聖クルアーン

The Holy Qur'ān

JAPANESE TRANSLATION

ISLAM INTERNATIONAL PUBLICATIONS

目　次

章　項　目　頁

序　文

慈悲深く、恵み遍く(あまね)アッラーの御名(みな)において。

聖クルアーンはイスラーム教の聖典である。凡そ1400年前、アラビアにおいて、全能なる神アッラーがその使徒であるムハンマド（彼に平安あれ）に啓示したものである。

この啓示は、ムハンマドが四十才の時に始まり、爾来23年間断続的に授けられた。これ等一連の啓示は、その都度、使徒側近の者たちの手によって記録され、後に聖典として編纂されたのである。筆記者として、この聖なる仕事に従事した者たちの中には、アブー、バクルやアリ、ザィド・ビン・サーベッド、ズベール・ビン・アルアワツム（彼等に恵みあれ）たちがいる。この外、多くの弟子たちが使徒に啓示された通り、聖章節を一字一句違えることなく暗誦していたのである。ちなみに、当時のアラビア人は、卓越した記憶力の持主ぞろいで、アラブの詩を十万節以上も暗誦している者も稀ではなかったという。このように聖クルアーンは、口述筆記と暗誦という二つの方法の集積によって、使徒に啓示された通り、一語たりとも遺漏なく記載されている。欧米の学者たちは、これまでにさまざまなる角度から、聖クルーアンの改竄(かいざん)を立証すべく試みてみたが、皆ことごとく失敗した。

ウイリアム・ムイール卿(Sir William Muir)はその著書「ムハンマドの生涯」(ロンドン、1912年、第1巻）の中で、次のように述べている。

ムハンマドの死後、二十数年後に、オスマンの暗殺に端を発して興った諸宗派は、争いを繰り返し、互に敵意をつのらせた結果、ムハンマドが苦労してうち建てたイスラーム共同体を分裂させてしまった。しかし、彼等は、常に一つのクルアーンを用いた。今日に至るまで、どの時代の人々も同じクルアーンを用いたということは、不運なカリフの命のもとに編纂された啓典と全く同じ聖典が、今日まで伝えられているという動かしがたい証拠である。12世紀もの長きにわたって、これほど純粋に伝えられている文献は、他に例をみない。

また、E・M・ウエーリー(E・M・Wherry)は、その著書「クルアーンについての総合的考察」(ロンドン、1986年、第一巻P 349)の中で、次のように書いている。

クルアーンの文章は、古典の中でも最も純粋なものである。

レーン・プーレ(Lane Poole)もその著書「精選クルアーン」（ターンバー、ロンドン、1879年、序章Cページ）の中で述べている。

クルアーンが本物であるということは、疑念の余地なき事実である。(中略)すべての言葉は、1300年経た今でも、全く変らざりしか、との確信をもって読むことができる。

ボスワース・スミス(Bosworth Smith)また然(しか)り。その著書「ムハンマドとイスラーム教」（ロンドン、1974年、P 22）の中で書いている。

クルアーンの中にあるものは、まさしくムハンマドの言葉そのものであり、全く加筆も削除もされていない。

最後に、T・W・アーノルド(T・W・Arnold)教授がその著書「イスラーム教の信仰」（ロンドン、P 9）の中で以下のように述べていることを紹介する。

この改訂版のテキストには、ムハンマド自身が実際に云った言葉が書かれている。この奇跡的な聖典について、その特徴をすべて詳細に説明することは不可能であるが、イスラーム

教についての知識をほとんど持ちあわせていない読者のために、いくつかの注目すべき点を挙げてみたいと思う。すなわち、聖クルアーンはアラブだけを対象にしたものではなく、人類すべてを対象にしている。そして、使徒ムハンマドは全人類のための預言者であるとしている。

聖クルアーンは神の掟の最後の言葉であり、人類の指針となる完全無欠の聖典である。

また、クルアーンは、預言という現象が日常的な事柄であると認める唯一の聖典である。さまざまなる人種、さまざまなる国に属する人々が、人間の歴史の中で幾度も神の啓示を授けられて来た、と繰り返し述べている。すなわち、聖クルアーンは次のように明白に説く。

原文（警告者が遣わされざりし民はなし。）〔35：25〕

原文（われわれはそれぞれの民の中から一人の使徒を選び、説かしめたり、「アッラーを崇拝し、邪神を避けよ」と。）〔16：37〕

つまり、クルアーンは、預言の現象が、新約並びに旧約聖書に書かれている預言にとどまるものではないとしている。また、聖クルアーンは、公正で、慈悲深く、恵み深い普遍の神という概念を主張し、すべての人間を人種、国籍にかかわりなく公平に扱っている。そして、繰り返し強調していることは、神は分かつことも、併せ祀ることもできないその独一性である。

聖クルアーンによれば、神と生きとし生けるものとの間には、ただ一つの関係しか存在しない。すなわち、創造主と創造物との関係である。どんな形に被造されるとも、神の栄光と偉大さ並びにその永遠さを讃える書は、クルアーンを措いて他にあろうか。また、クルアーンは、三位一体の考えを明確に否定する。神には配偶者も子もいないのである。

原文（云え、「彼こそはアッラー、独一者にして自存者、もろ人の依り縋る御方なり。彼は産み給わず、また産まれ給わず。彼と比肩し得る者、何処にも非ず。」と。〔112：2～5〕

聖クルアーンは、六つの基本的な理念を信ずることを説いている。すなわち、神の存在を信ずること、天使の存在を信ずること、神の啓示されたすべての聖典を信ずること、すべての預言者を信ずること、復活の日と審判の日を信ずること、すべてを包括する神の経綸を信ずることである。

また、聖クルアーンは性悪説を否定する。人間はすべて汚れなく生まれ出で来たとの性善説を採る。そして、神は公正であり、慈悲深く、寛容であり、情け深く、万物の主であり、宥恕者であらせられる。故に、もし神が僕たちの悔悟を受容するならば、その罪は悔悟の涙によって洗い流されるのである。

聖クルアーンの説くところによれば、贖罪とは、己が所業を悔い改め、真摯な心で神に縋ろうとした瞬間にそれはなされるとされている。人間は過去に犯した罪の如何にかかわらず、この瞬間、精神的に新しく生まれ変わり得るのである。

また、聖クルアーンは、イエス・キリストを、高貴にして尊敬せらるべき預言者なりとは云うが、ユダヤ教徒やキリスト教徒が主張するが如く、神の御子であり、人類の贖罪のために十字架の上で死んだという考え方は否定する。キリストに敵対する者どもは、十字架上で仮死状態にあったキリストを見て、すでに死せりと判断したのである。事実ユダヤ人たちは、為政者ポンティウス・ピラトにキリストの軀を引き渡してほしいと懇請し、許されて引き

取った時、わき腹の傷から新たに血が吐き出(い)でるのを見て、死に至らざることを確認しているのである。また、クルアーンは、マリアの処女受胎によってキリストは生まれたとし、マリアの処女性を疑う主張を否定している。

この他、聖クルアーンは、諸聖典の中でも、他の宗教に対する見解の点で、独特なものがある。すなわち、聖書における預言を認めているばかりか、何処に降った預言であろうと、信仰の基本として信じるようイスラーム教徒に説いている。

原文（不変の掟がその中にある聖典(みふみ)を。）〔98：4〕

聖クルアーンによれば、すべての宗教の根幹となる神託はもともと同じものであった。すなわち、独一の神を信じることは、遵奉の誠を尽し、神の嘉賞(かしょう)を得んために謙(へりくだ)って、篤信(とくしん)たることである。しかるに、イスラーム以外の宗教(おしえ)によれば、その道義的、社会的教えは、時代と共に、また状況に応じて書き換えられている。旧約聖書並びに福音書は、他の聖典同様神の啓示せるものとされているが、完全にもとのままであるとは云い難い。それ等は不幸にも、歴史の流れの中で、加筆改竄がなされている。クルアーンはその証拠に、これ等聖典の中にはさまざまな不一致や矛盾が多すぎると看破する。

クルアーンは、人間創造の究極の目的は神を崇拝することであると説く。そして、神を崇拝するということは、単に叩頭礼拝するだけでなく、神の特質を体得しようと努力し、神の啓蒙の光と美徳を具現化し、地上において神の代理者となろうとすることである。

確かに、人間は宇宙における神の最も高尚な創造物である。すべての創造物の中でも、威厳と名誉ある地位を占めている。人間は他の生物に優る地位を与えられているけれども、人間同志の間にはいささかも優劣は存在しない、とクルアーンは教える。創造主の目から見れば、身分の上下とは、人格が示す徳の有る無し、高潔か否かによって決まるのだ、と更に説く。

聖クルアーンの教えは、普遍的に行える、宗教的、社会的、経済的、道徳的体系として、人間のすべての興味と活動の領域を包括している。しかし、如何に素晴らしい体系であろうとも、絶対的な道徳的価値感を遵守することなしには、うまく働き得ないと厳命する。

更に聖クルアーンは、社会の様々な階層の人々の権利と義務を説き、社会的秩序と調和をもたらし、人間どうしの摩擦のもとをすべて取り除いてくれる。従って、クルアーンは、階級闘争や人間が人間を搾取するという考え方を退ける。

また、聖クルアーンは、すべての聖典の中でも、特に女性の権利を確立し、女性に対し、社会の中で尊敬されるべき高い地位を与えたという卓越性を持っている。たとえば、女性が相続する権利を保護し、その相続法を明示している。

また、信仰の自由は、クルアーンの教えの中でも特に重要な項目である。人間は、神によって、信ずるか拒否するかの意志の選択をまかされている。従って、信仰を無理強いすることは、何人たりともこれは認められない。そればかりか、如何なるイデオロギーも無理に押しつけることはできないし、その人の信仰を捨てさせることもできない。或る人に、物の考え方に変化をもたらす方法が許されるとしたなら、それは説得し、彼を納得させることのみなのである。

原文（宗教は強制するものに非ず。）〔2：257〕

原文（死ぬ者にアッラーの明証を見させて死なせ、生き残る者にアッラーの明証を見させて生き残らしめんがためなり。）〔8：43〕

聖クルアーンによれば、人間は死後、その魂は復活せしめられ、それからの運命（さだめ）は生前の所業によって決定されるという。すなわち、人の善行、悪行によって、死後の新しい生命の状態が決まるのである。

聖クルアーンの説くところによれば、イスラーム教は長い戦いの末、必ず暗闇を打ち破り、勝利をおさめ、如何なる宗教やイデオロギーにも増して世界的に理解され、全人類の指針光明となるであろう。聖預言者ムハンマドの伝承によれば、「我が弟子と目されるマハディーすなわちメシアによって、論理、道理、説得を通してイスラームの使命は大願成就されるであろう」と語り伝えられて来た。

1935年、インドのカーディアンに生まれたハズラト・ミルザ・グラーム・アハマドは1889年神の啓示により、沈滞腐敗するイスラーム教を改革すべしと命ぜられた。彼は直ちに神命に服し、「ブラヒィーン・アハマディア」の名のもとに、宗教改革運動に邁進したのである。そして、自らは、「メシア」（救世主）であり、「マハディー」（神により正しく導かれた者）であると宣言した。今日、イスラーム教アハマディア派として、広く世界にその名を知られているのは、この運動の名称に由来する。

アハマディア運動は、当初より、平和的に説得すること、納得させること、世界の各地でムスリム兄弟たちに奉仕することを通して、イスラームの神託を遍（あまね）く世界に知らしめんと奮闘努力した結果、今日の隆盛をみたのである。現在世界 100ケ国に運動の拠点を持つ。

此の度、日本語による聖クルアーン翻訳という偉業が成し得たのも、偏（ひとえ）に、日本におけるアハマディア兄弟たちの努力の結晶のたまものに外ならない。

神よ、これ等僕（しもべ）らに一層の御加護と、お恵みを降し賜わらんことを。

1988年6月24日

アハマディア出版局事業部長　ムバーラク・アハマド・サーキ

سُورَةُ الْفَاتِحَةِ مَكِّيَّةٌ

アル・ファーティハ
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍く(注1)アッラーの御名において。(注2)

注1　アラフマン(「慈悲深く」)及びアッラヒーム(「恵み遍く」)の二語は共に、彼は慈悲を示し給うた、彼は愛情深く善である、彼は許し給うた、という事を意味するラヒマを語源としている。

アラフマンとはすべての創造物に対し、その努力の如何にかかわらず、隅々まで与えられる無償の慈悲を意味するのに対し、もう一方のアッラヒームは人間の行動に対する見返りとして与えられる慈悲であるため、すべてのものに与えられるわけではないが、これを享受する者には、くり返し、あふれんばかりに与えられる。前者は神のみが示される美徳であるが、後者は人間も持ち得ることのできる美徳である。前者の慈愛は信者にも不信者にもそしてあまねく全ての創造物に与えられるが、後者の慈愛が対象とするのは、大体に於てその信者達である。聖なる預言者の言葉に従がえば、前者の美徳は一般的に現世に関してであり、神から与えられる後者の美徳は来世に関している。即ち、現世は、ほぼ行動の世界であり、来世は行動に対しての報いの世界である為、神の美徳のアラフマンは人に現世において恵みを与え、神の美徳のアッラヒームは人に来たるべき世においてその報いを惜しみなくもたらすのである。我等が必要とし、生活の基盤とする全ては、神の恩恵に他ならず、我等がそれに値せずとも、又、我等が生まれる以前より、有難くも恵まれたものであり、来世に約束される恩恵は、我等の行いの報いとして与えられるものなのである。この事からアラフマンは生まれるより前より与えられる恩恵であり、アッラヒームは行為の結果として与えられる恩恵である事が解る。9章以外のクルアーンの全ての章は第一節の「慈悲深く、恵み遍く…」で始められるが、これは、9章は独立した章ではなく8章の続きとなっているためである。イブン・アッバスに依れば、新しい章が始められる時は必ず第一節「慈悲深く…」で始められ、それなしでは、聖なる預言者は章を始める事はなかったという事を意味する言い伝えがある。この言い伝えから判る事は(1)「慈悲深く…」という節はクルアーンの一部であり何ら余分な部分ではないという事、そして(2)9章は独立した章ではないという事である。また、このいわれは、「慈悲深く…」は、アル・ファーティハの章(第一章)の一部のみを形成し全てのクルアーンの章の一部を形成するものではないと信じこんでいる一部の人々の思い込みに対する反証ともなる。聖なる預言者は、更に「慈悲深く…」の節は全てのクルアーン中の章の一部を成すものであると言ったと伝えられている。(ブハリとクットゥニ)　全ての章の最初にこの節が存在するという事には以下の様な意味を持つ。

クルアーンは聖なる知識の宝典であり、神の特別な御加護なくしては、手をふれる事は出来ない。「清められし者以外、触れる事なかれ」(56：80) その為、ビスミッラー(「慈悲深く…アッラーの御名において」)が全ての章の始めに置かれ、イスラム教徒に、クルアーン中の神の知識の宝庫に近づく為に又その益を受ける為には、純粋な心でクルアーンに近づくだけでなく、神の助けを常に祈念せねばならない事を思い起させる。道徳や精神的事柄に関した全ての問題は何らかの形で基本的な神の美徳である「慈悲」と「恵み」に関係している為、各々の独立した章の持つ意味への鍵ともなる。実際に於て、この節に述べられる神の美徳の幾つかの面を詳細に渡って示しているのが各章なのである。この決まり文句の「慈悲深く…」は聖典に先立つ聖書より取られたという論争がある。セールはZend Avestaを出典としていると主張し、ロッドウェルはイスラム以前のアラブ人達がユダヤ人の真似をし、それが最終的にクルアーンに組み込まれたとの意見を主張しているが、両者の見解共、明らかに正しくない。先ず第一にイスラム教徒達は、この形式、或いは類似の形式中の文句がクルアーンの啓示以前に知られていなかったとは、主張していないし第二に、その常とう句が、同一或いは類似の形式で、イスラム以前のアラブ人達に、たとえクルアーン中に示される以前に使われたとしても、その事が理由で、神より出でし言葉である事を否定する事は出来ないのである。実際にクルアーン中でも、ソロモンがシバの女

2．讃えあれアッラー、万物の主、　اَلْحَمْدُ لِلّٰهِ رَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ۝٢

3．仁慈、慈悲の主、（注3）　الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ۝٣

4．審判の日の主宰者（しゅさいしゃ）。（注4）　مٰلِكِ يَوْمِ الدِّيْنِ ۝٤

王宛に送った手紙の中に、この文句が使われている。(27：31)イスラム教徒が主張するのは、クルアーンこそ、その言葉をそうあるべき形で使用した、初めての啓示された聖典であるという事でこの主張は未だかつて論破された事がない。また、イスラム以前のアラブ人の間に、この言葉が流布していたというのも正しくない。何故なら、アラブ人達が神に対しアラフマンの名称を使用するのを嫌っていた事は周知の事実だからである。再度繰返すが、もしこの言葉が以前より知られていたとしても、その事実は、どんな民にも必らず指導者が遣わされたという事（35：25）と、クルアーンこそ、それ以前の啓示された聖書に包括される全ての永遠に変わらぬ真実が網羅されている書である（98：5）というクルアーンの教えの真実を確証するにすぎないのである。

注2　アッラーとは、完全な美徳を有し、何ら誤ちを持たぬ唯一無比の存在である。アラビア語でアッラーが他の意味で使用される事はない。他の言語でこれに該当する言葉は全て修飾的且つ説明的であり、往々にして複数の形を取るが、アラビア語の「アッラー」が複数形を取る事は絶対にない。アッラーとは、単一の実存であり、派生したものではなく、資格を示す言葉でもない。日本語ではアッラーに匹敵する言葉がない為、アラビア語の専門家に従い、翻訳ではそのままアッラーの訳があてられる。アッラーの最も正確な解釈としては、アルとは切り離す事が出来ず、全ての完全なる美徳を有する必然の結果として何にも依存しない存在に対し与えられた名称ということである。

注3　この節は現世の進化の法則を指している。即ち、全ての事物は発達を続け、この発達は漸進的で段階を経てもたらされ、「万物の主」こそ事物を段階的に発達、進化させる存在であるとの意味を表わしている。この行は又、進化の法則は神への信仰と矛盾しない事をも指摘している。しかし、ここで言及されている進化の過程は、一般に理解されている進化論と同一という訳ではない。進化という言葉は一般論的な意味で使われているのである。更にこの言葉から解かるのは、人は限りなく前進する為に創造されたという事実である。何故なら「アッラー、万物の主」という表現は、神は森羅万象を低い段階から高い段階へと発達させるという事を意味しており、これは全ての段階が終わった後に、果てる事のないもう一つの段階がある場合のみに可能なのである。

注4　神の四つの美徳、即ち、“全世界の主たる事”、“愛に満ちている事”、“慈悲深き事”、そして“終末の日の、主宰者たる事”は、神の神たる礎の美徳である。その他の美徳はこれら四つの美徳の説明或いは注釈にすぎず、四つの美徳こそ、全能の玉座がまします四本柱なのである。

これらの四つの美徳が述べられる順序で、人間に与えられる神の美徳が明らかにされる。即ち、「万物の主、アッラー」とは、神が人間を造られたのと同時に、人間が精神的に前進し発達するのに必要な環境をも創られた事を意味し、アラフマン（慈悲溢るる神）たる美徳は次に来る段階であって、慈愛に満ちた美徳を通して神は、いわば、人間に対しその道徳的又精神的前進に必要とされる手段と材料を手渡されるのである。そして人が手渡された手段を正しく使う事が出来れば、アッラヒームの美徳が人の為した事に対する報いを与えてくれる。そして最後に「審判の日の主宰者」が人の為した事に対する最終のそして集団としての結果を生みだし、然るべくしてその過程が完結するのである。最後の完全なる報いは最後の審判の日に下されるのであるが、一時的な報いは現世でも与えられる。但し現世での人間の行動はしばしば、他の人間、王、支配者等によって判断され、報いが与えられるという違いがあるが故に、常に間違いの起こる可能性がある。最後の審判の日に、神が裁きに出でます事は絶対の事であり、全ては神の手に委ねられる。そこでは何の間違いも、不当な罰も、不当な報いもない。又、「主宰者」という語を使うのも神が裁きを与えられる時は、定められた法律に従って審

5．我等は汝にのみ仕え、汝にのみ救いを希(こいねが)う。（注５）
6．正しい道に導き給え、（注６）
7．汝の怒りを蒙(こうむ)りし人々や踏み迷えし人々の道ではなく、汝が恵みを垂れ給えし（注７）人々の道に。（注８）

إِيَّاكَ نَعْبُدُ وَإِيَّاكَ نَسْتَعِينُ ۝٥
اهْدِنَا الصِّرَاطَ الْمُسْتَقِيمَ ۝٦
صِرَاطَ الَّذِينَ أَنْعَمْتَ عَلَيْهِمْ غَيْرِ الْمَغْضُوبِ
عَلَيْهِمْ وَلَا الضَّالِّينَ ۝٧ ع

判を下す裁判官の如くではないという事を示す為である。神は主宰者であるが故に許し給い神の望まれる方法で望まれる所に慈悲をお示しになる。ディーンという語を信仰を意味する語と考えれば、「審判の日の主宰者」は、真実の信仰が示される時には、人類は類いまれなる神の力の顕現を目のあたりにするが、信仰が衰えると、まるで、宇宙がその創造者である主の手をはなれ何のきまりもなくただ機械的に動くだけになってしまうという事を意味する。

注５　「我等は汝にのみ仕え」という言葉は、人が神の偉大な美徳に気付いた後に第一に心を動かされるのは神への礼拝であるという事を示す為「汝にのみ救いを希いねがう」という言葉の前に置かれている。神の助けを祈念するのは信仰の衝動の後に来るもので、人は神を礼拝する事を望むが、そうする為には神の助けが必要である事に気付くのである。又、この言いまわしの中のアラビア語に複数形が用いられているのには二つの重要なポイントがある。即ち(1)人はこの世に只一人の存在ではなく自分を取り巻く社会の一部である、その為、人が神への道を歩む時には、己のみではてく他の者とも連れ立つべきである事。そして(2)人は自分を取り巻く環境を改革しない限り安全ではないという事である。

又、神が最初の四行では三人称で表わされているが、この行で突然二人称になっている事は注目に値する。これは、神の四つの美徳を瞑想する事で人に創造主を拝するという押さえがたい熱望が生まれ、心から神に献身したいと強く願うが為、そしてその心の満足を得んが為に、最初の四行での三人称がこの行では二人称となるのである。

注６　　祈りは人の物質的、精神的、また現在及び未来の必然の全ての分野に渡っている。信者は、真直な道―最も近い道を示してくれる様祈る。時々、人は真直で正しい道を示されても、その道まで導びかれる事がなかったり、導びかれても、正しい道を辿り最後まで行きつく事が出来なかったりする。祈りは人に、道を示された事で、或いは道まで導びかれたとしてもそれだけで満足せず、最後の目的地に到達するまで従い続ける事を要求する。これこそ、正しき道を示し給え（90：11）、正しき道に導き給え（29：70）そして正しき道を歩ませ給え（7：44）という意味を表わすヒダヤの意義である。実際人はあらゆる段階で神の助けを必要としており、いかなる時にあっても、この節に具体的に表わされている祈願を神にささげ続けなければならないのである。故に常に祈る事が必要である。望む事が成就されず、必要が満足されず、目標が達成されない限り、我々には祈りが必要なのである。

注７　　真の信者は、正しき道に導びかれ、幾つかの方正なる行為を為すだけで、満足するものではない。真の信者は、目標をより高く掲げ、神がその下僕に、特別の恩寵を贈り始められる地位を得ようと努力する。真の信仰者は、神が選ばれし者に与え給うた神の恩寵の例を崇め、彼等に勇気づけられる。しかし単にそれだけに停まらず一層の努力をして神が恩寵を与えし者達の中に加えられる様、彼等の内の一人となる様、祈るのである。これらの「恩寵を賜わった者達」については４：70で触れられている。又、祈りは一般的であり何ら特定の恩寵に対し祈られるものではてい。信仰者は、神が彼に最高の神聖なる恩寵を与えて下さる事を懇願し、神は、適切と思われ又その信者がそれに値するだけの恩寵を、神の御意志により与えられるのである。

注8　アル・ファーティハの章（第一章）の言葉と文章の配列の順序は実に美しい。前半は神について、後半は人についてであるが、互いの色々な部分が驚嘆すべき形式で関わり合っている。前半に書かれている全ての高貴な美徳を有する存在を意味する"アッラー"に対応し、後半には、我等は、「汝にのみ仕え」という文章が配されている。熱心な信者は神を何の欠点もなく全ての完全な美徳を所有する存在と思えば、直ちに、心の奥底から自ずから、"御身のみを崇拝します"という叫びがわき出るのである。又、"全世界の主"という神の美徳に対しては、「汝にのみ救いを希い願う」という文章が対応している。イスラム教徒は、神こそ、世界の創造主にして支持者、そして全ての発展の源である事を知れば、"御身のみに助けを願います"と言い、神の庇護を直ちに求めるのである。数知れぬ程の恵みと我等の日の糧を惜しみなく与えて下さる主である、アラフマンの美徳に対応して"我等を正しき道に導びき給え"の語句が配されている。何故なら人に与えられる神よりの最大の御恵みは、神の使者達を通しての天啓による導きに他ならないからである。人の為した事への最上の報いを与えるアッラヒームの美徳に対応するのは、"御身が恩寵を与え給いし者達の道"という語句で、これは、神が恩寵を与え給いし下僕に報いのある祝福を授けられるのはアッラヒームだからである。そして、「審判の日の主宰者」と対を為すのは、"御身の怒りにふれざる者、そして迷いを生じなかった者"の行である。人は行為を為す時失敗を恐れる者である。故に人は、「審判の日の主宰者」たる美徳に考えをめぐらし、神の怒りにふれぬ様、又、正しい道をふみはずさぬ様、神に祈り始めるのである。

この章の祈りのもう一つの特徴は、祈りが人の内なる本能に、全く自然な形で訴えるという事である。人には、即、従がわざるを得ない、愛と恐怖という二つの基本的な動機がある。ある人は愛に心を動かされ、又、ある人は恐怖につき動かされる。愛に依って行動をする事は高貴な事であるが、実際には、愛が何の影響も与えない人々もいるのである。そういった人々は恐れから行動を起こすのである。第一章では両方の人の心の動きに訴えている。即ち、先ず最初に「万能の主」であり「慈悲深き」「恵み偏く」愛を心にふきこむ神の美徳が述べられ、而るべき後に、「審判の日の主宰者」が続き、これが人に悔い改め愛にこたえなければ、神の前で、己の行為の報いを受けねばならない事を思い起こさせている。この様に、恐怖の動機づけが、愛の動機づけと並べて導入されるのである。しかし、神の慈悲は、神の怒りより、はるかに抜きん出た美徳である為、唯一恐怖を呼び起こす様意図されたこの属性ですら、神の慈悲についての言及を伴っているのである。実際、ここでも又、神の慈悲は、神の怒りを超越している。何故なら、この美徳には、我々人間は裁き主の前ではなく、絶対的な罰の必要な場合のみに罰を与える、許す力を持つ主宰者の前に身を委ねるのであるということが黙示されている。

手短かに言えば、第一章は、形而上的知識の素晴らしい宝庫である。簡単な七つの節からなる短い章ではあっても、真実の知識と知恵がつまっている。「経典の母」と呼ばれるのも、この章がクルアーンの集大成だからである。全ての恩寵の源泉であるアッラーの名前で始まるこの章は、神の神たる四つの美徳の説明へと移ってゆく。即ち、(1)世界の創造主で支持者たる、(2)人の努力にかかわりなく、人が生まれる以前より、人の求める全てを与える慈愛に満ちた、(3)人の行動への一番よい結果を決定し分け隔てなく報いを与える慈悲深き、(4)我等が我等の為した事をその目前にさらさなければならてない。また、その被造物に対し単なる裁き手ではなく、主宰者として接せられ、慈悲をもって裁き、許す事が良い結果となる場合には常に許しを与えて下さる審判の日の主宰者である、という四つの美徳である。これがクルアーンの一番始めに描かれた、無限の力と王国を持ち、限りない慈悲と恩寵を与えて下さる、イスラムの神の像なのである。そしてその後に、神は以上に述べた高遠な美徳を有するが故に、人は今や、心より熱望し神を崇拝し、絶対の服従を約束して足許にひれふすとの人間の側からの言明が続くのである。しかし、慈悲深き神は人が弱い存在で間違いを犯しやすい事を、御存知の為、神の御国に近づく途中のあらゆる段階で人の直面する困難の全てに神の助けを願う様熱心に説かれるのである。そして最後に、統合的で尊大な祈りが示される。この祈りは、人が創造主に、精神的であれ世俗的であれ又、現在であこれ、未来であれ、全ての事柄につき、正しい道をお導き下さいと嘆願する祈りである。人は試錬に首尾よく耐えるのみでなく、神に選ばれし者達と同様に、神よりの惜しみない恩寵に授かれる様にと心から願う祈りなのである。一生間違わずに正しい道を歩める様、先人達同様、主である神に途中でつまづかずに神により近づける様、人は神に祈るのである。これが、第一章の主題であり、聖クルアーンの中で色々形を変えながらも、常に繰り返される主題なのである。

سُوْرَةُ الْبَقَرَةِ مَدَنِيَّةٌ (٢)

アル・バクラ
(メディナ啓示)

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

الٓمّٓ ②

ذٰلِكَ الْكِتٰبُ لَا رَيْبَ ۛ فِيْهِ ۛ هُدًى لِّلْمُتَّقِيْنَ ③

الَّذِيْنَ يُؤْمِنُوْنَ بِالْغَيْبِ وَيُقِيْمُوْنَ الصَّلٰوةَ وَمِمَّا رَزَقْنٰهُمْ يُنْفِقُوْنَ ④

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

2．アリフ・ラーム・ミーム。(注1)

3．これこそは疑惑を容れざる経典なり、(注2)正しい者への嚮導なり、(注3)

4．見るあたわざるものを信じ、(注4)礼拝を遵守し、(注5)われらが人々に降せしものを(注6)信ずる人々への。

注1　われはアッラー、全知者なり。

アリフ・ラーム・ミームのような略語はアル・ムカッタート(分かち書きして切って読む)として知られていて、28章までの初めに書かれている。またこの略語はアラビア文字の一語から五語までの語数から成っている。このような略語を作る語は次の十四語である。アリフ、ラーム、ミーム、サード、ラー、カーフ、ハーヤー、アイン、ター、シーン、ハアー、クアーフ、ヌーン、このうちクアーフとヌーンは50章と68章の初めにだけ書かれている。その他の語はそれぞれ決まった章の初めに二つまたはそれ以上の組合せで書かれている。アラビア人の間でムカッタートの使用が流行している。詩や会話に使用されている。ムカッタートは神の美徳に対する略語であり、各章の初めに書かれていてその主題をあらわすとともに神の美徳に深いかかわりをもっている。略語は無意味に各章つけていないし、略語の組合せにも意味がある。アリフ・ラーム・ミームはここに書かれているが、クルアーンの3、29、30、31、32の各章では「私は全能のアッラーである。」の意味である。

注2　「疑惑」は心の不安、疑念、苦悩、不幸、悪意、責任転嫁、中傷を意味する。この文章は今までにクルアーンに疑念をもった人がひとりもいないといっているわけではない。ただこの教えは道理にかなっているので曲解せずに正しく考えれば、確かな指針となり、平安が与えられると言っている。

注3　ムッタキ(「正しい者」)はワカーという語源から出た言葉で、災難から守る意味がある。「正しい者への嚮導なり」というのはクルアーンに記された導きは際限のない導きであることを含蓄する。クルアーンは、人々に無限の精神的向上への導きを与え、神の恩寵によりふさわしい者となるよう導く。

注4　「見るあたわざるもの」というのは人知を越えているが、それにもかかわらず理性や敬虔で確証され得るものである。認知できないもの、知覚できないものが必ずしも非合理とは限らない。イスラム教徒が信じるべき「見るあたわざるもの」の何一つとして理に反するものはない。世界には知覚できなくともその存在を否定できない未知なるものがたくさんある。

注5　「礼拝を遵守し」は定められた法則にすべて従って祈禱式を行うという意味である。礼拝は人間の神に対する内なる関係を外に向って表現することである。それ以上に神の恩寵が心ばかりでなく身体をも包むことである。だから心身相伴って完全なる礼拝が可能となる。心身なくして真の霊的礼拝は守れない。霊魂による礼拝は中身であり、肉体による礼拝はその器である。中身はその器なくしては保存され得ない。器が壊されればその中身も同様の道を辿る。

5．また、汝に啓示せしもの、(注7) 並びに汝以前に啓示せるものを信じ、(注8) 且つ来る世 (注9) を固く信ずる人々への嚮導なり。

وَالَّذِيْنَ يُؤْمِنُوْنَ بِمَآ اُنْزِلَ اِلَيْكَ وَمَآ اُنْزِلَ مِنْ قَبْلِكَ ۚ وَبِالْاٰخِرَةِ هُمْ يُوْقِنُوْنَ ۞٥

6．主の導きに従う人々、そは必ず成功せん。

اُولٰٓئِكَ عَلٰى هُدًى مِّنْ رَّبِّهِمْ ۗ وَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُوْنَ ۞٦

7．信ぜざる者どもは、汝之を警告するも、せざるも、彼等は信ぜざるべし。(注 10)

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا سَوَآءٌ عَلَيْهِمْ ءَاَنْذَرْتَهُمْ اَمْ لَمْ تُنْذِرْهُمْ لَا يُؤْمِنُوْنَ ۞٧

8．アッラーは彼等の心と耳を封じ眼には庇覆をほどこせり。(注 11) 彼等には重き罰あり。

خَتَمَ اللّٰهُ عَلٰى قُلُوْبِهِمْ وَعَلٰى سَمْعِهِمْ ۗ وَعَلٰٓى اَبْصَارِهِمْ غِشَاوَةٌ ۫ وَّلَهُمْ عَذَابٌ عَظِيْمٌ ۞٨

注 6　この節では三つの事柄を人間の霊的幸福の三つの面から次のように述べている。(1)人は目に見えない真実―五感ではわからない真実があることを信じるべきである。たとえば、人間は正義感をもっていると信じられることでもわかる。(2)天地創造を考えてもすばらしい秩序と計画がある。その思いが創造主の存在を確信させ、人間を制している神との真実の交わりを切望させる。この交わりは祈禱の成就によってなされる。(3)最後に信者が自らの創造主と真のふれあいを確立できたなら、その人は進んで同胞に仕えたくなるであろう。

注 7　モハッマド預言者を信じることが、この中心になっている。(2：286；4：66，137)

注 8　汝―神はすべての人々にその使者を送られたのだから今まですべての預言者の教えの聖なる源であるモハッマド預言者を後に続く者は信じるべきである。(13：8，35：25)

注 9　(1)最終地すなわちあの世また(2) 従うべき啓示のこと、を意味する。第(2) の意味ではクルアーン62：3，4に記述されている聖なる預言者の二回にわたる降臨についての箇所で詳述されている。一度目は7世紀おけるモハッマドの到来であり、その時クルアーンが神から聖なる預言者（モハッマド）に啓示された。二度目は、近年における彼の弟子の一人の到来を指す。即ちアハマディア運動の創設者であり約束されたメシアであるアハマドその人である。

注 10　この節は警告を受けようが受けまいが気にもとめない真実に対して無関心な信仰を持たない者について語っている。現状が続く限り彼らは信じないだろうと言明している。

注 11　器官は長い間使わずにいると萎えて使いものにならなくなる。信仰を持たない者は真実を理解しようとする心と耳をもつことを拒んでいる。その結果彼らの聞いたり、理解したりする力は失われると述べている。「アッラーは封印をなされた」の句で述べられているようにわざと無関心になれば当然それだけの結果になる。すべての法は神に由来し、すべての理由は当然神の意志に従属するので信仰を持たぬ者の心と耳を閉ざすのも神に帰する。

第二項

9．また人々の中には「我等はアッラーと末日を信ず」と云うが、その実彼等は全く信者に非ず。(注 12)

10. 彼等はアッラーと信者を欺かんとして、実は己れ自身を欺くにすぎず。しかも自ら之に気づかざるなり。

11. 彼等の心には病あり。アッラーはその病を重からしむ。(注 13) 而してその嘘ゆえに、彼等は厳しい罰を受けん。

12. 「世を紊すなかれ」と云えば、彼等は云う、「我等は秩序を正さんとす」と。

13. 用心せよ、彼等こそ紊乱者に非ざるか。しかも自ら之に気づかざるなり。

14. また彼等に向って「信ぜよ、人々が信ぜし如く」と云えば、彼等は云う、「愚か者の如く我等に信ぜよとな？」と。げに愚かなる者は、彼等なり。されど彼等はそれを知らず。(注 14)

15. 彼等は信者たちに会えば「我等は信ず」と云うが、その実不埒な仲間だけになれば「我等はお前たちの仲間なり。我等は信者たちをただ愚弄したまで」と云う。

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يَّقُوْلُ اٰمَنَّا بِاللّٰهِ وَبِالْيَوْمِ الْاٰخِرِ وَمَا هُمْ بِمُؤْمِنِيْنَ ⑨

يُخٰدِعُوْنَ اللّٰهَ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا ۚ وَمَا يَخْدَعُوْنَ اِلَّآ اَنْفُسَهُمْ وَمَا يَشْعُرُوْنَ ⑩

فِيْ قُلُوْبِهِمْ مَّرَضٌ ۙ فَزَادَهُمُ اللّٰهُ مَرَضًا ۚ وَلَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ۙ بِمَا كَانُوْا يَكْذِبُوْنَ ⑪

وَاِذَا قِيْلَ لَهُمْ لَا تُفْسِدُوْا فِي الْاَرْضِ ۙ قَالُوْٓا اِنَّمَا نَحْنُ مُصْلِحُوْنَ ⑫

اَلَآ اِنَّهُمْ هُمُ الْمُفْسِدُوْنَ وَلٰكِنْ لَّا يَشْعُرُوْنَ ⑬

وَاِذَا قِيْلَ لَهُمْ اٰمِنُوْا كَمَآ اٰمَنَ النَّاسُ قَالُوْٓا اَنُؤْمِنُ كَمَآ اٰمَنَ السُّفَهَآءُ ۗ اَلَآ اِنَّهُمْ هُمُ السُّفَهَآءُ وَلٰكِنْ لَّا يَعْلَمُوْنَ ⑭

وَاِذَا لَقُوا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا قَالُوْٓا اٰمَنَّا ۚ وَاِذَا خَلَوْا اِلٰى شَيٰطِيْنِهِمْ ۙ قَالُوْٓا اِنَّا مَعَكُمْ ۙ اِنَّمَا نَحْنُ مُسْتَهْزِءُوْنَ ⑮

注 12　神と終末の日が来ることだけを信じてその他のイスラムの信仰を忘れていることを意味している。イスラムの信仰形式では神を信じることが最初に出てくる事柄であり、終末を信じることは最後に出てくる事柄である。その両者を信仰告白すれば、そのこと自体ですでにイスラムの他の事柄を信仰告白したことになる。ここ以外でも終末を信じることは聖典を信じること同様、天使をも信じることであるとクルアーンは述べている。(6：93)

注 13　神はイスラム教徒を守っているという御印をたくさん示されている。その御印は次第に力を増してきたので偽善者たちは次第にイスラム教徒を恐れはじめてきた。その結果彼らはますます偽善の度を増した。

注 14　偽善者はイスラム教徒をとり憑かれた愚者の一団とみなしている。道理のないものに生命と財産を捧げることは無意味と考えている。しかし、彼らこそが愚者であり、イスラムの道理が繁栄への道であることは確かである。

16. アッラーは彼等の嘲りを罰し、しばし彼等を迷誤の中に留めしめん、暗闇(くらやみ)をさまよう如く。(注 15)

اللّٰهُ يَسْتَهْزِئُ بِهِمْ وَيَمُدُّهُمْ فِي طُغْيَانِهِمْ يَعْمَهُونَ ﴿١٦﴾

17. 彼等は御導きの代りに間違いを購(あがな)えし者、その取引は彼等を何も益することなく、また決して正しく導かれることなし。(注 16)

أُولٰٓئِكَ الَّذِينَ اشْتَرَوُا الضَّلٰلَةَ بِالْهُدٰى فَمَا رَبِحَتْ تِّجَارَتُهُمْ وَمَا كَانُوا مُهْتَدِينَ ﴿١٧﴾

18. 彼等のことをたとうれば、火を灯(とも)し(注 17)辺りが明るくなりたる時、その火をアッラーに奪い取られ、暗闇に取り残されし者の如し。なにも見得ざるなり。

مَثَلُهُمْ كَمَثَلِ الَّذِي اسْتَوْقَدَ نَارًا فَلَمَّآ أَضَآءَتْ مَا حَوْلَهُ ذَهَبَ اللّٰهُ بِنُورِهِمْ وَتَرَكَهُمْ فِي ظُلُمٰتٍ لَّا يُبْصِرُونَ ﴿١٨﴾

19. 彼等は、聾(つんぼ)で唖(おし)で盲(めくら)なり。されば引き返すことかなわず。

صُمٌّۢ بُكْمٌ عُمْيٌ فَهُمْ لَا يَرْجِعُونَ ﴿١٩﴾

20. またたとうれば、暗雲たれこめ、雷、稲妻をともないて降りしきる豪雨にも似たり。彼等は死を怖れて、雷鳴におののき、思わず両耳に指を差し込む。されどアッラーは不信心者どもを取り囲む。

أَوْ كَصَيِّبٍ مِّنَ السَّمَآءِ فِيهِ ظُلُمٰتٌ وَّرَعْدٌ وَّبَرْقٌ يَجْعَلُونَ أَصَابِعَهُمْ فِيٓ اٰذَانِهِمْ مِّنَ الصَّوَاعِقِ حَذَرَ الْمَوْتِ وَاللّٰهُ مُحِيطٌۢ بِالْكٰفِرِينَ ﴿٢٠﴾

21. 稲妻は目を眩(くら)ますばかり。閃(ひらめ)くたびに歩みを進めども、闇にたち戻ればそこに立ちどまる。もしアッラー欲しなば、必ず彼等の耳目を奪わん。げにアッラーは万能にまします。

يَكَادُ الْبَرْقُ يَخْطَفُ أَبْصَارَهُمْ كُلَّمَآ أَضَآءَ لَهُمْ مَّشَوْا فِيهِ وَإِذَآ أَظْلَمَ عَلَيْهِمْ قَامُوا وَلَوْ شَآءَ اللّٰهُ لَذَهَبَ بِسَمْعِهِمْ وَأَبْصَارِهِمْ إِنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٢١﴾

第三項

22. 汝等人々よ、お前たち主を崇拝せよ。お前たちを創り、お前たちの前に人々を創り給えし主を、義(ただ)しい人たらんために。

يٰٓأَيُّهَا النَّاسُ اعْبُدُوا رَبَّكُمُ الَّذِي خَلَقَكُمْ وَالَّذِينَ مِنْ قَبْلِكُمْ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُونَ ﴿٢٢﴾

注 15　ここでは、神が猶予を与えて偽善者の罪が深まってゆくのを許しているといっているのではない。もしそのように誤って解釈すれば 35 章 38 節と矛盾してしまう。そこでは神は信仰を持たない者に改心する猶予を許している。と述べられている。

注 16　(1)よき導きを捨てて代わりに誤りをとる。との意味である。(2)よき導きと誤りの両方が与えられるが、誤りをとり、よき導きを拒む。との意味である。

注 17　「火」という語は戦争の意をもつことがある。ここで「火を灯した」というのは偽善者が信仰を持たぬ者達と共謀してイスラム教徒に対して戦争をしかけるという意味で使われている。「火を灯す」は、他に聖なる預言者が神の命により聖なる光を灯すという意味で使われている箇所もある。次のような箇所がある。『私の場合は火を燃やす人のようである。』(ブハリ)

23. 主はお前たちのために臥所として大地をつくり、屋根として大空をおき、(注 18) 水を雲より降らせ、かくしてお前たちの糧なる果実を実らせ給えし御方なり。されば、故意にアッラーに同位者を配するなかれ。

24. もしお前たちが、われらの僕に降せし啓示を疑わば、お前たち之に類する一章を作り、アッラー以外にお前たちの助け手となる者をここに喚べ、もしお前たちの言葉が真実ならば。(注 19)

25. それがなし得ずば、絶対に出来はしまいが、その時は不信心者どもに用意せらるる人と石とを燃料とする業火に対してその身を守れ。

26. されど信じて、善行を積む者には、河川流れる楽園ありとの朗報を伝えよ。彼等そこで果実を賜わるたびに、「これは我等が以前に賜われるものなり」と云う。彼等は之に類するものを賜わるなり。またそこでは、清浄無垢なる配偶者に連れ添われ、(注 20) 末久しく楽園に住み留まらん。(注 21)

الَّذِي جَعَلَ لَكُمُ الْأَرْضَ فِرَاشًا وَالسَّمَاءَ بِنَاءً
وَأَنْزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَأَخْرَجَ بِهِ مِنَ الثَّمَرَاتِ
رِزْقًا لَكُمْ ۖ فَلَا تَجْعَلُوا لِلَّهِ أَنْدَادًا وَأَنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٢٣﴾
وَإِنْ كُنْتُمْ فِي رَيْبٍ مِمَّا نَزَّلْنَا عَلَىٰ عَبْدِنَا فَأْتُوا
بِسُورَةٍ مِنْ مِثْلِهِ وَادْعُوا شُهَدَاءَكُمْ مِنْ دُونِ
اللَّهِ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٢٤﴾
فَإِنْ لَمْ تَفْعَلُوا وَلَنْ تَفْعَلُوا فَاتَّقُوا النَّارَ الَّتِي وَقُودُهَا
النَّاسُ وَالْحِجَارَةُ ۖ أُعِدَّتْ لِلْكَافِرِينَ ﴿٢٥﴾
وَبَشِّرِ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ أَنَّ لَهُمْ جَنَّاتٍ
تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ ۖ كُلَّمَا رُزِقُوا مِنْهَا مِنْ
ثَمَرَةٍ رِزْقًا ۙ قَالُوا هَٰذَا الَّذِي رُزِقْنَا مِنْ قَبْلُ ۖ وَ
أُتُوا بِهِ مُتَشَابِهًا ۖ وَلَهُمْ فِيهَا أَزْوَاجٌ مُطَهَّرَةٌ ۖ وَهُمْ
فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٢٦﴾

注 18　この表現は建物や屋根のようなものでその中や下にいる生きものが保護されていることを意味する。同様に宇宙の離れた部分が私達の惑星を保護してくれている。星、雲その他宇宙の現象を科学的に研究している人は他の天体がいかに重いか、また地球のすべての側から高く上がって、果てしない広がりをもって軌道を通って、しかもいかに安全に安定しているかを知っている。ここではまた天と地の力の均り合いにより物質世界が完全になっていることを暗示している。

注 19　クルアーンの比類ないすばらしさについての事柄が五ヶ所でとりあげれらている。それは 2：24、10：39、11：14；17：89、52：34、35 である。これら五つの節の内 2 つでは、問いかけは同一であり、残り三つの節では、信仰を持たぬ者からの三つの別個の問いかけ（要求）が出されている。それぞれに異なった箇所で、問いかけの形をとったこの相異は、一見つじつまが合わぬ様に思われるがそうではない。実際に、これらの節にはいつの時をも象徴する要求が含まれており、それらの問いかけは聖なる預言者の時代と同様に、今日に於てもクルアーン中にそれぞれ違った形で提示されているのである。詳しくは、英版参照。

注 20　クルアーンでは、全ての被造物には、その完全な発展の為に連れ合いが必要であると教えている。楽園では、品行方正な男子と女子は、汚れのない連れ合いとなり精神的に発達し、幸福を全うするのである。どの様な連れ合いになるかは、来世でのみわかる事なのである。

注 21　この節では、信者が来世に報われる事が簡単に説明されている。イスラム教を批判する人々はこの説明に対しあらゆる反対を唱えているのであるが、それは彼等が、天からの御恵みについてのイスラムの教えを

27. アッラーは、蚊ほどの小さいもの、またそれより更に小さいものでも例証してはばからず。信ずる者は、それが主の降せし真理なることを知るも、不信心者は云う、「かかる例証をみせて、アッラーは何事を教えんとするか？」と。(注22) かくして主は、多くの人々を迷わせ、また多くの人々を導き給う。されど主は、不信心者以外は何人も迷わせ給わず。

إِنَّ اللَّهَ لَا يَسْتَحْيِۦٓ أَن يَضْرِبَ مَثَلًا مَّا بَعُوضَةً فَمَا فَوْقَهَا ۚ فَأَمَّا الَّذِينَ ءَامَنُوا فَيَعْلَمُونَ أَنَّهُ الْحَقُّ مِن رَّبِّهِمْ ۖ وَأَمَّا الَّذِينَ كَفَرُوا فَيَقُولُونَ مَاذَآ أَرَادَ اللَّهُ بِهَٰذَا مَثَلًا ۘ يُضِلُّ بِهِۦ كَثِيرًا وَيَهْدِي بِهِۦ كَثِيرًا ۚ وَمَا يُضِلُّ بِهِۦٓ إِلَّا الْفَٰسِقِينَ ﴿٢٦﴾

28. アッラーと契約しておきながら、後で之を破り、アッラーが提携せよと命ぜしものから離叛し、世を紊す者ども、彼等はみな滅び行く。

الَّذِينَ يَنقُضُونَ عَهْدَ اللَّهِ مِنۢ بَعْدِ مِيثَٰقِهِۦ وَيَقْطَعُونَ مَآ أَمَرَ اللَّهُ بِهِۦٓ أَن يُوصَلَ وَيُفْسِدُونَ فِي الْأَرْضِ ۚ أُولَٰٓئِكَ هُمُ الْخَٰسِرُونَ ﴿٢٧﴾

完全に誤解している点に端を発する。クルアーンでは、神の恩寵の本質を把握する事は人の力の及ばぬ所であると強く主張しており（32：18）、聖なる預言者も以下の如く語ったと伝えられている。即ち、「目で見た者も、耳で聞いた者もいない、まして人の心のはるか及ぶ所ではない。」（ブハリ）と。神の恩寵に、何故現世の具体的な事物名をはめるのか疑問は当然生じるが、これはクルアーンを読む者が必ずしも知的に高いレベルの人々ばかりではない為である。誰にでも判る平明な言葉がクルアーンでは使われているのである。神の恩寵を説明するにあたり、クルアーンでは、現世で一般的に善いとみなされる事物名を用い、信者に来世に於てよりよい形でこれらの物を全て得る事が出来ると説くのである。身近な言葉が使われているのは、この重要な対比をもたらす為であり、そうでなければ、現世の喜びと来世の恩寵との間に共通物など何もないのである。更にイスラムに依れば、来世が精神的状態のみで成り立っているという意味でなら、霊的であるとはいえない。来世に於てでも、人間の魂は、一種の肉体は持つが、その肉体を物質的なものではない。これは夢を想い起こせば思い当る事で、人が夢で見る場面は、夢遊状態では人の肉体を持ち、小川の流れる園にいたり果実を食したり乳を飲んだりしていたりするという意味から、純粋に精神的或いは霊的であるとはいえないのである。夢の中の乳はまぎれもなく実際の経験なのであるが、誰もこれを現世で人が実際に飲んでいる本当の乳であるとはいわない。来世に於る霊的恩寵とは現世で神が我々にお与え下さる御恵みが、単に主観的に実現されるものではない。我々が今ここで手にしている物は、来世で人が気付く神の真実の天恩の一例にすぎない。又、"園"は信仰を表わし、"小川"は、善行を表わす。それで人々は、信仰や善行が無駄にならない事を知るのである。故にクルアーンの中の"これは前世で我々に与えられていた物である"という語句から、天上では、信仰深き者達には、この世で手にした果実等が与えられるという結論をひき出す事は間違いである。何故なら、説明のあった通り、この二つは同一の物ではないからである。来世で手にする果実とは、自分達の信仰のあかしなのである。人がそれを口にする時、即座にその果実は現世での彼等の信仰の実りである事に気付くのである。この喜びの為、"これは以前、我等に与えられし物である"と言うのである。この表現は又、"我等に約束されし物"との意味をも有する。

注22　　神はクルアーン中で天国と地獄を暗喩と直喩を用いて説明されている。直喩と暗喩を用いなければ、深い意味を適確に表わす事が出来ず、霊的な事柄については、この方法によらねば的を得て伝わらず、それ以外で天を形容すれば、蚊のように取るに足らなくなってしまう。又、この場合に蚊の例えを使うのはアラブ人の間では、蚊はひどく弱い生き者と考えられるからである。しかしながら、比喩から天の像を浮かびあがらす事もできる。信者はクルアーンの語句が暗喩にすぎずその深い意味を伝える為に使われている事を知っているが、信仰を持たぬ者はその事が間違っていると言って、誤りや間違った導きを増長させるのである。

29. お前たちどうしてアッラーを信ぜずにいられようか？　彼は命なきお前たちに生命を与え、(注 23) 次いでいつかは死に至らしめ、再び甦らせ、やがてお前たちを己が許に連れ戻さん。(注 24)

30. お前たちのために地上に一切のものを創造せるは彼なり。然る後に天に及び、之を七層の天となせり。(注 25)　　彼は万事を(注26) 知る。

第四項

31. 汝の主は天使たちに云えり、(注 27)「わしは地上に代理者を置かんとす」と。天使たちは云えり、「世を紊し、流血の災を (注 28) 惹き起す如き者を置かんとするか？　我等は汝の神聖さを賞揚し、讃美してやまず(注 29) というに」と。主は答えて云えり、「わしはお前たちの知らざることを知る」と。(注 30)

كَيْفَ تَكْفُرُوْنَ بِاللّٰهِ وَكُنْتُمْ اَمْوَاتًا فَاَحْيَاكُمْ ثُمَّ يُمِيْتُكُمْ ثُمَّ يُحْيِيْكُمْ ثُمَّ اِلَيْهِ تُرْجَعُوْنَ ﴿٢٩﴾ هُوَ الَّذِيْ خَلَقَ لَكُمْ مَّا فِي الْاَرْضِ جَمِيْعًا ثُمَّ اسْتَوٰۤى اِلَى السَّمَآءِ فَسَوّٰىهُنَّ سَبْعَ سَمٰوٰتٍ وَهُوَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمٌ ﴿٣٠﴾

وَاِذْ قَالَ رَبُّكَ لِلْمَلٰٓئِكَةِ اِنِّيْ جَاعِلٌ فِي الْاَرْضِ خَلِيْفَةً قَالُوْۤا اَتَجْعَلُ فِيْهَا مَنْ يُّفْسِدُ فِيْهَا وَيَسْفِكُ الدِّمَآءَ وَنَحْنُ نُسَبِّحُ بِحَمْدِكَ وَنُقَدِّسُ لَكَ قَالَ اِنِّيْٓ اَعْلَمُ مَا لَا تَعْلَمُوْنَ ﴿٣١﴾

注 23　この節では人の生命が物質的肉体の消滅や崩壊で終わるものではなく、生命には余りにも重要な意義がある為、肉体の消滅で終わる事なく、物質的消滅後も育まれる事を表わしている。もし生命に偉大なる目的がなければ、神は生命など創造なさらなかったはずであるし、来世がなければ死すべきものとされないはずである。もし死が全ての生命の終りとすれば、人間の創造とは、“単なる娯楽と時間つぶし”で神の知恵の偉大さを示すものにすぎなくなってしまう。全ての知恵と英知の源である神が人間をお創りになったという事は取りも直さず、人がたった 60 年や 70 年生きた後に塵に返るべく創られているのではないという事である。それどころか、人は、その霊魂の借りの宿である肉体から抜け出た後に生きなければならない、より良い、より充実した永遠の生命の為に創造されたのである。

注 24　人の魂は死の後にすぐ天国や地獄へ行くのではなく、バルザフという中間地点で自分の行いの良い結果と悪い結果の幾つかを吟味させられる。然る後、完全な報いの前ぶれとなる復活に到るのである。

注 25　アラビア語では‘7’は通常、完全である事の象徴として使われ“70”とか“700”を用いる言葉は大きな数を意味している。これら三つの数字は、数的に大きいという意味でクルアーンの中に使われている。(9：8，15：45)　他の箇所では 23 章 18 節にも記されている。

注 26　太陽や月、及びその他の天体は人間に多大な益をもたらすものであり、近代科学はそういった意味での発見をしてきたし現在も更に解明されている。これら全ては、クルアーンの教えの真実と普遍性を証明する事に他ならない。科学はまた、地球の特性についてもより多くの発見をし続けており、以前は不用と思われていた事物が今では人にとり、非常に有用であると気付かれてきた。

注 27　神と天使の会話の描出は実際に書かれている言葉通りに理解される必要はない。ここに使われている「云えり」は、実際の文字通りではなく、比喩的な表現であり、言葉で表わされているのと等しい状態や態度を示すにすぎない。而してこの節は単に、その態度や状態で天使達は、ここに言葉で示されている返答を暗黙の内に示した事を意味している。

32. 主はアダムに万物の名前を教え、(注31) しかる後に天使たちの前にそれ等を示し、「もし自分たちの言葉が正しいと思わば、これ等のものの名を告げよ」と云えり。

وَعَلَّمَ اٰدَمَ الْاَسْمَآءَ كُلَّهَا ثُمَّ عَرَضَهُمْ عَلَى الْمَلٰٓئِكَةِ فَقَالَ اَنْۢبِـُٔوْنِىْ بِاَسْمَآءِ هٰٓؤُلَآءِ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ۝٣٢

注28　天使達は、神の為さんとする事に反対したり、アダムより自分達の方が優れていると主張した訳ではない。この問いかけは神が代理者を指名すると仰せられた為、促された結果である。秩序を維持し、法を実行するのには地上の代理者が必要である。天使達の反対は、地上に無秩序を生み、血を流す者達が出現する事への懸念から出たものである。人は、事の善と悪を為す大きな力を与えられているので、天使はその悪い面について語ったのであるが、神は人は神の美徳の映し鏡たるべき高い道徳に達し得る事を御存知だったのである。この人間の素晴らしい特性については、神が“私はお前達の知らない事を知っている”で言及されている。

注29　天使達の質問は神の御業に異議を唱えるものではなく、その指名の本質と英知についてよりよく解ろうとする為に、投げかけられたのである。57：2も参照の事。

注30　ほぼ6000年前に生存したアダムは、神が地上に創られた最初の人間であると世間では信じられている。しかし、クルアーンでは、この考えを確証してはいない。世界は何度も創造と文明の輪環を繰り返し、現在の人類の先祖とされるアダムは、現在の輪環の最初のつなぎめにすぎず、神の創造した最初の人間ではないのである。国が興り、そして亡び、文明も又然りであった。何人もの輪環にアダムが存在し、今のアダムに到っているのである。人以外の種族が繁栄し消滅し、そして違った輪環の文明が起こり亡びたかもしれないのである。偉大なイスラム教徒の神秘学者であるムヒユッディーン・イブン・アラビはかつて、カーバの巡礼を演じている自分自身を夢に見た事があると語った事がある。その夢の中で、彼の祖先の一人であるという男が彼の前に現われた。イブン・アラビが“貴方が死んでからどの位になるのか”と尋ねたら、その男は“5万年以上にもなる”と答えた。“しかしこの期間は、我々とアダムの隔たりよりも長い。”とイブン・アラビが言うと、“どのアダムの事をお前は話しているのだ。お前に一番近いアダムなのか、それとも、他の誰かに一番近いアダムなのか？”と答えた。“そこで私は思い出したのです。聖なる預言者が、神は少なくとも何十万ものアダムをお創りになったと言った事を。そして私は、自分自身につぶやいたのです。多分この男は私の祖先といっているが、今のアダムより以前のアダムの一人なのだろうと”とイブン・アラビは語ったのである。(フトゥハート2巻)

アダム以前に生きた種族が、アダムが生まれる以前に、全く絶えてしまったとは主張されていない。最も可能性があるのは、以前の種族が衰退してしまい、僅かに生き残った者の内の一人がアダムとなったのであろうという事である。神は然る後に、彼を新しい種族の先祖、そして新しい文明の先駆者に選ばれたのである。彼は、あたかも死せる者達の中から創造された、生命の新しい時代の夜明けを表わしている。カリファーは後継者という意味を表わす事からも、彼が引き継いだアダム以前に地上に存在し生きた人々がいた事は明確であり、アメリカやオーストラリア、又その他の国の元々の居住民が、一番近いアダムか、今のアダム以前のアダムの先祖かどうか、確信をもって言う事は出来ない。

アダムがどこで生まれ、改革者としてどこで育てられたかについては、諸説があるが、最も受け入れられているのは、彼は元々楽園にいたが、後にそこから出され、地上のどこかに置かれたという説である。しかし“地上に於て”という語句は、この見解に矛盾し、明らかにアダムは地上で暮らし、改革者として育てられたのは地球であった事を示している。可能性としては彼は先ずイラクに住まわされ、然る後に、近隣の土地に移されたと考えるのが最も妥当であろう。

注31　神はアダムに言葉の仕組みをお教えになった。人が文明化されるのに言語は不可欠であり、神がアダムに言語の仕組みを教えられた事はまぎれもないが、クルアーンには、人が、その道徳を完全な物とする為に学ばねばならぬアスマー（名前或いは属性）があると7：18に訳されている。このため、人は神の美徳を正しく認識し理解しなければ、神の知識に達する事が出来ず、且つ、神の美徳は神によってのみ教えられ得る事が

33. 天使たちは云えり、「汝に栄光あれ！　我等は汝に教えられたるもの以外は如何なる知識もなし。げに汝は、全知、全能にまします」と。（注 32）

قَالُوا سُبْحَانَكَ لَا عِلْمَ لَنَا إِلَّا مَا عَلَّمْتَنَا إِنَّكَ أَنْتَ الْعَلِيمُ الْحَكِيمُ ﴿٣٣﴾

34. 主は云えり、「これアダムよ、彼等にそれ等の名を告げよ」と。そこでアダムが彼等にその名前を告げると、（注 33）主は云えり、「わしはお前に、天地(あめつち)の秘密を知りつくし、お前たちが露(あらわ)に見せることも隠すことも、すべてを知る者ぞと告げざりしか？」と。

قَالَ يَا آدَمُ أَنْبِئْهُمْ بِأَسْمَائِهِمْ فَلَمَّا أَنْبَأَهُمْ بِأَسْمَائِهِمْ قَالَ أَلَمْ أَقُلْ لَكُمْ إِنِّي أَعْلَمُ غَيْبَ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَأَعْلَمُ مَا تُبْدُونَ وَمَا كُنْتُمْ تَكْتُمُونَ ﴿٣٤﴾

35. われらが天使たちに向って、「アダムに服従せよ」（注 34）と命ぜし時のことを思い起せ。天使たちは皆従いしが、イブリースのみは従わざりき。（注 35）彼は傲慢にもそれを拒み、不信心者の仲間となれり。

وَإِذْ قُلْنَا لِلْمَلَائِكَةِ اسْجُدُوا لِآدَمَ فَسَجَدُوا إِلَّا إِبْلِيسَ أَبَىٰ وَاسْتَكْبَرَ وَكَانَ مِنَ الْكَافِرِينَ ﴿٣٥﴾

解る。それ故に、その一番最初に、アダムが神を知り、認識し、神に近づく様、そして神から離れていってしまわぬ様、アダム（人）に神の美徳についての知識をお与えになることが必要だったのである。クルアーンに依れば、人と天使の違いは、人は、全ての完全な神の美徳であるアスマー（名前）、フスナー（美）の形象、或いは反映であるのに対し、天使は神の美徳の内の幾つかを表わしているにすぎない点にある。天使達は自分達の意志を持たず、受動的に、神の与えられた機能を果すだけであるが(66：7)、それに反し、人は自由意志と自由な選択の権利を与えられており、自分を神の美徳の完全な顕現としうる能力を有しているという点に於て天使と違っている。簡潔に言えば、この節の意味しているのは、神は先ずアダムに、色々な神の美徳を理解するのに必要な、自由意志と必要な能力を植えつけられ、然る後にこれら美徳が何たる物であるかの知識を与えられたという事なのである。また、アスマーとは、自然界の色々な事物の性質をも意味している。人は自然の力を利用するべく運命づけられている為、神は人に自然の性質と特性を知る能力と力を与えられたのである。

注 32　天使達は自分達の限界を認識していたので、自分達が人の様に神の全ての美徳を反映する事が出来ないと率直に告白している。即ち彼等は、神が、神の永遠の英知に於て、天使達に定められた神の美徳を反映する力を賜わったのである。

注 33　天使達がアダムの具現出来うる神の全ての美徳を、彼等自身の内には顕現出来ないと告げた時、アダムは、神の御意志に従い自分の中に生得の異なった自然の能力を表わし、天使達にその広大な特質を啓示したのである。それによりアダムは、自由意志と決断する力を与えられ、それらを使う事で、神の栄光と偉大さを啓示する事の出来うる人間の創造の必要性を証明したのである。

注 34　アダムは神の美徳の象徴となり、預言者の位を得たので、神は天使達にアダムに服従せよと命じられた。アラビア語のウスジュドゥーは“アダムの前に平伏せよ”という事を意味するものではない、何故ならクルアーンでは、はっきりと神以外の者に平伏する事を禁じているし(41：38)、そういう意味での命令は天使達に下されていないからである。命令は“私がアダムを創造した事への感謝のしるしとして、汝ら自身を神の前に、平伏せしめよ”との意味なのである。

注 35　イブリースはしばしば、サタンと同一に考えられるが、幾つかの場合そうであるとはいえない。先ず、イブリースは天使ではなかった事が理解されねばならない。天使達は、ずっと“従順”で“忠実”であると表

36. われらは云えり､｢アダムよ、汝は妻と共に楽園に住み、(注36) いずこなりと好きなところで腹いっぱい食すがよい。(注37) されど、罪人(つみびと)とならざらんがために、この木 (注38) に近づくなかれ」と。

وَقُلْنَا يَٰٓـَٔادَمُ ٱسْكُنْ أَنتَ وَزَوْجُكَ ٱلْجَنَّةَ وَكُلَا مِنْهَا رَغَدًا حَيْثُ شِئْتُمَا وَلَا تَقْرَبَا هَٰذِهِ ٱلشَّجَرَةَ فَتَكُونَا مِنَ ٱلظَّٰلِمِينَ ﴿٣٦﴾

現されているのに(66：7)、イブリースは神にそむいたと書かれているからである。彼もアダムにつくす様命ぜられていたのに、それにそむいた（7：13）ので神がお怒りになったのである。その上、イブリースへの別個の戒めがなかったとしても、天使は宇宙の色々な場所での保護者である為、天使に与えられた戒めは、全ての生きとし生ける者にも自動的に向けられたものとなるのである。今まで述べた様に、イブリースとは、実際にはその語の語源に基づき、天使に対しはむかった悪しき精霊に対して与えられた名前である。彼は、列記された属性、特に、善を放棄し、路頭に迷い、神の慈悲を遺棄するという属性を有するが故に、そう名付けられたのである。クルアーンでは、アダムの話のある所で 常に二つの名前が並んで述べられるが、イブリースが2：37で言われている様に サタンではないという事は どの場合にもこの二つの名前には明確な区別がみられる事からもわかる。天使と異なり、アダムに仕える事を拒否した者を指す時は常にイブリースで、アダムを欺き、“園”を出される原因となった者を指す時は常に“サタン”という名が示される。非常に重要で、クルアーンを通して常に変らぬこの区別は、少なくとも10ヶ所に現われ（2：35，37；7：12，21；15：32；17：62；18：51；20：117，121；38：75)、はっきりと、イブリースとサタンとは別個であり、アダム自身と同様の人々の一人であったサタンがアダムを欺いた事が明らかである。クルアーンの他の箇所では、イブリースは神の秘密なる創造であり、天使と違って、神に仕える事もそむく事を出来ると示されている。（7：12；13)

注36　この節に現われる「楽園」という言葉は、天或いは天国ではなく、単に、アダムが最初に住まわされた園の様な場所を意味している。この言葉が天を表わさない理由は、先ずアダムが最初に住まわされたのは地上であった事（2：37)、第2に、天とは、一旦そこに入ると決して出される事のない場所である事（15：49)である。何故なら、アダムはこの節で楽園を出されたと言っているからである。これは、アダムが最初に住んだ園は、その土地の肥沃さと、溢れるばかりの新緑の草木故にそう呼ばれた事を表わしている。最近の研究では、イラクかアッシリアのバビロンの近くのエデンの園であると言われている。(Enc. Brit “Ur”を参照)

注37　“好きな所で存分に食べよ”との表現から、アダムの住んでいた場所は誰が治めている所でもなく、言わば、自分の検分した所全ての領主となるべく創られたアダムに与えられた“神の土地”と言えよう。

注38　聖書に依れば、禁断の木は善悪の知識の木であった(創生記2：17)。しかしクルアーンでは、禁断の実を食べてしまったアダムとイブは裸となったという事から、この木は善の源である知識ではなく、アダムにその弱さを暴露させた悪の木であった事を意味している。クルアーンの見解は明らかに正しい。何故なら、人から知識を取り去ってしまうという事は人が存在するにいたる、まさにその目的を駄目にする事である事に他ならないからである。しかしながらクルアーンと聖書はこの木が実際の木ではなかったという点では同一の見解の様である。人を裸にしたり、人に善と悪を教えたりする特徴を持った木など、この地上には存在していないのだから、これは何かを象徴していると考えられる。シャジャラ（木というアラビア語）は口論やいさかいをも意味している。そして クルアーンの他の箇所では二種類のシャジャラ(木)の事が述べられている即わち(1)美しく純粋な善の木と(2)汚れた悪の木である。これに関しては、14：25と27を参照するとよい。純粋な事と純粋な教えは前者になぞられ、不順な事柄や考えは後者になぞらえられる。これらの説明から考え、この節の意味しているのは(1)アダムは口論（けんか）をさける様命ぜられた (2)彼は悪に対し、注意を促されたという事である。

37. しかるに、悪魔が彼等両人を踏みはずさせ、その住めるところより逐われる身に至らしめり。(注 39) さればわれらは云えり、「出て行け。お前たち互に敵となれ。　地上に(注 40) お前たちの住居あり、かりそめの楽しみのために」と。

فَأَزَلَّهُمَا الشَّيْطٰنُ عَنْهَا فَأَخْرَجَهُمَا مِمَّا كَانَا فِيهِ وَقُلْنَا اهْبِطُوا بَعْضُكُمْ لِبَعْضٍ عَدُوٌّ وَلَكُمْ فِي الْأَرْضِ مُسْتَقَرٌّ وَمَتَاعٌ إِلَىٰ حِينٍ ﴿٣٧﴾

38. その時アダムは、主より祈禱の辞を聞けり。而して主は、アダムに情けを垂れ給えり。げに主はたびたび憐れみに転じ、慈悲深き御方にまします。

فَتَلَقَّىٰ آدَمُ مِنْ رَبِّهِ كَلِمٰتٍ فَتَابَ عَلَيْهِ إِنَّهُ هُوَ التَّوَّابُ الرَّحِيمُ ﴿٣٨﴾

39. われらは云えり、「お前たちここから出て行け。他日わが嚮導がお前たちに降る時、之に従う者は恐怖も悲嘆もなからん」と。

قُلْنَا اهْبِطُوا مِنْهَا جَمِيعًا فَإِمَّا يَأْتِيَنَّكُمْ مِنِّي هُدًى فَمَنْ تَبِعَ هُدَايَ فَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿٣٩﴾

40. されど信ぜずして、われらの神兆を虚偽なりと云う者は、業火の住人となりて、その中に久しく住み留まらん。(注 41)

وَالَّذِينَ كَفَرُوا وَكَذَّبُوا بِآيٰتِنَا أُولٰئِكَ أَصْحٰبُ النَّارِ هُمْ فِيهَا خٰلِدُونَ ﴿٤٠﴾

第五項

41. イスラエルの子孫よ、(注 42) わしがお前たちに授けし恩恵を思い起し、わしとの契約を履行せよ。(注 43) さすればわしもお前たちとの契約を果さん。わしのみを畏れ敬え。

يٰبَنِي إِسْرٰٓءِيلَ اذْكُرُوا نِعْمَتِيَ الَّتِي أَنْعَمْتُ عَلَيْكُمْ وَأَوْفُوا بِعَهْدِي أُوفِ بِعَهْدِكُمْ وَإِيَّايَ فَارْهَبُونِ ﴿٤١﴾

注 39　この節の最初の二つの文はサタンの存在がアダムとその妻を彼等がそれまで住んでいた場所から誘惑し、それによって二人が今まで楽しんでいた心地よさを失わされた事を意味している。2：35で説明されている様に、アダムを欺き、苦悩をもたらしたのは、サタンであって、アダムに仕える事に従わなかったと言われているイブリースではない。故にここではイブリースを指すのではなく、アダムの時代にいた人々の中でアダムの敵であった他の誰かを指している。この推論は、イブリースがアダムに対しては何の力も持たなかったという事を示す17：66でも支持される。サタンという言葉はイブリースより、ずっと広い意味を持つ。というのはイブリースは神霊に属し、アダムに仕える事に従わなかった、悪の霊鬼に与えられた名前であり、その為、宇宙の悪の力の旗頭で代表となった者である。しかしサタンは、それが霊であろうと、人、動物、病気、或いはその他のどんなものであってもあらゆる悪又は害のある存在或いは事物に対し使われるのである。故にイブリースは"サタン"であり、イブリースの仲間や結託者は'サタン達'であり、真実の敵、有害な動物、有害な病気も全て"サタン達"なのである。クルアーン、ハディースそしてアラビアの文学では、'サタン'という言葉が、これらの一つ又は全てについて自由に使われている例が、至る所にみられる。

注 40　クルアーンでは生きたまま天に上る者はいないと主張されている。この節で、はっきりと、地上を人の生涯の住家と定め、イエス或いは、その他の誰も、生きたままで天に昇ってはいないと主張している。

注 41　イスラムでは、地獄が永遠に続くとは信じておらず、地獄を、罪人が、定められた期間、精神を治癒し回復させる為に居る一種の悔悟の場とみなしている。(11：109)

注 42　"イスラエル"とは、イサクの息子であるヤコブの別名である。イスラエルとは神が後にヤコブに与えられた名である（創生記 32：28)。元々のヘブライ語ではイスラーとエイルから成る複合語で、(a)神の王子、

42. お前たち、聖書の確証のためにわしが降(くだ)せしものを信じ、これを疑う最初の者となるなかれ。またわずかな価でわしの神兆(しるし)を売るなかれ。このわしのみを守護者とせよ。

وَاٰمِنُوْا بِمَآ اَنْزَلْتُ مُصَدِّقًا لِّمَا مَعَكُمْ وَلَا تَكُوْنُوْٓا اَوَّلَ كَافِرٍۭ بِهٖ ۪ وَلَا تَشْتَرُوْا بِاٰيٰتِيْ ثَمَنًا قَلِيْلًا ۡ وَّاِيَّايَ فَاتَّقُوْنِ ﴿۴۲﴾

43. 虚偽を以って真理を混乱させ、故意に真理を隠すなかれ。

وَلَا تَلْبِسُوا الْحَقَّ بِالْبَاطِلِ وَتَكْتُمُوا الْحَقَّ وَاَنْتُمْ تَعْلَمُوْنَ ﴿۴۳﴾

44. 礼拝を遵守し、喜捨を惜しまず、跪拝(きはい)する人々と共に跪拝(きはい)せよ。

وَاَقِيْمُوا الصَّلٰوةَ وَاٰتُوا الزَّكٰوةَ وَارْكَعُوْا مَعَ الرّٰكِعِيْنَ ﴿۴۴﴾

45. 経典を読みて、(注44) 他人(ひと)に善行を勧めながら、自らは之(これ)を行うことを忘れたるか？　それとも、理解し得ざるか？

اَتَاْمُرُوْنَ النَّاسَ بِالْبِرِّ وَتَنْسَوْنَ اَنْفُسَكُمْ وَاَنْتُمْ تَتْلُوْنَ الْكِتٰبَ ؕ اَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ﴿۴۵﴾

46. 忍耐と礼拝とによって佑助(たすけ)を求めよ。されど謙虚者ならでは、そは得難し、

وَاسْتَعِيْنُوْا بِالصَّبْرِ وَالصَّلٰوةِ ؕ وَاِنَّهَا لَكَبِيْرَةٌ اِلَّا عَلَى الْخٰشِعِيْنَ ﴿۴۶﴾

47. やがてその主に見(まみ)え主の御許(みもと)に帰り行くことを固く信ずる人々ならでは。

الَّذِيْنَ يَظُنُّوْنَ اَنَّهُمْ مُّلٰقُوْا رَبِّهِمْ وَاَنَّهُمْ اِلَيْهِ رٰجِعُوْنَ ﴿۴۷﴾

勇士又は兵上を意味している。(Concordance by Cruden & Hebrew-English Lexicon: 著者W. Gesenius)イスラエルという言葉は(1)ヤコブ自身（創世記32：28)、(2)ヤコブの後裔（中命記6：3、4）そして、(3)全ての方正で神を畏れる人々という、それぞれ異なった三つの意味を表してしる。(Hebrew-English Lexicon)

注43　アブラハム以降、“契約”は、ユダヤ人達によって更新された。ここでの“契約”は聖書の数ケ所で（出エジプト記20章、申命記5、18、26章）触れられている。“契約”が為されシナイ山に神の栄光が顕現した時、ユダヤ人達はこれに併なった“雷と稲妻とトランペットの音に、山から煙が立つ”（出エジプト記20：18）のを見て、余りにも恐れをおぼえたので、モーゼに「貴方が話してくれれば聞きますが、我々が死なぬ様、神が我々に話さないようにして下さい。」と叫んだ。（出エジプト記20：19）これらの無分別な神への言葉は彼等の運命を封印してしまい、その為神はモーゼに、これより後には、ユダヤ人の中からはモーゼの様な、律法を与える預言者は現れない事を告げられたのである。その様な預言者は、後にユダヤ人の同胞であるイシュマエルの末裔から出現するのである。この様に、この節では、神はイスラエルの子供達に、神がイサクと“契約”をし、イサクの子孫が、神との“契約”を果たし、神の十戒に従うのなら、神は彼等に恩恵を与え続け、もし果たさないのであれば、恩恵をはく奪される事を思い起させているのである。今では、ユダヤ人達は、“契約”を守っていない為、神は、既に約束された通りイシュマエルの後裔より約束された預言者を出現させたので、“契約”は、新しい預言者に従う人々に譲渡されたのである。

注44　ここで経典とは聖書を指している。しかし「経典を読みて」という文は、聖書の全ての内容が真実であると認められている事を意味するものではない。

第六項

48. イスラエルの子孫よ、わしがお前たちに授けし恩恵とお前たちを万民に優りて高めしことを思い起こせ。(注 45)

49. 何人も、他人の身代りにはなり得ず、執り成しも (注 46) 容れられず、贖いもきかず、如何なる助けも得られざるその日を恐れよ。

50. また、われらがファラオの民より (注 47) お前たちを救いたる時のことを思い起せ。彼等はお前たちを苛酷な責苦で苦しめ、お前たちの息子を殺害し、女たちを辱めたり。(注 48) あれは主の降したる大いなる試練なりき。

يٰبَنِيٓ إِسْرَآءِيلَ اذْكُرُوا نِعْمَتِيَ الَّتِيٓ أَنْعَمْتُ عَلَيْكُمْ وَأَنِّي فَضَّلْتُكُمْ عَلَى الْعٰلَمِينَ ﴿٤٨﴾
وَاتَّقُوا يَوْمًا لَّا تَجْزِي نَفْسٌ عَن نَّفْسٍ شَيْـًٔا وَّلَا يُقْبَلُ مِنْهَا شَفٰعَةٌ وَّلَا يُؤْخَذُ مِنْهَا عَدْلٌ وَّلَا هُمْ يُنْصَرُونَ ﴿٤٩﴾
وَإِذْ نَجَّيْنٰكُم مِّنْ اٰلِ فِرْعَوْنَ يَسُومُونَكُمْ سُوٓءَ الْعَذَابِ يُذَبِّحُونَ أَبْنَآءَكُمْ وَيَسْتَحْيُونَ نِسَآءَكُمْ وَفِي ذٰلِكُم بَلَآءٌ مِّن رَّبِّكُمْ عَظِيمٌ ﴿٥٠﴾

注 45　この節の意味するのは、ユダヤ人が優っていたのは、彼等の時代の他の人々に対してだけであり、クルアーンでは、全ての民の中で永久的に優越である民を伝えようとする為、3：111 の様に、イスラム教徒が“最も秀れた人々”であるとの表現をしている。

注 46　執り成しは次の条件でとり行なわれる。先づ(1)とりなしをする人は、とりなしてやりたいと思う人と特別なつながりがなくてはならず、その人から特別の恩恵を受けている事そうでないと、とりなしをする人はあえてとりなしをすることはせず、とりなし自体も実り多きものとなりえないからである。(2)とりなしをうける人は、とりなしてくれる人と真実の関係を有していなければならない。後者が、前者と真実の関係になければ、誰も他の人の為にとりなしをしようなどと思わないからである。(3)とりなしを施こしてもらう人は、普通神の喜びを勝ちえるのに正直な努力をした人でなくてはならない (21：29) (4)とりなしは、神の明白な許可なしには為されない。(2：256；10：4)　イスラム教で表現される「執り成し」とは、実際には、つぐないの形を変えたものにすぎない。何故なら「つぐない」とは、こわれた絆を直すとか、ほどけかかった絆をしめるとの意味を表わすからである。それ故、償いの扉が死によって閉ざされても、「執り成し」の扉は開かれているのである。そして「執り成し」は神の慈悲の顕現の方法であり、神は裁き手ではなく主宰者である為、神がそうされようと思われた者に、慈悲の手を指しのべられるのを阻む物は何もないのである。

注 47　ファラオとは特定の王の名前ではなく、ナイル川流域とアレキサンドリアを治める者が、ファラオと呼ばれていたのである。モーゼはファラオであるラムセスII世の統治する時代に生まれ、彼の息子メンフェタII世の君臨時に、ユダヤ人達を連れて、エジプトを出なければならなかった。ラムセスII世は圧政のファラオと呼ばれ、彼の後継者であるメンフェタII世が「出エジプトのファラオ」として知られているファラオである。(Enc. Bibとピークによる Commentary on the Bibleを参照)

注 48　ファラオは、ユダヤ人に、つらく屈辱的な労働をさせて、苛酷な苦役を課した上、ユダヤ人の息子は虐殺し、娘達は生かしておくとの命令も下した。こういった方法で彼はユダヤ人の人間性を破壊させようとしただけでなく、彼等の気高く勇壮な特質の抹殺まで企てたのである。

51. あの時われらは海を分けてお前たちを救い、お前たちの目前にてファラオの民を溺死せしめたり。(注 49)

وَإِذْ فَرَقْنَا بِكُمُ الْبَحْرَ فَأَنْجَيْنٰكُمْ وَأَغْرَقْنَآ اٰلَ فِرْعَوْنَ وَأَنْتُمْ تَنْظُرُوْنَ ﴿٥١﴾

52. また、われらがモーゼと (注 50) 四十日にわたる (注 51) 契約を結びし時のことを思い起せ。その間、モーゼの不在に乗じ、お前たちは犢を (注 52) 拝し、罪を犯したり。

وَإِذْ وٰعَدْنَا مُوْسٰٓى اَرْبَعِيْنَ لَيْلَةً ثُمَّ اتَّخَذْتُمُ الْعِجْلَ مِنْۢ بَعْدِهٖ وَاَنْتُمْ ظٰلِمُوْنَ ﴿٥٢﴾

53. それでもわれらはその時、お前たちを赦したるは、お前たちをして感謝せしめんがためなり。

ثُمَّ عَفَوْنَا عَنْكُمْ مِّنْۢ بَعْدِ ذٰلِكَ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُوْنَ ﴿٥٣﴾

注 49　この事件は、モーゼが神の命によりユダヤ人をエジプトからカナンの地へ脱出させた時の事である。ユダヤ人達は秘密裏に夜脱出し、ファラオがこれを知り家来達と後を追った時、紅海で海にのまれたのである。この偉大な神の啓示の持つ本質的意味を理解するには、類似した節である 20：78；26：62－64；44：25 をも併せて読む必要がある。これらの記述から判る事は、クルアーンが述べる様に(1)モーゼが杖で海をうった時或いは聖書が述べる様にモーゼが海に手をかざした時、丁度引き潮であり、海はその海床を表わし、後退してゆく時であった。(2)モーゼは神に、向かう岸まで急いで渡る様、神に命じられた。(3)しかしファラオの一族が海に着いた時は丁度満潮時にあたっており、彼等はユダヤ人に追いつく事に夢中で、何の考えもなく海にとびこんだ。(4)戦車の重装備や、重い武具等をつけていた為、ファラオの軍隊の進み具合が非常に遅く、まだ海中にいる折、満潮となって、全員、溺れてしまったらしい。という事である。モーゼが杖で海の水をうった事と海が分かれた事には何の因果関係もないのである。ひき潮時であった事と、ユダヤ人達は大急ぎで海を渡れという事が、モーゼへの神兆、或いは神からのお告げであったからにすぎない、神がそうなるべく図られたから、モーゼ達が紅海に着いた時、潮が引き潮となり、神が命じられた通りモーゼが、杖で海をうつと、潮が引き始めユダヤ人達が渡る為の道が出来たのである。引き潮とモーゼの打ちおろした杖は偶然重なったのであり、神のみが引き潮となる事を御存知でモーゼに丁度その時水をうつ様命ぜられていた為、奇跡となったのである。

モーゼがエジプトからカナンに脱出する為に渡った、紅海の正確な地点については、歴史家達の意見は異なっている。ある歴史学者は、その場所がタムスィラートの谷或いはトゥミラートの谷とも呼ばれた、ファラオ族の首都のあった (聖書百科辞典、第 4 巻 4012 項“ラムセス”の項) ゴシェン地域であると指摘しているし、他の学者は、モーゼはもっと北へ上り、地中海の近くのカナンと向かいあったゾアンのまわりをまわっていったと考えている。(聖書百科辞典、1438 項) しかし一番高い可能性としては、モーゼの時代のファラオ族の都のあったタル・アビー・スレイマーンから出てユダヤ人達は先ずティムサハ湾の北西部まで行ったが、湾が網の目状に行手を阻んでした為南に戻り、幅が 2 ～ 3 マイルしかないスエズの街の近くの紅海を渡り、カダスへ向かったと考えられる。(聖書百科辞典、1437 項)

注 50　ユダヤ教の始祖であるモーゼは、ユダヤの民をファラオの独裁から逃れさせた、ユダヤ人の最も偉大な預言者である。聖書の記載に依れば、アブラハムの死後 500 年程の後、そしてイエスに先だつ事 1400 年の頃生きたと言われている。彼は律法を与えた預言者であり、その他のユダヤの預言者は彼の確立したシステムの後継者にすぎない。

注 51　7：143 を参照の事

注 52　人は自分のまわりを取り巻く環境に隷属している、これは特に、支配をうける人々に特有で、彼等は自分達の支配者のやり方や習慣を大体に於いて真似る。ユダヤ人達は長い間、ファラオ族の奴隷であった為、自然にエジプト人達の偶像崇拝を受け入れていた。彼等は、モーゼに連れられてエジプトを出てから途中で偶像崇拝をする人々に出会った時、モーゼに、似た様な礼拝をする事を許してくれと、頼んだのである。(7；139)

54. またわれらがモーゼに、経典と（注 53）識別の基準を授与したるは、お前たちが正しく導かれんがためなり。

وَاِذْ اٰتَيْنَا مُوْسَى الْكِتٰبَ وَالْفُرْقَانَ لَعَلَّكُمْ تَهْتَدُوْنَ ﴿٥٤﴾

55. その時、モーゼはその民に云えり、「我が同胞よ、お前たちは犢を拝し、自らに罪を犯したり。されば悔い改めてお前たちの創り主に慈悲を請い、その邪欲を断て。その方がお前たちの創り主の御心にかなう」と。その後主は、お前たちへ憐れみの顔を向けたり。げに主はたびたび憐れみに転じ、慈悲深くまします。

وَاِذْ قَالَ مُوْسٰى لِقَوْمِهٖ يٰقَوْمِ اِنَّكُمْ ظَلَمْتُمْ اَنْفُسَكُمْ بِاتِّخَاذِكُمُ الْعِجْلَ فَتُوْبُوْٓا اِلٰى بَارِئِكُمْ فَاقْتُلُوْٓا اَنْفُسَكُمْ ذٰلِكُمْ خَيْرٌ لَّكُمْ عِنْدَ بَارِئِكُمْ فَتَابَ عَلَيْكُمْ اِنَّهٗ هُوَ التَّوَّابُ الرَّحِيْمُ ﴿٥٥﴾

56. その時、お前たちは云えり、「モーゼよ、我等はアッラーをこの目で見ずば、汝を信ぜず」と。すると、お前たちが見ている前で、落雷がお前たちを襲いたり。

وَاِذْ قُلْتُمْ يٰمُوْسٰى لَنْ نُّؤْمِنَ لَكَ حَتّٰى نَرَى اللّٰهَ جَهْرَةً فَاَخَذَتْكُمُ الصّٰعِقَةُ وَاَنْتُمْ تَنْظُرُوْنَ ﴿٥٦﴾

57. われらがお前たちを死（注 54）から甦らしめたるは、お前たちをして感謝せしめんがためなり。

ثُمَّ بَعَثْنٰكُمْ مِّنْۢ بَعْدِ مَوْتِكُمْ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُوْنَ ﴿٥٧﴾

58. 而してわれらは、お前たちの頭上を雲で（注55）覆い、マンナ（注 56）とサルワを（注57）降し、「われらが用意せる佳きものを喰へ」と云えり。彼等はわれらを害したに非ず、害したるは、彼等自らなり。

وَظَلَّلْنَا عَلَيْكُمُ الْغَمَامَ وَاَنْزَلْنَا عَلَيْكُمُ الْمَنَّ وَالسَّلْوٰى كُلُوْا مِنْ طَيِّبٰتِ مَا رَزَقْنٰكُمْ وَمَا ظَلَمُوْنَا وَلٰكِنْ كَانُوْٓا اَنْفُسَهُمْ يَظْلِمُوْنَ ﴿٥٨﴾

注 53　モーゼに与えられた十戒の書かれていた“牌”。7：146、151、155 を参照の事。この節では、神はモーゼに経典或いは石碑に書かれた十戒を与えられたのみでなく、善悪をはっきり区別できる様な天啓や神兆、そして規範をお与えになった事が述べられている。

注 54　この節は、不遜に示された不当なユダヤ人達の要求が、彼等の肉体的な死ではなく精神的な死をもたらした事を意味している。この意味は次の節で神が仰せられる、“一旦死んだ汝らをよみがえらせた”即ち、自分達の失ってしまった尊厳と名誉を再び与えられたの意味を持つ節で確証されている。「死」とは成長の力の終息、(57：18)；感じる力の損失(19：24)；解明する力の損失(6：123)；人間の生活をみじめにする悲しみ(14：18)；肉体的死（レーンによる語い辞典）を意味している。

注 55　出エジプト記、40：34－38 を参照の事

注 56　「マンナ」とは好意或いは贈り物、何の苦労や問題もなく手に入る物、はちみつ或いは露を意味している。

注 57　「サルワ」とは(1)アラビアの地域や近隣の国々にいるうずらに似た白色の鳥、(2)それが何であれ、人を満足させ幸せにする物；はちみつなどを表している。マンナとサルワを天から授かったとの表現はクルアー

59. また、われらは云えり、「お前たちこの邑(まち)に入り、(注 58)いずこなりと好きなところで腹いっぱい食せよ。頭(こうべ)をたれて門を入り、「我等の罪を許し給え」と唱えよ。われらはお前たちの罪を赦し、善行者には報奨を増さん」と。

وَإِذْ قُلْنَا ادْخُلُوا هَٰذِهِ الْقَرْيَةَ فَكُلُوا مِنْهَا حَيْثُ شِئْتُمْ رَغَدًا وَادْخُلُوا الْبَابَ سُجَّدًا وَقُولُوا حِطَّةٌ نَّغْفِرْ لَكُمْ خَطَايَاكُمْ ۚ وَسَنَزِيدُ الْمُحْسِنِينَ ﴿٥٩﴾

60. しかるに不義なす徒輩(やから)が、自分たちに告げられし言葉を他の言葉に変えたり。さればわれらは、罪を犯せし者どもに天罰を加えたり、命に背きし故に。

فَبَدَّلَ الَّذِينَ ظَلَمُوا قَوْلًا غَيْرَ الَّذِي قِيلَ لَهُمْ فَأَنزَلْنَا عَلَى الَّذِينَ ظَلَمُوا رِجْزًا مِّنَ السَّمَاءِ بِمَا كَانُوا يَفْسُقُونَ ﴿٦٠﴾

第七項

61. またモーゼが己が民のために水を求めて祈りし時、われらは云えり、「汝の杖でその岩をうて」と。すると、そこより十二の泉が湧き出で、各支族は自分の飲むべき場所(ところ)を知りたり。(注 59)「アッラーが賜えるものを食い且つ飲め。されど地上に騒乱を起し、邪悪な行いをするなかれ」。

وَإِذِ اسْتَسْقَىٰ مُوسَىٰ لِقَوْمِهِ فَقُلْنَا اضْرِب بِّعَصَاكَ الْحَجَرَ ۖ فَانفَجَرَتْ مِنْهُ اثْنَتَا عَشْرَةَ عَيْنًا ۖ قَدْ عَلِمَ كُلُّ أُنَاسٍ مَّشْرَبَهُمْ ۖ كُلُوا وَاشْرَبُوا مِن رِّزْقِ اللَّهِ وَلَا تَعْثَوْا فِي الْأَرْضِ مُفْسِدِينَ ﴿٦١﴾

62. 思い起すがよい、お前たちの言葉を。「モーゼよ、我等は唯一種の食物では満足できぬ。大地で育つものを我等に授け賜わらんことを、主に祈れ。すなわち、青菜、胡瓜(きゅうり)、麦、そら豆、玉葱など」モーゼはそれに答えて、

وَإِذْ قُلْتُمْ يَا مُوسَىٰ لَن نَّصْبِرَ عَلَىٰ طَعَامٍ وَاحِدٍ فَادْعُ لَنَا رَبَّكَ يُخْرِجْ لَنَا مِمَّا تُنبِتُ الْأَرْضُ مِن بَقْلِهَا وَقِثَّائِهَا وَفُومِهَا وَعَدَسِهَا وَبَصَلِهَا ۖ قَالَ أَتَسْتَبْدِلُونَ

ンでは三ケ所に見うけられる。当節はその一つである。(7：161 も参照) その三つの節全てに「我等が授けたよき物を食べよ」との訓令が続いている。この事からシナイ山の荒地で幾種類かの健康に良く美味な食べ物がユダヤ人達に授けられた事がわかるが、それは主としてマンナとサルワであった。出エジプト記の 16：13−15 を参照の事

注 58　「邑」は特定の街を指す必要はない。シナイ山からカナンに向かう途中にあった近くの街、或いは最も近くにあったどの街であってもよい。ユダヤ人達は自分達の送っていた生活レベルに達する施設や快適な環境や、以前の生活様式を持つ街に住みたいという欲望が強かったので、私有権のない砂漠ではごく当り前な、好きな所で食べる事ができ、住宅地の生活と砂漠の生活とを融合した様などこか近隣の村に入る事を試みた。しかしこの変化は自分達を他の人々と接触させる事となり、ひいては自分達の道徳律にも影響が生じる為、自分達自身に関して注意深く、又神に対しても従順であろうと努力した。

注 59　この場合のモーゼの奇跡は、自然の法則にさからった事をしたというのではなく神がモーゼに彼が杖でたたけばすぐ溢れでる様になっている特定の位置を啓示なさったという事なのである。地質学者に知られている事であるが、時々、小高い土地や岩の下の浅い所から水が涌き、岩か何か重い物で、たたかれたりつかれたりすると瞬時に水がほとばしる事があるのである。

云えり、「お前たちは優れるものの代りに劣れるものを求むるか？　ならば、エジプトに降り行け。しからばお前たちが求むるものを得ん」と。(注 60) かくて彼等は屈辱と困窮を被り、またアッラーの激怒に遭えり。こは彼等がアッラーの神兆を拒否し、預言者たちを不当にも殺せるが故なり。こは彼等が叛いて、罪を犯したるが故なり。

الَّذِىْ هُوَ اَدْنٰى بِالَّذِىْ هُوَ خَيْرٌؕ اِهْبِطُوْا مِصْرًا فَاِنَّ
لَكُمْ مَّا سَاَلْتُمْؕ وَضُرِبَتْ عَلَيْهِمُ الذِّلَّةُ وَالْمَسْكَنَةُ
وَبَآءُوْ بِغَضَبٍ مِّنَ اللّٰهِؕ ذٰلِكَ بِاَنَّهُمْ كَانُوْا يَكْفُرُوْنَ
بِاٰيٰتِ اللّٰهِ وَيَقْتُلُوْنَ النَّبِيّٖنَ بِغَيْرِ الْحَقِّؕ ذٰلِكَ بِمَا
عَصَوْا وَّكَانُوْا يَعْتَدُوْنَ ﴿٦٢﴾ ع

第八項

63. げに信ずる人々、ユダヤ教徒、キリスト教徒、並びにサービア人たち、(注 61) そのいずれたるを問わず、アッラーを信じ、最後の審判の日を信じ、善行を積む人々は、主より必ず報奨を賜わらん。而して彼等には、恐ろしきこと悲しきこと起らざるべし。

اِنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَالَّذِيْنَ هَادُوْا وَالنَّصٰرٰى وَ
الصّٰبِـِٕيْنَ مَنْ اٰمَنَ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ وَعَمِلَ
صَالِحًا فَلَهُمْ اَجْرُهُمْ عِنْدَ رَبِّهِمْ ۚ وَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ
وَلَا هُمْ يَحْزَنُوْنَ ﴿٦٣﴾

注 60　長い間の奴隷生活と、隷属の日々が続いた為、ユダヤ人達は臆病で怠惰となってしまっていた。神は、ユダヤ人達が自分達の臆病さと怠惰さをうちすてる事が出来る様にと、しばらくの間、砂漠で野草と猟獣に頼る生活をおさせになった。そうする事で生気を取り戻したユダヤ人達は、約束された土地へと導びかれ、パレスチナの統治者となったのである。しかしユダヤ人達は神の本当の御心を理解できず又、理解したとしてもその意味を深く考える事をせず、街に住む事を主張した。神は彼等が約束された土地を支配出来る様に準備させたかったのに、これらの御心を損ねた不運な人々はいろいろな作物を耕作する事に固執した為、望むものの得られる街へ戻る様に告げられた。

注 61　サビという言葉はもともと自分の信仰を新しい信仰の為に捨てる者を指す。しかしここでのサービア人というのはサビ教徒を指し、アラビアの一部の地域とその周辺の国々に存在する特定の宗教グループを意味している。その名称は、(1)メソポタミアに住んでいた星を拝む人々（ギボンの“ローマ帝国”ムルージュ・アル・ザハーブと倫理宗教百科辞典、8巻の“Mandaeans”の項参照）(2)イラクのムサールの近くに住み単一神と全ての神の預言者を信じていたが、経典を所有しなかった人々に対して用いられる、彼等はノアの信仰に従がうと主張している。しかし彼等と、聖書の注釈者が、古代イエメンに住んでいたとして説明するサービア人とを混同しない事。この節は、神と終末の日を信じる事のみで救われる、と間違えて理解されていることがあるが、そういう事を意味している訳ではない。クルアーンが強く主張しているのは、聖なる預言者を固く信ずる事が本質的な必須の事であり（4：151、152；6：93)、その信仰が神への信仰の肝要を為し、来るべき世を信ずるという事は、神の啓示を併せ信ずる事をも意味している（4：151、152；6：93)。他でも、イスラムこそが疑いもなく、宗教として神に認められていると明言されている（3：20、86)。ここで、クルアーンは、神と終末の日を信じる事の言明に局限している。これは啓示と聖なる預言者を信じる事が必須ではないという理由ではなく、神と終末の日を信じる事には神の啓示と聖なる預言者を信じる事が内包されているからである。この4つは本質的に切離す事が出来ないのである。実際には、この節はユダヤ人の“我等こそ神に選ばれし者達である”そしてそれ故救いの対象となる選良である、という間違った信仰をうちこわす様意図されている。この節が言わんとしているのは、救われるべき者が、ユダヤ人、キリスト教徒、サビ教徒、或いはイスラム教徒であろうと構わないという事なのである。信仰が口だけのものであるのなら、それは生命や人をつき動かす力のない死したものとなってしまう。そしてこの節は、預言を具体的に表わす為、イスラムの真実を試す安全な規準

64. またわれらが、お前たちと契約を結び、お前たちの前に山を聳え立たせ、(注 62)「われらがお前たちに授けしものを護持し、その中に記されたることを銘記せよ」と云いし言葉を思い起せ。

وَإِذْ أَخَذْنَا مِيثَاقَكُمْ وَرَفَعْنَا فَوْقَكُمُ الطُّورَ خُذُوا مَا آتَيْنَاكُمْ بِقُوَّةٍ وَاذْكُرُوا مَا فِيهِ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُونَ ﴿٦٣﴾

65. しかるにその後、お前たちはまた背けり。もしアッラーの恩恵と慈悲なかりせば、お前たちは必ず失敗者のうちに入りしなり。

ثُمَّ تَوَلَّيْتُمْ مِنْ بَعْدِ ذَٰلِكَ فَلَوْلَا فَضْلُ اللَّهِ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتُهُ لَكُنْتُمْ مِنَ الْخَاسِرِينَ ﴿٦٤﴾

66. お前たちは、お前たちのうち安息日の掟を破りし者あるを知る。さればわれらはその者どもに告げて、云えり、「猿に堕ちよ(注63)、蔑まれよ」と。

وَلَقَدْ عَلِمْتُمُ الَّذِينَ اعْتَدَوْا مِنْكُمْ فِي السَّبْتِ فَقُلْنَا لَهُمْ كُونُوا قِرَدَةً خَاسِئِينَ ﴿٦٥﴾

67. かくしてわれらは、彼等並びに彼等の後に来る人々のために、神を畏れる人々への戒めとなせり。

فَجَعَلْنَاهَا نَكَالًا لِمَا بَيْنَ يَدَيْهَا وَمَا خَلْفَهَا وَمَوْعِظَةً لِلْمُتَّقِينَ ﴿٦٦﴾

68. モーゼが己れの民に「アッラーがお前たちに牝牛を一頭犠牲に供えんことを命ず」と告げたる時、彼等は云えり、「汝は彼等をからかうか?」と。モーゼは云えり、「アッラーよ我を守り給え、我を愚者の一人たらしむるなかれ」と。

وَإِذْ قَالَ مُوسَىٰ لِقَوْمِهِ إِنَّ اللَّهَ يَأْمُرُكُمْ أَنْ تَذْبَحُوا بَقَرَةً قَالُوا أَتَتَّخِذُنَا هُزُوًا قَالَ أَعُوذُ بِاللَّهِ أَنْ أَكُونَ مِنَ الْجَاهِلِينَ ﴿٦٧﴾

としても取り上げられている。預言は、即ちイスラムが真実の信仰 (宗教) として勝利を得るとの預言である。規準は、預言が、イスラムがまさにその生存をかけて戦っている時に為されたという事実に基づいている。この節の言わんとしている事は，ユダヤ人、キリスト教徒、サビ信徒等、宗教に関してはそれがどの宗教であろうと、彼等が神と終末の日への、深く正直な信仰を持つのなら、そして、真の宗教 (信仰) 即ち、絶対的な帰依ー「イスラム」の真髄である善い行ないを為すのであれば、彼等が嘆く事も、彼等に恐怖が訪れる事もない。ということである。

注 62　この語句はシナイ山が実際にユダヤ人の頭上にそそり立った事を意味している訳ではない。これはユダヤ人がシナイ山のふもとにたたずんでいた時、聖約が起こった事を意味しているにすぎない。又、ユダヤ人がふもとで野営していた時、シナイ山に地震が起こった情景とも考えられる (出エジプト記 19：2) そういう場合には、高い山の山頂がゆれると頭上にまるでかぶさっている様にもみえるであろう。

注 63　「猩」という言葉が比喩的にイスラエル人の卑屈さと醜さを表わす為に使われているが、これは形状的なものではなく性格と精神の構造が猿のようであるとの意味である。彼らの心が猿の様になってしまったのである。それを示すのに神は比喩的な表現をお使いになるのである。もしクルアーンで肉体的な猿への変形を意味しているのであればアラビア語でハセヤという言葉を使うはずであり、合理的な存在に対してのハセインという語は使用しないのである。この言葉を使う事で、イスラエル人がいくら富や教育があっても猿同様世間でさげすまれ、、地上で強大な力を得る事がない事が指摘されている。「猩」という語の持つ原義は、ごみの中に屈伏するという内容の他に、卑屈さとさげすみという意味がある。5章61節も参照の事。

又すべてのユダヤ人を指すのではないという点で当章75節 (注 68) 参照のこと。

69. 彼等は云えり、「お前の主に祈り、如何なる牝牛なのか我等に明示せしめよ」と。モーゼは答えて、云えり、「神は仰せられたり。老い過ぎても、若過ぎてもいず、その中間で丁度年頃の牝牛なりと。さればお前たち、命ぜられしことをなせ」と。

قَالُوا ادْعُ لَنَا رَبَّكَ يُبَيِّنْ لَنَا مَا هِيَ ۚ قَالَ إِنَّهُ يَقُولُ إِنَّهَا بَقَرَةٌ لَا فَارِضٌ وَلَا بِكْرٌ عَوَانٌ بَيْنَ ذَٰلِكَ ۖ فَافْعَلُوا مَا تُؤْمَرُونَ ﴿٦٩﴾

70. 彼等は云えり、「我等のために主に祈り、牝牛が如何なる色かを我等に明示せしめよ」と。モーゼは答えて、云えり、「神は仰せられたり、そは焦げ茶色で、鮮明(あざやか)に冴え、見る人をば喜ばしむる牝牛なり」と。

قَالُوا ادْعُ لَنَا رَبَّكَ يُبَيِّنْ لَنَا مَا لَوْنُهَا ۚ قَالَ إِنَّهُ يَقُولُ إِنَّهَا بَقَرَةٌ صَفْرَاءُ فَاقِعٌ لَوْنُهَا تَسُرُّ النَّاظِرِينَ ﴿٧٠﴾

71. 彼等は更に云えり、「我等のために主に祈り、如何なる牝牛なるかを我等に明示せしめよ。我等にはどの牝牛も同じように見える故に。アッラーの御意志ならば、我等は必ず捜し当てん」と。

قَالُوا ادْعُ لَنَا رَبَّكَ يُبَيِّنْ لَنَا مَا هِيَ إِنَّ الْبَقَرَ تَشَابَهَ عَلَيْنَا وَإِنَّا إِنْ شَاءَ اللَّهُ لَمُهْتَدُونَ ﴿٧١﴾

72. モーゼは答えて、云えり、「神の仰せは、大地を耕し、作物に水を潅(そそ)ぎて疲れざる牝牛。完全無傷の一色の牝牛なり」と。彼等は云えり、「いまようやく汝は真実を告げたり」と。そこで彼等は心ならずもその牝牛を犠牲に供えたり。(注 64)

قَالَ إِنَّهُ يَقُولُ إِنَّهَا بَقَرَةٌ لَا ذَلُولٌ تُثِيرُ الْأَرْضَ وَلَا تَسْقِي الْحَرْثَ مُسَلَّمَةٌ لَا شِيَةَ فِيهَا ۚ قَالُوا الْآنَ جِئْتَ بِالْحَقِّ ۚ فَذَبَحُوهَا وَمَا كَادُوا يَفْعَلُونَ ﴿٧٢﴾

第九項

73. 思い起せ、お前たちが人を殺し、(注 65) その加害者について相い争える時、アッラーはお前たちが隠せしことを (注 66) 明白にせり。

وَإِذْ قَتَلْتُمْ نَفْسًا فَادَّارَأْتُمْ فِيهَا ۖ وَاللَّهُ مُخْرِجٌ مَا كُنْتُمْ تَكْتُمُونَ ﴿٧٣﴾

注 64　イスラエル人達は牛を非常に尊敬するエジプト人に混じって長く暮らしてきていた故に牛に対する尊敬の念はイスラエル人の心にすみついていた。これが、彼らが偶像を造った際、牛の形を用いた理由である（2 章 52 節、出エジプト記 32：4）。心からその念を呼び起こす為、何度も、牛をいけにえにする様にと彼らは命令された(民数紀 19：1－9；レビ記 4：1－21；16：3、11)。彼らは、愛がん用に特殊な牛を飼っていた様でありそうすべき神命があるとの誤解をしていた。故に、彼らは、何度も、モーゼに、神がいけにえにせよと命ぜられた牛に関し、詳しく指定をするように迫り、その質問の結果として、モーゼから動物を指定する為の、幾らかの条件が加えられた。

注 65　前途の章で、ユダヤ人の邪悪な風容や罪悪が述べられたが、この章では、十字架上でイエスを殺そうとした最大の罪が述べられており、その為、聖書に依れば、そのユダヤ人は、偽りの預言者であった事が示されている(申命記 21：23)。この極悪なユダヤ人の計画は、全くの失敗に帰したのである。イエスは十字架から、まるで死人の様ではあったが、まだ生きている状態でおろされた。この歴史的事実に関しては、23：51 を参照の事。

74. 而してわれらは云えり、「それの一部を以て死体を打て」と。かくしてアッラーは死者を蘇らせ、お前たちが納得ゆくようにその神兆を示したり。

فَقُلْنَا اضْرِبُوهُ بِبَعْضِهَا ۚ كَذَٰلِكَ يُحْيِي اللَّهُ الْمَوْتَىٰ وَيُرِيكُمْ آيَاتِهِ لَعَلَّكُمْ تَعْقِلُونَ ﴿٧٣﴾

75. しかるにその後、お前たちの心は岩の如く硬くなり、いや岩石よりも硬くなれり。(注67) その岩石の中には河川が湧き出でるものもあり、また岩が裂けて水が溢れ出るものもあり。またアッラーを畏れて自ら恭謙するものもあり。(注68) アッラーは決してお前たちの所業を見過し給わず。

ثُمَّ قَسَتْ قُلُوبُكُمْ مِنْ بَعْدِ ذَٰلِكَ فَهِيَ كَالْحِجَارَةِ أَوْ أَشَدُّ قَسْوَةً ۚ وَإِنَّ مِنَ الْحِجَارَةِ لَمَا يَتَفَجَّرُ مِنْهُ الْأَنْهَارُ ۚ وَإِنَّ مِنْهَا لَمَا يَشَّقَّقُ فَيَخْرُجُ مِنْهُ الْمَاءُ ۚ وَإِنَّ مِنْهَا لَمَا يَهْبِطُ مِنْ خَشْيَةِ اللَّهِ ۗ وَمَا اللَّهُ بِغَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُونَ ﴿٧٤﴾

76. お前たち、彼等ユダヤ人に、お前たちを信ずることを期待するのか？　彼等の或る者はすでにアッラーのお言葉を聴き、それを理解しながら、しかもその大切なことを知りつつ、後で改竄せり。

أَفَتَطْمَعُونَ أَنْ يُؤْمِنُوا لَكُمْ وَقَدْ كَانَ فَرِيقٌ مِنْهُمْ يَسْمَعُونَ كَلَامَ اللَّهِ ثُمَّ يُحَرِّفُونَهُ مِنْ بَعْدِ مَا عَقَلُوهُ وَهُمْ يَعْلَمُونَ ﴿٧٥﴾

77. 彼等は信者に会えば、云う、「我等もまた信ず」と。されど仲間同士になるや、「アッラーがお前たちに打ち明けしことを彼等に教え、主の前で彼等と論争するつもりか？お前たち、それがわからざるか？」と云う。(注69)

وَإِذَا لَقُوا الَّذِينَ آمَنُوا قَالُوا آمَنَّا وَإِذَا خَلَا بَعْضُهُمْ إِلَىٰ بَعْضٍ قَالُوا أَتُحَدِّثُونَهُمْ بِمَا فَتَحَ اللَّهُ عَلَيْكُمْ لِيُحَاجُّوكُمْ بِهِ عِنْدَ رَبِّكُمْ ۚ أَفَلَا تَعْقِلُونَ ﴿٧٦﴾

注66　この節は、イエスの死に関する真実が明るみに出て、この事件を長く隠し続けてきた覆いが取りはらわれる時がくる事を示している。

注67　前節で言及されている無実のイスラム教徒の殺人は、メディナのユダヤ人達の運命を封印する所となった。彼らの心は後にはどんどん柔軟性を失い、まるで石か、もっとひどくかたくなになってしまうのである。この節では、石の様に生命のないものでも、まだ、何らかの役にたつのに、有徳な事をしようとする心から遠くはなれてしまったユダヤ人は、あまりにも堕落してしまい、高潔な所業など、命ぜられてもしなくなってきているのである。石ですら、そこから水が湧いて人の為になる事があるのに、彼らは石以下であるといえる。

注68　ユダヤ人に関する比喩的表現で「猩」（当章66節）や、「岩石より硬く」（当節）というのは、ユダヤ人全体にあてはめられるものではない。何故なら、ユダヤ人の幾らかは、紛れもなく、神の畏敬に心がゆれ動くからである。これについてこの節で'彼ら（ユダヤ人）の中には、アッラーを畏れて謙る者もいる'と表現されている。

注69　この節では、常に偽善者ぶった行動をする他の階層のユダヤ人について述べている。彼らはイスラム教徒と混じると、世俗的な目的から和し、自分達の経典中の聖なる預言者に関する預言を確認するのである。しかし自分達と同種の者達と交わる時は、自分達の共同社会中の他の者達から、神が彼らに啓示した事について、イスラム教徒達を啓蒙する事を叱責されるのである。即ち聖書の中の聖なる預言者についての預言をイスラム教徒に知らせる事についての叱責である。

78. 彼等はアッラーが、彼等の隠すことも、表わすことも併せ知ることを知らざるか？

أولا يعلمون أن الله يعلم ما يسرون وما يعلنون ﴿٧٨﴾

79. 彼等の中には無知文盲な徒輩あり。その者たちは経典も知りもせず、ただ誤った概念で憶測するにすぎず。

ومنهم أميون لا يعلمون الكتب إلا أماني وإن هم إلا يظنون ﴿٧٩﴾

80. 自らの手で経典を記し、「こはアッラーより降されるものなり」と称し、(注 70) 僅かばかりの金子を得る者どもに災いあれ。己が手で記したるが故に、また利益を得るが故に彼等に災いあれ。

فويل للذين يكتبون الكتب بأيديهم ثم يقولون هذا من عند الله ليشتروا به ثمنا قليلا فويل لهم مما كتبت أيديهم وويل لهم مما يكسبون ﴿٨٠﴾

81. 彼等は云う、「業火が我等に触れるは、数日にしかすぎず」と。(注 71) 云え、「お前たちアッラーと約束を結びたるか？　果して然らば、アッラーは約束を破らざるべし。それともお前たちは、アッラーについてお前たちが知らざることを語るに非ずか？」と。

وقالوا لن تمسنا النار إلا أياما معدودة قل أتخذتم عند الله عهدا فلن يخلف الله عهده أم تقولون على الله ما لا تعلمون ﴿٨١﴾

82. 悪行を重ね、その罪に囲まれて身動きできぬ者、彼等は業火の住人となりて、永劫にその中に住み留まらん。

بلى من كسب سيئة وأحاطت به خطيئته فأولئك أصحب النار هم فيها خلدون ﴿٨٢﴾

83. されど信じて善行を積む者、彼等は楽園の住人となりて、永劫にその中に住み留まらん。

والذين آمنوا وعملوا الصلحت أولئك أصحب الجنة هم فيها خلدون ﴿٨٣﴾

第十項

84. われらがイスラエルの子孫と契約を結びし

وإذ أخذنا ميثاق بني إسرائيل لا تعبدون إلا

注 70　ユダヤ人の中には、神の言葉と称して本を作ったり、それらの一部を作った者達がいた。この様な行為はユダヤ人達により、しばしば行われ、その上、正統な聖書の他に、ユダヤ人達が、啓示された本であるとしている数冊の本があるため、啓示されなかった本と啓示された本との区別をする事が今では不可能になってくている程である。

注 71　ユダヤ人の幾つかの悪習を述べた後に、クルアーンは、ユダヤ人のごうまんさと、心のがん迷さの根本的原因を説明している。クルアーンの指摘する所によれば、これらは罰をうけないという間違った一般概念、(Jew、Enc・Gehenna参照) 或いは、もし罰せられる様な事があっても、その期間は極端に短く、極くささいな罰であるという誤解に起因している。聖なる預言者の時代には、一部のユダヤ人は、自分達の罰は 40 日間以上続くまいと思っていたくらいである。ある者達などは、それを 7 日間などと、勝手に短縮していた。目下の所、ユダヤ人があまねく信じているのは、どのグループに属していようが、いかにひどい人間であっても、無神論者でない限り、11 ケ月、或いは、いくら長くとも、1 ケ年以上、地獄にとめおかれる事はないという事である。こういう者達は地獄で、一生責苦を負うものであるが。

時を思い起せ。「お前たちアッラー以外何者も崇拝するなかれ。而して、両親、親戚、孤児、貧者を親切にせよ。人々に優しく言葉をかけ、礼拝を遵守し、喜捨を惜しむな」しかるにお前たちは、僅かな一部の者を除いて、他は顔をそむけたり。

اللّٰهَ وَبِالْوَالِدَيْنِ إِحْسَانًا وَّذِي الْقُرْبٰى وَالْيَتٰمٰى وَالْمَسٰكِيْنِ وَقُوْلُوْا لِلنَّاسِ حُسْنًا وَّأَقِيْمُوا الصَّلٰوةَ وَاٰتُوا الزَّكٰوةَ ثُمَّ تَوَلَّيْتُمْ إِلَّا قَلِيْلًا مِّنْكُمْ وَأَنْتُمْ مُّعْرِضُوْنَ ﴿٨٣﴾

85. またわれらは、お前たちと契約を結びし時、云えり、「お前たち、己が血を流すなかれ。また己が民をその家より追放するなかれ」と。その時お前たちは、これを是認し、自らその証人たりしなり。

وَإِذْ أَخَذْنَا مِيْثَاقَكُمْ لَا تَسْفِكُوْنَ دِمَاءَكُمْ وَلَا تُخْرِجُوْنَ أَنْفُسَكُمْ مِّنْ دِيَارِكُمْ ثُمَّ أَقْرَرْتُمْ وَأَنْتُمْ تَشْهَدُوْنَ ﴿٨٤﴾

86. しかるにお前たちは、己が同胞を殺し、且つ同胞の一部をその住居から逐い、あまつさえ相い謀って、悪と憎しみとを以て彼等に敵対せり。彼等が俘囚となりてひかれてくると、追放そのものが違法なるにもかかわらず、身代金を要求せり。お前たちは経典の一部を信じ、他を拒む気か？　お前たちのうちかかる行為をなせる者の報いは、現世においては恥辱、審判の日には極刑に処せらるべし。げにアッラーはお前たちの所業を見過し給わず。（注72）

ثُمَّ أَنْتُمْ هٰؤُلَاءِ تَقْتُلُوْنَ أَنْفُسَكُمْ وَتُخْرِجُوْنَ فَرِيْقًا مِّنْكُمْ مِّنْ دِيَارِهِمْ تَظٰهَرُوْنَ عَلَيْهِمْ بِالْإِثْمِ وَالْعُدْوَانِ وَإِنْ يَّأْتُوْكُمْ أُسٰرٰى تُفٰدُوْهُمْ وَهُوَ مُحَرَّمٌ عَلَيْكُمْ إِخْرَاجُهُمْ أَفَتُؤْمِنُوْنَ بِبَعْضِ الْكِتٰبِ وَتَكْفُرُوْنَ بِبَعْضٍ فَمَا جَزَاءُ مَنْ يَّفْعَلُ ذٰلِكَ مِنْكُمْ إِلَّا خِزْيٌ فِي الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا وَيَوْمَ الْقِيٰمَةِ يُرَدُّوْنَ إِلٰى أَشَدِّ الْعَذَابِ وَمَا اللّٰهُ بِغَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُوْنَ ﴿٨٥﴾

87. かくの如き徒輩は、来世より現世を選ぶ者なり。彼等は懲罰を軽減せられず、また如何なる佑助も得ざるべし。

أُولٰئِكَ الَّذِيْنَ اشْتَرَوُا الْحَيٰوةَ الدُّنْيَا بِالْاٰخِرَةِ فَلَا يُخَفَّفُ عَنْهُمُ الْعَذَابُ وَلَا هُمْ يُنْصَرُوْنَ ﴿٨٦﴾

注72　聖なる預言者の時代のメディナには、三つのユダヤ人の部族、バヌー・ケーヌカ、バヌー・ナズィールとバヌー・クレーザと、二つの異教徒の部族アウスとカズラッジュが住んでいた。アウスの隣にバヌー・ケーヌカとバヌー・クレーザの二つのユダヤ人の部族が、又カズラッジュには、バヌー・ナズィールが隣接していた。この為、異教徒間の戦争が始まるとユダヤ人達は自動的にまきこまれてしまう。しかし戦争中に、異教徒がユダヤ人を捕虜にするとユダヤ人達は寄付を集め身代金を支払った。ユダヤ人達は異教徒の捕虜として拘束される事は不当であると考えたのである。クルアーンはこの風習には反対で、彼らの信仰が、ユダヤ人の奴隷化を禁止するのみでなく、相互の戦争関係とあからさまな殺人を禁じており、聖書（又は経典）の一部だけを受け入れて、残りを否定する程悪い事はなく、このように、一部を受け入れないというのは、堕落した心の証拠であるとしている。ユダヤ人の奴隷化禁止に関しては、レビ記25：39−43、47−49、54、55；ネヘミア記5：8参照。

第十一項

88. げにわれらはモーゼに経典を与え、彼の後に幾多の使徒を継がしめたり。またわれらは、マリアの子のイエスに明証を与え、聖霊に（注 73）よって彼を強固ならしめり。しかるにお前たちは、使徒がお前たちの意にそまぬ啓示をもたらすたびに、お前たちは横柄に振る舞い、或る使徒をば嘘つきとののしり、また或る使徒をば殺害せるに非ずや？

وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ وَقَفَّيْنَا مِن بَعْدِهِ بِالرُّسُلِ وَآتَيْنَا عِيسَى ابْنَ مَرْيَمَ الْبَيِّنَاتِ وَأَيَّدْنَاهُ بِرُوحِ الْقُدُسِ أَفَكُلَّمَا جَاءَكُمْ رَسُولٌ بِمَا لَا تَهْوَىٰ أَنفُسُكُمُ اسْتَكْبَرْتُمْ فَفَرِيقًا كَذَّبْتُمْ وَفَرِيقًا تَقْتُلُونَ ﴿٨٧﴾

89. 彼等は云う、「我等の心は覆われているなり」と。然らず！　アッラーはその不信心の故に彼等を呪詛せり。信ずる人々の寥寥たることよ。

وَقَالُوا قُلُوبُنَا غُلْفٌ بَل لَّعَنَهُمُ اللَّهُ بِكُفْرِهِمْ فَقَلِيلًا مَّا يُؤْمِنُونَ ﴿٨٨﴾

90. さて、彼等の手許にある聖書を完全ならしめる経典がアッラーより彼等に降されると、かつて彼等は不信心者どもに対する勝利を祈願しながら、来るものが来ると、信ずることを拒みたり。（注 74）されば、アッラーの呪詛、不信心者どもの上にあれ。

وَلَمَّا جَاءَهُمْ كِتَابٌ مِّنْ عِندِ اللَّهِ مُصَدِّقٌ لِّمَا مَعَهُمْ وَكَانُوا مِن قَبْلُ يَسْتَفْتِحُونَ عَلَى الَّذِينَ كَفَرُوا فَلَمَّا جَاءَهُم مَّا عَرَفُوا كَفَرُوا بِهِ فَلَعْنَةُ اللَّهِ عَلَى الْكَافِرِينَ ﴿٨٩﴾

91. 災いは、彼等が自分の魂を賣り渡せしことなり。つまり、彼等がアッラーの降せし経典を信ぜざるは、アッラーが僕らの中でお気に入りの者に恩寵を垂れ給うことを妬むが故なり。かくて彼等は、主の怒りの上に更に怒りを招けり。不信心者どもには恥ずべき懲罰あり。

بِئْسَمَا اشْتَرَوْا بِهِ أَنفُسَهُمْ أَن يَكْفُرُوا بِمَا أَنزَلَ اللَّهُ بَغْيًا أَن يُنَزِّلَ اللَّهُ مِن فَضْلِهِ عَلَىٰ مَن يَشَاءُ مِنْ عِبَادِهِ فَبَاءُوا بِغَضَبٍ عَلَىٰ غَضَبٍ وَلِلْكَافِرِينَ عَذَابٌ مُّهِينٌ ﴿٩٠﴾

92. 彼等に向って「アッラーの降せしものを信ぜよ」と云うと、彼等は答えて云う、「我等は我等に降されたるものを信ず」と。され

وَإِذَا قِيلَ لَهُمْ آمِنُوا بِمَا أَنزَلَ اللَّهُ قَالُوا نُؤْمِنُ بِمَا

注 73　「聖霊」とは天使長ガブリエルの別名として広く知られている。ルフル・クドゥス（「聖霊」）とは神の聖なる又は、祝福された言葉との意味も表す。

注 74　この節では、ユダヤ人達は、異教徒のアラブ人達には、自分達の経典である聖書中に、世界中に真実をひろめる事となるであろう預言者の到来について、知らせない様にしていたということが表されている。或いは、その解決の仕方としては、聖なる預言者の到来以前に、ユダヤ人達は、神に熱烈に、まちがった信仰にうち勝つ真実の信仰をもたらす預言者を出現させるよう祈願していたのであるといえる。しかし、自分達の祈願していた預言者が実際に出現し、虚偽にうちかつ真実の優勢（支配）がはっきりすると、ユダヤ人達は、預言者を受け入れる事を拒否した。その結果、自分達の上に、神の呪いをうける事となったのである。

ど、その後に降れるものは、たといそれがすでに授かりし経典を完全ならしめる真理であろうと、彼等は之を信ぜざるなり。云え、「お前たちもし信者ならば、何故アッラーの預言者たちを殺害したるか？」と。

أُنزِلَ عَلَيْنَا وَيَكْفُرُونَ بِمَا وَرَآءَهُۥ وَهُوَ الْحَقُّ مُصَدِّقًا لِّمَا مَعَهُمْ ۗ قُلْ فَلِمَ تَقْتُلُونَ أَنۢبِيَآءَ اللَّهِ مِن قَبْلُ إِن كُنتُم مُّؤْمِنِينَ ﴿٩١﴾

93. かつてモーゼが、お前たちのところへ数々の奇跡をもたらせし時、お前たちはモーゼの留守に、犢を拝して罪人となれり。

وَلَقَدْ جَآءَكُم مُّوسَىٰ بِالْبَيِّنَٰتِ ثُمَّ اتَّخَذْتُمُ الْعِجْلَ مِنۢ بَعْدِهِۦ وَأَنتُمْ ظَٰلِمُونَ ﴿٩٢﴾

94. 思い起せ、われらがお前たちと契約を結び、お前たちの上に山を聳え立たせ、(注 75)「われらがお前たちに与えしものを堅持し、耳を傾けよ」と云える時のことを。すると彼等は、「我等は聴く、されど従わず」と答えたり。彼等は信仰心を持たぬが故に、その心は犢の愛に蝕ばまれたり。云え、「お前たちの信仰の命ずるものは、それが信仰だというなら、言語道断なり」と。

وَإِذْ أَخَذْنَا مِيثَٰقَكُمْ وَرَفَعْنَا فَوْقَكُمُ الطُّورَ خُذُوا مَآ ءَاتَيْنَٰكُم بِقُوَّةٍ وَاسْمَعُوا ۖ قَالُوا سَمِعْنَا وَعَصَيْنَا وَأُشْرِبُوا فِى قُلُوبِهِمُ الْعِجْلَ بِكُفْرِهِمْ ۚ قُلْ بِئْسَمَا يَأْمُرُكُم بِهِۦٓ إِيمَٰنُكُمْ إِن كُنتُم مُّؤْمِنِينَ ﴿٩٣﴾

95. 云え、「アッラーと御一緒できる来世の住処が、すべて他の人々を排除して、お前たちだけのものとするなら、本当にそう思うなら、死を望め」と。(注 76)

قُلْ إِن كَانَتْ لَكُمُ الدَّارُ الْءَاخِرَةُ عِندَ اللَّهِ خَالِصَةً مِّن دُونِ النَّاسِ فَتَمَنَّوُا الْمَوْتَ إِن كُنتُمْ صَٰدِقِينَ ﴿٩٤﴾

96. しかし彼等は、決して死を望まざるべし、すでに送りし己が罪故に。アッラーは不義なす者どもをよく知り給う。

وَلَن يَتَمَنَّوْهُ أَبَدًۢا بِمَا قَدَّمَتْ أَيْدِيهِمْ ۗ وَاللَّهُ عَلِيمٌۢ بِالظَّٰلِمِينَ ﴿٩٥﴾

97. 汝は、彼等が、多神教徒にも (注 77) 増して生に執着すること最もはなはだしき民なることを必ず知るべし。千年も生き長らえようと望む者あり。されど、たとい長寿を授かろうと、そは懲罰を免れざるべし。アッラーは彼等がなせることをすべて知り給う。

وَلَتَجِدَنَّهُمْ أَحْرَصَ النَّاسِ عَلَىٰ حَيَوٰةٍ وَمِنَ الَّذِينَ أَشْرَكُوا ۚ يَوَدُّ أَحَدُهُمْ لَوْ يُعَمَّرُ أَلْفَ سَنَةٍ وَمَا هُوَ بِمُزَحْزِحِهِۦ مِنَ الْعَذَابِ أَن يُعَمَّرَ ۗ وَاللَّهُ بَصِيرٌۢ بِمَا يَعْمَلُونَ ﴿٩٦﴾

注 75　　2：64 を参照の事。

注 76　　この意味は、もしユダヤ人が、神が彼らのみに神の恵みを与えられたという主張が正当で、聖なる預言者の主張がまちがっていると確信するのなら、彼らはうそをついたことにより死と破滅を求めるべきだとの意味である。

第十二項

98. 云え、「ガブリエルに (注 78) 敵対する者は誰か？　ガブリエルこそはアッラーの命を奉じ、以前に降されたる経典を完全ならしめ、また信者への嚮導並びに朗報として汝の心に啓示を降す者なり。

قُلْ مَنْ كَانَ عَدُوًّا لِّجِبْرِيْلَ فَإِنَّهٗ نَزَّلَهٗ عَلٰى قَلْبِكَ بِإِذْنِ اللّٰهِ مُصَدِّقًا لِّمَا بَيْنَ يَدَيْهِ وَهُدًى وَّبُشْرٰى لِلْمُؤْمِنِيْنَ ﴿٩٨﴾

99. アッラー、諸天使、諸使徒並びにガブリエルとミカエルに (注 79) 敵対する者は、誰であれ、そのような不信心者に対しては、アッラーは敵となる」と。(注 80)

مَنْ كَانَ عَدُوًّا لِّلّٰهِ وَمَلٰٓئِكَتِهٖ وَرُسُلِهٖ وَجِبْرِيْلَ وَمِيْكٰلَ فَإِنَّ اللّٰهَ عَدُوٌّ لِّلْكٰفِرِيْنَ ﴿٩٩﴾

100. げにわれらは、数々の明白なる神兆を汝に降したり。而して之を拒む者は、不信心者ばかりなり。

وَلَقَدْ أَنْزَلْنَآ إِلَيْكَ اٰيٰتٍ بَيِّنٰتٍ ۚ وَمَا يَكْفُرُ بِهَآ إِلَّا الْفٰسِقُوْنَ ﴿١٠٠﴾

101. なんたることか！　契約を結ぶたびに、何故彼等の中の或る者はそれを破棄するのか？　然らず、彼等の大方はもともと信ぜざるなり。

أَوَكُلَّمَا عٰهَدُوْا عَهْدًا نَّبَذَهٗ فَرِيْقٌ مِّنْهُمْ ۗ بَلْ أَكْثَرُهُمْ لَا يُؤْمِنُوْنَ ﴿١٠١﴾

102. それ故この度、彼等の経典を完成すべくアッラーより使徒が遣わされると、経典を賜りたる人々の一部は、なにも知らぬげに装い、アッラーの経典を背後に投げ捨てたり。

وَلَمَّا جَآءَهُمْ رَسُوْلٌ مِّنْ عِنْدِ اللّٰهِ مُصَدِّقٌ لِّمَا مَعَهُمْ نَبَذَ فَرِيْقٌ مِّنَ الَّذِيْنَ أُوْتُوا الْكِتٰبَ ۙ كِتٰبَ اللّٰهِ وَرَآءَ ظُهُوْرِهِمْ كَأَنَّهُمْ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿١٠٢﴾

注 77　ユダヤ人と比べ、多神教徒の方が、現世の生活に屈従的ではない、何故なら、ユダヤ人と違って異教徒達は、死後の人生の存在を信じていず，その為、死後の罰を恐れる事もないからである。

注 78　「ガブリエル」とはガブルとイルの合成語で、神の勇かんな下僕、或いは、神の召使いの意味をもつ。ヘブライ語のガブルは、'召使い'を意味し、イルは'強大な''力強い'の意味を表す。イブン・アッバスに依れば、ガブリエルのもう一つの名前はアブドゥウッラーである。天使の内にあって中心的存在であるガブリエルはクルアーンの大啓の担い手であった。聖書でも、ガブリエルの役割は、神の伝言を神の下僕に伝える事であるとしている。(ダニエル書 8：16；9：21 とルカによる福音書 1：19) 現節で指摘される様に，クルアーンでもガブリエルに同じ役割りを課している。しかし後になってのユダヤの書物では、彼は、火と雷の天使と表現されている。聖なる預言者の時代には、ユダヤ人は、ガブリエルを、彼らの敵であり、戦争、災いそして困苦の天使とみなしていた。

注 79　ミカエルも主要な天使の内の一人である。これはミークとイルの合成語と考えられ、'何ものも神に似る者はない'との意味を表している。ユダヤ人はミカエルを、好ましい天使とみなしており、ミカエルは、平和と豊かさ、慈雨と牧草の天使としてとらえ、世界を支える仕事を主としてなしていると考えていた。

注 80　天使達は、精神的つながりの中で重要な輪であり，精神的つながりの輪の一つですら、こわしたり、精神システムのたった一つの単位に対してでも悪意を明らかにする者は、実質上、全てのシステムとのつながりを自ら断つ事となるのである。こういった者は、神の真実の下僕に与えられる恵みやいつくしみを、はく奪され、罪人に下される罰に値するところとなるのである。

103. 而して彼等は、ソロモンの統治に反逆せる者どもが従いし行動を追う。ソロモンは不信心者に非ず。不信心者は、人々に虚偽や欺瞞を教えし反逆者どもなり。彼等はバビロンで、二人の天使、(注 81) ハールートとマールートに (注 82) 降されたるものを人々に教えたり。されど両天使は、「我等の方術は誘惑なり。されば、不信心者となるなかれ」と前置きせずには何人にも教えざりき。かくして反逆者どもは両天使より、夫と妻の仲をさく術を習いしが、彼等反逆者とてアッラーの許しなしには何人をも之によって害することはなかりき。しかるに、預言者に敵対する者どもは、自分を害し、益なきことばかりを学べるなり。(注 83) そんなものを購える者に来世の福が分け与えられざることを知りながら。げに災いは、彼等が自分の魂を売り渡したることなり。彼等、もしもこの事を知りたりせば！

وَاتَّبَعُوا مَا تَتْلُوا الشَّيٰطِيْنُ عَلٰى مُلْكِ سُلَيْمٰنَ وَ
مَا كَفَرَ سُلَيْمٰنُ وَلٰكِنَّ الشَّيٰطِيْنَ كَفَرُوْا يُعَلِّمُوْنَ
النَّاسَ السِّحْرَ وَمَآ اُنْزِلَ عَلَى الْمَلَكَيْنِ بِبَابِلَ
هَارُوْتَ وَمَارُوْتَ وَمَا يُعَلِّمٰنِ مِنْ اَحَدٍ حَتّٰى
يَقُوْلَآ اِنَّمَا نَحْنُ فِتْنَةٌ فَلَا تَكْفُرْ فَيَتَعَلَّمُوْنَ مِنْهُمَا
مَا يُفَرِّقُوْنَ بِهٖ بَيْنَ الْمَرْءِ وَزَوْجِهٖ وَمَا هُمْ بِضَآرِّيْنَ
بِهٖ مِنْ اَحَدٍ اِلَّا بِاِذْنِ اللّٰهِ وَيَتَعَلَّمُوْنَ مَا يَضُرُّهُمْ
وَلَا يَنْفَعُهُمْ وَلَقَدْ عَلِمُوْا لَمَنِ اشْتَرٰىهُ مَا لَهٗ فِى
الْاٰخِرَةِ مِنْ خَلَاقٍ وَلَبِئْسَ مَا شَرَوْا بِهٖٓ اَنْفُسَهُمْ
لَوْ كَانُوْا يَعْلَمُوْنَ ﴿١٠٣﴾

注 81　ここでの「二人の天使」という表現は、二人の聖人を指す、何故なら、ここでの二人の天使は人々に何かを教えると述べられており、天使は人々に混じって暮らさない為、人間と自由に往来する事はないからである。(17：95；21：8)

注 82　これらの名前は、この二人の聖人が出現する目的が、イスラエル人の敵である王国の栄光と威光を打ち破り、バラバラに裂く事にあるという事を象徴している。これらの聖人は、始めて出会う場合の相手には，自分達は善悪の区別をつけさせる為に神からの試練として下された存在なのであると語り、自分達の仲間を男子のみに制限した。然るにこの節の言わんとする所は聖なる預言者の時代のユダヤ人達は、ソロモンの時代の彼らの祖先がしていたのと同様に、有害な習慣にふけっていたという事である。更に言わんとしているのは、ソロモンの時代の害悪をまきちらした者達というのは、ソロモンを不信者であると決めつけた無法な者達でありここでソロモンが信仰を持たぬ者と責められる事に反論し、事実はそうではないという事を明確に記している。また彼の時代のこういった輩は人々をだまし自分達の意図する所を糊塗する為、一般に理解されているのとは違った意味合いで相手にその内容が伝わる様な形でその時代の人に教唆したのである。この節では、ソロモンに敵対する者達が、彼に対して、仕掛けたワナと、そうすることで、ソロモンの王国をつぶそうとした陰謀について語っている。ソロモンの時代の状況を語る事により、メディナのユダヤ人も、それと全く同様の下劣な策を聖なる預言者に仕かけてきているが、彼らの邪悪な目的が実を結ぶ事は絶対にありえないという事を表しているのである。

注 83　ユダヤ人達は、イスラムの威光が着実に拡がり、アラビアに於ける、反イスラムが完全に覆がえされ、イスラムの発展を自分達で止めたり縮めたりする事が出来ない事に気付いてからは、部外者達を反イスラムへと扇動し始めた。キリスト教徒の支配者に抑圧、迫害された彼らはペルシアに亡命し、自分達の信仰の拠点をユダからバビロニアへと移した (Hutchinson 16－3著、History of the Nations、P550 16－3)。次第にペルシアの帝王達の宮廷に影響力をふるい始めたユダヤ人は、イスラムへの陰謀を企て始めたのである。彼らの扇動は功を奏し、チョスロスII世が、イスラムを受け入れる様にとの聖なる預言者からの手紙を受け取った時、

104. もし彼等が信じて、正しく行いたれば、アッラーより更に佳き報奨を得たりしものを。彼等、もしもこの事を知りたりせば！

ولو انهم امنوا واتقوا لمثوبة من عند الله خير لو كانوا يعلمون ﴿١٠٤﴾

第十三項

105. 汝等信徒たちよ、ラーイナー※と云うなかれ。ウンズルナー※と云え。而して耳を傾けよ。不信心者どもは酷刑あらん。

※ラーイナーとは「我らを見よ」の意。しかし、ちょっとアクセントが変ると、「愚か者」、「うぬぼれ屋」となる。

※ウンズルナーとは、「我らを見つめよ」の意。

يايها الذين امنوا لا تقولوا راعنا وقولوا انظرنا واسمعوا وللكفرين عذاب اليم ﴿١٠٥﴾

106. 経典の民の中の不信心者どもや多神教徒たちは、主よりお前たちに下すものは、如何なる良きものでも、望まざるなり。されどアッラーは、誰れにもせよ、お気に召さば、慈悲を垂れ給う。アッラーは大いなる慈悲者にまします。

ما يود الذين كفروا من اهل الكتب ولا المشركين ان ينزل عليكم من خير من ربكم والله يختص برحمته من يشاء والله ذو الفضل العظيم ﴿١٠٦﴾

107. 以前に啓示せるものを廃棄し、また忘却せしむる時は、われらはそれに優るか、又はそれに等しきものを授く。汝、アッラーが全能にましますことを知らざるか？

ما ننسخ من اية او ننسها نات بخير منها او مثلها الم تعلم ان الله على كل شيء قدير ﴿١٠٧﴾

108. 汝、天地の大権がアッラーの所有なることを知らざるか？　アッラーを措いて、お前たちには如何なる守護者も、佑助者もなし。

الم تعلم ان الله له ملك السموت والارض وما لكم من دون الله من ولي ولا نصير ﴿١٠٨﴾

109. かつてモーゼが問われし如く、お前たち、己が使徒を詰問する気か？　信仰の代りに不信心を選ぶ者は、正しい道より迷い去れる者なり。(注 84)

ام تريدون ان تسئلوا رسولكم كما سئل موسى من قبل ومن يتبدل الكفر بالايمان فقد ضل سواء السبيل ﴿١٠٩﴾

チョスロスII世は、なぜ自分がイスラムを受け入れる必要があるのかと、当時はペルシアの領地であったイエメンの総監バードハームに、聖なる預言者を捕らえ鎖につないでペルシア宮廷に連れて来いとの命令を出させるに到った。この節が言及しているのは、聖なる預言者の時代のユダヤ人達のこういった、策謀や陰謀である。彼らが注目したのは、自分達の祖先達も同様に先ずソロモンに対し、ユダヤ社会の数名が、秘密の暗号や記号を伝えあう結社を作って、謀り事をめぐらしたという事実である。(列王上 11：14、23、26、29－32、11：14、23、26、歴代志下 10：2－4)。ユダヤ人が秘密結社を二度めに作ったのはネブカドネザル王の時代に、バビロンで捕虜となっていた時である。この節で言及されている聖人は、ハガイ、そしてイッドの息子であるゼガリヤである(エズラ書5：1)。これらの聖人達は秘密結社の会員を男子に限り、新しい会員の入会時には、彼らは自分達を神からの試練であると言ったがイスラエル人は、彼らのいうことを信じなかった。

注 84　この節では聖なる預言者の使命をくつがえすためにユダヤ人が用いた巧妙な計略について述べている。彼らは宗教に関係ないばかげた質問をした。それはイスラム教徒に疑問の精神を植えつけるためであり、そのために信仰の権威は傷つけられ、不信のとりこになるのである。

110. 経典の民の多くの者は、真理が証明された後でも、ただ自らの嫉妬心故に、すでに帰信せるお前たちを再び不信心者たらしめんと願う。されど許してやれ、顧みるな、アッラーの判決が下るまでは。げにアッラーは全能にまします。

وَدَّ كَثِيرٌ مِّنْ أَهْلِ الْكِتٰبِ لَوْ يَرُدُّونَكُم مِّنْ بَعْدِ إِيمَانِكُمْ كُفَّارًا ۚ حَسَدًا مِّنْ عِندِ أَنفُسِهِم مِّنۢ بَعْدِ مَا تَبَيَّنَ لَهُمُ الْحَقُّ ۚ فَاعْفُوا وَاصْفَحُوا حَتّٰى يَأْتِيَ اللّٰهُ بِأَمْرِهِ ۗ إِنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿١١٠﴾

111. 礼拝を遵守し、喜捨をせよ。お前たちが自らのためになしたる善行は、すべてアッラーの御許(みもと)に届かん。げにアッラーはお前たちの所業をみそなわし給う。

وَأَقِيمُوا الصَّلٰوةَ وَآتُوا الزَّكٰوةَ ۚ وَمَا تُقَدِّمُوا لِأَنفُسِكُم مِّنْ خَيْرٍ تَجِدُوهُ عِندَ اللّٰهِ ۗ إِنَّ اللّٰهَ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ﴿١١١﴾

112. 彼等は云う、「ユダヤ教徒、又はキリスト教徒以外は何人(なんぴと)も楽園に入るを得ず」と。そは彼等の虚しい希望なり。(注 85) 云え、「お前たちの云うことが本当なら、その証拠を示せ」と。

وَقَالُوا لَن يَدْخُلَ الْجَنَّةَ إِلَّا مَن كَانَ هُودًا أَوْ نَصٰرٰى ۗ تِلْكَ أَمَانِيُّهُمْ ۗ قُلْ هَاتُوا بُرْهَانَكُمْ إِن كُنتُمْ صٰدِقِينَ ﴿١١٢﴾

113. 否、アッラーに全く服従し、善行をなす者は、必ず主より報奨を受けん。かかる人々には、恐怖も悲しみも起らざるべし。(注86)

بَلٰى مَنْ أَسْلَمَ وَجْهَهُ لِلّٰهِ وَهُوَ مُحْسِنٌ فَلَهُ أَجْرُهُ عِندَ رَبِّهِ وَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿١١٣﴾

第十四項

114. ユダヤ教徒は云う、「キリスト教徒には拠り所なし」と。キリスト教徒は云う、「ユダヤ教徒には拠り所なし」と。両者は共に同じ経典を読誦する者なり。また知識を持たざる人々も同じことを云う。いずれ復活の日に、アッラーが彼等の論争に判決を下すべし。

وَقَالَتِ الْيَهُودُ لَيْسَتِ النَّصٰرٰى عَلٰى شَيْءٍ وَقَالَتِ النَّصٰرٰى لَيْسَتِ الْيَهُودُ عَلٰى شَيْءٍ وَهُمْ يَتْلُونَ الْكِتٰبَ ۗ كَذٰلِكَ قَالَ الَّذِينَ لَا يَعْلَمُونَ مِثْلَ قَوْلِهِمْ ۚ فَاللّٰهُ يَحْكُمُ بَيْنَهُمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ فِيمَا كَانُوا فِيهِ يَخْتَلِفُونَ ﴿١١٤﴾

注 85　ユダヤ教徒もキリスト教徒も、自分達だけが救いを手にしているという思い違いをしている。

注 86　この節では、完全正義に至る重要な三段階のことをほのめかしている。即ち、ファナー(死)、バカー(再生)、リカー(神との一致)である。「アッラーに完全に服従する」という言葉の意味は、我々の力、器官その他すべてが完全に神に屈服し、神の奉仕に捧げられるという事である。この状態がファナー、即ち真のイスラム教徒が自分に課す死のことである。第二節の「彼は善の実行者である」という言葉はバカー、即ち再生の状態を指している。それは、人が神の愛の中で迷い、世間的な計画や欲望が消えるとき、あたかも新しい命が与えられたように感じ、それがバカー(即ち再生)と呼ばれる。それから人は神のため又、人の奉仕のために生きるようになる。結びの言葉は正義の第三にして最高の段階を描写している。即ちリカーの状態、神との一致の状態で「休息している魂」、といわれる状態である。(89 章 28 節)

115. アッラーの礼拝所でその名を讃えることを拒み、あまつさえ之を壊さんとする者、これ以上の不届きがあろうか？（注87）かかる者は本来、恐怖なしには礼拝所に入ることを許されぬ筈なり。彼等は現世では恥辱を、来世では酷い罰を受けん。

وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنْ مَّنَعَ مَسٰجِدَ اللّٰهِ أَنْ يُّذْكَرَ فِيهَا اسْمُهٗ وَسَعٰى فِي خَرَابِهَا ۭ أُولٰٓئِكَ مَا كَانَ لَهُمْ أَنْ يَّدْخُلُوهَآ إِلَّا خَآئِفِينَ ۭ۬ لَهُمْ فِي الدُّنْيَا خِزْيٌ وَّلَهُمْ فِي الْاٰخِرَةِ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿١١٥﴾

116. 東も西もアッラーの所有なり。（注88）故にお前たちいずこに転じようとも、そこに必ずアッラーの慈顔あり。げにアッラーは慈悲深く、すべてを知り給う。

وَلِلّٰهِ الْمَشْرِقُ وَالْمَغْرِبُ ۚ فَأَيْنَمَا تُوَلُّوا فَثَمَّ وَجْهُ اللّٰهِ ۭ إِنَّ اللّٰهَ وَاسِعٌ عَلِيمٌ ﴿١١٦﴾

117. 彼等は云う、「アッラーに御子あり」と。（注89）聖なるかな、アッラー！　断じて然らず。天地に在るすべてのものは、アッラーの所有なり。皆ことごとくアッラーに服従す。

وَقَالُوا اتَّخَذَ اللّٰهُ وَلَدًا ۙ سُبْحٰنَهٗ ۭ بَلْ لَّهٗ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ ۭ كُلٌّ لَّهٗ قٰنِتُونَ ﴿١١٧﴾

118. 彼こそは天地の創始者なり。彼ものごとを決め、ただ「在れ！」と云えば、すなわちその通りになるなり。（注90）

بَدِيعُ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ ۭ وَإِذَا قَضٰٓى أَمْرًا فَإِنَّمَا يَقُولُ لَهٗ كُنْ فَيَكُونُ ﴿١١٨﴾

注87　この節は、他の宗教の祈り場に暴行を加えることまでする過激な行いに対する強い怒りを表している。彼らは聖なる場所で神を礼拝することを妨げ、寺院を破壊することまでする。そのような暴行は強い言葉で非難され、忍耐と寛大さの教訓が説かれている。クルアーンはすべての人に祈りの場で神を礼拝する自由で制限されない権利を認めている。なぜなら寺院やモスクは神を礼拝するために捧げられた場所であり、他の人が神を礼拝するのを妨げる人はその破壊と荒廃に手を貸しているのであるから。

注88　この節は、イスラムがはじめ東洋に広められ現代になって西洋に普及していくという預言を包含している。

注89　「アッラーに御子あり」という語はユダヤ教の宗教文学において「神の愛するしもべ」あるいは「預言者」の意味で比喩的に使われている。（ルカ20章36節マタイ5章9節、45節、48節申命記14章1節出エジプト記4章22節、ガラテア書3章26節等）神に息子があるならば、神は性的欲求に支配され妻を必要としその美徳を息子と共有しうるものになる。なぜなら息子は父親の体の一部だからである。神は死に支配されねばならない、なぜなら種の生殖は滅びゆくものの特徴だからである。イスラムは、このような考えすべてを拒否する。イスラムの教えによれば神は聖なる方でどんな欠陥も持たない方だからである。

注90　この特質はキリストの神性というキリスト教の教義に矛盾するばかりでなく、魂と物質は太古からあり永遠に存在するというヒンズー教の理論をも拒否している。(1)神は天と地の創造者で、神は息子や他のいかなる者の助力も宇宙の創造に際して必要としなかった事を意味している。(2)神は宇宙の創造者である、即ち神は無からすべての物を創造したのであって既存のモデルも既存の物質も必要としなかった。(3)神は全能である、即ちある物に「存在せよ」と命ぜられると、常に神の命令と計画に調和する形で存在するようになる。この節では、時々間違って理解されているが，神が存在せよと命ぜられた時、すぐに存在するようになると必ずしも意味しているわけではない。ここで言われているのは、神が命ぜられると何者もその命令を妨げることができないという事である。

119. 知識を持たざる者どもは云う、「アッラーは何故に我等に話しかけざるか、また神兆を（注 91）授けざるか？」と。以前にも彼等と同じことを云える者どもあり。彼等の心は同じなり。われらはすでに、確固たる信仰を持つ民にはさまざまなる神兆を明らかにせり。

وَقَالَ الَّذِينَ لَا يَعْلَمُونَ لَوْلَا يُكَلِّمُنَا اللَّهُ أَوْ تَأْتِينَا آيَةٌ ۗ كَذَٰلِكَ قَالَ الَّذِينَ مِن قَبْلِهِم مِّثْلَ قَوْلِهِمْ ۘ تَشَابَهَتْ قُلُوبُهُمْ ۗ قَدْ بَيَّنَّا الْآيَاتِ لِقَوْمٍ يُوقِنُونَ ﴿١١٩﴾

120. われらは汝を、朗報の伝達者として、また警告者として、真理を持たせて派遣せり。故に地獄に堕ちる者どもについて、汝に責任なし。

إِنَّا أَرْسَلْنَاكَ بِالْحَقِّ بَشِيرًا وَنَذِيرًا ۖ وَلَا تُسْأَلُ عَنْ أَصْحَابِ الْجَحِيمِ ﴿١٢٠﴾

121. ユダヤ教徒は、汝が彼等の宗旨に従わざる限り、満足せざるべし。キリスト教徒もまた然り。云え、「アッラーの御導こそが真の導きなり」と。もし汝、知識を授けられながら邪な彼等の考えに従わば、汝はアッラーの怒りの前で、友も援助者も持たざるべし。

وَلَن تَرْضَىٰ عَنكَ الْيَهُودُ وَلَا النَّصَارَىٰ حَتَّىٰ تَتَّبِعَ مِلَّتَهُمْ ۗ قُلْ إِنَّ هُدَى اللَّهِ هُوَ الْهُدَىٰ ۗ وَلَئِنِ اتَّبَعْتَ أَهْوَاءَهُم بَعْدَ الَّذِي جَاءَكَ مِنَ الْعِلْمِ ۙ مَا لَكَ مِنَ اللَّهِ مِن وَلِيٍّ وَلَا نَصِيرٍ ﴿١٢١﴾

122. われらから経典を授けられ、正しく之に従う者、これ等の人々こそ信者なり。（注 92）されど之を信ぜざる者ども、彼等は失敗者なり。

الَّذِينَ آتَيْنَاهُمُ الْكِتَابَ يَتْلُونَهُ حَقَّ تِلَاوَتِهِ أُولَٰئِكَ يُؤْمِنُونَ بِهِ ۗ وَمَن يَكْفُرْ بِهِ فَأُولَٰئِكَ هُمُ الْخَاسِرُونَ ﴿١٢٢﴾

第十五項

123. イスラエルの子孫よ、わしがお前たちに垂れたる恩寵を思い起せ、また万民の上にお前たちを高めたるそのことを。

يَا بَنِي إِسْرَائِيلَ اذْكُرُوا نِعْمَتِيَ الَّتِي أَنْعَمْتُ عَلَيْكُمْ وَأَنِّي فَضَّلْتُكُمْ عَلَى الْعَالَمِينَ ﴿١٢٣﴾

124. 何人も他人の身代りになれず、如何なる賠償も受入れられず、またどんな執り成しも無益で、誰の助けも得られざるその日を、畏れ慎め。

وَاتَّقُوا يَوْمًا لَّا تَجْزِي نَفْسٌ عَن نَّفْسٍ شَيْئًا وَلَا يُقْبَلُ مِنْهَا عَدْلٌ وَلَا تَنفَعُهَا شَفَاعَةٌ وَلَا هُمْ يُنصَرُونَ ﴿١٢٤﴾

注 91　信じない者が「しるし」を求めると言われる時はいつでも「しるし」は自分たちで考案した「しるし」か罰の「しるし」のことである。（21 章 6 節、6 章 38 節、13 章 28 節、20 章 134 節、135 節、29 章 5 節）

注 92　この言葉はムスリムについて述べているのであって、ユダヤ教徒やキリスト教徒のことではないである。なぜならクルアーンの真に誠実な信奉者はムスリムであって、ユダヤ教徒やキリスト教徒のことではない。彼らはクルアーンを信ずる事を拒否し、クルアーンをでっちあげの作品として拒んでいる。

125. アブラハムが主の命によって試めされ、而(しか)して彼がそれを果したときのことを思い起せ。主は云えり、「わしは汝を人々の導師たらしめん」と。そこでアブラハムは、「願わくは我が子孫(こどもら)からも導師を」と奉上せり。主は云えり、「わしの契約は罪人(つみびと)には及ばず」と。

وَاِذِ ابْتَلٰٓى اِبْرٰهٖمَ رَبُّهٗ بِكَلِمٰتٍ فَاَتَمَّهُنَّ ؕ قَالَ اِنِّیْ
جَاعِلُكَ لِلنَّاسِ اِمَامًا ؕ قَالَ وَمِنْ ذُرِّیَّتِیْ ؕ قَالَ
لَا یَنَالُ عَهْدِی الظّٰلِمِیْنَ ﴿۱۲۵﴾

126. またわれらが、聖殿を（注93）人類の集合の場所、並びに安全地域（注94）と定め、アブラハムの立てる処を礼拝の場所とせよと告げたときのことを思い起せ。われらはアブラハムとイシマエルに命じて、云えり、「ここに巡遊する人々や、お籠りに来る人々、跪拝叩頭(きはいこうとう)しにくる人々のために、わしの聖殿を掃き清めよ」と。

وَاِذْ جَعَلْنَا الْبَیْتَ مَثَابَةً لِّلنَّاسِ وَاَمْنًا ؕ وَاتَّخِذُوْا
مِنْ مَّقَامِ اِبْرٰهٖمَ مُصَلًّی ؕ وَعَهِدْنَاۤ اِلٰۤی اِبْرٰهٖمَ
وَاِسْمٰعِیْلَ اَنْ طَهِّرَا بَیْتِیَ لِلطَّآئِفِیْنَ وَالْعٰكِفِیْنَ
وَالرُّكَّعِ السُّجُوْدِ ﴿۱۲۶﴾

127. その時、アブラハムが祈って、云えり、「主よ、ここを平安の地となし、アッラーと末日を信ずる住民のために果実を賜え」と。主は云えり、「不信心者どもにもしばし恩恵を与えてやるが、後に之(これ)を業火(ごうか)の刑罰に突き落さん。そは悲惨な行き先なり」と。

وَاِذْ قَالَ اِبْرٰهٖمُ رَبِّ اجْعَلْ هٰذَا بَلَدًا اٰمِنًا وَّارْزُقْ
اَهْلَهٗ مِنَ الثَّمَرٰتِ مَنْ اٰمَنَ مِنْهُمْ بِاللّٰهِ وَالْیَوْمِ
الْاٰخِرِ ؕ قَالَ وَمَنْ كَفَرَ فَاُمَتِّعُهٗ قَلِیْلًا ثُمَّ اَضْطَرُّهٗۤ
اِلٰی عَذَابِ النَّارِ ؕ وَبِئْسَ الْمَصِیْرُ ﴿۱۲۷﴾

128. またアブラハムと（注95）イシマエルが聖殿の基礎を置き、祈りしときのことを思い起せ。「我等の主よ、我等よりこの家を受け給え。げに汝はすべてを聴き、すべてを知り給う。

وَاِذْ یَرْفَعُ اِبْرٰهٖمُ الْقَوَاعِدَ مِنَ الْبَیْتِ وَاِسْمٰعِیْلُ ؕ
رَبَّنَا تَقَبَّلْ مِنَّا ؕ اِنَّكَ اَنْتَ السَّمِیْعُ الْعَلِیْمُ ﴿۱۲۸﴾

注93　カーバ（聖殿）は伝説で言われているように、又、クルアーン自体が暗示しているように、はじめアダムによって建てられ（3章9節）、ある期間彼の子孫の礼拝の中心地であった。それから時が経つにつれて、人々は種々の小社会に分かれ、礼拝のためには別々の中心地を用いるようになった。その後アブラハムがそれを建て直し、彼の息子イシュマエルを通して彼の子孫に代々礼拝の中心地として残された。しかし時が経つにつれて、そこは偶像崇拝の家にかえられていった。その数は360にもなって、ほとんど1年の日数と同じ位になった。聖なる預言者の到来で、そこは再びすべての国の礼拝の中心にされた。聖なる預言者は、アダム以後分散してしまっていた人類を1つの人類共同体にまとめるために、預言者として遣わされた。

注94　メッカの町であるカーバは、平和と安全の場であると宣言した。力ある帝国はぼろぼろに崩壊し、歴史が始まって以来はじめて広い地域が荒れはてた。しかし、メッカの平和は物質的には乱されなかった。他の宗教の信仰の中心地は、危険時にこのような平和と自由を手にしたことはなかった。しかし、メッカは保護と安全の町としてとどまった。外国人の侵入もなかった。メッカは常に至高なる方の手の中にあった。

注95　アブラハムはカーバの創立者であったのか、それともただの再建者にすぎないのかは多くの議論を引き起こしてきた。アブラハムがその場の創立者であるという人もいるし、その起源はアダムにまで逆のぼると

129．主よ、なにとぞ我等を汝に服従帰依せしめ、我等の子孫も服従帰依する民たらしめよ。我等に祭儀を教え給え。慈顔を向け給え。げに汝はしばしば憐れみに転じ、慈悲深くまします。

رَبَّنَا وَاجْعَلْنَا مُسْلِمَيْنِ لَكَ وَمِنْ ذُرِّيَّتِنَآ اُمَّةً مُّسْلِمَةً لَّكَ وَاَرِنَا مَنَاسِكَنَا وَتُبْ عَلَيْنَا اِنَّكَ اَنْتَ التَّوَّابُ الرَّحِيْمُ ﴿١٢٩﴾

130．主よ、彼等の中から一人の使徒を興し、汝の啓示を彼等に読誦せしめ、経典と知恵を教え、彼等を浄めしめよ。げに汝は偉大にして、賢哲にましますﾞ」。(注 96)

رَبَّنَا وَابْعَثْ فِيْهِمْ رَسُوْلًا مِّنْهُمْ يَتْلُوْا عَلَيْهِمْ اٰيٰتِكَ وَيُعَلِّمُهُمُ الْكِتٰبَ وَالْحِكْمَةَ وَيُزَكِّيْهِمْ اِنَّكَ اَنْتَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ﴿١٣٠﴾

第十六項

131．その心愚かに非ざれば、誰かアブラハムの宗教を棄つるものぞ。彼こそはわれらがこの世で選びし者、来世においても必ず義しき人の仲間となさん。

وَمَنْ يَّرْغَبُ عَنْ مِّلَّةِ اِبْرٰهٖمَ اِلَّا مَنْ سَفِهَ نَفْسَهٗ وَلَقَدِ اصْطَفَيْنٰهُ فِي الدُّنْيَا وَاِنَّهٗ فِي الْاٰخِرَةِ لَمِنَ الصّٰلِحِيْنَ ﴿١٣١﴾

132．主が彼に向って「服従せよ」と告げると、彼は「我は服従す、万物の主に」と答えたり。

اِذْ قَالَ لَهٗ رَبُّهٗٓ اَسْلِمْ قَالَ اَسْلَمْتُ لِرَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿١٣٢﴾

いう人もいる。クルアーン（3章9節）と信頼できるモハッマド預言者の伝承は、アブラハムによってこの地に建物が建てられる前に、何か建物が存在していたが、それは廃墟になってその跡だけが残っていたという見解を支持している。この節にある「基礎」という語は、アブラハムとイシュマエルが建てた家の基礎はすでにあった事を示している。さらに、メッカで子供のイシュマエルと母と別れた時のアブラハムの祈り、即ち、「主よ、私はあなたの聖なる家の近くの荒れた谷に、我が子らを定住させたまえ（14章38節）」は、カーバが、アブラハムがメッカの谷で一家をかまえる前にすでに存在していた事を示している。ハディスもこの見解を支持している（ブハリ）。歴史の記録も、カーバの起源は古代にさかのぼるという見解を支持している。権威のある歴史家やイスラムに敵意を持つ批評家のうちですら、カーバが古代からある場所であり、大昔から聖なる場とされていた事を認めている。現在ヒジャーズとして知られている地域の事をディオドゥルス、シクルス、シシリ（60 B．C．）は、「そこは住民に特別に尊敬されていた」と言い、又、「堅い石で建てられたとても古い祭壇がそこにあり……近隣の民族が四方から群がってきた」とつけ加えている。（C．M．オールドファーザーによる翻訳、ロンドン、1935、BookIII、第2巻42章、211ページから213ページ）また他の書物によれば、「この文はメッカの聖なる家のことにちがいない、アラビア全土からこのように尊敬されている地は他に知られていないからだ。…伝承によるとカーバは大昔からアラビア中からの巡礼地になっている」とある。

注96　この節では当章全体の主題の要約をしている。当章ではこの節で述べられている順序で種々の主題を扱っている。即ち、最初に「しるし」について、次に「聖典」について、それから「法の知恵」、最後に「国家の進歩の手段」という順である。（詳細は英版参照）

133. アブラハムはおなじようにすることを自分の子供たちに命じたり、「我が息子たちよ、アッラーはお前たちのためにこの宗教(おしえ)を選びたり。さればお前たち、帰依者にならずしては死ぬなかれ」と。するとヤコブは之(これ)に倣(なら)いたり。(注 97)

وَوَصّٰى بِهَآ اِبْرٰهٖمُ بَنِيْهِ وَيَعْقُوْبُ ۭيٰبَنِيَّ اِنَّ اللّٰهَ اصْطَفٰى لَكُمُ الدِّيْنَ فَلَا تَمُوْتُنَّ اِلَّا وَاَنْتُمْ مُّسْلِمُوْنَ ۝١٣٢

134. お前たち、ヤコブが臨終の時に、その場に在りしか？　その時ヤコブは息子たちに、「我が亡き後、お前たちは何を拝むか？」と訊けり。息子たちは答えて、云えり、「我等は汝の神、汝の父祖の神。(注 98) アブラハム、イシマエル、イスアークの神なる唯一の神を拝さん。我等はその神に絶対服従す」と。(注 99)

اَمْ كُنْتُمْ شُهَدَاۗءَ اِذْ حَضَرَ يَعْقُوْبَ الْمَوْتُ ۙ اِذْ قَالَ لِبَنِيْهِ مَا تَعْبُدُوْنَ مِنْۢ بَعْدِيْ ۭ قَالُوْا نَعْبُدُ اِلٰهَكَ وَاِلٰهَ اٰبَاۗىِٕكَ اِبْرٰهٖمَ وَاِسْمٰعِيْلَ وَاِسْحٰقَ اِلٰهًا وَّاحِدًا ښ وَّنَحْنُ لَهٗ مُسْلِمُوْنَ ۝١٣٣

135. これらのことは過ぎ去りし民族のことなり。彼等は彼等が稼ぎしものの報いを受け、お前たちはお前たちが稼ぐものの報いを受けん。彼等の所業に対して、お前たちが問い質(ただ)されることなかるべし。

تِلْكَ اُمَّةٌ قَدْ خَلَتْ ۚ لَهَا مَا كَسَبَتْ وَلَكُمْ مَّا كَسَبْتُمْ ۚ وَلَا تُسْـَٔلُوْنَ عَمَّا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ۝١٣٤

136. 彼等は云う、「汝等ユダヤ教徒かキリスト教徒となれ。然(しか)らば正しく導かれん」と。云え、「否、我等は常に神のみを思う、偶像崇拝者の類(たぐい)に非ざりしアブラハムの宗教(おしえ)を奉ず」と。

وَقَالُوْا كُوْنُوْا هُوْدًا اَوْ نَصٰرٰى تَهْتَدُوْا ۭ قُلْ بَلْ مِلَّةَ اِبْرٰهٖمَ حَنِيْفًا ۭ وَمَا كَانَ مِنَ الْمُشْرِكِيْنَ ۝١٣٥

137. 汝等云え、「我等はアッラーを信じ、我等に啓示されたものを信じ、アブラハムとイシ

قُوْلُوْٓا اٰمَنَّا بِاللّٰهِ وَمَآ اُنْزِلَ اِلَيْنَا وَمَآ اُنْزِلَ اِلٰٓى

注 97　いつ死ぬか分からないのだから、すべての時を完全に神に委ねてすごさなければならない。この節は、又、真の信徒は常に完全に神の意志に従うべきであり、又完全に神の報いを勝ち取るべきなので、神は無限の寛大さで人が神の意志に全く従った時に死がもたらされるように配慮されたのかも知れないという事を意味している。

注 98　イシュマエルはヤコブのおじであった。しかしここに出てくるヤコブの子供達は、イシュマエルを彼らの祖先としている。それはアブ（父）という語が時にはおじという意味で使われた事を示している。ヤコブの息子たち、即ち、イスラエル族はイシュマエルを非常に尊敬していた。

注 99　我々の父ヤコブがこの世を去る時、彼は 12 人の息子を召集して彼らに、彼らの父イスラエルの言う事を注意して聞くようにと言った（創世記 49 章 2 節）。心の中で聖なるお方に関して疑問を持たないか。彼らは言った、我らの父イスラエルよ、聞け、汝の心の中にも、我々の心の中にも疑いはない。主は我らの父だからであり、神は一人だからである。

マエルとイサアークとヤコブとその子孫（こどもら）（注 100）に啓示されたるものを信じ、モーゼとイエスに賜われるものを信じ、またすべての預言者たちに神から与えられたるものを信ず。我等はそれ等の間に差別をつけず、ただアッラーに服従帰依し奉る」と。

إِبْرٰهِيمَ وَإِسْمٰعِيلَ وَإِسْحٰقَ وَيَعْقُوبَ وَالْأَسْبَاطِ وَمَآ أُوتِيَ مُوسٰى وَعِيسٰى وَمَآ أُوتِيَ النَّبِيُّونَ مِن رَّبِّهِمْ لَا نُفَرِّقُ بَيْنَ أَحَدٍ مِّنْهُمْ وَنَحْنُ لَهُ مُسْلِمُونَ ﴿١٣٧﴾

138. 而（しか）して、彼等もしお前たちが信ずる如く信じなば、彼等は正しく導かれん。されどもし背を向けなば、すなわち彼等は分裂を策したことになる。アッラーは彼等に対して汝を護るに足（た）り給う、すべてを聞き、すべてを知り給う御方なるが故に。（注 101）

فَإِنْ ءَامَنُوا بِمِثْلِ مَآ ءَامَنتُم بِهِ فَقَدِ اهْتَدَوا وَّإِن تَوَلَّوْا فَإِنَّمَا هُمْ فِي شِقَاقٍ فَسَيَكْفِيكَهُمُ اللّٰهُ وَهُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ﴿١٣٨﴾

139. 云え、「我等はアッラーの宗教（おしえ）を選ぶ。誰かあらん、信仰の教えでアッラーに優る者は。我等はアッラーのみを崇拝し奉る」と。

صِبْغَةَ اللّٰهِ وَمَنْ أَحْسَنُ مِنَ اللّٰهِ صِبْغَةً وَّنَحْنُ لَهُ عٰبِدُونَ ﴿١٣٩﴾

140. 云え、「お前たち、アッラーについて我等と論争せんとするか？　彼は我等の主であり、且つお前たちの主に非ざるか？　我等には我等の事あり、お前たちにはお前たちの事あり。我等はただ彼のみに誠を尽くし奉る」と。

قُلْ أَتُحَآجُّونَنَا فِي اللّٰهِ وَهُوَ رَبُّنَا وَرَبُّكُمْ وَلَنَآ أَعْمٰلُنَا وَلَكُمْ أَعْمٰلُكُمْ وَنَحْنُ لَهُ مُخْلِصُونَ ﴿١٤٠﴾

141. お前たちは、アブラハム、イシマエル、イスアーク、ヤコブ並びにその子孫（こどもら）が、ユダヤ教徒かキリスト教徒なりしと云うのか？（注 102）云え、「最も良く知る者は、お前たちか、又はアッラーか？」と。アッラーが降（くだ）せる証拠を有しながら、之（これ）を隠さんとする者、これ以上の不届き者は誰か？　アッラーはお前たちの所業を看過（かんか）せず。

أَمْ تَقُولُونَ إِنَّ إِبْرٰهِيمَ وَإِسْمٰعِيلَ وَإِسْحٰقَ وَيَعْقُوبَ وَالْأَسْبَاطَ كَانُوا هُودًا أَوْ نَصٰرٰى قُلْ ءَأَنتُمْ أَعْلَمُ أَمِ اللّٰهُ وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّن كَتَمَ شَهٰدَةً عِندَهُ مِنَ اللّٰهِ وَمَا اللّٰهُ بِغٰفِلٍ عَمَّا تَعْمَلُونَ ﴿١٤١﴾

注 100　ここで子供達と言われている語は、ヤコブの 12 人の子供達にちなんで名づけられたイスラエルの 12 の族のことである、即ち、ルーベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサーカル、ゼブルン、ヨセフ、ベンジャミン、ダン、ナフタリ、ガッド、アシェル（創世記 35 章 23 節－26 節、49 章 28 節）。

注 101　ムスリムはここで次のように述べている。ユダヤ教徒とキリスト教徒が、宗教は世襲のものではなく啓示された導きを受けいれる事にあるという考えに同意するなら、彼らの間に根本的な違いはない。そうでなければ、彼らは別々で深い溝がその間にある。分裂の責任とこの場合結果として起こる敵意はユダヤ教徒とキリスト教徒にあり、ムスリムにあるのではない。

注 102　ユダヤ教徒とキリスト教徒は、間接的に次のように言われている。彼らが主張するように救いが彼らだけにもたらされるものならば、アブラハムやその子孫はキリスト教やユダヤ教がまだ存在しないモーゼ以前の時代に生きていたのだから、どうやって導かれたのだろう。

142. これらのことは過ぎ去りし民族のことなり。彼等は彼等が稼ぎし報いを受け、お前たちはお前たちが稼ぐ報いを受けん。お前たちは、彼等のなせることに対して問われざるべし。(注 103)

تِلْكَ اُمَّةٌ قَدْ خَلَتْ لَهَا مَا كَسَبَتْ وَلَكُمْ مَّا كَسَبْتُمْ وَلَا تُسْـَٔلُوْنَ عَمَّا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ﴿١٤٢﴾

第十七項

143. 人々のうちの愚者は訊ねん、「何故に彼等はかつて守れる礼拝の方角を変えたるか？」と。答えよ、「東も西もアッラーの所有なり。彼は御心のままに誰でも正しい道に導き給う」と。(注 104)

سَيَقُوْلُ السُّفَهَآءُ مِنَ النَّاسِ مَا وَلّٰىهُمْ عَنْ قِبْلَتِهِمُ الَّتِىْ كَانُوْا عَلَيْهَا ؕ قُلْ لِّلّٰهِ الْمَشْرِقُ وَالْمَغْرِبُ ؕ يَهْدِىْ مَنْ يَّشَآءُ اِلٰى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ﴿١٤٣﴾

144. かくてわれらは、お前たちを立派な民となせり。そはお前たちをしてすべての人々の証人となし、(注 105) 使徒をしてお前たちの証人となさんがためなり。われらは前に、汝が以前に守れるところの礼拝の方角を定めたる (注 106) は、誰が使徒に従い、誰が踵を返すかを知らんがためなり。(注 107) こはアッラーに導かれし者以外には、一大事なり。されどアッラーはお前たちの信仰を虚しくせず。げにアッラーは人間に対してあわれみ深く、慈悲深くまします。

وَكَذٰلِكَ جَعَلْنٰكُمْ اُمَّةً وَّسَطًا لِّتَكُوْنُوْا شُهَدَآءَ عَلَى النَّاسِ وَيَكُوْنَ الرَّسُوْلُ عَلَيْكُمْ شَهِيْدًا ؕ وَمَا جَعَلْنَا الْقِبْلَةَ الَّتِىْ كُنْتَ عَلَيْهَآ اِلَّا لِنَعْلَمَ مَنْ يَّتَّبِعُ الرَّسُوْلَ مِمَّنْ يَّنْقَلِبُ عَلٰى عَقِبَيْهِ ؕ وَاِنْ كَانَتْ لَكَبِيْرَةً اِلَّا عَلَى الَّذِيْنَ هَدَى اللّٰهُ ؕ وَمَا كَانَ اللّٰهُ لِيُضِيْعَ اِيْمَانَكُمْ ؕ اِنَّ اللّٰهَ بِالنَّاسِ لَرَءُوْفٌ رَّحِيْمٌ ﴿١٤٤﴾

注 103　ユダヤ教徒とキリスト教徒は又、彼らが神の預言者の子孫であるからといって、そのことを報いが決められる際に斟酌されることはないと警告されている。彼らは自分の十字架を背負うべきである。他人の重荷を肩がわりできる人はいないのだから（6 章 165 節)。

注 104　この先の数節では、アブラハムが神の計画を模索しながら、メッカの荒涼たる不毛の谷で妻ハガーと子イシュマエルと共に住んだ事実に注目している。イシュマエルが大きくなった時、アブラハムはイシュマエルの助けを得てカーバを再建した。その間にアラブ族の間から偉大な預言者、即ち、いつの世にあっても人間性の導き手で主導者となるべき預言者を育ててくれるように祈った。しかし、時が満ち偉大な預言者が現れた時、神の永遠の計画は働き始め、カーバは人類全体のキブラ（礼拝の方向）にされた。しかしメッカにいる間、聖なる預言者は古い習慣と神の命令に従ってイスラエルの預言者のキブラであるエルサレムの寺院で祈っていた。メジナでも彼は顔をエルサレムに向け続けた。しかし 2 、3 か月後、彼は神の啓示に命じられて顔をカーバの方に向けた。このことはユダヤ教徒に反対された。この節は彼らの非難に対する答であり、キブラの方向を変えるための命令の内面に光をあてている。しかし、クルアーンは決して突然新しい命令を与えるのではない。好ましい議論を起こすことで受け入れられる下地を準備し始め、反対意見に答える。キブラの変化に関する命令はある人々の精神を不安定にすることがあるので、この節では礼拝する時に特別の方向を選ぶことは重要ではないという点に関して、一般的な見解を述べることで下地を準備している。真に重要な事は神への従順の精神であり信徒の間の一致である。「東も西もアッラーの所有る」という節は、東か西かの選択はさして重要ではない事を示している。真の目的は神だけなのだから、特定の方向を選ぶ事は一致の精神をつくり出す目的が第一なのである。この節は又、いつかカーバがムスリムの所有になることを告げている。

145. われらは汝が、しばしばその顔を天に向けるを見る。(注 108) ではここで、汝が欲する礼拝の方角（注 109）を汝に示さん。汝の顔を聖殿に向けよ。お前たちいずこに在りとも、その方角に顔を向けよ。経典を授けられたる人々なら、これ主よりの真理なることを知る。アッラーは彼等の所業を看過せず。

قَدْ نَرٰى تَقَلُّبَ وَجْهِكَ فِي السَّمَآءِ ۚ فَلَنُوَلِّيَنَّكَ
قِبْلَةً تَرْضٰهَا ۖ فَوَلِّ وَجْهَكَ شَطْرَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ ۚ
وَحَيْثُ مَا كُنْتُمْ فَوَلُّوْا وُجُوْهَكُمْ شَطْرَهٗ ۗ وَاِنَّ
الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْكِتٰبَ لَيَعْلَمُوْنَ اَنَّهُ الْحَقُّ مِنْ رَّبِّهِمْ ۗ
وَمَا اللّٰهُ بِغَافِلٍ عَمَّا يَعْمَلُوْنَ ﴿١٤٥﴾

注 105　ムスリムはここでそれぞれの時代に生きる人は、次の世代の人々を保護し守らなければいけないと言われている。最良の民族であるために、彼らに期待せれている高い生活水準から落ちないように常に警戒する責任があり、次の世代の人々が聖なる預言者の高尚な交わりを楽しんだ人々によって探求された道に従うようにする責任がある。このように、聖なる預言者は彼に直接従う人々の保護者でなければならず、世代から世代へとそれは続いていくべきなのだ。命ぜられたように、ムスムリは人類の指導者になるべきであり、彼らのすばらしき行いによって神の特別な恩恵の享受者となるべきである。このようにして他の人々も真の宗教に従っているという結論にならざるを得なくなるのである。このようにして、彼ら（ムスリム）は、他の人々に対してイスラムが真実であるという証人になるのである。それは聖なる預言者が彼らに対して真実の証人であったのと同じ事である。

注 106　この節の言葉で聖なる預言者が神の命令によってエルサレムの寺院を彼のキブラに選んだ事が分かる。しかし、それは一時しのぎのキブラであって、永久に人類のキブラになるのはカーバであると神は言われている。

注 107　アラブ族はメッカにある古代の祈りの家カーバに多くの攻撃を加えられた。カーバはアブラハムの時代にまでさか戻る国立寺院であった。それ故に、イスラムの非常に初期の段階から、聖典（ブハリ）に出てくる民族のキブラであるエルサレムの寺院に味方して、カーバを捨てるように言われたのは、苛酷な試練であった。そして後に、メジナでエルサレムの寺院からカーバへとキブラを変えたことはユダヤ教徒にとってもキリスト教徒にとっても大きな試練となった。このように、この変化が「経典の民」とムスリムの両方に又、メッカの偶像崇拝者にとっても試練となった。

注 108　メッカにいる間に、神の命令によって聖なる預言者はエルサレムの寺院の方へ祈りの際顔を向けた。しかし心の底から、カーバを自分のキブラにしたいと望んだ、しかも彼はある種の直観で遂には彼の望みがかなえられるであろうと思い、彼はエルサレムの聖なる寺院と彼の前にあるカーバの両方を保つことのできる場所を礼拝の地に選んでいた。しかし、彼がメジナに移住したとき、町の位置を考えてエルサレムの寺院の方にだけ顔を向けた。キブラの変化に伴って彼の内的欲求は強くなった。神の命令に服従して彼は実際にはその変化のために祈らなかったが、そのための天からの命令を熱心に待ち望んでいた。

注 109　この語は、普通の状況では、ムスリムは祈りを唱える時にカーバに顔を向けるが、しかし方向が一番重要なわけではないことを意味している。ここでの、方向の変化はムスリムの兄弟たちの間の一致と同一性を保つためにもたらされた。

146. たとい汝が経典を授けられたる人々に一切の神兆を示すとも、彼等は決して汝の礼拝の方角に従わざるべし。また汝も彼等の礼拝の方角には従わず。彼等は仲間うちですら他人の礼拝の方角には従わざるなり。汝知識を授けられながら、もし彼等の欲するところに従わば、必ず汝は罪人の仲間たるべし。

وَلَئِنْ أَتَيْتَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتٰبَ بِكُلِّ اٰيَةٍ مَّا تَبِعُوا قِبْلَتَكَ ۚ وَمَا أَنْتَ بِتَابِعٍ قِبْلَتَهُمْ ۚ وَمَا بَعْضُهُمْ بِتَابِعٍ قِبْلَةَ بَعْضٍ ۗ وَلَئِنِ اتَّبَعْتَ أَهْوَاءَهُمْ مِّنْ بَعْدِ مَا جَاءَكَ مِنَ الْعِلْمِ ۙ إِنَّكَ إِذًا لَّمِنَ الظّٰلِمِينَ ﴿١٤٦﴾

147. われらが経典を授けしあの者どもは、自分たちの息子たちの顔を認める如く、この事を承認す。されど彼等の一部の者は、承知しつつ真理を隠す。

اَلَّذِينَ اٰتَيْنٰهُمُ الْكِتٰبَ يَعْرِفُونَهٗ كَمَا يَعْرِفُونَ أَبْنَاءَهُمْ ۖ وَإِنَّ فَرِيقًا مِّنْهُمْ لَيَكْتُمُونَ الْحَقَّ وَهُمْ يَعْلَمُونَ ﴿١٤٧﴾

148. 真理は汝の主より出でたるものなれば、疑惑者の仲間となるなかれ。

اَلْحَقُّ مِنْ رَّبِّكَ فَلَا تَكُونَنَّ مِنَ الْمُمْتَرِينَ ﴿١٤٨﴾

第十八項

149. 人にはそれぞれ自分の目標あり。(注 110) 互に善行を競い合え。何処に在ろうとも、アッラーはいずれお前たちをことごとく召集すべし。げにアッラーは全能にまします。

وَلِكُلٍّ وِّجْهَةٌ هُوَ مُوَلِّيهَا فَاسْتَبِقُوا الْخَيْرٰتِ ۗ أَيْنَ مَا تَكُونُوا يَأْتِ بِكُمُ اللّٰهُ جَمِيعًا ۗ إِنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿١٤٩﴾

150. 汝いずかたより出で来るとも、汝の顔を聖殿に向けよ。こは主の降せし真理なり。アッラーはお前たちの所業を看過せず。(注 111)

وَمِنْ حَيْثُ خَرَجْتَ فَوَلِّ وَجْهَكَ شَطْرَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ ۖ وَإِنَّهٗ لَلْحَقُّ مِنْ رَّبِّكَ ۗ وَمَا اللّٰهُ بِغَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُونَ ﴿١٥٠﴾

151. 汝いずかたより出で来るとも、汝の顔を聖殿に向けよ。(注 112) またお前たち何処に在ろうとも、顔をそこに向けよ。さすれば人々

وَمِنْ حَيْثُ خَرَجْتَ فَوَلِّ وَجْهَكَ شَطْرَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ ۚ وَحَيْثُ مَا كُنْتُمْ فَوَلُّوا وُجُوهَكُمْ شَطْرَهٗ

注 110　この節は、短い言葉の中に成功する人生の要素を含んでいる。誰でも最初に明確なゴールを自分のために定めるべきである。それから、細心の注意を払ってそのために献心し、全神経をそれを保持するために緊張させ、健全な競争の精神で他のムスリムと争い、彼らより勝とうと努めるばかりでなく、自分の仲間がつまずいた時、立ち上がらせレースを続けさせるように助けるべきである。ここで目標という語のもうひとつの意味は「彼が支配するようにさせているもの」即ち、人が最初に目的を立て、それからそれを人生における抑制力とすることである。

注 111　この文はメッカはいずれムスリムの手に陥るという意味である。ムスリムによるメッカの征服はクルアーンの 17 章 81 節、28 章 86 節にも預言されている。申命記 33 章 2 節に含まれている預言は、聖なる預言者が 1 万人のムスリムの頭としてメッカに入ったとき成就された。

はお前たちに反対する論拠を有すまい、(注113) 不義なす徒輩は別として－彼等を恐れず、わしを恐れよ－そはお前たちの上にわしの愛顧を全うせんがためなり。而してお前たちを正しく導かんがためなり。(注114)

لِئَلَّا يَكُونَ لِلنَّاسِ عَلَيْكُمْ حُجَّةٌ إِلَّا الَّذِينَ ظَلَمُوا مِنْهُمْ فَلَا تَخْشَوْهُمْ وَاخْشَوْنِي وَلِأُتِمَّ نِعْمَتِي عَلَيْكُمْ وَلَعَلَّكُمْ تَهْتَدُونَ ﴿١٥١﴾

152. すなわちわれらは、お前たちの中から一人の使徒を遣わし、お前たちに我が神兆を読誦し、お前たちを浄め、お前たちに経典と聖知とを教え、お前たちが知らざりしことを教えしむ。

كَمَا أَرْسَلْنَا فِيكُمْ رَسُولًا مِنْكُمْ يَتْلُو عَلَيْكُمْ آيَاتِنَا وَيُزَكِّيكُمْ وَيُعَلِّمُكُمُ الْكِتَابَ وَالْحِكْمَةَ وَيُعَلِّمُكُمْ مَا لَمْ تَكُونُوا تَعْلَمُونَ ﴿١٥٢﴾

153. 故にわしを忘れるな、さすればわしもお前たちを忘れまい。わしに感謝せよ。わしの恩を忘れまいぞ。(注115)

فَاذْكُرُونِي أَذْكُرْكُمْ وَاشْكُرُوا لِي وَلَا تَكْفُرُونِ ﴿١٥٣﴾

第十九項

154. 汝等使徒たちよ、忍耐と礼拝によって佑助を求めよ。げにアッラーは忍耐強き人々と偕にあり。(注116)

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اسْتَعِينُوا بِالصَّبْرِ وَالصَّلَاةِ إِنَّ اللَّهَ مَعَ الصَّابِرِينَ ﴿١٥٤﴾

注112　ムスリムは征服したメッカの至高の目的を決して見失わないように言いつけられた。

注113　「人々は汝に対して異論を持たないだろう」という文は、ムスリムがメッカを征服しそこなったら、イスラムの敵から聖なる預言者はアブラハムの祈りを成就できなかったという反対意見が当然起きただろうということを意味している(2章130節)そして、それ故に、彼は約束された預言者と主張することは出来なかった。しかも、ムスリムが祈りの時に顔を向けるように命ぜられた寺院は、異教徒のメッカ人に支配させていて、偶像で一杯であった。偶像がカーバに残っていたため、ムスリムはそれらを礼拝することを非難された。しかし、唯一の神を礼拝するために捧げられた聖なる家から偶像をすっかり無くしたため異議もなくなったのであった。キブラとしてエルサレムの寺院をカーバに取りかえるという命令はメッカの征服に関する命令によって当然なし遂げられた。

注114　メッカを征服する事で、神のムスリムへの恩恵は完全になるだろう、その事が、すべてのアラブ人の服従と何千人もの人がイスラムの信仰に入信する意味になるのだから。結果は十分に上記の預言を成就している。なぜなら、メッカの征服のすぐ後に何千人ものアラブ人の改宗があったからである。メッカの征服に続いて、アラブ人がイスラムの教えに殺到したのは、アラブ人はどんな聖典にも従わなかったが、メッカはにせの預言者の弟子には征服されないというアブラハムの預言や、メッカ征服を試みる者は破滅するだろうという預言は知っていたからである。彼らはすばらしい預言の成就を、アビシニア人の侵略者、アブラハムや強力な軍隊の奇跡敵な破滅のうちに見た。

注115　人間の側からの神を「忘れない」とは、愛と献心を持って神を想い、神の命令を遂行する事、神の恩恵を心に留める事、神を賛美し祈りを捧げることである。神の側からの人間を「忘れない」とは、神が人間を近くに引き寄せる事、恩恵を人に与え、人間が幸福になるように物を与える事である。

注116　この節は、成功の秘訣を述べている。ムスリムは、辛抱強く努力を続けなければならない。目的を達成するための努力をおこたらず、決して落胆せず、同時に有害なものを遠ざけ、善いものにのみ、従っていかねばならない。神だけがすべての善の源であるからである。「忍耐」(サブル) という語は、「礼拝」(サラート) という語を進めたものである。それは時々軽べつされ、無視される神の法を遵守する事の重要さを強調するためである。祈りは、神によって定められた掟に従う時にのみ、神にききとどけられる。

155. またアッラーの道のために殺されたる者を、彼等は死せり、と云うなかれ。否、彼等は生きている。ただお前たちはそれを理解し得ざるなり。

وَلَا تَقُولُوا لِمَن يُقْتَلُ فِي سَبِيلِ اللَّهِ أَمْوَاتٌ ۚ بَلْ أَحْيَاءٌ وَلَٰكِن لَّا تَشْعُرُونَ ﴿١٥٥﴾

156. われらはお前たちを、恐怖や飢餓で、また財産や生命並びに農作物の収穫の損失によって試めさん。されど耐え忍ぶ者には、朗報を伝えよ。

وَلَنَبْلُوَنَّكُم بِشَيْءٍ مِّنَ الْخَوْفِ وَالْجُوعِ وَنَقْصٍ مِّنَ الْأَمْوَالِ وَالْأَنفُسِ وَالثَّمَرَاتِ ۗ وَبَشِّرِ الصَّابِرِينَ ﴿١٥٦﴾

157. 災難に遭いて、「げに我等はアッラーの所有なり。而して我等はいずれアッラーの御許へ帰り行く者なり」と云う者。(注 117)

الَّذِينَ إِذَا أَصَابَتْهُم مُّصِيبَةٌ قَالُوا إِنَّا لِلَّهِ وَإِنَّا إِلَيْهِ رَاجِعُونَ ﴿١٥٧﴾

158. かくの如き者の上にこそ主の祝福と慈悲が降る。彼等こそは正しく導かれている者なり。

أُولَٰئِكَ عَلَيْهِمْ صَلَوَاتٌ مِّن رَّبِّهِمْ وَرَحْمَةٌ ۖ وَأُولَٰئِكَ هُمُ الْمُهْتَدُونَ ﴿١٥٨﴾

159. サファーとマルワは（注 118）アッラーの聖跡のうちなり。故に聖殿に巡礼する者や、聖地詣りをする人々が両丘を周遊するも罪なし。自ら進んで善行をなさんとする者には、げにアッラーは之を認め、知悉者なり。

إِنَّ الصَّفَا وَالْمَرْوَةَ مِن شَعَائِرِ اللَّهِ ۖ فَمَنْ حَجَّ الْبَيْتَ أَوِ اعْتَمَرَ فَلَا جُنَاحَ عَلَيْهِ أَن يَطَّوَّفَ بِهِمَا ۚ وَمَن تَطَوَّعَ خَيْرًا فَإِنَّ اللَّهَ شَاكِرٌ عَلِيمٌ ﴿١٥٩﴾

160. われらはさまざまなる神兆や嚮導を降し、之を経典の中で人々に明白ならしめたにもかかわらず、之を包み隠す者ども、(注 119) 彼等はアッラーの呪いに遭い、呪咀者の呪いも受けるべし。

إِنَّ الَّذِينَ يَكْتُمُونَ مَا أَنزَلْنَا مِنَ الْبَيِّنَاتِ وَالْهُدَىٰ مِن بَعْدِ مَا بَيَّنَّاهُ لِلنَّاسِ فِي الْكِتَابِ ۙ أُولَٰئِكَ يَلْعَنُهُمُ اللَّهُ وَيَلْعَنُهُمُ اللَّاعِنُونَ ﴿١٦٠﴾

注 117　神は我々の持ち物すべての、我々自身をも含めた主である。神の無限の知恵をもって、神が我々からすべてを取り上げる事が正しいと考えられれば、我々にはそのことに不平やためらいを示す根拠はない。それ故、我々にふりかかるどの不幸にも我々は、落胆しないで、人生においてもっといい結果を得るために、より多くの努力をするべきである。このように、この節にふくまれる信条は、単に口先で決まり文句を唱える事ではなく、賢い助言と適時の警告である。

注 118　「サファー」と「マルワ」はメッカにあるカーバの近くにある二つの丘の名前である。サファーの方がカーバに近い。この二つの丘はハガルの偉大な忍耐と神への特別な忠誠心を記念して、又、一方では神の彼女と息子イシュマエルに対しての特別な愛情を記念する丘となっている。これらの丘をおとずれると、巡礼者は神の愛、神への忠誠心、神の力に深く心打たれる。

注 119　この文は、聖なる預言者に関して自分たちの聖書に出てくる預言を隠したユダヤ教徒に言われている。

161. 但し、悔悟してその身を修め、真理を明言する者は別なり。わしは彼等を許さん。わしはたびたび許す者、慈悲深い者なり。

إِلَّا الَّذِيْنَ تَابُوْا وَاَصْلَحُوْا وَبَيَّنُوْا فَاُولٰٓئِكَ اَتُوْبُ عَلَيْهِمْ ۚ وَاَنَا التَّوَّابُ الرَّحِيْمُ ﴿١٦١﴾

162. 不信心者で、不信心者のまま死ぬる者、彼等の上にはアッラーと天使と万民の呪いがかかるべし。

إِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَمَاتُوْا وَهُمْ كُفَّارٌ اُولٰٓئِكَ عَلَيْهِمْ لَعْنَةُ اللّٰهِ وَالْمَلٰٓئِكَةِ وَالنَّاسِ اَجْمَعِيْنَ ﴿١٦٢﴾

163. 彼等は呪いの中に取り残されん。刑罰は軽減されず、また猶予も与えられざるべし。

خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ۚ لَا يُخَفَّفُ عَنْهُمُ الْعَذَابُ وَلَا هُمْ يُنْظَرُوْنَ ﴿١٦٣﴾

164. お前たちの神は唯一なる神なり。彼の外に神なく、彼は仁慈者、慈悲者なり。（注 120）

وَاِلٰهُكُمْ اِلٰهٌ وَّاحِدٌ ۚ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ الرَّحْمٰنُ الرَّحِيْمُ ﴿١٦٤﴾

第二十項

165. 天地（あめつち）の創造、昼夜の交替、人々に利益をもたらす荷を運びて海原を渡る船、またアッラーが空から水を降（くだ）し死せる大地を生き返らせ、そこにあらゆる種類の動物をまき散らすその雨、風向きの変化、天地（あめつち）の間に奉仕する雲、これ等は皆思慮ある人々への神兆（しるし）なり。（注 121）

إِنَّ فِيْ خَلْقِ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَاخْتِلَافِ الَّيْلِ وَالنَّهَارِ وَالْفُلْكِ الَّتِيْ تَجْرِيْ فِي الْبَحْرِ بِمَا يَنْفَعُ النَّاسَ وَمَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ مِنَ السَّمَآءِ مِنْ مَّآءٍ فَاَحْيَا بِهِ الْاَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا وَبَثَّ فِيْهَا مِنْ كُلِّ دَآبَّةٍ وَّتَصْرِيْفِ الرِّيٰحِ وَالسَّحَابِ الْمُسَخَّرِ بَيْنَ السَّمَآءِ وَالْاَرْضِ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يَّعْقِلُوْنَ ﴿١٦٥﴾

166. しかるに人々の中には、アッラー以外に崇拝の対象を持ち、アッラーを愛する如く之（これ）を愛する者どもあり。されど信者のアッラーに対する愛は、彼等よりはるかに強し。

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يَّتَّخِذُ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ اَنْدَادًا يُّحِبُّوْنَهُمْ كَحُبِّ اللّٰهِ ۚ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اَشَدُّ حُبًّا

注 120　すべての罪は信仰の弱さから出るので、この節は神の唯一性に言及している。もし人々が神が唯一であることを固く信じて、にせの神々を作り出したりしなければ、決して正しい道をふみはずす事はないだろうと表明している。

注 121　クルアーンは宇宙を全体としてその主題を証明するあかしとしている。個々にとらえられた場合には、神の存在を結論づけるあかしとはならない。地球のはじまりは偶然に原子が集合したと言えるかもしれない。太陽の起源も月の起源もその他のものの起源も同様の理由かもしれない。しかし、一つの統合体としての宇宙、そこに広がる深い整然として秩序を考える時、この宇宙が偶然に存在しはじめたと結論づけることのできる人はいない。本当に、宇宙にみなぎる完全な調和と全秩序は、全治全能の唯一の賢明な存在によって創造され、統制されている事を力強く指摘している。しかも、自然現象の研究を特別に強調することで、不信の徒の注意は又、聖なる預言者に反した計画に成功する可能性がないという事実が引き出される。全宇宙は神によって制御され、神のお心に添うよう、又、神の理想を実現するよう働いている。

(注 122) 而してこれら罪人がやがて天罰を目の当たりに見る時、思い知るべし、すべての力がアッラーに属し、アッラーの罰がいかに激烈仮借なきものかを。

لِلّٰهِ ۗ وَلَوْ يَرَى الَّذِيْنَ ظَلَمُوْٓا اِذْ يَرَوْنَ الْعَذَابَ ۙ اَنَّ الْقُوَّةَ لِلّٰهِ جَمِيْعًا ۙ وَّاَنَّ اللّٰهَ شَدِيْدُ الْعَذَابِ ﴿١٦٦﴾

167. その時到らば、追随者を有せる者は、その追随者との関係を否認し、彼等は天罰を目撃し、彼等を結べる絆は寸断せらるべし。(注 123)

اِذْ تَبَرَّاَ الَّذِيْنَ اتُّبِعُوْا مِنَ الَّذِيْنَ اتَّبَعُوْا وَرَاَوُا الْعَذَابَ وَتَقَطَّعَتْ بِهِمُ الْاَسْبَابُ ﴿١٦٧﴾

168. 彼等追随者どもは云わん、「もし我等が今一度戻れるなら、彼等が我等との関係を否認した如く、我等も彼等との関係を否認せん」と。かくの如く、アッラーは彼等にそのなせることを明示し給う。されば彼等は、業火より逃れ得ざるべし。

وَقَالَ الَّذِيْنَ اتَّبَعُوْا لَوْ اَنَّ لَنَا كَرَّةً فَنَتَبَرَّاَ مِنْهُمْ كَمَا تَبَرَّءُوْا مِنَّا ۭ كَذٰلِكَ يُرِيْهِمُ اللّٰهُ اَعْمَالَهُمْ حَسَرٰتٍ عَلَيْهِمْ ۭ وَمَا هُمْ بِخٰرِجِيْنَ مِنَ النَّارِ ﴿١٦٨﴾

第二十一項

169. 汝等人々よ、大地にある合法にして佳き物を食せよ。(注 124) 悪魔の足跡に従うなかれ、彼はお前たちに公然と仇なす故に。

يٰٓاَيُّهَا النَّاسُ كُلُوْا مِمَّا فِي الْاَرْضِ حَلٰلًا طَيِّبًا ۡ وَّلَا تَتَّبِعُوْا خُطُوٰتِ الشَّيْطٰنِ ۭ اِنَّهٗ لَكُمْ عَدُوٌّ مُّبِيْنٌ ﴿١٦٩﴾

170. 悪魔はただ、悪事と醜行をお前たちに勧め、お前たちがアッラーについて知らざることを云わしめる。

اِنَّمَا يَاْمُرُكُمْ بِالسُّوْۗءِ وَالْفَحْشَاۗءِ وَاَنْ تَقُوْلُوْا عَلَى اللّٰهِ مَا لَا تَعْلَمُوْنَ ﴿١٧٠﴾

171. 彼等に向って、「アッラーが降せしものに従え」と云うと、彼等は云う、「否、我等は父

وَاِذَا قِيْلَ لَهُمُ اتَّبِعُوْا مَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ قَالُوْا بَلْ

注 122　神の愛はすべての宗教的教えの真髄であるが、イスラムほど神の愛を強調してきた宗教は他にない。聖なる預言者は非常に神に没頭していたので、異教徒のアラブ人から神に恋しているといわれた。クルアーンで、神の愛や恩恵それに至高な神に対する人間の魂の抗しがたい愛やあこがれをうえつけるような神の恩恵が、くり返し述べられる最も大切な主題である。

注 123　この節では、指導者に盲目的に従い、道を踏みはずし、神の伝道師をしりぞける人々にきびしい警告を与えている。

注 124　善行は真の信仰を作っている。この節から、約束された預言者の仕事、即ち、律法とその根底にある知恵を教える事、に関するアブラハムの祈りの第二部の議論に入る。祈り、断食、巡礼、ザカートに関する儀式が与えられ、又、社会的な事柄に関係する法律も与えられた。食物は人間の性格を形成する上で非常に重要なので、食物に関する規則が最初に述べられている。イスラム教では、すべての食物は、(1)ハラール（法律で許可されているもの）かつ(2)タイヤブ（おいしく、純粋で、栄養があって、健康によいもの）であるべきだとされている。(1)で認められていても場合によって、その人の健康にふさわしくないものなどは、(2)により禁じられる。

祖のなせる慣例に従う」と。なんとな！　彼等の先祖は全く無知蒙昧にして、導かれざりしに非ずか？(注 125)

نَتَّبِعُ مَآ أَلْفَيْنَا عَلَيْهِ آبَآءَنَا ۗ أَوَلَوْ كَانَ آبَآؤُهُمْ لَا يَعْقِلُونَ شَيْـًٔا وَّلَا يَهْتَدُونَ ﴿١٧١﴾

172. 不信心者どもを譬うれば、喚声と叫声の外に何も聴き得ざる者に向って叫ぶ者の如し。彼等は聾(つんぼ)で、啞(おし)で、盲(めくら)なり。されば彼等は悟らず。

وَمَثَلُ الَّذِينَ كَفَرُوا كَمَثَلِ الَّذِى يَنْعِقُ بِمَا لَا يَسْمَعُ إِلَّا دُعَآءً وَّنِدَآءً ۚ صُمٌّۢ بُكْمٌ عُمْىٌ فَهُمْ لَا يَعْقِلُونَ ﴿١٧٢﴾

173. 汝等信徒たちよ、われらがお前たちに賜える佳(よ)き物を食い、(注 126) 而してアッラーに感謝を捧げよ、もしお前たちがアッラーを崇拝するなら。

يٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا كُلُوا مِنْ طَيِّبٰتِ مَا رَزَقْنٰكُمْ وَاشْكُرُوا لِلّٰهِ إِنْ كُنْتُمْ إِيَّاهُ تَعْبُدُونَ ﴿١٧٣﴾

174. アッラーがお前たちに禁ぜし食物は、死肉、血、豚肉、(注 127) アッラー以外の名が唱えられたるもののみなり。されど必要にせまられ、故意に違反せず、限度を越えざる場合は罪に非ず。(注 128) げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

إِنَّمَا حَرَّمَ عَلَيْكُمُ الْمَيْتَةَ وَالدَّمَ وَلَحْمَ الْخِنْزِيرِ وَمَآ أُهِلَّ بِهِۦ لِغَيْرِ اللّٰهِ ۖ فَمَنِ اضْطُرَّ غَيْرَ بَاغٍ وَّلَا عَادٍ فَلَآ إِثْمَ عَلَيْهِ ۚ إِنَّ اللّٰهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿١٧٤﴾

注 125　永遠の生命にとても深い関係のある宗教に関して、人が年長者に盲目的に従うのは奇妙ではある。この世での生活の利益を追うことについては、重大な事柄とみなして、他人に盲目的に従わずとも、自分で道を選ぶのに、本当はもっと大切で本質的な宗教について、自分で道を選ばず、年長者に盲目的に従うというのは残念なことである。

注 126　「佳き物を食い」というのは注 124 にあるように、「法律で許され」かつ「善いもので、栄養のあるものを食せよ」ということである。ムスリムは、どのような形であれ、たとえ法律で許可されていても、身体的、精神的、霊的な健康を害するものを食べる事は許されていない事を示している。

注 127　この不潔な動物のまさにこの名前は、その肉を食する事を禁ずる事をほのめかしている。この語はアラビア語でヒンズとアラの結合である。最初の部分は「大変不潔な」の意味であり、次の部分は「私は見る」の意味である。即ち､「私はそれが大変不潔である事が分かる」の意味になる。ヒンディー語では、この動物はスーアルという名で知られているが、これはアラビア語のヒンズィール即ち､「私はそれが大変不潔である事が分かる」と全く同じ意味である。ヒンディー語では、この動物はバッド（悪いもの）として知られている、即ち、もとのアラビア語の翻訳と思われる「悪い」とか「不潔な」の意味である。

注 128　この節で非合法的であると宣言されているもののうちで、死んだ動物の血や肉を食べるという事は明らかに有害であって、多くの権威者や医学者によってそのように認識されてきた。ブタ肉は、人間の肉体的な健康にも有害であると証明された。ブタは汚物を食べ、不潔な場所に住む事を喜ぶ。ブタは下品な習慣を持ち、性倒錯という邪悪な特徴を持っている。回虫、腺病、癌、施毛虫が、ブタ肉を食べる民族により多く発生している事は知られている。ブタ肉を食べると施毛虫病の原因にもなる。

175. アッラーが降せし経典を隠し、之を安値で売り飛ばす者ども、彼等は腹中を燃え盛る炎で満たす。(注 129) 復活の日、アッラーは彼等に話しかけず、また浄めざるべし。而して酷罰が彼等にあり。

إن الذين يكتمون ما أنزل الله من الكتب و يشترون به ثمنا قليلا أولئك ما يأكلون في بطونهم إلا النار ولا يكلمهم الله يوم القيمة ولا يزكيهم و لهم عذاب أليم ١٧٥

176. 嚮導と引き替えに迷誤を取り、赦免の代りに懲罰を選びし者は、彼等なり。猛火の中における彼等の辛抱は、如何に甚だしいことか！

أولئك الذين اشتروا الضللة بالهدى والعذاب بالمغفرة فما أصبرهم على النار ١٧٦

177. さればこそアッラーは真理を以て経典を降し給えり。この経典について異論を唱うる者どもは、遙かに遠く離れ去りたる者なり。

ذلك بأن الله نزل الكتب بالحق وإن الذين اختلفوا في الكتب لفي شقاق بعيد ١٧٧

第二十二項

178. 正義とは、お前たちの顔を東に向け、また西に向けたりすることに非ず。真の正義とは、アッラーと末日と諸天使と経典と預言者たちを信じ、アッラーを愛するが故に自分の金を、親族、孤児、貧者、旅路にある者、物乞い、並びに捕虜を購うために費し、礼拝を遵守し、喜捨を惜しまぬ者を云い、また約束を結べば之を必ず履行し、困窮、艱難に耐え忍ぶ者にして、戦いの時は毅然たる者を云う。かくの如き人々こそ誠実な者、神を畏れる者なり。(注 130)

ليس البر أن تولوا وجوهكم قبل المشرق و المغرب و لكن البر من آمن بالله واليوم الآخر والملئكة والكتب والنبين وآتى المال على حبه ذوي القربى واليتمى والمسكين وابن السبيل والسائلين وفي الرقاب وأقام الصلوة وآتى الزكوة والموفون بعهدهم إذا عهدوا والصبرين في البأساء والضراء وحين البأس أولئك الذين صدقوا وأولئك هم المتقون ١٧٨

注 129　この節の意味は、火は渇きを満足させるどころか大きくするのと同じように、この世の事は心の平和と満足を与えることなく、その逆のものをもたらす、という事である。

注 130　この節にはイスラムの教えの要点が述べられている。まず、基本的なイスラムの信念と教理から始まっている。それはすべての行動の源となるものであり、人間のもつ本来の善をよりどころとした正義である。すなわち、神を信じること、最後の審判を信じること、天使、経典、聖なる預言者を信じることである。そして次に人間の行為に関するとても大切な事柄について述べている。

179. 汝等信徒たちよ、殺人に対する報復は、自由民には自由民、奴隷には奴隷、女子には女子と公正な報復を規定す。(注 131) 但し加害者が被害者の兄弟によって赦免される場合は、慣例によって之に贖血金を課し、加害者に懇ろに之を支拂わしむべし。こはお前たちの主よりの減刑にして、且つ慈悲なり。されば今後この掟に違犯する者は、酷罰あるべし。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا كُتِبَ عَلَيْكُمُ الْقِصَاصُ فِي الْقَتْلَى الْحُرُّ بِالْحُرِّ وَالْعَبْدُ بِالْعَبْدِ وَالْأُنْثَى بِالْأُنْثَى فَمَنْ عُفِيَ لَهُ مِنْ أَخِيهِ شَيْءٌ فَاتِّبَاعٌ بِالْمَعْرُوفِ وَأَدَاءٌ إِلَيْهِ بِإِحْسَانٍ ذَلِكَ تَخْفِيفٌ مِنْ رَبِّكُمْ وَرَحْمَةٌ فَمَنِ اعْتَدَى بَعْدَ ذَلِكَ فَلَهُ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿١٧٨﴾

180. 思慮ある人々よ、報復の掟にはお前たちのための救いあり、お前たちの安全を保障するための。(注 132)

وَلَكُمْ فِي الْقِصَاصِ حَيَاةٌ يَا أُولِي الْأَلْبَابِ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُونَ ﴿١٧٩﴾

注 131　この節は一般市民にとって大切な法の根本精神を述べている。すなわち、平等で公平な裁きの必要性である。罪を償い、誠意を見せて被害者の親類が許さない限り、犯罪者は相応に罰せられる。ここでは、殺人者は相当に報復される必要があると言っている。犯罪者を法によって罰しないということは神の命に背くことである。しかしながら、犯罪者を罰するのは殺された人の後継者でなく、法と秩序を責任持って守っている権威者である。しかしながら、また許しを与えることもできる。よって権威者は法のもとに法に従って裁かなければならない。だから自分の判断で勝手に許す権利はない。また被害者の後継ぎは法を司ることはできない。まして直接罰を与えることはできない。処罰は誰にも平等に課せられるとこの節でのべられている。この言葉は普遍的である。地位、身分、宗教のいかんにかかわらず、殺人の罪を犯した人はすべて同様に処罰される。この点に関しては聖なる預言者の言葉に明言されている(マジャ)。　　非戦斗の一般市民で未信徒である者を回教徒が意図的に殺した場合、死刑となるという見解が預言者の仲間の中で一致している。聖なる預言者も非イスラム教徒で非戦斗の者を意図的に殺したイスラム教徒は死刑であると述べている。自由民には自由民、奴隷には奴隷、婦人には婦人という言葉は自由民は奴隷を殺しても死刑にはならないとか、婦人は異性を殺しても死刑にならないと言っているのではない。社会的地位や性のいかんにかかわらずこの法は適用される。「自由民には自由民…。」という言葉を独特に解釈してアラブの特有の慣習ができた。それは性差や社会的地位により殺人者の処罰を決める方法である。しかし、その独特の慣習は今は廃止されている。この節の戒律には皆に嫌がられている習慣を廃止しようとしている姿勢がある。実際、前にも述べた報復についての法は「殺害には同等の報復のみをすることが規定されている。」という文で制限されている。この文は必要十分な意味をもち、主旨を完全に言いつくしている。それに続く「自由民には自由民、奴隷には奴隷、婦人には婦人」法の重要素ではない。ただ上記の三例を揚げてこのようなアラブの習慣は拒否すべきであると述べており、又、法をどのように施行すべきかを述べているだけである。聖なる預言者は「自分の奴隷を殺した者は誰でも死が与えられる。」と言ったと伝えられている。(マジャ) 他のところでまた「イスラム教徒の命はすべて報復の法のもとに平等である。」と述べている。(ナサイ)

注 132　イスラムの報復法のおかげで、殺人が押さえられ、人間の生命への安全が守られるのに多大な効果がある。人間の生命の尊厳を全く無視してしまう様な人間は、人間社会の一員として生きる全ての権利をはく奪され、赦免や容赦をうけられるのは、赦免などによって事態が好転し、両者共に良い結果がもたらされると考えられる状況のみである。この様にイスラムは一方では犯罪を抑圧するのに妥当な手段を講じ、又一方では慈悲と救済の高貴な特質を示すのにやぶさかではないのである。努力に反し、ほとんどの国に於いて、形式はそれぞれ異なっても死刑が課されているという事実はイスラムの規定の賢明さを充分に証明するものである。極刑廃止の熱心な推進者でさえもそれにかわる良い措置をみつけ出せないでいる。死刑にとってかわり終身刑を課すのは'酷'であり、理想的な代行刑とは言い難い事を認めざるを得ないのである。(Roy Caluert著 20 世紀に於る極刑、G. P. Putnum、ロンドン、1930)

181. お前たちに規定する、お前たちの誰かが死に臨んで、もし財産を遺すような場合は、両親及び親族に公明正大な遺言をすることを。こは神を畏れる者の義務なり。(注 133)

كُتِبَ عَلَيْكُمْ إِذَا حَضَرَ أَحَدَكُمُ الْمَوْتُ إِنْ تَرَكَ خَيْرًا الْوَصِيَّةُ لِلْوَالِدَيْنِ وَالْأَقْرَبِينَ بِالْمَعْرُوفِ حَقًّا عَلَى الْمُتَّقِينَ ﴿١٨١﴾

182. 遺言を聞きたる後、之(これ)を変更すれば、罪は変更する者の上にあり。げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。(注 134)

فَمَنْ بَدَّلَهُ بَعْدَمَا سَمِعَهُ فَإِنَّمَا إِثْمُهُ عَلَى الَّذِينَ يُبَدِّلُونَهُ إِنَّ اللَّهَ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿١٨٢﴾

183. 但し遺言者側のえこひいきや間違いを懸念して、当時者たちの間に入って之(これ)を調停することは、罪に非ず。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。(注 135)

فَمَنْ خَافَ مِنْ مُوصٍ جَنَفًا أَوْ إِثْمًا فَأَصْلَحَ بَيْنَهُمْ فَلَا إِثْمَ عَلَيْهِ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿١٨٣﴾

第二十三項

184. 汝等信徒たちよ、先人に規定せし如く、断食(ただ)をお前たちに規定す。こはお前たちを義しい人たらしめんがためなり。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا كُتِبَ عَلَيْكُمُ الصِّيَامُ كَمَا كُتِبَ عَلَى الَّذِينَ مِنْ قَبْلِكُمْ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُونَ ﴿١٨٤﴾

注 133　4章12節、13節で死者の財産を相続する場合の全ての人の取り分が決められている。これらの節は註釈者達の何人かには誤解されて当註の施こされている節を取り消すものと考えられているが、実際にはこの節で、遺言を残す者に対し法律的には相続資格を有してはいないが、遺産を認められる対象となる個人への、或いは慈善の目的の、或いは、戦時の、それぞれの遺産の取り扱いについての大事な追加条項となっているのである。ここでは4章12節と13節で扱っている、法定相続人の受けつぐ遺産について何ら規定するものではなく、そのため4章12節、13節によってこの節で述べられる規定が取り消される事など論外なのである。各々が各領分を取りしきるのである。しかしこの様にして譲られる遺産は、サード・ビン・アビー・ワカースに関して聖なる預言者が言った様に、相続されるべき遺産の1／3を越えてはならない(ブハリ・ジャナーイズ書)。これが遺言者の自由裁量となる限度で、それも遺言者が巨額の富を残した場合のみにあてはまるのである。死にゆくイスラム教徒がそれに従って遺言でき、一般的な理解としては4：12と13の後に、啓示された5章107節でこの節が4：12－13がある為に取り消されるという事はないという点が詳しく支持されている。実際、廃止論には何の根拠もないのである。

注 134　ここでは、前節には、従わねばならなく、又違反すると罪となる幾つかの指示が包括されている。それは財産とは相続の法にのっとって管轄されなければならないという指示であり、遺言者が、残した指示を破るものは、違反の罪となるのである。

注 135　子孫、配偶者、両親は、遺言がなくとも遺産を受けとる権利が保証されているため、特にこれらの人々について記述それた遺言は必要ではない。遺言が必要となるのは、それ以外の人に対し遺産を与えたいと遺言者が望む場合である。しかしこの限度額は遺産の1／3までとされている。その配分に関する遺言状が法的条件を満たしていても、ある条項では不公平となる場合もある。例えば、死者の相続人が非常に多いにもかかわらず、死者が遺言で遺産の最大限の1／3を慈善行為や、その他の法にかなった目的の為、寄付したりしてしまうと、相続人達は困った事となる。或いは、その1／3について遺言者が、正当な請求を無視した形で、不公平な配分をした場合もそうである。そういった場合には、相続人と遺言によって遺産を相続する人との間で公正な調整を行なうことが許されるが、これはむしろ賞賛されるべき行為である。

185. 定めの断食には、一定の日数あり。但しお前たちのうち病める者、また旅路にある者は、同じ日数を別の日に断食せよ。また断食可能でありながら、それが至難なる者は、貧者への施しによって償いとする。自発的に服従の気持ちで善行をなすは、己れのために最も良し。断食はお前たちのためなり、もしお前たちわかりさえすれば。(注 136)

أَيَّامًا مَّعْدُودَٰتٍ ۚ فَمَن كَانَ مِنكُم مَّرِيضًا أَوْ عَلَىٰ سَفَرٍ فَعِدَّةٌ مِّنْ أَيَّامٍ أُخَرَ ۚ وَعَلَى ٱلَّذِينَ يُطِيقُونَهُۥ فِدْيَةٌ طَعَامُ مِسْكِينٍ ۖ فَمَن تَطَوَّعَ خَيْرًا فَهُوَ خَيْرٌ لَّهُۥ ۚ وَأَن تَصُومُوا۟ خَيْرٌ لَّكُمْ ۖ إِن كُنتُمْ تَعْلَمُونَ ١٨٥

186. ラマダーン月こそは、(注 137) 人類の嚮導として、その嚮導の明証として、正邪善悪の識別としてクルアーンの (注 138) 降されたる月なり。(注 139) 故にお前たち、この月に家にい在る者は、断食せよ。但し病める者、旅路にあるものは別の日に同じ日数を断食せよ。(注 140) アッラーはお前たちに便宜を与え、難儀を求めず。こはお前たちがその日数を全うし、アッラーがお前たちに賜える嚮導に対してアッラーを讃美し、且つお前たちをして感謝せしめんがためなり。

شَهْرُ رَمَضَانَ ٱلَّذِىٓ أُنزِلَ فِيهِ ٱلْقُرْءَانُ هُدًى لِّلنَّاسِ وَبَيِّنَٰتٍ مِّنَ ٱلْهُدَىٰ وَٱلْفُرْقَانِ ۚ فَمَن شَهِدَ مِنكُمُ ٱلشَّهْرَ فَلْيَصُمْهُ ۖ وَمَن كَانَ مَرِيضًا أَوْ عَلَىٰ سَفَرٍ فَعِدَّةٌ مِّنْ أَيَّامٍ أُخَرَ ۗ يُرِيدُ ٱللَّهُ بِكُمُ ٱلْيُسْرَ وَلَا يُرِيدُ بِكُمُ ٱلْعُسْرَ وَلِتُكْمِلُوا۟ ٱلْعِدَّةَ وَلِتُكَبِّرُوا۟ ٱللَّهَ عَلَىٰ مَا هَدَىٰكُمْ وَلَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ١٨٦

注 136　宗教的儀式としての断食は、、詳細や形態に差異はあっても、全ての宗教に存在している"文化水準の高低にかかわらず、多大な数の宗教に於いて、断食がみうけられる。宗教で要求されていなくても、自分の体の要求に応じて或る範囲まで個人によっても遂行される"(ブリタニカ百科辞典より)肉体的、或いは世俗の関係事から、或る程度まで、厳しく身を律する事は精神の至高には必須であり心や求道者の共通の体験である。しかしイスラムでは、この断食道に新しい方針と精神的意味を導入している。それによると断食とは完全なる犠牲の象徴である。断食をする者は、人の生命を支える主たるものでそれなしでは生きてゆく事のできない飲み物と食べ物を口にしないだけでなく、自分達の子孫をはらむことができる妻のもとにゆく事も断つのである。この様に断食する者は、自分の神であり創造者であらせられる存在に対し、自分が必要とする全てを犠牲にする用意のある事を、実際に明白にするのである。

注 137　「ラマダーン」とは大陰暦の9月である。これは、断食をする人の内臓が乾きの為、大変熱くなる為ラマダ・アサイム (熱くなる) という、そのラマダを語源としている。9月がラマダと呼ばれた理由は、(1)この月の断食が乾きの為、熱と燃えるような感覚を生みだすから、(2)この月の礼拝が人の中の罪の痕跡を焼きつくすから、(3)この月の人の献身が人の心に創造者と自分の身のまわりの仲間達への必要とされる愛の温かさをうみだすから、と言われている。

注 138　クルアーンとは、(1)読まれるべき本、クルアーンとは世界で最も広範に渡り読まれている本である(ブリタニカ百科辞典) (2)世界へひろめられ伝えられるべき本或いはお告げ。クルアーンこそその神よりのお告げに何の制限もない唯一の経典である。その他の経典は、特定の時代の特定の人々にのみ啓示されたものであのが、クルアーンは、いつの時代のどんな人にでもあてられている。(34：29)(3)全ての真実を包括した本。真にクルアーンこそ、クルアーン以前の経典に包含された、全ての永遠の真実を包含する知識の宝庫のみならず(98：

187. わしの僕たちが、わしについて汝に問う時は、答えよ、「わしは常に近くにあり。(注141) わしに祈らば、わしはその懇願に応えん。故にわしの呼びかけに耳を傾け、わしを信ぜよ。(注142) さすれば彼等は正しい道を歩まん。

وَإِذَا سَأَلَكَ عِبَادِي عَنِّي فَإِنِّي قَرِيبٌ أُجِيبُ دَعْوَةَ
الدَّاعِ إِذَا دَعَانِ فَلْيَسْتَجِيبُوا لِي وَلْيُؤْمِنُوا بِي لَعَلَّهُمْ
يَرْشُدُونَ ﴿١٨٧﴾

188. お前たちが断食の夜、妻のそばに行くことは許される。妻はお前たちの着物であり、(注143) お前たちは妻の着物なり。アッラーはお前たちが無理しているのを斟酌し、憐れみに転ぜられ、軽減を与えたり。さればお前たち、妻のそばに行きて、アッラーがお前たちに定めたことを求めよ。飲むもよし、食べるもよし、黒糸と白糸の見分けがつく黎明に至るまで。その後は日暮れまで断食せよ。(注144) 礼拝堂で勤行中は妻のそばに通うなかれ。(注145) こはアッラーの立てたる掟なれば、彼女たちに近づくなかれ。アッラーはかくの如くその戒律

أُحِلَّ لَكُمْ لَيْلَةَ الصِّيَامِ الرَّفَثُ إِلَىٰ نِسَائِكُمْ هُنَّ
لِبَاسٌ لَكُمْ وَأَنْتُمْ لِبَاسٌ لَهُنَّ عَلِمَ اللَّهُ أَنَّكُمْ
كُنْتُمْ تَخْتَانُونَ أَنْفُسَكُمْ فَتَابَ عَلَيْكُمْ وَعَفَا
عَنْكُمْ فَالْآنَ بَاشِرُوهُنَّ وَابْتَغُوا مَا كَتَبَ اللَّهُ لَكُمْ
وَكُلُوا وَاشْرَبُوا حَتَّىٰ يَتَبَيَّنَ لَكُمُ الْخَيْطُ الْأَبْيَضُ
مِنَ الْخَيْطِ الْأَسْوَدِ مِنَ الْفَجْرِ ثُمَّ أَتِمُّوا الصِّيَامَ
إِلَى اللَّيْلِ وَلَا تُبَاشِرُوهُنَّ وَأَنْتُمْ عَاكِفُونَ فِي الْمَسَاجِدِ

4) 人がいかなる時、いかなる状況でも頼る事のできる真実から成っているのである。という三点の集大成であるといえる。(18：50)

注 139　聖なる預言者が最初に神のお告げを受けたのがラマダーンの 24 日である。そして全てのお告げは、毎年この月に、大天使ガブリエルによって聖なる預言者に復唱された。これは聖なる預言者の死んだ年まで続き、亡くなった年のこの月に、大天使ガブリエルにより、全クルアーンが預言者に対し復唱されたのである（ブハリ)。この様に、クルアーンの全てがラマダーンの月に啓示されたと言えるのである。

注 140　この文章は不必要な反復ではない。というのも、この文章は前節に於いて、断食の戒律への基盤をなしていたのが、この節では、実際の戒律となっているからである。しかしクルアーンでは賢明にも“病気”と“旅行”の二つを特に定義せずそれら用語の人々の一般的使用法と、おかれた状況次第の解釈に委ねている。

注 141　信仰心厚き者がラマダーンの月の御恵みと断食の御恵みに気づけば、それから、できるだけ多くの精神的恩恵を得ようと熱心になるのは当たり前の事である。この節は、信者のこの魂の渇望への答えなのである。

注 142　私を信じる（「わしを信ぜよ」の部分）は、神の存在を信じるという意味ではない。何故なら、すぐ前の文の“彼らは私の言う事に目を傾ける”（「わしの呼びかけに耳を傾け」の部分）という文そのものが、神の存在を信じる事を前提にしなければ意味がないからである。神の存在を信ぜずして傾聴し、神の戒律に従う事などできない事を意味しているからである。

注 143　ここでは何と簡明な言葉で、女性の権利と地位、結婚と婚姻関係の目的と意義が表されている事であろう。この節が言おうとしている結婚の本当の目的とは、夫と妻の二人の為の快適さ、保護、そして装飾であり、これこそ着物の使われ方なのである。（7：27 と 16：8）結婚とは、当然の事ながら性的欲望のはけ口だけではなく、夫と妻の両方が、邪悪や醜聞から互いを守りあうものなのである。

を人々に明示し給う、彼等をして悪よりその身を護らしめんがためために。

تِلْكَ حُدُوْدُ اللّٰهِ فَلَا تَقْرَبُوْهَا ؕ كَذٰلِكَ يُبَيِّنُ اللّٰهُ اٰيٰتِهٖ لِلنَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَتَّقُوْنَ ﴿۱۸۸﴾

189. お前たち、無益なことに（注 146）互にその財産を（注 147）浪費するなかれ。また裁判官に賄賂をつかって、他人の財産の一部を、承知のうえで不法にむさぼり食うなかれ。

وَلَا تَاْكُلُوْٓا اَمْوَالَكُمْ بَيْنَكُمْ بِالْبَاطِلِ وَتُدْلُوْا بِهَآ اِلَى الْحُكَّامِ لِتَاْكُلُوْا فَرِيْقًا مِّنْ اَمْوَالِ النَّاسِ بِالْاِثْمِ وَاَنْتُمْ تَعْلَمُوْنَ ﴿۱۸۹﴾ ع ۲۳

第二十四項

190. 彼等は新月について汝に問わん。云え、「そは人間の便宜のために、また巡礼のために定めたる時の基準なり」と。（注 148）またお前たち、裏口から家に入ることは（注 149）正しからず。真の正義者とは神を畏れる者なり。さればお前たち、正面から家に入るべし。而してアッラーを畏れよ、されば成功せん。

يَسْـَٔلُوْنَكَ عَنِ الْاَهِلَّةِ ؕ قُلْ هِيَ مَوَاقِيْتُ لِلنَّاسِ وَالْحَجِّ ؕ وَلَيْسَ الْبِرُّ بِاَنْ تَاْتُوا الْبُيُوْتَ مِنْ ظُهُوْرِهَا وَلٰكِنَّ الْبِرَّ مَنِ اتَّقٰى ۚ وَاْتُوا الْبُيُوْتَ مِنْ اَبْوَابِهَا ۪ وَاتَّقُوا اللّٰهَ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُوْنَ ﴿۱۹۰﴾

注 144　夜と昼が極端に長くなるような地区では（例えば極地）、夜と昼は１２時間の単位で考えられる（ムスリム）。

注 145　いわば断食の精神を完全にするといえるエティカフでは、妻との交わりや前戯は、夜であっても禁止される。

注 146　断食に関した戒律では、信心と公明正大さを獲得するという観点から、定められた期間中は飲食をがまんする事を命じている。この時期程、掟にかなわぬ食事（即ち、掟にかなわぬ富の獲得の事）は何にもまして実直にさけねばならないという事を人々に思いおこさせる時は他にないのである。また、この節ではその他に、賄賂の受け渡しを強く非難している。

注 147　自治体、或いは国家的団結を強調する為にクルアーンでは、しばしば、他のイスラム教徒の財産を"あなた達の財産"と表現する。ここでも、そういう意味で語られている。

注 148　イスラムでは、太陰暦と太陽暦を併用している。日中の５回の祈りや、ラマダーンの日の毎日の断食の初めと終わりを決めるのは日の出の入りに従う。また断食の月の選択や巡礼時の指定といた場合には太陰暦が使用される。イスラムは、両方の暦を使用するが、どちらかといえば太陽暦を多用する。

注 149　ここでは、礼拝の色々な様式を指示する本当の目的はそれらの行為が本質的に有用だからであるという重要な原則が指摘されている。礼拝することと時間のうち最優先されるべきは礼拝であり、時間は二次的なものである。しかし玄関からではなく"裏口から"家に入るといった類の問題を提出する者は時間を第一義、礼拝をただの付随的なものにしたいのである。これではまるで荷車を馬の前に置くようなものである。またここでの言及は、異教徒のアラブ人の習慣をさす様にも思われる。一たんメッカへの巡礼に出た者が、何らかの理由で帰宅せねばならぬ時には、彼らは、壁にはしごをかけ裏口から家に入る習慣を持っていたのである。この節では、このような因習を、敬けんとは精神的な概念であるからして、そんな事をしても敬けんである事にはならないと指摘して非難している。そして又、人の目的を達成するには適切な手段を講じる様、示唆している。（ブハリ、タフシール書）

191. お前たちに対して戦いを挑む者あらば、アッラーの道のために戦え。されど正義を逸脱するなかれ。げにアッラーは不義者を愛さず。(注 150)

وَقَاتِلُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ الَّذِينَ يُقَاتِلُونَكُمْ وَلَا تَعْتَدُوا ۚ إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ الْمُعْتَدِينَ ١٩١

192. かかる挑戦者に出遭わば、どこでもかまわず之を殺せ。(注 151) 而してお前たちが追放されたるところから、(注 152) 彼等を追い出せ。迫害は殺害よりも悪し。但し、相手が聖殿の中まで戦いを仕掛けてこないかぎり、聖殿の内部や近くで戦うなかれ。されど相手がもし戦いを挑まば、之と戦え。そは不信心者どもへの応報なり。

وَاقْتُلُوهُمْ حَيْثُ ثَقِفْتُمُوهُمْ وَأَخْرِجُوهُمْ مِنْ حَيْثُ أَخْرَجُوكُمْ ۚ وَالْفِتْنَةُ أَشَدُّ مِنَ الْقَتْلِ ۚ وَلَا تُقَاتِلُوهُمْ عِنْدَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ حَتَّىٰ يُقَاتِلُوكُمْ فِيهِ ۖ فَإِنْ قَاتَلُوكُمْ فَاقْتُلُوهُمْ ۗ كَذَٰلِكَ جَزَاءُ الْكَافِرِينَ ١٩٢

193. されど、彼等が戦を止めなば、アッラーは寛大にして、情け深くまします。

فَإِنِ انْتَهَوْا فَإِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ١٩٣

194. 迫害がなくなり、宗教がアッラーのために自由に信仰できるようになるまで、戦え。されど彼等が戦いをやめた際は、(注 153) 不義者に対しての外は敵意を (注 154) 抱くことは許されざることを忘れるな。

وَقَاتِلُوهُمْ حَتَّىٰ لَا تَكُونَ فِتْنَةٌ وَيَكُونَ الدِّينُ لِلَّهِ ۖ فَإِنِ انْتَهَوْا فَلَا عُدْوَانَ إِلَّا عَلَى الظَّالِمِينَ ١٩٤

注 150　これはイスラム教徒に戦いの許可が与えられている初期の時代の節の一つであり、この関連で、一番最初に啓示された節は 22：40 である。この節には宗教戦争をつかさどる条件の要旨が示されている。即ち、(1)そういった戦いは、アッラーの神の道の障害を取り除く目的の為である事、即ち、宗教的信念と行為の自由の確立の為である事、(2)相手方が先にイスラムに対して攻撃をしかけた場合のみ行なわれる事、(3)イスラムは敵が戦いを止めたらすぐに武器を置く事、の三つである。

注 151　この節は実際に戦いが、勃発した時の事についてであり、明らかに、イスラム軍は、先に攻撃をしかけてきた不信者達に対してのみ戦うよう指示されている。

注 152　この語句は、メッカこそ、イスラムの中心で最も聖なる場所であり、イスラム教徒以外が、そこにとどまっていてはいけない事を意味している。

注 153　ここでもイスラムが戦うのは相手が仕掛けてきた時の自衛の場合のみで、完全な宗教の自由を確立するまで戦いが許される事が示されている。もし、全ての不信者がイスラムを受けいれるまで戦いを続けよという事が神の律法であったなら聖なる預言者が不信者達との幾つもの平和条約を結ぶことなどできなかったはずである。ジハード（聖戦）についての詳細は 22 章 39 節－42 節を参照の事。

注 154　「敵意」（ウドゥワーン）とは、(1)敵意(2)悪しき行為、(3)悪しき行為への懲罰、そして(4)相手に対する正当化或いは、弁解の形をとった相手への接近を意味している。これら四つの節（191 －194 節）が、以下に述べる戦いについての取り決めの基本原理となっている。(1)戦いは神の為のみで、いかなる利己的動機、力や富の増強、或いは、国家やその他の利益の発展の為であってはならない(2)イスラム軍は先に攻撃をしかけられた場合のみに戦争に突入できる。(3)敵が攻撃を仕掛けた後も、限度内で交戦し、当面の目標以外は戦線を拡大せぬ事(4)正規軍のみを攻撃し、戦っていない者を攻撃したり苦痛を与えたりせぬ事。(5)戦争中でも、人々の宗

195. 聖月には聖月に（注 155）報復すべし。またすべての聖事のために報復の掟あり。されば何人(なんぴと)にせよ、お前たちに罪を犯す者あらば、相手がお前たちになしたる如く、その者を懲らしめよ。アッラーを畏れよ。而(しか)してアッラーは、アッラーを畏れ敬う人々と偕(とも)にあることを知れ。

الشَّهْرُ الْحَرَامُ بِالشَّهْرِ الْحَرَامِ وَالْحُرُمٰتُ قِصَاصٌ ۚ فَمَنِ اعْتَدٰى عَلَيْكُمْ فَاعْتَدُوْا عَلَيْهِ بِمِثْلِ مَا اعْتَدٰى عَلَيْكُمْ ۖ وَاتَّقُوا اللّٰهَ وَاعْلَمُوْا أَنَّ اللّٰهَ مَعَ الْمُتَّقِيْنَ ﴿١٩٥﴾

196. アッラーの道のために費やせ。(注 156) されど自らの手で、自分自身を破滅に投げ込むなかれ。善行をせよ。アッラーは善行をなすものを愛し給う。

وَأَنْفِقُوْا فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَلَا تُلْقُوْا بِأَيْدِيْكُمْ إِلَى التَّهْلُكَةِ ۛ وَأَحْسِنُوْا ۛ إِنَّ اللّٰهَ يُحِبُّ الْمُحْسِنِيْنَ ﴿١٩٦﴾

197. アッラーのために大巡礼、(注 157) 小巡礼を全うせよ。(注 158) されど、もしお前たちがそれをなすことを妨害されなば、何んでもよい、手に入り易いものを捧げよ。而(しか)して、その供物が生贄を捧げる場所に達するまで、頭を剃ることなかれ。お前たちのうち病める者、または頭に病いある者は、その償いとして、断食、または施し、または生贄(いけにえ)を捧げよ。されどお前たちが安全なる状態にあり、大巡礼と一緒に小巡礼もしておき

وَأَتِمُّوا الْحَجَّ وَالْعُمْرَةَ لِلّٰهِ ۚ فَإِنْ أُحْصِرْتُمْ فَمَا اسْتَيْسَرَ مِنَ الْهَدْيِ ۚ وَلَا تَحْلِقُوْا رُءُوْسَكُمْ حَتّٰى يَبْلُغَ الْهَدْيُ مَحِلَّهُ ۚ فَمَنْ كَانَ مِنْكُمْ مَرِيْضًا أَوْ بِهِ أَذًى مِنْ رَأْسِهِ فَفِدْيَةٌ مِنْ صِيَامٍ أَوْ صَدَقَةٍ أَوْ نُسُكٍ ۚ فَإِذَا أَمِنْتُمْ فَمَنْ تَمَتَّعَ بِالْعُمْرَةِ إِلَى الْحَجِّ فَمَا اسْتَيْسَرَ مِنَ

教上の慣例や儀式を妨げないこと。(6)信仰の地、或いはそこに、いかなる害を与える事も許されない。その為、その地の近隣で戦いをする事も許されない。(7)もし敵が、礼拝の場所を攻撃の中心とする場合は、その時に限り、イスラム軍は礼拝地内又はその近くから攻撃をしてもよい。(8)宗教上の自由が妨害されている間のみ，戦闘を続ける事ができる。(8：40；9：4－6；20：40、41）その他を参照の事

注 155　「聖月」とはズル・カーダ、ズル・ヒッジャー、ムハッラーム及びラジャブである。これらの月には戦闘行為は禁じられている。この戒律は、カーバの神殿と聖なる月の聖徳を守る為のものである。

注 156　戦争に勝つ為には、金銭を必要とする。出費をためらうと国家の破滅につながる為、信者はアッラーの大義の為には惜しまず金銭的協力をする事が望ましい。

注 157　この節から巡礼（ハジ）の内容の叙述となる。ジハード（聖戦）とハジ（巡礼）は互いに関係があり、両者共、アッラーの神の道の大義の為には、真実の熱心な信者ならくぐらなければならない犠牲（献身）の一(いち)形態であるといえる。2：178 から説明の続いているアッラーの大義の内、巡礼が人の精神的発展の最終段階であり、これまでに、祈り、断食、ジハードは既に説明されているところである。

注 158　「ウムラー」（小巡礼）とは上記の方法でエヘラームに入る事で、これはカーバの神殿のまわりを７回まわり、サファとマルワの間を駆け、いけにえを捧げる事であるが、これは強制の義務ではない。小巡礼は一年の内、いつ行なってもよいが、ハジ（大巡礼）はズル・ヒッジャーの月のみに行なわれる。

たいと思うなら、(注 159) なんでもよいから容易に手に入るものを供えよ。されど、何も捧げるものが見つからない場合は、巡礼中に三日間、家に帰ってから七日間、合せて十日間断食せよ。(注 160) これは聖殿近くにその家族が住まざる者の場合に限る。(注 161) アッラーを畏れよ。アッラーの懲罰は苛酷なことを銘記せよ。

الْهَدْيِ ۚ فَمَنْ لَّمْ يَجِدْ فَصِيَامُ ثَلٰثَةِ اَيَّامٍ فِي الْحَجِّ
وَ سَبْعَةٍ اِذَا رَجَعْتُمْ ؕ تِلْكَ عَشَرَةٌ كَامِلَةٌ ؕ ذٰلِكَ لِمَنْ
لَّمْ يَكُنْ اَهْلُهٗ حَاضِرِي الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ ۚ وَ اتَّقُوا اللّٰهَ
وَ اعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ شَدِيْدُ الْعِقَابِ ﴿۱۹۷﴾

第二十五項

198. 巡礼月は周知の事実なり。されば誰であれ、これ等の月に巡礼をなさんとした者は、巡礼中にみだらな言葉を吐いたり、罪を犯したり、喧嘩口論などするなかれ、忘れまいぞ。お前たちが善行をなせば、アッラーはそれを知る。されば旅のための必要なる食糧を準備せよ。最上の食糧は正義なり。思慮ある人々よ、わしのみを畏れ敬え。

اَلْحَجُّ اَشْهُرٌ مَّعْلُوْمٰتٌ ۚ فَمَنْ فَرَضَ فِيْهِنَّ الْحَجَّ
فَلَا رَفَثَ وَ لَا فُسُوْقَ ۙ وَ لَا جِدَالَ فِي الْحَجِّ ؕ وَ مَا
تَفْعَلُوْا مِنْ خَيْرٍ يَّعْلَمْهُ اللّٰهُ ؕ وَ تَزَوَّدُوْا فَاِنَّ خَيْرَ
الزَّادِ التَّقْوٰى ۫ وَ اتَّقُوْنِ يٰٓاُولِي الْاَلْبَابِ ﴿۱۹۸﴾

199. お前たちが主の恵みを求むるは罪に非ず。(注 162) されどお前たち、アラファートから (注 163) 降り来て、聖跡マシュアル・ア

لَيْسَ عَلَيْكُمْ جُنَاحٌ اَنْ تَبْتَغُوْا فَضْلًا مِّنْ رَّبِّكُمْ ؕ
فَاِذَآ اَفَضْتُمْ مِّنْ عَرَفٰتٍ فَاذْكُرُوا اللّٰهَ عِنْدَ الْمَشْعَرِ

注 159　ウムラーとハジは二つの方法でつなぐ事ができる。(1)ウムラーを行なう予定の巡礼者は、一人でエヘラームの状態に入り、儀式を取り行い終了させる。そしてズル・ヒッジャーの8日めに、もう一度エヘラームの段階に入りハジで指定されている儀式を行う。このウムラーとハジのつなげ方をタマットと呼び、文字通りに解釈すれば"物事を利用する"の意味となる。(2)巡礼時にウムラーとハジを同時に行う事である。この場合、巡礼者はそのつもりでエヘラームの状態に入り、巡礼が終わるまでその状態を続ける。これはキラーンと呼ばれ、文字通りでは"二つの物事を組み合わせる"の意味である。タマットとキラーンでは、供え物をしなければならない。

注 160　'巡礼中に三日の断食'という文中で言われている断食は別個のもので、同節上記の断食とは同一ではない。最初に述べられる断食は、頭をそる事ができない者の為であり、ここで述べられる断食はタマットの際に供え物を出せない者の為である。ここでいわれる三日間とはズル・ヒッジャーの 11、12、13 日である事が望ましく残りの 7 日間の断食は帰宅してから遂行すればよい。

注 161　ハジとウムラーを一緒に行なう事はメッカの居住者のみでなく外部の者にも許されているの意味であるが、なかには、聖なるモスクをハラム全体、即ちメッカの内とまわりの聖なる領域と拡大解釈する者もいる。

注 162　巡礼の目的はできるだけ多くの教徒の参加である為、クルアーンは巡礼達に商売を行う事を許している。現金を持って旅にでられない者は商品を持ってきて商売し、もうけたお金を旅の費用にあてる事ができる。

注 163　アラファートとは、巡礼達がズル・ヒッジャーの9日めの後半、休息する平地であり、メッカから約 14 kmの所にある。ヴゥクーフとしてしられているこの休息は、巡礼の重要な儀式の一つである。アラファートとは、聖なる場所又は知識の察知手段という意味の合成語である。

ルハラームでアッラーを念ぜよ。(注 164) かつて迷えるお前たちを、アッラーが導きたることを思いながら。

200\. かくして、人々が急ぎ進むところから、お前たちも急ぎ進み、アッラーに赦しを請え。げにアッラーは寛大にして、情け深くまします。(注 165)

201\. お前たち定めの儀礼を終えなば、自分たちの父祖を賞讃せし如く、いやもっと心をこめて、アッラーを賞讃せよ。人々のうちには云う者あり、「主よ、我等にこの世でもろもろの佳き物を与え給え」と。かかる者は、来世ではなんの分け前も得ざるべし。

202\. また彼等のうちに云う者あり、「主よ、我等にこの世で幸いを与え給え、来世においてもまた然り。而（しか）して我等を、業火（ごうか）の責苦から護り給え」と。(注 166)

203\. これ等の人々は、自分で稼いだものに相当する分け前を得るべし。アッラーは清算に迅速なり。

204\. 定められたる日数の間（注 167）アッラーを念ぜよ。但し二日間に短縮しても、その者

الْحَرَامِ وَاذْكُرُوهُ كَمَا هَدَاكُمْ وَإِن كُنتُم مِّن قَبْلِهِ لَمِنَ الضَّالِّينَ ﴿١٩٩﴾

ثُمَّ أَفِيضُوا مِنْ حَيْثُ أَفَاضَ النَّاسُ وَاسْتَغْفِرُوا اللَّهَ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿٢٠٠﴾

فَإِذَا قَضَيْتُم مَّنَاسِكَكُمْ فَاذْكُرُوا اللَّهَ كَذِكْرِكُمْ آبَاءَكُمْ أَوْ أَشَدَّ ذِكْرًا فَمِنَ النَّاسِ مَن يَقُولُ رَبَّنَا آتِنَا فِي الدُّنْيَا وَمَا لَهُ فِي الْآخِرَةِ مِنْ خَلَاقٍ ﴿٢٠١﴾

وَمِنْهُم مَّن يَقُولُ رَبَّنَا آتِنَا فِي الدُّنْيَا حَسَنَةً وَفِي الْآخِرَةِ حَسَنَةً وَقِنَا عَذَابَ النَّارِ ﴿٢٠٢﴾

أُولَٰئِكَ لَهُمْ نَصِيبٌ مِّمَّا كَسَبُوا وَاللَّهُ سَرِيعُ الْحِسَابِ ﴿٢٠٣﴾

وَاذْكُرُوا اللَّهَ فِي أَيَّامٍ مَّعْدُودَاتٍ فَمَن تَعَجَّلَ فِي

注 164　マシュアル・アルハラームとは、メッカとアラファートの間のムズダリファにある小さな丘である。ここで聖なる預言者は夕べと夜の祈りをし、日の出まで祈り続けた。メッカから約 9 km離れたここは、巡礼時のめい想と祈りにあてられる拝所である。

注 165　イスラムが到来する以前のクライシュ部族とフムスとして知られるバヌー・キナーナはアラファートへは、他の巡礼についていかず、マシュアル・アルハラームの近くに留まり、他の巡礼がアラファートから戻るのを待って合流した。当節と前節ではマシュアル・アルハラームの近くに留まらず、他の巡礼同様、アラファートまで行くべきであると述べている。そして、アラファートからマシュアル・アルハラームまで戻った巡礼達は、供え物をささげるミナーまで行き、エヘラームの状態が終わるのである。

注 166　ここではその努力や向上心が現世のみに限られてはいない現世と来世、両方に於ける善を求道する種類の人々について述べている。ハサナとは成功も意味しており、聖なる預言者も何度も使った、非常に総括的な祈りである。(ムスリム)

注 167　これらの日は、可能な限り、巡礼がミナーに滞在し、神を讃美しながら時間をすごすべきとされているズル・ヒッジャーの 11、12、13 日をさす。それらの日は、輝きと美の日々という意味のアヤームッタシリークと呼ばれている。

は罪なく、また長く留まるも罪なし。こは神を畏れる者のためなり。さればアッラーを畏れよ。(注 168) 而(しか)していずれ必ずアッラーの御許(みもと)へ召集せらるべきことを (注 169) 銘記せよ。

يَوْمَيْنِ فَلَآ إِثْمَ عَلَيْهِ وَمَنْ تَأَخَّرَ فَلَآ إِثْمَ عَلَيْهِ لِمَنِ اتَّقٰى وَاتَّقُوا اللّٰهَ وَاعْلَمُوٓا أَنَّكُمْ إِلَيْهِ تُحْشَرُونَ ٢٠٤

205. また人々の中には、現世に関することを語りて、汝を感心させ、アッラーを呼びて己れの胸中にあるものの証人たらしめんとする者あり。されど彼こそは最も口論好きな者なり。(注 170)

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يُّعْجِبُكَ قَوْلُهُ فِي الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا وَيُشْهِدُ اللّٰهَ عَلٰى مَا فِيْ قَلْبِهِ وَهُوَ أَلَدُّ الْخِصَامِ ٢٠٥

206. かかる者が一たび権力を握ると、四方に奔走して騒乱を策し、穀物や人類を蹂躙(じゅうりん)す。アッラーは騒乱を憎み給う。

وَإِذَا تَوَلّٰى سَعٰى فِي الْأَرْضِ لِيُفْسِدَ فِيْهَا وَيُهْلِكَ الْحَرْثَ وَالنَّسْلَ وَاللّٰهُ لَا يُحِبُّ الْفَسَادَ ٢٠٦

207. かかる者に、「アッラーを畏れよ」と云えば、却(かえ)って驕慢(きょうまん)が刺激され、更に罪に走る。(注 171) されば彼には、地獄こそがその応報なるべし。そは悲惨なる臥床(ふしど)なり。(注 172)

وَإِذَا قِيْلَ لَهُ اتَّقِ اللّٰهَ أَخَذَتْهُ الْعِزَّةُ بِالْإِثْمِ فَحَسْبُهُ جَهَنَّمُ وَلَبِئْسَ الْمِهَادُ ٢٠٧

208. また人々のうちにはアッラーの喜びを願うあまり、我と我が身を売る者あり。アッラーはその僕(しもべ)をあわれみ給う。(注 173)

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يَّشْرِيْ نَفْسَهُ ابْتِغَآءَ مَرْضَاتِ اللّٰهِ وَاللّٰهُ رَءُوْفٌ بِالْعِبَادِ ٢٠٨

注 168　巡礼の根本となる目的は、クルアーンで 2：198 に於いてナジについての戒律が説き始められる言葉であるタクワー（公明正大さ）の達成である。ここではただ外的に特定の儀式や典礼をとり行うだけで公正さの精神が伴わないものは無意味であり、タクワーこそ人の行動の全ての根底をなすものである事が強調されている。

注 169　何千もの巡礼がそのまわりを巡回し、そうできる時はいつもその方角を向いて祈りを捧げるカーバの神殿はイスラム教徒の心に、神の唯一性と、その尊厳を思い起こさせるのである。

注 170　世の中にはその雄弁さと、にせの隣人愛とで聞き手をだましおおす者もいる。彼らは本当の人間の発展には不可欠である犠牲の精神を何ら証明する事なく、自分自身の利益のみを追求し、細かい権利に関し他人と猛烈に争うのである。

注 171　彼らの努力は、他の人々の利益を傷つけ自分の利益をふやす事に全てむけられているのである。

注 172　尊厳と威信を間違って理解する事が、そういった人の主たるつまづきのもとであり、彼の虚しさが更に罪を重ねさせ、あらゆる面で正しい道から外れるのである。こういう者は地獄に落ちてゆくのである。

注 173　これは前節に述べられた人と対象的に、まるで自分達の魂を、アッラーの喜びを求道する事に与えてしまったかのように、その事のみに没頭する種類の人もいる事を述べている。

209. 汝等信徒たちよ、完全服従せよ。而(しか)してサタンの足跡を追うなかれ。サタンこそはお前たちの公敵なり。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوا ادْخُلُوْا فِي السِّلْمِ كَآفَّةً ۖ وَّ لَا
تَتَّبِعُوْا خُطُوٰتِ الشَّيْطٰنِ ؕ اِنَّهٗ لَكُمْ عَدُوٌّ مُّبِيْنٌ ﴿۲۰۹﴾

210. 明証が降(くだ)りたる後に、うっかり誤るが如きことあらば、アッラーは強大にして、賢哲にましますことを知れ。

فَاِنْ زَلَلْتُمْ مِّنْۢ بَعْدِ مَا جَآءَتْكُمُ الْبَيِّنٰتُ فَاعْلَمُوْۤا
اَنَّ اللّٰهَ عَزِيْزٌ حَكِيْمٌ ﴿۲۱۰﴾

211. 彼等は、アッラーが雲の天蓋の下、天使たちを引き連れ、(注 174) 彼等のところへ降臨するとでも思うのか？(注 175)　事はすでに決せられたり。すべてはアッラーに帰属す。

هَلْ يَنْظُرُوْنَ اِلَّاۤ اَنْ يَّاْتِيَهُمُ اللّٰهُ فِيْ ظُلَلٍ مِّنَ
الْغَمَامِ وَالْمَلٰٓئِكَةُ وَقُضِيَ الْاَمْرُ ؕ وَاِلَى اللّٰهِ تُرْجَعُ
الْاُمُوْرُ ﴿۲۱۱﴾

第二十六項

212. イスラエルの子孫(こどもら)に問え、われらが如何に多くの明証を彼等に授けたるかを。されど、アッラーの恩寵が降(くだ)りたる後、これを改変する者あらば、アッラーは之(これ)を厳しく罰す。(注 176)

سَلْ بَنِيْۤ اِسْرَآءِيْلَ كَمْ اٰتَيْنٰهُمْ مِّنْ اٰيَةٍۢ بَيِّنَةٍ ؕ
وَمَنْ يُّبَدِّلْ نِعْمَةَ اللّٰهِ مِنْۢ بَعْدِ مَا جَآءَتْهُ فَاِنَّ
اللّٰهَ شَدِيْدُ الْعِقَابِ ﴿۲۱۲﴾

213. この世は、不信心者どもには魅惑的に映るため、彼等は信徒たちを嘲弄す。されど神を畏れる人々は、復活の日には不信心者どもより上位を占めん。アッラーはその嘉(よみ)し給う人々には、計算を度外視して恩寵を授け給う。

زُيِّنَ لِلَّذِيْنَ كَفَرُوا الْحَيٰوةُ الدُّنْيَا وَيَسْخَرُوْنَ مِنَ
الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا ۘ وَالَّذِيْنَ اتَّقَوْا فَوْقَهُمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ ؕ
وَاللّٰهُ يَرْزُقُ مَنْ يَّشَآءُ بِغَيْرِ حِسَابٍ ﴿۲۱۳﴾

214. 人類はかつて一体なりき。(注 177) しかるにその後互に意見を異にしたれば、アッラー

كَانَ النَّاسُ اُمَّةً وَّاحِدَةً ۟ فَبَعَثَ اللّٰهُ النَّبِيّٖنَ

注 174　これはバドルの戦いの時の事で、この時には 25 章 26 節で約束されたように、信者を助ける為に雨と雲を降らせ（ブハリ）、信者の心には勇気を、不信者には恐怖を与えるべく天使をつかわされた（8：13）。不信者の中にもその日、実際に天使を見た者がいたと言われている。

注 175　「降臨」という語句は 16：27、59：3 にあるように、神の懲罰という意味で使われることもある。

注 176　これは神が厳しい懲罰を下されるという事を必ずしも意味している訳ではなく、神の懲罰は厳しく感じられるという意味である。

注 177　預言者の到来する以前は、彼ら全員が不信者であるという意味で、全ての人間は一つの民族であった。しかし一たん預言者が現れると、互いに違いはあっても、不信者達は一つに団結して預言者に対抗した。「人類はかつて一体なりき」という表現は、国家的一致団結という意味では、クルアーン中 10：20；21：93 と 23：53 に又当註の施こされた節で使われているように、考えが同一なという意味では、当節 2：214 の他に 5：49；16：94；42：9；43：34 にみられる。

は預言者たちを挙げて、朗報と警告の伝達となし、その争いを判断すべき真理の経典を彼等と共に降したり。しかるに今、経典を賜わりたる者のみが、経典に関して異った見解を抱き、明証が降りたる後だというに、互に嫉妬して相争うに至れり。(注 178) されどアッラーは、思し召しを以て、不信心者どもが異論を唱えたる真理へと、信徒たちを導きたり。かくの如くアッラーは、その嘉し給う者は誰であれ、正しい道に導き給う。

مُبَشِّرِينَ وَمُنذِرِينَ وَأَنزَلَ مَعَهُمُ الْكِتَابَ بِالْحَقِّ لِيَحْكُمَ بَيْنَ النَّاسِ فِيمَا اخْتَلَفُوا فِيهِ وَمَا اخْتَلَفَ فِيهِ إِلَّا الَّذِينَ أُوتُوهُ مِن بَعْدِ مَا جَاءَتْهُمُ الْبَيِّنَاتُ بَغْيًا بَيْنَهُمْ فَهَدَى اللَّهُ الَّذِينَ آمَنُوا لِمَا اخْتَلَفُوا فِيهِ مِنَ الْحَقِّ بِإِذْنِهِ وَاللَّهُ يَهْدِي مَن يَشَاءُ إِلَىٰ صِرَاطٍ مُّسْتَقِيمٍ ﴿٢١٤﴾

215. お前たち、お前たち以前に世を逝りし人々が味いたる状態を体験することなく、楽園に入り得ると思うか？　困苦艱難が彼等に降りかかり、不安に恐れおののく余り、使徒並びにその信奉者たちは、「アッラーの佑助はいつの日か？」と嘆いたり。アッラーの佑助は近づけり。(注 179)

أَمْ حَسِبْتُمْ أَن تَدْخُلُوا الْجَنَّةَ وَلَمَّا يَأْتِكُم مَّثَلُ الَّذِينَ خَلَوْا مِن قَبْلِكُم مَّسَّتْهُمُ الْبَأْسَاءُ وَالضَّرَّاءُ وَزُلْزِلُوا حَتَّىٰ يَقُولَ الرَّسُولُ وَالَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ مَتَىٰ نَصْرُ اللَّهِ أَلَا إِنَّ نَصْرَ اللَّهِ قَرِيبٌ ﴿٢١٥﴾

216. 彼等は何に費すべきかと、汝に問わん。云え､「善いことは皆、両親、親類縁者、孤児、貧者、並びに旅行者のためにお前たちの豊かな富を費すべし。お前たちがなす善行は、すべてアッラー之を知り給う」と。(注 180)

يَسْأَلُونَكَ مَاذَا يُنفِقُونَ قُلْ مَا أَنفَقْتُم مِّنْ خَيْرٍ فَلِلْوَالِدَيْنِ وَالْأَقْرَبِينَ وَالْيَتَامَىٰ وَالْمَسَاكِينِ وَابْنِ السَّبِيلِ وَمَا تَفْعَلُوا مِنْ خَيْرٍ فَإِنَّ اللَّهَ بِهِ عَلِيمٌ ﴿٢١٦﴾

217. 戦うことをお前たちに定める、そはいやであろうが。されどお前たちが好まざることが案外身のためとなり、また好むことが却って害となることもあり。お前たちは知

كُتِبَ عَلَيْكُمُ الْقِتَالُ وَهُوَ كُرْهٌ لَّكُمْ وَعَسَىٰ أَن تَكْرَهُوا شَيْئًا وَهُوَ خَيْرٌ لَّكُمْ وَعَسَىٰ أَن تُحِبُّوا

注 178　神は、聖なる預言者と最後の経典をつかわされ、彼の旗印のもとに全ての民が集結するようにとの全世界的伝道を伝えられたのである。この様に、輪回の輪が完結し、団結で始まった世界は団結に帰するべく設定されているのである。

注 179　イスラムのおつげを受け入れるのは、生易しいものではなく、教徒達は、厳しい試練や苦難を通過した後にやっと崇高な理想を達成するのである。

注 180　この節は費やされるものは正直に獲得されるべきであるとの意味を持ち、即ち、お金を使う場合は相手が受けとり易いようでなくてはならず、その人の必要を充たし、使った目的が称賛に値するものであり、それだけの価値があるものでなくてはならない。

らねども、アッラーはすべてを知るなり。（注 181）

شَيْـًٔا وَّهُوَ شَرٌّ لَّكُمْ ۗ وَاللّٰهُ يَعْلَمُ وَاَنْتُمْ لَا تَعْلَمُوْنَ ﴿٢١٧﴾

第二十七項

218. 彼等は聖月の期間における戦争について、汝に問わん。（注 182）云え、「その期間に戦うことは、大いなる罪なり。されど人々をアッラーの道より阻み、アッラーに忘恩的であり、人の聖殿に詣でるを妨げ、会衆を聖殿より追い払うことの方が、アッラーの目からすれば、より重き罪なり。而して迫害は、殺害よりも悪し」と。彼等は、もし出来るなら、お前たちをしてその信仰に背かしむるまで戦いを止めざるべし。お前たちのうち信仰に背き、不信心者として死ぬ者あらば、その者たちのなせることは、現世においても来世においても空無に帰すべし。彼等は業火の住人なり。而してそこに永劫に住まん。

يَسْـَٔلُوْنَكَ عَنِ الشَّهْرِ الْحَرَامِ قِتَالٍ فِيْهِ ۗ قُلْ قِتَالٌ
فِيْهِ كَبِيْرٌ ۗ وَصَدٌّ عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَكُفْرٌۢ بِهٖ وَ
الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ ۗ وَاِخْرَاجُ اَهْلِهٖ مِنْهُ اَكْبَرُ عِنْدَ
اللّٰهِ ۚ وَالْفِتْنَةُ اَكْبَرُ مِنَ الْقَتْلِ ۗ وَلَا يَزَالُوْنَ
يُقَاتِلُوْنَكُمْ حَتّٰى يَرُدُّوْكُمْ عَنْ دِيْنِكُمْ اِنِ اسْتَطَاعُوْا ۗ
وَمَنْ يَّرْتَدِدْ مِنْكُمْ عَنْ دِيْنِهٖ فَيَمُتْ وَهُوَ كَافِرٌ
فَاُولٰٓئِكَ حَبِطَتْ اَعْمَالُهُمْ فِى الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةِ ۚ وَاُولٰٓئِكَ
اَصْحٰبُ النَّارِ ۚ هُمْ فِيْهَا خٰلِدُوْنَ ﴿٢١٨﴾

219. 信ずる者、並びに迫害をさけて移住し、アッラーの道のために奮闘努力する者、これ等の者はアッラーの恩恵に浴さん。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

اِنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَالَّذِيْنَ هَاجَرُوْا وَجٰهَدُوْا فِىْ
سَبِيْلِ اللّٰهِ ۙ اُولٰٓئِكَ يَرْجُوْنَ رَحْمَتَ اللّٰهِ ؕ وَاللّٰهُ
غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٢١٩﴾

220. 彼等は汝に、酒と（注 183）賭博に（注 184）ついて問わん。云え、「両者とも大罪なり。

يَسْـَٔلُوْنَكَ عَنِ الْخَمْرِ وَالْمَيْسِرِ ۗ قُلْ فِيْهِمَآ اِثْمٌ

注 181　イスラム教徒は、おそれからではなく、人の血を流す事を好まないという理由から戦争を嫌った。また彼らは戦争の状態よりも、平和的雰囲気にある方がイスラムをひろめ普及させるのには、より伝達しやすいとも考えたのである。

注 182　もし不信者達が聖なる月の神聖さを犯した場合には、ためらわず聖なる月でも彼らを罰せよと命ぜられている。そうする事以外に聖なるものの神聖さは守れないからである（2：195）。註釈者が一般的に述べるところでは、或る時聖なる預言者はアブドゥラ・ビン・ジェーシにメッカへ向かっているクライシュ族の一行に関する情報を持ってくるように命じた。アブドゥラと彼の仲間がナクラーという地点で小隊と出会い、そこで一人を殺し二人を捕虜にした。これが起こった日時は定かではないが、或る者はこれを聖なる月であったとみなし、又ある者はそうではないといった。しかしその報せがメッカに届いた時、クライシュ族はその疑がい（聖なる月に武器をとった事）を利用して、イスラム教徒に抵抗し、聖なる月を汚したのである。この註のある節はその時、啓示されたものである。

注 183　ハマルというのは、あるものに覆いをかけた或いはあるものを隠したとの意味である。酒は、知性や感覚を覆いまどわし、影響を与える為、或いは、頭脳を興奮させ、自制心を失なわせる為、ハマルと呼ばれて

人間を益することもあるが、その害は利益を上廻る」と。(注 185) また彼等は汝に、何を費すべきかと問わん。云え、「余分のものを (注 186)」と。かくの如く、アッラーはお前たちを熟慮せしめんがために、さまざまなる戒律を明示し給う。

221. 現世並びに来世について。また彼等は、孤児について (注 187) 汝に問わん。云え、「彼等の幸福を増進することは善い行為なり。而してお前たちが彼等と親しく混り合わば、彼等はお前たちの兄弟なり。アッラー

كَبِيرٌ وَّمَنَافِعُ لِلنَّاسِ وَإِثْمُهُمَا أَكْبَرُ مِن نَّفْعِهِمَا ۗ وَ
يَسْأَلُونَكَ مَاذَا يُنفِقُونَ ۖ قُلِ الْعَفْوَ ۗ كَذَٰلِكَ يُبَيِّنُ اللَّهُ
لَكُمُ الْآيَاتِ لَعَلَّكُمْ تَتَفَكَّرُونَ ﴿٢١٩﴾

فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ ۗ وَيَسْأَلُونَكَ عَنِ الْيَتَامَىٰ ۖ قُلْ إِصْلَاحٌ
لَّهُمْ خَيْرٌ ۖ وَإِن تُخَالِطُوهُمْ فَإِخْوَانُكُمْ ۚ وَاللَّهُ يَعْلَمُ

いるのである。この酒とは特にぶどうから作るワインの事であるが、全ての酔酊物があてはまる。"アルコール中毒は病気の原因の重要な因子であり、アル中患者は病人の中でも悪い患者である。伝染病の死亡率も高く、疲労への抵抗力も低く、生命を縮めている様なものである。イギリスの保険会社では飲酒者と非飲酒者の推定寿命は約2倍違うとの統計を出している。飲酒と犯罪の関係もよく知られるところである。又、統計によれば、悪性因子の 25～85％は飲酒者である。アル中の及ぶべき結果として、一てんかん、精神異常、精神薄弱や、肉体、精神、倫理面での色々な形での退廃が、アル中患者の子孫には、頭ぬけて極だっているのである。(Ｊｅｗ．Ｅｎｃ.)"アルコール消費効果はそのまま神経組織に影響を与え、酩酊状態の度が進むと、判断と自制の知的プロセスが停止してしまう。(ブリタニカ)"度をすぎた飲酒と、道徳律や法律の違反との間には密接な関係があるという事は世界中で認めるところである。これは高度な知的及び論理的な能力の無力化の直接の結果であり、下劣な傾向へ流れてゆく事となるのである。(宗教倫理百科辞典)

注 184　賭の忌むべき傾向は今まで問題にされた事がなかったが、一生懸命働いて収入を得ようとしない賭事は本質的に反社会的行為であり、同情心をしぼませ、利己主義をはびこらせ、人格の劣化を招くものである。賭は本質的に野蛮であり、その動機は巧妙に隠されていても貪欲さに他ならない。賭は代価を支払わずに財産を手にする事であるから、平等の法則に反するし、丁度、決とうが相互の同意による殺人である様に、賭は一種の窃盗行為ともいえる。貪欲が、無気力につながり、運を頼むものであるから、その行為をなす者は、道徳秩序や人生の安定性を失ってしまう。賭はもうける事のみに注意を集中させる事であるから、人生のより価値ある目的への注意をむける事をしなくなってしまうのである。

注 185　物事を全面的には非難せず、少しでもよい所があれば、素直に認めるというのがイスラムの特徴である。イスラムが、特定のものを禁止するのは、それらが全く善くないという事からではなく、それらの邪悪な面が善い面を圧倒してしまうからである。世の中には全くその全てが悪であるというものは何もないのである。その多大な害の為に飲酒と賭事を禁じてはいても、それらのもつ利点を全然理解しない訳ではないのである。

注 186　普通一般の信者は自分達が必要とする分を充たした後で残った分を費やすよう命じられている。そして暮らしの楽な信者達は、自分達の財産のうち、可能な限りを費やすよう望まれている。しかしこの語句を全ての信者全体にあてはめるのであれば、戦時には、自分達の最低必要限分だけを残し大義の為、費やすべきである事を意味するところとなる。

注 187　孤児の養育は大変微妙な問題であり、且つ重要な社会的義務である。孤児は肉体的、精神的、道徳的な福祉が最も得やすい様に家族の一員として育成されねばならない。「彼らはあなた達の兄弟（同胞）である」という言葉にその勧めがこめられている。

は孤児の幸福増進を求める者と、悪いことをする者とを識別す。もしアッラー欲しなば、お前たちを困難に陥らしむべし。げにアッラーは強大にして、賢哲にまします」と。

الْمُفْسِدَ مِنَ الْمُصْلِحِ ۚ وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ لَأَعْنَتَكُمْ ۚ إِنَّ اللَّهَ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ﴿٢٢٠﴾

222. 偶像崇拝者の女性とは、彼女が信徒となるまで結婚するなかれ。(注 188) たとい彼女がお前たちをいかほど愛慕するとも、偶像崇拝の女性よりは女奴隷の信徒の方がはるかに良し。また、信徒の女性を彼等偶像崇拝者に、相手が信徒になるまで嫁がせるなかれ。たとい彼が彼女をいかほど愛慕するとも、偶像崇拝の男性よりも男奴隷の信徒の方がはるかに良し。これ等の者はお前たちを業火に誘う。されどアッラーは、お前たちを楽園に誘い、思し召しを以て赦免し給う。アッラーは人々を反省せしめんがために、その神兆を明示し給う。

وَلَا تَنكِحُوا الْمُشْرِكَاتِ حَتَّىٰ يُؤْمِنَّ ۚ وَلَأَمَةٌ مُّؤْمِنَةٌ خَيْرٌ مِّن مُّشْرِكَةٍ وَلَوْ أَعْجَبَتْكُمْ ۗ وَلَا تُنكِحُوا الْمُشْرِكِينَ حَتَّىٰ يُؤْمِنُوا ۚ وَلَعَبْدٌ مُّؤْمِنٌ خَيْرٌ مِّن مُّشْرِكٍ وَلَوْ أَعْجَبَكُمْ ۗ أُولَٰئِكَ يَدْعُونَ إِلَى النَّارِ ۖ وَاللَّهُ يَدْعُو إِلَى الْجَنَّةِ وَالْمَغْفِرَةِ بِإِذْنِهِ ۖ وَيُبَيِّنُ آيَاتِهِ لِلنَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُونَ ﴿٢٢١﴾

第二十八項

223. 彼等は月経について汝に問わん。云え、「そは不浄なり。されば月経中は、女を避け、浄まるまで (注 189) 近づくなかれ。清き身に戻りたれば、アッラーが命じたる如く (注 190) 彼女たちのそばに行け。アッラーは悔い改める者並びに清潔ならんとする者を愛し給う」と。

وَيَسْأَلُونَكَ عَنِ الْمَحِيضِ ۖ قُلْ هُوَ أَذًى فَاعْتَزِلُوا النِّسَاءَ فِي الْمَحِيضِ ۖ وَلَا تَقْرَبُوهُنَّ حَتَّىٰ يَطْهُرْنَ ۖ فَإِذَا تَطَهَّرْنَ فَأْتُوهُنَّ مِنْ حَيْثُ أَمَرَكُمُ اللَّهُ ۚ إِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ التَّوَّابِينَ وَيُحِبُّ الْمُتَطَهِّرِينَ ﴿٢٢٢﴾

注 188　「偶像崇拝者の女性」との結婚問題は、戦争と深くかかわりがある。何故なら、戦争の間長く家を離れている信者達は、こういった女性達との結婚に陥りがちだからである。この件は、多神教徒の男子と信者の女子の結婚同様、クルアーンでは同く禁じられている。これは倫理的、社会的面からだけでなく宗教上の問題にも根ざしている。多神教徒の夫は、妻に対してだけでなく、二人の間に生まれた子供にも極端に有害な影響を与えざるを得ず、又多神教徒の妻は、必ず子孫の育成をめちゃくちゃにしてしまうのである。更に、多神教徒の妻や夫が、信者を配偶者とすれば、両者の考え、信仰、人生の見方に大きなひらきがありすぎる為、不調和や不一致が生じ、ひいては、家庭内に平和がなくなってしまうのである。イスラムでは奴隷制は何の劣等の不名誉を帯びるものではなく、自由民のイスラム教徒の男子にとっては、多神教徒の女子よりイスラム教徒の女奴隷の方があらゆる面で、よい配偶者となり、その逆もまたそうなのである。イスラム社会に於いては、奴隷達の信仰と公明正大さは多大の尊敬をうけており、聖なる預言者の非常に尊敬された仲間（同胞）のベラール、サルマーン、そしてサーリムは全て解放された奴隷達であった。

注 189　信者と多神教徒の結婚の法を簡単にまとめた後で、婚姻関係や夫婦間の義務についての言及が必要となった。

224. お前たちの妻は、お前たちの耕地なり。されば意のままに己が畑におもむけ。(注 191) 而して己れ自身のためになるように、何か善いことをしておくべし。アッラーを畏れ、やがてアッラーに会うべきことを知れ。

نِسَآؤُكُمْ حَرْثٌ لَّكُمْ فَأْتُوا حَرْثَكُمْ أَنَّىٰ شِئْتُمْ وَقَدِّمُوا لِأَنفُسِكُمْ وَاتَّقُوا اللَّهَ وَاعْلَمُوا أَنَّكُم مُّلَاقُوهُ وَبَشِّرِ الْمُؤْمِنِينَ ﴿٢٢٤﴾

225. お前たちが善行をなし、正しく振舞い、人々の間に入って仲良くさせること、これ等を妨げるような誓いの対象に (注 192) アッラーを使うなかれ。

وَلَا تَجْعَلُوا اللَّهَ عُرْضَةً لِّأَيْمَانِكُمْ أَن تَبَرُّوا وَتَتَّقُوا وَتُصْلِحُوا بَيْنَ النَّاسِ وَاللَّهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٢٢٥﴾

226. アッラーはお前たちの空しき宣誓を咎めず。(注 193) されどアッラーは、お前たちの心に宿すことを咎む。アッラーは寛大にして、寛容にまします。

لَّا يُؤَاخِذُكُمُ اللَّهُ بِاللَّغْوِ فِي أَيْمَانِكُمْ وَلَٰكِن يُؤَاخِذُكُم بِمَا كَسَبَتْ قُلُوبُكُمْ وَاللَّهُ غَفُورٌ حَلِيمٌ ﴿٢٢٦﴾

227. 妻と同衾せざることを誓う者は、四カ月間待つべし。されどその間に、もし誓いを飜さば、アッラーは寛大にして、情け深くまします。(注 194)

لِّلَّذِينَ يُؤْلُونَ مِن نِّسَائِهِمْ تَرَبُّصُ أَرْبَعَةِ أَشْهُرٍ فَإِن فَاءُوا فَإِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿٢٢٧﴾

注 190　「アッラーが命じたる如く」という文に示唆される命とは、妻との交接は生殖に通ずる行為としてとらえるとの意味である。（2：188 も参照）

注 191　この節はクルアーンの純粋で威厳のある表現の雄弁な実証である。最も微妙な話題が、一番上品で思慮深く取り扱われ、　結婚の哲学と婚姻関係全体が、"汝の妻はお前にとって畑の様なもの"という簡明な一文で述べつくされている。女性とは実際、子孫という種のまかれる畑の様であり、賢明な夫は最もよい土を選び、最上の畑を用意し、最も良い種を大事にしておき、種まきに最もよい時と方法を選ぶのである。信者がそうすれば、子供という形での収穫が得られるが、それは信者のみならず、民族の全将来にもかかっているのである。婦人を畑に例える事は、優性学と性の倫理性に浴びるほどの光りをあてる事となるのである。

注 192　ここでの「対象」とは物失いの種或いは障害との意味を表し、人が全ての善行の溢れるばかりの源であるアッラーの名を、善行を行なわないようにする為使うという事は、まことに、瀆神の行為である。異端や目的もない誓いの対象や笑い物としてアッラーの名を口にする事はアッラーの神聖さの冒瀆にほかならない。当節と次節は、人の妻から身を遠ざけておく誓いについて述べられている 2：227 への導入部の役割を果たしている。

注 193　誓いをたてるとは冒険な事であるのに、なかには、何も意味する事なく、(不敬の意味で)神の名を口にするくせの者がいる。無意味に、或いは怒りの為、とっさに口にでたとか、口ぐせになっている誓いは、何の罪ほろぼしにもならない。

注 194　誓いに関した内容をはさんで、二つの導入の節の後で、クルアーンは婚姻関係の問題に立ち戻っている。ここでは、実際には離婚をしないで、妻と縁を切ろうと思っている男達について述べている。この離婚の問題にすすむ前に、クルアーンは、実際の別離ではないが、一時的且つ部分的な別離である月経（2：223 ）について述べているのはまことに興味深いところである。そして当節では、本当の、ただし漠然とした離別が

228. されど彼等が離婚を決意しなば、げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。(注 195)

وَإِنْ عَزَمُوا الطَّلَاقَ فَإِنَّ اللَّهَ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٢٢٨﴾

229. 離縁されたる女性は、用心のために、三たび月経を待つべし。而(しか)して彼女たちがもしアッラーと末日を信ずるなば、アッラーが彼女たちの胎内に創造せるものを隠すは、違法なり。而(しか)してこの期間中に、夫の側から妻と和解を望み、(注 196) 妻を復帰せしむるならば、その夫は最も正し。公平にみて、女性は男性と同等の権利を有すといえども、男性は女性より一つ上に位す。(注 197) アッラーは偉大にして、賢哲にまします。

وَالْمُطَلَّقَٰتُ يَتَرَبَّصْنَ بِأَنفُسِهِنَّ ثَلَٰثَةَ قُرُوٓءٍ وَلَا يَحِلُّ لَهُنَّ أَن يَكْتُمْنَ مَا خَلَقَ اللَّهُ فِىٓ أَرْحَامِهِنَّ إِن كُنَّ يُؤْمِنَّ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْءَاخِرِ وَبُعُولَتُهُنَّ أَحَقُّ بِرَدِّهِنَّ فِى ذَٰلِكَ إِنْ أَرَادُوٓا إِصْلَٰحًا وَلَهُنَّ مِثْلُ الَّذِى عَلَيْهِنَّ بِالْمَعْرُوفِ وَلِلرِّجَالِ عَلَيْهِنَّ دَرَجَةٌ وَاللَّهُ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ﴿٢٢٩﴾

ع ٢٨ ١٢

語られ、そしてこれに続く節で、実際のしかし取り消し可能な離婚が、そして2：231では最終的に取り消す事のできない離婚が語られているのである。これはイスラムが必要悪とみなす離婚で、その手続き中に出きる限り多くの負担を課すべく考えられた本当に素晴らしい秩序と命令である。イスラムでは、妻に近よらないと誓う者に4ケ月の期間を許している。この間に、彼は妻と仲直りして婚姻関係を修復するか、両者の間で別れる事にするか、にしなければならない。イスラムではいかなる場合も、女性をまるで停止状態にしておくような漠然とした離別は許されない。イーラとは離別の誓いの事で、この誓いによって夫から無視されている女性は、そのままの状態でいる事となる。その間彼女は他の男性と結婚する事もできないし、自分の夫ととも婚姻関係を持つ事はできないので、最長4ケ月までとされている。

注 195　この節からイスラムの離婚に関する法の説明が始まる。この法律によれば法的必要性が生じた場合には夫側に妻を離婚する権限がある。しかし、この権利が行使される事はめったになく、ほんの例外的場合のみである。

注 196　離婚とは神の目に映る全ての法的事項の内、最も忌むべきものであるという事実から、離婚に関しては、多くの審査と制限が付帯されている。先ず(1)夫が妻を離婚できるのは妻の月経が終わり、自由に夫婦関係のもてる期間でありながら、夫が何ら性的行為をしていない場合、(2)離婚が宣せられてから、妻は、約3ケ月に該当する三回の月経を待たなければならない。これはイッダ（待機期間）と呼ばれる。これだけの時間を夫に与え自分のした行動を考えさせ、もしどこかに妻への潜在的愛情がくすぶっているのなら、もう一度それに気づかせる為の期間である。(3)離婚された女性がもし妊娠している場合は、この事実を夫に隠してはならない。何故なら子供の先の誕生は両者の仲直りの一助となるからである。(4)完全な取り消し不能な離別には三回までの離婚がある。第2及び第1の離婚の宣言の後でも待機期間がきれてしまうより前なら、夫がそうしたいと思ったら、妻を元に戻す特権を持つ。たとえ待機期間が終わってしまっていても、結婚のきずなを結び直す事で第1回および第2回の離婚であれば、再び一緒になる事ができる。

注 197　個人的権利に関しては、夫と妻の権利は同格であるが、4：35でも指摘される通り、男の方が肉体的優越と家計を支える経済的責任から監督者的権威をもつ。

第二十九項

230. 離婚の宣言は二回まで許す。その後は、ふさわしい待遇を以て之を留むるか、或いは懇ろにして之を出せ。(注 198) 夫婦両者がアッラーによって定められたる掟を守り得ざることを恐れるに非ずば、お前たちは妻に与えたるものを取り戻すことは違法なり。(注 199) されどもしお前たちが、彼等はアッラーによって定められたる掟を守り得じと恐るる場合は、彼女がその自由を得るために与うることは、両人とも罪なし。こはアッラーの定めたる掟なれば、違犯するなかれ。(注 200) アッラーの定めたる掟に違犯する者は、罪人なり。

اَلطَّلَاقُ مَرَّتٰنِ فَاِمْسَاكٌ بِمَعْرُوْفٍ اَوْ تَسْرِيْحٌ بِاِحْسَانٍ وَلَا يَحِلُّ لَكُمْ اَنْ تَاْخُذُوْا مِمَّآ اٰتَيْتُمُوْهُنَّ شَيْـًٔا اِلَّآ اَنْ يَّخَافَآ اَلَّا يُقِيْمَا حُدُوْدَ اللّٰهِ فَاِنْ خِفْتُمْ اَلَّا يُقِيْمَا حُدُوْدَ اللّٰهِ فَلَا جُنَاحَ عَلَيْهِمَا فِيْمَا افْتَدَتْ بِهٖ تِلْكَ حُدُوْدُ اللّٰهِ فَلَا تَعْتَدُوْهَا وَمَنْ يَّتَعَدَّ حُدُوْدَ اللّٰهِ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الظّٰلِمُوْنَ ﴿٢٢٩﴾

231. 三回目の離婚宣言によって正式に別れたる後は、彼女が他の夫と結婚するまでは之を

فَاِنْ طَلَّقَهَا فَلَا تَحِلُّ لَهٗ مِنْ بَعْدُ حَتّٰى تَنْكِحَ زَوْجًا

注 198　ここで離婚についての5番めの審査がある。妻を離別したい男は、離婚を三度、別個の機会に宣言しなければならない。第2、第3の離婚宣言を一度めの離婚宣言で同時にすませてしまう事はできない。例え、一度めにくりかえし三度述べても意味はない。「離婚の宣言は二回まで許す」というのは聖なる預言者は、その回数がどれだけであれ、こういった集合された宣言を、ただ一回の離婚として取り扱った。ナサイによれば、或る日、一人の男が三つの離婚の宣言を一時に同時に行い“神の経典を私がまだここにいる間に、無効にできないものだろうか？　と言ったという事を聞き聖なる預言者は非常に立腹したという事である。最初の二つの離婚宣言をしても、妻の同意のあるなしにかかわらず、イッダー待機期間中であれば妻を元の状態に戻す事ができる。たとえその期間が終わっていても、彼女の同意があれば再婚する事ができる。しかし三度めの離婚の後では、夫のこの権利を喪失し、夫婦は最終的に離別するところとなる。聖なる預言者の同胞が一度、“クルアーンでは二度の離婚の事だけを語っていますが、三度めはどうなっているのですか？”と預言者に尋ねたら、彼は、“好意を持って自由にしてやれ”即ち二度の離婚の後でも、彼女が同意するのなら夫は妻を留めておき再婚できる事を意味する言葉が返ってきたのである。しかし夫が、どうしても離婚したいと望む場合は、彼は三度めの離婚宣言の後、“彼女を自由に”しなければならない。以上のような、男性の側から望まれる離婚はタラークとよばれる。

注 199　夫が妻を離婚する場合、夫は妻に与えた婚資をとりあげる事はできない。婚資を与えていない場合は、離婚が法的に正式のものとなる前に支払わなくてはならない。又、夫は、贈り物という形で彼女に与えたものはどんなものであっても取り戻す事は許されない。

注 200　しかし、妻の方が離別を望むホッラ(離婚)であれば彼女は‘汝らがおそれるなら’という言葉中、汝らが複数形をとっているという事からわかるように調停又は裁判の手続きをふまなければならない。この場合は両者が同意するか、裁判官が決めるかにより全額であれ一部であれ、妻は夫からもらったものと婚資を手離さなければならない。ケースの妻ジャミラの場合が、女性によるホッラの権利の行使の良い例である。彼女は二人の性格があわぬ為うまくいかず彼をきらいになったという事を理由に夫であるケースとの離別を要求した。彼女は、聖なる預言者より離婚の許可を与えられたが、夫からもらった果樹園を夫に帰さなければならなかった。(ブハリ)

غَيْرَهُ ۗ فَإِنْ طَلَّقَهَا فَلَا جُنَاحَ عَلَيْهِمَآ أَنْ يَّتَرَاجَعَآ إِنْ ظَنَّآ أَنْ يُّقِيمَا حُدُوْدَ اللّٰهِ ۗ وَتِلْكَ حُدُوْدُ اللّٰهِ يُبَيِّنُهَا لِقَوْمٍ يَّعْلَمُوْنَ ﴿٢٣١﴾

復縁させることは違法なり。もし第二の夫が彼女を離婚する場合は、両人がアッラーの定めたる掟を守り得る自信があらば、お互いまたもとに戻るとも罪なし。こはアッラーの定めたる掟なり。アッラーは之を知識ある人々に明示し給う。(注 201)

وَإِذَا طَلَّقْتُمُ النِّسَآءَ فَبَلَغْنَ أَجَلَهُنَّ فَأَمْسِكُوْهُنَّ بِمَعْرُوْفٍ أَوْ سَرِّحُوْهُنَّ بِمَعْرُوْفٍ ۚ وَلَا تُمْسِكُوْهُنَّ ضِرَارًا لِّتَعْتَدُوْا ۚ وَمَنْ يَّفْعَلْ ذٰلِكَ فَقَدْ ظَلَمَ نَفْسَهُ ۚ وَلَا تَتَّخِذُوْآ اٰيٰتِ اللّٰهِ هُزُوًا ۚ وَّاذْكُرُوْا نِعْمَتَ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ وَمَآ أَنْزَلَ عَلَيْكُمْ مِّنَ الْكِتٰبِ وَالْحِكْمَةِ يَعِظُكُمْ بِهٖ ۚ وَاتَّقُوا اللّٰهَ وَاعْلَمُوْآ أَنَّ اللّٰهَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمٌ ﴿٢٣٢﴾

232. お前たちその妻を離縁し、定められたる期間が満了しなば、善意を以て之を留むるか、又は懇ろにして之を出せ。彼女たちを不当に引き留めて、お前たち罪を犯すなかれ。そのようなことをする者は、必ず己れ自信を害う。アッラーの戒律を馬鹿にするなかれ。而してアッラーがお前たちに与えたる恩寵と、諭し戒めんがために降したる経典と知恵とを念え。アッラーを畏れ、且つアッラーが万事を知悉し給うことを銘記せよ。(注 202)

第三十項

وَإِذَا طَلَّقْتُمُ النِّسَآءَ فَبَلَغْنَ أَجَلَهُنَّ فَلَا تَعْضُلُوْهُنَّ أَنْ يَّنْكِحْنَ أَزْوَاجَهُنَّ إِذَا تَرَاضَوْا بَيْنَهُمْ بِالْمَعْرُوْفِ ۗ ذٰلِكَ يُوْعَظُ بِهٖ مَنْ كَانَ مِنْكُمْ يُؤْمِنُ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ ۗ ذٰلِكُمْ أَزْكٰى لَكُمْ وَأَطْهَرُ ۗ وَاللّٰهُ يَعْلَمُ وَأَنْتُمْ لَا تَعْلَمُوْنَ ﴿٢٣٣﴾

233. お前たち妻を離縁し、その定められたる期間が満了しなば、互に合意の上にて合法に彼女が望む者と結婚することを妨げるなかれ。こはお前たちのうち、アッラーを信じ、末日を信ずる者への訓戒なり。こはお前たちのために最も清浄なり。お前たちは知らねども、アッラーは之を知り給う。(注 203)

注 201　この節では、第3の最終的離婚について述べており、この場合夫は、離婚した妻が、他の男と結婚し婚姻関係を確立し、彼女が自由に結婚できる様にならない限り、離婚した妻と再び結ばれる権利を全て失う。この項目を法律の中に組みこむ事で、イスラムは一方では粗末に取り扱う事は許されない結婚の神聖さを高め、もう一方では、非常に間接的ではあるが、一度は夫と妻として暮らした二人が、もしそう望めば再婚できる機会を許可しているのである。

注 202　文脈から明らかなように、ここで述べられている離婚は、取り消す事のできる離婚である。この離婚宣言の後で夫に残された選択は妻をとどめおいてその人とまた夫婦として暮らすか正当に離別するかの二つだけである。彼には妻を虐待したり、不安定な状態にしておく事は許されないのである。

注 203　この節での‘夫’は、以前の或いはこれからの夫のいづれをも指す。前夫の場合は、“妻を離婚する場合”という文は第1又は第2の離婚をさし、これから結婚する夫であれば、第3の、最終的離婚を意味する。離婚した女性の後見人は、彼女が前夫と再婚する事を、そして、前夫は彼女が新しい夫と結婚する事を止める事はできない。

234. 生母はその子供に満二年間授乳すべし。こは授乳を全うせんと望む者のためなり。その場合父親は、慣例に従って、哺乳者の衣食を負担する義務を有す。何人（なんぴと）もその能力以上の負担は課せられることなし。生母はその子ゆえに、(注 204) 父親もまたその子ゆえに (注 205) 不当に強制せらるることなし。また相続人の場合も同様な義務を有す。(注 206) 双方が相談の上、合意にもとづいて (注 207) 離乳を決定するならば、両者には罪なし。またもし子供のために乳母をつけるなら、その乳母に約束せるものを公正に支給せば、お前たちには罪なし。アッラーを畏れ、アッラーがお前たちの行為を照覧し給うことを知れ。

وَالْوَالِدٰتُ يُرْضِعْنَ اَوْلَادَهُنَّ حَوْلَيْنِ كَامِلَيْنِ
لِمَنْ اَرَادَ اَنْ يُّتِمَّ الرَّضَاعَةَ ؕ وَعَلَى الْمَوْلُوْدِ لَهٗ
رِزْقُهُنَّ وَكِسْوَتُهُنَّ بِالْمَعْرُوْفِ ؕ لَا تُكَلَّفُ نَفْسٌ
اِلَّا وُسْعَهَا ۚ لَا تُضَآرَّ وَالِدَةٌۢ بِوَلَدِهَا وَلَا مَوْلُوْدٌ
لَّهٗ بِوَلَدِهٖ وَعَلَى الْوَارِثِ مِثْلُ ذٰلِكَ ۚ فَاِنْ اَرَادَا
فِصَالًا عَنْ تَرَاضٍ مِّنْهُمَا وَتَشَاوُرٍ فَلَا جُنَاحَ عَلَيْهِمَا ؕ
وَاِنْ اَرَدْتُّمْ اَنْ تَسْتَرْضِعُوْٓا اَوْلَادَكُمْ فَلَا جُنَاحَ
عَلَيْكُمْ اِذَا سَلَّمْتُمْ مَّآ اٰتَيْتُمْ بِالْمَعْرُوْفِ ؕ وَاتَّقُوا
اللّٰهَ وَاعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ بِمَا تَعْمَلُوْنَ بَصِيْرٌ ﴿٢٣٣﴾

235. お前たちのうち、その妻を残して死する者あらば、その妻は自分の計らいで、四カ月と十日間待つべし。而（しか）してその期間満了の後は、(注 208) 彼女たちが相応に身を処することに対して、(注 209) お前たちには何の罪もなし。アッラーはお前たちの所業を承知し給う。

وَالَّذِيْنَ يُتَوَفَّوْنَ مِنْكُمْ وَيَذَرُوْنَ اَزْوَاجًا يَّتَرَبَّصْنَ
بِاَنْفُسِهِنَّ اَرْبَعَةَ اَشْهُرٍ وَّعَشْرًا ۚ فَاِذَا بَلَغْنَ اَجَلَهُنَّ
فَلَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ فِيْمَا فَعَلْنَ فِيْٓ اَنْفُسِهِنَّ بِالْمَعْرُوْفِ ؕ
وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِيْرٌ ﴿٢٣٤﴾

注 204　この文は、(1)母親は我が子の為に父親を苦しめてはならない、(2)母親は我が子の為に苦しめられてはならない。という意味を表し両方共ここでは適用できる。

注 205　ここでは父親の子供に対する本来の所有権と、子供の保全に対する当然の責任を指摘している。

注 206　死んだ人の財産を相続する者は、故人の残した遺児達を養育する義務がある。

注 207　子供の離乳には最大二年が必要とされるが父親と母親の双方が同意するのであれば二年をまたずして離乳を打ち切る事ができる。これは又、母親の同意なくして二年がすぎるより以前に赤ん坊を離乳させてはいけない事をも意味している。

注 208　寡婦の場合のイッダ（待機期間）は 4 ケ月と 10 日でこれは、四回の月経期間を合わせたものである。イスラムでは、彼女の亡くなった夫への感情への尊敬のしるしとしてふつうの離別期間である 3 ケ月よりも期間を長くし、結婚生活のきづなの尊厳と神聖さに対する敬意を払っているのである。

注 209　「彼女達が相応に身を処する」とは、明らかに再婚の意味である。クルアーンは他の箇所でも、"未亡人達の為に結婚を用意してやれ"（24：33）との記載がある。

236. またお前たちがこれ等の女に、結婚の申し出をほのめかしたり、胸の中にその思いを秘めることは、お前たちに罪なし。アッラーはお前たちが、彼女たちになさんとすることを知り給う。されど公明正大なる言葉を云う以外は、彼女たちと秘密に約束するなかれ。また定められたる期間が満了するまでは、結婚の結び目を固める決意をするなかれ。アッラーはお前たちが心に宿すものを知悉（ちしつ）し給うことを心得よ。さればそのことに用心せよ。アッラーは寛大にして、寛容にましますす。（注 210）

وَلَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ فِيمَا عَرَّضْتُمْ بِهٖ مِنْ خِطْبَةِ النِّسَآءِ
اَوْ اَكْنَنْتُمْ فِيْٓ اَنْفُسِكُمْ ؕ عَلِمَ اللّٰهُ اَنَّكُمْ سَتَذْكُرُوْنَهُنَّ
وَلٰكِنْ لَّا تُوَاعِدُوْهُنَّ سِرًّا اِلَّآ اَنْ تَقُوْلُوْا قَوْلًا
مَّعْرُوْفًا ؕ وَلَا تَعْزِمُوْا عُقْدَةَ النِّكَاحِ حَتّٰى يَبْلُغَ
الْكِتٰبُ اَجَلَهٗ ؕ وَاعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ يَعْلَمُ مَا فِيْٓ اَنْفُسِكُمْ
فَاحْذَرُوْهُ ۚ وَاعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ حَلِيْمٌ ﴿٢٣٦﴾

第三十一項

237. お前たち女に触れず、婚資も決めざるうちに離婚するは、（注 211）罪なし。されど富者はその資力に応じて、貧者もその資力に応じて彼女たちに贈与せよ、妥当な贈与を。これ高潔な人に課せられる義務なり。

لَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ اِنْ طَلَّقْتُمُ النِّسَآءَ مَا لَمْ تَمَسُّوْهُنَّ
اَوْ تَفْرِضُوْا لَهُنَّ فَرِيْضَةً ۚۖ وَّمَتِّعُوْهُنَّ عَلَى الْمُوْسِعِ
قَدَرُهٗ وَعَلَى الْمُقْتِرِ قَدَرُهٗ ۚ مَتَاعًاۢ بِالْمَعْرُوْفِ ۚ حَقًّا
عَلَى الْمُحْسِنِيْنَ ﴿٢٣٧﴾

238. もしお前たち女の体に触れざるも、すでに婚資を決めたる後に之（これ）を離婚する場合は、決めた額の半分を（注 212）支払うべし。但し先方が辞退するか、結婚の絆を握る者が（注 213）辞退する場合は別なり。いずれにせよ、辞退する方が、公正により近し。ま

وَاِنْ طَلَّقْتُمُوْهُنَّ مِنْ قَبْلِ اَنْ تَمَسُّوْهُنَّ وَقَدْ
فَرَضْتُمْ لَهُنَّ فَرِيْضَةً فَنِصْفُ مَا فَرَضْتُمْ اِلَّآ اَنْ
يَّعْفُوْنَ اَوْ يَعْفُوَا الَّذِيْ بِيَدِهٖ عُقْدَةُ النِّكَاحِ ؕ وَ

注 210　上期の待機期間に、公に未亡人に対し結婚の申し込みをする事はできない。ただ、それとなくわからせる様にする事はできるが、決して公に、正式な、或いは、秘密の内にであってでも、結婚に関する申しこみをしてはならない。未亡人も当期間中にこういった申し込みに承諾を与えてはならない。未亡人は、亡くなった配偶者の思い出に敬意を払い、その間に妊娠していないかどうかを明らかにする為、4ケ月と10日待つのである。妊娠している未亡人は、子供を産むまでは結婚する事が許されないのである。

注 211　これは例外といえる。しかし結婚の約束が完了した後に、結婚の完遂と継続が、難しい或いは望ましくないとわかったりする事は、ままある事である。次節と現節に、そういう場合の取り決めが述べられている。

注 212　婚資が決められてからの離婚の場合には夫が妻にふれていないのなら決めた婚資の1／2を夫は妻に支払わねばならない。

注 213　「結婚の絆を握る者」は、結婚前には女性の後見人であり結婚後の契約取り扱い人は夫となる。

た互に恩情をかけ合うことを（注214）忘れるなかれ。げにアッラーはお前たちの所業を照覧し給う。

أَن تَعْفُوٓا أَقْرَبُ لِلتَّقْوَىٰ ۚ وَلَا تَنسَوُا الْفَضْلَ بَيْنَكُمْ ۚ إِنَّ اللَّهَ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ﴿٢٣٨﴾

239. 厳密に各礼拝を守れ。（注215）とりわけまん中の礼拝を。（注216）恭敬を満してアッラーの御前に立て。

حَافِظُوا عَلَى الصَّلَوَاتِ وَالصَّلَوٰةِ الْوُسْطَىٰ وَقُومُوا لِلَّهِ قَانِتِينَ ﴿٢٣٩﴾

240. 危険の恐れある場合は、徒歩または騎乗のまま礼拝せよ。（注217）されど安全な場合は、お前たちが知らざりしことをアッラーが教えたる如く、アッラーを念ぜよ。

فَإِنْ خِفْتُمْ فَرِجَالًا أَوْ رُكْبَانًا ۖ فَإِذَآ أَمِنتُمْ فَاذْكُرُوا اللَّهَ كَمَا عَلَّمَكُم مَّا لَمْ تَكُونُوا تَعْلَمُونَ ﴿٢٤٠﴾

241. お前たちのうち妻を残して死する者は、彼女たちが追出されずに一年間扶養を（注218）受けられるように遺言すべし。されど彼女たちが自ら家を出る場合は、彼女たちが自ら合法に行動することに対して、お前たちに罪なし。アッラーは偉大にして、賢哲にまします。

وَالَّذِينَ يُتَوَفَّوْنَ مِنكُمْ وَيَذَرُونَ أَزْوَاجًا ۚ وَصِيَّةً لِّأَزْوَاجِهِم مَّتَاعًا إِلَى الْحَوْلِ غَيْرَ إِخْرَاجٍ ۚ فَإِنْ خَرَجْنَ فَلَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ فِي مَا فَعَلْنَ فِيٓ أَنفُسِهِنَّ مِن مَّعْرُوفٍ ۗ وَاللَّهُ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ﴿٢٤١﴾

注214　「恩情をかけ合う」とは妻（或いは彼女の後見人）は、彼女の取り分の全て或いは一部を免除してやるか、夫が自分の支払うべき額よりも多く支払う事を意味している。しかし当然ながら、夫の方が寛容さを示す方が望ましい。

注215　結婚後、人は祈りをいくらかは怠りがちになる。それ以外にも、家庭生活は男女共に世話する事が倍になる為、結婚した人々を、もっと祈りを定期的に時間正しく行う様させる必要が生じてくるのである。

注216　「アスルの祈り」（まん中の礼拝）が聖なる預言者の言葉の内に支持されているという見解である。この祈りは人が前からとりかかっている仕事に没頭する最も忙しい時間の祈りとなるが、ある意味では、祈りは全て、真中の礼拝である。

注217　定められた一日の五回の礼拝を守る事は、最も重要な戒律である。イスラム教徒が正常な神経を持ち意識のある限り、礼拝を欠かしてはならない。教徒が非常な恐怖下にあっても、礼拝を怠ってはならない。馬上にあっても徒歩であっても、走っていようが、坐っていようが横たわっていようが、どういう状態にあっても礼拝すべきである。

注218　未亡人が独りでいなければならない２：235 で示される４ケ月と10日の間は、故人の相続人から、自分の権利として、住居と生活面での保障を要求できる。ここで言われている一年間とは、２：235 での権利に加えて、未亡人に与えられる好意にすぎないのである。この間に与えられるものは相続での彼女の取り分でもなければ、強制的命令でもないのである。

242. 離別せられたる女も公正に扶養されるべきなり。(注 219) これ神を畏れる者の義務なり。

وَلِلْمُطَلَّقٰتِ مَتَاعٌۢ بِالْمَعْرُوْفِ حَقًّا عَلَى الْمُتَّقِيْنَ ﴿٢٤٢﴾

243. かくの如くアッラーは、お前たちがわかるように戒律を説き明し給う。

كَذٰلِكَ يُبَيِّنُ اللّٰهُ لَكُمْ اٰيٰتِهٖ لَعَلَّكُمْ تَعْقِلُوْنَ ﴿٢٤٣﴾

第三十二項

244. 汝は数千の人々が (注 220) 死を怖れて、(注 221) 家から出て行きたる事実を (注 222) 知らざるか？　アッラーは彼等に「死せよ」と云い、(注 223) 後に之を甦らせり。げにアッラーは人間に対し慈悲深き御方なれど、世人の多くは感謝せず。

اَلَمْ تَرَ اِلَى الَّذِيْنَ خَرَجُوْا مِنْ دِيَارِهِمْ وَهُمْ اُلُوْفٌ حَذَرَ الْمَوْتِ فَقَالَ لَهُمُ اللّٰهُ مُوْتُوْا ثُمَّ اَحْيَاهُمْ اِنَّ اللّٰهَ لَذُوْ فَضْلٍ عَلَى النَّاسِ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَشْكُرُوْنَ ﴿٢٤٤﴾

245. アッラーの道のために戦え。(注 224) アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給うことを知れ。

وَقَاتِلُوْا فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَاعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ سَمِيْعٌ عَلِيْمٌ ﴿٢٤٥﴾

246. アッラーに善き貸付けをする者は誰か ?(注 225) アッラーはその者のために之を倍加す

مَنْ ذَا الَّذِيْ يُقْرِضُ اللّٰهَ قَرْضًا حَسَنًا فَيُضٰعِفَهٗ

注 219　前節では未亡人に追加的好意が与えられていたが、当節では、離婚した女性に追加的好意を与えている。この命令は離婚女性の場合には、離婚後に必然的に生じる困難な時期に、人は離婚女性に対し不当に残酷となりがちな為、特に不可欠のものである。

注 220　聖書ではエジプトを逃れたイスラエル人の数を 60 万人としている。近年の研究ではクルアーンの説をとり、約数千人と推定している (アーネスト・レナン著、イスラエル人民の歴史、P 145 、及びジョンキョト著、パレスチナとユダヤ人の歴史 P 174)。2 ：61 も参照する事。

注 221　イスラエル人はそれ以上エジプトに留まると自分達が根だやしにされる事を恐れてエジプトを脱出したのである。パロ族はあらゆる手段を講じ、ユダヤ民族を根絶しようとしたのである。

注 222　パロ族に迫害され、イスラエル人はエジプトを逃れ、アジアへ渡り、モーゼが約束された土地に入ろうとした時、彼らはそこに住んでいる人々を恐れ、前進する事を拒んだ。

注 223　これは、モーゼと共にカナンの地に入る事を拒んだイスラエル人がシナイ山の荒野で流浪した事であり、彼らは死して荒野に埋められ、新しい生命の息吹きにふれた、新しい世代の者達がジョシアに導かれ約束された土地に入ったのである。クルアーンの他の箇所にも“そして汝が死した後、汝を復活させる”という表現がある。

注 224　これはイスラム教徒にあてられたものである。死を恐れて、血を流す事をせず、自分達の国家の存亡、名誉を守る為に自分達の持つもの全てを犠牲にする心構えのない者は、生きる資格がない、とここでは主張されている。これこそ、クルアーンが教え説く国家発展の秘訣なのである。

注 225　クルアーンでは、アッラーの大義の為にお金を使う事は、神に金を貸すようなものであると言っている。これは、公明正大な理由で費やされた金銭は、無駄使いとはみなされない事を意味している。

べし。アッラーはその掌を閉ぢ、また之を開く。而してお前たちは、いずれアッラーの許へ帰らしめらる。

لَهٗۤ اَضۡعَافًا كَثِیۡرَةً ؕ وَاللّٰهُ یَقۡبِضُ وَیَبۡصُۜطُ ۪ وَاِلَیۡهِ تُرۡجَعُوۡنَ ﴿۲۴۶﴾

247. 汝、モーゼの後のイスラエルの子孫の族長たちについて、何も聞かざりしか？　その時彼等は預言者に向って、云えり、「我等のために王を任命せよ。されば我等はアッラーの道のために戦わん」と。預言者は云えり、「いざ戦うことを命ぜられると、お前たち戦いを欲せざるが如きことなきか？」と。彼等は云えり、「いづくんぞ我等はアッラーのために戦わざらんや？　すでに家を逐われ、子女とも離されたる身なれば」と。されどいざ戦いを命ぜられると、彼等のうち少数を除いて、皆背き去れり。アッラーはその違反者どもを熟知し給う。（注 226）

اَلَمۡ تَرَ اِلَی الۡمَلَاِ مِنۡۢ بَنِیۡۤ اِسۡرَآءِیۡلَ مِنۡۢ بَعۡدِ مُوۡسٰی ۘ اِذۡ قَالُوۡا لِنَبِیٍّ لَّهُمُ ابۡعَثۡ لَنَا مَلِكًا نُّقَاتِلۡ فِیۡ سَبِیۡلِ اللّٰهِ ؕ قَالَ هَلۡ عَسَیۡتُمۡ اِنۡ كُتِبَ عَلَیۡكُمُ الۡقِتَالُ اَلَّا تُقَاتِلُوۡا ؕ قَالُوۡا وَمَا لَنَاۤ اَلَّا نُقَاتِلَ فِیۡ سَبِیۡلِ اللّٰهِ وَقَدۡ اُخۡرِجۡنَا مِنۡ دِیَارِنَا وَاَبۡنَآئِنَا ؕ فَلَمَّا كُتِبَ عَلَیۡهِمُ الۡقِتَالُ تَوَلَّوۡا اِلَّا قَلِیۡلًا مِّنۡهُمۡ ؕ وَاللّٰهُ عَلِیۡمٌۢ بِالظّٰلِمِیۡنَ ﴿۲۴۷﴾

248. 預言者は彼等に云えり、「アッラーは、タールートを（注 227）お前たちの王として任命せり」と。すると彼等は云えり、「彼がどうして我等を統治することが出来得ようか？　彼よりも我等の方が統治者たるにふさわしく、それに彼は裕福にあらざるなり」と。そこで預言者は云えり、「アッラーはお前たちの上に彼を選び、その知識と肉体を豊かに増さしめたり」と。アッラーは御心にかなえば誰なりと、統治権を与え給う。アッラーは慈悲深く、すべてを知り給う。

وَقَالَ لَهُمۡ نَبِیُّهُمۡ اِنَّ اللّٰهَ قَدۡ بَعَثَ لَكُمۡ طَالُوۡتَ مَلِكًا ؕ قَالُوۡۤا اَنّٰی یَكُوۡنُ لَهُ الۡمُلۡكُ عَلَیۡنَا وَنَحۡنُ اَحَقُّ بِالۡمُلۡكِ مِنۡهُ وَلَمۡ یُؤۡتَ سَعَةً مِّنَ الۡمَالِ ؕ قَالَ اِنَّ اللّٰهَ اصۡطَفٰىهُ عَلَیۡكُمۡ وَزَادَهٗ بَسۡطَةً فِی الۡعِلۡمِ وَالۡجِسۡمِ ؕ وَاللّٰهُ یُؤۡتِیۡ مُلۡكَهٗ مَنۡ یَّشَآءُ ؕ وَاللّٰهُ وَاسِعٌ عَلِیۡمٌ ﴿۲۴۸﴾

注 226　ここで述べられている出来事は、モーゼの時代に比べれば改善されたイスラエル人の状況である。クルアーンの５：25では、モーゼが自分の信奉者達にアッラーの大義の為に戦う様、説き勤めた所、彼らは“モーゼ、お前はお前の主と二人で行って戦え。我々はここに坐っていよう。”と言ったが、現節ではこれに反し、“どうして我々が神の道の為に戦わないでいられよう。我々は既に家と子供達を後にしてかりだされてきたのだから”と言ったと伝えられている。しかしこの改善も口だけで実際はさ程変わっておらず、戦かわなければならなくなった時、彼らは軟弱になり戦う事を拒んだのである。この様に、この出来事は、イスラム教徒にとって、同じてつをふまぬ様に警告しているのである。

注 227　「タールート」は、ダビデより 200 年程前に生存したイスラエル人の王に与えられた名である。詳しくは英版参照。

249. 而して預言者は彼等に云えり、「統治者たるべき瑞兆として、お前たちにもたらされる櫃の（注228）中に、主よりの平安と、モーゼとアロン一家の遺物が（注229）納められ、それを天使たちが担い来るべし。もしお前たち真の信者ならば、げにそこにお前たちへの瑞兆あるなり」と。

وَقَالَ لَهُمْ نَبِيُّهُمْ إِنَّ آيَةَ مُلْكِهِ أَنْ يَأْتِيَكُمُ التَّابُوتُ فِيهِ سَكِينَةٌ مِّن رَّبِّكُمْ وَبَقِيَّةٌ مِّمَّا تَرَكَ آلُ مُوسَىٰ وَآلُ هَارُونَ تَحْمِلُهُ الْمَلَائِكَةُ ۚ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً لَّكُمْ إِن كُنتُم مُّؤْمِنِينَ ﴿٢٤٩﴾

第三十三項

250. タールートが軍を率いて出陣するに臨み、云えり、「げにアッラーは川によってお前たちを試めさんとす。されば、川の水を飲む者は味方に非ず。飲まざるものは味方なり。但し手で一掬の水を（注230）飲む者はその限りに非ず」と。されど少数の者を除いて、彼等はその水を飲めり。而して彼及び彼と信仰をともにする人々が川を渡りおえる

فَلَمَّا فَصَلَ طَالُوتُ بِالْجُنُودِ قَالَ إِنَّ اللَّهَ مُبْتَلِيكُم بِنَهَرٍ فَمَن شَرِبَ مِنْهُ فَلَيْسَ مِنِّي وَمَن لَّمْ يَطْعَمْهُ فَإِنَّهُ مِنِّي إِلَّا مَنِ اغْتَرَفَ غُرْفَةً بِيَدِهِ ۚ فَشَرِبُوا مِنْهُ إِلَّا قَلِيلًا مِّنْهُمْ ۚ فَلَمَّا جَاوَزَهُ هُوَ

注228　「櫃」（タープート）とは(1)物入れ又は箱(2)中に心臓等の入っている、胸部、胸或いはわき腹(3)知識、知恵そして平和をとどめおく心。

タープートの解釈は人によってまちまちであるが聖書では物入れ或いは箱であるとしているがクルアーンはここでは完全に"胸"或いは"心臓＝心"の意味で使っている。'神からの平安の臨在する'という文中のタープートの説明は、物入れという解釈だけでは通じない。平和や平安を他の人々に与えるどころか、聖書で語られる箱は、敵に持ちさられてしまったのであるから、イスラエル人を戦いで守るどころか、自分自身さえ守る事ができなかったのである。自ら箱をもって従軍していたサウルは、立ち直れない程の敗北を喫し、あまりにもその度合いが、ひどかった為敵もあわれんだ程で、彼は恥ずべき死を遂げたのである。だとすれば、そんな箱などイスラエル人にとって何の平安の源とはならないのである。神が彼らに与え給うたのは、勇気と忍耐力に満ちた「心」であった。その為、そこでいわれている平安が彼らのもとに下った時、イスラエル人は敵を打ち破り、相手に多大な敗北を祟らせたのであった。

注229　神がイスラエル人に下し給うた御恵みがもう一つ、ここで「遺物」という言葉で示されている。神は、彼らの祖先の特長であった崇高な性質で、モーゼやアーロンの子孫達を染めあげられたのである。モーゼやアーロンの子孫達に残された遺物は何ら物質的な物ではなく、祖先からの遺産として彼らの与えられたすぐれた道徳的資質なのである。

注230　一すくいの水だけは例外にするという事には二つの目的があったのである。先ず(1)行軍中の兵士のからからにひからびたのどを湿らせて、最低必要限の肉体的負担から解放する事、但し同時に、ガブガブ飲ませないようにしたという事は、彼らの士気を喪失させ敵の事をおろそかにしてしまう事を防ぐためであった。(2)試練をより厳しいものとする為であり、多くの場合、人にとって何もしない事より極端に限られた範囲内でのがまんの方がずっと苦しいからである。士師記7：5－6を参照の事。又「川」という語には"多くの"という意味もある。この意味とすれば、この節は、彼らは川（多くの水）によって試された、即ち、その誘惑に屈する者達は神の仕事を実行する資格は最早なく、忍耐強くこらえて、それを使った者は功を為すであろうとの意味になる。

や、云えり、「我等は今日、ジャールートと（注 231）その軍に立ち向う力なし」と。されどいつの日かアッラーに見(まみ)えんことを確認する人々は、云えり、「アッラーの指揮のもとに、如何に幾度(いくたび)も寡兵(かへい)をもって大軍を打ち破りたることか！　アッラーは不撓不屈(ふとうふくつ)なる者と偕(とも)にまします」と。

وَالَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ قَالُوا لَا طَاقَةَ لَنَا الْيَوْمَ بِجَالُوتَ وَجُنُودِهِ ۚ قَالَ الَّذِينَ يَظُنُّونَ أَنَّهُمْ مُلَاقُو اللَّهِ كَمْ مِنْ فِئَةٍ قَلِيلَةٍ غَلَبَتْ فِئَةً كَثِيرَةً بِإِذْنِ اللَّهِ ۗ وَاللَّهُ مَعَ الصَّابِرِينَ ﴿٢٥٠﴾

251. 而(しか)してジャールートとその軍勢に（注 232）遭遇すべく前進を始めたとき、彼等は祈りて、云えり、「我等の主よ、我等に不撓不屈(ふとうふくつ)の精神を注ぎ込み給え。我等の足を毅然(きぜん)と立たしめ、不信心者に対し我等を助け給え」と。

وَلَمَّا بَرَزُوا لِجَالُوتَ وَجُنُودِهِ قَالُوا رَبَّنَا أَفْرِغْ عَلَيْنَا صَبْرًا وَثَبِّتْ أَقْدَامَنَا وَانْصُرْنَا عَلَى الْقَوْمِ الْكَافِرِينَ ﴿٢٥١﴾

252. かくて彼等はアッラーの指揮のもとに、敵を敗走せしめたり。（注 233）ダビデはジャールートを殺し、アッラーはダビデに統治権と知恵とを授け、ダビデに自分が何を喜ぶかを教えたり。もしアッラーが人間に、互に牽制羈絆(けんせいきはん)し合うべくし向けざりせば、この地上は混乱に満たされたり。（注 234）されどアッラーはすべての人々への慈悲の主なり。

فَهَزَمُوهُمْ بِإِذْنِ اللَّهِ وَقَتَلَ دَاوُودُ جَالُوتَ وَآتَاهُ اللَّهُ الْمُلْكَ وَالْحِكْمَةَ وَعَلَّمَهُ مِمَّا يَشَاءُ ۗ وَلَوْلَا دَفْعُ اللَّهِ النَّاسَ بَعْضَهُمْ بِبَعْضٍ لَفَسَدَتِ الْأَرْضُ وَلَٰكِنَّ اللَّهَ ذُو فَضْلٍ عَلَى الْعَالَمِينَ ﴿٢٥٢﴾

253. これ等はアッラーの神兆(しるし)なり。われらは真理を以て之(これ)を汝に読誦す。げに汝は使徒の一人なり。

تِلْكَ آيَاتُ اللَّهِ نَتْلُوهَا عَلَيْكَ بِالْحَقِّ ۚ وَإِنَّكَ لَمِنَ الْمُرْسَلِينَ ﴿٢٥٣﴾

注 231　「ジャールート」とは、歯止めなく人に攻撃を仕掛け、他を攻めさいなむ者を意味する呼び方である。

注 232　この節で話されている「ジャールート」は一人の人間ではなく人々を指し「軍勢」とはこれらの人々の助力者や仲間を指している。聖書では、ミディアン人と呼び、彼らは数年にわたりイスラエル人に攻撃をかけ、彼らの土地を崩解させた（士師記６：１－６）アマリフ人及び全ての東部の部族がミディアン人の侵入を助け（士師記６：３）この節で述べられている「軍勢」を形成したのである。

注 223　タールート即ちギデオンは、ジャールート及びミディアン人に打ち勝つ事が出来たが、彼らの圧倒的勝利であるジャールートの殺りくは、約 200 年後のダビデの時代に成就されたものである。聖書ではダビデに倒されたのはゴリアテ（サムエル記上巻 17：４）となっているが、これはジャールートの同類である。クルアーンの与えている別名は多分、ダビデの時代の指揮者の名に由来していると思われる。

注 234　この簡潔な表現にこめられたこれらの言葉が全ての真実と正義の戦いの全哲学を述べつくしている。真実と正義の戦いは、混乱を生じさせたり平和を乱したり、弱少国家の自由を奪う為ではなく、混乱を正し平和と再興する為のみに戦われるべきなのである。

254. われらはこれら使徒たちの或る者をば、他より上位に置きたり。アッラーは彼等のうちの或る者に、御言葉をかけ給えり。また或る者には、高い位階を授けたり。(注 235) またわれらは、マリアの子イエスにさまざまなる明証を与え、聖霊によって彼を強くせり。もしアッラー欲したりせば、後の世の人々は明証が降(くだ)りたる後、互に相い争うことなかりしなり。しかるに彼等は意見を異にせり。或る者は信じ、或る者は信ぜざりき。もしアッラー欲したりせば、彼等は相い争うことなかりしなり。されどアッラーは己れの欲することをなし給う。

تِلْكَ الرُّسُلُ فَضَّلْنَا بَعْضَهُمْ عَلَىٰ بَعْضٍ مِنْهُمْ مَنْ كَلَّمَ اللَّهُ وَرَفَعَ بَعْضَهُمْ دَرَجَاتٍ ۚ وَآتَيْنَا عِيسَى ابْنَ مَرْيَمَ الْبَيِّنَاتِ وَأَيَّدْنَاهُ بِرُوحِ الْقُدُسِ ۗ وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ مَا اقْتَتَلَ الَّذِينَ مِنْ بَعْدِهِمْ مِنْ بَعْدِ مَا جَاءَتْهُمُ الْبَيِّنَاتُ وَلَٰكِنِ اخْتَلَفُوا فَمِنْهُمْ مَنْ آمَنَ وَمِنْهُمْ مَنْ كَفَرَ ۚ وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ مَا اقْتَتَلُوا وَلَٰكِنَّ اللَّهَ يَفْعَلُ مَا يُرِيدُ ﴿٢٥٤﴾

第三十四項

255. 汝ら信徒たちよ、取引も、(注 236) 友情も、(注 237) 執り成しもない (注 238) その日が来る前に、われらがお前たちに賜えしものを費やせ。自分自身に不正をなすことは、不信心者なり。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا أَنْفِقُوا مِمَّا رَزَقْنَاكُمْ مِنْ قَبْلِ أَنْ يَأْتِيَ يَوْمٌ لَا بَيْعٌ فِيهِ وَلَا خُلَّةٌ وَلَا شَفَاعَةٌ ۗ وَالْكَافِرُونَ هُمُ الظَّالِمُونَ ﴿٢٥٥﴾

256. アッラー、彼の外に神なし。永生者、自存者なり。まどろみも眠りも彼を捕えず。天にあるもの地にあるもの、すべて彼の所有(もの)なり。彼の許しなしに、彼に執り成しをなし得る者は誰ぞ？ 彼は、人々の前にあることを知り、また人々の後ろにあることを知り給う。彼が欲すに非ずば、人々は彼の知恵をいささかも知ることなし。彼の玉座は天地(あめつち)に広がり、之(これ)を護持して重荷となることなし。彼こそは至高にして、至大なる御方にまします。

اللَّهُ لَا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ الْحَيُّ الْقَيُّومُ ۚ لَا تَأْخُذُهُ سِنَةٌ وَلَا نَوْمٌ ۚ لَهُ مَا فِي السَّمَاوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ ۗ مَنْ ذَا الَّذِي يَشْفَعُ عِنْدَهُ إِلَّا بِإِذْنِهِ ۚ يَعْلَمُ مَا بَيْنَ أَيْدِيهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ ۖ وَلَا يُحِيطُونَ بِشَيْءٍ مِنْ عِلْمِهِ إِلَّا بِمَا شَاءَ ۚ وَسِعَ كُرْسِيُّهُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضَ ۖ وَلَا يَئُودُهُ حِفْظُهُمَا ۚ وَهُوَ الْعَلِيُّ الْعَظِيمُ ﴿٢٥٦﴾

注 235　この表現は、アッラーが語りかけない預言者達がいるとか、精神的に卓越していない預言者がいるという意味ではない。ただ、預言者には二種類あるという事を述べているだけである、即ち、(1)新しい律法をもたらす預言者、彼らはムカラム（律法を得た預言者）と呼ばれる。そして(2)預言者の地位が、彼らの精神の高遠さに由来する者、彼らはガイル・ムカラムな預言者（(1)以外の預言者）である。聖なる預言者はアダムをムカラムな預言者とみなすと言ったと伝えられている。

注 236　復活の日は、、取引などなく、人の行いの善悪と神の御慈悲次第なのである。

注 237　その日には、新しい友情のきずなを生み出す機会などないのである。

注 238　2 章 49 節を参照の事。

257. 宗教は強制するものに非ず。正道はすでに迷誤より区別されたり。(注 239) されば邪神をしりぞけてアッラーを信ずる者は、決して壊れざる把手を掴みたる者なり。アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

لَآ إِكْرَاهَ فِى الدِّينِ قَد تَّبَيَّنَ الرُّشْدُ مِنَ الْغَيِّ فَمَن يَكْفُرْ بِالطَّاغُوتِ وَيُؤْمِنۢ بِاللّٰهِ فَقَدِ اسْتَمْسَكَ بِالْعُرْوَةِ الْوُثْقٰى لَا انفِصَامَ لَهَا وَاللّٰهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٢٥٧﴾

258. アッラーは信徒たちの守護者なり。人々を暗闇より連れ出し、光明へ導き給う。不信心者どもは、その守護者は邪神で、彼等を光明より暗闇へ導く。彼等は業火の住人なり。永劫に彼等その中に住まん。

اللّٰهُ وَلِيُّ الَّذِينَ اٰمَنُوا يُخْرِجُهُم مِّنَ الظُّلُمٰتِ إِلَى النُّورِ وَالَّذِينَ كَفَرُوٓا أَوْلِيَآؤُهُمُ الطَّاغُوتُ يُخْرِجُونَهُم مِّنَ النُّورِ إِلَى الظُّلُمٰتِ أُولٰٓئِكَ أَصْحٰبُ النَّارِ هُمْ فِيهَا خٰلِدُونَ ﴿٢٥٨﴾

第三十五項

259. アッラーが王権を授けたるが故に、アブラハムに対してその主について論争せるあの男のこと、汝聞かざりしか？　その時アブラハムは云えり、「我が主は、生を与え、死に至らしめる御方なり」と。彼は云えり、「我もまた生を与え、死に至らしむる」と。そこでアブラハムは云えり、「よろしい、アッラーは太陽を東から昇らしむ。汝、西から之を昇らしめよ」と。かくて不信心者はあきれてものも云えざりき。(注 240) アッラーは不義なる者どもを導き給わず。

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِى حَآجَّ إِبْرٰهِيمَ فِى رَبِّهِۦٓ أَنْ اٰتٰىهُ اللّٰهُ الْمُلْكَ إِذْ قَالَ إِبْرٰهِيمُ رَبِّىَ الَّذِى يُحْىِۦ وَيُمِيتُ قَالَ أَنَا۠ أُحْىِۦ وَأُمِيتُ قَالَ إِبْرٰهِيمُ فَإِنَّ اللّٰهَ يَأْتِى بِالشَّمْسِ مِنَ الْمَشْرِقِ فَأْتِ بِهَا مِنَ الْمَغْرِبِ فَبُهِتَ الَّذِى كَفَرَ وَاللّٰهُ لَا يَهْدِى الْقَوْمَ الظّٰلِمِينَ ﴿٢٥٩﴾

注 239　宗教の為に特別な犠牲を払い、イスラムの敵に対して戦うという命令は、アッラーはイスラム教徒に、自分達の宗教を布教する為に武力を行使する事を望んでいらっしゃるという誤解を生じ易いが、この節でその誤解が取り除かれ、イスラム教徒に、もっとも強調された言葉で、非イスラム教徒を教徒化する際に絶対武力を行使してはならないと告げ、又何故行使してはならないかという理由も併せて述べている。「正道はすでに迷誤より区別」されているので、強制する必要はない。

注 240　アブラハムは偉大な偶像破壊者であった。彼の時代の人々はマドルク（朝の神、春の太陽）を主たる神とし、太陽や星を礼拝した（聖書百科辞典と宗教倫理百科、P.296）。彼らは、全ての生命が、太陽に依存していると信じた。アブラハムはある無神論者に非常に賢明に、もし彼が自分で言うように生と死をコントロールしているのであれば、全ての生命の依存している太陽の動きを逆にしてみなさいと頼んだ。彼は何も答えられなかった。彼はアブラハムの課題を成し就げられないとは言えなかった。もしその課題を受け入れれば自分が生と死の管理者である事をぶちこわすし、もしできるといえば、太陽を礼拝していた人々の目には、大変な冒涜とうつってしまうからである。こうして彼は完全に混乱し、何と言ってよいのか途方にくれたのである。

260. また廃墟に帰したる都を通りかかり、(注241)「アッラーはいつこの死せる都を甦らしむりか？」と云える男ありき。そこでアッラーはその男を百年の間死なしめ、(注242)再び甦らせて、云えり、「汝はどれ程留まりたるか？」と。彼は答えて、云えり、「一日か、否、数刻なり」と。(注243) アッラーは云えり、「然らず、汝はその状態で百年滞溜せるなり。(注244) それ、汝の食物と飲物とを見よ。そは未だ腐らず。されど汝の驢馬を見よ。(注245) われらが之をなせるは、汝をして人々への徴たらしめんがためなり。

أَوْ كَالَّذِي مَرَّ عَلَىٰ قَرْيَةٍ وَهِيَ خَاوِيَةٌ عَلَىٰ
عُرُوشِهَا قَالَ أَنَّىٰ يُحْيِي هَٰذِهِ اللَّهُ بَعْدَ مَوْتِهَا
فَأَمَاتَهُ اللَّهُ مِائَةَ عَامٍ ثُمَّ بَعَثَهُ قَالَ كَمْ لَبِثْتَ
قَالَ لَبِثْتُ يَوْمًا أَوْ بَعْضَ يَوْمٍ قَالَ بَل لَّبِثْتَ
مِائَةَ عَامٍ فَانظُرْ إِلَىٰ طَعَامِكَ وَشَرَابِكَ لَمْ يَتَسَنَّهْ
وَانظُرْ إِلَىٰ حِمَارِكَ وَلِنَجْعَلَكَ آيَةً لِّلنَّاسِ وَانظُرْ إِلَى

注241　ここで「廃墟に帰したる都」と言われているのは、紀元前599 年にバビロンアの王ネブカドネザルに破壊されたエルサレムの事である。預言者エゼキエルはバビロンの捕虜となったユダヤ人の一人であったが、街の側を通らされ、荒廃したエルサレムの廃墟と化した光景を目撃させられたのである。

注242　エゼキエルはこの街の崩壊の様子に心を痛め神に悲哀に満ち溢れた言葉で、エルサレムの復興を祈った。彼の祈りが届き、祈りをささげたエルサレムの復興が100 年後に成るという夢をみたのである。これは別にエゼキエルが100 年間死していた事を意味するものではない。クルアーンでは時々、夢の中でみられたものであるという事を言わずに、夢での光景が実際に起こったという表現をする事がある。(12：5)エゼキエルもその意義を悟ったという夢はイスラエルの子等が捕虜の状態にあって約100 年間、民族としての完全な屈辱を経た後新しい生命を受けとり聖なる街に戻ってくるという事を意味していた。そしてエゼキエルの夢は実現したのである。エルサレムは紀元前599 年にネブカドネザルが占領し(列王下24：10)、エゼキエルの夢は紀元前586 年頃のはずである。そしてエルサレムは崩壊後、約一世紀後に再建された。エルサレム建設は、ペルシャとミディアの王であったサイラスの許可と助力により紀元前537 年に始められ、紀元前515 年に完成をみたが、イスラエル人がエルサレムに戻り落着くまでに更に15年が必要とされた為、結果として崩壊から再建まで実際には100 年を要したのである。神が100 年の間エゼキエルを死者としておき100 年後によみがえらしたとするのは他愛もない事が、これは個人の生死ではなく、民族全体を表す街の生死に関して祈ったエゼキエルの祈りへの答とならないからである。

注243　この言葉は時間の確認の為で(18：20 と 23：114)、クルアーンでの用法に従えば、エゼキエルはどれだけの間、自分がその状態にあったかはわからない事を意味している。ここでの「日」は24時間で表される一日の意味ではなく、絶対的な時間なのである(1：4参照の事)。「一日か、否、数刻なり」という文はエゼキエルの眠っていた時間か、夢をみていた時間をも指している。エゼキエルは明らかに夢の続いた時間を聞かれたと思ったのである。

注244　しかしお前は100 年の間この状態にあったのだというのは、ある意味ではエゼキエルが、その状態に100 年とどまっていたという意味にもなる。(彼は自分が100 年死していた事を夢にみたのであるから)また彼が一日かそこら待ったという叙述は実際夢をみている時間はふつう非常に短いものであるからそれも正しいと言える。

注245　この事実をエゼキエルにわからせる為、神は彼の関心を彼の食事と飲み物とろばに向けたのである。飲み物や食べ物が腐らず、ろばが生きているという事は、彼が眠っていたのが一日程度であった事を示している。「汝のろばをみよ」という文は、捕虜でいた時野原でエゼキエルがろばを横にして寝ていた時に、夢をみた事を示している。当時イスラエル人は、農夫として畑で働かされていたのである。

الْعِظَامِ كَيْفَ نُنْشِزُهَا ثُمَّ نَكْسُوهَا لَحْمًا ۚ فَلَمَّا تَبَيَّنَ لَهُ قَالَ أَعْلَمُ أَنَّ اللَّهَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ٢٦٠

あの白骨を見よ、われらが如何にその骨を合せ、肉の衣を着せるかを」と。而してそれが彼に明示されると、彼は云えり、「我はアッラーが全能にましますことを知る」と。(注 246)

وَإِذْ قَالَ إِبْرَاهِيمُ رَبِّ أَرِنِي كَيْفَ تُحْيِي الْمَوْتَىٰ ۖ قَالَ أَوَلَمْ تُؤْمِنْ ۖ قَالَ بَلَىٰ وَلَٰكِنْ لِيَطْمَئِنَّ قَلْبِي ۖ قَالَ فَخُذْ أَرْبَعَةً مِنَ الطَّيْرِ فَصُرْهُنَّ إِلَيْكَ ثُمَّ اجْعَلْ عَلَىٰ كُلِّ جَبَلٍ مِنْهُنَّ جُزْءًا ثُمَّ ادْعُهُنَّ يَأْتِينَكَ سَعْيًا ۚ وَاعْلَمْ أَنَّ اللَّهَ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ٢٦١ ع ٣٥

261. アブラハムが、「主よ、如何にして死者に生命を与うるかを我に見せ給え」と云える時のことを思い起せ。アッラーは云えり、「汝は未だ信ぜざるか？」と。アブラハムは云えり、「我は信ず。ただ我が心を安心させんがためなり」と。(注 247) アッラーは云えり、「ならば四羽の鳥を取れ。之を汝に馴れさせてから、丘の上にその一部ずつを(注 248)置き、而して之を呼べ。彼等は汝のところへ急ぎ飛び来るべし。
かくてアッラーの偉力とその賢哲さを知れ」と。

第三十六項

مَثَلُ الَّذِينَ يُنْفِقُونَ أَمْوَالَهُمْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ كَمَثَلِ حَبَّةٍ أَنْبَتَتْ سَبْعَ سَنَابِلَ فِي كُلِّ سُنْبُلَةٍ مِائَةُ

262. アッラーの道のために己が財を費やす者を譬うれば、一粒の穀物に七つの穂がつき、その各々の穂に百の穀粒がつくが如し。アッラーは思し召す者には、倍加して与え

注 246　エゼキエルはその身に全ユダヤ民族を代表している。彼の象徴的な 100 年間の死は、個人のことではなく、民族全体の捕虜としての 100 年間の屈辱と悲しみを象徴していたのである。これがエゼキエルが神のみしるしとなったという意味である。37 章のエゼキエルも参照する事。

注 247　イーマーン（信仰）とイトゥミナーン（「安心」）との違いは、イーマーンの状態では、人は単に神が事を成しうる事を信じるだけであるが、イトゥミオームの状態では、彼の場合にも事が為るという確信を受け取るということである。アブラハムは確かに神が死者を生きかえらす事ができる事を信じていたが、彼が望んだのは、神が自分の子孫の場合にもそうなさって下さるかを知りうる事だったのである。

注 248　これは、物事の一部又は区分を意味している。アラビア語では、ジュズという。この様に、もし物事が一つの集団をなしていれば、‘一部’或いは‘区分’という語は、その各構成員をさす事となる。これはアブラハムの夢である。鳥四羽をつかまえるという事で、彼の子孫が四回の興亡をみる事が暗に示されている。これは、イスラエル人に二回、そしてイシュマエルを通してアブラハムの子孫となったイスラムの聖なる預言者の信奉者（あるいは後継者）に二回、繰り返されたのである。イサクを通したアブラハムの末えいであるユダヤ人の国力は、最初は、ネブカドネザルに、次にはタイタス(17：5－8ブリタニカ百科辞典、ユダヤ人の項)によって二回、かい滅させられた。そして二回とも神は、彼らの没落の後、再興された。二回めの没落後の再興は、キリスト教を受け入れたローマの皇帝コンスタンチヌスによって為しとげられたのである。イスラムの国力も同様に、先ず、タルターンの遊牧民の手にバクダッドが落ちた時、はげしいゆさぶりを受けたが、間もなくその打撃から回復した。勝利者は宗教をのりこえ、バグダッドの略害者であったハラクの孫は、イスラム教徒に改宗したのである。第2の段落はその後精神的且つ政治的にイスラムの衰退のみられた時期にやってきたのであり、第2の復興は約束された救世主によりもたらされたのである。

給う。アッラーは寛容にして、すべてに通暁(つうぎょう)し給う。(注 249)

حَبَّةٍ ؕ وَاللّٰهُ يُضٰعِفُ لِمَنْ يَّشَآءُ ؕ وَاللّٰهُ وَاسِعٌ عَلِيْمٌ ﴿٢٦٢﴾

263. アッラーの道のために己が財を費やし、その施しに嘲りや侮辱を伴わしめざる者は、主の御許(みもと)に報奨あり。彼等には怖れも悲嘆も起らざるべし。(注 250)

اَلَّذِيْنَ يُنْفِقُوْنَ اَمْوَالَهُمْ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ثُمَّ لَا
يُتْبِعُوْنَ مَآ اَنْفَقُوْا مَنًّا وَّلَآ اَذًى ۙ لَّهُمْ اَجْرُهُمْ
عِنْدَ رَبِّهِمْ ۚ وَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُوْنَ ﴿٢٦٣﴾

264. 親切な言葉や寛大さの方が、侮辱を伴う喜捨に優る。アッラーは自足者にして、寛容者にまします。(注 251)

قَوْلٌ مَّعْرُوْفٌ وَّمَغْفِرَةٌ خَيْرٌ مِّنْ صَدَقَةٍ يَّتْبَعُهَآ
اَذًى ؕ وَاللّٰهُ غَنِيٌّ حَلِيْمٌ ﴿٢٦٤﴾

265. 汝等信徒たちよ、嘲りと侮辱とによってお前たちの施しを空無に帰せしむるなかれ。(注 252) 人々に見せびらかすために自分の財を費せど、アッラーも末日も信ぜざる者どもがするが如く。かかる者は、泥をかぶりたる平らな岩に似て、大雨その上に降りそそがば、忽ち裸となりて、元の平らな堅い岩に戻る。彼等は己が稼ぎからいささかも利益を得ざるべし。アッラーは信仰せざる徒輩(やから)を導き給わず。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تُبْطِلُوْا صَدَقٰتِكُمْ بِالْمَنِّ
وَالْاَذٰى ۙ كَالَّذِيْ يُنْفِقُ مَالَهٗ رِئَآءَ النَّاسِ وَلَا
يُؤْمِنُ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ ؕ فَمَثَلُهٗ كَمَثَلِ صَفْوَانٍ
عَلَيْهِ تُرَابٌ فَاَصَابَهٗ وَابِلٌ فَتَرَكَهٗ صَلْدًا ؕ لَا
يَقْدِرُوْنَ عَلٰى شَيْءٍ مِّمَّا كَسَبُوْا ؕ وَاللّٰهُ لَا يَهْدِى
الْقَوْمَ الْكٰفِرِيْنَ ﴿٢٦٥﴾

注 249　前節では、ある国家が死し、そしてその国家が再興するに値する民族であれば、神が新しい生命を与えて下さるのは神の法である事が指摘され、その例としてイスラエルが挙げられている。そして更にアブラハムの末えいはイスラエル人とイシュマエル人に各々二回づつ計四回の興亡をみるとも述べられている。イスラム教徒を約束された再興にむけて準備させる為、神は、国家発展の手段に立ち返り、信仰薄き者達に心おきなく、神の大義の為に資力を費やすよう切に勧告なさっているのである。

注 250　全ての善行は悪用される事があり、アッラーの大義の為に財産を使う事の悪用は、それにマン（善行を自まんげに話す･恩をきせる）とアザー（迷惑を及ぼす）をする事である。アッラーの大義の為に財産を使ったり真実の為奉仕をした者は、その事を必要もないのに言いふらす事は禁じられている。そうする事は恩きせがましくなってしまうからである。同様に、彼らは自分達の貢献に対し見返りを要求してはならない。

注 251　助けを求める者達には、親切な言葉と寛容さの方が迷惑を併なう喜捨に勝る、或いは、助けを求めてきた者に恥をかいたと感じさせない為に、彼らの貧窮を黙っていてやり、他人にその事がもれぬ様にすべきである。というのがマグフラトの意味する所である。

注 252　他の箇所でもイスラム教徒は包み隠さず財産を使うよう命ぜられている(２：275)。その意図する目的は、他のイスラム教徒もその例にならう様にという事である。しかし信仰を持たぬ者は、公の評価を勝ちとる為のみに公然と金を使うのである。そういう者は神の報酬を受け取る資格を全て失うのである。

266. アッラーを喜ばさんとして、且つ己が精神を強めんとして（注253）財を費やす人は、丘の上の果樹園に（注254）似たり。大雨降らば、果実の収穫は二倍となる。よしまた降らずとも、お湿り程度でこと足りる。アッラーはお前たちの所業を照覧し給う。

وَمَثَلُ الَّذِينَ يُنْفِقُونَ أَمْوَالَهُمُ ابْتِغَاءَ مَرْضَاتِ اللَّهِ وَتَثْبِيتًا مِنْ أَنْفُسِهِمْ كَمَثَلِ جَنَّةٍ بِرَبْوَةٍ أَصَابَهَا وَابِلٌ فَآتَتْ أُكُلَهَا ضِعْفَيْنِ فَإِنْ لَمْ يُصِبْهَا وَابِلٌ فَطَلٌّ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ﴿٢٦٦﴾

267. お前たちのうち、棗椰子や葡萄の果樹園を持ち、小川その下を流れ、あらゆる種類の果物が採れ—ところがすでに年老い、されど跡継ぎたちは未だ幼弱—おりしも旋風猛火を伴いて果樹園を襲い、悉く焼き払う。そんな目に誰が遭いたいと望むか？（注255）かくの如くアッラーは、お前ちを反省せしめんがために、さまざまなる神兆を説き明し給う。

أَيَوَدُّ أَحَدُكُمْ أَنْ تَكُونَ لَهُ جَنَّةٌ مِنْ نَخِيلٍ وَأَعْنَابٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ لَهُ فِيهَا مِنْ كُلِّ الثَّمَرَاتِ وَأَصَابَهُ الْكِبَرُ وَلَهُ ذُرِّيَّةٌ ضُعَفَاءُ فَأَصَابَهَا إِعْصَارٌ فِيهِ نَارٌ فَاحْتَرَقَتْ كَذَٰلِكَ يُبَيِّنُ اللَّهُ لَكُمُ الْآيَاتِ لَعَلَّكُمْ تَتَفَكَّرُونَ ﴿٢٦٧﴾

第三十七項

268. 汝等信徒たちよ、お前たちが稼ぎたる佳物と、われらがお前たちのために大地よる産したものとを施しに費やせ。自分でも目をつぶらずには受け得ざる如き悪しきものを選びて施すなかれ。（注256）アッラーは自足者にして、讃美せられるべき御方なるを知れ。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا أَنْفِقُوا مِنْ طَيِّبَاتِ مَا كَسَبْتُمْ وَمِمَّا أَخْرَجْنَا لَكُمْ مِنَ الْأَرْضِ وَلَا تَيَمَّمُوا الْخَبِيثَ مِنْهُ تُنْفِقُونَ وَلَسْتُمْ بِآخِذِيهِ إِلَّا أَنْ تُغْمِضُوا فِيهِ وَاعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ غَنِيٌّ حَمِيدٌ ﴿٢٦٨﴾

注253　アッラーの大義の為に富を使う事は、自分が一生懸命稼いだ富を使う事で、自ら、己をして信仰を固く確固たるものとする重荷を自分に負わせるという事から、人の魂を強くするのである。

注254　神の大義の為に包み隠さず財産を費やす信者の心は、天が雨の恵みを降り注ぐ高台の土地の様なものである。天の雨は場合によっては低い土地には危険であるが、高台には多かろうが少なかろうがいづれの場合にも恵みとなるのである。

注255　この比喩によって、信者達は、自分達の財産をみせびらかしに使ったり、迷惑を及ぼすような喜捨をすれば、自分の費やした全てが無駄となってしまうと警告されている。

注256　この節では信者は神の大義の為には善きものとして純粋なものを費やす事が必要であると説かれている。何故なら合法的に手に入れた財産の中にも悪しきものが混ざっているからである。貧者に古くなった使用済みの物が渡される事はあっても、使い古しのものだけをその目的の為にさし出す事は許されないのである。

269. 悪魔（サタン）は貧乏を以てお前たちを脅し、お前たちに恥じ知らずな行動（ふるまい）を勧む。(注 257) しかるにアッラーは、寛容と恵み深さをお前たちに約束し給う。アッラーは寛容にして、すべてを知り給う。

اَلشَّيْطٰنُ يَعِدُكُمُ الْفَقْرَ وَيَاْمُرُكُمْ بِالْفَحْشَآءِ ۚ وَاللّٰهُ يَعِدُكُمْ مَّغْفِرَةً مِّنْهُ وَفَضْلًا ۗ وَاللّٰهُ وَاسِعٌ عَلِيْمٌ ﴿٢٦٩﴾

270. 彼は思し召す者に知恵を授け給う。知恵を賜わりたる者は、豊かなる幸福を賜わりたる者なり。(注 258) されど思慮ある人以外は、何人（なんぴと）も之（これ）に気づかざるなり。

يُّؤْتِي الْحِكْمَةَ مَنْ يَّشَآءُ ۚ وَمَنْ يُّؤْتَ الْحِكْمَةَ فَقَدْ اُوْتِيَ خَيْرًا كَثِيْرًا ۗ وَمَا يَذَّكَّرُ اِلَّآ اُولُوا الْاَلْبَابِ ﴿٢٧٠﴾

271. お前たちが何を費やし、また如何なる誓いをたてるか、アッラーはすべて之（これ）を知る。(注 259) 而（しか）して不義なす徒輩（やから）には、助け手なかるべし。

وَمَآ اَنْفَقْتُمْ مِّنْ نَّفَقَةٍ اَوْ نَذَرْتُمْ مِّنْ نَّذْرٍ فَاِنَّ اللّٰهَ يَعْلَمُهُ ۗ وَمَا لِلظّٰلِمِيْنَ مِنْ اَنْصَارٍ ﴿٢٧١﴾

272. お前たち、施しを公然とするも良いが、ひそかに之（これ）を貧者に与うるならば、その方が自分のために更に良し。(注 260) アッラーはお前たちが犯せし悪業のいくつかを容赦せん。アッラーはお前たちの所業を知り給う。

اِنْ تُبْدُوا الصَّدَقٰتِ فَنِعِمَّا هِيَ ۚ وَاِنْ تُخْفُوْهَا وَتُؤْتُوْهَا الْفُقَرَآءَ فَهُوَ خَيْرٌ لَّكُمْ ۗ وَيُكَفِّرُ عَنْكُمْ مِّنْ سَيِّاٰتِكُمْ ۗ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِيْرٌ ﴿٢٧٢﴾

273. 彼等を正しい道に従わせることは、汝の責に非ず。アッラーは思し召す者は誰であれ、導き給う。お前たちが施す良きものは、つまりは自分のためになる、アッラーを喜ば

لَيْسَ عَلَيْكَ هُدٰىهُمْ وَلٰكِنَّ اللّٰهَ يَهْدِيْ مَنْ يَّشَآءُ ۗ وَمَا تُنْفِقُوْا مِنْ خَيْرٍ فَلِاَنْفُسِكُمْ ۗ وَمَا تُنْفِقُوْنَ اِلَّا

注 257　神の大義の為、とめどなく財産を費やしていると人は貧乏になってしまうというサタンが人々に疑いの念を起こさせるのをこの節では取り去っている。又逆に、もし富める人々が、善なる理由・目的の為に自由に財産を費やさなければ、国家の貧窮が生じてしまう－即ち、共同社会の中でより恵まれない人々の経済的必要が満たされない場合には、彼らは生計をたてる為に、不正で不道徳な手段に走ってしまいがちとなる為、国は経済的に困窮し且つ道徳的に退廃するのである。

注 258　富を慈善に使う事は、国家発展と繁栄の秘訣であり、知恵に基づくということをこの節では意味している。

注 259　聖なる預言者は、義務付けられていない善を必ず行うという誓いをたてる事を認めなかった。もしそれでも人が義務付けられない善い事を行うという誓願をたてるのなら、その誓いを実行する義務を負う事となる。

注 260　イスラムは最も賢明に、公けと秘密裏の二種類の施しの方法を勧めている。施こしをあからさまに行う事は、善い例を設定する為、他の人が見習うという事も生じる。場合によってはこっそりと施こす方が、施こしを受けた兄弟達の貧窮を他人の目にふれさせない、そして施こしを鼻にかける事がほとんどないという事から、いっそうよいといえる。

ابْتِغَاءَ وَجْهِ اللَّهِ ۚ وَمَا تُنْفِقُوا مِنْ خَيْرٍ يُوَفَّ إِلَيْكُمْ وَأَنْتُمْ لَا تُظْلَمُونَ ﴿٢٧٢﴾

すことのみを願って（注 261）なしたれば。お前たちが施しに費やせるものは、存分に返済せられ、不当に遇せられることなかるべし。

لِلْفُقَرَاءِ الَّذِينَ أُحْصِرُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ لَا يَسْتَطِيعُونَ ضَرْبًا فِي الْأَرْضِ يَحْسَبُهُمُ الْجَاهِلُ أَغْنِيَاءَ مِنَ التَّعَفُّفِ تَعْرِفُهُمْ بِسِيمَاهُمْ لَا يَسْأَلُونَ النَّاسَ إِلْحَافًا ۗ وَمَا تُنْفِقُوا مِنْ خَيْرٍ فَإِنَّ اللَّهَ بِهِ عَلِيمٌ ﴿٢٧٣﴾

274. これらの施し者は、アッラーの道のために困窮し、(注 262) そのために国内を行き来でき得ざる者に与えらる。彼等は慎み深く、人に物乞わざるが故に無知なる者は彼等が裕福なりと思う。汝彼等のその特徴を観て、彼等を識るべし、彼等はうるさく物乞わざるが故に。(注 263) 何であれお前たちが施しに費やすものは、アッラー之を正確に知り給う。（注 264）

第三十八項

الَّذِينَ يُنْفِقُونَ أَمْوَالَهُمْ بِاللَّيْلِ وَالنَّهَارِ سِرًّا وَعَلَانِيَةً فَلَهُمْ أَجْرُهُمْ عِنْدَ رَبِّهِمْ وَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿٢٧٤﴾

275. 夜となく昼となく、ひそかにまた公然と己が財を施す者は、主より報奨を受く。彼等には恐怖も悲嘆も起らざるべし。

الَّذِينَ يَأْكُلُونَ الرِّبَا لَا يَقُومُونَ إِلَّا كَمَا يَقُومُ الَّذِي يَتَخَبَّطُهُ الشَّيْطَانُ مِنَ الْمَسِّ ۚ ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ قَالُوا إِنَّمَا

276. 利息をむさぼり食う徒輩は、(注 265) 悪魔の狂気に襲われたる者がする如き立ち上り方しかでき得ず。(注 266) そは彼等が、「商売

注 261　モハッマド預言者の弟子達は命令されたわけではないが自発的にアッラーの喜びのために自分の財産を善行のために費やそうとした。

注 262　状況は時にして、人を孤立させてしまう場合がある。こういう人々がより恵まれた人々からの助力に、特に値するのである。この範ちゅうに属する人々には二種類あり、一つは(1)神の使者と共に精神的恩恵を得るために励んでいる人々、又もう一つは(2)厳しい環境からぬけだせない為、日常の必要にも事欠く者達、である。

注 263　ここでは、物乞いをしない自尊心のある人々とその「慎み深さ」を賞讃し、それに対ししつこく物乞いをする下品さを説いている。聖なる預言者は、物乞いを罪ありと咎めた。

注 264　慈善に、義務的なザカートと余功（サダカ）の二種類がある。ザカートは、或る一定額の金銭又は財産を持っている全てのイスラム教徒から国家が徴収し、国家が、貧者、困窮者、孤児、未亡人そして徒歩旅行者等の為に使うものであり、その喜捨がどこから来たのか知らない受取手は、何ら特定の個人には恩義をうけない。ザカートとは国家の福祉なのである。サダカとは自発的であり、貧窮者を助けたいという願いから個人が与えるものである。サダカは、恵まれた裕福な人々には貧しい兄弟への同情心を、そして又貧しい人々の間には援助者への感謝を生じさせるものなのである。

注 265　文字通りでは、余剰又は追加を表すリバーは本来の合計額以上の追加額との意味である。リバーとは高利貸しと利息の両方の意味を持ち、ハディスに依れば、利子が前もって決められている全ての貸付けがこの定義にあてはまる。リバーの実際に意味する所は厳密にいえば通常考えられている、“利息”と全く同一ではな

もまた利息を取るが如し」と云うが故なり。アッラーは商売は許したれど、利息を取ることは禁じたり。されど、主より訓戒が降り、止める者は、過去のことは許さる。されど逆戻りせば、彼等は業火の住人となり、永劫にその中に住まん。

الْبَيْعُ مِثْلُ الرِّبٰوا ۘ وَاَحَلَّ اللّٰهُ الْبَيْعَ وَحَرَّمَ الرِّبٰوا ؕ فَمَنْ جَآءَهٗ مَوْعِظَةٌ مِّنْ رَّبِّهٖ فَانْتَهٰى فَلَهٗ مَا سَلَفَ ؕ وَاَمْرُهٗۤ اِلَى اللّٰهِ ؕ وَمَنْ عَادَ فَاُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ النَّارِ ۚ هُمْ فِيْهَا خٰلِدُوْنَ ﴿۲۷۶﴾

277. アッラーは利息を廃止し、施しには利を生ましめん。(注 267) アッラーは誰であれ、不信心者や罪深い者を愛し給わず。

يَمْحَقُ اللّٰهُ الرِّبٰوا وَيُرْبِى الصَّدَقٰتِ ؕ وَاللّٰهُ لَا يُحِبُّ كُلَّ كَفَّارٍ اَثِيْمٍ ﴿۲۷۷﴾

278. されど信じて善行をなし、礼拝を遵守し、定めの喜捨を払う者は、必ず主より報奨を受けん。彼等には、恐怖も悲嘆も起こらざるべし。

اِنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ وَاَقَامُوا الصَّلٰوةَ وَاٰتَوُا الزَّكٰوةَ لَهُمْ اَجْرُهُمْ عِنْدَ رَبِّهِمْ ۚ وَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُوْنَ ﴿۲۷۸﴾

279. 汝ら信徒たちよ、アッラーを畏れ、残れる利息を放棄せよ、もしお前たち信者ならば。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوا اتَّقُوا اللّٰهَ وَذَرُوْا مَا بَقِىَ مِنَ الرِّبٰۤوا اِنْ كُنْتُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ﴿۲۷۹﴾

いが、それ以上にうまく言い表せる言葉がない為、"利息"を持ってあてているのである。実際、人が貸した(金額) より多くをうけとったり、借りた (金額) より多くを支払うということは、取引きが、個人、銀行、社会、郵便局、その他どんな組織であれ、"利息" なのである。"利息" とは金銭に限られておらず、どのような物品であれ、同意を得た余剰分と共に返却されるという条件で貸付けとして与えられる全ての物品にあてはめられるのである。

注 266　ここでは、金貸しは、丁度頭の狂った者が自分の行動の結果を考慮しないのと同様に、彼らが無慈悲にも個人や社会、大きな意味では世界全体に与える、道徳上の又経済上の迷惑に気づいていないという事を意味している。リバーは、彼がもうける事にとりつかれている事が、彼をしてあらゆる善なる大義に対し無分別となっているという意味に於いて、金を貸す者に、いささかの狂気をもたらすのである。イスラムでは、少数の集団のみに富を集中させ、その為、逆に、公正な分配に悪影響を与えるとの理由で、リバーは禁じられている。リバーは金貸しをより怠慢にし、彼の中にある他人を助けるという心をつぶし、同情的行動の泉をしめて涸らしてしまう。彼らは他人の必需や負担を利用し利潤を得ているのである。リバーは金貸しに他の人々の欠乏につけこませ、借金をする者達には、返すあてのあるなしにかかわらず借金をさせ、不注意にせいて事を為すという傾向をうみださせ、結果的には自分自身と借り手の両方に取り返しのつかない道徳的傷を負わせてしまうのである。リバーは又戦争に通じる。戦争が長びくとどうしても貸付金に頼る所となり、それに併なう利息が最終的には、勝利者、敗者共々に経済的破たんをきたす所となるのである。手軽な借金のシステムが、直接の課税に頼る事なく、戦争の資力を得る事が、できるため、政府に破壊的な争いの実行を可能にしてしまうのである。イスラムは全ての種類の利息を禁じてしまった。近代業務は利息と密接に関係している為、利息を全面的に禁止するのは、ほとんど不可能であるが、環境や状況そしてシステムの変化が、もたらされれば、利息なしの事業は、イスラムが主権を持っていた日々がそうであった様に、必ずや実現できるのである。

注 267　これは利息に基づく経済は、最終的には、消失する、又は、破壊されるであろうという預言の様に思われる。

فَإِن لَّمْ تَفْعَلُوا فَأْذَنُوا بِحَرْبٍ مِّنَ اللَّهِ وَرَسُولِهِ ۚ وَإِن تُبْتُمْ فَلَكُمْ رُءُوسُ أَمْوَالِكُمْ ۚ لَا تَظْلِمُونَ وَلَا تُظْلَمُونَ ﴿٢٨٠﴾

280. お前たちそれを放棄せずば、アッラー並びにその使徒より戦いを布告せらるべし。されど悔い改めなば、お前たちは元金を回収し得る。かくの如く、悪いことをなさざれば、お前たちも悪いことをされざるなり。

وَإِن كَانَ ذُو عُسْرَةٍ فَنَظِرَةٌ إِلَىٰ مَيْسَرَةٍ ۚ وَأَن تَصَدَّقُوا خَيْرٌ لَّكُمْ ۖ إِن كُنتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٢٨١﴾

281. もし債務者が困窮する場合は、余裕が出来るまで猶予せよ。(注 268) 喜捨として借金を棒引きにすることは、お前たちのために更に良し、もしお前たちそれがわからば。

وَاتَّقُوا يَوْمًا تُرْجَعُونَ فِيهِ إِلَى اللَّهِ ۖ ثُمَّ تُوَفَّىٰ كُلُّ نَفْسٍ مَّا كَسَبَتْ وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ﴿٢٨٢﴾

282. お前たち、アッラーの許(もと)に帰されるその日を恐れよ。その日各人は、自分が稼いだるものを清算され、不当に遇せられることなかるべし。

第三十九項

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا تَدَايَنتُم بِدَيْنٍ إِلَىٰ أَجَلٍ مُّسَمًّى فَاكْتُبُوهُ ۚ وَلْيَكْتُب بَّيْنَكُمْ كَاتِبٌ بِالْعَدْلِ ۚ وَلَا يَأْبَ كَاتِبٌ أَن يَكْتُبَ كَمَا عَلَّمَهُ اللَّهُ ۚ فَلْيَكْتُبْ وَلْيُمْلِلِ الَّذِي عَلَيْهِ الْحَقُّ وَلْيَتَّقِ اللَّهَ رَبَّهُ وَلَا يَبْخَسْ مِنْهُ شَيْئًا ۚ فَإِن كَانَ الَّذِي عَلَيْهِ الْحَقُّ سَفِيهًا أَوْ ضَعِيفًا أَوْ لَا يَسْتَطِيعُ أَن يُمِلَّ هُوَ فَلْيُمْلِلْ وَلِيُّهُ بِالْعَدْلِ ۚ وَاسْتَشْهِدُوا شَهِيدَيْنِ مِن رِّجَالِكُمْ ۖ فَإِن لَّمْ يَكُونَا رَجُلَيْنِ فَرَجُلٌ وَامْرَأَتَانِ مِمَّن تَرْضَوْنَ مِنَ الشُّهَدَاءِ أَن تَضِلَّ إِحْدَاهُمَا فَتُذَكِّرَ إِحْدَاهُمَا الْأُخْرَىٰ ۚ وَلَا يَأْبَ الشُّهَدَاءُ إِذَا مَا دُعُوا ۚ وَلَا تَسْأَمُوا

283. 汝ら信徒たちよ、期限を定めて借りる場合は、それを記録にとどめよ。記録者にお前たちの前で公正に記録させよ。記録者はアッラーが教えたる如く記録し、記録を拒むなかれ。されば記録者に書かしめよ。負債者に口述させて之(これ)を記録させよ。負債者はアッラーを畏れ、いささかなりともそれより少くするなかれ。(注 269) もし負債者が、低能または虚弱、或いは自ら口述し得ざる場合は、その後見人に公正に口述して貰うべし。お前たちの内から二人の証人を呼べ。もし二名の男子なき場合は、証人として頼みに足る一名の男子と、二名の女子を選べ。さすれば二名の女子のうちいずれかが記憶を誤るとも、他が之(これ)を正すべし。証人は如何なる場合でも喚問を拒むべからず。金額の多少にかかわらず、その返済期

注 268　イスラムは貸付けを勧めるがこれは善を行う慈悲の貸付けであり利息はとらない。もし借手が返済時に困窮な状態にあれば、より楽な条件となるまで、返済を延期してもらう事ができる。

注 269　(1)責任が生じるのは借手であり、公正に考えれば、責任を規定する言葉は借手が選択すべきであるし、(2)口述文書は借手ではなく貸手が保管するものであるから、貸手ではなく借手の方が口述しなければならないのである。故に借手は、自分が口述したという事実を以て金額の正確さと返済条件の証明とする為、口述する様、頼まれるのであって、借手にはそれを否定する理由、根拠はないのである。

限を認めることを厭うなかれ。そうすることがアッラーの目にはより正しく、また確かな証拠となり、疑惑をさけるためにも最適なり。されば記録を怠るべからず。但し、商品がその場にあり、手から手へやり取りする場合はその限りに非ず。その場合は記録せずともお前たちに罪なし。(注 270) お前たち、取引をする際は、証人を立てよ。(注 271) 而して記録者並びに証人を害することなかれ。もしそれをなさば、お前たちの側に反則あり。アッラーを畏れよ。アッラーはお前たちにかく教え給う。アッラーはすべてに通暁し給う。

أَن تَكْتُبُوهُ صَغِيرًا أَوْ كَبِيرًا إِلَىٰ أَجَلِهِ ۚ ذَٰلِكُمْ أَقْسَطُ عِندَ اللَّهِ وَأَقْوَمُ لِلشَّهَادَةِ وَأَدْنَىٰ أَلَّا تَرْتَابُوا ۖ إِلَّا أَن تَكُونَ تِجَارَةً حَاضِرَةً تُدِيرُونَهَا بَيْنَكُمْ فَلَيْسَ عَلَيْكُمْ جُنَاحٌ أَلَّا تَكْتُبُوهَا ۗ وَأَشْهِدُوا إِذَا تَبَايَعْتُمْ ۚ وَلَا يُضَارَّ كَاتِبٌ وَلَا شَهِيدٌ ۚ وَإِن تَفْعَلُوا فَإِنَّهُ فُسُوقٌ بِكُمْ ۗ وَاتَّقُوا اللَّهَ ۖ وَيُعَلِّمُكُمُ اللَّهُ ۗ وَاللَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿٢٨٣﴾

284. もし旅路にありて、記録者を求め得ざる場合は、担保品を手に入れておけ。(注 272) またお前たちの間で、誰かに何かを預ける場合は、委任されたる者はその委託物を元通り引き渡すべし。その者をして主なるアッラーを畏れしめよ。証拠を隠すことなかれ。証拠を隠す者は、その心が罪深い者なり。アッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

وَإِن كُنتُمْ عَلَىٰ سَفَرٍ وَلَمْ تَجِدُوا كَاتِبًا فَرِهَانٌ مَّقْبُوضَةٌ ۖ فَإِنْ أَمِنَ بَعْضُكُم بَعْضًا فَلْيُؤَدِّ الَّذِي اؤْتُمِنَ أَمَانَتَهُ وَلْيَتَّقِ اللَّهَ رَبَّهُ ۗ وَلَا تَكْتُمُوا الشَّهَادَةَ ۚ وَمَن يَكْتُمْهَا فَإِنَّهُ آثِمٌ قَلْبُهُ ۗ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ عَلِيمٌ ﴿٢٨٤﴾

第四十項

285. 天に在るもの、地に在るもの、すべてはアッラーに属す。お前たちが胸中に抱くものをさらけ出そうと、また隠そうとも、アッラーはこれに対して清算を行うべし。誰を赦し、誰を罰するかは御心のままなり。(注 273) アッラーは全能にまします。

لِّلَّهِ مَا فِي السَّمَاوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ ۗ وَإِن تُبْدُوا مَا فِي أَنفُسِكُمْ أَوْ تُخْفُوهُ يُحَاسِبْكُم بِهِ اللَّهُ ۖ فَيَغْفِرُ لِمَن يَشَاءُ وَيُعَذِّبُ مَن يَشَاءُ ۗ وَاللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٢٨٥﴾

注 270　暗に言わんとしている事はこういった場合でも、証人が記録を残した方がよりよいという事である。

注 271　これは大きな取引きの場合をさす。

注 272　貸付けは担保を取っての前貸しの場合もある。これは一方が金銭を貸付けてもらうかわりに担保を入れるという形態である。担保によって貸付けを確認する事で、貸付けが、同一の配慮をもって、又担保にあてられた財産が請求次第で正直に返却される事が示されているのである。

注 273　"神のみ心のままに"という表現は、むしろ、自然法の存在を示すものであるが、アッラーの場合には、神の法を代表するのは神のみ心（意志）である為に、クルアーンでは以下の事を指摘する為にこの表現を用いているのである。即ち、(1)神は森羅万象に於る最終的権威である。(2)神の意志（み心）こそ法である　(3)神は完全な美徳を有されるから、神の意志は、公正且つ慈愛にみちた方法で、明白に示される。(17：111)

286. この使徒は、主が啓示されたるものを信ず。信徒たちもまた然り。彼等は皆、アッラー、諸天使、諸経典、並びに使徒たちを信じて、(注 274)「我等は使徒たちの間に差別を設けることなし」と云う。而して彼等は云う、「我等は拝聴し、我等は従う。なにとぞ我等に赦しを垂れ給え。主よ、我等は汝の許へ帰るなり」と。

آمَنَ الرَّسُولُ بِمَا أُنزِلَ إِلَيْهِ مِن رَّبِّهِ وَالْمُؤْمِنُونَ ۚ كُلٌّ آمَنَ بِاللَّهِ وَمَلَائِكَتِهِ وَكُتُبِهِ وَرُسُلِهِ لَا نُفَرِّقُ بَيْنَ أَحَدٍ مِّن رُّسُلِهِ ۚ وَقَالُوا سَمِعْنَا وَأَطَعْنَا ۖ غُفْرَانَكَ رَبَّنَا وَإِلَيْكَ الْمَصِيرُ ٢٨٥

287. アッラーは何人にもその能力以上の荷を負わせることなし。(注 275) 人はその稼ぎしもので報奨を受け、その招きし故に罰を受く。(注 276) 主よ、我等もし忘れ、また過ちを犯すとも、罰すなかれ。(注 277) 主よ、我等以前の人々に負わせたる如き重荷を、我等に背負わしむるなかれ。主よ、我等の力では担うに耐えざる重荷を我等に負わしむるなかれ。(注 278) 我等の罪障を消滅され、我等を赦し、憐憫を垂れ給え。汝は我等の愛護者なり。されば不信心者どもに対して、我等を助け給え。

لَا يُكَلِّفُ اللَّهُ نَفْسًا إِلَّا وُسْعَهَا ۚ لَهَا مَا كَسَبَتْ وَعَلَيْهَا مَا اكْتَسَبَتْ ۗ رَبَّنَا لَا تُؤَاخِذْنَا إِن نَّسِينَا أَوْ أَخْطَأْنَا ۚ رَبَّنَا وَلَا تَحْمِلْ عَلَيْنَا إِصْرًا كَمَا حَمَلْتَهُ عَلَى الَّذِينَ مِن قَبْلِنَا ۚ رَبَّنَا وَلَا تُحَمِّلْنَا مَا لَا طَاقَةَ لَنَا بِهِ ۖ وَاعْفُ عَنَّا وَاغْفِرْ لَنَا وَارْحَمْنَا ۚ أَنتَ مَوْلَانَا فَانصُرْنَا عَلَى الْقَوْمِ الْكَافِرِينَ ٢٨٦

注 274　善き行いは、確かに精神の純化を達成する主要な手段ではあるが、その源は心の純粋さにあり、心の純粋さは、正しい信仰を持つ事によってしか得られないのである。故に、この節ではクルアーンが今までに教えてきた、根本的な信仰の詳細を述べているのである。即ち、神と天使、経典と使者達、それらの自然の秩序への確信である。

注 275　この文は、あがないの教義への強力な反発となっている。ここでは(1) 神の律法は常に人間の力と本人の自然の限界を正しく把握して与えられる、そして(2)現世での道徳的純化とは必ずしも全ての欠陥や短所から完全に解放される事を意味する訳ではない、という二つの重要な原則が具体化されている。人がそうすべく期待されている事とは、心から善を求める努力をし、全力を挙げて罪を犯さぬ様努める事で、そのあとは慈悲深き神がお赦しになるのである。故に、あがないなどは必要ないのである。

注 276　善行は、さりげなく何ら意識せずに為されたのであっても報われ、悪行は、意識して、わざと行った場合のみに、罰せられるのである。

注 277　普通の状況にあっては、「忘れ」たり、「過ち」をおかしたりすることは、懲罰の対象となりうる意図や動機を持たないため、罰せられないのであるが、ここでは、もし適切な注意が払われていればさける事の出来る忘却や、過ちを表している。

注 278　“私達より先にあった人々に負わせたもうたような重荷を私達に負わせないで下さい”という表現は、自分達に負わされる負担が、自分達以前の人々に課せられた負担より軽くあるべきだという事を意味している訳ではなく、神よ貴方との契約を私達が破らない様お守り下さい。そして、私達以前の者達が、従順でなかったために生じさせた重い責任が、私達が生じさせる事のない様に我らを救い給えという事を意味しているのである。これはイスラムの保護と維持の為、そして、神がイスラム教徒に立腹なさらない様、自分達を守る為の集約的な祈り（礼拝）なのである。

سورة آل عمران مدنية (٣)

アール・イムラーン
（メディナ啓示）

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①
الٓمّٓ ②
اللّٰهُ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ الْحَيُّ الْقَيُّوْمُ ③
نَزَّلَ عَلَيْكَ الْكِتٰبَ بِالْحَقِّ مُصَدِّقًا لِّمَا بَيْنَ يَدَيْهِ وَاَنْزَلَ التَّوْرٰىةَ وَالْاِنْجِيْلَ ④

1．慈悲深く、恵み遍く(あまね)アッラーの御名(みな)において。
2．アリフ・ラーム・ミーム。（注１）
3．アッラー、彼の外に神なく、そは永遠(とわ)に生き、自存者なり。（注２）
4．彼は汝に真理の経典を降(くだ)し、それ以前に降(くだ)したるものの不足を満たしたり。彼は先に、人類の嚮導(きょうどう)として、律法と（注３）福音と（注４）を降(くだ)したり。而していままた闡明(せんめい)を（注５）降(くだ)したり。

注１　われはアッラー、全知者なり

注２　この節は、イエスの神性という誤った教義を、強く論破するものである。この教義の誤りを指摘する事がこの章の主題であるが、その為この教義を根底から断ち切る神の諸々の美徳が、第３章の冒頭部分で述べられているのである。即ち、唯一の生ける永遠の存在という美徳はその所有者である神が、提携者や助力者を必要としない存在である事を証明する一方、生と死の法の範ちゅうの存在であり、それ故永遠に生きる存在でもないイエスは神ではない事を証明しているのである。これらの神の美徳は、上記の教義の当然の帰結である贖罪の教理の中身のない事をも証明している。キリスト教徒の主張に依れば、イエスは、人類の罪をあがなう為、死んだという事であるがそれならば、尚更、イエスは神ではない。何故ならば、神は、永遠の生命であり、一時的であろうと永遠であろうと、死に給う事はないからである。イエスの死は、彼の肉体的存在から、神ーイエスが分離しただけであるというのは無益である。キリスト教の信仰に従えば、神ーイエスとイエスの肉体との間の関係は、イエスが十字架上で死ななかったとしても、本質に於て一時的なものであったので、いつかは分離する定めであった。であるからして、この関係をただ断ちきるという事は何ら意味のある目的を果さない。彼の罪深き信奉者への、あがないをもたらすのは何か他の死でなくてはならない。そして、その死は、キリスト教徒達自身によれば、イエスが十字架にかけられた後、天国或いは地獄（使徒行傳２：31）へ下った時、訪れたのである。この様に、神のみの特権である、"死する事がない"という事がありえなかったイエスは、文字通り、そして比喩的意味からも、死を免れえなかったのである。同時に、唯一無比の永遠の存在という美徳は、キリスト教教理の誤謬を証明している。自存し永遠であられる神は、他の存在の助けをかりずに自存するのみならず、他の全ての存在を支えるものである。しかしイエスは、これらの美徳を有せず、他の死すべき者と同様に、女性から生まれ、食物と水とで生活し、苦痛や痛みを感じ、彼の苦悩をやわらげる為、祈ってくれと他人に頼み、そして最後には、キリスト教徒が言う様に、十字架の上で死んだのである。新約聖書には、これら全ての事実を証明するに足る、数多くの記述がみられる。しかし、神が唯一自存の永遠の存在であるという事は、これら全ての肉体的弱さを超越したものなのである。

注３　律法（トーラ）とはモーゼの五書、即ち、創生記、出エジプト記、レビ記、民数紀略と、申命記を指し、トーラは又、場合によって十戒を指す場合もある。

مِنْ قَبْلُ هُدًى لِّلنَّاسِ وَأَنزَلَ الْفُرْقَانَ ۗ

5．アッラーの神兆(しるし)を否定する者は、必ず厳しい罰を受けん。アッラーは強大にして、応報の主なり。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا بِآيَاتِ اللَّهِ لَهُمْ عَذَابٌ شَدِيدٌ ۗ
وَاللَّهُ عَزِيزٌ ذُو انتِقَامٍ ⑤

6．げに天地(あめつち)における一切は、一つとしてアッラーに隠し得るものなし。

إِنَّ اللَّهَ لَا يَخْفَىٰ عَلَيْهِ شَيْءٌ فِي الْأَرْضِ وَلَا فِي
السَّمَاءِ ⑥

7．彼こそは御心(みこころ)のままに、お前たちを胎内に形造りたる御方なり。(注６)彼以外に神なく、雄大にして賢哲にまします。

هُوَ الَّذِي يُصَوِّرُكُمْ فِي الْأَرْحَامِ كَيْفَ يَشَاءُ ۚ لَا إِلَٰهَ
إِلَّا هُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ⑦

8．彼こそは汝に経典を降(くだ)したる御方なり。その経典の中には断固として決定的な節がある——これらは経典の根幹なり——他の節には解釈を異にすることが可能なるものもある。(注７)心邪悪なる者は、それから異なった解決を下し、仲たがいを謀り、また

هُوَ الَّذِي أَنزَلَ عَلَيْكَ الْكِتَابَ مِنْهُ آيَاتٌ مُّحْكَمَاتٌ
هُنَّ أُمُّ الْكِتَابِ وَأُخَرُ مُتَشَابِهَاتٌ ۖ فَأَمَّا الَّذِينَ فِي
قُلُوبِهِمْ زَيْغٌ فَيَتَّبِعُونَ مَا تَشَابَهَ مِنْهُ ابْتِغَاءَ

注４　福音書が良い報せの書と呼ばれる訳は、イエスの教えを受け入れた人達のための吉報を記述してあるという事だけでなく、イエスが、神自身の到来であると表現した、最も偉大な預言者の到来についての預言が記述されているからである。(マタイ 21：40) また、福音書とは、イエスのはりつけ後、ずっと後になって、イエスの教えの信奉者達のしたためた現在言われるところの、イエスの生涯とその教えを書き記したにすぎない四つの福音書ではなく、イエスの受けた実際の啓示の事を指している。

注５　「闡明」とは、クルアーン、或いは、聖なる預言者が、その真実をうちたてる為に賜った、天からの啓示を指す。

注６　子供の成長は母親の胎内で促がされる為、その生まれ出でし者は、母親の肉体的且つ道徳的条件に左右される。それ故、その肉体が他の人間同様に、母の胎内で育成されたイエスは、女性に固有の限界や劣性に影響されざるを得なかった。この事が、ナジラーンのキリスト教徒との論争で、聖なる預言者が、イエスのいわゆる神性が、誤りである事を証明する為に、イエスの誕生について言い及んだ理由なのである。聖なる預言者は、かくの如く話したと伝えられている。即ち、「イエスをはらんだのは女性だという事を知っていますか。そして、彼女が、普通の女性が子供を産むようにイエスを産んだという事も？」と。

注７　問題となる争点を証明する為には、経典の瞭然とした部分を考慮すべきであり、それらがある曖昧な文の構成に反すると考えられる場合は、曖昧な箇所を瞭然と語られている箇所と調和する様に解釈すべきであるとの鉄則をこの節は述べている。この節に依ると、クルアーンには二種類の表記があり、あるものは、モフカン（意味が瞭然としている）で、又あるものはムタシャーベ（色々な解釈が可能、即ち意味が曖昧である）である。39：24 ではクルアーン全体がムタシャーベであるとされ、11：2 でのクルアーンの諸節はモフカンとされている。ムタシャーベを正しく解釈するには、モフカンに矛盾しない解釈を採択すべきであろう。

間違った解釈を求めんとす。アッラー以外、何人(なんびと)もその正しい解釈を知る者なし。知識の堅固なる者は云う、「我等はこれを信ず、すべては我等の主より出でたるものなれば」と。されど理解を授けられたる者の外は、何人(なんびと)も之(これ)を注意せず。

9. 「主よ、ひとたび我等を導きたるからには、我等の心を邪悪に迷わしむるなかれ。汝の慈悲を我等に授け給え。げに汝は素晴らしき授与者なり。(注8)

10. 主よ、げに汝こそは疑う余地なき日にすべての人を召集する御方なり。アッラーは決してその約束を破らず」

第二項

11. あの不信心者ども、(注9)彼等の財産も子女(こどもら)もアッラーに対して何んの役にも立たざるべし。業火(ごうか)の薪(たきぎ)は彼等なり。

12. 彼等は、ファラオの民やそれ以前の民の場合と同じなり。彼等はわれらの神兆(しるし)を拒否したり。さればアッラーは、彼等をその罪故に罰したり。アッラーの懲罰は苛酷なり。

13. あの不信心者どもに云え、「お前たちは打ち負かされたあげく、地獄に集められるべし。そは悪(あ)しき安息所なり」と。

14. 両軍相会せる時、確かにお前たちへ神兆(しるし)ありき。(注10)すなわち、一方はアッラーの

الْفِتْنَةِ وَابْتِغَآءَ تَأْوِيلِهٖ ۚ وَمَا يَعْلَمُ تَأْوِيلَهٗٓ
إِلَّا اللّٰهُ ۘ وَالرّٰسِخُونَ فِي الْعِلْمِ يَقُولُونَ اٰمَنَّا بِهٖ ۙ كُلٌّ
مِّنْ عِنْدِ رَبِّنَا ۚ وَمَا يَذَّكَّرُ إِلَّآ أُولُوا الْأَلْبَابِ ﴿٨﴾

رَبَّنَا لَا تُزِغْ قُلُوبَنَا بَعْدَ إِذْ هَدَيْتَنَا وَهَبْ لَنَا مِنْ
لَّدُنْكَ رَحْمَةً ۚ إِنَّكَ أَنْتَ الْوَهَّابُ ﴿٩﴾

رَبَّنَآ إِنَّكَ جَامِعُ النَّاسِ لِيَوْمٍ لَّا رَيْبَ فِيهِ ۚ إِنَّ اللّٰهَ
لَا يُخْلِفُ الْمِيعَادَ ﴿١٠﴾

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا لَنْ تُغْنِيَ عَنْهُمْ أَمْوَالُهُمْ وَلَآ أَوْلَادُهُمْ
مِّنَ اللّٰهِ شَيْئًا ۖ وَأُولٰٓئِكَ هُمْ وَقُودُ النَّارِ ﴿١١﴾

كَدَأْبِ اٰلِ فِرْعَوْنَ ۙ وَالَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ ۚ كَذَّبُوا
بِاٰيٰتِنَا ۚ فَأَخَذَهُمُ اللّٰهُ بِذُنُوبِهِمْ ۗ وَاللّٰهُ شَدِيدُ
الْعِقَابِ ﴿١٢﴾

قُلْ لِّلَّذِينَ كَفَرُوا سَتُغْلَبُونَ وَتُحْشَرُونَ إِلٰى جَهَنَّمَ ۚ
وَبِئْسَ الْمِهَادُ ﴿١٣﴾

قَدْ كَانَ لَكُمْ اٰيَةٌ فِي فِئَتَيْنِ الْتَقَتَا ۖ فِئَةٌ تُقَاتِلُ فِي

注8　クルアーンの正しい知識は、心が純粋な者のみに与えられる。(56：80)

注9　これら全ての節は特にキリスト教徒について述べられている為、この場合の「不信心者」という言葉は、キリスト教徒を指していると思われる。

注10　ここで述べられているのは、装備・軍備とも万全であった1000人のメッカ軍に対し、武器も何もろくに持っていなかった、たった313名のイスラム教徒が、見事なまでの勝利をおさめた、バドルの戦いである。このバドルの戦いでは二つの預言が成就された。その一つはクルアーンの初期の啓示にあるもので、(54：45－49)もう一つは、聖書に示されていた預言である。(イザヤ21：13－17)聖書の預言に従えば、聖なる預言者のメッカからの(夜間)飛行の約一年の後に、メッカ人達の祖先がバドルで敗れ、かれらの栄光が没落するとの事であった。異教徒達の敗北は、イスラム教徒の勝利同様に、予想だにされなかったが、それは完璧なまでの勝利と敗北であった。実に、バドルの戦いとは、歴史上の、偉大な戦闘の一つに数えられているのである。そして、この戦いこそアラビアの運命を決定し、真に堅固な礎の下にイスラムを定着させたものなのである。

道のために戦い、相手側は不信心者どもなりしが、彼等はその眼で敵の己れに倍するを見たり。(注 11)アッラーは御心にかなえば誰でも、その加護を以て之(これ)を強くす。げにその中にあるものは、眼(まなこ)を有する人々への教訓なり。

سَبِيلِ اللّٰهِ وَأُخْرٰى كَافِرَةٌ يَرَوْنَهُمْ مِثْلَيْهِمْ رَأْيَ الْعَيْنِ ۚ وَاللّٰهُ يُؤَيِّدُ بِنَصْرِهِ مَنْ يَشَاءُ ۗ إِنَّ فِي ذٰلِكَ لَعِبْرَةً لِأُولِي الْأَبْصَارِ ۝١٤

15. さまざまなる欲望は人間の眼には美しく見えるものなり。すなわち、女性、子女(こどもら)、金銀の蓄積、血統の正しい焼印されたる馬、家畜、並びに作物など。これらは現世の楽しみにすぎず。されど素晴らしき住処(すみか)は、アッラーの許(もと)にあり。(注 12)

زُيِّنَ لِلنَّاسِ حُبُّ الشَّهَوٰتِ مِنَ النِّسَاءِ وَالْبَنِينَ وَالْقَنَاطِيرِ الْمُقَنْطَرَةِ مِنَ الذَّهَبِ وَالْفِضَّةِ وَالْخَيْلِ الْمُسَوَّمَةِ وَالْأَنْعَامِ وَالْحَرْثِ ۗ ذٰلِكَ مَتَاعُ الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا ۖ وَاللّٰهُ عِنْدَهُ حُسْنُ الْمَآبِ ۝١٥

16. 云え、「我はお前たちにそれに優るものを教えん」と。神を畏れる者のためには、主の御許(みもと)に河川流れる楽園あり。彼等はそこに永遠(とわ)に住み、純潔な配偶者とアッラーの御満悦とを賜わらん。アッラーは己れの僕(しもべ)たちを照覧し給う。

قُلْ أَؤُنَبِّئُكُمْ بِخَيْرٍ مِنْ ذٰلِكُمْ ۚ لِلَّذِينَ اتَّقَوْا عِنْدَ رَبِّهِمْ جَنّٰتٌ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهٰرُ خٰلِدِينَ فِيهَا وَأَزْوَاجٌ مُطَهَّرَةٌ وَرِضْوَانٌ مِنَ اللّٰهِ ۗ وَاللّٰهُ بَصِيرٌ بِالْعِبَادِ ۚ ۝١٦

17.「主よ、我等は信ず。されば我等の罪を赦し、業火(ごうか)の罰から救い給え」と云う人々は、

الَّذِينَ يَقُولُونَ رَبَّنَا إِنَّنَا آمَنَّا فَاغْفِرْ لَنَا ذُنُوبَنَا وَقِنَا عَذَابَ النَّارِ ۚ ۝١٧

18. 忍耐者、誠実者、謙虚者、並びに神の道のために喜捨を惜しまず、黎明に赦しを希(こいねが)う者なり。

الصّٰبِرِينَ وَالصّٰدِقِينَ وَالْقٰنِتِينَ وَالْمُنْفِقِينَ وَالْمُسْتَغْفِرِينَ بِالْأَسْحَارِ ۝١٨

19. アッラーは、己れの外に神なきことを証言す。諸天使並びに正義を護持する(注 13)

شَهِدَ اللّٰهُ أَنَّهُ لَا إِلٰهَ إِلَّا هُوَ وَالْمَلٰٓئِكَةُ وَأُولُوا الْعِلْمِ

注 11　ここでは、イスラム教徒達の目にはメッカ軍が、その実際の戦力の半分以下にみえた。即ち、実際には自分達の三倍にあたっていたのが、二倍にしか見えなかった事が記されている。これは、何ら軍隊といった装備ももたぬ微少なイスラム教徒達が、敵の強大な力をみて、意気が下らぬ様にとの神の意図に合致するところである。(8：45) その時の状況はどうであったかというと、メッカ軍の1／3は小高い丘の向う側におり、自分達の人数の約2倍にあたる600であるメッカ軍の2／3しかイスラム軍は見ていなかったというのが実際なのである。

注 12　イスラムは、現世で良きとされる物を求めたり使用したりする事を何ら禁ずるものではない。但し、それのみに没頭したり、そういった事を人生の目的にする者達は、当然、責められるべきなのである。

注 13　この言葉は、正義に見合った、正義に基づいている、とも解釈できる。

قَآئِمًا بِالْقِسْطِ لَآ إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ⑲

知識を授けられたる人々もまた然り。彼の外に神なし。(注 14) そは偉力者、賢哲なり。

إِنَّ الدِّينَ عِنْدَ اللّٰهِ الْإِسْلَامُ وَمَا اخْتَلَفَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتٰبَ إِلَّا مِنْ بَعْدِ مَا جَآءَهُمُ الْعِلْمُ بَغْيًا بَيْنَهُمْ وَمَنْ يَكْفُرْ بِآيٰتِ اللّٰهِ فَإِنَّ اللّٰهَ سَرِيعُ الْحِسَابِ ⑳

20. アッラーの見るところでは、真正の宗教はイスラームなり。(注 15) しかるに経典を授かりし人々が、知識が降りたる後仲たがいせるは、互に相妬むが故なり。アッラーの神兆を否定する者あらば、アッラーの清算は迅速なり。

فَإِنْ حَآجُّوكَ فَقُلْ أَسْلَمْتُ وَجْهِيَ لِلّٰهِ وَمَنِ اتَّبَعَنِ وَقُلْ لِلَّذِينَ أُوتُوا الْكِتٰبَ وَالْأُمِّيِّنَ ءَأَسْلَمْتُمْ فَإِنْ أَسْلَمُوا فَقَدِ اهْتَدَوْا وَإِنْ تَوَلَّوْا فَإِنَّمَا عَلَيْكَ الْبَلٰغُ وَاللّٰهُ بَصِيرٌۢ بِالْعِبَادِ ㉑

21. もし彼等が汝と相争わば、云え、「我はアッラーに服従す。我に従う者たちもまた然り」と。而して経典を授けられたる人々(注 16) 並びに無知なる人々に問え、(注 17)「お前たちも服従したるか？」と。もし彼等が服従せば、彼等は必ず導かれん。(注 18) されど、たとい彼等が背を向けるとも、汝の義務はただ神託の伝達なり。アッラーは己れの僕たちを照覧し給う。

注 14　自然と全ての真実の信仰（宗教）の基本原理に於る、唯一の中心的、議論の余地のない事実は、神の唯一性である。全ての創造と、その創造全般に行き渡っている完全なる秩序がこの基本的事実の、まぎれもない証拠である。預言者達に真実の伝言を与える天使達、その伝言を世界にひろめる神の使者達、そして神の使者達よりの真実の知識を受けとり、自分達のものとする良き人々、それら全てが、神の証明に対し、自分達の証拠を付け加えている。同様に、全てのものが一致して、アッラーといっしょに他の神々を信じるという間違いを、そしてそれが、複数の形態であれ、三位、或いは二位一体であろうと虚偽である事を立証している。

注 15　全ての宗教は、神の寛大さと、神の意志への恭順を信ずる事を説き、そうすべく勧めるが、その中で神の意志への恭順が完全な帰依という形をとっているのはイスラムだけである。完全なる帰依とは、神の美徳への完全な顕示を必要とし、この様な顕示を含むのはイスラムのみである。それ故、あらゆる宗教（信仰）の内で、イスラムのみが、信仰（宗教）という言葉の実際の意味に於て、神自身の宗教と呼ばれるに足るものなのである。全ての真実の宗教は、その原型と文字通りの、ムスリム（イスラム信仰者）という意味に於て、多かれ、少なかれイスラム（絶対の帰依）なのである。しかし信仰（宗教）が、あらゆる局面に於ける完全さを有しなければ、アル・イスラームの名は与えられるに到らない。そしてアル・イスラームこそクルアーンで最終的に完全化された律法の為への準備なのである。この節は更に 2：63 の説明ともなっている。

注 16　経典を与えられた民と経典を持たぬ民とで人間の世界は成り立っている。

注 17　2 章 77 節及び 7 章 158 節を参照の事。

注 18　経典を持つ民と経典を持たぬ民がもし自分達を神の御前になげだすなら、彼らは必らずや聖なる預言者を受け入れ正しく導かれる事となる。何故なら経典を持つ民にはその経典中に聖なる預言者に関する預言が、明確に示されているし、経典を持たぬ民は自然や人間の良心そして常識により導びかれる。

第三項

22. アッラーの神兆を否定し、不正に諸預言者を殺し、正義を勧める人々を殺す者には、必ず痛罰あらんことを告知せよ。(注 19)

إِنَّ الَّذِينَ يَكْفُرُونَ بِآيَاتِ اللَّهِ وَيَقْتُلُونَ النَّبِيِّينَ بِغَيْرِ حَقٍّ وَيَقْتُلُونَ الَّذِينَ يَأْمُرُونَ بِالْقِسْطِ مِنَ النَّاسِ فَبَشِّرْهُمْ بِعَذَابٍ أَلِيمٍ ﴿٢١﴾

23. 彼等はその所業が、現世においても来世においても、無に帰すべき者なり。彼等は如何なる援助者も得ざるべし。(注 20)

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ حَبِطَتْ أَعْمَالُهُمْ فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ وَمَا لَهُمْ مِنْ نَاصِرِينَ ﴿٢٢﴾

24. 汝は、経典の一部を（注 21）授けられたる人々を見ざるか？　彼等の異同を質すべく、アッラーの経典が示されたる時、彼等の一部はこれを嫌って背き去れり。

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ أُوتُوا نَصِيبًا مِنَ الْكِتَابِ يُدْعَوْنَ إِلَىٰ كِتَابِ اللَّهِ لِيَحْكُمَ بَيْنَهُمْ ثُمَّ يَتَوَلَّىٰ فَرِيقٌ مِنْهُمْ وَهُمْ مُعْرِضُونَ ﴿٢٣﴾

25. こは彼等が、「業火に触れるは限られたる日数にすぎず」と云うがためなり。彼等はその宗教に関して自分が日頃捏造せるものに、欺かれるなり。(注 22)

ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ قَالُوا لَنْ تَمَسَّنَا النَّارُ إِلَّا أَيَّامًا مَعْدُودَاتٍ وَغَرَّهُمْ فِي دِينِهِمْ مَا كَانُوا يَفْتَرُونَ ﴿٢٤﴾

26. いざわれらが、疑う余地なきその日、彼等を召集すると、彼等は果して如何にせん？　その時各人は、稼ぎしものを存分に支払われ、決して不当に遇せられることなかるべし。(注 23)

فَكَيْفَ إِذَا جَمَعْنَاهُمْ لِيَوْمٍ لَا رَيْبَ فِيهِ وَوُفِّيَتْ كُلُّ نَفْسٍ مَا كَسَبَتْ وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ﴿٢٥﴾

注 19　神の預言者は皆、どの様な状況にさらされようとも、自分の使命を全うした。預言者達を殺そうとする企てや、迫害がどれだけあろうとも、彼らの信仰を止めさせたり、その発展を途切れさせる事はできなかった。宗教（信仰）の歴史とはこの事実への紛れもない証拠を提供しているのである。

注 20　不信者達は来世における報いを信じておらず、自分達の行動が、復活の日に全く役にたたないという事の証拠として、現世に於て、イスラムを打ち破るという彼らの努力も無駄であり、それこそ来世に於ても、自分達の行動は何の益ともならない事の証拠となると告げられている。

注 21　(1)経典の一部を形成する、聖なる預言者に関する、聖書中の預言、(2)聖書の純粋な部分、(しかし、改ざんされずに原文のままで残ったのは極く一部であり、その部分のみが真実の聖書といえる。)或いは、(3)卓越した経典であるクルアーンと比較すれば、聖書は経典の一部にすぎない、の意味。

注 22　ユダヤ人とキリスト教徒達は来世の懲罰を自分達は受けないと自ら信じさせようとしている。ユダヤ人は自分達が選ばれた民であると思う事で、又、キリスト教徒は、自分達が言う所の神の息子であるイエスが、十字架上のあがないの死により自分達の罪を一身に背負った為と自分達をあざむいているのである。

注 23　この節では、人間の善行ではなく、どんな人であれ人間の血が、救済をもたらすという教義の矛盾を強く、きゅう弾している。

27. 唱えよ、「アッラー、統治権の主よ、汝は御心のままに誰にでも統治権を与え、また御心のままに之を取り上げ給う。御心のままに誰でも貴め、御心のままに誰でも卑しめ給う。善福はすべて汝の掌中にあり。げに汝は全能にまします。(注 24)

قُلِ اللّٰهُمَّ مٰلِكَ الْمُلْكِ تُؤْتِي الْمُلْكَ مَنْ تَشَآءُ وَتَنْزِعُ
الْمُلْكَ مِمَّنْ تَشَآءُ ۖ وَتُعِزُّ مَنْ تَشَآءُ وَتُذِلُّ مَنْ
تَشَآءُ ۖ بِيَدِكَ الْخَيْرُ ۖ إِنَّكَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٢٧﴾

28. 汝は夜を昼の中に入らせ、昼を夜の中に入らせ給う。(注 25) また死より生を生み、生より死を生み給う。汝は御心のまま誰にでも際限なく与え給う」と。(注 26)

تُولِجُ الَّيْلَ فِي النَّهَارِ وَتُولِجُ النَّهَارَ فِي الَّيْلِ ۖ
وَتُخْرِجُ الْحَيَّ مِنَ الْمَيِّتِ وَتُخْرِجُ الْمَيِّتَ مِنَ الْحَيِّ ۖ
وَتَرْزُقُ مَنْ تَشَآءُ بِغَيْرِ حِسَابٍ ﴿٢٨﴾

29. 信徒たちに、信徒たちを差し置いて不信心者どもを友たらしめるなかれ。(注 27) そのようなことをなす者は、アッラーとは何んの関係もなし。但し、お前たちが不信心者どもの危害を怖れる場合は別なり。(注 28) アッラーはお前たちにその懲罰を警告し給う。行きつく先はアッラーなり。

لَا يَتَّخِذِ الْمُؤْمِنُونَ الْكٰفِرِينَ أَوْلِيَآءَ مِنْ دُونِ
الْمُؤْمِنِينَ ۚ وَمَنْ يَفْعَلْ ذٰلِكَ فَلَيْسَ مِنَ اللّٰهِ
فِي شَيْءٍ إِلَّآ أَنْ تَتَّقُوا مِنْهُمْ تُقٰىةً ۗ وَيُحَذِّرُكُمُ
اللّٰهُ نَفْسَهٗ ۗ وَإِلَى اللّٰهِ الْمَصِيرُ ﴿٢٩﴾

30. 云え、「お前たち胸中に隠すとも、また顕すとも、アッラーはそれを知り給う。また彼は、天に在るもの地に在るもの、その一切を知り給う。アッラーは全能にまします」と。

قُلْ إِنْ تُخْفُوا مَا فِي صُدُورِكُمْ أَوْ تُبْدُوهُ يَعْلَمْهُ
اللّٰهُ ۗ وَيَعْلَمُ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ ۗ وَ
اللّٰهُ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٣٠﴾

注 24　当節の説明の為に、次節を参照の事。

注 25　“日（昼）”とはここでは人々の繁栄と権力を指し、“夜”とは衰退と堕落を指す。

注 26　当章及び前章では、国家が、全ての力と栄光の源である神の意志にそぐうか、反するか次第で、発展或いは没落してしまう、不変の神聖なる戒律の存在を指摘している。

注 27　前章で約束された様に、イスラムの、政治的権力の達成と共に、ムスリム（イスラム教徒）国家間に政治同盟を形成する事が必要となった。当注の施こされている文では、どういった形であれ、その他のイスラム教徒国家の利益を害したり相反したりする為、イスラム国家は非イスラム国家と、同盟、又は条約を結ぶべきではないとの指導原則が掲げられている。イスラムの利益は、その他全ての利益よりも優先される。

注 28　イスラム教徒は、不信者達の、ワナや陰謀に対し身を護るようにとの注意を喚起されている。敵の権力や軍備力ではなく、イスラム教徒が常に念頭に置き、用心すべき敵の巧妙なわなに関して言及している。

31. 用心せよ、すべての魂が現世でなせる己が善事と悪事に対決させられるその日を。魂は、己れとその悪事との間に、万里の隔たりがあらんことを望む。アッラーはお前たちに懲罰を警告し給う。されどアッラーは、己れの僕たちには極めて憐れみ深くましまず。

يَوْمَ تَجِدُ كُلُّ نَفْسٍ مَّا عَمِلَتْ مِنْ خَيْرٍ مُّحْضَرًا ۚ وَمَا عَمِلَتْ مِنْ سُوْٓءٍ ۚ تَوَدُّ لَوْ اَنَّ بَيْنَهَا وَبَيْنَهٗٓ اَمَدًا بَعِيْدًا ۗ وَيُحَذِّرُكُمُ اللّٰهُ نَفْسَهٗ ۗ وَاللّٰهُ رَءُوْفٌ بِالْعِبَادِ ﴿٣١﴾

第四項

32. 云え、「お前たちアッラーを愛しなば、我に従え。(注 29) さすればアッラーはお前たちを愛で、その過失を赦さん。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします」と。

قُلْ اِنْ كُنْتُمْ تُحِبُّوْنَ اللّٰهَ فَاتَّبِعُوْنِيْ يُحْبِبْكُمُ اللّٰهُ وَيَغْفِرْ لَكُمْ ذُنُوْبَكُمْ ۗ وَاللّٰهُ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٣٢﴾

33. 云え、「アッラー並びに使徒に従え」と。されどもし彼等背き去らば、アッラーは不信心者どもを愛さざることを忘れるな。

قُلْ اَطِيْعُوا اللّٰهَ وَالرَّسُوْلَ ۚ فَاِنْ تَوَلَّوْا فَاِنَّ اللّٰهَ لَا يُحِبُّ الْكٰفِرِيْنَ ﴿٣٣﴾

34. アッラーは、アダムとノア並びにアブラハム一家とイムラーン一家を (注 30) すべての民の上に選びたり。

اِنَّ اللّٰهَ اصْطَفٰٓى اٰدَمَ وَنُوْحًا وَّاٰلَ اِبْرٰهِيْمَ وَاٰلَ عِمْرٰنَ عَلَى الْعٰلَمِيْنَ ﴿٣٤﴾

35. 彼等は互に他の子孫なり。アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

ذُرِّيَّةً ۢ بَعْضُهَا مِنْ ۢ بَعْضٍ ۗ وَاللّٰهُ سَمِيْعٌ عَلِيْمٌ ﴿٣٥﴾

36. イムラーンの妻が、(注 31)「主よ、我が胎内に宿れるものを、汝への奉仕のために妾は献げんことを誓う。願わくは之を受けよ。すべてを聴き、すべてを知り給うは、げに汝のみなり」と云える時のことを思い起せ。

اِذْ قَالَتِ امْرَاَتُ عِمْرٰنَ رَبِّ اِنِّيْ نَذَرْتُ لَكَ مَا فِيْ بَطْنِيْ مُحَرَّرًا فَتَقَبَّلْ مِنِّيْ ۚ اِنَّكَ اَنْتَ السَّمِيْعُ الْعَلِيْمُ ﴿٣٦﴾

注 29　この節では、神の愛を手にするには、聖なる預言者に従う他ないという事を強調している。又ここでは 2：63 より生ずる可能性のある、神の存在と来世の存在を信じさえすれば、復活するに足るという誤解が取り除かれている。

注 30　詳しくは、英版参照のこと。

注 31　ムハララとは、解放されたとの意味であり全ての世俗の事柄から離れ、その両親により教会への奉仕の為、捧げられた子供の事を意味している。そして、これら教会にささげられた子供らは、未婚でいる事がイスラエル人の間の慣習であった。(マリアの福音、5：6 & Bayan ：36 項) この節では、マリアの母であるハンナという婦人 (聖書辞典) がイムラート・イムラーン (イムラーンの女性の意) として語られており、マリア自身は、アーロンの姉 (妹) とされている。イムラーンとアーロンは、各自、モーゼの父、そして兄にあたり、モーゼには又、ミリアムという名の姉 (妹) がいた。

37. 而して分娩するに及び、彼女は云えり、「主よ、妾は女児を産めり (注 32) －アッラーは彼女が産めるものをよく承知す、彼女が望みたるものは女児に非ず男児たることを－妾はこの子をマリアと名づけたり。(注 33) 妾はこの子と、この子の子孫を汝の御加護にゆだねます故、なにとぞ石にて撃たれし悪魔（サタン）から守り給え」と。(注 34)

فَلَمَّا وَضَعَتْهَا قَالَتْ رَبِّ إِنِّي وَضَعْتُهَا أُنْثَىٰ ۚ وَاللّٰهُ أَعْلَمُ بِمَا وَضَعَتْ ۚ وَلَيْسَ الذَّكَرُ كَالْأُنْثَىٰ ۚ وَإِنِّي سَمَّيْتُهَا مَرْيَمَ وَإِنِّي أُعِيذُهَا بِكَ وَذُرِّيَّتَهَا مِنَ الشَّيْطٰنِ الرَّجِيمِ ﴿٣٧﴾

38. そこで主は恵み深くその子を御嘉納あそばされ、すこやかに育て給い、ザカリヤをして (注 35) その子の保護者たらしめり。ザカリヤはその子の部屋を訪れるたびに、彼女のそばに食物があるのを見たり。彼は訊ねたり、「マリアよ、汝はいずこよりこれを得たるか？」と。彼女は答えて、云えり、「こはアッラーより頂戴す」と。(注 36) アッラーは御心のまま誰にでも限りなく賜（たま）う。

فَتَقَبَّلَهَا رَبُّهَا بِقَبُولٍ حَسَنٍ وَأَنْبَتَهَا نَبَاتًا حَسَنًا ۙ وَكَفَّلَهَا زَكَرِيَّا ۖ كُلَّمَا دَخَلَ عَلَيْهَا زَكَرِيَّا الْمِحْرَابَ ۙ وَجَدَ عِنْدَهَا رِزْقًا ۚ قَالَ يٰمَرْيَمُ أَنَّىٰ لَكِ هٰذَا ۖ قَالَتْ هُوَ مِنْ عِنْدِ اللّٰهِ ۖ إِنَّ اللّٰهَ يَرْزُقُ مَنْ يَشَاءُ بِغَيْرِ حِسَابٍ ﴿٣٨﴾

注 32　マリアの母は、彼女が神への奉仕にささげるつもりの息子に恵まれます様にとの期待の内に誓いをたてた。しかし男子のかわりに女児が生まれた為、彼女は困惑したのである。

注 33　マリア（ミリアム）がイエスの母であった。彼女は多分、モーゼとアーロンの妹（姉）のマリアムにちなんで名付けられたと思われる。(後になってミリアムと発音された。)

注 34　これらの言葉の解釈はかなり難しいものである。もしマリアの母が自分の子供を、神への奉仕にささげるつもりであったのなら、彼女は、その子供は、終生、未婚である事を、知っているべきだし知っていたに違いない。そうなれば、その子の子孫に祈りをささげる意味が一体どこにあるのであろう。最も納得のゆく説明は、神が、幻の中でハンナに、彼女の娘は、婦人の域に達すれば、子供を持つとお告げになり、その為マリアとその子供とに神の御加護を賜るべく彼女が祈ったのである。しかし、この祈りにもかかわらず、彼女は、最初に自分が意図した通り、マリアの将来を神に委ね、彼女をささげたのである。(３：36；マリアの誕生の福音) これは、真に例外的な事であったに違いない。何故なら、神への奉仕に献げられる資格は通常は男子のみだからである。マリアの母が幻を見、彼女の娘が、男子をもうける事を知ったという推察は、幾らか違った形ではあってもマリアの福音（３：５）中に示されている。それ故、マリアの母が、マリアとその子がサタンの誘惑から身を守れるようにと祈った事に何ら奇異なところはないのである。信心深い親なら誰でも、子供に対しこういった望みを持ち、将来、汚れのない良き人生をおくるよう祈るものなのである。又もう一つ留意すべきは、イスラムは、全ての神の預言者はサタンの誘惑から守られると宣言しているのに対し、聖書では、この加護をイエスに帰してはいないのである。(マルコ、１：12、13)

注 35　ザカリヤはクルアーンでは預言者とされている、イスラエル人の聖人の名前であるが、聖書では、単に聖職者（司祭）であったとしか述べられていない。(ルカ、１：５) 聖書で預言者とされている人物はゼガリ

39. そこでザカリヤは主に祈りて、云えり、「主よ、願わくは我に汝の御許より汚れなき子を賜え。げに汝は祈りをよくお聞きとどけくださる御方にまします」と。(注 37)

هُنَالِكَ دَعَا زَكَرِيَّا رَبَّهُ ۚ قَالَ رَبِّ هَبْ لِي مِن لَّدُنكَ ذُرِّيَّةً طَيِّبَةً ۖ إِنَّكَ سَمِيعُ الدُّعَاءِ ﴿٣٩﴾

40. 而してザカリヤがなお部屋にありて、立ちて祈りつつありし時、天使たちが彼に呼びかけて、云えり、「アッラーは汝にヨハネの(注 38) 朗報を賜う。ヨハネはアッラーからの御言葉が真理なることを証明せん。ヨハネは高貴なる者、純潔なる者、義しき人々の中から選ばれたる預言者たるべし」と。(注 39)

فَنَادَتْهُ الْمَلَائِكَةُ وَهُوَ قَائِمٌ يُصَلِّي فِي الْمِحْرَابِ أَنَّ اللَّهَ يُبَشِّرُكَ بِيَحْيَىٰ مُصَدِّقًا بِكَلِمَةٍ مِّنَ اللَّهِ وَسَيِّدًا وَحَصُورًا وَنَبِيًّا مِّنَ الصَّالِحِينَ ﴿٤٠﴾

41. ザカリヤは云えり、「主よ、我すでに老い、妻は石女なれば、如何にして子を得られようか？」と。(注 40) 主は答えて、云えり、「それをなすのがアッラーなり。アッラーは欲することをなし給う」と。

قَالَ رَبِّ أَنَّىٰ يَكُونُ لِي غُلَامٌ وَقَدْ بَلَغَنِيَ الْكِبَرُ وَامْرَأَتِي عَاقِرٌ ۖ قَالَ كَذَٰلِكَ اللَّهُ يَفْعَلُ مَا يَشَاءُ ﴿٤١﴾

ヤ（上記のザカリヤとはつづりが違う）であり、これについては、クルアーンでは全く触れられていない。クルアーン中のザカリヤは、イエスの徒弟であるヨハネの父であった。

注 36　贈り物はその場所を訪れた礼拝者が明らかに持ってきたものであったが、マリアが、アッラーよりの贈り物であると答える事は尋常な事である。何故なら、人に与えられる全ての善きものは、最終的な贈り手である神より来るからである。実際、マリアのような信心深い育てられ方をした少女から、それ以外の答がでるほうが驚くべきなのである。

注 37　その子供の信心深い受け答えは、いたくザカリヤの心をうち、彼の心の奥深くに、彼自身の、似たような信心深い子供を持ちたいという自然で潜在的な欲求を目覚めさせたのである。彼は神にマリアのような子を授かる様祈った。その祈りは、クルアーンの様々な箇所で、それぞれ違った言葉で述べられている事からも、長い期間に渡り、何度を繰り返されたものと思われる。(３：39；19：４－７；21：90)

注 38　ヨハネ（あるいはヤヒヤ）とは、聖書の預言を成就する為、イエスより前に、イエスの先駆者として現われた、預言者の名前である。ヨハネという名は、神御自身より、与えられたものである。(マラキ３：１、４：５)

注 39　ヨハネはマラキの“見よ、私は、神の偉大にして多難な日の前に、預言者である、エリヤをつかわす。”という預言の成就として現われた。(マラキ４：５)

注 40　ザカリヤの疑問は、神の約束に対する、純粋な驚きからの自然な表現であり、その問いかけには、自分が永らえて、自分の息子が生まれ、立派な青年に成長するのを見られる様にとの祈りもこめられていた。

42. そこでザカリヤは云えり、「主よ、我に証拠を示し給え」と。(注 41) 主は答えて、云えり、「その証拠は、汝は三日の間、他人と手まねを以てする以外は話すこと能わず。(注 42) 主の御名をひたすら唱え、朝な夕な主を讃美し奉れ」と。

قَالَ رَبِّ اجْعَل لِّيْ اٰيَةً ۚ قَالَ اٰيَتُكَ اَلَّا تُكَلِّمَ النَّاسَ ثَلٰثَةَ اَيَّامٍ اِلَّا رَمْزًا ۚ وَاذْكُرْ رَّبَّكَ كَثِيْرًا وَّسَبِّحْ بِالْعَشِيِّ وَالْاِبْكَارِ ﴿٤١﴾

第五項

43. 天使たちが (注 43) かく云える時を思え。「マリアよ、アッラーは汝を選び、汝を浄め、而してすべての女性の上に汝を選びたり。(注 44)

وَاِذْ قَالَتِ الْمَلٰٓئِكَةُ يٰمَرْيَمُ اِنَّ اللّٰهَ اصْطَفٰكِ وَطَهَّرَكِ وَاصْطَفٰكِ عَلٰى نِسَآءِ الْعٰلَمِيْنَ ﴿٤٢﴾

44. マリアよ、主に従順であれ。神を敬いてひれ伏せよ。神を崇めまつる者と共に神のみを崇拝せよ」

يٰمَرْيَمُ اقْنُتِيْ لِرَبِّكِ وَاسْجُدِيْ وَارْكَعِيْ مَعَ الرّٰكِعِيْنَ ﴿٤٣﴾

45. こは、われらが汝に啓示する不可見なる物事の消息なり。汝は矢を投げて、誰がマリアを養育すべきかを決めたる時、彼等と共に居合せず、また彼等が互に相争いし時も居合せざりき。(注 45)

ذٰلِكَ مِنْ اَنْۢبَآءِ الْغَيْبِ نُوْحِيْهِ اِلَيْكَ ۚ وَمَا كُنْتَ لَدَيْهِمْ اِذْ يُلْقُوْنَ اَقْلَامَهُمْ اَيُّهُمْ يَكْفُلُ مَرْيَمَ ۖ وَمَا كُنْتَ لَدَيْهِمْ اِذْ يَخْتَصِمُوْنَ ﴿٤٤﴾

注 41　ザカリヤは三日間、口を開かないでいれば、約束が成就すると言われたのであり、福音書が述べる様に、神の御言葉を信じなかった罪としておしにされたのではない。(ルカ、1：20－22)

注 42　沈黙を守るという戒律は、ザカリヤに、めい想と祈りに自分の時間をさくのに良い機会を与える為であった。即ち神の御慈悲と御慈愛を受けるには、最も適切な機会である。又しゃべらずにいるという事は、或る場合には、人間の失われた生命力と体力を回復するのに役立つとも考えられている。この慣行は当時のユダヤ人の間で流行っていたものと思われる。

注 43　クルアーンの慣用的表現に於て、天使に複数形を使うという事は、神はマリアの息子を通し生命の色々な局面に影響を与える意図がおありになった為、神がそれぞれ係りのある場所に全ての異なった天使達を出向かせ、伝言を伝える役割を果たさせ、神の望まれた変革を成しとげるべく召集をかけ、命令された事を意味しているのである。

注 44　この節では“選ばれた”という言葉が二回使われている。最初は、マリアについてで、他の誰への言及もない為、これは彼女の抜きんでた絶対の地位を意味している。然るに二回めに使われる時は、マリアの時代の他の女性達と比較した形で、彼女の高い地位を示す為、使われている。クルアーンでの語の使い方に従えば、「すべての女性の上に」という表現は、全ての時代、そして全ての年代の女性にあてはめられるものではなく、マリアの生きた特定の時代の女性のみに使われているものである。

注 45　クルアーン中でマリアに関して明らかにされている事実の多くは、それ以前の聖なる書には載っていない。故に、ここではそれらの事は、見えない事として語られている。以下に続く節で述べられている様に、マリアは寺院で神に身を献げた生活を送っている期間に、妊娠したのである。当然ながら神父達は、青天のへ

46. その時、天使たちがかく云えることを思い起せ。「マリアよ、アッラーはじきじきの御言葉で（注 46）汝に朗報を授け給う。彼の名はメシア、（注 47）マリアの子イエスなり。（注 48）彼は、現世並びに来世において高い栄誉を得、神のそば近く寄れる者の（注 49）一人たるべし。

إِذْ قَالَتِ الْمَلٰٓئِكَةُ يٰمَرْيَمُ إِنَّ اللّٰهَ يُبَشِّرُكِ بِكَلِمَةٍ مِّنْهُ اسْمُهُ الْمَسِيحُ عِيسَى ابْنُ مَرْيَمَ وَجِيهًا فِي الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةِ وَمِنَ الْمُقَرَّبِينَ ﴿٤٦﴾

47. 彼は揺籃(ゆりかご)の中においても、（注 50）また壮年になってからも人々に語りかけ、必ず義(ただ)しき人たらん」

وَيُكَلِّمُ النَّاسَ فِي الْمَهْدِ وَكَهْلًا وَّمِنَ الصّٰلِحِينَ ﴿٤٧﴾

きれきともいえる事実を知るに到り、スキャンダルをおそれて、協議した結果、マリアの処分を決定する人間を決め、結婚という形で落着かせる事となった。福音書で述べられている様に、一人のヨゼフという大工が、彼女の夫として適当であるとされ、この奇妙な状況を受け入れてくれる様にと説得された。これら全ては当然の事ながら秘密裡に行なわれた為、クルアーンで人々に知らしめた事は、見えない事であったのである。

注 46　この「御言語」とは命令、律法を意味する語である。4：172でみられる様に「霊」という語と一緒に使用する事で、イエスの神の息子であるという神性を、破砕、否定する為に使われた事は疑いもない。その中でイエスは、その言葉が、真実の大義にとって有用であった為、カリマ・トゥラーと呼ばれている。武勇によって真実の大義を助くる者は神の剣、又は神の獅子と呼ばれる様に、イエスも、彼の生誕が、父親の介在なしに、神の直接の“命令”でもたらされた為、カリマ・トゥラーと呼ばれたのである。イエスがクルアーン中でカリマー（言葉）と呼ばれるのなら、聖なる預言者は、ズィクル、即ち、本、或いは良き話しと呼ばれる。（65：11、12）そしてこれは明らかに多くのカリマー（言葉）で成りたっているものである。実際に、もしカリマ・トゥラーを“神の言葉”という意味に理解すれば、我々が最大限に言える事は、神は丁度他の預言者達を通して現わされたようにイエスを通して、御自身を表現なさったのである。言葉は思考を表わす手段にすぎず、言葉が我々の存在の一部を形成したり具体化したりする事はないのである。

注 47　観光者という意を持つアル・マシーとはヘブライ語の塗油された者という意味のメシアにあたるアラビア語である（聖書百科、PelとEth、宗教倫理百科）。イエスは長く多くの旅をする運命にあった為、こう名づけられたのである。しかし福音書の叙述に従えば、イエスの奉仕は、三年足らずの上に、彼は、幾つかのパレスチナ或いはシリアの町々しか尋ねておらず、メシアの称号にはそぐわなくなる。しかし近年の歴史上の調査では、はりつけの衝撃と傷がいえた後、イエスは東洋までの遠くと広きにわたり旅をし、最後にはカシミールに辿り着き、その地域に住んでいた、イスラエルの落ちのびた支族への伝言を伝えたという事実が判明している。小高い丘の空地にイエスは家を与えられたと述べられている23章51節も併せて参照する事。上記のメシアとは‘塗油されし者’との意味も併せもつ。イエスの生誕が常軌をいっしており嫡出であるとみなされがちの為、この人々の抱きうる非難を取り除く為、全ての神の預言者達は正に塗油されている者達の為、イエスは神御自身の塗油により“塗油された”と言われているのである。

注 48　イーサとはヘブライ語のヤスーの変形と思われる。イエスとはジョシュアとイェシュアのギリシア語にあたる。（聖書百科）

注 49　この表現からも、イエスは神の公正なる召使い以上の存在ではなかった事がわかる。クルアーン中では、全ての、人並み秀れた公正な人々は、神のお側近くにある人と語られている。（56：11、12）

注 50　マハド（「ゆりかご」）のもともとの意味は、人が熟年となった時に為さねばならぬ仕事への準備期間にあるという事である。カハラとマハドの二つの期間が一緒に述べられているという事実は、この二つの期間は続いているという事を表わす。カハラ（壮年）の前の全ての期間はマハドなのである。

48. マリアは云えり、「主よ、誰も男が妾に触れざるに、妾は如何にして子を産まん？」と。(注51)主は云えり、「それをなすのがアッラーなり。アッラーは欲するものを創り給う。彼一事を決しなば、ただ『在(あ)れ！』と云うだけで、そは存すなり。

قَالَتْ رَبِّ أَنَّىٰ يَكُونُ لِي وَلَدٌ وَلَمْ يَمْسَسْنِي بَشَرٌ ۖ
قَالَ كَذَٰلِكِ اللَّهُ يَخْلُقُ مَا يَشَاءُ ۚ إِذَا قَضَىٰ أَمْرًا فَإِنَّمَا
يَقُولُ لَهُ كُن فَيَكُونُ ﴿٤٨﴾

49. 而(しか)して主は、その子に、経典と知恵と律法と福音とを教え、

وَيُعَلِّمُهُ الْكِتَابَ وَالْحِكْمَةَ وَالتَّوْرَاةَ وَالْإِنجِيلَ ﴿٤٩﴾

50. イスラエルの子孫(こどもら)への使徒として、(注52)かくなる神託を持たせて派遣せん。『我は主の奇跡をたずさえてお前たちに来たれり。すなわち、粘土(つちくれ)を（注53）もって鳥の形を造り、(注54)それに息を吹き込めば、アッラーのお許しにより空に舞い上る鳥となら

وَرَسُولًا إِلَىٰ بَنِي إِسْرَائِيلَ أَنِّي قَدْ جِئْتُكُم بِآيَةٍ
مِّن رَّبِّكُمْ ۙ أَنِّي أَخْلُقُ لَكُم مِّنَ الطِّينِ كَهَيْئَةِ الطَّيْرِ
فَأَنفُخُ فِيهِ فَيَكُونُ طَيْرًا بِإِذْنِ اللَّهِ ۖ وَأُبْرِئُ

注51　いかに幸せな報せであったとしても、普通の状況では、未婚であり、一生結婚しないものと決められていたマリアにとって、男の子の母になるという事は、非常に困惑にみちた事であったに違いない。この節は、マリアの当然ながらの混乱を映し出している。又、マリアの、男の人は誰も私にふれていない、という言葉からもわかる様に、イエスには父親がいなかった。寺院の奉仕に献げられたマリアは、独身の誓いをたてていたことからも、結婚する事はできなかった。もし彼女が、正当な手順で結婚し子供をもうける事となっていれば、夢で天使に子供の誕生を告げられても驚く事はなかった。普通の女の子なら息子ができると夢で告げられても、普通に結婚すれば子供はできるものとして驚く事などはない。マリアの福音書では、独身の誓いをたてた事が言及されている。マリアの福音書の第5章に、寺院に居住する全ての処女達で14才の年令に達した者達は、高僧が、自分の家に帰宅する様にとの一般命令を出した際、神の処女であるマリア以外は全員従ったが、マリアだけは、自分自身と自分の両親がマリアを神に委ねたのであるから、そして自分も神に処女でいる事を誓ったのでその命には従えないと答えた。又その処女の誓いは、マリアが絶対に守り通すと決心した誓いであった。(マリアの福音書、５：４、５、６）結果的にヨゼフと結婚した事は、マリア自身の願いと誓いに反する事であったが、子供がいるとわかった為、そういった状況から余儀なく為されたものである。聖職者達はスキャンダルをさける為に結婚の手配をしなければならなかったのである。又、福音書からは何故、ヨゼフに白羽の矢がたったかは明らかではなく、彼は当然の事ながら結婚した時にはマリアの懐妊を知らされていなかった。(マタイ聖福音書１：18、19）多分、誓いを破る事が正当化できる、もっともらしい理由をつけたのであろう。イエスの誕生についての詳細は、19章19節－27節を参照する事。

注52　「イスラエルの子らへの使徒」という言葉は、イエスの使命がイスラエルの民（国）に限定されていた事を示している。彼は全世界に向けられた使者ではなかったのである。(マタイ聖福音書10：５－６；15：24；19：28、使徒行伝３：25、26；13：46、ルカ聖福音書19：10；22：28－30)

注53　「粘土」とは、比喩的に色々な形のとれる粘土の様に、あらゆる善い形に造られるのに適した従順な本性を有している人との意味を表わす。

注54　暗喩として、丁度アサド（文字通りの意味は獅子）が勇者に、又ダーバが地をはう、うじ虫の様に取るに足らない人間を表わす様に、この語は、精神的な高みに飛翔する、精神的に高貴な人を指す。(34：15)

ん。また我は盲人や（注 55）癩病人を癒やし、(注 56)アッラーのお許しにより死者を生き返らさん。(注 57)また我は、お前たちが何を食し、何を家に蓄えるべきかを告げん。(注 58)お前たち信徒ならば、げにその中にお前たちへの神兆(しるし)あり。

51. また我は、以前に降(くだ)されたる（注 59）律法を確証し、お前たちに禁じられているもの

الْأَكْمَهَ وَالْأَبْرَصَ وَأُحْيِ الْمَوْتَىٰ بِإِذْنِ اللَّهِ ۖ وَ
أُنَبِّئُكُمْ بِمَا تَأْكُلُونَ وَمَا تَدَّخِرُونَ فِي بُيُوتِكُمْ ۚ
إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً لَكُمْ إِنْ كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ ۝٥٠

وَمُصَدِّقًا لِمَا بَيْنَ يَدَيَّ مِنَ التَّوْرَاةِ وَلِأُحِلَّ

注 55　ここでの「盲人」とは、夜、目のみえない者、生まれつきの盲人、後になって目のみえなくなった者、そして理解したり考えたりする力を奪われた者を意味する。

注 56　「我は癒やす」とは、'私は、その人がその人を患らわしていた病気或いは欠陥から生じる社会的束縛から解放された事を宣言する'の意味である。

注 57　イエスが鳥を創造したという一般にあまねく知れ渡っている奇跡についての記載は聖書にはみられない。鳥の創造などという、今までどの預言者も為しえなかった事を、もし本当にイエスがしたのであれば、それを記載しないという理由はどこにもなく、その奇跡を述べる事は、イエスを他のいかなる預言者よりも卓越した地位におき、後の彼の信奉者達が、彼に奉った例の神性を主張する良い根拠となるはずである。めくらとライ病の人々をなおしたという事について、聖書から判るのは、ある種の病気を患う人々は（例、ライ病）イスラエル人の間では不潔であると考えられ、他の人間との社会的接触を禁じられていたという事である。'私は彼らはいえた者である事を宣言する'という表現は、上記の様な悪疾に悩む人々が、彼らのおかれていた法律上の或いは社会的に不利、不都合さをイエスに取り除いてもらった事を意味する。或いはイエスは常にこういった疾病患者を、直していたと考えられる。神の預言者達は精神的な医者であり、心がやみとなった者の目をひらき、精神的に聞く耳を持たぬ者に説き、心が死んでしまった者達に命をふきこむのである（マタイ聖福音書 13：15)。この場合にはマクマ（盲人）とは、信仰の灯はもっていても、決心が弱く、試練をもちこたえられない者を意味している。そういう人は、日中は物がみえ、即ち、何の試練もなく信仰の太陽が、かげりなく照らしている間はの意味であるが、しかし一旦、試練があったり犠牲をはらわねばならない夜になると、精神的な目標を失いぼう然と立ちつくすのである（2：21 を参照)。アブラス（ライ病）という語も同様に、精神的意味に於て、健康な皮ふのところどころに病気の皮ふが点在する信仰の不完全な者を意味する所となる。'死者をよみがえらせる'という文は、イエスが本当に死人を生き返らせた事を意味している訳ではない。実際に死んだ者がこの世に生き返る事などないし、そういう信仰はクルアーンの全ての教えに真向から反対するものである。（2：29；23：100、101；21：96；39：59、60；40：12；45：27) 自分達の信奉者の生命（人生）に、神の使者達がもたらす、目をみはる様な、道徳的変革は、精神的言葉の用語法からすると、'死する者に息吹をあたえる'と名付けられるべきものなのである。

注 58　この全文は、イエスがその弟子達に、何を食べるべきか、即ち、肉体の欲求にみあうには、何を身体にたくわえるべきか、そして天に心の宝として、何を貯えるべきか、語った事を意味している。言い換えれば、自分達の手にする所得は正直に法律にかなって獲得し、自分達の貯えは神の御心にかなって使い、明日の事は神に委ね、何も考えない様にする様にと、イエスは教えたのである。(マタイ聖福音書 6：25、26)

注 59　イエスはトーラに述べられている、イエス以前の預言者達の預言の成就として到来したのであったが、モーゼの後継者という意味からみれば、何の戒律も示さなかった。彼自身、自分の権能の限界を承知していたのである。(マタイ聖福音書 5：17、18)

のうちいくつかを許可すべく来たれり。(注60) 我はお前たちに主よりの奇跡を携えて来たれり。さればお前たち、アッラーを畏れかしこみ、我に従え。

لَكُمْ بَعْضَ الَّذِي حُرِّمَ عَلَيْكُمْ وَجِئْتُكُمْ بِآيَةٍ مِنْ رَبِّكُمْ فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُونِ ٥١

52. げにアッラーは我が主なり。またお前たちの主なり。されば彼を崇め奉れ。これぞ正しき道なり』」

إِنَّ اللَّهَ رَبِّي وَرَبُّكُمْ فَاعْبُدُوهُ هَٰذَا صِرَاطٌ مُسْتَقِيمٌ ٥٢

53. イエスは彼等の信ぜざるを知りて、云えり、「アッラーの道において、誰が我が援助者たらん？」と。弟子たちは答えて、云えり、「我等はアッラーの援助者なり。我等はアッラーを信ず。なにとぞ我等が忠順なることを証言されよ。

فَلَمَّا أَحَسَّ عِيسَىٰ مِنْهُمُ الْكُفْرَ قَالَ مَنْ أَنْصَارِي إِلَى اللَّهِ قَالَ الْحَوَارِيُّونَ نَحْنُ أَنْصَارُ اللَّهِ آمَنَّا بِاللَّهِ وَاشْهَدْ بِأَنَّا مُسْلِمُونَ ٥٣

54. 主よ、我等は汝が降(くだ)し賜わりたるものを信じ、この使徒に従う。さればなにとぞ我等を証言者たちの列に書き加え給え」と。

رَبَّنَا آمَنَّا بِمَا أَنْزَلْتَ وَاتَّبَعْنَا الرَّسُولَ فَاكْتُبْنَا مَعَ الشَّاهِدِينَ ٥٤

55. イエスに仇(あだ)なす彼等は策謀せり。(注61) アッラーも策謀せり。アッラーこそは最良の策謀者なり。

وَمَكَرُوا وَمَكَرَ اللَّهُ وَاللَّهُ خَيْرُ الْمَاكِرِينَ ٥٥

第六項

56. アッラーがかく云える時を思え。「イエスよ、わしは汝を死に至らしめ(注62)、わしが許(もと)に挙(あ)げ、不信心者の罪から汝を浄めん。

إِذْ قَالَ اللَّهُ يَا عِيسَىٰ إِنِّي مُتَوَفِّيكَ وَرَافِعُكَ إِلَيَّ وَمُطَهِّرُكَ مِنَ الَّذِينَ كَفَرُوا وَجَاعِلُ الَّذِينَ

注60　この表現はモーゼの律法を何ら変更したり改訂したりする事を意味しているものではなく、ユダヤ人達自身が、それが原因で違法となってしまったような事柄を指しているだけである(4：161；43：64)。　これら二つの節では、ユダヤ人達の中でも、合法性やある種の事項に関しては意見が分かれていた事と、ユダヤ人は不正や違反をする事で、神の祝福を失ってしまっていた事がわかる。このように、イエスはユダヤ人達が、どんな事柄が原因で正しい道を踏み外してしまったのかを決める裁き手として到来し、彼に従いさえすれば、取り上げられてしまった神の恵みを取り戻す事ができる事を告げに来たのである。

注61　ユダヤ人達はイエスが十字架上で、呪われた死を迎える様な計画をもくろんでいたが、(申命記21：24) 神の御計画はイエスをその死から救う事であった。イエスは十字架上では死なず、生きたまま降ろされ、はりつけの場所から遠く離れたカシミールで天寿を全うしたから、ユダヤ人の計画は破れ、神の御計画通りとなったのである。

注62　高名なアラブの言語学者であるザマクシャリは、"モタワフィーカ（ここでは「死に至らしめ」）とは、我、汝を人の手にかかる死より守り、汝に定められた寿命を約束し、人の手にかかるのではなく天寿を全うさせるものである。"との解釈を下している。実際、アラビア語の辞書編集者達は、おしなべて、タワッファとい

また汝に従いし人々を復活の日まで、不信心者の上に置くべし。然る後お前たちはわしの許に帰り(注 63)、わしはお前たちが争いたることについて裁決を下すべし。

اتَّبَعُوكَ فَوْقَ الَّذِينَ كَفَرُوا إِلَىٰ يَوْمِ الْقِيَامَةِ ۖ ثُمَّ إِلَيَّ مَرْجِعُكُمْ فَأَحْكُمُ بَيْنَكُمْ فِيمَا كُنْتُمْ فِيهِ تَخْتَلِفُونَ ٥٦

57. 不信心者どもをわしは、この世でもまた次の世でも、厳しい刑で処罰せん。而して彼等は如何なる助け手も得ざるべし。

فَأَمَّا الَّذِينَ كَفَرُوا فَأُعَذِّبُهُمْ عَذَابًا شَدِيدًا فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ وَمَا لَهُمْ مِنْ نَاصِرِينَ ٥٧

58. されど信じて善行を積む者には、アッラーは存分な報奨を賜わん。アッラーは不義なす者どもを好まず」

وَأَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ فَيُوَفِّيهِمْ أُجُورَهُمْ ۗ وَاللَّهُ لَا يُحِبُّ الظَّالِمِينَ ٥٨

59. 以上が、われらが汝に物語る神兆にして、且つ知恵に満ちた警告なり。

ذَٰلِكَ نَتْلُوهُ عَلَيْكَ مِنَ الْآيَاتِ وَالذِّكْرِ الْحَكِيمِ ٥٩

60. げにイエスは、アッラーから見れば、アダムと似たり。(注 64)アッラーはアダムを泥土で創り、(注 65) 之に「在れ」といいたれば、アダムは存しけり。

إِنَّ مَثَلَ عِيسَىٰ عِنْدَ اللَّهِ كَمَثَلِ آدَمَ ۖ خَلَقَهُ مِنْ تُرَابٍ ثُمَّ قَالَ لَهُ كُنْ فَيَكُونُ ٦٠

う語が前述の様な形態で使われた場合には、それ以外の解釈はなく、いかなるアラビア語の文字にも他の意味で使われた例は一つもないという点で、意見が一致している。この言葉は、クルアーン中で、25ヶ所の、異なった箇所で使われ、23の箇所で、こぞって、死する時に魂を取りさるとの意味となっている。ただ二箇所で、眠りにつく時魂を取り去るとの意味で使われているが、その場合には、夜又は眠りという語が付け加えられている。(6：61；39：43) イエスが死したという事実は否定すべくもない。そして聖なる預言者は、次の様に言ったと伝えられている。"もし、モーゼとイエスが、今、生存しているのであれば、私に従わざるをえなかったであろう。」と (カシール)。 聖なる預言者は、イエスの年令を120才であると確信している (ウンマール)。 又、クルアーンでは、30にも及ぶ節で、イエスの肉体が昇天し、天上で生きているという不条理な信仰は、完全に粉砕している。

注 63　ラーフィオカ・エレイヤ (ここでは「わしのもとへ帰る」) はクルアーン中ではその人の地位をあげ、重んじるという意で使われている。(24：37 及び 35：11) イエスが召され云々と述べられているのは、イエスが、十字架上で呪われて死んだというユダヤ人の間違った主張に応じての返答である。

注 64　アダムとは、もともと、一般的にアダムの息子達である人間を代表するものである。イエスはこの様に、ちりから創られた、その他の死すべき者と同じであると宣せられ、彼についての神性は存在しないものとなった。しかし、"アダム"という言葉が、人間の祖先を表わすとすれば、この節は、父親なくして誕生したという意味での、イエスとアダムの相似性を指摘していると考えられる。この場合、イエスには母があったが、そこまで完璧に考える必要はなく、その事実が二人の類似性に影響を及ぼすものではない。

注 65　他の箇所では、人は粘土から創られたと述べられている。'ちり'と'粘土'を使う際の違いは、'ちり'という語を使うと、天啓という概念 (天の水) が黙示されないが、'粘土'という言葉からは表明できるという点にある。

61. こは汝の主よりの真理なり、されば汝、疑う徒輩の仲間となるなかれ。

اَلْحَقُّ مِنْ رَّبِّكَ فَلَا تَكُنْ مِّنَ الْمُمْتَرِيْنَ ۝٦١

62. 知識が汝に降されたる後、まだ汝にイエスに関することで論駁する者あらば、云え、「我等の息子たちとお前たちの息子たち、我等の妻たちとお前たちの妻たち、我等の集団とお前たちの集団を召集し、熱烈に祈禱し、アッラーの呪いが嘘つきどもの上に降らんことを求めようではないか」と。(注 66)

فَمَنْ حَآجَّكَ فِيْهِ مِنْۢ بَعْدِ مَا جَآءَكَ مِنَ الْعِلْمِ فَقُلْ تَعَالَوْا نَدْعُ اَبْنَآءَنَا وَاَبْنَآءَكُمْ وَنِسَآءَنَا وَنِسَآءَكُمْ وَاَنْفُسَنَا وَاَنْفُسَكُمْ ثُمَّ نَبْتَهِلْ فَنَجْعَلْ لَّعْنَتَ اللّٰهِ عَلَى الْكٰذِبِيْنَ ۝٦٢

63. こは間違いなく真実の話なり。アッラーの外に神なし。げにアッラーこそは偉大にして、賢哲にまします。

اِنَّ هٰذَا لَهُوَ الْقَصَصُ الْحَقُّ ۚ وَمَا مِنْ اِلٰهٍ اِلَّا اللّٰهُ ۚ وَاِنَّ اللّٰهَ لَهُوَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ۝٦٣

64. されどもし彼等背を向けなば、忘れまいぞ、アッラーは離間者を熟知し給う。

فَاِنْ تَوَلَّوْا فَاِنَّ اللّٰهَ عَلِيْمٌۢ بِالْمُفْسِدِيْنَ ۝٦٤ ع

第七項

65. 云え、「経典の民よ、我等とお前たちの間にある共通の言葉のところへ来れ。すなわち、我等はアッラー以外何ものも崇拝せず、アッラーに何ものも配せず、また我等の何人といえども、アッラー以外のものを主と崇めまつることなし」と。されどもし彼等背を向けなば、云え、「我等が神に帰依したることを証言せよ」と。(注 67)

قُلْ يٰٓاَهْلَ الْكِتٰبِ تَعَالَوْا اِلٰى كَلِمَةٍ سَوَآءٍۢ بَيْنَنَا وَبَيْنَكُمْ اَلَّا نَعْبُدَ اِلَّا اللّٰهَ وَلَا نُشْرِكَ بِهٖ شَيْـًٔا وَّلَا يَتَّخِذَ بَعْضُنَا بَعْضًا اَرْبَابًا مِّنْ دُوْنِ اللّٰهِ ۚ فَاِنْ تَوَلَّوْا فَقُوْلُوا اشْهَدُوْا بِاَنَّا مُسْلِمُوْنَ ۝٦٥

注 66　この章で論じられているキリスト教の教義に関する検討は、この節が最後となる。ここで言及されているのは、60 名から成りアル・アーキブとして知られている、主任のアブドゥアル・マシーが統轄するナジラーンからやってきたキリスト教徒代表団の事である。彼らはモスクで聖なる預言者と会い、いわゆるイエスの神性について、しばらくの間、討論が続けられた。問題点が十分に論ぜられ、而る後にも代表団はその間違った教義を主張してゆずらぬ為、現節に述べられている神の命に従い、聖なる預言者は最後の手段として、ムバハラとして知られている、一種の、祈りの戦いに代表団を誘う事とした。ムバハラとは、間違った信仰を持っている者の上に神の呪いを呼ばせる祈りである。しかしキリスト教徒達は自分達の土台となるべきものに自信がもてなかったため、この挑戦を受けず、はからずも、間接的に自分達の教義の間違いを認めるところとなった。その時の事であるが、聖なる預言者は、キリスト教徒達独自の方法で、モスクで祈りをささげる事を許可した。彼らは東を向いて礼拝した。これは全ての宗教の歴史に於て比類のない、まことに寛容に満ちた宗教的行為であった。

注 67　この節は、一方にイスラム、もう一方に、キリスト教とユダヤ教をおし頂いての、両者間の妥協の根底を提供しているものであると一部では間違ってとらえられている。ここでは、もしこれらの宗教も、神の唯一性の教義を教え、説きひろめるのであれば、比較的、重要性のないと考えられるイスラムの教えの部分は、

66. 経典の民よ、お前たち何故にアブラハムのことで論争するのか、律法と福音とは彼以後に啓示されたるに非ざるか？　お前たち、それが解らざるか？

يَٰٓأَهۡلَ ٱلۡكِتَٰبِ لِمَ تُحَآجُّونَ فِيٓ إِبۡرَٰهِيمَ وَمَآ أُنزِلَتِ ٱلتَّوۡرَىٰةُ وَٱلۡإِنجِيلُ إِلَّا مِنۢ بَعۡدِهِۦٓۚ أَفَلَا تَعۡقِلُونَ ٦٦

67. 見よ！　お前たちは知識を有せる事柄について論争してきた者どもなるぞ。それがいま何故、皆目知識を有せざる事柄について論争するか？　アッラーは御存知なれど、知らぬはお前たちなり。(注 68)

هَٰٓأَنتُمۡ هَٰٓؤُلَآءِ حَٰجَجۡتُمۡ فِيمَا لَكُم بِهِۦ عِلۡمٞ فَلِمَ تُحَآجُّونَ فِيمَا لَيۡسَ لَكُم بِهِۦ عِلۡمٞۚ وَٱللَّهُ يَعۡلَمُ وَأَنتُمۡ لَا تَعۡلَمُونَ ٦٧

68. アブラハムはユダヤ教徒に非ず、またキリスト教徒にも非ざりき。彼は常に神におすがりして、従順にして、多神教徒に非ざりき。

مَا كَانَ إِبۡرَٰهِيمُ يَهُودِيّٗا وَلَا نَصۡرَانِيّٗا وَلَٰكِن كَانَ حَنِيفٗا مُّسۡلِمٗا وَمَا كَانَ مِنَ ٱلۡمُشۡرِكِينَ ٦٨

69. げにアブラハムに最も近い人々とは、彼の追従者たち並びにこの預言者とその信徒たちなり。而(しか)してアッラーは、信徒たちの愛護者にまします。

إِنَّ أَوۡلَى ٱلنَّاسِ بِإِبۡرَٰهِيمَ لَلَّذِينَ ٱتَّبَعُوهُ وَهَٰذَا ٱلنَّبِيُّ وَٱلَّذِينَ ءَامَنُواْۗ وَٱللَّهُ وَلِيُّ ٱلۡمُؤۡمِنِينَ ٦٩

うちすてておいてもいいのではないかという事が、論じられているのである。信仰という事柄に於て、すぐこの前の節ではその間違った信念の為、非難をうけ、その間違った信仰への呪いが落ちるのをみきわめる為の祈りの戦いの挑戦を強制的に受けた人々に対し、妥協を認めるという考えが、勧められているなどとは考えられない事である。聖なる預言者は、ヘラクリウス王に伝道の信書を書いていた際に、この節そのものを使って、ヘラクリウス王に強くイスラムを受け入れるよう勧め、もしそうしなければ、神の懲罰があると警告したのである(ブハリ)。この事は、単なる預言者によれば、ただ単に神の唯一性を信じるというだけでは、ヘラクリウス王を神の懲罰から救う事はできないという事を明らかに示している。実際、この節を理解すれば、ユダヤ人やキリスト教徒が、イスラムの真実に関して正しい結論に到達する事のできる、簡単で単純な方法に気がつくはずなのである。キリスト教徒は、神の唯一性を信じると明言していながら、イエスの神性を固く信じており、ユダヤ人はユダヤ人で、厳密な一神教信奉者であるにもかかわらず、聖職者や神学者に盲目的に忠誠を誓い、彼らを実質上、神と同格の位置においてしまっている。この節では、両者に、神の寛大さを信仰した信仰の原点に戻り、イスラム（絶対の帰依）を受け入れる障害となっている間違った神格を礼拝する事をやめるようにと勧告しているのである。この様に、これらの信仰といたずらに妥協する代りに、ここでは、それらの信仰の信奉者達に神の寛大さの教理に注目する事により、絶対の帰依であるイスラムを受けいれるよう、すすめているのである。そして神の寛大さの教義とは、少なくともその外部に於て、全てに共通する基本原理（教理）であり、更に歩みよる為の基本的接点となるものなのである。又、ここで、ブハリや、その他のイスラム教徒の伝統支持者が発表している、聖なる預言者が、ヘラクリウス王や、その他の何名かの、エピプト王のマコーキスも含めた支配者達へ送った、この節の言葉に含まれた、イスラムに誘う内容の手紙が最近発見され、ブハリが、引用したのと全く同じ言葉が述べられている事が判った事を併せて特記しておくべきであろう。この事実からも、その件に関しての、又、その他の認められているハディースの業績についても、ブハリの確実性が証明されるのである。

注 68　述べられている内容は、前述の節のアブラハムに関するユダヤ人とキリスト教徒の主張或いは、クルアーンでの教えのいずれかを指す。

70. 経典の民の或る一派は、お前たちを邪道に誘惑せんとす。されど彼等は、己れ自身を惑わすのみ。しかも彼等はそれを悟らず。(注 69)

وَدَّتْ طَّآئِفَةٌ مِّنْ اَهْلِ الْكِتٰبِ لَوْ يُضِلُّوْنَكُمْ وَمَا يُضِلُّوْنَ اِلَّآ اَنْفُسَهُمْ وَمَا يَشْعُرُوْنَ ۝٧٠

71. 経典の民よ、お前たちはその証人でありながら、何故アッラーの神兆(しるし)を否認するのか？ (注 70)

يٰٓاَهْلَ الْكِتٰبِ لِمَ تَكْفُرُوْنَ بِاٰيٰتِ اللّٰهِ وَاَنْتُمْ تَشْهَدُوْنَ ۝٧١

72. 経典の民よ、お前たち何故真理と虚偽とを混同し、知りつつ真理を隠蔽するのか？(注 71)

يٰٓاَهْلَ الْكِتٰبِ لِمَ تَلْبِسُوْنَ الْحَقَّ بِالْبَاطِلِ وَتَكْتُمُوْنَ الْحَقَّ وَاَنْتُمْ تَعْلَمُوْنَ ۝٧٢ ع ١٥

第八項

73. 経典の民の或る一派は云う、「黎明に信者に啓示されたるものを信じ、夕べに之(これ)を信ぜず。然(しか)らば恐らく、彼等踵(きびす)を返さん。(注 72)

وَقَالَتْ طَّآئِفَةٌ مِّنْ اَهْلِ الْكِتٰبِ اٰمِنُوْا بِالَّذِيْٓ اُنْزِلَ عَلَى الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَجْهَ النَّهَارِ وَاكْفُرُوْٓا اٰخِرَهٗ لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُوْنَ ۝٧٣

74. 而(しか)してお前たちの宗教を奉ずる者の外は何人(なんぴと)をも信ずるなかれ」と。云え、「真の嚮導(きょうどう)はアッラーの嚮導(きょうどう)なり。お前たちに賜わりたるものと同じ如きものが、他にも賜わるべし」と、「或いはその人々が主の

وَلَا تُؤْمِنُوْٓا اِلَّا لِمَنْ تَبِعَ دِيْنَكُمْ قُلْ اِنَّ الْهُدٰى هُدَى اللّٰهِ اَنْ يُّؤْتٰٓى اَحَدٌ مِّثْلَ مَآ اُوْتِيْتُمْ اَوْ

注 69　イスラムの信仰の簡明さ、率直さと完成度が、経典を持つ人々の心に抵抗しがたい程、イスラムに傾く心を湧き立たせるのであるが、彼らの道徳的高みに対し、嫉妬心を持ち、妙な心理が働き、評価していても従えずに逆に、イスラム教徒が自分達の方に傾き、自分達の様にルーズになる事を望み始めるのである。

注 70　神の啓示を認めぬという事は、誰がそうしても極悪非道な事であるが、天啓を目(ま)のあたりにしながら認めぬ者は、尚さら極悪である。

注 71　経典の民は自分達の聖書中に聖なる預言者の事が啓示されている事から、簡単にモハッマド（彼に神の御恵みと平安あれ）が、約束された救世主である事が判るのに、敵意と嫉妬心から、彼を認めようとせず、純粋な紛れもない真実を受け入れずに虚偽と真実をごちゃまぜにし続けるのである。

注 72　ユダヤ人は異教徒のアラブ人からは宗教的知識故に高く評価されていた。ユダヤ人達はこの事を不当に利用し、イスラム教徒達を信仰から遠ざける方法を考えていた。即ち、外面的にはイスラムを許容し、日の始めには信じ、日の終りには背信の態度をとる事で、無知文盲のアラブ人に、あれ程教養深い人達が、こんなにも早くイスラムの宗教から離れるという事は、イスラムには何か重大な欠陥があるに違いないと思わせようとしてである。しかし、これらの愚かな人々は、聖なる預言者を取り巻く同胞者の何ものにも打ち砕かれない信仰のきずなを完全に間違って評価してしまったのである。

يُحَآجُّوكُمْ عِندَ رَبِّكُمْ قُلْ إِنَّ الْفَضْلَ بِيَدِ اللَّهِ يُؤْتِيهِ مَن يَشَآءُ وَاللَّهُ وَاسِعٌ عَلِيمٌ ﴿٧٣﴾

御前（みまえ）で、お前たちと論争するやも知れず」と。(注 73)云え、「すべての賜物はアッラーの掌中にあり。アッラーは之（これ）を御心（みこころ）のままに誰にでも与え給う。アッラーは慈悲深く、すべてに通暁し給う。(注 74)

يَخْتَصُّ بِرَحْمَتِهِ مَن يَشَآءُ وَاللَّهُ ذُو الْفَضْلِ الْعَظِيمِ ﴿٧٤﴾

75. アッラーはその慈悲を垂れるために、御心（みこころ）のままに誰れをも選ぶ。アッラーは素晴らしい施恩の主なり」と。

وَمِنْ أَهْلِ الْكِتَٰبِ مَنْ إِن تَأْمَنْهُ بِقِنطَارٍ يُؤَدِّهِ إِلَيْكَ وَمِنْهُم مَّنْ إِن تَأْمَنْهُ بِدِينَارٍ لَّا يُؤَدِّهِ إِلَيْكَ إِلَّا مَا دُمْتَ عَلَيْهِ قَآئِمًا ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ قَالُوا لَيْسَ عَلَيْنَا فِي الْأُمِّيِّينَ سَبِيلٌ وَيَقُولُونَ عَلَى اللَّهِ الْكَذِبَ وَهُمْ يَعْلَمُونَ ﴿٧٥﴾

76. 経典の民の中には、たとい汝が財宝をも託するとも、之（これ）を汝に返還する者あり。かと思えば、わずか一ディナールを預けても、催促せずば、之（これ）を汝に返さざる者あり。そは彼等が、「我等は無知なる者に対して、(注 75) 何をしても咎（とが）められる筋なし」と考えるが故なり。彼等は知りつつアッラーに対して虚偽を述べるなり。

بَلَىٰ مَنْ أَوْفَىٰ بِعَهْدِهِ وَاتَّقَىٰ فَإِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ الْمُتَّقِينَ ﴿٧٦﴾

77. 否、己れの約束を履行し、アッラーを畏れる者――げにアッラーは神を畏れる者を愛し給う。

إِنَّ الَّذِينَ يَشْتَرُونَ بِعَهْدِ اللَّهِ وَأَيْمَٰنِهِمْ ثَمَنًا

78. アッラーとの契約や己れへの誓いを売って、わずかな利益を購（あがな）う者、彼等は来世に

注 73　もし我々がこういう見解を持つのが間違っているのなら、彼らこそ、この誤解を、何らかの神についての議論で論破すべきなのである。

注 74　(1)'そして、お前達の宗教に従う者以外は誰をも信じるな'という文は前節の結びの文からの続きである。そしてその後に、'導きとは神のお導きである。お前達が授かったと同様のものを他の誰かが授かって'という言葉で始まる文がそう入され、然る後に、ユダヤ人の'その人が主の御もとでお前達と言い争うかもしれない'との文が続き、最後に'全て広にして云々'という神の戒律（律法）で文がしめくくられるのである。こういう形式はクルアーン独得のもので、心理的な効果を生みだす為の工夫である。(2)他の解釈では、'真に導きとは神のお導きである'と、この場合訳される言葉のみを、そう入句と考え、以下の'お前達が授かったのと同様の……神のみもとで言い争う'のくだりをユダヤ人の発言ととらえる解釈もある。
(3)第 3 の解釈では、'お前達の宗教に従う者以外は誰をも信じるな'のみを、ユダヤ人の発言と考え、それに続く発言は全て神の御言葉と考えている。

注 75　聖なる預言者の時代には、ユダヤ人の間では、ユダヤ人以外のアラブ人から、財産や所有物を奪っても、アラブ人は間違った宗教の信者なので、何の罪にもならないという考えが信じられていた。多分、それは利子のやりとりに関し、ユダヤ人とユダヤ人以外では、不快な程の区別をするユダヤの高利貸の法にその端を発していると思われる。(出エヂプト記 22：25、レビ記 25：36、申命記 23：20)

قَلِيلًا أُولَٰئِكَ لَا خَلَاقَ لَهُمْ فِي الْآخِرَةِ وَلَا يُكَلِّمُهُمُ اللَّهُ وَلَا يَنْظُرُ إِلَيْهِمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ وَلَا يُزَكِّيهِمْ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ۝٧٨

おいて一分も得ざるべし。アッラーは彼等に物云わず、復活の日に彼等を顧みることもせず、また浄めざるべし。(注76)而して彼等には必ず厳しい罰あるべし。

وَإِنَّ مِنْهُمْ لَفَرِيقًا يَلْوُونَ أَلْسِنَتَهُمْ بِالْكِتَابِ لِتَحْسَبُوهُ مِنَ الْكِتَابِ وَمَا هُوَ مِنَ الْكِتَابِ وَيَقُولُونَ هُوَ مِنْ عِنْدِ اللَّهِ وَمَا هُوَ مِنْ عِنْدِ اللَّهِ وَيَقُولُونَ عَلَى اللَّهِ الْكَذِبَ وَهُمْ يَعْلَمُونَ ۝٧٩

79. 彼等の中には、経典を読誦しているうちに、己れの舌にて経典を歪め、お前たちに経典の中にないものを経典にあるが如く思い込ませんとする一派あり。(注77)彼等はアッラーより降されたるものに非ざるものを、「アッラーより降し賜わりたるものなり」と云う。彼等は承知の上でアッラーに対し奉り嘘を云うなり。

مَا كَانَ لِبَشَرٍ أَنْ يُؤْتِيَهُ اللَّهُ الْكِتَابَ وَالْحُكْمَ وَالنُّبُوَّةَ ثُمَّ يَقُولَ لِلنَّاسِ كُونُوا عِبَادًا لِي مِنْ دُونِ اللَّهِ وَلَٰكِنْ كُونُوا رَبَّانِيِّينَ بِمَا كُنْتُمْ تُعَلِّمُونَ الْكِتَابَ وَبِمَا كُنْتُمْ تَدْرُسُونَ ۝٨٠

80. アッラーより経典と、統治権と、預言者の資質とを与えられたる者が、後になって人々に向い、「アッラーではなく、我が僕たれ」と云うが如きは、人間としてあるまじきことなり。むしろ彼は、「主に全く忠実なるべし、お前たちは経典を教え、自らもそれを学ぶが故に」と云うべきなり。(注78)

وَلَا يَأْمُرَكُمْ أَنْ تَتَّخِذُوا الْمَلَائِكَةَ وَالنَّبِيِّينَ أَرْبَابًا أَيَأْمُرُكُمْ بِالْكُفْرِ بَعْدَ إِذْ أَنْتُمْ مُسْلِمُونَ ۝٨١

81. 彼はまた、諸天使並びに諸預言者を主と崇めよと勧める者に非ず。彼は、お前たちが神に帰依したる後、如何にしてお前たちに再び不信心を勧め得べきか？

注76　神は彼らに親切な言葉もかけられず、彼らの事を慈悲と憐憫の情をもって見まもる事も、彼らを純粋であると御判断なさる事もない。

注77　これは、聖なる預言者の時代にあるユダヤ人達の間で行なわれていた邪悪な行為への隠喩である。彼らはヘブライ語で、聞き手に朗唱されているのは、あたかもトーラであると思わせてしまう様な方法で、文章を朗詠したのである。この節で三回使われている“経典”とは一番最初に使われた部分では“ヘブライ語の文”をそして後二つは、“トーラ”を指している。朗詠された文は、ユダヤ人がそうみせかけた為、“経典”とされている。

注78　「経典を教え、自らも学んで」という文は、神聖且つ高潔な知識を有する者達はおしなべてその知識を人に分け与え、人々を無知なまま暗中模索させておかないようにするのが義務である事を表わしている。

第九項

82. アッラーが預言者を介して人々と契約を(注 79)結び、かく云えることを思い起せ。「わしはお前たちに経典と知恵を授く。而して後に、お前たちの持てる経典を完成すべく一人の使徒がお前たちのところへ来る。(注 80)お前たち彼を信じ、彼を助けよ」而して更に云えり、「お前たちこれを承諾するか、この件に関してお前たちに課する責任を受諾するか？」と。彼等は答えて、云えり、「我等は受諾す」と。アッラーは云えり、「ならば証人たれ、わしもまたお前たちと共に証人たらん」と。(注 81)

وَإِذْ أَخَذَ اللَّهُ مِيثَاقَ النَّبِيِّينَ لَمَا آتَيْتُكُم مِّن كِتَابٍ وَحِكْمَةٍ ثُمَّ جَاءَكُمْ رَسُولٌ مُّصَدِّقٌ لِّمَا مَعَكُمْ لَتُؤْمِنُنَّ بِهِ وَلَتَنصُرُنَّهُ ۚ قَالَ أَأَقْرَرْتُمْ وَأَخَذْتُمْ عَلَىٰ ذَٰلِكُمْ إِصْرِي ۖ قَالُوا أَقْرَرْنَا ۚ قَالَ فَاشْهَدُوا وَأَنَا مَعَكُم مِّنَ الشَّاهِدِينَ ﴿٨٢﴾

83. さればこの後背を向ける者は、げに彼等は罪人なり。

فَمَن تَوَلَّىٰ بَعْدَ ذَٰلِكَ فَأُولَٰئِكَ هُمُ الْفَاسِقُونَ ﴿٨٣﴾

84. 天に在るもの地に在るもの一切が、好むと好まざるにかかわらず、ことごとくアッラーに服従し、やがて御許へ還るというに、彼等はアッラー以外の宗教を求めんとするか？ (注 82)

أَفَغَيْرَ دِينِ اللَّهِ يَبْغُونَ وَلَهُ أَسْلَمَ مَن فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ طَوْعًا وَكَرْهًا وَإِلَيْهِ يُرْجَعُونَ ﴿٨٤﴾

注 79　ミサーク・アル・ナビジーンという表現は、預言者が神と結んだ契約、或いは、神のその預言者を通して人々と結んだ契約を意味している。ここでは後者の意味で使われている。この訳は更に後に続く、"その後に、お前達の持っているものを確証する一人の使徒が現われるであろう" という文章によっても支持される。何故ならば、神の使者が到来するのは預言者達へではなく人々のもとだからである。

注 80　ここではムサディーク（確認する）という語は、真実の要求者が偽の者と区別される規準を示す為、使われている。ここでは、この語は「完成する」と翻訳されている。

注 81　この節も、一般的には他の預言者達に、そして特に聖なる預言者にあてはまると考えられる。そしてその両方共正しく、この節は一般的な法則を述べているのであり、預言者の到来とは、彼以前の預言者の特定の預言の成就であり、その預言に於て預言者は、信奉者達に次の預言者が出現する時、彼を受け入れる様にと命ずるのである。もし預言者が丁度イエスやその他のイスラエルの預言者達の場合のように、一民族のみに下された経典の書中の預言の成就として出現するならば、その民族のみが、預言者を受け入れ、彼を助けなければならなくなる。しかし聖なる預言者の場合の様に、全ての宗教の経典の書中にその到来が予知されていると、全ての民族が彼を受け入れる事となるのである。聖なる預言者はイスラエルの預言者達のみの預言の成就として到来した訳ではなく、(イザヤ 21：13－15、申命記 18：18、33：2、ヨハネ聖福音書 14：25、26；16：7－13)、アーリア人の預言者や、仏教徒やゾロアスター教の賢者達も、聖なる預言者の到来を預言していたのである。(シャフラン・ダサーティールP．188)

注 82　肉体の世界では人は自然の法則に従わねばならず、人は経験からそうする事が自分に役立つ事を知っている。人間にある程度の自由が許されている精神的事柄に於ても、人がアッラーの戒律と命令に従う事が妥当であり、そうする事で人は神にめでられ恩恵を受ける事となるのである。

85. 云え、「我等はアッラー並びに我等に啓示されたるものを信じ、またアブラハム、イスマイル、イサク、ヤコブ及び諸支族に啓示されたるものを信じ、モーゼとイエスと他の預言者たちに主より降し賜わりたるものを信ず。(注 83)我等はこれ等の人々の間に如何なる差別も設けず、(注 84)ただ主のみに帰依す」と。

قُلْ آمَنَّا بِاللَّهِ وَمَا أُنْزِلَ عَلَيْنَا وَمَا أُنْزِلَ عَلَىٰ إِبْرَاهِيمَ وَإِسْمَاعِيلَ وَإِسْحَاقَ وَيَعْقُوبَ وَالْأَسْبَاطِ وَمَا أُوتِيَ مُوسَىٰ وَعِيسَىٰ وَالنَّبِيُّونَ مِنْ رَبِّهِمْ لَا نُفَرِّقُ بَيْنَ أَحَدٍ مِنْهُمْ وَنَحْنُ لَهُ مُسْلِمُونَ ٨٥

86. イスラーム以外の宗教を求める者は、受入れられざるべし。而して来世では、かかる者は失敗者の仲間たるべし。

وَمَنْ يَبْتَغِ غَيْرَ الْإِسْلَامِ دِينًا فَلَنْ يُقْبَلَ مِنْهُ وَهُوَ فِي الْآخِرَةِ مِنَ الْخَاسِرِينَ ٨٦

87. 一旦信仰を受入れ、しかも使徒の真実なるを証言し、明証が来れる後、再び不信心に戻る徒輩を、アッラーがどうして導き給うや?(注 85)アッラーは不義なす者を導き給わず。

كَيْفَ يَهْدِي اللَّهُ قَوْمًا كَفَرُوا بَعْدَ إِيمَانِهِمْ وَشَهِدُوا أَنَّ الرَّسُولَ حَقٌّ وَجَاءَهُمُ الْبَيِّنَاتُ وَاللَّهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظَّالِمِينَ ٨٧

88. かかる者どもの受くべき応報は、一斉に彼等に注がれるアッラー並びに諸天使と万民の呪詛なるべし。

أُولَٰئِكَ جَزَاؤُهُمْ أَنَّ عَلَيْهِمْ لَعْنَةَ اللَّهِ وَالْمَلَائِكَةِ وَالنَّاسِ أَجْمَعِينَ ٨٨

89. 彼等は永遠にその中に宿り、罪は軽減せられず、猶予もされざるべし。

خَالِدِينَ فِيهَا لَا يُخَفَّفُ عَنْهُمُ الْعَذَابُ وَلَا هُمْ يُنْظَرُونَ ٨٩

90. 但し、悔い改め身を修める者は別なり。げにアッラーは寛大にして、情け深くましま す。(注 86)

إِلَّا الَّذِينَ تَابُوا مِنْ بَعْدِ ذَٰلِكَ وَأَصْلَحُوا فَإِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ٩٠

注 83 'お前達の宗教に従う者以外、誰をも信じるな'(3:74)という文が示す様に、ユダヤ人は、イスラエル人以外の預言者を決して正しいと信じる事はなかった。

注 84 ここでは、色々な預言者の間の地位や格の違いはない事を意味している訳ではないが、この見解は2:254に反している。実際に言わんとしている事は、預言者達の間には、神よりの使者として何ら区別されるものなどないという事である。

注 85 確かに、最初は預言者の真実を信じ、彼への信仰を人前で宣言し天啓の証人となりつつも、その後、人を恐れたり世間の思惑を気にして預言者に背く者達は正しい道へ再び導かれるに価するものを全て失う事となる。又この節は、以前の預言者達を信じていたが聖なる預言者に背いた者達を指しているとも考えられる。

注 86 ただ過去のあやまちを悔いて、悲しむだけでは神の許しを得られない。その為に必要とされるのは、邪悪な方法を慎しむという正直な約束と他の人々をも改革するという強い決心なのである。

91. 一旦信仰を受入れたる後、再び不信心に戻り、その不信心さを増すのであれば、たとい悔悟しようとも、受け容れられざるべし。彼等は邪道に陥りたる者どもなり。(注 87)

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا بَعْدَ إِيمَانِهِمْ ثُمَّ ازْدَادُوا كُفْرًا لَّن تُقْبَلَ تَوْبَتُهُمْ وَأُولَٰئِكَ هُمُ الضَّالُّونَ ﴿٩١﴾

92. 信仰を拒み、不信心者として死する者は、たとい大地を埋めつくす程の黄金の身代金を以てしても、受納されざるべし。彼等には必ず酷罰あるべし。彼等には如何なる助け手もなかるべし。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا وَمَاتُوا وَهُمْ كُفَّارٌ فَلَن يُقْبَلَ مِنْ أَحَدِهِم مِّلْءُ الْأَرْضِ ذَهَبًا وَلَوِ افْتَدَىٰ بِهِ ۗ أُولَٰئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ وَمَا لَهُم مِّن نَّاصِرِينَ ﴿٩٢﴾

第十項

93. お前たち、己れが愛するものを喜捨するに非ずば、正義を全うするを得ず。お前たちが喜捨するものは、アッラー之を熟知し給う。(注 88)

لَن تَنَالُوا الْبِرَّ حَتَّىٰ تُنفِقُوا مِمَّا تُحِبُّونَ ۚ وَمَا تُنفِقُوا مِن شَيْءٍ فَإِنَّ اللَّهَ بِهِ عَلِيمٌ ﴿٩٣﴾

94. 律法が降されたる以前には、イスラエルが自ら禁じたるもの以外は、(注 89) すべての食物はイスラエルの (注 90) 子孫に許されたりしなり。　云え、「お前たちの言葉が真実ならば、律法を持ち来りて、それを読め」と。

كُلُّ الطَّعَامِ كَانَ حِلًّا لِّبَنِي إِسْرَائِيلَ إِلَّا مَا حَرَّمَ إِسْرَائِيلُ عَلَىٰ نَفْسِهِ مِن قَبْلِ أَن تُنَزَّلَ التَّوْرَاةُ ۗ قُلْ فَأْتُوا بِالتَّوْرَاةِ فَاتْلُوهَا إِن كُنتُمْ صَادِقِينَ ﴿٩٤﴾

95. さればこの後、アッラーに対して虚偽を捏造する者は、不義なす徒輩なり。

فَمَنِ افْتَرَىٰ عَلَى اللَّهِ الْكَذِبَ مِن بَعْدِ ذَٰلِكَ فَأُولَٰئِكَ هُمُ الظَّالِمُونَ ﴿٩٥﴾

注 87　背信者の悔悛について、3：90 にあるように悔悛はどういった段階でも受け入れられるということに対し、この節で述べられていることが反しているからといって、いかなる場合にも受け入れられないという事を意味している訳ではない。ここで言及されている人々とは、悔悛を公言しておきながら、自分達の生活に、実際の実質的変化を期す事で悔い改めを実行しないだけでなく、不信仰の度合を増しさえする者達である。

注 88　全ての公正さの凝縮で、善の最も高い形である真実の信仰を得る為には、人は自分が大事にしている全てを投げうつ覚悟がなくてはならない。公明正大さの極みは、神の為に資財を使うという事によってのみ達成されるのである。高い道徳（ビル）は、真の犠牲の精神を吸収する事なしに達成する事などできはしないのである。

注 89　ユダヤ人に禁じられている食物の幾つかはイスラムでは許されている。その内の一つは創世記 32：32 に述べられている。ヤコブは座骨神経痛を病んでおり、治療の目的で彼はらくだの肉を食することを自ら禁じた。これは、彼の個人的な事であったのだが、ユダヤ人は腱の肉を食する事を禁忌とした。

注 90　イスラエルという名は、夢の中でヤコブに与えられた。(創世記 32：28)

96. 云え、「アッラーは真実を語りたり。されば常に神に従順なりしアブラハムの宗教（おしえ）に従え。アブラハムは多神教徒に非ざりき」と。（注 91）

قُلْ صَدَقَ اللّٰهُ ۗ فَاتَّبِعُوْا مِلَّةَ اِبْرٰهِيْمَ حَنِيْفًا ۭ وَمَا كَانَ مِنَ الْمُشْرِكِيْنَ ﴿٩٦﴾

97. 人類のために最初に建立したる聖殿は、バッカ※にあり。そは祝福されたる家にして、万民への嚮導（きょうどう）なり。

※メッカの谷。

اِنَّ اَوَّلَ بَيْتٍ وُّضِعَ لِلنَّاسِ لَلَّذِيْ بِبَكَّةَ مُبٰرَكًا وَّهُدًى لِّلْعٰلَمِيْنَ ﴿٩٧﴾

98. その内部には幾多の明白な奇跡あり。たとえば、アブラハムの御立処など。一たびその中に入れば、何人（なんぴと）も平安を得るなり。また聖殿へ（注 92）巡礼することは、そこへ行き得るすべての人々に課せられたるアッラーへの義務なり。信ぜざる者をして、げにアッラーが一切から超越して自足し給う御方なることを覚えせしめよ。

فِيْهِ اٰيٰتٌۢ بَيِّنٰتٌ مَّقَامُ اِبْرٰهِيْمَ ڬ وَمَنْ دَخَلَهٗ كَانَ اٰمِنًا ۭ وَلِلّٰهِ عَلَي النَّاسِ حِجُّ الْبَيْتِ مَنِ اسْتَطَاعَ اِلَيْهِ سَبِيْلًا ۭ وَمَنْ كَفَرَ فَاِنَّ اللّٰهَ غَنِيٌّ عَنِ الْعٰلَمِيْنَ ﴿٩٨﴾

99. 云え、「経典の民よ、汝等何故にアッラーの神兆（しるし）を否認するのか、アッラーはお前たちの所業を照覧するに非ずや？」と。

قُلْ يٰٓاَهْلَ الْكِتٰبِ لِمَ تَكْفُرُوْنَ بِاٰيٰتِ اللّٰهِ ڰ وَاللّٰهُ شَهِيْدٌ عَلٰي مَا تَعْمَلُوْنَ ﴿٩٩﴾

100. 云え、「経典の民よ、汝等何故にアッラーの道より信徒たちを阻み、アッラーの道を曲（まげ）んと欲するか、（注 93）お前たちその証人でありながら？　アッラーはお前たちの所業を看過（かんか）せず」と。

قُلْ يٰٓاَهْلَ الْكِتٰبِ لِمَ تَصُدُّوْنَ عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ مَنْ اٰمَنَ تَبْغُوْنَهَا عِوَجًا وَّاَنْتُمْ شُهَدَاۗءُ ۭ وَمَا اللّٰهُ بِغَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُوْنَ ﴿١٠٠﴾

注 91　アブラハムが常に神に従順であったと言う事で、彼が、イスラエル人がした様に、自分自身の意志での特定の食物を食べる事を禁止する様な事はしなかった事を示唆している。要するに、この件については、イスラムはイスラエル人と異なり、神の預言者達の方法や実例、特にアブラハムの例に、逆らう事をしないという事を言わんとしているのである。

注 92　カーバに好意的な歴史的証拠に言及した後にクルアーンは、何故カーバが、いつの場合にも、キブラ、すなわち、神の宗教の中心とされるに価いするかを示す三つの理由を提示している。(1)偉大な長（おさ）であるアブラハムがここで祈りをささげたし、(2)カーバは平和と安心を与え、(3)色々な国の人々や、異なった民族が巡礼におもむく中心として未来永劫もとどまるであろうから。

注 93　“お前達はイスラムに不正が生じるのを期待する。”或いは、“お前達はイスラムの教義を邪道に陥いらせたがっている。”を意味している。

101．　汝等信徒たちよ、お前たちもし経典を授かりたる或る集団に従わば、彼等は信徒となりたるお前たちを、再び不信心者たらしむべし。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اِنْ تُطِيْعُوْا فَرِيْقًا مِّنَ الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْكِتٰبَ يَرُدُّوْكُمْ بَعْدَ اِيْمَانِكُمْ كٰفِرِيْنَ ﴿١٠١﴾

102．　アッラーの神兆がお前たちに読誦せられ、且つお前たちの中に使徒が居るというのに、お前たち如何にして信仰を棄て得るか？　アッラーに堅く縋る者は、(注 94)必ず正しい道に導かる。

وَكَيْفَ تَكْفُرُوْنَ وَاَنْتُمْ تُتْلٰى عَلَيْكُمْ اٰيٰتُ اللّٰهِ وَفِيْكُمْ رَسُوْلُهٗ ۗ وَمَنْ يَّعْتَصِمْ بِاللّٰهِ فَقَدْ هُدِيَ اِلٰى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ﴿١٠٢﴾

第十一項

103．　汝等信徒たちよ、相応しき畏敬の念を以てアッラーを畏れ敬え。帰依者にならずして、死ぬなかれ。(注 95)

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوا اتَّقُوا اللّٰهَ حَقَّ تُقٰتِهٖ وَلَا تَمُوْتُنَّ اِلَّا وَاَنْتُمْ مُّسْلِمُوْنَ ﴿١٠٣﴾

104．皆アッラーの綱に堅く縋り、分裂するなかれ。お前たちが互に仇敵なりし時、お前たちに賜えるアッラーの恩寵を思い起せ。アッラーはお前たちの心を愛情で結ぶ。(注 96) お前たちはその恩恵によって兄弟となれるなり。またお前たちが業火の坑の縁に (注 97) ありしを、アッラーがそこより救いたり。お前たちを導かんがために、アッラーはかくの如くその掟を明示し給う。

وَاعْتَصِمُوْا بِحَبْلِ اللّٰهِ جَمِيْعًا وَّلَا تَفَرَّقُوْا ۪ وَاذْكُرُوْا نِعْمَتَ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ اِذْ كُنْتُمْ اَعْدَآءً فَاَلَّفَ بَيْنَ قُلُوْبِكُمْ فَاَصْبَحْتُمْ بِنِعْمَتِهٖٓ اِخْوَانًا ۚ وَكُنْتُمْ عَلٰى شَفَا حُفْرَةٍ مِّنَ النَّارِ فَاَنْقَذَكُمْ مِّنْهَا ۗ كَذٰلِكَ يُبَيِّنُ اللّٰهُ لَكُمْ اٰيٰتِهٖ لَعَلَّكُمْ تَهْتَدُوْنَ ﴿١٠٤﴾

105．　またお前たちの中に、善行に誘い、公正を勧め、邪悪を禁ずる集団をあらしめよ。

وَلْتَكُنْ مِّنْكُمْ اُمَّةٌ يَّدْعُوْنَ اِلَى الْخَيْرِ وَيَاْمُرُوْنَ بِالْمَعْرُوْفِ وَيَنْهَوْنَ عَنِ الْمُنْكَرِ ۗ وَاُولٰٓئِكَ هُمُ

注 94　(1)神の戒律に従って行動する事で自分自身を罪を犯さぬ様保つ者。(2)アッラーとの関係を確立し、かたくアッラーに忠実なる者。

注 95　死がいつ訪れるかわからないので、人は、いつも持続的にその状態になければ、神に身を委ねた状態で死ねるとは限らない。故に、この表現は人は常に神に従順でなければならない事を教えている。

注 96　聖なる預言者が出現する以前のアラブの分裂は他に類をみないほどひどかった。又、一方、彼らの偉大な師の模範と高潔な教えにより、結束した、アラブ人の同胞愛のきずなの強さは他に匹敵するものが人間の歴史上ない程固かった。

注 97　"業火の穴のふち"とは、アラブ人達がいつもしていた、人間の命を多大に失なわせた、破壊的な戦いの事を意味している。

الْمُفْلِحُونَ ﴿١٠٥﴾

かかる人々は繁栄すべし。(注 98)

وَلَا تَكُونُوا كَالَّذِينَ تَفَرَّقُوا وَاخْتَلَفُوا مِنْ بَعْدِ مَا جَاءَهُمُ الْبَيِّنَاتُ ۚ وَأُولَٰئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿١٠٦﴾

106.　明証来れる後、分裂して互いに論争するが如き者どもとなるなかれ。彼等には重刑あるべし。(注 99)

يَوْمَ تَبْيَضُّ وُجُوهٌ وَتَسْوَدُّ وُجُوهٌ ۚ فَأَمَّا الَّذِينَ اسْوَدَّتْ وُجُوهُهُمْ أَكَفَرْتُمْ بَعْدَ إِيمَانِكُمْ فَذُوقُوا الْعَذَابَ بِمَا كُنْتُمْ تَكْفُرُونَ ﴿١٠٧﴾

107.　その日、或る者の顔は白く、また或る者はその顔黒くならん。(注 100) その顔黒くなる者は云われん。「お前たち一旦信じておきながら、信仰を翻したな？　されば、不信心故の懲罰を味わえ」と。

وَأَمَّا الَّذِينَ ابْيَضَّتْ وُجُوهُهُمْ فَفِي رَحْمَةِ اللَّهِ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿١٠٨﴾

108.　その顔白くなる者は、アッラーの御恵に浴し、永久にその中に住まん。

تِلْكَ آيَاتُ اللَّهِ نَتْلُوهَا عَلَيْكَ بِالْحَقِّ ۗ وَمَا اللَّهُ يُرِيدُ ظُلْمًا لِلْعَالَمِينَ ﴿١٠٩﴾

109.　こは真理を (注 101) 包含するアッラーの神兆なり。われら之を汝に読誦す。アッラーは人間に如何なる不正をも望まず。

وَلِلَّهِ مَا فِي السَّمَاوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ ۚ وَإِلَى اللَّهِ تُرْجَعُ الْأُمُورُ ﴿١١٠﴾

110.　天に在るもの、地に在るもの、ことごとくアッラーの所有なり。而してすべての事柄は、裁決のため必ずアッラーに帰る。

注 98　聖なる預言者は、「もしお前達の内の誰かが邪悪な事物をみつけたら、手でそれを払いのけよ。もし手ではらいのけられねば、舌（言葉）を使って、それを禁止せよ。腕ずくでも、言葉を介してでも、止めさせられないとしたら、少なくとも心の中でそれを憎ませよ。しかし、それは最も弱い形の信仰である。」と語ったと伝えられている。（ムスリム）

注 99　ここでは、イスラム教徒に不一致と不調和の危険をもたらそうとした際の経典の民の混乱と意見の不和について述べている。

注 100　クルアーンでは「白さ」と「黒さ」を、それぞれ'幸せ'と'悲しみ'を象徴するものとして用いている。（3：107、108；75：23－25；80：39－41）人が賞讃されるべき行為を為す時、アラブ人は彼の事を、「その人の顔はまっ白になる」といった表現をし、逆の場合には、「彼の顔はまっ黒になった」と表現するのである。

注 101　「真理」は先ず、神のこれらの啓示又は御言葉は真実に充ち溢れている。第２に、それらは権利として到来した－即ち、お前たちはそれらを受けとる権利を持っていた。そして最後に、これは、それらを明白にするには絶好の時である、との意味を表わしている。

第十二項

111.　お前たちは、人間のために集められたる最良の人々なり。(注 102)お前たちは善事を勧め、邪悪を禁じ、アッラーを信じ奉る。もし経典の民も信じたりせば、それは彼等のためによかりたるものを。彼等の中には信者もいるが、大方は不信心者なり。

كُنْتُمْ خَيْرَ أُمَّةٍ أُخْرِجَتْ لِلنَّاسِ تَأْمُرُوْنَ بِالْمَعْرُوْفِ وَتَنْهَوْنَ عَنِ الْمُنْكَرِ وَتُؤْمِنُوْنَ بِاللّٰهِ ۗ وَلَوْ اٰمَنَ اَهْلُ الْكِتٰبِ لَكَانَ خَيْرًا لَّهُمْ ۗ مِنْهُمُ الْمُؤْمِنُوْنَ وَاَكْثَرُهُمُ الْفٰسِقُوْنَ ﴿١١١﴾

112.　彼等はお前たちに、わずかばかりの損害しか加え得ざるなり。たとい彼等がお前たちに戦いを挑むとも、彼等は必ず敗走すべし。而して彼等は援助されざるべし。

لَنْ يَّضُرُّوْكُمْ اِلَّاۤ اَذًى ۗ وَاِنْ يُّقَاتِلُوْكُمْ يُوَلُّوْكُمُ الْاَدْبَارَ ۗ ثُمَّ لَا يُنْصَرُوْنَ ﴿١١٢﴾

113.　彼等は、アッラーまたは人間との契約によって保護されざる限り、何処へ行こうとも、必ず屈辱を被るべし。彼等はアッラーの憤怒を招き、不幸に襲われる。(注 103)それは彼等が神兆を拒否し、預言者たちを不当に殺せるが故なり。それは彼等が常に反抗し、掟にそむく違犯をなしたるが故なり。

ضُرِبَتْ عَلَيْهِمُ الذِّلَّةُ اَيْنَ مَا ثُقِفُوْۤا اِلَّا بِحَبْلٍ مِّنَ اللّٰهِ وَحَبْلٍ مِّنَ النَّاسِ وَبَآءُوْ بِغَضَبٍ مِّنَ اللّٰهِ وَضُرِبَتْ عَلَيْهِمُ الْمَسْكَنَةُ ۗ ذٰلِكَ بِاَنَّهُمْ كَانُوْا يَكْفُرُوْنَ بِاٰيٰتِ اللّٰهِ وَيَقْتُلُوْنَ الْاَنْۢبِيَآءَ بِغَيْرِ حَقٍّ ۗ ذٰلِكَ بِمَا عَصَوْا وَّكَانُوْا يَعْتَدُوْنَ ﴿١١٣﴾

114.　彼等とて皆同じに非ず。経典の民の中には義しい一団あり。彼等は夜中にアッラーの御言葉を読誦し、アッラーの御前に叩頭す。

لَيْسُوْا سَوَآءً ۗ مِنْ اَهْلِ الْكِتٰبِ اُمَّةٌ قَآئِمَةٌ يَّتْلُوْنَ اٰيٰتِ اللّٰهِ اٰنَآءَ الَّيْلِ وَهُمْ يَسْجُدُوْنَ ﴿١١٤﴾

115.　彼等はアッラーと最後の日を信じ、正義を勧め、邪悪を禁じ、互いに善行を競う。これ等は正義者なり。

يُؤْمِنُوْنَ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ وَيَاْمُرُوْنَ بِالْمَعْرُوْفِ وَيَنْهَوْنَ عَنِ الْمُنْكَرِ وَيُسَارِعُوْنَ فِي الْخَيْرٰتِ ۗ وَاُولٰٓئِكَ مِنَ الصّٰلِحِيْنَ ﴿١١٥﴾

注 102　この節ではイスラム教徒が最も良き人々であると主張されているのみでなく、その理由も、述べられている。(1)彼らは全人類の善き者として取りあげられた。そして、(2)善を行使し、悪を禁じ、そして唯一無比の神の存在を信じる事が彼らの義務なのである。イスラム教徒の栄光は、これら二つの条件次第で左右されるのである。

注 103　ここにはユダヤ人に関する重要且つ遠大な預言が包括されている。その預言とは、彼らは永遠に恥づかしめられる運命にあり、他の民族に隷従して生きてゆく事となるというものである。聖なる預言者の時代から現在に到るまで、ユダヤ人の歴史は、この恐しい預言の真実を雄弁に物語っている。全ての時代にわたり全ての国に於て、そしてそれは啓蒙と許容の現代に於てすら例外ではなく、ユダヤ人はひどい迫害の犠牲者であり、あらゆる種類の不名誉と、はづかしめにあってきた。イスラエル国家の建設は、ユダヤ民族の人生の一時的局面にすぎないのである。

116.　何事にせよ善をなさば、その報奨を拒まれることなかるべし。(注 104)アッラーは神を畏れる者をよく知り給う。

وَمَا يَفْعَلُوا مِنْ خَيْرٍ فَلَنْ يُكْفَرُوهُ ۗ وَاللَّهُ عَلِيمٌ بِالْمُتَّقِينَ ﴿١١٦﴾

117.　されど不信心者どもは、その財産も子女もアッラーに対して役立たざるべし。彼等は業火の住人なり。彼等はその中に永久に住まん。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا لَنْ تُغْنِيَ عَنْهُمْ أَمْوَالُهُمْ وَلَا أَوْلَادُهُمْ مِنَ اللَّهِ شَيْئًا ۖ وَأُولَٰئِكَ أَصْحَابُ النَّارِ ۚ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿١١٧﴾

118.　彼等が現世で費やせることを譬うれば、厳しい寒さが吹きよせて、己れ自身に害なせる人々の収穫を潰滅せしむるが如し。(注 105)アッラーが彼等を害したに非ず、彼等自ら己れを害するなり。

مَثَلُ مَا يُنْفِقُونَ فِي هَٰذِهِ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا كَمَثَلِ رِيحٍ فِيهَا صِرٌّ أَصَابَتْ حَرْثَ قَوْمٍ ظَلَمُوا أَنْفُسَهُمْ فَأَهْلَكَتْهُ ۚ وَمَا ظَلَمَهُمُ اللَّهُ وَلَٰكِنْ أَنْفُسَهُمْ يَظْلِمُونَ ﴿١١٨﴾

119.　汝等信徒たちよ、お前たちの仲間以外の者と親交を結ぶなかれ。彼等はお前たちを破滅させるために苦労をいとわざるべし。彼等はお前たちが災難に遭うことを喜ぶ。(注 106)憎悪はすでにその唇より出たり。されど彼等の胸中に蔵せるものは更にはなはだし。われらはすでに数々の神兆をお前たちに明らかにせり、もしお前たち理解するなら。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَتَّخِذُوا بِطَانَةً مِنْ دُونِكُمْ لَا يَأْلُونَكُمْ خَبَالًا وَدُّوا مَا عَنِتُّمْ ۚ قَدْ بَدَتِ الْبَغْضَاءُ مِنْ أَفْوَاهِهِمْ ۖ وَمَا تُخْفِي صُدُورُهُمْ أَكْبَرُ ۚ قَدْ بَيَّنَّا لَكُمُ الْآيَاتِ ۖ إِنْ كُنْتُمْ تَعْقِلُونَ ﴿١١٩﴾

注 104　イスラムは国家或いは部族レベルの宗教ではない。イスラムに加わる者は、その所属社会や信条が何であれ、当然の事ながら公明正大にふるまえば、信仰のその他の信奉者同様、同じ報酬を受取るのである。国籍がどうこうであるといった理由の偏見にみちた不当な扱いなどうけないのである。ユダヤ人も、又他のいかなる人も、一旦イスラムに帰依すれば、アラブ人のイスラム教徒と同等なのである。

注 105　この節の根底をなす考えとは、イスラムに敵対する不信者の努力は自分達にはねかえるという事である。不信者がイスラムを傷つけようとして為す事全ては結果として自分達を傷つける事となるのである。

注 106　彼らが待ち望んでいるのはお前達が不運や災難にみまわれること、滅びること或いは、弱くなって崩壊すること、或いは、公明正大な道を踏み外すこと、罪深き生活をおくるようになることなのである。

120.　見よ、お前たちは彼等を愛すれど、彼等はお前たちを愛せず。お前たちは経典を信じ、その全部を信ず。然るに彼等は、お前たちに会えば云う、(注 107)「我等は信ず」と。されど自分たちだけになれば、憤怒の余りその指先を噛む。云え、「憤死せよ。(注 108)げにアッラーはお前たちが胸中に隠すものを熟知し給う」と。

هَٰٓأَنتُمْ أُولَآءِ تُحِبُّونَهُمْ وَلَا يُحِبُّونَكُمْ وَتُؤْمِنُونَ بِالْكِتَٰبِ كُلِّهِۦ وَإِذَا لَقُوكُمْ قَالُوٓا ءَامَنَّا وَإِذَا خَلَوْا عَضُّوا عَلَيْكُمُ الْأَنَامِلَ مِنَ الْغَيْظِ قُلْ مُوتُوا بِغَيْظِكُمْ إِنَّ اللّٰهَ عَلِيمٌ بِذَاتِ الصُّدُورِ ﴿١٢٠﴾

121.　お前たちに好いことが起らば彼等は悲しみ、悪いことが降りかからば、そこで彼等は喜ぶ。されどお前たちが信念堅固にして、正義ならば、彼等の奸策は決してお前たちを害すること能わず。げにアッラーは彼等がなすことのすべてを取り囲み給う。(注 109)

إِن تَمْسَسْكُمْ حَسَنَةٌ تَسُؤْهُمْ وَإِن تُصِبْكُمْ سَيِّئَةٌ يَفْرَحُوا بِهَا وَإِن تَصْبِرُوا وَتَتَّقُوا لَا يَضُرُّكُمْ كَيْدُهُمْ شَيْـًٔا إِنَّ اللّٰهَ بِمَا يَعْمَلُونَ مُحِيطٌ ﴿١٢١﴾

第十三項

122.　汝早朝に家を出で、信徒たちを戦闘配置につかせし時のことを (注 110) 思い起せ。アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

وَإِذْ غَدَوْتَ مِنْ أَهْلِكَ تُبَوِّئُ الْمُؤْمِنِينَ مَقَٰعِدَ لِلْقِتَالِ وَاللّٰهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿١٢٢﴾

123.　またお前たちの二軍が、(注 111)臆病かぜに吹かれて勇気を失いかけしあの時、アッラーは彼等の守護者なりき。されば信徒たちよ、アッラーを頼みとすべきなり。

إِذْ هَمَّت طَّآئِفَتَانِ مِنكُمْ أَن تَفْشَلَا وَاللّٰهُ وَلِيُّهُمَا وَعَلَى اللّٰهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُونَ ﴿١٢٣﴾

注 107　文脈からすると、「お前たちに会えば云う」の文の後に、理解のために“彼らは一切経典を信じていないが”或いはそれに類似した語句を補なうとよい。

注 108　「憤死せよ」とは、イスラムに敵意を抱き、イスラムをつぶそうとしているユダヤ人に向けられたものである。

注 109　神が彼らの行為を無にして彼らを破滅させて下さるから、イスラム教徒は彼らを恐れるべきではない。全てのイスラムの敵である者達のたくらみは神の前に明らかであり、神が彼らの計画を実現できなくして下さるのである。

注 110　ここで述べられているのはウハドの戦いである。バドルでの敗北の屈辱をはらさんとしてヒジラの三年めに、メッカのクライシュは、3000 名の精鋭から成る武装軍をひきつれ、メディナへのりこんできたのである。望まないままに、聖なる預言者は、後になって逃亡してしまうアブドゥラ・ビン・ウバイの 300 人の信奉者を含めた 1000 名の戦力で、敵と交戦する為、メディナを後にしたのである。戦闘は、ウハドで行なわれた。

注 111　二つの隊とは、それぞれハズラジュとアウスに所属するバヌー・サリーマとバヌー・ハリーサの二つの部族であった。(ブハリ、マガジ書)ここでは、彼らが実際には、ひるんだのではなく、アブドゥラの 300 人の逃亡を目のあたりにし、小隊であったイスラム軍が更にかい滅状態となった為、イスラム軍を見すてようとの思いが心をかすめたのが、実際にはみすてたりはしなかった事を示している。

124.　アッラーはバドルにおいて、(注 112)お前たちが劣勢でありし時、お前たちを助けたり。さればアッラーをお前たちの守護者として畏れ敬え。さすればお前たち、感謝の気持も湧いてこよう。

وَلَقَدْ نَصَرَكُمُ اللّٰهُ بِبَدْرٍ وَّاَنْتُمْ اَذِلَّةٌ ۚ فَاتَّقُوا اللّٰهَ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُوْنَ ﴿١٢٤﴾

125.　その時、汝は信徒たちに云えり、「主が天より三千の天使を降し、汝等を助け給う。(注 113)お前たちそれでも足らざるか？」と。

اِذْ تَقُوْلُ لِلْمُؤْمِنِيْنَ اَلَنْ يَّكْفِيَكُمْ اَنْ يُّمِدَّكُمْ رَبُّكُمْ بِثَلٰثَةِ اٰلٰفٍ مِّنَ الْمَلٰٓئِكَةِ مُنْزَلِيْنَ ﴿١٢٥﴾

126.　然り、お前たちが信念堅固にして、正義ならば、敵が急襲するとも主が五千の天使をもって (注 114)猛攻し、(注 115)お前たちを助くべし。

بَلٰٓى ۙ اِنْ تَصْبِرُوْا وَتَتَّقُوْا وَيَاْتُوْكُمْ مِّنْ فَوْرِهِمْ هٰذَا يُمْدِدْكُمْ رَبُّكُمْ بِخَمْسَةِ اٰلٰفٍ مِّنَ الْمَلٰٓئِكَةِ مُسَوِّمِيْنَ ﴿١٢٦﴾

127.　アッラーはただ之によってお前たちの心を安心させんがため、朗報として之をお前たちに伝えたるのみ。(注 116)助けはただ、偉大にして賢哲にましますアッラーより至る。

وَمَا جَعَلَهُ اللّٰهُ اِلَّا بُشْرٰى لَكُمْ وَلِتَطْمَئِنَّ قُلُوْبُكُمْ بِهٖ ۗ وَمَا النَّصْرُ اِلَّا مِنْ عِنْدِ اللّٰهِ الْعَزِيْزِ الْحَكِيْمِ ﴿١٢٧﴾

注 112　バドルとはメッカとメディナの間にある道沿いの地名である。その地名は、バドルという男が持っていた泉に由来している。ここで述べられているバドルの戦いは、この地の近くで闘われた。

注 113　バドルの戦いのことであるとまちがって解釈されているが、前節で、たまたま、確固たるイスラム教徒が危険に陥った時、神がいかに助けられたかを示す為に述べられたバドルの戦いをさしているものではない。8：10 によれば、バドルの戦い時につかわされた天使の数は、敵の 1000 名に対し、同数の 1000 名であった。ウハドの戦いの時の敵の数は 3000 名であった為、この時つかわされた天使の数は 3000 である。この約束の成就については 3：153 にその説明がある。

注 114　もし不信者達が、イスラム軍が軍勢をたて直す間もなく、火急に攻めてきたら、神はイスラムに 5000 の天使を送りこんで下さるとの意味である。前述の 3000 に比し 5000 と天使の数が増えているのは、ウハドではイスラム軍は手厳しく攻められ、多大な被害をこうむり弱体化していたからである。メッカの近くまで来た時、クライシュは戻ってもう一度イスラム軍を攻撃する事にした。戦いの一日後に、聖なる預言者が、この事を知るに至った時、直ちに行軍せよとの命を出し、ウハドの戦いで彼と共に戦った者だけ後に続く様にと指揮した。そしてイスラム軍はメディナから 8 マイル離れたハムラ・アル・アサドまで出向いたのである。この果敢な聖なる預言者とその信奉者の予期せぬ出現に、威圧されたメッカ軍は、大急ぎでメッカに退却したのである。これは天使達が彼らの心に投げかけた恐怖のせいであった。そうでなければ、前日の戦いで数も減り、傷つき、消耗しきっているイスラム軍を前に退却する訳がないからである。

注 115　彼は突然、果敢に彼らを襲い、彼らが大破壊する様な働きをしたと言っているのである。

注 116　天使達はイスラム軍の心をくじけないようにする一方で、敵の心に威嚇と恐怖を送りこんだ。もし神がそう召されたら、天使がたった一人であっても、ウハドでのイスラム軍を助けるに充分であったが、神は 5000 の天使を送る事を約束されたのである。この事は、その時、多大な自然の力がイスラム軍に好都合に働いた事

128．こはアッラーが、不信心者どもの一部を切りくずし、或いは失墜させて失望して退去せしめんがためなり。(注 117)

لِيَقْطَعَ طَرَفًا مِّنَ الَّذِينَ كَفَرُوا أَوْ يَكْبِتَهُمْ فَيَنقَلِبُوا خَائِبِينَ ۝١٢٨

129．アッラーが彼等を容赦しようと、はたまた不義なす徒輩故に罰しようと、汝はいささかも関与せず。

لَيْسَ لَكَ مِنَ الْأَمْرِ شَيْءٌ أَوْ يَتُوبَ عَلَيْهِمْ أَوْ يُعَذِّبَهُمْ فَإِنَّهُمْ ظَالِمُونَ ۝١٢٩

130．天に在るもの、地に在るものすべてはアッラーの所有なり。アッラーは御心のまま誰でも赦し、御心のまま誰でも罰し給う。アッラーは寛大にして、慈悲深くましします。

وَلِلَّهِ مَا فِي السَّمَاوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ يَغْفِرُ لِمَن يَشَاءُ وَيُعَذِّبُ مَن يَشَاءُ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ۝١٣٠

第十四項

131．汝等信徒たちよ、倍をまた倍にする利息を貪るなかれ。お前たち栄えんがためにはアッラーを畏れよ。(注 118)

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَأْكُلُوا الرِّبَا أَضْعَافًا مُّضَاعَفَةً وَاتَّقُوا اللَّهَ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ۝١٣١

132．而して不信心者どもに準備されたる業火を怖れよ。(注 119)

وَاتَّقُوا النَّارَ الَّتِي أُعِدَّتْ لِلْكَافِرِينَ ۝١٣٢

133．お情けを戴くために、アッラーと使徒に従え。

وَأَطِيعُوا اللَّهَ وَالرَّسُولَ لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ۝١٣٣

134．主の宥恕を得るため、而して天地の如く広大なる楽園に入るために急げ。そは神を畏れる者のために――(注 120)

وَسَارِعُوا إِلَىٰ مَغْفِرَةٍ مِّن رَّبِّكُمْ وَجَنَّةٍ عَرْضُهَا السَّمَاوَاتُ وَالْأَرْضُ أُعِدَّتْ لِلْمُتَّقِينَ ۝١٣٤

をほのめかしている。更には信者の中にも不信者の中にも、バドルの戦い時に、実際に天使達の姿をみたものがいたと伝えられている。8：10も併せ読む事。

注 117　聖なる預言者は、メッカ人達のメディナへの急襲を予定している事を知るや、メディナに向って、行軍したのである。メッカ軍は、みっともなくも恥しげもなく逃げだしたのである。

注 118　キリスト教国家に於て、今では法律的に認められている、利息を課すという事は、モーゼは禁じていた。(出エジプト記 22：25、レビ記 25：36、37；申命記 23：19、20) ここでは、妥当な利息なら許されるが、暴利をむさぼるのはよくないと言っているのではなく、妥当であろうと極端であろうと、利息を課すという事自体が禁じられているのである。そして'幾倍にもなる'という意味に解釈される語句が、実際に聖なる預言者の時代に、流行っていた慣習を指摘する。2：276－281 参照。

注 119　2：276でも、戦火の警告を後に述べて、利息の禁止が説かれている。一般的な意味の他に、ここで"不信者"とされるのは、利息に関する戒律を守らぬ者である。

注 120　この節は、商売や売買が利息なしでは動かせないと現在の状況から信じこまされている者達への答を為している。そしてイスラム教徒はイスラムの教えに従いさえすれば全ての利益を受けられるであろうとここでは述べられている。又、楽園とは天上と地上の両方にあると書かれているのは、信者であれば、現世と来世に楽園を持つ事を意味している。聖なる預言者の有名な言葉が楽園と地獄について興味ある光明をなげかけてい

135.　幸運なときも不運なときも喜捨を行い、怒りを抑え、他人に寛容な人々のために準備される。(注 121) アッラーは善事を行う人々を愛し給う。

الَّذِينَ يُنْفِقُونَ فِي السَّرَّاءِ وَالضَّرَّاءِ وَالْكَاظِمِينَ
الْغَيْظَ وَالْعَافِينَ عَنِ النَّاسِ ۗ وَاللَّهُ يُحِبُّ الْمُحْسِنِينَ ﴿١٣٥﴾

136.　而して卑屈な行為や、過失を犯せる時、アッラーを想い、罪の容赦を請う人々ーアッラー以外誰が罪を赦したり出来ようぞ？ーまた､して来たことを悪いと知りつつやり続けない人々。(注 122)

وَالَّذِينَ إِذَا فَعَلُوا فَاحِشَةً أَوْ ظَلَمُوا أَنْفُسَهُمْ ذَكَرُوا اللَّهَ فَاسْتَغْفَرُوا
لِذُنُوبِهِمْ وَمَنْ يَغْفِرُ الذُّنُوبَ إِلَّا اللَّهُ وَلَمْ
يُصِرُّوا عَلَىٰ مَا فَعَلُوا وَهُمْ يَعْلَمُونَ ﴿١٣٦﴾

137.　これ等の者への報奨は、主よりの赦しと河川流れる楽園なり。(注 123) そこに彼等は永久に住まん。善行者の報奨はなんと素晴らしきかな！

أُولَٰئِكَ جَزَاؤُهُمْ مَغْفِرَةٌ مِنْ رَبِّهِمْ وَجَنَّاتٌ تَجْرِي
مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا ۚ وَنِعْمَ أَجْرُ
الْعَامِلِينَ ﴿١٣٧﴾

138.　お前たちの以前に幾多の処罰の例あり。地上を旅して、預言者たちを嘘つきとして遇せる者どもの末路が如何なるものなりしかを見よ。

قَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِكُمْ سُنَنٌ فَسِيرُوا فِي الْأَرْضِ
فَانْظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُكَذِّبِينَ ﴿١٣٨﴾

139.　こは人々への宣言なり。また神を畏れる者への嚮導並びに訓戒なり。

هَٰذَا بَيَانٌ لِلنَّاسِ وَهُدًى وَمَوْعِظَةٌ لِلْمُتَّقِينَ ﴿١٣٩﴾

140.　弱気になるなかれ、悲観するなかれ。お前たち真の信者ならば、必ず勝利を得ん。(注 124)

وَلَا تَهِنُوا وَلَا تَحْزَنُوا وَأَنْتُمُ الْأَعْلَوْنَ إِنْ كُنْتُمْ
مُؤْمِنِينَ ﴿١٤٠﴾

る。即ち、楽園が天上と地上とにあるというのなら、一体地獄はどこにあるのか？という問いに対し、聖なる預言者は、答えて“それでは昼がやってくれば、夜はどこに行くというのか？”と語った。そして更に、楽園の報酬は天と地の間の空間程に偉大なものなのであると語ったとも伝えられている。この事は、楽園とは心の状態であり、決して物理的場所をさす訳ではない事を示している。

注 121　人は他人が自分にしかけたいやがらせや罪を完全に忘れる、或いは、心に全く何のあともなくとり払ってしまうということは、最高の“許し”“寛容さ”なのである。それは、罪の抹消だけでなく、その痕跡すらあとかたもなく消し去り、忘れる事を意味している。

注 122　善人が偶然、道徳的に堕落しても、自分の行動を正当化したりせず、率直に罪を告白し改めるようにすればよい。

注 123　罪を犯した後に、心からその行為を悔いて人が神に本当に帰依した場合は、彼は神に許されるだけでなく、神が彼をより高い精神の極みにお導き下さり、天国を約束して下さる。

注 124　ここでは、一国家或いは一個人がいかに、強くなり強さを維持するかという重要な原則が具体化されている。そして“ゆるめるなかれ”とは、将来の危険に関してであり、“なげくなかれ”とは、過去の誤りや不運

141．　お前たち負傷を受けたれど、敵側もすでに同程度の損傷を（注 125）受けたり。われらが人間のためにこのように幸運の日と不運の日を与うるは、（注 126）彼等に注意をうながすためであり、これによってアッラーが真の信者を識別し、（注 127）お前たちの内より真理の証人を（注 128）作り給うためなり。アッラーは不義者を愛し給わず。

إِن يَمْسَسْكُمْ قَرْحٌ فَقَدْ مَسَّ الْقَوْمَ قَرْحٌ مِّثْلُهُ ۚ وَتِلْكَ الْأَيَّامُ نُدَاوِلُهَا بَيْنَ النَّاسِ وَلِيَعْلَمَ اللَّهُ الَّذِينَ آمَنُوا وَيَتَّخِذَ مِنكُمْ شُهَدَاءَ ۗ وَاللَّهُ لَا يُحِبُّ الظَّالِمِينَ ﴿١٤١﴾

142．　そはまたアッラーが信徒たちを浄め、不信心者を絶滅せんがためなり。（注 129）

وَلِيُمَحِّصَ اللَّهُ الَّذِينَ آمَنُوا وَيَمْحَقَ الْكَافِرِينَ ﴿١٤٢﴾

143．　お前たち、アッラーの道のために誰が勇敢に戦い、誰が耐え忍びたるかをアッラーが区別せぬうちに、楽園に入れるとでも思っているのか？（注 130）

أَمْ حَسِبْتُمْ أَن تَدْخُلُوا الْجَنَّةَ وَلَمَّا يَعْلَمِ اللَّهُ الَّذِينَ جَاهَدُوا مِنكُمْ وَيَعْلَمَ الصَّابِرِينَ ﴿١٤٣﴾

144．　お前たちは死に直面する前は死を望みたり。（注 131）されど、いざ面と向えば、お前たちの或る者は死から逃れんとす。

وَلَقَدْ كُنتُمْ تَمَنَّوْنَ الْمَوْتَ مِن قَبْلِ أَن تَلْقَوْهُ فَقَدْ رَأَيْتُمُوهُ وَأَنتُمْ تَنظُرُونَ ﴿١٤٤﴾

についてである。国家の衰退はひとえに、その責任の正しい認識の気をぬいてしまうか否かと、過去に思いをめぐらすか否かにかかっており、その二つを怠った国家は衰退するのである。この節ではこれら二つの危険に対する警告がなされている。

注 125　他の箇所（3：166）も参照。

注 126　“繁栄の日々”と“不遇の日々”

注 127　全知全能であられる神は、何ら自分の知識に付け加えるものなど必要ではない為、ここで意味されているのは、二者間の識別についてのみである。知識（イルム）には二種類あり、一つは、存在が分かる前から認識する知識であり、もう一つは、実際に存在する様になってから認識する知識である。ここでは、後者の知識の事を指す。

注 128　信心深い者達は、不遇の時に自分達が築いた高潔な模範と、確固たる信念により、イスラムの真実の証人となるのである。

注 129　ウハドの戦いは幾らかの不信者達にイスラムこそ神の真実の宗教であるとの認識を与えた。

注 130　人の勇気を試すのは試練であり苦悩である。そしてそれらなくしては精神の発達や純化はありえないのである。

注 131　ここでの“死”は戦いの意味である。　何故なら戦争の結果が死であるから。戦いとは、装備や人員数に於て敵軍と比し極端に弱体であったイスラム軍にとって、死を意味していた。ウハドの戦いの時に、聖なる預言者はメディナ市中で敵と対戦する事を提案したが、彼の同胞の内、特にバドルの戦いに参加できなかった者は、“我々はこの日を待っていたのです。うって出て敵と戦わせて下さい、そうでなければ、連中は我々を卑怯者というでしょう、”と訴えたのである。“汝はこの死をずっと待ち望んでいた”との表現はこのイスラム教徒の願いをさしているのである。

第十五項

145.　ムハンマドは一使徒に過ぎず。使徒たちは皆彼に先だって逝けり。もし彼死すか、或いは殺害されなば、お前たち踵を返さんとするか？ (注 132) 誰が踵を返そうとも、アッラーをいささかも害することなし。アッラーは必ず感謝する者を報奨し給う。

وَمَا مُحَمَّدٌ إِلَّا رَسُولٌ ۚ قَدْ خَلَتْ مِن قَبْلِهِ الرُّسُلُ ۚ أَفَإِن مَّاتَ أَوْ قُتِلَ انقَلَبْتُمْ عَلَىٰ أَعْقَابِكُمْ ۚ وَمَن يَنقَلِبْ عَلَىٰ عَقِبَيْهِ فَلَن يَضُرَّ اللَّهَ شَيْئًا ۗ وَسَيَجْزِي اللَّهُ الشَّاكِرِينَ ۝

146.　何人もアッラーの許しなしに死ぬことかなわず――その時期は予め定められてあり。而してこの世の報奨を欲する者には、われらは之を与え、来世の報奨を欲する者には、われらは之を与う。われらは必ず感謝する者を報奨し給う。

وَمَا كَانَ لِنَفْسٍ أَن تَمُوتَ إِلَّا بِإِذْنِ اللَّهِ كِتَابًا مُّؤَجَّلًا ۗ وَمَن يُرِدْ ثَوَابَ الدُّنْيَا نُؤْتِهِ مِنْهَا ۚ وَمَن يُرِدْ ثَوَابَ الْآخِرَةِ نُؤْتِهِ مِنْهَا ۚ وَسَنَجْزِي الشَّاكِرِينَ ۝

147.　如何に多くの預言者が付き随う信徒たちと共に戦いたることか。彼等はアッラーの道において遭遇せることのために阻喪せず、弱気にならず、敵を前にして屈せざりき。アッラーは断固として信念を貫き通す者を愛し給う。

وَكَأَيِّن مِّن نَّبِيٍّ قُتِلَ مَعَهُ رِبِّيُّونَ كَثِيرٌ ۚ فَمَا وَهَنُوا لِمَا أَصَابَهُمْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَمَا ضَعُفُوا وَمَا اسْتَكَانُوا ۗ وَاللَّهُ يُحِبُّ الصَّابِرِينَ ۝

注 132　ウハドの戦いの最中に聖なる預言者が殺されたという噂が流れた。ここでは、その事にふれ、たとえその報告が真実であったとしても、その事で、信仰強き者の心がゆれ動かされてしまう事はなかったであろうという事を言わんとしている。モハッマドは、ただの預言者にすぎない。彼以前に存在した預言者達も死した様に彼も又死すべきものである。しかしイスラムの神は不滅である。聖なる預言者が死んだ時、以下の様であったとの記録がある。オマルはメディナのモスクで、抜いた剣を手にしてこういった。“神の預言者が死したという者は誰であれ、私が生かしておかない。彼は死んだのではなく、あのモーゼでさえ神の御許にいった様に、神に召されたのである。(天に昇ったのである) そして、次には偽善者達を罰しに戻ってくるのである。” その場に居あわせたアブー・バクルは、毅然としてオマルに坐る様にいい、モスクに集結していた教徒達に、当節を朗唱し、預言者の死を伝えたのである。当然ながら彼らは大きな悲しみに包まれた。この節では偶然、聖なる預言者以前の預言者達も死んでいる事にふれているが、もし生存している者が一人でもいれば、聖なる預言者の死を証明する為に、この節が引用される事はなかった。
実際、イスラムとは、いかにその個人が偉大であろうと、その生命の火を、一人の人間の存在に頼っている訳ではない。神こそイスラムの啓示者であり保護者且つ守護者なのである。しかしこの節を読み、聖なる預言者が暗殺という形で戦いで死んだと誤解してはならない。彼は自分の生命を神から保護されていたのである。(5：68) 当然ながら敵はこの誤報に狂喜したが、むしろこれはイスラム教徒にとって形を変えた恵みとなった。後になって聖なる預言者が実際に死した時の、まるで胸がはりさけてしまう様な思いへの心の準備となったからである。この経験がなかったら、彼らは耐えられなかったはずである。

148.　彼等はただかく云えり、「主よ、我等の罪を赦し給え。我等の行き過ぎた行為を赦し給え。願わくは我等の足許を堅固ならしめ、不信心者どもに対して我等を助け給え」と。

وَمَا كَانَ قَوْلَهُمْ إِلَّا أَنْ قَالُوا رَبَّنَا اغْفِرْ لَنَا ذُنُوبَنَا وَإِسْرَافَنَا فِي أَمْرِنَا وَثَبِّتْ أَقْدَامَنَا وَانْصُرْنَا عَلَى الْقَوْمِ الْكَافِرِينَ ﴿١٤٨﴾

149.　さればアッラーは彼等に、現世の報奨と、来世の素晴らしい報奨とを与えたり。(注133)アッラーは善事を行う者を愛し給う。

فَآتَاهُمُ اللَّهُ ثَوَابَ الدُّنْيَا وَحُسْنَ ثَوَابِ الْآخِرَةِ ۗ وَاللَّهُ يُحِبُّ الْمُحْسِنِينَ ﴿١٤٩﴾ ع

第十六項

150.　汝等信徒たちよ、お前たちもし不信心者どもに従わば、(注134)彼等はお前たちの踵(くびす)を返さしめ、よってお前たちは失敗者とならん。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِنْ تُطِيعُوا الَّذِينَ كَفَرُوا يَرُدُّوكُمْ عَلَىٰ أَعْقَابِكُمْ فَتَنْقَلِبُوا خَاسِرِينَ ﴿١٥٠﴾

151.　否、アッラーこそはお前たちの守護者なり、最上の佑助者(ゆうじょしゃ)なり。

بَلِ اللَّهُ مَوْلَاكُمْ ۖ وَهُوَ خَيْرُ النَّاصِرِينَ ﴿١٥١﴾

152.　われらは信ぜざる者どもの心に恐怖を投ぜん。(注135)そは彼等が、アッラーが如何なる権威も降(くだ)さざる者を、アッラーと同位に置くが故なり。彼等の住居は業火(ごうか)なり。不義なす者の住居こそ悲惨なり。

سَنُلْقِي فِي قُلُوبِ الَّذِينَ كَفَرُوا الرُّعْبَ بِمَا أَشْرَكُوا بِاللَّهِ مَا لَمْ يُنَزِّلْ بِهِ سُلْطَانًا ۖ وَمَأْوَاهُمُ النَّارُ ۚ وَبِئْسَ مَثْوَى الظَّالِمِينَ ﴿١٥٢﴾

153.　お前たちがアッラーのお許しを得て彼等を殺し、滅ぼせる時、アッラーはお前たちとの約束を果したり。アッラーがお前たちに、お前たちの望みしものを見せたる後、お前たちは勇気を喪失して、(注136)仲間

وَلَقَدْ صَدَقَكُمُ اللَّهُ وَعْدَهُ إِذْ تَحُسُّونَهُمْ بِإِذْنِهِ ۖ حَتَّىٰ إِذَا فَشِلْتُمْ وَتَنَازَعْتُمْ فِي الْأَمْرِ وَعَصَيْتُمْ مِنْ

注133　来世での報酬には色々な段階があり、上に述べられた様な信者なら一番良い報せを受ける。"卓越"したと解釈されるフスナーという言葉は必ずしも無上の段階を指すわけではなく強意の意味で使われる場合もある。

注134　イスラム教徒が非イスラム教徒と交易を行なってはならないと命じられている訳ではない。ただ、イスラムにはっきり敵対している不信者には従わぬ様にと警告されているのである。

注135　偶像崇拝が生じる原因は迷信と恐怖にある。恐怖と迷信にとらわれる者は勇者となりえないのである。

注136　ここではウハドでイスラム軍の後陣に位置していた弓矢部隊の事を、実際の戦いへの参加や戦利品の略奪を押えきれず、自分達の役割を果たさず臆病で卑怯な事をしたと糾弾している。真の勇気と勇敢さが存在するのはまさに心の中なのである。

どうしで命令について相争い、(注 137)遂には背きたり。(注 138)お前たちの中には現世のみを欲求せし者も (注 139)あれば、また来世を望みし者もありき。そこでアッラーはお前たちを試さんがために、お前たちを彼等から敗走せしめたり。而（しか）してアッラーはお前たちを赦したり。なんとなれば、アッラーは信徒に対して慈悲深き御方にまします故に。

بَعْدِ مَآ أَرَىٰكُم مَّا تُحِبُّونَ ۚ مِنكُم مَّن يُرِيدُ ٱلدُّنْيَا وَمِنكُم مَّن يُرِيدُ ٱلْـَٔاخِرَةَ ۚ ثُمَّ صَرَفَكُمْ عَنْهُمْ لِيَبْتَلِيَكُمْ ۖ وَلَقَدْ عَفَا عَنكُمْ ۗ وَٱللَّهُ ذُو فَضْلٍ عَلَى ٱلْمُؤْمِنِينَ ١٥٢

154.　お前たちが逃げ去りつつありし時、使徒はお前たちの背後からお前たちを呼びたり。されど誰も振り向かざりき。(注 140)そこでアッラーは、苦難の上の苦難でお前たちに報いたり。(注 141)そはお前たちをしてその失えるものを悲しまず、また身に降

إِذْ تُصْعِدُونَ وَلَا تَلْوُۥنَ عَلَىٰٓ أَحَدٍ وَٱلرَّسُولُ يَدْعُوكُمْ فِىٓ أُخْرَىٰكُمْ فَأَثَٰبَكُمْ غَمًّۢا بِغَمٍّ لِّكَيْلَا

注 137　'命令'とは、聖なる預言者が丘の上の弓矢部隊に、彼の許可なしに持場を離れるなと言った命令、或いは、その趣旨と意味かのいづれかを指す。即ち、聖なる預言者が戦いの終わった後も、そこにとどまる様にと考えていたか否かについては、ある者は、彼が誰かにそのつもりであったといい、又ある者は誓ってそうではなかったといっていたのである。

注 138　丘に駐屯したイスラム軍は、自分達の指揮者であるアラドゥラ・ビン・ジュベールが聖なる預言者に従って「勝利が目前にあっても、持ち場を離れるな」と命令し、指揮しようとした。しかし、多くの部下はそれに従わず、離れてしまった。彼らが自分達自身を制する事を出来なかった事がイスラム軍に甚大な被害をこうむらせたのである。

注 139　これは、持ち場を離れた弓矢部隊の事を指している。アラビア語の文では、部隊の内の何名かは現世を望み、—即ち、戦いに加わり、戦利品をかき集めるの意、—他の何名かは（アブドゥラ・ビン・ジュベールと持ち場を離れなかった彼の仲間たち)、来世を望んだ。—即ち、聖なる預言者の命令に背いた場合の最終的な結果を考えた—との意味も示されている。或る者は目先の事だけを考え、他の者は先の事を読んだのである。

注 140　これは、ウハドの戦いで、前方と後方からはさまれたイスラム軍の隊列が砕け、多くの者達が、それぞれ違った方向に逃げだしてしまった事を指している。最初に後方から敵が出るとの報せに、後ろ向きになって攻撃の姿勢をとり待機していたイスラム軍に、向かってきたのは大軍団のイスラム軍で、彼らを敵であると誤認した待機軍は同士うちを始めたのであった。ひどい混乱と狂乱の為、聖なる預言者の声に注意を払う者もいなかった程であった。

注 141　聖なる預言者は弓矢部隊に丘陵地への駐屯を命じたが、戦いが勝利に終わったと早合点した彼らは守るべき位置を放棄してしまった為、手の内にあったイスラム軍の勝利は、ほとんど敗北の観を呈してしまったのである。これが第一の悲嘆である。次の悲しみとは、不確定ながら聖なる預言者の死が伝わった時の彼らの気持ちであった。神は、聖なる預言者の死の報せを、敗北の悲しみの後に意図的にもたらされた。そうする事で、聖なる預言者が死んでいなかった喜びで最初の悲しみがいやされるからである。

تَحْزَنُوا عَلَىٰ مَا فَاتَكُمْ وَلَا مَا أَصَابَكُمْ ۗ وَاللَّهُ خَبِيرٌ بِمَا تَعْمَلُونَ ﴿١٥٣﴾

りかかれることを悲しまざらしめんがためなり。(注 142) アッラーはお前たちの所業を知悉し給う。

ثُمَّ أَنزَلَ عَلَيْكُم مِّن بَعْدِ الْغَمِّ أَمَنَةً نُّعَاسًا يَغْشَىٰ طَائِفَةً مِّنكُمْ ۖ وَطَائِفَةٌ قَدْ أَهَمَّتْهُمْ أَنفُسُهُمْ يَظُنُّونَ بِاللَّهِ غَيْرَ الْحَقِّ ظَنَّ الْجَاهِلِيَّةِ ۖ يَقُولُونَ هَل لَّنَا مِنَ الْأَمْرِ مِن شَيْءٍ ۗ قُلْ إِنَّ الْأَمْرَ كُلَّهُ لِلَّهِ ۗ يُخْفُونَ فِي أَنفُسِهِم مَّا لَا يُبْدُونَ لَكَ ۖ يَقُولُونَ لَوْ كَانَ لَنَا مِنَ الْأَمْرِ شَيْءٌ مَّا قُتِلْنَا هَاهُنَا ۗ قُل لَّوْ كُنتُمْ فِي بُيُوتِكُمْ لَبَرَزَ الَّذِينَ كُتِبَ عَلَيْهِمُ الْقَتْلُ إِلَىٰ مَضَاجِعِهِمْ ۖ وَلِيَبْتَلِيَ اللَّهُ مَا فِي صُدُورِكُمْ وَلِيُمَحِّصَ مَا فِي قُلُوبِكُمْ ۗ وَاللَّهُ عَلِيمٌ بِذَاتِ الصُّدُورِ ﴿١٥٤﴾

155. 而して苦難の後に、アッラーはお前たちに平安を降し給えり－お前たちの一部の者は睡気に (注 143) 襲われたり－他の或る者(注 144)は自分自身が心配になって、無知愚昧の考えを以てアッラーについて間違った憶測をめぐらせり。彼等は云えり、「我等に如何なる関係があるのか？」と。云え、「事はすべてアッラーの所有なり」と。彼等は汝に明らかにせざるものを胸中に隠す。彼等は云う、「もし我等がこの事に関係がありしなば、我等はここで殺されざりしなるべし」と。こはアッラーが、お前たちが胸中に蔵するものを試み、お前たちの胸中に抱けるものを一掃せんがためなり。アッラーは胸中に抱けるものを熟知し給う。(注 145)

إِنَّ الَّذِينَ تَوَلَّوْا مِنكُمْ يَوْمَ الْتَقَى الْجَمْعَانِ إِنَّمَا

156. 両方の軍勢が相会せるあの日、(注 146) お前たちの中には敵に後を見せたる者あ

注 142 「失えるもの」とはイスラム軍が目前にしていた勝利を、そして、「降りかかること」とは、逆に自分達がこうむった敗北と、イスラム軍の失なわれた戦士達の事を指している。

注 143 ウハドの戦いでの事であるが、アブー・タルハは、ウハドの戦いの日に私は顔をあげ、まわりをみわたすと、眠気におそわれ、うとうとしている者ばかりであった。まどろみは心の平安のしるしである。クルアーンはこの事を神の恵みと、とられている。この事件は、戦いがほとんど終結に近づき、イスラム軍が近くの丘陵地に戻った時の事である。

注 144 これはメディナの後方にいた偽善者達の事を指している。彼らの関心はイスラムの名誉や聖なる預言者とイスラム軍の安全よりも、自分達の安全にあった。クルアーンの常とう句として、自分自身を殺すという表現は自分の仲間或いは同胞を殺すという意味ともなる。(2：55、86)

注 145 この節は信者達の確固とした献信を指摘している。確固たる信仰を持つ者にとっては、たとえそれが考えられたように死すべき場所であっても、喜んで死地に赴いた事を思いださせる事となるのである。これら全ては、神が、信仰厚き者を純化する為になさった事なのである。

注 146 これもウハドの戦いの事である。

り。そは彼等の犯せし罪のために (注 147) サタンが彼等をつまずかしめたる (注 148) 故なり。されどアッラーはすでに彼等を赦し給えり。げにアッラーは宥恕者(ゆうじょしゃ)、寛容者にまします。

اسْتَزَلَّهُمُ الشَّيْطٰنُ بِبَعْضِ مَا كَسَبُوْا ۚ وَلَقَدْ عَفَا اللّٰهُ عَنْهُمْ ۗ اِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ حَلِيْمٌ ﴿١٥٦﴾

第十七項

157.　汝等信徒たちよ、自分たちの兄弟が遠くへ旅し、(注 149)或いは戦場に赴きてたおれし時、「もし彼等が我等と共に家に在りしなば、死ぬことも、殺されることもなかりしものを」と云う不信心者どもの真似をするなかれ。こはアッラーが彼等の心に悲嘆を惹き起すべく (注 150)計り給えしことなり。生を与え死を賜うはアッラーにして、アッラーはお前たちの所業をみそなはし給う。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَكُوْنُوْا كَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَقَالُوْا لِاِخْوَانِهِمْ اِذَا ضَرَبُوْا فِي الْاَرْضِ اَوْ كَانُوْا غُزًّى لَّوْ كَانُوْا عِنْدَنَا مَا مَاتُوْا وَمَا قُتِلُوْا ۚ لِيَجْعَلَ اللّٰهُ ذٰلِكَ حَسْرَةً فِيْ قُلُوْبِهِمْ ۗ وَاللّٰهُ يُحْيٖ وَيُمِيْتُ ۗ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ بَصِيْرٌ ﴿١٥٧﴾

158.　たといお前たちがアッラーの道のために殺され、或いは死すとも、(注 151)アッラーの宥恕(ゆうじょ)と慈悲とは彼等が蓄積せる財宝よりはるかに優るべし。(注 152)

وَلَئِنْ قُتِلْتُمْ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ اَوْ مُتُّمْ لَمَغْفِرَةٌ مِّنَ اللّٰهِ وَرَحْمَةٌ خَيْرٌ مِّمَّا يَجْمَعُوْنَ ﴿١٥٨﴾

159.　而(しか)してたといお前たち死し、或いは殺されるとも、お前たちは必ずアッラーの御傍に召集せらる。(注 153)

وَلَئِنْ مُّتُّمْ اَوْ قُتِلْتُمْ لَاِلَى اللّٰهِ تُحْشَرُوْنَ ﴿١٥٩﴾

注 147　聖なる預言者の命令を誤解して持ち場をはなれてしまったが、それを除けば忠実であった者のこと。

注 148　この節での“つまづく”は、丘の駐屯地を無断で離れてしまった弓矢部隊と戦場をみすてて逃げ帰った教徒達をさす。

注 149　神の大義で遠国へ旅をするのである。

注 150　不信者の目的はイスラム軍を戦わせないようにする為、威嚇する事であったが、そんな警告に臆す事のないイスラム軍は、不信者達相手に戦う決意をより強くしたのである。自分達の意図とはうらはらに逆の効果を与えてしまった為、不信者達は途方にくれたのである。

注 151　真実の大義の為に戦い命をおとす者は、死んだとみなされない。彼は全ての生命の統率者で居られる神に命をささげたからである。
彼は肉体的には滅びても、精神的に永遠に生きるのである。(2 ：155)

注 152　偽善者は自分が残していかねばならぬ、富や繁栄の為、死を恐れるが、アッラーの大義に死する真の信仰を持つ者は、偽善者の卑しい貯えや、或いは教徒達自身の富或いはその他の世俗的な形で貯えたものなどとは比べものにならないものを手にするのである。

注 153　「お前たち」という代名詞は偽善者と信者、両方に向けられている。条件は違っても両者共、報酬と懲罰の為に神のもとに集結させられるからである。

160.　汝が彼等に対して優しいのは、アッラーの慈悲による。(注 154) もし汝が手荒く冷酷なりしならば、彼等は必ず汝の周囲から離散したるべし。されば彼等を赦し、彼等のために赦しを請え。而(しか)して諸事に関して彼等と相談し、(注 155) 一旦決すれば、アッラーを信頼せよ。げにアッラーは、アッラーを信頼する人々を愛し給う。

فَبِمَا رَحْمَةٍ مِّنَ اللَّهِ لِنتَ لَهُمْ ۖ وَلَوْ كُنتَ فَظًّا
غَلِيظَ الْقَلْبِ لَانفَضُّوا مِنْ حَوْلِكَ ۖ فَاعْفُ عَنْهُمْ
وَاسْتَغْفِرْ لَهُمْ وَشَاوِرْهُمْ فِي الْأَمْرِ ۖ فَإِذَا عَزَمْتَ
فَتَوَكَّلْ عَلَى اللَّهِ ۚ إِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ الْمُتَوَكِّلِينَ ﴿١٦٠﴾

161.　もしアッラーがお前たちを助けなば、何人(なんびと)もお前たちに打ち勝つことを得ず。されどアッラーもしお前たちを見捨てなば、アッラー以外に誰がお前たちを助くるか？されば信徒たちをして、ただアッラーに頼らしめよ。

إِن يَنصُرْكُمُ اللَّهُ فَلَا غَالِبَ لَكُمْ ۖ وَإِن يَخْذُلْكُمْ
فَمَن ذَا الَّذِي يَنصُرُكُم مِّن بَعْدِهِ ۗ وَعَلَى اللَّهِ فَلْيَتَوَكَّلِ
الْمُؤْمِنُونَ ﴿١٦١﴾

162.　預言者たる者不正を働く筈なし。誰であれ不正を働く者は、復活の日に、自分と一緒に不正をもたらすべし。その日各人は、自分が稼ぎしものを存分に支払われ、決して不当に遇せられることなかるべし。(注 156)

وَمَا كَانَ لِنَبِيٍّ أَن يَغُلَّ ۚ وَمَن يَغْلُلْ يَأْتِ بِمَا
غَلَّ يَوْمَ الْقِيَامَةِ ۚ ثُمَّ تُوَفَّىٰ كُلُّ نَفْسٍ مَّا كَسَبَتْ
وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ﴿١٦٢﴾

注 154　ここでの言葉は、その明白で人の口にされる特質が、全てのものにあまねく慈悲深くあられた聖なる預言者の美しい性格にあてられている。彼こそ、溢れるばかりの人間的な親身さを有しており、その相手の立場を思うやさしい気持ちは、仲間だけでなく、折あらば、彼を刺そうとつけねらっていた敵の上にもそそがれていたのである。記録によると、ウハドの戦いで、彼をみすてて逃げ帰った偽善者達の処分をしなかっただけでなく、国勢の相談も、もちかけた程であった。

注 155　イスラム独得のものは多々あるが、その一つは、ムシャーワラ（協議）制度であり、これはイスラムの根本原理に組み入れられている。イスラム国家の元首は、大事な国事についてはイスラム教徒に計る事が義務づけられているのである。聖なる預言者は、バドル、ウハド、そして堀の戦いの前や、彼の高貴なる妻であるアイシャにあらぬ疑いがかけられた時でさえもそうした様に、全ての重要な事項に関しては、信奉者達に意見を求めたのであった。アブー・フライラは、“聖なる預言者は重要な件を他の人々と協議する時には、最も気をつかっていた。”と言う。聖なる預言者の第二代の後継者であったオマルは、“協議なくしてはフィラファトはありえない。”と語ったと伝えられている。イスラム国家の首長、或いはカリファーは、最終決定権は自分にあっても、教徒の代表者の意見に耳を傾けなければならない。そして、イスラムのシューラ、又はムシャーワラとは西洋でいう所の議会を表わしている訳ではない。イスラム国家元首は、自分に具申された意見を、はねつける、或る種の特権をもってはいるが、この自由裁断を軽々しく使うべきではなく、大多数の意見を尊重しなくてはならない。

注 156　聖なる預言者に軍の後方を守る為に、丘陵への駐屯を命ぜられていた弓矢部隊は（全員ではないが）メッカ軍が全員攻戦しているのをみて持ち場を離れた。駐屯地を離れた時点で彼らは聖なる預言者の命令の意志に反しているとは思っていなかったが、結果としてはその場合、離れるべきではなかったのである。また、アラブの習慣では、戦いのさ中に、自分が手をつけた物は取り分となる為、そのままその場所に居つづければ戦利品を手にする事ができぬと考えたのである。

163．アッラーの御意に従う者が、アッラーの怒りを招き地獄を住居する者と同じであってなるものか。そは悲惨なる帰処なり！（注157）

أَفَمَنِ اتَّبَعَ رِضْوَانَ اللّٰهِ كَمَنْ بَاءَ بِسَخَطٍ مِّنَ اللّٰهِ وَمَأْوٰىهُ جَهَنَّمُ ۚ وَبِئْسَ الْمَصِيرُ ١٦٣

164．アッラーの見るところでは、彼等には種々の段階あり。アッラーは彼等の所業をみそなはし給う。

هُمْ دَرَجٰتٌ عِنْدَ اللّٰهِ ۗ وَاللّٰهُ بَصِيرٌ بِمَا يَعْمَلُونَ ١٦٤

165．げにアッラーは彼等の中より一人の使徒を立てて信徒たちに恩恵を施し、その使徒をして彼等に神兆を誦みきかせしめ、彼等を浄め、以前明らかに迷誤の中にありし彼等に経典と知恵とを教えしめたり。（注158）

لَقَدْ مَنَّ اللّٰهُ عَلَى الْمُؤْمِنِينَ إِذْ بَعَثَ فِيهِمْ رَسُولًا مِّنْ أَنْفُسِهِمْ يَتْلُوا عَلَيْهِمْ اٰيٰتِهٖ وَيُزَكِّيهِمْ وَيُعَلِّمُهُمُ الْكِتٰبَ وَالْحِكْمَةَ ۚ وَإِنْ كَانُوا مِنْ قَبْلُ لَفِي ضَلٰلٍ مُّبِينٍ ١٦٥

166．なんとな！　お前たちに災難が降りかかると－この前は二倍もの損害を（注159）加えたるにもかかわらず－お前たちは云う、「こはどうしたわけか？」と。云え、「そはお前たち自身より出でしことなり」と。（注160）げにアッラーは萬事を支配し給う。

أَوَلَمَّا أَصٰبَتْكُمْ مُّصِيبَةٌ قَدْ أَصَبْتُمْ مِّثْلَيْهَا قُلْتُمْ أَنّٰى هٰذَا ۖ قُلْ هُوَ مِنْ عِنْدِ أَنْفُسِكُمْ ۗ إِنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ١٦٦

167．両軍が合戦せるあの日に　お前たちに起りたることは、アッラーの思し召しなり。そはアッラーがこの事によって真の信者を識り、

وَمَا أَصٰبَكُمْ يَوْمَ الْتَقَى الْجَمْعٰنِ فَبِإِذْنِ اللّٰهِ وَلِيَعْلَمَ الْمُؤْمِنِينَ ١٦٧

注157　イスラム軍を一挙に弱体化せしめたウハドでの偽善者達の裏切りに、不屈の闘志をかきたてられた聖なる預言者は、イスラムの敵と戦う為、前線に進みでた。これに反し偽善者達は、自分達の裏切りにより神の怒りをかったのである。

注158　この言葉はイスラム教徒の心に、彼らと似ており、彼らの内の一人であった聖なる預言者の例に習いたいという望みを目覚めさせるべく意図されている。

注159　これはメッカ軍の死者70名及び捕虜70名であったバドルの戦いの事を言っている。ウハドの戦いではイスラム軍に70名の死者が出たが、捕虜は一人もでなかった。故に、イスラムは既にメッカ軍に倍の打撃を与えていた事となるのである。

注160　人間の実際の行動は、その原因の善悪の両因を本人が持っているのであるが、その行動の結果をもたらす、最終的な裁き手は神である。その結果の良否は、共に神より生ずるのである。（4：79）この意味で、人の行動の結果の善悪は神に帰するものとなるのである。

168.　また偽善者どもを識らんがためなり。(注161)「汝等アッラーの道のために戦え、敵を撃退せよ」と彼等云われし時、彼等は云えり、「もし我等戦の仕方を知るならば、お前たちに従うものを」と。(注162)彼等はあの日、どちらかといえば不信心者に近かりき。彼等は心にもないことをその唇で云えり。されどアッラーは、彼等が隠せることを熟知し給う。

وَلِيَعْلَمَ الَّذِينَ نَافَقُوا ۚ وَقِيلَ لَهُمْ تَعَالَوْا قَاتِلُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ أَوِ ادْفَعُوا ۖ قَالُوا لَوْ نَعْلَمُ قِتَالًا لَاتَّبَعْنَاكُمْ ۗ هُمْ لِلْكُفْرِ يَوْمَئِذٍ أَقْرَبُ مِنْهُمْ لِلْإِيمَانِ ۚ يَقُولُونَ بِأَفْوَاهِهِمْ مَا لَيْسَ فِي قُلُوبِهِمْ ۗ وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا يَكْتُمُونَ ﴿١٦٨﴾

169.　自分自身は後方に居残りながら、自分の仲間について述べる者あり、(注163)「もし彼等が我等に従いたりせば、殺されざりしものを」などと。云え、「もしお前たちの言葉が真実ならば、まず自分自身より死を防げ」と。

الَّذِينَ قَالُوا لِإِخْوَانِهِمْ وَقَعَدُوا لَوْ أَطَاعُونَا مَا قُتِلُوا ۗ قُلْ فَادْرَءُوا عَنْ أَنْفُسِكُمُ الْمَوْتَ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿١٦٩﴾

170.　アッラーの道のために殺されたる者たちを、死せる者と考えるなかれ。然らず、彼等は主より贈り物を賜わり、主の傍近くで生存す。

وَلَا تَحْسَبَنَّ الَّذِينَ قُتِلُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ أَمْوَاتًا ۚ بَلْ أَحْيَاءٌ عِنْدَ رَبِّهِمْ يُرْزَقُونَ ﴿١٧٠﴾

171.　彼等はアッラーが授けたるその賜物に歓び、彼等の後から、未だ一緒にはならざりしが、従い来る人々のためにも歓喜に満されている。なんとなれば、彼等の身には恐れも悲哀もなかるべし。(注164)

فَرِحِينَ بِمَا آتَاهُمُ اللَّهُ مِنْ فَضْلِهِ وَيَسْتَبْشِرُونَ بِالَّذِينَ لَمْ يَلْحَقُوا بِهِمْ مِنْ خَلْفِهِمْ أَلَّا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿١٧١﴾

注161　真の信仰を持つ者と偽善者を識別する為に試練や困難が下される為、ウハドでイスラム軍が困難に出会った事は、形を変えた御恵みであった事がわかる。ウハドの戦いの行動で混然としていた、信者達の真偽が識別されたのである。

注162　この節で暗に言及されているのは、ウハドの戦いでイスラム軍をみすてて、メディナに帰ったアブドゥラ・ビン・オバイ率いるところの300名の偽善者達のことである。

注163　‘仲間の事を語る’とは“仲間の事について話した”、即ちイスラム軍の事に関し、自分達の間で、話しをしたの意味である。

注164　壮烈な死で殉教した者達は、まだ現世に生きてはいて後に彼らのもとにくる仲間が敵に勝利をおさめる事で、喜ぶであろう。即ち、死後、ベールが取り除かれ、殉教者達には、イスラム軍に予定されている勝利の事が知らされるという意味である。彼らは仲間についてのよい報せを受けとるとは、神の天使達がイスラム軍の後の成功や勝利を彼らにいつも教えてくれるとの意味である。

172. 彼等はアッラーの恩恵とその恵み深さに喜び、アッラーが信徒たちへの報奨を無効にせざることを喜ぶ。

يَسْتَبْشِرُوْنَ بِنِعْمَةٍ مِّنَ اللّٰهِ وَفَضْلٍ وَّاَنَّ اللّٰهَ لَا يُضِيْعُ اَجْرَ الْمُؤْمِنِيْنَ ﴿١٧٢﴾

第十八項

173. 損害を被りたる後、アッラーと使徒の呼びかけに応えし人たち——中でもその人たちのうち善事を行い、公正に振る舞う人々は、必ず立派な報奨を授けられるべし。

اَلَّذِيْنَ اسْتَجَابُوْا لِلّٰهِ وَالرَّسُوْلِ مِنْ بَعْدِ مَآ اَصَابَهُمُ الْقَرْحُ ۛ لِلَّذِيْنَ اَحْسَنُوْا مِنْهُمْ وَاتَّقَوْا اَجْرٌ عَظِيْمٌ ﴿١٧٣﴾

174. 人々は彼等に向って云えり、「お前たちに敵対すべく大軍が集結せり。されば彼等敵を恐れよ」と。(注 165) されどこの事、却って彼等の信仰心を強めたり。彼等は云えり、「アッラーいませば、我等は満足なり。彼こそは素晴らしき守護者なり」と。

اَلَّذِيْنَ قَالَ لَهُمُ النَّاسُ اِنَّ النَّاسَ قَدْ جَمَعُوْا لَكُمْ فَاخْشَوْهُمْ فَزَادَهُمْ اِيْمَانًا ۖ وَّقَالُوْا حَسْبُنَا اللّٰهُ وَنِعْمَ الْوَكِيْلُ ﴿١٧٤﴾

175. かくて彼等はアッラーの恩恵と恵み深さに浴し、如何なる災難に遭うことなく帰り来り、(注 166) アッラーが嘉し給うところに従えり。げにアッラーは恵み深い主なり。

فَانْقَلَبُوْا بِنِعْمَةٍ مِّنَ اللّٰهِ وَفَضْلٍ لَّمْ يَمْسَسْهُمْ سُوْٓءٌ ۙ وَّاتَّبَعُوْا رِضْوَانَ اللّٰهِ ۗ وَاللّٰهُ ذُوْ فَضْلٍ عَظِيْمٍ ﴿١٧٥﴾

176. 悪魔が脅かし得る者は、ただ己が仲間のみ。(注 167) されば、お前たち信徒ならば、彼等悪魔を恐れず、わしを畏れよ。

اِنَّمَا ذٰلِكُمُ الشَّيْطٰنُ يُخَوِّفُ اَوْلِيَآءَهٗ ۪ فَلَا تَخَافُوْهُمْ وَخَافُوْنِ اِنْ كُنْتُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ﴿١٧٦﴾

177. 不信心に急ぐ徒輩を、汝悲しむことなかれ。彼等はいささかもアッラーを害すること能わず。(注 168) アッラーは来世において、如何なる幸せも彼等に割り当てることを望まず。彼等は必ず厳罰を受くべし。

وَلَا يَحْزُنْكَ الَّذِيْنَ يُسَارِعُوْنَ فِى الْكُفْرِ ۚ اِنَّهُمْ لَنْ يَّضُرُّوا اللّٰهَ شَيْـًٔا ۗ يُرِيْدُ اللّٰهُ اَلَّا يَجْعَلَ لَهُمْ حَظًّا فِى الْاٰخِرَةِ ۚ وَلَهُمْ عَذَابٌ عَظِيْمٌ ﴿١٧٧﴾

178. 信仰を売って不信を買う者は、アッラーをいささかも害することを能わず。彼等は必ず酷罰を受くべし。

اِنَّ الَّذِيْنَ اشْتَرَوُا الْكُفْرَ بِالْاِيْمَانِ لَنْ يَّضُرُّوا اللّٰهَ شَيْـًٔا ۚ وَلَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿١٧٨﴾

注 165　ヌーアイム・ビン・マスードがひろめた間違った噂の事をさす。

注 166　イスラム教徒達はバドル・アル・スグラで開催されていた年毎にたつ市で、多大な利益を手にして帰国した。

注 167　この語句は、(1)サタンはサタンの友である不信者達の事を、信者達に恐れさせようとした。(2)しかしサタンは自分の計画で恐怖を抱かす事ができたのは不信者のみであった。—という事を意味している。

注 168　イスラム或いは聖なる預言者とその信奉者を迫害しようとする者は、実際には神を冒とくしているのである。何故なら聖なる預言者の大義は、神御自身の大義だからである。

179.　不信心者どもに、われらが彼等に与える執行猶予は、彼等に幸いしていると思わしめるなかれ。われらが彼等に猶予を与えるは、ただ彼等に罪を重ねせしめんがためなり。彼等は必ず屈辱的な懲罰を受くべし。

وَلَا يَحْسَبَنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا أَنَّمَا نُمْلِي لَهُمْ خَيْرٌ لِأَنْفُسِهِمْ ۚ إِنَّمَا نُمْلِي لَهُمْ لِيَزْدَادُوا إِثْمًا ۚ وَلَهُمْ عَذَابٌ مُهِينٌ ﴿١٧٩﴾

180.　アッラーは善人と悪人を区別する時まで、信徒たちを今或る状態に捨て置き給わず。(注 169) また不可見なことをお前たちに啓示し給わず。されどアッラーは欲する者を使徒に選び給う。(注 170) さればアッラー並びに使徒を信ぜよ。お前たち、信じて公正であらば、必ず立派な報奨を受くべし。

مَا كَانَ اللَّهُ لِيَذَرَ الْمُؤْمِنِينَ عَلَىٰ مَا أَنْتُمْ عَلَيْهِ حَتَّىٰ يَمِيزَ الْخَبِيثَ مِنَ الطَّيِّبِ ۗ وَمَا كَانَ اللَّهُ لِيُطْلِعَكُمْ عَلَى الْغَيْبِ وَلَٰكِنَّ اللَّهَ يَجْتَبِي مِنْ رُسُلِهِ مَنْ يَشَاءُ ۖ فَآمِنُوا بِاللَّهِ وَرُسُلِهِ ۚ وَإِنْ تُؤْمِنُوا وَتَتَّقُوا فَلَكُمْ أَجْرٌ عَظِيمٌ ﴿١٨٠﴾

181.　アッラーが授けたる賜物を喜捨するにあたり、物惜しみする物に、そうした方が得だと思わしむるなかれ。然らず、それは彼等のために不利益なり。復活の日に　彼等の首のまわりに　物惜しみせしものを首飾りの如く付けらるるべし。天地の遺産は (注 171) アッラーの所有なり。さればアッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

وَلَا يَحْسَبَنَّ الَّذِينَ يَبْخَلُونَ بِمَا آتَاهُمُ اللَّهُ مِنْ فَضْلِهِ هُوَ خَيْرًا لَهُمْ ۖ بَلْ هُوَ شَرٌّ لَهُمْ ۖ سَيُطَوَّقُونَ مَا بَخِلُوا بِهِ يَوْمَ الْقِيَامَةِ ۗ وَلِلَّهِ مِيرَاثُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۗ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ خَبِيرٌ ﴿١٨١﴾

第十九項

182.　げにアッラーはかくの如く発言する徒輩の言葉を聞けり。「アッラーは貧しく、我等は富めり」われらは彼等が云えること (注 172) 並びに彼等の企てが預言者たちの不当な殺害なることを記録し、且つ云わん、「汝等火炙りの刑を味わえ」と。

لَقَدْ سَمِعَ اللَّهُ قَوْلَ الَّذِينَ قَالُوا إِنَّ اللَّهَ فَقِيرٌ وَنَحْنُ أَغْنِيَاءُ ۘ سَنَكْتُبُ مَا قَالُوا وَقَتْلَهُمُ الْأَنْبِيَاءَ بِغَيْرِ حَقٍّ وَنَقُولُ ذُوقُوا عَذَابَ الْحَرِيقِ ﴿١٨٢﴾

注 169　ここでは、イスラム教徒がくぐってきた試練や困難が今すぐには終わらぬ事を意味している。試練は、真の信者と偽善者や信仰低き者とが完全に識別されるまで続くのである。

注 170　これは、使者の内、ある者は選ばれ、ある者は選ばれないという事を意味しているのではなく、神が、神の使者と定められた者の内から、その特定の時代に最も適したと思われる使者を、お決めになるという意味なのである。

注 171　「遺産」と訳されているミラースは、ここでは所有権の意味を持つ。これは又、人に割りあてられた分との意味でもある。'楽園をつぐ者達'と述べられている 23：12 を参照してみる事。楽園は誰でもつぐ訳ではなく、神からの割り当てとして受け取るものなのである。

183.　こはお前たちの手が先に已れ自身の前に送りたることのため、またアッラーは決してその僕たちを不当に遇せざるためなり。

ذٰلِكَ بِمَا قَدَّمَتْ أَيْدِيكُمْ وَأَنَّ اللّٰهَ لَيْسَ بِظَلَّامٍ لِّلْعَبِيدِ ۝١٨٢

184.　彼等は云えり、「アッラーは我等に、火炎で食い尽される供物をもたらす物に非ずば、如何なる使徒も信ずるなかれと訓めたり」と。(注 173)云え、「すでにお前たちのところへ、我より以前に、使徒たちが明証を携えて、お前たちが求めるところのものを持って来たれり。お前たちの言葉が真実ならば、その時、何故使徒たちを殺害したるか？」と。

الَّذِينَ قَالُوا إِنَّ اللّٰهَ عَهِدَ إِلَيْنَا أَلَّا نُؤْمِنَ لِرَسُولٍ حَتّٰى يَأْتِيَنَا بِقُرْبَانٍ تَأْكُلُهُ النَّارُ ۗ قُلْ قَدْ جَاءَكُمْ رُسُلٌ مِّن قَبْلِي بِالْبَيِّنَاتِ وَبِالَّذِي قُلْتُمْ فَلِمَ قَتَلْتُمُوهُمْ إِن كُنتُمْ صَادِقِينَ ۝١٨٣

185.　もし彼等が汝を嘘つき呼ばわりせるとも、汝以前の使徒たちも嘘つき呼ばわりされている、種々なる明証と詩編と光り輝く経典を携えて来たあの使徒たちも。(注 174)

فَإِن كَذَّبُوكَ فَقَدْ كُذِّبَ رُسُلٌ مِّن قَبْلِكَ جَاءُوا بِالْبَيِّنَاتِ وَالزُّبُرِ وَالْكِتَابِ الْمُنِيرِ ۝١٨٤

186.　人は皆必ず死を (注 175)味わうべし。而して復活の日においてのみ存分に報いらるべし。業火から遠ざけられ、楽園に入らしめられる者は、げに本願成就せる者なり。現世の生活は、ただ空しき享楽に過ぎず。

كُلُّ نَفْسٍ ذَائِقَةُ الْمَوْتِ ۗ وَإِنَّمَا تُوَفَّوْنَ أُجُورَكُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ ۖ فَمَن زُحْزِحَ عَنِ النَّارِ وَأُدْخِلَ الْجَنَّةَ فَقَدْ فَازَ ۗ وَمَا الْحَيَاةُ الدُّنْيَا إِلَّا مَتَاعُ الْغُرُورِ ۝١٨٥

注 172　ユダヤ人が、アッラーの大義の為、富を提供するよう要請された時(3：181)、　イスラム教徒達をあざけって“アッラーは貧乏で我々は金持ちというのか？”と言った。この言葉は、新しい運動に参加しても、支払わねばならない金銭的負担が増すに従い、その事を快よく思わないこの様なけちな人々の心の中をも表わしているのである。

注 173　この節は「火炎で食い尽される供物」についての戒律を守ることは、詐欺師にだってできる事であるから、預言者の真実を試す資格とはならないということを、ユダヤ人に示している。ユダヤ人はそういう供物に関する戒律を守ることが預言者の証と考えていたので、その誤ちを指摘したのである。要求者の真実を示し確立するのは“明快なしるし(「明証」)”のみなのである。しかし、たとえ焼きつくす供物をすることを遵守するのが、真の預言者の資格であったとしても、ユダヤ人に反論を述べる権利などないのである。それに関しての糾弾が、“何故、お前達は決然とこの戒律を守った預言者達を受けいれなかったのだ？”という言葉によって、ユダヤ人に向けられている。

注 174　自分達にもそれぞれの警告と智恵の溢れる言葉の書かれている啓示(黙示)録があるのにかかわらず、イスラエルの預言者達が全員、従ったトーラの事。

注 175　死とは自然の中で最も確実である現象なのに、人々の死に対して、全く無視するか非常に冷淡な態度をとっている、ここでは俗世間の生活を、表面は甘く魅力的にみえても、一旦人がその喜びと利益を求める事に執着しだすと、にがく人をあざむくものである為、幻影であり虚無であると言っている。

187.　お前たちは必ずその財産や人格において試みられるべし。(注 176) またお前たちは、以前に経典を授けられたる人々や、多神教徒からさまざまなるよからぬことを聞かん。されどお前たちが毅然として公正に振る舞わば、それこそ本当に崇高な決意なり。

لَتُبْلَوُنَّ فِي أَمْوَالِكُمْ وَأَنفُسِكُمْ وَلَتَسْمَعُنَّ مِنَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ مِن قَبْلِكُمْ وَمِنَ الَّذِينَ أَشْرَكُوا أَذًى كَثِيرًا ۚ وَإِن تَصْبِرُوا وَتَتَّقُوا فَإِنَّ ذَٰلِكَ مِنْ عَزْمِ الْأُمُورِ ﴿١٨٦﴾

188.　アッラーがかつて、経典を授けられたる人々と契約を結び、(注 177)「お前たちこれを人々に説明し、隠すなかれ」と云える時のことを思い起せ。しかるに彼等は之を背後に投げ捨て、しかもわずかな代価で之を売れり。彼等が買えるものは災いなるかな。

وَإِذْ أَخَذَ اللَّهُ مِيثَاقَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ لَتُبَيِّنُنَّهُ لِلنَّاسِ وَلَا تَكْتُمُونَهُ فَنَبَذُوهُ وَرَاءَ ظُهُورِهِمْ وَاشْتَرَوْا بِهِ ثَمَنًا قَلِيلًا ۖ فَبِئْسَ مَا يَشْتَرُونَ ﴿١٨٧﴾

189.　己れのなせることを喜び、またなさざることで賞讃されることを好む徒輩一かかる者どもが懲罰を逃れられ得ると思うなかれ。彼等は苛酷な懲らしめを受けん。

لَا تَحْسَبَنَّ الَّذِينَ يَفْرَحُونَ بِمَا أَتَوا وَّيُحِبُّونَ أَن يُحْمَدُوا بِمَا لَمْ يَفْعَلُوا فَلَا تَحْسَبَنَّهُم بِمَفَازَةٍ مِّنَ الْعَذَابِ ۖ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿١٨٨﴾

190.　天地の大権はアッラーの所有にして、アッラーは万物の上に権能を握り給う。

وَلِلَّهِ مُلْكُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۗ وَاللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿١٨٩﴾

第二十項

191.　天地の創造、昼夜の交替、その中に在るものは思慮ある人々へのさまざまなる神兆なり。(注 178)

إِنَّ فِي خَلْقِ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَاخْتِلَافِ اللَّيْلِ وَالنَّهَارِ لَآيَاتٍ لِّأُولِي الْأَلْبَابِ ﴿١٩٠﴾

192.　立っても、坐っても、横になっても、絶えずアッラーを念じ、天地の創造について

الَّذِينَ يَذْكُرُونَ اللَّهَ قِيَامًا وَقُعُودًا وَعَلَىٰ جُنُوبِهِمْ

注 176　試練と試行には四重の目的がある。(1)それらにより、心からの確固たる信仰を持つ熱心な信者と、ためらったり信仰が薄かったりする者とが識別される。(2)信仰に熱心な者にとっては精神的発展の手段となる。(3)試練をかいくぐる者は、その際に自分自身の信仰の強さ或いは弱さを知り、それにより自らの行為を正す事が可能になる。(4)試練はそれに価する者にとっては、報酬への資格を確立してくれるものとなる。

注 177　ここで述べられているのは、何ら特定の契約の事ではなく、全ての預言者の信奉者が負う、自分達は神の伝言を説きひろめ、それにかなう様生きるという一般的な契約の事である。

注 178　天地創造と昼夜の入れかわりに潜在する教訓は、人に精神的な面と世俗的な面との発展を目標に創造されたのであり、もし公明正大に行動すれば、暗やみと苦しみの期間の後に、陽光と幸せがやってくるという事である。

思案する者は云う、「主よ、汝はこれを徒に創造せるに非ず。否、汝至聖者よ、我等を業火の刑より救い給え。(注 179)

وَيَتَفَكَّرُونَ فِي خَلْقِ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ رَبَّنَا مَا خَلَقْتَ هَٰذَا بَاطِلًا سُبْحَانَكَ فَقِنَا عَذَابَ النَّارِ ۝١٩١

193. 主よ、汝が業火の中に入らしめんとする者は、汝必ず之を辱しめ給う。而して不義なす者には如何なる救助者もなかるべし。

رَبَّنَا إِنَّكَ مَنْ تُدْخِلِ النَّارَ فَقَدْ أَخْزَيْتَهُ ۖ وَمَا لِلظَّالِمِينَ مِنْ أَنْصَارٍ ۝١٩٢

194. 主よ、我等は、『汝等の主を信ぜよ』と我等を信仰に招くその呼び掛けを聴いて信者となれり。されば主よ、我等の罪を赦し、犯せし数々の悪事を免除し、而して我等を正義者と共に死なしめ給え。

رَبَّنَا إِنَّنَا سَمِعْنَا مُنَادِيًا يُنَادِي لِلْإِيمَانِ أَنْ آمِنُوا بِرَبِّكُمْ فَآمَنَّا ۚ رَبَّنَا فَاغْفِرْ لَنَا ذُنُوبَنَا وَكَفِّرْ عَنَّا سَيِّئَاتِنَا وَتَوَفَّنَا مَعَ الْأَبْرَارِ ۝١٩٣

195. 主よ、汝の使徒たちを通して我等に約束せるものを与え給え。而して復活の日において、我等を辱しめるなかれ。げに汝は約束を破らず」と。

رَبَّنَا وَآتِنَا مَا وَعَدْتَنَا عَلَىٰ رُسُلِكَ وَلَا تُخْزِنَا يَوْمَ الْقِيَامَةِ ۗ إِنَّكَ لَا تُخْلِفُ الْمِيعَادَ ۝١٩٤

196. そこで主は、彼等の祈りに応えて、云えり、「わしはお前たちのうち、男女を問わず、働き者のその働きを空しくせざるべし。お前たちはお互い同士、男も女も隔てなし。(注 180)彼等家郷を追われ移住したる者、わしのために迫害をうけ、奮戦し斃れたる人々、わしは彼等よりその罪を消滅して、河川流れる楽園に入らしめん。これぞアッラーよりの報奨なり。げに最も素晴らしき報奨は、アッラーの許にあり」と。

فَاسْتَجَابَ لَهُمْ رَبُّهُمْ أَنِّي لَا أُضِيعُ عَمَلَ عَامِلٍ مِنْكُمْ مِنْ ذَكَرٍ أَوْ أُنْثَىٰ ۖ بَعْضُكُمْ مِنْ بَعْضٍ ۖ فَالَّذِينَ هَاجَرُوا وَأُخْرِجُوا مِنْ دِيَارِهِمْ وَأُوذُوا فِي سَبِيلِي وَقَاتَلُوا وَقُتِلُوا لَأُكَفِّرَنَّ عَنْهُمْ سَيِّئَاتِهِمْ وَلَأُدْخِلَنَّهُمْ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ ثَوَابًا مِنْ عِنْدِ اللَّهِ ۗ وَاللَّهُ عِنْدَهُ حُسْنُ الثَّوَابِ ۝١٩٥

注 179 前節で暗喩の施されている偉大なる秩序は当然ながらはっきりとした目的なしに存在する事はないのである。全宇宙が人間の為に創造されているのだから、その人間自身の創造には偉大な目的がなくてはならないのである。人が宇宙創造の物理的現象中に存在する精神上の暗示や、宇宙にあまねくゆきわたっている完全なる秩序に思いをめぐらす時、人は神の偉大な、えい智に深く印象づけられ、己れの最も奥深い底から、"主よ、あなたはいたずらにこの宇宙をおつくりになったのではありません" との叫びがわきおこるのである。

注 180 当章ではキリスト教の教理や理想、そしてその生活様式を語っており、キリスト教教会はそうではないと主張しているにもかかわらず、キリスト教では女性の地位が男性の地位に比し完全に下位である為、教会内部の女性の地位の内容もそれに準ずる結果となっている。「お前たちはお互い同士」という言葉は、男女両方の地位の内容を強調する為のものである。

197.　汝、不信心者どもが我がもの顔に地上を闊歩する様を見て、これに欺かれるなかれ。(注 181)

لَا يَغُرَّنَّكَ تَقَلُّبُ الَّذِينَ كَفَرُوا فِي الْبِلَادِ ﴿١٩٧﴾

198.　それはしばしの優越に過ぎず。いずれ地獄が彼等の住居とならん。そはおぞましき臥所（ふしど）なり。(注 182)

مَتَاعٌ قَلِيلٌ ثُمَّ مَأْوَاهُمْ جَهَنَّمُ ۚ وَبِئْسَ الْمِهَادُ ﴿١٩٨﴾

199.　されど主を畏れ敬う者には、河川流れる楽園あり。彼等その中に永久（とこしえ）に住まん－こはアッラーよりの歓待なり。正義者のためにアッラーの許（もと）にあるものは、最も素晴らしきものなり。

لَٰكِنِ الَّذِينَ اتَّقَوْا رَبَّهُمْ لَهُمْ جَنَّاتٌ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا نُزُلًا مِنْ عِنْدِ اللَّهِ ۗ وَمَا عِنْدَ اللَّهِ خَيْرٌ لِلْأَبْرَارِ ﴿١٩٩﴾

200.　また経典の民の中にも、アッラーを信じ、お前たちに降（くだ）されたるもの並びに自分たちに降（くだ）されたるものを信じ、アッラーの御前で自らへりくだる者あり。彼等はアッラーの神兆（しるし）をわずかな代価で売り渡さず。これ等の人々は必ず主の御許（みもと）で報奨を受けん。げにアッラーの清算は敏速なり。(注 183)

وَإِنَّ مِنْ أَهْلِ الْكِتَابِ لَمَنْ يُؤْمِنُ بِاللَّهِ وَمَا أُنْزِلَ إِلَيْكُمْ وَمَا أُنْزِلَ إِلَيْهِمْ خَاشِعِينَ لِلَّهِ لَا يَشْتَرُونَ بِآيَاتِ اللَّهِ ثَمَنًا قَلِيلًا ۗ أُولَٰئِكَ لَهُمْ أَجْرُهُمْ عِنْدَ رَبِّهِمْ ۗ إِنَّ اللَّهَ سَرِيعُ الْحِسَابِ ﴿٢٠٠﴾

201.　汝等信徒たちよ、忍耐強くあれ。忍耐を互いに競い合え。敵を用心せよ。幸いなるためにアッラーを畏れ敬え。(注 184)

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اصْبِرُوا وَصَابِرُوا وَرَابِطُوا وَاتَّقُوا اللَّهَ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ﴿٢٠١﴾

注 181　聖なる預言者の時代にあてはまるだけでなく、この節は、現在の、目がくらむ程の生活のあらゆる面に於るキリスト教国家の物質的繁栄にもあてはまる。そしてイスラム教徒には、一時のうつろう発展のまばゆさに、だまされたり、心が弱くなったりせぬ様、警告が為されている。

注 182　キリスト教国家の繁栄は一時的なものにすぎず、この節では、実際もう始まりかけており、更に彼らに与えられるであろう、恐しい懲罰がほのめかされている。

注 183　不信者に対して、「神の清算は敏速なり」という表現が使われる場合は、神は判断を下し懲罰を与えるのが早いとの意味であり、信者に対して使われる場合は、決着をつけ、報酬を与えられるのが早いとの意味である。

注 184　この節で述べられている成功に必要な五項目は以下の通りである。
(1)忍耐力と心のゆるぎなさを鍛練する、
(2)敵よりも、より忍耐強く確固たる信念を持つ、
(3)自分の所属する社会と宗教に、たゆみなく勤勉に奉仕する、
(4)辺境地に、攻撃と防御の両方に備えるため、常時用心深く見張りを置いておく事、
(5)公明正大な生活を送る事、「用心」とは、また人間の心の事を意味しており、信仰を持つ者は、常に、心の内なる敵と外なる敵の両方といつでも戦える状態にいなければならない、ということである。

سُورَةُ النِّسَاءِ مَدَنِيَّةٌ (٤)

アル・ニサー
（メディナ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ①

2．汝等人々よ、お前たちの主を畏れ敬え。主は一人の人間から（注1）お前たちを創造し、その一部より（注2）配偶者を創造し、その彼等両名より多くの男女を殖やしたり。お前たちその御名によって互に頼みごとを請い求めるアッラーを畏れ敬え。とりわけ血族関係の絆を重んずる（注3）アッラーを畏れ敬え。げにアッラーは常にお前たちを監視し給う。

يَا أَيُّهَا النَّاسُ اتَّقُوا رَبَّكُمُ الَّذِي خَلَقَكُم مِّن نَّفْسٍ وَاحِدَةٍ وَخَلَقَ مِنْهَا زَوْجَهَا وَبَثَّ مِنْهُمَا رِجَالًا كَثِيرًا وَنِسَاءً ۚ وَاتَّقُوا اللَّهَ الَّذِي تَسَاءَلُونَ بِهِ وَالْأَرْحَامَ ۚ إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَلَيْكُمْ رَقِيبًا ②

3．孤児に（注4）その財産を与えよ。お前たちの悪いものを以て、彼等の良いものと換えるなかれ。彼等の財産をお前たちのに合せてむさぼり食うなかれ。そは大罪なり。

وَآتُوا الْيَتَامَىٰ أَمْوَالَهُمْ ۖ وَلَا تَتَبَدَّلُوا الْخَبِيثَ بِالطَّيِّبِ ۖ وَلَا تَأْكُلُوا أَمْوَالَهُمْ إِلَىٰ أَمْوَالِكُمْ ۚ إِنَّهُ كَانَ حُوبًا كَبِيرًا ③

注1　「一人の人間」（又は一つの魂）の意味するものは、(1)アダム　(2)男と女を一体とみなした意。これは、二者が共に一つの業を行う時、二体は一体として語られるからである。(3)男と女を別物とみなした意。個々の人間はすべて。一人の人間である男の種から創られ、又同様に一人の人間である女から生まれるという意味において、人間は「一人の人間」から創られた、と言えるからである。

注2　この言葉は、女が男の肉体から造られたと言っているのではなく、女も男と同じ種に属するものであり、良きにつけ悪しきにつけ同じ傾向を持っていると言っているのである。イブが、アダムの肋骨から造られたという考えは、聖なる預言者の言葉から出てきたようである。聖なる預言者の言葉とは「女達は肋骨から造られた。それ故、確かに肋骨の最も曲がっている部分が最高の部分なのである。もし、そこを自分で真っ直ぐに伸ばそうとすれば、折れてしまうだろう。」というものである。（ブハリ、ニカー書）この聖なるなる預言者の言葉は、比喩的に用いられている。なぜなら、ここではイブの名をあげることなく、すべて女というものについて述べられているからである。そしてすべての女が肋骨から造られたわけではないことは明白だからである。

注3　この節は「神への畏敬」と「親族の絆の尊重」を並列に置いている。こうして，親族を大事にすることの重要性を強調しているのである。親族との関係は、クルアーンも大いに強調しているところである。聖なる預言者は、結婚式の説教には、相手に対する義務を双方に思い起こさせるために、この節を引用するのであった。

注4　前節で、神の二つの恩恵、即ち一つの魂から多くの男と女を生み殖やしたこと、親族の絆を強くすることにより滅亡しないよう保護してくれることの二つを語った後に、クルアーンは更に孤児の権利と利益を保護することにより、子孫を守る必要性を強調している。

4．もしお前たち孤児を公正に扱い得ざる恐れある場合、良しと思う女を娶るがよい、(注5) 二人なり、三人なり、四人なり。されど、もし公平に扱い得ざるを恐れなば、ただ一人の女か、或いはお前たちの右手が所有するものを娶れ。(注6)こは不公平を避けるための一番の近道なり。

وَإِنْ خِفْتُمْ أَلَّا تُقْسِطُوا فِي الْيَتَامَىٰ فَانكِحُوا مَا طَابَ لَكُم مِّنَ النِّسَاءِ مَثْنَىٰ وَثُلَاثَ وَرُبَاعَ ۖ فَإِنْ خِفْتُمْ أَلَّا تَعْدِلُوا فَوَاحِدَةً أَوْ مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُكُمْ ۚ ذَٰلِكَ أَدْنَىٰ أَلَّا تَعُولُوا ﴿٤﴾

注5　この節は、ある特定の状況のもとで、一夫多妻を許している点で重要である。イスラム教は、一人の男が妻を一度に四人まで持つことを許している。(そうするよう指示したり、奨励しているのでは決してない。)これは、孤児に関して許されているのであるから、社会の中で無視されている階層をどうするかという問題にまずその源があると理解すべきである。状況によっては、特に女捕虜や、他の普通の女性と結婚することによってのみ、孤児の利益が守られる場合もあるのだ。この節では、一夫多妻を孤児の問題との関連で語っているが、これが、社会的、道徳的な悪に対し必要な処方となりうる場合も起こってくるであろう。もし、結婚そのものの目的のみを考えても、こうした事が許されるのは正当であるばかりでなく、時には望ましいことであり、必要でさえあると思われる。それどころか、こうした場合、一夫多妻を拒否してしまうと、個人や社会の最良の利益に本当に反することになるかもしれない。クルアーンによれば、結婚の目的は四つあるという。即ち、(1)肉体的、道徳的、精神的弊害の防御(2：188 ；4：25) (2)心の平和と愛する相手がいるということの大切さ、(30：22)　(3)子供を生むこと、そして(4)親族の輪を広げること、(4：2)である。さて、妻が一人の場合、上に述べた結婚の四つの目的のうち、一つあるいは四つ共果たされないことも時々ある。たとえば、妻が不治の病や伝染病にかかった場合、もし妻が一人であれば、結婚の目的は確かに打ち砕かれてしまう。実際、その男には、もう一つ合法的な結婚をするか、欲情に負け不道徳な生活を送る以外、残された道はないのである。そして、病を患う妻は、良き伴侶ではあり得ない。なぜなら、彼女がいかに心に懸け同情するに値しようとも、彼女と一緒の生活は、夫に、あらゆる点において心の平和を与えることはできないからである。同様に、もし妻が産まず女であった場合には、自分の後を継ぎ、自分の名を受け継いでいく子孫を欲する夫の自然で全く正当な願望は、一夫多妻制なくしてはかなえられないのである。イスラム教が、複数の婚姻関係を許しているのは、こうした事情に対処するためなのである。しかし、上のどの場合でも、もし夫が最初の妻と離婚するとすれば、それは彼の恥じであり不名誉となるのである。実際のところ、一夫多妻制の目的は、ある程度、一夫一妻制の目的と同じである。一夫一妻の結婚の目的のうちの一つ、あるいはすべてが満たされない時にのみ初めて一夫多妻が必要となるのである。しかし、時には、男が一人の妻を本当に愛し、それで結婚の目的が十分満たされている場合でも、もう一人あるいはそれ以上の妻を持つことが必要となるような理由が他にあるのだ。その理由とは、(1)父のない孤児の庇護、(2)まだ年若くして未亡人になってしまった女に再婚の道を開くこと、(3)家族、社会の中で少なくなってしまった男を補うこと、である。ここに述べられている節から、一夫多妻制は、特に、何の保護もなく残された父のない子を庇護するために必要とされていることが明白である。こうした父のない子の母は、ある男の庇護のもとにいるのであれば、彼と結婚するのがよい。そうすれば、彼は、その子や母と直接に結びつき、もっと密接な親戚関係となって、結婚していない時よりも、もっと彼らの幸福に心を砕くようになるであろう、とこの節は示唆している。未亡人を再婚させること（24：33）は、一夫多妻制が果たすもう一つの目的である。イスラム教徒は、聖なる預言者の時代には、戦いに明けくれていた。多くの人が戦争で倒れ、後に、面倒を見てくれる近い親族もいない未亡人と父のない子が残された。戦争の必然の結果であるが、男より女の数が多く、また、面倒をみる人もない父のない子が非常に多くなったことから、イスラム社会を道徳的腐敗から守るため、一夫多妻制を奨励することが必要となったのである。一夫多妻制は、若い未亡人を再婚させるという付随的な理由の外に、戦争勃発後、種々の面の衰弱と共に国内の男の数が激減し、国の存亡が危ぶまれるほどになるという深刻な状況に対処するための策でもあった。民族衰微の大きな原因となる出生率の低下が生じた場合は、一夫多妻制を取り入れることによって、効果的に出生率の低下をくい止めることができるのである。一夫多妻制は、誤解されているような性的欲情のはけ口ではない。男にも女に

も同様に犠牲を要求しているのである。男も女も、個人的また当座の感情より、もっと広い社会的あるいは国家的利益を優先させるよう要求されているのである。

注６　「お前達の右手が所有するもの」という表現は、一般的には、イスラム教滅亡を謀る戦いに参加して、イスラム教徒に捕えられ、結局、自ら自分の自由を失ってしまった女捕虜、身代金も支払われない女の戦争捕虜の意である。この言葉は、クルアーンの中では「イバードやイマー」（男の召し使いと女の召し使い）という言葉よりよく用いられ、ミルク・ヤミーン（右手が所有するもの）という言葉は男女両方を意味する。この言葉は、奴隷や召し使いの意も含んだ言葉であり、ある特定の場合、この言葉が何を意味しているかは、文脈からのみ判断できるのである。「彼らの右手が持っている」という表現が、何を意味しているのか、また、これが適用される人の権利や資格については、多くの誤解が広まっている。イスラム教は、明確な言葉で奴隷制を非難している。それによれば、人間から自由を奪うことは、その人間がイスラム教やイスラム教国を滅亡させようとする戦いに加わって、自ら自分の自由を失うことになるのでなければ、それは、道徳的罪なのである。奴隷の売買もまた重大な罪である。クルアーンは、奴隷制を速やかに完全廃止するために、次のような非常に厳しい規制を定めている。(1)正規の戦闘の後にのみ、敵を捕虜にしうる。(2)捕虜は戦争が終結した後は解放しなければならない。しかし、(3)友好の証として、あるいは捕虜の交換により自由の身にすべきである。（47：５）しかし、これらのどちらの方法でも解放されなかった不運な人々と、あるいはイスラム教徒の主人のもとに留まることを望んだものは、その主人とムカータバと呼ばれる契約を結ぶことにより、自由を獲得することができる。（24：34）さて、もしある女が、上に言うような戦争中に捕虜となり、自由を奪われてミルク・ヤミーンとなったとする。そして、捕虜の交換で解放されることもならず、政府の事情も、友好のあかしとして彼女を即、解放することを許さず、彼女の同胞も政府も彼女のために身代金を払ってはくれず、彼女もムカータバを結んで、自分の自由を手に入れようとさえしないとする。そうして、彼女を捕虜としている者が、道徳的理由から、秩序を守るため彼女の事前の承諾なしで、彼女と結婚するということになるとすれば、この成り行きは、どうして好ましくないものと言えるだろうか。戦争で捕虜となった女や、奴隷の女と、結婚はしないまま性関係を持つことについては、この節でもクルアーンの他のどの節でも認めてはいない。クルアーンは、戦争捕虜の女を、正式に婚姻関係を結んでいない状態で妻のように扱うことを許していないばかりでなく、こうした戦争捕虜とも自由な女と同様、妻のような関係を持つためには、結婚しなければならないと明確に述べている。二者の唯一の違いは、社会的地位がその時点では異なっているということである。つまり、戦争捕虜の女の、結婚に対する事前の承諾は、自由な女の場合のようには必要がないとされたのである。彼女達は、反イスラムの戦争に加わったことにより、こうした権利は失ってしまっているのである。女捕虜について「右手が所有」しているというのはイスラム教が内縁関係を認めているという見解とは全く異なっているとクルアーンは述べている。この節以外にも少なくとも四つの節において、明瞭明白な言葉で、戦争捕虜の女は結婚するべきであると指示されている。（２：222；４：４；４：26；24：33）聖なる預言者もこの点について非常に明確に述べている。「奴隷の少女を所有している者、彼女に適切な教育を与え、うまく育てあげ、それから彼女に自由を与えて結婚する者、その者は二重に報われる。」（ブハリ・アルイルム書）この聖なる預言者の言葉は、「もしイスラム教徒が奴隷の少女を妻にしたいと思うなら、彼はまず彼女を自由の身にし、それから結婚すべきである。」と言っているのである。聖なる預言者自身の行動も、この教えにすっかり一致している。聖なる預言者の妻のうちジュベリヤとサフィヤの二人は戦争捕虜として彼のもとへやって来た。彼らは、聖なる預言者のミルク・ヤミームであった。しかし、彼はイスラム教の法に従って、彼女らと結婚したのである。彼はまた、エジプト王から彼のところに送られてきたマーリヤとも結婚している。そして、彼女も、預言者の他の妻たちと同様に、自由な妻の立場を満喫したのである。彼女はヴェールの着用を守り「信者達の母」の一人とされた。クルアーンは結婚に叔父、叔母の娘たちに適用されるのと同様に、「汝らの右手が所有する者」にも適用されることを明らかにしている。両者共、結婚した後に、妻として遇せられるべきである。先にあげた三人の場合共、結婚することによって聖なる預言者に対し正式のものとなったのである（33：51）。更に「そして『汝の右手が所有する者』以外は、既婚の女は、汝に許されてはいない」（４：25）という句は、前節と共に、男がどういう女と結婚すると違法となるかについて語っており、既婚の女は、こうした例の一つだというのである。しかし、例外が一つ設けてある。それは、既婚であっても、宗教戦争で捕虜となり、その後イスラム教徒の中に残ることを

5．而して女たちには婚資を快く与えよ。されど、もし彼女たち自らその一部を返すならば、喜んで有難く頂戴せよ。

وَآتُوا النِّسَاءَ صَدُقَاتِهِنَّ نِحْلَةً ۚ فَإِن طِبْنَ لَكُمْ عَن شَيْءٍ مِّنْهُ نَفْسًا فَكُلُوهُ هَنِيئًا مَّرِيئًا ⑤

6．アッラーが扶養のためにお前たちに託したる財産を、（注７）愚か者に与えるなかれ。その財産で彼等に衣食を給し、且つ優しい言葉で彼等に語れ。

وَلَا تُؤْتُوا السُّفَهَاءَ أَمْوَالَكُمُ الَّتِي جَعَلَ اللَّهُ لَكُمْ قِيَمًا وَارْزُقُوهُمْ فِيهَا وَاكْسُوهُمْ وَقُولُوا لَهُمْ قَوْلًا مَّعْرُوفًا ⑥

7．婚期に達するまで孤児を試みよ。もし健全な判断を（注８）彼等に認めなば、その財産を彼等に渡すべし。孤児が成長せざるうちに、急いで之を浪費するなかれ。（注９）後見人が富者ならば之に手を触れさせず、貧しき者なれば公正を以って之を利用せし

وَابْتَلُوا الْيَتَامَىٰ حَتَّىٰ إِذَا بَلَغُوا النِّكَاحَ فَإِنْ آنَسْتُم مِّنْهُمْ رُشْدًا فَادْفَعُوا إِلَيْهِمْ أَمْوَالَهُمْ ۖ وَلَا تَأْكُلُوهَا إِسْرَافًا وَبِدَارًا أَن يَكْبَرُوا ۚ وَمَن كَانَ غَنِيًّا فَلْيَسْتَعْفِفْ

選んだ女は、その主人と結婚できるというのである。彼女達が、前夫のもとに戻らないと決心したことは、前の結婚は無効となったとみなされたのである。ついでながら、結婚が禁止されている間柄の自由な女の親族と同じように、（こうした）召し使い女の親族とは、結婚することが許されていない。たとえば、奴隷であった妻の母や姉妹、娘などとは結婚できない。さらに、その当時の状況を考慮して、クルアーンでは、女の二つの階級の社会的地位をそれぞれ区別しなければならなかった。その区別はザウジュ（結婚した自由な女）とミルク・ヤミーン（もと捕虜であったが結婚した女）の二つの言葉で表現された。前者は夫婦が平等であり、後者は妻がいくらか劣った地位にあることを示唆している。しかし、それは一時的な面であった。クルアーンも聖なる預言者も、捕虜の女に、丁度聖なる預言者が実行したように、まず完全な自由と十分な地位を与え、しかる後に結婚すべきであると強く勧告している。また、イスラム教は通常の戦いで女を捕虜とすることを許してはいない。そして、捕虜との結婚が、彼女の事前の承諾なしで許されるのは次のような時のみである。聖なる預言者の頃、敵国がイスラム教を滅亡させようと、また剣の力でイスラム教徒にその信仰を捨てさせようと、反イスラムの宗教戦争をしかけ、イスラムの男や女を捕虜にして連れ去り、奴隷として扱ったことがあり、その時は、イスラム側も一時的に報復をゆるされた。しかしイスラム教のこうした指示は、単なる報復であり、本来、一時的なものである。それにはまた、捕虜となった女の身もちを守るという補足的な目的もあった。こうした状況は、現在は、もはや存在しない。現在は、宗教戦争はなくなっている。従って、戦争捕虜が奴隷や召使として扱われるということもないのである。

注７　この節においては、孤児の保護者は彼らの財産を使うに当たっては、注意深く自分自身の財産のように大切に扱わねばならないと示唆している。「お前たちに託したる財産」という言葉は、「彼らの管理下にある孤児の財産」という意でもある。また、この節においては、その財産が孤児のものであろうが、孤児の保護者のものであろうが、財産すべての意で使われているという解釈も可能である。

注８　孤児が、相応の年令となり、知的に十分成長して自分の財産を管理し、運用できるようになるまでは、いかなる場合も、彼らの財産が彼らに任されることはない。

注９　この節は、保護者たちに、孤児が財産を管理できるようになるまでに、孤児たちの財産を、軽はずみに浪費してしまわないよう警告している。しかし、もし保護者が貧しければ、適当額を賃金としてもらうことは許されている。その額は彼の仕事の量に比例する。

めよ。而(しか)して彼等の財産を返還する時は、必ず証人を立てよ。(注10)アッラーは清算者たるに十分なり。

وَمَنْ كَانَ فَقِيرًا فَلْيَأْكُلْ بِالْمَعْرُوفِ ۚ فَإِذَا دَفَعْتُمْ إِلَيْهِمْ أَمْوَالَهُمْ فَأَشْهِدُوا عَلَيْهِمْ ۚ وَكَفَىٰ بِاللَّهِ حَسِيبًا ⑦

8．男子は、両親及び近親の遺産の一部を得る。女子もまた、両親及び近親の遺産の一部を得る。遺産の多少を問わず一定められたる分与を得るなり。(注11)

لِلرِّجَالِ نَصِيبٌ مِمَّا تَرَكَ الْوَالِدَانِ وَالْأَقْرَبُونَ وَلِلنِّسَاءِ نَصِيبٌ مِمَّا تَرَكَ الْوَالِدَانِ وَالْأَقْرَبُونَ مِمَّا قَلَّ مِنْهُ أَوْ كَثُرَ ۚ نَصِيبًا مَفْرُوضًا ⑧

9．遺産の分配に際して、遠い親戚や孤児並びに貧者がその場にある場合は、その中から何がしかを彼等に与え、且つ優しい言葉で彼等に語れ。(注12)

وَإِذَا حَضَرَ الْقِسْمَةَ أُولُو الْقُرْبَىٰ وَالْيَتَامَىٰ وَالْمَسَاكِينُ فَارْزُقُوهُمْ مِنْهُ وَقُولُوا لَهُمْ قَوْلًا مَعْرُوفًا ⑨

10．もし彼等が自分の後にひ弱な子女を遺し、そのために気懸りであるならば、彼等をしてアッラーを畏れ敬い、正しい言葉を語らせしめよ。(注13)

وَلْيَخْشَ الَّذِينَ لَوْ تَرَكُوا مِنْ خَلْفِهِمْ ذُرِّيَّةً ضِعَافًا خَافُوا عَلَيْهِمْ فَلْيَتَّقُوا اللَّهَ وَلْيَقُولُوا قَوْلًا سَدِيدًا ⑩

11．不当に孤児の財産を貪(むさぼ)り食う徒輩(やから)は、自分の腹の中に火を呑み込むが如し。やがて彼等は燃え盛る火に焼かれるべし。

إِنَّ الَّذِينَ يَأْكُلُونَ أَمْوَالَ الْيَتَامَىٰ ظُلْمًا إِنَّمَا يَأْكُلُونَ فِي بُطُونِهِمْ نَارًا ۖ وَسَيَصْلَوْنَ سَعِيرًا ⑪

第二項

12．アッラーはお前たちの子女に関して、お前たちにかく命じたり。男子は女子二人分に相当する分与を受く。もし女子のみで、二人以上の場合は、故人の遺産の三分の二を受く。女子が一人なら、その半分を受く。また彼の両親は、(注14)彼に遺児ある場合

يُوصِيكُمُ اللَّهُ فِي أَوْلَادِكُمْ ۖ لِلذَّكَرِ مِثْلُ حَظِّ الْأُنْثَيَيْنِ ۚ فَإِنْ كُنَّ نِسَاءً فَوْقَ اثْنَتَيْنِ فَلَهُنَّ ثُلُثَا مَا تَرَكَ ۖ وَإِنْ كَانَتْ وَاحِدَةً فَلَهَا النِّصْفُ ۚ وَلِأَبَوَيْهِ لِكُلِّ

注10　財産は、信頼できる証人の立ち会いのもとで、孤児が大きくなったとき、彼に渡されるべきである。

注11　この節は、相続についてのイスラム教の法の基本となっている。これは、男女の社会的平等の一般原則を示しているのである。両者共、各々にふさわしい財産の分配を受ける資格を有しているのである。詳細な規則は次の節で述べられている。

注12　他の親戚、孤児、貧しい人々という言葉は、ここでは、故人の合法的な相続人ではなく、故人の財産分与を受ける資格のない遠い親戚、孤児、貧乏人のことをいっている。この節では、彼らに合法的な相続権を与えてはいないが、財産分与の遺言書を作る時に、財産の一部をこうした人々のためにとっておくようイスラム教徒達に強く説いているのである。

注13　この節は、孤児たちのための、説得力ある非常に強力な呼びかけとなっている。

注14　父と母の両方

は、それぞれ遺産の六分の一ずつを受く。されど遺児なく両親がその相続者である場合は、母親は三分の一を受く。もし彼に兄弟姉妹（けいていしまい）がある場合は、母親は、彼が遺言（ゆいごん）して遺贈したであろう分と負債を支払いたる後、六分の一を受く。父母と子女（こどもら）、お前たちは彼等のどちらが自分にとって、より有益かを知らざるなり。この分配の決りは、アッラーより出ず。げにアッラーはすべてを知り、賢哲にましします。（注 15）

وَاحِدٍ مِّنْهُمَا السُّدُسُ مِمَّا تَرَكَ إِن كَانَ لَهُ وَلَدٌ ۚ
فَإِن لَّمْ يَكُن لَّهُ وَلَدٌ وَوَرِثَهُ أَبَوَاهُ فَلِأُمِّهِ الثُّلُثُ ۚ
فَإِن كَانَ لَهُ إِخْوَةٌ فَلِأُمِّهِ السُّدُسُ مِن بَعْدِ وَصِيَّةٍ
يُوصِي بِهَا أَوْ دَيْنٍ ۗ آبَاؤُكُمْ وَأَبْنَاؤُكُمْ لَا تَدْرُونَ
أَيُّهُمْ أَقْرَبُ لَكُمْ نَفْعًا ۚ فَرِيضَةً مِّنَ اللَّهِ ۗ إِنَّ اللَّهَ كَانَ
عَلِيمًا حَكِيمًا ﴿١٢﴾

13. もし妻に子がない場合は、お前たちは妻の遺せるものの半分を受く。されどもし子がある場合は、彼女が遺言（ゆいごん）して遺贈したであろう分と負債を支払いたる後、彼女が遺せるものの四分の一を受く。もしお前たちに子がない場合は、妻はお前たちが遺したものの四分の一を受く。されど、もしお前たちに子がある場合は、妻は、お前たちが遺言（ゆいごん）して遺贈したであろう分と負債を支払いたる後、お前たちが遺せるものの八分の一を受く。もし男でも女でもその遺産が分配される場合、彼また彼女に両親も子もなく、（注 16）一人の兄か弟、または一人の姉か

وَلَكُمْ نِصْفُ مَا تَرَكَ أَزْوَاجُكُمْ إِن لَّمْ يَكُن لَّهُنَّ
وَلَدٌ ۚ فَإِن كَانَ لَهُنَّ وَلَدٌ فَلَكُمُ الرُّبُعُ مِمَّا تَرَكْنَ
مِن بَعْدِ وَصِيَّةٍ يُوصِينَ بِهَا أَوْ دَيْنٍ ۚ وَلَهُنَّ الرُّبُعُ
مِمَّا تَرَكْتُمْ إِن لَّمْ يَكُن لَّكُمْ وَلَدٌ ۚ فَإِن كَانَ لَكُمْ وَلَدٌ
فَلَهُنَّ الثُّمُنُ مِمَّا تَرَكْتُم مِّن بَعْدِ وَصِيَّةٍ تُوصُونَ
بِهَا أَوْ دَيْنٍ ۗ وَإِن كَانَ رَجُلٌ يُورَثُ كَلَالَةً أَوِ امْرَأَةٌ
وَلَهُ أَخٌ أَوْ أُخْتٌ فَلِكُلِّ وَاحِدٍ مِّنْهُمَا السُّدُسُ ۚ فَإِن

注 15　この節では、性別や生まれた順に関係なく、すべての近親者に対する死者の財産の適切な配分を規定している。子供達、両親、夫、妻が、生存していれば、どんな場合にも相応の配分を受ける主要な相続者であり、その他の親族は、特別な場合のみその資格を有するのである。男は家族を支える責任を持つ故に、男の相続分は女の二倍である。この節では、まず、息子と娘の相続の割合を定めている。息子は娘の二人分を相続するのである。息子と娘、両方いる時には、この規定が有効となる。しかし、娘たちだけで息子がいない場合、娘が二人以上であれば、遺産の２／３を彼女たちに、もし娘が一人であれば、１／２を割り当てている。この節では、両親の相続分については三つの場合を述べている。(1)ある人が、一人あるいは複数の子供を残して死んだ場合、その人の両親は各々１／６の配分を受ける。(2)もし亡くなった人に子供がなく、両親のみが相続人の場合（死者に妻あるいは夫がいない場合）には、母親が財産の１／３を相続し、あとの２／３は父親のものとなる。(3)第三の場合は第二の例の例外である。死した人に子がなく両親のみが相続者であるが、その死者に兄弟姉妹がいる場合である。この時、彼の兄弟たちが、彼から相続することはないが、両親への配分に影響を与えることになる。というのは、この場合、母親は１／６を相続し（第２の場合に１／３であったのと異なる）あとの５／６は父親のものとなる。この場合に、父親が相続する割合が多いのは、父親が死者の兄弟姉妹も扶養しなければならないからである。相続については次の節でも述べられている。

注 16　カラーラ（両親も子もない人）は(1)男であれ女であれ、死した後、親も子もどちらもいない人、(2)父と息子がいない人のことである。イブン・アッバスによれば、カラーラは、その人の父は生きていてもいない

妹がある場合は、各自遺産の六分の一を受く。されどそれ以上の人数にならば、遺言(ゆいごん)して遺贈したであろう分と負債を支払いたる後、彼等は均等に三分の一の分配を受く。みなこれは何人(なんぴと)にも損害を与えざるべし。こはアッラーより出でたる命令なり。アッラーは賢哲にして、寛容者にまします。

كَانُوٓا أَكْثَرَ مِن ذَٰلِكَ فَهُمْ شُرَكَآءُ فِى ٱلثُّلُثِ مِنۢ بَعْدِ وَصِيَّةٍ يُوصَىٰ بِهَآ أَوْ دَيْنٍ غَيْرَ مُضَآرٍّ وَصِيَّةً مِّنَ ٱللَّهِ وَٱللَّهُ عَلِيمٌ حَلِيمٌ ﴿١٣﴾

14. これ等はアッラーによりて立てられたる定律なり。誰であれアッラーとその使徒に従う者は、アッラーが河川流れる楽園へ入らしめん。その中に永久(とこしえ)に彼等は住まん。そは大成功なり。

تِلْكَ حُدُودُ ٱللَّهِ وَمَن يُطِعِ ٱللَّهَ وَرَسُولَهُۥ يُدْخِلْهُ جَنَّٰتٍ تَجْرِى مِن تَحْتِهَا ٱلْأَنْهَٰرُ خَٰلِدِينَ فِيهَا وَذَٰلِكَ ٱلْفَوْزُ ٱلْعَظِيمُ ﴿١٤﴾

15. されど誰であれアッラーとその使徒に背き、その定律を破る者は、業火(ごうか)に投ぜられ、永劫(えいごう)にその中に住み、屈辱的な懲罰を受けん。

وَمَن يَعْصِ ٱللَّهَ وَرَسُولَهُۥ وَيَتَعَدَّ حُدُودَهُۥ يُدْخِلْهُ نَارًا خَٰلِدًا فِيهَا وَلَهُۥ عَذَابٌ مُّهِينٌ ﴿١٥﴾

第三項

16. お前たちの妻がけしからぬ行いを（注17）したる場合は、四名の証人を喚(よ)べ。もし彼等立証しなば、彼女が死に至るまで、またはアッラーが何か別の道を講ずるまで彼女を家に軟禁せよ。

وَٱلَّٰتِى يَأْتِينَ ٱلْفَٰحِشَةَ مِن نِّسَآئِكُمْ فَٱسْتَشْهِدُوا عَلَيْهِنَّ أَرْبَعَةً مِّنكُمْ فَإِن شَهِدُوا فَأَمْسِكُوهُنَّ فِى ٱلْبُيُوتِ حَتَّىٰ يَتَوَفَّىٰهُنَّ ٱلْمَوْتُ أَوْ يَجْعَلَ ٱللَّهُ لَهُنَّ سَبِيلًا ﴿١٦﴾

としても、息子がいない人であるという。この解釈は、この言葉の三つ目の意味と考えてよいだろう。カラーラの兄弟姉妹は三つの項目に分かれる。第一は、本当の兄弟姉妹、即ち、両親が同じ者（こうした兄弟姉妹は専門的にはアヤーニーと呼ばれる）第二は、父方だけの兄弟姉妹である。（専門的にはアラーティーと呼ぶ）、第三に母方だけの兄弟姉妹で、父親が死者の父とは異なる場合である。（専門的にはアハヤーフィーと呼ぶ）。この節中の規定が関係するのは、この最後の項である。前の二つの項の兄弟姉妹に関する規定は、当章の最後の節の中に示されている。この第三の項の兄弟姉妹への配分は、第一、第二の項の兄弟たちへの配分より少ない。その理由は、第三の兄弟たちは母方のみの関係であり、他の二つの項の兄弟たちは、死者と同じ父の子供達だからである。カラーラとして死んだ人の財産は、兄弟と姉妹とには同じ配分である。通例の二対一の割合は、この場合適用されない。

注17　クルアーンの中で（7：29；33：31；65：2）用いられているような密通とか不義の意ではない。この言葉は社会関係を侵害し、平和を乱すもとになるような明らかに誤った行為すべてを指している。次の節でも、同様の罪がはっきりと罰が規定されないまま語られているが、この次の節中の男達と同様に、この節中の女達は、不義や密通とまではいかないが不正な、不道徳な罪を犯した女達である。これもやはり、アブー・ムスリムとムジャーヒドの見解である。こうした女達は、改心するか、結婚するまでは、他の女達と一緒にしてはならない。結婚は、アッラーによって彼女たちに開かれている道なのである。ここに言う罪は重大であるので、訴えられた女に対し不当とならないよう、目撃者が四人必要とされている。

17. またお前たちのうち男同士が同じ罪を犯さば、両名とも処罰せよ。(注 18) されど改悛して行状を改めるならば、かまわずにそのままにしておけ。げにアッラーはよく赦し、情け深くまします。

وَالَّذَانِ يَأْتِيَانِهَا مِنْكُمْ فَآذُوهُمَا ۚ فَإِنْ تَابَا وَأَصْلَحَا
فَأَعْرِضُوا عَنْهُمَا ۗ إِنَّ اللَّهَ كَانَ تَوَّابًا رَحِيمًا ﴿١٧﴾

18. アッラーが悔悟を赦すは、知らずに (注 19) 悪事を行うも、直ちに改悛する者のみなり。アッラーはこれ等の者には憐れみをかけ給う。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

إِنَّمَا التَّوْبَةُ عَلَى اللَّهِ لِلَّذِينَ يَعْمَلُونَ السُّوءَ بِجَهَالَةٍ
ثُمَّ يَتُوبُونَ مِنْ قَرِيبٍ فَأُولَٰئِكَ يَتُوبُ اللَّهُ عَلَيْهِمْ ۗ
وَكَانَ اللَّهُ عَلِيمًا حَكِيمًا ﴿١٨﴾

19. 悪事をし続けた挙句、死に臨んで、「我今後悔す」と云う者、また不信心者として死ぬ者はその悔悟を赦されざるなり。われらはかかる徒輩(やから)に痛罰を用意せり。

وَلَيْسَتِ التَّوْبَةُ لِلَّذِينَ يَعْمَلُونَ السَّيِّئَاتِ حَتَّىٰ إِذَا
حَضَرَ أَحَدَهُمُ الْمَوْتُ قَالَ إِنِّي تُبْتُ الْآنَ وَلَا
الَّذِينَ يَمُوتُونَ وَهُمْ كُفَّارٌ ۚ أُولَٰئِكَ أَعْتَدْنَا
لَهُمْ عَذَابًا أَلِيمًا ﴿١٩﴾

20. 汝等信徒たちよ、本人の意志を無視して女を相続するは、合法に非ず。(注 20) またお前たちが彼女たちに与えたるものの一部を取り戻すべく、彼女たちを不当に拘禁する

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا يَحِلُّ لَكُمْ أَنْ تَرِثُوا النِّسَاءَ كَرْهًا ۖ
وَلَا تَعْضُلُوهُنَّ لِتَذْهَبُوا بِبَعْضِ مَا آتَيْتُمُوهُنَّ

注 18　ここは、「両名」としてあるが必ずしも二人の男のこととは限らない。また、ここでいう罰がどういう形式をとるべきかは、関係当局の判断にまかされているのである。この節も前節も、法律で罰が規定されていない罪について語っている。事件は当局の判断にまかされ、その時の状況に応じて決定されるのである。更にこの節は、極悪非道の罪またはそれに近いような罪を犯した二人の男についても語っているようである。

注 19　「知らずに」という言葉は、罪人が悪とは知らずに悪をなしたという意味ではない。実際、人のなす悪行というものはすべて悪と知らず行った行為であり、正しく適切な知識が不足しているために生じたことなのである。「本当に無知と同義となるような知識というものがある。即ち、知ることがかえって人間に害になる知識がある。」とモハッマドは言ったとされている。従って「知らずに」という言葉がつけ加えられているのは、罪の本質、原理を示し、罪を犯さぬため、有益な知識を身につけるよう、人々に強く勧告するためである。

注 20　死者の親族は、未亡人の財産を握っておこうとして、彼女が新しい結婚をすることを妨げてはならないのである。しかし、もし彼女が明らかに好ましくない人物と結婚しようとしているのであれば、親族達は彼女の結婚を妨げることができる。この節の言葉が夫に向かって言われているとすれば、次のように解釈できるであろう。即ち、もし妻が夫と共に生活するのを欲せず、夫との離別を求めているのであれば、それは「女性からの離婚」の手続きを経れば可能であり、夫は妻の金銭目当てでこれを妨げてはならないということである。しかし、もし妻が明らかに邪悪な行為を為そうとしているのであれば、夫はその離婚を妨げることができるのである。

なかれ、但し彼女に確たる罪有る場合は別なり。彼女たちと優しく交われ。(注 21) お前たちもし彼女たちを嫌わば、アッラーが沢山の幸福をその中に置き給うたものを、お前たちが嫌うことになるやも知らず。

إِلَّآ أَن يَأْتِينَ بِفَاحِشَةٍ مُّبَيِّنَةٍ ۚ وَعَاشِرُوهُنَّ بِالْمَعْرُوفِ ۚ فَإِن كَرِهْتُمُوهُنَّ فَعَسَىٰٓ أَن تَكْرَهُوا شَيْئًا وَيَجْعَلَ اللَّهُ فِيهِ خَيْرًا كَثِيرًا ﴿٢٠﴾

21. お前たち妻を換えんとする場合、たとい彼女に巨額の宝を与えたりとも、その中から何も取り戻すなかれ。(注 22) お前たちは云いがかりをつけ、明白な罪を犯し、それを取り戻さんと欲するか？

وَإِنْ أَرَدتُّمُ اسْتِبْدَالَ زَوْجٍ مَّكَانَ زَوْجٍ وَآتَيْتُمْ إِحْدَاهُنَّ قِنطَارًا فَلَا تَأْخُذُوا مِنْهُ شَيْئًا ۚ أَتَأْخُذُونَهُ بُهْتَانًا وَإِثْمًا مُّبِينًا ﴿٢١﴾

22. どうして取り戻したり出来ようか、共に暮らせし仲なれば。しかも彼女は堅い誓約をお前たちから受けた身ぞ。

وَكَيْفَ تَأْخُذُونَهُ وَقَدْ أَفْضَىٰ بَعْضُكُمْ إِلَىٰ بَعْضٍ وَأَخَذْنَ مِنكُم مِّيثَاقًا غَلِيظًا ﴿٢٢﴾

23. お前たち、父が娶りたる女を娶るなかれ、すでに起きたることは除外す。(注 23) そは不潔で、憎むべき罪悪なり。

وَلَا تَنكِحُوا مَا نَكَحَ آبَاؤُكُم مِّنَ النِّسَاءِ إِلَّا مَا قَدْ سَلَفَ ۚ إِنَّهُ كَانَ فَاحِشَةً وَمَقْتًا وَسَاءَ سَبِيلًا ﴿٢٣﴾ ع

第四項

24. お前たちが娶ってならぬ相手は、自分の母親と (注 24) 自分の娘、姉妹、父方の伯叔母、母方の伯叔母、兄弟の娘、姉妹の娘、乳母(注 25)、乳姉妹、妻の母親、お前たち

حُرِّمَتْ عَلَيْكُمْ أُمَّهَاتُكُمْ وَبَنَاتُكُمْ وَأَخَوَاتُكُمْ وَعَمَّاتُكُمْ وَخَالَاتُكُمْ وَبَنَاتُ الْأَخِ وَبَنَاتُ الْأُخْتِ وَأُمَّهَاتُكُمُ

注 21　「最も善き者は、妻を最も大切にする者である。」と聖なる預言者が言ったとされている (ブハリ)。アーシャルフナという表現は、相互依存を示している。夫も妻も共に仲良く、お互い相手の愛に報いるよう命じている。

注 22　もし、何か特別の理由により、ある人が一人の妻と離婚し、別の女と結婚したいと思っても、彼は今までに前の妻に与えたものを、たとえどんなにその額が大きかろうと、とり戻すことは許されない。

注 23　この言葉は、この節が明らかにされる以前に、義母を妻としてしまった場合または姉妹二人が同時にある一人の男性と結婚していた場合、それをそのままにしておいてよいということではない。ここで言うのは、こうした男たちが悔い改め、行いを正すならば、過去に犯したどんな違法な行為に対しても罰せられることはないということである。過去の罪は許されるが、法に反して結婚した女は、ただちに離婚しなければならない。

注 24　養母の親族も、実母の血縁で結婚が禁止されている関係の者たちと同様、結婚が制限されている。養母の姉妹や養母の娘との結婚は違法なのである。

注 25　どの程度の乳を与えた者が、乳母として、この例にあてはまるのかは、神学者の意見の分かれるところである。

の妻が産みたる被後見人の連れ娘—されど未だ妻と肉体関係を持たざるならば、罪なし—並びに自分の息子の妻なり。また同時に二人の姉妹を娶るべからず、但しすでに起きたることは除外す。(注26) げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

الّٰتِيْٓ اَرْضَعْنَكُمْ وَاَخَوٰتُكُمْ مِّنَ الرَّضَاعَةِ وَاُمَّهٰتُ نِسَآئِكُمْ وَرَبَآئِبُكُمُ الّٰتِيْ فِيْ حُجُوْرِكُمْ مِّنْ نِّسَآئِكُمُ الّٰتِيْ دَخَلْتُمْ بِهِنَّ فَاِنْ لَّمْ تَكُوْنُوْا دَخَلْتُمْ بِهِنَّ فَلَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ وَحَلَآئِلُ اَبْنَآئِكُمُ الَّذِيْنَ مِنْ اَصْلَابِكُمْ وَاَنْ تَجْمَعُوْا بَيْنَ الْاُخْتَيْنِ اِلَّا مَا قَدْ سَلَفَ اِنَّ اللّٰهَ كَانَ غَفُوْرًا رَّحِيْمًا ﴿٢٤﴾

25. またお前たちが娶ってならぬ相手は、既婚の婦人なり、但しお前たちの右手が所有するものは除く。(注27) こはアッラーがお前たちに命じたることなり。これ以外ならば、お前たちはその財力によって、私通などではなく、正式に結婚して妻を求めることは許される。而して彼女たちから得た利益に対して、定められた婚資を与えよ。また婚資が決まった後、相互の合意によるならば、なにをしても差し支えなし。げにアッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَّالْمُحْصَنٰتُ مِنَ النِّسَآءِ اِلَّا مَا مَلَكَتْ اَيْمَانُكُمْ كِتٰبَ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ وَاُحِلَّ لَكُمْ مَّا وَرَآءَ ذٰلِكُمْ اَنْ تَبْتَغُوْا بِاَمْوَالِكُمْ مُّحْصِنِيْنَ غَيْرَ مُسٰفِحِيْنَ فَمَا اسْتَمْتَعْتُمْ بِهٖ مِنْهُنَّ فَاٰتُوْهُنَّ اُجُوْرَهُنَّ فَرِيْضَةً وَلَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ فِيْمَا تَرٰضَيْتُمْ بِهٖ مِنْ بَعْدِ الْفَرِيْضَةِ اِنَّ اللّٰهَ كَانَ عَلِيْمًا حَكِيْمًا ﴿٢٥﴾

26. お前たちのうち、信徒の自由女子を娶る資力なき者には、お前たちの右手が所有する者、すなわち信徒である女中を娶らしめよ。アッラーはお前たちの信仰を熟知し給う。お前たちは皆一体なり。されば彼女たちの主人の承諾を得て結婚し、彼女たちが貞節で姦淫を犯さず、また密夫と通ずることなくば、公明正大に婚資を与うべし。されどもし結婚後、不貞をはたらきたる場合は、自由婦人に規定された刑罰の半ばを科すべ

وَمَنْ لَّمْ يَسْتَطِعْ مِنْكُمْ طَوْلًا اَنْ يَّنْكِحَ الْمُحْصَنٰتِ الْمُؤْمِنٰتِ فَمِنْ مَّا مَلَكَتْ اَيْمَانُكُمْ مِّنْ فَتَيٰتِكُمُ الْمُؤْمِنٰتِ وَاللّٰهُ اَعْلَمُ بِاِيْمَانِكُمْ بَعْضُكُمْ مِّنْ بَعْضٍ فَانْكِحُوْهُنَّ بِاِذْنِ اَهْلِهِنَّ وَاٰتُوْهُنَّ اُجُوْرَهُنَّ بِالْمَعْرُوْفِ مُحْصَنٰتٍ غَيْرَ مُسٰفِحٰتٍ وَّلَا مُتَّخِذٰتِ اَخْدَانٍ فَاِذَآ اُحْصِنَّ فَاِنْ اَتَيْنَ

注26　注23参照

注27　既に結婚している女は、別の男と結婚することは出来ないが、ここで一つの例外を認めている。その例外とは、非イスラム教国がイスラム教国に対してしかけた戦争で捕虜となった女の場合である。こうした既婚の女は、もしイスラム教に改宗し、それ故、教徒でない夫のもとに帰れなくなったのであれば、イスラム教徒と結婚してもよいのである。「汝の右手に持つもの」についての更に詳しい説明は当章注6を見よ。

し。こはお前たちのうち罪を犯す恐れのある者のために定むるなり。自分自身を抑制することが、自分のためには一層よし。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

بِفَاحِشَةٍ فَعَلَيْهِنَّ نِصْفُ مَا عَلَى الْمُحْصَنٰتِ مِنَ الْعَذَابِ ۚ ذٰلِكَ لِمَنْ خَشِيَ الْعَنَتَ مِنْكُمْ ۚ وَاَنْ تَصْبِرُوْا خَيْرٌ لَّكُمْ ۗ وَاللّٰهُ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ۝٢٥

第五項

27. アッラーはお前たちのために、いろいろと説き明かし、お前たちを先人の道に導かんことを望む。而（しか）してお前たちに慈顔を向けんことを望む。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

يُرِيْدُ اللّٰهُ لِيُبَيِّنَ لَكُمْ وَيَهْدِيَكُمْ سُنَنَ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِكُمْ وَيَتُوْبَ عَلَيْكُمْ ۗ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ۝٢٦

28. アッラーはお前たちに慈顔を向けんことを望む。されど己れの下劣な欲望に従う者は、お前たちが大いに道を踏みはずさんことを望む。

وَاللّٰهُ يُرِيْدُ اَنْ يَّتُوْبَ عَلَيْكُمْ وَيُرِيْدُ الَّذِيْنَ يَتَّبِعُوْنَ الشَّهَوٰتِ اَنْ تَمِيْلُوْا مَيْلًا عَظِيْمًا ۝٢٧

29. アッラーはお前たちの荷を軽からしめんと望む、人間は弱きものに創られたるが故に。

يُرِيْدُ اللّٰهُ اَنْ يُّخَفِّفَ عَنْكُمْ ۚ وَخُلِقَ الْاِنْسَانُ ضَعِيْفًا ۝٢٨

30. 汝等信徒たちよ、相互の同意による商売で得るものに非ずば、自分たちの間で不正にむさぼり食うなかれ。また己が民を殺すなかれ。げにアッラーはお前たちに慈悲深くまします。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَاْكُلُوْۤا اَمْوَالَكُمْ بَيْنَكُمْ بِالْبَاطِلِ اِلَّاۤ اَنْ تَكُوْنَ تِجَارَةً عَنْ تَرَاضٍ مِّنْكُمْ ۚ وَلَا تَقْتُلُوْۤا اَنْفُسَكُمْ ۚ اِنَّ اللّٰهَ كَانَ بِكُمْ رَحِيْمًا ۝٢٩

31. 何人（なんぴと）であれ悪意を以て不当に之（これ）をなさば、われらはその者を業火（ごうか）の中に投込まん。そはアッラーにとりていと易きことなり。

وَمَنْ يَّفْعَلْ ذٰلِكَ عُدْوَانًا وَّظُلْمًا فَسَوْفَ نُصْلِيْهِ نَارًا ۚ وَكَانَ ذٰلِكَ عَلَى اللّٰهِ يَسِيْرًا ۝٣٠

32. お前たち禁ぜられたる大罪を避けるなば、(注28) われらはお前たちの些細な諸悪を抹消し、栄誉の場所に入場せしめん。

اِنْ تَجْتَنِبُوْا كَبٰۤىِٕرَ مَا تُنْهَوْنَ عَنْهُ نُكَفِّرْ عَنْكُمْ سَيِّاٰتِكُمْ وَنُدْخِلْكُمْ مُّدْخَلًا كَرِيْمًا ۝٣١

33. アッラーがお前たちの誰かを、他の者より優りて創れるとも、それを羨むなかれ。男は自分の稼ぎの中から分け前を得、女もま

وَلَا تَتَمَنَّوْا مَا فَضَّلَ اللّٰهُ بِهٖ بَعْضَكُمْ عَلٰى بَعْضٍ ۚ لِلرِّجَالِ نَصِيْبٌ مِّمَّا اكْتَسَبُوْا ۚ وَلِلنِّسَآءِ نَصِيْبٌ مِّمَّا

注28　クルアーンでは、罪の大きさの度合いによる分類はしていない。この言葉は相対的に用いているのである。神が禁じていることをなせば、何事であれ罪である。こうしたことを、やめられない、やめるのは大変だと思っても、きっぱりやめるとすれば、その人は他の罪からも許されるであろうと、この節は言っているのであろう。ある学者たちは、大罪という語を、罪を犯す最後の段階の意と解釈している。もし最後の行動を行うのをやめれば、それ以前の行動は許されるであろう。

た自分の稼ぎの中から分け前を得ん。(注29) さればアッラーにその恵みを請え。げにアッラーは萬事の知識をもち給う。

اكْتَسَبْنَ ۚ وَسْـَٔلُوا اللّٰهَ مِنْ فَضْلِهٖ ۚ اِنَّ اللّٰهَ كَانَ
بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمًا ﴿٣٣﴾

34. われらはすべての人々に対して、父母及び親戚が遺すものの相続者を定めたり。また同様にお前たちの誓約を批准せる人々にも。故に彼等にもその分け前を与えよ。げにアッラーは一切を照覧し給う。

وَلِكُلٍّ جَعَلْنَا مَوَالِيَ مِمَّا تَرَكَ الْوَالِدٰنِ وَالْاَقْرَبُوْنَ ۚ
وَالَّذِيْنَ عَقَدَتْ اَيْمَانُكُمْ فَاٰتُوْهُمْ نَصِيْبَهُمْ ۚ اِنَّ
اللّٰهَ كَانَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ شَهِيْدًا ﴿٣٤﴾ ع

第六項

35. 男は女の保護者なり。(注30)そはアッラーがあるものを他より優れるものとし、また男は女のために己が財を費やすが故なり。されば貞淑な女は従順にして、アッラーの加護のもとに夫の秘密を守る。不従順の恐れある女は訓戒し、または臥所(ふしど)に独り置き去りにし、(注31)懲らしめよ。かくてお前たちに従うようになれば、それ以上の手段を講ずるなかれ。(注32)げにアッラーはいと高く、偉大にまします。

اَلرِّجَالُ قَوّٰمُوْنَ عَلَى النِّسَآءِ بِمَا فَضَّلَ اللّٰهُ بَعْضَهُمْ
عَلٰى بَعْضٍ وَّبِمَآ اَنْفَقُوْا مِنْ اَمْوَالِهِمْ ۚ فَالصّٰلِحٰتُ
قٰنِتٰتٌ حٰفِظٰتٌ لِّلْغَيْبِ بِمَا حَفِظَ اللّٰهُ ۚ وَالّٰتِيْ تَخَافُوْنَ
نُشُوْزَهُنَّ فَعِظُوْهُنَّ وَاهْجُرُوْهُنَّ فِي الْمَضَاجِعِ
وَاضْرِبُوْهُنَّ ۚ فَاِنْ اَطَعْنَكُمْ فَلَا تَبْغُوْا عَلَيْهِنَّ
سَبِيْلًا ۚ اِنَّ اللّٰهَ كَانَ عَلِيًّا كَبِيْرًا ﴿٣٥﴾

36. もし、お前たち夫婦間の破局を恐れなば、(注33) 男の親族から調停人を一人と、女の親

وَاِنْ خِفْتُمْ شِقَاقَ بَيْنِهِمَا فَابْعَثُوْا حَكَمًا مِّنْ

注29　この節では、男女は仕事と報酬に関しては平等であることを明確にしている。

注30　アラビア語本文にあるヤッヴァームは、女性にとって支えとなる人という意である。この節では何故男が家長となるのか、二つの理由をあげている。(1)男が精神的、肉体的に優っていること、そして(2)男が生活の糧をかせぎ、家族を扶養する者であることの二点である。従って、当然家族の生活の費用をかせぎ、扶養する男が、家族のことについては自由に管理する立場にあるのである。

注31　この句の意は(1)夫婦関係を慎しむ(2)床を別々に離す(3)話しかけない、である。こうした方法は、いつまでも続けられるわけではない。なぜなら、宙に浮かぶものの如く、妻を放っておくことはできないからである（4：130)。夫婦関係を持たない、つまり実質的な別居の限度は4ヵ月であるとクルアーンは言う（2：227)。もし、事態が非常に深刻だと思えば、夫は4：16に書かれている条件を守らなければならないであろう。

注32　イスラム教徒たる夫は、妻を殴打せざるを 得ないことがあるとしても、妻の体に殴打の跡が残るほどに打ってはならない（ティルマディとムスムリ)。そして、妻を殴打するような夫は、最良の男とは言えないという聖なる預言者の言葉がある。

注33　ここで「お前たち」とはイスラム教国、あるいは社会全体を統合的に指すか、あるいは一般的に人々を指す。

族から調停人を一人任命せよ。(注34)もし彼等調停人が和解を望まば、アッラーは彼等を和解せしむべし。げにアッラーはすべてを知り、すべてに通暁(つうぎょう)し給う。

أَهْلِهِ وَحَكَمًا مِّنْ أَهْلِهَا ۚ إِن يُرِيدَا إِصْلَاحًا يُوَفِّقِ
اللَّهُ بَيْنَهُمَا ۗ إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَلِيمًا خَبِيرًا ﴿٣٦﴾

37. アッラーを崇敬せよ。何者もアッラーと併(あわ)せ祀るなかれ。而(しか)して父母に優しくせよ。親戚や孤児や貧しい人にも、血族の隣人や近くに住む他人にも、またお前たちのそばにいる仲間や旅行者にも、(注35)更にお前たちの右手が所有する者にも（注36）また然(しか)り。げにアッラーは傲慢不遜なる者を愛し給わず。

وَاعْبُدُوا اللَّهَ وَلَا تُشْرِكُوا بِهِ شَيْئًا ۖ وَبِالْوَالِدَيْنِ
إِحْسَانًا وَبِذِي الْقُرْبَىٰ وَالْيَتَامَىٰ وَالْمَسَاكِينِ وَالْجَارِ
ذِي الْقُرْبَىٰ وَالْجَارِ الْجُنُبِ وَالصَّاحِبِ بِالْجَنبِ
وَابْنِ السَّبِيلِ وَمَا مَلَكَتْ أَيْمَانُكُمْ ۗ إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ
مَن كَانَ مُخْتَالًا فَخُورًا ﴿٣٧﴾

38. 自ら吝嗇(けち)で他人(ひと)にも吝嗇(けち)を勧め、アッラーが与えたるものを隠蔽(いんぺい)する者、われらはかくの如き不信心者どもには屈辱的な刑罰を用意せり。

الَّذِينَ يَبْخَلُونَ وَيَأْمُرُونَ النَّاسَ بِالْبُخْلِ وَيَكْتُمُونَ
مَا آتَاهُمُ اللَّهُ مِن فَضْلِهِ ۗ وَأَعْتَدْنَا لِلْكَافِرِينَ عَذَابًا
مُّهِينًا ﴿٣٨﴾

39. また他人(ひと)に見せびらかすためにその財を費やし、アッラーも最後の日も信ぜざる者どももまた然(しか)り。誰であれ悪魔(サタン)を仲間に持つ者には、悪いやつを仲間にしたものよと思わしめよ。

وَالَّذِينَ يُنفِقُونَ أَمْوَالَهُمْ رِئَاءَ النَّاسِ وَلَا يُؤْمِنُونَ
بِاللَّهِ وَلَا بِالْيَوْمِ الْآخِرِ ۗ وَمَن يَكُنِ الشَّيْطَانُ لَهُ قَرِينًا
فَسَاءَ قَرِينًا ﴿٣٩﴾

40. アッラーと最後の日を信じ、アッラーが賜えるものの中からなにがしかを費やしたとしても、彼等には如何程の負担となりたるか？　アッラーは彼等を熟知し給う。

وَمَاذَا عَلَيْهِمْ لَوْ آمَنُوا بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ وَأَنفَقُوا
مِمَّا رَزَقَهُمُ اللَّهُ ۚ وَكَانَ اللَّهُ بِهِمْ عَلِيمًا ﴿٤٠﴾

41. げにアッラーは一微塵の重さだに何人(なんぴと)をも不当に遇せず。もし一善あらば、アッラーは之(これ)を倍加し、大なる報奨を御許(みもと)より与え給う。

إِنَّ اللَّهَ لَا يَظْلِمُ مِثْقَالَ ذَرَّةٍ ۖ وَإِن تَكُ حَسَنَةً
يُضَاعِفْهَا وَيُؤْتِ مِن لَّدُنْهُ أَجْرًا عَظِيمًا ﴿٤١﴾

注34　調停者は、相争っている両者の親族から選ばれるべきである。なぜなら、調停者たちは、争いの本当の理由を知っているべきであるし、又双方共、親族に彼らの食い違いを訴えるほうが楽である故である。

注35　前節で、妻に優しくせよと述べた後、この節でクルアーンは、その優しさを最も身近な両親から、最も遠い見ず知らずの他人まで、人間全体に広げていくようイスラム教徒たちに命じている。

注36　当章注6参照

42. われら各族より一人の証人を召喚し、また汝を彼等に対する証人たらしむるならば、はたして彼等いかがせん。

فكيف إذا جئنا من كل أمة بشهيد وجئنا بك على هؤلاء شهيدا ﴿٤٢﴾

43. その日至らば、信ぜずして使徒に背きたる者どもは、大地が彼等とともに平にならんことを望まん。されど彼等は何一つアッラーに隠すことを得ず。

يومئذ يود الذين كفروا وعصوا الرسول لو تسوى بهم الأرض ولا يكتمون الله حديثا ﴿٤٣﴾

第七項

44. 汝等信徒たちよ、お前たち酔っている時は、自分が何を云っているのか解るまで礼拝に近づくなかれ、また汚(けが)れている時も身を洗い浄めるまでは。(注 37)但し旅行中は別なり。(注 38)また病(や)んでいたり、旅路にあるとか、厠(かわや)から出て来たとか、女に触れたる場合(注 39)水が見つからざれば、土を使って顔と手をこすれ。げにアッラーは寛大にして、寛容にまします。

يا أيها الذين آمنوا لا تقربوا الصلوة وأنتم سكارى حتى تعلموا ما تقولون ولا جنبا إلا عابري سبيل حتى تغتسلوا وإن كنتم مرضى أو على سفر أو جاء أحد منكم من الغائط أو لمستم النساء فلم تجدوا ماء فتيمموا صعيدا طيبا فامسحوا بوجوهكم وأيديكم إن الله كان عفوا غفورا ﴿٤٤﴾

45. 汝は経典の一部を賜わりたる者どもを見ざるか？　彼等は迷誤を購(あがな)い、お前たちを道に迷わしめんと欲す。

ألم تر إلى الذين أوتوا نصيبا من الكتب يشترون الضللة ويريدون أن تضلوا السبيل ﴿٤٥﴾

注 37　「汚れている時にも行ってはならない」という表現は次のような意味である。　人は完全に正気でなければ礼拝できないのと同様に、もし汚れているのならば、沐浴によって全身を潔めた後でなければ礼拝できない。性交は体内に汚れを生じさせる。沐浴によってこの汚れを潔めて、礼拝に不可欠な条件として、汚れなく明るい、生き生きした身としなければならない。

注 38　「旅をしている時を除いて」という句は次のような意味である。　即ち、通常は汚れた状態にある者は、きちんと沐浴するまでは礼拝できないが、沐浴は強制されてはいない。この場合、この節の最後で指示されているように、こすりつける動作により汚れをとることが認められる。

注 39　四つの分類は、即ち、病人、旅行者、便所から出てきた者、そして妻のもとへ行ってきた者である。この内、後の二つがけがれているので、場合に応じ沐浴するか洗うことが必要である。そして、もし水が見つからなければ、44 節の最後に示された動作を行うことができる。前の二者に関しては、水についての条件は不要である。たとえ水がなくてもよいのである。それ故、「けがれている時」という言葉が「もし病気であったり、旅行中の場合」という言葉の後につけ加えられているのである。水の代わりは土とされた。というのは、水が人に自分の起源を思いおこさせ（77：21）　そうして人間に造り出すもう一つのささやかな物質を思い起こさせるからである（30：21）。

46. されどアッラーはお前たちの敵をよく知り給う。アッラーは愛護者たるに足り、佑助者たるに足る。

وَاللّٰهُ اَعْلَمُ بِاَعْدَآئِكُمْ ۚ وَكَفٰى بِاللّٰهِ وَلِيًّا ۙ وَّكَفٰى بِاللّٰهِ نَصِيْرًا ﴿٤٦﴾

47. ユダヤ教徒の中には経典の字句の位置を変える徒輩(やから)あり。彼等は、「我等は聞く、されど従わず」また、「聞かされざることを聞け」と云い、その舌を歪(ゆが)めて、「ラーイナー」と云い、信仰を中傷す。されど彼等がもし、「我等は聞き、且つ従う」とか、「汝聞け」また、「ウンズルナー」と云わば、彼等のために一層よく、更に正し。されどアッラーは、彼等をその不信心故に呪詛(じゅそ)せり。されば彼等は、少数の者を除いて、不信心者なり。

مِنَ الَّذِيْنَ هَادُوْا يُحَرِّفُوْنَ الْكَلِمَ عَنْ مَّوَاضِعِهٖ وَيَقُوْلُوْنَ سَمِعْنَا وَعَصَيْنَا وَاسْمَعْ غَيْرَ مُسْمَعٍ وَّرَاعِنَا لَيًّا بِاَلْسِنَتِهِمْ وَطَعْنًا فِى الدِّيْنِ ۚ وَلَوْ اَنَّهُمْ قَالُوْا سَمِعْنَا وَاَطَعْنَا وَاسْمَعْ وَانْظُرْنَا لَكَانَ خَيْرًا لَّهُمْ وَاَقْوَمَ ۙ وَلٰكِنْ لَّعَنَهُمُ اللّٰهُ بِكُفْرِهِمْ فَلَا يُؤْمِنُوْنَ اِلَّا قَلِيْلًا ﴿٤٧﴾

48. 汝等経典の民よ、われらがお前たちの指導者の或る者どもを滅ぼし、お前たちをうしろに捩じまわす前に、またわれらがサバトの民を呪詛(じゅそ)せる如くお前たちを呪詛(じゅそ)する前に、われらがお前たちの手許にあるものを完成すべく降(くだ)し賜わりたるもの（注40）を信ぜよ。アッラーの命令は必ず行わる。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْكِتٰبَ اٰمِنُوْا بِمَا نَزَّلْنَا مُصَدِّقًا لِّمَا مَعَكُمْ مِّنْ قَبْلِ اَنْ نَّطْمِسَ وُجُوْهًا فَنَرُدَّهَا عَلٰۤى اَدْبَارِهَاۤ اَوْ نَلْعَنَهُمْ كَمَا لَعَنَّاۤ اَصْحٰبَ السَّبْتِ ۚ وَكَانَ اَمْرُ اللّٰهِ مَفْعُوْلًا ﴿٤٨﴾

49. げにアッラーは何者も己れに併せ祀ることを許し給わず。（注41）されどこの事を除けば、アッラーは御心のままに誰をも赦し給う。アッラーに他神(あだしがみ)を併せ祀る者は、大罪を犯す者なり。

اِنَّ اللّٰهَ لَا يَغْفِرُ اَنْ يُّشْرَكَ بِهٖ وَيَغْفِرُ مَا دُوْنَ ذٰلِكَ لِمَنْ يَّشَآءُ ۚ وَمَنْ يُّشْرِكْ بِاللّٰهِ فَقَدِ افْتَرٰۤى اِثْمًا عَظِيْمًا ﴿٤٩﴾

50. 汝は自ら清浄であると思う徒輩(やから)を見ざるか？　否、御心のままに誰でも浄められるは、アッラーなり。彼等はいささかも不当に遇せられることなかるべし。

اَلَمْ تَرَ اِلَى الَّذِيْنَ يُزَكُّوْنَ اَنْفُسَهُمْ ۚ بَلِ اللّٰهُ يُزَكِّىْ مَنْ يَّشَآءُ وَلَا يُظْلَمُوْنَ فَتِيْلًا ﴿٥٠﴾

注40　この言葉は次のことを意味している。(1)二つの罰のどちらかが、ユダヤ人に下されるであろう。(2)ユダヤ人のある者には一方の罰が、他の者にはもう一方の罰が降りかかるであろう。

注41　神以外に他のものを信じ、愛することは反逆に価する。この節は死後のことのみ述べている。つまり、逃げた偽りの神を信じたまま死んだ者は、決して許されることがないというのである。

51. 見よ、如何に彼等がアッラーに対し虚偽を捏造するかを。(注 42) この一事だけでも、十分に明白な罪なり。

أُنْظُرْ كَيْفَ يَفْتَرُوْنَ عَلَى اللّٰهِ الْكَذِبَ وَكَفٰى بِهٖٓ اِثْمًا مُّبِيْنًا ﴿٥١﴾

第八項

52. 汝は経典の一部を賜わりたる者どもを見ざるか？　彼等は邪神を信仰し、罪を犯す者に従い、「この人々の方が、信徒たちよりより正しく導かれているなり」などと不信心者どもを指して云う。(注 43)

اَلَمْ تَرَ اِلَى الَّذِيْنَ اُوْتُوْا نَصِيْبًا مِّنَ الْكِتٰبِ يُؤْمِنُوْنَ بِالْجِبْتِ وَالطَّاغُوْتِ وَيَقُوْلُوْنَ لِلَّذِيْنَ كَفَرُوْا هٰٓؤُلَآءِ اَهْدٰى مِنَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا سَبِيْلًا ﴿٥٢﴾

53. 彼等こそはアッラーが呪詛せる者なり。アッラーが呪詛する者には如何なる佑助者もなかるべし。

اُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ لَعَنَهُمُ اللّٰهُ وَمَنْ يَّلْعَنِ اللّٰهُ فَلَنْ تَجِدَ لَهٗ نَصِيْرًا ﴿٥٣﴾

54. 彼等は天国に入れ得るとでも思うか？　もし然りとて、彼等は他人に棗椰子の核一つだに与えざるべし。

اَمْ لَهُمْ نَصِيْبٌ مِّنَ الْمُلْكِ فَاِذًا لَّا يُؤْتُوْنَ النَّاسَ نَقِيْرًا ﴿٥٤﴾

55. それとも彼等は、アッラーが恩寵を垂れたるが故にその民を妬むか？　われらはすでにアブラハムの子孫に経典と知恵を与え、且つ偉大なる王国を与えたり。

اَمْ يَحْسُدُوْنَ النَّاسَ عَلٰى مَآ اٰتٰىهُمُ اللّٰهُ مِنْ فَضْلِهٖ فَقَدْ اٰتَيْنَآ اٰلَ اِبْرٰهِيْمَ الْكِتٰبَ وَالْحِكْمَةَ وَاٰتَيْنٰهُمْ مُّلْكًا عَظِيْمًا ﴿٥٥﴾

56. しかるに彼等の或る者は彼を信じ、また或る者は彼より背き去れり。されど地獄の燃え盛る炎は、彼等を懲らしめるに十分なり。

فَمِنْهُمْ مَّنْ اٰمَنَ بِهٖ وَمِنْهُمْ مَّنْ صَدَّ عَنْهُ وَكَفٰى بِجَهَنَّمَ سَعِيْرًا ﴿٥٦﴾

57. われらの神兆を信ぜざる者は、われら必ず之を業火に投ぜん。彼等の皮膚が (注 44) 焼けおちるごとに、われらは之を新らしき

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا بِاٰيٰتِنَا سَوْفَ نُصْلِيْهِمْ نَارًا كُلَّمَا نَضِجَتْ جُلُوْدُهُمْ بَدَّلْنٰهُمْ جُلُوْدًا غَيْرَهَا لِيَذُوْقُوا

注 42　預言者を誰も必要としないので、神はもはや預言者をお遣しにはならないだろうなどと言うのは、ユダヤ人が言っている虚偽である。民衆が堕落した時に、預言者は必ず現われた。そして、現実に預言者はイスラム教の聖なる預言者に具現されたのである。

注 43　イスラム教徒達は、聖書に記されているすべての預言者も、モーゼに与えられた法の聖なる原理も信じていた。しかし、これらに対するユダヤ人の憎悪は非常に激しく、ユダヤ人たちは、聖書も預言者も認めないアラビアの偶像崇拝者のほうが、イスラム教徒よりましだと断言していたのである。

注 44　今日、肉より皮膚のほうが多くの神経が集まっているので、痛みに対して敏感であることが医学的に立証されている。クルアーンはこの大事実を 1400 年も前に明らかにしていた。クルアーンは、地獄の受刑者は焼かれた後皮膚が再生し、また焼かれることにより痛みが続くと述べているのである。

皮膚に取り替え、彼等をしてその罰をいつまでも味わしめん。げにアッラーは偉大にして、賢哲にまします。

الْعَذَابَ ۗ إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَزِيزًا حَكِيمًا ﴿٥٧﴾

58. されど信徒にして善行を積む者は、われら彼等を河川流れる楽園に入らしめ、永久にその中に住ましめん。彼等はそこにて汚れなき配偶者を娶らん。而してわれらは、彼等を気持ちよい樹蔭に導かん。

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ سَنُدْخِلُهُمْ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا ۖ لَهُمْ فِيهَا أَزْوَاجٌ مُطَهَّرَةٌ ۖ وَنُدْخِلُهُمْ ظِلًّا ظَلِيلًا ﴿٥٨﴾

59. アッラーはお前たちに、委託物は元の所有者に返還すべきことを命じ給う。(注 45) また人を裁く時は、公正を旨とするよう命じ給う。(注 46) アッラーがお前たちに訓戒することは、なんと素晴らしきことかな！アッラーはすべてを聴き、すべてをみそなはし給う。

إِنَّ اللَّهَ يَأْمُرُكُمْ أَنْ تُؤَدُّوا الْأَمَانَاتِ إِلَىٰ أَهْلِهَا وَإِذَا حَكَمْتُمْ بَيْنَ النَّاسِ أَنْ تَحْكُمُوا بِالْعَدْلِ ۚ إِنَّ اللَّهَ نِعِمَّا يَعِظُكُمْ بِهِ ۗ إِنَّ اللَّهَ كَانَ سَمِيعًا بَصِيرًا ﴿٥٩﴾

60. 汝等信徒たちよ、アッラーと使徒並びにお前たちの中の権限を委ねられたる者に従え。(注 47) もし何事においてか互に意見を異にする場合、お前たちアッラーと最後の日を信ずるならば、それをアッラーと使徒に委ねよ。それが最善かつもっとも褒めるに価する結果に至る。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا أَطِيعُوا اللَّهَ وَأَطِيعُوا الرَّسُولَ وَأُولِي الْأَمْرِ مِنْكُمْ ۖ فَإِنْ تَنَازَعْتُمْ فِي شَيْءٍ فَرُدُّوهُ إِلَى اللَّهِ وَالرَّسُولِ إِنْ كُنْتُمْ تُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ ۚ ذَٰلِكَ خَيْرٌ وَأَحْسَنُ تَأْوِيلًا ﴿٦٠﴾

第九項

61. 汝は、汝に啓示されたるもの並びに汝以前に啓示されたるものを信じているふりをし

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ يَزْعُمُونَ أَنَّهُمْ آمَنُوا بِمَا أُنْزِلَ

注 45　支配する権威、権力は民衆の「委託」によるものであるとここで記されている。そして、その権威、権力は民衆のものであり、誰か個人または王家の生得のものではないと明言しているのである。クルアーンは、王制や世襲制を認めず、代表制の政治形態を定めている。長は選挙によって選ばれるべきであり、長を選ぶ時には、民衆はその役職に最もふさわしい人に投票するよう命じられている。

注 46　イスラム教国の首長と、行政の仕事を委ねられている者たちは、各々の権限を公正に適切に使うよう命じられている。

注 47　「アッラーと使徒並びに」という言葉で表現されている命令は、支配者と被支配者との間の意見の相違、あるいは被支配者の間の食い違いのいずれかに係っているだろう。前者において重要なのは、もし支配者と被支配者との間に不一致の生ずる問題があれば、それはクルアーンの教えに照らして決定されるべきであり、もしそれができなければ、スンナとハディスに照らして決めなければならないということである。しかしながら、もしクルアーンもスンナもハディスもその問題について何も述べていなければ、それは、イスラム教徒の諸事を監督する権限を任された者に委ねられるべきである。この節は特に国家的な問題について述べているようであるが、この点における基本的な掟は、神と神の使者への服従が、あらゆる権威に対する服従に優先するということである。しかし、(一般の) 人々の間に意見の相違が生じている社会的な問題に関しての意見の食い違いや紛争の場合は、イスラム教徒はイスラム教の戒律に従うべきであり、他の法律に従ってはならない。

ている者どもを見ざるか？　彼等は邪神に従うなかれと命ぜられていたにもかかわらず、審判を邪神に求めんとす。悪魔は彼等を遥か遠く邪道に導かんと欲す。

إِلَيْكَ وَمَآ أُنزِلَ مِن قَبْلِكَ يُرِيدُونَ أَن يَتَحَاكَمُوٓا۟ إِلَى ٱلطَّٰغُوتِ وَقَدْ أُمِرُوٓا۟ أَن يَكْفُرُوا۟ بِهِۦ وَيُرِيدُ ٱلشَّيْطَٰنُ أَن يُضِلَّهُمْ ضَلَٰلًۢا بَعِيدًا ﴿٦١﴾

62. 人あり、彼等に向って、「汝等アッラーが降し給えるもの、並びに使徒の許へ来たれ」と云えば、汝は偽善者どもが嫌悪の情を表わして汝から顔をそむけるのを見ん。

وَإِذَا قِيلَ لَهُمْ تَعَالَوْا۟ إِلَىٰ مَآ أَنزَلَ ٱللَّهُ وَإِلَى ٱلرَّسُولِ رَأَيْتَ ٱلْمُنَٰفِقِينَ يَصُدُّونَ عَنكَ صُدُودًا ﴿٦٢﴾

63. 彼等は己が手で前に送れるもののために災難に遭わば、一体如何がせん？　彼等は汝に来たり、アッラーに誓って云う、「我等はただ好意を示し、和解を図らんとせるのみ」と。

فَكَيْفَ إِذَآ أَصَٰبَتْهُم مُّصِيبَةٌۢ بِمَا قَدَّمَتْ أَيْدِيهِمْ ثُمَّ جَآءُوكَ يَحْلِفُونَ بِٱللَّهِ إِنْ أَرَدْنَآ إِلَّآ إِحْسَٰنًا وَتَوْفِيقًا ﴿٦٣﴾

64. アッラーは彼等の胸中の秘密をよく知り給う。されば彼等を遠ざけ、彼等を訓戒し、彼等自身に関わる効果的な言葉を以て彼等に告げよ。

أُو۟لَٰٓئِكَ ٱلَّذِينَ يَعْلَمُ ٱللَّهُ مَا فِى قُلُوبِهِمْ فَأَعْرِضْ عَنْهُمْ وَعِظْهُمْ وَقُل لَّهُمْ فِىٓ أَنفُسِهِمْ قَوْلًۢا بَلِيغًا ﴿٦٤﴾

65. われらが使徒を遣わせるは、アッラーの許しのもとに人々をしてアッラーに従わせしめんがためなり。もし彼等が過ちを犯し、汝のところに来てアッラーの赦しを請い、使徒も彼等のために赦しを請わば、彼等はアッラーがたびたび憐れみに転ぜられ、慈悲深くましますことを知らん。

وَمَآ أَرْسَلْنَا مِن رَّسُولٍ إِلَّا لِيُطَاعَ بِإِذْنِ ٱللَّهِ وَلَوْ أَنَّهُمْ إِذ ظَّلَمُوٓا۟ أَنفُسَهُمْ جَآءُوكَ فَٱسْتَغْفَرُوا۟ ٱللَّهَ وَٱسْتَغْفَرَ لَهُمُ ٱلرَّسُولُ لَوَجَدُوا۟ ٱللَّهَ تَوَّابًا رَّحِيمًا ﴿٦٥﴾

66. 否、主に誓って云う、彼等間の争いに汝を審判者として立て、汝が下せる判決に如何なる異議も唱えず絶対服従するまでは、彼等は信徒に非ず。

فَلَا وَرَبِّكَ لَا يُؤْمِنُونَ حَتَّىٰ يُحَكِّمُوكَ فِيمَا شَجَرَ بَيْنَهُمْ ثُمَّ لَا يَجِدُوا۟ فِىٓ أَنفُسِهِمْ حَرَجًا مِّمَّا قَضَيْتَ وَيُسَلِّمُوا۟ تَسْلِيمًا ﴿٦٦﴾

67. もしわれらが彼等に「神のために生活を犠牲にせよ」とか「家を棄てよ」と命じても、彼等の中の僅かな者しかこれに従わざるべし。もし彼等が勧告通りに行わば、そは彼等のためにはなはだよく、信仰を強力ならしめる助けとなりたるものを。

وَلَوْ أَنَّا كَتَبْنَا عَلَيْهِمْ أَنِ ٱقْتُلُوٓا۟ أَنفُسَكُمْ أَوِ ٱخْرُجُوا۟ مِن دِيَٰرِكُم مَّا فَعَلُوهُ إِلَّا قَلِيلٌ مِّنْهُمْ وَلَوْ أَنَّهُمْ فَعَلُوا۟ مَا يُوعَظُونَ بِهِۦ لَكَانَ خَيْرًا لَّهُمْ وَأَشَدَّ تَثْبِيتًا ﴿٦٧﴾

68. 然らばわれらは必ず大なる報奨を彼等に与え、

وَإِذًا لَّآتَيْنَاهُم مِّن لَّدُنَّا أَجْرًا عَظِيمًا ﴿٦٨﴾

69. 正しき道に導かん。

وَلَهَدَيْنَاهُمْ صِرَاطًا مُّسْتَقِيمًا ﴿٦٩﴾

70. 誰であれアッラーとその使徒に従う者は、アッラーの祝福を受けし人々、すなわち預言者たち、誠実者たち、殉教者たち、並びに正義者たちの仲間に加わらん。彼等は素晴らしい仲間なり。(注 48)

وَمَن يُطِعِ اللَّهَ وَالرَّسُولَ فَأُولَٰئِكَ مَعَ الَّذِينَ أَنْعَمَ اللَّهُ عَلَيْهِم مِّنَ النَّبِيِّينَ وَالصِّدِّيقِينَ وَالشُّهَدَاءِ وَالصَّالِحِينَ ۚ وَحَسُنَ أُولَٰئِكَ رَفِيقًا ﴿٧٠﴾

71. これこそはアッラーよりの恩恵なり。アッラーはすべてを知る者として万全なり。

ذَٰلِكَ الْفَضْلُ مِنَ اللَّهِ ۚ وَكَفَىٰ بِاللَّهِ عَلِيمًا ﴿٧١﴾

第十項

72. 汝等信徒たちよ、安全のために用心せよ。(注 49) 隊をいくつかに分けて進むか、全軍一団となって前進せよ。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا خُذُوا حِذْرَكُمْ فَانفِرُوا ثُبَاتٍ أَوِ انفِرُوا جَمِيعًا ﴿٧٢﴾

73. お前たちの中には後に残る者あり。而してお前たちに災難がふりかかると、その者は云う、「我彼等と偕ならざりしは、げにアッラーの慈悲のたまものなり」と。

وَإِنَّ مِنكُمْ لَمَن لَّيُبَطِّئَنَّ فَإِنْ أَصَابَتْكُم مُّصِيبَةٌ قَالَ قَدْ أَنْعَمَ اللَّهُ عَلَيَّ إِذْ لَمْ أَكُن مَّعَهُمْ شَهِيدًا ﴿٧٣﴾

74. されどもしお前たちに何か幸いがアッラーより来りなば、お前たちと彼の間に何んの交誼も無かりしものの如く、「我もし彼等と偕なりせば、大成功をなし得たものを」などと彼は云うなり。

وَلَئِنْ أَصَابَكُمْ فَضْلٌ مِّنَ اللَّهِ لَيَقُولَنَّ كَأَن لَّمْ تَكُن بَيْنَكُمْ وَبَيْنَهُ مَوَدَّةٌ يَا لَيْتَنِي كُنتُ مَعَهُمْ فَأَفُوزَ فَوْزًا عَظِيمًا ﴿٧٤﴾

注 48　この節には、イスラム教徒が進みうる、精神的発展のあらゆる道が示されているので重要である。四つのどの精神的段階－預言者、誠実者、殉教者、正義者－にも、今は、聖なる預言者に従っていくことによってのみ到達しうるのである。こうしたことは、聖なる預言者のみの特権であり、他の預言者は誰も、こうした特権を聖なる預言者と分かつことはない。この考え方は、この節によって更に裏づけられている。この節は、預言者全般について語っている。そして、57：20では「アッラーとアッラーの使者を信ずる者、それは誠実者と殉教者である。」と言っている。これら二つの節を合わせ読んでみると、次のようになる。即ち、聖なる預言者以外の預言者に従う者は、誠実者と殉教者と正義者の地位までで、それ以上の地位を得ることはできないのに対し、聖なる預言者に従う者は、預言者の地位にも上ることができるというのである。バハルル・ムヒート(vol. iii P287)は、アル・ラーギブの次の言葉を引用している。「この節において、神は信者たちを四つの段階に分けている。そしてそれぞれに上下のある4つの段階を定めている。また、神は真の信者は、これらの段階のどれよりも低い所に止まっていてはならないと強く説いている。」そして、さらに付け加えて言う。「預言者の地位にも普通のものと特別なものと二種類ある。特別な預言者は法を作り出す預言者であり、今は誰もなることはできない。しかし、普通の預言者には、いつでもなることができる。」

注 49　この語は、防衛のために必要なあらゆる警戒、準備にも広げて解釈でき、また防衛のための武器の増強の意も包含していると思われる。

75. されば来世を願って現世を犠牲にする者に、アッラーの道のために戦わしめよ。アッラーの道のために戦う者は、戦死者であれ勝利者であれ、われらは必ず大なる報奨を与えん。

فَلْيُقَاتِلْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ الَّذِينَ يَشْرُونَ الْحَيٰوةَ الدُّنْيَا
بِالْآخِرَةِ ۚ وَمَنْ يُقَاتِلْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ فَيُقْتَلْ أَوْ
يَغْلِبْ فَسَوْفَ نُؤْتِيهِ أَجْرًا عَظِيمًا ﴿٧٥﴾

76. お前たち、何故にアッラーの道のために、また弱い者—男や女や子供たちのために戦わざるか？ (注 50) 彼等は云う、「主よ、この迫害の町から我等を連れ出し給え。而(しか)して我等のために汝の許(もと)より味方を遣わし給え。佑助者を遣わし給え」と。(注 51)

وَمَا لَكُمْ لَا تُقَاتِلُونَ فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَالْمُسْتَضْعَفِينَ
مِنَ الرِّجَالِ وَالنِّسَاءِ وَالْوِلْدَانِ الَّذِينَ يَقُولُونَ
رَبَّنَا أَخْرِجْنَا مِنْ هٰذِهِ الْقَرْيَةِ الظَّالِمِ أَهْلُهَا
وَاجْعَلْ لَنَا مِنْ لَدُنْكَ وَلِيًّا ۚ وَاجْعَلْ لَنَا مِنْ
لَدُنْكَ نَصِيرًا ﴿٧٦﴾

77. 信ずる者はアッラーの道のために戦い、信ぜざる者は邪神のために戦う。されば汝等悪魔(サタン)の仲間に対して戦いを挑(いど)め。げに悪魔(サタン)の策略は弱し。

الَّذِينَ آمَنُوا يُقَاتِلُونَ فِي سَبِيلِ اللَّهِ ۖ وَالَّذِينَ كَفَرُوا
يُقَاتِلُونَ فِي سَبِيلِ الطَّاغُوتِ فَقَاتِلُوا أَوْلِيَاءَ الشَّيْطٰنِ ۚ
إِنَّ كَيْدَ الشَّيْطٰنِ كَانَ ضَعِيفًا ﴿٧٧﴾

第十一項

78. 汝、「手を制止(やす)めよ。礼拝を遵守し喜捨を納めよ」と告げられたる人々を見ざるか？しかるに戦闘が命ぜられると、見よ、彼等の一部はアッラーを恐れるが如く人々を恐れ、いやそれ以上大なる恐怖を以って、「主よ、何故に汝は我等に戦いを命じ給うか？しばしの猶予も我等に与えざるおつもりか？」と云う。云え、「現世の歓楽は無きに等しい。神を畏れる者にとりては、来世こそがより勝るなり。而(しか)してお前たちはいささかも不当に遇せられることなかるべし」と。

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ قِيلَ لَهُمْ كُفُّوا أَيْدِيَكُمْ وَأَقِيمُوا
الصَّلٰوةَ وَآتُوا الزَّكٰوةَ ۚ فَلَمَّا كُتِبَ عَلَيْهِمُ الْقِتَالُ
إِذَا فَرِيقٌ مِنْهُمْ يَخْشَوْنَ النَّاسَ كَخَشْيَةِ اللَّهِ
أَوْ أَشَدَّ خَشْيَةً ۚ وَقَالُوا رَبَّنَا لِمَ كَتَبْتَ عَلَيْنَا
الْقِتَالَ ۚ لَوْلَا أَخَّرْتَنَا إِلَىٰ أَجَلٍ قَرِيبٍ ۗ قُلْ مَتَاعُ
الدُّنْيَا قَلِيلٌ ۚ وَالْآخِرَةُ خَيْرٌ لِمَنِ اتَّقَىٰ وَلَا
تُظْلَمُونَ فَتِيلًا ﴿٧٨﴾

注 50　この言葉も、'汝が戦わないのは一体どうしたのか' の意である。

注 51　この節は、イスラム教徒のほうから敵対行為を始めたことはないという明確な証拠である。イスラム教徒は、自分達の宗教を守り、より弱者で宗教を同じくする者を援助するための自己防衛戦しか戦ったことはない。

79. お前たち何処に在ろうとも、たとい堅固な高楼（たかどの）のうちにこもろうとも、死は必ず追いつくべし。(注52)もし彼等に何かよいことが起らば、彼等は云う、「こはアッラーより賜わる」と。またもし悪しきことが身に降りかからば、彼等は云う、「こは汝の所為（せい）なり」と。云え、「すべてはアッラーが賜わるものなり」と。(注53)彼等が何も理解し得ぬとは一体どうしたことぞ？

أَيْنَ مَا تَكُونُوا يُدْرِككُّمُ الْمَوْتُ وَلَوْ كُنتُمْ فِي بُرُوجٍ مُّشَيَّدَةٍ ۗ وَإِن تُصِبْهُمْ حَسَنَةٌ يَقُولُوا هَٰذِهِ مِنْ عِندِ اللَّهِ ۖ وَإِن تُصِبْهُمْ سَيِّئَةٌ يَقُولُوا هَٰذِهِ مِنْ عِندِكَ ۚ قُلْ كُلٌّ مِّنْ عِندِ اللَّهِ ۖ فَمَالِ هَٰؤُلَاءِ الْقَوْمِ لَا يَكَادُونَ يَفْقَهُونَ حَدِيثًا ٧٩

80. 汝に起こるすべての幸運はアッラーが下賜するものなり。(注54)しかるに汝に降りかかる災難は、汝自身が因（もと）をなす。われらは汝を使徒として人類に遣わしたり。而（しか）してアッラーは証人たるに足る。

مَّا أَصَابَكَ مِنْ حَسَنَةٍ فَمِنَ اللَّهِ ۖ وَمَا أَصَابَكَ مِن سَيِّئَةٍ فَمِن نَّفْسِكَ ۚ وَأَرْسَلْنَاكَ لِلنَّاسِ رَسُولًا ۚ وَكَفَىٰ بِاللَّهِ شَهِيدًا ٨٠

81. 誰であれ使徒に従う者は、紛れもなくアッラーに従う者なり。されど背き去る者あらば、われらはその者どもの番人として汝を遣わしたに非ず。

مَّن يُطِعِ الرَّسُولَ فَقَدْ أَطَاعَ اللَّهَ ۖ وَمَن تَوَلَّىٰ فَمَا أَرْسَلْنَاكَ عَلَيْهِمْ حَفِيظًا ٨١

82. 彼等は云う、「服従こそ我等の根本理念なり」と。しかるに彼等汝の面前より去れば、その或る者は汝が云えることに対して夜もすがら策謀をめぐらす。(注55)アッラーは闇に紛れた彼等の陰謀をすべて記録し給う。されば彼等から遠離して、ただアッラーを頼れ。事の成敗を決める者として、アッラーは万全なり。

وَيَقُولُونَ طَاعَةٌ فَإِذَا بَرَزُوا مِنْ عِندِكَ بَيَّتَ طَائِفَةٌ مِّنْهُمْ غَيْرَ الَّذِي تَقُولُ ۖ وَاللَّهُ يَكْتُبُ مَا يُبَيِّتُونَ ۖ فَأَعْرِضْ عَنْهُمْ وَتَوَكَّلْ عَلَى اللَّهِ ۚ وَكَفَىٰ بِاللَّهِ وَكِيلًا ٨٢

注52　一般的な自然の法則について述べているか、あるいは、偽善者たちが死をまぬがれることができると考え、自然の聖なる掟にそむいたとして、彼らに対し特に発せられたと考えるかどちらかである。

注53　「すべてはアッラーが賜わるものなり」という表現は、神は宇宙における最終統制力であり、良いことも悪いことも、人間に降りかかることすべて、一般的な自然の法則かあるいは何か神の特別な命令に起因するという意味において真実である。

注54　神は人間に生まれながらの力と才能を授けた。人間はその力や才能を正しく用いれば人生において成功し、逆に誤って用いれば困難に巻き込まれるのである。つまり、すべての善は神に、すべての悪は人間に起因していると、ここでは言っているのである。

注55　ここで言及しているのは、夜であれ昼であれ、密謀のことである。通例、密謀をたくらむのは夜であるので、姿を隠してくれる帳（とばり）であり、人目につかない「夜」という語がここで用いられているのである。

83. 彼等はクルアーンについて深く思わざるか？　もしクルアーンがアッラー以外より出でたるものならば、必ずその中には幾多の矛盾が（注 56）見つかる筈なり。

أَفَلَا يَتَدَبَّرُونَ الْقُرْآنَ ۚ وَلَوْ كَانَ مِنْ عِندِ غَيْرِ اللَّهِ لَوَجَدُوا فِيهِ اخْتِلَافًا كَثِيرًا ﴿٨٢﴾

84. 安全なことにせよ心配ごとにせよ、(注 57) 何等かの通報が彼等に来ると、彼等はそれを吹聴す。されど彼等もしそれを使徒または彼等のうちなる権威者に任せなば、通報より真相を引き出し得る人々が、必ずそれを理解せり。アッラーの恩恵と慈悲なかりせば、お前たちはただ少数を除いて、みな悪魔（サタン）に従いしなり。

وَإِذَا جَاءَهُمْ أَمْرٌ مِّنَ الْأَمْنِ أَوِ الْخَوْفِ أَذَاعُوا بِهِ ۖ وَلَوْ رَدُّوهُ إِلَى الرَّسُولِ وَإِلَىٰ أُولِي الْأَمْرِ مِنْهُمْ لَعَلِمَهُ الَّذِينَ يَسْتَنبِطُونَهُ مِنْهُمْ ۗ وَلَوْلَا فَضْلُ اللَّهِ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتُهُ لَاتَّبَعْتُمُ الشَّيْطَانَ إِلَّا قَلِيلًا ﴿٨٣﴾

85. さればアッラーの道のために戦え――汝は己れ自身にのみ責めを負う者なり――されば信徒たちを、戦いに鼓舞激励（こぶげきれい）させよ。(注 58) 恐らくアッラーが不信心者どもの力を制圧せん。アッラーは力において強大、罰を科するに猛烈なり。

فَقَاتِلْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ لَا تُكَلَّفُ إِلَّا نَفْسَكَ ۚ وَحَرِّضِ الْمُؤْمِنِينَ ۖ عَسَى اللَّهُ أَن يَكُفَّ بَأْسَ الَّذِينَ كَفَرُوا ۚ وَاللَّهُ أَشَدُّ بَأْسًا وَأَشَدُّ تَنكِيلًا ﴿٨٤﴾

86. 公正な執り成しをする者はそれに応じた報奨を得、悪意の執り成しをする者はそれに応じた報いを受けん。(注 59) アッラーは萬事を支配し給う。

مَّن يَشْفَعْ شَفَاعَةً حَسَنَةً يَكُن لَّهُ نَصِيبٌ مِّنْهَا ۖ وَمَن يَشْفَعْ شَفَاعَةً سَيِّئَةً يَكُن لَّهُ كِفْلٌ مِّنْهَا ۗ وَكَانَ اللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ مُّقِيتًا ﴿٨٥﴾

注 56　クルアーンの中の一節と、その中の教訓との「矛盾」あるいは預言者として語られているクルアーンの中の言葉と、その結果、成果の不一致は、ないことを示している。もし神からの啓示でなければ多くの矛盾があっただろう。

注 57　不安情報のほうが平和についての情報より後に出されているのは、クルアーンがここでは戦いについて述べているからである。戦いの最中には、応々にして良い結果となりそうな事柄を発表するのは、不安な事柄を公表するより危険なことなのである。平時においても、ここに示されている指示は、社会の安寧や規則に直接の影響を及ぼすので、重要である。「権威ある人々」という言葉は聖なる預言者か彼の後継者あるいは彼らに指名された指導者たちのことである。

注 58　この節で言わんとしているのは、聖なる預言者も含めてイスラム教徒は皆一人一人神に対して責任を負うということである。しかし、聖なる預言者のなすべき仕事は二つある。(1)自分自身戦うこと、及び(2)止むを得ない場合に、信者達に戦うよう促すことである。

注 59　この節は、他人のために為す嘆願や推薦という行為を軽く考えてはならないと述べている。他人のために嘆願する者は、そうした自分の行為に責任をとらなければならないからである。もしその嘆願、推薦が正しく公正であれば、彼は十分に報われるであろう。逆にそれらが正当でなければ、そこから生じる悪い結果に対し責任をとらなければならないであろう。

87. お前たち挨拶されたなら、更に良き挨拶するか、少なくとも同じ程度の挨拶を返せ。（注 60）げにアッラーは一切を清算し給う。

وَإِذَا حُيِّيتُمْ بِتَحِيَّةٍ فَحَيُّوا بِأَحْسَنَ مِنْهَا أَوْ رُدُّوهَا ۗ
إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ حَسِيبًا ﴿٨٦﴾

88. アッラーの外に崇敬に価する者なし。アッラーは復活の日に必ずお前たちを召集すべし。そは疑う余地なし。誰がアッラーの御言葉（みことば）に勝る真実を語るか？

اللَّهُ لَا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ ۚ لَيَجْمَعَنَّكُمْ إِلَىٰ يَوْمِ الْقِيَامَةِ لَا
رَيْبَ فِيهِ ۗ وَمَنْ أَصْدَقُ مِنَ اللَّهِ حَدِيثًا ﴿٨٧﴾

第十二項

89. 一体どうしたというのか、お前たち偽善者のことで二派に分れるとは？　アッラーは彼等が稼ぎしものの故に彼等を打ち倒せり。汝等はアッラーが迷わしめたる者を導かんとするか？　汝といえど、アッラーが迷わす者に道を示すこと、そは能（あた）わざるべし。

فَمَا لَكُمْ فِي الْمُنَافِقِينَ فِئَتَيْنِ وَاللَّهُ أَرْكَسَهُمْ
بِمَا كَسَبُوا ۚ أَتُرِيدُونَ أَنْ تَهْدُوا مَنْ أَضَلَّ اللَّهُ ۖ
وَمَنْ يُضْلِلِ اللَّهُ فَلَنْ تَجِدَ لَهُ سَبِيلًا ﴿٨٨﴾

90. 彼等は自分が信ぜざる如く、お前たちにも信ぜざらんことを望み、お前たちが同類の者ならんことを望む。されば彼等がアッラーの道のために家郷を後（あと）にするまでは、彼等の誰をも友とするなかれ。されど彼等が背を向けなば、何処なりとも彼等を捕え、之（これ）を殺せ。彼等のうちより友または援助者を選ぶなかれ。

وَدُّوا لَوْ تَكْفُرُونَ كَمَا كَفَرُوا فَتَكُونُونَ سَوَاءً فَلَا
تَتَّخِذُوا مِنْهُمْ أَوْلِيَاءَ حَتَّىٰ يُهَاجِرُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ ۚ
فَإِنْ تَوَلَّوْا فَخُذُوهُمْ وَاقْتُلُوهُمْ حَيْثُ وَجَدْتُمُوهُمْ ۖ
وَلَا تَتَّخِذُوا مِنْهُمْ وَلِيًّا وَلَا نَصِيرًا ﴿٨٩﴾

91. 但し彼等がお前たちと協定を結んでいる部族と関係がある人々、またはお前たちや己れの民と戦うのを避けるためにお前たちに投降せる者は除く。もしアッラーがその気になり給えば、アッラーは彼等にお前たちを制する力を与え、彼等は必ずお前たちと戦いしなり。されば彼等もし退きて戦わず、和平を提議する場合は、アッラーはお前たちに彼等を攻撃することを許さず。

إِلَّا الَّذِينَ يَصِلُونَ إِلَىٰ قَوْمٍ بَيْنَكُمْ وَبَيْنَهُمْ مِيثَاقٌ
أَوْ جَاءُوكُمْ حَصِرَتْ صُدُورُهُمْ أَنْ يُقَاتِلُوكُمْ أَوْ
يُقَاتِلُوا قَوْمَهُمْ ۚ وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ لَسَلَّطَهُمْ عَلَيْكُمْ
فَلَقَاتَلُوكُمْ ۚ فَإِنِ اعْتَزَلُوكُمْ فَلَمْ يُقَاتِلُوكُمْ وَأَلْقَوْا
إِلَيْكُمُ السَّلَمَ فَمَا جَعَلَ اللَّهُ لَكُمْ عَلَيْهِمْ سَبِيلًا ﴿٩٠﴾

92. お前たちは、お前たちや、己れの民と平和にありたいと望んでいる他の徒輩（やから）を見出さ

سَتَجِدُونَ آخَرِينَ يُرِيدُونَ أَنْ يَأْمَنُوكُمْ وَيَأْمَنُوا

注 60　この節は社会的義務を示している。

ん。されど彼等は騒動が再発すれば、たちまち之に顚倒す。されば、彼等もし退かず、和平も提議せず、戦いの手も制止ずば、何処なりとも彼等を捕らえ、之を殺せ。そのような者どもに対しては、われらはお前たちに明白なる権能を与う。

قومهم كلما ردوا الى الفتنة اركسوا فيها فان لم يعتزلوكم ويلقوا اليكم السلم ويكفوا ايديهم فخذوهم واقتلوهم حيث ثقفتموهم واولئكم جعلنا لكم عليهم سلطانا مبينا ﴿٩٢﴾

第十三項

93. 過失によるに非ずば、信者が信者を殺すのはふさわしからず。(注 61)過って一人の信者を殺したものは、一人の奴隷信者を解放し、且つ被害者の相続人に血の賠償金を支払うべし、但し相手方がそれを喜捨として免除する場合は別なり。されどもし殺された者がお前たちと敵対する民で、しかも信者ならば(注 62)、その科料は一人の奴隷信者を解放するだけでよし。またもし被害者がお前たちと協定を結べる部族であらば、その科料は血の賠償金を相手の相続人に支払った上、一人の奴隷信者を解放すべし。されどその資力なき者は二ヵ月間連続して断食せよ――こはアッラーよりの慈悲なり。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وما كان لمؤمن ان يقتل مؤمنا الا خطا ومن قتل مؤمنا خطا فتحرير رقبة مؤمنة ودية مسلمة الى اهله الا ان يصدقوا فان كان من قوم عدو لكم وهو مؤمن فتحرير رقبة مؤمنة وان كان من قوم بينكم وبينهم ميثاق فدية مسلمة الى اهله وتحرير رقبة مؤمنة فمن لم يجد فصيام شهرين متتابعين توبة من الله وكان الله عليما حكيما ﴿٩٣﴾

94. 誰であれ、故意に信徒を殺害する者は、その応報は地獄なり。彼はその中に永久に住まん。アッラーは彼に激怒し、彼を呪い、彼に恐ろしい罰を準備せん。

ومن يقتل مؤمنا متعمدا فجزاؤه جهنم خلدا فيها وغضب الله عليه ولعنه واعد له عذابا عظيما ﴿٩٤﴾

95. 汝等信徒たちよ、お前たちアッラーの道のために出で立つ時は、正しい調査をせよ。而して平和を求めてお前たちに挨拶する者

يايها الذين امنوا اذا ضربتم في سبيل الله فتبينوا

注 61　実際の戦闘においては、イスラム教徒が、同じイスラム教徒に誤って殺されることもあり得る。それ故、この節ではこうした万一の実態に備え常に自分を守るよう警告を発している。

注 62　殺された人がイスラム教徒であっても、たまたま敵側であった場合には、殺した人は信徒である。奴隷を一人解放すればよく、血の代償金は取り立てられない。なぜなら、敵に金銭を支払えば、反イスラム勢力の軍事力を強化することになるからである。「(そして) もし殺された人が女と協定を結んだ間柄であるなら」という表現中には、「彼が信徒であれば」という言葉は繰り返されていないが、これは、イスラム国家に住んでいるイスラム教徒ではない者、あるいはイスラム教徒と協定を結んでいる国の中の信徒でない者についても、この法律がイスラム教徒に対してと同じであることを示しているのである。

に向って、「汝は信徒に非ず」（注 63）と云うなかれ。お前たちは現世の品々を求めるが、アッラーの許には莫大なる戦利品あり。お前たちも以前は不信心者なりしが、アッラーは特別なる恩恵をお前たちに垂れ給えり。されば正しい調査をせよ。（注 64）げにアッラーはお前たちの所業を知悉し給う。

ولا تقولوا لمن ألقى إليكم السلم لست مؤمنا
تبتغون عرض الحيوة الدنيا فعند الله مغانم
كثيرة كذلك كنتم من قبل فمن الله عليكم
فتبينوا إن الله كان بما تعملون خبيرا ﴿٩٥﴾

96. 不具者は別として、家に居残る信徒と、アッラーの道のために財産も生命も捧げて戦う者とは同じからず。（注 65）アッラーは財産も生命も捧げて戦う者に、家に居残る者より高い位階を授けたり。アッラーはどちらの信徒にも良き報奨を約束せり。されど家に居残る者よりも、戦う者に高い位階を授け、大なる報奨、

لا يستوي القعدون من المؤمنين غير أولي الضرر
والمجهدون في سبيل الله بأموالهم وأنفسهم
فضل الله المجهدين بأموالهم وأنفسهم على
القعدين درجة وكلا وعد الله الحسنى وفضل
الله المجهدين على القعدين أجرا عظيما ﴿٩٦﴾

97. すなわちはるかにすぐれた位階と赦免と恵みとを授け給えり。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

درجت منه ومغفرة ورحمة وكان الله غفورا
رحيما ﴿٩٧﴾

第十四項

98. 己れの魂に害なしているうちに天使らに召されし者、彼等に天使は質さん、「お前たちの境涯や如何に？」と。彼等は答えん、「我等は地上で弱い者なりき」と。すると天使

إن الذين توفهم الملئكة ظالمي أنفسهم قالوا
فيم كنتم قالوا كنا مستضعفين في الأرض قالوا

注 63　ある国民が和平を提案してきたり、友好的態度を示す時には、イスラム教徒は、その態度に敬意を払い、敵意を抱くことを慎まなければならない。更に、メジナのイスラム教社会は敵対する部族に囲まれていたので、そこでは、イスラム教の挨拶をする人は、調べてみて信徒ではないとわかった時以外には、イスラム教徒とみなすよう指示されていた。

注 64　つまり、もし正当な調査もせず、こうした人を信徒ではないと考えるなら、これは汝が相手を殺害したい、そして相手の所有物を手に入れたいと思っていることになるであろう。

注 65　この節では、信者の二つの種類について述べている。(1)真面目にイスラム教を信じ、教義に従って生きようとするが、信仰を外からの攻撃から守り広めていく努力にまでは加わらない人々、つまり受動的な信者であり、この節では「家に居残る信徒」と呼ばれている。(2)イスラム教の教義に則って生きるのは勿論、その普及活動に精力的に参加する人々である。この人々は積極的な信者であり、ムジャヒドと呼ばれている。しかしながら、もう一つの種類の信者がいる。実際の非信徒との戦いには加わりはしないが、戦いに参加した者と同じ報酬を受ける者達である。彼らは心底はムジャヒドたるイスラム教徒と同じなのである。ムジャヒドは神のための戦いにどこへでも出ていくが、彼らは特別な事情のため、病気や貧困などのために、本人自らは遠征に参加できないのである。

أَلَمْ تَكُنْ أَرْضُ اللّٰهِ وَاسِعَةً فَتُهَاجِرُوْا فِيْهَا ۚ فَأُولٰٓئِكَ
مَأْوٰىهُمْ جَهَنَّمُ ۖ وَسَآءَتْ مَصِيْرًا ﴿٩٨﴾

らは云わん､「アッラーの大地は何処なりとも移り住める程広大ではなかりしか？」と。（注 66）これ等の者どもの住居は地獄なり。そは悲惨なる行く先なり。

إِلَّا الْمُسْتَضْعَفِيْنَ مِنَ الرِّجَالِ وَالنِّسَآءِ وَالْوِلْدَانِ لَا
يَسْتَطِيْعُوْنَ حِيْلَةً وَّلَا يَهْتَدُوْنَ سَبِيْلًا ﴿٩٩﴾

99. 但しかかる弱者のうち、避難の途を見出せず、またどうすべきかその手段を構ずる能力もない男や女や子供は除外す。（注 67）

فَأُولٰٓئِكَ عَسَى اللّٰهُ أَنْ يَّعْفُوَ عَنْهُمْ ۚ وَكَانَ اللّٰهُ عَفُوًّا
غَفُوْرًا ﴿١٠٠﴾

100. これ等の人々には、アッラーは恐らくその罪を宥恕せん。なんとなれば、アッラーは赦免者にして、寛大にまします故に。

وَمَنْ يُّهَاجِرْ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ يَجِدْ فِي الْأَرْضِ مُرٰغَمًا
كَثِيْرًا وَّسَعَةً ۚ وَمَنْ يَّخْرُجْ مِنْۢ بَيْتِهٖ مُهَاجِرًا إِلَى
اللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ ثُمَّ يُدْرِكْهُ الْمَوْتُ فَقَدْ وَقَعَ أَجْرُهٗ
عَلَى اللّٰهِ ۗ وَكَانَ اللّٰهُ غَفُوْرًا رَّحِيْمًا ﴿١٠١﴾

101. 誰であれアッラーの道のために家郷を棄てる者は、この地上のいたるところに避難場所と豊かさがあることを知るべし。また誰であれ家を後にして、アッラーの道並びに使徒のために移住し、（注 68）而して死に襲われたる者、その者の報奨はアッラーの責任なり。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

第十五項

وَإِذَا ضَرَبْتُمْ فِي الْأَرْضِ فَلَيْسَ عَلَيْكُمْ جُنَاحٌ أَنْ
تَقْصُرُوْا مِنَ الصَّلٰوةِ ۖ إِنْ خِفْتُمْ أَنْ يَّفْتِنَكُمُ
الَّذِيْنَ كَفَرُوْا ۚ إِنَّ الْكٰفِرِيْنَ كَانُوْا لَكُمْ عَدُوًّا مُّبِيْنًا ﴿١٠٢﴾

102. 旅行中にもし不信心者どもから危害を加えられる恐れのある場合は、礼拝を短縮するとも（注 69）お前たちに罪なし。げに不信心者どもはお前たちの公然の敵なり。

注 66　イスラム教は弱い受動的な信仰では十分と言えない。もし信者の周囲の環境が、信仰に適していないのであれば、信仰により適した場所に移住すべきである。もし移住しなければ、その信者の信仰は真剣なものとはみなされないであろう。

注 67　移住できない信者は、前節の種類分けからは除外される。

注 68　イスラム教は、信仰に対し敵意に満ちた環境から移住できるにもかかわらず、移住せず、そこに留まろうとすることに対しては、信者がどのような言い訳をしようと、それを受け入れない。

注 69　危険時の祈りについては、クルアーンは三つの別々の節で扱っている。即ち、(1)2：240では、非常に危険で正式に祈ることが不可能な時の祈りについて述べている。(2)この節では、通常の危険の時に個人個人が行う祈りを扱っている。(3)次の節では、危険な時、集団で行う祈りについて述べている。個々に行う祈りに関してこの節で言う「祈りの短縮」とはラカート（礼拝の単位）の数を減らすという意味ではない。ラカートは初めから、家より遠く離れている時には二回と定められている。敵襲の危険がある時には、定められた祈りを急いで行うという意味である。(家から遠く離れている場合ラカートは二回と定まっているので）危険が迫っている時には、この二回のラカートさえも一人一人大急ぎですませてよいのである。

103.　汝彼等と共にあり、彼等のために礼拝を先導せんとする際は、彼等の一部の者に武器をとらせて汝と共に立たしめよ。而して彼等が跪拝叩頭を終らば、彼等をしてお前たちの背後に退かしめ、まだ礼拝を済ませざる一団を前に進ませて汝と共に礼拝せしめよ。(注 70) その際も彼等をして警戒せしめ、且つ武器をとらしめよ。不信心者どもはお前たちが武器や荷物をおろそかにすることを望み、一挙にお前たちを襲うことを望む。もし降雨に邪魔され、或いは病めるならば、武器を下に置くとも、お前たちに罪なし。されど常に警戒を怠るべからず。(注 71) げにアッラーは不信心者どもに恥ずべき懲罰を準備せり。

وإذا كنت فيهم فأقمت لهم الصلوة فلتقم طائفة منهم معك وليأخذوا أسلحتهم فإذا سجدوا فليكونوا من ورائكم ولتأت طائفة أخرى لم يصلوا فليصلوا معك وليأخذوا حذرهم وأسلحتهم ود الذين كفروا لو تغفلون عن أسلحتكم وأمتعتكم فيميلون عليكم ميلة واحدة ولا جناح عليكم إن كان بكم أذى من مطر أو كنتم مرضى أن تضعوا أسلحتكم وخذوا حذركم إن الله أعد للكافرين عذابا مهينا ﴿١٠٣﴾

104.　礼拝が終らば、アッラーを唱念せよ、立ちながら、坐りながら、横になりながら。また安全なる時は、規定された形式で礼拝を遵守せよ。礼拝は、定められたる時刻に捧げることを信徒に命ぜられる。(注 72)

فإذا قضيتم الصلوة فاذكروا الله قياما وقعودا وعلى جنوبكم فإذا اطمأننتم فأقيموا الصلوة إن الصلوة كانت على المؤمنين كتابا موقوتا ﴿١٠٤﴾

105.　お前たち敵に対する追求の手をゆるめるなかれ。お前たちが苦しむ時、彼等もまた苦しむなり。されどお前たちには、彼等が望み得ざるアッラーよりの希望あり。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

ولا تهنوا في ابتغاء القوم إن تكونوا تألمون فإنهم يألمون كما تألمون وترجون من الله ما لا يرجون وكان الله عليما حكيما ﴿١٠٥﴾

第十六項

106.　われらが真理を包含する経典を汝に降したるは、アッラーが汝に教えたるものにのっとって、汝が人々の間を審判くためな

إنا أنزلنا إليك الكتب بالحق لتحكم بين الناس

注 70　前節が、危険時の個人個人の祈りについて述べているのに対し、この節では、信仰篤い人々の集団が、一緒に祈る時の仕方が詳細に示されており、種々の場合に応じた 11 もの形式の祈りがハディスの中で説明されている。

注 71　この節は、武器と警戒の違いを示している。前者は比較的安全な時には片付けられるであろうが、後者はいつも怠ってはならないのである。4：72 も参照せよ。

注 72　戦闘の最中は 2 つのラカートを急いで済ませるか、1 つのラカートだけを行うかどちらかであるため、この節では、イスラム教徒達は足りない分を補うため、やるべき事が終わった後には神を思い出し、略式でも神に祈らなければならないと定めている。これは、祈りを短くしたことの埋め合わせをするためである。

り。されば汝背信者のための弁護人となるなかれ。(注 73)

بِمَآ أَرَىٰكَ ٱللَّهُ ۚ وَلَا تَكُن لِّلْخَآئِنِينَ خَصِيمًا ﴿١٠٦﴾

107．アッラーの赦免を請い奉れ。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

وَٱسْتَغْفِرِ ٱللَّهَ ۖ إِنَّ ٱللَّهَ كَانَ غَفُورًا رَّحِيمًا ﴿١٠٧﴾

108．自らを欺く者どものために弁護するなかれ。げにアッラーは裏切者や罪深い者を愛し給わず。

وَلَا تُجَٰدِلْ عَنِ ٱلَّذِينَ يَخْتَانُونَ أَنفُسَهُمْ ۚ إِنَّ ٱللَّهَ
لَا يُحِبُّ مَن كَانَ خَوَّانًا أَثِيمًا ﴿١٠٨﴾

109．彼等は人の目はごまかせても、アッラーから身を隠すこと能わず。彼等が夜陰に乗じてアッラーの賛成せざることを企む時、アッラーは彼等と偕に在り。アッラーは彼等の所業を取り囲み給う。

يَسْتَخْفُونَ مِنَ ٱلنَّاسِ وَلَا يَسْتَخْفُونَ مِنَ ٱللَّهِ
وَهُوَ مَعَهُمْ إِذْ يُبَيِّتُونَ مَا لَا يَرْضَىٰ مِنَ ٱلْقَوْلِ ۚ
وَكَانَ ٱللَّهُ بِمَا يَعْمَلُونَ مُحِيطًا ﴿١٠٩﴾

110．見よ、お前たちは、現世において彼等を弁護する者なり。しかれども復活の日に、誰がアッラーを相手に彼等を弁護できようぞ、また誰が彼等の庇護者となり得ようぞ。

هَٰٓأَنتُمْ هَٰٓؤُلَآءِ جَٰدَلْتُمْ عَنْهُمْ فِى ٱلْحَيَوٰةِ ٱلدُّنْيَا
فَمَن يُجَٰدِلُ ٱللَّهَ عَنْهُمْ يَوْمَ ٱلْقِيَٰمَةِ أَم مَّن يَكُونُ
عَلَيْهِمْ وَكِيلًا ﴿١١٠﴾

111．されど、悪事を行い、己が魂に害なしても、アッラーに赦免を請わば、アッラーが寛大にして慈悲深くましますことがわかるべし。

وَمَن يَعْمَلْ سُوٓءًا أَوْ يَظْلِمْ نَفْسَهُۥ ثُمَّ يَسْتَغْفِرِ ٱللَّهَ
يَجِدِ ٱللَّهَ غَفُورًا رَّحِيمًا ﴿١١١﴾

112．誰であれ罪を犯す者は、ただ己れ自身に罪を犯すに過ぎず。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَمَن يَكْسِبْ إِثْمًا فَإِنَّمَا يَكْسِبُهُۥ عَلَىٰ نَفْسِهِۦ ۚ وَكَانَ
ٱللَّهُ عَلِيمًا حَكِيمًا ﴿١١٢﴾

113．誰であれ過ちや罪を犯して之を潔白な人のせいにする者は、讒誣と明白な罪をその身に負う者なり。

وَمَن يَكْسِبْ خَطِيٓـَٔةً أَوْ إِثْمًا ثُمَّ يَرْمِ بِهِۦ بَرِيٓـًٔا
فَقَدِ ٱحْتَمَلَ بُهْتَٰنًا وَإِثْمًا مُّبِينًا ﴿١١٣﴾

第十七項

114．もし汝にアッラーの恩恵と慈悲がなかりせば、彼等の一派は汝を迷わしめんと企みたり。されど彼等はただ自らを迷わしめるのみにして、いささかも汝を害うこと能わず。アッラーは汝に経典と知恵とを降し給

وَلَوْلَا فَضْلُ ٱللَّهِ عَلَيْكَ وَرَحْمَتُهُۥ لَهَمَّت طَّآئِفَةٌ
مِّنْهُمْ أَن يُضِلُّوكَ وَمَا يُضِلُّونَ إِلَّآ أَنفُسَهُمْ ۖ وَمَا
يَضُرُّونَكَ مِن شَىْءٍ ۚ وَأَنزَلَ ٱللَّهُ عَلَيْكَ ٱلْكِتَٰبَ وَ

注 73　この言葉は、すべてのイスラム教徒に宛てたものである。

い、汝が知らざりしことを教えたり。汝に垂れ給うアッラーの恩恵こそ大なるかな。（注 74）

الْحِكْمَةَ وَعَلَّمَكَ مَا لَمْ تَكُنْ تَعْلَمُ ۚ وَكَانَ فَضْلُ اللَّهِ عَلَيْكَ عَظِيمًا ﴿١١٤﴾

115. 喜捨や善行を勧め、或いは人々を仲裁する相談を（注 75）除いて、彼等の多くの相談は無益なり。誰であれアッラーを悦ばさんとして之をなす者あらば、われらはその者に大なる報奨を与えん。

لَا خَيْرَ فِي كَثِيرٍ مِنْ نَجْوَاهُمْ إِلَّا مَنْ أَمَرَ بِصَدَقَةٍ أَوْ مَعْرُوفٍ أَوْ إِصْلَاحٍ بَيْنَ النَّاسِ ۚ وَمَنْ يَفْعَلْ ذَٰلِكَ ابْتِغَاءَ مَرْضَاتِ اللَّهِ فَسَوْفَ نُؤْتِيهِ أَجْرًا عَظِيمًا ﴿١١٥﴾

116. されど嚮導が明示されたる後、使徒に背き、信徒の道に非ざる道を辿る者は、われらその者をして、已が追い求めんとする道を続行せしめ、果ては地獄に投げ込まん。そは悲惨なる行き着く先よ。

وَمَنْ يُشَاقِقِ الرَّسُولَ مِنْ بَعْدِ مَا تَبَيَّنَ لَهُ الْهُدَىٰ وَيَتَّبِعْ غَيْرَ سَبِيلِ الْمُؤْمِنِينَ نُوَلِّهِ مَا تَوَلَّىٰ وَنُصْلِهِ جَهَنَّمَ ۖ وَسَاءَتْ مَصِيرًا ﴿١١٦﴾

第十八項

117. アッラーは御自分に如何なる者も併せ祀ることを許し給わず。されどその他のことは、誰であれ御心にかなえば、之を許し給う。されどアッラーに他神を併せ祀る者は、はるかに遠く正道を踏みはずせし者なり。

إِنَّ اللَّهَ لَا يَغْفِرُ أَنْ يُشْرَكَ بِهِ وَيَغْفِرُ مَا دُونَ ذَٰلِكَ لِمَنْ يَشَاءُ ۚ وَمَنْ يُشْرِكْ بِاللَّهِ فَقَدْ ضَلَّ ضَلَالًا بَعِيدًا ﴿١١٧﴾

118. 彼等はアッラーをさしおいて、ただ偶像を祈るのみ、背逆の悪魔を祈るのみ、

إِنْ يَدْعُونَ مِنْ دُونِهِ إِلَّا إِنَاثًا وَإِنْ يَدْعُونَ إِلَّا شَيْطَانًا مَرِيدًا ﴿١١٨﴾

119. そはアッラーが呪詛せる者なり。悪魔は云う、「我必ず汝の僕らより割り当てられし者どもを連れ去らん。

لَعَنَهُ اللَّهُ ۘ وَقَالَ لَأَتَّخِذَنَّ مِنْ عِبَادِكَ نَصِيبًا مَفْرُوضًا ﴿١١٩﴾

120. 我必ず彼等を迷わせ、空しい欲望にふけらせ、彼等を煽って家畜の耳を切らせてアッラーの創造物を変えさせん」と。アッ

وَلَأُضِلَّنَّهُمْ وَلَأُمَنِّيَنَّهُمْ وَلَآمُرَنَّهُمْ فَلَيُبَتِّكُنَّ آذَانَ الْأَنْعَامِ وَلَآمُرَنَّهُمْ فَلَيُغَيِّرُنَّ خَلْقَ اللَّهِ ۚ

注 74　偽善者達は様々な手段を用いて、モハッマドを落とし入れようとした。彼らは、非常に重大な事柄について、聖なる預言者が誤った決定を下すように策をめぐらしていた。しかし、彼らの計画はいつも失敗に終わっている。なぜなら、聖なる預言者はイスラム教の将来に影響を及ぼすような問題に関しては、神によって常に正しい方向へと導かれていたからである。

注 75　二人以上の人で交わされた秘密の話、または他の人に秘密を洩らすこと、または秘密の相談をすることの意である。この言葉は、秘密の相談に限って用いられるのではなく、秘密であろうがなかろうが、重要事項を討議するために、特別に人々を召集するあらゆる会議に適用されるのである。

ラーをさしおいて悪魔（サタン）を友とする者は、必ず明白なる損失を被るべし。

وَمَن يَتَّخِذِ الشَّيْطَٰنَ وَلِيًّا مِّن دُونِ اللَّهِ فَقَدْ خَسِرَ خُسْرَانًا مُّبِينًا ﴿١١٩﴾

121.　悪魔（サタン）は彼等にいろいろと約束をなし、空しい欲望を生ぜしむ。されど悪魔（サタン）はただ彼等を欺かんがために約束するのみ。

يَعِدُهُمْ وَيُمَنِّيهِمْ ۖ وَمَا يَعِدُهُمُ الشَّيْطَٰنُ إِلَّا غُرُورًا ﴿١٢٠﴾

122.　これ等の者どもの住居は地獄なり。しかも彼等はそこより逃れる術（すべ）を知らず。

أُولَٰئِكَ مَأْوَاهُمْ جَهَنَّمُ وَلَا يَجِدُونَ عَنْهَا مَحِيصًا ﴿١٢١﴾

123.　されど信じて善行を積（つ）む人々には、われら之（これ）を河川流れる楽園に入るを許し、その中に永久（とこしえ）に住ましめん。こはアッラーの確約なり。アッラーの御言葉（みことば）より勝りて真実にもの云える者は誰か？

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّٰلِحَٰتِ سَنُدْخِلُهُمْ جَنَّٰتٍ تَجْرِي مِن تَحْتِهَا الْأَنْهَٰرُ خَٰلِدِينَ فِيهَا أَبَدًا ۖ وَعْدَ اللَّهِ حَقًّا ۚ وَمَنْ أَصْدَقُ مِنَ اللَّهِ قِيلًا ﴿١٢٢﴾

124.　そはお前たちの希望に副（そ）ってならず、また経典の民の希望に副（そ）ってならず。誰であれ悪事をなさば、その報いを受くべし。而（しか）してアッラーの外には味方も佑助者もなきことを悟るべし。

لَّيْسَ بِأَمَانِيِّكُمْ وَلَا أَمَانِيِّ أَهْلِ الْكِتَٰبِ ۗ مَن يَعْمَلْ سُوءًا يُجْزَ بِهِ وَلَا يَجِدْ لَهُ مِن دُونِ اللَّهِ وَلِيًّا وَلَا نَصِيرًا ﴿١٢٣﴾

125.　されど善行を積（つ）む者は、男女にかかわらず、(注 76) しかも信徒であれば、みな楽園に入り、棗椰子（なつめやし）の種のへこみ程も不当に遇せられざるべし。

وَمَن يَعْمَلْ مِنَ الصَّٰلِحَٰتِ مِن ذَكَرٍ أَوْ أُنثَىٰ وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَأُولَٰئِكَ يَدْخُلُونَ الْجَنَّةَ وَلَا يُظْلَمُونَ نَقِيرًا ﴿١٢٤﴾

126.　アッラーに全く服従帰依し、善事にいそしみ、アブラハムの正しい宗教に従う者より勝れる信仰をもつ者は誰か？　アッラーはアブラハムを特別の友とせり。(注 77)

وَمَنْ أَحْسَنُ دِينًا مِّمَّنْ أَسْلَمَ وَجْهَهُ لِلَّهِ وَهُوَ مُحْسِنٌ وَاتَّبَعَ مِلَّةَ إِبْرَٰهِيمَ حَنِيفًا ۗ وَاتَّخَذَ اللَّهُ إِبْرَٰهِيمَ خَلِيلًا ﴿١٢٥﴾

注 76　　この節では、仕事と報酬に関する限り、男も女も同等の立場においている。どちらも良い仕事をすれば、平等に十分な報酬を受けられるということが示されている。

注 77　　この節は、イスラム教の真髄を示している。その真髄とは、神の意志への完全な服従、自分のすべての能力、力を神への奉仕に捧げることであり、またアブラハムをイスラム教徒が模倣すべき、また後に従うべき真の模範としていつも心に止めておくことである。

127.　天に在るもの地に在るもの、挙げてアッラーの有なり。アッラーはすべてを取り囲み給う。

وَلِلّٰهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ ۗ وَكَانَ اللّٰهُ
بِكُلِّ شَيْءٍ مُّحِيْطًا ﴿۱۲۷﴾

第十九項

128.　彼等は女のことで汝に見解を求む。云え、「アッラーはお前たちに、彼女たちに関して判定を（注 78）与え給う。而してお前たちが規定されたものを与えず、しかも娶らんと望んでいる孤児の女に関することや、また無力な児童らに関することなどを経典の中でも誦 述されているなり。（注 79）またアッラーは孤児を公正に扱うべきことをお前たちに命じ給う。お前たちが行う善事は、アッラーは常に之を認知す」と。

وَيَسْتَفْتُوْنَكَ فِي النِّسَآءِ ۗ قُلِ اللّٰهُ يُفْتِيْكُمْ فِيْهِنَّ ۙ وَ
مَا يُتْلٰى عَلَيْكُمْ فِي الْكِتٰبِ فِيْ يَتٰمَى النِّسَآءِ الّٰتِيْ لَا
تُؤْتُوْنَهُنَّ مَا كُتِبَ لَهُنَّ وَتَرْغَبُوْنَ اَنْ تَنْكِحُوْهُنَّ
وَالْمُسْتَضْعَفِيْنَ مِنَ الْوِلْدَانِ ۙ وَاَنْ تَقُوْمُوْا لِلْيَتٰمٰى
بِالْقِسْطِ ۗ وَمَا تَفْعَلُوْا مِنْ خَيْرٍ فَاِنَّ اللّٰهَ كَانَ بِهٖ
عَلِيْمًا ﴿۱۲۸﴾

129.　もし女がその夫より虐待され、また嫌われる恐れがある場合でも、夫婦の間に和解なれば罪なし。（注 80）和解こそ最善なり。人間はともすれば強欲になりがちなれど、（注 81）もしお前たち善事を行い公正であらば、アッラーは必ずお前たちのなせることに気づくなり。

وَاِنِ امْرَاَةٌ خَافَتْ مِنْ بَعْلِهَا نُشُوْزًا اَوْ اِعْرَاضًا
فَلَا جُنَاحَ عَلَيْهِمَآ اَنْ يُّصْلِحَا بَيْنَهُمَا صُلْحًا ۗ وَالصُّلْحُ
خَيْرٌ ۗ وَاُحْضِرَتِ الْاَنْفُسُ الشُّحَّ ۗ وَاِنْ تُحْسِنُوْا
وَتَتَّقُوْا فَاِنَّ اللّٰهَ كَانَ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِيْرًا ﴿۱۲۹﴾

130.　お前たち如何に努むるとも、妻たちを完全に平等に遇し得ず。さればとて、他の妻たちを宙につるすが如く放置し、ただ一人を偏愛するなかれ。（注 82）お前たちが行状

وَلَنْ تَسْتَطِيْعُوْٓا اَنْ تَعْدِلُوْا بَيْنَ النِّسَآءِ وَلَوْ حَرَصْتُمْ
فَلَا تَمِيْلُوْا كُلَّ الْمَيْلِ فَتَذَرُوْهَا كَالْمُعَلَّقَةِ ۗ وَاِنْ

注 78　この「判定」については次の三つの節で触れられている。

注 79　「経典の中でも誦述されている」という言葉は、この章の第四節を暗に示している。自分の権利を十分に守れない孤児の少女と結婚することは、イスラム教徒には禁止されている。二代目カリフであるオマルは、裕福で美しい孤児の少女の保護者がその少女と結婚することを許そうとせず、彼女達のために他のもっとよい夫を見つけるよう強く要求していた。女に関するいくつかの教えは、これまでのクルアーンの中に示されているし、この後にもまだ述べられている。

注 80　'彼らがお互いに和解し合うのは決して罪とはならない。' というこの箇所は、勧告と叱責両方の意味を持つクルアーン特有の表現である。これは次のように解釈するとよいだろう。相争っている人々は、もしお互いに和解すれば、罪を犯すことになると思っているのだろうか。和解は罪ではない。逆に好ましいことである。

注 81　夫婦間に応々にして不和を引き起こす真の原因となるもの、それは夫のけちと妻の貪欲である。

注 82　男が妻たちとの間に、あらゆる点で完全な調和を保っていくことは、人間の能力では不可能である。例えば、愛は人間が統御できない心に関わることであるため、夫は妻全員に平等な愛を求められても、それは

を改め、公正に振舞うならば、アッラーは寛大にして慈悲深くまします。

تصلحوا وتتقوا فإن الله كان غفورا رحيما (١٣٠)

131．またたとい夫婦が別れるとも、アッラーはその心の豊かさを以て二人を世話すべし。(注 83)アッラーは恵み深く、賢哲にまします。

وإن يتفرقا يغن الله كلا من سعته وكان الله واسعا حكيما (١٣١)

132．天に在るもの地に在るもの、挙げてアッラーの有なり。われらはお前たちの以前に経典を授けし者、並びにお前たちにも、アッラーを畏れよと確かに命じたり。さればたといお前たちが信ぜずとも、天地間の一切はアッラーの有なり。アッラーは自足者、讃美すべき御方なり。

ولله ما في السموت وما في الأرض ولقد وصينا الذين أوتوا الكتب من قبلكم وإياكم أن اتقوا الله وإن تكفروا فإن لله ما في السموت وما في الأرض وكان الله غنيا حميدا (١٣٢)

133．天に在るもの地に在るもの、挙げてアッラーの有なり。而してアッラーは守護者として万全なり。

ولله ما في السموت وما في الأرض وكفى بالله وكيلا (١٣٣)

134．人々よ、もしアッラー欲しなば、彼はお前たちを滅ぼし、代りに他の人々を創造す。アッラーは之をなす権能を持ち給う。

إن يشأ يذهبكم أيها الناس ويأت بآخرين وكان الله على ذلك قديرا (١٣٤)

135．現世の報奨を望む者には、アッラーの御許に現世と来世の報奨があることを知らしめよ。アッラーはすべてを聴き、すべてをみそなはし給う。

من كان يريد ثواب الدنيا فعند الله ثواب الدنيا والآخرة وكان الله سميعا بصيرا (١٣٥)

第二十項

136．汝等信徒たちよ、証人としてアッラーの前に立つ時は、たといお前たち自身、または両親、または親族に逆らっても、(注 84)必ず公正を遵守せよ。富者であろうが貧者

يأيها الذين آمنوا كونوا قومين بالقسط شهداء لله ولو على أنفسكم أو الولدين والأقربين إن

不可能なことである。しかし、他の点で確かに公平に対処できるし、またそうしなければならない。つまり、妻たちに対し公平にできるのは、夫が自分で統制できる行為においてのみである。聖なる預言者はこの節に対し、このような解釈を下しているのである。

注 83　夫と妻が仲良くやっていこうと最大限の努力をしても、一緒にやっていけなくなり、離婚となれば、その時は神は双方によりふさわしい相手を見つけることを約束している。しかしイスラム教では、離婚は神の目から見れば、許されるすべての行為の中で最も憎むべきことである。

注 84　「汝自身に反して」という表現は「汝の家族や親類縁者に反して」という意味にもなるだろう。後に「両親と親類」という言葉がつけ加えられているのは、このことを強調するためである。

であろうが、アッラーはお前たちより以上に彼等両者を気にかけ給う。されば公正に振舞うべく我欲に追随するなかれ。また、もし真実を隠し、証言を忌避するならば、アッラーはお前たちの所業を知悉し給うこと忘れまいぞ。

يَكُنْ غَنِيًّا أَوْ فَقِيرًا فَاللّٰهُ أَوْلٰى بِهِمَا فَلَا تَتَّبِعُوا الْهَوٰى أَنْ تَعْدِلُوا وَإِنْ تَلْوُوا أَوْ تُعْرِضُوا فَإِنَّ اللّٰهَ كَانَ بِمَا تَعْمَلُونَ خَبِيرًا ﴿١٣٦﴾

137.　汝等信徒たちよ、アッラーとその使徒並びに使徒に降せる経典と、以前に降せる経典を信ぜよ。(注 85) 誰であれアッラー、諸天使、諸経典、使徒たち、並びに最後の日を信ぜざる者は、正しき道よりはるか遠くへ踏み迷いたる者なり。

يٰأَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا آمِنُوا بِاللّٰهِ وَرَسُولِهِ وَالْكِتٰبِ الَّذِي نَزَّلَ عَلٰى رَسُولِهِ وَالْكِتٰبِ الَّذِي أَنْزَلَ مِنْ قَبْلُ وَمَنْ يَكْفُرْ بِاللّٰهِ وَمَلٰئِكَتِهِ وَكُتُبِهِ وَرُسُلِهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ فَقَدْ ضَلَّ ضَلٰلًا بَعِيدًا ﴿١٣٧﴾

138.　一たび信じて背信し、再び信じてまたも背信し、しかもその背信の度合を強めるような者は、(注 86) アッラーはかかる徒輩を決して許さず、また導きもせず。

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا ثُمَّ كَفَرُوا ثُمَّ آمَنُوا ثُمَّ كَفَرُوا ثُمَّ ازْدَادُوا كُفْرًا لَمْ يَكُنِ اللّٰهُ لِيَغْفِرَ لَهُمْ وَلَا لِيَهْدِيَهُمْ سَبِيلًا ﴿١٣٨﴾

139.　偽善者どもに伝えてやれ、彼等には悲惨な懲罰があることを。

بَشِّرِ الْمُنٰفِقِينَ بِأَنَّ لَهُمْ عَذَابًا أَلِيمًا ﴿١٣٩﴾

140.　信徒をさしおいて、不信心者を友とする者あり。彼等は自分たちの手にて栄誉を求むるか？　すべての栄誉はアッラーの所有なり。

الَّذِينَ يَتَّخِذُونَ الْكٰفِرِينَ أَوْلِيَاءَ مِنْ دُونِ الْمُؤْمِنِينَ أَيَبْتَغُونَ عِنْدَهُمُ الْعِزَّةَ فَإِنَّ الْعِزَّةَ لِلّٰهِ جَمِيعًا ﴿١٤٠﴾

141.　アッラーはすでに経典の中で、(注 87) アッラーの神兆が否定され、また嘲笑せらるるを聞かば、彼等が話題を変えざるかぎり、お前たち彼等と同席するなかれ、と啓示せり。然らずんば、お前たちも彼等と同

وَقَدْ نَزَّلَ عَلَيْكُمْ فِي الْكِتٰبِ أَنْ إِذَا سَمِعْتُمْ آيٰتِ اللّٰهِ يُكْفَرُ بِهَا وَيُسْتَهْزَأُ بِهَا فَلَا تَقْعُدُوا مَعَهُمْ حَتّٰى يَخُوضُوا فِي حَدِيثٍ غَيْرِهِ إِنَّكُمْ إِذًا مِثْلُهُمْ

注 85　汝、信徒と称する者、行いと行動によって、汝の信仰が真実で強固なものであることを示せ。

注 86　この表現のついでに、イスラム教では背教は死をもって罰せられるという主張が根拠のないものであり、誤りであることを明らかにしている。死んでしまうなら、背信したり信じたりをくりかえす者など存在し得ないからである。

注 87　「すでに経典の中で汝に姿を示されている」という言葉は、6：69 から引用されている。
6：69 は、今語られているこの節より以前に、メッカで啓示されたのであるが、現在のクルアーンの中では、この節より後に置かれている。つまり、現在のクルアーンの順序は、初めに書かれた順序のままではないのである。

類なり。げにアッラーは偽善者と不信心者どもをやがて皆地獄に集めん。(注 88)

إِنَّ اللَّهَ جَامِعُ الْمُنَافِقِينَ وَالْكَافِرِينَ فِي جَهَنَّمَ جَمِيعًا ﴿١٤٠﴾

142．彼等はお前たちの敗戦を期待せる者どもなり。もしお前たちがアッラーの加護により勝利を得なば、彼等は云う、「我等はお前たちに協力せるに非ずや？」と。されどもし不信心者の方が有利な場合は、彼等は不信心者どもに向って云う、「我等はお前たちを優勢になさざりしか？　信徒に対してお前たちを守れるに非ずや？」と。アッラーは復活の日に、お前たちの間を審判すべし。アッラーは不信心者どもに信徒を打ち負かす方法を授けざるべし。

الَّذِينَ يَتَرَبَّصُونَ بِكُمْ فَإِنْ كَانَ لَكُمْ فَتْحٌ مِنَ اللَّهِ قَالُوا أَلَمْ نَكُنْ مَعَكُمْ وَإِنْ كَانَ لِلْكَافِرِينَ نَصِيبٌ قَالُوا أَلَمْ نَسْتَحْوِذْ عَلَيْكُمْ وَنَمْنَعْكُمْ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ فَاللَّهُ يَحْكُمُ بَيْنَكُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ وَلَنْ يَجْعَلَ اللَّهُ لِلْكَافِرِينَ عَلَى الْمُؤْمِنِينَ سَبِيلًا ﴿١٤١﴾

第二十一項

143．偽善者どもはアッラーを欺かんとするが、アッラーは彼等の欺瞞を懲らしめん。(注 89) 彼等礼拝に立つ時は、さも大儀そうに立ち、人に見せるだけのこと、しかも殆どアッラーを念ずることなし。

إِنَّ الْمُنَافِقِينَ يُخَادِعُونَ اللَّهَ وَهُوَ خَادِعُهُمْ وَإِذَا قَامُوا إِلَى الصَّلَاةِ قَامُوا كُسَالَىٰ يُرَاءُونَ النَّاسَ وَلَا يَذْكُرُونَ اللَّهَ إِلَّا قَلِيلًا ﴿١٤٢﴾

144．こちらでもなければあちらでもなく、(注 90) 何処にも属さざる者ども、アッラーが迷わしむる者には、汝たりとも救う術なし。

مُذَبْذَبِينَ بَيْنَ ذَٰلِكَ لَا إِلَىٰ هَٰؤُلَاءِ وَلَا إِلَىٰ هَٰؤُلَاءِ وَمَنْ يُضْلِلِ اللَّهُ فَلَنْ تَجِدَ لَهُ سَبِيلًا ﴿١٤٣﴾

145．汝等信徒たちよ、信徒たちをさしおいて、不信心者どもを友とするなかれ。お前たち、自らを糾弾する明白な証拠をアッラーに差し出すつもりか？

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَتَّخِذُوا الْكَافِرِينَ أَوْلِيَاءَ مِنْ دُونِ الْمُؤْمِنِينَ أَتُرِيدُونَ أَنْ تَجْعَلُوا لِلَّهِ عَلَيْكُمْ سُلْطَانًا مُبِينًا ﴿١٤٤﴾

注 88　この節に示された命令の底流には、三つの基本的な考え方がある。(1)宗教的事柄の重大性、重要性を強調している。(2)規律を乱そうとする非信徒の集団の影響から信徒たちを守ること、及び(3)イスラム教徒の心の内に宗教に対する敬虔な気持ちを生まれさせ育てることである。

注 89　神の代理が預言者であるので、実際に偽善者達が欺こうとしたのは聖なる預言者であって神ではない。聖なる預言者を陥れようと企てられた多くの陰謀は、神の意図を実現させないために計画された陰謀であった。それ故、彼らの人を欺く行為に対しては、神自身が彼らの罰を下すであろう。

注 90　この表現は、「信仰と不信仰の間」又は「信徒と非信徒の間」の意である。

146. 偽善者どもは必ず業火の一番深みに墜ちるべし。而して彼等には如何なる佑助者もなかるべし。(注 91)

إِنَّ الْمُنَافِقِينَ فِي الدَّرْكِ الْأَسْفَلِ مِنَ النَّارِ وَلَن تَجِدَ لَهُمْ نَصِيرًا ١٤٦

147. 但し、悔悟して改心し、アッラーにしっかりお縋りして、アッラーに対し奉り心から服従する者は除く。これ等の者は信徒の仲間なり。アッラーはやがて信徒たちに大なる報奨を授与すべし。

إِلَّا الَّذِينَ تَابُوا وَأَصْلَحُوا وَاعْتَصَمُوا بِاللَّهِ وَأَخْلَصُوا دِينَهُمْ لِلَّهِ فَأُولَٰئِكَ مَعَ الْمُؤْمِنِينَ وَسَوْفَ يُؤْتِ اللَّهُ الْمُؤْمِنِينَ أَجْرًا عَظِيمًا ١٤٧

148. お前たちもし感謝の気持ちで信仰しなば、アッラーとていかでお前たちを罰せんや。アッラーは感恩者にして、すべてを知り給う。(注 92)

مَا يَفْعَلُ اللَّهُ بِعَذَابِكُمْ إِن شَكَرْتُمْ وَآمَنتُمْ وَكَانَ اللَّهُ شَاكِرًا عَلِيمًا ١٤٨

149. アッラーは公然と汚い言葉で喋ることを好まず。但し、不当に遇せられた者の場合は別なり。(注 93) げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

الجزء ٦

لَا يُحِبُّ اللَّهُ الْجَهْرَ بِالسُّوءِ مِنَ الْقَوْلِ إِلَّا مَن ظُلِمَ وَكَانَ اللَّهُ سَمِيعًا عَلِيمًا ١٤٩

150. お前たちが善行を公然としようが、隠れてしようが、また受けたる害を赦そうが、アッラーは確かに罪業を寛恕し、全能者にまします。

إِن تُبْدُوا خَيْرًا أَوْ تُخْفُوهُ أَوْ تَعْفُوا عَن سُوءٍ فَإِنَّ اللَّهَ كَانَ عَفُوًّا قَدِيرًا ١٥٠

151. アッラーと使徒たちを信ぜず、アッラーと使徒たちの仲を裂かんとして、「我等には信じられるものもあれば、信じられざるものもあり」と云い、どちらつかずの道を追う者ども、(注 94)

إِنَّ الَّذِينَ يَكْفُرُونَ بِاللَّهِ وَرُسُلِهِ وَيُرِيدُونَ أَن يُفَرِّقُوا بَيْنَ اللَّهِ وَرُسُلِهِ وَيَقُولُونَ نُؤْمِنُ بِبَعْضٍ وَنَكْفُرُ بِبَعْضٍ وَيُرِيدُونَ أَن يَتَّخِذُوا بَيْنَ ذَٰلِكَ سَبِيلًا ١٥١

注 91　剣をもってイスラム教を広めるようクルアーンが要求しているという偽善者達からの非難に対して、クルアーンは明確に反論し、偽善者達を強く告発している。もし人が、その人の意志に反してイスラム教を信奉しなくてはならないとしたら、その人は決して真の信徒とはならないであろう。

注 92　神の側のシュクル（恩恵）は、人を許すこと、あるいは人を賞賛すること、あるいは人を十分に善意をもって好意的に評価することであり、そうして必ず彼をねぎらい彼に報いることである。

注 93　イスラム教は、教徒達が公然と人の悪口を言うことを許さない。しかし、ひどい目に合わされた者は、実際のその時に大声で叫ぶのはかまわない。そうすれば、他の人々が彼を助けに来るであろう。彼はまた、法廷に訴えて不正を正そうとしてもよい。しかし、誰かれ構わず不平を述べたてることはしてはならない。

注 94　この節は、彼らは神を受け入れるが、神の預言者達を拒絶しているという意味か、あるいは一部の預言者を信じても他の預言者は信じない、あるいは預言者の主張は拒絶するという意味のいずれかである。中間の道はどんなものも許されないのである。

152.　これらの徒輩は紛れもなき不信心者なり。さればわれらは、彼等のために恥ずべき懲罰を用意せり。

أُولَٰٓئِكَ هُمُ الْكٰفِرُوْنَ حَقًّا ۚ وَاَعْتَدْنَا لِلْكٰفِرِيْنَ عَذَابًا مُّهِيْنًا ﴿١٥١﴾

153.　されどアッラーとすべての使徒たちを信じ、使徒たちの間に何の差別をもつけざる人々には、アッラーはやがて報奨を与うべし。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا بِاللّٰهِ وَرُسُلِهٖ وَلَمْ يُفَرِّقُوْا بَيْنَ اَحَدٍ مِّنْهُمْ اُولٰٓئِكَ سَوْفَ يُؤْتِيْهِمْ اُجُوْرَهُمْ ۗ وَكَانَ اللّٰهُ غَفُوْرًا رَّحِيْمًا ﴿١٥٢﴾

第二十二項

154.　経典の民は汝に、天から経典を降してみせよと要求す。彼等はかつて、モーゼにそれ以上の大なるものを要求せり。彼等は云えり、「我等にアッラーを目のあたり見せよ」と。するとその時、その罪故に、壊滅的な懲罰が彼等を襲いたり。されどその後も彼等は、数々の明白な神兆を戴いておきながら、崇拝の対象に犢を選びたり。されどわれらはそれをも赦したり。而してわれらは　モーゼに明白な権能を与えたり。(注95)

يَسْـَٔلُكَ اَهْلُ الْكِتٰبِ اَنْ تُنَزِّلَ عَلَيْهِمْ كِتٰبًا مِّنَ السَّمَآءِ فَقَدْ سَاَلُوْا مُوْسٰٓى اَكْبَرَ مِنْ ذٰلِكَ فَقَالُوْٓا اَرِنَا اللّٰهَ جَهْرَةً فَاَخَذَتْهُمُ الصّٰعِقَةُ بِظُلْمِهِمْ ۚ ثُمَّ اتَّخَذُوا الْعِجْلَ مِنْۢ بَعْدِ مَا جَآءَتْهُمُ الْبَيِّنٰتُ فَعَفَوْنَا عَنْ ذٰلِكَ ۚ وَاٰتَيْنَا مُوْسٰى سُلْطٰنًا مُّبِيْنًا ﴿١٥٣﴾

155.　われらは彼等と契約するに当り、彼等の上に山を起し、彼等に云えり、「うやうやしく礼をしてこの門に入れ」と。また、「安息日の掟に違犯するなかれ」と。かくてわれらは彼等より堅い契約を取れり。(注96)

وَرَفَعْنَا فَوْقَهُمُ الطُّوْرَ بِمِيْثَاقِهِمْ وَقُلْنَا لَهُمُ ادْخُلُوا الْبَابَ سُجَّدًا وَّقُلْنَا لَهُمْ لَا تَعْدُوْا فِى السَّبْتِ وَاَخَذْنَا مِنْهُمْ مِّيْثَاقًا غَلِيْظًا ﴿١٥٤﴾

156.　しかるに彼等はその契約を破り、アッラーの神兆を拒否し、不当にも預言者たちを殺害せんと謀り、且つ云えり、「我等の心は蔽われているなり」と。然らず、彼等が信ぜざるが故にアッラーが彼等の心を封じたり。されば彼等は、僅かの者を除いて、不信心者なり。(注97)

فَبِمَا نَقْضِهِمْ مِّيْثَاقَهُمْ وَكُفْرِهِمْ بِاٰيٰتِ اللّٰهِ وَقَتْلِهِمُ الْاَنْۢبِيَآءَ بِغَيْرِ حَقٍّ وَّقَوْلِهِمْ قُلُوْبُنَا غُلْفٌ ۗ بَلْ طَبَعَ اللّٰهُ عَلَيْهَا بِكُفْرِهِمْ فَلَا يُؤْمِنُوْنَ اِلَّا قَلِيْلًا ﴿١٥٥﴾

注95　2：58も参照せよ。

注96　4：48も参照せよ。

注97　2：8も参照せよ。

157.　而して彼等信ぜざるが故にマリアに対する重大な讒言を告げて、(注 98)

وَبِكُفْرِهِمْ وَقَوْلِهِمْ عَلَىٰ مَرْيَمَ بُهْتَانًا عَظِيمًا ﴿١٥٧﴾

158.　「我等はアッラーの使徒にして救世主なるマリアの子イエスを殺したり」と云う。されど事実は、彼等はイエスを殺せるに非ず、また十字架に釘附けて殺せるに非ず、ただ彼等の目にはそのように映じたり。げにイエスについて意見を異にするものは、皆之を疑問とす。彼等は之に関する明確な知識なく、ただ憶測をめぐらすのみ。彼等は決してイエスを殺しはせじ。(注 99)

وَقَوْلِهِمْ إِنَّا قَتَلْنَا الْمَسِيحَ عِيسَى ابْنَ مَرْيَمَ رَسُولَ اللَّهِ ۚ وَمَا قَتَلُوهُ وَمَا صَلَبُوهُ وَلَٰكِن شُبِّهَ لَهُمْ ۚ وَإِنَّ الَّذِينَ اخْتَلَفُوا فِيهِ لَفِي شَكٍّ مِّنْهُ ۚ مَا لَهُم بِهِ مِنْ عِلْمٍ إِلَّا اتِّبَاعَ الظَّنِّ ۚ وَمَا قَتَلُوهُ يَقِينًا ﴿١٥٨﴾

注 98　ユダヤ人達は、聖母マリアを密通したとして非難したのである。(Panther書「Jewish Life of Jesus」) ユダヤ人がマリアを誹謗したのは、父なしの子イエスを生んだことを明確な証拠としている。なぜなら、もしイエスに父がいるとすれば、ユダヤ人がマリアを誹謗したのは何に対してであったのかということになる。単にイエスを生んだからと彼女をあざけっても、これは決して中傷とはなり得ない。クルアーンは他の所で、イエスの母は高徳な女性であったと述べ、この非難は誤りであると明言している。

注 99　マー・カタルーフ・ヤキーナン（彼らは決してイエスを殺していない。）という言葉は次のことを意味している。(1)彼らはイエスを確かに殺したのではない。(2)彼らはそのことを（イエスは死んだという推測）を確信とまではしていなかった。即ち、自分達がイエスを殺したことに疑いの余地など皆無だ、と言える程、十字架上でのイエスの死を確信しているわけではなかった。即ち自分達がイエスを殺したというのは推測の域を出ておらず十字架上でのイエスの死が全く確実だとはいえない。イエスが十字架上で死んだのではなく、天寿を全うしたのだという事実は、クルアーンが明らかにしている。福音書に書かれている通りの次にあげる事実がクルアーンのこの解釈をしっかりと根拠づけている。1．イエスは神の預言者であるので、十字架の上で死んだはずがない。なぜなら、聖書によれば、「十字架に懸けられる者は、神にとってはいまわしいものである」(申命記 21：23) からだ。2．イエスは非常な苦しみの中で「私をこの（十字架の上の死の）苦しみからお救い下さい。」と神に祈ったのだった。(マルコ 14：36；マタイ 26：29；ルカ 22：42) そして、彼の祈りはききとどけられたのである(ヘブル 5：7)。3．イエスは、生きたままクジラの腹に飲み込まれ、生きて戻ったヨナのように(マタイ 12：40)、彼もまた墓に入って三日の後に生きて戻るであろうと預言していた。4．彼はまた、自分がイエラエルの失われた十の部族を捜しに行くだろうと預言していた(ヨハネ 10：16)。イエスの時代には、ユダヤ人さえも、イスラエルの失われた十の部族は、各々異なった場所に散っていると信じていたのである。(ヨハネ 7：34、35) 5．イエスが十字架に懸けられたいたのは、僅か三時間ほどであった(ヨハネ 19：14)。そして、普通の人間であれば、そのように短時間で死ぬはずはない。6．彼は十字架から降ろされてすぐに脇腹を突かれた。すると血と水が吹き出したが、これは生ある確かの証であった。(ヨハネ 19：34)　7．ユダヤ人自身もイエスの死を確信していたわけではなかった。なぜなら、ユダヤ人達は「彼の弟子達が夜中に彼を盗み出し、そして人々に向かって『彼は死から甦った』と言ったりすることがないように」彼の墓に衛兵を一人配置するようピラトに頼んだのである。(マタイ 27：64)　8．どの福音書にも、十字架から降ろされた時、あるいは墓に安置された時に、イエスは死んでいたことをその目で確かに見たという話は一つも書かれていない。更に、弟子達は一人も、はりつけの現場にはいなかったのである。皆、イエスがカルバリに連れていかれた時に、何処かへ行ってしまっていた。この場合の真相は次のようであったらしい。恐らく「その罪のない男に何の罰も与えないように。」という妻の強い願いのために、ピラトはイエスが無実であると信じ、そして、イエス自身

159.　否、アッラーはイエスを己れの傍に召し寄せたり。(注 100) アッラーは強大にして、賢哲にまします。

بَلْ رَّفَعَهُ اللّٰهُ اِلَيْهِ ؕ وَكَانَ اللّٰهُ عَزِيْزًا حَكِيْمًا ﴿۱۵۹﴾

160.　経典の民の中にはただの一人だに、死ぬ前に、(注 101) そのことを信ぜざる者なかるべし。復活の日には、イエスは彼等に反対する証人たるべし。

وَاِنْ مِّنْ اَهْلِ الْكِتٰبِ اِلَّا لَيُؤْمِنَنَّ بِهٖ قَبْلَ مَوْتِهٖ ۚ وَيَوْمَ الْقِيٰمَةِ يَكُوْنُ عَلَيْهِمْ شَهِيْدًا ﴿۱۶۰﴾

預言者となる以前に所属していたエシニ協会の人望篤い会員であるアリメティアのヨゼフと協力して、イエスの命を助けようとしたのである。イエスの裁判は金曜日に行なわれた。次の日がサバト（安息日）であるため、受刑者は日没には必ず十字架から降ろされることがわかっていたからであり、ピラトは意図的に裁判を遅らせたのである。とうとうイエスに有罪の宣告を下さねばならなくなった時、ピラトは日没のわずか三時間前に判決を下したのである。こうすれば、普通の健康な人であれば、その程度の短い時間、十字架にかけられても死ぬことはないと彼は確信していたのである。ピラトは更に、痛みに対して少しは鈍感になるように、没薬（しつやく）に混ぜてワインと酢をイエスに飲ませるよう気を配った。三時間後、気を失った状態で（多分、与えられた酢の作用で）十字架から降ろされると、ピラトはアリメティアのヨゼフの願いをすぐさま聞き入れ、彼にイエスの体を引き渡したのである。イエスと共に、十字架にかけられた二人の犯罪者と異なり、イエスの骨は折られてはなく、ヨゼフは彼を岩の横を穿ち作った広い部屋に寝かせた。医学的な検死も、最後に一緒にいた者の証言による死因審問もなかった。(H. スペンサールイス著「Mystical Life of Jesus」) 9. ある膏薬、有名なマルハム・イサ（イエスの膏薬）が用意され、イエスの傷に塗られた。アリメティアのヨゼフと、やはりエシン協会の仲間で、学識高く人望ある会員であるニコデムスの二人がイエスの介抱をし、世話をした。10. 傷が十分に癒えてから、イエスは墓を出て、数人の弟子達と会い、食事を共にした後、エルサレムからガリリーまで、ずっと歩いて行ったのである（ルカ 24：50）。11. 1873年にアメリカで第一版が出された「The Crucificion by an Eye Witness（目撃した十字架）」という本は、イエスがはりつけになった七年後、エルサレムの一人のエシンの仲間がアレキサンドリアの同じ仲間に宛てて書いた古代ラテン語の手紙の写しを英語に翻訳したものであるが、これは、イエスが十字架から降ろされた時には生きていたという考えに、強力な根拠を与えている。この本には、はりつけの原因となった事々、カリバリの光景、それにその後の事が詳細に書かれている。

イエスがはりつけで死んだかどうか　ユダヤ人の間にも二つの異なった意見がある。ある者達は、イエスは殺された後十字架に懸けられたと言い、他の者達はイエスは十字架に懸けられて死んだと言う。使徒行伝 5：30 には、前者の考えが示されており、「汝らはそれを殺し木にはりつけにした。」と書かれている。クルアーンはこのどちらの意見もとらず、次の様に言う。「彼らはイエスを殺害してはいないし、十字架の上で死に至らしめたのでもない。」クルアーンは初めに、イエスがいかなる形でも殺されたのではないとし、次に十字架にはりつけにするという特別な殺害の方法を否定しているのである。クルアーンは、イエスが十字架に懸けられたという事を否定してはいないが十字架の上で死んだということは否定しているのである。

注 100　ユダヤ人たちは、イエスを十字架に懸けて殺した、そうして神の預言者だというイエスの主張が嘘であることを証明したのだと意気盛んに主張した。前節と同じくこの節においても、こうした非難に対し強く反論して、イエスにきせられた汚名を晴らし、そしてイエスの霊魂は（天に）昇り、イエスは神の前で祝福されたと述べている。ここでは、イエスの肉体が昇天したかどうかには、全く触れてなく、ただ神はイエスを神の近くまで昇らせたと述べているのみである。これは明らかに霊魂が天に昇る意である。なぜなら物理的なものは神のもとへはいかないからである。

注 101　「彼が死ぬ前」という表現中の「彼」というのは、イエスの死以前の経典の民のこと皆を指しているのである。ユダヤ人達は、イエスが真の預言者ではないことを証明したいがために、自分達がイエスを十字架に懸けて殺したと信じているのである。キリスト教徒達が、イエスは十字架上で死んだと信じているのは、彼らが贖罪の思想を持っているからである。

161.　ユダヤ教徒の罪故に、また彼等がアッラーの道にいそしむ多くの人々を妨害せし理由で、われらは以前に彼等に許可せしいくつかの佳き食物を禁止せり。(注 102)

فَبِظُلْمٍ مِّنَ الَّذِيْنَ هَادُوْا حَرَّمْنَا عَلَيْهِمْ طَيِّبٰتٍ أُحِلَّتْ لَهُمْ وَبِصَدِّهِمْ عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ كَثِيْرًا ﴿١٦١﴾

162.　そはまた彼等が禁を犯して利息を取り、(注 103)人々の財産を不正に貪り食らうためなり。さればわれらは、彼等の中の不信心者どもに、痛罰を用意せり。

وَّأَخْذِهِمُ الرِّبٰوا وَقَدْ نُهُوْا عَنْهُ وَأَكْلِهِمْ أَمْوَالَ النَّاسِ بِالْبَاطِلِ ۚ وَأَعْتَدْنَا لِلْكٰفِرِيْنَ مِنْهُمْ عَذَابًا أَلِيْمًا ﴿١٦٢﴾

163.　されど、彼等の中で知識堅固なる者、(注 104)つまり信仰する人々で、汝に降されたるもの並びに汝以前に降されたるものを信じ、特に礼拝を遵守し、喜捨をよくし、アッラーと最後の日を信ずる者、これ等の人々にはわれらは必ず大なる報奨を与えん。

لٰكِنِ الرّٰسِخُوْنَ فِي الْعِلْمِ مِنْهُمْ وَالْمُؤْمِنُوْنَ يُؤْمِنُوْنَ بِمَآ أُنْزِلَ إِلَيْكَ وَمَآ أُنْزِلَ مِنْ قَبْلِكَ وَالْمُقِيْمِيْنَ الصَّلٰوةَ وَالْمُؤْتُوْنَ الزَّكٰوةَ وَالْمُؤْمِنُوْنَ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ ۭ أُولٰٓئِكَ سَنُؤْتِيْهِمْ أَجْرًا عَظِيْمًا ﴿١٦٣﴾

第二十三項

164.　げにわれらはノアとその後の預言者たちに啓示せる如く、汝に啓示せり。すなわちわれらは、アブラハム、イスマエル、イサク、ヤコブと其の支族、イエス、ヨブ、ヨナ、アロン、並びにソロモンに啓示し、ダビデに詩篇を与えたり。

إِنَّآ أَوْحَيْنَآ إِلَيْكَ كَمَآ أَوْحَيْنَآ إِلٰى نُوْحٍ وَّالنَّبِيّٖنَ مِنْ بَعْدِهٖ ۚ وَأَوْحَيْنَآ إِلٰٓى إِبْرٰهِيْمَ وَإِسْمٰعِيْلَ وَإِسْحٰقَ وَيَعْقُوْبَ وَالْأَسْبَاطِ وَعِيْسٰى وَأَيُّوْبَ وَيُوْنُسَ وَهٰرُوْنَ وَسُلَيْمٰنَ ۚ وَاٰتَيْنَا دَاوٗدَ زَبُوْرًا ﴿١٦٤﴾

注 102　この節は、ユダヤ人に対し以前は許されていたが後に禁止された何か重要なことについて言っているのではない。なぜならモーゼ以後ユダヤ人の中には、律法が彼らに対して認めていたことを新たに禁ずるような法を発する預言者は一人も出現してはいなかったからである。この節は、ユダヤ人達が失った精神的な神の恩恵について述べているのである。イエスが「我、汝らに禁じられし事々を認めんがために来たり、」(3：15)即ち、過ちを犯したために汝らに失われていた神の祝福を再び汝らに与えるために自分が来たのだと語っているのも、ユダヤ人が失っていた精神的な神の恩恵についてだったのである。

注 103　ユダヤ人は、他のユダヤ人に対して利息を取って金を貸すことを禁じられていたが、ユダヤ人ではない者からは、利息を取ることを許されていたのである。(出エジプト記 22：25；レビ記 25：36、37、申命記 23：19、20) しかし彼らはこの法を破り、ユダヤ人からも利息を取るようになった(ネヘシヤ記 5：7)。後に彼らはこうした悪行は二度としないとネヘシヤに約束した(ネヘシヤ記 5：12)。しかし彼らは再び約束を破ったのである。結果、エザキエルの預言通り(エザキエル書 8：13)　彼らは、一つの国家の民としては滅亡し、地上あちこちに散らばって、敵の手で迫害されることになったのである。

注 104　これはイスラム教徒となったユダヤ人の中の学識ある人々のことである。「信徒達」という語がわざわざつけ加えられているのは、ここではイスラム教徒となったこのようなユダヤ人のみを指していることを明確にするためである。

165.　その他、すでに汝に告げたる使徒たちもあれば、未だ汝に告げざる使徒たちもあり。特にモーゼには、アッラーは長々と物云えり。

وَرُسُلًا قَدْ قَصَصْنَاهُمْ عَلَيْكَ مِنْ قَبْلُ وَرُسُلًا لَمْ نَقْصُصْهُمْ عَلَيْكَ ۚ وَكَلَّمَ اللَّهُ مُوسَىٰ تَكْلِيمًا ﴿١٦٥﴾

166.　朗報と警告の運び手である使徒の派遣は、使徒が来たからには誰もアッラーに対して如何なる抗弁もなし得ざるようにするためなり。アッラーは強大にして、賢哲にまします。

رُسُلًا مُبَشِّرِينَ وَمُنْذِرِينَ لِئَلَّا يَكُونَ لِلنَّاسِ عَلَى اللَّهِ حُجَّةٌ بَعْدَ الرُّسُلِ ۚ وَكَانَ اللَّهُ عَزِيزًا حَكِيمًا ﴿١٦٦﴾

167.　アッラーは汝に降(くだ)せるものについて、自ら証人となる。その啓示は御自らの知識において降(くだ)せるものにして、天使たちもその証人なり。而(しか)してアッラーは立証者として万全なり。

لَٰكِنِ اللَّهُ يَشْهَدُ بِمَا أَنْزَلَ إِلَيْكَ ۖ أَنْزَلَهُ بِعِلْمِهِ ۖ وَالْمَلَائِكَةُ يَشْهَدُونَ ۚ وَكَفَىٰ بِاللَّهِ شَهِيدًا ﴿١٦٧﴾

168.　信仰を拒み、アッラーの道へ進まんとする人々を妨げる徒輩(やから)は、正道からはるか遠くへ踏みはずした者なり。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا وَصَدُّوا عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ قَدْ ضَلُّوا ضَلَالًا بَعِيدًا ﴿١٦٨﴾

169.　げに信ぜずして不義を行う者どもは、アッラーは断じて赦(ゆる)さず、また如何なる道も教えざるべし、

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا وَظَلَمُوا لَمْ يَكُنِ اللَّهُ لِيَغْفِرَ لَهُمْ وَلَا لِيَهْدِيَهُمْ طَرِيقًا ﴿١٦٩﴾

170.　地獄への道以外は。そこに彼等は末長く住まん。そはアッラーにはいと易きことなり。

إِلَّا طَرِيقَ جَهَنَّمَ خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا ۚ وَكَانَ ذَٰلِكَ عَلَى اللَّهِ يَسِيرًا ﴿١٧٠﴾

171.　人々よ、使徒が主の御許(みもと)より真理を携えて来たれり。されば信ぜよ。信ずることはお前たちのためになるなり。また、お前たちたとい信ぜずとも、天に在るもの地に在るものすべてはアッラーの所有(もの)なり。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

يَا أَيُّهَا النَّاسُ قَدْ جَاءَكُمُ الرَّسُولُ بِالْحَقِّ مِنْ رَبِّكُمْ فَآمِنُوا خَيْرًا لَكُمْ ۚ وَإِنْ تَكْفُرُوا فَإِنَّ لِلَّهِ مَا فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۚ وَكَانَ اللَّهُ عَلِيمًا حَكِيمًا ﴿١٧١﴾

172.　経典の民よ、お前たち己れの宗教(おしえ)において矩(のり)を越えるなかれ。また真実以外はアッラーについて語るなかれ。救世主(メシア)、すなわちマリアの子イエスは、アッラーの使徒にすぎず、アッラーがマリアに降(くだ)せる御言葉

يَا أَهْلَ الْكِتَابِ لَا تَغْلُوا فِي دِينِكُمْ وَلَا تَقُولُوا عَلَى اللَّهِ إِلَّا الْحَقَّ ۚ إِنَّمَا الْمَسِيحُ عِيسَى ابْنُ مَرْيَمَ رَسُولُ اللَّهِ وَكَلِمَتُهُ أَلْقَاهَا إِلَىٰ مَرْيَمَ وَرُوحٌ مِنْهُ

の（注105）履行であり、アッラーより出でたる霊なり。さればアッラーとその使徒を信じ、「三位」と云うなかれ。止めるのだ、そのほうがお前たちのためになるべし。げにアッラーは独一の神なり。聖なるかな、いづくんぞ子あるべけんや。アッラーに天地の一切は帰属す。さればアッラーは守護者として万全なり。

فَآمِنُوا بِاللَّهِ وَرُسُلِهِ ۖ وَلَا تَقُولُوا ثَلَاثَةٌ ۚ انْتَهُوا خَيْرًا لَكُمْ ۚ إِنَّمَا اللَّهُ إِلَٰهٌ وَاحِدٌ ۖ سُبْحَانَهُ أَنْ يَكُونَ لَهُ وَلَدٌ ۘ لَهُ مَا فِي السَّمَاوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ ۗ وَكَفَىٰ بِاللَّهِ وَكِيلًا ﴿١٧١﴾

第二十四項

173.　救世主はアッラーの僕たることを恥じず、神の側近く伺候する天使たちもまた然り。アッラーを崇拝することを潔しとせず、高慢な徒輩は、アッラー之を己が許に召し寄せん。

لَنْ يَسْتَنْكِفَ الْمَسِيحُ أَنْ يَكُونَ عَبْدًا لِلَّهِ وَلَا الْمَلَائِكَةُ الْمُقَرَّبُونَ ۚ وَمَنْ يَسْتَنْكِفْ عَنْ عِبَادَتِهِ وَيَسْتَكْبِرْ فَسَيَحْشُرُهُمْ إِلَيْهِ جَمِيعًا ﴿١٧٢﴾

174.　されど信じて善行を積む人々には、アッラーは十分な報奨を与え、その上沢山な恩恵を与えん。されど崇拝することを潔しとせず、高慢な徒輩は、アッラー痛罰を以て之を懲らしめん。而して彼等は、アッラーを措て如何なる味方も救助者もなきことを悟らん。

فَأَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ فَيُوَفِّيهِمْ أُجُورَهُمْ وَيَزِيدُهُمْ مِنْ فَضْلِهِ ۖ وَأَمَّا الَّذِينَ اسْتَنْكَفُوا وَاسْتَكْبَرُوا فَيُعَذِّبُهُمْ عَذَابًا أَلِيمًا وَلَا يَجِدُونَ لَهُمْ مِنْ دُونِ اللَّهِ وَلِيًّا وَلَا نَصِيرًا ﴿١٧٣﴾

175.　汝等人々よ、明証すでに主よりお前たちに来たれり。われらはお前たちに明らかなる光明を降したり。

يَا أَيُّهَا النَّاسُ قَدْ جَاءَكُمْ بُرْهَانٌ مِنْ رَبِّكُمْ وَأَنْزَلْنَا إِلَيْكُمْ نُورًا مُبِينًا ﴿١٧٤﴾

176.　さればアッラーを信じて之を護持する人々に、アッラーは慈悲と恩恵とを垂れ給い、直き道によって彼等を己が許へ導かん。

فَأَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا بِاللَّهِ وَاعْتَصَمُوا بِهِ فَسَيُدْخِلُهُمْ فِي رَحْمَةٍ مِنْهُ وَفَضْلٍ وَيَهْدِيهِمْ إِلَيْهِ صِرَاطًا مُسْتَقِيمًا ﴿١٧٥﴾

177.　彼等は汝に裁断を請う。云え、「アッラーはお前たちに、直系相続者を遺さず死亡せる者に関する裁断を下す。人もし死して子なく、唯一人の姉妹がある場合は、故人の遺産の半分が彼女のものたるべし。反対に、

يَسْتَفْتُونَكَ قُلِ اللَّهُ يُفْتِيكُمْ فِي الْكَلَالَةِ ۚ إِنِ امْرُؤٌ هَلَكَ لَيْسَ لَهُ وَلَدٌ وَلَهُ أُخْتٌ فَلَهَا نِصْفُ مَا تَرَكَ ۚ وَهُوَ يَرِثُهَا إِنْ لَمْ يَكُنْ لَهَا وَلَدٌ ۚ فَإِنْ كَانَتَا اثْنَتَيْنِ

注105　3：46節を参照せよ。

فَلَهُمَا الثُّلُثٰنِ مِمَّا تَرَكَ ۗ وَإِنْ كَانُوْٓا إِخْوَةً رِّجَالًا وَّنِسَآءً فَلِلذَّكَرِ مِثْلُ حَظِّ الْاُنْثَيَيْنِ ۗ يُبَيِّنُ اللّٰهُ لَكُمْ اَنْ تَضِلُّوْا ۗ وَاللّٰهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمٌ ﴿١٧٧﴾

妻に子なく死せる場合は、夫が妻の相続者たるべし。されど二人の姉妹がある場合は、彼の遺産の三分の二が彼女たちのものたるべし。もし多数の相続者がある場合、つまり兄弟姉妹の両方——その場合は、男子一人の取り分は女子二人の取り分となる。アッラーはお前たちが誤らぬよう、之を明示し給う。アッラーは一切を熟知し給う。(注106)

注106　4：13で言及していたのは、カラーラの内で死の時に親も子もなく、しかも母方の兄弟姉妹しかしない者についてであった。この節では、父方母方、双方に兄弟姉妹がいるカラーラあるいは父方のみの兄弟姉妹がいるカラーラについて述べている。4：13とこの節を比べてみると、前者の兄弟姉妹たちの遺産配分は、後者の兄弟姉妹たちの遺産配分よりも少ないことが明らかであり、その理由も明白である。相続法の中のこの部分は、4：12、13で扱われている法とは意図的に分けて扱われているのである。クルアーンは、ユダヤ人がイエスに対して行った非難について暫く語った後、再びこの章の終わりで、再度、カラーラの問題に戻っている。そうして（カラーラに関する法を完成させるのと共に）イエスに精神的相続人がいないことに注目させようとしているのである。ある意味ではイエスもまたカラーラだった。イエスは、父なくして生まれ、さらに彼は精神的後継者を残していない。イブン・アッバスはカラーラを子を残さぬ者と規定しているが、イエスは後に精神的後継者を残さなかった故に、精神的カラーラだったのである。

سُوْرَةُ الْمَآئِدَةِ مَدَنِيَّةٌ

アル・マーエダ
（メディナ啓示）

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اَوْفُوْا بِالْعُقُوْدِ ۗ اُحِلَّتْ لَكُمْ بَهِيْمَةُ الْاَنْعَامِ اِلَّا مَا يُتْلٰى عَلَيْكُمْ غَيْرَ مُحِلِّى الصَّيْدِ وَاَنْتُمْ حُرُمٌ ۗ اِنَّ اللّٰهَ يَحْكُمُ مَا يُرِيْدُ ②

2．汝等信徒たちよ、お前たちの契約を履行せよ。お前たちに告げられるもの以外の（注1）四つ足の家畜は食することを許さる。但し聖地巡礼中は狩猟することを禁ず。アッラーは御心のままに掟を定め給う。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تُحِلُّوْا شَعَآئِرَ اللّٰهِ وَلَا الشَّهْرَ الْحَرَامَ وَلَا الْهَدْيَ وَلَا الْقَلَآئِدَ وَلَآ آٰمِّيْنَ الْبَيْتَ الْحَرَامَ يَبْتَغُوْنَ فَضْلًا مِّنْ رَّبِّهِمْ وَرِضْوَانًا ۗ وَاِذَا حَلَلْتُمْ فَاصْطَادُوْا ۗ وَلَا يَجْرِمَنَّكُمْ شَنَاٰنُ قَوْمٍ اَنْ صَدُّوْكُمْ عَنِ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ اَنْ تَعْتَدُوْا ۘ وَتَعَاوَنُوْا عَلَى الْبِرِّ وَالتَّقْوٰى ۖ وَلَا تَعَاوَنُوْا عَلَى الْاِثْمِ وَالْعُدْوَانِ ۖ وَاتَّقُوا اللّٰهَ ۗ اِنَّ اللّٰهَ شَدِيْدُ الْعِقَابِ ③

3．汝等信徒たちよ、アッラーの聖なる儀礼を（注2）汚すなかれ。また神聖月や（注3）犠牲の捧げ物、それにかける首輪を汚すなかれ。また主の恩恵と喜悦を求めて聖殿に詣でる人々を妨げるなかれ。されど聖域を去り、巡礼着を脱いだならば、狩猟するも可なり。（注4）また、かつてお前たちを聖殿より阻める者を恨みて、敵意を彼等に抱くなかれ。むしろ相助けて正義を行い、神を敬え。罪と悪事のために相助けることなかれ。（注5）アッラーを畏れよ。げにアッラーの懲罰は苛酷なり。

注1　'汝らに告知された物以外'との表現は、以下の節で述べられている動物を指している。しかしこれらには、自然死した動物の肉、血、豚の肉はあてはまらない。豚は家畜とはみなされないし、ここで例外とされるのは家畜についてであって、全ての動物を対象としている訳ではないからである。又、この件に関しては既に2：174で取り上げられているからでもある。

注2　神の認識と神についての知識に通じるあらゆる物を指す。

注3　聖なる月を冒瀆しない様慎しむという事は、その月間に為される所業に、正当な配慮をする事も意味している。

注4　巡礼者が、巡礼の旅を終え、巡礼の衣服を最終的に脱いでしまい聖なる領域の外へ足を踏み出せば、狩りをする事が許されるという事。

注5　何とこの個人的且つ全世界的行動の教義は気高いものであろう。もしこの教義通りに人が行為を為したなら、世の中の遺恨や憎しみ、互いのいがみ合いなど消滅してしまうであろうに。

4．お前たちに禁じられたものは、死骸の肉、血、豚肉、アッラー以外の名を唱えられたるもの、絞殺されたるもの、打ち殺されたるもの、墜死せるもの、角で突き殺されたるもの、野獣が食い残したるもの、但しお前たちが正式に殺したものは除く、偶像の供物台に捧げられたるものなり。而してまた籤矢をもって分配せるものも禁ぜらる。こは不敬なる行いなり。今では不信心者どもはお前たちの宗教を打破することを断念せり。されば彼等を怖れず、わしを怖れよ。今日わしはお前たちの宗教を完成し、お前たちの上にわが恩恵を満たし、お前たちの宗教としてイスラームを選びたり。されど罪を犯す意志なくも、ひもじさ故に餘儀なくなせる者には、げにアッラーは寛大にて、慈悲深くまします。

حرمت عليكم الميتة والدم ولحم الخنزير و
ما أهل لغير الله به والمنخنقة والموقوذة والمتردية
والنطيحة وما أكل السبع إلا ما ذكيتم وما ذبح
على النصب وأن تستقسموا بالأزلام ذلكم فسق
اليوم يئس الذين كفروا من دينكم فلا تخشوهم
واخشون اليوم أكملت لكم دينكم وأتممت عليكم
نعمتي ورضيت لكم الإسلام دينا فمن اضطر في
مخمصة غير متجانف لإثم فإن الله غفور رحيم ④

5．彼等は汝に、何が自分たちに許されているかを問う。云え、「すべて佳き物は（注６）お前たちに許さる。またアッラーがお前たちに教えし如く訓練せる鳥獣が捕えし獲物は、（注７）食べてよし。その際、アッラーの御名を唱えよ。而してアッラーを畏れよ。げにアッラーは清算するに迅速なり」と。

يسألونك ماذا أحل لهم قل أحل لكم الطيبات
وما علمتم من الجوارح مكلبين تعلمونهن مما
علمكم الله فكلوا مما أمسكن عليكم واذكروا اسم
الله عليه واتقوا الله إن الله سريع الحساب ⑤

6．今日すべての佳き物は（注８）お前たちに許さる。また経典の民の人々の食物はお前たちに許され、お前たちの食物は彼等に許

اليوم أحل لكم الطيبات وطعام الذين أوتوا الكتاب
حل لكم وطعامكم حل لهم والمحصنت من

注６　禁事は前節で述べられており、残りの事はここで、もしそれらがタイヤブ（善であり純粋である）であり、人の健康も倫理に有害でなければ合法であり、自分自身の環境や健康条件を考え合わせて、何が本人にとって善しとされる、或いは善くないとされるかを決定する事は各個人に委ねられるとされている。聖なる預言者は当然の事ながら、肉食獣とつめを持つ鳥獣類は、戒律にかなった食物の範ちゅうには入れていない。

注７　訓練された肉食鳥獣の捕らえた獲物は、人が訓練した代行者が殺したのであるから、適切に律法にかなって殺されたのであるとみなされる。しかし、その獲物に対してそれを食する事が律法にかなったものとする為、神の名を唱える事が必要である。

注８　これは、トラーの戒律に従って屠殺された動物の肉は、トラーの戒律下で許される全ての食物はイスラムの戒律で、許容されるので、イスラム教徒にとって食してよいものとなるという意味である。しかし、用心の為そういった食物にはアッラーの名を口に出して祈願するとよい。イブニアッバスによると、ここでの食物とは、“口にしてもよい食べ物”（ザビーハー）或いは、正しい手続きで屠殺された動物の肉を指すとの事である。

さる。また信徒で貞節な女、並びにお前たちの前に経典を（注９）賜われる貞節な女、婚資を与え正当な手続きを踏んで結婚を約定せし女、私通するに非ず秘密の愛人とするに非ずばお前たちに許さる。信仰を拒否する徒輩（やから）は、その行為は無に帰し、来世では失敗者の類（たぐい）とならん。

الْمُؤْمِنٰتِ وَالْمُحْصَنٰتُ مِنَ الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْكِتٰبَ
مِنْ قَبْلِكُمْ اِذَآ اٰتَيْتُمُوْهُنَّ اُجُوْرَهُنَّ مُحْصِنِيْنَ
غَيْرَ مُسٰفِحِيْنَ وَلَا مُتَّخِذِيْٓ اَخْدَانٍ ۭ وَمَنْ يَّكْفُرْ
بِالْاِيْمَانِ فَقَدْ حَبِطَ عَمَلُهٗ ۡ وَهُوَ فِي الْاٰخِرَةِ مِنَ
الْخٰسِرِيْنَ ﴿٦﴾

第二項

7．汝等信徒たちよ、礼拝に起（た）つときは顔を洗い、両手を肘（ひじ）まで洗い、濡れた手で髪を撫でつけ、両足を（注10）踝（くるぶし）まで洗え。また体が汚れているときは沐浴して身を浄めよ。また病むか、旅路にありて汚れたる状態、または便所から出て来た場合、もしくは女に触れたとき、水なき場合は、きれいな土を以て之（これ）の代りとなし、顔や手を（注11）拭うべし。アッラーはお前たちに難（むずか）しきを望み給わず。ただお前たちを浄め、お前たちが感謝の念を抱くよう己が恩恵をお前たちに満さんことを欲し給う。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اِذَا قُمْتُمْ اِلَى الصَّلٰوةِ فَاغْسِلُوْا
وُجُوْهَكُمْ وَاَيْدِيَكُمْ اِلَى الْمَرَافِقِ وَامْسَحُوْا بِرُءُوْسِكُمْ
وَاَرْجُلَكُمْ اِلَى الْكَعْبَيْنِ ۭ وَاِنْ كُنْتُمْ جُنُبًا فَاطَّهَّرُوْا ۭ
وَاِنْ كُنْتُمْ مَّرْضٰٓى اَوْ عَلٰي سَفَرٍ اَوْ جَاۗءَ اَحَدٌ مِّنْكُمْ مِّنَ
الْغَاۗىِٕطِ اَوْ لٰمَسْتُمُ النِّسَاۗءَ فَلَمْ تَجِدُوْا مَاۗءً فَتَيَمَّمُوْا
صَعِيْدًا طَيِّبًا فَامْسَحُوْا بِوُجُوْهِكُمْ وَاَيْدِيْكُمْ مِّنْهُ ۭ
مَا يُرِيْدُ اللّٰهُ لِيَجْعَلَ عَلَيْكُمْ مِّنْ حَرَجٍ وَّلٰكِنْ يُّرِيْدُ
لِيُطَهِّرَكُمْ وَلِيُتِمَّ نِعْمَتَهٗ عَلَيْكُمْ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُوْنَ ﴿٧﴾

8．お前たちに垂れたるアッラーの恩恵を念（おも）い、アッラーがお前たちと結べる契約を念（おも）え。その時、お前たちは云えり、「我等は聴き且つ従わん」と。而してアッラーを畏れよ。げにアッラーは人が胸中に懐くものを熟知し給う。

وَاذْكُرُوْا نِعْمَةَ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ وَمِيْثَاقَهُ الَّذِيْ وَاثَقَكُمْ
بِهٖٓ ۙ اِذْ قُلْتُمْ سَمِعْنَا وَاَطَعْنَا ۡ وَاتَّقُوا اللّٰهَ ۭ اِنَّ اللّٰهَ
عَلِيْمٌۢ بِذَاتِ الصُّدُوْرِ ﴿٨﴾

9．汝等信徒たちよ、正義に基づいて立証し、アッラーのために堅忍不抜たれ。人々への敵意をかりたてて正義に悖（もと）る行いをするなかれ。常に公正であれ。かくするは真の篤

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا كُوْنُوْا قَوّٰمِيْنَ لِلّٰهِ شُهَدَاۗءَ بِالْقِسْطِ ۡ
وَلَا يَجْرِمَنَّكُمْ شَنَاٰنُ قَوْمٍ عَلٰٓي اَلَّا تَعْدِلُوْا ۭ اِعْدِلُوْا

注９　イスラムではイスラム教徒の男性が経典を与えられた民族のイスラム教徒ではない女性と結婚する事を許してはいるが、やはり通常は、イスラム教徒の女性と結婚する事が望ましい。

注10　ここでは頭の次に足という言葉が表されている。これは頭の様に足もふかれるからという理由ではなく、沐浴の最後の順序が足だからである。

注11　4章44節を参照の事。

信なり。アッラーを畏れよ。げにアッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

هو أقرب للتقوى واتقوا الله إن الله خبير بما تعملون ٩

10．アッラーは信じて善行を積(つ)む人々を宥恕(ゆうじょ)し、大いなる報奨を与えんことを約束せり。

وعد الله الذين آمنوا وعملوا الصالحات لهم مغفرة وأجر عظيم ١٠

11．されど信ぜず、われらの神兆(しるし)を拒否する者ども、彼等は地獄の輩(ともがら)なり。

والذين كفروا وكذبوا بآياتنا أولئك أصحاب الجحيم ١١

12．汝等信徒たちよ、お前たちに垂れたるアッラーの恩恵を思い起せ。人々がお前たちに向って手を伸さんとせし時、アッラーはすかさずその手を抑止せり。アッラーを畏れよ。信徒たるもの皆アッラーにこそ信頼を寄せるべきなり。

يا أيها الذين آمنوا اذكروا نعمت الله عليكم إذ هم قوم أن يبسطوا إليكم أيديهم فكف أيديهم عنكم واتقوا الله وعلى الله فليتوكل المؤمنون ١٢

第三項

13．昔、アッラーはイスラエルの子孫(こどもら)と契約を結びたり。その時われらは、彼等のうちより十二人の首長を（注 12）興(おこ)したり。而してアッラーは云えり､「げにわしはお前たちと偕(とも)に在り。お前たちが礼拝を遵守し、定めの喜捨をなし、わが預言者たちを信じ、之(これ)を助け､アッラーに立派な貸付をなさば､わしは必ずお前たちの罪業を消滅し、お前たちを河川流れる楽園に導き入れん。されどお前たちの何人(なんぴと)にせよ、この後信ぜざる者は、正しい道より迷い出る者なり」と。

ولقد أخذ الله ميثاق بني إسرائيل وبعثنا منهم اثني عشر نقيبا وقال الله إني معكم لئن أقمتم الصلاة وآتيتم الزكاة وآمنتم برسلي وعزرتموهم وأقرضتم الله قرضا حسنا لأكفرن عنكم سيئاتكم ولأدخلنكم جنات تجري من تحتها الأنهار فمن كفر بعد ذلك منكم فقد ضل سواء السبيل ١٣

14．されど彼等その契約を破れるが故に、われらは彼等を呪い、且つその心を頑迷ならしめたり。彼等は経典中の字句を正しい場所から移し曲げて解釈し、与えられた訓戒の一部を忘却せり。汝は彼等が、僅かな者を除けば、常に裏切りをこととするを見ん。されど彼等を赦(ゆる)して、之(これ)を看過(かんか)せよ。げにアッラーは善行を積(つ)む者を愛し給う。

فبما نقضهم ميثاقهم لعناهم وجعلنا قلوبهم قاسية يحرفون الكلم عن مواضعه ونسوا حظا مما ذكروا به ولا تزال تطلع على خائنة منهم إلا قليلا منهم فاعف عنهم واصفح إن الله يحب المحسنين ١٤

注 12　‘12 人の首長’とは、モーゼの死後、現れたイスラエルの 12 人の預言者を指す、専門学者によれば、これらの人々はモーゼの任命した 12 人の‘皇子達’と呼ばれていたとの事である。

15. またわれらは、「我等はキリスト教徒なり」と云う者どもとも契約を結べり。(注 13) されど彼等もまた与えられたる訓戒の一部を忘却せり。さればわれらは、復活の日まで、彼等の間に敵意と憎悪とをかき立てたり。やがてアッラーは彼等に向って、そのなせることを告げ知らしめん。

ومن الذين قالوا إنا نصرى أخذنا ميثاقهم فنسوا حظا مما ذكروا به فأغرينا بينهم العداوة والبغضاء إلى يوم القيمة وسوف ينبئهم الله بما كانوا يصنعون ﴿١٥﴾

16. 経典の民よ、われらの使徒は、お前たちが経典の中で隠してきた幾多のことを解明するために、また幾多のことを黙過するためにお前たちのところへ来れり。アッラーよりの光明と (注 14) 明白なる経典が今お前たちに降りたり。

يأهل الكتب قد جاءكم رسولنا يبين لكم كثيرا مما كنتم تخفون من الكتب ويعفوا عن كثير قد جاءكم من الله نور وكتب مبين ﴿١٦﴾

17. これによってアッラーは、御心にかなう者を平安の道に導き、思し召しによって彼等を暗闇から引き出して光明へと誘い、正しい道に導き給う。

يهدي به الله من اتبع رضوانه سبل السلم ويخرجهم من الظلمت إلى النور بإذنه ويهديهم إلى صراط مستقيم ﴿١٧﴾

18. 「アッラーは何人にも非ず、マリアの子救世主なり」と云う者どもは、まぎれもなく不信の徒輩なり。云え、「もしアッラーが、マリアの子メシア、その母並びに地上のすべての人々を滅ぼさんとすれば、誰がアッラーを抑止し得ようぞ？」と。(注 15) 天も地も、またその間に在るもの、挙げてアッラーの統べ給うところなり。アッラーは御心のままに創造し、万能にましますﾞ。

لقد كفر الذين قالوا إن الله هو المسيح ابن مريم قل فمن يملك من الله شيئا إن أراد أن يهلك المسيح ابن مريم وأمه ومن في الأرض جميعا ولله ملك السموت والأرض وما بينهما يخلق ما يشاء والله على كل شيء قدير ﴿١٨﴾

19. ユダヤ教徒やキリスト教徒は云う､「我等はアッラーの子なり、寵児なり」と。云え、「しからば何故にアッラーはお前たちの罪を罰するか？然らず、お前たちはアッラーが創造せる人間にすぎず」と。アッラーは

وقالت اليهود والنصرى نحن أبنؤا الله وأحبؤه قل فلم يعذبكم بذنوبكم بل أنتم بشر ممن

注 13　これは、聖なる預言者の到来に関するイエスの預言についての様に思われるが(ヨハネ、16：12－13) この預言はイエスの後継者達が故意に無視したり､何とか違った意味にとろうと無駄な努力をした預言である。

注 14　聖なる預言者を指す (33：46、47)

注 15　ここで許らずも非常に強い語調が使われているのは、イエスが神の息子である等という途方もない教義に焦点をあて、とがめる為である。同様に、19：89－92 でも強くとがめる語調が使われている。

御心のままに赦し、御心のままに罰し給う。天も地も、またその間に在るものは、挙げてアッラーの統べ給うところ、而してすべてはその御許へ帰り行く。

خَلَقَ ۚ يَغْفِرُ لِمَنْ يَّشَآءُ وَيُعَذِّبُ مَنْ يَّشَآءُ ۚ وَلِلّٰهِ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا ۫ وَاِلَيْهِ الْمَصِيْرُ (١٩)

20. 経典の民よ、使徒たちの派遣が中断されたる後、われらの使徒がお前たちのところへ遣わされたるは、お前たちに物事を解明し、「朗報の伝達者も警告者も来らず」とお前たちに云わしめざらんがためなり。されば今、こうして朗報の伝達者であり警告者がお前たちのところへ来れるなり。アッラーは万能にまします。

يٰۤاَهْلَ الْكِتٰبِ قَدْ جَآءَكُمْ رَسُوْلُنَا يُبَيِّنُ لَكُمْ عَلٰى فَتْرَةٍ مِّنَ الرُّسُلِ اَنْ تَقُوْلُوْا مَا جَآءَنَا مِنْۢ بَشِيْرٍ وَّلَا نَذِيْرٍ ۫ فَقَدْ جَآءَكُمْ بَشِيْرٌ وَّنَذِيْرٌ ۗ وَاللّٰهُ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ (٢٠) ع

第四項

21. モーゼが己が民に向ってかく云える時のことを思い起せ。「我が民草よ、お前たちに垂れ賜えるアッラーの恩恵を思い起せ。彼はお前たちの中から預言者たちを興し、お前たちを王者たらしめ、他の如何なる民にも与えざりしものをお前たちに与えたり。

وَاِذْ قَالَ مُوْسٰى لِقَوْمِهٖ يٰقَوْمِ اذْكُرُوْا نِعْمَةَ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ اِذْ جَعَلَ فِيْكُمْ اَنْۢبِيَآءَ وَجَعَلَكُمْ مُّلُوْكًا ۖ وَّاٰتٰىكُمْ مَّا لَمْ يُؤْتِ اَحَدًا مِّنَ الْعٰلَمِيْنَ (٢١)

22. 我が民草よ、アッラーがお前たちに定めたる聖地に入れ。引き返すなかれ。引き返さば、失敗者とならん」

يٰقَوْمِ ادْخُلُوا الْاَرْضَ الْمُقَدَّسَةَ الَّتِيْ كَتَبَ اللّٰهُ لَكُمْ وَلَا تَرْتَدُّوْا عَلٰۤى اَدْبَارِكُمْ فَتَنْقَلِبُوْا خٰسِرِيْنَ (٢٢)

23. 彼等は云えり、「モーゼよ、そこには狂暴且つ強力な民あり。彼等が出で行かざる限り、我等はそこに入るを得ず。されど彼等もし出て行かば、我等はそこに入るべし」と。

قَالُوْا يٰمُوْسٰۤى اِنَّ فِيْهَا قَوْمًا جَبَّارِيْنَ ۖ وَاِنَّا لَنْ نَّدْخُلَهَا حَتّٰى يَخْرُجُوْا مِنْهَا ۚ فَاِنْ يَّخْرُجُوْا مِنْهَا فَاِنَّا دٰخِلُوْنَ (٢٣)

24. 主を畏れ、その恩恵に浴せる二人の男ありて、云えり、「門から入り、彼等に向って進撃せよ。一たび入らば、お前たちは必ず勝利を得ん。お前たち信徒ならば、アッラーを信頼せよ」と。

قَالَ رَجُلٰنِ مِنَ الَّذِيْنَ يَخَافُوْنَ اَنْعَمَ اللّٰهُ عَلَيْهِمَا ادْخُلُوْا عَلَيْهِمُ الْبَابَ ۚ فَاِذَا دَخَلْتُمُوْهُ فَاِنَّكُمْ غٰلِبُوْنَ ۬ۚ وَعَلَى اللّٰهِ فَتَوَكَّلُوْۤا اِنْ كُنْتُمْ مُّؤْمِنِيْنَ (٢٤)

25. されど彼等は云えり、「モーゼよ、我等は彼等がそこに居る限り、決して入るを得ず。されば汝と汝の主が行きて戦え。我等はここにて坐せん」と。

قَالُوْا يٰمُوْسٰۤى اِنَّا لَنْ نَّدْخُلَهَاۤ اَبَدًا مَّا دَامُوْا فِيْهَا فَاذْهَبْ اَنْتَ وَرَبُّكَ فَقَاتِلَاۤ اِنَّا هٰهُنَا قٰعِدُوْنَ (٢٥)

26. モーゼは云えり、「主よ、我は我が身と我が兄の外は何人も支配し得ず。されば主よ、我等と逆心の民との間を分け給え」と。

قَالَ رَبِّ إِنِّي لَا أَمْلِكُ إِلَّا نَفْسِي وَأَخِي فَافْرُقْ بَيْنَنَا وَبَيْنَ الْقَوْمِ الْفَاسِقِينَ ﴿٢٦﴾

27. 神は云えり、「しからば今後四十年間、彼等に対してこの地を禁断となす。その間彼等は狂気の如く取り乱して地上を彷徨せん。逆心の民に心煩わすなかれ」と。

قَالَ فَإِنَّهَا مُحَرَّمَةٌ عَلَيْهِمْ أَرْبَعِينَ سَنَةً يَتِيهُونَ فِي الْأَرْضِ فَلَا تَأْسَ عَلَى الْقَوْمِ الْفَاسِقِينَ ﴿٢٧﴾

第五項

28. アダムの二人の息子の（注 16）話を正確に彼等に語れ。彼等互に供物を捧げし時、一人は受納されしが、他は納れられざりき。そこで後者は云えり、「我必ずお前を殺さん」と。前者は答えて云えり、「アッラーは義しい人からの供物のみを受納す。

وَاتْلُ عَلَيْهِمْ نَبَأَ ابْنَيْ آدَمَ بِالْحَقِّ إِذْ قَرَّبَا قُرْبَانًا فَتُقُبِّلَ مِنْ أَحَدِهِمَا وَلَمْ يُتَقَبَّلْ مِنَ الْآخَرِ قَالَ لَأَقْتُلَنَّكَ قَالَ إِنَّمَا يَتَقَبَّلُ اللَّهُ مِنَ الْمُتَّقِينَ ﴿٢٨﴾

29. たとい汝が我を殺さんとして手を伸すとも、我は汝を殺さんとして手を伸ばすつもりなし。我は森羅万象の主アッラーを畏る。

لَئِنْ بَسَطْتَ إِلَيَّ يَدَكَ لِتَقْتُلَنِي مَا أَنَا بِبَاسِطٍ يَدِيَ إِلَيْكَ لِأَقْتُلَكَ إِنِّي أَخَافُ اللَّهَ رَبَّ الْعَالَمِينَ ﴿٢٩﴾

30. 我は汝が、己が罪同様、我に犯せる罪をも背負いて、業火の住人に加わらんことを望む。そは悪事を行う者の応報なり」と。

إِنِّي أُرِيدُ أَنْ تَبُوءَ بِإِثْمِي وَإِثْمِكَ فَتَكُونَ مِنْ أَصْحَابِ النَّارِ وَذَٰلِكَ جَزَاءُ الظَّالِمِينَ ﴿٣٠﴾

31. されど彼の心はその弟を殺すべく誘いたれば、彼は遂に弟を殺し、而して失敗者の一人となれり。

فَطَوَّعَتْ لَهُ نَفْسُهُ قَتْلَ أَخِيهِ فَقَتَلَهُ فَأَصْبَحَ مِنَ الْخَاسِرِينَ ﴿٣١﴾

32. その時、アッラーは一羽の鴉を遣わし、（注 17）地面に穴を掘らし、如何に弟の死骸を隠すかを彼に教えたり。彼は嘆いて云えり、「情けなや、我弟の死骸を隠すのに、この鴉ほどのことさえもし得ざるとは！」と。かくて彼は後悔せり。

فَبَعَثَ اللَّهُ غُرَابًا يَبْحَثُ فِي الْأَرْضِ لِيُرِيَهُ كَيْفَ يُوَارِي سَوْءَةَ أَخِيهِ قَالَ يَا وَيْلَتَا أَعَجَزْتُ أَنْ أَكُونَ مِثْلَ هَٰذَا الْغُرَابِ فَأُوَارِيَ سَوْءَةَ أَخِي فَأَصْبَحَ مِنَ النَّادِمِينَ ﴿٣٢﴾

注 16　‘アダムの二人の息子’とは比喩的に誰であれ人類から選ばれた、二人の個人を指している。又そのたとえ話は、預言者の地位が自分達から聖なる預言者を通しイシュマエル人に移ってしまった為、イスラエル人達がイシュマエルの末えいに対してとった敵意にみちた態度をも表現している。

注 17　大がらすの事件が実際にあった事なのか或いはただの例え話にすぎないのかについては評釈者の意見の分かれるところであるが、鳥類の仕草やくせを観察すると、多くの役にたつ発見をする事ができる。創世記 4：1－15 を参照の事。

33. このために、われらはイスラエルの子孫(こどもら)に掟を定め、人殺しの罪ある者か国中に騒乱を起せる廉(かど)による処刑に非ざる限り、一人を殺すは万民を殺すが如く、また一人を生かすは万民を生かすが如しと規定せり。而(しか)してわれらの使徒たちは明証を携えて彼等のところへ至りしが、なお彼等の多くはその後も地上で非道を行う。

مِنْ اَجْلِ ذٰلِكَ ۚ كَتَبْنَا عَلٰى بَنِىْٓ اِسْرَآءِيْلَ اَنَّهٗ مَنْ قَتَلَ نَفْسًاۢ بِغَيْرِ نَفْسٍ اَوْ فَسَادٍ فِى الْاَرْضِ فَكَاَنَّمَا قَتَلَ النَّاسَ جَمِيْعًا ؕ وَمَنْ اَحْيَاهَا فَكَاَنَّمَآ اَحْيَا النَّاسَ جَمِيْعًا ؕ وَلَقَدْ جَآءَتْهُمْ رُسُلُنَا بِالْبَيِّنٰتِ ثُمَّ اِنَّ كَثِيْرًا مِّنْهُمْ بَعْدَ ذٰلِكَ فِى الْاَرْضِ لَمُسْرِفُوْنَ ﴿۳۳﴾

34. アッラーや使徒に向って戦いを挑み、地上を騒乱せんと努(つと)むる者の応報は、殺されるか、磔(はりつけ)にされるか、手と足を互い違いに切断されるか、又は国外に追放されるかそれ以外になし。(注 18) こは彼等が現世で受ける辱め、来世においては重刑を受けん。

اِنَّمَا جَزٰٓؤُا الَّذِيْنَ يُحَارِبُوْنَ اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ وَيَسْعَوْنَ فِى الْاَرْضِ فَسَادًا اَنْ يُّقَتَّلُوْٓا اَوْ يُصَلَّبُوْٓا اَوْ تُقَطَّعَ اَيْدِيْهِمْ وَاَرْجُلُهُمْ مِّنْ خِلَافٍ اَوْ يُنْفَوْا مِنَ الْاَرْضِ ؕ ذٰلِكَ لَهُمْ خِزْىٌ فِى الدُّنْيَا وَلَهُمْ فِى الْاٰخِرَةِ عَذَابٌ عَظِيْمٌ ﴿۳۴﴾

35. 但し、お前たちが彼等を制圧せる以前に悔い改めし者は除く。(注 19) されば、アッラーが寛大にして慈悲深くましますことを知れ。

اِلَّا الَّذِيْنَ تَابُوْا مِنْ قَبْلِ اَنْ تَقْدِرُوْا عَلَيْهِمْ ۚ فَاعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿۳۵﴾

第六項

36. 汝等信徒たちよ、アッラーを畏れ敬い、アッラーに近づかんことを求め、アッラーの道のために奮闘せよ。然(しか)らばお前たち成功すべし。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوا اتَّقُوا اللّٰهَ وَابْتَغُوْٓا اِلَيْهِ الْوَسِيْلَةَ وَجَاهِدُوْا فِىْ سَبِيْلِهٖ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُوْنَ ﴿۳۶﴾

注 18　イスラムはイスラム教国或いはイスラム社会が圧倒多数でイスラムの利益にとって危険とされる邪悪な存在を根絶せよと要求する場合に、極端な手段であっても、積極的にとって戦うものである。イスラムと感情的な空想の情緒的断面に惑わされる事なく、理性と健全な判断の命に従い、公の攻撃に対する罰則も用意する。ここで準備される罰の形態には四種類あり、特殊な場合には、課される罰は、周囲の状況次第ともなる。又罰を課するのは個人ではなく統治政府の責任であり、'土地払い'という語は、イマーム・アブー・ハニーファに依ると禁固を表す。

注 19　この節及び前節で述べられているのは、'アッラー及びアッラーの使者に対し戦いを挑む者という表現からも明らかな様に、ただの盗ぞくやかっぱらいではなく、イスラム教国に戦いをしかけてくる反乱者や極悪非道な者達への罰についてである。また当節で、罪を犯した者達は悔い改めれば大赦を約束されているという事実からも、その推論は正しいと考えられる。しかし強盗、かっぱらい、窃盗者の様に、明らかに個人や社会に対して極悪非道な罪を犯した者達は、普通の状況では、どれだけ悔い改めても、教国からは許されず、律法

37. たとい不信心者が、地上にあるすべてのもの並びに之に倍するものを以て、復活の懲罰を贖わんとするも、そは受納されざるべし。彼等にはただ痛罰あるのみ。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا لَوْ أَنَّ لَهُم مَّا فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا وَمِثْلَهُ مَعَهُ لِيَفْتَدُوا بِهِ مِنْ عَذَابِ يَوْمِ الْقِيَامَةِ مَا تُقُبِّلَ مِنْهُمْ ۖ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٣٦﴾

38. 彼等は業火より脱出せんと欲すれど、そこより出づる能わず。永劫の罪のみ続かん。

يُرِيدُونَ أَن يَخْرُجُوا مِنَ النَّارِ وَمَا هُم بِخَارِجِينَ مِنْهَا ۖ وَلَهُمْ عَذَابٌ مُّقِيمٌ ﴿٣٧﴾

39. 盗みをしたる者は、男女を問わず、その手を斬り落せ。(注 20) そは己が所業の報いにして、アッラーの見せしめなり。アッラーは強大にして、賢哲にまします。

وَالسَّارِقُ وَالسَّارِقَةُ فَاقْطَعُوا أَيْدِيَهُمَا جَزَاءً بِمَا كَسَبَا نَكَالًا مِّنَ اللَّهِ ۗ وَاللَّهُ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ﴿٣٨﴾

40. されど、悪事を行えるも、後に悔悟し改心する者には、アッラーは容赦に転ぜられん。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

فَمَن تَابَ مِن بَعْدِ ظُلْمِهِ وَأَصْلَحَ فَإِنَّ اللَّهَ يَتُوبُ عَلَيْهِ ۗ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿٣٩﴾

41. 汝は天地の大権がアッラーの所有なることを知らざるか？　(注 21) アッラーは御心

أَلَمْ تَعْلَمْ أَنَّ اللَّهَ لَهُ مُلْكُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ يُعَذِّبُ

で定められた悪業に対する罰則をうけねばならないのである。彼等が悔後すれば、神は無論、赦されるが、教国の力は限られており、そこまでの権限は有していない。しかしながら政治犯は、反省しそれ以上の反乱行為や、国家へたてつく事をしなければ赦される。

注 20　この節で、'盗みをする女'という表現より前に'盗みをする男'が置かれているのは、女性より男性の方が盗みを犯しやすいからであり、24：3で、姦淫を犯す女という言葉が姦淫する男より前に置かれているのは、姦淫の罪が男より女の場合の方が立証しやすいからである。この各節の配列、又その言葉の配列の妙からもクルアーンの知的水準の高さがわかるのである。私通に関して男子に課せられる罰は厳しすぎる様にも思われるが、人間の今までの経験から、罰を厳しくして、もしその様な罪を犯せばどの様な日に会うか示せば、人をしてその様な行動を慎しませる効果があるのである。一人の人間を厳しく罰する事で、それをみせしめとし、同様の罪を犯すかもしれない多くの男達を救う方が賢明なのである。身体全体をそこなってしまう事なく、腐りきった四肢を切断できるのは名医といえる。イスラムが、精神的に貧しかった時代に、定められた罰則が人の行動を規制するものとなる為、実際に遂行され、盗ぞく達の手を切断するという極めてまれな事が行なわれた。今日に於いても、クルアーンで定められる盗みへの罰が効力を持っている為、アラビアでは窃盗は極めてまれである。また、この節で使われているアラビア語の二つの語の意味は、"彼らから盗む力を取り去る、或いは、彼らが盗む事をしなくなると考えられる実際的な手段をとる"という事を表している。この節を文字通りの罰と考えられる。しかしこういった最大級の罰が与えられるのは極端な場合のみであり、それ以外は盗人から盗む力を失くす或いは盗まなくさせる実際的方法が考えられ、より軽い罰則があてはめられる。当然の事ながら罰を与える場合には、あらゆる面からかんがみた状況判断が下される。神学者達の間で意見の相異があるという事は、とりも直さず、罰則の形態や軽重に関しては、それを下す裁判官の判断に委ねられるという事を意味している。

注 21　これらに類似した表現は、宇宙の神の統治が任意であり、何ら法的システムに基づいていないという事を意味している訳ではない。これらの表現は全て、神こそ宇宙に於ける最終的な権威であり、神の言葉が法であり、神の律令に対しての訴えや償いなど存在しないという事を指摘する為、用いられているのである。

مَنْ يَّشَآءُ وَيَغْفِرُ لِمَنْ يَّشَآءُ ۗ وَاللّٰهُ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ﴿٤١﴾

のままに罰し、御心のままに赦し給う。アッラーは全能にまします。

يٰٓاَيُّهَا الرَّسُوْلُ لَا يَحْزُنْكَ الَّذِيْنَ يُسَارِعُوْنَ فِي الْكُفْرِ مِنَ الَّذِيْنَ قَالُوْٓا اٰمَنَّا بِاَفْوَاهِهِمْ وَلَمْ تُؤْمِنْ قُلُوْبُهُمْ ۛ وَمِنَ الَّذِيْنَ هَادُوْا ۛ سَمّٰعُوْنَ لِلْكَذِبِ سَمّٰعُوْنَ لِقَوْمٍ اٰخَرِيْنَ ۙ لَمْ يَأْتُوْكَ ۗ يُحَرِّفُوْنَ الْكَلِمَ مِنْ بَعْدِ مَوَاضِعِهٖ ۚ يَقُوْلُوْنَ اِنْ اُوْتِيْتُمْ هٰذَا فَخُذُوْهُ وَاِنْ لَّمْ تُؤْتَوْهُ فَاحْذَرُوْا ۗ وَمَنْ يُّرِدِ اللّٰهُ فِتْنَتَهٗ فَلَنْ تَمْلِكَ لَهٗ مِنَ اللّٰهِ شَيْئًا ۗ اُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ لَمْ يُرِدِ اللّٰهُ اَنْ يُّطَهِّرَ قُلُوْبَهُمْ ۗ لَهُمْ فِي الدُّنْيَا خِزْيٌ ۚۖ وَّلَهُمْ فِي الْاٰخِرَةِ عَذَابٌ عَظِيْمٌ ﴿٤٢﴾

42. 使徒よ、競いて不信心に奔る者どもに心を痛めるなかれ。彼等は口では、「我等は信ず」と云うが、心では信ぜざるなり。またユダヤ教徒の中には好んで虚言に耳を傾け、(注22) 汝のところへ寄りつかざる者どもの言葉に耳を傾ける者あり。彼等は勝手に経典の字句を歪曲して云う、「もしこれがお前たちに与えられたるものならば、すなわち受けよ。されど与えられたるものに非ずば、すなわち避けよ」と。アッラーが試さんとする者あらば、汝とてアッラーに抗してその者のために何事をもし得ざるべし。これ等の者どもは、アッラーがその心を浄むるを欲せざる者なり。彼等は現世で恥辱を受け、来世では厳しい懲罰を受けん。

سَمّٰعُوْنَ لِلْكَذِبِ اَكّٰلُوْنَ لِلسُّحْتِ ۗ فَاِنْ جَآءُوْكَ فَاحْكُمْ بَيْنَهُمْ اَوْ اَعْرِضْ عَنْهُمْ ۚ وَاِنْ تُعْرِضْ عَنْهُمْ فَلَنْ يَّضُرُّوْكَ شَيْئًا ۗ وَاِنْ حَكَمْتَ فَاحْكُمْ بَيْنَهُمْ بِالْقِسْطِ ۗ اِنَّ اللّٰهَ يُحِبُّ الْمُقْسِطِيْنَ ﴿٤٣﴾

43. 彼等は好んで虚偽に耳を傾け、禁ぜられたるものをむさぼり食らう。もし彼等が裁定を求めて汝のところへ来なば、裁いてやるか彼等から顔を転じて脇を向け。たとい汝が彼等から顔をそむけるとも、彼等は汝を害する能わず。また裁くなら、公正に裁くべし。げにアッラーは公正なる者を愛し給う。

وَكَيْفَ يُحَكِّمُوْنَكَ وَعِنْدَهُمُ التَّوْرٰىةُ فِيْهَا حُكْمُ اللّٰهِ ثُمَّ يَتَوَلَّوْنَ مِنْ بَعْدِ ذٰلِكَ ۗ وَمَآ اُولٰٓئِكَ بِالْمُؤْمِنِيْنَ ﴿٤٤﴾

44. されどアッラーの判決を載せたる律法をすでに持つ彼等が、如何にして汝を裁判者となすべきや？しかるに彼等は律法を無視して背き去る。げに彼等は信徒に非ず。

第七項

اِنَّآ اَنْزَلْنَا التَّوْرٰىةَ فِيْهَا هُدًى وَّنُوْرٌ ۚ يَحْكُمُ بِهَا النَّبِيُّوْنَ الَّذِيْنَ اَسْلَمُوْا لِلَّذِيْنَ هَادُوْا وَالرَّبّٰنِيُّوْنَ

45. げにわれらは、嚮導と光明とを内含する律法を降したり。われらに帰依せる預言者たちは、(注23) 之に拠って、聖職者たちや

注22　この表現は(1)彼らは嘘をつく為に耳を傾ける、(2)彼らは他の者達が聖なる預言者に関していう嘘を真実として受け入れるの意味を持つ。

注23　3章80節参照

律法学者がなせる如くユダヤ教徒を裁きたり。なんとなれば、彼等はアッラーの経典の護持を託され、その守護者なりせば。故に人々を恐れるなかれ、ただわしのみを恐れよ。而してわずかな代価で神兆を売るなかれ。アッラーが降し給えるものに拠らずして（注 24）裁判する者ども、これ等の者は皆不信心者なり。

وَالْأَحْبَارُ بِمَا اسْتُحْفِظُوا مِنْ كِتٰبِ اللّٰهِ وَكَانُوا عَلَيْهِ شُهَدَاءَ ۚ فَلَا تَخْشَوُا النَّاسَ وَاخْشَوْنِ وَلَا تَشْتَرُوا بِاٰيٰتِي ثَمَنًا قَلِيلًا ۚ وَمَنْ لَمْ يَحْكُمْ بِمَا أَنْزَلَ اللّٰهُ فَأُولٰئِكَ هُمُ الْكٰفِرُونَ ﴿٤٥﴾

46. われらは律法の中で、かく規定せり。生命には生命を、目には目を、鼻には鼻を、耳には耳を、歯には歯を、その外受けた傷害に同じような報復を。されど報復の権利を放棄する者は、（注 25）己が罪の償いとなるべし。アッラーが降し給えるものに拠らずして裁く者、これ等は皆不義なす徒輩なり。

وَكَتَبْنَا عَلَيْهِمْ فِيهَا أَنَّ النَّفْسَ بِالنَّفْسِ وَالْعَيْنَ بِالْعَيْنِ وَالْأَنْفَ بِالْأَنْفِ وَالْأُذُنَ بِالْأُذُنِ وَالسِّنَّ بِالسِّنِّ وَالْجُرُوحَ قِصَاصٌ ۚ فَمَنْ تَصَدَّقَ بِهِ فَهُوَ كَفَّارَةٌ لَهُ ۚ وَمَنْ لَمْ يَحْكُمْ بِمَا أَنْزَلَ اللّٰهُ فَأُولٰئِكَ هُمُ الظّٰلِمُونَ ﴿٤٦﴾

47. われらは彼等の跡を踏ませてマリアの子イエスを遣わし、それ以前に律法の中に啓示せるものを実証せり。またわれらは、嚮導と光明とを内含する福音書をイエスに授けたり。そは以前に律法の中に啓示せるものの実証であり、神を畏れる者へ嚮導であり且つ警告なり。

وَقَفَّيْنَا عَلٰى اٰثَارِهِمْ بِعِيسَى ابْنِ مَرْيَمَ مُصَدِّقًا لِمَا بَيْنَ يَدَيْهِ مِنَ التَّوْرٰىةِ ۖ وَاٰتَيْنٰهُ الْإِنْجِيلَ فِيهِ هُدًى وَنُورٌ وَمُصَدِّقًا لِمَا بَيْنَ يَدَيْهِ مِنَ التَّوْرٰىةِ وَهُدًى وَمَوْعِظَةً لِلْمُتَّقِينَ ﴿٤٧﴾

48. されば福音の民をして、アッラーがその中に啓示せるものに拠りて裁き事をなさしめよ。何人であれアッラーが啓示せるものに拠らずして裁き事をなす者は、邪悪の徒輩なり。

وَلْيَحْكُمْ أَهْلُ الْإِنْجِيلِ بِمَا أَنْزَلَ اللّٰهُ فِيهِ ۚ وَمَنْ لَمْ يَحْكُمْ بِمَا أَنْزَلَ اللّٰهُ فَأُولٰئِكَ هُمُ الْفٰسِقُونَ ﴿٤٨﴾

49. われらが汝に真理から成る経典を啓示せるは、それ以前に啓示せる経典を実証し、そ

وَأَنْزَلْنَا إِلَيْكَ الْكِتٰبَ بِالْحَقِّ مُصَدِّقًا لِمَا بَيْنَ يَدَيْهِ

注 24　この節に於いて、クルアーンは前節で述べられたユダヤ人に対する非難を再び持ち出している。即ちモーゼ以後の神の預言者ですら、トラーに従って裁くよう命ぜられているのに、誰か一体、トラーに依らず、裁く事が出来るというのであろうかとの意味である。

注 25　出エジプト記 21：23－25、及びレビ記 24：19－21 を参照の事。また“これを自ら棄権する者達”という言葉が、キリスト教徒が多大に自慢する許しについての教えが、福音書にしか述べられてはいないというのは事実でないという立証となる。またモーゼの教えは、イエスの許しと無抵抗に主眼を置く教えに対し報復に主眼をおいてはいるものの、赦しは、モーゼの教えの一部を形成している。

の守護者たらしめんがためなり。(注 26) されぱアッラーが啓示せるものに拠りて彼等の間を裁くべし。彼等の邪悪な性癖に従い、汝に賜われる真理に背くなかれ。われらはお前たちのそれぞれに、明白なる宗教上の掟と俗事における明路とを定めたり。もしアッラーが欲したりせば、お前たちを一つの集団になし得たり。されどアッラーはお前たちを、お前たちに授け賜えるもので試めさんとす。されば互に善行を競うべし。いずれお前たちは皆アッラーの許(もと)へ帰り行かん。その時アッラーは、お前たちが争えることを教えん。

مِنَ الْكِتٰبِ وَمُهَيْمِنًا عَلَيْهِ فَاحْكُمْ بَيْنَهُمْ بِمَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ وَلَا تَتَّبِعْ اَهْوَآءَهُمْ عَمَّا جَآءَكَ مِنَ الْحَقِّ لِكُلٍّ جَعَلْنَا مِنْكُمْ شِرْعَةً وَّمِنْهَاجًا وَلَوْ شَآءَ اللّٰهُ لَجَعَلَكُمْ اُمَّةً وَّاحِدَةً وَّلٰكِنْ لِّيَبْلُوَكُمْ فِيْ مَآ اٰتٰىكُمْ فَاسْتَبِقُوا الْخَيْرٰتِ اِلَى اللّٰهِ مَرْجِعُكُمْ جَمِيْعًا فَيُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ فِيْهِ تَخْتَلِفُوْنَ ﴿٤٩﴾

50. されぱアッラーが啓示せるものに拠りて、彼等の間を裁くべし。彼等の邪悪な性癖に従うなかれ。アッラーが汝に啓示せるもので汝を惑わさんとする彼等に用心せよ。されど彼等が背き去らば、そはアッラーが彼等の犯せしさまざまなる罪故に、彼等を一撃せんとすることを知れ。げに多くの人間は不従順なり。

وَاَنِ احْكُمْ بَيْنَهُمْ بِمَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ وَلَا تَتَّبِعْ اَهْوَآءَهُمْ وَاحْذَرْهُمْ اَنْ يَّفْتِنُوْكَ عَنْۢ بَعْضِ مَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ اِلَيْكَ فَاِنْ تَوَلَّوْا فَاعْلَمْ اَنَّمَا يُرِيْدُ اللّٰهُ اَنْ يُّصِيْبَهُمْ بِبَعْضِ ذُنُوْبِهِمْ وَاِنَّ كَثِيْرًا مِّنَ النَّاسِ لَفٰسِقُوْنَ ﴿٥٠﴾

51. 彼等は無明時代の (注 27) 裁判を求むるか？されど信仰篤(あつ)き人々にとりて、アッラーに勝る裁判官があり得るか？

اَفَحُكْمَ الْجَاهِلِيَّةِ يَبْغُوْنَ وَمَنْ اَحْسَنُ مِنَ اللّٰهِ حُكْمًا لِّقَوْمٍ يُّوْقِنُوْنَ ﴿٥١﴾

第八項

52. 汝等信徒たちよ、ユダヤ教徒やキリスト教徒を友とするなかれ。(注 28) 彼等は互に友人なり。(注 29) お前たちの中で彼等と仲良

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَتَّخِذُوا الْيَهُوْدَ وَالنَّصٰرٰۤى اَوْلِيَآءَ بَعْضُهُمْ اَوْلِيَآءُ بَعْضٍ وَمَنْ يَّتَوَلَّهُمْ مِّنْكُمْ فَاِنَّهٗ

注 26　ここではクルアーンとは、それに先立つ経典を保護するものとして語られている。又それは、クルアーンは不滅であるものとして語られている。そして永遠の価値を有するもの全てを包括する。、永遠ではなく人類の必然にかなわぬものは全く含まれていないという意味に於いて、そして、不正な変更がなされず、神の御加護があるという意味に於いて、コーランは今までに存在した経典を保護する存在と呼ばれるのである。

注 27　無明時代ー即ち神の啓示の下っていないイスラム以前の事

注 28.　この節はユダヤ人やキリスト教徒、そして信仰を持たぬ者達への公正な、或いは慈悲深い扱いを禁じたり抑制したりする為に述べられているのではない。ここで取りあげているのは、イスラムと戦闘状態にある、そしていつもイスラムに対し、わなを仕掛けてくるユダヤ人或いはキリスト教徒についてである。

注 29　ユダヤ人とキリスト教徒は、お互いの相異を忘れ、イスラムに敵対する時には、徒党を組む。聖なる預言者が“全ての不信仰は、一つの共同体を形成する”と言った事は真に真実である。即ち信仰を持たぬ者は全て、たとえ互いに敵意を抱いていても、イスラム教徒に対抗する時には、仲間として行動するのである。

くする者あらば、その者は同類なり。アッラーは不義の徒輩を導かず。

مِنْهُمْ ۚ إِنَّ اللّٰهَ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظّٰلِمِيْنَ ﴿٥٢﴾

53. 汝は、心に病ある者が彼等のところへ走り行きて、「我等は災難に遭いはせぬかと恐る」と云うを見ん。ことによると、アッラーは御自ら勝利か、(注 30) さもなくば何か結果をもたらさん。その時彼等は、胸中に秘めたることについて後悔すべし。

فَتَرَى الَّذِيْنَ فِيْ قُلُوْبِهِمْ مَّرَضٌ يُّسَارِعُوْنَ فِيْهِمْ يَقُوْلُوْنَ نَخْشٰٓى أَنْ تُصِيْبَنَا دَآئِرَةٌ ۚ فَعَسَى اللّٰهُ أَنْ يَّأْتِيَ بِالْفَتْحِ أَوْ أَمْرٍ مِّنْ عِنْدِهٖ فَيُصْبِحُوْا عَلٰى مَآ أَسَرُّوْا فِيْٓ أَنْفُسِهِمْ نٰدِمِيْنَ ﴿٥٣﴾

54. 而して信ずる者は云わん、「これ等の者は、お前たちに協力するとアッラーにかけて厳かに誓いたる徒輩なるか？」と。彼等の所業は無に帰し、失敗者となれり。

وَيَقُوْلُ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا أَهٰٓؤُلَآءِ الَّذِيْنَ أَقْسَمُوْا بِاللّٰهِ جَهْدَ أَيْمَانِهِمْ ۙ إِنَّهُمْ لَمَعَكُمْ ۚ حَبِطَتْ أَعْمَالُهُمْ فَأَصْبَحُوْا خٰسِرِيْنَ ﴿٥٤﴾

55. 汝等信徒たちよ、お前たちのうちもしその教えに背く者あらば、アッラーはその者の代りに、アッラーを愛し、アッラーに愛される民を興すべし。(注 31) 彼等は、信徒には謙虚で心優しく、不信心者には意志堅固なり。彼等はアッラーの道のために奮闘努力し、非難者の非難を恐れざるべし。こはアッラーの恩恵なり。アッラーはそれを御心にかなう者に与え給う。アッラーは恵み深く、すべてを知り給う。

يٰٓأَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مَنْ يَّرْتَدَّ مِنْكُمْ عَنْ دِيْنِهٖ فَسَوْفَ يَأْتِي اللّٰهُ بِقَوْمٍ يُّحِبُّهُمْ وَيُحِبُّوْنَهٗٓ أَذِلَّةٍ عَلَى الْمُؤْمِنِيْنَ أَعِزَّةٍ عَلَى الْكٰفِرِيْنَ يُجَاهِدُوْنَ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَلَا يَخَافُوْنَ لَوْمَةَ لَآئِمٍ ۚ ذٰلِكَ فَضْلُ اللّٰهِ يُؤْتِيْهِ مَنْ يَّشَآءُ ۚ وَاللّٰهُ وَاسِعٌ عَلِيْمٌ ﴿٥٥﴾

56. お前たちの友とは、アッラーとその使徒、並びに礼拝を遵守し、定めの喜捨を納め、ただ神のみを崇拝する信徒たちなり。

إِنَّمَا وَلِيُّكُمُ اللّٰهُ وَرَسُوْلُهٗ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوا الَّذِيْنَ يُقِيْمُوْنَ الصَّلٰوةَ وَيُؤْتُوْنَ الزَّكٰوةَ وَهُمْ رٰكِعُوْنَ ﴿٥٦﴾

57. アッラーとその使徒、並びに信徒を友とする者、こういうアッラーの一党こそ勝利を保証されん。

وَمَنْ يَّتَوَلَّ اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا فَإِنَّ حِزْبَ اللّٰهِ هُمُ الْغٰلِبُوْنَ ﴿٥٧﴾

注 30　ここで述べられている'勝利'とは、メッカの陥落のこと、又は一般的な勝利のどちらにも理解できる。勝利の後に来る'出来事'とは、明らかに勝利以上の何かを指す。それはアラビア半島全体及びアラビア半島にある組織がイスラムに入信することを指す様に考えられる。

注 31　ある宗教（信仰）の信者数が、何ら回復の見込みの立たないまま、着実に、持続的に減少する場合には、その宗教は、絶えたと考えねばならない。

第九項

58. 汝等信徒たちよ、お前たちより以前に経典を授けられながら、お前たちの宗教を嘲弄笑罵する徒輩(やから)や不信心者どもを友とするなかれ。(注 32) お前たち信徒ならば、アッラーを畏れよ。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَتَّخِذُوا الَّذِينَ اتَّخَذُوا دِينَكُمْ هُزُوًا وَلَعِبًا مِنَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ مِنْ قَبْلِكُمْ وَالْكُفَّارَ أَوْلِيَاءَ ۚ وَاتَّقُوا اللَّهَ إِنْ كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿٥٨﴾

59. お前たちが礼拝に人を喚(よ)ぶ時、彼等はそれを嘲弄笑罵す。そは彼等が思慮なき民なるが故なり。

وَإِذَا نَادَيْتُمْ إِلَى الصَّلَاةِ اتَّخَذُوهَا هُزُوًا وَلَعِبًا ۚ ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَا يَعْقِلُونَ ﴿٥٩﴾

60. 云え、「経典の民よ、お前たちが我等を非難するは、我等がアッラーを信じ、我等に降(くだ)されたるものと、それ以前に降(くだ)されたるものとを信ずるが故なるか？それとも、お前たちの大部分の者が神に対し奉り不従順なるが故なるか？」と。

قُلْ يَا أَهْلَ الْكِتَابِ هَلْ تَنْقِمُونَ مِنَّا إِلَّا أَنْ آمَنَّا بِاللَّهِ وَمَا أُنْزِلَ إِلَيْنَا وَمَا أُنْزِلَ مِنْ قَبْلُ وَأَنَّ أَكْثَرَكُمْ فَاسِقُونَ ﴿٦٠﴾

61. 云え、「お前たちにこれより更に悪いアッラーの報奨を教えようか？彼等はアッラーに呪われ、その怒りを被り、猿や豚にされたる者、(注 33)並びに邪神を崇拝する徒輩(やから)なり。これ等の者どもは最悪な境遇にあり、正しい道よりはるか遠くへ迷い出た者どもなり」と。

قُلْ هَلْ أُنَبِّئُكُمْ بِشَرٍّ مِنْ ذَٰلِكَ مَثُوبَةً عِنْدَ اللَّهِ ۚ مَنْ لَعَنَهُ اللَّهُ وَغَضِبَ عَلَيْهِ وَجَعَلَ مِنْهُمُ الْقِرَدَةَ وَالْخَنَازِيرَ وَعَبَدَ الطَّاغُوتَ ۚ أُولَٰئِكَ شَرٌّ مَكَانًا وَأَضَلُّ عَنْ سَوَاءِ السَّبِيلِ ﴿٦١﴾

62. 彼等はお前たちのところへ来れば、「我等は信ず」と云う。(注 34) されど彼等は無信仰を抱いて入りたれば、去るときも無信仰のままなり。アッラーは彼等が隠すものを熟知し給う。

وَإِذَا جَاءُوكُمْ قَالُوا آمَنَّا وَقَدْ دَخَلُوا بِالْكُفْرِ وَهُمْ قَدْ خَرَجُوا بِهِ ۚ وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا كَانُوا يَكْتُمُونَ ﴿٦٢﴾

注 32　　5：52 では、信仰を持たぬ者の、イスラム教徒に対する敵意にみちた好戦的な態度の故に、彼等と交友関係を、結ぶ事が禁じられている。ここでは、その戒律に関する理由が述べられているが、これは、イスラム教徒が彼らと友好的な取り引きをしたり、善を施したり親切な応対をする事を禁じるものではない。

注 33　　ここでは‘猿’や‘豚’は比喩的な意味で使われている。特定の動物には、一定の特徴があり、その特徴は、それを有する特定の動物を明示しない限り、充分に説明できるものではない。猿は物真似を得意とし、豚は、不潔さ、恥知らずな行為、そしてその愚かさに特徴がある。‘邪神を拝む者’という表現では、‘猿’や‘豚’という言葉が、比喩的に用いられている。2 章 66 節参照の事。

注 34　　ユダヤ人は偽善的に、我は信ず、という語句をつぶやくだけで、単に信者のふりをし、実際には、その本当の意義を理解したり気づいたりはしていないのである。次節も参照の事。

63. 汝は、彼等の多くが争って罪悪と背逆に奔り、禁ぜられたるものを食するを見ん。げに彼等の行為は邪悪なり。

وَتَرَىٰ كَثِيرًا مِّنْهُمْ يُسَارِعُونَ فِي الْإِثْمِ وَالْعُدْوَانِ وَأَكْلِهِمُ السُّحْتَ ۚ لَبِئْسَ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٦٣﴾

64. 何故に聖職者たちや律法学者は、彼等が虚偽を口にし、禁ぜられたるものを食するを禁ぜざるか？げに彼等のなせることは邪魔なり。

لَوْلَا يَنْهَاهُمُ الرَّبَّانِيُّونَ وَالْأَحْبَارُ عَن قَوْلِهِمُ الْإِثْمَ وَأَكْلِهِمُ السُّحْتَ ۚ لَبِئْسَ مَا كَانُوا يَصْنَعُونَ ﴿٦٤﴾

65. 「アッラーの手は縛られているなり」とユダヤ教徒は云う。彼等の手こそ縛られ、而してその云えることのために彼等こそ呪われるべし。然らず、アッラーの両手は大きく開かれているなり。(注 35) アッラーは御心のままに施し給う。主が汝に降し賜わりたるものは、彼等の多くに反抗と不信心とを増大せしむべし。而してわれらが彼等の間に投ぜし敵意と憎悪とは、復活の日まで続くべし。彼等が如何に戦に火をつけんとしても、(注 36) その度にアッラーはそれを消し止めん。彼等は地上に騒乱を惹き起さんと努む。されどアッラーは騒乱者を好まず。

وَقَالَتِ الْيَهُودُ يَدُ اللَّهِ مَغْلُولَةٌ ۚ غُلَّتْ أَيْدِيهِمْ وَلُعِنُوا بِمَا قَالُوا ۘ بَلْ يَدَاهُ مَبْسُوطَتَانِ يُنفِقُ كَيْفَ يَشَاءُ ۚ وَلَيَزِيدَنَّ كَثِيرًا مِّنْهُم مَّا أُنزِلَ إِلَيْكَ مِن رَّبِّكَ طُغْيَانًا وَكُفْرًا ۚ وَأَلْقَيْنَا بَيْنَهُمُ الْعَدَاوَةَ وَالْبَغْضَاءَ إِلَىٰ يَوْمِ الْقِيَامَةِ ۚ كُلَّمَا أَوْقَدُوا نَارًا لِّلْحَرْبِ أَطْفَأَهَا اللَّهُ ۚ وَيَسْعَوْنَ فِي الْأَرْضِ فَسَادًا ۚ وَاللَّهُ لَا يُحِبُّ الْمُفْسِدِينَ ﴿٦٥﴾

66. されど経典の民が本当に信仰し、義しい者ならば、われらは彼等の罪障を消滅し、必ずや至福の楽園へ入らしめん。

وَلَوْ أَنَّ أَهْلَ الْكِتَابِ آمَنُوا وَاتَّقَوْا لَكَفَّرْنَا عَنْهُمْ سَيِّئَاتِهِمْ وَلَأَدْخَلْنَاهُمْ جَنَّاتِ النَّعِيمِ ﴿٦٦﴾

67. もし彼等が、律法と福音並びに主が降し賜わりたるものを遵守するならば、頭上からも、脚下からも必ず美味いものを賜わらん。(注 37) 彼等のうちにも節度をわきまえたる者あり。されどその多くの者のなせることは、邪悪なり。

وَلَوْ أَنَّهُمْ أَقَامُوا التَّوْرَاةَ وَالْإِنجِيلَ وَمَا أُنزِلَ إِلَيْهِم مِّن رَّبِّهِمْ لَأَكَلُوا مِن فَوْقِهِمْ وَمِن تَحْتِ أَرْجُلِهِم ۚ مِّنْهُمْ أُمَّةٌ مُّقْتَصِدَةٌ ۖ وَكَثِيرٌ مِّنْهُمْ سَاءَ مَا يَعْمَلُونَ ﴿٦٧﴾

注 35　手は祝福と仁愛を与える手段として、又、犯罪者を捕らえ、罰する為の力と権力の象徴として使われる。神の両手は大きくひろげられており、片手は信じる者に多くの物を与える為、又、もう一方の手は、ユダヤ人のごう慢さを罰する為、さし出されているのである。

注 36　ここでは、ユダヤ人達の、イスラムに対しての彼ら自身の憎しみに満ちた活動のみでなく、アラビアの多神教徒（偶像崇拝者）達がイスラム教徒に対し、戦いをしかける様、画策するユダヤ人の企てについて言及している。

注 37　(1)彼らは世俗的な富の他に神の啓示や聖体拝受といった、天の祝福をも受けるのであろう。(2)彼らは天からの時を得た慈雨を受けるだけでなく、地上でも、たくさんの収穫を得る。(3)神は、天からも地からも、彼らの進歩の為の手段を与えられるのである。

第十項

68. 使徒よ、主より啓示されたるものを人々に伝達せよ。汝それをなさずば、汝は主の使命を果たさざることなり。アッラーは人々から汝を護るべし。げにアッラーは信ぜざる民を導かず。

يَٰٓأَيُّهَا ٱلرَّسُولُ بَلِّغْ مَآ أُنزِلَ إِلَيْكَ مِن رَّبِّكَ ۖ وَإِن لَّمْ تَفْعَلْ فَمَا بَلَّغْتَ رِسَالَتَهُۥ ۚ وَٱللَّهُ يَعْصِمُكَ مِنَ ٱلنَّاسِ ۗ إِنَّ ٱللَّهَ لَا يَهْدِى ٱلْقَوْمَ ٱلْكَٰفِرِينَ ﴿٦٨﴾

69. 云え、「経典の民よ、(注 38) 律法と福音、並びに主がお前たちに降し賜えるものを遵守せぬ限り、お前たちは立つべき拠り所なし」と。されど主より汝に降し賜わりたるものは、彼等の多くに反抗と不信心とを増大せしむべし。されど不信心者どものことで心を痛めるなかれ。

قُلْ يَٰٓأَهْلَ ٱلْكِتَٰبِ لَسْتُمْ عَلَىٰ شَىْءٍ حَتَّىٰ تُقِيمُوا۟ ٱلتَّوْرَىٰةَ وَٱلْإِنجِيلَ وَمَآ أُنزِلَ إِلَيْكُم مِّن رَّبِّكُمْ ۗ وَلَيَزِيدَنَّ كَثِيرًا مِّنْهُم مَّآ أُنزِلَ إِلَيْكَ مِن رَّبِّكَ طُغْيَٰنًا وَكُفْرًا ۖ فَلَا تَأْسَ عَلَى ٱلْقَوْمِ ٱلْكَٰفِرِينَ ﴿٦٩﴾

70. げに信ずる人々、ユダヤ教徒、サービ教徒、(注 39) 並びにキリスト教徒とを問わず、誰であれアッラーと最後の日を信じ、善行をなす者には、恐怖も憂えもなかるべし。

إِنَّ ٱلَّذِينَ ءَامَنُوا۟ وَٱلَّذِينَ هَادُوا۟ وَٱلصَّٰبِـُٔونَ وَٱلنَّصَٰرَىٰ مَنْ ءَامَنَ بِٱللَّهِ وَٱلْيَوْمِ ٱلْءَاخِرِ وَعَمِلَ صَٰلِحًا فَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿٧٠﴾

71. げにわれらは、かつてイスラエルの子孫と契約を結び、彼等のところへ幾多の使徒を(注 40) 遣わせり。しかるに使徒が彼等の欲せざるものをもたらす度に、彼等は或いは之を嘘つき呼ばわりし、或いは之を殺したり。

لَقَدْ أَخَذْنَا مِيثَٰقَ بَنِىٓ إِسْرَٰٓءِيلَ وَأَرْسَلْنَآ إِلَيْهِمْ رُسُلًا ۖ كُلَّمَا جَآءَهُمْ رَسُولٌۢ بِمَا لَا تَهْوَىٰٓ أَنفُسُهُمْ فَرِيقًا كَذَّبُوا۟ وَفَرِيقًا يَقْتُلُونَ ﴿٧١﴾

72. 彼等は罰せられざるものと思いたれば、盲となり聾となれり。されどアッラーは彼等を容赦し給えり。彼等の多くは再び盲となり聾となれり。アッラーは彼等の所業を照覧し給う。

وَحَسِبُوٓا۟ أَلَّا تَكُونَ فِتْنَةٌ فَعَمُوا۟ وَصَمُّوا۟ ثُمَّ تَابَ ٱللَّهُ عَلَيْهِمْ ثُمَّ عَمُوا۟ وَصَمُّوا۟ كَثِيرٌ مِّنْهُمْ ۚ وَٱللَّهُ بَصِيرٌۢ بِمَا يَعْمَلُونَ ﴿٧٢﴾

注 38　2：114で、ユダヤ人とキリスト教徒は互いに、お互いに関して何ら独立していないと言い合っている事について非難されているが、この節ではクルアーン自身が経典を持つ人々について、全く同一の表現をしている。しかしこの同一表現には、明らかな相異がある。何故なら 2：114 に述べられた内容は言質を与えられていないが、当節での表現は、'汝がトラーを導守しなければ'という節によって言質を与えられているからである。

注 39　2：63 を参照の事。

注 40　この章と 5：13 を比較してみると、5：13 で"指導者達（リーダーズ）"とされているのは、この章の使徒にあたると考えられる。

73. 「アッラーはマリアの子、救世主(メシア)なり」と云う者ども、彼等はまさしく不信心者なり。救世主(メシア)自身云えり、「イスラエルの子孫(こどもら)よ、我が主でありお前たちの主なるアッラーを崇め奉れ」と。(注 41) 何人(なんぴと)にせよアッラーに他神(あだしがみ)を配する者あらば、アッラーはその者に楽園に入るを許さず。その者の行き先は業火(ごうか)なるべし。不義なす徒輩(やから)には如何なる救助者もなかるべし。

لقد كفر الذين قالوا إن الله هو المسيح ابن مريم وقال المسيح يبني إسرءيل اعبدوا الله ربي وربكم إنه من يشرك بالله فقد حرم الله عليه الجنة ومأوىه النار وما للظلمين من أنصار

74. 「アッラーとは三位の一つなり」と云う者ども、(注 42) 彼等はまさしく不信心者なり。唯一の神の外に神なし。もし彼等がその言葉を止めずば、彼等のうち信ぜざる者は厳しい罰を必ず受けん。

لقد كفر الذين قالوا إن الله ثالث ثلثة وما من إله إلا إله وحد وإن لم ينتهوا عما يقولون ليمسن الذين كفروا منهم عذاب أليم

75. 彼等はアッラーに顔を向け、その容赦(ゆるし)をなぜに請わざるか、アッラーは寛大にして慈悲深くましますのに？ (注 43)

أفلا يتوبون إلى الله ويستغفرونه والله غفور رحيم

76. マリアの子救世主(メシア)は一人の使徒に過ぎず。彼以前にも幾多の使徒ありて逝(ゆ)けり。彼の母は誠実なる女なりき。母子(おやこ)とも常に食事を摂(と)れり。(注 44) われらは彼等のためにさまざまなる神兆(しるし)を明示するも、見よ彼等は背き去るなり。

ما المسيح ابن مريم إلا رسول قد خلت من قبله الرسل وأمه صديقة كانا يأكلان الطعام انظر كيف نبين لهم الءايت ثم انظر أنى يؤفكون

77. 云え、「お前たちはアッラーの外に、お前たちに毫(ごう)も役立たざるものを拝む気か？」と。すべてを聴き、すべてを知り給う御方、そはアッラーなり。(注 45)

قل أتعبدون من دون الله ما لا يملك لكم ضرا ولا نفعا والله هو السميع العليم

注 41　イエスが、神のみを礼拝せよと教えたという事は、現在ではゆがめられた形となってはいても、福音書からは明らかである (マタイ 4：10；ルカ 4：8)。

注 42　この節では三位一体の教理、即ち聖父と聖子と聖霊が全ての面で共存し同等の存在であり、三つが合わさって一つの神を形成するが各々独立しているという、あの神秘的で難解な教義について語られている。この三位一体の教義に、はっきりとした形を与えたのは、ニケア公会議と特にアテネ人信条であった。

注 43　人間の救済の為には、何ら身代わりとなる犠牲は必要ではない。

注 44　この節では、色々言われているイエスの神性について数々の論論が進められている。即ち(1)イエスはあらゆる面に於いて、他の神の使い達に劣っている。(2)彼は女性から生まれた、(3)他の人間同様、彼は飢えと渇きの自然の掟に従わざるを得ず、それに続いて起こる現象を呈するのを免かれえなかった。

78. 云え、「経典の民よ、不正にお前たちの教えの矩を越えるなかれ。また、以前に道を踏み迷いて多くの人々を迷わせ、自らも正道を踏みはずせる者どもの悪癖に従うなかれ」と。

قُلْ يَٰٓأَهْلَ ٱلْكِتَٰبِ لَا تَغْلُوا۟ فِى دِينِكُمْ غَيْرَ ٱلْحَقِّ وَلَا تَتَّبِعُوٓا۟ أَهْوَآءَ قَوْمٍ قَدْ ضَلُّوا۟ مِن قَبْلُ وَأَضَلُّوا۟ كَثِيرًا وَضَلُّوا۟ عَن سَوَآءِ ٱلسَّبِيلِ ٧٨

第十一項

79. イスラエルの子孫のうちで信ぜざる徒輩は、ダビデやマリアの子イエスの舌にて呪われたり。そは彼等が従わず、常に掟を破れるが故なり。

لُعِنَ ٱلَّذِينَ كَفَرُوا۟ مِنۢ بَنِىٓ إِسْرَٰٓءِيلَ عَلَىٰ لِسَانِ دَاوُۥدَ وَعِيسَى ٱبْنِ مَرْيَمَ ذَٰلِكَ بِمَا عَصَوا۟ وَّكَانُوا۟ يَعْتَدُونَ ٧٩

80. 彼等は犯せし不正を互に抑止しざりき。彼等のなせることは大悪なり。（注 46）

كَانُوا۟ لَا يَتَنَاهَوْنَ عَن مُّنكَرٍ فَعَلُوهُ لَبِئْسَ مَا كَانُوا۟ يَفْعَلُونَ ٨٠

81. 汝は、彼等の多くの者が不信心者を友とするを見ん。彼等が己れのために先に送るものは災いなり。アッラーは彼等に立腹す。彼等は永劫の罪の中にとどまらん。

تَرَىٰ كَثِيرًا مِّنْهُمْ يَتَوَلَّوْنَ ٱلَّذِينَ كَفَرُوا۟ لَبِئْسَ مَا قَدَّمَتْ لَهُمْ أَنفُسُهُمْ أَن سَخِطَ ٱللَّهُ عَلَيْهِمْ وَفِى ٱلْعَذَابِ هُمْ خَٰلِدُونَ ٨١

82. 彼等もしアッラーを信じ、預言者とその啓示されたるものを信じなば、友としてかかる者どもを選びはせざりき。されど彼等の多くは罪人なり。

وَلَوْ كَانُوا۟ يُؤْمِنُونَ بِٱللَّهِ وَٱلنَّبِىِّ وَمَآ أُنزِلَ إِلَيْهِ مَا ٱتَّخَذُوهُمْ أَوْلِيَآءَ وَلَٰكِنَّ كَثِيرًا مِّنْهُمْ فَٰسِقُونَ ٨٢

83. 汝は、人々の中で最も激しく信徒を敵視する者が、ユダヤ教徒と多神教徒なるを知るべし。また汝は、「我等はキリスト教徒なり」と云う者が、信徒と友情最も親近なるを知るべし。そは彼等の中には多くの学者や修道士がいて、傲慢な心を持たざるが故なり。

لَتَجِدَنَّ أَشَدَّ ٱلنَّاسِ عَدَٰوَةً لِّلَّذِينَ ءَامَنُوا۟ ٱلْيَهُودَ وَٱلَّذِينَ أَشْرَكُوا۟ وَلَتَجِدَنَّ أَقْرَبَهُم مَّوَدَّةً لِّلَّذِينَ ءَامَنُوا۟ ٱلَّذِينَ قَالُوٓا۟ إِنَّا نَصَٰرَىٰ ذَٰلِكَ بِأَنَّ مِنْهُمْ قِسِّيسِينَ وَرُهْبَانًا وَأَنَّهُمْ لَا يَسْتَكْبِرُونَ ٨٣

84. 彼等はこの使徒に啓示されたるものを聞くと、真理を認め、その目に涙を満たす。（注

وَإِذَا سَمِعُوا۟ مَآ أُنزِلَ إِلَى ٱلرَّسُولِ تَرَىٰٓ أَعْيُنَهُمْ

注 45　イエスは誰に対しても何の善悪をなす力を持たなかった。彼は祈りを聞く事もできず，人間の必要を詳しく知る事ができぬ為、彼らの心を満たしてやる事ができなかった。これらが可能であるという特権こそ、神性を持つ全ての存在の特権なのである。

注 46　神の怒りを最も強く蒙ったユダヤ人の罪の一つは、ユダヤ人の間で、ひんぱんに行なわれていた悪習を互いに禁じようとしなかった事である。

47) 彼等は云う、「主よ、我等は信じ奉る。されば我等を証人のうちに書き添え給え。

تَفِيْضُ مِنَ الدَّمْعِ مِمَّا عَرَفُوْا مِنَ الْحَقِّ ۚ يَقُوْلُوْنَ
رَبَّنَآ اٰمَنَّا فَاكْتُبْنَا مَعَ الشّٰهِدِيْنَ ﴿٨٤﴾

85. どうして我等はアッラーと、我等に降し賜わりたる真理を信ぜずにいられようか？而してまた主が我等を義しい人々の中に入れ給わんことを希求せずにはいられようか？」と。

وَمَا لَنَا لَا نُؤْمِنُ بِاللّٰهِ وَمَا جَآءَنَا مِنَ الْحَقِّ ۙ وَ
نَطْمَعُ اَنْ يُّدْخِلَنَا رَبُّنَا مَعَ الْقَوْمِ الصّٰلِحِيْنَ ﴿٨٥﴾

86. さればアッラーは彼等の祈りに応え、河川流れる楽園をもって賞し給えり。彼等は永久にそのなかに住まん。そは善事を行う者への報奨なり。

فَاَثَابَهُمُ اللّٰهُ بِمَا قَالُوْا جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ
خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ۭ وَذٰلِكَ جَزَآءُ الْمُحْسِنِيْنَ ﴿٨٦﴾

87. されど信ぜざる者どもやわれらの神兆を拒否せる者ども、彼等はみな地獄の住人なり。

ع وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَكَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَآ اُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ الْجَحِيْمِ ﴿٨٧﴾

第十二項

88. 汝等信徒たちよ、アッラーがお前たちに許せる佳い食物を禁制とするなかれ。また掟に違犯するなかれ。アッラーは違犯者を好まず。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تُحَرِّمُوْا طَيِّبٰتِ مَآ اَحَلَّ اللّٰهُ لَكُمْ
وَلَا تَعْتَدُوْا ۭ اِنَّ اللّٰهَ لَا يُحِبُّ الْمُعْتَدِيْنَ ﴿٨٨﴾

89. アッラーがお前たちに許しを与えたる佳いものを食せよ。而してお前たちが信ずるアッラーを畏れよ。

وَكُلُوْا مِمَّا رَزَقَكُمُ اللّٰهُ حَلٰلًا طَيِّبًا ۠ وَّاتَّقُوا اللّٰهَ الَّذِيْٓ
اَنْتُمْ بِهٖ مُؤْمِنُوْنَ ﴿٨٩﴾

90. アッラーはお前たちの誓約における空しい言葉に対して、(注48)お前たちを咎めざるべし。されど本式に誓約しながらそれを破らば、お前たちを咎めるべし。かかる場合の罪の贖いは、お前たちが家族を養う普段の食物を十人の貧者に供するか、彼等に衣服を支給するか、或いは一人の奴隷を解放することなり。されど、その資力なき場合

لَا يُؤَاخِذُكُمُ اللّٰهُ بِاللَّغْوِ فِيْٓ اَيْمَانِكُمْ وَلٰكِنْ يُّؤَاخِذُكُمْ
بِمَا عَقَّدْتُّمُ الْاَيْمَانَ ۚ فَكَفَّارَتُهٗٓ اِطْعَامُ عَشَرَةِ مَسٰكِيْنَ
مِنْ اَوْسَطِ مَا تُطْعِمُوْنَ اَهْلِيْكُمْ اَوْ كِسْوَتُهُمْ اَوْ تَحْرِيْرُ
رَقَبَةٍ ۭ فَمَنْ لَّمْ يَجِدْ فَصِيَامُ ثَلٰثَةِ اَيَّامٍ ۭ ذٰلِكَ كَفَّارَةُ

注47　この節は特にナジャシにもあてはまるといえる。聖なる預言者の従兄でありアビシニアのイスラム教徒の亡命者達の代表であったジャファルが19章（マリアム）の最初の節をナジャシに読みかけた時、彼は人の目に明らかな程、感動をうけ、彼のほおを伝って涙がこぼれ落ち、情感にみちあふれた声で、それこそ全く彼自身がイエスについて信じていたとおりの事であり、それ以上には小枝一本分さえも考えなかったと述べたのである。

注48　イスラムの律法に反する誓いは、ただの無益な言葉にすぎない。

は、三日間断食せよ。これは誓約を破りしときの贖(あがない)いなり。己が誓約を守れ。かくの如くアッラーがお前たちにその神兆(しるし)を説き明すは、お前たちに感謝の念を抱かしめんがためなり。

أيمانكم إذا حلفتم ۚ واحفظوا أيمانكم ۚ كذلك يبين الله لكم آياته لعلكم تشكرون ﴿٩٠﴾

91. 汝等信徒たちよ、酒、賭博、偶像、占矢(うらないや)は忌むべき悪魔(サタン)の仕業なり。お前たち栄えんとするならこれ等に近寄るなかれ。

يا أيها الذين آمنوا إنما الخمر والميسر والأنصاب والأزلام رجس من عمل الشيطان فاجتنبوه لعلكم تفلحون ﴿٩١﴾

92. 悪魔(サタン)の望みはただ、酒と賭博によって（注49）お前たちの間に敵意と憎悪とを煽り立て、アッラーを忘れさせ、礼拝を捧るを妨げるところにあり。それでもお前たち、これ等を断(た)ち得ざるか？

إنما يريد الشيطان أن يوقع بينكم العداوة والبغضاء في الخمر والميسر ويصدكم عن ذكر الله وعن الصلوة ۖ فهل أنتم منتهون ﴿٩٢﴾

93. アッラーに従い、使徒に従い、而(しか)して用心せよ。たといお前たちが背き去ろうとも、わが使徒の責務はただ明白な神託を伝えるにあることを知れ。

وأطيعوا الله وأطيعوا الرسول واحذروا ۚ فإن توليتم فاعلموا أنما على رسولنا البلغ المبين ﴿٩٣﴾

94. 信じて善事を行う者は、神を畏れ、信じて義(ただ)しいことを行い、その上にも神を畏れて信心を深め、またその上にも神を畏れて善事を行うかぎり、(注50)その食することについて罪なかるべし。アッラーは善事を行う者を愛し給う。

ليس على الذين آمنوا وعملوا الصلحت جناح فيما طعموا إذا ما اتقوا وآمنوا وعملوا الصلحت ثم اتقوا وآمنوا ثم اتقوا وأحسنوا ۗ والله يحب المحسنين ﴿٩٤﴾ ع

注49　前節で述べた四つの事項は全て、何らかの意味で嫌忌であると記した後に、特にその内の二つである、酒と賭に限定して、何故嫌忌であるのかという理由を付記している。"敵意と憎しみ、そして、神を念じ、礼拝を守る妨げ"との言葉が意味する様に、嫌忌たるべき理由は、政治的、社会的、精神的、且つ社会宗教的見地に基づいているのである。

注50　この節からは以下の二つの重要な教理がひきだされる。(1)この世の中のもので，人間の利益となり利用に供する為作られたものは、一般的に全て純粋で清浄であり、禁じられているものは例外にすぎない。(2)清浄で純粋な食物は、人の道徳的発展に良い影響を及ぼし、不潔で不純な食物はその反対の効果がある。そしてまたこの節では、精神的発達の三段階が設定されている。第一段階では信者は神を畏怖し、信じ、そして善行を行う。第二段階では、神を畏怖し信ずるものの、この段階での信者の信仰はあまりにも強い為、善行を行う事がまるで自分達の信仰の一部となってくる。そして第三の段階では、信者は神を畏怖し、まるで実際に神の姿を目のあたりにしているかの如く、友たる人に善を行うのである。

第十三項

95. 汝等信徒たちよ、アッラーは誰が密かにアッラーを畏れ敬うかを知らんがために、お前たちの手や槍にて捕えし獲物によって、お前たちを試すべし。（注 51）されば何人にせよ、この後掟に違犯する者は、厳しい罰を受くべし。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَيَبْلُوَنَّكُمُ اللّٰهُ بِشَيْءٍ مِّنَ الصَّيْدِ تَنَالُهٗٓ اَيْدِيْكُمْ وَرِمَاحُكُمْ لِيَعْلَمَ اللّٰهُ مَنْ يَّخَافُهٗ بِالْغَيْبِ ۚ فَمَنِ اعْتَدٰى بَعْدَ ذٰلِكَ فَلَهٗ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿٩٥﴾

96. 汝等信徒たちよ、巡礼中は獲物を殺すなかれ。誰であれ故意に獲物を殺せる者は、その償いとして、お前たちのうち公正なる二名の者の判定に基き、その殺せるものと等しい価の四足獣を聖殿に捧げ物として届けよ。または罪滅ぼしとして貧者に給食を施すか、それに相当する日数を断食せよ、己れがなせる報いを味わうために。アッラーは過ぎたることは赦し給うが、再びそれを繰返さば、その違反を罰すべし。アッラーは偉大にして、応報の主なり。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَقْتُلُوا الصَّيْدَ وَاَنْتُمْ حُرُمٌ ۗ وَمَنْ قَتَلَهٗ مِنْكُمْ مُّتَعَمِّدًا فَجَزَآءٌ مِّثْلُ مَا قَتَلَ مِنَ النَّعَمِ يَحْكُمُ بِهٖ ذَوَا عَدْلٍ مِّنْكُمْ هَدْيًا ۢ بٰلِغَ الْكَعْبَةِ اَوْ كَفَّارَةٌ طَعَامُ مَسٰكِيْنَ اَوْ عَدْلُ ذٰلِكَ صِيَامًا لِّيَذُوْقَ وَبَالَ اَمْرِهٖ ۗ عَفَا اللّٰهُ عَمَّا سَلَفَ ۗ وَمَنْ عَادَ فَيَنْتَقِمُ اللّٰهُ مِنْهُ ۗ وَاللّٰهُ عَزِيْزٌ ذُو انْتِقَامٍ ﴿٩٦﴾

97. 魚獲物を（注 52）食することは、お前たちや旅人の食料として許されている。されど巡礼中の陸上の狩猟は禁ぜらる。アッラーを畏れよ、いずれお前たちはアッラーの許へ召し寄せられん。

اُحِلَّ لَكُمْ صَيْدُ الْبَحْرِ وَطَعَامُهٗ مَتَاعًا لَّكُمْ وَلِلسَّيَّارَةِ ۚ وَحُرِّمَ عَلَيْكُمْ صَيْدُ الْبَرِّ مَا دُمْتُمْ حُرُمًا ۗ وَاتَّقُوا اللّٰهَ الَّذِيْٓ اِلَيْهِ تُحْشَرُوْنَ ﴿٩٧﴾

98. アッラーは万民の擁護と向上のために、神聖で冒しがたい聖殿を作り、また神聖月と供物とその犠牲にかける頸輪とを定めたり。こはお前たちに、アッラーが天地間の一切のことを知り、万に通暁し給うことを教えんがためなり。

جَعَلَ اللّٰهُ الْكَعْبَةَ الْبَيْتَ الْحَرَامَ قِيٰمًا لِّلنَّاسِ وَالشَّهْرَ الْحَرَامَ وَالْهَدْيَ وَالْقَلَآئِدَ ۗ ذٰلِكَ لِتَعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ يَعْلَمُ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ وَاَنَّ اللّٰهَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمٌ ﴿٩٨﴾

99. アッラーは罰するに厳しくも、また寛大で慈悲深くましますことを知れ。

اِعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ شَدِيْدُ الْعِقَابِ وَاَنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٩٩﴾

注 51　狩猟は通常は、人が一人でおり、神の戒律を破るのを見る者が誰もいない密林地帯で行われる為、この節では、神への畏怖を示す為、その例に似つかわしい狩猟について述べられている。又この節は、次節で述べられる戒律への導入ともなっている。

注 52　ここでの獲物は海だけでなく川（小川）の流れ、湖、池等にいるものを含む。7：139 を参照の事。

100．使徒の務めはただ神託を伝えることにあり。アッラーはお前たちが外に表わすものも、内に隠すものも知り給う。

مَا عَلَى الرَّسُولِ إِلَّا الْبَلٰغُ ۗ وَاللّٰهُ يَعْلَمُ مَا تُبْدُونَ وَمَا تَكْتُمُونَ ﴿١٠٠﴾

101．云え、「たとい悪の多さが汝を驚かそうとも、悪と善とは同じに非ず」と。思慮ある人々よ、アッラーに対し奉り己が務めを忘れまいぞ。さすればお前たち成功すべし。

قُلْ لَّا يَسْتَوِي الْخَبِيثُ وَالطَّيِّبُ وَلَوْ أَعْجَبَكَ كَثْرَةُ الْخَبِيثِ ۚ فَاتَّقُوا اللّٰهَ يٰٓأُولِي الْأَلْبٰبِ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ﴿١٠١﴾

第十四項

102．汝等信徒たちよ、もし知らされなば却って苦悩するが如きことについて訊ねるなかれ。(注 53) されどクルアーンが降されつつあるとき、それを問わば、そはお前たちに知らさるべし。アッラーはこの事を赦し給う。なんとなれば、アッラーは寛大にして我慢強くまします故に。

يٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ اٰمَنُوا لَا تَسْـَٔلُوا عَنْ أَشْيَآءَ إِنْ تُبْدَ لَكُمْ تَسُؤْكُمْ ۚ وَإِنْ تَسْـَٔلُوا عَنْهَا حِينَ يُنَزَّلُ الْقُرْاٰنُ تُبْدَ لَكُمْ ۗ عَفَا اللّٰهُ عَنْهَا ۗ وَاللّٰهُ غَفُورٌ حَلِيمٌ ﴿١٠٢﴾

103．お前たち以前の民もこの事に関して訊ねたり。されどそれが因で、彼等は不信心者となれり。(注 54)

قَدْ سَأَلَهَا قَوْمٌ مِّنْ قَبْلِكُمْ ثُمَّ أَصْبَحُوا بِهَا كٰفِرِينَ ﴿١٠٣﴾

104．アッラーは、バヒーラ、サーイバ、ワシーラ並びにハーミなどを定めたることなし。されど不信心者どもが、アッラーについて偽りを捏造す。彼等の多くは理解し得ない者どもなり。

مَا جَعَلَ اللّٰهُ مِنْۢ بَحِيرَةٍ وَّلَا سَآئِبَةٍ وَّلَا وَصِيلَةٍ وَّلَا حَامٍ ۙ وَّلٰكِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا يَفْتَرُونَ عَلَى اللّٰهِ الْكَذِبَ ۗ وَأَكْثَرُهُمْ لَا يَعْقِلُونَ ﴿١٠٤﴾

105．彼等に向って、「アッラーが啓示せるもの並びに使徒の許へ来れ」と云うと、彼等は云う、「我等は父祖が見いだせる信仰で充分なり」と。なんたることぞ！彼等の父祖は

وَإِذَا قِيلَ لَهُمْ تَعَالَوْا إِلٰى مَآ أَنْزَلَ اللّٰهُ وَإِلَى الرَّسُولِ قَالُوا حَسْبُنَا مَا وَجَدْنَا عَلَيْهِ اٰبَآءَنَا ۗ أَوَلَوْ

注 53　イスラムのシャリヤ（戒律）の基礎は三つから成っている。(1)クルアーンで具現化された戒律(2)聖なる預言者の実践或いはスンナ、そして(3)聖なる預言者の本当に言った言葉の中の命令や教訓。

これらのイスラムの戒律の三つの源が、人間の全ての根本的問題を処理するが、よりささいな細部に渡る問題は、神より与えられた自分自身の知力と能力の助けをかりて上記の三つの輝く導きの光明の中で解決すべく、本人の自由意志に委ねられているのである。この節で言及されているのは，ささいな詳細に関する事柄に他ならない。

注 54　取るに足らぬ事を必要もないのに根掘り葉掘り聞いたり、それらに不用な法的制裁を求めるのは、大体に於いて質問者自身の損害となる。そうする事は、本人の自由意志を限定し、判断に足かせをはめ、不必要で厄介な法的処置に束縛してしまう。イスラエル人達はモーゼに、とるに足らぬ不必要な質問をした為、その結果、不用に枝葉末節に厳しくしてしまい、基本である神の十戒すらも守れなくなり、それを破る結果を招いてしまった（2：109）。

知識を持たず、また正しく導かれざりしに非ずや？

كَانَ اٰبَآؤُهُمْ لَا يَعْلَمُوْنَ شَيْـًٔا وَّلَا يَهْتَدُوْنَ ۝١٠٥

106. 汝等信徒たちよ、己れ自身に注意せよ。迷妄の徒は、お前たちが正しく導かれなば、お前たちを害する能わず。(注 55) お前たちはいずれ皆アッラーに帰着す。その時アッラーは、お前たちにそのなせることを告げ知らせん。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا عَلَيْكُمْ اَنْفُسَكُمْ ۚ لَا يَضُرُّكُمْ مَّنْ ضَلَّ اِذَا اهْتَدَيْتُمْ ؕ اِلَى اللّٰهِ مَرْجِعُكُمْ جَمِيْعًا فَيُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ۝١٠٦

107. 汝等信徒たちよ、お前たちの誰かが臨終に際し遺言状を作るときは、お前たちの中から公正なる二人を証人に立てよ。また旅先で不幸にも死にみまわれたる場合は、お前たち以外の他の部族から二名の証人を立てよ。礼拝の後彼等両名を引き止め、証言することを頼め。もし疑いあらば、アッラーにかけてかく誓わしめよ、「我等はたとい近親のためなりとも、如何なる価にても証言を売らず。またアッラーの証言を隠蔽せず。万一そのような場合は、我等は罪人たるべし」と。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا شَهَادَةُ بَيْنِكُمْ اِذَا حَضَرَ اَحَدَكُمُ الْمَوْتُ حِيْنَ الْوَصِيَّةِ اثْنٰنِ ذَوَا عَدْلٍ مِّنْكُمْ اَوْ اٰخَرٰنِ مِنْ غَيْرِكُمْ اِنْ اَنْتُمْ ضَرَبْتُمْ فِى الْاَرْضِ فَاَصَابَتْكُمْ مُّصِيْبَةُ الْمَوْتِ ؕ تَحْبِسُوْنَهُمَا مِنْۢ بَعْدِ الصَّلٰوةِ فَيُقْسِمٰنِ بِاللّٰهِ اِنِ ارْتَبْتُمْ لَا نَشْتَرِىْ بِهٖ ثَمَنًا وَّلَوْ كَانَ ذَا قُرْبٰى ۙ وَلَا نَكْتُمُ شَهَادَةَ ۙ اللّٰهِ اِنَّاۤ اِذًا لَّمِنَ الْاٰثِمِيْنَ ۝١٠٧

108. されど、二人の証人が偽証の罪を犯せること判明せる場合は、先の二人の証言に反対せる者の中から、最も真実の証言をするにふさわしい者を二名選び、之に代えよ。(注 56) 而して後者の両証人に、かく誓わせしめよ、「我等の証言は前の二人の証言より確かなることを誓う。また我等は如何なる不正もなしたることなし。これについていつわりあらば、我等は確かに不義者なり」と。

فَاِنْ عُثِرَ عَلٰۤى اَنَّهُمَا اسْتَحَقَّاۤ اِثْمًا فَاٰخَرٰنِ يَقُوْمٰنِ مَقَامَهُمَا مِنَ الَّذِيْنَ اسْتَحَقَّ عَلَيْهِمُ الْاَوْلَيٰنِ فَيُقْسِمٰنِ بِاللّٰهِ لَشَهَادَتُنَاۤ اَحَقُّ مِنْ شَهَادَتِهِمَا وَمَا اعْتَدَيْنَاۤ ۖ اِنَّاۤ اِذًا لَّمِنَ الظّٰلِمِيْنَ ۝١٠٨

注 55　真実を他の人々に説く事だけが我々に課せられた義務である。もし彼らが真実を受け入れればそれでよいし、我々の最善の努力にもかかわらず、彼らが、よこしまな方向から離れようとしない時、彼らが真実を拒絶しても、何ら我々に害は及ぼさない。いかなる場合にも、他の人々を我々の考え方に向かせようとして、その教義に妥協を与えてはならない。それは他人の魂を救う為に、自分達自身の魂を亡ぼしてしまう事となるからである。

注 56　アウラヤーンという語は最初の二人の証人の事を表し、これら二人の証人は、故人の死に立ち会い、彼らの立ち会っている時に遺言が作成され、財産を相続人に渡してくれるようにと委託されたのであるから、真実の証言をするのによりよい立場にあるといえる。'他'の二人の証人達は、故人の相続人の内から選ばれるべきである。

109．事実に則して証言させるには、かくするのが最良なり。さもなくば彼等の立証が後に別の証言によって斥けられる恐れあり。アッラーを畏れ、耳を傾けよ。アッラーは不従順な徒輩を導かず。

ذٰلِكَ أَدْنٰىٓ أَنْ يَّأْتُوْا بِالشَّهَادَةِ عَلٰى وَجْهِهَآ أَوْ يَخَافُوْٓا أَنْ تُرَدَّ أَيْمَانٌۢ بَعْدَ أَيْمَانِهِمْ ۗ وَاتَّقُوا اللّٰهَ وَاسْمَعُوْا ۗ وَاللّٰهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الْفٰسِقِيْنَ ﴿۱۰۹﴾

第十五項

110．アッラーが使徒たちを召喚する日、アッラーは彼等に云う、「お前たち如何なる返答を得たか？」と。使徒たちは答えて、(注 57)云わん、「我等は何もわからず。隠れて見えざるものを知る者は、ただ汝独りなり」と。

يَوْمَ يَجْمَعُ اللّٰهُ الرُّسُلَ فَيَقُوْلُ مَاذَآ أُجِبْتُمْ ۖ قَالُوْا لَا عِلْمَ لَنَا ۖ إِنَّكَ أَنْتَ عَلَّامُ الْغُيُوْبِ ﴿۱۱۰﴾

111．アッラーがかく云わんその日を思え。「マリアの子イエスよ、汝と汝の母に垂れたるわしの恩寵を思い起せ。わしは聖霊によって汝を強めたれば、汝は揺籃の中でも、また成人せし後も人々に語りたり。(注 58)わしは汝に、経典と知恵と律法と福音とを教えたり。汝はまたわしの許しによりて泥で鳥の形を作り、之に息を吹き込むと、そはわしの許しによりて天かける生き物となれり。また汝はわしの許しによりて (注 59)盲人と癩者を癒し、死者を甦らしめたり。さらにわしは、汝が明らかな神兆を携えてイスラエルの子孫を訪ねし時、汝を殺害せんとせし彼等を抑止せり。(注 60)彼等のうちの不信心者どもは云えり、『こは明らかに妖術なり』」

إِذْ قَالَ اللّٰهُ يٰعِيْسَى ابْنَ مَرْيَمَ اذْكُرْ نِعْمَتِيْ عَلَيْكَ وَعَلٰى وَالِدَتِكَ ۘ إِذْ أَيَّدْتُّكَ بِرُوْحِ الْقُدُسِ ۟ تُكَلِّمُ النَّاسَ فِي الْمَهْدِ وَكَهْلًا ۚ وَإِذْ عَلَّمْتُكَ الْكِتٰبَ وَالْحِكْمَةَ وَالتَّوْرٰىةَ وَالْإِنْجِيْلَ ۚ وَإِذْ تَخْلُقُ مِنَ الطِّيْنِ كَهَيْئَةِ الطَّيْرِ بِإِذْنِيْ فَتَنْفُخُ فِيْهَا فَتَكُوْنُ طَيْرًۢا بِإِذْنِيْ وَتُبْرِئُ الْأَكْمَهَ وَالْأَبْرَصَ بِإِذْنِيْ ۚ وَإِذْ تُخْرِجُ الْمَوْتٰى بِإِذْنِيْ ۚ وَإِذْ كَفَفْتُ بَنِيْٓ إِسْرَآءِيْلَ عَنْكَ إِذْ جِئْتَهُمْ بِالْبَيِّنٰتِ فَقَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْهُمْ إِنْ هٰذَآ إِلَّا سِحْرٌ مُّبِيْنٌ ﴿۱۱۱﴾

注 57　預言者の答えによると、神の質問の目的は、彼らから情報をひき出したり、神自身御存知の知識を補足したりすることではなく、4：42 からも明快なように、彼らが信仰をもたぬ者に対し証言を与えることである事を意味している。

注 58　ゆりかごの中から語りかけるとは、幼児期に、賢明で信心深い言葉を語る事を意味している。イエスのこういった語りかけは、本人自身が賢明で信心深く、且つ、イエスを賢く信心厚い子供に育てた母に多大に負うところである。成人になってから善き言葉を語ることは、マリアが信心深い婦人であった事を示すだけではない。イエス自身も公正な人物であった為、彼自身成長し、最早母親の直接の影響を受けない成人になっても、母の教育の結果である信心深く賢明な言葉を語りかけたのである。3章46節も参照の事。

注 59　3：50 を参照の事

注 60　これは、ユダヤ人達がイエスを十字架の上で殺そうとした企てをさす。しかし神はイエスを十字架から降ろされ助けられた。

112.　その時わしは、イエスの弟子たちを激励せり、「わしと使徒とを信ぜよ」と。彼等は云えり、「我等は信ず。されば汝、我等の帰依せることの証人たれ」と。

وَإِذْ أَوْحَيْتُ إِلَى الْحَوَارِيِّينَ أَنْ آمِنُوا بِي وَبِرَسُولِي قَالُوا آمَنَّا وَاشْهَدْ بِأَنَّنَا مُسْلِمُونَ ١١٢

113.　その弟子たちがかく云える時のことを思え。「マリアの子イエスよ、主は天から（注61）御馳走を並べた食卓を（注62）降し賜えることが可能なりや？」イエスは答えり、「お前たち信徒ならば、アッラーを畏れ敬え」と。

إِذْ قَالَ الْحَوَارِيُّونَ يَا عِيسَى ابْنَ مَرْيَمَ هَلْ يَسْتَطِيعُ رَبُّكَ أَنْ يُنَزِّلَ عَلَيْنَا مَائِدَةً مِنَ السَّمَاءِ قَالَ اتَّقُوا اللَّهَ إِنْ كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ ١١٣

114.　彼等は云えり、「我等はその食卓にて食い、我等の心を安んじ、汝が我等に語りたることの真実なるを知り、その証人たらんことを願う」と。

قَالُوا نُرِيدُ أَنْ نَأْكُلَ مِنْهَا وَتَطْمَئِنَّ قُلُوبُنَا وَنَعْلَمَ أَنْ قَدْ صَدَقْتَنَا وَنَكُونَ عَلَيْهَا مِنَ الشَّاهِدِينَ ١١٤

115.　マリアの子イエスは云えり、「アッラーよ、我等の主よ、天上から我等に御馳走を並べた食卓を降し、我等のために、我等の最初の者並びに最後の者の饗宴たらしめ、（注63）且つ汝よりの神兆たらしめよ。我等に食物を与え給え。汝こそは最上の養い主なり」と。

قَالَ عِيسَى ابْنُ مَرْيَمَ اللَّهُمَّ رَبَّنَا أَنْزِلْ عَلَيْنَا مَائِدَةً مِنَ السَّمَاءِ تَكُونُ لَنَا عِيدًا لِأَوَّلِنَا وَآخِرِنَا وَآيَةً مِنْكَ وَارْزُقْنَا وَأَنْتَ خَيْرُ الرَّازِقِينَ ١١٥

116.　アッラーは云えり、「げにわしはそれをお前たちに降さん。なれど、お前たちのうち何人にせよ後になって不信心者となる者あらば、わしはその者に必ず、他の何人にも加えざる罰を（注64）以て、之を懲らしめん」と。

قَالَ اللَّهُ إِنِّي مُنَزِّلُهَا عَلَيْكُمْ فَمَنْ يَكْفُرْ بَعْدُ مِنْكُمْ فَإِنِّي أُعَذِّبُهُ عَذَابًا لَا أُعَذِّبُهُ أَحَدًا مِنَ الْعَالَمِينَ ١١٦

注61　‘天からの’という言葉は、多くの手間なく確実に永久的にの意味を表している。

注62　イエスの弟子が頼んだのは、一食の糧ではなく、何の努力や困難もなく得られる永久的な生計の意味であった。

注63　イード（饗宴）という言葉が文字通り‘めぐりくる日’を表すように、キリスト教徒には、繁栄且つ発展する二つの期間（または時期）が、約束されていた。キリスト教徒は、コンスタンチヌス大帝の最初期の時代には、豊富な、この世の財産が、又それから後では18世紀及び19世紀に物質的繁栄と、政治的権勢が、他の人々の時代の歴史には匹敵するものがない程、約束されていたのである。

注64　ここで言及されている罰とは19：91で述べられている罰と全く同一のものを指す、今までの二回の大戦がこの預言の成就であり西側諸国の国民によってどんな恐ろしい罰が用意されているかは、神のみぞ知る所なのである。

第十六項

117.　アッラーがかく云わん時を思え。「マリアの子イエスよ、汝は人々に、『我と我が母をアッラーの外に二柱の神として崇めよ』と告げたるか？」(注 65)イエスは答えん、「汝至聖者よ、我何すれぞ云うべからざることを云わんや。(注 66)我もしそれを云いたりせば、汝はすでにそれを知るなり。汝は我が心に在るものを知れども、我は汝の心に在るものを知らず。隠れたことを知る者は、独り汝のみなり。

وَإِذْ قَالَ اللّٰهُ يٰعِيسَى ابْنَ مَرْيَمَ ءَأَنْتَ قُلْتَ لِلنَّاسِ اتَّخِذُوْنِيْ وَأُمِّيَ إِلٰهَيْنِ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ قَالَ سُبْحٰنَكَ مَا يَكُوْنُ لِيْ أَنْ أَقُوْلَ مَا لَيْسَ لِيْ بِحَقٍّ إِنْ كُنْتُ قُلْتُهُ فَقَدْ عَلِمْتَهُ تَعْلَمُ مَا فِيْ نَفْسِيْ وَلَا أَعْلَمُ مَا فِيْ نَفْسِكَ إِنَّكَ أَنْتَ عَلَّامُ الْغُيُوْبِ ﴿١١٦﴾

وقف النبي صلى الله عليه وسلم

118.　我は、汝が我に命じたることのみを彼等に告げり。すなわち、『我が主にして、お前たちの主なるアッラーを崇敬せよ』と。(注 67)我生きて彼等の間にありしときは、(注 68) 我は彼等の証人なりしが、汝が我を召し寄せたる後は、(注 69)汝こそが彼等の監

مَا قُلْتُ لَهُمْ إِلَّا مَا أَمَرْتَنِيْ بِهٖ أَنِ اعْبُدُوا اللّٰهَ رَبِّيْ وَرَبَّكُمْ وَكُنْتُ عَلَيْهِمْ شَهِيْدًا مَّا دُمْتُ فِيْهِمْ فَلَمَّا تَوَفَّيْتَنِيْ كُنْتَ أَنْتَ الرَّقِيْبَ عَلَيْهِمْ وَأَنْتَ عَلٰى كُلِّ

注 65　この節は聖なる力をマリアより帰するキリスト教会の風習について述べている。マリアの助けは連禱中に祈り求められており、ローマ教会の公教要理中にも、彼女が神の母であるという主張が説かれている。教会の神父達は過去に於いて、彼女を聖なるものとみなし、やっと数年前に、教皇パイウス 12 世が、教会の教義中に、マリアの肉体的昇天を組みこんだのである。これら全ては彼女を聖なる地位へ押し上げる事となり、これこそ、新教徒達が迷信的な聖母マリア崇拝であると糾弾するところなのである。

注 66　当書で、'私はできません'と翻訳されている箇所のアラビア語表現のその他の解釈の仕方は、'私にはふさわしくない'或いは、'私には、不可能であった'或いは'私にはそうする権利がない'等となる。よって、ここでの「云うべからざる」は、私が言うにふさわしくないという意になる。

注 67　イエスは唯一の神を礼拝せよと教えた（マタイ 4：10、ルカ 4：8）。

注 68　イエスが生きている間は、彼は大変注意深く自分の弟子達を見守り、正しい道から外れぬ様気をつけていた。しかし彼はその死後、彼らがどうなっていったか見当もつかない。今や、彼の後継者達は道を踏み外してしまった為、この節の指摘する様に、イエスの死後、彼は神として礼拝されるところとなってしまった。同様に、この節でイエスが、自分の後継者が自分と自分の母親とを二人の神として取り扱っている無知さを表明している事実は、彼がこの世には戻ってこない事を証明している。何故なら、もし彼がこの世に復活し、自分の弟子達が腐敗し、彼を神として崇拝している事を自分自身の目で知ったなら、神の前でこのようなことを言うはずはない。弟子達による三位一体をもし抗弁しようとすれば、この言葉は嘘になってしまう。故にこの節ははっきりと、イエスが死に、彼は復活しない事を述べているのである。更に、聖なる預言者の有名な言によれば、聖なる預言者はここでイエスの口にしたのと同様の言葉を復活の日に口にし、その時、イエスの弟子の何人かが地獄へ導かれるのを見るのである。この事は又、イエスも聖なる預言者同様に死んでいるという事実を確認しているのである。

注 69　3：56 を参照の事。

視者なり。汝こそ一切の証人なり。

شَيْءٍ شَهِيدٌ ﴿١١٨﴾

119．汝たとい彼等を罰さんとも、彼等は汝の僕(しもべ)なれば。またもし彼等を赦(ゆる)すなば、そは偉大にして賢哲なる汝なればこそ」と。

إِنْ تُعَذِّبْهُمْ فَإِنَّهُمْ عِبَادُكَ ۚ وَإِنْ تَغْفِرْ لَهُمْ فَإِنَّكَ أَنْتَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ﴿١١٩﴾

120．アッラーは云わん、「こは誠実なる人間が、その正直さ故に利益を得る日なり。彼等には河川流れる楽園ありて、そこに永久(とこしえ)に住まん。アッラーは彼等に満足し、彼等もまたアッラーに満悦し奉る。これこそ大成功なり」と。

قَالَ اللَّهُ هَٰذَا يَوْمُ يَنْفَعُ الصَّادِقِينَ صِدْقُهُمْ ۚ لَهُمْ جَنَّاتٌ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا ۖ رَضِيَ اللَّهُ عَنْهُمْ وَرَضُوا عَنْهُ ۚ ذَٰلِكَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ﴿١٢٠﴾

121．天地(あめつち)の主権とその中に存する一切のものは、アッラーに帰属す。アッラーは万物を支配し給う。(注 70)

لِلَّهِ مُلْكُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا فِيهِنَّ ۚ وَهُوَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿١٢١﴾

注 70　この節は、キリスト教徒の間違いを効果的に指摘している当章における結論を適切に述べている。キリスト教徒の栄光は続かず、神は最終的には、神の王国をより王国にふさわしい者達に移すという宣言がなされている。

سُورَةُ الْاَنْعَامِ مَكِّيَّةٌ

家畜　アル・アンアーム
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．天地(あめつち)を創造し、暗闇(くらやみ)と光明を生み出せるアッラーを讃え奉る。しかるに不信心者どもは、その主に対等する者を設けたり。

اَلْحَمْدُ لِلّٰهِ الَّذِيْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ وَجَعَلَ الظُّلُمٰتِ وَالنُّوْرَ ثُمَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا بِرَبِّهِمْ يَعْدِلُوْنَ ②

3．彼こそは土塊(つちくれ)よりお前たちを創り給い、しかる後に期限を定め給えり。その外にも、彼（注1）の許(もと)には、定め給える期限（注2）あり。しかるにお前たちは、まだ疑う。

هُوَ الَّذِيْ خَلَقَكُمْ مِّنْ طِيْنٍ ثُمَّ قَضٰٓى اَجَلًا وَاَجَلٌ مُّسَمًّى عِنْدَهٗ ثُمَّ اَنْتُمْ تَمْتَرُوْنَ ③

4．彼こそは天地(あめつち)(注3)における神、アッラーなり。彼はお前たちの秘めごとも、顕(あらわ)すことも知り給う。またお前たちが稼ぐものも知り給う。

وَهُوَ اللّٰهُ فِي السَّمٰوٰتِ وَفِي الْاَرْضِ يَعْلَمُ سِرَّكُمْ وَجَهْرَكُمْ وَيَعْلَمُ مَا تَكْسِبُوْنَ ④

5．主の神兆(しるし)（注4）が来る度に、彼等はそれより顔をそむける。

وَمَا تَاْتِيْهِمْ مِّنْ اٰيَةٍ مِّنْ اٰيٰتِ رَبِّهِمْ اِلَّا كَانُوْا عَنْهَا مُعْرِضِيْنَ ⑤

6．以前、彼等に真理がもたらされたる時、彼等はそれを拒否せり。されどほどなく、彼等が嘲笑せる知らせが彼等の身に起らん。

فَقَدْ كَذَّبُوْا بِالْحَقِّ لَمَّا جَآءَهُمْ فَسَوْفَ يَاْتِيْهِمْ اَنْۢبٰٓؤُا مَا كَانُوْا بِهٖ يَسْتَهْزِءُوْنَ ⑥

7．われらはこれまでに幾多の世代を滅ぼせり。彼等は之(これ)を見ざるか？われらが彼等のために地上に創りたるものは、お前たちに創りたる如きものに非ず。(注5)われらは

اَلَمْ يَرَوْا كَمْ اَهْلَكْنَا مِنْ قَبْلِهِمْ مِّنْ قَرْنٍ مَّكَّنّٰهُمْ فِي الْاَرْضِ مَا لَمْ نُمَكِّنْ لَّكُمْ وَاَرْسَلْنَا السَّمَآءَ عَلَيْهِمْ

注1　人類の創造とその死（大が定めた期限）の両方が、神のあわれみの行為として述べられている。

注2　最初の「期限」は個人の寿命を意味し、もう一方の「期限」は宇宙の生命を意味する。

注3　この節は神の人格が天と地に広まっていく事を意味するのではない。それは、神の英知が、宇宙全体を包含する事を意味する。

注4　神の知恵と力の重要な証拠は、神が神の使いに明かす預言と、圧倒的に不利な条件の中での使者達へ与える、支えと援助である。

注5　これは、世界が衰退していると言っているのではない。全体として見れば、発展しているに違いないが、過去に文明の頂点に達したいくつかの古代国家は芸術と科学の一定の分野に於いてあまりにも進歩してい

彼等の上に雲を送り、充分なる雨を降らせたり。またその足許にはいくつもの河川を流れしめたり。されど彼等の罪故に、われらは彼等を滅ぼし、代りに別の世代を興したり。

مِّدْرَارًا وَّجَعَلْنَا الْأَنْهٰرَ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهِمْ فَأَهْلَكْنٰهُمْ بِذُنُوْبِهِمْ وَأَنْشَأْنَا مِنْ بَعْدِهِمْ قَرْنًا اٰخَرِيْنَ ⑦

8．たといわれらが羊皮紙の上にしたためしものを汝に降し、彼等それに自分の手を触れるとも、(注６)不信心者どもはかく云わん、「こは明らかに妖術以外の何ものにも非ず」と。

وَلَوْ نَزَّلْنَا عَلَيْكَ كِتٰبًا فِيْ قِرْطَاسٍ فَلَمَسُوْهُ بِأَيْدِيْهِمْ لَقَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا إِنْ هٰذَا إِلَّا سِحْرٌ مُّبِيْنٌ ⑧

9．また彼等は云う、「何故彼の許へ天使(注７)が派遣されざるか？」と。されどもしわれらが天使を降せりとすれば、事はすでに決定せられ、彼等は猶予せられざりしなるべし。

وَقَالُوْا لَوْلَا أُنْزِلَ عَلَيْهِ مَلَكٌ وَلَوْ أَنْزَلْنَا مَلَكًا لَّقُضِيَ الْأَمْرُ ثُمَّ لَا يُنْظَرُوْنَ ⑨

10．また、もしわれらが天使を使徒に任命したとしても、われらは天使に人間の形をとらしめたれば、今彼等が迷う問題を、その時も迷はしめたるなり（注８)。

وَلَوْ جَعَلْنٰهُ مَلَكًا لَّجَعَلْنٰهُ رَجُلًا وَّلَلَبَسْنَا عَلَيْهِمْ مَّا يَلْبِسُوْنَ ⑩

11．汝以前にも、実に多くの使徒たちが嘲笑せられたり。されどそれ等嘲笑者は、その嘲笑せるものに包囲されたり。

وَلَقَدِ اسْتُهْزِئَ بِرُسُلٍ مِّنْ قَبْلِكَ فَحَاقَ بِالَّذِيْنَ سَخِرُوْا مِنْهُمْ مَّا كَانُوْا بِهٖ يَسْتَهْزِءُوْنَ ⑪ ع

第二項

12．云え、「地上を歩き廻り、預言者たちを嘘つき呼ばわりせる者どもの末路を見よ」と。

قُلْ سِيْرُوْا فِي الْأَرْضِ ثُمَّ انْظُرُوْا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُكَذِّبِيْنَ ⑫

13．云え、「天に在るもの、地に在るもの、すべては誰の所有なるか？」と。云え、「アッラーの所有なり」と。彼は慈悲を自らの務めと

قُلْ لِّمَنْ مَّا فِي السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ قُلْ لِّلّٰهِ كَتَبَ عَلٰى نَفْسِهِ الرَّحْمَةَ لَيَجْمَعَنَّكُمْ إِلٰى يَوْمِ الْقِيٰمَةِ لَا رَيْبَ

たので、その分野では、あとに続く世代で匹敵するものがなかったのである。例えば、科学の領域において驚異をもたらしたにもかかわらず、現代は今だに古代エジプト文明のなしとげた業のいくつかを驚嘆の思いでみつめている。

注６　彼らはそれが俗界のものでなく、天のものである事を確かめた。

注７　「天使の到来」は天の罰の切迫した接近を示す。

注８　この節は、天使が案内をするために来るべきであったという不信仰者の要求の愚かさをさらけだしている。

なす。(注9)彼はお前たちを必ず復活の日に喚び集めん。そは疑惑の余地なし。されど己が魂を破滅せる者どもは信じざるべし。

فِيهِ ۚ الَّذِينَ خَسِرُوا أَنفُسَهُمْ فَهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ١٢

14. およそ何であれ、夜の中に住むもの、昼の中に住むもの、すべてはアッラーの所有なり。彼はすべてを聴き、すべてを知り給う。

وَلَهُ مَا سَكَنَ فِي اللَّيْلِ وَالنَّهَارِ ۚ وَهُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ١٣

15. 云え、「天地の創始者であるアッラーの外に、我誰を守護者に求めんや？彼は一切を養いはすれど、自らは養われるを要せず」と。云え、「我は帰依者の魁たれと命ぜられたり」と。されば汝、アッラーに他神を併せ祀る者どもの仲間となるなかれ。

قُلْ أَغَيْرَ اللَّهِ أَتَّخِذُ وَلِيًّا فَاطِرِ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ وَهُوَ يُطْعِمُ وَلَا يُطْعَمُ ۗ قُلْ إِنِّي أُمِرْتُ أَنْ أَكُونَ أَوَّلَ مَنْ أَسْلَمَ وَلَا تَكُونَنَّ مِنَ الْمُشْرِكِينَ ١٤

16. 云え、「我もし主に背かば、我は荘厳な日のその懲罰を恐る」と。(注10)

قُلْ إِنِّي أَخَافُ إِنْ عَصَيْتُ رَبِّي عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيمٍ ١٥

17. その日懲罰を免れる者は、神がまさしく慈悲を垂れたまいし者なり。そは明らかなる成功なり。

مَنْ يُصْرَفْ عَنْهُ يَوْمَئِذٍ فَقَدْ رَحِمَهُ ۚ وَذٰلِكَ الْفَوْزُ الْمُبِينُ ١٦

18. もしアッラーが災いを持って汝に触れなば、アッラーを措いて何人もそれを取り除くこと能わずまたもし幸運を持って汝に触れなば、そはその支配力が万物に及ぶが故なり。

وَإِنْ يَمْسَسْكَ اللَّهُ بِضُرٍّ فَلَا كَاشِفَ لَهُ إِلَّا هُوَ ۖ وَإِنْ يَمْسَسْكَ بِخَيْرٍ فَهُوَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ١٧

19. 彼はその僕らの上にまします至高の権威(注11)なり。彼は賢哲にして、一切に通暁し給う。

وَهُوَ الْقَاهِرُ فَوْقَ عِبَادِهِ ۚ وَهُوَ الْحَكِيمُ الْخَبِيرُ ١٨

20. 云え、「証言(注12)において最も重要なことは何んぞや？」と。云え、「アッラーは、

قُلْ أَيُّ شَيْءٍ أَكْبَرُ شَهَادَةً ۖ قُلِ اللَّهُ ۖ شَهِيدٌ بَيْنِي

注9　天と地の全てのものがアッラーの神の所有するものなので、信仰に反するものでさえも神のものである。自分の手でつくりあげた物を破壊したいと思う人は誰もいないし、ましてや神がそうなさるわけがない。"彼"は慈悲深く、不信仰者達が後悔し、あわれみをかけられるように、彼らに猶予を授けられるのである。

注10　この節は、人間に神に対し不従順にならないよう身を守る事について強く勧告しているのであって聖なる預言者が神にそむくことがあると言っているわけではない。

注11　神の至高の権威という美徳は、物体と魂は、神と共存し、従って神によって創られたものではないという理論に反駁する。もし神によって創りだされたものでないならば、神はそれらを征服、又は支配する権利も力もなかったはずである。

注12　神は証言を3つの違った方法で有しておられる。—クルアーンによる啓示、これが第一の証言である。第二、第三の証言は、次に続く節で述べられている。

我とお前たちの間の証人なり。而してクルアーンが我に啓示されたるは、我をして之によって、お前たち並びに及ぶ限りの人々を戒めしめんがためなり。何んとな！お前たち本当にアッラーの外に神ありと証言するか？」と。云え、「我は証言せず」と。云え、「彼は独一なる神なり。お前たちが彼と共に併せ祀る他神と、我は関わりなし」と。

وَبَيْنَكُمْ وَأُوحِيَ إِلَيَّ هَٰذَا الْقُرْآنُ لِأُنذِرَكُم بِهِ وَمَن بَلَغَ أَئِنَّكُمْ لَتَشْهَدُونَ أَنَّ مَعَ اللَّهِ آلِهَةً أُخْرَىٰ قُل لَّا أَشْهَدُ قُلْ إِنَّمَا هُوَ إِلَٰهٌ وَاحِدٌ وَإِنَّنِي بَرِيءٌ مِّمَّا تُشْرِكُونَ ﴿٢٠﴾

21. われらが経典を授けし人々は、己が息子を識る如く彼を認む。(注 13) されど己が魂を破滅せる者どもは、信じざるべし。

الَّذِينَ آتَيْنَاهُمُ الْكِتَابَ يَعْرِفُونَهُ كَمَا يَعْرِفُونَ أَبْنَاءَهُمُ الَّذِينَ خَسِرُوا أَنفُسَهُمْ فَهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿٢١﴾

第三項

22. アッラーについて虚偽を捏造し、その神兆を虚妄とみなす者にも勝る不義者は誰か？げに不義者は栄えざるべし。(注 14)

وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرَىٰ عَلَى اللَّهِ كَذِبًا أَوْ كَذَّبَ بِآيَاتِهِ إِنَّهُ لَا يُفْلِحُ الظَّالِمُونَ ﴿٢٢﴾

23. われらが彼等を皆召喚する日、われらは神に他神を祀りし徒輩に問わん、「お前たちが主張せる僚神は今何処に在りや？」と。

وَيَوْمَ نَحْشُرُهُمْ جَمِيعًا ثُمَّ نَقُولُ لِلَّذِينَ أَشْرَكُوا أَيْنَ شُرَكَاؤُكُمُ الَّذِينَ كُنتُمْ تَزْعُمُونَ ﴿٢٣﴾

24. その時彼等は、「我等の主アッラーにかけて誓う、我等は偶像崇拝者に非ざりき」と云う以外、如何なる云い訳もなかるべし。(注 15)

ثُمَّ لَمْ تَكُن فِتْنَتُهُمْ إِلَّا أَن قَالُوا وَاللَّهِ رَبِّنَا مَا كُنَّا مُشْرِكِينَ ﴿٢٤﴾

25. 見よ、彼等が如何に自分を欺くかを。また彼等の捏造せるものが彼等を見捨てたるかを。

انظُرْ كَيْفَ كَذَبُوا عَلَىٰ أَنفُسِهِمْ وَضَلَّ عَنْهُم مَّا كَانُوا يَفْتَرُونَ ﴿٢٥﴾

26. 彼等の中には、汝に耳傾ける者あり。されどわれらは、彼等の心を覆いて理解し得ざるようにし、またその耳も聾となせり。さ

وَمِنْهُم مَّن يَسْتَمِعُ إِلَيْكَ وَجَعَلْنَا عَلَىٰ قُلُوبِهِمْ أَكِنَّةً أَن يَفْقَهُوهُ وَفِي آذَانِهِمْ وَقْرًا وَإِن يَرَوْا

注 13　預言者（又は、信仰（教義）に関する事はすべて）は最初は認められない。彼は、父親が息子を認めるがごとく認められるのみであり、全くの確実性というよりどちらかといえば、可能性としてである。信仰は、いつも目に見えない所から始められるべきである。

注 14　3つ目の教えは、人間の道理に基づいたものである。正気な人間なら誰もが、もし人が神に誓って話すと言いながら、神に対してうそをつく様な事をすれば、自分が完全な失敗と破滅のもとで人生を終わるであろう事を認めるであろう。一方、神の使いに反対するものは、決して繁栄を許される事なく、彼らの新しい信仰の発展をはばんだり阻止しようとする努力は完全な失敗に終わるであろう。

注 15　この異教徒側の否定は、本当は、自分達の無力さの、告白であり、又神の慈悲へ祈願の形でもある。

れば彼等たとい神兆を目の当たりに見ても、それを信ぜざるべし。彼等が汝のところへ来るのは、議論するためなり。かかる不信心者どもは云う、「こは往古の物語にすぎず」と。

كُلَّ آيَةٍ لَّا يُؤْمِنُوا بِهَا ۚ حَتَّىٰ إِذَا جَاءُوكَ يُجَادِلُونَكَ يَقُولُ الَّذِينَ كَفَرُوا إِنْ هَٰذَا إِلَّا أَسَاطِيرُ الْأَوَّلِينَ ﴿٢٦﴾

27. 彼等は、他人がそれを信ずることを禁じ、自らもそれより遠ざかる。彼等は誰も滅ぼさず、ただ自らを滅ぼすのみ。なれどそれに気付かず。

وَهُمْ يَنْهَوْنَ عَنْهُ وَيَنْأَوْنَ عَنْهُ ۖ وَإِن يُهْلِكُونَ إِلَّا أَنفُسَهُمْ وَمَا يَشْعُرُونَ ﴿٢٧﴾

28. 汝もし彼等が業火の前に立たされる時を見るなら、彼等は云わん、「我等を今一度世に戻しなば、我等は主の神兆を虚偽とみなさざるべし。而して我等は、信徒の一人とならん」と。

وَلَوْ تَرَىٰ إِذْ وُقِفُوا عَلَى النَّارِ فَقَالُوا يَا لَيْتَنَا نُرَدُّ وَلَا نُكَذِّبَ بِآيَاتِ رَبِّنَا وَنَكُونَ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ ﴿٢٨﴾

29. 否、彼等が日頃隠せるものが、ついに彼等の前に明らかにせられたり。たとい彼等を世に戻したとしても、彼等は必ず再び禁ぜられたることを繰り返さん。げに彼等は嘘つきなり。

بَلْ بَدَا لَهُم مَّا كَانُوا يُخْفُونَ مِن قَبْلُ ۖ وَلَوْ رُدُّوا لَعَادُوا لِمَا نُهُوا عَنْهُ وَإِنَّهُمْ لَكَاذِبُونَ ﴿٢٩﴾

30. 彼等は云う、「在るものはただ現世のみ。我等甦る筈なし」と。

وَقَالُوا إِنْ هِيَ إِلَّا حَيَاتُنَا الدُّنْيَا وَمَا نَحْنُ بِمَبْعُوثِينَ ﴿٣٠﴾

31. 汝もし彼等が主の御前に立たされる時を見るなら！主は云わん、「この二度目の命は、真実に非ざるか？」と。彼等は云わん、「然り、主にかけて」と。主は云わん、「しからば信仰を拒みし報いとして、罰を味わえ」と。

وَلَوْ تَرَىٰ إِذْ وُقِفُوا عَلَىٰ رَبِّهِمْ ۚ قَالَ أَلَيْسَ هَٰذَا بِالْحَقِّ ۚ قَالُوا بَلَىٰ وَرَبِّنَا ۚ قَالَ فَذُوقُوا الْعَذَابَ بِمَا كُنتُمْ تَكْفُرُونَ ﴿٣١﴾ ع

第四項

32. アッラーとの対面を否認せる者どもは、確かに失敗者なり。その時が突然至れば、彼等は云わん、「痛恨なるかな、この時を無視せることは！」と。而して彼等は、その背に重荷を背負うべし。(注 16)げに彼等の背負う荷物は災いなり。

قَدْ خَسِرَ الَّذِينَ كَذَّبُوا بِلِقَاءِ اللَّهِ ۖ حَتَّىٰ إِذَا جَاءَتْهُمُ السَّاعَةُ بَغْتَةً قَالُوا يَا حَسْرَتَنَا عَلَىٰ مَا فَرَّطْنَا فِيهَا وَهُمْ يَحْمِلُونَ أَوْزَارَهُمْ عَلَىٰ ظُهُورِهِمْ ۚ أَلَا سَاءَ مَا يَزِرُونَ ﴿٣٢﴾

注 16　この節は、彼らの背負う重荷がことのほか重いことを意味している。

33. 現世の世活はただ遊戯か気晴らしにすぎず。義しい人々には、来世の住居こそが勝れるものなり。お前たちまだ解らざるか？

وَمَا الْحَيٰوةُ الدُّنْيَآ اِلَّا لَعِبٌ وَّلَهْوٌ ۗ وَلَلدَّارُ الْاٰخِرَةُ خَيْرٌ لِّلَّذِيْنَ يَتَّقُوْنَ ۗ اَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ﴿٣٣﴾

34. われらは彼等の言葉が汝を悲しませることをよく承知す。彼等が嘘つきと誹るは汝に非ず。悪人どもが拒否するは、アッラーの神兆そのものなり。(注 17)

قَدْ نَعْلَمُ اِنَّهٗ لَيَحْزُنُكَ الَّذِيْ يَقُوْلُوْنَ فَاِنَّهُمْ لَا يُكَذِّبُوْنَكَ وَلٰكِنَّ الظّٰلِمِيْنَ بِاٰيٰتِ اللّٰهِ يَجْحَدُوْنَ ﴿٣٤﴾

35. 汝 (注 18) 以前にも、多くの使徒たちが拒否されたり。されど拒否や迫害にもかかわらず、われらの救いが至るまで、使徒たちは耐え忍べり。アッラー (注 19) の言葉は、何人も之を変えること能わず。而して過去の使徒たちの消息はすでに汝に伝えられたり。

وَلَقَدْ كُذِّبَتْ رُسُلٌ مِّنْ قَبْلِكَ فَصَبَرُوْا عَلٰى مَا كُذِّبُوْا وَاُوْذُوْا حَتّٰٓى اَتٰىهُمْ نَصْرُنَا ۚ وَلَا مُبَدِّلَ لِكَلِمٰتِ اللّٰهِ ۚ وَلَقَدْ جَآءَكَ مِنْ نَّبَاِى الْمُرْسَلِيْنَ ﴿٣٥﴾

36. もし彼等の離反が汝を悲しましむるならば、汝地中に抜け道を穿つか、天に梯をかけて神兆を彼等にもたらすべし、汝それができ得るなら。アッラーもし欲したりせば、彼等を集めて之を導き給えり。されば汝、無知蒙昧の徒となるなかれ。

وَاِنْ كَانَ كَبُرَ عَلَيْكَ اِعْرَاضُهُمْ فَاِنِ اسْتَطَعْتَ اَنْ تَبْتَغِيَ نَفَقًا فِى الْاَرْضِ اَوْ سُلَّمًا فِى السَّمَآءِ فَتَاْتِيَهُمْ بِاٰيَةٍ ۗ وَلَوْ شَآءَ اللّٰهُ لَجَمَعَهُمْ عَلَى الْهُدٰى فَلَا تَكُوْنَنَّ مِنَ الْجٰهِلِيْنَ ﴿٣٦﴾

37. 耳傾ける者のみ喚びかけに能く応ず。アッラーは能く死者を甦らしめん。しかる後に彼等はアッラーの許に帰らしめらる。(注 20)

اِنَّمَا يَسْتَجِيْبُ الَّذِيْنَ يَسْمَعُوْنَ ۘ وَالْمَوْتٰى يَبْعَثُهُمُ اللّٰهُ ثُمَّ اِلَيْهِ يُرْجَعُوْنَ ﴿٣٧﴾

注 17　聖なる預言者は、(心の)優しさにあふれていた。彼は自分に関して不信仰者達が言った事には心を乱さなかった。彼は、不信仰者達が自分をうそつきとして責めたからではなく、アッラーのお告げを退ける事により、彼らが自分自身への神の慈悲の入口を閉ざしてしまった事に深い悲しみをおぼえた。

注 18　神は、安楽と慰めのこれらの言葉でもって、聖なる預言者に愛情をこめて話しかける。預言者は彼より以前の預言者達もやはり拒絶され、あざけられ笑いものにされた事を知らされている。

注 19　神の救いは神の預言者達の上にもたらされ、その敵対する者達は、災難にあうという神のおきては不変のものである。

注 20　この節は、2 種類の人間の事を述べている。それは、(1)心底は善く、真実を聞く耳をもち、ちゅうちょなく受け入れる者達、そして(2)死んでいるようにみえるが、精神的な再生にふさわしい者達である。神は奇跡によって彼らの再生を早め、彼らはさらにイスラム教に耳を傾け、奉ずる事となるのである。

38. また彼等は云う、「何故に主より彼の許に神兆が降されざるか？」と。云え、「げにアッラーは神兆を降す力あり。されど彼等の多くは、解らざるなり」と。

وَقَالُوا لَوْلَا نُزِّلَ عَلَيْهِ آيَةٌ مِّن رَّبِّهِ ۚ قُلْ إِنَّ اللَّهَ قَادِرٌ عَلَىٰ أَن يُنَزِّلَ آيَةً وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٣٨﴾

39. 地上を這う動物も、双翼で飛翔する鳥も、みなお前たちのように集団をなす。われらは経典の中で、一つとして遺漏せしものはなし。されば彼等もまた、いずれその主の許に召し寄せられん。(注 21)

وَمَا مِن دَابَّةٍ فِي الْأَرْضِ وَلَا طَائِرٍ يَطِيرُ بِجَنَاحَيْهِ إِلَّا أُمَمٌ أَمْثَالُكُم ۚ مَّا فَرَّطْنَا فِي الْكِتَابِ مِن شَيْءٍ ۚ ثُمَّ إِلَىٰ رَبِّهِمْ يُحْشَرُونَ ﴿٣٩﴾

40. われらの神兆を拒否せる者どもは、暗闇の中にいる盲であり、聾なり。アッラーは己れの欲する者を迷わしめ、また欲する者を正しい道の上に置き給う。

وَالَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا صُمٌّ وَبُكْمٌ فِي الظُّلُمَاتِ ۗ مَن يَشَإِ اللَّهُ يُضْلِلْهُ وَمَن يَشَأْ يَجْعَلْهُ عَلَىٰ صِرَاطٍ مُّسْتَقِيمٍ ﴿٤٠﴾

41. 云え、「我に答えよ。もしアッラーの懲罰がお前たちに降りかかるとか、復活の日（注 22）が到来したら、もしお前たちの言葉がまことなら、お前たちはアッラー以外の者を喚びて祈るか？

قُلْ أَرَأَيْتَكُمْ إِنْ أَتَاكُمْ عَذَابُ اللَّهِ أَوْ أَتَتْكُمُ السَّاعَةُ أَغَيْرَ اللَّهِ تَدْعُونَ إِن كُنتُمْ صَادِقِينَ ﴿٤١﴾

42. 然らず、お前たちは必ずアッラーを喚びて祈らん。而してアッラーもし欲しなば、お前たちの祈りに応えてその災厄を除き給うが故に、お前たちはアッラーに併せ祀りし神々を忘れ去らん」と。(注 23)

بَلْ إِيَّاهُ تَدْعُونَ فَيَكْشِفُ مَا تَدْعُونَ إِلَيْهِ إِن شَاءَ وَتَنسَوْنَ مَا تُشْرِكُونَ ﴿٤٢﴾

注 21　この節は、鳥や昆虫、例えば蟻でさえも、大気中の変化から嵐がさし迫っている事を理解し、犬などの動物は飼い主の命令を理解するのに、愚かな不信仰者達は、災いの前兆も見えず、聖なる預言者を拒絶する事により、神の怒りを招いている事に気付かないという事を指摘している。彼らは、彼らの行動の全てが記録され、それに対する償いをしなければならないと警告されている。

この節は、さらに2種類の人間を示唆しているようである。それは(1)野獣を好む者は完全に世俗に心が傾けられ、彼らの人生の全てが肉体的欲望を満たす事に限られている、(2)鳥を好む者は、神聖な域へと高く舞いあがる—非常に崇高な者達は、クルアーン（3章50節）では鳥にたとえられている。

注 22　アッサーア「復活の日」は、イスラム教の決定的な勝利の時、又はメッカの陥落をさす。

注 23　「神々を忘れ去らん」という言葉は、メッカの陥落の日に、文字通り履行された。その日、メッカの人々は、アブ・スフヤーンと彼の妻ヒンダを始めとした他の人々が聖なる預言者の目前で、素直に認めた様に彼らの神々への信仰をすてた。ついに、アラビアから偶像崇拝は完全に消えたのである。

第五項

43. げにわれらは汝以前の諸々の民に多くの使徒を遣わせり。而して彼等を謙虚ならしめんがために、われらは彼等を貧困と災難で苦しめたり。(注 24)

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَآ إِلَىٰٓ أُمَمٍ مِّن قَبْلِكَ فَأَخَذْنٰهُم بِالْبَأْسَآءِ وَالضَّرَّآءِ لَعَلَّهُمْ يَتَضَرَّعُونَ ﴿٤٣﴾

44. しかるにわれらの懲罰が降りしとき、何故彼等は謙虚にならざりしか？されど、彼等の心は却って頑なとなり、悪魔は彼等にそのなせることを正しいものと思わしめたり。

فَلَوْلَآ إِذْ جَآءَهُم بَأْسُنَا تَضَرَّعُوا وَلٰكِن قَسَتْ قُلُوبُهُمْ وَزَيَّنَ لَهُمُ الشَّيْطٰنُ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٤٤﴾

45. かくて彼等がその与えられたる訓戒を忘れ去りし時、われらは万物の門を彼等に開き、授けられたるものに彼等が狂喜している時に、われらは突然彼等を襲いたり。見よ、彼等の絶望に落ち入りたる様を。

فَلَمَّا نَسُوا مَا ذُكِّرُوا بِهٖ فَتَحْنَا عَلَيْهِمْ أَبْوٰبَ كُلِّ شَيْءٍ حَتّٰىٓ إِذَا فَرِحُوا بِمَآ أُوتُوٓا أَخَذْنٰهُم بَغْتَةً فَإِذَا هُم مُّبْلِسُونَ ﴿٤٥﴾

46. かくして不義なす民は根絶やしにせられたり。万物の主アッラーに讃えあれ。

فَقُطِعَ دَابِرُ الْقَوْمِ الَّذِينَ ظَلَمُوا ۚ وَالْحَمْدُ لِلّٰهِ رَبِّ الْعٰلَمِينَ ﴿٤٦﴾

47. 云え、「お前たち我に答えよ。もしアッラーがお前たちの耳目を奪い、その心を封じなば、それをお前たちに返還し得るは、アッラーに非ずして如何なる神ぞや？」と。見よ、われらがさまざまなる方法で神兆を説明することを。されど彼等は背き去る。

قُلْ أَرَءَيْتُمْ إِنْ أَخَذَ اللّٰهُ سَمْعَكُمْ وَأَبْصٰرَكُمْ وَخَتَمَ عَلٰى قُلُوبِكُم مَّنْ إِلٰهٌ غَيْرُ اللّٰهِ يَأْتِيكُم بِهٖ ۗ انْظُرْ كَيْفَ نُصَرِّفُ الْاٰيٰتِ ثُمَّ هُمْ يَصْدِفُونَ ﴿٤٧﴾

48. 云え、「お前たち我に答えよ。もしアッラーの懲罰がお前たちに突然、又は公然と下らば、不義なる民以外に、誰が滅ぼされんや？」と。

قُلْ أَرَءَيْتَكُمْ إِنْ أَتٰىكُمْ عَذَابُ اللّٰهِ بَغْتَةً أَوْ جَهْرَةً هَلْ يُهْلَكُ إِلَّا الْقَوْمُ الظّٰلِمُونَ ﴿٤٨﴾

49. われらは朗報と警告の使者以外は使徒を派遣せず。されば、信じて身を修める者には、怖れもなく、また悲しみもなからん。

وَمَا نُرْسِلُ الْمُرْسَلِينَ إِلَّا مُبَشِّرِينَ وَمُنْذِرِينَ ۚ فَمَنْ اٰمَنَ وَأَصْلَحَ فَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿٤٩﴾

50. されどわれらの神兆を拒否する者は、その不服従故に、懲罰が下らん。

وَالَّذِينَ كَذَّبُوا بِاٰيٰتِنَا يَمَسُّهُمُ الْعَذَابُ بِمَا كَانُوا يَفْسُقُونَ ﴿٥٠﴾

注 24　前述の節は、一般に天罰を意味しており、この節では、その多様な形式が述べられている。

51. 云え、「我はお前たちに向って、アッラーの宝を所有すとは云わず。また、我不可視なるものを知るとも、我は天使なりとも云わず。我はただ我に啓示されたるものに従うのみ」と。云え、「盲人と目あきが同等なりや？それでもお前たちまだ反省せざるか？」と。

قُلْ لَّآ اَقُوْلُ لَكُمْ عِنْدِيْ خَزَآئِنُ اللّٰهِ وَلَآ اَعْلَمُ الْغَيْبَ وَلَآ اَقُوْلُ لَكُمْ اِنِّيْ مَلَكٌ ۚ اِنْ اَتَّبِعُ اِلَّا مَا يُوْحٰٓى اِلَيَّ ؕ قُلْ هَلْ يَسْتَوِي الْاَعْمٰى وَالْبَصِيْرُ ؕ اَفَلَا تَتَفَكَّرُوْنَ ﴿٥١﴾

第六項

52. 主の許(もと)に招集せられることを怖れる人々に警告せよ、彼等には主を措(お)いて外に、友もなければ執(と)り成(な)すものもなしと。さすれば彼等も、義(ただ)しい人になるやも知れぬ。

وَاَنْذِرْ بِهِ الَّذِيْنَ يَخَافُوْنَ اَنْ يُّحْشَرُوْٓا اِلٰى رَبِّهِمْ لَيْسَ لَهُمْ مِّنْ دُوْنِهٖ وَلِيٌّ وَّلَا شَفِيْعٌ لَّعَلَّهُمْ يَتَّقُوْنَ ﴿٥٢﴾

53. 主の愛顧を求めて、朝な夕な主を喚びて祈る者を追い払うなかれ。汝は彼等のことには全く責任なし、彼等もまた汝のことには責任なし。されば汝、もし彼等を追い払わば、汝は不義者の仲間とならん。

وَلَا تَطْرُدِ الَّذِيْنَ يَدْعُوْنَ رَبَّهُمْ بِالْغَدٰوةِ وَالْعَشِيِّ يُرِيْدُوْنَ وَجْهَهٗ ؕ مَا عَلَيْكَ مِنْ حِسَابِهِمْ مِّنْ شَيْءٍ وَّمَا مِنْ حِسَابِكَ عَلَيْهِمْ مِّنْ شَيْءٍ فَتَطْرُدَهُمْ فَتَكُوْنَ مِنَ الظّٰلِمِيْنَ ﴿٥٣﴾

54. かくしてわれらは、彼等の或る者をもって、他を試みたり。そは彼等をして、「アッラーが恩恵を垂れるは、我等のうちのこれ等の者なるか？」と云わしめんがためなり。感謝する者を最もよく知る者は、アッラーに非ざるか？ (注 25)

وَكَذٰلِكَ فَتَنَّا بَعْضَهُمْ بِبَعْضٍ لِّيَقُوْلُوْٓا اَهٰٓؤُلَآءِ مَنَّ اللّٰهُ عَلَيْهِمْ مِّنْ بَيْنِنَا ؕ اَلَيْسَ اللّٰهُ بِاَعْلَمَ بِالشّٰكِرِيْنَ ﴿٥٤﴾

55. われらの神兆(しるし)を信ずる者が汝のところへ来なば、云え、「お前たちの上に平安あれ。お前たちの主は慈悲を自らの務めとなせり。さればお前たちのうち知らずに罪を犯す者は、しかもその後改悛して行状を改めなば、主は寛大にして慈悲深くましますと」と。

وَاِذَا جَآءَكَ الَّذِيْنَ يُؤْمِنُوْنَ بِاٰيٰتِنَا فَقُلْ سَلٰمٌ عَلَيْكُمْ كَتَبَ رَبُّكُمْ عَلٰى نَفْسِهِ الرَّحْمَةَ ۙ اَنَّهٗ مَنْ عَمِلَ مِنْكُمْ سُوْٓءًا بِجَهَالَةٍ ثُمَّ تَابَ مِنْۢ بَعْدِهٖ وَاَصْلَحَ فَاَنَّهٗ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٥٥﴾

56. かくの如く、われらはさまざまなる神兆(しるし)を説き明す。そはお前たちに赦(ゆる)しを請い易くするためであり、また罪人(つみびと)たちの道を明白ならしむるためなり。

وَكَذٰلِكَ نُفَصِّلُ الْاٰيٰتِ وَلِتَسْتَبِيْنَ سَبِيْلُ الْمُجْرِمِيْنَ ﴿٥٦﴾

注 25　一般的に、信仰者達の社会における貧しい人々の存在は、金持ちが新しいお告げを受け入れる際の障害であることを示す。

第七項

57. 云え、「我はお前たちがアッラー以外に祈るものを崇めることを、禁ぜられているなり」と。云え、「我はお前たちの堕落した欲望に従わざるべし。もし従わば、我は邪道に陥りて、正しく導かれた者の仲間にならざるべし」と。

قُلْ إِنِّي نُهِيتُ أَنْ أَعْبُدَ الَّذِينَ تَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ قُلْ لَا أَتَّبِعُ أَهْوَاءَكُمْ قَدْ ضَلَلْتُ إِذًا وَمَا أَنَا مِنَ الْمُهْتَدِينَ ﴿٥٧﴾

58. 云え、「我は主の明証の上に立つ。しかるにお前たちは、それを拒否す。お前たちが催促することは、我が権限の外のことなり。その決定は唯だアッラー次第なり。彼は真理を説き給い、最も優れたる判断者なり」と。

قُلْ إِنِّي عَلَىٰ بَيِّنَةٍ مِنْ رَبِّي وَكَذَّبْتُمْ بِهِ مَا عِنْدِي مَا تَسْتَعْجِلُونَ بِهِ إِنِ الْحُكْمُ إِلَّا لِلَّهِ يَقُصُّ الْحَقَّ وَهُوَ خَيْرُ الْفَاصِلِينَ ﴿٥٨﴾

59. 云え、「お前たちが催促することが我が掌中にありとすれば、事は我とお前たちの間で決定せられん。されどアッラーは最もよく不義者を知り給う」と。

قُلْ لَوْ أَنَّ عِنْدِي مَا تَسْتَعْجِلُونَ بِهِ لَقُضِيَ الْأَمْرُ بَيْنِي وَبَيْنَكُمْ وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِالظَّالِمِينَ ﴿٥٩﴾

60. げにアッラーの許には不可視なるものの鍵あり。アッラーの外は何人も之を知らず、アッラーは陸上のもの、また海上のもの、その一切を知り給う。木の葉一枚落つるとも、アッラーは之を知り給う。また地中深い暗闇に横たわる一粒の穀物も、青きもの、枯れたるもの、一つとして明白な経典に記載せられざるはなし。

وَعِنْدَهُ مَفَاتِحُ الْغَيْبِ لَا يَعْلَمُهَا إِلَّا هُوَ وَيَعْلَمُ مَا فِي الْبَرِّ وَالْبَحْرِ وَمَا تَسْقُطُ مِنْ وَرَقَةٍ إِلَّا يَعْلَمُهَا وَلَا حَبَّةٍ فِي ظُلُمَاتِ الْأَرْضِ وَلَا رَطْبٍ وَلَا يَابِسٍ إِلَّا فِي كِتَابٍ مُبِينٍ ﴿٦٠﴾

61. 夜お前たちの魂を召し寄せる者は、アッラーなり。彼はお前たちが昼間行うこと（注26）を知り給う。而して彼は、再びお前たちを昼の中に目覚めさせ、定めの期間（注27）を全うさせ給う。而してお前たちの帰するところは彼の許なり。その時彼はお前たちに、お前たちの現世での所業を語り聞かせん。

وَهُوَ الَّذِي يَتَوَفَّاكُمْ بِاللَّيْلِ وَيَعْلَمُ مَا جَرَحْتُمْ بِالنَّهَارِ ثُمَّ يَبْعَثُكُمْ فِيهِ لِيُقْضَىٰ أَجَلٌ مُسَمًّى ثُمَّ إِلَيْهِ مَرْجِعُكُمْ ثُمَّ يُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٦١﴾

注26　神のみが、人間の夜の状態と日中の行動を知っており、いつ何時でも神の支配下に収められる、従って、敬虔な者と邪悪な者の本質を知っているのも神のみであり、その結果として神のみが罰を下すことのできる立場にあるわけである。

注27　ここで言われている「期間」は、人間が生まれながらにして賦与されている才能や力によって決定されており、その使われ方が正しいか否かに従って、延ばされたり短縮されたりする。
ここでは、神の永遠の知識への言及はない。

第八項

62. アッラーはその僕らの上に至高に君臨す。死がお前たちのうちの誰かに訪れ、われらの使者がその魂を手ぬかりなく迎え入れるまで、アッラーはお前たちの上に監視者を遣わす。

وَهُوَ الْقَاهِرُ فَوْقَ عِبَادِهِ وَيُرْسِلُ عَلَيْكُمْ حَفَظَةً ۖ حَتَّىٰ إِذَا جَاءَ أَحَدَكُمُ الْمَوْتُ تَوَفَّتْهُ رُسُلُنَا وَهُمْ لَا يُفَرِّطُونَ ﴿٦٢﴾

63. しかる後に、彼等は真の主たるアッラーの許に帰らしめらる。げに判決は彼のものなり。彼は最も迅速な清算者なり。

ثُمَّ رُدُّوا إِلَى اللَّهِ مَوْلَاهُمُ الْحَقِّ ۚ أَلَا لَهُ الْحُكْمُ وَهُوَ أَسْرَعُ الْحَاسِبِينَ ﴿٦٣﴾

64. 云え、「陸や海の災難からお前たちを救う者は誰か？かかる時お前たちは、心密かに謙って、アッラーに祈って、『もし我等をこの事より救わば、我等は必ず感謝する者たらん』などと云うのではないか？」と。

قُلْ مَنْ يُنَجِّيكُمْ مِنْ ظُلُمَاتِ الْبَرِّ وَالْبَحْرِ تَدْعُونَهُ تَضَرُّعًا وَخُفْيَةً لَئِنْ أَنْجَانَا مِنْ هَٰذِهِ لَنَكُونَنَّ مِنَ الشَّاكِرِينَ ﴿٦٤﴾

65. 云え、「アッラーはお前たちを之より救い、また一切の災難から救い給う。しかるにお前たちは、アッラーに他神を併せ祀るとは」と。

قُلِ اللَّهُ يُنَجِّيكُمْ مِنْهَا وَمِنْ كُلِّ كَرْبٍ ثُمَّ أَنْتُمْ تُشْرِكُونَ ﴿٦٥﴾

66. 云え、「アッラーはお前たちに、頭上からも、脚下からも懲罰を科す力あり。またお前たちを多くの派閥に分裂混乱せしめ、お互に暴虐を味わせしめる力を有す」と。見よ、彼等を諭さんがために、われらは如何にさまざまなる方法で神兆を説き明かすかを！

قُلْ هُوَ الْقَادِرُ عَلَىٰ أَنْ يَبْعَثَ عَلَيْكُمْ عَذَابًا مِنْ فَوْقِكُمْ أَوْ مِنْ تَحْتِ أَرْجُلِكُمْ أَوْ يَلْبِسَكُمْ شِيَعًا وَيُذِيقَ بَعْضَكُمْ بَأْسَ بَعْضٍ ۗ انْظُرْ كَيْفَ نُصَرِّفُ الْآيَاتِ لَعَلَّهُمْ يَفْقَهُونَ ﴿٦٦﴾

67. しかるに汝の民は、真実なるものを否認せり。云え、「我はお前たちの守護者に非ず」と。

وَكَذَّبَ بِهِ قَوْمُكَ وَهُوَ الْحَقُّ ۚ قُلْ لَسْتُ عَلَيْكُمْ بِوَكِيلٍ ﴿٦٧﴾

68. そもそもそれぞれのお告げには、一定の時期あり。やがてお前たちにもわかる時が来よう。(注28)

لِكُلِّ نَبَإٍ مُسْتَقَرٌّ ۚ وَسَوْفَ تَعْلَمُونَ ﴿٦٨﴾

69. 汝、われらの神兆について空しく談論する者を見なば、彼等が話題を転ずるまで彼等から遠ざかれ。たとい悪魔が汝を忘却せし

وَإِذَا رَأَيْتَ الَّذِينَ يَخُوضُونَ فِي آيَاتِنَا فَأَعْرِضْ عَنْهُمْ حَتَّىٰ يَخُوضُوا فِي حَدِيثٍ غَيْرِهِ ۚ وَإِمَّا

注28　この節は、神がその全然誤りのない知識をもって、全ての預言の成就の時を定めた事を意味している。従って、真理の拒絶する者達に約束された罰も時が来れば実現するのである。

むることあるとも、それに気付いたなら、不義なる徒輩（やから）と同坐するなかれ。

يُنْسِيَنَّكَ الشَّيْطٰنُ فَلَا تَقْعُدْ بَعْدَ الذِّكْرٰى مَعَ الْقَوْمِ الظّٰلِمِيْنَ ٦٩

70. 義（ただ）しい人々は彼等に対して如何なる責任も有せず。されど彼等に忠告すべし。さすれば彼等も神を畏れ敬うようになるやも知れぬ。

وَمَا عَلَى الَّذِيْنَ يَتَّقُوْنَ مِنْ حِسَابِهِمْ مِّنْ شَيْءٍ وَّلٰكِنْ ذِكْرٰى لَعَلَّهُمْ يَتَّقُوْنَ ٧٠

71. 宗教を娯楽か気晴しと考え、この世の生活に欺かれている者どもは、うち捨てておけ。人は己が稼ぎのために地獄に送られるということを、これによって人々に訓戒せよ。アッラーの外には、助ける者も執（と）り成す者もなかるべし。たとい如何なる賠償を以てしても、受納せられざるべし。彼等は己れの行状のために、破滅へと引き渡されたる者どもなり。彼等は信ぜざるが故に、熱湯を飲まされ、苛酷な懲罰を受けん。

وَذَرِ الَّذِيْنَ اتَّخَذُوْا دِيْنَهُمْ لَعِبًا وَّلَهْوًا وَّغَرَّتْهُمُ الْحَيٰوةُ الدُّنْيَا وَذَكِّرْ بِهٖٓ اَنْ تُبْسَلَ نَفْسٌۢ بِمَا كَسَبَتْ لَيْسَ لَهَا مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ وَلِيٌّ وَّلَا شَفِيْعٌ وَاِنْ تَعْدِلْ كُلَّ عَدْلٍ لَّا يُؤْخَذْ مِنْهَا اُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ اُبْسِلُوْا بِمَا كَسَبُوْا لَهُمْ شَرَابٌ مِّنْ حَمِيْمٍ وَّعَذَابٌ اَلِيْمٌۢ بِمَا كَانُوْا يَكْفُرُوْنَ ٧١

第九項

72. 云え、「我等はアッラー以外に、毒にも薬にもならざるものを祈れようか。また、一たびアッラーに導かれておりながら、悪魔（サタン）の誘惑にまどわされて、地上で当てどなく途方にくれる者の如く、後で踵を返せようか。彼には、『我等の許（もと）へ来れ』と正しい道に招いてくれる仲間がいるというのに」と。云え、「アッラーの嚮導（きょうどう）こそ真の嚮導（きょうどう）なり。我等は万物の主に服従せよと命ぜられたり。（注29）

قُلْ اَنَدْعُوْا مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ مَا لَا يَنْفَعُنَا وَلَا يَضُرُّنَا وَنُرَدُّ عَلٰٓى اَعْقَابِنَا بَعْدَ اِذْ هَدٰىنَا اللّٰهُ كَالَّذِى اسْتَهْوَتْهُ الشَّيٰطِيْنُ فِى الْاَرْضِ حَيْرَانَ لَهٗٓ اَصْحٰبٌ يَّدْعُوْنَهٗٓ اِلَى الْهُدَى ائْتِنَا قُلْ اِنَّ هُدَى اللّٰهِ هُوَ الْهُدٰى وَاُمِرْنَا لِنُسْلِمَ لِرَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ٧٢

73. また我等は、『礼拝を遵守し、主を畏れ敬え』と命ぜられたり。而（しか）してお前たちは、必ず主の御許（みもと）へ召し寄せられん」と。

وَاَنْ اَقِيْمُوا الصَّلٰوةَ وَاتَّقُوْهُ وَهُوَ الَّذِىْٓ اِلَيْهِ تُحْشَرُوْنَ ٧٣

74. 真理を以て天地（あめつち）を創造せる者は彼なり。その日、彼「在れ」と宣（のたま）えば、そは在るべし。その御言葉は真理なり。喇叭（らっぱ）が吹き鳴らさ

وَهُوَ الَّذِىْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ بِالْحَقِّ وَيَوْمَ يَقُوْلُ كُنْ فَيَكُوْنُ قَوْلُهُ الْحَقُّ وَلَهُ الْمُلْكُ يَوْمَ

注29　この節は、偶像崇拝者の場合を、進むべき決まった方向のない迷える人にたとえている。しかし真の信仰者は、人生の定まった目的と目標をもっている。彼はいつも根深い信念のもとに唯一の神に祈りを捧げ、偶像崇拝者の様に取り乱してさまよい歩く事はない。

れるその日、主権は彼の所有なり。彼は見えざるものも見えるものも、ひとしく知り給う。彼は賢哲にして一切を知悉し給う。（注 30）

يُنفَخُ فِي الصُّورِ ۚ عَٰلِمُ الْغَيْبِ وَالشَّهَٰدَةِ ۚ وَهُوَ الْحَكِيمُ الْخَبِيرُ ﴿٧٣﴾

75. アブラハムが父アーザル（注 31）に「汝は偶像を神と見なすか？我思うに、父上もその御一党も、明らかに迷誤の中にあり」と云える時のことを思え。

وَإِذْ قَالَ إِبْرَٰهِيمُ لِأَبِيهِ ءَازَرَ أَتَتَّخِذُ أَصْنَامًا ءَالِهَةً ۖ إِنِّىٓ أَرَىٰكَ وَقَوْمَكَ فِى ضَلَٰلٍ مُّبِينٍ ﴿٧٤﴾

76. そこでわれらは、アブラハムを信心堅固なる者たらしめんがために、天地の王国を示したり。（注 32）

وَكَذَٰلِكَ نُرِىٓ إِبْرَٰهِيمَ مَلَكُوتَ السَّمَٰوَٰتِ وَالْأَرْضِ وَلِيَكُونَ مِنَ الْمُوقِنِينَ ﴿٧٥﴾

77. 夜の帳が彼を覆える時、彼は一つの星を見たり。彼は云えり、「こは我が主なり」と。しかるに、星が沈むに臨み、「我は没するものを好まず」と云えり。

فَلَمَّا جَنَّ عَلَيْهِ الَّيْلُ رَءَا كَوْكَبًا ۖ قَالَ هَٰذَا رَبِّى ۖ فَلَمَّآ أَفَلَ قَالَ لَآ أُحِبُّ الْءَافِلِينَ ﴿٧٦﴾

78. 次いで彼は、煌々と輝く月の昇るのを見て、云えり、「こは我が主なり」されど月が没するや、彼は云えり、「もし主が我を導かずば、我は必ず迷える者どもの仲間とならん」と。

فَلَمَّا رَءَا الْقَمَرَ بَازِغًا قَالَ هَٰذَا رَبِّى ۖ فَلَمَّآ أَفَلَ قَالَ لَئِن لَّمْ يَهْدِنِى رَبِّى لَأَكُونَنَّ مِنَ الْقَوْمِ الضَّآلِّينَ ﴿٧٧﴾

79. 次いで彼は目映い日の出を見て、云えり、「こは我が主なり。こは偉大なり」と。されどこれまた没するに及び、彼は云えり、「我が民よ、我はお前たちが神と併せ祀る偶像を避ける。（注 33）

فَلَمَّا رَءَا الشَّمْسَ بَازِغَةً قَالَ هَٰذَا رَبِّى هَٰذَآ أَكْبَرُ ۖ فَلَمَّآ أَفَلَتْ قَالَ يَٰقَوْمِ إِنِّى بَرِىٓءٌ مِّمَّا تُشْرِكُونَ ﴿٧٨﴾

注 30　神の預言者は実際、神の声を通す喇叭であり、又その音は、神の教えの幅広い普及と彼の人々の人生の中に彼によってもたらされるべき大いなる革命の象徴である。

この節は、聖なる預言者の教えが世界に幅広く発表され受け入れられ、そしてイスラム教が勝利を得、支配をする時、それから神の（王）国はこの世にはっきり示される様に確立し、そしてその日、偶像は粉々に破壊される事となるのである。

注 31　旧約聖書には、アブラハムの父の名は、テラとして与えられており（創世記 11 章 26 節）新約聖書では（ルカ 3 章 34 節）、サラとなっている。タルムードは、ルカと一致している。従ってキリスト教の著述家達は、クルアーンでアブラハムの父をアザール名で呼ぶ事に関して異議を唱える道理はないはずである。

注 32　この節は、神がアブラハムに、天地万物で働く自然のおきてと、全てにゆきわたっている神の力と支配への知識と洞察力を授けた事を述べている。

注 33　77 節から 79 節までは、アブラハムがその偶像崇拝者達に提示した。彼らの太陽、月、そして星の数々は、そのまま彼らが崇拝する神（の数）である（Jew Enc.）という彼らの信心のバカバカしさを論じている。

しかしこれらの節から、アブラハム自身が暗中模索し自分の神が誰であるかを知らず、そして夜の星、月、

80. 我は天地を創造せる主の方に我が顔を向け奉る。我は常に神に耳を傾け奉る。我は多神教徒の類いに非ず」と。

إِنِّي وَجَّهْتُ وَجْهِيَ لِلَّذِي فَطَرَ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضَ حَنِيفًا وَّمَآ أَنَا مِنَ الْمُشْرِكِينَ ﴿٨٠﴾

81. されど彼の民は、彼に異存を唱えたり。そこで彼は、「お前たち、我を正しく導きたるアッラーについて、我と議論するつもりか？主が何事かを欲すに非ずば、我はお前たちが主と併せ祀るものを怖れず。主はその知識の中に、すべてを包含し給う。お前たちまだ悟らざるか？

وَحَآجَّهُ قَوْمُهُ ط قَالَ أَتُحَآجُّوٓنِّي فِي اللّٰهِ وَقَدْ هَدٰىنِ ط وَلَآ أَخَافُ مَا تُشْرِكُونَ بِهِٓ إِلَّآ أَنْ يَّشَآءَ رَبِّي شَيْئًا ط وَسِعَ رَبِّي كُلَّ شَيْءٍ عِلْمًا ط أَفَلَا تَتَذَكَّرُونَ ﴿٨١﴾

82. 我安んぞお前たちが神と併せ祀るものを怖れんや。お前たちはアッラーより如何なる権限も授けられざるに、怖れ気もなく、アッラーに偶像を併せ祀る」と云えり。さて、両者のどちらがより安泰なり得べきか、お前たちにもわかる筈なり。

وَكَيْفَ أَخَافُ مَآ أَشْرَكْتُمْ وَلَا تَخَافُونَ أَنَّكُمْ أَشْرَكْتُمْ بِاللّٰهِ مَا لَمْ يُنَزِّلْ بِهِ عَلَيْكُمْ سُلْطٰنًا ط فَأَيُّ الْفَرِيقَيْنِ أَحَقُّ بِالْأَمْنِ إِنْ كُنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٨٢﴾

83. 信徒であり、その信仰を不義と混同せざる者、彼等こそは平安であり、正しく導かれる者なり。

الَّذِينَ آمَنُوا وَلَمْ يَلْبِسُوٓا إِيمَانَهُمْ بِظُلْمٍ أُولٰٓئِكَ لَهُمُ الْأَمْنُ وَهُمْ مُّهْتَدُونَ ﴿٨٣﴾

第十項

84. これが、アブラハムに与えてその民に抗せしめたるわれらの論旨なり。われらは嘉す

وَتِلْكَ حُجَّتُنَآ آتَيْنٰهَآ إِبْرٰهِيمَ عَلٰى قَوْمِهِ ط نَرْفَعُ

そして太陽を次から次へと神にして迎え、そしてそれぞれが各々の見方に向かった時、彼らの神威への信心をあきらめ、天地の創造者である唯一の神に向きなおった、と推定するのは間違いである。

事実、この一節は、アブラハムがこういう天体を神とみなしたどころか、彼の人々に彼らの信心の空しさを一歩一歩証明しようと努めたことを示すため、色々な面から論じられているのである。75－76節は、アブラハムが唯一の神の断固たる信者であった事を表している。彼は、従って、暗中模索していたり、一つの神から又違う神へとさまよったとみなされる事などあり得ない。

「これが私の神であろうか」という言葉は、星を崇拝する人に対する反論である。彼は、彼の人々の星が彼らの神であるという信仰をあばくためにこれらの言葉を述べたのである。その上に彼は、星が沈んでしまうものである事をもう知っていた。従って彼の「私は沈んでしまわないものが好きである」という言葉に含まれた議論は既に彼の中には存在していたにちがいない。実際には、彼は自分の議論を最も効果的な形で使いたかった。

従って、彼は最初に星が自分の神であると仮定して、そしてそれが消えた時、「私は沈んでしまわない物を好む。」と急いで宣言した。

月と太陽の沈む事に関しても同様であった。太陽の場合は、彼は彼の人々の愚かさをあざけるために、「より偉大な」又は「最も偉大な」という言葉を皮肉に使った。これは、彼がとり入れた議論のひとくだりによって、アブラハムが徐々に神へ彼の人々を引くつもりであった事を示す。

80－82節に、ざっと目を通すだけで、アブラハムが神に断固たる信仰のみを持っていただけでなく、神の特質に関する深い知識も持っていた事は、非常に明白である。

る者は誰であれ位階を高む。げに汝の主は賢哲にして、すべてを知り給う。(注 34)

دَرَجٰتٍ مَّنْ نَّشَآءُ ۗ اِنَّ رَبَّكَ حَكِيْمٌ عَلِيْمٌ ﴿٨٣﴾

85. またわれらは、彼にイサクとヤコブを与え、それぞれ正しく導きたり。またこれより前に、われらはノアを導きたり。アブラハムの子孫では、ダビデ、ソロモン、ヨブ、ヨセフ、モーゼ、アロンを導きたり。われらはかくの如く善行に励む人々を報奨す。(注 35)

وَوَهَبْنَا لَهٗۤ اِسْحٰقَ وَيَعْقُوْبَ ۗ كُلًّا هَدَيْنَا ۚ وَنُوْحًا هَدَيْنَا مِنْ قَبْلُ وَمِنْ ذُرِّيَّتِهٖ دَاوٗدَ وَسُلَيْمٰنَ وَاَيُّوْبَ وَيُوْسُفَ وَمُوْسٰى وَهٰرُوْنَ ۗ وَكَذٰلِكَ نَجْزِى الْمُحْسِنِيْنَ ﴿٨٤﴾

86. またわれらは、ザカリヤ、ヨハネ、イエス、並びにイリアスを導きたり。皆それぞれ高潔な者なりき。

وَزَكَرِيَّا وَيَحْيٰى وَعِيْسٰى وَاِلْيَاسَ ۗ كُلٌّ مِّنَ الصّٰلِحِيْنَ ﴿٨٥﴾

87. またわれらは、イスマイル、エリヤ、ヨナ、並びにロトを導き、その各々を世に秀でた者となせり。

وَاِسْمٰعِيْلَ وَالْيَسَعَ وَيُوْنُسَ وَلُوْطًا ۗ وَكُلًّا فَضَّلْنَا عَلَى الْعٰلَمِيْنَ ﴿٨٦﴾

88. またわれらは、彼等の父祖、子孫、兄弟の中から、或る者たちを選びて正しい道へと導きたり。

وَمِنْ اٰبَآئِهِمْ وَذُرِّيّٰتِهِمْ وَاِخْوَانِهِمْ ۚ وَاجْتَبَيْنٰهُمْ وَهَدَيْنٰهُمْ اِلٰى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ﴿٨٧﴾

89. こはアッラーの嚮導(きょうどう)なり。アッラーは己が僕(しもべ)らの中から、嘉(よみ)する者を導き給う。されど彼等もしアッラー以外のものを崇拝しなば、彼等の所業はすべて無益なものに帰すべし。

ذٰلِكَ هُدَى اللّٰهِ يَهْدِىْ بِهٖ مَنْ يَّشَآءُ مِنْ عِبَادِهٖ ۗ وَلَوْ اَشْرَكُوْا لَحَبِطَ عَنْهُمْ مَّا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ﴿٨٨﴾

注 34　この節は、アブラハムが彼の主として次から次へと天体を選び、徐々に神への信仰を持ち始めたのか、それともこういった天体を神々として崇拝することによって彼の人々の誤りを証明しようと努めることに用いた、巧みで漸進的な論証で、あるかの問題を明白に解決する。

この節はアブラハムが最初から唯一の神への明らかな、確固とした信念を、もっていた事を表し、そして太陽や月等に関して彼が言った事は、神が彼に教えた論証の一部であった。

注 35　アッユーブもしくはヨブはヨブ記の主要人物である。彼は聖書の中でウジ地に住んでいると述べられている。

専門学者の中には、これはイドゥミア又はアラビア地方であるという者達がいる。又他には、メソポタミアを彼の出生地として定めている者達もいる。

ウジはどうやらどこかアラビアの北にあったようである。イスラエル人のエジプトからの脱出以前にヨブはその地に住んでいたと言われている。

彼は、従って、モーゼよりも前に生まれており、又一部ではモーゼより約20年前にも預言者としての使命を受けた、モーゼの同国人であると言われている。

90. われらが経典と統治権と預言の資格を授けし人々は、これ等の者なり。されど彼等がもしその恩顧に背かば、われらは忘恩に非ざる人々に之を委ぬべし。

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ آتَيْنَاهُمُ الْكِتَابَ وَالْحُكْمَ وَالنُّبُوَّةَ ۚ فَإِن يَكْفُرْ بِهَا هَٰؤُلَاءِ فَقَدْ وَكَّلْنَا بِهَا قَوْمًا لَّيْسُوا بِهَا بِكَافِرِينَ ﴿٩٠﴾

91. これ等の者はアッラーに導かれたる者なれば、汝は彼等の嚮導に従え。云え、「我はこのために如何なる報酬もお前たちに求めず。こはただ全人類への訓戒なり」と。

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ هَدَى اللَّهُ ۖ فَبِهُدَاهُمُ اقْتَدِهْ ۗ قُل لَّا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ أَجْرًا ۖ إِنْ هُوَ إِلَّا ذِكْرَىٰ لِلْعَالَمِينَ ﴿٩١﴾

第十一項

92. 「アッラーは如何なる人間にも何一つ啓示せず」(注 36)と云う者どもがいるが、彼等はアッラーの力を正しく測れる者に非ず。云え、「光明と嚮導として、モーゼが人々のためにもたらせる経典は、誰が啓示したるや—お前たちはそれを紙に書き、そのいくらかを見せて、大部分は隠蔽するも、お前たちもお前たちの祖先も知らざりしことをそれによって教えられたるに非ずや？」と。云え、「アッラーなり」と。その後は彼等を放置して、空論にふけらしめよ。(注 37)

وَمَا قَدَرُوا اللَّهَ حَقَّ قَدْرِهِ إِذْ قَالُوا مَا أَنزَلَ اللَّهُ عَلَىٰ بَشَرٍ مِّن شَيْءٍ ۗ قُلْ مَنْ أَنزَلَ الْكِتَابَ الَّذِي جَاءَ بِهِ مُوسَىٰ نُورًا وَهُدًى لِّلنَّاسِ ۖ تَجْعَلُونَهُ قَرَاطِيسَ تُبْدُونَهَا وَتُخْفُونَ كَثِيرًا ۖ وَعُلِّمْتُم مَّا لَمْ تَعْلَمُوا أَنتُمْ وَلَا آبَاؤُكُمْ ۖ قُلِ اللَّهُ ۖ ثُمَّ ذَرْهُمْ فِي خَوْضِهِمْ يَلْعَبُونَ ﴿٩٢﴾

93. こはわれらが啓示せる祝福せられたる経典にして、以前に降されたるものを満たし、また汝をして諸邑の母並びにその周囲の人々に警告せしめんがために降されたるものなり。されば来世を信ずる人々は之を信じ、厳しく礼拝を遵守す。

وَهَٰذَا كِتَابٌ أَنزَلْنَاهُ مُبَارَكٌ مُّصَدِّقُ الَّذِي بَيْنَ يَدَيْهِ وَلِتُنذِرَ أُمَّ الْقُرَىٰ وَمَنْ حَوْلَهَا ۚ وَالَّذِينَ يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ يُؤْمِنُونَ بِهِ ۖ وَهُمْ عَلَىٰ صَلَاتِهِمْ يُحَافِظُونَ ﴿٩٣﴾

彼はイスラエル人ではなく、ヤコブの兄のエサウの系統を引いていた。彼は、非常に変化に富んだ生涯を送り、神に多様な方法で「ためされた」。しかし彼は最も信義に厚く公正である事を立証し、非常な逆境においても忍耐強くしっかりとしていた為、彼は忍耐の手本として、今なお人類の記憶にとどめられている(Jewish Enc. 及び　Enc. of Islam)。

注 36　　この言葉は「もしクルアーンが神によって啓示されたのでないならば、一体誰がそのなかに、あなたやそしてあなたの祖先のどちらにも知られていないそのような賢明で広い教え—その教えを生ずる事はあなたの力をはるかに越えているが—を具体的に表現したというのか。神のみがその様な教えを下すことができるのである。」という事を意味している。

注 37　　ユダヤ人達は、モーゼの五書のある箇所を明らかにし、聖なる預言者の出現に関する預言とおつげを含む他の箇所を隠しておいた事をここで非難されている。

94. アッラーについて虚偽を捏造し、また啓示を受けずして「我は啓示を受けたり」などと云う者、また「我はアッラーが降せるものと類似なものを降して見せん」などと云う者、これ以上の性悪な不義者があろうか？あの不義者どもが死の苦痛にもだえる最中、天使たちが手をさし伸べて「お前たちの魂を渡せ。アッラーについて虚偽を述べたて、尊大にもその神兆から顔をそむけたる報いとして、今お前たちは屈辱的な懲罰に処せらるべし」と云う有様を、汝が見るを得なば。

وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرَىٰ عَلَى اللَّهِ كَذِبًا أَوْ قَالَ أُوحِيَ إِلَيَّ وَلَمْ يُوحَ إِلَيْهِ شَيْءٌ وَمَن قَالَ سَأُنزِلُ مِثْلَ مَا أَنزَلَ اللَّهُ ۗ وَلَوْ تَرَىٰ إِذِ الظَّالِمُونَ فِي غَمَرَاتِ الْمَوْتِ وَالْمَلَائِكَةُ بَاسِطُو أَيْدِيهِمْ أَخْرِجُوا أَنفُسَكُمُ ۖ الْيَوْمَ تُجْزَوْنَ عَذَابَ الْهُونِ بِمَا كُنتُمْ تَقُولُونَ عَلَى اللَّهِ غَيْرَ الْحَقِّ وَكُنتُمْ عَنْ آيَاتِهِ تَسْتَكْبِرُونَ ﴿٩٤﴾

95. 今お前たちは、われらがお前たちに授けしものはすべて背後に残し、最初われらが創れる如く、一人ずつわれらの前に来たる。われらは、お前たちが神の仲間なりと主張せる仲介者どもがお前たちと一緒なるを見ず。今お前たちの間の絆は断たれ、お前たちが主張せるものがお前たちを見捨てたり。

وَلَقَدْ جِئْتُمُونَا فُرَادَىٰ كَمَا خَلَقْنَاكُمْ أَوَّلَ مَرَّةٍ وَتَرَكْتُم مَّا خَوَّلْنَاكُمْ وَرَاءَ ظُهُورِكُمْ ۖ وَمَا نَرَىٰ مَعَكُمْ شُفَعَاءَكُمُ الَّذِينَ زَعَمْتُمْ أَنَّهُمْ فِيكُمْ شُرَكَاءُ ۚ لَقَد تَّقَطَّعَ بَيْنَكُمْ وَضَلَّ عَنكُم مَّا كُنتُمْ تَزْعُمُونَ ﴿٩٥﴾

第十二項

96. 穀粒や棗椰子の種に芽ばえさせる者は、アッラーなり。彼は死より生をもたらし、また生けるものに死を与える者なり。これがアッラーなり。しかるにお前たち、何故に背き去るのか？（注 38）

إِنَّ اللَّهَ فَالِقُ الْحَبِّ وَالنَّوَىٰ ۖ يُخْرِجُ الْحَيَّ مِنَ الْمَيِّتِ وَمُخْرِجُ الْمَيِّتِ مِنَ الْحَيِّ ۚ ذَٰلِكُمُ اللَّهُ ۖ فَأَنَّىٰ تُؤْفَكُونَ ﴿٩٦﴾

97. 彼は曙を出現させ、休息のために夜を設け、（注 39）また時を計るために太陽と月とを設けたり。こは偉大にして賢哲なる彼の処置なり。（注 40）

فَالِقُ الْإِصْبَاحِ وَجَعَلَ اللَّيْلَ سَكَنًا وَالشَّمْسَ وَالْقَمَرَ حُسْبَانًا ۚ ذَٰلِكَ تَقْدِيرُ الْعَزِيزِ الْعَلِيمِ ﴿٩٧﴾

注 38　草木が芽を出す、もとになるその種にここでは注意がむけられている。種自体は、ほんのとるに足らないものであるのに、成長し、大木になるのである事に注意がむけられている

同様に、種の様に人間は、神の啓示を受け入れる者、そして神の大いなる特質を反映するものとして成長する事が可能なのである。

注 39　ちょうど、人が日中働いて疲れて夜眠り元気を回復するのと同様に、聖なる預言者がその姿を現した人々は、長い休息の夜をおくっていたが、彼らの機能はまた活気をとりもどし、精神的エネルギーに満ちあふれる所となり、預言者の導きのもとに精神的発展の頂上を極めていく（登っていく）のに著しくふさわしい状態になったのである。

注 40　ちょうど自然界で、時間の計測と光の源として太陽と月が欠くことのできないものである様に、精神の世界では、神の預言者は絶対必要なものである。

98. また彼は、お前たちのために星辰を設け、陸でも海でも暗闇の中を行くときの道しるべとなせり。われらは思慮ある人々に神兆を詳述せり。(注 41)

وَهُوَ الَّذِيْ جَعَلَ لَكُمُ النُّجُوْمَ لِتَهْتَدُوْا بِهَا فِيْ ظُلُمٰتِ الْبَرِّ وَالْبَحْرِ ۗ قَدْ فَصَّلْنَا الْاٰيٰتِ لِقَوْمٍ يَّعْلَمُوْنَ ٩٨

99. また彼は、一人の人間よりお前たちを作り出し、住居と宿るところを与えたり。われらは理解し得る人々に神兆を詳述せり。(注 42)

وَهُوَ الَّذِيْٓ اَنْشَاَكُمْ مِّنْ نَّفْسٍ وَّاحِدَةٍ فَمُسْتَقَرٌّ وَّمُسْتَوْدَعٌ ۗ قَدْ فَصَّلْنَا الْاٰيٰتِ لِقَوْمٍ يَّفْقَهُوْنَ ٩٩

100. 雨を雲より降らせるのもまた彼なり。われらはその水でよろずの草木に芽をふかせ、次いでその芽から青葉を出させ、而して鈴なりの穀粒を実らしむ。また棗椰子の莖衣から枝もたわわに房なす椰子の実を垂らしむ。またわれらは、葡萄園とともに、橄欖、柘榴など—似たものもあれば、似ざるものもあり、を育成す。その果物に実がなり、それが熟するを見よ。げにこの中には、信ずる人々へのさまざまなる神兆あり。(注 43)

وَهُوَ الَّذِيْٓ اَنْزَلَ مِنَ السَّمَآءِ مَآءً ۚ فَاَخْرَجْنَا بِهٖ نَبَاتَ كُلِّ شَيْءٍ فَاَخْرَجْنَا مِنْهُ خَضِرًا نُّخْرِجُ مِنْهُ حَبًّا مُّتَرَاكِبًا ۚ وَمِنَ النَّخْلِ مِنْ طَلْعِهَا قِنْوَانٌ دَانِيَةٌ وَّجَنّٰتٍ مِّنْ اَعْنَابٍ وَّالزَّيْتُوْنَ وَالرُّمَّانَ مُشْتَبِهًا وَّغَيْرَ مُتَشَابِهٍ ۗ اُنْظُرُوْٓا اِلٰى ثَمَرِهٖٓ اِذَآ اَثْمَرَ وَيَنْعِهٖ ۗ اِنَّ فِيْ ذٰلِكُمْ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يُّؤْمِنُوْنَ ١٠٠

注 41　夜の闇の中で旅行者を導く星の様に、神と神学者達は、精神的な闇の中を手探りしながら、過ちをおかしている人々に導きを与える。

注 42　この節は、神が「1つの魂」から人間を増やした時に、意図なしに行ったはずはない事を示している。神が人類を創り、増やした大いなる目的は、神は彼らにこの世の住人となる期間だけでなく、さらに正しい人は、自らの主に対面できる死の向こうにある永遠の命を約束された—それは、神の使いの導きのもとでのみ昇っていける、実に高尚な目標なのである。

注 43　啓示はここでは、雨水にたとえられており、この節は、啓示は実際に天恵であるならば、何故、預言者が出現すると必ず不和や争いが起こるのかという疑問に答えている。ちょうど雨降りのあとに大地の内に隠れて眠っている種に応じて、善きも悪しきあらゆる種類の草木がはえるのと、同様に、預言者の出現により、それまで混ざりあった状態でいた人間は、善と悪に分けられる。「似たものもあれば、似ざるものもあり」という言葉はしかるに、似かよっている果物もあれば全く異なる果物もある事を意味している。

これは、種類を異にして、ある点では似かよっており、又他の点では似ていない果物と、同種のもので、主たる点では似通っているが、大して重要でない細部においては、どちらかの方が甘みが強かったりどちらかの方が色や大きさに多様性があったりという風に似ていないという果物のどちらの場合においても適用され得る。預言者を受け入れ神の導きに従うような人々の場合はこれと同様である。しかるにある点ではお互いに非常に類似点を持ち、又他の点では異なり、あるものは他よりも道徳的に、かつ精神的により進歩している。又同じ様に、あるものは精神的成長の1つの段階においてより進歩しており、他のものは違う所でより進歩している。彼らは、精神的完成の違った段階に到達し、それぞれの生まれながらの能力や性質により、異なった特性を作り出す。「それの熟すこと」という言葉は、果物が成熟することとの類似に当てはまる。ちょうどまだ熟していない見本で果物の評価をするのが不公平であるのと同様に、信仰者の中にはまだ精神的発達の過程である完成の域に到達していないから天啓の結果の欠点を捜すのは不公平である。

101. 彼等は妖霊を、アッラーが創りたるにもかかわらず、アッラーの同位者と見なす。それぱかりか、知識もなしに、妄りにアッラーに息子たちや娘たちがありとなす。聖なるかなアッラー、彼は彼等が彼に在りとするものの上に超在す！（注 44)

وَجَعَلُوا لِلَّهِ شُرَكَاءَ الْجِنَّ وَخَلَقَهُمْ وَخَرَقُوا لَهُ بَنِينَ وَبَنَاتٍ بِغَيْرِ عِلْمٍ سُبْحَانَهُ وَتَعَالَى عَمَّا يَصِفُونَ ﴿١٠١﴾

第十三項

102. 天地の創始者よ、彼は一切を創造し、あらゆることを知り給い、配偶者も持たずして、安んぞ子を持ち得んや（注 45)？

بَدِيعُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ أَنَّى يَكُونُ لَهُ وَلَدٌ وَلَمْ تَكُنْ لَهُ صَاحِبَةٌ وَخَلَقَ كُلَّ شَيْءٍ وَهُوَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿١٠٢﴾

103. それがお前たちの主アッラーなり。彼の外に神なし。万物の創造者なり。されば彼を崇拝せよ。彼は一切を監視す。

ذَٰلِكُمُ اللَّهُ رَبُّكُمْ لَا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ خَالِقُ كُلِّ شَيْءٍ فَاعْبُدُوهُ وَهُوَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ وَكِيلٌ ﴿١٠٣﴾

104. 衆目は彼を見ず、されど彼は衆目を見る。彼は霊妙にして、一切を知悉し給う。（注 46)

لَا تُدْرِكُهُ الْأَبْصَارُ وَهُوَ يُدْرِكُ الْأَبْصَارَ وَهُوَ اللَّطِيفُ الْخَبِيرُ ﴿١٠٤﴾

105. げに証拠が、すでに主よりお前たちに降れり。されば、眼をあけて見る者は(注 47)己がために幸いし、眼を閉ざす者 (注 48)は己れを損なう。而して我はお前たちの監視者に非ず。(注 49)

قَدْ جَاءَكُمْ بَصَائِرُ مِنْ رَبِّكُمْ فَمَنْ أَبْصَرَ فَلِنَفْسِهِ وَمَنْ عَمِيَ فَعَلَيْهَا وَمَا أَنَا عَلَيْكُمْ بِحَفِيظٍ ﴿١٠٥﴾

注 44　ジンは、一般の人達から隠れた、又は離れたままでいるそんな存在である。この節は、人間が、神の啓示を拒絶し自らの判断と理屈に従ったり、ジンと天使達を神の協同者と関連づけて考えたり神が息子や娘をものと考えたりするのはあやまりであることを示している。

注 45　人は妻をもつことにより息子を、持つ事ができる。神には妻がいないので、むすこはもてない。さらに、神は全ての創造者であり、完全な知恵を持つので援助したり跡を継いだりするための息子を必要としない。

注 46　この節は、神の啓示の援助なく、人間の思慮のみでは、神を理解する事はできない事を表しており、神は肉眼では見られないが、彼の預言者達を通して、又は彼の美徳の働きを通して、自らの姿を人間の前に明らかにされる。神はさらに心の眼で知覚する事ができる。

注 47　道理をうまく利用する事。

注 48　真理に目をつむるため盲目も同然である。

注 49　神の預言者の義務は、神が彼に明らかにする事を伝達する事に限られている。人々にそれを受け入れる様強要する事は彼の関与すべきことではない。
付随的に、この節はイスラム教は、その教えの普及のための「力」の使用を奨励又は黙認するという問責への反駁となっている。

106.　かくの如く、われらが多くの神兆をさまざまなる方法で説明するは、彼等に「汝は深く学べり」と云わしめさせ、また知識ある人々に神兆を明瞭ならしめんがためなり。

وَكَذَٰلِكَ نُصَرِّفُ الْآيَاتِ وَلِيَقُولُوا دَرَسْتَ وَلِنُبَيِّنَهُ لِقَوْمٍ يَعْلَمُونَ ﴿١٠٦﴾

107.　主より汝に啓示されたるものに従え。彼の外に神なし。偶像崇拝者を避けよ。

اتَّبِعْ مَا أُوحِيَ إِلَيْكَ مِن رَّبِّكَ ۖ لَا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ ۖ وَأَعْرِضْ عَنِ الْمُشْرِكِينَ ﴿١٠٧﴾

108.　もしアッラーが欲したりせば、彼等とてアッラーに他神を配したりはせじ。(注 50)ともあれ、われらは汝を彼等の監視者に任命せるに非ざれば、汝も彼等に対して責めを負うことなし。(注 51)

وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ مَا أَشْرَكُوا ۗ وَمَا جَعَلْنَاكَ عَلَيْهِمْ حَفِيظًا ۖ وَمَا أَنتَ عَلَيْهِم بِوَكِيلٍ ﴿١٠٨﴾

109.　彼等がアッラー以外に崇拝するものを罵るなかれ。(注 52)彼等は無知ゆえに、恨みから、アッラーを罵るやも知れぬ。かくの如くして、われらはどの民族にも己が行為を公正なものと思わしめたり。而して彼等の帰所はその主の許なり。その時主は、彼等に向ってそのなせることを告げ知らせん。(注 53)

وَلَا تَسُبُّوا الَّذِينَ يَدْعُونَ مِن دُونِ اللَّهِ فَيَسُبُّوا اللَّهَ عَدْوًا بِغَيْرِ عِلْمٍ ۗ كَذَٰلِكَ زَيَّنَّا لِكُلِّ أُمَّةٍ عَمَلَهُمْ ثُمَّ إِلَىٰ رَبِّهِم مَّرْجِعُهُمْ فَيُنَبِّئُهُم بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٠٩﴾

110　彼等はいとも厳かにアッラーにかけて誓い、もし我等に神兆が降るなら、之を必ず信ずと云えり。云え、「神兆はすべてアッラーの掌中にあり。されど、神兆が降ると

وَأَقْسَمُوا بِاللَّهِ جَهْدَ أَيْمَانِهِمْ لَئِن جَاءَتْهُمْ آيَةٌ لَّيُؤْمِنُنَّ بِهَا ۚ قُلْ إِنَّمَا الْآيَاتُ عِندَ اللَّهِ ۖ وَمَا يُشْعِرُكُمْ

注 50　神は、その無限の知恵の内に、人間を自由な行為者とされた。もし神が少しでも人々を強要しようとしたならば、彼は確かに真理に従う様強要していただろう。しかし、人間自身のためにも神は強制する事に満足を覚えられなかったのである。

注 51　クルアーンの中で聖なる預言者の呼び名として使われている“守護者”“番人”又は、“色々な事柄の処置者”という言葉は、彼が他の人々の行動に責任は持たないという事を意味するために使われている。

注 52　この節では、偶像崇拝者達の感情でさえも尊重する事を説き聞かせるだけでなく、さらに、異なった国や社会の間に親睦を作り出す事への希望も示されている。

注 53　これは、ある特定の動作をする事に固執する時、人はそれに好意を抱く様になり、その動作は自分の見解では良く見える様になるというような人間の本質（そして、この神のおきてに人間の全般にわたる進歩の秘密が隠されている）を神がつくり出された事を意味するのみである。この一般的な神のおきてに従って、偶像崇拝者達は自分達には良く、価値のあるものに思われる、偶像を崇拝するという行為を好むようになるのである。

أَنَّهَا إِذَا جَاءَتْ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿١١٠﴾

も彼等は之を信じざるべきことを、如何にお前たちにわからしめようぞ？」と。(注54)

وَنُقَلِّبُ أَفْئِدَتَهُمْ وَأَبْصَارَهُمْ كَمَا لَمْ يُؤْمِنُوا بِهِ أَوَّلَ مَرَّةٍ وَنَذَرُهُمْ فِي طُغْيَانِهِمْ يَعْمَهُونَ ﴿١١١﴾

111．われらは、彼等が最初に之を信ぜざりし時の如く、彼等の心と目を混乱せしめ、罪を犯すままにして迷誤の中に彼等をさまよわせしむべし。(注55)

第十四項

وَلَوْ أَنَّنَا نَزَّلْنَا إِلَيْهِمُ الْمَلَائِكَةَ وَكَلَّمَهُمُ الْمَوْتَىٰ وَحَشَرْنَا عَلَيْهِمْ كُلَّ شَيْءٍ قُبُلًا مَا كَانُوا لِيُؤْمِنُوا إِلَّا أَنْ يَشَاءَ اللَّهُ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَهُمْ يَجْهَلُونَ ﴿١١٢﴾

112．たといわれらが彼等に諸天使を遣わし、死者が彼等に語りかけ、また万物を彼等の面前に集むるとも、アッラーが欲せざれば、彼等は決して信ぜざるべし。されど彼等の多くは無知なり。(注56)

وَكَذَٰلِكَ جَعَلْنَا لِكُلِّ نَبِيٍّ عَدُوًّا شَيَاطِينَ الْإِنْسِ وَالْجِنِّ يُوحِي بَعْضُهُمْ إِلَىٰ بَعْضٍ زُخْرُفَ الْقَوْلِ غُرُورًا وَلَوْ شَاءَ رَبُّكَ مَا فَعَلُوهُ فَذَرْهُمْ وَمَا يَفْتَرُونَ ﴿١١٣﴾

113．われらはどの預言者にも或る敵を設けたり。すなわち人間や妖霊の中の邪悪なる者どもなり。彼等は互に欺き合うために華美な談論を交わす―もし主が欲したりせば、彼等もそれをせざりしものを。されば虚言をもてあそぶままに、彼等を捨て置け(注57)

注54　聖句で与えられている内容以外に、節の後半部は、以下の様に表現する事ができる。それは、おつげはアッラーとともにある、そしてさらに彼らは信じないだろうが、いつそのおつげが来るか知らしめるそのものもアッラーと共にある。

注55　神が忘れずに心に留めておられる過去の不信仰者達の行為は、彼らが偶像崇拝的な礼拝をあきらめない限り、たとえおつげがあってからでも真理を受け入れる邪魔となるであろうの意。

注56　天使の役目の一つは、人間によい考えを提案し、真理へ導くことである（4章32、33節)。時には、彼らはこれらの役目を夢や幻を通して果たす。もう死んでいる正しい人々は、預言者の言い分を立証するために人々の夢の中に現われる。死んだ者が人と話すにはもう一つの方法がある。精神的に死んでしまっている人が彼らの預言者の教えにより、新しい精神的生活に促されると、彼らの精神的復活は、言わば、不信仰者達に呼びかけ、その主張の真理を立証する事となる

ここでの言葉は、地震、疫病、飢饉、戦争そして他の災いの形で、預言者の真理に対する証拠となっている。自然界の種々の事柄の考証なのである。このように自然そのものが、不信仰者に対し怒りをもっている様に見うけられる。まさにその自然力は彼らに対し反旗を翻しているのである。

注57　「人間やジン」という言葉は、クルアーンの多くの節に登場するが、これは神の創造物の2つの異なった種族ではなく、人間の内の2つの部類を示す；“人間”は大衆又は一般の人々を示し“ジン”は、しばしば一般の人々から遠ざかったままでおり、混ざろうとせず、公衆の熟視から隠れたままでいるも同然の尊大な人々を表わす。

114.　そは来世を信ぜざる者の心をそれに傾かしめ、それで喜ばしめ、今稼いでいるものをいつまでも稼がせるためなり。(注 58)

وَلِتَصْغٰٓى اِلَيْهِ اَفْـِٕدَةُ الَّذِيْنَ لَا يُؤْمِنُوْنَ بِالْاٰخِرَةِ وَلِيَرْضَوْهُ وَلِيَقْتَرِفُوْا مَا هُمْ مُّقْتَرِفُوْنَ ﴿١١٤﴾

115.　我豈アッラー以外に審判を求むべけんや。明白に説かれたる経典をお前たちに降したるはアッラーなり。われらが経典を与えたる者は、それが真理を以て主より降されたることを知る。されば汝、疑う徒輩の仲間となるなかれ。(注 59)

اَفَغَيْرَ اللّٰهِ اَبْتَغِيْ حَكَمًا وَّهُوَ الَّذِيْٓ اَنْزَلَ اِلَيْكُمُ الْكِتٰبَ مُفَصَّلًا ؕ وَالَّذِيْنَ اٰتَيْنٰهُمُ الْكِتٰبَ يَعْلَمُوْنَ اَنَّهٗ مُنَزَّلٌ مِّنْ رَّبِّكَ بِالْحَقِّ فَلَا تَكُوْنَنَّ مِنَ الْمُمْتَرِيْنَ ﴿١١٥﴾

116.　主の御言葉は、真実と公正とにおいて缺くところなし。(注 60)何人もその御言葉を変えるを得ず。彼はすべてを聴き、すべてを知り給う。(注 61)

وَتَمَّتْ كَلِمَتُ رَبِّكَ صِدْقًا وَّعَدْلًا ؕ لَا مُبَدِّلَ لِكَلِمٰتِهٖ ۚ وَهُوَ السَّمِيْعُ الْعَلِيْمُ ﴿١١٦﴾

117.　汝もし地上の多数の者に従わば、彼等は汝をアッラーの道から迷わしめん。彼等はただ憶測にまかせて、虚言をこととするにすぎず。

وَاِنْ تُطِعْ اَكْثَرَ مَنْ فِي الْاَرْضِ يُضِلُّوْكَ عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ؕ اِنْ يَّتَّبِعُوْنَ اِلَّا الظَّنَّ وَاِنْ هُمْ اِلَّا يَخْرُصُوْنَ ﴿١١٧﴾

118.　げに汝の主は、彼の道から迷い去る者を一番よく知り、また正しく導かれている者を一番よく知り給う。(注 62)

اِنَّ رَبَّكَ هُوَ اَعْلَمُ مَنْ يَّضِلُّ عَنْ سَبِيْلِهٖ ۚ وَهُوَ اَعْلَمُ بِالْمُهْتَدِيْنَ ﴿١١٨﴾

注 58　彼らは自分達の邪悪な道を持続するという事である。この言葉はさらに、彼らが自分達が、得たものの結果を経験する事も意味する。

注 59　「経典」とは、クルアーンの事をも意味している。なぜならば、前の神の聖典（聖書など）のみでなく、クルアーンそのものも聖なる預言者の真理に対する証明となっているからである。クルアーンは、近来の見解と信仰に反するにもかかわらず、クルアーンにこういう教えが詳細に物語られ、説明される対象となる公正な心をもつ人々は、その教えの正当性を認めざるを得ないような内容を包括しているのである。

注 60　メッカが陥落した時、聖なる預言者が、その頃偶像であふれていたカーバに入り、偶像をあとからあとから杖でなぐり、まさしくこの預言の「主の御言葉と真実と公正とにおいて缺くところなし」という言葉を唱えた。このように、メッカの陥落によって神の言葉は実際に満たされたという事実がここでは暗に意味されている。

注 61　神の預言、又は神の律法が神の預言者達の利益の為に働く方法或いは手段。

注 62　信仰に関しては、何が正しいか誤っているかの審判として受け入れられるのは、多数派と、少数派のどちらでもない。神のみが「絶対的に確実な審判」である。神は天のおつげを見せ、真理の道を追い求める集団を助けることによって己れの審判を下す。

119.　お前たちアッラーの神兆を信じなば、アッラーの御名がその上に唱えられたるものを食せよ。(注 63)

فَكُلُوا مِمَّا ذُكِرَ اسْمُ اللَّهِ عَلَيْهِ إِن كُنتُم بِآيَاتِهِ مُؤْمِنِينَ ﴿١١٩﴾

120.　お前たち何故にアッラーの御名がその上に唱えられたるものを食わざるか―強いられたる場合を除いて、アッラーはお前たちに食うべからざるものをすでに明示せるに非ずや？げに多くの人々が知識の不足に因する邪欲から他人を誤り導く。確かに、汝の主は、違犯者を一番よく知り給う。

وَمَا لَكُمْ أَلَّا تَأْكُلُوا مِمَّا ذُكِرَ اسْمُ اللَّهِ عَلَيْهِ وَقَدْ فَصَّلَ لَكُم مَّا حَرَّمَ عَلَيْكُمْ إِلَّا مَا اضْطُرِرْتُمْ إِلَيْهِ ۗ وَإِنَّ كَثِيرًا لَّيُضِلُّونَ بِأَهْوَائِهِم بِغَيْرِ عِلْمٍ ۗ إِنَّ رَبَّكَ هُوَ أَعْلَمُ بِالْمُعْتَدِينَ ﴿١٢٠﴾

121.　公然の罪も、内密の罪も之を避けよ。げに罪を積む者は、必ずその犯せる行為に対して応報を受けん。

وَذَرُوا ظَاهِرَ الْإِثْمِ وَبَاطِنَهُ ۚ إِنَّ الَّذِينَ يَكْسِبُونَ الْإِثْمَ سَيُجْزَوْنَ بِمَا كَانُوا يَقْتَرِفُونَ ﴿١٢١﴾

122.　アッラーの御名をその上に唱えざるものを食うなかれ。そは歴然たる違犯なり。げに悪魔たちは仲間をそそのかして、お前たちと論争せしめんとす。お前たちもし彼等に従わば、お前たちは多神教徒となるべし(注 64)。

وَلَا تَأْكُلُوا مِمَّا لَمْ يُذْكَرِ اسْمُ اللَّهِ عَلَيْهِ وَإِنَّهُ لَفِسْقٌ ۗ وَإِنَّ الشَّيَاطِينَ لَيُوحُونَ إِلَىٰ أَوْلِيَائِهِمْ لِيُجَادِلُوكُمْ ۖ وَإِنْ أَطَعْتُمُوهُمْ إِنَّكُمْ لَمُشْرِكُونَ ﴿١٢٢﴾

第十五項

123.　死せる者にわれら生を与え、而して光明を与えて人々の間を歩かしめたる者と、暗闇の中に在りてそこより出で得ざる者と、同じなりや？かくの如く不信心者どもは、己が行為を正しいものと思わしめられたり。(注 65)

أَوَمَن كَانَ مَيْتًا فَأَحْيَيْنَاهُ وَجَعَلْنَا لَهُ نُورًا يَمْشِي بِهِ فِي النَّاسِ كَمَن مَّثَلُهُ فِي الظُّلُمَاتِ لَيْسَ بِخَارِجٍ مِّنْهَا ۚ كَذَٰلِكَ زُيِّنَ لِلْكَافِرِينَ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٢٣﴾

注 63　2章 173節と 23章 52節において、よい純粋な食物を食すことは、人間の動作と直接に関係を持つことを示す。従って信仰者達は、ここに自分達の信仰を強め、自分達の不純な心を洗い清めるため、純粋で体によい食べ物を食べるようにと、ここに申しつけられている。

注 64　この節は、何故自然に死んだ動物や神の名においての祈りをもって正当に殺された動物でないものを食する事が禁止されているかを説明している。神の名を唱えるのは、動物の殺害によってうみだされがちな無慈悲の影響を取り消し、人間の心に神聖化される効果をうみだす為である。

注 65　前述の節では、人間の手によって作られたおきては、いつも欠陥がある事が指摘されていた。今、この節では、人間の手で作られた教えは、神の教えに対抗できない事が述べられている。人間の思考力のみを助けとして法を考案する者とは、決して出てこられない暗闇の中で手探りで何かを捜し求めている者のようである。

124.　またわれらは、それぞれの邑の有力者たちを罪人となし、暗闇のような中でむなしく策謀せしむ。されど彼等は自ら識らずして、ただ己れに対して策謀するのみ。

وَكَذَٰلِكَ جَعَلْنَا فِي كُلِّ قَرْيَةٍ أَكَٰبِرَ مُجْرِمِيهَا لِيَمْكُرُوا فِيهَا ۖ وَمَا يَمْكُرُونَ إِلَّا بِأَنفُسِهِمْ وَمَا يَشْعُرُونَ ﴿١٢٤﴾

125.　奇跡が起ると、彼等は云う、「アッラーの使徒たちに賜わりたるものと同じものを我等に賜わるまでは、我等は信ずる気持なし」と。アッラーは誰がその使徒たちにふさわしいかを一番よく知り給う。罪を犯せし者どもは、その策謀せることのために、いずれアッラーの御前で屈辱と厳しい懲罰を受くべし。(注 66)

وَإِذَا جَآءَتْهُمْ ءَايَةٌ قَالُوا لَن نُّؤْمِنَ حَتَّىٰ نُؤْتَىٰ مِثْلَ مَآ أُوتِيَ رُسُلُ اللَّهِ ۘ اللَّهُ أَعْلَمُ حَيْثُ يَجْعَلُ رِسَالَتَهُۥ ۗ سَيُصِيبُ الَّذِينَ أَجْرَمُوا صَغَارٌ عِندَ اللَّهِ وَعَذَابٌ شَدِيدٌۢ بِمَا كَانُوا يَمْكُرُونَ ﴿١٢٥﴾

126.　アッラーもし人を導かんとすれば、彼はイスラームのために、その人の胸を拡げ給う。されど迷わしめんとすれば、恰も天に昇らんとする者の如く、その胸を縮めせばめ給う。かくの如く、アッラーは信ぜざる者どもの上に罰を課し給う。(注 67)

فَمَن يُرِدِ اللَّهُ أَن يَهْدِيَهُۥ يَشْرَحْ صَدْرَهُۥ لِلْإِسْلَٰمِ ۖ وَمَن يُرِدْ أَن يُضِلَّهُۥ يَجْعَلْ صَدْرَهُۥ ضَيِّقًا حَرَجًا كَأَنَّمَا يَصَّعَّدُ فِي السَّمَآءِ ۚ كَذَٰلِكَ يَجْعَلُ اللَّهُ الرِّجْسَ عَلَى الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿١٢٦﴾

127.　これぞ汝の主の道、御許に真直に導く道なり。われらはこうして、反省する人々のためにさまざまなる神兆を詳細に説明せり。

وَهَٰذَا صِرَٰطُ رَبِّكَ مُسْتَقِيمًا ۗ قَدْ فَصَّلْنَا الْءَايَٰتِ لِقَوْمٍ يَذَّكَّرُونَ ﴿١٢٧﴾

128.　主の御許に、彼等のための平安な住居あり。而して主は彼等の愛護者なり、彼等のなせる報い故に。

لَهُمْ دَارُ السَّلَٰمِ عِندَ رَبِّهِمْ ۖ وَهُوَ وَلِيُّهُم بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٢٨﴾

129.　彼等を皆一斉に招集する日、主は云わん、「妖霊の徒輩よ、お前たちは多くの人間を食いものにせり」と。(注 68) 人間の中の

وَيَوْمَ يَحْشُرُهُمْ جَمِيعًا يَٰمَعْشَرَ الْجِنِّ قَدِ اسْتَكْثَرْتُم مِّنَ الْإِنسِ ۖ وَقَالَ أَوْلِيَآؤُهُم مِّنَ

注 66　アッラーの神は、彼の使いとして誰がふさわしく、又誰がふさわしくないか一番よく知っておられる。

注 67　神が迷わそうと欲した者は神のおきてを重荷とみなし、それを実行するのに肉体的な困難と精神的な苦悩を感じる。彼の胸中は、いわば急勾配の丘を登っている人のように切迫していくのである。

注 68　そのアラビア語の言葉のもつ可能性は以下の様である。(1)汝は一般の大衆の中から多くの者達を味方に引き入れ、そばに呼び、汝に従わせるようにした。(2)汝は彼らを食い物にした。(3)汝は大衆に大いなる重要性があるとみなした、すなわち、大衆が汝に従わなくなるのではという恐れから真理を受け入れなかった。

ちょうど弱者が、大いなる者への恐れから真理を受け入れないように、同様に、大いなる者も時にはその信奉者達を恐れ、彼らが彼を置き去りにするのでは、という恐れのために真理を受け入れなかったりするのである。

妖霊(ジン)の友は云わん、「主よ、我等は相互に利用し合えり。されど今、汝が我等のために定めたる期限が到来せり」と。主は云わん、「業火(ごうか)がお前たちの永劫(えいごう)の住居なり。但し、アッラーが欲すれば、その限りに非ず」と。げに汝の主は賢哲にして、すべてを知り給う。

الْإِنسِ رَبَّنَا اسْتَمْتَعَ بَعْضُنَا بِبَعْضٍ وَبَلَغْنَا أَجَلَنَا الَّذِي أَجَّلْتَ لَنَا ۚ قَالَ النَّارُ مَثْوَاكُمْ خَالِدِينَ فِيهَا إِلَّا مَا شَاءَ اللَّهُ ۗ إِنَّ رَبَّكَ حَكِيمٌ عَلِيمٌ ﴿١٢٩﴾

130．かくの如く、我等は不義者どもを互に親しくせしむ、そのなせる悪事のために。(注69)

وَكَذَٰلِكَ نُوَلِّي بَعْضَ الظَّالِمِينَ بَعْضًا بِمَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ﴿١٣٠﴾

第十六項

131．「妖霊(ジン)と人間の徒輩(やから)よ、お前たちのところには、お前たちの中より出でし使徒たちが来て、われらの神兆(しるし)をお前たちに物語り、この日の会見について警告せざりしか？」すると、彼等は云わん、「我等は自らに逆って証言す」と。要するに現世の生活が彼等を欺けり。彼等は己れに背いて、不信心者なりしことを自ら立証す。

يَا مَعْشَرَ الْجِنِّ وَالْإِنسِ أَلَمْ يَأْتِكُمْ رُسُلٌ مِّنكُمْ يَقُصُّونَ عَلَيْكُمْ آيَاتِي وَيُنذِرُونَكُمْ لِقَاءَ يَوْمِكُمْ هَٰذَا ۚ قَالُوا شَهِدْنَا عَلَىٰ أَنفُسِنَا ۖ وَغَرَّتْهُمُ الْحَيَاةُ الدُّنْيَا وَشَهِدُوا عَلَىٰ أَنفُسِهِمْ أَنَّهُمْ كَانُوا كَافِرِينَ ﴿١٣١﴾

132．諸使徒が遣わされるのは、主が警告もなしに妄(みだ)りに諸市府を滅ぼすことなきがためなり。(注70)

ذَٰلِكَ أَن لَّمْ يَكُن رَّبُّكَ مُهْلِكَ الْقُرَىٰ بِظُلْمٍ وَأَهْلُهَا غَافِلُونَ ﴿١٣٢﴾

133．人はすべて、その行為に応じて段階あり。主は彼等のなせることを等閑(なおざり)にせず。

وَلِكُلٍّ دَرَجَاتٌ مِّمَّا عَمِلُوا ۚ وَمَا رَبُّكَ بِغَافِلٍ عَمَّا يَعْمَلُونَ ﴿١٣٣﴾

134．主は自立自足し、慈悲に満ちあふれ給う。彼もし欲しなば、お前たちを追い払い、欲するものをお前たちの継承者たらしむ、恰も別の民の子孫よりお前たちを出現せしめたる如く。

وَرَبُّكَ الْغَنِيُّ ذُو الرَّحْمَةِ ۚ إِن يَشَأْ يُذْهِبْكُمْ وَيَسْتَخْلِفْ مِن بَعْدِكُم مَّا يَشَاءُ كَمَا أَنشَأَكُم مِّن ذُرِّيَّةِ قَوْمٍ آخَرِينَ ﴿١٣٤﴾

注69　この言葉は、そしてこのように邪悪な者のいくらかを他の邪悪なもの達の上におくとの意味を併せもつ。

注70　神は警告者をたててさし迫った災いに対し、まず最初に人々に警告しない限りは、決して一般的な災難を下されない。災難はここでは、地震、悲惨な戦争、伝染病、等の全ての人を襲う一般的な災害を意味する。

135.　お前たちに約束されることは、必ず実現す。されどお前たちは、それを阻止し得ず。

إِنَّ مَا تُوعَدُونَ لَآتٍ وَمَا أَنتُم بِمُعْجِزِينَ ﴿١٣٥﴾

136.　云え、「人々よ、お前たちの仕方で行え。我もまた我が務めを行う。やがてお前たちは、終(つい)の報奨の住居が誰れのものとなるかを知らん」と。げに不義なす徒輩(やから)は決して栄えず。(注 71)

قُلْ يَا قَوْمِ اعْمَلُوا عَلَىٰ مَكَانَتِكُمْ إِنِّي عَامِلٌ فَسَوْفَ تَعْلَمُونَ مَن تَكُونُ لَهُ عَاقِبَةُ الدَّارِ إِنَّهُ لَا يُفْلِحُ الظَّالِمُونَ ﴿١٣٦﴾

137.　彼等はアッラーが創れる穀物や家畜の一部を割いて、「これをアッラーに」と自分勝手にきめこみ、「而(しか)してこれは我等の偶像神に」などと云う。彼等の偶像神に供えたるものはアッラーに達せず、アッラーに供えたるものは彼等の偶像神に達す。彼等の判断は悪し。(注 72)

وَجَعَلُوا لِلَّهِ مِمَّا ذَرَأَ مِنَ الْحَرْثِ وَالْأَنْعَامِ نَصِيبًا فَقَالُوا هَٰذَا لِلَّهِ بِزَعْمِهِمْ وَهَٰذَا لِشُرَكَائِنَا فَمَا كَانَ لِشُرَكَائِهِمْ فَلَا يَصِلُ إِلَى اللَّهِ وَمَا كَانَ لِلَّهِ فَهُوَ يَصِلُ إِلَىٰ شُرَكَائِهِمْ سَاءَ مَا يَحْكُمُونَ ﴿١٣٧﴾

138.　同様にまた彼等の神々（注 73）は、多くの多神教徒に自分たちの子女(こどもら)を殺すを善しと思わしめたり。こは神々が彼等を滅ぼし、その宗教を混乱させんがためなり。されど、もしアッラー欲したりせば、彼等もこれをせざりしなり。されば彼等を、その捏造(ねつぞう)せるものとともに捨て置け。(注 74)

وَكَذَٰلِكَ زَيَّنَ لِكَثِيرٍ مِّنَ الْمُشْرِكِينَ قَتْلَ أَوْلَادِهِمْ شُرَكَاؤُهُمْ لِيُرْدُوهُمْ وَلِيَلْبِسُوا عَلَيْهِمْ دِينَهُمْ وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ مَا فَعَلُوهُ فَذَرْهُمْ وَمَا يَفْتَرُونَ ﴿١٣٨﴾

139.　彼等はまた、「これこれの家畜と穀物は禁ぜられている。(注 75) 何人(なんびと)も彼等の許しな

وَقَالُوا هَٰذِهِ أَنْعَامٌ وَحَرْثٌ حِجْرٌ لَّا يَطْعَمُهَا إِلَّا

注 71　この言葉はさらに、(1)汝の方法に基づいて行動せよ　(2)どんなことでもやるならやってみよという意味をもつ。この節は偶像崇拝的なメッカの人々にどうでも勝手にして、イスラム教を絶滅させ、当時の小さなイスラム社会を破壊するために自分達の力と方策の最大限を尽くす努力をする様挑戦をしているが、彼らのふらちな計画と努力は全く失敗に終わるのである。

注 72　これはアラブ人の偶像崇拝的な習慣に関連している。彼らは、自分達の土地の産物を「神」と彼らの神々の間で分ける。もし彼らの神々のためにとっておかれる分量が他の目的に使われたならば、「神」のためにとっておいた分は、彼らの神々の名において慈悲（慈善）心として手放されるが、もし「神」のためにとっておいたものが他の目的に使われた時は、神々のためにとっておいた分量が、神に譲られることはなかったのである。

注 73　ここでいう「彼らの神々」とは預言者や占星家等の聖職者を意味する。

注 74　ここでは、自然の災害を防ぐために、女の子を殺害したり生きたまま埋めたり、彼らの神々の供物台に、いけにえとして捧げたりという、特定のアラブの部族が行う最も残虐な慣例について言及している。又は何人か特定の子供の数がいれば一人を神のいけにえとして捧げるという彼らの迷信的な祈願を表わしているともいえる。

注 75　「禁じられた穀物」というのは、偶像に捧げられた、収穫を得る為の畑という意味である。これらの穀物を使えるのは、彼らの世話をする聖職者のみである。

しに食すべからず」と自分勝手にきめこんで云う。而(しか)してその背が禁じられたる家畜（注 76）や、アッラーの御名(みな)をその上に唱えざる家畜(注 77)を作る。これすべてアッラーに対して虚偽の捏造(ねつぞう)なり。そのうちアッラーは、彼等の捏造(ねつぞう)せることに返報すべし。

مَن نَّشَآءُ بِزَعْمِهِمْ وَأَنْعَٰمٌ حُرِّمَتْ ظُهُورُهَا وَأَنْعَٰمٌ لَّا يَذْكُرُونَ ٱسْمَ ٱللَّهِ عَلَيْهَا ٱفْتِرَآءً عَلَيْهِ سَيَجْزِيهِم بِمَا كَانُوا۟ يَفْتَرُونَ ﴿١٣٩﴾

140．彼等はまた､｢これこれの家畜の胎内にあるものは、もっぱら男子だけに限られ、妻女には禁ぜらる。但し死産の場合はみんな一緒に相伴(しょうばん)することを得(う)」などと云う。アッラーはそのうち、彼等の独断に対して応報すべし。げにアッラーは賢哲にして、すべてを知り給う。(注 78)

وَقَالُوا۟ مَا فِى بُطُونِ هَٰذِهِ ٱلْأَنْعَٰمِ خَالِصَةٌ لِّذُكُورِنَا وَمُحَرَّمٌ عَلَىٰٓ أَزْوَٰجِنَا وَإِن يَكُن مَّيْتَةً فَهُمْ فِيهِ شُرَكَآءُ سَيَجْزِيهِمْ وَصْفَهُمْ إِنَّهُۥ حَكِيمٌ عَلِيمٌ ﴿١٤٠﴾

141．無知ゆえに、愚かにも自分の子女(こどもら)を殺す者、またアッラーに対して嘘をつき、アッラーが彼等に与えたるものを禁ずる者は、本当に失敗者なり。彼等は紛れもなく迷誤に陥りし者にして、正しく導かれることなし。

قَدْ خَسِرَ ٱلَّذِينَ قَتَلُوٓا۟ أَوْلَٰدَهُمْ سَفَهًۢا بِغَيْرِ عِلْمٍ وَحَرَّمُوا۟ مَا رَزَقَهُمُ ٱللَّهُ ٱفْتِرَآءً عَلَى ٱللَّهِ قَدْ ضَلُّوا۟ وَمَا كَانُوا۟ مُهْتَدِينَ ﴿١٤١﴾

第十七項

142．棚を備えた果樹園、棚のない果樹園、棗椰子(なつめやし)、さまざまなる作物を産する畑、橄欖(かんらん)、柘榴(ざくろ)、その他似たるもの、似ざるもの、これらすべてを生じしめたるは、アッラーなり。実を結ばば、食べよ。されど収穫の日には税を納め、浪費するなかれ。げにアッラーは浪費する者を好まず。(注 79)

وَهُوَ ٱلَّذِىٓ أَنشَأَ جَنَّٰتٍ مَّعْرُوشَٰتٍ وَغَيْرَ مَعْرُوشَٰتٍ وَٱلنَّخْلَ وَٱلزَّرْعَ مُخْتَلِفًا أُكُلُهُۥ وَٱلزَّيْتُونَ وَٱلرُّمَّانَ مُتَشَٰبِهًا وَغَيْرَ مُتَشَٰبِهٍ كُلُوا۟ مِن ثَمَرِهِۦٓ إِذَآ أَثْمَرَ وَءَاتُوا۟ حَقَّهُۥ يَوْمَ حَصَادِهِۦ وَلَا تُسْرِفُوٓا۟ إِنَّهُۥ لَا يُحِبُّ ٱلْمُسْرِفِينَ ﴿١٤٢﴾

注 76　5章 104 節で述べられている牛の事である。それらは、乗り物としても、荷物運搬用としても使われなかった。

注 77　メッカの偶像崇拝者達の「彼らの神々」に奉納された牛の事をさす。殺害の時に、神の名を述べたことに関してはここでは何も言及されていない。

注 78　アラブ人のもう一つの馬鹿げた慣習を指す。

注 79　前述の節では、偶像崇拝者のアラブ人が自分達のために考案した、偶像崇拝的な慣習、馬鹿げた慣例やおきてが言及されており、この節になってから、神の律法が示されている。

143.　アッラーは家畜を、或るものは荷を負うべく、また或るものは食用にと創りたり。アッラーがお前たちに賜えるものを食し、悪魔の足跡に追随するなかれ。げに悪魔はお前たちの公然の敵なり。(注 80)

وَمِنَ الْأَنْعَامِ حَمُولَةً وَفَرْشًا ۚ كُلُوا مِمَّا رَزَقَكُمُ اللَّهُ وَلَا تَتَّبِعُوا خُطُوَاتِ الشَّيْطَانِ ۚ إِنَّهُ لَكُمْ عَدُوٌّ مُبِينٌ ﴿١٤٣﴾

144.　アッラーは八隻を創りたり。すなわち羊が二対、山羊が二対—云え、「アッラーが禁じたるは、牡二匹なのか、それとも牝二匹なのか、はたまた胎内にある牝二匹なのか？　お前たちの云うことが真実ならば、確実に我に告げよ」と。

ثَمَانِيَةَ أَزْوَاجٍ ۖ مِنَ الضَّأْنِ اثْنَيْنِ وَمِنَ الْمَعْزِ اثْنَيْنِ ۗ قُلْ آلذَّكَرَيْنِ حَرَّمَ أَمِ الْأُنْثَيَيْنِ أَمَّا اشْتَمَلَتْ عَلَيْهِ أَرْحَامُ الْأُنْثَيَيْنِ ۖ نَبِّئُونِي بِعِلْمٍ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿١٤٤﴾

145.　駱駝が二頭、牡牛が二頭。云え、「アッラーが禁じたるは、牡二頭なのか、牝二頭なのか、はたまた胎内にある牝二頭なのか？　アッラーが之を命じたる時、お前たちはその場に在りしか？」と。アッラーに対して嘘をつき、知識もなしに人々を迷わす者より不義なる奴輩はあろうか？　アッラーは不義なる奴輩を導かず。(注 81)

وَمِنَ الْإِبِلِ اثْنَيْنِ وَمِنَ الْبَقَرِ اثْنَيْنِ ۗ قُلْ آلذَّكَرَيْنِ حَرَّمَ أَمِ الْأُنْثَيَيْنِ أَمَّا اشْتَمَلَتْ عَلَيْهِ أَرْحَامُ الْأُنْثَيَيْنِ ۖ أَمْ كُنْتُمْ شُهَدَاءَ إِذْ وَصَّاكُمُ اللَّهُ بِهَٰذَا ۚ فَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرَىٰ عَلَى اللَّهِ كَذِبًا لِيُضِلَّ النَّاسَ بِغَيْرِ عِلْمٍ ۗ إِنَّ اللَّهَ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظَّالِمِينَ ﴿١٤٥﴾ ع

146.　云え、「我に啓示されたるものの中で、食べたいのに食べることを禁じられたものを我は知らず、死肉、流れ出る血、豚の肉—これは不浄なるが故に—それにアッラー以外の名が唱えられる故に汚れたるものを除き。されど、違犯の意志なく、また規則にそむくに非ず、必要に迫られやむを得ざりし場合は、汝の主は寛大にして、情け深くまします」と。(注 82)

قُلْ لَا أَجِدُ فِي مَا أُوحِيَ إِلَيَّ مُحَرَّمًا عَلَىٰ طَاعِمٍ يَطْعَمُهُ إِلَّا أَنْ يَكُونَ مَيْتَةً أَوْ دَمًا مَسْفُوحًا أَوْ لَحْمَ خِنْزِيرٍ فَإِنَّهُ رِجْسٌ أَوْ فِسْقًا أُهِلَّ لِغَيْرِ اللَّهِ بِهِ ۚ فَمَنِ اضْطُرَّ غَيْرَ بَاغٍ وَلَا عَادٍ فَإِنَّ رَبَّكَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿١٤٦﴾

注 80　その第一の意味以外に、この節は、さらに、おきてにかなったものを食することは、悪魔の攻撃から自らを守る手段であることを示唆している。

注 81　偶像崇拝者達は、もし神が牛とらくだを食べる事を禁じたと主張するなら、神がそれを伝えたという時に居あわせたのか、と尋ねられる。彼らは、牛とらくだは本当に禁止されていたことを示す神の権威を提出する事を要求されており、それは何故ならば、牛やらくだの肉を食べることは、いくらかの、聖書重視の人々—牛はヒンズー教徒達が、らくだは一部のユダヤ人達—にとっては禁止されている事とみなされているからである。

注 82　この節は、許される食物と禁止されている食物に関して、偶像崇拝者のアラブ人達によって作られた法は、何の知識も理由も基盤もなく、随意的である；それにひきかえ、イスラム教徒によって規定された食物

147.　されどユダヤ教徒には、われらは爪牙を持つすべての動物を禁じたり。またわれらは、背中や腸や骨に付きたるものを除いて、(注 83) 牛や羊や山羊の脂を禁じたり。これは彼等の違犯に対する応報なり。(注 84) げにわれらは真実を語る。

وَعَلَى الَّذِينَ هَادُوا حَرَّمْنَا كُلَّ ذِي ظُفُرٍ ۚ وَمِنَ الْبَقَرِ وَالْغَنَمِ حَرَّمْنَا عَلَيْهِمْ شُحُومَهُمَا إِلَّا مَا حَمَلَتْ ظُهُورُهُمَا أَوِ الْحَوَايَا أَوْ مَا اخْتَلَطَ بِعَظْمٍ ۚ ذَٰلِكَ جَزَيْنَاهُم بِبَغْيِهِمْ ۖ وَإِنَّا لَصَادِقُونَ ﴿١٤٧﴾

148.　彼等もし汝を嘘つきと責めなば、云え、「主は一切を抱擁する慈悲を持ち給う。されど罪深い民は、主の激怒を押し戻すことし得ざるべし」と。

فَإِن كَذَّبُوكَ فَقُل رَّبُّكُمْ ذُو رَحْمَةٍ وَاسِعَةٍ ۚ وَلَا يُرَدُّ بَأْسُهُ عَنِ الْقَوْمِ الْمُجْرِمِينَ ﴿١٤٨﴾

149.　アッラーに他神を配する彼等は云わん、「アッラーもし欲したりせば、我等も我等の父祖も、アッラーに他神を配することはせず、また何も禁忌を作らざりしならん」と。同様に、彼等以前の者も、われらの激怒を味わうまでは、神の使徒たちを嘘つきよばわりせり。云え、「お前たち確たる知識を有するか？有るならそれをわれらに示せ。お前たちはただ憶測に従い、虚言を事とするにすぎず」と。

سَيَقُولُ الَّذِينَ أَشْرَكُوا لَوْ شَاءَ اللَّهُ مَا أَشْرَكْنَا وَلَا آبَاؤُنَا وَلَا حَرَّمْنَا مِن شَيْءٍ ۚ كَذَٰلِكَ كَذَّبَ الَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ حَتَّىٰ ذَاقُوا بَأْسَنَا ۗ قُلْ هَلْ عِندَكُم مِّنْ عِلْمٍ فَتُخْرِجُوهُ لَنَا ۖ إِن تَتَّبِعُونَ إِلَّا الظَّنَّ وَإِنْ أَنتُمْ إِلَّا تَخْرُصُونَ ﴿١٤٩﴾

150.　云え、「最後の論拠はアッラーのものなり。アッラーもし欲したりせば、アッラーはお前たちを皆導きたりしならん」と。(注 85)

قُلْ فَلِلَّهِ الْحُجَّةُ الْبَالِغَةُ ۖ فَلَوْ شَاءَ لَهَدَاكُمْ أَجْمَعِينَ ﴿١٥٠﴾

の規律は知恵と理由に基づいている、という事を意味している。根本的に、イスラム教（徒）は４つのものを禁止している―３つはそれらが不浄で不潔であることから、そして１つはそれが神聖を汚し信心深くないということからである。最初に述べた３つのものは、腐肉、動物が殺害された時、又は傷を負った時に流れ出る血、そして豚肉である。

この節で述べられている様に、これら全ては不浄で不潔すなわち、それらは人間の肉体と精神の両方の健康にとって有害である。ここで注意すべき事は、不浄という言葉は、最初に述べられた３つの禁止さている物とともに読みとる必要がある。４つ目の禁止されているものは、アッラー以外のものの名をとなえて加工された食べものである。それは神聖を汚す、すなわち、神に対する不従順、反抗のもとなのである。そういう食物を食す事は、人間の精神面の健康を害し、彼の神に対する愛を自ら失うこととなっていく。

注 83　　レビ記７章23節参照。タルムードの中では、あばらについている脂肪に関しては、例外とされている。

注 84　　これらのものは、ユダヤ人の人達の罪に対する罰として禁止された。

注 85　　もし神が彼の人々に「神の意」に従う様強制するならば、神は確実に、誤った事ではなく、正しいことを強制するはずである。しかし神の無限の知恵の中で、神は人間を自由な取次人とした。神は人間に、何が正しく、何が誤っているかを説明し、そしてどちらでも、選びたい道に進める様、選択を自由にまかせた。

151. 云え、「アッラーがこれを禁じたり、と立証する証人を出せ」と。たとい彼等証言するとも、汝は彼等とともに証言するなかれ。またわれらの神兆を虚偽なりとする者ども並びに来世を信ぜず、主に同位者を配する者どもの邪悪な性向に追随するなかれ。

قُلْ هَلُمَّ شُهَدَاءَكُمُ الَّذِينَ يَشْهَدُونَ أَنَّ اللَّهَ حَرَّمَ هَٰذَا ۖ فَإِنْ شَهِدُوا فَلَا تَشْهَدْ مَعَهُمْ ۚ وَلَا تَتَّبِعْ أَهْوَاءَ الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا وَالَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ وَهُمْ بِرَبِّهِمْ يَعْدِلُونَ ﴿١٥١﴾ ع ١٨

第十九項

152. 云え、「来れ、我は主が禁じたることをお前たちに復誦せん。同位者として如何なるものも主に配するなかれ。両親に親切を尽くせ。貧困を恐れて子女を殺すなかれ―お前たちも子女もわれらが養ってやるほどに―外に現われたることでも、心の内に隠されたることでも、不潔な行為に近づくなかれ。また正義のため以外は、アッラーが禁じたる殺害をするなかれ。こはアッラーがお前たちを理解せしめんとして、お前たちに命じたるものなり。(注 86)

قُلْ تَعَالَوْا أَتْلُ مَا حَرَّمَ رَبُّكُمْ عَلَيْكُمْ ۖ أَلَّا تُشْرِكُوا بِهِ شَيْئًا ۖ وَبِالْوَالِدَيْنِ إِحْسَانًا ۖ وَلَا تَقْتُلُوا أَوْلَادَكُمْ مِنْ إِمْلَاقٍ ۖ نَحْنُ نَرْزُقُكُمْ وَإِيَّاهُمْ ۖ وَلَا تَقْرَبُوا الْفَوَاحِشَ مَا ظَهَرَ مِنْهَا وَمَا بَطَنَ ۖ وَلَا تَقْتُلُوا النَّفْسَ الَّتِي حَرَّمَ اللَّهُ إِلَّا بِالْحَقِّ ۚ ذَٰلِكُمْ وَصَّاكُمْ بِهِ لَعَلَّكُمْ تَعْقِلُونَ ﴿١٥٢﴾

153. また孤児の財産は最善の管理のため以外は、彼が成年に達するまで、近寄るべからず、また、枡目は十分にし、目方は公正にせよ。(注 87) われらは何人にもその能力以上のものは課せず。意見を述べる時は、たとい近親に関係せることでも公平を守れ。またアッラーとの契約を全うせよ。こはアッラーがお前たちを注意させるためにお前たちに命じたるものなり」と。(注 88)

وَلَا تَقْرَبُوا مَالَ الْيَتِيمِ إِلَّا بِالَّتِي هِيَ أَحْسَنُ حَتَّىٰ يَبْلُغَ أَشُدَّهُ ۖ وَأَوْفُوا الْكَيْلَ وَالْمِيزَانَ بِالْقِسْطِ ۖ لَا نُكَلِّفُ نَفْسًا إِلَّا وُسْعَهَا ۖ وَإِذَا قُلْتُمْ فَاعْدِلُوا وَلَوْ كَانَ ذَا قُرْبَىٰ ۖ وَبِعَهْدِ اللَّهِ أَوْفُوا ۚ ذَٰلِكُمْ وَصَّاكُمْ بِهِ لَعَلَّكُمْ تَذَكَّرُونَ ﴿١٥٣﴾

注 86　「禁止」という言葉にあとに続く訓令は、神が実行する様命令している事である。一方では、「禁止」という言葉を使うことによって、また一方で、明確に定めた戒律をすぐ後に続ける事により、この節は、それ自体に、直接的な命令と、その逆の両方が組み合わされている。この節は、更に違った風に、解釈することも可能である。最初の文は、「主が禁じたること」という語句で終わり、次の文章が、この場合'それはあなたに申しつけられている'という意味をもつ言葉で始まっていると、とらえられるべきである。そうすると、この節は以下の様に読みとられる。「さあ、あなた方の主が禁止したものを私が語ろう。神のパートナーとして、関連づけるものは、何でもいいというわけではない事が申しつけられており……」

注 87　生命の保護についての訓令の次に、財産を守るための戒律について述べられている。

注 88　言葉を守るための訓令のあとに、心を守るための訓令があり、それは、「アッラーとの契約を全うせよ」という語句の中に含蓄されている。なぜならば、以前の訓令が人間との契約に関係していたのに反し、ここでの訓令は、神との契約に関係しているからである。

154.　また、云え、「これこそわが直き道なり。されば之に従え。お前たちをアッラーの道から離れしむる如き他の道に従うなかれ。こはアッラーがお前たちをして悪に対して身を守らしめんがために、お前たちに命じたるものなり」と。

وَأَنَّ هَٰذَا صِرَاطِي مُسْتَقِيمًا فَاتَّبِعُوهُ ۖ وَلَا تَتَّبِعُوا السُّبُلَ فَتَفَرَّقَ بِكُمْ عَنْ سَبِيلِهِ ۚ ذَٰلِكُمْ وَصَّاكُمْ بِهِ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُونَ ﴿١٥٤﴾

155.　更にわれらがモーゼに経典を与えたるは—善行をなせる者に対する恩恵の完遂であり、一切の解明であり、嚮導にして慈悲なり—彼等は恐らく主との対面を信ぜん。

ثُمَّ آتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ تَمَامًا عَلَى الَّذِي أَحْسَنَ وَتَفْصِيلًا لِكُلِّ شَيْءٍ وَهُدًى وَرَحْمَةً لَعَلَّهُمْ بِلِقَاءِ رَبِّهِمْ يُؤْمِنُونَ ﴿١٥٥﴾ ع ١٩

第二十項

156.　こはわれらが降せる有難い経典なり。されば之に従い、罪から身を守れ。さすればお前たち慈悲に浴せん。

وَهَٰذَا كِتَابٌ أَنْزَلْنَاهُ مُبَارَكٌ فَاتَّبِعُوهُ وَاتَّقُوا لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ﴿١٥٦﴾

157.　お前たちに、「経典は我等以前にただ二つの宗派にのみ降されたり。されど我等は彼等の読めるものを知らざりき」と、云わしめざるために。(注 89)

أَنْ تَقُولُوا إِنَّمَا أُنْزِلَ الْكِتَابُ عَلَىٰ طَائِفَتَيْنِ مِنْ قَبْلِنَا وَإِنْ كُنَّا عَنْ دِرَاسَتِهِمْ لَغَافِلِينَ ﴿١٥٧﴾

158.　またお前たちに、「もし我等に経典が降されていなば、我等は必ず彼等より善く導かれたるなり」と、云わしめざるために。今主よりの明証が、すなわち嚮導と慈悲がお前たちのところへ来れり。さればアッラーの神兆を拒否し、それより背き去る者、これ以上の不義なる者は誰か？われらは、われらの神兆を忌避する者どもには、その忌避せることのために、恐ろしい懲罰を以て報ゆべし。

أَوْ تَقُولُوا لَوْ أَنَّا أُنْزِلَ عَلَيْنَا الْكِتَابُ لَكُنَّا أَهْدَىٰ مِنْهُمْ ۚ فَقَدْ جَاءَكُمْ بَيِّنَةٌ مِنْ رَبِّكُمْ وَهُدًى وَرَحْمَةٌ ۚ فَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنْ كَذَّبَ بِآيَاتِ اللَّهِ وَصَدَفَ عَنْهَا ۗ سَنَجْزِي الَّذِينَ يَصْدِفُونَ عَنْ آيَاتِنَا سُوءَ الْعَذَابِ بِمَا كَانُوا يَصْدِفُونَ ﴿١٥٨﴾

159.　彼等はただ、諸天使が彼等のところへ現われるを待ち、(注 90)主が来臨する (注 91)

هَلْ يَنْظُرُونَ إِلَّا أَنْ تَأْتِيَهُمُ الْمَلَائِكَةُ أَوْ يَأْتِيَ رَبُّكَ أَوْ يَأْتِيَ بَعْضُ آيَاتِ رَبِّكَ ۗ يَوْمَ يَأْتِي بَعْضُ

注 89　この節で述べられている「二つの宗派」は、モーゼの5書が与えられ、アラビアの北の地域から、その宗教が起こったユダヤ人と（ゾロアスター教の経典である）ゼンドアベスタが与えられ、アラビアの東側に住んでいたゾロアスター教徒のことだとも言えるし、又は、アラビアに住んでいて、アラブ人が出会った、二派の人々である、ユダヤ人とキリスト教徒の事をさしているのかもしれない。

注 90　ここでは、「天使が現われる」は、戦争を使った、人間への罰を意味する。何故ならば、イスラム教徒とその敵との間で行われた戦いに関連して、天使の到来が、述べられているからである（3章 125節、126節、8章10節）。

を待ち、また主の何か特別なる奇蹟が起るを待つのみ。而(しか)して、主の何かの奇蹟が起る（注 92）日には、それまで信じもせず、信仰によって善行を積(つ)まざる者が信じても、益するところなし。云え、「待て汝等、われらもまた待つ」と。

ءَايَٰتِ رَبِّكَ لَا يَنفَعُ نَفْسًا إِيمَٰنُهَا لَمْ تَكُنْ ءَامَنَتْ مِن قَبْلُ أَوْ كَسَبَتْ فِىٓ إِيمَٰنِهَا خَيْرًا ۗ قُلِ ٱنتَظِرُوٓا۟ إِنَّا مُنتَظِرُونَ ﴿١٥٨﴾

160．己が宗教を分裂させて、（注 93）宗派となせる者どもに対して、汝はいささかも関わりなし。げに彼等のことはアッラーのもとにあり。やがてアッラーは彼等に、そのなせることを告げ知らすべし。

إِنَّ ٱلَّذِينَ فَرَّقُوا۟ دِينَهُمْ وَكَانُوا۟ شِيَعًا لَّسْتَ مِنْهُمْ فِى شَىْءٍ ۚ إِنَّمَآ أَمْرُهُمْ إِلَى ٱللَّهِ ثُمَّ يُنَبِّئُهُم بِمَا كَانُوا۟ يَفْعَلُونَ ﴿١٦٠﴾

161．一善を行う者は、之(これ)に十倍する報奨を受くべし。されど一悪を行えば、それに等しき応報(むくい)を受けるのみ。彼等は不当に遇せられることなかるべし。（注 94）

مَن جَآءَ بِٱلْحَسَنَةِ فَلَهُۥ عَشْرُ أَمْثَالِهَا ۖ وَمَن جَآءَ بِٱلسَّيِّئَةِ فَلَا يُجْزَىٰٓ إِلَّا مِثْلَهَا وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ﴿١٦١﴾

162．云え、「主は我を直き道に導き給えり一正しい宗教(おしえ)、高潔なアブラハムの宗教(おしえ)に。アブラハムは、アッラーに他神(あだしがみ)を併(あわ)せ祀る徒輩(やから)に非ざりき」と。

قُلْ إِنَّنِى هَدَىٰنِى رَبِّىٓ إِلَىٰ صِرَٰطٍ مُّسْتَقِيمٍ دِينًا قِيَمًا مِّلَّةَ إِبْرَٰهِيمَ حَنِيفًا ۚ وَمَا كَانَ مِنَ ٱلْمُشْرِكِينَ ﴿١٦٢﴾

163．云え、「我が礼拝、我が献身、我が生も死も、挙(あ)げて万物の主なるアッラーのためなり。（注 95）

قُلْ إِنَّ صَلَاتِى وَنُسُكِى وَمَحْيَاىَ وَمَمَاتِى لِلَّهِ رَبِّ ٱلْعَٰلَمِينَ ﴿١٦٣﴾

164．主には如何なる同位者もなし。而して我はかく命ぜられたり、我は服従帰依する人々の魁(さきがけ)なり」と。

لَا شَرِيكَ لَهُۥ ۖ وَبِذَٰلِكَ أُمِرْتُ وَأَنَا۠ أَوَّلُ ٱلْمُسْلِمِينَ ﴿١٦٤﴾

注 91　「主が来臨する」という表現は、真実の敵の完全な破滅を意味する。

注 92　「奇蹟が起こる」とは、飢饉、疫病、災害の様な、この世の罰を意味する。

注 93　「己が宗教を分裂させる」という語句は、人が自分の気まぐれや空想に従うようになると、違いというものが人間同士に生じ、考え方の合意が消え失せることを示している。

注 94　よい行為は、10 倍にも、又それ以上にも増えていく、よい種のようであるが（2 章 262 節、4 章 4 節、10 章 27・28 節及びディルマディの断食書）、それに反して悪は、悪い種のように 1 つのままである。

注 95　祈り、犠牲、生と死は人間の行動の全ての分野にかかわり、そして聖なる預言者は、彼の人生の全ての局面は、神に捧げられていると宣言する様に命じられていた。彼の祈りの全ては、神に捧げられ、彼の犠牲

165.　云え、「我豈(あに)万物の主にましますアッラーの外に主を求むべけんや？」と。何人(なんぴと)も己れ自身に稼ぐのみ。他人の荷物まで背負うことなし。而(しか)してお前たちは、やがて主に召されるべし。その時主は、お前たちが意見を異にせる問題について、お前たちに告げ知らすべし。(注 96)

قُلْ أَغَيْرَ اللّٰهِ أَبْغِي رَبًّا وَّهُوَ رَبُّ كُلِّ شَيْءٍ ۚ وَلَا تَكْسِبُ
كُلُّ نَفْسٍ إِلَّا عَلَيْهَا ۚ وَلَا تَزِرُ وَازِرَةٌ وِّزْرَ أُخْرٰى ۚ
ثُمَّ إِلٰى رَبِّكُمْ مَّرْجِعُكُمْ فَيُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ فِيْهِ
تَخْتَلِفُوْنَ ﴿١٦٥﴾

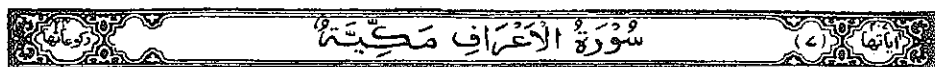
166.　お前たちをして地上に於ける代理者となし、お前たちの或る者の位階を他の者よりも高からしめたるは、アッラーなり。そは彼がお前たちに与えたるものによって、お前たちを試みんがためなり。げに主は懲罰に迅速なれど、また寛大にして、情け深くまします。(注 97)

وَهُوَ الَّذِيْ جَعَلَكُمْ خَلٰٓئِفَ الْأَرْضِ وَرَفَعَ بَعْضَكُمْ
فَوْقَ بَعْضٍ دَرَجٰتٍ لِّيَبْلُوَكُمْ فِيْ مَآ اٰتٰىكُمْ ۚ إِنَّ رَبَّكَ
سَرِيْعُ الْعِقَابِ ۖ وَإِنَّهٗ لَغَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿١٦٦﴾

も全て、神のためのものであり、彼の人生の全ては神への奉仕であり、そしてもし、宗教的原因から、彼が死を求める事になろうとも、それもやはり神の喜びを得んがための行為という事に他ならない。

注 96　この節は、17 章 16 節、53 章 40、41 節と同様、キリストの贖罪の教義への激しい否認を含み、誰もが、自らの十字架を背負い、己れの行動に責任をもたなければならないという事実に断固として注目させている。

注 97　この節は、イスラム教徒に対する、勧告と警告の両方から同時に構成されている。彼らは、力と権威を授けられ、国事を統制する義務を、今まさにゆだねられると告げられている。彼らは、創造主に対し、自分達の義務遂行の結果を明らかにしなければならないので、責任を公正と正義によって果たさなければならない。

سُوْرَةُ الْأَعْرَافِ مَكِّيَّةٌ

アル・アラーフ
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2. アリフ・ラーム・ミーム・サード。(注1)

الٓمّٓصٓ ②

3. こは汝に啓示されたる経典なり、汝が之によって警告を与え、また信徒たちへの訓戒たらしめんがためにーさればこれがために汝の胸を狭めるなかれ。(注2)

كِتٰبٌ اُنْزِلَ اِلَيْكَ فَلَا يَكُنْ فِيْ صَدْرِكَ حَرَجٌ مِّنْهُ لِتُنْذِرَ بِهٖ وَذِكْرٰى لِلْمُؤْمِنِيْنَ ③

4. 主よりお前たちに降されたるものに従い、主以外の守護者に追随するなかれ。お前たちはめったに訓戒に従わず。

اِتَّبِعُوْا مَآ اُنْزِلَ اِلَيْكُمْ مِّنْ رَّبِّكُمْ وَلَا تَتَّبِعُوْا مِنْ دُوْنِهٖٓ اَوْلِيَآءَ ؕ قَلِيْلًا مَّا تَذَكَّرُوْنَ ④

5. われらは如何に多くの邑を滅ぼせることか!われらの懲罰は夜間に、また彼等が昼寝の最中に降れり。(注3)

وَكَمْ مِّنْ قَرْيَةٍ اَهْلَكْنٰهَا فَجَآءَهَا بَاْسُنَا بَيَاتًا اَوْ هُمْ قَآئِلُوْنَ ⑤

6. 而してわれらの懲罰が彼等に降れる時、彼等はただ、「げに我等は不義者なりき!」と叫喚するのみなりき。(注4)

فَمَا كَانَ دَعْوٰىهُمْ اِذْ جَآءَهُمْ بَاْسُنَآ اِلَّآ اَنْ قَالُوْٓا اِنَّا كُنَّا ظٰلِمِيْنَ ⑥

7. われらは、必ず使徒を遣わされたる人々を尋問し、また使徒たちも必ず尋問すべし。(注5)

فَلَنَسْــَٔلَنَّ الَّذِيْنَ اُرْسِلَ اِلَيْهِمْ وَلَنَسْــَٔلَنَّ الْمُرْسَلِيْنَ ⑦

注1 我は全知全能にて、真理なり。

注2 この節は、特にモハッマドのみでなくすべての信徒に向けて話されている。

注3 特に夜間(明け方)と真昼が、たいてい神の罰が下る時間であるとここでは述べている。この時間は人々が大抵眠っているか、ぼんやりしている時間である。

注4 罰が下された時、確固とした無神論者さえも、時として神の助けを求めて叫び声をあげるが、それは、こうした恐ろしい時には自分自身の無力さばかりでなく、より高い存在の強力な力を実感するからである。

注5 すべての人々は、どんな形であれ神に対して責任を負うという原則をこの節では、述べている。人々はすべて、神の使者をどのように受け入れたかを問われるであろう。又、使者達は神の言葉をいかに伝道し、それに対する民衆の反応がどうであったかを問われるであろう。

8．而して、われらは彼等に、その所業を確実な知識にもとづいて話さん。なんとなれば、われらは決して不在なることなし。

فَلَنَقُصَّنَّ عَلَيْهِم بِعِلْمٍ وَّمَا كُنَّا غَآئِبِينَ ﴿٨﴾

9．その日の秤は正確なり。秤重き者は、(注6) 必ず成功すべし。

وَالْوَزْنُ يَوْمَئِذٍ الْحَقُّ فَمَن ثَقُلَتْ مَوَازِينُهُ فَأُولَٰٓئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُونَ ﴿٩﴾

10．されど秤軽き者は、われらの神兆を軽ろんじたがために、その身を滅ぼせる者なるべし。

وَمَنْ خَفَّتْ مَوَازِينُهُ فَأُولَٰٓئِكَ الَّذِينَ خَسِرُوٓا أَنفُسَهُم بِمَا كَانُوا بِآيَاتِنَا يَظْلِمُونَ ﴿١٠﴾

11．われらはお前たちを地上に安住させ、而して生計の手段を与えたり。しかるにお前たちは殆んど感謝せず。

وَلَقَدْ مَكَّنَّاكُمْ فِي الْأَرْضِ وَجَعَلْنَا لَكُمْ فِيهَا مَعَايِشَ قَلِيلًا مَّا تَشْكُرُونَ ﴿١١﴾ ع

第二項

12．われらはお前たちを創造し、しかる後にお前たちに形を与えたり。(注7) 而してわれらは天使たちに向って「アダムに服従せよ」(注8) と命じたところ、イブリースを除いて、(注9) 彼等はすべて服従せり。イブリースだけが服従者のうちに加わらざりき。

وَلَقَدْ خَلَقْنَاكُمْ ثُمَّ صَوَّرْنَاكُمْ ثُمَّ قُلْنَا لِلْمَلَٰٓئِكَةِ اسْجُدُوا لِآدَمَ فَسَجَدُوٓا إِلَّآ إِبْلِيسَ لَمْ يَكُن مِّنَ السَّٰجِدِينَ ﴿١٢﴾

13．神は云えり、「わしが命じたるに、汝何故に服従せざるか？」と。すると、イブリースは云えり、「我はアダムに勝る。汝は我を火で創りたるが、アダムは粘土で (注10) 創られたり」と。(注11)

قَالَ مَا مَنَعَكَ أَلَّا تَسْجُدَ إِذْ أَمَرْتُكَ قَالَ أَنَا خَيْرٌ مِّنْهُ خَلَقْتَنِي مِن نَّارٍ وَخَلَقْتَهُ مِن طِينٍ ﴿١٣﴾

注6　この言葉は比喩的に用いられている。物質は、金属や木で作られた秤りでその重さを計るが、物質でないものの重さを計るということは、その本来の価値、真価、重要性を明確にするということである。

注7　人間は、粘土をいろいろの形にできるように、自分の精神的存在を様々に形成することができるのである。

注8　アダムに服せよという命令は、天使に向かって発せられたのであるが、天使は神の命令の神聖なる具現者であるが故に、この命令はすべての創造物に適用されるものであった。

注9　イブリースは天使ではなかった(18：51)。ガブリエルが天使長であるのに対し、イブリースは悪霊の長である。ここに述べられていることは、人間の最初の祖先である最初のアダムとは何のかかわり合いもない。ここにかかわっているのは、後のアダム(この大地に6000年前に住み、ノアやアブラハムや彼らの子孫の直接の祖先) のみである。

注10　「粘土」という語についての説明は、3章50節を参照。

注11　この節は、神とイブリースの間の会話として表現されているが、実際にこうしたやり取りがあったというわけではなく、状況を言葉で表現したということである。イブリースがアダムに服さなかった結果がこの状況なのである。2章31節も参照せよ。

14. 神は云えり、「ならばここより落ちて行け。ここは汝如き傲慢な者の居るべきところに非ず。出て行け。げに汝は見下げはてたる輩なりと。

قَالَ فَاهْبِطْ مِنْهَا فَمَا يَكُونُ لَكَ أَنْ تَتَكَبَّرَ فِيهَا فَاخْرُجْ إِنَّكَ مِنَ الصَّٰغِرِينَ ﴿١٤﴾

15. イブリースは云えり、「彼等人間が甦らしめらるその日まで、(注 12) なにとぞ我に猶予を授けたまえ」と。

قَالَ أَنْظِرْنِي إِلَىٰ يَوْمِ يُبْعَثُونَ ﴿١٥﴾

16. 神は云えり、「汝は猶予される者のうちに加えられん」と。

قَالَ إِنَّكَ مِنَ الْمُنْظَرِينَ ﴿١٦﴾

17. イブリースは云えり、「汝が我に身を誤らせたので、我は汝の直き道にて彼等人間を待たん。

قَالَ فَبِمَا أَغْوَيْتَنِي لَأَقْعُدَنَّ لَهُمْ صِرَٰطَكَ الْمُسْتَقِيمَ ﴿١٧﴾

18. 而して我は、前後左右から (注 13) 彼等を襲わん。されば汝は、彼等の多くが忘恩の徒なるを知るべし」と。

ثُمَّ لَآتِيَنَّهُمْ مِنْ بَيْنِ أَيْدِيهِمْ وَمِنْ خَلْفِهِمْ وَعَنْ أَيْمَٰنِهِمْ وَعَنْ شَمَآئِلِهِمْ وَلَا تَجِدُ أَكْثَرَهُمْ شَٰكِرِينَ ﴿١٨﴾

19. 神は云えり、「蔑まされ、逐い立てられてここより去れ。もし彼等のうち汝に追随する者あらば、わしはお前たち一同で地獄を満さん。

قَالَ اخْرُجْ مِنْهَا مَذْءُومًا مَدْحُورًا لَمَنْ تَبِعَكَ مِنْهُمْ لَأَمْلَأَنَّ جَهَنَّمَ مِنْكُمْ أَجْمَعِينَ ﴿١٩﴾

20. アダムよ、汝と汝の妻は庭園に (注 14) 住み、好きなところで食うがよい。(注 15) なれど不義者の類にならざらんがために、この樹には (注 16) 近寄るなかれ」と。

وَيَٰٓـَٔادَمُ اسْكُنْ أَنْتَ وَزَوْجُكَ الْجَنَّةَ فَكُلَا مِنْ حَيْثُ شِئْتُمَا وَلَا تَقْرَبَا هَٰذِهِ الشَّجَرَةَ فَتَكُونَا مِنَ الظَّٰلِمِينَ ﴿٢٠﴾

注 12　この節にいう復活とは来世に約束された万人の大復活のことではない。人間の霊魂の復活あるいは人間の精神的意識が最も高められた状態のことを言っているのである。精神的復活がない限り、イブリースが人に道を誤らせることもあるであろう。しかし、人間が一旦バカー（再生）と呼ばれる精神の高い段階に到達すれば、もはやイブリースはその人間に対し何の害を為すこともできないのである（17：66)。

注 13　サタンが張りめぐらしている誘惑の網に注意せよ。

注 14　2：36 を参照

注 15　これは、肉体的、精神的に有害であるとして禁じられること以外はすべて合法であることを示している。

注 16　「禁断の木」とは、アダムとその妻に、ある特定の事柄を禁じている戒律のことも意味しているようである。クルアーンの中では、「良い言葉」は「良い木」と関連しており（14：25)、邪悪な言葉は「悪い木」と関連づけられている（14：27)。

21．しかるに悪魔（サタン）が彼等に囁いて、彼等に見えざりし恥部を彼等に知らしめ、而（しか）して云えり、「主がお前たちにこの樹を禁じたるは、お前たちを天使または不老不死者たらしめざらんがためなり」と。（注 17）

فَوَسْوَسَ لَهُمَا الشَّيْطٰنُ لِيُبْدِيَ لَهُمَا مَا وُرِيَ عَنْهُمَا مِنْ سَوْاٰتِهِمَا وَقَالَ مَا نَهٰكُمَا رَبُّكُمَا عَنْ هٰذِهِ الشَّجَرَةِ اِلَّآ اَنْ تَكُوْنَا مَلَكَيْنِ اَوْ تَكُوْنَا مِنَ الْخٰلِدِيْنَ ﴿٢١﴾

22．而（しか）して悪魔（サタン）は二人に誓って云えり、「げに我はお前たちの真実（まこと）の助言者なり」と。

وَقَاسَمَهُمَآ اِنِّيْ لَكُمَا لَمِنَ النّٰصِحِيْنَ ﴿٢٢﴾

23．こうして悪魔（サタン）は二人を欺きて堕落せしめたり。彼等その樹の実を味わうや、たちまち恥ずかしさを自覚し、庭園の木の葉で己が身を覆いたり。（注 18）すると、主は二人に呼びかけて、云えり、「わしはお前たちにその樹を禁ぜざりしか、また悪魔（サタン）はお前たちの公然の敵なりと云わざりしか？」と。

فَدَلّٰىهُمَا بِغُرُوْرٍ ۚ فَلَمَّا ذَاقَا الشَّجَرَةَ بَدَتْ لَهُمَا سَوْاٰتُهُمَا وَطَفِقَا يَخْصِفٰنِ عَلَيْهِمَا مِنْ وَّرَقِ الْجَنَّةِ ۖ وَنَادٰىهُمَا رَبُّهُمَآ اَلَمْ اَنْهَكُمَا عَنْ تِلْكُمَا الشَّجَرَةِ وَاَقُلْ لَّكُمَآ اِنَّ الشَّيْطٰنَ لَكُمَا عَدُوٌّ مُّبِيْنٌ ﴿٢٣﴾

24．彼等は云えり、「主よ、我等は誤れり。汝我等を許さず、慈悲を垂れざれば、我等は必ず失敗者とならん」と。（注 19）

قَالَا رَبَّنَا ظَلَمْنَآ اَنْفُسَنَا ۫ وَاِنْ لَّمْ تَغْفِرْ لَنَا وَتَرْحَمْنَا لَنَكُوْنَنَّ مِنَ الْخٰسِرِيْنَ ﴿٢٤﴾

注 17　邪悪な考えが最後に人を破滅に追いやる時、同時に、その人自身、自分の弱点をはっきりと自覚するのである。アダムが住むことになった場所は、クルアーンの中では比喩的に「庭園」と表現されている。そして、次に続く文においても比喩が続けて用いられ、アダムはある特定の「木」に近づくことを禁止されていこと書かれているが、この「木」とは、文字通りの物としての木ではなく、アダムが近づいてはならないある特定の一族、部族のことであった。アダムが近づいてはならないとされたのは、この一族が彼の敵であり、彼に危害を加えようとも何の痛みも感じない人々であったからである。

注 18　サタンのため、アダムの共同体に亀裂が入り、中の弱い人々が共同体の絆から離れていった時に、アダムが「庭園」の木の葉すなわち共同体の若者達を集め、彼らの協力を得て、彼に従う人々を再統一、再編成しはじめたということをしめしているのである。若者は旧思想や偏見にほとんどとらわれないので、神の預言者達に従い彼らを助けるのは、一般に若者たちである（10：84）。アダムに従うことを拒否した者としてクルアーンに描かれているのはイブリースと呼ばれ、彼をそそのかす者がサタンと呼ばれている。この区別は、この節のみでなく、クルアーン全体を通して、関連する節すべてにおいて、明確である。すなわちサタンとイブリースは別人なのである。アダムをそそのかし、間違いを犯させたシャイターンは、目に見えぬ悪霊ではなく、血も肉もある邪悪な人間であって、人々の中にいる悪魔であり、サタンの具現であり、イブリースの代理人であった。そして、アダムが近づいてはならないとされた一族の一員なのであった。モハッマドは、彼の名前はハリス（人名）であると言ったとされているが、このことは、彼が人間であって悪霊ではないことを示すもう一つの証拠である。

注 19　間もなくアダムは自分の誤ちに気づき、後悔しつつ、急いで神のもとへ戻った。そもそもアダムの誤ちとは、この人間悪魔を、神がかかわり合わないよう警告したにもかかわらず、支援者と間違えたことにあったのである。

25. 主は云えり、「出て行け、お前たちは互に敵となならん。地上にはお前たちの仮の宿と、ひと時の楽しみあり」と。(注20)

قَالَ اهْبِطُوا بَعْضُكُمْ لِبَعْضٍ عَدُوٌّ ۖ وَلَكُمْ فِي الْأَرْضِ مُسْتَقَرٌّ وَمَتَاعٌ إِلَىٰ حِينٍ ﴿٢٥﴾

26. 而して主はまた云えり、「そこでお前たちは生き、そこで死に、而してそこより甦らしめらるべし」と。(注21)

قَالَ فِيهَا تَحْيَوْنَ وَفِيهَا تَمُوتُونَ وَمِنْهَا تُخْرَجُونَ ﴿٢٦﴾

第三項

27. アダムの子らよ、げにわれらはお前たちに、恥部を覆い、また飾るための衣服を授けたり。されど、正義の衣裳こそが最高なり。(注22) こは彼等に忘れさせざるための、アッラーの神兆の一つなり。

يَا بَنِي آدَمَ قَدْ أَنْزَلْنَا عَلَيْكُمْ لِبَاسًا يُوَارِي سَوْآتِكُمْ وَرِيشًا ۖ وَلِبَاسُ التَّقْوَىٰ ذَٰلِكَ خَيْرٌ ۚ ذَٰلِكَ مِنْ آيَاتِ اللَّهِ لَعَلَّهُمْ يَذَّكَّرُونَ ﴿٢٧﴾

28. アダムの子らよ、悪魔がかつて、お前たちの先祖にその恥部を知らしめんがために、その衣を剝ぎ奪って彼等を庭園より放逐せしめたように、悪魔にたぶらかされるなかれ。事実、悪魔とその一族は、お前たちには見えざるところからお前たちを見る。げにわれらは、悪魔をして信ぜざる者どもの友となせり。(注23)

يَا بَنِي آدَمَ لَا يَفْتِنَنَّكُمُ الشَّيْطَانُ كَمَا أَخْرَجَ أَبَوَيْكُمْ مِنَ الْجَنَّةِ يَنْزِعُ عَنْهُمَا لِبَاسَهُمَا لِيُرِيَهُمَا سَوْآتِهِمَا ۗ إِنَّهُ يَرَاكُمْ هُوَ وَقَبِيلُهُ مِنْ حَيْثُ لَا تَرَوْنَهُمْ ۗ إِنَّا جَعَلْنَا الشَّيَاطِينَ أَوْلِيَاءَ لِلَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿٢٨﴾

注20　この節では、アダムが自分の生地から他の地へ移住するよう命令されたことを明らかにしている。そうなったのは、彼の共同体の中に様々に異なった人達の間に、急に敵意と憎しみが生まれてきたからであった。この事実は、アダムが出て行くよう命令された「庭園」が楽園ではなかったことのもう一つの証拠となっている。アダムは、彼の生地メソポタミアから出て、近隣の地に移ったようである。この移住は、多分一時的なことであり、ずっと後に彼は自分の故郷に戻ったであろう。事実、「時への備え」という言葉は、移住が一時的なものであることを、僅かにほのめかしている。アダムは、この節で、これから先、注意深くしているよう警告を受けているのである。それも、今や彼は永遠に自分の生地にこそ住むべきであるからなのである。

注21　一般的な意に解釈すれば、この節は、人間は誰も物としての肉体を持ったまま楽園に昇ることはできないと示唆しているのである。人は地上で生き、地上で死ななければならないのである。

注22　アダムが「庭園」において自己の「裸身」に纏ったのは、敬虔なる信仰という衣服であった。

注23　シャイターンと呼ばれる悪霊とその仲間達は、普通は目には見えない。彼らは、密かに力をふるい、人間の隠れた弱点を捜し出しては、人間がその邪悪な心をますます強くするよう仕向けるのである。神はただ人間の試練として、サタンをお創りになったのであり、サタンは、人間が辿っていく精神の旅路の途中にある障害物としての役割を果たすのである。障害物とは、妨害するためのものではない。人生という競技の中で、競争者達がもっと用心深くなり、それまで以上に努力をするようになるためのものなのである。障害物に躓き人生に負けた、不注意者、怠惰な者は、自分自身を責めるべきであって、彼らの気概を試すため、彼らを試練に向かわせた人あるいは人々を責めるべきではない。

29. 彼等はみだらな行為をする度に、云う、「我等は、父祖たちがそれを行うを見たり。アッラーが之を我等に命じたり」と。云え、「アッラーは決してみだらな行為を命ぜず。お前たち、アッラーについて己れの知らざることを云うか？」と。

وإذا فعلوا فاحشة قالوا وجدنا عليها آباءنا والله أمرنا بها قل إن الله لا يأمر بالفحشاء أتقولون على الله ما لا تعلمون ﴿٢٩﴾

30. 云え、「主は正義を命じ給えり。されば礼拝の場所では、(注24)常にその顔を主に正しく向けて祈り、誠を尽して信ぜよ。主がお前たちに生をもたらしたる如く、お前たちはいずれ主の許へ帰り行く」と。(注25)

قل أمر ربي بالقسط وأقيموا وجوهكم عند كل مسجد وادعوه مخلصين له الدين كما بدأكم تعودون ﴿٣٠﴾

31. 主は或る者は導き、また迷誤する者はうち捨てたり。彼等はアッラーをさしおいて悪魔どもを仲間となし、しかも自らは正しく導かれていると思う。

فريقا هدى وفريقا حق عليهم الضللة إنهم اتخذوا الشيطين أولياء من دون الله ويحسبون أنهم مهتدون ﴿٣١﴾

32. アダムの子らよ、礼拝所に於ける礼拝時には、服装に気をつけよ。(注26)飲むもよし、食べるもよし、なれど度を過ごすなかれ。げに主は度を過ごす者を好まず。

يبني ءادم خذوا زينتكم عند كل مسجد وكلوا واشربوا ولا تسرفوا إنه لا يحب المسرفين ﴿٣٢﴾

第四項

33. 云え、「アッラーがその僕のために作りたる装身具や、その賜える清潔な食物を禁じたるは誰か？」と。云え、「これらのものは、復活の日において、現世にて信徒なりし人々にのみ限らる」と。(注27)かくの如く、われらは知識ある人々にさまざまなる神兆を説明す。

قل من حرم زينة الله التي أخرج لعباده والطيبت من الرزق قل هي للذين ءامنوا في الحيوة الدنيا خالصة يوم القيمة كذلك نفصل الأيت لقوم يعلمون ﴿٣٣﴾

注24　祈りの時間が近づき、寺院に出かける時には、イスラム教徒達は、世俗のことを忘れて、神に注意を集中しなければならない。すべての祈りの前に行う沐浴は、信徒の心を神に向けさせ、祈りを行うにふさわしい状態にさせることを目的としているのである。

注25　「主がお前たちに生をもたらしたる如く、お前たちはいずれ主の許へ帰り行く」という言葉は、「丁度我々の肉体が母の子宮の内で次第に成長するように、我々の魂も、死後、同様な成長過程を辿るであろうと言っているのである。

注26　美しく装うことは身体的にも精神的にも必要なことである。身体的な観点では、信徒達は祈りの場へ行く時には、できるだけ清潔できちんとした服装をすることとされているのである。

注27　神が用意なさった素晴らしい汚れなき物は、実際の生活においては不信徒とも分かつのであるが、本来は信徒たちのためのものである。将来には、不信徒を除き、信徒たちのみ恩恵を与えられるであろう。

34．云え、「主が禁じたることは、みだらな行為、そは外に現われたるものでも内に秘めたるものでも、また罪と邪悪な違犯、アッラーが何の権能も授けざるものをお前たちがアッラーに配し祀ること、並びにアッラーについて己れの知らざることを云うことなり」と。

قُلْ إِنَّمَا حَرَّمَ رَبِّيَ الْفَوَاحِشَ مَا ظَهَرَ مِنْهَا وَمَا بَطَنَ وَالْإِثْمَ وَالْبَغْيَ بِغَيْرِ الْحَقِّ وَأَنْ تُشْرِكُوا بِاللَّهِ مَا لَمْ يُنَزِّلْ بِهِ سُلْطَانًا وَأَنْ تَقُولُوا عَلَى اللَّهِ مَا لَا تَعْلَمُونَ ﴿٣٣﴾

35．いずれの民にも一定の期限あり。その期限至れば、一瞬なりとも遅速する能わず。(注28)

وَلِكُلِّ أُمَّةٍ أَجَلٌ ۖ فَإِذَا جَاءَ أَجَلُهُمْ لَا يَسْتَأْخِرُونَ سَاعَةً ۖ وَلَا يَسْتَقْدِمُونَ ﴿٣٤﴾

36．アダムの子らよ、(注29)もしお前たちの中より選ばれし使徒がお前たちのところに来て、わが神兆をお前たちに物語る場合、それで神を畏れ、善事を行う者には、恐れも悲哀もなかるべし。

يَا بَنِي آدَمَ إِمَّا يَأْتِيَنَّكُمْ رُسُلٌ مِنْكُمْ يَقُصُّونَ عَلَيْكُمْ آيَاتِي ۙ فَمَنِ اتَّقَىٰ وَأَصْلَحَ فَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿٣٥﴾

37．されどわれらの神兆を拒否し、尊大にも之より顔をそむける者ども、彼等は業火の住人となり、その中に永劫に住まん。

وَالَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا وَاسْتَكْبَرُوا عَنْهَا أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ النَّارِ ۖ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٣٦﴾

38．アッラーに対して偽りを捏造し、その神兆を虚偽なりとする者以上に不義なる者は誰か？かかる徒輩は定められた通りの運命を持つべし。(注30)やがてわれらの使者たちが彼等を訪れてその命を召す時、使者たちは云わん、「アッラーの外に、日頃お前たちが祈れる者は、今何処にありや？」と。彼等は答えん、「我等は彼等を見出せず」と。かくて彼等は自ら不信心者たりしことを立証すべし。

فَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرَىٰ عَلَى اللَّهِ كَذِبًا أَوْ كَذَّبَ بِآيَاتِهِ ۚ أُولَٰئِكَ يَنَالُهُمْ نَصِيبُهُمْ مِنَ الْكِتَابِ ۖ حَتَّىٰ إِذَا جَاءَتْهُمْ رُسُلُنَا يَتَوَفَّوْنَهُمْ قَالُوا أَيْنَ مَا كُنْتُمْ تَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ ۖ قَالُوا ضَلُّوا عَنَّا وَشَهِدُوا عَلَىٰ أَنْفُسِهِمْ أَنَّهُمْ كَانُوا كَافِرِينَ ﴿٣٧﴾

注28　ある民族に罰が下ると定められた時がせまってくると、もうそれを回避することも、遅らせることも、別の時期に延期することも不可能である。

注29　この点については、特別な注を加えるに値する。即ち、既出のいくつかの節と同様、「アダムの子供達よ」という言葉は、モハッマドの時代の人々に向かって、またまだこれから生まれてくる世代の人々に向かって呼びかけているのである。遠い過去の人々や、アダムのすぐ次の世代に向かって呼びかけているのでない。

注30　この言葉は、神の使者を拒絶する者たちは、彼らは敗北し、挫折するという預言が実現するのを、自らの目でしかと見るであろう。また、神の使者に逆らった罪で、彼らに下される罰を噛みしめることになるであろうと述べているのである。

قَالَ ادْخُلُوْا فِيْٓ اُمَمٍ قَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِكُمْ مِّنَ الْجِنِّ
وَالْاِنْسِ فِي النَّارِ ؕ كُلَّمَا دَخَلَتْ اُمَّةٌ لَّعَنَتْ اُخْتَهَا ؕ
حَتّٰٓى اِذَا ادَّارَكُوْا فِيْهَا جَمِيْعًا ۙ قَالَتْ اُخْرٰىهُمْ لِاُوْلٰىهُمْ
رَبَّنَا هٰٓؤُلَآءِ اَضَلُّوْنَا فَاٰتِهِمْ عَذَابًا ضِعْفًا مِّنَ النَّارِ ؕ
قَالَ لِكُلٍّ ضِعْفٌ وَّلٰكِنْ لَّا تَعْلَمُوْنَ ﴿٣٩﴾

39．主は云わん、「汝等、お前たち以前に逝きたるさまざまなる民族、妖霊(ジン)と人間の集団に混って業火(ごうか)に入れ」と。一つの集団が入るたびに、必ず姉妹集団を呪い、逐次そこに入り終るや、最後の集団は最初の集団について云わん、(注 31)「主よ、我等を迷わしめたるは、この者どもなり。されば彼等に業火(ごうか)の罪を二倍与えよ」と。主は云わん、「誰れにも皆二倍の刑罰を (注 32) 与えん。されどお前たち、之(これ)を知らざるのみ」と。

وَقَالَتْ اُوْلٰىهُمْ لِاُخْرٰىهُمْ فَمَا كَانَ لَكُمْ عَلَيْنَا مِنْ
فَضْلٍ فَذُوْقُوا الْعَذَابَ بِمَا كُنْتُمْ تَكْسِبُوْنَ ﴿٤٠﴾

40．最初の者どもは最後の者どもに向って、云わん、「お前たちは我等に勝るところなし。さればお前たちがなせることに対する懲罰を味わえ」と。

第五項

اِنَّ الَّذِيْنَ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَا وَاسْتَكْبَرُوْا عَنْهَا لَا تُفَتَّحُ
لَهُمْ اَبْوَابُ السَّمَآءِ وَلَا يَدْخُلُوْنَ الْجَنَّةَ حَتّٰى يَلِجَ
الْجَمَلُ فِيْ سَمِّ الْخِيَاطِ ؕ وَكَذٰلِكَ نَجْزِي الْمُجْرِمِيْنَ ﴿٤١﴾

41．われらの神兆(しるし)を拒否し、尊大にも之(これ)より顔をそむける者ども、彼等には天門断じて開かれず。また駱駝(らくだ)が針の孔(あな)を通らぬ限り、彼等は楽園に入るを得ざるべし。かくの如く、われらは悪人どもに報ゆ。

لَهُمْ مِّنْ جَهَنَّمَ مِهَادٌ وَّمِنْ فَوْقِهِمْ غَوَاشٍ ؕ وَ
كَذٰلِكَ نَجْزِي الظّٰلِمِيْنَ ﴿٤٢﴾

42．彼等の寝床は地獄なり。上もまた同じ地獄で、彼等を覆う。われらはかくの如く不義者に報ゆ。

وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ لَا نُكَلِّفُ نَفْسًا اِلَّا
وُسْعَهَآ ؗ اُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ الْجَنَّةِ ۚ هُمْ فِيْهَا خٰلِدُوْنَ ﴿٤٣﴾

43．されど信じて、善行を積(つ)む人々は―われらは何人(なんぴと)にも、能力以上のものを課せず、(注 33) ―楽園の住人であり、そこに永久(とこしえ)に住まん。

وَنَزَعْنَا مَا فِيْ صُدُوْرِهِمْ مِّنْ غِلٍّ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهِمُ
الْاَنْهٰرُ ۚ وَقَالُوا الْحَمْدُ لِلّٰهِ الَّذِيْ هَدٰىنَا لِهٰذَا ۟ وَمَا

44．われらは如何なる怨恨(えんこん)も彼等の胸中より取り除くべし。彼等の足許(あしもと)には河川流れるべし。彼等は云わん、「我等をここに導きしアッラーに讃えあれ。もしアッラー我等を

注 31　指導者達（最初の集団）と彼らに従う者達（最後の集団）。

注 32　苦痛と苦悩は、それが続いている間は激しく感じられるであろう、神の苦悩は堪え難いものであるだろう。

注 33　挿入句の「何人も能力以上のものを課せず」という句は、"罪は人間の本質に根ざしており、人間はそこから逃げ出すことはできない" というキリスト教の教義と反している箇所である。

導かざりせば、我等は正しい道を得る能わじ。げに主の使徒たちは真理をもたらしたり」と。而して彼等はかく告げらるべし、「こはお前たちの行い故に、報奨として授けられたる楽園なり」と。

كنا لنهتدي لولا أن هدانا الله لقد جاءت رسل ربنا بالحق ونودوا أن تلكم الجنة أورثتموها بما كنتم تعملون ﴿٤٤﴾

45. 楽園の住人たちは地獄の住人たちに向って云わん、「我等は主の約束が真実なるを見たり。お前たちも主の約束が真実なるを見たるか？」と。彼等は答えん、「然り」と。その時、一人の布告者が両者の間にありて、云わん、「アッラーの呪い、不義者の上に降る—

ونادى أصحب الجنة أصحب النار أن قد وجدنا ما وعدنا ربنا حقا فهل وجدتم ما وعد ربكم حقا قالوا نعم فأذن مؤذن بينهم أن لعنة الله على الظلمين ﴿٤٥﴾

46. 彼等はアッラーの道から人々を背かしめ、之を歪めんとしたばかりか、(注 34)来世も信ぜざる者どもなり」と。

الذين يصدون عن سبيل الله ويبغونها عوجا وهم بالآخرة كفرون ﴿٤٦﴾

47. 両者の間に隔壁あり。而してその高壁の上に人々ありて、記号によってすべての者を識別す。彼等は楽園へ行く人々に声をかけて、云わん、「あなたがたに平安あれ」と。彼等は未だ楽園に入らねど、そこに入るを希望せん。

وبينهما حجاب وعلى الأعراف رجال يعرفون كلا بسيمهم ونادوا أصحب الجنة أن سلم عليكم لم يدخلوها وهم يطمعون ﴿٤٧﴾

48. 次に彼等の目は業火の徒輩に転じて云わん、「主よ、我等を不義なる徒輩と一緒にするなかれ」と。

وإذا صرفت أبصرهم تلقاء أصحب النار قالوا ربنا لا تجعلنا مع القوم الظلمين ﴿٤٨﴾

第六項

49. 高壁に居る人々は記号によって人を識別し、(注 35) その者たちに呼びかけて云わん、「お前たちの多くの富も、傲慢さも、ともに自らを益せざるに非ずや？

ونادى أصحب الأعراف رجالا يعرفونهم بسيمهم قالوا ما أغنى عنكم جمعكم وما كنتم تستكبرون ﴿٤٩﴾

注 34　この表現は、悪を行なう者達は、真の宗教など堕落させたいと願っているという意味である。彼らは、彼ら自身邪悪なだけではなく、他人をも彼らの如くに変えてしまおうとし、更に宗教の教義をゆがめ、勝手に変えようとさえしているのである。

注 35　段上にいる人即ち預言者達は、人々の中のある特定の者達に呼びかけるであろう。預言者達は彼らの為に派遣されたのであり、預言者達はこうした人々を彼らの特別な特徴によって見分け、彼らに向かって、預言者達に敵対すれば、悲しむべき結末になることを、今こそ理解する必要があると告げるであろう。

50．お前たちが、アッラーは恩恵を施さずと誓えるは、これ等の人々なるか？」と。神は彼等に向って云わん、「楽園に入れ。お前たちは恐れも悲哀もなかるべし」と。

أَهٰٓؤُلَآءِ الَّذِيْنَ اَقْسَمْتُمْ لَا يَنَالُهُمُ اللّٰهُ بِرَحْمَةٍ ؕ اُدْخُلُوا الْجَنَّةَ لَا خَوْفٌ عَلَيْكُمْ وَلَآ اَنْتُمْ تَحْزَنُوْنَ ۞٥٠

51．業火（ごうか）の住人たちは楽園の住人たちに呼びかけて、云わん、「アッラーがお前たちに与えたるもの、水なりなんなり我等に注げ」と。彼等は答えて云わん、「アッラーは不信心者どもにその両方を禁じたり―

وَنَادٰٓى اَصْحٰبُ النَّارِ اَصْحٰبَ الْجَنَّةِ اَنْ اَفِيْضُوْا عَلَيْنَا مِنَ الْمَآءِ اَوْ مِمَّا رَزَقَكُمُ اللّٰهُ ؕ قَالُوْٓا اِنَّ اللّٰهَ حَرَّمَهُمَا عَلَى الْكٰفِرِيْنَ ۞٥١

52．宗教を気晴しか娯楽と考え、現世の生活に欺かれたる者どもには」と。されば、彼等がこの日の対面を忘れ、われらの神兆（しるし）を認めざりし如く、今日われらも彼等を忘れ去らん。

الَّذِيْنَ اتَّخَذُوْا دِيْنَهُمْ لَهْوًا وَّلَعِبًا وَّغَرَّتْهُمُ الْحَيٰوةُ الدُّنْيَا ۚ فَالْيَوْمَ نَنْسٰهُمْ كَمَا نَسُوْا لِقَآءَ يَوْمِهِمْ هٰذَا ۙ وَمَا كَانُوْا بِاٰيٰتِنَا يَجْحَدُوْنَ ۞٥٢

53．げにわれらは彼等に経典をもたらし、知識に基いてそれを記述せり。こは信ずる人々への嚮導（きょうどう）にして、かつ慈悲なり。

وَلَقَدْ جِئْنٰهُمْ بِكِتٰبٍ فَصَّلْنٰهُ عَلٰى عِلْمٍ هُدًى وَّرَحْمَةً لِّقَوْمٍ يُّؤْمِنُوْنَ ۞٥٣

54．今彼等は、ただ警告の結果、それ以外何を待つか？　その結果が到来する日、以前に之（これ）を忘れていた人々は「主の使徒たちは確かに真実をもたらせり。我等のために執り成してくれる仲裁者はいざるか？それとも我等を再び現世に返してくれるなら、これまでして来たことと違った行為をなすべきものを」と云わん。げに彼等は自らを滅ぼせり。而（しか）してその捏造（ねつぞう）せるものは、彼等を見捨てたり。

هَلْ يَنْظُرُوْنَ اِلَّا تَاْوِيْلَهٗ ؕ يَوْمَ يَاْتِيْ تَاْوِيْلُهٗ يَقُوْلُ الَّذِيْنَ نَسُوْهُ مِنْ قَبْلُ قَدْ جَآءَتْ رُسُلُ رَبِّنَا بِالْحَقِّ ۚ فَهَلْ لَّنَا مِنْ شُفَعَآءَ فَيَشْفَعُوْا لَنَآ اَوْ نُرَدُّ فَنَعْمَلَ غَيْرَ الَّذِيْ كُنَّا نَعْمَلُ ؕ قَدْ خَسِرُوْٓا اَنْفُسَهُمْ وَضَلَّ عَنْهُمْ مَّا كَانُوْا يَفْتَرُوْنَ ۞٥٤ ع ١٤

第七項

55．げにお前たちの主はアッラーにして、六日の間に（注36）天と地を創り、しかる後に

اِنَّ رَبَّكُمُ اللّٰهُ الَّذِيْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ فِيْ سِتَّةِ اَيَّامٍ ثُمَّ اسْتَوٰى عَلَى الْعَرْشِ يُغْشِي الَّيْلَ النَّهَارَ

注36　この期間の長さを推測したり、決定することは不可能である。「一千年」かもしれないし（20：48）、「五万年」かもしれない（70：5）。神は、神の時代のすべてを我々に明らかになさっているわけではない。神のある時代は一千年以上であり、また別の時代は五万年、何億年と続くかもしれない。科学が、天や地が現在の形態にまで発展してくるのに何百万年もかかっていることを明らかにしている。イスラム教の高名な学者イブン・アラビーの見解も同じ結論を引き出している。このとおり、我々は、天地の創造が完成していく「六日間」の長さを明確にすることはできないのである。神は、それぞれの期間に、それぞれの変化をもたらされる。変化のあるものは、一千年、あるものは五万年、またあるものはもっと長い歳月を必要とするであろう。我々

玉座に登れり。(注37)彼は夜を以て昼を覆わしめたれば、夜はすみやかに昼を追跡す。更に彼は、日月星辰すべてを創り、これらすべてを己が命に服させ給う。げに創造と支配は彼の所有なり。讃えあれ、万物の主アッラー。

يَطْلُبُهُ حَثِيثًا وَالشَّمْسَ وَالْقَمَرَ وَالنُّجُومَ مُسَخَّرَاتٍ بِأَمْرِهِ ۗ أَلَا لَهُ الْخَلْقُ وَالْأَمْرُ ۗ تَبَارَكَ اللَّهُ رَبُّ الْعَالَمِينَ ﴿٥٥﴾

56．心を虚しくして、密かに主に祈れ。げに主は罪人を好まず。

ادْعُوا رَبَّكُمْ تَضَرُّعًا وَخُفْيَةً ۚ إِنَّهُ لَا يُحِبُّ الْمُعْتَدِينَ ﴿٥٦﴾

57．秩序が（注38）定まりたる後、地上に騒乱を起すなかれ。畏敬し、希望を抱いて主に祈れ。げにアッラーの慈悲は善行をなす者の近くにあり。

وَلَا تُفْسِدُوا فِي الْأَرْضِ بَعْدَ إِصْلَاحِهَا وَادْعُوهُ خَوْفًا وَطَمَعًا ۚ إِنَّ رَحْمَتَ اللَّهِ قَرِيبٌ مِّنَ الْمُحْسِنِينَ ﴿٥٧﴾

58．その慈悲に先立ち、朗報として風を送り出す御方は、彼なり。風が重い雲を運べば、われらは之を不毛の地に送り、それより水を降らせ、さまざまなる果実を生ぜしむ。同様に、われらは死者を甦らしむるなり。（注39）お前たち恐らく教訓を受けん。

وَهُوَ الَّذِي يُرْسِلُ الرِّيَاحَ بُشْرًا بَيْنَ يَدَيْ رَحْمَتِهِ ۖ حَتَّىٰ إِذَا أَقَلَّتْ سَحَابًا ثِقَالًا سُقْنَاهُ لِبَلَدٍ مَّيِّتٍ فَأَنزَلْنَا بِهِ الْمَاءَ فَأَخْرَجْنَا بِهِ مِن كُلِّ الثَّمَرَاتِ ۚ كَذَٰلِكَ نُخْرِجُ الْمَوْتَىٰ لَعَلَّكُمْ تَذَكَّرُونَ ﴿٥٨﴾

59．沃土は主の許しによりて草木繁茂すれど、悪土は貧弱なもの以外育たず。同様に、わ

وَالْبَلَدُ الطَّيِّبُ يَخْرُجُ نَبَاتُهُ بِإِذْنِ رَبِّهِ ۖ وَالَّذِي

のわかることは、天地の創造は、完全な完結した形態になるためには、長い六つの期間が必要であるということのみである。

注37　「神は玉座に登れり」という言葉は、物質的な宇宙の創造の後、神の卓越した属性とそれに類する特性が発揮されて、世界のすべての事々が、一連の自然法によって統率されるようになったということを意味する。

注38　この表現は次のような意である。クルアーンが明らかにされる以前は、不信徒達は、正義にそむく生活をしていても、それに対して何らかの言い訳をしてきた。しかし、完全な導きの書が著されたからには、彼らは、もはや悪を為し続け、罪悪と不正に屈し、罰も受けることなく正義に反する生活を続けていくことは許されないというべきである。イスラー（秩序）という語は、クルアーンが著され、モハッマドが出現したのと共に行われるようになった、良き規則正しい生活を表している。

注39　単なる雨水でも、死の土地に新しい生命を与え、野菜、果物や穀物をその地から生まれさせる。それと同様に、天の啓示の水が精神的な命のなかった人間に新しい命を吹き込むのだと、この節は語っているのである。この節は、クルアーンという形となって降ってきた天の水のおかげで、荒涼として乾燥した不毛の地アラブが、やがて果物のたわわになった木々や、香り高い花をつけた草々で満ちるであろうと約束しているのである。当然、これまで人間のかす、屑と言われてきたアラブの人々が、これ以後突然、教師として指導者として浮かび上がってきたのである。

れらは感謝の念を抱く人々にいろいろと形を変えてさまざまなる神兆(しるし)を詳しく説明す。

خَبُثَ لَا يَخْرُجُ إِلَّا نَكِدًا ۚ كَذَٰلِكَ نُصَرِّفُ الْآيَاتِ لِقَوْمٍ يَشْكُرُونَ ﴿٥٩﴾

ع ١٤

第八項

60. われらはノアをその民に遣わせり。その時、ノアは云えり、「人々よ、アッラーを崇拝せよ。彼の外に神なし。げに我はお前たちのために大変な日の懲罰を恐る」と。

لَقَدْ أَرْسَلْنَا نُوحًا إِلَىٰ قَوْمِهِ فَقَالَ يَا قَوْمِ اعْبُدُوا اللَّهَ مَا لَكُمْ مِنْ إِلَٰهٍ غَيْرُهُ إِنِّي أَخَافُ عَلَيْكُمْ عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيمٍ ﴿٦٠﴾

61. 部族の長老たちは云えり、「我等は、汝こそ迷誤の中にありと思う」と。

قَالَ الْمَلَأُ مِنْ قَوْمِهِ إِنَّا لَنَرَاكَ فِي ضَلَالٍ مُبِينٍ ﴿٦١﴾

62. ノアは云えり、「人々よ、我は迷える者に非ず。我は万物の主よりの使徒なり。(注40)

قَالَ يَا قَوْمِ لَيْسَ بِي ضَلَالَةٌ وَلَٰكِنِّي رَسُولٌ مِنْ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿٦٢﴾

63. 我は主の神託をお前たちに伝え、善き助言を与える者なり。而(しか)して我は、お前たちが知らざることをアッラーより知らされているなり。

أُبَلِّغُكُمْ رِسَالَاتِ رَبِّي وَأَنْصَحُ لَكُمْ وَأَعْلَمُ مِنَ اللَّهِ مَا لَا تَعْلَمُونَ ﴿٦٣﴾

64. お前たちは、お前たちの中の一人を通して主の訓戒がお前たちに来たることを驚くか？彼がお前たちに警告し、お前たちをして正義ならしめ、慈悲に浴せしめんとするのを」と。

أَوَعَجِبْتُمْ أَنْ جَاءَكُمْ ذِكْرٌ مِنْ رَبِّكُمْ عَلَىٰ رَجُلٍ مِنْكُمْ لِيُنْذِرَكُمْ وَلِتَتَّقُوا وَلَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ﴿٦٤﴾

65. しかるに彼等は、ノアを嘘つき呼ばわりせり。さればわれらは、ノア並びにノアと箱舟をともにする人々を救い、われらの神兆(しるし)を拒否せる者どもを溺死せしめたり。げに彼等は盲目の民なりき。

فَكَذَّبُوهُ فَأَنْجَيْنَاهُ وَالَّذِينَ مَعَهُ فِي الْفُلْكِ وَأَغْرَقْنَا الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا ۚ إِنَّهُمْ كَانُوا قَوْمًا عَمِينَ ﴿٦٥﴾

ع ١٥

第九項

66. われらはまた、アードの民に（注41）その兄弟フードを遣わせり。その時、フードは

وَإِلَىٰ عَادٍ أَخَاهُمْ هُودًا ۗ قَالَ يَا قَوْمِ اعْبُدُوا اللَّهَ

注40　ノアは、彼が誤りを犯しているという非難に対し反論している。実際には、彼は、ある場所にこれから行こうとする者は、そこへ通じる道を知らないか、あるいは、そこへの道を以前に通ったことがないために、道に迷ったとされるかもしれないが、ある場所から戻ってこようという者が、どうして道を知らないことがあろうか、どうして道に迷うことがあるだろうかと言っている。ノアは、自分が間違いをするはずがないという。なぜなら、彼は神のもとからやって来たのであり、それ故、彼が神のもとへ通じる道からはずれてさ迷うことはあり得ないというのである。

注41　アードとは、アラビアにはるか昔に住んでいた部族の名称である。ある時期、彼らは広義のアラビアの最も肥沃な地域、特にイエメンやシリア、メソポタミアを支配しており、アラビア全土を支配した最初の民

(注 42)云えり、「人々よ、アッラーを崇拝せよ。彼の外に神なし。お前たち神を畏れざる気か？」と。

مَا لَكُمْ مِّنْ إِلٰهٍ غَيْرُهُۥ ۚ أَفَلَا تَتَّقُونَ ﴿٦٦﴾

67．この民のうち信ぜざる長老どもは云えり、「我等は、汝が確かに愚妄の中にあるを見る。我等は汝を嘘つきの一人と見なす」と。

قَالَ الْمَلَأُ الَّذِينَ كَفَرُوا مِن قَوْمِهِۦٓ إِنَّا لَنَرٰىكَ فِى سَفَاهَةٍ وَإِنَّا لَنَظُنُّكَ مِنَ الْكٰذِبِينَ ﴿٦٧﴾

68．フードは答えり、「人々よ、我は愚か者に非ず。万物の主の使徒なり。

قَالَ يٰقَوْمِ لَيْسَ بِى سَفَاهَةٌ وَلٰكِنِّى رَسُولٌ مِّن رَّبِّ الْعٰلَمِينَ ﴿٦٨﴾

69．我はお前たちに主の神託を伝える者にして、お前たちの正直かつ誠実な相談相手なり。

أُبَلِّغُكُمْ رِسٰلٰتِ رَبِّى وَأَنَا لَكُمْ نَاصِحٌ أَمِينٌ ﴿٦٩﴾

70．お前たちは、お前たちの中の一人を通して主の訓戒がお前たちに来たることを驚くか？主はお前たちにノアの民の後を継がせ、而(しか)してお前たちの体格を強大ならしめたることを思い起せ。而(しか)して繁栄を願わば、アッラーの恩恵を忘れまいぞ」と。

أَوَعَجِبْتُمْ أَن جَآءَكُمْ ذِكْرٌ مِّن رَّبِّكُمْ عَلٰى رَجُلٍ مِّنكُمْ لِيُنذِرَكُمْ ۚ وَاذْكُرُوٓا إِذْ جَعَلَكُمْ خُلَفَآءَ مِنۢ بَعْدِ قَوْمِ نُوحٍ وَزَادَكُمْ فِى الْخَلْقِ بَصْۜطَةً ۖ فَاذْكُرُوٓا ءَالَآءَ اللّٰهِ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ﴿٧٠﴾

71．彼等は云えり、「汝は我等にアッラーのみを崇拝し、我等の父祖が崇拝せるものをやめさせんがために我等に来たるか？もし汝の言葉が本当なら、我等を脅迫する事実を今ここにもたらせ」と。

قَالُوٓا أَجِئْتَنَا لِنَعْبُدَ اللّٰهَ وَحْدَهُۥ وَنَذَرَ مَا كَانَ يَعْبُدُ ءَابَآؤُنَا ۖ فَأْتِنَا بِمَا تَعِدُنَآ إِن كُنتَ مِنَ الصّٰدِقِينَ ﴿٧١﴾

72．フードは答えり、「主よりの懲罰と憤怒はすでにお前たちにふりかかりたり。お前たちは、お前たちが命名せる名前について我と論争するつもりか—お前やお前たちの父祖たちが命名せる—アッラーはそれ等に如何なる権能も与えず。されば待て、我もまたお前たちと共に待つほどに」と。

قَالَ قَدْ وَقَعَ عَلَيْكُم مِّن رَّبِّكُمْ رِجْسٌ وَغَضَبٌ ۖ أَتُجٰدِلُونَنِى فِىٓ أَسْمَآءٍ سَمَّيْتُمُوهَآ أَنتُمْ وَءَابَآؤُكُم مَّا نَزَّلَ اللّٰهُ بِهَا مِن سُلْطٰنٍ ۚ فَانتَظِرُوٓا إِنِّى مَعَكُم مِّنَ الْمُنتَظِرِينَ ﴿٧٢﴾

73．かくてわれらは慈悲を垂れ、彼並びに彼と共にありし者を救いたれど、われらの神兆(しるし)

فَأَنجَيْنٰهُ وَالَّذِينَ مَعَهُۥ بِرَحْمَةٍ مِّنَّا وَقَطَعْنَا دَابِرَ

族であった。そして、一番めのアードとして知られている。11章51節も参照せよ。

注42　フードはノアから数えて七代目の世代の人であった。

الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا وَمَا كَانُوا مُؤْمِنِينَ ﴿٧٣﴾

を拒否し、信ぜざりし者どもは最後の一人まで生命を奪い去りたり。

第十項

وَإِلَىٰ ثَمُودَ أَخَاهُمْ صَالِحًا قَالَ يَا قَوْمِ اعْبُدُوا اللَّهَ مَا لَكُم مِّنْ إِلَٰهٍ غَيْرُهُ قَدْ جَاءَتْكُم بَيِّنَةٌ مِّن رَّبِّكُمْ هَٰذِهِ نَاقَةُ اللَّهِ لَكُمْ آيَةً فَذَرُوهَا تَأْكُلْ فِي أَرْضِ اللَّهِ وَلَا تَمَسُّوهَا بِسُوءٍ فَيَأْخُذَكُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٧٤﴾

74．われらはまた、サムードの民にその兄弟サーリフを遣わせり。その時、サーリフは云えり、「人々よ、アッラーを崇拝せよ。彼の外に神なし。今主より明証がお前たちに来たれり―こはアッラーの牝駱駝にして、お前たちへの神兆なり。されば之をアッラーの大地に食むがままに放牧せよ。而して痛罰にあわぬよう、之を害するなかれ。

وَاذْكُرُوا إِذْ جَعَلَكُمْ خُلَفَاءَ مِن بَعْدِ عَادٍ وَبَوَّأَكُمْ فِي الْأَرْضِ تَتَّخِذُونَ مِن سُهُولِهَا قُصُورًا وَتَنْحِتُونَ الْجِبَالَ بُيُوتًا فَاذْكُرُوا آلَاءَ اللَّهِ وَلَا تَعْثَوْا فِي الْأَرْضِ مُفْسِدِينَ ﴿٧٥﴾

75．アッラーがお前たちにアードの民のあとを継がせ、その地に安住せしめた時のことを思い起せ。お前たちは平野に館を建て、また山を刻んで家々となせり。さればアッラーの恩恵を思い出して、地上に騒乱を引き起す不法をするなかれ」と。

قَالَ الْمَلَأُ الَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا مِن قَوْمِهِ لِلَّذِينَ اسْتُضْعِفُوا لِمَنْ آمَنَ مِنْهُمْ أَتَعْلَمُونَ أَنَّ صَالِحًا مُّرْسَلٌ مِّن رَّبِّهِ قَالُوا إِنَّا بِمَا أُرْسِلَ بِهِ مُؤْمِنُونَ ﴿٧٦﴾

76．この民の中の傲慢な長老たちは、弱者と見なされている人々、すなわち信徒たちに向って、云えり、「お前たちはサーリフが確かに主より遣わされたる者なることを知るか？」と。彼等は答えり、「我等はサーリフが遣わされたる使命を信ず」と。

قَالَ الَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا إِنَّا بِالَّذِي آمَنتُم بِهِ كَافِرُونَ ﴿٧٧﴾

77．傲慢なる者どもは云えり、「我等はお前たちが信ずるものを信ぜず」と。

فَعَقَرُوا النَّاقَةَ وَعَتَوْا عَنْ أَمْرِ رَبِّهِمْ وَقَالُوا يَا صَالِحُ ائْتِنَا بِمَا تَعِدُنَا إِن كُنتَ مِنَ الْمُرْسَلِينَ ﴿٧٨﴾

78．而して彼等は雌駱駝の腘を切り、主の命に背きて、云えり、「サーリフよ、もし汝が本当に使徒の一人ならば、我等を脅迫する事実を今ここで起して見せよ」と。

فَأَخَذَتْهُمُ الرَّجْفَةُ فَأَصْبَحُوا فِي دَارِهِمْ جَاثِمِينَ ﴿٧٩﴾

79．すると、にわかに地震が彼等を襲いたれば、彼等はことごとく自らの家の中で斃れ伏したり。

فَتَوَلَّىٰ عَنْهُمْ وَقَالَ يَا قَوْمِ لَقَدْ أَبْلَغْتُكُمْ رِسَالَةَ

80．そこでサーリフは彼等に背を向け、而して云えり、「人々よ、我は主のお告げをお前たちに伝え、真心をもって忠告せり。しかる

にお前たちは、誠実な忠告者を好まず」と。（注 43）

رَبِّي وَنَصَحْتُ لَكُمْ وَلٰكِنْ لَّا تُحِبُّوْنَ النّٰصِحِيْنَ ۝٨٠

81．われらはまたロトを（注 44）遣わせり。その時、ロトはその民に向って云えり、「お前たちは、何人も未だかつて行わざりし（注 45）忌まわしい行為を犯すのか？

وَلُوْطًا إِذْ قَالَ لِقَوْمِهٖٓ أَتَأْتُوْنَ الْفَاحِشَةَ مَا سَبَقَكُمْ بِهَا مِنْ أَحَدٍ مِّنَ الْعٰلَمِيْنَ ۝٨١

82．お前たち、女の代りに男に欲情をもよおして近づくとは。お前たちはなんという放埒な民なのだ」と。

إِنَّكُمْ لَتَأْتُوْنَ الرِّجَالَ شَهْوَةً مِّنْ دُوْنِ النِّسَآءِ ۚ بَلْ أَنْتُمْ قَوْمٌ مُّسْرِفُوْنَ ۝٨٢

83．その民はただかく答えたり、「彼等をお前たちの邑から追い出せ。彼等は清純を装う者なり」と。（注 46）

وَمَا كَانَ جَوَابَ قَوْمِهٖٓ إِلَّآ أَنْ قَالُوْٓا أَخْرِجُوْهُمْ مِّنْ قَرْيَتِكُمْ ۚ إِنَّهُمْ أُنَاسٌ يَّتَطَهَّرُوْنَ ۝٨٣

84．かくてわれらは、ロトの妻を除いて、ロトとその家族を救いたり。彼女はあとにとどまりたる者の類なりき。

فَأَنْجَيْنٰهُ وَأَهْلَهٗٓ إِلَّا امْرَأَتَهٗ ۖ كَانَتْ مِنَ الْغٰبِرِيْنَ ۝٨٤

85．而してわれらは彼等の上に雨を降らせたり。（注 47）見よ。罪人どもの末路が如何なるものなりしかを！（注 48）

وَأَمْطَرْنَا عَلَيْهِمْ مَّطَرًا ۖ فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُجْرِمِيْنَ ۝٨٥

第十一項

86．われらはまた、マドヤンの民に（注 49）その兄弟シュアイブを遣わせり。（注 50）そ

وَإِلٰى مَدْيَنَ أَخَاهُمْ شُعَيْبًا ۗ قَالَ يٰقَوْمِ اعْبُدُوا اللّٰهَ

注 43　サーリフ（サーレ）は悲しみに打ちひしがれた町を、そのままにしてたち去った。彼はこれ以上その恐ろしい光景を見るに耐えなかったのであり、丁度バドルにおけるモハッマドのように、悲しみと悲嘆に満ちた心で、この節にあるような哀しい言葉を口にしたのである。

注 44　ロトはアブラハムの甥であり、同世代であった。

注 45　この言葉は、その忌まわしい事が、今までになかった新たな悪であるということ、あるいは、、その程度が以前と比ぶべくもない程重大であったということを言ってる。

注 46　ロトに敵対する人々は、彼に従う人々を特別に高潔を気どり、それを誇示していると軽蔑した。

注 47　大地震の時には、岩や瓦礫が噴き出し、高く上ってまた大地に落ちてくることがよくある。ボンペイで起こり、1965 年にはカングラ（インド）で起こった。

注 48　ある人々によれば、死海の周囲の地は街が廃墟となっているという。しかし、クルアーンはここをメディナからシリアへの道に定めているようである（15：80）。

注 49　マドヤンはケトゥラとアブラハムの間に生まれた息子であった（創世記 25：1 、2 ）。

注 50　シュアイブはモーゼ以前の非イスラム人の預言者の名であった。聖書に彼の名は見当らないが、一般に彼はモーゼの義父として、尊敬されている。

の時、シュアイブは云えり、「人々よ、アッラーを崇拝せよ。彼の外に神なし。主より明証がお前たちに来たれり。されば量目や目方をたっぷりと与え、人の財産を減らすなかれ。また秩序が定りたる後、地上に騒乱をひき起すなかれ。お前たち信徒ならば、こうするのが身のためなるぞ。

مَا لَكُم مِّنْ إِلَٰهٍ غَيْرُهُ ۖ قَدْ جَاءَتْكُم بَيِّنَةٌ مِّن رَّبِّكُمْ ۖ فَأَوْفُوا الْكَيْلَ وَالْمِيزَانَ وَلَا تَبْخَسُوا النَّاسَ أَشْيَاءَهُمْ وَلَا تُفْسِدُوا فِي الْأَرْضِ بَعْدَ إِصْلَاحِهَا ۚ ذَٰلِكُمْ خَيْرٌ لَّكُمْ إِن كُنتُم مُّؤْمِنِينَ ﴿٨٦﴾

87. また路頭に坐して脅迫し、アッラーを信ずる人々をアッラーの道より背かしむるなかれ。またそれを歪曲せんとするなかれ。お前たちはかつて少数なりしが、アッラーがお前たちを増加せしめたることを思い起せ。見よ、騒乱を引き起したる者どもの末路が如何なるものなりしかを！

وَلَا تَقْعُدُوا بِكُلِّ صِرَاطٍ تُوعِدُونَ وَتَصُدُّونَ عَن سَبِيلِ اللَّهِ مَنْ آمَنَ بِهِ وَتَبْغُونَهَا عِوَجًا ۚ وَاذْكُرُوا إِذْ كُنتُمْ قَلِيلًا فَكَثَّرَكُمْ ۖ وَانظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُفْسِدِينَ ﴿٨٧﴾

88. もしお前たちのうち、我が遣わされたる使命を信ずる一団と、之を信ぜざる一団とあらば、アッラーが我等の間を審判するまで暫く辛抱して待て。アッラーこそ最上の審判者にまします」と。

وَإِن كَانَ طَائِفَةٌ مِّنكُمْ آمَنُوا بِالَّذِي أُرْسِلْتُ بِهِ وَطَائِفَةٌ لَّمْ يُؤْمِنُوا فَاصْبِرُوا حَتَّىٰ يَحْكُمَ اللَّهُ بَيْنَنَا ۚ وَهُوَ خَيْرُ الْحَاكِمِينَ ﴿٨٨﴾

89. その民の中の傲慢なる長老たちは云えり、「シュアイブよ、我等は汝並びに汝と共にある信者たちをこの邑より追放せん。それがいやなら、我等の宗教に戻れ」と。シュアイブは云えり、「我等不本意でもか？

قَالَ الْمَلَأُ الَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا مِن قَوْمِهِ لَنُخْرِجَنَّكَ يَا شُعَيْبُ وَالَّذِينَ آمَنُوا مَعَكَ مِن قَرْيَتِنَا أَوْ لَتَعُودُنَّ فِي مِلَّتِنَا ۚ قَالَ أَوَلَوْ كُنَّا كَارِهِينَ ﴿٨٩﴾

90. アッラーがそこより我等をお救いくだされたというに、今またお前たちの宗教に戻らば、我等はアッラーに対し奉り偽る者とならん。我等の主アッラーの御意志に非ざれば、そこに戻らざることが我等の義務なり。主はその知識の中に一切を包含す。我等はアッラーを信頼し奉る。されば主よ、真理をもって我等とこの人々の間を裁き給え。汝こそは最上の判決者にまします」と。

قَدِ افْتَرَيْنَا عَلَى اللَّهِ كَذِبًا إِنْ عُدْنَا فِي مِلَّتِكُم بَعْدَ إِذْ نَجَّانَا اللَّهُ مِنْهَا ۚ وَمَا يَكُونُ لَنَا أَن نَّعُودَ فِيهَا إِلَّا أَن يَشَاءَ اللَّهُ رَبُّنَا ۚ وَسِعَ رَبُّنَا كُلَّ شَيْءٍ عِلْمًا ۚ عَلَى اللَّهِ تَوَكَّلْنَا ۚ رَبَّنَا افْتَحْ بَيْنَنَا وَبَيْنَ قَوْمِنَا بِالْحَقِّ وَأَنتَ خَيْرُ الْفَاتِحِينَ ﴿٩٠﴾

91. その民の中の信ぜざる長老たちは云えり、「お前たちもしシュアイブに従わば、必ず失敗者とならん」と。

وَقَالَ الْمَلَأُ الَّذِينَ كَفَرُوا مِن قَوْمِهِ لَئِنِ اتَّبَعْتُمْ شُعَيْبًا إِنَّكُمْ إِذًا لَّخَاسِرُونَ ﴿٩١﴾

92．すると、にわかに地震が彼等を襲いたれば、彼等はことごとく自らの家の中で斃れ伏したり。

فأخذتهم الرجفة فأصبحوا في دارهم جثمين ﴿٩٢﴾

93．シュアイブを嘘つき呼ばわりせる人々は、恰もそこに未だかつて住めることなかりし如くなれるなり。シュアイブを嘘つき呼ばわりせる人々—彼等こそ失敗者なりけり。

الذين كذبوا شعيبا كأن لم يغنوا فيها الذين كذبوا شعيبا كانوا هم الخسرين ﴿٩٣﴾

94．そこで、シュアイブは彼等に背を向け、而して云えり、「人々よ、我は主のお告げを確かにお前たちに伝え、真心をもって忠告せり。されば、信ぜざる人々のためにどうして我が心を痛めようか」と。

فتولى عنهم وقال يقوم لقد أبلغتكم رسلت ربي ونصحت لكم فكيف آسى على قوم كفرين ﴿٩٤﴾

第十二項

95．われらは如何なる邑にも、そこに住む人々に災難と苦しみをふりかけずに預言者を遣わさざりき。そは彼等を謙虚ならしめんがためなり。

وما أرسلنا في قرية من نبي إلا أخذنا أهلها بالبأساء والضراء لعلهم يضرعون ﴿٩٥﴾

96．しかる後、われら彼等の不幸を転じて幸福を与うれば、彼等は裕福になりて、云えり、「我等の父祖もまた苦楽を合せ嘗めたり」と。さればわれらは彼等が悟らざるうちに突然懲罰を加えたり。

ثم بدلنا مكان السيئة الحسنة حتى عفوا وقالوا قد مس آباءنا الضراء والسراء فأخذنهم بغتة وهم لا يشعرون ﴿٩٦﴾

97．もしこれ等の邑々の住民が信じて義しくありたりせば、われらは彼等に天地の祝福を開きしなり。されど彼等信ぜざるが故に、われらは彼等が日頃稼ぎしことに対して懲罰を加えたり。

ولو أن أهل القرى آمنوا واتقوا لفتحنا عليهم بركت من السماء والأرض ولكن كذبوا فأخذنهم بما كانوا يكسبون ﴿٩٧﴾

98．これ等の邑々の住民は、彼等が夜眠れる間に降るわれらの懲罰に対して果して平気でいられるのか？

أفأمن أهل القرى أن يأتيهم بأسنا بياتا وهم نائمون ﴿٩٨﴾

99．これ等の邑々の人々は、昼日中遊び戯れる最中に降るわれらの懲罰に対して果して平気でいられるのか？

أو أمن أهل القرى أن يأتيهم بأسنا ضحى وهم يلعبون ﴿٩٩﴾

100．彼等はアッラーの計略に対して果して平気でいられるのか？滅ぶべきものどもの外は、何人もアッラーの計略に対して心配せざる者はなし。

أفأمنوا مكر الله فلا يأمن مكر الله إلا القوم الخسرون ﴿١٠٠﴾

第十三項

101．以前の住民の後を承けてその地を継げる者には、こは嚮導を与えざるか？すなわち、もしわれらが欲しなば、彼等の罪故にわれらは彼等を滅ぼすことも、また彼等の心を封印して聞えなくすることも可能なれば。

أَوَلَمْ يَهْدِ لِلَّذِينَ يَرِثُونَ الْأَرْضَ مِنْ بَعْدِ أَهْلِهَا أَنْ لَوْ نَشَاءُ أَصَبْنَاهُمْ بِذُنُوبِهِمْ ۚ وَنَطْبَعُ عَلَىٰ قُلُوبِهِمْ فَهُمْ لَا يَسْمَعُونَ ﴿١٠١﴾

102．われらはこれ等の邑々について、いくつかの消息を汝に語れり。使徒たちは確かに明証を携えて彼等のところへ来れり。しかるに彼等は、以前信ぜざるものを信ずることを欲せざりき。アッラーはかくの如く不信心者の心を封じ給う。

تِلْكَ الْقُرَىٰ نَقُصُّ عَلَيْكَ مِنْ أَنْبَائِهَا ۚ وَلَقَدْ جَاءَتْهُمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَيِّنَاتِ فَمَا كَانُوا لِيُؤْمِنُوا بِمَا كَذَّبُوا مِنْ قَبْلُ ۚ كَذَٰلِكَ يَطْبَعُ اللَّهُ عَلَىٰ قُلُوبِ الْكَافِرِينَ ﴿١٠٢﴾

103．彼等の大半は契約を守らず。げに彼等の大半は邪悪な者どもなり。

وَمَا وَجَدْنَا لِأَكْثَرِهِمْ مِنْ عَهْدٍ ۖ وَإِنْ وَجَدْنَا أَكْثَرَهُمْ لَفَاسِقِينَ ﴿١٠٣﴾

104．そこでわれらは、彼等の後に、モーゼにわれらの奇蹟を持たせてファラオ並びにその長老たちのところへ遣わしたり。しかるに彼等は不当にも之を拒否せり。されば見よ、騒乱をひき起せる者どもの末路が如何なるものなりしかを！

ثُمَّ بَعَثْنَا مِنْ بَعْدِهِمْ مُوسَىٰ بِآيَاتِنَا إِلَىٰ فِرْعَوْنَ وَمَلَئِهِ فَظَلَمُوا بِهَا ۖ فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُفْسِدِينَ ﴿١٠٤﴾

105．モーゼは云えり、「ファラオよ、げに我は万物の主より遣わされたる者なり。

وَقَالَ مُوسَىٰ يَا فِرْعَوْنُ إِنِّي رَسُولٌ مِنْ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿١٠٥﴾

106．我はアッラーについて、真実の外は何事も語るを許されざる身なり。我は主より明証を携えてお前たちに来れり。されば我と共に、イスラエルの子らを放免せよ」と。

حَقِيقٌ عَلَىٰ أَنْ لَا أَقُولَ عَلَى اللَّهِ إِلَّا الْحَقَّ ۚ قَدْ جِئْتُكُمْ بِبَيِّنَةٍ مِنْ رَبِّكُمْ فَأَرْسِلْ مَعِيَ بَنِي إِسْرَائِيلَ ﴿١٠٦﴾

107．ファラオは云えり、「もし汝が証拠を携えて来たりなば、而して汝の言葉が事実ならば、その証拠を見せよ」と。

قَالَ إِنْ كُنْتَ جِئْتَ بِآيَةٍ فَأْتِ بِهَا إِنْ كُنْتَ مِنَ الصَّادِقِينَ ﴿١٠٧﴾

108．さればモーゼ、その杖を投げたり。見よ、そは忽ち一條の蛇となれり。（注51）

فَأَلْقَىٰ عَصَاهُ فَإِذَا هِيَ ثُعْبَانٌ مُبِينٌ ﴿١٠٨﴾

注51　神の預言者達が示した奇跡は、奇術師の手先の芸当とは違うものである。それらは、大いなる宗教的、精神的目的にかなうものであり、それを目撃した人々の心に、信仰への確信、神への敬虔な感情と怖れを生じ

109.　また彼その手を前に伸せば、見よ、その手は誰れの目にも真白に映(うつ)れり。（注 52）

وَنَزَعَ يَدَهُ فَإِذَا هِيَ بَيْضَاءُ لِلنَّاظِرِينَ ١٠٩

第十四項

110.　ファラオの民の長老たちは云えり、「この者は確かに技量優れたる魔術師なり。

قَالَ الْمَلَأُ مِنْ قَوْمِ فِرْعَوْنَ إِنَّ هَٰذَا لَسَاحِرٌ عَلِيمٌ ١١٠

111.　此奴(こやつ)はお前たちをこの国より追い出さんとする者なり。さてそこで、お前たちの意見や如何に？」と。（注 53）

يُرِيدُ أَنْ يُخْرِجَكُمْ مِنْ أَرْضِكُمْ فَمَاذَا تَأْمُرُونَ ١١١

るものである。もし実際に小杖がへびに変わったとしたら、その動作の全てが預言者の奇跡というより、手品師の芸当のように見えたであろう。この奇跡について、聖書に何と書いてあるかにかかわらず、クルアーンは小杖が実際に生きているへびに変わったという見解への支持を与えるには到っていない。そんな事は、現実には起こらなかったようである。小杖がただ単にすばやく動いているへびのようにみえたのである。奇跡は、神が、小杖がへびの形にみえる様に見物人の視覚に、何か特別な支配を施したか、小杖そのものをへびに見えるように変えられたかどちらかの、幻であり、この幻を、モーゼに加えて、パロとその廷臣達も一緒に見たのである。小杖は小杖のままであったのだが、ただモーゼや他の者達にはへびにみえたのであった。幻影の内に、人が邪魔物である肉体の域を越え、一時的に精神的な範囲に移動される時、人はその認知以外で又肉体の一部である目では見えないものが見えることは、普通の霊的な現象である。同様な神霊的現象は、聖なる預言者の時代に、月がまるでバラバラに割れたかの様に、聖なる預言者のみでなく、その信者達と、その敵対する者達にも目撃された時にもみられた（ブハリ・タフシール書）。
聖なる預言者が幻の中でしばしば見たというガブリエルは、ある時、預言者と共に座っていたその仲間達によっても目撃された、と言い伝えられている（ブハリ・イーマーン書）。同様に、バドルの戦いに於て、天使達が、不信仰者にでさえも目撃された。同じような実例は、著名なイスラムの軍司令官であるサーリヤの率いるイスラムの陸軍が、イラクで敵と戦っていた時にも起こっている。二代カリフであるオマルがメディナで金曜日の説教をしている最中に、イスラムの陸軍が絶対多数の敵に圧倒され悲惨な敗北がさし迫っているのを幻の中に見た。そこで突然、彼は説教を途中でやめ説教壇から「サーリヤよ、山へ逃げろ、山へ逃げろ。」と叫んだ。何百マイルも離れた所で、また耳が聞こえなくなる程の戦争のごう音のまっ只中で、サーリヤはオマルの声を聞き、その指示に従い、イスラムの陸軍は確実な敗北から救われたのである。
モーゼの奇跡は、大いなる重要性を持っている。それは、こんな風に解釈する事ができる。神はモーゼに、その時彼にはへびのように見えた小杖を投げ捨てる様言ったり、そして、神の命ずるままに拾いあげると、それはただの木であった。ここで、幻と夢の言葉を借りて言えば、へびは敵を象徴し、小杖は公衆を表象している。従って、この幻を手段として、神はモーゼに、もし神がモーゼの人々を彼から退けさせたら、人々はまぎれもないへび（のような陰険な人々）になるだろう事を知らせようとした。しかし、もし人々を彼のいつくしみ深い世話の下に置いておくならば、彼らは公正な、信心深い人々からなる強力堅固な社会へと成長していくだろうと悟らせたのである。

注 52　　神はモーゼにこう言った「汝の手をその胸に突きさしてみよ。それは、病弊もなく、まっ白なまま現われて来るであろう」(28：33)。これは象徴的な言葉で、モーゼにもし彼が信仰者達をいつくしみ深い世話のもとで近くに置けば、人々は知性にあふれた者達になるだけでなく、他の者達へその明知を伝えることになるが、そうでなければ、ただ陰険であるだけでなく道徳的にも病むであろう、というはっきりとした暗示となっていた。従って奇跡は、魔術師による演技ではなく、深い精神的意味に満ちたお告げだったのである。

注 53　　これらの言葉は、モーゼに対するエジプト人達の気持を徐々に組立てる意図をもっていたのだが、モーゼは彼らを追い出す事など望んでいなかった。彼の使命は、自分の人々をエジプトから脱出させることに限られていたのである。

112．彼等は云えり、「しばし彼とその兄弟を待たせ、その間に召喚者を国中に走らせ、

قَالُوٓا اَرۡجِهۡ وَاَخَاهُ وَاَرۡسِلۡ فِى الۡمَدَآئِنِ حٰشِرِيۡنَ

113．それぞれの技量に秀でたる魔術師を汝の前に連行させるがよろしかろう」と。

يَاۡتُوۡكَ بِكُلِّ سٰحِرٍ عَلِيۡمٍ

114．かくて魔術師たちはファラオの前に参上し、「我等首尾よく勝ちたる時は、もちろん褒美をいただけましうな」と云えり。

وَجَآءَ السَّحَرَةُ فِرۡعَوۡنَ قَالُوٓا اِنَّ لَنَا لَاَجۡرًا اِنۡ كُنَّا نَحۡنُ الۡغٰلِبِيۡنَ

115．ファラオは云えり、「さよう。その上、お前たちを余がそば近く取り立てん」と。

قَالَ نَعَمۡ وَاِنَّكُمۡ لَمِنَ الۡمُقَرَّبِيۡنَ

116．そこで彼等は、「モーゼよ、汝が先に投げるか、それとも我等が先に投げようか」と云えり。（注 54）

قَالُوۡا يٰمُوۡسٰٓى اِمَّآ اَنۡ تُلۡقِىَ وَاِمَّآ اَنۡ نَّكُوۡنَ نَحۡنُ الۡمُلۡقِيۡنَ

117．モーゼは答えり、「汝等投げよ」と。（注 55）彼等投げるに当り、先づ人々の目に魔法をかけ、畏怖の念にうたせておいてから、驚嘆する魔術を披露せり。

قَالَ اَلۡقُوۡا ۚ فَلَمَّآ اَلۡقَوۡا سَحَرُوۡٓا اَعۡيُنَ النَّاسِ وَاسۡتَرۡهَبُوۡهُمۡ وَجَآءُوۡ بِسِحۡرٍ عَظِيۡمٍ

118．われらはモーゼをかく激励せり、「汝の杖を投げよ」と。すると見よ、その杖は彼等が幻出せしめたるものを忽ち呑み込みたり。（注 56）

وَاَوۡحَيۡنَآ اِلٰى مُوۡسٰٓى اَنۡ اَلۡقِ عَصَاكَ ۚ فَاِذَا هِىَ تَلۡقَفُ مَا يَاۡفِكُوۡنَ

119．かくて真理は確立され、彼等のなせることの空しさが証明せられたり。

فَوَقَعَ الۡحَقُّ وَبَطَلَ مَا كَانُوۡا يَعۡمَلُوۡنَ

120．かくの如く彼等はそこで打ち負かされ、面目を失って退きさがりたり。（注 57）

فَغُلِبُوۡا هُنَالِكَ وَانۡقَلَبُوۡا صٰغِرِيۡنَ

注 54　その場面の緊張感に注目せよ。関係者達両方共が、決定的な試錬に取り組む心構えを持ちながらお互いに向いあって勢ぞろいしているのである。

注 55　神の預言者達は決して最初に攻撃をしない。彼らは、防御をし、神の救いを求めるのを好むので、相手側の攻撃を待つ。

注 56　それは、小杖からできた「へび」ではなく、手品師達の魔術をといたのは、小杖そのものであった。大いなる預言者の精神力に支配され、神の命令により投げ捨てられたモーゼの小杖は、見物者達の前でまやかしをあばき、そして彼らの魔術によって人々に本当のへびだと思い込ませていたものを、粉々にこわした。「彼らが幻出せしめたるものを忽ち呑み込みたり。」という語句は、手品師達によってつくられた惑わしを小杖がすぐにはあばいた事を示し「呑み込む」は「つくり出された影響もしくは印象を破壊した」ことを示す。

注 57　この節は、パロ族の一団を指し、魔術師達のことを言っているのではなさそうである。後者は、次の節で語られる。「面目を失う」は、ほんの少し前に戦いの場面に、誇り高く、横柄な態度で現れ、成功に自信を持っていた彼ら（パロとその一団）は、今では遠慮がちで控えめで元気がないとの事である。

121.　魔術師たちはひれ伏して（注 58）叩頭せり。

وَأُلْقِيَ السَّحَرَةُ سٰجِدِيْنَ ﴿١٢١﴾

122.　而して彼等は云えり、「我等は万物の主を信ず、

قَالُوْٓا اٰمَنَّا بِرَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿١٢٢﴾

123.　モーゼとアロンの主を」と。

رَبِّ مُوْسٰى وَهٰرُوْنَ ﴿١٢٣﴾

124.　ファラオを云えり、「お前たち余の許しなしに彼を信じたるか。これはまさしく、住民を（注 59）邑から追い出さんとして、お前たちが企らみたる陰謀なり。余はいまに、お前たちを思い知らしてやるほどに。

قَالَ فِرْعَوْنُ اٰمَنْتُمْ بِهٖ قَبْلَ اَنْ اٰذَنَ لَكُمْ ۚ اِنَّ هٰذَا لَمَكْرٌ مَّكَرْتُمُوْهُ فِي الْمَدِيْنَةِ لِتُخْرِجُوْا مِنْهَآ اَهْلَهَا ۚ فَسَوْفَ تَعْلَمُوْنَ ﴿١٢٤﴾

125.　必ずやお前たちの手足を交互に切り落し、しかる後に一纒めにして磔に（注 60）処せん」と。

لَاُقَطِّعَنَّ اَيْدِيَكُمْ وَاَرْجُلَكُمْ مِّنْ خِلَافٍ ثُمَّ لَاُصَلِّبَنَّكُمْ اَجْمَعِيْنَ ﴿١٢٥﴾

126.　彼等は答えり、「我等は我が主の許へ帰るべし。

قَالُوْٓا اِنَّآ اِلٰى رَبِّنَا مُنْقَلِبُوْنَ ﴿١٢٦﴾

127.　陛下は、我等が我等に降されたる主の神兆を信じたという理由で、報復せんとするか。主よ、確固不抜な信念を我等に注ぎ給え。我等をば汝に身を任せて、死なせ給え」と。

وَمَا تَنْقِمُ مِنَّآ اِلَّآ اَنْ اٰمَنَّا بِاٰيٰتِ رَبِّنَا لَمَّا جَآءَتْنَا ۗ رَبَّنَآ اَفْرِغْ عَلَيْنَا صَبْرًا وَّتَوَفَّنَا مُسْلِمِيْنَ ﴿١٢٧﴾

第十五項

128.　ファラオの民の長老たちは云えり、（注 61）「陛下はモーゼとその一党を放置しておくおつもりか？彼等は国中に騒乱をまき

وَقَالَ الْمَلَاُ مِنْ قَوْمِ فِرْعَوْنَ اَتَذَرُ مُوْسٰى وَقَوْمَهٗ لِيُفْسِدُوْا فِي الْاَرْضِ وَيَذَرَكَ وَاٰلِهَتَكَ ۗ قَالَ

注 58　魔術師達の敗北はあまりにも完全なものだったので、何か隠された力が足元をすくったようであった。そして彼らは神の御前にて祈りと謙そんの態度で、地面にひれ伏す事を余儀なくさせられた。

注 59　ここでいう「住民」という語句は、パロ自身の人民を指すが、彼らは、エジプトの本当の住人ではなく、農夫達から国を無理にとりあげた者達であった。

注 60　はりつけは、苦痛な死を意味していたにもかかわらず、刑罰によりみせしめの効果を加え、死をより苦痛なものとするために、手足を切り落とす罰がそれに加えられた。付随的に、この節は、モーゼの時代の昔からでさえも、はりつけによる死刑は、行われていた事を示している。

注 61　重臣達自身が、モーゼとその兄に、猶予を与える様、パロに助言したのであるが（17： 112）　しかし今、その同じ重臣達が、自分達の助言に従ってモーゼとアロンに与えた時間に対しパロを非難している。このようにして、不名誉と屈辱を敬慶する者は、道徳的品位を落としていくのである。

起し、あまつさえ汝とその神々をないがしろにするなり」と。(注 62) ファラオは答えり、「我等は彼等の息子たちをことごとく殺し、婦女のみを生かしておこう。我等は彼等を支配す」と。

سَنُقَتِّلُ أَبْنَاءَهُمْ وَنَسْتَحْيِي نِسَاءَهُمْ وَإِنَّا فَوْقَهُمْ قَاهِرُونَ ﴿١٢٨﴾

129．モーゼはその民に云えり、「アッラーに助けを求め、辛抱せよ。げに大地はアッラーの所有なり。アッラーはその僕らの中で嘉する者に遺産として之を授く。善果は神を畏敬する者に帰する」と。

قَالَ مُوسَىٰ لِقَوْمِهِ اسْتَعِينُوا بِاللَّهِ وَاصْبِرُوا ۚ إِنَّ الْأَرْضَ لِلَّهِ يُورِثُهَا مَنْ يَشَاءُ مِنْ عِبَادِهِ ۖ وَالْعَاقِبَةُ لِلْمُتَّقِينَ ﴿١٢٩﴾

130．彼等は云えり、「我等は、汝が我等のところへ来る前も、その後ですら、常に迫害を受く」と。モーゼは云えり、「主はお前たちの敵を滅ぼし、お前たちにこの地を (注 63) 統治せしめんがために、主はお前たちが如何に行動するかを御覧になるかも知れぬ」と。

قَالُوا أُوذِينَا مِنْ قَبْلِ أَنْ تَأْتِيَنَا وَمِنْ بَعْدِ مَا جِئْتَنَا ۚ قَالَ عَسَىٰ رَبُّكُمْ أَنْ يُهْلِكَ عَدُوَّكُمْ وَيَسْتَخْلِفَكُمْ فِي الْأَرْضِ فَيَنْظُرَ كَيْفَ تَعْمَلُونَ ﴿١٣٠﴾

第十六項

131．われらはファラオの民を、うち続く旱魃と果実類の缺乏を以て懲らしめ、彼等を反省せしめんとせり。

وَلَقَدْ أَخَذْنَا آلَ فِرْعَوْنَ بِالسِّنِينَ وَنَقْصٍ مِنَ الثَّمَرَاتِ لَعَلَّهُمْ يَذَّكَّرُونَ ﴿١٣١﴾

132．しかるに彼等は、幸運至れば、「こは我等のものなり」と云えり。されど災いが降りかかれば、彼等はその凶運をモーゼ並びに彼と偕にある者たちのせいになせり。然らず、彼等の凶運はアッラーの定め給えるものなり。されど彼等の多くは之を知らず。

فَإِذَا جَاءَتْهُمُ الْحَسَنَةُ قَالُوا لَنَا هَٰذِهِ ۖ وَإِنْ تُصِبْهُمْ سَيِّئَةٌ يَطَّيَّرُوا بِمُوسَىٰ وَمَنْ مَعَهُ ۗ أَلَا إِنَّمَا طَائِرُهُمْ عِنْدَ اللَّهِ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿١٣٢﴾

133．彼等は云えり、「汝が如何なる奇蹟を示して我等を魅了せしめんとするも、我等は断じて汝を信ずるものに非ず」と。

وَقَالُوا مَهْمَا تَأْتِنَا بِهِ مِنْ آيَةٍ لِتَسْحَرَنَا بِهَا فَمَا نَحْنُ لَكَ بِمُؤْمِنِينَ ﴿١٣٣﴾

注 62　パロ自身、彼の人民によって神として崇拝されていた (28：39)。そして、彼は、代わって、他の神々を崇拝した。このゆえに、重臣達は、パロとその神々の崇拝を非難したことに対し、モーゼとアロンを責めたのである。

注 63　この節はパロの絶滅の後、イスラエル人がエジプトを継承させられるべきだという事を必ずしも意味しない。これは、単に、パロの力は、断たれるべきものであった、そして他の者達が彼の王国を所有することになっていることを意味する。パロの絶滅とその王国の崩壊の後、イスラエル人を支持する王朝がその地を占有したことを我々は知っている。この節で述べられている「この地」はエジプトではなく、イスラエル人に約束され、その約束に従って彼らが受け継いだ聖なる国のことをさしている。

134.　そこでわれらは彼等に、嵐、蝗、虱、蛙、血など―明証を降したり。(注 64) されど彼等依然として傲慢にして、罪深い民なりき。

فَأَرْسَلْنَا عَلَيْهِمُ الطُّوفَانَ وَالْجَرَادَ وَالْقُمَّلَ وَالضَّفَادِعَ وَالدَّمَ آيَاتٍ مُّفَصَّلَاتٍ فَاسْتَكْبَرُوا وَكَانُوا قَوْمًا مُّجْرِمِينَ ١٣٤

135.　しかるに懲罰が降ると、彼等は云えり、「モーゼよ、我等のために汝の主に懇願してくれぬか、主が汝に約束せることに従って。汝もしこの懲罰を除かば、我等は必ず汝を信じ、イスラエルの子らを汝と共に放免すべし」と。

وَلَمَّا وَقَعَ عَلَيْهِمُ الرِّجْزُ قَالُوا يَا مُوسَى ادْعُ لَنَا رَبَّكَ بِمَا عَهِدَ عِندَكَ لَئِن كَشَفْتَ عَنَّا الرِّجْزَ لَنُؤْمِنَنَّ لَكَ وَلَنُرْسِلَنَّ مَعَكَ بَنِي إِسْرَائِيلَ ١٣٥

136.　かくてわれらが、或る期間、懲罰を彼等より除いてやると、見よ、彼等はその約束を破りたり。

فَلَمَّا كَشَفْنَا عَنْهُمُ الرِّجْزَ إِلَىٰ أَجَلٍ هُم بَالِغُوهُ إِذَا هُمْ يَنكُثُونَ ١٣٦

137.　さればわれらは彼等に報復し、ことごとく之を海中に溺れせしめたり。そは彼等がわれらの神兆を嘘よばわりし、これを軽視せるがためなり。

فَانتَقَمْنَا مِنْهُمْ فَأَغْرَقْنَاهُمْ فِي الْيَمِّ بِأَنَّهُمْ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا وَكَانُوا عَنْهَا غَافِلِينَ ١٣٧

138.　而してわれらは、弱者視せられたる人々に、われらが祝福せる土地の（注 65）東も西も（注 66）継がしめたり。イスラエルの子らの忍耐故に、汝の主の有難い言葉は彼等の上に完うせられたり。われらはファラオとその民が築けるもの並びに建てたるもの、そのことごとくを破壊せり。

وَأَوْرَثْنَا الْقَوْمَ الَّذِينَ كَانُوا يُسْتَضْعَفُونَ مَشَارِقَ الْأَرْضِ وَمَغَارِبَهَا الَّتِي بَارَكْنَا فِيهَا وَتَمَّتْ كَلِمَتُ رَبِّكَ الْحُسْنَىٰ عَلَىٰ بَنِي إِسْرَائِيلَ بِمَا صَبَرُوا وَدَمَّرْنَا مَا كَانَ يَصْنَعُ فِرْعَوْنُ وَقَوْمُهُ وَمَا كَانُوا يَعْرِشُونَ ١٣٨

139.　かくてわれらはイスラエルの子らをして海を渡らしめると、彼等は多くの偶像を熱心に奉ずる人々に出会いたり。彼等は云えり、「モーゼよ、彼等には多くの神々あり、我等にも一柱の神を作れ」と。モーゼは云えり、「げにお前たちは愚かなる徒輩なり。

وَجَاوَزْنَا بِبَنِي إِسْرَائِيلَ الْبَحْرَ فَأَتَوْا عَلَىٰ قَوْمٍ يَعْكُفُونَ عَلَىٰ أَصْنَامٍ لَّهُمْ قَالُوا يَا مُوسَى اجْعَل لَّنَا إِلَٰهًا كَمَا لَهُمْ آلِهَةٌ قَالَ إِنَّكُمْ قَوْمٌ تَجْهَلُونَ ١٣٩

注 64　聖書では、小杖と白い手のおつげ以外に 10 のお告げが述べられている（出エジプト記 7－11 章）。聖書の記述は、お告げを相当誇張してしまったようである。

注 65　アブラハムとヤコブの子孫達に約束された聖なる地（5：22）。イスラエル人が成功し、繁栄し、大いなる国家に成長することになっている土地だったので清められた。

注 66　「土地の東も西も」という語句は、アラビア語の慣用句によると、国全体を意味する。

140.　これ等の人々が携わるものはことごとく破壊され、彼等のなすことは必ず無に帰すべし」と。

إِنَّ هَٰٓؤُلَآءِ مُتَبَّرٌ مَّا هُمْ فِيهِ وَبَٰطِلٌ مَّا كَانُوا۟ يَعْمَلُونَ ﴿١٤٠﴾

141.　モーゼは更に云えり、「我にアッラーの外に神を探せとな、お前たちを選びてすべての民族の上に置き給えし御方の外に？」と。

قَالَ أَغَيْرَ ٱللَّهِ أَبْغِيكُمْ إِلَٰهًا وَهُوَ فَضَّلَكُمْ عَلَى ٱلْعَٰلَمِينَ ﴿١٤١﴾

142.　われらがお前たちをファラオの民から救える時のことを思い起せ。彼等はお前たちを厳しい責苦で苦しめたり。お前たちの息子たちは殺され、女たちは辱められたり。その中にお前たちの主よりの重大な試練ありき。

وَإِذْ أَنجَيْنَٰكُم مِّنْ ءَالِ فِرْعَوْنَ يَسُومُونَكُمْ سُوٓءَ ٱلْعَذَابِ ۙ يُقَتِّلُونَ أَبْنَآءَكُمْ وَيَسْتَحْيُونَ نِسَآءَكُمْ ۚ وَفِى ذَٰلِكُم بَلَآءٌ مِّن رَّبِّكُمْ عَظِيمٌ ﴿١٤٢﴾

第十七項

143.　われらはモーゼに三十夜を命じたりしが、更に十夜を追加せり。(注 67) 従って主の命じたる期間は四十夜をもって完了せり。そこでモーゼはその兄アロンに向って云えり、「我が留守中に、(注 68) 我に代りて我が民を治め、彼等をうまく統御し、悪をなす者どもの道に従うなかれ」と。

وَوَٰعَدْنَا مُوسَىٰ ثَلَٰثِينَ لَيْلَةً وَأَتْمَمْنَٰهَا بِعَشْرٍ فَتَمَّ مِيقَٰتُ رَبِّهِۦٓ أَرْبَعِينَ لَيْلَةً ۚ وَقَالَ مُوسَىٰ لِأَخِيهِ هَٰرُونَ ٱخْلُفْنِى فِى قَوْمِى وَأَصْلِحْ وَلَا تَتَّبِعْ سَبِيلَ ٱلْمُفْسِدِينَ ﴿١٤٣﴾

144.　モーゼがわれらの命じたる時に来たので、主はモーゼに向って云うと、モーゼは云えり、「主よ、お姿を現わし、我に汝を仰ぎ見させたまえ」と。主は答えて云えり、「汝はわれを見るべからず。なれどあの山を見よ。もしあの山がその場に残るなら、すなわち汝はわれを見ん」と。されど、主が山の上に御自身を顕わすや、主は忽ち山を粉々に粉砕せり。(注 69) ためにモーゼは気を失って倒れたり。やがて正気に戻ると、モーゼは云えり、「聖なるかな。我は改悛して汝に帰依し、信者の魁とならん」と。

وَلَمَّا جَآءَ مُوسَىٰ لِمِيقَٰتِنَا وَكَلَّمَهُۥ رَبُّهُۥ قَالَ رَبِّ أَرِنِىٓ أَنظُرْ إِلَيْكَ ۚ قَالَ لَن تَرَىٰنِى وَلَٰكِنِ ٱنظُرْ إِلَى ٱلْجَبَلِ فَإِنِ ٱسْتَقَرَّ مَكَانَهُۥ فَسَوْفَ تَرَىٰنِى ۚ فَلَمَّا تَجَلَّىٰ رَبُّهُۥ لِلْجَبَلِ جَعَلَهُۥ دَكًّا وَخَرَّ مُوسَىٰ صَعِقًا ۚ فَلَمَّآ أَفَاقَ قَالَ سُبْحَٰنَكَ تُبْتُ إِلَيْكَ وَأَنَا۠ أَوَّلُ ٱلْمُؤْمِنِينَ ﴿١٤٤﴾

注 67　神のモーゼとの親交は約束された三十夜に完成された。十夜の期間の延長は約束の一部分ではないが、特別の好意であった。

注 68　この語句はアロンの地位がモーゼのそれより下（従属したもの）だった事を示す。　モーゼはイスラエル人達を「私の民」と呼び、アロンに彼の代わりに行動してくれる様に指示した、すなわち、彼が不在の間に彼の代わりに役目を勤めるということである。

注 69　山は実際に粉々に破壊されたわけではない。この語句は地震のものすごい激烈な様子を比喩的に表すために使われた。

145. アッラーは云えり、「モーゼよ、われは汝を、わが神託とわが言葉によって人々の上に選びたり。さればわが賜えるものを護持し、感謝する者となれ」と。（注 70）

قَالَ يٰمُوْسٰٓى اِنِّى اصْطَفَيْتُكَ عَلَى النَّاسِ بِرِسٰلٰتِىْ وَبِكَلَامِىْ ۖ فَخُذْ مَآ اٰتَيْتُكَ وَكُنْ مِّنَ الشّٰكِرِيْنَ ﴿١٤٥﴾

146. われらは石の平板の上にあらゆることについて—あらゆることについての訓戒と解釈とを記せり。「されば、これをしっかりと護持し、また汝の民にこの中に記されている如く、最善の道に従うよう命ぜよ。（注 71）われらはその中、お前たちに罪人どもの住居を見せん」

وَكَتَبْنَا لَهٗ فِى الْاَلْوَاحِ مِنْ كُلِّ شَىْءٍ مَّوْعِظَةً وَّتَفْصِيْلًا لِّكُلِّ شَىْءٍ ۚ فَخُذْهَا بِقُوَّةٍ وَّاْمُرْ قَوْمَكَ يَاْخُذُوْا بِاَحْسَنِهَا ۗ سَاُورِيْكُمْ دَارَ الْفٰسِقِيْنَ ﴿١٤٦﴾

147. この地上に妄りに傲慢にふるまう者ども、わしは彼等をわが神兆より遠ざけん。されば彼等は、たといさまざまなる神兆を見るも之を信ぜず、また正道を目のあたりにしても之を己れの道とはせず。されど邪曲の道を見なば、これぞ己が道なりと思うべし。こは彼等がわれらの神兆を偽りと見なし、之を軽視せるが故なり。

سَاَصْرِفُ عَنْ اٰيٰتِىَ الَّذِيْنَ يَتَكَبَّرُوْنَ فِى الْاَرْضِ بِغَيْرِ الْحَقِّ ۗ وَاِنْ يَّرَوْا كُلَّ اٰيَةٍ لَّا يُؤْمِنُوْا بِهَا ۚ وَاِنْ يَّرَوْا سَبِيْلَ الرُّشْدِ لَا يَتَّخِذُوْهُ سَبِيْلًا ۚ وَاِنْ يَّرَوْا سَبِيْلَ الْغَىِّ يَتَّخِذُوْهُ سَبِيْلًا ۗ ذٰلِكَ بِاَنَّهُمْ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَا وَكَانُوْا عَنْهَا غٰفِلِيْنَ ﴿١٤٧﴾

148. われらの神兆並びに来世での対面を信ぜざる者ども—彼等の所業は無に帰さん。彼等はただそのなせることに対して応報せらるるのみに非ざるか？

وَالَّذِيْنَ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَا وَلِقَآءِ الْاٰخِرَةِ حَبِطَتْ اَعْمَالُهُمْ ۗ هَلْ يُجْزَوْنَ اِلَّا مَا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ﴿١٤٨﴾ ع

第十八項

149. モーゼの民は、モーゼの留守中、自分たちの装身具にて—命なき吼える犢を作りたり。彼等その犢が彼等に物云わず、（注 72）

وَاتَّخَذَ قَوْمُ مُوْسٰى مِنْۢ بَعْدِهٖ مِنْ حُلِيِّهِمْ عِجْلًا جَسَدًا لَّهٗ خُوَارٌ ۗ اَلَمْ يَرَوْا اَنَّهٗ لَا يُكَلِّمُهُمْ وَلَا

注 70　この節は、神が、モーゼはイシュマエル家の大預言者が達成する様に運命づけられている高い精神的段階には達する事はできない、という事を気付かせたあとに、モーゼを慰める方法として彼にむけて話しかけられたものの様である。彼は「あの預言者」のために指定された高い尊厳を切望せず、神が既に彼に授けた段階に満足し続け、感謝する様求められた。

注 71　モーゼはここでは、彼の人々に、徳のより高い形を実行する様努力し、単に信仰の弱い者向けの指令の上で行動する事で満足し続けない様に熱心に説く様求められている。

注 72　神は、彼のしもべ達に話しかけなければ、生きた神とは証明されない。
神がその選ばれたしもべ達に過去に話をしているのに、今話をやめるべきだったのにと論じるのは、おかしい。神のいかなる特質も機能をやめるべきだったと仮定される事はできない。神の啓示の贈り物は過去に獲得できた様に、今でも得る事ができる。啓示は必ずしも新しいおきてを含んでいるとは限らない。それは、さらに精神的生活に新鮮味を与え、人々をその神に近づかせる意味をもった。

また如何なる道にも彼等を導かざるを知らざりしか？　彼等はそれを拝みたれば、すなわち罪人なりき。

يَهْدِيْهِمْ سَبِيْلًا ۘ اِتَّخَذُوْهُ وَكَانُوْا ظٰلِمِيْنَ ﴿١٤٩﴾

150.　されど彼等後悔して、その迷えることを悟りて、云えり、「主が我等に慈悲を垂れ給わず、また我等を赦さざれば、我等は必ず失敗者の類とならん」と。

وَلَمَّا سُقِطَ فِيْٓ اَيْدِيْهِمْ وَرَاَوْا اَنَّهُمْ قَدْ ضَلُّوْا ۙ قَالُوْا لَئِنْ لَّمْ يَرْحَمْنَا رَبُّنَا وَيَغْفِرْ لَنَا لَنَكُوْنَنَّ مِنَ الْخٰسِرِيْنَ ﴿١٥٠﴾

151.　モーゼその民に帰るや、憤りかつ悲しみて云えり、「お前たちは、我が留守中になんたる邪悪をなしたるか。お前たちは主の命を待たずに、自ら主の断罪を早めんとなせるか？」と。而して彼は石の平板を下に置き、兄の頭をかかえて己れに引き寄せたり。(注 73) アロンは云えり、「我が母の子よ、人々は我をあなどり、今にも殺さんとせり。されば我を罰して敵を喜ばしむるなかれ。また我を不義なる徒輩の民の中に加えるなかれ」と。(注 74)

وَلَمَّا رَجَعَ مُوْسٰٓى اِلٰى قَوْمِهٖ غَضْبَانَ اَسِفًا ۙ قَالَ بِئْسَمَا خَلَفْتُمُوْنِيْ مِنْۢ بَعْدِيْ ۚ اَعَجِلْتُمْ اَمْرَ رَبِّكُمْ ۚ وَاَلْقَى الْاَلْوَاحَ وَاَخَذَ بِرَاْسِ اَخِيْهِ يَجُرُّهٗٓ اِلَيْهِ ۗ قَالَ ابْنَ اُمَّ اِنَّ الْقَوْمَ اسْتَضْعَفُوْنِيْ وَكَادُوْا يَقْتُلُوْنَنِيْ ۖ فَلَا تُشْمِتْ بِيَ الْاَعْدَآءَ وَلَا تَجْعَلْنِيْ مَعَ الْقَوْمِ الظّٰلِمِيْنَ ﴿١٥١﴾

152.　モーゼは云えり、「主よ、我と兄とを赦し、汝の慈悲に浴せしめ給え。汝は慈悲を与える者の中でも最も慈悲深き御方なり」と。

قَالَ رَبِّ اغْفِرْ لِيْ وَلِاَخِيْ وَاَدْخِلْنَا فِيْ رَحْمَتِكَ ۖ وَاَنْتَ اَرْحَمُ الرّٰحِمِيْنَ ﴿١٥٢﴾

第十九項

153.　犢を拝せる者どもは (注 75) 主の激怒に触れ、またこの世の生活においても屈辱に遭うべし。われらは嘘いつわりを捏造する者にかくの如く報ゆ。

اِنَّ الَّذِيْنَ اتَّخَذُوا الْعِجْلَ سَيَنَالُهُمْ غَضَبٌ مِّنْ رَّبِّهِمْ وَذِلَّةٌ فِي الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا ۗ وَكَذٰلِكَ نَجْزِي الْمُفْتَرِيْنَ ﴿١٥٣﴾

154.　されど、悪事をなせども後に改悟して信仰に入る者には、げに主はその後は寛大にして慈悲深くまします。

وَالَّذِيْنَ عَمِلُوا السَّيِّاٰتِ ثُمَّ تَابُوْا مِنْۢ بَعْدِهَا وَاٰمَنُوْٓا ۡ اِنَّ رَبَّكَ مِنْۢ بَعْدِهَا لَغَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿١٥٤﴾

注 73　　モーゼは、アロンが聖書の中で（出エジプト 32：2－4）そうしたと描かれている様に仔牛崇拝を支持もしくは援助したからという理由からではなく、彼が人々が仔牛を崇拝する事を、ちゃんと止めさせなかっという事に対して、腹を立て、アロンの頭をつかまえたのである。モーゼの怒りは、アロンのおかしたいかなる宗教的、または規則的違反に対してではなく、彼が不在の時に物事を正しく継持できなかった自分の失敗に対して当然のものであった。その怒りは怒るにたる正当な理由があるとみなされた。なぜならば非常な神聖冒瀆罪がおかされ、モーゼの人生の全ての業績が危うくさせられたからである。

注 74　　アロンは、モーゼの優しさと兄弟愛の感情に訴えた。

注 75　　仔牛崇拝に共謀したとしてアロンを非難している聖書の記述は、実に誤った印象を与えるものである (Enc. Bib　1巻：2)。

155.　さて、モーゼの憤怒静まるや、彼は落ちたる石の平板を拾いたり。その上には、主を畏れる者への嚮導と慈悲とが認められてありき。

وَلَمَّا سَكَتَ عَنْ مُّوسَى الْغَضَبُ أَخَذَ الْأَلْوَاحَ ۖ وَفِي نُسْخَتِهَا هُدًى وَّرَحْمَةٌ لِّلَّذِينَ هُمْ لِرَبِّهِمْ يَرْهَبُونَ ﴿١٥٥﴾

156.　而してモーゼは、われらとの会見の約束のために、その民の中より七十人を選びたり。しかるにその時、地震彼等を襲いしかば、（注 76）モーゼは云えり、「主よ、汝もし欲したりせば、汝は彼等をすでに滅ぼし、我もまた滅ぼし得た筈。いま汝は、我等のうちの愚か者がなせることのために我等を滅ぼさんとするか？ただこれ汝の試練なり。汝は之によって己れの欲する者を迷わせ、また欲する者を導き給う。汝は我等の守護者なり。されば我等を赦して慈悲を垂れ給え、汝は最上の宥恕者なれば。

وَاخْتَارَ مُوسٰى قَوْمَهٗ سَبْعِينَ رَجُلًا لِّمِيقَاتِنَا ۚ فَلَمَّا أَخَذَتْهُمُ الرَّجْفَةُ قَالَ رَبِّ لَوْ شِئْتَ أَهْلَكْتَهُمْ مِّنْ قَبْلُ وَإِيَّايَ ۖ أَتُهْلِكُنَا بِمَا فَعَلَ السُّفَهَاءُ مِنَّا ۚ إِنْ هِيَ إِلَّا فِتْنَتُكَ ۖ تُضِلُّ بِهَا مَنْ تَشَاءُ وَتَهْدِي مَنْ تَشَاءُ ۖ أَنْتَ وَلِيُّنَا فَاغْفِرْ لَنَا وَارْحَمْنَا وَأَنْتَ خَيْرُ الْغٰفِرِينَ ﴿١٥٦﴾

157.　この世においても、また次の世においても、我等に幸福を授け給え。我等は悔い改めて汝に帰依す」と。アッラーは答えり、「われは欲する者にわが懲罰を加う。されどわが慈悲は一切を包容す。さればわれは、正義に振舞い、喜捨をなし、われらの神兆を信ずる人々にはその慈悲を授けん—

وَاكْتُبْ لَنَا فِي هٰذِهِ الدُّنْيَا حَسَنَةً وَّفِي الْاٰخِرَةِ إِنَّا هُدْنَا إِلَيْكَ ۚ قَالَ عَذَابِي أُصِيبُ بِهٖ مَنْ أَشَاءُ ۚ وَرَحْمَتِي وَسِعَتْ كُلَّ شَيْءٍ ۚ فَسَأَكْتُبُهَا لِلَّذِينَ يَتَّقُونَ وَيُؤْتُونَ الزَّكٰوةَ وَالَّذِينَ هُمْ بِاٰيٰتِنَا يُؤْمِنُونَ ﴿١٥٧﴾

158.　すなわち文盲の（注 77）預言者に追従する者たちには。この者については、彼等

الَّذِينَ يَتَّبِعُونَ الرَّسُولَ النَّبِيَّ الْأُمِّيَّ الَّذِي يَجِدُونَهٗ

注 76　地震は自然な現象であったが、モーゼはそれが彼の人々の犯した罪に対する神の罰ではないかとおそれた。

注 77　ウンミーは、母親に所属、又は付属する、すなわち母の胸の中の子供の様に純粋無垢であること；特にアラブ人のように天啓聖典のないもの；読み書きのできないもの；町々の母として知られているメッカに属しているもの、を意味する。もしウンミーという言葉が「文盲」としてとらえられるならば、この節は、聖なる預言者が、いかなる教育も受けず、学問もなかったにもかかわらず、それなのに神は、彼に、学問や啓発に最も進歩的とされている人々にさえも光と案内を分け与える知恵をお与えになったことを意味している。
もし聖なる預言者が文盲で読み書きができなかったとしたら、彼が現実にそうであったような、すぐれた商売人ではあり得なかったであろうという反対意見は、聖なる預言者の時代の、善良な成功をおさめたアラビア人の商売人に対する誤った概念からうまれたものである。ウェリー（人名）は、アジアには、20 世紀の現代にさえも、初等教育でさえ受けていない、非常に成功をおさめた商売人がいる事を知っていたならば、そんな異議はとなえなかったであろう。聖なる預言者の時代、メッカでは、教育はあまり好まれなかった。読み書きができる人は非常に少なかったが、多くの人々が非常に成功し、繁栄した商売を経営していた。教育は、その頃ア

が所持せる律法（トーラ）並びに福音（注 78）の中に記されたるなり。彼は正義を彼等に命じ、邪悪を禁じ、またすべての清潔なものを許し、不浄なるものを禁じ、かつ彼等からその背負いし重荷や束縛を取り除く。されば彼を信じ、彼を尊敬し、彼を支持し、彼を援助し、彼と共に降（くだ）されたる光明に従う人々—これ等の者は必ず成功すべし」と。

مَكْتُوبًا عِندَهُمْ فِي التَّوْرَاةِ وَالْإِنجِيلِ يَأْمُرُهُم
بِالْمَعْرُوفِ وَيَنْهَاهُمْ عَنِ الْمُنكَرِ وَيُحِلُّ لَهُمُ الطَّيِّبَاتِ
وَيُحَرِّمُ عَلَيْهِمُ الْخَبَائِثَ وَيَضَعُ عَنْهُمْ إِصْرَهُمْ
وَالْأَغْلَالَ الَّتِي كَانَتْ عَلَيْهِمْ ۚ فَالَّذِينَ آمَنُوا بِهِ وَ
عَزَّرُوهُ وَنَصَرُوهُ وَاتَّبَعُوا النُّورَ الَّذِي أُنزِلَ مَعَهُ ۙ
أُولَٰئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُونَ ﴿١٥٨﴾

第二十項

159.　云え、「人々よ、げに我は天地（あめつち）の主権を掌握するアッラーよりお前たちに遣わされたる使徒なり。（注 79）アッラーの外に神なし。アッラーは生を与え、死を賜う。さればアッラー並びにその使徒、すなわちアッラー並びにその御言葉（みことば）を信ずる文盲（ウンミー）の預言者を信ぜよ。而（しか）して彼に追従せよ。しからばお前たち正しく導かれん」と。

قُلْ يَا أَيُّهَا النَّاسُ إِنِّي رَسُولُ اللَّهِ إِلَيْكُمْ جَمِيعًا الَّذِي
لَهُ مُلْكُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۖ لَا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ يُحْيِي وَ
يُمِيتُ ۖ فَآمِنُوا بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ النَّبِيِّ الْأُمِّيِّ الَّذِي
يُؤْمِنُ بِاللَّهِ وَكَلِمَاتِهِ وَاتَّبِعُوهُ لَعَلَّكُمْ تَهْتَدُونَ ﴿١٥٩﴾

ラビアでは必須条件とはみなされていなかったのである。さらに、聖なる預言者が読み書きできなかったという考えが、彼の何度もくりかえされた「文盲の預言者」という主張に対する誤解に源を発するものであるといういくらかのキリスト教徒達の主張は、異様であり、又、根本的にまちがっている。彼（預言者）と何年も寝食を共にし、毎日彼が読んだり書いたりしている姿を見た者達が彼が文盲であるかそうでないか確認する事ができず、単に彼の自分は文盲だというくり返された主張によりこの確信に誤って導かれたことは驚くべきことである。彼の（聖なる預言者の）筆記者の利用は、最も学問のある者達の間でも、筆記者の利用はその時代には普通であったことから、彼の書く技術への知識に否定的に作用するものではないという論争は、アラブとイスラエルの歴史に対するウェリーの無知さをうっかり示す結果となっている。事実は、聖なる預言者の時代には、アラブ人の間には、今その言葉が理解されている様な意味でのウラマー、すなわち宗教学者は存在せず、また筆記者や書記をもつ事にも慣れ親しんでいないという事である。アラブ人によって筆記者が使われていたという事実の記録は全く残っていない。聖なる預言者が、啓示が彼のもとへ与えられる以前は、書くことも読むこともできなかったという学者達による完璧な意見の合意が為されている。クルアーンは、少なくとも神から啓示をうける以前の聖なる預言者は、読み書きはできなかったという点では、かなりはっきりとしている。(29；49)。しかしながら、彼は、晩年には、少しは判読できるようになっていたのである。

注 78　　聖なる預言者に関する聖書の預言のいくつかについてはマタイ 23；39, ヨハネ 14；16、26；16：7－14 申命記 18：18 と 33：22；イザヤ書 21：13－17 と 20：62、雅歌 1：5－6；そしてハバクク書 3－7 を参照する事

注 79　　イスラム教の預言者以前に現れた神の預言者達の全ては、彼らがさし向けられた人々、そして彼らが出現した特定の時代にあうように教えが定められていた彼らが特定の国の預言者であったのに反して、聖なる等は人類全体に向けて、時の終わりまでのために出現したのである。彼の到来は、人類の歴史にとってすばらしい独特な出来事であった。それは全ての異なった国家と社会を 1 つの友愛団体に結合させる様働いた－それは、（肌の）色、風土、信念の違いが完全に末梢される人類の兄弟愛なのである。

160．モーゼの民の中にも、真理をもって他人を導き、また自らもそれによって正義を行う集団あり。（注 80）

وَمِنْ قَوْمِ مُوسَىٰٓ أُمَّةٌ يَهْدُونَ بِالْحَقِّ وَبِهِ يَعْدِلُونَ ﴿١٦٠﴾

161．われらは彼等を、十二の支族、すなわち異なる集団に分ちたり。モーゼの民が渇を訴えたる時、われらはモーゼに、「汝の杖でその岩を打て」と（注 81）黙示して教えたり。すると、忽ちそこより十二の泉が噴出し、各支族は己が飲む場所を知れり。またわれらは、鶉を降して、「われらがお前たちに用意せる清潔なものを食べよ」と告げたり。彼等は如何なる害もわれらに加えざりき。彼等はただ己れを害したるのみ。（注 82）

وَقَطَّعْنَٰهُمُ ٱثْنَتَىْ عَشْرَةَ أَسْبَاطًا أُمَمًا ۚ وَأَوْحَيْنَآ إِلَىٰ مُوسَىٰٓ إِذِ ٱسْتَسْقَىٰهُ قَوْمُهُۥٓ أَنِ ٱضْرِب بِّعَصَاكَ ٱلْحَجَرَ ۖ فَٱنۢبَجَسَتْ مِنْهُ ٱثْنَتَا عَشْرَةَ عَيْنًا ۖ قَدْ عَلِمَ كُلُّ أُنَاسٍ مَّشْرَبَهُمْ ۚ وَظَلَّلْنَا عَلَيْهِمُ ٱلْغَمَٰمَ وَأَنزَلْنَا عَلَيْهِمُ ٱلْمَنَّ وَٱلسَّلْوَىٰ ۖ كُلُوا۟ مِن طَيِّبَٰتِ مَا رَزَقْنَٰكُمْ ۚ وَمَا ظَلَمُونَا وَلَٰكِن كَانُوٓا۟ أَنفُسَهُمْ يَظْلِمُونَ ﴿١٦١﴾

162．彼等がかく云われた時のことを思い起せ。「この邑に住み、随処で好む物を食へ、ただ、『赦し給え』と唱え、頭を低うして門を入れ。われらはお前たちの罪を赦し、また善事を行う者に益々報奨を加増せん」

وَإِذْ قِيلَ لَهُمُ ٱسْكُنُوا۟ هَٰذِهِ ٱلْقَرْيَةَ وَكُلُوا۟ مِنْهَا حَيْثُ شِئْتُمْ وَقُولُوا۟ حِطَّةٌ وَٱدْخُلُوا۟ ٱلْبَابَ سُجَّدًا نَّغْفِرْ لَكُمْ خَطِيٓـَٰٔتِكُمْ ۚ سَنَزِيدُ ٱلْمُحْسِنِينَ ﴿١٦٢﴾

163．しかるに彼等のうちの罪人どもは、自分たちに説かれたるものを他の言葉に変えたり。さればわれらは、彼等の罪に対して天誅を降したり。

فَبَدَّلَ ٱلَّذِينَ ظَلَمُوا۟ مِنْهُمْ قَوْلًا غَيْرَ ٱلَّذِى قِيلَ لَهُمْ فَأَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ رِجْزًا مِّنَ ٱلسَّمَآءِ بِمَا كَانُوا۟ يَظْلِمُونَ ﴿١٦٣﴾

第二十一項

164．かつて海浜にありしあの邑について彼等に訊ねよ。彼等が安息日を汚せし時のことを。安息日には水面に姿を見せていた魚たちが、彼等が安息日を守らざりし時、魚たちはその姿を見せざりき。われらはかくの

وَسْـَٔلْهُمْ عَنِ ٱلْقَرْيَةِ ٱلَّتِى كَانَتْ حَاضِرَةَ ٱلْبَحْرِ إِذْ يَعْدُونَ فِى ٱلسَّبْتِ إِذْ تَأْتِيهِمْ حِيتَانُهُمْ يَوْمَ سَبْتِهِمْ شُرَّعًا وَيَوْمَ لَا يَسْبِتُونَ ۙ لَا تَأْتِيهِمْ ۚ كَذَٰلِكَ

注 80　モーゼの信者の全員が堕落していた訳ではない。彼らのうちのいくらかは、彼ら自身が善良であっただけではなく、さらに他の者達をも真理に導き、公正に行動したのである。クルアーンは決して人々を十ぱひとからげで無差別にとがめる事はなかったのである。

注 81　2：61 を参照の事。

注 82　彼らは、自分達自身を中傷したにすぎず、真理の起こりを傷つける事はできなかった。

如く、彼等が違犯するために彼等を苦しめたり。（注 83）

نَبْلُوهُم بِمَا كَانُوا يَفْسُقُونَ ﴿١٦٣﴾

165.　彼等の中の一団が他の一団に、「何故お前たちはアッラーが之を滅ぼさんとし、また厳罰を以て懲らしめんとする者どもを訓戒するか？」と云える時、彼等は云えり、「我等がそうするのは、主の御前で弁明せんがためなり。また彼等をして義しい人たらしめんがためなり」と。

وَإِذْ قَالَتْ أُمَّةٌ مِّنْهُمْ لِمَ تَعِظُونَ قَوْمًا ۙ اللَّهُ مُهْلِكُهُمْ أَوْ مُعَذِّبُهُمْ عَذَابًا شَدِيدًا ۖ قَالُوا مَعْذِرَةً إِلَىٰ رَبِّكُمْ وَلَعَلَّهُمْ يَتَّقُونَ ﴿١٦٤﴾

166.　彼等が訓戒されていたものをすべて忘れたる時、われらは悪を禁じたる者たちを救い、罪人どもはその違犯ゆえに厳罰を以て罰したり。

فَلَمَّا نَسُوا مَا ذُكِّرُوا بِهِ أَنجَيْنَا الَّذِينَ يَنْهَوْنَ عَنِ السُّوءِ وَأَخَذْنَا الَّذِينَ ظَلَمُوا بِعَذَابٍ بَئِيسٍ بِمَا كَانُوا يَفْسُقُونَ ﴿١٦٥﴾

167.　彼等が禁じられたることに対して生意気にも背きし時、われらは彼等に云えり、「汝等卑賤なる猩に（注 84）なれ！」と。

فَلَمَّا عَتَوْا عَن مَّا نُهُوا عَنْهُ قُلْنَا لَهُمْ كُونُوا قِرَدَةً خَاسِئِينَ ﴿١٦٦﴾

168.　主が、復活の日まで、酷い責苦によって彼等を苦しめる者を彼等に遣わさんと、宣言せる時のことを思い起せ。（注 85）げに主は応報に速かなり。（注 86）また寛大にして慈悲深くもまします。

وَإِذْ تَأَذَّنَ رَبُّكَ لَيَبْعَثَنَّ عَلَيْهِمْ إِلَىٰ يَوْمِ الْقِيَامَةِ مَن يَسُومُهُمْ سُوءَ الْعَذَابِ ۗ إِنَّ رَبَّكَ لَسَرِيعُ الْعِقَابِ ۖ وَإِنَّهُ لَغَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿١٦٧﴾

169.　われらは地上で彼等を幾多の支族に分割せり。或る者は正しく、また或る者はそうではない。されば、われらは彼等をたち戻らせんがために、幸いと災いとを以て彼等を試みたり。

وَقَطَّعْنَاهُمْ فِي الْأَرْضِ أُمَمًا ۖ مِّنْهُمُ الصَّالِحُونَ وَمِنْهُمْ دُونَ ذَٰلِكَ ۖ وَبَلَوْنَاهُم بِالْحَسَنَاتِ وَالسَّيِّئَاتِ لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُونَ ﴿١٦٨﴾

注 83　安息日には魚はとられなかったので、魚は、本能的に安全な時を知るようになり、従ってこの本能的な安全の気持が、安息日に彼らを水面に現れさせ、大群をなして、岸辺に近寄らせたのである。この事実は、ユダヤ人にとってあまりにも強い誘惑であり、安息日に捕獲する手はずを整え、神聖を汚してしまったのである。

注 84　　2：66 参照

注 85　　先の節で「卑賤なる猩」と言われた人々が、実際に猩に変身させられたわけではなく人間として存在し続けたのであるがみじめに生存し、他の者達に軽べつされた事を示している。

注 86　　クルアーンのいくつかの節から、神が罪人をさばくのに時間をかけることが明らかとなっている。神は何度も何度も猶予を授ける。この語句が意味するのはついに罰が人々に下されると命ぜられた時には、それは即座に来て、それが来るのを退ける事は何をもってしてもできない事を意味している。

170.　その後、邪悪な子孫が彼等の後を継いで経典を継承せり。彼等はこの下劣な世界の儚い利得を取り、「こは我等に許さるべし」と云う。再び同じような利得が彼等に至らば、彼等はそれ等を取るべし。アッラーについては真実以外なにも口にせざることと、経典にかけて彼等からとりし契約に非らざるか？彼等はそこに記されたることを読み、かつ学びし筈。されば義しい人々の来世の住居の方がかえってよし。お前たちこれでも解らざるか？

فَخَلَفَ مِنْ بَعْدِهِمْ خَلْفٌ وَّرِثُوا الْكِتٰبَ يَاْخُذُوْنَ عَرَضَ هٰذَا الْاَدْنٰى وَيَقُوْلُوْنَ سَيُغْفَرُ لَنَا ۚ وَاِنْ يَّاْتِهِمْ عَرَضٌ مِّثْلُهٗ يَاْخُذُوْهُ ۗ اَلَمْ يُؤْخَذْ عَلَيْهِمْ مِّيْثَاقُ الْكِتٰبِ اَنْ لَّا يَقُوْلُوْا عَلَى اللّٰهِ اِلَّا الْحَقَّ وَدَرَسُوْا مَا فِيْهِ ۗ وَالدَّارُ الْاٰخِرَةُ خَيْرٌ لِّلَّذِيْنَ يَتَّقُوْنَ ۗ اَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ﴿١٧٠﴾

171.　而して経典に沿うた己が生活を堅持し、礼拝を遵守する人々、そのような義しい人々への報奨はわれらは空くせず。

وَالَّذِيْنَ يُمَسِّكُوْنَ بِالْكِتٰبِ وَاَقَامُوا الصَّلٰوةَ ۗ اِنَّا لَا نُضِيْعُ اَجْرَ الْمُصْلِحِيْنَ ﴿١٧١﴾

172.　われらがあの山を天蓋の如く（注 87）彼等の頭上で揺り動かすや、彼等はそれが己れの頭上に落下せんと思いたり。時にわれらは云う、「われらがお前たちに授けたるものを堅持し、救われんためにその中に記されたることを銘記せよ」と。

وَاِذْ نَتَقْنَا الْجَبَلَ فَوْقَهُمْ كَاَنَّهٗ ظُلَّةٌ وَّظَنُّوْٓا اَنَّهٗ وَاقِعٌۢ بِهِمْ ۚ خُذُوْا مَآ اٰتَيْنٰكُمْ بِقُوَّةٍ وَّاذْكُرُوْا مَا فِيْهِ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُوْنَ ﴿١٧٢﴾

第二十二項

173.　汝の主がアダムの子ら—すなわち彼等の腰部から—子孫を取り出し、彼等に己れ自身の証人たらしめたる時、かく云えり、「われらはお前たちの主に非ざるか？」と。彼等は云う、「然り、我等は之を証言す」と。こは復活の日にあたり、お前たちに「我等はこの事を閑却せり」と云わざらしめんがためなり。

وَاِذْ اَخَذَ رَبُّكَ مِنْۢ بَنِيْٓ اٰدَمَ مِنْ ظُهُوْرِهِمْ ذُرِّيَّتَهُمْ وَاَشْهَدَهُمْ عَلٰٓى اَنْفُسِهِمْ ۚ اَلَسْتُ بِرَبِّكُمْ ۗ قَالُوْا بَلٰى ۛ شَهِدْنَا ۛ اَنْ تَقُوْلُوْا يَوْمَ الْقِيٰمَةِ اِنَّا كُنَّا عَنْ هٰذَا غٰفِلِيْنَ ﴿١٧٣﴾

174.　また、「かつてアッラーに神々を配したるは我等が父祖にして、我等はただ彼等以降の子孫にすぎず。汝は偽りを云う者がなせることのために我等を滅ぼさんとするか？」とお前たちに云わざらしめんがためなり。

اَوْ تَقُوْلُوْٓا اِنَّمَآ اَشْرَكَ اٰبَآؤُنَا مِنْ قَبْلُ وَكُنَّا ذُرِّيَّةً مِّنْۢ بَعْدِهِمْ ۚ اَفَتُهْلِكُنَا بِمَا فَعَلَ الْمُبْطِلُوْنَ ﴿١٧٤﴾

注 87　イスラエルの指導者達は、山のふもとに集められた（出エジプト 19：17）。山は彼らにとっては、いつ何時落ちるかもしれない天蓋のように高くそびえている様に思われた。

175．われらがかくの如く神兆(しるし)を明示するは、彼等をさとし、正道にたち戻らせんがためなり。

وَكَذٰلِكَ نُفَصِّلُ الْاٰيٰتِ وَلَعَلَّهُمْ يَرْجِعُوْنَ ﴿١٧٤﴾

176．また、われらが神兆(しるし)を与えたるも、それを脱ぎ棄てたるが故に、悪魔(サタン)が彼に憑(つ)き、邪道に陥(お)ちたる者の物語を彼等に告げよ。

وَاتْلُ عَلَيْهِمْ نَبَاَ الَّذِيْٓ اٰتَيْنٰهُ اٰيٰتِنَا فَانْسَلَخَ مِنْهَا فَاَتْبَعَهُ الشَّيْطٰنُ فَكَانَ مِنَ الْغٰوِيْنَ ﴿١٧٥﴾

177．われらもし欲したりせば、その神兆(しるし)によって彼を向上せしめ得たり。されど彼は地上に（注 88）執着し、己れの欲望に従えり。譬(たと)うれば渇したる犬の如し。追い払えども舌をたらし、放置するも舌をたらす。われらの神兆(しるし)を信ぜざる者どもはかくの如し。されば、彼等に反省させるために、この物語を彼等に語れ。

وَلَوْ شِئْنَا لَرَفَعْنٰهُ بِهَا وَلٰكِنَّهٗٓ اَخْلَدَ اِلَى الْاَرْضِ وَاتَّبَعَ هَوٰىهُ فَمَثَلُهٗ كَمَثَلِ الْكَلْبِ اِنْ تَحْمِلْ عَلَيْهِ يَلْهَثْ اَوْ تَتْرُكْهُ يَلْهَثْ ذٰلِكَ مَثَلُ الْقَوْمِ الَّذِيْنَ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَا فَاقْصُصِ الْقَصَصَ لَعَلَّهُمْ يَتَفَكَّرُوْنَ ﴿١٧٦﴾

178．悪いのは、われらの神兆(しるし)を虚偽と見なす者なり。されど彼等が損(そこな)うもの、そは己れ自身なり。

سَآءَ مَثَلًا الْقَوْمُ الَّذِيْنَ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَا وَاَنْفُسَهُمْ كَانُوْا يَظْلِمُوْنَ ﴿١٧٧﴾

179．アッラーが導き給う者は正しき道の上にあり。アッラーが迷わしむる者は失敗者とならん。

مَنْ يَّهْدِ اللّٰهُ فَهُوَ الْمُهْتَدِيْ وَمَنْ يُّضْلِلْ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْخٰسِرُوْنَ ﴿١٧٨﴾

180．げにわれらは地獄に入るべき多くの妖霊(ジン)と人間とを創りたり。（注 89）彼等は心あれどそれもて悟らず、眼(まなこ)あれどそれもて見ず、耳あれどそれもて聴かざるなり。彼等は恰も家畜の如し。否、家畜よりもさらに迷う。彼等は全く無思慮なり。

وَلَقَدْ ذَرَاْنَا لِجَهَنَّمَ كَثِيْرًا مِّنَ الْجِنِّ وَالْاِنْسِ لَهُمْ قُلُوْبٌ لَّا يَفْقَهُوْنَ بِهَا وَلَهُمْ اَعْيُنٌ لَّا يُبْصِرُوْنَ بِهَا وَلَهُمْ اٰذَانٌ لَّا يَسْمَعُوْنَ بِهَا اُولٰٓئِكَ كَالْاَنْعَامِ بَلْ هُمْ اَضَلُّ اُولٰٓئِكَ هُمُ الْغٰفِلُوْنَ ﴿١٧٩﴾

181．極めて美しき名称はすべてアッラーのものなり。（注 90）されば之(これ)を以て彼を呼び

وَلِلّٰهِ الْاَسْمَآءُ الْحُسْنٰى فَادْعُوْهُ بِهَا وَذَرُوا الَّذِيْنَ

注 88　物質的な物、特に金銭への執着。

注 89　この節は、従って、人間の創造の目的とは何ら関係がなく、ただ、多くの人やジン（後者の語は、特別な階級の人、すなわち指導者又は重臣或いは著名な人をも意味する）の生命の痛ましい終わりを語るだけである。彼らがその日々を罪と邪悪の中で過ごす様子から、彼らは、地獄のために創り出されたのではないかと思われる。

注 90　神の正式な名はアッラーである；他の呼び名の全ては、厳密に言えば、彼の美徳である。祈りの間、人は、そういう神の美徳を、その祈りの目的に直接関連があるとして念ずるべきである。

奉れ。その名称について正しい方法より逸脱する者は捨て置け。彼等は己れがなせることに対して報いらるべし。（注 91）

يُلْحِدُونَ فِي أَسْمَائِهِ سَيُجْزَوْنَ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٨١﴾

182．また、われらが創れる者の中には、真理を以て人を導き、それに基づき正義を行う一団あり。

وَمِمَّنْ خَلَقْنَا أُمَّةٌ يَهْدُونَ بِالْحَقِّ وَبِهِ يَعْدِلُونَ ﴿١٨٢﴾

第二十三項

183．されどわれらの神兆(しるし)を拒否する者どもは、われらは彼等の知らざる方法で少しずつ彼等を破滅に引き込まん。

وَالَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا سَنَسْتَدْرِجُهُمْ مِنْ حَيْثُ لَا يَعْلَمُونَ ﴿١٨٣﴾

184．われは彼等に猶予を与うるも、わが計略は必ずや効を奏(そう)せん。

وَأُمْلِي لَهُمْ إِنَّ كَيْدِي مَتِينٌ ﴿١٨٤﴾

185．彼等は、彼等の仲間は精神異状者に非ず、と考えざりしか？彼は明白なる警告者に他(ほか)ならぬ。（注 92）

أَوَلَمْ يَتَفَكَّرُوا مَا بِصَاحِبِهِمْ مِنْ جِنَّةٍ إِنْ هُوَ إِلَّا نَذِيرٌ مُبِينٌ ﴿١٨٥﴾

186．彼等は天地(あめつち)の王国に（注 93）目を向け、アッラーが創りたる万物を観察せざるか？また己れの期限が真近に近づくを知らざるか？ならばこの後、如何なるものを信ぜんとするか？（注 94）

أَوَلَمْ يَنْظُرُوا فِي مَلَكُوتِ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا خَلَقَ اللَّهُ مِنْ شَيْءٍ وَأَنْ عَسَىٰ أَنْ يَكُونَ قَدِ اقْتَرَبَ أَجَلُهُمْ فَبِأَيِّ حَدِيثٍ بَعْدَهُ يُؤْمِنُونَ ﴿١٨٦﴾

187．アッラーが一たび迷わしむれば、何人(なんぴと)といえどもそこに導きはなし。アッラーは彼等をして罪を犯すにまかせ、気ままに徘徊(はいかい)せしむ。

مَنْ يُضْلِلِ اللَّهُ فَلَا هَادِيَ لَهُ وَيَذَرُهُمْ فِي طُغْيَانِهِمْ يَعْمَهُونَ ﴿١٨٧﴾

注 91　神の美徳に関して、正しい道からそれるという事は、神はクルアーンまたはハディスに述べられている最も素晴らしい美徳の全ての所有主なので、彼の威厳、尊厳、そして全能の慈悲と矛盾する様な、他の美徳を神のために考え出す必要はない事を意味している。

注 92　彼らは、聖なる預言者は彼らの仲間であると告げられており、預言者は、彼らの中で生活し、行動し、そして彼らはもう何年も彼の事を知っており、従って彼のどこをとっても狂気のさたではない事は、彼らには簡単に理解出来、事実心の中では確信しているのである。

注 93　メッカの人々は、新しい時代の到来を告げる、自分達の周囲で起きている大きな、多様な変化が見えないのであろうか。全ての徴候が、偶像崇拝が国から消滅し、イスラム教にとって代わられるという事実を示しているのに。又「王国」という言葉は、神が天国と地獄の上に及ぼす支配を意味している。

注 94　不信仰者達が、完璧で完成された戒律であるクルアーンを、拒絶し続けているとすると、一体彼らが信じる物は、他に何があるのだろうか、

188．彼等が汝に「いつ起らんや？」とその時について問わば、云え、「それを知り給うは、独り我が主のみ。主を措いて何人もそれを明示する能わず。そは天と地を苦しめるなり。(注95) そは突如襲いかからん」と。彼等は汝に恰も汝がそれを熟知せるかの如く問う。云え、「それを知り給うは、独りアッラーのみ。されど大多数の者は之を知らず」と。

يَسْـَٔلُونَكَ عَنِ ٱلسَّاعَةِ أَيَّانَ مُرْسَىٰهَا ۖ قُلْ إِنَّمَا عِلْمُهَا عِندَ رَبِّى ۖ لَا يُجَلِّيهَا لِوَقْتِهَآ إِلَّا هُوَ ۚ ثَقُلَتْ فِى ٱلسَّمَـٰوَٰتِ وَٱلْأَرْضِ ۚ لَا تَأْتِيكُمْ إِلَّا بَغْتَةً ۗ يَسْـَٔلُونَكَ كَأَنَّكَ حَفِىٌّ عَنْهَا ۖ قُلْ إِنَّمَا عِلْمُهَا عِندَ ٱللَّهِ وَلَـٰكِنَّ أَكْثَرَ ٱلنَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ﴿١٨٨﴾

189．云え、「アッラーが欲すに非ずば、我は己れの利害すら左右する能力なし。我もし不可見のものの知識を有したりせば、大なる幸せを得て、災いに遭うこともなかりしものを。我はただ一介の警告者にして、信徒たちへ朗報を伝達する者にすぎず」と。

قُل لَّآ أَمْلِكُ لِنَفْسِى نَفْعًا وَلَا ضَرًّا إِلَّا مَا شَآءَ ٱللَّهُ ۚ وَلَوْ كُنتُ أَعْلَمُ ٱلْغَيْبَ لَٱسْتَكْثَرْتُ مِنَ ٱلْخَيْرِ ۚ وَمَا مَسَّنِىَ ٱلسُّوٓءُ ۚ إِنْ أَنَا۠ إِلَّا نَذِيرٌ وَبَشِيرٌ لِّقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ﴿١٨٩﴾

第二十四項

190．アッラーこそは単一の人間からお前たちを創造せり。またアッラーは、男が女に安らぎを見いだすべく、(注96) 男の肋骨より妻を創り給えり。彼が彼女を知るや、彼女は軽き荷を負いてその荷と共に往来せり。されど次第に重くなりたれば、彼等両名その主アッラーに祈りて、云う、「もし我等に良い子を授けなば、我等は必ず感謝を捧げん」と。

هُوَ ٱلَّذِى خَلَقَكُم مِّن نَّفْسٍ وَٰحِدَةٍ وَجَعَلَ مِنْهَا زَوْجَهَا لِيَسْكُنَ إِلَيْهَا ۖ فَلَمَّا تَغَشَّىٰهَا حَمَلَتْ حَمْلًا خَفِيفًا فَمَرَّتْ بِهِۦ ۖ فَلَمَّآ أَثْقَلَت دَّعَوَا ٱللَّهَ رَبَّهُمَا لَئِنْ ءَاتَيْتَنَا صَـٰلِحًا لَّنَكُونَنَّ مِنَ ٱلشَّـٰكِرِينَ ﴿١٩٠﴾

191．主が彼等に良い子を授けると、彼等は主が自分たちに授けたることを顧慮して、主に他神を配したり。しかれどもアッラーは、彼等が配せる者の上にいと高くいまし給う。

فَلَمَّآ ءَاتَىٰهُمَا صَـٰلِحًا جَعَلَا لَهُۥ شُرَكَآءَ فِيمَآ ءَاتَىٰهُمَا ۚ فَتَعَـٰلَى ٱللَّهُ عَمَّا يُشْرِكُونَ ﴿١٩١﴾

192．彼等自身が造られたるものにして、己れは何も創り得ない偶像をアッラーに配するとは何んたることか？

أَيُشْرِكُونَ مَا لَا يَخْلُقُ شَيْـًٔا وَهُمْ يُخْلَقُونَ ﴿١٩٢﴾

注95　人間にとって罰を受ける事が苦痛であるのと同様、神にとって、罰の裁定は苦痛であり、それが、「そは天と地を苦しめるなり」という語句の意味するところである；すなわち「天」は神と天使達を表わし、「地」は人間を表すのである。

注96　結婚の本来の目的の一つは、男女がお互いにとっての、安楽と慰めのよりどころとなる事である。人間は、本質的に社会生活を営むものであり、親しい伴侶への自然な切望が結婚というものによって満たされるのである。

193.　それ等神々は彼等を助け得ず、己れ自身さえも助くる能わず。

وَلَا يَسْتَطِيعُونَ لَهُمْ نَصْرًا وَلَا أَنفُسَهُمْ يَنصُرُونَ ﴿١٩٣﴾

194.　たといお前たち彼等を正道に招くとも、彼等はお前たちに従わざるべし。彼等を招くも、沈黙を守るも、しょせんお前たちにとりては同じことなり。

وَإِن تَدْعُوهُمْ إِلَى الْهُدَىٰ لَا يَتَّبِعُوكُمْ ۚ سَوَاءٌ عَلَيْكُمْ أَدَعَوْتُمُوهُمْ أَمْ أَنتُمْ صَامِتُونَ ﴿١٩٤﴾

195.　げにアッラーの外にお前たちが祈るそれ等神々は、お前たちと同じく主の僕にすぎず。もしお前たちの言葉が真実ならば、それ等神々を呼びてお前たちの祈りに応えさせよ。（注 97）

إِنَّ الَّذِينَ تَدْعُونَ مِن دُونِ اللَّهِ عِبَادٌ أَمْثَالُكُمْ ۖ فَادْعُوهُمْ فَلْيَسْتَجِيبُوا لَكُمْ إِن كُنتُمْ صَادِقِينَ ﴿١٩٥﴾

196.　それ等神々には歩む足ありや、握る手ありや、見る眼ありや、聴く耳ありや？云え、「お前たちがアッラーに配するものを呼びて、汝等みな我に謀らみをしかけよ、遠慮することなかれ。（注 98）

أَلَهُمْ أَرْجُلٌ يَمْشُونَ بِهَا ۖ أَمْ لَهُمْ أَيْدٍ يَبْطِشُونَ بِهَا ۖ أَمْ لَهُمْ أَعْيُنٌ يُبْصِرُونَ بِهَا ۖ أَمْ لَهُمْ آذَانٌ يَسْمَعُونَ بِهَا ۗ قُلِ ادْعُوا شُرَكَاءَكُمْ ثُمَّ كِيدُونِ فَلَا تُنظِرُونِ ﴿١٩٦﴾

197.　げに我が守護者は経典を降し賜わりたるアッラーなり。彼は正義を行う者を守護し給う。

إِنَّ وَلِيِّيَ اللَّهُ الَّذِي نَزَّلَ الْكِتَابَ ۖ وَهُوَ يَتَوَلَّى الصَّالِحِينَ ﴿١٩٧﴾

198.　お前たちが祈るものは、お前たちを助くる能力なく、己れ自身すら助くる能わず」と。

وَالَّذِينَ تَدْعُونَ مِن دُونِهِ لَا يَسْتَطِيعُونَ نَصْرَكُمْ وَلَا أَنفُسَهُمْ يَنصُرُونَ ﴿١٩٨﴾

199.　たといお前たちが彼等を正道に招くとも、彼等は聴かざるべし。汝は彼等が汝の方を見るを知るが、彼等は見ざるなり。

وَإِن تَدْعُوهُمْ إِلَى الْهُدَىٰ لَا يَسْمَعُوا ۖ وَتَرَاهُمْ يَنظُرُونَ إِلَيْكَ وَهُمْ لَا يُبْصِرُونَ ﴿١٩٩﴾

200.　預言者よ、常に寛容を旨とし、親切をすすめ、無知なる者から遠ざかれ。

خُذِ الْعَفْوَ وَأْمُرْ بِالْعُرْفِ وَأَعْرِضْ عَنِ الْجَاهِلِينَ ﴿٢٠٠﴾

注 97　　この節は、偶像はそうする力をもっていないので、彼らが求める、アッラー以外の生物又は無生物は、決して彼らの祈りに答えられないという趣意であり、偶像崇拝者達に対する公然の挑戦となっている。ところが、生き給う神は、彼の熱愛者の祈りにお答えになるのである。

注 98　　これとこの次の節では、前節で、不信仰者達に掲げられた挑戦が拡大されている。彼らはイスラム教との戦闘において、彼らの神に助けを要求し、自分達の全ての方策を駆使し、攻撃のために全ての武力を召集し、打ちこわすためにあらゆる手段を講じ、聖なる預言者を攻撃するための時間を無駄にせず、こうした試みにより、どういう危害を及ぼすことができたかをあえて見たがっている。神は、彼の預言者を助け、その根源の繁栄と成功を約束された（5：68　58：22）。

201. もし悪魔(サタン)の誘惑に襲われたる場合は、アッラーに加護を求めよ。げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

وَإِمَّا يَنزَغَنَّكَ مِنَ الشَّيْطٰنِ نَزْغٌ فَاسْتَعِذْ بِاللّٰهِ ۚ إِنَّهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ٢٠١

202. 義(ただ)しい人々は悪魔(サタン)の誘惑に襲われたる時、アッラーを念(おも)う。(注 99) すると見よ、物事は正しく見え来るなり。

إِنَّ الَّذِينَ اتَّقَوْا إِذَا مَسَّهُمْ طَيْفٌ مِّنَ الشَّيْطٰنِ تَذَكَّرُوا فَإِذَا هُم مُّبْصِرُونَ ٢٠٢

203. 兄弟でも無信心者は彼等を迷誤の中に引き込み、手をゆるめることなし。

وَإِخْوٰنُهُمْ يَمُدُّونَهُمْ فِي الْغَيِّ ثُمَّ لَا يُقْصِرُونَ ٢٠٣

204. 汝が彼等に新たな神兆(しるし)をもたらさざれば、彼等は「何故汝は自らそれを作らざるか?」と問う。云え、「我はただ我が主より啓示されることに従うのみ。これ等はお前たちの主よりの明証にして、信ずる者たちへの嚮導(きょうどう)並びに慈悲なり」と。

وَإِذَا لَمْ تَأْتِهِم بِآيَةٍ قَالُوا لَوْلَا اجْتَبَيْتَهَا ۚ قُلْ إِنَّمَا أَتَّبِعُ مَا يُوحٰى إِلَيَّ مِن رَّبِّي ۚ هٰذَا بَصَائِرُ مِن رَّبِّكُمْ وَهُدًى وَرَحْمَةٌ لِّقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ٢٠٤

205. さればクルアーンが読誦せらるる時は、之(これ)に耳を傾け、静粛にせよ、さすればお前たち慈悲に浴さん。(注 100)

وَإِذَا قُرِئَ الْقُرْآنُ فَاسْتَمِعُوا لَهُ وَأَنصِتُوا لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ٢٠٥

206. 朝な夕な、心を虚しくして畏れかしこみ、声を低くして汝の主を汝の心に念ぜよ。而(しか)して懈怠者(げたいしゃ)の類(たぐい)となるなかれ。

وَاذْكُر رَّبَّكَ فِي نَفْسِكَ تَضَرُّعًا وَخِيفَةً وَدُونَ الْجَهْرِ مِنَ الْقَوْلِ بِالْغُدُوِّ وَالْآصَالِ وَلَا تَكُن مِّنَ الْغٰفِلِينَ ٢٠٦

207. げに主の側近くある者は、慢心して崇敬を怠る者に非ず。彼等は主を讃美し、その御前(みまえ)に平伏叩頭(へいふくこうとう)す。

إِنَّ الَّذِينَ عِندَ رَبِّكَ لَا يَسْتَكْبِرُونَ عَنْ عِبَادَتِهِ وَيُسَبِّحُونَهُ وَلَهُ يَسْجُدُونَ ۩ ٢٠٧

注 99　これらの語句は、公正な人々が、サタンによって怒りに煽動される時、又は悪人達によって、彼らに対し、何らかの災いが引き起こされる時、彼らは、アッラーを思い出す事を意味している。

注 100　新しいお告げへの要求に対する返答として、不信仰者達は、ここに、あり余るほどのおつげや証しを含んでいる事から、クルアーンに注意して耳を傾ける様にと言われた。

سُوْرَةُ الْاَنْفَالِ مَدَنِيَّةٌ (٨)

（メディナ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．彼等戦利品（注1）について汝に問う。云え、「戦利品はアッラーと使徒に属す。さればアッラーを畏れかしこみ、お互いの関係を正しくし、アッラーと使徒に従え、もしお前たち信者ならば」と。

يَسْـَٔلُوْنَكَ عَنِ الْاَنْفَالِ ۭ قُلِ الْاَنْفَالُ لِلّٰهِ وَالرَّسُوْلِ ۚ فَاتَّقُوا اللّٰهَ وَاَصْلِحُوْا ذَاتَ بَيْنِكُمْ ۠ وَاَطِيْعُوا اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗٓ اِنْ كُنْتُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ②

3．真の信者とは、アッラーの御名が言及されただけでその心が震え戦き、その神兆が読誦されるや、その信心を益々深め、主を信頼し、

اِنَّمَا الْمُؤْمِنُوْنَ الَّذِيْنَ اِذَا ذُكِرَ اللّٰهُ وَجِلَتْ قُلُوْبُهُمْ وَاِذَا تُلِيَتْ عَلَيْهِمْ اٰيٰتُهٗ زَادَتْهُمْ اِيْمَانًا وَّعَلٰي رَبِّهِمْ يَتَوَكَّلُوْنَ ③

4．礼拝を遵守し、われらが授けしものから惜みなく施す者をいうなり。

الَّذِيْنَ يُقِيْمُوْنَ الصَّلٰوةَ وَمِمَّا رَزَقْنٰهُمْ يُنْفِقُوْنَ ④

5．これ等は真の信者なり。彼等は主の御許にて高い位階を得、また容赦と高貴な給養を賜わらん。

اُولٰۗىِٕكَ هُمُ الْمُؤْمِنُوْنَ حَقًّا ۭ لَهُمْ دَرَجٰتٌ عِنْدَ رَبِّهِمْ وَمَغْفِرَةٌ وَّرِزْقٌ كَرِيْمٌ ⑤

6．主が正義のために汝を家郷より出でしめたる時、一部の信者が之に反対したれば、主は汝を助けて敵にあたらせたり。（注2）

كَمَآ اَخْرَجَكَ رَبُّكَ مِنْۢ بَيْتِكَ بِالْحَقِّ ۠ وَاِنَّ فَرِيْقًا مِّنَ الْمُؤْمِنِيْنَ لَكٰرِهُوْنَ ⑥

注1　アンファールとは、神の贈り物として、労なくしてイスラム教徒が手に入れた戦利品である。この節は、戦利品の分配について述べているのではない。それについては、8：42を参照する事。ここでは、バドルの勝利の後にイスラム教徒は戦利品を手に入れたことのみ語っている。

注2　イスラム教徒達は、メジナから行軍してきた時、自分達が十分に武装したメッカ軍と戦うことになるとは思ってもいなかった。彼らは戦う準備もろくにしていなかったのである。途中、メッカ軍と戦わなければならないとわかった時、彼らは聖なる預言者に心配そうに尋ねた。何故、自分達に本当の状況を教えてくれなかったのか、知っていれば、敵を迎え打つ準備も十分に整えてきたはずだと。彼らは自分たちのことを心配したのではなく聖なる預言者の身を心配したのだ。覚悟もできていないまま預言者を危険にさらしたくなかったのである。（主は）「汝らを進ませた」と言わず、「汝を進ませた」と言うこの節から、神は預言者を防備無しにはしておかないことが明らかである。イスラム教徒達は、戦いを恐れてはいなかったが、好みはしなかった。それは、彼らは流血を嫌うし、また、聖なる預言者が危険にさらされることになるからだった。

7．彼等は恰も死を目の当りにしながらそれに追い立てられているかの如く、真理が明白になった後も、なお汝と真理について論争す。

يُجَادِلُونَكَ فِي الْحَقِّ بَعْدَ مَا تَبَيَّنَ كَأَنَّمَا يُسَاقُونَ إِلَى الْمَوْتِ وَهُمْ يَنظُرُونَ ⑦

8．またアッラーが、二隊（注３）のうちいずれか一隊はお前たちの所有(もの)たるべしと約束せし時、お前たちは武装せざる一隊(注４)を己れの所有(もの)と望みしあの時を念(おも)え。だがアッラーはその言葉の真実を立証し、不信心者の根を絶(た)やさんと欲したり。

وَإِذْ يَعِدُكُمُ اللَّهُ إِحْدَى الطَّائِفَتَيْنِ أَنَّهَا لَكُمْ وَتَوَدُّونَ أَنَّ غَيْرَ ذَاتِ الشَّوْكَةِ تَكُونُ لَكُمْ وَيُرِيدُ اللَّهُ أَن يُحِقَّ الْحَقَّ بِكَلِمَاتِهِ وَيَقْطَعَ دَابِرَ الْكَافِرِينَ ⑧

9．これは罪人(つみびと)がたとえそれを嫌うとも、彼は真実を立証し、虚偽は無なりと悟らしめんと欲したるが故なり。

لِيُحِقَّ الْحَقَّ وَيُبْطِلَ الْبَاطِلَ وَلَوْ كَرِهَ الْمُجْرِمُونَ ⑨

10．お前たちが主に援助を嘆願せし時、彼はお前たちに応えて、云えり、「われは次々（注５）に一千（注６）の天使を繰り出してお前たちを助けん」と。

إِذْ تَسْتَغِيثُونَ رَبَّكُمْ فَاسْتَجَابَ لَكُمْ أَنِّي مُمِدُّكُم بِأَلْفٍ مِّنَ الْمَلَائِكَةِ مُرْدِفِينَ ⑩

11．アッラーが朗報をなせるは、ひたすらお前たちの心をそれで安んじさせんがためなり。(注７）援助はひとりアッラーのみより来る。げに、アッラーは偉大にして、賢哲にまします。

وَمَا جَعَلَهُ اللَّهُ إِلَّا بُشْرَىٰ وَلِتَطْمَئِنَّ بِهِ قُلُوبُكُمْ وَمَا النَّصْرُ إِلَّا مِنْ عِندِ اللَّهِ إِنَّ اللَّهَ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ⑪

第二項

12．その時、アッラーは安心のしるしとしてお前たちを仮眠（注８）に陥(おちい)らしめ、また天

إِذْ يُغَشِّيكُمُ النُّعَاسَ أَمَنَةً مِّنْهُ وَيُنَزِّلُ عَلَيْكُم مِّنَ

注３　二隊とは、(1)初めからイスラム教徒と戦うつもりで来ている装備十分なメッカ軍。(2)北からメッカへ戻っていく途中の軽武装のメッカの隊商、を指している。

注４　イスラム教徒達は、当然のことながら、軽武装の隊商と出合うほうがよかった。しかし、神は、彼らをしっかり武装したメッカ軍と出合わせたのである。このようにした神の目的は、神の命令によって真実を確立し、信仰しない者の根をたち切ることであった（3章14節と8章42節～45節参照)。

注５　次々と並んでいるの意。

注６　6章 159節参照。

注７　3章 127節参照。

注８　ここでは、バドルの戦いについて述べている。

より水を注ぎかけこれによってお前たちを浄め、悪魔（サタン）（注9）の汚れを祓（はら）い、お前たちの心を引き締め、またこれによってお前たちの脚を堅めんとせり。（注10）

السماء ماء ليطهركم به ويذهب عنكم رجز الشيطن وليربط على قلوبكم ويثبت به الاقدام ⑫

13．その時汝の主は諸天子に啓示して、云い給えり、「われはお前たちと偕（とも）にあり。されば信ずる者たちを確固不動たらしめよ。われは信ぜざる者の心に恐怖を投ぜん。その時彼等の首（注11）を刎（は）ね、すべての指先を打ち落せ」と。

اذ يوحي ربك الى الملئكة اني معكم فثبتوا الذين امنوا سالقي في قلوب الذين كفروا الرعب فاضربوا فوق الاعناق واضربوا منهم كل بنان ⑬

14．これは彼等がアッラー並びにその使徒に抗せるが故なり。誰であれアッラー並びにその使徒に抗する者には、まことにアッラーは応報に厳しくましします。

ذلك بانهم شاقوا الله ورسوله ومن يشاقق الله ورسوله فان الله شديد العقاب ⑭

15．お前たちの懲罰はこれなり、されば之（これ）を味わいて、不信心者のために業火（ごうか）の刑罰あるを知れ。

ذلكم فذوقوه وان للكفرين عذاب النار ⑮

16．おお、汝等信ずる者よ！　汝等不信心者どもの進軍して来るに出会うとも、彼等にお前たちの背を向けるなかれ。（注12）

يايها الذين امنوا اذا لقيتم الذين كفروا زحفا فلا تولوهم الادبار ⑯

17．誰であれ作戦上か、他の隊に合流（注13）するため以外、その日の敵に背を向ける者は、アッラーの激怒を蒙（こう）むり、その住居は地獄なるべし。そは悪しき行先なり。

ومن يولهم يومئذ دبره الا متحرفا لقتال او متحيزا الى فئة فقد باء بغضب من الله ومأوىه جهنم وبئس المصير ⑰

注9　敵が水源を占拠してしまったのである。イスラム教徒達は、当然、水不足で非常に困るだろうと心配したのである。また、サタンというのは、悪魔の友達や仲間のことも意味している。

注10　イスラム教徒は砂地で、メッカ軍は固い土の上で野営した。折よく雨が降り、砂地は固まり、固い土のところは滑りやすくなった。

注11　頭のすぐ下の首の上部、ここは最も弱いところとされている。

注12　イスラム教徒は、最後の最後まで戦わなければならない。勝利か死かである。彼らに第三の道はない。

注13　この節は、イスラム教徒が退却してもよい場合を規定し、説明している。すなわち、(a)敵を欺く作戦として、あるいは、よりよい戦闘位置に移動する時。(b)隊が主力軍か別の部隊に合流するため退却する時。

18．お前たちが彼等を殺したに非ず、アッラーが彼等を殺せり。また汝が投げたる時、それを投げたるは汝に非ずしてアッラーなり。（注 14）そは不信心者どもを打ち倒さんがため並びに彼御自身より恩恵を信者に賜わらんがためなり。げに、アッラーはすべてを聴き、すべてを深知し給う。

فَلَمْ تَقْتُلُوهُمْ وَلٰكِنَّ اللّٰهَ قَتَلَهُمْ وَمَا رَمَيْتَ إِذْ رَمَيْتَ وَلٰكِنَّ اللّٰهَ رَمٰى وَلِيُبْلِيَ الْمُؤْمِنِينَ مِنْهُ بَلَآءً حَسَنًا إِنَّ اللّٰهَ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿١٨﴾

19．生じたる事はかくの如し。されば、アッラーは不信心者どもの奸策を無に帰せしめん御方なるを知れ。

ذٰلِكُمْ وَأَنَّ اللّٰهَ مُوهِنُ كَيْدِ الْكٰفِرِينَ ﴿١٩﴾

20．不信心者よ、もしお前たち審判を望むなら、すでに裁決（注 15）は降されたり。もしお前たち敵対を止めるなら、そはお前たちのために益とならん。だがもし敵対行為に戻るなら、われらもまた還るべし。お前たちの軍勢が如何に多くとも、役立つことなかるべし。アッラーが信者と偕にあることを知れ。

إِنْ تَسْتَفْتِحُوا فَقَدْ جَآءَكُمُ الْفَتْحُ وَإِنْ تَنْتَهُوا فَهُوَ خَيْرٌ لَكُمْ وَإِنْ تَعُودُوا نَعُدْ وَلَنْ تُغْنِيَ عَنْكُمْ فِئَتُكُمْ شَيْئًا وَلَوْ كَثُرَتْ وَأَنَّ اللّٰهَ مَعَ الْمُؤْمِنِينَ ﴿٢٠﴾

第三項

21．汝等信ずる者よ、アッラー並びにその使徒に従え。彼の命を聴き、同時に背くなかれ。

يٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوٓا أَطِيعُوا اللّٰهَ وَرَسُولَهُ وَلَا تَوَلَّوْا عَنْهُ وَأَنْتُمْ تَسْمَعُونَ ﴿٢١﴾

22．また、聴きもせで、「我等は聴く」と云う如き徒輩になるなかれ。

وَلَا تَكُونُوا كَالَّذِينَ قَالُوا سَمِعْنَا وَهُمْ لَا يَسْمَعُونَ ﴿٢٢﴾

23．アッラーの見解における最悪の人非人とは、ものごとの道理を解せざる聾者並びに唖者なり。

إِنَّ شَرَّ الدَّوَآبِّ عِنْدَ اللّٰهِ الصُّمُّ الْبُكْمُ الَّذِينَ لَا يَعْقِلُونَ ﴿٢٣﴾

注 14　バドルの戦いに勝ったのは、イスラム教徒達が巧みに戦い、勇豪だったからではない。彼らはあまりに少数であり、あまりに弱く、装備は粗末すぎたので、数の上でははるかに優勢で装備もずっと整い、また、はるかによく訓練されている軍隊と戦って勝てるとは考えられなかった。聖なる預言者がひとつかみの小石や砂を投げた行為は、モーゼが杖で海の水を打ったのと全くよく似ている。モーゼの行為を合図に、風が吹き、潮が満ちてきて、ファラトとその大軍は海の藻くずとなったのである。同様に、聖なる預言者が小石をひとつかみ投げたのは、強風が吹く合図であった。その強風のためにアブ・ジャハル（聖なる預言者は彼を、自分に従う人々のファラオだとみなしていた。）とその大軍は砂漠で壊滅したのである。どちらの場合も、神の特別な意図の下で、二人の預言者の行為と同時に、自然の威力が発揮されたのだった。

注 15　信仰しない者達は、聖なる預言者に、神の審判として勝利を要求した。彼らは、神の審判は彼らが望む通りになると聞かされているのである。

24．アッラーもし彼等に何か善きことあるを認めたれば、必ず彼等を聞かしめたるなり。(注 16) されど、今仮に聴えるようになさば、彼等これを嫌って背き去らん。

وَلَوْ عَلِمَ اللَّهُ فِيهِمْ خَيْرًا لَأَسْمَعَهُمْ وَلَوْ أَسْمَعَهُمْ لَتَوَلَّوْا وَهُمْ مُعْرِضُونَ ﴿٢٤﴾

25．汝等信ずる者よ、アッラー並びにその使徒がお前たちに生命を与える (注 17) ために呼び給う時は、応えよ。アッラーは人とその心との間に入り給い、(注 18) またお前たちはやがて彼の御許(みもと)に召し寄せられるを知れ。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اسْتَجِيبُوا لِلَّهِ وَلِلرَّسُولِ إِذَا دَعَاكُمْ لِمَا يُحْيِيكُمْ وَاعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ يَحُولُ بَيْنَ الْمَرْءِ وَقَلْبِهِ وَأَنَّهُ إِلَيْهِ تُحْشَرُونَ ﴿٢٥﴾

26．災難に対して油断するな、そはお前の中の不義を為(な)せる者 (注 19) のみ襲うに非ず。而(しか)して、アッラーは懲罰するに厳しくましますと知れ。

وَاتَّقُوا فِتْنَةً لَا تُصِيبَنَّ الَّذِينَ ظَلَمُوا مِنْكُمْ خَاصَّةً وَاعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ شَدِيدُ الْعِقَابِ ﴿٢٦﴾

27．お前たち地上においてその数少く、劣勢と見なされ、人々が強奪に来はしないかと恐れおののいていた頃のことを憶い起せ。あの時彼は、お前たちを助けてかくまい、且つ強くし、更に種々なる佳(よ)き物を賜いたり。お前たち恐らく感謝せん。(注 20)

وَاذْكُرُوا إِذْ أَنْتُمْ قَلِيلٌ مُسْتَضْعَفُونَ فِي الْأَرْضِ تَخَافُونَ أَنْ يَتَخَطَّفَكُمُ النَّاسُ فَآوَاكُمْ وَأَيَّدَكُمْ بِنَصْرِهِ وَرَزَقَكُمْ مِنَ الطَّيِّبَاتِ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ﴿٢٧﴾

28．汝等信ずる者よ、アッラー並びに使徒を裏切るなかれ。また自分達への信頼を知りつ

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَخُونُوا اللَّهَ وَالرَّسُولَ وَتَخُونُوا

注 16　「必ず彼等を聞かしめたるなり。」という言葉は、次のような意味である。　もし、神が今の状態のままで彼らに真理を受け入れるよう強いても、　彼らの心の底は変わらず、　決して真のイスラム教徒にはならないだろう。

注 17　神の預言者が死者への命を与えるという表現は、比喩的、精神的な意味でとらえるべきである。

注 18　「アッラーは、人とその心との間に入り給う」という言葉は、人（または人の自我）は自分の心を統制することはできない、心を自分の思うままにすることはできないという意味である。この言葉は、さらに、人はすぐに神の声に耳を傾け、すぐにそれに応じなければならない、とも言おうとしている。なぜなら、もし人がすぐにそうしなければ、予期しなかった事柄が人の心をかたくなにし、錆つかせてしまうかもしれない。そうなれば、人は神の声に耳をかたむけなくなってしまうかもしれないからである。

注 19　自分自身を正しく律するだけでは十分ではない。我々は、周囲も変えていかなければ安全ではいられない。燃えさかる炎に囲まれた家は、いつ何時、その炎に燃え尽くされてしまうかもしれないのである。

注 20　ここでは、イスラム教徒たちに、彼らが国の中で弱い立場にあって、強い敵意ある人々に囲まれていた時、神が助けてくれたように、彼らは、権力を持った時には、弱者を守るよう努力しなければならないと言っている。この節は、イスラム教徒が、すぐに政治的権力を得るであろうという預言を暗示している。

つ、裏切るなかれ。(注 21)

أَمَٰنَٰتِكُمْ وَأَنتُمْ تَعْلَمُونَ ٢٨

29．富と子女達は一つの験しにすぎぬことを知れ、またアッラーの御許にこそ偉大な報奨あるを知れ。

وَاعْلَمُوٓا أَنَّمَآ أَمْوَٰلُكُمْ وَأَوْلَٰدُكُمْ فِتْنَةٌ وَأَنَّ ٱللَّهَ عِندَهُۥٓ أَجْرٌ عَظِيمٌ ٢٩

30．汝等信ずる者よ、お前たちもしアッラーを畏れ敬わば、彼はお前たちに救援を授け、お前たちの諸悪を消滅し、容赦せん。アッラーは偉大なる恩恵の主にまします。

يَٰٓأَيُّهَا ٱلَّذِينَ ءَامَنُوٓا إِن تَتَّقُوا ٱللَّهَ يَجْعَل لَّكُمْ فُرْقَانًا وَيُكَفِّرْ عَنكُمْ سَيِّـَٔاتِكُمْ وَيَغْفِرْ لَكُمْ وَٱللَّهُ ذُو ٱلْفَضْلِ ٱلْعَظِيمِ ٣٠

31．不信者どもが汝に対して奸策をめぐらし、汝を監禁し、或いは殺さんとし、或いは放逐せんとせし時のことを憶い起せ。彼等畫策したれども、アッラーもまた畫策せり。(注 22) アッラーは一番の策略家にまします。

وَإِذْ يَمْكُرُ بِكَ ٱلَّذِينَ كَفَرُوا لِيُثْبِتُوكَ أَوْ يَقْتُلُوكَ أَوْ يُخْرِجُوكَ وَيَمْكُرُونَ وَيَمْكُرُ ٱللَّهُ وَٱللَّهُ خَيْرُ ٱلْمَٰكِرِينَ ٣١

32．われらの神兆が彼等に読誦されるや、彼等は云う、「我等はすでに聞けり。もし我等欲しなば、これと同じことを云い得べし。(注 23) これはただ古人の物語にすぎず」と。

وَإِذَا تُتْلَىٰ عَلَيْهِمْ ءَايَٰتُنَا قَالُوا قَدْ سَمِعْنَا لَوْ نَشَآءُ لَقُلْنَا مِثْلَ هَٰذَآ إِنْ هَٰذَآ إِلَّآ أَسَٰطِيرُ ٱلْأَوَّلِينَ ٣٢

33．彼等が、「アッラーよ、もしこれが汝よりの真理ならば、我等の上に天より石を降らせ給え、或いは我等の上に苛酷な懲罰を蒙ら

وَإِذْ قَالُوا ٱللَّهُمَّ إِن كَانَ هَٰذَا هُوَ ٱلْحَقَّ مِنْ عِندِكَ فَأَمْطِرْ عَلَيْنَا حِجَارَةً مِّنَ ٱلسَّمَآءِ أَوِ ٱئْتِنَا بِعَذَابٍ

注 21　この節は、人間の二つの忠誠について述べている。一つは、我々の創造者であるが故に絶対で永遠なる神（そして神の使者も）に対する忠誠であり、もう一つは、仲間への義務から生じる、仲間に対する忠誠である。

注 22　この節で述べられているのは、メッカのダールン・ナドワ（自治会館）で行われた秘密会議のことである。町の長老たちは、この新しい信仰が広まるのを妨げようとする自分達の努力がすべて失敗し、また、メッカから移ることのできるイスラム教徒はほとんど皆、メジナへ移り、危害を逃れたのを知って、イスラム教を根絶しようとする最後の計画をねろうとダールン・ナドワに集まったのである。さんざん討議した後に、彼らはある計画を考えついた。それはクライシュのいろいろな部族から、たくさんの若者を集め、共同して聖なる預言者を襲撃させ、殺させるというものだった。聖なる預言者は、真夜中、見張りが眠りこんでいる間に、密かに家を出、常に誠実な仲間であるアブ・バクルと共に、ソールの洞くつに避難した。そして、無事メジナに行きついたのである。

注 23　信仰しない者達は、クルアーンのような話など、自分達も作れると豪語していたが、これはただのからいばりである。実際に、彼らは何も作りはしなかったし、今だに、短い一章すらできてはいない。

せ給え」と云える時を憶い起せ。（注 24）

اَلِيْمٍ ۝٣٣

34．されどアッラーは汝が彼等の中にいる間は彼等を罰せず、（注 25）また彼等が赦罪を乞う間は彼等を処罰せざりき。

وَمَا كَانَ اللّٰهُ لِيُعَذِّبَهُمْ وَاَنْتَ فِيْهِمْ ؕ وَمَا كَانَ اللّٰهُ مُعَذِّبَهُمْ وَهُمْ يَسْتَغْفِرُوْنَ ۝٣٤

35．彼等聖礼拝所の真の守護者に非らざるに、そこに人の詣づるを妨害するに及んでは、もはやアッラーとて彼等を罰せざる理由何もなし。真の守護者は正義の人のみなり、しかるに彼等の多くは之を知らず。

وَمَا لَهُمْ اَلَّا يُعَذِّبَهُمُ اللّٰهُ وَهُمْ يَصُدُّوْنَ عَنِ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ وَمَا كَانُوْۤا اَوْلِيَآءَهٗ ؕ اِنْ اَوْلِيَآؤُهٗۤ اِلَّا الْمُتَّقُوْنَ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُوْنَ ۝٣٥

36．聖殿における彼等の礼拝は、ただ口笛を吹き手を拍ちならすにすぎず。されば、懲罰を味わえ、信ぜざりしが故に。

وَمَا كَانَ صَلَاتُهُمْ عِنْدَ الْبَيْتِ اِلَّا مُكَآءً وَّتَصْدِيَةً ؕ فَذُوْقُوا الْعَذَابَ بِمَا كُنْتُمْ تَكْفُرُوْنَ ۝٣٦

37．まこと、不信心者どもは人をアッラーの道より阻まんとして己が富を費やす。これからも費やし続けん。されど、やがてそれが後悔の種とならん、（注 26）打ち負かされん時至るらん。不信心者どもは地獄に集められん。

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا يُنْفِقُوْنَ اَمْوَالَهُمْ لِيَصُدُّوْا عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ؕ فَسَيُنْفِقُوْنَهَا ثُمَّ تَكُوْنُ عَلَيْهِمْ حَسْرَةً ثُمَّ يُغْلَبُوْنَ ۬ؕ وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْۤا اِلٰى جَهَنَّمَ يُحْشَرُوْنَ ۝٣٧

38．それはアッラーが悪人を善人より分ち、一人を他の上に置いて順次彼等を一緒に積み重ね、しかる後に之を地獄に投げ込み給う。彼等は紛れもない失敗者なり。

لِيَمِيْزَ اللّٰهُ الْخَبِيْثَ مِنَ الطَّيِّبِ وَيَجْعَلَ الْخَبِيْثَ بَعْضَهٗ عَلٰى بَعْضٍ فَيَرْكُمَهٗ جَمِيْعًا فَيَجْعَلَهٗ فِيْ جَهَنَّمَ ؕ اُولٰٓئِكَ هُمُ الْخٰسِرُوْنَ ۝٣٨

第五項

39．不信心者どもに云え、「もし止めるならば、過去のことは赦されん。されど、もしそこに還るならば、往古の人々が遭いたる先例あり」と。

قُلْ لِّلَّذِيْنَ كَفَرُوْۤا اِنْ يَّنْتَهُوْا يُغْفَرْ لَهُمْ مَّا قَدْ سَلَفَ ۚ وَاِنْ يَّعُوْدُوْا فَقَدْ مَضَتْ سُنَّتُ الْاَوَّلِيْنَ ۝٣٩

注 24・　バドルの戦場でのアブ・ジャハルの祈りは、ほとんどの言葉の通りであった。そして、この祈りは、そのとおり実現したのである。アブ・ジャハルは、多くのクライシュの指導者と共に死に、彼らの屍は穴に投げ込まれた。

注 25　　メッカの人々は、聖なる預言者がメッカを去った後に、罰を受けたのである。神の使者は、天罰に対する楯になってくれていたのである。

注 26　　この言葉が預言しているのは、信仰しない者達はイスラム教との戦いに多くの富を費やしているが、後にそれを非常に後悔し、悲嘆にくれるだろうということである。イスラム教を滅ぼそうとする彼らの努力は、結局、無に帰するであろうし、彼らの息子達は、イスラム教を受け入れ、イスラム教を更に広めるために、富を費やすことになるのである。

40. 迫害がなくなり、宗教が皆悉くアッラーのものとなるまで彼等と戦え。(注 27) されど、彼等もし敵対を止めるならば、まことにアッラーは彼等の行動を監視し給う。

وَقَاتِلُوهُمْ حَتّٰى لَا تَكُونَ فِتْنَةٌ وَّيَكُونَ الدِّينُ كُلُّهُ لِلّٰهِ ۚ فَإِنِ انْتَهَوْا فَإِنَّ اللّٰهَ بِمَا يَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ﴿٤٠﴾

41. もし彼等背くならば、(注 28) その時アッラーはお前たちの守護者にましますことを知れ。なんと素晴らしい守護者なり、擁護者なり！

وَإِنْ تَوَلَّوْا فَاعْلَمُوا أَنَّ اللّٰهَ مَوْلٰىكُمْ ۚ نِعْمَ الْمَوْلٰى وَنِعْمَ النَّصِيرُ ﴿٤١﴾

42. もしお前たちアッラーを信じ、また判別の日 (注 29) ——すなわち両軍相会せる日、われらが僕に降せしものを信じるならば、お前たちが戦利品として獲たるものは何物にせよ、その五分の一は、アッラー並びにその使徒、親戚、孤児、貧者、及び旅行者 (注 30) のものであることを知れ。げにアッラーは全能にまします。

وَاعْلَمُوا أَنَّمَا غَنِمْتُمْ مِّنْ شَيْءٍ فَأَنَّ لِلّٰهِ خُمُسَهُ وَلِلرَّسُولِ وَلِذِي الْقُرْبٰى وَالْيَتٰمٰى وَالْمَسٰكِينِ وَابْنِ السَّبِيلِ إِنْ كُنْتُمْ آمَنْتُمْ بِاللّٰهِ وَمَا أَنْزَلْنَا عَلٰى عَبْدِنَا يَوْمَ الْفُرْقَانِ يَوْمَ الْتَقَى الْجَمْعٰنِ ۗ وَاللّٰهُ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٤٢﴾

43. お前たちが谷の手前岸に陣取り、彼等は向う岸にあり、その下を隊商が在りたりし時のこと。たとえお前たち互に合戦を約したりとも、必ずその約束を違えたであろう。(注 31) されど、戦闘は行われたり。そはアッラーが定めたることを成し遂げんがた

إِذْ أَنْتُمْ بِالْعُدْوَةِ الدُّنْيَا وَهُمْ بِالْعُدْوَةِ الْقُصْوٰى وَالرَّكْبُ أَسْفَلَ مِنْكُمْ ۚ وَلَوْ تَوَاعَدْتُّمْ لَاخْتَلَفْتُمْ فِي الْمِيعٰدِ ۙ وَلٰكِنْ لِّيَقْضِيَ اللّٰهُ أَمْرًا كَانَ مَفْعُولًا ۙ لِّيَهْلِكَ

注 27　イスラム教徒達は、宗教上の迫害がなくなり、人々が自分の選んだ宗教を自由に信仰できるようになるまで、戦わなければならないと定められていた。勿論、イスラム教は、良心の自由の最大の支持者である (2 章 194 節参照)。

注 28　この言葉は、「もし、彼らが和平の提案を受け入れず、再び敵対するのであれば」という意味である。

注 29　バドルの日のこと。

注 30　この節は、戦利品の分配について述べている (8 章 2 節も参照の事)。戦利品の五分の一はイマームかカリファにゆだね、彼の判断に従って、ここにあげた五者の間で分配されるべきものである。聖なる預言者に分配されたものは、貧しいイスラム教徒たちのために費やされた。預言者自身は、全く簡素な生活をしていたからである。イマーム・マリクによれば、分配は必ずしも平等に行なわれる必要はない。イマームの裁量にまかされ、イマームは、その時の状況や必要性に応じて分配するのである。こうしたことも、聖なる預言者と、正しく彼を踏襲する四人の後継者の仕事であった。残りの五分の四は、兵士たちに分配された。兵士たちは、給料もなく、たいていの場合、戦争に行く費用さえ自分達で賄わなければならなかったのだった。当時、正規軍も国家財政というものもない時であったから、これは、その当時の状況に見合うよう考えられた、緊急の分配方法であった。「親戚」とは、ザカート (喜捨) から何の利益も得ることができなかったハシムと、アブドゥル・ムッターリブの子孫すべてのことである。

注 31　この節は、バドルにおける三つの軍勢の位置関係をはっきり描き出している。イスラム教徒達はメジナに近い側に、メッカ軍はメジナから離れた側に、そしてシリアから来たメッカの隊商は、海の方へ向ってい

め、(注 32) また死ぬ者にアッラーの明証を見させて死なせ、生き残る者にアッラーの明証を見させて生き残らしめんがためなり。まことにアッラーはすべてを聴き、すべてを深く知り給う。

مَنْ هَلَكَ عَنْ بَيِّنَةٍ وَّيَحْيٰى مَنْ حَيَّ عَنْ بَيِّنَةٍ ۗ وَإِنَّ اللّٰهَ لَسَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٤٣﴾

44. アッラーは汝の夢の中で、敵を寡少に見せしめたり。(注 33) もし彼が敵の人数を大勢いるように見せしめなば、お前たちは必ず気後れし、その事について論じ争ったに違いない。されど、アッラーはお前たちを救い給えり。彼は確かに、人が胸奥に秘めたるものを深知し給う。

إِذْ يُرِيكَهُمُ اللّٰهُ فِي مَنَامِكَ قَلِيلًا ۖ وَلَوْ أَرٰىكَهُمْ كَثِيرًا لَّفَشِلْتُمْ وَلَتَنَازَعْتُمْ فِي الْأَمْرِ وَلٰكِنَّ اللّٰهَ سَلَّمَ ۗ إِنَّهُ عَلِيمٌ بِذَاتِ الصُّدُورِ ﴿٤٤﴾

45. 両軍が遭遇せし時を念え。彼はお前たちの眼に、彼等を少数と映ぜしめ、彼等の眼にはお前たちを少数と映ぜしめたるは、(注 34) アッラーがその定めたることを成し遂げんとせんがためなりき。万事最後の決定はアッラーに帰着す。

وَإِذْ يُرِيكُمُوهُمْ إِذِ الْتَقَيْتُمْ فِي أَعْيُنِكُمْ قَلِيلًا وَّيُقَلِّلُكُمْ فِي أَعْيُنِهِمْ لِيَقْضِيَ اللّٰهُ أَمْرًا كَانَ مَفْعُولًا ۗ وَإِلَى اللّٰهِ تُرْجَعُ الْأُمُورُ ﴿٤٥﴾ ع

第六項

46. 汝等信ずる者よ、合戦に際しては毅然として、アッラーを幾度も唱念せよ、さすれば幸あらん。

يٰأَيُّهَا الَّذِينَ اٰمَنُوا إِذَا لَقِيتُمْ فِئَةً فَاثْبُتُوا وَاذْكُرُوا اللّٰهَ كَثِيرًا لَّعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ﴿٤٦﴾

47. 而して、アッラーと使徒に従い、意気消沈して力を喪失することのないように互に喧嘩口論などするなかれ。堅忍不抜たれ。アッラーは堅忍不抜なる者と偕にあり。

وَأَطِيعُوا اللّٰهَ وَرَسُولَهُ وَلَا تَنَازَعُوا فَتَفْشَلُوا وَتَذْهَبَ رِيحُكُمْ وَاصْبِرُوا ۗ إِنَّ اللّٰهَ مَعَ الصّٰبِرِينَ ﴿٤٧﴾

たのである。この節では、次のようにも述べている。もし、イスラム教徒達が、自分で衝突の時を決められるのなら、彼らはきっと、最初の衝突の日を、もっと先に延ばしたかったであろう。その時、彼らは自分達の力は、はるかに強力で、装備もはるかに整った敵と戦うには不十分だと感じていたのである。しかし、神は、神の奇跡を強く示すのが目的であったから、彼らを敵に出合わせたのである。

注 32　神は、メッカ軍の敗北を宣告していたのである。

注 33　聖なる預言者がバドルへ行く途中見た幻の中では、メッカ軍の人数は、実際の数よりも少なく見えたのである。これは、メッカ軍は、数や装備で優っていても、必ず敗北するという意味であった。

注 34　前節が、聖なる預言者の見た幻の中の敵の様子を述べているのに対し、この節では戦場における敵の実際の陣容について述べている。敵は、兵の三分の一を土手の後に隠れさせていた。従って、両軍が相対する時、イスラム教徒は、実際の三分の二の人数の敵と対することになる。これは、当然彼らを勇気づけた。敵側としては、このようにしたのは、イスラム教徒達が恐れをなして戦場から逃げ出し、戦争にならなくなる事態を避けるためであった。こうした両軍の考えは、それぞれに軍の戦意をもり上げていた。結果は、神が宣告した通り、すなわち、メッカ軍の屈辱的なさんざんな敗北となったのである。

48. 昂然として己が家より現われ出で、人をアッラーの道から背き去らしめる徒輩の如くなるなかれ。アッラーは彼等の行動のすべてを取り囲み給う。

وَلَا تَكُونُوا كَالَّذِينَ خَرَجُوا مِن دِيَارِهِم بَطَرًا وَرِئَاءَ النَّاسِ وَيَصُدُّونَ عَن سَبِيلِ اللَّهِ وَاللَّهُ بِمَا يَعْمَلُونَ مُحِيطٌ ﴿٤٨﴾

49. 悪魔（注 35）が己が行為を正しいと彼等に思わしめていた時、云えり、「今日、何人もお前たちに打ち勝るを得ず。我はお前たちの擁護者なり」と。しかるに、両軍相対峙するや、彼は踵を回して、云えり、「我はお前たちとは関りなし。我はお前たちの見えざるものを見る。我はアッラーを恐る。（注 36）アッラーは罰するに厳しくまします」と。

وَإِذْ زَيَّنَ لَهُمُ الشَّيْطَانُ أَعْمَالَهُمْ وَقَالَ لَا غَالِبَ لَكُمُ الْيَوْمَ مِنَ النَّاسِ وَإِنِّي جَارٌ لَّكُمْ فَلَمَّا تَرَاءَتِ الْفِئَتَانِ نَكَصَ عَلَىٰ عَقِبَيْهِ وَقَالَ إِنِّي بَرِيءٌ مِّنكُمْ إِنِّي أَرَىٰ مَا لَا تَرَوْنَ إِنِّي أَخَافُ اللَّهَ وَاللَّهُ شَدِيدُ الْعِقَابِ ﴿٤٩﴾

第七項

50. 偽善者並びに心に病のある者が「彼等の宗教はこれ等の人々を惑わしたり」と云えし時を念え。誰であれアッラーに信頼をよせる者は……然り、まことにアッラーは偉大にして、賢哲にまします。

إِذْ يَقُولُ الْمُنَافِقُونَ وَالَّذِينَ فِي قُلُوبِهِم مَّرَضٌ غَرَّ هَٰؤُلَاءِ دِينُهُمْ وَمَن يَتَوَكَّلْ عَلَى اللَّهِ فَإِنَّ اللَّهَ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ﴿٥٠﴾

51. 汝もし見得るならば、諸天使が不信心者どもの生命を持ち去る時、彼等の顔や背を打ちて云う、「汝等火焙の刑を味わえ！

وَلَوْ تَرَىٰ إِذْ يَتَوَفَّى الَّذِينَ كَفَرُوا الْمَلَائِكَةُ يَضْرِبُونَ وُجُوهَهُمْ وَأَدْبَارَهُمْ وَذُوقُوا عَذَابَ الْحَرِيقِ ﴿٥١﴾

52. この責苦はお前たちの手が自分の前に送りしもののためなり。またアッラーはその僕等に些かも不正不義にましまさぬことを知れ」と。

ذَٰلِكَ بِمَا قَدَّمَتْ أَيْدِيكُمْ وَأَنَّ اللَّهَ لَيْسَ بِظَلَّامٍ لِّلْعَبِيدِ ﴿٥٢﴾

注 35　この節で語られている人は、メッカの人々の反イスラム感情をかきたてたスラカ・ビン・マリク・ビン・ジュシャムだと言われている。しかし、彼は後に、イスラム教徒になっている。メッカ軍がまだメッカに滞留している時に、何人かのクライシュ部族の指導者の心配は、バヌー・カナーナの一派でクライシュ部族に敵意を持つバヌ・バクルが、メッカ軍がいなくなった時に、メッカを急襲するかもしれないし、メッカ軍を後から攻撃するかもしれないということだった。バヌー・カナーナの長、スラカがバヌー・カナーナの部族はメッカの人々に何の危害も加えることはないと保証したので、彼らの心配はおさまった。

注 36　スラカは、イスラム教徒達が断固とした決意を固めているのを見て、恐ろしくなったのである。彼らを見て、彼らには勝利か死か、どちらか一つなのだと確信したのである。丁度同じ様に、ウットバとウメールはバドルの戦いの日に感じ、メッカの人々に、イスラム教徒は皆、死へ向って行く様に見えたと語っている (Tabari)。

53．彼等の場合は、ファラオの民並びにその以前のものどもと同じなり。彼等はアッラーの神兆を信ぜざりき。さればアッラーはその罪故に彼等を懲らしめたり。まことに、アッラーは強力にして、罰するに厳しくまします哉。

كَدَأْبِ آلِ فِرْعَوْنَ وَالَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ كَفَرُوا بِآيَاتِ اللَّهِ فَأَخَذَهُمُ اللَّهُ بِذُنُوبِهِمْ إِنَّ اللَّهَ قَوِيٌّ شَدِيدُ الْعِقَابِ ﴿٥٣﴾

54．こはアッラーが一度或る民に恩寵を授くれば、その民が先に自らの心裡を変えざる限り（注37）変えざるがためなり、而して、アッラーはすべてを聴き、すべてを深知するを知れ。

ذَٰلِكَ بِأَنَّ اللَّهَ لَمْ يَكُ مُغَيِّرًا نِّعْمَةً أَنْعَمَهَا عَلَىٰ قَوْمٍ حَتَّىٰ يُغَيِّرُوا مَا بِأَنفُسِهِمْ وَأَنَّ اللَّهَ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٥٤﴾

55．彼等の場合はファラオの民並びにその以前のものどもと同じなり。彼等はその主の神兆を拒否せり。されば、われらはその罪故に彼等を滅ぼせり。われらはファラオの民を溺れしめたり、なんとなれば彼等悉く不義なす徒輩なりしが故に。

كَدَأْبِ آلِ فِرْعَوْنَ وَالَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ كَذَّبُوا بِآيَاتِ رَبِّهِمْ فَأَهْلَكْنَاهُم بِذُنُوبِهِمْ وَأَغْرَقْنَا آلَ فِرْعَوْنَ وَكُلٌّ كَانُوا ظَالِمِينَ ﴿٥٥﴾

56．アッラーの立場から見た最低の人非人とは、忘恩の徒輩なり。されば彼等は信ぜざるべし。

إِنَّ شَرَّ الدَّوَابِّ عِندَ اللَّهِ الَّذِينَ كَفَرُوا فَهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿٥٦﴾

57．これ等の者と汝は盟約を結びしも、彼等はその都度之を破約し、（注38）神を畏れぬ者どもなり。

الَّذِينَ عَاهَدتَّ مِنْهُمْ ثُمَّ يَنقُضُونَ عَهْدَهُمْ فِي كُلِّ مَرَّةٍ وَهُمْ لَا يَتَّقُونَ ﴿٥٧﴾

58．されば、戦場にて彼等を打ち破りし時は、背後に従う者どもを逐い散らせ。（注39）さすれば、彼等も反省するやも知らず。

فَإِمَّا تَثْقَفَنَّهُمْ فِي الْحَرْبِ فَشَرِّدْ بِهِم مَّنْ خَلْفَهُمْ لَعَلَّهُمْ يَذَّكَّرُونَ ﴿٥٨﴾

59．また、或る民が汝を裏切る恐れある場合は、お前の方から公平に（注40）盟約を彼等

وَإِمَّا تَخَافَنَّ مِن قَوْمٍ خِيَانَةً فَانبِذْ إِلَيْهِمْ عَلَىٰ

注37　この節は、神は、先に人々が悪い方に変っていかない限り、神が民族に与えた恩恵を取り上げないという、一般的な神の掟を述べている。

注38　彼らは、再三約束を破り、厳粛に行なわれた合意も踏みにじる。

注39　信徒は、はっきりした理由がない限り、決して武器をとってはならないと定められている。しかし、いったん武器を取れば、敵に恐怖心を抱かせるほどに、勇敢に戦い、相手に致命的な打撃を与えなければならないのである。気力に欠け、優柔不断な戦いは決して巧みな戦術ではない。戦うとなれば、敏速で徹底的でなければならないのである。

注40　もし、ある民族が、イスラム教徒と交した盟約を破れば、イスラム教徒は、盟約は破棄するとはっきり相手に布告し、もし攻撃されれば、全力で反撃するであろう。しかし、いかなる場合も、この事前の布告な

に投げ返せ。げに、アッラーは背信者を愛し給わぬ。

ع سَوَآءٍ ۭ اِنَّ اللّٰهَ لَا يُحِبُّ الْخَآئِنِيْنَ ۝٥٩

第八項

60. 信ぜざる者をして、わしに勝ると思わしむるなかれ。彼等は神の目的を挫折する能(あた)わず。

وَلَا يَحْسَبَنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا سَبَقُوْا ۭ اِنَّهُمْ لَا يُعْجِزُوْنَ ۝٦٠

61. 可能な限りの軍勢とつないだ馬を彼等に対して備えよ、それによってアッラー並びにお前たちの敵、それからお前たちは知らぬが、アッラーが知る敵に恐怖を与えよ。(注41) お前たちがアッラーの道に費すものは、必ず存分に返済されん。決して不当に遇せらるることなし。

وَاَعِدُّوْا لَهُمْ مَّا اسْتَطَعْتُمْ مِّنْ قُوَّةٍ وَّمِنْ رِّبَاطِ الْخَيْلِ تُرْهِبُوْنَ بِهٖ عَدُوَّ اللّٰهِ وَعَدُوَّكُمْ وَاٰخَرِيْنَ مِنْ دُوْنِهِمْ ۚ لَا تَعْلَمُوْنَهُمْ ۚ اَللّٰهُ يَعْلَمُهُمْ ۭ وَمَا تُنْفِقُوْا مِنْ شَيْءٍ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ يُوَفَّ اِلَيْكُمْ وَاَنْتُمْ لَا تُظْلَمُوْنَ ۝٦١

62. もし彼等和平に傾かば、汝もまたそれに傾け、(注42) 而してアッラーを信頼せよ。彼こそはすべてを聴き、すべてを深く知り給う御方にまします。

وَاِنْ جَنَحُوْا لِلسَّلْمِ فَاجْنَحْ لَهَا وَتَوَكَّلْ عَلَى اللّٰهِ ۭ اِنَّهٗ هُوَ السَّمِيْعُ الْعَلِيْمُ ۝٦٢

63. たとえ彼等が汝を欺かんとするも、アッラーいます限り汝は万全なり。彼こそはその助けにより、且(か)つ多くの信者によって汝の地歩(ちほ)を固めたりし御方なるぞ。

وَاِنْ يُّرِيْدُوْٓا اَنْ يَّخْدَعُوْكَ فَاِنَّ حَسْبَكَ اللّٰهُ ۭ هُوَ الَّذِيْٓ اَيَّدَكَ بِنَصْرِهٖ وَبِالْمُؤْمِنِيْنَ ۝٦٣

しに奇襲することは許されない。「公平に」とは平等な立場で、つまり、両軍共知った上で、各々盟約の義務を負うことはないという意味である。

注41　この節では、イスラム教徒に、戦争を回避する最善の方法は十分な準備をしておくことだということが述べられている。国内に十分な軍隊を持つだけでなく、国境にも十分な軍隊を配置すべきである。そして、知恵と誠実と気力を持って自らを律すれば、戦場から遠く離れた敵も、イスラム教徒と戦うことをあきらめるであろう。また、戦う時には、金銭を惜しみなく使うことも大切だとも述べられている。更に、信徒たちへの警告と預言も含んでいるようである。その預言とは、異教徒のアラブ人だけが彼らの敵なのではなく、近い将来、彼らを攻撃してくる民族が、他にいるというのである。これは、ビザンチン帝国とペルシャ帝国のことを指し、聖なる預言者の死後間もなく、イスラム教徒はこの国々と戦わなければならなくなるであろうというものである。

注42　この節は、和平条約を結ぶに当っての、重要な原則を具体的に述べているだけでなく、イスラム教の戦争の性格についても興味深い指摘をしている。イスラム教徒は、イスラム教を受け入れさせるために戦争に訴えたのではなく、平和を確立し、維持するために戦争をしたというのである。たとえ相手が仕掛けてきた戦争でも、相手が和平を求めてくれば、イスラム教徒は、これを拒んではならないと定めていた。たとえそれが、彼らを欺き、時をかせぐための和平であってもである。このことは、イスラムが、国家間の平和を確立するために、どれほどのことをするかを示している。

64．また彼は、信者の心を一つに結集し給うた御方なり。たとえ汝が地上に在るすべてのものを費やすとも、信者等の心を一つになす能わず、しかるに、アッラーは彼等を一つに結集せり。げに、彼は偉大にして、賢哲にまします。

وَأَلَّفَ بَيْنَ قُلُوبِهِمْ لَوْ أَنفَقْتَ مَا فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا مَّا أَلَّفْتَ بَيْنَ قُلُوبِهِمْ وَلَٰكِنَّ اللَّهَ أَلَّفَ بَيْنَهُمْ إِنَّهُ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ٦٤

第九項

65．預言者よ、汝はアッラーと汝に従う信者あれば十分なり。

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ حَسْبُكَ اللَّهُ وَمَنِ اتَّبَعَكَ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ ٦٥

66．預言者よ、戦いに際しては信者たちを激励せよ。お前たちのうち二十人（注 43）の堅忍不抜の者あらば、能く二百の敵を打ち破らん。もしお前たちの一百あらば、一千の不信者どもを打ち破らん。なんとなれば、彼等は事のなんたるかを解せざる人々故。（注 44）

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ حَرِّضِ الْمُؤْمِنِينَ عَلَى الْقِتَالِ إِن يَكُن مِّنكُمْ عِشْرُونَ صَابِرُونَ يَغْلِبُوا مِائَتَيْنِ وَإِن يَكُن مِّنكُم مِّائَةٌ يَغْلِبُوا أَلْفًا مِّنَ الَّذِينَ كَفَرُوا بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَّا يَفْقَهُونَ ٦٦

67．いまアッラーはお前たちに弱気あるを知り。お前たちの負担を軽減せり。されば、お前たちのうち一百の堅忍不抜の者あらば、能く二百の敵を打ち破らん。またもし一千あらば、アッラーの支配力の許に二千（注 45）を打ち破らん。アッラーは堅忍不抜の人々と偕にまします。

الْآنَ خَفَّفَ اللَّهُ عَنكُمْ وَعَلِمَ أَنَّ فِيكُمْ ضَعْفًا فَإِن يَكُن مِّنكُم مِّائَةٌ صَابِرَةٌ يَغْلِبُوا مِائَتَيْنِ وَإِن يَكُن مِّنكُمْ أَلْفٌ يَغْلِبُوا أَلْفَيْنِ بِإِذْنِ اللَّهِ وَاللَّهُ مَعَ الصَّابِرِينَ ٦٧

68．正規の戦いで打ち負かした敵に非ざれば、捕虜とするは預言者には相応しからず。（注 46）お前たちは現世の幸せを望めど

مَا كَانَ لِنَبِيٍّ أَن يَكُونَ لَهُ أَسْرَىٰ حَتَّىٰ يُثْخِنَ فِي الْأَرْضِ تُرِيدُونَ عَرَضَ الدُّنْيَا وَاللَّهُ يُرِيدُ الْآخِرَةَ

注 43　この節は、一戦闘部隊の最小限の人数を 20 人と言っているようである。

注 44　なぜなら、彼らは雇い兵であり、自分達の戦いの目的が正当かどうか理解してはいないし、それに興味も持っていないからである。それとも、彼らは、自ら追求し、身を献げるような、より高尚な理想など持ち合わせていないと言っているのかもしれない。

注 45　この節を、前節を破棄するものと理解すべきではない。二つの節は各々、イスラム教徒社会の二つの異った状況の時のことを述べているのである。初めのうち、彼らは、弱少で、装備も不十分であり、戦う技術も十分身につけていなかった。しかし、時が経つにつれて、全般的な状況、戦争経験、兵力は大いに向上し、彼らは十倍の敵も打ち負かすことができるようになったのである。バドル、オハド、堀の戦いと、両軍の兵力の差はますます広がっていった。しかし、イスラム教徒は自分達の勢力を見事に守り、とうとうヤルムークの戦いでは、たった六万のイスラム教徒が百万以上の敵を破ったのである。

注 46　この節では、戦いが正規戦で、そして敵を完全に制圧した場合以外には、敵を捕虜にしてはならないという原則を定めている。これは、奴隷制度を廃止する原則である。イスラム教を滅ぼすために戦争に参加し、そして負けたもののみが、捕虜となるというのである（47 章 5 節参照）。

も、アッラーはお前たちに来世を望む。アッラーは偉大にして、賢哲にまします。

وَاللّٰهُ عَزِيْزٌ حَكِيْمٌ ﴿٦٨﴾

69．すでに発令されしアッラーの掟なかりせば、(注 47) お前たちはその取りしもの故に大なる災難に襲われた筈。(注 48)

لَوْلَا كِتٰبٌ مِّنَ اللّٰهِ سَبَقَ لَمَسَّكُمْ فِيْمَآ اَخَذْتُمْ عَذَابٌ عَظِيْمٌ ﴿٦٩﴾

70．お前たちは戦利品の中より合法にして清潔なるものを食し、アッラーを畏れ敬え。げに、アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

فَكُلُوْا مِمَّا غَنِمْتُمْ حَلٰلًا طَيِّبًا ۖ وَّاتَّقُوا اللّٰهَ ۭ اِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٧٠﴾ ع

第十項

71．預言者よ、お前の手中にある捕虜に云え、「もしアッラーお前たちの心中に何んらかの良きもの在るを知らば、お前たちが奪われしものより優るものをお前たちに与え、(注 49) 且つ容赦せん。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします」と。

يٰٓاَيُّهَا النَّبِيُّ قُلْ لِّمَنْ فِيْٓ اَيْدِيْكُمْ مِّنَ الْاَسْرٰٓى ۙ اِنْ يَّعْلَمِ اللّٰهُ فِيْ قُلُوْبِكُمْ خَيْرًا يُّؤْتِكُمْ خَيْرًا مِّمَّآ اُخِذَ مِنْكُمْ وَيَغْفِرْ لَكُمْ ۭ وَاللّٰهُ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٧١﴾

72．されど彼等もし汝を裏切らんと意図するならば、彼等はすでにアッラーを裏切りし者なれば、アッラーは汝に彼等を制する力を与えたり。アッラーはすべてを聴き、賢哲にまします。

وَاِنْ يُّرِيْدُوْا خِيَانَتَكَ فَقَدْ خَانُوا اللّٰهَ مِنْ قَبْلُ فَاَمْكَنَ مِنْهُمْ ۭ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ﴿٧٢﴾

73．信仰を受け容れ、家郷を棄て、財産も生命をもなげうってアッラーのために奮闘努力せる者、並びに彼等に住居と援助を与えし人々——これ等は互に仲間なり。されど、信仰を受け容れど、家郷を出でざる人々を、彼等が家郷を出でざる限り、お前たちは彼等を保護する責務なし。されど、彼等が宗教上の問題でお前たちに援助を請わば、彼

اِنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَهَاجَرُوْا وَجٰهَدُوْا بِاَمْوَالِهِمْ وَاَنْفُسِهِمْ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَالَّذِيْنَ اٰوَوْا وَّنَصَرُوْٓا اُولٰۗىِٕكَ بَعْضُهُمْ اَوْلِيَاۗءُ بَعْضٍ ۭ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَلَمْ يُهَاجِرُوْا مَا لَكُمْ مِّنْ وَّلَايَتِهِمْ مِّنْ شَيْءٍ حَتّٰى يُهَاجِرُوْا ۚ وَاِنِ اسْتَنْصَرُوْكُمْ فِي الدِّيْنِ فَعَلَيْكُمُ

注 47　この言葉は、援助についての神の約束を指している。

注 48　身代金をとって、捕虜を釈放することは、既に、よく行われていたことであった。ここで強調していることは、正規戦以外では、相手を捕虜にしてはいけないということである。

注 49　預言者の叔父アバースが、バドルで敵の捕虜となった。その後、彼はイスラム教に改宗し、聖なる預言者のもとにやって来た。そして、神は捕虜には身代金以上のものを与えるとこの節に約束されている様に、自分の場合も、この約束を実行して欲しいと叔父アバースは頼んだ。聖なる預言者は、彼の要求をきき入れたのである (Jarir, X, 31)。

等を助くるはお前たちの義務なり。但しお前たちと協定のある民に敵対する場合は除く。(注 50) アッラーはお前たちの所業を覹し給う。

النَّصْرُ إِلَّا عَلَىٰ قَوْمٍ بَيْنَكُمْ وَبَيْنَهُمْ مِيثَاقٌ ۗ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ﴿٧٢﴾

74. 信ぜざる者ども――彼等も互に仲間なり。もしお前たち命ぜられたることを為さざれば、地上に災害と大混乱が到来せん。(注 51)

وَالَّذِينَ كَفَرُوا بَعْضُهُمْ أَوْلِيَاءُ بَعْضٍ ۚ إِلَّا تَفْعَلُوهُ تَكُنْ فِتْنَةٌ فِي الْأَرْضِ وَفَسَادٌ كَبِيرٌ ﴿٧٣﴾

75. 信仰を受け容れ、家郷を棄て、アッラーのために奮闘努力する者、並びに彼等に住居と援助を与えし人々――これ等の人々こそ真の信者なり。容赦と給養は彼等のためにこそあり。

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَهَاجَرُوا وَجَاهَدُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَالَّذِينَ آوَوْا وَنَصَرُوا أُولَٰئِكَ هُمُ الْمُؤْمِنُونَ حَقًّا ۚ لَهُمْ مَغْفِرَةٌ وَرِزْقٌ كَرِيمٌ ﴿٧٤﴾

76. 後れて信仰を受け容れ、家郷を棄て、アッラーのためにお前たちと一緒に奮闘努力せし者――これ等はお前たちの仲間なり。なれど、アッラーの経典によれば、血縁者は彼等よりも更に相い近し。(注 52) げにアッラーは万事を深知し給う。

وَالَّذِينَ آمَنُوا مِنْ بَعْدُ وَهَاجَرُوا وَجَاهَدُوا مَعَكُمْ فَأُولَٰئِكَ مِنْكُمْ ۚ وَأُولُو الْأَرْحَامِ بَعْضُهُمْ أَوْلَىٰ بِبَعْضٍ فِي كِتَابِ اللَّهِ ۗ إِنَّ اللَّهَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿٧٥﴾

注 50　この節は、同国内、同じ政府の下に住むイスラム教徒達は、移民であろうが、もともとの市民であろうが、お互い必要な時には助け合わなければならないと定めている。しかし、イスラム教国に移住しない教徒達は、世俗的なことではイスラム教の国から、援助を求めることはできない。もし宗教上の理由で迫害されれば、その時は、イスラム教国の人々は、彼らを助けなければならない。しかしながら、もし、彼らが非イスラム教国でも、イスラムと和平条約を結んでいる国に住んでいるのであれば、たとえ宗教上の問題でも、援助はできない。この場合のイスラム教徒がとれる唯一の方法は、非イスラム教国から移民してくることである。

注 51　イスラム教徒がもし、この原則を守らなければ、国内には、圧制と暴虐と混乱が起きるであろう。

注 52　73 節で、すべてのイスラム教徒はお互いに兄弟であるとはっきり述べているということと、聖なる預言者がメジナで、亡命者と救援者達の間に兄弟の関係を結ばせたということから、財産までが相続されると誤解されたかもしれない。ここでは、血縁関係のみが相続の資格があり、他の教徒達は信仰上のみの兄弟であると明言しているのである。

سُوْرَةُ التَّوْبَةِ مَدَنِيَّةٌ

（メディナ啓示）

1．これはアッラー並びにその使徒より、お前たちが協約を結びし多神教徒に対する義務の免除の宣言なり。（注1）

بَرَآءَةٌ مِّنَ اللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖٓ اِلَى الَّذِيْنَ عٰهَدْتُّمْ مِّنَ الْمُشْرِكِيْنَ ①

2．されば、四ヵ月間は自由に地上を往来せよ。お前たちはアッラーの計画を挫折さし得ず、（注2）またアッラーが不信心者に屈辱を与うる者なることを知れ。

فَسِيْحُوْا فِي الْاَرْضِ اَرْبَعَةَ اَشْهُرٍ وَّاعْلَمُوْٓا اَنَّكُمْ غَيْرُ مُعْجِزِي اللّٰهِ وَاَنَّ اللّٰهَ مُخْزِي الْكٰفِرِيْنَ ②

3．アッラー並びにその使徒より大巡礼の日に人々に発せられる布告は次の如し、（注3）「アッラーは多神教徒とは何んの関係もなし。その使徒もまた同じなり。されば、もしお前たち改悛するなら、そはお前たちのために幸いならん。なれど、もし背き去らば、アッラーの計画を挫折し得ざることを知れ」而(しか)して、信ぜざる者どもに痛罰を通告せよ。

وَاَذَانٌ مِّنَ اللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖٓ اِلَى النَّاسِ يَوْمَ الْحَجِّ الْاَكْبَرِ اَنَّ اللّٰهَ بَرِيْٓءٌ مِّنَ الْمُشْرِكِيْنَ ۙ وَرَسُوْلُهٗ ؕ فَاِنْ تُبْتُمْ فَهُوَ خَيْرٌ لَّكُمْ ۚ وَاِنْ تَوَلَّيْتُمْ فَاعْلَمُوْٓا اَنَّكُمْ غَيْرُ مُعْجِزِي اللّٰهِ ؕ وَبَشِّرِ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا بِعَذَابٍ اَلِيْمٍ ③

4．但しお前たちが協定を結びし多信教徒でその後破約せず、またお前たちに敵対する何人(なんぴと)をも援助せざりし人々は除く。（注4）

اِلَّا الَّذِيْنَ عٰهَدْتُّمْ مِّنَ الْمُشْرِكِيْنَ ثُمَّ لَمْ يَنْقُصُوْكُمْ شَيْـًٔا وَّلَمْ يُظَاهِرُوْا عَلَيْكُمْ اَحَدًا فَاَتِمُّوْٓا اِلَيْهِمْ

注1　この節では、イスラムと聖なる預言者の正当性がメッカの陥落によって完全に証明されたと宣言されている。預言者は賞金付きのお尋ね者となってきびしくメッカを追放されたが、彼は再び栄光と勝利を得て帰って来ると宣言されていた（28章86節参照）。ここにメッカの陥落、そしてアラビアにおけるイスラム戒律の樹立という二つの預言が成就された。このようにメッカは預言者のものであるという預言を果たすため、またメッカの人々の同様の願いを成就するためにもこの聖なる預言は完全に正しいと立証された。

注2　メッカ陥落とフナインの戦いにおけるハワズィンの敗北を通してイスラムの戒律と権威が確立された。武器を捨て回教徒たちと和平を結んだ地方もあり、和平は完全に守られた。しかし、平和が続き、法と秩序が守られていることが確かであるのに、正式な和平への提示もしなければ、武器も捨てず、またイスラム教徒といかなる和平も結ばない地方もあり、こういう人々はイスラム教徒に敵意を示した。結果的には彼らは滅びていったが、敗北を認めもしなければ、回教徒と共に平和に暮らそうともしなかった。四ヶ月の停戦期間を与え、その間は軍事行動はとらなかったので、彼らはもうこれ以上の抵抗は無意味と思っていたので、行こうと思えば国中どこへも行くことができた。彼等は、その時降服することもできれば和平を結ぶこともできたのである。この節はこういう人々について述べられている。

注3　イスラム教徒の指導のもとに最初に行われた異教徒の移動であったので、大巡礼と呼ばれた。

注4　これらの部族はバヌー・クザー、バヌー・ムドリュジュ、バヌー・バクル、バヌー・ダムラー、バヌー・

されば、期限が満了するまで彼等との協定を全うせよ。アッラーは公正なる者を愛し給う。

عَهْدَهُمْ إِلَىٰ مُدَّتِهِمْ ۚ إِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ الْمُتَّقِينَ ④

5．禁止の月過ぎなば、(注5)何処なりと多神教徒（注6）は見つけ次第これを殺し、捕虜となし、包囲し、いたるところに伏兵を置いて待伏せよ。なれど、もし彼等が改悛し、礼拝を遵守し、喜捨を払うなら、その時は釈放せよ。(注7)げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

فَإِذَا انْسَلَخَ الْأَشْهُرُ الْحُرُمُ فَاقْتُلُوا الْمُشْرِكِينَ حَيْثُ وَجَدْتُمُوهُمْ وَخُذُوهُمْ وَاحْصُرُوهُمْ وَاقْعُدُوا لَهُمْ كُلَّ مَرْصَدٍ ۚ فَإِنْ تَابُوا وَأَقَامُوا الصَّلَاةَ وَآتَوُا الزَّكَاةَ فَخَلُّوا سَبِيلَهُمْ ۚ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ⑤

6．もし誰か多神教徒が汝に保護を請わば、之を保護してアッラーの言葉を聞かしめ、しかるに後に彼を安全な場所に送り届けよ。(注8)そは彼等が無知の民なるが故なり。

وَإِنْ أَحَدٌ مِنَ الْمُشْرِكِينَ اسْتَجَارَكَ فَأَجِرْهُ حَتَّىٰ يَسْمَعَ كَلَامَ اللَّهِ ثُمَّ أَبْلِغْهُ مَأْمَنَهُ ۚ ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَا يَعْلَمُونَ ⑥

スレームの一族である。この節はイスラムが愛をもって和平や合意をしたので、計らずもイスラムの神聖さを表わしている。

注5　「禁止の月」というのはズル・ガーダ、ズル・ヒッジャー、モハッラム、ラジャブの四ヶ月間を指している。最初の三ヶ月は大巡礼の期間であって、最後の一ヶ月にアラブ人は一般的に小巡礼またはウムラーを行なう（2章 195節、2章 218節参照)。アシホルル・ホロムという語は「聖なる月」をあらわすのではなく、上記の9章2節の戦闘行為の「禁止の期間」の四ヶ月間を意味している。この期間には、異教徒は国中を安全に旅することを許されたので、イスラムが勝利を納めているかどうか、神の言葉が成就されているかどうかを自分の目で確かめることができた。

この期間中は敵意をもたないことになっているが、この期間が終ると、公然とイスラムに敵対するものと戦争にすることもできた。それは彼らが敵意を示し、繰り返し誓いを破ったからである。この誓いの最後の条件に対する判断が9章8節〜13節に記されている。不誠実やうらぎりの罪のない異教徒は保護されていた（9章4節7節参照)。

注6　イスラム教徒と戦っているがまだ和平が結ばれていない多神教徒のこと。

注7　イスラム教徒に褒うべき損失を与えたこれらイスラムの敵であっても悔い改め、自らの意志でイスラムを受け入れたならば許されるべきである。実は、異教徒の中には心の底からイスラムが真理であることを確信している人がたくさんいたが、自尊心や迫害されはしまいかという恐れや思惑から、信仰告白を控えていた。この節ではたとえ戦争中であろうとも、イスラムの信仰を告白する人がいれば、その告白は決して偽善や言い逃れとは考えないという事を保障している。

注8　異教徒との戦争はイスラムの信仰を強いるためのものではなかった。戦争中でも異教徒がイスラムの真理を確かめたいと思えば、キャンプや本部へ入ることが許されている。そこでイスラムの真理を説かれ、彼らはイスラムの教えに触れる事ができた。しかし、もし新たに信仰する気にならない場合でも、もとの安全な場所に戻された。このようなすばらしい教えがあるのに、雅量の狭さから真理を逆手にとったり黙殺したりしてイスラムを非難する事は不正の極みであり、すなわちそれは異教徒の反イスラムの宣伝運動なのである。

第二項

7．お前たちが聖殿において締結せし者を除いて、これ等多神教徒がアッラー並びにその使徒と協定を結べようか？　されば、彼等がお前たちに誠実である限り、お前たちも誠実であれ。(注9) げにアッラーは公正なる者を愛し給う。

كيف يكون للمشركين عهد عند الله وعند رسوله إلا الذين عاهدتم عند المسجد الحرام فما استقاموا لكم فاستقيموا لهم إن الله يحب المتقين ⑦

8．どうして彼等と協定など結べようか（注10）？彼等もしお前たちより優位に立たば、如何なる血縁も誓約も顧(かえり)みざるべし。彼等は口先ではお前たちを喜ばせども、その実心では拒絶する。彼等の多くは二心(ふたごころ)の徒輩(やから)なり。

كيف وإن يظهروا عليكم لا يرقبوا فيكم إلا ولا ذمة يرضونكم بأفواههم وتأبى قلوبهم وأكثرهم فاسقون ⑧

9．彼等はわずかな代価でアッラーの神兆(しるし)を売り、人々をアッラーの道から背かしむ。彼等の行為は邪悪なる哉(かな)。

اشتروا بآيات الله ثمنا قليلا فصدوا عن سبيله إنهم ساء ما كانوا يعملون ⑨

10．彼等は血縁も契約も、信者の場合には顧(かえり)みず。(注11) 彼等こそは罪人(つみびと)なり。

لا يرقبون في مؤمن إلا ولا ذمة وأولئك هم المعتدون ⑩

11．されど、もし彼等悔悟し、礼拝を遵守し、喜捨を払うなら、彼等とてお前たちの信仰における兄弟なり。われらは事理を解する人々に神兆(しるし)を明示す。

فإن تابوا وأقاموا الصلاة وآتوا الزكاة فإخوانكم في الدين ونفصل الآيات لقوم يعلمون ⑪

12．されど、誓約の後その誓いを破り、お前たちの宗教を誹謗(ひぼう)するが如きことあらば、そ

وإن نكثوا أيمانهم من بعد عهدهم وطعنوا

注9　　この節では大事な和平を繰り返し破棄したり、イスラム教徒を裏切って攻撃したりする非イスラム教徒に対してだけ戦うことが許されていると述べている。更に、和平を結んでいる人々に対して、イスラム教徒は、彼らが和平をきちんと誠実に守っているかどうかを見守らなければいけないと述べている。９章４節にも同様のことが書かれている。クルアーンには、繰り返し和平に誠実であれと熱心に説かれている。

注10　　イスラムに対して一度ならず敵対した不信心者や、和平を締結することに一際関心を示さない不誠実な裏切り者に対してにのみ、戦争を行うことを命じる、とこの節に詳しく記されている。

注11　　８、９、10節ではなぜイスラム教徒がこういう偶像崇拝者に対して戦争を行うことを命じられるかという理由が記されている（９章５節参照）。その理由は、(1)彼らは不誠実な裏切者であり、彼らはイスラム教徒と友人であると公言しながら、すぐ中傷する機会をねらい、約束を破り、イスラム教徒の信頼を裏切ってきた。(2)彼らは親族関係の絆さえ無視し、親族の者がイスラムを信じただけで殺してしまった（９章８節参照）。(3)彼らが戦争をする目的はイスラムを信仰させないようにするためであった（９章９節参照）。(4)彼らが最初にイスラム教徒を攻撃したのである（９章13節参照）。

の時は不信心者の領袖らと戦え（注12）——げに、彼等は自らの誓いを尊重せず——さすれば彼等の方から止めるやも知らず。

فِيْ دِيْنِكُمْ فَقَاتِلُوْٓا اَئِمَّةَ الْكُفْرِ اِنَّهُمْ لَآ اَيْمَانَ لَهُمْ لَعَلَّهُمْ يَنْتَهُوْنَ ⑫

13．お前たち、己れの誓約を破り、使徒を放逐せんと企て、（注13）最初にお前たちを攻撃せし者ども（注14）と戦わざる気か？　お前たち彼等を恐るるか？　否、お前たち信者ならば、恐るるに最も相応しい御方はアッラーなるぞ。

اَلَا تُقَاتِلُوْنَ قَوْمًا نَّكَثُوْٓا اَيْمَانَهُمْ وَهَمُّوْا بِاِخْرَاجِ الرَّسُوْلِ وَهُمْ بَدَءُوْكُمْ اَوَّلَ مَرَّةٍ اَتَخْشَوْنَهُمْ فَاللّٰهُ اَحَقُّ اَنْ تَخْشَوْهُ اِنْ كُنْتُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ⑬

14．彼等と戦え。じからばアッラーはお前たちの手で彼等を懲らしめ、彼等を辱しめ、お前たちを助けて彼等に勝たしめ、信ずる人々の心を和らげ、

قَاتِلُوْهُمْ يُعَذِّبْهُمُ اللّٰهُ بِاَيْدِيْكُمْ وَيُخْزِهِمْ وَيَنْصُرْكُمْ عَلَيْهِمْ وَيَشْفِ صُدُوْرَ قَوْمٍ مُّؤْمِنِيْنَ ⑭

15．且つ心中の憤りを運び去らん。アッラーは御心にかなう者は恵みを垂れ給う。アッラーはすべてを深知し、賢哲にまします。

وَيُذْهِبْ غَيْظَ قُلُوْبِهِمْ وَيَتُوْبُ اللّٰهُ عَلٰى مَنْ يَّشَآءُ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ⑮

16．お前たちのうちアッラーのために奮闘努力する者、並びにアッラーとその使徒と信者の外は何者も親しい友とせざる者を、（注15）アッラーが知らざるままに放置するとでも思うのか？　アッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

اَمْ حَسِبْتُمْ اَنْ تُتْرَكُوْا وَلَمَّا يَعْلَمِ اللّٰهُ الَّذِيْنَ جٰهَدُوْا مِنْكُمْ وَلَمْ يَتَّخِذُوْا مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ وَلَا رَسُوْلِهٖ وَلَا الْمُؤْمِنِيْنَ وَلِيْجَةً وَاللّٰهُ خَبِيْرٌۢ بِمَا تَعْمَلُوْنَ ⑯

第三項

17．アッラーの聖殿を保守管理するは、自ら不信を立証する多神教徒に非ず。（注16）彼

مَا كَانَ لِلْمُشْرِكِيْنَ اَنْ يَّعْمُرُوْا مَسٰجِدَ اللّٰهِ شٰهِدِيْنَ

注12　‘不信仰の指導者達’という言葉はここでは少数の個人の指導者を指すのではなく、戦うことを命じたすべての人々を指している。彼らは最初にイスラム教徒と衝突したので、他の者達に勇気を与える結果となった為、‘指導者’と呼ばれるようになった。また、彼らのイスラムに対する敵意は根強く、執念深いものであったのでまるで、悪魔そのものであったといえる。

注13　聖なる預言者がタブークへ遠征したとき、メジナ周辺の部族はアラビアのさまざまな部族を煽動して彼を滅ぼそうとたくらんだ。

注14　これらの言葉は、メッカ人の異教徒を指すのではない。これはメジナおよびその周辺に住む異教徒を指している。同時の状況を考察するとイスラムは被害者であってこそあれ、加害者であるというのは見当違いもはなはだしい。

注15　イスラム教徒の歩むべき道はまだ続き、もっと憂うべき危機に直面するだろうとこの節で暗示されている。

注16　この節は偶像崇拝者の巡礼に関するものであり、下記の9章28節にある告知の序文にあたっている。

等の所業は虚しく、業火のうちに永久に住まん。

عَلَىٰٓ أَنفُسِهِم بِٱلْكُفْرِ ۚ أُو۟لَٰٓئِكَ حَبِطَتْ أَعْمَٰلُهُمْ وَفِى ٱلنَّارِ هُمْ خَٰلِدُونَ ﴿١٧﴾

18. アッラーを信じ、末日を信じ，礼拝を遵守し、喜捨を払い、アッラー以外には何人も恐れぬ者、(注 17) そういう者のみがアッラーの聖殿を管理すべし。彼等は正しく導かれん。

إِنَّمَا يَعْمُرُ مَسَٰجِدَ ٱللَّهِ مَنْ ءَامَنَ بِٱللَّهِ وَٱلْيَوْمِ ٱلْءَاخِرِ وَأَقَامَ ٱلصَّلَوٰةَ وَءَاتَى ٱلزَّكَوٰةَ وَلَمْ يَخْشَ إِلَّا ٱللَّهَ ۖ فَعَسَىٰٓ أُو۟لَٰٓئِكَ أَن يَكُونُوا۟ مِنَ ٱلْمُهْتَدِينَ ﴿١٨﴾

19. お前たちは、巡礼者に水を与え、聖殿を管理する者を、アッラーと末日を信じ、アッラーの道のために奮闘努力する者と同じなりと考えるか？　アッラーの見地からすれば、彼等は到底比較にならず。(注 18) アッラーは不正なる人々を導き給わぬ。

أَجَعَلْتُمْ سِقَايَةَ ٱلْحَآجِّ وَعِمَارَةَ ٱلْمَسْجِدِ ٱلْحَرَامِ كَمَنْ ءَامَنَ بِٱللَّهِ وَٱلْيَوْمِ ٱلْءَاخِرِ وَجَٰهَدَ فِى سَبِيلِ ٱللَّهِ ۚ لَا يَسْتَوُۥنَ عِندَ ٱللَّهِ ۗ وَٱللَّهُ لَا يَهْدِى ٱلْقَوْمَ ٱلظَّٰلِمِينَ ﴿١٩﴾

20. 信仰を受け容れ、神のために家郷を棄て、財産と生命をアッラーのために献げて奮闘努力する者は、アッラーの見地において最上位たるべし。彼等こそは勝利を得ん。

ٱلَّذِينَ ءَامَنُوا۟ وَهَاجَرُوا۟ وَجَٰهَدُوا۟ فِى سَبِيلِ ٱللَّهِ بِأَمْوَٰلِهِمْ وَأَنفُسِهِمْ أَعْظَمُ دَرَجَةً عِندَ ٱللَّهِ ۚ وَأُو۟لَٰٓئِكَ هُمُ ٱلْفَآئِزُونَ ﴿٢٠﴾

21. 主は彼等に慈悲と喜悦の朗報を賜い、また永遠の至福に満ちたる楽園も彼等のものなるべし。

يُبَشِّرُهُمْ رَبُّهُم بِرَحْمَةٍ مِّنْهُ وَرِضْوَٰنٍ وَجَنَّٰتٍ لَّهُمْ فِيهَا نَعِيمٌ مُّقِيمٌ ﴿٢١﴾

22. 彼等は永遠にそこに住まん。げに、アッラーの御許には大なる報奨あり。

خَٰلِدِينَ فِيهَآ أَبَدًا ۚ إِنَّ ٱللَّهَ عِندَهُۥٓ أَجْرٌ عَظِيمٌ ﴿٢٢﴾

これ以後アリーがヘジュラ暦 9 年の大巡礼の時に告知したように、偶像崇拝者は誰もカーバに近づくことが許されなかった。その禁止の理由がこの節に述べられている。カーバは唯一の神を礼拝するために献堂された寺院であり、偶像崇拝者達は唯一の神の敵であることを宣言し、神を非難していると自ら告白しているのであるから、彼等はまるで関係がないのである。

注 17　聖なるモスクまたはカーバは世界中のモスクを代表するイスラムの中心的モスクである為、アッラーのモスクという語句は 19 節の聖なるモスクを指している。

注 18　カーバを外面的に形の上から礼拝することは、それ自体価値あることである。しかし真のイスラム教徒のみが行い得る精神な礼拝と比べるべきもない事である。イスラムは儀式の形式よりもそのもととなる精神なものを重んじるのである。そして信徒の生活はカーバよりもっと神聖である、と聖なる預言者は述べたと記されている (MAJAH)。

23．汝等信ずる者よ、もしお前たちの父や兄弟が信仰よりも不信を選ばば、友とするなかれ。(注 19) お前たちのうち彼等を友とする者あらば、それこそ不義の徒輩なるぞ。

يا أيها الذين آمنوا لا تتخذوا آباءكم وإخوانكم أولياء إن استحبوا الكفر على الإيمان ومن يتولهم منكم فأولئك هم الظالمون ﴿٢٣﴾

24．云え、「もしお前たちの親、子供、兄弟、妻、親戚、それからお前たちが手に入れた財産や不況を恐れる商売、意にかなった住居などが、アッラーとその使徒並びにアッラーの道のために (注 20) 奮闘努力するよりお前たちにとって大事ならば、よろしい、アッラーの裁断が降るまで待つがよい。アッラーは不従順な人は導き給わぬ」と。

قل إن كان آباؤكم وأبناؤكم وإخوانكم وأزواجكم وعشيرتكم وأموال اقترفتموها وتجارة تخشون كسادها ومساكن ترضونها أحب إليكم من الله ورسوله وجهاد في سبيله فتربصوا حتى يأتي الله بأمره والله لا يهدي القوم الفاسقين ﴿٢٤﴾

第四項

25．アッラーはこれまでに幾多の戦場でお前たちを援助せり、フナインの合戦のときも然り。あの時お前たちは多勢をたのんで得意になりたれど、それはお前たちになんの役にも立たず、却って広大な大地がお前たち全体のせいで狭くなり、遂にお前たちは退却せり。

لقد نصركم الله في مواطن كثيرة ويوم حنين إذ أعجبتكم كثرتكم فلم تغن عنكم شيئا وضاقت عليكم الأرض بما رحبت ثم وليتم مدبرين ﴿٢٥﴾

26．そこでアッラーは、彼の使徒と信者等の上に沈着さを降し、またお前たちに見えざりし軍勢を遣わして不信心者どもを懲らしめたり。これこそは不信心者どもの応報なり。

ثم أنزل الله سكينته على رسوله وعلى المؤمنين وأنزل جنودا لم تروها وعذب الذين كفروا وذلك جزاء الكافرين ﴿٢٦﴾

27．この後アッラーは意にかなう者には憐れみに転ぜられ給う。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

ثم يتوب الله من بعد ذلك على من يشاء والله غفور رحيم ﴿٢٧﴾

28．汝等信ずる者よ、多神教徒は真に不浄なり。故に本年以降彼等が聖殿に近づくことを禁

يا أيها الذين آمنوا إنما المشركون نجس فلا يقربوا

注 19　この節は、イスラムに正面から敵対し激しく戦い、イスラムを皆殺しにしようとする不信徒たちについて書かれている。

注 20　親類や友人との愛の絆やその他世間体、財産、商売、富などはより貴い絆、より高潔な理由のために犠牲にすべきと判断したときには、そうされてしかるべきである。

ず。お前たち困窮が心配なら、(注 21) アッラーの意にかなえば、その賜物によってお前たちを富まさん。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

الْمَسْجِدَ الْحَرَامَ بَعْدَ عَامِهِمْ هَٰذَا ۚ وَإِنْ خِفْتُمْ عَيْلَةً فَسَوْفَ يُغْنِيكُمُ اللَّهُ مِن فَضْلِهِ إِن شَاءَ ۚ إِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ٢٨

29. 経典の民でありながら、アッラーも末日も信ぜず、アッラーとその使徒が禁じたるものを守らず、剰え(あまつさえ)真理(まこと)の宗教を奉ぜざる者に対して、彼等が屈服して、自ら進んで貢税(こうぜい)を差し出すまで戦え。(注 22)

قَاتِلُوا الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَلَا بِالْيَوْمِ الْآخِرِ وَلَا يُحَرِّمُونَ مَا حَرَّمَ اللَّهُ وَرَسُولُهُ وَلَا يَدِينُونَ دِينَ الْحَقِّ مِنَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ حَتَّىٰ يُعْطُوا الْجِزْيَةَ عَن يَدٍ وَهُمْ صَاغِرُونَ ٢٩

第五項

30. ユダヤ教徒はエズラを (注 23) アッラーの子なりと云い、キリスト教徒はメシアをアッラーの子なりと云う。これ彼等の口より出る言葉なり。彼等はそれ以前の不信心者どもの言葉を真似るに過ぎず。彼等にアッラーの呪いあれ！　なんと迷誤せるものどもよ！

وَقَالَتِ الْيَهُودُ عُزَيْرٌ ابْنُ اللَّهِ وَقَالَتِ النَّصَارَى الْمَسِيحُ ابْنُ اللَّهِ ۖ ذَٰلِكَ قَوْلُهُم بِأَفْوَاهِهِمْ ۖ يُضَاهِئُونَ قَوْلَ الَّذِينَ كَفَرُوا مِن قَبْلُ ۚ قَاتَلَهُمُ اللَّهُ ۚ أَنَّىٰ يُؤْفَكُونَ ٣٠

31. 彼等はアッラーの他に、法学者や修道士を己れの主となせり。またマリアの子メシアも然(しか)り。彼等はただ唯一なる神を崇拝することのみを命ぜられたり。彼の外に神なし。

اتَّخَذُوا أَحْبَارَهُمْ وَرُهْبَانَهُمْ أَرْبَابًا مِّن دُونِ اللَّهِ وَالْمَسِيحَ ابْنَ مَرْيَمَ وَمَا أُمِرُوا إِلَّا لِيَعْبُدُوا

注 21　メッカは商業の一大中心地であったので、巡礼の季節になると大変賑わった。だからメッカ人はとても経済的に潤っており、この禁令は経済的豊かさがかえって悪影響を及ぼすのではないかと懸念して出されたようである。

注 22　この節はアラビアに住んでいる契約した人々に関するもので、彼たちは、偶像崇拝者のようにあからさまにイスラムに敵対し、イスラムを滅ぼそうと企て、策略をめぐらしてきた。そのため、イスラム教徒は彼らが忠実で和やかな僕とならないかぎり、戦わざるを得なかったのである。ジズヤとはこれら非イスラム教徒が払う税金のことであり、彼らは税金を払う事で自由に安全にイスラム教国の臣民として生活できるのである。非イスラム教徒に課せられた税ジズヤよりもっと重い税ザカートが、イスラム教徒に課せられていたことは特記すべきことである。その上、非イスラム教徒には免除されていた徴兵の義務もイスラム教徒には課せられていた。このように非イスラム教徒のほうが、安い税金を払い、徴兵義務もなく、この意味では楽な暮らしをしていたのである。「屈服」という語は彼らが政治的には下位の立場にあることを表わしており、その他はイスラム教徒と同等の社会的権利を有していたのである。アラビアの偶像崇拝者やその近隣に住むユダ人、キリスト教徒はイスラムの宿敵であった。

注 23　ウザイルまたはエズラは紀元前五世紀の人で、彼はセライヤという高僧の子孫で僧侶階級に属し、僧エズラとして知られていた。

彼に他神を配するとはなんと畏れ多いことか！

إِلَٰهًا وَاحِدًا ۖ لَّا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ ۚ سُبْحَانَهُ عَمَّا يُشْرِكُونَ ﴿٣١﴾

32．彼等はその口によってアッラーの光を消さんと欲す。されど不信心者どもが之を嫌うとも、アッラーはその光を完璧ならしめるのみ。

يُرِيدُونَ أَن يُطْفِئُوا نُورَ اللَّهِ بِأَفْوَاهِهِمْ وَيَأْبَى اللَّهُ إِلَّا أَن يُتِمَّ نُورَهُ وَلَوْ كَرِهَ الْكَافِرُونَ ﴿٣٢﴾

33．彼こそは嚮導と真理の宗教とをもたせて使徒を遣わし給いし御方なり。たとい多信教徒が嫌うとも、彼は之を以って万の宗教より優れるものとなす。

هُوَ الَّذِي أَرْسَلَ رَسُولَهُ بِالْهُدَىٰ وَدِينِ الْحَقِّ لِيُظْهِرَهُ عَلَى الدِّينِ كُلِّهِ وَلَوْ كَرِهَ الْمُشْرِكُونَ ﴿٣٣﴾

34．汝等信ずる者よ、げに、聖職者や、修道士の多くは、偽って人々の財産を貪り、アッラーの道より人々を背かしむ。また金銀を貯め込み、之をアッラーの道のために使おうとせぬ徒輩――彼等に痛刑あるを知らせよ。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِنَّ كَثِيرًا مِّنَ الْأَحْبَارِ وَالرُّهْبَانِ لَيَأْكُلُونَ أَمْوَالَ النَّاسِ بِالْبَاطِلِ وَيَصُدُّونَ عَن سَبِيلِ اللَّهِ ۗ وَالَّذِينَ يَكْنِزُونَ الذَّهَبَ وَالْفِضَّةَ وَلَا يُنفِقُونَهَا فِي سَبِيلِ اللَّهِ فَبَشِّرْهُم بِعَذَابٍ أَلِيمٍ ﴿٣٤﴾

35．その日、地獄の火の中で財宝は灼熱せられ、それが彼等の額や脇腹や背中に焼印を押し、(注 24)「これはお前たちが己れのために貯めたるものなり。さらば己れの貯めたるものを味わえ」と云われん。

يَوْمَ يُحْمَىٰ عَلَيْهَا فِي نَارِ جَهَنَّمَ فَتُكْوَىٰ بِهَا جِبَاهُهُمْ وَجُنُوبُهُمْ وَظُهُورُهُمْ ۖ هَٰذَا مَا كَنَزْتُمْ لِأَنفُسِكُمْ فَذُوقُوا مَا كُنتُمْ تَكْنِزُونَ ﴿٣٥﴾

36．アッラーの布告によれば、アッラーが天地を創造せし以来、月の数は十二なり。(注 25) そのうち四ヵ月が神聖月なり。それが正しい信経なり。さればこの期間中はお前たち互に害し合うなかれ。だが多神教徒が皆一緒になってお前たちと戦う如く、お前たちも皆一緒になって彼等と戦え。而して、アッラーは主を畏れ敬う者と偕にあることを知れ。

إِنَّ عِدَّةَ الشُّهُورِ عِندَ اللَّهِ اثْنَا عَشَرَ شَهْرًا فِي كِتَابِ اللَّهِ يَوْمَ خَلَقَ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضَ مِنْهَا أَرْبَعَةٌ حُرُمٌ ۚ ذَٰلِكَ الدِّينُ الْقَيِّمُ ۚ فَلَا تَظْلِمُوا فِيهِنَّ أَنفُسَكُمْ ۚ وَقَاتِلُوا الْمُشْرِكِينَ كَافَّةً كَمَا يُقَاتِلُونَكُمْ كَافَّةً ۚ وَاعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ مَعَ الْمُتَّقِينَ ﴿٣٦﴾

注 24　これは比喩的な表現である。ひとりの金持ちが強欲と高慢から貧しい人々を助けようとしなかった時、彼の額は曇り、そして目をそむけ、ついには軽蔑の色をあらわし、助けを求める男に背を向けて行ってしまった。額、両脇、背がその場の状況や心の動きを印象的に物語っている。

注 25　太陰暦でも太陽暦でも十二ヶ月である。

37．神聖月の延期はただ不信を増すだけなり。(注26) 信ぜざる人々はこれによって邪道に導かれる。彼等或る年はこれを犯し、次の年にはこれを守り、アッラーが神聖と定め給うた月数に符合させ、かくしてアッラーが禁じ給うたことを合法となす。彼等その己が悪行を自らは正しいと思う。されどアッラーは信ぜざるものどもを導き給わぬ。

إِنَّمَا النَّسِيٓءُ زِيَادَةٌ فِي الْكُفْرِ يُضَلُّ بِهِ الَّذِينَ كَفَرُوا
يُحِلُّونَهُ عَامًا وَّيُحَرِّمُونَهُ عَامًا لِّيُوَاطِـُٔوا عِدَّةَ مَا
حَرَّمَ اللّٰهُ فَيُحِلُّوا مَا حَرَّمَ اللّٰهُ ۚ زُيِّنَ لَهُمْ سُوٓءُ
أَعْمَالِهِمْ ۚ وَاللّٰهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الْكٰفِرِينَ ﴿٣٧﴾

第六項

38．汝等信ずる者よ、アッラーの道のために出陣せよと云われると、地べたに重く身を沈めるとは、一体如何なることぞ？ (注27) お前たち来世よりも現世に満足するか？ されど、来世に較ぶれば現世の享楽は無きに等しい。

يٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ اٰمَنُوا مَا لَكُمْ إِذَا قِيلَ لَكُمُ انْفِرُوا
فِي سَبِيلِ اللّٰهِ اثَّاقَلْتُمْ إِلَى الْأَرْضِ ۚ أَرَضِيتُمْ بِالْحَيٰوةِ
الدُّنْيَا مِنَ الْاٰخِرَةِ ۚ فَمَا مَتَاعُ الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا فِي
الْاٰخِرَةِ إِلَّا قَلِيلٌ ﴿٣٨﴾

39．もしお前たちが出陣せぬのなら、アッラーは痛刑をもってお前たちを懲らしめ、お前たちの代りに他の民を選ばん。されどお前たちアッラーを害する能(あた)わず。アッラーは万事(よろづのこと)に全能なり。

إِلَّا تَنْفِرُوا يُعَذِّبْكُمْ عَذَابًا أَلِيمًا ۙ وَّيَسْتَبْدِلْ قَوْمًا
غَيْرَكُمْ وَلَا تَضُرُّوهُ شَيْـًٔا ۗ وَاللّٰهُ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٣٩﴾

40．たといお前たち彼を助けずとも、彼が不信心者どもにたった一人の同僚とともに追い詰められし時、アッラー彼を助けしことを知れ。その時彼等は二人で洞窟にひそみ、彼は同僚に向って云えり、「悲しむなかれ、アッラーは我等と偕(とも)にあり」と。すると、アッラーは彼に安心を降(くだ)し賜い、お前たちには見えざる軍勢を以て彼を強加し、信ぜざるものどもの言葉を卑しめ、而(しか)してアッラーの言葉こそのみ至高となす。アッラーは偉大にして、賢哲にまします。(注28)

إِلَّا تَنْصُرُوهُ فَقَدْ نَصَرَهُ اللّٰهُ إِذْ أَخْرَجَهُ الَّذِينَ كَفَرُوا
ثَانِيَ اثْنَيْنِ إِذْ هُمَا فِي الْغَارِ إِذْ يَقُولُ لِصَاحِبِهِ
لَا تَحْزَنْ إِنَّ اللّٰهَ مَعَنَا ۚ فَأَنْزَلَ اللّٰهُ سَكِينَتَهُ عَلَيْهِ
وَأَيَّدَهُ بِجُنُودٍ لَّمْ تَرَوْهَا وَجَعَلَ كَلِمَةَ الَّذِينَ
كَفَرُوا السُّفْلٰى ۗ وَكَلِمَةُ اللّٰهِ هِيَ الْعُلْيَا ۗ وَاللّٰهُ عَزِيزٌ
حَكِيمٌ ﴿٤٠﴾

注26　この節ではアラブの長年の習慣に言及しており、ズル・カータ、ズル・ヒッジャー・ムハラムの聖なる三ヶ月間は肉食を断つには長過ぎる為で時々普通の月と入れ替えることがあった。

注27　これはタブークへの遠征の事についてであり、この町はメジナとダマスカスのちょうど中間にある。ローマ人として一般に知られている東ローマ帝国のギリシャ人達がシリヤ国境に集まっているという報せが届き勇猛な軍隊、その数およそ三万、ヒジラ九年に聖なる預言者はメジナを後にした。大きな苦難の末、イスラム教徒の軍隊は長くつらい行進を続けた為、後にこの遠征は苦難の行軍と言われた。

41．或いは軽く或いは重く備えて出陣せよ。お前たちの財産や生命をアッラーのために献げて奮闘努力せよ。もしお前たち之を解さば、お前たちのためにはそれが最善なり。

انْفِرُوا خِفَافًا وَثِقَالًا وَجَاهِدُوا بِأَمْوَالِكُمْ وَأَنْفُسِكُمْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ ذَٰلِكُمْ خَيْرٌ لَكُمْ إِنْ كُنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٤١﴾

42．利益眼前にあり、しかも旅程短かければ、彼等もまた汝に従えり。されど苦しい旅は彼等には余りにも遠しと映ず。しかも彼等はアッラーにかけて誓って云う､「出来得たならば、我等も諸君とともに出陣せしものを」と。彼等は自らを滅ぼす者なり。アッラーは彼等が嘘つきなるを知る。

لَوْ كَانَ عَرَضًا قَرِيبًا وَسَفَرًا قَاصِدًا لَاتَّبَعُوكَ وَلَٰكِنْ بَعُدَتْ عَلَيْهِمُ الشُّقَّةُ وَسَيَحْلِفُونَ بِاللَّهِ لَوِ اسْتَطَعْنَا لَخَرَجْنَا مَعَكُمْ يُهْلِكُونَ أَنْفُسَهُمْ وَاللَّهُ يَعْلَمُ إِنَّهُمْ لَكَاذِبُونَ ﴿٤٢﴾

第七項

43．アッラーは汝の心配事を取り除き給う。何故に汝は、真実を告げるは誰で、嘘をつくは誰かを知る前に彼等に背後に留まることを許したるか？

عَفَا اللَّهُ عَنْكَ لِمَ أَذِنْتَ لَهُمْ حَتَّىٰ يَتَبَيَّنَ لَكَ الَّذِينَ صَدَقُوا وَتَعْلَمَ الْكَاذِبِينَ ﴿٤٣﴾

44．アッラーと末日を信ずる者は、財産と生命を献げて奮戦することを免除されんとして汝に許しを請いはせぬ。アッラーは主に対する義務を果たす者を深知し給う。

لَا يَسْتَأْذِنُكَ الَّذِينَ يُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ أَنْ يُجَاهِدُوا بِأَمْوَالِهِمْ وَأَنْفُسِهِمْ وَاللَّهُ عَلِيمٌ بِالْمُتَّقِينَ ﴿٤٤﴾

45．アッラーと末日を信ぜざる者のみ汝に免除の許しを請わん。彼等の心は疑惑に充ち、疑惑の中に揺れ動く。

إِنَّمَا يَسْتَأْذِنُكَ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ وَارْتَابَتْ قُلُوبُهُمْ فَهُمْ فِي رَيْبِهِمْ يَتَرَدَّدُونَ ﴿٤٥﴾

46．もし彼等真に出陣する気持ありたれば、そのための準備をなせし筈。されどアッラーは彼等の出陣に反対せり。故に彼は、彼等を背後に留め置き､「汝等居残り者と一緒に家に居残れ」と仰せられたり。

وَلَوْ أَرَادُوا الْخُرُوجَ لَأَعَدُّوا لَهُ عُدَّةً وَلَٰكِنْ كَرِهَ اللَّهُ انْبِعَاثَهُمْ فَثَبَّطَهُمْ وَقِيلَ اقْعُدُوا مَعَ الْقَاعِدِينَ ﴿٤٦﴾

注28　この節では聖なる預言者はアブー・バクルを伴ってメッカからメジナへ移動したことを述べている。その時聖なる預言者はソールという洞窟に身を寄せたのであるが、この節ではアブー・バクルの極めて霊的に高い状態を強調しており、彼は神と共におり、神と恐れを分かちあう者達“二人の内の一人”と説明されている。記録に依れば、洞窟の中でアブー・バクルが急に泣き出し、聖なる預言者がなぜ泣くのかと聞くと、アブー・バクルは「私は自分の命が惜しくて泣いているのではありません。ああ、神の預言者であられるお方よ、私が死んでもそれは単に私個人の問題です。でももしあなたがお亡くなりになったら……それはイスラムそして、すべてのイスラム社会滅亡を意味します。」と言ったと伝えられている。

47．もし彼等お前たちとともに出陣せば、いたずらに難儀を増すばかり。お前たちの間をあちこち走り廻って騒動を惹き起こそうと謀らん。さすればお前たちの中には彼等に耳を傾ける者も出てこよう。されどアッラーは不義なす徒輩を深知し給う。

لَوْ خَرَجُوا فِيكُم مَّا زَادُوكُمْ إِلَّا خَبَالًا وَلَأَوْضَعُوا
خِلَالَكُمْ يَبْغُونَكُمُ الْفِتْنَةَ وَفِيكُمْ سَمَّاعُونَ لَهُمْ ۗ
وَاللَّهُ عَلِيمٌ بِالظَّالِمِينَ ﴿٤٧﴾

48．彼等は以前にも騒動を起し、汝を陥れんと企みしが、真理が到来してアッラーの御意志が打ち勝りたりき、もつとも彼等それを好まざりしが。

لَقَدِ ابْتَغَوُا الْفِتْنَةَ مِن قَبْلُ وَقَلَّبُوا لَكَ الْأُمُورَ
حَتَّىٰ جَاءَ الْحَقُّ وَظَهَرَ أَمْرُ اللَّهِ وَهُمْ كَارِهُونَ ﴿٤٨﴾

49．彼等の中には「背後に留まることを許せ、我を試練に遭わしむるな」と云う者あり。彼等はすでに試練に陥にけり。地獄は不信心者を包囲せん。

وَمِنْهُم مَّن يَقُولُ ائْذَن لِّي وَلَا تَفْتِنِّي ۚ أَلَا فِي
الْفِتْنَةِ سَقَطُوا ۗ وَإِنَّ جَهَنَّمَ لَمُحِيطَةٌ بِالْكَافِرِينَ ﴿٤٩﴾

50．もし汝福を得ればそれは彼等を悩まし、災難降りかかれば、「我等は以前より警戒せり」と彼等は云う。彼等歓喜して背き去る。

إِن تُصِبْكَ حَسَنَةٌ تَسُؤْهُمْ ۖ وَإِن تُصِبْكَ مُصِيبَةٌ
يَقُولُوا قَدْ أَخَذْنَا أَمْرَنَا مِن قَبْلُ وَيَتَوَلَّوا وَّهُمْ
فَرِحُونَ ﴿٥٠﴾

51．云え、「アッラーが我等に定めたることの外は、何事も我等に降りかかることなかるべし。アッラーは我等の守護者なり。されば信者たるものその信頼をアッラーに寄せるべきなり」と。

قُل لَّن يُصِيبَنَا إِلَّا مَا كَتَبَ اللَّهُ لَنَا هُوَ مَوْلَانَا ۚ
وَعَلَى اللَّهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُونَ ﴿٥١﴾

52．云え、「お前たちは我等に、二つの光栄の一つ以外に何事も期待する能わず。我等は、アッラー御自ら又は我等の手を通じてお前たちを懲らしめんことを期待す。されば待て、我等もまたお前たちとともに待たん」と。

قُلْ هَلْ تَرَبَّصُونَ بِنَا إِلَّا إِحْدَى الْحُسْنَيَيْنِ ۖ
وَنَحْنُ نَتَرَبَّصُ بِكُمْ أَن يُصِيبَكُمُ اللَّهُ بِعَذَابٍ
مِّنْ عِندِهِ أَوْ بِأَيْدِينَا ۖ فَتَرَبَّصُوا إِنَّا مَعَكُم
مُّتَرَبِّصُونَ ﴿٥٢﴾

53．云え、「たとい進んで寄付しようが、出ししぶろうが、お前たちからのものは御嘉納せられざるべし。お前たちは実に不従順な人間なり」と。

قُلْ أَنفِقُوا طَوْعًا أَوْ كَرْهًا لَّن يُتَقَبَّلَ مِنكُمْ ۖ إِنَّكُمْ
كُنتُمْ قَوْمًا فَاسِقِينَ ﴿٥٣﴾

54．彼等の寄付が御嘉納されざるは、偏に彼等

وَمَا مَنَعَهُمْ أَن تُقْبَلَ مِنْهُمْ نَفَقَاتُهُمْ إِلَّا أَنَّهُمْ

كَفَرُوْا بِاللّٰهِ وَبِرَسُوْلِهٖ وَلَا يَأْتُوْنَ الصَّلٰوةَ اِلَّا وَهُمْ
كُسَالٰى وَلَا يُنْفِقُوْنَ اِلَّا وَهُمْ كٰرِهُوْنَ ﴿٥٤﴾

がアッラー並びにその使徒を信ぜざるが故なり。また、彼等は礼拝を怠り、しぶしぶ寄付するが故なり。

فَلَا تُعْجِبْكَ اَمْوَالُهُمْ وَلَآ اَوْلَادُهُمْ ؕ اِنَّمَا يُرِيْدُ
اللّٰهُ لِيُعَذِّبَهُمْ بِهَا فِى الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا وَتَزْهَقَ
اَنْفُسُهُمْ وَهُمْ كٰفِرُوْنَ ﴿٥٥﴾

55．されば彼等の富や子女（こども）を羨望するなかれ。アッラーはそれによって現世で彼等を罰し、また不信心者として死なしめんと意図するのみ。

وَيَحْلِفُوْنَ بِاللّٰهِ اِنَّهُمْ لَمِنْكُمْ ؕ وَمَا هُمْ مِّنْكُمْ وَ
لٰكِنَّهُمْ قَوْمٌ يَّفْرَقُوْنَ ﴿٥٦﴾

56．彼等アッラーの御名にかけてお前たちの味方なりと誓いしも、味方に非ず、ただ臆病者なり。

لَوْ يَجِدُوْنَ مَلْجَاً اَوْ مَغٰرٰتٍ اَوْ مُدَّخَلًا لَّوَلَّوْا
اِلَيْهِ وَهُمْ يَجْمَحُوْنَ ﴿٥٧﴾

57．もし彼等避難所や洞窟、または潜り込むべき穴ですらあるを知れば、そこへ向って一目散に遁（に）げ去らん。

وَمِنْهُمْ مَّنْ يَّلْمِزُكَ فِى الصَّدَقٰتِ ۚ فَاِنْ اُعْطُوْا
مِنْهَا رَضُوْا وَاِنْ لَّمْ يُعْطَوْا مِنْهَآ اِذَا هُمْ يَسْخَطُوْنَ ﴿٥٨﴾

58．彼等の中には喜捨のことに関して汝を非難する者あり。それを与えられたる者は喜び、与えられざる者は、見よ、彼等は憤る。

وَلَوْ اَنَّهُمْ رَضُوْا مَآ اٰتٰهُمُ اللّٰهُ وَرَسُوْلُهٗ ۙ وَقَالُوْا
حَسْبُنَا اللّٰهُ سَيُؤْتِيْنَا اللّٰهُ مِنْ فَضْلِهٖ وَرَسُوْلُهٗٓ ۙ
اِنَّآ اِلَى اللّٰهِ رٰغِبُوْنَ ﴿٥٩﴾ ع

59．彼等もしアッラー並びにその使徒が与えしものに満足して、「我等はアッラーさえましませば十分なり。アッラーはその恵みを我等に垂れん、同様に使徒もまた。我等はアッラーに嘆願し奉る」と云いたれば、彼等のためにはよかりしものを。

第八項

اِنَّمَا الصَّدَقٰتُ لِلْفُقَرَآءِ وَالْمَسٰكِيْنِ وَالْعٰمِلِيْنَ
عَلَيْهَا وَالْمُؤَلَّفَةِ قُلُوْبُهُمْ وَفِى الرِّقَابِ وَالْغٰرِمِيْنَ
وَفِىْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَابْنِ السَّبِيْلِ ؕ فَرِيْضَةً مِّنَ اللّٰهِ ؕ
وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ﴿٦٠﴾

60．喜捨の用途は、（注29）貧者に困窮者、喜捨の業務に携わる人、心を和らげる人々、奴隷の身の代金、負債者の救済、アッラーの道、並びに旅人のためにあり——これアッラーの掟なり。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

注29　この節ではザカートが施される人と物について規定している。(1)フカラー（貧しさや病で打ちひしがれた人々の意。）(2)マサーキーン（働く能力があるのにその法を知らない人々の意）(3)ザカートを集めたり、教えたり、その他これに類する仕事をする人々。(4)新しく改宗した、お金に困っている人々。(5)奴隷、捕虜、その他自由になるために保証金を要求された人々。(6)借金を払えなくなった人々や事業に失敗した人々。(7)立派な理由がある場合。(8)旅の途中でお金がなくなった人、知識を求めて旅をしている人、社会的関係を広げるために旅している人。

61. 彼等の中には預言者を怒らせんとて「彼は耳に過ぎず」と云う者あり。云え「お前たちのためになる良いことを聴く耳なり。(注30) 彼はアッラーを信じ、信者の信義を信じ、且つ信者への恩寵(めぐみ)を信ずる者なり」と。アッラーの使徒を怒らせる者はいずれ痛罰を受けん。

وَمِنْهُمُ الَّذِينَ يُؤْذُونَ النَّبِيَّ وَيَقُولُونَ هُوَ أُذُنٌ قُلْ أُذُنُ خَيْرٍ لَّكُمْ يُؤْمِنُ بِاللَّهِ وَيُؤْمِنُ لِلْمُؤْمِنِينَ وَرَحْمَةٌ لِّلَّذِينَ آمَنُوا مِنكُمْ وَالَّذِينَ يُؤْذُونَ رَسُولَ اللَّهِ لَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٦١﴾

62. 彼等はお前たちを喜ばしめんとしてアッラーの御名にかけて宣誓す。されど、もし彼等信者ならば、アッラー並びにその使徒を喜ばしむることこそ正しけれ。

يَحْلِفُونَ بِاللَّهِ لَكُمْ لِيُرْضُوكُمْ وَاللَّهُ وَرَسُولُهُ أَحَقُّ أَن يُرْضُوهُ إِن كَانُوا مُؤْمِنِينَ ﴿٦٢﴾

63. 誰であれアッラー並びにその使徒に反抗する者は、そこに永遠(とわ)に留め置かるる地獄の業火あるを、彼等知らざるか？　そは大いなる屈辱なり。

أَلَمْ يَعْلَمُوا أَنَّهُ مَن يُحَادِدِ اللَّهَ وَرَسُولَهُ فَأَنَّ لَهُ نَارَ جَهَنَّمَ خَالِدًا فِيهَا ذَٰلِكَ الْخِزْيُ الْعَظِيمُ ﴿٦٣﴾

64. 偽信者は胸中に秘めるものをあばき出される一章(スーラ)が啓示されはしないかと恐る。(注31) 云え、「汝等嘲笑せよ！　アッラーはお前たちが恐るるものを明るみに出さん」と。

يَحْذَرُ الْمُنَافِقُونَ أَن تُنَزَّلَ عَلَيْهِمْ سُورَةٌ تُنَبِّئُهُم بِمَا فِي قُلُوبِهِمْ قُلِ اسْتَهْزِئُوا إِنَّ اللَّهَ مُخْرِجٌ مَّا تَحْذَرُونَ ﴿٦٤﴾

65. 汝もし彼等に問わば、彼等必ず云わん、「我等はただ無駄話をしてふざけているのみ」と。云え、「お前たちが嘲笑せるは、アッラーやその神兆(しるし)、並びに使徒に非らざるか？

وَلَئِن سَأَلْتَهُمْ لَيَقُولُنَّ إِنَّمَا كُنَّا نَخُوضُ وَنَلْعَبُ قُلْ أَبِاللَّهِ وَآيَاتِهِ وَرَسُولِهِ كُنتُمْ تَسْتَهْزِئُونَ ﴿٦٥﴾

66. 云い訳はするな。お前たちは一度信じた後また不信心者に戻れり。たといわれらがお前たちの一部は赦せども、他の一部は懲らしめん。なんとなれば彼等の犯せし罪故に」と。

لَا تَعْتَذِرُوا قَدْ كَفَرْتُم بَعْدَ إِيمَانِكُمْ إِن نَّعْفُ عَن طَائِفَةٍ مِّنكُمْ نُعَذِّبْ طَائِفَةً بِأَنَّهُمْ كَانُوا مُجْرِمِينَ ﴿٦٦﴾

第九項

67. 偽信者どもは、男も女も皆同じようなもの。彼等は悪を勧(すす)め、善を妨げ、アッラーの道

الْمُنَافِقُونَ وَالْمُنَافِقَاتُ بَعْضُهُم مِّن بَعْضٍ يَأْمُرُونَ

注30　オゾン（意味は「耳」）は他人から聞いたことを何でも信じる人の意味であり、聖なる預言者を中傷する人々が、預言者を軽蔑し、見くびって話すのを聞きその話が正しいとすぐ信じ、単に聞くだけの道具と化している人の事を指している。

注31　実際には偽善者は、聖なる預言者を神の啓示を受けた者と信じていなかったので、そのような恐れの念はもたなかった。この節では偽善者の冗談や嘲笑の皮肉な面を示している。

のために費すことにその手を閉づ。彼等アッラーを忘れたるが故にアッラーもまた彼等を無視せり。(注 32) げに偽信者は罪人なり。

68. アッラーは偽信者の男女並びに不信者に業火を約束し、彼等をそこに永遠に留めん。業火は彼等には十分なり。その上アッラーは彼等を呪詛せり。彼等は永劫の刑罰を受けん、

69. お前たち以前の民の如く。彼等は力においてお前たちに優り、財産と子女においてもより豊かなりき。彼等は己が定命をしばしの間楽しめり、お前たちもまたお前たち以前のこれ等の民が楽しんだ如く己が定命を楽しめり。またお前たちは彼等が無駄話に耽溺した如く無駄話にうつつを抜かせり。彼等の所業は現世においても来世においても無益に帰さん。彼等こそは失敗者なり。

70. 彼等以前の人々——ノアの民、アード、サムード、アブラハムの民、ミディアンの住民、並びに滅亡せる幾多の邑の消息が彼等に達せざりしか？(注 33)　彼等の許にはそれぞれの使徒たちが明証を携えて至れり。さればアッラー彼等を虐待するに非ず、彼等自ら己れを虐待せり。

71. 男女の信者はお互い同士助けとなる仲間なり。彼等は善を勧め、悪を禁じ、礼拝を遵守し、喜捨を払い且つアッラー並びにその使徒に従う。アッラーは斯かる人々に慈悲を垂れ給わん。げにアッラーは偉大にして、賢哲にまします。

بِالْمُنْكَرِ وَيَنْهَوْنَ عَنِ الْمَعْرُوفِ وَيَقْبِضُونَ أَيْدِيَهُمْ
نَسُوا اللّٰهَ فَنَسِيَهُمْ إِنَّ الْمُنٰفِقِينَ هُمُ الْفٰسِقُونَ ﴿٦٧﴾

وَعَدَ اللّٰهُ الْمُنٰفِقِينَ وَالْمُنٰفِقٰتِ وَالْكُفَّارَ نَارَ جَهَنَّمَ
خٰلِدِينَ فِيهَا هِيَ حَسْبُهُمْ وَلَعَنَهُمُ اللّٰهُ وَلَهُمْ
عَذَابٌ مُقِيمٌ ﴿٦٨﴾

كَالَّذِينَ مِنْ قَبْلِكُمْ كَانُوا أَشَدَّ مِنْكُمْ قُوَّةً وَأَكْثَرَ
أَمْوٰلًا وَأَوْلٰدًا فَاسْتَمْتَعُوا بِخَلٰقِهِمْ فَاسْتَمْتَعْتُمْ
بِخَلٰقِكُمْ كَمَا اسْتَمْتَعَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِكُمْ بِخَلٰقِهِمْ
وَخُضْتُمْ كَالَّذِي خَاضُوا أُولٰئِكَ حَبِطَتْ أَعْمٰلُهُمْ
فِي الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةِ وَأُولٰئِكَ هُمُ الْخٰسِرُونَ ﴿٦٩﴾

أَلَمْ يَأْتِهِمْ نَبَأُ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ قَوْمِ نُوحٍ وَعَادٍ
وَثَمُودَ وَقَوْمِ إِبْرٰهِيمَ وَأَصْحٰبِ مَدْيَنَ وَالْمُؤْتَفِكٰتِ
أَتَتْهُمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَيِّنٰتِ فَمَا كَانَ اللّٰهُ لِيَظْلِمَهُمْ
وَلٰكِنْ كَانُوا أَنْفُسَهُمْ يَظْلِمُونَ ﴿٧٠﴾

وَالْمُؤْمِنُونَ وَالْمُؤْمِنٰتُ بَعْضُهُمْ أَوْلِيَاءُ بَعْضٍ
يَأْمُرُونَ بِالْمَعْرُوفِ وَيَنْهَوْنَ عَنِ الْمُنْكَرِ وَ
يُقِيمُونَ الصَّلٰوةَ وَيُؤْتُونَ الزَّكٰوةَ وَيُطِيعُونَ اللّٰهَ
وَرَسُولَهُ أُولٰئِكَ سَيَرْحَمُهُمُ اللّٰهُ إِنَّ اللّٰهَ عَزِيزٌ
حَكِيمٌ ﴿٧١﴾

注 32　　ニスヤーンの一般的な意味は「忘れること」であるが、実際には人や物に関して考えることを止めたり、記憶していなかったり、怠慢だったり、物事の処理がのろいことを意味する。神に関して用いられるときは、この言葉は人間に罰を与えて神との関係を絶ったり、神が愛と思いやりの心で人間のことを考えるのを止める意味となる。

注 33　　ソドムとゴモラ（創世記 19；24、25）の事。

72. アッラーは男女の信者に、永遠に住むべき河川流るる楽園と、また永遠の園の中に楽しい住居とを約束せり。されど一番素晴らしいものは、アッラーの御満悦。そは至上の成就なり。

وَعَدَ اللّٰهُ الْمُؤْمِنِيْنَ وَالْمُؤْمِنٰتِ جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا وَمَسٰكِنَ طَيِّبَةً فِيْ جَنّٰتِ عَدْنٍ ۭ وَرِضْوَانٌ مِّنَ اللّٰهِ اَكْبَرُ ۭ ذٰلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيْمُ ﴿٧٢﴾

第十項

73. 預言者よ、不信心者どもや偽信者と戦え。(注 34) 彼等に対して厳しくあれ。彼等の住居は地獄にして、行きつく先の大凶なるかな。

يٰٓاَيُّهَا النَّبِيُّ جَاهِدِ الْكُفَّارَ وَالْمُنٰفِقِيْنَ وَاغْلُظْ عَلَيْهِمْ ۭ وَمَاْوٰىهُمْ جَهَنَّمُ ۭ وَبِئْسَ الْمَصِيْرُ ﴿٧٣﴾

74. 彼等はアッラーの御名にかけて何も悪いことは云わずと誓いしも、事実は確かに罰当たりな言葉を吐き、一旦イスラームに帰依した後また不信心者となれり。また彼等は達成し得ざることを企む。彼等が信者に恨みを抱くのは、ただアッラー並びにその使徒がその恵みによって信者たちを富ましめたがためなり。(注 35) されど彼等もし改悛するならば、それは彼等のために大いに結構なこと。されど彼等もし背き去らば、アッラーは彼等を現世においても来世においても痛刑をもって懲らしめん。地上において彼等は如何なる友も救い手もなかるべし。

يَحْلِفُوْنَ بِاللّٰهِ مَا قَالُوْا ۭ وَلَقَدْ قَالُوْا كَلِمَةَ الْكُفْرِ وَكَفَرُوْا بَعْدَ اِسْلَامِهِمْ وَهَمُّوْا بِمَا لَمْ يَنَالُوْا ۚ وَمَا نَقَمُوْٓا اِلَّآ اَنْ اَغْنٰىهُمُ اللّٰهُ وَرَسُوْلُهٗ مِنْ فَضْلِهٖ ۚ فَاِنْ يَّتُوْبُوْا يَكُ خَيْرًا لَّهُمْ ۚ وَاِنْ يَّتَوَلَّوْا يُعَذِّبْهُمُ اللّٰهُ عَذَابًا اَلِيْمًا ۙ فِي الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةِ ۚ وَمَا لَهُمْ فِي الْاَرْضِ مِنْ وَّلِيٍّ وَّلَا نَصِيْرٍ ﴿٧٤﴾

75. 彼等の中にはアッラーと契約を結びし者ありて、云えり、「もしアッラーがその恵みを我等に垂れ給わば、我等は必ず施しを行い、義人とならん」と。

وَمِنْهُمْ مَّنْ عٰهَدَ اللّٰهَ لَىِٕنْ اٰتٰىنَا مِنْ فَضْلِهٖ لَنَصَّدَّقَنَّ وَلَنَكُوْنَنَّ مِنَ الصّٰلِحِيْنَ ﴿٧٥﴾

76. ところがアッラーが彼等に恵みを垂るるや、賜われるものを惜み、嫌って背き去る。

فَلَمَّآ اٰتٰىهُمْ مِّنْ فَضْلِهٖ بَخِلُوْا بِهٖ وَتَوَلَّوْا وَّهُمْ مُّعْرِضُوْنَ ﴿٧٦﴾

注 34　預言者はどのように偽善者相手に戦うのかの記載はないが、少なくとも武器を取って戦うことはどこにも書いていない。事実預言者は偽善者に戦いをしかけるようなことはなかったのである。

注 35　聖なる預言者がメディナに来てから町は賑わい、商売は繁盛し、市民は豊かになったのである。

77．そこでアッラーは、彼等がアッラーと会う日まで彼等の心の中に偽善を抱かしめたり。なんとなれば、彼等がアッラーとの約束を破り、嘘をついた報いなるが故に。

فَأَعْقَبَهُمْ نِفَاقًا فِي قُلُوبِهِمْ إِلَىٰ يَوْمِ يَلْقَوْنَهُ بِمَا أَخْلَفُوا اللَّهَ مَا وَعَدُوهُ وَبِمَا كَانُوا يَكْذِبُونَ ٧٧

78．彼等は、アッラーが彼等の秘密も密談も、いな、見る能わざるものまでよく御存知なることを知らざるか？

أَلَمْ يَعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ سِرَّهُمْ وَنَجْوَاهُمْ وَأَنَّ اللَّهَ عَلَّامُ الْغُيُوبِ ٧٨

79．進んで喜捨を行う信者並びに己れの労力で得たもの以外に喜捨するものを持たざる信者を非難し、(注 36) 嘲笑する者どもあり。アッラーはその嘲笑を彼等に返報せん。彼等には痛刑あるべし。

الَّذِينَ يَلْمِزُونَ الْمُطَّوِّعِينَ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ فِي الصَّدَقَاتِ وَالَّذِينَ لَا يَجِدُونَ إِلَّا جُهْدَهُمْ فَيَسْخَرُونَ مِنْهُمْ ۙ سَخِرَ اللَّهُ مِنْهُمْ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ٧٩

80．汝、彼等のために赦しを請おうが請うまいが、たとい七十度彼等のために赦しを請うとも、(注 37) アッラーは決して彼等を赦さざるべし。これ彼等がアッラーとその使徒を信ぜざりしが故なり。アッラーは不実な人間を導き給わぬ。

اسْتَغْفِرْ لَهُمْ أَوْ لَا تَسْتَغْفِرْ لَهُمْ إِنْ تَسْتَغْفِرْ لَهُمْ سَبْعِينَ مَرَّةً فَلَنْ يَغْفِرَ اللَّهُ لَهُمْ ۚ ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ كَفَرُوا بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ ۗ وَاللَّهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الْفَاسِقِينَ ٨٠

第十一項

81．残留組の人々は、アッラーの使徒が出陣したる後、家に坐せるを喜びて、己が財産と生命をアッラーの道のために献げて戦うことを嫌いたり。彼等は云えり、「炎暑の時に出陣するな」と。云え、「地獄の火は更に強烈なるぞ」と。彼等これしきのことが理解し得ざるか！

فَرِحَ الْمُخَلَّفُونَ بِمَقْعَدِهِمْ خِلَافَ رَسُولِ اللَّهِ وَكَرِهُوا أَنْ يُجَاهِدُوا بِأَمْوَالِهِمْ وَأَنْفُسِهِمْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَقَالُوا لَا تَنْفِرُوا فِي الْحَرِّ ۗ قُلْ نَارُ جَهَنَّمَ أَشَدُّ حَرًّا ۚ لَوْ كَانُوا يَفْقَهُونَ ٨١

82．彼等は暫くの間笑い、しかる後沢山泣くがいい。(注 38) これ彼等が稼ぎしものに対する応報なり。

فَلْيَضْحَكُوا قَلِيلًا وَلْيَبْكُوا كَثِيرًا جَزَاءً بِمَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ٨٢

注 36　貧しいイスラム教徒アブー・アキールは、一日の稼ぎすべてを神に捧げたが、その額が、少なかったので偽善者にあざけりを受けた。

注 37　「七十」という数には特別な意味はないが、滅びることが運命づけられているような偽善者は、何度預言者に許しを請うても決して許されないことを強調する為に使われている。

注 38　この節では命令的な意味がないことは明らかである。ただ偽善者は遠からず、泣かなければならない日が来ると預言しているだけである。

83．アッラーが汝を彼等の一味のところへ凱旋させると、彼等は汝に出陣の許可を願い出ん、されば云え、「お前たちは決して我と共に出陣すること叶わず、また決して我と共に敵と戦うこと叶わず。最初にお前たちは居残りを選びたれば、今回も残留組と共に坐せ」と。

فَإِنْ رَّجَعَكَ اللّٰهُ إِلٰى طَآئِفَةٍ مِّنْهُمْ فَاسْتَأْذَنُوْكَ لِلْخُرُوْجِ فَقُلْ لَّنْ تَخْرُجُوْا مَعِيَ أَبَدًا وَّلَنْ تُقَاتِلُوْا مَعِيَ عَدُوًّا ۚ إِنَّكُمْ رَضِيْتُمْ بِالْقُعُوْدِ أَوَّلَ مَرَّةٍ فَاقْعُدُوْا مَعَ الْخٰلِفِيْنَ ﴿٨٣﴾

84．また彼等のうち誰かが死すとも、汝決して祈るなかれ、また墓に詣でるなかれ。彼等はアッラー並びにその使徒を信ぜず不従順のうちに歿したるが故に。

وَلَا تُصَلِّ عَلٰٓى أَحَدٍ مِّنْهُمْ مَّاتَ أَبَدًا وَّلَا تَقُمْ عَلٰى قَبْرِهٖ ۖ إِنَّهُمْ كَفَرُوْا بِاللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ وَمَاتُوْا وَهُمْ فٰسِقُوْنَ ﴿٨٤﴾

85．汝、彼等の財産や子女に好奇心をそそるなかれ。アッラーはただこれによって現世で彼等を罰し、彼等が不信心者でいる間にその魂を離れ去らしめんと意図するのみ。

وَلَا تُعْجِبْكَ أَمْوَالُهُمْ وَأَوْلَادُهُمْ ۖ إِنَّمَا يُرِيْدُ اللّٰهُ أَنْ يُّعَذِّبَهُمْ بِهَا فِي الدُّنْيَا وَتَزْهَقَ أَنْفُسُهُمْ وَهُمْ كٰفِرُوْنَ ﴿٨٥﴾

86．「アッラーを信じ、アッラーの道のために使徒と一緒に奮戦せよ」との一章が啓示されるや、彼等のうちの富裕なる者は汝に許可を願い出て、云う、「我等に家に坐せる者と共に居られることを許せ」と。（注39）

وَإِذَآ أُنْزِلَتْ سُوْرَةٌ أَنْ اٰمِنُوْا بِاللّٰهِ وَجَاهِدُوْا مَعَ رَسُوْلِهِ اسْتَأْذَنَكَ أُولُوا الطَّوْلِ مِنْهُمْ وَقَالُوْا ذَرْنَا نَكُنْ مَّعَ الْقٰعِدِيْنَ ﴿٨٦﴾

87．彼等は女どもと共に留まることを好む。彼等の心は封ぜられたり。（注40）されば彼等理解し難し。

رَضُوْا بِأَنْ يَّكُوْنُوْا مَعَ الْخَوَالِفِ وَطُبِعَ عَلٰى قُلُوْبِهِمْ فَهُمْ لَا يَفْقَهُوْنَ ﴿٨٧﴾

88．されど、使徒並びに彼と共に信ずる者は、アッラーの道のために己が財産と生命を献げて奮戦す。これ等の者はさまざまなる幸福を得ん。これ等の者は成就者たらん。

لٰكِنِ الرَّسُوْلُ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مَعَهٗ جٰهَدُوْا بِأَمْوَالِهِمْ وَأَنْفُسِهِمْ ۗ وَأُولٰٓئِكَ لَهُمُ الْخَيْرٰتُ ۖ وَأُولٰٓئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُوْنَ ﴿٨٨﴾

89．アッラーは彼等に河川流るる楽園を用意せり。彼等彼処に永遠に住まん。そは至高の幸福なり。

أَعَدَّ اللّٰهُ لَهُمْ جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهٰرُ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ۗ ذٰلِكَ الْفَوْزُ الْعَظِيْمُ ﴿٨٩﴾ ع

注39　この言葉が必ずしも実際に偽善者によって話されたととる必要はなく、ただ色々な言い訳をして預言者のもとへなかなか来ない様子を表わす為に使われただけである。

注40　2章8節を参照の事。

第十二項

90．沙漠の民の中にも種々なる弁解をして、(注 41) 免除を願い出て来たる者あり。彼等はアッラー並びその使徒に嘘をつき家に居残りたり。不信心者のあの者どもにやがて痛刑が降されん。

وَجَآءَ ٱلْمُعَذِّرُونَ مِنَ ٱلْأَعْرَابِ لِيُؤْذَنَ لَهُمْ وَقَعَدَ ٱلَّذِينَ كَذَبُوا ٱللَّهَ وَرَسُولَهُۥ ۚ سَيُصِيبُ ٱلَّذِينَ كَفَرُوا مِنْهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٩٠﴾

91．弱き者、病める者、並びに費すものを持たざる者は、彼等がアッラー並びにその使徒に誠実でありなば、罪はなし。善事を行う者に非難の理由なし。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

لَيْسَ عَلَى ٱلضُّعَفَآءِ وَلَا عَلَى ٱلْمَرْضَىٰ وَلَا عَلَى ٱلَّذِينَ لَا يَجِدُونَ مَا يُنفِقُونَ حَرَجٌ إِذَا نَصَحُوا لِلَّهِ وَرَسُولِهِۦ ۚ مَا عَلَى ٱلْمُحْسِنِينَ مِن سَبِيلٍ ۚ وَٱللَّهُ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿٩١﴾

92．また汝のところへ来て、汝に乗るものを求めたる者に、汝が「我はお前たちに乗せてやるものを都合出来ず」と云うと、彼等は目から涙をこぼして、自分たちが貢献し得ざることを悲しみて去り行く。これ等の者もまた罪なし。(注 42)

وَلَا عَلَى ٱلَّذِينَ إِذَا مَآ أَتَوْكَ لِتَحْمِلَهُمْ قُلْتَ لَآ أَجِدُ مَآ أَحْمِلُكُمْ عَلَيْهِ تَوَلَّوا وَّأَعْيُنُهُمْ تَفِيضُ مِنَ ٱلدَّمْعِ حَزَنًا أَلَّا يَجِدُوا مَا يُنفِقُونَ ﴿٩٢﴾

93．責められるべきは、裕福にもかかわらず免除を願い出てくる者どものみ。彼等は女どもと共に残るを喜ぶ。アッラーは彼等の心を封じたれば、彼等はものの道理を知らず。

إِنَّمَا ٱلسَّبِيلُ عَلَى ٱلَّذِينَ يَسْتَـْٔذِنُونَكَ وَهُمْ أَغْنِيَآءُ ۚ رَضُوا بِأَن يَكُونُوا مَعَ ٱلْخَوَالِفِ وَطَبَعَ ٱللَّهُ عَلَىٰ قُلُوبِهِمْ فَهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٩٣﴾

94．お前たちが彼等のところへ帰還するや、彼等はさまざまな弁解をお前たちになさん。云え、「弁解は止めよ。彼等は断じてお前たちを信ぜず。アッラーはすでにお前たちの実態を彼等に教えたり。アッラーはお前たちの行状を監視せん。使徒もまた然り。然る後にお前たちは見えざるものと見えるものを知る御方の許に召し寄せられ、そこでお前たちは己が為せしことをすべて告げられん」と。(注 43)

يَعْتَذِرُونَ إِلَيْكُمْ إِذَا رَجَعْتُمْ إِلَيْهِمْ ۚ قُل لَّا تَعْتَذِرُوا لَن نُّؤْمِنَ لَكُمْ قَدْ نَبَّأَنَا ٱللَّهُ مِنْ أَخْبَارِكُمْ ۚ وَسَيَرَى ٱللَّهُ عَمَلَكُمْ وَرَسُولُهُۥ ثُمَّ تُرَدُّونَ إِلَىٰ عَٰلِمِ ٱلْغَيْبِ وَٱلشَّهَٰدَةِ فَيُنَبِّئُكُم بِمَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٩٤﴾

注 41　要するに、この言葉は義務を怠り、実際そうする事が出来なかった理由もないのに、言い訳をする人を指している。

注 42　この節に書かれていることは誰にでもあてはまることであるが、ここでは特に貧しい七人のイスラム教徒について述べられている。彼らはとてもジハードへ行きたがっていたのであるが望みを達成する手段も資力もなかったのである。

注 43　この節は聖なる預言者がタブークへの遠征へ行ってまだメディナに戻っていなかった時啓示された。

95．お前たちが彼等のところへ帰還するや、彼等は、お前たちが彼等を無視することをアッラーにかけて誓言せん。されば彼等を無視せよ。げに、彼等は不浄なり、彼等の居住は地獄なり――これ彼等が稼ぎしものに対するふさわしき報いなり。（注 44）

سَيَحْلِفُوْنَ بِاللّٰهِ لَكُمْ اِذَا انْقَلَبْتُمْ اِلَيْهِمْ لِتُعْرِضُوْا عَنْهُمْ ؕ فَاَعْرِضُوْا عَنْهُمْ ؕ اِنَّهُمْ رِجْسٌ ؗ وَّ مَاْوٰىهُمْ جَهَنَّمُ ۚ جَزَآءًۢ بِمَا كَانُوْا يَكْسِبُوْنَ ﴿۹۵﴾

96．彼等はお前たちを喜ばせようと誓言せん。されどたといお前たちが彼等に満足しようと、アッラーは邪悪な民は喜ばず。

يَحْلِفُوْنَ لَكُمْ لِتَرْضَوْا عَنْهُمْ ۚ فَاِنْ تَرْضَوْا عَنْهُمْ فَاِنَّ اللّٰهَ لَا يَرْضٰى عَنِ الْقَوْمِ الْفٰسِقِيْنَ ﴿۹۶﴾

97．砂漠の民の不信と偽善たるや更に甚だしく、アッラーが使徒に啓示せし掟を知ろうと欲せず。されどアッラーはすべてを聴き、賢哲にまします。

اَلْاَعْرَابُ اَشَدُّ كُفْرًا وَّنِفَاقًا وَّاَجْدَرُ اَلَّا يَعْلَمُوْا حُدُوْدَ مَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ عَلٰى رَسُوْلِهٖ ؕ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ﴿۹۷﴾

98．また砂漠の民の中にはアッラーの道のために費すことを、罰金とでも考え、お前たちに災難が降りかからんことを期待する者あり。されど不幸は彼等の上にこそ降りかからん。アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

وَمِنَ الْاَعْرَابِ مَنْ يَّتَّخِذُ مَا يُنْفِقُ مَغْرَمًا وَّيَتَرَبَّصُ بِكُمُ الدَّوَآئِرَ ؕ عَلَيْهِمْ دَآئِرَةُ السَّوْءِ ؕ وَاللّٰهُ سَمِيْعٌ عَلِيْمٌ ﴿۹۸﴾

99．されど砂漠の民の中にもアッラーと末日を信じ、（注 45）自分の差し出すものによってアッラーに近づき、且つ預言者の祝福にあずかれる手段と考えている者あり。然り！　そは確かに彼等にとりて神に近づく手段なり。アッラーはやがて彼等をその恩寵に浴せしめん。げに、アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

وَمِنَ الْاَعْرَابِ مَنْ يُّؤْمِنُ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ وَيَتَّخِذُ مَا يُنْفِقُ قُرُبٰتٍ عِنْدَ اللّٰهِ وَصَلَوٰتِ الرَّسُوْلِ ؕ اَلَآ اِنَّهَا قُرْبَةٌ لَّهُمْ ؕ سَيُدْخِلُهُمُ اللّٰهُ فِيْ رَحْمَتِهٖ ؕ اِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿۹۹﴾

第十三項

100．信者の一番先に位を占むる者は、最初の遷移者並びに援助者、及び彼等に従って善い振舞をした者なり。アッラーは彼等を喜び、彼等もまたアッラーを喜ぶ。（注 46）

وَالسّٰبِقُوْنَ الْاَوَّلُوْنَ مِنَ الْمُهٰجِرِيْنَ وَالْاَنْصَارِ وَالَّذِيْنَ اتَّبَعُوْهُمْ بِاِحْسَانٍ ۙ رَّضِيَ اللّٰهُ عَنْهُمْ

注 44　これら「信仰に遅れをとる者」は異った概念に属するので、彼らは別に扱われる。

注 45　クルアーンは決して無差別にすべての人々を非難しはしない。この節では砂漠に住むアラブ人はすべて悪人であるという誤解をとり除こうとしている。

注 46　この節では聖なる預言者の最初の３代の後継者や彼の主だった仲間を非難しているシーア派について触れている。彼等に対しては、強行な論駁がなされている。このシーア派というのはイスラム教の二大分派

アッラーは彼等のために河川流るる楽園を用意せり。彼等は永遠にそこに住まん。これぞ至高の幸福なり。

وَرَضُوا عَنْهُ وَأَعَدَّ لَهُمْ جَنّٰتٍ تَجْرِي تَحْتَهَا الْأَنْهٰرُ خٰلِدِينَ فِيهَا أَبَدًا ۚ ذٰلِكَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ﴿١٠٠﴾

101.　お前たちのまわりの砂漠の民の中にも偽信者あり、(注 47) またメディナの住民の中にも然り。彼等は偽善に固執す。汝等それを知るまいが、われらはそれを知る。われらは彼等を再度懲らしめ、然る後に重刑に処せん。(注 48)

وَمِمَّنْ حَوْلَكُمْ مِنَ الْأَعْرَابِ مُنٰفِقُونَ ۛ وَمِنْ أَهْلِ الْمَدِينَةِ ۛ مَرَدُوا عَلَى النِّفَاقِ لَا تَعْلَمُهُمْ ۖ نَحْنُ نَعْلَمُهُمْ ۚ سَنُعَذِّبُهُمْ مَرَّتَيْنِ ثُمَّ يُرَدُّونَ إِلَىٰ عَذَابٍ عَظِيمٍ ﴿١٠١﴾

102.　またその他に、自らの罪を認めたるものあり。彼等の所業は善悪相混じりたり。(注 49) かかる人々には恐らくアッラーは憐れみの顔を向け給う。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くましします。

وَآخَرُونَ اعْتَرَفُوا بِذُنُوبِهِمْ خَلَطُوا عَمَلًا صٰلِحًا وَآخَرَ سَيِّئًا عَسَى اللّٰهُ أَنْ يَتُوبَ عَلَيْهِمْ ۚ إِنَّ اللّٰهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿١٠٢﴾

103.　彼等の財産から喜捨をさせ、之によって彼等を清め且つ浄化せよ。また彼等のために祈れ。汝の祈禱は彼等のために安らぎの源泉なり。アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

خُذْ مِنْ أَمْوٰلِهِمْ صَدَقَةً تُطَهِّرُهُمْ وَتُزَكِّيهِمْ بِهَا وَصَلِّ عَلَيْهِمْ ۖ إِنَّ صَلٰوتَكَ سَكَنٌ لَهُمْ ۗ وَاللّٰهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿١٠٣﴾

104..　彼等は、アッラーがその僕の改悛を容認し、その喜捨を受納し、また幾度も憐れみに立ち戻り、慈悲深くましますことを、知らざるか？

أَلَمْ يَعْلَمُوا أَنَّ اللّٰهَ هُوَ يَقْبَلُ التَّوْبَةَ عَنْ عِبَادِهِ وَيَأْخُذُ الصَّدَقٰتِ وَأَنَّ اللّٰهَ هُوَ التَّوَّابُ الرَّحِيمُ ﴿١٠٤﴾

105.　云え、「働き続けよ。アッラーは必ずお前たちの所業を監視せん、使徒並びに信者も

وَقُلِ اعْمَلُوا فَسَيَرَى اللّٰهُ عَمَلَكُمْ وَرَسُولُهُ وَالْمُؤْمِنُونَ

の一派で、モハッマドの婿のアリを正統の後継者として初三代のカリフを教主と認めず、スンナを正統と認めない一派のこと。

注 47　聖なる預言者の死後彼らの種族の中の偽善者が結集して、メジナを襲った。メジナの近くの砂漠に住む五つの種族--ジュヘナ、ムゼナ、アシジャ、アスラム、ゲフェルについて特に言及している (Khaldūn, i i 66)。

注 48　「二回」は罰の方式を意味しているのではなく、(9；16 に説明された様にその) 期間を意味している。偽善者は一年に二回の罰が課せられるなら一年の、又、一年に一回の罰が課せられるならば二年という様に、一年から二年の期間に渡って罰せられることを意味している。

注 49　クバーのモスクのことで、ここは聖なる預言者がメッカからメディナに行くときに立ち寄った所で、そこに建てられたモスクである。

また然り。やがてお前たちは見えざるものと見えるものとを知悉し給う御方の許に召し寄せられ、しかる後にお前たちが為せることを告げられん」と。

وَسَتُرَدُّونَ إِلَىٰ عَالِمِ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ فَيُنَبِّئُكُم بِمَا
كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿١٠٥﴾

106.　この他に、アッラーの裁定が延期された者あり。彼等は罰せられるのか、はたまた慈悲の顔を向けてもらえるものやら。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَآخَرُونَ مُرْجَوْنَ لِأَمْرِ اللَّهِ إِمَّا يُعَذِّبُهُمْ وَإِمَّا يَتُوبُ
عَلَيْهِمْ ۗ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿١٠٦﴾

107.　偽善者どもの中には、イスラームの妨害と不信心を助けるために、また信者の仲を離反させるために、並びに以前アッラーとその使徒に戦った人の待伏の場所たらしめんがために礼拝堂を建立したる人々あり。而して彼等は必ず誓って云う、「我等はただ善事を行うのみ」と。されどアッラーは断固としてその虚偽なることを立証す。

وَالَّذِينَ اتَّخَذُوا مَسْجِدًا ضِرَارًا وَكُفْرًا وَتَفْرِيقًا
بَيْنَ الْمُؤْمِنِينَ وَإِرْصَادًا لِّمَنْ حَارَبَ اللَّهَ وَرَسُولَهُ
مِن قَبْلُ ۚ وَلَيَحْلِفُنَّ إِنْ أَرَدْنَا إِلَّا الْحُسْنَىٰ ۖ وَاللَّهُ يَشْهَدُ
إِنَّهُمْ لَكَاذِبُونَ ﴿١٠٧﴾

108.　断じてそのような場所で礼拝するなかれ。最初の日より敬虔に基づいて建立されたる礼拝堂こそ、その中で汝が礼拝するにどれほどふさわしいことか。あすこには、身を清めることを好む人々あり。アッラーは自らを清める者を愛し給う。

لَا تَقُمْ فِيهِ أَبَدًا ۚ لَّمَسْجِدٌ أُسِّسَ عَلَى التَّقْوَىٰ مِنْ أَوَّلِ
يَوْمٍ أَحَقُّ أَن تَقُومَ فِيهِ ۚ فِيهِ رِجَالٌ يُحِبُّونَ أَن يَتَطَهَّرُوا ۚ
وَاللَّهُ يُحِبُّ الْمُطَّهِّرِينَ ﴿١٠٨﴾

109.　アッラーを畏れ、且つ喜ばしむるために建物の礎を定めた者と、水に侵蝕されて崩れ落ちる断崖の縁に建物の礎を定め、建物ともども地獄の火中に転落した者と、果していずれが勝れるか？　アッラーは不義なす徒輩を導き給わず。

أَفَمَنْ أَسَّسَ بُنْيَانَهُ عَلَىٰ تَقْوَىٰ مِنَ اللَّهِ وَرِضْوَانٍ
خَيْرٌ أَم مَّنْ أَسَّسَ بُنْيَانَهُ عَلَىٰ شَفَا جُرُفٍ هَارٍ
فَانْهَارَ بِهِ فِي نَارِ جَهَنَّمَ ۗ وَاللَّهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ
الظَّالِمِينَ ﴿١٠٩﴾

110.　彼等の作れる建物は、その心千々に引き裂かれない限り、いつまでも心の不安の種とならん。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

لَا يَزَالُ بُنْيَانُهُمُ الَّذِي بَنَوْا رِيبَةً فِي قُلُوبِهِمْ
إِلَّا أَن تَقَطَّعَ قُلُوبُهُمْ ۗ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿١١٠﴾

第十四項

111.　まことに、アッラーは楽園と引換えに、信者たちの生命と財産を購えり。彼等はアッラーの道のために戦い、殺し殺される

إِنَّ اللَّهَ اشْتَرَىٰ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ أَنفُسَهُمْ وَأَمْوَالَهُم
بِأَنَّ لَهُمُ الْجَنَّةَ ۚ يُقَاتِلُونَ فِي سَبِيلِ اللَّهِ فَيَقْتُلُونَ

――これはアッラーが律法（トーラ）、福音、（注 50）並びにクルアーンにおいて己れ自身に義務としてかかる約束なり。誰がアッラーより約束に忠実なるものがあろうか？　されば お前たちアッラーと結びし契約を喜べ。これぞ至高の幸福成就（じょうじゅ）なり。

وَيُقْتَلُونَ وَعْدًا عَلَيْهِ حَقًّا فِي التَّوْرَاةِ وَالْإِنجِيلِ
وَالْقُرْآنِ ۚ وَمَنْ أَوْفَىٰ بِعَهْدِهِ مِنَ اللَّهِ ۚ فَاسْتَبْشِرُوا
بِبَيْعِكُمُ الَّذِي بَايَعْتُم بِهِ ۚ وَذَٰلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ﴿١١١﴾

112．彼等は、悔い改める者、アッラーを崇敬する者、讃美する者、断食する者、神前に跪（ひざまず）く者、ひれ伏して祈る者、善を勧（すす）め悪を許さぬ者、アッラーの制限（いましめ）を守る者などなり。これ等の信者に朗報を伝えよ。

التَّائِبُونَ الْعَابِدُونَ الْحَامِدُونَ السَّائِحُونَ الرَّاكِعُونَ
السَّاجِدُونَ الْآمِرُونَ بِالْمَعْرُوفِ وَالنَّاهُونَ عَنِ
الْمُنكَرِ وَالْحَافِظُونَ لِحُدُودِ اللَّهِ ۗ وَبَشِّرِ الْمُؤْمِنِينَ ﴿١١٢﴾

113．多神教徒のために、たとい血縁の者たりとも、地獄に陥（お）ちることが明白となれる後は、神の赦しを請うようなことは、預言者並びに信者の為（な）すべきことに非ず。

مَا كَانَ لِلنَّبِيِّ وَالَّذِينَ آمَنُوا أَن يَسْتَغْفِرُوا لِلْمُشْرِكِينَ
وَلَوْ كَانُوا أُولِي قُرْبَىٰ مِن بَعْدِ مَا تَبَيَّنَ لَهُمْ أَنَّهُمْ
أَصْحَابُ الْجَحِيمِ ﴿١١٣﴾

114．アブラハムが自分の父のために赦しを請えるは、父となせし約束のためなり。（注 51）されど、父がアッラーの敵なることが明白なるに及び、彼は父と絶縁せり。げに、アブラハムは心優しく、寛容なりき。

وَمَا كَانَ اسْتِغْفَارُ إِبْرَاهِيمَ لِأَبِيهِ إِلَّا عَن مَّوْعِدَةٍ
وَعَدَهَا إِيَّاهُ فَلَمَّا تَبَيَّنَ لَهُ أَنَّهُ عَدُوٌّ لِّلَّهِ تَبَرَّأَ مِنْهُ ۚ
إِنَّ إِبْرَاهِيمَ لَأَوَّاهٌ حَلِيمٌ ﴿١١٤﴾

115．アッラーは、彼等が守るべきことを明示せぬ限り、一度（ひとたび）導いた人々を迷わしむることなし。げにアッラーは萬事（よろずのこと）を深知し給う。

وَمَا كَانَ اللَّهُ لِيُضِلَّ قَوْمًا بَعْدَ إِذْ هَدَاهُمْ
حَتَّىٰ يُبَيِّنَ لَهُم مَّا يَتَّقُونَ ۚ إِنَّ اللَّهَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿١١٥﴾

116．げに、天地（あめつち）の主権はアッラーに属す。生を与え、死を賜う御方。お前たち、アッラーの他には味方もなければ、救助者もなし。

إِنَّ اللَّهَ لَهُ مُلْكُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۖ يُحْيِي
وَيُمِيتُ ۚ وَمَا لَكُم مِّن دُونِ اللَّهِ مِن
وَلِيٍّ وَلَا نَصِيرٍ ﴿١١٦﴾

117．アッラーは預言者並びに苦難な時代に彼に従った遷移者（ムハージル）と援助者（アンサール）に慈悲の顔を向け給えり、一部の者の心はほとんど本分を踏みはずしかけていたが。それでもなお慈悲

لَقَد تَّابَ اللَّهُ عَلَى النَّبِيِّ وَالْمُهَاجِرِينَ وَالْأَنصَارِ
الَّذِينَ اتَّبَعُوهُ فِي سَاعَةِ الْعُسْرَةِ مِن بَعْدِ مَا

注 50　律法（申命記 6：3－5）と福音書（マタイ 19：21，27－29）。

注 51　19 章 48 節を参照の事。

の顔を向け給えり。げにアッラーは、彼等には同情的で慈悲深くまします。

كَادَ يَزِيغُ قُلُوبُ فَرِيقٍ مِّنْهُمْ ثُمَّ تَابَ عَلَيْهِمْ
إِنَّهُ بِهِمْ رَءُوفٌ رَّحِيمٌ ﴿١١٧﴾

118.　後に居残りし三人の者にも(注52)アッラーはまた慈悲の顔を向けたり。広大な大地が彼等には狭きものとなり、彼等の魂もまた之によって苦しめられ、遂にアッラーに救いを求める以外に、アッラーから遁れるすべなきを悟れり。するとアッラーは慈悲の顔を彼等に向け、彼等がアッラーに頼れるように取りはからい給う。げにアッラーは、幾たびとなく赦し給い、慈悲深くまします。

وَعَلَى الثَّلَاثَةِ الَّذِينَ خُلِّفُوا حَتَّىٰ إِذَا ضَاقَتْ عَلَيْهِمُ الْأَرْضُ بِمَا
رَحُبَتْ وَضَاقَتْ عَلَيْهِمْ أَنفُسُهُمْ وَظَنُّوا أَن لَّا مَلْجَأَ
مِنَ اللَّهِ إِلَّا إِلَيْهِ ثُمَّ تَابَ عَلَيْهِمْ لِيَتُوبُوا إِنَّ اللَّهَ
هُوَ التَّوَّابُ الرَّحِيمُ ﴿١١٨﴾

第十五項

119.　汝等信ずる者よ、アッラーを畏れ、真を説く人と行を偕にせよ。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اتَّقُوا اللَّهَ وَكُونُوا مَعَ الصَّادِقِينَ ﴿١١٩﴾

120.　メディナの住民やその周辺の砂漠の民が、アッラーの使徒の後に居残って、彼の生命より己れ等の命を重ずるのは正しからず。なんとなれば、彼等はアッラーの道において、渇きにも疲れにも餓えにも遭わず、不信心者どもを立腹させる証跡も踏まず、また敵になんの損害も生ぜせしめず、にもかかわらず彼等のために善行が記録されている所以なり。アッラーは善行者への報奨を湮滅せず。

مَا كَانَ لِأَهْلِ الْمَدِينَةِ وَمَنْ حَوْلَهُم مِّنَ الْأَعْرَابِ
أَن يَتَخَلَّفُوا عَن رَّسُولِ اللَّهِ وَلَا يَرْغَبُوا بِأَنفُسِهِمْ عَن
نَّفْسِهِ ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ لَا يُصِيبُهُمْ ظَمَأٌ وَلَا نَصَبٌ وَلَا
مَخْمَصَةٌ فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَلَا يَطَئُونَ مَوْطِئًا يَغِيظُ
الْكُفَّارَ وَلَا يَنَالُونَ مِنْ عَدُوٍّ نَّيْلًا إِلَّا كُتِبَ لَهُم بِهِ
عَمَلٌ صَالِحٌ إِنَّ اللَّهَ لَا يُضِيعُ أَجْرَ الْمُحْسِنِينَ ﴿١٢٠﴾

121.　彼等は多かれ少なかれ如何なる金額も費さず、また一つの谷も越さずとも、アッラーは彼等が為せる行為に対して最善の報奨を与えんと記録せられたり。

وَلَا يُنفِقُونَ نَفَقَةً صَغِيرَةً وَلَا كَبِيرَةً وَلَا يَقْطَعُونَ
وَادِيًا إِلَّا كُتِبَ لَهُمْ لِيَجْزِيَهُمُ اللَّهُ أَحْسَنَ مَا كَانُوا
يَعْمَلُونَ ﴿١٢١﴾

注52　カービン・マーリク，ヒラール・ビン・オマイヤ，ムラーラ・ビン・ラビーヤ（9：106）の三人のことである。彼らは熱心なイスラム教徒であったが、タブークの行軍に参加しそびれた為、聖なる預言者がメディナに戻った時、三人共徹底的な社会追放をうけた。その為彼らは妻と別居しなければならず、このような禁治産者としての状態が五十日間も続いた。その間彼らは深く悔い改めたので許しを与えられたが、彼らは迷うことなく自らの罪を告白し、言い訳がましいことは言わず率直で正直な信徒であった為、民の罰を心の底から深く受け入れた。大地はこんなにも広大なのに、その時の彼らにとっては、この世は息のつまるほど狭く感じられたほど、彼らは心痛のためやつれ果てたのである（ブハリ・マガーズィ書)。

122.　信者全員は一斉に出陣すべきに非ず。各団の一部を出陣から外し、その者たちに宗教上の知識（注53）に習熟せしめ、みなが帰還したる時彼等に訓戒を与え、悪から身を守れるようにしてやるべきではないか？

وَمَا كَانَ الْمُؤْمِنُونَ لِيَنْفِرُوا كَافَّةً ۚ فَلَوْلَا نَفَرَ مِنْ كُلِّ فِرْقَةٍ مِنْهُمْ طَائِفَةٌ لِيَتَفَقَّهُوا فِي الدِّينِ وَلِيُنْذِرُوا قَوْمَهُمْ إِذَا رَجَعُوا إِلَيْهِمْ لَعَلَّهُمْ يَحْذَرُونَ ﴿١٢٢﴾

第十六項

123.　汝等信ずる者よ、お前たちの傍近くにいる不信心者どもと戦え。（注54）彼等にお前たちが手強い相手であることを悟らしめよ。アッラーは義しい者と偕にあることを知れ。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا قَاتِلُوا الَّذِينَ يَلُونَكُمْ مِنَ الْكُفَّارِ وَلْيَجِدُوا فِيكُمْ غِلْظَةً ۚ وَاعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ مَعَ الْمُتَّقِينَ ﴿١٢٣﴾

124.　啓示が降る度に、彼等の中には「この章によって信心を深めるのか？」と云う者あり。およそ信仰する者は之によって信心を深め、且つ喜ぶ。

وَإِذَا مَا أُنْزِلَتْ سُورَةٌ فَمِنْهُمْ مَنْ يَقُولُ أَيُّكُمْ زَادَتْهُ هَٰذِهِ إِيمَانًا ۚ فَأَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا فَزَادَتْهُمْ إِيمَانًا وَهُمْ يَسْتَبْشِرُونَ ﴿١٢٤﴾

125.　されど心に病ある者は、穢れの上にさらに穢れが加わり、遂に不信心者のまま歿す。

وَأَمَّا الَّذِينَ فِي قُلُوبِهِمْ مَرَضٌ فَزَادَتْهُمْ رِجْسًا إِلَىٰ رِجْسِهِمْ وَمَاتُوا وَهُمْ كَافِرُونَ ﴿١٢٥﴾

126.　彼等は毎年一度や二度試みられていることを悟らざるか？　されど彼等は改悛することもなく、また留意することもなし。

أَوَلَا يَرَوْنَ أَنَّهُمْ يُفْتَنُونَ فِي كُلِّ عَامٍ مَرَّةً أَوْ مَرَّتَيْنِ ثُمَّ لَا يَتُوبُونَ وَلَا هُمْ يَذَّكَّرُونَ ﴿١٢٦﴾

127.　啓示が降る度に彼等は互に顧みて、云う、「誰かに見られてはいまいか？」と。然る後に彼等は背き去る。アッラーが彼等の心を背かしめたるは、彼等が理解せざる徒輩なるが故なり。

وَإِذَا مَا أُنْزِلَتْ سُورَةٌ نَظَرَ بَعْضُهُمْ إِلَىٰ بَعْضٍ هَلْ يَرَاكُمْ مِنْ أَحَدٍ ثُمَّ انْصَرَفُوا ۚ صَرَفَ اللَّهُ قُلُوبَهُمْ بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَا يَفْقَهُونَ ﴿١٢٧﴾

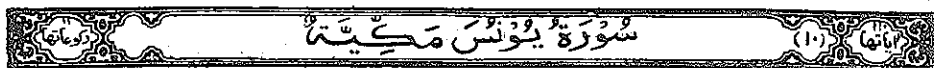
注53　善い信仰や善行ができないのは真の知識が欠如している事が原因であり、この節ではこういった弱さを取り除く方法について述べている。砂漠に住むアラビア人はイスラムの教義には全く無知であった為（9：97）、彼らを指導する際の実際的な方法をここでは論じている。

注54　イスラム教徒の中にあり、共に暮らしていた偽善者達の事についての言及である。イスラム教徒は、彼ら個人に対してではなく、偽善者という階級に対し戦うよう命ぜられ、聖なる預言者に彼らの悪習や、偽善的な行為を訴え出る事で、彼らに対抗する事が課せられていた。

128.　いまお前たちの中から一人の使徒がお前たちのところへ遣わされたり。彼はお前たちが災難に遭えば心を痛め、熱心にお前たちの幸福を願い、信者に対して情け深く、慈悲深い。

لَقَدْ جَآءَكُمْ رَسُولٌ مِّنْ أَنفُسِكُمْ عَزِيزٌ عَلَيْهِ مَا عَنِتُّمْ حَرِيصٌ عَلَيْكُم بِالْمُؤْمِنِينَ رَءُوفٌ رَّحِيمٌ ﴿١٢٨﴾

129.　されどもし彼等背き去らば、云え、「我はアッラーいませば充分なり。彼の他に神なし。彼こそは我が頼り、偉大なる玉座の主なり」と。

فَإِن تَوَلَّوْا فَقُلْ حَسْبِيَ اللَّهُ لَآ إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ ۖ عَلَيْهِ تَوَكَّلْتُ ۖ وَهُوَ رَبُّ الْعَرْشِ الْعَظِيمِ ﴿١٢٩﴾

سُوْرَةُ يُوْنُسَ مَكِّيَّةٌ

ヨナ
(メッカ啓示)

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

1．慈悲深く、恵遍くアッラーの御名において。

الٓرٰ تِلْكَ اٰيٰتُ الْكِتٰبِ الْحَكِيْمِ ②

2．アリフ・ラーム・ラー。(注1) これこそは知恵に満ちた経典の諸節なり。(注2)

اَكَانَ لِلنَّاسِ عَجَبًا اَنْ اَوْحَيْنَآ اِلٰى رَجُلٍ مِّنْهُمْ اَنْ اَنْذِرِ النَّاسَ وَبَشِّرِ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اَنَّ لَهُمْ قَدَمَ صِدْقٍ عِنْدَ رَبِّهِمْ ؕ قَالَ الْكٰفِرُوْنَ اِنَّ هٰذَا لَسٰحِرٌ مُّبِيْنٌ ③

3．われらが彼等のうちの一人に啓示して、「人類に警告せよ。また信ずる者には、彼等が主のお傍で名誉ある地位を得べしとの朗報を伝えよ」と云えることが、人々には不思議なことなるか？　不信心者どもは云う、「こは明らかに魔術なり」と。(注3)

اِنَّ رَبَّكُمُ اللّٰهُ الَّذِيْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ فِيْ سِتَّةِ اَيَّامٍ ثُمَّ اسْتَوٰى عَلَى الْعَرْشِ يُدَبِّرُ الْاَمْرَ ؕ مَا مِنْ شَفِيْعٍ اِلَّا مِنْۢ بَعْدِ اِذْنِهٖ ؕ ذٰلِكُمُ اللّٰهُ رَبُّكُمْ فَاعْبُدُوْهُ ؕ اَفَلَا تَذَكَّرُوْنَ ④

4．げに、お前たちの主は六日のうちに(注4)天地を創造り給い、然る後に玉座に登り給えしアッラーなり。彼は一切を統治し給う。(注5) 彼の許しを得た後でなければ何者も仲裁者たるを得ず。これがアッラー、お前たちの主なり。されば彼を崇拝せよ。お前たちまだ目がさめざるか？

注1　「アリフ・ラム・ラー」2章2節を参照

注2　「知恵に満ちた」という言葉はクルアーンの三つの顕著な特質を表わしている。即ちクルアーンは、(a)あらゆる精神的知識の土台を包含し、全ての真実を教え込んでいる故に、知恵に満ちているのである。(b)次に、その教えはあらゆる場合や、あらゆる環境に適合するように表わされている。(c)そしてそれは、全ての宗教上の違いに正しい判断を下してくれるのである。

注3　この節は次の様な重要な事実を明らかにする。即ち、道徳的に堕落し、自分を大切にしたり自信を持つというあらゆる感覚を失くしてしまっている人達、つまりここでは不信仰者達のことであるが、あまりにも堕落している為に、彼らの中から誰かが現れて、彼らが落ち込んでしまっている堕落の泥沼の中から彼らを助けることが出来るなどとは想像も出来なかった。ただ、外部から現れた誰かにしか彼らの境遇を改善することは出来ないと思っていた。

注4　7章55節参照。

注5　「彼は一切を統治し給う」という言葉は、宇宙の働きと、神が神の命令を果たし神の意志を明示するのに使う手段とを表わしているのである。

5．お前たち皆ともにアッラーのお傍に帰るなり。アッラーのお約束は違うことなし。げに彼は創造の源を起し、然る後に之を復起させ給う、これ信じて善事を行える者を公平に賞せんがためなり。然れども、不信心者どもに対しては煮えたぎる熱湯と痛刑あるべし、なんとなれば彼等信ぜざるが故に。(注6)

إِلَيْهِ مَرْجِعُكُمْ جَمِيعًا ۖ وَعْدَ اللَّهِ حَقًّا ۚ إِنَّهُ يَبْدَؤُا الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيدُهُ لِيَجْزِيَ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ بِالْقِسْطِ ۚ وَالَّذِينَ كَفَرُوا لَهُمْ شَرَابٌ مِنْ حَمِيمٍ وَعَذَابٌ أَلِيمٌ بِمَا كَانُوا يَكْفُرُونَ ۝

6．彼こそは太陽を燦爛たる輝きたらしめ、月を反射の明鏡たらしめ、年数と時刻の計算をお前たちにわからしむるために（注7）その整然たる軌道を定めたる御方なり。アッラーが之を創造せるはただ真理のために他ならず。彼は理解する人々のためにさまざまなる神兆を詳述し給う。

هُوَ الَّذِي جَعَلَ الشَّمْسَ ضِيَاءً وَالْقَمَرَ نُورًا وَقَدَّرَهُ مَنَازِلَ لِتَعْلَمُوا عَدَدَ السِّنِينَ وَالْحِسَابَ ۚ مَا خَلَقَ اللَّهُ ذَٰلِكَ إِلَّا بِالْحَقِّ ۚ يُفَصِّلُ الْآيَاتِ لِقَوْمٍ يَعْلَمُونَ ۝

7．まこと、夜と昼の交替の中に、またアッラーが天地の間に創造れるすべてのもののうちに、神を畏れる人々へのさまざまな神兆あり。(注8)

إِنَّ فِي اخْتِلَافِ اللَّيْلِ وَالنَّهَارِ وَمَا خَلَقَ اللَّهُ فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ لَآيَاتٍ لِقَوْمٍ يَتَّقُونَ ۝

注6　現世での行動に審判が下され、報いられ、新しい人生が与えられるのは死後だけではないといえる。現世も又、一つの世代というのは次の世代へと引き継がれていく為、前世代の人々の良い行いというものは無駄にはならないし、次世代の人々にとり有益となりうる。また、サリハートは、正しく高潔な所業を意味する他に、特殊な場合と環境で緊急事態の為になされた所業をも意味している。

注7　この節は、非常に賢明な自然の法則を指摘している。我々は一つの天体が横切った宇宙の大きさを知るのに、他の天体との位置の変化の関係によって判断出来る。神は、我々が歳月の計算をすることができるようにあらかじめ太陽と月の運行を定められたのである。云いかえれば神はこれらの天体に動きを与え、その運行を定められたので、その動きを観察することによって我々は一定の歳月が流れ、元の位置から動き続けたことを知ることができるのである。あらゆる計算とあらゆる暦は、太陽と月の動きにたよっている。月は地球の回りを回るので、我々は月という尺度を知ることができる。地球は地軸上を回転しながら太陽の回りを回っているので、我々は日と年を計ることが出来るのである。

注8　この節の中の「神を畏れる人々」という言葉は、前節の「理解する人々」という表現のかわりに用いられている。なぜなら昼夜の交替という自然現象は、無知な人でさえ知っていたが、神への畏敬のみが敬けんな研究から、真の精神的恩恵を生み出すからである。また、先の節で言及した月と太陽のさまざまな運行の定めというのは、一個人やあらゆる人が感知し理解できるほど容易なことではなかった。それ故、知識を授かった人々のみが、それによって恩恵をこうむることができた。その上、昼夜が交替する現象は、民族の興亡に似通っている。栄華繁栄の昼の後には衰退と堕落の夜が来る。永遠の栄華を満喫した民は一つもなかったし、衰退と堕落の暗闇の中で永遠にもがき手探りし続けた民もなかった。ある民は、繁栄の昼を長く、衰退の夜を短くすることが出来よう。それに夜が来るを遅らせるのも、彼らの力のうちにある。

8．われらとの会見を待ち望まず、現世の生活に満足し、之に安んずる者、並びにわれらの神兆を軽視する者（注９）——

إن الذين لا يرجون لقاءنا ورضوا بالحيوة الدنيا واطمأنوا بها والذين هم عن اٰيٰتنا غٰفلون ﴿٨﴾

9．彼等の住居は業火なり、己が稼ぎし報い故に。

أولٰئك مأوٰىهم النار بما كانوا يكسبون ﴿٩﴾

10．されど信じて善行に勤しむ者は——彼等の信仰の故をもって主が之を正しく導かん。至福の園において、河川彼等の脚下を流るべし。

إن الذين اٰمنوا وعملوا الصٰلحٰت يهديهم ربهم بإيمٰنهم تجري من تحتهم الأنهٰر في جنٰت النعيم ﴿١٠﴾

11．彼処にて彼等は、「おお、アッラーに栄えあれ！」と祈り、互に「平安あれ」と挨拶を交わす。而して祈禱の結びは、「万物の主たるアッラーに讃美あれ」となるべし。（注10）

دعوٰىهم فيها سبحٰنك اللهم وتحيتهم فيها سلٰم وأٰخر دعوٰىهم أن الحمد لله رب العٰلمين ﴿١١﴾

第二項

12．もしアッラーが、人々が富の獲得に狂奔する如く彼等の上に災厄を急ぎ早めなば、彼等の命数はすでに終らされたるべし。されどわれらは、われらとの会見を待ち望まぬ者どもを放置し，その迷路の中に狂気のように徘徊せしむ。（注11）

ولو يعجل الله للناس الشر استعجالهم بالخير لقضي إليهم أجلهم فنذر الذين لا يرجون لقاءنا في طغيٰنهم يعمهون ﴿١٢﴾

注９　人間性の研究は次のような重要な事実を明らかにする。即ち、全ての人間の進歩は、希望と、畏敬という本能に密接に結びついているということである。我々の最高の努力は、この二つの本能のどちらかに鼓吹されている。ある人々の労働と汗は、利益と権力増大という希望の為であり、他の人々の作業は恐れの為である。この節では、これらの二つの階級の人々に「ラジャー」という言葉で訴えている。「ラジャー」とは、「望む者、恐れる者」の意味である（Lane）。

注10　神を崇拝することは、自発的であり本能によるものであるといえる。なぜなら、天上では物事の真実が人間を導くものとなり、人々はあらゆる神の所業は深い叡知に基づいていたことを理解する事となる。このことを理解すると、彼らは本能的自発的に、「アッラーに栄光あれ」と唱えるようになるのである。この節はまた、信ずる者達の行きつく先は、いつも幸福であることを示している。彼らは神の栄光を唱えることで、彼らの喜びを表現するのである。

注11　不信仰者達の行為は、禍が彼らにふりかかってくるのを求めているようなものである。しかし神はゆっくり罰せられる。もし神が不信仰者達の行為が受けるに値する程急いで彼らを罰していたなら、彼らはとうの昔に滅びてしまっていたことであろう。もし、「ハイール」という単語を、聖句の中にあるように「善」の意味にとるなら、この節は次の様な意味になると思われる。もし神が不信仰者達を、彼らの悪い行いのゆえに罰するのを、神が善を授けるのと同じ程の早さでなされるなら、不信仰者達は、とっくに滅亡してしまっていたであろうに。

13．人は災難に遭えば、或いは側臥し、或いは端坐し、或いは起立してわれらに祈る。されどわれらがその災難を彼より取り除くや、恰も災難に際してわれらに祈らざりしが如く、また己れの道を行く。このように則を越えたる者は己れの所業を正しいと思わしめらる。

وَإِذَا مَسَّ الْإِنسَانَ الضُّرُّ دَعَانَا لِجَنبِهِ أَوْ قَاعِدًا أَوْ قَائِمًا فَلَمَّا كَشَفْنَا عَنْهُ ضُرَّهُ مَرَّ كَأَن لَّمْ يَدْعُنَا إِلَىٰ ضُرٍّ مَّسَّهُ ۚ كَذَٰلِكَ زُيِّنَ لِلْمُسْرِفِينَ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٣﴾

14．昔われらは、お前たちより前に幾多の世代を滅ぼしたり。使徒たちが明証を携えて彼等のところへ行けども、彼等之を信ぜざりしが故なり。このようにわれらは罪人に報ゆ。（注 12）

وَلَقَدْ أَهْلَكْنَا الْقُرُونَ مِن قَبْلِكُمْ لَمَّا ظَلَمُوا ۙ وَجَاءَتْهُمْ رُسُلُهُم بِالْبَيِّنَاتِ وَمَا كَانُوا لِيُؤْمِنُوا ۚ كَذَٰلِكَ نَجْزِي الْقَوْمَ الْمُجْرِمِينَ ﴿١٤﴾

15．然る後にわれらはお前たちをして彼等の後に地上を継がしめたり、これお前たちが如何に為すかを見んがためなり。

ثُمَّ جَعَلْنَاكُمْ خَلَائِفَ فِي الْأَرْضِ مِن بَعْدِهِمْ لِنَنظُرَ كَيْفَ تَعْمَلُونَ ﴿١٥﴾

16．われらの明証が彼等に読誦されるや、われらと会見を待ち望まぬ者どもは、云う、「これと違ったクルアーンを持ち来れ、さもなくばこれを改竄せよ」と。云え、「我は自分勝手に改竄するを得ず。我はただ己れに啓示されたるものに従うのみ。もし我主に背かば、荘厳な日の刑罰を我は恐るる」と。（注 13）

وَإِذَا تُتْلَىٰ عَلَيْهِمْ آيَاتُنَا بَيِّنَاتٍ ۙ قَالَ الَّذِينَ لَا يَرْجُونَ لِقَاءَنَا ائْتِ بِقُرْآنٍ غَيْرِ هَٰذَا أَوْ بَدِّلْهُ ۚ قُلْ مَا يَكُونُ لِي أَنْ أُبَدِّلَهُ مِن تِلْقَاءِ نَفْسِي ۖ إِنْ أَتَّبِعُ إِلَّا مَا يُوحَىٰ إِلَيَّ ۖ إِنِّي أَخَافُ إِنْ عَصَيْتُ رَبِّي عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيمٍ ﴿١٦﴾

17．云え、「もしアッラー欲したりせば、我はお前たちに之を誦せず、またアッラーは之をお前たちに教えざりしなり。この啓示が降

قُل لَّوْ شَاءَ اللَّهُ مَا تَلَوْتُهُ عَلَيْكُمْ وَلَا أَدْرَاكُم بِهِ ۖ

注 12　懲罰は二種類ある。(1)自然の法則に違反する結果である懲罰と、(2)「シャリヤ」の掟が侮辱される時に生ずる懲罰とである。後者の懲罰は、人々が邪まな生活を送っている時、又は、彼らの中から預言者が現れるのに人々は彼を拒み、彼の前にあらゆる種類の妨害をなす時、一民族の上にふりかかる。この種の懲罰は、ある種の特徴によって解り、他の懲罰の方は、たとえば、民族の興亡の様なものであるが、これらは自然の通常の法則に対する違反行為の結果として生ずるのである。

注 13　「荘厳な日の刑罰」は、一国家の災禍を暗示している。

注 14　この節は、預言者の地位を主張する者の真実性を調べる為の確実な基準を具体的に表わしている。当然のことながら、ある行為の中で、習慣や気質を通して確信を得た人間が、善か悪かどちらかに大きく変化するには、非常に長い時間がかかる。それではイスラムの預言者は啓示を受ける前、全く公正な人間であったのに、いかにして突然ぺてん師に変わることができたのであろうか。そんな事はありえないのである。

فَقَدْ لَبِثْتُ فِيكُمْ عُمُرًا مِّن قَبْلِهِۦٓ ۚ أَفَلَا تَعْقِلُونَ ﴿١٧﴾

る以前に我はお前たちと偕に過ごしたり。お前たちまだ理解せざるか？」と。（注14）

فَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنِ ٱفْتَرَىٰ عَلَى ٱللَّهِ كَذِبًا أَوْ كَذَّبَ بِـَٔايَٰتِهِۦٓ ۚ إِنَّهُۥ لَا يُفْلِحُ ٱلْمُجْرِمُونَ ﴿١٨﴾

18．アッラーに反対して虚偽を作り出し、或いはその神兆を虚偽なりとする者より倍する不義なる者があろうか？　げに罪人は決して栄えざるべし。（注15）

وَيَعْبُدُونَ مِن دُونِ ٱللَّهِ مَا لَا يَضُرُّهُمْ وَلَا يَنفَعُهُمْ وَيَقُولُونَ هَٰٓؤُلَآءِ شُفَعَٰٓؤُنَا عِندَ ٱللَّهِ ۚ قُلْ أَتُنَبِّـُٔونَ ٱللَّهَ بِمَا لَا يَعْلَمُ فِى ٱلسَّمَٰوَٰتِ وَلَا فِى ٱلْأَرْضِ ۚ سُبْحَٰنَهُۥ وَتَعَٰلَىٰ عَمَّا يُشْرِكُونَ ﴿١٩﴾

19．彼等はアッラーの代りに、害にも益にもならざるものを拝み、而して云う、「これ等の神々はアッラーに対する我等の弁護者なり」と。云え、「お前たちは天地に在るアッラーの知らざる何者かをアッラーに告げんとするか？」と。聖なるかな、アッラーは彼等がアッラーと併せ祀る神々の上に高くいまし給う。（注16）

وَمَا كَانَ ٱلنَّاسُ إِلَّآ أُمَّةً وَٰحِدَةً فَٱخْتَلَفُوا۟ ۚ وَلَوْلَا كَلِمَةٌ سَبَقَتْ مِن رَّبِّكَ لَقُضِىَ بَيْنَهُمْ فِيمَا فِيهِ يَخْتَلِفُونَ ﴿٢٠﴾

20．人類は初め一つの生活共同体なりしが、（注17）その後自らの間で互に意見を異にせり。もし以前に汝の主より降されたる言葉なかりせば、彼等の争論はすでに判決されていたであろう。（注18）

وَيَقُولُونَ لَوْلَآ أُنزِلَ عَلَيْهِ ءَايَةٌ مِّن رَّبِّهِۦ ۖ فَقُلْ إِنَّمَا

21．彼等は云う、「何故に主より神兆が彼に降されざるか？」と。云え、「不可視なものはた

注15　この節は、二つの永遠の真実を照らし出している。(a)神について嘘を作り上げたり、神の使者達を排斥したり反対したりする者達は、神の懲罰から決して逃れることは出来ない。(b)ぺてん師や偽りの預言者達は、彼らの伝道に成功することは出来ない。

注16　偶像崇拝の真の原因は、彼らの創り出した偶像の目的を間違えて理解してしまった所にある。偶像崇拝者は、人間と神の美徳又、彼自身の生まれながらにして神から授かった偉大な収容力と素質と間違った概念を持っている。彼は、仲介物の助けなしでは神への道がない、とか、神は、すでに神に近づいた者の仲介を通してでなければ人間の所に降りたもうことはない、という愚かな信念をいだいているのである。イスラム教はこれらの観念に両方とも極度に反対するものである。

注17　彼らはよこしまな考えで、神の預言者達に反対して一致団結したのであった（2章 214節参照）。

注18　この言葉は、次の意味のうちの一つあるいは全てを示す可能性がある。即ち、(a)神は、正しい道を見つける能力を人に与え、啓示された指導を通してそこへの方向を示されたが、彼らはその道を捨て、誤った方向に落ちこんでしまった。(b)人は、神の使者達を通して正しい道をいつも示されているのだが、人間達の中で、意見を異にし続けているのである。(c)神よりの使者達に反対して、不信仰者達はいつも同じ道をたどり、こうして一つの共同体を形成するのである。古来ずっと、彼らは神よりの使者達に反対し、意見を異にしていたのである。（2章 214節参照）

الْغَيْبُ لِلَّهِ فَانْتَظِرُوا إِنِّي مَعَكُمْ مِنَ الْمُنْتَظِرِينَ ﴿٢١﴾

だアッラーにのみ属す。されば待て、我もお前たちとともに待つ者なり」と。(注19)

第三項

وَإِذَا أَذَقْنَا النَّاسَ رَحْمَةً مِنْ بَعْدِ ضَرَّاءَ مَسَّتْهُمْ إِذَا لَهُمْ مَكْرٌ فِي آيَاتِنَا ۚ قُلِ اللَّهُ أَسْرَعُ مَكْرًا ۚ إِنَّ رُسُلَنَا يَكْتُبُونَ مَا تَمْكُرُونَ ﴿٢٢﴾

22. 災難に遭いたる後にわれらが人々に慈悲を味わしむると、彼等は却ってわれらの神兆に対してよからぬ企みをなす。(注20) 云え、「アッラーの方が策謀においてはより迅速なり」と。げにわれらの使徒たちはお前たちの企みをすべて記録す。

هُوَ الَّذِي يُسَيِّرُكُمْ فِي الْبَرِّ وَالْبَحْرِ ۖ حَتَّىٰ إِذَا كُنْتُمْ فِي الْفُلْكِ وَجَرَيْنَ بِهِمْ بِرِيحٍ طَيِّبَةٍ وَفَرِحُوا بِهَا جَاءَتْهَا رِيحٌ عَاصِفٌ وَجَاءَهُمُ الْمَوْجُ مِنْ كُلِّ مَكَانٍ وَظَنُّوا أَنَّهُمْ أُحِيطَ بِهِمْ ۙ دَعَوُا اللَّهَ مُخْلِصِينَ لَهُ الدِّينَ لَئِنْ أَنْجَيْتَنَا مِنْ هَٰذِهِ لَنَكُونَنَّ مِنَ الشَّاكِرِينَ ﴿٢٣﴾

23. 彼こそはお前たちを陸に海に旅せしむお方なり。お前たち船に乗るや、和風彼等を運び、彼等之を喜ぶ。然れども暴風忽ち船を襲い、波浪四方より迫り来たればもはやこれまでと思い、彼等は自らの宗教を浄化してアッラーに祈って云う、「汝もし我等を之より救わば、我等必ず感謝を捧げる者たらん」と。(注21)

فَلَمَّا أَنْجَاهُمْ إِذَا هُمْ يَبْغُونَ فِي الْأَرْضِ بِغَيْرِ الْحَقِّ ۗ يَا أَيُّهَا النَّاسُ إِنَّمَا بَغْيُكُمْ عَلَىٰ أَنْفُسِكُمْ ۖ مَتَاعَ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا ۖ ثُمَّ إِلَيْنَا مَرْجِعُكُمْ فَنُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٢٤﴾

24. 然れども彼等救い出されるや、見よ、彼等は地上において不法にも不行跡を行う。汝等よく聞け、お前たちの不行跡は現世の享楽を求めて己れ自身を害するに過ぎず。然る後にお前たちはわれらが許に帰る。その時われらはお前たちに、お前たちの為せしことを語り聞かせん。

注19　この節は、不信仰者達が、早く懲罰が来ないのかと要求するのに対しての効果ある回答を含んでいる。モハッマド預言者は、彼らに次のように云うようにお告げを受けた。恐るべき懲罰の到来が遅れていることに苛立つべきは、彼らではなく、モハッマド預言者自身である。というのは、この遅れによってあざけりにさらされているのはモハッマド預言者であって、モハッマド預言者が神の命令を辛抱強く待っているのに、彼らが待てないというのは、いかなることかと。

注20　慈悲は神からもたらされるが、不遇は己れの邪悪な行為の結果である。

注21　心地良い風が時に激しい強風となって、広範囲の破壊を招くように、不信仰者達に許されている一時の休息は、彼らの破壊への前奏曲となるかもしれない。この明白な真実を不信仰者達に痛感させる為に、航海の安楽と危険に彼らの注意を引くのである。

25. げに現世の生活は、譬うれば、われらが天上より降す雨の如し。人や家畜が食する地上の産物は雨とよく混り、大地がその装飾を身にまとい美しく装いをこらすや、そこに住む人間は大地を支配せりと思う。然れども われらの命令が昼夜の別なく一たび下れば、昨日までのものはなきが如く刈り入れの跡と変ぜせしむ。われらはかくの如く反省する人々のためにもろもろの神兆を説きあかす。（注 22）

إِنَّمَا مَثَلُ الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا كَمَآءٍ اَنْزَلْنٰهُ مِنَ السَّمَآءِ فَاخْتَلَطَ بِهٖ نَبَاتُ الْاَرْضِ مِمَّا يَاْكُلُ النَّاسُ وَ الْاَنْعَامُ حَتّٰۤى اِذَاۤ اَخَذَتِ الْاَرْضُ زُخْرُفَهَا وَ ازَّيَّنَتْ وَظَنَّ اَهْلُهَاۤ اَنَّهُمْ قٰدِرُوْنَ عَلَيْهَاۤ اَتٰىهَاۤ اَمْرُنَا لَيْلًا اَوْ نَهَارًا فَجَعَلْنٰهَا حَصِيْدًا كَاَنْ لَّمْ تَغْنَ بِالْاَمْسِ كَذٰلِكَ نُفَصِّلُ الْاٰيٰتِ لِقَوْمٍ يَّتَفَكَّرُوْنَ ٢٥

26. アッラーは平安の住居に召し給い、お気に召すものを正しき道に導き給う。

وَاللّٰهُ يَدْعُوْۤا اِلٰى دَارِ السَّلٰمِ وَيَهْدِيْ مَنْ يَّشَآءُ اِلٰى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ٢٦

27. 善行を為せる者には、こよなき報奨と、これに加うるに祝福あるべし。彼等の面には暗さも屈辱の陰もなし。彼等こそは楽園の住人、その中に永遠に住まん。

لِلَّذِيْنَ اَحْسَنُوا الْحُسْنٰى وَزِيَادَةٌ وَلَا يَرْهَقُ وُجُوْهَهُمْ قَتَرٌ وَّلَا ذِلَّةٌ اُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ الْجَنَّةِ هُمْ فِيْهَا خٰلِدُوْنَ ٢٧

28. 然るに悪事を為せる者には、その悪事に見合う応報ありて屈辱に覆われるべし。何人もアッラーの怒りから彼等を守らざるべし。されば彼等の面はさながら夜の暗闇に覆われたる如くなるべし。彼等こそは業火の住人、その中に永遠に留まらん。（注 23）

وَالَّذِيْنَ كَسَبُوا السَّيِّاٰتِ جَزَآءُ سَيِّئَةٍ بِمِثْلِهَا وَتَرْهَقُهُمْ ذِلَّةٌ مَا لَهُمْ مِّنَ اللّٰهِ مِنْ عَاصِمٍ كَاَنَّمَاۤ اُغْشِيَتْ وُجُوْهُهُمْ قِطَعًا مِّنَ الَّيْلِ مُظْلِمًا اُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ النَّارِ هُمْ فِيْهَا خٰلِدُوْنَ ٢٨

29. われらが彼等を皆ともに集めんその日を忘れまいぞ、われらはそこで神に他神を配したる徒輩に云わん、「己が場所に控えおれ、お前たち並びに他神たちは」と。然る後にわれらは両者の間を隔つべし。すると他神たちは云わん、「お前たちが崇拝せしは我等に非らざりしか？

وَيَوْمَ نَحْشُرُهُمْ جَمِيْعًا ثُمَّ نَقُوْلُ لِلَّذِيْنَ اَشْرَكُوْا مَكَانَكُمْ اَنْتُمْ وَشُرَكَآؤُكُمْ فَزَيَّلْنَا بَيْنَهُمْ وَقَالَ شُرَكَآؤُهُمْ مَّا كُنْتُمْ اِيَّانَا تَعْبُدُوْنَ ٢٩

注 22　たとえ話の中の教訓では、民族がおごり、空となり、命を軽々しく取るようになると、彼らの衰退は始まり、ちゅう落してゆくのである。

注 23　この節はいくつかの重要な真実を表わしている。(a)善の報いはいろいろある（前の節参照）が、悪の報いは、悪と似通ったものだけである。(b)神の掟を破る者達は、高い理想と高潔な野心に鼓吹されることがなくなり、あらゆる指導力を失くし、決して指導者になることを望まず、単に他人の模倣者となるのである。(c)

30．我等とお前たちの関係はアッラーの御証言で充分なり。我等はお前たちの崇拝を毫も気づかざりき」と。

فَكَفَىٰ بِاللَّهِ شَهِيدًا بَيْنَنَا وَبَيْنَكُمْ إِن كُنَّا عَنْ عِبَادَتِكُمْ لَغَافِلِينَ ٣٠

31．そこにて各人は先に経験せし行為の何んたるかを悟らん。而して彼等の真正の主たるアッラーの許に引戻され、彼等が捏造せるすべては消滅せん。（注24）

هُنَالِكَ تَبْلُو كُلُّ نَفْسٍ مَّا أَسْلَفَتْ وَرُدُّوا إِلَى اللَّهِ مَوْلَاهُمُ الْحَقِّ وَضَلَّ عَنْهُم مَّا كَانُوا يَفْتَرُونَ ٣١

第四項

32．云え、「お前たちのために天地より食物を供給するは誰ぞ？　また、誰が耳や目に権能を授け給うたるや？　死から生を興し、生に死をもたらす者は誰ぞ？　万物を摂理するは誰ぞ？　彼等は云わん、「アッラーなり」と。然らば云え、「お前たちアッラーの保護を請わざる気か？」と。

قُلْ مَن يَرْزُقُكُم مِّنَ السَّمَاءِ وَالْأَرْضِ أَمَّن يَمْلِكُ السَّمْعَ وَالْأَبْصَارَ وَمَن يُخْرِجُ الْحَيَّ مِنَ الْمَيِّتِ وَيُخْرِجُ الْمَيِّتَ مِنَ الْحَيِّ وَمَن يُدَبِّرُ الْأَمْرَ فَسَيَقُولُونَ اللَّهُ فَقُلْ أَفَلَا تَتَّقُونَ ٣٢

33．このような御方こそお前たちの真正の主アッラーなり。真理を捨てたる後に残るものは迷誤に非ずして何ぞ？　然るにお前たちは何故に真理から顔を背けるのか？

فَذَٰلِكُمُ اللَّهُ رَبُّكُمُ الْحَقُّ فَمَاذَا بَعْدَ الْحَقِّ إِلَّا الضَّلَالُ فَأَنَّىٰ تُصْرَفُونَ ٣٣

34．かくして、反逆の徒輩は信ぜざるべしと云える主の言葉は真実となれり。

كَذَٰلِكَ حَقَّتْ كَلِمَتُ رَبِّكَ عَلَى الَّذِينَ فَسَقُوا أَنَّهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ٣٤

35．云え、「お前たちの偶像神の中で、誰が創造を起し、然る後に之を繁殖させ得るか？」と。云え、「創造を起し、然る後に之を繁殖させ得るは、ただアッラーのみ。然るにお前たち何故に背き去るのか？」と。（注25）

قُلْ هَلْ مِن شُرَكَائِكُم مَّن يَبْدَأُ الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيدُهُ قُلِ اللَّهُ يَبْدَأُ الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيدُهُ فَأَنَّىٰ تُؤْفَكُونَ ٣٥

この様に堕落し、神の怒りを招いてしまうと、彼らは神の救いを失くしてしまう。(d)悪事を行う者達の不正行為と罪は、長く隠しておくことはできないし、遅かれ早かれあばかれるのである。

注24　この世で、完全に物の真実を理解し、悟ることは人には与えられていない。あらゆる物からおおいが完全に取り除かれ、その物の真の姿が明らかにされるのは、次の世においてのみである。

注25　創造主の真の試練は、神がすでに作りたもうた物を、再び作ることができる能力である。さもなくば批判は重大な反対となり、どんなぺてん師にもすることができてしまう。この神性の試練を規定した後で、この節は偶像崇拝者達に尋ねる。彼らが神と呼んでいる者達の中で、誰がこの創造と、この世の初めから働き続けている再生のシステムの創り主であるのかと。

36．云え、「お前たちの偶像神の中で、誰が真理に導くか？」と。云え、「真理に導く者はアッラーなり。然らば真理に導き給う御方の方が追従うに値するのか、それとも己れ自身が導かれずば道を知らざる者に追従うべきなのか？　どうしたのか？　汝等如何に判断するや？」と。

قُلْ هَلْ مِنْ شُرَكَآئِكُمْ مَّنْ يَّهْدِيْٓ اِلَى الْحَقِّ ۭ قُلِ اللّٰهُ يَهْدِيْ لِلْحَقِّ ۭ اَفَمَنْ يَّهْدِيْٓ اِلَى الْحَقِّ اَحَقُّ اَنْ يُّتَّبَعَ اَمَّنْ لَّا يَهِدِّيْٓ اِلَّآ اَنْ يُّهْدٰى ۚ فَمَا لَكُمْ ۣ كَيْفَ تَحْكُمُوْنَ ﴿٣٦﴾

37．彼等の多くはただ憶測に従うのみ。真理の前には憶測は断じて何んの役にも立たず。げにアッラーは彼等の所業を知悉し給う。（注 26）

وَمَا يَتَّبِعُ اَكْثَرُهُمْ اِلَّا ظَنًّا ۭ اِنَّ الظَّنَّ لَا يُغْنِيْ مِنَ الْحَقِّ شَيْـــًٔا ۭ اِنَّ اللّٰهَ عَلِيْمٌۢ بِمَا يَفْعَلُوْنَ ﴿٣٧﴾

38．このクルアーンはアッラー以外の者によって案出されたるものに非ず。それどころか、それ以前に在りし啓示の不足を満たし、完全なる法の闡明なり。そは疑う余地なきものぞ。万物の主より下し賜われるものなり。

وَمَا كَانَ هٰذَا الْقُرْاٰنُ اَنْ يُّفْتَرٰى مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ وَلٰكِنْ تَصْدِيْقَ الَّذِيْ بَيْنَ يَدَيْهِ وَتَفْصِيْلَ الْكِتٰبِ لَا رَيْبَ فِيْهِ مِنْ رَّبِّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿٣٨﴾

39．彼等が「彼之を捏造したるか？」と云うならば、云え、「然らばこれに類する一章を作り、アッラー以外にお前たちが見いだし得る者に助けを求めよ、もしお前たちの言葉が真実ならば」と。（注 27）

اَمْ يَقُوْلُوْنَ افْتَرٰىهُ ۭ قُلْ فَاْتُوْا بِسُوْرَةٍ مِّثْلِهٖ وَادْعُوْا مَنِ اسْتَطَعْتُمْ مِّنْ دُوْنِ اللّٰهِ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ﴿٣٩﴾

40．いや彼等は、自分たちが理解し得ざりしもの、並びに未だその深い意味を示されざる故をもって拒否けたり。だが見よ不義者の末路が如何なるものなりしかを！

بَلْ كَذَّبُوْا بِمَا لَمْ يُحِيْطُوْا بِعِلْمِهٖ وَلَمَّا يَاْتِهِمْ تَاْوِيْلُهٗ ۭ كَذٰلِكَ كَذَّبَ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الظّٰلِمِيْنَ ﴿٤٠﴾

41．彼等の中の或る者は之を信じ、また他の者は之を信ぜず、されど主は害悪をなせる者を熟知し給う。

وَمِنْهُمْ مَّنْ يُّؤْمِنُ بِهٖ وَمِنْهُمْ مَّنْ لَّا يُؤْمِنُ بِهٖ ۭ وَرَبُّكَ اَعْلَمُ بِالْمُفْسِدِيْنَ ﴿٤١﴾

第五項

42．もし彼等が汝を嘘つきよばわりするならば、云え、「我が所業は我がため、お前たち

وَاِنْ كَذَّبُوْكَ فَقُلْ لِّيْ عَمَلِيْ وَلَكُمْ عَمَلُكُمْ ۚ اَنْتُمْ

注 26　アッラー以外の神々を信じる者達が持つ信念と見解は、単に空想と推測から生じたものである。彼らがいわゆる神とよんでいる者達は、彼らに何ら指針を明示したことがなかったからである。

注 27　この節は、不信仰者達に挑戦している。クルアーンが持っているような優秀さを備えた本が、もし人が捏造できるような物であるならば、なぜ彼らは自分達で同様のものを作成しないのか。この挑戦はあらゆる時代にある（44 も参照）。

の所業はお前たちのため。お前たちは我が所業に関係(かかわり)なく、我はお前たちの所業に関係(かかわり)なし」と。

بَرِيٓـُٔونَ مِمَّآ أَعْمَلُ وَأَنَا۠ بَرِىٓءٌ مِّمَّا تَعْمَلُونَ ٤٢

43．彼等の中には汝に耳を傾ける者あり。然(しか)れども理解し得ぬ聾者(ろうしゃ)をして聴かしめんとするか？

وَمِنْهُم مَّن يَسْتَمِعُونَ إِلَيْكَ ۚ أَفَأَنتَ تُسْمِعُ ٱلصُّمَّ
وَلَوْ كَانُوا۟ لَا يَعْقِلُونَ ٤٣

44．また、彼等の中には汝に目を向ける者あり。然(しか)れどもよしや彼等見えずとも、その盲(めしい)を助け導かんとするか？

وَمِنْهُم مَّن يَنظُرُ إِلَيْكَ ۚ أَفَأَنتَ تَهْدِى ٱلْعُمْىَ
وَلَوْ كَانُوا۟ لَا يُبْصِرُونَ ٤٤

45．げにアッラーは決して人を害さず、害するは、人己れ自らなり。

إِنَّ ٱللَّهَ لَا يَظْلِمُ ٱلنَّاسَ شَيْـًٔا وَلَـٰكِنَّ ٱلنَّاسَ
أَنفُسَهُمْ يَظْلِمُونَ ٤٥

46．アッラーが彼等を召し寄せ給う日、彼等はただ白昼の一刻を墓穴の中で待ちたるかの如く思わん。彼等は互に相い認めん。アッラーとの会見を否定し、嚮導(きょうどう)に従わざりし者は確かに失敗者なり。（注 28）

وَيَوْمَ يَحْشُرُهُمْ كَأَن لَّمْ يَلْبَثُوٓا۟ إِلَّا سَاعَةً مِّنَ
ٱلنَّهَارِ يَتَعَارَفُونَ بَيْنَهُمْ ۚ قَدْ خَسِرَ ٱلَّذِينَ كَذَّبُوا۟
بِلِقَآءِ ٱللَّهِ وَمَا كَانُوا۟ مُهْتَدِينَ ٤٦

47．われらが彼等に威嚇せることの幾つかの履行を汝の生涯のうちに見せようとも、また見せる前に汝をわれらが許(もと)に召し寄せようが、どのみち彼等はわれらがところへ帰るなり。されば汝、来世においても予言の履行を知るべし。アッラーは彼等が為せるすべてについて立証す。（注 29）

وَإِمَّا نُرِيَنَّكَ بَعْضَ ٱلَّذِى نَعِدُهُمْ أَوْ نَتَوَفَّيَنَّكَ فَإِلَيْنَا
مَرْجِعُهُمْ ثُمَّ ٱللَّهُ شَهِيدٌ عَلَىٰ مَا يَفْعَلُونَ ٤٧

48．どの民族にも一人の使徒あり。されば使徒が現れ出(いず)れば彼等は公正に裁かれ、不当に遇せられることなし。（注 30）

وَلِكُلِّ أُمَّةٍ رَّسُولٌ ۖ فَإِذَا جَآءَ رَسُولُهُمْ قُضِىَ بَيْنَهُم
بِٱلْقِسْطِ وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ٤٨

注 28　不信仰者達のことは、クルアーンの中で、ただ昼間の一時間だけこの世界にいたと何回も述べられてきた。それらの節の中では全て、その事は文字通りこの世に実際にいた時間のことではなく、暗黙のうちに定められている世俗的な用事や、怠けた仕事に費やした時間のことである。彼らは仕事を怠けて人生を無駄に使ったので、たとえ彼らが実際は何年も生きたとしても、彼らはこの世にたった一日しか生きていなかったといわれるのは正当であろう。

注 29　この節は、重要な原則を定めている。迫り来る懲罰についてのおどしと警告から成っている預言は、取り消されることがある。一方、一般的な特性を持った約束を含んでいる預言で、特定の預言者に依頼するのではなく、全ての預言者達に依頼する一般的掟を具体化している預言は、取り消されたり無効になったりしない。この節は、更に、全ての預言が実現されるまでに時間制限が必要のないことを示唆するのである。

注 30　この節は律法を定める預言者に関係していると考えられる。なぜなら、全ての宗教上の律法は、律法を制定する預言者が礎を築いているからである。

49. 彼等は云う、「お前たちの言葉が真実ならば、この威嚇は何時履行されんや？」と。

وَيَقُولُونَ مَتَىٰ هَٰذَا الْوَعْدُ إِن كُنتُمْ صَادِقِينَ ﴿٤٩﴾

50. 云え、「アッラー欲せざれば、我は己れの利害を掌握する力を有せず。(注 31) それぞれの民に定められた期限あり。その期限至れば、彼等瞬時たりとも遅らすこと能わず、また早めることも能わず」と。

قُل لَّا أَمْلِكُ لِنَفْسِي ضَرًّا وَلَا نَفْعًا إِلَّا مَا شَاءَ اللَّهُ ۗ لِكُلِّ أُمَّةٍ أَجَلٌ ۚ إِذَا جَاءَ أَجَلُهُمْ فَلَا يَسْتَأْخِرُونَ سَاعَةً ۖ وَلَا يَسْتَقْدِمُونَ ﴿٥٠﴾

51. 云え、「我に教えよ、もし彼の懲罰が或いは夜に、或いは昼に急襲されたるとき、罪人はそれから如何にして逃げ出さん？ (注 32)

قُلْ أَرَأَيْتُمْ إِنْ أَتَاكُمْ عَذَابُهُ بَيَاتًا أَوْ نَهَارًا مَّاذَا يَسْتَعْجِلُ مِنْهُ الْمُجْرِمُونَ ﴿٥١﴾

52. それがお前たちに降りかかるに及んで初めてお前たちは之を信ぜんとするか？　何事ぞ、今になって信ずるとは！　お前たちは以前、その到来の速かならんことを要求したではないか？」と。

أَثُمَّ إِذَا مَا وَقَعَ آمَنتُم بِهِ ۚ آلْآنَ وَقَدْ كُنتُم بِهِ تَسْتَعْجِلُونَ ﴿٥٢﴾

53. その時不正を為したる者どもは、「永劫の刑罰を味わえ。お前たちは自ら稼ぎしものに対してのみ返報されるに非ずや」と云われん。

ثُمَّ قِيلَ لِلَّذِينَ ظَلَمُوا ذُوقُوا عَذَابَ الْخُلْدِ هَلْ تُجْزَوْنَ إِلَّا بِمَا كُنتُمْ تَكْسِبُونَ ﴿٥٣﴾

54. 彼等は汝に問わん、「そは真実なるか？」と。云え、「然り、主にかけて！　これは真実なり。お前たちはそれから逃ぐる能わず」と。(注 33)

وَيَسْتَنبِئُونَكَ أَحَقٌّ هُوَ ۖ قُلْ إِي وَرَبِّي إِنَّهُ لَحَقٌّ ۖ وَمَا أَنتُم بِمُعْجِزِينَ ﴿٥٤﴾

第六項

55. もし不義不正を行う者が地上の一切のものを所有したなら、必ずそれを以て罪を贖わんとせん。また刑罰を目のあたりにすれば、良心の苛責を表明せん。なれど審判は公正に下され、彼等は決して不当に遇せられることなかるべし。

وَلَوْ أَنَّ لِكُلِّ نَفْسٍ ظَلَمَتْ مَا فِي الْأَرْضِ لَافْتَدَتْ بِهِ ۗ وَأَسَرُّوا النَّدَامَةَ لَمَّا رَأَوُا الْعَذَابَ ۖ وَقُضِيَ بَيْنَهُم بِالْقِسْطِ ۚ وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ﴿٥٥﴾

注 31　この節は、不信仰者達の(前の節で述べた)懲罰についての要求に対する回答を表わしている。モハッマドは、彼らに次の様に質問する様命じられる。彼が、彼自身に善をなしたり、彼から邪悪をそらしたりする力を一切持たない時に、どのようにして彼らの懲罰の要求を満たすことが出来るのかと。

注 32　この節は、不信仰者達に対する非難になっている。彼らは、懲罰がいつ来るのかとか、どんな形かなど、無駄な議論にふけるべきではなく、彼らの人生に健全な変化を与えることによって、その懲罰から逃れる様努力すべきである。

注 33　あなた達は、それから逃れることは出来ない。との意味。

56．汝等知れ、およそ天地の間に存在するものはアッラーの所有なり。アッラーの約束は真実なることを知れ！　然るに大多数の者は之を知らず。

أَلَآ إِنَّ لِلّٰهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ ۗ أَلَآ إِنَّ وَعْدَ اللّٰهِ حَقٌّ وَّلٰكِنَّ أَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿٥٦﴾

57．生を与え死を賜う者は彼にして、お前たち皆いずれは彼の許に連れ戻されん。

هُوَ يُحْيٖ وَيُمِيْتُ وَإِلَيْهِ تُرْجَعُوْنَ ﴿٥٧﴾

58．おお人々よ！　主よりお前たちに訓戒が降れり、また心中の病いを癒す良薬と、信者への嚮導と慈悲とが。

يٰٓأَيُّهَا النَّاسُ قَدْ جَآءَتْكُمْ مَّوْعِظَةٌ مِّنْ رَّبِّكُمْ وَشِفَآءٌ لِّمَا فِي الصُّدُوْرِ ۙ وَهُدًى وَّرَحْمَةٌ لِّلْمُؤْمِنِيْنَ ﴿٥٨﴾

59．云え、「偏にアッラーの恩恵とその慈悲によりて。そこに、それによって、彼等を喜ばしめよ。それは彼等が秘蔵したものより優る」と。

قُلْ بِفَضْلِ اللّٰهِ وَبِرَحْمَتِهٖ فَبِذٰلِكَ فَلْيَفْرَحُوْا ۗ هُوَ خَيْرٌ مِّمَّا يَجْمَعُوْنَ ﴿٥٩﴾

60．云え、「アッラーがお前たちに下し賜えたる食物のうち、お前たちは或るものを禁じ、或るものを合法となせり、このことをお前たち考えたことがあるのか？」と。云え、「アッラーがお前たちにそれを許し給うや、それともアッラーに対して虚偽を唱える気か？」と。（注 34）

قُلْ أَرَءَيْتُمْ مَّآ أَنْزَلَ اللّٰهُ لَكُمْ مِّنْ رِّزْقٍ فَجَعَلْتُمْ مِّنْهُ حَرَامًا وَّحَلٰلًا ۗ قُلْ آٰللّٰهُ أَذِنَ لَكُمْ أَمْ عَلَى اللّٰهِ تَفْتَرُوْنَ ﴿٦٠﴾

61．アッラーに対して虚偽を唱える者どもは復活の日を如何に思案するや？　アッラーは人間に対して慈悲深くましまします、然るに彼等の大多数は感謝せず。

وَمَا ظَنُّ الَّذِيْنَ يَفْتَرُوْنَ عَلَى اللّٰهِ الْكَذِبَ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ ۗ إِنَّ اللّٰهَ لَذُوْ فَضْلٍ عَلَى النَّاسِ وَلٰكِنَّ أَكْثَرَهُمْ لَا يَشْكُرُوْنَ ﴿٦١﴾

第七項

62．汝が何かに携わり、クルアーンのいずこかを誦し、またお前たちがどんな仕事をしようと、お前たちがそれに夢中になっていることをわれらは監察す。また地に在り、天に在るものは、たとい微塵の重さでも汝の主の日より逃れること能わず。それよりも

وَمَا تَكُوْنُ فِيْ شَأْنٍ وَّمَا تَتْلُوْا مِنْهُ مِنْ قُرْاٰنٍ وَّلَا تَعْمَلُوْنَ مِنْ عَمَلٍ إِلَّا كُنَّا عَلَيْكُمْ شُهُوْدًا إِذْ تُفِيْضُوْنَ فِيْهِ ۗ وَمَا يَعْزُبُ عَنْ رَّبِّكَ مِنْ مِّثْقَالِ ذَرَّةٍ فِي الْأَرْضِ

注 34　　飲食は人間が第一に必要とする物であり、この点で人を導くことは宗教の最初の義務である。しかしながら、ある物は律法にかない、他の物は律法にかなわないと宣言するのには、医学的、道徳的、宗教的な根拠が当然である。イスラム教はこの点必要な教訓を規定しているのである。

小なるものも、或いは大なるものも逃れられず、悉く載せて明典の中にあり。（注35）

وَلَا فِي السَّمَاءِ وَلَا أَصْغَرَ مِنْ ذَٰلِكَ وَلَا أَكْبَرَ إِلَّا فِي كِتَابٍ مُبِينٍ ﴿٦٢﴾

63．見よ、アッラーが愛護する者は、恐怖もなければ悲哀もなからん――（注36）

أَلَا إِنَّ أَوْلِيَاءَ اللَّهِ لَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿٦٣﴾

64．信仰する者並びに正義を守る者は――

الَّذِينَ آمَنُوا وَكَانُوا يَتَّقُونَ ﴿٦٤﴾

65．彼等には、現世においても来世においても朗報あり。アッラーのお言葉には変更なし。そは大成功ぞかし。

لَهُمُ الْبُشْرَىٰ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَفِي الْآخِرَةِ ۚ لَا تَبْدِيلَ لِكَلِمَاتِ اللَّهِ ۚ ذَٰلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ﴿٦٥﴾

66．彼等の言葉に汝心を痛めることなかれ。権能栄誉は悉くアッラー所有なり。彼はすべてを聴き、すべてを知り給う。（注37）

وَلَا يَحْزُنْكَ قَوْلُهُمْ ۘ إِنَّ الْعِزَّةَ لِلَّهِ جَمِيعًا ۚ هُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ﴿٦٦﴾

67．見よ、天に在るもの地に在るもの皆アッラーの所有なり。アッラー以外に他の神々を祈る者は、実に併せ祀りし神々に従うに非ず。彼等はただ憶測に従うに過ぎず、推測するのみ。

أَلَا إِنَّ لِلَّهِ مَنْ فِي السَّمَاوَاتِ وَمَنْ فِي الْأَرْضِ ۗ وَمَا يَتَّبِعُ الَّذِينَ يَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ شُرَكَاءَ ۚ إِنْ يَتَّبِعُونَ إِلَّا الظَّنَّ وَإِنْ هُمْ إِلَّا يَخْرُصُونَ ﴿٦٧﴾

68．彼こそはお前たちの休息のために夜を設け、また仕事に従事するための光り輝く昼を設け給うた御方なり。此の中には神託に耳を傾ける人々へのさまざまなる神兆あり。（注38）

هُوَ الَّذِي جَعَلَ لَكُمُ اللَّيْلَ لِتَسْكُنُوا فِيهِ وَالنَّهَارَ مُبْصِرًا ۚ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَاتٍ لِقَوْمٍ يَسْمَعُونَ ﴿٦٨﴾

注35　ある物は、小さいがゆえに隠れたままになっている一方、大きい為に、一部分が隠れているような物もある。神の視力は、非常に鋭く見抜く為に、どんな物も、いかに小さくとも、神から隠れていることは出来ないし、神の視力は非常に理解力がある為に、大きい物であっても、その物の一部分たりとも神の視野から逃れることは出来ないのである。

注36　「恐れ」は人の未来の行動に、「悲しみ」は人の過去の行動に関連しているのである。

注37　6節では神の友は決して悲しまないと云われたが、ここではモハッマドは悲しまないよう命ぜられている。事実、モハッマドの悲しみは、自分の為ではなく、他の人の為であった。彼は悲しみの声をあげたのも涙を流したのも人類の為であった（18章7節参照）。

注38　夜は、人の疲れきった身体が回復するのに必要な時間であり、次の日の仕事に備えるためのものであるのと同様に、民族の生活の中で、不景気で停滞している期間というのは、彼らの休息と回復の為の時間となり、人々は気持ちを新たにし、新たな活力を吹き込むことによって未来の仕事の準備を整えるのである。

69. 彼等は云う、「アッラーは子を生み給うた」と。彼に讃えあれ！　彼は自ら満ち足り給う。天に在るもの地に在るもの悉くアッラーに属す。お前たちはこの件に関してなんの権威も有せず。お前たち知らざるくせに、アッラーについて語る気か？（注 39）

قَالُوا اتَّخَذَ اللَّهُ وَلَدًا سُبْحَانَهُ هُوَ الْغَنِيُّ لَهُ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ إِنْ عِنْدَكُمْ مِنْ سُلْطٰنٍ بِهٰذَا أَتَقُولُونَ عَلَى اللَّهِ مَا لَا تَعْلَمُونَ ﴿٦٩﴾

70. 云え、「アッラーについて虚偽を案出す者どもは、断じて幸いなかるべし」と。

قُلْ إِنَّ الَّذِينَ يَفْتَرُونَ عَلَى اللَّهِ الْكَذِبَ لَا يُفْلِحُونَ ﴿٧٠﴾

71. 彼等は此の世で束の間の享楽に浴さん。なれどその後われらが許に帰る。その時われらは彼等に厳刑酷罰を味わしめん、信ぜざりしが故に。

مَتَاعٌ فِي الدُّنْيَا ثُمَّ إِلَيْنَا مَرْجِعُهُمْ ثُمَّ نُذِيقُهُمُ الْعَذَابَ الشَّدِيدَ بِمَا كَانُوا يَكْفُرُونَ ﴿٧١﴾

第八項

72. 彼等にノアの物語を誦んで聞かせよ。すなわち彼がその民に向って云えり、「おお我が民よ、もしもわしが神とともにいることが気にさわるなら、またアッラーの神兆に基づいてお前たちに義務を喚起することが気にさわるなら——わしはアッラーに一切を任せる——さればお前たちその併せ祀る神々とともにその陰謀を奮い起こせ。お前たちの行動を躊躇するなかれ。わしに対してお前たちの陰謀を断行し、猶予を与えるなかれ。（注 40）

وَاتْلُ عَلَيْهِمْ نَبَأَ نُوحٍ إِذْ قَالَ لِقَوْمِهِ يٰقَوْمِ إِنْ كَانَ كَبُرَ عَلَيْكُمْ مَقَامِي وَتَذْكِيرِي بِآيٰتِ اللَّهِ فَعَلَى اللَّهِ تَوَكَّلْتُ فَأَجْمِعُوا أَمْرَكُمْ وَشُرَكَاءَكُمْ ثُمَّ لَا يَكُنْ أَمْرُكُمْ عَلَيْكُمْ غُمَّةً ثُمَّ اقْضُوا إِلَيَّ وَلَا تُنْظِرُونِ ﴿٧٢﴾

73. たといお前たちが背を向けるとも、わしはお前たちから報酬を請う者に非ず。我が報酬はアッラーの許にあり。而して我はアッ

فَإِنْ تَوَلَّيْتُمْ فَمَا سَأَلْتُكُمْ مِنْ أَجْرٍ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا

注 39　(a)神は、衰えと死という法則を免れている。それ故、神の仕事を引き継ぐべき息子を必要としないのである。(b)神は、自ら満ち足りたお方である故に、神が宇宙の事柄をなす時の助けとなる息子を必要としないのである。(c)“アッラーは子を生み給うた”という教義は、いかなる確証にももとづいていないし、愚かな哲学的推量や憶測をはるかに越えるものでもない。

注 40　あとの節で述べられるノアとモーゼとヨナの三預言者達の記述を注意深く精読すると、彼らの人生の話はモハッマドの人生に集約されていることがわかる。モハッマドはメッカでノアの、またメディナでモーゼの、そして再び戻ったメッカではヨナの役を勤めたのである。このことは、クルアーンで述べられている預言者達の記述が単なる物語ではなく、モハッマドの人生に起こる予定であった重大な出来事についての偉大な預言となっていることを十分に表わしている。

ラーに身を任せる者たるべきことを命ぜられたり」と。（注41）

عَلَى اللّٰهِ وَأُمِرْتُ أَنْ أَكُونَ مِنَ الْمُسْلِمِينَ ۝٧٢

74．然るに彼等は彼を拒みし故に、われらは彼と、彼と偕にある人々を箱舟に救いたり。われらは彼等をわれらが寵愛の相続者たらしめ、われらの神兆を否認した者どもは皆溺れしめたり。されば見よ、警告されたる者の末路が如何に惨たるかを！

فَكَذَّبُوهُ فَنَجَّيْنٰهُ وَمَنْ مَّعَهٗ فِي الْفُلْكِ وَجَعَلْنٰهُمْ خَلٰٓئِفَ وَأَغْرَقْنَا الَّذِينَ كَذَّبُوا بِاٰيٰتِنَا فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُنْذَرِينَ ۝٧٣

75．斯くて彼の後に、われらはそれぞれの民に使徒たちを遣わし、彼等に明証を齎せり。然れども彼等は以前にそれを拒否したが故に、それを信じようと欲せざりき。かくの如くわれらは罪人の心を堅く閉ざす。（注42）

ثُمَّ بَعَثْنَا مِنْۢ بَعْدِهٖ رُسُلًا إِلٰى قَوْمِهِمْ فَجَآءُوهُمْ بِالْبَيِّنٰتِ فَمَا كَانُوا لِيُؤْمِنُوا بِمَا كَذَّبُوا بِهٖ مِنْ قَبْلُ ۚ كَذٰلِكَ نَطْبَعُ عَلٰى قُلُوبِ الْمُعْتَدِينَ ۝٧٤

76．斯くてわれらは彼等の後に、モーゼ並びにアロンにわれらの神兆を託してファラオ並びにその長老たちのところへ遣わしたり。然れども彼等尊大に振舞いたり。彼等は罪深い民なりき。

ثُمَّ بَعَثْنَا مِنْۢ بَعْدِهِمْ مُّوسٰى وَهٰرُونَ إِلٰى فِرْعَوْنَ وَمَلَإِيْهٖ بِاٰيٰتِنَا فَاسْتَكْبَرُوا وَكَانُوا قَوْمًا مُّجْرِمِينَ ۝٧٥

77．われらより真理が彼等に至るや、彼等は云う、「こは明白なる魔術なり」と。（注43）

فَلَمَّا جَآءَهُمُ الْحَقُّ مِنْ عِنْدِنَا قَالُوٓا إِنَّ هٰذَا لَسِحْرٌ مُّبِينٌ ۝٧٦

78．モーゼは云えり、「真理がお前たちに至るや、かくの如き言葉を云うか？　魔術とな？　魔術師は栄えざるべし」と。

قَالَ مُوسٰٓى أَتَقُولُونَ لِلْحَقِّ لَمَّا جَآءَكُمْ ۖ أَسِحْرٌ هٰذَا ۖ وَلَا يُفْلِحُ السّٰحِرُونَ ۝٧٧

注41　神の預言者達に対して、いつも出される意義は、彼らは、自分達の指導権の下に新しい政治制度を確立しようと、すでに存在している政治制度に対する反逆の基準を引き上げ、彼らの同胞を支配しようともくろむというものである。この根拠のないとがめは、この節の中で反ばくされている。神の予言者達は決して自己の権力増大を求めはしない。それどころか、苦しみと奉仕の道を選ぶのである。

注42　神は、独断的に不信仰者達の心を封印したりはなさらない。がんこで不正に神の言葉に耳を傾けることを拒んで、真実を見て受け入れる能力を捨て去るのは不信仰者達自身である。彼らは自分自身で邪悪の運命を作り上げているのである。

注43　明白なる魔術(シイフルとムビーン)という二つの簡単な単語の中には、神の預言者達の敵が、彼らを敗北させ、くじかせるのに使う、殆んど全ての策略と陰謀が隠されている。真実の敵達は、宗教心の篤い人々に新しい教えはその土地の宗教を腐敗させるような魔術やごまかし以外の何ものでもないと云う。一方心の底では国の物質的利益を求めると告白する愛国者達には、新しい教えを受け入れると、国の中の異なる共同体の間で紛争や不協和が生じ、国の団結に致命的な打撃を与えると云うので、彼らは恐れて新しい教えから逃げ去るのである。

79. 彼等は云えり、「汝が来たるは、我等の父祖の奉ぜし信仰から我等を背かしめんがためなるか、而(しか)してお前たち兄弟(ふたり)はこの国を支配せんと欲するか？されど我等はお前たち両名を信じはせぬ」と。

قَالُوْٓا اَجِئْتَنَا لِتَلْفِتَنَا عَمَّا وَجَدْنَا عَلَيْهِ اٰبَآءَنَا وَتَكُوْنَ لَكُمَا الْكِبْرِيَآءُ فِي الْاَرْضِ ۭ وَمَا نَحْنُ لَكُمَا بِمُؤْمِنِيْنَ ﴿٧٩﴾

80. ファラオは云えり、「魔術の達人たちを皆我が前に連れ来れ」と。

وَقَالَ فِرْعَوْنُ ائْتُوْنِيْ بِكُلِّ سٰحِرٍ عَلِيْمٍ ﴿٨٠﴾

81. 魔術師たちが来るや、モーゼは彼等に向って云えり、「汝等投げたいものを投げよ」と。

فَلَمَّا جَآءَ السَّحَرَةُ قَالَ لَهُمْ مُّوْسٰٓى اَلْقُوْا مَآ اَنْتُمْ مُّلْقُوْنَ ﴿٨١﴾

82. 彼等投げるや、モーゼは云えり、「お前たちが齎(もたら)せるものは、単なる魔法に過ぎず。アッラーはそれを無力にせん。アッラーは悪事をなせる者の仕業(しわざ)を許さず。

فَلَمَّآ اَلْقَوْا قَالَ مُوْسٰى مَا جِئْتُمْ بِهِ ۙ السِّحْرُ ۭ اِنَّ اللّٰهَ سَيُبْطِلُهٗ ۭ اِنَّ اللّٰهَ لَا يُصْلِحُ عَمَلَ الْمُفْسِدِيْنَ ﴿٨٢﴾

83. たとい悪人どもがそれを嫌うとも、アッラーは自らの言葉によって真理を確証す」と。（注 44）

وَيُحِقُّ اللّٰهُ الْحَقَّ بِكَلِمٰتِهٖ وَلَوْ كَرِهَ الْمُجْرِمُوْنَ ﴿٨٣﴾ ع ٨ ١٣

第九項

84. されど、モーゼの民の中の少数の若者たちを除いて、モーゼに従う者はなかりき、ファラオ並びに長老たちの迫害を恐るるが故に。げにファラオは地上における暴君にして、罪人(つみびと)なりき。

فَمَآ اٰمَنَ لِمُوْسٰٓى اِلَّا ذُرِّيَّةٌ مِّنْ قَوْمِهٖ عَلٰي خَوْفٍ مِّنْ فِرْعَوْنَ وَمَلَا۟ىِٕهِمْ اَنْ يَّفْتِنَهُمْ ۭ وَاِنَّ فِرْعَوْنَ لَعَالٍ فِي الْاَرْضِ ۚ وَاِنَّهٗ لَمِنَ الْمُسْرِفِيْنَ ﴿٨٤﴾

85. モーゼは云えり、「我が民よ、もしお前たちアッラーを信ずるならば、而(しか)して神の御旨(みむね)に服従するならば、お前たちの信頼をアッラーに置き奉れ」と。

وَقَالَ مُوْسٰى يٰقَوْمِ اِنْ كُنْتُمْ اٰمَنْتُمْ بِاللّٰهِ فَعَلَيْهِ تَوَكَّلُوْٓا اِنْ كُنْتُمْ مُّسْلِمِيْنَ ﴿٨٥﴾

86. 彼等は云えり、「我等は信頼をアッラーに置き奉る。我等の主よ、我等をして不義なす民の災難に遭わしむるなかれ。

فَقَالُوْا عَلَى اللّٰهِ تَوَكَّلْنَا ۚ رَبَّنَا لَا تَجْعَلْنَا فِتْنَةً لِّلْقَوْمِ الظّٰلِمِيْنَ ﴿٨٦﴾

87. お慈悲もて、我等をかの不信心の民の暴虐より救い出し給え」と。

وَنَجِّنَا بِرَحْمَتِكَ مِنَ الْقَوْمِ الْكٰفِرِيْنَ ﴿٨٧﴾

注 44　正義は、その普及の為に正しくない手段による支援を必要としない。「終りは手段を正当化す」という言葉は、神の預言者達と彼らの真の後継者達の説法ではなかった。真実は、それ自体が持つ強さによって広まり、勝利を収めるのであって、虚偽によるのではない。

88. そこでわれらはモーゼとその兄弟に啓示して、云えり、「汝等両名、お前たちが率いる民のため、邑中に住まいを定め、(注 45) どの家も同じ方向に面して建て、礼拝を遵守せよ。それから信者たちに朗報を与えよ」と。 (注 46)

وَأَوْحَيْنَا إِلَىٰ مُوسَىٰ وَأَخِيهِ أَن تَبَوَّآ لِقَوْمِكُمَا بِمِصْرَ بُيُوتًا وَاجْعَلُوا بُيُوتَكُمْ قِبْلَةً وَأَقِيمُوا الصَّلَاةَ ۗ وَبَشِّرِ الْمُؤْمِنِينَ ﴿٨٨﴾

89. すると、モーゼは云えり、「我等の主よ、汝はファラオとその長老たちに現世の栄華と富財とを賜えり。主よ、それ故に彼等は人々を汝の道から迷わしむ。主よ、彼等の富財を消滅し、その心を頑固になし給え——痛刑を目の当りにせぬ限り信ずる気にならぬように」と。

وَقَالَ مُوسَىٰ رَبَّنَا إِنَّكَ آتَيْتَ فِرْعَوْنَ وَمَلَأَهُ زِينَةً وَأَمْوَالًا فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا رَبَّنَا لِيُضِلُّوا عَن سَبِيلِكَ ۖ رَبَّنَا اطْمِسْ عَلَىٰ أَمْوَالِهِمْ وَاشْدُدْ عَلَىٰ قُلُوبِهِمْ فَلَا يُؤْمِنُوا حَتَّىٰ يَرَوُا الْعَذَابَ الْأَلِيمَ ﴿٨٩﴾

90. 彼は云えり、「お前たちの祈禱は聴き容れらる。されば汝等両名堅忍不抜たれ、無知なる者どもの道に従うなかれ」と。

قَالَ قَدْ أُجِيبَت دَّعْوَتُكُمَا فَاسْتَقِيمَا وَلَا تَتَّبِعَانِّ سَبِيلَ الَّذِينَ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٩٠﴾

91. かくしてわれらはイスラエルの子らをして海を渡らしめたり。ファラオとその軍勢はここぞとばかり果敢に追跡せしが、溺死その身に襲いかかるに及んで、ファラオは云えり、「イスラエルの子らが信ずるお方の外に神無きを信ず。我は彼に服従する人々の一人なり」と。 (注 47)

وَجَاوَزْنَا بِبَنِي إِسْرَائِيلَ الْبَحْرَ فَأَتْبَعَهُمْ فِرْعَوْنُ وَجُنُودُهُ بَغْيًا وَعَدْوًا ۖ حَتَّىٰ إِذَا أَدْرَكَهُ الْغَرَقُ قَالَ آمَنتُ أَنَّهُ لَا إِلَٰهَ إِلَّا الَّذِي آمَنَتْ بِهِ بَنُو إِسْرَائِيلَ وَأَنَا مِنَ الْمُسْلِمِينَ ﴿٩١﴾

92. 何事ぞ、今となって！ 以前汝は服従せず、作悪者の一人なりしに非ずや。

آلْآنَ وَقَدْ عَصَيْتَ قَبْلُ وَكُنتَ مِنَ الْمُفْسِدِينَ ﴿٩٢﴾

注 45　町に住めという命令は、イスラエル人がその前に荒野に住んでいたゆえ出されたということではない。この節は、ただ、文明化した共同生活の必要性と有益性を強調しているにすぎない。弱い少数派社会の人々は、大都会では集団生活をするという一般的な傾向があるのである。

注 46　「どの家も同じ方向に面して建てる」という言葉は次のことを意味する。(1)イスラエル人は、必要な時にお互いに助け合えるように非常に近くに一緒に住むよう命じられた。というのは、この目的は人々が家を近くか又はお互い向かい合って建てる時にのみ達成されるからである。(2)彼らは全員家を一方に向けて建てなければならない。そのことは、比ゆ的に、彼らが共通の目的又は理想を持たねばならないことを意味している。(3)全ての家は同じように建っていなければならない。そこでは富者と貧者との間に真の同胞愛が得られるので皆が一つの集団として協力するということが暗示されている。なぜなら、一社会のある者は宮殿の様な住宅に住み、ある者はひどいあばら家に住むというようなところには、真の同胞愛は存在することができないからである。

注 47　これらの言葉は、誇り高いファラオの失墜の深さを物語っている。

93．されど今日われらは汝をその肉体と共に救わん。そは汝をして汝の後に来る人々への神兆たらしめんがためなり。されどまことに多くの人々がわれらの神兆を軽視す。（注 48）

فَالْيَوْمَ نُنَجِّيكَ بِبَدَنِكَ لِتَكُونَ لِمَنْ خَلْفَكَ آيَةً ۚ وَإِنَّ كَثِيرًا مِنَ النَّاسِ عَنْ آيَاتِنَا لَغَافِلُونَ ٩٣

第十項

94．われらはイスラエルの子らに立派な住まいを当てがい、いろいろと佳物を与えたり。而して知恵づくまでは彼等互に相い争うことなかりき。げに主は、復活の日において、彼等が争いし事柄に関して彼等を審判せん。

وَلَقَدْ بَوَّأْنَا بَنِي إِسْرَائِيلَ مُبَوَّأَ صِدْقٍ وَرَزَقْنَاهُمْ مِنَ الطَّيِّبَاتِ فَمَا اخْتَلَفُوا حَتَّىٰ جَاءَهُمُ الْعِلْمُ ۚ إِنَّ رَبَّكَ يَقْضِي بَيْنَهُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ فِيمَا كَانُوا فِيهِ يَخْتَلِفُونَ ٩٤

95．もし汝われらの降せしものに疑いあらば、汝以前に経典を読める人々に尋ねよ。真理が主より汝に来たれり、されば断じて疑う者の一人となるなかれ。（注 49）

فَإِنْ كُنْتَ فِي شَكٍّ مِمَّا أَنْزَلْنَا إِلَيْكَ فَاسْأَلِ الَّذِينَ يَقْرَءُونَ الْكِتَابَ مِنْ قَبْلِكَ ۚ لَقَدْ جَاءَكَ الْحَقُّ مِنْ رَبِّكَ فَلَا تَكُونَنَّ مِنَ الْمُمْتَرِينَ ٩٥

96．またアッラーの神兆を拒否するなかれ。さもなくば、汝失敗者の一人とならん。

وَلَا تَكُونَنَّ مِنَ الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِ اللَّهِ فَتَكُونَ مِنَ الْخَاسِرِينَ ٩٦

97．げに主の罰が決定された者は、信ぜざるべし、

إِنَّ الَّذِينَ حَقَّتْ عَلَيْهِمْ كَلِمَتُ رَبِّكَ لَا يُؤْمِنُونَ ٩٧

98．たとい諸々の神兆が彼等に至るとも、痛刑を目のあたり見ぬ限りは。

وَلَوْ جَاءَتْهُمْ كُلُّ آيَةٍ حَتَّىٰ يَرَوُا الْعَذَابَ الْأَلِيمَ ٩٨

注 48　あらゆる聖典と歴史の本の中でクルアーンだけがこの事実を述べているのは注目すべきことである。聖書はこのことについてふれていないし、どんな歴史書もそうである。しかし、神の言葉は何というすばらしい手法で真実を証明されたことか。3000 年以上の経過の後に、ファラオの遺体は発見され、現在カイロの博物館に保存されている。ミイラは、ファラオが怒りと愚かさをうかがわせる顔つきをした、やせた背の低い男であったことを示している。モーゼはラメス２世（Rameses II）の時代に生まれ、彼に育てられた（出エジプト記２の２～10）。しかし、モーゼが預言者としての使命を託されたのは、ラメス２世の息子のメネプタ(Meneptah)の治世の時であった（Jew. Enc.　９巻Ｐ 500 と、Enc. Bib.「パロ」と「エジプト」の個所）。

注 49　この演説は、モハッマドに対してではなく、クルアーンのあらゆる読者に対してのものである。その事については、「汝われらが降せし」という言葉もまた、この話がモハッマドにされていないことを示している。というのは、クルアーンの数個所で、それは全ての民に示されたと述べられているからである（２の 137、21 の 11）。まさに次の節が、この見方を支持している。何故ならば、マホメットはどうあっても「アラーのみしるしを疑う」人々のうちの一人ではあり得ないからである。

99. ヨナの民を除いて、信仰に入り、その信仰のおかげを被むりたる邑（注 50）なかりしは何故ぞ？　ヨナの民が信仰に入りたる時、われらは彼等からこの世における恥辱の罰を除き、しばしの給養を与えたり。（注 51）

فَلَوْلَا كَانَتْ قَرْيَةٌ آمَنَتْ فَنَفَعَهَا إِيمَانُهَا إِلَّا قَوْمَ يُونُسَ لَمَّا آمَنُوا كَشَفْنَا عَنْهُمْ عَذَابَ الْخِزْيِ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَمَتَّعْنَاهُمْ إِلَىٰ حِينٍ ﴿٩٩﴾

100. もし主が欲したりせば、地上のすべての人々は皆ともに信者とならん。汝は人々に強要して信者たらしめんとするか？（注 52）

وَلَوْ شَاءَ رَبُّكَ لَآمَنَ مَنْ فِي الْأَرْضِ كُلُّهُمْ جَمِيعًا ۚ أَفَأَنْتَ تُكْرِهُ النَّاسَ حَتَّىٰ يَكُونُوا مُؤْمِنِينَ ﴿١٠٠﴾

101. 何人もアッラーの許可なくして信仰に入る能わず。而して理解せざる者どもには天罰を加え給う。（注 53）

وَمَا كَانَ لِنَفْسٍ أَنْ تُؤْمِنَ إِلَّا بِإِذْنِ اللَّهِ ۚ وَيَجْعَلُ الرِّجْسَ عَلَى الَّذِينَ لَا يَعْقِلُونَ ﴿١٠١﴾

102. 云え、「天地に生ずるものをよく考えてみよ」と。然れども、神兆も警告も信ぜざる人々には役立たず。（注 54）

قُلِ انْظُرُوا مَاذَا فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۚ وَمَا تُغْنِي الْآيَاتُ وَالنُّذُرُ عَنْ قَوْمٍ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿١٠٢﴾

103. 彼等は、彼等以前に逝ける者が被った懲罰の日々以外に、何を期待し得るか？　云え、「待て。わしもお前たちとともに待つ者なり」と。

فَهَلْ يَنْتَظِرُونَ إِلَّا مِثْلَ أَيَّامِ الَّذِينَ خَلَوْا مِنْ قَبْلِهِمْ ۚ قُلْ فَانْتَظِرُوا إِنِّي مَعَكُمْ مِنَ الْمُنْتَظِرِينَ ﴿١٠٣﴾

104. その時われらは使徒たち並びに信者たちを救うべし。かくの如く信者を救うはわれらが義務なり。

ثُمَّ نُنَجِّي رُسُلَنَا وَالَّذِينَ آمَنُوا ۚ كَذَٰلِكَ حَقًّا عَلَيْنَا نُنْجِ الْمُؤْمِنِينَ ﴿١٠٤﴾

注 50　町に住む人々の事。

注 51　ヨナについては、クルアーンの 6 個所で述べられており、（4 章 164 節、6 章 87 節、21 章 88 節、37 章 140 節、68 章 49 節）聖書の中では、彼は"イスラエルの預言者"と述べられている（2 列王紀、14 章 25 節）。彼はニネベに行きそこでニネベの人々にのろいをかけるよう命じられた。そこで、クルアーンによると、彼は自分の民の所につかわされたとなっている。彼はイスラエル人でもなければ、ニネベにつかわされたのでもなく、ただ彼自身の民の区域に行っただけであった。聖書研究者達自らもヨナのことをイスラエル人とは認めないのである。

注 52　この節により、イスラム教はその布教の為に武力の行使を許したり支持したりしないということが、いささかの疑いもなく明らかとなっている（2 章 257 節も参照。）。

注 53　単に口先で、ある教義を述べるだけで、真の信仰を得ることは不可能である。

注 54　「天地に生ずるものをよく考えてみよ」という言葉は次のような意味である。モハッマッドの主張を成功と繁栄に導くよう運命づけている数々の要因は、天と地の両方ですでに明らかである。それで、その主張はそれ自体の美しい教訓の力で繁栄していくので、その主張を助けるのにどんな強制も必要としないのである。

第十一項

105．云え、「汝等人々よ、たといお前たちが我が宗教に疑いを抱くとも、我はお前たちがアッラー以外に拝するものを拝まず。我はお前たちに死を賜うアッラーのみを拝す。げに我は信者たるべきことを命ぜられたり。

قُلْ يٰٓاَيُّهَا النَّاسُ اِنْ كُنْتُمْ فِيْ شَكٍّ مِّنْ دِيْنِيْ فَلَآ اَعْبُدُ الَّذِيْنَ تَعْبُدُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ وَلٰكِنْ اَعْبُدُ اللّٰهَ الَّذِيْ يَتَوَفّٰىكُمْ ۖۚ وَاُمِرْتُ اَنْ اَكُوْنَ مِنَ الْمُؤْمِنِيْنَ ﴿١٠٥﴾

106．また我は神の言いつけをお前たちに伝達することも命ぜられたり、『常に神に心を向ける者として宗教に専念し、アッラーに他神を併せ祀る者どもの一人となるなかれ。

وَاَنْ اَقِمْ وَجْهَكَ لِلدِّيْنِ حَنِيْفًا ۚ وَلَا تَكُوْنَنَّ مِنَ الْمُشْرِكِيْنَ ﴿١٠٦﴾

107．アッラーの外に、汝を益することも損なうこともなし得ざる者に、祈るなかれ。もし汝之を為さば、汝は必ず不義者の一人とならん』」と。

وَلَا تَدْعُ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ مَا لَا يَنْفَعُكَ وَلَا يَضُرُّكَ ۚ فَاِنْ فَعَلْتَ فَاِنَّكَ اِذًا مِّنَ الظّٰلِمِيْنَ ﴿١٠٧﴾

108．もしアッラーが禍いによって汝を苦しめなば、彼以外に何人たりとも之を除くこと能わず。またもし幸いを授けようと思えば、何人もその恩寵を阻むこと能わず。彼は僕等の中から御心にかなう者にそれを施し給う。彼は寛大にして、慈悲深くまします。

وَاِنْ يَّمْسَسْكَ اللّٰهُ بِضُرٍّ فَلَا كَاشِفَ لَهٗٓ اِلَّا هُوَ ۚ وَاِنْ يُّرِدْكَ بِخَيْرٍ فَلَا رَآدَّ لِفَضْلِهٖ ؕ يُصِيْبُ بِهٖ مَنْ يَّشَآءُ مِنْ عِبَادِهٖ ؕ وَهُوَ الْغَفُوْرُ الرَّحِيْمُ ﴿١٠٨﴾

109．云え、「汝等人々よ、今、主より真理がお前たちに来れり。その嚮導に従う者はただ己れの利益のために導かれ、誤る者はただ己れを損なうために誤る。我はお前たちの付き添い人に非ず」と。

قُلْ يٰٓاَيُّهَا النَّاسُ قَدْ جَآءَكُمُ الْحَقُّ مِنْ رَّبِّكُمْ ۚ فَمَنِ اهْتَدٰى فَاِنَّمَا يَهْتَدِيْ لِنَفْسِهٖ ۚ وَمَنْ ضَلَّ فَاِنَّمَا يَضِلُّ عَلَيْهَا ۚ وَمَآ اَنَا عَلَيْكُمْ بِوَكِيْلٍ ؕ ﴿١٠٩﴾

110．汝に啓示されたるものに従い、アッラーが審判するまで耐え忍べ。彼は最も優れたる審判者なり。

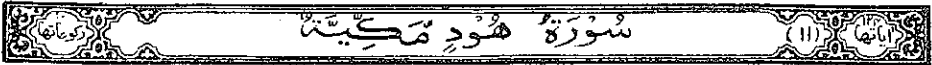
وَاتَّبِعْ مَا يُوْحٰٓى اِلَيْكَ وَاصْبِرْ حَتّٰى يَحْكُمَ اللّٰهُ ۖۚ وَهُوَ خَيْرُ الْحٰكِمِيْنَ ﴿١١٠﴾

سُوْرَةُ هُوْدٍ مَكِّيَّةٌ (١١)

フード

（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．アリフ・ラーム・ラー。（注1）こはその諸節が確定せられ、欠陥がなく、細部にわたって説明されたる経典なり。（注2）

الٓرٰ كِتٰبٌ اُحْكِمَتْ اٰيٰتُهٗ ثُمَّ فُصِّلَتْ مِنْ لَّدُنْ حَكِيْمٍ خَبِيْرٍ ②

3．そはお前たちに、アッラー以外に何者をも崇拝すべからずと教え給う。我は警告者並びに朗報伝達者としてアッラーより遣わされたる者なり。

اَلَّا تَعْبُدُوْٓا اِلَّا اللّٰهَ ؕ اِنَّنِيْ لَكُمْ مِّنْهُ نَذِيْرٌ وَّبَشِيْرٌ ③

4．お前たち主の赦しを求めて、懺悔せよ。さすれば定めの時至るまで、主はお前たちに沢山の給養を与えん。また功績のある者には恩恵を授けん。されど、もしお前たち背き去らば、我はお前たちのためにあの恐ろしい日の懲罰を恐る。（注3）

وَّاَنِ اسْتَغْفِرُوْا رَبَّكُمْ ثُمَّ تُوْبُوْٓا اِلَيْهِ يُمَتِّعْكُمْ مَّتَاعًا حَسَنًا اِلٰٓى اَجَلٍ مُّسَمًّى وَّيُؤْتِ كُلَّ ذِيْ فَضْلٍ فَضْلَهٗ ؕ وَاِنْ تَوَلَّوْا فَاِنِّيْٓ اَخَافُ عَلَيْكُمْ عَذَابَ يَوْمٍ كَبِيْرٍ ④

5．お前たちが帰り着くところはアッラーなり。而して彼は萬事において全能なり。

اِلَى اللّٰهِ مَرْجِعُكُمْ ۚ وَهُوَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ⑤

6．今彼等は彼に見られまいとして、その胸を折りたたむ。彼等その衣で体をすっかり包み隠さんとしても、彼は彼等が何を穏し、また何を顕すかを知り給う。げに彼は、彼等の胸奥に抱くものを深知し給う。（注4）

اَلَآ اِنَّهُمْ يَثْنُوْنَ صُدُوْرَهُمْ لِيَسْتَخْفُوْا مِنْهُ ؕ اَلَا حِيْنَ يَسْتَغْشُوْنَ ثِيَابَهُمْ ۙ يَعْلَمُ مَا يُسِرُّوْنَ وَمَا يُعْلِنُوْنَ ۚ اِنَّهٗ عَلِيْمٌۢ بِذَاتِ الصُّدُوْرِ ⑥

注1　われは一切を見るアッラーなり。

注2　イスラム教の根本となる教えには反論の余地が全くないので、それらに異議を申し立てるのは難しい。しかしイスラム教についてのあらゆる真実を知る為には、根本となる教えと、それらの細目の両方を学ぶ必要がある。それでも、根本のものを細目より優先すべきである。

注3　この節は、人の精神の発達では、給養の段階が、ざんげのあとに来て、それよりも価値が高いことを示している。給養は過去の罪による邪悪な影響に対して神の保護を願い求めたあと、誠実で心から神に帰依する行動のことである。神に近づくのに、これ以上のどんな良い手段を想像することが出来るであろうか。

注4　不信仰者達は、疑惑と反対の念を心に隠し持っており、それらをあらわに出さないし、取り除いたりしない。彼らが真実を受け入れるのを妨げている理由は、彼らが心の内を開き、疑いを晴らすのを彼ら自身で拒んでいる為である。

7．地上における生きとし生けるもの、みなその食物をアッラーに頼らざるものはなし。彼はそのしばしの滞在場所も、常住所も知り給う。百事(ひじゃくじ)は載(の)せて明快なる経典にあり。（注５）

وَمَا مِنْ دَآبَّةٍ فِي الْاَرْضِ اِلَّا عَلَى اللّٰهِ رِزْقُهَا وَيَعْلَمُ مُسْتَقَرَّهَا وَمُسْتَوْدَعَهَا ۚ كُلٌّ فِيْ كِتٰبٍ مُّبِيْنٍ ﴿٧﴾

8．玉座が水上に在りし頃、六日の間で（注６）天地(あめつち)を創造したるは彼なり。これは彼が、お前たちのうち誰が一番立派な振舞いをするか試さんがためなり。されど汝もし「お前たちは死後に必ず甦らしめられん」と云わば、信ぜざる者どもは必ず云わん、「これは明らかに惑わし以外の何ものにも非ず」と。（注７）

وَهُوَ الَّذِيْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ فِيْ سِتَّةِ اَيَّامٍ وَّكَانَ عَرْشُهٗ عَلَى الْمَآءِ لِيَبْلُوَكُمْ اَيُّكُمْ اَحْسَنُ عَمَلًا ۚ وَلَئِنْ قُلْتَ اِنَّكُمْ مَّبْعُوْثُوْنَ مِنْ بَعْدِ الْمَوْتِ لَيَقُوْلَنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْٓا اِنْ هٰذَآ اِلَّا سِحْرٌ مُّبِيْنٌ ﴿٨﴾

9．またわれらがもし彼等の懲罰を一定時期延ばせば、彼等は必ず云わん、「何がそれを制止するのか？」と。罰彼等に下る日は、それを避ける術(すべ)もなく、日頃嘲笑してたものに彼等は包囲されん。

وَلَئِنْ اَخَّرْنَا عَنْهُمُ الْعَذَابَ اِلٰٓى اُمَّةٍ مَّعْدُوْدَةٍ لَّيَقُوْلُنَّ مَا يَحْبِسُهٗ ۗ اَلَا يَوْمَ يَاْتِيْهِمْ لَيْسَ مَصْرُوْفًا عَنْهُمْ وَحَاقَ بِهِمْ مَّا كَانُوْا بِهٖ يَسْتَهْزِءُوْنَ ﴿٩﴾

第二項

10．もしわれらが人間をしてわれらの慈悲を味わしめ、然(しか)る後にこれを彼から取り上げたなら、彼は絶望し、恩を忘る。

وَلَئِنْ اَذَقْنَا الْاِنْسَانَ مِنَّا رَحْمَةً ثُمَّ نَزَعْنٰهَا مِنْهُ ۚ اِنَّهٗ لَيَـُٔوْسٌ كَفُوْرٌ ﴿١٠﴾

注５　神は、神のあらゆる創造物の為に、食物を用意なされた。地の底深くに住む虫やは虫類の為に、生活の手段を与えさえしたのである。人間の理性は、この様に地上や地中の無制限に存在する虫や昆虫達が、どの様に、どこから食物を得るのかを知って当惑する。人間は宇宙の神秘を解明したと考えているが、自分達が食べているいろいろな種類の食物は言うに及ばず、全ての生命体をまだ完全に知りつくした訳ではない。しかし、神はそれら全てのものに対して十分な用意をなされた。この節は、神が創造物の中でも最も卑しい物を自然学上の必要性から供給された様に、道徳的精神的な必要物として同様の供給をするのを確かに怠ることが出来なかったし、それが人間であり、神の創造物の極致であることを示している。この節は、あらゆる生き物の一時的永久的すみかだけではなく、その力が発展することが出来る最大の限界についても述べている。

注６　７章55節参照。

注７　水のことは全ての生命の源としてクルアーンの中で繰り返し述べられてきた（21章31節、25章55節、77章21節、86章７節）。「玉座が水上に在りし」という言葉は、偉大なる恩恵の表示は生き物、とりわけ全創造物の中で最高のものである人間を通して見られることを表している。この言葉は又、神の美徳は恩恵の表示の為に、クルアーンの数個所で水にたとえられてきた神の啓示のことを意味しているのかもしれない。「おまえたちは死後、必ず甦らしめられん。」という言葉には次のことが示されている。この創造のシステム自体、人は死後生命を持つことを表わしている。というのは、意志と独立心を持った生物がその中で生きなければならないこの広大な宇宙という創造物は、その生物の創造が偉大なる目的にかなう様意図されていることを明らかに

11．だがもし災難にみまわれた後、われらが彼に幸福を味わせてやると、彼は自信をもって云わん、「不幸は我より去れり」と。見よ、彼は大喜びして自慢す、

وَلَئِنْ أَذَقْنَاهُ نَعْمَاءَ بَعْدَ ضَرَّاءَ مَسَّتْهُ لَيَقُولَنَّ ذَهَبَ السَّيِّئَاتُ عَنِّي ۚ إِنَّهُ لَفَرِحٌ فَخُورٌ ﴿١١﴾

12．耐え忍び善い行いをなす者は別として。彼等には赦しと素晴らしい報奨が与えられん。

إِلَّا الَّذِينَ صَبَرُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ أُولَٰئِكَ لَهُمْ مَغْفِرَةٌ وَأَجْرٌ كَبِيرٌ ﴿١٢﴾

13．恐らく汝は、汝に啓示されたるものの一部を放棄したい気持ちになり、そのために己が胸を苦しめられる。そは彼等が「何故に宝物が彼に降されざるか、また何故に天使が彼と共に至らざるか？」と云うがためなり。汝はただ警告者に過ぎず、萬事の監視者はアッラーなり。

فَلَعَلَّكَ تَارِكٌ بَعْضَ مَا يُوحَىٰ إِلَيْكَ وَضَائِقٌ بِهِ صَدْرُكَ أَنْ يَقُولُوا لَوْلَا أُنْزِلَ عَلَيْهِ كَنْزٌ أَوْ جَاءَ مَعَهُ مَلَكٌ ۚ إِنَّمَا أَنْتَ نَذِيرٌ ۚ وَاللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ وَكِيلٌ ﴿١٣﴾

14．彼等は云う、「彼がこれを偽造したのではないか？」と。云え、「もしお前たちの言葉が真実なら、然らばこれに類する章節を十ほど作って示せ。アッラー以外にお前たちが頼れる神にお願いしてみるがいい」と。

أَمْ يَقُولُونَ افْتَرَاهُ ۖ قُلْ فَأْتُوا بِعَشْرِ سُوَرٍ مِثْلِهِ مُفْتَرَيَاتٍ وَادْعُوا مَنِ اسْتَطَعْتُمْ مِنْ دُونِ اللَّهِ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿١٤﴾

15．もし彼等神々がお前たちの挑戦に応えられぬのなら、そはアッラーの御知恵にて啓示されたるものにして、彼の他に神なきことを知れ。さればお前たち服従するや？

فَإِلَّمْ يَسْتَجِيبُوا لَكُمْ فَاعْلَمُوا أَنَّمَا أُنْزِلَ بِعِلْمِ اللَّهِ وَأَنْ لَا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ ۖ فَهَلْ أَنْتُمْ مُسْلِمُونَ ﴿١٥﴾

16．誰であれ現世の生活とその栄華を望む者には、彼等の行いに対して、われらは現世において充分に報ゆべし。決して不当に遇せらるることなし。

مَنْ كَانَ يُرِيدُ الْحَيَاةَ الدُّنْيَا وَزِينَتَهَا نُوَفِّ إِلَيْهِمْ أَعْمَالَهُمْ فِيهَا وَهُمْ فِيهَا لَا يُبْخَسُونَ ﴿١٦﴾

17．されどこれ等の者どもは、来世において火獄の外に何もなき者なり。彼等が現世でなせることは無となり、すべての振舞いは徒労に帰さん。

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ لَيْسَ لَهُمْ فِي الْآخِرَةِ إِلَّا النَّارُ ۖ وَحَبِطَ مَا صَنَعُوا فِيهَا وَبَاطِلٌ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٧﴾

18．主よりの明白な証拠に基づいて、主の神兆の真理なるを証言する彼に従い、しかも嚮導にして慈悲なるモーゼの経典によっ

أَفَمَنْ كَانَ عَلَىٰ بَيِّنَةٍ مِنْ رَبِّهِ وَيَتْلُوهُ شَاهِدٌ مِنْهُ وَمِنْ قَبْلِهِ كِتَابُ مُوسَىٰ إِمَامًا وَرَحْمَةً ۚ أُولَٰئِكَ

するのである。しかしこの世界での寿命は短く、試しと試練の一時的存在であるので、この試しと試練の一時のすみかの後、人間は報酬の永続的な永遠のすみかに進まなければならないのである。

て予言されていた者が、どうして詐欺師であるべきか？ これを信ずる人々は、真の信者なり。而してこれを信ぜず反対する徒輩は、火獄が約束の地とならん。されば、汝これを疑うなかれ。まことにこれは、汝の主よりの真理なり。されど、人々の多くは之を信ぜず。（注８）

يُؤْمِنُونَ بِهِ ۚ وَمَنْ يَكْفُرْ بِهِ مِنَ الْأَحْزَابِ فَالنَّارُ مَوْعِدُهُ ۚ فَلَا تَكُ فِي مِرْيَةٍ مِنْهُ ۚ إِنَّهُ الْحَقُّ مِنْ رَبِّكَ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يُؤْمِنُونَ ⑱

19．アッラーに対して虚偽を案出てる者より更に大なる不義者はあろうか？かかる者どもは主の御前に引き立てられ、証人たちに、「これ等の者は主に対して虚偽をなしたり」と云われん。それ、アッラーの呪詛不義なす輩の上に降る。（注９）

وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرَىٰ عَلَى اللَّهِ كَذِبًا ۚ أُولَٰئِكَ يُعْرَضُونَ عَلَىٰ رَبِّهِمْ وَيَقُولُ الْأَشْهَادُ هَٰؤُلَاءِ الَّذِينَ كَذَبُوا عَلَىٰ رَبِّهِمْ ۚ أَلَا لَعْنَةُ اللَّهِ عَلَى الظَّالِمِينَ ⑲

20．彼等はアッラーの道から人々を背かしめ、之を曲げんと謀る。その上、来世を信ぜぬ者どもなり。

الَّذِينَ يَصُدُّونَ عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ وَيَبْغُونَهَا عِوَجًا وَهُمْ بِالْآخِرَةِ هُمْ كَافِرُونَ ⑳

21．かかる徒輩は、地上において神の計画を挫折する能わず、またアッラー以外に如何なる愛護者も持つ能わじ。彼等の刑罰は倍加されん。彼等は聴く能わず、また見る能わじ。（注10）

أُولَٰئِكَ لَمْ يَكُونُوا مُعْجِزِينَ فِي الْأَرْضِ وَمَا كَانَ لَهُمْ مِنْ دُونِ اللَّهِ مِنْ أَوْلِيَاءَ ۘ يُضَاعَفُ لَهُمُ الْعَذَابُ ۚ مَا كَانُوا يَسْتَطِيعُونَ السَّمْعَ وَمَا كَانُوا يُبْصِرُونَ ㉑

22．彼等は己が身を滅ぼせり、而して彼等が案出せる神々は彼等を見捨てるべし。

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ خَسِرُوا أَنْفُسَهُمْ وَضَلَّ عَنْهُمْ مَا كَانُوا يَفْتَرُونَ ㉒

注８　この節ではモハッマドを支持して三つの主張が言葉で示された。（ａ）「彼は、主から下された明らかなみしるしの上にしっかりと立っている者であり」（ｂ）「彼に従うように主から下された証人が真であることを証明する為に」そして、（ｃ）「モーゼの聖書に彼の出現は予言されていた」と。「主から下された明らかなみしるし」というのは、モハッマドが、堕落し退廃した人々の生活に引き起こした偉大な道徳的革命のことであった。そして、彼の真実性を証明する証人達というのは、彼の後継者達の中から現われた神に支持されたる指導者たちのことであった。後継者達は教訓と慣例によって時代を通してイスラム教の真理とクルアーンを確立していった。一段と秀でた証人というのは、約束されたメシアアハマディア運動の創立者であった。次の、「モーゼの経典によって予言されていた」という言葉は、旧約聖書の中に見い出されるモハッマドについての数々の予言を示すものである（26章 197節参照）。

注９　この証人達は、神の予言者達のことであるといえる。

注10　不信仰に導いた指導者達は、彼ら自身の罪と、彼らが誤って導いた者達の罪との両方の為に罰せられるであろう。

23．彼等こそは、疑いもなく、来世において最大の失敗者なり。

لَا جَرَمَ أَنَّهُمْ فِي الْآخِرَةِ هُمُ الْأَخْسَرُونَ ٢٣

24．然しながら、信じて善行を為し、主の御前で謙虚る者──これ等は楽園の住人にして、その中に永遠に滞在せん。（注 11）

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ وَأَخْبَتُوا إِلَىٰ رَبِّهِمْ أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ الْجَنَّةِ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ٢٤

25．両者を譬うれば、盲で聾と、目も見えれば耳も聞える者との違いの如し。両者の状態等しからんや？これでもまだお前たち理解せざるか？（注 12）

مَثَلُ الْفَرِيقَيْنِ كَالْأَعْمَىٰ وَالْأَصَمِّ وَالْبَصِيرِ وَالسَّمِيعِ هَلْ يَسْتَوِيَانِ مَثَلًا أَفَلَا تَذَكَّرُونَ ٢٥

第三項

26．われらはノアをその民に遣わして、云わしめた、「実に我はお前たちのための、平凡な一介の警告者に過ぎず。

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا نُوحًا إِلَىٰ قَوْمِهِ إِنِّي لَكُمْ نَذِيرٌ مُبِينٌ ٢٦

27．お前たちはアッラーの外に何者をも崇拝するなかれ。げに我は、お前たちのために、悲惨な日の刑罰を恐る」と。（注 13）

أَنْ لَا تَعْبُدُوا إِلَّا اللَّهَ إِنِّي أَخَافُ عَلَيْكُمْ عَذَابَ يَوْمٍ أَلِيمٍ ٢٧

28．その民のうちの信ぜざる長老たちは云えり、「我等は汝を見るに、我等自身と同じ人間にすぎず。また我等が見るに、ただ我等の中で最も卑しい連中が考えなしに汝に従ったにすぎず。また我等は、お前が我等より何も優れているとは思われず。それどころか、お前は嘘つきだと我等は信ず」と。

فَقَالَ الْمَلَأُ الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ قَوْمِهِ مَا نَرَاكَ إِلَّا بَشَرًا مِثْلَنَا وَمَا نَرَاكَ اتَّبَعَكَ إِلَّا الَّذِينَ هُمْ أَرَاذِلُنَا بَادِيَ الرَّأْيِ وَمَا نَرَىٰ لَكُمْ عَلَيْنَا مِنْ فَضْلٍ بَلْ نَظُنُّكُمْ كَاذِبِينَ ٢٨

29．ノアは云えり、「我が民よ、我に告げよ。もし我、主の明証に基づいて、主の御許から慈悲を賜わりても、それがお前たちに解しがたいのなら、之を嫌悪うお前たちに、我等之を強い得べけんや？

قَالَ يَا قَوْمِ أَرَأَيْتُمْ إِنْ كُنْتُ عَلَىٰ بَيِّنَةٍ مِنْ رَبِّي وَآتَانِي رَحْمَةً مِنْ عِنْدِهِ فَعُمِّيَتْ عَلَيْكُمْ أَنُلْزِمُكُمُوهَا وَأَنْتُمْ لَهَا كَارِهُونَ ٢٩

注 11　精神的発展でより高い段階に上る為には、正しい信仰と善なる所業に加えて、神への完全な確信と服従、そして神に対する完全な信仰が不可欠である。

注 12　ここでは、信仰と不信仰との間が美しい対比で示されている。信仰者は視覚と聴覚を完全に所有する者として表わされ、不信仰者のことは、めくらでつんぼの人間にたとえられているのである。

注 13　「悲惨な懲罰」と「悲惨な日の懲罰」は異なるものである。後者の表現は、より大きな激烈さを暗示している。ある種の懲罰は非常に悲惨なものである。しかし、何百年も経過したあとでさえ、その日々の記憶が絶えず付きまとい苦痛を与え続ける様な「特定の日々」がある。現実の「懲罰」は、それが降りかかる人々にだけ苦痛を与えるのだが、「悲惨な懲罰の日々」の記憶はそれ以後の人々をさえおびえさせるものである。

30．我が民よ、我はその報酬として、お前たちに如何なる財貨も求むるに非ず。我が報酬はアッラーからのみなり。而して我はこれ等信ずる者を追い払う気はなし。彼等は必ず主に見えん。されど我は、お前たちが無知なる民だと考える。

وَيٰقَوْمِ لَآ اَسْـَٔلُكُمْ عَلَيْهِ مَالًا ۗ اِنْ اَجْرِىَ اِلَّا عَلَى اللّٰهِ وَمَآ اَنَا بِطَارِدِ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا ۗ اِنَّهُمْ مُّلٰقُوْا رَبِّهِمْ وَلٰكِنِّىْٓ اَرٰىكُمْ قَوْمًا تَجْهَلُوْنَ ﴿٣٠﴾

31．我が民よ、我もし彼等信者を逐わば、アッラーの怒りに対して我を助くるは誰ぞ？お前たちこれでもまだ気がつかぬのか？

وَيٰقَوْمِ مَنْ يَّنْصُرُنِىْ مِنَ اللّٰهِ اِنْ طَرَدْتُّهُمْ ۗ اَفَلَا تَذَكَّرُوْنَ ﴿٣١﴾

32．我はお前たちに、『我が手にアッラーの宝あり』とか、『不可視なものを知る』とか、また『我は天使なり』とも云わず。また我は、お前たちが蔑視している人々に関して『アッラーが彼等に如何なる幸福も授けざるべし』とも云わず―彼等の胸中に何があるかを一番御存知なのは、アッラーなり。それ等を云いし場合は、我は不義者の列に加わらん」と。

وَلَآ اَقُوْلُ لَكُمْ عِنْدِىْ خَزَآئِنُ اللّٰهِ وَلَآ اَعْلَمُ الْغَيْبَ وَلَآ اَقُوْلُ اِنِّىْ مَلَكٌ وَّلَآ اَقُوْلُ لِلَّذِيْنَ تَزْدَرِىْٓ اَعْيُنُكُمْ لَنْ يُّؤْتِيَهُمُ اللّٰهُ خَيْرًا ۗ اَللّٰهُ اَعْلَمُ بِمَا فِىْٓ اَنْفُسِهِمْ ۚ اِنِّىْٓ اِذًا لَّمِنَ الظّٰلِمِيْنَ ﴿٣٢﴾

33．彼等は云えり、「ノアよ、汝は我等と論争せり、しかも、しばしば長きに亘り。もし汝の言葉が真実を語るなら、汝が我等に威嚇することを今ここに齎せ」と。

قَالُوْا يٰنُوْحُ قَدْ جٰدَلْتَنَا فَاَكْثَرْتَ جِدَالَنَا فَاْتِنَا بِمَا تَعِدُنَآ اِنْ كُنْتَ مِنَ الصّٰدِقِيْنَ ﴿٣٣﴾

34．ノアは云えり、「もしアッラー欲しなば、お前たちにそれを齎すは彼のみ、而してお前たちは神の御意志を妨げること能わず。(注 14)

قَالَ اِنَّمَا يَاْتِيْكُمْ بِهِ اللّٰهُ اِنْ شَآءَ وَمَآ اَنْتُمْ بِمُعْجِزِيْنَ ﴿٣٤﴾

35．もしアッラーがお前たちを滅ぼさんと欲しなば、たとい我お前たちに忠告せんと欲しても、我が忠告はお前たちを益せざるべし。彼はお前たちの主にして、お前たちやがて彼の御許に召し寄せられん」と。(注 15)

وَلَا يَنْفَعُكُمْ نُصْحِىْٓ اِنْ اَرَدْتُّ اَنْ اَنْصَحَ لَكُمْ اِنْ كَانَ اللّٰهُ يُرِيْدُ اَنْ يُّغْوِيَكُمْ ۗ هُوَ رَبُّكُمْ ۗ وَاِلَيْهِ تُرْجَعُوْنَ ﴿٣٥﴾

注 14　この節は、懲罰の予言について次の三つの重要な規則を具体化している。(a)懲罰が現実にいつ起きるかということは、一般には明らかにされない。(b)予言は条件付きであり、神が欲するままに延期されたり取り消されたりし得るものである。(c)懲罰の予言に関して、どんな変更が起きようとも、神の不変の目的は決して変わることはない。なぜなら、不信仰者達には「神の目的をくじかせることが出来ない」からである。

注 15　この節は、ノアが、彼の民が彼を信じなかった為に非常に怒り、彼らの滅亡の為に祈った(71 章 27 節、28 節)という一般に持たれていた誤った観念を取り去るものである。というのは、この節は、ノアが自発的に

36．彼等は云うか、「彼が之を創作したるか？」と。云え、「我もし之を創作せりとすれば、罪は我にあり。然れども、我はお前たちが犯す罪には関りなし」と。

أَمْ يَقُولُونَ افْتَرَاهُ قُلْ إِنِ افْتَرَيْتُهُ فَعَلَيَّ إِجْرَامِي وَأَنَا بَرِيءٌ مِّمَّا تُجْرِمُونَ ٣٦

第四項

37．ノアにかく啓示されき、「すでに信者となりし者以外は、汝の民の何人も信ぜざるべし。故に彼等が行動について、汝憂うるなかれ。(注 16)

وَأُوحِيَ إِلَىٰ نُوحٍ أَنَّهُ لَن يُؤْمِنَ مِن قَوْمِكَ إِلَّا مَن قَدْ آمَنَ فَلَا تَبْتَئِسْ بِمَا كَانُوا يَفْعَلُونَ ٣٧

38．されば汝、われらが監視のもとに、啓示に従って方舟を造れ。悪行をなせる者どものことでわれに歎願するなかれ。彼等は溺れ死ぬ定めなり」と。

وَاصْنَعِ الْفُلْكَ بِأَعْيُنِنَا وَوَحْيِنَا وَلَا تُخَاطِبْنِي فِي الَّذِينَ ظَلَمُوا إِنَّهُم مُّغْرَقُونَ ٣٨

39．かくてノアは方舟を造りぬ。その民の長老たちそばを通り過ぎる毎に、彼を嘲弄せり。彼は云えり、「今お前たち我等を嘲り笑うとも、時至りなば、お前たちが今嘲り笑う如く、我等はお前たちを笑うべし。

وَيَصْنَعُ الْفُلْكَ وَكُلَّمَا مَرَّ عَلَيْهِ مَلَأٌ مِّن قَوْمِهِ سَخِرُوا مِنْهُ قَالَ إِن تَسْخَرُوا مِنَّا فَإِنَّا نَسْخَرُ مِنكُمْ كَمَا تَسْخَرُونَ ٣٩

40．その時お前たちは、誰が上に恥辱の刑が、永劫の刑が降るかを知るべし」と。

فَسَوْفَ تَعْلَمُونَ مَن يَأْتِيهِ عَذَابٌ يُخْزِيهِ وَيَحِلُّ عَلَيْهِ عَذَابٌ مُّقِيمٌ ٤٠

41．遂にわれらの命令は下り、大地より諸泉ほとばしり出る時、(注 17) われらは云えり、「各種類の番、雄と雌、並びに汝の家族をこの舟に乗り込ませよ。但し、すでに宣刑が降された者を除き、信者も乗せよ」と。

حَتَّىٰ إِذَا جَاءَ أَمْرُنَا وَفَارَ التَّنُّورُ قُلْنَا احْمِلْ فِيهَا مِن كُلٍّ زَوْجَيْنِ اثْنَيْنِ وَأَهْلَكَ إِلَّا مَن سَبَقَ

民の滅亡を神に祈ったのではなく、神自らが彼にそうさせることを望まれたからであったことを示すからである。

注 16　71 章 27 節、28 節に関する祈りは、この節が明示されたあとに、唱えられたものと思われる。この節によると、ノアは彼の民の中から誰も彼を信ずる者が出ないであろうという神の決定を知らされていた。それ故ノアの祈り (71 章 27 節、28 節) は、神の意志と定めに対する服従以上の何ものでもなかった。その祈りが意味したことは全て、ノアの民の滅亡についての神の定めを神が実行してもよいということであった。

注 17　ノアの洪水は、ただ単に泉から水が湧き出た為だけではなかった。54 章 12 節～13 節で明らかな様に、それの本当の原因は、にわかに大雨が降り出したということであった。雨は降って激流となり、至る所水びたしとなり、概して大雨の時みられる様に、水も又、地球の深部からわき上がり始めた。そして泉という泉はわき上がり始め、この様にして、水は天からと地からの両方で、全ての土地に洪水をもたらしたのであった。ノアは、泉が非常に沢山発見された山の多い土地に住んでいたのである。

されど、僅少を除いて、彼と共に信ぜし者はなかりき。（注 18）

عَلَيْهِ الْقَوْلُ وَمَنْ آمَنَ ۚ وَمَا آمَنَ مَعَهُ إِلَّا قَلِيلٌ ﴿٤١﴾

42．ノアは云えり、「この中に乗り込め。航行も停泊もアッラーの御名においてなせ。我が主は実に寛大にして、慈悲深くましますと」と。

وَقَالَ ارْكَبُوا فِيهَا بِسْمِ اللَّهِ مَجْرَاهَا وَمُرْسَاهَا ۚ إِنَّ رَبِّي لَغَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٤٢﴾

43．かくして方舟は彼等を乗せ、山の如き波浪の中へ進め行けり。ノアは離れて立てる我が子に向って呼びかけり、「我が息子よ、我等と偕に船に乗れ、不信心者と偕にいるなかれ」と。

وَهِيَ تَجْرِي بِهِمْ فِي مَوْجٍ كَالْجِبَالِ وَنَادَىٰ نُوحٌ ابْنَهُ وَكَانَ فِي مَعْزِلٍ يَا بُنَيَّ ارْكَبْ مَعَنَا وَلَا تَكُنْ مَعَ الْكَافِرِينَ ﴿٤٣﴾

44．すると息子は答えり、「我は山に逃げて避難せん」と。ノアは云えり、「今日という日は、アッラーが慈悲を垂れる者以外は、何人もアッラーの神慮から無事でいられる者はなし」と。その時、波浪二人の間に寄せ来り、遂に息子は溺死者の一人となれり。（注 19）

قَالَ سَآوِي إِلَىٰ جَبَلٍ يَعْصِمُنِي مِنَ الْمَاءِ ۚ قَالَ لَا عَاصِمَ الْيَوْمَ مِنْ أَمْرِ اللَّهِ إِلَّا مَنْ رَحِمَ ۚ وَحَالَ بَيْنَهُمَا الْمَوْجُ فَكَانَ مِنَ الْمُغْرَقِينَ ﴿٤٤﴾

45．やがて声ありて、云えり、「大地よ、汝の水を吸い込め。大空よ、雨降らすことを止めよ」と。すると洪水は引き、事態は治まり、方舟はジューディー山の上に漂着せり。するとまた声ありて、「滅亡せよ、悪人ども」と云えり。（注 20）

وَقِيلَ يَا أَرْضُ ابْلَعِي مَاءَكِ وَيَا سَمَاءُ أَقْلِعِي وَغِيضَ الْمَاءُ وَقُضِيَ الْأَمْرُ وَاسْتَوَتْ عَلَى الْجُودِيِّ ۖ وَقِيلَ بُعْدًا لِلْقَوْمِ الظَّالِمِينَ ﴿٤٥﴾

注 18　「各種類の」という言葉は、ここではあらゆる動物たちのことではなく、ノアが必要とした全ての動物のことを意味するのである。確かに、箱舟は世界中にいる全種類の動物のつがいを運ぶのに十分な大きさではなかった。「つがい（各種類 2 つのみ）」という言葉をつけ加えていることも、又絶対に必要であった数だけの動物が取り上げられたことを示すのである。

注 19　この節は、ノアが住んでいた場所が山々に囲まれていたことを示している。普通名詞として使われるジャバル（山）という単語は、一連の山々があったという事実を表わしている。そしてその山のうちの一つに、ノアの息子は避難所を求めたのかもしれない。事実、その場所は高い山々で囲まれた谷であったと思われる。この様な場所は、大雨の時すぐに洪水になってしまうということは驚くべきことではない。

注 20　ヤクートゥル、ハムウィによると、アル・ジュディ山は、モサル地方のチグリス河の東側にある長い一連の山々である。サッレによれば「アル・ジュディは、南側のアルメニアを、メソポタミアとカード人が住んでいたアッシリアの地方とから分ける山々のうちの一つである。その山は、カード人からカルドウ又は、ガルドウという名をとったのだが、ギリシャ人がそれをGordyoeiと変えてしまったのである……。ノアの箱舟がこれらの山の上に止まったと断言している言伝えは、かなり古代のものであったに違いない。というのは、それはキャルディーン自身の言伝えだからである（Berosusapud Joseph.Antiq……）。ノアの箱舟の名残りは、

46. ノアはその主を呼びて、云えり、「我が主よ、息子は我が家族の一員なり。汝の約束は真実であり、汝は審判者の中で最も公明正大なる御方にまします」と。

وَنَادَىٰ نُوحٌ رَّبَّهُ فَقَالَ رَبِّ إِنَّ ابْنِي مِنْ أَهْلِي وَإِنَّ وَعْدَكَ الْحَقُّ وَأَنْتَ أَحْكَمُ الْحٰكِمِينَ ﴿٤٦﴾

47. 主は云えり、「ノアよ、彼は汝の家族の一員に非ず。彼は不行跡な人間なり。されば汝が知らざることについて、われに求めを請うなかれ。われは警告す、汝が無知なる者の一人とならぬよう」と。（注 21）

قَالَ يٰنُوحُ إِنَّهُ لَيْسَ مِنْ أَهْلِكَ إِنَّهُ عَمَلٌ غَيْرُ صٰلِحٍ فَلَا تَسْئَلْنِ مَا لَيْسَ لَكَ بِهِ عِلْمٌ إِنِّيٓ أَعِظُكَ أَنْ تَكُونَ مِنَ الْجٰهِلِينَ ﴿٤٧﴾

48. ノアは云えり、「主よ、汝のお加護によりまして、我、自ら知らざることを汝に請い求めざらんことを。汝が我を赦し、慈悲を垂れ給わざれば、我は失敗者の列に加わらん」と。（注 22）

قَالَ رَبِّ إِنِّيٓ أَعُوذُ بِكَ أَنْ أَسْئَلَكَ مَا لَيْسَ لِي بِهِ عِلْمٌ وَإِلَّا تَغْفِرْ لِي وَتَرْحَمْنِيٓ أَكُنْ مِّنَ الْخٰسِرِينَ ﴿٤٨﴾

49. 声ありて、云えり、「ノアよ、われらが賜う平安と共に上陸せよ。汝並びに汝と偕にある人々から生まれる民族に祝福あれ。しばしの間享楽に与る民族もあろうが、然る後に彼等にはわれらの痛刑が降されん」と。（注 23）

قِيلَ يٰنُوحُ اهْبِطْ بِسَلٰمٍ مِّنَّا وَبَرَكٰتٍ عَلَيْكَ وَعَلٰٓى أُمَمٍ مِّمَّنْ مَّعَكَ وَأُمَمٌ سَنُمَتِّعُهُمْ ثُمَّ يَمَسُّهُمْ مِّنَّا عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٤٩﴾

又、エピファニアスの時代にここで見られたのであった……そして、ヘラクレス王はタマニーン町からアル・ジュディ山に登って行き、ノアの箱舟の場所を見たといわれている。又、以前には、"ノアの箱舟修道院"と呼ばれた有名な修道院があった。ネストリア人は、これらの山々の上のノアの箱舟が止まったとみなされた場所で、祝祭日を祝ったものであった。しかし、西暦 776 年にその修道院は、いなずまによって破壊されたのであった」（サレSele P 179, 180）……。ジュディ（Djudi）は、ジャズィラ・イブン・オマルの北西約 25 マイル、北緯 37 度 30 分、ブタン地方のそびえ立つ山の一群である……。ジュディの名声はメソポタミアの言伝えをよりどころにしている。この言伝えは、ノアの箱舟が止まった山は、アララット山ではなく、ジュディであることを確証するのである……。古い聖書の注釈書は、現在ジュディと呼ばれている山をそれとみなし、あるいはキリスト教当局によれば、Gordyeneの山がノアの避難所にされたということである（Enc. of Islam, 1巻P 1059)。バビロニアの言伝えも又、アルメニアのアル・ジュディ山をその場所とし（Jew. Enc. "Ararat"参照)、旧約聖書は、バビロンがノアの子孫の住んだ場所であることを認めるのである（創世紀 11 章 9 節)。

注 21　この節によれば、これらの人々だけがノアの家族の一員とみなされ、彼を通じて、神と真実の関係を確立したのであった。

注 22　ノアは、彼の息子が彼の家族の中に含まれていたではないかと言ったことは、罪ではなかった。それは単に人間らしい誤った判断だったのである。しかも彼はざんげをした。そのことは、ざんげをすることが、必ずしも人の罪深きことの証明とはならないことを示すのである。ざんげは又、人間の弱さからくる悪や、誤った判断の結果による悪から自分を守ってくれることもあるのだ。

注 23　この節は、ノアの子孫とは切り離して、ノアの箱舟で彼と一緒にいた信仰者達の子孫も、ノアの洪水から救われ、繁栄し、増加したことを示すものである。現在、学者達は、今地上に住んでいる者の殆どがノア

50．これはわれらが汝に啓示する、知られざる消息なり。以前は汝之を知らず、汝も汝の民もまた。されば汝、忍耐せよ。善果は神を畏れ敬う人々のものなり。（注24）

تِلْكَ مِنْ أَنبَآءِ ٱلْغَيْبِ نُوحِيهَآ إِلَيْكَ ۖ مَا كُنتَ تَعْلَمُهَآ أَنتَ وَلَا قَوْمُكَ مِن قَبْلِ هَٰذَا ۖ فَٱصْبِرْ ۖ إِنَّ ٱلْعَٰقِبَةَ لِلْمُتَّقِينَ ۝

第五項

51．われらはアードの民に、その同胞フードを遣わせり。彼は云えり、「我が民よ、唯アッラーを崇拝せよ。お前たちはアッラー以外に神を有せず。彼に配したる他神は、お前たちが作り出したものにすぎず。（注25）

وَإِلَىٰ عَادٍ أَخَاهُمْ هُودًا ۚ قَالَ يَٰقَوْمِ ٱعْبُدُوا۟ ٱللَّهَ مَا لَكُم مِّنْ إِلَٰهٍ غَيْرُهُۥٓ ۖ إِنْ أَنتُمْ إِلَّا مُفْتَرُونَ ۝

の子孫であるとの見方に賛成するのである。

ノアの洪水の話は、さまざまな国の言伝えと文学の中に見ることが出来、それらは少しずつ異なっている(Enc. Rel. & Eth.; Enc. Bib & Enc. Brit. “Deluge”参照)。この悲劇の結末は、人類の文明が起こり始めた頃、どこかで起こったと推測される。比較的文化と文明が進んだ一民族が、ある国に定住するようになる時は、常にその土地に以前からいた文明の遅れた住民達を抹殺してしまったか、彼らを非常に弱体化させたかのどちらかであったことは、歴史的によく知られた事実である。この様に人類文明の幕明け役であったノアの子孫と彼の仲間達は、他の土地に散らばって行ったのである。というのは、彼らはすでにその土地に住んでいた民族より強力であった為に、その民族を滅ぼしてしまったか、自分達の中に吸収してしまったかであった。この様にして、彼らは征服して全ての国に彼ら自身の伝統と習慣をとり入れていったに違いないのである。そしてその結果、ノアの箱舟についての言伝えも又、他の土地に紹介されていったに違いない。しかし、時の経過と共に、移住者達は、元の土地とのつながりを持たなくなり、その結果、悲劇の結末はどこかの土地での出来事とみなされる様になり、人や場所のその地方での呼び方が、元の名前にとってかわる様になったのであった。ノアの洪水は全人類への天罰ということでもなかったし、いろいろな土地の種々の言伝えが別の洪水のことを指すととられていた訳でもなかったのである。

注24　いろいろな予言者達についてのクルアーンの説明は、単なる物語として、もくろまれているのではない。それらの話はクルアーンの中に与えられているが、その理由は、それらが、モハッマド自身の人生に起こる予定であった似通った出来事についての予言的暗示を含んでいるからである。

注25　いくらかのヨーロッパの批評家達はアード人そのものの存在を否定した。今迄アラビアで発見された碑文の中で、アードがその国のある民族の名前だと述べているものは一つもないと彼らは言う。それで、クルアーンはマホメットの時代に、アラブ人の間に広くいきわたっていた人気のある伝説の中の一つを引用したにすぎなかったのだと主張するのである。この反論は誤解の上に成り立っている。事実、人種の区分には、二通りあることが一般に知られている。一つは人種全体を表わす名前であり、もう一つは、その人種のうちのある特定のグループを表わすものである。アードは単一種族の名ではなく、幾つかの種族の集まりの名であり、それらの中の異なる種族が時を変えて権力をふるったのであった。彼らは、特定の集まりの名を携える碑文を後に残したのであった。しかし彼らは全て、中心となるアード族に属していた。この名が、古代の地理の本の中にある、という事実もまたアードという名の民族が確かに住んでいたことも示すのである。クルアーンの中で述べられているアード種族は、イラームと呼ばれていた。アードの中のこのイラーム派は、紀元前500年迄続いた強大な王国を築いていた。彼らの言語はアラミ語で、ヘブライ語と同族である。アラム王国は、セム王国の滅亡後築かれ、その境界の中に、メソポタミア、パレスチナ、シリア、カルディアの全てを含んでいた。考古学の調査で、この王国の跡が発見されたのである。

アード種族は、ノアの民のすぐあとに生活していた（7章70節）。彼らは高い場所に記念物を築いた（26章

52．我が民よ、我は之がためにいかなる報酬もお前たちに求めず。我が報酬は、我を創り給うた彼の御許にのみあり。これでもお前たち理解し得ざるか？

يقوم لا أسئلكم عليه أجرا إن أجري إلا على الذي فطرني أفلا تعقلون ﴿٥١﴾

53．我が民よ、お前たちの主に赦しを請い、おすがりすれば、彼はお前たちの上に雲を送り、沛然たる雨を降らし、お前たちの力に更に力を加うべし。されば不信心者となって、彼から顔をそむけることなかれ」と。(注 26)

ويقوم استغفروا ربكم ثم توبوا إليه يرسل السماء عليكم مدرارا ويزدكم قوة إلى قوتكم ولا تتولوا مجرمين ﴿٥٢﴾

54．彼等は云えり、「フードよ、汝は我等に如何なる確証も齎さざりき。されば彼等は、汝の言葉だけでは、彼等の神々を棄てる気はなし。また汝を信ずる気もなし。

قالوا يهود ما جئتنا ببينة وما نحن بتاركي آلهتنا عن قولك وما نحن لك بمؤمنين ﴿٥٣﴾

55．我等は唯、我等の神々の或る者が汝に禍をなせり、と云う得るのみ」と。フードは答えて、云えり、「我はアッラーに立証を願う、されば汝等もまた、我は彼以外に、汝等の神々に関りなきことを証言せよ。

إن نقول إلا اعتراك بعض آلهتنا بسوء قال إني أشهد الله واشهدوا أني بريء مما تشركون ﴿٥٤﴾

56．されば前たちみなで、我に刃向かう計画を工夫せよ。我に猶予を与えるなかれ。

من دونه فكيدوني جميعا ثم لا تنظرون ﴿٥٥﴾

57．げに我は、我が主にしてお前たちの主なるアッラーを信頼し奉る。生きとし生ける者、一としてアッラーがその前髪を捕えざるはなし。(注 27) げに主は、彼を頼る人々を救うべく、正道の上に立ち給う。

إني توكلت على الله ربي وربكم ما من دابة إلا هو آخذ بناصيتها إن ربي على صراط مستقيم ﴿٥٦﴾

129節)。アラビアには、今も尚、大建造物の遺跡が残っている。これらの民の歴史は今、薄暗がりにおおわれてしまい、只、いくらかの建物の遺跡が見られるだけである (46章26節)。これらの民が住んでいた領域は、アフカーフ (46章22節) と呼ばれている。それは、文字上は、ゆるやかに曲がりくねったZ字形の砂丘を意味するが、アラビアの二つの場所に与えられた名である。一つは南部で、南アフカーフとして知られており、もう一つは北部で、北アフカーフと呼ばれている。これらの広大な地域はよく肥えた地であるが、砂漠の近くである為に、砂漠の砂が風で積み上げられて、そこに砂丘を作り上げる。アードが砂嵐によって罰せられた時、これらの砂丘が出来上がったのかもしれない。彼らの滅亡は吹きつける激しい風によって引き起こされ、彼らの主要都市を山のような砂と塵の下に埋めつくしていったのであった (69章7、8節)。

注26　アードの人々の主要な職業は農業であり、彼らの土地には井戸も灌漑用水もなかった為、耕作の為には雨水にたよっていたと思われるのである。

注27　前髪を捕えるというのは、アラブ人の古い習慣に関係している。征服された民族が捕虜として征服者の前に連れて来られた時、征服者は彼の前髪をしっかりと捕えていたか、勝利のしるしに彼らの前髪をそらせたのであった。

58．然れどもなお、たといお前たち背き去るとも、我はすでに我が使命をお前たちに伝達せり。主はお前たちの代りに、他の民で置き替えん。お前たちは彼を毫も害する能わず。げに主は、一切を監視し給う」と。

فَإِنْ تَوَلَّوْا فَقَدْ أَبْلَغْتُكُمْ مَّا أُرْسِلْتُ بِهِ إِلَيْكُمْ وَيَسْتَخْلِفُ رَبِّي قَوْمًا غَيْرَكُمْ وَلَا تَضُرُّونَهُ شَيْئًا إِنَّ رَبِّي عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ حَفِيظٌ ﴿٥٨﴾

59．かくてわれらの命令が下るや、われらはフード並びに彼と共に信ぜし人々を救えり。われらは厳刑酷罰から彼等を救助せり。

وَلَمَّا جَاءَ أَمْرُنَا نَجَّيْنَا هُودًا وَالَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ بِرَحْمَةٍ مِّنَّا وَنَجَّيْنَاهُم مِّنْ عَذَابٍ غَلِيظٍ ﴿٥٩﴾

60．アードとはこのような者なりき。彼等はその主の徴を拒否し、その使徒たちに背き、真理の敵の傲慢な命令に従えり。

وَتِلْكَ عَادٌ جَحَدُوا بِآيَاتِ رَبِّهِمْ وَعَصَوْا رُسُلَهُ وَاتَّبَعُوا أَمْرَ كُلِّ جَبَّارٍ عَنِيدٍ ﴿٦٠﴾

61．かくて彼等は、この世において、また復活の日において、呪いの言葉につきまとわれたり。見よ、アードの手合いはその主に対して恩知らずな振舞をなせり。見よ、フードの民アードは遠くへ放逐されたではないか！

وَأُتْبِعُوا فِي هَٰذِهِ الدُّنْيَا لَعْنَةً وَيَوْمَ الْقِيَامَةِ أَلَا إِنَّ عَادًا كَفَرُوا رَبَّهُمْ أَلَا بُعْدًا لِّعَادٍ قَوْمِ هُودٍ ﴿٦١﴾

第六項

62．またわれらは、サムード族にはその同胞のサーリフを遣わしたり。彼は云えり、「我が民よ、アッラーを崇拝せよ。お前たちは彼以外に神を有せず。彼はお前たちを地より興し、そこにお前たちを住ましめ給うた。されば彼に赦しを請い、帰依しまつれ。まこと我が主はいと近くにましまして、祈願に応え給う。

وَإِلَىٰ ثَمُودَ أَخَاهُمْ صَالِحًا قَالَ يَا قَوْمِ اعْبُدُوا اللَّهَ مَا لَكُم مِّنْ إِلَٰهٍ غَيْرُهُ هُوَ أَنشَأَكُم مِّنَ الْأَرْضِ وَاسْتَعْمَرَكُمْ فِيهَا فَاسْتَغْفِرُوهُ ثُمَّ تُوبُوا إِلَيْهِ إِنَّ رَبِّي قَرِيبٌ مُّجِيبٌ ﴿٦٢﴾

63．彼等は云えり、「サーリフよ、汝は我等の間で希望の的なりき。汝は我等が父祖が拝みしものを、我等に拝むなと云うか？なれど、汝が勧める教えについて、我等は訝しみ疑う」と。

قَالُوا يَا صَالِحُ قَدْ كُنتَ فِينَا مَرْجُوًّا قَبْلَ هَٰذَا أَتَنْهَانَا أَن نَّعْبُدَ مَا يَعْبُدُ آبَاؤُنَا وَإِنَّنَا لَفِي شَكٍّ مِّمَّا تَدْعُونَا إِلَيْهِ مُرِيبٍ ﴿٦٣﴾

64．サーリフは云えり、「我が民よ、云ってみよ、もし我主よりの明証の上に立ち、じきじきに特別なる慈悲を賜わっていながら、もし我主に背かば、誰が我をアッラーから衛る

قَالَ يَا قَوْمِ أَرَأَيْتُمْ إِن كُنتُ عَلَىٰ بَيِّنَةٍ مِّن رَّبِّي وَآتَانِي مِنْهُ رَحْمَةً فَمَن يَنصُرُنِي مِنَ اللَّهِ إِنْ

عَصَيْتُهُ فَمَا تَزِيدُونَنِي غَيْرَ تَخْسِيرٍ ﴿٦٤﴾

を得べけんや？されば<ruby>お前たちは、ただ我が破滅を促<rt>うなが</rt></ruby>さんとするものなり。

وَيَا قَوْمِ هَٰذِهِ نَاقَةُ اللَّهِ لَكُمْ آيَةً فَذَرُوهَا تَأْكُلْ فِي أَرْضِ اللَّهِ وَلَا تَمَسُّوهَا بِسُوءٍ فَيَأْخُذَكُمْ عَذَابٌ قَرِيبٌ ﴿٦٥﴾

65．我が民よ、これなるはアッラーがお前たちへの徴（しるし）として賜われる牝駱駝（めすらくだ）なり。されば彼女をアッラーの大地に放牧し、身近な懲罰を被（こうむ）らぬように之（これ）に危害を加えることなかれ」と。

فَعَقَرُوهَا فَقَالَ تَمَتَّعُوا فِي دَارِكُمْ ثَلَاثَةَ أَيَّامٍ ذَٰلِكَ وَعْدٌ غَيْرُ مَكْذُوبٍ ﴿٦٦﴾

66．然（しか）るに彼等はその駱駝（らくだ）の膕（ひかがみ）を切れり。そこでサーリフは云えり、「三日の間お前たちは自分の家で楽しむがよい。これは違（たが）うことなき約束なるぞ」と。（注 28）

فَلَمَّا جَاءَ أَمْرُنَا نَجَّيْنَا صَالِحًا وَالَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ بِرَحْمَةٍ مِنَّا وَمِنْ خِزْيِ يَوْمِئِذٍ إِنَّ رَبَّكَ هُوَ الْقَوِيُّ الْعَزِيزُ ﴿٦٧﴾

67．かくてわれらの命令が下るや、われらは特別な慈悲によって、サーリフ並びに彼と共に信ぜし人々を救い、また該（か）の日における恥辱からも救いたり。げに汝の主は、強力にして偉大なる者にまします。

وَأَخَذَ الَّذِينَ ظَلَمُوا الصَّيْحَةُ فَأَصْبَحُوا فِي دِيَارِهِمْ جَاثِمِينَ ﴿٦٨﴾

68．懲罰が不義を行いし者どもに襲いかかるや、彼等は家の中で伏し横たわる、

كَأَنْ لَمْ يَغْنَوْا فِيهَا أَلَا إِنَّ ثَمُودَ كَفَرُوا رَبَّهُمْ أَلَا بُعْدًا لِثَمُودَ ﴿٦٩﴾

69．さながら彼等はその中に絶（た）えて住まなかった者の如く。見よ、サムードはその主に対して恩知らずな振舞をなせり。見よ、サムードは遠くへ放逐されたではないか！（注 29）

第七項

وَلَقَدْ جَاءَتْ رُسُلُنَا إِبْرَاهِيمَ بِالْبُشْرَىٰ قَالُوا سَلَامًا

70．われらの使徒たち（注 30）は朗報を携えてアブラハムに至れり。彼等が「平安あれ」

注 28　三日の猶予というのは多分、後悔の為の最後のチャンスとしての意味があったのであろうが、不運な民はそれを利用しなかったのである。

注 29　61 節では、「フードの民」という言葉が、歴史上の理由の為に、アードという単語につけ加えられていた。というのは、実際アードは、二つの種族の名前、1 番目のアード人と 2 番目のアード人とがある。そして「フードの民」という言葉がつけ加えられていたのは、そこで意味しているのが 1 番目のアード人のことであって、2 番目の方ではないことを示す為であった。しかし、タムードは、一種族のみの名前であったので、「予言者サレの民」という言葉は省略されいてた。理由は、それをつけ加えても、どんな有益な目的にもかなわなかったであろうからである。

注 30　「使徒達」が誰であったかに関しては、異なった意見がある。ある者は、彼らを人間と考え、ある者は彼らは天使だと考える。前者の見方は、真実と現実により近いと思われる。アブラハムとロトの二人は、そ

と挨拶すると、彼も「平安あれ」と応え、ただちに焼いた犢を供したり。（注 31）

قَالَ سَلٰمٌ فَمَا لَبِثَ اَنْ جَآءَ بِعِجْلٍ حَنِيْذٍ ۝

71．然るに、アブラハムは彼等の手が犢に触れざるのを見て、彼之を怪しみ、彼等に怖れを抱きたり。すると彼等は云えり、「怖れるなかれ、我等はロトの民へ遣わされた者なり」と。（注 32）

فَلَمَّا رَاٰۤ اَيْدِيَهُمْ لَا تَصِلُ اِلَيْهِ نَكِرَهُمْ وَاَوْجَسَ مِنْهُمْ خِيْفَةً ۚ قَالُوْا لَا تَخَفْ اِنَّاۤ اُرْسِلْنَاۤ اِلٰى قَوْمِ لُوْطٍ ۝

72．その時、彼の妻そばに居合わせたれば、彼女もまた恐怖を覚えたり。そこで、われらは彼女にイサクと、イサクの後にヤコブが産まれる朗報を伝えたり。

وَامْرَاَتُهٗ قَآئِمَةٌ فَضَحِكَتْ فَبَشَّرْنٰهَا بِاِسْحٰقَ ۙ وَمِنْ وَّرَآءِ اِسْحٰقَ يَعْقُوْبَ ۝

73．彼女は云えり、「情けなや、妾はすでにいたく老い、我が夫も老人なるに、我如何にして子を産むべけんや？これはまことに不思議なことなり」と。

قَالَتْ يٰوَيْلَتٰۤى ءَاَلِدُ وَاَنَا عَجُوْزٌ وَّهٰذَا بَعْلِىْ شَيْخًا ۗ اِنَّ هٰذَا لَشَىْءٌ عَجِيْبٌ ۝

74．すると彼等は云えり、「汝はアッラーの御決定を不思議に思うか？アッラーの慈悲と祝福がこの家の人々の上にあれかし。げに彼は、讃美と栄光を受け給うべき御方なり」と。（注 33）

قَالُوْۤا اَتَعْجَبِيْنَ مِنْ اَمْرِ اللّٰهِ رَحْمَتُ اللّٰهِ وَبَرَكٰتُهٗ عَلَيْكُمْ اَهْلَ الْبَيْتِ ۗ اِنَّهٗ حَمِيْدٌ مَّجِيْدٌ ۝

の土地は初めてであったところから、神がその地方の信心深い人々に命じて、天罰が実際に彼の民に襲いかかる前に、ロトを安全な場所に連れて行くよう命じられた、という可能性がかなりある。ロトの民はすでに懲罰におどされていた（15 章 65 節）。「使徒達」は、ただ彼に約束された恐るべき懲罰の時が来たことを知らせる為にのみ来たのであった。

注 31　アブラハムの本当の名前はアブラムであった。イシュマエルの誕生の後、神御自身の命令によって、彼は「民族の父」とか「多くの民族の父」を意味するアブラハムと呼ばれる様になった。彼の子孫の一派イスラエル人はカナンに住み、他の一派はイシュマエルの民で、アラビアに住んでいた。

注 32　アブラハムは最初、「使徒達」を普通の旅人と思っていたが、彼らが焼いた子牛を食べるのを控えた時、彼は彼らが特別の使命を帯びているのに気がついたのであった。それを彼は理解することが出来なかったのであった。「彼等に怖れを抱きたり」という言葉は、アブラハムが見知らぬ旅人を恐れるという意味ではなく、彼らがその食物を口にしなかった時、彼はもてなしの作法に反することを何かしたのではないかと恐れたのであった。客はアブラハムの落ち着かない表情から彼の心の不安な状態を読み取ったと思われる。それで、彼らはすぐにアブラハムに、自分達は気分を害している訳では全くなく、食べ物をごちそうにならない理由は、自分達の恐ろしい使命が食べる気をなくさせているのだ、と言って、彼の心配を取り除いたのであった。客はこの返答もまた、彼らが天使ではなかったことを表わしている。もし彼らが天使であったなら、彼らは自分達は人間ではないから食べ物に手をつけることが出来ないのだと言ったことであろう。ロトは、ハランの息子、テラーフの孫であり、パレスチナ人、モアーブとアンモーンの祖先であった。彼はアブラハムのおいであり、カナンでアブラハムに加わったのである。

注 33　この節では、「この家の人々」という言葉は、明らかにアブラハムの妻に当てはまるのである。理由は彼女は子供を一人も産んではいなかったからである。事実、予言者　a Prophet　に関してクルアーンの中で家

75．アブラハムから恐怖が去り、朗報が彼に伝えられると、彼はロトの人々のためにわれらに対して弁護せり。（注 34）

فَلَمَّا ذَهَبَ عَنْ إِبْرَٰهِيمَ الرَّوْعُ وَجَآءَتْهُ الْبُشْرَىٰ يُجَٰدِلُنَا فِى قَوْمِ لُوطٍ ﴿٧٥﴾

76．げにアブラハムは、温厚で心優しく、幾たびとなく改悛せり。

إِنَّ إِبْرَٰهِيمَ لَحَلِيمٌ أَوَّٰهٌ مُّنِيبٌ ﴿٧٦﴾

77．「アブラハムよ、思いとどまれ。主の御決定はすでに下り、避け難き懲罰が彼等の上に来りつつあり」

يَٰٓإِبْرَٰهِيمُ أَعْرِضْ عَنْ هَٰذَآ ۖ إِنَّهُۥ قَدْ جَآءَ أَمْرُ رَبِّكَ ۖ وَإِنَّهُمْ ءَاتِيهِمْ عَذَابٌ غَيْرُ مَرْدُودٍ ﴿٧٧﴾

78．われらの使徒等がロトに至るや、彼は彼等のために心を痛め、彼等のために無力なるを感じ、「こは苦難の日なるかな」と云えり。

وَلَمَّا جَآءَتْ رُسُلُنَا لُوطًا سِىٓءَ بِهِمْ وَضَاقَ بِهِمْ ذَرْعًا وَقَالَ هَٰذَا يَوْمٌ عَصِيبٌ ﴿٧٨﴾

79．人々はあわてふためいて彼に来たれり。（注 35）彼等はこれ以前にも悪事を重ねたりき。彼は云えり、「我が民よ、ここに我が娘たちあり。彼女等は、お前たちには潔きに過ぎる。さればアッラーを畏れ、我が客人たちの前で我を辱しむるなかれ。お前たちの中には一人も正義の心の者が在らざるか？」と。（注 36）

وَجَآءَهُۥ قَوْمُهُۥ يُهْرَعُونَ إِلَيْهِ وَمِن قَبْلُ كَانُوا۟ يَعْمَلُونَ السَّيِّـَٔاتِ ۚ قَالَ يَٰقَوْمِ هَٰٓؤُلَآءِ بَنَاتِى هُنَّ أَطْهَرُ لَكُمْ ۖ فَاتَّقُوا۟ اللَّهَ وَلَا تُخْزُونِ فِى ضَيْفِىٓ ۖ أَلَيْسَ مِنكُمْ رَجُلٌ رَّشِيدٌ ﴿٧٩﴾

の人々という表現が使われている時、概してそれは、彼の妻又は妻達を指しているのである（28 章 13 節、33 章 34 節）。

注 34　　創世紀 18 章 21 節－33 節参照。

注 35　　ソドムとゴモラの二つの町の住人は、街道で旅人達から金品を略奪したものであった。（Jew. Enc. “Sodom”参照）。当然彼らは常に報復を恐れていた。特にソドムの住人は、実際隣国と戦争状態にあった（創世紀 14 章）。彼らはよそ者が町に入ることを歓迎しなかったのである。ロトは、神の全ての予言者達の様に、自然に旅人の世話をし、もてなしたものであった（15 章 71 節）。彼の民は、いつも不安がって、繰り返し彼にその習慣を捨てるよう警告していたので、彼が旅人である「使徒達」を家に招き入れた時、彼らは激怒し、怒った顔つきで彼の家にとんで来た。なぜなら、彼らが何度も抗議しているのを無視して彼がよそ者に宿をかす為に、今度こそ彼を罰する良い機会を得たと思ったのであった（15 章 68 節～71 節）。

注 36　　ロトは、彼らの今迄の悪い行いから考えて、何か悪いことをして客の前で彼をはずかしめはしないかと恐れたことを、この節は表わしている。ここではその悪い行いがどんなものかについては特に言及していない。彼らは邪（よこしま）な民であったので、ロトは彼らが彼に何か害を与えるかもしれないことを、当然理解していた。それで彼は彼らに、もし彼らが本当に彼がよそ者と結託して彼らに害をなすかもしれないと恐れるのなら、彼の娘達を拘留し彼女達を罰することによって彼への怒りをぶちまけることができるであろう、と言った。それは彼らが取り上げるのに、より良くより清浄な道であった。なぜなら、その方法なら、彼らは彼の客を侮辱するという恥ずべき行動を避けることもしたであろうからである。あるいは、その意味は次の様であるかもしれない。ロトは町の尊ぶべき高齢者として人民自身の妻達のことを我が娘達と呼んだのかもしれない。彼女達はその町の人たちにとって清浄だと言った。

80．彼等は答えり、「汝は、我等が汝の娘たちに対して何も求めることなきことを知り、また我等が何を欲するかを知る」と。（注37）

قالوا لقد علمت ما لنا في بناتك من حق وإنك لتعلم ما نريد ۝٨٠

81．彼は云えり、「我にお前たちを処理する力あらんことを、或いは、我を擁護してくれる強力な支えを得んことを」と。（注38）

قال لو أن لي بكم قوة أو آوي إلى ركن شديد ۝٨١

82．すると使徒たちは云えり、「ロトよ、我等は汝の主の使徒なり。（注39）彼等は決して汝を害する能(あた)わず。されば夜の間に汝の家族と共に立ち去れ。而(しか)してお前たち家族の何人(なんびと)をも後を振り向かしめるな、但し汝の妻は除く。彼等の身に降りかかることが、彼女にも起らん。彼等の定めの刻限は朝なり。朝はすでに近きに非ずや？」と。

قالوا يا لوط إنا رسل ربك لن يصلوا إليك فأسر بأهلك بقطع من الليل ولا يلتفت منكم أحد إلا امرأتك إنه مصيبها ما أصابهم إن موعدهم الصبح أليس الصبح بقريب ۝٨٢

83．かくてわれらの命令が下るや、われらはその邑(まち)を転覆し、泥石をその上に雨と注ぎ積らせたり、（注40）

فلما جاء أمرنا جعلنا عاليها سافلها وأمطرنا عليها حجارة من سجيل منضود ۝٨٣

84．汝の主の決定を印(しる)した泥石を。かかる刑罰は今日の不義者を隔てること遠からざるものなり。

مسومة عند ربك وما هي من الظالمين ببعيد ۝٨٤

النصف ع

第八項

85．それからまたミディアンの民にわれらはその同胞(はらから)シュアイブを遣わしたり。彼は云え

وإلى مدين أخاهم شعيبا قال يا قوم اعبدوا

注37　ロトが町ですでに結婚している彼の娘達（創世紀19章15節）を人質として提案した時、彼の民は女性を人質としてとることは彼らの習慣に反するので、その提案を受けるのを拒否した(Enc. Brit.)。「我等が汝の娘たちに対して何も求めることなき」という言葉は、彼らが多くの注解者がいっている様な娘達のせいだとする動機を持ってやって来たのではなかったことを示している。というのは、ロトの民の様に道徳的に堕落し、腐敗した民は、肉欲の情熱を満足させることに関して、権利があるとかないとか、正しいとか正しくないとかいう様な疑問はいだかないものであるからであった。“我等が何を欲するかを知る”という言葉は、「我々の望みは、よそ者を我々に引き渡すことだとお前は知っているはず」ということを意味するのである。

注38　お前達は、私が客を追い払うべきだと主張して、私の上に屈辱がふりかかるのを望んでいるが、私はその屈辱から救われる様神に祈るであろう。

注39　「使徒達」は、ロトに警告を与え、どこへ行くかを導くよう神から命令されていた隣国の高潔な人達であった。

注40　ロトの民は恐ろしい地震によって滅亡したと思われる。激しい地震は、しばしば地球のある部分を上下にひっくり返し、土の破片が空中に吹き飛び、そして落ちるのである。

り、「我が民よ、アッラーを崇拝せよ。お前たちは彼以外に神を有せず。度量衡を不足するなかれ。お前たちは繁栄しているようであるが、我はお前たちのために滅亡の日のその刑罰を恐る。（注 41）

اللّٰهَ مَا لَكُمْ مِّنْ اِلٰهٍ غَيْرُهٗ ؕ وَلَا تَنْقُصُوا الْمِكْيَالَ وَالْمِيْزَانَ اِنِّيْٓ اَرٰىكُمْ بِخَيْرٍ وَّاِنِّيْٓ اَخَافُ عَلَيْكُمْ عَذَابَ يَوْمٍ مُّحِيْطٍ ﴿٨٥﴾

86．我が民よ、度量衡は公正に十分に計れ、他人のものを詐取するなかれ、不正を行って地上に騒乱を引き起すなかれ。

وَيٰقَوْمِ اَوْفُوا الْمِكْيَالَ وَالْمِيْزَانَ بِالْقِسْطِ وَلَا تَبْخَسُوا النَّاسَ اَشْيَآءَهُمْ وَلَا تَعْثَوْا فِى الْاَرْضِ مُفْسِدِيْنَ ﴿٨٦﴾

87．アッラーがお前たちの手許に遺すもののほうがお前たちのためには一層よい、もしお前たち信者ならば。されど我はお前たちの監守者たる身に非ず」と。

بَقِيَّتُ اللّٰهِ خَيْرٌ لَّكُمْ اِنْ كُنْتُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ۚ وَمَآ اَنَا عَلَيْكُمْ بِحَفِيْظٍ ﴿٨٧﴾

88．彼等は云えり、「シュアイブよ、汝の教えは、我等が父祖の崇めしものを捨つるべしと命じ、且つ我等の財産を己が意のままにすべからずと命ずるのか？汝はほんとに、自分が聡明であり、公正な者だと思い込んでいる者よ」と。

قَالُوْا يٰشُعَيْبُ اَصَلٰوتُكَ تَاْمُرُكَ اَنْ نَّتْرُكَ مَا يَعْبُدُ اٰبَآؤُنَآ اَوْ اَنْ نَّفْعَلَ فِىْٓ اَمْوَالِنَا مَا نَشٰٓؤُا ؕ اِنَّكَ لَاَنْتَ الْحَلِيْمُ الرَّشِيْدُ ﴿٨٨﴾

89．彼は云えり、「我が民よ、我に告げよ、もし我、主から賜われる明証の上に立ち、且つ主は我に手厚い給養をじきじきに賜われり、お前たち之を主に何と回答せん？我はお前たちに禁じたることを、かげで之を行わんと欲せず。我は出来得る限り世の中の物事を正しくせんと願うのみ。アッラーによる以外には、我は何事も成し遂げる力を有さず。我は彼を頼り、而して彼のお傍に帰り行く。（注 42）

قَالَ يٰقَوْمِ اَرَءَيْتُمْ اِنْ كُنْتُ عَلٰى بَيِّنَةٍ مِّنْ رَّبِّىْ وَرَزَقَنِىْ مِنْهُ رِزْقًا حَسَنًا ؕ وَمَآ اُرِيْدُ اَنْ اُخَالِفَكُمْ اِلٰى مَآ اَنْهٰىكُمْ عَنْهُ ؕ اِنْ اُرِيْدُ اِلَّا الْاِصْلَاحَ مَا اسْتَطَعْتُ ؕ وَمَا تَوْفِيْقِىْٓ اِلَّا بِاللّٰهِ ؕ عَلَيْهِ تَوَكَّلْتُ وَاِلَيْهِ اُنِيْبُ ﴿٨٩﴾

注 41　マディアンは、アブラハムの三番目の妻ケトラの息子であった。（創世紀 25 章 1 節、2 節）。彼の子孫は皆マディアンと呼ばれた。彼らの首都もまたマディアンと呼ばれた。この町はアラビア海岸上、海から 10 キロ入り込んだアクバ湾にあった。マディアンの子孫がヘジャーズの北に住み、彼らがこの町を作り上げたのである。モーゼがファラオから避難する為に逃げたのはここであったし、彼が紅海をわたったあと、イスラエル人と共にいたのはマディアンの近くであった。7 章 86 節も参照。

注 42　シュエーブに反対する者達は、彼は彼らが詐欺を働くのを押さえて、自分の仕事を進めようとしていると疑ったのである。

90．我が民よ、我に反抗して、ノアの民やフードの民、またサーリフの民が遭遇した如き運命に自分自身を導き行かしむるな。特にロトの民はお前たちと隔たること遠からず。（注 43）

وَيٰقَوْمِ لَا يَجْرِمَنَّكُمْ شِقَاقِيْٓ اَنْ يُّصِيْبَكُمْ مِّثْلُ مَآ اَصَابَ قَوْمَ نُوْحٍ اَوْ قَوْمَ هُوْدٍ اَوْ قَوْمَ صٰلِحٍ ۚ وَمَا قَوْمُ لُوْطٍ مِّنْكُمْ بِبَعِيْدٍ ﴿٩٠﴾

91．さればお前たちの主に赦しを請い、誠意をもっておすがりせよ。主はまことに慈悲深く、愛に満ちたお方でいらせられる」と。

وَاسْتَغْفِرُوْا رَبَّكُمْ ثُمَّ تُوْبُوْٓا اِلَيْهِ ۚ اِنَّ رَبِّيْ رَحِيْمٌ وَّدُوْدٌ ﴿٩١﴾

92．彼等は云えり、「シュアイブよ、我等、汝の云うことを解せず、我等は汝が我等の中の弱者と見たり。汝の一族のためならざりせば、我等は汝を石にて打たん。汝は我等の中で些かの権威も有せず」と。

قَالُوْا يٰشُعَيْبُ مَا نَفْقَهُ كَثِيْرًا مِّمَّا تَقُوْلُ وَاِنَّا لَنَرٰىكَ فِيْنَا ضَعِيْفًا ۚ وَلَوْلَا رَهْطُكَ لَرَجَمْنٰكَ وَمَآ اَنْتَ عَلَيْنَا بِعَزِيْزٍ ﴿٩٢﴾

93．彼は云えり、「我が民よ、お前たちはアッラーよりも我が一族を重視するのか？粗略にもお前たちの背後に彼を投げ捨てり。げに我が主はお前たちの所業を遍くみそなはし給う。

قَالَ يٰقَوْمِ اَرَهْطِيْٓ اَعَزُّ عَلَيْكُمْ مِّنَ اللّٰهِ ۭ وَاتَّخَذْتُمُوْهُ وَرَآءَكُمْ ظِهْرِيًّا ۭ اِنَّ رَبِّيْ بِمَا تَعْمَلُوْنَ مُحِيْطٌ ﴿٩٣﴾

94．我が民よ、自分が思うがままに振舞え、我も思うままに行わん。お前たちは程なく思い知るべし、誰が上に恥ずべき刑罰が下るか、誰が嘘つきであるかを。されば待て、我もまたお前たちと共に待たん」と。（注 44）

وَيٰقَوْمِ اعْمَلُوْا عَلٰى مَكَانَتِكُمْ اِنِّيْ عَامِلٌ ۭ سَوْفَ تَعْلَمُوْنَ ۙ مَنْ يَّاْتِيْهِ عَذَابٌ يُّخْزِيْهِ وَمَنْ هُوَ كَاذِبٌ ۭ وَارْتَقِبُوْٓا اِنِّيْ مَعَكُمْ رَقِيْبٌ ﴿٩٤﴾

95．われらの命令が実施されるに及んで、われらはシュアイブ並びに彼と共に信じたる人々を特別な慈悲によって救いたり。然るに、懲罰は悪人どもを捕えたれば、彼等は皆自分の家の中で仆れ伏す、

وَلَمَّا جَآءَ اَمْرُنَا نَجَّيْنَا شُعَيْبًا وَّالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مَعَهٗ بِرَحْمَةٍ مِّنَّا وَاَخَذَتِ الَّذِيْنَ ظَلَمُوا الصَّيْحَةُ فَاَصْبَحُوْا فِيْ دِيَارِهِمْ جٰثِمِيْنَ ﴿٩٥﴾

注 43　この節は次のことを示す。シュエーブはノア、フード、サーレ、ロト、アブラハムの後に現れたのであるが、モーゼの時代よりは前であった。だからモーゼとその民は、まさにシュエーブの民の区域内に住んでいたにもかかわらず、彼はここでモーゼの民についてふれていないからである。

注 44　彼らは、彼ら自身の知識と計画に応じて、働き続けねばならず、彼は彼の信仰 (Faith) に導かれて働いたことを、この節も表わしているといえよう。その結果は、誰が神の意志に従って働いたか、誰が神の目的に逆らって失敗させようと企てていたかを示したのであった。

96．さながら彼等は絶えてその家に住めることなかりし如くなりき。滅亡せよミディアン、かつてサムードが滅びし如く。

كَأَن لَّمْ يَغْنَوْا فِيهَا ۗ أَلَا بُعْدًا لِّمَدْيَنَ كَمَا بَعِدَتْ ثَمُودُ ﴿٩٦﴾

第九項

97．われらはまた、数々の神兆と明瞭なる権能を授けてモーゼを、

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا مُوسَىٰ بِآيَاتِنَا وَسُلْطَانٍ مُّبِينٍ ﴿٩٧﴾

98．ファラオとその族長たちのもとに遣わしたり。然るに、彼等はファラオの命令に従えり。されどその命令は全く正しいものに非ざりき。

إِلَىٰ فِرْعَوْنَ وَمَلَئِهِ فَاتَّبَعُوا أَمْرَ فِرْعَوْنَ ۖ وَمَا أَمْرُ فِرْعَوْنَ بِرَشِيدٍ ﴿٩٨﴾

99．復活の日には、ファラオは人民を率い、彼等を火獄の中へ導き行かん、恰も家畜が水飼場に導かれる如く。行き着ける水飼場こそ禍なるかな。

يَقْدُمُ قَوْمَهُ يَوْمَ الْقِيَامَةِ فَأَوْرَدَهُمُ النَّارَ ۖ وَبِئْسَ الْوِرْدُ الْمَوْرُودُ ﴿٩٩﴾

100．彼等は現世で呪詛につきまとわれ、復活の日に於て、賜わるものは禍なり。（注45）

وَأُتْبِعُوا فِي هَٰذِهِ لَعْنَةً وَيَوْمَ الْقِيَامَةِ ۚ بِئْسَ الرِّفْدُ الْمَرْفُودُ ﴿١٠٠﴾

101．これは、われらが汝に語る、滅亡せし邑々の消息なり。或るものは今も立っているが、中にはすでに刈り入れ時の如くなぎ倒されたるものもあり。

ذَٰلِكَ مِنْ أَنبَاءِ الْقُرَىٰ نَقُصُّهُ عَلَيْكَ ۖ مِنْهَا قَائِمٌ وَحَصِيدٌ ﴿١٠١﴾

102．われらは彼等を害せざりき、害せしは己れ自らなり。アッラー以外に彼等が祈りし神々は、主の命令が実施されるに及んで、毫も彼等を益することなかりき。いたずらに彼等の破滅を促したにすぎず。（注46）

وَمَا ظَلَمْنَاهُمْ وَلَٰكِن ظَلَمُوا أَنفُسَهُمْ ۖ فَمَا أَغْنَتْ عَنْهُمْ آلِهَتُهُمُ الَّتِي يَدْعُونَ مِن دُونِ اللَّهِ مِن شَيْءٍ لَّمَّا جَاءَ أَمْرُ رَبِّكَ ۖ وَمَا زَادُوهُمْ غَيْرَ تَتْبِيبٍ ﴿١٠٢﴾

103．かくの如きは、主が悪事をなせる邑々を捕える、その掴み方なり。げに、その掴み方は、痛烈にして苛酷なり。

وَكَذَٰلِكَ أَخْذُ رَبِّكَ إِذَا أَخَذَ الْقُرَىٰ وَهِيَ ظَالِمَةٌ ۚ إِنَّ أَخْذَهُ أَلِيمٌ شَدِيدٌ ﴿١٠٣﴾

注45　この節は、次のことを示す。ファラオは、彼の民から神に逆らう彼らのささえとみなされていたのだが、復活の日に、彼は彼らにとって禍のささえであったことを証明することになろう。というのは、彼は彼らを地獄へつき落とすだけでなく、彼自身彼らと共にそこへ入って行くであろうからである。

注46　神は決して不正に民を罰することはないし、彼らの上に懲罰をもたらすのは、彼ら自身の悪事である、という事実をクルアーンは繰り返し強調するのである。そのことは、運命とか、人は先の解らない宿命のえじきである、という理論を否定するものである。神は公正さとか真の理由もなしに独断的に民族の興亡を作り上げるという見解をも否定するのである。そういう訳で、懲罰のことを述べる箇所ではどこでも、懲罰とか報復は人間自身の行いの結果であることを付け加えずにはおけないのである。

104．げにその中には、来世の懲罰を恐れる者への神兆（注 47）あり。その日こそ人類すべてが召集せられ、一切衆生にその処分が目撃されん日なり。（注 48）

إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً لِّمَنْ خَافَ عَذَابَ الْآخِرَةِ ۚ ذَٰلِكَ يَوْمٌ مَّجْمُوعٌ لَّهُ النَّاسُ وَذَٰلِكَ يَوْمٌ مَّشْهُودٌ ﴿١٠٤﴾

105．われらは之を、一定期限だけ延期するにすぎず。（注 49）

وَمَا نُؤَخِّرُهُ إِلَّا لِأَجَلٍ مَّعْدُودٍ ﴿١٠٥﴾

106．その日来れば、何人も主の許しなしに発言する能わず。而して或る者は不幸に、また或る者は幸福を得ん。

يَوْمَ يَأْتِ لَا تَكَلَّمُ نَفْسٌ إِلَّا بِإِذْنِهِ ۚ فَمِنْهُمْ شَقِيٌّ وَسَعِيدٌ ﴿١٠٦﴾

107．不幸にならん徒輩は劫火の中に入れられ、そこにて嘆き、涙にむせぶばかりなるべし。

فَأَمَّا الَّذِينَ شَقُوا فَفِي النَّارِ لَهُمْ فِيهَا زَفِيرٌ وَشَهِيقٌ ﴿١٠٧﴾

108．主の思し召しがなければ、天地が存続する限りそこに住みとどまらん。げに汝の主は、欲することを成し遂げ給う。（注 50）

خَالِدِينَ فِيهَا مَا دَامَتِ السَّمَاوَاتُ وَالْأَرْضُ إِلَّا مَا شَاءَ رَبُّكَ ۚ إِنَّ رَبَّكَ فَعَّالٌ لِّمَا يُرِيدُ ﴿١٠٨﴾

109．然るに、幸福になるべき者は楽園に入り、主の思し召しがなければ、天地が存続する限りそこに住みとどまらん―つまり絶ゆることなき恩賞を。（注 51）

وَأَمَّا الَّذِينَ سُعِدُوا فَفِي الْجَنَّةِ خَالِدِينَ فِيهَا مَا دَامَتِ السَّمَاوَاتُ وَالْأَرْضُ إِلَّا مَا شَاءَ رَبُّكَ ۖ عَطَاءً غَيْرَ مَجْذُوذٍ ﴿١٠٩﴾

注 47　ここでの「神兆」とは、「戒め」を意味する。

注 48　人は完全に独立している訳ではない。人は、環境と教育と遺伝に影響されている。それで人の特別な行動を正しく判定する為には、その行動を導き影響を与えるまわりの全ての状況と環境を考慮に入れる必要がある。

注 49　猶予できる「時期」とは、すでにわかっている範囲の中で動くのであり、それはその範囲の中で環境によって容易に変わるのである。たとえば、人の寿命にはある限界がある。つまり、それは、その限界の中で短くなったり長くなったり出来るのである。しかし廃棄されることが出来ず、取り消しも出来ないこの「時期」とは、全ての民の滅亡に関係するのである。

注 50　クルアーンのこの表現は、非常に延長された時期を表わす慣用語句である。クルアーンは、地獄の懲罰が永遠に続くものではないことを啓示するのである。

注 51　ヒンズー教によれば、天国も地獄も（即ち、報償と懲罰）期間が限られている。そして懲罰を受けたり、彼の行いの報償を受けた後、人は再びこの世に送り返されるのである。セム族の宗教のうちユダヤ教は、ユダヤ人を地獄の拷問から殆んど解放している一方、ユダヤ人以外には楽園を否定するものである。キリスト教によれば、その数派のものは、天国は最終的には結末を迎える（Tafsir Kabir）という信念を持っているけれど、天国も地獄も永遠である。イスラム教は、この点についてはこれら全ての宗教とは根本的に異なるもの

110.　されば彼等が崇拝するものについて思い煩うことなかれ。彼等はただ以前父祖が崇拝した如く、崇拝しているに過ぎず。われらは彼等に、その取り分を減らすことなく支給せん。

فَلَا تَكُ فِي مِرْيَةٍ مِّمَّا يَعْبُدُ هَٰٓؤُلَآءِ ۚ مَا يَعْبُدُونَ إِلَّا كَمَا يَعْبُدُ آبَآؤُهُم مِّن قَبْلُ ۚ وَإِنَّا لَمُوَفُّوهُمْ نَصِيبَهُمْ غَيْرَ مَنقُوصٍ ﴿١١٠﴾

第十項

111.　昔、われらはモーゼに経典を与えしが、これに関して異論生じたり。もし汝の主よりすでに発せられたる言葉なかりせば、問題は遠い以前に彼等の間ですでに解決済な筈。然るに、彼等は之について今だに不安なる疑惑を抱く。（注52）

وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ فَاخْتُلِفَ فِيهِ ۚ وَلَوْلَا كَلِمَةٌ سَبَقَتْ مِن رَّبِّكَ لَقُضِيَ بَيْنَهُمْ ۚ وَإِنَّهُمْ لَفِي شَكٍّ مِّنْهُ مُرِيبٍ ﴿١١١﴾

112.　汝の主は彼等の所業に応じて、十分に報い給う。げに彼は、彼等のなせることを知悉し給う。

وَإِنَّ كُلًّا لَّمَّا لَيُوَفِّيَنَّهُمْ رَبُّكَ أَعْمَالَهُمْ ۚ إِنَّهُ بِمَا يَعْمَلُونَ خَبِيرٌ ﴿١١٢﴾

113.　されば、汝並びに汝と共に神に帰依した者は、命ぜられた通り真直に進み行け。また汝等則を越えるなかれ、信ずる者よ、彼はお前たちのなせることをみそなわし給うが故に。（注53）

فَاسْتَقِمْ كَمَآ أُمِرْتَ وَمَن تَابَ مَعَكَ وَلَا تَطْغَوْا ۚ إِنَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ﴿١١٣﴾

である。それによると、天国は永遠永劫である。一方、地獄は一時的であり、期間に限りがある。イマム・アハマド・ビン・ハンバルは、その影響についてアブドゥラ・ビン・アムル・ビン・アル・アースによって報告されているとして、モハッマドの言葉を引用する。即ち、「地獄の上にはそのよろい戸がお互いにぶつかり合うであろう日が来て、その中には何も残らないであろう。それは、地獄の仲間達が何世紀もそこで過ごした後、起こるであろう。」(Musnad)。この言伝えによれば、地獄に関して使われているハリディーン（永続的）という単語は、「幾世紀もの間続く」ということを意味しているだけである。アブドゥラ・ビン・ウマルとジャビルは、イマム・ハンバルの意見に賛成している。アブ・サイド・アルフドゥリも同様のハディース（ブハリ）を引用している。しかしながら、いくらかの著名な宗教権威者達—その中でもイブン・テミヤとイブン・カイエムは次の様に主張する。邪まな不信仰者達は、地獄に永久にとどめられてしかるべき者であるが、地獄そのものが、ある日、神の御慈悲によって消滅するであろうし、地獄がなくなった時には当然地獄の中の住人はいなくなるであろうと (Faith)。クルアーンは、天国については、地獄に関して使った様な表現ではなく、決して終ることのない報償（41章9節、84章26節、95章7節）という言葉を使った。更に 101章10節～12節の中では、地獄は母にたとえられ、胎児は子供の体が形作られ、さまざまな器官が完成する迄母親の子宮の中に留まると述べられている。同じ様に、地獄に落とされていくような不運な人々は、彼らの諸器官の機能が完全な発達を遂げて、主の美しい御顔を見ることが出来る様になる迄そこに留まるであろう。

注52　人間の罪はあまりにもひどかったので、もしも、人類は精神的に発達していくよう作られて、その結果、神の御慈悲をうける者になるであろうという前もって定められた命令がなかったなら、人間はとっくの昔に滅亡させられてしまっていたであろう（7章 157節、11章 120節、51章57節参照)。

注53　モハッマドだけは、神の意志に従って、彼自身の人生を形作るよう要求されてはいなかった。彼は彼を信ずる全ての人達も、彼の例にならうのを見なければならなかった。それはこの荘重な二重の責任を理解す

114. 劫火(ごうか)を免(まぬが)れんとするならば、悪事をする者どもに心を傾けるなかれ。お前たちは、アッラーの外に、愛護者もなく、また助ける者とてなかるべし。（注 54)

وَلَا تَرْكَنُوٓا إِلَى الَّذِينَ ظَلَمُوا فَتَمَسَّكُمُ النَّارُ وَمَا لَكُم مِّن دُونِ اللَّهِ مِنْ أَوْلِيَآءَ ثُمَّ لَا تُنصَرُونَ ﴿١١٣﴾

115. 昼間の両端に、並びに昼に近い夜の時刻に、礼拝を遵守せよ。げに善行は諸悪を駆逐(くちく)す。これは主を念ずる人々への訓戒なり。

وَأَقِمِ الصَّلَوٰةَ طَرَفَيِ النَّهَارِ وَزُلَفًا مِّنَ الَّيْلِ إِنَّ الْحَسَنَٰتِ يُذْهِبْنَ السَّيِّـَٔاتِ ذَٰلِكَ ذِكْرَىٰ لِلذَّٰكِرِينَ ﴿١١٤﴾

116. 汝、辛抱強くあれ。げにアッラーは義人(ただしいひと)への報奨は湮滅(いんめつ)するに忍び難し。

وَاصْبِرْ فَإِنَّ اللَّهَ لَا يُضِيعُ أَجْرَ الْمُحْسِنِينَ ﴿١١٥﴾

117. お前たちの前の世代の者の中には、われらが救いたる僅かな者を除いて、何故に地上における頽廃行為を禁ずる思慮ある者なかりしか？不義を行う者どもは安逸を追い求めて、罪人(かみびと)となれり。

فَلَوْلَا كَانَ مِنَ الْقُرُونِ مِن قَبْلِكُمْ أُولُوا بَقِيَّةٍ يَنْهَوْنَ عَنِ الْفَسَادِ فِي الْأَرْضِ إِلَّا قَلِيلًا مِّمَّنْ أَنجَيْنَا مِنْهُمْ وَاتَّبَعَ الَّذِينَ ظَلَمُوا مَآ أُتْرِفُوا فِيهِ وَكَانُوا مُجْرِمِينَ ﴿١١٦﴾

118. 汝の主は、そこに住む住民が正義(ただし)くありさえすれば、その邑(まち)を妄(みだ)りに潰滅するものに非ず。

وَمَا كَانَ رَبُّكَ لِيُهْلِكَ الْقُرَىٰ بِظُلْمٍ وَأَهْلُهَا مُصْلِحُونَ ﴿١١٧﴾

119. また、もし主欲し給わば、彼は全人類を一つの民族となす。されど彼等は常に争いを起す、

وَلَوْ شَآءَ رَبُّكَ لَجَعَلَ النَّاسَ أُمَّةً وَٰحِدَةً وَلَا يَزَالُونَ مُخْتَلِفِينَ ﴿١١٨﴾

120. 主が慈悲を垂れ給うた人々を除いて、そが為にこそ主は彼等を創れり。「われは従わぬ妖霊(じん)並びに庶民どもで地獄を満たさん」との主の言葉は、履行されん。

إِلَّا مَن رَّحِمَ رَبُّكَ وَلِذَٰلِكَ خَلَقَهُمْ وَتَمَّتْ كَلِمَةُ رَبِّكَ لَأَمْلَأَنَّ جَهَنَّمَ مِنَ الْجِنَّةِ وَالنَّاسِ أَجْمَعِينَ ﴿١١٩﴾

121. われらが汝に使徒たちの重要な消息を物語るのは、それによって汝の信念を強固た

وَكُلًّا نَّقُصُّ عَلَيْكَ مِنْ أَنۢبَآءِ الرُّسُلِ مَا نُثَبِّتُ بِهِۦ

ることであり、そのことは、彼を早く老いこませた程に、彼の上にあまりにも重くのしかかっていたのであった (Baihaqui)。

注 54　人はまわりの環境に影響されるので、もし彼のまわりが堕落していれば、その堕落は遅かれ早かれ彼に影響を与えるのは確かである。それで、この節では、信仰者達は、たとえそれが彼らの友人縁者であっても、邪まで正しくない人々との全てのつながりを断ち切るよう命じるのである。

らしめんがためなり。而してこの中に真理並びに信者への訓戒と注意が汝に授けられたり。

فُؤَادَكَ وَجَاءَكَ فِي هَٰذِهِ الْحَقُّ وَمَوْعِظَةٌ وَذِكْرَىٰ لِلْمُؤْمِنِينَ ۝١٢١

122.　然しながら、信ぜぬ者どもには云え、「お前たち思うがままに振舞え、我等も思うままに行わん。（注 55）

وَقُل لِّلَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ اعْمَلُوا عَلَىٰ مَكَانَتِكُمْ إِنَّا عَامِلُونَ ۝١٢٢

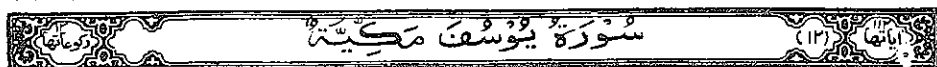
123.　汝等待っておれ、我等も待たん」と。

وَانتَظِرُوا إِنَّا مُنتَظِرُونَ ۝١٢٣

124.　天地の秘事は悉くアッラーに属し、萬事は彼に帰し奉る。されば彼を崇拝し、汝の信頼をただ彼のみに置き奉れ。主はお前たちの所業を閑却せず。

وَلِلَّهِ غَيْبُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَإِلَيْهِ يُرْجَعُ الْأَمْرُ كُلُّهُ فَاعْبُدْهُ وَتَوَكَّلْ عَلَيْهِ وَمَا رَبُّكَ بِغَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُونَ ۝١٢٤

注 55　この節は次のことを意味する。イスラム教の最終的な勝利と、不信仰者達の敗北と挫折について、この章の中で述べられた偉大な予言は、現在では成就不可能で信じられないことの様に見えるが、神において不可能なことは何もなく、これらの予言は、必ず実現するであろう。

سُورَةُ يُوسُفَ مَكِّيَّةٌ (١٢)

ユースフ
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．アリフ・ラーム・ラー。（注1）これは明瞭な経典の諸節なり。

الٓرٰ تِلْكَ اٰيٰتُ الْكِتٰبِ الْمُبِيْنِ ②

3．われらはお前たちに理解せしめんがために、クルアーンをアラビア語で啓示したり。（注2）

اِنَّآ اَنْزَلْنٰهُ قُرْءٰنًا عَرَبِيًّا لَّعَلَّكُمْ تَعْقِلُوْنَ ③

4．われらはこのクルアーンを汝に啓示するにあたり、以前汝が閑却(なおざり)にしていた最も美しい物語を語り聞かせようぞ。（注3）

نَحْنُ نَقُصُّ عَلَيْكَ اَحْسَنَ الْقَصَصِ بِمَآ اَوْحَيْنَآ اِلَيْكَ هٰذَا الْقُرْاٰنَ وَاِنْ كُنْتَ مِنْ قَبْلِهٖ لَمِنَ الْغٰفِلِيْنَ ④

5．ヨセフ（注4）がその父にかく云える時を念(おも)え。「我が父よ、我は十一の星と太陽と月が、我に拝賀するを夢に見たり」（注5）

اِذْ قَالَ يُوْسُفُ لِاَبِيْهِ يٰٓاَبَتِ اِنِّيْ رَاَيْتُ اَحَدَ عَشَرَ كَوْكَبًا وَّالشَّمْسَ وَالْقَمَرَ رَاَيْتُهُمْ لِيْ سٰجِدِيْنَ ⑤

注1　2章2節を参照の事。

注2　数えきれない程多量で多様な意味の語源を持ち、言語自体が明快、雄弁、そしてわかりやすいアラビア語は「アラビー」と呼ばれ、豊か、全体的、明確という意味を表わしている。アラビア語の豊富な語句は、多岐にわたる思想を充分に表現し、なおかつ、微妙な言外の意味も伝える事が出来、他の言語をよせつけない正確さと豊富さで以ってあらゆる内容の題材を論ずる事が出来る。ヨーロッパの言語学者は、アラビア語は根源が完璧な言語である事を認めざるを得ず、その豊かな何十万もの語源からは、ぼう大な何種類もの派生語が生じている。

注3　ヨセフの話が聖なる預言者にかくも詳細に渡って啓示されているのは、その話の内容に預言者自身の生涯に預言的な暗示となる部分が多くあるからである。

注4　ヨセフは、イスラエルとしても知られる預言者ヤコブの12人の息子の一人である。ヨセフはラケルの二人の息子の長男の方である。彼の名前は「加える」即わち、「神は私にもう一人息子をお加えになる」という意味を表わしている（創世紀30章24節）。

注5　「我に拝賀するを夢にみたり」聖書では、太陽と月を最初に、それから11個の星の記述が後に続いているが（創世紀37章9節）、このヨセフに拝賀する者達の順序が、クルアーンでは逆になっている。これはクルアーンの方が史実に忠実であり、まず最初にヨセフに出会い拝賀したのは彼の兄達（11個の星）それから両親の順序であったからである。この節はヨセフの両親と兄弟達が彼に帰依した事を意味している。

6．彼は云えり、「かわいい我が息子よ、汝(な)が兄弟にその夢の話を語るなかれ、汝に敵対する謀(はかりごと)を企たせぬためにも。げに悪魔(サタン)は人間にとって公然の敵なり。

قَالَ يٰبُنَيَّ لَا تَقْصُصْ رُءْيَاكَ عَلٰٓى اِخْوَتِكَ فَيَكِيْدُوْا لَكَ كَيْدًا ؕ اِنَّ الشَّيْطٰنَ لِلْاِنْسَانِ عَدُوٌّ مُّبِيْنٌ ﴿٦﴾

7．汝がかかる夢を見たのであれば、主は汝を選び諸事の解釈を教え、汝の二祖―アブラハムとイサクに恩寵を完(まつと)うした如く、之(これ)を汝とヤコブ一家（注６）に完(まつと)うせん。げに汝の主は、すべてを知り、賢哲にまします。

وَكَذٰلِكَ يَجْتَبِيْكَ رَبُّكَ وَيُعَلِّمُكَ مِنْ تَاْوِيْلِ الْاَحَادِيْثِ وَيُتِمُّ نِعْمَتَهٗ عَلَيْكَ وَعَلٰٓى اٰلِ يَعْقُوْبَ كَمَآ اَتَمَّهَا عَلٰٓى اَبَوَيْكَ مِنْ قَبْلُ اِبْرٰهِيْمَ وَاِسْحٰقَ ؕ اِنَّ رَبَّكَ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ﴿٧﴾

第二項

8．げにヨセフとその兄弟の物語の中には、詮索好きな徒輩(ともがら)へのいろいろな表徴(しるし)あり。

لَقَدْ كَانَ فِيْ يُوْسُفَ وَاِخْوَتِهٖٓ اٰيٰتٌ لِّلسَّآئِلِيْنَ ﴿٨﴾

9．時に彼等は云えり、「確かに、数において優る我等よりも、我等の父はヨセフとその弟を我等より寵愛す。父は明らかに誤れり。（注７）

اِذْ قَالُوْا لَيُوْسُفُ وَاَخُوْهُ اَحَبُّ اِلٰٓى اَبِيْنَا مِنَّا وَنَحْنُ عُصْبَةٌ ؕ اِنَّ اَبَانَا لَفِيْ ضَلٰلٍ مُّبِيْنِ ﴿٩﴾

10．ヨセフを殺せ（注８）、或いは、どこか遠い国に追い払え、されば父の顔はもっぱらお前たちに向けられん。然(しか)る後に義(ただ)しい人となるを得べし」と。（注９）

اقْتُلُوْا يُوْسُفَ اَوِ اطْرَحُوْهُ اَرْضًا يَّخْلُ لَكُمْ وَجْهُ اَبِيْكُمْ وَتَكُوْنُوْا مِنْ بَعْدِهٖ قَوْمًا صٰلِحِيْنَ ﴿١٠﴾

11．するとその中の一人が云えり、「ヨセフを殺すなかれ。やむなくば、彼を深い井戸の底に置き去りにせよ。誰か旅人が彼を拾い去らん」と。

قَالَ قَآئِلٌ مِّنْهُمْ لَا تَقْتُلُوْا يُوْسُفَ وَاَلْقُوْهُ فِيْ غَيٰبَتِ الْجُبِّ يَلْتَقِطْهُ بَعْضُ السَّيَّارَةِ اِنْ كُنْتُمْ فٰعِلِيْنَ ﴿١١﴾

注６　聖書では、この名前（ヤコブ）は「取って代わる者」との説明がある（創世紀27章36節）。「ヤコブ」とは「神が後ろにおわします」、或いは「神が報いを与えられる」といった様な意味合いの「ヤーコベル」が短縮されて作られた名前だというのが、一般的な批評家達の意見である。ヤコブはイサクとレベッカの息子で、アブラハムの孫にあたり、イスラエル人の祖先とされており、第三の族長として知られている（Enc. Bib. Jew. Enc.）。

注７　自分達の方があらゆる点でずっと優れていると思っているのに、自分達に取ってかわって父親の愛情を勝ち得、常にその関心の的となったヨセフに立腹したヨセフの兄弟達の様に、クライシュの指導者達も、クルアーンはメッカとタイフの町の偉大な者達の中の誰かに啓示されるべきであったと主張した（43章32節）。何故なら、彼等は、聖なる預言者は、預言者という高い地位に選ばれるには値しない存在であるとみなしていたからである。

注８　ヨセフを殺そうと計画したヨセフの兄弟達の様にクライシュの人々も聖なる預言者を殺そうと企てた。（８章31節）

注９　ルベン（創世紀37章22節）参照。

12．彼等は云えり、「我等の父よ、我等はヨセフの幸いを祈る者だというに、汝は何故にヨセフを我等に信託ざるか？

قَالُوا يَا أَبَانَا مَا لَكَ لَا تَأْمَنَّا عَلَىٰ يُوسُفَ وَإِنَّا لَهُ لَنَاصِحُونَ ﴿١٢﴾

13．明日、彼を我等と共に行かしめよ、さすれば彼は自ら楽しみ遊び、我等は必ず彼を護らん」と。

أَرْسِلْهُ مَعَنَا غَدًا يَرْتَعْ وَيَلْعَبْ وَإِنَّا لَهُ لَحَافِظُونَ ﴿١٣﴾

14．ヤコブは云えり、「お前たちが彼を連れ去るのは、我を深く悲しませる。お前たちがうっかりしている間に、狼が彼を取り食いはしないかと我は恐る」と。（注 10）

قَالَ إِنِّي لَيَحْزُنُنِي أَنْ تَذْهَبُوا بِهِ وَأَخَافُ أَنْ يَأْكُلَهُ الذِّئْبُ وَأَنْتُمْ عَنْهُ غَافِلُونَ ﴿١٤﴾

15．彼等は云えり、「我等は大勢いるというのに、狼が彼を取り食らうようであれば、我等も紛れもなく身の破滅なり」と。

قَالُوا لَئِنْ أَكَلَهُ الذِّئْبُ وَنَحْنُ عُصْبَةٌ إِنَّا إِذًا لَخَاسِرُونَ ﴿١٥﴾

16．かくて彼等は彼を連れ去り、深い井戸の底に彼を置き去りにすべく衆議一致し、まさにその意地悪い企てをなさんとするや、われらはヨセフに黙示して、云えり、「汝は何時かこの事を彼等に語り告げん、然れども彼等はその時、汝を識らざるべし」と。

فَلَمَّا ذَهَبُوا بِهِ وَأَجْمَعُوا أَنْ يَجْعَلُوهُ فِي غَيَابَتِ الْجُبِّ وَأَوْحَيْنَا إِلَيْهِ لَتُنَبِّئَنَّهُمْ بِأَمْرِهِمْ هَٰذَا وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ﴿١٦﴾

17．日が暮れて、彼等は泣きながらその父のところへ帰りたり。

وَجَاءُوا أَبَاهُمْ عِشَاءً يَبْكُونَ ﴿١٧﴾

18．「我等の父よ、我等は互に競走していて、ヨセフを我等の荷物と一緒に残し置きたるところ、狼来りて彼を食らう。我等真実を語るとも、汝は我等を信じざるべし」と彼等は云えり。（注 11）

قَالُوا يَا أَبَانَا إِنَّا ذَهَبْنَا نَسْتَبِقُ وَتَرَكْنَا يُوسُفَ عِنْدَ مَتَاعِنَا فَأَكَلَهُ الذِّئْبُ وَمَا أَنْتَ بِمُؤْمِنٍ لَنَا وَلَوْ كُنَّا صَادِقِينَ ﴿١٨﴾

19．彼等はヨセフの下着に偽りの血をつけて持ち来たれり。ヤコブは云えり、「そうではあるまい、お前たちの目にはこれしきのことと思えしが、己れ自身に重大な事をなしたるなり。（注 12）されど今は、耐え忍ぶこ

وَجَاءُوا عَلَىٰ قَمِيصِهِ بِدَمٍ كَذِبٍ قَالَ بَلْ سَوَّلَتْ لَكُمْ أَنْفُسُكُمْ أَمْرًا فَصَبْرٌ جَمِيلٌ وَاللَّهُ الْمُسْتَعَانُ

注 10　この節の叙述から、ヤコブは、兄弟達がヨセフを殺そうとしているたくらみについて神より既に知らされていた事がわかる。その為あたかも告発するが如くに、彼等が自分達の凶悪な犯罪を酌量してもらう為に、後になって使う事になるのと同一の語句を使ったのである。

注 11　この言葉は、兄弟達の心のイライラを表わし、自分達の罪の意識を暴露している。

注 12　これらの言葉は、ヤコブが息子達の報告を作り話と考えていた事を示している。

عَلٰى مَا تَصِفُوْنَ ﴿١٩﴾

とこそ我がためなり。お前たちが主張することに対して、我は偏にアッラーに助けを求めん」と。

وَجَآءَتْ سَيَّارَةٌ فَاَرْسَلُوْا وَارِدَهُمْ فَاَدْلٰى دَلْوَهٗ ۗ قَالَ يٰبُشْرٰى هٰذَا غُلٰمٌ ۗ وَاَسَرُّوْهُ بِضَاعَةً ۗ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ ۢ بِمَا يَعْمَلُوْنَ ﴿٢٠﴾

20．やがて隊商が通りかかり、水汲む者が井戸に遣わされたり。男釣瓶を井戸に下ろすや、叫びたり、「吉なるかな！ここに童子あり！」そこで彼等はこの童子を賣りものにしようと思い、ひそかに隠したり。(注 13) されどアッラーは、彼等のなせることを熟知せり。

وَشَرَوْهُ بِثَمَنٍ ۢ بَخْسٍ دَرَاهِمَ مَعْدُوْدَةٍ ۚ وَكَانُوْا فِيْهِ مِنَ الزّٰهِدِيْنَ ﴿٢١﴾ ع ٢ ١٢

21．彼等はヨセフを、欲しがりざりしかば、僅かな銀貨で彼を売り払えり。

第三項

وَقَالَ الَّذِى اشْتَرٰىهُ مِنْ مِّصْرَ لِامْرَاَتِهٖۤ اَكْرِمِىْ مَثْوٰىهُ عَسٰۤى اَنْ يَّنْفَعَنَاۤ اَوْ نَتَّخِذَهٗ وَلَدًا ۗ وَكَذٰلِكَ مَكَّنَّا لِيُوْسُفَ فِى الْاَرْضِ ۡ وَلِنُعَلِّمَهٗ مِنْ تَاْوِيْلِ الْاَحَادِيْثِ ۗ وَاللّٰهُ غَالِبٌ عَلٰۤى اَمْرِهٖ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿٢٢﴾

22．ヨセフを購いたるは埃及人 (注 14) にして、男その妻に云えり、「懇に遇せよ。彼が彼等を益することあるやもしれず、また彼を我等の養子とするもよし」と。かくてわれらはヨセフをその国に落ち着かせ、さまざまな事象の解釈を教えたり。アッラーはその決定したるものは必ず完うし給う、されど世人の多くは之を知らず。

وَلَمَّا بَلَغَ اَشُدَّهٗۤ اٰتَيْنٰهُ حُكْمًا وَّعِلْمًا ۗ وَكَذٰلِكَ نَجْزِى الْمُحْسِنِيْنَ ﴿٢٣﴾

23．さて、彼が成人に達した時、われらは彼に識見と知識とを授けたり。かくの如くわれらは正しい行いをなす者に報ゆ。

وَرَاوَدَتْهُ الَّتِىْ هُوَ فِىْ بَيْتِهَا عَنْ نَّفْسِهٖ وَغَلَّقَتِ الْاَبْوَابَ وَقَالَتْ هَيْتَ لَكَ ۗ قَالَ مَعَاذَ اللّٰهِ اِنَّهٗ رَبِّىْۤ اَحْسَنَ مَثْوَاىَ ۗ اِنَّهٗ لَا يُفْلِحُ الظّٰلِمُوْنَ ﴿٢٤﴾

24．ヨセフが起居せる家の妻、彼の意志に反して彼を誘惑せんと謀る。彼女は戸を閉じて、云えり、「さあ、来れ」と。ヨセフは云えり、「我はアッラーに保護を求む。彼は我が主なり。 (注 15) 彼があなたがたに、我を懇に遇さしめたり。げに、悪事をなせる者は決して栄えず」と。

注 13　隊商の面々は、ヨセフをよいもうけの対象と考えていた。

注 14　ヨセフを買い取ったエジプト人は、ユダヤの文字では、ポテパルであるとされている (Enc. Bib. 及び創世紀 39 章 1 節)。彼は古代エジプトでは高官とされた、近衛兵の隊長であった。

注 15　この節では、婦人がヨセフを誘惑しそこない、ヨセフがこの難を逃れた事が述べられている。「彼は我が主なり」とは神の事である。一部評釈者が「主人」と解釈しているのは誤りである。ここはヨセフのエジプト人の主人をさしているわけではない。神を表わしているのである。

25．彼女は彼を誘惑せんと思えども、彼は誘惑に負けじと決意せり。（注 16）もし彼主の明証（注 17）を見ざりせば、かかる決心を示すこと能わじ。かくの如く、われらは彼より罪悪と醜行とを遠ざけたり。げに彼は、われらの選ばれた僕の一人なりき。（注 18）

وَلَقَدْ هَمَّتْ بِهٖ ۚ وَهَمَّ بِهَا لَوْلَآ اَنْ رَّاٰ بُرْهَانَ رَبِّهٖ ۚ كَذٰلِكَ لِنَصْرِفَ عَنْهُ السُّوْٓءَ وَالْفَحْشَآءَ ۚ اِنَّهٗ مِنْ عِبَادِنَا الْمُخْلَصِيْنَ ﴿٢٥﴾

26．そこで彼等はともに戸口に走り、女は背後よりヨセフの上着を引き裂けり、而して彼等は戸口にて彼女の夫に遭いたり。彼女は云えり、「汝の妻に悪事をなさんとした者は、投獄するか痛刑の外に、その懲罰如何にせん？」と。

وَاسْتَبَقَا الْبَابَ وَقَدَّتْ قَمِيْصَهٗ مِنْ دُبُرٍ وَّاَلْفَيَا سَيِّدَهَا لَدَا الْبَابِ ۚ قَالَتْ مَا جَزَآءُ مَنْ اَرَادَ بِاَهْلِكَ سُوْٓءًا اِلَّآ اَنْ يُّسْجَنَ اَوْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿٢٦﴾

27．ヨセフは云えり、「彼女の方が我が意志に逆らって我を誘惑せんと謀る」と。時に家人の中の一目撃者証言して、云う、「もし彼の上着が前から裂けているならば、彼女の言葉は真実で、嘘つきは彼なり。

قَالَ هِيَ رَاوَدَتْنِيْ عَنْ نَّفْسِيْ وَشَهِدَ شَاهِدٌ مِّنْ اَهْلِهَا ۚ اِنْ كَانَ قَمِيْصُهٗ قُدَّ مِنْ قُبُلٍ فَصَدَقَتْ وَهُوَ مِنَ الْكٰذِبِيْنَ ﴿٢٧﴾

28．然しながら、その上着が後ろから裂けているならば、彼女は嘘つきで、彼の言葉は真実なり」と。

وَاِنْ كَانَ قَمِيْصُهٗ قُدَّ مِنْ دُبُرٍ فَكَذَبَتْ وَهُوَ مِنَ الصّٰدِقِيْنَ ﴿٢٨﴾

29．そこで、彼女の夫は上着が背後から引き裂かれているのを見て、云えり、「これはお前たち女どもの企みなり。実にお前たちの企みは恐るべし。（注 19）

فَلَمَّا رَاٰ قَمِيْصَهٗ قُدَّ مِنْ دُبُرٍ قَالَ اِنَّهٗ مِنْ كَيْدِكُنَّ ۚ اِنَّ كَيْدَكُنَّ عَظِيْمٌ ﴿٢٩﴾

注 16　ヨセフの主人の妻は、ヨセフに関してある事—男女の交合—を企てた。同様に、ヨセフも彼女についてある考えを持った。即ち彼女の邪悪な目的に抗する事である。ヨセフが何らやましい心を持たなかった事は前節からせ明確であり、彼はただ、彼女をその邪悪な目的から思い止まらせようとしただけであった。

注 17　「主の明証」とは、ヨセフが既に目のあたりに見た井戸に投げこまれた時に受けた啓示である彼の将来を預言した素晴らしい夢をさす。　この時の夢では、 彼の後々の卓越性や栄光（当章 16 節）及び、 投げこまれた井戸から無事に助けだされる事も指摘されていた。

注 18　丁度ヨセフが自分の敬虔さと廉直さの道をふみはずす様に誘惑されたのと同様に、聖なる預言者も、メッカの偶像崇拝者達に、神の唯一性について説教するのを止めれば、彼等の王にするとか、莫大な富を与える、或いはアラビアでいちばん美しい女性と結婚させると誘惑された。当然ながら聖なる預言者は、この申し出を退けたが、拒絶の際の「私の右手に太陽を、そして左手に月を置いたとしても、私が唯一なる神についての説教を止める事は有り得ない」との返答は歴史に残る言葉である。

注 19　出来る限り妻をかばおうとしたポテパルは、ずるかしこく、よこしまなる全ての女性を糾弾している。

30．ヨセフよ、この危害を見のがしてやれ。しかし、妻よ、汝はその罪の赦しを請え。汝は間違いなく罪を犯せし者なるぞ」と。

يُوسُفُ أَعْرِضْ عَنْ هٰذَا ۜ وَاسْتَغْفِرِي لِذَنْبِكِ ۚ إِنَّكِ كُنْتِ مِنَ الْخٰطِئِينَ ٣٠

第四項

31．ところで、市井の婦人たちは評せり、「アズィーズ（注20）の妻が従僕の意に反して誘惑せんとす。従僕が奥方を恋に迷わしめたり。（注21）　我等は明らかに奥方の過ちなるを知る」と。

وَقَالَ نِسْوَةٌ فِي الْمَدِينَةِ امْرَاَتُ الْعَزِيزِ تُرَاوِدُ فَتٰهَا عَنْ نَفْسِهٖ ۚ قَدْ شَغَفَهَا حُبًّا ۗ إِنَّا لَنَرٰهَا فِي ضَلٰلٍ مُّبِينٍ ٣١

32．奥方は彼女たちの陰口を聞くと、人を遣わして彼女たちを招き、宴を設けてその一人一人にナイフを与えた後、ヨセフを呼んで、云えり、「ここに来て、彼女たちの前に出よ」と。然るに、婦人たち彼を見るなり、余程高貴な御方に違いないと思い、（注22）驚嘆の余りその手を傷つけて、（注23）云えり、「アッラーに讃美あれ！こは人間に非ず、こは貴き天使に非ずして何ぞ」と。

فَلَمَّا سَمِعَتْ بِمَكْرِهِنَّ أَرْسَلَتْ إِلَيْهِنَّ وَأَعْتَدَتْ لَهُنَّ مُتَّكَاً وَّاٰتَتْ كُلَّ وَاحِدَةٍ مِّنْهُنَّ سِكِّينًا وَّقَالَتِ اخْرُجْ عَلَيْهِنَّ ۚ فَلَمَّا رَاَيْنَهٗٓ اَكْبَرْنَهٗ وَقَطَّعْنَ اَيْدِيَهُنَّ وَقُلْنَ حَاشَ لِلّٰهِ مَا هٰذَا بَشَرًا ۗ اِنْ هٰذَآ اِلَّا مَلَكٌ كَرِيمٌ ٣٢

33．奥方は云えり、「皆様が妾を非難した、その相手というのがこの者なり。妾は彼の意に反して誘惑せんとせしが、彼は罪より己れを護りたり。されど、今度妾の命ずることに従わずば、妾は彼を投獄し、彼は蔑まされる身とならん」と。

قَالَتْ فَذٰلِكُنَّ الَّذِي لُمْتُنَّنِي فِيهِ ۗ وَلَقَدْ رَاوَدْتُّهٗ عَنْ نَّفْسِهٖ فَاسْتَعْصَمَ ۗ وَلَئِنْ لَّمْ يَفْعَلْ مَآ اٰمُرُهٗ لَيُسْجَنَنَّ وَلَيَكُونًا مِّنَ الصّٰغِرِينَ ٣٣

34．そこで、ヨセフは祈りて云えり、「我が主よ、我は彼女たちの誘いに従うよりは牢獄を選ぶ。されど、汝、彼女たちの策略を取り除かずば、我が心彼女たちに傾きて遂に痴人の一人とならん」と。

قَالَ رَبِّ السِّجْنُ اَحَبُّ اِلَيَّ مِمَّا يَدْعُونَنِيْٓ اِلَيْهِ ۚ وَاِلَّا تَصْرِفْ عَنِّي كَيْدَهُنَّ اَصْبُ اِلَيْهِنَّ وَاَكُنْ مِّنَ الْجٰهِلِينَ ٣٤

注20　「アル・アズィーズ」とはポテパルの事を指す。彼は王の警護に当る兵の隊長であったが、聖なる預言者の時代には、エジプトの長や高位にある者達は「アル・アズィーズ」の称号で呼ばれていた。

注21　「恋に迷わせたり」というアラビア的表現は、彼女のヨセフに対する愛は彼女の心の奥底まで入りこんだ、或いは、彼への愛が彼女をはげしくうった、又は、彼女の心が奪われたという意味合いである。

注22　彼女たちは彼の事を気高い存在と感じたのである。

注23　「手を傷つけた」という表現は、女性達がヨセフを見た時、そのあまりの気高く、美しい容ぼうに心を奪われ、思わず手にしていたナイフで自分達の手を傷つけてしまった程であった事を意味している。或いは、彼女等の驚きと驚嘆を比喩的に表わしたものとも考えられる。「指先をかむ」というアラビア語の表現は、驚きを示す時に使われる。その一部を表わす際、それの含まれる全体を表わす言葉が時々使われるので、この場合

35. それゆえ、主は彼の祈願に応え、ヨセフから彼女たちの策略を払いのけたり。げに彼は、すべてを聴き、すべてを深知し給う。

فَاسْتَجَابَ لَهٗ رَبُّهٗ فَصَرَفَ عَنْهُ كَيْدَهُنَّ ۚ اِنَّهٗ هُوَ السَّمِيْعُ الْعَلِيْمُ ﴿٣٥﴾

36. 然るに長老たちは、ヨセフの潔白の証拠を見たにもかかわらず、自分たちの名望を維持せんがために、彼を暫く投獄せしむることにせり。（注 24）

ثُمَّ بَدَا لَهُمْ مِّنْ بَعْدِ مَا رَاَوُا الْاٰيٰتِ لَيَسْجُنُنَّهٗ حَتّٰى حِيْنٍ ﴿٣٦﴾

第五項

37. その時、二人の若者がヨセフと共に入牢せり。その一人は云えり、「我は夢に葡萄を搾るを見たり」と。すると、もう一人が云えり、「我は夢に、自分の頭の上にパンをのせて運びつつあると、鳥来りて之を啄むを見たり。（注 25）我等に教え給え、この夢の解釈を。お見かけしたところ、汝は義しい人なりと思う」と。

وَدَخَلَ مَعَهُ السِّجْنَ فَتَيٰنِ ۗ قَالَ اَحَدُهُمَآ اِنِّيْٓ اَرٰىنِيْٓ اَعْصِرُ خَمْرًا ۚ وَقَالَ الْاٰخَرُ اِنِّيْٓ اَرٰىنِيْٓ اَحْمِلُ فَوْقَ رَاْسِيْ خُبْزًا تَاْكُلُ الطَّيْرُ مِنْهُ ۗ نَبِّئْنَا بِتَاْوِيْلِهٖ ۚ اِنَّا نَرٰىكَ مِنَ الْمُحْسِنِيْنَ ﴿٣٧﴾

38. ヨセフは答えり、「お前たちに支給される食事は無くなるべし、然れども我はそうなる前にその意味を告げ知らせん。これは我が主が我に教えたるが故なり。我はアッラーを信ぜず且つ来世を信ぜざる人々の宗教を放棄せり。

قَالَ لَا يَاْتِيْكُمَا طَعَامٌ تُرْزَقٰنِهٖٓ اِلَّا نَبَّاْتُكُمَا بِتَاْوِيْلِهٖ قَبْلَ اَنْ يَّاْتِيَكُمَا ۗ ذٰلِكُمَا مِمَّا عَلَّمَنِيْ رَبِّيْ ۗ اِنِّيْ تَرَكْتُ مِلَّةَ قَوْمٍ لَّا يُؤْمِنُوْنَ بِاللّٰهِ وَهُمْ بِالْاٰخِرَةِ هُمْ كٰفِرُوْنَ ﴿٣٨﴾

39. 而して我は、我が父祖、アブラハム、イサク及びヤコブの宗教を奉ず。我等は何者もアッラーと併せ祀ること能わず。これこそ我等のみならず、全人類に賜りたるアッラーの恩恵なり、然るに世人の大半は感謝の念を知らず。

وَاتَّبَعْتُ مِلَّةَ اٰبَآءِيْٓ اِبْرٰهِيْمَ وَاِسْحٰقَ وَيَعْقُوْبَ ۗ مَا كَانَ لَنَآ اَنْ نُّشْرِكَ بِاللّٰهِ مِنْ شَيْءٍ ۗ ذٰلِكَ مِنْ فَضْلِ اللّٰهِ عَلَيْنَا وَعَلَى النَّاسِ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَشْكُرُوْنَ ﴿٣٩﴾

も、手が指先の代わりに使われたとも考えられる。タルムードに依れば、お客の女性達にはオレンジが出されており、彼女達はヨセフを一目みて心を奪われた為、うっかり手を切ってしまったという解釈になる（Jew. Enc. とタルムード）。

注 24　ポテパルの妻の悪い噂がひろまった為、彼女のまわりの者達は、スキャンダルのもみけしには、ヨセフを投獄すれば、世間が彼の方が悪い事をしかけたのだと思い、人々の非難が彼にむけられるであろうと考えた。

注 25　召使い頭とパン職人の夢については、創世紀の第 40 章を参照の事。

40．我が同囚の両名よ、異った神々か、それとも唯一全能の主か、いずれが優るや？

يصاحبي السجن ءارباب متفرقون خير ام الله الواحد القهار ﴿٣٩﴾

41．アッラーの外にお前たちが崇拝するものは、お前たちや父祖たちが名づけたる名称にすぎず、アッラーはそれ等に如何なる権威も降し賜わざるなり。決定は独りアッラー次第なり。彼はお前たちに、彼以外に何者も崇拝するなかれと命じたり。これこそ正しき教えなり、然るに世人の大半は之を知らず。

ما تعبدون من دونه الا اسماء سميتموها انتم واباؤكم ما انزل الله بها من سلطن ان الحكم الا لله امر الا تعبدوا الا اياه ذلك الدين القيم ولكن اكثر الناس لا يعلمون ﴿٤٠﴾

42．我が同囚の両名よ、お前たちの一人については、その主人のために酒を酌ぐ身とならん。他の一人は、磔けにされ、数多の鳥がその頭を啄むべし。お前たちが訊ねし事は、すでに決定をみたるなり」と。

يصاحبي السجن اما احدكما فيسقي ربه خمرا واما الاخر فيصلب فتاكل الطير من راسه قضي الامر الذي فيه تستفتين ﴿٤١﴾

43．而してヨセフは、両名の中釈放せらるべしと思った方に、云えり、「我が主人に我がことを告げよ」と。然るに悪魔が男に之を忘れせしめたれば、ヨセフはなお数年牢屋に繋がれたり。

وقال للذي ظن انه ناج منهما اذكرني عند ربك فانسه الشيطن ذكر ربه فلبث في السجن بضع سنين ﴿٤٢﴾ ع ٥ ١٥

第六項

44．時に王云えり、「余は夢で、七頭の肥えた牝牛が七頭の痩せたのに食われ、また七つの青穂と七つの枯れ穂を見たり。汝等長老たちよ、もし夢判断が出来るなら、余の夢の意味を解け」と。

وقال الملك اني ارى سبع بقرت سمان ياكلهن سبع عجاف وسبع سنبلت خضر واخر يبست يايها الملا افتوني في رءياي ان كنتم للرءيا تعبرون ﴿٤٣﴾

45．彼等は答えり、「雑夢なり、我等はかかる雑夢を解く術を知らず」と。

قالوا اضغاث احلام وما نحن بتاويل الاحلام بعلمين ﴿٤٤﴾

46．ところで、例の両名の中釈放された男が、その後しばらくして想起し、云えり、「我その解説を御一同に告げ知らせん、故に我を派遣し給え」と。

وقال الذي نجا منهما وادكر بعد امة انا انبئكم بتاويله فارسلون ﴿٤٥﴾

47．「ヨセフよ、誠実なる人よ、七頭の肥えた牝牛が七頭の痩せたのに食われ、また七つ

يوسف ايها الصديق افتنا في سبع بقرت سمان

の青穂と七つの枯れ穂の夢の意味を我等のために解け。我は帰りて人々に之を知らさん」

يَّاْكُلُهُنَّ سَبْعٌ عِجَافٌ وَّسَبْعَ سُنۢبُلٰتٍ خُضْرٍ وَّاُخَرَ يٰبِسٰتٍ لَّعَلِّيْٓ اَرْجِعُ اِلَى النَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَعْلَمُوْنَ ﴿٤٧﴾

48．ヨセフは答えり、「お前たち七年間今まで通り種を播き、勤勉に働け。而して自分たちが食べる少量を除いて、刈り入れたるものは穂のまま蓄えよ。

قَالَ تَزْرَعُوْنَ سَبْعَ سِنِيْنَ دَاَبًا ۚ فَمَا حَصَدْتُّمْ فَذَرُوْهُ فِيْ سُنۢبُلِهٖٓ اِلَّا قَلِيْلًا مِّمَّا تَاْكُلُوْنَ ﴿٤٨﴾

49．すると、その後、七年に亘って苦しいとき来り、お前たちが貯蔵する少量を除いて、豫め災害に備えておきしものまですべてを食い尽くさん。（注 26）

ثُمَّ يَاْتِيْ مِنْۢ بَعْدِ ذٰلِكَ سَبْعٌ شِدَادٌ يَّاْكُلْنَ مَا قَدَّمْتُمْ لَهُنَّ اِلَّا قَلِيْلًا مِّمَّا تُحْصِنُوْنَ ﴿٤٩﴾

50．その後に来る一年は、慈雨を得て、果汁を搾るべし」と。

ثُمَّ يَاْتِيْ مِنْۢ بَعْدِ ذٰلِكَ عَامٌ فِيْهِ يُغَاثُ النَّاسُ وَفِيْهِ يَعْصِرُوْنَ ﴿٥٠﴾

第七項

51．王は云えり、「その者を連れて参れ」と。然るに使者がヨセフのところへ来ると、ヨセフは云えり、「帰りて汝の主人に訊ねよ、その手を傷つけし女どもはどうするのかと。我が主は彼女等の詭計をよく知り給う」と。（注 27）

وَقَالَ الْمَلِكُ ائْتُوْنِيْ بِهٖ ۚ فَلَمَّا جَآءَهُ الرَّسُوْلُ قَالَ ارْجِعْ اِلٰى رَبِّكَ فَسْـَٔلْهُ مَا بَالُ النِّسْوَةِ الّٰتِيْ قَطَّعْنَ اَيْدِيَهُنَّ ؕ اِنَّ رَبِّيْ بِكَيْدِهِنَّ عَلِيْمٌ ﴿٥١﴾

52．王は婦人たちに訊ねり、「お前たちがヨセフの意に反して誘惑せし時、どうであったか？」と。彼女たちは答えり、「彼はアッラーを恐れ、罪に近寄らざりき―私たちは、彼がいささかも悪なきを知りぬ」と。アズィーズの妻云えり、「これで、事実が明らかになれり。彼を誘惑せしは妾なれど、彼はまことに誠実なる者なり」と。（注 28）

قَالَ مَا خَطْبُكُنَّ اِذْ رَاوَدْتُّنَّ يُوْسُفَ عَنْ نَّفْسِهٖ ؕ قُلْنَ حَاشَ لِلّٰهِ مَا عَلِمْنَا عَلَيْهِ مِنْ سُوْٓءٍ ؕ قَالَتِ امْرَاَتُ الْعَزِيْزِ الْـٰٔنَ حَصْحَصَ الْحَقُّ ؗ اَنَا رَاوَدْتُّهٗ عَنْ نَّفْسِهٖ وَاِنَّهٗ لَمِنَ الصّٰدِقِيْنَ ﴿٥٢﴾

注 26　聖なる預言者の時代に、アラビアは七年にも渡る飢きんに襲われ、その大飢きんのすさまじさは、人々が腐肉でも口にせざるを得なかった程であったという（ブハリ）。

注 27　ヨセフが並々ならぬ人間である事を知った王は、彼を釈放しようとしたが、ヨセフが自分に科された疑いの潔白をはっきり証明する査問が終わらないうちは釈放される事を拒んだ。ヨセフが取調べを望んだ目的は二つあった。一つは、王に後々になって彼を閉じこめた人達の邪悪な目的に惑わされ彼に悪意をもたぬ様、彼の無実をしっかりはらしたかった事。そしてもう一つには彼の恩人であるポテパルにヨセフが恩知らずであったとの印象を持ち続けて欲しくなかったからである。

注 28　この節の語句から、女達が手を傷つけたというのは実際に起こった事である事がわかる。さもなければ、ヨセフがその事に言及はしないからである。驚嘆からか会話に没頭したかのいづれかの理由で、何人かの

53．ヨセフは云えり、「これは我が主人に、彼が不在中、我彼を裏切る者に非ず、またアッラーは不貞な女の詭計(わるだくみ)を助けるものに非らざることを知らしめるためなり。

ذَٰلِكَ لِيَعْلَمَ أَنِّي لَمْ أَخُنْهُ بِالْغَيْبِ وَأَنَّ اللَّهَ لَا يَهْدِي كَيْدَ الْخَائِنِينَ ﴿٥٢﴾

54．然(しか)れども、人間の心は悪に傾きやすいものであるが故に、主が慈悲を垂れる者を除いて、我は自ら潔白なりとは考えず。げに我が主は寛大にして、慈悲深くまします」と。

وَمَا أُبَرِّئُ نَفْسِي ۚ إِنَّ النَّفْسَ لَأَمَّارَةٌ بِالسُّوءِ إِلَّا مَا رَحِمَ رَبِّي ۚ إِنَّ رَبِّي غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿٥٣﴾

55．王は云えり、「その者を連れて参れ。余はその者を格別に取り立てん」と。王はヨセフと語りて、云えり、「今日より汝は地位と信任を授けられて、我等と偕(とも)に居(お)るべし」と。

وَقَالَ الْمَلِكُ ائْتُونِي بِهِ أَسْتَخْلِصْهُ لِنَفْسِي ۖ فَلَمَّا كَلَّمَهُ قَالَ إِنَّكَ الْيَوْمَ لَدَيْنَا مَكِينٌ أَمِينٌ ﴿٥٤﴾

56．ヨセフは云えり、「我をこの国の倉庫(かねぐら)の管理者に任命されよ、我有能なる管理者なるが故に」と。（注29）

قَالَ اجْعَلْنِي عَلَىٰ خَزَائِنِ الْأَرْضِ ۖ إِنِّي حَفِيظٌ عَلِيمٌ ﴿٥٥﴾

57．かくの如く、われらはヨセフにこの国において地位を与え、彼の好むところに何処なりと住むことを得せしめたり。われらはわれらの欲する者に恩恵(めぐみ)を垂れ、義(ただ)しい人の報奨は決して空しくせず。

وَكَذَٰلِكَ مَكَّنَّا لِيُوسُفَ فِي الْأَرْضِ يَتَبَوَّأُ مِنْهَا حَيْثُ يَشَاءُ ۚ نُصِيبُ بِرَحْمَتِنَا مَن نَّشَاءُ ۖ وَلَا نُضِيعُ أَجْرَ الْمُحْسِنِينَ ﴿٥٦﴾

58．神を信じ神を畏れる者には、来世の報奨こそ勝りたるはなし。

وَلَأَجْرُ الْآخِرَةِ خَيْرٌ لِّلَّذِينَ آمَنُوا وَكَانُوا يَتَّقُونَ ﴿٥٧﴾

第八項

59．ヨセフの兄たち来たりて、ヨセフに目通りせり。ヨセフは兄たちを認めたれど、彼等はヨセフを認めざりき。

وَجَاءَ إِخْوَةُ يُوسُفَ فَدَخَلُوا عَلَيْهِ فَعَرَفَهُمْ وَهُمْ لَهُ مُنكِرُونَ ﴿٥٨﴾

60．ヨセフは兄たちに食料を供給して、云えり、「お前たちの腹違いの弟を連れて参れ。（注30）お前たち、我充分に桝目(ますめ)を満すを見ずや、我は最善の招客者に非ざるか？

وَلَمَّا جَهَّزَهُم بِجَهَازِهِمْ قَالَ ائْتُونِي بِأَخٍ لَّكُم مِّنْ أَبِيكُمْ ۚ أَلَا تَرَوْنَ أَنِّي أُوفِي الْكَيْلَ وَأَنَا خَيْرُ الْمُنزِلِينَ ﴿٥٩﴾

婦人が気づかずに手を傷つけたのである。或いは、ヨセフに、真実ではない告発を行なった事で、手を傷つけなければならなかった、即ち、自分達を虚偽の立場に落としこんだという意味とも考えられる。しかし実際には何もおこらなかったのだとすれば、ヨセフが“手を切った事”について言及するはずがないのである。

注29　ヨセフは、財務係となる事を望んだ。彼は王の夢の実現に深くかかわる部署の責任を持つという強い願いから、一途に望んだものと思われる。

注30　ヤコブには12人の息子がいた。ヨセフとベニヤミンは妻ラケルの子で、残りの10人は他の妻達の子供であった。

61．然しながら、その弟を我が前に連れ参れぬのなら、お前たちはわしから穀物を量ってもらえまい。またわしに近づくこともさせぬ」と。

فَإِن لَّمْ تَأْتُونِي بِهِ فَلَا كَيْلَ لَكُمْ عِندِي وَلَا تَقْرَبُونِ ﴿٦١﴾

62．彼等は答えり、「彼を手放すよう、我等は父を説き伏せん。我等必ず之をなさん」と。

قَالُوا سَنُرَاوِدُ عَنْهُ أَبَاهُ وَإِنَّا لَفَاعِلُونَ ﴿٦٢﴾

63．ヨセフはその家僕等に命じたり、「彼等の金子をその鞍袋の中に入れておけ、さすれば家に帰りてこれを認め、多分また帰り来たらん」と。

وَقَالَ لِفِتْيَانِهِ اجْعَلُوا بِضَاعَتَهُمْ فِي رِحَالِهِمْ لَعَلَّهُمْ يَعْرِفُونَهَا إِذَا انقَلَبُوا إِلَىٰ أَهْلِهِمْ لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُونَ ﴿٦٣﴾

64．彼等その父の許に帰るや、云えり、「我等の父よ、我等は今後穀物の販売を拒否されたり。されば売って貰うために、弟を我等と偕に遣わされよ。我等は必ず弟を保護せん」と。

فَلَمَّا رَجَعُوا إِلَىٰ أَبِيهِمْ قَالُوا يَا أَبَانَا مُنِعَ مِنَّا الْكَيْلُ فَأَرْسِلْ مَعَنَا أَخَانَا نَكْتَلْ وَإِنَّا لَهُ لَحَافِظُونَ ﴿٦٤﴾

65．ヤコブは云えり、「あの子をお前たちには預けられぬ。先にあの子の兄をお前たちに預けた時と同じ結果とならん。されど一番の保護者はアッラーにして、彼こそは慈悲を垂れ給う者の中で最も慈悲深き御方にまします」と。

قَالَ هَلْ آمَنُكُمْ عَلَيْهِ إِلَّا كَمَا أَمِنتُكُمْ عَلَىٰ أَخِيهِ مِن قَبْلُ فَاللَّهُ خَيْرٌ حِفْظًا وَهُوَ أَرْحَمُ الرَّاحِمِينَ ﴿٦٥﴾

66．ところで、彼等その荷を解くと、彼等の金子が返還されてあるを見たり。彼等は云えり、「我等の父よ、我等はこの上に何を望むべきや？我等の金子は返還されてここにあり。此の分なら家族の食料も貰え得べし、また弟を護り、更に駱駝一頭分もの荷を得て帰るべし。それくらいわけもなく得られるなり」と。（注31）

وَلَمَّا فَتَحُوا مَتَاعَهُمْ وَجَدُوا بِضَاعَتَهُمْ رُدَّتْ إِلَيْهِمْ قَالُوا يَا أَبَانَا مَا نَبْغِي هَٰذِهِ بِضَاعَتُنَا رُدَّتْ إِلَيْنَا وَنَمِيرُ أَهْلَنَا وَنَحْفَظُ أَخَانَا وَنَزْدَادُ كَيْلَ بَعِيرٍ ذَٰلِكَ كَيْلٌ يَسِيرٌ ﴿٦٦﴾

67．ヤコブは云えり、「お前たちが避け難い障害にとり囲まれた場合に非ざれば、必ず彼を連れ戻るとアッラーの御名にかけて誓わぬかぎり、我は彼をお前たちと偕に行かしめず」と。かくて彼等がヤコブに誓いし時、

قَالَ لَنْ أُرْسِلَهُ مَعَكُمْ حَتَّىٰ تُؤْتُونِ مَوْثِقًا مِّنَ اللَّهِ لَتَأْتُنَّنِي بِهِ إِلَّا أَن يُحَاطَ بِكُمْ فَلَمَّا آتَوْهُ مَوْثِقَهُمْ

注31　「らくだ一頭分の荷物」とは必ずしも、らくだの背に載せる荷物を指すのではなく、たとえ、ろばに積んでも、らくだが普通運ぶ分の荷物の量を表わす。

ヤコブは云えり、「アッラーは我等が誓いしことを監視し給う」と。

قَالَ اللّٰهُ عَلٰى مَا نَقُوْلُ وَكِيْلٌ ٦٦

68. 更にヤコブは云えり、「我が息子たちよ、一つの門より入るなかれ、必ず別々の門より入れ。されど我はアッラーに対して無力なり。決定は独りアッラー次第なり。我はアッラーを信頼し奉る。信頼は独りアッラーに置き奉れ」と。

وَقَالَ يٰبَنِيَّ لَا تَدْخُلُوْا مِنْۢ بَابٍ وَّاحِدٍ وَّادْخُلُوْا مِنْ اَبْوَابٍ مُّتَفَرِّقَةٍ ۭ وَمَآ اُغْنِيْ عَنْكُمْ مِّنَ اللّٰهِ مِنْ شَيْءٍ ۭ اِنِ الْحُكْمُ اِلَّا لِلّٰهِ ۭ عَلَيْهِ تَوَكَّلْتُ ۚ وَعَلَيْهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُتَوَكِّلُوْنَ ٦٧

69. 彼等は父の言葉に従いて入りたれど、アッラーの定めたる何事をも回避する能わじ、ただヤコブの気持を満足させたるのみ。われらは彼に教えたれば、彼は博識なれど、世人の大半は之を知らず。(注 32)

وَلَمَّا دَخَلُوْا مِنْ حَيْثُ اَمَرَهُمْ اَبُوْهُمْ ۭ مَا كَانَ يُغْنِيْ عَنْهُمْ مِّنَ اللّٰهِ مِنْ شَيْءٍ اِلَّا حَاجَةً فِيْ نَفْسِ يَعْقُوْبَ قَضٰىهَا ۭ وَاِنَّهٗ لَذُوْ عِلْمٍ لِّمَا عَلَّمْنٰهُ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُوْنَ ٦٨

第九項

70. 彼等がヨセフを訪ねると、ヨセフはその弟を自分の許に泊らせり。而してヨセフは云えり、「我は汝の兄なり。されど彼等のなしたることに、悲しむなかれ」と。

وَلَمَّا دَخَلُوْا عَلٰي يُوْسُفَ اٰوٰٓى اِلَيْهِ اَخَاهُ قَالَ اِنِّىْٓ اَنَا اَخُوْكَ فَلَا تَبْتَىِٕسْ بِمَا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ٦٩

71. ヨセフは彼等に食料を供給したる時、弟の鞍袋の中に器をしのばせたり。出発してまもなく、大声で喚びかける者の声あり、「汝等旅行者よ、お前たちは盗賊なり」と。(注 33)

فَلَمَّا جَهَّزَهُمْ بِجَهَازِهِمْ جَعَلَ السِّقَايَةَ فِيْ رَحْلِ اَخِيْهِ ثُمَّ اَذَّنَ مُؤَذِّنٌ اَيَّتُهَا الْعِيْرُ اِنَّكُمْ لَسٰرِقُوْنَ ٧٠

72. 彼等は振り返って訊ねり、「お前たちが失える物は何ぞ？」と。

قَالُوْا وَاَقْبَلُوْا عَلَيْهِمْ مَّاذَا تَفْقِدُوْنَ ٧١

注 32　ヤコブは、神の啓示で既に知らされるかしてエジプトにいる男がヨセフだと気がついていた。その為、ヨセフが実の弟であるベニヤミンに二人だけで会える様、息子達に別々に町に入る様、頼んだのである。

注 33　ヨセフ自身が器を弟の袋に入れる事を最初に命令し、その後で彼を、窃盗の罪で告発したというのは誤った解釈である。彼の威厳から考えて、その様なことをすることはあり得ないのである。実際、弟の袋に入れる様にヨセフが命令したのはセカヤ（水を飲む器）であり、失くなった王の器というのはスワー（計量の器）の事であった。兄弟達の復路の準備の興奮のためと、弟ベニヤミンとの別れが近づいたため、ヨセフはのどの渇きをおぼえ水を持ってくる様に頼んだ。水は王の計量の器に入って運ばれてきた。当時は、計量の器は飲む器としても使われていたのである。喉の渇きをいやした後、ヨセフは、うっかりとその器をベニヤミンの持ち物の中に置いてしまい、誰も気づかずに兄のせいで荷物にまぎれこんでしまったのである。ヨセフはすぐに、いかにしてこの間違いが起こったのか気づいたが、これはベニヤミンを拘束する為の神自身の計画だと気づき、隊商が出ていってしまうまで、分別をもって何も言わずにおいたのである。

73. 追手の人たちは云えり、「国王の器を失えり。誰であれ、それを届け出る者には、一駱駝分の荷を取らせん、我その保証人たらん」と。

قَالُوا نَفْقِدُ صُوَاعَ الْمَلِكِ وَلِمَنْ جَآءَ بِهٖ حِمْلُ بَعِيْرٍ وَّاَنَا بِهٖ زَعِيْمٌ ﴿٧٣﴾

74. 彼等は答えり、「アッラーにかけて、あなた方よく御存知のように、我等はこの国で悪事を働くために来たに非ず、我等は盗賊に非ず」と。

قَالُوْا تَاللّٰهِ لَقَدْ عَلِمْتُمْ مَّا جِئْنَا لِنُفْسِدَ فِي الْاَرْضِ وَمَا كُنَّا سٰرِقِيْنَ ﴿٧٤﴾

75. すると、追手の人たちは云えり、「ならば、もしお前たちが嘘をついたことが判ったなら、その処罰は如何がせん？」と。

قَالُوْا فَمَا جَزَآؤُهٗٓ اِنْ كُنْتُمْ كٰذِبِيْنَ ﴿٧٥﴾

76. 彼等は答えり、「その罰は、器が誰かの鞍袋の中に在りたる場合、その鞍袋の持主をその罰金とす。かくの如く我等は悪事を行う者を罰す」と。（注 34）

قَالُوْا جَزَآؤُهٗ مَنْ وُّجِدَ فِيْ رَحْلِهٖ فَهُوَ جَزَآؤُهٗ كَذٰلِكَ نَجْزِي الظّٰلِمِيْنَ ﴿٧٦﴾

77. そこで彼（注 35）は弟の袋の前に、彼等の袋を調べ、然る後器を弟の袋より取り出だせり。（注 36）かくわれらはヨセフのために策したり。（注 37）アッラーの思し召しがなかりせば、国王の法律の下で、ヨセフはその弟を取り上げること叶わざるが故なり。われらは欲するままにその者の位階を高む。而して一切の知識ある者の上に、独一なる最高の識者あり。

فَبَدَاَ بِاَوْعِيَتِهِمْ قَبْلَ وِعَآءِ اَخِيْهِ ثُمَّ اسْتَخْرَجَهَا مِنْ وِّعَآءِ اَخِيْهِ كَذٰلِكَ كِدْنَا لِيُوْسُفَ مَا كَانَ لِيَاْخُذَ اَخَاهُ فِيْ دِيْنِ الْمَلِكِ اِلَّآ اَنْ يَّشَآءَ اللّٰهُ نَرْفَعُ دَرَجٰتٍ مَّنْ نَّشَآءُ وَفَوْقَ كُلِّ ذِيْ عِلْمٍ عَلِيْمٌ ﴿٧٧﴾

78. 彼等は云えり、「彼が盗みたるか、以前彼の兄も盗みたることありき」と。（注 38）さ

قَالُوْٓا اِنْ يَّسْرِقْ فَقَدْ سَرَقَ اَخٌ لَّهٗ مِنْ قَبْلُ

注 34　驚きあわてふためいたヨセフの兄弟達は、袋から器の見つかった者は自分達自身で拘束され身の証をたてるべきだと提案した。その為、自分の弟以外の残りの兄弟は、窃盗の罪をきせられずに、弟だけを残させておく事ができたのである。

注 35　器がなくなったと公表した役人。

注 36　これはヨセフがベニヤミンに示した特別の配慮からである。

注 37　全ての事は神の思し召しであった。即ちヨセフは、何も手を出さなかったのである。ヨセフは水飲み用に使った王の計量の器を全く気付かずにベニヤミンの荷物に入れてしまい、偶然に兄弟達がベニヤミンをヨセフのところに残す様にする意見を述べた。そのため、ヨセフは満足のゆく幸運を手にしたのである。

注 38　一つの罪はもう一つの罪を呼ぶ。ヨセフの兄弟達は、最初は彼を死に追いやろうとし、今や、恥も知らずに、彼の事を盗っ人呼ばわりしたのである。

れどヨセフはそれを心に秘め、之を彼等に明さざりき。ヨセフはただ云えり、「お前たちは酷い状態になるべし。アッラーはお前たちが申し立てることを最もよく知り給う」と。

فَأَسَرَّهَا يُوسُفُ فِي نَفْسِهِ وَلَمْ يُبْدِهَا لَهُمْ ۚ قَالَ أَنتُمْ شَرٌّ مَّكَانًا ۖ وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا تَصِفُونَ ﴿٧٨﴾

79. 彼等は云えり、「侯に申し上げる、彼には年老いたる父あり。（注 39）されば彼の代りに我等の中から一人を選び給え、汝を優しいお方とお見うけいたすが故に」と。

قَالُوا يَا أَيُّهَا الْعَزِيزُ إِنَّ لَهُ أَبًا شَيْخًا كَبِيرًا فَخُذْ أَحَدَنَا مَكَانَهُ ۖ إِنَّا نَرَاكَ مِنَ الْمُحْسِنِينَ ﴿٧٩﴾

80. ヨセフは答えり、「アッラーは、我等の財物を所持せし者以外は、何人も捕えることを禁じたり。之をなさば、我等不義者とならん」と。

قَالَ مَعَاذَ اللَّهِ أَن نَّأْخُذَ إِلَّا مَن وَجَدْنَا مَتَاعَنَا عِندَهُ إِنَّا إِذًا لَّظَالِمُونَ ﴿٨٠﴾ ع

第十項

81. 彼等は弟を諦め、退きて、密議せり。一同の指導者（注 40）は云えり、「汝等はアッラーの御名において厳粛なる誓約を父と交せしこと、並びに以前ヨセフについても自らの取分を怠ったことを忘れたるか？されば、我が父が我を許すか、或いはアッラーが判決を下すまでは、我はこの地を離れまじ。彼こそは最も優れたる審判者なり。

فَلَمَّا اسْتَيْأَسُوا مِنْهُ خَلَصُوا نَجِيًّا ۖ قَالَ كَبِيرُهُمْ أَلَمْ تَعْلَمُوا أَنَّ أَبَاكُمْ قَدْ أَخَذَ عَلَيْكُم مَّوْثِقًا مِّنَ اللَّهِ وَمِن قَبْلُ مَا فَرَّطتُمْ فِي يُوسُفَ ۖ فَلَنْ أَبْرَحَ الْأَرْضَ حَتَّىٰ يَأْذَنَ لِي أَبِي أَوْ يَحْكُمَ اللَّهُ لِي ۖ وَهُوَ خَيْرُ الْحَاكِمِينَ ﴿٨١﴾

82. 汝等は父の許に帰りて、告げよ、『我等の父よ、汝の息子は盗みをしたり。我等はただ自分たちが見たことを申し述べるに過ぎず。なれど、見えざることに対しては、監視者たる能わじ。

ارْجِعُوا إِلَىٰ أَبِيكُمْ فَقُولُوا يَا أَبَانَا إِنَّ ابْنَكَ سَرَقَ وَمَا شَهِدْنَا إِلَّا بِمَا عَلِمْنَا وَمَا كُنَّا لِلْغَيْبِ حَافِظِينَ ﴿٨٢﴾

注 39　ベニヤミンに盗みの罪を着せただけでなく、彼を見放し、その上、「彼には年老いたる父あり」と言って自分達の弟である事を認め様としなかった。

注 40　聖書によれば、ベニヤミンを置き去りにして父ヤコブの元には帰れないと言ったのは長男のルベンではなく、四番めの兄のユダであった。クルアーンに用いられている「カロール」は「大きい」とか「年上の」という意味を表わし、「年長の」という意味を持つ「アクバル」は使われていない。ヤコブの四番めの息子であるユダは、ヨセフより年上の兄の一人である。又更に、「カビール」は単に「大きい」、「年上」であるだけではなく、「査定、地位、尊厳に於いて偉大である」或いは「統率者」の意味をも併せ持ち、ここではむしろその意味で使われており、又そういう意味であればルベンよりはユダにあてはまる。ユダはヤコブにとってはルベンよりも重要な存在であった（創世紀 43 章 8 ～10 節）。

83．我等が在りし邑の人々に訊ね給え、又は我等と偕に帰りたる隊商に訊ね給え。我等の言葉は真実なり』」と。

وَسْـَٔلِ ٱلْقَرْيَةَ ٱلَّتِى كُنَّا فِيهَا وَٱلْعِيرَ ٱلَّتِىٓ أَقْبَلْنَا فِيهَا ۖ وَإِنَّا لَصَـٰدِقُونَ ﴿٨٢﴾

84．ヤコブは云えり、「そうではあるまい、お前たちは自分たちのためによからぬ事件を潤色したり。なれど、今の我は耐え忍ぶことこそ有益なり。恐らく、アッラーがあの子たちをすべて（注 41）我に返し給わん。彼こそはすべてを知り、賢哲にましますが故に」と。

قَالَ بَلْ سَوَّلَتْ لَكُمْ أَنفُسُكُمْ أَمْرًا ۖ فَصَبْرٌ جَمِيلٌ ۖ عَسَى ٱللَّهُ أَن يَأْتِيَنِى بِهِمْ جَمِيعًا ۚ إِنَّهُۥ هُوَ ٱلْعَلِيمُ ٱلْحَكِيمُ ﴿٨٣﴾

85．ヤコブは彼等から顔をそむけて、云えり、「ああ、ヨセフを思いて我が心歎き哀しむ!」と。彼の目は悲嘆のために涙で満たされ、胸は煩悶で締めつけられたり。（注 42）

وَتَوَلَّىٰ عَنْهُمْ وَقَالَ يَـٰٓأَسَفَىٰ عَلَىٰ يُوسُفَ وَٱبْيَضَّتْ عَيْنَاهُ مِنَ ٱلْحُزْنِ فَهُوَ كَظِيمٌ ﴿٨٤﴾

86．彼等は云えり、「アッラーにかけて申し上げる、汝ヨセフについて語るを止めずは、衰弱するか、果ては亡き人の中に入らん」と。（注 43）

قَالُوا۟ تَٱللَّهِ تَفْتَؤُا۟ تَذْكُرُ يُوسُفَ حَتَّىٰ تَكُونَ حَرَضًا أَوْ تَكُونَ مِنَ ٱلْهَـٰلِكِينَ ﴿٨٥﴾

87．ヤコブは答えり、「我はただ我が煩悶と憂愁をアッラーに訴えるのみ。而して、我は、お前たちが知らざることを、アッラーより聴き知る者なり。（注 44）

قَالَ إِنَّمَآ أَشْكُوا۟ بَثِّى وَحُزْنِىٓ إِلَى ٱللَّهِ وَأَعْلَمُ مِنَ ٱللَّهِ مَا لَا تَعْلَمُونَ ﴿٨٦﴾

88．我が息子たちよ、行きて、ヨセフ並びにその兄弟を探すのだ。アッラーの慈悲に絶望するなかれ、不信者輩の外は何人もアッラーの慈悲に絶望せず」と。（注 45）

يَـٰبَنِىَّ ٱذْهَبُوا۟ فَتَحَسَّسُوا۟ مِن يُوسُفَ وَأَخِيهِ وَلَا تَا۟يْـَٔسُوا۟ مِن رَّوْحِ ٱللَّهِ ۖ إِنَّهُۥ لَا يَا۟يْـَٔسُ مِن رَّوْحِ ٱللَّهِ إِلَّا ٱلْقَوْمُ ٱلْكَـٰفِرُونَ ﴿٨٧﴾

注 41　ヨセフとベニヤミンとユダのこと。

注 42　この節にはヤコブの目には悲しみの涙が溢れ目の前がまっ暗になったという事が述べられている。

注 43　「衰弱」とは、肉体及び知性の堕落した、心の多大な不安と病に悩む、虚弱や疲労で死にかけている、或いは、過度の悲しみや愛情でやせ衰え崩壊してしまった人間を意味している。

注 44　ヤコブが、神により、ヨセフとベニヤミンそしてユダが生きている事を知らされている事を暗示している。

注 45　この節も、ヤコブが、ヨセフとベニヤミンとユダがエジプトで生きている事を確信していた事を示している。

89. 彼等は再びヨセフの前に来て、云えり、「侯よ、我等並びに我が家族は災難に見舞われたれば、我等が持ち来たる金少しなれど、十分な枡目を我等に与え、慈善として施し給え。必ずやアッラーは、慈悲深いお方を賞し給う。（注 46）

فَلَمَّا دَخَلُوا عَلَيْهِ قَالُوا يَا أَيُّهَا الْعَزِيزُ مَسَّنَا وَأَهْلَنَا الضُّرُّ وَجِئْنَا بِبِضَاعَةٍ مُّزْجَاةٍ فَأَوْفِ لَنَا الْكَيْلَ وَتَصَدَّقْ عَلَيْنَا إِنَّ اللَّهَ يَجْزِي الْمُتَصَدِّقِينَ ٨٩

90. ヨセフは云えり、「お前たちが愚昧でありし時、ヨセフ並びにその弟に、何を行いたるかわかっておるのか？」と。（注 47）

قَالَ هَلْ عَلِمْتُم مَّا فَعَلْتُم بِيُوسُفَ وَأَخِيهِ إِذْ أَنتُمْ جَاهِلُونَ ٩٠

91. 彼等は云えり、「ややっ、汝ヨセフとな！？」ヨセフは云えり、「さよう、我はヨセフ、こは我が弟なり。アッラーは我等に慈悲深くあらせられたり。誰であれ、アッラーを畏れ敬い、且つ耐え忍ぶ者であるならば―アッラーは決して善行者への報奨を空しゅうはせず」と。

قَالُوا أَإِنَّكَ لَأَنتَ يُوسُفُ قَالَ أَنَا يُوسُفُ وَهَٰذَا أَخِي قَدْ مَنَّ اللَّهُ عَلَيْنَا إِنَّهُ مَن يَتَّقِ وَيَصْبِرْ فَإِنَّ اللَّهَ لَا يُضِيعُ أَجْرَ الْمُحْسِنِينَ ٩١

92. 彼等は云えり、「アッラーにかけて、げにアッラーは、汝を我等の上に選べるなり。我等は確かに罪人にてありき」と。

قَالُوا تَاللَّهِ لَقَدْ آثَرَكَ اللَّهُ عَلَيْنَا وَإِن كُنَّا لَخَاطِئِينَ ٩٢

93. ヨセフは云えり、「今日のところはお前たちを非難すまい。（注 48）恐らくアッラーもお前たちを赦し給う。彼は慈悲者の中でも、最も慈悲深い御方にましますが故に。

قَالَ لَا تَثْرِيبَ عَلَيْكُمُ الْيَوْمَ يَغْفِرُ اللَّهُ لَكُمْ وَهُوَ أَرْحَمُ الرَّاحِمِينَ ٩٣

注 46　この場合のヨセフの兄弟達の行動は説明し難い。彼等は、自分達の現在のエジプトへの旅の真の目的であるヨセフとベニヤミンとユダを捜し出すということを無視し、余りにも道徳的に低次元となってしまい、食物の施しを乞う様になった。

注 47　自分の兄弟が身を落としてゆくのを、これ以上見るに耐えなくなったヨセフは、自分がヨセフであることを彼等に言った。しかし話の内容については間接的に持ち出した。

注 48　ヨセフは兄弟に疑念を持たせず、即座に自分の赦免は腹蔵のない無制限なものであると告げ、彼等の処置についての兄弟の恐怖と憂慮を取り除いてやった。この兄弟を許した心の広さ、寛大さが、聖なる預言者に最も類似している点である。聖なる預言者もヨセフの様に脱出と追放の中にあって、名誉と力を勝ち得、何年もの流刑の後、生まれ故郷に征服者として一万人の支持者の統率者として凱旋した時に、メッカは彼の足許にひれ伏し、預言者は彼等にどの様な措置を望むか尋ねた。「ヨセフが自分の兄弟達に取った措置を」と彼等は答えた。聖なる預言者は即座に「それでは今日お前達には何のとがめもない事としよう」と答えた。メッカのクライシュはこの聖なる預言者の死を計る為に、そしてイスラムを根絶する為には、何ものをも辞さなかった以前の血に飢えた敵であった。それにもかかわらずこのクライシュに対して聖なる預言者のとったこの気高い処置は人間の歴史の全記録中に並ぶものがない程、寛大であった。

94．されば我が上着を持ち帰りて、我が父の前に横たえよ。さすれば彼一部始終を了解せん。然(しか)る後にお前たち、全家を挙(あ)げて我を訪ねよ」と。

اِذْهَبُوْا بِقَمِيْصِيْ هٰذَا فَاَلْقُوْهُ عَلٰى وَجْهِ اَبِيْ يَاْتِ بَصِيْرًا ۚ وَاْتُوْنِيْ بِاَهْلِكُمْ اَجْمَعِيْنَ ﴿٩٤﴾

第十一項

95．彼等の隊商が出発した頃、その父は云えり、「お前たち我を老耄(もうろく)せりと思うだろうが、我はヨセフの匂いを感ず」と。（注 49）

وَلَمَّا فَصَلَتِ الْعِيْرُ قَالَ اَبُوْهُمْ اِنِّيْ لَاَجِدُ رِيْحَ يُوْسُفَ لَوْلَآ اَنْ تُفَنِّدُوْنِ ﴿٩٥﴾

96．彼等皆云えり、「アッラーにかけて、そはいつもながらの老いの錯誤(よまい)なり」と。

قَالُوْا تَاللّٰهِ اِنَّكَ لَفِيْ ضَلٰلِكَ الْقَدِيْمِ ﴿٩٦﴾

97．されど、朗報の伝達者来りて、ヨセフの上着をヤコブの前に横たえると、ヤコブは啓発されたり。（注 50）そこで、ヤコブは云えり、「我はお前たちに、お前たちが知らざることをアッラーより聴き知っておると云わざりしか？」と。

فَلَمَّآ اَنْ جَآءَ الْبَشِيْرُ اَلْقٰهُ عَلٰى وَجْهِهٖ فَارْتَدَّ بَصِيْرًا ۚ قَالَ اَلَمْ اَقُلْ لَّكُمْ ۚ اِنِّيْٓ اَعْلَمُ مِنَ اللّٰهِ مَا لَا تَعْلَمُوْنَ ﴿٩٧﴾

98．彼等は云えり、「我等の父よ、我等の罪の赦免(しゃめん)を請い給え。我等は紛れもなく罪深い者なりき」と。

قَالُوْا يٰٓاَبَانَا اسْتَغْفِرْ لَنَا ذُنُوْبَنَآ اِنَّا كُنَّا خٰطِئِيْنَ ﴿٩٨﴾

99．ヤコブは云えり、「我は、我が主に間違いなくお前たちの赦しを請わん。げに彼は、寛大にして慈悲深くましますす」と。

قَالَ سَوْفَ اَسْتَغْفِرُ لَكُمْ رَبِّيْ ۗ اِنَّهٗ هُوَ الْغَفُوْرُ الرَّحِيْمُ ﴿٩٩﴾

100．　かくて彼等一同ヨセフを訪れると、ヨセフは父母（注 51）を抱きしめて、云えり、「アッラーもし欲しなば、安じて埃及(エジプト)に入れ」と。

فَلَمَّا دَخَلُوْا عَلٰى يُوْسُفَ اٰوٰٓى اِلَيْهِ اَبَوَيْهِ وَقَالَ ادْخُلُوْا مِصْرَ اِنْ شَآءَ اللّٰهُ اٰمِنِيْنَ ﴿١٠٠﴾

注 49　兄弟達の隊商が帰宅する以前に、ヤコブは家内の人々に、「あらゆる状況はそれに反した様相を呈しているにもかかわらず、ヨセフに間もなく会える様に思う」と述べている。この確信を強調する為、ヤコブは、「ヨセフに会う事は不可能だと皆は思っているだろうが、夢でもなければ、年寄りの思い入れでもない。」という語句で表わしている。

注 50　ヨセフのシャツがヤコブの目の前に置かれた時、信仰に根ざした啓示に過ぎなかったヨセフが生きているという確信が事実として、把握されたのである。これが、「啓発された」という言葉の意味するところである。クルアーンでは、ヤコブが盲になったという解釈は全然取っていないのである。盲になったという事が、彼の偉大な神の預言者であるという尊厳と一致しないし、その他の数節にも盲になったという見解には反する叙述がみられる。ヤコブに手渡されたシャツは、ヨセフが井戸に投げ込まれた時着ていたシャツと思われる。

注 51　ヨセフの実の母親であるラケルは既に死んでおり、この節の「両親」という語の使用法は、養母であっても、その人の実の親としての愛と尊敬に値する事を示している。

101. 而してヨセフは両親を玉座（注52）に登らしめたれば、彼等一同地に俯伏して神に感謝の意を捧げり。（注53）ヨセフは云えり、「我が父よ、これは昔、我が見し夢の成就なり。我が主は之を実現せしめたり。悪魔が我と我が兄弟との間に仲たがいを引き起こさせたる時、後で我を牢獄より出し、（注54）またあなた方を砂漠より連れ来るは、我に賜えるアッラの恩寵なり。げに、我が主は、お気に召したる者には慈悲深くましします。彼はすべてを知り、賢哲にまします。

وَرَفَعَ أَبَوَيْهِ عَلَى الْعَرْشِ وَخَرُّوا لَهُ سُجَّدًا ۖ وَقَالَ يَا أَبَتِ هَٰذَا تَأْوِيلُ رُؤْيَايَ مِنْ قَبْلُ قَدْ جَعَلَهَا رَبِّي حَقًّا ۖ وَقَدْ أَحْسَنَ بِي إِذْ أَخْرَجَنِي مِنَ السِّجْنِ وَجَاءَ بِكُمْ مِنَ الْبَدْوِ مِنْ بَعْدِ أَنْ نَزَغَ الشَّيْطَانُ بَيْنِي وَبَيْنَ إِخْوَتِي ۚ إِنَّ رَبِّي لَطِيفٌ لِمَا يَشَاءُ ۚ إِنَّهُ هُوَ الْعَلِيمُ الْحَكِيمُ ۝١٠١

102. おお、主よ、汝は我に権能を授け、夢の解釈を教えたり。おお、天地の創造者よ、汝は現世においても来世においても我が守護者なり。願わくば我を、汝の意思に甘心悦服して死なしめよ、而して義しき人々の列に加え給え」と。

رَبِّ قَدْ آتَيْتَنِي مِنَ الْمُلْكِ وَعَلَّمْتَنِي مِنْ تَأْوِيلِ الْأَحَادِيثِ ۚ فَاطِرَ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ أَنْتَ وَلِيِّي فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ ۖ تَوَفَّنِي مُسْلِمًا وَأَلْحِقْنِي بِالصَّالِحِينَ ۝١٠٢

103. これは、われらが汝に啓示する秘奥なる消息なり。汝は、ヨセフの兄弟たちが詭計をなさんとせし時、彼等と偕に居らざりき。（注55）

ذَٰلِكَ مِنْ أَنْبَاءِ الْغَيْبِ نُوحِيهِ إِلَيْكَ ۖ وَمَا كُنْتَ لَدَيْهِمْ إِذْ أَجْمَعُوا أَمْرَهُمْ وَهُمْ يَمْكُرُونَ ۝١٠٣

104. たとい汝が熱望するとも、世人の多くは之を信ぜざるべし。

وَمَا أَكْثَرُ النَّاسِ وَلَوْ حَرَصْتَ بِمُؤْمِنِينَ ۝١٠٤

105. 汝はこのために如何なる報酬も彼等に求めず。そはただ全人類のための訓戒に過ぎず。

وَمَا تَسْأَلُهُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ ۚ إِنْ هُوَ إِلَّا ذِكْرٌ لِلْعَالَمِينَ ۝١٠٥

注52　「玉座」の意味は、ヨセフが両親を王にひきあわせた（創世紀47章2節、7節）、或いは王の許可を受け、自分の玉座に坐らせた事を意味している。古代に於いては、王の大臣や代理人は、王と同様に自分の玉座を持っていたのである。

注53　ヨセフの兄弟と両親は、ヨセフがこんなにも高い地位につかせて頂けた事を、ひれ伏して神に感謝したのである。ヨセフにひざまづいて拝したのではなく、ヨセフの事で跪拝したのである。

注54　ヨセフは、神の恩恵については、牢獄から解放してもらった事だけを述べ、井戸から助け出された事には触れなかった。これは兄弟達に自分達の行為を恥じさせたくなかったからである。

注55　このヨセフの次弟は単なる話ではなく、聖なる預言者とイスラムの将来についての力強い預言の核をなしている。

第十二項

106. 天地間には数多(あまた)の神兆(しるし)あり、されど彼等は之(これ)を見過し、通りすぐ。(注56)

وَكَأَيِّنْ مِّنْ اٰيَةٍ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ يَمُرُّوْنَ عَلَيْهَا وَهُمْ عَنْهَا مُعْرِضُوْنَ ﴿١٠٦﴾

107. 彼等の多くは、アッラーに他神(あだしがみ)を併(あわ)せ祀らずば、アッラーを信ぜず。

وَمَا يُؤْمِنُ اَكْثَرُهُمْ بِاللّٰهِ اِلَّا وَهُمْ مُّشْرِكُوْنَ ﴿١٠٧﴾

108. ならば彼等は、抵抗し難いアッラーの懲罰から、また知らぬ間に突然到来する死期から安全でいられるとでも思っているのか？

اَفَاَمِنُوْٓا اَنْ تَاْتِيَهُمْ غَاشِيَةٌ مِّنْ عَذَابِ اللّٰهِ اَوْ تَاْتِيَهُمُ السَّاعَةُ بَغْتَةً وَّهُمْ لَا يَشْعُرُوْنَ ﴿١٠٨﴾

109. 云え、「これぞ我が道なり。我と我に従う者は、確実なる証拠に基いて、アッラーに呼びかける。アッラーに光栄あれ、我はアッラーに他神(あだしがみ)を配する者に非ず」と。(注57)

قُلْ هٰذِهٖ سَبِيْلِيْٓ اَدْعُوْٓا اِلَى اللّٰهِ عَلٰى بَصِيْرَةٍ اَنَا وَمَنِ اتَّبَعَنِيْ وَسُبْحٰنَ اللّٰهِ وَمَآ اَنَا مِنَ الْمُشْرِكِيْنَ ﴿١٠٩﴾

110. われらが汝以前に使徒として遣わした者は、すべて邑(まち)の住民の中から選びてこれに啓示を与えし者ばかり。彼等地上を遍(あまね)く旅して、彼等以前の人々の末路が如何なるものなりしかを見ざりしか？神を畏れ敬う者にとっては、来世の住居(すみか)こそ最上なり。お前たちこれでも理解(わから)ざるか？

وَمَآ اَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ اِلَّا رِجَالًا نُّوْحِيْٓ اِلَيْهِمْ مِّنْ اَهْلِ الْقُرٰى اَفَلَمْ يَسِيْرُوْا فِي الْاَرْضِ فَيَنْظُرُوْا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ وَلَدَارُ الْاٰخِرَةِ خَيْرٌ لِّلَّذِيْنَ اتَّقَوْا اَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ﴿١١٠﴾

111. 使徒たちが不信心者どもに絶望し、世間から嘘つき呼ばわりされたる時、われらの助けが使徒たちに降(くだ)り、われらが欲する者を救いたり。されど、悪人どもは、われらの懲罰から免(まぬか)れ得ず。

حَتّٰٓى اِذَا اسْتَيْئَسَ الرُّسُلُ وَظَنُّوْٓا اَنَّهُمْ قَدْ كُذِبُوْا جَآءَهُمْ نَصْرُنَا فَنُجِّيَ مَنْ نَّشَآءُ وَلَا يُرَدُّ بَاْسُنَا عَنِ الْقَوْمِ الْمُجْرِمِيْنَ ﴿١١١﴾

112. 確かに、これ等の物語の中には理性ある人々への教訓あり。そは作り話に非ず、以前に在りしものの証明であり、萬事の詳細な解説であり、且つまた信仰する徒輩(ともがら)への嚮導にして、慈悲なり。

لَقَدْ كَانَ فِيْ قَصَصِهِمْ عِبْرَةٌ لِّاُولِي الْاَلْبَابِ مَا كَانَ حَدِيْثًا يُّفْتَرٰى وَلٰكِنْ تَصْدِيْقَ الَّذِيْ بَيْنَ يَدَيْهِ وَتَفْصِيْلَ كُلِّ شَيْءٍ وَّهُدًى وَّرَحْمَةً لِّقَوْمٍ يُّؤْمِنُوْنَ ﴿١١٢﴾

注56　この節では、信者と不信者の根本的な態度の違いが指摘されている。信ずる者は、心の目を開き、少しでも神よりの手がかりがあれば、つかもうと心の準備がなされているが、不信者達は、明確な究極の神兆(しるし)が現れている際も恩恵をうける事を拒否する盲の人間の様にふるまう。

注57　健やかな理由と確固たる信念を持たない盲目的で思慮のない信仰は、神の目には届いたとしても何の意味をも持たないのである。

سُوْرَةُ الرَّعْدِ مَكِّيَّةٌ (١٣)

アル・ラアド
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．アリフ・ラーム・ミーム・ラー。(注1) これは完全無欠なる経典の諸節なり。汝の主より汝に降し賜わりたるものは真理なり、されど世人の多くは之を信ぜず。

الٓمّٓرٰ تِلْكَ اٰيٰتُ الْكِتٰبِ ؕ وَالَّذِيْٓ اُنْزِلَ اِلَيْكَ مِنْ رَّبِّكَ الْحَقُّ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَ النَّاسِ لَا يُؤْمِنُوْنَ ②

3．お前たちに見得る柱なくして大空を高く挙げたるはアッラーなり。(注2) 然る後、彼は玉座に登れり。(注3) 彼はまた日月をその任務に服せしめ給えば、両者は定めの時までその軌道を運行す。彼は萬事を総轄す。お前たちに主に見えんことを確信せしめんがため、彼はさまざま神兆を明にし給う。

اَللّٰهُ الَّذِيْ رَفَعَ السَّمٰوٰتِ بِغَيْرِ عَمَدٍ تَرَوْنَهَا ثُمَّ اسْتَوٰى عَلَى الْعَرْشِ وَسَخَّرَ الشَّمْسَ وَالْقَمَرَ ؕ كُلٌّ يَّجْرِيْ لِاَجَلٍ مُّسَمًّى ؕ يُدَبِّرُ الْاَمْرَ يُفَصِّلُ الْاٰيٰتِ لَعَلَّكُمْ بِلِقَآءِ رَبِّكُمْ تُوْقِنُوْنَ ③

4．大地を拡げ、山々や河川をそこに配したるは彼なり。而して彼は、一切の果実を雌雄一対となせり。(注4) 彼はまた夜をして昼を覆わせ給う。まことにこの中には、思案する人々へのさまざまなる神兆あり。

وَهُوَ الَّذِيْ مَدَّ الْاَرْضَ وَجَعَلَ فِيْهَا رَوَاسِيَ وَاَنْهٰرًا ؕ وَمِنْ كُلِّ الثَّمَرٰتِ جَعَلَ فِيْهَا زَوْجَيْنِ اثْنَيْنِ يُغْشِي الَّيْلَ النَّهَارَ ؕ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يَّتَفَكَّرُوْنَ ④

注1　われは一切を知り一切を見るアッラーなり。10、11、12章はアリフ・ラーム・ラーという句ではじまっているが、順番でいうと13番目当章はアリフ・ラーム・ミーム・ラーという句ではじまっている。このように短縮形で異なっているのは、当章の主題が10、11、12章とは少し違っているという事である。この4語から成る短縮句の意味は、「我はアッラーであり、全知の神、一切を知り一切を見る神である」ということである。

注2　この文の意味は、(1)天は柱がなくても落ちない事が分かる。(2)天は目には見えない柱の上にある、即ち天には支えがあるが、それを見ることができない。この節の意味を文字通りに取れば、天は柱の支えなしで存在しているという意味である。比喩的には、天は、実際には、支えの上にあるのだが、人間の目にはこの支えは見えないというのである。これは、たとえば、今までに科学によって発見された目には見えない重力、磁力、惑星の動きなどや、将来発見されるだろうものごとである。

注3　「玉座」という語はクルアーンでは、精神的、肉体的法則の完成をもたらすことを意味するために使われている。この表現の使い方は、世界の君主のならわしに似ている。

注4　この節では果物のことにだけ触れているけれども、クルアーンの他の個所では、神がすべてのものに一対ー雄と雌ーを作られたと述べている（36章37節、51章50節）。これは実に、すべての宗教的聖典の中でクルアーンが最初に言い出したことである。科学者は、無機物の中にすら「対」を発見しようとし始めた。この節ではすべてのものは対になっているという法則が人間の知性にも応用できることに注意を向けている。天の光が知性を照らさなければ、人は神の啓示を人間の理性の結合から生まれる真の知識を得ることはできない。

5．地上には、相い接して、異った区域あり。葡萄の園、穀物の畑、或いは一つの根より一緒に育った棗椰子の樹もあれば、独り立つものもあり。それ等は皆同じ水を灌がれども、われらが或る果物を特に他よりも慈味ならしめたり。この中には、理性ある人々へのさまざまな神兆あり。（注5）

وَفِي الْأَرْضِ قِطَعٌ مُتَجَاوِرَاتٌ وَجَنَّاتٌ مِنْ أَعْنَابٍ وَزَرْعٌ وَنَخِيلٌ صِنْوَانٌ وَغَيْرُ صِنْوَانٍ يُسْقَىٰ بِمَاءٍ وَاحِدٍ وَنُفَضِّلُ بَعْضَهَا عَلَىٰ بَعْضٍ فِي الْأُكُلِ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَاتٍ لِقَوْمٍ يَعْقِلُونَ ⑤

6．もし汝驚くべきことあらば、彼等の言葉こそ驚くべきことなり、「何んとな！彼等土と化したる後、再び新しい創造の状態にさせられるとな？」と云う。これ等の者はその主を信ぜざる者どもなり。彼等はその頸に枷をかけられ、（注6）火獄の住人となって、永劫に彼処に留まらん。

وَإِنْ تَعْجَبْ فَعَجَبٌ قَوْلُهُمْ أَإِذَا كُنَّا تُرَابًا أَإِنَّا لَفِي خَلْقٍ جَدِيدٍ أُولَٰئِكَ الَّذِينَ كَفَرُوا بِرَبِّهِمْ وَأُولَٰئِكَ الْأَغْلَالُ فِي أَعْنَاقِهِمْ وَأُولَٰئِكَ أَصْحَابُ النَّارِ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ⑥

7．過去において、さまざまなみせしめが起っているにもかかわらず、彼等は汝に福よりも禍いの速やかならんことを求む。　げに主は、その悪行にもかかわらず、人間に寛大であり、同時に懲罰にも厳格にまします。

وَيَسْتَعْجِلُونَكَ بِالسَّيِّئَةِ قَبْلَ الْحَسَنَةِ وَقَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِهِمُ الْمَثُلَاتُ وَإِنَّ رَبَّكَ لَذُو مَغْفِرَةٍ لِلنَّاسِ عَلَىٰ ظُلْمِهِمْ وَإِنَّ رَبَّكَ لَشَدِيدُ الْعِقَابِ ⑦

8．信ぜざる者どもは云う、「何故に主より奇蹟（注7）が彼に降らざりしか？」と。汝はただ警告者にすぎず。それぞれ各民族とも、一人の師導者あり。

وَيَقُولُ الَّذِينَ كَفَرُوا لَوْلَا أُنْزِلَ عَلَيْهِ آيَةٌ مِنْ رَبِّهِ إِنَّمَا أَنْتَ مُنْذِرٌ وَلِكُلِّ قَوْمٍ هَادٍ ⑧

第二項

9．アッラーはそれぞれの女性が身ごもることを知り、また懐妊期限の増減を知る。一切のものは、アッラーの御手許で正しく計量される。（注8）

اللَّهُ يَعْلَمُ مَا تَحْمِلُ كُلُّ أُنْثَىٰ وَمَا تَغِيضُ الْأَرْحَامُ وَمَا تَزْدَادُ وَكُلُّ شَيْءٍ عِنْدَهُ بِمِقْدَارٍ ⑨

注5　この表現の意味は、木々に同じ水をやっても実る果実は味や色が大変に違う、それなら、何故聖なる預言者が同じ町、同じ民族の中に住んでいても、彼が特に天啓という秘薬に養われていて、彼の敵がサタンの保護の下で育てられているなら、彼一人抜きんでていないわけがあり得ようかという意味である。

注6　間違った信仰と悪行という手かせ足かせ。

注7　「奇蹟」というのは、他の意味が示されていない時は、いつでも「こらしめの奇蹟」の意味である。

注8　4節で宇宙のすべての物は対になっていると語られたが、霊的世界でも男のように振るまう人もあれば女のように振るまう人もいる。前者は影響を与え、後者は影響を受ける。この節では聖なる預言者の人格においては、霊的には影響を与える男であっても、だれも彼の刻印を受けなければ、霊的な身分を得る事が出来ない、という事が指摘されている。更に、神は聖なる預言者の時代の人々の生まれつきの才能や素質をよく知っ

10．彼は見えざる世界も、見える世界も知悉し、比類ない偉大者、至高者なり。

عٰلِمُ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ الْكَبِيْرُ الْمُتَعَالِ ⑩

11．お前たちの中で、その言葉をそっと胸にしまっておく者も、また之をあからさまに吹聴する者も、アッラーにとりては同じなり。また闇に身を隠す者も、白昼堂々と闊歩する者もまた然り。（注９）

سَوَآءٌ مِّنْكُمْ مَّنْ اَسَرَّ الْقَوْلَ وَمَنْ جَهَرَ بِهٖ وَمَنْ هُوَ مُسْتَخْفٍۢ بِالَّيْلِ وَسَارِبٌۢ بِالنَّهَارِ ⑪

12．使者の前後には諸天使（注10）が随伴し、アッラーの命を奉じて彼を護衛す。アッラーは、人々が己れの心中にあるものを変えぬ限り、決して人々の境遇を変えることなし。而して、アッラー人々を懲らしめんと欲さば、何人も之を払いのけること能わず、また人々はアッラー以外に如何なる守護者も有せず。

لَهٗ مُعَقِّبٰتٌ مِّنْۢ بَيْنِ يَدَيْهِ وَمِنْ خَلْفِهٖ يَحْفَظُوْنَهٗ مِنْ اَمْرِ اللّٰهِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ لَا يُغَيِّرُ مَا بِقَوْمٍ حَتّٰى يُغَيِّرُوْا مَا بِاَنْفُسِهِمْ ؕ وَاِذَآ اَرَادَ اللّٰهُ بِقَوْمٍ سُوْٓءًا فَلَا مَرَدَّ لَهٗ ۚ وَمَا لَهُمْ مِّنْ دُوْنِهٖ مِنْ وَّالٍ ⑫

13．彼こそは稲妻を見せて、お前たちに希望と恐怖を抱かしめ、また重い雨雲を起し給う。（注11）

هُوَ الَّذِيْ يُرِيْكُمُ الْبَرْقَ خَوْفًا وَّطَمَعًا وَّيُنْشِئُ السَّحَابَ الثِّقَالَ ۚ ⑬

14．雷鳴とどろいてその栄光を讃えれば、諸天使も彼を畏れてまた然り。彼は雷鳴を放ち、彼等がアッラーについて論争している間に、之をもってその欲する者を撃ち給う、而して、罰するに厳しくましします。

وَيُسَبِّحُ الرَّعْدُ بِحَمْدِهٖ وَالْمَلٰٓئِكَةُ مِنْ خِيْفَتِهٖ ۚ وَيُرْسِلُ الصَّوَاعِقَ فَيُصِيْبُ بِهَا مَنْ يَّشَآءُ وَهُمْ يُجَادِلُوْنَ فِي اللّٰهِ ۚ وَهُوَ شَدِيْدُ الْمِحَالِ ؕ ⑭

15．正当な祈りとはただ彼にのみ祈ることなり。（注12）彼等がアッラー以外に祈る

لَهٗ دَعْوَةُ الْحَقِّ ؕ وَالَّذِيْنَ يَدْعُوْنَ مِنْ دُوْنِهٖ لَا

ておられ、神の影響を受け入れようと悪魔の影響を受け入れようとに関係なく、どちらが栄え、どちらが衰退するかは神にとってはわかりきった事なのである。聖なる預言者を受け入れ、彼の刻印を受ける者は、成長し、力・影響力・数も増し、彼の敵は衰退し減少するのである。

注９　聖なる預言者の敵の、あからさまな、或いは秘密の計画は、神の目には見通されているし、その神が聖なる預言者の助力者であり保護者である為、成功するはずがないのである。

注10　「諸天使」とここで言われているのは、天国に住む天使とも取れるし、命をかけて聖なる預言者を守った献身的な仲間のこととも理解できる。

注１１　雷は、恐怖と希望とを想起させる。雷が恐怖を想起させるのは、人がそのために死んだり、胚芽やある種の植物は悪い影響を受けたりするからである。又、雷は希望をももたらす。なぜなら、雷は豊かな雨の訪れを告げ、色々な病原菌を破壊して、伝染病をおさえる役割も果すからである。

注12　この表現は次のように解釈できる。(1)神だけが礼拝に値する。(2)人間に役に立ち利益になるのは、神に祈ることだけである。(3)神の声だけが真実を支持するものである。(4)神の声こそ、何ものにも勝り優先されなければならない。

神々は、何んの応えも与えはせず。譬うれば、口に水が達せんことを願って、両手を水にさし伸べしが、水は決して達せざるが如し。（注 13）不信心者どもの祈りは、無駄骨折りにすぎず。

يَسْتَجِيبُونَ لَهُم بِشَيْءٍ إِلَّا كَبَاسِطِ كَفَّيْهِ إِلَى الْمَاءِ لِيَبْلُغَ فَاهُ وَمَا هُوَ بِبَالِغِهِ ۚ وَمَا دُعَاءُ الْكَافِرِينَ إِلَّا فِي ضَلَالٍ ﴿١٥﴾

16. 凡そ天に在るもの地に在るものは、好むと好まざるにかかわらず、アッラーに服従す、それ等の影が朝な夕な地に這う如く。（注 14）

وَلِلَّهِ يَسْجُدُ مَن فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ طَوْعًا وَكَرْهًا وَظِلَالُهُم بِالْغُدُوِّ وَالْآصَالِ ۩ ﴿١٦﴾

17. 云え、「天地の主は誰ぞ？」と。云え、「アッラーなり」と。云え、「然らばお前たち何故にアッラーの代りに、自分自身ですら益するも害するもなし得ざる者を救い手としたるか？」と。云え、「盲と目あきは同等なりや？また、暗闇と光が同等と見なさるべきや？或いは、彼等は、アッラーの創造するのと似たようなものを創造した神々を彼に配したれば、両者の創造が彼等には相似たものと思われるか？」と。云え、「アッラーこそ萬物の創造主、独一にして至高者なり」と。

قُلْ مَن رَّبُّ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ قُلِ اللَّهُ ۚ قُلْ أَفَاتَّخَذْتُم مِّن دُونِهِ أَوْلِيَاءَ لَا يَمْلِكُونَ لِأَنفُسِهِمْ نَفْعًا وَلَا ضَرًّا ۚ قُلْ هَلْ يَسْتَوِي الْأَعْمَىٰ وَالْبَصِيرُ أَمْ هَلْ تَسْتَوِي الظُّلُمَاتُ وَالنُّورُ ۗ أَمْ جَعَلُوا لِلَّهِ شُرَكَاءَ خَلَقُوا كَخَلْقِهِ فَتَشَابَهَ الْخَلْقُ عَلَيْهِمْ ۚ قُلِ اللَّهُ خَالِقُ كُلِّ شَيْءٍ وَهُوَ الْوَاحِدُ الْقَهَّارُ ﴿١٧﴾

18. 彼、空より雨を降らせ給えば、水はその容量に応じて谷々を流れ下り、奔流は泡沫を浮べて運び行く。装身具や台所道具を造るために火に溶かされた金属からも、また同様な泡を生ず。アッラーはかくの如く真贋を描写し給う。泡沫は忽ちに消え去れども、

أَنزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَسَالَتْ أَوْدِيَةٌ بِقَدَرِهَا فَاحْتَمَلَ السَّيْلُ زَبَدًا رَّابِيًا ۚ وَمِمَّا يُوقِدُونَ عَلَيْهِ فِي النَّارِ ابْتِغَاءَ حِلْيَةٍ أَوْ مَتَاعٍ زَبَدٌ مِّثْلُهُ ۚ كَذَٰلِكَ يَضْرِبُ اللَّهُ الْحَقَّ وَالْبَاطِلَ ۚ فَأَمَّا الزَّبَدُ

注 13　人生で成功する正しい方法は、すべてのものをそれにふさわしい場所に置くことである。即ち、神には神があって然るべき地位を与え、創造物は、そうあるべき位置を与える。これこそ、成功し真に幸福になる方法である。

注 14　この節は偉大な真実を具体的に述べている。即ち、すべての創造物は、いやでも応でも神がつくられた自然法に従う義務がある。舌は味覚を司らねばならないし、耳は聴かざるを得ない。この自然法への服従が強制と呼ばれる。しかし、人はある程度行動の自由が与えられていて、人は自由意志を働かせ自分で判断するが、自由を与えられていると思われる分野での行動においてすら、一定量の義務がある。又、好むと好まざるとにかかわらず、何をするにしても神の法則に従わなければならない。「好むと好まざるとにかかわらず」という語は、喜んで神に服従する信徒と不承不承神の法に従っている不信徒の二種類の人々についてもあてはまる。

فَيَذْهَبُ جُفَاءً ۖ وَأَمَّا مَا يَنفَعُ النَّاسَ فَيَمْكُثُ فِي الْأَرْضِ ۚ كَذَٰلِكَ يَضْرِبُ اللَّهُ الْأَمْثَالَ ﴿١٨﴾

人間に役立つものは地上に残る。かくの如くアッラーはさまざまな比喩で説き明かし給う。（注 15）

لِلَّذِينَ اسْتَجَابُوا لِرَبِّهِمُ الْحُسْنَىٰ ۚ وَالَّذِينَ لَمْ يَسْتَجِيبُوا لَهُ لَوْ أَنَّ لَهُم مَّا فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا وَمِثْلَهُ مَعَهُ لَافْتَدَوْا بِهِ ۚ أُولَٰئِكَ لَهُمْ سُوءُ الْحِسَابِ وَمَأْوَاهُمْ جَهَنَّمُ ۖ وَبِئْسَ الْمِهَادُ ﴿١٩﴾

19. 主のお召に応ずる人々には永遠の幸福あり。然しながらそのお召に応えぬ者どもは、たとい地上にあるすべてのもの並びに之に倍するものを持っていたとて、躊躇うことなく之を投げ出して罪を贖わんとするに至らん。それらの者どもは苛酷な罰を受けん。その住居は地獄なり。なんと悲惨なる死なるかな！

第三項

أَفَمَن يَعْلَمُ أَنَّمَا أُنزِلَ إِلَيْكَ مِن رَّبِّكَ الْحَقُّ كَمَنْ هُوَ أَعْمَىٰ ۚ إِنَّمَا يَتَذَكَّرُ أُولُو الْأَلْبَابِ ﴿٢٠﴾

20. 主より汝に啓示されたるものが真理なることを知る者を、盲と同一視できようか？されど思慮ある人々だけが注意する。

الَّذِينَ يُوفُونَ بِعَهْدِ اللَّهِ وَلَا يَنقُضُونَ الْمِيثَاقَ ﴿٢١﴾

21. そはアッラーとの約束を履行し、誓約を破らざる人々なり。

وَالَّذِينَ يَصِلُونَ مَا أَمَرَ اللَّهُ بِهِ أَن يُوصَلَ وَيَخْشَوْنَ رَبَّهُمْ وَيَخَافُونَ سُوءَ الْحِسَابِ ﴿٢٢﴾

22. またアッラーが結合されんことを命じ給うた者と結ばれ、主を畏敬し、あの苛酷な罰を恐れる人々。（注 16）

وَالَّذِينَ صَبَرُوا ابْتِغَاءَ وَجْهِ رَبِّهِمْ وَأَقَامُوا الصَّلَاةَ وَأَنفَقُوا مِمَّا رَزَقْنَاهُمْ سِرًّا وَعَلَانِيَةً وَيَدْرَءُونَ بِالْحَسَنَةِ السَّيِّئَةَ أُولَٰئِكَ لَهُمْ عُقْبَى الدَّارِ ﴿٢٣﴾

23. また主の愛顧を求めて耐え忍び、礼拝を遵守し、われらが施したものの中から、公私に亘って喜捨を行い、善を以て悪を撃退する人々。これ等の人々には終の住処の善果あるべし―（注 17）

注 15　この節には、2つの非常に適切な比喩が使われている。一つは、真理は水にたとえられ、虚偽は泡にたとえられている。虚偽は、はじめ真理をおおい隠すように思われるが、最終的には、ゴミが強力な水流に流されるように、真理によって押し流されてしまう。二番目の比喩では、真実は金又は銀に例えられる。何故なら金や銀は溶かされたとき、不純物を捨て去り、混じりけのない純粋で輝く金属だけを残すからである。

注 16　信心深く神に対する義務を果す事で、信徒は神の創造物である事に対する義務をまっとうする。この二つの義務を守ることが、信仰の土台となるのである。

注 17　信者は、悪を絶滅するのに最もふさわしい道に従う。信者は罰が役に立つ目的の役割を果すなら、罰に頼るし、赦しが望ましい結果をもたらす場合なら、赦しに頼る。簡単に言うならば、信者は環境に応じてどの方法であれ最も適切な方法を使って悪の根源そのものを切り捨てるのである。

24. すなわち永遠の楽園が。彼等は彼処に入る、その父祖、その妻女、その子孫（注 18）のうちの正義者もまた然り。而して諸天使は各門より入りて彼等を迎え、（注 19）

جَنّٰتُ عَدْنٍ يَّدْخُلُوْنَهَا وَمَنْ صَلَحَ مِنْ اٰبَآئِهِمْ وَاَزْوَاجِهِمْ وَذُرِّيّٰتِهِمْ وَالْمَلٰٓئِكَةُ يَدْخُلُوْنَ عَلَيْهِمْ مِّنْ كُلِّ بَابٍ ﴿٢٤﴾

25. 「お前たち耐え忍びたるが故に平安を得たり。見よ、この終の住処の褒賞のなんと素晴しいことよ！」と云う。

سَلٰمٌ عَلَيْكُمْ بِمَا صَبَرْتُمْ فَنِعْمَ عُقْبَى الدَّارِ ﴿٢٥﴾

26. しかるに、アッラーに誓約した後、之を破り、アッラーが結合すべく命じ給うた者と絶縁し、地上において悪業を犯す者ども―これ等の者はアッラーの呪いが降り、苛酷な住処に入るべし。

وَالَّذِيْنَ يَنْقُضُوْنَ عَهْدَ اللّٰهِ مِنْۢ بَعْدِ مِيْثَاقِهٖ وَيَقْطَعُوْنَ مَآ اَمَرَ اللّٰهُ بِهٖٓ اَنْ يُّوْصَلَ وَيُفْسِدُوْنَ فِي الْاَرْضِ اُولٰٓئِكَ لَهُمُ اللَّعْنَةُ وَلَهُمْ سُوْٓءُ الدَّارِ ﴿٢٦﴾

27. アッラーはその欲する者に、その給養を或いは豊かに、或いは乏しく授け給う。彼等は現世を喜んでいるが、来るべき生活に比すれば、これただ束の間の享楽にすぎず。

اَللّٰهُ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَنْ يَّشَآءُ وَيَقْدِرُ وَفَرِحُوْا بِالْحَيٰوةِ الدُّنْيَا وَمَا الْحَيٰوةُ الدُّنْيَا فِي الْاٰخِرَةِ اِلَّا مَتَاعٌ ﴿٢٧﴾

第四項

28. 信ぜざる者どもは云う、「何故に主より奇蹟が彼に降らざりしか？」と。云え、「アッラーはその欲する者を迷わしめ、彼に頼る者をお傍に導き給う。（注 20）

وَيَقُوْلُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لَوْلَآ اُنْزِلَ عَلَيْهِ اٰيَةٌ مِّنْ رَّبِّهٖ قُلْ اِنَّ اللّٰهَ يُضِلُّ مَنْ يَّشَآءُ وَيَهْدِيْٓ اِلَيْهِ مَنْ اَنَابَ ﴿٢٨﴾

29. 信ずる輩は、アッラーを唱念して心安らかなり。然り！心に安らぎを得るには、アッラーを唱念するに如かず。（注 21）

اَلَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَتَطْمَئِنُّ قُلُوْبُهُمْ بِذِكْرِ اللّٰهِ اَلَا بِذِكْرِ اللّٰهِ تَطْمَئِنُّ الْقُلُوْبُ ﴿٢٩﴾

注 18　この節では重要な原理が述べられている。人の行う善行は、意図したものであろうとなかろうと、親戚縁者の助けや協力があって為される。だから、人の勝ちとるほうびは、親戚縁者すべてが、その報いにあずかるべきなのである。

注 19　信者の為した善行の種々の範疇は、来るべき世において、天国の数多くの門として表わされる。

注 20　神が、神の方に向う者を導き、神から背いて神の導きを拒む者が道を迷っても、そのままにしておかれるというのは、神の不変の法である。

注 21　神を探究するのは、人間の魂の心からの願望であって、人生の真の目的である。その目的が達成されると、人は丁度まるで神のひざの上で安らかに眠っている様な心のやすらぎを得るのである。

30．信仰に入り、善行にいそしむ者は―幸福を手にし、素晴しい処に帰り行かん」と。

اَلَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ طُوْبٰى لَهُمْ وَحُسْنُ مَاٰبٍ ﴿٣٠﴾

31．かくてわれらは、汝に啓示したことを彼等に誦み聞かせんがために、昔幾多の民族が滅び去ったことのある民の中に汝を遣わせり。然るに彼等は慈悲深い神を信ぜず。云え、「彼は我が主なり。彼の外に神なし。我は彼に頼り、彼に帰る」と。

كَذٰلِكَ اَرْسَلْنٰكَ فِيْۤ اُمَّةٍ قَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِهَاۤ اُمَمٌ لِّتَتْلُوَاْ عَلَيْهِمُ الَّذِيْۤ اَوْحَيْنَاۤ اِلَيْكَ وَهُمْ يَكْفُرُوْنَ بِالرَّحْمٰنِ قُلْ هُوَ رَبِّيْ لَاۤ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ عَلَيْهِ تَوَكَّلْتُ وَاِلَيْهِ مَتَابِ ﴿٣١﴾

32．もしここにクルアーンがあって、それによって山が動かされ、(注 22) 大地が裂かれ、(注 23) 死者が物云うとしても、(注 24) 彼等はそれを信じはすまい。否、物事はすべてアッラーしだいなり。アッラーもし欲したりせば、全人類を必ず導き得た筈、信者たるものこれに気がつかぬか？なれど、信ぜざる者どもには、その所業ゆえに、災難がつきまとい、或いは家の近くに居座って、(注 25) アッラーの約束が実現されるまでは絶えることなからん。アッラーは必ずその約束を守り給う。

وَلَوْ اَنَّ قُرْاٰنًا سُيِّرَتْ بِهِ الْجِبَالُ اَوْ قُطِّعَتْ بِهِ الْاَرْضُ اَوْ كُلِّمَ بِهِ الْمَوْتٰى بَلْ لِّلّٰهِ الْاَمْرُ جَمِيْعًا اَفَلَمْ يَايْـَٔسِ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْۤا اَنْ لَّوْ يَشَآءُ اللّٰهُ لَهَدَى النَّاسَ جَمِيْعًا وَلَا يَزَالُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا تُصِيْبُهُمْ بِمَا صَنَعُوْا قَارِعَةٌ اَوْ تَحُلُّ قَرِيْبًا مِّنْ دَارِهِمْ حَتّٰى يَاْتِيَ وَعْدُ اللّٰهِ اِنَّ اللّٰهَ لَا يُخْلِفُ الْمِيْعَادَ ﴿٣٢﴾

第五項

33．使徒たちは汝以前にも嘲笑されり。しかしわれらは信ぜぬ者どもに猶予を与えたり。然るに今、急に襲う、わが懲罰の如何に恐ろしいことかよ！

وَلَقَدِ اسْتُهْزِئَ بِرُسُلٍ مِّنْ قَبْلِكَ فَاَمْلَيْتُ لِلَّذِيْنَ كَفَرُوْا ثُمَّ اَخَذْتُهُمْ فَكَيْفَ كَانَ عِقَابِ ﴿٣٣﴾

注 22　「それによって山が動かされる」というのは、クルアーンは人にふりかかるすべての難問をすべて解決する、或いは、クルアーンが古い規則を廃止して人間の直面する種々の問題への新しい解決法を教え込む、という意味を表わしている。

注 23　「大地が裂かれ」というのは、クルアーンは地球全地にすみやかに広がるだろうという事であり、文字通りに解釈すれば、土地の一部が敵の領土から切り離され、信徒の所有地になっていく事を意味している。

注 24　「死者がもの云うとしても」というのは、クルアーンによって、霊的に死んでいる人々が、新しい生活にめざめるだけでなく、叡智ある言葉を話し、世界にクルアーンのメッセージを説く様になるということである。

注 25　「災難がつきまとい、或いは近くに居座って」というのは、不信者の上に災害が次から次へと降り続け、不運の波に見舞われ続けることとなり、然る後、彼らの権力の完全な破滅に関する預言が成就して、彼らの都であり主要塞であるメッカが崩壊することを示している。

34．各人の上に在りて、監視する者は誰か？然るに彼等は、アッラーに比すべき神々を作る。云え、「彼等の名を挙げよ」（注 26）と。お前たちはアッラーの知らざることをアッラーに教えんとするか？それとも、ただの空しい名称なりや？そうではない、不信心者の目には、自分たちの企みが立派なものに映じ、（注 27）ために彼等は正しい道から閉め出されているなり。アッラーが邪道に陥し入れた者には、如何なる導きもなかるべし。

أَفَمَنْ هُوَ قَائِمٌ عَلَىٰ كُلِّ نَفْسٍ بِمَا كَسَبَتْ ۗ وَجَعَلُوا لِلَّهِ شُرَكَاءَ قُلْ سَمُّوهُمْ ۚ أَمْ تُنَبِّئُونَهُ بِمَا لَا يَعْلَمُ فِي الْأَرْضِ أَمْ بِظَاهِرٍ مِنَ الْقَوْلِ ۗ بَلْ زُيِّنَ لِلَّذِينَ كَفَرُوا مَكْرُهُمْ وَصُدُّوا عَنِ السَّبِيلِ ۗ وَمَنْ يُضْلِلِ اللَّهُ فَمَا لَهُ مِنْ هَادٍ ﴿٣٣﴾

35．かかる者どもは現世で罰を受けるが、来世の罰は更に酷く、何人もアッラーの怒りに対して彼等を護ってくれはせぬ。

لَهُمْ عَذَابٌ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا ۖ وَلَعَذَابُ الْآخِرَةِ أَشَقُّ ۖ وَمَا لَهُمْ مِنَ اللَّهِ مِنْ وَاقٍ ﴿٣٤﴾

36．敬虔なる信者に約束されたる楽園をたとうれば、かくの如し。河川その中を流れて、常時果物が実り、（注 28）されば樹下に日蔭あり。こは正義者への褒賞なり、されど信ぜざる者どもへの応酬は、業火なり。

مَثَلُ الْجَنَّةِ الَّتِي وُعِدَ الْمُتَّقُونَ ۖ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ ۖ أُكُلُهَا دَائِمٌ وَظِلُّهَا ۚ تِلْكَ عُقْبَى الَّذِينَ اتَّقَوْا ۖ وَعُقْبَى الْكَافِرِينَ النَّارُ ﴿٣٥﴾

37．われらが経典を授けた人々は、汝に啓示されたことを喜ぶ。されど多くの異った集団の中にはその一部を否認する者あり。云え、「我はただアッラーを崇拝せよ、何物も彼に併せ祀るべからず、と命ぜられてるのみ。我は彼に祈り、彼に帰る」と。

وَالَّذِينَ آتَيْنَاهُمُ الْكِتَابَ يَفْرَحُونَ بِمَا أُنْزِلَ إِلَيْكَ ۖ وَمِنَ الْأَحْزَابِ مَنْ يُنْكِرُ بَعْضَهُ ۚ قُلْ إِنَّمَا أُمِرْتُ أَنْ أَعْبُدَ اللَّهَ وَلَا أُشْرِكَ بِهِ ۚ إِلَيْهِ أَدْعُو وَإِلَيْهِ مَآبِ ﴿٣٦﴾

注 26　偶像崇拝者は、彼らの神がどんな儀式を司っていたかを述べるように要求されている。この節で使われる「名を挙げよ」はいう語は、個人の名前ではなく特性を表わす名前のことである。なぜなら神々の個人的な名のうちのいくつかは、クルアーン自体の中に述べられているからである（71 章 24 節）。「彼等の名を挙げよ」という意味は軽蔑の意味でもあり得る。即ち、不信の徒の神々はあまりにも価値がないので、その名を口にするだけで恥しい事となる。

注 27　人が利益を得るために、詐欺や欺瞞を働く時、自分の行う詐欺行為がだんだん魅力的に思われてきて、自分が犠牲になるということはよくあることである。

注 28　「常時果物が実り」の意味は天上の果実には秋はなく、腐る季節や休止期もないという事で、天国の恩恵や祝福は絶える事がない事を意味している。「果物」と「日蔭」はそれぞれ内的な祝福と外的な祝福を表わしていて、信徒は天国において、内的にも外的にもすべての種類の祝福を受けるであろうという意味である。

38. 従って、われらはそれを詳細な、判断の基準として啓示したり。されば汝に知識が降った後、彼等の邪悪な欲望に汝もし従うならば、汝をアッラーの怒りから助ける者も防ぐ者もなかるべし。

وَكَذٰلِكَ أَنْزَلْنٰهُ حُكْمًا عَرَبِيًّا ۚ وَلَئِنِ اتَّبَعْتَ أَهْوَآءَهُمْ بَعْدَ مَا جَآءَكَ مِنَ الْعِلْمِ ۙ مَا لَكَ مِنَ اللّٰهِ مِنْ وَّلِيٍّ وَّلَا وَاقٍ ﴿٣٨﴾

第六項

39. げにわれらは汝以前にも幾多の使徒を遣わし、妻子を彼等に与えたり。なれど、アッラーの許しなくば、如何なる使徒も奇蹟を現わすことを得ず。各時代ごとに一つの啓示書あり。

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا رُسُلًا مِّنْ قَبْلِكَ وَجَعَلْنَا لَهُمْ أَزْوَاجًا وَّذُرِّيَّةً ۚ وَمَا كَانَ لِرَسُوْلٍ أَنْ يَّأْتِيَ بِاٰيَةٍ إِلَّا بِإِذْنِ اللّٰهِ ۗ لِكُلِّ أَجَلٍ كِتَابٌ ﴿٣٩﴾

40. アッラーはその欲するものを取り消し、(注29) またこれを制定す。すべての戒律の拠り所はアッラーの御許にあり。(注30)

يَمْحُوا اللّٰهُ مَا يَشَآءُ وَيُثْبِتُ ۖ وَعِنْدَهٗٓ أُمُّ الْكِتٰبِ ﴿٤٠﴾

41. われらが彼等に威嚇することの一部を実現して汝に見せようが、または汝を死なしめようと、それは問題にならず。なんとなれば、汝の役目はただ神託の伝達にして、清算はわれらの務めなり。

وَإِنْ مَّا نُرِيَنَّكَ بَعْضَ الَّذِيْ نَعِدُهُمْ أَوْ نَتَوَفَّيَنَّكَ فَإِنَّمَا عَلَيْكَ الْبَلٰغُ وَعَلَيْنَا الْحِسَابُ ﴿٤١﴾

42. 彼等はわれらがその地を襲って、端からその地を次第に衰えさせつつあるを見ざるか？ (注31) アッラーが判定を下せば、何人もその裁定を覆し得ず。而して彼は清算するに迅速なり

أَوَلَمْ يَرَوْا أَنَّا نَأْتِي الْأَرْضَ نَنْقُصُهَا مِنْ أَطْرَافِهَا ۗ وَاللّٰهُ يَحْكُمُ لَا مُعَقِّبَ لِحُكْمِهٖ ۗ وَهُوَ سَرِيْعُ الْحِسَابِ ﴿٤٢﴾

43. 彼等以前の者どももいろいろと企みを謀る。されど一切の有効な企みはアッラーに

وَقَدْ مَكَرَ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ فَلِلّٰهِ الْمَكْرُ جَمِيْعًا ۖ

注29　この節では、神の罰に関する二つの掟を述べている。a）神が罰を取消されるのは、全体か一部かのいづれかである。b）神は罰を命ぜられたままにしておかれる。

注30　a）神だけがすべての戒律やその基になっている叡智の根源を知っておられる。b）律法のすべての戒律は神の恩恵に基づいている為、律法の根源は神と共にある。「拠り所」とは源、基礎、起源、あるいは滞在、支持を意味する。

注31　この節は、「端からその地を次第に衰えさせつつあるを見ざるか？」というのは以下の様な意味であることを示している。イスラムはアラビア中に広がり、すべての家、すなわち身分の高い人にも低い人にも、金持ちにも貧者にも、奴隷にも主人にも、社会のすべての機関に食い込んでいるということである。

属す。彼は各人が稼ぎしものを知る。而(しか)して不信心者どもは、終(つい)の住居の褒賞が何人(なんびと)のものなるかをほどなく知らん（注 32）。

يَعْلَمُ مَا تَكْسِبُ كُلُّ نَفْسٍ ۗ وَسَيَعْلَمُ الْكُفَّارُ لِمَنْ
عُقْبَى الدَّارِ ﴿٤٣﴾

44．信ぜざる者どもは云う、「汝は使徒に非ず」と。云え、「アッラーは我とお前たちの証人たるに十分なり。而(しか)して経典の知識を有する者もまた然(しか)り」と。（注 33）

وَيَقُولُ الَّذِينَ كَفَرُوا لَسْتَ مُرْسَلًا ۚ قُلْ كَفَىٰ بِاللَّهِ
شَهِيدًا بَيْنِي وَبَيْنَكُمْ وَمَنْ عِنْدَهُ عِلْمُ الْكِتَابِ ﴿٤٤﴾ ع

注 32　イスラムのすべての敵の意図は、神に知られているので、そのどんな計画も戦略も神の目的—イスラムの究極の勝利—を邪魔することはできない。

注 33　「経典の知識」という語の意味は、天国からの鮮明な、神兆(しるし)と、聖なる預言者に関しての以前からある経典の預言の事を指す。

سُوْرَةُ اِبْرٰهِيْمَ مَكِّيَّةٌ (١٤)

イブラヒーム
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍く（あまね）アッラーの御名（みな）において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．アリフ・ラーム・ラー。(注1) これはわれらが汝に啓示した経典なり。汝が、主の命によって、人類を暗黒の中から光明へ、偉大にして、讃美されるべき御方の道に導くために—

الٓرٰ كِتٰبٌ اَنْزَلْنٰهُ اِلَيْكَ لِتُخْرِجَ النَّاسَ مِنَ الظُّلُمٰتِ اِلَى النُّوْرِ ۙ بِاِذْنِ رَبِّهِمْ اِلٰى صِرَاطِ الْعَزِيْزِ الْحَمِيْدِ ②

3．アッラー、その御方に天地（あめつち）にあるもの一切は属す。されば災いなるかな不信心者ども、恐ろしい刑罰を受けねばならぬ。

اللّٰهِ الَّذِيْ لَهٗ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ ؕ وَوَيْلٌ لِّلْكٰفِرِيْنَ مِنْ عَذَابٍ شَدِيْدِ ③

4．彼等は来世よりも現世を愛し、人々をアッラーの道から妨げ、之（これ）を歪曲（わいきょく）せんと謀る。これ等は甚だしく迷える者なり。

الَّذِيْنَ يَسْتَحِبُّوْنَ الْحَيٰوةَ الدُّنْيَا عَلَى الْاٰخِرَةِ وَيَصُدُّوْنَ عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَيَبْغُوْنَهَا عِوَجًا ؕ اُولٰٓئِكَ فِيْ ضَلٰلٍ بَعِيْدٍ ④

5．われらは未だかつて、その民の言葉(注2)でなさざる如何なる使徒も遣わしたことなし。それは人々に解るように説明させんがためなり。然（しか）る後、アッラーは己れの欲する者を迷わしめ、また己れの欲する者を導き給う。彼は偉大にして、賢哲にまします。

وَمَآ اَرْسَلْنَا مِنْ رَّسُوْلٍ اِلَّا بِلِسَانِ قَوْمِهٖ لِيُبَيِّنَ لَهُمْ ؕ فَيُضِلُّ اللّٰهُ مَنْ يَّشَآءُ وَيَهْدِيْ مَنْ يَّشَآءُ ؕ وَهُوَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ⑤

注1　われは一切を見るアッラーなり。

注2　この節は、聖なる預言者の御告げがアラブ民族のみに宛てられているという事を意味しているのではない。その様な考えは、聖なる預言者がはっきりと自分は全世界に、つかわされた神よりの使者であると宣言しているクルアーン中の他の節でも（7：159；34：29）とがめられており、クルアーンが聖なる預言者の全世界への使命を説くのみならず、預言者自身も人類全てにという意味で“私は黒い人にも赤い人にも、つかわされた (Binan)、そして私は全ての人類の為に選ばれた (Buphan)”と語ったと伝えられている。クルアーンはアラブ民族が最初の受け取り手であった為にアラビア語で啓示され（そして又、アラビア語が、最も明快で雄弁且つ意味の広い言語である為、クルアーンの御告げを伝達するのには最も卓越して適切な手段である為）、アラビア語を通して、全世界へ説かれる事になっていたのであり、神よりの御告げがアラブ民族のみにあてられていたという訳ではない。

6．昔われらは、モーゼにさまざまな神兆を持たせて遣わした時、「汝の民を暗黒の中から光明へ導き、アッラーの日々を彼等に憶い起させよ」と云えり。げにその中には、耐え忍び恩に感ずる者へのさまざまな神兆あり。

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا مُوسَىٰ بِآيَاتِنَا أَنْ أَخْرِجْ قَوْمَكَ مِنَ الظُّلُمَاتِ إِلَى النُّورِ وَذَكِّرْهُم بِأَيَّامِ اللَّهِ ۚ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَاتٍ لِّكُلِّ صَبَّارٍ شَكُورٍ ﴿٦﴾

7．モーゼがその民にかく云いたる時を念え。「ファラオの民がお前たちに残酷な刑罰を加え、お前たちの男児を殺して女子のみを容赦した時、アッラーがお前たちを救い出したその恩顧を忘れまいぞ。そは主の下し給うた試錬なりき」

وَإِذْ قَالَ مُوسَىٰ لِقَوْمِهِ اذْكُرُوا نِعْمَةَ اللَّهِ عَلَيْكُمْ إِذْ أَنجَاكُم مِّنْ آلِ فِرْعَوْنَ يَسُومُونَكُمْ سُوءَ الْعَذَابِ وَيُذَبِّحُونَ أَبْنَاءَكُمْ وَيَسْتَحْيُونَ نِسَاءَكُمْ ۚ وَفِي ذَٰلِكُم بَلَاءٌ مِّن رَّبِّكُمْ عَظِيمٌ ﴿٧﴾

第二項

8．その時、主は宣言せり、「お前たちもし有難たく思うなら、われは必ずお前たちへの恵みを増さん。然れども、お前たちもし恩に感ぜずば、わが懲罰は実に恐ろしいぞ」と。（注３）

وَإِذْ تَأَذَّنَ رَبُّكُمْ لَئِن شَكَرْتُمْ لَأَزِيدَنَّكُمْ ۖ وَلَئِن كَفَرْتُمْ إِنَّ عَذَابِي لَشَدِيدٌ ﴿٨﴾

9．更にモーゼは云えり、「たといお前たちが信ぜずとも、いや地上の尽くの人々が信ぜずとも、神はお前たちに損なわれることなし。げにアッラーは自ら満ち足りて、讃美に値し給う。

وَقَالَ مُوسَىٰ إِن تَكْفُرُوا أَنتُمْ وَمَن فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا فَإِنَّ اللَّهَ لَغَنِيٌّ حَمِيدٌ ﴿٩﴾

10．お前たち以前の人々、ノアやアードやサムードの民、並びに彼等以後の民の消息を伝え聞かざりしか？以後の民については、アッラー以外何人も知らず。使徒たちがそれぞれの民に明証を携えて来たれども、

أَلَمْ يَأْتِكُمْ نَبَأُ الَّذِينَ مِن قَبْلِكُمْ قَوْمِ نُوحٍ وَعَادٍ وَثَمُودَ ۛ وَالَّذِينَ مِن بَعْدِهِمْ ۛ لَا يَعْلَمُهُمْ إِلَّا اللَّهُ ۚ جَاءَتْهُمْ رُسُلُهُم بِالْبَيِّنَاتِ فَرَدُّوا أَيْدِيَهُمْ فِي أَفْوَاهِهِمْ

注３　「有難く思う」というのは、三種類あり、それらは、(1)心或いは精神により、受けた恩恵がどんなものであるかを正しく理解する「感謝」　(2)舌（言葉）を使って、恩人を賞賛、推奨する「感謝」そして(3)手足を使い、その功績・価値に従い、受けた恩恵に報いる「感謝」である。また感謝には五つの基本がある。即ち、（a）自分に何かをしてくれた恩人に対してする返礼を望む気持ち、尊敬の念　（b）恩人への愛　（c）受けた恩恵への認識　（d）受けた恩恵に対し恩人を賞賛する事、及び　（e）彼（恩を与えてくれた人）の望まぬ方法でその恩恵を使わない事、という五つの基本である。これが人間の側からの感謝である。神の側から捉えられた感謝とは、人を許し、受け入れ、或いは安らぎを与え善意と恩恵をもって人を尊ぶと、そして而る後、当然彼に、応じる或いは報いるという事である。人は、人が神より賜わった物を正しく使う時のみ、神に感謝することができるのである。

وَقَالُوا إِنَّا كَفَرْنَا بِمَا أُرْسِلْتُم بِهِ وَإِنَّا لَفِي شَكٍّ مِّمَّا تَدْعُونَنَا إِلَيْهِ مُرِيبٍ (10)

人々はその手を己が口に当て（注４）、云えり、「我等はお前たちが遣わされた使命を信ぜず、またお前たちが我等を招く教えについても不安なる疑いを持つ」と。

قَالَتْ رُسُلُهُمْ أَفِي اللَّهِ شَكٌّ فَاطِرِ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ يَدْعُوكُمْ لِيَغْفِرَ لَكُم مِّن ذُنُوبِكُمْ وَيُؤَخِّرَكُمْ إِلَىٰ أَجَلٍ مُّسَمًّى قَالُوا إِنْ أَنتُمْ إِلَّا بَشَرٌ مِّثْلُنَا تُرِيدُونَ أَن تَصُدُّونَا عَمَّا كَانَ يَعْبُدُ آبَاؤُنَا فَأْتُونَا بِسُلْطَانٍ مُّبِينٍ (11)

11．彼等の使徒たちは云えり、「お前たち天地（あめつち）の創造主（注５）、アッラーに疑心を抱くか？彼がお前たちを召（め）し給うは、お前たちの罪を赦（ゆる）し、定められた期限までお前たちに猶予を与えんがためなり」と。すると、彼等は云えり、「お前たちは我等同様ただの人間にすぎず。お前たちは我等の父祖が崇拝していたものから、我等を背かしめんとなす。ならば、明確なる証拠を我等に示せ」と。

قَالَتْ لَهُمْ رُسُلُهُمْ إِن نَّحْنُ إِلَّا بَشَرٌ مِّثْلُكُمْ وَلَٰكِنَّ اللَّهَ يَمُنُّ عَلَىٰ مَن يَشَاءُ مِنْ عِبَادِهِ وَمَا كَانَ لَنَا أَن نَّأْتِيَكُم بِسُلْطَانٍ إِلَّا بِإِذْنِ اللَّهِ وَعَلَى اللَّهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُونَ (12)

12．使徒たちは云えり、「我等は確かにお前たち同様ただの人間なり、（注６）然（しか）れども、アッラーはその僕等（しもべら）の中から嘉（よみ）し給う者に恩恵（めぐみ）を施し給う。アッラーの命に非ざれば、我等はお前たちに証拠を示す立場に非ず。信者たちはただアッラーにのみその信頼を託すべきなり。

وَمَا لَنَا أَلَّا نَتَوَكَّلَ عَلَى اللَّهِ وَقَدْ هَدَانَا سُبُلَنَا وَلَنَصْبِرَنَّ عَلَىٰ مَا آذَيْتُمُونَا وَعَلَى اللَّهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُتَوَكِّلُونَ (13)

13．アッラーが我等に歩むべき道を導き給うたというに、何故に我等は自らの信頼をアッラーに託さざるか？されば、我等は必ずお前たちが我等に加える迫害を耐え忍ばん。されば、頼る者をして、アッラーに頼らしめ給え」と。

注４　「手を己が口に当て」というのは、信仰なき者達は、預言者達の高らかな主張に、驚きのあまり自分達の手で口をふさぐ、或いは、強い怒りの為預言者の言った事に対し、自分達の手をかむとの意味を表わしている。或いはもう一つの解釈としては、不信者達は、預言者達をだまらせ、その主張を話す事を止めさせる為、預言者達の口に手を置くとの意味にもとれる。

注５　預言者に与えられた御教えは神を源泉としている事を証明する為に天と地の創造が引用されている。神は、天地の創造主で、人を造り賜うたのであるから、神がその被造物である人間に何の導きも与えられないと考えるのは、理にかなっていないのである。それと同等に、神は天地を創造する事によって、人間の進歩と物質的繁栄の為に豊富な準備を為さったのであるから、人の精神的繁栄への準備を怠たられる訳がないのである。

注６　人を導く為に又、人の模範となる為、つかわされる神よりの使者は、人間達自身に似た人でなくてはならない。何故なら、彼等自身に似た人間でなくしては模範とはなりえないからである。

第三項

14．すると、不信心者どもは使徒たちに向って云えり、「お前たちが我等の宗教に戻らずば、我等は必ずお前たちを追放せん」と。そこで主は使徒たちに啓示し給う。「われらは必ず悪人どもを絶滅せん。

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لِرُسُلِهِمْ لَنُخْرِجَنَّكُمْ مِنْ أَرْضِنَا أَوْ لَتَعُودُنَّ فِي مِلَّتِنَا فَأَوْحَىٰ إِلَيْهِمْ رَبُّهُمْ لَنُهْلِكَنَّ الظَّالِمِينَ ⑭

15．而して、その後、必ずお前たちをこの国に住まわしめん。こはわが審判を畏れ、わが警告を恐れる者のためなり」。（注７）

وَلَنُسْكِنَنَّكُمُ الْأَرْضَ مِنْ بَعْدِهِمْ ذَٰلِكَ لِمَنْ خَافَ مَقَامِي وَخَافَ وَعِيدِ ⑮

16．使徒たちが勝利を祈ると、そのお蔭で、真理に対するすべての傲慢な敵の野望は水泡に帰せり。

وَاسْتَفْتَحُوا وَخَابَ كُلُّ جَبَّارٍ عَنِيدٍ ⑯

17．彼の前には地獄あり、而して彼は煮えたぎる湯を飲まされよう。

مِنْ وَرَائِهِ جَهَنَّمُ وَيُسْقَىٰ مِنْ مَاءٍ صَدِيدٍ ⑰

18．彼は煮え湯を口一杯含めども、嚥み下す能わず。而して、死四方より迫るも、（注８）死する能わず。その他にも、苛酷な刑罰あるべし。

يَتَجَرَّعُهُ وَلَا يَكَادُ يُسِيغُهُ وَيَأْتِيهِ الْمَوْتُ مِنْ كُلِّ مَكَانٍ وَمَا هُوَ بِمَيِّتٍ وَمِنْ وَرَائِهِ عَذَابٌ غَلِيظٌ ⑱

19．己が主を信ぜざる者どもの有様は、（注９）風吹きすさぶ嵐の日の灰燼にさも似たり。彼等は己が稼ぎしものを支配し得ず。こは実に甚だしき迷誤なり。

مَثَلُ الَّذِينَ كَفَرُوا بِرَبِّهِمْ أَعْمَالُهُمْ كَرَمَادٍ اشْتَدَّتْ بِهِ الرِّيحُ فِي يَوْمٍ عَاصِفٍ لَا يَقْدِرُونَ مِمَّا كَسَبُوا عَلَىٰ شَيْءٍ ذَٰلِكَ هُوَ الضَّلَالُ الْبَعِيدُ ⑲

20．汝はアッラーが真理に基づいて、天地を創り給いたることを知らざるか？アッラーもし欲しなば、彼はお前たちを取り除き、新たな創造を以て之に代えること可能なり。

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللَّهَ خَلَقَ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضَ بِالْحَقِّ إِنْ يَشَأْ يُذْهِبْكُمْ وَيَأْتِ بِخَلْقٍ جَدِيدٍ ⑳

注７　クルアーンでは、最高の存在に対して代名詞を使う場合、単数形と複数形の両方を用いている。神の力と尊厳を表わす場合には複数形が、そして自足性と独立性を表わす場合には単数形が用いられる。又、一部のイスラム教徒の神学者の説によると、天使を通して、結果をもたらす場合には複数が、そしてある特別な神の律令（命令）で事を為す場合には単数形があてられるとの事である。現行の節では両方使用されている。

注８　'四方から死が迫る' とは、信仰を持たぬ者達の多くの罪や諸悪には、色々な形態での死が待ちうけている。という意味である。

注９　この「有様」とは、神の預言者に背いて為した行為を指す。

21．そは、アッラーにはいと易きことなり。

وَمَا ذَٰلِكَ عَلَى اللَّهِ بِعَزِيزٍ ﴿٢١﴾

22．彼等こぞってアッラーの御前にまかり出る時、（注 10）弱者と見なされていた者は傲慢なりし人々に向って云わん、「げに我等はお前たちの追随者なり。されば、お前たちはアッラーの懲罰に対して何か我等のためになし得るか？」と。彼等は答えん、「アッラーもし我等を導きたりせば、我等必ずお前たちを導きしなり。されど、今となりては、忍耐するもせずとも、我等がためには同じこと、逃れる術はなし」と。（注 11）

وَبَرَزُوا لِلَّهِ جَمِيعًا فَقَالَ الضُّعَفَاءُ لِلَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا إِنَّا كُنَّا لَكُمْ تَبَعًا فَهَلْ أَنتُم مُّغْنُونَ عَنَّا مِنْ عَذَابِ اللَّهِ مِن شَيْءٍ ۚ قَالُوا لَوْ هَدَانَا اللَّهُ لَهَدَيْنَاكُمْ ۖ سَوَاءٌ عَلَيْنَا أَجَزِعْنَا أَمْ صَبَرْنَا مَا لَنَا مِن مَّحِيصٍ ﴿٢٢﴾

第四項

23．而して、事決せられるや、悪魔は云わん、「アッラーは真実の約束をお前たちと結びたれど、わしはお前たちを欺きたり。わしはお前たちの上に如何なる権能も有せず、ただお前たちを誘惑し、お前たちがそれに従いたるなり。されば、わしを責めるなかれ、責めるは己れ自身なるぞ。わしはお前たちを助くる能わず。お前たちもまたわしを助くる能わず。お前たちはわしを神と併せ祀りたりしが、わしはすでにそのことは認めざりき。悪人どもは必ず酷罰に遭わん」と。

وَقَالَ الشَّيْطَانُ لَمَّا قُضِيَ الْأَمْرُ إِنَّ اللَّهَ وَعَدَكُمْ وَعْدَ الْحَقِّ وَوَعَدتُّكُمْ فَأَخْلَفْتُكُمْ ۖ وَمَا كَانَ لِيَ عَلَيْكُم مِّن سُلْطَانٍ إِلَّا أَن دَعَوْتُكُمْ فَاسْتَجَبْتُمْ لِي ۖ فَلَا تَلُومُونِي وَلُومُوا أَنفُسَكُم ۖ مَّا أَنَا بِمُصْرِخِكُمْ وَمَا أَنتُم بِمُصْرِخِيَّ ۖ إِنِّي كَفَرْتُ بِمَا أَشْرَكْتُمُونِ مِن قَبْلُ ۗ إِنَّ الظَّالِمِينَ لَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٢٣﴾

24．然れども、信仰に入り、善行にいそしむ者は、河川流るる楽園に入るを許され、主の命によって、そこに末永く住むべし。そこでのお互いの挨拶は「平安あれ」なり。

وَأُدْخِلَ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِن تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا بِإِذْنِ رَبِّهِمْ ۖ تَحِيَّتُهُمْ فِيهَا سَلَامٌ ﴿٢٤﴾

25．汝はアッラーが如何に適当な言葉で譬えを述べられているかを解らざるか？それは恰

أَلَمْ تَرَ كَيْفَ ضَرَبَ اللَّهُ مَثَلًا كَلِمَةً طَيِّبَةً كَشَجَرَةٍ

注 10　弱さの表われとしての堕落をもたらすのは、人々が実際にとった間違った行動ばかりが原因とはいえない。自分達の弱さが人目にさらされると、業績以上に成功の頼みの綱である評判と威信が致命的な打撃をうけ、敵対する社会での自分達の評価が下がり、はっきりと衰退と退廃を感じさせられるのである。これが「彼等こぞってアッラーの御前にまかり出る時」という節の意味するところである。

注 11　「脱れる術はなし」というのは、滅ぶ運命にある者達は、絶望にうちひしがれ、自分達のおかれる低い状態に既に甘んじているのである。

も良樹の如く、根はしっかりとして、枝葉を蒼穹に伸す。（注 12）

طَيِّبَةٍ أَصْلُهَا ثَابِتٌ وَفَرْعُهَا فِي السَّمَاءِ ﴿٢٥﴾

26．主の命によって春夏秋冬その実を結ぶ。アッラーは人々に反省をうながすために比喩を用う。

تُؤْتِي أُكُلَهَا كُلَّ حِينٍ بِإِذْنِ رَبِّهَا ۗ وَيَضْرِبُ اللَّهُ الْأَمْثَالَ لِلنَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُونَ ﴿٢٦﴾

27．然れども、悪言は悪樹の如く、根は大地から根こそぎにされ、堅固さを欠く。（注 13）

وَمَثَلُ كَلِمَةٍ خَبِيثَةٍ كَشَجَرَةٍ خَبِيثَةٍ اجْتُثَّتْ مِن فَوْقِ الْأَرْضِ مَا لَهَا مِن قَرَارٍ ﴿٢٧﴾

28．アッラーは堅固なる言葉を以て、信仰する者たちの意志を、現世並びに来世においても強固ならしむ。されど、悪人どもは迷わしめる。アッラーは己れの欲することをなし給う。

يُثَبِّتُ اللَّهُ الَّذِينَ آمَنُوا بِالْقَوْلِ الثَّابِتِ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَفِي الْآخِرَةِ ۖ وَيُضِلُّ اللَّهُ الظَّالِمِينَ ۚ وَيَفْعَلُ اللَّهُ مَا يَشَاءُ ﴿٢٨﴾ ع

29．汝は忘恩を以てアッラーの恩恵に報い、その民を破滅の住居へと陥らしめたる者を見ざりしや―

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ بَدَّلُوا نِعْمَتَ اللَّهِ كُفْرًا وَأَحَلُّوا قَوْمَهُمْ دَارَ الْبَوَارِ ﴿٢٩﴾

30．すなわち地獄に？彼等はその中で焼かれるべし。憐れなるかな彼等の住居や。

جَهَنَّمَ يَصْلَوْنَهَا ۖ وَبِئْسَ الْقَرَارُ ﴿٣٠﴾

31．彼等はアッラーの道から人々を迷わせるために、アッラーに対する同位者等を立てり。「暫時楽しめ、したが、お前たちの行先は業火なり」

وَجَعَلُوا لِلَّهِ أَندَادًا لِّيُضِلُّوا عَن سَبِيلِهِ ۗ قُلْ تَمَتَّعُوا فَإِنَّ مَصِيرَكُمْ إِلَى النَّارِ ﴿٣١﴾

注 12　神の言葉は、かれらの節では以下の４つの基本的性質を有する木になぞらえられている。その木の４つの性質とは（a）それは善である、即ち、絶対に人間の理性や良心、或いは人間的感情や感受性を害する事がない教えである、という意味であり、（b）まるで良好な根の深い、実のたくさんなる木の様に、強く安定した土台を持ち、その源から新鮮な生命と糧を受け取り、強い木の如く、反対やそれを認めない批判の一撃にあっても折れ曲がる事なく、あらゆる嵐に耐えてしっかりと立っている特質である。その木は、唯一の源より生命と糧を得ている為、その原則と教えには、不調和や放棄がないのである。（c）その枝は天にも届き、即ち、それに従って行動すれば、人は精神的卓絶の頂上をも極められる事を意味し、（d）それが生みだす事実は一年を通じ豊富であるという特質で、これは、その恩恵はいつもみられ、いつの時も生みだされ続け、その教えに従って行動する人々は神と交わる事が出来、高潔さと行動の純粋さで、同時代の人々の上に高くそびえる事が出来るとの意味である。クルアーンはこれらの特質を隅々まで有しているのである。

注 13　善い木とは違って、ねつ造者達の作り出した本は、悪い木の様なものである。その教えは、理知にも自然法にも支えられておらず、批判に耐える事も出来ず、その原則として理想は人間の条件や環境が変わると、ころころ変わってしまうのである。又その教えは、神と真実の関係を持ちえたと主張できる人達を生みだす事ができない。神の源泉から新鮮な生命を得る事の出来ない教えは、衰退と退化を免れる事ができないのである。

32．信ずるわが僕等に告げよ、取り引きも友情も役立たぬ日が到来する前に、礼拝を遵守し、われらが賜えしものの中から、こっそりと、或いは公然と施しを行え。

قُلْ لِّعِبَادِيَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا يُقِيْمُوا الصَّلٰوةَ وَيُنْفِقُوْا مِمَّا رَزَقْنٰهُمْ سِرًّا وَّعَلَانِيَةً مِّنْ قَبْلِ اَنْ يَّاْتِيَ يَوْمٌ لَّا بَيْعٌ فِيْهِ وَلَا خِلٰلٌ ﴿٣٢﴾

33．アッラー、彼こそは天地を創造し、雲から雨を降らせ、之によってお前たちの食物たる果実を成熟せ給うたお方なり。また、船舶に命じ、大洋を渡ってお前たちの用に服せしめ、河川をもお前たちの用に服せしめたり。

اَللّٰهُ الَّذِيْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ وَاَنْزَلَ مِنَ السَّمَآءِ مَآءً فَاَخْرَجَ بِهٖ مِنَ الثَّمَرٰتِ رِزْقًا لَّكُمْ وَسَخَّرَ لَكُمُ الْفُلْكَ لِتَجْرِيَ فِي الْبَحْرِ بِاَمْرِهٖ وَسَخَّرَ لَكُمُ الْاَنْهٰرَ ﴿٣٣﴾

34．また彼は、絶えずその役目を果たす日月をお前たちの用に服せしめたり。而して彼は、夜も昼もお前たちの用に服せしめたり。

وَسَخَّرَ لَكُمُ الشَّمْسَ وَالْقَمَرَ دَآئِبَيْنِ وَسَخَّرَ لَكُمُ الَّيْلَ وَالنَّهَارَ ﴿٣٤﴾

35．彼は、お前たちが彼に請い願うものは、（注14）すべて与え給う。たといお前たちがアッラーの幾多の恩恵を数え上げようと欲するも、数うる能わじ。げに人間というものは、不義不正にして、恩知らずであることよ。

وَاٰتٰىكُمْ مِّنْ كُلِّ مَا سَاَلْتُمُوْهُ وَاِنْ تَعُدُّوْا نِعْمَتَ اللّٰهِ لَا تُحْصُوْهَا اِنَّ الْاِنْسَانَ لَظَلُوْمٌ كَفَّارٌ ﴿٣٥﴾ ع

第六項

36．アブラハムがかく云える時を思い起せ。「主よ、願わくばこの邑を安泰ならしめ給え。また、我と我が子孫等を偶像崇拝から遠ざけさせ給え。（注15）

وَاِذْ قَالَ اِبْرٰهِيْمُ رَبِّ اجْعَلْ هٰذَا الْبَلَدَ اٰمِنًا وَّاجْنُبْنِيْ وَبَنِيَّ اَنْ نَّعْبُدَ الْاَصْنَامَ ﴿٣٦﴾

37．主よ、彼等はすでに幾多の人々を迷わしめたり。されど、誰であれ我に従う者は、確かに我が仲間であり、我に従わざる者は―いや、今は云うまい。汝はまことに寛大にして、慈悲深くまします。

رَبِّ اِنَّهُنَّ اَضْلَلْنَ كَثِيْرًا مِّنَ النَّاسِ فَمَنْ تَبِعَنِيْ فَاِنَّهٗ مِنِّيْ وَمَنْ عَصَانِيْ فَاِنَّكَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٣٧﴾

注14　「お前たちが彼に請い願うもの」というのは、全てかなえられてきた人間の本質的な、要求の事をさす。神は今まで人間が本質的に切望し要求する全てを満足させる為に完全な準備をして下さったのである。

注15　この節でのアブラハムの祈りは、偶像崇拝がメッカやその周辺の国々に、いつか広がり、浸透していくであろう事を知っていた事を示している。何年も前に祈りがささげられた時の、子孫達を偶像崇拝から守り給えという危惧が示されているのである。

38. 我等の主よ、我は、我が子孫等の一部を汝の聖殿の近くの不毛の谷間に住まわせたり（注 16）—主よ—彼等に礼拝を遵守せしめよ。（注 17）されば、人々の心を彼等に向けさせ、また彼等に果実を供給し給え、（注 18）さすれば、彼等恐らく感謝せん。

رَبَّنَآ إِنِّيٓ أَسۡكَنتُ مِن ذُرِّيَّتِي بِوَادٍ غَيۡرِ ذِي زَرۡعٍ عِندَ بَيۡتِكَ ٱلۡمُحَرَّمِ رَبَّنَا لِيُقِيمُواْ ٱلصَّلَوٰةَ فَٱجۡعَلۡ أَفۡـِٔدَةٗ مِّنَ ٱلنَّاسِ تَهۡوِيٓ إِلَيۡهِمۡ وَٱرۡزُقۡهُم مِّنَ ٱلثَّمَرَٰتِ لَعَلَّهُمۡ يَشۡكُرُونَ ﴿٣٨﴾

39. 我等の主よ、汝は我等が隠すことも、あらわにすることも知り給う。凡そ天にあるもの地にあるもの、何一つとしてアッラーより隠れたるは無し。

رَبَّنَآ إِنَّكَ تَعۡلَمُ مَا نُخۡفِي وَمَا نُعۡلِنُۗ وَمَا يَخۡفَىٰ عَلَى ٱللَّهِ مِن شَيۡءٖ فِي ٱلۡأَرۡضِ وَلَا فِي ٱلسَّمَآءِ ﴿٣٩﴾

40. 老齢にもかかわらず、我にイスマエルとイサクを授け給えしアッラーに讃美あれ。げに主は祈願をよくお聴きとどけ下さるお方にまします。

ٱلۡحَمۡدُ لِلَّهِ ٱلَّذِي وَهَبَ لِي عَلَى ٱلۡكِبَرِ إِسۡمَٰعِيلَ وَإِسۡحَٰقَۚ إِنَّ رَبِّي لَسَمِيعُ ٱلدُّعَآءِ ﴿٤٠﴾

41. 主よ、常に我をして礼拝を守らしめよ、我が子孫等にもまた然り。主よ、汝の慈悲を我に垂れ、我が祈りに応え給え。

رَبِّ ٱجۡعَلۡنِي مُقِيمَ ٱلصَّلَوٰةِ وَمِن ذُرِّيَّتِيۚ رَبَّنَا وَتَقَبَّلۡ دُعَآءِ ﴿٤١﴾

42. 主よ、清算を受ける日、我と我が両親並びに信者たちを赦し給え」（注 19）

رَبَّنَا ٱغۡفِرۡ لِي وَلِوَٰلِدَيَّ وَلِلۡمُؤۡمِنِينَ يَوۡمَ يَقُومُ ٱلۡحِسَابُ ﴿٤٢﴾

第七項

43. アッラーが悪人どもの所業をうかつに見過すと思うなかれ。彼はただ、彼等が恐怖の余り瞠目する日まで、暫し彼等に猶予を与えているのみ。

وَلَا تَحۡسَبَنَّ ٱللَّهَ غَٰفِلًا عَمَّا يَعۡمَلُ ٱلظَّٰلِمُونَۚ إِنَّمَا يُؤَخِّرُهُمۡ لِيَوۡمٖ تَشۡخَصُ فِيهِ ٱلۡأَبۡصَٰرُ ﴿٤٣﴾

注 16　ここで述べられているのは、アラビアの荒野での、我が息子イシュマエルと妻ハガルについてのアブラハムの決心である。

注 17　このアブラハムの祈りは聖なる預言者に於いて完全に成就された。何故なら預言者以前は、神前に供物を捧げる為メッカを訪れたのはアラブ人達だけであったが、預言者モハッマドの出現の後は、全世界からあらゆる人々が訪れる事となったからである。

注 18　この祈りは、メッカのまわりに草の葉一枚見られなかった時に捧げられたものであったが、預言が画期的に成就し、メッカでは最も望ましい果実が一年を通じ手に入る様になったのである。

注 19　自分達がサタンから守られているにもかかわらず、神の預言者達が神に赦しを乞う祈りをささげるのは、預言者が、神の尊厳と神聖さを、そして自分達の弱さを知っているからである。自分達の自我や私欲が、ぬぐいさられ、神と完全に併合できる事を願い神が彼等を神の慈悲と慈愛で覆って下さる様神に謙虚に祈りをささげさせるのは、この弱さの認識に他ならないのである。

44．その日彼等は、恐怖の余り頭を振り立てて走り廻り、眼は転じ眩み、心は空ろなり。(注 20)

مُهْطِعِينَ مُقْنِعِي رُءُوسِهِمْ لَا يَرْتَدُّ إِلَيْهِمْ طَرْفُهُمْ ۖ وَأَفْئِدَتُهُمْ هَوَاءٌ ﴿٤٣﴾

45．約束の懲罰が降る日のことを人々に警告せよ。時に悪人どもは云わん、「主よ、暫し我等に猶予を与え給え。我等は必ず汝の呼びかけに応え、使徒に従わん」と。「お前たちは以前、自ら誓わざりしか、自分たちには決して没落なしと？

وَأَنذِرِ النَّاسَ يَوْمَ يَأْتِيهِمُ الْعَذَابُ فَيَقُولُ الَّذِينَ ظَلَمُوا رَبَّنَا أَخِّرْنَا إِلَىٰ أَجَلٍ قَرِيبٍ نُّجِبْ دَعْوَتَكَ وَنَتَّبِعِ الرُّسُلَ ۗ أَوَلَمْ تَكُونُوا أَقْسَمْتُم مِّن قَبْلُ مَا لَكُم مِّن زَوَالٍ ﴿٤٤﴾

46．お前たちは、自らを滅ぼせる者どもが住居した跡に住み、而して、われらが如何に彼等を処遇したるかをお前たちに明示せり。また多くの譬え話を述べたるなり」

وَسَكَنتُمْ فِي مَسَاكِنِ الَّذِينَ ظَلَمُوا أَنفُسَهُمْ وَتَبَيَّنَ لَكُمْ كَيْفَ فَعَلْنَا بِهِمْ وَضَرَبْنَا لَكُمُ الْأَمْثَالَ ﴿٤٥﴾

47．彼等はすでに企みを謀れり。なれど、その企みはアッラーの手許にあり。(注 21) その企みがたとい山をも動かす如きものであっても。

وَقَدْ مَكَرُوا مَكْرَهُمْ وَعِندَ اللَّهِ مَكْرُهُمْ وَإِن كَانَ مَكْرُهُمْ لِتَزُولَ مِنْهُ الْجِبَالُ ﴿٤٦﴾

48．されば、アッラーがその使徒になされた約束を、怠るなどと思うなかれ。げにアッラーは強大にして、応報の主なるぞ。

فَلَا تَحْسَبَنَّ اللَّهَ مُخْلِفَ وَعْدِهِ رُسُلَهُ ۗ إِنَّ اللَّهَ عَزِيزٌ ذُو انتِقَامٍ ﴿٤٧﴾

49．大地変じて他の地に変わり、天また変じて他の天に変わるその日、(注 22) 人は皆、唯一至高なるアッラーの御前に出で来らん。

يَوْمَ تُبَدَّلُ الْأَرْضُ غَيْرَ الْأَرْضِ وَالسَّمَاوَاتُ ۖ وَبَرَزُوا لِلَّهِ الْوَاحِدِ الْقَهَّارِ ﴿٤٨﴾

50．汝はその日、悪人どもが鎖で一緒に繋がれているのを見るべし。

وَتَرَى الْمُجْرِمِينَ يَوْمَئِذٍ مُّقَرَّنِينَ فِي الْأَصْفَادِ ﴿٤٩﴾

51．彼等の着物は、恰も瀝青の如くにして、火は彼等の顔面を包む。

سَرَابِيلُهُم مِّن قَطِرَانٍ وَتَغْشَىٰ وُجُوهَهُمُ النَّارُ ﴿٥٠﴾

注 20　この節と前節には、予想だにしなかった一万の精鋭軍を連れた聖なる預言者のメッカの門への突然の出現に対する、メッカの人々の当惑と驚倒が、まざまざと描写されている。

注 21　神は彼等の邪悪な計画を全て御存知で彼等の計画を徒労に終らせられるのである。

注 22　メッカの陥落とアラビアに於いてのイスラムの樹立は、謂わば、新しい宇宙か新天地に出現した様なものであった。古い秩序は一掃され、全く以前とは異なった新しい秩序がそれらに取ってかわったのである。

52．これアッラーが各人のなせることに応じて報い給うところなり。げにアッラーは、清算するに迅速なり

لِيَجْزِيَ اللّٰهُ كُلَّ نَفْسٍ مَّا كَسَبَتْ ۗ اِنَّ اللّٰهَ سَرِيْعُ الْحِسَابِ ﴿٥٢﴾

53．こは世人への訓戒なり。之(これ)によって彼等が恩恵に浴し、警戒し、彼こそ唯一なる神であることを悟り、思慮ある人々に注意せしめんがために。

هٰذَا بَلٰغٌ لِّلنَّاسِ وَلِيُنْذَرُوْا بِهٖ وَلِيَعْلَمُوْٓا اَنَّمَا هُوَ اِلٰهٌ وَّاحِدٌ وَّلِيَذَّكَّرَ اُولُوا الْاَلْبَابِ ﴿٥٣﴾

سُوْرَةُ الْحِجْرِ مَكِّيَّةٌ (١٥)

ヒジル
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ (١)

2．アリフ・ラーム・ラー。（注1）これ等は経典の諸節にして、事理を解明するクルアーンの諸節なり。

الٓرٰ تِلْكَ اٰيٰتُ الْكِتٰبِ وَ قُرْاٰنٍ مُّبِيْنٍ (٢)

3．信ぜざる者どもは幾度も希(こいね)がわん、我等ムスリムでありたれば、と。（注2）

رُبَمَا يَوَدُّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لَوْ كَانُوْا مُسْلِمِيْنَ (٣)

4．彼等をして好きなように食べ且つ楽しませておくがよい。また空しい希望を抱いて自ら欺かしめよ。やがて彼等は思い知らん。（注3）

ذَرْهُمْ يَاْكُلُوْا وَ يَتَمَتَّعُوْا وَ يُلْهِهِمُ الْاَمَلُ فَسَوْفَ يَعْلَمُوْنَ (٤)

5．われらは決して、如何なる邑(まち)も一定期限（注4）を置かずに、（注5）滅亡せしめたることなし。

وَ مَاۤ اَهْلَكْنَا مِنْ قَرْيَةٍ اِلَّا وَ لَهَا كِتَابٌ مَّعْلُوْمٌ (٥)

6．如何なる民も己れの運命の期限を早める能(あた)わず、また之(これ)を延期する能(あた)わず。

مَا تَسْبِقُ مِنْ اُمَّةٍ اَجَلَهَا وَ مَا يَسْتَاْخِرُوْنَ (٦)

7．彼等は云えり、「汝、訓戒を降(くだ)されたる者よ、げに汝は狂人なり。

وَ قَالُوْا يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْ نُزِّلَ عَلَيْهِ الذِّكْرُ اِنَّكَ لَمَجْنُوْنٌ (٧)

8．もし汝の言葉真理とあらば、何故我等に諸天使を連れ来らざるか？」と。

لَوْ مَا تَاْتِيْنَا بِالْمَلٰٓئِكَةِ اِنْ كُنْتَ مِنَ الصّٰدِقِيْنَ (٨)

注1　われは一切を知るアッラーなり

注2　このような望みは、聖なる預言者の時代に実際に不信者によって表現されたと記録にある。

注3　この節の意味は、節の最後で述べられている不信の徒の望み――イスラム教徒であったならばよかったのに――という望みはかなえられない望みであるという事である。即ち、それは単なる一時的な望みであって彼らの真の欲望は世間的な楽しみと物質の獲得である。

注4　ここで言われている「一定期限」とは、預言者が預言したように敵が破滅すべく定められた時機のことである。

注5　「邑」とは預言者がつかわされた人々を象徴している。聖なる預言者モハッマドの「邑」は、クルアーン（6：93）で「母なる邑」と呼ばれてきた。

9．われらは正義の必要のため以外は天使を降しはせぬが、降したる時は、不信心者どもは猶予せられざるべし。（注6）

مَا نُنَزِّلُ الْمَلٰٓئِكَةَ اِلَّا بِالْحَقِّ وَمَا كَانُوْٓا اِذًا مُّنْظَرِيْنَ ⑨

10．げに訓戒を降せしはわれら自らなり、而して、われらはその守護者とならん。（注7）

اِنَّا نَحْنُ نَزَّلْنَا الذِّكْرَ وَاِنَّا لَهٗ لَحٰفِظُوْنَ ⑩

11．われらは汝以前にも、古の民のさまざまな集団に幾多の使徒を遣わせり。

وَلَقَدْ اَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ فِيْ شِيَعِ الْاَوَّلِيْنَ ⑪

12．然れども、使徒等彼等に至るや、一人として彼等のために嘲笑せられざるはなかりき。

وَمَا يَاْتِيْهِمْ مِّنْ رَّسُوْلٍ اِلَّا كَانُوْا بِهٖ يَسْتَهْزِءُوْنَ ⑫

13．かくの如く、われらは罪深い者の心中に、この嘲りの習癖を忍ばせり。

كَذٰلِكَ نَسْلُكُهٗ فِيْ قُلُوْبِ الْمُجْرِمِيْنَ ⑬

14．故に彼等は、昔の人々の先例がありたれど、このクルアーンを信ぜず。

لَا يُؤْمِنُوْنَ بِهٖ وَقَدْ خَلَتْ سُنَّةُ الْاَوَّلِيْنَ ⑭

15．また、たといわれらが彼等のために天門を開き、自由に登らしめんとするも。（注8）

وَلَوْ فَتَحْنَا عَلَيْهِمْ بَابًا مِّنَ السَّمَآءِ فَظَلُّوْا فِيْهِ يَعْرُجُوْنَ ⑮

16．彼等は必ず云わん、「ただ我等の目が眩惑されたに過ぎず。否な、我等は魔法にかけられたり」と。（注9）

لَقَالُوْٓا اِنَّمَا سُكِّرَتْ اَبْصَارُنَا بَلْ نَحْنُ قَوْمٌ مَّسْحُوْرُوْنَ ⑯

注6　ここで不信者は、次のように告げられる。真理、正義、知恵の必要に従って、彼らは神の罰を受ける事になるだろう。天使が彼らの上に降りてきて一刻の猶予もくれないだろう。

注7　この節でなされたクルアーンの保護と保存に関する約束が見事に達成されたので、他に証拠がなかったとしても、この事実だけでこれが神からのものであると証明するに充分である。当章はメッカで啓示された。その時、聖なる預言者とその信奉者の命は深刻な危険にさらされていて、敵は簡単に新しい信仰をつぶす事ができるかのようにみえた。しかし、その時、不信者はその新しい信仰を破壊するよう挑まれた。そして神は、神自らがその保護者であるから、不信者の計画を善しとされない旨、警告された。神からの挑戦は明白で絶対的なものであって、敵が強く、無茶苦茶な事をしかけてきにもかかわらず、クルアーンは改悪されず、書き入れされずに残った。そしてそれ以来いつも完全に安全に守られきた。クルアーンのこの特質は、どのような聖なる書とも共有されるものではない。イスラムに対して敵意を持つことで名高い批評家ウィリアム・ミュア卿は次のように述べている。「クルアーンのすべての節がモハッマド自身の手によるもので、全く変えられていないとほとんど確信してもよい。……我々が、今、手にしているクルアーンは、完全にモハッマド自身が使った成文と同じものであると保証できる。……この純粋なクルアーンと、他の経典を比較することは、共通点を持たない者を比較することである。」（「モハッマドの生涯」の序論）。ドイツの偉大な東洋学者であるノルデク教授は次のように書いている。「クルアーンに後世の書き込みがあると証明しようとしたヨーロッパの学者の試みは失敗した(Enc. Brit)。二、三年後、クルアーンの純粋性に誤りを見出す事に完全に失敗したミンガナ博士は、反対に、すべての経典の中でクルアーンだけが、全く書き込みも改変もされていないという主張を容認した。

注8　この節は、もし神が神のあわれみの門を開けて罰を与えないとしたら、不信者は、神の方に向かないで、物質的繁栄や楽しみを得るのに一生懸命になるであろうとの意味である。

第二項

17．われらは天上に星座を設け、仰ぎ見る者のために之を飾り装えり。（注 10）

وَلَقَدْ جَعَلْنَا فِي السَّمَاءِ بُرُوجًا وَزَيَّنَّاهَا لِلنَّاظِرِينَ ﴿١٧﴾

18．而してわれらは、石もて追われたるすべての悪魔から之を護りたり。（注 11）

وَحَفِظْنَاهَا مِنْ كُلِّ شَيْطَانٍ رَجِيمٍ ﴿١٨﴾

19．盗み聞きし、之を歪曲する者あらば、（注 12）その者は流星に追いかけられる。

إِلَّا مَنِ اسْتَرَقَ السَّمْعَ فَأَتْبَعَهُ شِهَابٌ مُبِينٌ ﴿١٩﴾

20．また、われらは大地を伸べ広げ、（注 13）そこに揺がざる山々を据え、そこですべてのものを相応な割合のもとに生ぜしめたり。（注 14）

وَالْأَرْضَ مَدَدْنَاهَا وَأَلْقَيْنَا فِيهَا رَوَاسِيَ وَأَنْبَتْنَا فِيهَا مِنْ كُلِّ شَيْءٍ مَوْزُونٍ ﴿٢٠﴾

21．われらはそこで、お前たちのために生活の道を与え、お前たちが扶養せざるものにも之を与えたり。

وَجَعَلْنَا لَكُمْ فِيهَا مَعَايِشَ وَمَنْ لَسْتُمْ لَهُ بِرَازِقِينَ ﴿٢١﴾

注 9　不信の徒は、精神的な事柄からあまりにもかけ離れてしまっているので、たとえ聖なる預言者が経験した霊的体験や、彼が到達した霊的視野が多少なりとも得られたとしても、不信の徒はこれを信ぜず魔法や妖術の犠牲になったと言ったことであろう。

注 10　ここで述べられているのは、夜空の惑星や恒星の美しさだけではない。それらが創造された偉大なる目的が 16：17 や 67：6 と同じ様に以下の節でも述べられており、星の美しさはその偉大な目的の成就にあるのである。

注 11　この節では、物理的世界では、悪意を持ちがちな人がある種の影響力や力を行使して他人をある程度傷つけることはできても、天の祝福、即ち、星の健全な影響を完全に奪うことはできないと述べている。同様に、霊的世界において「サタン」は預言者や他の信奉者を支配する事ができないのである（当章 43 節）。この節で述べられる「サタン」とは、預言者から離れて神と連結しようとするような不信の徒のことである（14―16 節）。このような人に対して、霊的天界は真に守られていて、天国の門は閉じられている。

注 12　「盗み聞きし」とは、預言者の教えを自分の教えのふりをして提言するようなサギ行為のことである。彼らは、預言者の教えに何ら新しいものはなく、彼ら自身が預言者の持っている知識への入口を知っていると人々を信じさせるようにすることで人を欺くのである。又、当節では、彼らが一文脈から一節をむしり取って、間違った解説をつけて、その意味を曲解することで素朴な民衆を欺こうとしているという意味でもある。また「之を歪曲する者」という言葉から、17 節の「天上」とは霊的秩序を代表しているのであって物理的な天上を指している訳ではない事がはっきりわかる。

注 13　二つの意味がここでは考えられる。即ち、神は地球を非常に大きく創られたので、地球が丸いのに人々はその丸さに不自由を感じない、という事。又、神は肥料で土を肥えさせた、の意味である。天文学の研究から、地球は隕石や隕石のかけらとして地球にふりそそぐ星のかけらから新しい力と肥料を得続けているという事が明らかになっている。

注 14　地球は食物を育てるのに充分な水を必要としている。この目的のために神は水の貯蔵庫としての山を創造されて、雪の形で水を貯え、河の形で地上に水を分配された。

22．われらの手許には、無限の財宝の如く、無いものとてなし。而してわれらは、之を一定の分量ずつ授け与う。（注 15）

وَإِن مِّن شَيْءٍ إِلَّا عِندَنَا خَزَآئِنُهُۥ وَمَا نُنَزِّلُهُۥٓ إِلَّا بِقَدَرٍ مَّعْلُومٍ ٢٢

23．われらは雨雲を孕んだ風を送り、雲から雨を降らせ、お前たちに之を飲ましむ。お前たちはその水の貯蔵者に非ず。

وَأَرْسَلْنَا ٱلرِّيَٰحَ لَوَٰقِحَ فَأَنزَلْنَا مِنَ ٱلسَّمَآءِ مَآءً فَأَسْقَيْنَٰكُمُوهُ وَمَآ أَنتُمْ لَهُۥ بِخَٰزِنِينَ ٢٣

24．生を与え、死を生ぜしむるはげにわれらなり。而してわれらは、萬物の唯一なる相続者なり。（注 16）

وَإِنَّا لَنَحْنُ نُحْيِۦ وَنُمِيتُ وَنَحْنُ ٱلْوَٰرِثُونَ ٢٤

25．われらはお前たちの中で率先垂範する者を知り、また誰が落後者かをも知る。

وَلَقَدْ عَلِمْنَا ٱلْمُسْتَقْدِمِينَ مِنكُمْ وَلَقَدْ عَلِمْنَا ٱلْمُسْتَـْٔخِرِينَ ٢٥

26．汝の主は、いずれ彼等を一斉に召喚せん。げに彼は賢哲にして、一切を知ろしめし給う。

وَإِنَّ رَبَّكَ هُوَ يَحْشُرُهُمْ إِنَّهُۥ حَكِيمٌ عَلِيمٌ ٢٦ ع

第三項

27．われらは、黒泥で形どった乾ける陶土で人間を創れり。（注 17）

وَلَقَدْ خَلَقْنَا ٱلْإِنسَٰنَ مِن صَلْصَٰلٍ مِّنْ حَمَإٍ مَّسْنُونٍ ٢٧

注 15　神はすべてのものを無限に所有されている。しかし神は限りない慈悲の心で、人が真にその物を求める時にだけ特定の物に心を向けさせるようにされた。物質的な宇宙と同様に、クルアーンは霊的宇宙であって、その中に時の要求に従ってあらわれてくる霊的知識の隠された宝庫がある。

注 16　大きな改革がクルアーンの教えを通してもたらされる。古い規律が死に、真の信徒が地を継ぐ事となるのである。

注 17　「乾ける陶土」から人が創造されたという事の意味は、人が言語の資質と恩恵がひそんでいる物質から創造されたという事である。この事は、人は天の声に応答する力を与えられているという事でもある。しかし、乾ける陶土は、異質の何かに打たれた時にだけ音を発するので、この語の意味は人が応答する力は、神の呼びかけを受けることを条件にしている事を示している。この資質が人間をすべての創造物のうちで最も優れた存在にしている。黒泥という語は、人が黒い泥即ち、土と水から創られたという事を意味する。土は身体の源であり、水は魂の源である。他の場所でクルアーンは、土と水を別々に、人が創造された物質として述べている（3：60；21：31)。「乾ける陶土」という語と「黒泥」という語を連結することで、クルアーンは、他の生物が黒い泥、即ち土と水だけから創られた（それらも未開発の魂を持っているので）のに対し、人は乾いた土、即ち言語の賜物と結合した黒い泥から創られている事を指摘している。人間は又完全な形に「形どられ」ている(95：5)。当節の意味は神が土に息を吹きかけられた時、土がすぐさま生きる物質になったという事ではない。クルアーンが繰り返して述べているのは、宇宙の創造はゆっくりと行われたという事である。この節では、人間の創造の第一段階を述べているだけであり、人間の創造の他の段階は 30：21、35：12、22：6、23：15、

28．したがその前に、燃えさかる炎から妖霊（ジン）を創れり。（注 18）

وَالْجَآنَّ خَلَقْنٰهُ مِنْ قَبْلُ مِنْ نَّارِ السَّمُوْمِ ﴿٢٨﴾

29．汝の主が諸天使にかく云える時を思い起せ。「われは黒泥で形どった乾ける陶土で人間を創らんとす。

وَاِذْ قَالَ رَبُّكَ لِلْمَلٰٓئِكَةِ اِنِّيْ خَالِقٌۢ بَشَرًا مِّنْ صَلْصَالٍ مِّنْ حَمَاٍ مَّسْنُوْنٍ ﴿٢٩﴾

30．されば、われ之（これ）を完成し、わが霊を彼に吹き込みたらん時、汝等地に平伏（ひれふ）して彼を拝せよ」

فَاِذَا سَوَّيْتُهٗ وَنَفَخْتُ فِيْهِ مِنْ رُّوْحِيْ فَقَعُوْا لَهٗ سٰجِدِيْنَ ﴿٣٠﴾

31．されば諸天使、すなわち一斉に叩頭（こうとう）せり。

فَسَجَدَ الْمَلٰٓئِكَةُ كُلُّهُمْ اَجْمَعُوْنَ ﴿٣١﴾

32．しかるに、イブリースだけはなさざりき。彼は叩頭（こうとう）者の仲間に加わることを拒みたり。（注 19）

اِلَّآ اِبْلِيْسَ اَبٰٓى اَنْ يَّكُوْنَ مَعَ السّٰجِدِيْنَ ﴿٣٢﴾

33．神は云えり、「イブリースよ、皆と偕（とも）に叩頭（こうとう）せぬとは如何なることぞ？」と。（注 20）

قَالَ يٰٓاِبْلِيْسُ مَا لَكَ اَلَّا تَكُوْنَ مَعَ السّٰجِدِيْنَ ﴿٣٣﴾

34．イブリースは答えり、「我は、黒泥で形どった乾ける陶土で創られし人間如きに平伏（ひれふ）して拝する気持ちなし」と。

قَالَ لَمْ اَكُنْ لِّاَسْجُدَ لِبَشَرٍ خَلَقْتَهٗ مِنْ صَلْصَالٍ مِّنْ حَمَاٍ مَّسْنُوْنٍ ﴿٣٤﴾

40：68に述べられている。　人間が土から創られたというクルアーンの説明は（この事は、人間創造の長い過程は土から始まったという意味である）、現在でも人の食物が土から直接に、間接に生み出されるという事実からも確証される。この事は土に含まれる物質が人のもとを形成している事を示している。何故なら、このような事が起こらなかったならば、人は土から栄養を取ることがなかったであろうからである。それは、生物を形成しているものだけが栄養を与えることができるからで、その他のものでは消費した分を補給する事はできない。

注 18　同じようなクルアーンの表現である、「人はあわただしさ（性急さ）から創られている」（21：38）が、実際に人が性急さからできているわけではないことを示しているのと同様に、この節でもジンが炎のような性質を持っているが、実際に炎でできているわけではないことを示している。このように土からの創造、あるいは炎からの創造というのは比喩であって、それぞれに、おとなしくて従順な性質、烈しくて燃えさかる気質を表している。

注 19　神がサタンを罰せられた（当章 35、36 節）のは、天使にだけ命じられた命令を実行しなかったから（当章 29、30 節）であり、天使に与えられた命令は、自動的に天使の権威に服するすべての被造物に適用されるからである。クルアーンの他の箇所で、天使たちへの命令がイブリースにも適用される事が明言されている（7：12、13）。

注 20　アラビア語の表現では次の意味に取ることもできる。「何を迷っているのか。」「なぜ、従わないのか。」「いったいどうしたというのか。」

35. 神は云えり、「さればここより出で去れ。げに汝は拒否されたり。

قَالَ فَاخْرُجْ مِنْهَا فَإِنَّكَ رَجِيمٌ ﴿٣٥﴾

36. さればわが呪いを、汝は最後の審判の日まで背負わされん」と。

وَإِنَّ عَلَيْكَ اللَّعْنَةَ إِلَىٰ يَوْمِ الدِّينِ ﴿٣٦﴾

37. イブリースは云えり、「主よ、ならば我を人々が甦らされる日まで猶予したまえ」と。(注 21)

قَالَ رَبِّ فَأَنظِرْنِي إِلَىٰ يَوْمِ يُبْعَثُونَ ﴿٣٧﴾

38. 神は云えり、「汝は猶予を与えられた人々の中に加えらる。

قَالَ فَإِنَّكَ مِنَ الْمُنظَرِينَ ﴿٣٨﴾

39. 定められた時限の、その日まで」と。(注 22)

إِلَىٰ يَوْمِ الْوَقْتِ الْمَعْلُومِ ﴿٣٩﴾

40. イブリースは答えり、「主よ、汝は我を迷わせたが故に、我は必ず地上において、正道から踏みはずすことを人間の目に美しく映ぜしめ、悉く彼等を迷わしめん。

قَالَ رَبِّ بِمَا أَغْوَيْتَنِي لَأُزَيِّنَنَّ لَهُمْ فِي الْأَرْضِ وَلَأُغْوِيَنَّهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٤٠﴾

41. 人々の中から汝が特に選びたる僕等を除いて」と。

إِلَّا عِبَادَكَ مِنْهُمُ الْمُخْلَصِينَ ﴿٤١﴾

42. 神は云えり、「こはわれに至る正しき道なり。

قَالَ هَٰذَا صِرَاطٌ عَلَيَّ مُسْتَقِيمٌ ﴿٤٢﴾

43. 汝は、汝に従うことを選びたる身を誤れる者以外は、わが僕等の上に支配力を有せず」と。(注 23)

إِنَّ عِبَادِي لَيْسَ لَكَ عَلَيْهِمْ سُلْطَانٌ إِلَّا مَنِ اتَّبَعَكَ مِنَ الْغَاوِينَ ﴿٤٣﴾

44. げに地獄は、彼等一同への約束の場所なり。

وَإِنَّ جَهَنَّمَ لَمَوْعِدُهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٤٤﴾

45. 地獄には七つの門あり。その各々に割り当てられた彼等の一部あり。(注 24)

لَهَا سَبْعَةُ أَبْوَابٍ لِكُلِّ بَابٍ مِنْهُمْ جُزْءٌ مَقْسُومٌ ﴿٤٥﴾

注２１　「人々が甦らされる日まで」という文の意味は、神の安らぎを体得した状態に達した時、人が霊的に生まれかわる事を指す。その時には、人はサタンの誘惑や霊的堕落からまぬがれる。神とサタンの間のこの会話は、ここで示されているように、比喩にすぎない。

注 22　「定められた時限」とは、37 節で説明されているように、預言者とその信奉者が最終的に敵に打ち勝つ日のことであり、虚言とその虚言に従う者がついに打ち潰される時のことである。

注 23　当節では、人の性質は本質的に純粋である事を暗示しているようである。自分自身の性質を汚しサタンに従うことを選んだ者だけが正しい道を見失う。この考えは 91：11 でより深く説明されている。

注 24　アラビア語では、70 と同様 7 という数字は特定の数ではなく、完全さや豊富さを表わすために用いられる事が多い。この節は、地獄の門の数は、罪を犯した者の罪の数や種類に対応するだけあるという意味であ

第四項

46．されど、公正なる人は、花園や泉のあるところに住まん。

اِنَّ الْمُتَّقِيْنَ فِيْ جَنّٰتٍ وَّعُيُوْنٍ ۝٤٦

47．「心安らかに、安心してその中に入れ」（注25）

اُدْخُلُوْهَا بِسَلٰمٍ اٰمِنِيْنَ ۝٤٧

48．われらは彼等の胸中よりすべての怨恨をとり除かん。さすれば、彼等は兄弟の如くなりて、（注26）偕に相対して牀に坐さん。

وَنَزَعْنَا مَا فِيْ صُدُوْرِهِمْ مِّنْ غِلٍّ اِخْوَانًا عَلٰى سُرُرٍ مُّتَقٰبِلِيْنَ ۝٤٨

49．彼等はそこで如何なる労苦も知らず、またそこを追われることもなかるべし。（注27）

لَا يَمَسُّهُمْ فِيْهَا نَصَبٌ وَّمَا هُمْ مِّنْهَا بِمُخْرَجِيْنَ ۝٤٩

50．預言者よ、わが僕等に告げよ、われは実に寛大にして、慈悲深い者なることを。

نَبِّئْ عِبَادِيْٓ اَنِّيْٓ اَنَا الْغَفُوْرُ الرَّحِيْمُ ۝٥٠

51．また、わが懲罰は実に痛烈であることも。

وَاَنَّ عَذَابِيْ هُوَ الْعَذَابُ الْاَلِيْمُ ۝٥١

52．而して、彼等にアブラハムの賓客について語れ。

وَنَبِّئْهُمْ عَنْ ضَيْفِ اِبْرٰهِيْمَ ۝٥٢

53．客たち彼を訪れて云えり、「平安あれ」と。アブラハムは云えり、「我等は貴方がたを恐る」と。（注28）

اِذْ دَخَلُوْا عَلَيْهِ فَقَالُوْا سَلٰمًا قَالَ اِنَّا مِنْكُمْ وَجِلُوْنَ ۝٥٣

54．彼等は云えり、「恐るるなかれ、我等は汝に賢き男子の嬉しい知らせをもたらせり」と。

قَالُوْا لَا تَوْجَلْ اِنَّا نُبَشِّرُكَ بِغُلٰمٍ عَلِيْمٍ ۝٥٤

る。7という数は外界に対応する7つの感覚、即ち、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、そして痛みを感じる感覚と気温を感じる感覚のことでもある。それによって人は外界を感受する。

注25　「心安らかに」安全に入れということは、それぞれ人の心の中に食い込む内的心配からの自由、外的苦痛と罰からの自由という事を表わす。

注26　真に天国の生活を楽しんでいると言える人は、その心の中に兄弟に対する敵意や悪意が全くない者だけである。

注27　この節は、天国とは絶えず働き続ける場所である事を意味している。しかし、それにもかかわらず、信徒は激しい仕事につきものの疲れを全く感ぜず、従って疲れの結果生ずる消耗や衰弱もないのである。

注28　使いの者達は差し迫った大惨事の報せをもたらした為、悲しみと悲嘆が、はっきりと表情に表われていたのであろう。アブラハムは彼らの困惑した表情から、又、彼らが差し出された食事を口にする事を拒否した事からそれを悟ったのである（11：71）。

55. 彼は云えり、「我齢(よわい)すでに老いたるにもかかわらず、嬉しい知らせを我に与うるか？何故貴方がたはかかる知らせを我に与うるか？」と。

قَالَ أَبَشَّرْتُمُونِي عَلَىٰ أَن مَّسَّنِيَ الْكِبَرُ فَبِمَ تُبَشِّرُونَ ٥٥

56. 彼等は云えり、「我等は本当に汝に嬉しい知らせをもたらせり。されば絶望(あきらめ)る者の一人となるなかれ」と。

قَالُوا بَشَّرْنَاكَ بِالْحَقِّ فَلَا تَكُن مِّنَ الْقَانِطِينَ ٥٦

57. 彼は云えり、「迷える者に非ずば、誰が主の慈悲を諦め得ようか？」と。

قَالَ وَمَن يَقْنَطُ مِن رَّحْمَةِ رَبِّهِ إِلَّا الضَّالُّونَ ٥٧

58. 更に語をついで、「ところで、使者たちよ、貴方がたの使命とはそも如何なるものぞ？」と訊けば、

قَالَ فَمَا خَطْبُكُمْ أَيُّهَا الْمُرْسَلُونَ ٥٨

59. 「我等は罪深い民のところへ赴く途中なり。

قَالُوا إِنَّا أُرْسِلْنَا إِلَىٰ قَوْمٍ مُّجْرِمِينَ ٥٩

60. 但し、ロトの一家は除く。我等はあの一家は全員救わんと欲すれど、

إِلَّا آلَ لُوطٍ إِنَّا لَمُنَجُّوهُمْ أَجْمَعِينَ ٦٠

61. ロトの妻だけは例外なり。我等は、彼女が後に居残る者どもの仲間に加わらんことを定めたり」と彼等は云えり。

إِلَّا امْرَأَتَهُ قَدَّرْنَا إِنَّهَا لَمِنَ الْغَابِرِينَ ٦١ ع

第五項

62. 使者たちがロトの家を訪ねるや、

فَلَمَّا جَاءَ آلَ لُوطٍ الْمُرْسَلُونَ ٦٢

63. ロトは云えり、「貴方がたは見なれぬ人たちじゃ」と。（注29）

قَالَ إِنَّكُمْ قَوْمٌ مُّنكَرُونَ ٦٣

64. 彼等は云えり、「さよう、しかし我等は人々が疑いを抱くことに関して、天罰の知らせを汝に持ち来たるなり。

قَالُوا بَلْ جِئْنَاكَ بِمَا كَانُوا فِيهِ يَمْتَرُونَ ٦٤

65. 我等は汝に確実な知らせをもたらせり。我等の言葉は真実なり。

وَأَتَيْنَاكَ بِالْحَقِّ وَإِنَّا لَصَادِقُونَ ٦٥

66. されば、夜の明けぬ間に、家族と共に出で立ち、汝は家族の最後尾に従え。お前たちのうち誰も後ろを振り向かせず、（注30）ただ命ぜられた方向に進め」と。

فَأَسْرِ بِأَهْلِكَ بِقِطْعٍ مِّنَ اللَّيْلِ وَاتَّبِعْ أَدْبَارَهُمْ وَلَا يَلْتَفِتْ مِنكُمْ أَحَدٌ وَامْضُوا حَيْثُ تُؤْمَرُونَ ٦٦

注29　ロトはこの人たちは単なる旅人で、たまたまその場所を訪ねたにすぎないと思った。

注30　「誰も後ろを振り向かせず」という言葉は比喩的に使われていて、後に残された人々に気をとられず、前向きに進んでいくようにという意味である。

67. かくしてわれらは、この民が朝までに根絶されんことを、その決定をロトにはっきりと伝えたり。

وَقَضَيْنَآ إِلَيْهِ ذَٰلِكَ ٱلْأَمْرَ أَنَّ دَابِرَ هَٰٓؤُلَآءِ مَقْطُوعٌ مُّصْبِحِينَ ﴿٦٦﴾

68. 都の人々は歓喜して集まり来たれり。(注31)

وَجَآءَ أَهْلُ ٱلْمَدِينَةِ يَسْتَبْشِرُونَ ﴿٦٧﴾

69. ロトは云えり、「これなる方々は我が客人なり。されば我に恥をかかせるなかれ。

قَالَ إِنَّ هَٰٓؤُلَآءِ ضَيْفِى فَلَا تَفْضَحُونِ ﴿٦٨﴾

70. アッラーを畏れよ、我を侮辱するなかれ」と。

وَٱتَّقُوا ٱللَّهَ وَلَا تُخْزُونِ ﴿٦٩﴾

71. 彼等は云えり、「我等は汝に如何なる民も歓待(もてな)すことを禁じたるに非ざるか？」と。

قَالُوٓا أَوَلَمْ نَنْهَكَ عَنِ ٱلْعَٰلَمِينَ ﴿٧٠﴾

72. ロトは云えり、「お前たちが是非というなら、ここに十分なる保障、我が娘らあり」と。(注32)

قَالَ هَٰٓؤُلَآءِ بَنَاتِىٓ إِن كُنتُمْ فَٰعِلِينَ ﴿٧١﴾

73. 誓って云う、彼等は狂乱して迷誤の中に徘徊(はいかい)す。

لَعَمْرُكَ إِنَّهُمْ لَفِى سَكْرَتِهِمْ يَعْمَهُونَ ﴿٧٢﴾

74. かくて、彼等は黎明(よあけ)に天罰に見舞われたり。

فَأَخَذَتْهُمُ ٱلصَّيْحَةُ مُشْرِقِينَ ﴿٧٣﴾

75. われらはあの都を顛覆(てんぷく)し、住民の上に焼いた瓦石(がせき)を雨と降らせたり。

فَجَعَلْنَا عَٰلِيَهَا سَافِلَهَا وَأَمْطَرْنَا عَلَيْهِمْ حِجَارَةً مِّن سِجِّيلٍ ﴿٧٤﴾

76. げにこの中には、物事に閲(けみ)する人々へのさまざまな神兆(しるし)あり。

إِنَّ فِى ذَٰلِكَ لَءَايَٰتٍ لِّلْمُتَوَسِّمِينَ ﴿٧٥﴾

77. しかも、この都の跡は、今なおそのまま路傍に横たわれり。(注33)

وَإِنَّهَا لَبِسَبِيلٍ مُّقِيمٍ ﴿٧٦﴾

78. げにこの中には、信ずる者への一種の表徴(いましめ)あり。

إِنَّ فِى ذَٰلِكَ لَءَايَةً لِّلْمُؤْمِنِينَ ﴿٧٧﴾

注31　ロトは人々から、見知らぬ人を町に入れるなと言われていたので、ロトのもとへお客が来たとき、ロトが彼らの警告にもかかわらずお客をもてなしているのを非難してやろうと思って、人々は喜んで集まってきた。

注32　11章79節参照

注33　ここで言及されている道、即ち、アラビアとシリアを結ぶ道は今なお使われている。この道は死海に沿って通じていて、地方の人たちにロトの海 (The Sea of Lot) として知られている。

79．而して、森に住む民もまた不義なす徒輩なりき。

وَإِنْ كَانَ أَصْحٰبُ الْأَيْكَةِ لَظٰلِمِينَ ﴿٧٩﴾

80．されば、われらは彼等を懲らしめたり。これ等の二都市の跡は、今なお天下の公道沿いに在り。（注 34）

فَانْتَقَمْنَا مِنْهُمْ وَإِنَّهُمَا لَبِإِمَامٍ مُّبِينٍ ﴿٨٠﴾

第六項

81．ヒジル（注 35）の住民も使徒たちを虚妄家として遇せり。

وَلَقَدْ كَذَّبَ أَصْحٰبُ الْحِجْرِ الْمُرْسَلِينَ ﴿٨١﴾

82．われらが数々の神兆を降したるも、彼等は之に注意を向けざりき。

وَاٰتَيْنٰهُمْ اٰيٰتِنَا فَكَانُوا عَنْهَا مُعْرِضِينَ ﴿٨٢﴾

83．彼等は岩石を穿って家となし、而して油断せり。（注 36）

وَكَانُوا يَنْحِتُونَ مِنَ الْجِبَالِ بُيُوتًا اٰمِنِينَ ﴿٨٣﴾

84．然るに或る朝､彼等は天罰に見舞われたり。（注 37）

فَأَخَذَتْهُمُ الصَّيْحَةُ مُصْبِحِينَ ﴿٨٤﴾

85．而して、彼等が今まで築けしものは、彼等のためになんの役にも立たざりき。

فَمَآ أَغْنٰى عَنْهُمْ مَّا كَانُوا يَكْسِبُونَ ﴿٨٥﴾

86．われらは天も地も、その間にある一切のものを真理に基づかざる以外は創造せざりき。げに審判の時刻は近づけり。されば、汝寛大な心をもって容赦せよ。（注 38）

وَمَا خَلَقْنَا السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَآ إِلَّا بِالْحَقِّ وَإِنَّ السَّاعَةَ لَاٰتِيَةٌ فَاصْفَحِ الصَّفْحَ الْجَمِيلَ ﴿٨٦﴾

注 34　ロトの町の場合、街道は「今なおそのまま路傍に横たわれり。」と記されている（当章 77 節）。これは未来も存在し続けるだろうという預言を意味している。「森の人」（The People of the Wood）の住居の場合、道は「開かれた道」と呼ばれていた。アジアとエジプトを結ぶ古い道は（「開かれた」という語は、その道が隊商によって使われなくなった今でもなお存在していることを含蓄している。）最近､隊商には使われなくなった。

注 35　ヒジル（石の意）はタブークとメディナの間にあり、ここに住んでいたタムード族に彼らに警告を与える者としてサレーが遣わされた。その町は大きな石造りの町、石の壁と城壁で囲まれていた為、この名前で呼ばれる様になった。

注 36　この節ではタムード族は文明化された強力で裕福な集団であった事を示している。彼らは夏と冬に別々の保養地を持ち、安全で快適な生活を送っていた。夏、高原に保養と転地のために出かけて冬の住居を離れる時でさえも、他の地区の住民から攻撃されるという心配は全くなかった。この節では又、彼らの建築が非常に発達していたことが、示されている。

注 37　この節で言及されている大惨事は地震であった事が 7：79 に明らかにされている。

注 38　宇宙の創造とそこに行き渡っている素晴らしい設計と秩序は、人生がこの地上だけのかりそめの短い存在に限定されてはおらず、偉大な目的を有しており、人はただほんのしばらくの間食べて飲んで楽しく過ごしそれから永遠に死するために創造された訳ではないという、紛れもない結論へと導いてゆく。

87. げに汝の主こそ至尊者、全知者なり。

إِنَّ رَبَّكَ هُوَ الْخَلّٰقُ الْعَلِيمُ ﴿٨٧﴾

88. われらは汝に不断に繰り返して唱えるべき七つの節と、偉大なるクルアーンをすでに授けたり。

وَلَقَدْ آتَيْنٰكَ سَبْعًا مِّنَ الْمَثَانِي وَالْقُرْآنَ الْعَظِيمَ ﴿٨٨﴾

89. 汝、われらが或る類(たぐい)いの者に授けたるかりそめの楽しみに、目を見張り、また彼等のために心を悩ますなかれ。それよりも汝の慈悲の翼を信徒たちに低く垂れよ。(注39)

لَا تَمُدَّنَّ عَيْنَيْكَ إِلٰى مَا مَتَّعْنَا بِهٖٓ أَزْوَاجًا مِّنْهُمْ وَلَا تَحْزَنْ عَلَيْهِمْ وَاخْفِضْ جَنَاحَكَ لِلْمُؤْمِنِينَ ﴿٨٩﴾

90. 而(しか)して云え、「我は疑う余地なき警告者なり」と。

وَقُلْ إِنِّيٓ أَنَا النَّذِيرُ الْمُبِينُ ﴿٩٠﴾

91. なんとなれば、われらは汝に逆って幾つもの集団に分れた者どもに罰を科せんと決意せり。(注40)

كَمَآ أَنْزَلْنَا عَلَى الْمُقْتَسِمِينَ ﴿٩١﴾

92. 彼等は、クルアーンには幾多の虚偽ありと言明せり。

الَّذِينَ جَعَلُوا الْقُرْآنَ عِضِينَ ﴿٩٢﴾

93. されば誓って云う、われらは必ず彼等一同を糾明(きゅうめい)せん、

فَوَرَبِّكَ لَنَسْـَٔلَنَّهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٩٣﴾

94. 彼等が現世で何をしていたかと。

عَمَّا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٩٤﴾

95. されば汝は、伝達を命ぜられたことを宣揚し、多神教徒どもから遠ざかれ。

فَاصْدَعْ بِمَا تُؤْمَرُ وَأَعْرِضْ عَنِ الْمُشْرِكِينَ ﴿٩٥﴾

96. われらは必ず嘲笑する者どもに対し汝を満足させん。

إِنَّا كَفَيْنٰكَ الْمُسْتَهْزِءِينَ ﴿٩٦﴾

97. 彼等はアッラーと偕(とも)に他の神々を並(なら)べ立てるが、そのうち必ず思いしらされん。

الَّذِينَ يَجْعَلُونَ مَعَ اللّٰهِ إِلٰهًا آخَرَ ۚ فَسَوْفَ يَعْلَمُونَ ﴿٩٧﴾

98. われらは、汝の胸が彼等の云うことのために難儀させられていることを知る。(注41)

وَلَقَدْ نَعْلَمُ أَنَّكَ يَضِيقُ صَدْرُكَ بِمَا يَقُولُونَ ﴿٩٨﴾

注39　この節で真に重要なことは、聖なる預言者が次のように告げられたという事である。
即ち、不信の徒が間もなく罰せられて、彼らが誇っていたすべての富、繁栄、栄光は彼らに縁のないものになるという事実を嘆き悲しむことのないようにと。

注40　メッカの住民は、数組の集団を形成していて聖なる預言者を妨害して邪魔をするための様々な任務を

99. 主の讃美を称え、主の御前に平伏者の仲間たれ。

فَسَبِّحْ بِحَمْدِ رَبِّكَ وَكُنْ مِّنَ السّٰجِدِيْنَ ﴿۹۹﴾

100. 而して死が汝に到来するまで、主を崇拝し続けよ。（注 42）

وَاعْبُدْ رَبَّكَ حَتّٰى يَاْتِيَكَ الْيَقِيْنُ ﴿۱۰۰﴾

それぞれに負っていた。又、その集団は聖なる預言者を殺すことに決めた時、種々の役割を割り当てられた。「幾つもの集団に分れた者」というのは「お互いに種々の義務を割り当てた人々」の意味でもある。

注 41　聖なる預言者が嘆いたのは、不信者が、彼をあざ笑ったからではなく、彼らがアッラーの神と他の神々とを結びつけたからである。預言者の嘆きは一方では神へのねたましい程の愛であり、又、他方では彼の同胞に対しての心からの心配であった。

注 42　この節では、聖なる預言者の使命の主な目的、即ち、神の調和を確立すること、に関する限り、それは成就されつつあるということを主張している。彼は喜びに満ちて感謝しながら、神を痣めたたえ、神に心からの献身をささげてひれ伏すのである。

سُوْرَةُ النَّحْلِ مَكِّيَّةٌ (١٦)

アンナハル
（メッカ啓示）

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ (١)

2. アッラーの仰せられしことは近い将来に必ず起るべし。（注1）されば、之を急ぎ求むるなかれ。聖なるかな、彼こそは人々が彼と併せ祀る神々の上に高くまします。

أَتٰى أَمْرُ اللّٰهِ فَلَا تَسْتَعْجِلُوْهُ ؕ سُبْحٰنَهٗ وَتَعٰلٰى عَمَّا يُشْرِكُوْنَ (٢)

3. 彼は僕らの中で嘉したる者に、彼が命じた天使らを遣わし、「われの外に神なし。さればただわれのみを、主護者と崇めよと人々に警告せよ」と仰せられ給う。

يُنَزِّلُ الْمَلٰٓئِكَةَ بِالرُّوْحِ مِنْ أَمْرِهٖ عَلٰى مَنْ يَّشَآءُ مِنْ عِبَادِهٖٓ أَنْ أَنْذِرُوْٓا أَنَّهٗ لَآ إِلٰهَ إِلَّآ أَنَا فَاتَّقُوْنِ (٣)

4. 彼は真理に基づいて天地を創造せり。（注2）彼こそは人々が彼と併せ祀る神々の上に高くまします。

خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضَ بِالْحَقِّ ؕ تَعٰلٰى عَمَّا يُشْرِكُوْنَ (٤)

5. 彼は一滴の液体より人間を創造せり。然るに見よ、人間は公然たる反抗者なるかな！（注3）

خَلَقَ الْإِنْسَانَ مِنْ نُّطْفَةٍ فَإِذَا هُوَ خَصِيْمٌ مُّبِيْنٌ (٥)

6. 而して、彼また家畜も創造せり。お前たちが之に依って暖かい着物と便宜を得るのみならず、その肉を食するために。

وَالْأَنْعَامَ خَلَقَهَا ۚ لَكُمْ فِيْهَا دِفْءٌ وَّمَنَافِعُ وَمِنْهَا تَأْكُلُوْنَ (٦)

7. 夕に家畜らを小屋に連れ帰るとき、又朝に牧場へ逐い行くとき、家畜らのなんたる美しさよ。

وَلَكُمْ فِيْهَا جَمَالٌ حِيْنَ تُرِيْحُوْنَ وَحِيْنَ تَسْرَحُوْنَ (٧)

注1　この文の意味は、不信者を罰する時期、即ち新しい時代の到来を告げる時期が既に来ているという事である。

注2　「真理に基づいて」という意味は、人間が霊的に改心する時、天と地は協力して望ましい結果を生み出すように、それぞれ決まった役割を持っていると考えてもいいし、又は神が天地を創ったのは人間の関心を神の方に向けるように働かせるためであり、人間に神をおいて完全なものは何もない事を知らせるためであると考えてもいい。

注3　神は明確な法則に従って天地を創造された後に人間を創り、その導き手としての啓示を下された。神はとるに足らないものから人間を創造されたにもかかわらず、人間に最高の資質を与えられたが、人間は神から賜った導きによって行動しないで、神の力や権力を疑い始めた。

8．剰え、お前たちが苦労せずに達し得ぬ遠い所にまでお前たちの重荷を運ぶ。げにお前たちの主は憐憫にして、慈悲深くまします。

وَتَحْمِلُ أَثْقَالَكُمْ إِلَىٰ بَلَدٍ لَّمْ تَكُونُوا بَالِغِيهِ إِلَّا بِشِقِّ الْأَنفُسِ ۚ إِنَّ رَبَّكُمْ لَرَءُوفٌ رَّحِيمٌ ٨

9．また、彼は馬、騾馬、驢馬をお前たちの乗用に、それから飾りとなすためにと創り給えり。（注４）さらに彼は、お前たちがいまだ知らざるものを創造せん。（注５）

وَالْخَيْلَ وَالْبِغَالَ وَالْحَمِيرَ لِتَرْكَبُوهَا وَزِينَةً ۚ وَيَخْلُقُ مَا لَا تَعْلَمُونَ ٩

10．正しい道を示すはアッラー次第なり。逸脱する道もあり。然しながら、もしアッラー欲したりせば、お前たちすべてを導き得たりし筈。

وَعَلَى اللَّهِ قَصْدُ السَّبِيلِ وَمِنْهَا جَائِرٌ ۚ وَلَوْ شَاءَ لَهَدَاكُمْ أَجْمَعِينَ ١٠ ع

第二項

11．彼こそは雲から水を降らせ給える御方。お前たちはそれを飲み、またお前たちが家畜を育てる叢林も之によって成育す。

هُوَ الَّذِي أَنزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً ۖ لَّكُم مِّنْهُ شَرَابٌ وَمِنْهُ شَجَرٌ فِيهِ تُسِيمُونَ ١١

12．この雨によって、彼は穀物、橄欖、棗椰子、葡萄など種々の果実を生ぜしむ。げに、この中に含むものこそ、思慮深い者への神兆なり。（注６）

يُنبِتُ لَكُم بِهِ الزَّرْعَ وَالزَّيْتُونَ وَالنَّخِيلَ وَالْأَعْنَابَ وَمِن كُلِّ الثَّمَرَاتِ ۗ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً لِّقَوْمٍ يَتَفَكَّرُونَ ١٢

13．また彼は、夜と昼とをお前たちのために役立たせしめ、太陽も月も群星もまた彼の命令によってお前たちに役立たせしめたり。げにこの中に含むものこそ理解ある者へのさまざまな神兆なり。

وَسَخَّرَ لَكُمُ اللَّيْلَ وَالنَّهَارَ وَالشَّمْسَ وَالْقَمَرَ ۖ وَالنُّجُومُ مُسَخَّرَاتٌ بِأَمْرِهِ ۗ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَاتٍ لِّقَوْمٍ يَعْقِلُونَ ١٣

14．また彼が地上に創りしさまざまな色合いも、お前たちのために役立たせしむ。（注７）

وَمَا ذَرَأَ لَكُمْ فِي الْأَرْضِ مُخْتَلِفًا أَلْوَانُهُ ۗ إِنَّ

注４　神は人間に必要な物資を与えられる時、いつでも精神的に必要なものにも心を配っておられる。

注５　この文は、神は人間にまだ知られていない新しい交通機関をもたらされるという意味である。この預言は鉄道、蒸気船、自動車、飛行機という形で実現された。神だけがこれから先に発明される交通手段を知っておられる。

注６　植物を成長させるエネルギーは土の中に隠れているのかも知れないが、土が天から水をもらわなければそのエネルギーは働くことができない。人間も同様にすばらしい素質を受け継いでいても神の啓示の助けなしには向上できない。人間の精神的向上の基礎を知性だけに置くことは、土が水の助けなしに植物を成長させることができると言うのに等しい。

注７　神の創造で最もすばらしい事の１つは、２つの物あるいは人で全く同じものがないという事である。この多様性がなかったならば世界中で数え切れない程の混乱が起きたであろう。１つのものを別のものと区別

げにこの中に含むものは、注意ぶかい人への神兆なり。（注８）

فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً لِّقَوْمٍ يَذَّكَّرُونَ ﴿١٤﴾

15．而して、海をお前たちに服従せしめ、お前たちが海から新鮮な魚を獲て食し、また身に付ける装飾を得さしめ給うたは彼なり。汝は見たり、波を蹴立てて進み行く舟の姿を。こはお前たちに、旅行を可ならしめ、且つ主の恩恵を求め、以て感謝を捧げしめんがためなり。（注９）

وَهُوَ الَّذِي سَخَّرَ الْبَحْرَ لِتَأْكُلُوا مِنْهُ لَحْمًا طَرِيًّا وَّتَسْتَخْرِجُوا مِنْهُ حِلْيَةً تَلْبَسُونَهَا ۚ وَتَرَى الْفُلْكَ مَوَاخِرَ فِيهِ وَلِتَبْتَغُوا مِن فَضْلِهِ وَلَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ﴿١٥﴾

16．また大地がお前たちとともに揺れ動かざるよう、彼は地上に堅固なる山嶽を据えたり。（注 10）而してお前たちが正しく進めるよう、河川や道路を設けたり。（注 11）

وَأَلْقَىٰ فِي الْأَرْضِ رَوَاسِيَ أَن تَمِيدَ بِكُمْ وَأَنْهَارًا وَّسُبُلًا لَّعَلَّكُمْ تَهْتَدُونَ ﴿١٦﴾

17．そのほかにも、道標を設置せり。それらによって、また星辰によって、人々は正しい方角を知る。（注 12）

وَعَلَامَاتٍ ۚ وَبِالنَّجْمِ هُمْ يَهْتَدُونَ ﴿١٧﴾

したり、１人の人を別の人と見分けるのが難しかったことだろう。同様に、人間は気質や体質が多様なので、色んな性質の人に同じようにぴったりする教えを工夫することは人間の能力を超えている。自然界に存在する相違点を全部知っている人はだれもいない。神だけがこのさまざまな違いを把握されていて、それ故に、神だけがすべての人を満足させ、すべての人に有益な教えを与えることができる。

注８　思慮深い者（12 節）、理解ある者（13 節）、注意ぶかい者（14 節）という三語はそれぞれの節の終わりに別々に記されていて、その語が使われている節の主題に特に適切であると考えられる。又この３つの節でまとまりとして扱われている主題にも応用できると考えられる。どの語をどの場所で使うかはその語の重要さの度合によって決められている。「思慮」という語が最初に使われているのは、それが人間が道徳的に改心する過程で最初に行うことであり、又すべての道徳的性質の中で最初に目覚めるものであるからである。「思慮」深くなれば、「理解力」が増し理性を使うようになる。第二段階で人は道徳的改革を遂げる。その次に来る第三段階では誘惑は完全に克服され道徳的葛藤は消え、「注意ぶかく」自戒し善行を行うことは自分の性質の一部となる。

注９　海は人間の益になるとても重要なものである。それは水の宝庫でありそこから太陽は我々に雨を与える。海は又、旅行や貿易の交通路であり、人間に食物資源を与えている。

注 10　地質学では山脈が地震の時に地面を守るのに大いに役立っている事実を立証した。

注 11　ここで使われている「道路」という語は人間の手によって人為的に作られた道ではなく大昔から公道として使われてきた自然にできた山道、川道、谷道のことである。

注 12　この節は、地球が、谷も山も川もないでこぼこのない平らな表面をしていたならば人がある場所から他の場所へ行く道を見つけることがほとんど不可能であったろうという事を物語っている。地球の表面にある物理的な特徴が道を探すのに役立っている。今日でもこういう目標が空路で非常に役立っている。星も陸や海を旅する人の役に立っている。

18．されば、萬物を創造せし者を、何一つ創造せざる者と同一視できようか？お前たちまだ気がつかぬか？

أَفَمَنْ يَخْلُقُ كَمَنْ لَّا يَخْلُقُ ۗ أَفَلَا تَذَكَّرُونَ ﴿١٨﴾

19．お前たち、たといアッラーの恩恵を数えあげんと欲するとも、数うべからず。然り、アッラーはまことにおやさしく、恩恵きわまりなきお方にましますぞ。

وَإِنْ تَعُدُّوا نِعْمَةَ اللَّهِ لَا تُحْصُوهَا ۗ إِنَّ اللَّهَ لَغَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿١٩﴾

20．しかもアッラーは、お前たちが何を隠し、何を表わすかを知り悉し給う。

وَاللَّهُ يَعْلَمُ مَا تُسِرُّونَ وَمَا تُعْلِنُونَ ﴿٢٠﴾

21．然るに、彼等がアッラーの他に拝する神々は、何一つ創造せず、却って自ら創られたり。

وَالَّذِينَ يَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ لَا يَخْلُقُونَ شَيْئًا وَّهُمْ يُخْلَقُونَ ﴿٢١﴾

22．彼等は死物にして、生命なし。されば、いつ甦らされるのか、その時を知らず。

أَمْوَاتٌ غَيْرُ أَحْيَاءٍ ۖ وَمَا يَشْعُرُونَ أَيَّانَ يُبْعَثُونَ ﴿٢٢﴾

第三項

23．お前たちの神は独一なる神なり。されど、来世を信ぜざる徒輩は、その心が真理に染まず、全く傲慢な者どもなり。

إِلَٰهُكُمْ إِلَٰهٌ وَّاحِدٌ ۚ فَالَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ قُلُوبُهُمْ مُّنْكِرَةٌ وَّهُمْ مُّسْتَكْبِرُونَ ﴿٢٣﴾

24．疑う余地なく、アッラーは彼等が何を隠し、何を表わすかを知り給う。げに彼は、高慢なる者を愛で給わず。

لَا جَرَمَ أَنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ مَا يُسِرُّونَ وَمَا يُعْلِنُونَ ۚ إِنَّهُ لَا يُحِبُّ الْمُسْتَكْبِرِينَ ﴿٢٤﴾

25．彼等に向って「主が汝等に降し給えるものは何ぞや？」と問わば、彼等は云う、「古人の寓話なり」と。

وَإِذَا قِيلَ لَهُمْ مَّاذَا أَنْزَلَ رَبُّكُمْ ۙ قَالُوا أَسَاطِيرُ الْأَوَّلِينَ ﴿٢٥﴾

26．復活の日至らば、己が荷をすべて背負い、剰え彼等がその無知ゆえに迷わしめたる者の重荷の一部まで負わさるべし。ああ、彼等が担うものこそ悲惨しきかな！

لِيَحْمِلُوا أَوْزَارَهُمْ كَامِلَةً يَّوْمَ الْقِيَامَةِ ۙ وَمِنْ أَوْزَارِ الَّذِينَ يُضِلُّونَهُمْ بِغَيْرِ عِلْمٍ ۗ أَلَا سَاءَ مَا يَزِرُونَ ﴿٢٦﴾

第四項

27．彼等以前にも悪巧みを策てたる徒輩あり。然れども、アッラー彼等の建物を土台から覆し、その屋根彼等の頭上に落下し、思いもよらぬところから懲罰を蒙りぬ。（注13）

قَدْ مَكَرَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ فَأَتَى اللَّهُ بُنْيَانَهُمْ مِّنَ الْقَوَاعِدِ فَخَرَّ عَلَيْهِمُ السَّقْفُ مِنْ فَوْقِهِمْ وَأَتَاهُمُ الْعَذَابُ مِنْ حَيْثُ لَا يَشْعُرُونَ ﴿٢٧﴾

注13　過去の預言者達に反対する者達にふりかかったのは通常の破壊ではなかった。彼らは根こそぎ破壊され、彼らが建てた建物の土台やその上の壁や屋根は彼らの上に倒れかかった。すなわち対立した者達の指導者も追従者も容赦されなかったのである。

28. さらにまた、復活の日至らば、彼は彼等を辱しめて云わん、「お前たちが預言者に反抗して、われに併せ祀りし神々は果して何処にありや？」と。知識を賦与された人々は云わん、「げに今日こそ、恥辱と災難が不信心者輩の上に下るべし」と。

ثُمَّ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ يُخْزِيْهِمْ وَيَقُوْلُ اَيْنَ شُرَكَآءِيَ الَّذِيْنَ كُنْتُمْ تُشَآقُّوْنَ فِيْهِمْ قَالَ الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْعِلْمَ اِنَّ الْخِزْيَ الْيَوْمَ وَالسُّوْٓءَ عَلَى الْكٰفِرِيْنَ ﴿٢٨﴾

29. 己れの魂を自らそこなっている間に天使らに召されたる者は、そこで初めて服従を申し出、「我等は如何なる悪事も行わず」と云わん。(注 14) 否な、アッラーはお前たちの所業を知悉し給う。

الَّذِيْنَ تَتَوَفّٰىهُمُ الْمَلٰٓئِكَةُ ظَالِمِيْٓ اَنْفُسِهِمْ فَاَلْقَوُا السَّلَمَ مَا كُنَّا نَعْمَلُ مِنْ سُوْٓءٍ بَلٰٓى اِنَّ اللّٰهَ عَلِيْمٌ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ﴿٢٩﴾

30. されば地獄の門を入り、その中に住め。高慢なる者の住居は禍なるかな。

فَادْخُلُوْٓا اَبْوَابَ جَهَنَّمَ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا فَلَبِئْسَ مَثْوَى الْمُتَكَبِّرِيْنَ ﴿٣٠﴾

31. 然れども、主を畏れ奉りし者は斯問われん、「主が啓示されたるものを汝等いかに思うや？」と。彼等は云う、「最上なり」と。善事をなす者はこの現世で報奨あり。しかも来世の住居は更に良し。げに主を畏れ奉る者の住居は素晴らしきかな—

وَقِيْلَ لِلَّذِيْنَ اتَّقَوْا مَاذَآ اَنْزَلَ رَبُّكُمْ قَالُوْا خَيْرًا لِلَّذِيْنَ اَحْسَنُوْا فِيْ هٰذِهِ الدُّنْيَا حَسَنَةٌ وَلَدَارُ الْاٰخِرَةِ خَيْرٌ وَلَنِعْمَ دَارُ الْمُتَّقِيْنَ ﴿٣١﴾

32. そは河川流るる永遠の楽園なり。彼等が欲するものはすべてそこにあり。(注 15) かくの如く、アッラーは己れを畏れ奉る者に報い給う。

جَنّٰتُ عَدْنٍ يَدْخُلُوْنَهَا تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ لَهُمْ فِيْهَا مَا يَشَآءُوْنَ كَذٰلِكَ يَجْزِي اللّٰهُ الْمُتَّقِيْنَ ﴿٣٢﴾

33. 彼等は汚れなきままに天使らが命を召し上げた者。天使らは、「あなたがたに平安あれかし！あなたがたがなしたることの賞なれば、いざ楽園に入れかし」と云う。

الَّذِيْنَ تَتَوَفّٰىهُمُ الْمَلٰٓئِكَةُ طَيِّبِيْنَ يَقُوْلُوْنَ سَلٰمٌ عَلَيْكُمُ ادْخُلُوا الْجَنَّةَ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ﴿٣٣﴾

34. これに反して、不信心者どもは天使らが彼等に臨まんとするを待つか、或いは汝の主

هَلْ يَنْظُرُوْنَ اِلَّآ اَنْ تَاْتِيَهُمُ الْمَلٰٓئِكَةُ اَوْ يَاْتِيَ

注 14　不信者は、自分達のした事は良い意図と純粋な動機に基いており、神の美徳に想念を集中させる為、にせの神々を礼拝したにすぎないと抗議する。

注 15　正しく、敬けんな意志の望む事は神の意志と一致する。それ故、神の意図するものだけが与えられるように敬けんなる者は願うのである。

の命が下るを待つ以外に、何をか期待せん？（注16）斯く振舞いたる者は、彼等以前にも存したり。アッラーは彼等を害したに非ず、害えるは彼等自らなり。

أَمْرُ رَبِّكَ ۚ كَذَٰلِكَ فَعَلَ الَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ ۚ وَمَا ظَلَمَهُمُ اللَّهُ وَلَٰكِن كَانُوا أَنفُسَهُمْ يَظْلِمُونَ ﴿٣٤﴾

35. かくして、なせる悪事は自らに跳ね返り、（注17）かつて嘲笑せしものに彼等は包囲されたり。

فَأَصَابَهُمْ سَيِّئَاتُ مَا عَمِلُوا وَحَاقَ بِهِم مَّا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِئُونَ ﴿٣٥﴾

第五項

36. 多神教徒どもは云う、「アッラーもし欲したりせば、我等も、我等の父祖も、彼以外に何物をも崇拝せざりしものを。また我等は主の命令なくして、何物も禁ぜざりき」と。斯く云うは、彼等以前の者も又然り。しかれども、使徒の責務は神託を明瞭に宣達する以外、他事なきに非ずや？

وَقَالَ الَّذِينَ أَشْرَكُوا لَوْ شَاءَ اللَّهُ مَا عَبَدْنَا مِن دُونِهِ مِن شَيْءٍ نَّحْنُ وَلَا آبَاؤُنَا وَلَا حَرَّمْنَا مِن دُونِهِ مِن شَيْءٍ ۚ كَذَٰلِكَ فَعَلَ الَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ ۚ فَهَلْ عَلَى الرُّسُلِ إِلَّا الْبَلَاغُ الْمُبِينُ ﴿٣٦﴾

37. われらはそれぞれの民の中から一人の使徒を選び、説かしめたり、「アッラーを崇拝し、邪神を避けよ」と。彼等の或る者をアッラーは導き給い、又他の者を迷うがままに任したり。されば各地を経巡りて、預言者たちを偽る者と遇した徒輩の末路や如何ん、と見るがよい！

وَلَقَدْ بَعَثْنَا فِي كُلِّ أُمَّةٍ رَّسُولًا أَنِ اعْبُدُوا اللَّهَ وَاجْتَنِبُوا الطَّاغُوتَ ۖ فَمِنْهُم مَّنْ هَدَى اللَّهُ وَمِنْهُم مَّنْ حَقَّتْ عَلَيْهِ الضَّلَالَةُ ۚ فَسِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَانظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُكَذِّبِينَ ﴿٣٧﴾

38. たとい汝が彼等を導かんと切望しても、知るがよい、アッラーは迷わしめんとした者は断じて導かず。あの者どもは如何なる救け手もなし。

إِن تَحْرِصْ عَلَىٰ هُدَاهُمْ فَإِنَّ اللَّهَ لَا يَهْدِي مَن يُضِلُّ ۖ وَمَا لَهُم مِّن نَّاصِرِينَ ﴿٣٨﴾

39. 彼等はアッラーの御名にかけて、「アッラーは一たび死したる者を甦らせ給わず」と堅く誓う。否、アッラーは必ず死者を甦らせん―こは彼自らを縛りたる約束なり。されど世人の大半は之を知らず。

وَأَقْسَمُوا بِاللَّهِ جَهْدَ أَيْمَانِهِمْ ۙ لَا يَبْعَثُ اللَّهُ مَن يَمُوتُ ۚ بَلَىٰ وَعْدًا عَلَيْهِ حَقًّا وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٣٩﴾

注16　‘天使を待つ’は個人の不信仰者の破壊を意味し、「主の命が下るを待つ」は国家の滅亡を意味している。

注17　悪行が罰せられるという事は、外から発生するのではなく、その行為そのものの自然の結果であり、その行為の度合いに応じたものである。

40．彼等の論争の問題を彼等に明示し、且つ信ぜざる者に自分たちが嘘つきなるを思い知らしめんがために、彼は死者を甦らせん。(注 18)

لِيُبَيِّنَ لَهُمُ الَّذِي يَخْتَلِفُونَ فِيهِ وَلِيَعْلَمَ الَّذِينَ كَفَرُوا أَنَّهُمْ كَانُوا كَاذِبِينَ ﴿٣٩﴾

41．われら何事かを欲するときは、ただ「在れ」と云うのみ。而して、忽ち存す。(注 19)

إِنَّمَا قَوْلُنَا لِشَيْءٍ إِذَا أَرَدْنَاهُ أَنْ نَقُولَ لَهُ كُنْ فَيَكُونُ ﴿٤٠﴾

第六項

42．アッラーの道のため故に迫害を蒙り家郷を逐われたる者は、彼等は知るべくもないが、われらは彼等に現世で必ず佳い住居を与え、来世においても更に大なる報奨を与えん—

وَالَّذِينَ هَاجَرُوا فِي اللَّهِ مِنْ بَعْدِ مَا ظُلِمُوا لَنُبَوِّئَنَّهُمْ فِي الدُّنْيَا حَسَنَةً ۖ وَلَأَجْرُ الْآخِرَةِ أَكْبَرُ ۚ لَوْ كَانُوا يَعْلَمُونَ ﴿٤١﴾

43．すなわち彼等は堅忍不抜にして、その主を信ずる者なり。

الَّذِينَ صَبَرُوا وَعَلَىٰ رَبِّهِمْ يَتَوَكَّلُونَ ﴿٤٢﴾

44．われらは、啓示を授けたる人々を除いて、何者をも汝以前に遣わしたりはせじ。汝之を知らずば、警告の聖典を持てる民に之を問え。

وَمَا أَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ إِلَّا رِجَالًا نُوحِي إِلَيْهِمْ ۚ فَاسْأَلُوا أَهْلَ الذِّكْرِ إِنْ كُنْتُمْ لَا تَعْلَمُونَ ﴿٤٣﴾

45．われらは明証と経典を授けて使徒らを遣わしたり。われらが汝に警告の聖典を授けたるは、今迄に降されたものを人々に解明せんがため、さすれば彼等も熟慮せん。

بِالْبَيِّنَاتِ وَالزُّبُرِ ۗ وَأَنْزَلْنَا إِلَيْكَ الذِّكْرَ لِتُبَيِّنَ لِلنَّاسِ مَا نُزِّلَ إِلَيْهِمْ وَلَعَلَّهُمْ يَتَفَكَّرُونَ ﴿٤٤﴾

46．悪事をたくらむあの者ども、アッラーの怒りに触れて大地に呑みこまれたり、又は思いがけないことで天罰を蒙ることなどなしと確信するや？

أَفَأَمِنَ الَّذِينَ مَكَرُوا السَّيِّئَاتِ أَنْ يَخْسِفَ اللَّهُ بِهِمُ الْأَرْضَ أَوْ يَأْتِيَهُمُ الْعَذَابُ مِنْ حَيْثُ لَا يَشْعُرُونَ ﴿٤٥﴾

47．或いは、あちこち動きまわっている際に、神のお考えを避くべき途なきときに、彼等をアッラーは捉え給わじと信ずるや？(注 20)

أَوْ يَأْخُذَهُمْ فِي تَقَلُّبِهِمْ فَمَا هُمْ بِمُعْجِزِينَ ﴿٤٦﴾

注 18　復活の日に悟る真理が、あまりにも完璧な為、不信者は復活を否定した事は愚かであったと認める事となる。まことに復活の日の真実の実現は完全無欠なのである。

注 19　「在れ」という語は、神が既に存在しているものに対し、命令を下すという意味ではない。それは単に望みについての表現にすぎず、神が望みを表明すれば直ちにそれは成就される事を意味する。

注 20　不信の徒が、度々の旅行や、その活動が自由で制限されていない事から、彼らの力は無敵で栄光が常に彼らと共にあるのだと、信仰を持つ者が考えてはならない。間もなくこういう活動はその政治力の破滅を招くだろう。

48．はたまた、少しずつ消耗させて破滅に導く罰なしと信ずるや？ともかく、お前たちの主は実におやさしく、慈悲深きお方にまします。（注 21）

أَوْ يَأْخُذَهُمْ عَلَىٰ تَخَوُّفٍ فَإِنَّ رَبَّكُمْ لَرَءُوفٌ رَّحِيمٌ ﴿٤٨﴾

49．彼等は、アッラーが創り給いしすべてのものが、かしこまってアッラーに平伏しながら、右から左にその影を移動するを観ざりしか？

أَوَلَمْ يَرَوْا إِلَىٰ مَا خَلَقَ اللَّهُ مِن شَيْءٍ يَتَفَيَّأُ ظِلَالُهُ عَنِ الْيَمِينِ وَالشَّمَائِلِ سُجَّدًا لِّلَّهِ وَهُمْ دَاخِرُونَ ﴿٤٩﴾

50．天に在るもの、地に在るもの、皆悉くアッラーに額づく。諸天使もまた然り。彼等は高慢に非ず。

وَلِلَّهِ يَسْجُدُ مَا فِي السَّمَاوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ مِن دَابَّةٍ وَالْمَلَائِكَةُ وَهُمْ لَا يَسْتَكْبِرُونَ ﴿٥٠﴾

51．すなわち、彼等は己れらの上に在す主を畏れ、その命ぜられたることを行う。

يَخَافُونَ رَبَّهُم مِّن فَوْقِهِمْ وَيَفْعَلُونَ مَا يُؤْمَرُونَ ﴿٥١﴾

第七項

52．アッラーは云えり、「二神を拝むなかれ。神は唯だ御一柱。されば、われらのみ畏れ敬え」と。（注 22）

وَقَالَ اللَّهُ لَا تَتَّخِذُوا إِلَٰهَيْنِ اثْنَيْنِ ۖ إِنَّمَا هُوَ إِلَٰهٌ وَاحِدٌ ۖ فَإِيَّايَ فَارْهَبُونِ ﴿٥٢﴾

53．天に在るもの、地に在るもの、すべてはアッラーの所属にして、彼にこそ永久に服従す。然るに、お前たちアッラー以外に何者を畏るるか？

وَلَهُ مَا فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَلَهُ الدِّينُ وَاصِبًا ۚ أَفَغَيْرَ اللَّهِ تَتَّقُونَ ﴿٥٣﴾

54．すべての恩恵はアッラーより授かり給う。なれど、お前たち災難に遭えば、彼に救けを求めて嘆願す。

وَمَا بِكُم مِّن نِّعْمَةٍ فَمِنَ اللَّهِ ۖ ثُمَّ إِذَا مَسَّكُمُ الضُّرُّ فَإِلَيْهِ تَجْأَرُونَ ﴿٥٤﴾

55．斯て、彼はお前たちからその災難を取り除けると、なんと、お前たちの或る者は主に併せ祀る者を配して、

ثُمَّ إِذَا كَشَفَ الضُّرَّ عَنكُمْ إِذَا فَرِيقٌ مِّنكُم بِرَبِّهِمْ يُشْرِكُونَ ﴿٥٥﴾

注 21　この節は、不信の徒の力はしだいに弱くなるということで、信仰を持たぬ者は徹底的に打倒される前に、イスラムの力が増大し続けて最終的には勝利を収めるという恐怖にとりつかれる事となるという意味である。

注 22　宇宙のしくみを研究すれば、宇宙に存在するその素晴らしい一貫性が明らかになる。もし神が一人でなかったならば、この秩序は消えてしまったであろうし、その上、もし二人の神がいたら命令を実行するために一人の神はもう一人の神に従わなければならなかったであろう。この場合、二人のうち一人の神は不必要であったろう。もし二人共、同等であったならばそれぞれが影響を及ぼし統制する宇宙を持っていたこととなる。そんな事になれば、お互いの間できっと意見の相違がでたことであろう。しかしその様な仮定は不条理である。それ故に、全宇宙を創造したのは唯一の神でなければならないのである。

56. われらが彼等に垂れたる恩恵を否定す。されば、しばし楽しむがよい。やがてお前たち思い知らん。

لِيَكْفُرُوا بِمَا آتَيْنَاهُمْ ۚ فَتَمَتَّعُوا ۖ فَسَوْفَ تَعْلَمُونَ ٥٦

57. 彼等は、われらが授けしものの一部を偽りの神々のために用意す。アッラーに誓って云う、お前たちはその捏造したかどにより必ず糾明せらるるべし。

وَيَجْعَلُونَ لِمَا لَا يَعْلَمُونَ نَصِيبًا مِّمَّا رَزَقْنَاهُمْ ۗ تَاللَّهِ لَتُسْأَلُنَّ عَمَّا كُنتُمْ تَفْتَرُونَ ٥٧

58. そればかりか、彼等はアッラーに娘らありと云う—畏れ多きかな！—ところが、自らは所望するものを欲しがる。（注 23）

وَيَجْعَلُونَ لِلَّهِ الْبَنَاتِ سُبْحَانَهُ ۙ وَلَهُم مَّا يَشْتَهُونَ ٥٨

59. 現に、彼等のだれもが女児誕生の報せを聞けば、忽ち失意落胆の余りその顔はくもる。

وَإِذَا بُشِّرَ أَحَدُهُم بِالْأُنثَىٰ ظَلَّ وَجْهُهُ مُسْوَدًّا وَهُوَ كَظِيمٌ ٥٩

60. 彼はその悪い報せのために人目を避け「恥を忍んで之を育つべきか、それとも土中に埋めるべきか」と思い惑う。（注 24）げに、彼等の判断たるや邪悪なり。

يَتَوَارَىٰ مِنَ الْقَوْمِ مِن سُوءِ مَا بُشِّرَ بِهِ ۚ أَيُمْسِكُهُ عَلَىٰ هُونٍ أَمْ يَدُسُّهُ فِي التُّرَابِ ۗ أَلَا سَاءَ مَا يَحْكُمُونَ ٦٠

61. 来世を信ぜざる徒輩の地位は不幸なり、これに反して、すべての高尚な属性はアッラーに属す。そは雄大にして、賢哲にまします。

لِلَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ مَثَلُ السَّوْءِ ۖ وَلِلَّهِ الْمَثَلُ الْأَعْلَىٰ ۚ وَهُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ٦١

第八項

62. もし仮に、アッラーがその悪業故に人を罰さば、彼は地上に一個の生類もとり残すまじ。（注 25）然れども、彼は定められたる

وَلَوْ يُؤَاخِذُ اللَّهُ النَّاسَ بِظُلْمِهِم مَّا تَرَكَ عَلَيْهَا مِن دَابَّةٍ وَلَٰكِن يُؤَخِّرُهُمْ إِلَىٰ أَجَلٍ مُّسَمًّى ۖ فَإِذَا

注 23　この節では、信仰を持たぬ者のつまずきのもとは、（息子ではなく）娘の出生が神のせいだとすることにあると言っている訳ではない。しかしながらクルアーンでは息子の出生を神のせいにする事も、強く非難している（19 章 91、92 節）。当節では単に、不信者が娘の出生により面目がつぶれると信じこんでいるので、神のせいにしてしまう彼らの愚かさについて述べられている。

注 24　ここで言及されているのはあるアラブの種族で流行していた女児を生き埋めにする野蛮な習慣についてである。彼らは女性に対して非常に低い認識しか持っておらず、その社会で極端に低い地位しか与えていなかった。クルアーンは女性の名誉を強く支持し、すべての合法的な権利を認めてきた。この点でクルアーンは世界中の聖典の中で独特なものといえる。

注 25　神によってすべての罪が一度に罰せられたとしたら、世の終りが来て地上の生物がすべて死に絶えてしまう為、罰の下される時が遅らされているのである。人は罪の結果として滅ぼされ、人の滅亡後は動物や鳥などは生存する為の目的がなくなる。動物等は、人間の役に立ち、人間の利益になるために創られたのだから、人間と共に滅びるのである。

期限まで彼等を猶豫す。而して、その時至らば、彼等之を寸時も延し、又早めること能わず。

جَآءَ اَجَلُهُمْ لَا يَسْتَاْخِرُوْنَ سَاعَةً وَّ لَا يَسْتَقْدِمُوْنَ ﴿٦٢﴾

63. 然しながら、彼等は己れの好まざるものをアッラーに振り当て、しかも、最上なものは自分たちのためにあるべしと偽りを述べる。疑いもなく、業火は彼等のもの、その中に彼等は見捨てられん。

وَيَجْعَلُوْنَ لِلّٰهِ مَا يَكْرَهُوْنَ وَتَصِفُ اَلْسِنَتُهُمُ الْكَذِبَ اَنَّ لَهُمُ الْحُسْنٰى ۗ لَا جَرَمَ اَنَّ لَهُمُ النَّارَ وَاَنَّهُمْ مُّفْرَطُوْنَ ﴿٦٣﴾

64. 神かけて云うが、われらは汝以前にも諸々の民に使徒らを遣わせり。然るに、悪魔はそれらの民をして己れの所業を正しいと思わしめたり。されば、今日彼等の庇護者は悪魔なれど、何れ彼等も痛罰を蒙らん。

تَاللّٰهِ لَقَدْ اَرْسَلْنَآ اِلٰٓى اُمَمٍ مِّنْ قَبْلِكَ فَزَيَّنَ لَهُمُ الشَّيْطٰنُ اَعْمَالَهُمْ فَهُوَ وَلِيُّهُمُ الْيَوْمَ وَلَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿٦٤﴾

65. われらが汝に経典を降せるは、汝に、彼等が論争する問題について彼等に、解明せしめんがため、また信ずる者への嚮導並びに慈悲たらしめんが故なり。

وَمَآ اَنْزَلْنَا عَلَيْكَ الْكِتٰبَ اِلَّا لِتُبَيِّنَ لَهُمُ الَّذِى اخْتَلَفُوْا فِيْهِ ۙ وَهُدًى وَّ رَحْمَةً لِّقَوْمٍ يُّؤْمِنُوْنَ ﴿٦٥﴾

66. アッラーは天より水を降し、之によって死せる大地を甦らしむ。げにこの中には耳傾ける者への神兆あり。

وَاللّٰهُ اَنْزَلَ مِنَ السَّمَآءِ مَآءً فَاَحْيَا بِهِ الْاَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا ۗ اِنَّ فِىْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً لِّقَوْمٍ يَّسْمَعُوْنَ ﴿٦٦﴾

第九項

67. また、家畜の場合にも、お前たちへの教えあり。われらは、彼等の腹中にあるもの、すなわち排泄物と血液の中間にある清らかなもの、飲む者をして快さを得さしむる乳をお前たちに与う。

وَاِنَّ لَكُمْ فِى الْاَنْعَامِ لَعِبْرَةً ۚ نُسْقِيْكُمْ مِّمَّا فِىْ بُطُوْنِهٖ مِنْۢ بَيْنِ فَرْثٍ وَّدَمٍ لَّبَنًا خَالِصًا سَآئِغًا لِّلشّٰرِبِيْنَ ﴿٦٧﴾

68. また、棗椰子と葡萄の果実、お前たちは之にて酒や体によい食べ物を得る。(注26) この中に含まれるものは、道理をわきまえた者への確かな神兆なり。

وَمِنْ ثَمَرٰتِ النَّخِيْلِ وَالْاَعْنَابِ تَتَّخِذُوْنَ مِنْهُ سَكَرًا وَّ رِزْقًا حَسَنًا ۗ اِنَّ فِىْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً لِّقَوْمٍ يَّعْقِلُوْنَ ﴿٦٨﴾

69. また、汝の主は蜜蜂に黙示して (注27)「丘や樹間や、又は人が作りし棚に、お前たちの巣を営め。

وَاَوْحٰى رَبُّكَ اِلَى النَّحْلِ اَنِ اتَّخِذِىْ مِنَ الْجِبَالِ بُيُوْتًا وَّمِنَ الشَّجَرِ وَمِمَّا يَعْرِشُوْنَ ﴿٦٩﴾

注26　神によって創造されたものが自然で純粋な形のままであれば、純で健全で活力のもととなる食物になる。しかし人がそれらを自然のまま用いないのであれば、損われてしまう。同じ様に神の教えも完全なままである限り、精神的に非常に有益なものとなるが、その完全さが損われれば全く役に立たなくなる。

注27　ここでの啓示は、神がすべての創造物に生まれつきの本能を与えられたという事を意味している。この節には、全宇宙は、明らかであったり隠されていたりする啓示（直観）によって円滑に首尾よく動いている

70. 而して、あらゆる果実を食し、主によって教えられた分り易い道をとって帰巣せよ」と仰せられ給う。かくて蜜蜂の体内から多様なる色彩の薬効ある飲物出づ。この中に含まれるものは、思維する者たちへの確かな神兆なり。

ثُمَّ كُلِي مِن كُلِّ الثَّمَرَاتِ فَاسْلُكِي سُبُلَ رَبِّكِ ذُلُلًا ۚ يَخْرُجُ مِن بُطُونِهَا شَرَابٌ مُّخْتَلِفٌ أَلْوَانُهُ فِيهِ شِفَاءٌ لِّلنَّاسِ ۗ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً لِّقَوْمٍ يَتَفَكَّرُونَ ﴿٧٠﴾

71. アッラーはお前たちを創り、いつかまた死なしむ。而して、お前たちの或る者を、知りたることをことごとく忘れ果てるまで長生きせしむ。げにアッラーは、全知全能にまします。

وَاللَّهُ خَلَقَكُمْ ثُمَّ يَتَوَفَّاكُمْ ۚ وَمِنكُم مَّن يُرَدُّ إِلَىٰ أَرْذَلِ الْعُمُرِ لِكَيْ لَا يَعْلَمَ بَعْدَ عِلْمٍ شَيْئًا ۚ إِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ قَدِيرٌ ﴿٧١﴾

第十項

72. また、アッラーは、お前たちの或る者を富裕ならしめたり。然るに、これらの恩恵を施されたる者、己れの右手が所有す者にその財産を頒ちて、之を等しく配分することをせず。然らば、彼等はアッラーの恩恵を非認せんとするか？

وَاللَّهُ فَضَّلَ بَعْضَكُمْ عَلَىٰ بَعْضٍ فِي الرِّزْقِ ۚ فَمَا الَّذِينَ فُضِّلُوا بِرَادِّي رِزْقِهِمْ عَلَىٰ مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُهُمْ فَهُمْ فِيهِ سَوَاءٌ ۚ أَفَبِنِعْمَةِ اللَّهِ يَجْحَدُونَ ﴿٧٢﴾

73. また、アッラーは、お前たちの中からお前たちに配偶者を与え、その配偶者からお前たちに子供や孫を授け、且ついろいろと結構なものを供給し給う。（注 28）然るに、彼等はくだらぬものを信じて、アッラーの恩恵を認めざるか？

وَاللَّهُ جَعَلَ لَكُم مِّنْ أَنفُسِكُمْ أَزْوَاجًا وَجَعَلَ لَكُم مِّنْ أَزْوَاجِكُم بَنِينَ وَحَفَدَةً وَرَزَقَكُم مِّنَ الطَّيِّبَاتِ ۚ أَفَبِالْبَاطِلِ يُؤْمِنُونَ وَبِنِعْمَتِ اللَّهِ هُمْ يَكْفُرُونَ ﴿٧٣﴾

74. アッラーをさし措いて彼等が崇める如きものは、天地から如何なる賜物も彼等に与えず、のみならずかかる能力を所有せず。

وَيَعْبُدُونَ مِن دُونِ اللَّهِ مَا لَا يَمْلِكُ لَهُمْ رِزْقًا مِّنَ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ شَيْئًا وَلَا يَسْتَطِيعُونَ ﴿٧٤﴾

75. されば、アッラーに類似せるものを造り出すなかれ。げにアッラーは知り給うが、お前たちは知らず。（注 29）

فَلَا تَضْرِبُوا لِلَّهِ الْأَمْثَالَ ۚ إِنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ وَأَنتُمْ لَا تَعْلَمُونَ ﴿٧٥﴾

というほのめかしが隠されている。言い換えれば、すべての創造物は天賦の本能と生まれつきの素質に従って行動する時にだけそのものが存在する目的にかなっているという事である。蜜蜂が優れた例として選ばれた。なぜならば蜜蜂のすばらしい組織と仕事ぶりは裸眼によっても見ることができるので素人の観察者をも感動させる事ができるからである。

注 28　この節は神の唯一性を、支持する論点として、私有の本能について述べている。

注 29　人間は神の偉大で限りない力について何も知らないのに、神に関する法則を考察するなどというのは、厚かましい限りである。

76. アッラーは、主の持ちものにして自らは如何なる力ももたぬ奴隷と、(注 30) われらが許から佳き供給物を賜わりたる者が、ひそかに、又公然とそれらを施しに使う自由人とを比喩し給う。(注 31) この両者果して同等なるか？アッラーに讃美あれ！されど、彼等の大半は之を知らず。

ضَرَبَ اللّٰهُ مَثَلًا عَبْدًا مَّمْلُوْكًا لَّا يَقْدِرُ عَلٰى شَيْءٍ وَّمَنْ رَّزَقْنٰهُ مِنَّا رِزْقًا حَسَنًا فَهُوَ يُنْفِقُ مِنْهُ سِرًّا وَّجَهْرًا هَلْ يَسْتَوٗنَ اَلْحَمْدُ لِلّٰهِ بَلْ اَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُوْنَ ۝٧٦

77. また、アッラーは、二人の男の比喩を説く。一人は唖にして、何事もなす能わず、何処に遣っても役に立たず、主人の重荷となるばかり。かかる者が、正義を勧め、直き道を踏む者と同等となり得べきや？

وَضَرَبَ اللّٰهُ مَثَلًا رَّجُلَيْنِ اَحَدُهُمَآ اَبْكَمُ لَا يَقْدِرُ عَلٰى شَيْءٍ وَّهُوَ كَلٌّ عَلٰى مَوْلٰىهُ اَيْنَمَا يُوَجِّهْهُّ لَا يَاْتِ بِخَيْرٍ هَلْ يَسْتَوِيْ هُوَ وَمَنْ يَّاْمُرُ بِالْعَدْلِ وَهُوَ عَلٰى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ۝٧٧

第十一項

78. 天地の奥秘 (注 32) はアッラーの司り給うところ、而して、約束の時起るはまたたく間に似たり。否、それよりも速やかなり。然り、アッラーは萬事に亘って力を有す。

وَلِلّٰهِ غَيْبُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَمَآ اَمْرُ السَّاعَةِ اِلَّا كَلَمْحِ الْبَصَرِ اَوْ هُوَ اَقْرَبُ اِنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ۝٧٨

79. また、アッラーはお前たちに感謝せしめんがために、お前たちを母の胎内から何も解らざるうちに取り出だし、耳と目と心とを与え給えり。(注 33)

وَاللّٰهُ اَخْرَجَكُمْ مِّنْۢ بُطُوْنِ اُمَّهٰتِكُمْ لَا تَعْلَمُوْنَ شَيْـًٔا وَّجَعَلَ لَكُمُ السَّمْعَ وَالْاَبْصَارَ وَالْاَفْـِٕدَةَ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُوْنَ ۝٧٩

80. 彼等は天空でアッラーに服う飛鳥を観ざるか？アッラーに非ずして誰が飛鳥を制するぞ。(注 34) 確かに、この中に含まれているものは、信仰する人々へのさまざまな神兆なり。

اَلَمْ يَرَوْا اِلَى الطَّيْرِ مُسَخَّرٰتٍ فِيْ جَوِّ السَّمَآءِ مَا يُمْسِكُهُنَّ اِلَّا اللّٰهُ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يُّؤْمِنُوْنَ ۝٨٠

注 30　不信心な者はまるで意志と行動の自由を失って、自分の低い欲望と快楽の奴隷になった者のようである。

注 31　ここで参考とされているのは聖なる預言者―神の最高のしもべの事と思われる。(1)彼は（夜に人類のために祈ることにより）人に知られる事なく人類に仕え、又（目に見える奉仕活動によって）堂々と人類の為に尽くした。(2)彼は昼夜絶え間なく人類の為につくした。

注 32　「天地の奥秘」とは即ち、信じない者の最終的な敗北と当惑、それにイスラムの勝利を意味する。

注 33　聞いたり見たり理解したりする能力は、この順序で人が知識を得るのを助けてきた。生まれたばかりの子供はまず、聴力を使う。視力が次に発達し、そして成長の最終段階として理解が発達する。

注 34　この節では間もなくメッカの不信の徒にふりかかる罰についてだけ述べている。鳥を近づけないという意味は、信じない者のために用意してある罰を保留しているという事である。アラブの詩には鳥が勝軍の後

81. また、アッラーは、お前たちに安息の場所として家を与え、また家畜の皮革によって天幕を与え、旅路にあっても、宿営に際しても、その軽便さをお前たちに分らしめたり。また彼は、家畜からとれる羊毛や毛皮や獣毛で世帯道具や時期に応じた必需品をお前たちに与えたり。

والله جعل لكم من بيوتكم سكنا وجعل لكم من جلود الانعام بيوتا تستخفونها يوم ظعنكم ويوم اقامتكم ومن اصوافها واوبارها واشعارها اثاثا ومتاعا الى حين ﴿٨١﴾

82. また、アッラーは、創造せる樹木でお前たちに日陰を作り、山中に避難所を設け、暑熱を防ぐ衣服と戦場でその身を護る甲冑とを与えたり。かくの如く、彼はお前たちを服従帰依させんがために、その恵みを全うす。

والله جعل لكم مما خلق ظلالا وجعل لكم من الجبال اكنانا وجعل لكم سرابيل تقيكم الحر وسرابيل تقيكم باسكم كذلك يتم نعمته عليكم لعلكم تسلمون ﴿٨٢﴾

83. されど、もし彼等背を向けなば、汝はただ神託を伝えよ。

فان تولوا فانما عليك البلغ المبين ﴿٨٣﴾

84. 彼等はアッラーの恵みを認めつつも、之を否認す。世人の大半は凝り固まった不信心者輩なり。

يعرفون نعمت الله ثم ينكرونها واكثرهم الكفرون ﴿٨٤﴾

第十二項

85. われらがそれぞれの民より一人の証人を立てるその日を忘れまいぞ。(注35) その日不信心者どもは犯した行為の修正は許されず、また弁解も許されざるべし。

ويوم نبعث من كل امة شهيدا ثم لا يؤذن للذين كفروا ولا هم يستعتبون ﴿٨٥﴾

86. 非行を為せる者どもが懲罰を目のあたりに見ん時は、そは彼等のために軽減せられず、また猶予せられざるべし。

واذا را الذين ظلموا العذاب فلا يخفف عنهم ولا هم ينظرون ﴿٨٦﴾

87. アッラーに他神を併せ祀りし彼等が、その他神を見て、云わん、「われらの主よ、彼等

واذا را الذين اشركوا شركاءهم قالوا ربنا

について行って戦場で倒されたままになっている敵の死体をついばむことが述べられているものが沢山ある。アラブの諺によれば鳥が空中を舞うという事は、部族の敗北と破壊を象徴している(67：20参照)。この節では、神はイスラム教徒が信仰を持たぬ者に対して戦いを挑む事を差し控えさせたと言明している。しかし、いったん戦う許可が与えられるや否や、不信の徒は、打ち負かされ破滅させられ、信仰を持たぬ者達の死体は空を飛んでいる鳥に食われるところとなるのである。

注35　この節では神よりの使者が世界のすべての民族と国々に送られた事が述べられている。この主張はすべての経典の中でクルアーンにだけ述べられているものである。そしてクルアーンによって約1400年前に明らかにされたこの主張の真理が、今や人類の上を照らし始めたのである。

こそは、我等が日頃主の代りに崇めたる合祭神(がっさいしん)なり」と。すると、彼等は直ちに反駁せん、「お前たちこそ虚言者なり」と。(注36)

هٰؤُلَآءِ شُرَكَآؤُنَا الَّذِيْنَ كُنَّا نَدْعُوْا مِنْ دُوْنِكَ ۚ فَاَلْقَوْا اِلَيْهِمُ الْقَوْلَ اِنَّكُمْ لَكٰذِبُوْنَ ﴿۸۷﴾

88. その日彼等も初めてアッラーに恭順(きょうじゅん)を申し出でん。而(しか)して、彼等が捏造(ねつぞう)せし神々は彼等を見捨てん。

وَاَلْقَوْا اِلَى اللّٰهِ يَوْمَئِذِ ِالسَّلَمَ وَضَلَّ عَنْهُمْ مَّا كَانُوْا يَفْتَرُوْنَ ﴿۸۸﴾

89. 自ら不信心者にして、人をアッラーの道から背かしめる者には、その害毒故に、懲罰の上に更に懲罰を加えん。

اَلَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَصَدُّوْا عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ زِدْنٰهُمْ عَذَابًا فَوْقَ الْعَذَابِ بِمَا كَانُوْا يُفْسِدُوْنَ ﴿۸۹﴾

90. われらがそれぞれの民のうちに同族の一人の証人を召し出し、彼等に対する証言をさせる日を、忘れまいぞ。而(しか)して、われらは汝をこの徒輩(やから)に対する証人たるべしとす。さればこそ、われらは一切を解明する経典を汝に降(くだ)し、神に甘心順服(かんしんじゅんぷく)する者への嚮導(きょうどう)と慈悲と朗報たらしめたるなり。

وَيَوْمَ نَبْعَثُ فِيْ كُلِّ اُمَّةٍ شَهِيْدًا عَلَيْهِمْ مِّنْ اَنْفُسِهِمْ وَجِئْنَا بِكَ شَهِيْدًا عَلٰى هٰؤُلَآءِ ۚ وَنَزَّلْنَا عَلَيْكَ الْكِتٰبَ تِبْيَانًا لِّكُلِّ شَيْءٍ وَّهُدًى وَّرَحْمَةً وَّبُشْرٰى لِلْمُسْلِمِيْنَ ﴿۹۰﴾

第十三項

91. げにアッラーは、正義と善行並びに親族に対する贈与を命じ給い、醜行と邪悪並びに背逆を禁じ給う。かく誡め給うは、お前たちに留意せしめんがためなり。

اِنَّ اللّٰهَ يَاْمُرُ بِالْعَدْلِ وَالْاِحْسَانِ وَاِيْتَآئِ ذِي الْقُرْبٰى وَيَنْهٰى عَنِ الْفَحْشَآءِ وَالْمُنْكَرِ وَالْبَغْيِ ۚ يَعِظُكُمْ لَعَلَّكُمْ تَذَكَّرُوْنَ ﴿۹۱﴾

92. お前たちアッラーと約束したならば、その約束を全うせよ。誓約を確認し、(注37) アッラーを証人としたる後に之(これ)を破ることなかれ。アッラーはお前たちの行為を確実に知り給う。

وَاَوْفُوْا بِعَهْدِ اللّٰهِ اِذَا عٰهَدْتُّمْ وَلَا تَنْقُضُوا الْاَيْمَانَ بَعْدَ تَوْكِيْدِهَا وَقَدْ جَعَلْتُمُ اللّٰهَ عَلَيْكُمْ كَفِيْلًا ۚ اِنَّ اللّٰهَ يَعْلَمُ مَا تَفْعَلُوْنَ ﴿۹۲﴾

93. せっかく紡(つむ)いだ糸を解(ほぐ)す女の如くなるなかれ。　いかに一方の集団が他方より優勢になったからといって、誓約を策略の手段に使うなかれ。(注38) アッラーは之(これ)によっ

وَلَا تَكُوْنُوْا كَالَّتِيْ نَقَضَتْ غَزْلَهَا مِنْ بَعْدِ قُوَّةٍ اَنْكَاثًا ۚ تَتَّخِذُوْنَ اَيْمَانَكُمْ دَخَلًا بَيْنَكُمْ اَنْ تَكُوْنَ

注36　偽りの神とその信奉者との間の論争が、示唆している事は、罪と、真理の否定に基く友情は決して長続きしないという事である。

注37　信徒が神に負っている恩義はアッラーの約束という語で表わされ、仲間に負っている義務は誓約という語で表わされている。

注38　この節と次の節では、どんな事をしても守らなければならない誓いの死守について最大級の強調がなされている。

てお前たちを試みんとす。されば復活の日に於て、彼はお前たちが意見を異にする事柄を必ずお前たちに明確にせん。

أُمَّةٌ هِيَ أَرْبَىٰ مِنْ أُمَّةٍ ۚ إِنَّمَا يَبْلُوكُمُ اللَّهُ بِهِ ۚ وَلَيُبَيِّنَنَّ لَكُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ مَا كُنتُمْ فِيهِ تَخْتَلِفُونَ ﴿٩٣﴾

94. アッラーもし欲したりせば、彼は必ずお前たちを一団となし得た筈。されど、彼はその欲する者を迷わしめ、また、欲する者を導き給う。而して、お前たちはその為せることについて必ずや訊問されん。

وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ لَجَعَلَكُمْ أُمَّةً وَاحِدَةً وَلَٰكِن يُضِلُّ مَن يَشَاءُ وَيَهْدِي مَن يَشَاءُ ۚ وَلَتُسْأَلُنَّ عَمَّا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٩٤﴾

95. お前たち、誓約をお互いの間の策略の手段に使うことなかれ。(注 39) 然らずば、踏みしめた脚は滑り、人々をアッラーの道から背かしめたることのために、不運を嘗めさせられ、且つ重刑を受けん。

وَلَا تَتَّخِذُوا أَيْمَانَكُمْ دَخَلًا بَيْنَكُمْ فَتَزِلَّ قَدَمٌ بَعْدَ ثُبُوتِهَا وَتَذُوقُوا السُّوءَ بِمَا صَدَدتُّمْ عَن سَبِيلِ اللَّهِ ۖ وَلَكُمْ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿٩٥﴾

96. アッラーの契約をわづかな代価で売るなかれ。お前たち識見を有するなら、アッラーの許にあるものこそお前たちにとりて最も優れるを知らん。(注 40)

وَلَا تَشْتَرُوا بِعَهْدِ اللَّهِ ثَمَنًا قَلِيلًا ۚ إِنَّمَا عِندَ اللَّهِ هُوَ خَيْرٌ لَّكُمْ إِن كُنتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٩٦﴾

97. お前たちの有するものは消滅すれど、アッラーの許にあるものは永存す。而して、堅忍不抜な者には、われらは必ず彼等が為せる最善の行為に対して報奨を与えん。

مَا عِندَكُمْ يَنفَدُ ۖ وَمَا عِندَ اللَّهِ بَاقٍ ۗ وَلَنَجْزِيَنَّ الَّذِينَ صَبَرُوا أَجْرَهُم بِأَحْسَنِ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٩٧﴾

98. 男でも女でも、(注 41) 信者にして義しい行いをする者は、われら必ず清らかな人生を授く。またわれらは、彼等が為せる最善の行為に対して、必ずや報奨を授けん。

مَنْ عَمِلَ صَالِحًا مِّن ذَكَرٍ أَوْ أُنثَىٰ وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَلَنُحْيِيَنَّهُ حَيَاةً طَيِّبَةً ۖ وَلَنَجْزِيَنَّهُمْ أَجْرَهُم بِأَحْسَنِ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٩٨﴾

99. 汝クルアーンを読誦する時は、排斥された悪魔に対してアッラーの加護を求めよ。

فَإِذَا قَرَأْتَ الْقُرْآنَ فَاسْتَعِذْ بِاللَّهِ مِنَ الشَّيْطَانِ الرَّجِيمِ ﴿٩٩﴾

注 39　そのような行いは、自分の力を弱める事になる。

注 40　人々は力を持つようになると、大体に於いて、色々な誘惑にかられてしまう。故に彼らの敵は人々の中からスパイや情報提供者を雇い、その国家の秘密を知るために多額のワイロを贈る。イスラム教徒達は次のような言葉で、このような誘惑に負けないように警告されている。「アッラーの契約をわずかな代価で売るなかれ。」

注 41　この節では男女同権が認められ、神の恩恵は男女に等しく分け与えられる事が約束されている。

100．悪魔(サタン)は、信じてその主に頼る者に対して何んの支配力も持たず。

إِنَّهُ لَيْسَ لَهُ سُلْطَانٌ عَلَى الَّذِينَ آمَنُوا وَعَلَىٰ رَبِّهِمْ يَتَوَكَّلُونَ ﴿١٠٠﴾

101．彼の力はただ、彼を味方とする者並びにアッラーに他神等(あだしがみら)を併(あわ)せ祀る徒輩(やから)の上にのみ及ぶ。

إِنَّمَا سُلْطَانُهُ عَلَى الَّذِينَ يَتَوَلَّوْنَهُ وَالَّذِينَ هُمْ بِهِ مُشْرِكُونَ ﴿١٠١﴾

第十四項

102．われらが或る御告(おつげ)を他の御告(おつげ)に代える時—アッラーこそは最もその啓示するものを知り給うに—彼等は云う、「汝はただ捏造者(ねつぞう)にすぎず」と。然(しか)らず、彼等の大半は知識を有せざるなり。

وَإِذَا بَدَّلْنَا آيَةً مَكَانَ آيَةٍ ۙ وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا يُنَزِّلُ قَالُوا إِنَّمَا أَنْتَ مُفْتَرٍ ۚ بَلْ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿١٠٢﴾

103．云え、「主より聖霊が汝に、真理を携えて降(くだ)せるは、信者の信念を強固ならしめ、且つムスリムへの嚮導(きょうどう)並びに朗報たらしめんがためなり」と。

قُلْ نَزَّلَهُ رُوحُ الْقُدُسِ مِنْ رَبِّكَ بِالْحَقِّ لِيُثَبِّتَ الَّذِينَ آمَنُوا وَهُدًى وَبُشْرَىٰ لِلْمُسْلِمِينَ ﴿١٠٣﴾

104．われらは彼等が、「彼ムハマンドに教えるは、ただの人間にすぎず」と云うを知る。然(しか)れども、彼等がほのめかす者の言葉は外国語なり。これに反し、こは平易明瞭(へいいめいりょう)なるアラビア語なり。

وَلَقَدْ نَعْلَمُ أَنَّهُمْ يَقُولُونَ إِنَّمَا يُعَلِّمُهُ بَشَرٌ ۗ لِسَانُ الَّذِي يُلْحِدُونَ إِلَيْهِ أَعْجَمِيٌّ وَهَٰذَا لِسَانٌ عَرَبِيٌّ مُبِينٌ ﴿١٠٤﴾

105．アッラーの神兆(しるし)を信ぜざる徒輩(やから)は、アッラー之(これ)を導かず、而(しか)して彼等は痛ましい罰を受けん。

إِنَّ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِآيَاتِ اللَّهِ ۙ لَا يَهْدِيهِمُ اللَّهُ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿١٠٥﴾

106．アッラーの神兆(しるし)を信ぜざる徒輩(やから)は、虚偽(いつわり)を捏造(ねつぞう)してるにすぎず、彼等こそ嘘つきなり。

إِنَّمَا يَفْتَرِي الْكَذِبَ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِآيَاتِ اللَّهِ ۖ وَأُولَٰئِكَ هُمُ الْكَاذِبُونَ ﴿١٠٦﴾

107．誰であれ一旦アッラーを信じた後、再び翻った者—但し無理じいされてやむなく不信を表明した者で、(注42) その心が全く平安なる者は除くが—自らの胸を不信仰に向って開ける者は、アッラーの激怒その上に降(くだ)る。されば、彼等は苛酷な罰を受けん。

مَنْ كَفَرَ بِاللَّهِ مِنْ بَعْدِ إِيمَانِهِ إِلَّا مَنْ أُكْرِهَ وَقَلْبُهُ مُطْمَئِنٌّ بِالْإِيمَانِ وَلَٰكِنْ مَنْ شَرَحَ بِالْكُفْرِ صَدْرًا فَعَلَيْهِمْ غَضَبٌ مِنَ اللَّهِ وَلَهُمْ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿١٠٧﴾

注42　この節では、心の中ではイスラムの教えに満足しているけれども、厳しい取調べに会って不信仰を表明する言葉を述べてしまった人が神からどのように扱われるかについては述べられていない。この事は、こういう者についての最後の審判は保留されていて、今後の行動によって神がどのように扱われるかを決定するという事が述べられている。

108．　こは彼等が来世よりも現世を愛したがため、またアッラーが不信心者どもを導かざるが故なり。

ذٰلِكَ بِاَنَّهُمُ اسْتَحَبُّوا الْحَيٰوةَ الدُّنْيَا عَلَى الْاٰخِرَةِ ۙ وَاَنَّ اللّٰهَ لَا يَهْدِى الْقَوْمَ الْكٰفِرِيْنَ ﴿١٠٨﴾

109．　これ等はアッラーがその心と耳と目を封じたる徒輩なり。不注意な人間とは彼等のことなり。

اُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ طَبَعَ اللّٰهُ عَلٰى قُلُوْبِهِمْ وَسَمْعِهِمْ وَاَبْصَارِهِمْ ۚ وَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْغٰفِلُوْنَ ﴿١٠٩﴾

110．　彼等は来世に於て必ず失敗者たるべし。

لَا جَرَمَ اَنَّهُمْ فِى الْاٰخِرَةِ هُمُ الْخٰسِرُوْنَ ﴿١١٠﴾

111．　されど、汝の主は一迫害を受けて家郷を捨て、それでもなお苦闘善戦し、且つ耐え忍びし者には（注 43）―これからは寛大にして、慈悲深くまします。

ثُمَّ اِنَّ رَبَّكَ لِلَّذِيْنَ هَاجَرُوْا مِنْۢ بَعْدِ مَا فُتِنُوْا ثُمَّ جٰهَدُوْا وَصَبَرُوْٓا ۙ اِنَّ رَبَّكَ مِنْۢ بَعْدِهَا لَغَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿١١١﴾ ع

第十五項

112．　各自が自分自身を弁護す日至れば、誰れもが己れの所業に応じて報いられ、決して不当に遇せられることなかるべし。

يَوْمَ تَاْتِىْ كُلُّ نَفْسٍ تُجَادِلُ عَنْ نَّفْسِهَا وَتُوَفّٰى كُلُّ نَفْسٍ مَّا عَمِلَتْ وَهُمْ لَا يُظْلَمُوْنَ ﴿١١٢﴾

113．　アッラーは一比喩を説く。平隠無事な或る邑あり。四方から豊かに物質が至りたるが、アッラーの恵みを感謝せざるにより、彼は飢餓と恐怖の長衣を被せ、以て彼等が為せる悪事の報いを味わせり。（注 44）

وَضَرَبَ اللّٰهُ مَثَلًا قَرْيَةً كَانَتْ اٰمِنَةً مُّطْمَئِنَّةً يَّاْتِيْهَا رِزْقُهَا رَغَدًا مِّنْ كُلِّ مَكَانٍ فَكَفَرَتْ بِاَنْعُمِ اللّٰهِ فَاَذَاقَهَا اللّٰهُ لِبَاسَ الْجُوْعِ وَالْخَوْفِ بِمَا كَانُوْا يَصْنَعُوْنَ ﴿١١٣﴾

114．　同族から選ばれし使徒が彼等に遣わされたり。されど、彼等はその者を嘘つき呼ばわりしたれば、彼等が不義を行いつつあるとき天罰之に降りたり。

وَلَقَدْ جَآءَهُمْ رَسُوْلٌ مِّنْهُمْ فَكَذَّبُوْهُ فَاَخَذَهُمُ الْعَذَابُ وَهُمْ ظٰلِمُوْنَ ﴿١١٤﴾

注 43　　109 節、110 節では、信仰からはなれ、不信仰を支持し、イスラムの敵に加わる者について、語られているが、この節では審判が保留されている者について述べられている。この場合に下される審判は、次の通りである。もし彼らが家を離れ、神のために闘い、イスラムへの途上でふりかかるすべての苦しみを耐え忍ぶならば、神は、その時になってはじめて過去の罪を赦される事となろう。又、当節は、メッカに啓示されたもので、この節で述べられているジハード（聖戦）は、剣で戦うことではなく、イスラムの理想を実現するために努めるというだけの意味である。

注 44　　「邑」―メッカのこと、「飢餓」―恐ろしい飢きんが七年もの間メッカを襲った（44 章 11 節参照）。「恐怖の長衣」―メッカ市民がイスラム教徒に巻き込まれて敗れた戦争の恐怖の事を意味している。彼らは戦争の恐怖がすっかり彼らをおおっているかのように非常な緊張の中で、生活していた。アラブの諺では、「味わう」という語はしばしば「長衣」として使われ、次の様な良く知られたアラブの詩がある。あなたのために何を料理してあげましょうかと言われたから、長い上衣とシャツを料理して下さいと私が答えた。

115.　アッラーがお前たちに賜わりたる合法にして且つ清潔なるものを食し、アッラーを崇拝するなら、アッラーの恵みに感謝せよ。(注 45)

فَكُلُوا مِمَّا رَزَقَكُمُ اللّٰهُ حَلٰلًا طَيِّبًا وَاشْكُرُوا نِعْمَتَ اللّٰهِ اِنْ كُنْتُمْ اِيَّاهُ تَعْبُدُوْنَ ﴿١١٥﴾

116.　アッラーがお前たちに禁じ給うたものは、死肉と血液と豚の肉、並びにアッラー以外の名を唱えられたるものなり。然しながら、不服従するに非ず、掟にそむくに非ず、やむなく食わされた場合は、アッラーは寛大に赦し給う。

اِنَّمَا حَرَّمَ عَلَيْكُمُ الْمَيْتَةَ وَالدَّمَ وَلَحْمَ الْخِنْزِيْرِ وَمَآ اُهِلَّ لِغَيْرِ اللّٰهِ بِهٖ فَمَنِ اضْطُرَّ غَيْرَ بَاغٍ وَّلَا عَادٍ فَاِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿١١٦﴾

117.　お前たち、口から出まかせに虚偽を云うなかれ—「こは合法、そは禁ぜられている」などと。これ等の者はアッラーに対し奉り虚偽を企てる者なり。アッラーに対し奉り虚偽を企てる者は決して栄えず。

وَلَا تَقُوْلُوْا لِمَا تَصِفُ اَلْسِنَتُكُمُ الْكَذِبَ هٰذَا حَلٰلٌ وَّهٰذَا حَرَامٌ لِّتَفْتَرُوْا عَلَى اللّٰهِ الْكَذِبَ اِنَّ الَّذِيْنَ يَفْتَرُوْنَ عَلَى اللّٰهِ الْكَذِبَ لَا يُفْلِحُوْنَ ﴿١١٧﴾

118.　此の世はしばしの享楽なれど、やがて彼等は悲惨な罰を受くべし。

مَتَاعٌ قَلِيْلٌ وَّلَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿١١٨﴾

119.　ユダヤ教徒にも、われらは先に汝に告げたる如く、多くの物を禁じたり。されど、われらは彼等に不当なことをしたに非ず、彼等自ら己れを害えるなり。

وَعَلَى الَّذِيْنَ هَادُوْا حَرَّمْنَا مَا قَصَصْنَا عَلَيْكَ مِنْ قَبْلُ وَمَا ظَلَمْنٰهُمْ وَلٰكِنْ كَانُوْٓا اَنْفُسَهُمْ يَظْلِمُوْنَ ﴿١١٩﴾

120.　汝の主は—無知故に悪事を行い、後に改悛して身を修める者には—寛大にして、慈悲深くまします。

ثُمَّ اِنَّ رَبَّكَ لِلَّذِيْنَ عَمِلُوا السُّوْٓءَ بِجَهَالَةٍ ثُمَّ تَابُوْا مِنْ بَعْدِ ذٰلِكَ وَاَصْلَحُوْٓا اِنَّ رَبَّكَ مِنْ بَعْدِهَا لَغَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿١٢٠﴾

第十六項

121.　げにアブラハムは美徳の模範、アッラーに忠実で、常に信心深く、アッラーに他神を併せ祀る者に非ざりき。

اِنَّ اِبْرٰهِيْمَ كَانَ اُمَّةً قَانِتًا لِّلّٰهِ حَنِيْفًا وَلَمْ يَكُ مِنَ الْمُشْرِكِيْنَ ﴿١٢١﴾

122.　常にその恵みに感謝の念を抱きし故に、アッラーは彼を選びて正しい道に導き給えり。

شَاكِرًا لِّاَنْعُمِهٖ اِجْتَبٰىهُ وَهَدٰىهُ اِلٰى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ﴿١٢٢﴾

注 45　2章169節、174節、5章4節、6章119節、120節、146節参照

123.　われらは彼に現世に於ける幸福を与え、米世に於ても義しき人々の仲間に入れん。

وَآتَيْنَاهُ فِي الدُّنْيَا حَسَنَةً ۖ وَإِنَّهُ فِي الْآخِرَةِ لَمِنَ الصَّالِحِينَ ﴿١٢٢﴾

124.　而して今、われらは汝に啓示を降して云えり、「常にアッラーに心を捧げまつるアブラハムの流儀に従え、彼はアッラーに他神を併せ祀る者に非ざりき」と。

ثُمَّ أَوْحَيْنَا إِلَيْكَ أَنِ اتَّبِعْ مِلَّةَ إِبْرَاهِيمَ حَنِيفًا ۖ وَمَا كَانَ مِنَ الْمُشْرِكِينَ ﴿١٢٣﴾

125.　安息日は、(注 46) それについて意見を異にする者どもに対して定められたものにすぎず。而して、復活の日には、汝の主は必ず彼等が論争したことに対して判決を下すべし。

إِنَّمَا جُعِلَ السَّبْتُ عَلَى الَّذِينَ اخْتَلَفُوا فِيهِ ۚ وَإِنَّ رَبَّكَ لَيَحْكُمُ بَيْنَهُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ فِيمَا كَانُوا فِيهِ يَخْتَلِفُونَ ﴿١٢٤﴾

126.　知恵と熱心な勧めによって人々を主の道に招き、最善な方法で人々を説得せよ。主は、道を踏みはずした者、また正しく導かれる者を最もよく知り給う。

ادْعُ إِلَىٰ سَبِيلِ رَبِّكَ بِالْحِكْمَةِ وَالْمَوْعِظَةِ الْحَسَنَةِ ۖ وَجَادِلْهُمْ بِالَّتِي هِيَ أَحْسَنُ ۚ إِنَّ رَبَّكَ هُوَ أَعْلَمُ بِمَنْ ضَلَّ عَنْ سَبِيلِهِ ۖ وَهُوَ أَعْلَمُ بِالْمُهْتَدِينَ ﴿١٢٥﴾

127.　お前たち迫害者を懲しめんと欲するなら、蒙った被害と同じ程度に之をなせ。然しながら、もし堪忍しうるなら、堪忍するにしくはなし。

وَإِنْ عَاقَبْتُمْ فَعَاقِبُوا بِمِثْلِ مَا عُوقِبْتُمْ بِهِ ۖ وَلَئِنْ صَبَرْتُمْ لَهُوَ خَيْرٌ لِلصَّابِرِينَ ﴿١٢٦﴾

128.　預言者よ、汝、我慢強くあれ。されど、汝の忍耐はアッラーの加護にてのみ可能なり。彼等のことを悲しむなかれ、また彼等の悪計に心を痛めるるなかれ。

وَاصْبِرْ وَمَا صَبْرُكَ إِلَّا بِاللَّهِ ۚ وَلَا تَحْزَنْ عَلَيْهِمْ وَلَا تَكُ فِي ضَيْقٍ مِمَّا يَمْكُرُونَ ﴿١٢٧﴾

129.　げにアッラーは、義しい者、善行を積む者と偕にいまし給う。

إِنَّ اللَّهَ مَعَ الَّذِينَ اتَّقَوْا وَالَّذِينَ هُمْ مُحْسِنُونَ ﴿١٢٨﴾

١٦ ع ٢٢

注 46　ユダヤ人は、自国の衰退と悲惨は、安息日を冒涜したからだと信じていた。しかし彼らは今、安息日を守ることではなくイスラムを受け入れることで失われた栄光を取り戻すことができると教えられるのである。

سُورَةُ بَنِي إِسْرَاءِيلَ مَكِّيَّةٌ

イスラエル
（メッカ啓年）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ①

2．夜に乗じて、その僕を聖殿から、われらが辺りを浄めし遥か遠き聖殿に運びたる彼に栄光あれ。こはわれらの神兆のいくつかを彼ムハンマッドに見せんがためなり。げに全てを聴き、全てを見透す者は、彼のみにまします。（注１）

سُبْحَانَ الَّذِي أَسْرَىٰ بِعَبْدِهِ لَيْلًا مِنَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ إِلَى الْمَسْجِدِ الْأَقْصَا الَّذِي بَارَكْنَا حَوْلَهُ لِنُرِيَهُ مِنْ آيَاتِنَا ۚ إِنَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْبَصِيرُ ②

注１　この聖なる預言者の啓示としての幻について語っている節は多くのクルアーン注釈者にはミラージ（霊的昇天）と解釈されているが当書では、これは聖なる預言者のメッカからエルサレムへの幻の中でのイスラ（聖なる夜間飛行）であると解釈している。聖なる預言者のミラージについては、かなりの行間をさいて53章で語られている。53章で（８－18節）語られている全ての事実は、預言者出現の５年後のラジヤブの月に起ったアビシニアへの移動に引き続き直ちに啓示されたのであるが、これは聖なる預言者のミラージについての伝承中で詳細に渡って述べられている。この節で述べられている聖なる預言者のメッカからエルサレムへの霊的夜間飛行或いはイスラは、ズルカーニに依れば預言者出現の11年後に起った事であり、ミョールや数人のキリスト教著述家の意見では預言者出現の12年後という事になっている。しかしメルダベと、イブネ・サードの説では、ヒジラに一年先立つラビウル・アウヴァールの月の17日に起ったとされている（Al－Khasais, Al－Kubia）。ベーキもイスラはヒジラの一年か半年前に起ったとしている。この様に全ての伝承から解る事は預言者出現の12年後にあたるヒジラの一年か半年前にイスラが起ったという事で、預言者出現の10年後にハディジャが亡くなった後、聖なる預言者が、彼の従姉であるウンム・ハニと暮していたのがヒジラの時である。しかし大勢を占める学術的意見では、ミラージは第５番めの年に起っているのである。かくの如くこの二つの事件は、６～７年の間隔のあいた全く別個の事件であり、同一のものではないのである。各々の事件は全く別個であると考えなければならない。そして聖なる預言者のミラージで起ったとされる言い伝えのなかの色々な事柄は、イスラでの事柄とは、全く性質を異にするものなのである。叙述中には、これら二つの事件は、精神的現象であったにすぎず聖なる預言者が物理的に昇天したり、エルサレムまで旅した訳ではないとも述べられている。「歴史的に強力な事実の他にも、その他の関連状況がこの二つの事件は全く別個の物である事を主張する助けとなる。即ち(a)クルアーンでは聖なる預言者のミラージ（霊的昇天）については53章で説明があるが、イスラについては何の言及もされていない（エルサレムの夜間飛行）。そして当章では、イスラについては述べられていてもミラージへの引喩はない。(b)イスラが起った時、聖なる預言者が宿泊先にしていた彼の従姉であるウンム・ハニは、聖なる預言者がエルサレムへ旅した事については語っているが、天へ旅した事については何も語っていない。彼女こそ聖なる預言者が、エルサレムへの夜間飛行を話した、初めての人であり、彼女からの報告をうけて、その事件を書きとめた四名の違った報告者の権威に基づき、少なくとも、数人の伝承話の収集者が、彼女の話を裏づけている。四人の報告者全員が、聖なる預言者がエルサレムに行き、同じ夜にメッカへ帰ってきたという意見を同じくしている。又聖なる預言者が昇天の事をもウンニ・ハニに話していたなら、彼女がその事を書きもらすはずがないのである。しかし彼女がそうしていない事から考え合せ、結果的には、問題の夜に、聖なる預言者はエルサレムへの夜間飛行或いはイスラを行なったのみで、その時に昇天のミラージは起らなかったのである。伝承話を編さんする人達がイスラとミラージを混同してしまった様に思われる。この混乱はイスラ（夜間飛行）という言葉がイスラとミラージの両方の意味で使われた事に起因する様である。

3．われらはモーゼに経典を与え、これを以てイスラエルの子らへの嚮導たらしめて云えり、「汝等、われを措いて他に守護者をつくるなかれ。

وَآتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ وَجَعَلْنَاهُ هُدًى لِّبَنِي إِسْرَائِيلَ أَلَّا تَتَّخِذُوا مِن دُونِي وَكِيلًا ﴿٢﴾

4．ノアと共に方舟に乗せたる者の子孫よ」と。げに彼は謝恩の念厚き僕なりき。

ذُرِّيَّةَ مَنْ حَمَلْنَا مَعَ نُوحٍ إِنَّهُ كَانَ عَبْدًا شَكُورًا ﴿٣﴾

5．また、われらは経典の中でイスラエルの子らに「お前たちは必ず二度地上に於て悪事を犯し、而して非常に横柄な態度に出づ」と言明す。（注２）

وَقَضَيْنَا إِلَىٰ بَنِي إِسْرَائِيلَ فِي الْكِتَابِ لَتُفْسِدُنَّ فِي الْأَرْضِ مَرَّتَيْنِ وَلَتَعْلُنَّ عُلُوًّا كَبِيرًا ﴿٤﴾

6．二つのうち最初の警告が実現されるや、われらは、われらの僕の中で恐ろしい腕力を備えたる者たちをお前たちに遣わしたり。彼等はお前たちの家の最奥部までも詮索したれば、警告はかくして全うされり。（注３）

فَإِذَا جَاءَ وَعْدُ أُولَاهُمَا بَعَثْنَا عَلَيْكُمْ عِبَادًا لَّنَا أُولِي بَأْسٍ شَدِيدٍ فَجَاسُوا خِلَالَ الدِّيَارِ وَكَانَ وَعْدًا مَّفْعُولًا ﴿٥﴾

そして、イスラとミラージの説明中の、幾つかの詳細の類似性が、この混乱を大きくし定着させてしまった。(c)先ず最初に、聖なる預言者がエルサレムへ行き、その後エルサレムから天へ昇ったと言われる言い伝えでは、エルサレムで聖なる預言者は彼以前のアダム、アブラハム、モーゼ、そしてイエス・キリストという預言者達に出会い、そして天でも、再び同一の預言者達にあったのに、聖なる預言者は、彼等だとはわからなかったとも述べられている。しかし聖なる預言者がエルサレムで会った預言者達はどうやって彼以前に天に行ったのであろう。そして何故、同夜の夜間飛行中に、ほんの少し前に出会った彼等に、聖なる預言者が気づかなかったのであろう。そんな事は考えられない事である。　みしるし“遠隔のモスク（礼拝堂）”とはエルサレムにある預言者ソロモンの神殿をさす。

注２　　モーゼの経典中に述べられているユダヤ人達の二つの約束違反が、この節で言及されている（中命記28章15節、49〜53節、63節、64節、30章15節）イスラエルの民の中から不信者になった人達に、ダビデとイエス・キリストによりのろいが２度与えられ（５章79節）彼らは２度も罰せられた。

注３　　ダビデの死後神より第一の罰が、そしてイエス・キリストの死後第二の罰がユダヤ人達に下された。聖書によれば、ユダヤ人達は、モーゼ以後強大な民族となり、ダビデの時代に強力な王国の土台を築き、ダビデの死後、しばらくの間、その繁栄を保ち続けたとある。その後、衰退の一途をたどり、紀元前 733年頃に、サマリアはアッシリア人に占領され、イスラム全土は、ジエズリールの北部に併合されてしまった。紀元前 608年にはネコ・ファラオ引きいるエジプト軍がパレスチナを侵攻し、イスラエル人はエジプト人の支配する所となった（Jew. Enc.巻Ｐ 665)。しかし一時の権力の消失と破壊、荒廃といった事が彼等の生活様式を変える事はなかった。ユダヤ人達は以前のままの邪悪な生活態度のままで、預言者エレミアが、彼等の悪しき生活方法を止めないと神の怒りが下されると注意しても、ユダヤ人達は一べつもくれなかった。ジホヤーキンの在位時、バビロニアのネブカドネザルはパレスチナへの第一次侵攻を行ない、神殿の器を持ち去ったが、街を苛酷に包囲する事はなかった。しかし、ゼデキアの反乱が紀元前87年にネブカドネザルに第２次パレスチナ侵攻を許す所となり、一年半の包囲の後、街は嵐で落ちてしまい、街から逃げだしたゼデキア王はとらわれの身となった。王の息子達は虐殺され、王の目はくりぬかれ、足かせをはめられて、バビロンへと連れ去られた。神殿や王宮、その他の偉大な建築物は焼きうちされ、大司祭や指導者達は殺され、多くの人々が捕虜となって連れられていった（Jew. Enc.第６巻Ｐ 665、第７巻Ｐ 122、“Jerusalem”参照)。

7．その後、われらはお前たちに彼等を打ち負かす力を与え、加えて、富と子宝でお前たちを助け、以前よりも遙かに優勢ならしめたり。

ثُمَّ رَدَدْنَا لَكُمُ الْكَرَّةَ عَلَيْهِمْ وَأَمْدَدْنَاكُم بِأَمْوَالٍ وَبَنِينَ وَجَعَلْنَاكُمْ أَكْثَرَ نَفِيرًا ٧

8．ところで、もしお前たち善事を行わば、そは己が身のためとならん。また、もし悪事を行わば、そは己れの損とならん。さて、後者の警告その実現の時到るや、われらはお前たちの顔を苦痛で覆うべく敵軍を差し向けり。彼等は最初の時の如く聖殿に踏み入り、分捕った全てのものを破壊せん。(注4)

إِنْ أَحْسَنتُمْ أَحْسَنتُمْ لِأَنفُسِكُمْ وَإِنْ أَسَأْتُمْ فَلَهَا فَإِذَا جَاءَ وَعْدُ الْآخِرَةِ لِيَسُوءُوا وُجُوهَكُمْ وَلِيَدْخُلُوا الْمَسْجِدَ كَمَا دَخَلُوهُ أَوَّلَ مَرَّةٍ وَلِيُتَبِّرُوا مَا عَلَوْا تَتْبِيرًا ٨

9．或いは、主もお前たちの上にあわれみを思し召すやもしらず。されど、お前たち再び以前の状態に逆もどりするなら、われらも必ず返報せん。されば、われらは地獄を、不信心者輩の牢獄として設けたり。

عَسَىٰ رَبُّكُمْ أَن يَرْحَمَكُمْ وَإِنْ عُدتُّمْ عُدْنَا وَجَعَلْنَا جَهَنَّمَ لِلْكَافِرِينَ حَصِيرًا ٩

10．げにこのクルアーンは人を最も正しい道に導き、また、善行を積む信徒は大いなる報奨を授けらるべしとの朗報を伝う。(注5)

إِنَّ هَٰذَا الْقُرْآنَ يَهْدِي لِلَّتِي هِيَ أَقْوَمُ وَيُبَشِّرُ الْمُؤْمِنِينَ الَّذِينَ يَعْمَلُونَ الصَّالِحَاتِ أَنَّ لَهُمْ أَجْرًا كَبِيرًا ١٠

注4　この節はユダヤ人達の第2の邪宗への帰依による邪悪な生活と、その結果として彼等にもたらされた罰について語っている。彼等はイエス・キリストを迫害し、彼を十字架にはりつけて殺そうとし、又、彼の目的を、はばもうとした。それ故、神はユダヤ人達に罰の苦しみとして、西暦70年に、タイタス率いるところのローマ軍を侵攻させて国を破壊させた。そして比べようのない恐怖の中で、エルサレムは破壊され、ソロモンの神殿は焼きつくされたのである。(Enc. Bib. "Jerusalem"参照) この大きな不幸は、イエス・キリストがカシミールでまだ生存していた時に起こった。この事は、モーゼによって預言されたことである。(申命記32章18節～26節) ここでは、第2の罰についての預言が聖書では、第1の罰についての預言の後に述べられている点に注目すべきであろう (申命記28章)。ユダヤ人達が再びエルサレムに戻るという預言の後にもこの預言が為されている (申命記30章1－5節)。この事からわかるのはこの預言 (申命記32章18－26節) が、クルアーンでは、"お前達は必ずや二度地上に於て悪事を犯すとの言及のある、第2の罰を指している"という事である。この節はイスラム教徒に対しても、ユダヤ人達様に邪悪な生活を止めなければ二度罰せられるであろうとの警告の意味を持っている。最初の罰は西暦1258年に、バグダードが侵攻された時、下された。野蛮な遊牧民であるハラクが、完璧な力を誇り、かつ知識に富む町をうちのめし、180万ものイスラム教徒の首をはねたと言われている。しかしイスラムはこの恐るべきちょう落から輝しく立ち直り、ハラクの孫と多くのモンゴル人そして、タタル人もイスラムを受け入れたのである。第2の罰は、末日に下されるべく天により定められる。

注5　クルアーンが信奉者達の為に設定する究極の目標はクルアーン以前の人々の目標に比し、より高貴で崇高である。そして真の信奉者には、精神的且つ現世の祝福を約束している。故に人々は、その祝福を得んが為に多大な努力をし、だらしなく規律のゆるんだ生活に落ちいらぬ様身を守り、あらゆる場合に於て、約束された神の恩恵に価いする者であり得なければならない。

11．また、来世を信ぜざる徒輩（やから）に、われらが酷罰を用意していることを警告す。

وَأَنَّ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ أَعْتَدْنَا لَهُمْ عَذَابًا أَلِيمًا ﴿١١﴾ ع

第二項

12．人間は幸福のために祈るべきなのに、不幸をも祈る。人間とは軽はずみなり。

وَيَدْعُ الْإِنْسَانُ بِالشَّرِّ دُعَاءَهُ بِالْخَيْرِ ۖ وَكَانَ الْإِنْسَانُ عَجُولًا ﴿١٢﴾

13．われらは夜と昼を二つの徴（しるし）として設け、次に夜の徴（しるし）を暗くし、昼の徴（しるし）を明るくせり。こはお前たちをして主の恵みを求めしめ、また年の計算を知り、計算の方法をわきまえせしめんがためなり。われらはすべてのことを詳細に説き明かせり。（注６）

وَجَعَلْنَا اللَّيْلَ وَالنَّهَارَ آيَتَيْنِ فَمَحَوْنَا آيَةَ اللَّيْلِ وَجَعَلْنَا آيَةَ النَّهَارِ مُبْصِرَةً لِتَبْتَغُوا فَضْلًا مِنْ رَبِّكُمْ وَلِتَعْلَمُوا عَدَدَ السِّنِينَ وَالْحِسَابَ ۚ وَكُلَّ شَيْءٍ فَصَّلْنَاهُ تَفْصِيلًا ﴿١٣﴾

14．われらはそれぞれの人間の運命をその者の頚に結びたり。而（しか）して、復活の日に、われらは彼に大きく開いた帳簿を提示せん。（注７）

وَكُلَّ إِنْسَانٍ أَلْزَمْنَاهُ طَائِرَهُ فِي عُنُقِهِ ۖ وَنُخْرِجُ لَهُ يَوْمَ الْقِيَامَةِ كِتَابًا يَلْقَاهُ مَنْشُورًا ﴿١٤﴾

15．「汝の帳簿を読むがよい。今日こそ汝、自分自身に十分なる清算者たれ」

اقْرَأْ كِتَابَكَ ۖ كَفَىٰ بِنَفْسِكَ الْيَوْمَ عَلَيْكَ حَسِيبًا ﴿١٥﴾

16．正道を守る者はただ己れ自身を益するために守り、迷う者はただ己れ自身が損をするのみ。（注８）また重荷を背負うは、他人の重荷を背負うに非ず。（注９）われらは使徒を派遣せずして、罰することなし。（注10）

مَنِ اهْتَدَىٰ فَإِنَّمَا يَهْتَدِي لِنَفْسِهِ ۖ وَمَنْ ضَلَّ فَإِنَّمَا يَضِلُّ عَلَيْهَا ۚ وَلَا تَزِرُ وَازِرَةٌ وِزْرَ أُخْرَىٰ ۗ وَمَا كُنَّا مُعَذِّبِينَ حَتَّىٰ نَبْعَثَ رَسُولًا ﴿١٦﴾

注６　夜も昼も共に人間に益をもたらす。しかし夜のもたらす益が微妙で隠れているのに対し、昼の益ははっきりと明白である。この節では又、昼と夜の交替する事の自然現象が一年の日附を決め、暦を作る助けとなる事が述べられている。この現象が、科学と数学の発達と発展にも寄与したのである。

注７　人間の運命をその頚に結びたりという事は、行動と努力は人が生きている限り永遠についてまわる事を意味し、ターイル（鳥）とは鳥で吉凶を占うアラブの古い習慣を表わしている。人は、一たん為した行為をやり直す事は出来ず、その行動はとてつもない効力を持ち、人の目には見えずとも、行為を為した者の首につけられたままで拭い去る事は出来ないのである。

注８　懲罰は外部から来るものではなく、人自身の中より生まれるものである。実際に天と地獄の懲罰と報酬は、善であろうと悪であろうと、人が現世で為した行為を形態化し、代表するものなのである。この様に現世では人は運命を創り出し来世で、いわば、自分自身の報酬を或いは罰をうける者なのである。

注９　誰もが自分自身の十字架を背負わなければならないし、また誰かが代わって犠牲になってくれても本人には何の利益にもならない。この節は贖罪の原則の根本を取り去るものである。

注10　世界は、かつてない程の厳しさと比べようのない強大さの悪病（ペスト）、飢饉、戦争、地震やその他の災害を次々に経験し、人間の生活は苛酷なものであった。これらの災害や破局が地球をおそう以前に、神が警告者を派遣することになっているのだ。

17. われら或る邑を滅ぼさんと欲するや、まずその邑の反逆する徒輩に命令を下す。然るに、彼等はなおも罪を犯すが故に、之に対して当然の処刑をなし、われらその邑を壊滅す。

وَإِذَآ أَرَدْنَآ أَن نُّهْلِكَ قَرْيَةً أَمَرْنَا مُتْرَفِيهَا فَفَسَقُوا۟ فِيهَا فَحَقَّ عَلَيْهَا ٱلْقَوْلُ فَدَمَّرْنَٰهَا تَدْمِيرًا (١٧)

18. ノア以後われらは如何に多くの世代を亡ぼしたることか！汝の主は、その僕等の罪業を知悉し、且つ余す所なくみそなわし給う。

وَكَمْ أَهْلَكْنَا مِنَ ٱلْقُرُونِ مِنۢ بَعْدِ نُوحٍ ۗ وَكَفَىٰ بِرَبِّكَ بِذُنُوبِ عِبَادِهِۦ خَبِيرًۢا بَصِيرًا (١٨)

19. 誰であれ、束の間の現世を望むものには、われらは気の向くままに、気の向いた者に、現世で享楽を急がす。而る後、われらは彼に地獄を指定す。そこで彼は焼かれ、呪われ、拒否されるべし。

مَّن كَانَ يُرِيدُ ٱلْعَاجِلَةَ عَجَّلْنَا لَهُۥ فِيهَا مَا نَشَآءُ لِمَن نُّرِيدُ ثُمَّ جَعَلْنَا لَهُۥ جَهَنَّمَ يَصْلَىٰهَا مَذْمُومًا مَّدْحُورًا (١٩)

20. されど、信者であり、来世を望み、そのために努力する者―かくの如き者の努力は、神に嘉納せられん。

وَمَنْ أَرَادَ ٱلْءَاخِرَةَ وَسَعَىٰ لَهَا سَعْيَهَا وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَأُو۟لَٰٓئِكَ كَانَ سَعْيُهُم مَّشْكُورًا (٢٠)

21. われらはすべての者に―この者にも、またあの者にも―あまねく賜物を頒ち授く。主の授けものには限界なし。（注 11）

كُلًّا نُّمِدُّ هَٰٓؤُلَآءِ وَهَٰٓؤُلَآءِ مِنْ عَطَآءِ رَبِّكَ ۚ وَمَا كَانَ عَطَآءُ رَبِّكَ مَحْظُورًا (٢١)

22. 見よ、如何にわれらが現世で或る者を他の者より出世させたかを。されど、来世に於ては、之に優る地位と栄誉あり。

ٱنظُرْ كَيْفَ فَضَّلْنَا بَعْضَهُمْ عَلَىٰ بَعْضٍ ۚ وَلَلْءَاخِرَةُ أَكْبَرُ دَرَجَٰتٍ وَأَكْبَرُ تَفْضِيلًا (٢٢)

23. 汝辱しめられ、見捨てられることなきよう、アッラーに他神を併せ祀るなかれ。

لَّا تَجْعَلْ مَعَ ٱللَّهِ إِلَٰهًا ءَاخَرَ فَتَقْعُدَ مَذْمُومًا مَّخْذُولًا (٢٣) ع

第三項

24. 汝の主は命じたり、「彼以外に何者をも崇拝するなかれ。また両親に孝養をつくせ。片親、或いは両親とも汝のところで年老いた場合、いやみを云ったり、非難することなく、丁寧な言葉で話すがよい。（注 12）

وَقَضَىٰ رَبُّكَ أَلَّا تَعْبُدُوٓا۟ إِلَّآ إِيَّاهُ وَبِٱلْوَٰلِدَيْنِ إِحْسَٰنًا ۚ إِمَّا يَبْلُغَنَّ عِندَكَ ٱلْكِبَرَ أَحَدُهُمَآ أَوْ كِلَاهُمَا فَلَا تَقُل لَّهُمَآ أُفٍّ وَلَا تَنْهَرْهُمَا وَقُل لَّهُمَا قَوْلًا كَرِيمًا (٢٤)

注 11　神の賜物には二種類ある。(1)イスラム教徒、ユダヤ人、ヒンズー教徒、その他を問わず、あらゆる種類の人々の善行と努力が、その程度に応じ身を結ぶ結果としての一般的な賜物、(2)精神的事柄のみに限られ、神の真実の下僕のみに与えられ、不信者には与えられる事のない特別の慈愛と救い。

注 12　この節より、行動の原則の説明が始まる。人はこの行動の原則を遵守する事で、自分達の組織の保全が出来、衰退と分裂から組織を安全に守る事が出来る。神の単一性を信ずる事が全ての美徳が芽生える種とな

25. 而(しか)して、敬愛の情をこめ、柔順の翼を低く垂れ、かく云え、『主よ、彼等に慈悲を垂れ給え、幼い時彼等が我を慈(いつく)しみ育てた如く』」と。（注 13）

وَاخْفِضْ لَهُمَا جَنَاحَ الذُّلِّ مِنَ الرَّحْمَةِ وَقُلْ رَّبِّ ارْحَمْهُمَا كَمَا رَبَّيَانِي صَغِيرًا ﴿٢٥﴾

26. もしお前たち義(ただ)しからば、主はお前たちの心中を熟知し給う。げに彼は、悔い改めて帰順する者には寛大にまします。

رَبُّكُمْ أَعْلَمُ بِمَا فِي نُفُوسِكُمْ إِن تَكُونُوا صَالِحِينَ فَإِنَّهُ كَانَ لِلْأَوَّابِينَ غَفُورًا ﴿٢٦﴾

27. それから、親族にはやるべきものはやるべし、また貧者や旅人(たびびと)にも。但しむやみに浪費するなかれ。

وَآتِ ذَا الْقُرْبَىٰ حَقَّهُ وَالْمِسْكِينَ وَابْنَ السَّبِيلِ وَلَا تُبَذِّرْ تَبْذِيرًا ﴿٢٧﴾

28. 浪費家は悪魔(サタン)の同胞(はらから)なり。悪魔(サタン)は主に対し恩知らずなり。（注 14）

إِنَّ الْمُبَذِّرِينَ كَانُوا إِخْوَانَ الشَّيَاطِينِ وَكَانَ الشَّيْطَانُ لِرَبِّهِ كَفُورًا ﴿٢٨﴾

29. なれど、主の恵みを汝が求むるが故に、汝がもし彼等から顔をそむけざるを得ない場合でも、少くとも優しい言葉で彼等に語れ。（注 15）

وَإِمَّا تُعْرِضَنَّ عَنْهُمُ ابْتِغَاءَ رَحْمَةٍ مِّن رَّبِّكَ تَرْجُوهَا فَقُل لَّهُمْ قَوْلًا مَّيْسُورًا ﴿٢٩﴾

り、その信心がなければ、全ての罪がはびこる。神の唯一性を信じることは、信仰の中心であり、またシルク（唯一の神以外に他のものを崇拝すること）を非難することも、信仰の中心となっている。なぜならば、唯一性を信じることは全ての善のもとになり、シルクは全ての罪の根であるからである。この原則は、自然の法則と律法の法則両者の基盤と礎となる。また、律法の全ての法則が神の唯一性への信仰を基としているという現実はあまりにも明白なので、説明も必要としないが、自然界の法則や全ての科学の発達も、全てこの信念に起因している。何故なら、もし神が複数で存在するのなら、自然の法則も一つではなくなるからである。全ての科学上の発明や発見は、秩序ある一定の変わる事のないシステムが全宇宙を支配するという信念に従っている為、一つの一定で一糸乱れぬ自然界の法則が欠除していては、全ての科学的発展が終結してしまうのである。この節の表わす第２の重要な戒律は、人間の道徳行動に関してである。つまり、人間の自分の親に対しての義務が道徳的行為の最も重要な部分を形成するものであり、これは何故なら自分の神への関心を一番最初に向けさせてくれるのが両親であり、両親が鏡となって神の美徳をうつしてくれるからである。神の美徳を具体的に人間の例を出して説明しようとするなら、両親の例が一番ふさわしいであろう。しかし、神に関する態度には、不可能であっても、両親の場合は可能であることがある。たとえば、神の恩恵にお返しをする事は不可能であるから、人は少なくともシルクから遠ざかる事を心がけるべきであると教えられるが、両親の場合は、与えてくれた愛と思いやりに報いることがほとんど可能なのである。

注 13　美しい直喩を用いてこの節では、両親への思いやりが教えこまれている。親の愛は報いる事の出来ぬ程深いものである為、この返せぬ分は祈りが補なってくれる。祈りには、年老いた両親は、自分達が子供の時、親にしてもらったのと同じ様に、心を配って愛情豊かに接する様との思いがこめられている。

注 14　神から与えられた賜物を正しく使わない人間は神からうとまれる。そして自分の富を浪費し、正しく富を使わねばならないという責任をさけようとする者も同様である。

注 15　見た所は慈悲を与えた方が良さそうにみえるともそれを与えると逆効果となる場合もある。例えば、乞食を職業としたり、金をよくない使い道に費やす悪い習慣からぬけられない者達がそうである。そういった人たちには金を与えるよりもはげましの言葉をかける方が救いとなるのだ。

30．汝の手を己れの頚に縛りつけるなかれ。さりとて全く手を差し伸べ放題にするなかれ、非難されたあげく無一文にならぬためにも。（注 16）

وَلَا تَجْعَلْ يَدَكَ مَغْلُولَةً إِلَىٰ عُنُقِكَ وَلَا تَبْسُطْهَا كُلَّ الْبَسْطِ فَتَقْعُدَ مَلُومًا مَّحْسُورًا ﴿٢٩﴾

31．主は己れの欲する者にその給養を豊かにし、また己れの欲する者に之を制限す。げに彼は己れの僕等を知悉し、すっかり見透し給う。

إِنَّ رَبَّكَ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَن يَشَاءُ وَيَقْدِرُ ۚ إِنَّهُ كَانَ بِعِبَادِهِ خَبِيرًا بَصِيرًا ﴿٣٠﴾

第四項

32．貧困を恐れて自分の子女を殺すなかれ。(注 17) 子女たちもお前たちも、養うはわれらなり。げに子女を殺すは大罪なり。(注 18)

وَلَا تَقْتُلُوا أَوْلَادَكُمْ خَشْيَةَ إِمْلَاقٍ ۖ نَّحْنُ نَرْزُقُهُمْ وَإِيَّاكُمْ ۚ إِنَّ قَتْلَهُمْ كَانَ خِطْئًا كَبِيرًا ﴿٣١﴾

33．また、姦通を斥けよ。それは醜悪なり、罪悪なり。（注 19）

وَلَا تَقْرَبُوا الزِّنَىٰ ۖ إِنَّهُ كَانَ فَاحِشَةً وَسَاءَ سَبِيلًا ﴿٣٢﴾

34．而して、正当な理由なしにアッラーが禁じたる者を殺すなかれ。何人にせよ不当に殺害されたる場合は、その相続人にわれらは報復の権利を認めたり。然れども、その報復殺害は規定された限度を越えるなかれ、なんとなれば、法によって擁護されるが故に。

وَلَا تَقْتُلُوا النَّفْسَ الَّتِي حَرَّمَ اللَّهُ إِلَّا بِالْحَقِّ ۗ وَمَن قُتِلَ مَظْلُومًا فَقَدْ جَعَلْنَا لِوَلِيِّهِ سُلْطَانًا فَلَا يُسْرِف فِّي الْقَتْلِ ۖ إِنَّهُ كَانَ مَنصُورًا ﴿٣٣﴾

注 16　真の必要があっての施しを惜しんだり、無分別に浪費してはならない。富を浪費してしまった結果、本当に寄附が必要となる時に施しができなくなってしまうからだ。

注 17　子供に対し適切な教育や食事そして衣類を与えぬしみったれた（欲深な）親達は、実質的には子供達に肉体的且つ精神的な死を与えているに等しい。心のこもった教育や、本来あるべき状態になる機会を与えられたら、社会の有用な構成員になり得る一罪もない子供達を“まっ殺してしまう”を、この節では強く非難している。子供を殺す事とは又、近頃世間で奨励されている､不必要で問題の多い、受胎調節の事をも意味している。

注 18　ここでは大罪を用い、子供を殺すという事は、人間の本質が不快を感じ、ひるみをおぼえ、人間の感情を持たぬ者だけが出来うる事であるという事を主張している。

注 19　子供を殺す事を禁じた戒律に続くのは、それと同じ位重い姦淫についての戒告である。姦淫は、色々な形で数えきれぬ程の子供を死なせてしまうという意味に於て、重要な戒律なのである。聖書の“汝、姦淫するなかれ”と違い、クルアーンではもっとはっきりと効果的でわかりやすい表現で“姦通を斥けよ”と言っている。クルアーンでは、姦淫の具体的行為を禁じ、とがめるのみならず、姦淫に通じる道を全て閉じようとしているのである。

35．孤児が成年に達するまでは、その財産を殖やすのでなければ、之に手を触れるなかれ。而して契約を全うせよ。契約は必ず糾明せらるるべし。（注 20）

وَلَا تَقْرَبُوا مَالَ الْيَتِيمِ إِلَّا بِالَّتِي هِيَ أَحْسَنُ حَتَّىٰ يَبْلُغَ أَشُدَّهُ ۚ وَأَوْفُوا بِالْعَهْدِ ۖ إِنَّ الْعَهْدَ كَانَ مَسْئُولًا ﴿٣٥﴾

36．お前たち量る場合は、枡目を十分に与え、また正確い天秤を以て量れ。その方が立派であり、結局は得となる。（注 21）

وَأَوْفُوا الْكَيْلَ إِذَا كِلْتُمْ وَزِنُوا بِالْقِسْطَاسِ الْمُسْتَقِيمِ ۚ ذَٰلِكَ خَيْرٌ وَأَحْسَنُ تَأْوِيلًا ﴿٣٦﴾

37．己れの知らざることに従うなかれ。げに耳、目、心―皆これ等は必ず釈明を求めらるるべし。（注 22）

وَلَا تَقْفُ مَا لَيْسَ لَكَ بِهِ عِلْمٌ ۚ إِنَّ السَّمْعَ وَالْبَصَرَ وَالْفُؤَادَ كُلُّ أُولَٰئِكَ كَانَ عَنْهُ مَسْئُولًا ﴿٣٧﴾

38．横柄に地を歩むなかれ、なんとなれば、汝大地を引き裂く能わず、また山の高さにも達する能わず。（注 23）

وَلَا تَمْشِ فِي الْأَرْضِ مَرَحًا ۖ إِنَّكَ لَنْ تَخْرِقَ الْأَرْضَ وَلَنْ تَبْلُغَ الْجِبَالَ طُولًا ﴿٣٨﴾

39．これ等すべては、汝の主から見れば、憎むべき罪悪なり。

كُلُّ ذَٰلِكَ كَانَ سَيِّئُهُ عِنْدَ رَبِّكَ مَكْرُوهًا ﴿٣٩﴾

40．こは主が汝に啓示せる知恵の一部なり。されば、如何なる他神もアッラーと偕に祀るなかれ、然らずば、呪われ、拒否されて、汝地獄に投ぜられん。

ذَٰلِكَ مِمَّا أَوْحَىٰ إِلَيْكَ رَبُّكَ مِنَ الْحِكْمَةِ ۗ وَلَا تَجْعَلْ مَعَ اللَّهِ إِلَٰهًا آخَرَ فَتُلْقَىٰ فِي جَهَنَّمَ مَلُومًا مَدْحُورًا ﴿٤٠﴾

41．なんとな！主は男子をお前たちに授け給い、自らは天使等の中より女子を採れりと云うか？お前たちはまことに罪深いことを云う。

أَفَأَصْفَاكُمْ رَبُّكُمْ بِالْبَنِينَ وَاتَّخَذَ مِنَ الْمَلَائِكَةِ إِنَاثًا ۚ إِنَّكُمْ لَتَقُولُونَ قَوْلًا عَظِيمًا ﴿٤١﴾

注 20　結果的には、殺人者と殺された者との二つの家族に孤児を残してしまう殺人の罪に関する法を、定めた後で、クルアーンでは孤児達の権利について指示を与えている。最も重要な点は、彼等の財産についてであり、ここでは義務という意味を表わす“契約”という言葉が孤児達の財産の世話をするという事は、そうする事での何の恩恵もないが、誠実にそして十分に履行すべき責任であり義務である事を強く訴える為に、使われている。

注 21　商売を順調に運び、富を形成する秘訣は、商売上の取引きに於て、公正且つ誠実である事である。

注 22　自然の順序でゆけば、“耳”“目”そして“心”による疑いの源をこの節では非難している。人の心に疑いが、生じるのは先ず耳を通してである。意地の悪い告げ口や噂で疑いが生じるのである。その次が目撃する事である。人は他人の行動を見て誤解し、その動機や意図を疑ったりする。しかし一番忌むべきは、悪い噂の結果や、勝手な解釈をした他の人の行動が原因ではなく、病んだ自分自身の心が作りあげてしまう疑いの念である。（前述の節で言及されている）神聖にして犯すべからざる人間の生命や財産のみでなく、人間の名誉も、神聖にして犯すべからざるものであり、これを攻撃する事も責任を持って向かわねばならない。

注 23　自分の業績を自慢したり、見せびらかしたりする事は、軽薄さを吹聴するのみならず、道徳的にも欠陥を生じさせる。何故なら、そういう態度は、既に自分の達成した業績に満足を覚えるのみで、結果的にはその人の道徳的向上の妨げになるだけである。

第五項

42．われらは彼等を諭さんとして、クルアーンの中で真理をいろいろな方法で説明せり。されど、そはただ彼等の嫌悪を増したるにすぎず。（注 24）

وَلَقَدْ صَرَّفْنَا فِي هَٰذَا الْقُرْآنِ لِيَذَّكَّرُوا وَمَا يَزِيدُهُمْ إِلَّا نُفُورًا ﴿٤٢﴾

43．云え、彼等が云う如く、彼と偕に他神等があったならば、偶像崇拝者どもは必ず玉座の主に抗する道を捜し求めん。

قُل لَّوْ كَانَ مَعَهُ آلِهَةٌ كَمَا يَقُولُونَ إِذًا لَّابْتَغَوْا إِلَىٰ ذِي الْعَرْشِ سَبِيلًا ﴿٤٣﴾

44．清浄なるかな、彼は彼等が云うが如きものとは較べものにならぬ遙か高みにおわします。

سُبْحَانَهُ وَتَعَالَىٰ عَمَّا يَقُولُونَ عُلُوًّا كَبِيرًا ﴿٤٤﴾

45．七つの天も大地も、またその中にあるすべてのもので、彼の栄光を讃えざるはなし。然しながら、お前たちはそれ等の讃美の意味を解せず。げに彼は忍耐強く、寛大にまします。（注 25）

تُسَبِّحُ لَهُ السَّمَاوَاتُ السَّبْعُ وَالْأَرْضُ وَمَن فِيهِنَّ ۚ وَإِن مِّن شَيْءٍ إِلَّا يُسَبِّحُ بِحَمْدِهِ وَلَٰكِن لَّا تَفْقَهُونَ تَسْبِيحَهُمْ ۗ إِنَّهُ كَانَ حَلِيمًا غَفُورًا ﴿٤٥﴾

46．汝クルアーンを読誦するとき、われらは汝と、来世を信ぜぬ者との間に見えざる幕を垂らす。

وَإِذَا قَرَأْتَ الْقُرْآنَ جَعَلْنَا بَيْنَكَ وَبَيْنَ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ حِجَابًا مَّسْتُورًا ﴿٤٦﴾

47．並びにわれらは、彼等にクルアーンを理解させないように、その心に覆いをかけ、耳も聞けなくす。されば、汝がクルアーンの中で主のことのみ語れば、彼等之を嫌い背を向けるなり。（注 26）

وَجَعَلْنَا عَلَىٰ قُلُوبِهِمْ أَكِنَّةً أَن يَفْقَهُوهُ وَفِي آذَانِهِمْ وَقْرًا ۚ وَإِذَا ذَكَرْتَ رَبَّكَ فِي الْقُرْآنِ وَحْدَهُ وَلَّوْا عَلَىٰ أَدْبَارِهِمْ نُفُورًا ﴿٤٧﴾

48．われらは彼等が汝に耳傾ける時、彼等がどんなことを聞くのか、また、彼等が内証で協議する時、悪人どもは「お前たちはただ憑かれた男に従っているにすぎず」と云うを熟知す。

نَّحْنُ أَعْلَمُ بِمَا يَسْتَمِعُونَ بِهِ إِذْ يَسْتَمِعُونَ إِلَيْكَ وَإِذْ هُمْ نَجْوَىٰ إِذْ يَقُولُ الظَّالِمُونَ إِن تَتَّبِعُونَ إِلَّا رَجُلًا مَّسْحُورًا ﴿٤٨﴾

注 24　重要な事柄全てを論じなければならない経典では、時に応じ、主題にかかれる要点に立ち戻る事は、極く当り前であり必要でもある。何度も言及するのは、その事柄につき、新しい角度からとらえてみたり、新しい反論を論破したりする為であり、その目的で反復すると正常な神経を有する教養ある人ならそれに対し異議を唱える事はできないのである。

注 25　「七つの天と大地もまたその中にあるすべてのものは、神を讃える」という語句は、全宇宙が神の唯一性に関わりを持つという事を、又「神の栄光を讃えざるはなし」の語句は、全ての事物は神の存在の寛大さに、それぞれ各々に係り合いがあるという事を意味している。

注 26　心の覆いとは、悪意やねたみ、まちがった優越感や人種的偏見、社会的地位や収入の喪失に対して心を被う事、或いは、不信者が真実を受け入れるのを拒む為に、強く都合よく信じてきた古い習慣や信仰への心の覆いを指す。

49．見よ、彼等が如何に数々の譬え(たとえ)を汝に向つて並べ立てるかを。しかし、結局迷えるなり。されば、道を見出すこと能(あた)わず。

انْظُرْ كَيْفَ ضَرَبُوا لَكَ الْأَمْثَالَ فَضَلُّوا فَلَا يَسْتَطِيعُونَ سَبِيلًا ﴿٤٩﴾

50．彼等は云う、「我等が骨となり、粉々の粒子となり果てた後、また新しく生まれかえるとな？」と。

وَقَالُوا أَإِذَا كُنَّا عِظَامًا وَرُفَاتًا أَإِنَّا لَمَبْعُوثُونَ خَلْقًا جَدِيدًا ﴿٥٠﴾

51．云え、「汝等石なりとも鉄なりとも、

قُلْ كُونُوا حِجَارَةً أَوْ حَدِيدًا ﴿٥١﴾

52．はたまた、お前たちが思う一番堅い如何なる物質になろうとも、お前たちは甦らしめらるべし」と。すると、彼等は問わん、「我等を生き返らすは誰ぞ？」と。云え、「そはお前たちを最初に創り給うた御方なり」と。彼等頭を振りて更に問わん、「それは何時起るや？」と。云え、「恐らく、近からん、(注27)

أَوْ خَلْقًا مِمَّا يَكْبُرُ فِي صُدُورِكُمْ ۚ فَسَيَقُولُونَ مَنْ يُعِيدُنَا ۖ قُلِ الَّذِي فَطَرَكُمْ أَوَّلَ مَرَّةٍ ۚ فَسَيُنْغِضُونَ إِلَيْكَ رُءُوسَهُمْ وَيَقُولُونَ مَتَىٰ هُوَ ۖ قُلْ عَسَىٰ أَنْ يَكُونَ قَرِيبًا ﴿٥٢﴾

53．彼がお前たちを喚(よ)び出(いだ)し、お前たちがそれに応えて彼を讃美し奉るその日は。而して、お前たちは、墓中にとどまりたるは暫しの間にすぎずと思うらむ」と。

يَوْمَ يَدْعُوكُمْ فَتَسْتَجِيبُونَ بِحَمْدِهِ وَتَظُنُّونَ إِنْ لَبِثْتُمْ إِلَّا قَلِيلًا ﴿٥٣﴾

第六項

54．わが僕等(しもべら)に告げよ、常に丁寧に語りかけよ。たしかに、悪魔(サタン)というものは人々の間に仲たがいを扇動す。げに悪魔(サタン)は人間にとって公然の敵なり。

وَقُلْ لِعِبَادِي يَقُولُوا الَّتِي هِيَ أَحْسَنُ ۚ إِنَّ الشَّيْطَانَ يَنْزَغُ بَيْنَهُمْ ۚ إِنَّ الشَّيْطَانَ كَانَ لِلْإِنْسَانِ عَدُوًّا مُبِينًا ﴿٥٤﴾

55．お前たちを一番よく御存知なのは、お前たちの主なり。彼もし欲しなば、慈悲をお前たちに垂れ、また欲しなば、お前たちを罰しもしよう。而(しか)して、われらはあの者どもの番人たるべく汝を遣わしたに非ず。

رَبُّكُمْ أَعْلَمُ بِكُمْ ۖ إِنْ يَشَأْ يَرْحَمْكُمْ أَوْ إِنْ يَشَأْ يُعَذِّبْكُمْ ۚ وَمَا أَرْسَلْنَاكَ عَلَيْهِمْ وَكِيلًا ﴿٥٥﴾

注27　この節は二通りに解釈できる。先ず不信者に対し、彼等の心が鉄や石、或いはその他の似た様な物質の如くかたくなになろうとも、神は聖なる預言者を通してもたらそうとなさった、全体的な変革を彼等にも、もたらそうと思っていらっしゃるという解釈。そしてもう一つは、前節で述べられた、復活についての彼等の疑いに対して答えるという形で、彼等が、鉄や石、或いはその他の物質に形を変えても、神の懲罰は免れ得ないと語っているという解釈である。

56．汝の主は、天地間のすべてのものをよく知り給う。またわれらは預言者の或る者を他よりも賞揚し、ダビデに詩篇を授けたり。

وَرَبُّكَ أَعْلَمُ بِمَن فِي السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ ۗ وَلَقَدْ فَضَّلْنَا بَعْضَ النَّبِيِّينَ عَلَىٰ بَعْضٍ ۖ وَآتَيْنَا دَاوُودَ زَبُورًا ﴿٥٦﴾

57．云え、「アッラー以外にお前たちが神々と信じている者に訴えよ。されば、お前たちは、彼等がお前たちの災難を除き、またそれを転ずる力もないことを思い知らん」と。

قُلِ ادْعُوا الَّذِينَ زَعَمْتُم مِّن دُونِهِ فَلَا يَمْلِكُونَ كَشْفَ الضُّرِّ عَنكُمْ وَلَا تَحْوِيلًا ﴿٥٧﴾

58．彼等が拝んでいる者ども自身、主に近づかんことを望む—たといお側近く伺候している者たちですら—アッラーの慈悲を期待し、その懲罰を恐る。げに恐るべきは、汝の主の懲罰なり。（注 28）

أُولٰئِكَ الَّذِينَ يَدْعُونَ يَبْتَغُونَ إِلَىٰ رَبِّهِمُ الْوَسِيلَةَ أَيُّهُمْ أَقْرَبُ وَيَرْجُونَ رَحْمَتَهُ وَيَخَافُونَ عَذَابَهُ ۚ إِنَّ عَذَابَ رَبِّكَ كَانَ مَحْذُورًا ﴿٥٨﴾

59．如何なる都でも、われらは復活の日の来る前に之を滅ぼし、または厳しい懲罰を加えん。此の事は経典の中に銘記せらる。（注 29）

وَإِن مِّن قَرْيَةٍ إِلَّا نَحْنُ مُهْلِكُوهَا قَبْلَ يَوْمِ الْقِيَامَةِ أَوْ مُعَذِّبُوهَا عَذَابًا شَدِيدًا ۚ كَانَ ذٰلِكَ فِي الْكِتَابِ مَسْطُورًا ﴿٥٩﴾

60．奇蹟を降すにわれらの妨げとなるものは何もなし。ただし、往古の民が之を認めざりき。されど、此の事は妨害とはならず。われらはサムードの民に明白な神兆として牝駱駝を与えたり、しかるに彼等は不当にも之を虐げたり。われらは警告のためにのみ奇蹟を降す。（注 30）

وَمَا مَنَعَنَا أَن نُّرْسِلَ بِالْآيَاتِ إِلَّا أَن كَذَّبَ بِهَا الْأَوَّلُونَ ۚ وَآتَيْنَا ثَمُودَ النَّاقَةَ مُبْصِرَةً فَظَلَمُوا بِهَا ۚ وَمَا نُرْسِلُ بِالْآيَاتِ إِلَّا تَخْوِيفًا ﴿٦٠﴾

61．われらがかつて、汝に向って、「げに、主は人間をとり囲み給う」　と云いし時のことを思い起せ。われらが汝に見せたる幻は、クルアーンに記されたあの呪われた樹と同じく、人間を試さんがためなり。われらは

وَإِذْ قُلْنَا لَكَ إِنَّ رَبَّكَ أَحَاطَ بِالنَّاسِ ۚ وَمَا جَعَلْنَا الرُّؤْيَا الَّتِي أَرَيْنَاكَ إِلَّا فِتْنَةً لِّلنَّاسِ وَالشَّجَرَةَ الْمَلْعُونَةَ فِي الْقُرْآنِ ۚ وَنُخَوِّفُهُمْ فَمَا يَزِيدُهُمْ

注 28　この節は、或る人々が神として礼拝する天使、預言者そして聖人達について言及している。

注 29　神の預言者達やクルアーンが予言した宇宙的な惨禍と一連の災害の前兆となる懲罰の事についての言及である。

注 30　以下の様にも解釈出来うる。即ち、以前の人々が、預言者達の言を嘘だといった事が原因で、これ以上神のしるしを送られないというようなことがあろうか、つまり、それが、天よりのしるしを与えぬ理由にはなりえないという解釈となる。

彼等に継続して警告せんとするも、そは徒(いたずら)に彼等に大罪を増さしめるばかりなり。(注 31)

إِلَّا طُغْيَانًا كَبِيرًا ٦١

第七項

62. われらが、天使たちに、「アダムに対して平伏せよ」と命じた時のことを思い起せ。イブリースの外は彼等みな平伏せり。イブリースは「汝が泥にて創れしものに対して、我いかで拝伏すべきや？」と云えり。

وَإِذْ قُلْنَا لِلْمَلَٰٓئِكَةِ اسْجُدُوا لِآدَمَ فَسَجَدُوٓا إِلَّآ إِبْلِيسَ قَالَ ءَأَسْجُدُ لِمَنْ خَلَقْتَ طِينًا ٦٢

63. 更に彼は、「汝が我より上の者として礼遇したるは此の者なるか？汝もし復活の日まで我を猶予したまえば、我は必ずこの者の子孫を、わずかの者を除き、我が支配下にす」と云えり。(注 32)

قَالَ أَرَءَيْتَكَ هَٰذَا الَّذِي كَرَّمْتَ عَلَيَّ لَئِنْ أَخَّرْتَنِ إِلَىٰ يَوْمِ الْقِيَٰمَةِ لَأَحْتَنِكَنَّ ذُرِّيَّتَهُٓ إِلَّا قَلِيلًا ٦٣

64. アッラーは云えり、「立ち去れ！何人(なんぴと)にせよ汝に従う者は、必ず地獄を返報しようぞ―返報をたっぷりとな。

قَالَ اذْهَبْ فَمَن تَبِعَكَ مِنْهُمْ فَإِنَّ جَهَنَّمَ جَزَآؤُكُمْ جَزَآءً مَّوْفُورًا ٦٤

65. 而(しか)して、彼等の仲で誰でもいいから汝その声で誘惑し、汝の歩兵や騎兵を以て彼等を攻めたてよ。また、財宝と子女(こども)たちを領ちて、彼等と約束を結べ」と。されど、悪魔(サタン)の約束は、ただ彼等を欺くのみ。(注 33)

وَاسْتَفْزِزْ مَنِ اسْتَطَعْتَ مِنْهُم بِصَوْتِكَ وَأَجْلِبْ عَلَيْهِم بِخَيْلِكَ وَرَجِلِكَ وَشَارِكْهُمْ فِي الْأَمْوَٰلِ وَالْأَوْلَٰدِ وَعِدْهُمْ ۚ وَمَا يَعِدُهُمُ الشَّيْطَٰنُ إِلَّا غُرُورًا ٦٥

66. されど、わが僕等(しもべら)に対しては、げに汝は彼等の上に如何なる支配力も有せず。彼等の守護は汝の主のみでこと足りる。(注 34)

إِنَّ عِبَادِي لَيْسَ لَكَ عَلَيْهِمْ سُلْطَٰنٌ ۚ وَكَفَىٰ بِرَبِّكَ وَكِيلًا ٦٦

注 31　これは当章の第二節で述べられた幻の事を言っている。この幻の中で、聖なる預言者は、ユダヤ人達のキブラ（祈りの方向）であるエルサレムの神殿で、他の全ての預言者達を率いて祈る自分自身を見た。この幻は、いつか将来に於て、これらの預言者達の信奉者達もイスラムの輪に加わるであろう事を暗示している。これが'主はすべての人間をとりかこみたもう'の語句の意味する事なのである。そして、イスラムが全体に浸透するのは、59 節に述べられた厄禍が世界的に始まりだした後なのである。

注 32　"復活"という言葉はここでは信者の信仰が完全なものとなりサタンが、その信者に対し何の影響も及ぼせなくなった時に、信者の誰でもが経験する霊的復活を指している。

注 33　この節では、悪魔の仲間達が、人に正しい道をふみはずさせるのに使う三つの方法を説明している。(1)貧しい人間や弱い人間を彼等に対する暴力の恐怖を持続させる事で威嚇する。(2)言葉での暴力への恐怖に負けない者達に対し徒党を組み、更にあくどいやり方で又計画的な攻撃をしかけ、あらゆる方法で、迫害、弾圧を行なう。(3)真実の大義を守る事を止めさえすれば、指導者にしてやると言って、力強く、影響力のある者達を誘惑する。

注 34　人は、精神的に"復活"し、信仰が確かなものとならない限り、サタンの誘惑に影響される。

67. お前たちの主は、お前たちのために海上を船で航行させ、お前たちに彼の恩恵を求めさせんとするお方なり。げに彼はお前たちに慈悲深くまします。

رَبُّكُمُ الَّذِيْ يُزْجِيْ لَكُمُ الْفُلْكَ فِي الْبَحْرِ لِتَبْتَغُوْا مِنْ فَضْلِهٖ ۭ اِنَّهٗ كَانَ بِكُمْ رَحِيْمًا ﴿٦٧﴾

68. お前たち海で災難に遭うや、日頃お前たちが拝む神々はみな消え、独りアッラーいますのみ。然るに、彼がお前たちを無事陸に届けてやれば、お前たちは忽ちよそを向く。人間という奴はまことに恩知らずな者なり。（注 35）

وَاِذَا مَسَّكُمُ الضُّرُّ فِي الْبَحْرِ ضَلَّ مَنْ تَدْعُوْنَ اِلَّآ اِيَّاهُ ۚ فَلَمَّا نَجّٰىكُمْ اِلَى الْبَرِّ اَعْرَضْتُمْ ۭ وَكَانَ الْاِنْسَانُ كَفُوْرًا ﴿٦٨﴾

69. お前たち、彼が、渚において、お前たちを沈めるとか、物凄い砂嵐を見舞わせることなし、と安心し得るか？そうなっては、お前たち如何なる守護者も見つかりはせぬぞ。

اَفَاَمِنْتُمْ اَنْ يَّخْسِفَ بِكُمْ جَانِبَ الْبَرِّ اَوْ يُرْسِلَ عَلَيْكُمْ حَاصِبًا ثُمَّ لَا تَجِدُوْا لَكُمْ وَكِيْلًا ﴿٦٩﴾

70. それとも、彼が再びお前たちを海に連れ戻し、突風を見舞って、お前たちをその不信仰のために溺れさせることなし、と安心し得るか？そうなりたる時は、お前たちのために、われらに刃向って助けてやろうという者など見つかりはせぬ。

اَمْ اَمِنْتُمْ اَنْ يُّعِيْدَكُمْ فِيْهِ تَارَةً اُخْرٰى فَيُرْسِلَ عَلَيْكُمْ قَاصِفًا مِّنَ الرِّيْحِ فَيُغْرِقَكُمْ بِمَا كَفَرْتُمْ ۙ ثُمَّ لَا تَجِدُوْا لَكُمْ عَلَيْنَا بِهٖ تَبِيْعًا ﴿٧٠﴾

71. げにわれらは、アダムの子孫を優遇し、（注 36）彼等を陸や海に運び、（注 37）いろいろ結構な品々を与え、更に、われらが創りし多くの人々の上に彼等の身分を高めたり。（注 38）

وَلَقَدْ كَرَّمْنَا بَنِيْٓ اٰدَمَ وَحَمَلْنٰهُمْ فِي الْبَرِّ وَالْبَحْرِ وَرَزَقْنٰهُمْ مِّنَ الطَّيِّبٰتِ وَفَضَّلْنٰهُمْ عَلٰي كَثِيْرٍ مِّمَّنْ خَلَقْنَا تَفْضِيْلًا ﴿٧١﴾ ع

注 35　苦悩と困窮の中にいる時、謙虚になり神に祈り慎み深い生活を送る様にと誓うのが人間の本質である。

注 36　神はアダムの子等全てに同等にほまれを与えられ特定の民族や種族のみに特権を与えられた訳ではない。更に、発展と繁栄への道は誰にでも平等にひらかれており、海のみでなく陸にも同様に運ばれるのである。

注 37　クルアーン中に海に重点がおかれているのは珍しい。クルアーンがアラブ人達に与えられた経典であり、生涯を通して航海による旅を経験した事のない全てのアラブ人や聖なる預言者が、海路の旅路を強調する事はまず有り得ない事からクルアーンが聖なる預言者が書いたものではない事が解る。聖なる預言者は、海路の航海の多大な利点については知り得なかったのである。

注 38　人間であるという等級は、地上に於ける神の代理者という意味で他の全ての創造物に、まさっているのである。

第八項

72．或る日、われらはすべての人間をその師導者(しどうしゃ)と共に召集せん、そのことを忘れまいぞ。その日、右手に己れの記録を渡される者は—その記録を熱心に読み、且ついささかも不当に遇せらるることなかるべし。(注 39)

يَوْمَ نَدْعُوا كُلَّ أُنَاسٍ بِإِمَامِهِمْ فَمَنْ أُوتِيَ كِتٰبَهٗ بِيَمِينِهٖ فَأُولٰٓئِكَ يَقْرَءُونَ كِتٰبَهُمْ وَلَا يُظْلَمُونَ فَتِيلًا ٧٢

73．然(しか)しながら、此の世に於て盲目なる者は、来世に於いても盲目なるべし。而(しか)して、ますます正道から迷い去らん。(注 40)

وَمَنْ كَانَ فِي هٰذِهٖٓ أَعْمٰى فَهُوَ فِي الْاٰخِرَةِ أَعْمٰى وَأَضَلُّ سَبِيلًا ٧٣

74．彼等は、われらが汝に啓示したことのために、汝にひどいしうちをし、危く汝に、われらに対抗して啓示したものとは別なものを捏造(ねつぞう)せしめんとせり。もしそうなりたる場合、彼等は汝を親友として遇したるべし。(注 41)

وَإِنْ كَادُوا لَيَفْتِنُونَكَ عَنِ الَّذِيٓ أَوْحَيْنَآ إِلَيْكَ لِتَفْتَرِيَ عَلَيْنَا غَيْرَهٗ وَإِذًا لَّاتَّخَذُوكَ خَلِيلًا ٧٤

75．もしわれらがクルアーンを以て汝を堅固たらしめざりせば、汝はいささか彼等に傾かんとしたるなり。(注 42)

وَلَوْلَآ أَنْ ثَبَّتْنٰكَ لَقَدْ كِدْتَّ تَرْكَنُ إِلَيْهِمْ شَيْـًٔا قَلِيلًا ٧٥

76．その場合は、われらは汝に此の世で重刑を、また死後に於ても重刑を味わさせんとす。もしそうなりたる場合、汝のために、われらに刃向って助けてやろうなどという者は何処にも見つかりはせぬ。

إِذًا لَّأَذَقْنٰكَ ضِعْفَ الْحَيٰوةِ وَضِعْفَ الْمَمَاتِ ثُمَّ لَا تَجِدُ لَكَ عَلَيْنَا نَصِيرًا ٧٦

注 39　左手は懲罰の、そして右手は祝福の象徴である。そして又、人の身体の右半分は、左に比べ筋力が強い為、或る種の優越性を帯びている。この節で述べられる人の行いの記録とは善い方の祝福された記録を意味する。右手はここでも強さと力を意味しており (69 章 46 節)、右手に信者達が各々の記録を持つとは、力と決意をもつて美徳を有する事を表わし、不信者達が左手に記録を持つという事は、必要とされる強さと熱意を持って美徳への努力をしなかった事を表わしている。

注 40　現世で心の (精神の) 眼を開いて物を見ない者は、来世でも精神的に物をみる目を持たないままである。クルアーンでは神のみ印をよく考えず、それを役立てない者は“盲目”であるとしている。こういう人々は来世でも精神的に“盲目”なのである。

注 41　不信者達は聖なる預言者を彼に啓示された教義が原因で、彼に強制的にそれを変えさせたり、クルアーンで体現されている教義以外を教義としようとしたりして、聖なる預言者を非常な苦境に落とし入れようとした。これらの不信者の邪悪な計画や、それを実行した事が、彼等の全くの失敗であった事についてこの節では言及しているのである。

注 42　預言者の根本的性質は余りにも純粋であった為、クルアーンが彼に啓示されていなかったとしても、そして、神が彼に関して意図し給うた事を知らなかったとしても、預言者はシルク (唯一の神以外のものを崇拝すること) を行なう事に屈する事はほとんどありえなかったのである。。

77. げに彼等は、汝を国外に放逐せんとし、汝をこの地より正に追い払わんとせり。しかし、その場合は、彼等とて汝が去れる後、長くは留まり得ざりき。（注 43）

وَإِنْ كَادُوا لَيَسْتَفِزُّونَكَ مِنَ الْأَرْضِ لِيُخْرِجُوكَ مِنْهَا وَإِذًا لَّا يَلْبَثُونَ خِلْفَكَ إِلَّا قَلِيلًا ﴿٧٧﴾

78. 以上のことは、汝以前にわれらが使徒たちと共に降せしわれらの遣りかたなり。されば汝、われらの遣り方には如何なる変更もなきことを悟るべし。

سُنَّةَ مَنْ قَدْ أَرْسَلْنَا قَبْلَكَ مِنْ رُّسُلِنَا وَلَا تَجِدُ لِسُنَّتِنَا تَحْوِيلًا ﴿٧٨﴾

第九項

79. 太陽が傾き、薄暗くなったころから夜の暗闇に至るまで礼拝を行い、而して、黎明にクルアーンを読誦せよ。げに黎明のクルアーン読誦は、とりわけ神に御嘉納あらせられ給う。（注 44）

أَقِمِ الصَّلٰوةَ لِدُلُوكِ الشَّمْسِ إِلَىٰ غَسَقِ الَّيْلِ وَقُرْاٰنَ الْفَجْرِ إِنَّ قُرْاٰنَ الْفَجْرِ كَانَ مَشْهُودًا ﴿٧٩﴾

80. また、汝、汝には規定外（注 45）の勤行としてクルアーンの読誦のために、深夜に起きよ。恐らく主は、汝を光栄ある地位に登らしめん。（注 46）

وَمِنَ الَّيْلِ فَتَهَجَّدْ بِهِ نَافِلَةً لَّكَ عَسٰى أَنْ يَّبْعَثَكَ رَبُّكَ مَقَامًا مَّحْمُودًا ﴿٨٠﴾

81. 云え、「主よ、我に正しい入り方で入らせ、正しい出方で出し給え。而して、我になにとぞお手ずからお手助けの力を授け給え」と。（注 47）

وَقُلْ رَّبِّ أَدْخِلْنِي مُدْخَلَ صِدْقٍ وَّأَخْرِجْنِي مُخْرَجَ صِدْقٍ وَّاجْعَلْ لِّي مِنْ لَّدُنْكَ سُلْطٰنًا نَّصِيرًا ﴿٨١﴾

注 43　聖なる預言者の敵達は、彼がその信奉者達の間の尊厳を失なってしまう様に、法的追放の汚辱にまみれさせようとした。しかし神自身が、彼にメッカを去る様にと命ぜられた為、メッカの市民権を失う事も含めた汚辱から、聖なる預言者は救われたのである。

注 44　この節では、イスラムの５回の日々の祈りの時間について説明している。'太陽が傾き'とは午後の祈り、夕方の祈り、そして日没の祈りの三つの意味を持つ、'夜の暗闇'という表現には日没時の祈りも含まれるが、特に夜の祈りを意味し、'黎明の'という語句は、朝の祈りの時間を示している。

注 45　本文中に与えられた意味に加えナ・フィラとは特別の恩恵との意味を持ち、祈りは肉体に負担をかけるものではなく、神からの特典と特別の恩恵である事を教えている。

注 46　イスラムの聖なる預言者程、ひどいそしりをうけ悪口をいわれた人はおそらく他に類をみないであろうし、彼程、神の賞讃をうけ、多くの神の祝福と恩恵の対象となった人もいないといえる。夜の静けさの中では、タハッジュードの祈りが信ずる者の精神的な意気の高まりに最も似合い、創造主と共にただ一人で、神との特別な霊的交わりをかわすのである。

注 47　祈りと嘆願がかなえられ聖なる預言者はこの節で聖なる礼拝堂から遠隔の礼拝堂まで夜の間に、その僕を連れて旅したもうたお方に栄光あれ（17 章 2 節）の語句で為された預言の成就として、メディナへ連れていかれる福音を授けられた。この預言の成就を予期し、彼は今住んでいるメッカからの脱出とメディナへの入場がまぎれもなく祝福されたものである事を祈るよう命ぜられた。

82. 而して、宣言せよ、「真理は降り、虚偽は消滅せり。げに虚偽は消滅する定めなり」と。

وَقُلْ جَآءَ الْحَقُّ وَزَهَقَ الْبَاطِلُ إِنَّ الْبَاطِلَ كَانَ زَهُوقًا ﴿٨٢﴾

83. われらが少しずつ降すクルアーンは、信者にとっては治療であり慈悲なれど、そはただ不義なす徒輩の損を増すばかりなり。

وَنُنَزِّلُ مِنَ الْقُرْآنِ مَا هُوَ شِفَآءٌ وَرَحْمَةٌ لِّلْمُؤْمِنِينَ وَلَا يَزِيدُ الظَّالِمِينَ إِلَّا خَسَارًا ﴿٨٣﴾

84. われら人に恩恵を施すや、彼は顔をそむけて遠ざかり、而して災難に見舞われれば、彼は忽ち絶望す。

وَإِذَآ أَنْعَمْنَا عَلَى الْإِنسَانِ أَعْرَضَ وَنَا بِجَانِبِهِ وَإِذَا مَسَّهُ الشَّرُّ كَانَ يَئُوسًا ﴿٨٤﴾

85. 云え、「人はだれでも己が流儀に従って行動す。されど、主は、一番正しく導かれたる者は誰なるかを熟知し給う」と。

قُلْ كُلٌّ يَعْمَلُ عَلَىٰ شَاكِلَتِهِ فَرَبُّكُمْ أَعْلَمُ بِمَنْ هُوَ أَهْدَىٰ سَبِيلًا ﴿٨٥﴾

第十項

86. 彼等は汝に、霊について問う。云え、「霊は主の命により創られり。お前たちがこの件に関して授かりし知識は、些少なものにすぎず」と。（注 48）

وَيَسْـَٔلُونَكَ عَنِ الرُّوحِ قُلِ الرُّوحُ مِنْ أَمْرِ رَبِّي وَمَآ أُوتِيتُم مِّنَ الْعِلْمِ إِلَّا قَلِيلًا ﴿٨٦﴾

87. もしわれら欲さば、われらは汝に啓示せしものを取り去ることも可能なり。然る時は汝、汝のためにわれらに刃向う如何なる守護者も見出せまいぞ、（注 49）

وَلَئِن شِئْنَا لَنَذْهَبَنَّ بِالَّذِيٓ أَوْحَيْنَآ إِلَيْكَ ثُمَّ لَا تَجِدُ لَكَ بِهِ عَلَيْنَا وَكِيلًا ﴿٨٧﴾

88. ただ主が慈悲を垂れる場合を除いて。実に、汝に対する主の恩寵は広大無辺なり。

إِلَّا رَحْمَةً مِّن رَّبِّكَ إِنَّ فَضْلَهُ كَانَ عَلَيْكَ كَبِيرًا ﴿٨٨﴾

注 48　ユダヤ人達の精神的衰退と退廃の時期には、多くの近代の心霊主義者や見神論者、そしてヒンズー教のヨガ行者の様にオカルトが流行した。聖なる預言者の時代のメディナにいたユダヤ人達の中にもこの種の事をする者達がおり、メッカの偶像崇拝者達が聖なる預言者を論駁する為オカルト信奉者達に助力を求めた時、彼等は、聖なる預言者に人間の魂について質問する様、メッカの偶像崇拝者達をそそのかした。クルアーンでは、魂は神の命令によりその力を得るのであり、魔術や心霊儀式で得たとされる神の命令以外の物は、全てまやかしであるという意見を述べた節でこの問いかけに答えている。人間の魂の本質に関する質問を最初にメッカで聖なる預言者に問いかけたのはクライシュ族でアブトウラ・ビン・マスードによるとメディナでも、同様の質問をユダヤ人達にされたと言うことである。魂はここでは、神の直接の命令によって創られたものと説明されている。クルアーンでは、全ての創造は、以下に述べる二つのカテゴリーに分けられる。(1)先に創造された物質や事柄の助けを全く借りず、直接もたらされた創造　(2)即に創造されている方法や事物の助けをかりて、第二次的に生じた創造。前者の種類の創造はアムル（2 章 118 節参照）のカテゴリーに属し、後者はハルク（創造）（命令）として知られている。人間の魂は第一のカテゴリーに属する。

注 49　この節では地上からクルアーンの教えが消え去る時が来るという預言を暗示している様に思われる。クルアーンの精神や核心が地上より姿を消し、その他の教義の、ユダヤを原型とする、超自然の力を持つ、その時代にはスフィといわれたいわゆる秘法などは、関係者の努力で全部が全部消滅してしまう訳ではないが、どちらにしてもそういった時が来るであろうという聖なる預言者の似通った預言が伝えられている。

89．云え、「たとい人間と妖霊が力を合わせ、互に助け合って、此のクルアーンに似たものを作らんとしても、彼等は断じて之に類するものを作るを得ず」と。（注 50）

قُلْ لَّئِنِ اجْتَمَعَتِ الْإِنْسُ وَالْجِنُّ عَلٰٓى أَنْ يَّأْتُوْا بِمِثْلِ هٰذَا الْقُرْاٰنِ لَا يَأْتُوْنَ بِمِثْلِهٖ وَلَوْ كَانَ بَعْضُهُمْ لِبَعْضٍ ظَهِيْرًا ﴿٨٩﴾

90．げにわれらは此のクルアーンの中で、一切の比喩をあげ、いろいろな遣りかたで人間に解明したけれど、大多数の人間は不信仰ゆえに一切を拒否せり。（注 51）

وَلَقَدْ صَرَّفْنَا لِلنَّاسِ فِيْ هٰذَا الْقُرْاٰنِ مِنْ كُلِّ مَثَلٍ فَأَبٰٓى أَكْثَرُ النَّاسِ إِلَّا كُفُوْرًا ﴿٩٠﴾

91．而して、彼等は云う、「我等は汝が大地より泉を噴き出させて見せてくれるまでは、絶対に汝を信ぜず。

وَقَالُوْا لَنْ نُّؤْمِنَ لَكَ حَتّٰى تَفْجُرَ لَنَا مِنَ الْأَرْضِ يَنْبُوْعًا ﴿٩١﴾

92．或いは、汝が棗椰子園や葡萄園を持ち、その中に幾すじもの豊かに流れる川を生じせしめるまでは。（注 52）

أَوْ تَكُوْنَ لَكَ جَنَّةٌ مِّنْ نَّخِيْلٍ وَّعِنَبٍ فَتُفَجِّرَ الْأَنْهٰرَ خِلٰلَهَا تَفْجِيْرًا ﴿٩٢﴾

93．或いは汝が主張する如く、汝が大空をばらばらにして我等の頭上に落して見せるまでは。それとも、アッラーと天使たちを我等が面前に伴い来るまでは。

أَوْ تُسْقِطَ السَّمَآءَ كَمَا زَعَمْتَ عَلَيْنَا كِسَفًا أَوْ تَأْتِيَ بِاللّٰهِ وَالْمَلٰٓئِكَةِ قَبِيْلًا ﴿٩٣﴾

94．或いは汝が黄金の家を持つか、昇天して見せるまでは。我等は、我等が読み得るような経典を持って降るに非ざれば、断じて汝の昇天を信ぜず」と。云え、「我が主に讃えあれ！我はただ使者として遣わされた一個の人間にすぎざるに非ずや」と。（注 53）

أَوْ يَكُوْنَ لَكَ بَيْتٌ مِّنْ زُخْرُفٍ أَوْ تَرْقٰى فِي السَّمَآءِ ۚ وَلَنْ نُّؤْمِنَ لِرُقِيِّكَ حَتّٰى تُنَزِّلَ عَلَيْنَا كِتٰبًا نَّقْرَؤُهٗ ۚ قُلْ سُبْحَانَ رَبِّيْ هَلْ كُنْتُ إِلَّا بَشَرًا رَّسُوْلًا ﴿٩٤﴾

注 50　ここでは、その霊能力を得る対象である、やみに隠れた霊を呼び出し、助力を願うというオカルト儀式にふける者達に対する挑戦が為されている。挑戦は聖なるクルアーンの神の起源（origin）（聖なる源）を否定する全ての人々に対し、為されているのである。

注 51　人間の能力には限りがある為、人は、どんなにがんばっても、限られた数の問題しか解決できない。しかしクルアーンは人間の道徳や精神的発展に関するあらゆる事柄を今までに処理してきているのである。

注 52　メッカの人々が、自分達の質問や反対に対してクルアーンの答えに戸惑った時、彼等は聖なる預言者に向き直り、'もしクルアーンが全ての知識に精通しているのなら、聖なる預言者は地から泉を湧かせたり、庭園を造り出したり、自分用に金で出来た家を建てるといった奇跡が行えるはずだ。'とつめよった。

注 53　不信者達の思慮分別のない要求に対しこれらの要求は神或いは預言者のいずれかについての事であるとの答が出され、第一のカテゴリーの要求は、その性格に於て軽兆浮薄であり、神はそういった法外さの及ばぬ所にましますので論外であり、聖なる預言者に関しての要求については、彼は人間である為能力は限られており、一方神の預言者であるという使命を有する為、相矛盾してしまうという事になる。

第十一項

95. 嚮導が彼等に降された時、「アッラーは使者として我等と同じ人間を遣わしたるか？」と彼等が云いしことを除けば、人々に信仰を妨げるものは何もなかりき。

وَمَا مَنَعَ النَّاسَ أَنْ يُؤْمِنُوا إِذْ جَاءَهُمُ الْهُدَىٰ إِلَّا أَنْ قَالُوا أَبَعَثَ اللَّهُ بَشَرًا رَسُولًا ﴿٩٥﴾

96. 云え、「もし地上を悠々として歩き廻っているのが天使たちなら、われらは確かに天から天使を使者として遣わせり」と。（注54）

قُلْ لَوْ كَانَ فِي الْأَرْضِ مَلَائِكَةٌ يَمْشُونَ مُطْمَئِنِّينَ لَنَزَّلْنَا عَلَيْهِمْ مِنَ السَّمَاءِ مَلَكًا رَسُولًا ﴿٩٦﴾

97. 云え、「我とお前たちのことは、アッラーの証言で十分なり。げにアッラーはその僕等を知り尽くし、よくみそなわし給う」と。

قُلْ كَفَىٰ بِاللَّهِ شَهِيدًا بَيْنِي وَبَيْنَكُمْ ۚ إِنَّهُ كَانَ بِعِبَادِهِ خَبِيرًا بَصِيرًا ﴿٩٧﴾

98. アッラーが導く者のみが、正しい道を辿る。されどアッラーが迷わしむる者は、汝はアッラー以外にその者どもには助け手がないことを知るべし。而して、復活の日に、われらは彼等をうつ伏せにし、盲にし、唖にし、聾にして召し寄せん。彼等の住居は地獄なり。火勢が衰えるたびに、われらは彼等のために火炎を加うべし。（注55）

وَمَنْ يَهْدِ اللَّهُ فَهُوَ الْمُهْتَدِ ۖ وَمَنْ يُضْلِلْ فَلَنْ تَجِدَ لَهُمْ أَوْلِيَاءَ مِنْ دُونِهِ ۖ وَنَحْشُرُهُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ عَلَىٰ وُجُوهِهِمْ عُمْيًا وَبُكْمًا وَصُمًّا ۖ مَأْوَاهُمْ جَهَنَّمُ ۖ كُلَّمَا خَبَتْ زِدْنَاهُمْ سَعِيرًا ﴿٩٨﴾

النصف

99. こは、彼等がわれらの神兆を拒否し、「何んとな！我等が死んで骨と塵埃に帰したる後、再び新たな被造物として生き返ると云うか？」などと云いしが故の報いなり。（注56）

ذَٰلِكَ جَزَاؤُهُمْ بِأَنَّهُمْ كَفَرُوا بِآيَاتِنَا وَقَالُوا أَإِذَا كُنَّا عِظَامًا وَرُفَاتًا أَإِنَّا لَمَبْعُوثُونَ خَلْقًا جَدِيدًا ﴿٩٩﴾

100. 彼等は、天地を創造し給うたアッラーが、また彼等の如き者を創る力を有することを知らざりしか？されば、彼は、彼等のために疑うべからざる期限を定めたり。然れど

أَوَلَمْ يَرَوْا أَنَّ اللَّهَ الَّذِي خَلَقَ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضَ قَادِرٌ عَلَىٰ أَنْ يَخْلُقَ مِثْلَهُمْ وَجَعَلَ لَهُمْ أَجَلًا لَا

注54　この節には以下の二つの意味が考えられる。(a)天使達は天使の様な人間の上に降臨し、彼等に反対する者達には降臨しない。そして反対する者達も生活面で天使の様になれば、天使が降臨する。(b)同種類の生き者のみが、互いの模範となりうる。故に、人間以外は、他の人間のひな型とはなり得ぬ為、人類に対する神の伝言を帯びる者は人間でしかあり得ない。

注55　長い間、炎に焼かれて不信者達の意識が薄れると、神は再び彼等の意識を目覚めさせ以前と同じ位、厳しく焼かれる苦痛を感じさせるのである。

注56　来世を否定した結果が、実際には、信仰と真実の拒否となるのである。そしてこの事が、クルアーンが多大な重点を死後の世界におき、全ての重要な問題点を何度も折にふれ、死後の世界に帰するのである。

رَيْبَ فِيهِ فَأَبَى الظّٰلِمُونَ إِلَّا كُفُورًا ۝١٠٠

も、不義なす徒輩は一切を拒否し、背信をつのらせるばかりなり。

قُلْ لَّوْ أَنْتُمْ تَمْلِكُونَ خَزَآئِنَ رَحْمَةِ رَبِّيٓ إِذًا لَّأَمْسَكْتُمْ خَشْيَةَ الْإِنْفَاقِ ۚ وَكَانَ الْإِنْسَانُ قَتُورًا ۝١٠١

101.　云え、「たといお前たち、主の無限の財宝を掌中にしても、お前たちは費すことを恐れて之を隠さん。人間とは吝嗇なり」と。

第十二項

وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسٰى تِسْعَ آيٰتٍ بَيِّنٰتٍ فَسْئَلْ بَنِيٓ إِسْرَآءِيلَ إِذْ جَآءَهُمْ فَقَالَ لَهُ فِرْعَوْنُ إِنِّي لَأَظُنُّكَ يٰمُوسٰى مَسْحُورًا ۝١٠٢

102.　実はわれらは、モーゼに九つの明証を授けたり。されば、イスラエルの子孫にこの事を問え。モーゼが彼等に来るや、ファラオは彼に対して云えり、「モーゼよ、我は汝を憑かれた者とみなす」と。（注 57）

قَالَ لَقَدْ عَلِمْتَ مَآ أَنْزَلَ هٰٓؤُلَآءِ إِلَّا رَبُّ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ بَصَآئِرَ ۚ وَإِنِّي لَأَظُنُّكَ يٰفِرْعَوْنُ مَثْبُورًا ۝١٠٣

103.　モーゼは云えり、「これ等の奇蹟を明証として降したるは、外でもない、天地の主なることは汝もよく知るところ。ファラオよ、思うに、汝は滅びる運命たるべし」と。

فَأَرَادَ أَنْ يَّسْتَفِزَّهُمْ مِّنَ الْأَرْضِ فَأَغْرَقْنٰهُ وَمَنْ مَّعَهُ جَمِيعًا ۝١٠٤

104.　そこで、ファラオは、彼等を国外に追放せんとせり。されど、われらは、ファラオ並びに彼の仲間を悉く溺れしめたり。

وَّقُلْنَا مِنْ بَعْدِهِ لِبَنِيٓ إِسْرَآءِيلَ اسْكُنُوا الْأَرْضَ فَإِذَا جَآءَ وَعْدُ الْآخِرَةِ جِئْنَا بِكُمْ لَفِيفًا ۝١٠٥

105.　而して、その後、われらはイスラエルの子孫に云えり、「汝等この地に住め。されど、後世になって、約束の時至れば、われらはお前たちすべてをさまざまなる民族から連れ戻さん」と。（注 58）

وَبِالْحَقِّ أَنْزَلْنٰهُ وَبِالْحَقِّ نَزَلَ ۗ وَمَآ أَرْسَلْنٰكَ إِلَّا مُبَشِّرًا وَّنَذِيرًا ۝١٠٦

106.　われらはこれを真理を以て降したれば、これは真理によって降れり。而して、われらが汝を遣わしたるは、ただ朗報を伝え、警告を与えるためにすぎず。

注 57　クルアーンの他の箇所でふれられている、これら九つの神兆とは(a)杖（7章108節）、(b)白い手（7章109節）、(c)、(d)ひでり及び果物が手に入らなくなる事（7章13節）、(e)嵐、(f)いなご、(g)しらみの群れ、(h)かえるの群れ、そして(i)血の懲罰である（7章134節）。

注 58　この節では、イスラム教徒にも、ユダヤ人の様に、2回の大災厄が訪れる事が暗示されている。第一の災厄はハラク・カーンの率いるタタル人の手にバグダッドが落ちた時に訪れた。そして第2の神の懲罰は末日に訪れる事がここでは語られている。丁度ユダヤ人達が第一番目の救世主であるイエス・キリストの時に神罰を受けた如く、約束されたメシアの時代の末日に於てイスラム教徒は神罰をうけるのである。そして“末日の約束”の成就を意味するこの第二の神罰で、ユダヤ人達は世界の各地から聖なる地に戻される事になっていた。この預言はバルフォア宣言の下にユダヤ人達がパレスチナにもどり、イスラムと呼ばれる国を建設した事で明白に成就されているのである。“末日の約束”は約束されたメシヤの時代にあてはめられるのだ。

107. 而(しか)して、われらがクルアーンをばらばらに啓示せるは、汝がそれを人々に折々に読み聞かせるためなり。されば、われらは之(これ)を断片的に啓示せり。

وَقُرْاٰنًا فَرَقْنٰهُ لِتَقْرَاَهٗ عَلَى النَّاسِ عَلٰى مُكْثٍ وَّنَزَّلْنٰهُ تَنْزِيْلًا ﴿١٠٧﴾

108. 云え、「お前たち之(これ)を信ずるも、また信ぜざるも、これ以前に知識を授けられた者は、その読誦されるを聞くや、その面(おもて)を伏して拝す」と。

قُلْ اٰمِنُوْا بِهٖٓ اَوْ لَا تُؤْمِنُوْا اِنَّ الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْعِلْمَ مِنْ قَبْلِهٖٓ اِذَا يُتْلٰى عَلَيْهِمْ يَخِرُّوْنَ لِلْاَذْقَانِ سُجَّدًا ﴿١٠٨﴾

109. 而(しか)して云う、「清浄なるかな主よ。ついに主の約束は果たされたり」と。

وَّيَقُوْلُوْنَ سُبْحٰنَ رَبِّنَآ اِنْ كَانَ وَعْدُ رَبِّنَا لَمَفْعُوْلًا ﴿١٠٩﴾

110. 彼等はその顔を地に伏して泣きぬ。そは彼等をますます謙虚ならしむ。（注59）

وَيَخِرُّوْنَ لِلْاَذْقَانِ يَبْكُوْنَ وَيَزِيْدُهُمْ خُشُوْعًا ﴿١١٠﴾ السجدة

111. 云え、「アッラーに祈れ、またはラフマーンに祈れ。お前たちが彼に祈る御名(みな)は、どちらを唱えても、つまり最高の美称は彼のものなり」と。礼拝は声高くなるなかれ、さりとて低く過ぎてもならぬ。その中頃に道を求めよ。

قُلِ ادْعُوا اللّٰهَ اَوِ ادْعُوا الرَّحْمٰنَ اَيًّا مَّا تَدْعُوْا فَلَهُ الْاَسْمَآءُ الْحُسْنٰى وَلَا تَجْهَرْ بِصَلَاتِكَ وَلَا تُخَافِتْ بِهَا وَابْتَغِ بَيْنَ ذٰلِكَ سَبِيْلًا ﴿١١١﴾

112. 而(しか)して云え、「讃えあれ、アッラー。子を持たざる御方(おんかた)、その王権を共に分つ者とてなく、またその欠陥の故に援助者を必要とすることなき御方(おんかた)」と。その偉大さを賞揚(しょうよう)し、彼を讃美し奉れ。

وَقُلِ الْحَمْدُ لِلّٰهِ الَّذِيْ لَمْ يَتَّخِذْ وَلَدًا وَّلَمْ يَكُنْ لَّهٗ شَرِيْكٌ فِي الْمُلْكِ وَلَمْ يَكُنْ لَّهٗ وَلِيٌّ مِّنَ الذُّلِّ وَكَبِّرْهُ تَكْبِيْرًا ﴿١١٢﴾ ع

注59　この節では、平伏する時に、神の偉大さをそして自分自身の弱さをはっきり認識する事が人間の精神を謙虚にするというイスラム教徒の心の状態を表わしている。信者は平伏の姿勢でひれ伏すという命が包括されているこれらの節を誦じた後でひれ伏さなければならない。

سُوْرَةُ الْكَهْفِ مَكِّيَّةٌ (١٨)

アル・カハフ
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍く、アッラーの御名において

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．すべての賞讃はアッラーのもの、彼こそはその僕に経典を降し、いささかもその中に不正を入れざりき。（注１）

اَلْحَمْدُ لِلّٰهِ الَّذِيْٓ اَنْزَلَ عَلٰى عَبْدِهِ الْكِتٰبَ وَلَمْ يَجْعَلْ لَّهٗ عِوَجًا ②

3．彼は経典を以って監視者となし、それによって御手ずから苛酷な刑罰を加え給うことを警告させ、また善行を積む信徒たちはやがて結構な報奨あるべしとの朗報を伝え給えり、

قَيِّمًا لِّيُنْذِرَ بَاْسًا شَدِيْدًا مِّنْ لَّدُنْهُ وَيُبَشِّرَ الْمُؤْمِنِيْنَ الَّذِيْنَ يَعْمَلُوْنَ الصّٰلِحٰتِ اَنَّ لَهُمْ اَجْرًا حَسَنًا ③

4．彼等をその中で末永く住まわせんとの。

مّٰكِثِيْنَ فِيْهِ اَبَدًا ④

5．また、「アッラーは御子をもち給う」と云う徒輩にも警告し給う。（注２）

وَّيُنْذِرَ الَّذِيْنَ قَالُوا اتَّخَذَ اللّٰهُ وَلَدًا ⑤

6．彼等並びに彼等の父祖たちはこの事について如何なる知識も持たず。彼等の口より出づるこの言葉は実に重大なり。彼等の云うことは虚偽以外の何ものにも非ず。

مَا لَهُمْ بِهٖ مِنْ عِلْمٍ وَّلَا لِاٰبَآئِهِمْ كَبُرَتْ كَلِمَةً تَخْرُجُ مِنْ اَفْوَاهِهِمْ اِنْ يَّقُوْلُوْنَ اِلَّا كَذِبًا ⑥

7．彼等もしこの説教を信ぜずば、恐らく彼は彼等のために心を痛め、己れの身を殺すに至らん。（注３）

فَلَعَلَّكَ بَاخِعٌ نَّفْسَكَ عَلٰٓى اٰثَارِهِمْ اِنْ لَّمْ يُؤْمِنُوْا بِهٰذَا الْحَدِيْثِ اَسَفًا ⑦

注１　監視者として、クルアーンは２つの役目を果たす。クルアーンは、以前の聖典に見受けられた誤りを訂正し、消去するという意味において、そういった以前の経典の監視者となる。そしてまた、来るべき世代の人々の精神的教育の責任を担い、人間生活の崇高な目的の実現へと至らしめる道のりに彼らを導くことにより、クルアーンは彼らに対する監視者でもある。

注２　クルアーンは最初、‘警告を与えるもの’として、そしてその次には、‘喜ばしきたよりを与えるもの’（３節）、そして再び本節に見られるように‘警告を与えるもの’として語られている。不信者は、２度警告を受け、その２度にわたる警告の間に、信者は、喜ばしきたよりを与えられてきたのである。イスラム教徒にとっての喜ばしきたよりが間に入る形となっての２重の警告は、３つの預言を暗示していた。(1)聖なる預言者の時代における聖なる預言者の反対者の敗北、破滅　(2)イスラム教徒による驚異的な権力と栄光の獲得　(3)イスラム教徒の栄光ののち、“アッラー（神）は御子をもち給う”と主張するキリスト教国家にふりかからんとする罰

注３　本節では、己の人々の精神的幸福に対する聖なる預言者の不安と憂慮が大いに証されている。聖なる預言者は、神のお告げの拒否や反対を深く悲しむあまり、すんでのところで亡くなってしまうところであった。

8．げにわれらは、地上にあるすべてのものを地の飾りとして設けたり、彼等のうち誰が最も立派な行状を示すかを試さんがために。(注4)

إِنَّا جَعَلْنَا مَا عَلَى الْأَرْضِ زِينَةً لَّهَا لِنَبْلُوَهُمْ أَيُّهُمْ أَحْسَنُ عَمَلًا ⑧

9．されど、われらは、地上にあるすべてのものを潰滅(かいめつ)し、不毛の荒野に帰せしめん。(注5)

وَإِنَّا لَجَاعِلُونَ مَا عَلَيْهَا صَعِيدًا جُرُزًا ⑨

10．汝は思うや、あの洞窟の人たちとその碑文のことを、われらの神兆(しるし)の中でも特に不思議なはなしだと？（注6）

أَمْ حَسِبْتَ أَنَّ أَصْحَابَ الْكَهْفِ وَالرَّقِيمِ كَانُوا مِنْ آيَاتِنَا عَجَبًا ⑩

神の使者、そして神の預言者たちは、生まれながらの人情の深さにあふれている。彼らは、人類のために叫び、涙を流し、深く悲しむのである。しかしながら、人間とは恩知らずのもので、彼らが深く同情の気持ちを向けている、まさにその人々が彼らを処刑し、殺害しようとするのである。

注4　神が創造した数えきれない全てのものの中には、特定の用途がないとか、利益に欠けるといったようなものはただひとつとして存在しない。それら全てが、人間生活の美を高めているのである。イスラム教徒は、常にこれらの簡単な言葉の根底にある偉大なる真実を心に留めおき、自然の偉大なる神秘を探究し、また自然力の限りなき特性を調査するため、その時間と労力を捧げるよう命じられてきたのだった。

注5　本節は、西洋のキリスト教国家が、富、権力、支配を獲得し、偉大なる発見、発明を成し遂げたのち、聖書で述べられているように、神の地上を罪と邪悪でみたしてしまうであろうという預言を暗示している。神の天罰が引き起こされ、旧約、および新約聖書、クルアーン、ハディスの神の偉大なる預言者の口から出された預言のごとく、広範囲にわたる災難が地上に下り、彼らが成し遂げるであろう全ての進歩、全ての作品、高尚かつ荘厳な建築物、土地の美しさ、全てのはなやかさ、栄光、そして壮大さは完全に破壊されることであろう。

注6　本節では、ほら穴の住人がなんら不可解なものではなかったことが、断言されている。普通の自然法からの逸脱と見做されるものは、彼らに関しては何もなかったのだ。だが、不思議なことに、多くの風変わりな伝説が、彼らを中心にして作り上げられてきたのだ。ギボンが、自らの“ローマ帝国の堕落と没落”の中で語ったように、記憶すべき物語、“7人の眠れる者たち”が、ほら穴の住人たちを取り巻く神秘の解決への重大な手がかりを提供している。ギボンは次のように語っている。“デキウス皇帝がキリスト教徒を処刑した際、エフェソスの7人の高貴な若者は、隣の山腹の広々とした洞窟に潜伏した。彼らは、暴君により滅びる運命だったのだ。暴君は、洞窟の入り口を巨大な石を積み重ねてしっかり閉ざすよう命令した。初期のキリスト教徒が、神の唯一性を信じていたため、偶像崇拝者であるローマ皇帝の手による数えきれないほどの処刑を受けねばならなかったということは、今や有名な歴史的事実である。この処刑は，ローマに火をつけたと言われる悪名高きネロ皇帝の時代に早くも、始まったのだ。偉大なる学問および文明の府が燃えた際に、彼はぶらぶらしていたのである。この処刑は、約40年間の短い休止期間の後まで断続的に続いたのち、古代ローマの宗教や組織を復活させたいと願ったデモウス皇帝のもとで新たなる怒りと共に再開された。そして、この目的を考慮し、キリスト教徒の系統的絶滅を始めたのだ。しかしながら、全ての反キリスト教徒法案をしのいだのは、西暦303年のディオクレティアヌスの布告であった。これらの布告により、帝国の全地方のキリスト教教会は破壊され、彼らの神聖なる書物は公に燃やされ、教会の所有物は没収され、キリスト教徒は、土地の保護から除外されてしまったのだ。”（キボン著ローマ帝国, Enc. Brit, Story of Rome)。この残酷で非人間的な処刑からのがれるため、無力な犠牲者たちは、ローマのカタコンベへ逃げ込み、隠れたのだった。このような目的のために、これらのカタコンベは、迷路のような通り道の複雑さ、暗やみの中でも追跡者に発見されないと思われる多くの小部屋、いろんな高さにある隠れ場所により、みごとに改造された。カタコンベの墓石上の碑銘から、初期のキリスト教徒は厳格な一神教信者であったことがうかがわれる。イエスは、羊飼い、または神の預言者として

11．あの若者たちが洞窟の中に逃れて、云えり、「主よ、御手ずから我等に慈悲を垂れ、我等の仕事に正しい導きを授け給え」と。

إِذْ أَوَى الْفِتْيَةُ إِلَى الْكَهْفِ فَقَالُوا رَبَّنَا آتِنَا مِنْ لَدُنْكَ رَحْمَةً وَهَيِّئْ لَنَا مِنْ أَمْرِنَا رَشَدًا ⑪

12．かくてわれらは、洞窟の中で、長年にわたり彼等の耳を封じたり。（注７）

فَضَرَبْنَا عَلَىٰ آذَانِهِمْ فِي الْكَهْفِ سِنِينَ عَدَدًا ⑫

13．然る後、われらと彼等を喚び覚まし、両者のどちらがよく彼等の滞在期間を計算するかを知らんとせり。（注８）

ثُمَّ بَعَثْنَاهُمْ لِنَعْلَمَ أَيُّ الْحِزْبَيْنِ أَحْصَىٰ لِمَا لَبِثُوا أَمَدًا ⑬

第二項

14．われら真実を以て、彼等の話を汝に語らん。彼等は主を信ずる若者たちならば、（注９）われらも彼等の導きを倍加せり。

نَحْنُ نَقُصُّ عَلَيْكَ نَبَأَهُمْ بِالْحَقِّ ۚ إِنَّهُمْ فِتْيَةٌ آمَنُوا بِرَبِّهِمْ وَزِدْنَاهُمْ هُدًى ⑭

のみ言及されてきたし、彼の母マリアも、信心深い女性として言及されているのみである。また、カタコンベに避難したキリスト教徒は、見知らぬ人の接近をほえ声で知らせてくれる犬を入り口に置いていたように思われる。このように、ほら穴の住人の説明は実際初期のキリスト教徒の歴史を表すものであり、彼らが、神の唯一性を信じているがために、いかに多くの処刑を受けなければならなかったかを示すものである。ほら穴の場所と描写は、18節で見られるように第2次的に重要なものなのだ。そしてその場所と描写は、他のどの場所よりも完全に、より細かな詳細、正確さにおいてローマのカタコンベに当てはまるのである。

ほら穴の住人の物語はまた、アリミティヤのヨセフや彼の仲間たちにも当てはまると考えられ得る。アームズベリーのウィリアムによれば、ヨセフは、聖ピリポによりイギリスに派遣され、サマーセットシャーの小さな島を与えられ、そしてそこに、よじれた小枝でイギリスで初めてのキリスト教教会を建設したが、その教会はのちに、グランストンベリーの修道院となったということである。また別の説明によると、ヨセフは西暦63年にイギリスにさまよい込んだということになっている。伝説によれば、グラストンベリーの最初の教会は、聖ピリポにより、ガリアからイギリスへと派遣された12使徒の指導者であるアリミティヤのヨセフが建設した編み枝でつくられた小さな建物であったらしい(Enc. Brit., 第10版、13版“アリミティヤのヨセフ”および“グラストンベリー”参照)。最新の理論もまた、“死海文書”の研究から強力な支持が得られるのだが、その理論では、初期のキリスト教徒が、避難し自らの信念や教訓を書きつけたほら穴の場所を死海付近の谷だとしてい

“ほら穴”と“碑銘”が、キリスト教徒の信仰の２つの最も顕著な側面を表している。すなわち、キリスト教は、拒絶の宗教、世界から身をひそめる宗教として始まり、最後には世の中の事柄に完全に没頭する宗教、著作や碑銘の世界においてはビジネスおよび貿易の宗教となるに至ったということなのだ。

注７　文字どおり、本節は‘我々は、いかなる音であれ、彼らの耳に入り込ませはしなかった’ということを意味する。すなわち、長年にわたり、彼らは外界の出来事からは完全に孤立したままで、外界で何が起こっているかなど、知るよしもなかったのだ。

注８　初期のキリスト教徒の間には、派が２つ存在したようであった。(1)しらばくれたり偽り隠したりすることをいやがり、不信仰や偶像崇拝と妥協するすべも知らない人たちは自らの信仰のため、忍耐強く毅然として、迫害を受けた。この人たちは、ほら穴へ逃げ込まねばならなかった。(2)思慮分別も勇気の重要な一部であると考えた人たちは、自らの信仰を隠し、迫害からのがれた。“２派”という言葉はまた、迫害者と迫害された者をも指す。

注９　本節は、多くの異様な話が、聖なる預言者の時代にほら穴の住人に関して流されていたことを示している。しかしながら、彼らは自らの主のために全てを投げうち、自らの信仰ゆえに着実に迫害への途をたどったという高貴なふるまいの持ち主たる若者だったというところが、彼らに関する真実なのである。

15. 而して、われら、彼等の心を堅固ならしめるや、（注 10）彼等起ちて、云えり、「我等の主は、天地の主なり。我等断じて彼の外に如何なる神も祈らず。もし祈らば、途方もないことを口にしたことなり。

وَّرَبَطْنَا عَلٰى قُلُوْبِهِمْ اِذْ قَامُوْا فَقَالُوْا رَبُّنَا رَبُّ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ لَنْ نَّدْعُوَا۠ مِنْ دُوْنِهٖۤ اِلٰهًا لَّقَدْ قُلْنَاۤ اِذًا شَطَطًا ﴿۱۵﴾

16. これ等我が民は、アッラー以外に他神を崇拝す。（注 11）何故彼等は、一つの明証だに無きにもかかわらず、崇拝するや？アッラーについて偽りを捏造する者よりも悪逆な者が果たしてあろうか？

هٰۤؤُلَآءِ قَوْمُنَا اتَّخَذُوْا مِنْ دُوْنِهٖۤ اٰلِهَةً ؕ لَوْلَا يَاْتُوْنَ عَلَيْهِمْ بِسُلْطٰنٍۭ بَيِّنٍ ؕ فَمَنْ اَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرٰى عَلَى اللّٰهِ كَذِبًا ﴿۱۶﴾

17. ところで、お前たち、彼等や彼等がアッラー以外に崇める者から身を退いたなら、洞窟へ避難せよ。（注 12）主はその慈悲をお前たちに広げ、このお前たちの事態を善処せん」と。

وَاِذِ اعْتَزَلْتُمُوْهُمْ وَمَا يَعْبُدُوْنَ اِلَّا اللّٰهَ فَاْوٗۤا اِلَى الْكَهْفِ يَنْشُرْ لَكُمْ رَبُّكُمْ مِّنْ رَّحْمَتِهٖ وَيُهَيِّئْ لَكُمْ مِّنْ اَمْرِكُمْ مِّرْفَقًا ﴿۱۷﴾

18. 汝は、日がその昇る時は洞窟の右方に移動し、その没する時は彼等から左に遠ざかり行くを見たり。彼等は洞中の広場に居たり。（注 13）これ、アッラーの神兆の一つなり。アッラーが導き給う者のみ正しい道を辿れども、迷うにまかせた者には、汝、如何なる助け手もないことを知るべし。

وَتَرَى الشَّمْسَ اِذَا طَلَعَتْ تَّزٰوَرُ عَنْ كَهْفِهِمْ ذَاتَ الْيَمِيْنِ وَاِذَا غَرَبَتْ تَّقْرِضُهُمْ ذَاتَ الشِّمَالِ وَهُمْ فِيْ فَجْوَةٍ مِّنْهُ ؕ ذٰلِكَ مِنْ اٰيٰتِ اللّٰهِ ؕ مَنْ يَّهْدِ اللّٰهُ فَهُوَ الْمُهْتَدِ ۚ وَمَنْ يُّضْلِلْ فَلَنْ تَجِدَ لَهٗ وَلِيًّا مُّرْشِدًا ﴿۱۸﴾

注 10　人々は、彼らに反対し、冷酷にも彼らを迫害したが、ほら穴の住人は、おどされ、自らの宗教を捨てるなどということはあり得なかった。神は、彼らの心を強固なものにし、彼らに堅固たる信仰を授けた。

注 11　ほら穴の住人は、偶像崇拝をしていたローマ人により迫害されていた。

注 12　本節では、一神教の若者たちは、個人個人が離れ離れになっているのではなく、その構成員がしばしば私生活において顔を合わすような組織化がされ、統制された宗教社会の一部となっているのだという事実が、明るみに出されている。これらの若者たちが、ほら穴に避難することを話す際に、彼らは特定のほら穴を心に留めていたということを、本節は示している。このほら穴は、ローマの奴隷が己の残酷な主人から逃亡してきた折に、避難場所として常に使用していたものと思われる。“そして、なんじらは彼らから逃れた今や”という語は、彼らがすでに厳しい社会的排斥の犠牲者となり、自らの別個の集団で人々から離れて生活していたということを物語っている。

注 13　ほら穴は、北西向きに位置していたと思われる。というのも、太陽が、北向きの場所を右から左へと通過するからである。‘広々とした穴’という語が示すように、ほら穴は、広い領域にわたっていたようであった。現存するローマのカタコンベが、この説を確証している。カタコンベは広い領域を囲うが、870 マイル（約 1400 km）にまでも及ぶと推定されてきた（Enc. Brit）。また、カタコンベにはほとんど光は入らなかったように思われる。ほら穴は、隠れ場所としての役割を果たすようにつくられた。聖ジェロームは、4 世紀にカタコンベを

第三項

19. 汝、彼等が目覚めていると思うだろうが、(注14) さにあらず、眠りおる。われらは彼等に、右と左に寝返りを打たせ、(注15) 犬もその入口で前脚を伸ばし臥す。(注16) 人もし彼等を見なば、仰天して彼等から逃げ、必ずや彼等を恐れる心に満されん。(注17)

وَتَحْسَبُهُمْ أَيْقَاظًا وَهُمْ رُقُودٌ ۚ وَنُقَلِّبُهُمْ ذَاتَ الْيَمِينِ وَذَاتَ الشِّمَالِ ۖ وَكَلْبُهُمْ بَاسِطٌ ذِرَاعَيْهِ بِالْوَصِيدِ ۚ لَوِ اطَّلَعْتَ عَلَيْهِمْ لَوَلَّيْتَ مِنْهُمْ فِرَارًا وَلَمُلِئْتَ مِنْهُمْ رُعْبًا ﴿١٩﴾

20. かくてわれらは、彼等を目覚めさせると、彼等互に相い尋ねたり。中の一人が「お前たちどれほどここにとどまりしか?」と問えり。彼等は答えり、「我等が居たのは一日か、或いは数刻なり」と。他の者は云えり、「どれほど居たのか、最も良く知る者は主なり。ともかく、誰かに、この銀貨を持たせて町に遣り、最も清潔なる食物を (注18) 売る住民を探させて、彼にそこから食糧を運ばせよ。彼に慎重に振舞わさせ、(注19)

وَكَذَٰلِكَ بَعَثْنَاهُمْ لِيَتَسَاءَلُوا بَيْنَهُمْ ۚ قَالَ قَائِلٌ مِنْهُمْ كَمْ لَبِثْتُمْ ۖ قَالُوا لَبِثْنَا يَوْمًا أَوْ بَعْضَ يَوْمٍ ۚ قَالُوا رَبُّكُمْ أَعْلَمُ بِمَا لَبِثْتُمْ فَابْعَثُوا أَحَدَكُمْ بِوَرِقِكُمْ هَٰذِهِ إِلَى الْمَدِينَةِ فَلْيَنْظُرْ أَيُّهَا أَزْكَىٰ طَعَامًا فَلْيَأْتِكُمْ بِرِزْقٍ مِنْهُ وَلْيَتَلَطَّفْ

訪れたがこのように語っている。"まっくらなので、ダビデ預言者の"生けるまま地獄に下らんことを"(詩篇55章15節)という言葉が果たされそうでと。"ほんの時折、薄暗がりの恐怖を和らげるべく、光が入れられるが、それも窓を通してというよりは、穴を通してなのである (Enc. Brit., 第11版よりの引用)。

注14　北方のキリスト教国家は、休止状態にあるが、まもなく何世紀にも及ぶ深い眠りから目覚め、世界じゅうに分散し、世界を支配するようになるであろうと、聖なる預言者の時代に、イスラム教徒たちは警告された。

注15　"我々は彼らをして、右に左に寝返りを打たせる"という語は、彼らが世界を歩き回り、新たな市場を求めてあらゆる方向に分散し、新たな征服を成し遂げることをさしているように思われる。

注16　この語は、西洋のキリスト教国家では犬がこの上なく好まれたということを示すのに加え、マルモラ海の両側でヨーロッパを警戒し、その姿が、犬が前肢を前方に伸ばして、両側を見張っているような様相のビザンチン帝国をさしているともとれる。

注17　この語は、西洋のキリスト教国家が、強大な政治権力を獲得せんとする時代をさしている。クルアーンでは、キリスト教国家がまだ何世紀にも及ぶ深い眠りに陥り、いかに想像力を駆使しようとも、彼らが、その後手にした権力や栄光を予知することは不可能に思われた何百年も昔に、この事実を預言していたのだ。本節では、西洋国家の東方、南方の土地に及ぶ支配の特徴的な像、彼ら特有の生活様式、彼らがそういった地域の人々の間に引き起こした恐怖と畏敬の念、すべてが述べられている。

注18　ほら穴の住人は、自分たちへの迫害の波が和らいだのを見、食料を買い、自分たちに対する状況を把握するため、仲間のひとりに古いコインを何枚か持たせて、町に向かわせた。ここでの「食品」は、小麦、大麦、きび、なつめやし等の食料品を意味する。このことは、西洋国家による世界のあらゆる地域への商業的遠征に言及しているのである。

誰にも我等のことは気づかせるな。(注 20)

وَلَا يُشْعِرَنَّ بِكُمْ أَحَدًا ٢٠

21. もし彼等がお前たちを知らば、彼等はお前たちを石撃ちにするか、彼等の宗教に引き戻さんとす。然る時は、お前たち決して栄えざるべし」と。

إِنَّهُمْ إِن يَظْهَرُوا عَلَيْكُمْ يَرْجُمُوكُمْ أَوْ يُعِيدُوكُمْ فِي مِلَّتِهِمْ وَلَن تُفْلِحُوا إِذًا أَبَدًا ٢١

22. かくの如く、われら彼等にこの人たちのことを明らかにせり。そは、之によって、アッラーの約束が真実なることを彼等に知らしめ、且つ該の時について、疑いなきことを知らしめんがためなりき。思い起せ、その時彼等は互に論争して、「彼等の上に一堂を建てん」と云いしことを。主は彼等を最も良く知り給う。この論争に勝利せる人々は云えり、「我等は必ず彼等の上に礼拝堂を建立せん」と。

وَكَذَٰلِكَ أَعْثَرْنَا عَلَيْهِمْ لِيَعْلَمُوا أَنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ وَأَنَّ السَّاعَةَ لَا رَيْبَ فِيهَا إِذْ يَتَنَازَعُونَ بَيْنَهُمْ أَمْرَهُمْ فَقَالُوا ابْنُوا عَلَيْهِم بُنْيَانًا رَّبُّهُمْ أَعْلَمُ بِهِمْ قَالَ الَّذِينَ غَلَبُوا عَلَىٰ أَمْرِهِمْ لَنَتَّخِذَنَّ عَلَيْهِم مَّسْجِدًا ٢٢

23. 或る者は云う、「彼等は三人なりき、四番目は犬なり」と。また、他の者は当て推量で「彼等は五人なりき、六番目は犬なり」と云う。而して、更に他の者は云う、「彼等は七人なりき、八番目は犬なり」と。云え、「我が主が最も良くその数を知る。僅かな者を除いて、彼等を知る者はなし」と。されば、彼等について、反駁し得ざる論議以外は、議論するなかれ。また、彼等の誰にも、これについて問うなかれ。(注 21)

سَيَقُولُونَ ثَلَاثَةٌ رَّابِعُهُمْ كَلْبُهُمْ وَيَقُولُونَ خَمْسَةٌ سَادِسُهُمْ كَلْبُهُمْ رَجْمًا بِالْغَيْبِ وَيَقُولُونَ سَبْعَةٌ وَثَامِنُهُمْ كَلْبُهُمْ قُل رَّبِّي أَعْلَمُ بِعِدَّتِهِم مَّا يَعْلَمُهُمْ إِلَّا قَلِيلٌ فَلَا تُمَارِ فِيهِمْ إِلَّا مِرَاءً ظَاهِرًا وَلَا تَسْتَفْتِ فِيهِم مِّنْهُمْ أَحَدًا ٢٣

第四項

24. 何事によらず、「我それを明日なさん」と云うなかれ、

وَلَا تَقُولَنَّ لِشَيْءٍ إِنِّي فَاعِلٌ ذَٰلِكَ غَدًا ٢٤

注 19　ヨーロッパの商売人は、商業取引において、穏やかさや礼儀正しさを保つ特別なこつを身につけている。この彼らの特質については、ここでの表現を“彼を礼儀正しくさせておけ”と解釈することにより、十分言及されていることがわかる。そして、この表現は‘彼に注意深いふるまいをさせよ’という意味でもある。

注 20　「誰にも我等のことは気づかせるな」という語は東洋において西洋の影響が、静かにそっと浸透していくことを意味している。

注 21　これらの推測は、カタコンベの小部屋の壁の碑銘に基づいているようである。しかし、各々の碑銘は特定の家族、派、集団についてのみの言及があるにすぎない。さまざまな折りに、カタコンベに避難した人々の総数は、知られていない。碑銘から、犬が常に、避難民の一派に同伴したと思われる。

إِلَّا أَن يَشَاءَ اللَّهُ وَاذْكُر رَّبَّكَ إِذَا نَسِيتَ وَقُلْ
عَسَىٰ أَن يَهْدِيَنِ رَبِّي لِأَقْرَبَ مِنْ هَٰذَا رَشَدًا ﴿٢٥﴾

25. もしアッラーの思し召しならば、と附加せずして。汝もしこれを忘れたる時は、主を念じて云え、「主よ、願わくは我をこれよりも正しい道に近づけたまえ」と。

وَلَبِثُوا فِي كَهْفِهِمْ ثَلَاثَ مِائَةٍ سِنِينَ وَ
ازْدَادُوا تِسْعًا ﴿٢٦﴾

26. さて、彼等が洞窟の中に居たのは、三百年と、更に加えて九年なり。（注 22）

قُلِ اللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا لَبِثُوا لَهُ غَيْبُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ
أَبْصِرْ بِهِ وَأَسْمِعْ مَا لَهُم مِّن دُونِهِ مِن وَلِيٍّ
وَلَا يُشْرِكُ فِي حُكْمِهِ أَحَدًا ﴿٢٧﴾

27. 云え、「アッラーは彼等が如何に長く滞在したか最も良く知り給う」と。（注 23）天地の神秘は、すべて彼に属す。なんと彼はすべてを見透し、且つ聞こしめすことよ！（注 24）彼等はアッラー以外に如何なる助け手も持たず、また彼は、何人にもその審判を分担させることなし。

وَاتْلُ مَا أُوحِيَ إِلَيْكَ مِن كِتَابِ رَبِّكَ لَا مُبَدِّلَ
لِكَلِمَاتِهِ وَلَن تَجِدَ مِن دُونِهِ مُلْتَحَدًا ﴿٢٨﴾

28. 汝に啓示されたる主の経典を読誦せよ。何人もその言葉を変える能わず。また、汝は、彼以外に避難所を見出せざるべし。

وَاصْبِرْ نَفْسَكَ مَعَ الَّذِينَ يَدْعُونَ رَبَّهُم بِالْغَدَاةِ
وَالْعَشِيِّ يُرِيدُونَ وَجْهَهُ وَلَا تَعْدُ عَيْنَاكَ عَنْهُمْ
تُرِيدُ زِينَةَ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَلَا تُطِعْ مَنْ
أَغْفَلْنَا قَلْبَهُ عَن ذِكْرِنَا وَاتَّبَعَ هَوَاهُ
وَكَانَ أَمْرُهُ فُرُطًا ﴿٢٩﴾

29. 朝な夕な、主に祈る人たちにならって、汝も彼の喜悦を求め続けよ。現世の栄華を求めて、彼等から目をそらすなかれ。また、われらが、その心にわれらを念ずることを軽視させた者、並びに下劣な欲望を追い求める者に従うなかれ。かかる者は、掟にそむけり。

注 22　初期のキリスト教徒が迫害を受け、しばしば、ほら穴や他の隠れ場所に避難していた期間は、およそ309 年にも及び、歴史的資料により、この数字は確証されてきた。一般に信じられているように、キリスト教徒の迫害は、西暦 28 年のイエスのはりつけに始まり、約 309 年を経た西暦 337 年に、コンスタンチヌス大帝がキリスト教に改宗したことにより幕を閉じたのであった。(Enc. Brit)コンスタンチヌス大帝が、改宗したのは西暦 337 年ではなく、 西暦 309 年であった。はりつけの悲劇を、一般に信じられているよりも 28 年おそくおこったのだ (Chronologh; Archbishop Ushers 著とDaily Bible Illustrations; Dr. Kitto著)。

注 23　初期のキリスト教徒は、いろんな時代に多くの場所、たとえばローマ、アレクサンドリア等で、迫害されてきた。彼らは、さまざまな時に、さまざまな期間にわたり、ほら穴やカタコンベに避難することを余儀なくされた。カタコンベにおける彼らの滞在が、唯一の不断のエピソードだというわけではなかった。そのような滞在の期間全ての正確な長さは、アッラーのみが知るところである。

注 24　この語はまた次のような意味をもつ。‘神の視界は、よどみなく、神の聴覚は鋭い’つまり、‘神は全てを見、全てを聞くのである’ということなのだ。

30．云え、「真理は主より来たる。されば、信ずるも、信ぜざるも、その者の意志なり」と。げにわれらは、悪人どもに、燃えさかる天蓋に囲まれるべく火を用意せり。彼等助けを求めて叫ぶれば、どろどろに溶けた鉛が浴びせられ、その顔を焼かん。なんと恐ろしきかなその飲物たるや、なんと不幸なるかな火獄の休み処よ！

وَقُلِ الْحَقُّ مِنْ رَّبِّكُمْ فَمَنْ شَآءَ فَلْيُؤْمِنْ وَّمَنْ شَآءَ فَلْيَكْفُرْ إِنَّآ أَعْتَدْنَا لِلظّٰلِمِيْنَ نَارًا أَحَاطَ بِهِمْ سُرَادِقُهَا وَإِنْ يَّسْتَغِيْثُوْا يُغَاثُوْا بِمَآءٍ كَالْمُهْلِ يَشْوِي الْوُجُوْهَ بِئْسَ الشَّرَابُ وَسَآءَتْ مُرْتَفَقًا ﴿٣٠﴾

31．信じて善行を積む者には―われらは善行を積む者の報奨は決して忘れはせぬ。

إِنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ إِنَّا لَا نُضِيْعُ أَجْرَ مَنْ أَحْسَنَ عَمَلًا ﴿٣١﴾

32．それ等の者には永遠(とこしえ)の楽園ありて、河川その下を流る。彼等その中(うち)に在りて黄金の腕環(うでわ)で飾られ、絹や錦(にしき)の緑衣をまとい、寝椅子にもたれかからん。なんと素晴らしき報奨なるかな、なんと結構な休み処よ！

أُولٰٓئِكَ لَهُمْ جَنّٰتُ عَدْنٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهِمُ الْأَنْهٰرُ يُحَلَّوْنَ فِيْهَا مِنْ أَسَاوِرَ مِنْ ذَهَبٍ وَّيَلْبَسُوْنَ ثِيَابًا خُضْرًا مِّنْ سُنْدُسٍ وَّإِسْتَبْرَقٍ مُّتَّكِئِيْنَ فِيْهَا عَلَى الْأَرَآئِكِ نِعْمَ الثَّوَابُ وَحَسُنَتْ مُرْتَفَقًا ﴿٣٢﴾

第五項

33．彼等に二人の男の比喩を述べよ。(注 25)われらはその一人に、葡萄園を与え、そのまわりに棗椰子(なつめやし)を植えめぐらし、その間に穀物の畑を設けたり。

وَاضْرِبْ لَهُمْ مَّثَلًا رَّجُلَيْنِ جَعَلْنَا لِأَحَدِهِمَا جَنَّتَيْنِ مِنْ أَعْنَابٍ وَّحَفَفْنٰهُمَا بِنَخْلٍ وَّجَعَلْنَا بَيْنَهُمَا زَرْعًا ﴿٣٣﴾

34．両園とも豊かな果実を産し、いささかも欠乏することなかりき。而(しか)して、われらは両園の間に川も流したり。(注 26)

كِلْتَا الْجَنَّتَيْنِ اٰتَتْ أُكُلَهَا وَلَمْ تَظْلِمْ مِّنْهُ شَيْئًا وَّفَجَّرْنَا خِلٰلَهُمَا نَهَرًا ﴿٣٤﴾

35．されば、彼は豊かな収穫を獲(え)たり。或る日、彼は自慢して、友に向って云えり、「我は汝

وَّكَانَ لَهُ ثَمَرٌ فَقَالَ لِصَاحِبِهِ وَهُوَ يُحَاوِرُهُ

注 25　本節は、たとえ話の形で、2種類の人々――キリスト教徒とイスラム教徒の状態を語っているが、"2人の男"というのは、これら2種類の人間を表し、"2つの庭"はキリスト教徒国家繁栄の2時代を表している。最初の時代は、イスラム教の出現に先立ち、2度目の時代は、ヨーロッパのキリスト教国家が、大いに進歩を遂げ、19世紀に頂点に達した先例のない権力と名声を獲得し始めた西暦17世紀の幕あけとととともに始まったのだ。

注 26　川の流れは、聖なる預言者の時代を表している。聖なる預言者を通して、モーゼやイエスの真の教訓の一部が、保存された。

より裕福にして、眷族（けんぞく）も汝より多数なり」と。（注 27）

أَنَا أَكْثَرُ مِنكَ مَالًا وَأَعَزُّ نَفَرًا ﴿٣٥﴾

36．彼は邪心を抱いて己が園に入れり。彼は云えり、「我はこの園がいつか荒廃に帰すべしとは思わず。（注 28）

وَدَخَلَ جَنَّتَهُ وَهُوَ ظَالِمٌ لِّنَفْسِهِ قَالَ مَا أَظُنُّ أَن تَبِيدَ هَٰذِهِ أَبَدًا ﴿٣٦﴾

37．而（しか）して、また、該（か）の時が来るべしとも思わず。たとい主の許（もと）に連れ戻されるとも、我は必ずこれに優る良い場所（ところ）を得ん」と。

وَمَا أَظُنُّ السَّاعَةَ قَائِمَةً وَلَئِن رُّدِدتُّ إِلَىٰ رَبِّي لَأَجِدَنَّ خَيْرًا مِّنْهَا مُنقَلَبًا ﴿٣٧﴾

38．その友、彼に抗して云えり、「汝は、最初土より汝を創り、次いで一滴の精液より、更に完全な人間の形に仕上げ給うた御方を信ぜざるか？

قَالَ لَهُ صَاحِبُهُ وَهُوَ يُحَاوِرُهُ أَكَفَرْتَ بِالَّذِي خَلَقَكَ مِن تُرَابٍ ثُمَّ مِن نُّطْفَةٍ ثُمَّ سَوَّاكَ رَجُلًا ﴿٣٨﴾

39．なれど、我に関するかぎりでは、アッラーのみが我が主なり。されば、我、主と偕（とも）に如何なる者も併（あわ）せ祀（まつ）らず。

لَّٰكِنَّا هُوَ اللَّهُ رَبِّي وَلَا أُشْرِكُ بِرَبِّي أَحَدًا ﴿٣٩﴾

40．汝が、己れの葡萄園に入りし時、何故『すべてはアッラーの御意志のまま。権能（みちから）はただアッラーに存す』と云わざりしか？たとい汝、我を財力と子孫（こら）とに於て、汝より劣ると見るとしても。

وَلَوْلَا إِذْ دَخَلْتَ جَنَّتَكَ قُلْتَ مَا شَاءَ اللَّهُ لَا قُوَّةَ إِلَّا بِاللَّهِ إِن تَرَنِ أَنَا أَقَلَّ مِنكَ مَالًا وَوَلَدًا ﴿٤٠﴾

41．恐らく主は、我に何時か汝の園に優る何かを授け給わん。（注 29）而（しか）して、汝の園には天から雷（いかずち）を投じ、不毛の荒野に帰せしめん。（注 30）

فَعَسَىٰ رَبِّي أَن يُؤْتِيَنِ خَيْرًا مِّن جَنَّتِكَ وَيُرْسِلَ عَلَيْهَا حُسْبَانًا مِّنَ السَّمَاءِ فَتُصْبِحَ صَعِيدًا زَلَقًا ﴿٤١﴾

注 27　強力で富裕なキリスト教国家は、貧しく力のないイスラム教徒を、貧困、および、物質資源の欠乏のために、軽蔑し、あざけった。

注 28　自らの物質的進歩に誇りを抱き、西洋キリスト教国家は、楽でぜいたくな生活にふけっているのである。そして、うぬぼれと横柄さから、自分たちの権力、進歩、繁栄が永久に続くのだと誤解している。また、だまされて、安心、自己満足しているため、彼らは罪と邪悪の生活に全く迷い込んでしまうことになるのである。

注 29　本節および 36、40 節では 2 つの庭（33 節）のうち、1 つはイスラム以前に実際、消滅したため、ひとつの庭のみについて述べられている。キリスト教徒にとって最大の誇りの源となった庭は、イスラム後に栄えた庭――彼らの現在の大いなる物質的進歩と権力なのである。

注 30　'天から'という語は、いかなる地上の力も、西洋のキリスト教国家の軍事力に実際上、抵抗し戦うことができないことを示している。神自身が、彼らの破滅を引き起こすような状況を生み出すのである。

42．或いは、園内の水が地面深く浸透し、(注31) 地下水を見出し得ざるべし」と。

أَوْ يُصْبِحَ مَآؤُهَا غَوْرًا فَلَنْ تَسْتَطِيْعَ لَهٗ طَلَبًا ﴿۴۲﴾

43．果せるかな、彼の果実は絶滅せり。彼は葡萄園につぎ込んだものを想い、両手を堅く握って嘆き悲しめり。葡萄園は葡萄棚もろとも倒潰せり。(注32) 而して、彼は云えり、「我もし我が主と偕に、何者をも配せざりしなば！」と。

وَاُحِيْطَ بِثَمَرِهٖ فَاَصْبَحَ يُقَلِّبُ كَفَّيْهِ عَلٰى مَآ اَنْفَقَ فِيْهَا وَهِيَ خَاوِيَةٌ عَلٰى عُرُوْشِهَا وَيَقُوْلُ يٰلَيْتَنِيْ لَمْ اُشْرِكْ بِرَبِّيْٓ اَحَدًا ﴿۴۳﴾

44．彼にはアッラーに逆って助けてくれる衆とてなく、また己れ自身も護り得ざりき。

وَلَمْ تَكُنْ لَّهٗ فِئَةٌ يَّنْصُرُوْنَهٗ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ وَمَا كَانَ مُنْتَصِرًا ﴿۴۴﴾

45．かかる場合に於ける加護は、真実者アッラーからのみ来る。彼は最良の報奨者にして、最善の結果を降し給う。

هُنَالِكَ الْوَلَايَةُ لِلّٰهِ الْحَقِّ هُوَ خَيْرٌ ثَوَابًا وَّ خَيْرٌ عُقْبًا ﴿۴۵﴾

第六項

46．また、彼等に、現世の生活を譬え話で述べよ。そは、われらが空から降す水の如し。大地の草木はそれを混じて成育するも、やがて風に吹き散らされん枯れ草の破片となる。(注33) げにアッラーは、万事を支配す。

وَاضْرِبْ لَهُمْ مَّثَلَ الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا كَمَآءٍ اَنْزَلْنٰهُ مِنَ السَّمَآءِ فَاخْتَلَطَ بِهٖ نَبَاتُ الْاَرْضِ فَاَصْبَحَ هَشِيْمًا تَذْرُوْهُ الرِّيٰحُ وَكَانَ اللّٰهُ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ مُّقْتَدِرًا ﴿۴۶﴾

47．富や子女はこの世の生活の飾りなり。なれど、永続する善行こそ、アッラーの目には、即座の報奨の故に、また将来の希望が故に遥かに優るなり。

اَلْمَالُ وَالْبَنُوْنَ زِيْنَةُ الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا وَالْبٰقِيٰتُ الصّٰلِحٰتُ خَيْرٌ عِنْدَ رَبِّكَ ثَوَابًا وَّخَيْرٌ اَمَلًا ﴿۴۷﴾

48．われらが群山を動かす日をよく考えよ。汝はさまざまな民族が互に前に進むを見ん。

وَيَوْمَ نُسَيِّرُ الْجِبَالَ وَتَرَى الْاَرْضَ بَارِزَةً وَّحَشَرْنٰهُمْ

'何者も、彼らと戦う力はないであろう'(ムスリム　ダジャール書) と述べたと伝えられ、聖なる預言者が言及したのは、キリスト教の物質的栄光を象徴するゴグとマゴグのこの抵抗不可能な力である。

注31　クルアーンの言葉では、彼らの庭を新鮮で緑に保つと表現されている、彼らの偉大な手腕や知的才能の源は、これまで彼らの物質的進歩を支えてきたが、やがて干上がり、彼らの"園"は完全に荒廃してしまうことになるだろう。とこの節は示している。彼らの精神的な新鮮さの源もまた同様に干上がってしまうだろう。

注32　物質的富裕を維持しようとするキリスト教徒たちの全ての努力は、煙のごとく消え権力や名声は、またたく間に突然、傾くであろう。ついでながら、本節では、園は棚もろとも"倒れる"と示されてあるが現実にはそういうことはないため、これらの節で使われている"園"という語は、文字通りの意味で使われたのではないことを示している。

注33　なんと、適切で力強い、世俗生活のはかなさの表現なのだろうか！

而して、われらは彼等を集め、(注 34) ただの一人だに残しはせぬ。

فَلَمْ نُغَادِرْ مِنْهُمْ أَحَدًا ﴿٤٨﴾

49. 彼等並んで主の御前に拝謁させられん。「いまお前たちは、われらが最初創りし如く、(注 35) われらが前に来たれり。なれど、お前たちは、われらがお前たちに対する約束を履行するとは思わざりき」と彼等は云われん。

وَعُرِضُوا عَلَىٰ رَبِّكَ صَفًّا لَّقَدْ جِئْتُمُونَا كَمَا خَلَقْنَاكُمْ أَوَّلَ مَرَّةٍ ۚ بَلْ زَعَمْتُمْ أَلَّن نَّجْعَلَ لَكُم مَّوْعِدًا ﴿٤٩﴾

50. 而して、行状の記録が記された帳簿が彼等の前に提示され、汝は、悪人どもがその中に記されたことについて恐れおののく姿を見ん。而して、彼等は云わん、「ああ、こはなんたる帳簿ぞ！細大洩らさず記録して、余すところなし」と。而して、彼等は、己が為せる所業のすべてを顔前に突きつけられん。されば主は、何人も不公平には処遇せず。

وَوُضِعَ الْكِتَابُ فَتَرَى الْمُجْرِمِينَ مُشْفِقِينَ مِمَّا فِيهِ وَيَقُولُونَ يَا وَيْلَتَنَا مَالِ هَٰذَا الْكِتَابِ لَا يُغَادِرُ صَغِيرَةً وَلَا كَبِيرَةً إِلَّا أَحْصَاهَا ۚ وَوَجَدُوا مَا عَمِلُوا حَاضِرًا ۗ وَلَا يَظْلِمُ رَبُّكَ أَحَدًا ﴿٥٠﴾

第七項

51. われらが諸天使に向って、「アダムに対して平伏せよ」と云いし時のことを思い起せ。イブリースを除いて、彼等はみな従えり。イブリースは妖霊の仲間にして、主の命令に背きたり。然るに、お前たち、イブリースやその子孫をお前たちの敵だというに、わしの代りに仲間とせんとするか？不義者ども、その交換は災いなるぞ。

وَإِذْ قُلْنَا لِلْمَلَائِكَةِ اسْجُدُوا لِآدَمَ فَسَجَدُوا إِلَّا إِبْلِيسَ كَانَ مِنَ الْجِنِّ فَفَسَقَ عَنْ أَمْرِ رَبِّهِ ۗ أَفَتَتَّخِذُونَهُ وَذُرِّيَّتَهُ أَوْلِيَاءَ مِن دُونِي وَهُمْ لَكُمْ عَدُوٌّ ۚ بِئْسَ لِلظَّالِمِينَ بَدَلًا ﴿٥١﴾

52. われは天地の創造並びに彼等自身の創造にも、彼等を参与せしめざりき。(注 36) また、われは、人々を迷わせる徒輩の助けは借りはせぬ。

مَّا أَشْهَدتُّهُمْ خَلْقَ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَلَا خَلْقَ أَنفُسِهِمْ وَمَا كُنتُ مُتَّخِذَ الْمُضِلِّينَ عَضُدًا ﴿٥٢﴾

注 34　本節では、聖書の言葉により、'国家が国家に反抗して立ち上がり、王国が王国に反抗して立上がり、さまざまな場所で飢饉、疫病、地震が起こるとき（マタイ 24 章 7 節)、先の数節で述べられた悪の力、すなわちゴグとマゴグの完全なる破滅に関する預言が､果たされるであろうということが示されている。「彼らを集め」という表現は、彼らがお互いに向きあって、戦闘隊形をとって集まり、あくまで戦うことを意味している。

注 35　この言葉は、彼らが全ての権力、権威を奪われ、以前のごとく服従と恥辱の状態に戻ることを余儀なくされてしまうことを意味している。

注 36　本節は、そのとき世界の恒久的平和と調和の時代を布告する新たな世界秩序について、一般に語られ、いわゆる政治的、社会的思考の指導者たちは、その確立を求め、主張するが、神が、この至高なる任務の成就を自らの仕事としたため、彼らは、努力を実らせることはできないであろうことを意味している。

53．「お前たちがわしの同位者と考えし神々を喚べ」と主が云わん、その日を想(おも)え。その日、彼等、いくら神々を喚べども、神々は彼等に応えざるべし、われらが両者の間に障壁を置いたがために。（注 37）

وَيَوْمَ يَقُولُ نَادُوا شُرَكَآءِيَ الَّذِينَ زَعَمْتُمْ فَدَعَوْهُمْ فَلَمْ يَسْتَجِيبُوا لَهُمْ وَجَعَلْنَا بَيْنَهُمْ مَوْبِقًا ﴿٥٣﴾

54．罪を犯せし者は業火(ごうか)を見、その中に投ぜられんことを悟るも、そこから逃れ去る術(すべ)なきことを知るべし。（注 38）

وَرَاَ الْمُجْرِمُونَ النَّارَ فَظَنُّوٓا اَنَّهُمْ مُّوَاقِعُوهَا وَلَمْ يَجِدُوا عَنْهَا مَصْرِفًا ﴿٥٤﴾ ع ١٩

第八項

55．げにわれらは、人間に良かれかしと、このクルアーンの中で、さまざまに、あらゆる譬(たとえ)を引いて詳述せり。（注 39）然るに、人間とは、なんと議論好きなことよ。

وَلَقَدْ صَرَّفْنَا فِي هٰذَا الْقُرْاٰنِ لِلنَّاسِ مِنْ كُلِّ مَثَلٍ ؕ وَكَانَ الْاِنْسَانُ اَكْثَرَ شَيْءٍ جَدَلًا ﴿٥٥﴾

56．今嚮導(きょうどう)彼等に至れり。往古の民が被むりし先例が彼等の身に起るを望むか、それとも、懲罰の急襲に直面するを望むに非ずば、何者も、人々が信仰し、主の宥恕(ゆうじょ)を求めることを妨げるを得ず。

وَمَا مَنَعَ النَّاسَ اَنْ يُّؤْمِنُوٓا اِذْ جَآءَهُمُ الْهُدٰى وَيَسْتَغْفِرُوا رَبَّهُمْ اِلَّآ اَنْ تَاْتِيَهُمْ سُنَّةُ الْاَوَّلِينَ اَوْ يَاْتِيَهُمُ الْعَذَابُ قُبُلًا ﴿٥٦﴾

57．われらは、朗報伝達者として、また警告者に非ずば、使徒たちを遣わさず。然(しか)るに、信ぜざる者どもは虚偽を以て論争し、真理をしりぞけんとす。而(しか)して彼等は、わが神兆(しるし)と彼等への警告を嘲笑す。

وَمَا نُرْسِلُ الْمُرْسَلِينَ اِلَّا مُبَشِّرِينَ وَمُنْذِرِينَ ۚ وَيُجَادِلُ الَّذِينَ كَفَرُوا بِالْبَاطِلِ لِيُدْحِضُوا بِهِ الْحَقَّ وَاتَّخَذُوٓا اٰيٰتِي وَمَآ اُنْذِرُوا هُزُوًا ﴿٥٧﴾

58．その主の神兆(しるし)を気づかせられながら、之(これ)に背き、また己が手が先に送りしものを忘れるよりも更に悪(あ)しき者あるや？げにわれら

وَمَنْ اَظْلَمُ مِمَّنْ ذُكِّرَ بِاٰيٰتِ رَبِّهِ فَاَعْرَضَ عَنْهَا وَنَسِيَ مَا قَدَّمَتْ يَدٰهُ ؕ اِنَّا جَعَلْنَا عَلٰى قُلُوبِهِمْ

注 37　本節は、これらの国家が高い関税障壁、鉄のカーテンを張りめぐらせ、お互いに経済ボイコットをなすことを意味している。または、彼らが破滅に至る致命的な戦争にまきこまれることを意味しているともとれる。

注 38　西洋の不信仰国家は、多大な破壊力を誇る戦争の接近に遭遇するであろう。彼らは、あらゆる手段に訴えて、それを避けようととするが、そのための彼らの計画や努力は全て、むだになるであろう。西洋はすでに、世界における西洋の政治的支配、名声を破壊されるところであり、また西洋文明をその基盤までゆるがした２度にわたる最も破壊的な戦争のきびしい試練をくぐり抜けてきたのだ。第３の大虐殺が西洋を、いやおそらくは全世界のぞき込んで入る。

注 39　本節は、以下のことを意味する。(1)全ての神の創造物の中で、人間は、理性と知的能力を授けられてきた。しかしながら残念なことに、人間は、その真実を拒否し、他の邪悪な目的を遂行するために使っているのだ。(2)また、人間は、慢性的な不安と疑いの犠牲者であり、めったに満足することがない。そして、常に疑い深いため、最も確信のもてる論議においてさえ、逃げ道を見つけだそうとするという意味だともとれる。

は、彼等の心に覆いをかけたれば、彼等は神兆を理解せず、その耳もつんぼなり。されば、たとい汝が彼等を導きのために呼びかけるとも、彼等は決して之を容認ざるべし。(注 40)

أَكِنَّةً أَن يَفْقَهُوهُ وَفِي آذَانِهِمْ وَقْرًا ۖ وَإِن تَدْعُهُمْ إِلَى الْهُدَىٰ فَلَن يَهْتَدُوا إِذًا أَبَدًا ﴿٥٨﴾

59. 然るに、汝の主は寛大にして、情け深い御方にまします。彼もし彼等の積めし所業を以て誅せんと欲さば、彼等はたちどころに罰せられるべし。然しながら、彼等には定められた一期ありて、それより逃れ得る避難所を見出さざるべし。

وَرَبُّكَ الْغَفُورُ ذُو الرَّحْمَةِ ۖ لَوْ يُؤَاخِذُهُم بِمَا كَسَبُوا لَعَجَّلَ لَهُمُ الْعَذَابَ ۚ بَل لَّهُم مَّوْعِدٌ لَّن يَجِدُوا مِن دُونِهِ مَوْئِلًا ﴿٥٩﴾

60. これ等の邑々を―われらは彼等が邪悪を犯したがために滅ぼせり。しかし、その滅亡には、豫めその時を定めたり。

وَتِلْكَ الْقُرَىٰ أَهْلَكْنَاهُمْ لَمَّا ظَلَمُوا وَجَعَلْنَا لِمَهْلِكِهِم مَّوْعِدًا ﴿٦٠﴾ ع

第九項

61. モーゼがその従者に向って「わしは二つの海が出会うところに行きつくまで、何年かかろうと旅を止める気はなし」と云いし時を思い起せ。

وَإِذْ قَالَ مُوسَىٰ لِفَتَاهُ لَا أَبْرَحُ حَتَّىٰ أَبْلُغَ مَجْمَعَ الْبَحْرَيْنِ أَوْ أَمْضِيَ حُقُبًا ﴿٦١﴾

62. 然るに、彼等二つの海が出会いしところにたどりつくや、携え来たりし彼等の魚のことを忘れたれば、魚は(注 41)速やかに海中へと逃げ去りぬ。

فَلَمَّا بَلَغَا مَجْمَعَ بَيْنِهِمَا نَسِيَا حُوتَهُمَا فَاتَّخَذَ سَبِيلَهُ فِي الْبَحْرِ سَرَبًا ﴿٦٢﴾

63. 而して、彼等更に旅を続け、またモーゼ、従者に云えり。「朝餉を(注 42)これへ持て。いやはやこの旅には疲れたり」

فَلَمَّا جَاوَزَا قَالَ لِفَتَاهُ آتِنَا غَدَاءَنَا لَقَدْ لَقِينَا مِن سَفَرِنَا هَٰذَا نَصَبًا ﴿٦٣﴾

注 40　不信仰者は、道理を理解し、神から授けられた能力を活用するのをしつこく拒否する。その結果、その能力や才能はさびつき、腐敗し、彼らは罪と邪悪の中で、もがきつづけるのである。

注 41　フート(魚)は、幻となって見られると、正しき人々の崇拝の家を示す。この語のこの意味において、“2つの海が出会う場所に彼らが到達すると、彼らは魚のことは忘れてしまった”という表現は、モーゼとイスラムの摂理が出会うとき、すなわち、モーゼの摂理がその機能を停止させ、イスラムの摂理が効力を発生するとき、真の正義がモーゼとイエスの従者たちの間より出て、そのときより、新たな摂理の従者たちの特別な印となるのである。(48 章 30 節)尚、前節(当章 61 節)の詳しい説明は英版参照のこと。

注 42　幻で「朝餉(朝の食事、朝食を頼むこと)」は、疲労を表す。そして本節では、‘2つの海のつながり’を過ぎ、長い間、それぞれの旅に出、むなしく約束されたる預言者を待つことにあきあきしたのち(申命記 18 章 18 節)モーゼと彼の若き仲間は、預言者は既に現れたのだが、自分たちが彼に気づかなかったかもしれないといわんとしている。本節では、モーゼと彼の若き仲間(イエス)は、それぞれユダヤ教とキリスト教を象徴している。

64. 従者は答えり、「汝見ざりしか、我等岩の上にて休めし時、手前は魚のことを忘れたり—この事を汝に告げることを忘れさせたるは、悪魔(サタン)に非ずして誰ぞ—魚は海へ泳ぎ去れり、不思議なこともあるものなり？」と。(注 43)

قَالَ اَرَءَيْتَ اِذْ اَوَيْنَآ اِلَى الصَّخْرَةِ فَاِنِّيْ نَسِيْتُ الْحُوْتَ وَمَآ اَنْسٰنِيْهُ اِلَّا الشَّيْطٰنُ اَنْ اَذْكُرَهٗ وَاتَّخَذَ سَبِيْلَهٗ فِي الْبَحْرِ عَجَبًا ﴿٦٣﴾

65. モーゼは云えり、「それこそ我等が求めたるものなり」と。かくて、彼等はその足跡をたどり、もと来た道を引き返せり。

قَالَ ذٰلِكَ مَا كُنَّا نَبْغِ فَارْتَدَّا عَلٰٓى اٰثَارِهِمَا قَصَصًا ﴿٦٤﴾

66. 而(しか)して、彼等は、われらが慈悲を垂れし僕(しもべ)等の（注 44）一人に会えり。その僕(しもべ)にはわれらじきじきに知識を授けたり。

فَوَجَدَا عَبْدًا مِّنْ عِبَادِنَآ اٰتَيْنٰهُ رَحْمَةً مِّنْ عِنْدِنَا وَعَلَّمْنٰهُ مِنْ لَّدُنَّا عِلْمًا ﴿٦٥﴾

67. モーゼは彼に向って云えり、「汝が教えられたる嚮導(きょうどう)のいくつかを教えてくれるなら、我汝に従うべきや？」と。（注 45）

قَالَ لَهٗ مُوْسٰى هَلْ اَتَّبِعُكَ عَلٰٓى اَنْ تُعَلِّمَنِ مِمَّا عُلِّمْتَ رُشْدًا ﴿٦٦﴾

68. 彼は答えり、「汝は我と共に忍耐するを得ず。

قَالَ اِنَّكَ لَنْ تَسْتَطِيْعَ مَعِيَ صَبْرًا ﴿٦٧﴾

69. 汝、その意味を解せぬ事柄について、どうして辛抱しきれようぞ？」と。

وَكَيْفَ تَصْبِرُ عَلٰى مَا لَمْ تُحِطْ بِهٖ خُبْرًا ﴿٦٨﴾

70. モーゼは云えり、「もしアッラー欲しなば、汝、我が耐え忍ぶを見ん。而(しか)して、我は汝の如何なる命令にも背くまじ」と。

قَالَ سَتَجِدُنِيْٓ اِنْ شَآءَ اللّٰهُ صَابِرًا وَّلَآ اَعْصِيْ لَكَ اَمْرًا ﴿٦٩﴾

71. 彼は云えり、「ならば、我に従うとも、我その意味を汝に云うまでは、何事も我に問うなかれ」と。

قَالَ فَاِنِ اتَّبَعْتَنِيْ فَلَا تَسْـَٔلْنِيْ عَنْ شَيْءٍ حَتّٰٓى اُحْدِثَ لَكَ مِنْهُ ذِكْرًا ﴿٧٠﴾

第十項

72. かくて、彼等ともに出発し、やがて船に乗り込むや、彼その船に孔(あな)を穿(うが)ちたり。モーゼは云えり、「船に孔(あな)を穿(うが)ちたるは、乗客を

فَانْطَلَقَا حَتّٰٓى اِذَا رَكِبَا فِي السَّفِيْنَةِ خَرَقَهَا قَالَ

注 43　ここで表していることは、真の信心と神の崇拝は、このような人々のもとを離れるのだということである。

注 44　この“神のしもべ”（アブド）とは誰なのだろうか。神は誰に慈悲を授けたのであろうか。神は誰に知識を与えたのであろうか、モーゼは誰を求めて、神の命令を履行し、あのような長い困難な旅に出たのであろうか、誰が全ての話の中心人物であり、英雄であるのだろうか。聖なる預言者モハッマド以外には考えられないのだ。彼の魂は、モーゼの幻において、肉体を与えられたのである。

注 45　モーゼは、聖なる預言者が成し遂げた最高の精神的知識を与えられなかった。

溺れさせんとする気か？汝はほんとに罪なことをなせるかな！」と。

أَخَرَقْتَهَا لِتُغْرِقَ أَهْلَهَا لَقَدْ جِئْتَ شَيْئًا إِمْرًا ﴿٧١﴾

73．すると、彼は答えり、「我は汝に、我と共に忍耐し得る者に非ず、と云わざりしか？」と。（注 46）

قَالَ أَلَمْ أَقُلْ إِنَّكَ لَن تَسْتَطِيعَ مَعِيَ صَبْرًا ﴿٧٢﴾

24 74．モーゼは云えり、「我が失念を責めるなかれ、またしくじらすべく、我をむずかしい目に遇せるなかれ」と。

قَالَ لَا تُؤَاخِذْنِي بِمَا نَسِيتُ وَلَا تُرْهِقْنِي مِنْ أَمْرِي عُسْرًا ﴿٧٣﴾

75．かくて、彼等はともに旅をし、やがて一人の若者に出会うや、彼その若者を殺したり。モーゼは云えり、「汝は、誰も殺さぬ罪なき者を殺したり。汝、なんたる恐ろしいことをなせるや！」と。（注 47）

فَانطَلَقَا حَتَّىٰ إِذَا لَقِيَا غُلَامًا فَقَتَلَهُ قَالَ أَقَتَلْتَ نَفْسًا زَكِيَّةً بِغَيْرِ نَفْسٍ لَّقَدْ جِئْتَ شَيْئًا نُّكْرًا ﴿٧٤﴾

24 76．彼は云えり、「我は汝に、我と共に汝は忍耐し得る者に非ず、と云わざりしか？」と。

قَالَ أَلَمْ أَقُل لَّكَ إِنَّكَ لَن تَسْتَطِيعَ مَعِيَ صَبْرًا ﴿٧٥﴾

77．モーゼは云えり、「我もし、この後、何事かを汝に問わば、我を伴うなかれ。いまは我が詫びを容れよ」と。

قَالَ إِن سَأَلْتُكَ عَن شَيْءٍ بَعْدَهَا فَلَا تُصَاحِبْنِي قَدْ بَلَغْتَ مِن لَّدُنِّي عُذْرًا ﴿٧٦﴾

78．かくて、彼等は更に旅を続け、或る邑にたどりつき、そこの邑人に食物を請いたり。然るに、邑の人々は彼等を客としてもてなすを拒みたり。（注 48）ところが、そこに崩れかかりし壁あるを見て、彼之を修理せり。モーゼは云えり、「汝もし欲しなば、之に対する報酬を得たりしものを」と。

فَانطَلَقَا حَتَّىٰ إِذَا أَتَيَا أَهْلَ قَرْيَةٍ اسْتَطْعَمَا أَهْلَهَا فَأَبَوْا أَن يُضَيِّفُوهُمَا فَوَجَدَا فِيهَا جِدَارًا يُرِيدُ أَن يَنقَضَّ فَأَقَامَهُ قَالَ لَوْ شِئْتَ لَاتَّخَذْتَ عَلَيْهِ أَجْرًا ﴿٧٧﴾

79．彼は云えり、「これで、汝と訣別す。今我は、汝が忍耐し得ざりし事柄の、その理由を告げん。

قَالَ هَٰذَا فِرَاقُ بَيْنِي وَبَيْنِكَ سَأُنَبِّئُكَ بِتَأْوِيلِ مَا لَمْ تَسْتَطِع عَّلَيْهِ صَبْرًا ﴿٧٨﴾

注 46　公正なるモーゼの幻における“神のしもべ”（聖なる預言者）は、２者の間には大きな違いが存在したので、それゆえに、彼（モーゼ）は、彼に同伴できない、すなわちモーゼの信者たちは彼（聖なる預言者）を受け入れないであろうと、モーゼに述べたとしてここに表されている。

注 47　幻の言葉の中で、若者はとりわけ、無知、強さ、そして、野性的衝動を示す。モーゼの幻における正しき“神のしもべ”によるその青年の殺害は、イスラム教では、その従者に、肉欲、情欲を真に絶つことを要求するのだということを意味した。

注 48　本節は、モーゼと聖なる預言者が神のためにユダヤ教徒とキリスト教徒の協力を求めるが、それは、両者に拒まれるということを示している。

80．先づ船のことだが、あれは海で働く貧しい人々のもの。(注 49) それを我壊さんとしたるは、彼等の背後にすべての船を強制徴用せんとす国王あるが故なり。

أَمَّا السَّفِينَةُ فَكَانَتْ لِمَسٰكِينَ يَعْمَلُونَ فِي الْبَحْرِ فَأَرَدْتُّ أَنْ أَعِيبَهَا وَكَانَ وَرَآءَهُمْ مَّلِكٌ يَّأْخُذُ كُلَّ سَفِينَةٍ غَصْبًا ﴿٨٠﴾

81．次に、若者の (注 50) 場合は、その若者の両親は信者なれど、彼が背逆と不信を以て禍を両親に及ばさんことを我は恐れたがためなり。

وَأَمَّا الْغُلٰمُ فَكَانَ أَبَوٰهُ مُؤْمِنَيْنِ فَخَشِينَآ أَنْ يُّرْهِقَهُمَا طُغْيَانًا وَّكُفْرًا ﴿٨١﴾

82．されば、我等は主に、彼よりも清純且つ親孝行な息子を取換てくだし賜わらんことを希えり。

فَأَرَدْنَآ أَنْ يُّبْدِلَهُمَا رَبُّهُمَا خَيْرًا مِّنْهُ زَكٰوةً وَّأَقْرَبَ رُحْمًا ﴿٨٢﴾

83．さて、あの壁のことだが、あれはもともと邑に住む二人の孤児の (注 51) 所有なり。その中には二人のための財宝あり。而して、彼等の父は義しい人なりき。されば、彼等が成人したあかつきに、主よりのお恵みとして之を取り出さんことを望みたり。されば、修理をしたるは、我が意向に非ず。(注 52) 以上が、汝が忍耐し得ざりし事柄の説明なり」と。(注 53)

وَأَمَّا الْجِدَارُ فَكَانَ لِغُلٰمَيْنِ يَتِيمَيْنِ فِي الْمَدِينَةِ وَكَانَ تَحْتَهُ كَنْزٌ لَّهُمَا وَكَانَ أَبُوهُمَا صَالِحًا فَأَرَادَ رَبُّكَ أَنْ يَّبْلُغَآ أَشُدَّهُمَا وَيَسْتَخْرِجَا كَنْزَهُمَا رَحْمَةً مِّنْ رَّبِّكَ وَمَا فَعَلْتُهُ عَنْ أَمْرِي ذٰلِكَ تَأْوِيلُ مَا لَمْ تَسْطِعْ عَّلَيْهِ صَبْرًا ﴿٨٣﴾

注 49　"貧しき人々"という語は、ここでは、"イスラム教徒"を表していると思われる。ボートに穴をあけるとは、イスラムでは、イスラム教徒にアッラーのために、ザカート、施しとして自らのお金を使うよう勧められていることを意味した。これは、強さ、真の繁栄というよりはむしろ、経済的弱さのよりどころであるように思われるが、実際は、そうではないのである。イスラムの暴君の最たるものは、ビザンティンおよびイラン帝国であり、アラビアが彼らに貧しく不毛の土地で、わざわざ征服する価値はないと思われていなかったとしたら、それらの帝国がアラビアを吸い上げてしまったであろう。そういうわけで、この地は、聖なる預言者のためにそのままの形で保たれたのだ。

注 50　グラーム (若者) は、上記に述べられたように、夢や幻の中では、無知、強さ、野性的衝動を示す。本節での"彼の両親"とは、人間の体と魂である。というのは、全ての道徳的特質が湧き上がる源 (両親) は、イスラム教で教えられるように人間は本来、善を好むため、ここでは"信者"として表される人間の体と魂の結合だからなのである。これらの"信者"は"若者"と称される衝動により悪に引き込まれるのだ。イスラム教は、これらの衝動を根絶し、人間、つまり結合した人間の体と魂を、慈善心に富む方向に発達させ、また、人間生活の高い目的を達成させるのである。

注 51　孤児は、モーゼとイエスであり、公正なる父はアブラハムである。彼らの宝物は、彼らにより人々に残された真の教訓である。その教訓は、人々の不信心により失われてしまう危険性があったのではあるが。この宝物の、人々が、クルアーンの教訓の真実の悟りに目覚めるときには、それを受け入れるだろうという目的で、クルアーンの中で守られたのだ。

注 52　それは神の命令のもとになされた。

注 53　イスラム教の教えは、根本的にモーゼの律法の原理のあるものとは異なる法律や原理に基づいていたため、ユダヤ教徒とイスラム教徒の真実であり本物の協力は不可能であったという事実をモーゼの幻は指摘している。

第十一項

84．彼等はズル・クァルナインに（注 54）ついて汝に問わん。云え、「我は彼の物語のいくつかをお前たちに語り聞かせん」と。

وَيَسْـَٔلُوْنَكَ عَنْ ذِى الْقَرْنَيْنِ ۭ قُلْ سَاَتْلُوْا عَلَيْكُمْ مِّنْهُ ذِكْرًا ۝٨٤

85．われらは彼の権能を地上に確立し、すべてを成し遂げる方途を彼に与えたり。

اِنَّا مَكَّنَّا لَهٗ فِى الْاَرْضِ وَاٰتَيْنٰهُ مِنْ كُلِّ شَیْءٍ سَبَبًا ۝٨٥

86．然る後、彼は或る道を進めり、

فَاَتْبَعَ سَبَبًا ۝٨٦

87．太陽が没する国に至るまで。彼はそこで、太陽が暗黒の水に沈むを見、また海辺に民の住むを見たり。われらは云えり、「ズル・クァルナインよ、彼等を懲らしめるもよし、また優しくしてやるもよし」と。

حَتّٰٓى اِذَا بَلَغَ مَغْرِبَ الشَّمْسِ وَجَدَهَا تَغْرُبُ فِىْ عَيْنٍ حَمِئَةٍ وَّوَجَدَ عِنْدَهَا قَوْمًا ۭ قُلْنَا يٰذَا الْقَرْنَيْنِ اِمَّآ اَنْ تُعَذِّبَ وَاِمَّآ اَنْ تَتَّخِذَ فِيْهِمْ حُسْنًا ۝٨٧

88．彼は云えり、「不義なす者は、先ず我等が必ず罰し、然る後、主の御許に連れ行かれ、恐ろしい懲罰を味わされん」と。

قَالَ اَمَّا مَنْ ظَلَمَ فَسَوْفَ نُعَذِّبُهٗ ثُمَّ يُرَدُّ اِلٰى رَبِّهٖ فَيُعَذِّبُهٗ عَذَابًا نُّكْرًا ۝٨٨

89．然しながら、信仰心篤く、善行を積む者は、結構な報奨を得べし。また、われらも、彼が容易に行い得ることを命ぜん。（注 55）

وَاَمَّا مَنْ اٰمَنَ وَعَمِلَ صَالِحًا فَلَهٗ جَزَاۗءَ ۨ الْحُسْنٰى ۚ وَسَنَقُوْلُ لَهٗ مِنْ اَمْرِنَا يُسْرًا ۝٨٩

90．次いで彼は他の道を進めり、

ثُمَّ اَتْبَعَ سَبَبًا ۝٩٠

注 54　ズル・クルナインはダニエルの有名な夢の雄牛の 2 本の角を象徴するメド・ペルシア帝国を創立した王だと思われる。"私は、雄牛が西方、北方、そして南方に前進するのを見た。だからどんな動物も雄牛の前には立つことができないであろうし、雄牛の手から解放されるものもなかったのである。しかし、雄牛は、己の意志で行動し、偉大になったのだ"（ダニエル書 8 章 4 節、20 節、21 節）ダニエルの夢のこの部分と完全に調和して、クルアーンはズル・クルナイン（87、91、94 節）の 3 つの旅に言及している。この事実は、ズル・クルナイルがメディアとペルシアの王の記述的な名前だという推論に対する大きな根拠となる。メディアとペルシアの全ての王の中で、クルアーンにおいて与えられた記述が最もよくあてはまるのはサイラスである。クルアーンは、ズル・クルナインの 4 つの特有の性質に言及した。(1)彼は力強い君主であり、親切で公正な統治者であった（85 節、89 節）。(2)彼は、神の有徳なしもべであり、神の啓示をうけた（92 節、99 節）。(3)彼は西方に向かって行進し、いわば、濃い水の海に太陽が沈むのに気がついたところに至るまで、征服を続けた。そしてその後、東方に向かい、広大な領土を征服し鎮圧した（87 節、88 節）。(4)彼は、野蛮な人たちが住み、ゴグとマゴグが侵略をした中ほどの地域へ行った、そしてその侵略を押さえるために、壁を築いた（94～98 節）古代の偉大な統治者、有名な陸軍大尉の中で、サイラス上記の 4 つの特性を大部分、所有しているのだ。それゆえに彼はクルアーンのズル・クルナインだと見なされる価値が当然あるのである（イザヤ書 45 章、エズラ書 1、2 章歴代史略第 2 巻 36 章 22、23 節、Historians' History of the World, "Cyrus" 参照）。

注 55　イザヤ書 45 章 1 ～ 3 節、歴代史略第 2 巻 36 章 22～23 節参照

91．太陽が昇る国に至るまで。（注 56）彼はそこで、なんの日覆いを持たぬ住民の上に太陽が昇り来るを見たり。

حَتّٰۤى اِذَا بَلَغَ مَطۡلِعَ الشَّمۡسِ وَجَدَهَا تَطۡلُعُ عَلٰى
قَوۡمٍ لَّمۡ نَجۡعَلۡ لَّهُمۡ مِّنۡ دُوۡنِهَا سِتۡرًا ﴿٩١﴾

92．事実はかくの如し。げにわれらは、彼が持てるもののすべてを熟知せり。

كَذٰلِكَ ؕ وَقَدۡ اَحَطۡنَا بِمَا لَدَيۡهِ خُبۡرًا ﴿٩٢﴾

93．次いで彼は更に他の道を進めり、（注 57）

ثُمَّ اَتۡبَعَ سَبَبًا ﴿٩٣﴾

94．遂に二峯が聳え立つ山間に（注 58）入り来るまで。見れば麓に住民ありて、彼等は一言も解せざりき。（注 59）

حَتّٰۤى اِذَا بَلَغَ بَيۡنَ السَّدَّيۡنِ وَجَدَ مِنۡ دُوۡنِهِمَا قَوۡمًا ۙ
لَّا يَكَادُوۡنَ يَفۡقَهُوۡنَ قَوۡلًا ﴿٩٤﴾

95．彼等は云えり、「ズル・クァルナインよ、ゴグとマゴグが（注 60）この地を荒す。我等は汝に税賦を納める故、我等と彼等の間に防壁を築きたまえ？」と。

قَالُوۡا يٰذَا الۡقَرۡنَيۡنِ اِنَّ يَاۡجُوۡجَ وَمَاۡجُوۡجَ مُفۡسِدُوۡنَ
فِى الۡاَرۡضِ فَهَلۡ نَجۡعَلُ لَكَ خَرۡجًا عَلٰٓى اَنۡ تَجۡعَلَ
بَيۡنَنَا وَبَيۡنَهُمۡ سَدًّا ﴿٩٥﴾

96．彼は答えり、「主が我に賦与せる能力は、汝等の貢賦より更に勝る。されど、お前たち努めて我に手を貸せ。さすれば我は、お前たちと彼等の間に防壁を築かん。

قَالَ مَا مَكَّنِّىۡ فِيۡهِ رَبِّىۡ خَيۡرٌ فَاَعِيۡنُوۡنِىۡ بِقُوَّةٍ اَجۡعَلۡ
بَيۡنَكُمۡ وَبَيۡنَهُمۡ رَدۡمًا ﴿٩٦﴾

注 56　本節は、太陽が激しく照りつける樹木のない不毛地帯であるアフガニスタンやバルチスタンといった東方へのサイラスの遠征に言及している。またシースタンやヘラトの東方まで、そしてメシェドまでつづくドゥズタブの北方まで何百マイルも広がった平野に暮らす人々にもあてはまるのである。

注 57　本節は、カスピ海とコーカサス山脈の間の領土、ペリシア北方までのサイラスの 3 度めの遠征に言及している。

注 58　“2 つの山”は、2 つの障壁を意味する。壁が築かれたデルベントの道は、片側がカスピ海、もう一方の側がコーカサス山脈に接していた。これら 2 つが、2 つの障壁の役目を果たしていた。

注 59　こういった地域の人々は、サイラスとは異なる言葉を話した。しかしペルシアのすぐ近隣に住み、ペルシア人やメディア人と、常に接していたため、彼らは、非常に不十分であり、また非常な困難を伴ったが、彼らの言葉を理解し、話せるようになったのだ。壁が築かれた地域は、ペルシアに隣接し、のちには、ペルシアの一部となった。しかし今では、ロシア領土に含まれてしまっている。

注 60　ヤジュージュとマジュージュ（ゴクとマゴグ）という言葉は共に、彼はペースがはやかった、彼またはそれは燃え立つ火となったという意味の語源アッジャに由来し、最も遠い東方のスキタイ人に関連がある（Enc. Brit. & Jewish Ency. “ゴグ”と“マゴグ”，Historians' History of the world 第 2 巻 582 ページ、エザキエル 38 章 2 ～ 6 節、39 章 6 節）。西洋のキリスト教国家も、燃える火や、煮え湯を大いに利用するし、また、彼らの物質的進歩、偉大な発見や発明は、こういったものの正しく非常に広範囲にわたる使用のおかげであるゆえに、この言葉は西洋のキリスト教国家にもあてはまるのである。または、この言葉は、これらの国家が新たな征服を試みるため常に、せかせか、いらいらして見張りの体制をくずさぬゆえ、その落ち着かない行動を含蓄しているとも考えられる。

97. 我に沢山の鉄塊を運び来たれよ」と。やがて、両山腹の間の空地が鉄塊で満たされるや、彼は「今だ、鞴(ふいご)にて之(これ)を吹け」と命じたり。彼等それを火の如く熱して赤くなるまで吹くと、彼は云えり、「溶かした銅をこれへ持て。我それをこの上に注がん」と。

آتُونِي زُبَرَ الْحَدِيدِ ۖ حَتَّىٰ إِذَا سَاوَىٰ بَيْنَ الصَّدَفَيْنِ قَالَ انفُخُوا ۖ حَتَّىٰ إِذَا جَعَلَهُ نَارًا قَالَ آتُونِي أُفْرِغْ عَلَيْهِ قِطْرًا ﴿٩٧﴾

98. かくして彼等ゴグとマゴグは、之(これ)によじ登るも、之(これ)を穿(うが)つこともし得ざりき。

فَمَا اسْطَاعُوا أَن يَظْهَرُوهُ وَمَا اسْتَطَاعُوا لَهُ نَقْبًا ﴿٩٨﴾

99. そこで、彼は云えり、「これ我が主の慈悲なるぞ。なれど、主の約束が実現せらるる時、彼は之(これ)を微塵(みじん)に打ち砕かん。主の約束は必ずや間違いなし」と。

قَالَ هَٰذَا رَحْمَةٌ مِّن رَّبِّي ۖ فَإِذَا جَاءَ وَعْدُ رَبِّي جَعَلَهُ دَكَّاءَ ۖ وَكَانَ وَعْدُ رَبِّي حَقًّا ﴿٩٩﴾

100. その日、われらは、押し寄せる波の如く彼等を相打ち砕かしめん。而(しか)して、喇叭(ラッパ)が吹き鳴らされ、われらすべての人々を喚び集めん。

وَتَرَكْنَا بَعْضَهُمْ يَوْمَئِذٍ يَمُوجُ فِي بَعْضٍ ۖ وَنُفِخَ فِي الصُّورِ فَجَمَعْنَاهُمْ جَمْعًا ﴿١٠٠﴾

101. その日、われらは不信心者どもに地獄を目のあたりに表示せん―

وَعَرَضْنَا جَهَنَّمَ يَوْمَئِذٍ لِّلْكَافِرِينَ عَرْضًا ﴿١٠١﴾

102. その目を蔽われてわが警告に気づかず、聴くことさえも能(あた)わざりし者どもに。

الَّذِينَ كَانَتْ أَعْيُنُهُمْ فِي غِطَاءٍ عَن ذِكْرِي وَكَانُوا لَا يَسْتَطِيعُونَ سَمْعًا ﴿١٠٢﴾

第十二項

103. 不信心者どもは、わしをさしおいて、わが僕等(しもべら)を守護者となし得べしとするか？げにわれらは、不信心者どもをもてなすためにと地獄を備(そな)えたり。

أَفَحَسِبَ الَّذِينَ كَفَرُوا أَن يَتَّخِذُوا عِبَادِي مِن دُونِي أَوْلِيَاءَ ۚ إِنَّا أَعْتَدْنَا جَهَنَّمَ لِلْكَافِرِينَ نُزُلًا ﴿١٠٣﴾

104. 云え、「その所業故に誰が一番損するかを、われらはお前たちに教えようか？―

قُلْ هَلْ نُنَبِّئُكُم بِالْأَخْسَرِينَ أَعْمَالًا ﴿١٠٤﴾

105. つまり、自分では善行をしているつもりが、現世(うつしよ)の生活を追う余りその努力がすべて徒労に帰したる者どもなり」と。

الَّذِينَ ضَلَّ سَعْيُهُمْ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَهُمْ يَحْسَبُونَ أَنَّهُمْ يُحْسِنُونَ صُنْعًا ﴿١٠٥﴾

106. 彼等は、主の神兆(しるし)も、主との会見も信ぜざる者どもなり。されば、彼等の努力は無に帰し、復活の日には、われら彼等になんらの重みも与えざるべし。

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ كَفَرُوا بِآيَاتِ رَبِّهِمْ وَلِقَائِهِ فَحَبِطَتْ أَعْمَالُهُمْ فَلَا نُقِيمُ لَهُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ وَزْنًا ﴿١٠٦﴾

107.　こは彼等の応報なり—すなわち地獄こそ。信仰を拒み、わが神兆とわが使徒たちを嘲笑したるが故に。

ذٰلِكَ جَزَآؤُهُمْ جَهَنَّمُ بِمَا كَفَرُوْا وَاتَّخَذُوْٓا اٰيٰتِيْ وَرُسُلِيْ هُزُوًا ﴿١٠٧﴾

108.　信じて善行を積む者は、かならずや至福の園に入居せん。

اِنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ كَانَتْ لَهُمْ جَنّٰتُ الْفِرْدَوْسِ نُزُلًا ﴿١٠٨﴾

109.　彼等その裡に永遠に住み、決して他に移ることを欲せざるべし。

خٰلِدِيْنَ فِيْهَا لَا يَبْغُوْنَ عَنْهَا حِوَلًا ﴿١٠٩﴾

110.　云え、「たとい大海が主の御言葉のために墨なりとも、主の御言葉が果てる前に、海水必ず涸れん、たといわれら同じものをもたらし之を補うとも」と。（注 61）

قُلْ لَّوْ كَانَ الْبَحْرُ مِدَادًا لِّكَلِمٰتِ رَبِّيْ لَنَفِدَ الْبَحْرُ قَبْلَ اَنْ تَنْفَدَ كَلِمٰتُ رَبِّيْ وَلَوْ جِئْنَا بِمِثْلِهٖ مَدَدًا ﴿١١٠﴾

111.　云え、「我はお前たち同様ただの人間にすぎず。なれど我は、お前たちの神が唯一なる神なることを啓示されたり。されば、その主に会わんことを望む者には、善行を積ましめよ。また、彼をしてその主と共に何者をも拝せしむるなかれ」と。（注 62）

قُلْ اِنَّمَآ اَنَا بَشَرٌ مِّثْلُكُمْ يُوْحٰٓى اِلَيَّ اَنَّمَآ اِلٰهُكُمْ اِلٰهٌ وَّاحِدٌ فَمَنْ كَانَ يَرْجُوْا لِقَآءَ رَبِّهٖ فَلْيَعْمَلْ عَمَلًا صَالِحًا وَّلَا يُشْرِكْ بِعِبَادَةِ رَبِّهٖٓ اَحَدًا ﴿١١١﴾

注 61　西洋のキリスト教国家は、自分たちの偉大な発明や科学的発見を、誇りにし、創造物自体の神秘を見抜くことに成功したという思い違いのもとで、努力をしているように思われる。これは、空虚なおごりにすぎない。神の神秘は、無尽蔵で底知れないため、これらの人間が発見したことや、今後あらゆる努力をして発見するであろうことは、大洋の中の水滴1滴にも及ばないのである。

注 62　この章の最初と最後の 10 節の朗唱をすれば、ダッジャールの精神的猛攻撃から守られると聖なる預言者が述べたと伝えられている。このことは、ダッジャールとゴグとマゴグが1つのものであり、同一人物——西洋のキリスト教国家の人間であることを示している。ダッジャールが、イスラム教に対する有害な宗教布教を表し、ゴグとマゴグは、彼らの物質的、政治的権力と支配を表すのである。

سُورَةُ مَرْيَمَ مَكِّيَّةٌ (١٩)

マリヤム
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．カーフ・ハー・ヤー・アイン・サード。(注1)

كٓهٰيٰعٓصٓ ②

3．こは汝の主がその僕ザカリヤに垂れたる慈悲の話しなり。

ذِكْرُ رَحْمَتِ رَبِّكَ عَبْدَهٗ زَكَرِيَّا ③

4．ザカリヤ密かにその主を喚びて、

اِذْ نَادٰى رَبَّهٗ نِدَآءً خَفِيًّا ④

5．云えり、「主よ、我が体の骨は弱まり、頭は霜の如くきらめき輝く。然れども、我が主よ、我は汝に祈りて未だ祝福されざることはなかりき。

قَالَ رَبِّ اِنِّيْ وَهَنَ الْعَظْمُ مِنِّيْ وَاشْتَعَلَ الرَّاْسُ شَيْبًا وَّلَمْ اَكُنْۢ بِدُعَآئِكَ رَبِّ شَقِيًّا ⑤

6．されど、我が妻は石女なれば、我が亡き後の縁者たちを心配す。さればなにとぞ我に後継ぎを授け給え。(注2)

وَاِنِّيْ خِفْتُ الْمَوَالِيَ مِنْ وَّرَآءِيْ وَكَانَتِ امْرَاَتِيْ عَاقِرًا فَهَبْ لِيْ مِنْ لَّدُنْكَ وَلِيًّا ⑥

7．我が後を継ぎ、ヤコブの家を継ぐ者を。而してその者を、汝の意に適う者たらしめよ。」と。

يَّرِثُنِيْ وَيَرِثُ مِنْ اٰلِ يَعْقُوْبَ وَاجْعَلْهُ رَبِّ رَضِيًّا ⑦

8．神は云えり、「ザカリヤよ、われらは、その名をヤフヤーと呼ぶ息子の朗報を汝に伝う。われらはこれまで何人にもこの名を与えざりき」と。

يٰزَكَرِيَّآ اِنَّا نُبَشِّرُكَ بِغُلٰمِ اِۨسْمُهٗ يَحْيٰى لَمْ نَجْعَلْ لَّهٗ مِنْ قَبْلُ سَمِيًّا ⑧

9．ザカリヤは云えり、「我が妻は石女にして、我もまた老齢に達す、いかで子を持てるや？」と。(注3)

قَالَ رَبِّ اَنّٰى يَكُوْنُ لِيْ غُلٰمٌ وَّكَانَتِ امْرَاَتِيْ عَاقِرًا وَّقَدْ بَلَغْتُ مِنَ الْكِبَرِ عِتِيًّا ⑨

注1　汝はすべてを満たす真の導き手、すべてを知り給う真の神。

注2　ザカリヤの祈りは、祈りが必要とするすべての要素を兼ね備えていた。神にきき届けられるには、謙虚に心からの熱情をこめて祈らなければならない。サガリヤの祈りはこれらすべての条件を満たしていた。

注3　この節では、ザカリヤが神から息子が授けられるという恩寵に純粋に驚いている様子が示されている。だれであっても、ザカリヤと同様、突然このような知らせを受けたならば自然に驚きを示すはずである。

10. 啓示を伝達せる天使は云えり、「さもありなん。されど、汝の主は云えり、『われは以前、汝が無でありし時に汝を創造せり。されば、いと易きことなり』」と。

قَالَ كَذٰلِكَ ۚ قَالَ رَبُّكَ هُوَ عَلَيَّ هَيِّنٌ وَّقَدْ خَلَقْتُكَ مِنْ قَبْلُ وَلَمْ تَكُ شَيْـًٔا ⑩

11. ザカリヤは云えり、「主よ、然らば我にその証拠を示したまえ」と。神は云えり、「その証拠は、汝に三昼夜の間誰とも語らせず」と。（注４）

قَالَ رَبِّ اجْعَلْ لِّيْٓ اٰيَةً ۭ قَالَ اٰيَتُكَ اَلَّا تُكَلِّمَ النَّاسَ ثَلٰثَ لَيَالٍ سَوِيًّا ⑪

12. かくて彼は聖殿よりその民のところへ出で来たり、それとなく身振りで、朝な夕な神を讃え奉ることを彼等に頼みたり。

فَخَرَجَ عَلٰى قَوْمِهٖ مِنَ الْمِحْرَابِ فَاَوْحٰٓى اِلَيْهِمْ اَنْ سَبِّحُوْا بُكْرَةً وَّعَشِيًّا ⑫

13. 神は云えり、「ヤフヤーよ、経典を遵守せよ」と。而して、われらは未だ幼いながらも彼に知恵を授け、

يٰيَحْيٰى خُذِ الْكِتٰبَ بِقُوَّةٍ ۭ وَاٰتَيْنٰهُ الْحُكْمَ صَبِيًّا ⑬

14. またわれら手ずから慈愛と無垢の心を授けたれば、彼は敬虔にして、

وَّحَنَانًا مِّنْ لَّدُنَّا وَزَكٰوةً ۭ وَكَانَ تَقِيًّا ⑭

15. 父母に孝、傲慢かつ反抗的に非ざりき。

وَّبَرًّۢا بِوَالِدَيْهِ وَلَمْ يَكُنْ جَبَّارًا عَصِيًّا ⑮

16. 彼の生まれし日に、逝きし日に、また復活らん日に平安彼の上にあれかし。

وَسَلٰمٌ عَلَيْهِ يَوْمَ وُلِدَ وَيَوْمَ يَمُوْتُ وَيَوْمَ يُبْعَثُ حَيًّا ⑯

第二項

17. また、経典で言及したマリアのことを物語れ。その時彼女は、家人を避けて東の方へ引籠り、

وَاذْكُرْ فِي الْكِتٰبِ مَرْيَمَ ۘ اِذِ انْتَبَذَتْ مِنْ اَهْلِهَا مَكَانًا شَرْقِيًّا ⑰

18. 彼等の目から己れを蔽い隠したる時、われら天使を彼女のもとへ遣わしたれば、天使は完璧き人間の形を以て彼女の前に出現せり。（注５）

فَاتَّخَذَتْ مِنْ دُوْنِهِمْ حِجَابًا ۪ فَاَرْسَلْنَآ اِلَيْهَا رُوْحَنَا فَتَمَثَّلَ لَهَا بَشَرًا سَوِيًّا ⑱

注４　ザカリヤは、口をきかず、ただ神を想い、賛美することに専心するようにという命令を申し渡されたが、これは老いたザカリヤの体力を回復させるために考慮された気高い方策なのである。福音書では、彼がおしになったのは神の言葉を信じなかったゆえに与えられた罰なのだとされているが、正しくない。（ルカ　１：20－21）

注５　偉大なる息子の誕生という喜ばしいお告げがマリヤに伝えられたのだが、そのお告げは、直接マリヤに聞きとれるように音声として語られたのではない。夢か幻影という形をとって伝達されたのである。夢の中に現れた天使は、健康な男子の姿をしており、彼女に息子が生まれるという神からのお告げを伝えたのである。それゆえ、聖霊が彼女の体に入り込むことなどあり得ず、ここで示されているのは単に彼女のゆめの中に大天使が男性の姿で現れたということである。

19．マリアは云えり、「我、汝より離れて慈悲深い神の御許に逃れたり、汝もし神を畏るるなば」と。

قَالَتْ إِنِّىٓ أَعُوذُ بِٱلرَّحْمَٰنِ مِنكَ إِن كُنتَ تَقِيًّا ١٩

20．彼は答えり、「我はただ汝に、純潔なる男の子を授けんがために来し使者にすぎず」と。

قَالَ إِنَّمَآ أَنَا۠ رَسُولُ رَبِّكِ لِأَهَبَ لَكِ غُلَٰمًا زَكِيًّا ٢٠

21．マリアは云えり、「男未だ我に触れざれば、しかも、不身持ちでない身が、如何にして子供を持ち得ようぞ？」と。

قَالَتْ أَنَّىٰ يَكُونُ لِى غُلَٰمٌ وَلَمْ يَمْسَسْنِى بَشَرٌ وَلَمْ أَكُ بَغِيًّا ٢١

22．彼は答えり、「さもありなん。なれど、汝の主は云う、『これわれわれには容易し。われらがかくするは、その子を以て人間への神兆となし、われらからの慈悲たらしめんがためなり。こは命定されたことなり』」と。

قَالَ كَذَٰلِكِ قَالَ رَبُّكِ هُوَ عَلَىَّ هَيِّنٌ وَلِنَجْعَلَهُۥٓ ءَايَةً لِّلنَّاسِ وَرَحْمَةً مِّنَّا وَكَانَ أَمْرًا مَّقْضِيًّا ٢٢

23．かくて彼女はその子を孕み、(注6)その子と共に遠隔のところへ引籠れり。

فَحَمَلَتْهُ فَٱنتَبَذَتْ بِهِۦ مَكَانًا قَصِيًّا ٢٣

注6　マリアが夫との交わりもなくしてどのようにイエスを身ごもったのか、ということは、現在のところ人間の知性では押し測ることのできない神の神秘であるとみなされている。この謎は、今の我々の知力の及ぶ範囲内での自然法を超越したものなのである。今の我々は知らずともこの先解明できるようになるであろう、などとは言えまい。人間の知識には、所せん限りがあり、神の神秘をすべて解き明かすことなど、とうてい無理なことである。自然の神秘で、人間がいまだ解明できないものは山とあるし、多分それらはこれからもわからぬまま謎として残っていくのではないかと思われる。解き明かせない神秘の一つが、父を介さないイエスの誕生についてである。神がおできになることは際限がなく、一方、人間の力には限りがある。彼は“存れ”と一言おっしゃってこの宇宙を創造された方なので、我々には起こり得ないように思われる事もすべてお出来になるのだということは明らかである。また医学的にも、女性一人で子供をはらむという可能性を完全に排除することができない。生物学的見地から宗教ぬきにして純粋に考察すると、処女生殖（単為生殖――すなわち、男性との関係を持たずして子供をつくるということ）が、何らかの条件下では起こり得ると考えられている。女性の骨盤、下腹部にしばしば見られるある種の種瘍がこのような単為生殖を可能にし得ると見ている医学関係者がいる。この種瘍は男性化細胞種瘍として知られ、男性の精子をつくることができる。もし、女性の体内で、男性化細胞種瘍により生存精子が製造できるとすれば、女性の単為生殖の可能性、さらに言えば処女生殖の可能性は否定できまい。すなわち、女性自身の体内において男性が彼女の体内に通常の方法でもしくは外科的処置により精子を送り込んだと同様の結果を生み出すことが可能であろうということである。最近になってヨーロッパで、ある婦人科グループが、男性との接触なく出産した女性の例を公表した(ランセット)。　イエスの誕生は、父を介さなかったという点において全く他に例を見ないものとされてきたが、こうなってくるとそうとも言いきれないようである（Enc. Brit 引用について詳しくは英版参照)。もしこれらのすべての可能性を完全に否定するとイエスは私生児としてうまれたなどとんでもない帰結を導きだしてしまうかもしれない。キリスト教、ユダヤ教ともイエスの誕生は、通常、人が生まれるのとは違った特殊性を有するという点で合意しているものの、キリスト教ではそれを超自然として受けとめているのに対しユダヤ教はイエスが私生児なのだと解釈している（Jew Enc.)。実際、戸籍簿にもイエスを私生児として記載している（タルムド)。マリアの夫、ヨセフは、イエスが生まれるまでマリアと夫婦関係を持たなかったと福音書で述べられており、この事実のみがイエスの誕生の特異性を成している（マタイ　1：25)。この「彼女はその子を孕み」という表現には、マリアが男性を介さずにそうなったという特別の概念を含む。

24．分娩の苦痛の余り、彼女は棗椰子(なつめやし)の幹に取りすがりたり。彼女は云えり、「おお！我かくなる以前に死に、忘れ去られし者なりせば！」と。

فَأَجَآءَهَا ٱلْمَخَاضُ إِلَىٰ جِذْعِ ٱلنَّخْلَةِ قَالَتْ يَٰلَيْتَنِى مِتُّ قَبْلَ هَٰذَا وَكُنتُ نَسْيًا مَّنسِيًّا ٢٤

25．すると、下から彼女を呼ぶ者ありて、云う、「悲しむなかれ。汝の主は、汝の足もとに一筋の小川を備えたり。

فَنَادَىٰهَا مِن تَحْتِهَآ أَلَّا تَحْزَنِى قَدْ جَعَلَ رَبُّكِ تَحْتَكِ سَرِيًّا ٢٥

26．棗椰子(なつめやし)の幹を自分の方に揺り動かせ。さすれば、熟(う)れた新鮮な実が汝の上に落ちん。（注７）

وَهُزِّىٓ إِلَيْكِ بِجِذْعِ ٱلنَّخْلَةِ تُسَٰقِطْ عَلَيْكِ رُطَبًا جَنِيًّا ٢٦

27．されば、食い且つ飲み、汝の目を静めよ。而(しか)して、汝もし誰かに会わば『我は慈悲なる神に斉戒を誓いたり。されば、我どなたとも今日は物云えず』と云え」と。（注８）

فَكُلِى وَٱشْرَبِى وَقَرِّى عَيْنًا فَإِمَّا تَرَيِنَّ مِنَ ٱلْبَشَرِ أَحَدًا فَقُولِىٓ إِنِّى نَذَرْتُ لِلرَّحْمَٰنِ صَوْمًا فَلَنْ أُكَلِّمَ ٱلْيَوْمَ إِنسِيًّا ٢٧

28．かくて、彼女は、嬰児(みどりご)を抱いて一族のもとに帰り来たれり。彼等は云えり、「マリアよ、汝はまことにけしからぬことをなせり。

فَأَتَتْ بِهِۦ قَوْمَهَا تَحْمِلُهُۥ قَالُوا۟ يَٰمَرْيَمُ لَقَدْ جِئْتِ شَيْـًٔا فَرِيًّا ٢٨

注７　この記述によると、イエスの誕生は、ナツメヤシがユダヤ地方で新たに実る季節のでき事とわかる。ナツメヤシの季節というと、紛れもなく８月から９月である。一般にキリスト教徒に受けとられている見解では、イエスは12月25日生まれとされており、毎年、キリスト教国ではこの日をクリスマスとして熱情的に祝っている。しかし、この12月25日生まれという見解はクルアーンの記述と矛盾するだけでなく、歴史的にも反するし、さらには新約聖書の記述にも合致せず矛盾してしまっている。イエス誕生について、ルカによる福音書では「この地方で（ユダヤ地方）で羊飼いたちが、夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた（ルカ　２：７，８参照）、とある。このルカの記述についてキリスト教の司教であるバーンズ氏も「The Rise of Christianity」という有名な本の79ページでこう述べている。「12月25日がイエスの実際の誕生の日であるということは何の根拠もないことである。もし、イエスの誕生にまつわるルカの福音を信じるとするとそこにはベツレヘム近くで羊飼いが野宿していたとある。イエスのお生まれになったベツレヘム周辺で冬というと夜の気温はたいへん低く、ユダヤ地方の山岳地域では、、雪も珍しくない。どうやら西暦300年ごろ、あれこれ議論の末、イエスの誕生日を話し合いの上で決定したようである。バーンス司教の見解について以下に少し引用する。（引用文献については英版参照。）

キリストの生年月日は今だ明白になってはいない。しかし、西暦340年に教会の神父がキリスト誕生を祝う日として、ある一日を選んだ際、彼らは賢くも冬至を選んだといえよう。冬至であれば人々はしっかり頭に入れ、最も大切な祝祭日として心に留めることができるからである。もちろん、人間がつくった暦の形式のずれにより、キリスト生誕の日づけも冬至を２～３日前後するということはある。(Enc. Brit.15版　５巻P 642)……中略……第２に、冬至は、その当時太陽の誕生した日とみなされており、ローマ暦12月25日は多神教徒にとり太陽神生誕の祝日となっていた。キリスト教会はこの一般に広まっていた祝日を踏みにじることができず、その祝日をキリストの生誕の日として精神的意味を与えたのである (Ch. Enc.)。

注８　マリアが無駄な話をしないよう命ぜられたのは、一つには彼女の体力を保持するためにであり、もう一つには彼女が心を集中させて神を想い、神に祈る時間をより多くとれるようにという御はからいなのであった。

29．アロンの姉よ、汝の父は悪人に非ず、母もまた淫らな女に非ざりしに！」と。

يَٰٓأُخْتَ هَٰرُونَ مَا كَانَ أَبُوكِ ٱمْرَأَ سَوْءٍ وَمَا كَانَتْ أُمُّكِ بَغِيًّا ٢٩

30．すると、マリアは己が子を指させり。彼等は云えり、「我等、揺籃(ようらん)の中なる嬰児(みどりご)と如何にして語り得るか？」と。

فَأَشَارَتْ إِلَيْهِ ۖ قَالُوا۟ كَيْفَ نُكَلِّمُ مَن كَانَ فِى ٱلْمَهْدِ صَبِيًّا ٣٠

31．すると、その子は云えり、「我はアッラーの僕(しもべ)なり。彼経典を我に授け、我を預言者となせり。

قَالَ إِنِّى عَبْدُ ٱللَّهِ ءَاتَىٰنِىَ ٱلْكِتَٰبَ وَجَعَلَنِى نَبِيًّا ٣١

32．而(しか)して、彼は、我いずこに居ようとも祝福し賜い、我が生ある限り礼拝と慈善を怠らぬよう命じたり。

وَجَعَلَنِى مُبَارَكًا أَيْنَ مَا كُنتُ وَأَوْصَٰنِى بِٱلصَّلَوٰةِ وَٱلزَّكَوٰةِ مَا دُمْتُ حَيًّا ٣٢

33．また、母に孝養をつくすことを命じたり。而(しか)して、我を高慢にして、不幸なる者たらしめざりき。

وَبَرًّۢا بِوَٰلِدَتِى وَلَمْ يَجْعَلْنِى جَبَّارًا شَقِيًّا ٣٣

34．我が生まれし日に我が上に平安ありしが、我が死なん日に、また、再び甦らん日にも我が上に平安あらん」と。

وَٱلسَّلَٰمُ عَلَىَّ يَوْمَ وُلِدتُّ وَيَوْمَ أَمُوتُ وَيَوْمَ أُبْعَثُ حَيًّا ٣٤

35．これがマリアの子（注9）イエスなり。人々が疑心を抱くところの真相とは、これなり。

ذَٰلِكَ عِيسَى ٱبْنُ مَرْيَمَ ۚ قَوْلَ ٱلْحَقِّ ٱلَّذِى فِيهِ يَمْتَرُونَ ٣٥

36．アッラーに子があるはずなどとは、（注10）アッラーの威厳にふさわしからず。彼に讃えあれ。彼ことを決して「在(あ)れ」と云えば、すなわち、存す。

مَا كَانَ لِلَّهِ أَن يَتَّخِذَ مِن وَلَدٍ ۖ سُبْحَٰنَهُۥٓ ۚ إِذَا قَضَىٰٓ أَمْرًا فَإِنَّمَا يَقُولُ لَهُۥ كُن فَيَكُونُ ٣٦

注9　「イブン・マリヤム」（マリアの息子）という表現はイエスを指し示す名前である。これは、父を介さない誕生である（そのため父の名前を入れられない）ことを暗示するものである。それと同時にクルアーンのこの箇所で「マリアの息子」と表現されたもう一つの理由は、他の者との混合を避けることができるという点にある。福音書ではイエスの通称として「人の子（イエス）」（アラビア語で「イブン・アダム」）を用いているが、「人の子」という表現は聖書の中で他の人々を指し示すのにも使われている。「マリアの息子」と言えば誰のことであるか一目瞭然にわかるので紛わしさのないこの表現を用いてクルアーンはここでイエスを「マリアの息子」と称している。

注10　キリスト教の人々は、イエスを神の息子と信じている。その根拠としては、聖書中でイエスが「神の御子」と称されていることにあるのだが、聖書では他の人々に対しても「神の御子」と呼びかけている。イエスのみが「神の御子」として他の人々と区別して呼ばれたわけではないので、これらの人々が神の実の息子たちでないのと同様、イエスも神の実の息子ではないのである（ルカ　20：36；　エレミヤ　31：9；　マタイ　6：9；　ヨハネ　8：41；　エペソ　4：6）。

37. イエスは云えり、「げにアッラーは我が主なり。而(しか)して、お前たちの主なり。されば、彼のみを崇めよ。こは正しき道なり」と。

وَاِنَّ اللّٰهَ رَبِّيْ وَرَبُّكُمْ فَاعْبُدُوْهُ ۭ هٰذَا صِرَاطٌ مُّسْتَقِيْمٌ ﴿۳۷﴾

38. 然(しか)るに、諸宗派はイエスに関して互に論争す。信ぜざる者どもは禍いなるかな、重大な日に臨(のぞ)むが故に。

فَاخْتَلَفَ الْاَحْزَابُ مِنْۢ بَيْنِهِمْ ۚ فَوَيْلٌ لِّلَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ مَّشْهَدِ يَوْمٍ عَظِيْمٍ ﴿۳۸﴾

39. 彼等がわれらの前にまかり出づる日、彼等はなんとよく聞こえ、よく見えることよ！然(しか)るに、現世では、不義者どもは明らかに迷誤の中にあり。

اَسْمِعْ بِهِمْ وَاَبْصِرْ ۙ يَوْمَ يَاْتُوْنَنَا لٰكِنِ الظّٰلِمُوْنَ الْيَوْمَ فِيْ ضَلٰلٍ مُّبِيْنٍ ﴿۳۹﴾

40. 一切が決定されん嘆きのその日について、彼等に警告せよ。なれど、今はのん気にかまえているので、彼等は信ぜず。

وَاَنْذِرْهُمْ يَوْمَ الْحَسْرَةِ اِذْ قُضِيَ الْاَمْرُ ۘ وَهُمْ فِيْ غَفْلَةٍ وَّهُمْ لَا يُؤْمِنُوْنَ ﴿۴۰﴾

41. この大地、並びにその上に在るすべての人々を相続するはわれらなり。されば、彼等は皆われらが許(もと)に連れ戻されん。（注11）

اِنَّا نَحْنُ نَرِثُ الْاَرْضَ وَمَنْ عَلَيْهَا وَاِلَيْنَا يُرْجَعُوْنَ ﴿۴۱﴾

第三項

42. 経典の中でアブラハムの物語を話せ。彼は誠実な男であり、預言者なりき。

وَاذْكُرْ فِي الْكِتٰبِ اِبْرٰهِيْمَ ۬ اِنَّهٗ كَانَ صِدِّيْقًا نَّبِيًّا ﴿۴۲﴾

43. 彼が父に向かって云いし時のことを念(おも)え。「我が父よ、何故汝は、聞きもせず見もせず、また少しも役立たぬものを崇拝するか？

اِذْ قَالَ لِاَبِيْهِ يٰۤاَبَتِ لِمَ تَعْبُدُ مَا لَا يَسْمَعُ وَلَا يُبْصِرُ وَلَا يُغْنِيْ عَنْكَ شَيْـًٔا ﴿۴۳﴾

44. 我が父よ、汝が授かりしことなき知識が今我に降(くだ)れり。されば、我に従え。我は汝を正しい道に導かん。

يٰۤاَبَتِ اِنِّيْ قَدْ جَآءَنِيْ مِنَ الْعِلْمِ مَا لَمْ يَاْتِكَ فَاتَّبِعْنِيْۤ اَهْدِكَ صِرَاطًا سَوِيًّا ﴿۴۴﴾

45. 我が父よ、悪魔(サタン)を拝むなかれ。げに悪魔(サタン)は慈悲なる神に逆らう反逆者なり。

يٰۤاَبَتِ لَا تَعْبُدِ الشَّيْطٰنَ ۭ اِنَّ الشَّيْطٰنَ كَانَ لِلرَّحْمٰنِ عَصِيًّا ﴿۴۵﴾

注11　この節は、次の２つの預言を表している。(1)キリスト教の人々が、まず、多くの信者に支えられて世界中で優勢をふるい、世界を支配するであろう。(2)しかし、彼らは真の神を信じなかったが故に、支配権を剥奪され、それは究極的にはイスラムの人々の手に与えられるであろう。

46．我が父よ、我は慈悲なる神の罰が汝に降(くだ)りはすまいか、また汝が悪魔(サタン)の仲間たらんことを恐る」

يَٰٓأَبَتِ إِنِّيٓ أَخَافُ أَن يَمَسَّكَ عَذَابٌ مِّنَ ٱلرَّحْمَٰنِ فَتَكُونَ لِلشَّيْطَٰنِ وَلِيًّا ٤٦

47．父は答えり、「アブラハムよ、汝は我が神々を拒否するか？もし汝思いとどまらずば、汝との一切の関係を断ち切らん。暫(しばら)く我より遠ざかれ」と。

قَالَ أَرَاغِبٌ أَنتَ عَنْ ءَالِهَتِي يَٰٓإِبْرَٰهِيمُ ۖ لَئِن لَّمْ تَنتَهِ لَأَرْجُمَنَّكَ ۖ وَٱهْجُرْنِي مَلِيًّا ٤٧

48．アブラハムは云えり、「汝の上に平安あれ。我は汝のために我が主に赦(ゆる)しを請わん。彼は我に実に慈悲深くまします。

قَالَ سَلَٰمٌ عَلَيْكَ ۖ سَأَسْتَغْفِرُ لَكَ رَبِّيٓ ۖ إِنَّهُۥ كَانَ بِي حَفِيًّا ٤٨

49．されば、我は、あなたがた並びにあなた方がアッラー以外に祈る者から離れて去り行かん。而(しか)して、我が主のみに祈らん。我が主に祈らば、我は失望させられざるべし」と。

وَأَعْتَزِلُكُمْ وَمَا تَدْعُونَ مِن دُونِ ٱللَّهِ وَأَدْعُوا۟ رَبِّي عَسَىٰٓ أَلَّآ أَكُونَ بِدُعَآءِ رَبِّي شَقِيًّا ٤٩

50．かくて彼が、彼等並びに彼等がアッラー以外に崇拝せる神々から別れたれば、われらは彼にイサクとヤコブを授け、彼等各々を預言者たらしめたり。

فَلَمَّا ٱعْتَزَلَهُمْ وَمَا يَعْبُدُونَ مِن دُونِ ٱللَّهِ وَهَبْنَا لَهُۥٓ إِسْحَٰقَ وَيَعْقُوبَ ۖ وَكُلًّا جَعَلْنَا نَبِيًّا ٥٠

51．而(しか)して、われらは彼等に恵みを与え、またまことの名声を授けたり。

وَوَهَبْنَا لَهُم مِّن رَّحْمَتِنَا وَجَعَلْنَا لَهُمْ لِسَانَ صِدْقٍ عَلِيًّا ٥١

第四項

52．而(しか)して、この経典の中で、モーゼの物語を述べよ。彼は特に選ばれた者で、使者であり、預言者なりき。

وَٱذْكُرْ فِي ٱلْكِتَٰبِ مُوسَىٰٓ ۚ إِنَّهُۥ كَانَ مُخْلَصًا وَكَانَ رَسُولًا نَّبِيًّا ٥٢

53．われらは山の右側より彼に呼びかけ、霊的交渉のために傍近くに彼を招き寄せり。

وَنَٰدَيْنَٰهُ مِن جَانِبِ ٱلطُّورِ ٱلْأَيْمَنِ وَقَرَّبْنَٰهُ نَجِيًّا ٥٣

54．而(しか)して、われらは恩恵によって、彼の兄アロンを預言者として彼に授けたり。

وَوَهَبْنَا لَهُۥ مِن رَّحْمَتِنَآ أَخَاهُ هَٰرُونَ نَبِيًّا ٥٤

55．また、この経典の中で、イスマエルの物語を述べよ。彼は実に信義に厚い男で、使徒であり、預言者なりき。

وَٱذْكُرْ فِي ٱلْكِتَٰبِ إِسْمَٰعِيلَ ۚ إِنَّهُۥ كَانَ صَادِقَ ٱلْوَعْدِ وَكَانَ رَسُولًا نَّبِيًّا ٥٥

56. 彼は常に、その民に礼拝と慈善を命じたれば、主にいたく嘉せられたり。

وَكَانَ يَأْمُرُ أَهْلَهُ بِالصَّلَوٰةِ وَالزَّكَوٰةِ وَكَانَ عِندَ رَبِّهِ مَرْضِيًّا ٥٦

57. また、この経典の中で、イドリースの物語を述べよ。彼は正直な男で、預言者なりき。

وَاذْكُرْ فِي الْكِتَٰبِ إِدْرِيسَ إِنَّهُ كَانَ صِدِّيقًا نَّبِيًّا ٥٧

58. されば、われらは彼を、高き地位に登らしめたり。

وَرَفَعْنَٰهُ مَكَانًا عَلِيًّا ٥٨

59. 以上の人々は、アッラーが特に祝福を与えし預言者にして、アダムの後裔にして、われらがノアと共に方舟で運びし者たちの子孫で、アブラハムとイスラエルの子孫なり。彼等は、われらが導き選び出した者ばかりなり。慈悲なる神の徴が彼等に読誦されるや、彼等は神の御前に平伏して叩頭し、感涙にむせぶ。

أُولَٰٓئِكَ الَّذِينَ أَنْعَمَ اللَّهُ عَلَيْهِم مِّنَ النَّبِيِّنَ مِن ذُرِّيَّةِ ءَادَمَ وَمِمَّنْ حَمَلْنَا مَعَ نُوحٍ وَمِن ذُرِّيَّةِ إِبْرَٰهِيمَ وَإِسْرَٰٓءِيلَ وَمِمَّنْ هَدَيْنَا وَاجْتَبَيْنَا إِذَا تُتْلَىٰ عَلَيْهِمْ ءَايَٰتُ الرَّحْمَٰنِ خَرُّوا سُجَّدًا وَبُكِيًّا ٥٩

60. 然るに、彼等の後をついだ子孫たちは、礼拝を怠り、私欲に耽けりたり。されば、彼等はやがて破滅に遭遇せん、

فَخَلَفَ مِنۢ بَعْدِهِمْ خَلْفٌ أَضَاعُوا الصَّلَوٰةَ وَاتَّبَعُوا الشَّهَوَٰتِ فَسَوْفَ يَلْقَوْنَ غَيًّا ٦٠

61. 改悛し、信仰に入り、善行を積む者を除いて。それ等の人々は楽園に入り、些かも不当に遇せらるることなかるべし—

إِلَّا مَن تَابَ وَءَامَنَ وَعَمِلَ صَٰلِحًا فَأُولَٰٓئِكَ يَدْخُلُونَ الْجَنَّةَ وَلَا يُظْلَمُونَ شَيْـًٔا ٦١

62. すなわち慈悲なる神が、目に見えぬものを信じたその僕等に約束せしエデンの園なり。彼の約束は必ずや果たされん。

جَنَّٰتِ عَدْنٍ الَّتِي وَعَدَ الرَّحْمَٰنُ عِبَادَهُ بِالْغَيْبِ إِنَّهُ كَانَ وَعْدُهُ مَأْتِيًّا ٦٢

63. 彼等はそこで一切くだらなぬことは聞かず、ただ「平安あれ」と云うを聞く。而して、朝な夕な食物を与えられん。

لَا يَسْمَعُونَ فِيهَا لَغْوًا إِلَّا سَلَٰمًا وَلَهُمْ رِزْقُهُمْ فِيهَا بُكْرَةً وَعَشِيًّا ٦٣

64. かくの如きが楽園にして、われらは、義しいわれらの僕等に之を継がせしめん。

تِلْكَ الْجَنَّةُ الَّتِي نُورِثُ مِنْ عِبَادِنَا مَن كَانَ تَقِيًّا ٦٤

65. 諸天使は彼等に云わん、「我等は汝の主の命に非ずば、天より降らず。我等以前のもの、我等以後のもの、並びにその間にあるもの、すべてはアッラーの統べ給うところ。而して、汝の主は決して忘却せず」と。

وَمَا نَتَنَزَّلُ إِلَّا بِأَمْرِ رَبِّكَ لَهُ مَا بَيْنَ أَيْدِينَا وَمَا خَلْفَنَا وَمَا بَيْنَ ذَٰلِكَ وَمَا كَانَ رَبُّكَ نَسِيًّا ٦٥

66．彼は天地(あめつち)と、その間にある一切のものの主なり。されば、彼に仕えて、堅忍不抜な奉公をせよ。汝は彼の外に、比肩(ひけん)し得る者あるを知るや？

رَبُّ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا فَاعْبُدْهُ وَاصْطَبِرْ لِعِبَادَتِهٖ هَلْ تَعْلَمُ لَهٗ سَمِيًّا ٦٦

第五項

67．人は云う、「なんとな！我死したる後、再び甦らせられるとな？」と。

وَيَقُوْلُ الْاِنْسَانُ ءَاِذَا مَا مِتُّ لَسَوْفَ اُخْرَجُ حَيًّا ٦٧

68．人は、われらが曾(か)つて彼が無でありし時、彼を創造したる事実を、忘れたるか？

اَوَلَا يَذْكُرُ الْاِنْسَانُ اَنَّا خَلَقْنٰهُ مِنْ قَبْلُ وَلَمْ يَكُ شَيْـًٔا ٦٨

69．ならば、汝の主にかけて云う、「われらは彼等並びに悪魔(サタン)どもも一緒に、必ず召集せん。然(しか)る後、彼等を跪(ひざまず)かせ、地獄のまわりを曳き廻さん。

فَوَرَبِّكَ لَنَحْشُرَنَّهُمْ وَالشَّيٰطِيْنَ ثُمَّ لَنُحْضِرَنَّهُمْ حَوْلَ جَهَنَّمَ جِثِيًّا ٦٩

70．次いで、われらは各宗派の中から、慈悲なる神に反逆すること最も甚(はなは)だしかりし者を必ずや選び出さん。

ثُمَّ لَنَنْزِعَنَّ مِنْ كُلِّ شِيْعَةٍ اَيُّهُمْ اَشَدُّ عَلَى الرَّحْمٰنِ عِتِيًّا ٧٠

71．げにわれらは、誰がそこで焼かれるに最もふさわしいかを熟知す。（注 12）

ثُمَّ لَنَحْنُ اَعْلَمُ بِالَّذِيْنَ هُمْ اَوْلٰى بِهَا صِلِيًّا ٧١

72．お前たちの一人として、それが起らざるはなし。これ主の決定済みの判決なり。

وَاِنْ مِّنْكُمْ اِلَّا وَارِدُهَا كَانَ عَلٰى رَبِّكَ حَتْمًا مَّقْضِيًّا ٧٢

73．われらは義(ただ)しい者を救い、不義者どもは跪(ひざまず)かせたまま地獄に放置せん。

ثُمَّ نُنَجِّي الَّذِيْنَ اتَّقَوْا وَّنَذَرُ الظّٰلِمِيْنَ فِيْهَا جِثِيًّا ٧٣

74．而(しか)して、われらの明白なる徴(しるし)が（注 13）彼等に読誦されると、不信心者共は信者に向って云う、「両派のいずれが地位に於て優り、また付き合う仲間もより印象的なるかを云ってみよ」と。

وَاِذَا تُتْلٰى عَلَيْهِمْ اٰيٰتُنَا بَيِّنٰتٍ قَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لِلَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اَيُّ الْفَرِيْقَيْنِ خَيْرٌ مَّقَامًا وَّاَحْسَنُ نَدِيًّا ٧٤

注 12　「焼かれるにふさわしい」が意味しているのは(1)放っておかれるよりも火の中へ入れられた方がよい人々のこと。(2)他の人々と比較した際、他の人々よりも火の中に入れられる必要がある人々。(3)他の手段を用いるよりは、火を用いて罰せられた方がよい人々。

注 13　単に「しるし」というと何かにまつわる証拠であるとか、論拠のある主張のことを意味する。あるものの存在、目的を示し、それを確立することのできる論理、知性あるいは経験に基づいていれば、それは「徴(しるし)」である。一方、本文中にあるような「明白なる徴」と言うと、これは、単にその存在を示し、証明するというに留まらず、今、直面し、解決しようとしている問題やその状況に応じた適切な主張や論理のことを示す。そ

75. われらは彼等以前に如何に多くの世代を破滅に陥(おとし)いれたことか、富に於ても見かけに於ても彼等に優る徒輩(やから)なりし者を！

وَكَمْ أَهْلَكْنَا قَبْلَهُم مِّن قَرْنٍ هُمْ أَحْسَنُ أَثَاثًا وَرِءْيًا ﴿٧٥﴾

76. 云え、「慈悲なる神は、迷誤の中にいる者に暫しの猶予を与う。彼等が威嚇されたことに出会うまで―天罰か、それとも審判の時至りて―その時彼等は、状態に於いてより悪く、力に於てより弱きものは誰なるかを知らん。

قُلْ مَن كَانَ فِي الضَّلَالَةِ فَلْيَمْدُدْ لَهُ الرَّحْمَٰنُ مَدًّا ۚ حَتَّىٰ إِذَا رَأَوْا مَا يُوعَدُونَ إِمَّا الْعَذَابَ وَإِمَّا السَّاعَةَ فَسَيَعْلَمُونَ مَنْ هُوَ شَرٌّ مَّكَانًا وَأَضْعَفُ جُندًا ﴿٧٦﴾

77. 而(しか)して、アッラーは、嚮導(きょうどう)に従う者にはその指導を増し給う。末永く残る善行は、汝の主の目には、報奨に於て勝り、また終局に於ても勝る。」と。

وَيَزِيدُ اللَّهُ الَّذِينَ اهْتَدَوْا هُدًى ۗ وَالْبَاقِيَاتُ الصَّالِحَاتُ خَيْرٌ عِندَ رَبِّكَ ثَوَابًا وَخَيْرٌ مَّرَدًّا ﴿٧٧﴾

78. 汝は、われらの神兆(しるし)を信ぜず、「我は必ず富と子女(こどもら)に恵まれん」と云う者を見たるか？

أَفَرَأَيْتَ الَّذِي كَفَرَ بِآيَاتِنَا وَقَالَ لَأُوتَيَنَّ مَالًا وَوَلَدًا ﴿٧٨﴾

79. 彼は見る能(あた)わざるものの知識を得たるか、それとも、慈悲なる神と約束を結べるか？

أَطَّلَعَ الْغَيْبَ أَمِ اتَّخَذَ عِندَ الرَّحْمَٰنِ عَهْدًا ﴿٧٩﴾

80. 断じて然(しか)らず！われらは彼の言葉を記録し、而(しか)して、その懲罰を延長せん。

كَلَّا ۚ سَنَكْتُبُ مَا يَقُولُ وَنَمُدُّ لَهُ مِنَ الْعَذَابِ مَدًّا ﴿٨٠﴾

81. われら、彼が自慢するものをすべて相続せん。されば、彼は独りわれらの前に出で来らん。

وَنَرِثُهُ مَا يَقُولُ وَيَأْتِينَا فَرْدًا ﴿٨١﴾

82. 彼等はアッラー以外にも神々を立て、之(これ)を力のよりどころとして拝す。

وَاتَّخَذُوا مِن دُونِ اللَّهِ آلِهَةً لِّيَكُونُوا لَهُمْ عِزًّا ﴿٨٢﴾

83. 然(しか)らず！その神々は彼等の崇拝を拒み、かえって彼等の敵とならん。

ع كَلَّا ۚ سَيَكْفُرُونَ بِعِبَادَتِهِمْ وَيَكُونُونَ عَلَيْهِمْ ضِدًّا ﴿٨٣﴾

第六項

84. われらはあの不信心者どもに違犯行為を扇動せんがために悪魔(サタン)どもを遣わしたり。汝、之(これ)を知らずや？

أَلَمْ تَرَ أَنَّا أَرْسَلْنَا الشَّيَاطِينَ عَلَى الْكَافِرِينَ تَؤُزُّهُمْ أَزًّا ﴿٨٤﴾

85. 故に汝は、彼等に関して性急になるなかれ。われらが詳しく彼等の悪行を記録す。

فَلَا تَعْجَلْ عَلَيْهِمْ ۖ إِنَّمَا نَعُدُّ لَهُمْ عَدًّا ﴿٨٥﴾

86. われらが義(ただ)しい人々を名誉ある客として慈悲なる神の御前(みまえ)に召集せん、その日を想(おも)え。

يَوْمَ نَحْشُرُ الْمُتَّقِينَ إِلَى الرَّحْمَٰنِ وَفْدًا ﴿٨٦﴾

の徴により私たちは、何が正しいのか、その場に必要な解答を得ることができる。さらにそれはその「明白なる徴」のみが持てる高貴で崇高な目的を有しているという点で普通の徴とは異なる。

87．而して、罪人をば、渇した駱駝の群の如く、われら之を地獄に駆りたてん。

وَّنَسُوقُ الْمُجْرِمِينَ إِلَىٰ جَهَنَّمَ وِرْدًا ﴿٨٦﴾

88．慈悲なる神と契約を結びたる者の外は、何人も執り成す力を有せざるべし。

لَا يَمْلِكُونَ الشَّفَاعَةَ إِلَّا مَنِ اتَّخَذَ عِندَ الرَّحْمَٰنِ عَهْدًا ﴿٨٧﴾

89．彼等は云う、「慈悲なる神は子を設けたり」と。

وَقَالُوا اتَّخَذَ الرَّحْمَٰنُ وَلَدًا ﴿٨٨﴾

90．まことにお前たちは恐ろしいことを口にしたものよ！

لَّقَدْ جِئْتُمْ شَيْئًا إِدًّا ﴿٨٩﴾

91．ために天は裂け、大地はちりぢりに割れ、山々も粉々に崩れ落ちん。（注 14）

تَكَادُ السَّمَاوَاتُ يَتَفَطَّرْنَ مِنْهُ وَتَنشَقُّ الْأَرْضُ وَتَخِرُّ الْجِبَالُ هَدًّا ﴿٩٠﴾

92．彼等が慈悲なる神に子ありと云いしがためなり。

أَن دَعَوْا لِلرَّحْمَٰنِ وَلَدًا ﴿٩١﴾

93．子ありなどとは、慈悲なる神の身にはふさわしからず。

وَمَا يَنبَغِي لِلرَّحْمَٰنِ أَن يَتَّخِذَ وَلَدًا ﴿٩٢﴾

94．天にあるもの、地にあるもの、一人として慈悲なる神の許に僕として罷り出でざる者はなし。（注 15）

إِن كُلُّ مَن فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ إِلَّا آتِي الرَّحْمَٰنِ عَبْدًا ﴿٩٣﴾

95．げに彼はその知恵によって彼等を理解し、すべて完全に数えたり。

لَّقَدْ أَحْصَاهُمْ وَعَدَّهُمْ عَدًّا ﴿٩٤﴾

96．而して、復活の日には、みなそれぞれ単独で彼の御前に罷り出でん。

وَكُلُّهُمْ آتِيهِ يَوْمَ الْقِيَامَةِ فَرْدًا ﴿٩٥﴾

注 14　イエスが神の実子であるという教義はたいへんに忌むべきものであるので、山も地もごう音を響かせて粉々に砕け散るであろうというのである。神の息子であると信じる教義は、「天」－天の摂理と矛盾する。なぜなら、神が息子をもつというのは神の属性に反するからである。同時にその教義は「大地」に住む人の摂理にもそむくものである。なぜならそれは人間の本性の命ずるところではなく、自然に従えば、人間の知性も論理性も嫌悪感を示し、それを受け入れようとはしないはずである。高貴で崇高な人々、すなわち聖なる預言者や神に選ばれた人々－「山」もまた、それを否定している。なぜなら、人が自らの救済のために、誰かを身代わりとしての代償的受難者が必要であるということはおかしいし、道徳的に高い地位に自らをおくことができるかどうかは自らの精神的努力、経験の帰結として決められることなのだから。

注 15　慈悲深き気高き神には御自身の助けとして息子を必要としたり、継承者として息子を必要とすることはあり得ない。なぜなら神は天地創造の神であられ、彼の王国は宇宙すべてに渡り、人間はすべて、その神のしもべであり、イエスも我々同様に神のしもべなのであるから。

97. 信じて善行を積む人々には—慈悲なる神は慈しみを賜わらん。（注 16）

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ سَيَجْعَلُ لَهُمُ الرَّحْمَٰنُ وُدًّا ﴿٩٧﴾

98. かくの如く、われらがクルアーンを汝の言葉で容易ならしめたは、汝をして義しい者に朗報を伝え、論争好きな徒輩には警告を与えしめんがためなり。

فَإِنَّمَا يَسَّرْنَاهُ بِلِسَانِكَ لِتُبَشِّرَ بِهِ الْمُتَّقِينَ وَتُنْذِرَ بِهِ قَوْمًا لُدًّا ﴿٩٨﴾

99. 彼等より以前に、われらは如何に多くの世代を打ち滅ぼしたることか！汝はいま彼等のうちのただの一人でも残存するを見るか、またはその囁きすら聴くか？（注 17）

وَكَمْ أَهْلَكْنَا قَبْلَهُمْ مِنْ قَرْنٍ هَلْ تُحِسُّ مِنْهُمْ مِنْ أَحَدٍ أَوْ تَسْمَعُ لَهُمْ رِكْزًا ﴿٩٩﴾

注 16　この節は、次の３通りに解釈できる。(1)神は、御自身の愛をキリストの心の中に託されるであろう。(2)神は、キリストを深く愛されるであろう。(3)神は、キリストの心の中に人々への深い愛を与えられるであろう。(4)神は、人々の心の中にキリストへの深い愛を育まれるであろう。

注 17　西洋のキリスト教諸国家に対するきびしい警告がこの節で示されている。もし彼らが自分たちの誤った考えを捨てて、真実を受け入れるということを実際にしないのであれば、彼らの上に恐ろしい運命がふりかかることになるという警告である。彼らは今、物質的な力を誇り、物質的なものを拠りどころとし、世界的な繁栄、発展をとげたと誇りにしているが、もしこのまま誤った信仰を持ち、罪深き生活を悔い改めないならば、破滅に至る他、道はないという明白な事実に気がついていないのである。

سُورَةُ طٰهٰ مَكِّيَّةٌ (٢٠)

ター・ハー
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍く(あまねく)アッラーの御名(みな)において。 بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①
2. ター・ハー。(注1) طٰهٰ ②
3. われらが汝にクルアーンを降(くだ)したるは、汝を苦しめんがために非ず、 مَآ اَنْزَلْنَا عَلَيْكَ الْقُرْاٰنَ لِتَشْقٰٓى ③
4. 神を畏れる者への訓戒としてなり。 اِلَّا تَذْكِرَةً لِّمَنْ يَّخْشٰى ④
5. そは、大地と崇高なる諸天とを創り給うた御方の啓示なり。 تَنْزِيْلًا مِّمَّنْ خَلَقَ الْاَرْضَ وَالسَّمٰوٰتِ الْعُلٰى ⑤
6. 彼は玉座に鎮座し給う慈悲なる神なり。 اَلرَّحْمٰنُ عَلَى الْعَرْشِ اسْتَوٰى ⑥
7. 天にあるもの、地にあるもの、その間にあるもの、並びに湿った底土の下にあるもの、すべては彼が統(す)べ給う。 لَهٗ مَا فِى السَّمٰوٰتِ وَمَا فِى الْاَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا وَمَا تَحْتَ الثَّرٰى ⑦
8. もし汝が声高に物云うとも、また低い声でささやこうと、彼は差異なく聴きたまい、人間の秘めたる思案や、更に隠されたことも知り給う。 وَاِنْ تَجْهَرْ بِالْقَوْلِ فَاِنَّهٗ يَعْلَمُ السِّرَّ وَاَخْفٰى ⑧
9. アッラー、彼の外に神なし。最も美しい称号は彼のものなり。 اَللّٰهُ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ لَهُ الْاَسْمَآءُ الْحُسْنٰى ⑨
10. ところで、モーゼの物語は汝の耳に達したりや? وَهَلْ اَتٰىكَ حَدِيْثُ مُوْسٰى ⑩
11. 彼、火を見て、家族に云えり、「汝等ここにとどまれ、我は火を認めたり。我、お前たちのために彼処から燃えさしを持ちかえらん。或いは、あの火で正しい道に導かれるかも知らぬ」と。(注2) اِذْ رَاٰ نَارًا فَقَالَ لِاَهْلِهِ امْكُثُوْٓا اِنِّىْٓ اٰنَسْتُ نَارًا لَّعَلِّىْٓ اٰتِيْكُمْ مِّنْهَا بِقَبَسٍ اَوْ اَجِدُ عَلَى النَّارِ هُدًى ⑪

注1　我、愛しきしもべよ。完全な人間、理想的な人物よ。

注2　この節には、モーゼの2種類の幻影について書かれている。(1)この様なものが、預言者にしか見えない場合。このような状況では、預言者しか神の出現を見ることはできない。(2)預言者の子弟たちも、神の出現を見ることができる場合。ここで、モーゼが言おうとしたのは、彼が見た光景が後者のような出現であるならば、子弟たちに新しいシャリヤが与えられるだろうが、もし前者であるならば、自分自身の精神の向上のための導きと受けるであろう。

12．さて、彼が火の傍に来ると、声ありて、云う、「モーゼよ、

فَلَمَّآ اَتٰىهَا نُوْدِيَ يٰمُوْسٰى ﴿١٢﴾

13．げにわれは汝の主なり。されば、汝の靴を脱げ。汝は今、トッワーの聖なる谷にあり。（注３）

اِنِّيْٓ اَنَا رَبُّكَ فَاخْلَعْ نَعْلَيْكَ ۚ اِنَّكَ بِالْوَادِ الْمُقَدَّسِ طُوًى ﴿١٣﴾

14．われは汝を選びたり。されば、啓示されることに耳を傾けよ。

وَاَنَا اخْتَرْتُكَ فَاسْتَمِعْ لِمَا يُوْحٰى ﴿١٤﴾

15．げにわれはアッラーなり。われの外に神なし。されば、われに仕え、われを念じて礼拝を遵守せよ。

اِنَّنِيْٓ اَنَا اللّٰهُ لَآ اِلٰهَ اِلَّآ اَنَا فَاعْبُدْنِيْ ۙ وَاَقِمِ الصَّلٰوةَ لِذِكْرِيْ ﴿١٥﴾

16．げに該(か)の時は近づけり。われ之(これ)を隠さんとするは、各人がその努力に応じて返報されんがためなり。

اِنَّ السَّاعَةَ اٰتِيَةٌ اَكَادُ اُخْفِيْهَا لِتُجْزٰى كُلُّ نَفْسٍۭ بِمَا تَسْعٰى ﴿١٦﴾

17．されば、之(これ)を信ぜず、己れの下劣な欲望に従う者に妨げられ、汝それより背を向けなば、汝滅亡せん。

فَلَا يَصُدَّنَّكَ عَنْهَا مَنْ لَّا يُؤْمِنُ بِهَا وَاتَّبَعَ هَوٰىهُ فَتَرْدٰى ﴿١٧﴾

18．ところで、モーゼよ、汝の右手にあるものは、そは何ぞや？」と。

وَمَا تِلْكَ بِيَمِيْنِكَ يٰمُوْسٰى ﴿١٨﴾

19．モーゼは答えり、「これは杖なり。我これに凭れ、また我が羊のために木の葉を打落し、その他いろいろ利用す」と。

قَالَ هِيَ عَصَايَ ۚ اَتَوَكَّؤُا عَلَيْهَا وَاَهُشُّ بِهَا عَلٰى غَنَمِيْ وَلِيَ فِيْهَا مَاٰرِبُ اُخْرٰى ﴿١٩﴾

20．神は云えり、「モーゼよ、その杖を投げよ」と。

قَالَ اَلْقِهَا يٰمُوْسٰى ﴿٢٠﴾

21．そこで、モーゼが杖を投げると、見よ、そは蛇に変じたり。（注４）

فَاَلْقٰىهَا فَاِذَا هِيَ حَيَّةٌ تَسْعٰى ﴿٢١﴾

22．神は云えり、「それを攫(つか)め、怖がるなかれ。われらはそれをもとの形に戻さん。

قَالَ خُذْهَا وَلَا تَخَفْ سَنُعِيْدُهَا سِيْرَتَهَا الْاُوْلٰى ﴿٢٢﴾

注３　上述したように、これはモーゼが見た光景である。ここで「くつ」は、妻、子供、友人など世俗の関係を表している。「汝のくつを脱げ」というのは、家族との関係と地域との関係を意味している。従って、神との霊的交感の時モーゼは、妻、子供や他の世俗的関係についてこの考えを払いのけなければいけなかった。この節を文字通り解釈すれば、モーゼは聖なる場所にいるので、くつを脱ぐように命令されたということになるであろう。

注４　杖が実際にへびになったのではなく、単にへびのように見えただけであるので、自然の法則となんら矛盾することは無い。この奇跡は、モーゼを支持する強力な証拠であるばかりでなく、人々が永遠に偶像崇拝や他の邪悪な習慣を信じていたりする訳ではないと、モーゼをなぐさめるものである。モーゼの庇護を受けた瞬間に、人々は善良で神を畏敬する仲間となるのである。７章108節も参照のこと。

23．今度は汝の手を（注５）腋の下にさし込め。病気に非ざるにその手は白くならん―つまり第二の奇蹟なり。

وَاضْمُمْ يَدَكَ إِلَىٰ جَنَاحِكَ تَخْرُجْ بَيْضَاءَ مِنْ غَيْرِ سُوءٍ آيَةً أُخْرَىٰ ﴿٢٣﴾

24．かくの如きは、われらが汝に更に大なる奇蹟のいくつかを示さんがためなり。（注６）

لِنُرِيَكَ مِنْ آيَاتِنَا الْكُبْرَى ﴿٢٤﴾

25．汝ファラオのところへ行け。彼はあらゆる面で掟を破りたり」と。

اذْهَبْ إِلَىٰ فِرْعَوْنَ إِنَّهُ طَغَىٰ ﴿٢٥﴾

第二項

26．モーゼは云えり､「主よ､我が胸を拡げ給え。

قَالَ رَبِّ اشْرَحْ لِي صَدْرِي ﴿٢٦﴾

27．我が仕事を容易ならしめ給え。

وَيَسِّرْ لِي أَمْرِي ﴿٢٧﴾

28．我が舌の結び目を解き、

وَاحْلُلْ عُقْدَةً مِنْ لِسَانِي ﴿٢٨﴾

29．彼等に我が言葉を理解せしめ給え。

يَفْقَهُوا قَوْلِي ﴿٢٩﴾

30．また、我が家族より我に一人の補佐を与え給え―(注７)

وَاجْعَلْ لِي وَزِيرًا مِنْ أَهْلِي ﴿٣٠﴾

31．すなわち、我が兄、アロンを。

هَارُونَ أَخِي ﴿٣١﴾

32．彼によって我が力を増大し、

اشْدُدْ بِهِ أَزْرِي ﴿٣٢﴾

33．彼をして我が仕事を分担せしめ給え、

وَأَشْرِكْهُ فِي أَمْرِي ﴿٣٣﴾

34．我等大いに汝を讃美し奉り、

كَيْ نُسَبِّحَكَ كَثِيرًا ﴿٣٤﴾

35．また大いに汝を念じ奉るほどに。

وَنَذْكُرَكَ كَثِيرًا ﴿٣٥﴾

36．げに汝は、我等を常に見守り給う」と。

إِنَّكَ كُنْتَ بِنَا بَصِيرًا ﴿٣٦﴾

注５　ヤド（手）は、地域・人々も意味するので、この節の表現は、モーゼが人々を庇護しなければいけないという命令を意味している。もしそうすれば、モーゼは精神的な光を放つ高潔な人となり、世界には、道義的邪悪が無くなるであろう。ヤドバイダ（白い手）は明確で強力な議論も意味する。モーゼは自らを証明する強固な議論を授かっていた。

注６　杖は、モーゼに与えられた神兆のうちでも最も偉大なものの１つである。モーゼが、預言者となった時にも、杖の神兆が現れた（20章19節）。モーゼがファラオ（王）に説教をしに行った時にも、ファラオと魔法使いたちに、杖の奇跡が示された(20章70節～74節)。イスラエル人たちが、水を欲しがった時、モーゼは、岩を杖でたたく様に命じられた（２章61節）また、モーゼが海を渡ろうとした時、神はモーゼに対し、海を杖でたたく様命じた。

注７　モーゼは、自分に与えられた偉大な仕事を遂行するのには、力不足であると考え、援助者に助けを求めた。聖なる預言者には、もっと重大な責任の仕事が任されていたが、決して援助を求めたりはしなかった。彼は、道徳的退廃の深淵から、精神的栄光の頂点へと人々を高めるという責任を、独力で、全く手助けも無しで、完全に遂行した。

37．神は云えり、「モーゼよ、汝の願いごとを承諾す。

قَالَ قَدْ أُوتِيتَ سُؤْلَكَ يَٰمُوسَىٰ ٣٦

38．われらは以前にも汝に恩恵を施せり。

وَلَقَدْ مَنَنَّا عَلَيْكَ مَرَّةً أُخْرَىٰٓ ٣٧

39．その時、われらは、汝の母に重要な啓示について黙示して、云えり、

إِذْ أَوْحَيْنَآ إِلَىٰٓ أُمِّكَ مَا يُوحَىٰٓ ٣٨

40．「この子を箱舟に入れて、川に投げ込め。然らば後に、川が之を岸に打上げん。而して、わが敵であり、その子の敵でもある者が彼を拾い上げん」と。われは手ずから愛をこめて汝を包みたり。われこれをなせるは、わが目の前にて汝が育てあげられんがためなり。

أَنِ ٱقْذِفِيهِ فِى ٱلتَّابُوتِ فَٱقْذِفِيهِ فِى ٱلْيَمِّ فَلْيُلْقِهِ ٱلْيَمُّ بِٱلسَّاحِلِ يَأْخُذْهُ عَدُوٌّ لِّى وَعَدُوٌّ لَّهُۥ ۚ وَأَلْقَيْتُ عَلَيْكَ مَحَبَّةً مِّنِّى وَلِتُصْنَعَ عَلَىٰ عَيْنِىٓ ٣٩

41．汝の姉が歩き廻った末、「あなた方をこの子を世話する者のところへ案内すべきか？」と云いたる時。されば、われらは汝を母のところへ戻したり、そは汝の母を安心させ、悲しみを消さんがためなり。また、汝が人を殺した時も、われらは汝を窮地より救えり。この外にも、われらは汝をいろいろな方法で試みたり。汝は数年間マドゥヤンの民の中にとどまりたり。その後、汝はわれらの命によってここに来たりぬ、モーゼよ。

إِذْ تَمْشِىٓ أُخْتُكَ فَتَقُولُ هَلْ أَدُلُّكُمْ عَلَىٰ مَن يَكْفُلُهُۥ ۖ فَرَجَعْنَٰكَ إِلَىٰٓ أُمِّكَ كَىْ تَقَرَّ عَيْنُهَا وَلَا تَحْزَنَ ۚ وَقَتَلْتَ نَفْسًا فَنَجَّيْنَٰكَ مِنَ ٱلْغَمِّ وَفَتَنَّٰكَ فُتُونًا ۚ فَلَبِثْتَ سِنِينَ فِىٓ أَهْلِ مَدْيَنَ ثُمَّ جِئْتَ عَلَىٰ قَدَرٍ يَٰمُوسَىٰ ٤٠

42．「われは、わがために汝を選びたり。

وَٱصْطَنَعْتُكَ لِنَفْسِى ٤١

43．汝、兄と共に、わが奇蹟をたずさえて行け。而して、われを念ずることを怠るなかれ。

ٱذْهَبْ أَنتَ وَأَخُوكَ بِـَٔايَٰتِى وَلَا تَنِيَا فِى ذِكْرِى ٤٢

44．お前たち両名ファラオのところへ行け、彼はすべての則を越えて罪を犯したれば。

ٱذْهَبَآ إِلَىٰ فِرْعَوْنَ إِنَّهُۥ طَغَىٰ ٤٣

45．されど、優しい言葉で彼に語れ。さすれば彼気がつき、神を畏れるかも知らぬ」

فَقُولَا لَهُۥ قَوْلًا لَّيِّنًا لَّعَلَّهُۥ يَتَذَكَّرُ أَوْ يَخْشَىٰ ٤٤

46．両名は答えり、「主よ、彼が我等に対して乱暴せぬか、また暴虐ならんことを恐る」と。

قَالَا رَبَّنَآ إِنَّنَا نَخَافُ أَن يَفْرُطَ عَلَيْنَآ أَوْ أَن يَطْغَىٰ ٤٥

47．神は云えり、「恐るるなかれ。われはお前たち両名と偕にあり。われは聞き、見守らん。

قَالَ لَا تَخَافَآ ۖ إِنَّنِى مَعَكُمَآ أَسْمَعُ وَأَرَىٰ ٤٦

فَأْتِيَاهُ فَقُولَآ إِنَّا رَسُولَا رَبِّكَ فَأَرْسِلْ مَعَنَا بَنِىٓ

48．されば、汝等両名彼のところへ行きて、云え、「我等は汝の主の使徒なり。されば、我等と共にイスラエルの子らを去らしめよ。彼等を苦しめることなかれ。今我等は主より奇蹟(しるし)を汝にもたらせり。この嚮導に従う者に平安あれかし。

إِسْرَاءِيلَ وَلَا تُعَذِّبْهُمْ قَدْ جِئْنَاكَ بِآيَةٍ مِّن رَّبِّكَ وَالسَّلَامُ عَلَىٰ مَنِ اتَّبَعَ الْهُدَىٰ ٤٨

49．そは我等に啓示されたり。之(これ)を拒否し、背を向ける者に天罰降(くだ)らんことを」と。

إِنَّا قَدْ أُوحِيَ إِلَيْنَا أَنَّ الْعَذَابَ عَلَىٰ مَن كَذَّبَ وَتَوَلَّىٰ ٤٩

50．ファラオは云えり、「ならば、モーゼよ、お前ら両名の主とは誰ぞや？」と。

قَالَ فَمَن رَّبُّكُمَا يَا مُوسَىٰ ٥٠

51．モーゼは云えり、「我等の主とは、すべてのものに正しい形を与え、然(しか)る後にその本来の目的に導き給うた御方なり」と。

قَالَ رَبُّنَا الَّذِي أَعْطَىٰ كُلَّ شَيْءٍ خَلْقَهُ ثُمَّ هَدَىٰ ٥١

52．ファラオは云えり、「然(しら)らば、前代の者の成り行きや如何に？」と。(注8)

قَالَ فَمَا بَالُ الْقُرُونِ الْأُولَىٰ ٥٢

53．モーゼは云えり、「それに関する知識は、記録されて主の許(もと)にあり。我が主は誤ることなく、また忘るることもなし」と。(注9)

قَالَ عِلْمُهَا عِندَ رَبِّي فِي كِتَابٍ لَّا يَضِلُّ رَبِّي وَلَا يَنسَى ٥٣

54．貴方がたのために大地を揺籃となしたるは彼にして、その中に幾多の道を敷き連(つら)ねたり。而(しか)して、天より雨を降(くだ)し、それによってわれらはさまざまなる雌雄の植物を生ぜしむ。

الَّذِي جَعَلَ لَكُمُ الْأَرْضَ مَهْدًا وَسَلَكَ لَكُمْ فِيهَا سُبُلًا وَأَنزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَأَخْرَجْنَا بِهِ أَزْوَاجًا مِّن نَّبَاتٍ شَتَّىٰ ٥٤

55．汝等之(これ)を食い、家畜を放牧せよ。げにこの中には、思慮ある者への幾多の神兆(しるし)あり。

كُلُوا وَارْعَوْا أَنْعَامَكُمْ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَاتٍ لِّأُولِي النُّهَىٰ ٥٥

第三項

56．われらは、大地よりお前たちを創り、而(しか)して、之(これ)に帰らしめ、再びそれよりお前たちを甦らせん。

مِنْهَا خَلَقْنَاكُمْ وَفِيهَا نُعِيدُكُمْ وَمِنْهَا نُخْرِجُكُمْ تَارَةً أُخْرَىٰ ٥٦

注8　ファラオの問に対するモーゼの返答に、ファラオは困惑し、自らの質問を退け、モーゼに別の質問をした。すなわち、もう死んでしまった以前の世代について、モーゼの神は知っているかと尋ね、モーゼの導き無しで、以前の世代の人々は、どのようにやっていたのかと明らかにしようとした。すなわち彼らの祖先は、神の導きが無く、神の罰を受けて然るべきであるとモーゼに遠回しに言わせることにより、ファラオは、人々がモーゼに対し反感を抱くように、巧妙に仕組んだのであった。

注9　モーゼは、ファラオの責任のがれ的な策略に対し、相手をへこますような答をしている。彼はファラオに対し、祖先のことは気にかけないと言った。神は彼らのことをすべて知り、彼らに関する詳細は神の記憶

57．われらはファラオにさまざまなる神兆を見せたれど、それ等を彼は認めず、信ずることを拒否したり。

وَلَقَدْ أَرَيْنَاهُ آيَاتِنَا كُلَّهَا فَكَذَّبَ وَأَبَىٰ ٥٧

58．ファラオは云えり、「モーゼよ、汝は妖術を以て我等をこの国土から追い出すべく来たるか？（注10）

قَالَ أَجِئْتَنَا لِتُخْرِجَنَا مِنْ أَرْضِنَا بِسِحْرِكَ يَا مُوسَىٰ ٥٨

59．ならば我等も、同じ妖術を以て汝に対抗せん。されば、我等と汝と約束を結び、双方に都合のいい場所で、必ず約束に違わざれ、我等も汝も」と。

فَلَنَأْتِيَنَّكَ بِسِحْرٍ مِّثْلِهِ فَاجْعَلْ بَيْنَنَا وَبَيْنَكَ مَوْعِدًا لَّا نُخْلِفُهُ نَحْنُ وَلَا أَنتَ مَكَانًا سُوًى ٥٩

60．モーゼは云えり、「その約束は祭りの日と定めん。日が空高く昇る頃、（注11）人々を呼び集めよ」と。

قَالَ مَوْعِدُكُمْ يَوْمُ الزِّينَةِ وَأَن يُحْشَرَ النَّاسُ ضُحًى ٦٠

61．そこで、ファラオは退きとり、計画を煉り、然る後約束の場に現れたり。

فَتَوَلَّىٰ فِرْعَوْنُ فَجَمَعَ كَيْدَهُ ثُمَّ أَتَىٰ ٦١

62．モーゼは人々に云えり、「禍なるかなお前たち。アッラーに対し奉り偽りを云うなかれ、天罰をうけて滅ぼされぬために。げに彼は、偽る者は必ず滅ぼさん」と。（注12）

قَالَ لَهُم مُّوسَىٰ وَيْلَكُمْ لَا تَفْتَرُوا عَلَى اللَّهِ كَذِبًا فَيُسْحِتَكُم بِعَذَابٍ ۖ وَقَدْ خَابَ مَنِ افْتَرَىٰ ٦٢

63．そこで、彼等と計略について互いに論議し、またひそかに協議せり。

فَتَنَازَعُوا أَمْرَهُم بَيْنَهُمْ وَأَسَرُّوا النَّجْوَىٰ ٦٣

64．彼等は云えり、「この両名は確かに妖術使いにして、その妖術を使ってお前たちをその国土から放逐し、もってお前たちの優れた伝統を滅ぼさんとする者なり。

قَالُوا إِنْ هَٰذَانِ لَسَاحِرَانِ يُرِيدَانِ أَن يُخْرِجَاكُم مِّنْ أَرْضِكُم بِسِحْرِهِمَا وَيَذْهَبَا بِطَرِيقَتِكُمُ الْمُثْلَىٰ ٦٤

の中に蓄えられており、復活の日には、神が彼らの状況、環境を考慮に入れ、彼らの行ないに従って、報いるであろう、と答えたのである。

注10　この節は、ファラオの狡猾なたくらみについて言及しているようである。エジプトでは外人であるモーゼは、賢い策略により、エジプト王朝を覆そうとしている、とファラオは人々に述べた。

注11　モーゼと聖なる預言者との間には、面白い類似点がある様だ。十分に準備されたモーゼと魔術師とのコンテストがズハー（午前中）に行なわれたのに対し、聖なる預言者が征服者として、メッカ入りしたのも、アラビアにおける不信仰と多神教の敗退を示すズハーの時であった。

注12　この節には神の啓示の要求者の真偽を試すための確実な基準が定められている。すなわち、神に対してうそをつく者は、つかの間繁栄するかもしれないが、究極的には滅び、みじめな終りをとげるであろう。これは、すべての宗教の歴史のページに大きく書かれている真理である。

65．されば、お前たちの計略を申し合せ、勢ぞろいして進み出でよ。げに今日勝利を得た者は必ず栄えん」と。

فَأَجْمِعُوا كَيْدَكُمْ ثُمَّ ائْتُوا صَفًّا ۚ وَقَدْ أَفْلَحَ الْيَوْمَ مَنِ اسْتَعْلَىٰ ٦٥

66．彼等は云えり、「モーゼよ、汝が先に投げるか、それとも我等が先になそうか」と。

قَالُوا يَا مُوسَىٰ إِمَّا أَنْ تُلْقِيَ وَإِمَّا أَنْ نَكُونَ أَوَّلَ مَنْ أَلْقَىٰ ٦٦

67．モーゼは云えり、「いや、汝等先に投げよ」と。（注 13）すると、見よ！彼等の縄や棒は、その魔術によって、モーゼには、さながら走り廻るが如くに見えたり。（注 14）

قَالَ بَلْ أَلْقُوا ۖ فَإِذَا حِبَالُهُمْ وَعِصِيُّهُمْ يُخَيَّلُ إِلَيْهِ مِنْ سِحْرِهِمْ أَنَّهَا تَسْعَىٰ ٦٧

68．されば、モーゼは心中に怖れをいだけり。（注 15）

فَأَوْجَسَ فِي نَفْسِهِ خِيفَةً مُوسَىٰ ٦٨

69．われらは云えり、「怖るるなかれ、汝必ず勝を得ん。

قُلْنَا لَا تَخَفْ إِنَّكَ أَنْتَ الْأَعْلَىٰ ٦٩

70．汝の右手にあるものを投げよ。さすればそれは、彼等が造れるものを呑み込まん、彼等が造りし物はただの魔術師のごまかしにすぎぬ故。魔術師など、何をもくろもうと、決して栄えず」と。

وَأَلْقِ مَا فِي يَمِينِكَ تَلْقَفْ مَا صَنَعُوا ۖ إِنَّمَا صَنَعُوا كَيْدُ سَاحِرٍ ۖ وَلَا يُفْلِحُ السَّاحِرُ حَيْثُ أَتَىٰ ٧٠

71．かくて、魔術師たちは屈服し、平伏せり。彼等は云えり、「我等はアロンとモーゼの主を信ず」と。

فَأُلْقِيَ السَّحَرَةُ سُجَّدًا قَالُوا آمَنَّا بِرَبِّ هَارُونَ وَمُوسَىٰ ٧١

72．ファラオは云えり、「お前たちは余の許可なしに彼を信ずるか？彼はお前たちに魔術を教えた首魁だった筈。されば、余はお前たちの両手両足を互い違いに切落し、必ず棗椰子の幹にお前たちを磔けにしてくれん。さすればお前たち、いずれの罰が酷しく、いつそう永続きするか、思い知らされん」と。

قَالَ آمَنْتُمْ لَهُ قَبْلَ أَنْ آذَنَ لَكُمْ ۖ إِنَّهُ لَكَبِيرُكُمُ الَّذِي عَلَّمَكُمُ السِّحْرَ ۖ فَلَأُقَطِّعَنَّ أَيْدِيَكُمْ وَأَرْجُلَكُمْ مِنْ خِلَافٍ وَلَأُصَلِّبَنَّكُمْ فِي جُذُوعِ النَّخْلِ وَلَتَعْلَمُنَّ أَيُّنَا أَشَدُّ عَذَابًا وَأَبْقَىٰ ٧٢

注 13　神の預言者たちは、決して自ら攻撃をしかけることはなかった。攻撃されて始めて、防衛した。

注 14　モーゼには魔術師の縄と棒は、動き回っているかの様に見えた。悪の力は、はじめ、短い間勝利を得る様にみえるが、すぐに滅びるのだ。

注 15　モーゼは、魔術師の縄や棒を恐れたりはしなかった。神の預言者たちは、確固たる岩の上に立っており、何ものをも恐れなかった。唯一モーゼが恐れたのは、人々が魔術師の奇妙な行動に惑わされるのではないかということだけであった。

73. 彼等は答えり、「我等は汝より、我等に示されたる明白なる神兆、並びに我等を創造せる彼の方を選ぶべし。されば、汝欲するがままに判決せよ。汝はただ現世の命のみ決定し得るにすぎず。

قَالُوا لَنْ نُؤْثِرَكَ عَلَىٰ مَا جَاءَنَا مِنَ الْبَيِّنَاتِ وَالَّذِي فَطَرَنَا فَاقْضِ مَا أَنْتَ قَاضٍ إِنَّمَا تَقْضِي هَٰذِهِ الْحَيَاةَ الدُّنْيَا ﴿٧٣﴾

74. げに我等が主を信ずるは、我等が犯せし罪の赦しを請い、また汝が我等に強要した魔術の赦しを請わんがためなり。なんとなれば、アッラーは汝よりもはるかに優りて、最も長続きし給う」と。

إِنَّا آمَنَّا بِرَبِّنَا لِيَغْفِرَ لَنَا خَطَايَانَا وَمَا أَكْرَهْتَنَا عَلَيْهِ مِنَ السِّحْرِ وَاللَّهُ خَيْرٌ وَأَبْقَىٰ ﴿٧٤﴾

75. 罪人として主の前に出る者には—地獄あり。彼はその中で死にもせず、また生きもせざらん。（注 16）

إِنَّهُ مَنْ يَأْتِ رَبَّهُ مُجْرِمًا فَإِنَّ لَهُ جَهَنَّمَ لَا يَمُوتُ فِيهَا وَلَا يَحْيَىٰ ﴿٧٥﴾

76. されど、善行を積みし信者として彼の前に出る者、かかる者には最上の位階あり—

وَمَنْ يَأْتِهِ مُؤْمِنًا قَدْ عَمِلَ الصَّالِحَاتِ فَأُولَٰئِكَ لَهُمُ الدَّرَجَاتُ الْعُلَىٰ ﴿٧٦﴾

77. すなわち、下に河川流るる永遠の楽園なり。彼等はそこに永久に住みつかん。そはその身を潔く保つ者への報奨なり。

جَنَّاتُ عَدْنٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا وَذَٰلِكَ جَزَاءُ مَنْ تَزَكَّىٰ ﴿٧٧﴾

第四項

78. われらはモーゼに啓示を降し、「夜に乗じてわが僕等を連れ出し、海中に彼等のために乾いた道を打ち開け。汝追いつかれることを恐れるなかれ、また何も怖がることなかれ」と命ず。

وَلَقَدْ أَوْحَيْنَا إِلَىٰ مُوسَىٰ أَنْ أَسْرِ بِعِبَادِي فَاضْرِبْ لَهُمْ طَرِيقًا فِي الْبَحْرِ يَبَسًا لَا تَخَافُ دَرَكًا وَلَا تَخْشَىٰ ﴿٧٨﴾

79. ファラオはその軍勢を率いて人々を追跡しが、海水は彼等を完全に呑み沈めたり。

فَأَتْبَعَهُمْ فِرْعَوْنُ بِجُنُودِهِ فَغَشِيَهُمْ مِنَ الْيَمِّ مَا غَشِيَهُمْ ﴿٧٩﴾

80. ファラオはその民を邪道に導き、之を正しく導かざりしが故なり。

وَأَضَلَّ فِرْعَوْنُ قَوْمَهُ وَمَا هَدَىٰ ﴿٨٠﴾

81. 「イスラエルの子らよ、われらはお前たちをその敵から救い出し、あの山の右側でお

يَا بَنِي إِسْرَائِيلَ قَدْ أَنْجَيْنَاكُمْ مِنْ عَدُوِّكُمْ وَ

注 16　死により、人は苦しみから解き放される。そのため、罪人は地獄では死なず、苦しみに苛まされるであろう。また、罪人は地獄で生きることもできない。真実の生とは、神の恩寵により成り立つものであり、彼にはそれが与えられないのだ。あるいは、この節の意味するものは、罪人からはすべての慰め、幸福が奪われており、この様な状況は、死よりもつらい、ということかもしれない。

前たちと約束を結び、而して、マンナと鶉をお前たちに降したり。

وٰعَدْنٰكُمْ جَانِبَ الطُّوْرِ الْاَيْمَنَ وَنَزَّلْنَا عَلَيْكُمُ الْمَنَّ وَالسَّلْوٰى ﴿٨١﴾

82．われらがお前たちのために用意したる佳物を食せよ、なれど、度を過ごすことなかれ、もしわが激怒がお前たちの上に降るを恐れなば。わが激怒に触れたる者は、必ずや滅び去らん。

كُلُوْا مِنْ طَيِّبٰتِ مَا رَزَقْنٰكُمْ وَلَا تَطْغَوْا فِيْهِ فَيَحِلَّ عَلَيْكُمْ غَضَبِيْ ۚ وَمَنْ يَّحْلِلْ عَلَيْهِ غَضَبِيْ فَقَدْ هَوٰى ﴿٨٢﴾

83．されど、悔い改めて信仰に入り、善行を積み、その上、指導に忠実なる者には、げにわれは寛大なり。

وَاِنِّيْ لَغَفَّارٌ لِّمَنْ تَابَ وَاٰمَنَ وَعَمِلَ صَالِحًا ثُمَّ اهْتَدٰى ﴿٨٣﴾

84．ところで、モーゼよ、汝をその民から急ぎ離れさせたるは、何ぞや？」

وَمَآ اَعْجَلَكَ عَنْ قَوْمِكَ يٰمُوْسٰى ﴿٨٤﴾

85．モーゼは答えり、「みな我が足跡を厳密に追う。而して我、汝主の許に急ぎたるは、ただ汝を喜ばせんがためなり」と。

قَالَ هُمْ اُولَآءِ عَلٰٓى اَثَرِيْ وَعَجِلْتُ اِلَيْكَ رَبِّ لِتَرْضٰى ﴿٨٥﴾

86．神は云えり、「われら、汝の不在の間に人々を試したるに、サーミリーが（注 17）皆を邪道に導きぬ」と。

قَالَ فَاِنَّا قَدْ فَتَنَّا قَوْمَكَ مِنْۢ بَعْدِكَ وَاَضَلَّهُمُ السَّامِرِيُّ ﴿٨٦﴾

87．されば、モーゼは怒りかつ悲しみつつ己が民のもとに帰りて、云えり、「お前たちの主は有難い約束をお前たちと結ばざりしか？その約束の期限がお前たちは長すぎるとでも云うのか、それとも、天罰が己が身に降りかからんことを望みて、我との約束を破りしか？」と。

فَرَجَعَ مُوْسٰٓى اِلٰى قَوْمِهٖ غَضْبَانَ اَسِفًا ۚ قَالَ يٰقَوْمِ اَلَمْ يَعِدْكُمْ رَبُّكُمْ وَعْدًا حَسَنًا ۚ اَفَطَالَ عَلَيْكُمُ الْعَهْدُ اَمْ اَرَدْتُّمْ اَنْ يَّحِلَّ عَلَيْكُمْ غَضَبٌ مِّنْ رَّبِّكُمْ فَاَخْلَفْتُمْ مَّوْعِدِيْ ﴿٨٧﴾

88．彼等は云えり、「我等は自ら進んで汝との約束を破れるに非ず。なれど、我等は人々の装飾品の重荷を背負わされたので、之を打ち捨てり、あのサーミリー人が投げたる如く」と。

قَالُوْا مَآ اَخْلَفْنَا مَوْعِدَكَ بِمَلْكِنَا وَلٰكِنَّا حُمِّلْنَآ اَوْزَارًا مِّنْ زِيْنَةِ الْقَوْمِ فَقَذَفْنٰهَا فَكَذٰلِكَ اَلْقَى السَّامِرِيُّ ﴿٨٨﴾

注 17　サーミリーとは、サーマリヤ（サマリア人）の形容詞である。サマリア人は、イスラエルの子供の種族の一つであり、ユダヤ教の一宗派であるが、彼らとは、慣習が異なっていた。正確にいえば、サマリア人とは、サマリアの住民である。このサマリア人とは、現在、ナブラスに住み、自らをベネー・イェスラエルと呼ぶ小部族のことを指す。彼らの地域としての歴史は紀元前 722 年にアッシリア人がサマリアを占拠した時に始まる（Jew. Enc.）。

89．かくてサーミリー人は彼等に、牛の形をした、吼える物を造りたり。すると、彼等は云えり､「こはお前たちの神にして、モーゼの神なりしが、彼はそれを忘れたるなり」と。

فَأَخْرَجَ لَهُمْ عِجْلًا جَسَدًا لَّهُ خُوَارٌ فَقَالُوا هَٰذَا إِلَٰهُكُمْ وَإِلَٰهُ مُوسَىٰ فَنَسِيَ ﴿٨٩﴾

90．彼等はそれが一言も答えず、また毒にも薬にもならぬものだということが解らざりしか？

أَفَلَا يَرَوْنَ أَلَّا يَرْجِعُ إِلَيْهِمْ قَوْلًا وَلَا يَمْلِكُ لَهُمْ ضَرًّا وَلَا نَفْعًا ﴿٩٠﴾

第五項

91．これ以前に､すでにアロンが人々に云えり､「我が民よ、お前たちは犢像によって試されたるにすぎず。なれど、げにお前たちの主は慈悲深い神なり。されば、我に従い、我が命に服せ」と。

وَلَقَدْ قَالَ لَهُمْ هَارُونُ مِن قَبْلُ يَا قَوْمِ إِنَّمَا فُتِنتُم بِهِ ۖ وَإِنَّ رَبَّكُمُ الرَّحْمَٰنُ فَاتَّبِعُونِي وَأَطِيعُوا أَمْرِي ﴿٩١﴾

92．彼等は答えり､「我等はモーゼが我等に還るまでは､決して之を崇拝することを止めず」と。

قَالُوا لَن نَّبْرَحَ عَلَيْهِ عَاكِفِينَ حَتَّىٰ يَرْجِعَ إِلَيْنَا مُوسَىٰ ﴿٩٢﴾

93．モーゼは尋ねり､「アロンよ、彼等が迷うのを見たる時、何が汝を妨げたるか、

قَالَ يَا هَارُونُ مَا مَنَعَكَ إِذْ رَأَيْتَهُمْ ضَلُّوا ﴿٩٣﴾

94．我に従うことから？汝、何故に我が命に背きたるや？」と。

أَلَّا تَتَّبِعَنِ ۖ أَفَعَصَيْتَ أَمْرِي ﴿٩٤﴾

95．アロンは答えり､「我が母の子よ、我が髭や髪の毛を摑むなかれ。我は汝が『イスラエルの子らを分裂せしめ、我が言葉を守らざりき』と云いはすまいかと恐れたるなり」と。

قَالَ يَا ابْنَ أُمَّ لَا تَأْخُذْ بِلِحْيَتِي وَلَا بِرَأْسِي ۖ إِنِّي خَشِيتُ أَن تَقُولَ فَرَّقْتَ بَيْنَ بَنِي إِسْرَائِيلَ وَلَمْ تَرْقُبْ قَوْلِي ﴿٩٥﴾

96．モーゼは云えり､「然らば､サーミリー人よ、汝の存念や如何に？」と。

قَالَ فَمَا خَطْبُكَ يَا سَامِرِيُّ ﴿٩٦﴾

97．彼は云えり､「我は彼等が気づかざるものを気づけり｡我は使徒が教えしことの一部を、採ったにすぎず。しかし、それすらも打ち捨てり。かくしたるは、我が心が我に命じたるが故なり」と。（注18）

قَالَ بَصُرْتُ بِمَا لَمْ يَبْصُرُوا بِهِ فَقَبَضْتُ قَبْضَةً مِّنْ أَثَرِ الرَّسُولِ فَنَبَذْتُهَا وَكَذَٰلِكَ سَوَّلَتْ لِي نَفْسِي ﴿٩٧﴾

注18　この言葉には、「私たちの理解力は、イスラエル人よりもすぐれている。」という意味もあるかもしれない。サーミリーが言おうとしたのは、盲目的にモーゼの教えを信じたのではなく、モーゼに従い、教えを理解して信じた、ということである。しかし、モーゼがシナイ山に行った時、彼は便宜の仮面を取り去り、今まで受け入れてきた教え（先祖から受け継がれてきた知識）をすべて捨ててしまった。これが、彼の心の中からの行動である。

98. モーゼは云えり、「されば、立ち去れ！この世にある限り、汝は誰にも『我に触るなかれ』と（注19）云わしめられん。而して、いずれは逃れ難き懲罰の約束あり。さあ、汝が崇拝せし神を見よ。我等は必ず之を焚き灰と化し、然る後に之を海中に撒き散らさん。

قَالَ فَاذْهَبْ فَإِنَّ لَكَ فِي الْحَيٰوةِ أَنْ تَقُولَ لَا مِسَاسَ وَإِنَّ لَكَ مَوْعِدًا لَّنْ تُخْلَفَهُ وَانْظُرْ إِلَىٰ إِلٰهِكَ الَّذِي ظَلْتَ عَلَيْهِ عَاكِفًا لَّنُحَرِّقَنَّهُ ثُمَّ لَنَنْسِفَنَّهُ فِي الْيَمِّ نَسْفًا ﴿٩٨﴾

99. お前たちの神は、独りアッラーにして、それ以外には神なし。彼はその御知識で一切を包含す」と。

إِنَّمَا إِلٰهُكُمُ اللّٰهُ الَّذِي لَا إِلٰهَ إِلَّا هُوَ وَسِعَ كُلَّ شَيْءٍ عِلْمًا ﴿٩٩﴾

100. かくの如く、われらは汝に以前に起りしことの消息を語り聞かす。而して、われらは汝にわれらがもとより注意を与えたり。

كَذٰلِكَ نَقُصُّ عَلَيْكَ مِنْ أَنْبَاءِ مَا قَدْ سَبَقَ وَقَدْ آتَيْنٰكَ مِنْ لَّدُنَّا ذِكْرًا ﴿١٠٠﴾

101. 之に背いたる者は、復活の日に於て、必ず重荷を背負わされ、

مَنْ أَعْرَضَ عَنْهُ فَإِنَّهُ يَحْمِلُ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ وِزْرًا ﴿١٠١﴾

102. その下に甘んぜん。復活の日に於ける彼等にとりて、その重荷は禍いなるべし、

خٰلِدِينَ فِيهِ وَسَاءَ لَهُمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ حِمْلًا ﴿١٠٢﴾

103. 喇叭が吹き鳴らされんその日。その日こそ、われらは碧眼の罪ぶかい者どもを（注20）一人のこらず召集せん。

يَوْمَ يُنْفَخُ فِي الصُّورِ وَنَحْشُرُ الْمُجْرِمِينَ يَوْمَئِذٍ زُرْقًا ﴿١٠٣﴾

104. 彼等は互いに声をひそめて、ささやかん「お前たちの滞在は、ほんの十日程に（注21）しかすぎざりき」—

يَتَخَافَتُونَ بَيْنَهُمْ إِنْ لَّبِثْتُمْ إِلَّا عَشْرًا ﴿١٠٤﴾

105. われらは彼等が云わんとすることを熟知す—すなわち、彼等の中で最も世故にたけた者は云わん、「お前たちは、たった一日しか滞在せなんだ」と。

نَحْنُ أَعْلَمُ بِمَا يَقُولُونَ إِذْ يَقُولُ أَمْثَلُهُمْ طَرِيقَةً إِنْ لَّبِثْتُمْ إِلَّا يَوْمًا ﴿١٠٥﴾

注19　この“我に触るなかれ”という言葉の意味として、次の3つが考えられる。(1)サーミリーは、イスラエル人を牛信仰へ導いたため、社会から拒絶され、罰せされた。(2)彼は皮膚の伝染病にかかったので、人々は彼との接触を拒んだ。(3)彼は、心気症にかかり、人々を避けた。

注20　この比喩は、青い目を持ち、精神的に盲目で、常にイスラムへの憎みを持っている西洋キリスト教諸国を指している様である。

注21　ここでの「10日間」とは、全部で1000年間を意味している。ヒジラ後、ヨーロッパ諸国が休眠していた10世紀（1000年間）のことを指している。聖なる預言者が紀元7世紀初頭に説教を始めた1000年後の17世紀始めに、ヨーロッパ諸国は冬眠から目ざめ、征服のために世界中へと広がっていった。

第六項

106.　彼等は山について（注 22）汝に問わん。云え、「我が主之を粉々に打ち砕き、塵埃の如く四散せん。

وَيَسْـَٔلُونَكَ عَنِ الْجِبَالِ فَقُلْ يَنسِفُهَا رَبِّي نَسْفًا ﴿١٠٦﴾

107.　而して、之を平坦なる不毛の荒野となし、

فَيَذَرُهَا قَاعًا صَفْصَفًا ﴿١٠٧﴾

108.　汝はそこに、何んの窪みも突起するところも見るべし」と。（注 23）

لَّا تَرَىٰ فِيهَا عِوَجًا وَلَا أَمْتًا ﴿١٠٨﴾

109.　その日彼等は、真直に行く召集者に（注 24）従い、それから逸脱し得ざるべし。慈悲深い神の御前ではすべての声は静まり、かそけき足音の外、汝なにも聴かざるべし。

يَوْمَئِذٍ يَتَّبِعُونَ الدَّاعِيَ لَا عِوَجَ لَهُ ۖ وَخَشَعَتِ الْأَصْوَاتُ لِلرَّحْمَٰنِ فَلَا تَسْمَعُ إِلَّا هَمْسًا ﴿١٠٩﴾

110.　その日、慈悲深い神が許可を与え、誠実なるその言葉が嘉納せられる者の外は、誰の執成も益せざるべし。

يَوْمَئِذٍ لَّا تَنفَعُ الشَّفَاعَةُ إِلَّا مَنْ أَذِنَ لَهُ الرَّحْمَٰنُ وَرَضِيَ لَهُ قَوْلًا ﴿١١٠﴾

111.　アッラーは、彼等の前にあるもの後ろにあるもの、（注 25）そのすべてを知り給う。されど、彼等はその知識を以て之を理解し得ざるなり。

يَعْلَمُ مَا بَيْنَ أَيْدِيهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ وَلَا يُحِيطُونَ بِهِ عِلْمًا ﴿١١١﴾

112.　すべての顔は、永生者、自存者の御前で謙らん。而して、邪悪の重荷を背負った者は、必ずや滅ぶらん。

وَعَنَتِ الْوُجُوهُ لِلْحَيِّ الْقَيُّومِ ۖ وَقَدْ خَابَ مَنْ حَمَلَ ظُلْمًا ﴿١١٢﴾

113.　されど、信者にして、善行を積む者は、不当に遇せられる心配もなければ、また損害を受ける心配もなかるべし。

وَمَن يَعْمَلْ مِنَ الصَّالِحَاتِ وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَلَا يَخَافُ ظُلْمًا وَلَا هَضْمًا ﴿١١٣﴾

注 22　ここでアル・ジバール（山）というのは、強力な西洋キリスト教諸国のことである。この節の預言は、西洋諸国を完膚なきまでに破壊するということである。西洋の衰退はもうすでに始まっている。2 つの大戦が、西洋を大いに弱体化させた。18 章 9 節も参照のこと。

注 23　これは、偉大で強力な帝国が滅び、人間社会の様々な分野における社会的経済的地位が向上するであろう時に、社会主義と民主主義が興隆することを示している。

注 24　聖なる預言者のこと。

注 25　「後ろにあるもの」という言葉は、すでに成し遂げた偉業を指し、「前にあるもの」とは、将来、成し遂げようとしている偉業を示す。

114.　かくの如く、われらはアラビア語でクルアーンを降し、その中でさまざまなる警告を明示せり、こは彼等をして神を畏れせしめ、また神を思い出さしめる原因を生ぜしめんがためなり。

وَكَذٰلِكَ اَنْزَلْنٰهُ قُرْاٰنًا عَرَبِيًّا وَّصَرَّفْنَا فِيْهِ مِنَ الْوَعِيْدِ لَعَلَّهُمْ يَتَّقُوْنَ اَوْ يُحْدِثُ لَهُمْ ذِكْرًا ﴿١١٤﴾

115.　崇高なるかな、アッラー、真の王者なり！汝への啓示が完了せぬ前にクルアーンの読誦を催促することなかれ。むしろ云え、「主よ、我に知識を（注26）増し給え」と。

فَتَعٰلَى اللّٰهُ الْمَلِكُ الْحَقُّ ۚ وَلَا تَعْجَلْ بِالْقُرْاٰنِ مِنْ قَبْلِ اَنْ يُّقْضٰٓى اِلَيْكَ وَحْيُهٗ ۫ وَقُلْ رَّبِّ زِدْنِيْ عِلْمًا ﴿١١٥﴾

116.　昔、われらは、アダムと約束を結びしが、彼は之を忘れたり。されどわれらは、彼に不服従の決心ありとは思わざりき。（注27）

وَلَقَدْ عَهِدْنَآ اِلٰٓى اٰدَمَ مِنْ قَبْلُ فَنَسِيَ وَلَمْ نَجِدْ لَهٗ عَزْمًا ﴿١١٦﴾

第七項

117.　われらが、天使たちに向かってアダムに服従せよ」と云いし時、人々は皆従いたり。なれど、イブリースは服さざりき。彼は拒みたり。

وَاِذْ قُلْنَا لِلْمَلٰٓئِكَةِ اسْجُدُوْا لِاٰدَمَ فَسَجَدُوْٓا اِلَّآ اِبْلِيْسَ ۭ اَبٰى ﴿١١٧﴾

118.　そこで、われらは云えり、「アダムよ、この者は、汝並びに汝の妻の敵なり。されば、お前たち両人、この者に楽園から逐い出されて失敗せぬよう気をつけよ。（注28）

فَقُلْنَا يٰٓاٰدَمُ اِنَّ هٰذَا عَدُوٌّ لَّكَ وَلِزَوْجِكَ فَلَا يُخْرِجَنَّكُمَا مِنَ الْجَنَّةِ فَتَشْقٰى ﴿١١٨﴾

119.　此の園では、汝は飢えず、また裸ならず。

اِنَّ لَكَ اَلَّا تَجُوْعَ فِيْهَا وَلَا تَعْرٰى ﴿١١٩﴾

120.　渇きを覚えず、また陽にさらされることもなからん」と。（注29）

وَاَنَّكَ لَا تَظْمَؤُا فِيْهَا وَلَا تَضْحٰى ﴿١٢٠﴾

注26　聖なる預言者は、「知識は中国の様な遠い国にある。されど、知識を求めよ。」と言ったと伝えらている。クルアーンの他の箇所でも、知識は「神の偉大なる恩寵」とされている（2章270節、4章114節参照）知識には2種類ある。(1)啓示によって与えられる知識。クルアーンには、完全な顕示として書かれている。(2)人間が、自ら努力して習得するもの。

注27　この節には、アダムの過失は、判断の過ちであったことが示されている。それはうかつに心ならずもしたことであり、意識的、故意にしたことではなかった。過ちを犯すのは、人の常である。

注28　もし、アダムがイブリースの甘言に惑され、彼の忠告を受け入れたならば、ジャンナ、すなわち、今まで享受してきた「楽園」にいるような至福の生、精神的満足を失うであろう、と警告された。

注29　当節と前節は、文明社会の快適さ、安楽さについて言及しているものと思われる。この2つの節が示しているのは、生活に基本的に必要である衣・食・住を供給することが文明的政府の第一の義務であり、社会が文明社会であるといえるのは、国民すべてにこれらの必要性が満たされた時である。飢えて死ぬ人々がいる一方、富をためこむ人々がいる、という様な深刻な経済的不平等が無くならない限り、人類は社会の混乱に苦しみ続け、人間社会の道徳は向上しないであろう。ここでアダムは、すべての住民に、生活の快適さと必需品

121. 然るに、悪魔はアダムに教唆して、云えり、「アダムよ、我は汝に永遠の樹と不滅の王権とを教えようか？」と。（注 30）

فَوَسْوَسَ إِلَيْهِ الشَّيْطٰنُ قَالَ يٰآدَمُ هَلْ أَدُلُّكَ عَلٰى شَجَرَةِ الْخُلْدِ وَمُلْكٍ لَّا يَبْلٰى ﴿١٢١﴾

122. かくて、彼等両人それを食したれば、自分たちが裸なることに気づき、楽園の木の葉を綴りてその身を蔽い始めたり。かくて、アダムは主の命に背きたれば、その生涯はみじめなものとなりぬ。

فَأَكَلَا مِنْهَا فَبَدَتْ لَهُمَا سَوْءٰتُهُمَا وَطَفِقَا يَخْصِفٰنِ عَلَيْهِمَا مِنْ وَّرَقِ الْجَنَّةِ وَعَصٰى آدَمُ رَبَّهُ فَغَوٰى ﴿١٢٢﴾

123. その後主は、慈悲ゆえに再び彼を選び、彼を容赦して正道へと導きたり。

ثُمَّ اجْتَبٰهُ رَبُّهُ فَتَابَ عَلَيْهِ وَهَدٰى ﴿١٢٣﴾

124. 神は云えり、「お前たち、皆にここから落ちて行け、相互に敵となりて。而して、もしお前たちにわが嚮導降ることあらば、之に従う者は迷うことなく、また災難に遭わざるべし。

قَالَ اهْبِطَا مِنْهَا جَمِيعًا بَعْضُكُمْ لِبَعْضٍ عَدُوٌّ فَإِمَّا يَأْتِيَنَّكُمْ مِّنِّيْ هُدًى فَمَنِ اتَّبَعَ هُدَايَ فَلَا يَضِلُّ وَلَا يَشْقٰى ﴿١٢٤﴾

125. されど、わが訓戒に背く者は、その生涯は難儀させられ、また復活の日には、われら之を盲者として甦らさん」と。

وَمَنْ أَعْرَضَ عَنْ ذِكْرِيْ فَإِنَّ لَهُ مَعِيْشَةً ضَنْكًا وَّنَحْشُرُهُ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ أَعْمٰى ﴿١٢٥﴾

126. 彼は云わん、「主よ、汝何故に我を盲者として甦らしめたるか、我以前視力を持ちたるものを？」と。

قَالَ رَبِّ لِمَ حَشَرْتَنِيْ أَعْمٰى وَقَدْ كُنْتُ بَصِيْرًا ﴿١٢٦﴾

127. 神は云えり、「われらの神兆が汝に降りし時、汝は之をなおざりにせり。今日は、同様に汝がなおざりにされる日なり」と。

قَالَ كَذٰلِكَ أَتَتْكَ آيٰتُنَا فَنَسِيْتَهَا وَكَذٰلِكَ الْيَوْمَ تُنْسٰى ﴿١٢٧﴾

128. われらはこのようにして、規則に違犯し、その主の神兆を信ぜざる者に報ゆ。なれど、来世の懲罰は更に厳しく、更に長し。

وَكَذٰلِكَ نَجْزِيْ مَنْ أَسْرَفَ وَلَمْ يُؤْمِنْ بِآيٰتِ رَبِّهِ وَلَعَذَابُ الْآخِرَةِ أَشَدُّ وَأَبْقٰى ﴿١٢٨﴾

129. われらが彼等以前に如何に多くの世代を滅ぼしたるか、今彼等はそれ等の廃墟を往き来しながら、之によって導かれることなきか？げにこの中には、理性を備えた者へのさまざまなる神兆あり。

أَفَلَمْ يَهْدِ لَهُمْ كَمْ أَهْلَكْنَا قَبْلَهُمْ مِّنَ الْقُرُوْنِ يَمْشُوْنَ فِيْ مَسٰكِنِهِمْ إِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَآيٰتٍ لِّأُولِي النُّهٰى ﴿١٢٩﴾

が十分に与えられている場所に住むであろう、と告げられている。このような状態は、クルアーンの他の部分でも（2章36節）示されている。この節は、また、アダムによって、新しい社会秩序が始まり、人間の社会的発展の時代の先がけとなる王国の基盤を築かれる、ということも示している。

注 30　121節～124節までについての説明は2章36節～39節参照。

第八項

130. もしすでに主から発布せられたる言葉(注 31) なかりせば、而して期限が定められたるに非ざりせば、即罰は避け得ざりしなり。

وَلَوْلَا كَلِمَةٌ سَبَقَتْ مِن رَّبِّكَ لَكَانَ لِزَامًا وَأَجَلٌ مُّسَمًّى ﴿١٣٠﴾

131. 彼等が何んといおうとも耐え忍び、日の出前、日没前に主の栄光を讃えまつれ。また夜間の一時、一日の二回の極に於ても之をなせ。さすれば汝本当の幸福を見いだすやも知れぬ。

فَاصْبِرْ عَلَىٰ مَا يَقُولُونَ وَسَبِّحْ بِحَمْدِ رَبِّكَ قَبْلَ طُلُوعِ الشَّمْسِ وَقَبْلَ غُرُوبِهَا ۖ وَمِنْ آنَاءِ اللَّيْلِ فَسَبِّحْ وَأَطْرَافَ النَّهَارِ لَعَلَّكَ تَرْضَىٰ ﴿١٣١﴾

132. われらが彼等の或る種の者に、束の間の楽しみ―すなわち現世の栄華―を与えたことに汝目をみはるなかれ―あれは要するに、それによって彼等を試さんがためなり。(注 32)

وَلَا تَمُدَّنَّ عَيْنَيْكَ إِلَىٰ مَا مَتَّعْنَا بِهِ أَزْوَاجًا مِّنْهُمْ زَهْرَةَ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا لِنَفْتِنَهُمْ فِيهِ ۚ وَرِزْقُ رَبِّكَ خَيْرٌ وَأَبْقَىٰ ﴿١٣٢﴾

133. 汝の家族に礼拝を命じ、且つそれを絶えず続けさせよ。われらは汝に養われんことを求めず、汝を養うはわれらなり。果報は罪悪に抗して身を護る者にあり。

وَأْمُرْ أَهْلَكَ بِالصَّلَاةِ وَاصْطَبِرْ عَلَيْهَا ۖ لَا نَسْأَلُكَ رِزْقًا ۖ نَّحْنُ نَرْزُقُكَ ۗ وَالْعَاقِبَةُ لِلتَّقْوَىٰ ﴿١٣٣﴾

134. 彼等は云う、「何故彼は主から奇蹟を我等にもたらさざるか？」と。先の諸経典の中にある明白な証拠が、いま彼等に来たれるに非ざるか？

وَقَالُوا لَوْلَا يَأْتِينَا بِآيَةٍ مِّن رَّبِّهِ ۚ أَوَلَمْ تَأْتِهِم بَيِّنَةُ مَا فِي الصُّحُفِ الْأُولَىٰ ﴿١٣٤﴾

135. もしわれらが、使徒の到来以前に天罰によって彼等を滅ぼしたれば、彼等は必ず云わん、「何故汝は我等に使徒を遣わさざりき？さすれば、我等は、卑しめられ、辱しめられる前に汝の戒律に従いたりしものを」と。

وَلَوْ أَنَّا أَهْلَكْنَاهُم بِعَذَابٍ مِّن قَبْلِهِ لَقَالُوا رَبَّنَا لَوْلَا أَرْسَلْتَ إِلَيْنَا رَسُولًا فَنَتَّبِعَ آيَاتِكَ مِن قَبْلِ أَن نَّذِلَّ وَنَخْزَىٰ ﴿١٣٥﴾

136. 云え、「誰もみな待つ。されば、汝等も待て。やがてお前たちは、正道を進むは誰か、また正しい嚮導に従うは誰か、それを知るべし」と。

قُلْ كُلٌّ مُّتَرَبِّصٌ فَتَرَبَّصُوا ۖ فَسَتَعْلَمُونَ مَنْ أَصْحَابُ الصِّرَاطِ السَّوِيِّ وَمَنِ اهْتَدَىٰ ﴿١٣٦﴾

注 31　これは、7章157節の神の言葉について言及している。これからも神の慈悲が、他の特性より優るであろう、と神は全智において定めた。

注 32　戦争、そしてひいては人間の悲惨・流血につながる国家間のねたみ・対立は、人間が物質的豊さ・快適さを貪欲に求めたことによる直接的・間接的な結果である。イスラム教信者は、他人の富をうらやんではいけない。

سُوْرَةُ الْاَنْبِيَاءِ مَكِّيَّةٌ

アル・アンビヤ
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．自分たちの清算が近づいているにもかかわらず、人々は無頓着に顧みざるなり。

اِقْتَرَبَ لِلنَّاسِ حِسَابُهُمْ وَهُمْ فِيْ غَفْلَةٍ مُّعْرِضُوْنَ ②

3．主より降る新たな警告をば、(注1)彼等はいずれも、ばかにして聞き流すばかり。

مَا يَأْتِيْهِمْ مِّنْ ذِكْرٍ مِّنْ رَّبِّهِمْ مُّحْدَثٍ اِلَّا اسْتَمَعُوْهُ وَهُمْ يَلْعَبُوْنَ ③

4．彼等の心は怠りがちなり。而して、不義を行う者どもは密かに相語りて云う、「この男は、我等同様ただの人間に非ざるか？(注2)お前たちその目を開いていながら、魔術に従うのか？」と。

لَاهِيَةً قُلُوْبُهُمْ وَاَسَرُّوا النَّجْوَى الَّذِيْنَ ظَلَمُوْا هَلْ هٰذَآ اِلَّا بَشَرٌ مِّثْلُكُمْ اَفَتَاْتُوْنَ السِّحْرَ وَاَنْتُمْ تُبْصِرُوْنَ ④

5．之に答えて、預言者は云えり、「我が主は、天地の間で語られることはすべて知り給う。彼はすべてを聴き、すべてを深知し給う」と。(注3)

قٰلَ رَبِّيْ يَعْلَمُ الْقَوْلَ فِي السَّمَآءِ وَالْاَرْضِ وَهُوَ السَّمِيْعُ الْعَلِيْمُ ⑤

注1　モハッマド預言者がもたらす啓示は、人々に初めて伝えられる新しい文句や新鮮な形で提示されているが、伝達すべき内容、その本質は既存の啓示と変わらぬものである。そのことは、クルアーンの中でモハッマド預言者自身が、御自身のことを、新たな啓示をもたらす使者ではないと自述していることからわかる。(46：10)

注2　各々の預言者に対し不信者が反ばくの対象としていつでも言及することは、"お前だって我々と変わらぬ人間であり、我々同様いつかは死ぬ運命にあるではないか"、という点である(14：11、23：25、34、26：155、36：16、64：7)。このことに対しては幾度も答えが与えられている(12：110、14：12、16：44と45、17：96)。ここでは8節で答えが述べられている。それは、不信者たちが一方では預言者のことを普通の人と何ら変わりはないと言いつつも、その一方で彼が魔術師であると言うことによりモハッマド預言者が人並みでない知力を有していることを認めているところにある。聖なる預言者は、聞き手に、不思議な影響を及ぼしたがゆえに不信者たちに魔術師と呼ばれたのである。そしてこの節では、クルアーンの有する力は、すばらしく、人を引きつけるものであるから、偏見のない公平な判断力を持つ人であれば、だれでも、クルアーンを受け入れずにはいられないのだということに言及している。

注3　神は不信者がイスラムにしかけるすべての悪だくみや彼らの秘密を御存知なのである。神は、モハッマド預言者や神に選ばれたしもべたちの祈りを聞きとどけられ、不信者たちのすべての悪だくみをくじくのである。

6．否、彼等は云えり、「そは雑夢にすぎず。否、彼之を捏造せり。否、彼は詩人にすぎず。ならば、昔の預言者たちが遣わされたる時の如く、彼にも我等に奇蹟をもたらさしめよ」と。

بَلْ قَالُوٓا أَضْغَاثُ أَحْلَامٍۢ بَلِ افْتَرٰىهُ بَلْ هُوَ شَاعِرٌ فَلْيَأْتِنَا بِاٰيَةٍ كَمَآ أُرْسِلَ الْاَوَّلُوْنَ ٦

7．彼等以前にわれらが滅ぼせし邑の住民は、いずれも信仰せざりき。されば、彼等は信ずべきか？

مَآ اٰمَنَتْ قَبْلَهُمْ مِّنْ قَرْيَةٍ اَهْلَكْنٰهَا اَفَهُمْ يُؤْمِنُوْنَ ٧

8．汝以前にわれらが使徒として遣わしたる者はすべて、われらが啓示を降せしただの人間にすぎず。お前たち之を知らずば、警告を受けた民に之を問え。

وَمَآ اَرْسَلْنَا قَبْلَكَ اِلَّا رِجَالًا نُّوْحِيْٓ اِلَيْهِمْ فَسْـَٔلُوْٓا اَهْلَ الذِّكْرِ اِنْ كُنْتُمْ لَا تَعْلَمُوْنَ ٨

9．われらは使徒たちを食物を摂らざる躰に造らず、また彼等は永遠に生くべき身でもなかりき。

وَمَا جَعَلْنٰهُمْ جَسَدًا لَّا يَاْكُلُوْنَ الطَّعَامَ وَمَا كَانُوْا خٰلِدِيْنَ ٩

10．かくて、われらは約束を全うし、嘉せし者たちを救い、罪人どもを滅ぼせり。

ثُمَّ صَدَقْنٰهُمُ الْوَعْدَ فَاَنْجَيْنٰهُمْ وَمَنْ نَّشَآءُ وَاَهْلَكْنَا الْمُسْرِفِيْنَ ١٠

11．今われらはお前たちに、その品位の糧となる経典を降したり。お前たちそれが解らざるか？（注４）

لَقَدْ اَنْزَلْنَآ اِلَيْكُمْ كِتٰبًا فِيْهِ ذِكْرُكُمْ اَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ١١

第二項

12．われらは如何に多く罪深き邑の住民を滅ぼし、その後に別の民を興したりぞや！

وَكَمْ قَصَمْنَا مِنْ قَرْيَةٍ كَانَتْ ظَالِمَةً وَّاَنْشَاْنَا بَعْدَهَا قَوْمًا اٰخَرِيْنَ ١٢

13．彼等はわれらの懲罰に気づくや、見よ、そこから逃げ出し始めり。

فَلَمَّآ اَحَسُّوْا بَاْسَنَآ اِذَا هُمْ مِّنْهَا يَرْكُضُوْنَ ١٣

14．そこで、われらは云えり、「逃れるなかれ、お前たちが楽しめし快楽の場、お前たちの住居へ帰れ。お前たちはその行状について糾問せらるべし」と。

لَا تَرْكُضُوْا وَارْجِعُوْٓا اِلٰى مَآ اُتْرِفْتُمْ فِيْهِ وَمَسٰكِنِكُمْ لَعَلَّكُمْ تُسْـَٔلُوْنَ ١٤

15．彼等は云えり、「悲しいかな、げに我等は不義者なりき」と。

قَالُوْا يٰوَيْلَنَآ اِنَّا كُنَّا ظٰلِمِيْنَ ١٥

注４　この節で意味していることは、クルアーンを拒否するものは深い悲しみの淵に落ち入り、クルアーンに従うものは発展し、繁栄を遂げ、はしご段の一番下から、いと高き所に昇り、物質的、精神的栄光を得るであろうということである。この事実から、クルアーンが作りごとや詩人のたわむれでなく、混乱した夢物語の集成でもなく、まさに真の神、天地の創造主のお言葉の集大成であるとわかる。

16．而して、彼等の泣き声は、われらがなぎ倒せし畑の如く絶滅せしむるまでは止まざりき。

فَمَا زَالَتْ تِّلْكَ دَعْوٰىهُمْ حَتّٰى جَعَلْنٰهُمْ حَصِيْدًا خٰمِدِيْنَ ﴿١٦﴾

17．われらは天と地、並びにその間にあるすべてのものを、戯れに創造せるに非ず。(注５)

وَمَا خَلَقْنَا السَّمَآءَ وَالْاَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا لٰعِبِيْنَ ﴿١٧﴾

18．もし気晴しを見出さんと欲しなば、われらは之を自らの内に見出さん。われらは断じてそのようなことはせじ。(注６)

لَوْ اَرَدْنَآ اَنْ نَّتَّخِذَ لَهْوًا لَّاتَّخَذْنٰهُ مِنْ لَّدُنَّآ ۖ اِنْ كُنَّا فٰعِلِيْنَ ﴿١٨﴾

19．否、われら、真理を虚偽に投げつければ、そはその頭を砕き、見よ、消滅す。禍なるかな、お前たちが神のせいにしたることが。

بَلْ نَقْذِفُ بِالْحَقِّ عَلَى الْبَاطِلِ فَيَدْمَغُهٗ فَاِذَا هُوَ زَاهِقٌ ۚ وَلَكُمُ الْوَيْلُ مِمَّا تَصِفُوْنَ ﴿١٩﴾

20．天にあるもの地にあるもの、すべてはアッラーに属す。而して、彼のお傍にある者たちは、彼に仕えて驕らず、また倦みもせぬ。

وَلَهٗ مَنْ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۚ وَمَنْ عِنْدَهٗ لَا يَسْتَكْبِرُوْنَ عَنْ عِبَادَتِهٖ وَلَا يَسْتَحْسِرُوْنَ ﴿٢٠﴾

21．彼等は夜も昼も彼を讃美し奉り、たゆむことなし。(注７)

يُسَبِّحُوْنَ الَّيْلَ وَالنَّهَارَ لَا يَفْتُرُوْنَ ﴿٢١﴾

22．彼等は死者を甦らし得る神々を地上で取り得たるや？ (注８)

اَمِ اتَّخَذُوْٓا اٰلِهَةً مِّنَ الْاَرْضِ هُمْ يُنْشِرُوْنَ ﴿٢٢﴾

23．もし天地の間にアッラー以外に神々がありとすれば、天地は必ず荒廃せん。(注９)されば、彼等が唱えるものの上にいやさかに栄えます王座の主アッラーを讃美し奉れ。

لَوْ كَانَ فِيْهِمَآ اٰلِهَةٌ اِلَّا اللّٰهُ لَفَسَدَتَا ۚ فَسُبْحٰنَ اللّٰهِ رَبِّ الْعَرْشِ عَمَّا يَصِفُوْنَ ﴿٢٣﴾

注５　宇宙が単なるなぐさみに創造されたのでなく、その創造には、神の偉大なる知性が秘められているということを考えれば、神が創造物の核として創り給うた人間は、壮大で崇高な目的に仕えるべく創られたことは明らかである。この節では、人間は地球上に神の代理人として遣わされ、人間は神の美徳を映し出す鏡として仕えるべく創られているということが示されている。(２：31)

注６　もし、神が何の壮大な目的もなく単なるなぐさみにこの宇宙を創造されたとしたら、それは神の尊厳や栄知に矛盾することである。

注７　この節では、神の真のしもべとはいかなるものかが述べられている。彼らはたゆむことなく神や人類に仕えているのである。
彼らは一旦神の真理を受け入れれば、どんな状況にあろうとそれを捨てることはない。彼らの、真理に仕えようとする熱意は、衰えることがない。神を礼拝することは彼らの喜びの源であり、それにより彼らは不安や悩みから解き放たれ、心の安らぎをおぼえるのである。(13：29)　モハッマド預言者は「私の目の輝きは祈りの中に存る」と述べたとされている。

注８　使者を甦らせることは、神のみが成し得ることである。イエスにしろ他の人にしろ、この神のみがもつ力は持ち得ない。この神の属性に言及することでイエスの神性を論破するのがこの節とその前後を通じての大切な主題となっている。

注９　この節では、多神論者に対する効果的で得心のいく議論がなされている。無神論者であろうともこの全宇宙に行きわたっている完全な秩序を否定することはできまい。このすばらしい秩序を見れば、唯一の法に

24．彼はそのなすことについて問われることなし、問われるは彼等なるべし。

لَا يُسْئَلُ عَمَّا يَفْعَلُ وَهُمْ يُسْئَلُونَ ﴿٢٤﴾

25．彼等はアッラー以外に神々ありとするか？　云え、「ならばその証拠を示せ。こは、我に従う者たち並びに我が以前の者たちへの経典なり」と。否、彼等の多くは真理を知らず、故に彼等は之(これ)を忌避(きひ)す。

أَمِ اتَّخَذُوا مِنْ دُونِهِ آلِهَةً قُلْ هَاتُوا بُرْهَانَكُمْ هٰذَا ذِكْرُ مَنْ مَعِيَ وَذِكْرُ مَنْ قَبْلِي بَلْ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُونَ الْحَقَّ فَهُمْ مُعْرِضُونَ ﴿٢٥﴾

26．われらは「われ以外に神なし、されば、われのみを崇拝せよ」と啓示することなく、汝以前に使徒を遣わさざりき。

وَمَا أَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ مِنْ رَسُولٍ إِلَّا نُوحِي إِلَيْهِ أَنَّهُ لَا إِلٰهَ إِلَّا أَنَا فَاعْبُدُونِ ﴿٢٦﴾

27．彼等は云う、「慈悲深い神は子を設け給えり」と。アッラーに讃えあれ。否、彼等はただ名誉ある僕等(しもべら)なり。

وَقَالُوا اتَّخَذَ الرَّحْمٰنُ وَلَدًا سُبْحَانَهُ بَلْ عِبَادٌ مُكْرَمُونَ ﴿٢٧﴾

28．彼等はアッラーより先に物云わず、ただアッラーの命を奉じて行う。

لَا يَسْبِقُونَهُ بِالْقَوْلِ وَهُمْ بِأَمْرِهِ يَعْمَلُونَ ﴿٢٨﴾

29．アッラーは、彼等以前にあるもの並びに彼等以後にあるものを知る。彼等は、アッラーが満足の意を表せざる者は執(と)り成(な)さず。彼等はアッラーに畏れて震え戦(おのの)く。

يَعْلَمُ مَا بَيْنَ أَيْدِيهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ وَلَا يَشْفَعُونَ إِلَّا لِمَنِ ارْتَضٰى وَهُمْ مِنْ خَشْيَتِهِ مُشْفِقُونَ ﴿٢٩﴾

30．彼等天使の中に「我は彼とは別の神なり」と云う者あらば、（注10）われらはその者に地獄を以て報いん。われらはかくの如く不義な輩(やから)に報ゆ。

وَمَنْ يَقُلْ مِنْهُمْ إِنِّي إِلٰهٌ مِنْ دُونِهِ فَذٰلِكَ نَجْزِيهِ جَهَنَّمَ كَذٰلِكَ نَجْزِي الظَّالِمِينَ ﴿٣٠﴾

従ってそれが形成されているという事実は明らかである。そして法が唯一であるということから自然に、宇宙の創造主であり監視者であられる神の唯一性が証明できる。もし神が複数存在するとしたら、当然のことながら宇宙を制御している法も複数存在することになる。
なぜなら一つの神にそれぞれ、宇宙を創るために個有の法が必要とされるからである。それゆえに、もし複数の神が存在するとすれば当然、混乱が生じるのは避けられず、宇宙はぶつかり合って粉々に砕け散ってしまうことであろう。以上のことから、すべての点で同等の３人の神が存在し、共に宇宙を創り、制御しているなどというのは全くばかげたあり得ない話だとわかる。

注10　神性を要求する者が、その誤った要求ゆえ罰せられるのは、来世においてのみであるが、不実にも預言者性を主張する詐称者、いかさま師はまさにこの世で、罰せられるのである。彼らは、死、破滅に遭遇し、彼らの組織は全て、まさにこの世でむだになってしまうのだ（69章45－48節）。このような２種類の詐称者の扱いが違うのは、神性を主張することの愚かさは自明であるという事実ゆえであり、そのようなことを主張する者は、あえてこの世で罰せられるにはおよばないからである。しかしながら、預言者性を不実にも主張する者は、もし無罪放免を認められたとしたならば、罪なき人々をだまして、己の虚偽なる主張を受け入れさせることに成功する可能性もありえる。それゆえに、そのような者はまさにこの世で、最終的に、敗北、敗走、破壊を経験させられ、長生きは許されず、又、その使命が果たされることも許されないのである。

第三項

31．不信心者輩は、天と地が相い寄りたる一個の団塊なりしをわれらが之を二つに分けたることを、解らざるか？而して、われらは、水よりすべての生物を創造せり。それでも彼等は信ぜざるか？（注 11）

أَوَلَمْ يَرَ الَّذِينَ كَفَرُوٓا أَنَّ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضَ كَانَتَا رَتْقًا فَفَتَقْنٰهُمَا ۖ وَجَعَلْنَا مِنَ الْمَآءِ كُلَّ شَيْءٍ حَيٍّ ۖ أَفَلَا يُؤْمِنُونَ ﴿٣١﴾

32．また、われらは、大地に堅固なる山々を据え、以て大地が揺れ動かざるようにし、その上、彼等が正しく導かれんがためにそこに広い道を造りたり。

وَجَعَلْنَا فِي الْأَرْضِ رَوَاسِيَ أَنْ تَمِيدَ بِهِمْ وَجَعَلْنَا فِيهَا فِجَاجًا سُبُلًا لَّعَلَّهُمْ يَهْتَدُونَ ﴿٣٢﴾

33．更にわれらは、天をもって、しっかりと支え護る屋根となしぬ。然るに彼等は、その神兆を顧みず。（注 12）

وَجَعَلْنَا السَّمَآءَ سَقْفًا مَّحْفُوظًا ۚ وَهُمْ عَنْ اٰيٰتِهَا مُعْرِضُونَ ﴿٣٣﴾

34．彼こそは、昼夜を創り、その軌道に沿って迅速に走る太陽と月とを創り給えし御方なり。（注 13）

وَهُوَ الَّذِي خَلَقَ الَّيْلَ وَالنَّهَارَ وَالشَّمْسَ وَالْقَمَرَ ۖ كُلٌّ فِي فَلَكٍ يَسْبَحُونَ ﴿٣٤﴾

35．われらは汝以前の何人にも、不死の命を授けたることなし。それでは、汝は死すとも、

وَمَا جَعَلْنَا لِبَشَرٍ مِّنْ قَبْلِكَ الْخُلْدَ ۖ أَفَإِنْ مِّتَّ

注 11　本節は、偉大なる科学的真実を指摘している。宇宙の前物質的段階に言及し、全宇宙、特に太陽系が、非結晶質、星雲状集団から発達したということを主張しているように思われる。神は、神自身の手により動かしめた法則に応じ、物質の固まりを分裂させた。そのばらとなった小片が、太陽系の単位となったのである。(Harold Richards著“The Universe Surveyed”及びFred Hoyle著“The Nature of Universe”)　その後、神は水から全ての生命を創造した。物質的宇宙と同様に、精神的宇宙もまた、混乱した考え、愚かな信念といった定形の集団から発達するのだと、本節は含意しているように思われる。神が、神の絶対的に確実な知恵を駆使し、至高なる計画に従事し、物質の固まりを分裂させ、その結果こなごなとなった小片が太陽系の単位となったのと同様の方法で、神は混乱した考えの窮地に浸った世界に新しい精神的秩序をもたらすのである。人類が、道徳的堕落のまっ暗やみに陥り、精神的ふん囲気が濃厚かつ圧迫的になると、神は、一面に広がる精神的暗やみを揺さぶる天の使者を遣わして御自身の美徳を表されるために、光を起こすのだ。すると、この混乱し、生命のない道徳的堕落と精神的退廃の固まりから、精神的宇宙が生まれるのである。その精神的宇宙は、中央から広がり始め、最終的には全地球を包含し、その刺激から生命および進むべき方向を受け入れるのだ。

注 12　太陽、月、惑星、星を伴う太陽系は、何百万年もの間存在し続けた秩序のとれ、よく統制された組織であり、これら組織体の動きにおいては、なんらの無秩序も、逸脱も経験したこのがないのであった。これらの天の組織体は、地球及びその住民に、非常に有益な影響を与えるのである。屋根が、家の住民に対して、雨、寒さ、暑さからの保護手段であると同様に、天は、地球に対しての保護の役割を果たし、天体は、人類に有益な影響を及ぼすのである。

注 13　夜と昼、太陽と月は全て、神によって創造され、それら全てが人間の必要性を満たすのであり、地球上での人間の存在にとっては不可欠なものである。

فَهُمُ الْخٰلِدُوْنَ ﴿٣٥﴾

彼等は永遠にこの世で生きると云うか？（注 14）

كُلُّ نَفْسٍ ذَآئِقَةُ الْمَوْتِ ۗ وَنَبْلُوْكُمْ بِالشَّرِّ وَالْخَيْرِ فِتْنَةً ۗ وَاِلَيْنَا تُرْجَعُوْنَ ﴿٣٦﴾

36. 人はみな死を味わされん。われらは禍福の試練を用いて、お前たちを試すなり。而して、お前たち、必ずわが許に連れ戻されん。

وَاِذَا رَاٰكَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْٓا اِنْ يَّتَّخِذُوْنَكَ اِلَّا هُزُوًا ۗ اَهٰذَا الَّذِيْ يَذْكُرُ اٰلِهَتَكُمْ ۚ وَهُمْ بِذِكْرِ الرَّحْمٰنِ هُمْ كٰفِرُوْنَ ﴿٣٧﴾

37. 不信心者どもが汝を見る時、彼等は汝をただ嗤いものにして、云う、「我等の神々を悪し様に云うは、この者なるか？」と。慈悲深い神の訓戒を拒否する者、そは彼等自身なり。

خُلِقَ الْاِنْسَانُ مِنْ عَجَلٍ ۗ سَاُورِيْكُمْ اٰيٰتِيْ فَلَا تَسْتَعْجِلُوْنِ ﴿٣٨﴾

38. 人間というものはせっかちに出来ている。わが神兆を必ずお前たちに見せてやるから、われをせき立てることなかれ。

وَيَقُوْلُوْنَ مَتٰى هٰذَا الْوَعْدُ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ﴿٣٩﴾

39. すると、彼等は云う、「お前の言葉が本当なら、その約束は何時実行されるか？」と。

لَوْ يَعْلَمُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا حِيْنَ لَا يَكُفُّوْنَ عَنْ وُّجُوْهِهِمُ النَّارَ وَلَا عَنْ ظُهُوْرِهِمْ وَلَا هُمْ يُنْصَرُوْنَ ﴿٤٠﴾

40. もし不信心者どもが、その顔や背を業火から（注 15）防ぎ得ず、また救われざらんことを知るならば！

بَلْ تَأْتِيْهِمْ بَغْتَةً فَتَبْهَتُهُمْ فَلَا يَسْتَطِيْعُوْنَ رَدَّهَا وَلَا هُمْ يُنْظَرُوْنَ ﴿٤١﴾

41. 否、そは彼等を不意に襲い、驚きうろたえせしむべし。されば、彼等は之を押し戻すこと能わず、また猶予せらることもなかるべし。（注 16）

وَلَقَدِ اسْتُهْزِئَ بِرُسُلٍ مِّنْ قَبْلِكَ فَحَاقَ بِالَّذِيْنَ سَخِرُوْا مِنْهُمْ مَّا كَانُوْا بِهٖ يَسْتَهْزِءُوْنَ ﴿٤٢﴾ ع

42. げに汝以前の使徒たちは嘲弄せられたり。されど、彼等を嘲弄せし者どもは、その嘲弄したもので包囲されり。

注 14　聖なる預言者以前のさまざまな法律や宗教的組織は全て、精神的腐敗、破滅に至る運命だったのだ。時の果てまで生き延びるのは、聖なる預言者の法律－イスラム教律法のみであった。本節がまた含意していることは、いかなる人間も、腐敗や死から免れないし、聖なる預言者ですらも同様であるということである。永遠・永久とは神自身のみに見られる特性なのだ。

注 15　「業火」とはここでは“戦争の火”を意味する。不信者たちは、火をつけ、自分たち自身がその中で、燃え尽きてしまった。彼らはイスラム教に向かって、剣を抜き、その剣によって、滅びてしまったのだ。「その顔や」というのは、彼らが、自分たちの前で目にすることになる罰を意味する。すなわちそのきざしが、明らかに判然とするだろうということである。「その背を」というのは、その罰が彼らに突然、だしぬけに襲いかかるであろうということを意味している。さらには、その罰は彼ら全て―指導者たち、そして一般の人間―を圧倒することになるであろう。

注 16　本節での言及は、おそらくは、クライシュが完全に不意打ちを食わされ、すっかりうろたえてしまった際のメッカの陥落についてのことであろう。

第四項

43．云え、「昼夜をとわず、慈悲深い神の怒りに対してお前たちを護る者は誰ぞ？」と。然るに彼等は、その主を念ずることを顧みず。

قُلْ مَنْ يَكْلَؤُكُمْ بِالَّيْلِ وَالنَّهَارِ مِنَ الرَّحْمٰنِ ۗ بَلْ هُمْ عَنْ ذِكْرِ رَبِّهِمْ مُّعْرِضُوْنَ ﴿٤٣﴾

44．それとも彼等は、われら以外に、自分を護り得る神々を有するや？それ等の神々は、己れ自身をも護ること能わず、またわれらの攻撃を防ぐこと能わず。

اَمْ لَهُمْ اٰلِهَةٌ تَمْنَعُهُمْ مِّنْ دُوْنِنَا ۚ لَا يَسْتَطِيْعُوْنَ نَصْرَ اَنْفُسِهِمْ وَلَا هُمْ مِّنَّا يُصْحَبُوْنَ ﴿٤٤﴾

45．否、われらはこれ等の者並びに、その父祖たちにこの世の享楽を与え、その命を永からしめたり。彼等は、われらがこの地を訪れ、外郭から縮小しつつあるを見ざるか？（注17）彼等は果して勝利者たり得るや？

بَلْ مَتَّعْنَا هٰٓؤُلَآءِ وَاٰبَآءَهُمْ حَتّٰى طَالَ عَلَيْهِمُ الْعُمُرُ ۗ اَفَلَا يَرَوْنَ اَنَّا نَاْتِى الْاَرْضَ نَنْقُصُهَا مِنْ اَطْرَافِهَا ۗ اَفَهُمُ الْغٰلِبُوْنَ ﴿٤٥﴾

46．云え、「我はただ天啓に従ってお前たちに警告するのみ」と。されど、聾者は、警告されてもその呼びかけの声が聞けず。

قُلْ اِنَّمَآ اُنْذِرُكُمْ بِالْوَحْىِ ۖ وَلَا يَسْمَعُ الصُّمُّ الدُّعَآءَ اِذَا مَا يُنْذَرُوْنَ ﴿٤٦﴾

47．然しながら、主の罰の気配すら感じただけで、彼等は必ず悲鳴を上げる。「ああ、情けなや！げに我等は不義者なりき」

وَلَئِنْ مَّسَّتْهُمْ نَفْحَةٌ مِّنْ عَذَابِ رَبِّكَ لَيَقُوْلُنَّ يٰوَيْلَنَآ اِنَّا كُنَّا ظٰلِمِيْنَ ﴿٤٧﴾

48．われらは公正にして正確なる秤を最後の審判の日のために設けん、されば何人も不当に遇せらるることなし。たとい芥子菜の種子の一粒の重さなりとも、われらは之を明らかにせん。われらは清算者として万全なり。

وَنَضَعُ الْمَوَازِيْنَ الْقِسْطَ لِيَوْمِ الْقِيٰمَةِ فَلَا تُظْلَمُ نَفْسٌ شَيْـًٔا ۗ وَاِنْ كَانَ مِثْقَالَ حَبَّةٍ مِّنْ خَرْدَلٍ اَتَيْنَا بِهَا ۗ وَكَفٰى بِنَا حٰسِبِيْنَ ﴿٤٨﴾

49．われらはモーゼとアロンに、義しい者にとっては識別とも光明とも、また訓戒ともなるものを与えたり。

وَلَقَدْ اٰتَيْنَا مُوْسٰى وَهٰرُوْنَ الْفُرْقَانَ وَضِيَآءً وَّذِكْرًا لِّلْمُتَّقِيْنَ ﴿٤٩﴾

50．彼等は密かにその主を恐れ、審判の時を憶いて恐れおののく者たちなり。

الَّذِيْنَ يَخْشَوْنَ رَبَّهُمْ بِالْغَيْبِ وَهُمْ مِّنَ السَّاعَةِ مُشْفِقُوْنَ ﴿٥٠﴾

注17　ある国民の国家の繁栄の時代が長くなると、その国民は、自分らの繁栄や進歩が衰えることはないであろうとの誤った認識をするようになり、その結果、横柄になり、心はかたくなになるのである。従って、繁栄時代が長びくことが、没落の原因となるのである。本節では、不信者たちに、進歩や繁栄が無限に続くのだという物欲しげな考え、虚偽の自己満足を特に持たぬよう警告し、神は徐々にではあるが確実に、あらゆる方向からその土地を減らし、縮小しつつあるのだ、つまり、イスラム教は、あらゆる家、全ての社会的地域や階層に侵入していくのだという事実に目を閉じていまわないようにと言っているのだ。

51．而して、このクルアーンは、われらが降したる有難い訓戒なり。然るにお前たち、なお之を拒むか？

وَهٰذَا ذِكْرٌ مُّبٰرَكٌ اَنْزَلْنٰهُ ۚ اَفَاَنْتُمْ لَهٗ مُنْكِرُوْنَ ﴿٥١﴾

第五項

52．その昔、われらはアブラハムを指導せり、彼がその器であるを知りたればこそ。

وَلَقَدْ اٰتَيْنَآ اِبْرٰهِيْمَ رُشْدَهٗ مِنْ قَبْلُ وَكُنَّا بِهٖ عٰلِمِيْنَ ﴿٥٢﴾

53．彼がその父並びにその民に向って、「貴方がたがか程夢中になる、これ等の偶像は何者ぞ？」と云えし時、

اِذْ قَالَ لِاَبِيْهِ وَقَوْمِهٖ مَا هٰذِهِ التَّمَاثِيْلُ الَّتِيْٓ اَنْتُمْ لَهَا عٰكِفُوْنَ ﴿٥٣﴾

54．彼等は答えり、「我等は、先祖たちが彼等を崇拝するを見たり」と。

قَالُوْا وَجَدْنَآ اٰبَآءَنَا لَهَا عٰبِدِيْنَ ﴿٥٤﴾

55．アブラハムは云えり、「貴方がた自身並びに貴方がたの先祖たちも明らかに誤れり」と。

قَالَ لَقَدْ كُنْتُمْ اَنْتُمْ وَاٰبَآؤُكُمْ فِيْ ضَلٰلٍ مُّبِيْنٍ ﴿٥٥﴾

56．彼等は云えり、「汝は本当に我等に真理をもたらしたるか、それとも冗談を云うのか？」と。

قَالُوْٓا اَجِئْتَنَا بِالْحَقِّ اَمْ اَنْتَ مِنَ اللّٰعِبِيْنَ ﴿٥٦﴾

57．アブラハムは答えり、「否、貴方がたの主は天地の主、それを創り給うた御方なり。而して、我は、その証人の一人なり。（注 18）

قَالَ بَلْ رَّبُّكُمْ رَبُّ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ الَّذِيْ فَطَرَهُنَّ ۖ وَاَنَا عَلٰى ذٰلِكُمْ مِّنَ الشّٰهِدِيْنَ ﴿٥٧﴾

58．アッラーに誓って云う、貴方がたが背を向けて去りし後、我は必ず貴方がたの偶像に対して策を施さん」と。

وَتَاللّٰهِ لَاَكِيْدَنَّ اَصْنَامَكُمْ بَعْدَ اَنْ تُوَلُّوْا مُدْبِرِيْنَ ﴿٥٨﴾

59．そこで彼は、巨像一体、彼等帰りて尋ぬべしと思い、之を残し、他の悉く打ち砕きたり。

فَجَعَلَهُمْ جُذٰذًا اِلَّا كَبِيْرًا لَّهُمْ لَعَلَّهُمْ اِلَيْهِ يَرْجِعُوْنَ ﴿٥٩﴾

60．彼等は云えり、「我等の神々に対して誰が之をなしたるか？げにその者こそ不義者なり」と。

قَالُوْا مَنْ فَعَلَ هٰذَا بِاٰلِهَتِنَآ اِنَّهٗ لَمِنَ الظّٰلِمِيْنَ ﴿٦٠﴾

61．他の者は云えり、「我等は、アブラハムと呼ばれる若者が、神々を悪し様に云うを聞けり」と。

قَالُوْا سَمِعْنَا فَتًى يَّذْكُرُهُمْ يُقَالُ لَهٗٓ اِبْرٰهِيْمُ ﴿٦١﴾

注 18　本節では、神の使者たちは、神について語る際には、個人的経験から話すのだという至高の真実を指摘している。神の使者たちは、単に、人間の理性が神の存在を信じることを要求するために人間を神のもとに招くのではなく、十分な確信と、確固たる信念をもって、人間を神のもとに招くのである。（12 章 109 節）

62．彼等は云えり、「されば彼を公衆の面前に曳き出せ、（注 19）恐らく皆が証人とならん」と。

قَالُوا فَأْتُوا بِهِ عَلَىٰ أَعْيُنِ النَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَشْهَدُونَ ٦٢

63．彼等はアブラハムに向って云えり、「おお、アブラハムよ、我等の神々に之を為せるは汝なるか？」と。

قَالُوا أَأَنتَ فَعَلْتَ هَٰذَا بِآلِهَتِنَا يَا إِبْرَاهِيمُ ٦٣

64．アブラハムは答えり、「然り、確かに何者かが之をなせり。ここに偶像等の頭あり。もし偶像等物云わば、之を偶像等に問え」と。（注 20）

قَالَ بَلْ فَعَلَهُ كَبِيرُهُمْ هَٰذَا فَاسْأَلُوهُمْ إِن كَانُوا يَنطِقُونَ ٦٤

65．かくて彼等は自ら顧みて、云えり、「誤りしは、げに我等自身なり」と。

فَرَجَعُوا إِلَىٰ أَنفُسِهِمْ فَقَالُوا إِنَّكُمْ أَنتُمُ الظَّالِمُونَ ٦٥

66．しかるに、彼等はやがて、邪悪な以前の状態にたち返りて、云えり、「汝これ等の神々が物云わぬことを確かに知りぬ」と。

ثُمَّ نُكِسُوا عَلَىٰ رُءُوسِهِمْ لَقَدْ عَلِمْتَ مَا هَٰؤُلَاءِ يَنطِقُونَ ٦٦

67．アブラハムは云えり「ならば貴方がたは、アッラーの代りに、少しも毒にも薬にもならぬ神々を崇め奉るか？

قَالَ أَفَتَعْبُدُونَ مِن دُونِ اللَّهِ مَا لَا يَنفَعُكُمْ شَيْئًا وَلَا يَضُرُّكُمْ ٦٧

68．いやはや、情けなや貴方がた、並びにアッラーの代りに貴方がたが崇める神々は。これでも貴方がたまだ理解し得ぬか？」と。

أُفٍّ لَّكُمْ وَلِمَا تَعْبُدُونَ مِن دُونِ اللَّهِ أَفَلَا تَعْقِلُونَ ٦٨

69．彼等は云えり、「彼を火炙りにし、我等の神々を救え、いやしくも何事かをなさんとするなら」と。

قَالُوا حَرِّقُوهُ وَانصُرُوا آلِهَتَكُمْ إِن كُنتُمْ فَاعِلِينَ ٦٩

70．そこで、われらは云えり、「火よ、冷たくなれ、アブラハムは安泰なれ」と。（注 21）

قُلْنَا يَا نَارُ كُونِي بَرْدًا وَسَلَامًا عَلَىٰ إِبْرَاهِيمَ ٧٠

注 19　アブラハムが、大衆の前に召喚された理由は、彼が偶像を非難するのを聞いた者が彼に不利な証言をするためか、彼に不利な証拠を耳にし、どんな罰を彼に与えるべきかを決定するためか、又は、彼に課さることになっている罰を、彼らが目撃するためかのどれかである。

注 20　本文で与えられた意味の他に、このアラビア語の表現は、アブラハムが偶像崇拝者たちと話をする際に、習慣として皮肉的に話されてきたものでもある。この場合、この語の意味は、次のようである。“なぜ私がこれを為してしまうべきだったのであろうか。彼らの支配者がこれを為したかもしれないのに”これによって、事実があまりに明らかであるので、私がこれを為したことを疑う余地もなければなんらの説明も必要ないのだということを意味している、アブラハムは、まず偶像を破壊し、そしてもしも話せるのならば、偶像に誰が、偶像を破壊したのか告げるよう要求せよと信者にいどむことにより、人々を非難し、彼の偶像崇拝の慣習の空虚さをしみじみと訴えたようである。

注 21　火がいかにしておさまったかについては、語られていない。折よい雨、または激しいハリケーンによって、消されたのかもしれない。いずれにせよ、神が、アブラハムの解放に至った状況をひき起こしたことに変

71. 彼等はアブラハムに危害を加えんと謀りしが、われらは彼等を最悪の失敗者たらしめたり。

وَأَرَادُوا بِهِ كَيْدًا فَجَعَلْنَاهُمُ الْأَخْسَرِينَ ﴿٧١﴾

72. 而して、われらはアブラハムとロトを救い、われらが万民のために祝福せし土地へ彼等を導きたり。

وَنَجَّيْنَاهُ وَلُوطًا إِلَى الْأَرْضِ الَّتِي بَارَكْنَا فِيهَا لِلْعَالَمِينَ ﴿٧٢﴾

73. 而して、われらは彼にイサクを授け、また孫としてヤコブも授け、彼等を皆義しい人となせり。

وَوَهَبْنَا لَهُ إِسْحَاقَ وَيَعْقُوبَ نَافِلَةً ۖ وَكُلًّا جَعَلْنَا صَالِحِينَ ﴿٧٣﴾

74. 而して、われらは彼等をして、われらが命を奉じて人々を導く指導者たらしめ、また啓示を降して、善行を積み、礼拝を遵守し、施しを惜しまぬことを彼等に命じたり。されば、彼等は、われらのみを崇拝せり。

وَجَعَلْنَاهُمْ أَئِمَّةً يَهْدُونَ بِأَمْرِنَا وَأَوْحَيْنَا إِلَيْهِمْ فِعْلَ الْخَيْرَاتِ وَإِقَامَ الصَّلَاةِ وَإِيتَاءَ الزَّكَاةِ ۖ وَكَانُوا لَنَا عَابِدِينَ ﴿٧٤﴾

75. またロトには、われらは知恵と知識とを与えり。而して、われらは忌まわしい行為にふけるあの邑から、彼を救出せり。げに彼等は邪悪にして、反逆的民なりき。

وَلُوطًا آتَيْنَاهُ حُكْمًا وَعِلْمًا وَنَجَّيْنَاهُ مِنَ الْقَرْيَةِ الَّتِي كَانَت تَّعْمَلُ الْخَبَائِثَ ۗ إِنَّهُمْ كَانُوا قَوْمَ سَوْءٍ فَاسِقِينَ ﴿٧٥﴾

76. なれど、われらはロトをわれらが慈悲の中に入るを許したり、彼が本当に義しい人間なりしが故に。

وَأَدْخَلْنَاهُ فِي رَحْمَتِنَا ۖ إِنَّهُ مِنَ الصَّالِحِينَ ﴿٧٦﴾

第六項

77. 昔、ノアが、声をあげてわれらを喚びし時のことを思い起せ。われらはその祈りを聞きたれば、大災害から彼とその家族とを救出せり。

وَنُوحًا إِذْ نَادَىٰ مِن قَبْلُ فَاسْتَجَبْنَا لَهُ فَنَجَّيْنَاهُ وَأَهْلَهُ مِنَ الْكَرْبِ الْعَظِيمِ ﴿٧٧﴾

78. 而して、われらは、われらの神兆を否認せる者どもに対抗し、彼を助けり。げに彼等は邪悪な民なりし故、われらは之を皆溺死せしめたり。

وَنَصَرْنَاهُ مِنَ الْقَوْمِ الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا ۚ إِنَّهُمْ كَانُوا قَوْمَ سَوْءٍ فَأَغْرَقْنَاهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٧٨﴾

わりはない。天の奇跡には、常に神秘的要因が存在する。アブラハムが火から救い出されたその方法も、本当にすばらしき奇跡であった。アブラハムが火の中に投げ込まれたことは、ユダヤ人のみならず、東方のキリスト教徒にも信じらさている。1月25日は、この事件を記念して、シリアカレンダーで特別扱いの日とされている（Hyde, De Rel. Vet Pers., P73）。また、Mdr. Rabbah on Gen. Par. 17, Schalacheleth Hakabala 2, Maimon de Idol. Ch. 1 Jad Hachazakah, Vet 6も参照のこと。

79. また、ダビデとソロモンが、或る者の羊が夜間迷い出て作物を荒したる時、（注 22）それぞれ独自の裁きをなしたることを思い起せ。われらはその裁判の証人なりき。

وَدَاوُدَ وَسُلَيْمَٰنَ إِذْ يَحْكُمَانِ فِى ٱلْحَرْثِ إِذْ نَفَشَتْ فِيهِ غَنَمُ ٱلْقَوْمِ وَكُنَّا لِحُكْمِهِمْ شَٰهِدِينَ ﴿٧٩﴾

80. われらはソロモンに、その事件に対する正しい知力を与えたり。われらは両名のそれぞれに知恵と知識とを与えたり。特にダビデには、われら山々と鳥たちを従わせしめ、われらの讃美にダビデと偕に協和せしめたり。こはすべてわれらがなせる技なり。

فَفَهَّمْنَٰهَا سُلَيْمَٰنَ ۚ وَكُلًّا ءَاتَيْنَا حُكْمًا وَعِلْمًا ۚ وَسَخَّرْنَا مَعَ دَاوُدَ ٱلْجِبَالَ يُسَبِّحْنَ وَٱلطَّيْرَ ۚ وَكُنَّا فَٰعِلِينَ ﴿٨٠﴾

81. また、われらは、お前たちのために鎧を造る術を彼に教えたり、（注 23）そは人々にお互いの暴力からその身を防ぎ衛らしめんがためなり。これでもお前たち感謝の念が湧かぬか？

وَعَلَّمْنَٰهُ صَنْعَةَ لَبُوسٍ لَّكُمْ لِتُحْصِنَكُم مِّنۢ بَأْسِكُمْ ۖ فَهَلْ أَنتُمْ شَٰكِرُونَ ﴿٨١﴾

82. また、われらは、烈風を（注 24）ソロモンに従わせしめたり。風はソロモンの意のままに、われらが祝福したる国に向いて吹きつけり。われらはすべてのことを知る者なり。

وَلِسُلَيْمَٰنَ ٱلرِّيحَ عَاصِفَةً تَجْرِى بِأَمْرِهِۦٓ إِلَى ٱلْأَرْضِ ٱلَّتِى بَٰرَكْنَا فِيهَا ۚ وَكُنَّا بِكُلِّ شَىْءٍ عَٰلِمِينَ ﴿٨٢﴾

83. また、われらは、彼のために潜水し、かたわら他の仕事もなす潜水夫を彼に従わせしめたり。而して、彼等を見張るは、われらなり。

وَمِنَ ٱلشَّيَٰطِينِ مَن يَغُوصُونَ لَهُۥ وَيَعْمَلُونَ عَمَلًا دُونَ ذَٰلِكَ ۖ وَكُنَّا لَهُمْ حَٰفِظِينَ ﴿٨٣﴾

注 22　表現の美しさを増すために、本節および後続の数節において、隠喩的言語が用いられた。「作物」は、ソロモンの国を意味し、「或る者の羊は、ソロモンの国に攻め入った野性的で、略奪によって生きている近隣の部族のことを表す。ここでは、ダビデとソロモンが、そういった野蛮な部族の腐敗を一掃し、打ち砕くために採った政策についての言及がなされている。ダビデは、偉大なる戦士であったため、強硬な政策をとることを支持した。しかしながら、ソロモンは、穏健な政策を追求し、それら部族と友好条約を結ぶことにより、味方にひき入れたいと考えた。

注 23　本節ではまた、ダビデ軍事力および彼の戦闘道具、くさりかたびらをつくる技術のすばらしさについて、言及されている。ダビデは、偉大な征服を成し遂げてきた手段により、さまざまなよろいかぶとを発明し、発展させた。彼の代において、イスラエル王国は、その権力の頂点に達した。それは、イスラエルの歴史における黄金時代だった。

注 24　ソロモンの船は、ペルシア湾、紅海、地中海を往復し、そして、定期的な貿易が、パレスチナとペルシア湾、およびこれら 2 海のまわりに位置する国との間で行われていたようだ(列王紀第 1 巻、10 章 27～29 節)。

“テュロスのヒラムと協力し、彼は、一定の間隔をおいて地中海の港で貿易を行い、金、銀、象牙、さる、くじゃくを持ち込む外洋航行の船団を維持したのだ(列王紀第 1 巻 10 章 22 節、10 章 27～29 節、歴代史略第 2 巻

84. また、ヨブが、声をあげてその主を喚び、「我は災難にみまわれたり、汝は慈悲を垂れ給う者の中で最も慈悲深きお方にまします」と云いし時のことを思い起せ。

وَأَيُّوبَ إِذْ نَادَىٰ رَبَّهُۥٓ أَنِّى مَسَّنِىَ ٱلضُّرُّ وَأَنتَ أَرْحَمُ ٱلرَّٰحِمِينَ ﴿٨٤﴾

85. われらは彼の祈りを聞きたれば、身にふりかかりたる災難を除き、その家族をもとに戻したのみか、眷族を倍加して之を彼に賜わりたり。すなわち、こはわれらよりの慈悲にして、且つ崇拝者たちへの訓戒なり。

فَٱسْتَجَبْنَا لَهُۥ فَكَشَفْنَا مَا بِهِۦ مِن ضُرٍّ وَءَاتَيْنَٰهُ أَهْلَهُۥ وَمِثْلَهُم مَّعَهُمْ رَحْمَةً مِّنْ عِندِنَا وَذِكْرَىٰ لِلْعَٰبِدِينَ ﴿٨٥﴾

86. イスマエル、イドリス、ズール・キフルたち（注25）を思い起せ。皆堅忍不抜の者なりき。

وَإِسْمَٰعِيلَ وَإِدْرِيسَ وَذَا ٱلْكِفْلِ كُلٌّ مِّنَ ٱلصَّٰبِرِينَ ﴿٨٦﴾

87. されば、われらは彼等を、われらが慈悲の中に入るを許したり。げに彼等は義しい者なりき。

وَأَدْخَلْنَٰهُمْ فِى رَحْمَتِنَآ إِنَّهُم مِّنَ ٱلصَّٰلِحِينَ ﴿٨٧﴾

88. また、ズル・ヌーンが立腹して出で去りし時を思い起せ。（注26）彼は、われらが決して彼を苦しませないと考え、暗黒の最中に在りて、声をあげて云う、「汝の外に神なし。汝に栄光あれ。げに我は誤れり」と。

وَذَا ٱلنُّونِ إِذ ذَّهَبَ مُغَٰضِبًا فَظَنَّ أَن لَّن نَّقْدِرَ عَلَيْهِ فَنَادَىٰ فِى ٱلظُّلُمَٰتِ أَن لَّآ إِلَٰهَ إِلَّآ أَنتَ سُبْحَٰنَكَ إِنِّى كُنتُ مِنَ ٱلظَّٰلِمِينَ ﴿٨٨﴾

89. われら彼の祈りを聞きたれば、その不幸から彼を救いたり。かくの如く、われらは信仰する者を救いだす。

فَٱسْتَجَبْنَا لَهُۥ وَنَجَّيْنَٰهُ مِنَ ٱلْغَمِّ وَكَذَٰلِكَ نُۨجِى ٱلْمُؤْمِنِينَ ﴿٨٩﴾

8章18節、Enc. Brit“ソロモン”参照）ここでは風について使われている形容詞がアシファ（烈しい）であるのに反して、38章37節では、ルカー（穏やかな）という形容詞が使われている。このことは、風は、早く吹いたが、穏やかで、ソロモンの船にはなんら損害を加えなかったことを示している。

注25　ズール・キフルの正体は、不確定さに包まれている。イスラム教のクルーアン注釈者は、彼を数人の人物、主に聖書の預言者たちと同一視している。しかしながら、この名前で知られる預言者は、アラブ人にズール・キフルと呼ばれているエゼキエルであると思われる。ズール・キフルとエズキエルという語は、形においても、意味においても非常に類似しているようである。前者の語は、“豊富な分け前を所有している”という意味を持ち、後者は“神は力を与える”という意味を持つ。

注26　本節では、ズル・ヌーンの怒りの原因は細かに記されていない。明らかに彼は、神に対して腹をたてはしなかったし、腹をたてるはずもなかったのだ。彼を立腹させたメッセージを受け入れることは、人々がかたくなに拒否してきたにちがいない。なぜならば預言者が神に対して怒りを抱くなどとは、思いもよらぬことだからなのだ。神の選民は神の命令が与えられるまでは、話しすらもしなければ、行動もしないのである（21章28節）。「彼はわれらが決して彼を苦しまさないと考え」というのは、“我々は、彼を苦しめはしないだろう”または“我々は、彼にいかなる悩みをも与えることはないであろう”という意味である。

90. また、ザカリヤがその主に声をあげて「主よ、我を独りで捨て置き給うな、汝は最も優れた相続者にましますものを」と云いし時を思い起せ。

وَزَكَرِيَّآ إِذْ نَادٰى رَبَّهٗ رَبِّ لَا تَذَرْنِيْ فَرْدًا وَّأَنْتَ خَيْرُ الْوٰرِثِيْنَ ﴿٩٠﴾

91. われら彼の祈りを聞きたれば、ヨハネを授け、また彼のためにその妻の不妊症を治癒したり。彼等は互いに競って善行を積み、希望と恐懼とを以てわれらに祈り、われらが前に常に謙りぬ。

فَاسْتَجَبْنَا لَهٗ وَوَهَبْنَا لَهٗ يَحْيٰى وَأَصْلَحْنَا لَهٗ زَوْجَهٗ إِنَّهُمْ كَانُوْا يُسٰرِعُوْنَ فِي الْخَيْرٰتِ وَيَدْعُوْنَنَا رَغَبًا وَّرَهَبًا وَكَانُوْا لَنَا خٰشِعِيْنَ ﴿٩١﴾

92. 而して、彼女その純潔を守りたれば、われらは彼女の体内に福音を吹き入れ、彼女とその息子を萬民への神兆となせり。(注27)

وَالَّتِيْ أَحْصَنَتْ فَرْجَهَا فَنَفَخْنَا فِيْهَا مِنْ رُّوْحِنَا وَجَعَلْنٰهَا وَابْنَهَآ اٰيَةً لِّلْعٰلَمِيْنَ ﴿٩٢﴾

93. げにお前たちのこの宗派は、一つの宗派なり。而して、われはお前たちの主なれば、われを崇めよ。(注28)

إِنَّ هٰذِهٖٓ أُمَّتُكُمْ أُمَّةً وَّاحِدَةً وَّأَنَا رَبُّكُمْ فَاعْبُدُوْنِ ﴿٩٣﴾

94. 然るに、彼等は、自分たちの事情で互に分裂せり。されど、皆いずれはわれらの許に帰るべし。(注29)

وَتَقَطَّعُوْٓا أَمْرَهُمْ بَيْنَهُمْ كُلٌّ إِلَيْنَا رٰجِعُوْنَ ﴿٩٤﴾

第七項

95. されど、善行を積み且つ信者なれば、何人であれ、その努力は決してなおざりにせらるることなし。われらはそれを必ず記録せん。

فَمَنْ يَّعْمَلْ مِنَ الصّٰلِحٰتِ وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَلَا كُفْرَانَ لِسَعْيِهٖ وَإِنَّا لَهٗ كٰتِبُوْنَ ﴿٩٥﴾

注27　本節では、ユダヤ人がマリアに向けた中傷的な非難に反駁している。本節はまた、公正かつ正直な生活を営む人になら誰にでも、当てはまるものである。66章13節では、ある層の有徳な信者たちは、マリアにたとえられている。そのような有徳な信者は全て、言わば、マリアなのである。そして、神が信者に神の精神を吹き込むと、その信者は“マリアの息子”となるのである。すなわち、彼はイエスが所有する神の特質を獲得するのである。

注28　先行の数節において、神の預言者数人と、他の有徳なる人物数人についてが同時に述べられてきた。これは単なる偶然ではない。これらの預言者について同時に述べられるということは、ある明確な目的にかなうのである。彼らは全て、ある事柄を共有していたのだ。彼らは皆、なんらかの形の困難、災難を経験し、その厳しい試練のもとで彼らは、最高の立派な忍耐、我慢を示したのだ。彼らはまた、全ての宗教の基本的原則、つまり神の唯一性を教えたのである。

注29　ある階層の人々、すなわち神の有徳なるしもべたちについては、先行の数節で述べられてきた。本節では、もうひとつの階層、つまり、神の預言者を拒否し、その結果、自分たちの間での不和、論争の犠牲となってしまい、お互いに、相いれない信念や教義を持つに至る人たちのことに、言及している。

96. われらが絶滅せし邑の住民には冒しがたい禁忌あり、すなわち、彼等世に戻ることなかるべし、（注 30）

وَحَرٰمٌ عَلٰى قَرْيَةٍ اَهْلَكْنٰهَآ اَنَّهُمْ لَا يَرْجِعُوْنَ ﴿٩٦﴾

97. ゴグとマゴグが（注 31）解き放たれて、諸丘より奔り下り来るその時までは。（注 32）

حَتّٰٓى اِذَا فُتِحَتْ يَاْجُوْجُ وَمَاْجُوْجُ وَهُمْ مِّنْ كُلِّ حَدَبٍ يَّنْسِلُوْنَ ﴿٩٧﴾

98. 而して、その間違いない約束が近づくと、（注 33）見よ、不信心者どもは瞠目して（注 34）云わん、「悲しいかな！げに我等はこの事を軽視せり。否、我等は誤りたり」と。

وَاقْتَرَبَ الْوَعْدُ الْحَقُّ فَاِذَا هِيَ شَاخِصَةٌ اَبْصَارُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا ۗ يٰوَيْلَنَا قَدْ كُنَّا فِيْ غَفْلَةٍ مِّنْ هٰذَا بَلْ كُنَّا ظٰلِمِيْنَ ﴿٩٨﴾

99. 「げにお前たち、並びにお前たちがアッラーの外に崇めるものは、地獄の薪なり。その地獄に、お前たちは皆落ち行かん」

اِنَّكُمْ وَمَا تَعْبُدُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ حَصَبُ جَهَنَّمَ ۗ اَنْتُمْ لَهَا وٰرِدُوْنَ ﴿٩٩﴾

100. お前たちが云い張る如く、もし彼等が神々ならば、彼等は地獄には落ちざるべし。然るに、彼等は皆その中に永久に住まん。

لَوْ كَانَ هٰٓؤُلَآءِ اٰلِهَةً مَّا وَرَدُوْهَا ۗ وَكُلٌّ فِيْهَا خٰلِدُوْنَ ﴿١٠٠﴾

101. その中でうごめき苦しむことは、彼等の運命とならん。然れども、彼等はその中で何事も聞かざるべし。（注 35）

لَهُمْ فِيْهَا زَفِيْرٌ وَّهُمْ فِيْهَا لَا يَسْمَعُوْنَ ﴿١٠١﴾

注 30　死者は、2度とこの世に送り変えされることはないということは、犯しがたい神の法である。

注 31　18 章 95 節参照

注 32　先の数節に関連して読むと、この節では、威厳と栄光の全盛ののち、ひとたび、死や破滅の犠牲となれば、再度、失われた栄光を取り戻すことができないという具合に、自然法は作用すると言わんとしている。ゴグとマゴグですら、その偉大なる物質的崇高、栄光にもかかわらず、同じ法の犠牲となることであろう。彼らは衰退し、再び栄えることはないだろう。ゴクとマゴク、つまり西洋のキリスト教国家の民はすでに、政治的権力の全ての高みに昇り、世界じゅうに広がったのだ。クルアーンの表現は、彼らが全ての有利な点を独占し、全世界を支配するだろうということを意味している。

注 33　ゴグとマゴグの支配ののちには、破滅的なできごとが世界に起こるであろう。そしてその結果、最終的にはイスラムの勝利が到来し、ゴグとマゴグにより代表された虚偽の力、物質主義の敗北に終わることであろう。

注 34　ゴグとマゴグの完全なる破滅ののち、イスラムが、以前の偉大さ、栄光を再び取り戻すときは、イスラムの再生の望みを全く失してしまっていた人たちは、自分の目が信じられないことであろう。

注 35　彼らは、慰めや安楽を与えてくれるようなものを耳にすることはないであろう。つまり、地獄では、叫び声、悲鳴、泣き叫ぶ声の壮絶さゆえに、そこに収容された人たちは、お互いの声を聞くことはないであろうということである。

102.　然れども、すでにわれらから良い褒美を賜りたる者は、地獄から遥か遠くへ移されん。

إِنَّ الَّذِينَ سَبَقَتْ لَهُم مِّنَّا الْحُسْنَىٰ أُولَٰئِكَ عَنْهَا مُبْعَدُونَ ﴿١٠٢﴾

103.　彼等は地獄からのかすかな物音すら聴かざるべし。（注 36）而して、自分たちの魂が念願するところに、永久に留まらん。

لَا يَسْمَعُونَ حَسِيسَهَا ۖ وَهُمْ فِي مَا اشْتَهَتْ أَنفُسُهُمْ خَالِدُونَ ﴿١٠٣﴾

104.　絶大な恐怖も彼等を悩まさざるべし、而して、天使たちは彼等を出迎えて云わん、「こは約束せられたる、お前たちの日なり」と。

لَا يَحْزُنُهُمُ الْفَزَعُ الْأَكْبَرُ وَتَتَلَقَّاهُمُ الْمَلَائِكَةُ هَٰذَا يَوْمُكُمُ الَّذِي كُنتُمْ تُوعَدُونَ ﴿١٠٤﴾

105.　走り書きした巻物を巻き上げる如く、（注 37）われら諸天を巻き上げるその日を思え。われら最初の創造をなした如く、われらは再び之を繰り返さん―（注 38）われらが履行すべき約束を。われらは必ず之を果さん。

يَوْمَ نَطْوِي السَّمَاءَ كَطَيِّ السِّجِلِّ لِلْكُتُبِ ۚ كَمَا بَدَأْنَا أَوَّلَ خَلْقٍ نُّعِيدُهُ ۚ وَعْدًا عَلَيْنَا ۚ إِنَّا كُنَّا فَاعِلِينَ ﴿١٠٥﴾

106.　われらはすでに、訓戒を与えたる後、詩編の中にかく記せり、「わが義しい僕等は必ずやその地を（注 39）継がん」と。

وَلَقَدْ كَتَبْنَا فِي الزَّبُورِ مِن بَعْدِ الذِّكْرِ أَنَّ الْأَرْضَ يَرِثُهَا عِبَادِيَ الصَّالِحُونَ ﴿١٠٦﴾

注 36　本節および次節では、神の有徳なるしもべが、地獄から遠ざけられ、なんらその音を耳にすることもなく、ましてや、19 章 72 節から一般に誤解されているように、地獄へ入るなどということは決してないことを示している。

注 37　「巻物を巻きあげる」とは、偉大なる帝国が一掃され、強大な国家が破壊され、別の民が、その代わりに、勢力を得るようになることを意味する。また、聖なる預言者を通じて、大いなる変遷がもたらされ、古い天が巻き上げられ、その代わりに新しい天、新しい地上が創造されるであろうという意味ともとれる。古き秩序がくずれ、その代わりに、新しき、より良き秩序が生まれるのだ。聖なる預言者の時代におけるほどの完全なる変化を、かつて世界は、目のあたりにしたことはなかったのだ。

注 38　「我々は再びこれを繰り返さん」という表現は、聖なる預言者により生み出された秩序が、不信心で機械主義の西洋文明により創造されたイスラム教徒の生活に対する物質的な見方を通じて、妨げを受けるであろうことを含意している。しかし、この妨げは一時的なものであり、イスラムは、新しい精神的目覚めを経験し、再び勝ち誇って現れるのである。

注 39　“その地”とは、パレスチナを意味する。その地は、我々の時代に、いわゆる民主主義キリスト教強国の悪のもくろみにより、パレスチナという名の国が、存在をやめ、その荒れ跡に、イスラエル共和国が築かれるまで、十字軍にその所有権が移った 92 年の短い期間を除いて、約 1350 年間、イスラムの所有のもとにあったのだ。ユダヤ人は、約 2000 年間、荒れ地をさまよったのちに、本領を発揮するようになったのだ。しかし、この大きな歴史的できごとも、クルアーンの預言の成就として、起こったものなのである（17 章 105 節）。しかしながら、これは単なる一時的な形勢にすぎないのだ。イスラム教徒が、勝利を奪回する運命となっているのである。遅かれ早かれ―遅かれというよりはむしろ早かれ―パレスチナは、イスラムの手中に戻ることであろう。これは神の天命であり、誰も神命を変えることはできないのである。

107. げにこの中には、神を崇拝する者への御神託あり。

إن في هذا لبلٰغا لقوم عٰبدين ١٠٧

108. われらはただ万民への慈悲として汝を遣わしたるのみ。(注 40)

وما أرسلنٰك إلا رحمة للعٰلمين ١٠٨

109. 云え、「我に啓示されたるは、お前たちの神は独一なる神なりということ。然らば、お前たち帰依し奉るか？」と。

قل إنما يوحىٰ إلي أنما إلٰهكم إلٰه وٰحد فهل أنتم مسلمون ١٠٩

110. 然しながら、もし彼等背を向けなば、云え、「我はお前たちすべてに等しく警告したれども、お前たちが約束されしことが、果して近きにあるか、遠きにあるか、我それを知らず。(注 41)

فإن تولوا فقل ءاذنتكم علىٰ سواء وإن أدري أقريب أم بعيد ما توعدون ١١٠

111. げに神は、声高に云うことも、お前たちが密に隠すことも知り給う。

إنه يعلم الجهر من القول ويعلم ما تكتمون ١١١

112. また、我は、この猶予がお前たちへの試練なのか、ただ束の間の享楽に過ぎぬのか、それを知らず」と。

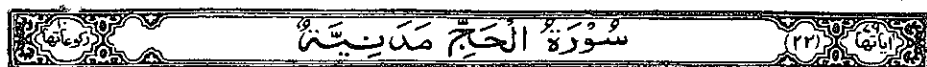
وإن أدري لعله فتنة لكم ومتٰع إلىٰ حين ١١٢

113. 預言者は更に云えり、「主よ、真理を以て裁き給え。我等の主は慈悲の神なり、お前たちが主張することに対して、お助けが期待できる」と。

قل رب احكم بالحق وربنا الرحمٰن المستعان علىٰ ما تصفون ١١٣

注 40　聖なる預言者は、そのメッセージが特定の国や人間に限定されていないがゆえに人類全体にとっての恵みだったのだ。彼を通じて、世界の国家が、かつてなかったほどの祝福を与えられてきたのである。

注 41　神は、その約束の成就のため、日毎、時間毎に束縛されているわけではない。神はある預言が成就されるべき場合と時を最もよく心得ているのである。

سُوْرَةُ الْحَجِّ مَدَنِيَّةٌ (٢٢)

アルハッジ

(メディナ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ (١)

2．人々よ、主を畏れよ。審判の日の地震はげに恐ろしきかな——

يٰۤاَيُّهَا النَّاسُ اتَّقُوْا رَبَّكُمْ اِنَّ زَلْزَلَةَ السَّاعَةِ شَيْءٌ عَظِيْمٌ (٢)

3．その日到らば、すべての乳飲み子を抱えた女はその哺乳を忘れ、すべての妊婦はその荷を早産せん。また、汝は、人々が酔うに非ざるに、酔えるが如くなるを見ん。そはアッラーの懲罰が激烈なればこそ。(注１)

يَوْمَ تَرَوْنَهَا تَذْهَلُ كُلُّ مُرْضِعَةٍ عَمَّاۤ اَرْضَعَتْ وَتَضَعُ كُلُّ ذَاتِ حَمْلٍ حَمْلَهَا وَتَرَى النَّاسَ سُكٰرٰى وَمَا هُمْ بِسُكٰرٰى وَلٰكِنَّ عَذَابَ اللّٰهِ شَدِيْدٌ (٣)

4．人々の中には、知識もなしに、アッラーについて反駁し、反逆心を抱く悪魔に従う者あり。

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يُّجَادِلُ فِي اللّٰهِ بِغَيْرِ عِلْمٍ وَّيَتَّبِعُ كُلَّ شَيْطٰنٍ مَّرِيْدٍ (٤)

5．悪魔と親しくなる者は、(注２)邪道に導かれ、以て業火の刑に誘われん。

كُتِبَ عَلَيْهِ اَنَّهٗ مَنْ تَوَلَّاهُ فَاَنَّهٗ يُضِلُّهٗ وَيَهْدِيْهِ اِلٰى عَذَابِ السَّعِيْرِ (٥)

6．おお、人々よ、復活について疑うならば、考えて見よ。われらはお前たちを土から創り、次に一滴の精液、次に凝結した血、次に少しは形をなしたもの、また少しも形をなさぬ肉塊より創れり。こはお前たちにわ

يٰۤاَيُّهَا النَّاسُ اِنْ كُنْتُمْ فِيْ رَيْبٍ مِّنَ الْبَعْثِ فَاِنَّا خَلَقْنٰكُمْ مِّنْ تُرَابٍ ثُمَّ مِنْ نُّطْفَةٍ ثُمَّ مِنْ عَلَقَةٍ ثُمَّ مِنْ مُّضْغَةٍ مُّخَلَّقَةٍ وَّغَيْرِ مُخَلَّقَةٍ لِّنُبَيِّنَ

注１　この節では前節で示された「審判の日の地震」がいかに厳しいものであるかを３つの比喩を用いて表している。母親にとって自分の乳を吸う赤ん坊ほどかわいいものはない。それだけに母親が乳飲み子を見捨てるほどの恐ろしさというのがいかにすさまじいものかは、想像を絶するほどである。この究極の恐ろしさが、あまりにも突然に容赦なく人々に降りかかるために、乳飲み児を胸に抱いた母はその子を捨て、妊婦はその荷を早産し、人は恐ろしさのあまり、泥酔しているかのごとく、自分を見失い、何をしているのかわからない乱心状態になってしまうと述べられている。

注２　これは、サタンと親しくなり、それに従ってしまったために、正しい道を踏みはずした人々のことのみを指す。クルアーンの他の箇所で述べられているように、サタンは、高潔な人々に対しては無力である。サタンが堕落させることができるのは、彼の邪悪の誘いに自ら応じる人々のみなのである(16：100 －101 、17：66)。

れらが権能を証明せんがためなり。而して、われらは、欲する者を或る期間胎内に留まらしめ、然る後、嬰児としてお前たちを出生せしめ、次いで成年に達するまで養育す。されど、お前たちの中には夭折する者もあれば、また或る者は、知りたることを悉く忘却するほどに年老いるまで留めおかれる者もある。また、汝、枯渇した大地を見よ。されど、われらが一たび水を降り注げば、大地は忽ち生き返り、膨張みて、あらゆる種類の美しい草木が萌え出づる。

لَكُمْ ۚ وَنُقِرُّ فِي الْأَرْحَامِ مَا نَشَاءُ إِلَىٰ أَجَلٍ مُّسَمًّى ثُمَّ نُخْرِجُكُمْ طِفْلًا ثُمَّ لِتَبْلُغُوا أَشُدَّكُمْ ۖ وَمِنكُم مَّن يُتَوَفَّىٰ وَمِنكُم مَّن يُرَدُّ إِلَىٰ أَرْذَلِ الْعُمُرِ لِكَيْلَا يَعْلَمَ مِن بَعْدِ عِلْمٍ شَيْئًا ۚ وَتَرَى الْأَرْضَ هَامِدَةً فَإِذَا أَنزَلْنَا عَلَيْهَا الْمَاءَ اهْتَزَّتْ وَرَبَتْ وَأَنبَتَتْ مِن كُلِّ زَوْجٍ بَهِيجٍ ٦

7．こは、アッラーが真理にして、死者を蘇生らせ、万物の上に権能を持ち給うが故なり。

ذَٰلِكَ بِأَنَّ اللَّهَ هُوَ الْحَقُّ وَأَنَّهُ يُحْيِي الْمَوْتَىٰ وَأَنَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ٧

8．そは、また、審判の日が疑いの余地なく必ず来るべき故なり。そは、また、墓中の徒輩を覚醒させ給うが故なり。

وَأَنَّ السَّاعَةَ آتِيَةٌ لَّا رَيْبَ فِيهَا وَأَنَّ اللَّهَ يَبْعَثُ مَن فِي الْقُبُورِ ٨

9．然るに、人々の中には、知識もなければ嚮導もなく、また光明を投ずる経典も持たずして、アッラーについて反駁し、

وَمِنَ النَّاسِ مَن يُجَادِلُ فِي اللَّهِ بِغَيْرِ عِلْمٍ وَلَا هُدًى وَلَا كِتَابٍ مُّنِيرٍ ٩

10．尊大にその脇腹を向け、人々をアッラーの道から迷わしめんとする者あり。そのような者は、現世に於て屈辱あり。而して、復活の日に於ては、われら之に火炙りの刑を嘗めさせん。（注３）

ثَانِيَ عِطْفِهِ لِيُضِلَّ عَن سَبِيلِ اللَّهِ ۖ لَهُ فِي الدُّنْيَا خِزْيٌ ۖ وَنُذِيقُهُ يَوْمَ الْقِيَامَةِ عَذَابَ الْحَرِيقِ ١٠

11．こは汝の手が先に送りしものに対する応報にして、アッラーはその僕等を不当に迫害する者に非ず。

ذَٰلِكَ بِمَا قَدَّمَتْ يَدَاكَ وَأَنَّ اللَّهَ لَيْسَ بِظَلَّامٍ لِّلْعَبِيدِ ١١

第二項

12．また、人々の中には、いわば境目でアッラーに仕える者あり。（注４）幸運来れば満足し、試練に遭遇すれば元の流儀に戻る。このよ

وَمِنَ النَّاسِ مَن يَعْبُدُ اللَّهَ عَلَىٰ حَرْفٍ ۖ فَإِنْ أَصَابَهُ خَيْرٌ اطْمَأَنَّ بِهِ ۖ وَإِنْ أَصَابَتْهُ فِتْنَةٌ

注３　真実を拒む人々には、２種類の罰が用意されている。一つは、現世における敗北、挫折、そしてもう一つは、来世における恥辱、不名誉である。現世において罰を受ける者は、来世においても確実に罰を受けることとなる。

انْقَلَبَ عَلَىٰ وَجْهِهِ خَسِرَ الدُّنْيَا وَالْآخِرَةَ ذَٰلِكَ هُوَ الْخُسْرَانُ الْمُبِينُ ﴿١٢﴾

うな者は現世も来世も失う者なり。そは明白なる損失なり。

يَدْعُوا مِنْ دُونِ اللَّهِ مَا لَا يَضُرُّهُ وَمَا لَا يَنْفَعُهُ ذَٰلِكَ هُوَ الضَّلَالُ الْبَعِيدُ ﴿١٣﴾

13．このような者は、アッラーの外に、毒にも薬にもならぬ者を祈る。そは甚だしき迷誤なり。

يَدْعُوا لَمَنْ ضَرُّهُ أَقْرَبُ مِنْ نَفْعِهِ لَبِئْسَ الْمَوْلَىٰ وَلَبِئْسَ الْعَشِيرُ ﴿١٤﴾

14．このような者は、己れを利するよりも、己れを害せんとする者を祈る。げに悪しき庇護者なり、げに悪しき仲間なり。（注５）

إِنَّ اللَّهَ يُدْخِلُ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ إِنَّ اللَّهَ يَفْعَلُ مَا يُرِيدُ ﴿١٥﴾

15．信仰し、善行を積む者は、アッラー之を河川流るる楽園に入らしめん。げにアッラーは欲することを為し給う。

مَنْ كَانَ يَظُنُّ أَنْ لَنْ يَنْصُرَهُ اللَّهُ فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ فَلْيَمْدُدْ بِسَبَبٍ إِلَى السَّمَاءِ ثُمَّ لْيَقْطَعْ فَلْيَنْظُرْ هَلْ يُذْهِبَنَّ كَيْدُهُ مَا يَغِيظُ ﴿١٦﴾

16．現世に於ても来世に於ても、アッラーは預言者を助けざるべしと思う者あらば、その者をして天まで綱を張らしめ、而して、之を断ち切らしめよ。而して、己れの計画が、自分を怒らしているものを除去し得るかどうか、その者に見せしめよ。（注６）

注４　「境目でアッラーに仕える」という表現で示されているのは、神に仕えていながら宗教心が薄く、敵陣の場末にいるように、気持ちがぐらぐらしている人のことである。戦っていて勝ちそうだと確信するとそこに居すわり、負けそうだと思うと逃げてしまう人のようだとたとえている。この「境目でアッラーに仕える」という表現はすぐあとの「幸運来れば満足し、試練に遭遇すれば元の流儀に戻る」という表現で説明されている。またこの表現は、信仰が薄い人がいつも疑心を捨てられない状態にあるということを象徴している。真の神を受け入れることで物質的恩恵にあずかることができると思っている時には信者として行動し、一旦、何らかの試練を与えられるとくるりときびすをかえして信仰を捨ててしまうという人々のことである。

注５　偽りの神をあがめる信奉者たちは、時を経ずして明らかに堕落していき、自分自身の尊厳と自信をひどく害してしまうことになる。彼らは自分の信仰から恩恵を受けたいと望んでいるが、その信仰が偽りの神に対するものである限り、無理な望みである。

注６　この表現は、モハッマド預言者に対してできる限りの悪行をしかける不信者に挑みかけるものである。モハッマド預言者は常に、神に助けられているし、今後も変わることなく救われるものである。それを不信者であるお前たちが妨げることなどできるものか。イスラムが着実に発展し続けるということは神より定められている紛れもない天意であり、なんぴとも神の命を変えることはできない。イスラムのめざましい発展を目にする不信者たちは自らを恥じ、つらい思いにさいなまれるであろうが、死より他に彼らをこのつらさから逃がれさせてくれるものはない。

「天まで綱を」の「天」という語を「屋根」あるいは「天井」と解釈すると、この節は次のような意味にとれる。その場合「もし、モハッマド預言者に敵対する不信者たちが、彼の使命が果たされてイスラムが繁栄していくのを目にして激しく怒っているのなら、彼を天井に綱でつるし、そのあとで綱を切って見よ。そんな時も

17．故にわれらは、明白な神兆としてクルアーンを降したり。而して、アッラーは、己れの欲する者を必ず導き給う。

وَكَذٰلِكَ اَنْزَلْنٰهُ اٰيٰتٍۢ بَيِّنٰتٍ ۙ وَّاَنَّ اللّٰهَ يَهْدِيْ مَنْ يُّرِيْدُ ﴿١٧﴾

18．信ずる人々、ユダヤ教徒、サービ教徒、キリスト教徒、拝火教徒、並びに偶像崇拝者たちについては、復活の日に於て、アッラーは必ず彼等に判決を下すべし。げにアッラーは一切をみそなわし給う。

اِنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَالَّذِيْنَ هَادُوْا وَالصّٰبِـِٕيْنَ وَالنَّصٰرٰى وَالْمَجُوْسَ وَالَّذِيْنَ اَشْرَكُوْٓا ۖ اِنَّ اللّٰهَ يَفْصِلُ بَيْنَهُمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ ۗ اِنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ شَهِيْدٌ ﴿١٨﴾

19．汝、天にあるもの地にあるもの、日月星辰、群山、樹木、禽獣並びに沢山の人間が、アッラーに対して服従するを見ざりしか？然れども、懲罰に値する者もまた多し。而して、アッラーが貶め給う者は、何人も之を尊敬し得ず。(注７)げにアッラーは己れの欲することを為し給う。

اَلَمْ تَرَ اَنَّ اللّٰهَ يَسْجُدُ لَهٗ مَنْ فِى السَّمٰوٰتِ وَمَنْ فِى الْاَرْضِ وَالشَّمْسُ وَالْقَمَرُ وَالنُّجُوْمُ وَالْجِبَالُ وَالشَّجَرُ وَالدَّوَآبُّ وَكَثِيْرٌ مِّنَ النَّاسِ ۗ وَكَثِيْرٌ حَقَّ عَلَيْهِ الْعَذَابُ ۗ وَمَنْ يُّهِنِ اللّٰهُ فَمَا لَهٗ مِنْ مُّكْرِمٍ ۗ اِنَّ اللّٰهَ يَفْعَلُ مَا يَشَآءُ ۩ ﴿١٩﴾

20．これ等は、主について争う二派の（注８）論争者たちなり。信ぜざる者どもには業火の衣裳が仕立てられ、その頭上には煮え滾る湯が浴びせられん。

هٰذٰنِ خَصْمٰنِ اخْتَصَمُوْا فِيْ رَبِّهِمْ ۖ فَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا قُطِّعَتْ لَهُمْ ثِيَابٌ مِّنْ نَّارٍ ۗ يُصَبُّ مِنْ فَوْقِ رُءُوْسِهِمُ الْحَمِيْمُ ﴿٢٠﴾

彼は必ず神により助けられるのだ。」という意味になる。
３章 120節でも、不信者たちは次のようにけん責されている。「怒りのうちに滅びよ。げに、アッラーはすべて汝らの胸中を知り給ふ。」

注７　神は、自然界のさまざまな法を定められたお方であり、神により創造された森羅万象のもの、すべて、生物であれ無生物であれ、その法に従わねばならない。誰一人、何一つたりとも法に従わずして存在することはできない。すべての秩序を定めているこの根本的な法に加え、神が人々を導くものとして顕示された法—シャリヤ（戒律）が存在する。人はこの法—戒律に従うこともそむくこともできる。（この点が上記の法と異なる。）しかし、当然、戒律に従わなければ自業自得で、その報いを受け、苦しむこととなる。この節は、さらに偶像崇拝者たちに、アッラー以外の自然物を崇拝、信仰の対象としていることがいかにむなしく愚かなことであるかをはっきり悟らせるものである。ここで述べられているように、万物は、皆、まさにその存在自体を神に依存しているのである。すべては神が、万物、万民のために定められた法に従って存在し、機能しているのであり、一時たりとも神なくしては存在すらし得ないのである。
それゆえに、神が定められた法に従うことにより初めて存在し得るものを崇拝の対象とすることは、愚かで浅はかなことなのである。

注８　この「二派」が示しているのは、信者と不信者という２つに分類されている人々のことである。

21．それによって臓腑も皮膚も溶かされん。

يُصْهَرُ بِهٖ مَا فِيْ بُطُوْنِهِمْ وَالْجُلُوْدُ ﴿٢١﴾

22．更に彼等は、鉄矛をみまわれん。

وَلَهُمْ مَّقَامِعُ مِنْ حَدِيْدٍ ﴿٢٢﴾

23．苦悶より逃れんとする度に、またもや火の中に突き落され、「汝等火炙りの罰を味わえ！」と云われん。

كُلَّمَآ اَرَادُوْٓا اَنْ يَّخْرُجُوْا مِنْهَا مِنْ غَمٍّ اُعِيْدُوْا فِيْهَا وَذُوْقُوْا عَذَابَ الْحَرِيْقِ ﴿٢٣﴾

第三項

24．されどアッラーは、信じて善行を積む人々には河川流るる楽園に入らしめん。彼等はそこで、黄金の腕環や真珠で身を飾られ、絹の衣裳をまとわん。

اِنَّ اللّٰهَ يُدْخِلُ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ يُحَلَّوْنَ فِيْهَا مِنْ اَسَاوِرَ مِنْ ذَهَبٍ وَّلُؤْلُؤًا وَلِبَاسُهُمْ فِيْهَا حَرِيْرٌ ﴿٢٤﴾

25．彼等は純潔な言葉に導かれ、讃美し奉る神の道に導かれん。

وَهُدُوْٓا اِلَى الطَّيِّبِ مِنَ الْقَوْلِ وَهُدُوْٓا اِلٰى صِرَاطِ الْحَمِيْدِ ﴿٢٥﴾

26．人々をアッラーの道から誘惑し、そこの居住者たると砂漠からの来訪者たるとを問わず、われらが萬人のために設けたる聖殿に参詣に来る人を妨害する者、また聖殿内で正しい道から不法に逸脱せんとする不信心者どもについては—われらは必らず之に痛刑を嘗めさせん。

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَيَصُدُّوْنَ عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَالْمَسْجِدِ الْحَرَامِ الَّذِيْ جَعَلْنٰهُ لِلنَّاسِ سَوَآءَ الْعَاكِفُ فِيْهِ وَالْبَادِ وَمَنْ يُّرِدْ فِيْهِ بِاِلْحَادٍ بِظُلْمٍ نُّذِقْهُ مِنْ عَذَابٍ اَلِيْمٍ ﴿٢٦﴾

第四項

27．われらがアブラハムに聖殿の位置を選定し、(注9)かく云いたる時のことを思い起せ。「何者もわれに配するなかれ。而して、巡周する者、(注10)立礼する者、お辞儀す

وَاِذْ بَوَّاْنَا لِاِبْرٰهِيْمَ مَكَانَ الْبَيْتِ اَنْ لَّا تُشْرِكْ بِيْ شَيْـًٔا وَّطَهِّرْ بَيْتِيَ لِلطَّآئِفِيْنَ وَالْقَآئِمِيْنَ

注9　この節からわかるように、カーバはアブラハムの時代よりずっと以前にすでに存在していたのである。事実、カーバはアダムにより建設された。3章97節にあるように、それは有史初の聖なる神殿であった。アブラハムの時代までに、崩壊してしまっていたが、神のお告げによりアブラハムは、その聖殿の位置を知り、モハッマド預言者の偉大なる祖先である彼（アブラハム）とその息子のイシュマエルが、カーバ神殿を再建したのである。2章128節参照。

注10　この節は、当章（第22章）の中心となる主題—巡礼についての導入部を成している。聖なるモスク（カーバ神殿）のまわりを廻ることが巡礼の儀式での一番の要である。そのため、カーバ神殿の神聖さ、尊厳性を簡潔に述べることは、メッカ巡礼（ハジ）の主題へのふさわしい導入部となり得る。

وَالرُّكَّعِ السُّجُودِ ٢٧

る者、平伏す者のために、わが聖殿を常に浄めよ。(注 11)

وَأَذِّن فِي النَّاسِ بِالْحَجِّ يَأْتُوكَ رِجَالًا وَعَلَىٰ كُلِّ ضَامِرٍ يَأْتِينَ مِن كُلِّ فَجٍّ عَمِيقٍ ٢٨

28. 而して、人々に向って巡礼を宣言せよ。(注 12) 彼等は汝のところへ歩いて来るもあり、またそれぞれ遠路痩せた駱駝に乗って来るもあり、

لِّيَشْهَدُوا مَنَافِعَ لَهُمْ وَيَذْكُرُوا اسْمَ اللَّهِ فِي أَيَّامٍ مَّعْلُومَاتٍ عَلَىٰ مَا رَزَقَهُم مِّن بَهِيمَةِ الْأَنْعَامِ ۖ فَكُلُوا مِنْهَا وَأَطْعِمُوا الْبَائِسَ الْفَقِيرَ ٢٩

29. こは彼等のためにその功徳を体得させ、定められた日数の間、授け賜りたる四足獣の上にアッラーの御名を唱えさせんがためなり。然る後、汝等はそれを食い、且つ困窮者並びに貧者を養え。

ثُمَّ لْيَقْضُوا تَفَثَهُمْ وَلْيُوفُوا نُذُورَهُمْ وَلْيَطَّوَّفُوا بِالْبَيْتِ الْعَتِيقِ ٣٠

30. 然る後、彼等にその欠くべからざる浄化の行為を終らしめ、その誓いを全うさせ、而してこの由緒古い聖殿を巡周せしめよ」

ذَٰلِكَ وَمَن يُعَظِّمْ حُرُمَاتِ اللَّهِ فَهُوَ خَيْرٌ لَّهُ عِندَ رَبِّهِ ۗ وَأُحِلَّتْ لَكُمُ الْأَنْعَامُ إِلَّا مَا يُتْلَىٰ عَلَيْكُمْ ۖ فَاجْتَنِبُوا الرِّجْسَ مِنَ الْأَوْثَانِ وَاجْتَنِبُوا قَوْلَ الزُّورِ ٣١

31. こは神の掟なり。アッラーの神聖なる儀礼を尊重する者は、主の見るところでは嘉しとせられん。クルアーンの中で、お前たちにすでに告げられたものを除いて、家畜の肉を食するは合法なり。されば偶像神の穢れを避け、嘘偽の言葉を避けよ。

حُنَفَاءَ لِلَّهِ غَيْرَ مُشْرِكِينَ بِهِ ۚ وَمَن يُشْرِكْ بِاللَّهِ فَكَأَنَّمَا خَرَّ مِنَ السَّمَاءِ فَتَخْطَفُهُ الطَّيْرُ أَوْ تَهْوِي بِهِ الرِّيحُ فِي مَكَانٍ سَحِيقٍ ٣٢

32. お前たちの崇拝と服従をアッラーに捧げまつり、彼に如何なるものも配するなかれ。アッラーと偕に他神を併せ祀る者は、恰も高きより落下せる者の如し。鳥之を掠め去るか、また風之をさらって遙か彼方へ吹き飛ばす。(注 13)

注 11　「わが聖殿を常に浄めよ」というのは、命令と預言の両方を兼ね備えている。命令としては、カーバ神殿は唯一の真の神を崇拝するべく建立されたので、偶像崇拝により汚してはならない、というもの。預言としては、この命が無視されて聖なる神殿が偶像崇拝の館と化することがあろうが、それらは結局のところ、すべて一掃されるであろう、というものである。

注 12　巡礼の習慣が設けられたのはアブラハム預言者の時であり、「人々に巡礼するよう告げよ」という言葉で示された。巡礼は、決して偶像崇拝的なものではない。キリスト教の著者の中には、偶像崇拝を習慣としていたアラブ人を懐柔するためにモハッマド預言者がイスラムに組み入れたものだというように考えている者がいるが、それは明らかに誤っている。アブラハム預言者の時代から、巡礼は休みなく今日まで続けられている。遠隔の地からおびただしい数のムスリムが毎年メッカ巡礼のために集まってきているという事実はこの預言が成就されているという反ばく不可能な証となっている。

注 13　人は、最も高貴な神の創造物である。宇宙、全世界に存在するすべてのもの—太陽・月・星・地球・大洋・山々などは皆、人間に役立つよう、人間のために存在している。人間は、神の属性を自らに反映できる

33．事実はかくの如し。アッラーの聖なる神兆を尊重するということは、要するに、心の義しさから出るものなり。（注 14）

ذٰلِكَ وَمَنْ يُّعَظِّمْ شَعَآئِرَ اللّٰهِ فَاِنَّهَا مِنْ تَقْوَى الْقُلُوْبِ ﴿٣٣﴾

34．お前たちは定められた期限まで、これらの家畜から幾多の利益を受け、然る後、彼等家畜は由緒古い聖殿に犠牲として供えらる。（注 15）

لَكُمْ فِيْهَا مَنَافِعُ اِلٰٓى اَجَلٍ مُّسَمًّى ثُمَّ مَحِلُّهَآ اِلَى الْبَيْتِ الْعَتِيْقِ ﴿٣٤﴾

第五項

35．われらは、人々に授けたる四足獣の上に、アッラーの御名を唱えさせんがため、すべての人々に、犠牲の儀礼を定めたり。（注 16）お前たちの神は独一なる神なり。（注 17）されば、汝等みな彼に帰依し奉れ。汝は謙虚な徒輩に朗報を伝えよ。

وَلِكُلِّ اُمَّةٍ جَعَلْنَا مَنْسَكًا لِّيَذْكُرُوا اسْمَ اللّٰهِ عَلٰى مَا رَزَقَهُمْ مِّنْ بَهِيْمَةِ الْاَنْعَامِ فَاِلٰهُكُمْ اِلٰهٌ وَّاحِدٌ فَلَهٗٓ اَسْلِمُوْا وَبَشِّرِ الْمُخْبِتِيْنَ ﴿٣٥﴾

ほどに道徳的、精神的に向上することができる。　もし、人間が、生命なきものを崇拝の対象としてしまうほど自らを堕落させるなら、卓越した精神の高みから、一気に道徳的、知的退廃の深みへまっさかさまに落ちてしまうようなものである。

注 14　イスラム教で、心の正しさや清らかさを人々に教えこむために定められているきまりや恒例の儀式がもつ目的について、この節で述べられている。イスラムの儀式や礼拝のきまりはそれ自身が“目的”なのではなく、正しく清らかな心を鍛練するための“手段”にすぎない。

注 15　メッカに捧げ物をして持ち込まれる動物は、献上されるまでに、荷を運搬したり、さく乳したりするのに用いてもよい。その他にもいろんな形で人間のために役立てることができれば、捧げる前に利用することが許されている。

注 16　この節から、捧げものに関しての主題に移る。それは、ハジ（巡礼）とジハード（聖戦）と並び、この章の3つの重要なテーマを成している。この節ではさらに、献上が定められているのはイスラムに限ったことではない、と述べられている。すべての宗教は、さかのぼれば皆同じ神に端を発しているので、このような共通部分を有しているのである。また、この節で示されているように、もともと、捧げ者として信者に申しつけられたのは、“動物”（四足獣）なのであり、人間をいけにえにするなどという残酷な行為は決して定められていはいない。そういう残虐行為は、後になって改変されてイスラム以外の宗教で勝手に行われたものである。「犠牲」の語源となっているアラビア語のナサカには、いくつかの意味があることから、真の献上は次の3つを本質的特質として有しているといえる。
(1) 自発的に行われるものであること。(2)純粋な動機からささげられるものであること。(3)物質的斟酌から、ささげられるものではないこと。

注 17　この節は、2重に重要な意味を持つ。(1)宗教によってその場所や時は大きく異なるものの、すべての宗教に共通して捧げものをするという儀式が存在しているということは、もともとすべての宗教が、同じ神から端を発しており、どの国家においても、実は神は唯一なのであるということを示している。(2)献上のもつ目的は、人が自分の大志、願望、すべての考えや理想、そして命も誇りも、神のためにささげることにより、神の唯一性を公然と示す、ということである。イスラムにおいて献上の概念は、他の宗教に見られるように、怒っている神をなだめるとか、自分の罪の償いとして行うというものではなく、自分の有するすべてを神にゆだねるという概念なのである。

36．彼等の心はアッラーの名を耳にするや、畏怖に満つ。而して、彼等は何が起ころうと耐え忍び、礼拝を遵守し、われらが授けしものを惜しみなく費やす。

الَّذِينَ إِذَا ذُكِرَ اللَّهُ وَجِلَتْ قُلُوبُهُمْ وَالصَّابِرِينَ عَلَىٰ مَا أَصَابَهُمْ وَالْمُقِيمِي الصَّلَاةِ وَمِمَّا رَزَقْنَاهُمْ يُنْفِقُونَ ﴿٣٦﴾

37．われらは特に、アッラーの聖なる神兆として、お前たちに犠牲の駱駝を定めたり。彼等はお前たちに多大の利益になるものなり。されば、並び立てる時に、彼等の上にアッラーの御名を唱えよ。而して、彼等が横に斃れたならば、これを食い、また貧困者ながら満足してる者や、哀願する者にも食わしめよ。（注 18）かくの如く、われらが彼等をお前たちの用に供せしは、お前たちに感謝の気持を抱かせしめんがためなり。

وَالْبُدْنَ جَعَلْنَاهَا لَكُمْ مِنْ شَعَائِرِ اللَّهِ لَكُمْ فِيهَا خَيْرٌ ۖ فَاذْكُرُوا اسْمَ اللَّهِ عَلَيْهَا صَوَافَّ ۖ فَإِذَا وَجَبَتْ جُنُوبُهَا فَكُلُوا مِنْهَا وَأَطْعِمُوا الْقَانِعَ وَالْمُعْتَرَّ ۚ كَذَٰلِكَ سَخَّرْنَاهَا لَكُمْ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ﴿٣٧﴾

38．それらの肉はアッラーに達せず、その血もまた然り。されど、お前たちの敬虔はアッラーに達せん。（注 19）かくの如く、それらをお前たちの用に供せしは、お前たちに、その嚮導に対して、アッラーを讃美せしめんがためなり。されば、善行を積む人々に朗報を伝えよ。

لَنْ يَنَالَ اللَّهَ لُحُومُهَا وَلَا دِمَاؤُهَا وَلَٰكِنْ يَنَالُهُ التَّقْوَىٰ مِنْكُمْ ۚ كَذَٰلِكَ سَخَّرَهَا لَكُمْ لِتُكَبِّرُوا اللَّهَ عَلَىٰ مَا هَدَاكُمْ ۗ وَبَشِّرِ الْمُحْسِنِينَ ﴿٣٨﴾

注 18　メッカに連れていったラクダを捧げ物として屠殺したのは、丁度ラクダが主人のために命を投げ出すのと同様に人が自分の創造主であり主である神のために自分の命をも投げうつつもりであるという意志を、象徴したのにすぎない。献上の究極的な目的は、そこにあり、この節に示されている他の目的は、付随的なものである。巡礼者は、動物が屠殺される時、献身の大切さを思い、心に刻むのである。またこの節では、屠殺された動物の肉は無駄にしてはならず、正しく配分されねばならないと述べられている。

注 19　この節では、献上の本質、真の目的に光を浴びせかけている。神が喜ばれるのは、献上という行為のうわべではなく、その献上を行う人の動機や献上をする時の心の中味なのである。屠殺される動物の肉や血は、神には直接届かない。しかし、献上者の心の内は神に受けとられるのである。我々にとって身近で大切なものすべて、それを献上するように要求され、神はそのすべてをお受けとりになる。物質的所有物、崇高な理想、誇り、そして命そのもの。実際、神が要求しているのは、動物の血や肉でなく、それを献じる人の心なのである。しかし、重要なのは心であり、外部から見ることのできる献上という行為ではないのだからといって、献上が重要でないという誤解をしてはならない。　献上の行為は、精神という本質である中味をとりかこんでいる殻のようなものであり、献上する人の心という本質と共に殻である献上の行為も大切なものなのである。肉体なくして精神は宿ることができないのと同様、殻なくして中味が存在することはできないからである。

39. げにアッラーは信じる人々を守護し給う。(注20) げにアッラーは恩知らずの裏切り者を愛で給わず。

إِنَّ اللَّهَ يُدَافِعُ عَنِ الَّذِينَ آمَنُوا إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ كُلَّ خَوَّانٍ كَفُورٍ ﴿٣٩﴾

第六項

40. 戦を仕掛けた者への戦いは許可す。(注21) なんとなれば、彼等の方が間違っている—げにアッラーは彼等を助ける力あり—

أُذِنَ لِلَّذِينَ يُقَاتَلُونَ بِأَنَّهُمْ ظُلِمُوا وَإِنَّ اللَّهَ عَلَىٰ نَصْرِهِمْ لَقَدِيرٌ ﴿٤٠﴾

41. 「我等の主はアッラーなり」と云いしが故に不当にも家郷を逐われた人々を—もしアッラーが或る人々を用いて他の者どもを撃退せざれば、修道院、キリスト教会、猶太教会、並にイスラームの礼拝堂など、不断にそこでアッラーの御名が唱念されているところは、必ずや悉く破壊されたり。アッラーは必ず、御自分に手伝う者を助け給う。(注22) げにアッラーは強大にして、偉大にまします—

الَّذِينَ أُخْرِجُوا مِن دِيَارِهِم بِغَيْرِ حَقٍّ إِلَّا أَن يَقُولُوا رَبُّنَا اللَّهُ وَلَوْلَا دَفْعُ اللَّهِ النَّاسَ بَعْضَهُم بِبَعْضٍ لَّهُدِّمَتْ صَوَامِعُ وَبِيَعٌ وَصَلَوَاتٌ وَمَسَاجِدُ يُذْكَرُ فِيهَا اسْمُ اللَّهِ كَثِيرًا وَلَيَنصُرَنَّ اللَّهُ مَن يَنصُرُهُ إِنَّ اللَّهَ لَقَوِيٌّ عَزِيزٌ ﴿٤١﴾

注20　この節からジハード(聖戦)について導入される。献上について語られたのはこの非常に重要な主題に入るための序奏としてまことにふさわしいことである。まず、前節までで、ムスリムは、自衛戦をすることを許可される前に献身の大切さを教えられた。そして今この節ではイスラムのジハードという概念に光があてられている。ジハードというのはこの節で述べられているように真実を守るための戦いのことである。イスラムは自ら攻撃をしかけてはならない。しかし、自分の尊厳、国家、信仰を守るためであれば、美徳とされる。人は最も高貴な神の創造物である。人は神の創造の頂点に位置し、神はすべてを人のために創られた。人は、地球において神の代理人としての役わりを任され、すべての神の創造物にとっての王とされた(2：31)。　これが、人は宇宙の中で高き所に存在するというイスラムの概念なのである。

注21　学者たちの意見が一致しているところでは、この節が啓示されて初めて、ムスリムは自衛のために武器をとることが許されるようになったのだということである。次節にも続いていくが、武器も持たずにメッカでの迫害に耐え、自らを守るべく戦っていた一握りのムスリムに武器をとることが許された理由もあわせて述べられている。まず最初の理由・前提としてムスリムが不当に取り扱われていたということがあげられている。

注22　ムスリムが武器を手にしてもよいという理由を述べられたあと、当節でイスラムの戦いの目的が述べられている。それは決して他人の家や所有物を奪うことではない。　また彼らの国家の自由を奪い、他国の支配下に服従させるというものでもない。また西洋の大国がしているように、その国を新たな市場として利用したり植民地化することでもない。それは、自衛のために、イスラムを撲滅から救うために、そして良心の自由と思想の自由を確立するために戦われるものなのである。また、他の宗教に属する祈りの場、教会や寺などは守られなければならない。たとえ戦っている敵であってもその人たちの宗教の自由を妨げてはならないことになっている。相手の祈りの場を尊重し、決して破壊したり攻撃したりしないということは他の宗教に見る戦いとは異なり、特にジハードにおいてみられるイスラムの特長である。他国の礼拝堂であっても、イスラム教徒はそれを守るのである(2：194 、2：257 、8：40、8：73)。イスラムの戦いの最も重要な目的は、信仰と礼拝の自由を確立することであり、国や誇りや自由を不当な攻撃から守ることにある。これに優る戦いの理由など存在するであろうか。

42. これらの人々は、もしわれらが彼等にこの国に安住せしむると、礼拝を遵守し、喜捨を惜しまず、正しくあることを命じ、悪しくあることを禁ぜん。（注 23）何事によらず、最後の断はアッラー次第なり。

الَّذِيْنَ اِنْ مَّكَّنّٰهُمْ فِي الْاَرْضِ اَقَامُوا الصَّلٰوةَ وَاٰتَوُا الزَّكٰوةَ وَاَمَرُوْا بِالْمَعْرُوْفِ وَنَهَوْا عَنِ الْمُنْكَرِ ۗ وَلِلّٰهِ عَاقِبَةُ الْاُمُوْرِ ﴿٤٢﴾

43. 彼等は汝を嘘つきと非難するが、彼等以前にも、ノアの民も、アード並びにサムード族も、その預言者たちを嘘つきと非難せり。

وَاِنْ يُّكَذِّبُوْكَ فَقَدْ كَذَّبَتْ قَبْلَهُمْ قَوْمُ نُوْحٍ وَّعَادٌ وَّثَمُوْدُ ﴿٤٣﴾

44. アブラハムの民や、ロトの民もまた然り。

وَقَوْمُ اِبْرٰهِيْمَ وَقَوْمُ لُوْطٍ ﴿٤٤﴾

45. マドヤンの住民も然り。モーゼの民もまた然り。されど、われは不信心者どもに猶予を与え、然る後、彼等を襲いたり。われを否定すれば、その結果や恐ろしぞかし！

وَّاَصْحٰبُ مَدْيَنَ ۚ وَكُذِّبَ مُوْسٰى فَاَمْلَيْتُ لِلْكٰفِرِيْنَ ثُمَّ اَخَذْتُهُمْ ۚ فَكَيْفَ كَانَ نَكِيْرِ ﴿٤٥﴾

46. われらは如何に多くの邑を、悪事をなせる間に滅ぼせることか。そは屋根の上に落ち崩れたり。また、見捨てられし井戸、廃墟と化せる高楼の数々！

فَكَاَيِّنْ مِّنْ قَرْيَةٍ اَهْلَكْنٰهَا وَهِيَ ظَالِمَةٌ فَهِيَ خَاوِيَةٌ عَلٰى عُرُوْشِهَا وَبِئْرٍ مُّعَطَّلَةٍ وَّقَصْرٍ مَّشِيْدٍ ﴿٤٦﴾

47. 物がわかる心と聴く耳を持つべく、彼等は諸国を遍歴せざりしか？盲なるはその眼に非ず、その胸にある心なり。（注 24）

اَفَلَمْ يَسِيْرُوْا فِي الْاَرْضِ فَتَكُوْنَ لَهُمْ قُلُوْبٌ يَّعْقِلُوْنَ بِهَآ اَوْ اٰذَانٌ يَّسْمَعُوْنَ بِهَا ۚ فَاِنَّهَا لَا تَعْمَى الْاَبْصَارُ وَلٰكِنْ تَعْمَى الْقُلُوْبُ الَّتِيْ فِي الصُّدُوْرِ ﴿٤٧﴾

48. それ故に、彼等は汝に懲罰を急がす。アッラーはその約束を決して破りはせぬ。ただ、時には、主の一日はお前たちの勘定で千年にも相当す。（注 25）

وَيَسْتَعْجِلُوْنَكَ بِالْعَذَابِ وَلَنْ يُّخْلِفَ اللّٰهُ وَعْدَهٗ ۗ وَاِنَّ يَوْمًا عِنْدَ رَبِّكَ كَاَلْفِ سَنَةٍ مِّمَّا تَعُدُّوْنَ ﴿٤٨﴾

注 23　この節で示されているように、ムスリムは武力を手にしても、それを利己的な目的に用いるべきではないとされている。貧しい人々や踏みにじられている人々の状況を改善したり、所領の平和と安全を確立したり、礼拝の場を尊重し、守るために用いられるべきである。

注 24　この節から、クルアーンのこの箇所及び他の箇所で述べられている死人、盲人、ろうあ者というのは、精神的に死んでいる人、見えない人、聞こえない人、話せない人のことを指しているということは明らかである。

注 25　モハッマド預言者は次のように告げたと記録されている。今後の 3 世紀は、イスラムの最盛期であり、その後、誤った考えが広まるために、暗黒時代に入り、それは千年にも及ぶであろう。この長い暗黒時代は一

49．われはどれほど多くの悪事に狂奔する邑を猶予したことか。然る後、われそれを急に襲いたれば、帰するところはわが許なり。

وَكَأَيِّن مِّن قَرْيَةٍ أَمْلَيْتُ لَهَا وَهِيَ ظَالِمَةٌ ثُمَّ أَخَذْتُهَا وَإِلَيَّ الْمَصِيرُ ﴿٤٩﴾

第七項

50．云え、「人々よ、我はただお前たちの公然たる警告者にすぎず」と。

قُلْ يَا أَيُّهَا النَّاسُ إِنَّمَا أَنَا لَكُمْ نَذِيرٌ مُّبِينٌ ﴿٥٠﴾

51．信じて善行を積む人々には、寛恕と光栄ある給養あり。

فَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَهُم مَّغْفِرَةٌ وَرِزْقٌ كَرِيمٌ ﴿٥١﴾

52．なれど、われらの神兆に逆らって、われらの目的を挫折せんと謀る者どもは—業火の住人たらん。

وَالَّذِينَ سَعَوْا فِي آيَاتِنَا مُعَاجِزِينَ أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ الْجَحِيمِ ﴿٥٢﴾

53．汝以前にわれらが遣わした使徒や預言者が、何かを得ようと欲すると、悪魔は彼が欲しがるもので妨害せり。されどアッラーは、悪魔が妨害せるものを取り除く。その上、アッラーは己が神兆を堅固にす。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَمَا أَرْسَلْنَا مِن قَبْلِكَ مِن رَّسُولٍ وَلَا نَبِيٍّ إِلَّا إِذَا تَمَنَّىٰ أَلْقَى الشَّيْطَانُ فِي أُمْنِيَّتِهِ فَيَنسَخُ اللَّهُ مَا يُلْقِي الشَّيْطَانُ ثُمَّ يُحْكِمُ اللَّهُ آيَاتِهِ ۗ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿٥٣﴾

54．これアッラーが悪魔に妨害させて、その心に病ある者、（注26）並びにその心が頑固な者を試さんがためなり。げに不義なる従輩は反抗して遙か遠くに隔たり存す。

لِّيَجْعَلَ مَا يُلْقِي الشَّيْطَانُ فِتْنَةً لِّلَّذِينَ فِي قُلُوبِهِم مَّرَضٌ وَالْقَاسِيَةِ قُلُوبُهُمْ ۗ وَإِنَّ الظَّالِمِينَ لَفِي شِقَاقٍ بَعِيدٍ ﴿٥٤﴾

55．すでに知識を賜りたる者は、こは主よりの真理なることを知り、以て之を信じ、その心を謙虚ならしめん。げにアッラーは、信ずる人々を正しい道に導き給う。

وَلِيَعْلَمَ الَّذِينَ أُوتُوا الْعِلْمَ أَنَّهُ الْحَقُّ مِن رَّبِّكَ فَيُؤْمِنُوا بِهِ فَتُخْبِتَ لَهُ قُلُوبُهُمْ ۗ وَإِنَّ اللَّهَ لَهَادِ الَّذِينَ آمَنُوا إِلَىٰ صِرَاطٍ مُّسْتَقِيمٍ ﴿٥٥﴾

目にたとえられている（32：6）。この時代に、青い目の人々が興隆し、世界中に広がるであろう（20：103－104）。物質的繁栄と政治力にうぬぼれ、横へいになっているこれらの青い目の人々のことが、モハッマド預言者への挑戦、ムスリムの人々への試練として描かれているが、約束の時がくれば、彼らは倒されイスラムの繁栄が到来するであろう。

注26　この節でまた、我々が前節で施した解釈が支持されている。無知な注釈者がこの節に加えた根拠のない話は取るに足らない。この節が意味しているのは、不信者たちがモハッマド預言者の使命が普及し果たされていこうとするに対し、ありとあらゆる障害を設けて妨げようとしている、ということである。彼らは、「その心に病ある者」が誤った方向へ導かれて行くように、あるいは、イスラムの発展が遅らされるように望んでこのような悪だくみをなすのである。しかし神はそのような障害をすべて取り除いて下さり、真実は一時仮そめに妨げられ勢いをそがれるかのごとく見えても、かならずや発展の途をたどるのだと主張されている。

56. 然るに、信ぜざる従輩は、審判の日が突如として彼等を襲うか、潰滅の日の罰がその身に降りかかるまでは、それについて疑うことを止めざるべし。

وَلَا يَزَالُ الَّذِينَ كَفَرُوا فِي مِرْيَةٍ مِّنْهُ حَتَّىٰ تَأْتِيَهُمُ السَّاعَةُ بَغْتَةً أَوْ يَأْتِيَهُمْ عَذَابُ يَوْمٍ عَقِيمٍ ﴿٥٦﴾

57. その日、(注 27) 大権はアッラーの掌中にあり。彼は彼等の間を裁き給わん。されば、信じて善行を積む者は、至福の園に入るべし。

الْمُلْكُ يَوْمَئِذٍ لِّلَّهِ يَحْكُمُ بَيْنَهُمْ ۚ فَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ فِي جَنَّاتِ النَّعِيمِ ﴿٥٧﴾

58. 然れども、不信心者にして、われらの神兆を拒否する者は、恥ずべき罰を受けん。

وَالَّذِينَ كَفَرُوا وَكَذَّبُوا بِآيَاتِنَا فَأُولَٰئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ مُّهِينٌ ﴿٥٨﴾

第八項

59. また、アッラーの道のために家郷を捨て、その後敵に殺されたり、又は死んだ者は、(注 28) アッラー必ず之に立派な給養を賜わらん。げにアッラーは最上の給養者なり。

وَالَّذِينَ هَاجَرُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ ثُمَّ قُتِلُوا أَوْ مَاتُوا لَيَرْزُقَنَّهُمُ اللَّهُ رِزْقًا حَسَنًا ۚ وَإِنَّ اللَّهَ لَهُوَ خَيْرُ الرَّازِقِينَ ﴿٥٩﴾

60. アッラーは必ず彼等が喜ぶところに彼等を入らしめん。げにアッラーはすべてを知り、寛容にまします。

لَيُدْخِلَنَّهُم مُّدْخَلًا يَرْضَوْنَهُ ۗ وَإِنَّ اللَّهَ لَعَلِيمٌ حَلِيمٌ ﴿٦٠﴾

61. そは必ずかくの如くあるべし。誰であれ自分が被むりたるものと同様の報復をしたのに、規則違犯された場合には、アッラーは必ずその者を助け給わん。(注 29) げにアッラーは赦免者にして、寛大なり。

ذَٰلِكَ ۖ وَمَنْ عَاقَبَ بِمِثْلِ مَا عُوقِبَ بِهِ ثُمَّ بُغِيَ عَلَيْهِ لَيَنصُرَنَّهُ اللَّهُ ۗ إِنَّ اللَّهَ لَعَفُوٌّ غَفُورٌ ﴿٦١﴾

注 27　「その日」が意味するのは、イスラムの最後の勝利のことである。それはまた同時に不信者のクライシュ族の勢力がついに完全に倒されるメッカ陥落をも言及している。メッカ陥落の時、クライシュはムスリムの軍隊がまさにすぐ近くへ攻め入ってくるまで、全くそれに気づいていなかったのだ。

注 28　自分の心、家、そして大切にしているすべてのものを神にささげ、神のために一生を費やし、死んでいった者は、神のために実際に戦って命を落とした者たちと同様に分類されるに価する。なぜならば、彼らの神への献身は、実際の殉教者の献身と同様に偉大なものであるからである。
ここでの「死んだ者」は、神への献身に一生を捧げていった価値ある人たちを指す。

注 29　この節は 2 重に重要性を有する。一つは、ムスリムが救われるという約束、もう一つは、ムスリムが究極的には勝利をおさめ繁栄するという預言が含蓄されている。前者の意味において、実際ムスリムが圧迫され、被害をうけてきていることが明白であり、被害に対し報復が許されているが、自分の受けた以上に相手に害を及ぼしてはならないとされている。後者の意味において、ムスリムは、敵を自分の支配下におさめるであろうが、その時でも受けた以上の害を与えてはならず、さらに寛容にも、神が慈悲と許しという美徳を備えていらっしゃるように、ムスリムが敵の人々を許し、謝罪してあげることがより良いことであると告げられている。

62．そはアッラーが、夜を昼の中に入らしめ、また昼を夜の中に入らしめるが故なり。(注 30) なんとなれば、アッラーはすべてを聴き、すべてをみそなわし給うが故なり。

ذٰلِكَ بِأَنَّ اللّٰهَ يُولِجُ الَّيْلَ فِي النَّهَارِ وَيُولِجُ النَّهَارَ فِي الَّيْلِ وَأَنَّ اللّٰهَ سَمِيعٌ بَصِيرٌ ﴿٦٢﴾

63．そはアッラーが真理にして、彼等がアッラー以外に祈るものは偽りの神なるが故、アッラーは至尊者、至大者にましますが故なり。

ذٰلِكَ بِأَنَّ اللّٰهَ هُوَ الْحَقُّ وَأَنَّ مَا يَدْعُونَ مِنْ دُونِهِ هُوَ الْبَاطِلُ وَأَنَّ اللّٰهَ هُوَ الْعَلِيُّ الْكَبِيرُ ﴿٦٣﴾

64．汝、アッラーが天から水を降せば大地が緑となるを、(注 31) 見ざるか？げにアッラーは細かに気を配り、すべてを承知し給う。

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللّٰهَ أَنْزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَتُصْبِحُ الْأَرْضُ مُخْضَرَّةً إِنَّ اللّٰهَ لَطِيفٌ خَبِيرٌ ﴿٦٤﴾

65．天にあるもの地にあるもの、一切はアッラーに属す。げにアッラーは自立自存し、讃美に値する御方なり。

لَهُ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ وَإِنَّ اللّٰهَ لَهُوَ الْغَنِيُّ الْحَمِيدُ ﴿٦٥﴾

第九項

66．汝、アッラーが地上にあるすべてのものをお前たちに従属させたるを見ざるか、またアッラーの命に依って海を渡る船を見ざるか？更に彼は、天を引き止め、己が許しなしに地上に落ちざらしめ給う。げにアッラーは人間に哀れみ深く、情け深くまします。

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللّٰهَ سَخَّرَ لَكُمْ مَا فِي الْأَرْضِ وَالْفُلْكَ تَجْرِي فِي الْبَحْرِ بِأَمْرِهِ وَيُمْسِكُ السَّمَاءَ أَنْ تَقَعَ عَلَى الْأَرْضِ إِلَّا بِإِذْنِهِ إِنَّ اللّٰهَ بِالنَّاسِ لَرَءُوفٌ رَحِيمٌ ﴿٦٦﴾

67．而して、お前たちに生命を与え、次いで死なせ、再び甦らしむるは彼なり。(注 32) まことに、人間というものは恩知らずの最たるものなり。

وَهُوَ الَّذِي أَحْيَاكُمْ ثُمَّ يُمِيتُكُمْ ثُمَّ يُحْيِيكُمْ إِنَّ الْإِنْسَانَ لَكَفُورٌ ﴿٦٧﴾

注 30　この節では、前節でほのめかされている事実が比喩を用いて示されている。ムスリムが悲惨な状況で圧政下にある長い期間は「夜」にたとえられ、それが今や終わりを告げ、ムスリムの栄光の日々である「昼」が訪れようとしていることが示されている。

注 31　この節は不信者たちの注意を彼らの目の前で展開される自然現象に向けようとしている。お前たちには見えないのか？　神が天から雨を降らせ、荒涼とした不毛の地、精神的に死んだ状態にあるアラブの土地に水の恵みを与えるのを。そして新しい生命が芽生え、新緑があたりいっぱいに広がるのを。そして全世界が精神的に目覚め、イスラムが深く根をおろしていくのを。以上のことがこの節で述べられている。

注 32　生と死の現象は同時に起こるものである。死するたびに新しい生命が望まれる。バドルの戦いやウハドの戦いの戦場で殺されたムスリムは、アラブ全土に精神的復興をもたらしたのである。

68．われらはすべての人々にその守るべき儀礼を定めたり。（注 33）されば、彼等にイスラームの儀礼について汝に反駁せしめるなかれ。唯だ彼等を汝の主に招け。げに汝は正しい嚮導の上にあり。

لِكُلِّ أُمَّةٍ جَعَلْنَا مَنْسَكًا هُمْ نَاسِكُوهُ فَلَا يُنَازِعُنَّكَ فِي الْأَمْرِ وَادْعُ إِلَىٰ رَبِّكَ إِنَّكَ لَعَلَىٰ هُدًى مُسْتَقِيمٍ ﴿٦٨﴾

69．もし彼等が汝に論争を起しなば、云え、「アッラーはお前たちがなせることを最もよく知り給う。

وَإِنْ جَادَلُوكَ فَقُلِ اللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا تَعْمَلُونَ ﴿٦٩﴾

70．復活の日には、お前たちが意見を異にしたことについて、アッラーはお前たちを審判すべし」と。

اللَّهُ يَحْكُمُ بَيْنَكُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ فِيمَا كُنْتُمْ فِيهِ تَخْتَلِفُونَ ﴿٧٠﴾

71．アッラーが天地間の一切を知り給うことを、汝知らざるか？そは、すべて記帳されて存す。また、そは、アッラーにとりて容易なり。

أَلَمْ تَعْلَمْ أَنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ مَا فِي السَّمَاءِ وَالْأَرْضِ إِنَّ ذَٰلِكَ فِي كِتَابٍ إِنَّ ذَٰلِكَ عَلَى اللَّهِ يَسِيرٌ ﴿٧١﴾

72．彼等は、アッラーが如何なる権威も降したまわざる者、またこれについて如何なる知識も有せぬ者を、アッラー以外に崇敬す。然れども、悪事を仂らく従輩には、助け手はなし。（注 34）

وَيَعْبُدُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ مَا لَمْ يُنَزِّلْ بِهِ سُلْطَانًا وَمَا لَيْسَ لَهُمْ بِهِ عِلْمٌ وَمَا لِلظَّالِمِينَ مِنْ نَصِيرٍ ﴿٧٢﴾

73．われらの明瞭な神兆が彼等に読誦されると、汝はそれら信ぜざる者どもの顔面に拒否の色が浮かぶを認めん。彼等は、われらの神兆を誦える者に向って、攻撃を加えんとす。云え、「我はお前たちに　、これより更に悪しきことを告げようか？そは業火なり！アッラーは信ぜざる者どもにそれを約束せり。そは恥ずべき行き先なるかな！」と。

وَإِذَا تُتْلَىٰ عَلَيْهِمْ آيَاتُنَا بَيِّنَاتٍ تَعْرِفُ فِي وُجُوهِ الَّذِينَ كَفَرُوا الْمُنْكَرَ يَكَادُونَ يَسْطُونَ بِالَّذِينَ يَتْلُونَ عَلَيْهِمْ آيَاتِنَا قُلْ أَفَأُنَبِّئُكُمْ بِشَرٍّ مِنْ ذَٰلِكُمُ النَّارُ وَعَدَهَا اللَّهُ الَّذِينَ كَفَرُوا وَبِئْسَ الْمَصِيرُ ﴿٧٣﴾

注 33　神への礼拝は、すべての国家やその国民のうちにいろんな形で見うけられる。このことから、イスラムがあらゆる宗教の中で最も早くに、人々のうちに神の使者が降り、人々にいろんな形態の礼拝を教えるであろうと宣言したことが偉大な事実であるとわかる。

注 34　ここでは偶像崇拝に対し 3 つの議論が提示されている。(1) 今までに著された神の本の中で偶像崇拝に言質を与えそれを認めているものは何一つとしてない。(2) 人間の理性や良心に従えば、偶像崇拝には抵抗を示すのが当然であり、偶像崇拝者たちは偶像崇拝を支持する個人的経験や考察に基づくようなまともな議論をすることが全くできない。(3) 偶像崇拝者と信者が反目しあっていた時代に、信者は大勝利を得た。以上のように神の啓示、人間の理性、勝利を定めた歴史上の評決、すべてが偶像崇拝は正しくないとしている。

第十項

74. 人々よ、一つの譬を述べるが故に、之を聞け。お前たちがアッラーの代わりに拝する者どもは、よしやその目的のために相寄り協力しようとも、蠅一匹だに創造し得ず。また、その蠅が彼等から何物かを奪い去るも、彼等は之を取り戻す能わず。縋る者も、縋られる者も、ああ、無力なるかな。(注35)

يَآأَيُّهَا النَّاسُ ضُرِبَ مَثَلٌ فَاسْتَمِعُوا لَهُ ۚ إِنَّ الَّذِينَ تَدْعُونَ مِن دُونِ اللَّهِ لَن يَخْلُقُوا ذُبَابًا وَلَوِ اجْتَمَعُوا لَهُ ۖ وَإِن يَسْلُبْهُمُ الذُّبَابُ شَيْئًا لَّا يَسْتَنقِذُوهُ مِنْهُ ۚ ضَعُفَ الطَّالِبُ وَالْمَطْلُوبُ ﴿٧٣﴾

75. 彼等はアッラーの権能について正しい概念を形成し得ず。(注36) アッラーは強力にして、偉大にまします。

مَا قَدَرُوا اللَّهَ حَقَّ قَدْرِهِ ۗ إِنَّ اللَّهَ لَقَوِيٌّ عَزِيزٌ ﴿٧٤﴾

76. アッラーは、諸天使並びに人間の中より使徒を選ぶ。げにアッラーはすべてを聴き、すべてをみそなわし給う。

اللَّهُ يَصْطَفِي مِنَ الْمَلَآئِكَةِ رُسُلًا وَمِنَ النَّاسِ ۚ إِنَّ اللَّهَ سَمِيعٌ بَصِيرٌ ﴿٧٥﴾

77. 彼は皆の前にあるものを知り、またその後にあるものを知る。而して、万事はアッラーの決定に帰着す。

يَعْلَمُ مَا بَيْنَ أَيْدِيهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ ۗ وَإِلَى اللَّهِ تُرْجَعُ الْأُمُورُ ﴿٧٦﴾

78. 汝等信ずる者よ、礼拝に於ては頭をたれ、叩頭して主を崇めまつり、栄えんために善行を積め。

يَآأَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا ارْكَعُوا وَاسْجُدُوا وَاعْبُدُوا رَبَّكُمْ وَافْعَلُوا الْخَيْرَ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ۩ ﴿٧٧﴾

79. お前たち、アッラーの道のために、本分を尽して戦え。彼はお前たちを選びたれど、宗教に関しては、お前たちに如何なる艱苦も課せざりき。されば、お前たちの父祖アブラハムの信仰に従え。彼は以前にも、またこの経典の中でも、(注37) お前たちを

وَجَاهِدُوا فِي اللَّهِ حَقَّ جِهَادِهِ ۚ هُوَ اجْتَبَاكُمْ وَمَا جَعَلَ عَلَيْكُمْ فِي الدِّينِ مِنْ حَرَجٍ ۚ مِّلَّةَ أَبِيكُمْ إِبْرَاهِيمَ ۚ هُوَ سَمَّاكُمُ الْمُسْلِمِينَ مِن

注35　この節は不信者たちに彼らが完全に無力であり、決して彼らの偽りの神によっては救いは得られないということ、そして、彼らが偽りの神を崇拝していることはいかに愚かなことであるかを明示している。

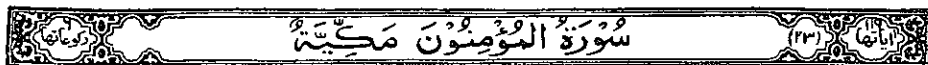
注36　偶像崇拝者が、木や石で作られた神を偶像として拝むほど自らを落としめてしまうという事実から、真の神の属性に関する彼らの概念の貧困さがうかがわれる。事実、多神教徒があれこれ複数の神を拝んだり、偶像崇拝者が偶像を拝んだりするのは、彼らが、真の神の御力に限りがありその属性が人間のもののように不完全だと考えている、その概念の貧困さに起因しているのである。

注37　「この経典の中で」という表現は、暗に、クルアーンこの中で引用されているアブラハムの祈りをほのめかしている(2章129節参照)。

قَبْلُ وَفِيْ هٰذَا لِيَكُوْنَ الرَّسُوْلُ شَهِيْدًا عَلَيْكُمْ
وَتَكُوْنُوْا شُهَدَآءَ عَلَى النَّاسِ ۚ فَاَقِيْمُوا الصَّلٰوةَ
وَاٰتُوا الزَّكٰوةَ وَاعْتَصِمُوْا بِاللّٰهِ ۗ هُوَ مَوْلٰىكُمْ ۚ فَنِعْمَ
الْمَوْلٰى وَنِعْمَ النَّصِيْرُ ﴿٧٩﴾

ムスリムと名づけたり。(注38) これ使徒をしてお前たちの証人たらしめ、お前たちをして人類の証人たらしめんがためなり。故に、礼拝を尊守し、喜捨を惜しまず、しっかりとアッラーにお縋り申せ。彼こそはお前たちの愛護者なり。なんと素晴らしい愛護者、なんと素晴らしい援助者にましますかな！

注38　「彼は以前にも、またこの経典の中でもお前たちをムスリムと名づけたり」というのは、イザヤの預言にふれた表現である（イザヤ書62：2、65：15参照）。

سُوْرَةُ الْمُؤْمِنُوْنَ مَكِّيَّةٌ (٢٣)

アル・モーメヌーン

（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．信者たちは必ず幸運を得る。（注1）

قَدْ اَفْلَحَ الْمُؤْمِنُوْنَ ②

3．彼等は、礼拝の時は謙(へりくだ)り、（注2）

الَّذِيْنَ هُمْ فِيْ صَلَاتِهِمْ خٰشِعُوْنَ ③

4．下らぬことは一切避け、（注3）

وَالَّذِيْنَ هُمْ عَنِ اللَّغْوِ مُعْرِضُوْنَ ④

5．進んで喜捨を行い、（注4）

وَالَّذِيْنَ هُمْ لِلزَّكٰوةِ فٰعِلُوْنَ ⑤

6．貞節を守る

وَالَّذِيْنَ هُمْ لِفُرُوْجِهِمْ حٰفِظُوْنَ ⑥

7．但し、その妻たち並びにその右手が所有するものは除く。その場合は罪なし。（注5）

اِلَّا عَلٰٓى اَزْوَاجِهِمْ اَوْ مَا مَلَكَتْ اَيْمَانُهُمْ فَاِنَّهُمْ غَيْرُ مَلُوْمِيْنَ ⑦

8．なれど、これらを超えて何かを求める者は、罪人(つみびと)なり。

فَمَنِ ابْتَغٰى وَرَآءَ ذٰلِكَ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْعٰدُوْنَ ⑧

9．信託や約束に忠実で、

وَالَّذِيْنَ هُمْ لِاَمٰنٰتِهِمْ وَعَهْدِهِمْ رٰعُوْنَ ⑨

10．礼拝を厳守する者。（注6）

وَالَّذِيْنَ هُمْ عَلٰى صَلَوٰتِهِمْ يُحَافِظُوْنَ ⑩

注1　この節では、高い精神力を備えた信者について述べられており、その特質は後節に書かれてある。この様な信者たちは神の救いのみならず、幸運を得るであろうが、それは幸運を得ることが救いを得ることよりも遥かに高い精神過程のものだからである。

注2　人生で成功を治め、人間を創り賜うた神の崇高な御意志を成就したいと願うなら、信者はまず様々な条件を満たさなければならず、それについての記述がこの節より始まる。この条件とは、幾重にも重なる人間の精神的発達段階の事であろう。第一に、信者は悔い改め、謙虚な気持ちで神を崇めなければならない。

注3　第二に、全ての無駄な言葉・思考・行動を慎まなければならない。人生は厳しいものであり、信者は上記の教えを守らねばならない。常に人生を有意義に過し、無用なことを避けねばならないのである。

注4　喜捨の目的は、苦しみを取り除き、あるいは社会の貧民層を救い上げるのみならず、金銭と物質を貯え、それを盛んに循環させる事で、健全な経済調整を計るものである。

注5　4章4節参照

注6　この節では、信者の精神的に最も成長した状態について述べられている。神の記憶は信者にとり第二の天性となり、我身の一部と化し、魂の救いとなる。この段階に至れば、信者は集団への帰属心が強まり、個より地域・国家の利益を重んじる為集団での礼拝を特に心掛ける様になる。

11．かかる人々こそ相続人、

أولئك هم الوارثون ⑪

12．楽園を継ぐ者なり。彼等はそこに永久に住み留まらん。（注７）

الذين يرثون الفردوس هم فيها خالدون ⑫

13．われらは泥の精粋から人間を創り、

ولقد خلقنا الإنسان من سلالة من طين ⑬

14．次いでわれらは之を一滴の精液として安全な保管所におさめたり。

ثم جعلناه نطفة في قرار مكين ⑭

15．次いでわれらは、その精液から凝血を創り、次いでその凝血から無形の塊を創り、その塊から骨を創り、更にその骨に肉をまとわせ、然る後にわれらは之を新たな創造物に発達させり。されば、最も優れた創造主アッラーを讃美し奉れ。

ثم خلقنا النطفة علقة فخلقنا العلقة مضغة فخلقنا المضغة عظاما فكسونا العظام لحما ثم أنشأناه خلقا آخر فتبارك الله أحسن الخالقين ⑮

16．こうしてその後、お前たちは必ず朽ち果てん。（注８）

ثم إنكم بعد ذلك لميتون ⑯

17．而して、復活の日に、再び甦らしめらる。（注９）

ثم إنكم يوم القيامة تبعثون ⑰

18．われらはお前たちの頭上に七層の天を創れり。（注 10）而して、われらは、その創造を等閑にはせず。

ولقد خلقنا فوقكم سبع طرائق وما كنا عن الخلق غافلين ⑱

19．またわれらは、適量の水を空から降し、それを地中に留まらしめり—われらはまたその水を運び去る力も有す—（注 11）

وأنزلنا من السماء ماء بقدر فأسكناه في الأرض وإنا على ذهاب به لقادرون ⑲

注７　前節に述べた信者達はあらゆる徳を身に付け、野にある物全てを備えた楽園に住む様になる。死を望めば、むしろ神より永遠の命を賜わり、望みは全てかなえられるであろう (50 36)。

注８　人は成長を終えた後、衰え死に致る。生きとし生けるもの全てが死を迎えるのは、不変の摂理である。神のみが不滅なのである。

注９　死後人が甦るのは、魂の成長を続け永遠を知る為である。現世における歩みはその前段階であり、言わば母親の胎内に宿る赤子の様なものである。死後に新たな世に生まれ変わり、終りなき成長を始めるのである。

注 10　この章の初め 10 節で述べた６段階の精神的成長は、天国（当章 12 節参照）も含めると７段階となる。同様に、精子形成の前段階（13 節）を胎児成長過程に加えれば、７段階となる。この様に、この章で述べて来た精神的成長の７段階という数は、13 節～15 節で述べた人間の肉体的成長の７段階と奇しくも一致する。

注 11　この節では、人が肉体的、精神的に要する物を如何に神より賜わったか、その一例が示されている。全ての命は、雨・雪・霰として空から降り落ちる水無くしては生存できない。同じく、魂も又、神の啓示という精神的恵無くしては存在し得ない。

20．われらはその水でお前たちのために棗椰子や葡萄園を設いたり。園内には沢山の果物ありて、お前たちそれを食す。

فَاَنْشَاْنَا لَكُمْ بِهٖ جَنّٰتٍ مِّنْ نَّخِيْلٍ وَّاَعْنَابٍ لَكُمْ فِيْهَا فَوَاكِهُ كَثِيْرَةٌ وَّمِنْهَا تَاْكُلُوْنَ ﴿۲۰﴾

21．また、シナイ山中に生える一樹あり。油を産し、食者のために調味料にもなる。（注12）

وَشَجَرَةً تَخْرُجُ مِنْ طُوْرِ سَيْنَآءَ تَنْۢبُتُ بِالدُّهْنِ وَصِبْغٍ لِّلْاٰكِلِيْنَ ﴿۲۱﴾

22．而して、家畜に於てもまた、お前たちへの教訓あり。われらは彼等の腹の中のものをお前たちに飲ましめ、お前たちは多くの利益を彼等から得る上に、その肉をも食す。（注13）

وَاِنَّ لَكُمْ فِى الْاَنْعَامِ لَعِبْرَةً ۚ نُسْقِيْكُمْ مِّمَّا فِيْ بُطُوْنِهَا وَلَكُمْ فِيْهَا مَنَافِعُ كَثِيْرَةٌ وَّمِنْهَا تَاْكُلُوْنَ ﴿۲۲﴾

23．お前たちは彼等の背に乗って、また船に乗って運ばれる。

وَعَلَيْهَا وَعَلَى الْفُلْكِ تُحْمَلُوْنَ ﴿۲۳﴾

第二項

24．われらはノアをその民に遣わしたり。彼は云えり、「我が民よ、アッラーに仕えまつれ。アッラー以外に神なし。お前たち、アッラーの加護を求めざるか？」と。

وَلَقَدْ اَرْسَلْنَا نُوْحًا اِلٰى قَوْمِهٖ فَقَالَ يٰقَوْمِ اعْبُدُوا اللّٰهَ مَا لَكُمْ مِّنْ اِلٰهٍ غَيْرُهٗ ؕ اَفَلَا تَتَّقُوْنَ ﴿۲۴﴾

25．すると、その民の中の信仰なき長老たちは云えり、「彼は我等同様ただの人間にすぎず。彼は我等が上に立たんとす。もしアッラー欲しなば、彼と共に必ず天使らを遣わさん。我等はいまだかつて、遠い先祖にかくの如きことありしを聞かず。（注14）

فَقَالَ الْمَلَؤُا الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ قَوْمِهٖ مَا هٰذَآ اِلَّا بَشَرٌ مِّثْلُكُمْ ۙ يُرِيْدُ اَنْ يَّتَفَضَّلَ عَلَيْكُمْ ؕ وَلَوْ شَآءَ اللّٰهُ لَاَنْزَلَ مَلٰٓئِكَةً ۚۖ مَّا سَمِعْنَا بِهٰذَا فِيْٓ اٰبَآئِنَا الْاَوَّلِيْنَ ﴿۲۵﴾

26．彼はただ狂気に病んでいるにすぎず。されば、待てしばし、彼に関しては」と。

اِنْ هُوَ اِلَّا رَجُلٌۢ بِهٖ جِنَّةٌ فَتَرَبَّصُوْا بِهٖ حَتّٰى حِيْنٍ ﴿۲۶﴾

注12　シナイ山中と言う言葉から、我々は聖書の偉大な預言を思い起こす。「主はシナイから来られ、セイルから彼等を照らし、パランの山から光を放ち、一万の聖者らとともに来られた。その右手からは、彼等に稲妻がきらめいていた（申命記33章2節）。H. F. プレスコットによる“Once to Sinai”も参照の事。

注13　「無知から知へと人を変える証し」という意味をもつ、「教訓」は、動物の内蔵で牧草がミルクに変わる微妙な過程を暗示している。この事を深く掘り下げて考えれば、神の偉大なる力及び神の啓示の為されるその巧みな方法に、人は気付くのである。

注14　不信者達は優越感に捕われ、「我々同様ただの人間にすぎ」ない指導者を受け入れる訳にはいかないという理由で、神の使者を拒む。天使の存在が大昔から信じられて来た事を、この節は偶然にも示している。遙か遡るノアの時代に、彼に刃向かう者達は、天使が自分たちのもとへ降りて来るのを見たいと願った。

27．彼は云えり、「我が主よ、助け給え、彼等は我を嘘つきと見なす」と。

قال رب انصرني بما كذبون ﴿٢٧﴾

28．されば、われらは啓示によって彼に命じたり。「われらの啓示に従って、われらの眼前で箱舟を造れ。われらが命下りて地中から沢山の泉が噴出する時、あらゆる生きものを雄雌一番(ひとつがい)ずつ、並びに汝の家族をその舟の中に乗り込ませよ、但しすでに裁断が下された者どもは除く。而(しか)して、不義をなせる者どものことで、われに請願するなかれ。彼等は必ず溺死せん。（注 15）

فاوحينا اليه ان اصنع الفلك باعيننا ووحينا فاذا جاء امرنا وفار التنور فاسلك فيها من كل زوجين اثنين واهلك الا من سبق عليه القول منهم ولا تخاطبني في الذين ظلموا انهم مغرقون ﴿٢٨﴾

29．而(しか)して汝、すなわち、汝並びに汝と一緒の者たちが箱舟の中に落ちついたなら、唱えよ、『悪人どもから我等を救い給うたアッラーに讃(たた)えあれ』と。

فاذا استويت انت ومن معك على الفلك فقل الحمد لله الذي نجىنا من القوم الظلمين ﴿٢٩﴾

30．また云え、『主よ、恵まれた地点に上陸させ給え、汝ほど最善に上陸させ給うお方はあらざるほどに』」と。

وقل رب انزلني منزلا مبركا وانت خير المنزلين ﴿٣٠﴾

31．げにこの中には種々な神兆(しるし)あり。われらはノアの民を試みたるなり。

ان في ذلك لايت وان كنا لمبتلين ﴿٣١﴾

32．然(しか)る後、彼等の後に、われらは別の一族を興したり。（注 16）

ثم انشانا من بعدهم قرنا اخرين ﴿٣٢﴾

33．而して、われらは彼等の中(うち)より選べる一人の使徒を彼等に遣わし、云わしめたり、「アッラーに仕えまつれ。アッラー以外に神なし。お前たち神を畏敬せざるか？」と。

فارسلنا فيهم رسولا منهم ان اعبدوا الله ما لكم من اله غيره افلا تتقون ﴿٣٣﴾

第三項

34．すると、その民の長老で、信仰をもたず、来世での対面を否定し、しかもわれらが今生(こんじょう)で安楽を与えたる者が云えり、「これなる者は、我等同様ただの人間にすぎず。彼は我等が食べるものを食べ、飲むものを飲む。

وقال الملا من قومه الذين كفروا وكذبوا بلقاء الاخرة واترفنهم في الحيوة الدنيا ما هذا الا بشر مثلكم ياكل مما تاكلون منه ويشرب مما تشربون ﴿٣٤﴾

注 15　　11 章 41 節参照。

注 16　　「別の一族」アード族、つまりフードの一族を指す。それはこの節及び次の数節に書かれた“次の世代”の置かれる状況が、7 章 66～70 節のアード族に関する記述と実に良く似通っているからである。

35．お前たち、自分自身と同じ人間に従わば、お前たち必ず損失者とならん。

وَلَئِنْ أَطَعْتُمْ بَشَرًا مِّثْلَكُمْ إِنَّكُمْ إِذًا لَّخَٰسِرُونَ ﴿٣٥﴾

36．彼はお前たちが死んで土と骨になりたる後、お前たちは再び甦らしめらる、と云うか？

أَيَعِدُكُمْ أَنَّكُمْ إِذَا مِتُّمْ وَكُنتُمْ تُرَابًا وَعِظَٰمًا أَنَّكُم مُّخْرَجُونَ ﴿٣٦﴾

37．ばかばかしい、お前たちが約束されたことは真実からほど遠い。

هَيْهَاتَ هَيْهَاتَ لِمَا تُوعَدُونَ ﴿٣٧﴾

38．我等にはただ現世の生活あるのみ。我等は死に、我等は生く。されど、我等は断じて再び甦らしめらることなかるべし。

إِنْ هِيَ إِلَّا حَيَاتُنَا الدُّنْيَا نَمُوتُ وَنَحْيَا وَمَا نَحْنُ بِمَبْعُوثِينَ ﴿٣٨﴾

39．彼はアッラーに対して嘘を捏造するただの人間にすぎず。されば、我等は彼を信じたりはせぬ」と。

إِنْ هُوَ إِلَّا رَجُلٌ افْتَرَىٰ عَلَى اللَّهِ كَذِبًا وَمَا نَحْنُ لَهُ بِمُؤْمِنِينَ ﴿٣٩﴾

40．彼は云えり、「主よ、我を助け給え。彼等は我を嘘つきと見なす」と。

قَالَ رَبِّ انصُرْنِي بِمَا كَذَّبُونِ ﴿٤٠﴾

41．神は云えり、「やがて、彼等は必ず後悔せん」と。

قَالَ عَمَّا قَلِيلٍ لَّيُصْبِحُنَّ نَٰدِمِينَ ﴿٤١﴾

42．まさにその時、天罰が下り、われらは彼等を激流に浮ぶ浮きかすの如くなしたり。不義なす従輩よ懲りあれ！

فَأَخَذَتْهُمُ الصَّيْحَةُ بِالْحَقِّ فَجَعَلْنَٰهُمْ غُثَاءً ۚ فَبُعْدًا لِّلْقَوْمِ الظَّٰلِمِينَ ﴿٤٢﴾

43．然る後、われらは彼等の後に別の多くの世代を興したり。

ثُمَّ أَنشَأْنَا مِن بَعْدِهِمْ قُرُونًا ءَاخَرِينَ ﴿٤٣﴾

44．如何なる民も、その定めの期限を早める能わず、また遅らす能わず。（注17）

مَا تَسْبِقُ مِنْ أُمَّةٍ أَجَلَهَا وَمَا يَسْتَـْٔخِرُونَ ﴿٤٤﴾

45．然る後、われらは使徒等をあいついで遣わしたり。なれど、いずれの民も彼等の使徒が登場するや、彼等は使徒を嘘つきとして遇したり。されば、われらは次々に彼等を滅亡へと辿らせ、以てすべてを伝説たらしめたり。信ぜざる従輩よ、懲りあれ！(注18)

ثُمَّ أَرْسَلْنَا رُسُلَنَا تَتْرَا ۖ كُلَّ مَا جَاءَ أُمَّةً رَّسُولُهَا كَذَّبُوهُ ۚ فَأَتْبَعْنَا بَعْضَهُم بَعْضًا وَجَعَلْنَٰهُمْ أَحَادِيثَ ۚ فَبُعْدًا لِّقَوْمٍ لَّا يُؤْمِنُونَ ﴿٤٥﴾

注17　誰も神の定められた運命を変える事はできない。神の預言者を拒めば、必ずや罰せられる。神を信じない者についてどの様な形で罰を御与えになるかは、神御自身がお決めになる。

注18　彼等は壊滅した為、後生の人々は、彼等を、かつてこの世にあったが、今やその存在の跡形も無い人々と表現した。

46. 然る後、われらはモーゼとその兄を、数々のわれらの奇跡と明白なる権能と共に遣わしたり、

ثُمَّ أَرْسَلْنَا مُوسَىٰ وَأَخَاهُ هَارُونَ بِآيَاتِنَا وَسُلْطَانٍ مُبِينٍ ﴿٤٦﴾

47. ファラオとその長老たちのところへ。然るに彼等は横柄な民なれば、尊大に振舞いたり。

إِلَىٰ فِرْعَوْنَ وَمَلَئِهِ فَاسْتَكْبَرُوا وَكَانُوا قَوْمًا عَالِينَ ﴿٤٧﴾

48. 彼等は云えり、「我等と等しいただの人間二人を、我等に信ぜよとな、而も彼等の同族は我等の奴隷に非ざるか？」と。

فَقَالُوا أَنُؤْمِنُ لِبَشَرَيْنِ مِثْلِنَا وَقَوْمُهُمَا لَنَا عَابِدُونَ ﴿٤٨﴾

49. そこで、彼等は二人を嘘つき呼ばわりしたれば、彼等もまた滅ぼされた者どもの仲間に入りたり。

فَكَذَّبُوهُمَا فَكَانُوا مِنَ الْمُهْلَكِينَ ﴿٤٩﴾

50. 而してわれらは、モーゼに彼等を導かしめんと、経典を授けたり。

وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ لَعَلَّهُمْ يَهْتَدُونَ ﴿٥٠﴾

51. われらはまた、マリアの子とその母を一つの神兆となし、二人の安全のための隠れ場として、泉が湧き出る緑の谷間の小高いところを、与えたり。（注 19）

وَجَعَلْنَا ابْنَ مَرْيَمَ وَأُمَّهُ آيَةً وَآوَيْنَاهُمَا إِلَىٰ رَبْوَةٍ ذَاتِ قَرَارٍ وَمَعِينٍ ﴿٥١﴾

注 19　イエス・キリストの死は、彼の出生と同様に論議の的となっている。彼が亡くなられる頃、どこですごしたか、今までも論じられてきた。クルアーンや聖書は歴史的な確かな裏付けを持ち、イエス・キリストは十字架によってなくなられたのではないことを明らかにする。この論点を支持する学説を以下に記す。

（1）1877年ころ中東を旅したロシアの旅行家ニコラス・ノトビッチは、著書「イエスの知られざる生活」の中で、「イエスはカシミールとアフガニスタンを訪れた。」と書いている。ニコラス・ノトビッチがカシミールを訪れた当時、カシミールのマハラジャ宮殿に起居していたイギリス人サー・フランシス・ヤングハズバンドは、ゾジラ峠近くでノトビッチと会った。イエスの東洋への旅に関する最近の研究はノトビッチの著作を強力に裏付けている。「イエスによる東洋訪問という珍しい話をスリナガールに見つけたのは我々が初めてだ。」と、ニコラス・ローリッチ博士は著書「Heart of Asia（アジアの心）」に書いている。ローリッチ博士は更に続ける「イエスが、インド、ラダック、中央アジアにまで足跡を残している事を我々は後に知った。カシミール、ラダック、チベット、更にその北部地域も含め、中央アジア全域で、イエス来訪は未だ信じられている。」(Jawahar Lal Nehru著“Glimpses of World History”)

学者の中には、ノトビッチの作品にあるあいまいな箇所を指して、イエスが神の預言者になる前にインドを訪れたとする説に異を唱える者もある。イエスがインドを訪れたと言われているのは彼がまだ13才か14才の頃であり、遠隔地への長く苦しい旅、しかも道中我身を死の危険にさらすかもしれない旅をその様な若者が考えたはずがない。では、何が若き日のイエスをインドへ駆り立てたのか？　もしイエスが当時インドを訪れたとすれば何故インドやカシミールの人々が13才か14才の少年の行動をわざわざ記録に残したのであろうか？　史実では、ユダヤ人に追われ、パレスチナでの暮しも危なくなったイエスは、パレスチナを去り、“イスラエルの失われた10支族”の為に、旧約聖書に書かれた預言成就を求めて旅に出た。そして長く危険な旅の後インド及びカシミールに着き、その地で 120才の高齢に至るまで波瀾に満ちた人生を送ったイエスの行動が記されているのはそこまでである (Kanzal-Ummal, 6章参照)。アッシリア人やバビロニア人に追われた“イスラ

第三項

52．汝等使徒たちよ清潔なものを食し、善行をなせ。げにわれはお前たちの所業を熟知す。

يَٰٓأَيُّهَا ٱلرُّسُلُ كُلُوا۟ مِنَ ٱلطَّيِّبَٰتِ وَٱعْمَلُوا۟ صَٰلِحًا ۖ إِنِّى بِمَا تَعْمَلُونَ عَلِيمٌ ﴿٥٢﴾

53．而して、お前たちの教団は同一不二にして、われはお前たちの主なることを知れ。されば、われをお前たちの守護者として敬え。(注 20)

وَإِنَّ هَٰذِهِۦٓ أُمَّتُكُمْ أُمَّةً وَٰحِدَةً وَأَنَا۠ رَبُّكُمْ فَٱتَّقُونِ ﴿٥٣﴾

エルの失われた支族”は、イラン及びイラクに住み着いた。後に、ダリウス、サイラスの元にイラン人がアフガニスタンやインドまで領土を拡大した時、これ等の支族は共にインド、アフガニスタンに入植したのであった。(2) カシミール人、アフガニスタン人は“イスラエルの失われた支族”の末裔である。この事は両種族の習慣・歴史・記録からも明らかである。町名・種族名・習慣・生活様式・服装・身体的特徴等あらゆる点で、カシミール人・アフガニスタン人はイスラエル人と酷似している。古代の碑文も又、それを示している。両種族の民話にはイスラエルの話が多く含まれる。カシミールという名それ自体、実は“シリアの様な”という意味の語がカシミールに由来している。又、ノアの孫であるカッシュあるいはクッシュにちなんで名付けられたとも考えられる。これらの事実からすれば、アフガニスタン人及びカシミール人が“イスラエルの失われた支族”の末裔であるという見解は間違いない。(3) イエスがカシミールに来た事、カシミール人が“イスラエルの失われた 10 支族”の末裔である事は上記の事実で十分に証明しているが、イエスがカシミールを訪れ、彼の地で暮し、没した事柄の最大の証しは、カシミール地方にあるスリナガール市カンヤール町に現存するイエスの墓である。ラウザバルと呼ばれるこの墓に葬られている人物としては、ユーズ・アシフ、ナビー・サヘブ、シャハザーダー・ナビー、イサー・サーヘブ等様々な名が挙っている。信頼でき得る歴史的記述によれば、ユーズ・アシフは 1900 年余り前にカシミールに来て、福音書に書かれた比喩を多く用いて説教したらしい。歴史書では、ユーズ・アシフは、ナビー（預言者）と記されている。一方聖書には“人を集める人”を意味するヤスーという名で記されているが、このヤスーはイエスの記述名である。イエスの使者がイスラエルの失われた十支族を主の囲いに集めた時、イエス自身がこう語った。「私にはまた、この囲いに属さない他の羊があります。私はそれも導かなければなりません。彼等は私の声に聞き従い、一人の牧者、一つの群れとなるのです。」(ヨハネ 10 章 6 節)

次の史実もこの問題をある程度解明している。その墓はある預言者のものとして良く知られている。彼は皇子であり外国からカシミールに来て、カシミールの人々に説教を聞かせた。その名をユーズ・アシフと言った。(Tarikh Azami, pp82- 85)。ユーズ・アシフはカシミールと呼ばれる国に来るまで幾つかの地を彷徨った。そして遙か遠い彼の地を訪れ、死ぬまでそこで過ごした。(Ikmat al-Din, pp358-359)。前述の如く、カシミール伝説にはある預言者を語った件りがある。彼はカシミールに住み、イエスの様に比喩、小話を用いて人々に説いて聞かせた。それ等の比喩小話は今もカシミールに伝わっている(John Noel's article in Asia, Oct. 1930)。だから、イエスがインドに行きスリナガールで没したのは合理的、歴史的観点からして真実と見て間違いあるまい。

この問題を更に詳しく調べるには、救世主アハマドによる書“Masih Hindustan Mainで（インドのイエス）”を繙くのが良い。又、“Nazarene Gospel Restored”も参考になろう。この書の著者達は、西暦 30 年に十字架にかけられたイエスが復活後数十年生存したと主張している。十字架から救出された後、イエスはどこで母と共に平穏に暮し、永遠の眠りに就いたのか。それに関する最も詳しい記述はクルアーンに見られる。「緑と谷と泉のある高地」これは美しいカシミール渓谷を語ったものである。ニコラス・ノトビッチはカシミールを“永遠の楽園の谷”と呼んだ。

注 20　　神の使者は、人々を同一不二と成した。それは、彼等が同じ神を崇め、同じ教えに従い、この世に慈愛に満ちた神の国を造るという同じ目的を以ていたからである。

54. 然るに、人々は自らの都合で分裂し、いろいろなる宗派を創りてそれぞれ自分の奉ずるものに歓喜す。（注 21）

فَتَقَطَّعُوْٓا اَمْرَهُمْ بَيْنَهُمْ زُبُرًا ۭ كُلُّ حِزْبٍۢ بِمَا لَدَيْهِمْ فَرِحُوْنَ ﴿۵۴﴾

55. されば、暫らく、彼等を混乱のままに捨ておけ。

فَذَرْهُمْ فِيْ غَمْرَتِهِمْ حَتّٰى حِيْنٍ ﴿۵۵﴾

56. 彼等は、富と子宝をわれらが授けるために、

اَيَحْسَبُوْنَ اَنَّمَا نُمِدُّهُمْ بِهٖ مِنْ مَّالٍ وَّبَنِيْنَ ﴿۵۶﴾

57. われらが進んで彼等に好いことをなすとでも考えているのか？然らず、されど、彼等は之を悟らず。（注 22）

نُسَارِعُ لَهُمْ فِي الْخَيْرٰتِ ۭ بَلْ لَّا يَشْعُرُوْنَ ﴿۵۷﴾

58. げに主を畏れて尊敬する者、

اِنَّ الَّذِيْنَ هُمْ مِّنْ خَشْيَةِ رَبِّهِمْ مُّشْفِقُوْنَ ﴿۵۸﴾

59. 主のさまざまなる神兆を信ずる者、

وَالَّذِيْنَ هُمْ بِاٰيٰتِ رَبِّهِمْ يُؤْمِنُوْنَ ﴿۵۹﴾

60. 主とならべて如何なる他神も祀らぬ者、

وَالَّذِيْنَ هُمْ بِرَبِّهِمْ لَا يُشْرِكُوْنَ ﴿۶۰﴾

61. 主の許に帰るべきことを想うてその胸を畏敬に満たし、施すべきものは惜しみなく施す者、

وَالَّذِيْنَ يُؤْتُوْنَ مَآ اٰتَوْا وَّقُلُوْبُهُمْ وَجِلَةٌ اَنَّهُمْ اِلٰى رَبِّهِمْ رٰجِعُوْنَ ﴿۶۱﴾

62. これ等の者こそ進んで善行を競い、その先頭を争う者なり。

اُولٰۗىِٕكَ يُسٰرِعُوْنَ فِي الْخَيْرٰتِ وَهُمْ لَهَا سٰبِقُوْنَ ﴿۶۲﴾

63. われらは如何なる者にもその能力以上に負担を課せず。（注 23）またわれらの許に真実を語る帳簿あるなれば、（注 24）人々は不当に遇せられることなかるべし。

وَلَا نُكَلِّفُ نَفْسًا اِلَّا وُسْعَهَا وَلَدَيْنَا كِتٰبٌ يَّنْطِقُ بِالْحَقِّ وَهُمْ لَا يُظْلَمُوْنَ ﴿۶۳﴾

64. なれど、彼等の心はこの帳簿に全くうかつなれば、その所業は悪事ばかりなり。

بَلْ قُلُوْبُهُمْ فِيْ غَمْرَةٍ مِّنْ هٰذَا وَلَهُمْ اَعْمَالٌ مِّنْ دُوْنِ ذٰلِكَ هُمْ لَهَا عٰمِلُوْنَ ﴿۶۴﴾

注 21　すべての預言者の死後、彼の弟子達は分裂し、それぞれに自らこそ真の後継者であると主張し、他者を真実を持たざる者と非難する。

注 22　何をもって成功したと見なし、又何をもって神の御慈愛を得たと見なすのか。人はそれを富・権力・名声で量ろうとするが、これは誰もが犯し易い誤りであり、前節及びこの節ではこの誤りを正す様求めている。

注 23　人の道徳的精神的成長の為に神がクルアーンに示された律法は、力の及ぶ範囲でこれに従わねばならない。その律法はどの様な状況にも、又どの様な気質の人々にも適したものである。

注 24　クルアーンに示された教えは英知に基づくものであり、あらゆる状況、あらゆる人々に適しており、正義・公正・英知の求めに応じている。この事が「真実を語る帳簿」という言葉の意味する処である。

65. われら彼等の中の奢りにふける者を懲らしめんと捕えると、見よ、彼等はその時になって、助けを求めて泣き叫ぶ。

حَتّٰٓى اِذَآ اَخَذْنَا مُتْرَفِيْهِمْ بِالْعَذَابِ اِذَا هُمْ يَجْـَٔرُوْنَ ﴿٦٥﴾

66. 「今となって、泣き叫ぶな。お前たち断じてわが助けを受けざるべし。

لَا تَجْـَٔرُوا الْيَوْمَ اِنَّكُمْ مِّنَّا لَا تُنْصَرُوْنَ ﴿٦٦﴾

67. 数々のわが神兆はすでにお前たちに読誦されたるものを、その都度お前たちは踵を廻らして去り、

قَدْ كَانَتْ اٰيٰتِيْ تُتْلٰى عَلَيْكُمْ فَكُنْتُمْ عَلٰٓى اَعْقَابِكُمْ تَنْكِصُوْنَ ﴿٦٧﴾

68. 傲慢にも、クルアーンを埒もない夜話しの種となせり」（注 25）

مُسْتَكْبِرِيْنَ بِهٖ سٰمِرًا تَهْجُرُوْنَ ﴿٦٨﴾

69. 彼等は神の言葉をとくと思案せざるか、それとも、古の祖先に起らざりしものが彼等には生じたとでもいうのか？

اَفَلَمْ يَدَّبَّرُوا الْقَوْلَ اَمْ جَآءَهُمْ مَّا لَمْ يَأْتِ اٰبَآءَهُمُ الْاَوَّلِيْنَ ﴿٦٩﴾

70. 或いは、己が使徒を悟らず、之を拒むや？（注 26）

اَمْ لَمْ يَعْرِفُوْا رَسُوْلَهُمْ فَهُمْ لَهٗ مُنْكِرُوْنَ ﴿٧٠﴾

71. はたまた、彼は狂人なりと云うのか？然らず、彼は人々に真理を携えり。なれど、世人の多くは真理を忌避す。

اَمْ يَقُوْلُوْنَ بِهٖ جِنَّةٌ بَلْ جَآءَهُمْ بِالْحَقِّ وَاَكْثَرُهُمْ لِلْحَقِّ كٰرِهُوْنَ ﴿٧١﴾

72. もし真理が彼等の望み通りに従ったならば、天も地も、またその間にあるものは悉く堕落せり。然らず、われらは彼等に訓戒をもたらしたれど、彼等はそれから脇へそれたり。

وَلَوِ اتَّبَعَ الْحَقُّ اَهْوَآءَهُمْ لَفَسَدَتِ السَّمٰوٰتُ وَالْاَرْضُ وَمَنْ فِيْهِنَّ بَلْ اَتَيْنٰهُمْ بِذِكْرِهِمْ فَهُمْ عَنْ ذِكْرِهِمْ مُّعْرِضُوْنَ ﴿٧٢﴾

73. それとも、汝は彼等に報酬を求むるか？汝の主の報酬こそ最上なり。彼こそは最上の供給者なり。（注 27）

اَمْ تَسْـَٔلُهُمْ خَرْجًا فَخَرَاجُ رَبِّكَ خَيْرٌ وَّهُوَ خَيْرُ الرّٰزِقِيْنَ ﴿٧٣﴾

注 25　傲慢という語は次の様な意味を持つ。意志の弱い愚かな者にとり、クルアーンの啓示が余りにも偉大過ぎると不信心者は考える。又、彼等は、クルアーン朗唱を耳にすれば、傲慢な態度でその場を立ち去る。

注 26　この節では、モハッマド預言者の良識と、彼に敵対する者達の無分別が示されて来た。モハッマド預言者の生活は彼等の前に開かれた本の様なものであり、彼等は預言者の生活が如何なる物か良く心得ている。それは非の打ち所の無いものである。モハッマド預言者の誠実で高潔な人と成りを熟知しているにもかかわらず、彼等は預言者に偽り有りと言い張る（10 章 17 節参照）。

注 27　モハッマド預言者の行いは全ての誠意に基づくもので、自らの無私無欲の奉仕活動に如何なる報酬をも求めなかったが、それを端的に示す事柄がある。モハッマド預言者は、心優しい伯父アブ・タリブに、偶像崇拝者への説教を諦めて彼等と妥協してはどうかと勧められた時、次の様に答えた。「もし彼等が私の右に太陽を

74. 確かに、汝は彼等を正しい道に導く。

وَإِنَّكَ لَتَدْعُوهُمْ إِلَىٰ صِرَاطٍ مُّسْتَقِيمٍ ﴿٧٤﴾

75. されど、来世を信ぜざる者どもは、その道から逸脱す。

وَإِنَّ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ عَنِ الصِّرَاطِ لَنَاكِبُونَ ﴿٧٥﴾

76. たといわれらが彼等に慈悲を垂れ、彼等の災難を取り除くとも、彼等は盲目的にさまよい、なお罪を重ねん。

وَلَوْ رَحِمْنَاهُمْ وَكَشَفْنَا مَا بِهِم مِّن ضُرٍّ لَّلَجُّوا فِي طُغْيَانِهِمْ يَعْمَهُونَ ﴿٧٦﴾

77. われらすでに彼等に罰を加えしも、彼等はその主の御前でへりくだることなく、また謙虚に哀願することもなかりき。

وَلَقَدْ أَخَذْنَاهُم بِالْعَذَابِ فَمَا اسْتَكَانُوا لِرَبِّهِمْ وَمَا يَتَضَرَّعُونَ ﴿٧٧﴾

78. されど、われらが恐ろしい罰の扉を彼等の前に開くとき、見よ、彼等はその時初めて絶望す。(注28)

حَتَّىٰ إِذَا فَتَحْنَا عَلَيْهِم بَابًا ذَا عَذَابٍ شَدِيدٍ إِذَا هُمْ فِيهِ مُبْلِسُونَ ﴿٧٨﴾

第五項

79. 彼こそはお前たちに、耳や眼や心を創り給うたお方なり。然(しか)るに、お前たちは殆ど感謝せず。(注29)

وَهُوَ الَّذِي أَنشَأَ لَكُمُ السَّمْعَ وَالْأَبْصَارَ وَالْأَفْئِدَةَ قَلِيلًا مَّا تَشْكُرُونَ ﴿٧٩﴾

80. また、お前たちを地上に殖やし給うたお方は、彼なり。而(しか)して、お前たちいずれは彼の許(もと)へ召し寄せられん。

وَهُوَ الَّذِي ذَرَأَكُمْ فِي الْأَرْضِ وَإِلَيْهِ تُحْشَرُونَ ﴿٨٠﴾

81. 生死を与うるも彼なり。昼夜の交替を支配するもまた彼なり。お前たちまだわからざるか?(注30)

وَهُوَ الَّذِي يُحْيِي وَيُمِيتُ وَلَهُ اخْتِلَافُ اللَّيْلِ وَالنَّهَارِ أَفَلَا تَعْقِلُونَ ﴿٨١﴾

82. 然(しか)るに、彼等は昔の人々が云えると同じことを云う。

بَلْ قَالُوا مِثْلَ مَا قَالَ الْأَوَّلُونَ ﴿٨٢﴾

左に月を置いて、偶像崇拝者への説教を諦める様促したとしても、私は使命を果たすまでは決してその要求に応じない。使命を果たすか、あるいは使命のために人生をささげて終わるかどちらかだ。」この預言者の言葉は忘れてはならない(Taloari,巻)。

注28　事が順調に運んでいる時、人の気持ちは四方に散り、悪事にふける様になる。しかし自らの愚かな行為の末不幸な結末を迎えた時、人は絶望に陥る。

注29　「感謝」という語の持つ意味の一つに贈り物の正しい使い方というものがあるが(14：8)、この節では神からの贈り物について述べられてある。我々は神より授けられた目、耳、心を正しく用いて、身体的、精神的に神のしるしを見、神の言葉に耳を傾け、それについて深く考えねばならない。

注30　この節では国家の栄枯盛衰が暗示されている。一度権力の座に付き栄華を極めた人々は、その悪業の結果衰退し、死に至るのである。

83. 彼等は云えり、「なんとな！我等死んで、土と骨とに帰したる後、再び甦らしめられるとな？

قَالُوٓا أَءِذَا مِتْنَا وَكُنَّا تُرَابًا وَعِظَامًا أَءِنَّا لَمَبْعُوثُونَ ﴿٨٣﴾

84. 以前にも我等や我等が父祖たちが約束されたることは、これなり。こは古（いにしえ）の伝説にすぎず」と。

لَقَدْ وُعِدْنَا نَحْنُ وَءَابَآؤُنَا هَٰذَا مِن قَبْلُ إِنْ هَٰذَآ إِلَّآ أَسَٰطِيرُ ٱلْأَوَّلِينَ ﴿٨٤﴾

85. 云え、「大地とそこにある一切は誰の所有（もの）なるか、お前たち之（これ）を知るや？」と。

قُل لِّمَنِ ٱلْأَرْضُ وَمَن فِيهَآ إِن كُنتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٨٥﴾

86. 彼等は云わん、「アッラーなり」と。云え、「お前たちまだ留意せざるか？」と。

سَيَقُولُونَ لِلَّهِ قُلْ أَفَلَا تَذَكَّرُونَ ﴿٨٦﴾

87. 云え、「七つの天の主、偉大なる玉座の主は誰ぞ」と。

قُلْ مَن رَّبُّ ٱلسَّمَٰوَٰتِ ٱلسَّبْعِ وَرَبُّ ٱلْعَرْشِ ٱلْعَظِيمِ ﴿٨٧﴾

88. 彼等は云わん、「そはアッラーなり」と。云え、「お前たちそれでも彼を自分たちの守護者と敬（うやま）うざるか？」と。

سَيَقُولُونَ لِلَّهِ قُلْ أَفَلَا تَتَّقُونَ ﴿٨٨﴾

89. 云え、「一切の支配権を掌握し、他を庇護すれど、自らは庇護されざる者は誰ぞ、お前たち之（これ）を知るや？」と。

قُلْ مَنۢ بِيَدِهِۦ مَلَكُوتُ كُلِّ شَيْءٍ وَهُوَ يُجِيرُ وَلَا يُجَارُ عَلَيْهِ إِن كُنتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٨٩﴾

90. 彼等は云わん、「すべてはアッラーの所有（もの）なり」と。云え、「ならば、何故にお前たちは惑わされるか？」と。

سَيَقُولُونَ لِلَّهِ قُلْ فَأَنَّىٰ تُسْحَرُونَ ﴿٩٠﴾

91. それどころか、われらは彼等に真理をもたらしたれど、彼等は確かに嘘つきなり。

بَلْ أَتَيْنَٰهُم بِٱلْحَقِّ وَإِنَّهُمْ لَكَٰذِبُونَ ﴿٩١﴾

92. アッラーは子を設けず、また彼の外に如何なる神もなし。もしそのような場合は、それぞれの神が己が創りしものを運び去り、その或る者は必ず他の者を支配せん。彼等が主張するものより遙か高くましますアッラーに讃えあれ！（注31）

مَا ٱتَّخَذَ ٱللَّهُ مِن وَلَدٍ وَمَا كَانَ مَعَهُۥ مِنْ إِلَٰهٍ إِذًا لَّذَهَبَ كُلُّ إِلَٰهٍۭ بِمَا خَلَقَ وَلَعَلَا بَعْضُهُمْ عَلَىٰ بَعْضٍ سُبْحَٰنَ ٱللَّهِ عَمَّا يَصِفُونَ ﴿٩٢﴾

注31　イエスが神の子であるというキリスト教義が偽りである事を、この節で論証している。人が事を成就する際息子の手助を必要とするが、神は天地の創造主であり、全宇宙の唯一の支配者である。神に、他の者や息子の助力は不要である。又、全宇宙は一定の法則に支配されており、宇宙の創造・目的・支配の統一は創造主と支配者の一致を示している。支配の二元性は混乱を無秩序を示すものである。

93．見えざるものも、見えるものも知り給うお方！故に彼は、彼等が彼に配する者の上に高くいまし給う。

عٰلِمِ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ فَتَعٰلٰى عَمَّا يُشْرِكُوْنَ ٩٣

第六項

94．云え、「主よ、汝我に、彼等が約束されたことを、示し給うならば。

قُلْ رَّبِّ اِمَّا تُرِيَنِّيْ مَا يُوْعَدُوْنَ ٩٤

95．主よ、我を不義者の仲間に加え給うな」と。(注 32)

رَبِّ فَلَا تَجْعَلْنِيْ فِي الْقَوْمِ الظّٰلِمِيْنَ ٩٥

96．げにわれらは、彼等に約束せしことを汝に示す能力(ちから)あり。

وَاِنَّا عَلٰٓى اَنْ نُّرِيَكَ مَا نَعِدُهُمْ لَقٰدِرُوْنَ ٩٦

97．善行で悪を撃退せよ。われらは、彼等の主張することを熟知す。(注 33)

اِدْفَعْ بِالَّتِيْ هِيَ اَحْسَنُ السَّيِّئَةَ نَحْنُ اَعْلَمُ بِمَا يَصِفُوْنَ ٩٧

98．而して、云え、「主よ、悪党どものそそのかしに乗せられぬよう、我を護り給え。(注 34)

وَقُلْ رَّبِّ اَعُوْذُ بِكَ مِنْ هَمَزٰتِ الشَّيٰطِيْنِ ٩٨

99．彼等が近づかぬよう、汝、我が主よ、我を護り給え」と。

وَاَعُوْذُ بِكَ رَبِّ اَنْ يَّحْضُرُوْنِ ٩٩

100．死が彼等の一人に臨む時、その者は懇願して云う、「主よ、我を還(かえ)らしめよ、

حَتّٰٓى اِذَا جَآءَ اَحَدَهُمُ الْمَوْتُ قَالَ رَبِّ ارْجِعُوْنِ ١٠٠

101．正しい行為をするために、置き去りし我が命に」と。決して然(しか)らず。そは口先だけの出まかせにすぎず。彼等の背後には、再び甦らしめられるまで障壁が立ち塞(ふさ)ぐ。(注 35)

لَعَلِّيْٓ اَعْمَلُ صَالِحًا فِيْمَا تَرَكْتُ كَلَّا اِنَّهَا كَلِمَةٌ هُوَ قَآئِلُهَا وَمِنْ وَّرَآئِهِمْ بَرْزَخٌ اِلٰى يَوْمِ يُبْعَثُوْنَ ١٠١

注 32　この章はメッカ時代末期に現れた。モハッマド預言者はメッカを去ろうとしていた。クライシュはモハッマド預言者を迫害し、メッカより追放した為、彼等に将に天罰が下ろうとしていた。天罰の下る時モハッマド預言者はメッカ退去の許しを得る為神に祈る様教えを受けている。

注 33　メッカで不信心者と共に有る限り、あらゆる迫害に耐え、悪に善で報いなければならないと、モハッマド預言者は此処で申し渡されている。

注 34　「悪党ども」は、モハッマド預言者に敵対する者の内、指導的役割を果たす者を指す。「そそのかし」とは、モハッマド預言者を中傷し、その実像を歪めて伝える事により、人々の間に預言者への反感を育む動きの事である。

注 35　「障壁」とは二者間の障害物という意味を持つが、教義上は死亡した日から復活した日までの中間期間を指す。天国へいけるのか地獄に落ちて罰を受けるのかがまだ定まってない状態を表わす。クルアーンではこれを未発達の状態とし、一方復活を完全に発達した魂の誕生と位置付けている。

102. 而してその日、喇叭が吹き鳴らされれば、彼等の間の血縁の絆は絶たれ、互に安否を問うこともなかるべし。（注 36）

فَإِذَا نُفِخَ فِي الصُّورِ فَلَا أَنْسَابَ بَيْنَهُمْ يَوْمَئِذٍ وَلَا يَتَسَاءَلُونَ ﴿١٠٢﴾

103. その時、秤り重い人々ーこれ等は栄えん。

فَمَنْ ثَقُلَتْ مَوَازِينُهُ فَأُولَٰئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُونَ ﴿١٠٣﴾

104. されど、秤り軽い者どもは、その魂は滅び、地獄が彼等の住居とならん。

وَمَنْ خَفَّتْ مَوَازِينُهُ فَأُولَٰئِكَ الَّذِينَ خَسِرُوا أَنْفُسَهُمْ فِي جَهَنَّمَ خَالِدُونَ ﴿١٠٤﴾

105. 業火は彼等の面を焦がし、その中で苦悶に歯をむき出さん。

تَلْفَحُ وُجُوهَهُمُ النَّارُ وَهُمْ فِيهَا كَالِحُونَ ﴿١٠٥﴾

106. 「わが神兆はお前たちに、読誦せられざりしか、而してお前たち之を虚偽なりと看做さざりしか？」

أَلَمْ تَكُنْ آيَاتِي تُتْلَىٰ عَلَيْكُمْ فَكُنْتُمْ بِهَا تُكَذِّبُونَ ﴿١٠٦﴾

107. すると、彼等は云わん、「主よ、悲運に我等は打ちのめされり。我等は迷誤の民なりき。

قَالُوا رَبَّنَا غَلَبَتْ عَلَيْنَا شِقْوَتُنَا وَكُنَّا قَوْمًا ضَالِّينَ ﴿١٠٧﴾

108. 我等の主よ、ここから我等を出し給え。もし再び違犯を繰り返さば、その時こそ本当の悪人たるべし」と。

رَبَّنَا أَخْرِجْنَا مِنْهَا فَإِنْ عُدْنَا فَإِنَّا ظَالِمُونَ ﴿١٠٨﴾

109. 神は云わん、「火の中へ立ち去れ。われに物云うことなかれ。（注 37）

قَالَ اخْسَئُوا فِيهَا وَلَا تُكَلِّمُونِ ﴿١٠٩﴾

110. わが僕等の中には、『主よ、我等は信ず。故に、我等の罪を赦し給え。而して、我等に慈悲を垂れ給え。汝はいと慈悲深き御方にまします故に』と云いし一団あり。

إِنَّهُ كَانَ فَرِيقٌ مِنْ عِبَادِي يَقُولُونَ رَبَّنَا آمَنَّا فَاغْفِرْ لَنَا وَارْحَمْنَا وَأَنْتَ خَيْرُ الرَّاحِمِينَ ﴿١١٠﴾

111. 然るに、お前たちは彼等をあざ笑い、嘲笑し続けてる間にわれを念ずることを忘れたり。（注 38）

فَاتَّخَذْتُمُوهُمْ سِخْرِيًّا حَتَّىٰ أَنْسَوْكُمْ ذِكْرِي وَكُنْتُمْ مِنْهُمْ تَضْحَكُونَ ﴿١١١﴾

注 36　ある人物に罰が下される時、彼の家系・家柄は全く考慮されない。裁きの日評価されるのはその人物の善行であって、血縁及び交友関係は何の役にも立たない。

注 37　神の使者を見下し、否定する者は、裁きの日に地獄へ落ち、憎しみと軽蔑を受ける。生前の悪事に対する弁解は許されない。神は全てを御存知なのだから。

注 38　この節は次の様な意味を持つ。信心者は貧しく弱いので、不信心者は信者の意にかかわらず彼等を雇い、搾取し、報酬無しに労働を強要する。

112. われは今日、彼等が耐え忍びしことに対し報いたり。至福を成就せるは、げに彼等なり」と。

إِنِّي جَزَيْتُهُمُ الْيَوْمَ بِمَا صَبَرُوْٓا أَنَّهُمْ هُمُ الْفَآئِزُوْنَ ﴿١١٢﴾

113. 神は問わん、「お前たち、地上に何年留まりたるか？」と。

قٰلَ كَمْ لَبِثْتُمْ فِي الْأَرْضِ عَدَدَ سِنِيْنَ ﴿١١٣﴾

114. 彼等は答えん、「一日か、否、その何分の一かにすぎず。（注39）なれど、数えていた者に之を問い給え」と。

قَالُوْا لَبِثْنَا يَوْمًا أَوْ بَعْضَ يَوْمٍ فَسْـَٔلِ الْعَآدِّيْنَ ﴿١١٤﴾

115. 神は云わん、「お前たちが地上に留まりたるは、僅かなり。もしお前たち此の意を知らば！

قٰلَ إِنْ لَّبِثْتُمْ إِلَّا قَلِيْلًا لَّوْ أَنَّكُمْ كُنْتُمْ تَعْلَمُوْنَ ﴿١١٥﴾

116. ならばお前たち、われらは意味もなくお前たちを創れりと思えるか？また、われらが許に連れ戻されることなかるべし、と思えるか？」と。（注40）

أَفَحَسِبْتُمْ أَنَّمَا خَلَقْنٰكُمْ عَبَثًا وَّأَنَّكُمْ إِلَيْنَا لَا تُرْجَعُوْنَ ﴿١١٦﴾

117. 崇高なり真実の王者アッラー。栄光の玉座の主たる彼以外に神なし。

فَتَعٰلَى اللّٰهُ الْمَلِكُ الْحَقُّ لَآ إِلٰهَ إِلَّا هُوَ رَبُّ الْعَرْشِ الْكَرِيْمِ ﴿١١٧﴾

118. なんの証明もなしにアッラーと共に他神を祈る者を、主はいずれ必ず清算せん。げに不信心者どもは栄えざるべし。

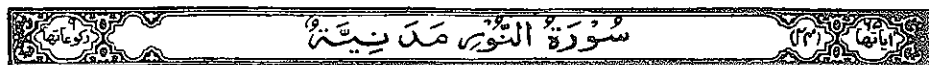
وَمَنْ يَّدْعُ مَعَ اللّٰهِ إِلٰهًا اٰخَرَ لَا بُرْهَانَ لَهٗ بِهٖ فَإِنَّمَا حِسَابُهٗ عِنْدَ رَبِّهٖ إِنَّهٗ لَا يُفْلِحُ الْكٰفِرُوْنَ ﴿١١٨﴾

119. 云え、「主よ、赦し給え。慈悲を垂れ給え。汝は最上の慈悲者なり」と。

وَقُلْ رَّبِّ اغْفِرْ وَارْحَمْ وَأَنْتَ خَيْرُ الرّٰحِمِيْنَ ﴿١١٩﴾

注39　安楽な生活というものは、後に罰を受けた時、それが如何に短く、又、悔恨と無念を伴うものであるかが明らかになる。人生の快楽とはむなしく短命であることが、不信心者を例にとれば良く分かる。

注40　人間は、神の属性を自らに育み、再現するという偉大な目的成就の為に創り出された。神の特性を授けられ、全創造物少なくともこの宇宙に存在する創造物の中心的役割を担っている。神の御意志を成就するという偉大な目標を授けられている為、人間の一生は、この世を離れ、魂が肉体を離れても終わる事はないであろう。人間の魂は、新たな世界へ新たな形を取り、新たな肉体へと永遠の旅を続けるであろう。肉体が滅びれば魂も共に滅びるという考え方は、宇宙創造における神の栄知・御計画・目的に反するものである。

سُورَةُ النُّورِ مَدَنِيَّةٌ

アル・ヌール
(メディナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ①

2. こはわれらが降(くだ)せる一章(スーラ)にして、義務として課せられた掟なり。(注1)われらはお前たちに注意せしんがために、その中に明白なる戒律を降(くだ)したり。(注2)

سُورَةٌ أَنزَلْنَاهَا وَفَرَضْنَاهَا وَأَنزَلْنَا فِيهَا آيَاتٍ بَيِّنَاتٍ لَّعَلَّكُمْ تَذَكَّرُونَ ②

3. 淫婦並びに姦夫には、各自百回の笞打(むちうち)を科せ。アッラーの裁きを執行するに当り、お前たち、もしアッラーと審判の日を信ずるならば、両名に対して哀れみをかけるは不用なり。而(しか)して、数名の信者にその仕置きに立合せよ。(注3)

الزَّانِيَةُ وَالزَّانِي فَاجْلِدُوا كُلَّ وَاحِدٍ مِّنْهُمَا مِائَةَ جَلْدَةٍ ۖ وَلَا تَأْخُذْكُم بِهِمَا رَأْفَةٌ فِي دِينِ اللَّهِ إِن كُنتُمْ تُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ ۖ وَلْيَشْهَدْ عَذَابَهُمَا طَائِفَةٌ مِّنَ الْمُؤْمِنِينَ ③

注1　この節で「義務として課せられた掟」と示されているように、ここでは、この章の戒律の重要性を強調している。それは、クルアーン全章が神により啓示され、そこに示された戒律は全て守る事を義務付けられているからである。

注2　遺憾ながら、愚かにも他教徒の慣習を模倣して、イスラム教徒はクルアーンの他の章にある規律以上に、この章の戒律に背いてきた。

注3　イスラム法典において、男女間の貞節は、徳目として非常に重要なものである。この章では、貞節を守る為の広範に渡る戒律が定められている。イスラム教はこの法を犯す事を固く禁じている。イスラム教の貞節に関する厳しさは、次に述べる姦通・姦淫に対する罰則に良く表われている。罰として「各自百回の笞打」が科されており、罪を犯した男女共に既婚か未婚か、あるいは一方が既婚で他方が未婚等、様々な場合が想定できるが、それにより懲罰に差異が加えられる訳ではない。この節では、笞刑を用いるとなっており、姦通・姦淫や他の重罪に対して投石にする死刑を行なうとはクルアーンでは定められていない。姦通罪より遥かに極悪非道な殺人罪、強盗罪、反逆罪、あるいは治安を乱す罪に対してすら、イスラム教では死刑を規定していない。これ等の罪に科す極刑は死刑であるが、第一級犯罪（2： 179）に対しては慰謝料支払いが、その他の犯罪（5：33−34）に対しては禁固・流刑が定められている。既婚の奴隷女が姦通罪を犯した場合クルアーンの別の章（4：26）に書かれてある様に、自由な身分の既婚女性と比べると、罰は半減される。投石のように死に至らせるような刑はどうやって半分にできようか？　だから、不貞節の罰は死刑ではあり得ないのだ。

クルアーンは、姦通罪に対して笞刑を課す事が明記されており、その適用は罪人の既婚・未婚を問わなかった。又、この節及び他の関連する節には、モハッマド預言者の高潔な配偶者アイシャに関して彼女自身既婚であったにもかかわらず、謂われ無き中傷の在った事も記されている。これ等の事実にもかかわらず、イスラム教の神学の学派の中には正当な理由無く、言語学者の手を経ずして、「この節では、姦通罪に対する罰則として、未婚者には笞刑を、既婚者には投石による死刑を規定している。」という誤った解釈を教えている所もある。この誤認は、既婚の姦通罪者がモハッマド預言者の命により投石による死刑を科せられたと書かれたハディスにある二・三の例を拠り所としている様である。この内の一例は、ユダヤ人男女に関するもので、彼等はモーゼ

4．姦夫は、淫婦か多神教徒の女以外結婚してはならぬ。淫婦も、姦夫か多神教徒の男以外結婚してはならぬ。このことは信者に堅く禁ぜられる。

الزَّانِي لَا يَنكِحُ إِلَّا زَانِيَةً أَوْ مُشْرِكَةً وَالزَّانِيَةُ لَا يَنكِحُهَا إِلَّا زَانٍ أَوْ مُشْرِكٌ ۚ وَحُرِّمَ ذَٰلِكَ عَلَى الْمُؤْمِنِينَ ④

5．貞節なる女を中傷し、而(しか)も四人の証人を挙げ得ざる者には、八十回の笞打(むちうち)を科せ。(注4）今後そのような者の証言は決して受け入れるなかれ。彼等は違犯者なり。

وَالَّذِينَ يَرْمُونَ الْمُحْصَنَاتِ ثُمَّ لَمْ يَأْتُوا بِأَرْبَعَةِ شُهَدَاءَ فَاجْلِدُوهُمْ ثَمَانِينَ جَلْدَةً وَلَا تَقْبَلُوا لَهُمْ شَهَادَةً أَبَدًا ۚ وَأُولَٰئِكَ هُمُ الْفَاسِقُونَ ⑤

の律法に基づき投石刑を受けた(ブハリ)。モハッマド預言者の行いは不変であり、新しい戒律が啓示されるまでは、旧約聖書に基づき罪を裁いた。投石刑の科せられた記録が一・二あるが、その罪の犯されたのが、当節が啓示された前か後かは定かではない。この節の啓示前に犯罪が行われた場合でも、記録者の誤りで、啓示後に起こされたものと誤記されている可能性もある。ハディスにはその様な記事錯誤の部分が発見されている。あるいは当時、世の中が深刻な状況で、その為モハッマド預言者が姦通罪人以外にも死刑を科したか、又記録者がその状況を考慮し損じたのかもしれない。さもなければ、モハッマド預言者が明確な神の戒律に背く事は不可解である。

姦通罪に対する罰則の誤解を生み出す事となったもう一つの原因は、モハッマド預言者の後継者オマルとアリーにあると言える。オマルは次の様に語ったと記録されている。「律法には、投石刑についての一節があった。我々はそれを読み、理解し、覚えた。モハッマド預言者は姦通罪者に投石刑を科し、我々も又彼に従った。人々が律法に書かれてない事を付け加えたのはオマルだと言っているではないか。」(Kashf al-Ghummah、2巻、P・111）ハディスは全くの偽文書か、良くてもオマルの言葉を誤解したものと思われる。オマルがクルアーンの一部であると言っているものを書き忘れることなどあり得ない、そして、オマルが正しいことをするのに人々を、おそれてそれをしなかったということは考えられない。もしオマルが本当に言ったのならクルアーンに必ず書き入れるはずである。又、姦通罪を犯した女性を笞打った後投石死に追いやったアリーは、次の様に語ったと記されている。「私は戒律に基き彼女を笞打ち、モハッマド預言者の行いに従い彼女に投石死を科した。」(ブハリ）これ等の言葉から、二つの推論が導き出される。(1)姦通者を罰する際、モハッマド預言者は、クルアーンに規された神の戒律に反する刑を科した。しかしこれは有り得ない。(2)一方、ウマールは、姦通者に投石刑を科すべしという戒律がある。」と語っている。又アリーは「その様な戒律は無いが、モハッマド預言者に習い、私も姦通者に投石刑を科した。」と述べている。両者の言は相矛盾するのみならず、神の戒律に背くものであり、それ由、偽造か、よしんば誤って伝えられたものとして否定せざるを得ない。

注4　姦通罪に次ぐ社会悪は、潔白な人に対する誹謗行為である。文明化されたいわゆる近代社会でよく見られるこの誹謗行為をイスラム教は戒め、無実の人を中傷する者に対して厳罰を持って処する。罰則には3種類のものがある。(a)体罰　(b)偽証者という烙印を押す事により、証言の法的効力を失くする。(c)罪人として扱う事で精神的恥辱を与える。告訴内容が真実か否かという点は、ここでは触れられていない。告発者は必要な証拠を提出しない限り偽証者とみなされ、規定の罰則を科せられる。姦通罪で告発された女性も、事実はどうであれ、証拠が揃わなければ無罪となる。法の意図する所は名誉毀損行為防止である。「貞節なる女」という語が用いられてはいるが、この節の戒律は男女双方を対象としたものである。アラビア語では、男女両性に等しく関わる事柄を述べる時、男性の性が用いられる。しかし男性よりむしろ女性に関する事柄の場合は女性の性が用いられる。ここに書かれた戒律は名誉毀損に対する罰則に関するもので、被害者は男女両性であるとは言うものの、女性の方が一般的により被害は大きいので"貞節なる女"という語を用いているのである。同じく"「中傷」する者"という語はアラビア語本文では男性語ではあるが、男女両性に適用される。

6．但し、その後、悔悟して行状を改めたる者は除く。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。(注5)

إِلَّا الَّذِينَ تَابُوا مِنْ بَعْدِ ذٰلِكَ وَأَصْلَحُوا فَإِنَّ اللّٰهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ⑥

7．自分の妻を中傷し、しかも自分以外証人を挙げ得ざる者には、アッラーに誓って己れの言葉が真実なることを四度誓わしめよ。(注6)

وَالَّذِينَ يَرْمُونَ أَزْوَاجَهُمْ وَلَمْ يَكُنْ لَّهُمْ شُهَدَاءُ إِلَّا أَنْفُسُهُمْ فَشَهَادَةُ أَحَدِهِمْ أَرْبَعُ شَهٰدٰتٍ بِاللّٰهِ إِنَّهُ لَمِنَ الصّٰدِقِينَ ⑦

8．而して、五度目には、もし自分が嘘つきなら、アッラーの呪詛を受けん、と誓わしめよ。

وَالْخَامِسَةُ أَنَّ لَعْنَتَ اللّٰهِ عَلَيْهِ إِنْ كَانَ مِنَ الْكٰذِبِينَ ⑧

9．男が嘘つきなることを、女がアッラーに誓って四度証言するなら、彼女は刑罰を免れん。

وَيَدْرَؤُا عَنْهَا الْعَذَابَ أَنْ تَشْهَدَ أَرْبَعَ شَهٰدٰتٍ بِاللّٰهِ إِنَّهُ لَمِنَ الْكٰذِبِينَ ⑨

10．而して、五度目の誓いは、(注7)もし彼の言葉が真実ならば、アッラーの怒り我が上に降らんことをと誓わしめよ。

وَالْخَامِسَةَ أَنَّ غَضَبَ اللّٰهِ عَلَيْهَا إِنْ كَانَ مِنَ الصّٰدِقِينَ ⑩

11．もしアッラーの恩恵と慈悲なかりせば、然るに事実はあわれみ深く賢明なり、お前たちは災難に遭えり。

وَلَوْلَا فَضْلُ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتُهُ وَأَنَّ اللّٰهَ تَوَّابٌ حَكِيمٌ ⑪ ع

第二項

12．げにこの偽りを捏造せし者は、(注8)お前たちの中の一部の者どもなり。この事件

إِنَّ الَّذِينَ جَاءُوا بِالْإِفْكِ عُصْبَةٌ مِّنْكُمْ لَا تَحْسَبُوهُ شَرًّا لَّكُمْ بَلْ هُوَ خَيْرٌ لَّكُمْ لِكُلِّ امْرِئٍ مِّنْهُمْ مَّا اكْتَسَبَ

注5　名誉毀損の場合、罪人が悔い改めれば刑罰の免除もあり得る。第一の体罰に関しては、有罪が確定次第施行されるので別として、後の二つの罰則は罪人の態度如何で免除もある。

注6　夫婦間に疑惑が生じ、家族関係がこじれる事もあるので、その様な場合に備えた特別の規定がある。

注7　妻が夫に告訴された時、4人の証人が妻を無罪と認めれば、残る一人の証人が夫を支持しても、妻は無罪となり、又夫も妻を告発した廉で裁かれる事はない。しかし、夫婦仲がこの様にこじれてしまえば最早縒りを戻す事もできず、夫婦関係は維持できないであろう。

注8　この節に述べられている痛ましい出来事が起きたのは、ヒジラ暦5年モハッマド預言者がバニー・ムスタリク討伐を終えた帰路の最中であった。イスラム軍はメディナの近くに夜営しなければならなかった。この討伐の旅に、モハッマド預言者は賢夫人アイシャを伴っていた。アイシャは用足しにキャンプを離れた。戻った時、彼女はどこかにネックレスを落して来た事に気付いた。ネックレス自体は高価な物ではなかったが、友人からの借り物だったので、彼女はそれを捜しに再び出かけた。戻ってみると、軍隊は、それまで彼女の乗っていたラクダと共に立ち去った後だった。彼女は当時まだ若く、体重も軽かったので、召使い達は彼女が篭に

を自分たちへの禍いと思うなかれ。否、そはお前たちのために幸いなり。彼等各自、自らが稼いだ罪の責めを負う。中でも、張本人は重刑に処せらるべし。(注9)

مِنَ الْإِثْمِ ۚ وَالَّذِي تَوَلَّىٰ كِبْرَهُ مِنْهُمْ لَهُ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿١٢﴾

13. お前たちそれを聞いた時、何故信者の男もまた女も自分たち仲間に対して善意に推測し、「こは明白なる虚偽なり」と云わざりしか？

لَوْلَا إِذْ سَمِعْتُمُوهُ ظَنَّ الْمُؤْمِنُونَ وَالْمُؤْمِنَاتُ بِأَنْفُسِهِمْ خَيْرًا وَقَالُوا هَٰذَا إِفْكٌ مُبِينٌ ﴿١٣﴾

14. 何故に彼等は之を立証すべく四人の証人を挙げざりしか？彼等が必要なる証人を立て得ざりし以上、アッラーの目に彼等は確かに嘘つきなり。(注10)

لَوْلَا جَاءُوا عَلَيْهِ بِأَرْبَعَةِ شُهَدَاءَ ۚ فَإِذْ لَمْ يَأْتُوا بِالشُّهَدَاءِ فَأُولَٰئِكَ عِنْدَ اللَّهِ هُمُ الْكَاذِبُونَ ﴿١٤﴾

15. もしお前たちにアッラーの恩恵と、現世並びに来世に於ける彼の慈悲がなかりせば、お前たちは、その没入した中傷のために、重刑を科せられたり。

وَلَوْلَا فَضْلُ اللَّهِ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتُهُ فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ لَمَسَّكُمْ فِي مَا أَفَضْتُمْ فِيهِ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿١٥﴾

16. お前たちは互に舌先でそれを知り、己れの知らざることを口から出まかせに語れり。而して、アッラーの目には重大なることを、軽視せり。

إِذْ تَلَقَّوْنَهُ بِأَلْسِنَتِكُمْ وَتَقُولُونَ بِأَفْوَاهِكُمْ مَا لَيْسَ لَكُمْ بِهِ عِلْمٌ وَتَحْسَبُونَهُ هَيِّنًا وَهُوَ عِنْدَ اللَّهِ عَظِيمٌ ﴿١٦﴾

17. お前たち、それを聞いた時、何故に云わざりしか、「こは我等の口にすべきことに非ず。おお、神よ、汝に讃えあれ、こは悲しむべき中傷なり！」と。

وَلَوْلَا إِذْ سَمِعْتُمُوهُ قُلْتُمْ مَا يَكُونُ لَنَا أَنْ نَتَكَلَّمَ بِهَٰذَا سُبْحَانَكَ هَٰذَا بُهْتَانٌ عَظِيمٌ ﴿١٧﴾

乗り込んでいるものと思っていた。彼女はなす術も無く座り込み泣き、やがて眠りに落ちた。後から来た難民のサフワーンが彼女を見つけた。まだベールをつけることが規定される以前にサフワーンは彼女を目にした事があったので、一目でアイシャであるとわかり、サフワーンは彼女を自分のラクダに乗せ、自らはラクダの後ろを徒歩でメディナへ行った（ブハリ；ニカー書参照)。アブドゥラ・ビン・オバイ・ビン・サルールを首領とするメディナの偽善者達はこの出来事を利用しようと企み、アイシャに対しての悪意ある醜聞を触れ回った。残念ながら、イスラム教徒の中にこの企みに加わる者もあった。しかしアイシャの無実は神の啓示により証明された。流言を広めた者達は罰せられ、以後この様な醜聞を禁じる啓示が与えられた。

注9　「張本人」とはメディナの偽善者達の首謀者であるアブドゥラ・ビン・オバイを指してしる。彼こそが例の虚言を思い付き、人々に触れ回った張本人である。彼はイスラム教に刃向かい、メディナの王になる野望を抱いていたが、志を遂げずして不名誉な死を迎えた。

注10　イスラム教徒の男女を姦通罪で告訴する者は、四人の証人の裏付けを必要とする。姦通の目撃者を3人までしか集められなければ、告発者はイスラム法に基づき偽証者として扱われる。他人の姦通現場を目撃したからといって、その醜聞を触れ回る事は許されない。

18．アッラーはお前たちに、信者ならば、決して再びこのようなことを繰り返すべからず、と戒め給う。

يَعِظُكُمُ اللَّهُ أَنْ تَعُودُوا لِمِثْلِهِ أَبَدًا إِنْ كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿١٨﴾

19．アッラーは、お前たちに戒律を解きあかし給う。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَيُبَيِّنُ اللَّهُ لَكُمُ الْآيَاتِ ۚ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿١٩﴾

20．醜聞が信徒の間に広まることを喜ぶ者は、現世に於ても来世に於ても痛刑を受けん。(注 11) お前たちは知らざるも、アッラーは知り給う。

إِنَّ الَّذِينَ يُحِبُّونَ أَنْ تَشِيعَ الْفَاحِشَةُ فِي الَّذِينَ آمَنُوا لَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ ۚ وَاللَّهُ يَعْلَمُ وَأَنْتُمْ لَا تَعْلَمُونَ ﴿٢٠﴾

21．もしお前たちの上にアッラーの恩恵と慈悲なかりせば、しかし事実はあわれみ深く慈悲深くましします、お前たちは滅亡させられたり。

وَلَوْلَا فَضْلُ اللَّهِ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتُهُ وَأَنَّ اللَّهَ رَءُوفٌ رَحِيمٌ ﴿٢١﴾ ع النصف

第三項

22．汝等信仰する者よ、悪魔（サタン）の足跡に従うなかれ。悪魔（サタン）の足跡に従う者は、悪魔（サタン）が必ず醜行と悪事を強いることを知るべし。(注 12) もしお前たちの上にアッラーの恩恵と慈悲なかりせば、お前たちの一人として清浄なるはなかりしなり。されど、アッラーは、その嘉（よみ）する者を清め給う。アッラーはすべてを聴き、知悉（ちしつ）し給う。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَتَّبِعُوا خُطُوَاتِ الشَّيْطَانِ ۚ وَمَنْ يَتَّبِعْ خُطُوَاتِ الشَّيْطَانِ فَإِنَّهُ يَأْمُرُ بِالْفَحْشَاءِ وَالْمُنْكَرِ ۚ وَلَوْلَا فَضْلُ اللَّهِ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتُهُ مَا زَكَىٰ مِنْكُمْ مِنْ أَحَدٍ أَبَدًا وَلَٰكِنَّ اللَّهَ يُزَكِّي مَنْ يَشَاءُ ۗ وَاللَّهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٢٢﴾

23．お前たちの中の裕福な資産家に、親類縁者、貧者並びにアッラーの道のために家郷を捨てた人々のために、今後一切なにもやらぬと誓わしむるなかれ。(注 13) 彼等を赦し

وَلَا يَأْتَلِ أُولُو الْفَضْلِ مِنْكُمْ وَالسَّعَةِ أَنْ يُؤْتُوا أُولِي الْقُرْبَىٰ وَالْمَسَاكِينَ وَالْمُهَاجِرِينَ فِي سَبِيلِ اللَّهِ

注 11　イスラム教は、姦通罪に関する偽証の流布を厳しく戒めて来た。姦通を犯した者だけでなく、その醜聞を広めた者も罰せられたが、むしろ後者の方がより重い刑を科せられた。散発的に起こる姦通よりも、世の中に性的不道徳の蔓延する方が遥かに深刻な問題を引き起こすからである。もし真偽の定かでない醜聞の流布を見過ごせば、地域社会の不徳行為に対する嫌悪感も薄れ、やがては不徳行為がはびこる様になるであろう。未来に対する悲観論が世に広まり、道徳基盤は根底から覆されるであろう。

注 12　人間は、明らかに悪いと分かる事には手を出さないし、又それを嫌らう。そこで悪魔はいきなり不徳な行いをする様に人間をそそのかすのではなく、たわい無い事から始めて徐々に人間の道徳観を麻痺させて行く。初め悪口を言いふらす程度だった者が次第にそれを他人に押し付ける様になり、結局は大罪を犯す事となる。

注 13　これはアブー・バクルの事を指す。彼は貧しい親族のミスターに小遣いを与えていたが、ミスターが不運にもアイシャ誹謗の件に巻き込まれてしまった為、それを打ち切ってしまった。

て、その違犯を見のがしてやれ。お前たちは、アッラーがお前たちを赦すことを望まざるか？アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

وَلْيَعْفُوا وَلْيَصْفَحُوا ۗ أَلَا تُحِبُّونَ أَنْ يَغْفِرَ اللَّهُ لَكُمْ ۗ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٢٢﴾

24. 軽率なれど、貞節なる純真な信者の女を(注14)中傷する者は、現世に於ても来世に於ても呪詛せらる。彼等には厳罰あり。

إِنَّ الَّذِينَ يَرْمُونَ الْمُحْصَنَاتِ الْغَافِلَاتِ الْمُؤْمِنَاتِ لُعِنُوا فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ وَلَهُمْ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿٢٣﴾

25. 自分が為したる所業に対して、己が舌や手や足が不利なる証言をする日、（注15）

يَوْمَ تَشْهَدُ عَلَيْهِمْ أَلْسِنَتُهُمْ وَأَيْدِيهِمْ وَأَرْجُلُهُمْ بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٢٤﴾

26. その日アッラーは、彼等が受くべき応報を存分に支払わん。されば、彼等は、アッラーこそが明白なる真理なることを悟らん。(注16)

يَوْمَئِذٍ يُوَفِّيهِمُ اللَّهُ دِينَهُمُ الْحَقَّ وَيَعْلَمُونَ أَنَّ اللَّهَ هُوَ الْحَقُّ الْمُبِينُ ﴿٢٥﴾

27. 悪いことは悪い性格の人のためにありて、悪人の心は悪事に傾く。また、善いことは善い性格の人のためにありて、善人の心は善事に傾き、彼等は人々の申し立てるすべての中傷から無垢なる者なり。容赦と栄誉ある給養は、彼等のためにあり。（注17）

الْخَبِيثَاتُ لِلْخَبِيثِينَ وَالْخَبِيثُونَ لِلْخَبِيثَاتِ ۖ وَالطَّيِّبَاتُ لِلطَّيِّبِينَ وَالطَّيِّبُونَ لِلطَّيِّبَاتِ ۚ أُولَٰئِكَ مُبَرَّءُونَ مِمَّا يَقُولُونَ ۖ لَهُمْ مَغْفِرَةٌ وَرِزْقٌ كَرِيمٌ ﴿٢٦﴾

第四項

28. 汝等信徒たちよ、許可を求めず、家人に挨拶もせずして、己れの家以外に入ることな

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَدْخُلُوا بُيُوتًا غَيْرَ بُيُوتِكُمْ حَتَّىٰ تَسْتَأْنِسُوا وَتُسَلِّمُوا عَلَىٰ أَهْلِهَا ۚ ذَٰلِكُمْ خَيْرٌ لَكُمْ

注14　アイシャ誹謗の件で「純真」という語が使われているのはこれは彼女の潔白を示すものである。徳を備えた人は、誤ちを犯す等、考えもしないものである。

注15　近年の科学的研究によりこの節が真実であると証明された。様々な機械が開発され、それを設置すれば、話声はもちろんの事、人の手・足や内臓の動く音まで保存できる。この機械は、警察が犯人を逮捕し取り調べる上で非常に役立っている。機械を通じて捕えられた犯人の舌・手・足の動きは、有罪の証拠となる。言葉や行動は現場に痕跡を残すことが科学の力で立証されている。クルアーンによれば、これ等の痕跡は必ず具体化するものであり、良しにつけ悪しきにつけ人の為した行いは後に手足の動きとなって現れ、その人の過去の動かぬ証拠となる。

注16　真実は全て相対的なものである。ある観点からすれば真実である事柄も見方を変えれば偽りとなる。絶対の真実は神のみである。

注17　「悪事」という語は不徳な行為・不快な発言を意味しており、この節では、悪人は悪事を行い不快な言葉を発し、悪口を言い触らすと主張している。一方、善人は行い発言共に正しいとも述べている。

لَعَلَّكُمْ تَذَكَّرُونَ ﴿٢٨﴾

かれ。（注 18）その方がお前たちのためには良く、その中おそらくそれを悟らん。

فَإِن لَّمْ تَجِدُوا فِيهَا أَحَدًا فَلَا تَدْخُلُوهَا حَتَّىٰ يُؤْذَنَ لَكُمْ ۖ وَإِن قِيلَ لَكُمُ ارْجِعُوا فَارْجِعُوا ۖ هُوَ أَزْكَىٰ لَكُمْ ۚ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ عَلِيمٌ ﴿٢٩﴾

29. 家に人なき時は、許しがあるまでは中に入ることなかれ。またもし、「帰ってくれ」と云われたる時は、帰るように。その方がお前たちのためにはより潔し。げにアッラーはお前たちの行為を熟知し給う。

لَّيْسَ عَلَيْكُمْ جُنَاحٌ أَن تَدْخُلُوا بُيُوتًا غَيْرَ مَسْكُونَةٍ فِيهَا مَتَاعٌ لَّكُمْ ۚ وَاللَّهُ يَعْلَمُ مَا تُبْدُونَ وَمَا تَكْتُمُونَ ﴿٣٠﴾

30. お前たちの品物がある無人の家に入ることは、罪なし。アッラーは、お前たちが表わすことも隠すことも知り給う。

قُل لِّلْمُؤْمِنِينَ يَغُضُّوا مِنْ أَبْصَارِهِمْ وَيَحْفَظُوا فُرُوجَهُمْ ۚ ذَٰلِكَ أَزْكَىٰ لَهُمْ ۗ إِنَّ اللَّهَ خَبِيرٌ بِمَا يَصْنَعُونَ ﴿٣١﴾

31. 男の信者たちに、その眼を抑え、（注 19）陰部を護れと云え。その方が彼等のためにより潔し。げにアッラーは彼等の行為を熟知し給う。

وَقُل لِّلْمُؤْمِنَاتِ يَغْضُضْنَ مِنْ أَبْصَارِهِنَّ وَيَحْفَظْنَ فُرُوجَهُنَّ وَلَا يُبْدِينَ زِينَتَهُنَّ إِلَّا مَا ظَهَرَ مِنْهَا ۖ وَلْيَضْرِبْنَ بِخُمُرِهِنَّ عَلَىٰ جُيُوبِهِنَّ ۖ وَلَا يُبْدِينَ زِينَتَهُنَّ إِلَّا لِبُعُولَتِهِنَّ أَوْ آبَائِهِنَّ أَوْ آبَاءِ بُعُولَتِهِنَّ أَوْ أَبْنَائِهِنَّ أَوْ أَبْنَاءِ بُعُولَتِهِنَّ أَوْ إِخْوَانِهِنَّ أَوْ بَنِي إِخْوَانِهِنَّ أَوْ بَنِي أَخَوَاتِهِنَّ أَوْ نِسَائِهِنَّ أَوْ مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُهُنَّ أَوِ التَّابِعِينَ غَيْرِ أُولِي الْإِرْبَةِ مِنَ الرِّجَالِ أَوِ الطِّفْلِ الَّذِينَ لَمْ يَظْهَرُوا عَلَىٰ عَوْرَاتِ النِّسَاءِ ۖ وَلَا يَضْرِبْنَ بِأَرْجُلِهِنَّ لِيُعْلَمَ مَا يُخْفِينَ مِن زِينَتِهِنَّ ۚ وَتُوبُوا إِلَى اللَّهِ جَمِيعًا أَيُّهَ الْمُؤْمِنُونَ

32. 女の信者たちに、その眼を抑え、陰部を護り、やむを得ず外に露（あら）われたるところ以外はその美しさや飾り物を人目に触れさせてはならぬと云え。而（しか）して、そのヴェールを胸まで垂れ、己れの夫、又は父、又は夫の父、又は己れの子供たち、又は夫の子供たち、又は兄弟、又は兄弟姉妹の子供たち、又は行儀正しい女たち、又は己れの右手が所有する奴婢（どひ）、又は性欲なき子供の下僕、又は女の恥部に関心を持たぬ幼児を除き、その美しさや飾り物を人目に触れさせることなかれ。また、彼女たちの隠れたる飾り物を人目に触れるほどに、その脚を印象づけるなかれ。汝等信徒たちよ、相い集いてアッラーにお縋り申せ、栄えんがために。（注 20）

注 18　職場や家庭での会見を申し込む際、相手が受け入れてくれるかどうかを知るには、名刺や紹介状を取り次ぎに出すのが良いし、これは先に述べたクルアーンの教えにも添ったやり方である。

注 19　先に示された通り、クルアーンは物事を外見で判断するのではなく、本質に迫るべきだと説いている。人物の評価はその本質によって決まる。良い性質は育てて行くべきであり、悪い性質は根絶しなければならない。邪まな考えは目を通して心に入り込む。それ故、この節ではイスラム信者の男女が出会う際視線を交える事を禁じて来た。

لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ۝٣٢

33. お前たちの中で、独り身の女、及び男の奴隷並びに女の奴隷で結婚に適する者は、結婚させよ。（注21）彼等もし貧しくあらば、アッラーはそのお恵みを以て彼等を富まさん。アッラーは慈悲深く、すべてを知悉し給う。

وَأَنكِحُوا الْأَيَامَىٰ مِنكُمْ وَالصَّالِحِينَ مِنْ عِبَادِكُمْ وَإِمَائِكُمْ ۚ إِن يَكُونُوا فُقَرَاءَ يُغْنِهِمُ اللَّهُ مِن فَضْلِهِ ۗ وَاللَّهُ وَاسِعٌ عَلِيمٌ ۝٣٣

注20　イスラム教におけるヴェールの持つ意味に関しては、イスラム信者の間にも甚だしい誤解があり、詳しい説明が必要である。此処にヴェールに関する節を全て記す。（1）イスラム教の女性信者は顔や膚を露わにせず、装飾品を除き自らの美しさを表に出さず、胸まで覆うヴェールをまとう。（当章24、32節参照）（2）預言者よ、貴人方の妻、娘、女性の信徒に告げよ。「ゆったりした長衣を身に付けなさい。そうすれば見分けが付き、不快な言葉をかけられる事もない。」(33：60)　この節(33：60)で使われているアラビア語はジャラビーブ、単数形がジルバーブで長くゆるやかな外衣という意味を持つ。（3）預言者の妻達よ、貴女方が高潔であれば並の女達と同じではない。「甘い言葉でささやいてはいけない……。」(33章33－34節参照)（4）信者達よ、既婚者も未成年者も、日に三度許しを請いなさい。朝の祈りの前、夏の正午に衣を脱ぐ時、そして夜の祈りの後に(24：59)。

上記の四つの節から以下の推論がなされる。(a)イスラム教の女性は外出時にジルバーブという長衣をまとい、それは頭から胸まで覆うものでなければならない。これは重要な事でクルアーン33章60節に記されている。長衣をまとうのは、イスラムの女性が所用で外出する際、いかがわしい人々による擬視やみだらな言葉に苦しめられない為である。(b)イスラムの男女は出会った際互いに顔を見つめるのを避ける。(c)第三の戒律は明らかにモハッマド預言者の妻達に科せられたものであるが、クルアーンの教えとして、他のイスラム女性にも適用される。「家に留まれ」(33：34)という語は所用で外出する場合も含んでおり、イスラム女性の主な行動範囲は家庭内である。(d)三つの時間帯には、子供達すら両親の部屋へ入る事は許されないし、召使いや女奴隷は主人の寝室に入ってはならない。第一の戒律は女性が外出する際守らなければならないものである。彼女等は全身を覆う長衣を身に付けねばならない。第二の戒律はヴェールに関するもので、主に家庭内で、頻繁に訪れる男性の近親者と同席する際着用する。この時、男女互いに顔を合わす事を禁じているが、女性は更に、自らのそして衣服や装飾品の美しさを表に出さない様気遣わなければならない。近親者が時構わず頻繁に訪ねて来る度に長衣を着用するのは大変で実行し難いのでこれは不要である。家庭内でヴェールを着用するのは同席者が近親者だけの場合であるが、それ以外に、行儀正しい女たち、年老いた召使い、女奴隷、未成年の男子（思春期を迎えていない男の子）もその範ちゅうに入いると推論される。第一の戒律は屋外でヴェールを着用する場合、第二の戒律は屋内でヴェールを着用する場合であるが、関連する節33章60節およびこの節には2種類のベールの表現がある。33章60節には、女性は外出時長衣を家庭内で親族と同席する際は頭部を覆うヴェールを着用すべしとある。更に30章60節に外出時の長衣着用を定めている（これらの衣服についての詳細は33：60参照）。この節では頭部を覆うヴェールを胸まで着用する様定めてある。前者の場合、長衣は頭・顔・胸全てを覆っているが、後者の場合は頭と胸のみで顔は出しても良い。女性が外出時に着用する長衣の形は、慣習・社会的地位・家庭の伝統・イスラム社会の階級等により様々である。家庭内で着用するヴェールも又、女性がイスラム社会のどの階級に属し、どの様な仕事を持つかにより形が変わる。家庭内では顔を覆う必要はない。唯、男性の近親者が訪ねて来る時だけ、顔や装飾品を覆えば良いのである。第三の戒律は見知らぬ男性に話しかける時、威厳ある態度で臨む様女性に求めている。又家事・育児・一族の問題等女性としての役目を十分に果たす様求めている。第四の戒律は、夫婦に出来る限り家族の他の者達と離れて寝室を持つ様に、又幼児ですら脚注にて先に述べた（当章59節）時間帯には寝室に入れてはならないと命じている。

注21　寡婦や未婚者にも、イスラム教では結婚を強く勧めている。イスラム教は未婚を良しとせず、結婚こそ正常で自然な状態とみなす。モハッマド預言者は、次の様に語ったと伝えられている。「結婚は私のスンナ（慣習）であり、私のスンナを非難し捨てる者は私に属さない。」（ムスリム；ニカー書）

34．結婚の手だてが見つからぬ者は、アッラーがその恵みを以て富ませるまで、純潔を保つべきなり。また、お前たちの右手の所有にかかる者で、解放証明書を欲しがる者あらば、（注 22）彼等に何か美点を認めたならば、之(これ)を書いて彼等に与え、更にアッラーがお前たちに賜える富の一部を与えよ。また、お前たちの奴婢(どひ)が操正しく生きようと望むなら、現世の利得を求めて淫行を彼女たちに強いるなかれ。然(しか)しながら、誰かが無理強いした場合は、アッラーは彼女たちを赦し、慈悲を垂れ給わん。

وَلْيَسْتَعْفِفِ الَّذِينَ لَا يَجِدُونَ نِكَاحًا حَتَّىٰ يُغْنِيَهُمُ
اللَّهُ مِن فَضْلِهِ ۗ وَالَّذِينَ يَبْتَغُونَ الْكِتَابَ مِمَّا مَلَكَتْ
أَيْمَانُكُمْ فَكَاتِبُوهُمْ إِنْ عَلِمْتُمْ فِيهِمْ خَيْرًا ۖ وَآتُوهُم
مِّن مَّالِ اللَّهِ الَّذِي آتَاكُمْ ۚ وَلَا تُكْرِهُوا فَتَيَاتِكُمْ
عَلَى الْبِغَاءِ إِنْ أَرَدْنَ تَحَصُّنًا لِّتَبْتَغُوا عَرَضَ الْحَيَاةِ
الدُّنْيَا ۚ وَمَن يُكْرِههُّنَّ فَإِنَّ اللَّهَ مِن بَعْدِ إِكْرَاهِهِنَّ
غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿٣٣﴾

35．われらはすでに数々の明白なる神兆(しるし)をお前たちに降(くだ)し、お前たち以前に逝ける人々の例と、神を畏れる者への訓戒を物語りたり。

وَلَقَدْ أَنزَلْنَا إِلَيْكُمْ آيَاتٍ مُّبَيِّنَاتٍ وَمَثَلًا مِّنَ الَّذِينَ
خَلَوْا مِن قَبْلِكُمْ وَمَوْعِظَةً لِّلْمُتَّقِينَ ﴿٣٤﴾ ع

第五項

36．アッラーは天地(あめつち)の光明なり。その光りを譬(たと)うれば、灯火(ともしび)おける壁龕(へきがん)の如し。灯火(ともしび)は玻璃の中にあり。玻璃は燦然(さんぜん)たる星の如し。その輝きは聖なる一樹より射(さ)す。すなわち橄欖(かんらん)樹にして、東国の産に非ず、また西国の産に非ず。その油は、火がそれに触れずとも、燃え出さんばかりなり。光の上に光を加うるなり！アッラーは、己れの嘉(よ)みするものをその光明へ導き給う。かくの如く、アッラーは数々の比喩を人々のために明示し給う。（注 23）アッラーは一切を深知し給う。

اللَّهُ نُورُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۚ مَثَلُ نُورِهِ كَمِشْكَاةٍ فِيهَا
مِصْبَاحٌ ۖ الْمِصْبَاحُ فِي زُجَاجَةٍ ۖ الزُّجَاجَةُ كَأَنَّهَا كَوْكَبٌ
دُرِّيٌّ يُوقَدُ مِن شَجَرَةٍ مُّبَارَكَةٍ زَيْتُونَةٍ لَّا شَرْقِيَّةٍ
وَلَا غَرْبِيَّةٍ يَكَادُ زَيْتُهَا يُضِيءُ وَلَوْ لَمْ تَمْسَسْهُ
نَارٌ ۚ نُّورٌ عَلَىٰ نُورٍ ۗ يَهْدِي اللَّهُ لِنُورِهِ مَن يَشَاءُ ۚ
وَيَضْرِبُ اللَّهُ الْأَمْثَالَ لِلنَّاسِ ۗ وَاللَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ
عَلِيمٌ ﴿٣٥﴾

注 22　奴隷の「解放証明書」とは一種の契約書で、これにより、奴隷達は主(あるじ)の意にかかわらず、働いて自由の身になることができる。契約書には奴隷の解放に必要な金額あるいは労働が書かれてある。

注 23　この節は美しい比喩で、明かり・ガラス球・壁含龍の話である。神の光が届くのはこの三品に限り、この三品が結び付く事で明かりは完成する。明かりは光源。ガラス球は風で消えぬ様明かりを覆い、明るさを増す。壁合龍は明かりを守る。直喩法で電気ランプを語れば、電線が光源、電球が光を守り、笠が光を広げ方向付ける。しかし、明かり・ガラス球・壁含龍は、宗教用語としてそれぞれ神の光・神の預言者を指すと言えよう。神の預言者は光が消えぬ様に守り、明るさを増す。東にカリファー（預言者の後継者）は神の光を広げ、方向付け、世の人々の啓蒙に努める。又、この節では、明かりに使う油は純度が高く、火を付けなくとも燃え上がる程、引火性の強いものでなければならないと述べられている。その油は、東の国にも西の国にも属さず、特定の人の有利にも不利にもなる事のない一本の木より抽出されたものである。この節にはもう一つの解釈がある。この節で述べられる光はクルアーンに述べられている様に、モハッマド預言者を指すとも言える。この

37. この灯火は、アッラーの命によって建てられ、その尊名が唱念せらるる御堂の中に灯る。そこに人々は、朝な夕なアッラーを讃美し奉る、（注 24）

فِي بُيُوتٍ أَذِنَ اللَّهُ أَنْ تُرْفَعَ وَيُذْكَرَ فِيهَا اسْمُهُ يُسَبِّحُ لَهُ فِيهَا بِالْغُدُوِّ وَالْآصَالِ ﴿٣٦﴾

38. 商売や交易のためにアッラーを憶うことを怠ったり、礼拝や喜捨をなすことを忘れたりすることなく。彼等は、心も目も苦悶攪拌されるべき日を怖る。（注 25）

رِجَالٌ لَا تُلْهِيهِمْ تِجَارَةٌ وَلَا بَيْعٌ عَنْ ذِكْرِ اللَّهِ وَإِقَامِ الصَّلَاةِ وَإِيتَاءِ الزَّكَاةِ يَخَافُونَ يَوْمًا تَتَقَلَّبُ فِيهِ الْقُلُوبُ وَالْأَبْصَارُ ﴿٣٧﴾

39. アッラーは彼等の行為の中の最善なことに対して報い、且つ恵みにより報奨を加増し給う。アッラーは己れが嘉し給う者には限りなく賜給し給う。

لِيَجْزِيَهُمُ اللَّهُ أَحْسَنَ مَا عَمِلُوا وَيَزِيدَهُمْ مِنْ فَضْلِهِ وَاللَّهُ يَرْزُقُ مَنْ يَشَاءُ بِغَيْرِ حِسَابٍ ﴿٣٨﴾

40. 然れども、無信仰の徒輩に於ては、その行為すべて砂漠の蜃気楼の如し。渇したる者水と思い、行きてそこに到れば何も見いだし得ず。かわりに彼は、アッラーの傍近くにあり、己が勘定をすっかり頂戴させられんことを知る。アッラーは清算の時は速やかなり。

وَالَّذِينَ كَفَرُوا أَعْمَالُهُمْ كَسَرَابٍ بِقِيعَةٍ يَحْسَبُهُ الظَّمْآنُ مَاءً حَتَّىٰ إِذَا جَاءَهُ لَمْ يَجِدْهُ شَيْئًا وَوَجَدَ اللَّهَ عِنْدَهُ فَوَفَّاهُ حِسَابَهُ وَاللَّهُ سَرِيعُ الْحِسَابِ ﴿٣٩﴾

41. 又は、彼等の行為は、大海原の深い水の中の暗闇の如し。浪の上に浪たちさわぎ、暗雲その上を覆い、闇また闇と層をなす。手をさし伸ぶれば、その手も見えぬ程。アッラーが光明を与えざる者には、如何なる光明もなし。

أَوْ كَظُلُمَاتٍ فِي بَحْرٍ لُجِّيٍّ يَغْشَاهُ مَوْجٌ مِنْ فَوْقِهِ مَوْجٌ مِنْ فَوْقِهِ سَحَابٌ ظُلُمَاتٌ بَعْضُهَا فَوْقَ بَعْضٍ إِذَا أَخْرَجَ يَدَهُ لَمْ يَكَدْ يَرَاهَا وَمَنْ لَمْ يَجْعَلِ اللَّهُ لَهُ نُورًا فَمَا لَهُ مِنْ نُورٍ ﴿٤٠﴾

場合壁合龍はモハッマド預言者の心、明かりは最上の特質を備えた彼の潔白な特性、ガラスは彼の特性に備わる神の光の透明感と明るさを表している。天の啓示の光がモハッマド預言者の特性の光の上に降りて来る時、クルアーンに「光の上に光を加うるなり」と記されている様に、輝きは倍加する。モハッマド預言者の光は神木から抽出された油で燈されている為、明るく安定しており、永遠に輝き続ける。(「聖なる一樹」という語がこれを示している) 又、その光は東方・西方共に照らす。モハッマド預言者の心は澄み、彼の特性は素晴らしい特質を備えている為、神の啓示が下される以前から、彼は偉大な使命を与えられる相応しい人物であった。これは次の言葉に示されている。「その油は火がそれに触れずとも、燃え出さんばかりなり。」

注 24　この節には立証と預言が書かれてある。クルアーンに書かれた光に照らされた家々は栄え、そこに住む人々は常に神を賛えるとこの節は預言している。これは彼等が神の光に照らされた事を立証するものである。

注 25　モハッマド預言者の友の正義と彼等の神への愛がこの節で立証されている。彼等は肉と骨から成る人間であり、世俗的な野心を持ち、本業・副業に従事する。僧侶でもなければ、俗世を離れた隠者でもない。しかしながら世俗の雑事の中にあっても彼等は決して神と他人への努めを怠らない。

第六項

42. 汝、天地のすべてのもの（注26）がアッラーを讃美し、鳥たちでさえ（注27）その翼を拡げてまた讃えまつるを見ざるか？皆それぞれに礼拝と讃美のすべを知る。而して、アッラーは彼等の為せることを熟知し給う。

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللّٰهَ يُسَبِّحُ لَهٗ مَنْ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ وَالطَّيْرُ صٰٓفّٰتٍ ۖ كُلٌّ قَدْ عَلِمَ صَلَاتَهٗ وَتَسْبِيحَهٗ ۗ وَاللّٰهُ عَلِيمٌ بِمَا يَفْعَلُونَ ﴿٤٢﴾

43. 天地の経倫はアッラーの掌中にありて、萬物はアッラーに帰り行かん。

وَلِلّٰهِ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ ۖ وَإِلَى اللّٰهِ الْمَصِيرُ ﴿٤٣﴾

44. 汝、アッラーが雲を駆り、次いて之を集め、その中から雨が降り出すように更に雲を積み重ねるを見ざるか？而して、彼は、雹まじりの山なす雲を天より降し、之を以て己れの欲する者を強打し、或いは追い払う。その稲妻のきらめきは目もくらむばかりなり。（注28）

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللّٰهَ يُزْجِي سَحَابًا ثُمَّ يُؤَلِّفُ بَيْنَهٗ ثُمَّ يَجْعَلُهٗ رُكَامًا فَتَرَى الْوَدْقَ يَخْرُجُ مِنْ خِلٰلِهٖ ۚ وَيُنَزِّلُ مِنَ السَّمَآءِ مِنْ جِبَالٍ فِيهَا مِنْ بَرَدٍ فَيُصِيبُ بِهٖ مَنْ يَّشَآءُ وَيَصْرِفُهٗ عَنْ مَّنْ يَّشَآءُ ۖ يَكَادُ سَنَا بَرْقِهٖ يَذْهَبُ بِالْأَبْصَارِ ﴿٤٤﴾

45. アッラーは夜と晝を交替し給う。げにその中には､見る目持つ者への教訓あり。（注29）

يُقَلِّبُ اللّٰهُ الَّيْلَ وَالنَّهَارَ ۚ إِنَّ فِي ذٰلِكَ لَعِبْرَةً لِّأُولِي الْأَبْصَارِ ﴿٤٥﴾

46. また、アッラーは水よりあらゆる動物を創り給えり。その或るものは腹にて歩み、その或るものは二脚で立ち、その或るものは四つ足で歩む。アッラーは望みのものを創り給う。（注30）げにアッラーは全能なり。

وَاللّٰهُ خَلَقَ كُلَّ دَآبَّةٍ مِّنْ مَّآءٍ ۚ فَمِنْهُمْ مَّنْ يَّمْشِي عَلٰى بَطْنِهٖ ۚ وَمِنْهُمْ مَّنْ يَّمْشِي عَلٰى رِجْلَيْنِ ۚ وَمِنْهُمْ مَّنْ يَّمْشِي عَلٰٓى أَرْبَعٍ ۚ يَخْلُقُ اللّٰهُ مَا يَشَآءُ ۚ إِنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٤٦﴾

注26　天使（天にあるもの）、人間・動物・植物・鉱物等、地上の生物・無生物（地にあるもの）

注27　空飛ぶ鳥。精神世界において三つの意味を持つ。(a)精神的に高められた地位にある人物。(b)物質獲得に全身全霊をかけ、精神的向上に全く関心を示さない俗人。(c)精神的状況が上記二者の中間に位置する人物。

注28　この節には、律法が、ある者にとっては利益をもたらす恵みの雨であり、又別の者にとり破壊を招く嵐となると書かれてある。

注29　この節には次の事が述べられている。前節で述べられた人間の精神的発達は、必ずしも一様に、しかも継続的に為される訳ではない。時には速く、時には遅く、そして又時には停止する事もある。この人間の精神的発達における後退・進歩は、宗教用語で夜と昼に例えられる。世の全ての物は加速と遅滞の法則に支配されており、人間の精神的発達も例外ではない。

注30　精神的にさすらう者が目標に向いどの様に発達を遂げるかがこの節に記されてある。ある者は非常にゆっくり進歩する。彼等は目標に向かい這って進む。ある者は二足動物の様により速く進む。更にある者は四足動物の様により一層速く進む。此処に暗示されているのは速さであって、進み方ではない。一般に四足動物は、二足動物や爬行動物より速く進む。同じ事は精神的旅人にも当てはまる。

47. 事実、われらは、明白なるさまざまなる神兆を降したり。アッラーは己が嘉する者を正しい道に導き給う。

لَقَدْ أَنْزَلْنَا آيَاتٍ مُبَيِّنَاتٍ ۚ وَاللَّهُ يَهْدِي مَنْ يَشَاءُ إِلَىٰ صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ﴿٤٦﴾

48. 彼等は云う、「我等はアッラーと使徒を信じ、之に服従す」と。然るにその後、彼等の或る者どもは背き去れり。かかる徒輩は信者に非ず。

وَيَقُولُونَ آمَنَّا بِاللَّهِ وَبِالرَّسُولِ وَأَطَعْنَا ثُمَّ يَتَوَلَّىٰ فَرِيقٌ مِنْهُمْ مِنْ بَعْدِ ذَٰلِكَ ۚ وَمَا أُولَٰئِكَ بِالْمُؤْمِنِينَ ﴿٤٧﴾

49. 而して、彼等は、どちらが正しいか裁きを受けるためアッラーと使徒の前に召喚せらるや、見よ、彼等の一部は之を忌避す。

وَإِذَا دُعُوا إِلَى اللَّهِ وَرَسُولِهِ لِيَحْكُمَ بَيْنَهُمْ إِذَا فَرِيقٌ مِنْهُمْ مُعْرِضُونَ ﴿٤٨﴾

50. もし正義自分の側にありと思わば、彼等は喜んで彼の御前に走り来るなり。

وَإِنْ يَكُنْ لَهُمُ الْحَقُّ يَأْتُوا إِلَيْهِ مُذْعِنِينَ ﴿٤٩﴾

51. 彼等の心には病気でもあるのか、それとも疑心を抱くか、或いはアッラーとその使徒が不公平に自分たちを裁かんことを恐るるか？然らず、彼等こそ不義者なり。(注31)

أَفِي قُلُوبِهِمْ مَرَضٌ أَمِ ارْتَابُوا أَمْ يَخَافُونَ أَنْ يَحِيفَ اللَّهُ عَلَيْهِمْ وَرَسُولُهُ ۚ بَلْ أُولَٰئِكَ هُمُ الظَّالِمُونَ ﴿٥٠﴾

第七項

52. どちらが正しいか裁きを受けるためアッラーとその使徒の前に召喚された時、信者の応答はただ「我等は聴き、且つ服従す」と云うのみ。彼等こそ栄える者なり。(注32)

إِنَّمَا كَانَ قَوْلَ الْمُؤْمِنِينَ إِذَا دُعُوا إِلَى اللَّهِ وَرَسُولِهِ لِيَحْكُمَ بَيْنَهُمْ أَنْ يَقُولُوا سَمِعْنَا وَأَطَعْنَا ۚ وَأُولَٰئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُونَ ﴿٥١﴾

53. アッラーとその使徒に服従し、アッラーを畏れ敬い、守護者と崇める者、これ等は必ず好結果を得る者なり。

وَمَنْ يُطِعِ اللَّهَ وَرَسُولَهُ وَيَخْشَ اللَّهَ وَيَتَّقْهِ فَأُولَٰئِكَ هُمُ الْفَائِزُونَ ﴿٥٢﴾

54. 汝もし命を下さば、我等ただちに出で征かんと彼等はアッラーにかけてその強固なる誓いを立てる。云え、「誓うなかれ。必要なのは道理にかなった服従なり。げにアッラーはお前たちの為すことを熟知し給う」と。

وَأَقْسَمُوا بِاللَّهِ جَهْدَ أَيْمَانِهِمْ لَئِنْ أَمَرْتَهُمْ لَيَخْرُجُنَّ ۖ قُلْ لَا تُقْسِمُوا ۖ طَاعَةٌ مَعْرُوفَةٌ ۚ إِنَّ اللَّهَ خَبِيرٌ بِمَا تَعْمَلُونَ ﴿٥٣﴾

注31　この節では以下の事が書かれてある。不信心者は三つの精神的病の一つあるいは全てに苦しむ。ある者はある病に、他の者は他の病に苦しむ。人の精神的発達をはばむ三つの物は、疑い・恐れ・妬みである。

注32　この節及び次の節では、イスラム教の原理が示されている。イスラム法典は完全無欠であり、その教義は人間の生活全てに及ぶ。モハッマド預言者はイスラム教徒の生活に係わる全ての事柄の最高権威である。

55. 云え、「アッラーの命を遵奉(じゅんぽう)し、使徒に従え」と。然(しか)れども、お前たちもし背き去りたる時は、彼は彼の責任を負い、お前たちはお前たちの責任を負う。されど、お前たちもし彼に従わば、お前たちは正しく導かれん。使徒はただ神託を伝達するが務めなり。

قُلْ أَطِيعُوا اللَّهَ وَأَطِيعُوا الرَّسُولَ فَإِنْ تَوَلَّوْا فَإِنَّمَا عَلَيْهِ مَا حُمِّلَ وَعَلَيْكُمْ مَا حُمِّلْتُمْ وَإِنْ تُطِيعُوهُ تَهْتَدُوا وَمَا عَلَى الرَّسُولِ إِلَّا الْبَلَاغُ الْمُبِينُ ﴿٥٥﴾

56. アッラーは、お前たちのうち信仰に入り善事を為す者に、彼等以前の者に継がしめたる如く必ず地を継がし、彼等のために自分が選びたるものを彼等の宗教となし、今までの不安恐怖の代りに平安と無事を与えん、と約束せり。彼等はわれを崇(おが)め、われに何者をも配せざらん。されど、その後、不信心者になる者は、反逆者なり。(注33)

وَعَدَ اللَّهُ الَّذِينَ آمَنُوا مِنْكُمْ وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَيَسْتَخْلِفَنَّهُمْ فِي الْأَرْضِ كَمَا اسْتَخْلَفَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ وَلَيُمَكِّنَنَّ لَهُمْ دِينَهُمُ الَّذِي ارْتَضَى لَهُمْ وَلَيُبَدِّلَنَّهُمْ مِنْ بَعْدِ خَوْفِهِمْ أَمْنًا يَعْبُدُونَنِي لَا يُشْرِكُونَ بِي شَيْئًا وَمَنْ كَفَرَ بَعْدَ ذَلِكَ فَأُولَئِكَ هُمُ الْفَاسِقُونَ ﴿٥٦﴾

57. お前たち慈悲に浴せんがために、礼拝を遵守し、施しをなし、使徒に従え。

وَأَقِيمُوا الصَّلَاةَ وَآتُوا الزَّكَاةَ وَأَطِيعُوا الرَّسُولَ لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ﴿٥٧﴾

58. 汝、不信心者どもが地上でわれらの計画を挫折(ざせつ)し得る、と思うなかれ。彼等の住居は地獄なり。そは実に悪(あ)しき帰り所なり。

لَا تَحْسَبَنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا مُعْجِزِينَ فِي الْأَرْضِ وَمَأْوَاهُمُ النَّارُ وَلَبِئْسَ الْمَصِيرُ ﴿٥٨﴾

第八項

59. 汝等信徒たちよ、お前たちの右手が所有する者、並びに思春期に達せざる者といえども、次の三つの場合は、入室に際し、彼等にお前たちの許可を求めさせよ。すなわち、早朝の礼拝の前、暑さのためにお前たちが

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لِيَسْتَأْذِنْكُمُ الَّذِينَ مَلَكَتْ أَيْمَانُكُمْ وَالَّذِينَ لَمْ يَبْلُغُوا الْحُلُمَ مِنْكُمْ ثَلَاثَ مَرَّاتٍ مِنْ قَبْلِ صَلَاةِ الْفَجْرِ وَحِينَ تَضَعُونَ ثِيَابَكُمْ

注33　この節はカラファト（預言者の後継者の地位）を記す序文として、52節から55節までにアッラーと神の使者に従う様繰り返し強調されている。これはイスラム教におけるカリファー（預言者の後継者）の地位を暗示するものである。イスラム教徒が現世において宗教的指導者の地位を与えられるという約束がこの節に書かれている。この約束は全てのイスラム民族に対し為されたものであるが、彼等の指導者、そしてモハッマド預言者の後継者にとり、カラファトの法は明白な形を取るであろう。カラファト制定の約束は明白である。モハッマド預言者は常に人の精神的指導者であり、彼のカラファトはこの世の終わりまで様々な形を取りつつ存在し続けるであろう。他のカラファトは全て消滅する。これは、モハッマド預言者が、他のいかなる神の預言者・使者より優れている事を示すものである。我々の世代は、アハマディーヤ運動の創始者に最高の宗教的カリファーを見出してきている。

お昼どき着物を脱いでいるとき、及び夜の礼拝以後なり。これ等はお前たちの三度の私事（わたくしごと）なり。それ以外なら、必要に応じて互に自由に往き来しても、お前たちにも彼等にも罪なし。かくの如く、アッラーはお前たちに神兆（しるし）を解明し給う、すべてを知り賢哲にましますが故に。

مِّنَ الظَّهِيْرَةِ وَمِنْۢ بَعْدِ صَلٰوةِ الْعِشَآءِ ثَلٰثُ عَوْرٰتٍ لَّكُمْ ؕ لَيْسَ عَلَيْكُمْ وَلَا عَلَيْهِمْ جُنَاحٌۢ بَعْدَهُنَّ ؕ طَوّٰفُوْنَ عَلَيْكُمْ بَعْضُكُمْ عَلٰى بَعْضٍ ؕ كَذٰلِكَ يُبَيِّنُ اللّٰهُ لَكُمُ الْاٰيٰتِ ؕ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ﴿۵۹﴾

60．而（しか）して、お前たちの子供たちが思春期に達したならば、彼等以前の年上の者が許可を求めた如く、入室に際し許可を求めせしめよ。かくの如く、アッラーはその戒律をお前たちに明瞭に述べ給う。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَاِذَا بَلَغَ الْاَطْفَالُ مِنْكُمُ الْحُلُمَ فَلْيَسْتَاْذِنُوْا كَمَا اسْتَاْذَنَ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ ؕ كَذٰلِكَ يُبَيِّنُ اللّٰهُ لَكُمْ اٰيٰتِهٖ ؕ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ﴿۶۰﴾

61．もはや結婚を願わざる年嵩（としかさ）の女の場合は、その美を見せびらかすのでなければ、外衣を脱ぐことも罪にはならぬ。されど、それさえも慎むことは、彼女等のために更に好し。アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

وَالْقَوَاعِدُ مِنَ النِّسَآءِ الّٰتِيْ لَا يَرْجُوْنَ نِكَاحًا فَلَيْسَ عَلَيْهِنَّ جُنَاحٌ اَنْ يَّضَعْنَ ثِيَابَهُنَّ غَيْرَ مُتَبَرِّجٰتٍۭ بِزِيْنَةٍ ؕ وَاَنْ يَّسْتَعْفِفْنَ خَيْرٌ لَّهُنَّ ؕ وَاللّٰهُ سَمِيْعٌ عَلِيْمٌ ﴿۶۱﴾

62．盲でも、跛（びっこ）でも、病人でも、又お前たち自身でも、自分の家、又は父の家、又は母の家、又は兄弟の家、又は姉妹の家、又は父方の叔父叔母の家、又は母方の叔父叔母の家、又はお前たちがその鍵を持っている家、又はお前たちの友達の家で食事することは差し支えなし。一緒に食べようが、別々に食べようが、差し支えなし。然（しか）れども、家に入るに際しては、主よりの祝福された清浄な挨拶を述べよ。かくの如く、アッラーはその戒律をお前たちに解らせしめんと明瞭に述べ給う。

لَيْسَ عَلَى الْاَعْمٰى حَرَجٌ وَّلَا عَلَى الْاَعْرَجِ حَرَجٌ وَّلَا عَلَى الْمَرِيْضِ حَرَجٌ وَّلَا عَلٰٓى اَنْفُسِكُمْ اَنْ تَاْكُلُوْا مِنْۢ بُيُوْتِكُمْ اَوْ بُيُوْتِ اٰبَآئِكُمْ اَوْ بُيُوْتِ اُمَّهٰتِكُمْ اَوْ بُيُوْتِ اِخْوَانِكُمْ اَوْ بُيُوْتِ اَخَوٰتِكُمْ اَوْ بُيُوْتِ اَعْمَامِكُمْ اَوْ بُيُوْتِ عَمّٰتِكُمْ اَوْ بُيُوْتِ اَخْوَالِكُمْ اَوْ بُيُوْتِ خٰلٰتِكُمْ اَوْ مَا مَلَكْتُمْ مَّفَاتِحَهٗٓ اَوْ صَدِيْقِكُمْ ؕ لَيْسَ عَلَيْكُمْ جُنَاحٌ اَنْ تَاْكُلُوْا جَمِيْعًا اَوْ اَشْتَاتًا ؕ فَاِذَا دَخَلْتُمْ بُيُوْتًا فَسَلِّمُوْا عَلٰٓى اَنْفُسِكُمْ تَحِيَّةً مِّنْ عِنْدِ اللّٰهِ مُبٰرَكَةً طَيِّبَةً ؕ كَذٰلِكَ يُبَيِّنُ اللّٰهُ لَكُمُ الْاٰيٰتِ لَعَلَّكُمْ تَعْقِلُوْنَ ﴿۶۲﴾ ع

第九項

63．真の信者とは、アッラーとその使徒を信じ、公共の用件で人々が集って使徒と共にある時、使徒の許可なしに立ち去らざる者、これ等の者のみなり。げに汝に許可を求むる者こそは、真にアッラーとその使徒を信ずる者なり。されば、彼等が自分の用事で汝に許可を求めた場合は、汝が良いと思った者には許可を与え、更にその者のためにアッラーの寛容を祈れ。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。（注 34）

إِنَّمَا الْمُؤْمِنُونَ الَّذِينَ آمَنُوا بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ وَإِذَا كَانُوا مَعَهُ عَلَىٰ أَمْرٍ جَامِعٍ لَّمْ يَذْهَبُوا حَتَّىٰ يَسْتَأْذِنُوهُ ۚ إِنَّ الَّذِينَ يَسْتَأْذِنُونَكَ أُولَٰئِكَ الَّذِينَ يُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ ۚ فَإِذَا اسْتَأْذَنُوكَ لِبَعْضِ شَأْنِهِمْ فَأْذَن لِّمَن شِئْتَ مِنْهُمْ وَاسْتَغْفِرْ لَهُمُ اللَّهَ ۚ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿٦٣﴾

64．使徒の召喚をお前たち相互の召喚と同一視するなかれ。（注 35）アッラーはお前たちの中で、こっそり抜け出る者を知り給う。されば、命令に従わざる者に、災難が降りかからぬよう、また恐ろしい天罰に遭わぬよう用心させよ。

لَّا تَجْعَلُوا دُعَاءَ الرَّسُولِ بَيْنَكُمْ كَدُعَاءِ بَعْضِكُم بَعْضًا ۚ قَدْ يَعْلَمُ اللَّهُ الَّذِينَ يَتَسَلَّلُونَ مِنكُمْ لِوَاذًا ۚ فَلْيَحْذَرِ الَّذِينَ يُخَالِفُونَ عَنْ أَمْرِهِ أَن تُصِيبَهُمْ فِتْنَةٌ أَوْ يُصِيبَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٦٤﴾

65．汝等耳を傾けよ！天地の一切はアッラーに帰属す。彼は、お前たちが如何なる状態にあるかを知り給う。而して、彼等が彼の許に連れ戻される日、彼は彼等に彼等のしたことを告げ知らさん。アッラーはあらゆることに通暁し給う。

أَلَا إِنَّ لِلَّهِ مَا فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۖ قَدْ يَعْلَمُ مَا أَنتُمْ عَلَيْهِ وَيَوْمَ يُرْجَعُونَ إِلَيْهِ فَيُنَبِّئُهُم بِمَا عَمِلُوا ۗ وَاللَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿٦٥﴾

注 34　前記の数節において、イスラム教徒が社会の重要な問題に対して如何に身を処すべきか、その指針が示されてあった。この節では国家の重要性を論じている。国家の重要な問題に携わるモハッマド預言者と共にある限り、イスラム教徒は彼の許可無くして集団を離れる事は出来ない。又、国家や社会全体に係わる問題において、彼等が別個に行動する事を禁じている。モハッマド預言者、あるいは彼の後継者か彼の推す指導者の指導の下に開かれたイスラムの会合での決定に、イスラム教徒は従わねばならない。

注 35　預言者や指導者の声は、軽んぜられてはならない。常に重要事に関わるので、ふさわしい尊厳を有していなくてはならない。モハッマド預言者やカリファーのプライバシーを侵害してはならない。貴重な時間に不必要な要求をしてはならない。彼らと話すときは、彼らの地位をふまえ、尊敬の念を持って接すること。

سورة الفرقان مكية (٢٥)

アル・フルカン
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ (١)

2．万民への警告者たらしめんとして、その僕に識別を降し給うたお方に祝福あれ。

تَبٰرَكَ الَّذِيْ نَزَّلَ الْفُرْقَانَ عَلٰى عَبْدِهٖ لِيَكُوْنَ لِلْعٰلَمِيْنَ نَذِيْرًا (٢)

3．天地の主権は彼に属す。彼は御子を設け給わず、主権を分担する者とてなく、一切を創造し、且つ規則正しく定め給う。

الَّذِيْ لَهٗ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَلَمْ يَتَّخِذْ وَلَدًا وَّلَمْ يَكُنْ لَّهٗ شَرِيْكٌ فِي الْمُلْكِ وَخَلَقَ كُلَّ شَيْءٍ فَقَدَّرَهٗ تَقْدِيْرًا (٣)

4．それにもかかわらず、彼等は彼以外に神々を崇拝す、己れ自身が創られた者にして、自らはなにも創造せず、己れの利害を左右する力を有せず、生も死も審判の日の復活をも左右する力を持たぬ者を。（注１）

وَاتَّخَذُوْا مِنْ دُوْنِهٖٓ اٰلِهَةً لَّا يَخْلُقُوْنَ شَيْـًٔا وَّهُمْ يُخْلَقُوْنَ وَلَا يَمْلِكُوْنَ لِاَنْفُسِهِمْ ضَرًّا وَّلَا نَفْعًا وَّلَا يَمْلِكُوْنَ مَوْتًا وَّلَا حَيٰوةً وَّلَا نُشُوْرًا (٤)

5．信ぜざる徒輩は云う、「こは彼が捏造せる偽りに過ぎず。他の人々が彼を助けたり」と。だがしかし、彼等こそが不正と虚偽を犯したり。

وَقَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْٓا اِنْ هٰذَآ اِلَّآ اِفْكُ ۨافْتَرٰىهُ وَاَعَانَهٗ عَلَيْهِ قَوْمٌ اٰخَرُوْنَ فَقَدْ جَاۗءُوْ ظُلْمًا وَّزُوْرًا (٥)

6．また彼等は云う、「往古の伝説なり。朝な夕な口授せられたるを、彼が書き取りたるなり」と。

وَقَالُوْٓا اَسَاطِيْرُ الْاَوَّلِيْنَ اكْتَتَبَهَا فَهِيَ تُمْلٰى عَلَيْهِ بُكْرَةً وَّاَصِيْلًا (٦)

7．云え、「之れを降し給えたるは、天地の秘密に通暁せるお方なり。げに彼は寛大にして、慈悲深くまします」と。

قُلْ اَنْزَلَهُ الَّذِيْ يَعْلَمُ السِّرَّ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ اِنَّهٗ كَانَ غَفُوْرًا رَّحِيْمًا (٧)

注１　全ての物は三段階の発達を遂げねばならない。(1) 不存（無）(2) 成長の特性・力を授けられた可能性ある生　(3) 現実の生　全ての生の創造主・神はこの全段階を完全に支配される。

8．また、彼等は云う、「何たることぞ、(注2) 使徒たる者が食物を摂り、且つ往来を散策するとは？何故に天使が彼に降されて、彼と共に警告者にならざるか？

وَقَالُوا مَالِ هٰذَا الرَّسُولِ يَأْكُلُ الطَّعَامَ وَيَمْشِي فِي الْأَسْوَاقِ لَوْلَا أُنْزِلَ إِلَيْهِ مَلَكٌ فَيَكُونَ مَعَهُ نَذِيرًا ﴿٨﴾

9．また財宝が彼に投げ与えられたり、食うべき果樹園を持たざりしか」と。更に、不義なす徒後は云う、「お前たちはただ幻術師に従っているに過ぎず」と。

أَوْ يُلْقَىٰ إِلَيْهِ كَنْزٌ أَوْ تَكُونُ لَهُ جَنَّةٌ يَأْكُلُ مِنْهَا وَقَالَ الظّٰلِمُونَ إِنْ تَتَّبِعُونَ إِلَّا رَجُلًا مَسْحُورًا ﴿٩﴾

10．見よ、彼等は如何に多くの譬えを造りだすことか！故に迷誤し、道を見出すこと能わず。(注3)

اُنْظُرْ كَيْفَ ضَرَبُوا لَكَ الْأَمْثَالَ فَضَلُّوا فَلَا يَسْتَطِيعُونَ سَبِيلًا ﴿١٠﴾

第二項

11．彼もし欲しなば、それよりもはるかに佳きものを汝に賜う彼を祝福せよ。すなわちそは河川流るる楽園なり、また宮殿なり。

تَبٰرَكَ الَّذِي إِنْ شَاءَ جَعَلَ لَكَ خَيْرًا مِنْ ذٰلِكَ جَنّٰتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهٰرُ وَيَجْعَلْ لَكَ قُصُورًا ﴿١١﴾

12．それどころか、彼等は審判の時を否定す。われらは、審判の時を否定する徒輩のために、燃えさかる火炎を用意せり。(注4)

بَلْ كَذَّبُوا بِالسَّاعَةِ وَأَعْتَدْنَا لِمَنْ كَذَّبَ بِالسَّاعَةِ سَعِيرًا ﴿١٢﴾

13．火は遙か遠くから彼等を見とめるや、荒れ狂い、咆哮せん。(注5)

إِذَا رَأَتْهُمْ مِنْ مَكَانٍ بَعِيدٍ سَمِعُوا لَهَا تَغَيُّظًا وَزَفِيرًا ﴿١٣﴾

14．而して、彼等ひとまとめに縛られ、狭いところに投げこまれると、彼等はそこでひと思いに滅せんことを懇願せん。

وَإِذَا أُلْقُوا مِنْهَا مَكَانًا ضَيِّقًا مُقَرَّنِينَ دَعَوْا هُنَالِكَ ثُبُورًا ﴿١٤﴾

注2　この使者に何が起こったのか。

注3　不信心者は生命の真価に対する認識が浅い。彼等は独自の方法で神の真理を試そうとする為、真理に近付けず、いつまでも、疑惑と不信心の暗闇を彷徨う。

注4　信者には高位と名誉が授けられる一方、不信心者には恐ろしい罰が用意されてある。裁きは差し迫り、門口まで近付いている。しかし彼等はそれに気付かず、信じようとはしない。

注5　当節及び次節では裁きが真に下されようとしていると述べられている。不信心者の苦しみと屈辱感を増し、それを徹底する為、彼等の日・耳はそれを知覚させせられるであろう。彼等は苦しみに耐え兼ねて、逃れようと死を望むであろう。

15. 「今になってひと思いに死なんとするなかれ、宜敷く万死を請え」

لَا تَدْعُوا الْيَوْمَ ثُبُورًا وَّاحِدًا وَّادْعُوا ثُبُورًا كَثِيرًا ﴿١٥﴾

16. 云え、「この火獄がいいか、それとも義しい人に約束された永遠の楽園がいいか？そは彼等の報奨にして、行き着くところとならん」と。

قُلْ أَذٰلِكَ خَيْرٌ أَمْ جَنَّةُ الْخُلْدِ الَّتِي وُعِدَ الْمُتَّقُونَ ۚ كَانَتْ لَهُمْ جَزَاءً وَّمَصِيرًا ﴿١٦﴾

17. 彼等は永遠にそこに住み、望むものは何なんりと得べし。そは、常に請わるる汝の主の約束なり。(注６)

لَهُمْ فِيهَا مَا يَشَاءُونَ خٰلِدِينَ ۚ كَانَ عَلٰى رَبِّكَ وَعْدًا مَّسْئُولًا ﴿١٧﴾

18. 最後の審判の日、彼は彼等並びに彼等がアッラー以外に崇めし神々を召し寄せ、かく問わん、「わが僕らを迷わしめたるは、お前たちか？それとも、彼等自ら道を踏み外したるか？」と。

وَيَوْمَ يَحْشُرُهُمْ وَمَا يَعْبُدُونَ مِنْ دُونِ اللّٰهِ فَيَقُولُ ءَأَنْتُمْ أَضْلَلْتُمْ عِبَادِي هٰؤُلَاءِ أَمْ هُمْ ضَلُّوا السَّبِيلَ ﴿١٨﴾

19. 彼等は云わん、「汝に讃えあれ！我等は汝以外に守護者を求むる者に非ず。然れども、汝は、彼等並びに彼等の父祖に汝の訓戒を忘れるほどに現世の快楽を授けたれば、彼等は淪落の民となりぬ」と。

قَالُوا سُبْحٰنَكَ مَا كَانَ يَنْبَغِي لَنَا أَنْ نَّتَّخِذَ مِنْ دُونِكَ مِنْ أَوْلِيَاءَ وَلٰكِنْ مَّتَّعْتَهُمْ وَاٰبَاءَهُمْ حَتّٰى نَسُوا الذِّكْرَ ۚ وَكَانُوا قَوْمًا بُورًا ﴿١٩﴾

20. そこで、われらは偶像崇拝者どもに向って云わん、「今、彼等は、お前たちの言葉を虚偽なりと立証せり。されば、お前たちは懲罰を免れ、助けを得る能わず」と。われらは、お前たちのうち誰であれ罪を犯す者には、恐ろしい罰を味わしめん。

فَقَدْ كَذَّبُوكُمْ بِمَا تَقُولُونَ فَمَا تَسْتَطِيعُونَ صَرْفًا وَّلَا نَصْرًا ۚ وَمَنْ يَّظْلِمْ مِّنْكُمْ نُذِقْهُ عَذَابًا كَبِيرًا ﴿٢٠﴾

21. われらが汝以前に遣わしたる使徒たちは、一人として食物を摂らざるはなく、また街路を往き来せざるはなかりき。われらはお前たちの或る者をして、他のものへの試練たらしめたり。されば、お前たち耐え忍べるか？汝の主は一切を照覧し給う。

وَمَا أَرْسَلْنَا قَبْلَكَ مِنَ الْمُرْسَلِينَ إِلَّا إِنَّهُمْ لَيَأْكُلُونَ الطَّعَامَ وَيَمْشُونَ فِي الْأَسْوَاقِ ۗ وَجَعَلْنَا بَعْضَكُمْ لِبَعْضٍ فِتْنَةً ۗ أَتَصْبِرُونَ ۚ وَكَانَ رَبُّكَ بَصِيرًا ﴿٢١﴾

第三項

22. われらとの会見を期待せぬ徒輩は云う、「何故に天使が我等に降されざるか？又は何故

وَقَالَ الَّذِينَ لَا يَرْجُونَ لِقَاءَنَا لَوْلَا أُنْزِلَ

注６　信者が来世に望むものは、神の意志と一体化する事である。それ由この望みは適えられるであろう。

に我等の主はその姿を見せざるのか？」と。げに彼等は驕(おご)り昂(たかぶ)り、甚だしくその則(のり)を越えたり。（注７）

عَلَيْنَا الْمَلٰٓئِكَةُ اَوْ نَرٰى رَبَّنَا ؕ لَقَدِ اسْتَكْبَرُوْا فِيْٓ اَنْفُسِهِمْ وَعَتَوْ عُتُوًّا كَبِيْرًا ﴿٢٢﴾

23．彼等は、天使らと会見する審判の日には、その犯せし罪故に、如何なる朗報もなき日とならん。彼等は嘆いて、叫ばん、「頑丈な障壁あれ！」と。

يَوْمَ يَرَوْنَ الْمَلٰٓئِكَةَ لَا بُشْرٰى يَوْمَئِذٍ لِّلْمُجْرِمِيْنَ وَيَقُوْلُوْنَ حِجْرًا مَّحْجُوْرًا ﴿٢٣﴾

24．われらは彼等の所業を調べ、塵芥(ちりあくた)の如く四散せしめん。（注８）

وَقَدِمْنَآ اِلٰى مَا عَمِلُوْا مِنْ عَمَلٍ فَجَعَلْنٰهُ هَبَآءً مَّنْثُوْرًا ﴿٢٤﴾

25．天国の住み人たちは、その日、その住居と休息の場所ゆえに、一層安楽とならん。

اَصْحٰبُ الْجَنَّةِ يَوْمَئِذٍ خَيْرٌ مُّسْتَقَرًّا وَّاَحْسَنُ مَقِيْلًا ﴿٢٥﴾

26．その日、天は雲と共にちりぢりに引き裂かれ、天使の大軍が降臨せしめられん。

وَيَوْمَ تَشَقَّقُ السَّمَآءُ بِالْغَمَامِ وَنُزِّلَ الْمَلٰٓئِكَةُ تَنْزِيْلًا ﴿٢٦﴾

27．その日こそ、（注９）真(まこと)の主権は慈悲深き神に属し、不信心者どもは多難な日とならん。

اَلْمُلْكُ يَوْمَئِذِ ٍالْحَقُّ لِلرَّحْمٰنِ ؕ وَكَانَ يَوْمًا عَلَى الْكٰفِرِيْنَ عَسِيْرًا ﴿٢٧﴾

28．その日、不義なす徒輩(やから)は己が手を噛み、かく云わん、「ああ、もし我使徒と共に同じ道を歩みたりなば！

وَيَوْمَ يَعَضُّ الظَّالِمُ عَلٰى يَدَيْهِ يَقُوْلُ يٰلَيْتَنِى اتَّخَذْتُ مَعَ الرَّسُوْلِ سَبِيْلًا ﴿٢٨﴾

29．ああ、情けなや！かかる者を仲間にせざりせば！

يٰوَيْلَتٰى لَيْتَنِىْ لَمْ اَتَّخِذْ فُلَانًا خَلِيْلًا ﴿٢٩﴾

30．お諭(さとし)が我に達したる後、彼は我を迷わしめたり」と。悪魔(サタン)とは、助けを必要とする時、いつも人を見捨てるものなり。

لَقَدْ اَضَلَّنِىْ عَنِ الذِّكْرِ بَعْدَ اِذْ جَآءَنِىْ ؕ وَكَانَ الشَّيْطٰنُ لِلْاِنْسَانِ خَذُوْلًا ﴿٣٠﴾

注７　　2章　211 節参照

注８　　彼等の第二の要求は適えられず、彼等の働きは全て無効となり、彼等は破壊され、ちり片の様に空気の薄い地に追いやられるだろう。

注９　　事実、バドル戦の日は不信心者にとり最も苦しい一日となった。その日イスラムが創設され、クライシュは自らの敗北と屈辱を悟ったのである。

31. 使徒は云わん、「主よ、我が民はこのクルアーンを廃棄せしものと見なせり」と。(注10)

وَقَالَ الرَّسُولُ يٰرَبِّ إِنَّ قَوْمِي اتَّخَذُوا هٰذَا الْقُرْاٰنَ مَهْجُورًا ﴿٣١﴾

32. さればわれらはそれぞれの預言者たちに、罪人(つみびと)の中から、敵を作りたり。而して主は、嚮導者、援助者として不足なし。

وَكَذٰلِكَ جَعَلْنَا لِكُلِّ نَبِيٍّ عَدُوًّا مِّنَ الْمُجْرِمِينَ ۗ وَكَفٰى بِرَبِّكَ هَادِيًا وَّنَصِيرًا ﴿٣٢﴾

33. 信ぜざる者どもはまた云う、「何故、クルアーンは彼に全部一度に啓示されざりきか？」と。われらがかくなしたるは、汝の心を徐々に堅固ならしめんがためなり。されば、われらは、それを最善な形で整えたり。

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لَوْلَا نُزِّلَ عَلَيْهِ الْقُرْاٰنُ جُمْلَةً وَّاحِدَةً ۚ كَذٰلِكَ ۚ لِنُثَبِّتَ بِهٖ فُؤَادَكَ وَرَتَّلْنٰهُ تَرْتِيلًا ﴿٣٣﴾

34. たとえ彼等が如何なる比喩を以て汝に臨むとも、われらは汝に、真理と遥かに勝る解釈とを与う。(注11)

وَلَا يَأْتُونَكَ بِمَثَلٍ إِلَّا جِئْنٰكَ بِالْحَقِّ وَأَحْسَنَ تَفْسِيرًا ﴿٣٤﴾

35. 先導者と共に地獄に引き立てられん者ども、彼等こそ最悪の境遇に置かれ、正しい道から最も遠くへ迷い出でん。

الَّذِينَ يُحْشَرُونَ عَلٰى وُجُوهِهِمْ إِلٰى جَهَنَّمَ ۙ أُولٰٓئِكَ شَرٌّ مَّكَانًا وَّأَضَلُّ سَبِيلًا ﴿٣٥﴾ ع

第四項

36. われらはモーゼに経典を授け、彼と共にその兄アロンを補佐として任命せり。

وَلَقَدْ اٰتَيْنَا مُوسَى الْكِتٰبَ وَجَعَلْنَا مَعَهٗٓ أَخَاهُ هٰرُونَ وَزِيرًا ﴿٣٦﴾

37. 而(しか)して、われらは命じたり、「お前たち両名、われらの神兆(しるし)を拒みたる民のところへ往け」と。その後、われらは徹底して彼等を殲滅(せんめつ)せり。

فَقُلْنَا اذْهَبَآ إِلَى الْقَوْمِ الَّذِينَ كَذَّبُوا بِاٰيٰتِنَا ۗ فَدَمَّرْنٰهُمْ تَدْمِيرًا ﴿٣٧﴾

38. また。ノアの民がその使徒らを拒みたる時、われらは之(これ)を溺死させ、もって人類への懲らしめとなせり。われらは不義なす徒輩(やから)には恐ろしい懲罰を用意せり。

وَقَوْمَ نُوحٍ لَّمَّا كَذَّبُوا الرُّسُلَ أَغْرَقْنٰهُمْ وَجَعَلْنٰهُمْ لِلنَّاسِ اٰيَةً ۗ وَأَعْتَدْنَا لِلظّٰلِمِينَ عَذَابًا أَلِيمًا ﴿٣٨﴾

注10　この節は、いわゆるイスラム教徒がクルアーンを廃棄した人々に向けたものと言える。過去14世紀に渡りクルアーンはイスラム教徒に無視されて来たが、現在は更にひどい状態にある。これに関してモハッマド預言者の言葉がある。「イスラム教徒にある時代が来る。その時イスラム教は消え失せ名ばかりとなり、クルアーンもその名と言葉のみ残るであろう。」(Baihagui・Shuab al-Iwan) 今、真にその時を迎えている。

注11　数ある黙示録の中にあって唯一クルアーンに見られる特質がある。神の存在、イスラム教の真理、神の始まり、その他宗教上の諸問題全て事実であるとクルアーンは唱え、他の力を借りる事なくそれを実証するに十分な論拠を提示している。

39．またわれらは、アード、サムード、ラスの住民ども並びにその間の幾多の世代を殲滅せり。（注 12）

وَعَادًا وَثَمُودَا۟ وَأَصْحَٰبَ ٱلرَّسِّ وَقُرُونًۢا بَيْنَ ذَٰلِكَ كَثِيرًا ٣٩

40．そのそれぞれに、われらは実例を以て戒めたり。而して、それぞれを、われらは徹底して殲滅せり。

وَكُلًّا ضَرَبْنَا لَهُ ٱلْأَمْثَالَ ۖ وَكُلًّا تَبَّرْنَا تَتْبِيرًا ٤٠

41．これ等不信心者どもは、災害の雨が降り注ぎしあの邑を訪れたに相違なし。その時、彼等は、それがわからざりしか？然らず、彼等は復活させられることを期待せざるなり。

وَلَقَدْ أَتَوْا۟ عَلَى ٱلْقَرْيَةِ ٱلَّتِىٓ أُمْطِرَتْ مَطَرَ ٱلسَّوْءِ ۚ أَفَلَمْ يَكُونُوا۟ يَرَوْنَهَا ۚ بَلْ كَانُوا۟ لَا يَرْجُونَ نُشُورًا ٤١

42．彼等汝を見る時は、ただ汝を物笑いの種にするばかり。而して云う、「アッラーが使徒として遣わしたるは、この者なるか？

وَإِذَا رَأَوْكَ إِن يَتَّخِذُونَكَ إِلَّا هُزُوًا أَهَٰذَا ٱلَّذِى بَعَثَ ٱللَّهُ رَسُولًا ٤٢

43．もし我等がしっかりして之を信奉せざりせば、我等はあやうく彼によって我等の神々を棄てんとす」と。されど、彼等、やがて刑罰を目のあたりに見れば、正しい道から最も外れし者は誰なるかを知らん。

إِن كَادَ لَيُضِلُّنَا عَنْ ءَالِهَتِنَا لَوْلَآ أَن صَبَرْنَا عَلَيْهَا ۚ وَسَوْفَ يَعْلَمُونَ حِينَ يَرَوْنَ ٱلْعَذَابَ مَنْ أَضَلُّ سَبِيلًا ٤٣

44．汝は、己れの邪悪な欲望を以て神とする者を、見たるか？汝はそのような者の守護者たらんとするか？

أَرَءَيْتَ مَنِ ٱتَّخَذَ إِلَٰهَهُۥ هَوَىٰهُ أَفَأَنتَ تَكُونُ عَلَيْهِ وَكِيلًا ٤٤

45．汝は、彼等の大部分の者が聞き且つ物がわかるとでも思うか？彼等はただ家畜の如し。否、彼等の行状は家畜にも劣るなり。

أَمْ تَحْسَبُ أَنَّ أَكْثَرَهُمْ يَسْمَعُونَ أَوْ يَعْقِلُونَ ۚ إِنْ هُمْ إِلَّا كَٱلْأَنْعَٰمِ ۖ بَلْ هُمْ أَضَلُّ سَبِيلًا ٤٥

第五項

46．汝は、主が如何に影を伸ばすかを見ざりしか？主もし欲しなば、その影を静止するも可能なり。（注 13）なれど、われらは太陽を以てその案内人となす。（注 14）

أَلَمْ تَرَ إِلَىٰ رَبِّكَ كَيْفَ مَدَّ ٱلظِّلَّ وَلَوْ شَآءَ لَجَعَلَهُۥ سَاكِنًا ثُمَّ جَعَلْنَا ٱلشَّمْسَ عَلَيْهِ دَلِيلًا ٤٦

注 12　ラスはタムード族の一部が住んでいたヤマーマの町であるとみなす注釈者もいる。又、他の注釈者はラスとはタムード族の一部を指すと考える。それは彼等が預言者を井戸に投げ込んだからである。彼等はタムードの残存者であった。

注 13　この節では比喩的表現を用いて、イスラム教の発生・普及・支配が述べられており、これを自然現象になぞらえて表現している。太陽が物に隠れている時、影が長く伸びる。同様に、神が人々の背後にいる時、人々の力は強まる。神がイスラムの背後にいる時、神の影は、地球の隅々にまで広がり続け、世の人々は皆神を求め、神の下で慰めと安楽を見いだす。この節における太陽とは、イスラム教又はモハッマド預言者を指す。

注 14　太陽の位置は、影の大きさを左右する。

47．然る後、われらは徐々に影をわれらの方に引き寄す。（注 15）

ثُمَّ قَبَضْنَٰهُ إِلَيْنَا قَبْضًا يَسِيرًا ﴿٤٧﴾

48．お前たちのために、夜を衣となし、眠りを休息となし、昼は起きて働く時と定めたるは彼なり。（注 16）

وَهُوَ ٱلَّذِى جَعَلَ لَكُمُ ٱلَّيْلَ لِبَاسًا وَٱلنَّوْمَ سُبَاتًا وَجَعَلَ ٱلنَّهَارَ نُشُورًا ﴿٤٨﴾

49．また、その恵みを垂れる前に、朗報として風を送るは彼なり。而して、われらは清らかな水を天から降し、

وَهُوَ ٱلَّذِىٓ أَرْسَلَ ٱلرِّيَٰحَ بُشْرًۢا بَيْنَ يَدَىْ رَحْمَتِهِۦ ۚ وَأَنزَلْنَا مِنَ ٱلسَّمَآءِ مَآءً طَهُورًا ﴿٤٩﴾

50．これによって枯死せる土地に生命を与え、われらが創りしもの、すなわち、家畜や多くの人間に之を飲料として与う。

لِّنُحْـِۧىَ بِهِۦ بَلْدَةً مَّيْتًا وَنُسْقِيَهُۥ مِمَّا خَلَقْنَآ أَنْعَٰمًا وَأَنَاسِىَّ كَثِيرًا ﴿٥٠﴾

51．われらは彼等に注意させんとして、さまざまなる方法で之を説明せり。然れども、世人の多くはすべてを否認し、信ぜざるなり。

وَلَقَدْ صَرَّفْنَٰهُ بَيْنَهُمْ لِيَذَّكَّرُوا۟ فَأَبَىٰٓ أَكْثَرُ ٱلنَّاسِ إِلَّا كُفُورًا ﴿٥١﴾

52．もしわれらその気になりたれば、各邑に一人ずつの警告者を遣し得た筈。

وَلَوْ شِئْنَا لَبَعَثْنَا فِى كُلِّ قَرْيَةٍ نَّذِيرًا ﴿٥٢﴾

53．されば、不信者に従わず、クルアーンを用い、全力を尽くして彼等と戦え。

فَلَا تُطِعِ ٱلْكَٰفِرِينَ وَجَٰهِدْهُم بِهِۦ جِهَادًا كَبِيرًا ﴿٥٣﴾

54．彼こそは二つの海を流れさせたる者、こちらは甘くしてうまく、あちらは鹹くして苦し。而して、彼は、両者の間に越え難き障壁を置けり。（注 17）

وَهُوَ ٱلَّذِى مَرَجَ ٱلْبَحْرَيْنِ هَٰذَا عَذْبٌ فُرَاتٌ وَهَٰذَا مِلْحٌ أُجَاجٌ وَجَعَلَ بَيْنَهُمَا بَرْزَخًا وَحِجْرًا مَّحْجُورًا ﴿٥٤﴾

注 15　この節では、全盛を極めた後のイスラム教の衰退にふれている。前節では影は隆盛を意味したが当節では衰退の意味で用いられている。

注 16　この節にある夜は、神からの使者が出現する以前の精神的暗闇の時代を指している。そして昼は使者の出現による精神的曙を示す。

注 17　真の宗教と偽りの宗教を表わすのに、この節では"二つの水"という言葉を用いている。真の宗教であるイスラム教と、その他の堕落した宗教は併存を続け、前者は甘い果実となり魂の旅人の渇きを潤すが、後者は不毛で苦く、如何なる成果ももたらさない。この二つの水は又海の水と川の水を示してもいる。後者を甘いと感ずる限り、前者は塩辛く、苦く感じられる。しかし川の甘い水が海に注ぎ込み、塩辛い水と混った時、それも又辛くなる。この二つの水は混ざり合わない限り、それぞれ別の味を持つ。同様に、偽りの宗教の教義は、真の宗教の教義と混ざり合えば、その甘さを失い、役に立たなくなる。しかし神はこうお決めになった。神の庇護の下「イスラム教は、偽りの宗教と隣り合わせていても、その甘さを失わないであろう。」(15：10) 両者の間には越える事の出来ない壁がある。

55. また、水より人間を創り、その者のために血統と婚姻による血族関係を作りたる者は、彼なり。げに汝の主は全能にまします。

وَهُوَ الَّذِيْ خَلَقَ مِنَ الْمَآءِ بَشَرًا فَجَعَلَهٗ نَسَبًا وَّصِهْرًا ؕ وَكَانَ رَبُّكَ قَدِيْرًا ﴿٥٥﴾

56. 然るに、彼等は、アッラーの外に毒にも薬にもならざる者を崇拝す。不信心者は、その主に敵対する悪魔に味方する者なり。

وَيَعْبُدُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ مَا لَا يَنْفَعُهُمْ وَلَا يَضُرُّهُمْ ؕ وَكَانَ الْكَافِرُ عَلٰى رَبِّهٖ ظَهِيْرًا ﴿٥٦﴾

57. われらは汝を、ただ朗報の伝達者として、且つ警告者として遣わしたに過ぎず。

وَمَآ اَرْسَلْنٰكَ اِلَّا مُبَشِّرًا وَّنَذِيْرًا ﴿٥٧﴾

58. 云え、「誰もがその主への道をとらんことを希う以外、我はこのためにお前たちから報酬を求めず」と。（注 18）

قُلْ مَآ اَسْئَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ اَجْرٍ اِلَّا مَنْ شَآءَ اَنْ يَّتَّخِذَ اِلٰى رَبِّهٖ سَبِيْلًا ﴿٥٨﴾

59. 汝、永生にして不死なる御方を信頼し、ひたすら讃美せよ。彼はその僕等の諸々の罪を承知する者として十分なり。

وَتَوَكَّلْ عَلَى الْحَيِّ الَّذِيْ لَا يَمُوْتُ وَسَبِّحْ بِحَمْدِهٖ ؕ وَكَفٰى بِهٖ بِذُنُوْبِ عِبَادِهٖ خَبِيْرًا ﴿٥٩﴾

60. 彼は六日で、天地とその間にある一切を創造し、然る後、自ら玉座に鎮座せり。慈悲深き神よ！されば汝、彼に関して、知る者に尋ねよ。（注 19）

اِلَّذِيْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا فِيْ سِتَّةِ اَيَّامٍ ثُمَّ اسْتَوٰى عَلَى الْعَرْشِ ۚ اَلرَّحْمٰنُ فَسْئَلْ بِهٖ خَبِيْرًا ﴿٦٠﴾

61. 彼等に向って「慈悲深き神に服従せよ」と云うと、彼等は云う、「慈悲深い神とは一体誰ぞ？我等は汝が命ずる者に服従すべきとな？」と。而して、ますますその嫌悪の情をつのらせるばかりなり。

وَاِذَا قِيْلَ لَهُمُ اسْجُدُوْا لِلرَّحْمٰنِ قَالُوْا وَمَا الرَّحْمٰنُ ۗ اَنَسْجُدُ لِمَا تَاْمُرُنَا وَزَادَهُمْ نُفُوْرًا ﴿٦١﴾

第六項

62. 天に十二宮を造り、その中に、灯火と晄々たる月を置き給う御方に讃美あれ。（注 20）

تَبٰرَكَ الَّذِيْ جَعَلَ فِي السَّمَآءِ بُرُوْجًا وَّجَعَلَ فِيْهَا سِرٰجًا وَّقَمَرًا مُّنِيْرًا ﴿٦٢﴾

注 18　イスラム教が教義普及の為に力の行使を禁じてある事が、この節に明示されている。

注 19　(1)神、(2)モハッマド預言者

注 20　この節では、天及び天を照し出す太陽・月・星の創造を語る事で、宗教上の天国に注意を喚起している。そこでの太陽は救世主モハッマド預言者であり月及び星は彼の友を指す。この友人達に関してモハッマド預言者は次の様に語っている。「我友は数ある星の様であり、彼等に従う者は正しく導かれるであろう。」(Razin)

63. また。主を念じたい者や、感謝の念を抱きたい者のために、昼夜を設け、之を循環しむるは彼なり。（注 21）

وَهُوَ الَّذِي جَعَلَ اللَّيْلَ وَالنَّهَارَ خِلْفَةً لِّمَنْ أَرَادَ أَن يَذَّكَّرَ أَوْ أَرَادَ شُكُورًا ٦٣

64. 慈悲深い神の真の僕たちとは、道を歩くにも謙虚に振舞い、無知なる者に話しかけられても「平安あれ！」と云う者なり。（注 22）

وَعِبَادُ الرَّحْمَٰنِ الَّذِينَ يَمْشُونَ عَلَى الْأَرْضِ هَوْنًا وَإِذَا خَاطَبَهُمُ الْجَاهِلُونَ قَالُوا سَلَامًا ٦٤

65. また、主の御前に平伏し、且つ起立して夜を過ごす者、

وَالَّذِينَ يَبِيتُونَ لِرَبِّهِمْ سُجَّدًا وَقِيَامًا ٦٥

66.「主よ、地獄の懲罰より我等を免れしめよ。あの懲罰は永劫の拷問なり。

وَالَّذِينَ يَقُولُونَ رَبَّنَا اصْرِفْ عَنَّا عَذَابَ جَهَنَّمَ ۖ إِنَّ عَذَابَهَا كَانَ غَرَامًا ٦٦

67. そは実に悪しき休息の場､悪しき住居なり」と云う者。

إِنَّهَا سَاءَتْ مُسْتَقَرًّا وَمُقَامًا ٦٧

68. また、金を使うに当り、浪費せず、さりとて物惜しみするでなく､能く中庸を保つ者。

وَالَّذِينَ إِذَا أَنفَقُوا لَمْ يُسْرِفُوا وَلَمْ يَقْتُرُوا وَكَانَ بَيْنَ ذَٰلِكَ قَوَامًا ٦٨

69. また､アッラーの外に如何なる神も崇めず、正当な理由に非ざれば、アッラーの禁を破って人を殺さず、不義密通を行われざる者、これ等の者たちなり。然れども、之を犯す者は、必ず罪の報いを受くべし。（注 23）

وَالَّذِينَ لَا يَدْعُونَ مَعَ اللَّهِ إِلَٰهًا آخَرَ وَلَا يَقْتُلُونَ النَّفْسَ الَّتِي حَرَّمَ اللَّهُ إِلَّا بِالْحَقِّ وَلَا يَزْنُونَ ۚ وَمَن يَفْعَلْ ذَٰلِكَ يَلْقَ أَثَامًا ٦٩

70. 復活の日には、その懲罰は倍加せられ、地獄に於て屈辱の日を過ごさん。

يُضَاعَفْ لَهُ الْعَذَابُ يَوْمَ الْقِيَامَةِ وَيَخْلُدْ فِيهِ مُهَانًا ٧٠

注 21　物質界において夜の後昼が訪れる様に、精神界においても、闇が世を覆う時神は世を照らすべく使者を使わす。

注 22　天国における太陽・モハッマド預言者の出現により為された偉大なる道徳改革に関する記述がこの節より始まる。人々は闇の子から寛大で慈悲深き下僕へと変わった。この節及び次節において、寛大なる神の下僕の特質が述べられてあるが、それはモハッマド預言者と共にある人々を苦しめて来た悪徳の対極となる。

注 23　偶像崇拝・殺害・姦通は三大罪であり、個々の悪業及び社会的性的不徳の根源である。クルアーンはこれらの罪に繰り返し言及して来た。

71．但し、改悛して、（注24）信仰に入り、善行を積む者は除かれる。アッラーは彼等のために、その諸悪を善行に替え給う。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

إِلَّا مَنْ تَابَ وَآمَنَ وَعَمِلَ عَمَلًا صَالِحًا فَأُولَٰئِكَ يُبَدِّلُ اللَّهُ سَيِّئَاتِهِمْ حَسَنَاتٍ ۗ وَكَانَ اللَّهُ غَفُورًا رَحِيمًا ﴿٧١﴾

72．改悛し、而して、善行を積む者は、本当に後悔してアッラーに帰依し奉る者なり。

وَمَنْ تَابَ وَعَمِلَ صَالِحًا فَإِنَّهُ يَتُوبُ إِلَى اللَّهِ مَتَابًا ﴿٧٢﴾

73．また、虚偽の証言をせず、くだらぬことに遇えばその傍を威厳を以って通り過ぎる者。

وَالَّذِينَ لَا يَشْهَدُونَ الزُّورَ وَإِذَا مَرُّوا بِاللَّغْوِ مَرُّوا كِرَامًا ﴿٧٣﴾

74．主の神兆の話が出ると、聾か盲のように倒れざる者。（注25）

وَالَّذِينَ إِذَا ذُكِّرُوا بِآيَاتِ رَبِّهِمْ لَمْ يَخِرُّوا عَلَيْهَا صُمًّا وَعُمْيَانًا ﴿٧٤﴾

75．「主よ、我等に日を楽しませる妻子を授けたまえ。我等を義しい人の模範たらしめよ」と云う者。

وَالَّذِينَ يَقُولُونَ رَبَّنَا هَبْ لَنَا مِنْ أَزْوَاجِنَا وَذُرِّيَّاتِنَا قُرَّةَ أَعْيُنٍ وَاجْعَلْنَا لِلْمُتَّقِينَ إِمَامًا ﴿٧٥﴾

76．これ等の者は、その堅忍不抜さ故に、天国に於て至高なる場所を賜わり、そこにて歓迎と平安とを受けん、

أُولَٰئِكَ يُجْزَوْنَ الْغُرْفَةَ بِمَا صَبَرُوا وَيُلَقَّوْنَ فِيهَا تَحِيَّةً وَسَلَامًا ﴿٧٦﴾

77．永久に。そは素晴らしき休息処なり、素晴らしき住居なり。

خَالِدِينَ فِيهَا ۚ حَسُنَتْ مُسْتَقَرًّا وَمُقَامًا ﴿٧٧﴾

78．不信心者に向って云え、「お前たち、我が主に祈らずば、主はお前たちのことを考慮せざるべし。然るに、今お前たちは、その神託を拒みたり、天罰お前たちを必ず断ち割らん」と。

قُلْ مَا يَعْبَأُ بِكُمْ رَبِّي لَوْلَا دُعَاؤُكُمْ ۖ فَقَدْ كَذَّبْتُمْ فَسَوْفَ يَكُونُ لِزَامًا ﴿٧٨﴾

注24　「改悛」とは、全ての悪を避け善行を為す為に、固い決意を持って過去の不徳を真実悔い改め、更に、被害者に対して償う事である。過去を省みる事で、人生は大いなる変革を遂げることができる。

注25　彼等は目を見開き神の言葉に耳を傾ける。彼等の信仰は風聞ではなく確信に基づくものである。

رکوعاتها ١١　سُوْرَةُ الشُّعَرَآءِ مَكِّيَّةٌ (٢٦)　اٰياتها ٢٢٨

アルショアラー
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍く（あまねく）アッラーの御名（みな）において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ۞١

2．ター・スィーン・ミーム　※　（注1）
※恵み深く、すべてを聴き、すべてを知る神！

طٰسٓمٓ ۞٢

3．これは明瞭（めいりょう）なる経典の諸節なり。

تِلْكَ اٰيٰتُ الْكِتٰبِ الْمُبِيْنِ ۞٣

4．彼等信ずるを肯（がえ）んぜぬが故に、恐らく汝は心を痛め己が身を殺すに至らん。（注2）

لَعَلَّكَ بَاخِعٌ نَّفْسَكَ اَلَّا يَكُوْنُوْا مُؤْمِنِيْنَ ۞٤

5．もしわれら欲しなば、われらは彼等の首（こうべ）をその前にぬかずかしむる奇跡を天より降（くだ）すべし。（注3）

اِنْ نَّشَاْ نُنَزِّلْ عَلَيْهِمْ مِّنَ السَّمَآءِ اٰيَةً فَظَلَّتْ اَعْنَاقُهُمْ لَهَا خٰضِعِيْنَ ۞٥

6．然（しか）るに、彼等は、慈悲深き神より新しき訓戒が下るたびに、（注4）それより顔をそむけるなり。

وَمَا يَاْتِيْهِمْ مِّنْ ذِكْرٍ مِّنَ الرَّحْمٰنِ مُحْدَثٍ اِلَّا كَانُوْا عَنْهُ مُعْرِضِيْنَ ۞٦

7．事実、彼等は、それを虚偽（いつわり）として遇（ぐう）せり。されど、やがてその嘲（あざけ）りしものの到来を告げる知らせが彼等に到らん。

فَقَدْ كَذَّبُوْا فَسَيَاْتِيْهِمْ اَنْۢبٰٓؤُا مَا كَانُوْا بِهٖ يَسْتَهْزِءُوْنَ ۞٧

8．彼等は大地を眺めざるか、われらはそこで、如何に多くの立派な種を発生せしめたるかを？

اَوَلَمْ يَرَوْا اِلَى الْاَرْضِ كَمْ اَنْۢبَتْنَا فِيْهَا مِنْ كُلِّ زَوْجٍ كَرِيْمٍ ۞٨

注1　この章及び次章は、ター・スィーン・ミーム群として知られる特異な章で、両者の主題は酷似している。これ等はほぼ同じ時期にメッカで啓示された。この章群はモーゼの生涯をかなり詳しく取り上げており、この省略された文字がシナイ山及びモーゼを表わしているとみなす注釈者も居る。ター・スィーンはトゥール（シナイ山）を、ミームは、モーゼを表わす。

注2　18章7節参照

注3　モハッマド預言者の苦悩が無駄に終わる事はない。人々は、彼に対する妨害を止めなければ、裁きを下されるであろう。それは彼等の指導者を辱める事となる。「首」は指導者を意味する。

注4　「新しき」という語は、此処では「新しい表現で」あるいは「新たに詳細な記述で」という意味で用いられている。事実、神の律法は全て、基本的教義は似通ったものである。相違点は細部にのみ見られる。そこで、新しい律法は、時代の要求・考え方に見合った形に変えて啓示される。預言者達も、この新しい律法に従う者、従来の律法に従う者様々である。

9．げにこの中には神兆あり。然れども、彼等の大半は之を信じたがらず。

إِنَّ فِي ذٰلِكَ لَاٰيَةً ۗ وَمَا كَانَ أَكْثَرُهُمْ مُّؤْمِنِينَ ⑨

10．げに、汝の主、彼は偉力者、慈悲者にま　します。（注5）

وَإِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ⑩

11．主がモーゼを呼びて、かく宣いしことを思い起せ。「不埒を仂く民衆のところへ行け。

وَإِذْ نَادٰى رَبُّكَ مُوسٰىٓ أَنِ ائْتِ الْقَوْمَ الظّٰلِمِينَ ⑪

12．すなわち、ファラオの民のところへ。彼等は神を畏れざるか？」

قَوْمَ فِرْعَوْنَ ۗ أَلَا يَتَّقُونَ ⑫

13．彼は答えり、「主よ、我は彼等が、我を嘘つきと看做すを恐る。

قَالَ رَبِّ إِنِّيٓ أَخَافُ أَنْ يُّكَذِّبُونِ ⑬

14．加えて、我が胸はせばまり、舌も滑らかならず。（注6）されば、アロンにも御言葉を降し給え。

وَيَضِيقُ صَدْرِي وَلَا يَنْطَلِقُ لِسَانِي فَأَرْسِلْ إِلٰى هٰرُونَ ⑭

15．また我は、彼等にとがめられることをなしたれば、彼等が我を殺さんことを恐る」と。（注7）

وَلَهُمْ عَلَيَّ ذَنْبٌ فَأَخَافُ أَنْ يَّقْتُلُونِ ⑮

16．神は云えり、「断じて然らず。お前たち両名われらの奇跡を携えて行け。われらはお前たちと偕にありて、その祈りを聞き入れん。

قَالَ كَلَّا ۚ فَاذْهَبَا بِاٰيٰتِنَآ إِنَّا مَعَكُمْ مُّسْتَمِعُونَ ⑯

17．されば、ファラオのところへ行きて、云え、『我等は万物の主よりの使徒なり、

فَأْتِيَا فِرْعَوْنَ فَقُولَآ إِنَّا رَسُولُ رَبِّ الْعٰلَمِينَ ⑰

18．イスラエルの子らを我等と共に去らしめよ』と。

أَنْ أَرْسِلْ مَعَنَا بَنِيٓ إِسْرَآءِيلَ ⑱

19．すると、ファラオは云えり、「汝が幼少の時、ここで育てたるは我等でなかりしか？しかも、汝は長年我等の中で生活を過さざりしか。

قَالَ أَلَمْ نُرَبِّكَ فِينَا وَلِيدًا وَّلَبِثْتَ فِينَا مِنْ عُمُرِكَ سِنِينَ ⑲

注5　「まことに汝の主、彼は偉大者、慈悲者にまします」という言葉は、預言者の置かれた状況がこの章で述べられる預言者達のものと類似している事を示す。しかし、他の預言者の敵を捕らえ滅した強大なる神が、モハッマド預言者においては彼を勝利と繁栄に導きその力を示すのみならず、彼の一族に慈悲を与えるであろう。モハッマド預言者の一族において滅びるのはわずかであり、大多数の者は神の許しと慈悲を授けられ、遂には神のお告げを受けるであろう。

注6　モーゼは、委ねられた偉大なる事業を成し遂げられるかと案じていた様だ。預言者としての任は事実非常に重い。モハッマド預言者も又、最初の啓示を受けた時、不安に駆られた。

注7　この話は、ファラオの人々がモーゼを、エジプト人殺害の廉で告発した事を示している。この出来事は、出エジプト記2：11－15及びクルアーン28：16－21に記されているが、そこにはこの殺害が故意のものではなかったと書かれてある。モーゼは、エジプト人に打たれていたイスラエル人を助けようとしたのであり、その争いの最中、エジプト人は亡くなったのである。

20. 然(しか)るに、汝が為したることは何んたることぞ、汝は全く恩を知らざる者なり」と。(注8)

وَفَعَلْتَ فَعْلَتَكَ الَّتِي فَعَلْتَ وَأَنْتَ مِنَ الْكٰفِرِينَ ٢٠

21. モーゼは云えり、「我、それを為せるは、いまだ我迷える者でありし時なり。(注9)

قَالَ فَعَلْتُهَآ إِذًا وَّأَنَا مِنَ الضَّآلِّينَ ٢١

22. されば、我はお前たちを怖れて逃げ去れり。されど、我が主は正しい判断力を我に授け、しかも使徒の列に加えたり。(注10)

فَفَرَرْتُ مِنْكُمْ لَمَّا خِفْتُكُمْ فَوَهَبَ لِي رَبِّي حُكْمًا وَّجَعَلَنِي مِنَ الْمُرْسَلِينَ ٢٢

23. イスラエルの子らを奴隷にしておきながら、幼少時の恩顧を以て我をなじるか？」と。(注11)

وَتِلْكَ نِعْمَةٌ تَمُنُّهَا عَلَيَّ أَنْ عَبَّدْتَّ بَنِيٓ إِسْرَآءِيلَ ٢٣

24. ファラオは云えり、「万物の主とは何者か？」と。(注12)

قَالَ فِرْعَوْنُ وَمَا رَبُّ الْعٰلَمِينَ ٢٤

25. モーゼは云えり、「天地(あめつち)並びに天地間の一切のものの主なり、(注13) もしお前たち信ずるならば」と。

قَالَ رَبُّ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَآ إِنْ كُنْتُمْ مُّوقِنِينَ ٢٥

26. ファラオは側近に向って云えり、「お前たち、聞きたるか？」と。(注14)

قَالَ لِمَنْ حَوْلَهُٓ أَلَا تَسْتَمِعُونَ ٢٦

注8　この節では、モーゼにより死に至らしめられたエジプト人の事が述べられている。ファラオは自らを、そしてエジプト人をイスラエル人の恩人と自負しており、エジプト人を殺害した事で、モーゼを恩知らずと非難している。

注9　イスラエル人がエジプト人から逃れようとモーゼに助けを求めた時、彼は為す術を知らなかったが、貧しく弱いイスラエル人を救おうとしてモーゼが拳を振り下ろすと、運悪くエジプト人は亡くなってしまった。一打で人の命を奪う事は常識的に有り得ず、この死は事故であった。又、見方を変えれば、モーゼの抑圧された人々にたいする愛由に、彼はイスラエル人を助けようとしてエジプト人に一撃を見舞い、その命を奪う事となったのである。モーゼはその結末を予期せずして行動したと言えよう。

注10　モーゼがエジプト人を殺害し、逃亡した後に神が自ら彼を預言者に任じたのはモーゼの行為が瞬時の予期せぬものであった事の証しといえよう。

注11　ファラオ（エジプトの王）はモーゼ族（イスラエル人）を何代にも渡り奴隷として拘束し、彼等の尊厳、決断力、活力を奪って来たにも拘らず、自らの行為を善行であると述べた。このファラオの慎み無き言葉を、モーゼは恥ずべきものと語った事が記されている。

注12　前節に書かれたモーゼのファラオに対する返答はファラオを困惑させた様である、直ちにファラオは話題を変え、神の存在、属性に関する難解な問題をモーゼに突き付けた。

注13　「天地間の一切のもの」という語は、神の支配の及ぶ範囲が如何に広大であるかを示している。

注14　この節には、ファラオがエジプト人を扇動し、モーゼに刃向かう様、し向けた事が書かれている。モーゼは、天地創造はアッラーの為せる業であると主張した。全宇宙は自らの神の支配下にあると信ずるエジプト人にとり、このモーゼの主張はエジプトの神々に対する侮辱ではないか。この様に語ってファラオはエジプト人の、モーゼに対する敵愾心を扇ったのである。

27．モーゼは云えり、「そはお前たちの主にして、またお前たちの父祖の主なるぞ」と。(注 15)

قَالَ رَبُّكُمْ وَرَبُّ اٰبَآئِكُمُ الْاَوَّلِيْنَ ﴿٢٧﴾

28．ファラオは云えり、「お前たちに遣わされたこの使徒は、間違いなく狂人なり」と。(注 16)

قَالَ اِنَّ رَسُوْلَكُمُ الَّذِيْٓ اُرْسِلَ اِلَيْكُمْ لَمَجْنُوْنٌ ﴿٢٨﴾

29．モーゼは云えり、「そは東西並びにその間にある一切の主なり、(注 17) お前たち思慮があるなら解るのだが」と。

قَالَ رَبُّ الْمَشْرِقِ وَالْمَغْرِبِ وَمَا بَيْنَهُمَا ۭ اِنْ كُنْتُمْ تَعْقِلُوْنَ ﴿٢٩﴾

30．ファラオは云えり、「汝、もし我以外に神を信ずれば、我は必ず汝を獄(ごく)に投げ込まん」と。

قَالَ لَىِٕنِ اتَّخَذْتَ اِلٰهًا غَيْرِيْ لَاَجْعَلَنَّكَ مِنَ الْمَسْجُوْنِيْنَ ﴿٣٠﴾

31．モーゼは云えり、「何となく、我たとえ明白なる証拠を汝に携えたとしてもか！」と。

قَالَ اَوَلَوْ جِئْتُكَ بِشَيْءٍ مُّبِيْنٍ ﴿٣١﴾

32．ファラオは云えり、「汝の云うことが本当なら、直ちにそれを出してみよ」と。

قَالَ فَاْتِ بِهٖٓ اِنْ كُنْتَ مِنَ الصّٰدِقِيْنَ ﴿٣٢﴾

33．されば、モーゼはその杖を投げたり。見よ、そは明らかな蛇となれり。

فَاَلْقٰى عَصَاهُ فَاِذَا هِيَ ثُعْبَانٌ مُّبِيْنٌ ﴿٣٣﴾

34．次いで、その手を懐から引き出せば、見よ、誰の目にもそは白く映じたり。(注 18)

وَّنَزَعَ يَدَهٗ فَاِذَا هِيَ بَيْضَاۗءُ لِلنّٰظِرِيْنَ ﴿٣٤﴾

第三項

35．ファラオは側近の長老たちに云えり、「この者は卓越した妖術師なり。

قَالَ لِلْمَلَاِ حَوْلَهٗٓ اِنَّ هٰذَا لَسٰحِرٌ عَلِيْمٌ ﴿٣٥﴾

36．彼はお前たちを、その妖術によって、国外に追い出さんと謀るなり。さて、お前たちの見解や如何に？」と。

يُّرِيْدُ اَنْ يُّخْرِجَكُمْ مِّنْ اَرْضِكُمْ بِسِحْرِهٖ ڰ فَمَاذَا تَاْمُرُوْنَ ﴿٣٦﴾

37．彼等は答えり、「暫らく彼とその兄を待たせ、その間に邑々(まちまち)に召喚者を遣わし、

قَالُوْٓا اَرْجِهْ وَاَخَاهُ وَابْعَثْ فِي الْمَدَاۗىِٕنِ حٰشِرِيْنَ ﴿٣٧﴾

注 15　第 25 節では、神の支配圏の広大さをモーゼは述べているが、当節においては、神の支配が時にも及ぶ事が示されている。

注 16　ファラオはモーゼが他人の言葉に耳を傾けず、己の主張を繰り返すばかりでまるで狂人の様だと考え、その思いを語った。

注 17　この節では、神の王国があらゆる方位に広がっている事を示している。

注 18　7 章 109 節参照

38. 国中の卓越した魔術師をおそばに召し給え」と。

يَأْتُوكَ بِكُلِّ سَحَّارٍ عَلِيمٍ ﴿٣٨﴾

39. かくて、定められた日の定められた時刻に、多くの魔術師たちは集められり。

فَجُمِعَ السَّحَرَةُ لِمِيقَاتِ يَوْمٍ مَعْلُومٍ ﴿٣٩﴾

40. また、民衆に向って云えり、「お前たちも参集せぬか？」と。

وَقِيلَ لِلنَّاسِ هَلْ أَنْتُمْ مُجْتَمِعُونَ ﴿٤٠﴾

41. 「もし魔術師たちが勝たば、我等は彼等に従わん」

لَعَلَّنَا نَتَّبِعُ السَّحَرَةَ إِنْ كَانُوا هُمُ الْغَالِبِينَ ﴿٤١﴾

42. さて、魔術師たちは来着するや、(注 19) ファラオに云えり、「我等もし勝たば、褒賞を得べきや如何ん？」と。

فَلَمَّا جَاءَ السَّحَرَةُ قَالُوا لِفِرْعَوْنَ أَئِنَّ لَنَا لَأَجْرًا إِنْ كُنَّا نَحْنُ الْغَالِبِينَ ﴿٤٢﴾

43. ファラオは云えり、「よろしい、もし勝たば、お前たちを我が側近のうちに加えん」と。

قَالَ نَعَمْ وَإِنَّكُمْ إِذًا لَمِنَ الْمُقَرَّبِينَ ﴿٤٣﴾

44. モーゼは魔術師たちに云えり、「さて、汝等、投げたいものを投げよ」と。

قَالَ لَهُمْ مُوسَى أَلْقُوا مَا أَنْتُمْ مُلْقُونَ ﴿٤٤﴾

45. そこで、魔術師たちはその縄や杖を投げて、云えり、「ファラオの御威光により、勝利を得るは我等なり」と。

فَأَلْقَوْا حِبَالَهُمْ وَعِصِيَّهُمْ وَقَالُوا بِعِزَّةِ فِرْعَوْنَ إِنَّا لَنَحْنُ الْغَالِبُونَ ﴿٤٥﴾

46. 次いで、モーゼがその杖を投げるや、見よ、そは彼等のまやかしを呑み込めり。(注 20)

فَأَلْقَى مُوسَى عَصَاهُ فَإِذَا هِيَ تَلْقَفُ مَا يَأْفِكُونَ ﴿٤٦﴾

47. 因って、魔術師たち地に平伏して、

فَأُلْقِيَ السَّحَرَةُ سَاجِدِينَ ﴿٤٧﴾

48. 云えり、「我等は万物の主、

قَالُوا آمَنَّا بِرَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿٤٨﴾

49. モーゼ並びにアロンの主を、信じ奉る」と。

رَبِّ مُوسَى وَهَارُونَ ﴿٤٩﴾

50. ファラオは云えり、「お前たちは、我が許しなしに、モーゼを信じたり。彼こそはお前たちに魔術を教えし張本人なり。お前たち、

قَالَ آمَنْتُمْ لَهُ قَبْلَ أَنْ آذَنَ لَكُمْ إِنَّهُ لَكَبِيرُكُمُ الَّذِي عَلَّمَكُمُ السِّحْرَ فَلَسَوْفَ تَعْلَمُونَ لَأُقَطِّعَنَّ

注 19　魔術師とは職業として呪術を行う者で、その道徳性は非常に低いものであった。

注 20　モーゼの杖が飲み込んだのは魔術師の杖やヘビではなく、彼等の作り上げた物全てであった。モーゼの杖が彼等の欺満を徹底敵に打ち砕いたとこの節には明示してある。魔術師に惑わされて、見物人が本物のヘビと思い込んでいた物を粉々に砕く事で、魔術師の虚構を暴いたのはこのモーゼの杖であった。

いずれ必ず思い知らせん。お前たちの手足をたがいちがいに切り落し、一同悉く磔(はりつけ)に処す」と。

اَيْدِيَكُمْ وَاَرْجُلَكُمْ مِّنْ خِلَافٍ وَّلَاُوصَلِّبَنَّكُمْ اَجْمَعِيْنَ ۝٥٠

51．彼等は云えり、「我等を害する能(あた)わず、我等主の許(もと)に帰り行くなれば。（注21）

قَالُوْا لَا ضَيْرَ اِنَّآ اِلٰى رَبِّنَا مُنْقَلِبُوْنَ ۝٥١

52．ただ我等が願わんことは、我らが最初の信者なれば、主が我等の数々の罪を赦し給わんことを」と。

اِنَّا نَطْمَعُ اَنْ يَّغْفِرَ لَنَا رَبُّنَا خَطٰيٰنَآ اَنْ كُنَّآ اَوَّلَ الْمُؤْمِنِيْنَ ۝٥٢

第四項

53．かくて、われらはモーゼに啓示して、命ず、「わが僕(しもべ)らを連れ、夜陰に乗じて立ち去れ。お前たち必ず追跡せられるべし」と。

وَاَوْحَيْنَآ اِلٰى مُوْسٰٓى اَنْ اَسْرِ بِعِبَادِيْٓ اِنَّكُمْ مُّتَّبَعُوْنَ ۝٥٣

54．ファラオは急使を邑々(まちまち)に遣わし、云わしめたり、

فَاَرْسَلَ فِرْعَوْنُ فِى الْمَدَآئِنِ حٰشِرِيْنَ ۝٥٤

55．「彼等は寡少(かしょう)なれど、

اِنَّ هٰٓؤُلَآءِ لَشِرْذِمَةٌ قَلِيْلُوْنَ ۝٥٥

56．我等に怒り、恨みを抱く。（注22）

وَاِنَّهُمْ لَنَا لَغَآئِظُوْنَ ۝٥٦

57．然(しか)れども、我等は油断なく防備整いたる大軍なり」と。

وَاِنَّا لَجَمِيْعٌ حٰذِرُوْنَ ۝٥٧

58．かくて、われらは彼等を、果樹園並びに泉水から、

فَاَخْرَجْنٰهُمْ مِّنْ جَنّٰتٍ وَّعُيُوْنٍ ۝٥٨

59．財宝並びに名誉ある地位からも、追い立てり。

وَّكُنُوْزٍ وَّمَقَامٍ كَرِيْمٍ ۝٥٩

60．そはかくなる次第なりき。而(しか)して、われらは之(これ)をイスラエルの子らに遺産として与えたり。（注23）

كَذٰلِكَ وَاَوْرَثْنٰهَا بَنِيْٓ اِسْرَآءِيْلَ ۝٦٠

61．さて、追跡せるファラオの軍勢は、日出づるころ彼等に追いつけり。

فَاَتْبَعُوْهُمْ مُّشْرِقِيْنَ ۝٦١

注21　つい先程まで悪銭を得ようと策略をめぐらしていた魔術師達が、信仰を得、死を恐れなくなった。

注22　神の預言者の出現は、彼の言葉を受け入れ、彼に従う者に輝ける未来を約束するものである。預言者は人々に新たな生命を与え、人生観を変える新しい希望と確信を彼等の内に生じさせる。モーゼ出現の後、イスラエル人の間に大きな変化の起きた事をファラオは感じ、これは彼の感情を著しく害した。

注23　ファラオやエジプト人の泉・庭園・財宝がイスラエル人に与えられたのではない。イスラエル人はエジプトを去り、ミルクと蜂蜜の流れる約束の地カナンへ向かった。その地で新たに彼等は泉・庭園・財宝を与えられたのである。事実、パレスチナは、庭園と泉の豊富な点でエジプトに似ている。

62．両軍相見えたる時、モーゼの同志らは云えり、「ついに捕まりたるか」と。（注24）

فَلَمَّا تَرَاءَا الْجَمْعٰنِ قَالَ اَصْحٰبُ مُوْسٰٓى اِنَّا لَمُدْرَكُوْنَ (٦٢)

63．モーゼは云えり、「断じて然らず、そのようなことを云うなかれ！主は我と偕にあり。主は我を無事に導かん」と。

قَالَ كَلَّا ۚ اِنَّ مَعِيَ رَبِّيْ سَيَهْدِيْنِ (٦٣)

64．その時、われらモーゼに啓示して、命ず、「汝の杖で海を打て」と。（注25）すると、海忽ち分れ、両側はさながら峨々たる山嶽の如くなりぬ。

فَاَوْحَيْنَآ اِلٰى مُوْسٰٓى اَنِ اضْرِبْ بِّعَصَاكَ الْبَحْرَ ؕ فَانْفَلَقَ فَكَانَ كُلُّ فِرْقٍ كَالطَّوْدِ الْعَظِيْمِ (٦٤)

65．而して、われらは追手の軍勢をそこに誘き寄せり。

وَاَزْلَفْنَا ثَمَّ الْاٰخَرِيْنَ (٦٥)

66．かくして、われらはモーゼ並びに彼と共にありし人々を救いたり。

وَاَنْجَيْنَا مُوْسٰى وَمَنْ مَّعَهٗٓ اَجْمَعِيْنَ (٦٦)

67．然れども、その他の者どもは悉く溺死せしめたり。

ثُمَّ اَغْرَقْنَا الْاٰخَرِيْنَ (٦٧)

68．げにこの中には、一つの神兆あり。然れども、彼等の多くは信ぜざるなり。

اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً ؕ وَمَا كَانَ اَكْثَرُهُمْ مُّؤْمِنِيْنَ (٦٨)

69．げに汝の主は、偉大にして、慈悲深くまします。

وَاِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيْزُ الرَّحِيْمُ (٦٩)

第五項

70．アブラハムの物語を彼等に読誦せよ。

وَاتْلُ عَلَيْهِمْ نَبَاَ اِبْرٰهِيْمَ (٧٠)

71．すなわち、アブラハムがその父とその一族に向って、「貴方がた何を拝すか？」と訊ねし時のことを。（注26）

اِذْ قَالَ لِاَبِيْهِ وَقَوْمِهٖ مَا تَعْبُدُوْنَ (٧١)

72．彼等は答えり、「我等は偶像を拝す。これからもそのために専心せん」と。

قَالُوْا نَعْبُدُ اَصْنَامًا فَنَظَلُّ لَهَا عٰكِفِيْنَ (٧٢)

73．アブラハムは云えり、「貴方がたが祈る時、偶像能く貴方がたに耳を貸すか？

قَالَ هَلْ يَسْمَعُوْنَكُمْ اِذْ تَدْعُوْنَ (٧٣)

74．或いは、貴方がたを益するなり害するなりなし得るか？」と。

اَوْ يَنْفَعُوْنَكُمْ اَوْ يَضُرُّوْنَ (٧٤)

注24　「モーゼの同志ら」は信仰心が弱かった様である。これは5：22−23、7：149、20：87−92に示されてある。

注25　この言葉は「民を海へ導け」という意味も持つ。

注26　アブラハムが反偶像崇拝を訴え続けた事がクルアーン全編に示されている。彼は、聖像破壊者として史上に残る最初の人物である。

75．彼等は云えり、「否、されど、我等は父祖たちがかくの如くなすを見たり」と。

قَالُوا بَلْ وَجَدْنَا آبَاءَنَا كَذَٰلِكَ يَفْعَلُونَ ﴿٧٥﴾

76．アブラハムは云えり、「汝等考えざるか、貴方がたがこれまで崇めしものを、

قَالَ أَفَرَأَيْتُمْ مَا كُنْتُمْ تَعْبُدُونَ ﴿٧٦﴾

77．すなわち貴方がた並びに貴方がたの先祖が。

أَنْتُمْ وَآبَاؤُكُمُ الْأَقْدَمُونَ ﴿٧٧﴾

78．それ等の偶像はすべて我が仇敵なり、但し万物の主を除いて。

فَإِنَّهُمْ عَدُوٌّ لِي إِلَّا رَبَّ الْعَالَمِينَ ﴿٧٨﴾

79．我を創り、而して、導き給うお方は、主なり。

الَّذِي خَلَقَنِي فَهُوَ يَهْدِينِ ﴿٧٩﴾

80．我に食物並びに飲水を授け給うお方。

وَالَّذِي هُوَ يُطْعِمُنِي وَيَسْقِينِ ﴿٨٠﴾

81．我病めば、之を癒すは主なり。（注 27）

وَإِذَا مَرِضْتُ فَهُوَ يَشْفِينِ ﴿٨١﴾

82．我を死なしめ、再び甦らしめるお方。（注 28）

وَالَّذِي يُمِيتُنِي ثُمَّ يُحْيِينِ ﴿٨٢﴾

83．審判の日に、我、我が罪を赦し給わんことを乞い願うお方。

وَالَّذِي أَطْمَعُ أَنْ يَغْفِرَ لِي خَطِيئَتِي يَوْمَ الدِّينِ ﴿٨٣﴾

84．主よ、我に知恵を授け、義しき人々の列に加え給え。

رَبِّ هَبْ لِي حُكْمًا وَأَلْحِقْنِي بِالصَّالِحِينَ ﴿٨٤﴾

85．後の世まで、真実不変の名声を我に授け給え。（注 29）

وَاجْعَلْ لِي لِسَانَ صِدْقٍ فِي الْآخِرِينَ ﴿٨٥﴾

86．我をして至福の園を継ぐ者の一人たらしめよ。

وَاجْعَلْنِي مِنْ وَرَثَةِ جَنَّةِ النَّعِيمِ ﴿٨٦﴾

87．また、我が父を赦し給え、誤れる者の一人なれば。

وَاغْفِرْ لِأَبِي إِنَّهُ كَانَ مِنَ الضَّالِّينَ ﴿٨٧﴾

88．人々が甦らされる日、（注 30）我が面目を汚すなかれ。

وَلَا تُخْزِنِي يَوْمَ يُبْعَثُونَ ﴿٨٨﴾

注 27　アブラハムは、病の原因は自らにあり、治癒は神のおかげと考えている事がこの節に書かれてある。事実、人に降り懸かる災いは全て、人が自然の法に触れた為に起きたのであり、それ由、その者自身に責任があるのである。4 章 80 節も参照の事。

注 28　アブラハムは病の原因は自らにあるとしているが、一方、死を神の恩恵と捕らえている。死は恐れるものでも避けるものでもない。事実、死は人生の自然にして必要なる終わりであり、それは生命と共に、神の偉大なる賜物である。

注 29　アブラハムはその良き名を後世に残した。後の世の三大宗教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教はアブラハムを偉大なる先祖、精神の祖と仰ぎ、崇めている。

注 30　死後に人が新しくより良い権利を授けられ、精神的に成長する道が開かれていること。

89．その日、富も子女も何ら助けとならざらん。

يَوْمَ لَا يَنْفَعُ مَالٌ وَّلَا بَنُوْنَ ﴿٨٩﴾

90．ただ健全な真心をアッラーに捧げまつる者のみ救われん」と。

اِلَّا مَنْ اَتَى اللّٰهَ بِقَلْبٍ سَلِيْمٍ ﴿٩٠﴾

91．楽園は義しき者の近くにもたらされん。(注 31)

وَاُزْلِفَتِ الْجَنَّةُ لِلْمُتَّقِيْنَ ﴿٩١﴾

92．迷える者どもには、地獄が開かれん。

وَبُرِّزَتِ الْجَحِيْمُ لِلْغٰوِيْنَ ﴿٩٢﴾

93．而して、彼等は問われん、「お前たちがアッラー以外に崇めしものは、今何處に在るぞや？

وَقِيْلَ لَهُمْ اَيْنَمَا كُنْتُمْ تَعْبُدُوْنَ ﴿٩٣﴾

94．彼等はお前たちを助け得るか、或いは自らを助け得るか？」と。

مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ هَلْ يَنْصُرُوْنَكُمْ اَوْ يَنْتَصِرُوْنَ ﴿٩٤﴾

95．かくの如くにして、その者どもは地獄にまっさかさまに投げ込まれん、彼等並びに迷いたる者ども、

فَكُبْكِبُوْا فِيْهَا هُمْ وَالْغَاوٗنَ ﴿٩٥﴾

96．及びイブリースの軍勢も、皆同時に。

وَجُنُوْدُ اِبْلِيْسَ اَجْمَعُوْنَ ﴿٩٦﴾

97．彼等は其處で互いに争いて、云わん、

قَالُوْا وَهُمْ فِيْهَا يَخْتَصِمُوْنَ ﴿٩٧﴾

98．「アッラーに誓って云う、我等は明白なる迷誤なりき、

تَاللّٰهِ اِنْ كُنَّا لَفِيْ ضَلٰلٍ مُّبِيْنٍ ﴿٩٨﴾

99．我等がお前たちを万物の主に比肩したるは。

اِذْ نُسَوِّيْكُمْ بِرَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿٩٩﴾

100．我等を迷わしめたる者は、ただ罪人のみ。

وَمَآ اَضَلَّنَآ اِلَّا الْمُجْرِمُوْنَ ﴿١٠٠﴾

101．而して、今、我等には如何なる弁護者もなく、

فَمَا لَنَا مِنْ شَافِعِيْنَ ﴿١٠١﴾

102．また、同情を寄せる友もなし。

وَلَا صَدِيْقٍ حَمِيْمٍ ﴿١٠٢﴾

103．我等現世に戻り得るなら、必ず信者となるべきものを！」と。

فَلَوْ اَنَّ لَنَا كَرَّةً فَنَكُوْنَ مِنَ الْمُؤْمِنِيْنَ ﴿١٠٣﴾

104．げにこの中には神兆あり。然れども、彼等の大半は信ぜざるなり。

اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً ۗ وَمَا كَانَ اَكْثَرُهُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ﴿١٠٤﴾

注 31　正義なる者は天国に入いる新たなより良い権利を与えられるとここに書かれてある。

105.　げに汝の主、すなわち彼は、偉大にして、慈悲深くまします。

وَإِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ﴿١٠٥﴾

第六項

106.　ノアの一族も使徒たちを嘘つきとして遇したり、

كَذَّبَتْ قَوْمُ نُوحٍ الْمُرْسَلِينَ ﴿١٠٦﴾

107.　彼等の兄弟ノアが彼等に向って、かく云いし時。「お前たち神を畏れざるか？

إِذْ قَالَ لَهُمْ أَخُوهُمْ نُوحٌ أَلَا تَتَّقُونَ ﴿١٠٧﴾

108.　げに我は、お前たちへ遣わされたる忠実なる使徒なり。

إِنِّي لَكُمْ رَسُولٌ أَمِينٌ ﴿١٠٨﴾

109.　されば、アッラーを畏み奉り、而して、我に従え。（注 32）

فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُونِ ﴿١٠٩﴾

110.　我はこの為に如何なる報酬もお前たちに請いはせぬ。我が報酬はただ万物の主の許にあり。

وَمَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا عَلَىٰ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿١١٠﴾

111.　されば、アッラーを畏み奉り、而して、我に従え」

فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُونِ ﴿١١١﴾

112.　彼等は云えり、「汝に従うは卑賤最たる者のみなのに、我等に汝を信ぜよとな？」と。

قَالُوا أَنُؤْمِنُ لَكَ وَاتَّبَعَكَ الْأَرْذَلُونَ ﴿١١٢﴾

113.　ノアは云えり、「我、彼等がして来たことについて、何の知るところあらんや？

قَالَ وَمَا عِلْمِي بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١١٣﴾

114.　彼等の勘定はただ主の許に在り。もしお前たちが理解するならば！（注 33）

إِنْ حِسَابُهُمْ إِلَّا عَلَىٰ رَبِّي لَوْ تَشْعُرُونَ ﴿١١٤﴾

115.　ともあれ、我は信仰する者たちを追い払わんとする者に非ず。（注 34）

وَمَا أَنَا بِطَارِدِ الْمُؤْمِنِينَ ﴿١١٥﴾

116.　我はただ一介の警告者にすぎず」と。

إِنْ أَنَا إِلَّا نَذِيرٌ مُبِينٌ ﴿١١٦﴾

117.　彼等は云えり、「ノアよ、汝やめぬなら、汝は必ず石を以て打たるる身とならん」と。

قَالُوا لَئِنْ لَمْ تَنْتَهِ يَا نُوحُ لَتَكُونَنَّ مِنَ الْمَرْجُومِينَ ﴿١١٧﴾

118.　ノアは云えり、「主よ、我が民は我を嘘つきとして遇したり。

قَالَ رَبِّ إِنَّ قَوْمِي كَذَّبُونِ ﴿١١٨﴾

注 32　「アッラー畏み奉り、而して、我に従え。」という言葉は、この章で全ての預言者が人々に告げて来たものであるが、これは、神の啓示にある一般的な戒律とは別に、その時々の預言者の教えに従う様人々に示されたものである。

注 33　クルアーンは、異なる地域で五つの異なる語に訳され、内容もそれぞれの地域の特殊性に沿い、理解され易い様に書かれて来た。それ等は基本的には同じものだが、意味の細い点に違いがある。

注 34　神の預言者と一般の人々では、人生の価値判断の基準が異なる。前者は人をその行いで、又後者は財産及び社会的地域で判断する。

119．されば、汝、我と彼等との間に断固たる裁きを下し給え。而して、我並びに我と偕にある信者たちを救い給え」と。

فَافْتَحْ بَيْنِي وَبَيْنَهُمْ فَتْحًا وَنَجِّنِي وَمَن مَّعِيَ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ (١١٩)

120．そこでわれらは、ノア並びに彼と偕にある者たちをみな箱舟に積み込んで救いたり。

فَأَنجَيْنَاهُ وَمَن مَّعَهُ فِي الْفُلْكِ الْمَشْحُونِ (١٢٠)

ثُمَّ أَغْرَقْنَا بَعْدُ الْبَاقِينَ (١٢١)

122．げにこの中には神兆あり。然れども、彼等の大半は信ぜざるなり。

إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً ۖ وَمَا كَانَ أَكْثَرُهُم مُّؤْمِنِينَ (١٢٢)

123．げに汝の主、すなわち彼は、偉大にして、慈悲深くまします。

وَإِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ (١٢٣)

第七項

124．アード族も使徒たちを拒みたり、

كَذَّبَتْ عَادٌ الْمُرْسَلِينَ (١٢٤)

125．彼等の兄弟フードが彼等に向って、かく云いし時。「お前たち神を畏れざるか？

إِذْ قَالَ لَهُمْ أَخُوهُمْ هُودٌ أَلَا تَتَّقُونَ (١٢٥)

126．まことに我は、お前たちへ遣わされたる忠実なる信徒なり。

إِنِّي لَكُمْ رَسُولٌ أَمِينٌ (١٢٦)

127．されば、アツラーを畏み奉り、而して、我に従え。

فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُونِ (١٢٧)

128．我はこの為に如何なる報酬もお前たちに請いはせぬ。我が報酬は万物の主の許にあり。

وَمَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ ۖ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا عَلَىٰ رَبِّ الْعَالَمِينَ (١٢٨)

129．お前たちあらゆる高処に記念碑を建つるは、虚しい栄華を求めてか、

أَتَبْنُونَ بِكُلِّ رِيعٍ آيَةً تَعْبَثُونَ (١٢٩)

130．また豪華な館を築いて、永久に生くるつもりか？（注35）

وَتَتَّخِذُونَ مَصَانِعَ لَعَلَّكُمْ تَخْلُدُونَ (١٣٠)

注35　当節及び前、後の節には、アードの人々が強力でしかも高い文化を備えた民族であったと記されてある。彼等は当時科学を非常に進歩させた。要塞・宮殿・大規模な貯水池を建設した。避暑地・工場・機械製作所を所有した。建設技術は特に優れていた。新兵器・戦法を編み出し、巨大な記念卑を建造した。つまり、今日の西側諸国の様に、最進技術を駆使したあらゆる設備を所有していた。彼等は学問において大いなる進歩を遂げたが、しかし歴史の最大の教訓を忘れていた。国家の真の強さは物質によるのではなく、高い特性によりもたらされるのである。彼等は道徳的・精神的に退廃し、行いを改めると告げる預言者の警告に耳を貸さなかった為、神の警告を無視する者の逃がれ得ない恐しい運命に彼等も又陥ったのである。11章51節も参照のこと。

131. 更に、誰かを襲うとなると、暴虐者の如く之を襲う。

وَإِذَا بَطَشْتُمْ بَطَشْتُمْ جَبَّارِينَ ١٣١

132. されば、アツラーを畏み奉り、而して、我に従え。

فَاتَّقُوا اللّٰهَ وَأَطِيعُونِ ١٣٢

133. お前たち知っての通り、さまざまなるものを授け給うたお方を畏み奉れ。

وَاتَّقُوا الَّذِي أَمَدَّكُمْ بِمَا تَعْلَمُونَ ١٣٣

134. 彼はお前たちに家畜と子女らを授け、

أَمَدَّكُمْ بِأَنْعَامٍ وَبَنِينَ ١٣٤

135. また、果樹園と井泉も授けたり。

وَجَنَّاتٍ وَعُيُونٍ ١٣٥

136. げに我はお前たちのために、恐ろしい日の懲罰を恐る」

إِنِّي أَخَافُ عَلَيْكُمْ عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيمٍ ١٣٦

137. 彼等は云えり、「汝が我等に警告するもせざるも、そは我等には同じことなり。

قَالُوا سَوَاءٌ عَلَيْنَا أَوَعَظْتَ أَمْ لَمْ تَكُنْ مِنَ الْوَاعِظِينَ ١٣٧

138. そは往古の作り話にすぎず。

إِنْ هٰذَا إِلَّا خُلُقُ الْأَوَّلِينَ ١٣٨

139. 我等は罰せられざるべし」と。

وَمَا نَحْنُ بِمُعَذَّبِينَ ١٣٩

140. かくて、彼等はフードを拒みたれば、われらは彼等を滅ぼしたり。げにこの中には神兆あり。然れども、彼等の大半は信ぜざるなり。

فَكَذَّبُوهُ فَأَهْلَكْنَاهُمْ ۗ إِنَّ فِي ذٰلِكَ لَآيَةً ۖ وَمَا كَانَ أَكْثَرُهُمْ مُؤْمِنِينَ ١٤٠

141. げに汝の主、すなわち彼は、偉大にして、慈悲深くまします。

وَإِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ١٤١

第八項

142. サムート族も諸使徒を拒みたり、

كَذَّبَتْ ثَمُودُ الْمُرْسَلِينَ ١٤٢

143. 彼等の兄弟サーリフが彼等に向って、かく云いし時。「お前たち邪悪に対してその身を守らざるか？

إِذْ قَالَ لَهُمْ أَخُوهُمْ صَالِحٌ أَلَا تَتَّقُونَ ١٤٣

144. げに我は、お前たちへ遣わされたる忠実な使徒なり。

إِنِّي لَكُمْ رَسُولٌ أَمِينٌ ١٤٤

145. されば、アッラーを畏み奉り、而して、我に従え。

فَاتَّقُوا اللّٰهَ وَأَطِيعُونِ ١٤٥

146. 我はこの為に如何なる報酬もお前たちに請いはせぬ。我が報酬は万物の主の許にあり。

وَمَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ ۖ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا عَلَىٰ رَبِّ الْعَالَمِينَ ١٤٦

147. お前たちは、ここに持ってるものの間で、永く安泰なり得べしと考えるか、

أَتُتْرَكُوْنَ فِيْ مَا هٰهُنَآ اٰمِنِيْنَ ﴿١٤٧﴾

148. すなわち果樹園や井泉、

فِيْ جَنّٰتٍ وَّعُيُوْنٍ ﴿١٤٨﴾

149. 麦畑や枝もたわわに実をつける棗椰子の間で？

وَّزُرُوْعٍ وَّنَخْلٍ طَلْعُهَا هَضِيْمٌ ﴿١٤٩﴾

150. また、巧みに山を切り開いて家を造るとも。

وَتَنْحِتُوْنَ مِنَ الْجِبَالِ بُيُوْتًا فٰرِهِيْنَ ﴿١٥٠﴾

151. されば、アッラーを畏み奉り、而して我に従え。

فَاتَّقُوا اللّٰهَ وَاَطِيْعُوْنِ ﴿١٥١﴾

152. 則を越える者の命令に従うなかれ。

وَلَا تُطِيْعُوْٓا اَمْرَ الْمُسْرِفِيْنَ ﴿١٥٢﴾

153. 彼等は地上に騒動を引きおこし、改善せざる者なり」

الَّذِيْنَ يُفْسِدُوْنَ فِي الْاَرْضِ وَلَا يُصْلِحُوْنَ ﴿١٥٣﴾

154. 彼等は云えり、「汝はただ憑かれたる者にすぎず。

قَالُوْٓا اِنَّمَآ اَنْتَ مِنَ الْمُسَحَّرِيْنَ ﴿١٥٤﴾

155. 汝は我等同様ただの人間にすぎず。もし汝のことばが真実なら、一つの奇跡を現出せよ」と。

مَآ اَنْتَ اِلَّا بَشَرٌ مِّثْلُنَا ۚ فَاْتِ بِاٰيَةٍ اِنْ كُنْتَ مِنَ الصّٰدِقِيْنَ ﴿١٥٥﴾

156. サーリフは云えり、「ここに一頭の牝駱駝あり。駱駝もお前たちも、それぞれ定められた日に水を飲むべし。

قَالَ هٰذِهٖ نَاقَةٌ لَّهَا شِرْبٌ وَّلَكُمْ شِرْبُ يَوْمٍ مَّعْلُوْمٍ ﴿١٥٦﴾

157. 而して、恐ろしい日の罰を被らぬよう、駱駝を害するなかれ。

وَلَا تَمَسُّوْهَا بِسُوْٓءٍ فَيَاْخُذَكُمْ عَذَابُ يَوْمٍ عَظِيْمٍ ﴿١٥٧﴾

158. 然るに、彼等はその膕を切断せり。然る後、彼等は後悔せり。

فَعَقَرُوْهَا فَاَصْبَحُوْا نٰدِمِيْنَ ﴿١٥٨﴾

159. 懲罰彼等を襲えるが故なり。げにこの中には神兆あり。然れども、彼等の大半は信ぜざるなり。

فَاَخَذَهُمُ الْعَذَابُ ۗ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً ۗ وَمَا كَانَ اَكْثَرُهُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ﴿١٥٩﴾

160. げに汝の主、すなわち彼は、偉大にして、慈悲深くまします。

وَاِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيْزُ الرَّحِيْمُ ﴿١٦٠﴾

第九項

161. ロトの民も諸使徒を拒みたり、

كَذَّبَتْ قَوْمُ لُوْطِ ۣالْمُرْسَلِيْنَ ﴿١٦١﴾

162. 彼等の兄弟ロトが彼等に向って、かく云いし時。「お前たち神を畏れざるか？

اِذْ قَالَ لَهُمْ اَخُوْهُمْ لُوْطٌ اَلَا تَتَّقُوْنَ ﴿١٦٢﴾

163.　げに我は、お前たちへ遣わされたる忠実なる使徒なり。

إِنِّي لَكُمْ رَسُولٌ أَمِينٌ ﴿١٦٢﴾

164.　されば、アッラーを畏み奉り、而して、我に従え。

فَاتَّقُوا اللّٰهَ وَأَطِيعُونِ ﴿١٦٣﴾

165.　我はこの為に如何なる報酬もお前たちに請いはせぬ。我が報酬は万物の主の許にあり。

وَمَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ ۚ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا عَلٰى رَبِّ الْعٰلَمِينَ ﴿١٦٤﴾

166.　お前たち、男にのみ近づいて、

أَتَأْتُونَ الذُّكْرَانَ مِنَ الْعٰلَمِينَ ﴿١٦٥﴾

167.　主がお前たちのために創りたまいし妻を捨て置くか？いや、全くお前たちは則を越えたる人々なり。」

وَتَذَرُونَ مَا خَلَقَ لَكُمْ رَبُّكُمْ مِنْ أَزْوَاجِكُمْ ۚ بَلْ أَنْتُمْ قَوْمٌ عَادُونَ ﴿١٦٦﴾

168.　彼等は云えり、「ロトよ、汝やめぬなら、汝は必ず追放せらるべし」と。

قَالُوا لَئِنْ لَمْ تَنْتَهِ يٰلُوطُ لَتَكُونَنَّ مِنَ الْمُخْرَجِينَ ﴿١٦٧﴾

169.　ロトは云えり、「我は心からお前たちの行状を憎む。

قَالَ إِنِّي لِعَمَلِكُمْ مِنَ الْقَالِينَ ﴿١٦٨﴾

170.　主よ、我と我が家族を彼等の所業より救い給え」と。

رَبِّ نَجِّنِي وَأَهْلِي مِمَّا يَعْمَلُونَ ﴿١٦٩﴾

171.　かくて、われらはロト並びにその家族のすべてを救いたり、

فَنَجَّيْنٰهُ وَأَهْلَهُ أَجْمَعِينَ ﴿١٧٠﴾

172.　あとに残れる者の中に入りたる一老女を除いて。

إِلَّا عَجُوزًا فِي الْغٰبِرِينَ ﴿١٧١﴾

173.　然る後、われらはその残餘者をみな滅ぼせり。

ثُمَّ دَمَّرْنَا الْأٰخَرِينَ ﴿١٧٢﴾

174.　而して、われらは彼等の上に雨を降らせたり。警告を受けたる者どもに降りかかりしその雨や、苛酷なりき。

وَأَمْطَرْنَا عَلَيْهِمْ مَطَرًا ۚ فَسَاءَ مَطَرُ الْمُنْذَرِينَ ﴿١٧٣﴾

175.　げにこの中には神兆あり。然れども、彼等の大半は信ぜざるなり。

إِنَّ فِي ذٰلِكَ لَأٰيَةً ۖ وَمَا كَانَ أَكْثَرُهُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿١٧٤﴾

176.　げに汝の主、すなわち彼は、偉大にして、慈悲深くまします。

وَإِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ﴿١٧٥﴾

第十項

177.　森に住む人々も諸使徒を拒みたり、

كَذَّبَ أَصْحٰبُ لْـَٔيْكَةِ الْمُرْسَلِينَ ﴿١٧٦﴾

178.　シュアイブが彼等に向って、かく云いし時。「お前たち神を畏れざるか？

إِذْ قَالَ لَهُمْ شُعَيْبٌ أَلَا تَتَّقُونَ ﴿١٧٧﴾

179.　げに我は、お前たちへ遣わされたる忠実なる使徒なり。

إِنِّي لَكُمْ رَسُولٌ أَمِينٌ ﴿١٧٩﴾

180.　されば、アッラーを畏み奉り、而して、我に従え。

فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُونِ ﴿١٨٠﴾

181.　我はこの為に如何なる報酬もお前たちに請いはせぬ。我が報酬は万物の主の許にあり。

وَمَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا عَلَىٰ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿١٨١﴾

182.　枡目は十分に与え、ごまかす者となるなかれ。

أَوْفُوا الْكَيْلَ وَلَا تَكُونُوا مِنَ الْمُخْسِرِينَ ﴿١٨٢﴾

183.　正確な秤を以て計量し、

وَزِنُوا بِالْقِسْطَاسِ الْمُسْتَقِيمِ ﴿١٨٣﴾

184.　他人の物を減少し、不正をなして地上を撹乱するなかれ。

وَلَا تَبْخَسُوا النَّاسَ أَشْيَاءَهُمْ وَلَا تَعْثَوْا فِي الْأَرْضِ مُفْسِدِينَ ﴿١٨٤﴾

185.　而して、お前たち並びに前代の諸民族を創れる彼を畏み奉れ」

وَاتَّقُوا الَّذِي خَلَقَكُمْ وَالْجِبِلَّةَ الْأَوَّلِينَ ﴿١٨٥﴾

186.　彼等は云えり、「汝はただ憑かれたる者にすぎず。

قَالُوا إِنَّمَا أَنْتَ مِنَ الْمُسَحَّرِينَ ﴿١٨٦﴾

187.　我等同様ただの人間にすぎず。我等は汝を嘘つきと看做す。

وَمَا أَنْتَ إِلَّا بَشَرٌ مِثْلُنَا وَإِنْ نَظُنُّكَ لَمِنَ الْكَاذِبِينَ ﴿١٨٧﴾

188.　もし汝の言葉が真実ならば、天の断片を我等の上に落下せしめよ」と。

فَأَسْقِطْ عَلَيْنَا كِسَفًا مِنَ السَّمَاءِ إِنْ كُنْتَ مِنَ الصَّادِقِينَ ﴿١٨٨﴾

189.　シュアイブは云えり、「我が主は、お前たちのなせることを最もよく知り給う」と。(注 36)

قَالَ رَبِّي أَعْلَمُ بِمَا تَعْمَلُونَ ﴿١٨٩﴾

190.　かくて、彼等はシュアイブを嘘つきとして宣したり。されば、陰惨な日の懲罰彼等を襲えり。そはまことに恐ろしい懲罰の日なりき。

فَكَذَّبُوهُ فَأَخَذَهُمْ عَذَابُ يَوْمِ الظُّلَّةِ إِنَّهُ كَانَ عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيمٍ ﴿١٩٠﴾

注 36　自らに科せられる裁きを取り除こうとする人々の傲慢な態度に対し、シュアイブ預言者は次の様に答えた。不完全な知識しか持ち合わせない者が、裁きを科すべきか否か、又裁きがいつ科せられるべきであるか決める事はできない。それができるのは天地創造の神のみである。彼等の行いを全て熟知された神のみが、各々にふさわしい裁きを下されるのである。

191.　げにこの中には神兆あり。然れども、彼等の大半は信ぜざるなり。

إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً ۖ وَمَا كَانَ أَكْثَرُهُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿١٩١﴾

192.　げに汝の主、すなわち彼は、偉大にして、慈悲深くまします。

وَإِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ﴿١٩٢﴾

第十一項

193.　まことにこれは、万物の主よりの啓示なり。（注 37）

وَإِنَّهُ لَتَنْزِيلُ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿١٩٣﴾

194.　かの忠誠なる聖霊之を携えて

نَزَلَ بِهِ الرُّوحُ الْأَمِينُ ﴿١٩٤﴾

195.　汝の心に降りたるは、汝をして警告者たらしめんがためなり、（注 38）

عَلَىٰ قَلْبِكَ لِتَكُونَ مِنَ الْمُنْذِرِينَ ﴿١٩٥﴾

196.　平明にして明快なるアラビア語において。

بِلِسَانٍ عَرَبِيٍّ مُبِينٍ ﴿١٩٦﴾

197.　この事はすでに、昔の人々の経典の中で言及す。（注 39）

وَإِنَّهُ لَفِي زُبُرِ الْأَوَّلِينَ ﴿١٩٧﴾

198.　イスラエルの子孫の学者が之を知るは、彼等にとりて明証に非ざるか？

أَوَلَمْ يَكُنْ لَهُمْ آيَةً أَنْ يَعْلَمَهُ عُلَمَاءُ بَنِي إِسْرَائِيلَ ﴿١٩٨﴾

199.　もしわれら之をアラブ以外の者に降し、

وَلَوْ نَزَّلْنَاهُ عَلَىٰ بَعْضِ الْأَعْجَمِينَ ﴿١٩٩﴾

200.　その者がアラブの彼等に読誦するとも、彼等はそれを信ぜざるべし。

فَقَرَأَهُ عَلَيْهِمْ مَا كَانُوا بِهِ مُؤْمِنِينَ ﴿٢٠٠﴾

201.　故にわれらは、罪深い者の心に不信を植え付けり。（注 40）

كَذَٰلِكَ سَلَكْنَاهُ فِي قُلُوبِ الْمُجْرِمِينَ ﴿٢٠١﴾

注 37　先に述べた預言者のお告げと同じく、クルアーンのお告げも又神により啓示されたものである。唯、違いは、先の預言者達が一族の長である人々に使わされたのに対し、クルアーンは世界中の人々に啓示されたものである。これは次の一文から明らかである。「まことにこれは、万物の主よりの啓示なり。」

注 38　「汝の心」という語は次の事を示している。クルアーンのお告げはモハッマド預言者が、授けられた啓示を自らの言葉で表現したものではなく、ガブリエルを通してモハッマド預言者の心に下された神御自身の言葉であった。

注 39　モハッマド預言者の出現及びクルアーンの啓示の予告がそれ以前の諸経典に記されている。あらゆる宗教の経典に見られるが、特に聖書がクルアーン前に、よく知られ、読まれていた経典であったので、その中にモハッマド預言者の出現についての部分があるので示す（申命記 18 章 18～33 節イザヤ 21 章 13～17 節詩篇 1 章 5・6 節、ハブワーク 3 章 3～5 節、マタイ 21 章 42～45 節、ヨハネ 16 章 12～14 節）。

注 40　不信者の悪習は自らの心に根差し、悪事にふける中で生じるものであり、外から入って来るものではない。事実この節である一般的な真実が述べられている。人が悪事にふける時、罪の意識は鈍り、やがては悪事を好む様にすらなる。この様に、悪は人の心を蝕んで行くのである。

202. 彼等は痛刑を日の当たりに見るまでは、之を信ぜざるべし。

لَا يُؤْمِنُونَ بِهِ حَتَّىٰ يَرَوُا الْعَذَابَ الْأَلِيمَ ٢٠٢

203. 然れども、刑罰は、彼等が気付かぬ間に、突然襲わん。

فَيَأْتِيَهُم بَغْتَةً وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ٢٠٣

204. すると、彼等は云わん、「我等は猶予を与えられざるか？」と。

فَيَقُولُوا هَلْ نَحْنُ مُنظَرُونَ ٢٠٤

205. なんとな！彼等はわれらの懲罰を急ぎ求めんとな？

أَفَبِعَذَابِنَا يَسْتَعْجِلُونَ ٢٠٥

206. 汝は如何に思うか？たといわれらが彼等をこの世で長年楽しませようとも、

أَفَرَأَيْتَ إِن مَّتَّعْنَاهُمْ سِنِينَ ٢٠٦

207. 約束された懲罰に見舞われなば、

ثُمَّ جَاءَهُم مَّا كَانُوا يُوعَدُونَ ٢٠٧

208. 楽しめることは、彼等にとりて、益するところ何もなし。

مَا أَغْنَىٰ عَنْهُم مَّا كَانُوا يُمَتَّعُونَ ٢٠٨

209. されど、われらは、警告者を遣わさずして、いまだかつて如何なる邑も滅ぼさざりき。（注41）

وَمَا أَهْلَكْنَا مِن قَرْيَةٍ إِلَّا لَهَا مُنذِرُونَ ٢٠٩

210. こは警告なり。われらは不当に処罰を施す者に非ず。

ذِكْرَىٰ وَمَا كُنَّا ظَالِمِينَ ٢١٠

211. 悪魔は、それを携えて降りたることなし。

وَمَا تَنَزَّلَتْ بِهِ الشَّيَاطِينُ ٢١١

212. 彼等はその任にふさわしからず、またかかる能力もなし。（注42）

وَمَا يَنبَغِي لَهُمْ وَمَا يَسْتَطِيعُونَ ٢١٢

213. 彼等は、天上の話を聴くを禁じられているなり。

إِنَّهُمْ عَنِ السَّمْعِ لَمَعْزُولُونَ ٢١٣

214. されば、処罰されざるように、アッラー以外に如何なる他神も祈るなかれ。（注43）

فَلَا تَدْعُ مَعَ اللَّهِ إِلَٰهًا آخَرَ فَتَكُونَ مِنَ الْمُعَذَّبِينَ ٢١٤

注41　この節には、神の啓示の一つが示されている。預言者が遣わされた時、彼を拒否する事で裁きを逃がれ様としなければ、裁きが下される事はない。17章16節、28章60節、35章38節も参照のこと

注42　クルアーン製作にあたりサタンは如何なる働きもできなかったとする主張を指示する文が三つ、この節に含まれている。(a)クルアーンの教えは、サタンの表わす物全てを断固として非難する。(b)クルアーンは高い特性をを備え、サタンの力を上回る崇高な真実を記している。(c)クルアーンには、イスラム教の究極的な勝利が預言されている。サタンは未来に対する見識を持たない為、預言を行う力がない。

注43　クルアーンが悪魔の成せる業であるはずがない。悪魔の手になる物であれば、クルアーンに見られる様に唯一神に重きを置く事は有り得ない。

215. 而して、一番身近な同族の者に警告せよ。(注 44)

وَأَنْذِرْ عَشِيرَتَكَ الْأَقْرَبِينَ ٢١٥

216. また、汝に従う信者たちに慈悲の翼を低く垂れよ。

وَاخْفِضْ جَنَاحَكَ لِمَنِ اتَّبَعَكَ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ ٢١٦

217. もし彼等汝に背かば、その時は云え、「我はお前たちの為すことに一切関りなし」と。(注 45)

فَإِنْ عَصَوْكَ فَقُلْ إِنِّي بَرِيءٌ مِمَّا تَعْمَلُونَ ٢١٧

218. 汝の信頼を、偉力者、慈悲者に託せ。

وَتَوَكَّلْ عَلَى الْعَزِيزِ الرَّحِيمِ ٢١٨

219. 彼は汝が礼拝に立つを見、

الَّذِي يَرَاكَ حِينَ تَقُومُ ٢١٩

220. また、アッラーの前で平伏す者たちの中にある汝の動作をみそなはし給う。

وَتَقَلُّبَكَ فِي السَّاجِدِينَ ٢٢٠

221. げに彼は、すべてを聴き、すべてを知り給う。

إِنَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ٢٢١

222. 誰が上に悪魔たちが降るかを、われお前たちに教えようか？

هَلْ أُنَبِّئُكُمْ عَلَىٰ مَنْ تَنَزَّلُ الشَّيَاطِينُ ٢٢٢

223. 彼等は、あらゆる大嘘つきと犯罪者どもの上に降る。

تَنَزَّلُ عَلَىٰ كُلِّ أَفَّاكٍ أَثِيمٍ ٢٢٣

224. 彼等はその聴きたることを復唱すれど、彼等の大半は嘘つきなり。

يُلْقُونَ السَّمْعَ وَأَكْثَرُهُمْ كَاذِبُونَ ٢٢٤

225. 而して、詩人たちはどうかと云えば、彼等に従うは誤る者のみ。

وَالشُّعَرَاءُ يَتَّبِعُهُمُ الْغَاوُونَ ٢٢٥

226. 汝は彼等が、いたるところの谷間で、取り乱しさまよう姿を、

أَلَمْ تَرَ أَنَّهُمْ فِي كُلِّ وَادٍ يَهِيمُونَ ٢٢٦

227. また己れのやりもせぬことを云うのを見ざるか？ (注 46)

وَأَنَّهُمْ يَقُولُونَ مَا لَا يَفْعَلُونَ ٢٢٧

注 44　記録によれば、この節が啓示された時、モハッマド預言者はサファーに立ち、全てのクライシュ族の名を呼び、モハッマド預言者の言葉を受け入れ悪業を断たねば神の裁きが下ると彼等に警告した。(ブハリ)

注 45　私は貴人から自由だ。貴人の行いとは無関係だ。貴人の行為に対して一切責任を負わない。

注 46　この節には、モハッマド預言者が詩人であるという非難に対する反論が書かれてある。その三つの反証とは次の様なものである。(1)詩人に従う者は高い徳性を備えてはいないが、モハッマド預言者に従う者は高尚な考えと高い徳性を持つ。(2)詩人は人生に対する確固たる考えや計画を持たない。言わば、あてどなく谷を

228. 但し、信じて義(ただ)しい行いにいそしみ、大いにアッラーを念じ、不当な取り扱いをされたる時のみ報復する者は除かれる。而(しか)して、不義なす徒輩(やから)は、やがて如何なるところに帰り行くかを知るに至らん。

إِلَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ وَذَكَرُوا اللَّهَ
كَثِيرًا وَانْتَصَرُوا مِنْ بَعْدِ مَا ظُلِمُوا ۗ وَسَيَعْلَمُ
الَّذِينَ ظَلَمُوا أَيَّ مُنْقَلَبٍ يَنْقَلِبُونَ ﴿٢٢٨﴾

さまよう様なものである。しかし、モハッマド預言者は偉大で崇高なる人生の使命を持つ。(3)詩人は自らの言葉を行為に移さない。しかしモハッマド預言者は最高の説教者であると共に、最高の実行者であり、模範である。

سُوْرَةُ النَّمْلِ مَكِّيَّةٌ

アル・ナマル
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．ター・スィーン。(注1)こはクルアーンにして、人々を啓発する経典の諸節、

طٰسٓ تِلْكَ اٰيٰتُ الْقُرْاٰنِ وَكِتَابٍ مُّبِيْنٍ ②

3．信仰する人々への嚮導(きょうどう)と朗報なり、

هُدًى وَّبُشْرٰى لِلْمُؤْمِنِيْنَ ③

4．礼拝を遵守し、喜捨をなし、来世について毅然(きぜん)たる信念を持つ者への。

الَّذِيْنَ يُقِيْمُوْنَ الصَّلٰوةَ وَيُؤْتُوْنَ الزَّكٰوةَ وَهُمْ بِالْاٰخِرَةِ هُمْ يُوْقِنُوْنَ ④

5．来世を信ぜざる徒輩(やから)については、われら彼等をして己れの所業を立派なことと思わしめたれば、彼等は惑(まど)いさまよう。(注2)

اِنَّ الَّذِيْنَ لَا يُؤْمِنُوْنَ بِالْاٰخِرَةِ زَيَّنَّا لَهُمْ اَعْمَالَهُمْ فَهُمْ يَعْمَهُوْنَ ⑤

6．恐ろしい責苦を受くるは彼等にして、来世に於ては最も大なる損失者たらん。

اُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ لَهُمْ سُوْٓءُ الْعَذَابِ وَهُمْ فِي الْاٰخِرَةِ هُمُ الْاَخْسَرُوْنَ ⑥

7．げに汝は、このクルアーンを、賢哲にして深知なる御方より授けられたる者なり。(注3)

وَاِنَّكَ لَتُلَقَّى الْقُرْاٰنَ مِنْ لَّدُنْ حَكِيْمٍ عَلِيْمٍ ⑦

8．モーゼがその家族の者に、「我燃ゆる火を認めたり。(注4)我行きて、其処(そこ)より消息を

اِذْ قَالَ مُوْسٰى لِاَهْلِهٖٓ اِنِّيْٓ اٰنَسْتُ نَارًا سَاٰتِيْكُمْ

注1　恵み深く、すべてを聴く神！

注2　人に悪行をそそのかすサタンが人の目に美しく映る事が6：44及び8：49に明示されている。しかし当節では、不信心者の行為が当人に良く見える様神が仕向けられていると書かれてある。人が、自らの行為に責任を感じないまま悪の道を進む時、彼がその行為を正しく適切だと思い始めるのは当然であり、こうして彼はその誤った考えに捕らわれる様になるのである。これは、実の所彼自身の行為の所産と言うよりは、神の法に沿った出来事であり、神に起因するものである。

注3　モハッマド預言者が自らの言葉を書き綴った本をクルアーンと名付けたという非難に対し、この節はそれを明確に否定している。更に、彼が全智全能の神より直接にクルアーンを授けられたと明示している。

注4　モーゼが目にしたのは現実の火ではない。もしそうであれば「我燃ゆる火を認めたり。」という表現をせずに「我、その燃ゆる火を認めたり。」と言ったであろう。クルアーンに書かれたモーゼに関する主な出来事の多くは、物質界で現実に起きた事ではなく、モーゼの精神的発達途上における出来事を象徴しており、預言としての意味を持つ。クルアーンには、杖に関する幻以外にも重要な例が挙げられており、当節も又その一つである。

مِّنْهَا بِخَبَرٍ أَوْ آتِيكُم بِشِهَابٍ قَبَسٍ لَّعَلَّكُمْ تَصْطَلُونَ ٨

もたらさん。或いは、燃えさしを持ち帰らん、さすればお前たち暖を得べし」と云える時を念え。

فَلَمَّا جَاءَهَا نُودِيَ أَن بُورِكَ مَن فِي النَّارِ وَمَنْ حَوْلَهَا ۚ وَسُبْحَانَ اللَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ ٩

9．彼そこに到るや、声ありて、仰せられり、「火を求める者並びにその周囲におる者に祝福あれ。(注5)万物の主、アッラーに讃えあれ。

يَا مُوسَىٰ إِنَّهُ أَنَا اللَّهُ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ١٠

10．モーゼよ、げにわれこそは偉大にして、賢哲なるアッラーなり。

وَأَلْقِ عَصَاكَ ۚ فَلَمَّا رَآهَا تَهْتَزُّ كَأَنَّهَا جَانٌّ وَلَّىٰ مُدْبِرًا وَلَمْ يُعَقِّبْ ۚ يَا مُوسَىٰ لَا تَخَفْ إِنِّي لَا يَخَافُ لَدَيَّ الْمُرْسَلُونَ ١١

11．汝の杖を投げよ」と。モーゼ投げたる杖が蛇の如く動くを見るや、(注6)背を向けてあとをも見ずに逃げだせり。「モーゼよ、恐れるなかれ。われ汝と偕にあり。使徒たるものは、わが前で恐れる必要なし。

إِلَّا مَن ظَلَمَ ثُمَّ بَدَّلَ حُسْنًا بَعْدَ سُوءٍ فَإِنِّي غَفُورٌ رَّحِيمٌ ١٢

12．罪を犯せし者でも、その後、善を以て悪に替えたる者には、われまことに慈悲深く寛大なり。

وَأَدْخِلْ يَدَكَ فِي جَيْبِكَ تَخْرُجْ بَيْضَاءَ مِنْ غَيْرِ سُوءٍ ۖ فِي تِسْعِ آيَاتٍ إِلَىٰ فِرْعَوْنَ وَقَوْمِهِ ۚ إِنَّهُمْ كَانُوا قَوْمًا فَاسِقِينَ ١٣

13．汝の手を懐中に入れよ。そは病に非ざるに、白くなりて出でん。こはファラオとその民に示す九種の奇跡の一つなり。彼等は実に罪深き徒輩なり」(注7)

فَلَمَّا جَاءَتْهُمْ آيَاتُنَا مُبْصِرَةً قَالُوا هَٰذَا سِحْرٌ مُّبِينٌ ١٤

14．然るに、われらの明瞭なるさまざまな奇跡が彼等の前で生じても、彼等は「こは明白なる妖術なり」と云えり。

وَجَحَدُوا بِهَا وَاسْتَيْقَنَتْهَا أَنفُسُهُمْ ظُلْمًا وَعُلُوًّا ۚ فَانظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُفْسِدِينَ ١٥

15．彼等は心の裡ではそれが真実なるを悟れども、その無理驕傲を以て之を認めざりき。然れども、これ等堕落せし徒輩の末路が如何に不幸なりしかを見よ！

注5　この言葉は次の様な意味を持つ。(a)火を捜し求め、それに近付く者。(b)火の中に居る者、あるいは火に入ろうとしている者。処所での火は、神の愛の火、又は災難の火を象徴している。この節に書かれた火とは神の事ではなく、又火の中に神が居られたのでもない。それは唯、囲りのもの全てに光を投げかける神の出現であった。

注6　7章108節参照

注7　「九種の奇跡」については17：102参照。

第二項

16．またわれらは、ダビデ並びにソロモンに知識を授けたれば、(注８)彼等は云えり、「彼を信ずる多くの僕らに優りて、我等を高めたるアッラーに讃えあれ」と。

وَلَقَدْ آتَيْنَا دَاوُدَ وَسُلَيْمَٰنَ عِلْمًا ۖ وَقَالَا الْحَمْدُ لِلَّهِ الَّذِي فَضَّلَنَا عَلَىٰ كَثِيرٍ مِّنْ عِبَادِهِ الْمُؤْمِنِينَ ﴿١٦﴾

17．ソロモンはダビデの継承者なりき。彼は云えり、「汝等人々よ、我等は鳥の言葉を教えられ、(注９)且つすべてのものを授けられり。これこそ神の明白なる恩寵なり」と。

وَوَرِثَ سُلَيْمَٰنُ دَاوُدَ ۖ وَقَالَ يَا أَيُّهَا النَّاسُ عُلِّمْنَا مَنطِقَ الطَّيْرِ وَأُوتِينَا مِن كُلِّ شَيْءٍ ۖ إِنَّ هَٰذَا لَهُوَ الْفَضْلُ الْمُبِينُ ﴿١٧﴾

18．妖霊と人間(注10)と鳥類（注11）からなる軍勢がソロモンのもとに集められ、それぞれの部隊に編成されて、（注12）

وَحُشِرَ لِسُلَيْمَٰنَ جُنُودُهُ مِنَ الْجِنِّ وَالْإِنسِ وَالطَّيْرِ فَهُمْ يُوزَعُونَ ﴿١٨﴾

注８　ダビデは優れた武人であり、又強力にして賢明な政治家でもあった。彼はユダヤ王朝の創設者であり、ヘブライ王国の真の建国者であった。ダンからビールシェバに至るまで、イスラエルの全支族は彼の下に統一し、ユーフラテスからナイルに至る広大な地域を支配する強力な王国を築き上げた。父のダビデの後を継いだソロモンは、この王国をより強力なものにした。彼も又、優れた君主であった。彼は自国の商業を大いに発展させた。彼はイスラエルの王の中の王であり、エルサレムに有名な寺院を建てた事で良く知られている。エルサレムは後に、イスラエルの祈りの方角となった。

注９　言葉とは、意志を表わす音声と文字のことである。それは外的には口語、内的には理解となる。又トゥクという語は動物や鳥が抽象的な意味で扱われる時にも用いられる。鳥や昆虫は独自の意志伝達手段を持つ。渡り鳥は季節の移り変わりと共に地域から地域へと移動する。彼等は群れをなして整然と飛ぶ。同じ様に、蟻は共同体の中で生活し、蜂は統制された支配系統を持つ。彼等の間に意志伝達手段がなければ、この様な事は不可能である。この伝達手段は、彼等の言葉と言えるであろう。預言者ダビデ及びソロモンが鳥の言葉を学んだとここに書かれてあるが、それは、彼等が鳥の利用法を知った事を示しているのかもしれない。伝言を送るのに鳥を利用する方法はソロモンが考え出したもので、この方法を多用して広大な国を統治したのである。

注10　ジンは此の節では、山又は未開の部族を指す。当節は21：83, 34：13, 38：38と併読すれば良い。処々では、ソロモンの軍勢の統率者について述べられている。ジン，インス，タエルこの三つの言葉は、彼の軍隊の三部門を示す。当節及び34：13にあるジンは軍隊の特殊部隊を示しているが、21：83, 38：38ではシャヤーティーンが同様に使われている。ソロモンは未開部族を征服したが、ジンとシャヤーティーンはほぼ同じ意味で使われており、軍の中枢部隊を形成し、ソロモンの為に様々な難事業を為した者達を指している。足の速い馬という意味の語タエル（鳥）は、ソロモンの騎兵隊を示している。これは38：32・34で裏付けられており、そこには、ソロモンが馬を非常に可愛がっていたと書かれてある。以上の通り、ジン（選良）とインス（庶民）はソロモンの歩兵隊の二部門を指し、タエルは騎馬隊を指す。しかし、もしタエルを実際の鳥という意味にとるなら、ソロモンが通信に使った鳥を指すだろう。この様に彼等はソロモンの軍隊にとり、無くてはならない存在であった。また、この三語を隠喩的に解釈すれば、それぞれ「高位の人」「俗人」「高潔な人」を指す。

注11　タエルは、鳥という意味の他に、馬の様に足の速い動物も指す。タエルの強意形であるタヤールは、機敏で足の速い馬を指し、走る速度が非常に速く、まるで飛んでいる様に見えるのである。

注12　この表現は⑴彼等が二つの隊を形成していたことを表わす。⑵彼等は秩序ある軍隊の様に行進した。⑶先頭部隊が停止したので、後継部隊は追い付けたのかもしれない。この文から分かる様に、ソロモンの軍隊はよく訓練され規則正しく、数部隊に分かれていた。

19. 彼等が蟻の谷にさしかかると、(注 13) 一人の蟻族の女が「蟻族よ、自分の住居に入れ、ソロモンの率いる軍勢が、それとは知らず、お前たちを踏みつぶさぬように」と云えり。(注 14)

حَتّٰۤى اِذَاۤ اَتَوْا عَلٰى وَادِ النَّمْلِ ۙ قَالَتْ نَمْلَةٌ يّٰۤاَيُّهَا النَّمْلُ ادْخُلُوْا مَسٰكِنَكُمْ ۚ لَا يَحْطِمَنَّكُمْ سُلَيْمٰنُ وَجُنُوْدُهٗ ۙ وَهُمْ لَا يَشْعُرُوْنَ ﴿١٩﴾

20. そこでソロモンは、彼女の言葉に笑いながら、微笑んで云えり、(注 15)「主よ、汝が我並びに我が父母に垂れ給うた恩寵に感謝すべく、我を振い起し給え。而して、御慈悲によりて、汝の嘉し給う善い行いに我を導き給わんことを。我を汝の義しい僕らの中に加わらしめ給え」と。

فَتَبَسَّمَ ضَاحِكًا مِّنْ قَوْلِهَا وَقَالَ رَبِّ اَوْزِعْنِيْۤ اَنْ اَشْكُرَ نِعْمَتَكَ الَّتِيْۤ اَنْعَمْتَ عَلَيَّ وَعَلٰى وَالِدَيَّ وَاَنْ اَعْمَلَ صَالِحًا تَرْضٰىهُ وَاَدْخِلْنِيْ بِرَحْمَتِكَ فِيْ عِبَادِكَ الصّٰلِحِيْنَ ﴿٢٠﴾

21. さて、ソロモンは鳥たちを閲して、云えり、「フドフドが見えざるは何故ぞ？彼は故意に参加せざるか？ (注 16)

وَتَفَقَّدَ الطَّيْرَ فَقَالَ مَا لِيَ لَاۤ اَرَى الْهُدْهُدَ ۖ اَمْ كَانَ مِنَ الْغَآئِبِيْنَ ﴿٢١﴾

22. 我は必ず厳しい懲罰を以て彼を処罰せん。或いは、彼がその不在の明白なる釈明をもたらすに非ずば、我必ず彼を殺さん」と。(注 17)

لَاُعَذِّبَنَّهٗ عَذَابًا شَدِيْدًا اَوْ لَاۡاَذْبَحَنَّهٗۤ اَوْ لَيَاْتِيَنِّيْ بِسُلْطٰنٍ مُّبِيْنٍ ﴿٢٢﴾

注 13　「ナマルの谷」の代名詞ナマルは一般に誤解されている様な蟻の谷という意味ではなく。ナマルという名の支族の住んだ谷を指す。

注 14　ソロモンの兵士達の信心深さは普く知られていた様だ。彼等が故意に人を傷付ける事はなかった。これは、「それとは知らず」という文が示しており、次節で明示されている様に、それはソロモンを喜ばせた。

注 15　ソロモンや彼の軍隊の力、信仰心を称えたナマルの人々の言葉に、ソロモンが感嘆したと、この節に書かれてある。

注 16　軍隊と、国の高官・おそらくは将軍であったフドフドが、緊急時に不在であった事実を、ソロモンは再検討した様だった。

注 17　フドフドは、伝説上一般に信じられている様な、ソロモンが通信に使った鳥ではなかったその根拠として次の様な事が挙げられる。(a)偉大な王であり神の預言者であるソロモンの高潔さからして、彼が一羽の小鳥に腹を立て、厳罰を下し、あるいは死に至らしめたとは考えられない。(b)フドフドは国の掟に詳しく、神の唯一性に精通していた様で(25−26 節)、鳥ではそうはならない。(c)渡り鳥でないフドフドが長い距離を飛べる訳はなく、シェバ（またはサバ）までの往復飛行に使われたはずはない (23 節)。　以上の点からしてフドフドは鳥ではなく人間であり、しかも国の高官あるいは将軍で、ソロモンより重要な使命を受けシェバの女王の元へ赴いたのである。使者の交換は、ソロモンの時代によく行われていた様である。又、人が鳥や動物に因んで名付けられるのは知られた事だ。フドフドはソロモンの国民によくある名前だった。聖書にある名前フダードのアラビア形がフドフドの様だ。数人のエドムの王の名がフドフドで、イシュマエルの息子もそうである。又、ヤコブの虐殺を恐れてエジプトへ逃がれたエドムの皇子も同じ名を持っていた(列王上 11：14)。この名は一般的で、旧約聖書にも度々使われているので、限定語が付いていない限り、エドム家の男を意味する事となっている。(Jew. Enc.)フドフドは又、シェバの女王ビルキースの父の名でもある(Muntaha al-Irab)。

23．だが、待つほどもなく、フドフドが飛来して、云えり、「我は、汝が知らぬことを知り得たり。確実なる消息を持つてサバより飛び来たりぬ。(注 18)

فَمَكَثَ غَيْرَ بَعِيدٍ فَقَالَ أَحَطتُ بِمَا لَمْ تُحِطْ بِهِۦ وَجِئْتُكَ مِن سَبَإٍۭ بِنَبَإٍ يَقِينٍ ﴿٢٣﴾

24．我は、その国を治めるは女性なるを見たり。彼女はすべてのものを賜わりて、燦然たる玉座を有せり。(注 19)

إِنِّى وَجَدتُّ ٱمْرَأَةً تَمْلِكُهُمْ وَأُوتِيَتْ مِن كُلِّ شَىْءٍ وَلَهَا عَرْشٌ عَظِيمٌ ﴿٢٤﴾

25．彼女もその民も、アッラーの代りに、太陽を崇拝するを見たり。(注 20) 而して、悪魔、彼等をしてその所業を立派なりと思わしめ、正しい道を歩まぬよう彼等を妨げたれば、彼等は正しく導かれていず。

وَجَدتُّهَا وَقَوْمَهَا يَسْجُدُونَ لِلشَّمْسِ مِن دُونِ ٱللَّهِ وَزَيَّنَ لَهُمُ ٱلشَّيْطَٰنُ أَعْمَٰلَهُمْ فَصَدَّهُمْ عَنِ ٱلسَّبِيلِ فَهُمْ لَا يَهْتَدُونَ ﴿٢٥﴾

26．これはつまり、天地の奥秘を光明に持ち顕すし、人が隠すことも顕すこともすべて知るアッラーを拝すなかれ、と悪魔が彼等に命じたるが故なり。

أَلَّا يَسْجُدُوا۟ لِلَّهِ ٱلَّذِى يُخْرِجُ ٱلْخَبْءَ فِى ٱلسَّمَٰوَٰتِ وَٱلْأَرْضِ وَيَعْلَمُ مَا تُخْفُونَ وَمَا تُعْلِنُونَ ﴿٢٦﴾

27．アッラー！彼の外に神なく、荘厳なる玉座の主なり」と。

السجدة

ٱللَّهُ لَآ إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ رَبُّ ٱلْعَرْشِ ٱلْعَظِيمِ ﴿٢٧﴾

28．そこで、ソロモンは云えり、「我等は見ん、汝果して真実を語りたるか、或いは偽る徒輩の一人なるかを。(注 21)

قَالَ سَنَنظُرُ أَصَدَقْتَ أَمْ كُنتَ مِنَ ٱلْكَٰذِبِينَ ﴿٢٨﴾

29．我が書翰を持ち往き、之を彼等の前に投じ、然る後退きて彼等の返答を見よ」と。(注 22)

ٱذْهَب بِّكِتَٰبِى هَٰذَا فَأَلْقِهْ إِلَيْهِمْ ثُمَّ تَوَلَّ عَنْهُمْ فَٱنظُرْ مَاذَا يَرْجِعُونَ ﴿٢٩﴾

注 18　フドフドが国の重要な使者として、派遣され、ソロモンの代理で重要書類を運んだ事がこの節から分かる。サバとは、聖書に書かれたシバの事であろう（列王上 10 章）それはイエメンにある都市でサナアの町から三日程かかりシェバの女王の行政府の所在地であった。又、サバはカターニ族の有名な一支族でもある。

注 19　シェバの女王が治めた人々は非常に裕福であり、高い文明を備えていた。女王は、強力な君主と成るに必要な物全てを所有していた。

注 20　サバの人々は太陽・星を崇拝していた。おそらくこの宗教は、海やペルシャ湾を頻繁に往き来していたイエメン人により、イラクからイエメンへもたらされたのであろう。サバの人々を 2：63, 5：70, 22：18 で述べたサービたちと混合してはならない。サービたちに関しては様々な記述がある。(1)イラク在住の星を崇拝する人々。(2)ユダヤ教、キリスト教、ゾロアスター教を取り混ぜた様な宗教を信じる人々。(3)イラクのムーサル近くに住み、唯一神を信じるが、何の律法も持たない人々。(4)イラク周辺に住み、全ての神の預言者を信じる人々。

注 21　鳥が真実を語るか、虚言を吐くかは全く分からない。しかし、この節でも、フドフドが鳥でなく、ソロモン政府の高官であった事を示すもう一つの根拠が挙げられている。

注 22　たとえダビデとソロモンが鳥の言葉を理解するとしても、シェバの女王もそうでしったという記述は

30．女王は云えり、「汝等族長たちよ、妾に貴い書翰が投ぜられたり。

قَالَتْ يٰٓاَيُّهَا الْمَلَؤُا اِنِّيْٓ اُلْقِيَ اِلَيَّ كِتٰبٌ كَرِيْمٌ ۝٣٠

31．そはソロモンより寄せられたものにして、かく認められり、「慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

اِنَّهٗ مِنْ سُلَيْمٰنَ وَاِنَّهٗ بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ۝٣١

32．我に傲慢にも抗せず、服従悦服して我に来たれ」と。

اَلَّا تَعْلُوْا عَلَيَّ وَاْتُوْنِيْ مُسْلِمِيْنَ ۝٣٢ ع

第三項

33．女王は云えり、「汝等族長たちよ、この件に関して妾に建議せよ。お前たちの助言を得るまでは、妾は何事も決せざるべし」と。

قَالَتْ يٰٓاَيُّهَا الْمَلَؤُا اَفْتُوْنِيْ فِيْٓ اَمْرِيْ ۚ مَا كُنْتُ قَاطِعَةً اَمْرًا حَتّٰى تَشْهَدُوْنِ ۝٣٣

34．族長たちは答えり、「我等は力量もあり、戦場にては勇猛なれど、命を下すは汝の務めなり。されば、命ぜんことを熟慮されよ」と。（注23）

قَالُوْا نَحْنُ اُولُوْا قُوَّةٍ وَّاُولُوْا بَاْسٍ شَدِيْدٍ ۙ وَّالْاَمْرُ اِلَيْكِ فَانْظُرِيْ مَاذَا تَاْمُرِيْنَ ۝٣٤

35．女王は云えり、「諸王が都府を陥れたる時は、之れを掠奪し、その民の貴顕を卑賤なる者となすを常とす。彼等のなすことは常にかくの如し。

قَالَتْ اِنَّ الْمُلُوْكَ اِذَا دَخَلُوْا قَرْيَةً اَفْسَدُوْهَا وَجَعَلُوْٓا اَعِزَّةَ اَهْلِهَآ اَذِلَّةً ۚ وَكَذٰلِكَ يَفْعَلُوْنَ ۝٣٥

36．然れども、妾は彼等に進物を送らん。而して、使節が如何なる返事を持ち帰るかを見るつもりなり」と。

وَاِنِّيْ مُرْسِلَةٌ اِلَيْهِمْ بِهَدِيَّةٍ فَنٰظِرَةٌ بِمَ يَرْجِعُ الْمُرْسَلُوْنَ ۝٣٦

37．かくて、女王の使節ソロモンの許に到るや、ソロモンは云えり、「お前たちは、その財宝を以て、我を助けんとするか？然しながら、アッラーが我に賜わりたるものは、お前たちが賜わりたるものよりはるかに優る。否、然るに、お前たちはその贈物を誇る。（注24）

فَلَمَّا جَآءَ سُلَيْمٰنَ قَالَ اَتُمِدُّوْنَنِ بِمَالٍ فَمَآ اٰتٰىنِۦَ اللّٰهُ خَيْرٌ مِّمَّآ اٰتٰىكُمْ ۚ بَلْ اَنْتُمْ بِهَدِيَّتِكُمْ تَفْرَحُوْنَ ۝٣٧

クルアーンのどこにも示されていない。にもかかわらず、フドフドは、使者としてソロモンの手紙をシェバの女王に渡し、更にソロモンの代理として彼女と会見する様命ぜられたのである。

注23　シェバの女王は強力な君主であり、多くの物を所有し、国民の愛情・協力・自発的な服従を得、彼等の運命の裁定者であった。サバの権力と栄光は、紀元前1100年ごろに極った。女王の治世は紀元前950年まで続いた。この年に、彼女はソロモンに王位を譲ったと伝えられている。彼女の禅譲は次の様な聖書の言葉に従ったものであった。「シェバ（あるいはサバ）の王達は貢を納めよう。」（詩篇72：10）

注24　ソロモンは、彼に贈り物を送って寄越した女王の態度に、明らかに腹を立てた様だ。彼はそれを侮辱と捕えた。彼が女王の降服を求めていたのに対し、わずかな贈り物がなされただけであった。サバの人々は当

38．急ぎ帰れ。我等は必ず抗し難い大軍を以て彼等に臨み、彼等をはずかしめて国外に放逐し、卑賤なる状態に陥らしめん」と。

ارْجِعْ إِلَيْهِمْ فَلَنَأْتِيَنَّهُمْ بِجُنُودٍ لَّا قِبَلَ لَهُمْ بِهَا وَلَنُخْرِجَنَّهُمْ مِّنْهَا أَذِلَّةً وَّهُمْ صٰغِرُونَ ﴿٣٨﴾

39．ソロモンは云えり、「族長たちよ、お前たちのうち、先方が屈服して我に来る前に、彼女の玉座を我にもたらす者は果たして誰か？」と。（注25）

قَالَ يٰٓأَيُّهَا الْمَلَؤُا أَيُّكُمْ يَأْتِيْنِيْ بِعَرْشِهَا قَبْلَ أَنْ يَّأْتُوْنِيْ مُسْلِمِيْنَ ﴿٣٩﴾

40．すると、妖霊の仲間に勇猛なる首領ありて、云えり、「我、汝が野営地を引き払う前に、それを汝にもたらさん。げに我はよくその能力を持つ者なれば、信頼されるに足る者なり」と。（注26）

قَالَ عِفْرِيْتٌ مِّنَ الْجِنِّ أَنَا اٰتِيْكَ بِهٖ قَبْلَ أَنْ تَقُوْمَ مِنْ مَّقَامِكَ وَإِنِّيْ عَلَيْهِ لَقَوِيٌّ أَمِيْنٌ ﴿٤٠﴾

41．また、経典の知識ある者ありて、云えり、「我、一瞬の間に、それを汝にもらさらん」と。而して、ソロモン、玉座がその前に置かれるを見て、云えり、「こは我が主のお恵みにして、我之に感謝するかせざるかを主我に試めさんとす。感謝するものは、己れ自身の幸福のために感謝す。感謝せざる者ありても、我が主は自ら足りて、寛大なり」と。

قَالَ الَّذِيْ عِنْدَهٗ عِلْمٌ مِّنَ الْكِتٰبِ أَنَا اٰتِيْكَ بِهٖ قَبْلَ أَنْ يَّرْتَدَّ إِلَيْكَ طَرْفُكَ فَلَمَّا رَاٰهُ مُسْتَقِرًّا عِنْدَهٗ قَالَ هٰذَا مِنْ فَضْلِ رَبِّيْ لِيَبْلُوَنِيْٓ ءَأَشْكُرُ أَمْ أَكْفُرُ وَمَنْ شَكَرَ فَإِنَّمَا يَشْكُرُ لِنَفْسِهٖ وَمَنْ كَفَرَ فَإِنَّ رَبِّيْ غَنِيٌّ كَرِيْمٌ ﴿٤١﴾

42．ソロモンは更に云えり、「女王の玉座を彼女が識別し得ないように改めよ。而して、彼女が見分けがつくかつかぬか試してみよう」と。

قَالَ نَكِّرُوْا لَهَا عَرْشَهَا نَنْظُرْ أَتَهْتَدِيْٓ أَمْ تَكُوْنُ مِنَ الَّذِيْنَ لَا يَهْتَدُوْنَ ﴿٤٢﴾

43．女王が到着するや、ソロモンは訊ねり、「汝の玉座はかくの如きものなりや？」と。女王は答えり、「同じ様に思う。我等はこれよ

فَلَمَّا جَآءَتْ قِيْلَ أَهٰكَذَا عَرْشُكِ قَالَتْ كَأَنَّهٗ هُوَ

初ソロモンの領土を攻撃したり、そこで不安をかき立て様とした。だからこそ、ソロモンは女王が贈り物を寄越した事に腹を立てたのである。平常ならば彼は喜んで贈り物を受けたはずである。

注25　一国の王が他国の王を訪れる時、国賓の歓迎会に王座を設ける事が当時流行っていた様である。ソロモンも又、女王歓迎の席に王座を作る様命じた。それは彼女の為に特別に作られた物なので、「彼女の王座」と呼ばれている。この言葉には又「彼女の王座にふさわしい人」という意味もある。

注26　上述の「勇猛なる首領」（イフリート）は巨大な権力を振るう高官であり、それ由、定められた時間内で主の命を主の十分に満足できる様に遂行できると確信していた。「信頼されるに足る」とはこの様な事を示している。「野営地」は、ソロモンがサバへ向う途中留まった所で、シェバの女王の返書を携えて戻る使者を、彼は処所で待っていた。

وَأُوتِينَا الْعِلْمَ مِن قَبْلِهَا وَكُنَّا مُسْلِمِينَ ﴿٤٣﴾

り以前に知識を授かり、(注 27) すでに服従帰依した者なり」と。

وَصَدَّهَا مَا كَانَت تَّعْبُدُ مِن دُونِ اللَّهِ ۖ إِنَّهَا كَانَتْ مِن قَوْمٍ كَافِرِينَ ﴿٤٤﴾

44. されど、彼女がアッラー以外に拝したる神々が、彼女の信心を阻害せり。なんとなれば、彼女の出自は不信の民なるが故に。

قِيلَ لَهَا ادْخُلِي الصَّرْحَ ۖ فَلَمَّا رَأَتْهُ حَسِبَتْهُ لُجَّةً وَكَشَفَتْ عَن سَاقَيْهَا ۚ قَالَ إِنَّهُ صَرْحٌ مُّمَرَّدٌ مِّن قَوَارِيرَ ۗ قَالَتْ رَبِّ إِنِّي ظَلَمْتُ نَفْسِي وَأَسْلَمْتُ مَعَ سُلَيْمَانَ لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿٤٥﴾

45. 女王は「宮殿に入れ」と告げられたり。然るに、女王宮殿を見れば、そは広大なる水面と思いて裳裾をまくって脛を露にせり。(注 28) ソロモンは云えり、「こは瑠璃板にて敷きつめた宮殿なり」と。女王は云えり、「主よ、げに妾は誤れり。妾ソロモンと共に万物の主なるアッラーに服従帰依す」と。

第四項

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا إِلَىٰ ثَمُودَ أَخَاهُمْ صَالِحًا أَنِ اعْبُدُوا اللَّهَ فَإِذَا هُمْ فَرِيقَانِ يَخْتَصِمُونَ ﴿٤٦﴾

46. 先にわれらは、サムードの民にその兄弟サーリフを遣わし「アッラーを崇拝せよ」と云えり。然るに、見よ、彼等二派に分かれて争えり。

قَالَ يَا قَوْمِ لِمَ تَسْتَعْجِلُونَ بِالسَّيِّئَةِ قَبْلَ الْحَسَنَةِ ۖ لَوْلَا تَسْتَغْفِرُونَ اللَّهَ لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ﴿٤٧﴾

47. サーリフは云えり、「我が民よ、何故お前たちは善をさし措いて悪を急ぎ求めるか？何故にアッラーの宥恕を求めて、その慈悲に浴せんとせざるか？」と。

قَالُوا اطَّيَّرْنَا بِكَ وَبِمَن مَّعَكَ ۚ قَالَ طَائِرُكُمْ عِندَ اللَّهِ ۖ بَلْ أَنتُمْ قَوْمٌ تُفْتَنُونَ ﴿٤٨﴾

48. 彼等は云えり、「我等は汝と汝と偕にある者を卜占苜いたるに、凶と出たり」と。彼は云えり、「お前たちの不幸の真の原因は、アッラーの許にあり。それどころか、お前たちは試みられている民なり」と。

注 27　「我等はこれより以前に知識を授かり」というのは、女王が既にソロモンの偉大な権力と富に精通し、彼に忠誠を尽くす決心をしていた事を表わす。

注 28　ソロモンは、女王が偶像崇拝を止め、真の信仰を受け入れる様望んだ。その為、彼はこの高貴で賢明な婦人に、自らの誤りを悟らせ様とした。ソロモンが彼女用に作成させた王座は、この目的の為であった。それは彼女が誇る彼女自身の王座より遥かに美しく、あらゆる点で優れていた。ソロモンがそうしたのは、彼が神の寵児であり、彼女よりも物質的・精神的に遥かに多くのものを与えられている事を、彼女に悟らせる為であった。当節にある宮殿も又、同じ目的で建てられた。本文にある通り、宮殿の入口には厚いガラス板が敷かれ、その下には透き通った水が流れていた。女王が宮殿に足を踏み入れた時、透明なガラスを水と思い、脚を露わにした。しかし、すぐに間違いであるとわかり、戸惑ってしまった。ソロモンはこの装置を用いて彼女がガラスを水と取り違えたと同じ様に、彼女の崇める太陽や他の神聖なる物が真の光源ではない事を気付かせた。それ等は単に光を放つが、生命の無い物である。それ等の放つ光を与えているのは全能の神である。この様にしてソロモンは意を遂げた。この高貴な女性は自らの誤ちを告白し、木や石の偶像崇拝を離れ、唯一神の熱心な信者となったのである。

49．さて、この邑に九人の一味ありて、国中に災いを及ぼせり。而して、改心することなし。

وَكَانَ فِي الْمَدِينَةِ تِسْعَةُ رَهْطٍ يُفْسِدُونَ فِي الْأَرْضِ وَلَا يُصْلِحُونَ ﴿٤٩﴾

50．彼等は云えり、「アッラーに誓って約束す、我等必ず夜に乗じて彼と彼の家族を襲わん。而して、その後、被害者の遺族に告げん、『我等は彼の家族の殺害を目撃せざりき、げに我等の言葉は真実なり』と。

قَالُوا تَقَاسَمُوا بِاللَّهِ لَنُبَيِّتَنَّهُ وَأَهْلَهُ ثُمَّ لَنَقُولَنَّ لِوَلِيِّهِ مَا شَهِدْنَا مَهْلِكَ أَهْلِهِ وَإِنَّا لَصَادِقُونَ ﴿٥٠﴾

51．かくて、彼等は一計を案じたれば、われらも策せり。然れども、彼等そのことに気づかざりき。（注 29）

وَمَكَرُوا مَكْرًا وَمَكَرْنَا مَكْرًا وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ﴿٥١﴾

52．見るがいい、彼等の企みが如何に不幸な結末になりしかを！げにわれらは、彼等並びにその民を同時に悉く滅ぼせり。

فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ مَكْرِهِمْ أَنَّا دَمَّرْنَاهُمْ وَقَوْمَهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٥٢﴾

53．あれなるは、その不義のために倒壊せる彼等の家なり。げにこの中には、道理を弁えた人々への神兆あり。

فَتِلْكَ بُيُوتُهُمْ خَاوِيَةً بِمَا ظَلَمُوا إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً لِقَوْمٍ يَعْلَمُونَ ﴿٥٣﴾

54．而して、われらは、神を信じ且つ畏れ敬いたる人々を救いたり。

وَأَنْجَيْنَا الَّذِينَ آمَنُوا وَكَانُوا يَتَّقُونَ ﴿٥٤﴾

55．またわれらは、ロトを使徒として遣わしたり。時に彼は、己が一族に云えり、「お前たち、それを悪いと知りながら、敢て醜行を犯すや？

وَلُوطًا إِذْ قَالَ لِقَوْمِهِ أَتَأْتُونَ الْفَاحِشَةَ وَأَنْتُمْ تُبْصِرُونَ ﴿٥٥﴾

56．何たることぞ！お前たち女よりもむしろ男に欲情を抱いて近づくとは？お前たちは本当に無知なる徒輩なり」と。

أَئِنَّكُمْ لَتَأْتُونَ الرِّجَالَ شَهْوَةً مِنْ دُونِ النِّسَاءِ بَلْ أَنْتُمْ قَوْمٌ تَجْهَلُونَ ﴿٥٦﴾

57．然るに、彼の一族の答えは「ロト一家をこの邑から放逐せよ。彼等は高潔ぶる一門なり」とだけ云えり。

فَمَا كَانَ جَوَابَ قَوْمِهِ إِلَّا أَنْ قَالُوا أَخْرِجُوا آلَ لُوطٍ مِنْ قَرْيَتِكُمْ إِنَّهُمْ أُنَاسٌ يَتَطَهَّرُونَ ﴿٥٧﴾

注 29　モハッマド預言者はメッカから逃れたが、結局クライシュの軍勢は全滅した。彼等は、モハッマド預言者をメッカから追放する事が自らの滅亡につながろうとは思いもしなかったのである。

注 30　モーゼ、ダビデ、ソロモン、サーレ、ロトに関する話はこの節で終わる。ここには神の平和への願い、人類に世の全ての善徳において恩恵を与える神の預言者及び選民への祝福が述べられてあった。この後の章は神の存在・神の偉大なる力と唯一性を示す主題へと移る。

58. かくてわれらは、ロトの妻を除き、ロトとその家族を救いたり。われらは彼女を後に残る者の中に加えたり。

فَأَنْجَيْنٰهُ وَأَهْلَهٗٓ إِلَّا امْرَأَتَهٗ قَدَّرْنٰهَا مِنَ الْغٰبِرِينَ ﴿٥٨﴾

59. 而してわれらは、彼等の上に或る種の雨を降らしたり。その雨は、警告を受けたる徒輩には禍なりき。

وَأَمْطَرْنَا عَلَيْهِمْ مَّطَرًا فَسَآءَ مَطَرُ الْمُنْذَرِينَ ﴿٥٩﴾

第五項

60. 云え、「アッラーに讃えあれ、その選び給うた僕らに平安あれ。優位なるはアッラーなりや、はたまた彼等がアッラーと併せ祀る神々なりや？」と。（注 30）

قُلِ الْحَمْدُ لِلّٰهِ وَسَلٰمٌ عَلٰى عِبَادِهِ الَّذِينَ اصْطَفٰى ءٰٓاللّٰهُ خَيْرٌ أَمَّا يُشْرِكُونَ ﴿٦٠﴾

61. 天地を創造し、お前たちのために水を大空から降し、（注 31）以て美しい果樹園を繁茂させるは誰ぞ？それ等の樹木を成育させるは、お前たちの能くするところに非ず。アッラーに比肩し得る神在りや？否、彼等は正しい道から逸れ行くばかり。

أَمَّنْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضَ وَأَنْزَلَ لَكُمْ مِّنَ السَّمَآءِ مَآءً فَأَنْۢبَتْنَا بِهٖ حَدَآئِقَ ذَاتَ بَهْجَةٍ مَّا كَانَ لَكُمْ أَنْ تُنْۢبِتُوا شَجَرَهَا ءَإِلٰهٌ مَّعَ اللّٰهِ بَلْ هُمْ قَوْمٌ يَعْدِلُونَ ﴿٦١﴾

62. 大地を安息所となし、河川をその中に引き、不動なる山々をその上に置き、二つの海の間に隔壁を設けたるは誰ぞ？（注 32）アッラーに比肩し得る神在りや？否、彼等の大半は知らざるなり。

أَمَّنْ جَعَلَ الْأَرْضَ قَرَارًا وَّجَعَلَ خِلٰلَهَآ أَنْهٰرًا وَّجَعَلَ لَهَا رَوَاسِيَ وَجَعَلَ بَيْنَ الْبَحْرَيْنِ حَاجِزًا ءَإِلٰهٌ مَّعَ اللّٰهِ بَلْ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٦٢﴾

63. 困窮せる者の祈りに応えてその不幸を取り除き、お前たちをして地を嗣しめる者は誰ぞ？（注 33）アッラーに比肩し得る神在りや？お前たちは殆ど之を熟慮せず。

أَمَّنْ يُّجِيبُ الْمُضْطَرَّ إِذَا دَعَاهُ وَيَكْشِفُ السُّوٓءَ وَيَجْعَلُكُمْ خُلَفَآءَ الْأَرْضِ ءَإِلٰهٌ مَّعَ اللّٰهِ قَلِيلًا مَّا تَذَكَّرُونَ ﴿٦٣﴾

64. 陸海の暗黒の中でお前たちを導き、また、慈悲の先駆として朗報の風を送るは誰ぞ？アッラーに比肩し得る神在りや？アッラーは、彼等がアッラーに併せ祀る者より遥か高くにおわします。

أَمَّنْ يَّهْدِيكُمْ فِي ظُلُمٰتِ الْبَرِّ وَالْبَحْرِ وَمَنْ يُّرْسِلُ الرِّيٰحَ بُشْرًاۢ بَيْنَ يَدَيْ رَحْمَتِهٖ ءَإِلٰهٌ مَّعَ اللّٰهِ تَعٰلَى اللّٰهُ عَمَّا يُشْرِكُونَ ﴿٦٤﴾

注 31　前節で触れた主題に沿い、まずは自然に関する話題から始まる。それは、天地の創造、不毛の地に降りる雨と生命、そして山と川。

注 32　前節に始まる主題は、処所で更に深く広くなる。

注 33　神の偉大なる力は自然の法則の素晴らしさに表されており、人が苦しみの中で神に救いを求め、神がその声をお聞きになられた時、それは人の心に表される。

65. 始原の創造をなし、然る後之を生殖せしめ、(注 34) 天と地からお前たちを扶養するは誰ぞ？アッラーに比肩し得る神在りや？云え、「もしお前たちの言葉が真実ならば、その証拠を出してみよ」と。

أَمَّن يَبْدَؤُا الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيدُهُ وَمَن يَرْزُقُكُم مِّنَ السَّمَاءِ وَالْأَرْضِ ۗ أَءِلَٰهٌ مَّعَ اللَّهِ ۚ قُلْ هَاتُوا بُرْهَانَكُمْ إِن كُنتُمْ صَادِقِينَ ٦٥

66. 云え、「天地の間、アッラーの外には何人も霊界を知らず。また、彼等は、甦らしめられるその時を知らず」と。

قُل لَّا يَعْلَمُ مَن فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ الْغَيْبَ إِلَّا اللَّهُ ۚ وَمَا يَشْعُرُونَ أَيَّانَ يُبْعَثُونَ ٦٦

67. 否、来世に関する彼等の知識には限界あり。というより、彼等はそれについて疑いを抱く。いや、それどころか、盲なり。

بَلِ ادَّارَكَ عِلْمُهُمْ فِي الْآخِرَةِ ۚ بَلْ هُمْ فِي شَكٍّ مِّنْهَا ۖ بَلْ هُم مِّنْهَا عَمُونَ ٦٧

第六項

68. 不信心者どもは云う、「なんとな！我等や我等の祖先が土に帰したる後、本当に再び甦らしめられるというのか？

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا أَءِذَا كُنَّا تُرَابًا وَآبَاؤُنَا أَئِنَّا لَمُخْرَجُونَ ٦٨

69. 我等は、つまり、我等も父祖も以前この事を約束せられたり。されど、こは、住古の物語にすぎず」と。

لَقَدْ وُعِدْنَا هَٰذَا نَحْنُ وَآبَاؤُنَا مِن قَبْلُ إِنْ هَٰذَا إِلَّا أَسَاطِيرُ الْأَوَّلِينَ ٦٩

70. 云え、「地上を経巡りて罰当りどもの惨めな末路如何なるものなりしかを見よ」と。

قُلْ سِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَانظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُجْرِمِينَ ٧٠

71. 汝、彼等のために哀むなかれ、又彼等の策謀の故に心を痛めるなかれ。

وَلَا تَحْزَنْ عَلَيْهِمْ وَلَا تَكُن فِي ضَيْقٍ مِّمَّا يَمْكُرُونَ ٧١

72. 彼等は云う、「もしお前の言葉が真実ならば、その約束が履行されるのは何時なるか？」と。

وَيَقُولُونَ مَتَىٰ هَٰذَا الْوَعْدُ إِن كُنتُمْ صَادِقِينَ ٧٢

73. 云え、「お前たちが催促することの一部は、お前たちのすぐ後に接近しているやも知れぬ」と。

قُلْ عَسَىٰ أَن يَكُونَ رَدِفَ لَكُم بَعْضُ الَّذِي تَسْتَعْجِلُونَ ٧٣

74. げに汝の主は、人々に対して慈悲深くまします。然るに、彼等の大半は感謝の念なし。

وَإِنَّ رَبَّكَ لَذُو فَضْلٍ عَلَى النَّاسِ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَهُمْ لَا يَشْكُرُونَ ٧٤

注 34　創造と出産を表わす。

75. げに汝の主は、人々の胸に秘めたることも、また顕わすことも知り給う。

وَإِنَّ رَبَّكَ لَيَعْلَمُ مَا تُكِنُّ صُدُورُهُمْ وَمَا يُعْلِنُونَ ﴿٧٥﴾

76. 天地に於て、秘密なるものは一つとしてなく、すべて明瞭なる経典に記されているなり。

وَمَا مِنْ غَائِبَةٍ فِي السَّمَاءِ وَالْأَرْضِ إِلَّا فِي كِتَابٍ مُبِينٍ ﴿٧٦﴾

77. げにこのクルアーンは、イスラエルの子孫のために、彼等が相争う大概の事柄を明示するものなり。（注 35)

إِنَّ هَٰذَا الْقُرْآنَ يَقُصُّ عَلَىٰ بَنِي إِسْرَائِيلَ أَكْثَرَ الَّذِي هُمْ فِيهِ يَخْتَلِفُونَ ﴿٧٧﴾

78. げにこは、信徒たちにとり嚮導であり、慈悲なり。

وَإِنَّهُ لَهُدًى وَرَحْمَةٌ لِلْمُؤْمِنِينَ ﴿٧٨﴾

79. げに汝の主は、自らの判断によって彼等の間を裁くべし、全能、全知にましますが故に。

إِنَّ رَبَّكَ يَقْضِي بَيْنَهُمْ بِحُكْمِهِ ۚ وَهُوَ الْعَزِيزُ الْعَلِيمُ ﴿٧٩﴾

80. されば汝、アッラーを信頼せよ。汝は確かに、明白なる真理の上に立つ故に。

فَتَوَكَّلْ عَلَى اللَّهِ ۖ إِنَّكَ عَلَى الْحَقِّ الْمُبِينِ ﴿٨٠﴾

81. げに汝は、死者を（注 36）聴かしむる能わず、また背を向けて退く聾に汝の呼ぶ声を聴かしむる能わず。

إِنَّكَ لَا تُسْمِعُ الْمَوْتَىٰ وَلَا تُسْمِعُ الصُّمَّ الدُّعَاءَ إِذَا وَلَّوْا مُدْبِرِينَ ﴿٨١﴾

82. また汝は、盲を迷誤から導く能わず。汝はただわれらが神兆を信ずる者に聴かしめ得るのみ。さすれば彼等は服従帰依す。

وَمَا أَنْتَ بِهَادِي الْعُمْيِ عَنْ ضَلَالَتِهِمْ ۖ إِنْ تُسْمِعُ إِلَّا مَنْ يُؤْمِنُ بِآيَاتِنَا فَهُمْ مُسْلِمُونَ ﴿٨٢﴾

83. だが、判決が彼等に下される時は、われらは大地から或る種の黴菌を彼等にもたらさん。（注 37）そは彼等を害すべし、なんとなれば、われらの神兆を信ぜざりしが故に。

وَإِذَا وَقَعَ الْقَوْلُ عَلَيْهِمْ أَخْرَجْنَا لَهُمْ دَابَّةً مِنَ الْأَرْضِ تُكَلِّمُهُمْ أَنَّ النَّاسَ كَانُوا بِآيَاتِنَا لَا يُوقِنُونَ ﴿٨٣﴾

注 35　この節ではソロモンの事が述べられている。ユダヤ人達は、ソロモンがシェバの女王の心を奪う為に偶像崇拝を利用した、と彼を非難した。女王に対するソロモンの態度を巡っては、ユダヤ人の間に意見の相違があったので、クルアーンはこの不明瞭な出来事の真相を明かしたのである。

注 36　当節の「死者」とは精神的に死んだ者であり、同じく次節の「盲」とは精神的盲人のことである。

注 37　これは、末日にペストが発生することを預言したものである。当節はモハッマド預言者自らが解釈した。しかし、もしここに示されているような「ばい菌（虫)」を現世の富・物質的安楽をのみ追い求める超唯物論者と解するなら（34：15），当節における「彼等」というのは、現世に関わりある物のみを求め続ける西洋の唯物論者を指す事になる（18： 105)。

第七項

84．その日、われらは、それぞれの民からわれらの神兆を拒否せる徒輩をひとまとめに集め、之を別個の一団となさん。

وَيَوْمَ نَحْشُرُ مِن كُلِّ أُمَّةٍ فَوْجًا مِّمَّن يُكَذِّبُ بِآيَاتِنَا فَهُمْ يُوزَعُونَ ﴿٨٤﴾

85．彼等御前に至るや、アッラーは云わん、「お前たち浅薄な知識を以て、われらの神兆を拒みたるか？お前たちの為したることは何事ぞ？」と。

حَتَّىٰ إِذَا جَاءُوا قَالَ أَكَذَّبْتُم بِآيَاتِي وَلَمْ تُحِيطُوا بِهَا عِلْمًا أَمَّاذَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٨٥﴾

86．かくて、自らの悪行ゆえに、判決は彼等の上に下るべし。然るに、彼等弁明する能わず。（注38）

وَوَقَعَ الْقَوْلُ عَلَيْهِم بِمَا ظَلَمُوا فَهُمْ لَا يَنطِقُونَ ﴿٨٦﴾

87．彼等悟らざるか、われらが彼等の休息のために夜を創り、光を以て照らすべく昼を創りたることを？げにこの中には、信ずる人々へのさまざまなる神兆あり。

أَلَمْ يَرَوْا أَنَّا جَعَلْنَا اللَّيْلَ لِيَسْكُنُوا فِيهِ وَالنَّهَارَ مُبْصِرًا إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَاتٍ لِّقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ﴿٨٧﴾

88．喇叭が吹き鳴らされるその日、（注39）アッラーが嘉し給う者の外は、天にある者、地にある者、悉く恐怖におののかん。而して、謙りてアッラーの前に出でん。

وَيَوْمَ يُنفَخُ فِي الصُّورِ فَفَزِعَ مَن فِي السَّمَاوَاتِ وَمَن فِي الْأَرْضِ إِلَّا مَن شَاءَ اللَّهُ وَكُلٌّ أَتَوْهُ دَاخِرِينَ ﴿٨٨﴾

89．汝は連なる山々を見て、（注40）それがしっかりとゆるがざるものと思うなれど、そは雲の飛び去る如く消えうせん。こは万物を総覧するアッラーの御業なり。彼はお前たちの所業を悉く知ろしめし給う。

وَتَرَى الْجِبَالَ تَحْسَبُهَا جَامِدَةً وَهِيَ تَمُرُّ مَرَّ السَّحَابِ صُنْعَ اللَّهِ الَّذِي أَتْقَنَ كُلَّ شَيْءٍ إِنَّهُ خَبِيرٌ بِمَا تَفْعَلُونَ ﴿٨٩﴾

90．誰であれ善事を行える者は、それより更に優る褒賞を賜わり、かかる者はその日の恐怖に動じざるべし。

مَن جَاءَ بِالْحَسَنَةِ فَلَهُ خَيْرٌ مِّنْهَا وَهُم مِّن فَزَعٍ يَوْمَئِذٍ آمِنُونَ ﴿٩٠﴾

注38　彼等は己れの罪を弁解できないだろう。彼等に対する告発は事実明白で、翻す事はできず、有罪の判決が彼等に下されるであろう。

注39　「らっぱが吹き鳴らされるその日」というのはキリストの復活を指す他、トランペットの吹奏のごとく、モハッマド預言者により導かれた新たな秩序を示す。

注40　山のごとく深く根付いていたと思える古い理念や法は、モハッマド預言者の出現と共に、雲が流れる様に、溶け、消え去った。「山々」とは強大なローマ及びペルシャ帝国を指すが、この両国も、圧倒的な勝利を治めたイスラム軍を前にして、もみ殻の様に四散させられた。

91. なれど、悪事を行える者は、業火の中に逆様に投げ込まれん。「お前たちは自らの行為に対して賞罰されざるか？」

وَمَنْ جَآءَ بِالسَّيِّئَةِ فَكُبَّتْ وُجُوْهُهُمْ فِي النَّارِ ۚ هَلْ تُجْزَوْنَ إِلَّا مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ﴿٩١﴾

92. 云え、「我はただ、主が聖域となされしこの町の主に仕えよと命ぜられているのみ。(注 41) 万物は彼の掌中にあり。而して、我は、神に甘心服従する者の一人たるべしと命ぜらる。

إِنَّمَآ أُمِرْتُ أَنْ أَعْبُدَ رَبَّ هٰذِهِ الْبَلْدَةِ الَّذِيْ حَرَّمَهَا وَلَهٗ كُلُّ شَيْءٍ ۖ وَّأُمِرْتُ أَنْ أَكُوْنَ مِنَ الْمُسْلِمِيْنَ ﴿٩٢﴾

93. また、クルアーンを読誦することも」と。されば、誰であれ嚮導に従う者は、己れ自身の幸福追求となり、迷誤する者には「我は一警告者にすぎず」と云え。

وَأَنْ أَتْلُوَا الْقُرْاٰنَ ۚ فَمَنِ اهْتَدٰى فَإِنَّمَا يَهْتَدِيْ لِنَفْسِهٖ ۚ وَمَنْ ضَلَّ فَقُلْ إِنَّمَآ أَنَا مِنَ الْمُنْذِرِيْنَ ﴿٩٣﴾

94. 而して云え、「アッラーに讃えあれ。彼はお前たちにそのさまざまなる神兆をやがて示すべし。而して、お前たちは之を認めん」と。汝の主は、お前たちの所業を閑却せず。

وَقُلِ الْحَمْدُ لِلّٰهِ سَيُرِيْكُمْ اٰيٰتِهٖ فَتَعْرِفُوْنَهَا ۚ وَمَا رَبُّكَ بِغَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُوْنَ ﴿٩٤﴾

注 41　偶像崇拝がアラビアから無くなれば、カーバ神殿はその重要性を失い、それと共に自らの保管者としての威信も失われるのではないかとメッカの人々は恐れた。(カーバ神殿には、イスラム教以前の当時にメッカの人々により偶像が祭られていた) この節では、彼らの誤った考えを正し、世界の活力の中心であり、全人類に向けられた神託の中心地として、メッカはその重要性を失う事なく、むしろその威信は深まり、終わりの時まで崇められると説いている。

سُورَةُ الْقَصَصِ مَكِّيَّةٌ (٢٨)

アル・カサス
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ①

2．ター・スイーン・ミーム。(注1)

طسٓمٓ ②

3．こは明瞭(めいりょう)なる経典の諸節なり。

تِلْكَ آيَاتُ الْكِتَابِ الْمُبِينِ ③

4．われらは信ずる人々のために、モーゼ並びにファラオの正確な話を汝に復誦(ふくしょう)す。

نَتْلُوا عَلَيْكَ مِنْ نَبَإِ مُوسَىٰ وَفِرْعَوْنَ بِالْحَقِّ لِقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ④

5．げにファラオはかの国において横柄に振舞い、その民を幾多の党派に分ちたり。彼は民の一部を虐げ、その息子らを殺し、婦女子のみを容赦せんと謀(はか)れり。(注2)彼は確かに離間者なりき。

إِنَّ فِرْعَوْنَ عَلَا فِي الْأَرْضِ وَجَعَلَ أَهْلَهَا شِيَعًا يَسْتَضْعِفُ طَائِفَةً مِنْهُمْ يُذَبِّحُ أَبْنَاءَهُمْ وَيَسْتَحْيِي نِسَاءَهُمْ إِنَّهُ كَانَ مِنَ الْمُفْسِدِينَ ⑤

6．われらはかの国において抑圧された人々に恵みを与え、彼等を指導者となし、われらが恩恵の後継者となすべく、

وَنُرِيدُ أَنْ نَمُنَّ عَلَى الَّذِينَ اسْتُضْعِفُوا فِي الْأَرْضِ وَنَجْعَلَهُمْ أَئِمَّةً وَنَجْعَلَهُمُ الْوَارِثِينَ ⑥

7．彼等の勢力(ちから)をかの国に確立し、ファラオとハーマンとその軍勢にその危惧(きぐ)せることを示さんと欲したり。(注3)

وَنُمَكِّنَ لَهُمْ فِي الْأَرْضِ وَنُرِيَ فِرْعَوْنَ وَهَامَانَ وَجُنُودَهُمَا مِنْهُمْ مَا كَانُوا يَحْذَرُونَ ⑦

注1　恵み深く、すべてを聴き、すべてを知る神！

注2　20世紀において、西洋の植民地化政策による分断と統治が行なわれたが、ファラオも同じ政策をとり、成功を治めていた様である。彼はエジプト人を分割し、その間に不公平な差別を作った。引立てられる者もあれば、搾取され抑圧される者もあった。モーゼ一族は後者の不幸な人々だった。「その息子を殺し、婦女子のみを容赦せん」という言葉は、イスラエル人支配の為、ファラオがその男達を殺し、女のみ生かし続けた事を外見的に示しているが、今一つの意味をこの語は持つ。ファラオは、搾取と冷酷な抑圧を持って、イスラエルの男達の力を奪い、女の様な臆病者にした。

注3　エジプトにおけるイスラエルの民の退廃は絶望的となり、ファラオとエジプト人の非道ぶりは最悪のものであった。全智の神は、抑圧者を罰し、被抑圧者を解放する様命じ、そのとき神はモーゼをお選びになった。全ての神の使者の時代に起きたこの出来事は、イスラムのモハッマド預言者の時に全て明らかにされた。

8．かくて、われらは、モーゼの母に黙示を以て、云えり、「彼に乳を飲ませよ。嬰児の身に危険を感じたら、ただちに彼を河に捨てよ、而して、案じ悲しむなかれ。なんとなれば、われらは彼を汝につれ戻し、而して、使徒の一人たらしめん」と。

وَأَوْحَيْنَا إِلَىٰ أُمِّ مُوسَىٰ أَنْ أَرْضِعِيهِ ۖ فَإِذَا خِفْتِ عَلَيْهِ فَأَلْقِيهِ فِي الْيَمِّ وَلَا تَخَافِي وَلَا تَحْزَنِي ۖ إِنَّا رَادُّوهُ إِلَيْكِ وَجَاعِلُوهُ مِنَ الْمُرْسَلِينَ ﴿٨﴾

9．ファラオの家人は、後日己れらの敵となり、憂慮の因となるべき嬰児を拾いあげたり。げにファラオとハーマン並びにその軍勢は罪深い徒輩なりき。

فَالْتَقَطَهُ آلُ فِرْعَوْنَ لِيَكُونَ لَهُمْ عَدُوًّا وَحَزَنًا ۗ إِنَّ فِرْعَوْنَ وَهَامَانَ وَجُنُودَهُمَا كَانُوا خَاطِئِينَ ﴿٩﴾

10．ファラオの后は云えり、「この子は、妾と汝の眼の喜びとならん。殺すなかれ。多分将来、我等のために役に立つやも知れぬ。或いは、養子とするもよし」と。彼等はその成り行きに気づかざりき。（注４）

وَقَالَتِ امْرَأَتُ فِرْعَوْنَ قُرَّتُ عَيْنٍ لِي وَلَكَ ۖ لَا تَقْتُلُوهُ عَسَىٰ أَنْ يَنْفَعَنَا أَوْ نَتَّخِذَهُ وَلَدًا وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ﴿١٠﴾

11．モーゼの母の心は不安を免れたり。もしわれらが彼女の心を強固ならしめ、毅然たる信者たらしめざりせば、彼女は危うくその真相を明らかにするところなりき。（注５）

وَأَصْبَحَ فُؤَادُ أُمِّ مُوسَىٰ فَارِغًا ۖ إِنْ كَادَتْ لَتُبْدِي بِهِ لَوْلَا أَنْ رَبَطْنَا عَلَىٰ قَلْبِهَا لِتَكُونَ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ ﴿١١﴾

12．母はモーゼの姉に向って云えり、「彼の後を追え」と。姉は遠くよりモーゼを見守りしが、彼等はそれに気づかざりき。

وَقَالَتْ لِأُخْتِهِ قُصِّيهِ ۖ فَبَصُرَتْ بِهِ عَنْ جُنُبٍ وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ﴿١٢﴾

13．われらはモーゼにあらかじめ、すべての乳母を拒むべく定めたり。そこで、姉来たりて云えり、「あなたがたに代わってこの子を育て、この子のために幸いを祈る人たらんとなる家政婦一家を教えましょうか？」と。

وَحَرَّمْنَا عَلَيْهِ الْمَرَاضِعَ مِنْ قَبْلُ فَقَالَتْ هَلْ أَدُلُّكُمْ عَلَىٰ أَهْلِ بَيْتٍ يَكْفُلُونَهُ لَكُمْ وَهُمْ لَهُ نَاصِحُونَ ﴿١٣﴾

14．かくしてわれらは、モーゼをその母に返し、彼女の眼を喜ばしめ、その悲しみを除いて、アッラーの約束が真実なることを知らしめたり。されど、彼等の多くは知らざるなり。

فَرَدَدْنَاهُ إِلَىٰ أُمِّهِ كَيْ تَقَرَّ عَيْنُهَا وَلَا تَحْزَنَ وَلِتَعْلَمَ أَنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿١٤﴾

注４　神の下される手段は実際計り知れない。ファラオに深く愛されていた子が、ある日神の手でファラオを裁くものとなろうとは、彼が気付くはずもなかった。この裁きは、ファラオが神の戒律を否定し、長い間イスラエルの民を抑圧し、虐げて来た為に下されたのである。

注５　モーゼの母親は自分の手もとにモーゼが戻ってきたとき、何と喜んだ事であろう。余りの喜びに、彼女は全ての事、彼女が神の啓示を受け、それに従い息子を川に入れた事等、を人々に話してしまう所だった。

第二項

15. 而(しか)して、モーゼが成人して、分別盛りに達したるを機会に、われらは彼に知恵と知識を与えたり。かくの如く、われらは善事を行う人々に報ゆ。

وَلَمَّا بَلَغَ أَشُدَّهُ وَاسْتَوَىٰٓ ءَاتَيْنَٰهُ حُكْمًا وَعِلْمًا ۚ وَكَذَٰلِكَ نَجْزِى ٱلْمُحْسِنِينَ ﴿١٥﴾

16. 或る時、モーゼは、住民がうっかりしていた隙に町に入りたり。そこで、彼は二人の男が争うのを見たり。一人は彼の仲間であり、他方は敵なりき。彼の仲間は彼に助勢を求めたり。されば、モーゼは握りこぶしにて敵を強打せり。(注6)よって、その男は死す。モーゼは云えり、「こは悪魔(サタン)の仕業なり。げに彼は人を迷わせる明白なる敵なり」と。(注7)

وَدَخَلَ ٱلْمَدِينَةَ عَلَىٰ حِينِ غَفْلَةٍ مِّنْ أَهْلِهَا فَوَجَدَ فِيهَا رَجُلَيْنِ يَقْتَتِلَانِ هَٰذَا مِن شِيعَتِهِۦ وَهَٰذَا مِنْ عَدُوِّهِۦ ۖ فَٱسْتَغَٰثَهُ ٱلَّذِى مِن شِيعَتِهِۦ عَلَى ٱلَّذِى مِنْ عَدُوِّهِۦ فَوَكَزَهُۥ مُوسَىٰ فَقَضَىٰ عَلَيْهِ ۖ قَالَ هَٰذَا مِنْ عَمَلِ ٱلشَّيْطَٰنِ ۖ إِنَّهُۥ عَدُوٌّ مُّضِلٌّ مُّبِينٌ ﴿١٦﴾

17. 更に云えり、「主よ、我、己が魂を損なえり。願わくは我を赦し給え」と。(注8)されば、主は彼を赦したり。主は寛大にして、慈悲深くまします。

قَالَ رَبِّ إِنِّى ظَلَمْتُ نَفْسِى فَٱغْفِرْ لِى فَغَفَرَ لَهُۥٓ ۚ إِنَّهُۥ هُوَ ٱلْغَفُورُ ٱلرَّحِيمُ ﴿١٧﴾

18. 更に言葉を続け、「主よ、汝は我に慈悲を垂れ給えし故に、我は決して罪を犯す者の味方とならざるべし」と。(注9)

قَالَ رَبِّ بِمَآ أَنْعَمْتَ عَلَىَّ فَلَنْ أَكُونَ ظَهِيرًا لِّلْمُجْرِمِينَ ﴿١٨﴾

注6　高い特性を備え、高度な理念を抱いていたので、モーゼは常に弱く虐げられた者に対する助力を心掛けていた。その為、貧しいイスラエル人が傲慢で残酷なエジプト人から救ってくれる様頼んだ時、モーゼは直ちに救出に向かった。

注7　「こはサタンの仕業なり」とは、アラブの成句によれば、悪い事が起きたという意味である。つまり「サタンが一人のエジプト人とイスラエルの民の一人とを戦わせたので、私は虐げられたイスラエル人を助けに来なければならなかったが、悪い結果(相手の死)となってしまった。」のである。又、冒頭の言葉は亡くなったエジプト人に向けられたものとも言える。「これは、お前の悪魔の様な行為がもたらした。」言い換えれば、「お前の死は、その悪行・犯罪に端を発するものである。」モーゼが武器を使った訳ではなく、唯エジプト人から身を守る為拳(こぶし)を振るったという事実は、エジプト人の死が事故であった事を示している。当然、モーゼに彼を殺す意図はなかった。クルアーンは、モーゼがこの節で述べているエジプト人の悪行については触れていない。が、このエジプト人が、イスラエル女性に姦淫を強いたという記録がある。それ由に、この節にある争いが起き、モーゼによる干渉、そしてエジプト人の死となった事は明白である。

注8　貧しいイスラエル人を助けようとして、モーゼはエジプト人を殺してしまい、我身を危険にさらし、背負いきれない重荷を自らに科してしまったとモーゼは悟った。そこで彼は、支配階級の者を殺してしまった事で起きるであろう災いから我身を守り賜えと神に祈った (Jew. Enc. Moses参照)。

注9　この節では、モーゼが神に語りかけている。「主よ！　あなたは常に寛大であられます。それ由、貴人の御好意に感謝して、私は約束致します。私はあの時と同じく、常に抑圧される者を助けましょう。そして決して抑圧する側には立たないでしょう。」あるいは次の様な意味にもとれる。「神よ、貴人は常に私に寛大であられます。ですから、抑圧する者に味方する等この私にどうしてできましょうか？」

19．翌朝、モーゼ町中に在りて、恐れを抱きつつ警戒すると、見よ、前日彼に助けを求めし男が、再び彼に援助を乞えり。モーゼは男に向って云えり、「汝は明らかに誤り導かれしやつなり」と。（注 10）

فَأَصْبَحَ فِي الْمَدِيْنَةِ خَآئِفًا يَّتَرَقَّبُ فَإِذَا الَّذِي اسْتَنْصَرَهٗ بِالْأَمْسِ يَسْتَصْرِخُهٗ ۚ قَالَ لَهٗ مُوْسٰٓى إِنَّكَ لَغَوِيٌّ مُّبِيْنٌ ﴿١٩﴾

20．共同の敵たる男（注 11）を制せんとした時、その男は云えり、「モーゼよ、汝は昨日人を殺した如く、我を殺さんと欲するや？汝はこの国に於てただ暴君たらんと欲し、仲裁者たることを欲せざるか？」と。

فَلَمَّآ أَنْ أَرَادَ أَنْ يَّبْطِشَ بِالَّذِيْ هُوَ عَدُوٌّ لَّهُمَا ۙ قَالَ يٰمُوْسٰٓى أَتُرِيْدُ أَنْ تَقْتُلَنِيْ كَمَا قَتَلْتَ نَفْسًا بِالْأَمْسِ ۖ إِنْ تُرِيْدُ إِلَّآ أَنْ تَكُوْنَ جَبَّارًا فِي الْأَرْضِ وَمَا تُرِيْدُ أَنْ تَكُوْنَ مِنَ الْمُصْلِحِيْنَ ﴿٢٠﴾

21．折しも、一人の男が町の外(はずれ)より走り来たりて、云えり、「モーゼよ、実は、長老たちが汝を殺さんと協議中なり。されば、逃げよ。げに我は、汝のためを思う者なり」と。

وَجَآءَ رَجُلٌ مِّنْ أَقْصَا الْمَدِيْنَةِ يَسْعٰى ؗ قَالَ يٰمُوْسٰٓى إِنَّ الْمَلَأَ يَأْتَمِرُوْنَ بِكَ لِيَقْتُلُوْكَ فَاخْرُجْ إِنِّيْ لَكَ مِنَ النّٰصِحِيْنَ ﴿٢١﴾

22．かくて彼は、用心且つ警戒しながら町を後にせり。彼は云えり、「主よ、不義なる徒輩(やから)から我を守り給え」と。

فَخَرَجَ مِنْهَا خَآئِفًا يَّتَرَقَّبُ ؗ قَالَ رَبِّ نَجِّنِيْ مِنَ الْقَوْمِ الظّٰلِمِيْنَ ﴿٢٢﴾

第三項

23．モーゼはその顔をマドヤンの方に向け、云えり、「主は我を正しき道に導かん」と。

وَلَمَّا تَوَجَّهَ تِلْقَآءَ مَدْيَنَ قَالَ عَسٰى رَبِّيْٓ أَنْ يَّهْدِيَنِيْ سَوَآءَ السَّبِيْلِ ﴿٢٣﴾

24．而(しか)して、マドヤンの水場に来てみると、そこに羊の群に水飼(みずか)いする一団の男等あり。男等の傍(かたわら)に二人の女ありて、自分たちの羊の群を控えさせているを彼は見たり。彼は問えり、「何事ぞや？」と。（注 12）彼女た

وَلَمَّا وَرَدَ مَآءَ مَدْيَنَ وَجَدَ عَلَيْهِ أُمَّةً مِّنَ النَّاسِ يَسْقُوْنَ ۬ وَوَجَدَ مِنْ دُوْنِهِمُ امْرَأَتَيْنِ تَذُوْدٰنِ ۚ قَالَ مَا خَطْبُكُمَا ۖ قَالَتَا لَا نَسْقِيْ حَتّٰى

注 10　モーゼは、彼に助けを求めたイスラエル人を咎めた様である。「お前は愚かだ。自らの行為がどの様な事態を招くのかに思い及ばずして、忽ちの内に災難に巻き込まれてしまった。」この言葉は一般的に誤解されているが、モーゼはその男を犯罪者とみなした訳ではない。

注 11　「共同の敵たる男」という言葉から男はエジプト人だった事が分かる。聖書にある様に、もし彼がイスラエル人なら、彼はエジプト人達と結託し、先日の一件を当局に通報したはずだ。だからこそ、彼は、モーゼやモーゼに助けを求めたイスラエル人にとり共通の敵だったのである。

注 12　何をお困りですか？

ちは答えり、「牧童たちが羊を連れ去るまでは、我等の群に水飼いするを得ず。そは我等の父 甚だ老いたればなり」と。

يُصْدِرَ الرِّعَاءُ وَأَبُونَا شَيْخٌ كَبِيرٌ ﴿٢٤﴾

25. されば、モーゼは彼女等のために、その群に水飼いをしたり。然る後、樹陰に退いて云えり、「主よ、我は何であれ我に降し賜える善きものを必要として受くる」と。

فَسَقَىٰ لَهُمَا ثُمَّ تَوَلَّىٰ إِلَى الظِّلِّ فَقَالَ رَبِّ إِنِّي لِمَا أَنْزَلْتَ إِلَيَّ مِنْ خَيْرٍ فَقِيرٌ ﴿٢٥﴾

26. 彼女等の一人羞しげにモーゼのところへ歩み寄りて云えり、「我等のために羊の群に水飼いたることに対し、我が父が汝を招き之にお礼をなさんとす」と。されば、モーゼは老人の所へ行き、己が身の上を語れり。老人は云えり、「恐るるなかれ。汝はすでに不義なる徒輩より免れたり」と。

فَجَاءَتْهُ إِحْدَاهُمَا تَمْشِي عَلَى اسْتِحْيَاءٍ قَالَتْ إِنَّ أَبِي يَدْعُوكَ لِيَجْزِيَكَ أَجْرَ مَا سَقَيْتَ لَنَا ۚ فَلَمَّا جَاءَهُ وَقَصَّ عَلَيْهِ الْقَصَصَ قَالَ لَا تَخَفْ ۖ نَجَوْتَ مِنَ الْقَوْمِ الظَّالِمِينَ ﴿٢٦﴾

27. 二人の女のうち一人が「我が父よ、彼を雇い給え。汝のために最適なる仕用人は、頑健にして信用のおける者なり」と云えり。

قَالَتْ إِحْدَاهُمَا يَا أَبَتِ اسْتَأْجِرْهُ ۖ إِنَّ خَيْرَ مَنِ اسْتَأْجَرْتَ الْقَوِيُّ الْأَمِينُ ﴿٢٧﴾

28. 老人はモーゼに云えり、「汝もしわしのために八年間働かば、わしは二人の娘のどちらかを汝と妻わさんと欲す。もし期限を十年とせんと欲しなば、これまた汝の意にまかせん。わしは汝に難儀を課するつもりなし。もしアッラー欲しなば、汝はわしが公正な人間なることを知るべし」と。

قَالَ إِنِّي أُرِيدُ أَنْ أُنْكِحَكَ إِحْدَى ابْنَتَيَّ هَاتَيْنِ عَلَىٰ أَنْ تَأْجُرَنِي ثَمَانِيَ حِجَجٍ ۖ فَإِنْ أَتْمَمْتَ عَشْرًا فَمِنْ عِنْدِكَ ۖ وَمَا أُرِيدُ أَنْ أَشُقَّ عَلَيْكَ ۚ سَتَجِدُنِي إِنْ شَاءَ اللَّهُ مِنَ الصَّالِحِينَ ﴿٢٨﴾

29. モーゼは云えり、「これ汝と我との間の取り決めなり。我二つの期限のいづれを履行するとも、我に非はなし。アッラーは我等が云えることを見證す」と。

قَالَ ذَٰلِكَ بَيْنِي وَبَيْنَكَ ۖ أَيَّمَا الْأَجَلَيْنِ قَضَيْتُ فَلَا عُدْوَانَ عَلَيَّ ۖ وَاللَّهُ عَلَىٰ مَا نَقُولُ وَكِيلٌ ﴿٢٩﴾

第四項

30. かくて、モーゼはその期限を満了し、家族と共に旅立ち、山の此方に一つの火を認めたり。彼は家人に云えり、「ここにて待て、我は燃ゆる火を認めたり。我行きて其処より消息をもたらさん。或いは、燃えさしを持ち帰らん。さすればお前たち暖を得べし」と。(注13)

فَلَمَّا قَضَىٰ مُوسَى الْأَجَلَ وَسَارَ بِأَهْلِهِ آنَسَ مِنْ جَانِبِ الطُّورِ نَارًا قَالَ لِأَهْلِهِ امْكُثُوا إِنِّي آنَسْتُ نَارًا لَعَلِّي آتِيكُمْ مِنْهَا بِخَبَرٍ أَوْ جَذْوَةٍ مِنَ النَّارِ لَعَلَّكُمْ تَصْطَلُونَ ﴿٣٠﴾

注13　瞑想や神との霊的交わりには、独居が必要である。モーゼは神との霊的交流を授かる為、家族と離れ、世俗の繋がりを一切断った。モーゼは神聖なる魂の谷の縁に立っただけであったが、モハッマド預言者は実際

31．彼火の傍に至ると、谷間の右側の聖なるところにある木から声ありて、呼びかけられたり、「モーゼよ、われこそは万物の主、アッラーなるぞ」と。

فَلَمَّآ أَتٰىهَا نُودِيَ مِنْ شَاطِئِ الْوَادِ الْأَيْمَنِ فِي الْبُقْعَةِ الْمُبٰرَكَةِ مِنَ الشَّجَرَةِ أَنْ يّٰمُوسٰىٓ إِنِّيٓ أَنَا اللّٰهُ رَبُّ الْعٰلَمِينَ ﴿٣١﴾

32．而して、また云えり、「汝の杖を投げよ」と。彼その杖が蛇の如く動くを見たれば、退いて逃れ、後ろを振り向かざりぎ。「モーゼよ」と声ありて、仰せられり、「もそっと近う、恐るるなかれ。げに汝は無事なる者の一人なり。

وَأَنْ أَلْقِ عَصَاكَ ۖ فَلَمَّا رَاٰهَا تَهْتَزُّ كَأَنَّهَا جَآنٌّ وَّلّٰى مُدْبِرًا وَّلَمْ يُعَقِّبْ ۚ يٰمُوسٰىٓ أَقْبِلْ وَلَا تَخَفْ ۖ إِنَّكَ مِنَ الْاٰمِنِينَ ﴿٣٢﴾

33．汝の手をその懐に入れよ。そは病に非ざるに、白くなりて出でん。汝の恐怖を静めるために汝の腕を自分の方に引っ込めよ。これ等は、ファラオとその長老たちに主から示された二つの奇跡なり。げに彼等は邪悪な民なり」と。

اُسْلُكْ يَدَكَ فِي جَيْبِكَ تَخْرُجْ بَيْضَآءَ مِنْ غَيْرِ سُوٓءٍ وَّاضْمُمْ إِلَيْكَ جَنَاحَكَ مِنَ الرَّهْبِ فَذٰنِكَ بُرْهَانٰنِ مِنْ رَّبِّكَ إِلٰى فِرْعَوْنَ وَمَلَا۟ئِهٖ ۚ إِنَّهُمْ كَانُوا قَوْمًا فٰسِقِينَ ﴿٣٣﴾

34．モーゼは云えり、「主よ、我はかつて彼等の一人を殺したり。故に我は、彼等が我を殺さんことを恐る。（注 14）

قَالَ رَبِّ إِنِّي قَتَلْتُ مِنْهُمْ نَفْسًا فَأَخَافُ أَنْ يَّقْتُلُونِ ﴿٣٤﴾

35．また、我が兄アロン－彼は我よりも言葉巧みなれば、真実の証人となるために彼を補佐として我と共に遣わし給え。我は、彼等が我を嘘つきと非難せんことを恐る」と。

وَأَخِي هٰرُونُ هُوَ أَفْصَحُ مِنِّي لِسَانًا فَأَرْسِلْهُ مَعِيَ رِدْاً يُّصَدِّقُنِيٓ ۖ إِنِّيٓ أَخَافُ أَنْ يُّكَذِّبُونِ ﴿٣٥﴾

36．神は云えり、「われらは汝の兄の助けを用いて、汝の腕を強くせん。また、お前たち両名に権能を与えるが故に、彼等はお前たちに危害を加え得ざるべし。われらの奇跡を携えて行け。お前たち両名並びにお前たちに従う者は勝利者たらん」と。

قَالَ سَنَشُدُّ عَضُدَكَ بِأَخِيكَ وَنَجْعَلُ لَكُمَا سُلْطٰنًا فَلَا يَصِلُونَ إِلَيْكُمَا ۚ بِاٰيٰتِنَآ ۚ أَنْتُمَا وَمَنِ اتَّبَعَكُمَا الْغٰلِبُونَ ﴿٣٦﴾

37．かくて、モーゼがわれらの明白なる奇跡を携えて彼等に至るや、彼等は云えり、「こはただの考案せる魔術にすぎず。我等は御先

فَلَمَّا جَآءَهُمْ مُّوسٰى بِاٰيٰتِنَا بَيِّنٰتٍ قَالُوا مَا هٰذَآ إِلَّا سِحْرٌ مُّفْتَرًى وَّمَا سَمِعْنَا بِهٰذَا فِيٓ اٰبَآئِنَا

谷へ入っていった。(53：14，15)。モーゼは、モハッマド預言者に取っておかれた様な神のお側近くの所まで行く事はできなかった。

注 14　　モーゼは、誤って殺してしまった男の事に少し触れているが、故意の殺人と間違えられて有罪になることは認めてはいない。

祖の物語りの中で、これに似たことを聞いたためしなし」と。

الْأَوَّلِينَ ﴿٣٧﴾

38. モーゼは云えり、「主は誰にその御導きを与え給うたか、また誰が終(つい)の住処(すみか)の恩賞を得べきかを一番よく知り給う。げに、悪人は決して栄えず」と。

وَقَالَ مُوسَىٰ رَبِّيٓ أَعْلَمُ بِمَن جَآءَ بِٱلْهُدَىٰ مِنْ عِندِهِۦ وَمَن تَكُونُ لَهُۥ عَٰقِبَةُ ٱلدَّارِ ۖ إِنَّهُۥ لَا يُفْلِحُ ٱلظَّٰلِمُونَ ﴿٣٨﴾

39. ファラオは云えり、「長老たちよ、我は我以外にお前たちのために神あるを知らず。されば、ハーマーンよ、我がために泥で煉瓦を焼き、而(しか)して高殿(たかどの)を築け。然(さ)すれば、我、モーゼの神をのぞき見ん。なんとなれば、我は彼を嘘つきと考える故に」と。

وَقَالَ فِرْعَوْنُ يَٰٓأَيُّهَا ٱلْمَلَأُ مَا عَلِمْتُ لَكُم مِّنْ إِلَٰهٍ غَيْرِى فَأَوْقِدْ لِى يَٰهَٰمَٰنُ عَلَى ٱلطِّينِ فَٱجْعَل لِّى صَرْحًا لَّعَلِّىٓ أَطَّلِعُ إِلَىٰٓ إِلَٰهِ مُوسَىٰ وَإِنِّى لَأَظُنُّهُۥ مِنَ ٱلْكَٰذِبِينَ ﴿٣٩﴾

40. かくて、ファラオとその軍勢は、その国(ち)に於て、むやみやたらと横暴を極めたり。彼等は、われらの許(もと)につれ戻されることなど断じてあるべき筈なしと思えり。

وَٱسْتَكْبَرَ هُوَ وَجُنُودُهُۥ فِى ٱلْأَرْضِ بِغَيْرِ ٱلْحَقِّ وَظَنُّوٓا۟ أَنَّهُمْ إِلَيْنَا لَا يُرْجَعُونَ ﴿٤٠﴾

41. されば、われらはファラオ並びにその軍勢を捕え、彼等を海中に投じたり。見よ、悪人どもの末路が如何に悲惨なりしかを！

فَأَخَذْنَٰهُ وَجُنُودَهُۥ فَنَبَذْنَٰهُمْ فِى ٱلْيَمِّ ۖ فَٱنظُرْ كَيْفَ كَانَ عَٰقِبَةُ ٱلظَّٰلِمِينَ ﴿٤١﴾

42. われらは彼等を、業火(ごうか)に誘(いざな)う先達となせり。復活の日には、彼等は助けられざるべし。

وَجَعَلْنَٰهُمْ أَئِمَّةً يَدْعُونَ إِلَى ٱلنَّارِ ۖ وَيَوْمَ ٱلْقِيَٰمَةِ لَا يُنصَرُونَ ﴿٤٢﴾

43. 彼等は現世に於ては、われらが呪詛(のろい)で追い廻され、而(しか)して復活の日には、すべての慈悲を拒まれる者とならん。

وَأَتْبَعْنَٰهُمْ فِى هَٰذِهِ ٱلدُّنْيَا لَعْنَةً ۖ وَيَوْمَ ٱلْقِيَٰمَةِ هُم مِّنَ ٱلْمَقْبُوحِينَ ﴿٤٣﴾ ع

第五項

44. われらは古(いにしえ)の世代を次々と滅ぼしたる後、人類のために啓発のよりどころとして、また嚮導(きょうどう)並びに慈悲として、モーゼに経典を授けたり、彼等に反省させんがために。

وَلَقَدْ ءَاتَيْنَا مُوسَى ٱلْكِتَٰبَ مِنۢ بَعْدِ مَآ أَهْلَكْنَا ٱلْقُرُونَ ٱلْأُولَىٰ بَصَآئِرَ لِلنَّاسِ وَهُدًى وَرَحْمَةً لَّعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُونَ ﴿٤٤﴾

45. 汝は、昔われらがモーゼに命令を降(くだ)せし時、シナイ山の西側に居らず、また目撃者の一

وَمَا كُنتَ بِجَانِبِ ٱلْغَرْبِىِّ إِذْ قَضَيْنَآ إِلَىٰ مُوسَى

員でも非ざりき。（注15）

الْأَمْرَ وَمَا كُنْتَ مِنَ الشّٰهِدِيْنَ ﴿٤٥﴾

46．然れども、われらはモーゼの後に幾多の世代を興し、彼等のためにその生命を長くせり。汝はまたマドヤンの民と共に住み、われらの神兆を彼等に物語りし者に非ざりき。されど、諸使徒を遣わしたるは、われらなり。（注16）

وَلٰكِنَّآ اَنْشَاْنَا قُرُوْنًا فَتَطَاوَلَ عَلَيْهِمُ الْعُمُرُ ۚ وَمَا كُنْتَ ثَاوِيًا فِيْٓ اَهْلِ مَدْيَنَ تَتْلُوْا عَلَيْهِمْ اٰيٰتِنَا ۙ وَلٰكِنَّا كُنَّا مُرْسِلِيْنَ ﴿٤٦﴾

47．また汝は、われらがモーゼに呼びかけし時も、シナイ山の山腹には居らざりき。然るに、われらが汝を、主の慈悲として遣わしたは、（注17）未だかつて一度も警告者至らざりし民に、警告せしめんがためにして、彼等にも反省せしめんがためなり。

وَمَا كُنْتَ بِجَانِبِ الطُّوْرِ اِذْ نَادَيْنَا وَلٰكِنْ رَّحْمَةً مِّنْ رَّبِّكَ لِتُنْذِرَ قَوْمًا مَّآ اَتٰهُمْ مِّنْ نَّذِيْرٍ مِّنْ قَبْلِكَ لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُوْنَ ﴿٤٧﴾

48．もしそうせざれば、彼等の手が先に送りし行いのために、災難が彼等の身に降りかかる時、彼等は云わん、「主よ、何故に汝は我等に使徒を遣わさざりしか？　我等は汝の神兆に従い、信者となりしものを」と。

وَلَوْلَآ اَنْ تُصِيْبَهُمْ مُّصِيْبَةٌ ۢ بِمَا قَدَّمَتْ اَيْدِيْهِمْ فَيَقُوْلُوْا رَبَّنَا لَوْلَآ اَرْسَلْتَ اِلَيْنَا رَسُوْلًا فَنَتَّبِعَ اٰيٰتِكَ وَنَكُوْنَ مِنَ الْمُؤْمِنِيْنَ ﴿٤٨﴾

49．然るに、今、真理がわれらの許より彼等に至ると、彼等は云えり、「何故彼に、モーゼに与えたる如き奇跡を、与えざりしか？」と。彼等は以前、モーゼに与えたるものを信ぜざりしに非ずや？　彼等は云えり、「律法もクルアーンも、両者とも互に助け合う魔術にすぎず」と。更に彼等は「我等は両者とも信ぜず」と云えり。

فَلَمَّا جَآءَهُمُ الْحَقُّ مِنْ عِنْدِنَا قَالُوْا لَوْلَآ اُوْتِيَ مِثْلَ مَآ اُوْتِيَ مُوْسٰى ؕ اَوَلَمْ يَكْفُرُوْا بِمَآ اُوْتِيَ مُوْسٰى مِنْ قَبْلُ ۚ قَالُوْا سِحْرٰنِ تَظٰهَرَا ۟ وَقَالُوْٓا اِنَّا بِكُلٍّ كٰفِرُوْنَ ﴿٤٩﴾

50．云え、「ならば、お前たちの言葉が真実ならば、両者（注18）に勝る導きの経典をアッラーの許よりもたらしてみよ、然らば我それに従わん」と。

قُلْ فَاْتُوْا بِكِتٰبٍ مِّنْ عِنْدِ اللّٰهِ هُوَ اَهْدٰى مِنْهُمَآ اَتَّبِعْهُ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ﴿٥٠﴾

注15　この節は、モーゼによるモハッマド預言者出現の預言が明らかに成就されたと示している。更に、モーゼが預言を行なう時、傍らにモハッマド預言者その人が居たのである（申命記18章18節）。

注16　この言葉はモハッマド預言者とモーゼの類似点を述べている。モーゼはマドヤンの見知らぬ人々の中で10年暮した後、ファラオの圧政に苦しむイスラエル人を救う為エジプトに戻った。同様にモハッマド預言者もメディナに10年住んだ後、メッカを支配しに戻った。

注17　預言者が自分自身に関する預言を（申命記18：18）モーゼに強い、その成就を求めた等有り得ないとこの節は示している。

注18　「両者」とはクルアーンとトーラのこと。

51．然るに、彼等もし汝の要求に応じ得ざる場合は、彼等はただ自分の妄想に従っているにすぎぬことを知れ。アッラーのお導きなくして自分の妄想に従う者にも増して身を誤る者は誰ぞ？げにアッラーは、悪をなせる人々を導き給わず。

فَإِنْ لَّمْ يَسْتَجِيبُوا لَكَ فَاعْلَمْ أَنَّمَا يَتَّبِعُونَ أَهْوَآءَهُمْ ۚ وَمَنْ أَضَلُّ مِمَّنِ اتَّبَعَ هَوٰىهُ بِغَيْرِ هُدًى مِّنَ اللّٰهِ ۚ إِنَّ اللّٰهَ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظّٰلِمِينَ ﴿٥١﴾

第六項

52．われらは彼等に次々と啓示を降したり、そは彼等に訓戒を受け入れさせんがために。

وَلَقَدْ وَصَّلْنَا لَهُمُ الْقَوْلَ لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُونَ ﴿٥٢﴾

53．われらがクルアーン以前に経典（注19）を与えたる者は、クルアーンを信ず。

اَلَّذِينَ اٰتَيْنٰهُمُ الْكِتٰبَ مِنْ قَبْلِهِ هُمْ بِهِ يُؤْمِنُونَ ﴿٥٣﴾

54．その彼等に向って読誦せらるるや、彼等は云う、「我等は之を信ず。げに、こは主よりの真理なり。げに我等は、それが降る以前からすでに神に甘心服従の者なりき」と。

وَإِذَا يُتْلٰى عَلَيْهِمْ قَالُوٓا اٰمَنَّا بِهِ إِنَّهُ الْحَقُّ مِنْ رَّبِّنَآ إِنَّا كُنَّا مِنْ قَبْلِهِ مُسْلِمِينَ ﴿٥٤﴾

55．これ等の者はその報奨を倍加せられるべし。なんとなれば、彼等はよく耐え忍び、善を以って悪を斥け、われらが授けしものを惜しみなく他人に施し与えたるが故に。

أُولٰٓئِكَ يُؤْتَوْنَ أَجْرَهُمْ مَّرَّتَيْنِ بِمَا صَبَرُوا وَيَدْرَءُونَ بِالْحَسَنَةِ السَّيِّئَةَ وَمِمَّا رَزَقْنٰهُمْ يُنْفِقُونَ ﴿٥٥﴾

56．また彼等は、くだらぬ話を耳にすると、それから顔をそむけていう、「我等には我等の仕事あり、お前たちにはお前たちの仕事あり。いざさらば。我等は愚人に関心をもたず」と。

وَإِذَا سَمِعُوا اللَّغْوَ أَعْرَضُوا عَنْهُ وَقَالُوا لَنَآ أَعْمَالُنَا وَلَكُمْ أَعْمَالُكُمْ سَلٰمٌ عَلَيْكُمْ لَا نَبْتَغِي الْجٰهِلِينَ ﴿٥٦﴾

57．げに汝は、自分の好みのままに誰でも導くことを得ず。然るに、アッラーは、誰であれその欲する者を導き給う。アッラーは、導きを受け入れる者を誰よりもよく知り給う。

إِنَّكَ لَا تَهْدِي مَنْ أَحْبَبْتَ وَلٰكِنَّ اللّٰهَ يَهْدِي مَنْ يَّشَآءُ ۚ وَهُوَ أَعْلَمُ بِالْمُهْتَدِينَ ﴿٥٧﴾

58．彼等は云う、「もし我等が汝と共に嚮導に従わば、我等はこの地より叩き出されん」と。われらは彼等のために安全なる聖域を確立し、其処に、われらからの給養として各種の果物を輸送せしむるに非ずや？然るに、彼等の大半は之を知らず。

وَقَالُوٓا إِنْ نَّتَّبِعِ الْهُدٰى مَعَكَ نُتَخَطَّفْ مِنْ أَرْضِنَا ۚ أَوَلَمْ نُمَكِّنْ لَّهُمْ حَرَمًا اٰمِنًا يُّجْبٰٓى إِلَيْهِ ثَمَرٰتُ كُلِّ شَيْءٍ رِّزْقًا مِّنْ لَّدُنَّا وَلٰكِنَّ أَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٥٨﴾

注19　ここでいう「経典」は、トーラを指す。

59．われらは如何に多くの栄華を誇れる邑を滅ぼせしことか！　これ等は彼等の居住地なりしが、彼等の後に殆ど住む者とてなし。(注 20) 故に、その相続者に成りたる者は、われらなり。

وَكَمْ أَهْلَكْنَا مِنْ قَرْيَةٍ بَطِرَتْ مَعِيشَتَهَا فَتِلْكَ مَسٰكِنُهُمْ لَمْ تُسْكَنْ مِّنْ بَعْدِهِمْ إِلَّا قَلِيلًا وَكُنَّا نَحْنُ الْوٰرِثِيْنَ ﴿٥٩﴾

60．然れども、主は、その啓示を人々に誦み聞かすべくその首都に使徒を挙げずして、決して如何なる首都も滅ぼせることなし。またわれらは、その住民が不義不正に非ずば、如何なる首都も滅ぼせることなし。

وَمَا كَانَ رَبُّكَ مُهْلِكَ الْقُرٰى حَتّٰى يَبْعَثَ فِيْٓ أُمِّهَا رَسُوْلًا يَّتْلُوْا عَلَيْهِمْ اٰيٰتِنَا وَمَا كُنَّا مُهْلِكِي الْقُرٰٓى إِلَّا وَأَهْلُهَا ظٰلِمُوْنَ ﴿٦٠﴾

61．お前たちが今与えられているものすべては、たんに束の間の現世の楽しみであり、それを飾るものにすぎず。然しながら、アッラーの許にあるものは、はるかに勝りて、不変なり。それでもお前たちわからざるか？

وَمَآ أُوْتِيْتُمْ مِّنْ شَيْءٍ فَمَتَاعُ الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا وَزِيْنَتُهَا وَمَا عِنْدَ اللهِ خَيْرٌ وَّأَبْقٰى أَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ﴿٦١﴾

第七項

62．われらが善美なる約束をなし、やがてその約束が実現される者と、われらが現世に於てのみ愉楽を享受させた後、復活の日に神の前に曳き出して糾弾する者と、同一なりや？

أَفَمَنْ وَّعَدْنٰهُ وَعْدًا حَسَنًا فَهُوَ لَاقِيْهِ كَمَنْ مَّتَّعْنٰهُ مَتَاعَ الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا ثُمَّ هُوَ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ مِنَ الْمُحْضَرِيْنَ ﴿٦٢﴾

63．その日神は、彼等を呼びて問わん、「お前たちが主張せるわれに匹敵する神々は、いま何処にありや？」と。

وَيَوْمَ يُنَادِيْهِمْ فَيَقُوْلُ أَيْنَ شُرَكَآءِيَ الَّذِيْنَ كُنْتُمْ تَزْعُمُوْنَ ﴿٦٣﴾

64．すると、天罰の宣告通りになりたる彼等は、云わん、「主よ、我等が誘惑せる者どもは、これ等なり。我等は己れ自身が迷った如く彼等を迷わせり。我等はいま彼等とは関係なく、汝を頼る。彼等が崇めしは、我等に非ざりき」と。

قَالَ الَّذِيْنَ حَقَّ عَلَيْهِمُ الْقَوْلُ رَبَّنَا هٰٓؤُلَآءِ الَّذِيْنَ أَغْوَيْنَا أَغْوَيْنٰهُمْ كَمَا غَوَيْنَا تَبَرَّأْنَآ إِلَيْكَ مَا كَانُوْٓا إِيَّانَا يَعْبُدُوْنَ ﴿٦٤﴾

65．また、かく云われん、「お前たちが神と併せ祀りたる神々に祈れ」と。されば、彼等は神々に祈らん。然れども、神々は応えざる

وَقِيْلَ ادْعُوْا شُرَكَآءَكُمْ فَدَعَوْهُمْ فَلَمْ يَسْتَجِيْبُوْا

注 20　以前住んでいた人々は、力もあり、優秀な文明を誇っていたにもかかわらず、神の真理を否定したことによって地上の上から払い去られた。弱いものと思われていた人々が、彼らにとってかわってやってきた。

べし。彼等はただ懲罰を見るのみ、而(しか)して、嚮導(きょうどう)に従っていたならば、と思う！

لَهُمْ وَرَأَوُا الْعَذَابَ لَوْ أَنَّهُمْ كَانُوا يَهْتَدُونَ ﴿٦٥﴾

66．その日神は、彼等を呼びて問わん、「お前たちは使徒らに如何に答えたのか？」と。

وَيَوْمَ يُنَادِيهِمْ فَيَقُولُ مَاذَا أَجَبْتُمُ الْمُرْسَلِينَ ﴿٦٦﴾

67．その日、すべての消息は彼等に不明瞭となり、お互いに訊くことすらかなわざるべし。

فَعَمِيَتْ عَلَيْهِمُ الْأَنْبَاءُ يَوْمَئِذٍ فَهُمْ لَا يَتَسَاءَلُونَ ﴿٦٧﴾

68．然(しか)れども、改悛して信仰し、正義(ただしき)を行う者は、成功者の仲間に加えられん。（注 21）

فَأَمَّا مَنْ تَابَ وَآمَنَ وَعَمِلَ صَالِحًا فَعَسَىٰ أَنْ يَكُونَ مِنَ الْمُفْلِحِينَ ﴿٦٨﴾

69．汝の主は、己れの欲することを創造し、己れの欲する者を選び給う。されど、彼等は選択することを得ず。アッラーを讃えよ。彼こそは、彼に併せ祀る神々の上に高くいまし給う。

وَرَبُّكَ يَخْلُقُ مَا يَشَاءُ وَيَخْتَارُ ۗ مَا كَانَ لَهُمُ الْخِيَرَةُ ۚ سُبْحَانَ اللَّهِ وَتَعَالَىٰ عَمَّا يُشْرِكُونَ ﴿٦٩﴾

70．而(しか)して、汝の主は、彼等が胸に秘めるもの、また、外に顕(あら)わすものを知り給う。

وَرَبُّكَ يَعْلَمُ مَا تُكِنُّ صُدُورُهُمْ وَمَا يُعْلِنُونَ ﴿٧٠﴾

71．彼は、アッラーなり。彼の外に神なし。現世並びに来世の一切の讃美は、彼に属す。審判は彼の掌握するところにして、お前たちは彼の許(もと)に連れ戻されん。

وَهُوَ اللَّهُ لَا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ ۖ لَهُ الْحَمْدُ فِي الْأُولَىٰ وَالْآخِرَةِ ۖ وَلَهُ الْحُكْمُ وَإِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿٧١﴾

72．云え、「我に告げよ、もしアッラーが復活の日までお前たちの上に永続的に夜を拡げなば、お前たちに光明をもたらす者は、アッラーに非ずして如何なる神ぞ？　お前たち耳を傾けざるつもりか？」と。

قُلْ أَرَأَيْتُمْ إِنْ جَعَلَ اللَّهُ عَلَيْكُمُ اللَّيْلَ سَرْمَدًا إِلَىٰ يَوْمِ الْقِيَامَةِ مَنْ إِلَٰهٌ غَيْرُ اللَّهِ يَأْتِيكُمْ بِضِيَاءٍ ۖ أَفَلَا تَسْمَعُونَ ﴿٧٢﴾

73．云え、「我に告げよ、もしアッラーが復活の日までお前たちの上に永続的に昼を拡げなば、お前たちに休息すべき夜をもたらす者は、アッラーに非ずして如何なる神ぞ？　お前たちこれでもわからざるか？」と。（注 22）

قُلْ أَرَأَيْتُمْ إِنْ جَعَلَ اللَّهُ عَلَيْكُمُ النَّهَارَ سَرْمَدًا إِلَىٰ يَوْمِ الْقِيَامَةِ مَنْ إِلَٰهٌ غَيْرُ اللَّهِ يَأْتِيكُمْ بِلَيْلٍ تَسْكُنُونَ فِيهِ ۖ أَفَلَا تُبْصِرُونَ ﴿٧٣﴾

注 21　イスラム教では、悔い改めた者に対し扉は常に開かれている。罪人が今はのきわに悔い改める事さえ許される。救われない者は無い。ただし、神をあくまでも否定する者は、自ら悔根の扉を閉ざす事となる。

注 22　不断の労働、不断の休息は人の身体を蝕む。夜間の休息と昼間の労働、これは神の大いなる恵みである。夜、疲れた四支は休められ、翌日の労働への新たな活力が湧く。そして昼間働き、生活の糧を得る。この繰り返しが神の恵みである。

74．彼が、その慈悲によって、昼夜を設けたるは、お前たちを休息させ、且つお前たちにその恩恵を求めせしめんがため、並びにお前たちに感謝の気持ちを抱かせしめんがためなり。

وَمِنْ رَّحْمَتِهٖ جَعَلَ لَكُمُ الَّيْلَ وَالنَّهَارَ لِتَسْكُنُوْا فِيْهِ وَلِتَبْتَغُوْا مِنْ فَضْلِهٖ وَلَعَلَّكُمْ تَشْكُرُوْنَ ﴿٧٣﴾

75．その日、彼は、彼等を呼びて問わん、「お前たちが主張せる、われに匹敵する神々はいま何処にありや？」と。

وَيَوْمَ يُنَادِيْهِمْ فَيَقُوْلُ اَيْنَ شُرَكَآءِيَ الَّذِيْنَ كُنْتُمْ تَزْعُمُوْنَ ﴿٧٤﴾

76．而して、われらはそれぞれの民から一人の証人を挙げて、問わん、「お前たちの証拠を持ち来れよ」と。すると、彼等は、真理はアッラーに属することを悟らん。而して、彼等が捏造せる神々は、みな彼等を捨てて去らん。

وَنَزَعْنَا مِنْ كُلِّ اُمَّةٍ شَهِيْدًا فَقُلْنَا هَاتُوْا بُرْهَانَكُمْ فَعَلِمُوْٓا اَنَّ الْحَقَّ لِلّٰهِ وَضَلَّ عَنْهُمْ مَّا كَانُوْا يَفْتَرُوْنَ ﴿٧٥﴾ ع

第八項

77．げにクアールーンは、（注 23）モーゼの民の一人なりしが、彼はその民に対して傲慢しく振舞いたり。われらが彼におびただしい財宝を与えたれば、その宝蔵の鍵は一群の大力なる男たちにもなお担い難きほどなりき。その民は彼に向って云えり、「有頂天になるなかれ。げにアッラーは、有頂天になる者を愛で給わぬ

اِنَّ قَارُوْنَ كَانَ مِنْ قَوْمِ مُوْسٰى فَبَغٰى عَلَيْهِمْ وَاٰتَيْنٰهُ مِنَ الْكُنُوْزِ مَآ اِنَّ مَفَاتِحَهٗ لَتَنُوْٓاُ بِالْعُصْبَةِ اُولِي الْقُوَّةِ اِذْ قَالَ لَهٗ قَوْمُهٗ لَا تَفْرَحْ اِنَّ اللّٰهَ لَا يُحِبُّ الْفَرِحِيْنَ ﴿٧٦﴾

78．アッラーが汝に授けしもので来世の住居を求めよ。この世に於ける汝の取り分を忘却するなかれ。アッラーが汝によくした如く、汝も他人によいことをせよ。而して、この世で悪を為さんと謀るなかれ。げにアッラーは、悪を為す徒輩を愛で給わぬ」と。

وَابْتَغِ فِيْمَآ اٰتٰىكَ اللّٰهُ الدَّارَ الْاٰخِرَةَ وَلَا تَنْسَ نَصِيْبَكَ مِنَ الدُّنْيَا وَاَحْسِنْ كَمَآ اَحْسَنَ اللّٰهُ اِلَيْكَ وَلَا تَبْغِ الْفَسَادَ فِي الْاَرْضِ اِنَّ اللّٰهَ لَا يُحِبُّ الْمُفْسِدِيْنَ ﴿٧٧﴾

79．彼は云えり、「我、これを授かりたるは、我が持てる知識のせいなり」と。彼は、アッラーが彼より力も富もありし彼より前の多くの世代を滅ぼせることを、知らざりし

قَالَ اِنَّمَآ اُوْتِيْتُهٗ عَلٰى عِلْمٍ عِنْدِيْ اَوَلَمْ يَعْلَمْ اَنَّ اللّٰهَ قَدْ اَهْلَكَ مِنْ قَبْلِهٖ مِنَ الْقُرُوْنِ مَنْ هُوَ اَشَدُّ

注 23　クアールーンは非常に裕福であった。彼はファラオに高く引き立てられ、ファラオの財政管理者の様な立場にあった。彼はファラオの金鉱を管理する役人で、金採掘技術者であった様だ。南エジプトのカルーの領地は、良質の金鉱があることで有名だった。彼はイスラエルの民の一人であり、モーゼの信奉者だったと言われている。しかしファラオの引きを得んが為、彼は同胞を虐げ、彼等に傲慢に振る舞った。その為天罰が下り、彼は死んだ。

مِنْهُ قُوَّةً وَأَكْثَرُ جَمْعًا ۚ وَلَا يُسْأَلُ عَن ذُنُوبِهِمُ الْمُجْرِمُونَ ٧٩

か？　およそ罪を犯せし者は、自分の立場を弁護する機会を与えられざるべし。(注24)

فَخَرَجَ عَلَىٰ قَوْمِهِ فِي زِينَتِهِ ۖ قَالَ الَّذِينَ يُرِيدُونَ الْحَيَوٰةَ الدُّنْيَا يَٰلَيْتَ لَنَا مِثْلَ مَآ أُوتِيَ قَٰرُونُ إِنَّهُ لَذُو حَظٍّ عَظِيمٍ ٨٠

80．クアールーンは、あらん限りきらびやかに飾り立てて、その民の前に出で行きぬ。現世の生活に執心する徒輩（やから）は云えり、「ああ、我等もクアールーンが授かりたる如きものがいただけたならば！げに彼こそは、素晴しい幸福者よ」と。

وَقَالَ الَّذِينَ أُوتُوا الْعِلْمَ وَيْلَكُمْ ثَوَابُ اللَّهِ خَيْرٌ لِّمَنْ ءَامَنَ وَعَمِلَ صَٰلِحًا ۚ وَلَا يُلَقَّىٰهَآ إِلَّا الصَّٰبِرُونَ ٨١

81．然（しか）れども、真の知識を授けられたる者は、云えり、「情けなや、信仰して善行を積（つ）む者にとっては、アッラーの褒賞こそ最勝なり。但し、耐え忍ぶ者のみがそれを与えられん」と。

فَخَسَفْنَا بِهِ وَبِدَارِهِ الْأَرْضَ فَمَا كَانَ لَهُ مِن فِئَةٍ يَنصُرُونَهُ مِن دُونِ اللَّهِ وَمَا كَانَ مِنَ الْمُنتَصِرِينَ ٨٢

82．かくて、われらは大地に、彼とその屋敷とを呑み込ましめり。彼にはアッラーに抗して助けてくれる味方とてなく、また自ら防衛し得る力も非ざりき。

وَأَصْبَحَ الَّذِينَ تَمَنَّوْا مَكَانَهُ بِالْأَمْسِ يَقُولُونَ وَيْكَأَنَّ اللَّهَ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَن يَشَآءُ مِنْ عِبَادِهِ وَيَقْدِرُ ۖ لَوْلَآ أَن مَّنَّ اللَّهُ عَلَيْنَا لَخَسَفَ بِنَا ۖ وَيْكَأَنَّهُ لَا يُفْلِحُ الْكَٰفِرُونَ ٨٣

83．前日まで、彼の身分を切望せし徒輩（やから）は、云い始めり「アッラーは自分の欲する僕等（しもべ）に給養を賜い、或る者には之を増し、或る者には之（これ）を減ずるなり。もし我等にアッラーの御慈悲なかりせば、我等もまた大地に呑み込まれたるべし。ああ、忘恩の徒は決して栄えず」と。

第九項

تِلْكَ الدَّارُ الْءَاخِرَةُ نَجْعَلُهَا لِلَّذِينَ لَا يُرِيدُونَ عُلُوًّا فِي الْأَرْضِ وَلَا فَسَادًا ۚ وَالْعَٰقِبَةُ لِلْمُتَّقِينَ ٨٤

84．こは、来世の住居なり。われらは之（これ）を、この世で高慢なることを欲せず、また堕落を欲せざる者に与う。善果は、義（ただ）しい人のために存す。

مَن جَآءَ بِالْحَسَنَةِ فَلَهُ خَيْرٌ مِّنْهَا ۖ وَمَن جَآءَ بِالسَّيِّئَةِ فَلَا يُجْزَى الَّذِينَ عَمِلُوا السَّيِّـَٔاتِ إِلَّا مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ٨٥

85．善行を為（な）す者は、功徳（くどく）に勝る報奨を受けん。されど、悪事を為（な）せる者は、その行為に応じてそれなりの報いを頂載せん。(注25)

注24　不信心者の有罪は明らかであり、これ以上の吟味は不要だ。あるいは次の様な意味にもとれる。有罪を宣告された者はその罪が明白であり、弁明の機会を与えられないであろう。

注25　神の報酬の掟は次の様である。善行に対する報酬は何倍にもなり、悪行に対する罰は、当然受けるべきものより減らされ、悪くともその罪相当のものである。

86．クルアーンの教えを汝に授け給うた彼は、必ず汝を帰るべき故郷に連れ戻さん。云え、「我が主は、嚮導をもたらしたるは誰か、また迷誤にあるは誰かを熟知し給う」と。

إِنَّ الَّذِي فَرَضَ عَلَيْكَ الْقُرْآنَ لَرَادُّكَ إِلَىٰ مَعَادٍ قُلْ رَّبِّي أَعْلَمُ مَن جَاءَ بِالْهُدَىٰ وَمَنْ هُوَ فِي ضَلَالٍ مُّبِينٍ ﴿٨٦﴾

87．経典が汝に啓示せられるとは、全く汝の予期せざりしことにして、そは偏えに主の慈悲による。されば、断じて不信心者を手助けする者となるなかれ。

وَمَا كُنتَ تَرْجُو أَن يُلْقَىٰ إِلَيْكَ الْكِتَابُ إِلَّا رَحْمَةً مِّن رَّبِّكَ فَلَا تَكُونَنَّ ظَهِيرًا لِّلْكَافِرِينَ ﴿٨٧﴾

88．アッラーの数々の神兆が汝に降されたるからには、それから顔をそむけることなかれ。人々を主の御許に呼び寄せよ。而して、主に他神を配する徒輩の中に加わるなかれ。

وَلَا يَصُدُّنَّكَ عَنْ آيَاتِ اللَّهِ بَعْدَ إِذْ أُنزِلَتْ إِلَيْكَ وَادْعُ إِلَىٰ رَبِّكَ وَلَا تَكُونَنَّ مِنَ الْمُشْرِكِينَ ﴿٨٨﴾

89．アッラー以外に如何なる神も祈るなかれ。彼の外に神なし。すべてのものは、彼を除いて、みな消滅す。審判は彼の掌握し給うところにして、お前たちは彼の許に連れ戻されん。

وَلَا تَدْعُ مَعَ اللَّهِ إِلَٰهًا آخَرَ لَا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ كُلُّ شَيْءٍ هَالِكٌ إِلَّا وَجْهَهُ لَهُ الْحُكْمُ وَإِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿٨٩﴾

سُورَةُ الْعَنْكَبُوتِ مَكِّيَّةٌ (٢٩)

アル・アンカブート
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ①

2．アリフ・ラーム・ミーム。(注1)

الم ②

3．人はただ、「我等信ず」と云うだけで、試されることなかるべし、と考えるか？

أَحَسِبَ النَّاسُ أَنْ يُتْرَكُوا أَنْ يَقُولُوا آمَنَّا وَهُمْ لَا يُفْتَنُونَ ③

4．われらは、彼等以前の者も試したり。なんとなれば、アッラーは誠実なる者は誰なるか、また虚言者は誰なるかを必ず識別せん。(注2)

وَلَقَدْ فَتَنَّا الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ فَلَيَعْلَمَنَّ اللَّهُ الَّذِينَ صَدَقُوا وَلَيَعْلَمَنَّ الْكَاذِبِينَ ④

5．それとも、悪事を行う者は、われらから逃(のが)れられ得るとでも思うか？　禍なるかなその判断。

أَمْ حَسِبَ الَّذِينَ يَعْمَلُونَ السَّيِّئَاتِ أَنْ يَسْبِقُونَا ۚ سَاءَ مَا يَحْكُمُونَ ⑤

6．アッラーとの会見を希(こいねが)う者には、アッラーの定められた時が必ず来るべきことを準備させよ。彼は全聴者、全知者にまします。

مَنْ كَانَ يَرْجُو لِقَاءَ اللَّهِ فَإِنَّ أَجَلَ اللَّهِ لَآتٍ ۚ وَهُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ⑥

7．信仰のために努力する者は、(注3)ただ己れ自身のために努力するなり。げにアッラーは一切の衆生(しゅじょう)を頼むことなく、独り自ら存す。

وَمَنْ جَاهَدَ فَإِنَّمَا يُجَاهِدُ لِنَفْسِهِ ۚ إِنَّ اللَّهَ لَغَنِيٌّ عَنِ الْعَالَمِينَ ⑦

8．信じて善行を積(つ)む者は、われらは必ず彼等の諸々の罪を帳消しにして、而(しか)して、彼等の最善なる行いに対して褒賞を与えん。

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَنُكَفِّرَنَّ عَنْهُمْ سَيِّئَاتِهِمْ وَلَنَجْزِيَنَّهُمْ أَحْسَنَ الَّذِي كَانُوا يَعْمَلُونَ ⑧

注1　　われはアッラー、全知者なり（2章2節を参照）。

注2　　信者は苦難・窮乏を経験しなければならず、彼等の信仰は厳しく試される。彼等が真実神の下僕(しもべ)となるのは、厳しい試練に耐えた後である。

注3　　この節では、ムジャヒド（「信仰のために努力する者」）について短くも適切な説明がされてある。実際の行動に移すべき高い理想と不変の努力をイスラム用語でジハートと言う。そして、この高い理想を持ち、それを実現する人物が、真の意味でのムジャヒドである。

9．人間たるもの父母に孝養を盡すべくわれらは命じたり。されど、もし父母が汝の知らぬ神々をわれと併せ祀れと強いるなら、彼等に従うなかれ。お前たちは皆われに帰る。その時われは、お前たちの行いしことを語り知らせん。

وَوَصَّيْنَا الْإِنْسَانَ بِوَالِدَيْهِ حُسْنًا ۖ وَإِنْ جَاهَدَاكَ لِتُشْرِكَ بِي مَا لَيْسَ لَكَ بِهِ عِلْمٌ فَلَا تُطِعْهُمَا ۚ إِلَيَّ مَرْجِعُكُمْ فَأُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ⑨

10．信じて善行を積む者は、われら必ず義しき者の中に加えん。

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَنُدْخِلَنَّهُمْ فِي الصَّالِحِينَ ⑩

11．人々の中には「我等アッラーを信ず」と云いながら、一たびアッラーが原因で苦難に遭遇すると、人為の迫害を恰も天罰の如く看做すものあり。然るに、もし助けが主から至るならば、彼等は必ず云う、「我等は確かにお前たちと一緒なりき」と。萬人が胸中に抱くものを一番良く知るは、アッラーに非ざるか？（注４）

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يَقُولُ آمَنَّا بِاللَّهِ فَإِذَا أُوذِيَ فِي اللَّهِ جَعَلَ فِتْنَةَ النَّاسِ كَعَذَابِ اللَّهِ وَلَئِنْ جَاءَ نَصْرٌ مِنْ رَبِّكَ لَيَقُولُنَّ إِنَّا كُنَّا مَعَكُمْ ۚ أَوَلَيْسَ اللَّهُ بِأَعْلَمَ بِمَا فِي صُدُورِ الْعَالَمِينَ ⑪

12．然り、アッラーは誰が信者かを確実に知り、誰が偽善者なるかを確実に知り給う。

وَلَيَعْلَمَنَّ اللَّهُ الَّذِينَ آمَنُوا وَلَيَعْلَمَنَّ الْمُنَافِقِينَ ⑫

13．不信心者どもは信者等に云う、「我等の教えを奉ぜよ。我等必ずお前たちの罪を負わん」と。（注５）されど、彼等は、己が罪すらも負う能わず。げに彼等は嘘つきなり。

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لِلَّذِينَ آمَنُوا اتَّبِعُوا سَبِيلَنَا وَلْنَحْمِلْ خَطَايَاكُمْ وَمَا هُمْ بِحَامِلِينَ مِنْ خَطَايَاهُمْ مِنْ شَيْءٍ ۖ إِنَّهُمْ لَكَاذِبُونَ ⑬

14．されど、いずれ彼等も己れ自身の重荷を負い、加うるに、自らの重荷と共に他人の重荷まで背負わせられん。而して、復活の日には、その捏造せることについて糾問せらるべし。

وَلَيَحْمِلُنَّ أَثْقَالَهُمْ وَأَثْقَالًا مَعَ أَثْقَالِهِمْ ۖ وَلَيُسْأَلُنَّ يَوْمَ الْقِيَامَةِ عَمَّا كَانُوا يَفْتَرُونَ ⑭

注４　初期のイスラム教徒は、厳しい試練の下で不動の信仰を示したし、又真の信者も常にそうであった。これとは対照的に信仰心の弱い者が、いつの世にもいる。彼等は並みの試練にうろたえ、苦しみに耐えられず信仰を捨てようとする。又一方で、神の救いが信者にもたらされ、神の目的が進むのを目の当たりにすれば、彼等は信者の輪に加わろうとする。

注５　偽善者とは別に、不信心者の攻撃的な指導者がいる。彼等はその高い社会的地位を利用して、地位の低い者を誤った方向に導こうとする。彼らは自分たちの指導を受け入れるよう主張し、同時に新しい（真の）宗教を拒む事で彼らがこうむる損失には自分たちが責任を持つと主張する。

第二項

15．われらは昔、ノアをその民に遣わしたり。彼その民の中にとどまること、千歳より五十年を除く。その民悪事にふける最中に、突如洪水襲いたり。（注６）

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا نُوحًا إِلَىٰ قَوْمِهِ فَلَبِثَ فِيهِمْ أَلْفَ سَنَةٍ إِلَّا خَمْسِينَ عَامًا فَأَخَذَهُمُ الطُّوفَانُ وَهُمْ ظَالِمُونَ ﴿١٥﴾

16．われらは、ノアとその方舟に乗りたる人々を救いたり。而して、われらは之を萬人への徴となせり。

فَأَنجَيْنَاهُ وَأَصْحَابَ السَّفِينَةِ وَجَعَلْنَاهَا آيَةً لِّلْعَالَمِينَ ﴿١٦﴾

17．また、アブラハムがその民にかく云いたる時を念え。「アッラーを崇め、且つ畏こみ奉れ。そは、お前たちの身のためとならん、もしお前たち思慮分別があるならば。

وَإِبْرَاهِيمَ إِذْ قَالَ لِقَوْمِهِ اعْبُدُوا اللَّهَ وَاتَّقُوهُ ذَٰلِكُمْ خَيْرٌ لَّكُمْ إِن كُنتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿١٧﴾

18．お前たちはアッラーをさしおいて、偶像のみを拝み、且つ虚偽を捏造す。お前たちがアッラーをさしおいて拝する神々は、お前たちに日々の糧を供給する能力なし。されば、アッラーに糧を請い求め、彼を崇め、彼に感謝せよ。お前たち皆、いずれは彼の許に連れ戻されん」

إِنَّمَا تَعْبُدُونَ مِن دُونِ اللَّهِ أَوْثَانًا وَتَخْلُقُونَ إِفْكًا ۚ إِنَّ الَّذِينَ تَعْبُدُونَ مِن دُونِ اللَّهِ لَا يَمْلِكُونَ لَكُمْ رِزْقًا فَابْتَغُوا عِندَ اللَّهِ الرِّزْقَ وَاعْبُدُوهُ وَاشْكُرُوا لَهُ ۖ إِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿١٨﴾

19．もしもお前たちがこの真理を認めぬのなら、今までにも信用せざりし民は多かりき。さもあればあれ、使徒の責務は、ただ神託を明確に伝えるのみ。

وَإِن تُكَذِّبُوا فَقَدْ كَذَّبَ أُمَمٌ مِّن قَبْلِكُمْ ۖ وَمَا عَلَى الرَّسُولِ إِلَّا الْبَلَاغُ الْمُبِينُ ﴿١٩﴾

20．彼等は見ざるや、アッラーが如何に創造を起し、再び之を繰り返し給うかを？　そは、アッラーにとりてまことに容易なり。（注７）

أَوَلَمْ يَرَوْا كَيْفَ يُبْدِئُ اللَّهُ الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيدُهُ ۚ إِنَّ ذَٰلِكَ عَلَى اللَّهِ يَسِيرٌ ﴿٢٠﴾

注６　ノアの時代は950年間続いたと処々に書かれてある。聖書ではそれを952年間としている。ノア、フード、サーレ等、古代の預言者が生きた時代や、その生存期間について、正確な数字を挙げるのは難しい。「彼等を知る者は、神の他誰一人いない。」とクルアーンは述べている（14：10）。950年という期間は、ノア個人の生存期間ではなく、彼の律法が行われた時代を指すのであろう。アブラハムがノアの末裔である事から、これはアブラハムの世に繋がる時の流れの始まりだったと言える（37：84）。次にヨセフの時が来、そしてモーゼの時へと移る。事実、預言者の年令とは、彼の律法と教義が行なわれた年数の事である。ノアの年令の区切りを示すのに、サナーとアームという二語が用いられている。前者は本来「悪意を持つ」という意味で、後者は「善意を持つ」という意味である。ノアの律法の初めの50年間は、精神的成長と回心の時であった。その後に道徳の退廃が始まり、彼の一族は次第に道徳的に堕落して行き、この事態は900年の間続いた。

注７　この節には、神の創造と再生の律法がどの様に行なわれるかが示されている。神は、モハッマド預言者を通して、古き者が滅びた後に、新たな人々と、新たな秩序を創造されるであろう。

21．云え、「国々を遍歴せよ。而（しか）して、アッラーが如何に最初の創造を起したるかを見よ。次いで、アッラーは第二の創造を生じさせん」と。（注８）げにアッラーは萬能にまします。

قُلْ سِيْرُوْا فِي الْاَرْضِ فَانْظُرُوْا كَيْفَ بَدَاَ الْخَلْقَ ثُمَّ اللّٰهُ يُنْشِئُ النَّشْاَةَ الْاٰخِرَةَ ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ﴿۲۱﴾

22．彼は、欲する者を罰し、また、欲する者に慈悲を垂れ給う。（注９）而（しか）して、お前たち皆、いずれは彼の許（もと）に引き戻されん。

يُعَذِّبُ مَنْ يَّشَآءُ وَيَرْحَمُ مَنْ يَّشَآءُ ۚ وَاِلَيْهِ تُقْلَبُوْنَ ﴿۲۲﴾

23．お前たちは、天に於ても地に於ても、アッラーの意図を挫折せしむる能（あた）わず。またお前たちには、アッラーの外に如何なる味方も、助け手もなし。（注10）

وَمَآ اَنْتُمْ بِمُعْجِزِيْنَ فِي الْاَرْضِ وَلَا فِي السَّمَآءِ ۫ وَمَا لَكُمْ مِّنْ دُوْنِ اللّٰهِ مِنْ وَّلِيٍّ وَّلَا نَصِيْرٍ ﴿۲۳﴾

第三項

24．アッラーの神兆（しるし）を信ぜず、その会見を信ぜざる者は－わが慈悲を断念したる徒輩（やから）なり。彼等は痛罰を受けん。

وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا بِاٰيٰتِ اللّٰهِ وَلِقَآئِهٖۤ اُولٰٓئِكَ يَئِسُوْا مِنْ رَّحْمَتِيْ وَاُولٰٓئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿۲۴﴾

25．その民の答えは、ただかくの如きなりき。「彼を殺せ、さもなくば火炙（ひあぶ）りにせよ」。然（しか）れども、アッラーは彼を火中より救いたり。この中には、信ずる人々への歴然たる神兆（しるし）あり。

فَمَا كَانَ جَوَابَ قَوْمِهٖۤ اِلَّآ اَنْ قَالُوا اقْتُلُوْهُ اَوْ حَرِّقُوْهُ فَاَنْجٰىهُ اللّٰهُ مِنَ النَّارِ ؕ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يُّؤْمِنُوْنَ ﴿۲۵﴾

26．アブラハムは云えり、「げにお前たちは、アッラーの外に偶像を奉ずれども、お前たちと神々はただ現世に於けるよしみによって結ばれるのみ。（注11）されば、復活の

وَقَالَ اِنَّمَا اتَّخَذْتُمْ مِّنْ دُوْنِ اللّٰهِ اَوْثَانًا ۙ مَّوَدَّةَ بَيْنِكُمْ فِي الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا ۚ ثُمَّ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ يَكْفُرُ

注８　この言葉は、クルアーンに何度か取り上げられており（6：12，12：110，30：10，35：45，40：83），そのほとんどの箇所には、「一つの国家が滅び、新たな国家が生まれる」事を示す記述が続く。当節では、死後の復活ではなく、唯、国の栄枯盛衰について述べられている。

注９　クルアーンの数ケ所で述べられている通り、神は根拠無くして罰せられる訳ではなく、裁きは罪に比して下される。この節は唯一この事を強調している。

注10　神意が現れ、イスラム教が広まり勝利を得る時、不信心者は神の御計画を妨げたり、定められた恐しい運命を逃がれる事はできない。不信心者はこの様に厳しく警告されている。

注11　「よしみ」という言葉は次の様な意味を持つ。(1)相思相愛の関係や、それを望む気持ちは、偶像崇拝の理想や行為に基づくものである。(2)貴人方は、偶像崇拝の理想や行為を互いの愛の基盤としてしまった。つまり、偶像崇拝の一致により、社会の均質性を保とうとしたのである。

日に於ては、互に否認し、互に呪いあうべし。お前たちの住居は業火なるべし。而して、お前たちを救う者なかるべし」と。

بَعْضُكُمْ بِبَعْضٍ وَّيَلْعَنُ بَعْضُكُمْ بَعْضًا وَّمَأْوٰىكُمُ النَّارُ وَمَا لَكُمْ مِّنْ نّٰصِرِيْنَ ﴿٢٦﴾

27．ロトはアブラハムを信じたり。されば、アブラハムは云えり、「我、主の許へ避難せん。まことに彼は、偉大にして賢哲にまします」と。

فَاٰمَنَ لَهٗ لُوْطٌ ۘ وَقَالَ اِنِّيْ مُهَاجِرٌ اِلٰى رَبِّيْ ۭ اِنَّهٗ هُوَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ﴿٢٧﴾

28．われらはアブラハムに、イサクとヤコブを与え、預言者としての能力を授け、彼の子孫に経典を授けたり。また、彼には、現世に於て報奨も与えたり。彼は来世に於て、必ずや義しき人々の仲間に加えられん。

وَوَهَبْنَا لَهٗٓ اِسْحٰقَ وَيَعْقُوْبَ وَجَعَلْنَا فِيْ ذُرِّيَّتِهِ النُّبُوَّةَ وَالْكِتٰبَ وَاٰتَيْنٰهُ اَجْرَهٗ فِي الدُّنْيَا ۚ وَاِنَّهٗ فِي الْاٰخِرَةِ لَمِنَ الصّٰلِحِيْنَ ﴿٢٨﴾

29．われらはまたロトを遣わしたが、時に彼はその民にかく云えり、「お前たちは、お前たち以前の如何なる民も行わざりし忌まわしい行為を犯す。

وَلُوْطًا اِذْ قَالَ لِقَوْمِهٖٓ اِنَّكُمْ لَتَاْتُوْنَ الْفَاحِشَةَ ۡ مَا سَبَقَكُمْ بِهَا مِنْ اَحَدٍ مِّنَ الْعٰلَمِيْنَ ﴿٢٩﴾

30．なんたることぞ！　男に色情を抱いて近づき、大道で旅人を襲い、集会の席ですら忌まわしい行為をするのか？！」と。（注 12）
然るに、その民はかく答えたるのみ、「もし汝の言葉が真実なら、アッラーの罰とやらここにもたらせ」と。

اَىِٕنَّكُمْ لَتَاْتُوْنَ الرِّجَالَ وَتَقْطَعُوْنَ السَّبِيْلَ ۥ وَتَاْتُوْنَ فِيْ نَادِيْكُمُ الْمُنْكَرَ ۭ فَمَا كَانَ جَوَابَ قَوْمِهٖٓ اِلَّآ اَنْ قَالُوا ائْتِنَا بِعَذَابِ اللّٰهِ اِنْ كُنْتَ مِنَ الصّٰدِقِيْنَ ﴿٣٠﴾

31．ロトは祈りたり、「主よ、この邪悪な民から我を守り給え」と。

قَالَ رَبِّ انْصُرْنِيْ عَلَى الْقَوْمِ الْمُفْسِدِيْنَ ﴿٣١﴾

第四項

32．かくて、われらの使者たちは朗報を携えてアブラハムに来たりて、云えり、「我等はこの邑の住民を滅ぼさんとす。げにこの邑の住民は、不義なす徒輩なり」と。

وَلَمَّا جَاۗءَتْ رُسُلُنَآ اِبْرٰهِيْمَ بِالْبُشْرٰى ۙ قَالُوْٓا اِنَّا مُهْلِكُوْٓا اَهْلِ هٰذِهِ الْقَرْيَةِ ۚ اِنَّ اَهْلَهَا كَانُوْا ظٰلِمِيْنَ ﴿٣٢﴾

33．アブラハムは云えり、「されど、邑にロトあり」と。使者たちは云えり、「我等は、そこに住む者を熟知す。我等は必ず、後に残る

قَالَ اِنَّ فِيْهَا لُوْطًا ۭ قَالُوْا نَحْنُ اَعْلَمُ بِمَنْ فِيْهَا ڭ لَنُنَجِّيَنَّهٗ وَاَهْلَهٗٓ اِلَّا امْرَاَتَهٗ ڭ كَانَتْ مِنَ

注 12　三つの悪徳は、この節のロト一族によるもので、それは次の様なものである。(1)極悪な犯罪 (2)路上強盗 (3)公衆の面前で恥もなく罪を犯す事

者の仲間に入るロトの妻を除いて、ロトとその家族を救わん」と。

الْغٰبِرِيْنَ ﴿٣٣﴾

34．而して、われらの使者たちがロトのところに到ると、彼は人々のために自分の無力さを感じ、心を痛めたり。（注 13）されば、使者たちは云えり、「恐れるなかれ、悲しむなかれ。我等は必ず、後に残る者の仲間に入る汝の妻を除き、汝と汝の家族を救わん。

وَلَمَّآ اَنْ جَآءَتْ رُسُلُنَا لُوْطًا سِيْٓءَ بِهِمْ وَضَاقَ بِهِمْ
ذَرْعًا وَّقَالُوْا لَا تَخَفْ وَلَا تَحْزَنْ اِنَّا مُنَجُّوْكَ وَاَهْلَكَ
اِلَّا امْرَاَتَكَ كَانَتْ مِنَ الْغٰبِرِيْنَ ﴿٣٤﴾

35．我等はこの邑の住民に、彼等の不埒きわまる振舞い故に、天罰を降さんとす」と。

اِنَّا مُنْزِلُوْنَ عَلٰٓى اَهْلِ هٰذِهِ الْقَرْيَةِ رِجْزًا مِّنَ السَّمَآءِ
بِمَا كَانُوْا يَفْسُقُوْنَ ﴿٣٥﴾

36．われらは思慮ある人々のために、明白なる徴として、それを今に遺したり。

وَلَقَدْ تَّرَكْنَا مِنْهَآ اٰيَةًۢ بَيِّنَةً لِّقَوْمٍ يَّعْقِلُوْنَ ﴿٣٦﴾

37．また、われらは、マドゥヤンの民にその兄弟シュアイブを遣わしたり。彼は云えり、「我が民よ、アッラーを崇め、最後の日を忘れず、地上を乱す邪悪を犯すなかれ」と。

وَاِلٰى مَدْيَنَ اَخَاهُمْ شُعَيْبًا فَقَالَ يٰقَوْمِ اعْبُدُوا اللّٰهَ
وَارْجُوا الْيَوْمَ الْاٰخِرَ وَلَا تَعْثَوْا فِى الْاَرْضِ مُفْسِدِيْنَ ﴿٣٧﴾

38．然るに、彼等は、シュアイブを嘘つきと呼べり。因って、激震彼等を襲い、彼等己が家の下敷きとなれり。

فَكَذَّبُوْهُ فَاَخَذَتْهُمُ الرَّجْفَةُ فَاَصْبَحُوْا فِيْ دَارِهِمْ
جٰثِمِيْنَ ﴿٣٨﴾

39．われらはまた、アード並びにサムードの民を滅ぼせり。そは、彼等の廃墟によって、お前たちにはすでに明白なり。悪魔は彼等に、己が所業を立派なものだと思わしめたれば、彼等慧眼なれど、正しき道より離反せり。（注 14）

وَعَادًا وَّثَمُوْدَا۠ وَقَدْ تَّبَيَّنَ لَكُمْ مِّنْ مَّسٰكِنِهِمْ وَزَيَّنَ
لَهُمُ الشَّيْطٰنُ اَعْمَالَهُمْ فَصَدَّهُمْ عَنِ السَّبِيْلِ وَ
كَانُوْا مُسْتَبْصِرِيْنَ ﴿٣٩﴾

40．またわれらは、クァールーンとファラオとハーマーンを滅ぼせり。モーゼがその使命の証を持って彼等に至りしも、地上に於て傲然と振舞えり。されど、彼等は、われらを凌駕し得ざりき。

وَقَارُوْنَ وَفِرْعَوْنَ وَهَامٰنَ وَلَقَدْ جَآءَهُمْ مُّوْسٰى
بِالْبَيِّنٰتِ فَاسْتَكْبَرُوْا فِى الْاَرْضِ وَمَا كَانُوْا سٰبِقِيْنَ ﴿٤٠﴾

注 13　使者がどの様な人物かはこの節に述べられており、彼等の使命に関しては 11：70－71，15：68－72 に書かれてある。彼等の訪問はロト預言者を悲しませた。見知らぬ者が街へ来るのを嫌い、ロトによそ者を受け入れない様禁じていた。彼は一族の者達が客の前で彼に恥をかかせるのではないかと恐れた。

注 14　このクルアーンの言葉は次の様な意味を持つ。(1)彼等は、自ら選んだ道が誤りであった事に気付いた。(2)彼等は、どの様な結末を迎えるか知りつつも、故意に一つの道を選んだ。

41. 要するに、われらは、彼等の各々をその罪にてらして罰したり。或る者には石混じりの嵐を送り､或る者は怒号を似て之を襲い、或る者は大地に呑み込ましめ、或る者は溺死せしめたり。アッラーが彼等を虐待したに非ず、虐待したるは彼等自らなり。

فَكُلًّا أَخَذْنَا بِذَنْبِهِ فَمِنْهُم مَّنْ أَرْسَلْنَا عَلَيْهِ حَاصِبًا وَمِنْهُم مَّنْ أَخَذَتْهُ الصَّيْحَةُ وَمِنْهُم مَّنْ خَسَفْنَا بِهِ الْأَرْضَ وَمِنْهُم مَّنْ أَغْرَقْنَا وَمَا كَانَ اللَّهُ لِيَظْلِمَهُمْ وَلَٰكِن كَانُوا أَنفُسَهُمْ يَظْلِمُونَ ﴿٤٠﴾

42. アッラー以外に守護者を求むる者は、譬うれば、己れの家を造る蜘蛛の如し。すべての家の中で、最も脆弱なものは、蜘蛛の家なり、彼等この事を知りたりせば！（注15）

مَثَلُ الَّذِينَ اتَّخَذُوا مِن دُونِ اللَّهِ أَوْلِيَاءَ كَمَثَلِ الْعَنكَبُوتِ اتَّخَذَتْ بَيْتًا وَإِنَّ أَوْهَنَ الْبُيُوتِ لَبَيْتُ الْعَنكَبُوتِ لَوْ كَانُوا يَعْلَمُونَ ﴿٤١﴾

43. げにアッラーは、彼等がアッラー以外に祈るものは、何であれ、知り給う。彼は偉大にして、賢哲にまします。

إِنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ مَا يَدْعُونَ مِن دُونِهِ مِن شَيْءٍ وَهُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ﴿٤٢﴾

44. これ等は、われらが人間のために示したる比喩なれども、知識を持てる者以外は之を理解せぬなり。

وَتِلْكَ الْأَمْثَالُ نَضْرِبُهَا لِلنَّاسِ وَمَا يَعْقِلُهَا إِلَّا الْعَالِمُونَ ﴿٤٣﴾

45. アッラーは真理を以て、天地を創造し給えり。げにこの中に在るものは､信者への神兆なり。

خَلَقَ اللَّهُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضَ بِالْحَقِّ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً لِّلْمُؤْمِنِينَ ﴿٤٤﴾

第五項

46. 汝に啓示されたる経典を読誦し、礼拝を遵守せよ。げに礼拝は、人をみだらな行為と悪事から防止す。而して、最も肝要なことは、アッラーを唱念することなり。アッラーはお前たちの所業を知悉し給う。

اتْلُ مَا أُوحِيَ إِلَيْكَ مِنَ الْكِتَابِ وَأَقِمِ الصَّلَاةَ إِنَّ الصَّلَاةَ تَنْهَىٰ عَنِ الْفَحْشَاءِ وَالْمُنكَرِ وَلَذِكْرُ اللَّهِ أَكْبَرُ وَاللَّهُ يَعْلَمُ مَا تَصْنَعُونَ ﴿٤٥﴾

47. 立派な態度を以てするに非ずば、経典の民と論争するなかれ。されど、不義なす徒輩の場合は別なり。而して云え、「我等は、我等並びにお前たちに啓示されたものを信ず。我等の神も、お前たちの神も、一つな

وَلَا تُجَادِلُوا أَهْلَ الْكِتَابِ إِلَّا بِالَّتِي هِيَ أَحْسَنُ إِلَّا الَّذِينَ ظَلَمُوا مِنْهُمْ وَقُولُوا آمَنَّا بِالَّذِي أُنزِلَ إِلَيْنَا وَأُنزِلَ

注15　イスラム教の主題である神の不変性についてはこの節で終わる、処々では美しい陰喩が用いられて、偶像崇拝の愚かさ、誤りを多神論者に痛感させている。それらは蜘蛛の巣の様にもろく、知的な批判には対抗できない。

إِلَيْكُمْ وَإِلَٰهُنَا وَإِلَٰهُكُمْ وَاحِدٌ وَنَحْنُ لَهُ مُسْلِمُونَ ﴿٤٧﴾

り。されば、我等はその神に服従帰依し奉る」と。（注 16）

وَكَذَٰلِكَ أَنزَلْنَا إِلَيْكَ الْكِتَابَ ۚ فَالَّذِينَ آتَيْنَاهُمُ الْكِتَابَ يُؤْمِنُونَ بِهِ ۖ وَمِنْ هَٰؤُلَاءِ مَن يُؤْمِنُ بِهِ ۚ وَمَا يَجْحَدُ بِآيَاتِنَا إِلَّا الْكَافِرُونَ ﴿٤٨﴾

48. われらは汝にも同じように経典を降(くだ)したり。されば、われらが真実(まこと)の知識なる経典を授けたる者は、クルアーンを信ず。また、メッカ人(びと)の中にもクルアーンを信ずる人々あり。不信心者の外は何人(なんびと)もわれらの神兆(しるし)を拒まず。

وَمَا كُنتَ تَتْلُو مِن قَبْلِهِ مِن كِتَابٍ وَلَا تَخُطُّهُ بِيَمِينِكَ ۖ إِذًا لَّارْتَابَ الْمُبْطِلُونَ ﴿٤٩﴾

49. 汝はクルアーンを賜わる前に、如何なる経典も読誦(どくしょう)せず、また汝の右手で如何なるものをも書かざりき。もしそうであったとすれば、嘘つきどもは疑心を抱いたに相違なし。（注 17）

بَلْ هُوَ آيَاتٌ بَيِّنَاتٌ فِي صُدُورِ الَّذِينَ أُوتُوا الْعِلْمَ ۚ وَمَا يَجْحَدُ بِآيَاتِنَا إِلَّا الظَّالِمُونَ ﴿٥٠﴾

50. 然(しか)らず、そは知識を賜わる者の心の中に於ける明瞭なる神兆(しるし)なり。不義なす徒輩(やから)の外は、何人(なんびと)もわれらの神兆(しるし)を拒まず。（注 18）

وَقَالُوا لَوْلَا أُنزِلَ عَلَيْهِ آيَاتٌ مِّن رَّبِّهِ ۖ قُلْ إِنَّمَا الْآيَاتُ عِندَ اللَّهِ وَإِنَّمَا أَنَا نَذِيرٌ مُّبِينٌ ﴿٥١﴾

51. 彼等は云えり、「何故主より奇跡が彼に降(くだ)されざるか？」と。云え、「奇跡はアッラーの許(もと)にあり。我はただの警告者にすぎず」と。

أَوَلَمْ يَكْفِهِمْ أَنَّا أَنزَلْنَا عَلَيْكَ الْكِتَابَ يُتْلَىٰ عَلَيْهِمْ ۚ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَرَحْمَةً وَذِكْرَىٰ لِقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ﴿٥٢﴾ ع

52. われらが彼に経典を降(くだ)せしは、彼等に誦(よ)み聞かせんがため、彼等それでも足れりと思わざるか？　げにこの中には、信ずる人々への慈悲と訓戒あり。（注 19）

注 16　自分の宗教を他の人々に説く際の適切な法則がこの節に示されている。我々はまず、自分と相手が共通点のある信仰を持つという点を強調する事で説教を始めるべきだ。例えば、「経典の民」について語る時は、永遠なる神と神の啓示という二つの基本的教義を基にしなければならないと我々は教えられている。

注 17　読み書きの出来ない一人の男がある国に生まれ育ち、文明人との接触もなく、おそらく他の黙示録に関して何の知識も無かったであろう。その男にクルアーンを作る事などできたであろうか？　否、クルアーンは永遠に価値あるもの全てを備えただけでなく、人類が常に必要とする道徳的・精神的なものを満たす様に作られているのである。これ等の事柄は、クルアーンが神に啓示されたものであり、モハッマド預言者が神の教えを伝える師である事を確証する。

注 18　前節では、クルアーンが神の啓示である事を示す外的証拠に言及しているが、当節では、クルアーンに精通する者の心から神の光が湧き出るという内的証拠を挙げている。

注 19　罰の神兆(しるし)を求める不信心者に対し（前節参照）、この節は哀れみを込めて答えている。神は既にクルアーンを通して慈悲の印をお与えになっており、クルアーンに従えば高位を得、世の人々に敬われるであろうに。にもかかわらず、なぜ罰の印を求めるのか、と答えている。

第六項

53. 云え、「我とお前たちとの間のことは、アッラーお独りの証言でこと足りる。彼は天地に通暁す。されば、虚妄を信じてアッラーを信ぜざる者、斯かる者は失敗者なり」と。

قُلْ كَفَىٰ بِاللَّهِ بَيْنِي وَبَيْنَكُمْ شَهِيدًا ۖ يَعْلَمُ مَا فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۗ وَالَّذِينَ آمَنُوا بِالْبَاطِلِ وَكَفَرُوا بِاللَّهِ أُولَٰئِكَ هُمُ الْخَاسِرُونَ ﴿٥٣﴾

54. 彼等は汝に懲罰を催促す。もし定められたる時期なかりせば、たちどころに罰は降ったに相違なし。げに懲罰は、彼等の気づかぬ中に、突然襲いかかるべし。（注 20）

وَيَسْتَعْجِلُونَكَ بِالْعَذَابِ ۚ وَلَوْلَا أَجَلٌ مُسَمًّى لَجَاءَهُمُ الْعَذَابُ وَلَيَأْتِيَنَّهُمْ بَغْتَةً وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ﴿٥٤﴾

55. 彼等は汝に懲罰を催促するが、地獄はすでに、不信心者どもを取り囲めり。（注 21）

يَسْتَعْجِلُونَكَ بِالْعَذَابِ وَإِنَّ جَهَنَّمَ لَمُحِيطَةٌ بِالْكَافِرِينَ ﴿٥٥﴾

56. 懲罰が彼等の頭上から足の下まで埋めつくす（注 22）その日、主は云わん、「汝等の所業の報いを味わえ」と。

يَوْمَ يَغْشَاهُمُ الْعَذَابُ مِنْ فَوْقِهِمْ وَمِنْ تَحْتِ أَرْجُلِهِمْ وَيَقُولُ ذُوقُوا مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٥٦﴾

57. ああ、信ずるわが僕らよ！　わが大地は広大なり、されば、われのみを崇めよ。

يَا عِبَادِيَ الَّذِينَ آمَنُوا إِنَّ أَرْضِي وَاسِعَةٌ فَإِيَّايَ فَاعْبُدُونِ ﴿٥٧﴾

58. 人は皆死する者なり。然る後、お前たちはわれらに連れ戻されん。

كُلُّ نَفْسٍ ذَائِقَةُ الْمَوْتِ ۖ ثُمَّ إِلَيْنَا تُرْجَعُونَ ﴿٥٨﴾

59. 信仰し、正しい行いをする者には、われらは必ず楽園の高殿に宿らせん。その下には河川流れ漂う。彼等はそこに永久に住み留まらん。善いことに精を出せし者の報奨は実に素晴らしい。（注 23）

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَنُبَوِّئَنَّهُمْ مِنَ الْجَنَّةِ غُرَفًا تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا ۚ نِعْمَ أَجْرُ الْعَامِلِينَ ﴿٥٩﴾

60. よく耐え忍んだ者たちや、信頼をその主に置き奉りし者たちもまた。

الَّذِينَ صَبَرُوا وَعَلَىٰ رَبِّهِمْ يَتَوَكَّلُونَ ﴿٦٠﴾

注 20　この節は、不信心者の罰の神兆を求めるのに対し、次の様に率直に答えている。クルアーンを通じて与えられた慈悲の印に恵まれるより、この不幸な者達はあくまで罰を求めている。それ由、彼等はこの印を得、突然思い掛ない所で彼等に罰が下るであろう。しかし彼等は定められた時まで待たねばならない。

注 21　前節に述べられた罰とは、現世で不信心者に下されるものである。この節にある罰は、来世に彼等に科せられるものである。

注 22　神の罰が下る時、それは突然・急激に、滝の様に四方から彼等を襲う。

注 23　信者はここで、明確な言葉で約束されている。心の拠り所を神の道に置く者は、信仰が揺がず、行いが正しい為、神の為に失うものより遥かに多くの報酬を与えられるであろう。

61．己が食糧をまかなえざる動物が如何に沢山いることか！　アッラーはそれ等を養い、またお前たちを養い給う。（注 24）彼はすべてを聴き、すべてを知り給う。

وَكَأَيِّن مِّن دَآبَّةٍ لَّا تَحْمِلُ رِزْقَهَا ٱللَّهُ يَرْزُقُهَا وَإِيَّاكُمْ وَهُوَ ٱلسَّمِيعُ ٱلْعَلِيمُ ٦١

62．もし汝、彼等に向って「天地を創造し、太陽と月とを抑えて役立たしめたるは誰か？」と問わば、（注 25）彼等は必ずや答えん、「アッラーなり」と。然らば、何故彼等は真理から離反しているのか？

وَلَئِن سَأَلْتَهُم مَّنْ خَلَقَ ٱلسَّمَٰوَٰتِ وَٱلْأَرْضَ وَسَخَّرَ ٱلشَّمْسَ وَٱلْقَمَرَ لَيَقُولُنَّ ٱللَّهُ فَأَنَّىٰ يُؤْفَكُونَ ٦٢

63．アッラーは、その僕らの中で、欲する者に給養を増し、欲する者に給養を減ずる。げにアッラーは、萬事を深知し給う。

ٱللَّهُ يَبْسُطُ ٱلرِّزْقَ لِمَن يَشَآءُ مِنْ عِبَادِهِۦ وَيَقْدِرُ لَهُۥٓ إِنَّ ٱللَّهَ بِكُلِّ شَىْءٍ عَلِيمٌ ٦٣

64．もし汝、彼等に向って「天から水を降し、それによって枯れ死んだ大地に生を与える者は誰か？」と問わば、彼等は必ず答えん、「アッラーなり」と。云え、「すべての賞讃はアッラーに属す」と。されど、彼等の大半は解らざるなり。

وَلَئِن سَأَلْتَهُم مَّن نَّزَّلَ مِنَ ٱلسَّمَآءِ مَآءً فَأَحْيَا بِهِ ٱلْأَرْضَ مِنۢ بَعْدِ مَوْتِهَا لَيَقُولُنَّ ٱللَّهُ قُلِ ٱلْحَمْدُ لِلَّهِ بَلْ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْقِلُونَ ٦٤

65．今生は、気晴らしか慰みにしかすぎず。（注 26）来世の安息所こそ真の生活なり、彼等この事を知りたりせば。

وَمَا هَٰذِهِ ٱلْحَيَوٰةُ ٱلدُّنْيَآ إِلَّا لَهْوٌ وَلَعِبٌ وَإِنَّ ٱلدَّارَ ٱلْءَاخِرَةَ لَهِىَ ٱلْحَيَوَانُ لَوْ كَانُوا۟ يَعْلَمُونَ ٦٥

66．船の中では、彼等は誠実且つひた向きにアッラーを祈る。然るに、アッラーが彼等を無事上陸させてやると、見よ、彼等はアッラーに再び他神を併せ祀る、

فَإِذَا رَكِبُوا۟ فِى ٱلْفُلْكِ دَعَوُا۟ ٱللَّهَ مُخْلِصِينَ لَهُ ٱلدِّينَ فَلَمَّا نَجَّىٰهُمْ إِلَى ٱلْبَرِّ إِذَا هُمْ يُشْرِكُونَ ٦٦

67．われらが彼等に授けたるものを忘れて。而して、彼等は当座の享楽にふける。されど、彼等はやがて己が行状の結果を知るべし。

لِيَكْفُرُوا۟ بِمَآ ءَاتَيْنَٰهُمْ وَلِيَتَمَتَّعُوا۟ فَسَوْفَ يَعْلَمُونَ ٦٧

68．その周辺で強奪がほしいままに行われているとき、われらが彼等のためにメッカの安

أَوَلَمْ يَرَوْا۟ أَنَّا جَعَلْنَا حَرَمًا ءَامِنًا وَيُتَخَطَّفُ ٱلنَّاسُ مِنْ

注 24　動物や鳥ですら食物に恵まれている時に、神の最も優れた創造物であり、頂上を極める人間が飢える事などあろうはずがない。

注 25　神は生命ある全ての創造物及び自然現象を人間の役に立つように、与えられた。

注 26　崇高な目的の為に生じる艱難辛苦や、神の為に耐える犠牲の無い人生は娯楽と同じく無益なものである。

حَوْلِهِمْ ۗ اَفَبِالْبَاطِلِ يُؤْمِنُوْنَ وَبِنِعْمَةِ اللّٰهِ يَكْفُرُوْنَ ﴿٦٨﴾

全な聖域を設けたることを、彼等は見ざりしか？　それでも彼等は虚妄を信じて、アッラーの恩恵を拒否するつもりか？

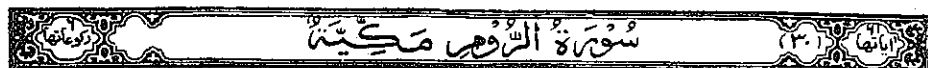
وَمَنْ اَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرٰى عَلَى اللّٰهِ كَذِبًا اَوْ كَذَّبَ بِالْحَقِّ لَمَّا جَآءَهٗ ۗ اَلَيْسَ فِيْ جَهَنَّمَ مَثْوًى لِّلْكٰفِرِيْنَ ﴿٦٩﴾

69. アッラーについて偽りを捏造(ねつぞう)する者、或いは真理が来(きた)れる時に之(これ)を否認する者以上の不義者は誰か？　地獄には不信心者どもの住居は非ざるか？

وَالَّذِيْنَ جَاهَدُوْا فِيْنَا لَنَهْدِيَنَّهُمْ سُبُلَنَا ۗ وَاِنَّ اللّٰهَ لَمَعَ الْمُحْسِنِيْنَ ﴿٧٠﴾

70. されど、われらのために励む者は、(注 27) われらは之(これ)をわれらの道に導かん。げにアッラーは、常に善人と偕(とも)にあり。

注 27　イスラム教に定められたジハードとは、殺害の加害者及び被害者になる事ではなく、神の御意志に沿う様努力する事にある。

سُوْرَةُ الرُّوْمِ مَكِّيَّةٌ (٣٠)

アル・ルーム
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．アリフ・ラーム・ミーム。（注1）

الٓمّٓ ②

3．羅馬人は破れたり、

غُلِبَتِ الرُّوْمُ ③

4．この国に隣接する地（注2）に於て。然しながら、彼等はいずれ勝利せん、

فِيْٓ اَدْنَى الْاَرْضِ وَهُمْ مِّنْۢ بَعْدِ غَلَبِهِمْ سَيَغْلِبُوْنَ ④

5．数年の後には一前の敗北も後の勝利も、アッラーの御意志なり一その日、信者たちは喜ばん、（注3）

فِيْ بِضْعِ سِنِيْنَ ۗ لِلّٰهِ الْاَمْرُ مِنْ قَبْلُ وَمِنْۢ بَعْدُ ۗ وَيَوْمَئِذٍ يَّفْرَحُ الْمُؤْمِنُوْنَ ⑤

注1　われはアッラー、全知者なり（2節2章参照）。

注2　パレスチナ

注3　当節及び前二節の趣旨を十分理解する為には、イスラム教のモハッマド預言者の出現直前に、アラビアに領土を持つ二大帝国、ペルシャ及びローマの政治状況がどの様であったか、その概略を知る必要がある。両国は交戦中であった。初めペルシャが勝利をものにした。ペルシャによる征服の始まりは西暦 602 年で、この年、フォーカスに殺害された恩人モーリスの仇討ちの為、チョスロス二世はローマと開戦した。20 年後ローマ帝国はペルシャ軍に敗れたが、これはかつてない事であった。ペルシャはシリアやアジアの小国を奪い、西暦 608 年にはチャルセドンに進攻した。ダマスカスが 613 年に陥落した。建国以来ペルシャ人が足を踏み込れない周辺諸国は、ことごとく荒廃した。614 年6月、エルサレムも又落ちた。キリスト教徒は皆、ペルシャ人が総大司教と共にキリストの十字架を取り払ったと聞き、脅えた。キリスト教は権威を失った。ペルシャ人による征服は、エルサレム占領では終わらなかった。次にエジプトがそしてアジアの小国が再び征服され、ペルシャ軍はコンスタンチノープルのすぐ側まで近付いた。ローマは抵抗する事もできたのだが、内紛が災いし、それを行わなかった。ヘラクレスは徹底的に屈辱を受けた。チョスロスは、鎖で繋がれ王座の足元に引き立てられたヘラクレスに会い、ヘラクレスが十字架にかけられた彼の神を捨て、太陽崇拝を受け入れるまで、彼を放免しようとしなかった（Historians History of the World, 7巻P 159： 8巻P P 94－95、Enc. Brit. “ChosroesII” と “Heraclius”参照）　この事はイスラム教徒を非常に悲しませた。それは彼等がローマ人と同じく経典の民だったからである。メッカのクライシュは、ペルシャ人の様に偶像崇拝者であり、キリスト教徒軍の敗北に、イスラム教打倒の契機と考え、喜んだ。このローマ軍崩壊の直後、西暦 616 年にモハッマド預言者に神の啓示が為されたが、当節及び前二節ではこれが主題となっている。この三節には、重要な事が二つ述べられている。八・九年の短期間に形勢は逆転し（3～9年を表す。）かつて勝利を治めたペルシャ軍が、当時徹底的に痛めつけられたローマ人の手で、今度は完敗に追いやられるであろうと、当時思いもよらない預言が、この三節に記されてある。この様な短期間にイスラム教が勝利を治め、不信心者の敗北が決定的となる所にこの預言の重要性がある。この預言は、人間の予測を越えて現実のものとなった。ペルシャが勝利を治めている最中、モハッマド預言者は、ローマ人は再び勝利を得ると何年も先の事をあえて預言した。この預言が為され

6．アッラーの助けを。彼は己れの欲する者を助け給う。彼は偉大にして、慈悲深くまします。

بِنَصْرِ اللّٰهِ ؕ يَنْصُرُ مَنْ يَّشَآءُ ؕ وَهُوَ الْعَزِيْزُ الرَّحِيْمُ ﴿٦﴾

7．こはアッラーの約束なり。アッラーはその約束を破らず。(注4)然るに、世人の多くは之を知らず。

وَعْدَ اللّٰهِ ؕ لَا يُخْلِفُ اللّٰهُ وَعْدَهٗ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿٧﴾

8．彼等はただ今生の外観を知るも、来世については全く意に介さず。(注5)

يَعْلَمُوْنَ ظَاهِرًا مِّنَ الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا ۖۚ وَهُمْ عَنِ الْاٰخِرَةِ هُمْ غٰفِلُوْنَ ﴿٨﴾

9．彼等はその心の中に、アッラーが天地並びにその間に在るすべてのものを真理を以て、且つ一定の期間を定めて創造し給うたことを、考えざりしか？(注6)然るに、人々の多くは、主との対面を信ぜず。

اَوَلَمْ يَتَفَكَّرُوْا فِيْٓ اَنْفُسِهِمْ ۫ مَا خَلَقَ اللّٰهُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَآ اِلَّا بِالْحَقِّ وَاَجَلٍ مُّسَمًّى ؕ وَاِنَّ كَثِيْرًا مِّنَ النَّاسِ بِلِقَآئِ رَبِّهِمْ لَكٰفِرُوْنَ ﴿٩﴾

10．彼等は各地を遍歴して、彼等より前の者、その末路たるや如何ばかりなりしかを見ざるや？昔の人は、その力において、この者たちよりも強く、地を耕し、且つこの者たちよりも繁栄せり。而して、使徒たちはさまざまなる明証を携えて彼等のところへ至りしなり。アッラーが彼等を害するに非ず、害するは彼等自身なり。

اَوَلَمْ يَسِيْرُوْا فِى الْاَرْضِ فَيَنْظُرُوْا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ ؕ كَانُوْٓا اَشَدَّ مِنْهُمْ قُوَّةً وَّاَثَارُوا الْاَرْضَ وَعَمَرُوْهَآ اَكْثَرَ مِمَّا عَمَرُوْهَا وَجَآءَتْهُمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَيِّنٰتِ ؕ فَمَا كَانَ اللّٰهُ لِيَظْلِمَهُمْ وَلٰكِنْ كَانُوْٓا اَنْفُسَهُمْ يَظْلِمُوْنَ ﴿١٠﴾

11．されば、悪事を働く者の末路は悲惨なり。なんとなれば、アッラーの徴を否認し、嘲弄したるが故に。

ثُمَّ كَانَ عَاقِبَةَ الَّذِيْنَ اَسَآءُوا السُّوْٓاٰى اَنْ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِ اللّٰهِ وَكَانُوْا بِهَا يَسْتَهْزِءُوْنَ ﴿١١﴾ ع

たとされる当時、ヘラクレスの治世当初12年はローマ帝国が崩壊に向かうという預言以降、如何なる預言も成就されなかった（ギボン著、Rise, Decline & Fall of the Roman Empire, 25巻、P 74)。さらに詳しくは、英版の脚注参照。

注4　この約束は8：43に書かれている。

注5　不信心者の知識では、物事を表面的に理解する事しかできないが、ペルシャ人及びクライシュの敗北の因は、物的面ではなく、その精神面にあった。

注6　もし不信心者が、現世における人の寿命が限られたものである事に思い及んでいれば、彼等は、この世における生が人の全てではないと悟ったであろう。更に、死後により良い生があり、そこにおいて人の精神的発達は止まる事はないのであり現世は来世の前段階に過ぎない事に気付いたであろう。

第二項

12．アッラーは創造を起し、次いで、それを反復し給う。然(しか)る後、アッラーの許(もと)にお前たちは連れ戻されん。

اَللّٰهُ يَبْدَؤُا الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيْدُهٗ ثُمَّ اِلَيْهِ تُرْجَعُوْنَ ﴿١٢﴾

13．審判の時が到来する日、罪を犯せし者は絶望に襲われん。

وَيَوْمَ تَقُوْمُ السَّاعَةُ يُبْلِسُ الْمُجْرِمُوْنَ ﴿١٣﴾

14．彼等は、アッラーと併(あわ)せ祀りし神々のうち、一人として、彼等のために執成(とりな)してくれる者となるべき者なきを知るべし。また彼等も、アッラーに併せ祀りし神々を否認すべし。

وَلَمْ يَكُنْ لَّهُمْ مِّنْ شُرَكَآئِهِمْ شُفَعٰٓؤُا وَكَانُوْا بِشُرَكَآئِهِمْ كٰفِرِيْنَ ﴿١٤﴾

15．審判の時が到来する日、その日こそ彼等は、相互(あいたがい)に分離せらるべし。

وَيَوْمَ تَقُوْمُ السَّاعَةُ يَوْمَئِذٍ يَّتَفَرَّقُوْنَ ﴿١٥﴾

16．その時、信じて善行を積みたる者は、礼遇され、楽園に於て幸(しあわ)せを得べし。（注７）

فَاَمَّا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ فَهُمْ فِيْ رَوْضَةٍ يُّحْبَرُوْنَ ﴿١٦﴾

17．されど、信ぜずして、われらの神兆(しるし)並びに来世の対面を否認せし者、これ等は懲罰に処せらるべし。

وَاَمَّا الَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَكَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَا وَلِقَآئِ الْاٰخِرَةِ فَاُولٰٓئِكَ فِي الْعَذَابِ مُحْضَرُوْنَ ﴿١٧﴾

18．されば、朝な夕なアッラーを讃美せよ。

فَسُبْحٰنَ اللّٰهِ حِيْنَ تُمْسُوْنَ وَحِيْنَ تُصْبِحُوْنَ ﴿١٨﴾

19．天地(あめつち)の一切の賞賛はアッラーに属す。されば、午後に、また日が傾く頃、アッラーを讃美せよ。（注８）

وَلَهُ الْحَمْدُ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَعَشِيًّا وَّحِيْنَ تُظْهِرُوْنَ ﴿١٩﴾

20．アッラーは、死者から生者を生じ、生者から死者を生ず。また、彼は、枯死せる大地を甦らせ給う。かくの如く、お前たちも墓より曳き出さしめらるるなり。

يُخْرِجُ الْحَيَّ مِنَ الْمَيِّتِ وَيُخْرِجُ الْمَيِّتَ مِنَ الْحَيِّ وَيُحْيِ الْاَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا ۚ وَكَذٰلِكَ تُخْرَجُوْنَ ﴿٢٠﴾ ع

注７　アラブ人が、イスラム教を通して、如何にして退廃の深淵より精神的物的最高峰に登り至ったかは、史上に明記されてある。

注８　人が、人間創造の崇高な目的に思い及び、更にモハッマド預言者に従ったアラブ人の様に、道徳的退廃から立ち直り、精神的最高峰に至った人々に思い至る時、彼は自ら叫ぶ。「全てを有する天地創造の神に栄光あれ。」

第三項

21．彼の神兆の一つはかくの如し、すなわち、彼はお前たちを土より創造したりき。されば、お前たち人間となりて、地上に拡散す。（注９）

وَمِنْ اٰيٰتِهٖٓ اَنْ خَلَقَكُمْ مِّنْ تُرَابٍ ثُمَّ اِذَآ اَنْتُمْ بَشَرٌ تَنْتَشِرُوْنَ ﴿٢١﴾

22．また、彼の神兆の一つはかくの如し、すなわち彼がお前たちのために、お前たちの中から妻を創り、以てお前たちに安らぎを得せしめ、且つお前たち相互に愛慕の情を起せしめたることなり。げにこの中には、熟慮する人々へのさまざまなる神兆あり。（注10）

وَمِنْ اٰيٰتِهٖٓ اَنْ خَلَقَ لَكُمْ مِّنْ اَنْفُسِكُمْ اَزْوَاجًا لِّتَسْكُنُوْٓا اِلَيْهَا وَجَعَلَ بَيْنَكُمْ مَّوَدَّةً وَّرَحْمَةً ۗ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يَّتَفَكَّرُوْنَ ﴿٢٢﴾

23．その神兆の中には、天地の創造並びにお前たちの言語や肌色の多様性あり。げにこの中には、知識ある者へのさまざまなる神兆あり。（注11）

وَمِنْ اٰيٰتِهٖ خَلْقُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَاخْتِلَافُ اَلْسِنَتِكُمْ وَاَلْوَانِكُمْ ۗ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّلْعٰلِمِيْنَ ﴿٢٣﴾

24．またその神兆の中には、お前たちが夜も昼も眠れること、主の恩恵を求められるということがある。げにこの中には、耳を傾ける人々へのさまざまなる神兆あり。

وَمِنْ اٰيٰتِهٖ مَنَامُكُمْ بِالَّيْلِ وَالنَّهَارِ وَابْتِغَاۤؤُكُمْ مِّنْ فَضْلِهٖ ۗ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يَّسْمَعُوْنَ ﴿٢٤﴾

25．また彼の神兆の一つはかくの如し、すなわち、彼は恐れと希望の源たる雷電をお前たちに示し、天から水を降して枯死せる大地

وَمِنْ اٰيٰتِهٖ يُرِيْكُمُ الْبَرْقَ خَوْفًا وَّطَمَعًا وَّيُنَزِّلُ مِنَ السَّمَاۤءِ مَاۤءً فَيُحْيٖ بِهِ الْاَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا ۗ

注９　この節には「彼は、お前たちを土（トゥラーブ）より創造したりき。」とあるが他所には人は粘土（ティン）から作られたとある（6：3，17：62，23：13，32：8，37：12，38：72）。土つまり乾燥した土から作られた人間は、粘土から作られた人間に先立つ訳で、言い換えれば、これは人間の糧となる食物が土から作られた事を示すものである。当節には、神の存在を示す三つの論拠が挙げられている。（１）神は、生命と何ら係りのない、生命を生み出す特性を持たない所の土より人間をお作りになった。（２）神は人間に鋭い感情を授けられ、向上心をその特質に加えられ、目標達成の能力をお与えになった。（３）神は人間に勢力拡大と世界支配の欲望を植え付けられ、この欲望達成に必要な力をお与えになった。

注10　男女の愛は出産に繋がり、地上において人類は生き続ける事となる。これは、背後にある計画があり、計画者が存在し、又、来世により良き生のある事を示している。

注11　人間の進歩は、言語や人類の多様性と密接な係りを持つ。この多様化も、ある計画とその計画者の存在を示している。この計画者とは天地創造の神であられる。言語・人種の多様性により生じた様々な文明の中にありながらも、人類としてのまとまりがある。この人類の統一性は、必然的にその創造主が御一人であられる事を示す。

إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَاتٍ لِقَوْمٍ يَعْقِلُونَ ٢٥

を甦らしむることなり。げにこの中には、恩慮ある人々へのさまざまなる神兆あり。（注 12）

وَمِنْ آيَاتِهِ أَنْ تَقُومَ السَّمَاءُ وَالْأَرْضُ بِأَمْرِهِ ۚ ثُمَّ إِذَا دَعَاكُمْ دَعْوَةً مِنَ الْأَرْضِ إِذَا أَنْتُمْ تَخْرُجُونَ ٢٦

26．更にその神兆の一つはかくの如し、すなわち、天地は主の命によって屹立することなり。（注 13）然る後、主一声お前たちに呼びかけるや、見よ、お前たちは、大地から出現せん。

وَلَهُ مَنْ فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۖ كُلٌّ لَهُ قَانِتُونَ ٢٧

27．天地に於ける一切は、彼に属す。皆 悉く彼に従う。（注 14）

وَهُوَ الَّذِي يَبْدَأُ الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيدُهُ وَهُوَ أَهْوَنُ عَلَيْهِ ۚ وَلَهُ الْمَثَلُ الْأَعْلَىٰ فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۚ وَهُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ٢٨

28．衆生を最初に生起し、次いで之を反復する者、そは彼なり。彼にとりて、そはいと易し。天地に於ける至高の地位は、彼のものなり。彼は偉大にして、賢哲にまします。

第四項

ضَرَبَ لَكُمْ مَثَلًا مِنْ أَنْفُسِكُمْ ۖ هَلْ لَكُمْ مِنْ مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُكُمْ مِنْ شُرَكَاءَ فِي مَا رَزَقْنَاكُمْ فَأَنْتُمْ فِيهِ سَوَاءٌ تَخَافُونَهُمْ كَخِيفَتِكُمْ أَنْفُسَكُمْ ۚ كَذَٰلِكَ نُفَصِّلُ الْآيَاتِ لِقَوْمٍ يَعْقِلُونَ ٢٩

29．彼は、お前たち自身に関する一つの比喩を示し給う。お前たちは、お前たちの右手が所有する者の中で、その誰かを、われらがお前たちに与えしものを同等に分配し、お前たちお互い同士が気遣う如くその者に気兼ねせねばならぬ仲間として付き合うか？ かくの如く、われらは思慮ある人々にさまざまなる神兆を説き明かす。（注 15）

注 12　光は、肥沃をもたらす雨を予告するだけでなく、様々な病原菌を殺し、穀物を荒らす害虫を駆除する。この様に、光は畏怖の念を引き起こすと共に、人間に様々な恩恵を与えてくれるものである。自然のあらゆる要素が、神の御計画の中に定められた役割を果たすのである。以上の事柄は、神の存在、神の偉大なる知恵そして力の証となっている。

注 13　太陽系ができて以来長い時が経ったが、微塵も狂いは生じていない。惑星が何の支えもなく軌道を維持できるのは、それが神の業によるものだからである。

注 14　大宇宙がいつ誕生したかの推測は、人間の理解力の及ばない所のものである。知られざる過去の時から、太陽は惑星や天体と共に、一定の軌道を逸れる事なく規則正しく動いてきた。何百万という衛星がありながら、それ等が衝突する事もない。完全なる法と秩序が宇宙全体を支配しているのである。この事は次の言葉で表されている。「皆悉く彼に従う。」

注 15　主と奴隷は共に人間でありながら平等でなく、主は富を奴隷に分け与えようとしないのに、全ての物の唯一創造主であり支配者である神が、宇宙の支配を他の者に分け与える事などどうして出来ようか？　神は、唯一、すべての支配を司どっているのである。

30．否、然らず。不義の徒輩は、知識なくして己れの低級な欲望に従うのみ。アッラーが迷わしめた者を、誰が導き得るや？彼等には如何なる救助者もなかるべし。

بَلِ اتَّبَعَ الَّذِينَ ظَلَمُوا أَهْوَاءَهُمْ بِغَيْرِ عِلْمٍ فَمَنْ
يَهْدِي مَنْ أَضَلَّ اللَّهُ وَمَا لَهُمْ مِنْ نَاصِرِينَ ٣٠

31．されば、汝の顔をひたすら宗教に向けよ。アッラーによって創られた本性、すなわち人間を創り給うた本然の姿に従え。アッラーの創造に変更なし。そは正しき宗教なり。されど、世人の多くは之を知らず。（注16）

فَأَقِمْ وَجْهَكَ لِلدِّينِ حَنِيفًا فِطْرَتَ اللَّهِ الَّتِي فَطَرَ
النَّاسَ عَلَيْهَا لَا تَبْدِيلَ لِخَلْقِ اللَّهِ ذَٰلِكَ الدِّينُ
الْقَيِّمُ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ٣١

32．お前たちの顔を神に向け、悔悟し、神を畏れ、礼拝を遵守せよ。（注17）而して、他神を神と併せ祀る徒輩の一人となるなかれ。

مُنِيبِينَ إِلَيْهِ وَاتَّقُوهُ وَأَقِيمُوا الصَّلَاةَ وَلَا تَكُونُوا
مِنَ الْمُشْرِكِينَ ٣٢

33．その宗教を分裂させて、各宗派を成した徒輩は、己れの宗派にのみ喜び満足す。（注18）

مِنَ الَّذِينَ فَرَّقُوا دِينَهُمْ وَكَانُوا شِيَعًا كُلُّ حِزْبٍ
بِمَا لَدَيْهِمْ فَرِحُونَ ٣٣

34．人は不幸に見舞われると、悔悟して主の方に向き直り、嘆願す。されど、一度慈悲に浴せしめると、見よ、彼等の或る者は主に他神を配し、

وَإِذَا مَسَّ النَّاسَ ضُرٌّ دَعَوْا رَبَّهُمْ مُنِيبِينَ إِلَيْهِ
ثُمَّ إِذَا أَذَاقَهُمْ مِنْهُ رَحْمَةً إِذَا فَرِيقٌ مِنْهُمْ بِرَبِّهِمْ
يُشْرِكُونَ ٣٤

35．われらが彼等に授けしものを否定し始める。ならば暫く楽しめ、いまに思い知るべし。

لِيَكْفُرُوا بِمَا آتَيْنَاهُمْ فَتَمَتَّعُوا فَسَوْفَ تَعْلَمُونَ ٣٥

36．われらは彼等に、神と併せ祀ることに賛成する何等かの権威を降したとでも云うのか？（注19）

أَمْ أَنْزَلْنَا عَلَيْهِمْ سُلْطَانًا فَهُوَ يَتَكَلَّمُ بِمَا كَانُوا بِهِ
يُشْرِكُونَ ٣٦

注16　神は一つ、人類も又一つである。これがアッラーによって創られた天性つまり、人間の本質に根差す宗教であり、人間は本能的にこれに従う。人間は生まれた時この信仰の中にあるが、育つ環境や、親の考え、信仰、親から受けた教育等が、彼をユダヤ教徒や、魔術師、キリスト教徒に変えてしまうのである（ブハリ）。

注17　唯一全能なる神を信じる事は真の宗教の基本的原理ではあるが、それだけでは不十分である。真の宗教は一定の戒律を備えなければならない。その中でも最も重要な戒律は礼拝することである。

注18　過去において、真の宗教から逸脱した者達は分裂して対立し、争いを起こした。

注19　前数節では、全宗教の基本原理である唯一神について述べて来たが、当節及び次の三節ではシルク、つまり、偽神をアッラーに結びつける事について書かれてある。多神教徒は、その偽りの宗教を支える物全てに論拠を持たない。人間の本性、理性、良識は全て、偶像崇拝を嫌悪する。

37. われら人々を慈悲に浴せしむれば、彼等は之を喜ぶ。然るに、彼等の手が先に送れるもののために、災難が降りかかると、見よ、彼等はたちまち絶望す。

وَإِذَآ أَذَقْنَا ٱلنَّاسَ رَحْمَةً فَرِحُوا۟ بِهَا ۖ وَإِن تُصِبْهُمْ سَيِّئَةٌۢ بِمَا قَدَّمَتْ أَيْدِيهِمْ إِذَا هُمْ يَقْنَطُونَ ﴿٣٧﴾

38. アッラーは誰であれ、その欲するものに給養を増し、或いは減ずることを、彼等は見ざるか？　げにこの中には、信ずる人々へのさまざまなる神兆あり。

أَوَلَمْ يَرَوْا۟ أَنَّ ٱللَّهَ يَبْسُطُ ٱلرِّزْقَ لِمَن يَشَآءُ وَيَقْدِرُ ۚ إِنَّ فِى ذَٰلِكَ لَءَايَٰتٍ لِّقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ﴿٣٨﴾

39. されば、親類縁者に相当なものを与えよ、また貧しい者や旅人にも。そはアッラーの恩寵を求める者のためには、最もよし。かかる者は、必ず栄えるべし。

فَـَٔاتِ ذَا ٱلْقُرْبَىٰ حَقَّهُۥ وَٱلْمِسْكِينَ وَٱبْنَ ٱلسَّبِيلِ ۚ ذَٰلِكَ خَيْرٌ لِّلَّذِينَ يُرِيدُونَ وَجْهَ ٱللَّهِ ۖ وَأُو۟لَـٰٓئِكَ هُمُ ٱلْمُفْلِحُونَ ﴿٣٩﴾

40. 他人の財産で得とろうとて、利息を以て貸付けしても、アッラーの見解からすれば、そは殖えるに非ず。然るに、アッラーの恩寵を求めて喜捨した者、これ等の者こそその富は倍加されん。

وَمَآ ءَاتَيْتُم مِّن رِّبًا لِّيَرْبُوَا۟ فِىٓ أَمْوَٰلِ ٱلنَّاسِ فَلَا يَرْبُوا۟ عِندَ ٱللَّهِ ۖ وَمَآ ءَاتَيْتُم مِّن زَكَوٰةٍ تُرِيدُونَ وَجْهَ ٱللَّهِ فَأُو۟لَـٰٓئِكَ هُمُ ٱلْمُضْعِفُونَ ﴿٤٠﴾

41. お前たちを創造し、之を養い、次いで之を死なしめ、而して之を甦らしむるはアッラーなり。お前たちの神々のうち、誰がこれ等の一つでも能くする者あるか？　讃えよ、彼と併せ祀る神々とは比較にならぬ高みにいまし給う彼を。（注20）

ٱللَّهُ ٱلَّذِى خَلَقَكُمْ ثُمَّ رَزَقَكُمْ ثُمَّ يُمِيتُكُمْ ثُمَّ يُحْيِيكُمْ ۖ هَلْ مِن شُرَكَآئِكُم مَّن يَفْعَلُ مِن ذَٰلِكُم مِّن شَىْءٍ ۚ سُبْحَٰنَهُۥ وَتَعَٰلَىٰ عَمَّا يُشْرِكُونَ ﴿٤١﴾

第５項

42. 人間の手が行いしことのために、陸にも海にも腐敗生じたり。こは彼等をしてその所業の報いを幾分か味わしめんため、さすれば彼等も悪より立ち直るかもしれぬ。（注21）

ظَهَرَ ٱلْفَسَادُ فِى ٱلْبَرِّ وَٱلْبَحْرِ بِمَا كَسَبَتْ أَيْدِى ٱلنَّاسِ لِيُذِيقَهُم بَعْضَ ٱلَّذِى عَمِلُوا۟ لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُونَ ﴿٤٢﴾

注20　神は我々の創造主にして、維持者・供給者でもあられる。神は生死を完全に支配され、前述の三つの重要な特性を備えられている。それは、我々の崇拝を求められる最高の御方に有するものである。

注21　前節の主題は、全生命を創造し、管理し、導かれる全能の神への信仰心を人間に教え込む事にあった。当節では、「闇が地表を覆い、人が神を忘れ、自ら作り出した神を崇める時、神は、罪深い群れより神の元へ引き戻す為、預言者をお遣いになる。」と述べられている。詳しくは、英版脚注を参照の事。

43．云え、「地上を遍く旅して、お前たち以前の者どもの末路が如何に惨なりしかを見よ！彼等の多くは多神教徒なりき」と。

قُلْ سِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَانْظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِينَ مِنْ قَبْلُ ۚ كَانَ أَكْثَرُهُمْ مُشْرِكِينَ ٤٢

44．されば、避け難きその日がアッラーより来る前に、汝の顔を正しい教えに向けよ。その日、人間は二群に分けられるべし。

فَأَقِمْ وَجْهَكَ لِلدِّينِ الْقَيِّمِ مِنْ قَبْلِ أَنْ يَأْتِيَ يَوْمٌ لَا مَرَدَّ لَهُ مِنَ اللَّهِ ۖ يَوْمَئِذٍ يَصَّدَّعُونَ ٤٣

45．不信心者どもはその不信の責任を負うべし。また、正しい行為をする者は、自らの後生安楽を準備す。

مَنْ كَفَرَ فَعَلَيْهِ كُفْرُهُ ۖ وَمَنْ عَمِلَ صَالِحًا فَلِأَنْفُسِهِمْ يَمْهَدُونَ ٤٤

46．こは主が恩寵を以て、信じて正義を行いたる者を賞せんがためなり。げに彼は、不信心者どもを愛で給わぬ。

لِيَجْزِيَ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ مِنْ فَضْلِهِ ۚ إِنَّهُ لَا يُحِبُّ الْكَافِرِينَ ٤٥

47．主の神兆の一つは、朗報の伝達者として風を送り、お前たちにその慈悲を味わせ、その命令によって船を帆走らさせ、お前たちをして主の恩寵を求めしめ、以って感謝の気持を抱かせしめんがためなり。(注 22)

وَمِنْ آيَاتِهِ أَنْ يُرْسِلَ الرِّيَاحَ مُبَشِّرَاتٍ وَلِيُذِيقَكُمْ مِنْ رَحْمَتِهِ وَلِتَجْرِيَ الْفُلْكُ بِأَمْرِهِ وَلِتَبْتَغُوا مِنْ فَضْلِهِ وَلَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ٤٦

48．げにわれらは、汝以前にも幾多の使徒をその民に、明証を携えて、遣わしたり。然る後、われらは罪を犯せし者を罰したり。なれど、信ずる者を助けるは、われらの務めなり。

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ رُسُلًا إِلَىٰ قَوْمِهِمْ فَجَاءُوهُمْ بِالْبَيِّنَاتِ فَانْتَقَمْنَا مِنَ الَّذِينَ أَجْرَمُوا ۖ وَكَانَ حَقًّا عَلَيْنَا نَصْرُ الْمُؤْمِنِينَ ٤٧

49．雲をわき起らせるために風を送りたるはアッラーなり。次いで彼は，雲を思うがままに大空にうち拡げ、之を幾層にも積み重ね給う。されば汝は見ん、その只中より降り下る雨を。彼、その僕等の中の欲する者の上に之を降り注がしむと、見よ、彼等は欣喜雀躍す、

اللَّهُ الَّذِي يُرْسِلُ الرِّيَاحَ فَتُثِيرُ سَحَابًا فَيَبْسُطُهُ فِي السَّمَاءِ كَيْفَ يَشَاءُ وَيَجْعَلُهُ كِسَفًا فَتَرَى الْوَدْقَ يَخْرُجُ مِنْ خِلَالِهِ ۖ فَإِذَا أَصَابَ بِهِ مَنْ يَشَاءُ مِنْ عِبَادِهِ إِذَا هُمْ يَسْتَبْشِرُونَ ٤٨

注 22　この言葉は、神の律法が、精神界のみならず物質界においても行われる事を示している。雨が降る前にそれを知らせる風が吹く様に、神の預言者が出現するに先立ち、彼の教えが広まるに適した状況が作られ、その善良なる人々が現れ、地を固め、彼の為に真直ぐな道をつけるのである。

50．それ以前、雨が彼等に降り注ぐ前までは絶望にうちひしがれていたことも忘れて。

وَإِن كَانُوا مِن قَبْلِ أَن يُنَزَّلَ عَلَيْهِم مِّن قَبْلِهِ لَمُبْلِسِينَ ٥٠

51．されば見よ、アッラーの慈悲の跡を、如何にして枯死せる大地を生き返らしむるかを。死者を甦らしむるは彼なり、なんとなれば、げに彼は全能にまします故に。(注 23)

فَانظُرْ إِلَىٰ آثَارِ رَحْمَتِ اللَّهِ كَيْفَ يُحْيِي الْأَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا ۚ إِنَّ ذَٰلِكَ لَمُحْيِي الْمَوْتَىٰ ۖ وَهُوَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ٥١

52．然しながら、われら風を送りて収穫物が黄ばみでもせば、以後彼等は必ず、われらの恩恵を認めざる者とならん。

وَلَئِنْ أَرْسَلْنَا رِيحًا فَرَأَوْهُ مُصْفَرًّا لَّظَلُّوا مِن بَعْدِهِ يَكْفُرُونَ ٥٢

53．汝は死者に聴かしむる能わず、また背を見せて逃げ去る聾に汝の呼び声を聴かしむる能わず。

فَإِنَّكَ لَا تُسْمِعُ الْمَوْتَىٰ وَلَا تُسْمِعُ الصُّمَّ الدُّعَاءَ إِذَا وَلَّوْا مُدْبِرِينَ ٥٣

54．また、盲を迷誤より導き出すこと能わず。汝はただわれらの神兆を信じて帰依する者に聴かしめ得るのみ。(注 24)

وَمَا أَنتَ بِهَادِ الْعُمْيِ عَن ضَلَالَتِهِمْ ۖ إِن تُسْمِعُ إِلَّا مَن يُؤْمِنُ بِآيَاتِنَا فَهُم مُّسْلِمُونَ ٥٤

第六項

55．アッラーは初めにお前たちを弱く創り、然る後之を強健にし、強健の後に衰えと老いを生ぜしむ。彼はその欲する者を創造し給う。彼は全知全能におわします。

اللَّهُ الَّذِي خَلَقَكُم مِّن ضَعْفٍ ثُمَّ جَعَلَ مِن بَعْدِ ضَعْفٍ قُوَّةً ثُمَّ جَعَلَ مِن بَعْدِ قُوَّةٍ ضَعْفًا وَشَيْبَةً ۚ يَخْلُقُ مَا يَشَاءُ ۖ وَهُوَ الْعَلِيمُ الْقَدِيرُ ٥٥

56．復活の時が到来する日、(注 25) 罪を犯せし者は、墓中に在りたるは一刻にすぎず、と断言せん。かくの如く、彼等は正道から背き去れり。

وَيَوْمَ تَقُومُ السَّاعَةُ يُقْسِمُ الْمُجْرِمُونَ مَا لَبِثُوا غَيْرَ سَاعَةٍ ۚ كَذَٰلِكَ كَانُوا يُؤْفَكُونَ ٥٦

注 23　厳しい日照りの後に恵みの雨が降り、干からびた地面に新しい生命が宿る。前二節には上記の自然現象が書かれてあったが、当節では、道徳的に退廃した者達の魂の復活にも同じ様な処法がとられると述べられてある。死人同然の者は、神の預言者を通じ、新たな生命を与えられるのである。

注 24　運命の良し悪しは、己自身に依る。人が真実に耳を傾けない限り、預言も神の啓示もその者を神に導きはしない。自らが一歩前へ踏み出せば、神も又近付いて来られる。

注 25　イスラムの勝利の時。

57．然しながら、知識と信仰とを賜われる人たちは云わん、「お前たちはアッラーの経典に従って、復活の日まで留まれり。而して、今日が復活の日なり。（注 26）されど、お前たちはそれを知ろうとも思わざりき」と。

وَقَالَ الَّذِينَ أُوتُوا الْعِلْمَ وَالْإِيمَانَ لَقَدْ لَبِثْتُمْ فِي كِتَابِ اللَّهِ إِلَىٰ يَوْمِ الْبَعْثِ فَهَٰذَا يَوْمُ الْبَعْثِ وَلَٰكِنَّكُمْ كُنتُمْ لَا تَعْلَمُونَ ﴿٥٧﴾

58．されば、その日、悪人どもの云い訳はその身を益するところなからん。また、改心せんとすれども許されざるべし。（注 27）

فَيَوْمَئِذٍ لَّا يَنفَعُ الَّذِينَ ظَلَمُوا مَعْذِرَتُهُمْ وَلَا هُمْ يُسْتَعْتَبُونَ ﴿٥٨﴾

59．げにわれらは、クルアーンの中で、人々のためにさまざまなる比喩を明示せり。なれど、たとい汝が神兆を携え行くとも、信ぜざる者どもは必ず云わん、「お前たちは嘘つきにすぎず」と。

وَلَقَدْ ضَرَبْنَا لِلنَّاسِ فِي هَٰذَا الْقُرْآنِ مِن كُلِّ مَثَلٍ وَلَئِن جِئْتَهُم بِآيَةٍ لَّيَقُولَنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا إِنْ أَنتُمْ إِلَّا مُبْطِلُونَ ﴿٥٩﴾

60．アッラーは知識なき者どもの心をかくの如く封じ給う。（注 28）

كَذَٰلِكَ يَطْبَعُ اللَّهُ عَلَىٰ قُلُوبِ الَّذِينَ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٦٠﴾

61．されば、汝、耐え忍べ。アッラーの約束は必ず実現す。堅き信仰を持たぬ者どもをして汝を軽んじせしめるなかれ。

فَاصْبِرْ إِنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ وَلَا يَسْتَخِفَّنَّكَ الَّذِينَ لَا يُوقِنُونَ ﴿٦١﴾ ع

注 26　「復活の日」とは、処々では死後の復活を指すのではなく、人々が魂の復活により立ち上がった時、新たな神の指導者が現れる事を示す。

注 27　本文になるアラビア語は次の様な意味を持つ。（1）彼等は神の入口に近付く事を認められないであろう。（2）彼等は犯した罪の償いを許されないであろう。（3）彼等が弁論の中でどの様な言い逃れをしようとも、それは容れられないであろう。（4）彼等が神の引き立てを得る事はないであろう。

注 28　神の指導者を通してもたらされる神の知識を拒否する者は、その心を堅く閉ざされる。不信心者の心が閉ざされるのは、彼等が神の知識を受け入れることを拒んだ当然の成り行きである。

سُورَةُ لُقْمٰنَ مَكِّيَّةٌ

ルクマーン
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍く（あまねく）アッラーの御名（みな）におい
て。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．アリフ・ラーム・ミーム。(注1)

الٓمّٓ ②

3．こは知恵に満ちたる経典の諸節にして、

تِلْكَ اٰيٰتُ الْكِتٰبِ الْحَكِيْمِ ③

4．善行にいそしむ人々への嚮導（きょうどう）と慈悲なり、

هُدًى وَّ رَحْمَةً لِّلْمُحْسِنِيْنَ ④

5．礼拝を遵守し、定めの喜捨を納め、来世を
堅く信じ奉る者への。

الَّذِيْنَ يُقِيْمُوْنَ الصَّلٰوةَ وَيُؤْتُوْنَ الزَّكٰوةَ وَ هُمْ
بِالْاٰخِرَةِ هُمْ يُوْقِنُوْنَ ⑤

6．そは主の導きに従う者、幸いあるべし。

اُولٰٓئِكَ عَلٰى هُدًى مِّنْ رَّبِّهِمْ وَ اُولٰٓئِكَ هُمُ
الْمُفْلِحُوْنَ ⑥

7．然（しか）れども、世の中にはお導きと引き替えに
くだらぬ物語を信じ、知識もないくせに、
人々をアッラーの道から邪道に導き、之（これ）を
からかう者あり。(注2)かかる者には恥ず
べき懲罰下るべし。

وَ مِنَ النَّاسِ مَنْ يَّشْتَرِيْ لَهْوَ الْحَدِيْثِ لِيُضِلَّ
عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ بِغَيْرِ عِلْمٍ ۖ وَّ يَتَّخِذَهَا هُزُوًا ؕ
اُولٰٓئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ مُّهِيْنٌ ⑦

8．かかる者にわれらの神兆（しるし）を誦（よ）み聞かすと、
彼はさながら聴かざる如く、また両耳が
活動（はたら）かざる如く、傲然（ごうぜん）たる態度でよそを
向く。されば彼に痛罰を告知せよ。

وَاِذَا تُتْلٰى عَلَيْهِ اٰيٰتُنَا وَلّٰى مُسْتَكْبِرًا كَاَنْ لَّمْ يَسْمَعْهَا
كَاَنَّ فِيْٓ اُذُنَيْهِ وَقْرًا ۚ فَبَشِّرْهُ بِعَذَابٍ اَلِيْمٍ ⑧

9．げに信じて善行を積（つ）む人々――彼等は歓喜
の御園（みその）に入り、

اِنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ لَهُمْ جَنّٰتُ النَّعِيْمِ ⑨

注1　　われはアッラー、全知者なり（2章2節参照)。

注2　　生命は非常に大切なものである。人間は高尚にして崇高なる目的を果たす為に作られた。しかし心の浮付いてしまった者は、愚かな気晴らしに貴重な時と労力を費やしてしまうのである。(23：116)。

10．その中に末長く住み留まらん。アッラーの約束は確実なり。彼は偉大にして、賢哲にまします。

خٰلِدِينَ فِيهَا ۖ وَعْدَ اللّٰهِ حَقًّا ۚ وَهُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ⑩

11．彼は目に見得る柱なくして諸天を創り、また地上に牢固たる山々を配してそれがお前たちと共に揺れ動かざらしめ、その上にさまざまなる生物を播き散らし給えり。またわれらは雲より水を降り下し、各種のすばらしい種類を生ぜしめ給えり。

خَلَقَ السَّمٰوٰتِ بِغَيْرِ عَمَدٍ تَرَوْنَهَا وَأَلْقٰى فِي الْأَرْضِ رَوٰسِيَ أَنْ تَمِيدَ بِكُمْ وَبَثَّ فِيهَا مِنْ كُلِّ دَآبَّةٍ ۚ وَأَنْزَلْنَا مِنَ السَّمَآءِ مَآءً فَأَنْبَتْنَا فِيهَا مِنْ كُلِّ زَوْجٍ كَرِيمٍ ⑪

12．こはアッラーの創造なり。さて、アッラー以外の者で、創造したるものあらば、今われに見せよ。否、不義なす輩は明らかに迷誤の中にあり。

هٰذَا خَلْقُ اللّٰهِ فَأَرُونِي مَاذَا خَلَقَ الَّذِينَ مِنْ دُونِهِ ۚ بَلِ الظّٰلِمُونَ فِي ضَلٰلٍ مُبِينٍ ⑫

第二項

13．われらはルクマーンに知恵を授けて「アッラーに感謝せよ」と云えり。誰であれ感謝する者は、ひたすら己れ自身のために感謝するなり。然るに、恩知らずは、ままよ、アッラーは満ち足り給う御方、讃美されるべき御方なり。

وَلَقَدْ آتَيْنَا لُقْمٰنَ الْحِكْمَةَ أَنِ اشْكُرْ لِلّٰهِ ۚ وَمَنْ يَشْكُرْ فَإِنَّمَا يَشْكُرُ لِنَفْسِهِ ۖ وَمَنْ كَفَرَ فَإِنَّ اللّٰهَ غَنِيٌّ حَمِيدٌ ⑬

14．またルクマーンが（注3）その息子に訓戒して、かく云いし時を念え。「我が愛する息子よ、アッラーと他神らを併せ祀るなかれ。神と他神を併せ祀るは、重大なる不正なり」（注4）

وَإِذْ قَالَ لُقْمٰنُ لِابْنِهِ وَهُوَ يَعِظُهُ يٰبُنَيَّ لَا تُشْرِكْ بِاللّٰهِ ۖ إِنَّ الشِّرْكَ لَظُلْمٌ عَظِيمٌ ⑭

15．われらは人間に、その父母に対して孝養をつくすべく命じたり（注5）——特に母は、弱りやつれて子供を産み、更に離乳させるまで二年を要する（注6）——「われ並びに

وَوَصَّيْنَا الْإِنْسٰنَ بِوٰلِدَيْهِ ۚ حَمَلَتْهُ أُمُّهُ وَهْنًا عَلٰى وَهْنٍ وَفِصٰلُهُ فِي عَامَيْنِ أَنِ اشْكُرْ لِي وَلِوٰلِدَيْكَ

注3　ルクマーンはアラブ人ではない人、おそらくはエジプト人を指すのだろう。彼はエジプトかヌビアに従う様命じられている。又、彼がギリシア人のイソップだという説もある。当節及び次の二節にある様に、ルクマーンが息子に語る立派な道徳的教訓から判断すれば、彼が神の預言者である事が分かる。

注4　全ての宗教の基本的な教義は、唯一神にある。全ての高尚なる原理は、この教義に基付く。神以外のものを崇めたり、神を離れる事で、人は自らを卑め、その人格を損なうのである。

注5　この節及び次節は挿入節で、神への義務に次ぎ重要な人間の務めを説いている。それは、両親及び同僚に対する義務である。

注6　この文と46：16の間の明らかな矛盾は、子供達の中には他より早く生まれた為、体質が弱く、離乳に時間がかかるものもあるという点から生じている。

إِلَيَّ الْمَصِيرُ ⑮

汝の父母に感謝せよ。わが許へ終の帰趨あり。

وَإِن جَاهَدَاكَ عَلَىٰ أَن تُشْرِكَ بِي مَا لَيْسَ لَكَ بِهِ عِلْمٌ فَلَا تُطِعْهُمَا وَصَاحِبْهُمَا فِي الدُّنْيَا مَعْرُوفًا وَاتَّبِعْ سَبِيلَ مَنْ أَنَابَ إِلَيَّ ثُمَّ إِلَيَّ مَرْجِعُكُمْ فَأُنَبِّئُكُم بِمَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ⑯

16. されど、もし父母が汝の知らざる者をわれと併せ祀るべく強いなば、彼等に従うなかれ。されど、俗事に於ては、優しくいたわりの気持で交われ。(注7)而して、宗教上の事柄は、われに頼る者の道に従え。いずれお前たちの帰趨はわが許となる。その時われはお前たちが常々行いたることを語り聞かせん。

يَا بُنَيَّ إِنَّهَا إِن تَكُ مِثْقَالَ حَبَّةٍ مِّنْ خَرْدَلٍ فَتَكُن فِي صَخْرَةٍ أَوْ فِي السَّمَاوَاتِ أَوْ فِي الْأَرْضِ يَأْتِ بِهَا اللَّهُ إِنَّ اللَّهَ لَطِيفٌ خَبِيرٌ ⑰

17. 我が愛する息子よ、たといそれが芥子の種子の一粒の重さなりとも、或いは巌の中に在ろうとも、または天に在ろうとも地に在ろうとも、アッラーは必ずそれを持ち出し給う。(注8)げにアッラーは妙知者、知悉者なり。

يَا بُنَيَّ أَقِمِ الصَّلَاةَ وَأْمُرْ بِالْمَعْرُوفِ وَانْهَ عَنِ الْمُنكَرِ وَاصْبِرْ عَلَىٰ مَا أَصَابَكَ إِنَّ ذَٰلِكَ مِنْ عَزْمِ الْأُمُورِ ⑱

18. 我が愛する息子よ、礼拝を遵守し、他人に善を勧め、悪を禁じ、身に降りかかるものは根気よく耐え忍べ。こは崇高なる決意が要求される事柄なり。

وَلَا تُصَعِّرْ خَدَّكَ لِلنَّاسِ وَلَا تَمْشِ فِي الْأَرْضِ مَرَحًا إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ كُلَّ مُخْتَالٍ فَخُورٍ ⑲

19. 而して、汝、他人に対して生意気な態度を取るなかれ、また地上を我が物顔に歩くなかれ。げにアッラーは横柄なうぬぼれやを愛で給わぬ。

وَاقْصِدْ فِي مَشْيِكَ وَاغْضُضْ مِن صَوْتِكَ إِنَّ أَنكَرَ الْأَصْوَاتِ لَصَوْتُ الْحَمِيرِ ⑳ ع

20. 穏やかな歩調で歩め、汝の音声を低く抑えよ。最も不愉快な声は驢馬の嘶きなり」

第三項

أَلَمْ تَرَوْا أَنَّ اللَّهَ سَخَّرَ لَكُم مَّا فِي السَّمَاوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ وَأَسْبَغَ عَلَيْكُمْ نِعَمَهُ ظَاهِرَةً وَبَاطِنَةً وَ

21. お前たち、アッラーが天にあるもの地にあるものすべてをお前たちに利用せしめ、また見えるもの見えざるもの両つながらその恩寵をお前たちに浴せしめたることを、知

注7　もし両親に対する義務が神への義務と対立する場合は、自らの創造主であられる神への忠誠を優先させなければならない。しかし、神への忠誠に相反する命令や要求を両親がした時、それを無視して両親に横柄に振舞ってはならず、彼等に、変わらぬ礼儀と愛・優しさを示し続けるべきである。

注8　良きにつけ悪しきにつけ、行動は無駄ではない。それは永遠の痕跡を残す。この偉大な真実については50：19でも述べられている。

らざりしか？（注９）然るに、人々の中には、知識も導きもなく、光明を投ずる経典も有せず、アッラーについて論駁する者あり。（注10）

مِنَ النَّاسِ مَنْ يُجَادِلُ فِي اللّٰهِ بِغَيْرِ عِلْمٍ وَّلَا هُدًى وَّلَا كِتٰبٍ مُّنِيْرٍ ﴿٢١﴾

22．かかる徒輩に「アッラーが啓示せしものに従え」と云えば、彼等は云う、「否、我等は我等の先祖が奉じたる教えに従わん」と。（注11）なんとな！　悪魔が彼等を火炙りの刑に誘ふともか？

وَاِذَا قِيْلَ لَهُمُ اتَّبِعُوْا مَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ قَالُوْا بَلْ نَتَّبِعُ مَا وَجَدْنَا عَلَيْهِ اٰبَآءَنَا ؕ اَوَلَوْ كَانَ الشَّيْطٰنُ يَدْعُوْهُمْ اِلٰى عَذَابِ السَّعِيْرِ ﴿٢٢﴾

23．アッラーにすべてを任せておすがりする者、而して善をなす者は、堅牢なる把っ手をひしと握れる者なり。萬事おちつくところはアッラーに帰着す。（注12）

وَمَنْ يُّسْلِمْ وَجْهَهٗۤ اِلَى اللّٰهِ وَهُوَ مُحْسِنٌ فَقَدِ اسْتَمْسَكَ بِالْعُرْوَةِ الْوُثْقٰى ؕ وَاِلَى اللّٰهِ عَاقِبَةُ الْاُمُوْرِ ﴿٢٣﴾

24．信ぜざる者の不信について汝悩むなかれ。彼等はわれらが許へ帰る。その時、われらは彼等の所業を語り聞かせん。げにアッラーは胸に秘めたるものを熟知し給う。

وَمَنْ كَفَرَ فَلَا يَحْزُنْكَ كُفْرُهٗ ؕ اِلَيْنَا مَرْجِعُهُمْ فَنُنَبِّئُهُمْ بِمَا عَمِلُوْا ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَلِيْمٌۢ بِذَاتِ الصُّدُوْرِ ﴿٢٤﴾

25．われらは彼等をしばし楽しません。然る後、厳刑酷罰へと駆り立てん。

نُمَتِّعُهُمْ قَلِيْلًا ثُمَّ نَضْطَرُّهُمْ اِلٰى عَذَابٍ غَلِيْظٍ ﴿٢٥﴾

26．もし汝、彼等に「誰が天地を創造したるか？」と問わば、彼等は必ず「アッラーなり」と答えん。（注13）云え、「すべての讃美はアッラーの帰属なり」と。然れども、彼等の大半は知らざるなり。

وَلَئِنْ سَاَلْتَهُمْ مَّنْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ لَيَقُوْلُنَّ اللّٰهُ ؕ قُلِ الْحَمْدُ لِلّٰهِ ؕ بَلْ اَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿٢٦﴾

注９　この言葉は、肉体的、精神的、物質的、知的、即知、未知如何にかかわらず、人間の必要とする物全てを指している。

注10　人間の理性、吟味、神の啓示この三つが合わされば、多神教の愚かさが証明される。

注11　古い考えや信仰を捨てよと言われても、人間は容易にはそれに応じない。神の預言者達が不信心者から受けた不断の妨害とは、後者が先祖代々の慣習や信仰をどうしても手放そうとしなかった事である。これが、「知識も導きもなく、光明を投ずる経典も有せず」の意味する所である。

注12　結果を生み出すすべての行動は神のみがひきおこす。

注13　宇宙の創造及び宇宙の構造と理法を知的に研究してみれば、この宇宙には創造主がおられるという推論に必然的に達する。ラーヤクーランナという言葉は、不信心者が、望まずとも、宇宙の創造主が神であると認めざるを得ない事を示している。

27．天地における一切は挙げてアッラーに帰属す。げにアッラーは自主自足にして、讃美すべき御方にまします。

لِلّٰهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۗ اِنَّ اللّٰهَ هُوَ الْغَنِيُّ الْحَمِيْدُ ﴿٢٦﴾

28．たとい地上の樹をすべて筆となし、海が墨汁で、そこへ更に七つの海を増し加えたとて、（注 14）アッラーのお言葉を書き尽し難し。げにアッラーは偉大にして、賢哲にまします。

وَلَوْ اَنَّ مَا فِي الْاَرْضِ مِنْ شَجَرَةٍ اَقْلَامٌ وَّالْبَحْرُ يَمُدُّهٗ مِنْۢ بَعْدِهٖ سَبْعَةُ اَبْحُرٍ مَّا نَفِدَتْ كَلِمٰتُ اللّٰهِ ۗ اِنَّ اللّٰهَ عَزِيْزٌ حَكِيْمٌ ﴿٢٧﴾

29．お前たちの創造と復活は、一個の魂の創造と復活に相似たり。（注 15）げにアッラーはすべてを聴き、すべてをみそなわし給う。

مَا خَلْقُكُمْ وَلَا بَعْثُكُمْ اِلَّا كَنَفْسٍ وَّاحِدَةٍ ۗ اِنَّ اللّٰهَ سَمِيْعٌ ۢ بَصِيْرٌ ﴿٢٨﴾

30．汝は知らずや、アッラーは夜を昼に変え、昼を夜に変え、また太陽と月とをそれぞれ定められた期限までその軌道を走るべく服従せしめたることを、（注 16）並びにアッラーはお前たちの所業に通暁し給うことを？

اَلَمْ تَرَ اَنَّ اللّٰهَ يُوْلِجُ الَّيْلَ فِي النَّهَارِ وَيُوْلِجُ النَّهَارَ فِي الَّيْلِ وَسَخَّرَ الشَّمْسَ وَالْقَمَرَ ۫ كُلٌّ يَّجْرِيْٓ اِلٰٓى اَجَلٍ مُّسَمًّى وَّاَنَّ اللّٰهَ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِيْرٌ ﴿٢٩﴾

31．これすなわち、アッラーこそが真の神なるが故、それ以外に彼等が祈るものはすべて偽物、而してアッラーのみが至高者、無比なる至大者なるが故なり。

ذٰلِكَ بِاَنَّ اللّٰهَ هُوَ الْحَقُّ وَاَنَّ مَا يَدْعُوْنَ مِنْ دُوْنِهِ الْبَاطِلُ ۙ وَاَنَّ اللّٰهَ هُوَ الْعَلِيُّ الْكَبِيْرُ ﴿٣٠﴾

第四項

32．汝、アッラーの恵みによりて船が海上を航行するを見ざるか？（注 17）こは彼がお前たちにその神兆を示さんがためなり。げにこの中には堅忍感恩の徒へのさまざまなる神兆あり。

اَلَمْ تَرَ اَنَّ الْفُلْكَ تَجْرِيْ فِي الْبَحْرِ بِنِعْمَتِ اللّٰهِ لِيُرِيَكُمْ مِّنْ اٰيٰتِهٖ ۗ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّكُلِّ صَبَّارٍ شَكُوْرٍ ﴿٣١﴾

注 14　7や70という数は、アラビア語で大きな数を示し、通常の7や70という数字そのものを指してはいない。

注 15　この節は、人間は全て同じ自然の法則の下にある事を示している。又、この同じ自然の法則の下で、人が進歩・後退する様に、国や社会も栄枯盛衰を繰り返すとも書かれてある。

注 16　夜の後に昼が、又は昼の後に夜が来るという自然の法則は、個人のみならず、国家の運命をも左右する。

注 17　航海は偉大なる神の恵みである。人類の繁栄の多くが航海によってもたらされる。概して、最大の海運力を持つ国が、世界で最大の富と力を誇る。

33．屋根の如き大浪にのみ込まれんとする時には、彼等もアッラーに対し奉り全く裏表なきが如く念じ祈る。然(しか)るに、彼等を無事上陸せしむれば、たちまち、中庸の道を歩むは､その中の僅かばかりとなるなり。(注18) 而(しか)して､われらが神兆(しるし)を否定する者は､二心ある忘恩者に外ならず。

وَإِذَا غَشِيَهُم مَّوْجٌ كَالظُّلَلِ دَعَوُا اللَّهَ مُخْلِصِينَ لَهُ الدِّينَ فَلَمَّا نَجَّاهُمْ إِلَى الْبَرِّ فَمِنْهُم مُّقْتَصِدٌ وَمَا يَجْحَدُ بِآيَاتِنَا إِلَّا كُلُّ خَتَّارٍ كَفُورٍ ﴿٣٣﴾

34．人々よ、主に庇護を求めよ、而(しか)して、父は子のために、子は父のために何事もなし得ざるその日を恐れよ。げにアッラーの約束は必ず実現す。されば、現世の生活に欺かれるなかれ、またアッラーのことで詐欺師に欺かれるなかれ。

يَا أَيُّهَا النَّاسُ اتَّقُوا رَبَّكُمْ وَاخْشَوْا يَوْمًا لَّا يَجْزِي وَالِدٌ عَن وَلَدِهِ وَلَا مَوْلُودٌ هُوَ جَازٍ عَن وَالِدِهِ شَيْئًا إِنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ فَلَا تَغُرَّنَّكُمُ الْحَيَاةُ الدُّنْيَا وَلَا يَغُرَّنَّكُم بِاللَّهِ الْغَرُورُ ﴿٣٤﴾

35．げにアッラーのみが審判の時を知り給う。彼は雨を降らせ、胎内に宿るものを知り給う。然(しか)れども、何人(なんぴと)も明日何が起るか、またいずこの地で死するかを知らず。げにアッラーは深知者(しんちしゃ)、通暁者(つうぎょうしゃ)なり。

إِنَّ اللَّهَ عِندَهُ عِلْمُ السَّاعَةِ وَيُنَزِّلُ الْغَيْثَ وَيَعْلَمُ مَا فِي الْأَرْحَامِ وَمَا تَدْرِي نَفْسٌ مَّاذَا تَكْسِبُ غَدًا وَمَا تَدْرِي نَفْسٌ بِأَيِّ أَرْضٍ تَمُوتُ إِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ خَبِيرٌ ﴿٣٥﴾

注18　この節には、ムシュリク（多神教徒）に共通の特徴が挙げられている。多神教徒は信仰が弱く、非常に迷信深い。彼の信仰は､偽りの風聞や迷信の混じったものなので、些細な不幸にすら動じてしまうのである。

سُوْرَةُ السَّجْدَةِ مَكِّيَّةٌ (٣٢)

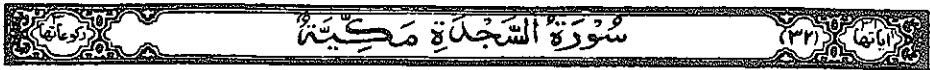
アル・サジュダ

(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．アリフ・ラーム・ミーム。(注1)

الٓمّٓ ②

3．この経典の啓示は、疑いもなく、万物の主より降る。

تَنْزِيْلُ الْكِتٰبِ لَا رَيْبَ فِيْهِ مِنْ رَّبِّ الْعٰلَمِيْنَ ③

4．彼等は、「彼がそれを偽作せり」と云うか？否、こは汝をして、汝以前にいまだかつて警告者来らざりし民に向って警告を与え、彼等を導かしめんがために主より降されたる真理なり。

اَمْ يَقُوْلُوْنَ افْتَرٰىهُ ۚ بَلْ هُوَ الْحَقُّ مِنْ رَّبِّكَ لِتُنْذِرَ قَوْمًا مَّآ اَتٰىهُمْ مِّنْ نَّذِيْرٍ مِّنْ قَبْلِكَ لَعَلَّهُمْ يَهْتَدُوْنَ ④

5．天地とその間のすべてものを六日のうちに(注2)創造せるはアッラーにして、然る後その玉座に登り坐す。お前たちに、アッラー以外、他に助ける者も執り成す者もなし。お前たち、それでも反省せざるか？

اَللّٰهُ الَّذِيْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا فِيْ سِتَّةِ اَيَّامٍ ثُمَّ اسْتَوٰى عَلَى الْعَرْشِ ۚ مَا لَكُمْ مِّنْ دُوْنِهٖ مِنْ وَّلِيٍّ وَّلَا شَفِيْعٍ ۚ اَفَلَا تَتَذَكَّرُوْنَ ⑤

6．天より地に至るまで、アッラーは一切を統たもう。然る後、そは一日にして彼の許へ昇り行くが、その一日はお前たちが数える一千年に相当す。(注3)

يُدَبِّرُ الْاَمْرَ مِنَ السَّمَآءِ اِلَى الْاَرْضِ ثُمَّ يَعْرُجُ اِلَيْهِ فِيْ يَوْمٍ كَانَ مِقْدَارُهٗٓ اَلْفَ سَنَةٍ مِّمَّا تَعُدُّوْنَ ⑥

7．この御方こそ見えざるものと見えるものを知悉し、偉大にして慈悲深くまします。

ذٰلِكَ عٰلِمُ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ الْعَزِيْزُ الرَّحِيْمُ ⑦

注1　われはアッラー、全知者なり(2章2節参照)。

注2　6：194参照

注3　この節では、イスラム教の波乱に富んだ歴史の中で、起こると定められた深刻な危機について述べられている。イスラム教は、初めの三世紀の間不断の前進と繁栄の時を迎える事となっていた。モハッマド預言者は、この事実について次の様に語ったと記されている。「私の生きている今世紀、そしてそれに続く二世紀が最良の時である(テルマディ，ブハリーシャハダート書)。」最初の三世紀に不断の勝利を得た後、イスラム教は衰退を始めた。この衰退はその後千年の間続いた。当節後半は、この千年間を示したものである。又、モハッマド預言者は次の様に語ったとも記されている。イスラム教義がプレアデス星団に登り、ペルシャの末裔の男がそれを地上に戻すであろう(ブハリータフシール書)。ヒジラ14世紀に約束されたメシヤ(救世主)が現れ、衰退は止められ、イスラム教の復活が始まったのである。

8．彼は、その創造せるすべてのものを完璧ならしめたる者なり。而して彼は、土塊を以て人間の創造に着手せり。

اَلَّذِيْٓ اَحْسَنَ كُلَّ شَيْءٍ خَلَقَهٗ وَبَدَاَ خَلْقَ الْاِنْسَانِ مِنْ طِيْنٍ ٨

9．然る後、彼は、わずかな液体の精粋から子孫を造り、

ثُمَّ جَعَلَ نَسْلَهٗ مِنْ سُلٰلَةٍ مِّنْ مَّآءٍ مَّهِيْنٍ ٩

10．之に形を与え、己が魂を吹き込みたり。また、耳や目や心をお前たちに与えたり。然るにお前たち、ほんのわずかしか感謝せぬとは。

ثُمَّ سَوّٰىهُ وَنَفَخَ فِيْهِ مِنْ رُّوْحِهٖ وَجَعَلَ لَكُمُ السَّمْعَ وَالْاَبْصَارَ وَالْاَفْـِٕدَةَ ۗ قَلِيْلًا مَّا تَشْكُرُوْنَ ١٠

11．彼等は云う、「なんとな！　我等地中に消え失せた後、再び新たな被造物となりて甦るとな？」と。否、彼等は主との対面を信ぜざるものどもなり。

وَقَالُوْٓا ءَاِذَا ضَلَلْنَا فِى الْاَرْضِ ءَاِنَّا لَفِيْ خَلْقٍ جَدِيْدٍ ۗ بَلْ هُمْ بِلِقَآءِ رَبِّهِمْ كٰفِرُوْنَ ١١

12．云え、「お前たち担当の死の天使が、お前たちから命を取り去らん。然る後、お前たちは主の許へ連れ戻されん」と。

قُلْ يَتَوَفّٰىكُمْ مَّلَكُ الْمَوْتِ الَّذِيْ وُكِّلَ بِكُمْ ثُمَّ اِلٰى رَبِّكُمْ تُرْجَعُوْنَ ١٢

第二項

13．罪を犯せし者が主の前で頭を垂れ、「主よ、我等は見たり、聴きもせり、願わくは我等を生に帰し給え。さすれば必ず善行を為さん、真実を悟らされたが故に」と云う様を汝目睹し得なば。

وَلَوْ تَرٰٓى اِذِ الْمُجْرِمُوْنَ نَاكِسُوْا رُءُوْسِهِمْ عِنْدَ رَبِّهِمْ ۗ رَبَّنَآ اَبْصَرْنَا وَسَمِعْنَا فَارْجِعْنَا نَعْمَلْ صَالِحًا اِنَّا مُوْقِنُوْنَ ١٣

14．われらもし敢て欲しなば、すべての人間にその嚮導を与え得べし。されど、「妖霊と人間一緒にして地獄を満たさん」（注４）とわが口から出でし言葉は、必ず実現す。

وَلَوْ شِئْنَا لَاٰتَيْنَا كُلَّ نَفْسٍ هُدٰىهَا وَلٰكِنْ حَقَّ الْقَوْلُ مِنِّيْ لَاَمْلَـَٔنَّ جَهَنَّمَ مِنَ الْجِنَّةِ وَالنَّاسِ اَجْمَعِيْنَ ١٤

15．されば、お前たちの悪行の報いを味わえ、この日の対面をお前たちが忘れたが故に。われらもお前たちを忘れたり。されば、お前たちが重ねたる悪行ゆえに永劫の刑を味わえ。

فَذُوْقُوْا بِمَا نَسِيْتُمْ لِقَآءَ يَوْمِكُمْ هٰذَا ۚ اِنَّا نَسِيْنٰكُمْ وَذُوْقُوْا عَذَابَ الْخُلْدِ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ١٥

16．われらの神兆を本当に信ずる者というは、その話が出ると地にひれ伏して主を讃美し奉り、驕りたかぶらぬ者のみ。

اِنَّمَا يُؤْمِنُ بِاٰيٰتِنَا الَّذِيْنَ اِذَا ذُكِّرُوْا بِهَا خَرُّوْا سُجَّدًا وَّسَبَّحُوْا بِحَمْدِ رَبِّهِمْ وَهُمْ لَا يَسْتَكْبِرُوْنَ ١٦ السجدة

注４　この文は、15章43節及び44節と同様に罪深い者のみが地獄へ落ちる事を示している。妖霊は黒幕、人間は庶民を表わしている。

17．彼等その臥所より離れるや、畏れと願いを抱いてその主に祈り、われらが授けしものを惜しみなく費す。

تَتَجَافَىٰ جُنُوبُهُمْ عَنِ الْمَضَاجِعِ يَدْعُونَ رَبَّهُمْ خَوْفًا وَطَمَعًا وَمِمَّا رَزَقْنَاهُمْ يُنفِقُونَ ﴿١٧﴾

18．何人も、その善行の報奨として、目を喜ばすものがひそかに用意されてあるを知らず。

فَلَا تَعْلَمُ نَفْسٌ مَّا أُخْفِيَ لَهُم مِّن قُرَّةِ أَعْيُنٍ جَزَاءً بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٨﴾

19．されば、信者は罪を犯す者と同類なりと見なされるべきか？　もとより両者は等しからず。

أَفَمَن كَانَ مُؤْمِنًا كَمَن كَانَ فَاسِقًا ۚ لَّا يَسْتَوُونَ ﴿١٩﴾

20．信じて善行を積む者には永遠の宿りの楽園あり、そは彼等がなせることに対する饗応として。

أَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ فَلَهُمْ جَنَّاتُ الْمَأْوَىٰ نُزُلًا بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٢٠﴾

21．罪を犯す徒輩には、その宿りは業火たるべし。彼等はそこより出でんとする度に、その中に突き戻され、かく云われん、「お前たちが常に否定せる業火の刑を味わえ」と。

وَأَمَّا الَّذِينَ فَسَقُوا فَمَأْوَاهُمُ النَّارُ ۖ كُلَّمَا أَرَادُوا أَن يَخْرُجُوا مِنْهَا أُعِيدُوا فِيهَا وَقِيلَ لَهُمْ ذُوقُوا عَذَابَ النَّارِ الَّذِي كُنتُم بِهِ تُكَذِّبُونَ ﴿٢١﴾

22．われらはこの大刑罰の前に、手近な罰を彼等に味わしめん、(注５)そは彼等が悔い改め、われらが許に回帰すために。

وَلَنُذِيقَنَّهُم مِّنَ الْعَذَابِ الْأَدْنَىٰ دُونَ الْعَذَابِ الْأَكْبَرِ لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُونَ ﴿٢٢﴾

23．主の神兆によって戒められながら、後に之に背き去るより大なる罪あるべきか？　われらは必ずその罪を犯せる者に報復す。

وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّن ذُكِّرَ بِآيَاتِ رَبِّهِ ثُمَّ أَعْرَضَ عَنْهَا ۚ إِنَّا مِنَ الْمُجْرِمِينَ مُنتَقِمُونَ ﴿٢٣﴾

第三項

24．われらはかつて、モーゼに経典を授けたり。されば、汝も経典を受けることを疑うなかれ。われらはそれを、イスラエルの子らへの嚮導とせり。

وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ فَلَا تَكُن فِي مِرْيَةٍ مِّن لِّقَائِهِ ۖ وَجَعَلْنَاهُ هُدًى لِّبَنِي إِسْرَائِيلَ ﴿٢٤﴾

25．われらは彼等の中から、われらが命令によって人々を導く導師を任命せり。なんとなれば、彼等はよく耐え忍び、われらの神兆を堅く信じるが故なり。

وَجَعَلْنَا مِنْهُمْ أَئِمَّةً يَهْدُونَ بِأَمْرِنَا لَمَّا صَبَرُوا ۖ وَكَانُوا بِآيَاتِنَا يُوقِنُونَ ﴿٢٥﴾

注５　「大刑罰」と「手近な罰」は次の様な意味を持つ。(1)現世における苦悩と来世における苦悩。(2)バドルの戦いにおけるクライシュの敗北とメッカの陥落。(3)小さな不幸、そして決定的な破滅を忠告されながらそれに耳を貸そうとしない者に起こる不幸。

26．げに汝の主は、彼等が互に争うことについて、復活の日に彼等の間を審判すべし。

إِنَّ رَبَّكَ هُوَ يَفْصِلُ بَيْنَهُمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ فِيمَا كَانُوا فِيهِ يَخْتَلِفُونَ ﴿٢٦﴾

27．われらが彼等以前に幾多の世代を滅ぼせること、そは彼等を導かざるか？　今日、人々はその廃墟に帰したる住居跡を往来す。げにこの中にはさまざまなる神兆あり。それでも彼等は敢て聴かざるか？

أَوَلَمْ يَهْدِ لَهُمْ كَمْ أَهْلَكْنَا مِنْ قَبْلِهِمْ مِّنَ الْقُرُونِ يَمْشُونَ فِي مَسٰكِنِهِمْ ۚ إِنَّ فِي ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ ۚ أَفَلَا يَسْمَعُونَ ﴿٢٧﴾

28．彼等いまだ見ざるか、われら乾燥ける大地に水を駆り、之によって家畜並びに彼等自身が食する穀物を生育せしむるを？　それでも彼等は敢て見ざるか？

أَوَلَمْ يَرَوْا أَنَّا نَسُوقُ الْمَآءَ إِلَى الْأَرْضِ الْجُرُزِ فَنُخْرِجُ بِهِ زَرْعًا تَأْكُلُ مِنْهُ أَنْعَامُهُمْ وَأَنْفُسُهُمْ ۚ أَفَلَا يُبْصِرُونَ ﴿٢٨﴾

29．彼等は云う、「お前の言葉が真事なら、その勝利とやらは何時来るか？」と。

وَيَقُولُونَ مَتٰى هٰذَا الْفَتْحُ إِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِينَ ﴿٢٩﴾

30．云え、「勝利のその日には、（注６）信ぜざる者どもの信仰は役立たず、また猶予もされざるべし」と。

قُلْ يَوْمَ الْفَتْحِ لَا يَنْفَعُ الَّذِينَ كَفَرُوا إِيمَانُهُمْ وَلَا هُمْ يُنْظَرُونَ ﴿٣٠﴾

31．されば汝、彼等を顧みるな。而して、待て。彼等もまた待つ。

فَأَعْرِضْ عَنْهُمْ وَانْتَظِرْ إِنَّهُمْ مُنْتَظِرُونَ ﴿٣١﴾

注６　バドルの戦いの日（８：42）。

سورة الاحزاب مدنية (٣٣)

アル・アフザーブ
（メディナ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍く アッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．汝、預言者よ、アッラーに加護を求めよ。不信心者並びに偽信者の要請に従うなかれ。げにアッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

يٰۤاَيُّهَا النَّبِيُّ اتَّقِ اللّٰهَ وَلَا تُطِعِ الْكٰفِرِيْنَ وَالْمُنٰفِقِيْنَ ۗ اِنَّ اللّٰهَ كَانَ عَلِيْمًا حَكِيْمًا ②

3．主が汝に啓示されたるところに従え。げにアッラーはお前たちの所業を知悉し給う。

وَّاتَّبِعْ مَا يُوْحٰۤى اِلَيْكَ مِنْ رَّبِّكَ ۗ اِنَّ اللّٰهَ كَانَ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِيْرًا ③

4．アッラーを信頼せよ。アッラーは守護者たるに足る。

وَّتَوَكَّلْ عَلَى اللّٰهِ ۗ وَكَفٰى بِاللّٰهِ وَكِيْلًا ④

5．アッラーは如何なる人にも、その胸の中に二つの心を創らず。また母と呼んで離別する妻がお前たちの生母にはならぬ。またお前たちが養子とせるものをお前たちの実子とせず。これはただお前たちの口より出づる言葉にすぎず。（注１）然るに、アッラーの言葉は真実であり、正しい道に導き給う。

مَا جَعَلَ اللّٰهُ لِرَجُلٍ مِّنْ قَلْبَيْنِ فِيْ جَوْفِهٖ ۚ وَمَا جَعَلَ اَزْوَاجَكُمُ الّٰٓئِيْ تُظٰهِرُوْنَ مِنْهُنَّ اُمَّهٰتِكُمْ ۚ وَمَا جَعَلَ اَدْعِيَآءَكُمْ اَبْنَآءَكُمْ ۗ ذٰلِكُمْ قَوْلُكُمْ بِاَفْوَاهِكُمْ ۗ وَاللّٰهُ يَقُوْلُ الْحَقَّ وَهُوَ يَهْدِي السَّبِيْلَ ⑤

6．実父の名によって彼等を呼べ。その方が、アッラーの目には一層公平なり。たといお前たち彼等の父を知らずとも、彼等は信仰においてお前たちとは兄弟であり且つ友なり。而して、故意に之をなすに非ざれば、この件に関する誤りは罪なし。然しながら、お前たちの心に意図ある場合はその責任を問う。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

اُدْعُوْهُمْ لِاٰبَآئِهِمْ هُوَ اَقْسَطُ عِنْدَ اللّٰهِ ۚ فَاِنْ لَّمْ تَعْلَمُوْۤا اٰبَآءَهُمْ فَاِخْوَانُكُمْ فِي الدِّيْنِ وَمَوَالِيْكُمْ ۗ وَلَيْسَ عَلَيْكُمْ جُنَاحٌ فِيْمَاۤ اَخْطَاْتُمْ بِهٖ ۙ وَلٰكِنْ مَّا تَعَمَّدَتْ قُلُوْبُكُمْ ۗ وَكَانَ اللّٰهُ غَفُوْرًا رَّحِيْمًا ⑥

注１　この節では、モハッマド預言者の時代に広範に、しかも深く根付いていた二つの慣習の廃止を求めた。この二つの内、より醜悪なのは、ズィハールのものであった。夫は腹を立てると妻を母と呼んだ。哀れな妻は婚姻権を取り上げられており、夫に束縛されるままで、他の男と結婚する事もできなかった。イスラム教は女性の権利を擁護するものであり、この様に残酷な慣習を許容できなかった。今一つの慣習とは、他人の息子を

7．預言者は信者自身よりも信者に近く、その妻たちは信者らの母の如し。またアッラーの経典によれば、血縁者は信者並びにメッカからの移住者よりもその間柄は近し、但しお前たちが友に見せる親切はこの限りに非ず。これまた経典の中に示さる。（注２）

اَلنَّبِيُّ اَوْلٰى بِالْمُؤْمِنِيْنَ مِنْ اَنْفُسِهِمْ وَ اَزْوَاجُهٗ
اُمَّهٰتُهُمْ وَاُولُوا الْاَرْحَامِ بَعْضُهُمْ اَوْلٰى بِبَعْضٍ
فِيْ كِتٰبِ اللّٰهِ مِنَ الْمُؤْمِنِيْنَ وَالْمُهٰجِرِيْنَ اِلَّآ اَنْ
تَفْعَلُوْٓا اِلٰٓى اَوْلِيٰٓئِكُمْ مَّعْرُوْفًا كَانَ ذٰلِكَ فِي الْكِتٰبِ
مَسْطُوْرًا ۞٧

8．また思い起せ、われらが預言者たちから、汝から、ノアから、アブラハム、モーゼ並びにマリアの子イエスから誓約を取りし時のことを。われらは彼等から実に厳粛なる誓約を取れり。

وَاِذْ اَخَذْنَا مِنَ النَّبِيّٖنَ مِيْثَاقَهُمْ وَمِنْكَ وَمِنْ
نُّوْحٍ وَّاِبْرٰهِيْمَ وَمُوْسٰى وَعِيْسَى ابْنِ مَرْيَمَ
وَاَخَذْنَا مِنْهُمْ مِّيْثَاقًا غَلِيْظًا ۞٨

9．こは主が誠実なる者に、その誠実を質さんがためなり。而して、主は、不信心者どものために痛刑を準備せり。

لِّيَسْـَٔلَ الصّٰدِقِيْنَ عَنْ صِدْقِهِمْ وَاَعَدَّ لِلْكٰفِرِيْنَ
عَذَابًا اَلِيْمًا ۞٩ ع

第二項

10．汝等信徒たちよ、アッラーがお前たちに垂れたる恩恵を念え。お前たちに大軍が攻め寄せて来た時、（注３）われらは彼等に対して烈風とお前たちには見えざる大軍を送り

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوا اذْكُرُوْا نِعْمَةَ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ اِذْ
جَآءَتْكُمْ جُنُوْدٌ فَاَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ رِيْحًا وَّجُنُوْدًا لَّمْ

養子にする事だった。この慣習は、血縁に混乱をもたらす事は別としても、浅薄な事であった。これ等の慣習廃止の理由は次の文に示されている。「アッラーは如何なる人にも、その胸の中に二つの心を創らず」人間の心は感情の中枢と考えられている。心は一度に一つの感情しか抱けない。つまり、様々な感情が同時に心を占める事は有り得ないのである。更に、人間関係が変われば感情も変わる。単に妻を母と、あるいは他人を息子と呼んだからと言って、人の気持ちがそれに対応できる訳ではない。妻は決して母とは成り得ないし、他人が息子に成る事もできない。口から出た言葉が、その発言者の心を変えられる訳ではなく、又血縁という厳然たる事実を変える事もできないのである。

注２　精神上の父としてのモハッマド預言者を通して生じるイスラムの兄弟関係は誤解され、イスラム教徒は互いの資産を相続できると受け取られて来た。この節では、この誤解を解く為に、次の様に述べている。相続できるのは血縁者であり、しかも信者のみである。不信心者は、肉親の信者から相続を受ける事はできない。更にこの節には、メッカからの移住者と、彼等がメディナに着いた時に手助けした者達の間に結ばれた兄弟関係を廃止したとある。この関係が続けば、移住者は支援者の残した財産まで相続したであろう。この兄弟関係は、しかし一時的な措置で、メッカからの移民の更生を目的として結ばれた血縁関係で、単なる誓約ではなかったが、相続権決定や同様の事態に際し、決定的な要因となっていた。しかし、イスラムのこの広い意味での兄弟関係は存続し、イスラム教徒は互いに実の兄弟の様に接する事を求められたのである。

注３　この節から「堀りの戦い」の話が始まる。これは、ヒジラ５年に起こり、イスラム教徒が遠征した最も激しい戦いだった。アラビア全体が一団となりイスラムに対した。メッカのクライシュ、その同盟国であるガトファーン，アシュジャ，ムッラ，ファラーラ，スライム，バヌーサード，バヌアサド中央アラビアの砂漠

たり。（注４）アッラーはお前たちが為せることをみそなわし給う。

تَرَوْهَا ۚ وَكَانَ اللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرًا ۝١٠

11．その時彼等は、上方からも下方からもお前たちを襲い、お前たちの眼は惑乱し、その心臓は喉もとまで上り、お前たちはアッラーについてさまざまなる憶測をなせり。（注５）

إِذْ جَاءُوكُم مِّن فَوْقِكُمْ وَمِنْ أَسْفَلَ مِنكُمْ وَإِذْ زَاغَتِ الْأَبْصَارُ وَبَلَغَتِ الْقُلُوبُ الْحَنَاجِرَ وَتَظُنُّونَ بِاللَّهِ الظُّنُونَا ۝١١

12．かくて信者は猛烈な試練を受け、彼等は激しくゆすぶられたり。

هُنَالِكَ ابْتُلِيَ الْمُؤْمِنُونَ وَزُلْزِلُوا زِلْزَالًا شَدِيدًا ۝١٢

13．その時、偽信者ども並びに心に病のある徒輩は云う、「アッラーとその使徒の約束は惑わしなりきか」と。

وَإِذْ يَقُولُ الْمُنَافِقُونَ وَالَّذِينَ فِي قُلُوبِهِم مَّرَضٌ مَّا وَعَدَنَا اللَّهُ وَرَسُولُهُ إِلَّا غُرُورًا ۝١٣

14．時に彼等の中の一部の者は云えり「ヤスリブ（注６）の衆よ、お前たちは敵に抵抗し得ざれば、すみやかに引き返せ」と。（注７）而して、彼等の或る者たちは「我等の家は無防備なり」と云い、預言者に許可すら求めたり。実は、無防備に非ざりき。彼等はただ離脱遁走を謀りたり。

وَإِذْ قَالَت طَّائِفَةٌ مِّنْهُمْ يَا أَهْلَ يَثْرِبَ لَا مُقَامَ لَكُمْ فَارْجِعُوا ۚ وَيَسْتَأْذِنُ فَرِيقٌ مِّنْهُمُ النَّبِيَّ يَقُولُونَ إِنَّ بُيُوتَنَا عَوْرَةٌ وَمَا هِيَ بِعَوْرَةٍ ۖ إِن يُرِيدُونَ إِلَّا فِرَارًا ۝١٤

の民族、裏切者ユダヤ教徒に扇動された者達、メディナの裏切者の偽善者達、左記の者達が徒党を組んでモハッマド預言者に向かった。一万から二万の強力な軍隊がわずか1200（一説には、堀を作るのに従事した女性・子供を含めて3000人のイスラム教徒がいたとされる。）ばかりの準備不足のイスラム教徒に対し派遣された。メディナの包囲攻撃は15日から4週間も続いた。イスラム教徒はこの厳しい試練を境に、次第に強くなって行き、クライシュに不審を抱く者達は、二度とイスラム教徒に軍隊を向ける事はなかった。

注４　不信心者を挫き、彼等の戦意を損ったのは、雨・風・寒さという大自然の力だった。この言葉は又、不信者を恐怖に陥し込れ、イスラム教徒を勇気付けた天使達を表してもいる。ウィリアムシューアは次の様に述べている。「えさは手に入らず、貯えは減って行き、ラクダや馬が毎日何頭も死んで行った。戦意の弱まった時、夜になり、冷たく激しい風雨が無防備のキャンプを無情に打った。嵐はハリケーンとなった。火は消え、テントは飛ばされ、料理道具や他の用具も吹き飛ばされた(“Life of Mohammed”)。

注５　不信心者達が突然イスラム教徒の前に、あらゆる方向から、メディナの高台からも平原からも現れた。当節最後の言葉は偽善者達に向けられたもので、誠実で不変のイスラム教徒に対するものではない。

注６　これはヒジラ（移住）の前に使われたメディナの名前だった。

注７　この言葉は次の様な意味である。「古い宗教に戻れ」又は、「家へ帰れ。」

15．もし敵が四方から邑(まち)に入り、彼等が叛逆するべく要求されなば、彼等は必ず之(これ)に応えたりしなり。彼等は殆んど之(これ)を躊躇せざりしならん。（注８）

وَلَوْ دُخِلَتْ عَلَيْهِم مِّنْ أَقْطَارِهَا ثُمَّ سُئِلُوا الْفِتْنَةَ لَآتَوْهَا وَمَا تَلَبَّثُوا بِهَا إِلَّا يَسِيرًا ﴿١٥﴾

16．而(しか)も彼等はすでにアッラーに、断じて背を見せじと誓いたり。アッラーとの約束は必ず糾問(きゅうもん)せらるべし。

وَلَقَدْ كَانُوا عَاهَدُوا اللَّهَ مِن قَبْلُ لَا يُوَلُّونَ الْأَدْبَارَ ۚ وَكَانَ عَهْدُ اللَّهِ مَسْئُولًا ﴿١٦﴾

17．云え、「逃走は、たとい戦死や虐殺から免れたとしても、お前たちを益せざるべし。そはただ暫時(ざんじ)の楽しみにすぎず」と。

قُل لَّن يَنفَعَكُمُ الْفِرَارُ إِن فَرَرْتُم مِّنَ الْمَوْتِ أَوِ الْقَتْلِ وَإِذًا لَّا تُمَتَّعُونَ إِلَّا قَلِيلًا ﴿١٧﴾

18．云え、「アッラーがお前たちに禍を下さんとした場合、また慈悲を垂れんとした場合、一体誰がそれを妨げ得るものぞ？」と。彼等はアッラー以外に、如何なる味方も援助者(たすけて)も見出し得ざるべし。

قُلْ مَن ذَا الَّذِي يَعْصِمُكُم مِّنَ اللَّهِ إِنْ أَرَادَ بِكُمْ سُوءًا أَوْ أَرَادَ بِكُمْ رَحْمَةً ۚ وَلَا يَجِدُونَ لَهُم مِّن دُونِ اللَّهِ وَلِيًّا وَلَا نَصِيرًا ﴿١٨﴾

19．げにアッラーはお前たちの中の邪魔だてする者や、仲間に向って「我等のところへ来れ」と云いながら、自らは戦いに加わらざる徒輩(やから)をよく知り給う。

قَدْ يَعْلَمُ اللَّهُ الْمُعَوِّقِينَ مِنكُمْ وَالْقَائِلِينَ لِإِخْوَانِهِمْ هَلُمَّ إِلَيْنَا ۖ وَلَا يَأْتُونَ الْبَأْسَ إِلَّا قَلِيلًا ﴿١٩﴾

20．彼等のお前たちへの助力は僅少なり。すなわち、危険に襲われれば、汝は彼等が瀕死の人の如く目玉をぐるぐるまわして汝を凝視するを見る。然(しか)るに、恐怖過ぎ去れば、鋭い舌先で戦利品を貪(むさぼ)らんとしてお前に喰ってかかる。これ等の徒輩(やから)は信仰などせざりき。されば、アッラーは彼等の仕業を甲斐(かい)なからしめたり。そはアッラーには容易なことなり。

أَشِحَّةً عَلَيْكُمْ ۖ فَإِذَا جَاءَ الْخَوْفُ رَأَيْتَهُمْ يَنظُرُونَ إِلَيْكَ تَدُورُ أَعْيُنُهُمْ كَالَّذِي يُغْشَىٰ عَلَيْهِ مِنَ الْمَوْتِ ۖ فَإِذَا ذَهَبَ الْخَوْفُ سَلَقُوكُم بِأَلْسِنَةٍ حِدَادٍ أَشِحَّةً عَلَى الْخَيْرِ ۚ أُولَٰئِكَ لَمْ يُؤْمِنُوا فَأَحْبَطَ اللَّهُ أَعْمَالَهُمْ ۚ وَكَانَ ذَٰلِكَ عَلَى اللَّهِ يَسِيرًا ﴿٢٠﴾

21．彼等は聯合軍が敗退せざることを希望し、聯合軍再び来ることあらば、砂漠の遊牧民の中に在りて、お前たちの消息を問わんことを望む。また、たとい彼等がお前たちと偕(とも)にありといえども、殆んど戦いに加わらざるべし。

يَحْسَبُونَ الْأَحْزَابَ لَمْ يَذْهَبُوا ۖ وَإِن يَأْتِ الْأَحْزَابُ يَوَدُّوا لَوْ أَنَّهُم بَادُونَ فِي الْأَعْرَابِ يَسْأَلُونَ عَنْ أَنبَائِكُمْ ۖ وَلَوْ كَانُوا فِيكُم مَّا قَاتَلُوا إِلَّا قَلِيلًا ﴿٢١﴾

第三項

22．げにアッラーの預言者は、アッラーとの対面と審判の日を切望し、不断にアッラーを念ずる者にとり、立派な模範なり。

لَقَدْ كَانَ لَكُمْ فِي رَسُولِ اللّٰهِ أُسْوَةٌ حَسَنَةٌ لِمَنْ كَانَ يَرْجُوا اللّٰهَ وَالْيَوْمَ الْاٰخِرَ وَذَكَرَ اللّٰهَ كَثِيرًا ﴿٢٢﴾

23．信徒たちが聯合軍を見たる時、彼等は云えり「こはアッラー並びにその使徒が我等に約束せるものなり。されば、アッラー並びにその使徒は真実を語れり」と。そはただ彼等の信仰と帰依の念を深めたるのみなりき。

وَلَمَّا رَاَ الْمُؤْمِنُونَ الْاَحْزَابَ قَالُوا هٰذَا مَا وَعَدَنَا اللّٰهُ وَرَسُولُهُ وَصَدَقَ اللّٰهُ وَرَسُولُهُ وَمَا زَادَهُمْ اِلَّا اِيمَانًا وَتَسْلِيمًا ﴿٢٣﴾

24．信徒たちの中にはアッラーと結べる約束に忠実なる者あり。その或る者はすでにその誓いを全うし、また或る者は今も待機す。彼等はいささかもその節を変えざりき。

مِنَ الْمُؤْمِنِينَ رِجَالٌ صَدَقُوا مَا عَاهَدُوا اللّٰهَ عَلَيْهِ فَمِنْهُمْ مَنْ قَضٰى نَحْبَهُ وَمِنْهُمْ مَنْ يَنْتَظِرُ وَمَا بَدَّلُوا تَبْدِيلًا ﴿٢٤﴾

25．アッラーは、信義ある者にはその信義に報い、また御心のままに偽信者を罰し、或いは思い直して容赦す。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

لِيَجْزِيَ اللّٰهُ الصّٰدِقِينَ بِصِدْقِهِمْ وَيُعَذِّبَ الْمُنٰفِقِينَ اِنْ شَاءَ اَوْ يَتُوبَ عَلَيْهِمْ اِنَّ اللّٰهَ كَانَ غَفُورًا رَحِيمًا ﴿٢٥﴾

26．アッラーは不信心者どもをしてその憤怒のうちに撤退せしめたり。（注９）彼等は何の利益も得ざりしなり。この戦いに於て、アッラーは信徒たちを満足せしめたり。アッラーは力強く、偉大なり。

وَرَدَّ اللّٰهُ الَّذِينَ كَفَرُوا بِغَيْظِهِمْ لَمْ يَنَالُوا خَيْرًا وَكَفَى اللّٰهُ الْمُؤْمِنِينَ الْقِتَالَ وَكَانَ اللّٰهُ قَوِيًّا عَزِيزًا ﴿٢٦﴾

27．アッラーは聯合軍を助けたる経典の民を城塞より降らしめ、その心中に恐怖を投じたり。お前たちはその或る者を殺し、また他の者を俘虜となせり。

وَاَنْزَلَ الَّذِينَ ظَاهَرُوهُمْ مِنْ اَهْلِ الْكِتٰبِ مِنْ صَيَاصِيهِمْ وَقَذَفَ فِي قُلُوبِهِمُ الرُّعْبَ فَرِيقًا تَقْتُلُونَ وَتَاْسِرُونَ فَرِيقًا ﴿٢٧﴾

注８　もし敵が一人別の方からメディナに入り込み、彼と協力してイスラム教と戦う様求められれば、偽善者達は喜んで従うだろうし、又即にそうしている。以上の事がこの節に書かれている。

注９　神は連合軍の攻撃を防いだ。彼等は包囲を解かなければならず、自らの邪悪な企てを果たせなかった事に腹を立てた余り、家に戻り、二度とメディナを攻撃しには来なかった。以降、主導権はイスラム教徒の手に移ったのである。堀の戦いは、イスラム史上の分岐点となった。弱く、常に侵略されて来たイスラム教が、アラビアの一大勢力となったのである。

28．而して、アッラーは、彼等の土地、家屋、財産、並びにお前たちが未だ足を踏み入れざりし土地までもお前たちに継承せしめたり。アッラーは万事を支配し給う。

وَأَوْرَثَكُمْ أَرْضَهُمْ وَدِيَارَهُمْ وَأَمْوَالَهُمْ وَأَرْضًا لَّمْ تَطَـُٔوهَا ۚ وَكَانَ ٱللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَىْءٍ قَدِيرًا ﴿٢٨﴾

第四項

29．預言者よ、汝の妻たちに云え、「お前たち、現世の暮らしとその栄華とを望まば、来れ。我はお前たちに物を贈って、立派に離別せん。（注 10）

يَـٰٓأَيُّهَا ٱلنَّبِىُّ قُل لِّأَزْوَٰجِكَ إِن كُنتُنَّ تُرِدْنَ ٱلْحَيَوٰةَ ٱلدُّنْيَا وَزِينَتَهَا فَتَعَالَيْنَ أُمَتِّعْكُنَّ وَأُسَرِّحْكُنَّ سَرَاحًا جَمِيلًا ﴿٢٩﴾

30．されど、お前たちもしアッラーとその使徒並びに来世の住居とを望むならば、お前たちのうち善事を行う者にはアッラーが立派な報奨を備え給えり」と。

وَإِن كُنتُنَّ تُرِدْنَ ٱللَّهَ وَرَسُولَهُۥ وَٱلدَّارَ ٱلْـَٔاخِرَةَ فَإِنَّ ٱللَّهَ أَعَدَّ لِلْمُحْسِنَـٰتِ مِنكُنَّ أَجْرًا عَظِيمًا ﴿٣٠﴾

31．預言者の妻たちよ、お前たちの中で明白なる醜行（注 11）を犯したる者は、その罰は倍加せられん。そはアッラーにとりて容易なり。

يَـٰنِسَآءَ ٱلنَّبِىِّ مَن يَأْتِ مِنكُنَّ بِفَـٰحِشَةٍ مُّبَيِّنَةٍ يُضَـٰعَفْ لَهَا ٱلْعَذَابُ ضِعْفَيْنِ ۚ وَكَانَ ذَٰلِكَ عَلَى ٱللَّهِ يَسِيرًا ﴿٣١﴾

32．然れども、アッラーとその使徒を遵奉し、善行を積む者には、われらは報奨を倍加し、光栄ある給養を備えたり。

وَمَن يَقْنُتْ مِنكُنَّ لِلَّهِ وَرَسُولِهِۦ وَتَعْمَلْ صَـٰلِحًا نُّؤْتِهَآ أَجْرَهَا مَرَّتَيْنِ وَأَعْتَدْنَا لَهَا رِزْقًا كَرِيمًا ﴿٣٢﴾

33．預言者の妻たちよ、お前たちは世間一般の子女とは同じからず、もし、お前たち義しくありたしと思うならば。されば、心に病ある者を挑発せぬよう、甘い言葉で囁くなかれ。ただ上品に物云え。（注 12）

يَـٰنِسَآءَ ٱلنَّبِىِّ لَسْتُنَّ كَأَحَدٍ مِّنَ ٱلنِّسَآءِ ۚ إِنِ ٱتَّقَيْتُنَّ فَلَا تَخْضَعْنَ بِٱلْقَوْلِ فَيَطْمَعَ ٱلَّذِى فِى قَلْبِهِۦ مَرَضٌ وَقُلْنَ قَوْلًا مَّعْرُوفًا ﴿٣٣﴾

注 10　モハッマド預言者の妻達は、その品行において世の手本となるべきだとされているので、彼女達は無私の模範となるにふさわしい人物だった。彼女達はお金を使ったり楽しく暮らす事を全く禁じられていた訳ではないが、高度な献身を求められていた事は事実だ。当節及び次の数節に述べられているのは、物質的な恩恵や豊かで安楽な生活を自制するこの厳しい規範についてである。モハッマド預言者と交わるにはこの犠牲的行為が必要とされ、彼の妻達は安楽な暮らしとモハッマド預言者との交わりのどちらか一方を選ぶ様命じられた。

注 11　高い信仰に達し得ない行為のことで、物質的に満たされる事でありもし彼女達がこれを望む様であれば、悪い見本を示す事となる。そして、モハッマド預言者の妻として他の女性の手本であるべき立場にあるので、彼女達は非常に重大な責任を負う事となり、その罪は倍加するであろう。他方、もし彼女達が神と神の使者に身を捧げ、他の者の模範となるべく無私の気高い例を示すなら、その報いも又倍加しよう。

注 12　モハッマド預言者の妻達は、男性と話す時、自らの高位にふさわしい威厳を保ち、十分に礼儀を弁えて振る舞う事を処々に命じられている。イスラム教徒の女性たちもこれに準ずる。

34．而して、淑やかに家におれ。（注 13）かつて無明時代のように飾りたてて、お前たちの美しさを見せびらかすなかれ。而して、礼拝を遵守し、定めの喜捨をなし、アッラーとその使徒の命を遵奉せよ。家事を司る者たちよ、アッラーはお前たちから不浄を祓い、徹底して浄めんと欲す。

وَقَرْنَ فِي بُيُوتِكُنَّ وَلَا تَبَرَّجْنَ تَبَرُّجَ الْجَاهِلِيَّةِ الْأُولَىٰ وَأَقِمْنَ الصَّلٰوةَ وَآتِينَ الزَّكٰوةَ وَأَطِعْنَ اللَّهَ وَرَسُولَهُ ۚ إِنَّمَا يُرِيدُ اللَّهُ لِيُذْهِبَ عَنكُمُ الرِّجْسَ أَهْلَ الْبَيْتِ وَيُطَهِّرَكُمْ تَطْهِيرًا ﴿٣٣﴾

35．お前たちの家で読誦せらるるアッラーの神兆と知恵とを銘記せよ。げにアッラーは敏感にして、すべてに通暁し給う。

وَاذْكُرْنَ مَا يُتْلَىٰ فِي بُيُوتِكُنَّ مِنْ آيَاتِ اللَّهِ وَالْحِكْمَةِ ۚ إِنَّ اللَّهَ كَانَ لَطِيفًا خَبِيرًا ﴿٣٤﴾

第五項

36．神に帰依した男と女、信心深い男と女、忠順な男と女、誠実な男と女、信仰に於て耐え忍ぶ男と女、控え目な男と女、慈善を惜しまぬ男と女、断食を守る男と女、貞節な男と女、断えずアッラーを念ずる男と女、これ等の者のためにアッラーは素晴らしい褒賞を用意せり。

إِنَّ الْمُسْلِمِينَ وَالْمُسْلِمَاتِ وَالْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنَاتِ وَالْقَانِتِينَ وَالْقَانِتَاتِ وَالصَّادِقِينَ وَالصَّادِقَاتِ وَالصَّابِرِينَ وَالصَّابِرَاتِ وَالْخَاشِعِينَ وَالْخَاشِعَاتِ وَالْمُتَصَدِّقِينَ وَالْمُتَصَدِّقَاتِ وَالصَّائِمِينَ وَالصَّائِمَاتِ وَالْحَافِظِينَ فُرُوجَهُمْ وَالْحَافِظَاتِ وَالذَّاكِرِينَ اللَّهَ كَثِيرًا وَالذَّاكِرَاتِ أَعَدَّ اللَّهُ لَهُم مَّغْفِرَةً وَأَجْرًا عَظِيمًا ﴿٣٥﴾

37．アッラー並びにその使徒がすでに事を決したる時、自分勝手に事を行なわんとするは、男女の信者のなすべきことに非ず。（注 14）アッラーとその使徒の命に背く者は、明らかに迷誤の中にさまよう者なり。

وَمَا كَانَ لِمُؤْمِنٍ وَلَا مُؤْمِنَةٍ إِذَا قَضَى اللَّهُ وَرَسُولُهُ أَمْرًا أَن يَكُونَ لَهُمُ الْخِيَرَةُ مِنْ أَمْرِهِمْ ۗ وَمَن يَعْصِ اللَّهَ وَرَسُولَهُ فَقَدْ ضَلَّ ضَلَالًا مُّبِينًا ﴿٣٦﴾

注 13　この言葉は、女性の主な活動範囲が家庭にあることを示しているが、女性に外出が認められない訳ではない。理にかなった用向きの為であれば、必要なだけ何度でも出かけて構わない。但し、異人種や様々な職業の者の集まりに加わったり、男性と肩を並べたり、外出する事で主婦としての義務を怠る様であれば、イスラムの有るべき女性の道からはずれる事となる。モハッマド預言者の妻達は、特に家に留まる様に求められていたが、それは、信徒の母たる高位の尊厳がこれを要求していたからであり、又イスラム教徒がしばしば挨拶に訪れ、宗教上の重要な問題で彼女達に教えを請うたからである。この戒律はイスラム教徒の全女性に等しく適応する。イスラム教では、モハッマド預言者に為された挨拶は、同時に全イスラム教徒に向けられたものとみなされる。同様に、モハッマド預言者の妻達に科せられた戒律は、又全イスラム女性に向けられたものでもある訳である。

注 14　この節が啓示された直接の原因は、モハッマド預言者がザイナブを彼の解放奴隷ザイドに娶わせたいと強く望んだ際、ザイナブがそれをためらった事にある。自らの意志に反し、モハッマド預言者の望み通りに

38. アッラーが恩顧を垂れ、汝も目をかけた男に、汝が、「妻を汝の許に留めおけ、而して、アッラーを畏れよ」と云いし時を念え。而して汝はアッラーが発かんとすることを心中に隠し、他人の噂を恐れたり。汝が恐るべきはアッラーの筈。されば、ザイドが離婚に必要な手続を了えたる時、（注 15）われらは彼女を汝に妻せり。こは、使徒は、養子の嫁でも離婚の手続が了えているなら、之を娶れることなり。されば、アッラーの命令は履行されねばならぬ。（注 16）

وَاِذْ تَقُوْلُ لِلَّذِيْٓ اَنْعَمَ اللّٰهُ عَلَيْهِ وَاَنْعَمْتَ عَلَيْهِ اَمْسِكْ عَلَيْكَ زَوْجَكَ وَاتَّقِ اللّٰهَ وَتُخْفِيْ فِيْ نَفْسِكَ مَا اللّٰهُ مُبْدِيْهِ وَتَخْشَى النَّاسَ ۚ وَاللّٰهُ اَحَقُّ اَنْ تَخْشٰىهُ ؕ فَلَمَّا قَضٰى زَيْدٌ مِّنْهَا وَطَرًا زَوَّجْنٰكَهَا لِكَيْ لَا يَكُوْنَ عَلَى الْمُؤْمِنِيْنَ حَرَجٌ فِيْٓ اَزْوَاجِ اَدْعِيَآئِهِمْ اِذَا قَضَوْا مِنْهُنَّ وَطَرًا ؕ وَكَانَ اَمْرُ اللّٰهِ مَفْعُوْلًا ﴿٣٨﴾

39. 預言者がアッラーの命じたることを行うに（注 17）、何んの障害あるべきや。そは過ぎ

مَا كَانَ عَلَى النَّبِيِّ مِنْ حَرَجٍ فِيْمَا فَرَضَ اللّٰهُ لَهٗ ؕ سُنَّةَ اللّٰهِ فِي الَّذِيْنَ خَلَوْا مِنْ قَبْلُ ؕ وَكَانَ اَمْرُ اللّٰهِ قَدَرًا

ザイナブがザイドと結婚したのは立派な事である。モハッマド預言者は、ザイドを夫として受け入れる様に彼女に強いた訳ではない。彼女が自発的にモハッマド預言者の願いに従ったのである。

注 15　モハッマド預言者の若い解放奴隷ザイド・ビン・ハーリスを指す。養子縁組がイスラム教で不法行為と示されるまでモハッマド、預言者は彼を養子としていた。

注 16　ザイナブはモハッマド預言者のおばの娘であったので、生粋のアラブ女性で、その家柄や高い社会的地位を誇りとしていた。イスラム教は、階級制・階級の世襲・財産譲渡の無い文明を世にもたらしたいと目指していた。神の前に、人は皆自由で平等であった。モハッマド預言者は、イスラム教のこの高尚な理想の実現を、まず自らの家庭において始めようとした。彼はザイナブにザイドと結婚する事を望んだ。ザイドはモハッマド預言者の手で自由の身となったとはいえ、ある人々の心には、まだ彼を奴隷とみなす意識が根強く残っていた。奴隷の烙印という、自由人と奴隷との間の不公平な差別があり、モハッマド預言者はザイナブをザイドに娶す事で、これを取り除こうとしたのである。モハッマド預言者の望みに従い、ザイナブはこの申し入れを受けた。モハッマド預言者の願いは適えられた。この結婚は、基本的な階級制度を徹廃させる事となった。しかし残念な事に結婚自体は失敗に終わった。ザイナブとザイドの階級の違いは二人の好みの不一致をもたらし、ザイドは劣等感にさいなまれたのである。この結婚の失敗は当然モハッマド預言者を悲しませた。しかし同時に良い結果をも生み出した。当節の後半に述べられている様に、神の命に従い、モハッマド預言者が自らザイナブと結婚することで養子の妻を娶るのは神への冒瀆だとする、アラブに深く根付いた不快な慣習を根絶できたのである。養子制度は廃止され、それと共に、この愚かな考えも亡くされた。この様に、ザイナブとザイドの結婚は、一つの高尚な目的の為になされ、その失敗も、又一つの目的を適えたのである。「アッラーを畏れ」とは、ザイドがザイナブと別れたがった事を示す。イスラム教では離婚は神の目に非常に不快なものと写り、モハッマド預言者はザイドに思い直す様熱心に説いた。「汝が恐れるべきはアッラー」という箇所はザイド、モハッマド預言者双方に向けられたものと言えよう。ザイドの場合、彼がザイナブとの別離の原因が明るみに出るのを望まなかった事を意味しよう。それは、「アッラーを畏れ」の言葉が示す様に、非がザイナブより彼自身に多くあったからである。しかし先述の文がモハッマド預言者に適用される時、ザイドとザイナブの結婚がモハッマド預言者の意を汲んで行なわれたので、当然彼が離婚を望まなかった事を示すものと言えよう。この文は又次の事も示している。この結婚の破綻は、イスラムの同胞愛における試みが明らかに失敗に終わった事を意味し、これにより、信仰の弱い者達に不安と混乱が起こるのではないかとモハッマド預言者は恐れた。この懸念はモハッマド預言者の心に重くのしかかった。「他人の噂を恐れ…」という言葉が彼のこの不安を言い表しているようだ。

注 17　この言葉は、モハッマド預言者がザイナブと結婚した事を示している。又、彼の結婚が神の命に従ったものであった事も表している。

逝く人々に対せるアッラーのやり方なりき。アッラーの命令は不動の掟なり。

مَّقْدُورًا ﴿٣٩﴾

40．彼等はアッラーの御告げを伝え、アッラーを畏れ、それ以外の何者も畏れざりき。アッラーは清算者として十分なり。

الَّذِينَ يُبَلِّغُونَ رِسَالَاتِ اللَّهِ وَيَخْشَوْنَهُ وَلَا يَخْشَوْنَ أَحَدًا إِلَّا اللَّهَ ۗ وَكَفَىٰ بِاللَّهِ حَسِيبًا ﴿٤٠﴾

41．ムハンマドはお前たちの中の誰の父にも非ず。然しアッラーの使徒であり、諸預言者の印璽なり。（注18）　アッラーは萬事を知悉し給う。

مَّا كَانَ مُحَمَّدٌ أَبَا أَحَدٍ مِّن رِّجَالِكُمْ وَلَٰكِن رَّسُولَ اللَّهِ وَخَاتَمَ النَّبِيِّينَ ۗ وَكَانَ اللَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمًا ﴿٤١﴾

第六項

42．汝等使徒たちよ、不断にアッラーを唱念せよ。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اذْكُرُوا اللَّهَ ذِكْرًا كَثِيرًا ﴿٤٢﴾

注18　カータムは「刻印する」という意味の語カタマに由来する。この語の第一義は上記したが、第二義としては次の様なものが挙げられる。(1)物事を終える。(2)物を覆う。(3)粘土に刻印を押したり、他の方法で押印をして書類を保護する。カータムは、印の付いた指輪の事であり、つまりは物事の結末を意味する。この語には装飾品という意味もあり、言い換えれば最上・完全を表わす。カーティム，カトゥム，カータム，はほぼ同義語と言える。この点からして、カータムル・ナビイーンは、預言者達の印、つまりは預言者の中で最高にして完全なる人物を指す。又第二義的には、預言者達の装飾品、すなわち預言者の内最後に来る者を意味する。メッカでモハッマド預言者の息子達が全て幼児期に亡った時、彼の敵は彼をアブタル（息子を持たない者）となじった。彼の跡を継ぐ息子がいなければ、彼の活動は早晩終わるであろうとの意味がそこには込められていた。不信者によるこの非難に対して、スーラカウサル（108章）にモハッマド預言者ではなく彼の敵こそ子孫を持たぬであろうと明示された。スーラカウサルが啓示された後、そこに示された事が初期のイスラム教徒にとり喜ばしいものである事が自ずと明らかになった。それは、モハッマド預言者に息子が授かり、その子は立派に成人するであろうというものだった。モハッマド預言者は過去・現在・未来において成人に至る息子の父とはなれないとする誤解があったが、当節はそれを取り払った。当節は、子孫の根絶を恐れるのは、モハッマド預言者ではなく、彼の敵であると記すスーラカウサルと対立している様に見えるが、実際は、この外見上の矛盾を解決しようと試みているのである。モハッマド預言者はラスールッラー（神の使徒）であり、又カータムル・ナビイーン（預言者達の精神的な父）であると当節は述べている。彼が全使徒及び預言者の父であるなら、何故彼はアブタル（子孫無き者）と言われ得よう？　又、もしこの言葉の意味を「彼は最後の預言者であり、彼の後に現れる預言者はいない。」と捕らえるなら、当節はその内容と一致せず何ら関連が無くなってしまう。そして、モハッマド預言者は子孫に恵まれないとする不信心者の愚弄に反駁する所か、それを認める事となってしまう。

上記されたカータムの意味から推察して、カータムル・ナビイーンには四つの意味が考えられる。(1)モハッマド預言者は、預言者達の封印であった。つまり、モハッマド預言者の印が無い限り、真の預言者とは認められない。モハッマド預言者以前の預言者はだれでもその地位をモハッマド預言者に承認されなければならず、又彼以降の預言者はモハッマド預言者の弟子にならなければ、預言者の地位を得る事はできない。(2)モハッマド預言者は預言者の中で最も優れた完全なる人物であり。預言者達にとり装飾源でもあった(Zurqani, Sharah Mawahib al-Ladunniyyah)。(3)モハッマド預言者は啓示を受けた最後の預言者であった。この解釈は、イブン・アラビー，シャワリーウッラー，イマーム・アリー・カーリー，ムジャディッド・アリフ・サーニー等の著名なイスラム教の理論家、聖徒、学者に受け入れられて来た。これ等の偉大な学者や聖人によれば、モハッマド預言者の教義を廃する者、彼の教団（ウンマ）に属さない者の中には、モハッマド預言者の後を継げる預言者は居ない。(Futuhat,Tafhimat, Maktubat & Yawaqit wal Jawahir)。モハッマド預言者の賢妻アイシャ

43. 朝な夕なアッラーを讃え奉れ。

وَّسَبِّحُوْهُ بُكْرَةً وَّاَصِيْلًا ﴿٤٣﴾

44. お前たちを暗黒から光明へ導き出さんとして、天使らと同様お前たちを祝福するは彼なり。彼は信ずる人々には慈悲深くましします。

هُوَ الَّذِيْ يُصَلِّيْ عَلَيْكُمْ وَمَلٰٓئِكَتُهٗ لِيُخْرِجَكُمْ مِّنَ الظُّلُمٰتِ اِلَى النُّوْرِ ؕ وَكَانَ بِالْمُؤْمِنِيْنَ رَحِيْمًا ﴿٤٤﴾

45. 彼等がアッラーに会い奉る日の挨拶は、「平安あれ」の一語なるべし。而して、アッラーは、彼等のために光栄ある報奨を準備せり。

تَحِيَّتُهُمْ يَوْمَ يَلْقَوْنَهٗ سَلٰمٌ ۖۚ وَاَعَدَّ لَهُمْ اَجْرًا كَرِيْمًا ﴿٤٥﴾

46. 預言者よ、げにわれらは汝を証人として、朗報の伝達者として、警告者として遣わしたり。

يٰٓاَيُّهَا النَّبِيُّ اِنَّآ اَرْسَلْنٰكَ شَاهِدًا وَّمُبَشِّرًا وَّنَذِيْرًا ﴿٤٦﴾

47. またアッラーの命を奉じて人々をアッラーの許へ召喚する者として、光明を与える燈火として。（注 19）

وَّدَاعِيًا اِلَى اللّٰهِ بِاِذْنِهٖ وَسِرَاجًا مُّنِيْرًا ﴿٤٧﴾

48. されば、信者たちに向って、アッラーから素晴らしい賜物をたまわるべしとの朗報を伝えよ。

وَبَشِّرِ الْمُؤْمِنِيْنَ بِاَنَّ لَهُمْ مِّنَ اللّٰهِ فَضْلًا كَبِيْرًا ﴿٤٨﴾

49. 而して、不信心者並びに偽信者の徒輩に従うなかれ。彼等の騒ぎはそのままに捨ておき、ひたすらアッラーに頼れ、守護者として十分なるが故に。

وَلَا تُطِعِ الْكٰفِرِيْنَ وَالْمُنٰفِقِيْنَ وَدَعْ اَذٰىهُمْ وَتَوَكَّلْ عَلَى اللّٰهِ ؕ وَكَفٰى بِاللّٰهِ وَكِيْلًا ﴿٤٩﴾

50. 汝等信徒たちよ、女の信者と結婚し、体に触れざる前に之を離婚する場合は、お前たちは彼女に規定の期限を待たせる権利を有

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اِذَا نَكَحْتُمُ الْمُؤْمِنٰتِ ثُمَّ طَلَّقْتُمُوْهُنَّ مِنْ قَبْلِ اَنْ تَمَسُّوْهُنَّ فَمَا لَكُمْ عَلَيْهِنَّ مِنْ عِدَّةٍ

は次の様に語ったと記されている。「彼（モハッマド預言者）はカータムルナビイーンであると言いなさい、しかし彼の後に続く預言者がいないと言ってはならない。」(4)預言者としての特性を全て、その身に完全に表していたという意味において、モハッマド預言者は最後の預言者であった。カータムは優秀さを表わす最高の言葉として、一般的に使われる。又、クルアーンは、モハッマド預言者の後に預言者が現れると明示している（7：36)。モハッマド預言者自身、彼の後にも預言者の職分は続くものと心に刻んでいた。彼は次の様に語ったと記されている。「もしイブラーヒム（彼の息子）が生きておれば、彼は預言者となったであろう（マジャーーアルジャナイズ書)。」又以下の様にも述べた。「アブー・バクルは、私の後に現れる者たちのうち、預言者を除けば最初の人物である。」

注 19　太陽が物質界の中心に位置する様に、モハッマド預言者は精神界の要である。彼は天空の太陽であり、他の預言者、神の指導者達は星や月の様にその回りを回り、彼から光を与えられる。彼は次の様に語ったとされる。「私の弟子は数ある星の様であり、その後に従う者は正しく導かれるであろう。」

せず。されば、彼女になにがしかの品物を与え、きれいに暇を出すべし。（注 20）

تَعْتَدُّونَهَا ۖ فَمَتِّعُوهُنَّ وَسَرِّحُوهُنَّ سَرَاحًا جَمِيلًا ﴿٥٠﴾

51．預言者よ、われらが汝に妻として許した者は、汝が婚資を払った者、戦利品としてアッラーが汝に与えたるもののうち汝の右手が所有する者、汝の父方の叔父の娘と父方の叔母の娘、母方の叔父の娘と母方の叔母の娘で汝と共に移住し来たる者、並びに女の信者で自らその身を預言者に捧げんと欲し、預言者も彼女との結婚を望む場合なり。但し、こは汝のみに許された特権にして、他の信徒たちには許されぬ。われらはすでに信徒たちに、信者の妻やその右手が所有する者に関するわれらの命じたことを知らせたり、汝が信徒たちにその規定を説明する上に支障なからしめんがために。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ إِنَّا أَحْلَلْنَا لَكَ أَزْوَاجَكَ اللَّاتِي آتَيْتَ
أُجُورَهُنَّ وَمَا مَلَكَتْ يَمِينُكَ مِمَّا أَفَاءَ اللَّهُ عَلَيْكَ
وَبَنَاتِ عَمِّكَ وَبَنَاتِ عَمَّاتِكَ وَبَنَاتِ خَالِكَ وَبَنَاتِ
خَالَاتِكَ اللَّاتِي هَاجَرْنَ مَعَكَ وَامْرَأَةً مُؤْمِنَةً إِنْ
وَهَبَتْ نَفْسَهَا لِلنَّبِيِّ إِنْ أَرَادَ النَّبِيُّ أَنْ يَسْتَنْكِحَهَا
خَالِصَةً لَكَ مِنْ دُونِ الْمُؤْمِنِينَ ۗ قَدْ عَلِمْنَا مَا
فَرَضْنَا عَلَيْهِمْ فِي أَزْوَاجِهِمْ وَمَا مَلَكَتْ أَيْمَانُهُمْ
لِكَيْلَا يَكُونَ عَلَيْكَ حَرَجٌ ۗ وَكَانَ اللَّهُ غَفُورًا رَحِيمًا ﴿٥١﴾

52．汝は妻たちのうち欲するものを退け、欲する者を迎え入れるを得べし。また、汝は、退けし者のうち、汝の欲する者を連れ戻すとも差し支えなし。その方が彼女たちの気持は落ちつき、悲しまず、汝が彼女たちに与えたるもので皆満足するであろうからより一層妥当なり。（注 21）アッラーはお前たちが心に抱くものを知り給う。アッラーは全知者、寛容者にまします。

تُرْجِي مَنْ تَشَاءُ مِنْهُنَّ وَتُؤْوِي إِلَيْكَ مَنْ تَشَاءُ ۖ
وَمَنِ ابْتَغَيْتَ مِمَّنْ عَزَلْتَ فَلَا جُنَاحَ عَلَيْكَ ۚ ذَٰلِكَ
أَدْنَىٰ أَنْ تَقَرَّ أَعْيُنُهُنَّ وَلَا يَحْزَنَّ وَيَرْضَيْنَ بِمَا
آتَيْتَهُنَّ كُلُّهُنَّ ۚ وَاللَّهُ يَعْلَمُ مَا فِي قُلُوبِكُمْ ۚ وَكَانَ
اللَّهُ عَلِيمًا حَلِيمًا ﴿٥٢﴾

53．なれど汝は、今後他の女を娶（めと）ることを許されず、またたといその美貌が汝を魅（み）するとも、他の女を以て現在の妻に替えることも許されず、但し汝の右手が所有する者は除

لَا يَحِلُّ لَكَ النِّسَاءُ مِنْ بَعْدُ وَلَا أَنْ تَبَدَّلَ بِهِنَّ
مِنْ أَزْوَاجٍ وَلَوْ أَعْجَبَكَ حُسْنُهُنَّ إِلَّا مَا مَلَكَتْ

注 20　「きれいに暇を出すべし。」は、次の様な意味を持つ。(1)離婚した女性を責めてはいけない。(2)離婚女性は通常規定の婚資以上のものを支払われるべきだ。(3)離婚後、女性の行動の自由を束縛してはならない。

注 21　モハッマド預言者の妻達が、彼と添い遂げるか、物質的に豊かな生活つまり世俗のものを選ぶかその選択権を与えられた一方、モハッマド預言者は、いずれの妻と添い遂げ、又、別れるかの選択権を与えられてた。妻達は即座に意を表した。彼女達は彼と運命を共にする方を選んだ。モハッマド預言者は全てに等しく思いやりがあった。彼女達皆を選ぶと示した。モッツマド預言者の決意は彼女達を大変喜ばせた。「あなたが彼女達に与えたもので彼女たちは皆、喜んだ。」という意のことが文中にも示されている。

يَمِينُكَ ۗ وَكَانَ اللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ رَّقِيبًا ﴿٥٢﴾

く。（注 22）アッラーは萬事を監視し給う。

第七項

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَدْخُلُوا بُيُوتَ النَّبِيِّ إِلَّا أَن يُؤْذَنَ لَكُمْ إِلَىٰ طَعَامٍ غَيْرَ نَاظِرِينَ إِنَاهُ وَلَٰكِنْ إِذَا دُعِيتُمْ فَادْخُلُوا فَإِذَا طَعِمْتُمْ فَانتَشِرُوا وَلَا مُسْتَأْنِسِينَ لِحَدِيثٍ ۚ إِنَّ ذَٰلِكُمْ كَانَ يُؤْذِي النَّبِيَّ فَيَسْتَحْيِي مِنكُمْ ۖ وَاللَّهُ لَا يَسْتَحْيِي مِنَ الْحَقِّ ۚ وَإِذَا سَأَلْتُمُوهُنَّ مَتَاعًا فَاسْأَلُوهُنَّ مِن وَرَاءِ حِجَابٍ ۚ ذَٰلِكُمْ أَطْهَرُ لِقُلُوبِكُمْ وَقُلُوبِهِنَّ ۚ وَمَا كَانَ لَكُمْ أَن تُؤْذُوا رَسُولَ اللَّهِ وَلَا أَن تَنكِحُوا أَزْوَاجَهُ مِن بَعْدِهِ أَبَدًا ۚ إِنَّ ذَٰلِكُمْ كَانَ عِندَ اللَّهِ عَظِيمًا ﴿٥٣﴾

54．汝等使徒たちよ、許しなくば、食事の支度が整うまで待てずに預言者の家に入るなかれ。しかし、招かれた時には入り、食事がすめば無駄話に長居することなく、直ちに辞去せよ。（注 23）預言者は長居されて迷惑するも、お前たちに帰れとも云い出しかねるがためなり。されどアッラーは、真実を告げるに遠慮せず。また、お前たちが、預言者の妻たちに何かを頼む場合は、帳の背後からそれを頼め。（注 24）かくするは、お前たちの心のためにも、また彼女たちの心のためにも汚れることなし。而して、お前たち、アッラーの使徒に迷惑をかけるようなことをするなかれ。また彼亡き後、その妻たちと結婚すべからず。（注 25）げにそはアッラーの目には大罪なり。

إِن تُبْدُوا شَيْئًا أَوْ تُخْفُوهُ فَإِنَّ اللَّهَ كَانَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمًا ﴿٥٤﴾

55．お前たち、事を表に現わすとも、或いはそれを隠そうとも、アッラーは一切萬事を深知し給う。

لَّا جُنَاحَ عَلَيْهِنَّ فِي آبَائِهِنَّ وَلَا أَبْنَائِهِنَّ وَلَا إِخْوَانِهِنَّ وَلَا أَبْنَاءِ إِخْوَانِهِنَّ وَلَا أَبْنَاءِ أَخَوَاتِهِنَّ وَلَا نِسَائِهِنَّ وَلَا مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُهُنَّ ۗ وَاتَّقِينَ اللَّهَ ۚ إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ شَهِيدًا ﴿٥٥﴾

56．彼女たちがヴェールなしに接して差し支えない相手は、自分の父、息子、兄弟、兄弟の子等、姉妹の子等、家の女たち、並びに彼女たちの右手が所有する者たちなり。預言者の妻たちよ、アッラーを畏れ敬え。げにアッラーは萬事を検証し給う。

注 22　この節がヒジラ７年に啓示されモハッマド預言者はこれ以上、結婚しないことが定められた。彼は又、当時の妻のいずれとも離婚してはならないとされていた。それはおそらく、信徒の母たる彼女達の尊厳を重んじるからであり、又、彼女達が世俗の快楽よりも、モハッマド預言者の家庭における厳しさを選んだからであろう。神は彼女達の犠牲的行為を認められ、モハッマド預言者に、それ以上の結婚と当時の妻達との離婚を共に禁じられた。

注 23　招かれざる家を訪れてはならない。招かれた時は約束の時間を守らねばならない。遅れるのは早過ぎるのと同じく良くない事だ。食後は無駄話に、自らのそして他人の時を浪費する事無く、辞去すべし。

注 24　この戒律は、異性間の過度の親交を戒めたものである。これは、全ての女性に向けられている。

注 25　モハッマド預言者に残された寡婦との婚姻は重罪であると、この節に示されていた。モハッマド預言者の妻であるが故の信徒の母という立場上、宗教上の息子が彼女達と結婚するのは、彼女達の宗教上の尊厳を犯す事となるからであった。

57．アッラーとその天使たちは預言者を祝福す。汝等信徒たちよ、お前たちも彼を祝福し、平安の言葉を以て挨拶せよ。

إِنَّ اللّٰهَ وَمَلٰٓئِكَتَهٗ يُصَلُّوْنَ عَلَى النَّبِيِّ ۚ يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا صَلُّوْا عَلَيْهِ وَسَلِّمُوْا تَسْلِيْمًا ﴿٥٧﴾

58．げにアッラーとその使徒を非難する者、(注 26) アッラーは彼等に現世にても来世にても呪いをかけ、恥づべき懲罰を用意せり。

إِنَّ الَّذِيْنَ يُؤْذُوْنَ اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ لَعَنَهُمُ اللّٰهُ فِى الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةِ وَاَعَدَّ لَهُمْ عَذَابًا مُّهِيْنًا ﴿٥٨﴾

59．故なくして信徒の男女を非難する者は、中傷と明白な罪に対する責めを負うべし。

وَالَّذِيْنَ يُؤْذُوْنَ الْمُؤْمِنِيْنَ وَالْمُؤْمِنٰتِ بِغَيْرِ مَا اكْتَسَبُوْا فَقَدِ احْتَمَلُوْا بُهْتَانًا وَّاِثْمًا مُّبِيْنًا ﴿٥٩﴾

第八項

60．預言者よ、汝の妻たち及び娘たち、並びに信徒の女たちにゆったりした長衣をまとえと告げよ。(注 27) かくすれば識別され易く、またからかわれずにすむ。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

يٰٓاَيُّهَا النَّبِيُّ قُلْ لِّاَزْوَاجِكَ وَبَنٰتِكَ وَنِسَآءِ الْمُؤْمِنِيْنَ يُدْنِيْنَ عَلَيْهِنَّ مِنْ جَلَابِيْبِهِنَّ ۗ ذٰلِكَ اَدْنٰٓى اَنْ يُّعْرَفْنَ فَلَا يُؤْذَيْنَ ۗ وَكَانَ اللّٰهُ غَفُوْرًا رَّحِيْمًا ﴿٦٠﴾

61．もしも偽信者や、心に病のある者、並びに邑(まち)に流言蜚語(りゅうげんひご)を流して人心を動揺させる徒輩(やから)が、その行為をやめぬのなら、われらは必ず汝を激励して彼等と戦わせしむべし。(注 28) さすれば彼等が汝の隣人として邑(まち)に住むのは、ただ暫時(しばし)の間となるべし。

لَئِنْ لَّمْ يَنْتَهِ الْمُنٰفِقُوْنَ وَالَّذِيْنَ فِيْ قُلُوْبِهِمْ مَّرَضٌ وَّالْمُرْجِفُوْنَ فِى الْمَدِيْنَةِ لَنُغْرِيَنَّكَ بِهِمْ ثُمَّ لَا يُجَاوِرُوْنَكَ فِيْهَآ اِلَّا قَلِيْلًا ﴿٦١﴾

62．彼等は呪われるべし。何処(いずこ)にても彼等は見つけられ次第捉えられ、殲滅(せんめつ)されん。(注 29)

مَّلْعُوْنِيْنَ ۛ اَيْنَمَا ثُقِفُوْٓا اُخِذُوْا وَقُتِّلُوْا تَقْتِيْلًا ﴿٦٢﴾

注 26　「アッラーを非難する」とは神の目的遂行を妨げる事であり「使徒を非難する」とは神の使徒に対する誹謗を意味する。

注 27　イスラム教のベールには二つの目的がある。それは閑居を命じ、礼儀をわきまえ、威厳ある振舞を勧めるものである。女性はむやみに男性と出会う事を許されず、外出時の服装に関する規定に従う様求められている。ベールについての詳細は、24 章 32 節の脚注参照の事。

注 28　メディナの偽善者及びユダヤ教徒は、イスラム教徒に対してあらゆる妨害を行ったが、彼等の主なやり方は、イスラム教に関する偽りの話を広める事であった。しかし彼等の権力と威信が失われた時、この悪事は完全に敗北を喫した。「必ず汝を激励して」というのは次の様な意味でもある。「我々は必ずや貴方をして彼等を抑えさせるであろう。さもなくば彼等の上に君臨する権限を授けよう。」

注 29　不幸なユダヤ人達は代々屈辱感にさいなまれて来た。彼等がパレスチナに帰還し、イスラエル国家を設立したのは一時的な局面でしかない様だ。

63. 過ぎ去りし人々に対せるアッラーの流儀はかくの如くなりき。而して、汝は、アッラーの流儀に決して変更なきことを知らん。

سُنَّةَ اللَّهِ فِي الَّذِينَ خَلَوْا مِن قَبْلُ ۖ وَلَن تَجِدَ لِسُنَّةِ اللَّهِ تَبْدِيلًا ﴿٦٢﴾

64. 人は最期について汝に問う。云え、「そは独りアッラーのみぞ知る」と。而して、その最期が近くか否かを誰が汝に語り得るか？

يَسْأَلُكَ النَّاسُ عَنِ السَّاعَةِ ۖ قُلْ إِنَّمَا عِلْمُهَا عِندَ اللَّهِ ۚ وَمَا يُدْرِيكَ لَعَلَّ السَّاعَةَ تَكُونُ قَرِيبًا ﴿٦٣﴾

65. げにアッラーは不信心者どもを呪詛し、彼等のために燃え盛る火を用意せり。

إِنَّ اللَّهَ لَعَنَ الْكَافِرِينَ وَأَعَدَّ لَهُمْ سَعِيرًا ﴿٦٤﴾

66. 彼等は永劫にその中に住み留まらん。そこでは味方もなければ助け手もなし。

خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا ۖ لَّا يَجِدُونَ وَلِيًّا وَلَا نَصِيرًا ﴿٦٥﴾

67. 彼等の顔が火の中でぐるぐる廻される日、彼等は初めて云わん、「ああ、我等もアッラーの命に従い、その預言者の命に従いたりせば！」と。

يَوْمَ تُقَلَّبُ وُجُوهُهُمْ فِي النَّارِ يَقُولُونَ يَا لَيْتَنَا أَطَعْنَا اللَّهَ وَأَطَعْنَا الرَّسُولَا ﴿٦٦﴾

68. 而して、更に云わん、「主よ、我等は首長たちやお偉ら方に順えり。然るに彼等は、正しい道より我等を邪道に導けり。（注 30）

وَقَالُوا رَبَّنَا إِنَّا أَطَعْنَا سَادَتَنَا وَكُبَرَاءَنَا فَأَضَلُّونَا السَّبِيلَا ﴿٦٧﴾

69. 主よ、彼等に二重の罰を加え、重き呪いを以て彼等を呪いたまえ」と。

رَبَّنَا آتِهِمْ ضِعْفَيْنِ مِنَ الْعَذَابِ وَالْعَنْهُمْ لَعْنًا كَبِيرًا ﴿٦٨﴾

第九項

70. 汝等信徒たちよ、モーゼを誹謗せる輩の如くなるなかれ。（注 31）然しながら、アッラーは、彼等のモーゼについて語れる疑いを晴らしたり。モーゼはアッラーに大いに尊重された者なりき。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَكُونُوا كَالَّذِينَ آذَوْا مُوسَىٰ فَبَرَّأَهُ اللَّهُ مِمَّا قَالُوا ۚ وَكَانَ عِندَ اللَّهِ وَجِيهًا ﴿٦٩﴾

71. 汝等信徒たちよ、アッラーを畏れ、正直に話せ。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اتَّقُوا اللَّهَ وَقُولُوا قَوْلًا سَدِيدًا ﴿٧٠﴾

72. さすればアッラーはお前たちの所業を矯正し、そのもろもろの罪を宥恕せん。而して、アッラーとその使徒の命を遵奉する者は、必ずや素晴らしい幸運をものにせん。

يُصْلِحْ لَكُمْ أَعْمَالَكُمْ وَيَغْفِرْ لَكُمْ ذُنُوبَكُمْ ۗ وَمَن يُطِعِ اللَّهَ وَرَسُولَهُ فَقَدْ فَازَ فَوْزًا عَظِيمًا ﴿٧١﴾

注 30　前節の言葉は不信心者達の指導者に向けられたものであった。当節では粗野で狡猾な人物について述べてある。他人に対する悪行の責めから逃れ様とするのは人間の性である。

注 31　モーゼは様々な中傷を受けたが、それには次の様なものもあった。(1)クアールーン（コラ）という男は、ある女性に、彼女との姦通の罪で彼を告発する様説いた。(2)アーロンが民衆の信望を集める様になった事に嫉妬し、モーゼは彼を殺害しようとした。(3)彼はハンセン病と梅毒を病んでいた。(4)サムリは彼を偶像崇拝のかどで告発した。(5)彼の妹は彼にいわれ無き非難を浴びせた。

73．われらは初め、諸天と大地と山々にこの神聖な掟の保管を求めたり。然るに彼等は之を担うことを辞退し、且つ之を恐れたり。然るに、人類は之を担えり。然しながら人類は敢て不義をなし、且つ愚昧なり。（注32）

إِنَّا عَرَضْنَا الْأَمَانَةَ عَلَى السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ وَالْجِبَالِ فَأَبَيْنَ أَنْ يَحْمِلْنَهَا وَأَشْفَقْنَ مِنْهَا وَحَمَلَهَا الْإِنْسَانُ إِنَّهُ كَانَ ظَلُومًا جَهُولًا ﴿٧٣﴾

74．この故に、アッラーは偽信者並びに多神教徒に、男女の別なく刑罰を科さん。されど、アッラーは、信仰する者には、男女の別なく憐れみを垂れ給う。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

لِيُعَذِّبَ اللّٰهُ الْمُنٰفِقِينَ وَالْمُنٰفِقٰتِ وَالْمُشْرِكِينَ وَالْمُشْرِكٰتِ وَيَتُوبَ اللّٰهُ عَلَى الْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنٰتِ وَكَانَ اللّٰهُ غَفُورًا رَّحِيمًا ﴿٧٤﴾

注32　人間は、神の特性を習得し、創造主の姿に似る為に、大いなる天性の力を授けられている（2：31）。これは事実重大な義務であり、全宇宙にあって人間のみが遂行できると知らされた。他は、天使・天・地・山全てその能力を持たない。それ等はその義務の負担を拒んだ。人間がこの義務を受け入れたのは、それを履行できるのが人間しか無かったからである。人間以外の生物は全てこの義務にそむく事を拒んだ。つまり彼等は皆課せられた全ての法を忠実に履行したのである（16：50，51）。決断力を持つ人間のみ、自らの義務を顧みず、神の律法にそむいた。当節のこの解釈は41：12で裏付けされている。

رُكُوعَاتُهَا ٦ — سُوْرَةُ سَبَاٍ مَّكِّيَّةٌ (٣٤) — اٰيَاتُهَا ٥٤

サバー
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ﴿١﴾

2．天地の一切を統べ給うアッラーに讃えあれ。来世の讃美もまた彼の所有なり。彼は賢哲にして、すべてに通暁し給う。

اَلْحَمْدُ لِلّٰهِ الَّذِيْ لَهٗ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ وَلَهُ الْحَمْدُ فِي الْاٰخِرَةِ ۭ وَهُوَ الْحَكِيْمُ الْخَبِيْرُ ﴿٢﴾

3．彼は大地に入るもの並びにそれより出づるものを知り、天より降るもの並びにそこへ立ちのぼるものを知り給う。而して、慈悲深く、寛大にまします。

يَعْلَمُ مَا يَلِجُ فِي الْاَرْضِ وَمَا يَخْرُجُ مِنْهَا وَمَا يَنْزِلُ مِنَ السَّمَاۗءِ وَمَا يَعْرُجُ فِيْهَا ۭ وَهُوَ الرَّحِيْمُ الْغَفُوْرُ ﴿٣﴾

4．信ぜざる徒輩は云う、「審判の如きは、我等決して出会うざるべし」と。云え、「断じてさにあらず。見えざるものを知り給う我が主にかけて、そは必ずお前たちを不意に襲わん。天地に於ける一微塵の重さでも、またそれより小なるものも大なるものも、一つとして彼より免れるはなし。そは載せてすべて明快なる経典にあり。（注1）

وَقَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لَا تَاْتِيْنَا السَّاعَةُ ۭ قُلْ بَلٰى وَرَبِّيْ لَتَاْتِيَنَّكُمْ عٰلِمِ الْغَيْبِ ۚ لَا يَعْزُبُ عَنْهُ مِثْقَالُ ذَرَّةٍ فِي السَّمٰوٰتِ وَلَا فِي الْاَرْضِ وَلَآ اَصْغَرُ مِنْ ذٰلِكَ وَلَآ اَكْبَرُ اِلَّا فِيْ كِتٰبٍ مُّبِيْنٍ ﴿٤﴾

5．こは信じて善行を積む者を主が賞せんがためなり。彼等は宥恕を賜り、且つ光栄ある給養も賜るべし」と。

لِّيَجْزِيَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ ۭ اُولٰۗىِٕكَ لَهُمْ مَّغْفِرَةٌ وَّرِزْقٌ كَرِيْمٌ ﴿٥﴾

6．然れども、われらの神兆に抵抗し、その計画を妨げんとする者は、厳しい懲罰に遭遇せん。

وَالَّذِيْنَ سَعَوْ فِيْٓ اٰيٰتِنَا مُعٰجِزِيْنَ اُولٰۗىِٕكَ لَهُمْ عَذَابٌ مِّنْ رِّجْزٍ اَلِيْمٌ ﴿٦﴾

7．知識を賜れる者は、主より汝に啓示されたるものは真理であり、偉大にして讃美され

وَيَرَى الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْعِلْمَ الَّذِيْٓ اُنْزِلَ اِلَيْكَ مِنْ رَّبِّكَ هُوَ الْحَقَّ ۙ وَيَهْدِيْٓ اِلٰى صِرَاطِ الْعَزِيْزِ

注1　前節の主題は、当節で更に詳しく述べられており。善悪に係わらず行動を伴わなければ報いも得られないと示されている。イスラム教に敵対し、イスラム教徒を迫害すれば必ずや罰を受けるであろうと、不信心者は警告されている。

るべき御方への道に導くものなることを知る。

الْحَمِيدِ ﴿٧﴾

8．されど、信ぜざる者どもは云う、「我等はお前たちに、お前たちが粉々に砕けた後、再び新たな創造物として甦らされんと説く者を、教えようか？

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا هَلْ نَدُلُّكُمْ عَلَىٰ رَجُلٍ يُنَبِّئُكُمْ إِذَا مُزِّقْتُمْ كُلَّ مُمَزَّقٍ إِنَّكُمْ لَفِي خَلْقٍ جَدِيدٍ ﴿٨﴾

9．彼はアッラーの御意思（みこころ）に反対して嘘（うそ）をつきたるか、それとも気が狂れたるか？」と。然（しか）らず、懲罰を被（こうむ）り且つ迷誤の中に遠のくは、来世を信ぜざる彼等なり。

أَفْتَرَىٰ عَلَى اللَّهِ كَذِبًا أَمْ بِهِ جِنَّةٌ ۗ بَلِ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ فِي الْعَذَابِ وَالضَّلَالِ الْبَعِيدِ ﴿٩﴾

10．彼等は、天地（あめつち）に於ける己が前後にあるものによって如何に取り囲まれているかを、知らざるか？もしわれら欲しなば、大地をして彼等を呑み込ましめ、或いは天の一角を彼等の上に墜落せしめ得べし。（注２）げにこの中には、悔い改めることごとくの僕（しもべ）への神兆（しるし）あり。

أَفَلَمْ يَرَوْا إِلَىٰ مَا بَيْنَ أَيْدِيهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ مِنَ السَّمَاءِ وَالْأَرْضِ ۚ إِنْ نَشَأْ نَخْسِفْ بِهِمُ الْأَرْضَ أَوْ نُسْقِطْ عَلَيْهِمْ كِسَفًا مِنَ السَّمَاءِ ۚ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً لِكُلِّ عَبْدٍ مُنِيبٍ ﴿١٠﴾

第二項

11．われらは、ダビデに恩寵を垂れて、云えり、「汝等山々よ、（注３）ダビデと共にアッラーの讃美の歌を歌え、（注４）汝等鳥たちも」と。而（しか）して、われらはダビデのために鉄を軟かにして、（注５）

وَلَقَدْ آتَيْنَا دَاوُودَ مِنَّا فَضْلًا ۖ يَا جِبَالُ أَوِّبِي مَعَهُ وَالطَّيْرَ ۖ وَأَلَنَّا لَهُ الْحَدِيدَ ﴿١١﴾

12．云えり、「鎧を作れ、身動きを考えその鎖帷子の環を小さく整えよ。而（しか）して、善行にいそしめ。げにわれはお前たちのすることを照覧す」と。

أَنِ اعْمَلْ سَابِغَاتٍ وَقَدِّرْ فِي السَّرْدِ ۖ وَاعْمَلُوا صَالِحًا ۖ إِنِّي بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ﴿١٢﴾

13．またわれらはソロモンに風を服従せしめたり、朝（あした）のひと吹きで一箇月の道程（みちのり）を旅し、夕（ゆうべ）のひと吹きで１箇月の道程（みちのり）を旅する風

وَلِسُلَيْمَانَ الرِّيحَ غُدُوُّهَا شَهْرٌ وَرَوَاحُهَا شَهْرٌ ۖ وَأَسَلْنَا لَهُ عَيْنَ الْقِطْرِ ۖ وَمِنَ الْجِنِّ مَنْ يَعْمَلُ بَيْنَ

注２　「大地をして彼等を呑み込ましめ」という箇所は、地上のしるしを述べており、「天の一角を彼等の上に墜落せしめ」は、天のしるしに言及したものである。

注３　山岳民族の事。12：83にも類似表現がある。

注４　21：80参照。

注５　「鉄を軟かにして」は、次の事を指す。鉄製兵器製造技術がダビデにより開発され、次節に述べられている様に彼はその技術を応用してよろいを作り上げた。

を。(注6)またわれらは、ソロモンのために溶銅の泉を湧き出せしめたり。また妖霊(ジン)の或る者には、主の命を奉じてソロモンのもとで働かさせり。而(しか)して、われらは彼等に云えり、われらが命令に背く者あらば、その者に火焔(ひあぶり)の懲罰を味わしめんと。

يَدَيْهِ بِإِذْنِ رَبِّهِ ۖ وَمَن يَزِغْ مِنْهُمْ عَنْ أَمْرِنَا نُذِقْهُ مِنْ عَذَابِ السَّعِيرِ ١٣

14. かくて彼等は、ソロモンの欲するもの、宮殿や彫像や貯水池の如き鉢や固定した大鍋を作りたり。(注7)而(しか)して、われらは云えり、「汝等ダビデの家の子らよ、感謝に満ちて働け」と。されど、わが僕(しもべ)らの中には、感謝するものは僅かなり。

يَعْمَلُونَ لَهُ مَا يَشَاءُ مِن مَّحَارِيبَ وَتَمَاثِيلَ وَجِفَانٍ كَالْجَوَابِ وَقُدُورٍ رَّاسِيَاتٍ ۚ اعْمَلُوا آلَ دَاوُودَ شُكْرًا ۚ وَقَلِيلٌ مِّنْ عِبَادِيَ الشَّكُورُ ١٤

15. 而(しか)して、われらがソロモンの死を定めたる時、一匹の地虫がソロモンの杖を噛めることを除けば、その死を示すものは何もなかりき。ソロモンが地に倒れるに及んで、妖霊(ジン)たちは、不可視なるものを知りたりせば、この恥ずべき苦役に長く服しはせざりしものを、と痛切に悟りたり。(注8)

فَلَمَّا قَضَيْنَا عَلَيْهِ الْمَوْتَ مَا دَلَّهُمْ عَلَىٰ مَوْتِهِ إِلَّا دَابَّةُ الْأَرْضِ تَأْكُلُ مِنسَأَتَهُ ۖ فَلَمَّا خَرَّ تَبَيَّنَتِ الْجِنُّ أَن لَّوْ كَانُوا يَعْلَمُونَ الْغَيْبَ مَا لَبِثُوا فِي الْعَذَابِ الْمُهِينِ ١٥

16. 昔サバのために、その故国に神兆(しるし)あり。すなわち二つの果樹園が、一つは右に、一つは左にありて、われらは彼等に云えり、「お前ちの主が授けたる食物を食し、主に感謝し奉れ。国麗(うるわ)しく、主は慈悲深くまします」と。(注9)

لَقَدْ كَانَ لِسَبَإٍ فِي مَسْكَنِهِمْ آيَةٌ ۖ جَنَّتَانِ عَن يَمِينٍ وَشِمَالٍ ۖ كُلُوا مِن رِّزْقِ رَبِّكُمْ وَاشْكُرُوا لَهُ ۚ بَلْدَةٌ طَيِّبَةٌ وَرَبٌّ غَفُورٌ ١٦

注6　ソロモンの領土はシリア北部から、地中海東岸沿いに紅海におよび、アラビア海に沿ってペルシャ湾にまで拡大した。事実、ソロモンの時代に、イスラエル王国は富と権勢は絶頂にあった。当節にある「風」という語は、権勢という意味を持つ。又、ソロモンは商隊を保有し(列王上；9章26−28節、Jew. Enc. 11巻, P 437)彼の下に産業と技能は非常に発達し、彼は野蛮で反抗的な山岳民族を征服し配下に入れたと示されてもいる(歴代志略下2章18節及び4章1、2節)。

注7　栄華を極め、権力と教養を備えた君主であると同時に、ソロモンはイスラエル建国者の子息でもあった。彼は建築に、殊の他、関心を持ち、彼の下で建築技術は大幅に向上した。イスラエルの寺院は、彼の建築における趣味の良さを良く表している。

注8　ソロモンの無能な息子で後継者でもあったレハベアムの支配力は弱く、ソロモンが作り上げた強大な王国は分裂してしまった(列王上；12, 13, 14章とJewish. Enc. “Rehoboam”)。

注9　27：23で述べられたサバは、サナー又はマアーリブとも呼ばれる地から旅程にして三日かかるイエメンの町であった。この町の名は旧約聖書、ギリシャ、ローマ、アラビア文学、特に南アラビアの碑文によく見られる。サバの住民は豊かで教養も高く、神により人生のあらゆる快適さをふんだんに与えられていた。国全体がダムと灌漑設備により豊饒で、そこには庭園や小川が見られた。防壁やダムの様な農業振興の為の公共設備が施されてあったが、中でもマアーリブのダムは最も素晴らしいものであった(Enc. of Islam,巻, P 6)。

17．然るに彼等背きたれば、われらは彼等にすさまじい洪水を浴せたり。（注 10）而して、われらは、その素晴らしい二つの果樹園の代わりに苦い実を結ぶ御柳と少しばかりのハマナツメの二園を与えたり。

فَأَعْرَضُوا فَأَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ سَيْلَ الْعَرِمِ وَبَدَّلْنَٰهُمْ بِجَنَّتَيْهِمْ جَنَّتَيْنِ ذَوَاتَيْ أُكُلٍ خَمْطٍ وَأَثْلٍ وَشَيْءٍ مِّنْ سِدْرٍ قَلِيلٍ ١٧

18．かくの如くわれらが彼等に報復したるは、その忘恩なるが故なり。われらがかくの如く報復するは、ただ忘恩者だけなり。

ذَٰلِكَ جَزَيْنَٰهُمْ بِمَا كَفَرُوا وَهَلْ نُجْزِيٓ إِلَّا الْكَفُورَ ١٨

19．またわれらは、サバとわれらが祝福せる邑々との間に目につきやすい幾つかの邑を設け、それらの間に楽な旅程を定めて云えり、「これらの邑々を通って、昼夜をとわず安心して旅せよ」と。（注 11）

وَجَعَلْنَا بَيْنَهُمْ وَبَيْنَ الْقُرَى الَّتِي بَٰرَكْنَا فِيهَا قُرًى ظَٰهِرَةً وَقَدَّرْنَا فِيهَا السَّيْرَ سِيرُوا فِيهَا لَيَالِيَ وَأَيَّامًا آمِنِينَ ١٩

20．然るに、サバ人は神に感謝する代りに云えり、「主よ、我等の旅程を更に長くなし給え」と。（注 12）かくて、彼等自らその身を誤りたれば、われらは彼等を徹底して粉砕分散し、後の世の語り草となせり。げにこの中には、堅忍不抜にして感謝の念あつき人々へのさまざまなる神兆あり。

فَقَالُوا رَبَّنَا بَعِّدْ بَيْنَ أَسْفَارِنَا وَظَلَمُوا أَنْفُسَهُمْ فَجَعَلْنَٰهُمْ أَحَادِيثَ وَمَزَّقْنَٰهُمْ كُلَّ مُمَزَّقٍ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَٰتٍ لِّكُلِّ صَبَّارٍ شَكُورٍ ٢٠

21．而して、イブリースは、一部の真の信者を除いて、彼等が自分に従えるが故に、彼等に対する自分の判断が正確なりしことを知る。（注 13）

وَلَقَدْ صَدَّقَ عَلَيْهِمْ إِبْلِيسُ ظَنَّهُ فَاتَّبَعُوهُ إِلَّا فَرِيقًا مِّنَ الْمُؤْمِنِينَ ٢١

注 10　サバの住民達の富を守っていたマアーリブのダムが大洪水で決壊し、全土が水に漬かり、被害は広範囲に及んだ。美しい庭園、小川、芸術作品に満ちた国土は廃墟と化してしまった。ダムはおよそ長さ 2 マイル、高さ 120 フィートあった。それは西暦一世紀あるいは二世紀に破壊の目にあった。

注 11　「祝福せる邑々」とは、ソロモン王国の中心地であるパレスチナの町を指している。サバの住民はソロモン王国と盛んに貿易を行っていた。「目につきやすい幾つかの邑」とは、互いにすぐ見える程近接した二つの町という意味である。又、主要な町という意味もあり、イエメンからパレスチナ及びシリアへ抜ける道がよく使われ、安全で好まれていた事を示す。ミュールによれば、イエメンからシリアへ向かう街道沿いのハダルマウトからマイラーまでに 70 の宿があった。この道は人通りが多く安全であり、両側には並木が植えられていた。

注 12　この言葉はサバの住民の語ったものとされているが、事実、神の戒律に従わない為窮地に陥った当時の彼等の様子が示されている。人通りが多く栄えた街道はさびれてしまった。「我等が旅程を更に長くなし給え」という言葉は次の事を示す。街道沿いの町の多くがさびれてしまい、宿から宿への距離が長くなり。安全性も失われた。サバの住民は絶滅し、その痕跡は何も留められなかった。彼等は唯、語り継がれるのみとなった。

注 13　サタンは、サバの住民達をうまく堕落させられるだろうと見ていたが、彼等の悪事により、このサタンの思惑は当たる事となった。この悪人達やその悪事に対するサタンの判断は 17：63 に述べられており、サタンが、アダムの子孫をわずかな例を除いて滅ぼすと語ったとそこに書かれてある。

22．されどイブリースは、彼等を支配せざりしなり。（注14）ただわれらは、来世を信ずる者と、之(これ)を疑う者とを識別せんがためなり。汝の主は萬事を監視し給う。

وَمَا كَانَ لَهُ عَلَيْهِم مِّن سُلْطَٰنٍ إِلَّا لِنَعْلَمَ مَن يُؤْمِنُ بِالْآخِرَةِ مِمَّنْ هُوَ مِنْهَا فِي شَكٍّ ۗ وَرَبُّكَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ حَفِيظٌ ﴿٢٢﴾

第三項

23．云え、「お前たちがアッラー以外に神々ありと主張せる者に訴えよ。（注15）彼等は天地(あめつち)に於ける一微塵(いちみじん)の重さだに左右する能(あた)わず、また天地(あめつち)の創造に於て如何なる役割も果たさず、またアッラーは彼等の中に如何なる補佐も有せず」と。

قُلِ ادْعُوا الَّذِينَ زَعَمْتُم مِّن دُونِ اللَّهِ ۖ لَا يَمْلِكُونَ مِثْقَالَ ذَرَّةٍ فِي السَّمَٰوَٰتِ وَلَا فِي الْأَرْضِ وَمَا لَهُمْ فِيهِمَا مِن شِرْكٍ وَمَا لَهُ مِنْهُم مِّن ظَهِيرٍ ﴿٢٣﴾

24．アッラーが許せる者（注16）を除いて、どんな執(と)り成(な)しもアッラーに対して無益なり。やがて彼等の心（注17）から恐怖が消えた時、彼等（注18）は問わん、「主は何んと言いたるか？」と。使徒たち（注19）は答えん、「真理なり」と。主は至高にして、偉大なる御方にまします。

وَلَا تَنفَعُ الشَّفَٰعَةُ عِندَهُ إِلَّا لِمَنْ أَذِنَ لَهُ ۚ حَتَّىٰ إِذَا فُزِّعَ عَن قُلُوبِهِمْ قَالُوا مَاذَا قَالَ رَبُّكُمْ ۖ قَالُوا الْحَقَّ ۖ وَهُوَ الْعَلِيُّ الْكَبِيرُ ﴿٢٤﴾

25．云え、「天地(あめつち)からお前たちに食物を与えるは誰ぞ？」と。云え、「アッラーなり。我等か、お前たちか、そのどちらかが正道の上にあり、どちらかが明白なる迷誤の中にあるなり」と。（注20）

قُلْ مَن يَرْزُقُكُم مِّنَ السَّمَٰوَٰتِ وَالْأَرْضِ ۖ قُلِ اللَّهُ ۖ وَإِنَّا أَوْ إِيَّاكُمْ لَعَلَىٰ هُدًى أَوْ فِي ضَلَٰلٍ مُّبِينٍ ﴿٢٥﴾

26．云え、「お前たちは我等の罪について問われず、我等もまたお前たちの行為(ふるまい)について問われざるべし」と。

قُل لَّا تُسْـَٔلُونَ عَمَّا أَجْرَمْنَا وَلَا نُسْـَٔلُ عَمَّا تَعْمَلُونَ ﴿٢٦﴾

注14　サタンは人間に対して如何なる権威も持ち合わせていない。人間が精神的に堕落するのは、自らの誤った信仰や、悪事によるものである。

注15　不信心者は、彼等の偽りの神にイスラム発展の疎止を求めてみよと挑まれ、偽の神にはそれができないと告げられている。事実、この世の如何なる力を持ってしても、真実が広まるのを疎止する事はできないのである。

注16　モハッマド預言者。この言葉は又、執り成しがその者の有利になる様行われても良いと神の認める人物を指す。

注17　執り成し手の心。

注18　裁かれる罪深き人々。

注19　執り成し手又は神の使徒。

注20　確かに我々（信者）は正しく、貴方達（不信心者）は誤っている。

27．云え、「主は我等を皆同時に召し給い、然る後、事実に基いて審判し給う。アッラーこそは最も有能な裁判官、能く百事を知り給う」と。（注 21）

قُلْ يَجْمَعُ بَيْنَنَا رَبُّنَا ثُمَّ يَفْتَحُ بَيْنَنَا بِالْحَقِّ وَهُوَ الْفَتَّاحُ الْعَلِيمُ ﴿٢٧﴾

28．云え、「お前たちが、同僚として彼と併せ祀りし神々を我に示せ。否、お前たちは示し得ず。なんとなれば、彼は偉大にして、賢哲なるアッラーなり」と。

قُلْ أَرُونِيَ الَّذِينَ أَلْحَقْتُمْ بِهِ شُرَكَاءَ كَلَّا بَلْ هُوَ اللَّهُ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ﴿٢٨﴾

29．われらが汝を全人類に遣わしたは、ただ朗報伝達者並びに警告者としてのみ。然るに、世人の大半は之を知らず。（注 22）

وَمَا أَرْسَلْنَاكَ إِلَّا كَافَّةً لِلنَّاسِ بَشِيرًا وَنَذِيرًا وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٢٩﴾

30．彼等は云う、「もしお前の言葉が事実なら、その約束が実現せらるるはいつの日ぞ？」と。

وَيَقُولُونَ مَتَىٰ هَٰذَا الْوَعْدُ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٣٠﴾

31．云え、「お前たちは或る日を以て約束されているが、その日をばお前たちは一瞬たりとも遅速し得ざるなり」と。（注 23）

قُلْ لَكُمْ مِيعَادُ يَوْمٍ لَا تَسْتَأْخِرُونَ عَنْهُ سَاعَةً وَلَا تَسْتَقْدِمُونَ ﴿٣١﴾

第四項

32．信ぜざる者どもは云う、「我等はこのクルアーンとこれに先だつ経典も信じはせぬ」と。汝もし不義者が主の御前に連行せられ、互に罪をなすり合っているところを見得るならば。現世で弱者と見なされし者が、驕慢なりし者に向って云わん、「もしお前たちなかりせば、我等は必ず信者たりしものを」と。（注 24）

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لَنْ نُؤْمِنَ بِهَٰذَا الْقُرْآنِ وَلَا بِالَّذِي بَيْنَ يَدَيْهِ وَلَوْ تَرَىٰ إِذِ الظَّالِمُونَ مَوْقُوفُونَ عِنْدَ رَبِّهِمْ يَرْجِعُ بَعْضُهُمْ إِلَىٰ بَعْضٍ الْقَوْلَ يَقُولُ الَّذِينَ اسْتُضْعِفُوا لِلَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا لَوْلَا أَنْتُمْ لَكُنَّا مُؤْمِنِينَ ﴿٣٢﴾

注 21　この節はメッカの陥落について述べたものと一般的に受け取られている。イスラム教徒と不信者いずれが正しくいずれが誤りであるか、疑惑の影はこの時払われた。この後、イスラム教徒と敵の心は一つになり、大いなる勝利がもたらされた。

注 22　モハッマド預言者が、この世の終わりまで全人類に神の使者として遣わされたと、クルアーンに繰り返し述べられて来た。21：108 及び 25：2 も参照の事。イスラム教のお告げは普遍的であり、クルアーンは究極の啓示書として決定的なものであると主張して来た。

注 23　バドルの戦いの日、又は 32：6 に述べられた日。この時より一千年は同じ状態が続き、その後、イスラム教が世界的な宗教として受け入れられる時代が始まるであろう。

注 24　罪人が裁きを前にして、自分の罪を他人になすりつけて罰を逃れようとするのは人間の性である。当節及び次の二節にはこの人間の習性が述べられている。

33．すると、驕慢なりし者は弱者と見なされし者に向って云わん、「導きがお前たちに達したる後、お前たちをその導きから邪魔だてしたるは我等だというのか？　然らず、罪を犯せし者は、お前たち自身なり」と。

قَالَ الَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا لِلَّذِينَ اسْتُضْعِفُوا أَنَحْنُ صَدَدْنَاكُمْ عَنِ الْهُدَىٰ بَعْدَ إِذْ جَاءَكُمْ بَلْ كُنْتُمْ مُجْرِمِينَ ٣٣

34．弱者と見なされし者再び驕慢なりし者に向って云わん、「然らず、お前たちこそ日夜陰謀をめぐらし、我等にアッラーを信ぜず、アッラーに同位者を配せよと命じたり」と。彼等は刑罰を目のあたりにして初めて自責の念を表明せん。われらは不信心者どもの首に首枷をかけん。彼等はただそのなせることのために罰せられん。

وَقَالَ الَّذِينَ اسْتُضْعِفُوا لِلَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا بَلْ مَكْرُ اللَّيْلِ وَالنَّهَارِ إِذْ تَأْمُرُونَنَا أَنْ نَكْفُرَ بِاللَّهِ وَنَجْعَلَ لَهُ أَنْدَادًا وَأَسَرُّوا النَّدَامَةَ لَمَّا رَأَوُا الْعَذَابَ وَجَعَلْنَا الْأَغْلَالَ فِي أَعْنَاقِ الَّذِينَ كَفَرُوا هَلْ يُجْزَوْنَ إِلَّا مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ٣٤

35．われらがいずれかの邑に警告者を遣わすたびに、その邑の裕福な者たちは云えり、「我等はお前の使命を信ぜず」と。（注25）

وَمَا أَرْسَلْنَا فِي قَرْيَةٍ مِنْ نَذِيرٍ إِلَّا قَالَ مُتْرَفُوهَا إِنَّا بِمَا أُرْسِلْتُمْ بِهِ كَافِرُونَ ٣٥

36．彼等は云う、「我等は富と子宝により恵まれており、また懲罰にも遭わざるべし」と。

وَقَالُوا نَحْنُ أَكْثَرُ أَمْوَالًا وَأَوْلَادًا وَمَا نَحْنُ بِمُعَذَّبِينَ ٣٦

37．云え、「げに我が主は御心のままに、或る者にはその給養を殖やし、また或る者には之を減らし給う。されど、世人の大半は之を知らざるなり」と。

قُلْ إِنَّ رَبِّي يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَنْ يَشَاءُ وَيَقْدِرُ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ٣٧

第五項

38．お前たちをわれらに近づけせしむるは、お前たちの富や子宝に非ず。然れども、信仰し、善行を積む者は、己れの行為のために二倍の報奨を賜わるべし。而して、安らかき高楼の住居が保証されん。（注26）

وَمَا أَمْوَالُكُمْ وَلَا أَوْلَادُكُمْ بِالَّتِي تُقَرِّبُكُمْ عِنْدَنَا زُلْفَىٰ إِلَّا مَنْ آمَنَ وَعَمِلَ صَالِحًا فَأُولَٰئِكَ لَهُمْ جَزَاءُ الضِّعْفِ بِمَا عَمِلُوا وَهُمْ فِي الْغُرُفَاتِ آمِنُونَ ٣٨

39．然れども、われらの神兆の目的を挫折させんとして抵抗する者は、必ず刑罰に服せしめられん。（注27）

وَالَّذِينَ يَسْعَوْنَ فِي آيَاتِنَا مُعَاجِزِينَ أُولَٰئِكَ فِي الْعَذَابِ مُحْضَرُونَ ٣٩

注25　神の預言者達は、虐げられた人々を社会の正当な地位まで引き上げ、彼等に当然の権利を戻す為遣わされる。それは、ついの世にも、神のお告げに背くのが富と権力ある者達だからである。

注26　富と権力が神に近付く手段ではない。むしろ、それが人を神から遠ざける傾向がある。正しい信仰と善行こそが人を真に豊かにし、神の救いと喜びをもたらすのである。

注27　神の大義がひろまるのを疎止し、神の目的を妨害しようと不信心者達が陰謀を企てても、それは無駄

40．云え、「げに我が主は御心（みこころ）のままに、その僕（しもべ）らの或る者には給養を殖やし、また或る者には之（これ）を減らし給う。而（しか）して、何であれお前たちが費せし分は、主は必ず埋め合わすべし。主は無上の供給者なり。

قُلْ إِنَّ رَبِّي يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَنْ يَشَاءُ مِنْ عِبَادِهِ وَيَقْدِرُ لَهُ ۚ وَمَا أَنْفَقْتُمْ مِنْ شَيْءٍ فَهُوَ يُخْلِفُهُ ۖ وَهُوَ خَيْرُ الرَّازِقِينَ ٤٠

41．主が同時に彼等を召し寄せる日、主は天使たちに向って訊ねん、「これ等の者はお前たちを崇拝したるか？」と。

وَيَوْمَ يَحْشُرُهُمْ جَمِيعًا ثُمَّ يَقُولُ لِلْمَلَائِكَةِ أَهَٰؤُلَاءِ إِيَّاكُمْ كَانُوا يَعْبُدُونَ ٤١

42．天使たちは答えん、「汝に栄光あれ。我等の守護者は汝におわします。否、彼等は妖霊（ジン）を拝み、その多くは妖霊（ジン）を信じたり」と。

قَالُوا سُبْحَانَكَ أَنْتَ وَلِيُّنَا مِنْ دُونِهِمْ ۖ بَلْ كَانُوا يَعْبُدُونَ الْجِنَّ ۖ أَكْثَرُهُمْ بِهِمْ مُؤْمِنُونَ ٤٢

43．不信心者どもはかく云われん、「されば、この日、お前たちは互に相手を益することも害することもなし得ざるべし」と。而（しか）して、われらは罪を犯せし者どもに云わん、「お前たちが否定せる業火（ごうか）の罰を味わえ」と。

فَالْيَوْمَ لَا يَمْلِكُ بَعْضُكُمْ لِبَعْضٍ نَفْعًا وَلَا ضَرًّا وَنَقُولُ لِلَّذِينَ ظَلَمُوا ذُوقُوا عَذَابَ النَّارِ الَّتِي كُنْتُمْ بِهَا تُكَذِّبُونَ ٤٣

44．われらの明白なる神兆（しるし）が彼等に読誦される時、彼等は云う「この男は、お前たちをして、お前たちの父祖が崇めしものから背かしめんと謀る者にすぎず」と。而（しか）してまた云う、「こは捏造（ねつぞう）せる偽りにすぎず」と。而（しか）して不信心者どもは、自分たちに来れる真理について、「こは魔術以外の何ものにも非ず」と云う。

وَإِذَا تُتْلَىٰ عَلَيْهِمْ آيَاتُنَا بَيِّنَاتٍ قَالُوا مَا هَٰذَا إِلَّا رَجُلٌ يُرِيدُ أَنْ يَصُدَّكُمْ عَمَّا كَانَ يَعْبُدُ آبَاؤُكُمْ ۚ وَقَالُوا مَا هَٰذَا إِلَّا إِفْكٌ مُفْتَرًى ۚ وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لِلْحَقِّ لَمَّا جَاءَهُمْ إِنْ هَٰذَا إِلَّا سِحْرٌ مُبِينٌ ٤٤

45．われらは彼等に、研究させるべく経典を与えざりき、また汝より先に如何なる警告者も遣わさざりき。

وَمَا آتَيْنَاهُمْ مِنْ كُتُبٍ يَدْرُسُونَهَا ۖ وَمَا أَرْسَلْنَا إِلَيْهِمْ قَبْلَكَ مِنْ نَذِيرٍ ٤٥

46．彼等に先だつ者も真理を拒みたるが、これ等の者はわれらが彼等に与えたるものの十分の一にも及ばざるに、わが使徒たちを嘘つきとして遇（ぐう）したり。されば、彼等はやがて知るべし、われを否定せる結末が如何に恐ろしいことかを。

وَكَذَّبَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ وَمَا بَلَغُوا مِعْشَارَ مَا آتَيْنَاهُمْ فَكَذَّبُوا رُسُلِي ۖ فَكَيْفَ كَانَ نَكِيرِ ٤٦

な事であり、必ずや彼らは報いを受ける。

第六項

47. 云え、「我は一言だけお前たちに勧告す。お前たち二人ずつ、または独(ひと)りでアッラーの前に立ち、とくと考えよ。さすればお前たちの仲間が狂気に非ざることを悟らん。その仲間はただ切迫した厳刑についてお前たちに警告する者にすぎず」と。（注 28）

قُلْ إِنَّمَآ أَعِظُكُم بِوَاحِدَةٍ ۖ أَن تَقُومُوا لِلَّهِ مَثْنَىٰ وَفُرَادَىٰ ثُمَّ تَتَفَكَّرُوا ۚ مَا بِصَاحِبِكُم مِّن جِنَّةٍ ۚ إِنْ هُوَ إِلَّا نَذِيرٌ لَّكُم بَيْنَ يَدَيْ عَذَابٍ شَدِيدٍ ﴿٤٧﴾

48. 云え、「我はお前たちに如何なる報酬をも求めず、そはお前たちのものなり。わが報酬はただアッラーの許(もと)にあり。アッラーは萬事を照覧(しょうらん)し給う」と。

قُلْ مَا سَأَلْتُكُم مِّنْ أَجْرٍ فَهُوَ لَكُمْ ۖ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا عَلَى اللَّهِ ۖ وَهُوَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ شَهِيدٌ ﴿٤٨﴾

قُلْ إِنَّ رَبِّي يَقْذِفُ بِالْحَقِّ عَلَّامُ الْغُيُوبِ ﴿٤٩﴾

50. 云え、「真理は来りぬ、されば虚偽は何も創らず、またその復活もなるまじ」と。（注 29）

قُلْ جَاءَ الْحَقُّ وَمَا يُبْدِئُ الْبَاطِلُ وَمَا يُعِيدُ ﴿٥٠﴾

51. 云え、「我もし誤(あやま)らば、誤(あやま)りて我自身を害するのみ。我もし正しく導かるるとすれば、そは我が主の啓示のお蔭なり。げに主はすべてを能(よ)く聴き、身近にまします」と。

قُلْ إِن ضَلَلْتُ فَإِنَّمَآ أَضِلُّ عَلَىٰ نَفْسِي ۖ وَإِنِ اهْتَدَيْتُ فَبِمَا يُوحِي إِلَيَّ رَبِّي ۚ إِنَّهُ سَمِيعٌ قَرِيبٌ ﴿٥١﴾

52. 汝もし彼等の恐れ戦(おのの)くさまを見るならば、逃れるすべなく、近い場所にて捕わるる彼等を。

وَلَوْ تَرَىٰ إِذْ فَزِعُوا فَلَا فَوْتَ وَأُخِذُوا مِن مَّكَانٍ قَرِيبٍ ﴿٥٢﴾

53. 彼等は云わん、「我等はそれを信ず」と。然(しか)れども、彼等如何にして遠き場所から信仰を受容し得んや？（注 30）

وَقَالُوا آمَنَّا بِهِ وَأَنَّىٰ لَهُمُ التَّنَاوُشُ مِن مَّكَانٍ بَعِيدٍ ﴿٥٣﴾

注 28　この節は、モハッマド預言者の主張を、客観的かつ公平に検討してみる様勧めている。不信心者は、モハッマド預言者が精神異常であったか否か、先入観や世間的考え方に捕らわれる事なく考察してみる様提言されている。

注 29　「何も創らず」という言葉は、偶像崇拝がアラビアに根付く事は無いと強く預言するものである。偶像崇拝は永遠にその国から姿を消すであろう。

注 30　「遠き場所」は死後を意味し、不信心者は必ずや死後自らの誤ちを悟るとこの節は示している。彼等は、モハッマド預言者の使命が現実とは懸け離れたもので、その実態は根拠の無いものだと愚かな憶測をめぐらしている。

54．彼等は以前、遠方より不可視なるものについてさまざまなる憶測にふけれども、それを信ぜざりき。

وَّقَدْ كَفَرُوْا بِهٖ مِنْ قَبْلُ ۚ وَيَقْذِفُوْنَ بِالْغَيْبِ مِنْ مَّكَانٍۢ بَعِيْدٍ ﴿۵۴﴾

55．昔の彼等の同類がなされた如く、彼等と彼等の熱望するものとの間には障害が据えらるべし。げに彼等は不安なる疑惑の中にありしなり。（注 31）

وَحِيْلَ بَيْنَهُمْ وَبَيْنَ مَا يَشْتَهُوْنَ كَمَا فُعِلَ بِاَشْيَاعِهِمْ مِّنْ قَبْلُ ۭ اِنَّهُمْ كَانُوْا فِيْ شَكٍّ مُّرِيْبٍ ﴿۵۵﴾

注 31　イスラム教に敵対する者は、往時の預言者に対抗した者と同じく、自らの魂の叫びに気付く事なく。モハッマド預言者の使命を正しく理解できないであろう。

سُوۡرَةُ فَاطِرٍ مَّكِّيَّةٌ

アル・ファーティル
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ①

2. 讃美はすべてアッラーのもの、そは天地の創造主にして、二翼、三翼、四翼の天使を使者として用う。(注1)而して、彼はその創れる者に己れの欲するものを増す。げにアッラーはすべての事に権能を持ち給う。

اَلۡحَمۡدُ لِلّٰهِ فَاطِرِ السَّمٰوٰتِ وَالۡاَرۡضِ جَاعِلِ الۡمَلٰٓـئِكَةِ رُسُلًا اُولِىۡۤ اَجۡنِحَةٍ مَّثۡنٰى وَثُلٰثَ وَرُبٰعَ ؕ يَزِيۡدُ فِى الۡخَلۡقِ مَا يَشَآءُ ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَىۡءٍ قَدِيۡرٌ ②

3. アッラーが人間に授与する慈悲は、(注2)何人も之を抑止する能わず。なれど、アッラーが抑止するものは、何人も後に之を開放する能わず。げにアッラーは偉大にして、賢哲にまします。

مَا يَفۡتَحِ اللّٰهُ لِلنَّاسِ مِنۡ رَّحۡمَةٍ فَلَا مُمۡسِكَ لَهَا ۚ وَمَا يُمۡسِكۡ ۙ فَلَا مُرۡسِلَ لَهٗ مِنۡۢ بَعۡدِهٖ ؕ وَهُوَ الۡعَزِيۡزُ الۡحَكِيۡمُ ③

4. 人々よ、お前たちに授与せるアッラーの恩恵を念え。アッラー以外に、天地からお前たちに必要物を供給する創造主ましますや? アッラー以外に崇拝するに足る者はなし。然るに、お前たち何処へ顔をそむけるぞや?

يٰۤاَيُّهَا النَّاسُ اذۡكُرُوۡا نِعۡمَتَ اللّٰهِ عَلَيۡكُمۡ ؕ هَلۡ مِنۡ خَالِقٍ غَيۡرُ اللّٰهِ يَرۡزُقُكُمۡ مِّنَ السَّمَآءِ وَالۡاَرۡضِ ؕ لَاۤ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ۖ فَاَنّٰى تُؤۡفَكُوۡنَ ④

5. たとい彼等が汝を拒むとも、げに汝以前にも神の使徒たちは拒まれたり。なれど、物事はすべて、裁決のためにアッラーの許へ戻さるるなり。

وَاِنۡ يُّكَذِّبُوۡكَ فَقَدۡ كُذِّبَتۡ رُسُلٌ مِّنۡ قَبۡلِكَ ؕ وَاِلَى اللّٰهِ تُرۡجَعُ الۡاُمُوۡرُ ⑤

注1　天使達は物質界における諸事の扱いを任されている(79：6)。これは彼等に課せられた任務の一つである。これより更に重要な任務は、神の御意志を神の使者に伝える事だ。啓示を携えた天使達は、一度に二つから四つの神の特性を表し、又それ以上の特性を伝える者もある。アジニハは力の象徴であり、天使はそれぞれ託された任務の重要性に応じた力を持つ事がこの節に示されている。最高位の天使ガブリエルは天使達の長であり、神の使者に啓示を伝授する任務の中でも最も重要なものを託され、それは彼の指揮の下で、成い遂げられるのである。

注2　前節において、神が天地を創造され、人間の物質的、精神的要求に万全の備えをされたと書かれてあるが、当節では、クルアーンの啓示を通して、神が人間に慈悲を授けると定められた事が示されている。

6．汝等人々よ、アッラーの約束は必ず実現す。されば、現世に欺かれるなかれ、またアッラーについて欺瞞者に欺かれるなかれ。

يٰٓاَيُّهَا النَّاسُ اِنَّ وَعْدَ اللّٰهِ حَقٌّ فَلَا تَغُرَّنَّكُمُ الْحَيٰوةُ الدُّنْيَا وَلَا يَغُرَّنَّكُمْ بِاللّٰهِ الْغَرُوْرُ ٦

7．げに悪魔はお前たちの敵なり。されば、敵として之を扱え。悪魔は、彼等をして燃え盛る火の住人たらしめんがためにのみ己が信奉者を誘惑す。

اِنَّ الشَّيْطٰنَ لَكُمْ عَدُوٌّ فَاتَّخِذُوْهُ عَدُوًّا اِنَّمَا يَدْعُوْا حِزْبَهٗ لِيَكُوْنُوْا مِنْ اَصْحٰبِ السَّعِيْرِ ٧

8．信ぜざる徒輩には厳しい罰あり。されど、信じて善行を積む者には、宥恕と素晴らしい報奨あり。

اَلَّذِيْنَ كَفَرُوْا لَهُمْ عَذَابٌ شَدِيْدٌ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ لَهُمْ مَّغْفِرَةٌ وَّاَجْرٌ كَبِيْرٌ ٨

第二項

9．己れの悪事が粉飾され、そのために之を善事と考える者が、信じて善行を積む者と同じであり得るや？　げにアッラーは己れの欲する者を迷わし、また欲する者を導き給う。されば、彼等のために嘆いて、汝の心をすりへらすなかれ。げにアッラーは彼等の行動を知り給う。(注３)

اَفَمَنْ زُيِّنَ لَهٗ سُوْٓءُ عَمَلِهٖ فَرَاٰهُ حَسَنًا فَاِنَّ اللّٰهَ يُضِلُّ مَنْ يَّشَآءُ وَيَهْدِيْ مَنْ يَّشَآءُ فَلَا تَذْهَبْ نَفْسُكَ عَلَيْهِمْ حَسَرٰتٍ اِنَّ اللّٰهَ عَلِيْمٌۢ بِمَا يَصْنَعُوْنَ ٩

10．アッラーこそは風を吹き送り、雲を起し給う御方。而して、われらは之を枯死せる地域へと駆り、それによって死せる大地を生き返らしむ。復活もまたかくの如し。(注４)

وَاللّٰهُ الَّذِيْٓ اَرْسَلَ الرِّيٰحَ فَتُثِيْرُ سَحَابًا فَسُقْنٰهُ اِلٰى بَلَدٍ مَّيِّتٍ فَاَحْيَيْنَا بِهِ الْاَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا كَذٰلِكَ النُّشُوْرُ ١٠

11．栄誉を希う者は、一切の栄誉がアッラーに属することを知れ。善言は登りてアッラーに達し、義しい行いはアッラー之を賞揚す。されど、悪事を謀る徒輩、彼等には厳しい刑罰あり。されば、かかるたくらみは空無に帰さん。

مَنْ كَانَ يُرِيْدُ الْعِزَّةَ فَلِلّٰهِ الْعِزَّةُ جَمِيْعًا اِلَيْهِ يَصْعَدُ الْكَلِمُ الطَّيِّبُ وَالْعَمَلُ الصَّالِحُ يَرْفَعُهٗ وَالَّذِيْنَ يَمْكُرُوْنَ السَّيِّاٰتِ لَهُمْ عَذَابٌ شَدِيْدٌ وَمَكْرُ اُولٰٓئِكَ هُوَ يَبُوْرُ ١١

注３　モハッマド預言者は、人々が精神的幸福を得られる様に願い、彼等が真理に刃向かえば深く悲しむと、この節は雄弁に表している。18：７も参照の事。

注４　此処にある復活とは、人が精神的に堕落した状態から立ち直る事を示しており、雨が振れば涸れた地が生気を取り戻す様に、悪に染まり道徳的に退廃した人も、神の啓示という天からの水により蘇るとこの節は述べている。

12. アッラーはお前たちを土より創り、次に一滴の精液より、次にお前たちを夫婦となせり。如何なる女もアッラーに知られずして妊娠し、また子供を分娩することなし。寿命を延ばされて長生きする者も、また命を縮められる者も、一人として天の帳簿に記載せられざるはなし。そは実にアッラーにはたやすきことなり。（注5）

وَاللّٰهُ خَلَقَكُمْ مِّنْ تُرَابٍ ثُمَّ مِنْ نُّطْفَةٍ ثُمَّ جَعَلَكُمْ اَزْوَاجًا ۚ وَمَا تَحْمِلُ مِنْ اُنْثٰى وَلَا تَضَعُ اِلَّا بِعِلْمِهٖ ۚ وَمَا يُعَمَّرُ مِنْ مُّعَمَّرٍ وَّلَا يُنْقَصُ مِنْ عُمُرِهٖۤ اِلَّا فِيْ كِتٰبٍ ۚ اِنَّ ذٰلِكَ عَلَى اللّٰهِ يَسِيْرٌ ﴿۱۲﴾

13. 二つの海は等しからず。一つは甘くて味がよく、飲んで気持よし。もう一方は鹹くて苦し。而して、お前たちは、その両方より新鮮な魚を食し、且つ身につける装飾品を採る。また汝は、船が波を切って海上を走るを見る。そはアッラーの恩恵をお前たちに求めさせるためであり、併せて感謝の念を起させるためなり。（注6）

وَمَا يَسْتَوِي الْبَحْرٰنِ ۖ هٰذَا عَذْبٌ فُرَاتٌ سَآئِغٌ شَرَابُهٗ وَهٰذَا مِلْحٌ اُجَاجٌ ۚ وَمِنْ كُلٍّ تَاْكُلُوْنَ لَحْمًا طَرِيًّا وَّتَسْتَخْرِجُوْنَ حِلْيَةً تَلْبَسُوْنَهَا ۚ وَتَرَى الْفُلْكَ فِيْهِ مَوَاخِرَ لِتَبْتَغُوْا مِنْ فَضْلِهٖ وَلَعَلَّكُمْ تَشْكُرُوْنَ ﴿۱۳﴾

14. アッラーは夜を昼に溶け込ませ、昼を夜に溶け込ませ給う。而して、彼は、太陽と月を服従させて働かせしむ、各々定めされた期間にその軌道を走るべく。かくなすはお前たちの主アッラーなり。すなわち、主権は彼のものなり。されば、お前たちがアッラー以外に祈るものは、一微塵だに左右する力なし。

يُوْلِجُ الَّيْلَ فِي النَّهَارِ وَيُوْلِجُ النَّهَارَ فِي الَّيْلِ ۙ وَسَخَّرَ الشَّمْسَ وَالْقَمَرَ ۖ كُلٌّ يَّجْرِيْ لِاَجَلٍ مُّسَمًّى ۗ ذٰلِكُمُ اللّٰهُ رَبُّكُمْ لَهُ الْمُلْكُ ۗ وَالَّذِيْنَ تَدْعُوْنَ مِنْ دُوْنِهٖ مَا يَمْلِكُوْنَ مِنْ قِطْمِيْرٍ ﴿۱۴﴾

15. たといお前たちが彼等に祈願するとも、彼等はお前たちの願いを聴かざるべし。よしや聴くとも、お前たちの願いに応ずることを得ず。而して、復活の日には、彼等は、お前たちが彼等をアッラーと併せ祀りしことを否認すべし。汝にかく告げ得る者は、一切を知悉す独一なる御方あるのみ。

اِنْ تَدْعُوْهُمْ لَا يَسْمَعُوْا دُعَآءَكُمْ ۚ وَلَوْ سَمِعُوْا مَا اسْتَجَابُوْا لَكُمْ ۗ وَيَوْمَ الْقِيٰمَةِ يَكْفُرُوْنَ بِشِرْكِكُمْ ۗ وَلَا يُنَبِّئُكَ مِثْلُ خَبِيْرٍ ﴿۱۵﴾

注5　小さな精子から均整がとれた完全な人間が育つ様に、地位が低く貧しいイスラム教徒達もいつか強力な社会を作り上げるであろう。この様に当節は預言している。女性が何を宿し、産むのか、又男性の生命の長短について書かれてあるが、これは、モハッマド預言者に対抗する者の子孫は減り、イスラム教徒の子孫は増えて行くと預言するものである。「天の帳簿に記載せられ」と文中に訳された言葉は「それは神の律法に沿ったものである。」という意味でもある。

注6　二つの海とは、真の宗教と偽りの宗教を象徴している。隠喩の続くこの節では、海水は飲み水や灌漑には適していないが、他の用法があると述べている。海からは、魚貝類や装飾品が採れる。同様に、現在イス

第三項

16. 汝等人々よ、お前たちはアッラーの御心次第なり、されどアッラーは自ら満ち足りて、讃美されるべき御方にまします。

يَا أَيُّهَا النَّاسُ أَنتُمُ الْفُقَرَاءُ إِلَى اللَّهِ ۖ وَاللَّهُ هُوَ الْغَنِيُّ الْحَمِيدُ ﴿١٦﴾

17. もし彼欲しなば、お前たちを撲滅し、之に代って新らしい者を創造せん。

إِن يَشَأْ يُذْهِبْكُمْ وَيَأْتِ بِخَلْقٍ جَدِيدٍ ﴿١٧﴾

18. そはアッラーにとりていささかも難しからず。(注７)

وَمَا ذَٰلِكَ عَلَى اللَّهِ بِعَزِيزٍ ﴿١٨﴾

19. 荷を背負える者は他人の荷を背負うこと能わず。たとい重荷を背負う者が、その重荷ゆえに他人を呼ぶとも、之を担うこと得ざるべし、親戚縁者たりといえども。汝はただ、密かに主を畏れ、礼拝を遵守する者のみを警告し得るにすぎず。而して、身を清める者は、己れの利益のために清めるなり。いずれ行き着く先は、アッラーの許なるべし。

وَلَا تَزِرُ وَازِرَةٌ وِزْرَ أُخْرَىٰ ۚ وَإِن تَدْعُ مُثْقَلَةٌ إِلَىٰ حِمْلِهَا لَا يُحْمَلْ مِنْهُ شَيْءٌ وَلَوْ كَانَ ذَا قُرْبَىٰ ۗ إِنَّمَا تُنذِرُ الَّذِينَ يَخْشَوْنَ رَبَّهُم بِالْغَيْبِ وَأَقَامُوا الصَّلَاةَ ۚ وَمَن تَزَكَّىٰ فَإِنَّمَا يَتَزَكَّىٰ لِنَفْسِهِ ۚ وَإِلَى اللَّهِ الْمَصِيرُ ﴿١٩﴾

20. 盲人と目明きとは同じからず、

وَمَا يَسْتَوِي الْأَعْمَىٰ وَالْبَصِيرُ ﴿٢٠﴾

21. 闇と光も、

وَلَا الظُّلُمَاتُ وَلَا النُّورُ ﴿٢١﴾

22. 日陰と炎熱も、

وَلَا الظِّلُّ وَلَا الْحَرُورُ ﴿٢٢﴾

23. 而して、生と死もまた。(注８)げにアッラーはその嘉する者に聴かしむるも、汝は墓中にある輩に聴かせること能わず。(注９)

وَمَا يَسْتَوِي الْأَحْيَاءُ وَلَا الْأَمْوَاتُ ۚ إِنَّ اللَّهَ يُسْمِعُ مَن يَشَاءُ ۖ وَمَا أَنتَ بِمُسْمِعٍ مَّن فِي الْقُبُورِ ﴿٢٣﴾

ラム教に刃向かう者は、海水のごとく苦く役に立たない。しかし彼等の子孫の中で、熱心に神の言葉を伝える者も出て来るだろう。25章54節参照。

注７　神はモハッマド預言者を通じて新たな世界と秩序の誕生を命じられた。神にとってはこれを実現する事は決して困難ではない。

注８　信者が「生」きている人と呼ばれているのは、彼等が真実を受け入れる事で新たな生を得るからである。一方、不信心者が「死」んでいる人と呼ばれるのは、永遠の命をもたらす真実を拒む事で、精神的な死を我身にもたらすからである。

注９　神の預言者が、故意に自らの心や耳を塞ぎ、神のお告げを避ける事はできない。その様な人物は、墓の下に眠る死人と同じく魂の死んだ者である。

24. 汝はただ一介の警告者なり。

إِنْ أَنْتَ إِلَّا نَذِيرٌ ﴿٢٤﴾

25. げにわれらは、汝を朗報伝達者として、また警告者として真理と共に遣わしたり。如何なる民も、警告者が遣わされざりし民はなし。(注 10)

إِنَّا أَرْسَلْنَاكَ بِالْحَقِّ بَشِيرًا وَنَذِيرًا ۚ وَإِنْ مِنْ أُمَّةٍ إِلَّا خَلَا فِيهَا نَذِيرٌ ﴿٢٥﴾

26. たとい彼等が汝を嘘つきと呼ぶとも、彼等以前の徒輩もまたその使徒たちを虚言者として扱いたり、明証と、聖典と、光明を投ずる経典を携えて彼等に至れる使徒たちを。

وَإِنْ يُكَذِّبُوكَ فَقَدْ كَذَّبَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ جَاءَتْهُمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَيِّنَاتِ وَبِالزُّبُرِ وَبِالْكِتَابِ الْمُنِيرِ ﴿٢٦﴾

27. されば、われはこれ等の不信心者どもを突然ひっ捕えたり。われを否定する結果の何んと恐ろしきことかな！

ثُمَّ أَخَذْتُ الَّذِينَ كَفَرُوا ۖ فَكَيْفَ كَانَ نَكِيرِ ﴿٢٧﴾

第四項

28. 汝は見ざるか、アッラーが空から水を降し、之によって色とりどりの実を生らせることを。また、山々は、白や赤やその他真っ黒とさまざまな色合いの縞模様があることを。(注 11)

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللَّهَ أَنْزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَأَخْرَجْنَا بِهِ ثَمَرَاتٍ مُخْتَلِفًا أَلْوَانُهَا ۚ وَمِنَ الْجِبَالِ جُدَدٌ بِيضٌ وَحُمْرٌ مُخْتَلِفٌ أَلْوَانُهَا وَغَرَابِيبُ سُودٌ ﴿٢٨﴾

29. 人間も獣も家畜も同様に多種多様なり。アッラーの僕等のうち、ただ知識ある者のみアッラーを畏れ奉る。(注 12) げにアッラーは偉大にして、寛大にまします。

وَمِنَ النَّاسِ وَالدَّوَابِّ وَالْأَنْعَامِ مُخْتَلِفٌ أَلْوَانُهُ كَذَٰلِكَ ۗ إِنَّمَا يَخْشَى اللَّهَ مِنْ عِبَادِهِ الْعُلَمَاءُ ۗ إِنَّ اللَّهَ عَزِيزٌ غَفُورٌ ﴿٢٩﴾

注 10　この節では、ある偉大なる真理が述べられている。その真理は、クルアーンが示すまで世には知られていなかった。言い換えれば、この真実のお告げを伝える為に、ある神の伝導者が世に遣わされたのである。この高尚な原理は、あらゆる宗教の源たる神、そして神の使者たるそれぞれの宗教の創始者への信仰に結び付くものである。それは、イスラム教徒にとり、信じ崇めなければならない教義の一つである。この崇高なる真理を世に広める事で、イスラム教は、異なる宗教間に友好関係を作り出すと共に、世界中の異教徒間の関係を悪化させて来た敵意を取り除こうと努めて来た。

注 11　雨が乾いた大地に降れば、様々な色・味・形・種類の穀物・花・果実が育つとこの節では語っている。しかし、雨は同じでも、育つ穀物・花・果実はそれぞれ非常に異なる。この違いが、土壌や種子の質によるのは明らかだ。同様に、神の啓示はクルアーンを通じて、水の様に様々な地で人々に届くが、受ける側の心の状態や、その受け取り方で効果も違って来る。

注 12　前節にのべられた形・色・種類の多様さは、花・果実・石に限らず、人・獣・家畜にも見られる。アンナース（人），アッダヴァーブ（獣），アル・アンアーム（家畜）は又、能力・地位・本能の異なる人物を表してもいる。「アッラーの僕のうち、ただ知識ある者のみアッラーを畏れ奉る。」先述の三語が三種の人物を指

30．げにアッラーの経典に従い、礼拝を遵守し、われらが賜えるものをひそかに、また公に施す者は、決して失敗せざる取り引きを期待する者なり。（注 13）

إِنَّ الَّذِينَ يَتْلُونَ كِتَٰبَ اللَّهِ وَأَقَامُوا الصَّلَوٰةَ وَأَنْفَقُوا مِمَّا رَزَقْنَٰهُمْ سِرًّا وَعَلَانِيَةً يَرْجُونَ تِجَٰرَةً لَّنْ تَبُورَ ٣٠

31．アッラーは彼等に十分なる報奨を与えた上、更にその恵みを加増せん。げに彼は宥恕者にして、頒賞者なり。

لِيُوَفِّيَهُمْ أُجُورَهُمْ وَيَزِيدَهُمْ مِّنْ فَضْلِهِ ۚ إِنَّهُ غَفُورٌ شَكُورٌ ٣١

32．われらが汝に啓示せる経典は、それ以前の経典を確証する真理なり。げにアッラーはその僕等を熟知し、且つ照覧し給う。

وَالَّذِي أَوْحَيْنَا إِلَيْكَ مِنَ الْكِتَٰبِ هُوَ الْحَقُّ مُصَدِّقًا لِّمَا بَيْنَ يَدَيْهِ ۗ إِنَّ اللَّهَ بِعِبَادِهِ لَخَبِيرٌ بَصِيرٌ ٣٢

33．その後、われらは、選びし僕等にこの経典を継がしめたり。而して、彼等の中には自分自身を破滅する者あり、また中庸を守る者あり、また或る者はアッラーの許しのもとに善行に於て他をぬきんでる者あり。（注 14）こはアッラーよりの大なる恩恵なり。

ثُمَّ أَوْرَثْنَا الْكِتَٰبَ الَّذِينَ اصْطَفَيْنَا مِنْ عِبَادِنَا ۚ فَمِنْهُمْ ظَالِمٌ لِّنَفْسِهِ ۚ وَمِنْهُم مُّقْتَصِدٌ ۚ وَمِنْهُمْ سَابِقٌ بِالْخَيْرَٰتِ بِإِذْنِ اللَّهِ ۚ ذَٰلِكَ هُوَ الْفَضْلُ الْكَبِيرُ ٣٣

34．彼等の報奨は永遠の楽園なるべし。彼等はそこに入り、黄金と真珠の腕環に飾られ、その衣裳は絹なるべし。

جَنَّٰتُ عَدْنٍ يَدْخُلُونَهَا يُحَلَّوْنَ فِيهَا مِنْ أَسَاوِرَ مِنْ ذَهَبٍ وَلُؤْلُؤًا ۚ وَلِبَاسُهُمْ فِيهَا حَرِيرٌ ٣٤

35．而して、彼等は云わん、「我等から災いを取り除き給えるアッラーに讃えあれ。げに我等の主は、宥恕者にして、頒賞者なり。

وَقَالُوا الْحَمْدُ لِلَّهِ الَّذِي أَذْهَبَ عَنَّا الْحَزَنَ ۗ إِنَّ رَبَّنَا لَغَفُورٌ شَكُورٌ ٣٥

36．その恩恵によって、我等は苦労もなければ疲労も覚えざる永遠の住居に住まわしめら

الَّذِي أَحَلَّنَا دَارَ الْمُقَامَةِ مِنْ فَضْلِهِ ۚ لَا يَمَسُّنَا

し、その内正しい知識を持つ者のみ神を畏れ敬うと強調している。この場合の知識とは宗教上のものではなく、自然の法に関するものである。自然とその法則を謙虚に学べば、自ずと神の偉大なる力を悟り、神に対して畏敬の念を持つ様になる。

注 13　この節は、先節に述べられたウルマー（知識を授かった人）について記述している。

注 14　信者は、厳しい精神的修養の様々な段階を経て行く。初めに、彼は自らの低俗な欲望と真剣に戦い、厳しい自制を実践する。その後徐々に目標に近付き、遂には精神的に完全な発達を遂げ、その崇高なる目標に向かい一定の速い速度で進んで行く。

فِيهَا نَصَبٌ وَلَا يَمَسُّنَا فِيهَا لُغُوبٌ ﴿٣٦﴾

る」と。（注 15）

وَالَّذِينَ كَفَرُوا لَهُمْ نَارُ جَهَنَّمَ لَا يُقْضَىٰ عَلَيْهِمْ فَيَمُوتُوا وَلَا يُخَفَّفُ عَنْهُم مِّنْ عَذَابِهَا كَذَٰلِكَ نَجْزِي كُلَّ كَفُورٍ ﴿٣٧﴾

37. されど、不信心者どもに対しては、地獄の火あり。彼等には死は許されず、また刑罰を軽くせられざるべし。このように、われらはすべての忘恩者に返報す。

وَهُمْ يَصْطَرِخُونَ فِيهَا رَبَّنَا أَخْرِجْنَا نَعْمَلْ صَالِحًا غَيْرَ الَّذِي كُنَّا نَعْمَلُ أَوَلَمْ نُعَمِّرْكُم مَّا يَتَذَكَّرُ فِيهِ مَن تَذَكَّرَ وَجَاءَكُمُ النَّذِيرُ فَذُوقُوا فَمَا لِلظَّالِمِينَ مِن نَّصِيرٍ ﴿٣٨﴾

38. 彼等は火の中で泣き叫ばん、「主よ、我等を出し給え、さすれば、これまでなしたるようなことはせず、必ず義しい行動をなさん」と。アッラーは彼等に云わん、「われらはお前たちに、思慮ある者なら反省し得た十分なる寿命を与えざりしか？　その上、警告者まで遣わせり。されば汝等、刑罰を味わえ。不義なす徒輩には救助者はなし」と。

第五項

إِنَّ اللَّهَ عَالِمُ غَيْبِ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ إِنَّهُ عَلِيمٌ بِذَاتِ الصُّدُورِ ﴿٣٩﴾

39. げにアッラーは、天地に於ける隠されたることのすべてを知り給う。げにアッラーは、人が心に宿るものを熟知し給う。

هُوَ الَّذِي جَعَلَكُمْ خَلَائِفَ فِي الْأَرْضِ فَمَن كَفَرَ فَعَلَيْهِ كُفْرُهُ وَلَا يَزِيدُ الْكَافِرِينَ كُفْرُهُمْ عِندَ رَبِّهِمْ إِلَّا مَقْتًا وَلَا يَزِيدُ الْكَافِرِينَ كُفْرُهُمْ إِلَّا خَسَارًا ﴿٤٠﴾

40. 彼こそはお前たちを、過ぎ逝ける人々の地上に於ける代理者たらしめたり。されば、信ぜざる者は、その不信の結果を甘受すべし。不信は彼等に、主の憎しみの増加以外なにももたらさず、ただ自らの損失を増すのみなるべし。

قُلْ أَرَأَيْتُمْ شُرَكَاءَكُمُ الَّذِينَ تَدْعُونَ مِن دُونِ اللَّهِ أَرُونِي مَاذَا خَلَقُوا مِنَ الْأَرْضِ أَمْ لَهُمْ شِرْكٌ فِي السَّمَاوَاتِ أَمْ آتَيْنَاهُمْ كِتَابًا فَهُمْ عَلَىٰ بَيِّنَتٍ مِّنْهُ بَلْ إِن يَعِدُ الظَّالِمُونَ بَعْضُهُم بَعْضًا إِلَّا غُرُورًا ﴿٤١﴾

41. 云え、「お前たちは、アッラー以外に、アッラーと併せ祀る神々を見たことがあるのか？　ならば、神々が地上で創造せるものを我に示せ。それとも、神々は天の創造に加わりたるや？　またわれらは、神々に経典を与え、それによって彼等を立証せしめたるか？」と。然らず、不義者はただ欺くために互に約束す。

注 15　あらゆる恐怖や苦悩から完全に解き放たれ、神の喜びを伴う心の平安魂の充足を得る事は、天国における最高の段階であり、当節及び前節に示してある通り、クルアーンは、これを信じ来世を信じる者に、この至福が授けられると約束している。

42．げにアッラーは天地(あめつち)をしかと抑えて、之(これ)を動かさせじ。もし天地(あめつち)が動きなば、アッラーを惜(お)いて一体誰が天地(あめつち)を抑え得ようぞ。(注16) げにアッラーは寛厚(かんこう)にして、寛大にまします。

إِنَّ اللَّهَ يُمْسِكُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضَ أَن تَزُولَا ۚ وَلَئِن زَالَتَا إِنْ أَمْسَكَهُمَا مِنْ أَحَدٍ مِّن بَعْدِهِ ۚ إِنَّهُ كَانَ حَلِيمًا غَفُورًا ﴿٤١﴾

43．彼等は、警告者が来たりなば、他の如何なる民に勝りて御指導に従い奉る、とアッラーの御名(みな)にかけて堅く誓いたり。然(しか)るに、警告者来たるや、彼等はただ嫌悪を増すばかりなり、

وَأَقْسَمُوا بِاللَّهِ جَهْدَ أَيْمَانِهِمْ لَئِن جَاءَهُمْ نَذِيرٌ لَّيَكُونُنَّ أَهْدَىٰ مِنْ إِحْدَى الْأُمَمِ ۖ فَلَمَّا جَاءَهُمْ نَذِيرٌ مَّا زَادَهُمْ إِلَّا نُفُورًا ﴿٤٢﴾

44．地上に於て傲慢(ごうまん)を事とし、悪事を策謀するために。されど、悪事の策謀は、ただその策謀の張本人を陥(おとし)いれるにすぎず。されば彼等は、昔の人々の慣例(しきたり)以外に何を期待し得るか？　汝はアッラーの慣例(しきたり)に如何なる変更も見ざるべし。またアッラーの慣例(しきたり)には如何なる交替も見ざるべし。

اسْتِكْبَارًا فِي الْأَرْضِ وَمَكْرَ السَّيِّئِ ۚ وَلَا يَحِيقُ الْمَكْرُ السَّيِّئُ إِلَّا بِأَهْلِهِ ۚ فَهَلْ يَنظُرُونَ إِلَّا سُنَّتَ الْأَوَّلِينَ ۚ فَلَن تَجِدَ لِسُنَّتِ اللَّهِ تَبْدِيلًا ۖ وَلَن تَجِدَ لِسُنَّتِ اللَّهِ تَحْوِيلًا ﴿٤٣﴾

45．彼等は国々を経巡(へめぐ)りて、往古(おうこ)の民の末路が如何に悲惨なりしかを見ざりしか？　それ等の人々は、彼等より栄えたりき。アッラーは、天地(あめつち)にある何かによって、その考えを妨げられる者に非ず。(注17) げにアッラーは全知全能にまします。

أَوَلَمْ يَسِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَيَنظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ وَكَانُوا أَشَدَّ مِنْهُمْ قُوَّةً ۚ وَمَا كَانَ اللَّهُ لِيُعْجِزَهُ مِن شَيْءٍ فِي السَّمَاوَاتِ وَلَا فِي الْأَرْضِ ۚ إِنَّهُ كَانَ عَلِيمًا قَدِيرًا ﴿٤٤﴾

46．もしアッラーが人々をその所業によって罰しなば、この地上には一人の人間もとり残されざるべし。されど、アッラーは、一定の期限まで人間を猶予し給う。だが、その定めの時到らば、彼等は知るべし、アッラーがその御前にすべての僕(しもべ)等を召し寄せることを。(注18)

وَلَوْ يُؤَاخِذُ اللَّهُ النَّاسَ بِمَا كَسَبُوا مَا تَرَكَ عَلَىٰ ظَهْرِهَا مِن دَابَّةٍ وَلَٰكِن يُؤَخِّرُهُمْ إِلَىٰ أَجَلٍ مُّسَمًّى ۖ فَإِذَا جَاءَ أَجَلُهُمْ فَإِنَّ اللَّهَ كَانَ بِعِبَادِهِ بَصِيرًا ﴿٤٥﴾

注16　天・地の機構は、一定の進路をそれる事なく、完全なる調和をもって作動を続けている。この調和は、背後に聡明にして全能なる存在のある事を示している。この最高のそして知性ある存在とは、我々の崇拝をお求めになられる神である。

注17　モハッマド預言者を亡き者にしようとする不信心者達の企みは全て失敗に終わりイスラムの大義が勝利を得る事は、不変の神意である。

注18　慈悲深き神は容易には罰を下されない。邪悪で反抗的な者に対して、その態度を改めさす為に、神は猶予をお与えになる。もし神が時を経ずして罰を下されるなら、罪人達は即刻滅び、世の終わりを迎え、地上の全生命は絶滅するであろう。それは、人類絶滅の後、動物・鳥類等が生存すべき理由が無いからである。又、この節は、神が、この世の忌まわしい虫けら共、つまり不信心者に対する裁きを厭われないとも意味している。

سُوْرَةُ يٰسٓ مَكِّيَّةٌ (٣٦)

ヤー・スィーン
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍（あまね）くアッラーの御名（みな）において。
بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．ヤー・スィーン。（注1）
يٰسٓ ②

3．知恵に満ちたるクルアーンにかけて誓う、
وَالْقُرْاٰنِ الْحَكِيْمِ ③

4．汝は確かに使徒の一人なり、
اِنَّكَ لَمِنَ الْمُرْسَلِيْنَ ④

5．正しき道を守る者。（注2）
عَلٰى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ⑤

6．こは偉大にして慈悲深き主よりの啓示なり、
تَنْزِيْلَ الْعَزِيْزِ الرَّحِيْمِ ⑥

7．父祖からいまだ警告されたことがなく、無思慮なる人々を汝が警告するための。
لِتُنْذِرَ قَوْمًا مَّآ اُنْذِرَ اٰبَآؤُهُمْ فَهُمْ غٰفِلُوْنَ ⑦

8．げに、すでに、彼等信ぜざるが故に、彼等の大部分に御言葉（おことば）は実証されたり。
لَقَدْ حَقَّ الْقَوْلُ عَلٰٓى اَكْثَرِهِمْ فَهُمْ لَا يُؤْمِنُوْنَ ⑧

9．われらは、顎までとどく首枷（くびかせ）（注3）を彼等の首に嵌（は）めたれば、彼等は頭を上向けざるを得ず。（注4）
اِنَّا جَعَلْنَا فِيْٓ اَعْنَاقِهِمْ اَغْلٰلًا فَهِيَ اِلَى الْاَذْقَانِ فَهُمْ مُّقْمَحُوْنَ ⑨

10．われらは彼等の前後に障壁を設け、且つ覆いたれば、彼等は何も見ることを得ず。（注5）
وَجَعَلْنَا مِنْۢ بَيْنِ اَيْدِيْهِمْ سَدًّا وَّمِنْ خَلْفِهِمْ سَدًّا فَاَغْشَيْنٰهُمْ فَهُمْ لَا يُبْصِرُوْنَ ⑩

注1　おお、完全なる指導者

注2　モハッマド預言者の道は、今や神の下に繋がる唯一の正しい道である。この節は、預言者と哲学者の差異を明確に述べている。哲学者は真理を見い出すのに長い時を必要とし、追求最中に迷う事も度々ある。しかし、神の預言者は、最少の時で、最短距離を経て真理に到達する。哲学者の様に抽象的で難解な思考にさまよう事もなく、預言者は神の啓示に導かれて直接真理に到達するのである。

注3　慣習、しきたり、偏見に捕らわれる事。不信心者はこれに束縛され、真理の受け入れを阻まれ、改心の努力を無にされるのである。

注4　人が知性を働かせ、慣習の束縛から逃がれようと努力する時ですら、彼はあらゆる方面からの圧力を受け、正しく洞察する事はほとんどできない。

注5　しきたり、偏見、うぬぼれが災いし、イスラム教を受け入れれば得られたであろう輝ける壮大な未来を、不信心者達は予期する事ができなかった。又、真理を拒み、神に罰せられた過去の人々の歴史を振り返る事もしなかった。

11．汝、彼等に警告するもせざるも、彼等には同じなり。すなわち、彼等は信ぜざるべし。（注６）

وَسَوَآءٌ عَلَيْهِمْ ءَأَنْذَرْتَهُمْ أَمْ لَمْ تُنْذِرْهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ١١

12．汝が警告し得るのは、訓戒に従い、密かに慈悲深き神を畏れる者のみ。されば、その者に、宥恕（ゆうじょ）と素晴らしい報奨の朗報を伝えよ。

إِنَّمَا تُنْذِرُ مَنِ اتَّبَعَ الذِّكْرَ وَخَشِيَ الرَّحْمٰنَ بِالْغَيْبِ فَبَشِّرْهُ بِمَغْفِرَةٍ وَّأَجْرٍ كَرِيمٍ ١٢

13．げにわれらのみが死者を甦らせ、彼等が前に送るものも後に遺（のこ）すものも記録す。われらは一切を明瞭なる原簿に記録す。

إِنَّا نَحْنُ نُحْيِ الْمَوْتٰى وَنَكْتُبُ مَا قَدَّمُوا وَآثَارَهُمْ وَكُلَّ شَيْءٍ أَحْصَيْنٰهُ فِيٓ إِمَامٍ مُّبِينٍ ١٣ ع

第二項

14．使徒たちが邑（まち）に来たれる時、その邑（まち）の人々の例（ためし）を彼等に述べよ。

وَاضْرِبْ لَهُمْ مَّثَلًا أَصْحٰبَ الْقَرْيَةِ إِذْ جَآءَهَا الْمُرْسَلُونَ ١٤

15．初めわれらは、彼等に二人の使徒（注７）を遣わしたところ、彼等はこの両名を拒みたり。されば、われらは更に一人を加えて之（これ）を強めたり。（注８）而（しか）して、彼等使徒たちは云えり、「げにわれらは使徒としてお前たちのところへ遣わされたる者なり」と。

إِذْ أَرْسَلْنَآ إِلَيْهِمُ اثْنَيْنِ فَكَذَّبُوهُمَا فَعَزَّزْنَا بِثَالِثٍ فَقَالُوٓا إِنَّآ إِلَيْكُمْ مُّرْسَلُونَ ١٥

16．すると、彼等は答えり、「お前たちは我等と同じ人間にすぎず、また慈悲深き神は何も啓示を降（くだ）さず。お前たちはただ偽るのみ」と。

قَالُوا مَآ أَنْتُمْ إِلَّا بَشَرٌ مِّثْلُنَا وَمَآ أَنْزَلَ الرَّحْمٰنُ مِنْ شَيْءٍ إِنْ أَنْتُمْ إِلَّا تَكْذِبُونَ ١٦

17．彼等使徒たちは云えり、「主は、我等が確かにお前たちに遣わされたる者なることを、知る。

قَالُوا رَبُّنَا يَعْلَمُ إِنَّآ إِلَيْكُمْ لَمُرْسَلُونَ ١٧

18．我等の務めは、ただ明白なる神託（しんたく）を伝達することのみ」と。

وَمَا عَلَيْنَآ إِلَّا الْبَلٰغُ الْمُبِينُ ١٨

注６　　２章７節参照

注７　　モーゼとイエス、又はアブラハムとイシュマエル。

注８　　モハッマド預言者は、モーゼとイエスが預言した彼の到来を実現する事でこの二人を力づけた（申命記18：18及びマタイ21：33－46）。更に２：129－130に述べられたアブラハムとイシュマエルの祈りを身をもって成就する事で、この二人を力づけたのである。

19．不信心者どもは云えり、「お前たちは、我等にとりては凶兆なり。お前たち、もし止めずば、我等必ず石もてお前たちを撃たん。我等の手で必ずお前たちの身に痛刑を降さん」と。

قَالُوٓا إِنَّا تَطَيَّرْنَا بِكُمْ ۚ لَئِن لَّمْ تَنتَهُوا لَنَرْجُمَنَّكُمْ وَلَيَمَسَّنَّكُم مِّنَّا عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿١٩﴾

20．彼等使徒は答えり、「お前たちの凶兆は、己れ自身のせいなり。お前たちは訓戒されたので、かく云うか？　否、お前たちは掟を悉く違犯する民なり」と。

قَالُوا طَٰٓئِرُكُم مَّعَكُمْ ۚ أَئِن ذُكِّرْتُم ۚ بَلْ أَنتُمْ قَوْمٌ مُّسْرِفُونَ ﴿٢٠﴾

21．時に、邑の端より（注9）走り来たる（注10）一人の男あり。男は云えり、「邑の人々よ、この使徒たちに従え。

وَجَآءَ مِنْ أَقْصَا الْمَدِينَةِ رَجُلٌ يَسْعَىٰ قَالَ يَٰقَوْمِ اتَّبِعُوا الْمُرْسَلِينَ ﴿٢١﴾

22．お前たちに報酬を求めず、正しき道を歩むこの方々に従え。

اتَّبِعُوا مَن لَّا يَسْـَٔلُكُمْ أَجْرًا وَهُم مُّهْتَدُونَ ﴿٢٢﴾

23．何故に我は、我を創りし御方を崇めざるべきや？　その御方の許へお前たちもいずれ連れ戻されん。

وَمَا لِيَ لَآ أَعْبُدُ الَّذِي فَطَرَنِي وَإِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿٢٣﴾

24．我は彼以外に他神を拝すべけんや？（注11）もし慈悲深き神が我に禍を下さんと思わば、彼等他神たちの執り成しは何んの役にも立たず、また我を救うこと能わず。

ءَأَتَّخِذُ مِن دُونِهِۦٓ ءَالِهَةً إِن يُرِدْنِ الرَّحْمَٰنُ بِضُرٍّ لَّا تُغْنِ عَنِّي شَفَٰعَتُهُمْ شَيْـًٔا وَلَا يُنقِذُونِ ﴿٢٤﴾

25．然る時は、我は紛れもない明白なる迷誤の中にあり。

إِنِّيٓ إِذًا لَّفِي ضَلَٰلٍ مُّبِينٍ ﴿٢٥﴾

26．我はお前たちの主を信じ奉る。されば、お前たち、我に耳傾けよ」と。

إِنِّيٓ ءَامَنتُ بِرَبِّكُمْ فَاسْمَعُونِ ﴿٢٦﴾

27．すると声ありて、云えり、「汝、楽園に入れ」と。男は云えり、「ああ、我が民が知りたれば、

قِيلَ ادْخُلِ الْجَنَّةَ ۖ قَالَ يَٰلَيْتَ قَوْمِي يَعْلَمُونَ ﴿٢٧﴾

28．ありがたくも主が我が罪を赦し、栄誉ある者のうちに我を入れ給うたことを！」と。

بِمَا غَفَرَ لِي رَبِّي وَجَعَلَنِي مِنَ الْمُكْرَمِينَ ﴿٢٨﴾

注9　「邑の端」とは、イスラム教の本山から最も離れた地を指す。

注10　「走り来たる」の同義語は、モハッマド預言者が約束された救世主について語る時にも用いられた。その言葉の中で、彼はイスラムの前進の為に辛抱強く賢明に務めたと述べている。

注11　人々は約束されたメシヤ（救世主）の時代に様々な神ー富の神、物質的権力、偽りの政治哲学、実現不可能な経済理論等を崇めるであろう。

29. 而して、男の死後、われらはその民に対して天から軍勢を差し向けざりき。またそのようなことは一切せざりき。

وَمَآ أَنزَلْنَا عَلَىٰ قَوْمِهِۦ مِنۢ بَعْدِهِۦ مِن جُندٍ مِّنَ ٱلسَّمَآءِ وَمَا كُنَّا مُنزِلِينَ ٢٩

30. ただ一陣の突風のみ。見よ、　彼等は消滅せり。（注 12)

إِن كَانَتْ إِلَّا صَيْحَةً وَٰحِدَةً فَإِذَا هُمْ خَٰمِدُونَ ٣٠

31. ああ、悲しいかなわが僕たち！　使徒が彼等に来るたびに、彼等は之を嘲笑す。（注 13)

يَٰحَسْرَةً عَلَى ٱلْعِبَادِ ۚ مَا يَأْتِيهِم مِّن رَّسُولٍ إِلَّا كَانُوا۟ بِهِۦ يَسْتَهْزِءُونَ ٣١

32. 彼等は、われらが彼等よりも前の幾多の世代を打ち滅ぼしたること、然も滅ぼされた人々は二度と帰らざることを、見ざるか？（注 14)

أَلَمْ يَرَوْا۟ كَمْ أَهْلَكْنَا قَبْلَهُم مِّنَ ٱلْقُرُونِ أَنَّهُمْ إِلَيْهِمْ لَا يَرْجِعُونَ ٣٢

33. 彼等は皆、一緒に集められて、われらの前に必ず連れて来られん。

وَإِن كُلٌّ لَّمَّا جَمِيعٌ لَّدَيْنَا مُحْضَرُونَ ٣٣

第三項

34. 彼等への一つの神兆は、死せる大地なり。われらは之を生き返らせ、之より穀物を生ぜしめ、彼等はそれを食す。

وَءَايَةٌ لَّهُمُ ٱلْأَرْضُ ٱلْمَيْتَةُ أَحْيَيْنَٰهَا وَأَخْرَجْنَا مِنْهَا حَبًّا فَمِنْهُ يَأْكُلُونَ ٣٤

35. また、われらは、そこに棗椰子と葡萄の園とを設け、泉水を湧き出せしむ、（注 15)

وَجَعَلْنَا فِيهَا جَنَّٰتٍ مِّن نَّخِيلٍ وَأَعْنَٰبٍ وَفَجَّرْنَا فِيهَا مِنَ ٱلْعُيُونِ ٣٥

36. 彼等にその果実を食せるように。されどそれは彼等の手で育てたものに非ず。これでも彼等は感謝せざるか？

لِيَأْكُلُوا۟ مِن ثَمَرِهِۦ وَمَا عَمِلَتْهُ أَيْدِيهِمْ ۖ أَفَلَا يَشْكُرُونَ ٣٦

注 12　この言葉は、砲弾、焼夷弾、原子爆弾が爆音と共に落下する時の模様を指している様だ。爆弾が落下、炸裂し、辺りの生命ある者は全て死に絶え炎が全てを焼き尽くす。クルアーンは 18 章 9 節はじめ、到る所でこの罰について述べている。

注 13　この節の言葉は哀感に満ちている。全能の神自ら、モハッマド預言者が人々に拒まれ嘲笑される事に深く悲しまれている様だ。モハッマド預言者は人々の為に悲しんだが、彼等は侮蔑と嘲笑をもってしてそれに答えた。

注 14　この言葉は万物にふさわしい神の罰について述べている様だ。

注 15　前節の陰喩は此処でも続いている。アラビアの渇いた大地から精神的知識の泉がわき出て、精神的果実を付けた木々が当たり一面に育つであろうと当節は述べている。

37．彼を讃えよ、大地に育つもの、人間も、それから人間が知らぬものも、皆対（つい）にして創造し給うた御方を。（注 16）

سُبْحَٰنَ ٱلَّذِى خَلَقَ ٱلْأَزْوَٰجَ كُلَّهَا مِمَّا تُنۢبِتُ ٱلْأَرْضُ وَمِنْ أَنفُسِهِمْ وَمِمَّا لَا يَعْلَمُونَ ٣٧

38．夜そのものもまた彼等への神兆（しるし）なり。われらがそれから昼を剝ぎ取ると、見よ、彼等は暗闇（くらやみ）の中にとり残される。

وَءَايَةٌ لَّهُمُ ٱلَّيْلُ نَسْلَخُ مِنْهُ ٱلنَّهَارَ فَإِذَا هُم مُّظْلِمُونَ ٣٨

39．また、太陽は、その定められた軌道を走る。こは全知全能なる神の定めるところなり。

وَٱلشَّمْسُ تَجْرِى لِمُسْتَقَرٍّ لَّهَا ذَٰلِكَ تَقْدِيرُ ٱلْعَزِيزِ ٱلْعَلِيمِ ٣٩

40．月に対しては、われらが各宿宮を定めたれば、再び干からびた椰子の細枝の如くなりて戻る。

وَٱلْقَمَرَ قَدَّرْنَٰهُ مَنَازِلَ حَتَّىٰ عَادَ كَٱلْعُرْجُونِ ٱلْقَدِيمِ ٤٠

41．太陽は月に追いつくわけには行かず、夜もまた昼を追い越す能（あた）わず。それ等皆軌道の上を浮遊す。（注 17）

لَا ٱلشَّمْسُ يَنۢبَغِى لَهَآ أَن تُدْرِكَ ٱلْقَمَرَ وَلَا ٱلَّيْلُ سَابِقُ ٱلنَّهَارِ وَكُلٌّ فِى فَلَكٍ يَسْبَحُونَ ٤١

42．われらが彼等の子孫（こどもら）を満載した舟にて運べることも、また彼等への神兆（しるし）なり。

وَءَايَةٌ لَّهُمْ أَنَّا حَمَلْنَا ذُرِّيَّتَهُمْ فِى ٱلْفُلْكِ ٱلْمَشْحُونِ ٤٢

43．われらはまた、彼等のために、その上に乗れる舟に似たものを造れり。（注 18）

وَخَلَقْنَا لَهُم مِّن مِّثْلِهِۦ مَا يَرْكَبُونَ ٤٣

注 16　植物界や無生物をも含む全ての物には対があるという事実を、科学は発見した。いわゆる元素ですから、個々では成り立たない。それらも又、存在を維持する為に相互依存している。この科学の真理は人間の知性にも当てはまる。天の光が降りて来るまでは、神の啓示と人間の知性が結び付いて生まれる真の知識を人間は手にする事ができない。

注 17　当節は宇宙空間を天体が漂う様（さま）に触れている。宇宙の構造は固定化されていると長らく考えられて来た概念をクルアーンははっきりと否定した。クルアーンの特徴は、科学や哲学における誤った考えを否定するだけでなく、新しい発見を予測する事にある。当節では更に、全宇宙の優れた構造と理法についても言及している。天体は全て、互いの領域を侵害する事なく、規則正しく、正確に任務を遂げる。太陽系は何億という天体系の一つであるが、中には太陽系とは比較にならない程大きいものもある。しかし、果てない空間に散らばる膨大な数の太陽や星は、互いに安全を保ち、到る処調和と美を作り出す様に配慮されている。天体はそれぞれ互いの軌道に影響を及ぼしつつも、一定の道筋を無事に進み、全体として構造と運行のみごとな調和を形作っている。

注 18　クルアーンは、神が新たな輸送手段を作り出される、とずっと以前に預言していた。蒸気船、大型船、飛行船、飛行機等今日多用されている物は、クルアーンの預言が成就した事をはっきりと示している。

44. 而して、われらもし欲しなば、彼等を溺れさせ得るなり。さすれば、誰も彼等を助ける者もなく、彼等は救われじ、

وَاِنْ نَّشَاْ نُغْرِقْهُمْ فَلَا صَرِيْخَ لَهُمْ وَلَا هُمْ يُنْقَذُوْنَ ﴿٤٤﴾

45. われらの慈悲によって暫く楽しむ以外。

اِلَّا رَحْمَةً مِّنَّا وَمَتَاعًا اِلٰى حِيْنٍ ﴿٤٥﴾

46. 「祈りによってお前たちの前にあるもの、(注 19) 並びに悔悟によってお前たちの後にあるもの (注 20) を警戒せよ、お慈悲にあずかるために」と告ぐるも、彼等は之を意に介せず。

وَاِذَا قِيْلَ لَهُمُ اتَّقُوْا مَا بَيْنَ اَيْدِيْكُمْ وَمَا خَلْفَكُمْ لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُوْنَ ﴿٤٦﴾

47. 主の神兆が彼等に来る毎に、彼等は一つとして之に背を向けざるはなし。

وَمَا تَاْتِيْهِمْ مِّنْ اٰيَةٍ مِّنْ اٰيٰتِ رَبِّهِمْ اِلَّا كَانُوْا عَنْهَا مُعْرِضِيْنَ ﴿٤٧﴾

48. 彼等に向って「アッラーがお前たちに授けたるものを施し与えよ」と云えば、不信心者どもは信ずる人々に向かって云う、「アッラーもし欲しなば、自ら之を養い給うものを、何ぞ我等が之を養うべきや？　お前たち、心得違いもはなはだしい」と。

وَاِذَا قِيْلَ لَهُمْ اَنْفِقُوْا مِمَّا رَزَقَكُمُ اللّٰهُ ۙ قَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لِلَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اَنُطْعِمُ مَنْ لَّوْ يَشَآءُ اللّٰهُ اَطْعَمَهٗٓ ۖ اِنْ اَنْتُمْ اِلَّا فِيْ ضَلٰلٍ مُّبِيْنٍ ﴿٤٨﴾

49. 而して、彼等は云う、「もしお前たちの言葉が真なら、審判の約束が果たされるはいつなるぞ？」と。

وَيَقُوْلُوْنَ مَتٰى هٰذَا الْوَعْدُ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ﴿٤٩﴾

50. 彼等はただ、互いに論争している間に突如襲い来る霹靂を待つにすぎず。(注 21)

مَا يَنْظُرُوْنَ اِلَّا صَيْحَةً وَّاحِدَةً تَاْخُذُهُمْ وَهُمْ يَخِصِّمُوْنَ ﴿٥٠﴾

51. その時彼等は、遺言もなし得ず、家に帰ることすら適うまじ。

فَلَا يَسْتَطِيْعُوْنَ تَوْصِيَةً وَّلَآ اِلٰٓى اَهْلِهِمْ يَرْجِعُوْنَ ﴿٥١﴾

注 19　貴人方が今後犯すであろう悪事によりもたらされる悪い結末。

注 20　過去に貴人方が為した悪事の結末。

注 21　此処に述べられた罰は、空から落ちる稲妻の様なものであろう。それは余りにも突然に下されるので、次節に書かれてある様に、罪人は遺言を残す事すらできないのであろう。

注 22　「らっぱ吹き鳴れば」という言葉は、裁きの日にトランペットが吹き鳴らされる他、偉大なる神の指導者が現れ、クラリオンを吹く事を示している。魂の死んだ者達はこの音に呼び覚まされ、墓から出て（魂が生き返って）神の呼びかけを聴きに集まり、それに応じるのである。

第四項

52．而して、喇叭吹き鳴れば、見よ彼等、墓場からあわてふためき主の許へ急ぎ行かん。(注 22)

وَنُفِخَ فِي الصُّورِ فَإِذَا هُمْ مِنَ الْأَجْدَاثِ إِلَىٰ رَبِّهِمْ يَنْسِلُونَ ٥٢

53．彼等は云わん、「ああ、禍なるかな！　我等を臥処より喚び起したるは誰ぞ？　こはしたり、慈悲深き神が約束した通りなり。使徒たちは真実を語りぬ」と。

قَالُوا يَا وَيْلَنَا مَنْ بَعَثَنَا مِنْ مَرْقَدِنَا ۜ هَٰذَا مَا وَعَدَ الرَّحْمَٰنُ وَصَدَقَ الْمُرْسَلُونَ ٥٣

54．霹靂起らば、(注 23) 見よ、彼等は一斉にわれらの前に召し寄せられん。

إِنْ كَانَتْ إِلَّا صَيْحَةً وَاحِدَةً فَإِذَا هُمْ جَمِيعٌ لَدَيْنَا مُحْضَرُونَ ٥٤

55．この日、何人も些かだに不当に遇せらるることなし。ただお前たちがなせることに対して、応報あるのみ。

فَالْيَوْمَ لَا تُظْلَمُ نَفْسٌ شَيْئًا وَلَا تُجْزَوْنَ إِلَّا مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ٥٥

56．げに楽園の住み人たちは、その日、己が仕事を楽しまん。(注 24)

إِنَّ أَصْحَابَ الْجَنَّةِ الْيَوْمَ فِي شُغُلٍ فَاكِهُونَ ٥٦

57．彼等は妻ともども、涼しい木陰の下で寝椅子に凭れ、身を横たえん。(注 25)

هُمْ وَأَزْوَاجُهُمْ فِي ظِلَالٍ عَلَى الْأَرَائِكِ مُتَّكِئُونَ ٥٧

58．彼等はそこで、さまざまなる果実を食し、且つその望むものを悉く獲ん。

لَهُمْ فِيهَا فَاكِهَةٌ وَلَهُمْ مَا يَدَّعُونَ ٥٨

59．「平安あれ」こは慈悲深き主よりのお言葉なり。(注 26)

سَلَامٌ قَوْلًا مِنْ رَبٍّ رَحِيمٍ ٥٩

60．神は云わん、「汝等罪人よ、今日は義しい人たちから離れて控えよ。

وَامْتَازُوا الْيَوْمَ أَيُّهَا الْمُجْرِمُونَ ٦٠

61．汝等アダムの子孫よ、われはお前たちに申しつけざりしか、悪魔を拝むでない、あの者はお前たちにとりて仇敵なり。

أَلَمْ أَعْهَدْ إِلَيْكُمْ يَا بَنِي آدَمَ أَنْ لَا تَعْبُدُوا الشَّيْطَانَ ۖ إِنَّهُ لَكُمْ عَدُوٌّ مُبِينٌ ٦١

注 23　数節の中で繰り返し述べられる「霹靂」という語について、当章では神の罰が一陣の風となって下される時の事だと示している。この語は、一瞬にして町全体を破壊する原子爆弾投下を指しているのかもしれない。

注 24　来世における生とは、一般に知られている様な無為のものではなく、絶えず精神的に成長し続けて行くものである。

注 25　喜びや幸せは、愛する者と分かち合う程に大きくなる。

注 26　天国における様々な恵み、神と共にある平安、自らの安らぎつまり心の平穏、これら全てを当節では平安（サラーム）の一語に要約している。

62．われを敬い崇めよ。それこそが正しい道なり。

وَأَنِ اعْبُدُونِي ۚ هَٰذَا صِرَاطٌ مُسْتَقِيمٌ ﴿٦٢﴾

63．然るに悪魔は、お前たちの大勢を迷わし行きぬ。それなのに、お前たちなぜ悟らざりしか？

وَلَقَدْ أَضَلَّ مِنْكُمْ جِبِلًّا كَثِيرًا ۖ أَفَلَمْ تَكُونُوا تَعْقِلُونَ ﴿٦٣﴾

64．こはお前たちに約束せられたる地獄なり。

هَٰذِهِ جَهَنَّمُ الَّتِي كُنْتُمْ تُوعَدُونَ ﴿٦٤﴾

65．今日こそそこに入れ、お前たち信ぜざりしが故に」と。

اصْلَوْهَا الْيَوْمَ بِمَا كُنْتُمْ تَكْفُرُونَ ﴿٦٥﴾

66．その日われらは、彼等の口に封印を施さん。されど、彼等の手はわれらに物云い、その足は為せることを証言せん。（注 27）

الْيَوْمَ نَخْتِمُ عَلَىٰ أَفْوَاهِهِمْ وَتُكَلِّمُنَا أَيْدِيهِمْ وَتَشْهَدُ أَرْجُلُهُمْ بِمَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ﴿٦٦﴾

67．而して、我らもし欲しなば、彼等の視力を消し得るなり。そうなれば、道を見出さんと焦り急ぐとも、彼等如何にして見るを得べきか？（注 28）

وَلَوْ نَشَاءُ لَطَمَسْنَا عَلَىٰ أَعْيُنِهِمْ فَاسْتَبَقُوا الصِّرَاطَ فَأَنَّىٰ يُبْصِرُونَ ﴿٦٧﴾

68．また、われら欲しなば、彼等をその場にくぎ付けすべくその形を変えることも可なり。（注 29）そうなれば、彼等は進むも退くも適うまじ。

وَلَوْ نَشَاءُ لَمَسَخْنَاهُمْ عَلَىٰ مَكَانَتِهِمْ فَمَا اسْتَطَاعُوا مُضِيًّا وَلَا يَرْجِعُونَ ﴿٦٨﴾

第五項

69．また、われらは、長寿を授ける者には、その者を昔の弱い状態に逆行せしむ。（注 30）これでも彼等悟らざるか？

وَمَنْ نُعَمِّرْهُ نُنَكِّسْهُ فِي الْخَلْقِ ۖ أَفَلَا يَعْقِلُونَ ﴿٦٩﴾

注 27　不信心者の有罪が彼等が驚く程完全に証明される時、彼等の口は閉じられ、一言も抗弁する事ができず、人間が行動する際の主要部分である手足は彼等の善悪を示す。今や人間の発言や行動は、テープレコーダーを使って正確に再生され、テレビにより遠く離れた画面に写し出される事ができる。これは、この世において、人間の舌や手足が如何にしてその者の有罪、無罪の決め手となり始めたのかを示している。

注 28　人間は自由意志を授けられているので、自らの行動には責任を負われなければならない。不信心者達は真実に目を向ける事を頑強に拒んだ為、それを見極める力を取り上げられてしまった。これは前節の「彼らの口に封印を施さん。」の意味でもある。

注 29　イブン・アバースによれば、この言葉は、「我々は家に居る彼等を滅ぼしたであろう。」という意味となり、又、ハサンによれば、「彼等の体力、知力は全て失われたであろう。」という意味になる。あるいは、「我々は彼等に屈辱を与えたであろう。」という意味にもとれる。

注 30　生命ある物は全て衰えて行く。この法則は個々人のみならず国家にも当てはまる。人間と同じく、国家も又、成長し、成熟した後、衰え滅びる。

70．われらは彼に詩を教えた覚えなし、そは彼に相応しからず。（注 31）こは訓戒にして、物事を明白にし、且つ詳細に説くクルアーンに外ならぬ、

وَمَا عَلَّمْنَٰهُ ٱلشِّعْرَ وَمَا يَنۢبَغِى لَهُۥٓ ۚ إِنْ هُوَ إِلَّا ذِكْرٌ وَقُرْءَانٌ مُّبِينٌ ٦٩

71．心有る者のすべてを戒め、（注 32）不信心者に対するアッラーの宣告が実現されることを説く。

لِّيُنذِرَ مَن كَانَ حَيًّا وَيَحِقَّ ٱلْقَوْلُ عَلَى ٱلْكَٰفِرِينَ ٧٠

72．彼等は悟らざるか、われらが手で形造りしものの中から彼等のために家畜を創り、それを彼等に所有しめたことを？（注 33）

أَوَلَمْ يَرَوْا۟ أَنَّا خَلَقْنَا لَهُم مِّمَّا عَمِلَتْ أَيْدِينَآ أَنْعَٰمًا فَهُمْ لَهَا مَٰلِكُونَ ٧١

73．而して、われらは之を彼等に服従せしめたればこそ、彼等の或る者は乗るために利用し、また或る者は食用となす。

وَذَلَّلْنَٰهَا لَهُمْ فَمِنْهَا رَكُوبُهُمْ وَمِنْهَا يَأْكُلُونَ ٧٢

74．またそのほかにもさまざまなる用途があり、飲みものもまた取れるなり。これでも、彼等は感謝せざるか？

وَلَهُمْ فِيهَا مَنَٰفِعُ وَمَشَارِبُ ۖ أَفَلَا يَشْكُرُونَ ٧٣

75．然るに、彼等は、アッラー以外に他神らを選び、之に救いを求めんとす。

وَٱتَّخَذُوا۟ مِن دُونِ ٱللَّهِ ءَالِهَةً لَّعَلَّهُمْ يُنصَرُونَ ٧٤

76．邪神どもは彼等を助けること能わず、逆に彼等の方が邪神どもを護る軍勢として神のおん前に召し出されん。

لَا يَسْتَطِيعُونَ نَصْرَهُمْ وَهُمْ لَهُمْ جُندٌ مُّحْضَرُونَ ٧٥

77．されば、彼等の言うことに汝の心を悩ますなかれ。げにわれは、彼等が胸に隠すこと、また明かすことも知る者なり。

فَلَا يَحْزُنكَ قَوْلُهُمْ ۘ إِنَّا نَعْلَمُ مَا يُسِرُّونَ وَمَا يُعْلِنُونَ ٧٦

78．人間は、われらが一滴の精液から彼を創造せることを、知らざるか？　然るに、見よ、人間は公然とわれらに刃向かうとは！

أَوَلَمْ يَرَ ٱلْإِنسَٰنُ أَنَّا خَلَقْنَٰهُ مِن نُّطْفَةٍ فَإِذَا هُوَ خَصِيمٌ مُّبِينٌ ٧٧

注 31　詩人はたいてい夢や空想に耽っているものなので、神の預言者は詩人に違いないという考えは、彼の尊厳に相反する。神の預言者には非常に崇高な目的がある。しかし、この節は、全ての詩は有害であり、詩人は全て夢想家であると述べている訳ではなく、神の預言者は、単に詩人とするには余りにも崇高な精神の持ち主であると語っている。

注 32　「心有る者」という言葉は、魂の滅びていない人という意味である。言い換えれば、神のお告げを受け入れる事が出来、神命に応じられる素養のある人を指す。

注 33　神が人間の物質的欲望を満たされるなら、その精神的要望には応じられないという訳ではない。当節及び次節において、人間が日常最も必要とする事柄について述べてある。

79．また人間(ひと)は、われらと相い似たものを虚構し、自分の創造を失念す。人間(ひと)は云う、「朽ち果てたる骨に誰が生き返らせ得るぞ？」と。

وَضَرَبَ لَنَا مَثَلًا وَّنَسِيَ خَلْقَهٗ ۚ قَالَ مَنْ يُّحْيِ الْعِظَامَ وَهِيَ رَمِيْمٌ ﴿۷۹﴾

80．云え、「最初に彼等(ひと)を創れる者が彼等(ひと)を生き返らせん。なんとなれば、彼は一切の被造物を知悉(ちしつ)し給う。

قُلْ يُحْيِيْهَا الَّذِيْٓ اَنْشَاَهَآ اَوَّلَ مَرَّةٍ ۗ وَهُوَ بِكُلِّ خَلْقٍ عَلِيْمُ ﴿۸۰﴾

81．彼はお前たちのために生(なま)の木より火を生じ、見よ、お前たちそのおかげで火を燃やすなり。（注 34）

اِلَّذِيْ جَعَلَ لَكُمْ مِّنَ الشَّجَرِ الْاَخْضَرِ نَارًا فَاِذَآ اَنْتُمْ مِّنْهُ تُوْقِدُوْنَ ﴿۸۱﴾

82．天地(あめつち)を創造せる者が之(これ)に類するものを創造する能力(ちから)を持たざることありや？　然(しか)り、彼は最高の創造者にして、一切を知る者なり。

اَوَلَيْسَ الَّذِيْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ بِقٰدِرٍ عَلٰٓى اَنْ يَّخْلُقَ مِثْلَهُمْ ۚ بَلٰى ۗ وَهُوَ الْخَلّٰقُ الْعَلِيْمُ ﴿۸۲﴾

83．げにその支配力は、何事かを欲し給う時、ただ「在れ」と仰せになれば、すなわち、そのものは存す。（注 35）

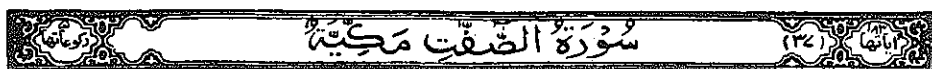
اِنَّمَآ اَمْرُهٗٓ اِذَآ اَرَادَ شَيْـًٔا اَنْ يَّقُوْلَ لَهٗ كُنْ فَيَكُوْنُ ﴿۸۳﴾

84．されば、彼の栄光を讃えまつれ、その御手(みて)の中に萬物を統(す)べ給う大権あり。而(しか)して、彼の許(もと)へ、お前たち皆いずれ連れ戻されん。

فَسُبْحٰنَ الَّذِيْ بِيَدِهٖ مَلَكُوْتُ كُلِّ شَيْءٍ وَّاِلَيْهِ تُرْجَعُوْنَ ﴿۸۴﴾

注 34　「生の木」とは、風による摩擦で枝に火の付易い樹脂性の木を指す様だ。枝の摩擦で火事が起こるという事は、言外に次の様な事を示している。信仰心の薄い者が神の預言者や神の指導者と接する時、彼等の魂は新たに蘇るのである。

注 35　「何事か欲し給う時、ただ「在れ」と仰せになればすなわち、そのものは存す。」が、クルアーンに表されれる時、常に次の意味を示すものである。非常に重大な出来事が起き、特に、神の指導者を通して重大なる道徳的、宗教的改革が実現するであろう。当節では更に、モハッマド預言者の手で大いなる変革がもたらされたとも述べている。

سُوْرَةُ الصّٰٓفّٰتِ مَكِّيَّةٌ (٣٧)

アッサー・ファート
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．列を詰めて整列する者たちにかけて、(注１)

وَالصّٰٓفّٰتِ صَفًّا ②

3．また勢いよく敵を撃退する者たちにかけて、(注２)

فَالزّٰجِرٰتِ زَجْرًا ③

4．並びに訓戒のクルアーンを読誦する者たちにかけて誓う、(注３)

فَالتّٰلِيٰتِ ذِكْرًا ④

5．げにお前たちの神は唯一にして、(注４)

اِنَّ اِلٰهَكُمْ لَوَاحِدٌ ⑤

6．天地(あめつち)の主、並びに天地(あめつち)の間の萬物の主、旭日昇天(きょくじつしょうてん)の地の主なり。(注５)

رَبُّ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا وَرَبُّ الْمَشَارِقِ ⑥

注１　(1)ワオという言葉は、当節及び次の二節では、「〜により」「私は誓う」「私は証人として召喚する。」の意味で使われている。クルアーンにおいて、神はある人物や物の宣誓を受け、彼等を証人として召喚した。通常、人が神の名の下に宣誓する時、それは、証拠の不足を補う為であり、彼の証言に信憑性を加える為である。こうする事で、他に彼の証言を立証する人物がいない時、その発言の正しさを神に証を頂こうとするのである。しかしクルアーンの宣誓はその様なものではない。クルアーンは、陳述の真実性を証明するには、単なる主張ではなく、確固たる議論が必要だとしている。時には、これ等の宣誓は明白な自然の法則を指している事もあり、暗に、明白なものから暗示的なもの、つまり精神的な法へ注意を喚起するものである。クルアーンの宣誓の今一つの目的は、預言の真実性実証にある。当節はこれに当てはまる。
(2) 戦いに加わるイスラム教徒達は、指揮者の背後で一日五回の礼拝を続けていた。

注２　イスラム教の敵と過酷な戦いを交え、彼等を撃退する事。

注３　クルアーンの朗読者。

注４　２〜５節には預言と事実が共に書かれてある。事実とは次の様なものである。いつの世にも数多居る中に、高潔にして神を畏れる人々がおり、彼等は言葉や行動で、神は一つであるという真理を証明する。又預言とは次の様なものである。現在アラビア全土は偶像崇拝と道徳の退廃に陥っているが、やがて信心深い社会が生まれ、そこでは人々は神を崇め、神への賛美を歌い国中に人々の賛美の声が響き渡り、更にはその地に神の唯一性を維持する事ができるであろう。それ故、モハッマド預言者の仲間達は、その特徴が少しこの節に述べられているが、神の唯一性の証人として召喚されるのである。しかしこの節には別の解釈もある。もし、様々な宗教の賢人の集う代表者会議が平和裏に催され、法と秩序の元、基本敵教義が冷静にして公明正大に討議されるなら、その当然の帰結として、神は一つという教義を確認する事となろう。

注５　この言葉は、イスラム教が初めに東方諸国に、次いで世界中に広まった事を示す。

7．われらは星辰を以て下天を飾り、（注６）

إِنَّا زَيَّنَّا السَّمَاءَ الدُّنْيَا بِزِينَةٍ الْكَوَاكِبِ ﴿٧﴾

8．あらゆる背逆の悪魔に対する守りとせり。（注７）

وَحِفْظًا مِّن كُلِّ شَيْطَٰنٍ مَّارِدٍ ﴿٨﴾

9．彼等は高貴なる天使らの会議を盗み聴きする能わず。すなわち八方より礫を浴せられ、

لَّا يَسَّمَّعُونَ إِلَى الْمَلَإِ الْأَعْلَىٰ وَيُقْذَفُونَ مِن كُلِّ جَانِبٍ ﴿٩﴾

10．撃退され、且つ永劫の刑罰を受けん。

دُحُورًا وَلَهُمْ عَذَابٌ وَاصِبٌ ﴿١٠﴾

11．而して、もしひそかに盗み聴きする者あらば、突き刺す火焔が之を追う。（注８）

إِلَّا مَنْ خَطِفَ الْخَطْفَةَ فَأَتْبَعَهُ شِهَابٌ ثَاقِبٌ ﴿١١﴾

12．彼等に問え、彼等が造れるものと、われらが創れるほかのものと、いずれが優りて堅牢なるか、と。われらは腰の強い粘土を以てそれ等を創りたり。

فَاسْتَفْتِهِمْ أَهُمْ أَشَدُّ خَلْقًا أَم مَّنْ خَلَقْنَا إِنَّا خَلَقْنَٰهُم مِّن طِينٍ لَّازِبٍ ﴿١٢﴾

13．汝は驚き奇しむも、彼等は嘲り笑う。（注９）

بَلْ عَجِبْتَ وَيَسْخَرُونَ ﴿١٣﴾

14．訓戒されるとも、意に介せず。

وَإِذَا ذُكِّرُوا لَا يَذْكُرُونَ ﴿١٤﴾

15．神兆を目のあたりに見ても、之を嘲り笑う。

وَإِذَا رَأَوْا آيَةً يَسْتَسْخِرُونَ ﴿١٥﴾

16．而して、彼等は云う、「埒もない、こは幻術にすぎず。

وَقَالُوا إِنْ هَٰذَا إِلَّا سِحْرٌ مُّبِينٌ ﴿١٦﴾

注６　この節は、身心並行論について述べている。つまり、物理的な空が惑星や星に支えられる様に、精神的な天空は預言者や神の指導者という精神的な存在により支えられるのである。両者はそれぞれ、精神的天空に光彩を添え、それは丁度、星や惑星が物理的な空を飾るのと同じである。

注７　サタンは二種類に分かれる。（１）偽善者の様に、イスラム社会に内在する敵。当節では彼等を“背逆のサタン”と呼ぶ。（２）外敵つまり不信心者。彼等は“拒絶されたサタン”と呼ばれている（15章18節）。

注８　神の世が天に在る限り、窃盗、強奪等の妨害を受ける事もなく安全である。しかしそれが預言者に啓示されれば、サタンや神の預言者の敵共は、預言者に誤った引用をさせてみたり、啓示から一節を抜き去ったり、啓示に多くの偽りを加える事で、啓示が誤り伝えられる様画策する。あるいは、預言者の教えを我が物として伝えようとすら試みる。しかし彼等の欺瞞は、神の指導者の手で啓示の真の姿が伝えられる時、暴かれるのである。

注９　モハッマド預言者、及びアラビアに強く根付いたイスラム教を通して、真に高潔にして神を畏れる人々が現れた事は、実際モハッマド預言者自身にとっても驚嘆すべき事柄である。

17. 何んとな！　我等は死んで、土と骨とに化したる時、再び甦らされるというか？

ءَاِذَا مِتْنَا وَكُنَّا تُرَابًا وَّعِظَامًا ءَاِنَّا لَمَبْعُوْثُوْنَ ﴿١٧﴾

18. いにしえの父祖たちもまた左様とな？」と。

اَوَ اٰبَآؤُنَا الْاَوَّلُوْنَ ﴿١٨﴾

19. 云え、「然り。その時お前たちは恥辱をこうむらん」と。

قُلْ نَعَمْ وَاَنْتُمْ دَاخِرُوْنَ ﴿١٩﴾

20. そはただ一喝なり。而して見よ、彼等たちまち瞠目せん。

فَاِنَّمَا هِيَ زَجْرَةٌ وَّاحِدَةٌ فَاِذَا هُمْ يَنْظُرُوْنَ ﴿٢٠﴾

21. 而して、云わん、「ああ、情けなや！　こは審判の日なるぞ」と。（注 10）

وَقَالُوْا يٰوَيْلَنَا هٰذَا يَوْمُ الدِّيْنِ ﴿٢١﴾

22. アッラーは云わん、「これこそ、お前たちが否認し続けた最後の判決の日なり」と。

هٰذَا يَوْمُ الْفَصْلِ الَّذِيْ كُنْتُمْ بِهٖ تُكَذِّبُوْنَ ﴿٢٢﴾

第二項

23. 天使たちは命ぜられん、「悪いことをした者、その伴侶もともども、並びに彼等がアッラー以外に崇めていたもの、

اُحْشُرُوا الَّذِيْنَ ظَلَمُوْا وَاَزْوَاجَهُمْ وَمَا كَانُوْا يَعْبُدُوْنَ ﴿٢٣﴾

24. これ等を集めて、地獄へ導け。

مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ فَاهْدُوْهُمْ اِلٰى صِرَاطِ الْجَحِيْمِ ﴿٢٤﴾

25. まて、彼等をとどめよ、彼等に訊ねたき儀あり。

وَقِفُوْهُمْ اِنَّهُمْ مَّسْـُٔوْلُوْنَ ﴿٢٥﴾

26. お前たち、互に相い助けざるは何故ぞ？」と。（注 11）

مَا لَكُمْ لَا تَنَاصَرُوْنَ ﴿٢٦﴾

27. 否、この日、彼等はただ服従する以外に途なきなり。（注 12）

بَلْ هُمُ الْيَوْمَ مُسْتَسْلِمُوْنَ ﴿٢٧﴾

28. 彼等の或る者は、互に訊ね合うべく他の者に話しかけん。

وَاَقْبَلَ بَعْضُهُمْ عَلٰى بَعْضٍ يَّتَسَآءَلُوْنَ ﴿٢٨﴾

29. 一方は云わん、「お前たちは常に右側から我等に来たりたり」と。（注 13）

قَالُوْٓا اِنَّكُمْ كُنْتُمْ تَاْتُوْنَنَا عَنِ الْيَمِيْنِ ﴿٢٩﴾

注 10　おそらくメッカ陥落の日を指すのであろう。

注 11　罪深き人々が互いに助け合う力が無いと悟れば、彼等は家へ戻るであろう。

注 12　罪人は、互いの弁護を申し出る事はなく、唯非難し合うばかりであり、この事は次節に示されている。

注 13　“右側”とは宗教を指し、当節は次の事を意味する。「貴人方は、宗教の名を借りて、我々を惑わそうと偽りを語った。」あるいは、“右側”は力を表しており、「貴人方は力を持ってして我々に近付いた。」という意味にもとれる。又、「貴人方は、正しい者だと誓いつつ我々に近付いた。」とも解釈できる。

30．他方は答えん、「然(しか)らず、お前たちこそ信者に非ざりき。

قَالُوا بَل لَّمْ تَكُونُوا مُؤْمِنِينَ ﴿٣٠﴾

31．しかも、我等はお前たちを自由にし得る者に非ざりき。要するにお前たち自身が則(のり)を逸脱(こえ)たる民なりき。

وَمَا كَانَ لَنَا عَلَيْكُم مِّن سُلْطَانٍ بَلْ كُنتُمْ قَوْمًا طَاغِينَ ﴿٣١﴾

32．今、主のお言葉が事実となりて、我等にふりかかれり。されば我等、天罰を味わねばなるまい。

فَحَقَّ عَلَيْنَا قَوْلُ رَبِّنَا إِنَّا لَذَائِقُونَ ﴿٣٢﴾

33．確かに我等はお前たちを迷わせり。したが、我等とて迷いしなれば」と。

فَأَغْوَيْنَاكُمْ إِنَّا كُنَّا غَاوِينَ ﴿٣٣﴾

34．かくてその日、彼等みな等しく刑罰を受けん。

فَإِنَّهُمْ يَوْمَئِذٍ فِي الْعَذَابِ مُشْتَرِكُونَ ﴿٣٤﴾

35．げにわれわれは、かくの如く、罪人(つみびと)を処罰す。

إِنَّا كَذَٰلِكَ نَفْعَلُ بِالْمُجْرِمِينَ ﴿٣٥﴾

36．なんとなれば、彼等「アッラーの外に神なし」と告げられたる時、尊大にも、

إِنَّهُمْ كَانُوا إِذَا قِيلَ لَهُمْ لَا إِلَٰهَ إِلَّا اللَّهُ يَسْتَكْبِرُونَ ﴿٣٦﴾

37．云えり、「我等の神々をこの気狂い詩人のために捨てよとな」と。

وَيَقُولُونَ أَئِنَّا لَتَارِكُو آلِهَتِنَا لِشَاعِرٍ مَّجْنُونٍ ﴿٣٧﴾

38．然(しか)らず、彼は真理をもたらし、遣わされたるすべての使徒の事実を証明する者なり。

بَلْ جَاءَ بِالْحَقِّ وَصَدَّقَ الْمُرْسَلِينَ ﴿٣٨﴾

39．お前たち、厳刑酷罰を味わせてやるぞ。

إِنَّكُمْ لَذَائِقُو الْعَذَابِ الْأَلِيمِ ﴿٣٩﴾

40．お前たちは自分が為せることに対してのみ返報されるべし、

وَمَا تُجْزَوْنَ إِلَّا مَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٤٠﴾

41．但し、アッラーに選ばれた僕(しもべ)等は除く。

إِلَّا عِبَادَ اللَّهِ الْمُخْلَصِينَ ﴿٤١﴾

42．それ等の者は特別なる給養を賜わるべし。

أُولَٰئِكَ لَهُمْ رِزْقٌ مَّعْلُومٌ ﴿٤٢﴾

43．すなわち、さまざまなる果物（注 14）を。加えて、栄誉を与えられん、

فَوَاكِهُ وَهُم مُّكْرَمُونَ ﴿٤٣﴾

44．至福の園にて、

فِي جَنَّاتِ النَّعِيمِ ﴿٤٤﴾

45．互に相い対して榻牀(とうしょう)に坐す。

عَلَىٰ سُرُرٍ مُّتَقَابِلِينَ ﴿٤٥﴾

注 14　信者が受けるであろう恩恵は、彼等の信仰と善行の賜物である。

46．湧き出る泉から汲める盃は一同にめぐり、

يُطَافُ عَلَيْهِمْ بِكَأْسٍ مِّنْ مَّعِيْنٍ ﴿٤٦﴾

47．その白き泡立ち、飲むと実に旨し、

بَيْضَآءَ لَذَّةٍ لِّلشّٰرِبِيْنَ ﴿٤٧﴾

48．その中には酩酊するものを含まず、体を疲れさすものもなし。

لَا فِيْهَا غَوْلٌ وَّلَا هُمْ عَنْهَا يُنْزَفُوْنَ ﴿٤٨﴾

49．彼等のそばには、眼すずやかにして臈たけた女性ら慎ましく侍るべし、（注15）

وَعِنْدَهُمْ قٰصِرٰتُ الطَّرْفِ عِيْنٌ ﴿٤٩﴾

50．さながら日射しを厭う卵の如きその美しさ。

كَاَنَّهُنَّ بَيْضٌ مَّكْنُوْنٌ ﴿٥٠﴾

51．やがて、彼等は互に話しかけ、訊ね合う。

فَاَقْبَلَ بَعْضُهُمْ عَلٰى بَعْضٍ يَّتَسَآءَلُوْنَ ﴿٥١﴾

52．中に一人の発言者ありて、云う、「我一人の友ありき、

قَالَ قَآئِلٌ مِّنْهُمْ اِنِّيْ كَانَ لِيْ قَرِيْنٌ ﴿٥٢﴾

53．その彼いつも口癖のように『お前までそれが真と信ずる類なるか？

يَّقُوْلُ اَئِنَّكَ لَمِنَ الْمُصَدِّقِيْنَ ﴿٥٣﴾

54．我等死に、土と骨とに帰したる後、我等は必ず返報せらるるとな？』と云いたり」と。

ءَاِذَا مِتْنَا وَكُنَّا تُرَابًا وَّعِظَامًا ءَاِنَّا لَمَدِيْنُوْنَ ﴿٥٤﴾

55．更に彼の発言者は左右を見まわして、云わん、「皆の衆、その男を見て御覧じろ？」と。（注16）

قَالَ هَلْ اَنْتُمْ مُّطَّلِعُوْنَ ﴿٥٥﴾

56．彼は下を見て、地獄の火の中にその友を認めん。

فَاطَّلَعَ فَرَاٰهُ فِيْ سَوَآءِ الْجَحِيْمِ ﴿٥٦﴾

57．彼は云わん、「アッラーの御名にかけて、汝は我を危うく滅ぼさんとせり。

قَالَ تَاللّٰهِ اِنْ كِدْتَّ لَتُرْدِيْنِ ﴿٥٧﴾

58．もし我が主の恩恵なかりせば、我は必ず地獄に引き立てられる者の一人なりしならん」と。

وَلَوْلَا نِعْمَةُ رَبِّيْ لَكُنْتُ مِنَ الْمُحْضَرِيْنَ ﴿٥٨﴾

注15　　イスラム教徒が、前節に書かれた恩恵を全て賜った事は、歴史が証している。彼等は楽園を手にした。彼等は王座に座り、権力を享受した。人生の汚れ無き楽しみを全て味わった。美しく貞淑な妻を娶った。そしてこの上更に「神は彼等を御気に召し、彼等は神に喜びを感じた」(58章23節)。これは彼等の最大の偉業であった。

注16　　話し手は52節で述べられた天国の人の事である。彼は、天国の他の人々に、彼の以前の不信者仲間を見たいかと尋ねるであろう。

59. 「我等は再び死なざるか、

أَفَمَا نَحْنُ بِمَيِّتِينَ ﴿٥٩﴾

60. 先の死は別として、而して刑罰を受けざるか？（注 17）

إِلَّا مَوْتَتَنَا الْأُولَىٰ وَمَا نَحْنُ بِمُعَذَّبِينَ ﴿٦٠﴾

61. げにこは最上の歓喜なり。（注 18）

إِنَّ هَٰذَا لَهُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ﴿٦١﴾

62. されば、努力する者には、かくの如きことのために努力せしめよ」

لِمِثْلِ هَٰذَا فَلْيَعْمَلِ الْعَامِلُونَ ﴿٦٢﴾

63. このように歓待されるがいいか、それともザックームの木か？（注 19）

أَذَٰلِكَ خَيْرٌ نُزُلًا أَمْ شَجَرَةُ الزَّقُّومِ ﴿٦٣﴾

64. げにわれらは悪人どもを試みんがためにこの樹を創れり。（注 20）

إِنَّا جَعَلْنَاهَا فِتْنَةً لِلظَّالِمِينَ ﴿٦٤﴾

65. げにそは地獄の底に生える樹なり。（注 21）

إِنَّهَا شَجَرَةٌ تَخْرُجُ فِي أَصْلِ الْجَحِيمِ ﴿٦٥﴾

66. 而して、その果実は恰も蛇の頭の如し。

طَلْعُهَا كَأَنَّهُ رُءُوسُ الشَّيَاطِينِ ﴿٦٦﴾

67. 彼等はそれを食わされて、腹は満たされるべし。

فَإِنَّهُمْ لَآكِلُونَ مِنْهَا فَمَالِئُونَ مِنْهَا الْبُطُونَ ﴿٦٧﴾

68. その上更に煮えたぎる汁を飲まされん。

ثُمَّ إِنَّ لَهُمْ عَلَيْهَا لَشَوْبًا مِنْ حَمِيمٍ ﴿٦٨﴾

69. 然る後、彼等は地獄に必ずや帰還させられん。

ثُمَّ إِنَّ مَرْجِعَهُمْ لَإِلَى الْجَحِيمِ ﴿٦٩﴾

70. 彼等は迷誤する先祖を見て、

إِنَّهُمْ أَلْفَوْا آبَاءَهُمْ ضَالِّينَ ﴿٧٠﴾

71. 自分たちもまたその足跡を急ぎ追い行けり。（注 22）

فَهُمْ عَلَىٰ آثَارِهِمْ يُهْرَعُونَ ﴿٧١﴾

注 17　天国の信者は、人間の大いなる運命、即ちその永遠なる生命に言及していると此処に述べられている。人間は、この世を離れた後には死を迎える事はないであろうと、彼は語る。永遠への彼の魂のさすらいは、終わり無きものであろう。

注 18　人間にとり最高の運命成就は、永遠の生命を享受し、絶えず精神的発達を遂げて行く事にある。

注 19　それを、死に到らしめる有害な食物という意味にとれば、当節は、「不信心者の呪われた木の果実を食べれば、精神的な死を被る」という意味になる。

注 20　不信心者の有害な木は、常に人々に害を与えて来た。

注 21　不信心者の木から食物を得る者は地獄の底へ落ちる。

注 22　人は古い慣習に捕らわれがちである。古臭い考えや偏見は容易には無くならない。人々が真実を受け入れる際の最大の障害は、クルアーンに繰り返し述べられている様に、新しい考えを拒む彼等自身の姿勢にある。

72．彼等以前の昔の人々も大方は罪を犯したり。

وَلَقَدْ ضَلَّ قَبْلَهُمْ أَكْثَرُ الْأَوَّلِيْنَ ﴿٧٢﴾

73．されば、われらは彼等に警告者を遣わせり。

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا فِيْهِمْ مُّنْذِرِيْنَ ﴿٧٣﴾

74．見よ、警告された者の末路が如何に悲惨なりしかを、

فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُنْذَرِيْنَ ﴿٧٤﴾

75．アッラーに選ばれた僕(しもべ)らを除いて。

إِلَّا عِبَادَ اللّٰهِ الْمُخْلَصِيْنَ ﴿٧٥﴾

第三項

76．昔、ノアがわれらに救いを求めた時、われらは彼の嘆願のすばらしき聴取者なりき。

وَلَقَدْ نَادٰىنَا نُوْحٌ فَلَنِعْمَ الْمُجِيْبُوْنَ ﴿٧٦﴾

77．われらは彼とその家族を大難から救い、

وَنَجَّيْنٰهُ وَأَهْلَهٗ مِنَ الْكَرْبِ الْعَظِيْمِ ﴿٧٧﴾

78．その子孫を唯一の生存者たらしめたり。(注 23)

وَجَعَلْنَا ذُرِّيَّتَهٗ هُمُ الْبٰقِيْنَ ﴿٧٨﴾

79．更にわれらは、後の世代の人々にまで、彼を讃えせしめたり、

وَتَرَكْنَا عَلَيْهِ فِي الْاٰخِرِيْنَ ﴿٧٩﴾

80．すなわち、「諸民族のうち特にノアの上に平安あれ」と。

سَلٰمٌ عَلٰى نُوْحٍ فِي الْعٰلَمِيْنَ ﴿٨٠﴾

81．かくの如く、われらは善行を積(つ)む者を賞す。

إِنَّا كَذٰلِكَ نَجْزِي الْمُحْسِنِيْنَ ﴿٨١﴾

82．げにノアは、篤信(とくしん)なるわれらの僕(しもべ)らの一人なりき。

إِنَّهٗ مِنْ عِبَادِنَا الْمُؤْمِنِيْنَ ﴿٨٢﴾

83．而して、われらは、その他の者どもをば溺死せしめたり。

ثُمَّ أَغْرَقْنَا الْاٰخَرِيْنَ ﴿٨٣﴾

84．げにアブラハムもまたノアと同じ信仰を有せり。

وَإِنَّ مِنْ شِيْعَتِهٖ لَإِبْرٰهِيْمَ ﴿٨٤﴾

85．アブラハムが純粋な心を以てその主の許に来たりし時を思え。

إِذْ جَآءَ رَبَّهٗ بِقَلْبٍ سَلِيْمٍ ﴿٨٥﴾

86．アブラハムはその父並びにその民に向って云えり、「お前たちが拝むもの、それは何ぞや？

إِذْ قَالَ لِأَبِيْهِ وَقَوْمِهٖ مَاذَا تَعْبُدُوْنَ ﴿٨٦﴾

注 23　ノアは人類の文明の礎を築いた。文明が発達する一族はその人口も増えその逆に、文明の後退する社会では、その周辺域においてまで人口は減って行く傾向にある。ノアの末裔は、高い文明を備え、豊富な資源を有していた為、他域へ領土を拡大し、文明の低い人々を支配した様である。低文明の人々は時の流れと共にノアの子孫に吸収され、果ては滅びてしまった。

87. お前たち、アッラーの外に虚妄の神々を求むるか？（注24）

أَئِفْكًا آلِهَةً دُونَ اللَّهِ تُرِيدُونَ ٨٦

88. ならば万物の主を、お前たちなんと考えるか？」と。

فَمَا ظَنُّكُمْ بِرَبِّ الْعٰلَمِينَ ٨٧

89. アブラハムは天を仰ぎて星辰を眺め、（注25）

فَنَظَرَ نَظْرَةً فِي النُّجُومِ ٨٨

90. 而して、云えり、「気分がすぐれぬ」と。（注26）

فَقَالَ إِنِّي سَقِيمٌ ٨٩

91. 故に彼等はアブラハムに背を向けて、去れり。

فَتَوَلَّوْا عَنْهُ مُدْبِرِينَ ٩٠

92. そこで、アブラハム密かに彼等の神々のところに行きて、云えり、「お前たち食(くわ)ぬか？

فَرَاغَ إِلَىٰ آلِهَتِهِمْ فَقَالَ أَلَا تَأْكُلُونَ ٩١

93. 如何がした、何故(なぜ)もの云わぬ？」と。（注27）

مَا لَكُمْ لَا تَنْطِقُونَ ٩٢

94. アブラハムは神々に飛びかかり、右手を以て之(これ)を打てり。（注28）

فَرَاغَ عَلَيْهِمْ ضَرْبًا بِالْيَمِينِ ٩٣

95. そこで、人々は急いでアブラハムのところへ来たれり。

فَأَقْبَلُوا إِلَيْهِ يَزِفُّونَ ٩٤

注24　人は人間の姿をした偽りの神を崇め易いものである。彼は、神の力、太陽、月、星等自然の物体、神々が木や石から切り出した無生物、更には彼自身の古臭い習慣、偏見、迷信、願望、感情等が、その偽りの神に起因すると考える。

注25　アブラハムと彼の聴衆の間で行なわれた論争は、夜更けまで続き、この話し合いが無益だと見たアブラハムは、それを早く打ち切りたいと願っていた様だ。そこで、話し合いが夜まで長引き、もう潮時であると悟らせる為に、彼は星に一瞥をくれたのである。

注26　話し合いが無駄であると考えたアブラハムは、気分がすぐれないので一人にしてくれないかと人々に告げた。又、「気分がすぐれぬ」は次の様な意味がある。(1)貴人達が偽りの神を崇拝する為、私の気分はすぐれない。(2)貴人達が偽りの神を崇めるので、私は非常に悲しい思いをしている。(3)私は貴人達の偽りの神崇拝を嫌う。

注27　生ける神の最大の特性とは、神がそのお選びになった下僕(しもべ)に語りかけられ、又彼等の祈りに耳を傾けられ、そしてそれにお答えになる事である。信者に語りかけたり、その声に耳を傾け、その祈りを受ける力が無ければ、それは死んだ神である。

注28　右手は力と強さを象徴しており、アブラハムが全力を持って偶像を打ち、粉々に砕いてしまったと、この節は示している。又、右とは誓いを意味しているので、当節は、「アブラハムが自らの誓いを果たす為に偶像を打ち砕いた」ことを表しているともいえよう（21章58節）。

96. アブラハムは云えり、「お前たちは己れが刻(きざ)んだものを拝するか、

قَالَ اَتَعْبُدُوْنَ مَا تَنْحِتُوْنَ ﴿٩٦﴾

97. お前たちを創り、またお前たちがこしらえたものも本来創造せるお方は、アッラーに非ざるか？」と。（注 29）

وَاللّٰهُ خَلَقَكُمْ وَمَا تَعْمَلُوْنَ ﴿٩٧﴾

98. 彼等は云えり、「彼のために小屋を建て、その火の中に彼を投げ込め」と。

قَالُوا ابْنُوْا لَهٗ بُنْيَانًا فَاَلْقُوْهُ فِي الْجَحِيْمِ ﴿٩٨﴾

99. かくの如く、彼等はアブラハムに悪だくみを策したれば、われらは彼等を痛烈に辱(はずか)しめたり。（注 30）

فَاَرَادُوْا بِهٖ كَيْدًا فَجَعَلْنٰهُمُ الْاَسْفَلِيْنَ ﴿٩٩﴾

100. アブラハムは云えり、「我は主の許(もと)に行かん。主は必ずや我を導かん」と。

وَقَالَ اِنِّيْ ذَاهِبٌ اِلٰى رَبِّيْ سَيَهْدِيْنِ ﴿١٠٠﴾

101. 而(しか)して、彼祈りて云えり、「主よ、我に義(ただ)しい息子を授けたまえ」と。

رَبِّ هَبْ لِيْ مِنَ الصّٰلِحِيْنَ ﴿١٠١﴾

102. 故にわれらは、寛容なる一男児の朗報をアブラハムに伝えたり。

فَبَشَّرْنٰهُ بِغُلٰمٍ حَلِيْمٍ ﴿١٠٢﴾

103. さて、その子が、アブラハムと共に走り廻れる年頃に成長した時、アブラハムは云えり、「愛する息子よ、我は汝を犠牲に供えることを夢に見たり。されば、汝、之をどう思うか？」と。息子は答えて、云えり、「父上よ、命ぜられた如くなしたまえ。アッラーの思し召しなら、我よく耐え忍ぶ者なることを父上に証明せん」と。（注 31）

فَلَمَّا بَلَغَ مَعَهُ السَّعْيَ قَالَ يٰبُنَيَّ اِنِّيْ اَرٰى فِي الْمَنَامِ اَنِّيْ اَذْبَحُكَ فَانْظُرْ مَاذَا تَرٰى ۚ قَالَ يٰاَبَتِ افْعَلْ مَا تُؤْمَرُ ۫ سَتَجِدُنِيْ اِنْ شَآءَ اللّٰهُ مِنَ الصّٰبِرِيْنَ ﴿١٠٣﴾

104. かくて、両名は神意に従い、アブラハムが息子の額を地に伏せし時、

فَلَمَّآ اَسْلَمَا وَتَلَّهٗ لِلْجَبِيْنِ ﴿١٠٤﴾

105. われらはアブラハムに声かけて、云えり、「アブラハムよ、

وَنَادَيْنٰهُ اَنْ يّٰاِبْرٰهِيْمُ ﴿١٠٥﴾

注 29　貴人方の道具となる手、足。

注 30　アブラハムの敵達は、彼に刃向かった為にその計画を妨害され、深い屈辱を味わった。

注 31　アブラハムが、神の命令に従い、二人の息子イシュマエルとイサクのどちらを生けにえに捧げたかという点で、クルアーンと聖書は意見を異にしている。聖書はイサクであったと述べ（創世記 22 章 2 節）　一方クルアーンはイシュマエルであったと明記している。（詳細は英語版参照のこと）

106．汝はすでにその夢の約束を履行せり」と。かくの如く、われらは善事をなすものを賞す。

قَدْ صَدَّقْتَ الرُّءْيَا ۚ إِنَّا كَذَٰلِكَ نَجْزِي الْمُحْسِنِينَ ﴿١٠٦﴾

107．げにこは明らかな試練(こころみ)なりき。

إِنَّ هَٰذَا لَهُوَ الْبَلَٰٓؤُا الْمُبِينُ ﴿١٠٧﴾

108．われらはすばらしい犠牲を以て彼の息子を贖(あなが)いたり。（注 32）

وَفَدَيْنَٰهُ بِذِبْحٍ عَظِيمٍ ﴿١٠٨﴾

109．而して更に、われらは後の世代の人々にまで彼を讃(たた)えせしめたり、（注 33）

وَتَرَكْنَا عَلَيْهِ فِي الْآخِرِينَ ﴿١٠٩﴾

110．すなわち、「アブラハムの上に平安あれ」と。

سَلَٰمٌ عَلَىٰٓ إِبْرَٰهِيمَ ﴿١١٠﴾

111．かくの如く、われらは善行を積(つ)む者を賞す。

كَذَٰلِكَ نَجْزِي الْمُحْسِنِينَ ﴿١١١﴾

112．げにアブラハムは、篤信(とくしん)なるわれらの僕(しもべ)の一人なりき。

إِنَّهُۥ مِنْ عِبَادِنَا الْمُؤْمِنِينَ ﴿١١٢﴾

113．またわれらは、アブラハムに、義(ただ)しい人間の一人たる預言者イサクの朗報を伝えたり。

وَبَشَّرْنَٰهُ بِإِسْحَٰقَ نَبِيًّا مِّنَ الصَّٰلِحِينَ ﴿١١٣﴾

114．その上われらは、アブラハムとイサクを祝福せり。然(しか)れども、彼等の子孫の中には善行者もあれば罪人(つみびと)もあり。（注 34）

وَبَٰرَكْنَا عَلَيْهِ وَعَلَىٰٓ إِسْحَٰقَ ۚ وَمِن ذُرِّيَّتِهِمَا مُحْسِنٌ وَظَالِمٌ لِّنَفْسِهِۦ مُبِينٌ ﴿١١٤﴾ ع

第四項

115．げにわれらは、モーゼとアロンに恩恵を施したり。

وَلَقَدْ مَنَنَّا عَلَىٰ مُوسَىٰ وَهَٰرُونَ ﴿١١٥﴾

116．すなわち、われらは、彼等両名とその民を大難より救い出したり。

وَنَجَّيْنَٰهُمَا وَقَوْمَهُمَا مِنَ الْكَرْبِ الْعَظِيمِ ﴿١١٦﴾

注 32　イシュマエルを生けにえとして捧げる為のアブラハムの準備は、ハジ（巡礼）の儀式に欠かせないイスラムの生けにえの法に従い行われた。この節では、アブラハムの時代に流行っていた人間の生けにえを廃し、代わりに動物の生けにえを捧げたと暗示しているのであろう。

注 33　アブラハムをして後世に名を残せしめたのは、三大宗教であるイスラム教、キリスト教、ユダヤ教、の弟子達よりも、遥かに偉大な教訓を授けられたからであり、この事は、この偉大なる創始者を先祖と仰ぐ人々にとり誇りとなっている。

注 34　“われらは、アブラハムとイサクを祝福せり。”この言葉は、神がイシュマエルを通して、アブラハムの子孫にお与えになった祝福を示している。イサクは、別に、その名前で書かれてある。

117. 而して、われらは彼等を援け、勝利者たらしめたり。

وَنَصَرْنٰهُمْ فَكَانُوْا هُمُ الْغٰلِبِيْنَ ﴿١١٧﴾

118. その上われらは、事理を明らかにする経典を彼等に授けたり。

وَاٰتَيْنٰهُمَا الْكِتٰبَ الْمُسْتَبِيْنَ ﴿١١٨﴾

119. 而して、彼等を正しい道に導けり。

وَهَدَيْنٰهُمَا الصِّرَاطَ الْمُسْتَقِيْمَ ﴿١١٩﴾

120. 而して更に、われらは後の世代の人々にまで彼等を讃えせしめたり、

وَتَرَكْنَا عَلَيْهِمَا فِي الْاٰخِرِيْنَ ﴿١٢٠﴾

121. すなわち、「モーゼとアロンの上に平安あれ！」と。

سَلٰمٌ عَلٰى مُوْسٰى وَهٰرُوْنَ ﴿١٢١﴾

122. かくの如く、われらは善事をなす者を賞す。

اِنَّا كَذٰلِكَ نَجْزِي الْمُحْسِنِيْنَ ﴿١٢٢﴾

123. げに彼等両名とも篤信なるわれらの僕なりき。

اِنَّهُمَا مِنْ عِبَادِنَا الْمُؤْمِنِيْنَ ﴿١٢٣﴾

124. 次にエリアもまた確かに、使徒の一人なりき。(注 35)

وَاِنَّ اِلْيَاسَ لَمِنَ الْمُرْسَلِيْنَ ﴿١٢٤﴾

125. エリアはその民に向って云えり、「お前たち神を畏れざるか？

اِذْ قَالَ لِقَوْمِهٖۤ اَلَا تَتَّقُوْنَ ﴿١٢٥﴾

126. バールを拝んで、最高の創造者、(注 36)

اَتَدْعُوْنَ بَعْلًا وَّتَذَرُوْنَ اَحْسَنَ الْخَالِقِيْنَ ﴿١٢٦﴾

127. すなわち、お前たちの主であり、祖先の主たるアッラーを捨てる気か？」と。

اللّٰهَ رَبَّكُمْ وَرَبَّ اٰبَآئِكُمُ الْاَوَّلِيْنَ ﴿١٢٧﴾

128. 然るに、彼等、エリアを嘘つきとして遇したれば、そのなせることの申し開きのため、いずれ神の御前に曳き出されん、

فَكَذَّبُوْهُ فَاِنَّهُمْ لَمُحْضَرُوْنَ ﴿١٢٨﴾

129. 但しアッラーに選ばれた僕らは除く。

اِلَّا عِبَادَ اللّٰهِ الْمُخْلَصِيْنَ ﴿١٢٩﴾

130. 而して、われらは、後の世代の人々にまで彼を讃えせしめたり、

وَتَرَكْنَا عَلَيْهِ فِي الْاٰخِرِيْنَ ﴿١٣٠﴾

注 35　エリヤは紀元前 900 年頃存在した。彼はヨルダンの東岸にあるギリードで生まれた。(Jew. Enc,列王上；17 章 1 節)

注 36　バールは、預言者エリヤの聴衆の崇拝するひとつの偶像の名であった。この人々は太陽を崇めた。バールは太陽神でありシリアのある町の人々は、それを崇めていた又、その町は、現在はシリアにありバーラ・ベックと呼ばれる。

131. すなわち、「エリアとその民の上に平安あれ」と。

سَلٰمٌ عَلٰٓى اِلْ يَاسِيْنَ ۝١٣١

132. かくの如く、われらは善事をなす者を賞す。

اِنَّا كَذٰلِكَ نَجْزِى الْمُحْسِنِيْنَ ۝١٣٢

133. げに彼は篤信(とくしん)なるわれらの僕(しもべ)らの一人なりき。

اِنَّهٗ مِنْ عِبَادِنَا الْمُؤْمِنِيْنَ ۝١٣٣

134. 次に、ロトもまた確かに、使徒の一人なりき。

وَاِنَّ لُوْطًا لَّمِنَ الْمُرْسَلِيْنَ ۝١٣٤

135. われらはロトとその家族を救いたり、

اِذْ نَجَّيْنٰهُ وَاَهْلَهٗٓ اَجْمَعِيْنَ ۝١٣٥

136. 但し後に残れる連中の中に入りし一老女を除いて。

اِلَّا عَجُوْزًا فِى الْغٰبِرِيْنَ ۝١٣٦

137. 然(しか)る後に、われらは他の者を悉く滅ぼせり。

ثُمَّ دَمَّرْنَا الْاٰخَرِيْنَ ۝١٣٧

138. げにお前たちはその廃墟のそばを、朝な、

وَاِنَّكُمْ لَتَمُرُّوْنَ عَلَيْهِمْ مُّصْبِحِيْنَ ۝١٣٨

139. 夕なに、往き来す。これでも、なぜお前たちわからざるか？ (注 37)

وَبِالَّيْلِ اَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ۝١٣٩

第五項

140. 次に、ヨナもまた確かに、使徒の一人なりき。 (注 38)

وَاِنَّ يُوْنُسَ لَمِنَ الْمُرْسَلِيْنَ ۝١٤٠

141. 彼貨物を満載せる船に逃れし時、(注 39)

اِذْ اَبَقَ اِلَى الْفُلْكِ الْمَشْحُوْنِ ۝١٤١

142. 水夫と共に籤(くじ)を抽(ひ)き、負けたり。

فَسَاهَمَ فَكَانَ مِنَ الْمُدْحَضِيْنَ ۝١٤٢

143. 自責の念にかられている時、一魚ありて彼を呑めり。

فَالْتَقَمَهُ الْحُوْتُ وَهُوَ مُلِيْمٌ ۝١٤٣

注 37　ロトが伝道に歩いた町ソドムそしてゴモラは、アラブの隊商が昼夜通った、シリアからアラビアへ抜ける街道沿いにあった。クルアーンの他の箇所では、これ等の町は、今でも存在している道にある(15 章 77 節)と記されている。

注 38　ヨナはイスラエルの預言者で、ジェロボム二世、又はジェホハズの治世であった九世紀に存在した。6 章 87 節及び 88 節も参照の事。

注 39　聖書によれば、ヨナは神よりニネベに呪いをかける様命ぜられたにもかかわらず彼は神の意に従わずタルシーシへ逃れた(ヨナ書；1 章 3 節)。クルアーンは、この聖書の記述は神の預言者を非難するものだとして、異議を唱えている。むしろ、クルアーンはヨナの人々に対し怒りを表しており、彼等が神のお告げを拒んだ為に、ヨナは彼等から逃れたのである。

144. 彼もし神を讃える者ならざりせば、

فَلَوْلَآ أَنَّهُۥ كَانَ مِنَ ٱلْمُسَبِّحِينَ ﴿١٤٤﴾

145. 必ずや審判の日まで魚腹の中に居たりしならん。

لَلَبِثَ فِى بَطْنِهِۦٓ إِلَىٰ يَوْمِ يُبْعَثُونَ ﴿١٤٥﴾

146. 然るに、われらは、彼を荒涼たる岸辺に打ち上げたり。而して、彼病みぬ。

فَنَبَذْنَٰهُ بِٱلْعَرَآءِ وَهُوَ سَقِيمٌ ﴿١٤٦﴾

147. されば、われらは、彼の上に瓢の木を繁らせり。

وَأَنۢبَتْنَا عَلَيْهِ شَجَرَةً مِّن يَقْطِينٍ ﴿١٤٧﴾

148. 而して、われらは、彼を使徒として、十万人、いやそれ以上の人々のところへ遣わしたり。

وَأَرْسَلْنَٰهُ إِلَىٰ مِا۟ئَةِ أَلْفٍ أَوْ يَزِيدُونَ ﴿١٤٨﴾

149. 而して、彼等みな信じたれば、われらは彼等に暫時生を楽しむことを許したり。

فَـَٔامَنُوا۟ فَمَتَّعْنَٰهُمْ إِلَىٰ حِينٍ ﴿١٤٩﴾

150. 彼等（注 40）に尋ねよ、彼等の主は娘を有し、彼等は息子を有すと云うかと。（注 41）

فَٱسْتَفْتِهِمْ أَلِرَبِّكَ ٱلْبَنَاتُ وَلَهُمُ ٱلْبَنُونَ ﴿١٥٠﴾

151. また、われらは天使たちを女性に創りしか、彼等之を目撃したと云うかと。

أَمْ خَلَقْنَا ٱلْمَلَٰٓئِكَةَ إِنَٰثًا وَهُمْ شَٰهِدُونَ ﴿١٥١﴾

152. 彼等の云うところは、歴然たる作りごとなり、

أَلَآ إِنَّهُم مِّنْ إِفْكِهِمْ لَيَقُولُونَ ﴿١٥٢﴾

153. 「アッラーが子を生めり」とは。彼等は間違いなく嘘つきなり。

وَلَدَ ٱللَّهُ وَإِنَّهُمْ لَكَٰذِبُونَ ﴿١٥٣﴾

154. アッラーは息子よりもむしろ娘を選びたるか？

أَصْطَفَى ٱلْبَنَاتِ عَلَى ٱلْبَنِينَ ﴿١٥٤﴾

155. 如何がした？　汝等どう判断するか？

مَا لَكُمْ كَيْفَ تَحْكُمُونَ ﴿١٥٥﴾

156. お前たちまだ反省せざるか？

أَفَلَا تَذَكَّرُونَ ﴿١٥٦﴾

157. それとも、明らかな証拠でもあるのか？

أَمْ لَكُمْ سُلْطَٰنٌ مُّبِينٌ ﴿١٥٧﴾

158. もしお前たちの言葉が本当なら、お前たちの経典を出して見せよ。

فَأْتُوا۟ بِكِتَٰبِكُمْ إِن كُنتُمْ صَٰدِقِينَ ﴿١٥٨﴾

注 40　不信心者のメッカの人々。

注 41　アラブの人々は、神の力を天使の為せる業とし、天使達が神の娘であると信じた。この事が此所で偶像崇拝として非難されている。

159.　彼等は、アッラーと妖霊との間に血縁ありと主張す。然るに、妖霊は審判のため神の御前に曳き出される身なることを承知す。

وَجَعَلُوا بَيْنَهُ وَبَيْنَ الْجِنَّةِ نَسَبًا وَلَقَدْ عَلِمَتِ الْجِنَّةُ إِنَّهُمْ لَمُحْضَرُونَ (١٥٩)

160.　聖なるかなアッラー、彼等が彼のせいにするものから超越する御方。

سُبْحَانَ اللَّهِ عَمَّا يَصِفُونَ (١٦٠)

161.　なれど、アッラーに選ばれた僕らは、かくの如きことはなさず。

إِلَّا عِبَادَ اللَّهِ الْمُخْلَصِينَ (١٦١)

162.　お前たち、並びにお前たちが崇拝するものは、

فَإِنَّكُمْ وَمَا تَعْبُدُونَ (١٦٢)

163.　アッラーに逆らって何人も迷わすことを得ず、

مَا أَنْتُمْ عَلَيْهِ بِفَاتِنِينَ (١٦٣)

164.　地獄の火で焼かれる者を除いて。

إِلَّا مَنْ هُوَ صَالِ الْجَحِيمِ (١٦٤)

165.　天使たちは云う、「我等のうち一人として定めされた部署を持たざる者はなし。(注42)

وَمَا مِنَّا إِلَّا لَهُ مَقَامٌ مَعْلُومٌ (١٦٥)

166.　我等は列をなして整列し、

وَإِنَّا لَنَحْنُ الصَّافُّونَ (١٦٦)

167.　アッラーの栄光を讃え奉る」と。

وَإِنَّا لَنَحْنُ الْمُسَبِّحُونَ (١٦٧)

168.　彼等は常々かく云えり、

وَإِنْ كَانُوا لَيَقُولُونَ (١٦٨)

169.　「もし我等が古代の人々のように聖典を有したならば、

لَوْ أَنَّ عِنْدَنَا ذِكْرًا مِنَ الْأَوَّلِينَ (١٦٩)

170.　我等は確かにアッラーの選ばれた僕になりしものを」と。

لَكُنَّا عِبَادَ اللَّهِ الْمُخْلَصِينَ (١٧٠)

171.　ところが、いざクルアーンが彼等に降ると、彼等は之を信ぜず。されど、彼等はやがて思い知らん。

فَكَفَرُوا بِهِ فَسَوْفَ يَعْلَمُونَ (١٧١)

172.　げにわれらの言葉はすでに使徒たるわれらの僕らに告げ知らせたり、

وَلَقَدْ سَبَقَتْ كَلِمَتُنَا لِعِبَادِنَا الْمُرْسَلِينَ (١٧٢)

173.　使徒たちが救援されるのは確かなり、

إِنَّهُمْ لَهُمُ الْمَنْصُورُونَ (١٧٣)

注42　この言葉は、ある人々の言う様に、天使を指すのかもしれない。他の人々によれば、それは信者について述べている事になる。

174．また勝利するはわれらの軍勢なりと。	وإن جندنا لهم الغلبون
175．されば、汝、しばらく彼等を顧みるな。	فتول عنهم حتى حين
176．而して、彼等を見守れ、彼等に己が末路を見せしめんがために。	وأبصرهم فسوف يبصرون
177．なんと、彼等はわれらが刑罰を催促するか？	أفبعذابنا يستعجلون
178．されど、いざそれが彼等の中庭に降る時、そは警告された人々には禍なる朝なるべし。（注 43）	فإذا نزل بساحتهم فساء صباح المنذرين
179．されば、汝、しばらく彼等を顧みるな。	وتول عنهم حتى حين
180．而して、見守れ、彼等に己が末路を見せしめんがために。	وأبصر فسوف يبصرون
181．聖なるかな汝の主、栄光の主、彼等が主張するものの上に超在す。	سبحن ربك رب العزة عما يصفون
182．使徒たちの上に平安あれ！（注 44）	وسلم على المرسلين
183．讃えあれアッラー、万物の主。	والحمد لله رب العلمين

注 43　この言葉はメッカの人々にとり最悪の日となった、メッカ陥落の日を指している様だ。この時、総勢一万のイスラム軍がメッカの郊外に押し寄せた。メッカの人々による反イスラムの企ては悉く失敗に終わり、信者の側に輝かしい勝利がもたらされた為、彼等の屈辱の器は溢れんばかりになった。

注 44　この言葉は、全預言者及び神の使者を代表するモハッマド預言者を指している様だ。

سُوْرَةُ صٓ مَكِّيَّةٌ　(٣٨)

サード
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．サード。※訓戒に満ちたるクルアーンにかけて誓う、そはわれらが啓示の言葉なり。
※真(まこと)の神

صٓ وَالْقُرْاٰنِ ذِى الذِّكْرِ ②

3．信ぜざる者どもは間違ったうぬぼれと憎しみに深く染まる。

بَلِ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا فِىْ عِزَّةٍ وَّشِقَاقٍ ③

4．彼等以前に、われらは如何に多くの世代を滅ぼしたことか！　彼等は慈悲を嘆願したけれど、すでに遅く、逃れる間なかりき。

كَمْ اَهْلَكْنَا مِنْ قَبْلِهِمْ مِّنْ قَرْنٍ فَنَادَوْا وَّلَاتَ حِيْنَ مَنَاصٍ ④

5．彼等は自分たちの中から警告者が登場せることを驚き怪しむ。而(しか)して、不信心者どもは云えり、「こは大山師の妖術つかいなり。

وَعَجِبُوْٓا اَنْ جَآءَهُمْ مُّنْذِرٌ مِّنْهُمْ وَقَالَ الْكٰفِرُوْنَ هٰذَا سٰحِرٌ كَذَّابٌ ⑤

6．あの男は諸々(もろもろ)の神々を、唯一の神となすとな？　こはまことに奇怪なことなり」と。

اَجَعَلَ الْاٰلِهَةَ اِلٰهًا وَّاحِدًا اِنَّ هٰذَا لَشَىْءٌ عُجَابٌ ⑥

7．彼等の長老たちは触れ歩けり、「往け、お前たちの神々をあくまでも護持せよ。こは企(たく)まれたることなり。

وَانْطَلَقَ الْمَلَاُ مِنْهُمْ اَنِ امْشُوْا وَاصْبِرُوْا عَلٰٓى اٰلِهَتِكُمْ اِنَّ هٰذَا لَشَىْءٌ يُّرَادُ ⑦

8．我等は今までの宗教に、かくの如きことあるを聞かざるなり。こはただの作り話にすぎず。

مَا سَمِعْنَا بِهٰذَا فِى الْمِلَّةِ الْاٰخِرَةِ اِنْ هٰذَآ اِلَّا اخْتِلَاقٌ ⑧

9．我等のうちあの男にのみ訓戒が降(くだ)りたるか？」と。否、彼等はわが訓戒を疑う。彼等はまだわが懲罰を味わざるが故に。

ءَاُنْزِلَ عَلَيْهِ الذِّكْرُ مِنْ بَيْنِنَا بَلْ هُمْ فِىْ شَكٍّ مِّنْ ذِكْرِىْ بَلْ لَّمَّا يَذُوْقُوْا عَذَابِ ⑨

10．偉力者、厚施者たる汝の主、その慈悲の宝庫は彼等のものなるか？

اَمْ عِنْدَهُمْ خَزَآئِنُ رَحْمَةِ رَبِّكَ الْعَزِيْزِ الْوَهَّابِ ⑩

11．また、天地(あめつち)とその間にある一切の大権は彼等のものなるか？　果して然(しか)らば、彼等をして勝手に手だてをさせて、登らしめよ。（注１）

أَمْ لَهُمْ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا ۚ فَلْيَرْتَقُوا فِي الْأَسْبَابِ ١١

12．彼等は、そこにて敗退せん同盟軍なり。（注２）

جُنْدٌ مَّا هُنَالِكَ مَهْزُومٌ مِّنَ الْأَحْزَابِ ١٢

13．彼等以前にも、ノアの民、アード並びに強大なるファラオの民が使徒たちを偽り者として遇したり。

كَذَّبَتْ قَبْلَهُمْ قَوْمُ نُوحٍ وَّعَادٌ وَّفِرْعَوْنُ ذُو الْأَوْتَادِ ١٣

14．またサムード族やロトの民、並びに森の住人たち、これらはみな使徒たちに敵対せる同盟者なりき。

وَثَمُودُ وَقَوْمُ لُوطٍ وَّأَصْحٰبُ لْـَٔيْكَةِ ۚ أُولٰٓئِكَ الْأَحْزَابُ ١٤

15．彼等は皆、使徒たちを偽り者として遇したれば、わが懲罰は当然彼等に襲いかかりたり。

إِنْ كُلٌّ إِلَّا كَذَّبَ الرُّسُلَ فَحَقَّ عِقَابِ ١٥

第二項

16．而(しか)して、これ等の者どもはただ一声を待つばかり、もはや一瞬の猶予もありはせぬ。

وَمَا يَنْظُرُ هٰٓؤُلَآءِ إِلَّا صَيْحَةً وَّاحِدَةً مَّا لَهَا مِنْ فَوَاقٍ ١٦

17．彼等は云う、「主よ、清算の日に先立ちて、我等の頂戴する分を急いで下したまえ」と。

وَقَالُوا رَبَّنَا عَجِّلْ لَّنَا قِطَّنَا قَبْلَ يَوْمِ الْحِسَابِ ١٧

18．彼等が何を云おうと耐え忍べ、而(しか)して、われらの僕(しもべ)、実力者ダビデを憶い起せ。げに彼は常に神に頼りたり。

اِصْبِرْ عَلٰى مَا يَقُولُونَ وَاذْكُرْ عَبْدَنَا دَاوٗدَ ذَا الْأَيْدِ ۚ إِنَّهٗٓ أَوَّابٌ ١٨

19．われらは山々をダビデに従わせしむ。すなわち、山々はダビデと共に、朝な夕な神の讃美を賀し奉りたり。

إِنَّا سَخَّرْنَا الْجِبَالَ مَعَهٗ يُسَبِّحْنَ بِالْعَشِيِّ وَالْإِشْرَاقِ ١٩

20．また、鳥たちも呼び集めてダビデに従わせしむれば、皆群れ来たりて、神に頼りたり。

وَالطَّيْرَ مَحْشُورَةً ۚ كُلٌّ لَّهٗٓ أَوَّابٌ ٢٠

注１　　不信心者達が、モハッマド預言者に逆らうため財産を集めて増やしても無駄である。

注２　　この節には、預言と挑戦が同時に示されている。挑戦とは悪の勢力に向けられたものである。彼等は、イスラム軍の前進を阻もうと、富をかき集め、強力な連合軍を作った。又、預言とは次の様なものである。もし不信心者の連合軍がイスラム軍を阻止するなら、不名誉な完敗を喫すであろう。この明白な預言は、堀りの戦いで文字通り成就された。

21. 更にわれらは、ダビデの王権を強化し、知恵と断固たる判断とを与えたり。

وَشَدَدْنَا مُلْكَهُ وَآتَيْنَاهُ الْحِكْمَةَ وَفَصْلَ
الْخِطَابِ ﴿٢١﴾

22. 汝は、論争者がダビデの私室の壁を乗り越えて入り来たれる物語を、聞きたることあるか？

وَهَلْ أَتَاكَ نَبَأُ الْخَصْمِ إِذْ تَسَوَّرُوا الْمِحْرَابَ ﴿٢٢﴾

23. ダビデは彼等が入り来たるを見て、驚けり。彼等は云えり、「心配めさるな。我等両名は訴訟の当事者なり。いずれかが相手に不正をなしたれば、我等の間を公正に裁きたまえ、不公平なきよう、我等を正道に導き給え。

إِذْ دَخَلُوا عَلَىٰ دَاوُدَ فَفَزِعَ مِنْهُمْ قَالُوا لَا تَخَفْ
خَصْمَانِ بَغَىٰ بَعْضُنَا عَلَىٰ بَعْضٍ فَاحْكُمْ بَيْنَنَا
بِالْحَقِّ وَلَا تُشْطِطْ وَاهْدِنَا إِلَىٰ سَوَاءِ الصِّرَاطِ ﴿٢٣﴾

24. これなるは我が兄なり。彼は九十九頭の牝羊を所有す。然るに、我が牝羊はただの一頭なり。にもかかわらず、兄は『その牝羊を我に委ねよ』と横車を押せり」と。

إِنَّ هَٰذَا أَخِي لَهُ تِسْعٌ وَتِسْعُونَ نَعْجَةً وَلِيَ
نَعْجَةٌ وَاحِدَةٌ فَقَالَ أَكْفِلْنِيهَا وَعَزَّنِي
فِي الْخِطَابِ ﴿٢٤﴾

25. ダビデは云えり、「自分の牝羊に汝の牝羊を併せ加えんとする彼の要求は、確かに不当なり。げに共同で仕事する者の多くは、互に非をなす。ただ神を信じて善行を積む者を除いて。然るに、そのような者は実に少し」と。時に、ダビデはわれらが彼を試みたることに気づき、主に宥恕を請い、礼拝にひれ伏し、主にお縋りせり。

قَالَ لَقَدْ ظَلَمَكَ بِسُؤَالِ نَعْجَتِكَ إِلَىٰ نِعَاجِهِ
وَإِنَّ كَثِيرًا مِنَ الْخُلَطَاءِ لَيَبْغِي بَعْضُهُمْ عَلَىٰ بَعْضٍ
إِلَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ وَقَلِيلٌ مَا هُمْ
وَظَنَّ دَاوُدُ أَنَّمَا فَتَنَّاهُ فَاسْتَغْفَرَ رَبَّهُ وَخَرَّ رَاكِعًا
وَأَنَابَ ﴿٢٥﴾

26. されば、われらは彼の怠慢を赦したり。げに彼はわれらの側近くの高い位階と素晴らしい帰処を得たり。（注3）

فَغَفَرْنَا لَهُ ذَٰلِكَ وَإِنَّ لَهُ عِنْدَنَا لَزُلْفَىٰ وَحُسْنَ
مَآبٍ ﴿٢٦﴾

27. かくてわれらはダビデに云えり、「ダビデよ、われらは汝を、地上に於けるわれらの代理者となせり。されば、人と人の間を公平に裁判し、アッラーの道を踏みはずさぬようくだらぬ欲望に従うなかれ」と。げに

يَا دَاوُدُ إِنَّا جَعَلْنَاكَ خَلِيفَةً فِي الْأَرْضِ فَاحْكُمْ
بَيْنَ النَّاسِ بِالْحَقِّ وَلَا تَتَّبِعِ الْهَوَىٰ فَيُضِلَّكَ
عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ إِنَّ الَّذِينَ يَضِلُّونَ عَنْ سَبِيلِ

注3　　この言葉は、ダビデには道徳上の欠点や精神的弱さのなかった事を示しており、聖書が彼に負わせた姦通の罪を事実上否定している（サムエル書下、11章4節、5節）。

アッラーの道を踏みはずす者は、清算の日を忘れたが故に、必ず酷い罰を被らん。

ٱللَّهِ لَهُمْ عَذَابٌ شَدِيدٌۢ بِمَا نَسُوا۟ يَوْمَ ٱلْحِسَابِ ٢٦

第三項

28. われらは天地とその間に在る一切を、徒に創造したに非ず。そは不信心者どもの考えなり。禍なるかな不信心者ども、業火の罰故に。

وَمَا خَلَقْنَا ٱلسَّمَآءَ وَٱلْأَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا بَٰطِلًا ۚ ذَٰلِكَ ظَنُّ ٱلَّذِينَ كَفَرُوا۟ ۚ فَوَيْلٌ لِّلَّذِينَ كَفَرُوا۟ مِنَ ٱلنَّارِ ٢٧

29. われらが、信じて善行を積む者とこの世で不正を働く者とを、同じように遇すると思うか？　義しい人を、邪悪な者と同じように遇すると思うか？

أَمْ نَجْعَلُ ٱلَّذِينَ ءَامَنُوا۟ وَعَمِلُوا۟ ٱلصَّٰلِحَٰتِ كَٱلْمُفْسِدِينَ فِى ٱلْأَرْضِ أَمْ نَجْعَلُ ٱلْمُتَّقِينَ كَٱلْفُجَّارِ ٢٨

30. こは汝に啓示せる経典なり、祝福に満ちて、人々をしてその諸節を瞑想せしめ、また理解力を賦与せられた人々をして之に心を留めしめんがためのもの。(注４)

كِتَٰبٌ أَنزَلْنَٰهُ إِلَيْكَ مُبَٰرَكٌ لِّيَدَّبَّرُوٓا۟ ءَايَٰتِهِۦ وَلِيَتَذَكَّرَ أُو۟لُوا۟ ٱلْأَلْبَٰبِ ٢٩

31. われらはソロモンをダビデに与えたり。優れたる僕なりき。彼は常にわれらに頼る。

وَوَهَبْنَا لِدَاوُۥدَ سُلَيْمَٰنَ ۚ نِعْمَ ٱلْعَبْدُ ۖ إِنَّهُۥٓ أَوَّابٌ ٣٠

32. 或る日の夕まぐれ、駿馬がソロモンに献上せられたる時、

إِذْ عُرِضَ عَلَيْهِ بِٱلْعَشِىِّ ٱلصَّٰفِنَٰتُ ٱلْجِيَادُ ٣١

33. 彼は云えり、「我は主を思うが故に、馬を好む」と。彼それらの馬に夢中になりたれば、馬が垂幕の背後に隠れたる時、云えり、(注５)

فَقَالَ إِنِّىٓ أَحْبَبْتُ حُبَّ ٱلْخَيْرِ عَن ذِكْرِ رَبِّى حَتَّىٰ تَوَارَتْ بِٱلْحِجَابِ ٣٢

34. 「馬を連れ戻せ」と。かくて、ソロモンは駿馬の脚や頸筋を撫で始めたり。(注６)

رُدُّوهَا عَلَىَّ ۖ فَطَفِقَ مَسْحًۢا بِٱلسُّوقِ وَٱلْأَعْنَاقِ ٣٣

35. また、われらはソロモンを試みて、その王座に見せかけの肉体を据えたり。やがて、

وَلَقَدْ فَتَنَّا سُلَيْمَٰنَ وَأَلْقَيْنَا عَلَىٰ كُرْسِيِّهِۦ

注４　クルアーンには、全宗教の基本的、普遍的教義、及び永遠不滅の教えが表されており、人間の必要とするものを十二分に備えている。

注５　神はソロモンに力と富を授けられた。彼は広大な王国を支配し、その為強力な軍隊を持たねばならなかった。騎兵隊が彼の軍の主力だったので、当然彼は血統の良い馬を愛好した。ソロモンの馬を愛する気持は、競馬の愛好者や馬の繁殖のプロのそれとは違った。神の大義の戦いに馬は用いられたのであり、それは唯創造主への彼の愛から生じるものであった。

注６　ソロモンは馬の行進を眺め、馬をほめるため、自分の馬の首や足をさわった様だ。

ソロモンは赦しを求めて神にお縋りせり。（注7）

جَسَدًا ثُمَّ أَنَابَ ﴿٣٥﴾

36. ソロモンは云えり、「我が主よ、我を赦し給え、而して、後世の何人も有ち得ざる王国を我に授け給え。げに汝は素晴らしい施与者にまします」と。（注8）

قَالَ رَبِّ اغْفِرْ لِي وَهَبْ لِي مُلْكًا لَّا يَنۢبَغِي لِأَحَدٍ مِّنۢ بَعْدِي إِنَّكَ أَنتَ الْوَهَّابُ ﴿٣٦﴾

37. されば、われらは風をソロモンに従わせしめたれば、風はソロモンの命ずるまま、その欲するところへ静かに吹き行く。

فَسَخَّرْنَا لَهُ الرِّيحَ تَجْرِي بِأَمْرِهِ رُخَآءً حَيْثُ أَصَابَ ﴿٣٧﴾

38. また巨人たちを従わせしめたれば、その中には各種の建築家や潜水夫たち、

وَالشَّيٰطِينَ كُلَّ بَنَّآءٍ وَّغَوَّاصٍ ﴿٣٨﴾

39. その他足かせをかけられた者もありき。（注9）

وَّاٰخَرِينَ مُقَرَّنِينَ فِي الْأَصْفَادِ ﴿٣٩﴾

40. 「こはわれらの贈物、大まかに振舞うもよし、控え目にするもよし、汝の随意たるべし」

هٰذَا عَطَآؤُنَا فَامْنُنْ أَوْ أَمْسِكْ بِغَيْرِ حِسَابٍ ﴿٤٠﴾

41. かくして、ソロモンの位階はわれらの側近くに占めて、素晴らしい帰処を得たり。

وَإِنَّ لَهُ عِندَنَا لَزُلْفٰى وَحُسْنَ مَاٰبٍ ﴿٤١﴾

第4項

42. われらの僕ヨブが主に向って「悪魔は我を艱難辛苦によって悩ませり」と訴えたる時を思え。

وَاذْكُرْ عَبْدَنَآ أَيُّوبَ إِذْ نَادٰى رَبَّهُ أَنِّي مَسَّنِيَ الشَّيْطٰنُ بِنُصْبٍ وَّعَذَابٍ ﴿٤٢﴾

43. われらはヨブに命じたり、「汝の馬を汝の足で駆り立て、すみやかに出発せよ。然らば彼処に、身を浄め、飲める清涼な水あり」と。

اُرْكُضْ بِرِجْلِكَ هٰذَا مُغْتَسَلٌ بَارِدٌ وَّشَرَابٌ ﴿٤٣﴾

注7　34章15節では、"一匹の地虫"という語が使われている。この語は、ソロモンの息子であり後継者のレハベアムあるいはダビデ一族に反旗を翻した無能な家来ジェロボアムを指している様だ。ソロモンは、自分の死後、その王国が無能な後継者の下では、その領土を維持できないであろうと悟った。そこで、彼は神に向かい祈った。この祈りは次節に述べられている。列王上：　12章28節参照のこと。

注8　ソロモンのつかの間の王国も、彼の死後、息子の無能さにより崩壊するであろうと彼が予知した事は、前節に示されており、そこで彼は、神が彼の一族に授けられた魂の王国が続く様にと祈った。"なんびとも持ち得ざる有る王国を我に授け給え"　この言葉を文字通りの意味に取るなら、ソロモンの祈りは、「彼の死後、彼の権力と栄光を継ぐ王国はイスラエルの日にできない。」と解釈されたであろう。

注9　21章83節、34章13節14節に述べられた様に、ソロモンは、領土内の未開人、野蛮人や反抗的な山岳民族を支配下に治めた。彼は彼等を入隊させ、彼の為に様々な働きをさせた。前節の巨人、34章13節のジン（選良）は、この人々を指し、彼等がソロモンに与えられた仕事も同種のものであった（歴代志略下 2章1節、2節）。

44. 而して、われらは慈悲によって、また思慮ある人々への訓戒たらしむるため、ヨブに家族と多くの眷族とを授けたり。

وَوَهَبْنَا لَهٗۤ اَهْلَهٗ وَمِثْلَهُمْ مَّعَهُمْ رَحْمَةً مِّنَّا وَذِكْرٰى لِاُولِى الْاَلْبَابِ ﴿٤٣﴾

45. 而して、われらはヨブに命じたり、「ひとつかみの乾いた小枝を握り、それにて打て。汝の約束を破るなかれ」と。われらは彼が忍耐強く立派な僕なるを知れり。げに彼は常に神に頼りたり。（注 10）

وَخُذْ بِيَدِكَ ضِغْثًا فَاضْرِبْ بِّهٖ وَلَا تَحْنَثْ اِنَّا وَجَدْنٰهُ صَابِرًا نِعْمَ الْعَبْدُ اِنَّهٗۤ اَوَّابٌ ﴿٤٤﴾

46. また、実力と識見を有する人々、われらの僕たちアブラハムとイサクとヤコブを思え。

وَاذْكُرْ عِبٰدَنَاۤ اِبْرٰهِيْمَ وَاِسْحٰقَ وَيَعْقُوْبَ اُولِى الْاَيْدِىْ وَالْاَبْصَارِ ﴿٤٥﴾

47. われらは特別なる目的のために彼等を選びたり、すなわち、来世の住居の人々を連想させるために。

اِنَّاۤ اَخْلَصْنٰهُمْ بِخَالِصَةٍ ذِكْرَى الدَّارِ ﴿٤٦﴾

48. まことに彼等は、われらの目から見ても、選良且つ最良の徒輩なり。

وَاِنَّهُمْ عِنْدَنَا لَمِنَ الْمُصْطَفَيْنَ الْاَخْيَارِ ﴿٤٧﴾

49. またイスマイルとエリシア（注 11）とズー・ル・キフルのことを思え。彼等はみな最良の徒輩なりき。

وَاذْكُرْ اِسْمٰعِيْلَ وَالْيَسَعَ وَذَا الْكِفْلِ وَكُلٌّ مِّنَ الْاَخْيَارِ ﴿٤٨﴾

50. こは訓戒なり。義しい人は必ずや素晴らしい帰処を得べし。

هٰذَا ذِكْرٌ وَاِنَّ لِلْمُتَّقِيْنَ لَحُسْنَ مَاٰبٍ ﴿٤٩﴾

51. すなわち、永遠の御園なり。諸門は彼等のために開かれ、

جَنّٰتِ عَدْنٍ مُّفَتَّحَةً لَّهُمُ الْاَبْوَابُ ﴿٥٠﴾

52. その中でゆったりと身をもたせて、沢山の果物や飲物を望みのままに注文せん。

مُتَّكِـِٕيْنَ فِيْهَا يَدْعُوْنَ فِيْهَا بِفَاكِهَةٍ كَثِيْرَةٍ وَّشَرَابٍ ﴿٥١﴾

注 10　「汝の約束を破るなかれ」が意味する語は、偽りを受け入れない、つまり、偶像崇拝や多神教と妥協する事なく、確固として唯一神を信じ続けるようにということである。この言葉が、「誓いを破ってはならない」という意味なら、この節は、「ヨブは一族の者達の怠慢が元で彼等と袂を分かったので、彼等に合流した後には、その怠慢を罰すると誓った。」事を示すものとなる。しかし、彼は、彼等に合流した時、当節に示されている通り、次の様な神の命を受けた。喜びと感謝の時に彼等を厳しく罰してはならず、彼等の苦しみが最少で済む様に誓いを果たさなければならない。

注 11　エリシアはエリヤの弟子であり後継者であった。彼は紀元前 938 年から 828 年まで存在した。6 章 87 節も参照の事。

53．而して、彼等のそばには、同じ年頃の伏目がちな乙女ら侍らん。

وَعِنْدَهُمْ قٰصِرٰتُ الطَّرْفِ اَتْرَابٌ ٥٣

54．こは清算の日のために、お前たちに約束せらるるものなり。（注 12）

هٰذَا مَا تُوْعَدُوْنَ لِيَوْمِ الْحِسَابِ ٥٤

55．げにこは尽きることなきわれらの給養なり。

اِنَّ هٰذَا لَرِزْقُنَا مَا لَهٗ مِنْ نَّفَادٍ ٥٥

56．信ずる人々はかくの如し。されど、邪悪な徒輩には悪しき帰処あり。

هٰذَا ۗ وَاِنَّ لِلطّٰغِيْنَ لَشَرَّ مَاٰبٍ ٥٦

57．すなわち、地獄なり。彼等はその中にて焼かれるべし。ああ、なんと無惨な臥処かな！

جَهَنَّمَ ۚ يَصْلَوْنَهَا ۚ فَبِئْسَ الْمِهَادُ ٥٧

58．邪悪な徒輩が得るものは、かくの如し。されば、彼等はこれを味わえ、すなわち煮えたぎる液体と猛烈に冷たい悪臭を放つ飲物を。（注 13）

هٰذَا ۙ فَلْيَذُوْقُوْهُ حَمِيْمٌ وَّغَسَّاقٌ ٥٨

59．その他にも、これに類するさまざまなる責苦あり。（注 14）

وَّاٰخَرُ مِنْ شَكْلِهٖٓ اَزْوَاجٌ ٥٩

60．不信心者どもの首領は告げられん、「こはお前たちと共に無鉄砲に突き進める一軍なり」と。彼等は歓迎せらるべくもなし。彼等は業火に焼かれるべし。（注 15）

هٰذَا فَوْجٌ مُّقْتَحِمٌ مَّعَكُمْ ۚ لَا مَرْحَبًا بِهِمْ ۗ اِنَّهُمْ صَالُوا النَّارِ ٦٠

61．彼等は首領たちに向って云わん、「お前たちこそ歓迎せられざる者なり。我等を邪道に導き、これを準備せるはお前たちなり。なんと無惨な臥処かな！」と。（注 16）

قَالُوْا بَلْ اَنْتُمْ ۗ لَا مَرْحَبًا بِكُمْ ۗ اَنْتُمْ قَدَّمْتُمُوْهُ لَنَا ۚ فَبِئْسَ الْقَرَارُ ٦١

注 12　全ての人々が、その行いに応じ報酬を賜るか、さもなくば罰を下されるかが決められる日。判決の日は、この世の全人類、社会、国家に訪れる。

注 13　地獄にある人々は、熱湯か冷水を飲む事になろう。彼等は、神より授かった能力を適度に用いる事なく、極端に走り、中庸を重んじなかった為、極度に熱い水か、さもなくば冷たい水を飲む事になるのである。

注 14　本文に示された意味以外に、当節には次の意味もある。「彼等と同じ経歴を持つ人々がいるであろう。」

注 15　不信心者の指導者達は、従者の一団が地獄に落ちて来るのを見る時、大勢の従者が彼等と共に火の中に入ると告げられるであろう。盲目的に指導者に従った者達は、真実を拒んだ為、まっさかさまに地獄へ落ちるのである。

注 16　不信心者の指導者に従った者達は、それぞれの言葉で指導者を呪うであろう。指導者、従者相方互いに罵り合う事となる。人は自らの行いが招く悪い結末に直面する時、その非を他人に転嫁しようとするのは、人間の性である。これは、罪深き者が、その悪行の恐るべき結末に直面した時にとる行動そのものである。

62．彼等は更に云わん、「主よ、我等のためにこの事を準備せる者に、業火の刑を倍加し給え」と。（注 17）

قَالُوا رَبَّنَا مَنْ قَدَّمَ لَنَا هٰذَا فَزِدْهُ عَذَابًا ضِعْفًا فِي النَّارِ ﴿٦٢﴾

63．地獄の住人たち（注 18）はまた云わん、「我等が常々悪人の類とみなせる者を、ここで見ざるとは、一体如何がした？

وَقَالُوا مَا لَنَا لَا نَرٰى رِجَالًا كُنَّا نَعُدُّهُمْ مِّنَ الْأَشْرَارِ ﴿٦٣﴾

64．我等が不当にも彼等を笑いぐさにしたためか、それとも、我等が見落ししたのではあるまいか」と。（注 19）

أَتَّخَذْنٰهُمْ سِخْرِيًّا أَمْ زَاغَتْ عَنْهُمُ الْأَبْصَارُ ﴿٦٤﴾

65．げに、こは真相なり、つまり、業火に陥ちた連中の互に相い争う姿なり。

إِنَّ ذٰلِكَ لَحَقٌّ تَخَاصُمُ أَهْلِ النَّارِ ﴿٦٥﴾

第５項

66．云え、「我は一介の警告者にすぎず。唯一、至高のアッラー以外に神なし。

قُلْ إِنَّمَا أَنَا مُنْذِرٌ ۖ وَّمَا مِنْ إِلٰهٍ إِلَّا اللّٰهُ الْوَاحِدُ الْقَهَّارُ ﴿٦٦﴾

67．そは天地とその間の萬物の主、偉力者、宥恕者にましますま」と。

رَبُّ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا الْعَزِيزُ الْغَفَّارُ ﴿٦٧﴾

68．云え、「こは重要な声明なるぞ。（注 20）

قُلْ هُوَ نَبَؤٌا عَظِيمٌ ﴿٦٨﴾

69．然るに、お前たちは之を忌避す。

أَنْتُمْ عَنْهُ مُعْرِضُونَ ﴿٦٩﴾

70．我は、天上の最高会議で論議される事柄については、何も知らざりき。

مَا كَانَ لِيَ مِنْ عِلْمٍ بِالْمَلَإِ الْأَعْلٰى إِذْ يَخْتَصِمُونَ ﴿٧٠﴾

71．ただ我は、公然の警告者たることを啓示されたる者なり」と。

إِنْ يُّوحٰى إِلَيَّ إِلَّا أَنَّمَا أَنَا نَذِيرٌ مُّبِينٌ ﴿٧١﴾

注 17　不信心者の指導者に従う者は、かつての指導に天罰の下る事を願うであろう。

注 18　此所での“住人たち”は、信者を指す。

注 19　地獄の人々は、この様に言葉をかわすであろう。「現世において、取るに足りない者と我々がみなしていた人々が此所にいないとは、どうした事か。彼等は嘲笑に値する人物ではなく、真の信者だったのか、それとも、彼等も又地獄に落ちたが、唯我々がその姿を見かけないだけなのか。」

注 20　“重要な声明”はクルアーンの啓示という偉大な出来事、又は、モハッマド預言者の出現を指している様だ。

72. 汝の主が天使たちに向って「われは土塊を以て人間を創らんとす。

إِذْ قَالَ رَبُّكَ لِلْمَلٰٓئِكَةِ إِنِّيْ خَالِقٌۢ بَشَرًا مِّنْ طِيْنٍ

73. 完成せし暁に、わが霊を之に吹き込まば、汝等地に伏して之に服従せよ」と云いたる時を思え。（注21）

فَإِذَا سَوَّيْتُهٗ وَنَفَخْتُ فِيْهِ مِنْ رُّوْحِيْ فَقَعُوْا لَهٗ سٰجِدِيْنَ

74. されば、天使たちは皆服従せり。（注22）

فَسَجَدَ الْمَلٰٓئِكَةُ كُلُّهُمْ أَجْمَعُوْنَ

75. 然るに、イブリースはせざりき。彼は高慢に振舞い、信ぜざる手合いとなりぬ。

إِلَّآ إِبْلِيْسَ ؕ اِسْتَكْبَرَ وَكَانَ مِنَ الْكٰفِرِيْنَ

76. 神は訊ねり、「イブリースよ、われがこの双手で創りしものに、汝は何故従わざるか？そは増長心のなせる業か、それとも、汝はほんとにわが命を無視する気か？」と。（注23）

قَالَ يٰٓإِبْلِيْسُ مَا مَنَعَكَ أَنْ تَسْجُدَ لِمَا خَلَقْتُ بِيَدَيَّ ؕ أَسْتَكْبَرْتَ أَمْ كُنْتَ مِنَ الْعَالِيْنَ

77. イブリースは答えり、「我は彼より優る。汝は火を以て我を創り、土塊を以て彼を創れり」と。（注24）

قَالَ أَنَا خَيْرٌ مِّنْهُ ؕ خَلَقْتَنِيْ مِنْ نَّارٍ وَّخَلَقْتَهٗ مِنْ طِيْنٍ

78. 神は云えり、「然らば、ここから出て行け、汝は追放なり。

قَالَ فَاخْرُجْ مِنْهَا فَإِنَّكَ رَجِيْمٌ

79. されば、審判の日まで、汝、わが呪詛を負うべし」と。

وَّإِنَّ عَلَيْكَ لَعْنَتِيْٓ إِلٰى يَوْمِ الدِّيْنِ

80. イブリースは云えり、「主よ、ならばせめて皆が喚び起されるその日まで、我に猶予を与え給え」と。（注25）

قَالَ رَبِّ فَأَنْظِرْنِيْٓ إِلٰى يَوْمِ يُبْعَثُوْنَ

注21　預言者が世に現れる時、天使達は彼の目的が進められる様支援し、敵の陰謀を全て取り除く様命じられる。

注22　天使、又は天使の様な人々。

注23　“われらがこの双手で”とは「私は、神の全ての美徳を表す様に人間を作った。」という意味である。

注24　預言者に刃向かう者は、常に権力と威信をもって彼の優位に立とうとする。同等か、さもなくば下等とみなされる者に忠誠を尽くす事は、彼等の誇りを傷付ける事となる。

注25　人間の魂の再生。“魂の安らぎ”の段階に至れば、人は精神的堕落から逃がれられる。15章37節も参照の事。

81. 神は云えり、「汝は確かに猶予されたる者のうちに加えらる、

قَالَ فَإِنَّكَ مِنَ الْمُنظَرِينَ ﴿٨١﴾

82. 定めの時のその日まで」と。(注 26)

إِلَىٰ يَوْمِ الْوَقْتِ الْمَعْلُومِ ﴿٨٢﴾

83. イブリースは云えり、「汝の威光にかけて誓わん、必ずや皆悉(ことごと)く誘(いざな)い惑わさん、

قَالَ فَبِعِزَّتِكَ لَأُغْوِيَنَّهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٨٣﴾

84. 彼等の中の汝に選ばれた僕(しもべ)等を除いて」と。

إِلَّا عِبَادَكَ مِنْهُمُ الْمُخْلَصِينَ ﴿٨٤﴾

85. 神は云えり、「そは真実なり、われは真実のみを語る、

قَالَ فَالْحَقُّ وَالْحَقَّ أَقُولُ ﴿٨٥﴾

86. われは汝と汝に従うすべての徒輩(やから)を以て、必ず地獄を満たさんことを」と。(注 27)

لَأَمْلَأَنَّ جَهَنَّمَ مِنكَ وَمِمَّن تَبِعَكَ مِنْهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٨٦﴾

87. 云え、「我はこのために如何なる報酬もお前たちに求めず、また我は矯飾者(きょうしょくしゃ)にも非ず。

قُلْ مَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ وَمَا أَنَا مِنَ الْمُتَكَلِّفِينَ ﴿٨٧﴾

88. クルアーンはすべての人々への訓戒に外ならぬ。

إِنْ هُوَ إِلَّا ذِكْرٌ لِّلْعَالَمِينَ ﴿٨٨﴾

89. 而(しか)して、暫くすれば、お前たち必ずその真実なるを知らん」と。(注 28)

وَلَتَعْلَمُنَّ نَبَأَهُ بَعْدَ حِينٍ ﴿٨٩﴾

注 26　真実が偽りを凌駕し、偽りを追い求める者が制圧される時。

注 27　神とサタンの問答は、現実の出来事に触れているのではなく、預言者出現時の状況について、陰喩的に表されている。72 節に述べられた男は、各時代の預言者を指しており、又、イブーリスとは、彼に刃向かい、その使命の推進を阻もうとする、悪意ある者達を表している。

注 28　モハッマド預言者は、不信心者達に対し、彼の布教が真実であると彼等が遠からず悟ると告げたことが、此所に示されている。

سُورَةُ الزُّمَرِ مَكِّيَّةٌ

アル・ズマロ
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍く(あまね)アッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ①

2．この経典の啓示は、偉大にして賢哲なるアッラーから降(くだ)る。

تَنْزِيلُ الْكِتَابِ مِنَ اللَّهِ الْعَزِيزِ الْحَكِيمِ ②

3．すべての真理を包含するこの経典を汝に啓示せるは、確かにわれらなり。されば、アッラーを崇め、誠を尽して彼を遵奉せよ。

إِنَّا أَنْزَلْنَا إِلَيْكَ الْكِتَابَ بِالْحَقِّ فَاعْبُدِ اللَّهَ مُخْلِصًا لَهُ الدِّينَ ③

4．至誠の遵奉は、ただアッラーに対してのみ行われるべきものなり。アッラー以外に守護者(しゅごしゃ)を求める者は、云う、「我等が彼等に仕えるは、彼等が我等をアッラーのおそば近くに導いてくれるかも知れぬ、と思うからなり」と。（注1）アッラーは必ず、彼等が意見を異にすることに関して、彼等の間を審判すべし。げにアッラーは忘恩の嘘つきを導かず。

أَلَا لِلَّهِ الدِّينُ الْخَالِصُ ۚ وَالَّذِينَ اتَّخَذُوا مِنْ دُونِهِ أَوْلِيَاءَ مَا نَعْبُدُهُمْ إِلَّا لِيُقَرِّبُونَا إِلَى اللَّهِ زُلْفَىٰ إِنَّ اللَّهَ يَحْكُمُ بَيْنَهُمْ فِي مَا هُمْ فِيهِ يَخْتَلِفُونَ ۗ إِنَّ اللَّهَ لَا يَهْدِي مَنْ هُوَ كَاذِبٌ كَفَّارٌ ④

5．もしアッラー子を持たんと欲しなば、己れが創りしものの中から好きな者を選ぶこと可なり。聖なるかな！彼はアッラー、唯一、至高なる御方(おんかた)にまします。

لَوْ أَرَادَ اللَّهُ أَنْ يَتَّخِذَ وَلَدًا لَاصْطَفَىٰ مِمَّا يَخْلُقُ مَا يَشَاءُ ۚ سُبْحَانَهُ ۖ هُوَ اللَّهُ الْوَاحِدُ الْقَهَّارُ ⑤

6．彼は真理を以て天地(あめつち)を創造せり。彼は昼を覆うために夜を造り、夜を覆うために昼を造る。また彼は、日月を服従させ、定められた時期までその軌道をそれぞれ運行せしむ。聞け、偉力者、宥恕者(ゆうじょしゃ)なるは、彼のみなるぞ。

خَلَقَ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضَ بِالْحَقِّ ۖ يُكَوِّرُ اللَّيْلَ عَلَى النَّهَارِ وَيُكَوِّرُ النَّهَارَ عَلَى اللَّيْلِ ۖ وَسَخَّرَ الشَّمْسَ وَالْقَمَرَ ۖ كُلٌّ يَجْرِي لِأَجَلٍ مُسَمًّى ۗ أَلَا هُوَ الْعَزِيزُ الْغَفَّارُ ⑥

7．彼は一個の存在からお前たちを創り、次いでそれよりその妻たちを創れり。而(しか)して、

خَلَقَكُمْ مِنْ نَفْسٍ وَاحِدَةٍ ثُمَّ جَعَلَ مِنْهَا زَوْجَهَا

注1　人間は、聖者のごとき自らの想像の産物である偽りの神々、富、権力、情感、父祖伝来の信仰と慣習等を崇める傾向にあり、これ等を通して神を悟ることができると信じている様に常に装う。

彼は八頭の家畜を、番として降し給えり。(注2)彼はまた、お前たちを母の胎内に創る。そは三重の暗闇に於ける創造につぐ創造なり。(注3)かくなせる御方が、お前たちの主アッラーなり。大権はアッラーの有なり。彼の外に神なし。然るにお前たち、いずこへ顔をそむけるか？

وَأَنزَلَ لَكُم مِّنَ الْأَنْعَامِ ثَمَٰنِيَةَ أَزْوَٰجٍ ۚ يَخْلُقُكُمْ فِي بُطُونِ أُمَّهَٰتِكُمْ خَلْقًا مِّنۢ بَعْدِ خَلْقٍ فِي ظُلُمَٰتٍ ثَلَٰثٍ ۚ ذَٰلِكُمُ اللَّهُ رَبُّكُمْ لَهُ الْمُلْكُ ۖ لَآ إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ ۖ فَأَنَّىٰ تُصْرَفُونَ ﴿٧﴾

8．たといお前たちが感謝せずとも、アッラーはお前たちの世話にならず、自ら足りる。なれど、彼はその僕等の忘恩を喜び給わず。しかし、もしお前たち感謝するならば、彼はお前たちを嘉し給う。而して、荷を負える者は、他人の荷を負う能わず。お前たちの帰り行く先は主なり。その時彼は、お前たちにそのなせることを告げ知らせん。げに彼は胸中に秘することも熟知し給う。

إِن تَكْفُرُوا فَإِنَّ اللَّهَ غَنِيٌّ عَنكُمْ ۖ وَلَا يَرْضَىٰ لِعِبَادِهِ الْكُفْرَ ۖ وَإِن تَشْكُرُوا يَرْضَهُ لَكُمْ ۗ وَلَا تَزِرُ وَازِرَةٌ وِزْرَ أُخْرَىٰ ۗ ثُمَّ إِلَىٰ رَبِّكُم مَّرْجِعُكُمْ فَيُنَبِّئُكُم بِمَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ۚ إِنَّهُ عَلِيمٌۢ بِذَاتِ الصُّدُورِ ﴿٨﴾

9．人は災難が降りかかると、主に祈り、悔悟して之に縋る。されど、一たび恩寵を施すや、人は先に祈りしことを忘れ、同位者をアッラーに配して人々をアッラーの道から誘い惑わさんとす。云え、「束の間の不信心な生活を楽しめ。汝等は確実に業火の住人なり」と。

وَإِذَا مَسَّ الْإِنسَٰنَ ضُرٌّ دَعَا رَبَّهُ مُنِيبًا إِلَيْهِ ثُمَّ إِذَا خَوَّلَهُ نِعْمَةً مِّنْهُ نَسِيَ مَا كَانَ يَدْعُوٓا إِلَيْهِ مِن قَبْلُ وَجَعَلَ لِلَّهِ أَندَادًا لِّيُضِلَّ عَن سَبِيلِهِ ۚ قُلْ تَمَتَّعْ بِكُفْرِكَ قَلِيلًا ۖ إِنَّكَ مِنْ أَصْحَٰبِ النَّارِ ﴿٩﴾

10．夜間も、或いは叩頭し或いは立ちて一心に神に祈り、来世を恐れ主の慈悲を請い願う者が、不信心者と同じであるべきか？　云え、「ものの分った人間と、わからぬ人間とが同じであるべきか？　げに思慮ある人間のみが注意せん。

أَمَّنْ هُوَ قَٰنِتٌ ءَانَآءَ الَّيْلِ سَاجِدًا وَقَآئِمًا يَحْذَرُ الْءَاخِرَةَ وَيَرْجُوا رَحْمَةَ رَبِّهِ ۗ قُلْ هَلْ يَسْتَوِي الَّذِينَ يَعْلَمُونَ وَالَّذِينَ لَا يَعْلَمُونَ ۗ إِنَّمَا يَتَذَكَّرُ أُولُوا الْأَلْبَٰبِ ﴿١٠﴾

注2　(ア)「八頭の家畜」とは、山羊、羊、駱駝、及び6：144－145で述べられた牛のつがいを指しており、此所で特に言及しているのは、それ等が人間にとり日々役立つ動物だからである。

注3　(イ)「三重の暗闇」は、胎児成長の三段階、ヌトゥファ（精子の半）、アラカ（血の固まり）、ムドゥガ（一塊の肉）を指している様だ。あるいは、86：7－8、3：7、16：79に述べられた三つの状態、又は妊娠期間中の三つの重要な時期を表しているとも言える。この妊娠期間中の時期とは具体的には、次の通りである。(a)妊娠2ケ月から3ケ月目　(b)3ケ月から5ケ月目　(c)8ケ月目の初め。妊娠中この三時期に流産し易いのである。

第二項

11. 云え「汝等信ずるわが僕等よ、お前たちの主を畏れ敬え。この世で善をなす者には、幸いあり。アッラーの大地は広大なり。げに堅忍不抜なる者は、限りなく賞せられん」と。(注4)

قُلْ يَٰعِبَادِ ٱلَّذِينَ ءَامَنُوا ٱتَّقُوا رَبَّكُمْ لِلَّذِينَ أَحْسَنُوا فِى هَٰذِهِ ٱلدُّنْيَا حَسَنَةٌ وَأَرْضُ ٱللَّهِ وَٰسِعَةٌ إِنَّمَا يُوَفَّى ٱلصَّٰبِرُونَ أَجْرَهُم بِغَيْرِ حِسَابٍ (١١)

12. 云え、「げに我は信仰に於て、一心不乱にアッラーを崇拝せよ、と命ぜられたり。

قُلْ إِنِّىٓ أُمِرْتُ أَنْ أَعْبُدَ ٱللَّهَ مُخْلِصًا لَّهُ ٱلدِّينَ (١٢)

13. 而して、アッラーに帰依する者たちの魁たれと命ぜられたり」と。

وَأُمِرْتُ لِأَنْ أَكُونَ أَوَّلَ ٱلْمُسْلِمِينَ (١٣)

14. 云え、「もし我、主に背かば、大変な日の刑罰を恐る」と。

قُلْ إِنِّىٓ أَخَافُ إِنْ عَصَيْتُ رَبِّى عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيمٍ (١٤)

15. 云え、「我が信仰に於て、一心不乱に崇拝するは、アッラーなり。

قُلِ ٱللَّهَ أَعْبُدُ مُخْلِصًا لَّهُۥ دِينِى (١٥)

16. お前たちはアッラー以外に好きなものを崇拝せよ」と。云え、「げに真の失敗者とは、復活の日に自分も家族も破滅する者なり」と。用心せよ！　げにそは明らかな失敗なり。

فَٱعْبُدُوا مَا شِئْتُم مِّن دُونِهِۦ قُلْ إِنَّ ٱلْخَٰسِرِينَ ٱلَّذِينَ خَسِرُوٓا أَنفُسَهُمْ وَأَهْلِيهِمْ يَوْمَ ٱلْقِيَٰمَةِ أَلَا ذَٰلِكَ هُوَ ٱلْخُسْرَانُ ٱلْمُبِينُ (١٦)

17. 彼等の頭上には火の天井あり、足下にも同じ床あらん。アッラーはかくの如くその僕等に警告す。「わが僕等よ、さればわれをお前たちの守護者と奉れ」

لَهُم مِّن فَوْقِهِمْ ظُلَلٌ مِّنَ ٱلنَّارِ وَمِن تَحْتِهِمْ ظُلَلٌ ذَٰلِكَ يُخَوِّفُ ٱللَّهُ بِهِۦ عِبَادَهُۥ يَٰعِبَادِ فَٱتَّقُونِ (١٧)

18. されど、邪神を崇めることを避け、改悛してアッラーの許へ帰る者－彼等には朗報あり。されば、わが僕等に朗報を伝えよ、

وَٱلَّذِينَ ٱجْتَنَبُوا ٱلطَّٰغُوتَ أَن يَعْبُدُوهَا وَأَنَابُوٓا إِلَى ٱللَّهِ لَهُمُ ٱلْبُشْرَىٰ فَبَشِّرْ عِبَادِ (١٨)

19. 神託に耳を傾け、その最善なるところに従う人々に。(注5)アッラーが導くは彼等なり、彼等は思慮ある人々なり。

ٱلَّذِينَ يَسْتَمِعُونَ ٱلْقَوْلَ فَيَتَّبِعُونَ أَحْسَنَهُۥٓ أُولَٰٓئِكَ ٱلَّذِينَ هَدَىٰهُمُ ٱللَّهُ وَأُولَٰٓئِكَ هُمْ أُولُوا ٱلْأَلْبَٰبِ (١٩)

注4　信者は苦難に会い、神の為に自らの家庭をすらも去らねばならないであろうと、この節は警告している。彼等は厳しい試練に遭遇した時、全世界が彼等にとり如何に広大であるかを知り、神より、過ぎたるほうびを賜れるであろう。

注5　信者の前に、等しく許された二本の道がある時、彼は、最上の結果をもたらす方を選ぶ。

20. されど、すでに天罰の宣告がなされた者を、如何にムハンマドといえども救えまい？　汝は業火の中に居る者を救い出し得るか？

أَفَمَنْ حَقَّ عَلَيْهِ كَلِمَةُ الْعَذَابِ أَفَأَنْتَ تُنْقِذُ مَنْ فِي النَّارِ ﴿٢٠﴾

21. されど、主を畏れる人々のためには、相い重なりそびえ立つ高楼ありて、河川脚下を流る。(注６)これアッラーの約束なり。アッラーはその約束を破らず。

لَٰكِنِ الَّذِينَ اتَّقَوْا رَبَّهُمْ لَهُمْ غُرَفٌ مِنْ فَوْقِهَا غُرَفٌ مَبْنِيَّةٌ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ وَعْدَ اللَّهِ لَا يُخْلِفُ اللَّهُ الْمِيعَادَ ﴿٢١﴾

22. 汝は見ざるか、アッラーが天から水を降らせ、それを大地に浸み込ませて泉となし、それによって色とりどりの作物を萌え出させ給うことを？　やがて枯れなば、そは黄色に変ず。次いでアッラーは、これを藁くずとなし給う。げにこの中には、思慮ある者たちへの訓戒あり。

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللَّهَ أَنْزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَسَلَكَهُ يَنَابِيعَ فِي الْأَرْضِ ثُمَّ يُخْرِجُ بِهِ زَرْعًا مُخْتَلِفًا أَلْوَانُهُ ثُمَّ يَهِيجُ فَتَرَاهُ مُصْفَرًّا ثُمَّ يَجْعَلُهُ حُطَامًا إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَذِكْرَىٰ لِأُولِي الْأَلْبَابِ ﴿٢٢﴾

第三項

23. アッラーがその胸を開かしめてイスラームを受け容れさせ、ためにその御光を受けた者と、(注７)不信仰の暗闇で模索する者と同一視すべきか？　災いなるかな、その心頑固にしてアッラーを念わざる者！　彼等は明らかに迷誤の中にあり。

أَفَمَنْ شَرَحَ اللَّهُ صَدْرَهُ لِلْإِسْلَامِ فَهُوَ عَلَىٰ نُورٍ مِنْ رَبِّهِ فَوَيْلٌ لِلْقَاسِيَةِ قُلُوبُهُمْ مِنْ ذِكْرِ اللَّهِ أُولَٰئِكَ فِي ضَلَالٍ مُبِينٍ ﴿٢٣﴾

24. アッラーは経典の形式で最上の説教を降したり。その経典の諸節は相互に支えあい、さまざまなる形を反復す。(注８)主を畏るる者はその朗唱に総毛立ち、然る後、肌も心もアッラーの憶いに和らぐ。アッラーの嚮導はかくの如し。アッラーは之を以って己れの欲する者を導き給う。されど、アッラーが迷わしむる者には、如何なる嚮導者もなかるべし。

اللَّهُ نَزَّلَ أَحْسَنَ الْحَدِيثِ كِتَابًا مُتَشَابِهًا مَثَانِيَ تَقْشَعِرُّ مِنْهُ جُلُودُ الَّذِينَ يَخْشَوْنَ رَبَّهُمْ ثُمَّ تَلِينُ جُلُودُهُمْ وَقُلُوبُهُمْ إِلَىٰ ذِكْرِ اللَّهِ ذَٰلِكَ هُدَى اللَّهِ يَهْدِي بِهِ مَنْ يَشَاءُ وَمَنْ يُضْلِلِ اللَّهُ فَمَا لَهُ مِنْ هَادٍ ﴿٢٤﴾

注６　天国における信者の位の相違は、各々の働きに違いのある事を表しており、これは、来世が非活動的で物憂いものではなく、絶えず努力と向上の続くものである事を暗示している。

注７　イスラムの教義は非常に奥深く広大であり、信者の心を開き、神の知恵と愛で満たす。それは、必ずや、思索、知識、真実の新たにして永遠の展望を開くであろう。

注８　神の啓示はクルアーンにおいて最も完全な形となった。当節では、クルアーンを「相互に支えあう経典の諸節」と表しているが、これは、クルアーンが相矛盾する事なく、互いに補完し合う異なる解釈を受け入

25．復活の日に、恐ろしい刑罰をその顔で防がねばならぬような者が、（注9）全く心配ない者と同一視せらるべきか？　不義なす徒輩はかく云われん、「お前がいつも稼いでいたものの報いを味わえ」と。

أَفَمَنْ يَتَّقِي بِوَجْهِهِ سُوءَ الْعَذَابِ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ ۚ وَقِيلَ لِلظّٰلِمِينَ ذُوقُوا مَا كُنْتُمْ تَكْسِبُونَ ﴿٢٥﴾

26．彼等以前の者どももまたわれらの神託を拒みたれば、懲罰が彼等を不意に襲いたり。

كَذَّبَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ فَأَتٰهُمُ الْعَذَابُ مِنْ حَيْثُ لَا يَشْعُرُونَ ﴿٢٦﴾

27．されば、アッラーは彼等に現世でも屈辱を味わせ給うが、来世の罰は更に苛酷なるべし。と云ったとて、彼等にはわかるまいが！

فَأَذَاقَهُمُ اللّٰهُ الْخِزْيَ فِي الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا ۚ وَلَعَذَابُ الْآخِرَةِ أَكْبَرُ ۘ لَوْ كَانُوا يَعْلَمُونَ ﴿٢٧﴾

28．われらは彼等に注意せしめんがために、さまざまなる比喩を明らかにせり。（注10）

وَلَقَدْ ضَرَبْنَا لِلنَّاسِ فِي هٰذَا الْقُرْاٰنِ مِنْ كُلِّ مَثَلٍ لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُونَ ﴿٢٨﴾

29．われらは彼等を義しい人になさんとして、正確無比なるアラビア語でクルアーンを啓示せり。

قُرْاٰنًا عَرَبِيًّا غَيْرَ ذِي عِوَجٍ لَعَلَّهُمْ يَتَّقُونَ ﴿٢٩﴾

30．アッラーはここに一比喩を明らかにす。つまり、多くの仲間いれど互いに仲たがいばかりするような者と、ただ一人に完全に傾倒する者。この両者の事情は同じかるべきか？（注11）讃美の詞は挙げてアッラーのものなり。然れども、大半の者は之を知らず。

ضَرَبَ اللّٰهُ مَثَلًا رَجُلًا فِيهِ شُرَكَاءُ مُتَشٰكِسُونَ وَرَجُلًا سَلَمًا لِرَجُلٍ هَلْ يَسْتَوِيٰنِ مَثَلًا ۚ اَلْحَمْدُ لِلّٰهِ ۚ بَلْ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٣٠﴾

れた神の書である事を示している。クルアーンのどの箇所にも矛盾は見られない。これが、クルアーンの無比の美点の一つとなっている。クルアーンの今一つの長所は、比喩を用いている事である。これは、文体に優美さと貴品を添え、最少限の言葉で広大な事柄を表す。又、クルアーンは「反復する」諸節とも呼ばれている。これは、クルアーンが、基本理念の重要性、目的を強調する為に、様々な形でそれを繰り返し述べている事を表している。この言葉は又、クルアーンの教義には、他の啓示書と類似するものもあれば、その優雅さにおいて新しく比類無いものもある事を示している。

注9　　この言葉は、裁きの日に不信心者に下される罰の重さを示している。彼等は厳罰にうろたえる余り、体の最も敏感な部分である顔を覆いもせずに、面を露にするであろう。

注10　　24節において、クルアーンは人類にとり最上の啓示書であり、人間の精神的向上に深く係わる全ての教義、又人生を有意義で喜びあるものにする主題全てを包括的に論じている。クルアーンは、信仰と行動に指針を与えている。

注11　　多神教徒とは、互いに利害の対立する幾つかの主に仕え、悪質で短気な人である。この様な人々は実に哀れである。彼等が、唯一神アッラーに仕え、気に入られる真の信者になれるだろうか。

31．げに汝はいずれ死す、彼等とてまた然(しか)り。

إِنَّكَ مَيِّتٌ وَإِنَّهُم مَّيِّتُونَ ٣١

32．而(しか)して、復活の日に、お前たちはその主の前で互に論争すべし。

ثُمَّ إِنَّكُمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ عِندَ رَبِّكُمْ تَخْتَصِمُونَ ٣٢

第四項

33．アッラーについて偽りを述べ、真理が降(くだ)れば之(これ)を拒否する者に優る不義者はあろうか？　不信心者どもの住居は地獄になしとな？

فَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّن كَذَبَ عَلَى اللّٰهِ وَكَذَّبَ بِالصِّدْقِ إِذْ جَآءَهُ ۚ أَلَيْسَ فِي جَهَنَّمَ مَثْوًى لِّلْكٰفِرِينَ ٣٣

34．されど、真理をもたらし、之(これ)を証明する者、かかる人々は義(ただ)しい者なり。

وَالَّذِي جَآءَ بِالصِّدْقِ وَصَدَّقَ بِهِۦٓ أُولٰٓئِكَ هُمُ الْمُتَّقُونَ ٣٤

35．それ等の者は、主の許(もと)で、己れの欲するものを得ん。そは善行を積(つ)む者への報奨なり。

لَهُم مَّا يَشَآءُونَ عِندَ رَبِّهِمْ ۚ ذٰلِكَ جَزٰٓؤُا الْمُحْسِنِينَ ٣٥

36．されば、アッラーは彼等がなせる諸悪を祓(はら)い浄(きよ)め、その所業の最善なるものに準じて報奨を与えん。（注12）

لِيُكَفِّرَ اللّٰهُ عَنْهُمْ أَسْوَأَ الَّذِي عَمِلُوا وَيَجْزِيَهُمْ أَجْرَهُم بِأَحْسَنِ الَّذِي كَانُوا يَعْمَلُونَ ٣٦

37．僕(しもべ)等はアッラーでは満足し得ざるか？彼等はアッラー以外の神々を以て汝を脅(おど)さんとす。アッラーが迷誤のままに見捨てる者には、如何なる導きもなし。

أَلَيْسَ اللّٰهُ بِكَافٍ عَبْدَهُ ۖ وَيُخَوِّفُونَكَ بِالَّذِينَ مِن دُونِهِۦ ۚ وَمَن يُضْلِلِ اللّٰهُ فَمَا لَهُ مِنْ هَادٍ ٣٧

38．而(しか)して、アッラーが導く者は、何人(なんびと)も之(これ)を誘(いざな)い惑(まど)わしむる能(あた)わず。アッラーは偉力者、応報の主に非ざるか？

وَمَن يَهْدِ اللّٰهُ فَمَا لَهُ مِن مُّضِلٍّ ۗ أَلَيْسَ اللّٰهُ بِعَزِيزٍ ذِي انتِقَامٍ ٣٨

39．汝彼等に「天地(あめつち)を創造せるは誰か？」と問わば、彼等は必ず「アッラーなり」と答えん。（注13）云え、「もしアッラーがこの我

وَلَئِن سَأَلْتَهُم مَّنْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضَ لَيَقُولُنَّ اللّٰهُ ۚ قُلْ أَفَرَءَيْتُم مَّا تَدْعُونَ مِن دُونِ

注12　神は信者の善行に、その程度に係わらず報いられる。神はそれぞれの最善の行いに報いられるのであるから。

注13　偶像崇拝者は、迷信や伝統的な愛着から、偽りの神を崇めるが、もしこの点を彼等に納得させるなら、彼等は、神が天地創造主であられ、真の力は全て神に属する事を、常に認めなければならない。

を傷つけんと欲しなば、お前たちがアッラー以外に拝する神々はその災難を除き得るか？　また、アッラーが我に慈悲を垂れんと欲しなば、彼等神々それを阻止し得るや？」と。云え、「我はアッラーのみにて満足なり。頼る者は、アッラーのみを頼る」と。

اللّٰهِ اِنْ اَرَادَنِیَ اللّٰهُ بِضُرٍّ هَلْ هُنَّ كٰشِفٰتُ ضُرِّهٖۤ اَوْ اَرَادَنِیْ بِرَحْمَةٍ هَلْ هُنَّ مُمْسِكٰتُ رَحْمَتِهٖ ؕ قُلْ حَسْبِیَ اللّٰهُ ؕ عَلَیْهِ یَتَوَكَّلُ الْمُتَوَكِّلُوْنَ ۝٣٩

40．云え、「我が民よ、お前たち最善をつくせ。我もつくす。やがて、お前たち思い知るべし、（注 14）

قُلْ یٰقَوْمِ اعْمَلُوْا عَلٰی مَكَانَتِكُمْ اِنِّیْ عَامِلٌ ۚ فَسَوْفَ تَعْلَمُوْنَ ۙ ۝٤٠

41．恥ずべき刑罰が何者に科せられ、永劫の罰が何者に下るかを」と。

مَنْ یَّاْتِیْهِ عَذَابٌ یُّخْزِیْهِ وَیَحِلُّ عَلَیْهِ عَذَابٌ مُّقِیْمٌ ۝٤١

42．げにわれらは人類の幸福のために、すべての真理から成る経典を汝に降したり。されば、嚮導に従う者は己れを益し、邪道に陥る者は己れを損なうのみ。而して、汝は彼等の保護者に非ず。（注 15）

اِنَّاۤ اَنْزَلْنَا عَلَیْكَ الْكِتٰبَ لِلنَّاسِ بِالْحَقِّ ۚ فَمَنِ اهْتَدٰی فَلِنَفْسِهٖ ۚ وَمَنْ ضَلَّ فَاِنَّمَا یَضِلُّ عَلَیْهَا ۚ وَمَاۤ اَنْتَ عَلَیْهِمْ بِوَكِیْلٍ ۝٤٢

第５項

43．アッラーは人間の死に臨んで、その魂を召し寄せ給う。また、いまだ死なざる者も、その睡眠の間に。而して、アッラーが死を決定せる者の魂は之を抑留し、然らざる者の魂は定めの期限まで之を還付す。げにこの中には、反省する人々へのさまざまなる神兆あり。（注 16）

اَللّٰهُ یَتَوَفَّی الْاَنْفُسَ حِیْنَ مَوْتِهَا وَالَّتِیْ لَمْ تَمُتْ فِیْ مَنَامِهَا ۚ فَیُمْسِكُ الَّتِیْ قَضٰی عَلَیْهَا الْمَوْتَ وَیُرْسِلُ الْاُخْرٰۤی اِلٰۤی اَجَلٍ مُّسَمًّی ؕ اِنَّ فِیْ ذٰلِكَ لَاٰیٰتٍ لِّقَوْمٍ یَّتَفَكَّرُوْنَ ۝٤٣

44．彼等はアッラー以外に執り成す者を求めるか？云え、「邪神どもはなんの権限もなく、なにもわからなくても、それでもいいのか？」と。（注 17）

اَمِ اتَّخَذُوْا مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ شُفَعَآءَ ؕ قُلْ اَوَلَوْ كَانُوْا لَا یَمْلِكُوْنَ شَیْـًٔا وَّلَا یَعْقِلُوْنَ ۝٤٤

注 14　当節は、イスラム教を倒す為に持てる力、富を全て使って最悪の行いをする様に、不信心者達に挑んでいるが、彼等の邪悪な企ては決して成功しないだろう。イスラム教は人類究極の希望であり運命なので、その大義は必ずや勝利を治めるのである。

注 15　人間は、良きにつけ悪しきにつけ、自らその運命を作り出す。

注 16　死を迎えても、人の魂は死滅する事なく、肉体を離れ、生前の行為を順を追って説明する為に、別の所で生き続ける。

注 17　魂は不滅であり、それを汚す様な行いをしてはならないと人間は教えられている。最悪の行為は自分を神と同等だと主張する事である。

45．云え、「すべて執り成しは、アッラー次第なり。天地の大権はアッラーに属す。いずれ、お前たちはアッラーの御許へ召し寄せられん」と。（注 18）

قُلْ لِّلّٰهِ الشَّفَاعَةُ جَمِيْعًا ۚ لَهٗ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۚ ثُمَّ اِلَيْهِ تُرْجَعُوْنَ ﴿٤٥﴾

46．アッラーの独一なることを聞くと、来世を信ぜざる者どもの心は嫌悪に縮みあがる。然るに彼等は、アッラー以外の邪神どもの名を聞くや、見よ、欣然たり。

وَاِذَا ذُكِرَ اللّٰهُ وَحْدَهُ اشْمَاَزَّتْ قُلُوْبُ الَّذِيْنَ لَا يُؤْمِنُوْنَ بِالْاٰخِرَةِ ۚ وَاِذَا ذُكِرَ الَّذِيْنَ مِنْ دُوْنِهٖٓ اِذَا هُمْ يَسْتَبْشِرُوْنَ ﴿٤٦﴾

47．云え、「おお、アッラー！　天地の創造主よ、目に見えざる世界と目に見える世界をともに知悉し給う御方、汝はその僕等の間で論争することについて、審判を下すべし」と。

قُلِ اللّٰهُمَّ فَاطِرَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ عٰلِمَ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ اَنْتَ تَحْكُمُ بَيْنَ عِبَادِكَ فِيْ مَا كَانُوْا فِيْهِ يَخْتَلِفُوْنَ ﴿٤٧﴾

48．悪事を働く徒輩が、たとえ地上のあらゆるものを、更にそれに加うるものを所有したとて、復活の日の恐ろしい罰を免れんとて、必ず之を以て購わんとすべし。されどその時、アッラーの御許から、彼等がいまだかつて考え及ばざることが示されん。

وَلَوْ اَنَّ لِلَّذِيْنَ ظَلَمُوْا مَا فِي الْاَرْضِ جَمِيْعًا وَّمِثْلَهٗ مَعَهٗ لَافْتَدَوْا بِهٖ مِنْ سُوْٓءِ الْعَذَابِ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ ۚ وَبَدَا لَهُمْ مِّنَ اللّٰهِ مَا لَمْ يَكُوْنُوْا يَحْتَسِبُوْنَ ﴿٤٨﴾

49．己れが稼ぎし悪事の数々が彼等に見えて来て、今まで嘲笑せることに彼等は包囲されん。

وَبَدَا لَهُمْ سَيِّاٰتُ مَا كَسَبُوْا وَحَاقَ بِهِمْ مَّا كَانُوْا بِهٖ يَسْتَهْزِءُوْنَ ﴿٤٩﴾

50．人は災難に遭うと、われらに祈る。されど、一たび恩恵を施すと、「これ我が知識にて得たり」と云う。然らず、そは一種の試練なり。されど、彼等の多くは之を知らず。（注 19）

فَاِذَا مَسَّ الْاِنْسَانَ ضُرٌّ دَعَانَا ۫ ثُمَّ اِذَا خَوَّلْنٰهُ نِعْمَةً مِّنَّا ۙ قَالَ اِنَّمَآ اُوْتِيْتُهٗ عَلٰى عِلْمٍ ۚ بَلْ هِيَ فِتْنَةٌ وَّلٰكِنَّ اَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿٥٠﴾

51．彼等以前の者も、同じことを云えり。されど、彼等の稼ぎしものは、彼等に益するところなし。

قَدْ قَالَهَا الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ فَمَآ اَغْنٰى عَنْهُمْ مَّا كَانُوْا يَكْسِبُوْنَ ﴿٥١﴾

注 18　　2 章 49 節参照

注 19　　人は逆境に在る時神に祈るが、順境においては神を忘れ、人生における成功は全て自らの力と知恵によるものと考えるのが常である。

52．されば、彼等は、己が稼ぎし悪事の数々に襲いかかられたり。されば、これ等不信心者の不義を行う者もまた、己が稼ぐ悪事の数々に襲われん。彼等は逃れること能わず。

فاصابهم سيات ما كسبوا والذين ظلموا من هؤلاء سيصيبهم سيات ما كسبوا وما هم بمعجزين ﴿٥٢﴾

53．彼等は、アッラーがその嘉する者に給養を増し、またその嘉するものに之を制限し給うことを、知らざるか？げにこの中には、信ずる人々へのさまざまなる神兆あり。

اولم يعلموا ان الله يبسط الرزق لمن يشاء ويقدر ان في ذلك لايت لقوم يؤمنون ﴿٥٣﴾

第六項

54．云え、「己れ自身に不行跡をなしたるわが僕等よ、アッラーの慈悲を諦めるなかれ。（注20）事実アッラーは、諸々の罪を赦し給う。げにアッラーは、寛大にして慈悲深くまします。

قل يعبادي الذين اسرفوا على انفسهم لا تقنطوا من رحمة الله ان الله يغفر الذنوب جميعا انه هو الغفور الرحيم ﴿٥٤﴾

55．汝等懲罰が下る前に、主にお縋りし、その意に従え。罰が下る時は、助からざるべし（注21）

وانيبوا الى ربكم واسلموا له من قبل ان ياتيكم العذاب ثم لا تنصرون ﴿٥٥﴾

56．主よりお前たちに啓示されたる最善の教えに従え、思いがけぬ懲罰が突然降りかかる前に」と。

واتبعوا احسن ما انزل اليكم من ربكم من قبل ان ياتيكم العذاب بغتة وانتم لا تشعرون ﴿٥٦﴾

57．「ああ、情けなや、我義務を忘れてアッラーをなおざりにせり！　げに我は嘲弄者一人なりき。

ان تقول نفس يحسرتى على ما فرطت في جنب الله وان كنت لمن السخرين ﴿٥٧﴾

58．もしアッラー我を導きたりせば、我は敬虔な信者たりしものを」

او تقول لو ان الله هدىني لكنت من المتقين ﴿٥٨﴾

59．また、懲罰を目のあたりにして、「もし我再び世に戻り得るならば、我は必ず善い行いをなす者の一人たらん」と悔やまぬために云え。

او تقول حين ترى العذاب لو ان لي كرة فاكون من المحسنين ﴿٥٩﴾

注20　この節は、罪人に希望と励ましの言葉を与えている。物事を楽観視する様に勧め、悲観的な考えを否定する。人生における大部分の罪や犯ちの根底には悲観論が在り、当節はこれを非難している。クルアーンは、重ねて神の慈悲、許しの約束を与えており（6：55、7：157、12：88、15：57、18：59）、悲しみに暮れ、重荷を負った者にとり、このお告げは何にも勝る慰めとなろう。

注21　前節は罪人に希望と励ましを与えたが、当節は、神の法に従う事で自らの運命を切り開いて行かなければならないと彼等に警告している。

60. 神は答えん、「然り、わが神兆が汝に至れる時、汝はこれ等を虚偽なりとし、傲慢にも不信者の仲間となれり」と。（注22）

بَلٰى قَدْ جَآءَتْكَ اٰيٰتِىْ فَكَذَّبْتَ بِهَا وَاسْتَكْبَرْتَ وَكُنْتَ مِنَ الْكٰفِرِيْنَ ﴿٦٠﴾

61. 汝は、復活の日に、アッラーに対して偽りを云いたる者どもの顔が暗くなるを見ん。地獄には驕慢なる者の住むべきところなしと云うか？

وَيَوْمَ الْقِيٰمَةِ تَرَى الَّذِيْنَ كَذَبُوْا عَلَى اللّٰهِ وُجُوْهُهُمْ مُّسْوَدَّةٌ ۚ اَلَيْسَ فِىْ جَهَنَّمَ مَثْوًى لِّلْمُتَكَبِّرِيْنَ ﴿٦١﴾

62. されど、敬虔なる者は、アッラーが諸々の災難から守り給い、幸運を授けるべし。彼等は禍に遭うことなく、悲しみもなかるべし。

وَيُنَجِّى اللّٰهُ الَّذِيْنَ اتَّقَوْا بِمَفَازَتِهِمْ ۡ لَا يَمَسُّهُمُ السُّوْٓءُ وَلَا هُمْ يَحْزَنُوْنَ ﴿٦٢﴾

63. アッラーは万物の創造主にして、そのすべてを管理し給う。

اَللّٰهُ خَالِقُ كُلِّ شَىْءٍ ۡ وَّهُوَ عَلٰى كُلِّ شَىْءٍ وَّكِيْلٌ ﴿٦٣﴾

64. 天地の鍵はその掌中にあり。されば、アッラーの神兆を信ぜざる者は、必ず失敗者とならん。

لَهٗ مَقَالِيْدُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۗ وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا بِاٰيٰتِ اللّٰهِ اُولٰٓئِكَ هُمُ الْخٰسِرُوْنَ ﴿٦٤﴾

第七項

65. 云え、「この我にアッラー以外の邪神どもを崇めよとな、汝等無知なる徒輩よ」と。

قُلْ اَفَغَيْرَ اللّٰهِ تَاْمُرُوْٓنِّىْٓ اَعْبُدُ اَيُّهَا الْجٰهِلُوْنَ ﴿٦٥﴾

66. 汝には、汝以前の人々に啓示せる如く「もし汝がアッラーに他神を配しなば、汝の所業は必ず無に帰し、失敗者の類いとならん」と確かに啓示せり。

وَلَقَدْ اُوْحِىَ اِلَيْكَ وَاِلَى الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِكَ ۚ لَئِنْ اَشْرَكْتَ لَيَحْبَطَنَّ عَمَلُكَ وَلَتَكُوْنَنَّ مِنَ الْخٰسِرِيْنَ ﴿٦٦﴾

67. 左様、アッラーを崇敬し、謝恩の念厚き輩たれ。

بَلِ اللّٰهَ فَاعْبُدْ وَكُنْ مِّنَ الشّٰكِرِيْنَ ﴿٦٧﴾

68. 彼等は、アッラーの権能について、正確な概念を形成し得ざるなり。復活の日には、この広大な大地は完全にアッラーの支配下となり、諸天は彼の右手にて捲かるべし。ありがたや、アッラーは彼等が配する他神とは比較にならぬ高みにまします。（注23）

وَمَا قَدَرُوا اللّٰهَ حَقَّ قَدْرِهٖ ۖ وَالْاَرْضُ جَمِيْعًا قَبْضَتُهٗ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ وَالسَّمٰوٰتُ مَطْوِيّٰتٌ ۢ بِيَمِيْنِهٖ ۚ سُبْحٰنَهٗ وَتَعٰلٰى عَمَّا يُشْرِكُوْنَ ﴿٦٨﴾

注22　悪に染まった者に、数々の再生の機会が与えられている。しかし、繰り返し神を拒み、悪事を働いて法を犯し、裁きが下される時になって、最早悔い改めても無駄である。

注23　当節では、神の偉大なる力と尊厳に触れ、木や石でできた偶像や愚かな人間を崇める事は、何にも増して神の偉大なる属性を傷付けると述べている。

69．而(しか)して、喇叭(ラッパ)一たび鳴り渡れば、アッラーが容赦せんと欲する者を除き、天にある者地にある者みな悉く昏倒(こんとう)せん。次いで二度目に鳴る時は、見よ、彼等起き上り、審判を待ち受ける。

وَنُفِخَ فِي الصُّوْرِ فَصَعِقَ مَنْ فِي السَّمٰوٰتِ وَمَنْ فِي الْاَرْضِ اِلَّا مَنْ شَآءَ اللّٰهُ ؕ ثُمَّ نُفِخَ فِيْهِ اُخْرٰى فَاِذَا هُمْ قِيَامٌ يَّنْظُرُوْنَ ﴿۶۹﴾

70．大地は主の御光(みひかり)によって光り輝き、天の帳簿が彼等の前に開き置かれ、預言者たちや証人たちが召喚され、公平な審判がなされ、決して不当には遇せられざるべし。

وَاَشْرَقَتِ الْاَرْضُ بِنُوْرِ رَبِّهَا وَوُضِعَ الْكِتٰبُ وَجِايْٓءَ بِالنَّبِيّٖنَ وَالشُّهَدَآءِ وَقُضِيَ بَيْنَهُمْ بِالْحَقِّ وَهُمْ لَا يُظْلَمُوْنَ ﴿۷۰﴾

71．各人ともそのなせることに対して存分に報いられるべし。主は彼等がなせることを熟知し給う。

وَوُفِّيَتْ كُلُّ نَفْسٍ مَّا عَمِلَتْ وَهُوَ اَعْلَمُ بِمَا يَفْعَلُوْنَ ﴿۷۱﴾ ع

第八項

72．而(しか)して、不信心者どもは群をなして地獄に駆(か)り立てられ、そこに到着するや、諸門たちまち開かれ、門番が彼等に向って云わん、「お前たちの中から出でたる使徒が来て、主の神兆(しるし)をお前たちに読誦せざりしか？　また、今日のこの対面をお前たちに警告せざりしか？」と。彼等は答えん、「然(しか)り、されど不信心者に対する刑罰の宣告は、すでになされたり」と。

وَسِيْقَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْٓا اِلٰى جَهَنَّمَ زُمَرًا ؕ حَتّٰٓى اِذَا جَآءُوْهَا فُتِحَتْ اَبْوَابُهَا وَقَالَ لَهُمْ خَزَنَتُهَآ اَلَمْ يَاْتِكُمْ رُسُلٌ مِّنْكُمْ يَتْلُوْنَ عَلَيْكُمْ اٰيٰتِ رَبِّكُمْ وَيُنْذِرُوْنَكُمْ لِقَآءَ يَوْمِكُمْ هٰذَا ؕ قَالُوْا بَلٰى وَلٰكِنْ حَقَّتْ كَلِمَةُ الْعَذَابِ عَلَى الْكٰفِرِيْنَ ﴿۷۲﴾

73．かく云われん、「汝等地獄の門を入りて、その中に永劫(えいごう)に住め。禍なるかな驕慢(きょうまん)なる者の住居は」と

قِيْلَ ادْخُلُوْٓا اَبْوَابَ جَهَنَّمَ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ۚ فَبِئْسَ مَثْوَى الْمُتَكَبِّرِيْنَ ﴿۷۳﴾

74．主を畏れる人々は、群をなして楽園へと案内されん。而(しか)して、楽園に着けば、忽ち諸門は開かれ、門番が彼等に向って「お前たちに平安あれ！　汝等に幸福あれ、中に入りて永遠(とこしえ)に住め」と云う。

وَسِيْقَ الَّذِيْنَ اتَّقَوْا رَبَّهُمْ اِلَى الْجَنَّةِ زُمَرًا ؕ حَتّٰٓى اِذَا جَآءُوْهَا وَفُتِحَتْ اَبْوَابُهَا وَقَالَ لَهُمْ خَزَنَتُهَا سَلٰمٌ عَلَيْكُمْ طِبْتُمْ فَادْخُلُوْهَا خٰلِدِيْنَ ﴿۷۴﴾

75．彼等は云わん、「賞讃は挙(あ)げてアッラーのもの、彼は我等との約束を果たしたり。彼は我等に大地を継がせ、楽園の何処(いずこ)なりと我等の好きなところに住ましむ」と。正義に

وَقَالُوا الْحَمْدُ لِلّٰهِ الَّذِيْ صَدَقَنَا وَعْدَهٗ وَاَوْرَثَنَا الْاَرْضَ نَتَبَوَّاُ مِنَ الْجَنَّةِ حَيْثُ نَشَآءُ ۚ فَنِعْمَ

精進せる者の報奨はなんと素晴らしきかな！

أَجْرُ الْعٰمِلِينَ ٧٥

76．而して、汝は、諸天使が玉座を囲み、主の栄光を讃美するを見ん。彼等は皆公平に裁かれん。而して、「賞讃は挙げて万物の主、アッラーのものなり」と唱えられん。(注24)

وَتَرَى الْمَلٰٓئِكَةَ حَآفِّينَ مِنْ حَوْلِ الْعَرْشِ يُسَبِّحُونَ بِحَمْدِ رَبِّهِمْ ۚ وَقُضِيَ بَيْنَهُمْ بِالْحَقِّ وَقِيلَ الْحَمْدُ لِلّٰهِ رَبِّ الْعٰلَمِينَ ٧٦

注24　神の属性は、裁きの日に最も完全な形で表され、天使達が神への賛美歌合唱の勤めを果たすであろう。又当節は次の様な意味を持つとも言える。神の唯一性はアラビアにもたらされ、地上における真の神の下僕が天の天使と共に神を賛美するであろう。

سُوْرَةُ الْمُؤْمِنِ مَكِّيَّةٌ

アル・モメン

(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ﴿١﴾

2．ハー・ミーム。(注1)

حٰمٓ ﴿٢﴾

3．この経典の啓示は、アッラーより降る。そは偉大にして全知全能、

تَنْزِيْلُ الْكِتٰبِ مِنَ اللّٰهِ الْعَزِيْزِ الْعَلِيْمِ ﴿٣﴾

4．罪を赦し、改悛を容れ、罰するに厳しく、賜物の所有主なり。彼の外に神なし。最後に帰り着くところは、彼なり。

غَافِرِ الذَّنْۢبِ وَقَابِلِ التَّوْبِ شَدِيْدِ الْعِقَابِ ذِى الطَّوْلِ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ اِلَيْهِ الْمَصِيْرُ ﴿٤﴾

5．不信心者以外は、何人もアッラーの神兆について反駁せず。されば、汝は、不信心者どもの闊歩するを見て欺かれるなかれ。(注2)

مَا يُجَادِلُ فِيْٓ اٰيٰتِ اللّٰهِ اِلَّا الَّذِيْنَ كَفَرُوْا فَلَا يَغْرُرْكَ تَقَلُّبُهُمْ فِي الْبِلَادِ ﴿٥﴾

6．彼等以前にも、ノアの民並びにその他の宗派の者が、使徒たちを捕えんと企て、偽りの証明によって真理を論破せんとなせり。されば、われは彼等を捕えたり。わが懲罰の如何に恐ろしかりしことか！

كَذَّبَتْ قَبْلَهُمْ قَوْمُ نُوْحٍ وَّالْاَحْزَابُ مِنْۢ بَعْدِهِمْ وَهَمَّتْ كُلُّ اُمَّةٍۢ بِرَسُوْلِهِمْ لِيَاْخُذُوْهُ وَجٰدَلُوْا بِالْبَاطِلِ لِيُدْحِضُوْا بِهِ الْحَقَّ فَاَخَذْتُهُمْ فَكَيْفَ كَانَ عِقَابِ ﴿٦﴾

7．かくの如く、不信心者どもに対する主のお言葉は履行されり。すなわち、彼等は業火の住人なり。

وَكَذٰلِكَ حَقَّتْ كَلِمَتُ رَبِّكَ عَلَى الَّذِيْنَ كَفَرُوْٓا اَنَّهُمْ اَصْحٰبُ النَّارِ ﴿٧﴾

8．玉座を担う諸天使（注3）並びにそれを取りまく天使たちは、主の栄光を讃え、主を

اَلَّذِيْنَ يَحْمِلُوْنَ الْعَرْشَ وَمَنْ حَوْلَهٗ يُسَبِّحُوْنَ بِحَمْدِ

注1　賞賛すべき栄誉の主

注2　信者達は、物力は月日が経てば必ず失われるものであるから、不信心者のそれに惑わされてはならないと命じられている。

注3　「玉座」は神の属性を意味しており（7章55節及び10章4節参照)、「玉座を担う諸天使」とは、その身を通じて神の属性を表す人を指す。自然の法は天使を通して作用し、預言者は神のお告げが人々にもたらされる媒介の役割を果たす為、この「玉座を担う諸天使」とは天使と神の使者双方を指し、「それを取りまく天使

信じ、信ずる人々のために赦しを求めて、云う、「主よ、汝は慈悲と知識を以て萬物を包含す。されば、悔悟し、汝の道に従う人々を赦し給え。而(しか)して、彼等を地獄の刑から守り給え。

رَبِّهِمْ وَيُؤْمِنُوْنَ بِهٖ وَيَسْتَغْفِرُوْنَ لِلَّذِيْنَ اٰمَنُوْا رَبَّنَا وَسِعْتَ كُلَّ شَيْءٍ رَّحْمَةً وَّعِلْمًا فَاغْفِرْ لِلَّذِيْنَ تَابُوْا وَاتَّبَعُوْا سَبِيْلَكَ وَقِهِمْ عَذَابَ الْجَحِيْمِ ۝٨

9．主よ、かねて汝が約束せる永遠の楽園に彼等を入らせ給え、彼等の父や妻や子供らの中の高潔な者たちも同じように。（注4）げに汝は偉大にして賢哲なり。

رَبَّنَا وَاَدْخِلْهُمْ جَنّٰتِ عَدْنِ ِالَّتِيْ وَعَدْتَّهُمْ وَمَنْ صَلَحَ مِنْ اٰبَآئِهِمْ وَاَزْوَاجِهِمْ وَذُرِّيّٰتِهِمْ اِنَّكَ اَنْتَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ۝٩

10．而(しか)して、彼等を諸悪より護り給え。かの日のために、汝が諸悪より護ってやる者、げにその者は汝の慈悲に浴したるなり。それは素晴らしい大成功なり」と。

وَقِهِمُ السَّيِّاٰتِ وَمَنْ تَقِ السَّيِّاٰتِ يَوْمَئِذٍ فَقَدْ رَحِمْتَهٗ وَذٰلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيْمُ ۝١٠ ع

第二項

11．不信心者どもは告げられん、「お前たちが自分自身を憎悪するよりも、お前たちが信仰を勧められて之(これ)を拒んだ時のアッラーの憎悪ははるかに激しかりき」と。（注5）

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا يُنَادَوْنَ لَمَقْتُ اللّٰهِ اَكْبَرُ مِنْ مَّقْتِكُمْ اَنْفُسَكُمْ اِذْ تُدْعَوْنَ اِلَى الْاِيْمَانِ فَتَكْفُرُوْنَ ۝١١

12．彼等は云わん、「主よ、汝は我等を二度死なせ、二度生命を与え給えり。（注6）我等は己が罪の数々を認む。されば、逃げるすべなきか？」と。

قَالُوْا رَبَّنَآ اَمَتَّنَا اثْنَتَيْنِ وَاَحْيَيْتَنَا اثْنَتَيْنِ فَاعْتَرَفْنَا بِذُنُوْبِنَا فَهَلْ اِلٰى خُرُوْجٍ مِّنْ سَبِيْلٍ ۝١٢

たち」というは、地上の諸事を取り仕切る首位の天使を補佐する下位の天使、あるいは、預言者の教えを広める預言者の真の弟子を示すと言えよう。7章55節も参照の事。

注4　この節には重要な原理が述べられてある。この世の何人たりとも独力で事を成すことはできない。意識するしないにかかわらず、他人の助力を得ているものである。この意識的あるいは無意識の内の援助者とは、主に両親・妻・子供達である。それ由、業績を成した暁に信者に授けられる天恵に、これ等の親族達も又浴する事を許されるであろう。

注5　自らの悪行が招いた不幸な結末を突き付けられた時、我身を呪い始めるのが人の常である。不信心者達は、罰が下される時我身を嫌悪すると告げられている。しかし、慈悲深き神は、彼等が神のお告げを拒み、神の使者を迫害した時、彼等に対し遥かに強い嫌悪の情を抱かれた。

注6　誕生以前の状態は一種の死であり、この世における生の終わりは第二の死である。誕生と復活は二つの生である。

13. 彼等は告げられん、「お前たちは、アッラーが唯一なるものと宣下されると、之を信ぜず、他神らをアッラーに配する時は之を信じたるが故なり。裁定はアッラー次第なり、そは至高者、比類なき至大者なり」と。

ذٰلِكُمْ بِأَنَّهٗٓ إِذَا دُعِيَ اللّٰهُ وَحْدَهٗ كَفَرْتُمْ ۚ وَإِنْ يُّشْرَكْ بِهٖ تُؤْمِنُوْا ۚ فَالْحُكْمُ لِلّٰهِ الْعَلِيِّ الْكَبِيْرِ ﴿١٣﴾

14. さまざまなる神兆をお前たちに示し、お前たちのために天から滋養を降すはアッラーなり。(注７)然るに、神にお縋りする者以外は、何人も之に留意せず。

هُوَ الَّذِيْ يُرِيْكُمْ اٰيٰتِهٖ وَيُنَزِّلُ لَكُمْ مِّنَ السَّمَآءِ رِزْقًا ۚ وَمَا يَتَذَكَّرُ إِلَّا مَنْ يُّنِيْبُ ﴿١٤﴾

15. されば汝等、不信心者どもが如何に嫌忌するとも、アッラーに祈願して随順の誠を尽せ。

فَادْعُوا اللّٰهَ مُخْلِصِيْنَ لَهُ الدِّيْنَ وَلَوْ كَرِهَ الْكٰفِرُوْنَ ﴿١٥﴾

16. アッラーは至尊者なり、玉座の主なり。(注８)彼は僕等のうちその欲する者にかの日の会見を警告すべく、御言葉を降し給う。

رَفِيْعُ الدَّرَجٰتِ ذُو الْعَرْشِ ۚ يُلْقِي الرُّوْحَ مِنْ أَمْرِهٖ عَلٰى مَنْ يَّشَآءُ مِنْ عِبَادِهٖ لِيُنْذِرَ يَوْمَ التَّلَاقِ ﴿١٦﴾

17. だれもが御前にまかり出る日、何事もアッラーから隠すこと能わざるべし。「その日、大権を握るは何者ぞ？」そはアッラー、唯一にして至高なる御方。

يَوْمَ هُمْ بٰرِزُوْنَ ۚ لَا يَخْفٰى عَلَى اللّٰهِ مِنْهُمْ شَيْءٌ ۗ لِمَنِ الْمُلْكُ الْيَوْمَ ۗ لِلّٰهِ الْوَاحِدِ الْقَهَّارِ ﴿١٧﴾

18. その日、各人は己れの稼ぎ高に応じた報いを受けん。如何なる不公平も行われず。げにアッラーの清算は迅速なり

اَلْيَوْمَ تُجْزٰى كُلُّ نَفْسٍ بِمَا كَسَبَتْ ۗ لَا ظُلْمَ الْيَوْمَ ۗ إِنَّ اللّٰهَ سَرِيْعُ الْحِسَابِ ﴿١٨﴾

19. 迫り来るその日のことを彼等に警告せよ。その時彼等の心臓は痛恨の余り、喉元まで上って息を止めん。不義なす輩は一人だに忠実な友もなく、また聞いて貰える執り成し手もなからん。

وَأَنْذِرْهُمْ يَوْمَ الْاٰزِفَةِ إِذِ الْقُلُوْبُ لَدَى الْحَنَاجِرِ كٰظِمِيْنَ ۚ مَا لِلظّٰلِمِيْنَ مِنْ حَمِيْمٍ وَّلَا شَفِيْعٍ يُّطَاعُ ﴿١٩﴾

20. アッラーは目の欺瞞（注９）を看破し、胸中に秘めるものを洞察す。

يَعْلَمُ خَآئِنَةَ الْأَعْيُنِ وَمَا تُخْفِي الصُّدُوْرُ ﴿٢٠﴾

注７　肉体的のみならず精神的にも、生を支える物は、全て天より下される。全生命の拠り所である水（21：31）は天より降り、人の魂の拠り所となる神の啓示も同じ天より授けられる。

注８　「玉座の主」は、慈悲の主と同様、「玉座」が物質的なものであるという巷の誤解に反論するものである。

注９　怒り・蔑み・欲望の眼差し。

21．アッラーは真理を以て審判すれど、アッラーの他に彼等が祈る者は、何事も裁き得ず。げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知る御方でおわします。

وَاللَّهُ يَقْضِي بِالْحَقِّ ۖ وَالَّذِينَ يَدْعُونَ مِن دُونِهِ لَا يَقْضُونَ بِشَيْءٍ ۗ إِنَّ اللَّهَ هُوَ السَّمِيعُ الْبَصِيرُ ﴿٢١﴾

第三項

22．彼等は各地を遍歴りて、彼等以前の人々の末路が如何がなりたるかを見ざりしか？あの者どもは彼等よりも力ありて、現に地上に彼等の遺跡を残す。然れども、アッラーは彼等の諸悪故に之を捕えたるなり。彼等はアッラーに対する防護者を持たざりき。

أَوَلَمْ يَسِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَيَنظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِينَ كَانُوا مِن قَبْلِهِمْ ۚ كَانُوا هُمْ أَشَدَّ مِنْهُمْ قُوَّةً وَآثَارًا فِي الْأَرْضِ فَأَخَذَهُمُ اللَّهُ بِذُنُوبِهِمْ وَمَا كَانَ لَهُم مِّنَ اللَّهِ مِن وَاقٍ ﴿٢٢﴾

23．そは、彼等の使徒が明白なる神兆を携えて彼等に来たりし時、彼等之を信ぜざりしが故に、アッラー彼等を捕らえたり。げにアッラーは力強く、罰するに苛斂なり。

ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ كَانَت تَّأْتِيهِمْ رُسُلُهُم بِالْبَيِّنَاتِ فَكَفَرُوا فَأَخَذَهُمُ اللَّهُ ۚ إِنَّهُ قَوِيٌّ شَدِيدُ الْعِقَابِ ﴿٢٣﴾

24．われらはモーゼを、われらの神兆と明らかな権能を与えて遣わしたり、

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا مُوسَىٰ بِآيَاتِنَا وَسُلْطَانٍ مُّبِينٍ ﴿٢٤﴾

25．ファラオとハーマーンとクアールーンのところへ。然るに、彼等は云えり、「この男は大嘘つきの妖術師なり」と。

إِلَىٰ فِرْعَوْنَ وَهَامَانَ وَقَارُونَ فَقَالُوا سَاحِرٌ كَذَّابٌ ﴿٢٥﴾

26．而して、モーゼがわれらからの真理を彼等にもたらすや、彼等は云えり、「モーゼと共に信ずる者たちの息子等を殺し、婦女子のみを生かしておけ」と。されど、不信心者どもの策謀はいつも必ず失敗す。

فَلَمَّا جَاءَهُم بِالْحَقِّ مِنْ عِندِنَا قَالُوا اقْتُلُوا أَبْنَاءَ الَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ وَاسْتَحْيُوا نِسَاءَهُمْ ۚ وَمَا كَيْدُ الْكَافِرِينَ إِلَّا فِي ضَلَالٍ ﴿٢٦﴾

27．ファラオは云えり、「モーゼを殺すのは余にまかせよ。モーゼに、自分の主に祈らせよ。余はモーゼがお前たちの宗教を変え、この國を撹乱せんことを恐る」と。

وَقَالَ فِرْعَوْنُ ذَرُونِي أَقْتُلْ مُوسَىٰ وَلْيَدْعُ رَبَّهُ ۖ إِنِّي أَخَافُ أَن يُبَدِّلَ دِينَكُمْ أَوْ أَن يُظْهِرَ فِي الْأَرْضِ الْفَسَادَ ﴿٢٧﴾

28．モーゼは云えり、「我は清算の日を信ぜぬすべての驕慢なる者から、我が主にして且つお前たちの主なるアッラーの許へ避難す」と。（注10）

وَقَالَ مُوسَىٰ إِنِّي عُذْتُ بِرَبِّي وَرَبِّكُم مِّن كُلِّ مُتَكَبِّرٍ لَّا يُؤْمِنُ بِيَوْمِ الْحِسَابِ ﴿٢٨﴾

注10　神は、預言者の選民の究極の拠り所である。彼等は周りを闇に囲まれ、彼等の説く真理を悪の勢力が根絶しようと企む時、神の扉をたたく。

第四項

29．ファラオの一族の中で、密かに信仰する者ありて、（注 11）云えり、「あなた方は『我が主はアッラーなり』と云うだけで、人を殺すか？その方があなた方の主より明白なる証拠をもたらし来たるというに。もし彼が嘘つきならば、その偽りの罪は彼の身に降りかからん。されど、もし彼の云うことが真実ならば、彼があなた方に警告するいくつかは、必ずやあなた方の身に降りかからん。げにアッラーは則を越える者や嘘つきを導き給わぬ。

وَقَالَ رَجُلٌ مُّؤْمِنٌ مِّنْ آلِ فِرْعَوْنَ يَكْتُمُ إِيمَانَهُ أَتَقْتُلُونَ رَجُلًا أَن يَقُولَ رَبِّيَ اللَّهُ وَقَدْ جَاءَكُم بِالْبَيِّنَاتِ مِن رَّبِّكُمْ وَإِن يَكُ كَاذِبًا فَعَلَيْهِ كَذِبُهُ وَإِن يَكُ صَادِقًا يُصِبْكُم بَعْضُ الَّذِي يَعِدُكُمْ إِنَّ اللَّهَ لَا يَهْدِي مَنْ هُوَ مُسْرِفٌ كَذَّابٌ ﴿٢٩﴾

30．みなの衆、今主権はあなた方のもの、あなた方はこの国で優位を占めるも、もしアッラーの罰が我等に降らば、之に対して我等を護る者は、果して誰か？」と。ファラオは云えり、「余は自分が納得することをお前たちに指示するのみ。余がお前たちを導く道こそが、正確な道なり」と。

يَا قَوْمِ لَكُمُ الْمُلْكُ الْيَوْمَ ظَاهِرِينَ فِي الْأَرْضِ فَمَن يَنصُرُنَا مِن بَأْسِ اللَّهِ إِن جَاءَنَا قَالَ فِرْعَوْنُ مَا أُرِيكُمْ إِلَّا مَا أَرَىٰ وَمَا أَهْدِيكُمْ إِلَّا سَبِيلَ الرَّشَادِ ﴿٣٠﴾

31．かの信者は云えり、「みなの衆、我は、過去の高度な民族が滅亡したあの日のようなことが、あなた方に起りはせぬかと心配す。

وَقَالَ الَّذِي آمَنَ يَا قَوْمِ إِنِّي أَخَافُ عَلَيْكُم مِّثْلَ يَوْمِ الْأَحْزَابِ ﴿٣١﴾

32．ノアやアードやサムードの民、並びに彼等以後の者どもの場合と同じように。

مِثْلَ دَأْبِ قَوْمِ نُوحٍ وَعَادٍ وَثَمُودَ وَالَّذِينَ مِن بَعْدِهِمْ وَمَا اللَّهُ يُرِيدُ ظُلْمًا لِّلْعِبَادِ ﴿٣٢﴾

33．みなの衆、我はあなた方のために、人々が助けを求めて互に呼び合うその日を心配す。（注 12）

وَيَا قَوْمِ إِنِّي أَخَافُ عَلَيْكُمْ يَوْمَ التَّنَادِ ﴿٣٣﴾

34．その日あなた方は、背を向けて遁走せん。アッラーの激怒からあなた方を護る者はなかるべし。アッラーが一たび邪道へ導かんとした者には、如何なる嚮導者もなかるべし。

يَوْمَ تُوَلُّونَ مُدْبِرِينَ مَا لَكُم مِّنَ اللَّهِ مِنْ عَاصِمٍ وَمَن يُضْلِلِ اللَّهُ فَمَا لَهُ مِنْ هَادٍ ﴿٣٤﴾

注 11　この信者は、ふさわしい時に表明しようと思い、その信仰を隠し続けた。彼が自らの信仰を表し、ファラオの臣下に語りかけたその勇気ある態度は、それまで信仰を隠して来たのが恐れの為ではなかった事を裏付けている。

注 12　人々が四散する日、又は彼等が互いに反目し合い分裂する日、あるいは、彼等が互いに助けを求める日。

35．かつてヨセフが明証をもたらし来たる時も、あなた方は彼のもたらしたものについて疑い続け、彼が死するに及んで、『彼の後にはアッラーも使徒を遣わさざるべし』と云えり。アッラーはかくの如く、則を越える者どもや懐疑者を迷わしむ。（注13）

وَلَقَدْ جَآءَكُمْ يُوسُفُ مِنْ قَبْلُ بِالْبَيِّنٰتِ فَمَا زِلْتُمْ فِيْ شَكٍّ مِّمَّا جَآءَكُمْ بِهٖ ؕ حَتّٰىٓ اِذَا هَلَكَ قُلْتُمْ لَنْ يَّبْعَثَ اللّٰهُ مِنْۢ بَعْدِهٖ رَسُوْلًا ؕ كَذٰلِكَ يُضِلُّ اللّٰهُ مَنْ هُوَ مُسْرِفٌ مُّرْتَابُۨ ﴿٣٥﴾

36．これ等の者どもは、アッラーより如何なる権威も与えられておらぬくせに、アッラーの徴をあれこれと論ずる徒輩なり。こは、アッラー並びに信徒たちにとって、甚だしく憎んで余りある者、故にアッラーは、すべての驕慢なる者の心を封印し給う」と。

الَّذِيْنَ يُجَادِلُوْنَ فِيْٓ اٰيٰتِ اللّٰهِ بِغَيْرِ سُلْطٰنٍ اَتٰىهُمْ ؕ كَبُرَ مَقْتًا عِنْدَ اللّٰهِ وَعِنْدَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا ؕ كَذٰلِكَ يَطْبَعُ اللّٰهُ عَلٰى كُلِّ قَلْبِ مُتَكَبِّرٍ جَبَّارٍ ﴿٣٦﴾

37．すると、ファラオは云えり、「ハーマーンよ、我がために高楼を築け、接近する途を得んために、

وَقَالَ فِرْعَوْنُ يٰهَامٰنُ ابْنِ لِيْ صَرْحًا لَّعَلِّيْٓ اَبْلُغُ الْاَسْبَابَ ﴿٣٧﴾

38．すなわち、天に接近する途を得て、モーゼの神とやらを熟視せん。ま、嘘に違いなかろうが」と。かくの如く、ファラオには己れの悪業が立派に見え、正しい道から閉め出されたり。而して、ファラオの策謀は滅び去りぬ。（注14）

اَسْبَابَ السَّمٰوٰتِ فَاَطَّلِعَ اِلٰٓى اِلٰهِ مُوْسٰى وَاِنِّيْ لَاَظُنُّهٗ كَاذِبًا ؕ وَكَذٰلِكَ زُيِّنَ لِفِرْعَوْنَ سُوْٓءُ عَمَلِهٖ وَصُدَّ عَنِ السَّبِيْلِ ؕ وَمَا كَيْدُ فِرْعَوْنَ اِلَّا فِيْ تَبَابٍ ﴿٣٨﴾

第五項

39．信仰せる者は云えり（注15）「人々よ、我に従え。我はお前たちを清廉な道に導かん。

وَقَالَ الَّذِيْٓ اٰمَنَ يٰقَوْمِ اتَّبِعُوْنِ اَهْدِكُمْ سَبِيْلَ الرَّشَادِ ﴿٣٩﴾

40．人々よ、この世の生活は束の間の快楽にすぎず。げに来世こそ永遠の住まいなり。

يٰقَوْمِ اِنَّمَا هٰذِهِ الْحَيٰوةُ الدُّنْيَا مَتَاعٌ ؗ وَّاِنَّ الْاٰخِرَةَ هِيَ دَارُ الْقَرَارِ ﴿٤٠﴾

注13　預言者は先史時代からこの世に存在したが、人間とは頑固なもので、新たな預言者が現れれば必ず彼を拒み、彼の死後彼を信じた人々は、もう預言者が出現する事は無く、啓示の扉は永遠に閉じられたと語った。

注14　ファラオは、モーゼの神を盗み見る為天国に上りたいものだと皮肉混じりに語ったが、神は海の底で彼にその力をお示しになった。

注15　「信仰せる者」という言葉は、真の信者がその大儀の正しさを確信している事を示すものである。彼等にあらゆる困難辛苦を甘受させる事が可能なのは、この岩の様に固い信仰の成せる業である。

41. 誰であれ悪事を行う者は、それ相応に返報されようぞ。然れども、善事を行う者は、信者なれば、男女の別なく楽園に入り、そこにて限りない給養を賜わらん。(注 16)

مَنْ عَمِلَ سَيِّئَةً فَلَا يُجْزٰى إِلَّا مِثْلَهَا ۚ وَمَنْ عَمِلَ صَالِحًا مِّنْ ذَكَرٍ أَوْ أُنْثٰى وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَأُولٰٓئِكَ يَدْخُلُونَ الْجَنَّةَ يُرْزَقُونَ فِيهَا بِغَيْرِ حِسَابٍ ﴿٤١﴾

42. 人々よ、我お前たちを救いに呼びかけるに、お前たちは我を業火に招かんとするは不思議なり。

وَيٰقَوْمِ مَا لِيٓ أَدْعُوكُمْ إِلَى النَّجٰوةِ وَتَدْعُونَنِيٓ إِلَى النَّارِ ﴿٤٢﴾

43. 我お前たちを、偉力者、宥恕者に招く時、お前たちは我にアッラーを棄てさせ、我に、我が知らざる者をアッラーに配せしめんとす。

تَدْعُونَنِي لِأَكْفُرَ بِاللّٰهِ وَأُشْرِكَ بِهٖ مَا لَيْسَ لِي بِهٖ عِلْمٌ ۫ وَّأَنَا أَدْعُوكُمْ إِلَى الْعَزِيزِ الْغَفَّارِ ﴿٤٣﴾

44. お前たちが我に勧める神々は、現世にても来世にても何んの権能も有せざる者なり。(注 17) 我等の帰所は必ずアッラーにして、罪人が業火の住人たらんこともまた間違いなかるべし。

لَا جَرَمَ أَنَّمَا تَدْعُونَنِيٓ إِلَيْهِ لَيْسَ لَهٗ دَعْوَةٌ فِي الدُّنْيَا وَلَا فِي الْاٰخِرَةِ وَأَنَّ مَرَدَّنَآ إِلَى اللّٰهِ وَأَنَّ الْمُسْرِفِينَ هُمْ أَصْحٰبُ النَّارِ ﴿٤٤﴾

45. されば、お前たち、我が云いしことをその中思い出さん。我は、我がことをアッラーに委ぬ。げにアッラーはその僕等を照覧す」と。

فَسَتَذْكُرُونَ مَآ أَقُولُ لَكُمْ ۚ وَأُفَوِّضُ أَمْرِيٓ إِلَى اللّٰهِ ۚ إِنَّ اللّٰهَ بَصِيرٌ ۢ بِالْعِبَادِ ﴿٤٥﴾

46. かくてアッラーは、彼等が策謀せる邪悪の数々から彼を護りたり。而して、ファラオの民を厳刑で包囲せり、

فَوَقٰىهُ اللّٰهُ سَيِّاٰتِ مَا مَكَرُوا وَحَاقَ بِاٰلِ فِرْعَوْنَ سُوٓءُ الْعَذَابِ ﴿٤٦﴾

47. すなわち、業火なり。彼等は朝な夕な業火にさらされん。(注 18) 而して、審判の時至れば、「ファラオの民を極刑に投ぜよ」と云われん。

اَلنَّارُ يُعْرَضُونَ عَلَيْهَا غُدُوًّا وَّعَشِيًّا ۚ وَيَوْمَ تَقُومُ السَّاعَةُ ۗ أَدْخِلُوٓا اٰلَ فِرْعَوْنَ أَشَدَّ الْعَذَابِ ﴿٤٧﴾

注 16　不信心者の悪行の報いがその行いに比して与えられる一方、信者の善行に対するほうびは際限の無いものである。これが、イスラム教における天国と地獄の概念である。

注 17　求められるにふさわしくない。求められるべきでない。求められる資格がない。

注 18　「朝な夕な業火にさらされん。」という言葉は、不信心者が、苦しみと喜びを判別できない中間の状態であるバルザフにあって苦しむ罰を指している様だ。天国か地獄の判定は裁きの日に下されるのであろう。

48. 彼等は業火の中で口論し、現世で弱くありし者が驕慢なりし者に向って云わん、「我等はお前たちに従いたり。さればお前たち、我等のために、多少なりとも業火を軽減したまえ」と。

وَإِذْ يَتَحَاجُّونَ فِي النَّارِ فَيَقُولُ الضُّعَفَاءُ لِلَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا إِنَّا كُنَّا لَكُمْ تَبَعًا فَهَلْ أَنْتُمْ مُغْنُونَ عَنَّا نَصِيبًا مِنَ النَّارِ ﴿٤٨﴾

49. 驕慢なりし者どもは云わん、「我等は今、みな火の中に在り、アッラーすでにその僕等を裁きたり」と。

قَالَ الَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا إِنَّا كُلٌّ فِيهَا إِنَّ اللَّهَ قَدْ حَكَمَ بَيْنَ الْعِبَادِ ﴿٤٩﴾

50. 業火の中の者どもは、地獄の番人に云わん、「我等のために、なにとぞ主に、せめて一日その刑を軽減せんことを請いたまえ」と。

وَقَالَ الَّذِينَ فِي النَّارِ لِخَزَنَةِ جَهَنَّمَ ادْعُوا رَبَّكُمْ يُخَفِّفْ عَنَّا يَوْمًا مِنَ الْعَذَابِ ﴿٥٠﴾

51. 番人たちは云わん、「使徒たちが明らかな神兆を携えてお前たちのところに来たらざりしか？」と。彼等は答えん「然り」と。番人たちは云わん、「然らば、祈れ」と。されど、不信心者の祈りは効なし。（注 19）

قَالُوا أَوَلَمْ تَكُ تَأْتِيكُمْ رُسُلُكُمْ بِالْبَيِّنَاتِ قَالُوا بَلَىٰ قَالُوا فَادْعُوا وَمَا دُعَاءُ الْكَافِرِينَ إِلَّا فِي ضَلَالٍ ﴿٥١﴾

第六項

52. われらは必ず、われらの使徒並びに信ずる人々を、現世に於ても、また証人たちが立ち上る日に於ても之を佑助せん。（注 20）

إِنَّا لَنَنْصُرُ رُسُلَنَا وَالَّذِينَ آمَنُوا فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَيَوْمَ يَقُومُ الْأَشْهَادُ ﴿٥٢﴾

53. その日、悪事をなせる者の云い訳は何んの役にも立たず、彼等は呪詛され、ただおぞましき住まいあるべし。

يَوْمَ لَا يَنْفَعُ الظَّالِمِينَ مَعْذِرَتُهُمْ وَلَهُمُ اللَّعْنَةُ وَلَهُمْ سُوءُ الدَّارِ ﴿٥٣﴾

54. われらはモーゼに嚮導を与え、イスラエルの子らを経典の相続者たらしめたり、

وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسَى الْهُدَىٰ وَأَوْرَثْنَا بَنِي إِسْرَائِيلَ الْكِتَابَ ﴿٥٤﴾

55. すなわち、思慮ある人々への嚮導と訓戒のために。

هُدًى وَذِكْرَىٰ لِأُولِي الْأَلْبَابِ ﴿٥٥﴾

56. されば、汝も耐え忍べ。アッラーの約束は真実なり。汝の過失の赦しを請い、朝な夕な、主の栄光を讃えよ。

فَاصْبِرْ إِنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ وَاسْتَغْفِرْ لِذَنْبِكَ وَسَبِّحْ بِحَمْدِ رَبِّكَ بِالْعَشِيِّ وَالْإِبْكَارِ ﴿٥٦﴾

注 19　神の預言者は刃向かう不信心者の努力や祈りは適いはしないが、その様な祈りが受け入れられない訳ではない。信者・不信心者にかかわらず、苦しむ者が神を求めれば、神はその祈りに答えられる（27：63）。

注 20　この節は、神の使者とその弟子達に向けられており、神の援助は常に彼等の側にあり、例え不信心者が彼等に刃向かう企みを起こそうともそれは無に帰すという強い約束が示されている。

57．如何なる権威も与えられていないくせに、アッラーの徴(しるし)をあれこれと論ずる徒輩(やから)、彼等の胸中にあるものは、自分自身でも手の届かぬ程の大野心以外のなにものにも非ず。されば、アッラーの加護を求めよ。げにアッラーはすべてを聴き、すべてをみそなはし給う。

إِنَّ الَّذِينَ يُجَادِلُونَ فِي آيَاتِ اللَّهِ بِغَيْرِ سُلْطَانٍ أَتَاهُمْ إِنْ فِي صُدُورِهِمْ إِلَّا كِبْرٌ مَا هُمْ بِبَالِغِيهِ فَاسْتَعِذْ بِاللَّهِ إِنَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْبَصِيرُ ٥٧

58．げに天地(あめつち)の創造は人間の創造より偉大なり。されど、世人の多くは之(これ)を知らず。

لَخَلْقُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ أَكْبَرُ مِنْ خَلْقِ النَّاسِ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ٥٨

59．盲(めくら)と目明きは同じからず。同様に、信仰し、善行を積(つ)む人々と悪事をなす徒輩(やから)は同じに非ず。之(これ)を熟慮する者の如何に少きことか。

وَمَا يَسْتَوِي الْأَعْمَىٰ وَالْبَصِيرُ وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ وَلَا الْمُسِيءُ قَلِيلًا مَا تَتَذَكَّرُونَ ٥٩

60．げに終末の時は近づけり。そは疑うべくもなし。されど、世人の多くは之(これ)を信ぜず。

إِنَّ السَّاعَةَ لَآتِيَةٌ لَا رَيْبَ فِيهَا وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يُؤْمِنُونَ ٦٠

61．而(しか)して、お前たちの主は云う、「われを崇めよ。然(しか)らば、われお前たちに応(こた)えん。されど、驕慢(きょうまん)の余りわれを崇めざる者どもは、必ず辱しめられて地獄に陥ん」と。

وَقَالَ رَبُّكُمُ ادْعُونِي أَسْتَجِبْ لَكُمْ إِنَّ الَّذِينَ يَسْتَكْبِرُونَ عَنْ عِبَادَتِي سَيَدْخُلُونَ جَهَنَّمَ دَاخِرِينَ ٦١

第七項

62．お前たちの休憩のために夜を、また見るために昼を設けたるはアッラーなり。げにアッラーは人間に慈悲深くあらせられる。然(しか)るに、世人の多くは感謝せざるなり。

اللَّهُ الَّذِي جَعَلَ لَكُمُ اللَّيْلَ لِتَسْكُنُوا فِيهِ وَالنَّهَارَ مُبْصِرًا إِنَّ اللَّهَ لَذُو فَضْلٍ عَلَى النَّاسِ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَشْكُرُونَ ٦٢

63．こはアッラー、お前たちの主、万物の創造者なり。彼以外に神なし。然(しか)るに、お前たち顔をそむけるとは如何なることぞ？

ذَٰلِكُمُ اللَّهُ رَبُّكُمْ خَالِقُ كُلِّ شَيْءٍ لَا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ فَأَنَّىٰ تُؤْفَكُونَ ٦٣

64．アッラーの徴(しるし)を拒む徒輩(やから)は、かくの如く背き去らしめらる。

كَذَٰلِكَ يُؤْفَكُ الَّذِينَ كَانُوا بِآيَاتِ اللَّهِ يَجْحَدُونَ ٦٤

65．アッラーこそはお前たちのために大地を休憩所となし、蒼穹(そうきゅう)を天蓋となし、お前たち

اللَّهُ الَّذِي جَعَلَ لَكُمُ الْأَرْضَ قَرَارًا وَالسَّمَاءَ

に形を与えて之(これ)を美事に形造り、さまざまなる佳(よ)きものを以てお前たちを扶養する者なり。お前たちの主、アッラーとはかくの如き御方。されば、万物の主、アッラーに感謝せよ。

بِنَآءً وَّصَوَّرَكُمْ فَاَحْسَنَ صُوَرَكُمْ وَرَزَقَكُمْ مِّنَ الطَّيِّبٰتِ ؕ ذٰلِكُمُ اللّٰهُ رَبُّكُمْ ۚۖ فَتَبٰرَكَ اللّٰهُ رَبُّ الْعٰلَمِيْنَ ۝٦٥

66．彼は永生者なり。彼の外に神なし。されば彼に祈り、信仰一筋の誠をつくせ。讃美は挙(あ)げて万物の主アッラーに帰属す。

هُوَ الْحَيُّ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ فَادْعُوْهُ مُخْلِصِيْنَ لَهُ الدِّيْنَ ؕ اَلْحَمْدُ لِلّٰهِ رَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ۝٦٦

67．云え、「我はお前たちがアッラー以外に拝する者を崇拝するを禁ぜらる、主より数々の明証が我に降(くだ)されたる上は。而(しか)して、万物の主に服従帰依することを命ぜられたり」と。

قُلْ اِنِّيْ نُهِيْتُ اَنْ اَعْبُدَ الَّذِيْنَ تَدْعُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ لَمَّا جَآءَنِيَ الْبَيِّنٰتُ مِنْ رَّبِّيْ وَاُمِرْتُ اَنْ اُسْلِمَ لِرَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ۝٦٧

68．彼こそはお前たちを土から、次いで一滴の精液から、次いで凝血から創り給い、次いで嬰児(みどりご)として生れ出でせしめた御方なり。次に彼は、お前たちに能力(ちから)を得さすべく成長せしめ、次いで老いせしめ、或る者はその前に死ぬるも、定められた寿命にお前たちを達せしむるは彼なり、お前たちがその知恵を学ぶために。

هُوَ الَّذِيْ خَلَقَكُمْ مِّنْ تُرَابٍ ثُمَّ مِنْ نُّطْفَةٍ ثُمَّ مِنْ عَلَقَةٍ ثُمَّ يُخْرِجُكُمْ طِفْلًا ثُمَّ لِتَبْلُغُوْٓا اَشُدَّكُمْ ثُمَّ لِتَكُوْنُوْا شُيُوْخًا ۚ وَمِنْكُمْ مَّنْ يُّتَوَفّٰى مِنْ قَبْلُ وَلِتَبْلُغُوْٓا اَجَلًا مُّسَمًّى وَّلَعَلَّكُمْ تَعْقِلُوْنَ ۝٦٨

69．彼こそは生を与え、死を賜う御方。彼、或る事を決定するや、ただ「在れ！」と云えば、そは在るなり。（注21）

هُوَ الَّذِيْ يُحْيٖ وَيُمِيْتُ ۚ فَاِذَا قَضٰٓى اَمْرًا فَاِنَّمَا يَقُوْلُ لَهٗ كُنْ فَيَكُوْنُ ۝٦٩

第八項

70．汝は見ざりしか、アッラーの徴(しるし)についてあげつろう徒輩(やから)を？　彼等如何に真理より背き去りたるか！

اَلَمْ تَرَ اِلَى الَّذِيْنَ يُجَادِلُوْنَ فِيْٓ اٰيٰتِ اللّٰهِ ؕ اَنّٰى يُصْرَفُوْنَ ۝٧٠

71．これ等の者は、経典とわれらが使徒たちに携えさせたものを否認する徒輩(やから)なり。されどやがて、彼等は思い知らん、

الَّذِيْنَ كَذَّبُوْا بِالْكِتٰبِ وَبِمَآ اَرْسَلْنَا بِهٖ رُسُلَنَا ۛ فَسَوْفَ يَعْلَمُوْنَ ۝٧١

注21　死者と同様に道徳的・精神的に衰退していたアラブ民族は、今やモハッマド預言者を通して新たに生まれ変わるべきである。これが生と死を司る神の御意志であり、何人たりともアッラーの御意志を妨げる事はできない。

72．鉄の首輪をその頸にかけられ、鎖につながれる時。彼等は引きずり込まれん、

إِذِ الْأَغْلَٰلُ فِيٓ أَعْنَاقِهِمْ وَالسَّلَٰسِلُ يُسْحَبُونَ ﴿٧٢﴾

73．煮えたぎる湯の中に。次いで業火が彼等を焼かん。

فِي الْحَمِيمِ ثُمَّ فِي النَّارِ يُسْجَرُونَ ﴿٧٣﴾

74．その時、彼等はかく問われん、「お前たちの神々は、いま何処にありや、

ثُمَّ قِيلَ لَهُمْ أَيْنَ مَا كُنتُمْ تُشْرِكُونَ ﴿٧٤﴾

75．アッラーに配せる神々は？　彼等は答えん、「彼等消え去りぬ。否、我等は以前、アッラーの外に何も拝せざりき」と。かくの如く、アッラーは不信心者どもを困惑せしむ。

مِن دُونِ اللَّهِ قَالُوا ضَلُّوا عَنَّا بَل لَّمْ نَكُن نَّدْعُوا مِن قَبْلُ شَيْـًٔا كَذَٰلِكَ يُضِلُّ اللَّهُ الْكَٰفِرِينَ ﴿٧٥﴾

76．「そはお前たちが地上に於て不当に驕慢なりしが故なり、また横柄に振舞いたるが故なり。

ذَٰلِكُم بِمَا كُنتُمْ تَفْرَحُونَ فِي الْأَرْضِ بِغَيْرِ الْحَقِّ وَبِمَا كُنتُمْ تَمْرَحُونَ ﴿٧٦﴾

77．汝等地獄の門を入り、中に住め。驕慢なる者の住まいは禍いなるかな」

ادْخُلُوٓا أَبْوَٰبَ جَهَنَّمَ خَٰلِدِينَ فِيهَا فَبِئْسَ مَثْوَى الْمُتَكَبِّرِينَ ﴿٧٧﴾

78．されば、汝も耐え忍べ。アッラーの約束は必ず間違いなし。われらが彼等に約束せしことの一端を汝に見せるにせよ、またその前に汝を死なしむるとも、いずれにしても、彼等はわれらの許に連れ戻されるべし。(注 22)

فَاصْبِرْ إِنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ فَإِمَّا نُرِيَنَّكَ بَعْضَ الَّذِي نَعِدُهُمْ أَوْ نَتَوَفَّيَنَّكَ فَإِلَيْنَا يُرْجَعُونَ ﴿٧٨﴾

79．われらは汝以前に幾多の使徒を遣わしたり。その或る者についてはすでに汝に語り、或る者についてはいまだ汝に告げず。されど、如何なる使徒といえど、アッラーの許しなしに神兆をもたらすこと能わず。されど、アッラーの大命一たび下れば、ことは公正に裁かれ、虚妄なりと云いし徒輩は消滅す。

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا رُسُلًا مِّن قَبْلِكَ مِنْهُم مَّن قَصَصْنَا عَلَيْكَ وَمِنْهُم مَّن لَّمْ نَقْصُصْ عَلَيْكَ وَمَا كَانَ لِرَسُولٍ أَن يَأْتِيَ بِـَٔايَةٍ إِلَّا بِإِذْنِ اللَّهِ فَإِذَا جَآءَ أَمْرُ اللَّهِ قُضِيَ بِالْحَقِّ وَخَسِرَ هُنَالِكَ الْمُبْطِلُونَ ﴿٧٩﴾

注 22　この節には二つの教義が含まれている。(1)真実は長い時を経て広まって行くが、勝利が神の民にもたらされるまで、彼等は幾つかの試練に耐えねばならず、彼等の信仰は試され、基準に達していると証明されなければならない。(2)不信心者に向けられた処罰の警告を含む預言は、延期、又は取り消しまでも考慮されている。預言の「一端」という語は、脅迫の意味合を持つ預言全てが実行される訳ではない事を示している。それは、不信心者が態度を改めれば、それに応じて変わるものである。

第九項

80．お前たちのために家畜を創り、それにお前たちを乗せ、またそれを食わしむるはアッラーなり。

اَللّٰهُ الَّذِیْ جَعَلَ لَكُمُ الْاَنْعَامَ لِتَرْكَبُوْا مِنْهَا وَمِنْهَا تَاْكُلُوْنَ ﴿۸۰﴾

81．このほか、お前たちはさまざまなる利益を彼等より得る。すなわち、彼等を用いて、お前たちが胸に宿す望みをかなえることも可能なり。船に乗る如く彼等の背に乗って、お前たちは運ばれる。

وَلَكُمْ فِیْهَا مَنَافِعُ وَلِتَبْلُغُوْا عَلَیْهَا حَاجَةً فِیْ صُدُوْرِكُمْ وَعَلَیْهَا وَعَلَى الْفُلْكِ تُحْمَلُوْنَ ﴿۸۱﴾

82．アッラーはさまざまなる徴をお前たちに見せているのに、お前たちは一体アッラーのどの徴を否定せんとするか？

وَیُرِیْكُمْ اٰیٰتِهٖ فَاَیَّ اٰیٰتِ اللّٰهِ تُنْكِرُوْنَ ﴿۸۲﴾

83．彼等は国々を遍歴りて、彼等以前の者の末路が如何なるものなるかを見ざりしか？彼等はこれ等の者どもよりその数はるかに優り、且つ有力なる者にして、地上に壮大なる遺跡を遺す。されど、彼等が稼いだすべてのものは、彼等のためには無益なりき。

اَفَلَمْ یَسِیْرُوْا فِی الْاَرْضِ فَیَنْظُرُوْا كَیْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِیْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ كَانُوْۤا اَكْثَرَ مِنْهُمْ وَاَشَدَّ قُوَّةً وَّاٰثَارًا فِی الْاَرْضِ فَمَاۤ اَغْنٰى عَنْهُمْ مَّا كَانُوْا یَكْسِبُوْنَ ﴿۸۳﴾

84．彼等の使徒が明らかな神兆を携えて彼等に来たりし時、彼等は持てる浅薄な知識に大得意なりき。されど、彼等の嘲笑せることが、遂に彼等を取り囲みぬ。

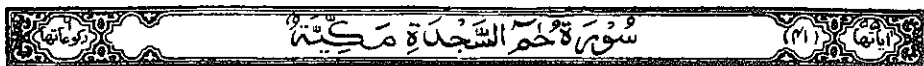
فَلَمَّا جَآءَتْهُمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَیِّنٰتِ فَرِحُوْا بِمَا عِنْدَهُمْ مِّنَ الْعِلْمِ وَحَاقَ بِهِمْ مَّا كَانُوْا بِهٖ یَسْتَهْزِءُوْنَ ﴿۸۴﴾

85．彼等はわれらの懲罰を見るに及んで、云えり、「我等はただアッラーを信じ、今までアッラーに配したる神々のすべてを否認す」と。

فَلَمَّا رَاَوْا بَاْسَنَا قَالُوْۤا اٰمَنَّا بِاللّٰهِ وَحْدَهٗ وَكَفَرْنَا بِمَا كُنَّا بِهٖ مُشْرِكِیْنَ ﴿۸۵﴾

86．されど、われらの懲罰を目の当りにしてなせる契約は、彼等を益せざりき。こはアッラーの僕等に対する、彼の慣例なり。されば、不信の徒輩は消滅せり。（注23）

فَلَمْ یَكُ یَنْفَعُهُمْ اِیْمَانُهُمْ لَمَّا رَاَوْا بَاْسَنَا سُنَّتَ اللّٰهِ الَّتِیْ قَدْ خَلَتْ فِیْ عِبَادِهٖ وَخَسِرَ هُنَالِكَ الْكٰفِرُوْنَ ﴿۸۶﴾

注23　不信心者の悪の器が満つる時、彼等は処罰されるべきだとの神の命は施行され、彼等が如何に信仰を告白しようともそれは効を奏せず、悔恨は遅きに失するのである。

ハーミーム　アッサジュダ
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍（あまね）くアッラーの御名（みな）において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．ハー・ミーム。（注1）

حٰمٓ ②

3．こは慈悲深く、恵み遍（あまね）くアッラーの啓示にして、

تَنْزِيْلٌ مِّنَ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ③

4．知識ある人々のために、詳細（ことこまか）に説明された諸節、明快且つ感銘的な言葉で表言された経典、すなわち、クルアーンなり。

كِتٰبٌ فُصِّلَتْ اٰيٰتُهٗ قُرْاٰنًا عَرَبِيًّا لِّقَوْمٍ يَّعْلَمُوْنَ ④

5．朗報と警告を伝えるものなり。されど、彼等の大半は顔をそむけて、之（これ）を聴かず。

بَشِيْرًا وَّنَذِيْرًا فَاَعْرَضَ اَكْثَرُهُمْ فَهُمْ لَا يَسْمَعُوْنَ ⑤

6．而（しか）して、彼等は云う、「我等の心は汝が要求することに対して拒否する覆いにおおわれ、耳も聞こえず、我等と汝の間には仕切りあり。されば、汝すきなようにせよ。我もまたすきにせん」と。

وَقَالُوْا قُلُوْبُنَا فِيْٓ اَكِنَّةٍ مِّمَّا تَدْعُوْنَآ اِلَيْهِ وَفِيْٓ اٰذَانِنَا وَقْرٌ وَّمِنْ بَيْنِنَا وَبَيْنِكَ حِجَابٌ فَاعْمَلْ اِنَّنَا عٰمِلُوْنَ ⑥

7．云え、「我はお前たち同様ただの人間なり。されど我は、お前たちの神が独一なる神なることを啓示せられたり。されば、よそみをせずに、主に向って真直に進み、赦しを請え」と。禍なるかな偶像崇拝者ども、

قُلْ اِنَّمَآ اَنَا بَشَرٌ مِّثْلُكُمْ يُوْحٰٓى اِلَيَّ اَنَّمَآ اِلٰهُكُمْ اِلٰهٌ وَّاحِدٌ فَاسْتَقِيْمُوْٓا اِلَيْهِ وَاسْتَغْفِرُوْهُ ۗ وَوَيْلٌ لِّلْمُشْرِكِيْنَ ⑦

8．彼等は喜捨を行わず、来世を否定する徒輩（やから）なり。

الَّذِيْنَ لَا يُؤْتُوْنَ الزَّكٰوةَ وَهُمْ بِالْاٰخِرَةِ هُمْ كٰفِرُوْنَ ⑧

9．されど、信仰して善行を積（つ）む者は、必ずやつきることなき報奨あり。

اِنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ لَهُمْ اَجْرٌ غَيْرُ مَمْنُوْنٍ ⑨

第二項

10．云え、「げにお前たちは、二日の間で（注2）大地を創れる彼を信ぜざるか？　剰（あまつさ）え、彼

قُلْ اَئِنَّكُمْ لَتَكْفُرُوْنَ بِالَّذِيْ خَلَقَ الْاَرْضَ فِيْ

注1　賞賛すべき栄誉の主

注2　「二日の間」の長さを推測する事はできない。それは数千年を上まわるかもしれない。クルアーンでは、ヤウム（一日）は千年（22：48）あるいは五千年（70：5）に匹敵して述べられている。地球が二日間で

يَوْمَيْنِ وَتَجْعَلُوْنَ لَهٗٓ اَنْدَادًا ۭ ذٰلِكَ رَبُّ الْعٰلَمِيْنَ ۝

に同位者を配するか？　彼の御方こそ、万物の主なるぞ」と。

وَجَعَلَ فِيْهَا رَوَاسِيَ مِنْ فَوْقِهَا وَبٰرَكَ فِيْهَا وَقَدَّرَ فِيْهَآ اَقْوَاتَهَا فِيْٓ اَرْبَعَةِ اَيَّامٍ ۭ سَوَاۗءً لِّلسَّاۗىِٕلِيْنَ ۝

11．彼は大地の上に堅固なる山々を置き、それを祝福し、さらに、四日の間でいろいろな食物を適当に設け、（注３）求める者すべてに之(これ)を等しく供給せり。（注４）

ثُمَّ اسْتَوٰٓى اِلَى السَّمَاۗءِ وَهِيَ دُخَانٌ فَقَالَ لَهَا وَلِلْاَرْضِ ائْتِيَا طَوْعًا اَوْ كَرْهًا ۭ قَالَتَآ اَتَيْنَا طَاۗىِٕعِيْنَ ۝

12．然(しか)る後、彼は、いまだ蒸気体にすぎざりし天に向って、また大地に向って云えり、「好むと好まざるとをとわず、汝等両名来たれ」と。天地(あめつち)は云えり、「我等喜んで参上す」と。（注５）

فَقَضٰىهُنَّ سَبْعَ سَمٰوٰتٍ فِيْ يَوْمَيْنِ وَاَوْحٰى فِيْ كُلِّ سَمَاۗءٍ اَمْرَهَا ۭ وَزَيَّنَّا السَّمَاۗءَ الدُّنْيَا بِمَصَابِيْحَ ڰ وَحِفْظًا ۭ ذٰلِكَ تَقْدِيْرُ الْعَزِيْزِ الْعَلِيْمِ ۝

13．そこで彼は、二日の間に之(これ)を七層の天となし、各天にその役割りを黙示せり。而(しか)して、われらは、最下層の天を照明と守護のために星屑(ともしび)で飾りたり。こは偉力者、全知者の定むるところなり。

فَاِنْ اَعْرَضُوْا فَقُلْ اَنْذَرْتُكُمْ صٰعِقَةً مِّثْلَ صٰعِقَةِ عَادٍ وَّثَمُوْدَ ۝

14．なれど、もし彼等背を向けなば、云え、「アードやサムードが被れる如き破壊的懲罰をお前たちに警告す」と。

作られたという表現は、地球が冷却・凝縮した後、無形から徐々に形作られた過程を暗示するものと言える。

注３　「二日の間」つまり、前節に述べられた地球が現在の形に至るまでの形成過程は、当節に記されている「四日の間」に含まれる。追加された「二日の間」は、地表に山河等ができ、動植物の育つ二段階を指す。13節も参照の事。「いろいろな食物を適当に設け」というのは、地球が、そこに生存する全生物を十分賄える食物を現在及び未来において供給し続ける事が可能だと示している。

注４　「求める者すべてに等しく」という言葉は、神が地上にもたらされた食物は、自然の摂理に従いそれを求める者に等しく分け与えられる事を示している。又、上記の言葉は地球で採れる食物に関しては、人間の必要全て満たされるという意味でもある。それ故、地球が将来、急激な人口増加の為に、十分な食糧供給ができなくなるのではないかという不安は、根拠の無いものである。地球は、現在の世界の人口の６倍に相当する280億人を賄えるだけの食糧・繊維・その他の農産物の供給が可能である。（オックスフォード大学農業経済研究所所長、コリン・クラーク教授による）

ごく最近、国連食糧農業機関が「1959年度食糧農業状況」に掲載した報告によれば、世界の食糧供給は人口増加の二倍の速度で増えているという事である。

注５　当節は、宇宙の万物が一定の法則に支配されている事を示している。此所に選択の余地は無い。神の律法に従うか否かの意志を授けられた唯一の存在は、人間である。この事は33：73にも述べられている。

15. 使徒たちが、彼等の前後より来たり、「アッラー以外に何者も崇めるなかれ」と云いたる時、彼等は云えり、「もし我等の主欲しなば、天使等を降せるものを。故に我等は、お前たちが遣わされたその使命を信ぜず」と。

إِذْ جَاءَتْهُمُ الرُّسُلُ مِنْ بَيْنِ أَيْدِيهِمْ وَمِنْ خَلْفِهِمْ أَلَّا تَعْبُدُوا إِلَّا اللَّهَ ۖ قَالُوا لَوْ شَاءَ رَبُّنَا لَأَنْزَلَ مَلَائِكَةً فَإِنَّا بِمَا أُرْسِلْتُمْ بِهِ كَافِرُونَ ﴿١٥﴾

16. アードのごときは、何んの理由もなしに地上で傲慢に振舞い、「我より力強き者は誰ぞ？」と云えり。自分たちを創り給うたアッラーの方がはるかに力優れることをわからざるか？　彼等は常にわれらが神兆を否定す。

فَأَمَّا عَادٌ فَاسْتَكْبَرُوا فِي الْأَرْضِ بِغَيْرِ الْحَقِّ وَقَالُوا مَنْ أَشَدُّ مِنَّا قُوَّةً ۖ أَوَلَمْ يَرَوْا أَنَّ اللَّهَ الَّذِي خَلَقَهُمْ هُوَ أَشَدُّ مِنْهُمْ قُوَّةً ۖ وَكَانُوا بِآيَاتِنَا يَجْحَدُونَ ﴿١٦﴾

17. かくてわれらは、彼等に怒り狂う風を吹きつけ、不吉な日々を送らせ、現世に於て屈辱の刑罰を味わしめたり。されど、来世の懲罰は更に酷なり、しかも助けられざるべし。

فَأَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ رِيحًا صَرْصَرًا فِي أَيَّامٍ نَحِسَاتٍ لِنُذِيقَهُمْ عَذَابَ الْخِزْيِ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا ۖ وَلَعَذَابُ الْآخِرَةِ أَخْزَىٰ ۖ وَهُمْ لَا يُنْصَرُونَ ﴿١٧﴾

18. またサムードについて云えば、われらは彼等に嚮導を与えたれど、彼等は導きよりも無知盲目を選びたり。されば、己が稼いだ行いのために、屈辱の刑罰の災難が彼等を襲いたり。

وَأَمَّا ثَمُودُ فَهَدَيْنَاهُمْ فَاسْتَحَبُّوا الْعَمَىٰ عَلَى الْهُدَىٰ فَأَخَذَتْهُمْ صَاعِقَةُ الْعَذَابِ الْهُونِ بِمَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ﴿١٨﴾

19. されど、われらは、信仰深く且つ義しく行動せる者を救いたり。

وَنَجَّيْنَا الَّذِينَ آمَنُوا وَكَانُوا يَتَّقُونَ ﴿١٩﴾

第三項

20. アッラーの敵が数珠つなぎになって業火へと追い立てられ、苦しめられんその日を、彼等に警告せよ。

وَيَوْمَ يُحْشَرُ أَعْدَاءُ اللَّهِ إِلَى النَّارِ فَهُمْ يُوزَعُونَ ﴿٢٠﴾

21. 彼等地獄に到着すると、彼等の耳や目や肌が、自分自身にそむいて、自分がなせることを証言せん。（注６）

حَتَّىٰ إِذَا مَا جَاءُوهَا شَهِدَ عَلَيْهِمْ سَمْعُهُمْ وَأَبْصَارُهُمْ وَجُلُودُهُمْ بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٢١﴾

注６　罪人の耳と目は、三つの形態を取り、不信心者に不利な証拠を提供する。(1)彼等の悪行は、結果として身体上に表れるであろう。(2)彼等の身体各所は悪用の為、震えており、その震えは彼等に不利な証拠となるであろう。(3)彼等の身体全体の動きは保存されており、裁きの日に再生されるであろう。

22．彼等は自分の肌に向って云わん、(注７)「何故汝等は我等に不利なる証言をするか？」と。彼等の肌は云わん、「万物を語らしむるアッラーは、我等にも語らしむ。彼こそは最初にお前たちを創りたる御方。されば、お前たちは彼の許(もと)に連れ戻されたり。

وَقَالُوا لِجُلُودِهِمْ لِمَ شَهِدتُّمْ عَلَيْنَا ۖ قَالُوا أَنطَقَنَا اللَّهُ الَّذِي أَنطَقَ كُلَّ شَيْءٍ وَهُوَ خَلَقَكُمْ أَوَّلَ مَرَّةٍ وَإِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿٢٢﴾

23．お前たちは現世で罪を犯せし時、己が耳や目や肌が自分に不利な証言をするとは思わざりけり。否、お前たちは、自分たちのしていることをアッラーはよく知るまい、とすら考えたり。

وَمَا كُنتُمْ تَسْتَتِرُونَ أَن يَشْهَدَ عَلَيْكُمْ سَمْعُكُمْ وَلَا أَبْصَارُكُمْ وَلَا جُلُودُكُمْ وَلَٰكِن ظَنَنتُمْ أَنَّ اللَّهَ لَا يَعْلَمُ كَثِيرًا مِّمَّا تَعْمَلُونَ ﴿٢٣﴾

24．己が主にお前たちが抱いた考えが、身を滅ぼしたり。されば今、お前たちは失敗者となれり」と。(注８)

وَذَٰلِكُمْ ظَنُّكُمُ الَّذِي ظَنَنتُم بِرَبِّكُمْ أَرْدَاكُمْ فَأَصْبَحْتُم مِّنَ الْخَاسِرِينَ ﴿٢٤﴾

25．今となっては、彼等如何に辛抱するとも、業火(ごうか)が彼等の永劫(えいごう)の住まいなり。また、たとえ赦しを請うとも、恩赦に浴する者のうちに入れられざるべし。(注９)

فَإِن يَصْبِرُوا فَالنَّارُ مَثْوًى لَّهُمْ ۖ وَإِن يَسْتَعْتِبُوا فَمَا هُم مِّنَ الْمُعْتَبِينَ ﴿٢٥﴾

26．われらは彼等に、自分の前のことや後のことを魅惑的に思わしめる仲間を当てがいたり。(注10) 過ぎた昔の妖霊(ジン)や人間どもに下したる宣告が事実となって証明されたり。げに彼等は失敗者なりき。

وَقَيَّضْنَا لَهُمْ قُرَنَاءَ فَزَيَّنُوا لَهُم مَّا بَيْنَ أَيْدِيهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ وَحَقَّ عَلَيْهِمُ الْقَوْلُ فِي أُمَمٍ قَدْ خَلَتْ مِن قَبْلِهِم مِّنَ الْجِنِّ وَالْإِنسِ ۖ إِنَّهُمْ كَانُوا خَاسِرِينَ ﴿٢٦﴾

注７　人間が行動する際に、皮膚は最も重要な役割を果たす。それは、触覚のみならずあらゆる感覚を保持する。目や耳の罪人は視覚・聴覚を遮されるが、皮膚の罪人は身体の全機能を制限される。

注８　事実、あらゆる罪は信仰の欠如がもたらす。

注９　不信心者の罪は実に忌まわしきものであり、彼等は神の恩恵を授かる事も、再びその恩恵によくする事もないであろう。又、不信心者は神の慈悲を求めて神の座のお側に近付く事すら許されないであろう。

注10　不信心者の悪の仲間は、その悪業が彼等にとり賞賛に値する事を示そうとして、その行為を讃える。これ等悪の共謀者達は、彼等が欺く者達と罪を分かち合わねばならないであろう。「自分の前のことや後のことを魅惑的に思わしめる仲間」という言葉は、彼等が悪の仲間と共謀して犯した行為、及び祖先の悪業を真似た者達を指す。妖霊(ジン)は選良、人間は庶民を表わしている。

第四項

27．不信心者どもは云う、「クルアーンに耳傾けるなかれ。読誦中に騒ぎたてよ、さすれば圧倒できよう」と。（注 11）

وقال الذين كفروا لا تسمعوا لهذا القرآن والغوا فيه لعلكم تغلبون ﴿٢٧﴾

28．ならばわれらは、不信の徒輩（やから）に厳しい刑を味わしめ、彼等が行える最悪なことに対して報復せん。

فلنذيقن الذين كفروا عذابا شديدا ولنجزينهم أسوأ الذي كانوا يعملون ﴿٢٨﴾

29．アッラーに仇（あだ）なす者の褒美はこれなり、すなわち業火（ごうか）なり。その中が彼等の永劫（えいごう）の住まいなるべし。われらの神兆（しるし）を常に否定した報いとして。

ذلك جزاء أعداء الله النار لهم فيها دار الخلد جزاء بما كانوا بآياتنا يجحدون ﴿٢٩﴾

30．不信心者どもは云わん、「主よ、妖霊（ジン）と人間の中で、（注 12）我等を邪道に迷わしめた者どもに会わせ給え。足で踏みつけ、辱しめてやりとうございます」と。

وقال الذين كفروا ربنا أرنا الذين أضلانا من الجن والإنس نجعلهما تحت أقدامنا ليكونا من الأسفلين ﴿٣٠﴾

31．「我等の主はアッラーなり」と云って、耐え忍んで来た者には、天使たちその上に降（くだ）り、かく安心させる。（注 13）「恐れるなかれ、悲しむなかれ。お前たちに約束されていた楽園の朗報を喜ぶがよい。

إن الذين قالوا ربنا الله ثم استقاموا تتنزل عليهم الملائكة ألا تخافوا ولا تحزنوا وأبشروا بالجنة التي كنتم توعدون ﴿٣١﴾

32．我等は現世でも来世でもお前たちの友だちなり。彼処では、お前たちが欲するものはすべて得られ、請うものはすべて叶（かな）えられん。

نحن أولياؤكم في الحياة الدنيا وفي الآخرة ولكم فيها ما تشتهي أنفسكم ولكم فيها ما تدعون ﴿٣٢﴾

33．こは宥恕（ゆうじょ）者、慈悲者よりのもてなしなり」。

نزلا من غفور رحيم ﴿٣٣﴾

第五項

34．人々をアッラーへと誘（いざな）い、善事をなし、「げに我は帰依者の一人なり」と云う人の言葉に優る善言あるか？

ومن أحسن قولا ممن دعا إلى الله وعمل صالحا وقال إنني من المسلمين ﴿٣٤﴾

注 11　闇の信奉者は常に叫びを上げて神の声を消そうとし、あらゆる企みを用いて人々の心を惑わそうとして来た。

注 12　2種類の人々。一方は、ジン（選良）であり、他方は普通の人間である。

注 13　信者が厳しい試練の只中で努力を続ける時、この現実の世において天使は、彼等を慰める為に降りて来る。

35．善悪は一律に非ず。善を以て悪を撃退せよ。しからば、そら、対立する間柄でも親友となるに至らん。（注 14）

وَلَا تَسْتَوِي الْحَسَنَةُ وَلَا السَّيِّئَةُ ۚ ادْفَعْ بِالَّتِي هِيَ أَحْسَنُ فَإِذَا الَّذِي بَيْنَكَ وَبَيْنَهُ عَدَاوَةٌ كَأَنَّهُ وَلِيٌّ حَمِيمٌ ﴿٣٥﴾

36．されど、之を授かる者は堅忍不抜な者のみか、或いは大へん幸運な者のみなり。

وَمَا يُلَقَّاهَا إِلَّا الَّذِينَ صَبَرُوا وَمَا يُلَقَّاهَا إِلَّا ذُو حَظٍّ عَظِيمٍ ﴿٣٦﴾

37．而して、もし悪魔からの誘惑が汝を悪に駆りたてなば、アッラーに加護を求めよ。げに彼はすべてを聴き、すべてを知り給う。

وَإِمَّا يَنْزَغَنَّكَ مِنَ الشَّيْطَانِ نَزْغٌ فَاسْتَعِذْ بِاللَّهِ ۖ إِنَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ﴿٣٧﴾

38．昼夜日月、これ等はアッラーの神兆の一つなり。日月の前で叩頭くなかれ。もし本当に拝む気持があるなら、それ等を創れるアッラーを崇めよ。

وَمِنْ آيَاتِهِ اللَّيْلُ وَالنَّهَارُ وَالشَّمْسُ وَالْقَمَرُ ۚ لَا تَسْجُدُوا لِلشَّمْسِ وَلَا لِلْقَمَرِ وَاسْجُدُوا لِلَّهِ الَّذِي خَلَقَهُنَّ إِنْ كُنْتُمْ إِيَّاهُ تَعْبُدُونَ ﴿٣٨﴾

39．たとえ彼等が傲慢にも顔をそむけるとも、そは彼等自身の損失、主と偕に在る者たちは夜も昼も彼の栄光を讃えまつり、倦むことなし。

فَإِنِ اسْتَكْبَرُوا فَالَّذِينَ عِنْدَ رَبِّكَ يُسَبِّحُونَ لَهُ بِاللَّيْلِ وَالنَّهَارِ وَهُمْ لَا يَسْأَمُونَ ۩ ﴿٣٩﴾

40．彼の神兆の中にはかくなるものもあり、すなわち、大地がしおれかかっている時、われらがその上に雨も降らせば、大地は忽ち生気を得て、動き且つふくれる。げに大地を甦らせる者は、死者を甦らせることも可なり。げに彼は万事を能くす。

وَمِنْ آيَاتِهِ أَنَّكَ تَرَى الْأَرْضَ خَاشِعَةً فَإِذَا أَنْزَلْنَا عَلَيْهَا الْمَاءَ اهْتَزَّتْ وَرَبَتْ ۚ إِنَّ الَّذِي أَحْيَاهَا لَمُحْيِي الْمَوْتَىٰ ۚ إِنَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٤٠﴾

41．われらの神兆を曲解する徒輩は、われらから隠れることを得ず。されば、業火に投ぜられる者がよいか、それとも安心してわれらの許に出づるを望むか？　お前たちの好きにせよ。げにアッラーはお前たちの所業をみそなはし給う。

إِنَّ الَّذِينَ يُلْحِدُونَ فِي آيَاتِنَا لَا يَخْفَوْنَ عَلَيْنَا ۗ أَفَمَنْ يُلْقَىٰ فِي النَّارِ خَيْرٌ أَمْ مَنْ يَأْتِي آمِنًا يَوْمَ الْقِيَامَةِ ۚ اعْمَلُوا مَا شِئْتُمْ ۖ إِنَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ﴿٤١﴾

注 14　伝道は伝道者に苦難をもたらす為、当節は彼に毅然として苦難に耐え、迫害者による悪行にも善行で応じよとすら命じている。

42．訓戒至れる時、（注 15）之を信ぜぬ徒輩は、失敗者なり。げにそは偉大なる経典なり。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا بِالذِّكْرِ لَمَّا جَاءَهُمْ ۚ وَإِنَّهُ لَكِتَٰبٌ عَزِيزٌ ﴿٤٢﴾

43．虚偽は前からも後からも之に近づくことを得ず、そは賢哲にして、讃美すべき御方よりの啓示なり。（注 16）

لَا يَأْتِيهِ الْبَٰطِلُ مِنْ بَيْنِ يَدَيْهِ وَلَا مِنْ خَلْفِهِ ۖ تَنْزِيلٌ مِنْ حَكِيمٍ حَمِيدٍ ﴿٤٣﴾

44．汝に対して云われることは、すべて汝以前の使徒たちが云われたことなり。汝の主は実に寛大ではあるが、また厳罰の主なるぞ。

مَا يُقَالُ لَكَ إِلَّا مَا قَدْ قِيلَ لِلرُّسُلِ مِنْ قَبْلِكَ ۚ إِنَّ رَبَّكَ لَذُو مَغْفِرَةٍ وَذُو عِقَابٍ أَلِيمٍ ﴿٤٤﴾

45．われらもし之を異國の言葉のクルアーンとなしなば、彼等は必ず云わん、「何故その諸節を明りようにせざるか？　何んと、アラブの預言者に外国語とは？」と。云え、「そは信ずる者には導きであり癒やしなり」と。されど信ぜざる徒輩は、その耳が聞こえず、且つ彼等にそれが見えざるなり。（注 17）彼等は、いわば、遠くから呼ばれる者 の如し。（注 18）

وَلَوْ جَعَلْنَٰهُ قُرْءَانًا أَعْجَمِيًّا لَقَالُوا لَوْلَا فُصِّلَتْ ءَايَٰتُهُ ۖ ءَاعْجَمِيٌّ وَعَرَبِيٌّ ۗ قُلْ هُوَ لِلَّذِينَ ءَامَنُوا هُدًى وَشِفَاءٌ ۖ وَالَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ فِي ءَاذَانِهِمْ وَقْرٌ وَهُوَ عَلَيْهِمْ عَمًى ۚ أُولَٰئِكَ يُنَادَوْنَ مِنْ مَكَانٍ بَعِيدٍ ﴿٤٥﴾

第六項

46．われらはかつてモーゼに経典を授けたところ、之に関して論争生じたり。もし前に発せられたる主の言葉（注 19）なかりせば、事はすでに決せられたり。なれど事実は、彼等は今もそれを疑い動揺す。

وَلَقَدْ ءَاتَيْنَا مُوسَى الْكِتَٰبَ فَاخْتُلِفَ فِيهِ ۗ وَلَوْلَا كَلِمَةٌ سَبَقَتْ مِنْ رَبِّكَ لَقُضِيَ بَيْنَهُمْ ۚ وَإِنَّهُمْ لَفِي شَكٍّ مِنْهُ مُرِيبٍ ﴿٤٦﴾

注 15　クルアーンは、ズィクル（訓戒）と呼ばれてきたが、その理由として次の三つが挙げられる。（1）クルアーンはその教義を人々に覚えさせる為に、様々な表現を用いて繰り返し述べている。（2）クルアーンは、それ以前の啓示書に記された高尚な教義を施した人物を思い出させる。（3）その教義に従う事により、人々は精神を高める事ができるのである。（ズィクルには名誉という意味もある。）

注 16　クルアーンは非常に優れた神の書であり、そこに述べられた偉大なる真実、教義・規範のどれとして考古学や近代科学と矛盾するものはない。

注 17　クルアーンの内容は彼等にとり不明瞭で、その教義の素晴しさ、有効性が彼等には見えない。

注 18　「遠くから呼ばれる者の如し。」という言葉は次の事を示している。裁きの日に、不信心者は全能の神の御座に近付く事を許されず、その悪事の申し開きをせよと遙か彼方より呼ばれるであろう。又、次の様にも解釈できる。不信心者はクルアーンの教えに耳を貸さず、それについて熟考する事を拒んだ為、それは彼等にとり、遠くから聞こえる不明瞭な声の様に理解できないものとなった。

注 19　7 章 157 節にある、「私の慈悲は、すべてを包括する。」という神の言葉を指している。

47．善行を積(つ)む者、そは己れ自身を益す。悪事をなす者、そは己が重荷とならん。而(しか)して、主はその僕(しもべ)等に対していささかも公平を欠くことなし。

مَنْ عَمِلَ صَالِحًا فَلِنَفْسِهِ وَمَنْ أَسَاءَ فَعَلَيْهَا وَمَا رَبُّكَ بِظَلَّامٍ لِلْعَبِيدِ ﴿٤٧﴾

48．審判の日のことは、ひとり彼のみぞ知る。(注 20) 彼が知らずして、一個の果実もその花苞より出でず、また一人の女も懐胎し分娩することなし。その日彼は、彼等に向って云わん、「わが同輩とやら、今何処に在りや？」と。彼等は答えん、「我等は断言す、我等の中であの神々の証人となる者は一人もなし」と。

إِلَيْهِ يُرَدُّ عِلْمُ السَّاعَةِ وَمَا تَخْرُجُ مِنْ ثَمَرَاتٍ مِنْ أَكْمَامِهَا وَمَا تَحْمِلُ مِنْ أُنْثَىٰ وَلَا تَضَعُ إِلَّا بِعِلْمِهِ وَيَوْمَ يُنَادِيهِمْ أَيْنَ شُرَكَائِي قَالُوا آذَنَّاكَ مَا مِنَّا مِنْ شَهِيدٍ ﴿٤٨﴾

49．かくて、彼等がかつて拝みたる神々は彼等を捨て去り、彼等は遁げ場のないことを思い悟らん。

وَضَلَّ عَنْهُمْ مَا كَانُوا يَدْعُونَ مِنْ قَبْلُ وَظَنُّوا مَا لَهُمْ مِنْ مَحِيصٍ ﴿٤٩﴾

50．人間とは幸運(しあわせ)を求めて倦(う)むことなし。されど一たび災難に遭えば、忽ち絶望してすべての望みを断念す。

لَا يَسْأَمُ الْإِنْسَانُ مِنْ دُعَاءِ الْخَيْرِ وَإِنْ مَسَّهُ الشَّرُّ فَيَئُوسٌ قَنُوطٌ ﴿٥٠﴾

51．しかも、難儀の後にわれらが情けをかけなば、人は必ず云わん、「こうなるは当然なり。審判の日など決して来るものか。たとい主の許(もと)に召し戻されるとも、我は主のおそばで幸いを得ん」と。(注 21) されば、われらは必ず不信心者どもにその行いしすべてを語り聞かせ、厳しい刑を味わしめん。

وَلَئِنْ أَذَقْنَاهُ رَحْمَةً مِنَّا مِنْ بَعْدِ ضَرَّاءَ مَسَّتْهُ لَيَقُولَنَّ هَٰذَا لِي وَمَا أَظُنُّ السَّاعَةَ قَائِمَةً وَلَئِنْ رُجِعْتُ إِلَىٰ رَبِّي إِنَّ لِي عِنْدَهُ لَلْحُسْنَىٰ فَلَنُنَبِّئَنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا بِمَا عَمِلُوا وَلَنُذِيقَنَّهُمْ مِنْ عَذَابٍ غَلِيظٍ ﴿٥١﴾

52．われら人間に恩恵を施せば、人(ひと)忽ちよそを向いて立ち去る。されど、一たび災難に遭えば、こは如何に、長々と祈る。

وَإِذَا أَنْعَمْنَا عَلَى الْإِنْسَانِ أَعْرَضَ وَنَأَىٰ بِجَانِبِهِ وَإِذَا مَسَّهُ الشَّرُّ فَذُو دُعَاءٍ عَرِيضٍ ﴿٥٢﴾

注 20　モハッマド預言者がアラブの地に蒔いた種が如何に育ち、どの様な実を結ぶかは神のみが御存知である。その実が腐れば破棄され、美味であれば大事に保たれるであろう。

注 21　苦境にある時絶望し、順境においては傲慢の権化となり、苦悩の欠けらも無いかのごとく振る舞い、成功は全て自らの努力と能力によるものとうぬぼれ始めるのが人の性(さが)である。

53．云え、「これがアッラーより降されたるものにして、而も之をお前たち信ぜずとすれば、真理よりはるか彼方に漂流させられた者よりも更に迷う者は誰か、云ってみよ？」と。

قُلْ أَرَءَيْتُمْ إِنْ كَانَ مِنْ عِنْدِ اللّٰهِ ثُمَّ كَفَرْتُمْ بِهٖ مَنْ أَضَلُّ مِمَّنْ هُوَ فِيْ شِقَاقٍۢ بَعِيْدٍ ﴿٥٣﴾

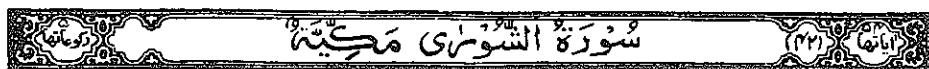
54．われらは、われらの神兆が真理なることが彼等にわかるまで、遠隔の地に於ても、また彼等自身の中に於ても、常に之を彼等に示さん。汝、汝の主が万物の立証者なること、それでも不足なるか？（注22）

سَنُرِيْهِمْ اٰيٰتِنَا فِي الْاٰفَاقِ وَفِيْٓ أَنْفُسِهِمْ حَتّٰى يَتَبَيَّنَ لَهُمْ أَنَّهُ الْحَقُّ ۭ أَوَلَمْ يَكْفِ بِرَبِّكَ أَنَّهٗ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ شَهِيْدٌ ﴿٥٤﴾

55．彼等はなお主との対面を疑うか。げにアッラーは一切を包囲し給う。

أَلَآ إِنَّهُمْ فِيْ مِرْيَةٍ مِّنْ لِّقَآءِ رَبِّهِمْ ۭ أَلَآ إِنَّهٗ بِكُلِّ شَيْءٍ مُّحِيْطٌ ﴿٥٥﴾

注22　イスラム教はアラブの地のみならず、地上の最果てまで広まるであろうと、当節は明確にして強い語調で預言している。

سُورَةُ الشُّورَىٰ مَكِّيَّةٌ

アル・シューラ
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ۝١

2．ハー・ミーム。(注1)

حمٓ ۝٢

3．アイン・スィン・カーフ。(注2)

عٓسٓقٓ ۝٣

4．かくの如く偉大にして賢哲なるアッラーは、汝に先だつ人々に啓示した如く、今ここに汝に啓示を降す。

كَذَٰلِكَ يُوحِيٓ إِلَيْكَ وَإِلَى ٱلَّذِينَ مِن قَبْلِكَ ٱللَّهُ ٱلْعَزِيزُ ٱلْحَكِيمُ ۝٤

5．すべて天に在るもの地に在るものは悉くアッラーの有なり。彼は至高く、至大なる者にまします。

لَهُۥ مَا فِي ٱلسَّمَٰوَٰتِ وَمَا فِي ٱلْأَرْضِ وَهُوَ ٱلْعَلِيُّ ٱلْعَظِيمُ ۝٥

6．諸天はその上空より割れ裂けんばかり。天使らはその主の讃美を唱え、地上の人々のために赦しを請う。(注3)ああ、げにアッラーこそは寛大にして、仁恕なる者にまします。

تَكَادُ ٱلسَّمَٰوَٰتُ يَتَفَطَّرْنَ مِن فَوْقِهِنَّ وَٱلْمَلَٰٓئِكَةُ يُسَبِّحُونَ بِحَمْدِ رَبِّهِمْ وَيَسْتَغْفِرُونَ لِمَن فِي ٱلْأَرْضِ أَلَآ إِنَّ ٱللَّهَ هُوَ ٱلْغَفُورُ ٱلرَّحِيمُ ۝٦

7．アッラー以外に守護者を求める徒輩については、アッラー之を監視す。されば、汝は彼等の監視者に非ず。(注4)

وَٱلَّذِينَ ٱتَّخَذُوا۟ مِن دُونِهِۦٓ أَوْلِيَآءَ ٱللَّهُ حَفِيظٌ عَلَيْهِمْ وَمَآ أَنتَ عَلَيْهِم بِوَكِيلٍ ۝٧

8．かくの如く、われらがアラビア語で汝にクルアーンを啓示せるは、汝をしてすべての邑の母並びにその周辺の人々に警告せしめんがため、また疑念の余地なきかの集合の

وَكَذَٰلِكَ أَوْحَيْنَآ إِلَيْكَ قُرْءَانًا عَرَبِيًّا لِّتُنذِرَ أُمَّ ٱلْقُرَىٰ وَمَنْ حَوْلَهَا وَتُنذِرَ يَوْمَ ٱلْجَمْعِ لَا رَيْبَ

注1　賞讃すべき栄誉の主。

注2　全知全能者。

注3　人間の罪は大きいが、神の慈悲はそれにも増して大きく、これは神の全ての属性を超えたものである。神の慈悲と、人間を許す様にとの天使の願いが一つになり、彼は神の罰から救われたのであり、悔い改める為の猶予を授けられているのである。

注4　神は人間の不敬や不信仰を見つめ、それを記録しておられ、もし彼等が悔い改めなければ処罰されるであろう。

日を人々に警告せしめんがためなり、或る者たちは楽園に入り、また或る者たちは燃えさかる業火に陥ちんその日を。

فِيهِ ۚ فَرِيقٌ فِي الْجَنَّةِ وَفَرِيقٌ فِي السَّعِيرِ ﴿٨﴾

9．アッラーもし欲したりせば、彼等を一つの民族になし得たり。されど彼は、己れの欲する者のみその慈悲のうちに招き入れ給う。而して、悪をなす徒輩には、守護者もなければ助け手もなかるべし。

وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ لَجَعَلَهُمْ أُمَّةً وَاحِدَةً وَلَٰكِنْ يُدْخِلُ مَنْ يَشَاءُ فِي رَحْمَتِهِ ۚ وَالظَّالِمُونَ مَا لَهُمْ مِنْ وَلِيٍّ وَلَا نَصِيرٍ ﴿٩﴾

10．彼等はアッラー以外に守護者を求めたるか？　されど、アッラーこそ真の守護者なり。彼は死者を甦らせ、全能にまします御方。

أَمِ اتَّخَذُوا مِنْ دُونِهِ أَوْلِيَاءَ ۖ فَاللَّهُ هُوَ الْوَلِيُّ وَهُوَ يُحْيِي الْمَوْتَىٰ وَهُوَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿١٠﴾

第二項

11．何事によらず、お前たちに争論ある時、その最後の裁きをつける者はアッラーなり。云え、「こはアッラー、我が主、我はただ彼を信頼し、常に悔悟して彼に心を向ける」と。

وَمَا اخْتَلَفْتُمْ فِيهِ مِنْ شَيْءٍ فَحُكْمُهُ إِلَى اللَّهِ ۚ ذَٰلِكُمُ اللَّهُ رَبِّي عَلَيْهِ تَوَكَّلْتُ وَإِلَيْهِ أُنِيبُ ﴿١١﴾

12．彼は天地の創始者なり。彼はお前たちのためにお前たち自身の中から妻女を創り、また家畜にも雌雄を創り、之によってお前たちを殖し給う。(注５)彼の如き御方はほかになし。彼はすべてを聴き、すべてをみそなはし給う。

فَاطِرُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۚ جَعَلَ لَكُمْ مِنْ أَنْفُسِكُمْ أَزْوَاجًا وَمِنَ الْأَنْعَامِ أَزْوَاجًا ۖ يَذْرَؤُكُمْ فِيهِ ۚ لَيْسَ كَمِثْلِهِ شَيْءٌ ۖ وَهُوَ السَّمِيعُ الْبَصِيرُ ﴿١٢﴾

13．天地の諸鍵は彼の有なり。彼は己れの欲する者に給養を拡げ、また欲する者に之をひき締め給う。げに彼は一切を熟知し給う。

لَهُ مَقَالِيدُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۖ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَنْ يَشَاءُ وَيَقْدِرُ ۚ إِنَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿١٣﴾

14．彼がお前たちに規定せる教えは、かつてノアに申しつけたるもの。われら今汝に之を啓示せり。こはアブラハムやモーゼやイエスに命じたるものなり、すなわち、「信仰を堅守し、宗派に分裂するなかれ。汝が人々に呼びかけるこの教えは、偶像崇拝者どもには至難なり。アッラーは欲する者を己れのために選び、悔悟して心を主に向ける者を己れの道に導き給う」と。

شَرَعَ لَكُمْ مِنَ الدِّينِ مَا وَصَّىٰ بِهِ نُوحًا وَالَّذِي أَوْحَيْنَا إِلَيْكَ وَمَا وَصَّيْنَا بِهِ إِبْرَاهِيمَ وَمُوسَىٰ وَعِيسَىٰ ۖ أَنْ أَقِيمُوا الدِّينَ وَلَا تَتَفَرَّقُوا فِيهِ ۚ كَبُرَ عَلَى الْمُشْرِكِينَ مَا تَدْعُوهُمْ إِلَيْهِ ۚ اللَّهُ يَجْتَبِي إِلَيْهِ مَنْ يَشَاءُ وَيَهْدِي إِلَيْهِ مَنْ يُنِيبُ ﴿١٤﴾

注５　神は夫婦の結び付きにより人類の子孫を増やされる。

15. 然るに彼等は、知識が降りたる後、互に妬み合い、分裂せり。もし定められた時限に関し主のお言葉なかりせば、事はすでに決済せり。なれど、彼等の後に経典を受け継いだ者たちは、今も之に関して疑心を抱き動揺す。

وَمَا تَفَرَّقُوْٓا اِلَّا مِنْۢ بَعْدِ مَا جَآءَهُمُ الْعِلْمُ بَغْيًاۢ بَيْنَهُمْ ۗ وَلَوْلَا كَلِمَةٌ سَبَقَتْ مِنْ رَّبِّكَ اِلٰٓى اَجَلٍ مُّسَمًّى لَّقُضِيَ بَيْنَهُمْ ۗ وَاِنَّ الَّذِيْنَ اُوْرِثُوا الْكِتٰبَ مِنْۢ بَعْدِهِمْ لَفِيْ شَكٍّ مِّنْهُ مُرِيْبٍ ﴿١٥﴾

16. されば汝は、人々をこの教えに召せ。汝が命ぜられた如く堅忍不抜であれ。彼等の思惑に乗せられるな。而して、云え、「我はアッラーが降せる経典を信ず。我は公平にお前たちを裁断することを命ぜられたり。アッラーは我等の主にして、且つお前たちの主なり。我等のすることは我等の責任、お前たちのすることはお前たちの責任なり。我等とお前たちの間には何も論争することなし。いずれ皆アッラーに召集され、彼の許へ帰るべし」と。(注6)

فَلِذٰلِكَ فَادْعُ ۚ وَاسْتَقِمْ كَمَآ اُمِرْتَ ۚ وَلَا تَتَّبِعْ اَهْوَآءَهُمْ ۚ وَقُلْ اٰمَنْتُ بِمَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ مِنْ كِتٰبٍ ۚ وَاُمِرْتُ لِاَعْدِلَ بَيْنَكُمْ ۗ اَللّٰهُ رَبُّنَا وَرَبُّكُمْ ۗ لَنَآ اَعْمَالُنَا وَلَكُمْ اَعْمَالُكُمْ ۗ لَا حُجَّةَ بَيْنَنَا وَبَيْنَكُمْ ۗ اَللّٰهُ يَجْمَعُ بَيْنَنَا ۚ وَاِلَيْهِ الْمَصِيْرُ ﴿١٦﴾

17. されど、アッラーの呼びかけに応えた後、アッラーをあげつらう者、彼等の論議はアッラーから見れば無益なり。(注7)天罰彼等に降りて厳しい罰を受けん。

وَالَّذِيْنَ يُحَآجُّوْنَ فِى اللّٰهِ مِنْۢ بَعْدِ مَا اسْتُجِيْبَ لَهٗ حُجَّتُهُمْ دَاحِضَةٌ عِنْدَ رَبِّهِمْ وَعَلَيْهِمْ غَضَبٌ وَّلَهُمْ عَذَابٌ شَدِيْدٌ ﴿١٧﴾

18. アッラーこそは真理を以て経典を降し、且つ秤を授け給える御方なり。而して、終末の日の近づけることを汝に知らしめるは誰か？

اَللّٰهُ الَّذِيْٓ اَنْزَلَ الْكِتٰبَ بِالْحَقِّ وَالْمِيْزَانَ ۗ وَمَا يُدْرِيْكَ لَعَلَّ السَّاعَةَ قَرِيْبٌ ﴿١٨﴾

19. 終末の日を信ぜぬ徒輩は之を催促するが、信ずる人々はその必ず来ることを知るが故に心配す。油断するな！　終末の日をあげ

يَسْتَعْجِلُ بِهَا الَّذِيْنَ لَا يُؤْمِنُوْنَ بِهَا ۚ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مُشْفِقُوْنَ مِنْهَا ۙ وَيَعْلَمُوْنَ اَنَّهَا الْحَقُّ ۗ

注6　モハッマド預言者は、彼が現れる前の全啓示書に記された中で、彼の信じる預言者の弟子となる様処所に命じられている。それ故、他の預言者が彼と反目するいわれは全くない。

注7　イスラム教が起こされ、多くの人々が信者となり始めた為、不信心者がイスラムの神の由来に異議を唱え続けても、それは無駄な事である。

注8　不信心者は裁きの日を信じないので、それを恐れず、その日が早く来る様求める。しかし、信者はその恐怖の日に自らの行為に申し開きをしなければならないと知っており、常時その日に備えると共に、その日が訪れるのを恐れている。

つらう者ははなはだしき迷誤の中にあり。（注8）

أَلَآ إِنَّ الَّذِينَ يُمَارُونَ فِي السَّاعَةِ لَفِي ضَلَٰلٍ بَعِيدٍ ﴿١٩﴾

20．アッラーはその僕等に対して優しくまします。彼はその欲する者を養う。彼は至強く、至偉大なり。

اللَّهُ لَطِيفٌ بِعِبَادِهِ يَرْزُقُ مَن يَشَآءُ وَهُوَ الْقَوِيُّ الْعَزِيزُ ﴿٢٠﴾

第三項

21．来世の収穫を希う者には、われらはその収穫を増さん。現世の収穫を希う者にもわれらはそれを与えん。されど、来世に於ては、その者の分けまえはなかるべし。（注9）

مَن كَانَ يُرِيدُ حَرْثَ الْآخِرَةِ نَزِدْ لَهُ فِي حَرْثِهِ وَمَن كَانَ يُرِيدُ حَرْثَ الدُّنْيَا نُؤْتِهِ مِنْهَا وَمَا لَهُ فِي الْآخِرَةِ مِن نَّصِيبٍ ﴿٢١﴾

22．彼等にはアッラーの同位者ありて、アッラーが許さざりし教えを彼等に許可したるか？　されど、われらの最後の決定の言葉なかりせば、事はすでに片づきたりしなり。不義者は必ず苛酷な罰を被らん。

أَمْ لَهُمْ شُرَكَٰٓؤُا شَرَعُوا لَهُم مِّنَ الدِّينِ مَا لَمْ يَأْذَن بِهِ اللَّهُ وَلَوْلَا كَلِمَةُ الْفَصْلِ لَقُضِيَ بَيْنَهُمْ وَإِنَّ الظَّٰلِمِينَ لَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٢٢﴾

23．汝は自分で稼ぎためたもののために悪果がその身に降りかかり、戦慄する不義者どもを見ん。されど、信じて善行を積む者は、楽園の草原に住まん。彼等は主の御許で、己が欲するものを得べし。こはいとも大なるアッラーの賜物なり。

تَرَى الظَّٰلِمِينَ مُشْفِقِينَ مِمَّا كَسَبُوا وَهُوَ وَاقِعٌ بِهِمْ وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّٰلِحَٰتِ فِي رَوْضَٰتِ الْجَنَّٰتِ لَهُم مَّا يَشَآءُونَ عِندَ رَبِّهِمْ ذَٰلِكَ هُوَ الْفَضْلُ الْكَبِيرُ ﴿٢٣﴾

24．こは信じて善行を積む僕等に与えるアッラーの朗報なり。云え、「我はお前たちへの奉仕のために如何なる報酬も求めず。ただ近親を愛するが故にお前たちを神へ導く」と。（注10）誰であれ善行を積む者には、われらはそれに対して善福を増さん。げにアッラーは寛大にして、すぐ感激なさる御方にまします。

ذَٰلِكَ الَّذِي يُبَشِّرُ اللَّهُ عِبَادَهُ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّٰلِحَٰتِ قُل لَّآ أَسْـَٔلُكُمْ عَلَيْهِ أَجْرًا إِلَّا الْمَوَدَّةَ فِي الْقُرْبَىٰ وَمَن يَقْتَرِفْ حَسَنَةً نَّزِدْ لَهُ فِيهَا حُسْنًا إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ شَكُورٌ ﴿٢٤﴾

注9　この世のはかない物を手に入れる事にのみ努める人は、来世における永遠の命の恵みを与えられはしない。しかし、来世に備える人は、過分な神の恵みを授かるであろう。

注10　この言葉は又次の様な意味にもなる。(1)私は貴人を神の法の下へ呼び寄せた事で、貴人から報酬を得るつもりはない。唯、親族として、貴人が精神的安らぎを得ていないのではないかと案ずる余り、そうするの

25．彼等は「彼ムハンマドがアッラーについて虚偽を捏造せり」と云うか？　もしアッラー欲しなば、汝の敵の心を閉じたる如く、汝の心を閉じることも可なり。されど、アッラーは、汝の口を通して虚偽を吸い取り、主の言葉を以て真理を立証す。げに主は、人が胸中に抱くことを熟知し給う。

أَمْ يَقُولُونَ افْتَرَىٰ عَلَى اللَّهِ كَذِبًا ۖ فَإِن يَشَإِ اللَّهُ يَخْتِمْ عَلَىٰ قَلْبِكَ ۗ وَيَمْحُ اللَّهُ الْبَاطِلَ وَيُحِقُّ الْحَقَّ بِكَلِمَاتِهِ ۚ إِنَّهُ عَلِيمٌ بِذَاتِ الصُّدُورِ ﴿٢٥﴾

26．僕等からの悔悟を容れ、もろもろの罪を赦すは彼なり。而して、彼はお前たちの所業を知悉し給う。

وَهُوَ الَّذِي يَقْبَلُ التَّوْبَةَ عَنْ عِبَادِهِ وَيَعْفُو عَنِ السَّيِّئَاتِ وَيَعْلَمُ مَا تَفْعَلُونَ ﴿٢٦﴾

27．彼は信じて善行を積む人々の祈願に応え、彼等にその慈悲を加増す。されど、不信心者どもには、厳しい罰を下し給う。

وَيَسْتَجِيبُ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ وَيَزِيدُهُم مِّن فَضْلِهِ ۚ وَالْكَافِرُونَ لَهُمْ عَذَابٌ شَدِيدٌ ﴿٢٧﴾

28．もしアッラーがその僕等に対する給養を殖し過ぎなば、彼等は地上に於てほしいままに振舞わん。されど、主は、欲する時、之をほどほどに下し給う。げに彼はその僕等を熟知し、之を監視し給う。

وَلَوْ بَسَطَ اللَّهُ الرِّزْقَ لِعِبَادِهِ لَبَغَوْا فِي الْأَرْضِ وَلَٰكِن يُنَزِّلُ بِقَدَرٍ مَّا يَشَاءُ ۚ إِنَّهُ بِعِبَادِهِ خَبِيرٌ بَصِيرٌ ﴿٢٨﴾

29．而して、彼等が絶望せる時、雨を降らせてその慈悲を展開するは彼なり。彼は守護者なり、讃美せらるべき御方なり。

وَهُوَ الَّذِي يُنَزِّلُ الْغَيْثَ مِن بَعْدِ مَا قَنَطُوا وَيَنشُرُ رَحْمَتَهُ ۚ وَهُوَ الْوَلِيُّ الْحَمِيدُ ﴿٢٩﴾

30．彼の神兆の中には、天地の創造とそこに彼が撒き散らした生きとし生けるものあり。而して、彼は、その欲する時に彼等を召集する能力あり。

وَمِنْ آيَاتِهِ خَلْقُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَثَّ فِيهِمَا مِن دَابَّةٍ ۚ وَهُوَ عَلَىٰ جَمْعِهِمْ إِذَا يَشَاءُ قَدِيرٌ ﴿٣٠﴾

第四項

31．お前たちにふりかかる不幸は、お前たちの手が稼いだこと。されど、彼は、お前たちの数々の罪を宥恕し給う。

وَمَا أَصَابَكُم مِّن مُّصِيبَةٍ فَبِمَا كَسَبَتْ أَيْدِيكُمْ وَيَعْفُو عَن كَثِيرٍ ﴿٣١﴾

である。(2)私は、貴人の精神に利する様にと私が為した大事業の報酬を貴人に求めはしない。唯、貴人は、血族としての身の処し方を知るべきだ。(3)私の貴人に対する気遣いや愛に報いて欲しいのではない。唯、私に反論するなら、少なくとも私が貴人に示す様な親族としての心配を貴人もするべきだ。(4)私は貴人に如何なる報酬をも求めないが、唯、神に近付きたいと願うべきである。この最後の内容は、25：58と一致し、その箇所には、モハッマド預言者が次の様に語ったと記されている。「我はお前たちへの奉仕のために……。(文中)」

32. お前たちは、地上に於て神の計画を挫折すること能わず、(注 11) またアッラー以外に如何なる友も助け手もなし。	وَمَآ أَنتُم بِمُعْجِزِينَ فِى ٱلْأَرْضِ ۖ وَمَا لَكُم مِّن دُونِ ٱللَّهِ مِن وَلِىٍّ وَلَا نَصِيرٍ ﴿٣٢﴾
33. また、山の如き巨船が海を渡るのも、彼の神兆の一つなり。(注 12)	وَمِنْ ءَايَٰتِهِ ٱلْجَوَارِ فِى ٱلْبَحْرِ كَٱلْأَعْلَٰمِ ﴿٣٣﴾
34. 彼もし欲さば、風を止めて船を海面に停止せしめることも可なり。げにこの中に含有されることは、耐え忍び感謝する人々への神兆なり。	إِن يَشَأْ يُسْكِنِ ٱلرِّيحَ فَيَظْلَلْنَ رَوَاكِدَ عَلَىٰ ظَهْرِهِۦٓ ۚ إِنَّ فِى ذَٰلِكَ لَءَايَٰتٍ لِّكُلِّ صَبَّارٍ شَكُورٍ ﴿٣٤﴾
35. 或いは彼は、彼等人間が稼いだことのために、船を沈めることも可なり。されど、彼は、彼等の罪の数々を宥恕し給う。	أَوْ يُوبِقْهُنَّ بِمَا كَسَبُوا۟ وَيَعْفُ عَن كَثِيرٍ ﴿٣٥﴾
36. されど、アッラーの神兆をあげつらう者は、自分たちには逃げ場のないことを思い知らん。	وَيَعْلَمَ ٱلَّذِينَ يُجَٰدِلُونَ فِىٓ ءَايَٰتِنَا مَا لَهُم مِّن مَّحِيصٍ ﴿٣٦﴾
37. お前たちが与えられたものはこの世の暫しの享楽なれど、アッラーの御許にあるものこそなお勝りて永続す、信じてその主を頼る者にとっては、	فَمَآ أُوتِيتُم مِّن شَىْءٍ فَمَتَٰعُ ٱلْحَيَوٰةِ ٱلدُّنْيَا ۖ وَمَا عِندَ ٱللَّهِ خَيْرٌ وَأَبْقَىٰ لِلَّذِينَ ءَامَنُوا۟ وَعَلَىٰ رَبِّهِمْ يَتَوَكَّلُونَ ﴿٣٧﴾
38. 大罪や醜行を避ける者にとっては、憤怒を抑えて寛恕する者にとっては、(注 13)	وَٱلَّذِينَ يَجْتَنِبُونَ كَبَٰٓئِرَ ٱلْإِثْمِ وَٱلْفَوَٰحِشَ وَإِذَا مَا غَضِبُوا۟ هُمْ يَغْفِرُونَ ﴿٣٨﴾
39. 主に耳を傾け礼拝を遵守する者にとっては、互に相談して事を行う者にとっては、(注 14) われらが授けたものを惜しみなく施す者にとっては、	وَٱلَّذِينَ ٱسْتَجَابُوا۟ لِرَبِّهِمْ وَأَقَامُوا۟ ٱلصَّلَوٰةَ وَأَمْرُهُمْ شُورَىٰ بَيْنَهُمْ وَمِمَّا رَزَقْنَٰهُمْ يُنفِقُونَ ﴿٣٩﴾

注 11　イスラム教が勝利を得、不信心者は神の命にそむく事はできず、イスラムの前進を遮る如何なる妨害も許されない。不信心者は、神がこの様に命じられたと告げられている。

注 12　当節及び他の数節において、クルアーンは、船が国際交流において重要な役割を果たすと指摘している。1400 年前に砂漠に住む子孫に啓示されたこの真実は、クルアーンが神に由来するものである事を十分に証明している。

注 13　この言葉は、あらゆる種類の罪、道徳上の過ちに言及したものだが、個々の罪については怒りが引き金となっている。怒りが限度を超える時、様々な罪が犯されるのであるから。

注 14　この節は、イスラム教徒が国事を司る際の指針として、シューラ（相互協議）について述べてある。この一語は、西側諸国の誇る政府の代表制の本質を表している。イスラム国家の指導者であるカリフは、国の重要問題について決断を下す時、国民の代表と協議する事を義務付けられている。4 章 59 節も参照の事。

40．迫害された時その身を護る者にとっては。

وَالَّذِينَ إِذَا أَصَابَهُمُ الْبَغْيُ هُمْ يَنتَصِرُونَ ﴿٤٠﴾

41．危害に対する報復は、それと同じ危害なり。されど、寛恕して和解する者には、アッラーの許に報賞あり。げにアッラーは不義者を愛で給わぬ。（注 15）

وَجَزَاءُ سَيِّئَةٍ سَيِّئَةٌ مِّثْلُهَا ۖ فَمَنْ عَفَا وَأَصْلَحَ فَأَجْرُهُ عَلَى اللَّهِ ۚ إِنَّهُ لَا يُحِبُّ الظَّالِمِينَ ﴿٤١﴾

42．迫害された時、防御するは、罪に非ず。（注 16）

وَلَمَنِ انتَصَرَ بَعْدَ ظُلْمِهِ فَأُولَٰئِكَ مَا عَلَيْهِم مِّن سَبِيلٍ ﴿٤٢﴾

43．罰せらるべきは、人を迫害し、地上に於て不当に則を越える者どものみ。

إِنَّمَا السَّبِيلُ عَلَى الَّذِينَ يَظْلِمُونَ النَّاسَ وَيَبْغُونَ فِي الْأَرْضِ بِغَيْرِ الْحَقِّ ۚ أُولَٰئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٤٣﴾

44．されど、耐え忍び、赦してやるなら、それは崇高な裁断なり。

وَلَمَن صَبَرَ وَغَفَرَ إِنَّ ذَٰلِكَ لَمِنْ عَزْمِ الْأُمُورِ ﴿٤٤﴾

第五項

45．アッラーが邪道に導こうとした者には、以後如何なる守護者もなし。而して、汝は、不義者どもが刑罰を目の当たりにして、「どこかに引返す道なきか？」と叫ぶを見ん。

وَمَن يُضْلِلِ اللَّهُ فَمَا لَهُ مِن وَلِيٍّ مِّن بَعْدِهِ ۗ وَتَرَى الظَّالِمِينَ لَمَّا رَأَوُا الْعَذَابَ يَقُولُونَ هَلْ إِلَىٰ مَرَدٍّ مِّن سَبِيلٍ ﴿٤٥﴾

46．汝は、彼等が業火の前に連れて来られると、恥てうなだれ、盗み見するを見ん。（注 17）而して、信徒たちは云わん、「復活の日に、家族もろとも我が身を破滅する者は、本当の失敗者なり」と。見よ、不義者どもは永劫の懲罰の中に留まらん。

وَتَرَاهُمْ يُعْرَضُونَ عَلَيْهَا خَاشِعِينَ مِنَ الذُّلِّ يَنظُرُونَ مِن طَرْفٍ خَفِيٍّ ۗ وَقَالَ الَّذِينَ آمَنُوا إِنَّ الْخَاسِرِينَ الَّذِينَ خَسِرُوا أَنفُسَهُمْ وَأَهْلِيهِمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ ۗ أَلَا إِنَّ الظَّالِمِينَ فِي عَذَابٍ مُّقِيمٍ ﴿٤٦﴾

注 15　この節は、イスラムの刑法の根幹をなしている。イスラム教義に基づく罪人の処罰の真の目的は、罪人の道徳的更生にある。もし許す事でその者が幾分なりとも道徳的に向上するなら、彼は許されるべきである。しかし、処罰が彼を更生に向かわせるなら、彼は罰せられなければならない。しかし、その罰は、犯した罪より重いものであってはならない。イスラム教は、もう一方の頬を出すという厳しい教えや、「目には目を」のユダヤ教の教義いずれをも信じず、常にその中庸を重んじている。

注 16　処罰に関するイスラム教義は、非現実的理想主義者の心には響かないかもしれないが、現実的な宗教として、イスラム教は、法・経済・道徳の諸問題に最も有益にして現実的な解決策を定めている。イスラム教は自己防衛を信者の道徳上の義務とみなす。モハッマド預言者は、次の様に語ったと記されている。財産と名誉を守るべくして命を落とす者は殉教者である（ブハリ、マザーリム・ワル・ガサブ書）。

注 17　こそこそした目付きは、犯罪の為召喚され、判決が下されるのを待つ罪人のものである。

47．アッラー以外彼等を助ける守護者なし。アッラーが邪道に導こうとした者には、もはや指導の方途なし。

وَمَا كَانَ لَهُمْ مِنْ أَوْلِيَاءَ يَنْصُرُونَهُمْ مِنْ دُونِ اللَّهِ ۗ وَمَنْ يُضْلِلِ اللَّهُ فَمَا لَهُ مِنْ سَبِيلٍ ﴿٤٧﴾

48．汝等、避け難い日がアッラーより来る前に、主に耳を傾けよ。その日お前たちは遁れるところなく、否認する機会もなし。

اسْتَجِيبُوا لِرَبِّكُمْ مِنْ قَبْلِ أَنْ يَأْتِيَ يَوْمٌ لَا مَرَدَّ لَهُ مِنَ اللَّهِ ۚ مَا لَكُمْ مِنْ مَلْجَإٍ يَوْمَئِذٍ وَمَا لَكُمْ مِنْ نَكِيرٍ ﴿٤٨﴾

49．されど、たとい彼等顔をそむけるとも、われらは汝を彼等の守護者として遣わしたに非ず。汝の務めはただ神託の伝達のみ。見よ、人間は、われらが恩恵を味わせてやると大喜びするが、己が手が先に送れるもののために災難に遭うと、忽ち恩を忘る。

فَإِنْ أَعْرَضُوا فَمَا أَرْسَلْنَاكَ عَلَيْهِمْ حَفِيظًا ۖ إِنْ عَلَيْكَ إِلَّا الْبَلَاغُ ۗ وَإِنَّا إِذَا أَذَقْنَا الْإِنْسَانَ مِنَّا رَحْمَةً فَرِحَ بِهَا ۖ وَإِنْ تُصِبْهُمْ سَيِّئَةٌ بِمَا قَدَّمَتْ أَيْدِيهِمْ فَإِنَّ الْإِنْسَانَ كَفُورٌ ﴿٤٩﴾

50．天地の大権はアッラーのものなり。彼は己が欲するものを創造す。彼は己が欲する者に女児を与え、また己が欲する者に男児を与え給う。

لِلَّهِ مُلْكُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۚ يَخْلُقُ مَا يَشَاءُ ۚ يَهَبُ لِمَنْ يَشَاءُ إِنَاثًا وَيَهَبُ لِمَنْ يَشَاءُ الذُّكُورَ ﴿٥٠﴾

51．或いは、アッラーは、女児、男児、共に与え給ふ。或いは子宝の恵みを与え給わず。げに、アッラーは、万事を知り、万事を能くす。（注 18）

أَوْ يُزَوِّجُهُمْ ذُكْرَانًا وَإِنَاثًا ۖ وَيَجْعَلُ مَنْ يَشَاءُ عَقِيمًا ۚ إِنَّهُ عَلِيمٌ قَدِيرٌ ﴿٥١﴾

52．アッラーは啓示によるか、帷の背後から、或いは使徒を遣わして己れの欲することを啓示する以外は、人間に直接語りかけ給わず。（注 19）げに彼は至高く、賢哲にまします。

وَمَا كَانَ لِبَشَرٍ أَنْ يُكَلِّمَهُ اللَّهُ إِلَّا وَحْيًا أَوْ مِنْ وَرَاءِ حِجَابٍ أَوْ يُرْسِلَ رَسُولًا فَيُوحِيَ بِإِذْنِهِ مَا يَشَاءُ ۚ إِنَّهُ عَلِيٌّ حَكِيمٌ ﴿٥٢﴾

注 18　当節及び前節において、不信心者は神が次の様な命令を下されたと告げられている。イスラム教徒がその数を増す一方、不信心者は減り、彼等の子孫がイスラム教となる為、絶えてしまうであろう。

注 19　当節は、神が下僕に語りかけ、啓示を表す三通りの方法について述べてある。（1）神は媒介を通さず、直接彼等に語りかけられる。（2）神は彼等に幻想をお見せになるが、それが理解されるか否かは定かでない。又、時には目覚めた状態の時に彼等に声をお聞かせになられるが、その時彼等には語りかけるお姿が見えない。これが「帷の背後」という語の意味する所である。（3）神は使者、すなわち神のお告げを運ぶ天使をお遣しになる。

53. かくわれらは、われらの命によって汝に神の言葉を啓示せり。汝は経典が如何なるものかを知らず、また信仰が如何なるものかも知らざりき。されど、われらは、之によってわれらが嘉する僕等を導く光明となせり。げに汝は人間を正しい道へ導く。

وَكَذٰلِكَ اَوۡحَيۡنَاۤ اِلَيۡكَ رُوۡحًا مِّنۡ اَمۡرِنَا ؕ مَا كُنۡتَ تَدۡرِىۡ مَا الۡكِتٰبُ وَلَا الۡاِيۡمَانُ وَلٰـكِنۡ جَعَلۡنٰهُ نُوۡرًا نَّهۡدِىۡ بِهٖ مَنۡ نَّشَآءُ مِنۡ عِبَادِنَا ؕ وَاِنَّكَ لَتَهۡدِىۡۤ اِلٰى صِرَاطٍ مُّسۡتَقِيۡمٍ ۙ﴿۵۳﴾

54. すなわち、天地に在るもの一切を統べ給うアッラーの道へ。(注 20) 見よ！　万物は悉くアッラーの御許へ帰り行く。(注 21)

صِرَاطِ اللّٰهِ الَّذِىۡ لَهٗ مَا فِى السَّمٰوٰتِ وَمَا فِى الۡاَرۡضِ ؕ اَلَاۤ اِلَى اللّٰهِ تَصِيۡرُ الۡاُمُوۡرُ ﴿۵۴﴾

注 20　イスラム教は、人間を神のもとへ導き、人間の創造の偉大にして崇高なる目的を悟らせる生命・光・道である。

注 21　全ての物の始まりと終わりは、アッラーの手に委ねられている。

سُورَةُ الزُّخْرُفِ مَكِّيَّةٌ

アル・ゾフロフ
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ①

2．ハー・ミーム。(注1)

حمٓ ②

3．われらはこの明瞭なる経典を証拠として引証す。

وَالْكِتٰبِ الْمُبِيْنِ ③

4．われらはそれを、お前たちが理解し得るよう、清潔且つ感銘的な言葉のクルアーンとなせり。

إِنَّا جَعَلْنٰهُ قُرْءٰنًا عَرَبِيًّا لَّعَلَّكُمْ تَعْقِلُوْنَ ④

5．而(しか)して、その内容は、われらが許(もと)にある至高にして知恵に満ちたる母典の中に記(しる)されたものなり。(注2)

وَإِنَّهُ فِيْٓ أُمِّ الْكِتٰبِ لَدَيْنَا لَعَلِيٌّ حَكِيْمٌ ⑤

6．お前たちが放縦(ほうじゅう)なるが故に、われらこの訓戒をお前たちから取り上げるべきか？(注3)

أَفَنَضْرِبُ عَنْكُمُ الذِّكْرَ صَفْحًا أَنْ كُنْتُمْ قَوْمًا مُّسْرِفِيْنَ ⑥

7．われらは如何に多くの預言者を昔の民へ遣わしたことか！

وَكَمْ أَرْسَلْنَا مِنْ نَّبِيٍّ فِي الْأَوَّلِيْنَ ⑦

8．然(しか)るに、預言者が現れれるたび、彼等は之(これ)を嘲笑せり。

وَمَا يَأْتِيْهِمْ مِّنْ نَّبِيٍّ إِلَّا كَانُوْا بِهٖ يَسْتَهْزِءُوْنَ ⑧

9．それ故に、われらはこの者どもより力優る民を打滅ぼしぬ。古人の先例すでにあり。

فَأَهْلَكْنَآ أَشَدَّ مِنْهُمْ بَطْشًا وَّمَضٰى مَثَلُ الْأَوَّلِيْنَ ⑨

10．もし汝、彼等に向って「天地(あめつち)を創造せる者は誰か？」と問わば、彼等は必ず答えん、「万能全知なる神これら両者を創造せり」と。

وَلَئِنْ سَأَلْتَهُمْ مَّنْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضَ لَيَقُوْلُنَّ خَلَقَهُنَّ الْعَزِيْزُ الْعَلِيْمُ ⑩

注1　賞讃すべき栄誉の主。

注2　戒律の原理という意味の語、母典は、クルアーンが神の栄知によるものであり、律法(シャリヤ)の原理となる事を示している。又、クルアーンが究極の神の律法の根本原理となる様、永遠の御命令が下されたと意味しているともいえる。

注3　この言葉の意味は次の様である。「貴人から、警告(神からの忠告)を取りあげ、貴人に背を向けて、何の導きも与えぬまま貴人から離れて行ってしまうとでも思っているのか。」

神のしるしの形をとる天の警告は途絶える事はない。天のしるしを拒む最もな理由があったなら、初めの預言者に続いて他の預言者が出現する事はなかっただろう。しかし、預言者は現れ続けたのである。

11．彼は大地をお前たちのために臥所となし、お前たちが迷わず歩けるようにその中に道筋を開き給えり。

الَّذِي جَعَلَ لَكُمُ الْأَرْضَ مَهْدًا وَّجَعَلَ لَكُمْ فِيهَا سُبُلًا لَّعَلَّكُمْ تَهْتَدُونَ ﴿١١﴾

12．また彼は、程よく空から雨を降し、以て枯死せる大地を甦らしむ。お前たちもそのようにして甦らしめられん。（注4）

وَالَّذِي نَزَّلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً بِقَدَرٍ فَأَنْشَرْنَا بِهِ بَلْدَةً مَّيْتًا كَذٰلِكَ تُخْرَجُونَ ﴿١٢﴾

13．また彼は、万物の雌雄を創り、お前たちが乗る船や家畜とを創れり。

وَالَّذِي خَلَقَ الْأَزْوَاجَ كُلَّهَا وَجَعَلَ لَكُمْ مِّنَ الْفُلْكِ وَالْأَنْعَامِ مَا تَرْكَبُونَ ﴿١٣﴾

14．こはお前たちをその背に安坐せしめんがためなり。お前たちがその背に乗るたびに、主の恩恵を憶い起して「これ等のものを我等に従わしめ給える彼に栄光あれ。我等自身では出来得ざりしことなり。

لِتَسْتَوُوا عَلٰى ظُهُورِهِ ثُمَّ تَذْكُرُوا نِعْمَةَ رَبِّكُمْ إِذَا اسْتَوَيْتُمْ عَلَيْهِ وَتَقُولُوا سُبْحٰنَ الَّذِي سَخَّرَ لَنَا هٰذَا وَمَا كُنَّا لَهُ مُقْرِنِينَ ﴿١٤﴾

15．主の御許へ我等は必ず帰り行かん」と云うためなり。

وَإِنَّا إِلٰى رَبِّنَا لَمُنْقَلِبُونَ ﴿١٥﴾

16．然るに彼等は、彼の僕の或る者を御子と主張す。（注5）げに人間は明らかに忘恩なり。

وَجَعَلُوا لَهُ مِنْ عِبَادِهِ جُزْءًا إِنَّ الْإِنْسَانَ لَكَفُورٌ مُّبِينٌ ﴿١٦﴾

第二項

17．アッラーはその創れるものから女児を取り、お前たちには男児の名誉を与えるとな？

أَمِ اتَّخَذَ مِمَّا يَخْلُقُ بَنٰتٍ وَّأَصْفٰكُمْ بِالْبَنِينَ ﴿١٧﴾

18．彼等の誰かに娘が生まれたと聞くと、その男の顔は蒼白となり、激怒する。

وَإِذَا بُشِّرَ أَحَدُهُمْ بِمَا ضَرَبَ لِلرَّحْمٰنِ مَثَلًا ظَلَّ وَجْهُهُ مُسْوَدًّا وَّهُوَ كَظِيمٌ ﴿١٨﴾

19．装身具の間で育てられはしても、議論を明確に表明し得ざる者を、アッラーに押しつけるのか？（注6）

أَوَمَنْ يُّنَشَّؤُا فِي الْحِلْيَةِ وَهُوَ فِي الْخِصَامِ غَيْرُ مُبِينٍ ﴿١٩﴾

注4　雨が降れば乾いた大地に新たな生命が生じる様に、魂の死人も神の啓示を通して蘇ると、この言葉は示している。

注5　この言葉は、イエスが神の子だとするキリスト教の教義を指す。

注6　この言葉は、装飾品で飾り立てた偶像を指しているようだ。当節は、偶像崇拝者を厳しく非難している。彼等は、語りかけたり彼等の祈りに答える事ができず、敵の攻撃から彼等を守る事もできない偶像を崇めている。

20．彼等は慈悲深い神の僕(しもべ)なる天使を女性と考える。彼等はその創造に立ち合いたるか？　彼等の証言は記録せられ、必ず糾問(きゅうもん)されん。

وَجَعَلُوا الْمَلٰٓئِكَةَ الَّذِيْنَ هُمْ عِبٰدُ الرَّحْمٰنِ اِنَاثًا ؕ اَشَهِدُوْا خَلْقَهُمْ ؕ سَتُكْتَبُ شَهَادَتُهُمْ وَيُسْـَٔلُوْنَ ٢٠

21．彼等は云わん、「もし慈悲深き神欲したりせば、我等は天使等を崇めはせざりき」と。彼等はこの事について何んの知識もなし。彼等はただ憶測するのみ。

وَقَالُوْا لَوْ شَآءَ الرَّحْمٰنُ مَا عَبَدْنٰهُمْ ؕ مَا لَهُمْ بِذٰلِكَ مِنْ عِلْمٍ ۗ اِنْ هُمْ اِلَّا يَخْرُصُوْنَ ٢١

22．クルアーンより以前、われらは彼等に経典を授けたりや、彼等それを護持するや？(注7)

اَمْ اٰتَيْنٰهُمْ كِتٰبًا مِّنْ قَبْلِهٖ فَهُمْ بِهٖ مُسْتَمْسِكُوْنَ ٢٢

23．否、彼等は云う、「我等は父祖たちが或る教えを奉ずるを見て、我等はその足跡に導かれる」と。

بَلْ قَالُوْٓا اِنَّا وَجَدْنَآ اٰبَآءَنَا عَلٰٓى اُمَّةٍ وَّاِنَّا عَلٰٓى اٰثٰرِهِمْ مُّهْتَدُوْنَ ٢٣

24．汝以前に、われらが警告者を邑(まち)に遣わすたびに、その邑(まち)のよこしまな有力者たちは云えり、「我等は父祖たちが或る教えを奉ずるを見て、我もその足跡を辿るのみ」と。

وَكَذٰلِكَ مَآ اَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ فِيْ قَرْيَةٍ مِّنْ نَّذِيْرٍ اِلَّا قَالَ مُتْرَفُوْهَآ ۙ اِنَّا وَجَدْنَآ اٰبَآءَنَا عَلٰٓى اُمَّةٍ وَّاِنَّا عَلٰٓى اٰثٰرِهِمْ مُّقْتَدُوْنَ ٢٤

25．警告者は云えり、「何となく！　お前たちの父祖が奉じたるものより優る導きをもたらすともか？」と。彼等は云えり、「我等は断じてお前の使命を信ぜず」と。

قٰلَ اَوَلَوْ جِئْتُكُمْ بِاَهْدٰى مِمَّا وَجَدْتُّمْ عَلَيْهِ اٰبَآءَكُمْ ؕ قَالُوْٓا اِنَّا بِمَآ اُرْسِلْتُمْ بِهٖ كٰفِرُوْنَ ٢٥

26．故にわれらは、彼等を罰せり。見よ、預言者を拒否せる徒輩(やから)の末路が如何なるものなりしかを！

فَانْتَقَمْنَا مِنْهُمْ فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُكَذِّبِيْنَ ٢٦

第三項

27．アブラハムが父とその一族にかく云える時のことを念(おも)え。「我はお前たちが崇めるものと全く係わりなし、

وَاِذْ قَالَ اِبْرٰهِيْمُ لِاَبِيْهِ وَقَوْمِهٖٓ اِنَّنِيْ بَرَآءٌ مِّمَّا تَعْبُدُوْنَ ٢٧

28．我を創り給い且つ必ず我を導かん御方を除いて」

اِلَّا الَّذِيْ فَطَرَنِيْ فَاِنَّهٗ سَيَهْدِيْنِ ٢٨

注7　偶像崇拝者は、その不合理な教義を支える論拠を持たないばかりか、自らの教義を支える経典すら提示できないでいる。

29. 而して、アブラハムは、之をその子孫に永代存続の遺訓となし、彼等を神に頼らしめんとせるなり。（注８）

وَجَعَلَهَا كَلِمَةً بَاقِيَةً فِي عَقِبِهِ لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُونَ ۝٢٩

30. 否、われは、彼等並びにその父祖に、真理とその神託を明らかにする使徒が来るまで、暫しの楽しみを許したり。

بَلْ مَتَّعْتُ هٰؤُلَاءِ وَآبَاءَهُمْ حَتّٰى جَاءَهُمُ الْحَقُّ وَرَسُولٌ مُبِينٌ ۝٣٠

31. 然るに、その真理彼等に来たるや、彼等は云えり、「こは妖術なれば、我等之を信ぜず」と。

وَلَمَّا جَاءَهُمُ الْحَقُّ قَالُوا هٰذَا سِحْرٌ وَإِنَّا بِهِ كَافِرُونَ ۝٣١

32. 更に彼等は云う、「何故このクルアーンは二都のお偉方に降らざりしか？」と。（注９）

وَقَالُوا لَوْلَا نُزِّلَ هٰذَا الْقُرْآنُ عَلٰى رَجُلٍ مِنَ الْقَرْيَتَيْنِ عَظِيمٍ ۝٣٢

33. 主の恵みを頒布する者、そは彼等なりや？（注10）彼等の間に現世の生活の資を頒ち、或る者に他の者を使えるようにその地位を高からしめるはわれらなり。汝の主の恵みは、彼等が蓄財するものよりはるかに優る。

أَهُمْ يَقْسِمُونَ رَحْمَتَ رَبِّكَ ۚ نَحْنُ قَسَمْنَا بَيْنَهُمْ مَعِيشَتَهُمْ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا ۚ وَرَفَعْنَا بَعْضَهُمْ فَوْقَ بَعْضٍ دَرَجَاتٍ لِيَتَّخِذَ بَعْضُهُمْ بَعْضًا سُخْرِيًّا ۗ وَرَحْمَتُ رَبِّكَ خَيْرٌ مِمَّا يَجْمَعُونَ ۝٣٣

34. 全人類がみな一種類の集団となるおそれなかりせば、われらは慈悲深い神を信ぜざる徒輩のために、住む家の屋根を銀板で葺き、その登る階段を銀造りとなし、

وَلَوْلَا أَنْ يَكُونَ النَّاسُ أُمَّةً وَاحِدَةً لَجَعَلْنَا لِمَنْ يَكْفُرُ بِالرَّحْمٰنِ لِبُيُوتِهِمْ سُقُفًا مِنْ فِضَّةٍ وَمَعَارِجَ عَلَيْهَا يَظْهَرُونَ ۝٣٤

35. すべて戸は銀製、臥するには銀の榻牀を与えたり、

وَلِبُيُوتِهِمْ أَبْوَابًا وَسُرُرًا عَلَيْهَا يَتَّكِئُونَ ۝٣٥

36. 黄金の装飾をほどこせる。されど、これ等はみなこの世の儚い楽しみにすぎず。（注11）主の許に於ける来世の安楽こそ、敬虔な信者のためにあり。

وَزُخْرُفًا ۚ وَإِنْ كُلُّ ذٰلِكَ لَمَّا مَتَاعُ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا ۚ وَالْآخِرَةُ عِنْدَ رَبِّكَ لِلْمُتَّقِينَ ۝٣٦

注８　アブラハムは唯一神を固く信じ、それを誠意と忍耐をもって子孫に説いた為、この信仰は末長く彼等の間に広まった。

注９　この「二都」はメッカとタイフを指すと一般に考えられている。それ等は、モハッマド預言者の時代に、アラブの社会的・政治的に重要な二大都市であった。

注10　この節は、次の様に不信心者を厳しく非難している。「彼等は、自らを神の慈悲を伝える役割を担う者と称しているが、それはいつからなのか？　又、誰にその様な決定を下す権利があると言うのか？」

第四項

37. 然(しか)しながら、慈悲深き神を念ずることをなおざりにする者には、われら悪魔(サタン)をつけて、親密なる友たらしめん。

وَمَن يَعْشُ عَن ذِكْرِ الرَّحْمَٰنِ نُقَيِّضْ لَهُ شَيْطَانًا فَهُوَ لَهُ قَرِينٌ ٣٦

38. これ等の友は彼等を神の道より妨げるも、彼等は正しく導かれていると考える。

وَإِنَّهُمْ لَيَصُدُّونَهُمْ عَنِ السَّبِيلِ وَيَحْسَبُونَ أَنَّهُم مُّهْتَدُونَ ٣٧

39. 而(しか)して、かくの如き者われらが許(もと)に来るに及んで、その友に向って云わん、「我と汝等の間に東西程の距りがあらんことを！」と。なんたる悪しき友なるかな！（注12）

حَتَّىٰ إِذَا جَاءَنَا قَالَ يَا لَيْتَ بَيْنِي وَبَيْنَكَ بُعْدَ الْمَشْرِقَيْنِ فَبِئْسَ الْقَرِينُ ٣٨

40. 而(しか)して、彼等は云われん、「そは、かの日に於てはお前たちに何にも役立つところなからん、お前たちが不義なりしが故に。お前たちは刑罰をともに味わう者なり」と。

وَلَن يَنفَعَكُمُ الْيَوْمَ إِذ ظَّلَمْتُمْ أَنَّكُمْ فِي الْعَذَابِ مُشْتَرِكُونَ ٣٩

41. なれば汝は聾(つんぼ)を聞こえるようにし、盲(めくら)や明白なる迷誤の中にある者を導くこと可能なりや？（注13）

أَفَأَنتَ تُسْمِعُ الصُّمَّ أَوْ تَهْدِي الْعُمْيَ وَمَن كَانَ فِي ضَلَالٍ مُّبِينٍ ٤٠

42. たといわれら汝を召し上げるとも、われらは必ず彼等に報復せん。

فَإِمَّا نَذْهَبَنَّ بِكَ فَإِنَّا مِنْهُم مُّنتَقِمُونَ ٤١

43. 或いは、われらが彼等に約束せしことを、われらは汝に証明せん。なんとなれば、われらは彼等を完全に支配するが故に。

أَوْ نُرِيَنَّكَ الَّذِي وَعَدْنَاهُمْ فَإِنَّا عَلَيْهِم مُّقْتَدِرُونَ ٤٢

44. されば、汝は、啓示されたるものを護持せよ。汝正しき道を辿るが故に。

فَاسْتَمْسِكْ بِالَّذِي أُوحِيَ إِلَيْكَ ۖ إِنَّكَ عَلَىٰ صِرَاطٍ مُّسْتَقِيمٍ ٤٣

45. げにクルアーンは汝とその民のために気品のよりどころなり。（注14）而(しか)して、お前たちは、之(これ)に関して尋ねられん。

وَإِنَّهُ لَذِكْرٌ لَّكَ وَلِقَوْمِكَ ۖ وَسَوْفَ تُسْأَلُونَ ٤٤

注11　財産と「地位」の差異が無くなっていれば、人は全て似通い、人間社会は機能しなくなっていたであろう。神は、金製の扉と階段の付いた銀製の家を不信心者に与えた事であろう。これ等の物は神の目からすれば何の価値もないものであるから。

注12　人は、自らの悪行の結果を突き付けられる時、旧友を避け、知らない振りをする。

注13　不信心者が故意に目と耳を塞ぎ神の言葉を拒む時、彼等の罪は深まり、遂に彼等は完全に滅びてしまうのである。

注14　ズィクル（「気品」）は、高位を意味する語であり、クルアーンを通して、モハッマド預言者とその弟子達が高位と名声を手にするであろう、と当節は述べている。

46．汝以前にわれらが遣わした使徒たちに尋ねよ、「われらは慈悲深き神以外に、崇めるべき他の神々を定めたるか？」と。

وَسْـَٔلْ مَنْ أَرْسَلْنَا مِن قَبْلِكَ مِن رُّسُلِنَآ أَجَعَلْنَا مِن دُونِ ٱلرَّحْمَٰنِ ءَالِهَةً يُعْبَدُونَ ٤٦

第五項

47．われらはかつて、モーゼを、ファラオとその族長たちのところへわれらの神兆を携えて遣わしたり。而して、モーゼは云えり、「我は正しく万物の主の使徒なり」と。

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا مُوسَىٰ بِـَٔايَٰتِنَآ إِلَىٰ فِرْعَوْنَ وَمَلَإِيْهِۦ فَقَالَ إِنِّى رَسُولُ رَبِّ ٱلْعَٰلَمِينَ ٤٧

48．モーゼがわれらの奇跡を携えて彼等のところへ来たるも、見よ、彼等は之を嘲笑せり。

فَلَمَّا جَآءَهُم بِـَٔايَٰتِنَآ إِذَا هُم مِّنْهَا يَضْحَكُونَ ٤٨

49．さればわれらが示せる奇跡は、それに先立つ奇跡よりはるかに見事なりき。而して、われらは、彼等をわれらに頼らしめんがために、刑罰を以て彼等を懲らしめたり。

وَمَا نُرِيهِم مِّنْ ءَايَةٍ إِلَّا هِىَ أَكْبَرُ مِنْ أُخْتِهَا وَأَخَذْنَٰهُم بِٱلْعَذَابِ لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُونَ ٤٩

50．すると、彼等は云えり、「汝妖術使いよ、主が汝と結びし約束に従って、我等のために主に祈願せよ。もし主が我等から禍をそらし得るなら、その時は、我等は必ず導きに従わん」と。

وَقَالُوا۟ يَٰٓأَيُّهَ ٱلسَّاحِرُ ٱدْعُ لَنَا رَبَّكَ بِمَا عَهِدَ عِندَكَ إِنَّنَا لَمُهْتَدُونَ ٥٠

51．然しながら、われらが彼等から罰を取り除くや、見よ、彼等は忽ちその契約を破る。

فَلَمَّا كَشَفْنَا عَنْهُمُ ٱلْعَذَابَ إِذَا هُمْ يَنكُثُونَ ٥١

52．而して、ファラオはその民に布告して、云えり、「我が民よ、エジプトの国土並びに余が脚下を流れるこれ等の河川は、挙げて余の有に非ざるか？　お前たちわからざるか？

وَنَادَىٰ فِرْعَوْنُ فِى قَوْمِهِۦ قَالَ يَٰقَوْمِ أَلَيْسَ لِى مُلْكُ مِصْرَ وَهَٰذِهِ ٱلْأَنْهَٰرُ تَجْرِى مِن تَحْتِىٓ أَفَلَا تُبْصِرُونَ ٥٢

53．余は、この卑しく、しかも何を云っているのか定かにわからない者よりはるかに優れり。

أَمْ أَنَا۠ خَيْرٌ مِّنْ هَٰذَا ٱلَّذِى هُوَ مَهِينٌ وَلَا يَكَادُ يُبِينُ ٥٣

54．黄金の腕環が何故に彼に授けられざりしか、また一群の天使たちが彼に付き添って同行せざりしか？」と。

فَلَوْلَآ أُلْقِىَ عَلَيْهِ أَسْوِرَةٌ مِّن ذَهَبٍ أَوْ جَآءَ مَعَهُ ٱلْمَلَٰٓئِكَةُ مُقْتَرِنِينَ ٥٤

55．かくの如く、ファラオは己が民を軽はずみに鼓舞したれば、民はファラオに従いぬ。げに彼等は邪悪な人々なりき。

فَٱسْتَخَفَّ قَوْمَهُۥ فَأَطَاعُوهُ إِنَّهُمْ كَانُوا۟ قَوْمًا فَٰسِقِينَ ٥٥

56．かくの如く、彼等がわれらを怒らせたれば、われらは彼等に報復し、彼等のすべてを溺死せしめたり。

فَلَمَّآ ءَاسَفُونَا انتَقَمْنَا مِنْهُمْ فَأَغْرَقْنَٰهُمْ أَجْمَعِينَ ٥٥

57．かくてわれらは、彼等を後世の人々への見せしめとなせり。

فَجَعَلْنَٰهُمْ سَلَفًا وَمَثَلًا لِّلْءَاخِرِينَ ٥٦

第六項

58．マリアの息子が一例として挙げられると、見よ、汝の民は声を上げて笑いたり。

وَلَمَّا ضُرِبَ ابْنُ مَرْيَمَ مَثَلًا إِذَا قَوْمُكَ مِنْهُ يَصِدُّونَ ٥٧

59．而して、彼等は云えり、「我等の神々が優るか、それともイエスが優るか？」と。彼等が汝に之を云うは、ただ論争のためのみ。然り、彼等は論争好きな徒輩なり。

وَقَالُوٓا ءَأَٰلِهَتُنَا خَيْرٌ أَمْ هُوَ مَا ضَرَبُوهُ لَكَ إِلَّا جَدَلًا بَلْ هُمْ قَوْمٌ خَصِمُونَ ٥٨

60．イエスは、われらが恩寵を授けたわれらの僕にすぎず。而して、われらは、イエスをイスラエルの子孫への鑑となせり。（注15）

إِنْ هُوَ إِلَّا عَبْدٌ أَنْعَمْنَا عَلَيْهِ وَجَعَلْنَٰهُ مَثَلًا لِّبَنِىٓ إِسْرَٰٓءِيلَ ٥٩

61．もしわれらその気になれば、地上に於て後継者となるべき天使等をお前たちの間に生じさせることも可なり。（注16）

وَلَوْ نَشَآءُ لَجَعَلْنَا مِنكُم مَّلَٰٓئِكَةً فِى الْأَرْضِ يَخْلُفُونَ ٦٠

62．げにイエスは、その時機の前兆なり。されば、之について疑心を抱かず、（注17）われに従え。これこそ正しい道なるぞ。

وَإِنَّهُۥ لَعِلْمٌ لِّلسَّاعَةِ فَلَا تَمْتَرُنَّ بِهَا وَاتَّبِعُونِ هَٰذَا صِرَٰطٌ مُّسْتَقِيمٌ ٦١

63．而して、お前たち、悪魔に迷わしめられるなかれ。げに悪魔は、お前たちの公然の敵なり。

وَلَا يَصُدَّنَّكُمُ الشَّيْطَٰنُ إِنَّهُۥ لَكُمْ عَدُوٌّ مُّبِينٌ ٦٢

注15　メシアの到来とは、ユダヤ民族が屈辱を受け、永遠に預言者としての地位を奪われる事を示すものであった。「鑑」は他に匹敵する物を意味し（6：39）、当節は本文の意味の他、次の事を示しているともいえる。イエスの様な人物が、彼等を蘇らせ、失われた魂の恵みを戻す為に彼等の中から起こされるが、彼等はこの吉報を喜ぶどころか、怒号を上げるのだ。当節は、この様にイエスの再来を語ったものとも言える。

注16　天使は人間の手本とはなり得なかったので、神は常に、神の御意志を人間に伝え人間の模範となる事を、人間自身に託された。

注17　「その時機」とはモーゼの時代の終末を表す。文中「之」というのは、イエスあるいはクルアーンを指す。当節は、イエスの後イスラエルの民は預言者の職を与えられないと述べている。又、クルアーンの時がモーゼの時に取って変わる事を示しているとも言える。

64．イエスはさまざまなる明証をもたらして、云えり、「我はお前たちに知恵をもたらしぬ。而（しか）して、お前たちが意見を異にするもののいくつかを解明せん。されば、アッラーを畏れ、我に従え。

وَلَمَّا جَآءَ عِيسٰى بِالْبَيِّنٰتِ قَالَ قَدْ جِئْتُكُمْ بِالْحِكْمَةِ وَلِاُبَيِّنَ لَكُمْ بَعْضَ الَّذِىْ تَخْتَلِفُوْنَ فِيْهِ ۚ فَاتَّقُوا اللّٰهَ وَاَطِيْعُوْنِ ﴿٦٤﴾

65．げにアッラーこそは我が主にして、お前たちの主なり。されば、彼を崇拝せよ。これこそ正しき道なるぞ」と。

اِنَّ اللّٰهَ هُوَ رَبِّىْ وَرَبُّكُمْ فَاعْبُدُوْهُ ؕ هٰذَا صِرَاطٌ مُّسْتَقِيْمٌ ﴿٦٥﴾

66．然（しか）るに、諸派ありて、意見を異にし、相争いぬ。哀れなるかな不義なす者ども、悲しむべき日のその刑罰ゆえに。

فَاخْتَلَفَ الْاَحْزَابُ مِنْۢ بَيْنِهِمْ ۚ فَوَيْلٌ لِّلَّذِيْنَ ظَلَمُوْا مِنْ عَذَابِ يَوْمٍ اَلِيْمٍ ﴿٦٦﴾

67．彼等は、知らぬ間に突如襲いかかる最後の審判、それ以外待つべきものなし。

هَلْ يَنْظُرُوْنَ اِلَّا السَّاعَةَ اَنْ تَاْتِيَهُمْ بَغْتَةً وَّهُمْ لَا يَشْعُرُوْنَ ﴿٦٧﴾

68．その日には、義（ただ）しい人々を除いて、友といえども互に敵とならん。（注 18）

اَلْاَخِلَّآءُ يَوْمَئِذٍۢ بَعْضُهُمْ لِبَعْضٍ عَدُوٌّ اِلَّا الْمُتَّقِيْنَ ﴿٦٨﴾ ع

第七項

69．「わが僕（しもべ）たちよ、この日お前たちは、何も恐れることなし、またお前たちを悲しい目に遭わせはせぬ。

يٰعِبَادِ لَا خَوْفٌ عَلَيْكُمُ الْيَوْمَ وَلَآ اَنْتُمْ تَحْزَنُوْنَ ۚ ﴿٦٩﴾

70．われらの神兆（しるし）を信じ、服従したお前たち、

اَلَّذِيْنَ اٰمَنُوْا بِاٰيٰتِنَا وَكَانُوْا مُسْلِمِيْنَ ۚ ﴿٧٠﴾

71．いざ楽園に入れ、お前たち並びにその伴侶（はんりょ）も、欣然（きんぜん）として」

اُدْخُلُوا الْجَنَّةَ اَنْتُمْ وَاَزْوَاجُكُمْ تُحْبَرُوْنَ ﴿٧١﴾

72．つぎつぎと黄金の鉢や杯が彼等に廻され、しかもそこには、欲しいものや目を楽しませるものがすべてあるべし。お前たち、そこにて永久（とこしえ）に住まん。

يُطَافُ عَلَيْهِمْ بِصِحَافٍ مِّنْ ذَهَبٍ وَّاَكْوَابٍ ۚ وَفِيْهَا مَا تَشْتَهِيْهِ الْاَنْفُسُ وَتَلَذُّ الْاَعْيُنُ ۚ وَاَنْتُمْ فِيْهَا خٰلِدُوْنَ ۚ ﴿٧٢﴾

73．「こは、お前たちがなせることのために、お前たちに継がしめた楽園なり。

وَتِلْكَ الْجَنَّةُ الَّتِىْٓ اُوْرِثْتُمُوْهَا بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ﴿٧٣﴾

注 18　苦境において友情は忘れ去られる。友は互いを見放し、敵に回る事さえある。クルアーンは他の箇所で、罪人がその悪業の結末を突き付けられた時の状況を鮮やかに描いている。（70：11―15、80：35―38）

74. そこには、お前たちのために果物が豊富にあるなれば、食べるがよい」

لَكُمْ فِيهَا فَاكِهَةٌ كَثِيرَةٌ مِّنْهَا تَأْكُلُونَ ٧٤

75. 罪を犯せし者は、地獄の責苦が永久(とわ)の住居(すみか)なり。

إِنَّ الْمُجْرِمِينَ فِي عَذَابِ جَهَنَّمَ خَالِدُونَ ٧٥

76. 刑罰は彼等のために軽減されず、されば彼等はその中で絶望せん。

لَا يُفَتَّرُ عَنْهُمْ وَهُمْ فِيهِ مُبْلِسُونَ ٧٦

77. われらが彼等に不当な仕打ちをしたに非ず、彼等自身が不義者なり。

وَمَا ظَلَمْنَاهُمْ وَلَٰكِن كَانُوا هُمُ الظَّالِمِينَ ٧٧

78. 彼等は叫ばん、「看守さま！　汝の主にお願いして、我等の命を終らしめ給え」と。看守は云わん、「お前たちここに留まらねばならぬ」と。

وَنَادَوْا يَا مَالِكُ لِيَقْضِ عَلَيْنَا رَبُّكَ ۖ قَالَ إِنَّكُم مَّاكِثُونَ ٧٨

79. 神は云わん、「げにわれらはお前たちに真理をもたらせり。然(しか)るに、お前たちの大半は真理を忌避(きひ)せり」と。

لَقَدْ جِئْنَاكُم بِالْحَقِّ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَكُمْ لِلْحَقِّ كَارِهُونَ ٧٩

80. 彼等はまたも悪だくみをし始めたか？　然(しか)らば、われらもまた彼等の滅亡を決定せん。

أَمْ أَبْرَمُوا أَمْرًا فَإِنَّا مُبْرِمُونَ ٨٠

81. 彼等は、われらが彼等の秘密や密談を聴かず、と考えるか？　然(しか)らず、われらの使者たちは彼等のそばにありて、一切を記録す。

أَمْ يَحْسَبُونَ أَنَّا لَا نَسْمَعُ سِرَّهُمْ وَنَجْوَاهُم ۚ بَلَىٰ وَرُسُلُنَا لَدَيْهِمْ يَكْتُبُونَ ٨١

82. 云え、「もし慈悲深い神に御子(みこ)ありなば、我は最初の崇拝者なり」と。（注 19）

قُلْ إِن كَانَ لِلرَّحْمَٰنِ وَلَدٌ فَأَنَا أَوَّلُ الْعَابِدِينَ ٨٢

83. 聖なるかなアッラー、天地(あめつち)の主、玉座の主、彼等が彼に帰するものより超絶し給う。

سُبْحَانَ رَبِّ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ رَبِّ الْعَرْشِ عَمَّا يَصِفُونَ ٨٣

84. されば、約束されたその日に彼等が直面するまで、彼等を無益な談論と喜戯にふけるにまかせよ。

فَذَرْهُمْ يَخُوضُوا وَيَلْعَبُوا حَتَّىٰ يُلَاقُوا يَوْمَهُمُ الَّذِي يُوعَدُونَ ٨٤

注 19　当節は次の様に解釈される。（1）もし寛大なる神が御子を持たれたのなら、私が初めに彼（神の子）を崇めたであろう。私は神の最も忠実なる下僕であり、彼（神の子）に対し義務を怠る事はない。（2）もし寛大なる神が御子をお持ちになれたとするなら、私こそ、その地位にふさわしい。私は誰よりも神を崇め、神にお仕えして来たのであるから。（3）寛大なる神は御子をお持ちでない。神の崇拝者は証人であるから、私が初めにこの事実を証明する。（4）寛大する神は御子をお持ちではなく、神に御子がいらっしゃるという主張を私が初めて否定する。

85. 彼こそは天にましします神にして、また地にましします神なり。彼は賢哲にして、すべてを知悉し給う。

وَهُوَ الَّذِي فِي السَّمَاءِ إِلَٰهٌ وَفِي الْأَرْضِ إِلَٰهٌ ۚ وَهُوَ الْحَكِيمُ الْعَلِيمُ ٨٥

86. 天地の大権並びにその間の万物を悉く統べ給う御方を祝福せよ。最後の審判の時の知識は彼の御許にあり、お前たちは必ず彼の御許へ連れ戻されん。

وَتَبَارَكَ الَّذِي لَهُ مُلْكُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا وَعِندَهُ عِلْمُ السَّاعَةِ وَإِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ٨٦

87. アッラー以外に彼等が祈るものは、執り成しする力なし。但し真理の証人となる者（注 20）は除く。彼等はこの事をよく承知す。

وَلَا يَمْلِكُ الَّذِينَ يَدْعُونَ مِن دُونِهِ الشَّفَاعَةَ إِلَّا مَن شَهِدَ بِالْحَقِّ وَهُمْ يَعْلَمُونَ ٨٧

88. もし汝彼等に「お前たちを創れる者は誰か？」と問わば、彼等は必ず云わん、「アッラーなり」と。然らば、彼等が顔をそむけてばかりいるは何故ぞ？

وَلَئِن سَأَلْتَهُم مَّنْ خَلَقَهُمْ لَيَقُولُنَّ اللَّهُ ۖ فَأَنَّىٰ يُؤْفَكُونَ ٨٨

89. われらは預言者が再三再四「主よ、これ等は信ぜざる民なり」と云うを見る。（注 21）

وَقِيلِهِ يَا رَبِّ إِنَّ هَٰؤُلَاءِ قَوْمٌ لَّا يُؤْمِنُونَ ٨٩

90. されば、汝は彼等をよけて、「平安あれ」と挨拶せよ。彼等もやがて己が愚を思い知らん。（注 22）

فَاصْفَحْ عَنْهُمْ وَقُلْ سَلَامٌ ۚ فَسَوْفَ يَعْلَمُونَ ٩٠

注 20　モハッマド預言者。

注 21　モハッマド預言者が一族の魂の平安を案じている事は、神の御言葉が何よりの証しとなった。モハッマド預言者は一族の拒絶を悲しむ余り、危く命を失う所であった。（18：7）

注 22　我々は今は迫害されているが、間もなく敵は敗北し、イスラム教がアラビア全土に広まり平和がもたらされるのだ、とモハッマド預言者は励まされている。その時が来たれば、彼は敵を許すであろう。

سُورَةُ الدُّخَانِ مَكِّيَّةٌ (٤٤)

アル・ドゥハーン

（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ①

2．ハー・ミーム。(注１)

حمٓ ②

3．この明快な経典にかけて。

وَالْكِتَابِ الْمُبِينِ ③

4．げにわれらは祝福された夜に之を啓示せり。（注２）げにわれらは邪悪に対して絶えず警告せり。

إِنَّا أَنزَلْنَاهُ فِي لَيْلَةٍ مُّبَارَكَةٍ إِنَّا كُنَّا مُنذِرِينَ ④

5．その夜は、すべての物事が知恵もて決定される、(注３)

فِيهَا يُفْرَقُ كُلُّ أَمْرٍ حَكِيمٍ ⑤

6．われらより出づる命令によって。げにわれらは絶えず使者を遣わす、

أَمْرًا مِّنْ عِندِنَا إِنَّا كُنَّا مُرْسِلِينَ ⑥

7．汝の主よりの慈悲として。げに彼はすべてを聞こし召し、且つすべてを知り、

رَحْمَةً مِّن رَّبِّكَ إِنَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ⑦

8．天地とその間の万物の主にまします、もしお前たち信仰心を持ちさえすれば。

رَبِّ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا إِن كُنتُم مُّوقِنِينَ ⑧

9．彼の外に神なし。彼は生殺与奪の権を司り給う。彼はお前たちの主にして、且つお前たちの父祖の主なり。

لَا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ يُحْيِي وَيُمِيتُ رَبُّكُمْ وَرَبُّ آبَائِكُمُ الْأَوَّلِينَ ⑨

10．然るに、彼等は之を疑って嬉戯す。

بَلْ هُمْ فِي شَكٍّ يَلْعَبُونَ ⑩

11．されば、大空が顕然たる煙を生ぜんその日を見守れ。

فَارْتَقِبْ يَوْمَ تَأْتِي السَّمَاءُ بِدُخَانٍ مُّبِينٍ ⑪

注１　賞讃すべき栄誉の主

注２　クルアーンの他の箇所で、それは「運命の夜」と呼ばれている（97：2）。モハッマド預言者の確かな伝承によれては、「運命の夜」は通例ラマダーンの最後の十夜に当たる。クルアーンはラマダーンの第二十四夜に、その存在を現し始めた。

注３　運命の夜、つまり偉大な神の使者到来の時は人類の未来が定まる新たな時代、新たな秩序を予告する。クルアーンが啓示された時とは、その後の人類の運命の基礎が築かれた時であり、人類にとり最高の運命の夜となった。

12. そは人々を覆い包まん。こは痛烈なる天罰なり。

يَغْشَى النَّاسَ هَذَا عَذَابٌ أَلِيمٌ ١٢

13. その時、人々は叫んで云わん、「我等の主よ、この責苦を我等から取り除き給え。げに我等は信者なり」と。

رَبَّنَا اكْشِفْ عَنَّا الْعَذَابَ إِنَّا مُؤْمِنُونَ ١٣

14. かつて使徒が彼等に来たりて、もの事を明りように説明した時、如何にその警告は彼等を益したりや？

أَنَّى لَهُمُ الذِّكْرَى وَقَدْ جَاءَهُمْ رَسُولٌ مُبِينٌ ١٤

15. 彼等はすなわち、使徒から顔をそむけて云えり、「彼奴(きゃつ)は狂人なり、憑かれたる者なり」と。

ثُمَّ تَوَلَّوْا عَنْهُ وَقَالُوا مُعَلَّمٌ مَجْنُونٌ ١٥

16. われらが懲罰を暫しでも取り除かば、お前たちは必ず不信に逆戻りせん。(注４)

إِنَّا كَاشِفُوا الْعَذَابِ قَلِيلًا إِنَّكُمْ عَائِدُونَ ١٦

17. われらが猛攻撃でお前たちを急襲する日、(注５) われらは間違いなく厳正に報復せん。

يَوْمَ نَبْطِشُ الْبَطْشَةَ الْكُبْرَى إِنَّا مُنْتَقِمُونَ ١٧

18. われらは彼等以前に、ファラオの民を試みたり。その時、一人の立派な使徒が彼等に来たりて、

وَلَقَدْ فَتَنَّا قَبْلَهُمْ قَوْمَ فِرْعَوْنَ وَجَاءَهُمْ رَسُولٌ كَرِيمٌ ١٨

19. 云えり、「アッラーの僕(しもべ)等を我に引き渡せ。げに我はお前たちへの忠実なる使者なり。

أَنْ أَدُّوا إِلَيَّ عِبَادَ اللَّهِ إِنِّي لَكُمْ رَسُولٌ أَمِينٌ ١٩

20. アッラーに逆って傲慢なるなかれ。げに我は明白なる権能を授かりてお前たちに来たれり。

وَأَنْ لَا تَعْلُوا عَلَى اللَّهِ إِنِّي آتِيكُمْ بِسُلْطَانٍ مُبِينٍ ٢٠

21. お前たちが我を石もて打たざるよう、我は、我が主にしてお前たちの主に、加護を請い願う。

وَإِنِّي عُذْتُ بِرَبِّي وَرَبِّكُمْ أَنْ تَرْجُمُونِ ٢١

22. お前たちもし我を信ぜずば、我に近づくな」と。

وَإِنْ لَمْ تُؤْمِنُوا لِي فَاعْتَزِلُونِ ٢٢

23. かくて、モーゼは主に祈り、「この者どもは実に罪深い民なり」と云えり。

فَدَعَا رَبَّهُ أَنَّ هَؤُلَاءِ قَوْمٌ مُجْرِمُونَ ٢٣

注４　信頼できる伝承によれば、モハッマド預言者が祈り、この飢饉は終った。しかしクライシュはそれにより利を得た訳ではなく、モハッマド預言者に刃向い続けた。

注５　「猛攻撃」とは、バドルの戦いにおけるクライシュの敗北又はメッカの陥落を指すのであろう。

24．アッラーは云えり、「夜陰に乗じてわが僕等を連れ去れ。なんとなれば、お前たちは追跡せらるべし。

فَأَسْرِ بِعِبَادِي لَيْلًا إِنَّكُم مُّتَّبَعُونَ ﴿٢٤﴾

25．汝、割れた海をそのままにうち捨て、行け。げに彼等は溺死すべき軍勢なり。（注６）

وَاتْرُكِ الْبَحْرَ رَهْوًا إِنَّهُمْ جُندٌ مُّغْرَقُونَ ﴿٢٥﴾

26．如何に多くの果樹園や泉を後に遺し彼等逝きたることか！

كَمْ تَرَكُوا مِن جَنَّٰتٍ وَّعُيُونٍ ﴿٢٦﴾

27．沢山の畑や立派な住居を！

وَّزُرُوعٍ وَّمَقَامٍ كَرِيمٍ ﴿٢٧﴾

28．その中で驕り喜べる数々の安楽をも！

وَّنَعْمَةٍ كَانُوا فِيهَا فَٰكِهِينَ ﴿٢٨﴾

29．そはかくの如し。而してわれらは、他の民をしてこれ等を継がしめたり。

كَذَٰلِكَ وَأَوْرَثْنَٰهَا قَوْمًا ءَاخَرِينَ ﴿٢٩﴾

30．天も地も彼等のために嘆き悲しまず、のみならず彼等は猶予も与えられざりき。（注７）

فَمَا بَكَتْ عَلَيْهِمُ السَّمَاءُ وَالْأَرْضُ وَمَا كَانُوا مُنظَرِينَ ﴿٣٠﴾

第二項

31．われらはイスラエルの子らを屈辱の苦痛より救えり、

وَلَقَدْ نَجَّيْنَا بَنِي إِسْرَٰٓءِيلَ مِنَ الْعَذَابِ الْمُهِينِ ﴿٣١﴾

32．ファラオによって課せられたる。彼ファラオは、放縦な者の中でもとびぬけて傲慢なりき。

مِن فِرْعَوْنَ إِنَّهُ كَانَ عَالِيًا مِّنَ الْمُسْرِفِينَ ﴿٣٢﴾

33．われらは承知の上で、イスラエルの子らを当時の諸民族の上に選びたり。（注８）

وَلَقَدِ اخْتَرْنَٰهُمْ عَلَىٰ عِلْمٍ عَلَى الْعَٰلَمِينَ ﴿٣٣﴾

34．而して、彼等に、その中に明白なる試練が含む数々の奇跡を与えたり。

وَءَاتَيْنَٰهُم مِّنَ الْءَايَٰتِ مَا فِيهِ بَلَٰٓؤٌا مُّبِينٌ ﴿٣٤﴾

35．さて、この者どもは云う、

إِنَّ هَٰٓؤُلَآءِ لَيَقُولُونَ ﴿٣٥﴾

36．「我等にはただ一度の死あるのみ。再び生返る筈なし。

إِنْ هِيَ إِلَّا مَوْتَتُنَا الْأُولَىٰ وَمَا نَحْنُ بِمُنشَرِينَ ﴿٣٦﴾

注６　モーゼとイスラエルの民が紅海の北端に着いた時、潮が引き始めた。水が後退して、徐々に砂地が現れ、海の中に窪地ができた。その時イスラエル人は渡った。20：78も参照の事。

注７　彼等は、涙を流される事も敬意を表される事もそして歌を歌われる事もなく、屈辱の中で滅びた。傲慢にも自らを神と呼んだ不幸な王は、「イスラエルの子孫が信じる神以外にこの世に神は無いと私は信じる」この様な注目すべき言葉を残し、海の中へ入って行った（10：91）。

注８　神はその御計画において、神の使命を果たすには当時のイスラエル人が最もふさわしいと御気付きになり、彼等を選ばれた。

37．お前たちの言葉が事実なら、我等の父祖を死より連れ戻せ」と。

فَأْتُوا بِآبَائِنَا إِن كُنتُمْ صَادِقِينَ ٣٧

38．彼等はトッバアの民や彼等以前の者どもより優れる者たちか？　彼等は罪深き者ども故に、われらは之(これ)を滅ぼせり。

أَهُمْ خَيْرٌ أَمْ قَوْمُ تُبَّعٍ وَالَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ أَهْلَكْنَاهُمْ إِنَّهُمْ كَانُوا مُجْرِمِينَ ٣٨

39．われらは天地(あめつち)及びすべてその間におけるものを戯(たわむれ)に創造したるに非ず。（注９）

وَمَا خَلَقْنَا السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا لَاعِبِينَ ٣٩

40．われらは之(これ)を永遠の真理のために創れども、彼等の大半は之(これ)を理解し得ざるなり。

مَا خَلَقْنَاهُمَا إِلَّا بِالْحَقِّ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ٤٠

41．げに判決の日こそ、彼等のすべてに定められたる期限なり。（注10）

إِنَّ يَوْمَ الْفَصْلِ مِيقَاتُهُمْ أَجْمَعِينَ ٤١

42．その日、友はその友のために少しも役立たず、また彼等は誰からも助けられざるべし、

يَوْمَ لَا يُغْنِي مَوْلًى عَن مَّوْلًى شَيْئًا وَلَا هُمْ يُنصَرُونَ ٤٢

43．助けらるるはアッラーが慈恵(めぐみ)を垂れ給わん人々のみ。げにアッラーは偉力者、慈悲者にまします。

إِلَّا مَن رَّحِمَ اللَّهُ ۚ إِنَّهُ هُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ٤٣

第三項

44．げにザックームの木こそは、

إِنَّ شَجَرَتَ الزَّقُّومِ ٤٤

45．罪深い者の食物。

طَعَامُ الْأَثِيمِ ٤٥

46．そは溶銅の如く腹の中で沸騰し、

كَالْمُهْلِ يَغْلِي فِي الْبُطُونِ ٤٦

47．恰も熱湯の煮えたぎるが如し。

كَغَلْيِ الْحَمِيمِ ٤٧

48．われらは天使等に命ぜん、「彼を捕え、燃えさかる業火(ごうか)の真只中に曳きずり込め。

خُذُوهُ فَاعْتِلُوهُ إِلَىٰ سَوَاءِ الْجَحِيمِ ٤٨

49．而(しか)して、熱湯の責苦を彼の頭に浴せよ。

ثُمَّ صُبُّوا فَوْقَ رَأْسِهِ مِنْ عَذَابِ الْحَمِيمِ ٤٩

50．とくと味わえ！　汝は偉力者、高貴な者と見なされたりき。（注11）

ذُقْ إِنَّكَ أَنتَ الْعَزِيزُ الْكَرِيمُ ٥٠

注９　人生には妥協のない目的と大いなる使命がある。人間の優秀な能力と天性の才能は、人生が見せかけではなく厳粛なものである事を示している。天地創造が私々の注意を強く引きつけるのは、この偉大な原理の由である。

注10　未知の秘密が全て明るみに出され、人の行為に最終的判定の下される最後の裁きの日以外にも、この世において全ての預言者の時代には、真実が勝利を治め、偽りが滅びる裁決の日がある。

注11　この言葉は反語法を用いて述べられている。

51．これこそお前たちが疑いたりしものなり」と。

إِنَّ هَٰذَا مَا كُنتُم بِهِۦ تَمۡتَرُونَ ﴿٥١﴾

52．然るに義しい人は、安全な場所に侍らん、

إِنَّ ٱلۡمُتَّقِينَ فِي مَقَامٍ أَمِينٖ ﴿٥٢﴾

53．花園と噴泉の間で、

فِي جَنَّٰتٖ وَعُيُونٖ ﴿٥٣﴾

54．絹や錦をまとい、互に相向い合って。

يَلۡبَسُونَ مِن سُندُسٖ وَإِسۡتَبۡرَقٖ مُّتَقَٰبِلِينَ ﴿٥٤﴾

55．そはかくの如し。われらは彼等につぶらな瞳の麗しき處女等を妻せん。

كَذَٰلِكَ وَزَوَّجۡنَٰهُم بِحُورٍ عِينٖ ﴿٥٥﴾

56．彼等はそこで、如何なる種類の果物でも安んじて意のままに得べし。

يَدۡعُونَ فِيهَا بِكُلِّ فَٰكِهَةٍ ءَامِنِينَ ﴿٥٦﴾

57．彼等はそこで、最初の死以外は、再び死を味わうことなかるべし。（注 12）神は、燃えさかる業火より彼等を救わん、

لَا يَذُوقُونَ فِيهَا ٱلۡمَوۡتَ إِلَّا ٱلۡمَوۡتَةَ ٱلۡأُولَىٰۖ وَوَقَىٰهُمۡ عَذَابَ ٱلۡجَحِيمِ ﴿٥٧﴾

58．こは汝の主よりの恩恵なり。（注 13）至上の歓喜の成就なり。

فَضۡلٗا مِّن رَّبِّكَۚ ذَٰلِكَ هُوَ ٱلۡفَوۡزُ ٱلۡعَظِيمُ ﴿٥٨﴾

59．われらはクルアーンを汝の言葉でわかりやすく制定せり、彼等をして留意せしめんがために。

فَإِنَّمَا يَسَّرۡنَٰهُ بِلِسَانِكَ لَعَلَّهُمۡ يَتَذَكَّرُونَ ﴿٥٩﴾

60．されば汝、しばらく様子を見よ。彼等も様子を見つつあり。

فَٱرۡتَقِبۡ إِنَّهُم مُّرۡتَقِبُونَ ﴿٦٠﴾

注 12　来世における生は永遠で、絶えず前進し、無為なものではない事を当節は明示している。

注 13　救いは神の恵みである。

سُوْرَةُ الْجَاثِيَةِ مَكِّيَّةٌ

アル・ジャーシャ
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．ハー・ミーム（注1）

حٰمٓ ②

3．この経典の啓示は、偉大にして賢哲なるアッラーより降る。

تَنْزِيْلُ الْكِتٰبِ مِنَ اللّٰهِ الْعَزِيْزِ الْحَكِيْمِ ③

4．げに天地には、信ずる人々への数々の神兆あり。

اِنَّ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ لَاٰيٰتٍ لِّلْمُؤْمِنِيْنَ ④

5．また、お前たち自身の創造や彼が地上にまき散らした一切の生物の中に、信心堅固な人々への数々の神兆あり。

وَفِيْ خَلْقِكُمْ وَمَا يَبُثُّ مِنْ دَآبَّةٍ اٰيٰتٌ لِّقَوْمٍ يُّوْقِنُوْنَ ⑤

6．また、夜と昼の交替にも、アッラーが天から下し給う糧によって死せる大地を甦らせることにも、更に風向きの変化にも、思慮ある人々への数々の神兆あり。（注2）

وَاخْتِلَافِ الَّيْلِ وَالنَّهَارِ وَمَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ مِنَ السَّمَآءِ مِنْ رِّزْقٍ فَاَحْيَا بِهِ الْاَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا وَتَصْرِيْفِ الرِّيٰحِ اٰيٰتٌ لِّقَوْمٍ يَّعْقِلُوْنَ ⑥

7．これ等は、われらが真理によって汝に読誦するアッラーの神兆の数々なり。然るに、アッラーの言葉とその神兆をしりぞけて、彼等は如何なる言葉を信ぜんとするか？

تِلْكَ اٰيٰتُ اللّٰهِ نَتْلُوْهَا عَلَيْكَ بِالْحَقِّ فَبِاَيِّ حَدِيْثٍ بَعْدَ اللّٰهِ وَاٰيٰتِهٖ يُؤْمِنُوْنَ ⑦

8．罪深き嘘つきどもに禍あれ、

وَيْلٌ لِّكُلِّ اَفَّاكٍ اَثِيْمٍ ⑧

9．アッラーの神兆を誦んで聞かせても、恰も聞かざるが如く依然として傲慢にその不信心を固執する徒輩よ。されば、そのような者には痛刑を告知せよ。

يَّسْمَعُ اٰيٰتِ اللّٰهِ تُتْلٰى عَلَيْهِ ثُمَّ يُصِرُّ مُسْتَكْبِرًا كَاَنْ لَّمْ يَسْمَعْهَا فَبَشِّرْهُ بِعَذَابٍ اَلِيْمٍ ⑨

10．而して、そのような者は、われらの神兆のいくつかを知ると、忽ち之を嗤いものとなす。かかる者には恥ずべき懲罰あり。

وَاِذَا عَلِمَ مِنْ اٰيٰتِنَا شَيْئًا اتَّخَذَهَا هُزُوًا اُولٰٓئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ مُّهِيْنٌ ⑩

注1　賞讃すべき栄誉の主。
注2　闇の後、光が訪れる様に、精神の闇が地上を覆う時、神は預言者又は神の使者という新たな光をお作りになり、彼等を通して御自身を表される。そして雄の木から雌の木へ風が花粉を運び交配させるのと同様、神の使者から出た精神的に高い思想は、信者の心に根付き、彼等に精神上の変革をもたらす。

11．彼等の行く手には、地獄あるのみ。而して、彼等が稼いだものは、彼等に少しも役立たず、アッラー以外に彼等が守護者と信じたものもまた然り。而して、彼等は恐ろしい懲罰をうけん。

من ورائهم جهنم ولا يغني عنهم ما كسبوا شيئا ولا ما اتخذوا من دون الله أولياء ولهم عذاب عظيم ﴿١١﴾

12．こは真の嚮導なり。主の神兆を信ぜざる者には、痛刑の責め苦あり。

هذا هدى والذين كفروا بآيات ربهم لهم عذاب من رجز أليم ﴿١٢﴾

第二項

13．海をお前たちに従わしめたるはアッラーなり。そはアッラーの命令によって、船舶を海上に走らしめ、お前たちにアッラーの恩恵を求めしめ、以てお前たちを感謝せしめんがためなり。

الله الذي سخر لكم البحر لتجري الفلك فيه بأمره ولتبتغوا من فضله ولعلكم تشكرون ﴿١٣﴾

14．彼はまた、天にあるもの、地にあるもの、そのすべてをお前たちに従属させり。（注3）こはすべてアッラーより出づ。げにこの中には、熟慮ある人々へのさまざまなる神兆あり。

وسخر لكم ما في السماوات وما في الأرض جميعا منه إن في ذلك لآيات لقوم يتفكرون ﴿١٤﴾

15．信ずる者に、信ずる者を迫害しアッラーの日を恐れぬ者どもを赦せ、と告げよ。こは、アッラーが彼等の稼ぎに応じて返報を行わんがためなり。

قل للذين آمنوا يغفروا للذين لا يرجون أيام الله ليجزي قوما بما كانوا يكسبون ﴿١٥﴾

16．義しいことをする者は己れを利し、悪いことをする者は己れを害す。いずれにしても、お前たちはみな主の御許へ連れ戻されん。

من عمل صالحا فلنفسه ومن أساء فعليها ثم إلى ربكم ترجعون ﴿١٦﴾

17．かつてわれらは、イスラエルの子らに経典と主権と預言の能力を授けたり。またわれらは、さまざまなる佳きもので彼等を養い、当時の諸民族の上に彼等を選びたり。

ولقد آتينا بني إسرائيل الكتاب والحكم والنبوة ورزقناهم من الطيبات وفضلناهم على العالمين ﴿١٧﴾

18．またわれらは、この事に関して明白なる徴を彼等に与えたり。而して、彼等は、真の知識が彼等に至りて後、互に妬み合うまでは、意見を異にすることなかりき。（注4）

وآتيناهم بينات من الأمر فما اختلفوا إلا من بعد ما جاءهم العلم بغيا بينهم إن ربك

注3　全宇宙は人間の為に作られた。これは、人間に成就すべき偉大な使命が課せられている事を示す。

注4　文頭の「この事」とはモハッマド預言者到来の事を指し、当節は次の事を示している。モーゼの律法にモハッマド預言者の到来の預言が数多く記されており、イスラエル人が彼を拒まなかったのは、彼の主張を

げに汝の主は、復活の日において、彼等が論争したことに関して彼等に審判を下すべし。

يَقْضِي بَيْنَهُمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ فِيْمَا كَانُوْا فِيْهِ يَخْتَلِفُوْنَ ﴿۱۸﴾

19．そこでわれらは、宗教の大道を汝に委ねたり。されば汝この道を辿れ。何も知らざる者どもの虚(むな)しい欲望に従うなかれ。（注５）

ثُمَّ جَعَلْنٰكَ عَلٰى شَرِيْعَةٍ مِّنَ الْاَمْرِ فَاتَّبِعْهَا وَلَا تَتَّبِعْ اَهْوَآءَ الَّذِيْنَ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿۱۹﴾

20．げに彼等は、アッラーに逆らっては、汝のために少しも役立たざるべし。不義なす徒輩(やから)は互に他の友なれど、義(ただ)しい者の友はアッラーなり。

اِنَّهُمْ لَنْ يُّغْنُوْا عَنْكَ مِنَ اللّٰهِ شَيْـًٔا ؕ وَاِنَّ الظّٰلِمِيْنَ بَعْضُهُمْ اَوْلِيَآءُ بَعْضٍ ۚ وَاللّٰهُ وَلِيُّ الْمُتَّقِيْنَ ﴿۲۰﴾

21．この経典は、人類への明証であり、固い信仰を持つ人々への嚮導(きょうどう)であり慈悲なり。

هٰذَا بَصَآئِرُ لِلنَّاسِ وَهُدًى وَّرَحْمَةٌ لِّقَوْمٍ يُّوْقِنُوْنَ ﴿۲۱﴾

22．悪事を働く者は、われらが、信じて善行を積(つ)む者と彼等を同等に遇し、その生死を等しからしむると、考えるか？　悪しきかな彼等の判断は。

اَمْ حَسِبَ الَّذِيْنَ اجْتَرَحُوا السَّيِّاٰتِ اَنْ نَّجْعَلَهُمْ كَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ ۙ سَوَآءً مَّحْيَاهُمْ وَمَمَاتُهُمْ ؕ سَآءَ مَا يَحْكُمُوْنَ ﴿۲۲﴾ ع ۱۸

第三項

23．アッラーは真理によって天地(あめつち)を創造せり。各人はその稼ぎに応じて報償され、何人(なんぴと)も決して不当に遇せらるることなし。

وَخَلَقَ اللّٰهُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ بِالْحَقِّ وَلِتُجْزٰى كُلُّ نَفْسٍ بِمَا كَسَبَتْ وَهُمْ لَا يُظْلَمُوْنَ ﴿۲۳﴾

24．汝は、己が空想に従って神を考える者、アッラーが故意に邪道に導き、その耳と心を封じ、その目を覆いたる者のことを、どう考えるか？　アッラーに見捨てられた後、一体誰がその者を導かん？　これでもまだお前たち訓戒を受入れざるか？

اَفَرَءَيْتَ مَنِ اتَّخَذَ اِلٰهَهٗ هَوٰىهُ وَاَضَلَّهُ اللّٰهُ عَلٰى عِلْمٍ وَّخَتَمَ عَلٰى سَمْعِهٖ وَقَلْبِهٖ وَجَعَلَ عَلٰى بَصَرِهٖ غِشٰوَةً ؕ فَمَنْ يَّهْدِيْهِ مِنْ بَعْدِ اللّٰهِ ؕ اَفَلَا تَذَكَّرُوْنَ ﴿۲۴﴾

25．彼等は云う、「あるものはただこの世の生活のみ。我等はそこで生き、而(しか)して死す。我等を滅ぼすものは時間あるのみ」と。され

وَقَالُوْا مَا هِيَ اِلَّا حَيَاتُنَا الدُّنْيَا نَمُوْتُ وَنَحْيَا وَمَا يُهْلِكُنَآ اِلَّا الدَّهْرُ ۚ وَمَا لَهُمْ بِذٰلِكَ مِنْ

裏付ける論拠（預言）があったからではなく、「互いに妬み合う」すなわち、モハッマド預言者がイスラエル人ではないという考えを好まなかったからである。

注５　　前節に述べられた「この事」とは、モハッマド預言者の到来及びクルアーンの啓示を指すと当節は示している。

ど、彼等はこのことについて如何なる知識も有せず。彼等はただ憶測するのみ。(注６)

عِلْمٍ إِنْ هُمْ إِلَّا يَظُنُّونَ ﴿٢٥﴾

26．而して、われらの明白なる神兆を彼等に誦み聞かせると、彼等の逃げ口上は、「お前たちの言葉が本当なら、我等の先祖を連れ戻せ」と云うにすぎず。

وَإِذَا تُتْلَىٰ عَلَيْهِمْ آيَاتُنَا بَيِّنَاتٍ مَا كَانَ حُجَّتَهُمْ إِلَّا أَنْ قَالُوا ائْتُوا بِآبَائِنَا إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٢٦﴾

27．云え、「お前たちに生命を与え、次いで之を召し上げ給う御方、そはアッラーなり。而して、復活の日、アッラーはお前たちを召集せん。こは疑うべからざることなり。されど、世人の多くは之を知らず」と。

قُلِ اللَّهُ يُحْيِيكُمْ ثُمَّ يُمِيتُكُمْ ثُمَّ يَجْمَعُكُمْ إِلَىٰ يَوْمِ الْقِيَامَةِ لَا رَيْبَ فِيهِ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٢٧﴾

ع ٣ ١٩

第四項

28．天地の大権はアッラーのものなり。而して、審判の時来りなば、虚妄に従う者は失敗者とならん。

وَلِلَّهِ مُلْكُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَيَوْمَ تَقُومُ السَّاعَةُ يَوْمَئِذٍ يَخْسَرُ الْمُبْطِلُونَ ﴿٢٨﴾

29．汝はあらゆる民が跪坐するを見ん。あらゆる民は己が記録の前に召換されん。(注７) 而して、彼等は云われん、「今日お前たちは、自分がなせることに対する報いを受けん。

وَتَرَىٰ كُلَّ أُمَّةٍ جَاثِيَةً كُلُّ أُمَّةٍ تُدْعَىٰ إِلَىٰ كِتَابِهَا الْيَوْمَ تُجْزَوْنَ مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٢٩﴾

30．これがわれらの帳簿なり。(注８)こはお前たちに反して真実を語る。われらはお前たちの所業をすべて残らず記録せり」と。

هَٰذَا كِتَابُنَا يَنْطِقُ عَلَيْكُمْ بِالْحَقِّ إِنَّا كُنَّا نَسْتَنْسِخُ مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٣٠﴾

31．さて、信じて善行を積みたる者、主は彼等をその慈悲の中に入れん。こは明らかなる幸福の成就なり。

فَأَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ فَيُدْخِلُهُمْ رَبُّهُمْ فِي رَحْمَتِهِ ذَٰلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْمُبِينُ ﴿٣١﴾

32．されど、不信心者どもは云われん、「お前たち、わが神兆を読誦せられざりしか？　然るに、お前たちは傲慢にして、罪悪の民となれり。

وَأَمَّا الَّذِينَ كَفَرُوا أَفَلَمْ تَكُنْ آيَاتِي تُتْلَىٰ عَلَيْكُمْ فَاسْتَكْبَرْتُمْ وَكُنْتُمْ قَوْمًا مُجْرِمِينَ ﴿٣٢﴾

注６　来世において、神の前で自らの行為の申し開きをしなければならないと告げられる時、不信心者は来世の存在容認を拒否すると、当節は述べる。むしろ彼等は、ある民族が滅びれば他の民族がそれに取って変わると主張し、この事態は、時の移ろいと共に全てが滅びるまで続く。これは人類にとり最も重要な事で、この先如何なる生命も存在しえない。

注７　「あらゆる民は己が記録の前に召喚されん。」という言葉は、前節に述べられた「審判の時」が、この世における裁きの時を表していることを示す。それは、この世においても人はその行為で裁かれ、それに応じて罰やほうびを与えられるからである。

注８　前節にある「己が記録」が当節で「われらの帳簿」に置き換えられたのは、国家及び個人の行動が神に記憶され、それに応じた裁決が神より下されるからである。

33．また、『アッラーの約束は必ず履行される。審判の到来は疑うべくもなし』と云われし時、お前たち『我等審判の何んたるかを知らず、そは憶測にすぎずと思う。故に我等は納得せず』と答えり」と。

وَإِذَا قِيلَ إِنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ وَالسَّاعَةُ لَا رَيْبَ فِيهَا قُلْتُم مَّا نَدْرِي مَا السَّاعَةُ إِن نَّظُنُّ إِلَّا ظَنًّا وَمَا نَحْنُ بِمُسْتَيْقِنِينَ ﴿٣٣﴾

34．かくて彼等は、己が諸悪を目の当たりにせん。而して、彼等は、日頃嘲笑せるものに包囲されん。

وَبَدَا لَهُمْ سَيِّئَاتُ مَا عَمِلُوا وَحَاقَ بِهِم مَّا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِءُونَ ﴿٣٤﴾

35．而して、彼等は云われん、「お前たちがかつて、お前たちのこの日を忘れたる如く、(注9) 今日はわれらがお前たちを忘れる番なるべし。お前たちの落ち行く先は業火にして、如何なる助け手もなかるべし。

وَقِيلَ الْيَوْمَ نَنسَاكُمْ كَمَا نَسِيتُمْ لِقَاءَ يَوْمِكُمْ هَٰذَا وَمَأْوَاكُمُ النَّارُ وَمَا لَكُم مِّن نَّاصِرِينَ ﴿٣٥﴾

36．これお前たちがアッラーの神兆を嘲笑し、現世の生活に欺かれたが故なり」と。かくして、彼等そこより出づるを得ず、また主の恩恵の中に連れ戻されざるべし。

ذَٰلِكُم بِأَنَّكُمُ اتَّخَذْتُمْ آيَاتِ اللَّهِ هُزُوًا وَغَرَّتْكُمُ الْحَيَاةُ الدُّنْيَا فَالْيَوْمَ لَا يُخْرَجُونَ مِنْهَا وَلَا هُمْ يُسْتَعْتَبُونَ ﴿٣٦﴾

37．されば、諸天の主、大地の主、万物の主アッラーに讃えあれ。

فَلِلَّهِ الْحَمْدُ رَبِّ السَّمَاوَاتِ وَرَبِّ الْأَرْضِ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿٣٧﴾

38．天地の尊厳は彼のものなり。彼は偉大にして、賢哲にまします。

وَلَهُ الْكِبْرِيَاءُ فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَهُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ﴿٣٨﴾

注9　約束された処罰の日。

سُوْرَةُ الْاَحْقَافِ مَكِّيَّةٌ

アル・アハクァーフ
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．ハー・ミーム。(注1)

حٰمٓ ②

3．この経典は、偉大にして賢哲なるアッラーより降る。

تَنْزِيْلُ الْكِتٰبِ مِنَ اللّٰهِ الْعَزِيْزِ الْحَكِيْمِ ③

4．われらは真理に基づかず、且つ一定の期限を定めることなく、天地並びに天地の間の萬物を創造せざりき。されど、信ぜざる者どもは、警告せられたることを忌避す。(注2)

مَا خَلَقْنَا السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَآ اِلَّا بِالْحَقِّ وَاَجَلٍ مُّسَمًّى ؕ وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا عَمَّآ اُنْذِرُوْا مُعْرِضُوْنَ ④

5．彼等に云え、「アッラー以外にお前たちが崇めるもの、そのなんたるかを知るか？　この大地に彼奴らが創れるものがあるなら、見せてみよ。(注3)はたまた彼奴ら諸天の創造に参与したとでもいうか？　お前たちの言葉が本当なら、このクルアーンより以前に啓示されたる経典か、その聖智の遺れるものをわれに示せ」と。(注4)

قُلْ اَرَءَيْتُمْ مَّا تَدْعُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ اَرُوْنِيْ مَاذَا خَلَقُوْا مِنَ الْاَرْضِ اَمْ لَهُمْ شِرْكٌ فِى السَّمٰوٰتِ ؕ اِيْتُوْنِيْ بِكِتٰبٍ مِّنْ قَبْلِ هٰذَآ اَوْ اَثٰرَةٍ مِّنْ عِلْمٍ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ⑤

6．アッラーの代わりに、最後の審判の日まで応えず、且つ彼等の祈願に気づかざるものを崇める者ども、これ等よりなお罪深き者ども、そは何人か？　(注5)

وَمَنْ اَضَلُّ مِمَّنْ يَّدْعُوْا مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ مَنْ لَّا يَسْتَجِيْبُ لَهٗٓ اِلٰى يَوْمِ الْقِيٰمَةِ وَهُمْ عَنْ دُعَآئِهِمْ غٰفِلُوْنَ ⑥

注1　賞讃すべき栄誉の主。

注2　宇宙は誕生したが、又終わりの時を迎えるのであろう。55章27、28節参照。

注3　崇拝を命じ、宇宙の創造主として我々の運命を左右されるが故に崇められるのは、神のみである。それに反し、偶像崇拝者の崇める偽りの神は、何一つ造り出さないばかりか、それ自身存在しないものであった。(25：4)

注4　事実、神の啓示書を除く如何なる典拠、及び人間の科学・理性も信仰の是非を決め兼ねる。

注5　イスラム教は、信者の祈りを受け入れる事でその存在を現し、苦境にある信者に慰めの言葉をかける実在の神に拝謁される（2：187）

7．彼等は人間が復活させられたとき、人間の敵となり、崇められたることを否認せん。

وَإِذَا حُشِرَ النَّاسُ كَانُوا لَهُمْ أَعْدَاءً وَكَانُوا بِعِبَادَتِهِمْ كٰفِرِينَ ⑦

8．われらの明白なる啓示が彼等に読誦せられたるとき、信ぜざる者どもはその真理について云う、「こは明らかに妖術なり」と。

وَإِذَا تُتْلٰى عَلَيْهِمْ اٰيٰتُنَا بَيِّنٰتٍ قَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لِلْحَقِّ لَمَّا جَاءَهُمْ هٰذَا سِحْرٌ مُّبِينٌ ⑧

9．また彼等は云う、「彼、これを捏造せり」と。云え、「もし我これをつくりなば、お前たちの力では、アッラーの罰から我を護ること能わず。アッラーはお前たちの、クルアーンについて語るくだらぬはなしを、よく知り給う。我とお前たちのことは、アッラーの証言で充分なり。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします」と。

أَمْ يَقُولُونَ افْتَرٰىهُ قُلْ إِنِ افْتَرَيْتُهُ فَلَا تَمْلِكُونَ لِي مِنَ اللّٰهِ شَيْئًا هُوَ أَعْلَمُ بِمَا تُفِيضُونَ فِيهِ كَفٰى بِهِ شَهِيدًا بَيْنِي وَبَيْنَكُمْ وَهُوَ الْغَفُورُ الرَّحِيمُ ⑨

10．云え、「我は新奇な使徒に非ず、また自分に何が起き、お前たちに何が起るかを知らざる者なり。我はただ、啓示されたることに従うのみ。而して我は、ただ一介の警告者にすぎぬ」と。

قُلْ مَا كُنْتُ بِدْعًا مِّنَ الرُّسُلِ وَمَا أَدْرِي مَا يُفْعَلُ بِي وَلَا بِكُمْ إِنْ أَتَّبِعُ إِلَّا مَا يُوحٰى إِلَيَّ وَمَا أَنَا إِلَّا نَذِيرٌ مُّبِينٌ ⑩

11．云え、「もしこのクルアーンがアッラーより降されたるものなるも、お前たちは之を信ぜず、而して、イスラエルの子孫の中からも証人ありて、自分に似た者の到来を証言し、信ずるも、お前たちが驕慢にも信ぜずとは何事か？」と。げにアッラーは、不義なす徒輩を導き給わず。

قُلْ أَرَءَيْتُمْ إِنْ كَانَ مِنْ عِنْدِ اللّٰهِ وَكَفَرْتُمْ بِهِ وَشَهِدَ شَاهِدٌ مِّنْ بَنِي إِسْرَاءِيلَ عَلٰى مِثْلِهِ فَاٰمَنَ وَاسْتَكْبَرْتُمْ إِنَّ اللّٰهَ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظّٰلِمِينَ ⑪ ع

第二項

12．信ぜざる者どもは、信ずる人々について云う、「もしクルアーンに良きことありなば、彼等がそれを我等に先んじて得る理なし」と。而して、彼等はそれによって導かられざるが故に、かく云わん、「こは古の譌言なり」と。

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لِلَّذِينَ اٰمَنُوا لَوْ كَانَ خَيْرًا مَّا سَبَقُونَا إِلَيْهِ وَإِذْ لَمْ يَهْتَدُوا بِهِ فَسَيَقُولُونَ هٰذَا إِفْكٌ قَدِيمٌ ⑫

13．クルアーン以前にも、嚮導にして且つ慈悲なるモーゼの経典あり。このアラビア語の

وَمِنْ قَبْلِهِ كِتٰبُ مُوسٰى إِمَامًا وَّرَحْمَةً وَهٰذَا

経典は、先の諸預言を実証し、悪事を行う徒輩に警告し、善人には朗報を伝えるものなり。

كِتَٰبٌ مُّصَدِّقٌ لِّسَانًا عَرَبِيًّا لِّيُنذِرَ ٱلَّذِينَ ظَلَمُوا۟ وَبُشْرَىٰ لِلْمُحْسِنِينَ ﴿١٣﴾

14. げに「我等の主はアッラーなり」と云い、しかも鋭意精進する者には、なんの怖れも、憂いもなからん。（注6）

إِنَّ ٱلَّذِينَ قَالُوا۟ رَبُّنَا ٱللَّهُ ثُمَّ ٱسْتَقَٰمُوا۟ فَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿١٤﴾

15. これ等は楽園の住人にして、永久に住み留まらん。こは彼等が所業に対する報賞なり。

أُو۟لَٰٓئِكَ أَصْحَٰبُ ٱلْجَنَّةِ خَٰلِدِينَ فِيهَا جَزَآءًۢ بِمَا كَانُوا۟ يَعْمَلُونَ ﴿١٥﴾

16. われらは人間に、父母に孝養をつくさんことを命じたり。母なるもの、懐胎に苦しみ、且つ分娩に苦しむ。胎に子を宿してから乳離れさせるまで、実に三十カ月を要す。（注7）而して分別盛りとなり、齢四十にも達する頃となれば、「主よ、我に、自分並びに我が父母に垂れたる汝の恩寵に、感謝せしめよ。汝を喜ばすべく、我に善行をなさしめ給え。而して我がために、我が子孫を義しき者となし給え。我は汝に帰依す。げに我は、汝に甘心悦服する者の一人なり」と云う。

وَوَصَّيْنَا ٱلْإِنسَٰنَ بِوَٰلِدَيْهِ إِحْسَٰنًا ۖ حَمَلَتْهُ أُمُّهُۥ كُرْهًا وَوَضَعَتْهُ كُرْهًا ۖ وَحَمْلُهُۥ وَفِصَٰلُهُۥ ثَلَٰثُونَ شَهْرًا ۚ حَتَّىٰٓ إِذَا بَلَغَ أَشُدَّهُۥ وَبَلَغَ أَرْبَعِينَ سَنَةً قَالَ رَبِّ أَوْزِعْنِىٓ أَنْ أَشْكُرَ نِعْمَتَكَ ٱلَّتِىٓ أَنْعَمْتَ عَلَىَّ وَعَلَىٰ وَٰلِدَىَّ وَأَنْ أَعْمَلَ صَٰلِحًا تَرْضَىٰهُ وَأَصْلِحْ لِى فِى ذُرِّيَّتِىٓ ۖ إِنِّى تُبْتُ إِلَيْكَ وَإِنِّى مِنَ ٱلْمُسْلِمِينَ ﴿١٦﴾

17. これ等の者は、われらその所業の最善なるものを受け容れ、その諸悪を大目に見る者たちなり。彼等は楽園の住人とならん。こは彼等になしたる真実の約束の履行なり。

أُو۟لَٰٓئِكَ ٱلَّذِينَ نَتَقَبَّلُ عَنْهُمْ أَحْسَنَ مَا عَمِلُوا۟ وَنَتَجَاوَزُ عَن سَيِّـَٔاتِهِمْ فِىٓ أَصْحَٰبِ ٱلْجَنَّةِ ۖ وَعْدَ ٱلصِّدْقِ ٱلَّذِى كَانُوا۟ يُوعَدُونَ ﴿١٧﴾

18. 然るに、その父母に向って、「笑止かな！父母よ、この身が甦らしめられると恫喝するか。我が前に幾多の世代逝きて再び帰らざるに非ずや？」と云う者あり。両親はアッラーに助けを求めて、云う、「汝なさけな

وَٱلَّذِى قَالَ لِوَٰلِدَيْهِ أُفٍّ لَّكُمَآ أَتَعِدَانِنِىٓ أَنْ أُخْرَجَ وَقَدْ خَلَتِ ٱلْقُرُونُ مِن قَبْلِى وَهُمَا يَسْتَغِيثَانِ ٱللَّهَ وَيْلَكَ ءَامِنْ إِنَّ وَعْدَ ٱللَّهِ حَقٌّ

注6　全宇宙の神アッラーに支持され、ゆるぎない信仰を持つ真の信者は、如何に過酷な試練のもとでも、恐れや悲しみで心の平安を乱される事はない。

注7　31：15で赤子の乳離れには二年かかると述べられているが、当節では、妊娠と授乳の期間として三十ヶ月、その内六ヶ月を懐胎期間としている。それは、妊婦が妊娠を負担に感じる時期を示している様で、四ヶ月目からそう感じ始めるからである。

や！　信ぜよ。アッラーの約束は真実なり」と。然るに彼は云う、「そは往古の物語にすぎず」と。

فَيَقُولُ مَا هٰذَآ إِلَّآ أَسَاطِيرُ الْأَوَّلِينَ ⑱

19. これ等の者は、彼等以前に逝りし妖霊や人間どもと一緒で、天罰を蒙るのが当たり前な徒輩なり。彼等は紛れもない失敗者なり。

أُولٰٓئِكَ الَّذِينَ حَقَّ عَلَيْهِمُ الْقَوْلُ فِيٓ أُمَمٍ قَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِهِمْ مِّنَ الْجِنِّ وَالْإِنْسِ ۚ إِنَّهُمْ كَانُوا خٰسِرِينَ ⑲

20. 而して、人はみなその所業に応じて、位階に違いあり。そはアッラーが人の所業に応じて報奨せんがためなり。また何人も決して不当に遇せらるることなし。(注８)

وَلِكُلٍّ دَرَجٰتٌ مِّمَّا عَمِلُوا ۚ وَلِيُوَفِّيَهُمْ أَعْمَالَهُمْ وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ⑳

21. 而して、信ぜざる者どもが業火にさらされる日、彼等は云われん、「お前たちは現世において結構なものを蕩尽し、存分に楽しめり。されば今日お前たちは、この世で真理を無視して傲慢且つ放埒なりしことのために、恥ずべき懲罰を以て報いられん」と。(注９)

وَيَوْمَ يُعْرَضُ الَّذِينَ كَفَرُوا عَلَى النَّارِ ۖ أَذْهَبْتُمْ طَيِّبٰتِكُمْ فِي حَيَاتِكُمُ الدُّنْيَا وَاسْتَمْتَعْتُمْ بِهَا ۚ فَالْيَوْمَ تُجْزَوْنَ عَذَابَ الْهُونِ بِمَا كُنْتُمْ تَسْتَكْبِرُونَ فِي الْأَرْضِ بِغَيْرِ الْحَقِّ وَبِمَا كُنْتُمْ تَفْسُقُونَ ㉑

第三項

22. アードの同胞について話してやれ。フードが砂丘のあたりでその民にかく警告した時のことを ── 警告者は彼以前にも以後にも来る ──「アッラー以外に何者も崇めるなかれ。お前たちがあの重大の日に如何なる罰をうけるか、我それを恐る」

وَاذْكُرْ أَخَا عَادٍ ۖ إِذْ أَنْذَرَ قَوْمَهُ بِالْأَحْقَافِ وَقَدْ خَلَتِ النُّذُرُ مِنْ بَيْنِ يَدَيْهِ وَمِنْ خَلْفِهِ أَلَّا تَعْبُدُوٓا إِلَّا اللّٰهَ ۖ إِنِّيٓ أَخَافُ عَلَيْكُمْ عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيمٍ ㉒

23. 彼等は云えり「汝は我等を、神々から背かしめんがために来たりしや？　ならば、汝の云うことが真実なら、我等を恫喝するものを、いま起してみよ」と。

قَالُوٓا أَجِئْتَنَا لِتَأْفِكَنَا عَنْ آلِهَتِنَا ۚ فَأْتِنَا بِمَا تَعِدُنَآ إِنْ كُنْتَ مِنَ الصّٰدِقِينَ ㉓

注８　裁きが下される前に、人の行為は全て厳密に審査され、その時々状況が考慮されるであろう。良い行いに対するほうびは、行為自体の何倍にも増やされ、悪業への処罰はその罪に応じたものである。神の報酬の法は、この様にして施行される。

注９　裁きの日に、自ら犯した悪業を突き付けられて、不信心者達は次の様に言い渡されるであろう。神が授けられた贈り物をつまらない事で浪費し、良い目的の為ではなく、自らの卑しい望みを適える事に利用した為、彼等は、その悪事の報いとして屈辱を被るであろうから、今からその心積りをしておかなければならない。

24．フードは云えり、「その知識は、アッラーのみ之を有す。我はただ、託されたることをお前たちに伝えるのみ。それにしてもお前たち、なんたる無知なる民ぞ」と。（注 10）

قَالَ اِنَّمَا الْعِلْمُ عِنْدَ اللّٰهِ ۖ وَ اُبَلِّغُكُمْ مَّاۤ اُرْسِلْتُ
بِهٖ وَ لٰكِنِّيْۤ اَرٰىكُمْ قَوْمًا تَجْهَلُوْنَ ﴿٢٣﴾

25．その時黒雲湧き起りて、彼等のいる谷間に流れ迫りたり。それ見て彼等は云えり、「あの雲、一雨くるぞ」と。「然らず、これお前たちが催促せのものにして、それに伴う暴風こそ恐ろしき天罰なり。

فَلَمَّا رَاَوْهُ عَارِضًا مُّسْتَقْبِلَ اَوْدِيَتِهِمْ ۙ قَالُوْا هٰذَا
عَارِضٌ مُّمْطِرُنَا ؕ بَلْ هُوَ مَا اسْتَعْجَلْتُمْ بِهٖ ؕ رِيْحٌ
فِيْهَا عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿٢٤﴾

26．そは主の命を奉じて一切を潰滅せん」翌朝、彼等の住居以外なにも残らざりき。われらかくの如く罪深い者どもを罰す。

تُدَمِّرُ كُلَّ شَيْءٍۭ بِاَمْرِ رَبِّهَا فَاَصْبَحُوْا لَا يُرٰۤى
اِلَّا مَسٰكِنُهُمْ ؕ كَذٰلِكَ نَجْزِي الْقَوْمَ الْمُجْرِمِيْنَ ﴿٢٥﴾

27．われらはお前たちに与えざりし力を彼等に備えさせ、耳、目、心を与えたり。然るに、彼等がアッラーの神兆を認めざりしが故に、その耳と目と心は彼等のために役立たざりき。而して彼等は、その嘲笑せるものに包囲されたり。

وَ لَقَدْ مَكَّنّٰهُمْ فِيْمَاۤ اِنْ مَّكَّنّٰكُمْ فِيْهِ وَ جَعَلْنَا
لَهُمْ سَمْعًا وَّ اَبْصَارًا وَّ اَفْـِٕدَةً ۖ ؗ فَمَاۤ اَغْنٰى عَنْهُمْ
سَمْعُهُمْ وَ لَاۤ اَبْصَارُهُمْ وَ لَاۤ اَفْـِٕدَتُهُمْ مِّنْ شَيْءٍ
اِذْ كَانُوْا يَجْحَدُوْنَ ۙ بِاٰيٰتِ اللّٰهِ وَ حَاقَ بِهِمْ مَّا كَانُوْا
بِهٖ يَسْتَهْزِءُوْنَ ﴿٢٦﴾

第四項

28．げにわれらは、お前たちの周辺諸都市を滅ぼしたり。而して、われらは、彼等をわれらに頼らしめんがために、さまざまなる手段で神兆を明示せり。

وَ لَقَدْ اَهْلَكْنَا مَا حَوْلَكُمْ مِّنَ الْقُرٰى وَ صَرَّفْنَا
الْاٰيٰتِ لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُوْنَ ﴿٢٧﴾

29．だがその時、アッラーに近づかんとしてアッラーの他に彼等が常々崇めし神々は、何故彼等を助けざりしか？　然り、神々は彼等を見捨てたり。そはすべて、彼等の虚言と捏造せるものにすぎざりしが故なり。

فَلَوْ لَا نَصَرَهُمُ الَّذِيْنَ اتَّخَذُوْا مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ قُرْبَانًا
اٰلِهَةً ؕ بَلْ ضَلُّوْا عَنْهُمْ ۚ وَ ذٰلِكَ اِفْكُهُمْ وَ مَا كَانُوْا
يَفْتَرُوْنَ ﴿٢٨﴾

30．クルアーンに耳傾けんと思う妖霊たちを、（注 11）われらが汝のところへ赴かしめた時のことを思い起こせ。彼等読誦の場に臨むや、互に「謹聴」と云えり。その終るや、

وَ اِذْ صَرَفْنَاۤ اِلَيْكَ نَفَرًا مِّنَ الْجِنِّ يَسْتَمِعُوْنَ الْقُرْاٰنَ ۚ
فَلَمَّا حَضَرُوْهُ قَالُوْۤا اَنْصِتُوْا ۚ فَلَمَّا قُضِيَ وَلَّوْا اِلٰى

注 10　善悪にかかわらず、人が行動する時の背景については神御一人が御存知であり、それ故、人が処罰されるか否かは神のみが知っておられる。又、処罰の時、形態についても御存知である。

注 11　当節に書かれた「妖霊たち」は、ナシービーンのユダヤ人達を指し、又、イラクのムーサルかニネベだという説もある。メッカの人々の敵意を恐れて、彼等は夜モハッマド預言者と会ったが、クルアーンやモハッマド預言者の言葉に耳を傾けた後、彼等はイスラム教に改宗し、進んでイスラム教を受け入れた人々にこの新たなお告げを伝えた。（Bayan、8巻）72：2も参照の事。

警告を伝えんがために仲間のところへ帰りたり。

قَوْمِهِمْ مُّنذِرِينَ ﴿٢٩﴾

31. 彼等は云えり、「仲間たちよ、我等はモーゼの後に降(くだ)されたる経典を聴聞(ちょうもん)せり。そは以前の経典を確証し、真理と正道に導くものなり。（注12）

قَالُوا يَا قَوْمَنَا إِنَّا سَمِعْنَا كِتَابًا أُنزِلَ مِن بَعْدِ مُوسَىٰ مُصَدِّقًا لِّمَا بَيْنَ يَدَيْهِ يَهْدِي إِلَى الْحَقِّ وَإِلَىٰ طَرِيقٍ مُّسْتَقِيمٍ ﴿٣٠﴾

32. 仲間たちよ、アッラーの召喚者に応えて、アッラーを信ぜよ。アッラーはお前たちのもろもろの罪を赦し、お前たちを痛刑より救わん。

يَا قَوْمَنَا أَجِيبُوا دَاعِيَ اللَّهِ وَآمِنُوا بِهِ يَغْفِرْ لَكُم مِّن ذُنُوبِكُمْ وَيُجِرْكُم مِّنْ عَذَابٍ أَلِيمٍ ﴿٣١﴾

33. されど、アッラーの召喚者に応えざる者は、この世でアッラーの罰からのがれられず、またアッラーの外に如何なる守護者ももたざるべし。かかる者は明らかに邪道にはまりたり」と。

وَمَن لَّا يُجِبْ دَاعِيَ اللَّهِ فَلَيْسَ بِمُعْجِزٍ فِي الْأَرْضِ وَلَيْسَ لَهُ مِن دُونِهِ أَوْلِيَاءُ ۚ أُولَٰئِكَ فِي ضَلَالٍ مُّبِينٍ ﴿٣٢﴾

34. 彼等は見ざるか、天地(あめつち)を創造し、しかもそのことに疲れを知らぬアッラーが、死者を甦らせる力あることを？（注13）然(しか)り、げにアッラーは全能なり。

أَوَلَمْ يَرَوْا أَنَّ اللَّهَ الَّذِي خَلَقَ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضَ وَلَمْ يَعْيَ بِخَلْقِهِنَّ بِقَادِرٍ عَلَىٰ أَن يُحْيِيَ الْمَوْتَىٰ ۚ بَلَىٰ إِنَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٣٣﴾

35. 信ぜざる者どもが業火(ごうか)に晒される日、彼等は云われん、「これでも真実に非ずというか？」と。彼等は答えん、「否、真実なり。主の御名にかけて」と。主は云わん、「然(しか)らば不信に対する懲罰を味わえ」と。

وَيَوْمَ يُعْرَضُ الَّذِينَ كَفَرُوا عَلَى النَّارِ أَلَيْسَ هَٰذَا بِالْحَقِّ ۖ قَالُوا بَلَىٰ وَرَبِّنَا ۚ قَالَ فَذُوقُوا الْعَذَابَ بِمَا كُنتُمْ تَكْفُرُونَ ﴿٣٤﴾

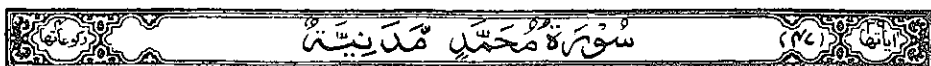
36. されば、諸使徒が毅然として耐え忍びたる如く、汝も耐え忍べ。彼等に対する懲罰を催促するなかれ。彼等その恫喝(どうかつ)されしことを日の当たりにする日、彼等は想わん、この世に留まりたること一刻(ひととき)にしかすぎずと。（注14）この警告はすでに伝えられたり。滅ぼされる者はただ不従順なものどものみ。

فَاصْبِرْ كَمَا صَبَرَ أُولُو الْعَزْمِ مِنَ الرُّسُلِ وَلَا تَسْتَعْجِل لَّهُمْ ۚ كَأَنَّهُمْ يَوْمَ يَرَوْنَ مَا يُوعَدُونَ لَمْ يَلْبَثُوا إِلَّا سَاعَةً مِّن نَّهَارٍ ۚ بَلَاغٌ ۚ فَهَلْ يُهْلَكُ إِلَّا الْقَوْمُ الْفَاسِقُونَ ﴿٣٥﴾

注12　前説に述べられた「選良たち」は、彼等がクルアーンを「モーゼの後に降された経典」と呼んでいる所から、ユダヤ人だと当節は示している。

注13　新たな天地創造の過程は、まだ終ってはいない。それは確証なき主張ではない。偉大なる神の使者の到来と共に、古い秩序は崩れ、新たなものがそれに取って換わる。これは新たな天地の創造を示すものである。

注14　不信心者に対する神の罰は余りに厳しく突然であり、それに比べれば安楽であった一生が、彼等には「一刻にしかすぎず」と思えるであろう。

سُوْرَةُ مُحَمَّدٍ مَّدَنِيَّةٌ

ムハンマド
(メディナ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．信仰せず、人々をアッラーの道より背かしむる者は、アッラーがその所業を空無に帰せしめん。(注1)

الَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَصَدُّوْا عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ اَضَلَّ اَعْمَالَهُمْ ②

3．然れども、信じて義しきを行い、ムハンマドに啓示されたるものを主よりの真理として信ずる者は、アッラーによってそのもろもろの罪を払拭され、その境遇を改善されん。

وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ وَاٰمَنُوْا بِمَا نُزِّلَ عَلٰى مُحَمَّدٍ وَّهُوَ الْحَقُّ مِنْ رَّبِّهِمْ كَفَّرَ عَنْهُمْ سَيِّاٰتِهِمْ وَاَصْلَحَ بَالَهُمْ ③

4．そは信ぜざる者は虚妄に従い、信ずる者はその主の真理に従うが故なり。かくの如く、アッラーはさまざまなる比喩を以て人々を戒め給う。

ذٰلِكَ بِاَنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوا اتَّبَعُوا الْبَاطِلَ وَاَنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوا اتَّبَعُوا الْحَقَّ مِنْ رَّبِّهِمْ كَذٰلِكَ يَضْرِبُ اللّٰهُ لِلنَّاسِ اَمْثَالَهُمْ ④

5．さてお前たち、不信心者輩と合戦するときは、彼等の首を斬り落せ。大殺傷により彼等に打ち勝ったときは、その縲絏を強固にせよ。しかる後、情をかけて放免するもよし、身のしろ金を取るもよし、戦いがその荷をおろすまで。こは掟なるぞ。(注2)も

فَاِذَا لَقِيْتُمُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا فَضَرْبَ الرِّقَابِ حَتّٰى اِذَآ اَثْخَنْتُمُوْهُمْ فَشُدُّوا الْوَثَاقَ فَاِمَّا مَنًّا بَعْدُ وَاِمَّا فِدَآءً حَتّٰى تَضَعَ الْحَرْبُ اَوْزَارَهَا ذٰلِكَ وَلَوْ يَشَآءُ

注1　不信心者は、イスラム教徒の前進を阻もうとする彼等の試みが、何の成果も上げず、むなしいものだと告げられている。

注2　当節には、一言で言えば、戦争の倫理と実戦時の行為に関する重要な原則がいくつか述べられており、付随的に、奴隷制度に痛烈な一撃を加えている。要約すると次の様になる。
(1)イスラム教徒が、その信仰・名誉・生命・財産を守る正規の戦いに加わる時、勇敢に戦う様命じられている(8：13−17)。(2)一旦、戦が始まれば、平和が確立され、自由が確保されるまで、それは続くべきである(8：40)。(3)敵の捕虜を引き立てることが許されているのは、徹底的に戦う正規の合戦のときのみである。この様に、正規の戦いにおいては捕虜を捕る事が許されると明言されているが、それ以外も如何なる理由をもってしても、人から自由を奪う事はできない。(4)戦いが終れば捕虜は解放されなければならない。その方法としては、見返りを求めない、身代金と引き換え、互いの捕虜交換の三通りがある。彼等を永遠に拘束したり、奴隷として扱ってはならない。モハッマド預言者は、バニー・ムスタリークの百家族を、又ハワーズィンの数千人に及

しアッラー欲しなば、彼は自ら彼等を罰すこと可なり。されど彼は、お前たちの或る者を以て他の者を試みんと欲す。(注3)而して、アッラーの道に死せる者は、決してその所業を空しくせらるることなかるべし。(注4)

اللّٰهُ لَانْتَصَرَ مِنْهُمْ وَلٰكِنْ لِّيَبْلُوَا۟ بَعْضَكُمْ بِبَعْضٍ ۗ وَالَّذِيْنَ قُتِلُوْا فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ فَلَنْ يُّضِلَّ اَعْمَالَهُمْ ۝٥

6．アッラーはそれ等の人々を導き、その境遇を改善し、

سَيَهْدِيْهِمْ وَيُصْلِحُ بَالَهُمْ ۝٦

7．常々告げおきたる楽園に入らしむべし。(注5)

وَيُدْخِلُهُمُ الْجَنَّةَ عَرَّفَهَا لَهُمْ ۝٧

8．汝等信徒たちよ、もしアッラーを助けなば、アッラーもまたお前たちを助け、その地歩を堅固ならしめん。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اِنْ تَنْصُرُوا اللّٰهَ يَنْصُرْكُمْ وَيُثَبِّتْ اَقْدَامَكُمْ ۝٨

9．されど信ぜざる者どもには、ただ破滅あるのみ。その所業は空無に帰さん。(注6)

وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا فَتَعْسًا لَّهُمْ وَاَضَلَّ اَعْمَالَهُمْ ۝٩

10．そは彼等が、アッラーが啓示せるものを嫌悪したるが故なり。よってアッラーは、彼等の所業を徒労に終わらしめたり。

ذٰلِكَ بِاَنَّهُمْ كَرِهُوْا مَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ فَاَحْبَطَ اَعْمَالَهُمْ ۝١٠

11．彼等は国々を遍歴りて、彼等以前に栄えし人々の末路が如何なるものになりしかを見ざりしか？　アッラーは彼等を撲滅せり。今ある不信心者輩にも同じこと起らん。(注7)

اَفَلَمْ يَسِيْرُوْا فِي الْاَرْضِ فَيَنْظُرُوْا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ ۗ دَمَّرَ اللّٰهُ عَلَيْهِمْ ۖ وَلِلْكٰفِرِيْنَ اَمْثَالُهَا ۝١١

ぶ捕虜を、両種族が戦いで惨敗した後解放した。バドルの戦いの後、捕虜から賠償が支払われた。彼等は金銭で賠償できなかったが、教養ある人々だった為、イスラム教徒に読み書きを教える事で償った。この様に、当節は奴隷制度を事実上根絶し、永久にこの世から取り除いた。

注3　信者の善性が表され、不信心者の悪性が暴かれる様にと、アッラーは前者と後者と戦わされた。敗北した敵を処遇する際、モハッマド預言者側の道徳上の卓越は、何にも増して明らかにされた。

注4　戦死したイスラム教徒の犠牲的行為は、無駄にはされないであろう。事実、彼等の犠牲があればこそ、アラビアにイスラム教が固く根付いたのである。

注5　不信心者は、現世において、天国のめぐみを味ってしまった。つまり、来世に約束されたものとクルアーンに書かれてある精神的恵みを全て彼等は物質的に享楽してしまったのである。又、別の解釈としては、クルアーンに記された天国についての約束がこの世で成就されるのをその目で確かめた為、不信心者は「楽園」を精神的に早まって、味わってしまったのである。

注6　不信心者の「所業は空無に帰さん」という言葉は、先述の数節で三度述べられている。これは、不信心者が、イスラム教の崩壊という彼等の究極の目標を達成する為に、全力を傾けた事を示している。しかし、イスラム教は勝利を治めた。イスラム教は繁栄し、不信心者は意を遂げられなかった。

注7　モハッマド預言者を信じない者は、世界中を歩いて、かつての預言者を拒んだ者が迎えた悲惨な最期をその目で確かめよと、クルアーンに15回も告げられている。

12．そはアッラーが信ずる者の守護者にして、不信心者輩には如何なる守護者もなきが故なり。

ذٰلِكَ بِاَنَّ اللّٰهَ مَوْلَى الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَاَنَّ الْكٰفِرِيْنَ
لَا مَوْلٰى لَهُمْ ﴿١٢﴾

第二項

13．げにアッラーは、信じて善行を積む者には、木陰に河川流るる楽園へ入らしめ給う。されど、不信心者輩には、現世の生活を楽しませ、獣の如く食わしめ、(注8)しかる後地獄の火を彼等の住処となさん。

اِنَّ اللّٰهَ يُدْخِلُ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ
جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ ۗ وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا
يَتَمَتَّعُوْنَ وَيَاْكُلُوْنَ كَمَا تَاْكُلُ الْاَنْعَامُ وَالنَّارُ
مَثْوًى لَّهُمْ ﴿١٣﴾

14．汝を追放せるあの邑よりもはるかに栄えし諸都市の住民を、われらは如何に多く滅ぼしたか！　されどそこには、誰一人彼等を助くる者なかりき。(注9)

وَكَاَيِّنْ مِّنْ قَرْيَةٍ هِيَ اَشَدُّ قُوَّةً مِّنْ قَرْيَتِكَ
الَّتِيْٓ اَخْرَجَتْكَ ۚ اَهْلَكْنٰهُمْ فَلَا نَاصِرَ لَهُمْ ﴿١٤﴾

15．その主より載きし明らかな証拠の上に立てる者と、自分のよからぬ行いを善しと思いてその悪性に従う者と、これ同じなりや？

اَفَمَنْ كَانَ عَلٰى بَيِّنَةٍ مِّنْ رَّبِّهٖ كَمَنْ زُيِّنَ لَهٗ سُوْٓءُ
عَمَلِهٖ وَاتَّبَعُوْٓا اَهْوَآءَهُمْ ﴿١٥﴾

16．義しき者に約束せる楽園の情景を述べるなら、そこには腐らぬ水の河川あり、味の変らぬ乳の川あり、いと旨き美酒の川あり、清く澄める蜜の川あり。彼等そこにて各種の果物と、主からの宥恕を賜わらん。かかる至福を享受する者が、永劫の業火の中に住み、煮えたぎる熱湯を飲ま強められ、臓腑を引き裂かれる者と、これ同じなりや？

مَثَلُ الْجَنَّةِ الَّتِيْ وُعِدَ الْمُتَّقُوْنَ ۗ فِيْهَآ اَنْهٰرٌ
مِّنْ مَّآءٍ غَيْرِ اٰسِنٍ ۚ وَاَنْهٰرٌ مِّنْ لَّبَنٍ لَّمْ يَتَغَيَّرْ
طَعْمُهٗ ۚ وَاَنْهٰرٌ مِّنْ خَمْرٍ لَّذَّةٍ لِّلشّٰرِبِيْنَ ۚ وَاَنْهٰرٌ
مِّنْ عَسَلٍ مُّصَفًّى ۗ وَلَهُمْ فِيْهَا مِنْ كُلِّ الثَّمَرٰتِ
وَمَغْفِرَةٌ مِّنْ رَّبِّهِمْ ۗ كَمَنْ هُوَ خَالِدٌ فِي النَّارِ
وَسُقُوْا مَآءً حَمِيْمًا فَقَطَّعَ اَمْعَآءَهُمْ ﴿١٦﴾

17．彼等の中には汝に耳傾ける者あるも、汝の前よりされば、知識を授けられたる者たちに向って、「彼がいま語りしことは何か？」

وَمِنْهُمْ مَّنْ يَّسْتَمِعُ اِلَيْكَ ۚ حَتّٰٓى اِذَا خَرَجُوْا مِنْ
عِنْدِكَ قَالُوْا لِلَّذِيْنَ اُوْتُوا الْعِلْمَ مَاذَا قَالَ اٰنِفًا

注8　信者は神や人間に仕える為に生きようとして食べるが、不信心者は食べる為に生き、何等高尚な目的を持たない。彼等は人生を全く唯物論的に捕えており、その意味で「獣」と変わらない。

注9　当節は、モハッマド預言者が懸賞金をかけられて愛する地メッカを追われ、メディナへ向う途中啓示された。メディナは遠く、辺地には、彼を殺すか生け捕りにして望みの懸賞金を手にしたいと願う山師が群がっていた為、彼は捕まりはしないかと絶えず脅えていた。モハッマド預言者は安全な旅を神より約束された。

と訊ねる者あり。彼等はアッラーがその心を封じたる者にして、ただ己が悪性に従うのみ。

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ طَبَعَ اللَّهُ عَلَىٰ قُلُوبِهِمْ وَاتَّبَعُوا أَهْوَاءَهُمْ ﴿١٧﴾

18．されど教えを守る者には、主は更に指導を増し、畏懼の念を高め給う。

وَالَّذِينَ اهْتَدَوْا زَادَهُمْ هُدًى وَآتَاهُمْ تَقْوَاهُمْ ﴿١٨﴾

19．不信心者どもは、突如襲う審判の時を待つばかりか。その前兆はすでに現れたり。(注10) それが現実に自分の身に起きてからでは、警告を容れんとしてもすでに遅し。

فَهَلْ يَنْظُرُونَ إِلَّا السَّاعَةَ أَنْ تَأْتِيَهُمْ بَغْتَةً ۖ فَقَدْ جَاءَ أَشْرَاطُهَا ۚ فَأَنَّىٰ لَهُمْ إِذَا جَاءَتْهُمْ ذِكْرَاهُمْ ﴿١٩﴾

20．されば汝、アッラーの外に神なきを知れ。もろもろの赦罪を乞い奉れ、而して男と女の信者の過ちのためにも、アッラーはお前たちの現世の場所も、来世の場所も知り給う。

فَاعْلَمْ أَنَّهُ لَا إِلَٰهَ إِلَّا اللَّهُ وَاسْتَغْفِرْ لِذَنْبِكَ وَلِلْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنَاتِ ۗ وَاللَّهُ يَعْلَمُ مُتَقَلَّبَكُمْ وَمَثْوَاكُمْ ﴿٢٠﴾

第三項

21．信ずる者は云う、「何故神託が降らざるか？」と。然るに、断固たる神託が降り、こと聖戦に及ぶや、心の病める輩は正に死に臨みたる如く憔悴して汝を見ゆ。なんと情けなや！

وَيَقُولُ الَّذِينَ آمَنُوا لَوْلَا نُزِّلَتْ سُورَةٌ ۖ فَإِذَا أُنْزِلَتْ سُورَةٌ مُحْكَمَةٌ وَذُكِرَ فِيهَا الْقِتَالُ ۙ رَأَيْتَ الَّذِينَ فِي قُلُوبِهِمْ مَرَضٌ يَنْظُرُونَ إِلَيْكَ نَظَرَ الْمَغْشِيِّ عَلَيْهِ مِنَ الْمَوْتِ ۖ فَأَوْلَىٰ لَهُمْ ﴿٢١﴾

22．望むらくは服従と時宜にかなった言葉なり。而して、事一たび決しなば、アッラーに忠誠なることが彼等のために幸いなり。

طَاعَةٌ وَقَوْلٌ مَعْرُوفٌ ۚ فَإِذَا عَزَمَ الْأَمْرُ فَلَوْ صَدَقُوا اللَّهَ لَكَانَ خَيْرًا لَهُمْ ﴿٢٢﴾

23．お前たち、この命令に背いて地上に騒乱をひろめ、血縁の絆を断たんとねがうのではあるまいな？ (注11)

فَهَلْ عَسَيْتُمْ إِنْ تَوَلَّيْتُمْ أَنْ تُفْسِدُوا فِي الْأَرْضِ وَتُقَطِّعُوا أَرْحَامَكُمْ ﴿٢٣﴾

24．かかる者は、アッラーの呪詛により、その耳は聾、その目は盲となる。

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ لَعَنَهُمُ اللَّهُ فَأَصَمَّهُمْ وَأَعْمَىٰ أَبْصَارَهُمْ ﴿٢٤﴾

注10　「前兆」という言葉は、モハッマド預言者のメッカからの逃亡を示している様だ。

注11　もし、不信心者達の勢力が倒されていなければ、彼等は地上に混乱を引き起こし、あらゆる血族を分断し、正義の主張を踏みにじっていた事であろう。それ故、イスラム教徒は戦いを許されたのであった。

25．彼等はクルアーンを思案熟考せんとせざるか？　それとも彼等の心は、鍵かけられたるか？

أَفَلَا يَتَدَبَّرُونَ الْقُرْآنَ أَمْ عَلَىٰ قُلُوبٍ أَقْفَالُهَا ٢٥

26．嚮導が明示されたる後、退転する者は、悪魔が之を誑かし、幻想を抱かせたる者なり。

إِنَّ الَّذِينَ ارْتَدُّوا عَلَىٰ أَدْبَارِهِمْ مِنْ بَعْدِ مَا تَبَيَّنَ لَهُمُ الْهُدَى ۙ الشَّيْطَانُ سَوَّلَ لَهُمْ وَأَمْلَىٰ لَهُمْ ٢٦

27．そは彼等が、アッラーが降し賜えるものを嫌う者どもに「事の次第ではお前たちに従わん」と云えるが故なり。されど、アッラーは、彼等の秘密を知り給う。（注12）

ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ قَالُوا لِلَّذِينَ كَرِهُوا مَا نَزَّلَ اللَّهُ سَنُطِيعُكُمْ فِي بَعْضِ الْأَمْرِ ۖ وَاللَّهُ يَعْلَمُ إِسْرَارَهُمْ ٢٧

28．時至り、諸天使に死に召し寄せられ、その顔や背を強打されなば、彼等如何に成り行くか？

فَكَيْفَ إِذَا تَوَفَّتْهُمُ الْمَلَائِكَةُ يَضْرِبُونَ وُجُوهَهُمْ وَأَدْبَارَهُمْ ٢٨

29．これ彼等が、アッラーを怒らすことに従い、悦ばすことを忌み避けたが故なり。さればアッラーは、彼等の所業を効なからしめ給う。

ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمُ اتَّبَعُوا مَا أَسْخَطَ اللَّهَ وَكَرِهُوا رِضْوَانَهُ فَأَحْبَطَ أَعْمَالَهُمْ ٢٩

第四項

30．心に病を宿す者は、アッラーが彼等の怨恨を明るみに持ち出し給わぬと想うか？

أَمْ حَسِبَ الَّذِينَ فِي قُلُوبِهِمْ مَرَضٌ أَنْ لَنْ يُخْرِجَ اللَّهُ أَضْغَانَهُمْ ٣٠

31．われらもし欲しなば、われら彼等を汝に示し、汝はその特徴により彼等を知り得べし。また汝は、彼等の曖昧なる表現によって必ず之を識別せん。（注13）アッラーはお前たちのなすことはすべて知り給う。

وَلَوْ نَشَاءُ لَأَرَيْنَاكَهُمْ فَلَعَرَفْتَهُمْ بِسِيمَاهُمْ ۚ وَلَتَعْرِفَنَّهُمْ فِي لَحْنِ الْقَوْلِ ۚ وَاللَّهُ يَعْلَمُ أَعْمَالَكُمْ ٣١

32．われらは、お前たちのうち誰が神のために努力し、誰が耐え忍びたるかを見極めるまで、お前たちを試みん。またわれらは、お前たちの行状をもたしかめん。

وَلَنَبْلُوَنَّكُمْ حَتَّىٰ نَعْلَمَ الْمُجَاهِدِينَ مِنْكُمْ وَالصَّابِرِينَ وَنَبْلُوَ أَخْبَارَكُمْ ٣٢

注12　メディアの偽善者は公然と不信心者の味方をした訳ではない。偽善者という者は悪賢く、背水の陣をしいたりはしない。彼は双方に等しく顔を向ける。

注13　偽善者という者は、決して真意を露わにはしない。彼は、ある者にはある考えを述べ、別の者にはそれと異なる考えを述べ、常に曖昧な態度を取る。この偽善者の不正な言動については、2：105 にも記されている。

33．信ぜずして、人々をアッラーの道より背かしめ、嚮導すでに明示されたる後に使徒に反抗する者、彼等はいささかもアッラーを害さざるべし。されどアッラーは、彼等の所業を無に帰せしめん。

إن الذين كفروا وصدوا عن سبيل الله وشاقوا الرسول من بعد ما تبين لهم الهدى لن يضروا الله شيئا وسيحبط أعمالهم ﴿٣٢﴾

34．汝等信徒たちよ、アッラーに従い、その使徒に従い、己が所業を空しうするなかれ。

يا أيها الذين آمنوا أطيعوا الله وأطيعوا الرسول ولا تبطلوا أعمالكم ﴿٣٣﴾

35．げに信ぜずして、人々をアッラーの道より背かしめ、不信心者として死ぬる者は、アッラー断じて之を赦さざるべし。

إن الذين كفروا وصدوا عن سبيل الله ثم ماتوا وهم كفار فلن يغفر الله لهم ﴿٣٤﴾

36．されば弱気を起すなかれ、和平を求めるなかれ。お前たちは必ず勝利せん。アッラーはお前たちと偕にありて、その労に対する報奨を拒み給わぬ。（注 14）

فلا تهنوا وتدعوا إلى السلم وأنتم الأعلون والله معكم ولن يتركم أعمالكم ﴿٣٥﴾

37．現世の暮らしは、娯楽か気晴らしにすぎぬ。なれど、信じてその身義しかれば、アッラーはお前たちに報奨をあたえ、お前たちの財産のすべてを求めざるべし。（注 15）

إنما الحيوة الدنيا لعب ولهو وإن تؤمنوا وتتقوا يؤتكم أجوركم ولا يسئلكم أموالكم ﴿٣٦﴾

38．もしアッラーが之を求めて強要しなば、お前たちは吝嗇となり、またお前たちに恨みを惹起させるに至らん。（注 16）

إن يسئلكموها فيحفكم تبخلوا ويخرج أضغانكم ﴿٣٧﴾

39．見よお前たちは、アッラーの道のために費やすことを求められた者なり。然るに、お前たちの中には、吝嗇なる者あり。吝嗇な

هأنتم هؤلاء تدعون لتنفقوا في سبيل الله فمنكم من يبخل ومن يبخل فإنما يبخل عن

注 14　戦いが一度始まれば、それが如何なる展開を繰り広げ様とも、平穏を求めてはならないと、イスラム教徒は命じられている。彼等は勝利を得るかさもなくば殉教者となる運命にある。彼等には、他に採るべき道はない。

注 15　イズラム教徒はアッラーの為に戦う様命ぜられており、戦の犠牲を払わねばならず、又この目的の為に金銭の負担も払わねばならないと、当節は示している。しかし、アッラーは彼等の金銭を必要とはしない。命や金銭を捧げる様求められるのは、それ無しに勝利は得られないからであり、それは彼等自身の利となる。真の信者は、この崇高な教えを理解しなければならない。

注 16　この節は、特に偽善者に向けられたものである。

نَفْسِهٖ وَاللّٰهُ الْغَنِيُّ وَاَنْتُمُ الْفُقَرَآءُ وَاِنْ تَتَوَلَّوْا
يَسْتَبْدِلْ قَوْمًا غَيْرَكُمْ ثُمَّ لَا يَكُوْنُوْٓا اَمْثَالَكُمْ ﴿٣٩﴾ ع

者は、自分自身が損をするのみ。（注17）アッラーは独り満ち足りてましますが、貧しきはお前たちなり。而（しか）して、たとえお前たちが背き去るとも、アッラーは他の民を以てお前たちに代えん。さすれば彼等は、お前たちの如き者に非ざるべし。（注18）

注17　けちな心は、人を蝕む致命的な病いである。クルアーンは他の箇所でその様な人々を強く非難している。（9：35）

注18　「他の民を以てお前たちに代えん。」という言葉は、誰に向けられたものなのかとモハッマド預言者が尋ねられた時、彼はこう答えたと記されている。「もし、信仰がプレアデスに届くなら、ペルシアの男がそれを地上に戻すであろう。」

سُورَةُ الْفَتْحِ مَدَنِيَّةٌ

アル・ファタ
（メディナ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ①

2．げにわれらは明確なる勝利を汝に与えたり。

إِنَّا فَتَحْنَا لَكَ فَتْحًا مُّبِينًا ②

3．そはアッラーが、汝の過去と将来（注1）の過ち（注2）を赦し、汝への恩寵を全うし、汝を正道に導き給わんがためなり。

لِّيَغْفِرَ لَكَ اللَّهُ مَا تَقَدَّمَ مِن ذَنبِكَ وَمَا تَأَخَّرَ وَيُتِمَّ نِعْمَتَهُ عَلَيْكَ وَيَهْدِيَكَ صِرَاطًا مُّسْتَقِيمًا ③

4．またアッラーが力強い援助をもって、汝を佑助せんがためなり。（注3）

وَيَنصُرَكَ اللَّهُ نَصْرًا عَزِيزًا ④

5．信仰心を更に増さしめるために、信者たちの心に安静を降せる者はアッラーなり。なんとなれば、アッラーは、天地の全軍を統率し、すべてを知り、賢哲にまします故に。

هُوَ الَّذِي أَنزَلَ السَّكِينَةَ فِي قُلُوبِ الْمُؤْمِنِينَ لِيَزْدَادُوا إِيمَانًا مَّعَ إِيمَانِهِمْ ۗ وَلِلَّهِ جُنُودُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۚ وَكَانَ اللَّهُ عَلِيمًا حَكِيمًا ⑤

6．こは信ずる男と信ずる女を河川流れる楽園に入らせ、その中に永久に住ましめ、彼等のもろもろの罪業を取り除き給わんとせんがためなり。そは、アッラーの目には、大勝利なり。

لِّيُدْخِلَ الْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنَاتِ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِن تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا وَيُكَفِّرَ عَنْهُمْ سَيِّئَاتِهِمْ ۚ وَكَانَ ذَٰلِكَ عِندَ اللَّهِ فَوْزًا عَظِيمًا ⑥

7．こはアッラーが、自分に対して邪心を抱くにせ信者の男や女ども、並びに偶像教徒の

وَيُعَذِّبَ الْمُنَافِقِينَ وَالْمُنَافِقَاتِ وَالْمُشْرِكِينَ وَ

注1　かってモハッマド預言者はクライシュに非難されたが、今後彼がその敵に非難され、追われ、モハッマド預言者の名誉は完全に回復されるであろう。「過去と将来」は以上の事を示している。

注2　卑劣の極みにまで落ちた人、全ての精神を最高位にまで高めた、モハッマド預言者の様な高い徳を備えた人物が、彼を中傷する者が転嫁しようとした道徳上の過失で有罪になるはずがなかった。無邪気を表す語ザンブ（当節の「過ち」）は、彼を誹謗するのに使われた。この語は、人間の本質であり、数々の誤りを犯す元となる性格の弱さを示すものである。前節に述べられた約束された勝利の後に起こる悪い出来事から、神はモハッマド預言者を守られる。それは、非常に多くの人々がイスラム教徒となり、彼等の宗教教育が望みの水準に達しないからである。以上の事を当節は志している。

注3　フダイビヤ協定が結ばれた後、神はイスラム教がアラビアに急速に広まる様に力を添えられ、モハッマド預言者は独立国の指導者に承認された。

男や女どもを罰せんがためなり。アッラー激怒し給えば、彼等の上に必ず悲惨な禍が降りかからん。アッラーは彼等を呪い、彼等のために地獄を準備せり。そは禍なる帰所なり。

المشركت الظانين بالله ظن السوء عليهم دائرة السوء وغضب الله عليهم ولعنهم واعد لهم جهنم وساءت مصيرا ٧

8．アッラーは天地(あめつち)の全軍を統率し、偉大にして、賢哲にまします。

ولله جنود السموت والارض وكان الله عزيزا حكيما ٨

9．われらが汝を証人として、朗報伝達者として、また警告者として遣わしたるは、

انا ارسلنك شاهدا ومبشرا ونذيرا ٩

10．お前たちに、アッラーを信じ、その使徒を信じ、ムハンマドを助け、尊敬し、以て朝な夕なアッラーを讃えしめんがためなり。

لتؤمنوا بالله ورسوله وتعزروه وتوقروه وتسبحوه بكرة واصيلا ١٠

11．まことに、汝に忠誠を誓う者は、すなわちアッラーに忠誠を誓う者なり。アッラーの御手(みて)は彼等の上にあり。されば、己が誓約を（注4）破る者は、自分自身を損なうのみ。されど、アッラーとの約束を履行する者は、アッラーその者に素晴らしい報奨を与えん。

ان الذين يبايعونك انما يبايعون الله يد الله فوق ايديهم فمن نكث فانما ينكث على نفسه ومن اوفى بما عهد عليه الله فسيؤتيه اجرا عظيما ١١

ع

第二項

12．後に居残ることを策せしベドウィンどもは、汝に云わん、「我等は財産や家族のことで忙殺(ぼうさつ)せられたり。されば我等のために、赦免(しゃめん)を乞え」と。彼等は心に在らざることをその舌を以て云う。云え、「もしアッラーがお前たちを害さんと欲し、また福ならしめんと欲しなば、何人(なんぴと)がアッラーの御意(みこころ)向を阻止し得るや？然(しか)り、アッラーはお前たちの所業を知悉(ちしつ)し給う。

سيقول لك المخلفون من الاعراب شغلتنا اموالنا واهلونا فاستغفر لنا يقولون بالسنتهم ما ليس في قلوبهم قل فمن يملك لكم من الله شيئا ان اراد بكم ضرا او اراد بكم نفعا بل كان الله بما تعملون خبيرا ١٢

13．否、お前たちは使徒並びに信者たちが再び家族の許へ還(かえ)らざるべしと考え、その心に之(これ)を喜べり。お前たちは邪念を抱きぬ。お前たちは淪落(りんらく)の民なるぞ」と。

بل ظننتم ان لن ينقلب الرسول والمؤمنون الى اهليهم ابدا وزين ذلك في قلوبكم وظننتم ظن السوء وكنتم قوما بورا ١٣

注4　この語は、フダイビヤの木の下でモハッマド預言者に向けられた信者の誓いを指す。

14．アッラーとその使徒を信ぜざる者ども、これ等不信心輩には、われらすでに燃え盛る烈火を調えおきぬ。

وَمَنْ لَّمْ يُؤْمِنْ بِاللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ فَاِنَّآ اَعْتَدْنَا لِلْكٰفِرِيْنَ سَعِيْرًا ⑭

15．而して、天地の大権はアッラーの有なり。彼は欲する者を赦し、欲する者を罰し給う。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

وَلِلّٰهِ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ يَغْفِرُ لِمَنْ يَّشَآءُ وَيُعَذِّبُ مَنْ يَّشَآءُ وَكَانَ اللّٰهُ غَفُوْرًا رَّحِيْمًا ⑮

16．後に居残りを策した者どもも、お前たちが出で往きて戦利品を得るやも知れぬとなれば、「我等にも供させよ」と云わん。彼等はアッラーの掟を変えんとす。云え、「お前たちは来てはならぬ。アッラーすでにかくのたまえり」と。すると彼等は云わん、「そうではあるまい、お前たちは我等を妬む」と。さに非ず、彼等は殆んど理解し得ざるなり。

سَيَقُوْلُ الْمُخَلَّفُوْنَ اِذَا انْطَلَقْتُمْ اِلٰى مَغَانِمَ لِتَاْخُذُوْهَا ذَرُوْنَا نَتَّبِعْكُمْ يُرِيْدُوْنَ اَنْ يُّبَدِّلُوْا كَلٰمَ اللّٰهِ قُلْ لَّنْ تَتَّبِعُوْنَا كَذٰلِكُمْ قَالَ اللّٰهُ مِنْ قَبْلُ فَسَيَقُوْلُوْنَ بَلْ تَحْسُدُوْنَنَا بَلْ كَانُوْا لَا يَفْقَهُوْنَ اِلَّا قَلِيْلًا ⑯

17．後に居残りたるベトウィンに云え、「お前たちはいずれ、強壮勇武なる民と戦うために召集されん。アッラーはお前たちに、敵が降参するまで戦わしめん。その時、もし命に従わば、アッラーは素晴らしい報奨をお前たちに与えん。されど以前の如く命に背かば、アッラーは痛刑を以てお前たちを懲らしめん」と。

قُلْ لِّلْمُخَلَّفِيْنَ مِنَ الْاَعْرَابِ سَتُدْعَوْنَ اِلٰى قَوْمٍ اُولِيْ بَاْسٍ شَدِيْدٍ تُقَاتِلُوْنَهُمْ اَوْ يُسْلِمُوْنَ فَاِنْ تُطِيْعُوْا يُؤْتِكُمُ اللّٰهُ اَجْرًا حَسَنًا وَاِنْ تَتَوَلَّوْا كَمَا تَوَلَّيْتُمْ مِّنْ قَبْلُ يُعَذِّبْكُمْ عَذَابًا اَلِيْمًا ⑰

18．盲人や跛や病人は、戦いに出征せずとも、罪なし。何人であれアッラーとその使徒の命に従う者は、アッラー之を河川流れる楽園に入らしめん。然れども、その背を向ける者は、アッラー痛刑を以て之を懲らしめん。

لَيْسَ عَلَى الْاَعْمٰى حَرَجٌ وَّلَا عَلَى الْاَعْرَجِ حَرَجٌ وَّلَا عَلَى الْمَرِيْضِ حَرَجٌ وَمَنْ يُّطِعِ اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ يُدْخِلْهُ جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ وَمَنْ يَّتَوَلَّ يُعَذِّبْهُ عَذَابًا اَلِيْمًا ⑱

第三項

19．げに信者たちがあの樹の下で汝に忠誠を誓いし時、(注5)アッラーは大いに之を喜べり。故に、アッラーは皆の心中を知りて、

لَقَدْ رَضِيَ اللّٰهُ عَنِ الْمُؤْمِنِيْنَ اِذْ يُبَايِعُوْنَكَ تَحْتَ الشَّجَرَةِ فَعَلِمَ مَا فِيْ قُلُوْبِهِمْ فَاَنْزَلَ السَّكِيْنَةَ

注5　神がイスラム教徒に平安を授けられた事の何よりの証しがある。イスラム教徒は総勢わずか1500名、遠く故郷を離れ、寄るべ無く敵に取り囲まれ、要塞で固められた強力な敵と向い合っていたが、和解案を受け入れず戦いに備えた。

安静を降し、更に手近な勝利を以て之に報いたり。(注6)

عَلَيْهِمْ وَأَثَابَهُمْ فَتْحًا قَرِيبًا ﴿١٩﴾

20．而して信者たちは、夥しい戦利品を得たり。アッラーは偉大にして、賢哲にまします。(注7)

وَمَغَانِمَ كَثِيرَةً يَأْخُذُونَهَا ۗ وَكَانَ اللَّهُ عَزِيزًا حَكِيمًا ﴿٢٠﴾

21．アッラーはお前たちに、夥しい戦利品を手にすることを約束し、はやばやと之を与え、且つお前たちに敵対する者どもの手を抑えたり。(注8)そは、之を以て信者たちへの徴たらしめ、且つお前たちを正しい道に導かんがためなり。

وَعَدَكُمُ اللَّهُ مَغَانِمَ كَثِيرَةً تَأْخُذُونَهَا فَعَجَّلَ لَكُمْ هَٰذِهِ وَكَفَّ أَيْدِيَ النَّاسِ عَنْكُمْ ۚ وَلِتَكُونَ آيَةً لِلْمُؤْمِنِينَ وَيَهْدِيَكُمْ صِرَاطًا مُسْتَقِيمًا ﴿٢١﴾

22．アッラーは他にも、お前たちがいまだ手にせざる勝利を約したるが、(注9)そはアッラーがすでに囲い込みたり。アッラーは全能にまします。

وَأُخْرَىٰ لَمْ تَقْدِرُوا عَلَيْهَا قَدْ أَحَاطَ اللَّهُ بِهَا ۚ وَكَانَ اللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرًا ﴿٢٢﴾

23．もしあの時、不信心者どもがお前たちと戦ったとしても、彼等は必ず敗北せり。その時彼等には、如何なる守護者も援助者もなかりし故に。

وَلَوْ قَاتَلَكُمُ الَّذِينَ كَفَرُوا لَوَلَّوُا الْأَدْبَارَ ثُمَّ لَا يَجِدُونَ وَلِيًّا وَلَا نَصِيرًا ﴿٢٣﴾

24．これが、昔からのアッラーの慣例なり。されば汝は、アッラーの慣例にいささかの変更もなきことを知らん。

سُنَّةَ اللَّهِ الَّتِي قَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلُ ۖ وَلَنْ تَجِدَ لِسُنَّةِ اللَّهِ تَبْدِيلًا ﴿٢٤﴾

25．また、メッカの谷において、お前たちを彼等に勝たしめたる後、お前たちも彼等も抑え、互に手を引かせたるはアッラーなり。

وَهُوَ الَّذِي كَفَّ أَيْدِيَهُمْ عَنْكُمْ وَأَيْدِيَكُمْ عَنْهُمْ بِبَطْنِ مَكَّةَ مِنْ بَعْدِ أَنْ أَظْفَرَكُمْ عَلَيْهِمْ

注6　「手近な勝利」はハイバルにおける勝利を示している。フダイビヤからの帰路、モハッマド預言者は、フダイビヤで彼と行動を共にしたイスラム教徒と共に、ハイバル（ユダヤ人による陰謀の一大温床地）のユダヤ人遠征を行った。

注7　「おびただしい戦利品」とは、前節に約束された「手近な勝利」の結果、イスラム教徒が手にしたし大きな利益を指すようだ。

注8　当節に述べられた「戦利品」は、アラビアの隣国ハイバルで勝利を治めた後、イスラム教徒が手にした戦利品を指しているようだ。しかし、「はやばやとこれを与え」という言葉は、明らかにハイバルで手に入れた戦利品を指している。「敵対する者どもの手を抑えたり。」という語は、フダイビヤ協定が、イスラム教徒に平和の時代の到来を告げるものである事を示している。

وَكَانَ اللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ بَصِيْرًا ﴿٢٥﴾

アッラーはお前たちの所業のすべてをみそなはし給う。（注 10）

هُمُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَصَدُّوْكُمْ عَنِ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ
وَالْهَدْيَ مَعْكُوْفًا اَنْ يَّبْلُغَ مَحِلَّهٗ ۚ وَلَوْلَا رِجَالٌ
مُّؤْمِنُوْنَ وَنِسَآءٌ مُّؤْمِنٰتٌ لَّمْ تَعْلَمُوْهُمْ اَنْ
تَطَـُٔوْهُمْ فَتُصِيْبَكُمْ مِّنْهُمْ مَّعَرَّةٌ ۢ بِغَيْرِ عِلْمٍ ۚ
لِيُدْخِلَ اللّٰهُ فِيْ رَحْمَتِهٖ مَنْ يَّشَآءُ ۚ لَوْ تَزَيَّلُوْا
لَعَذَّبْنَا الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْهُمْ عَذَابًا اَلِيْمًا ﴿٢٦﴾

26. 彼等は不信心者にして、お前たちの聖殿参詣を阻みたるばかりか、供物が犠牲所に達するを妨げたる者なり。メッカの中にも、お前たちが知らぬあまたの男女の信者あり。お前たちがそれ等信者を踏みにじって、知らぬまに罪を犯すおそれなかりせば、(注 11) アッラーはお前たちに戦いを許可せり。されどアッラーは、自分の欲する者にその慈悲を垂れんがため、お前たちを抑えたり。もし彼等が明らかに不信心者どもと分れて住みたれば、われらは彼等不信心者輩を痛刑を以て懲らしめたり。

اِذْ جَعَلَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا فِيْ قُلُوْبِهِمُ الْحَمِيَّةَ حَمِيَّةَ
الْجَاهِلِيَّةِ فَاَنْزَلَ اللّٰهُ سَكِيْنَتَهٗ عَلٰى رَسُوْلِهٖ وَ
عَلَى الْمُؤْمِنِيْنَ وَاَلْزَمَهُمْ كَلِمَةَ التَّقْوٰى وَكَانُوْٓا
اَحَقَّ بِهَا وَاَهْلَهَا ۚ وَكَانَ اللّٰهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمًا ﴿٢٧﴾

27. 不信心者どもがその心に驕暴を、すなわち無道時代の憤怒を宿せし時、アッラーはその使徒と信者たちの上に安静を降し、彼等に正義の原則を堅持せしめたり。そは彼等がそれを受けるに価し、またそれに叶えるが故なり。アッラーは一切を知悉し給う。

第四項

لَقَدْ صَدَقَ اللّٰهُ رَسُوْلَهُ الرُّءْيَا بِالْحَقِّ ۚ لَتَدْخُلُنَّ
الْمَسْجِدَ الْحَرَامَ اِنْ شَآءَ اللّٰهُ اٰمِنِيْنَ ۙ مُحَلِّقِيْنَ
رُءُوْسَكُمْ وَمُقَصِّرِيْنَ ۙ لَا تَخَافُوْنَ ۗ فَعَلِمَ مَا لَمْ
تَعْلَمُوْا فَجَعَلَ مِنْ دُوْنِ ذٰلِكَ فَتْحًا قَرِيْبًا ﴿٢٨﴾

28. げにアッラーはその使徒のために、「アッラー欲しなば、お前たちは頭を剃り、また髪を短く刈りて、恐れることなく安全に聖殿に入るを得ん」との夢を実現せり。(注 12) すなわちアッラーはお前たちが知らざることを知る。アッラーはこの事の外にも、お前たちのために手近な勝利を定めたり。

注 9　当節はイスラム教徒がハイバルでの勝利に次いで今一つ勝利を治めると預言している。

注 10　イスラム教徒が当時置かれていた状況、及び広範に渡る成果を考慮すれば、フダイビヤ協定は実に大きな勝利であった。この言葉は又、イスラム教徒がフダイビヤに来る前、神が彼等に授けられた様々な勝利をも指すといえる。つまり、バドルにおける勝利。難局にあったモハッマド預言者とイスラム教徒が、オハドからメディアに無事帰還した事。"堀の戦い"で大打撃を受け、イスラム教徒を崩壊しようとするメッカ人の陰謀がくじかれた事等。ある意味で、これ等は全て不信心者に対する信者の勝利であった。

注 11　メッカはイスラム教徒の中心地であり、もし逃亡が起きていれば、イスラム軍は、知らずに信者仲間を殺し、それにより彼等自身の大儀を傷つけ、非難を浴びていたであろう。

注 12　当節は、モハッマド預言者が仲間と共にカーバの巡回を行なう自らの姿を見た幻想について述べている。彼は小巡礼（ウムラ）の為、約 1500 の仲間とメッカへ向った。モハッマド預言者の幻想は真実であり、イ

29．アッラーこそは嚮導（きょうどう）と真実の教えを持たせてその使徒を遣わしたる御方、こはすべての宗教の上に之（これ）を勝利させんがためなり。（注13）アッラーは証人として、万全なり。

هُوَ الَّذِيْٓ اَرْسَلَ رَسُوْلَهٗ بِالْهُدٰى وَدِيْنِ الْحَقِّ لِيُظْهِرَهٗ عَلَى الدِّيْنِ كُلِّهٖ ۭ وَكَفٰى بِاللّٰهِ شَهِيْدًا ۝٢٩

30．ムハンマドはアッラーの使徒なり。彼と偕（とも）にある者たちは、不信心者に対しては容赦なく、信者同志では、優しく親切なり。（注14）汝は、彼等が平身低頭（へいしんていとう）し、アッラーの恩寵と嘉納（かのう）とを求めるを見ん。彼等の印（しるし）はその面上にあり。そは叩頭（こうとう）の痕（あと）。こは律法（トーラ）における彼等の描写なり。また福音（ふくいん）における描写も、新芽が芽吹き、力を増し、丈夫な茎に成長し、種まく人を喜ばせる一粒の種の成育の如しとある。種まく人々の喜ぶありさまが、また不信心者どもの憤怒の原因（たね）とならん。アッラーは信じて善行を積（つ）む人々に、宥恕（ゆうじょ）と素晴らしい報奨とを約束せり。

مُحَمَّدٌ رَّسُوْلُ اللّٰهِ ۭ وَالَّذِيْنَ مَعَهٗٓ اَشِدَّاۗءُ عَلَي الْكُفَّارِ رُحَمَاۗءُ بَيْنَهُمْ تَرٰىهُمْ رُكَّعًا سُجَّدًا يَّبْتَغُوْنَ فَضْلًا مِّنَ اللّٰهِ وَرِضْوَانًا ۡ سِيْمَاهُمْ فِيْ وُجُوْهِهِمْ مِّنْ اَثَرِ السُّجُوْدِ ۭ ذٰلِكَ مَثَلُهُمْ فِي التَّوْرٰىةِ ٻ وَمَثَلُهُمْ فِي الْاِنْجِيْلِ ۾ كَزَرْعٍ اَخْرَجَ شَطْــــَٔهٗ فَاٰزَرَهٗ فَاسْتَغْلَظَ فَاسْتَوٰى عَلٰي سُوْقِهٖ يُعْجِبُ الزُّرَّاعَ لِيَغِيْظَ بِهِمُ الْكُفَّارَ ۭ وَعَدَ اللّٰهُ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ مِنْهُمْ مَّغْفِرَةً وَّاَجْرًا عَظِيْمًا ۝٣٠

スラム教徒は必ずカーバに入り、小巡礼の儀式を執り行なうであろうと当章に明示されているにもかかわらず、モハッマド預言者はクライシュに、カーバに入る事を拒まれた。モハッマド預言者の旅は、先述の他の実質的な目的をかなえるだけでなく、偉大な神の預言者ですら、時に、その幻想の解釈を誤る事の重大な前例となった。

注13　当節は、イスラム教が最終的に他の全ての宗教に勝ったとはっきりと預言する。

注14　これは、世にその足跡を残そうとする、進歩的で裕福な人の二つの本質である。クルアーンの他所（5：55）に、イスラム教徒は信者に優しく謙虚であり、不信心者に厳しく決然と振る舞うと記されている。

سُورَةُ الْحُجُرَاتِ مَدَنِيَّةٌ

アル・フジュラート
(メディナ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ①

2．汝等信徒たちよ、アッラーとその使徒の面前で勝手な振舞をするなかれ。(注1)アッラーを畏れよ。げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

يَٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ ءَامَنُوا لَا تُقَدِّمُوا بَيْنَ يَدَيِ اللَّهِ وَرَسُولِهِۦ وَاتَّقُوا اللَّهَ إِنَّ اللَّهَ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ②

3．汝等信徒たちよ、お前たちが互に声高に喋る如く、お前たちの声を預言者の声より高く揚げるなかれ、お前たちの所業が知らぬまに無に帰せざるために。(注2)

يَٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ ءَامَنُوا لَا تَرْفَعُوٓا أَصْوَٰتَكُمْ فَوْقَ صَوْتِ النَّبِيِّ وَلَا تَجْهَرُوا لَهُۥ بِالْقَوْلِ كَجَهْرِ بَعْضِكُمْ لِبَعْضٍ أَن تَحْبَطَ أَعْمَٰلُكُمْ وَأَنتُمْ لَا تَشْعُرُونَ ③

4．げにアッラーの使徒の前でその声を低める者は、(注3)アッラーがその者の心を正しく浄化せり。彼等には宥恕と素晴らしい報奨あり。

إِنَّ الَّذِينَ يَغُضُّونَ أَصْوَٰتَهُمْ عِندَ رَسُولِ اللَّهِ أُولَٰٓئِكَ الَّذِينَ امْتَحَنَ اللَّهُ قُلُوبَهُمْ لِلتَّقْوَىٰ لَهُم مَّغْفِرَةٌ وَأَجْرٌ عَظِيمٌ ④

5．汝が室内にいる時、外から大声で汝を呼ぶ者、そのような者は概ね思慮なき者なり。(注4)

إِنَّ الَّذِينَ يُنَادُونَكَ مِن وَرَآءِ الْحُجُرَٰتِ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْقِلُونَ ⑤

6．汝が出て来るまでじっと待つなら、その方が彼等のためにはるかに良し。されどアッラーは、寛大にして、慈悲深くまします。

وَلَوْ أَنَّهُمْ صَبَرُوا حَتَّىٰ تَخْرُجَ إِلَيْهِمْ لَكَانَ خَيْرًا لَّهُمْ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ⑥

注1　信者はモハッマド預言者に敬意を払い、彼に全面的に従い、彼の命令を先取りしたり己れの欲望を彼の意志よりも優先させたりしてはならないと命ぜられている。

注2　当節は、モハッマド預言者に最大の敬意を払う様に強調している。イスラム教徒は、モハッマド預言者の前で大声で話したり、彼に声高く話しかけてはならない。この様な物腰は単に不作法なだけでなく、指導者に敬意を払わないといった相手の品位を傷付ける行為とみなされる。

注3　モハッマド預言者の前での物静かな語り口は、彼への敬意や自分自身の謙虚さを表し、声高な話し声は傲慢を示す。

注4　モハッマド預言者に屋外より大声で呼びかける事は、彼の私生活に立ち入る事となり、彼自身やその貴重な時を尊重しない表れである。唯不作法な者のみが、その様な愚かな振る舞いをする。

7．汝ら信徒たちよ、よこしまな人間がお前たちに何か情報をもたらしたなら、その真偽を充分に確かめよ。そはお前たちが知らずに或る民を害し、後で己が行為を悔むことないように。（注５）

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِنْ جَاءَكُمْ فَاسِقٌ بِنَبَإٍ فَتَبَيَّنُوا أَنْ تُصِيبُوا قَوْمًا بِجَهَالَةٍ فَتُصْبِحُوا عَلَىٰ مَا فَعَلْتُمْ نَادِمِينَ ۝٧

8．お前たちの中に、アッラーの使徒あることを知れ。彼ムハンマドもし多くの事柄においてお前たちの意思（かんがえ）に従うならば、お前たちは必ずめんどうな事になる。（注６）アッラーはお前たちに信仰を慕わせ、気に入らせ、且つ無信仰と邪悪と不従順を憎ましむ。かくなす者が正しい道を歩む者、

وَاعْلَمُوا أَنَّ فِيكُمْ رَسُولَ اللَّهِ ۚ لَوْ يُطِيعُكُمْ فِي كَثِيرٍ مِنَ الْأَمْرِ لَعَنِتُّمْ وَلَٰكِنَّ اللَّهَ حَبَّبَ إِلَيْكُمُ الْإِيمَانَ وَزَيَّنَهُ فِي قُلُوبِكُمْ وَكَرَّهَ إِلَيْكُمُ الْكُفْرَ وَالْفُسُوقَ وَالْعِصْيَانَ ۚ أُولَٰئِكَ هُمُ الرَّاشِدُونَ ۝٨

9．アッラーの慈悲と恩寵によりて。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

فَضْلًا مِنَ اللَّهِ وَنِعْمَةً ۚ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ۝٩

10．もし信者同志が二派に分れて争わば、汝、彼等の間に入って仲裁せよ。而（しか）る後、彼等の一方が違反する場合は、アッラーの命令にたち帰るまで違反者と戦え。もし彼等がたち帰えらば、公明正大に両者の仲を調停せよ。（注７）げにアッラーは正しい行いを愛す。

وَإِنْ طَائِفَتَانِ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ اقْتَتَلُوا فَأَصْلِحُوا بَيْنَهُمَا ۖ فَإِنْ بَغَتْ إِحْدَاهُمَا عَلَى الْأُخْرَىٰ فَقَاتِلُوا الَّتِي تَبْغِي حَتَّىٰ تَفِيءَ إِلَىٰ أَمْرِ اللَّهِ ۚ فَإِنْ فَاءَتْ فَأَصْلِحُوا بَيْنَهُمَا بِالْعَدْلِ وَأَقْسِطُوا ۖ إِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ الْمُقْسِطِينَ ۝١٠

11．げに信者はみな兄弟なり。されば、お前たち慈悲に浴せんがために、兄弟融和して

إِنَّمَا الْمُؤْمِنُونَ إِخْوَةٌ فَأَصْلِحُوا بَيْنَ أَخَوَيْكُمْ

注５　メッカ陥落後、アラビアのほぼ全域がイスラムの配下に下ったが、中には未だこの新しい秩序を受け入れず、断固とイスラム教徒と戦い、無惨な結果を迎えた者達もあった。又、隣接するビザンチン・イラン両帝国も、彼等の権力・威信に対する挑戦に気付いた。彼等は、この挑戦がアラビアで起こり、イスラム教との戦いが避けられないと考えた。それ故、この命令は必要であった。戦争が迫り、敵軍の動きに対し、機敏な行動が必要とされる時ですら、戦時下にはびこる流言を信じてはならないと、イスラム教徒は命じられている。彼等は十分に試され、行動が起こされる前に、彼等の正しさが確かめられなければならない。

注６　モハッマド預言者は、イスラム教徒に関する諸問題の助言を求めている様だが、必ずしも、神の御指導を受ける時の様に、その助言に従う必要はない。それは、彼が最終的な責任を負っているからである。イスラム教徒は処所に、以上の事を告げられている。

注７　イスラム国家の団結にとり大きな脅威となるのは、イスラム教徒間に生じる論争である。当節は、その様な論争を調停する効果的な方策が示されている。それは元来イスラム団体間の紛争処理を扱ってたものであるが、国家及び国際組織が同盟を結ぶ際の原則ともなり得る。当節は、国際平和維持に関し、適切な原則を提示している。

وَاتَّقُوا اللّٰهَ لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ١١

アッラーを畏れ敬え。(注８)

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا يَسْخَرْ قَوْمٌ مِّنْ قَوْمٍ عَسٰٓى
اَنْ يَّكُوْنُوْا خَيْرًا مِّنْهُمْ وَلَا نِسَآءٌ مِّنْ نِّسَآءٍ عَسٰٓى
اَنْ يَّكُنَّ خَيْرًا مِّنْهُنَّ ۚ وَلَا تَلْمِزُوْٓا اَنْفُسَكُمْ وَلَا
تَنَابَزُوْا بِالْاَلْقَابِ ۗ بِئْسَ الِاسْمُ الْفُسُوْقُ بَعْدَ
الْاِيْمَانِ ۚ وَمَنْ لَّمْ يَتُبْ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الظّٰلِمُوْنَ ١٢

12．汝等信徒たちよ、他人を嘲るなかれ。相手側が優るかも知れぬ。女の場合にも、ほかの女を嘲るなかれ。相手側が優るかも知れぬ。また、互に中傷するなかれ。仇名で呼び合うなかれ。信仰を告白した後の悪評は、不善なり。而して之を悔い改めざる徒輩は、悪人なり。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوا اجْتَنِبُوْا كَثِيْرًا مِّنَ الظَّنِّ ۖ اِنَّ
بَعْضَ الظَّنِّ اِثْمٌ وَّلَا تَجَسَّسُوْا وَلَا يَغْتَبْ
بَّعْضُكُمْ بَعْضًا ۗ اَيُحِبُّ اَحَدُكُمْ اَنْ يَّأْكُلَ لَحْمَ
اَخِيْهِ مَيْتًا فَكَرِهْتُمُوْهُ ۗ وَاتَّقُوا اللّٰهَ ۗ اِنَّ اللّٰهَ
تَوَّابٌ رَّحِيْمٌ ١٣

13．汝等信徒たちよ、やたらと猜疑するなかれ。猜疑も場合によっては罪なり。また、互に探り合い、陰口をきくことなかれ。お前たちのうち誰が死せる兄弟の肉を食するを欲すや？　お前たちは必ず之を忌み嫌う。アッラーを畏れ敬え。げにアッラーは幾たびとなく憐れみに翻り、慈悲深くまします。

يٰٓاَيُّهَا النَّاسُ اِنَّا خَلَقْنٰكُمْ مِّنْ ذَكَرٍ وَّاُنْثٰى
وَجَعَلْنٰكُمْ شُعُوْبًا وَّقَبَآئِلَ لِتَعَارَفُوْا ۚ اِنَّ
اَكْرَمَكُمْ عِنْدَ اللّٰهِ اَتْقٰكُمْ ۗ اِنَّ اللّٰهَ عَلِيْمٌ
خَبِيْرٌ ١٤

14．人びとよ、われらは一人の男と一人の女からお前たちを創り、而して之を部族と支族とに分ちたり。これお前たちをして互に認識せしめんがためなり。アッラーの目に最も高貴なる者は、最も公正な者なり。げにアッラーはすべてを知悉し、あらゆることに通暁し給う。

قَالَتِ الْاَعْرَابُ اٰمَنَّا ۗ قُلْ لَّمْ تُؤْمِنُوْا وَلٰكِنْ
قُوْلُوْٓا اَسْلَمْنَا وَلَمَّا يَدْخُلِ الْاِيْمَانُ فِيْ قُلُوْبِكُمْ
وَاِنْ تُطِيْعُوا اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ لَا يَلِتْكُمْ مِّنْ اَعْمَالِكُمْ

15．砂漠のベドウィンたちは云う、「我等は信ずる」と。云え、「お前たちは未だ信ぜず。イスラームを受け入れはしたが、真の信仰は未だその心に浸みわたらざるなり」と。されどお前たち、アッラーとその使徒に従うならば、アッラーは、お前たちの努力をい

注８　この節は、イスラム教徒の親交について特に述べている。もし、二人のイスラム教徒、あるいは二つのイスラム団体に争いが生じた時、他の信者は、両者の調停の為、直ちに行動せねばならないと命じられている。イスラムの真の強さは、階級・人種・国の違いを越えた、この兄弟愛の理想にある。

ささかも減じざるべし。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。（注９）

شَيْـًٔا ۚ إِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿١٥﴾

16．信者とは、ただアッラーとその使徒を信じ、決して疑わず、財産と生命を擲って（なげう）アッラーの道のために奮闘する者なり。かかる者こそ真（まこと）の信者なり。

إِنَّمَا الْمُؤْمِنُوْنَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا بِاللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ ثُمَّ
لَمْ يَرْتَابُوْا وَجٰهَدُوْا بِاَمْوَالِهِمْ وَاَنْفُسِهِمْ فِيْ
سَبِيْلِ اللّٰهِ ۭ اُولٰۗىِٕكَ هُمُ الصّٰدِقُوْنَ ﴿١٦﴾

17．云え、「お前たちは己れの宗教をアッラーに教えんとするか、天地間の一切を知り、あらゆることに通暁せる御方に？」と。

قُلْ اَتُعَلِّمُوْنَ اللّٰهَ بِدِيْنِكُمْ ۭ وَاللّٰهُ يَعْلَمُ مَا فِي
السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ ۭ وَاللّٰهُ بِكُلِّ شَيْءٍ
عَلِيْمٌ ﴿١٧﴾

18．彼等はイスラームを信奉したことで、汝に恩を施したる如く思う。云え、「イスラームを信奉したからといって、恩にきせるなかれ。お前たちに恩を施せるは、むしろアッラーなり。お前たちを真（まこと）の信仰に導きたるが故に、もしお前たちが正直な者なら」と。

يَمُنُّوْنَ عَلَيْكَ اَنْ اَسْلَمُوْا ۭ قُلْ لَّا تَمُنُّوْا عَلَيَّ اِسْلَامَكُمْ ۚ
بَلِ اللّٰهُ يَمُنُّ عَلَيْكُمْ اَنْ هَدٰىكُمْ لِلْاِيْمَانِ اِنْ
كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ﴿١٨﴾

19．げにアッラーは天地（あめつち）の秘奥（ひおう）を知る。アッラーはお前たちの所業をみそなはし給う。

اِنَّ اللّٰهَ يَعْلَمُ غَيْبَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۭ وَاللّٰهُ
بَصِيْرٌۢ بِمَا تَعْمَلُوْنَ ﴿١٩﴾

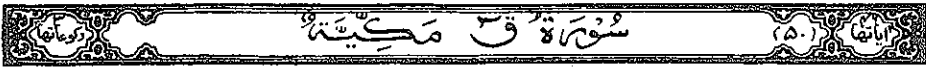
注９　イスラム教徒は全て、イスラム同胞主義の中心的役割を果たす。イスラム教は、都市部の文明人に対すると同じく、砂漠の非文明人に対しても同等の権利を与える。唯、後者は、イスラム教義を学び、それを生活に取り入れる為には、一層の努力を要すると告げられている。

سُوْرَةُ قٓ مَكِّيَّةٌ

クァーフ

（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．カーフ。（注１）栄光あるクルアーンにかけて誓う。

قٓ وَالْقُرْاٰنِ الْمَجِيْدِ ②

3．彼等は、自分たちの中から警告者が現れ来たことに驚く。不信心者どもは云う、「こは奇怪なるかな！

بَلْ عَجِبُوْٓا اَنْ جَآءَهُمْ مُّنْذِرٌ مِّنْهُمْ فَقَالَ الْكٰفِرُوْنَ هٰذَا شَيْءٌ عَجِيْبٌ ③

4．なんとな！　死して土に化したる後、我等甦るべしとな？　そはなす能わざる遙遠なる復帰なり」と。

ءَاِذَا مِتْنَا وَكُنَّا تُرَابًا ۚ ذٰلِكَ رَجْعٌ ۢ بَعِيْدٌ ④

5．われらは大地がどれほど彼等の軀を減らすかを知る。われらが許にすべてを記録する帳簿あり。

قَدْ عَلِمْنَا مَا تَنْقُصُ الْاَرْضُ مِنْهُمْ ۚ وَعِنْدَنَا كِتٰبٌ حَفِيْظٌ ⑤

6．彼等は真理が下された時、之を拒みたれば、いま混乱の状態にあるなり。

بَلْ كَذَّبُوْا بِالْحَقِّ لَمَّا جَآءَهُمْ فَهُمْ فِيْٓ اَمْرٍ مَّرِيْجٍ ⑥

7．彼等は頭上の天を仰ぎ見て思わざるか、われらが如何にそれを創り、飾り立てたか、またそこに毛ほどのきずもないことを？

اَفَلَمْ يَنْظُرُوْٓا اِلَى السَّمَآءِ فَوْقَهُمْ كَيْفَ بَنَيْنٰهَا وَزَيَّنّٰهَا وَمَا لَهَا مِنْ فُرُوْجٍ ⑦

8．また大地を、われら之をうち拡げて、その上にゆるぎない山々を据え、もろもろの美しき草木を成長せしめたり、

وَالْاَرْضَ مَدَدْنٰهَا وَاَلْقَيْنَا فِيْهَا رَوَاسِيَ وَاَنْۢبَتْنَا فِيْهَا مِنْ كُلِّ زَوْجٍۢ بَهِيْجٍ ⑧

9．そは神に頼るすべての僕等への啓蒙並びに訓戒として。（注２）

تَبْصِرَةً وَّذِكْرٰى لِكُلِّ عَبْدٍ مُّنِيْبٍ ⑨

注１　万能の主。

注２　自然界の存在理由を仮定する事は、理に適っている。神が万物の創造主であられるとの概念は、起源及び目的を完全に解き明かす。創造に目的があるということは、死後に生のある事を示す。肉体が滅びれば魂も死すという概念は、神の計画・英知及び宇宙創造における神の目的に反するものだからである。

10．またわれらは、天より祝福を以て水を降らせ、これによりて果樹園と稔り多き穀物とを育成す。

ونزلنا من السماء ماء مبركا فانبتنا به جنت وحب الحصيد ﴿١٠﴾

11．また鈴生りの実をつけた丈高き棗椰子の樹も、

والنخل بسقت لها طلع نضيد ﴿١١﴾

12．われらが僕等の糧として。さればわれらは死せる大地を生き返らしむ。復活もまたかくの如し。(注３)

رزقا للعباد واحيينا به بلدة ميتا كذلك الخروج ﴿١٢﴾

13．彼等以前に、ノアの民は真理を拒みたり。ラッスの民※やサムード族もまた然り。
※アラブの古い部族

كذبت قبلهم قوم نوح واصحب الرس وثمود ﴿١٣﴾

14．アード、ファラオ、並びにロトの徒輩も。

وعاد وفرعون واخوان لوط ﴿١٤﴾

15．森の住人どもやトッバアの民も。彼等はいずれも己が使徒を拒みたるが故に、われらの威嚇せる罰がその身にふりかかりたり。

واصحب الايكة وقوم تبع كل كذب الرسل فحق وعيد ﴿١٥﴾

16．最初の創造でわれら倦み疲れたるや？　然らず、されど彼等は新らしき創造について疑惑を抱く。(注４)

افعيينا بالخلق الاول بل هم في لبس من خلق جديد ﴿١٦﴾

第二項

17．われらは確かに人間を創造せり。さればわれらは、人間の魂が彼に囁くことを知る。われらは人間の頸静脈よりもその人間に近し。

ولقد خلقنا الانسان ونعلم ما توسوس به نفسه ونحن اقرب اليه من حبل الوريد ﴿١٧﴾

18．二天使が左右に坐して人の行為を記録する時、

اذ يتلقى المتلقين عن اليمين وعن الشمال قعيد ﴿١٨﴾

19．彼は一言も発せざるに、彼の傍にはすでにそれを記録せんと準備を整えたる監視の天使あり。

ما يلفظ من قول الا لديه رقيب عتيد ﴿١٩﴾

注３　神は、天より雨を降らせ、乾いた地を肥やし、新たな息吹きをもたらし、地上にあらゆる種類の花や実をお育てになる。同様に、神は、死後の人間に新たな生命をお与えになる事ができ、そうなさるであろう。

注４　これ等の節にある「創造」は、文字通りの意味の他、モハッマド預言者が人々にもたらした魂の目覚めを示す。

20．而(しか)してそのうち、死の昏睡に臨(のぞ)むは必定なり。「こはお前たちが常々避けんと欲したることなり」

وَجَآءَتْ سَكْرَةُ الْمَوْتِ بِالْحَقِّ ذٰلِكَ مَا كُنْتَ مِنْهُ تَحِيْدُ ٢٠

21．やがて喇叭(ラッパ)が吹き鳴らされん。「こは約束の日なり」

وَنُفِخَ فِي الصُّوْرِ ذٰلِكَ يَوْمُ الْوَعِيْدِ ٢١

22．どの魂も之(これ)を駆(か)り、且つ立証する天使に伴われて来たり進まん。

وَجَآءَتْ كُلُّ نَفْسٍ مَّعَهَا سَآئِقٌ وَّشَهِيْدٌ ٢٢

23．そこでわれらは云わん、「汝はこの事を軽視せり。されど今、われら汝の目隠しをはずしたれば、今日汝の視力は鋭し」と。

لَقَدْ كُنْتَ فِيْ غَفْلَةٍ مِّنْ هٰذَا فَكَشَفْنَا عَنْكَ غِطَآءَكَ فَبَصَرُكَ الْيَوْمَ حَدِيْدٌ ٢٣

24．而(しか)して、彼の同伴者の天使は、云わん、「この通り記録はすでに整えり」と。

وَقَالَ قَرِيْنُهٗ هٰذَا مَا لَدَيَّ عَتِيْدٌ ٢٤

25．われらは彼の二人の天使に云わん、「汝等両名、真理に敵対したすべての忘恩の徒を地獄に投ぜよ、

اَلْقِيَا فِيْ جَهَنَّمَ كُلَّ كَفَّارٍ عَنِيْدٍ ٢٥

26．善を阻(はば)む者、罪とがを犯す者、真理に疑心を抱ける者、

مَّنَّاعٍ لِّلْخَيْرِ مُعْتَدٍ مُّرِيْبٍ ٢٦

27．並びにアッラーの他に他神(あだしがみ)を奉ずる者を。汝等両名にてその者をば、あのもの凄い責苦の中に投げ込め」と。

اِلَّذِيْ جَعَلَ مَعَ اللّٰهِ اِلٰهًا اٰخَرَ فَاَلْقِيٰهُ فِي الْعَذَابِ الشَّدِيْدِ ٢٧

28．彼の仲間の悪魔(サタン)は云わん、「主よ、彼を背かしめたるは我に非ず、彼自身が勝手にどこまでも迷いたり」と。（注５）

قَالَ قَرِيْنُهٗ رَبَّنَا مَآ اَطْغَيْتُهٗ وَلٰكِنْ كَانَ فِيْ ضَلٰلٍ بَعِيْدٍ ٢٨

29．神は云わん、「わが面前で云い争うなかれ。われらはあらかじめお前たちに警告せり。

قَالَ لَا تَخْتَصِمُوْا لَدَيَّ وَقَدْ قَدَّمْتُ اِلَيْكُمْ بِالْوَعِيْدِ ٢٩

30．わが宣言は不変なり。而(しか)してわれは、わが僕等(しもべら)に決して不公平なる者に非ず」と。

مَا يُبَدَّلُ الْقَوْلُ لَدَيَّ وَمَآ اَنَا بِظَلَّامٍ لِّلْعَبِيْدِ ٣٠

第三項

31．その日、われらは地獄に問わん、「充満せるか？」と。（注６）すると、地獄は答えん、

يَوْمَ نَقُوْلُ لِجَهَنَّمَ هَلِ امْتَلَاْتِ وَتَقُوْلُ هَلْ

注５　悪事を働く者がその行為の結末を突き付けられた時、責任を他人に転嫁しようとするのは、人間の性(さが)だ。この不信心者の心の有り様が当節に述べられている。彼は、己れの罪をサタンのせいだと思うだろう。

注６　この対話は比喩である。地獄は処所で擬人化され、その口を通して自らの状況を表しているが、実際

「まだ来る者あるか？」と。（注7）

من مزيد ﴿٣١﴾

32．一方、義しい者には楽園が近くにもたらされ、もはや遠からず。（注8）

وأزلفت الجنة للمتقين غير بعيد ﴿٣٢﴾

33．而して、云われん、「こはお前たちに約束されたるものなり。すなわち、常日頃神に頼り、慎重な行いを旨とし、

هذا ما توعدون لكل أواب حفيظ ﴿٣٣﴾

34．密かに慈悲なる神を畏敬し、悔悟の心もて神前に出でたる者たちのために。

من خشي الرحمن بالغيب وجاء بقلب منيب ﴿٣٤﴾

35．汝等安じてここに入れ。こは永遠の日なり」と。（注9）

ادخلوها بسلام ذلك يوم الخلود ﴿٣٥﴾

36．彼等はそこで、もろもろの欲するものを得ん。われらが許には更に彼等への加増あり。（注10）

لهم ما يشاءون فيها ولدينا مزيد ﴿٣٦﴾

37．われらは彼等以前に、彼等より強大なる如何に多くの世代を滅ぼせしてことか。天罰下るや、彼等逃れんと努めたり。然れども、何処に避難所ありたるか？（注11）

وكم أهلكنا قبلهم من قرن هم أشد منهم بطشا فنقبوا في البلاد هل من محيص ﴿٣٧﴾

38．げにこの中には、心ある者や耳傾けて謹聴する者への訓戒あり。

إن في ذلك لذكرى لمن كان له قلب أو ألقى السمع وهو شهيد ﴿٣٨﴾

に語っている訳ではない。あるいは、その事に関しては話せるのであろう（擬人法は、4：12にも使われている。）。そこには、天地が進んで神の法に従うと述べたと記されている。擬人法は、アラビア語の特色であり美点の一つである。当章57章及び18章78節も参照の事。

注7　この言葉は、人間には際限なく罪を犯す可能性があり、又現世の快楽に対する飽くなき欲望を有すると示している。この為、人は地獄に落ちるのである。

注8　心の病いを除く為に、今後増々多くの人が地獄へ落とされると前節で述べられたが、当節は、天国が正義ある者・神を畏れる者によく近くなると告げている。

注9　クルアーンによれば、罰が如何に恐ろしいものであろうとも、地獄は一時の懲治の場、それに引き換え、天国は永遠の住み処、その祝福は終り無きものである（11：109）。

注10　高潔な人々は天国において、その心を満たされるであろう。しかし、人の望みは限られており、求める以上の、また値するより遙かに多くのものを与えられるであろう。

注11　本文の言葉は文字通り解釈すれば、「身を守る為に地下に潜った」となるが、爆撃を避ける為の現代の地下壕を指してもいる様だ。

39. げにわれらは、天地(あめつち)並びにその間にあるすべてのものを六日のうちに（注 12）創造せるも、いささかの疲労も覚えざりき。（注 13）

وَلَقَدْ خَلَقْنَا السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا فِيْ سِتَّةِ اَيَّامٍ ۖ وَّمَا مَسَّنَا مِنْ لُّغُوْبٍ ﴿٣٩﴾

40. されば汝、彼等になんといわれようとも耐え忍び、日の出前と日没前に主の栄光を讃美せよ。

فَاصْبِرْ عَلٰى مَا يَقُوْلُوْنَ وَسَبِّحْ بِحَمْدِ رَبِّكَ قَبْلَ طُلُوْعِ الشَّمْسِ وَقَبْلَ الْغُرُوْبِ ﴿٤٠﴾

41. また夜間にも、定められた礼拝の後に主を讃美せよ。

وَمِنَ الَّيْلِ فَسَبِّحْهُ وَاَدْبَارَ السُّجُوْدِ ﴿٤١﴾

42. 而(しか)して耳傾けよ、召集者が（注 14）近いところから（注 15）呼ぶその時に。

وَاسْتَمِعْ يَوْمَ يُنَادِ الْمُنَادِ مِنْ مَّكَانٍ قَرِيْبٍ ﴿٤٢﴾

43. その日彼等は、実際に一声の響くを聞かん。（注 16）そは墓より出で来る日なり。

يَّوْمَ يَسْمَعُوْنَ الصَّيْحَةَ بِالْحَقِّ ۗ ذٰلِكَ يَوْمُ الْخُرُوْجِ ﴿٤٣﴾

44. げにわれらこそは生を与え、死なしめる者なり。而(しか)してわれらの許(もと)こそ、終(つい)の帰所(すみか)なり。

اِنَّا نَحْنُ نُحْيٖ وَنُمِيْتُ وَاِلَيْنَا الْمَصِيْرُ ﴿٤٤﴾

45. 彼等の上で大地が割れ裂けるその日、彼等はあわてふためきて、出で来たらん。（注 17）こはわれらにとりてはいと易き召集なり。

يَوْمَ تَشَقَّقُ الْاَرْضُ عَنْهُمْ سِرَاعًا ۗ ذٰلِكَ حَشْرٌ عَلَيْنَا يَسِيْرٌ ﴿٤٥﴾

46. われらは彼等のいうことをよく承知す。ともあれ汝は、彼等に強(し)いる立場に非ず。されば、わが警告を恐れる者に、クルアーンによって訓戒せよ。

نَحْنُ اَعْلَمُ بِمَا يَقُوْلُوْنَ وَمَاۤ اَنْتَ عَلَيْهِمْ بِجَبَّارٍ ۚ فَذَكِّرْ بِالْقُرْاٰنِ مَنْ يَّخَافُ وَعِيْدِ ﴿٤٦﴾

注 12　41：10－13 参照。

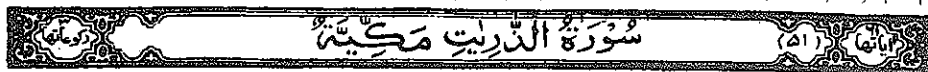
注 13　聖書で負わせられた不道徳の汚名を、神の高尚な預言者から取り除くだけでなく、神の尊厳・神聖と相矛盾する欠点を神より切り離しているのが、クルアーンの特徴である。聖書には、「神は第七日目に、なさっていた全ての業を休まれた」（創世記 2：2）とあるが、クルアーンに、神がお疲れになったという記述は何処にもない。

注 14　「召集者」とはモハッマド預言者の事を指しているようだ。次の数節には、彼の指図のままに、いわばその墓場より出でた人々に、彼の手で魂の再生がもたらされたと書かれてあり、この内容は、前記の推測を裏付けている。

注 15　「近いところから」とは又、モハッマド預言者の声が荒野や遠隔の地にはまだ届いていないが、やがては受け入れられる事を示している。

注 16　「一声」とは、モハッマド預言者による大きな声で呼びかけという意味でもある。

注 17　当章に書かれた再生は、クルアーンがもたらしているものである。

سُوْرَةُ الذّٰرِيٰتِ مَكِّيَّةٌ (٥١)

アル・ザーリヤート

(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。　بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ (١)

2．種をまき散らす風にかけて、(注1)　وَالذّٰرِيٰتِ ذَرْوًا (٢)

3．荷を運ぶ雲にかけて、　فَالْحٰمِلٰتِ وِقْرًا (٣)

4．静かに流れる川にかけて、　فَالْجٰرِيٰتِ يُسْرًا (٤)

5．われらの命を奉じて之(これ)を頒布(はんぷ)する諸天使にかけて、(注2)　فَالْمُقَسِّمٰتِ اَمْرًا (٥)

6．げにお前たちが約束されることは真実なり。　اِنَّمَا تُوْعَدُوْنَ لَصَادِقٌ (٦)

7．審判の日は必ず起るべし。　وَّاِنَّ الدِّيْنَ لَوَاقِعٌ (٧)

8．また幾多の軌道を有す天にかけて誓う、(注3)　وَالسَّمَآءِ ذَاتِ الْحُبُكِ (٨)

9．全くお前たちのいうことは不一致なり。(注4)　اِنَّكُمْ لَفِيْ قَوْلٍ مُّخْتَلِفٍ (٩)

注1　37章2節参照。注2も参照の事。

注2　2～5節の四節では、自然界・物質界の現象に対応する精神界の現象に目を向けている。この対比は非常に際立っている。四つの語「まき散らす」「運ぶ」「流れる」「頒布する」を自然現象に当てはめてみた場合、風を指すのであろう。風は海から立ち昇る水蒸気を四方へ散らし、雨雲を運び、穏やかに吹き、干からびた地に雨を降らせる。そしてその地を、草木・美しい花・甘い果実のあふれる豊かなものに変える。又、精神面に置き換えてみれば、この四語は高潔な人々の一団を表しているようだ。彼等は、モハッマド預言者から出る魂の泉で多く飲み、素晴らしくそして生気を与えるクルアーンの教えを身に付けた後、アラブの僻地へ、その後、更に遠隔の地へ赴き、彼等の祝福された荷を運び、多神教徒や不道徳な人の群がる国々で神の啓示を広めた。彼等は剣を手にする事なく、愛と平和をもって説いて回った。それは丁度、優しく吹き、枯れた地に雨をもたらす風の様であった。

注3　幾多の軌道とは、天空に散らばる惑星・彗星・恒星の軌道を指す。これ等の天体は、割り当てられた役割を寸分違わず果たしながら、各々の軌道上を漂う。互いの領域を侵す事なく、全てが一致して構造と運動の素晴らしい調和を形作る。天空がその様な惑星・恒星の軌道に満ちていると世に知らせたのはクルアーンであり、当時空は固定したものと信じられていた。

注4　前節に示された偉大な天文学的事実は、クルアーンが神の啓示書であり、神の為せる業に目的と調和の一貫性のある事を示すものである。しかし、唯物論社は無理な理論を作り出し、根拠の薄弱な推測にあがき、神の御言葉やモハッマド預言者を信じようとはしない。

10. 背きさるべく定められた者のみが、（注5）真理から背き去るなり。

يُؤْفَكُ عَنْهُ مَنْ اُفِكَ ﴿١٠﴾

11. 呪われよ、嘘つきども、

قُتِلَ الْخَرّٰصُوْنَ ﴿١١﴾

12. 無知の深みで真理を意に介せぬ徒輩(やから)よ。

الَّذِيْنَ هُمْ فِيْ غَمْرَةٍ سَاهُوْنَ ﴿١٢﴾

13. 彼等は訊く、「審判の日はいつなるか？」と。

يَسْـَٔلُوْنَ اَيَّانَ يَوْمُ الدِّيْنِ ﴿١٣﴾

14. そは彼等が、火獄における受難の日なり。

يَوْمَ هُمْ عَلَى النَّارِ يُفْتَنُوْنَ ﴿١٤﴾

15. 而(しか)して彼等は云われん、「汝等、己が責苦をとくと味わえ。これお前たちが催促せるものなり」と。

ذُوْقُوْا فِتْنَتَكُمْ هٰذَا الَّذِيْ كُنْتُمْ بِهٖ تَسْتَعْجِلُوْنَ ﴿١٥﴾

16. されど義(ただ)しき人々は花園と泉の間に住まん、

اِنَّ الْمُتَّقِيْنَ فِيْ جَنّٰتٍ وَّعُيُوْنٍ ﴿١٦﴾

17. 主が彼等に賜わんものを拝受しながら。現世にて善行を積(つ)みたるが故に。

اٰخِذِيْنَ مَآ اٰتٰهُمْ رَبُّهُمْ اِنَّهُمْ كَانُوْا قَبْلَ ذٰلِكَ مُحْسِنِيْنَ ﴿١٧﴾

18. 彼等は日頃夜も余り眠らず、

كَانُوْا قَلِيْلًا مِّنَ الَّيْلِ مَا يَهْجَعُوْنَ ﴿١٨﴾

19. 黎明(れいめい)には赦しを請い求めたり。

وَبِالْاَسْحَارِ هُمْ يَسْتَغْفِرُوْنَ ﴿١٩﴾

20. 彼等の富は、助けを求めし者と之(これ)を求めざりし者に（注6）頒布(はんぷ)されたり。

وَفِيْٓ اَمْوَالِهِمْ حَقٌّ لِّلسَّآئِلِ وَالْمَحْرُوْمِ ﴿٢٠﴾

21. また地上には、信心深い者たちへのさまざまな神兆(しるし)あり。

وَفِي الْاَرْضِ اٰيٰتٌ لِّلْمُوْقِنِيْنَ ﴿٢١﴾

22. お前たち自身の中にもまた然(しか)り。お前たちそれがわからざるか？

وَفِيْٓ اَنْفُسِكُمْ اَفَلَا تُبْصِرُوْنَ ﴿٢٢﴾

23. 而(しか)して天上には、お前たちの糧(かて)とお前たちに約束せられたるものあり。（注7）

وَفِي السَّمَآءِ رِزْقُكُمْ وَمَا تُوْعَدُوْنَ ﴿٢٣﴾

注5　この言葉は、「己に背を向ける人」という意味でもある。

注6　イスラム教によれば、富裕な信者の財は、それを欲しがる者にも、それを言えないもの同様、正当な理由があれば分け与えられる。この様にイスラム教徒の財産は、貧しき者にも与えられる手当を賄う義務がある。それ故、彼が同胞の必要を満たす時、それは好意から出たものではなく、唯、相手に対して負った義務を果たす事になる。「助けを求めざりし者」という語は、言外の意味として、自尊心・恥じる心・施しを求めない（2： 274）という点において貧しい者を指し、今一つ、口のきけない動物という意味もある。この言葉は此所では、病弱等の理由で働けない人を指すのに使われている。

注7　信者に向けられた勝利と繁栄の約束、及び不信者に対する警告。

24. 天地の主にかけて誓う、そは真実なり。お前たちの言葉が事実である如く（注８）

فَوَرَبِّ السَّمَآءِ وَالْاَرْضِ اِنَّهٗ لَحَقٌّ مِّثْلَ مَآ اَنَّكُمْ تَنْطِقُوْنَ ﴿٢٣﴾

第二項

25. 汝、アブラハムの貴客の物語を聞かざりしか？

هَلْ اَتٰىكَ حَدِيْثُ ضَيْفِ اِبْرٰهِيْمَ الْمُكْرَمِيْنَ ﴿٢٤﴾

26. その客たちアブラハムの許に来たりて、云えり、「平安あれ」と。アブラハムは彼等が未知の人々と思いながらも、答えて云えり、「あなたがたの上に平安あれ」と。（注９）

اِذْ دَخَلُوْا عَلَيْهِ فَقَالُوْا سَلٰمًا ؕ قَالَ سَلٰمٌ ۚ قَوْمٌ مُّنْكَرُوْنَ ﴿٢٥﴾

27. アブラハムは静かに立って奥に入り、肥えた仔牛を持ち来たり、

فَرَاغَ اِلٰٓى اَهْلِهٖ فَجَآءَ بِعِجْلٍ سَمِيْنٍ ﴿٢٦﴾

28. 客人の前にそれを置き、云えり、「召し上らざるか？」と。

فَقَرَّبَهٗٓ اِلَيْهِمْ قَالَ اَلَا تَاْكُلُوْنَ ﴿٢٧﴾

29. アブラハムは彼等に対して畏怖の念を抱けり。すると彼等は、云えり、「怖れるなかれ」と。而して、賢い男子が生まれるという朗報をアブラハムに伝えたり。（注10）

فَاَوْجَسَ مِنْهُمْ خِيْفَةً ؕ قَالُوْا لَا تَخَفْ ؕ وَبَشَّرُوْهُ بِغُلٰمٍ عَلِيْمٍ ﴿٢٨﴾

30. するとそこへ、アブラハムの妻出で来たりて叫び、（注11）その顔を打ちて云えり、「妾は石女の老婆なのに！」と。

فَاَقْبَلَتِ امْرَاَتُهٗ فِيْ صَرَّةٍ فَصَكَّتْ وَجْهَهَا وَقَالَتْ عَجُوْزٌ عَقِيْمٌ ﴿٢٩﴾

31. 客人たちは云えり、「たといそうであろうとも、こは主の思し召しなり。げに主は賢哲にして、すべてを知り給う」と。

قَالُوْا كَذٰلِكِ ۙ قَالَ رَبُّكِ ؕ اِنَّهٗ هُوَ الْحَكِيْمُ الْعَلِيْمُ ﴿٣٠﴾

32. アブラハムは云えり、「ところで、汝等使徒たちよ、あなた方の用向きや如何ん？」と。

قَالَ فَمَا خَطْبُكُمْ اَيُّهَا الْمُرْسَلُوْنَ ﴿٣١﴾

注８　前節に述べられた出来事は、モハッマド預言者の願望でもなければ、彼の想像の産物でもない。それは、「お前たちの言葉」が真実である様に、紛れもない事実である。又、当節は、あなたたちが言うようにクルアーンが正真正銘神の啓示書であると示しているともいえる。

注９　11：70～71参照。

注10　15：54同様、当節においても、約束された息子は、「賢い男子」として記されている。一方37：102では「寛容な息子」と呼ばれている。前節の記述はイサクを、後節はイシュマエルを指すものである。

注11　この節にある「叫び」というのは、最も激しい叫び、激しい悲しみ・怒り・苦悩・嫌悪や恥辱に顔面が引きつる事、引き付け等を意味する。

33．彼等は云えり、「我等はさる罪深い民のために遣わされたり。

قَالُوٓا إِنَّآ أُرْسِلْنَآ إِلَىٰ قَوْمٍ مُّجْرِمِينَ ٣٣

34．我等が派遣されたるは、その罪人どもを飛礫（つぶて）もて打ちすえんがためなり。

لِنُرْسِلَ عَلَيْهِمْ حِجَارَةً مِّن طِينٍ ٣٤

35．主自らその者どもの不行跡を印（しる）せし飛礫（つぶて）によりて」と。

مُّسَوَّمَةً عِندَ رَبِّكَ لِلْمُسْرِفِينَ ٣٥

36．われらそこに住む信者を救出せんとせしも、

فَأَخْرَجْنَا مَن كَانَ فِيهَا مِنَ ٱلْمُؤْمِنِينَ ٣٦

37．その邑（まち）で信者（ムスリム）たりし者はただの一家あるに過ぎざりき。

فَمَا وَجَدْنَا فِيهَا غَيْرَ بَيْتٍ مِّنَ ٱلْمُسْلِمِينَ ٣٧

38．さればわれらは、そこに、天罰を恐れる人々のために、確かな跡を残したり。

وَتَرَكْنَا فِيهَآ ءَايَةً لِّلَّذِينَ يَخَافُونَ ٱلْعَذَابَ ٱلْأَلِيمَ ٣٨

39．われらはモーゼにも、明白なる権威を与えてファラオのところへ遣わした時、奇跡を授けたり。

وَفِى مُوسَىٰٓ إِذْ أَرْسَلْنَٰهُ إِلَىٰ فِرْعَوْنَ بِسُلْطَٰنٍ مُّبِينٍ ٣٩

40．然（しか）るにファラオは、己が威勢を怙恃（こじ）する余り、（注12）モーゼに向って「妖術使いか、或いは狂人なり」と云えり。

فَتَوَلَّىٰ بِرُكْنِهِۦ وَقَالَ سَٰحِرٌ أَوْ مَجْنُونٌ ٤٠

41．さればわれらは、ファラオとその軍勢をひっ捕え、海中に投じたり。そはみな身から出た錆（さび）なり。

فَأَخَذْنَٰهُ وَجُنُودَهُۥ فَنَبَذْنَٰهُمْ فِى ٱلْيَمِّ وَهُوَ مُلِيمٌ ٤١

42．アード族にもまた然（しか）り。その時われらは暴風を彼等に吹きつけたり。

وَفِى عَادٍ إِذْ أَرْسَلْنَا عَلَيْهِمُ ٱلرِّيحَ ٱلْعَقِيمَ ٤٢

43．その襲いかかるや、何ものも残さず、すべてをぼろぼろの骨の如くになせり。

مَا تَذَرُ مِن شَىْءٍ أَتَتْ عَلَيْهِ إِلَّا جَعَلَتْهُ كَٱلرَّمِيمِ ٤٣

44．サムード族にもまた然（しか）り。その時彼等は告げられたり、「束の間を楽しむがよい」と。

وَفِى ثَمُودَ إِذْ قِيلَ لَهُمْ تَمَتَّعُوا۟ حَتَّىٰ حِينٍ ٤٤

45．然（しか）るに彼等は主の命に逆らいたり。されば驚き見つめる間に、雷（いかずち）彼等を襲いたれば、

فَعَتَوْا۟ عَنْ أَمْرِ رَبِّهِمْ فَأَخَذَتْهُمُ ٱلصَّٰعِقَةُ وَهُمْ يَنظُرُونَ ٤٥

注12　ここでの「威勢」は、支え又は援助、権力と抵抗、親族・仲間、援助と力を与える人、高貴な人等の意味がある。

注13　神は万物を対にしてお作りになった。この対は動物だけでなく、植物や無生物にも存在する。又精神的なものにも対はある。天地さえも対になっている。

46．彼等起つ能わず、またその身を守り得ざりき。

فَمَا اسْتَطَاعُوا مِنْ قِيَامٍ وَمَا كَانُوا مُنْتَصِرِينَ ﴿٤٦﴾

47．往古のノアの民もまた然り。彼等は不従順な民なりき。

وَقَوْمَ نُوحٍ مِنْ قَبْلُ ۖ إِنَّهُمْ كَانُوا قَوْمًا فَاسِقِينَ ﴿٤٧﴾

第三項

48．われらは偉力を以て天を創りたり。げにわれらは広大なる力を有す。

وَالسَّمَاءَ بَنَيْنَاهَا بِأَيْدٍ وَإِنَّا لَمُوسِعُونَ ﴿٤٨﴾

49．われらはまた大地をうち広げたり。そのなんたる素晴らしさよ！

وَالْأَرْضَ فَرَشْنَاهَا فَنِعْمَ الْمَاهِدُونَ ﴿٤٩﴾

50．われらはまたお前たちに熟慮せしめんがために、すべてのものを雌雄の番に創造せり。(注13)

وَمِنْ كُلِّ شَيْءٍ خَلَقْنَا زَوْجَيْنِ لَعَلَّكُمْ تَذَكَّرُونَ ﴿٥٠﴾

51．されば汝等、アッラーに加護を求めよ。げに我はアッラーよりの明白なる警告者なり。

فَفِرُّوا إِلَى اللَّهِ ۖ إِنِّي لَكُمْ مِنْهُ نَذِيرٌ مُبِينٌ ﴿٥١﴾

52．アッラー以外に他神を奉祠するなかれ。げに我はアッラーよりの明白なる警告者なり。

وَلَا تَجْعَلُوا مَعَ اللَّهِ إِلَٰهًا آخَرَ ۖ إِنِّي لَكُمْ مِنْهُ نَذِيرٌ مُبِينٌ ﴿٥٢﴾

53．彼等以前に遣わされた使徒も、一人として、「妖術使い、さもなくば狂人」よと云われざる者はなかりき。

كَذَٰلِكَ مَا أَتَى الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ مِنْ رَسُولٍ إِلَّا قَالُوا سَاحِرٌ أَوْ مَجْنُونٌ ﴿٥٣﴾

54．彼等はこの態度を世々継承したるか？ 然り、彼等はみな不正不遜な民なり。(注14)

أَتَوَاصَوْا بِهِ ۚ بَلْ هُمْ قَوْمٌ طَاغُونَ ﴿٥٤﴾

55．されば彼等を顧みるな。汝は彼等の所業に責任なし。

فَتَوَلَّ عَنْهُمْ فَمَا أَنْتَ بِمَلُومٍ ﴿٥٥﴾

56．ただ訓戒し続けよ。げに訓戒は信ずる人々のためになる。

وَذَكِّرْ فَإِنَّ الذِّكْرَىٰ تَنْفَعُ الْمُؤْمِنِينَ ﴿٥٦﴾

57．われ、妖霊と人間を創りしは、われを崇敬せしめんがためなり。(注15)

وَمَا خَلَقْتُ الْجِنَّ وَالْإِنْسَ إِلَّا لِيَعْبُدُونِ ﴿٥٧﴾

注14　いつの世にも、神の使者に向けられる非難は似通っており、ある世代の不信者が、同じ非難を繰り返す様に、次の世代に申し送っているのではと思わされる程である。

注15　ここで妖霊は選良、人間は庶民を表わしている。「崇敬」という語の第一義は、神の戒律に従い、それと完全に一体となる中で、持てる力を最大限に発揮し、正しい宗教の規律を従う事である。その目的は、神の

58. われは彼等に糧(かて)を求めず、われを養わんことを求めず。(注 16)

مَآ اُرِيْدُ مِنْهُمْ مِّنْ رِّزْقٍ وَّمَآ اُرِيْدُ اَنْ يُّطْعِمُوْنِ ۝٥٨

59. げにアッラー御自身こそ偉大な養い手、力と威力の主なり。

اِنَّ اللّٰهَ هُوَ الرَّزَّاقُ ذُو الْقُوَّةِ الْمَتِيْنُ ۝٥٩

60. 今よからぬことをなす徒輩(やから)は、昔、彼等の仲間がなめし悲運と同じ運命と相成らん。されば彼等をして、われに懲罰を催促せしむるなかれ。

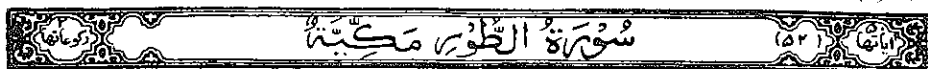
فَاِنَّ لِلَّذِيْنَ ظَلَمُوْا ذَنُوْبًا مِّثْلَ ذَنُوْبِ اَصْحٰبِهِمْ فَلَا يَسْتَعْجِلُوْنِ ۝٦٠

61. 災いなるかな不信心者輩(ばら)、そは彼等に約束せられたるその日があるが故に。

فَوَيْلٌ لِّلَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ يَّوْمِهِمُ الَّذِيْ يُوْعَدُوْنَ ۝٦١

影響を受け、我身に神の属性を表す事である。これは、当節に述べられている通り、人間が作り出された偉大にして高尚な目的であり、これを成し遂げる事が真の神への崇拝となる。神を求める様自らを駆り立て、神の御意志に完全に従いたいという高尚な願望をその身に起こす事のできる能力こそ、神より授った力の内最も高度なものであり、人間は外的内的才能を駆使すれば、この事を理解できる。

注 16　もし魂の旅人が、自らの人生の高い目的に向い忍耐強く歩みを進めるなら、彼の行為は神や他の如何なる人の為でもなく、唯、彼自身に潤い、望みを達成する事となる。

سُوْرَةُ الطُّوْرِ مَكِّيَّةٌ (٥٢)

アル・トゥール
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ١

2．かの山にかけて。（注１）
وَالطُّوْرِ ٢

3．書かれたる経典によりて（注２）
وَكِتٰبٍ مَّسْطُوْرٍ ٣

4．うち広げられたる羊皮紙に。
فِيْ رَقٍّ مَّنْشُوْرٍ ٤

5．盛況をきわめる聖殿にかけて。（注３）
وَّالْبَيْتِ الْمَعْمُوْرِ ٥

6．高々と持ち上げられたる天蓋にかけて。
وَالسَّقْفِ الْمَرْفُوْعِ ٦

7．漲る海にかけて。（注４）
وَالْبَحْرِ الْمَسْجُوْرِ ٧

8．主の懲罰は必ず起こる。
اِنَّ عَذَابَ رَبِّكَ لَوَاقِعٌ ٨

9．何人も之を避けること能わず。
مَّا لَهٗ مِنْ دَافِعٍ ٩

10．その日天はうち震え、（注５）
يَّوْمَ تَمُوْرُ السَّمَآءُ مَوْرًا ١٠

11．山々はぐらぐらと揺れ動かん。（注６）
وَّتَسِيْرُ الْجِبَالُ سَيْرًا ١١

注１　宣誓の哲学及び重要性については37：２を参照の事。

注２　クルアーン又は、モーゼの律法を指すが、おそらくクルアーンの事であろう。

注３　エルサレムの寺院、又はいずれかの礼拝堂、この言葉はクルアーンの中で、人の集まる所（２：126）、聖地（５：３）、聖なる寺院（17：２）、由緒ある所（22：30）、安全な街（95：４）と記されたカーバ神殿を指すものであろう。

注４　「みなぎる海」とは、ファラオと彼の強力な軍がイスラム人を追跡中に沈んだ紅海、又はクライシュの全ての指導者が殺害された、アル・バハル（海）として知られている、バドルの戦場を指しているようだ。

注５　その日、天の軍勢は揃ってモハッマド預言者の味方となるであろう。そして、バドルの日に、それは実現した。

注６　神の審判の下される日、不信心者の指導者達は恐しい結末を迎えるであろう。彼等は風の前のもみ殻の様に吹き飛ばされる。あるいは当節は、当時の大帝国が崩壊すると述べているともいえる。当節及び前節は、古く堕落した制度が一掃される前に、新たな秩序が生まれる事を暗示している。これらの節は、裁きの日を指すとも受け取れる。

12．その日、真理を拒否せる者どもに災いあれ、

فَوَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِّلْمُكَذِّبِينَ ﴿١٢﴾

13．くだらぬ議論を事とせる徒輩（やから）よ。

الَّذِينَ هُمْ فِي خَوْضٍ يَلْعَبُونَ ﴿١٣﴾

14．その日彼等は、地獄の火の中に容赦なく突き落されん。（注７）

يَوْمَ يُدَعُّونَ إِلَىٰ نَارِ جَهَنَّمَ دَعًّا ﴿١٤﴾

15．「こはお前たちが、日頃虚偽（いつわり）なりとせる業火（ごうか）なり。

هَٰذِهِ النَّارُ الَّتِي كُنتُم بِهَا تُكَذِّبُونَ ﴿١٥﴾

16．こは妖術か、それともお前たちこれが見えざるか？

أَفَسِحْرٌ هَٰذَا أَمْ أَنتُمْ لَا تُبْصِرُونَ ﴿١٦﴾

17．汝等この火で焚（や）かれよ。お前たちが之（これ）を忍ぶも忍ばざるも、そは同じなり。お前たちはただそのなしきたることの報いを受けるのみ」

اصْلَوْهَا فَاصْبِرُوا أَوْ لَا تَصْبِرُوا سَوَاءٌ عَلَيْكُمْ ۖ إِنَّمَا تُجْزَوْنَ مَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿١٧﴾

18．げに義（ただ）しい者は、花園と至福の中に住み、

إِنَّ الْمُتَّقِينَ فِي جَنَّاتٍ وَنَعِيمٍ ﴿١٨﴾

19．主が彼等に賜えるものを楽しまん。而（しか）して主は、業火（ごうか）の責苦から彼等を救わん。

فَاكِهِينَ بِمَا آتَاهُمْ رَبُّهُمْ وَوَقَاهُمْ رَبُّهُمْ عَذَابَ الْجَحِيمِ ﴿١٩﴾

20．「こはお前たちの行為（ふるまい）に対する報いなれば、食いかつ飲め、

كُلُوا وَاشْرَبُوا هَنِيئًا بِمَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٢٠﴾

21．並べられたる榻牀（とうしょう）に身を横たえながら」われらは彼等に、麗しき瞳もゆ処女をめあわせん。（注８）

مُتَّكِئِينَ عَلَىٰ سُرُرٍ مَّصْفُوفَةٍ ۖ وَزَوَّجْنَاهُم بِحُورٍ عِينٍ ﴿٢١﴾

注７　当節は、不信心者の有罪が確定し、悔恨の時が過ぎた後の彼等の状況を描いている。

注８　ここでの「めあわせる」という語に対応するアラビア語は、「彼はある物を別の物と組み合わせた。」又は「彼はそれを同種の物に結び付けた。」という意味である。フール（処女）は白目の部分があくまで白く、黒目があくまで黒く、身体の他の部分も非常に白く美しい人を指す。

死後の生活とは、現在の生活をそのまま表したに過ぎず、来世における報酬や罰は、現世の行為の反映である。天国や地獄は、別の新たな物質界を意味するのではない。知覚できるのは事実なので、そうしたければ、それ等を物質的なものと称しても構わないが、それ等は、現世における精神的事実を具体化しただけである。この世での係わりが来世には足かせと写るであろう。現世の嫉妬は炎となって鮮やかに見え、信者が神に捧げる愛は来世でワインとなって表わされる。この様に、天国には、庭・小川・ミルク・蜂蜜・鳥の肉・ワイン・果実・玉座・仲間その他色々な物があるが、それ等はこの世にあるのと同じ物ではなく、現世の生活における精神面を表したものである。上記された「めあわせる」、「処女」「瞳」は、天国で、神の高潔なる下僕が、顔がまばゆい程の心の美しさで輝く清らかな友と暮せるようになると示している。又、彼等は美しい娘、つまり妻を得るという意味でもある。

22．信仰する者、並びにその先祖の信仰を継承する子孫は、われら之を楽園で一緒にさせん。（注 9）またわれらは、彼等の功労をいささかも減らさざるべし。人はみな己がなせることに対して責めを負う。（注 10）

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَاتَّبَعَتْهُمْ ذُرِّيَّتُهُم بِإِيمَانٍ أَلْحَقْنَا بِهِمْ ذُرِّيَّتَهُمْ وَمَا أَلَتْنَاهُم مِّنْ عَمَلِهِم مِّن شَيْءٍ ۚ كُلُّ امْرِئٍ بِمَا كَسَبَ رَهِينٌ ﴿٢٢﴾

23．われらは彼等に、彼等の望む果物や肉を与えん。

وَأَمْدَدْنَاهُم بِفَاكِهَةٍ وَلَحْمٍ مِّمَّا يَشْتَهُونَ ﴿٢٣﴾

24．彼等はそこで互に盃のやりとりをすれども、乱暴狼藉なし。

يَتَنَازَعُونَ فِيهَا كَأْسًا لَّا لَغْوٌ فِيهَا وَلَا تَأْثِيمٌ ﴿٢٤﴾

25．童子ら行き巡りて彼等に給仕せん、その無垢なること秘蔵されたる真珠の如し。

وَيَطُوفُ عَلَيْهِمْ غِلْمَانٌ لَّهُمْ كَأَنَّهُمْ لُؤْلُؤٌ مَّكْنُونٌ ﴿٢٥﴾

26．彼等相い寄りて、訊ね合う。

وَأَقْبَلَ بَعْضُهُمْ عَلَىٰ بَعْضٍ يَتَسَاءَلُونَ ﴿٢٦﴾

27．彼等は云わん、「以前、我等家族と共にありし時、アッラーの審判を恐れたり。（注 11）

قَالُوا إِنَّا كُنَّا قَبْلُ فِي أَهْلِنَا مُشْفِقِينَ ﴿٢٧﴾

28．然るにアッラーは我等に慈悲を垂れ、熱風の懲罰より我等を救いたり。

فَمَنَّ اللَّهُ عَلَيْنَا وَوَقَانَا عَذَابَ السَّمُومِ ﴿٢٨﴾

29．そは以前、我等がアッラーを祈りたればこそ。げにアッラーは恵み深く、情け深い御方にまします」と。

إِنَّا كُنَّا مِن قَبْلُ نَدْعُوهُ ۖ إِنَّهُ هُوَ الْبَرُّ الرَّحِيمُ ﴿٢٩﴾

死後の世における報酬や罰の本質を理解するには、来世が現世に続くものである事を心に留めておかねばならない。人の魂が肉体を離れるや新たな身体が授けられる。それは、身体無くして魂は向上せず、至福を受けられず、又痛みを感ずる事もできないからである。新たな身体は、この世の魂のごとく優れて美しいものである。新しい身体の形や特質は、現世の我々のものとは全く異なるので、来世における報酬や懲罰の本質も、我々の想像を越えるものである。この事をクルアーンは 32 章 18 節で述べている（32：18）。又、モハッマド預言者は次の様に語ったとされる。如何なる目も天の恵を見た事はなく、如何なる耳もそれを聞いた事はなく、又、如何なる人の心もそれを感ずる事はできない（ブハリ）。天国には、罪、軽率で無意味な会話、又我々の知る肉体の快楽というものはないが、平安と神の喜びに満ちており、この事が、クルアーンにより正義ある者に伝え、約束された通り、天国を光り輝かせるのである。32 章 18 節も参照の事。

注 9　前節において、高潔なる者に純潔にして美しい妻が授けられると述べられているが、当節では、彼等に子供が授けられ、それにより彼等の喜びは完全なものとなると書かれている。

注 10　正義ある者に係わる事実は、不信心者には全く当てはめられない。自らの善行があってこそ、天国にその場所を得る事ができるのである。

注 11　本分の意味の他、当節は次の様な事も示している。「敵に包囲されれば、相手の脅しが時として我々を脅かす事もあろう。しかし、今我々は、ゆるぎない平安を得ている。」

第二項

30．さればさとしてやれ。主の恩寵によりて、汝は卜筮者に非ず、また狂人に非ず。

فَذَكِّرْ فَمَآ أَنْتَ بِنِعْمَتِ رَبِّكَ بِكَاهِنٍ وَّلَا مَجْنُوْنٍ ﴿٣٠﴾

31．彼等は云う、「彼は詩人なり。我等は、時が彼にもたらす災難を待たん」と。

أَمْ يَقُوْلُوْنَ شَاعِرٌ نَّتَرَبَّصُ بِهٖ رَيْبَ الْمَنُوْنِ ﴿٣١﴾

32．云え、「ならば汝等待つがよい。我またお前たちと共に待たん」と。（注 12）

قُلْ تَرَبَّصُوْا فَإِنِّيْ مَعَكُمْ مِّنَ الْمُتَرَبِّصِيْنَ ﴿٣٢﴾

33．彼等に之を命じたるは、己が思慮のなせる業か、はたまた彼等は邪曲の民か？（注 13）

أَمْ تَأْمُرُهُمْ أَحْلَامُهُمْ بِهٰذَآ أَمْ هُمْ قَوْمٌ طَاغُوْنَ ﴿٣٣﴾

34．彼等は云う、「彼それを捏造せり」と。然らず、彼等は信仰心をもたざるなり。

أَمْ يَقُوْلُوْنَ تَقَوَّلَهٗ بَلْ لَّا يُؤْمِنُوْنَ ﴿٣٤﴾

35．もし彼等のいうことが真なら、彼等をしてかくの如きお告げをもたらさしめよ。

فَلْيَأْتُوْا بِحَدِيْثٍ مِّثْلِهٖٓ إِنْ كَانُوْا صٰدِقِيْنَ ﴿٣٥﴾

36．彼等は無意味に創られたるか、それとも彼等自身が創造者なるか？

أَمْ خُلِقُوْا مِنْ غَيْرِ شَيْءٍ أَمْ هُمُ الْخٰلِقُوْنَ ﴿٣٦﴾

37．彼等は天地を創造せるか？　否、彼等は創造者を信ぜず。

أَمْ خَلَقُوا السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضَ بَلْ لَّا يُوْقِنُوْنَ ﴿٣٧﴾

38．彼等は主の宝を所持するか、それとも、その守護者なるか？

أَمْ عِنْدَهُمْ خَزَآئِنُ رَبِّكَ أَمْ هُمُ الْمُصَيْطِرُوْنَ ﴿٣٨﴾

39．彼等には天に登る梯子があり、それで登って神の言葉を窃み聴きし得るというか？　然らば、その聴取者に確かな証拠をもたらさしめよ。（注 14）

أَمْ لَهُمْ سُلَّمٌ يَّسْتَمِعُوْنَ فِيْهِ فَلْيَأْتِ مُسْتَمِعُهُمْ بِسُلْطٰنٍ مُّبِيْنٍ ﴿٣٩﴾

40．アッラーは娘で、お前たちは息子がいるとな？（注 15）

أَمْ لَهُ الْبَنٰتُ وَلَكُمُ الْبَنُوْنَ ﴿٤٠﴾

注 12　不信心者はモハッマド預言者を、未来に関して空想にふける詩人、無邪気な人のだまされ易さにつけ込む占い師、あるいは大ぼら吹きと呼び、早晩彼が悲惨な結末を迎えると期待している。しかし彼等は最後の審判の日を迎えるまで、その期待が無駄である事に気付かないであろう。時の流れのみが、彼等とモハッマド預言者の間の問題を解決し得るのである。以上の事を当節は暗示している。

注 13　彼等が道を誤ったり、自制を失いそら言にふけったり、神の御言葉を拒んで全ての法にそむいたのは、彼等自身に咎めがあるのだろうか。

注 14　もし不信心者が天国の秘密を知っているなら、モハッマド預言者が神に任命された使者でないという彼等の主張を立証させてみようではないか。

注 15　神が息子をお持ちだという事ですら唯一神に矛盾すると当節は述べているが、不信心者は大胆にも神の娘を存在するとして特定化する。彼等は、娘の出生を、不名誉の烙印とみなしているからである。

41. 汝が彼等に報酬を求めるあまり、彼等はその債務の重荷で打ちひしがれたるか？(注16)

أَمْ تَسْـَٔلُهُمْ أَجْرًا فَهُم مِّن مَّغْرَمٍ مُّثْقَلُونَ ﴿٤١﴾

42. 彼等は天地の秘儀に良く通じ、之を書き記し得る知識を有すか？

أَمْ عِندَهُمُ ٱلْغَيْبُ فَهُمْ يَكْتُبُونَ ﴿٤٢﴾

43. 彼等は策謀せんとするか？　されど、その策にかかるものは、信せざる彼等自身なり。

أَمْ يُرِيدُونَ كَيْدًا ۖ فَٱلَّذِينَ كَفَرُوا۟ هُمُ ٱلْمَكِيدُونَ ﴿٤٣﴾

44. 彼等は、アッラー以外に神を奉ずるか？　彼等がアッラーと共に合祀せんとする者の上に超然たるアッラーに栄光あれ！

أَمْ لَهُمْ إِلَٰهٌ غَيْرُ ٱللَّهِ ۚ سُبْحَٰنَ ٱللَّهِ عَمَّا يُشْرِكُونَ ﴿٤٤﴾

45. 彼等はたとい天の一角が崩落するを見るとも、「こはただの密雲なり」と云わん。(注17)

وَإِن يَرَوْا۟ كِسْفًا مِّنَ ٱلسَّمَآءِ سَاقِطًا يَقُولُوا۟ سَحَابٌ مَّرْكُومٌ ﴿٤٥﴾

46. されば、雷に打たれるその日まで彼等をすておけ、

فَذَرْهُمْ حَتَّىٰ يُلَٰقُوا۟ يَوْمَهُمُ ٱلَّذِى فِيهِ يُصْعَقُونَ ﴿٤٦﴾

47. 彼等の策謀がすこしも彼等に役立たず、且つ助けられざるその日まで。

يَوْمَ لَا يُغْنِى عَنْهُمْ كَيْدُهُمْ شَيْـًٔا وَلَا هُمْ يُنصَرُونَ ﴿٤٧﴾

48. 悪事を行う徒輩には、この外にも、懲罰あり。されど、彼等の大半は之を知らず。

وَإِنَّ لِلَّذِينَ ظَلَمُوا۟ عَذَابًا دُونَ ذَٰلِكَ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٤٨﴾

49. されば汝、忍びて主の審判を待て。汝はまさしくわれらの眼前にあり。眠りから醒めた時、主の栄光を称揚し奉れ。(注18)

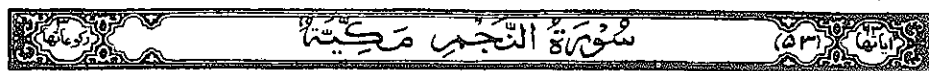
وَٱصْبِرْ لِحُكْمِ رَبِّكَ فَإِنَّكَ بِأَعْيُنِنَا ۖ وَسَبِّحْ بِحَمْدِ رَبِّكَ حِينَ تَقُومُ ﴿٤٩﴾

50. 而して夜半にも、また星落つる時にも、汝アッラーを讃美し奉れ。

وَمِنَ ٱلَّيْلِ فَسَبِّحْهُ وَإِدْبَٰرَ ٱلنُّجُومِ ﴿٥٠﴾

注16　当節は不信心者の良識に訴え、彼等の道徳的・精神的幸福を心から願って、モハッマド預言者が彼等を正義の道に招じ、しかもその労苦に何ら見返りを求めないでいる時、何故彼等は彼を受け入れないのかと問いている。

注17　不信心者は、例え自らの頭上に空が落ちて下るのを事実目の当たりにしても、それを「密雲」の形をした神の恵と己れに都合の良い解釈をするであろう。それ程までに不注意で油断している彼等の事だから、神の時機を得た警告を得るところもないのである。

注18　我々の保護の下（5：68)。

سُوْرَةُ النَّجْمِ مَكِّيَّةٌ
アル・ナジム

(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。
بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．沈み行く星にかけて、(注1)
وَالنَّجْمِ اِذَا هَوٰى ②

3．お前たちの仲間は誤らず、また惑(まど)うことなし。(注2)
مَا ضَلَّ صَاحِبُكُمْ وَمَا غَوٰى ③

4．また思惑で語るに非ず。
وَمَا يَنْطِقُ عَنِ الْهَوٰى ④

5．そは神より啓示されたるお告げに外ならぬ。(注3)
اِنْ هُوَ اِلَّا وَحْيٌ يُّوْحٰى ⑤

6．偉力の主が彼に教え授けたり。(注4)
عَلَّمَهٗ شَدِيْدُ الْقُوٰى ⑥

7．そは智力衆にすぐれたる御方なり。されば主は、一切を支配す。
ذُوْ مِرَّةٍ فَاسْتَوٰى ⑦

8．その時、主は、地平線の高きところに立ちて、啓示せり。(注5)
وَهُوَ بِالْاُفُقِ الْاَعْلٰى ⑧

9．次いで預言者はアッラーのそば近く引き寄せられ、アッラーいよいよ近づきて来臨(らいりん)したまい、(注6)
ثُمَّ دَنَا فَتَدَلّٰى ⑨

注1　アナジュムは恒星又は茎の無い植物という意味である。しかし固有名詞として用いられる時は、プレイアデス星団を指す。

注2　モハッマド預言者の語る理想や原理は間違っておらず（彼はこれまでにも間違いを犯した事がない）、又、彼はそれ等の原理からそれた事もない。この様に、彼の高尚な理想及びその実現方法に関して、彼はそれを身をもって表した確かな指導者である。

注3　当節は、モハッマド預言者の啓示が神から出たものであると述べているが、先の二節では、彼の啓示が、決して狂った心に生じる幻影や、人の欲望及び悪意のそそのかしによって生じる考えではないということを暗示している。

注4　クルアーンは強力な啓示書であり、それ以前の啓示書は全てクルアーンを前にしてその重要性は薄らぐ。

注5　神が、栄光と尊厳をもって、モハッマド預言者を遣わした時、彼の精神は最高位に達した。あるいは当節は、イスラム教の光が、全世界を照らす事ができる様に非常に高い所に上げられたと述べているともいえる。10節も参照の事。

注6　「来臨」というのは、「彼、又はそれが降りて来た」、あるいは「彼に近付いた」を意味する。当節は、モハッマド預言者が神に近付き、神が彼の方へ身をかがめられたと示している。又、モハッマド預言者は神の

10．その隔たることわずかに弓の弦二つ。いやそれよりも近きところなり。(注７)	فَكَانَ قَابَ قَوْسَيْنِ أَوْ أَدْنَىٰ ﴿١٠﴾
11．かくてアッラーは、その僕(しもべ)に向って、啓示の旨(おもむき)を降(くだ)し授けたり。	فَأَوْحَىٰٓ إِلَىٰ عَبْدِهِۦ مَآ أَوْحَىٰ ﴿١١﴾
12．預言者の心は、己れの見たものを偽らざりき。(注８)	مَا كَذَبَ ٱلْفُؤَادُ مَا رَأَىٰ ﴿١٢﴾
13．お前たちは預言者が見たることについて、彼と論争せんとするか？	أَفَتُمَٰرُونَهُۥ عَلَىٰ مَا يَرَىٰ ﴿١٣﴾
14．而(しか)して、彼は再度主を見たり、(注９)	وَلَقَدْ رَءَاهُ نَزْلَةً أُخْرَىٰ ﴿١٤﴾
15．遥かなるシドラ樹(じゅ)のそば近くに。(注10)	عِندَ سِدْرَةِ ٱلْمُنتَهَىٰ ﴿١٥﴾
16．そは終(つい)の住居の楽園の傍(かたわ)らなり。	عِندَهَا جَنَّةُ ٱلْمَأْوَىٰٓ ﴿١٦﴾

ごくお側へ行き、神の精神的知識の泉で多く飲んだ後、その知識を人々に伝える為に降りて来たという意味も当節にはある。

注７　アラブの格言にある「彼等は我々に一つの弓から矢を放った」というのは、彼等が挙って我々に反対したという意味である。この様に、この言葉は完全なる合意を示している。「弦」の意味がどの様であっても、「弓二つの弦」は密接にあわさった二つの弓の弦のように、二者間の非常に強い結び付きを示す。モハッマド預言者が精神的な上昇を続け、神のお側に近付き、神との隔りが失せた時、彼はいわば「二つの弓」を合わせた一つの「弦」となったのである。当節はこの事を表している。先述の格言は、古代アラブの習慣を我々に思い起こさせる。その習慣によれば、二人の人間が固い友情を誓う時、二人が一つである事を示す為に互いの弓を結び付け、その結び付けられた弓から一本の矢を放つ。こうして、彼等がいわば一人の人間となり、一方への攻撃はもう一方への攻撃となる事を示した。もし「来臨」という話が神について使われているのなら、モハッマド預言者が神に近付き、神は彼の元へ降りて来られ、両者は一人の人間のように結び付いたと、当節は示す事になる。しかし、この言葉には今一つの美しく神秘的な意味がある。すなわち、片やモハッマド預言者が神に完全に吸収された為、彼は神の生き写しとなり、又一方で、彼は人々の下へ降りて行き、彼等への愛・同情・心配に心を占められていたので、神性と人間性が彼の中で結び付き、彼は神性と人間性の二本の弓の弦の中心点となったのである。「いやそれより近きところ」とは、モハッマド預言者と神の関係が想像できない程緊密になった事を示している。

注８　モハッマド預言者は実際に見たのであり、それは事実で想像の産物ではないと示している。

注９　モハッマド預言者の見た幻想は、二重の意味を持ち精神的経験であった。

注10　精神の高まりの中で、モハッマド預言者は人の想像を上まわる程に神のお側近くまで登って行った。又、シドラ樹は海という意味の語根から派生したものなので、その段階で、神の知識の果てしない海と永遠の真実が彼の前に広がった」と、この節は示しているのかもしれない。あるいは、当節は、モハッマド預言者に授けられた神の知識が、シドラ樹の様に、魂の旅人の疲れた四肢に安らぎの場を与える事を、象徴的に示しているとも言える。更に、シドラ樹葉は死人の腐敗を防ぐ効能があるので、当節は、モハッマド預言者に啓示された教義は、それ自体に免疫があるだけでなく、人が堕落するのを防ぐ力があるとも意味しているのだろう。又、フダイビヤの停戦協定の時、モハッマド預言者の友が忠誠の誓いを手にしたのはこの木の下であったという預言も当節には含まれている。

17．シドラ樹の葉かげがこんもりと茂れる時なり。（注 11）

اِذْ يَغْشَى السِّدْرَةَ مَا يَغْشٰى ﴿١٧﴾

18．預言者の目はそこにすいつけられたり。

مَا زَاغَ الْبَصَرُ وَمَا طَغٰى ﴿١٨﴾

19．げに彼は主の徴の至高なるものを見たり。

لَقَدْ رَاٰى مِنْ اٰيٰتِ رَبِّهِ الْكُبْرٰى ﴿١٩﴾

20．さて、ラート※とウッザー※について告げよ、※メッカのクライシュ族の偶像。

اَفَرَءَيْتُمُ اللّٰتَ وَالْعُزّٰى ﴿٢٠﴾

21．また第三番目の女神マナート※についても。※メッカのクライシュ族の偶像。

وَمَنٰوةَ الثَّالِثَةَ الْاُخْرٰى ﴿٢١﴾

22．なんとな、お前たちは男の子を持ちながら、アッラーには女の子というか！

اَلَكُمُ الذَّكَرُ وَلَهُ الْاُنْثٰى ﴿٢٢﴾

23．げにこは不公平なる分配なり。

تِلْكَ اِذًا قِسْمَةٌ ضِيْزٰى ﴿٢٣﴾

24．これ等は、お前たちやその父祖がつけし名前にすぎぬ。アッラーは彼等に如何なる許可も降さざりき。すでに主よりの嚮導が彼等に至れりというに、彼等はただ己が空しい憶測や好むところに従うのみ。（注 12）

اِنْ هِيَ اِلَّآ اَسْمَآءٌ سَمَّيْتُمُوْهَآ اَنْتُمْ وَاٰبَآؤُكُمْ مَّآ اَنْزَلَ اللّٰهُ بِهَا مِنْ سُلْطٰنٍ اِنْ يَّتَّبِعُوْنَ اِلَّا الظَّنَّ وَمَا تَهْوَى الْاَنْفُسُ وَلَقَدْ جَآءَهُمْ مِّنْ رَّبِّهِمُ الْهُدٰى ﴿٢٤﴾

25．人間は、その望むものを得らるべきや？

اَمْ لِلْاِنْسَانِ مَا تَمَنّٰى ﴿٢٥﴾

26．否、来世も現世もアッラーのものなり。

فَلِلّٰهِ الْاٰخِرَةُ وَالْاُوْلٰى ﴿٢٦﴾ ع

第二項

27．天上に如何に多くの天使ありといえども、彼等の執り成しは役立たざるべし、アッラーが思し召し且つ嘉したものに許可を与えざる限りは。（注 13）

وَكَمْ مِّنْ مَّلَكٍ فِي السَّمٰوٰتِ لَا تُغْنِيْ شَفَاعَتُهُمْ شَيْـًٔا اِلَّا مِنْۢ بَعْدِ اَنْ يَّاْذَنَ اللّٰهُ لِمَنْ يَّشَآءُ وَيَرْضٰى ﴿٢٧﴾

注 11　「こんもりと茂れる」という言葉は、神の出現を指す。

注 12　真の信者は、確かな知識に基づいているが、偶像崇拝者は、その偽りの信仰及び教義に論理的根拠も啓示による権威も有しない。彼は推測や迷信という救いのない事態に陥り、自らの欲望の奴隷となる。29 節と同じく、当節も又、折れた葦の上に立つ偶像崇拝者の不安定な状況を述べている。

注 13　本文中の意味の他、この言葉は、「アッラーの御意志に従う者と、アッラー自身が認めた者を除いて」という意味もある。

28．来世を信ぜざる者どもは、諸天使に女性の名を付して呼ぶ。

إِنَّ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ لَيُسَمُّونَ الْمَلَٰٓئِكَةَ تَسْمِيَةَ الْأُنْثَىٰ ﴿٢٨﴾

29．然しながら、彼等はこの事について何んの知識も有せず、ただ憶測に従うのみ。憶測は真理にとって代ること能わず。

وَمَا لَهُمْ بِهِ مِنْ عِلْمٍ ۖ إِنْ يَتَّبِعُونَ إِلَّا الظَّنَّ ۖ وَإِنَّ الظَّنَّ لَا يُغْنِي مِنَ الْحَقِّ شَيْئًا ﴿٢٩﴾

30．されば汝、われらが訓戒に背を向け、現世の生活のみを希う者を、顧みるな。

فَأَعْرِضْ عَنْ مَنْ تَوَلَّىٰ عَنْ ذِكْرِنَا وَلَمْ يُرِدْ إِلَّا الْحَيَوٰةَ الدُّنْيَا ﴿٣٠﴾

31．彼等の知識の限界は、現世の内なり。げに主は誰が正道を踏みはずし、誰が嚮導に従うかを最も良く知り給う。

ذَٰلِكَ مَبْلَغُهُمْ مِنَ الْعِلْمِ ۚ إِنَّ رَبَّكَ هُوَ أَعْلَمُ بِمَنْ ضَلَّ عَنْ سَبِيلِهِ وَهُوَ أَعْلَمُ بِمَنِ اهْتَدَىٰ ﴿٣١﴾

32．天にあるもの地にあるもの、挙げてアッラーのものなり。故にアッラーは、悪事を行える者にはそのなせることに応報し、善行を積む者にはその最善なるものを以て報奨し給う。

وَلِلَّهِ مَا فِي السَّمَٰوٰتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ لِيَجْزِيَ الَّذِينَ أَسَٰٓءُوا بِمَا عَمِلُوا وَيَجْزِيَ الَّذِينَ أَحْسَنُوا بِالْحُسْنَى ﴿٣٢﴾

33．重大な罪悪やふしだらな行為を避けるならば、僅に微罪を犯すとも、（注14）主の赦しは宏大なり。主はお前たちを土より創れる時より、また母の胎内にありし時より、お前たちを良く知り給う。されば、己れの純潔をおごりたかぶるなかれ。主は、誰が真の義しき人か、誰れよりも良く知り給う。

الَّذِينَ يَجْتَنِبُونَ كَبَٰٓئِرَ الْإِثْمِ وَالْفَوَٰحِشَ إِلَّا اللَّمَمَ ۚ إِنَّ رَبَّكَ وَاسِعُ الْمَغْفِرَةِ ۚ هُوَ أَعْلَمُ بِكُمْ إِذْ أَنْشَأَكُمْ مِنَ الْأَرْضِ وَإِذْ أَنْتُمْ أَجِنَّةٌ فِي بُطُونِ أُمَّهَٰتِكُمْ ۖ فَلَا تُزَكُّوا أَنْفُسَكُمْ ۖ هُوَ أَعْلَمُ بِمَنِ اتَّقَىٰ ﴿٣٣﴾

第三項

34．汝、嚮導から顔をそむけ、

أَفَرَءَيْتَ الَّذِي تَوَلَّىٰ ﴿٣٤﴾

35．施すものは僅少、それも不承不承出す者を見ざるか？（注15）

وَأَعْطَىٰ قَلِيلًا وَأَكْدَىٰ ﴿٣٥﴾

注14　「微罪」の意味には、悪に傾きかけること、一時の堕落、心を過ぎり跡を残さぬ瞬時の悪意、女性に対する偶然の一瞥、等ある。語源的には（アラビア語で）、一時、急速、不定期、何気ない行為という意味がある。

注15　「不承不承出す」という語が鉱物について使われる時、「ダイヤモンドや宝石を出すのを拒んだ。」という意味となり、坑夫に用いられる時、「採掘の途中で硬い岩床に出くわし、彼はそれ以上堀り進めなかった」となる。

36．そういう者は、見えざるものについて知識を有し、故に見得るか？

أَعِنْدَهُ عِلْمُ الْغَيْبِ فَهُوَ يَرَىٰ ﴿٣٦﴾

37．そういう者はモーゼの書の中にある話を聞かされたことがないのか、

أَمْ لَمْ يُنَبَّأْ بِمَا فِي صُحُفِ مُوسَىٰ ﴿٣٧﴾

38．また、アブラハムが命令を履行した話を？

وَإِبْرَاهِيمَ الَّذِي وَفَّىٰ ﴿٣٨﴾

39．重荷を負う者は、決して他人(ひと)の重荷を負わざるべし。（注 16）

أَلَّا تَزِرُ وَازِرَةٌ وِزْرَ أُخْرَىٰ ﴿٣٩﴾

40．人間(ひと)はただ己れが努力したことのみを得べし。（注 17）

وَأَنْ لَيْسَ لِلْإِنْسَانِ إِلَّا مَا سَعَىٰ ﴿٤٠﴾

41．而(しか)してその成果は、やがて必ず認められん。

وَأَنَّ سَعْيَهُ سَوْفَ يُرَىٰ ﴿٤١﴾

42．その時、之(これ)に対して十分に報いられるべし。

ثُمَّ يُجْزَاهُ الْجَزَاءَ الْأَوْفَىٰ ﴿٤٢﴾

43．汝の主は、万物の帰趨(きすう)なり。（注 18）

وَأَنَّ إِلَىٰ رَبِّكَ الْمُنْتَهَىٰ ﴿٤٣﴾

44．人を笑わせ、また泣かしむるは彼なり。

وَأَنَّهُ هُوَ أَضْحَكَ وَأَبْكَىٰ ﴿٤٤﴾

45．死なしめ、生ましむるも彼なり。

وَأَنَّهُ هُوَ أَمَاتَ وَأَحْيَا ﴿٤٥﴾

46．彼は男女両性を創り給う、

وَأَنَّهُ خَلَقَ الزَّوْجَيْنِ الذَّكَرَ وَالْأُنْثَىٰ ﴿٤٦﴾

47．ほとばしり出た一滴の精液より。

مِنْ نُطْفَةٍ إِذَا تُمْنَىٰ ﴿٤٧﴾

48．二度目の創造を生むのも、彼なり。

وَأَنَّ عَلَيْهِ النَّشْأَةَ الْأُخْرَىٰ ﴿٤٨﴾

49．人を富ましめ且つ満足させるのも、彼なり。

وَأَنَّهُ هُوَ أَغْنَىٰ وَأَقْنَىٰ ﴿٤٩﴾

50．彼こそは狼星(シリウス)の主なり。（注 19）

وَأَنَّهُ هُوَ رَبُّ الشِّعْرَىٰ ﴿٥٠﴾

注 16　人は皆己れの十字架を背負い、重荷に絶えねばならないであろう。

注 17　高い理想と教義を伴う不断の努力の後に、人はその目的を達成する事ができる。当節は、人が額に汗して生計を得るべきだとも示している。

注 18　あらゆる因果関係は神に帰する。神は、全ての原因の源、つまり造物主であられる。因果の自然の理法は全宇宙に広まっている。それ事態が始まりではない原因は全て他の原因に起因し、これは又別のものに起因し、この過程が続くのである。

注 19　アラブ人はシリウスが彼等の運命を左右すると考え、それを崇拝した。

51．その昔、アードを滅ぼし、（注 20）

وَأَنَّهُۥٓ أَهْلَكَ عَادًا ٱلْأُولَىٰ ﴿٥١﴾

52．またサムードを一人だに容赦せず滅ぼしたは、彼なり。

وَثَمُودَا۟ فَمَآ أَبْقَىٰ ﴿٥٢﴾

53．彼等以前のノアの民を滅ぼせるも、彼なり。げに彼等は悪逆暴戻を極めたり。

وَقَوْمَ نُوحٍ مِّن قَبْلُ ۖ إِنَّهُمْ كَانُوا۟ هُمْ أَظْلَمَ وَأَطْغَىٰ ﴿٥٣﴾

54．彼は破壊せるロトの邑々を転覆せり。

وَٱلْمُؤْتَفِكَةَ أَهْوَىٰ ﴿٥٤﴾

55．故に抵抗し難い懲罰が彼等を覆いたり。

فَغَشَّىٰهَا مَا غَشَّىٰ ﴿٥٥﴾

56．されば主の恩恵のいづれについて、人は汝に反駁するか？（注 21）

فَبِأَىِّ ءَالَآءِ رَبِّكَ تَتَمَارَىٰ ﴿٥٦﴾

57．この者は、往古の警告者たちと同じ警告者なり。

هَٰذَا نَذِيرٌ مِّنَ ٱلنُّذُرِ ٱلْأُولَىٰٓ ﴿٥٧﴾

58．審判の日は近づけり。（注 22）

أَزِفَتِ ٱلْـَٔازِفَةُ ﴿٥٨﴾

59．アッラーに非ずば、何人もそれをそらすこと能わず。

لَيْسَ لَهَا مِن دُونِ ٱللَّهِ كَاشِفَةٌ ﴿٥٩﴾

60．お前たちこの言葉に驚くか？

أَفَمِنْ هَٰذَا ٱلْحَدِيثِ تَعْجَبُونَ ﴿٦٠﴾

61．笑って、泣かざるか？

وَتَضْحَكُونَ وَلَا تَبْكُونَ ﴿٦١﴾

62．いつまでも浮かれ遊ぶか？

وَأَنتُمْ سَٰمِدُونَ ﴿٦٢﴾

63．アッラーの御前にひれ伏して、崇め奉れ。（注 23）

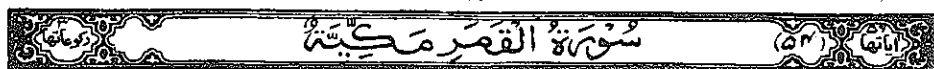
السجدة
۩ فَٱسْجُدُوا۟ لِلَّهِ وَٱعْبُدُوا۟ ﴿٦٣﴾

注 20　人間がまだ取るに足りない存在であった始まりの頃から、唯一神を支持する論議が為されて来たが、当章は、当節より、この命題立証の歴史を紹介し始めている。

注 21　モハッマド預言者の主張を支持し立証する論拠や神のしるしが、数多く明示されて来た後、当節では、皮肉混じりの哀れみの口調で、「いつまで真実を否定し、不信心の荒野を彷徨い続けるのか」と、強情な不信心者達に告げている。

注 22　当章は、モハッマド預言者の任期のごく初期、神命が下された五年目に啓示された。この時、嘲笑・脅迫・迫害の中で、イスラム教は重大な局面に直面していた。その時、この章の中で、クライシュ族の力を排する預言がなされ、次節にはより強い口調でそれが述べられている（54：46）。

注 23　イスラム教徒と不信心者の混在する前で、モハッマド預言者は当章を暗唱し終え、従者と共に地面にひれ伏したので、不信心者達も又、神の尊厳と栄光のみならずクルアーン暗唱の厳しさに深く打たれ、平伏したかもしれない。以上の事をこの言葉は表している様だ。これは、彼等が神を至高者そして創造主とみなし、彼等の神は神への仲介者に過ぎないと考えた為とも言える（10：19）。このもっともらしく思える出来事は、しかし、20～22 節で、ねつ造者により作り上げられた根拠の無い言い伝えと同じく、モハッマド預言者を中傷する人々が、その出来事の中にモハッマド預言者の過失を見つけ出せると勝手に信じて来たものである。

رکوعاتها　سُوْرَةُ الْقَمَرِ مَكِّيَّةٌ　(٥٤) آياتها

アル・クアマル
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．その時は近づけり、月も裂けたり。(注1)

اِقْتَرَبَتِ السَّاعَةُ وَانْشَقَّ الْقَمَرُ ②

3．されど、彼等奇跡を見ても、顔をそむけて云う、「相変わらずの妖術か」と。

وَاِنْ يَّرَوْا اٰيَةً يُّعْرِضُوْا وَيَقُوْلُوْا سِحْرٌ مُّسْتَمِرٌّ ③

4．彼等は真理を拒否し、己れの幻想に従う。然(しか)しながら、神の決定はすべて必ず実現す。(注2)

وَكَذَّبُوْا وَاتَّبَعُوْا اَهْوَاۗءَهُمْ وَكُلُّ اَمْرٍ مُّسْتَقِرٌّ ④

注1　月の分裂が肉眼で見えるか否かいずれにしても、それはあらゆる自然の法則に反する。この出来事に関して確固たる歴史上の確証はないとする意見を否定するのは難しい。他方、神の神秘を全て推し測ったり、自然のなぞを完全に理解できる者はない。地球のかなりの地域に影響を及ぼす様な出来事が、世界の天文台で観測されなかったり、歴史書に記されなかったとは考えられない。しかしこの出来事は、モハッマド預言者の言葉を集録した信頼するに足るブハリやムスリムに記されており、信頼できる筋の伝承に語り継がれ、イブン・マスードの様なモハッマド預言者の学のある友人に記録されているので、並はずれて重大な自然現象が幾つかモハッマド預言者の時代に起きた事を示すものである。ラズィーを含むクルアーンの注釈者達は、この出来事は月食だとして難問を解決しようと試みた。イマーム・ガザーリ、シャー・ワリウッラーも、月は実際に分裂したのではなく、神が見物人にその様に見える様計られたという見解をとった。イブン・アバース、シャー・アブトゥルアズィーズによれば、それはある種の月食となっている。しかしクルアーンに述べられた力強い言葉を考慮すれば、この出来事は単なる月食以上のものの様である。不信心者に執拗に要求された時、モハッマド預言者が素晴らしい奇跡を行ってみせたのは事実だ(ブハリとムスリム参照)。ヘビに変った杖が呪術師に向けられたモーゼの幻だったように、この出来事は、友人や不信心者に向けられたモハッマド預言者の幻だったようである。あるいは、引き潮と同時にモーゼが杖を使って海水を打つ事で、奇跡とは如何なるものかを示した様に、いずれかの天体が月の前にあって、見物人には月が割れた様に見える時、神がモハッマド預言者に月を割る奇跡を見せる様にお命じになったのかもしれない。しかし深い宗教的意義を備えた最も説得力ある解釈は、太陽がペルシャ人の国の象徴である様に、月はアラブ国家の紋章であり、その政治力の象徴だという事実もある。カイバルのユダヤの指導者ホイヤビン・アクタブの娘サフィヤが月がひざの上に落ちて来る夢を見たと父親に告げた時、彼は、「お前は、アラブの指導者との結婚を望んでいるのであるまいな。」と言い、その顔を打った。カイバル陥落の後、サフィヤがモハッマド預言者に嫁いだ時、彼女の夢は実現した。同じく、アイシャは、三つの月が彼女の部屋に落ちる夢を見たが、これは、モハッマド預言者、アブーバクル・オマルが次々にそこに葬られた時に成就した。カマル（月）のこの象徴的な意味からすれば、53：58で不信心のアラブ人が強迫に用いたその政治力が、既に崩壊の時を迎えていたと、当節は示している事になる。この場合の「その時」という語は、クライシュの指導者の大方が死に、彼等の勢力撲滅のきっかけとなったバトルの戦を指しているのだろう。この様に当節には、宣告後八・九年して見事実現した強力な預言が収められている。更に数人の作家の言を借りれば、「月も裂けたり(インシャクカ・アルカマル)」というアラビア語は、「その出来事は明らかになった」と意味するのである。この意味からすれば、「クライシュ族の力の崩壊の時が来た。モハッマド預言者が真の神の使者である事が明白となろう。」ということを当節を表している事になる。7：108も参照の事。

注2　クライシュの政治力崩壊は神により命じられたものであり、神の命は実現するに違いない。

5．その中に警告を含めるさまざまな消息は、すでに彼等に伝えられたり。

وَلَقَدْ جَآءَهُمْ مِّنَ الْأَنْبَآءِ مَا فِيْهِ مُزْدَجَرٌ ﴿٥﴾

6．そは完全無欠の智恵なり。されど、その警告は彼等を益せず。

حِكْمَةٌۢ بَالِغَةٌ فَمَا تُغْنِ النُّذُرُ ﴿٦﴾

7．されば汝、彼等を顧みるな。而して待て、召喚者が彼等をいやなところへ呼び出すその日まで。

فَتَوَلَّ عَنْهُمْ يَوْمَ يَدْعُ الدَّاعِ إِلٰى شَيْءٍ نُّكُرٍ ﴿٧﴾

8．その日彼等は、項垂れ目を伏せ、蝗の飛び散る如く墓より出で、(注3)

خُشَّعًا أَبْصَارُهُمْ يَخْرُجُوْنَ مِنَ الْأَجْدَاثِ كَأَنَّهُمْ جَرَادٌ مُّنْتَشِرٌ ﴿٨﴾

9．召喚者の許へ急ぎ行かん。「こは艱難の日なり」と嘆きながら。(注4)

مُّهْطِعِيْنَ إِلَى الدَّاعِ يَقُوْلُ الْكٰفِرُوْنَ هٰذَا يَوْمٌ عَسِرٌ ﴿٩﴾

10．彼等以前にも、ノアの民が真理を拒否したり。然り、彼等はわれらの僕を認めず、「狂人なり」と罵りて、排斥せり。

كَذَّبَتْ قَبْلَهُمْ قَوْمُ نُوْحٍ فَكَذَّبُوْا عَبْدَنَا وَقَالُوْا مَجْنُوْنٌ وَّازْدُجِرَ ﴿١٠﴾

11．故に彼はその主に「我は敗れたり。汝、来て我を助けたまえ」と祈りたり。

فَدَعَا رَبَّهٗٓ أَنِّيْ مَغْلُوْبٌ فَانْتَصِرْ ﴿١١﴾

12．故にわれらただちに天の水門を開きたれば、水は滝の如く降り下りたり。

فَفَتَحْنَآ أَبْوَابَ السَّمَآءِ بِمَآءٍ مُّنْهَمِرٍ ﴿١٢﴾

13．われらまた地上のいたるところに突然泉を噴出させたり。されば二つの水は命ぜられた目的のために合流せり。

وَّفَجَّرْنَا الْأَرْضَ عُيُوْنًا فَالْتَقَى الْمَآءُ عَلٰٓى أَمْرٍ قَدْ قُدِرَ ﴿١٣﴾

14．われらはノアを、板と釘もて造れるものの上に乗すれば、

وَحَمَلْنٰهُ عَلٰى ذَاتِ أَلْوَاحٍ وَّدُسُرٍ ﴿١٤﴾

15．その船はわれらの眼下に浮びたり。こはみなから排斥られた者への報奨なり。

تَجْرِيْ بِأَعْيُنِنَا جَزَآءً لِّمَنْ كَانَ كُفِرَ ﴿١٥﴾

16．われら之を後の世の人々のために、一つの神兆として遣したれど、果たしてこの種の警告を甘んじて受くる者ありや？

وَلَقَدْ تَّرَكْنٰهَآ اٰيَةً فَهَلْ مِنْ مُّدَّكِرٍ ﴿١٦﴾

注3　此所にある「墓」は不信心者の家を指す。不信心者は精神的な生活を全く欠いているので、クルアーンの数箇所において、彼等は死人に例えられて来た（27：81、35：23）。

注4　クライシュがほんの二・三年前にメッカから追放し、その首に懸賞金をかけた召喚者（モハッマド預言者）を、彼等の首都の門前に見た時、彼等が驚きうろたえた様子を、当節及び前二節は、鮮やかに描いている。

17．あの時のわが懲罰のもの凄さよ、わが警告の確かさよ！

فَكَيْفَ كَانَ عَذَابِي وَنُذُرِ ١٧

18．げにわれらは、クルアーンを理解し易く且つ記憶し易いようにつくりたり。されど、この警告に留意する者果たしてありや？

وَلَقَدْ يَسَّرْنَا الْقُرْآنَ لِلذِّكْرِ فَهَلْ مِن مُّدَّكِرٍ ١٨

19．アード族も真理を拒否せり。あの時のわが懲罰のもの凄さよ、わが警告の確かさよ！

كَذَّبَتْ عَادٌ فَكَيْفَ كَانَ عَذَابِي وَنُذُرِ ١٩

20．うち続く災厄の日に、われらは荒れ狂う暴風を彼等に吹きつければ、(注5)

إِنَّا أَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ رِيحًا صَرْصَرًا فِي يَوْمِ نَحْسٍ مُّسْتَمِرٍّ ٢٠

21．根こそぎにされた椰子の幹の如く、人々を引き裂けり。

تَنزِعُ النَّاسَ كَأَنَّهُمْ أَعْجَازُ نَخْلٍ مُّنقَعِرٍ ٢١

22．あの時のわが懲罰のもの凄さよ、わが警告の確かさよ！

فَكَيْفَ كَانَ عَذَابِي وَنُذُرِ ٢٢

23．げにわれらは、クルアーンを理解し易く且つ記憶し易いようにつくりたり。されど、この警告に留意する者果たしてありや？

وَلَقَدْ يَسَّرْنَا الْقُرْآنَ لِلذِّكْرِ فَهَلْ مِن مُّدَّكِرٍ ٢٣

第二項

24．サムードも警告者を拒めり。(注6)

كَذَّبَتْ ثَمُودُ بِالنُّذُرِ ٢٤

25．彼等は云えり、「何んと、我等の中の一人の男に、それもただの人間の云うことに従えとな！　そは明らかな誤りなり、狂気の沙汰なり。

فَقَالُوا أَبَشَرًا مِّنَّا وَاحِدًا نَّتَّبِعُهُ إِنَّا إِذًا لَّفِي ضَلَالٍ وَسُعُرٍ ٢٥

26．我等の中で彼にのみ訓戒が啓示されたというか？　否、彼は大嘘つきなり」と。

أَؤُلْقِيَ الذِّكْرُ عَلَيْهِ مِن بَيْنِنَا بَلْ هُوَ كَذَّابٌ أَشِرٌ ٢٦

27．「明日彼等は、誰が大嘘つきなるかを知るべし。

سَيَعْلَمُونَ غَدًا مَّنِ الْكَذَّابُ الْأَشِرُ ٢٧

28．われらは彼等を試みんがために牝駱駝を送らん。さればサーリフよ、じっと堪えて彼等を監視せよ。

إِنَّا مُرْسِلُو النَّاقَةِ فِتْنَةً لَّهُمْ فَارْتَقِبْهُمْ وَاصْطَبِرْ ٢٨

注5　当節は、好運・不運という特定の時があると意味しているのではなく、アード族にとりその日は不運であったと示しているのである。

注6　全ての預言者は神に任じられ、彼等の啓示は神より生じ、類似した永遠の基本的真実を含んでいるので、一人の預言者を拒めば、預言者全てを拒絶する事となる。ノアの一族アード、ロトの一族タムードは、実際はそれぞれの預言者のみを拒んだだけであったが、全ての預言者を排したと当節に書かれてあるのは、上記の理由からである。

29. 而して彼等に、水は人間と駱駝で共通に使用し、それぞれ交替に飲めと告げよ」

وَنَبِّئْهُمْ أَنَّ الْمَاءَ قِسْمَةٌ بَيْنَهُمْ كُلُّ شِرْبٍ مُحْتَضَرٌ ﴿٢٩﴾

30. 然るに彼等は仲間を呼びよせたれば、その男は刀を以て駱駝の膕を切り之を不具となす。

فَنَادَوْا صَاحِبَهُمْ فَتَعَاطَىٰ فَعَقَرَ ﴿٣٠﴾

31. あの時のわが懲罰のもの凄さよ、わが警告の確かさよ！

فَكَيْفَ كَانَ عَذَابِي وَنُذُرِ ﴿٣١﴾

32. われら彼等に一声の轟音を送れば、彼等はいけがきを作る枯木の如くなり果てり。(注7)

إِنَّا أَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ صَيْحَةً وَاحِدَةً فَكَانُوا كَهَشِيمِ الْمُحْتَظِرِ ﴿٣٢﴾

33. げにわれらは、クルアーンを理解し易く、且つ記憶し易いようにつくりたり。されど、この警告に留意する者果してありや？

وَلَقَدْ يَسَّرْنَا الْقُرْآنَ لِلذِّكْرِ فَهَلْ مِنْ مُدَّكِرٍ ﴿٣٣﴾

34. ロトの民も警告者を拒めり。

كَذَّبَتْ قَوْمُ لُوطٍ بِالنُّذُرِ ﴿٣٤﴾

35. さればわれらは、彼等に石の嵐を送り、黎明にロトの家族のみを救いやりぬ、

إِنَّا أَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ حَاصِبًا إِلَّا آلَ لُوطٍ نَجَّيْنَاهُمْ بِسَحَرٍ ﴿٣٥﴾

36. われらが恩寵によりて。われらはかくの如く、感謝する者に報ゆ。

نِعْمَةً مِنْ عِنْدِنَا كَذَٰلِكَ نَجْزِي مَنْ شَكَرَ ﴿٣٦﴾

37. 彼は確かにわれらの懲罰を彼等に警告せり。されど彼等はその警告を疑えり。

وَلَقَدْ أَنْذَرَهُمْ بَطْشَتَنَا فَتَمَارَوْا بِالنُّذُرِ ﴿٣٧﴾

38. それどころか、彼等は策略を用いて、彼をその賓客から引き離さんと謀りぬ。さればわれらは、彼等の目をつぶし、「わが懲罰と警告を、とくと味わえ」と告げたり。(注8)

وَلَقَدْ رَاوَدُوهُ عَنْ ضَيْفِهِ فَطَمَسْنَا أَعْيُنَهُمْ فَذُوقُوا عَذَابِي وَنُذُرِ ﴿٣٨﴾

39. 而して、翌朝早く、彼等の上にやむことなき懲罰が下りたり。

وَلَقَدْ صَبَّحَهُمْ بُكْرَةً عَذَابٌ مُسْتَقِرٌّ ﴿٣٩﴾

注7　不信心者は完全に鎮圧された。あるいは、生け垣をつくる際、職人の手で削り落とされ、刈り株を押しつぶされ、集められた枯木の様に、彼等は神の目には価値の無いものとなった。

注8　ロトの一族は彼の客を捕らえようとしたが、客は隠れて見つけられなかったようだ。又は、神のお計いで、ロト一族の注意は彼等からそれたと意味する。

40.「汝等、わが懲罰と警告を、とくと味わえ」

فَذُوقُوا عَذَابِي وَنُذُرِ ﴿٣٩﴾

41. げにわれらは、クルアーンを理解し易く、且つ記憶し易いようにつくりたり。されど、この警告に留意する者、果してありや？

وَلَقَدْ يَسَّرْنَا الْقُرْآنَ لِلذِّكْرِ فَهَلْ مِن مُّدَّكِرٍ ﴿٤٠﴾

第三項

42. げに警告者は、ファラオの民にも来たれり。

وَلَقَدْ جَاءَ آلَ فِرْعَوْنَ النُّذُرُ ﴿٤١﴾

43. 彼等は、われらの神兆をすべて認めざりき。さればわれらは、強力な全能の神の懲らしめ方で彼等を襲いたり。（注9）

كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا كُلِّهَا فَأَخَذْنَاهُمْ أَخْذَ عَزِيزٍ مُّقْتَدِرٍ ﴿٤٢﴾

44. お前たち不信心者ども、あのものどもより優れるというか？　それとも、お前たちだけは免除されると経典に記されているとでもいうか？（注10）

أَكُفَّارُكُمْ خَيْرٌ مِّنْ أُولَٰئِكُمْ أَمْ لَكُم بَرَاءَةٌ فِي الزُّبُرِ ﴿٤٣﴾

45. はたまた「我等は常勝軍なり」というか？

أَمْ يَقُولُونَ نَحْنُ جَمِيعٌ مُّنتَصِرٌ ﴿٤٤﴾

46. いまに見ておれ、彼の軍勢は必ず潰滅し、敗走せん。（注11）

سَيُهْزَمُ الْجَمْعُ وَيُوَلُّونَ الدُّبُرَ ﴿٤٥﴾

47. 然り、審判の日こそ彼等の約束された期限なり。その時こそ苛烈苦汁を味わわん。

بَلِ السَّاعَةُ مَوْعِدُهُمْ وَالسَّاعَةُ أَدْهَىٰ وَأَمَرُّ ﴿٤٦﴾

48. げに罪人どもは、迷誤と狂妄の中にあり。

إِنَّ الْمُجْرِمِينَ فِي ضَلَالٍ وَسُعُرٍ ﴿٤٧﴾

49. その日彼等は、俯きて業火へと引きずられ、「地獄の感触を味わえ」と云われん。

يَوْمَ يُسْحَبُونَ فِي النَّارِ عَلَىٰ وُجُوهِهِمْ ذُوقُوا مَسَّ سَقَرَ ﴿٤٨﴾

注9　ファラオは非常に強力な君主であった。彼は自らをイスラエル最高の君主とみなした(79：25)。その為、モーゼとアロンの神・全能の神の力がこの自称君主に振るわれ、彼は完全に滅ぼされた。

注10　当節は、形を変えて偶像崇拝者クライシュへの警告を繰り返している。「ノア、フード、ロトあるいはモーゼを拒んだ者より、お前たちは幾分なりともましなのか」と彼等に尋ねている。又は次の様に述べている。「啓示書に記された神の約束を受け入れるなら、お前たちは、預言者モハッマドを拒む事で罰せられる事はないであろう。」

注11　当節に含まれる強い預言は、メッカの軍隊がバドルの戦いで喫した徹的な敗北に関するものである。イスラム教徒は全く劣勢だったので、戦いが始まった時、預言者モハッマドは自分のテントの中で、謙そんと苦悩の中に、次の様に注目すべき言葉で神に祈った。「神よ、どうか御約束が成就されますように。このイスラム教徒の小隊が全滅すれば、この世に二度と神を崇める者は生じますまい。」（ブハリ）祈り終えた後、モハッマド預言者はテントから出、戦場に向いて当節を朗唱した。

50．げにわれらは、一切を、限定された規準のもとに創りたり。（注 12）

إِنَّا كُلَّ شَيْءٍ خَلَقْنَٰهُ بِقَدَرٍ ﴿٥٠﴾

51．しかもわれらの命令はただ一言にして、瞬（まばた）きの如し。（注 13）

وَمَآ أَمْرُنَآ إِلَّا وَٰحِدَةٌ كَلَمْحٍۭ بِٱلْبَصَرِ ﴿٥١﴾

52．げにわれらは、かってお前たちと同じ徒輩（やから）を滅ぼせり。されど、この警告に留意する者果してありや？

وَلَقَدْ أَهْلَكْنَآ أَشْيَاعَكُمْ فَهَلْ مِن مُّدَّكِرٍ ﴿٥٢﴾

53．彼等の所業はすべて帳簿に記載せらる。（注 14）

وَكُلُّ شَيْءٍ فَعَلُوهُ فِي ٱلزُّبُرِ ﴿٥٣﴾

54．大小一切のこと、悉（ことごと）く記載せらる。

وَكُلُّ صَغِيرٍ وَكَبِيرٍ مُّسْتَطَرٌ ﴿٥٤﴾

55．げに義（ただ）しい者は、花園と河川との間に住み、

إِنَّ ٱلْمُتَّقِينَ فِي جَنَّٰتٍ وَنَهَرٍ ﴿٥٥﴾

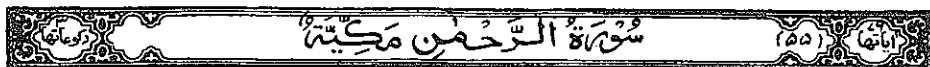
56．全能の王者の御前（みまえ）で永遠且つ栄誉の住居を賜わらん。

فِي مَقْعَدِ صِدْقٍ عِندَ مَلِيكٍ مُّقْتَدِرٍ ﴿٥٦﴾

注 12　何事にも断固たる基準がある。それには定められた時と場所が含まれる。

注 13　バドルの戦場におけるメッカ人の敗北は青天の霹靂であった為、それは覆（くつがえ）しようのないものであった。敵の力は、またたく間に失せた。

注 14　人の最小限の行為は、良きにつけ悪しきにつけ、因果関係による不可避の結果を生み出し、消す事の出来ない印象を跡に残す。

سورة الرحمن مكية (٥٥)

アル・ラフマーン
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍く（あまねく）アッラーの御名（みな）において。	بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①
2．そは慈悲深き神なり、	اَلرَّحْمٰنُ ②
3．クルアーンを教えたるは。	عَلَّمَ الْقُرْاٰنَ ③
4．彼は人間を創造し、（注１）	خَلَقَ الْاِنْسَانَ ④
5．之（これ）に言葉を教えたり。	عَلَّمَهُ الْبَيَانَ ⑤
6．日月は一定の計算に従いその軌道を走る。	اَلشَّمْسُ وَالْقَمَرُ بِحُسْبَانٍ ⑥
7．草木は神の御旨（みむね）に恭順す。（注２）	وَّالنَّجْمُ وَالشَّجَرُ يَسْجُدٰنِ ⑦
8．彼天を高く揚げ、権衡（けんこう）を据えたるは、（注３）	وَالسَّمَآءَ رَفَعَهَا وَوَضَعَ الْمِيْزَانَ ⑧
9．お前たちが権衡（けんこう）を不正に扱うことなからしめんがためなり。（注４）	اَلَّا تَطْغَوْا فِي الْمِيْزَانِ ⑨
10．されば、公明正大に計量し、決して少く計るなかれ。	وَاَقِيْمُوا الْوَزْنَ بِالْقِسْطِ وَلَا تُخْسِرُوا الْمِيْزَانَ ⑩
11．彼は大地をその被造物のために備（そな）えたれば、	وَالْاَرْضَ وَضَعَهَا لِلْاَنَامِ ⑪

注１　「人間」という語は、一般的な意味以外に、此所では完全なる人、モハッマド預言者を指す。彼の身には、神の属性が最も完全な形で表されている。この様に、人間が魂の向上の頂点に達し、その身に神の属性を表す様、神の慈悲で人間をお作りになったと、当節は示している。

注２　前節と共に読まれる当節は、最大の天体から最小の茎のない植物に至るまで、万物は一定の法則に支配され、寸分違わずその役割を果たすと示している。無数にある天体系の一つ、巨大な太陽系において、全ての天体は定められた軌道を安全に運行し、そこからはずれる事は決してない。

注３　全宇宙は一定の法則に支配され、それを構成する各部は、構造と動きのみごとな調和を遂げ一つに結びついている。この異物間の調和と均衡が少しなりとも乱れれば、全宇宙はばらばらになってしまうであろう。しかし神は、人間の及ばぬ、唯一神の支配の下で、世界を統制する法、全てを維持されて来られた。

注４　全宇宙に、　全てを包括する調和があるように、万物の霊長である人間もまた、均衡を保ち、すべての人を公平に扱い、極端を避け、創造主への義務を果たして中庸を重んじる様命じられている。

12．そこにはさまざまな果物あり、莢(さや)かぶる棗椰子(なつめやし)あり、

فِيهَا فَاكِهَةٌ وَالنَّخْلُ ذَاتُ الْأَكْمَامِ ﴿١٢﴾

13．穀かぶる穀物あり、馥郁(ふくいく)たる草木あり。

وَالْحَبُّ ذُو الْعَصْفِ وَالرَّيْحَانُ ﴿١٣﴾

14．然(しか)らばお前たち両者、人間と妖霊(ジン)ども、主の恩寵(おんちょう)のいずれを否(いな)むか？（注５）

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ﴿١٤﴾

15．彼は人間を陶器を焼くが如き粘土より創造し、（注６）

خَلَقَ الْإِنسَانَ مِن صَلْصَالٍ كَالْفَخَّارِ ﴿١٥﴾

16．妖霊(ジン)をば炎(ほのお)より創造せり。（注７）

وَخَلَقَ الْجَانَّ مِن مَّارِجٍ مِّن نَّارٍ ﴿١٦﴾

17．然(しか)らばお前たち両者、主の恩寵(おんちょう)のいずれを否(いな)むか？

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ﴿١٧﴾

18．彼は二つの東の主、二つの西の主なり。（注８）

رَبُّ الْمَشْرِقَيْنِ وَرَبُّ الْمَغْرِبَيْنِ ﴿١٨﴾

19．然(しか)らばお前たち両者、主の恩寵(おんちょう)のいずれを否(いな)むか？

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ﴿١٩﴾

注５　「否む」の主語は、庶民と妖霊の両者であるが、この「両者」は、又、二種類の人、信者と不信心者、主と従者、富める者と貧しき者、白人と有色人を指すのかもしれない。（アラビア語ではこの「否む」は、両数形という２つの主語をとる形で、書かれておりそれは、様々な節に含まれる戒律の威厳を示す為、それを強調するのに用いられたともいえる。この様な両数形はアラビア語でよく使われる。）50：25 も参照の事。モハッマド預言者は、当節が啓示される時、居合わせた信者が次の言葉を口にする事で返答すべきだと述べたとされる。「主よ、我々は、あなたのいかなる恩寵も否むことなどいたしません。」と。

注６　天空の創造と太陽・月の配置、そして地球とそこに育つ植物の成長について語った後、当章は、当節において、人間の事に触れている。乾いて音のする土から人間が作られたという事は、人間が会話の能力を潜在的に持つものから作られたと示しているのかもしれない。「粘土」は異質な物で打たれた時にのみ音を出すので、この言葉は、人間の応答力には神命を受けられる事が必要だと示すのに、処所で使われている。クルアーンでは、人間の創造及び精神発達の異なる段階を示すのに、三つの言葉が使われて来た。第一段階は「ちりからつくられた」（３：60）、第二段階は「粘土からつくられた」（６：３）、これは、神の言葉を受けた後、人間は識別力を得、これにより善・悪の判断ができる様になったと意味するものである。第三段階は「陶器」の段階と呼ばれ、人間は試され、試錬の炎をくぐり抜ける様定められているのである。あらゆる試錬に耐え、魂の成熟が完全の域に達して初めて、人は神に受け入れられるのである。

注７　15：28 参照。

注８　地上のどの地点を取ってみても、他の地点との関連で言えば東と西である。この事は、「二つの東」と「二つの西」として書かれてある。又、地球は丸いので、東半球の東は西半球の西であり、西半球の東、すなわち東半球の西である。この為、二つの東と二つの西が存在するのである。現代の政治用語では、二つの東は中近東と極東を、二つの西はヨーロッパとアメリカを指している。全世界の主は神であられる為、クルアーンの光はまず東に広まり、次いで西を照らす。この様にして 39 章 70 節に記されている「全地球が、神の光で照らされるであろう」という預言が成就される。

20．彼は二つの海を流れさせり。二つの海はいつの日か相い見(まみ)えん。(注9)

مَرَجَ الْبَحْرَيْنِ يَلْتَقِيٰنِ ٢٠

21．いま二つの海の間には隔壁ありて、互に浸食することを得ず。

بَيْنَهُمَا بَرْزَخٌ لَّا يَبْغِيٰنِ ٢١

22．然(しか)らばお前たち両者、主の恩寵(おんちょう)のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ٢٢

23．どちらの海からも真珠と珊瑚出づ。(注10)

يَخْرُجُ مِنْهُمَا اللُّؤْلُؤُ وَالْمَرْجَانُ ٢٣

24．然(しか)らばお前たち両者、主の恩寵(おんちょう)のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ٢٤

25．山の如く海面に聳(そび)え立つ船も、また彼の有(もの)なり。(注11)

وَلَهُ الْجَوَارِ الْمُنْشَئٰتُ فِي الْبَحْرِ كَالْاَعْلَامِ ٢٥

26．然(しか)らばお前たち両者、主の恩寵(おんちょう)のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ٢٦

第二項

27．この世にあるものはすべて消滅す。(注12)

كُلُّ مَنْ عَلَيْهَا فَانٍ ٢٧

28．独(ひと)り荘厳かつ栄誉の主のみ永遠に存在す。(注13)

وَّيَبْقٰى وَجْهُ رَبِّكَ ذُو الْجَلٰلِ وَالْاِكْرَامِ ٢٨

29．然(しか)らばお前たち両者、主の恩寵(おんちょう)のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ٢٩

注9　「二つの海」とは、紅海と地中海、又は大西洋と太平洋が考えられるが、特に前者を指しているようだ。当節には偉大な預言が含まれているが、これはスエズとパナマ両運河の建設により成就された。前者は紅海と地中海を、後者は大西洋と太平洋を結び付けた。世界はこの預言の成就を見る為に、13世紀もの間待たねばならなかった。あるいは、「2つの海」は、自然科学と精神科学を示しているのかもしれない。又、相反すると誤認された自然の法と神の啓示は、片や神の業であり、他方が神の言葉であるので、互いに確証し合うものである。

注10　不思議な事に、真珠も珊瑚もスエズ・パナマ両運河に見られる。

注11　この言葉は、山と同じく海を支配する、現代のレビ族の人を指している様だ。当章は、貿易拡大に海路を利用して手にした、西側諸国の進歩と繁栄に言及しているのかもしれない。

注12　全宇宙は衰退と死を避ける事はできず、いつかは衰びる運命にある。神のみがとどまれるであろう。それは神が独自に存在し、何に頼ることもなく存続できる存在だからである。

注13　地球、天体、物質界は全て無に帰す事となっているので、なおさら人間の理性は不死身の存在を求める。それは、全宇宙を創造され、万物の始まりであり、終わりでもある、神である。当節及び前二節は、同時に働く二つの不変の法則を示している。(1)万物は滅び死に行く運命にある。(2)神の法に従えば、生命の継続は保証される。

30. 天地にあるすべてのものは、彼に訴え請う。日々彼は異なる状態で自らを表わす。

يَسْـَٔلُهٗ مَنْ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ كُلَّ يَوْمٍ هُوَ فِيْ شَاْنٍ ۝٣٠

31. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ۝٣١

32. やがてわれらはお前たちを審判すべく時をつくらん、汝等二つの重荷よ！（注 14）

سَنَفْرُغُ لَكُمْ اَيُّهَ الثَّقَلٰنِ ۝٣٢

33. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ۝٣٣

34. 妖霊と人間の輩よ、天地の限界を越え得るならば、越えてみよ。されど主の権能の助けなしには、お前たち之を越える能わず。

يٰمَعْشَرَ الْجِنِّ وَالْاِنْسِ اِنِ اسْتَطَعْتُمْ اَنْ تَنْفُذُوْا مِنْ اَقْطَارِ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ فَانْفُذُوْا ۗ لَا تَنْفُذُوْنَ اِلَّا بِسُلْطٰنٍ ۝٣٤

35. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ۝٣٥

36. 火焔と溶銅がお前たちに浴びせられん。お前たちは自らを守り得ざるべし。（注 15）

يُرْسَلُ عَلَيْكُمَا شُوَاظٌ مِّنْ نَّارٍ ۙ وَّنُحَاسٌ فَلَا تَنْتَصِرٰنِ ۝٣٦

37. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ۝٣٧

38. 天が裂け割れて、赤皮の如く赤くなるときあらん。（注 16）

فَاِذَا انْشَقَّتِ السَّمَآءُ فَكَانَتْ وَرْدَةً كَالدِّهَانِ ۝٣٨

39. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ۝٣٩

注 14　二つの重要な物を意味する「二つの重荷」は、本文が示す通り、人とジンを指すと言えよう。又次の様な解釈もある。アラブ人と非アラブ人。現代政治用語に言う二大主要圏、つまり一方が、ソ連・中国とその同盟国、もう一方がアメリカ合衆国とその同盟国。資本階級と労働者階級。これ等二大連合が行動するやり方では、彼等は常に道徳的な争いから抜け出る事ができず、科学技術開発分野で何世紀にも渡って積み上げられた人々の業績を完全に打ち壊し、地上の生命をほぼ絶滅させてしまうかもしれない。当節には、この事への警告が含まれているようだ。

注 15　当節は、二つの対立する陣営にふりかかる、最も破壊的で恐ろしい罰を示している。全人類の文明を焼き尽くす恐れのある、恐ろしい大火に世界は瀕している様だ。

注 16　恐ろしい罰を如何にありありと描いている事か。

40．その日、人間も妖霊もその罪について問われることなからん。（注 17）

فَيَوْمَئِذٍ لَّا يُسْـَٔلُ عَن ذَنۢبِهِۦٓ إِنسٌ وَلَا جَآنٌّ ﴿٤٠﴾

41．然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَبِأَيِّ ءَالَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ﴿٤١﴾

42．罪を犯せし者はその印でわかり、前髪と両足を捕えられん。

يُعْرَفُ ٱلْمُجْرِمُونَ بِسِيمَٰهُمْ فَيُؤْخَذُ بِٱلنَّوَٰصِى وَٱلْأَقْدَامِ ﴿٤٢﴾

43．然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَبِأَيِّ ءَالَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ﴿٤٣﴾

44．こは罪を犯せし者が認めざりし地獄なり。

هَٰذِهِۦ جَهَنَّمُ ٱلَّتِى يُكَذِّبُ بِهَا ٱلْمُجْرِمُونَ ﴿٤٤﴾

45．彼等は煮えたぎる熱湯の中をめぐりさまよわん。

يَطُوفُونَ بَيْنَهَا وَبَيْنَ حَمِيمٍ ءَانٍ ﴿٤٥﴾

46．然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَبِأَيِّ ءَالَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ﴿٤٦﴾

第三項

47．されど、主の御前に立つことを畏れる者には、二つの楽園あり。（注 18）

وَلِمَنْ خَافَ مَقَامَ رَبِّهِۦ جَنَّتَانِ ﴿٤٧﴾

48．然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَبِأَيِّ ءَالَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ﴿٤٨﴾

49．そこにはうっそうと茂れる樹木あり。（注 19）

ذَوَاتَآ أَفْنَانٍ ﴿٤٩﴾

注 17　犯罪者の悪事は、彼等がその行為を犯したか否か聞かれないうちに、その顔に大書きされるであろう。クルアーンの他所（41：21）で示されている通り、不信心者の身体の諸器官ですら、彼等に不利な証言をするであろう。

注 18　「二つの楽園」とは次の様の事を意味する。(1)善良なる人生のもたらす心の平安。(2)物質快楽を追い求める人生に生じる苦しみからの解放。「楽園」は、現世で神の為に自らの欲望を捨て去る事であり、今一つは、来世で神の喜びを与えられる事である。真の信者は絶えず現世において神の恩恵に浴し、苦しみにかき乱れる事もない。これは地上の楽園であり、神を畏れる者に授けられ、彼は常にそこに住まうのである。来世に約束された天国とは、現世の楽園の映像でしかなく、現世でその様な人が享受する精神的恵を具現化したものである。クルアーンが 10：65 及び 41：32 で述べているのは、真の信者のこの楽園にいる様な状態である。「二つの楽園」は又、二本の川からの灌漑で土壌豊かな二つの谷、ジャイハーンとサイハーンを指してもいよう。フラートとナイルは、ハディスによれば天国の川となっている（ムスリム）。この二つの谷はオマルの時にイスラム教徒の手に陥た。

注 19　現世において、真の信者は神の為に様々な辛苦に耐え、あらゆる善行を行うので、来世で、その試錬や善行は、様々な色・味を持つ花や果実に形を変えるであろう。

50．然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ﴿٥٠﴾

51．両園には二つの流泉あり。（注 20）

فِيْهِمَا عَيْنٰنِ تَجْرِيٰنِ ﴿٥١﴾

52．然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ﴿٥٢﴾

53．そこにはあらゆる種類の果物が二種あり。（注 21）

فِيْهِمَا مِنْ كُلِّ فَاكِهَةٍ زَوْجٰنِ ﴿٥٣﴾

54．然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ﴿٥٤﴾

55．彼等は、敷物の上の錦の裏つけたる臥榻に身を横たえん。両園の熟れた果実は手の届くところにあらん。（注 22）

مُتَّكِـِٕيْنَ عَلٰى فُرُشٍۢ بَطَآئِنُهَا مِنْ اِسْتَبْرَقٍ ۭ وَجَنَا الْجَنَّتَيْنِ دَانٍ ﴿٥٥﴾

56．然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ﴿٥٦﴾

57．そこには、いまだかつて人間も妖霊も触れざりし嬌　羞の処女あらん。（注 23）

فِيْهِنَّ قٰصِرٰتُ الطَّرْفِ ۙ لَمْ يَطْمِثْهُنَّ اِنْسٌ قَبْلَهُمْ وَلَا جَآنٌّ ﴿٥٧﴾

58．然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ﴿٥٨﴾

59．彼女らは紅玉や真珠の如し。（注 24）

كَاَنَّهُنَّ الْيَاقُوْتُ وَالْمَرْجَانُ ﴿٥٩﴾

注 20　「二つの流泉」とは、ホクークッラー（神への義務）やホクークルエバード（イスラム教徒の同胞への義務）の精神の具象化であろう。イスラム教徒は現世でこれ等を完全に果たせなければならない。この二つの義務の履行が、来世で二つの泉と形を変えるのであろう。真の信者は、絶えずこの義務を遂行し続けるので、泉は流れ続けるものとして描かれたのである。

注 21　再び書かれている「二種」は陰喩的に信者の二種類の善行を表している様だ。(1)彼等自身の精神的向上の為のもの。(2)彼等の同胞の為に尽くすもの。

注 22　「二つの楽園」は、この章に三度用いられている。これは、来世の楽園における至福とは別に、信者は現世においても良き物を全て手にすると強調しているのである。

注 23　「嬌羞の処女」というのは、羞恥心のある女性を指し、彼女等の注意は全て神に向けられ、彼女等は主であり創造主であられる御方以外に何物にも目を向ける事すらないと示すものである。イスラム教の概念では、天国の恵みは地上の生活における喜びと似ている事がここで再び述べられている。天国には、宮殿・庭・川・木・果実・妻・子・友・等があり、唯これ等の性質は、現世のもののそれとは違うのである。事実それ等は、正義ある者がこの世で為す善行の精神的描写なのである。

注 24　57 節には、天国における信者仲間の心の清らかさが述べられてあったが、当節は、彼等の姿形の美しさに触れている。

60. 然(しか)らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否(いな)むか？	فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ﴿٦٠﴾
61. 善の報いは、善に非ずして何ぞや？	هَلْ جَزَاءُ الْإِحْسَانِ إِلَّا الْإِحْسَانُ ﴿٦١﴾
62. 然(しか)らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否(いな)むか？	فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ﴿٦٢﴾
63. これ等二つの楽園の外に、他の二つの楽園あり。（注 25）	وَمِنْ دُونِهِمَا جَنَّتَانِ ﴿٦٣﴾
64. 然(しか)らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否(いな)むか？	فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ﴿٦٤﴾
65. そこは緑したたるばかりなり。（注 26）	مُدْهَامَّتَانِ ﴿٦٥﴾
66. 然(しか)らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否(いな)むか？	فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ﴿٦٦﴾
67. そこにも二つのほとばしり湧き出る泉あり。（注 27）	فِيهِمَا عَيْنَانِ نَضَّاخَتَانِ ﴿٦٧﴾
68. 然(しか)らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否(いな)むか？	فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ﴿٦٨﴾
69. どちらにもさまざまなる果物あり、棗椰子(なつめやし)の実も、柘榴(ざくろ)もあり。	فِيهِمَا فَاكِهَةٌ وَنَخْلٌ وَرُمَّانٌ ﴿٦٩﴾
70. 然(しか)らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否(いな)むか？	فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ﴿٧٠﴾

注 25　47 節で述べられた「二つの楽園」は天国の庭であり、当節の「二つの楽園」は現世の庭を指すようだ。イスラム教徒は来世の庭を約束されており、この神の約束が成就される証しとして、彼等はこの世の庭をも約束された。それは、彼等がエジプトとイラクの豊饒な谷を征服した時、実際に彼等のものとなった。しかし、47 節にある「二つの楽園」の描写は当節のものとは異なる。これは、この章に二種類の信者が描かれている事を示している。47 節の楽園が約束された信者は、当節の庭を約束された信者より、精神的な位が高いようだ。関連の節をよく吟味してみれば、この事は明らかになる。この信者の二階級は、次の 56 章の 11 節・28 節にそれぞれ述べられている。

注 26　先の 49 節の楽園には様々な木々があると書かれているが、これは約束された信者の善行に色々なものがある事を示している。一方、当節の楽園は「緑したたる」と書かれてあり、これは、信者の行いが非常に素晴らしいことを示すものである。

注 27　当節及び前述の 51 節には、信者に約束された泉について、二つの異なる描写がなされている。51 節の約束された泉は、豊かに絶えず流れると書かれている。これは、その節の泉を約束された信者が、当節の泉を約束された信者より精神的に高位にある事を示している。それは、前者が報われる事を期待せずして常に他者に善行を施すのに対し、後者は自然の衝動から善行を為すが、その行為が主に自身の事に限られているからである。

71．そこには麗しき美女あまたあり。（注 28）

فِيهِنَّ خَيْرٰتٌ حِسَانٌ ﴿٧١﴾

72．然(しか)らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ﴿٧٢﴾

73．美しい黒い瞳の乙女等は、天幕の奥にひきこもりて侍(じ)す。（注 29）

حُوْرٌ مَّقْصُوْرٰتٌ فِي الْخِيَامِ ﴿٧٣﴾

74．然(しか)らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ﴿٧٤﴾

75．彼女等はいまだ人間も妖霊(ジン)も手を触れざりし乙女等なり。

لَمْ يَطْمِثْهُنَّ اِنْسٌ قَبْلَهُمْ وَلَا جَآنٌّ ﴿٧٥﴾

76．然(しか)らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ﴿٧٦﴾

77．緑の褥(しとね)や美しい敷物の上に身を横たえるなり。（注 30）

مُتَّكِـِٕيْنَ عَلٰى رَفْرَفٍ خُضْرٍ وَّعَبْقَرِيٍّ حِسَانٍ ﴿٧٧﴾

78．然(しか)らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否(いな)むか？（注 31）

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ﴿٧٨﴾

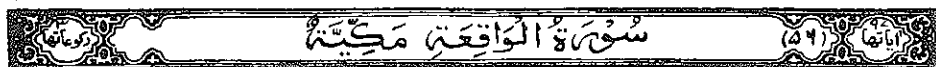
79．荘厳にして栄光にみつる汝(な)が主こそ祝福し奉るべきものなるかな。

تَبٰرَكَ اسْمُ رَبِّكَ ذِي الْجَلٰلِ وَالْاِكْرَامِ ﴿٧٩﴾

注 28　当節で少女に関して使われる「麗しき美女」という語は一般的な意味しか持ち合わさないが、これと比べると、59 節の「ルビーや真珠のごとく」には特別の意味があり、特に秀でた美しさを表している。

注 29　57 節の「嬌羞の」は、当節の「天幕の奥にひきこもりて」よりも、明らかに遙かに上品な様を表している。

注 30　信者に関して 55 節に前述された言葉は、彼等が当節の人々より威厳・敬意・権威を持つ事を示している。当節と共に、次の 56 章において、この二種類の信者の比較が特に述べられている。「先頭の人々」(56：11)、「右手の人々」(56：28)

注 31　当節がこの章で 31 回にも渡って用いられて来たという事は、意味の無い事ではあい。この章では特に、神が人間に授けられた素晴らしい恩恵について述べているようだ。この多種多様な恩恵を考えれば、当節が繰り返し用いられてたのはと実に適切な事に思える。しかし同時にこの章は、もし人間が悔い改め態度を変えなければ、核戦争の様の形で空前の破壊的な神の罰が人間に科せられると語っている。この差し迫った危機の警告も又、姿を変えた恩恵である。

سُوۡرَةُ الۡوَاقِعَةِ مَكِّيَّةٌ (٥٦)

アル・ワークィア
（メッカ啓示）

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ①

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

اِذَا وَقَعَتِ الۡوَاقِعَةُ ②

2．不可避なること起る時、（注１）

لَيۡسَ لِوَقۡعَتِهَا كَاذِبَةٌ ③

3．何人もその到来を嘘なりと云う能わず。

خَافِضَةٌ رَّافِعَةٌ ④

4．すなわち、或る者は貶降され、ある者は賞揚されん。（注２）

اِذَا رُجَّتِ الۡاَرۡضُ رَجًّا ⑤

5．大地が激しく震撼する時、（注３）

وَّبُسَّتِ الۡجِبَالُ بَسًّا ⑥

6．山々はこなごなになり、

فَكَانَتۡ هَبَآءً مُّنۡۢبَثًّا ⑦

7．塵埃の如くなりて四散せん。

وَّكُنۡتُمۡ اَزۡوَاجًا ثَلٰثَةً ⑧

8．その時お前たちは、三つの組みに分けられん。

فَاَصۡحٰبُ الۡمَيۡمَنَةِ ۙ مَاۤ اَصۡحٰبُ الۡمَيۡمَنَةِ ⑨

9．最初に右手の人々、彼等はなんと幸せなるかな！（注４）

وَاَصۡحٰبُ الۡمَشۡـَٔمَةِ ۙ مَاۤ اَصۡحٰبُ الۡمَشۡـَٔمَةِ ⑩

10．次に左手の人々、彼等はなんと不幸なるかな！（注５）

注１　(1)万人の復活（のＨ）。(2)アラビアにおける偶像崇拝の絶滅と偶像崇拝者であるクライシュの完敗。(3)偉大なる宗教改革者、モハッマド預言者の出現。

注２　２節の「不可避なること」は、人生に大いなる変革をもたらすであろう。新たな世界が生じるであろう。高位にして権力ある者は地に落ち、虐げられ踏みにじられた者が高められるであろう。

注３　アラビア全土は、その基盤まで揺らぐであろう。古い信仰、概念、道徳基準、習慣、生活様式等は根本から変わるのであろう。つまり古い秩序は絶え、全く新しいものに取って代わられるのである。前節・後節と共に、当節は死後の再生に当てはまるものである。

注４　他所（75：３）で、クルアーンはこの不信心者たちを表すのに「自責の念」という語を用いている。

注５　悪に向かい易い魂（12：54）。

11．先頭の人々は、一番義しかりし信者たち。（注６）

وَالسّٰبِقُوْنَ السّٰبِقُوْنَ ﴿١١﴾

12．彼等は神のそば近くに席を占めん。

اُولٰٓئِكَ الْمُقَرَّبُوْنَ ﴿١٢﴾

13．彼等は至福の楽園に住まん。

فِيْ جَنّٰتِ النَّعِيْمِ ﴿١٣﴾

14．そは初期のムスリムに多く、

ثُلَّةٌ مِّنَ الْاَوَّلِيْنَ ﴿١٤﴾

15．後世の者は少く、

وَقَلِيْلٌ مِّنَ الْاٰخِرِيْنَ ﴿١٥﴾

16．金や宝石をちりばめた榻牀の上に、

عَلٰى سُرُرٍ مَّوْضُوْنَةٍ ﴿١٦﴾

17．相対して倚座す。

مُّتَّكِـِٕيْنَ عَلَيْهَا مُتَقٰبِلِيْنَ ﴿١٧﴾

18．年とらぬ少年たちが給仕にまわる、（注７）

يَطُوْفُ عَلَيْهِمْ وِلْدَانٌ مُّخَلَّدُوْنَ ﴿١٨﴾

19．高坏や水差しや流泉から汲みたての盃をささげて。

بِاَكْوَابٍ وَّاَبَارِيْقَ ۙ وَكَاْسٍ مِّنْ مَّعِيْنٍ ﴿١٩﴾

20．彼等之を飲むとも頭痛せず、また泥酔することなく、

لَّا يُصَدَّعُوْنَ عَنْهَا وَلَا يُنْزِفُوْنَ ﴿٢٠﴾

21．果物はお好み次第、

وَفَاكِهَةٍ مِّمَّا يَتَخَيَّرُوْنَ ﴿٢١﴾

22．種々の鳥肉も望みのまま。

وَلَحْمِ طَيْرٍ مِّمَّا يَشْتَهُوْنَ ﴿٢٢﴾

23．また目もとすずやかな美しい処女らは、

وَحُوْرٌ عِيْنٌ ﴿٢٣﴾

24．恰も秘蔵の真珠の如し。

كَاَمْثَالِ اللُّؤْلُؤِ الْمَكْنُوْنِ ﴿٢٤﴾

25．こは彼等の善行の報いなり。

جَزَآءًۢ بِمَا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ﴿٢٥﴾

26．彼等はもはや無益な話も、罪つくりな話も聞かざるべし。

لَا يَسْمَعُوْنَ فِيْهَا لَغْوًا وَّلَا تَاْثِيْمًا ﴿٢٦﴾

注６　先頭の人々（この章の11～27節に述べられた、特に神のお側に近付く恩恵を施された好運な信者達）に施された天国における恩恵は、55章の47～62節に書かれた神の贈り物と非常に似ている。これは、55章47～62節の信者達が、この章の先頭の人々（特に神のお側に行く事を許された者）と同じ位にある事を示している。

注７　当節は、信者に仕える召し使いの無邪気さと変わる事のない初々しさを示している。

27．ただ「平安、平安」と云うを聞く。
اِلَّا قِيْلًا سَلٰمًا سَلٰمًا ۝٢٧

28．右方の人々はといえば、彼等はなんと幸せなるかな！
وَاَصْحٰبُ الْيَمِيْنِ ۙ مَآ اَصْحٰبُ الْيَمِيْنِ ۝٢٨

29．彼等は、刺(とげ)なしの滝木の間、
فِيْ سِدْرٍ مَّخْضُوْدٍ ۝٢٩

30．枝もたわわなバナナ、
وَّطَلْحٍ مَّنْضُوْدٍ ۝٣٠

31．うっそうたる樹陰、
وَّظِلٍّ مَّمْدُوْدٍ ۝٣١

32．滾々(こんこん)たる清泉のほとりに住まん。
وَّمَآءٍ مَّسْكُوْبٍ ۝٣٢

33．豊富な果実は
وَّفَاكِهَةٍ كَثِيْرَةٍ ۝٣٣

34．断えることなく、(注８)
لَّا مَقْطُوْعَةٍ وَّلَا مَمْنُوْعَةٍ ۝٣٤

35．その上高貴な伴侶(はんりょ)を得ん。(注９)
وَّفُرُشٍ مَّرْفُوْعَةٍ ۝٣٥

36．こはわれらが特に彼等のために創造せる者、
اِنَّآ اَنْشَاْنٰهُنَّ اِنْشَآءً ۝٣٦

37．みな処女ばかり、
فَجَعَلْنٰهُنَّ اَبْكَارًا ۝٣٧

38．かれんにして年も頃合い、(注 10)
عُرُبًا اَتْرَابًا ۝٣٨

39．右方の人々とは。
لِّاَصْحٰبِ الْيَمِيْنِ ۝٣٩

第二項

40．そは初期のムスリムに多く、
ثُلَّةٌ مِّنَ الْاَوَّلِيْنَ ۝٤٠

41．後世の者もまた多し。
وَثُلَّةٌ مِّنَ الْاٰخِرِيْنَ ۝٤١

注８　クルアーンのこの章及び他の章で天国の住人に約束された恩恵は、次の様な特質を備えている。(1)それ等はあり余る程のものであろう。(2)容易に手にする事ができ、取捨選択は信者に任されている。(3)減る事も尽きる事もない。(4)不快感や疾病を起こすものではない。

注９　心の平安を遂げる為に、信者は高貴な家柄で品位の高い純潔にして美しい配偶者を伴侶として持つのであろう。

注 10　美しく、貞淑にして信心深い妻は、夫と同じ人生観を持ち、人が受ける事のできる最大の神の恩恵である。天国には高潔な男性がいる様に、又、徳の高い女性がいるいと、クルアーンは述べている。人生を幸福で完全なるものにするのは、良き交わりである。

42．然(しか)るに左方の人々はといえば、彼等はなんと不幸なるかな！

وَأَصْحٰبُ الشِّمَالِ ۙ مَآ أَصْحٰبُ الشِّمَالِ ﴿٤٢﴾

43．熱風と沸湯の間、（注 11）

فِي سَمُومٍ وَّحَمِيمٍ ﴿٤٣﴾

44．黒煙の蔭、

وَّظِلٍّ مِّنْ يَّحْمُومٍ ﴿٤٤﴾

45．涼ならず快ならざるところに住まん。

لَّا بَارِدٍ وَّلَا كَرِيمٍ ﴿٤٥﴾

46．想えば彼等は、現世(うつしよ)で驕奢(きょうしゃ)に耽(ふけ)り、

إِنَّهُمْ كَانُوا قَبْلَ ذٰلِكَ مُتْرَفِينَ ﴿٤٦﴾

47．大罪を事とせり。

وَكَانُوا يُصِرُّونَ عَلَى الْحِنْثِ الْعَظِيمِ ﴿٤٧﴾

48．しかも常々かく云えり、「何んとな！　我等死して土と骨とに化したる後、再び甦らしめらるというか、（注 12）

وَكَانُوا يَقُولُونَ ۙ أَئِذَا مِتْنَا وَكُنَّا تُرَابًا وَّعِظَامًا ءَإِنَّا لَمَبْعُوثُونَ ﴿٤٨﴾

49．我等の遠い先祖もまた然りとな？」と。

أَوَ آبَاؤُنَا الْأَوَّلُونَ ﴿٤٩﴾

50．云え、「然(しか)り、昔の人も、今の人も

قُلْ إِنَّ الْأَوَّلِينَ وَالْآخِرِينَ ﴿٥٠﴾

51．定められたる日の決められたる時刻に必ず召集せらるべし。

لَمَجْمُوعُونَ ۙ إِلَىٰ مِيقَاتِ يَوْمٍ مَّعْلُومٍ ﴿٥١﴾

52．その時は汝等、迷える者、真理を拒否せる者よ、

ثُمَّ إِنَّكُمْ أَيُّهَا الضَّالُّونَ الْمُكَذِّبُونَ ﴿٥٢﴾

53．必ずやザックームの木を食わされ、

لَآكِلُونَ مِنْ شَجَرٍ مِّنْ زَقُّومٍ ﴿٥٣﴾

54．以て満腹にさせられ、

فَمَالِئُونَ مِنْهَا الْبُطُونَ ﴿٥٤﴾

55．更に熱湯を

فَشٰرِبُونَ عَلَيْهِ مِنَ الْحَمِيمِ ﴿٥٥﴾

56．恰も渇きに喘ぐ駱駝(らくだ)の如く飲まされん」と。（注 13）

فَشٰرِبُونَ شُرْبَ الْهِيمِ ﴿٥٦﴾

注 11　感情の虜となる不信心者は、あらゆる悪事に身を任せる。感情の激しさは、湯や焼けつくような熱い形をとるであろう。

注 12　復活や来世の否定は、それが言葉によるものであれ行為で表されるものであれ、世のあらゆる罪の根源となる。死後の生における真の信仰無くして、罪を止め善行に励む事はできない。

注 13　当節及び前節は、来世で罪人に科せられる罰を、現世における彼等の罪の非道さに見合った言葉で述べている。彼等は、他人が額に汗して得た物をむさぼり、強欲に取り憑かれ、手段を問わず財を蓄積し、それを誇り、そして神の言葉を拒んだ。罰として、彼等はザックームの木を食用として宛てがわれるが、それは彼

57．こは審判の日の彼等への饗応なり。

هٰذَا نُزُلُهُمْ يَوْمَ الدِّينِ ٥٦

58．われらはお前たちを創造せり。然るに何故真理を容認せざるか？

نحن خلقنكم فلولا تصدقون ٥٧

59．汝等、己れの射精するものについて、何と考えるか？

أفرءيتم ما تمنون ٥٨

60．それを創れるはお前たちか、それとも創造者はわれらなるか？

ءأنتم تخلقونه أم نحن الخلقون ٥٩

61．われらはお前たちすべてに死を定めたり。而して之は妨げられじ、

نحن قدرنا بينكم الموت وما نحن بمسبوقين ٦٠

62．お前たちを換えるにお前たち同類を以てし、今お前たちが知らざるものにお前たちを改造することは。（注 14）

على أن نبدل أمثلكم وننشئكم في ما لا تعلمون ٦١

63．お前たちにも最初の創造はわかる。然るに何故熟考せざるか？

ولقد علمتم النشأة الأولى فلولا تذكرون ٦٢

64．お前たち、種蒔きについて考えたるか？（注 15）

أفرءيتم ما تحرثون ٦٣

65．育てるのはお前たちか、それともわれらなるか？

ءأنتم تزرعونه أم نحن الزرعون ٦٤

66．もしわれら欲しなば、われらはそれを枯れた刈株ならしむるを得べし。その時お前たちは嘆き悲しみ続けん。

لو نشاء لجعلنه حطاما فظلتم تفكهون ٦٥

67．「我等は負債者となれり！

إنا لمغرمون ٦٦

68．否、すべてを奪われたり」

بل نحن محرومون ٦٧

69．お前たち、飲む水について考えたるか？

أفرءيتم الماء الذي تشربون ٦٨

70．雲からそれを降らすはお前たちか、それともわれらなるか？

ءأنتم أنزلتموه من المزن أم نحن المنزلون ٦٩

等の体内で火を吹くであろう。更に渇きを癒すには熱湯しかなく、病んで喉の渇いた駱駝の様に、彼等はいつまでも満たされないでいるだろう。

注 14　人間の肉体の崩壊は、命の終焉を意味するものではない。死は、唯、形を変えるだけである。肉体を離れた後、人の魂はもう一つの身体を与えられる。それは成長発達し、人が知る事も又想像すら出来ない形をとる。

注 15　64～72 節では、この世で人の生命の拠り所となる物が、簡潔に述べられている。その三つの主要な物とは、食物・水・火である。

71．もしわれら欲しなば、その水を苦くならしむるを得べし。然るに何故お前たちは感謝せざるか？

لَوْ نَشَآءُ جَعَلْنَٰهُ أُجَاجًا فَلَوْلَا تَشْكُرُونَ ٧٠

72．お前たちは燃やす火について考えたるか？（注 16）

أَفَرَءَيْتُمُ ٱلنَّارَ ٱلَّتِى تُورُونَ ٧١

73．燃やす木を生ぜしむるはお前たちか、それともわれらなるか？

ءَأَنتُمْ أَنشَأْتُمْ شَجَرَتَهَآ أَمْ نَحْنُ ٱلْمُنشِـُٔونَ ٧٢

74．われらは之をもって訓戒となし、且つ砂漠の旅人のためならしめたり。（注 17）

نَحْنُ جَعَلْنَٰهَا تَذْكِرَةً وَمَتَٰعًا لِّلْمُقْوِينَ ٧٣

75．されば、偉大なる主の御名を讃美し奉れ。

فَسَبِّحْ بِٱسْمِ رَبِّكَ ٱلْعَظِيمِ ٧٤

第三項

76．我群星の落つるを指して誓う。

فَلَآ أُقْسِمُ بِمَوَٰقِعِ ٱلنُّجُومِ ٧٥

77．もしお前たち知識あらば、げにそは重大なる誓言なり。

وَإِنَّهُۥ لَقَسَمٌ لَّوْ تَعْلَمُونَ عَظِيمٌ ٧٦

78．こは誠に尊きクルアーンなり、

إِنَّهُۥ لَقُرْءَانٌ كَرِيمٌ ٧٧

79．そは載せて秘蔵の天の原簿の中にあり。

فِى كِتَٰبٍ مَّكْنُونٍ ٧٨

80．清められたる者に非ずば、何人も之に触れるべからず。（注 18）

لَّا يَمَسُّهُۥٓ إِلَّا ٱلْمُطَهَّرُونَ ٧٩

81．そは万物の主よりの啓示なり。

تَنزِيلٌ مِّن رَّبِّ ٱلْعَٰلَمِينَ ٨٠

82．お前たち、この神の講話を拒否するか？

أَفَبِهَٰذَا ٱلْحَدِيثِ أَنتُم مُّدْهِنُونَ ٨١

83．また拒否することで、日々の生業とするか？（注 19）

وَتَجْعَلُونَ رِزْقَكُمْ أَنَّكُمْ تُكَذِّبُونَ ٨٢

注 16　火は、人間の生活の中で、最も重要な役割を果たす。人の生活を快適にするのに、多くを火に頼っている。それは非常に有益なものであるが、同時に使い方を誤れば破壊をもたらすものでもある。工業・商業・運輸業全て、それ無しには成り立たない。

注 17　貧しく飢えた人々。砂漠の旅人、あるいは荒れ果てた地に降り立った人々。

注 18　正しい生活を送る事で心が浄められる好運な人のみが、クルアーンの真意を理解し、不浄な心を持つ者が受入を拒む、神の知識の精神的神秘を明かされる。加えて言うなれば、肉体が汚れた者は、クルアーンに触れる事も読む事もすべきではない。

注 19　不信心者は、真実を受け入れる事で生計の手段を奪われるのではないかと恐れる。それ故、不正利得の為に、彼等は神の言葉を拒むのである。又は、彼等は真実を拒否することを生きがいにしてしまったと、当節は意味しているかもしれない。彼等は、どうあってもそれを受け入れないであろう。

84．然らば、瀕死の人の魂が、その咽喉もとまで上り来る時、

فَلَوْلَآ إِذَا بَلَغَتِ ٱلْحُلْقُومَ ٨٤

85．その時お前たちは見守っていながら、

وَأَنتُمْ حِينَئِذٍ تَنظُرُونَ ٨٥

86．われらがお前たちよりもその人の近くにいるのに、お前たちにはそれが見えざるなり。

وَنَحْنُ أَقْرَبُ إِلَيْهِ مِنكُمْ وَلَٰكِن لَّا تُبْصِرُونَ ٨٦

87．もしお前たちが責任を問われざる身なれば、

فَلَوْلَآ إِن كُنتُمْ غَيْرَ مَدِينِينَ ٨٧

88．而してお前たちの言が本当なら、何故その魂を連れ戻し得ざるか？

تَرْجِعُونَهَآ إِن كُنتُمْ صَٰدِقِينَ ٨٨

89．さて、その者がアッラーの側近くに召さるべき人々の一人ならば、

فَأَمَّآ إِن كَانَ مِنَ ٱلْمُقَرَّبِينَ ٨٩

90．彼は安楽と幸せの芳香と至福の楽園とをものにせん。

فَرَوْحٌ وَرَيْحَانٌ وَجَنَّتُ نَعِيمٍ ٩٠

91．而して、その者が右方の組の一人ならば、

وَأَمَّآ إِن كَانَ مِنْ أَصْحَٰبِ ٱلْيَمِينِ ٩١

92．「汝の上に平安あれ」と右方の仲間から挨拶せられん。

فَسَلَٰمٌ لَّكَ مِنْ أَصْحَٰبِ ٱلْيَمِينِ ٩٢

93．されど、真理を拒否し、迷える者ならば、

وَأَمَّآ إِن كَانَ مِنَ ٱلْمُكَذِّبِينَ ٱلضَّآلِّينَ ٩٣

94．煮えたぎる熱湯の饗応を受け、

فَنُزُلٌ مِّنْ حَمِيمٍ ٩٤

95．地獄で燔かれん。

وَتَصْلِيَةُ جَحِيمٍ ٩٥

96．げにこは間違いない事実なり。

إِنَّ هَٰذَا لَهُوَ حَقُّ ٱلْيَقِينِ ٩٦

97．されば、偉大なる主の御名を讃美し奉れ。

فَسَبِّحْ بِٱسْمِ رَبِّكَ ٱلْعَظِيمِ ٩٧

سورة الحديد مدنية

アル・ハディード
（メディナ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．天にあるもの、地にあるもの、すべてはアッラーを讃美し奉る。彼は偉大にして、賢哲にまします。（注1）

سَبَّحَ لِلّٰهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۚ وَهُوَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ②

3．彼は天地の大権を掌握し給う。彼は生を与え、死を生ぜしむ。彼は萬事を支配し給う。（注2）

لَهٗ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۚ يُحْيٖ وَيُمِيْتُ ۚ وَهُوَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ③

4．彼は始原にして（注3）最後なり、（注4）顕なるもの（注5）隠なるもの、（注6）而して萬事を熟知し給う。

هُوَ الْاَوَّلُ وَالْاٰخِرُ وَالظَّاهِرُ وَالْبَاطِنُ ۚ وَهُوَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمٌ ④

5．天地を六日間で創造し、然る後玉座に登り給うたは、彼なり。彼は地に入るもの、地より出づるものを知り、天より降るもの、天に昇るものを知り給う。而して彼は、お前たちが何処にあるとも、常にお前たちと偕にまします。さればアッラーはお前たちの所業のすべてをみそなはし給う。（注7）

هُوَ الَّذِيْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ فِيْ سِتَّةِ اَيَّامٍ ثُمَّ اسْتَوٰى عَلَى الْعَرْشِ ۚ يَعْلَمُ مَا يَلِجُ فِي الْاَرْضِ وَمَا يَخْرُجُ مِنْهَا وَمَا يَنْزِلُ مِنَ السَّمَآءِ وَمَا يَعْرُجُ فِيْهَا ۗ وَهُوَ مَعَكُمْ اَيْنَ مَا كُنْتُمْ ۗ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ بَصِيْرٌ ⑤

注1　宇宙の万物は、定められた役割を規則正しく実行し、神より授けられた能力を駆使して、見事な様式でその創造の目的を果たしている。その為、宇宙の設計者にして創造主が、真に強力で賢明であられるという結論に、人は否応なく導かれるのである。又、全宇宙は集合的に、創造物は個々に、それぞれの定められた領域において、神の業には全く欠ける所が無いという紛れもない真実の証しとなっている。以上の事を当節は示している。

注2　建設と破壊の過程は、宇宙の万物に常時平行に行われている。

注3　神は万物の始まりである。

注4　神は万物の帰する所である。

注5　神は何よりも神の業に御自身を表される。

注6　神から隠される物はない。又は、神は全てを理解なさるが、神御自身は理解され得ない。

注7　ある特定の神の教義がある人々にいつ必要となるか。又それを(1)天に戻すべきか、つまり廃すべきか。その教義が、授けられた人々の魂の必要を満たさなくなるのはいつか。この事を御存知なのは神のみであると示している。そして、神のみが、新たな教義の啓示の時を知っておいでになる。

6．彼は天地の大権を掌握し給う。されば萬事はアッラーに帰趨す。

لَهٗ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ وَاِلَى اللّٰهِ تُرْجَعُ الْاُمُوْرُ ۝٦

7．彼は夜を昼に変えさしめ、昼を夜に変えさしむ。彼は胸中に秘めたるものを熟知し給う。

يُوْلِجُ الَّيْلَ فِي النَّهَارِ وَيُوْلِجُ النَّهَارَ فِي الَّيْلِ ؕ وَهُوَ عَلِيْمٌۢ بِذَاتِ الصُّدُوْرِ ۝٧

8．アッラーとその使徒を信じ、アッラーがお前たちに継がしめたるものの中からアッラーの道のために施しをせよ。お前たちのうち信じて施しをする者は、いずれ素晴らしい報奨を手に入れん。

اٰمِنُوْا بِاللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ وَاَنْفِقُوْا مِمَّا جَعَلَكُمْ مُّسْتَخْلَفِيْنَ فِيْهِ ؕ فَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مِنْكُمْ وَاَنْفَقُوْا لَهُمْ اَجْرٌ كَبِيْرٌ ۝٨

9．使徒が主を信ずるよう勧めているというに、何故お前たちは信ぜざるか？　もしお前たちが真の信者なら、主はすでにお前たちと契約を結びたり。（注8）

وَمَا لَكُمْ لَا تُؤْمِنُوْنَ بِاللّٰهِ ۚ وَالرَّسُوْلُ يَدْعُوْكُمْ لِتُؤْمِنُوْا بِرَبِّكُمْ وَقَدْ اَخَذَ مِيْثَاقَكُمْ اِنْ كُنْتُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ۝٩

10．お前たちを暗黒より光明へ導かんとて明白なる神兆を己が僕に降せるは、彼なり。アッラーはお前たちに実に親切、且つ情け深くまします。

هُوَ الَّذِيْ يُنَزِّلُ عَلٰى عَبْدِهٖۤ اٰيٰتٍۭ بَيِّنٰتٍ لِّيُخْرِجَكُمْ مِّنَ الظُّلُمٰتِ اِلَى النُّوْرِ ؕ وَاِنَّ اللّٰهَ بِكُمْ لَرَءُوْفٌ رَّحِيْمٌ ۝١٠

11．天地の相続権はアッラーの所属だというに、何故お前たちアッラーの道に財を惜しむか？（注9）お前たちのうち、勝利の前に献金し戦った者は、後からそれをなした者と同列に非ず。彼等は勝利の後に寄与せる者より高位を占む。アッラーは、どちらにも、すべての者に善賞を約束せり。（注10）アッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

وَمَا لَكُمْ اَلَّا تُنْفِقُوْا فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَلِلّٰهِ مِيْرَاثُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ لَا يَسْتَوِيْ مِنْكُمْ مَّنْ اَنْفَقَ مِنْ قَبْلِ الْفَتْحِ وَقٰتَلَ ؕ اُولٰٓئِكَ اَعْظَمُ دَرَجَةً مِّنَ الَّذِيْنَ اَنْفَقُوْا مِنْۢ بَعْدُ وَقٰتَلُوْا ؕ وَكُلًّا وَّعَدَ اللّٰهُ الْحُسْنٰى ؕ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِيْرٌ ۝١١

注8　当節の「契約」は、人間の本質に植え付けられた神への信仰と、神のお側へ近付きたいという願いを表している。

注9　人は、物質的所有物を全て、それは本来神に帰するものであり、現世に残さねばならないであろう。

注10　メッカ陥落、あるいはフダイビヤ協定。

第二項

12．アッラーに立派な貸付をする者は誰ぞ？アッラーはその者のためにそれを倍加し、且つ沢山の報奨を与えん。

من ذا الذي يقرض الله قرضا حسنا فيضعفه له وله أجر كريم ﴿١٢﴾

13．その日汝は、男や女の信者の前や右側に光が走るを見ん。而(しか)して彼等はかく云われん、「今日はお前たちへ朗報あり。お前たちは、河川流るる楽園に、永遠(とこしえ)に住まん。そは大成功なり」と。

يوم ترى المؤمنين والمؤمنات يسعى نورهم بين أيديهم وبأيمانهم بشراكم اليوم جنات تجري من تحتها الأنهار خالدين فيها ذلك هو الفوز العظيم ﴿١٣﴾

14．その日、似非信者(えせしんじゃ)どもの男や女は、信者に向って云わん、「しばし待たれよ。我等にもあなた方の明りを貸してくださらぬか」と。（注11）彼等は云われん、「引き返して、明りを求めよ、もし可能なら」と。而(しか)してたちまち、信者と似非信者(えせしんじゃ)との間に扉の付いた壁が立ちはだかるべし。（注12）扉の内側は慈悲、外側は懲罰あるべし。

يوم يقول المنافقون والمنافقات للذين آمنوا انظرونا نقتبس من نوركم قيل ارجعوا وراءكم فالتمسوا نورا فضرب بينهم بسور له باب باطنه فيه الرحمة وظاهره من قبله العذاب ﴿١٤﴾

15．似非信者(えせしんじゃ)は信者に向って叫ばん、「我等はかつてあなた方と偕(とも)にあらざるか？」と。信者たちは答えん、「然(しか)り、されどお前たちは、自分を誘惑に陥れ、ためらい、疑い、己れの妄想に騙(だま)されているうちに、アッラーの大命が降(くだ)りたり。（注13）欺瞞者が、アッラーについてお前たちを欺きぬ。

ينادونهم ألم نكن معكم قالوا بلى ولكنكم فتنتم أنفسكم وتربصتم وارتبتم وغرتكم الأماني حتى جاء أمر الله وغركم بالله الغرور ﴿١٥﴾

16．さればお前たち、今となりては最早その罪を贖(あがな)い得ざるべし。不信心者もまた然(しか)り。お前たちの終(つい)の住居は業火(ごうか)なり。そはお前たちの仲間なり。（注14）げにそは悪しき行き先なり」と。

فاليوم لا يؤخذ منكم فدية ولا من الذين كفروا مأواكم النار هي مولاكم وبئس المصير ﴿١٦﴾

注11　「あなた方の明り」とは、貴人の信仰と善行の光、又は、神を悟り、現世で神の喜びを求めそれを手にできる能力の光。

注12　ここでの「壁」は、イスラム教、又はクルアーンの壁を指す。不信心者はこの壁の外に止まる為、彼等のこの行為は来世に壁の形を取るであろう。

注13　神の罰、天罰

注14　「そはお前たちの仲間なり。」この言葉は反語的に用いられたようだ。又、次の事を示しているのかも

17. 信ずる者がその心を謙ってアッラーを念じ、降し賜わりたる真理を順奉する時は、未だ到らざるか？　彼等以前に経典を授けていただきながら、アッラーの慈悲の授与を延期されたために、その心がかたくなになり、多くの者が背逆者となり果てり。あの者どもの轍を踏まざらしむる時は、未だ到らざるか？

أَلَمْ يَأْنِ لِلَّذِينَ آمَنُوا أَنْ تَخْشَعَ قُلُوبُهُمْ لِذِكْرِ اللَّهِ وَمَا نَزَلَ مِنَ الْحَقِّ وَلَا يَكُونُوا كَالَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ مِنْ قَبْلُ فَطَالَ عَلَيْهِمُ الْأَمَدُ فَقَسَتْ قُلُوبُهُمْ وَكَثِيرٌ مِنْهُمْ فَاسِقُونَ ﴿١٧﴾

18. アッラーが能くその死せる大地を甦らしむることを知れ。われらはお前たちを悟らしめんがために、さまざまなる神兆を明示せり。

اعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ يُحْيِي الْأَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا قَدْ بَيَّنَّا لَكُمُ الْآيَاتِ لَعَلَّكُمْ تَعْقِلُونَ ﴿١٨﴾

19. 喜捨を行う男女、並びにアッラーに立派な貸付をする者は、それを倍加され、且つ光栄ある報奨を受けん。

إِنَّ الْمُصَّدِّقِينَ وَالْمُصَّدِّقَاتِ وَأَقْرَضُوا اللَّهَ قَرْضًا حَسَنًا يُضَاعَفُ لَهُمْ وَلَهُمْ أَجْرٌ كَرِيمٌ ﴿١٩﴾

20. アッラーとその使徒を信ずる者、彼等は誠実者なり、主の眼前において証人たるべき者なり。彼等は報奨と光明とをものにせん。されど、不信心者並びにわれらの神兆を拒否する者、彼等は地獄の住人なり。

وَالَّذِينَ آمَنُوا بِاللَّهِ وَرُسُلِهِ أُولَٰئِكَ هُمُ الصِّدِّيقُونَ وَالشُّهَدَاءُ عِنْدَ رَبِّهِمْ لَهُمْ أَجْرُهُمْ وَنُورُهُمْ وَالَّذِينَ كَفَرُوا وَكَذَّبُوا بِآيَاتِنَا أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ الْجَحِيمِ ﴿٢٠﴾

第三項

21. 現世の生活は、ただの慰み、気晴らし、虚飾、己惚れ、富と子女を殖やすことの競争にすぎぬことを知れ。現世とは、譬うれば慈雨の如し。作物は生長し、耕作者を喜ばしむ。次いでそれは枯れ、色褪せ、終には藁屑の折れはしとなるを汝は見ゆ。而して来世では、不義者にはアッラーの厳しい懲罰あり。義しい者には彼の宥恕と嘉賞あり。まことに現世の生活は、束の間の詐りの楽しみにすぎず。

اعْلَمُوا أَنَّمَا الْحَيَاةُ الدُّنْيَا لَعِبٌ وَلَهْوٌ وَزِينَةٌ وَتَفَاخُرٌ بَيْنَكُمْ وَتَكَاثُرٌ فِي الْأَمْوَالِ وَالْأَوْلَادِ كَمَثَلِ غَيْثٍ أَعْجَبَ الْكُفَّارَ نَبَاتُهُ ثُمَّ يَهِيجُ فَتَرَاهُ مُصْفَرًّا ثُمَّ يَكُونُ حُطَامًا وَفِي الْآخِرَةِ عَذَابٌ شَدِيدٌ وَمَغْفِرَةٌ مِنَ اللَّهِ وَرِضْوَانٌ وَمَا الْحَيَاةُ الدُّنْيَا إِلَّا مَتَاعُ الْغُرُورِ ﴿٢١﴾

22. されば、主の宥恕と、天地と同じ広さのある楽園を求めて互に競い合え。そはアッ

سَابِقُوا إِلَىٰ مَغْفِرَةٍ مِنْ رَبِّكُمْ وَجَنَّةٍ عَرْضُهَا

しれない。「地獄の炎のみが、現世に不信心者の犯した罪の汚れを取り除き、彼等を魂の向上に適した者にし、この様にして彼等の友となるであろう。」

ラーとその使徒を信ずる人々のために設けられたり。こはアッラーの恩寵なり。アッラーは己れの欲する者にそれを授け給う。アッラーは限りなき恩寵の主にまします。

كعرض السماء والارض اعدت للذين امنوا بالله ورسله ذلك فضل الله يؤتيه من يشاء والله ذو الفضل العظيم ﴿٢٢﴾

23．この世に起るいかなる災厄も、またお前たちの身に降りかかる災難も、われらがそれを生ぜしむる前に、すでに経典の中に記されざるはなし。そはアッラーにはいと易きことなり。

ما اصاب من مصيبة في الارض ولا في انفسكم الا في كتب من قبل ان نبراها ان ذلك على الله يسير ﴿٢٣﴾

24．そはお前たちをして、失えるが故に悲しまず、与えられたが故に大得意にすることなからしめんがためなり。アッラーはうぬぼれ強いほら吹きを愛し給わぬ。

لكيلا تاسوا على ما فاتكم ولا تفرحوا بما اتكم والله لا يحب كل مختال فخور ﴿٢٤﴾

25．かかる徒輩(やから)は自ら吝嗇(りんしょく)にして、他人にも吝嗇(りんしょく)を勧む。たとい誰が背を向けようとも、アッラーは自足者なり、讃美せらるる御方なり。

الذين يبخلون ويامرون الناس بالبخل ومن يتول فان الله هو الغني الحميد ﴿٢٥﴾

26．げにわれらは、明らかな神兆(しるし)を授けて使徒を遣わし、また人々が正しく振舞うために使徒と共に経典と正邪の権衡(はかり)を降(くだ)したり。われらはまた鉄を授けたり。そは猛烈なる力あり、また人間のためにいろいろと便利を供す。こはアッラーが密かに、御自分とその使徒を助ける者を知らんがためなり。げにアッラーは強大にして、偉大なり。

لقد ارسلنا رسلنا بالبينت وانزلنا معهم الكتب والميزان ليقوم الناس بالقسط وانزلنا الحديد فيه باس شديد ومنافع للناس وليعلم الله من ينصره ورسله بالغيب ان الله قوي عزيز ﴿٢٦﴾

第四項

27．またわれらは、ノアとアブラハムを遣わしたり。而(しか)して彼等の子孫の中に，預言者と経典とを授けたり。されば彼等の中には、嚮導(きょうどう)に従いたる者もあれば、背逆せる者も多かりき。

ولقد ارسلنا نوحا وابرهيم وجعلنا في ذريتهما النبوة والكتب فمنهم مهتد وكثير منهم فسقون ﴿٢٧﴾

28．その後もわれらは次々と使徒を遣わしたり。更にわれらは、マリアの子イエスを遣わし、之(これ)に福音を与えたり。而(しか)してわれらは、イエスを受け容れし人々の心に親切と

ثم قفينا على اثارهم برسلنا وقفينا بعيسى ابن مريم واتينه الانجيل وجعلنا في

慈悲とを宿らしめたり。されど、禁欲的修道生活は、アッラーの嘉賞を求めて彼等自身が編み出せるもの。そはわれらが命じたるものに非ざるなり。而も彼等は之を正しく遵守せざりき。われらは彼等の中の信ぜし者に当然の報奨を与えたれど、彼等の多くは背逆者なり。

قلوب الذين اتبعوه رأفة ورحمة ورهبانية
ابتدعوها ما كتبنها عليهم إلا ابتغاء
رضوان الله فما رعوها حق رعايتها فأتينا
الذين امنوا منهم أجرهم وكثير منهم
فسقون ٢٨

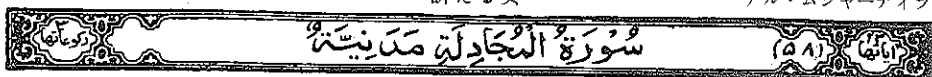
29．汝等信ずる者よ、アッラーを畏れ敬い、その使徒を信ぜよ。さすればアッラーはお前たちに、二倍の慈悲を垂れ、足許を照らす光明を賜い、且つ宥恕せん。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

يأيها الذين امنوا اتقوا الله وامنوا برسوله
يؤتكم كفلين من رحمته ويجعل لكم
نورا تمشون به ويغفر لكم والله غفور
رحيم ٢٩

30．経典の民はすべからく知るべし、彼等にもアッラーの恩寵はいささかも左右し得ざることを。その恩寵はただアッラーの御手のうちにありて、己が欲する者に与え給う。アッラーは限りなき恩寵の主なり。(注15)

لئلا يعلم أهل الكتب ألا يقدرون على شيء
من فضل الله وأن الفضل بيد الله يؤتيه
من يشاء والله ذو الفضل العظيم ٣٠

注15　神の恩恵はキリスト教徒だけに与えられるという彼等の誤りを正し、今や神は別の人々、イスラム教徒にそれを移されたと知らしめよ。

سُوْرَةُ الْمُجَادِلَةِ مَدَنِيَّةٌ

アル・ムジャーディラ
（メディナ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍く アッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．アッラーは、夫について汝に訴え、なお之をアッラーに愁訴する女の言を聴きたり。またアッラーは、お前たち両人の対話も聴きたり。げにアッラーはすべてを聴き、すべてをみそなはし給う。（注1）

قَدْ سَمِعَ اللّٰهُ قَوْلَ الَّتِيْ تُجَادِلُكَ فِيْ زَوْجِهَا وَ
تَشْتَكِيْٓ اِلَى اللّٰهِ ۖ وَاللّٰهُ يَسْمَعُ تَحَاوُرَكُمَا ۭ اِنَّ اللّٰهَ
سَمِيْعٌۢ بَصِيْرٌ ②

3．お前たちの中には妻を自分の母と呼び、故にその妻に近づかぬ者あり。母とは自分を生みたる者のみ。されば彼等の云うことは明らかに邪悪且つ正しからず。されどアッラーは赦免者にして、寛容者にまします。

اَلَّذِيْنَ يُظٰهِرُوْنَ مِنْكُمْ مِّنْ نِّسَآئِهِمْ مَّا هُنَّ
اُمَّهٰتِهِمْ ۭ اِنْ اُمَّهٰتُهُمْ اِلَّا الّٰٓـِٔيْ وَلَدْنَهُمْ ۭ وَ
اِنَّهُمْ لَيَقُوْلُوْنَ مُنْكَرًا مِّنَ الْقَوْلِ وَزُوْرًا ۭ
وَاِنَّ اللّٰهَ لَعَفُوٌّ غَفُوْرٌ ③

4．妻を母と呼び、後でその言を撤回せんとする者は、（注2）互に肌を触れ合う前に、奴隷を一人開放せねばならぬ。こはお前たちへの訓戒なり。アッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

وَالَّذِيْنَ يُظٰهِرُوْنَ مِنْ نِّسَآئِهِمْ ثُمَّ يَعُوْدُوْنَ
لِمَا قَالُوْا فَتَحْرِيْرُ رَقَبَةٍ مِّنْ قَبْلِ اَنْ يَّتَمَآسَّا ۭ
ذٰلِكُمْ تُوْعَظُوْنَ بِهٖ ۭ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِيْرٌ ④

5．されど、一人の奴隷ももたざる者は、肌を触れ合う前に、二カ月継続して断食せよ。

فَمَنْ لَّمْ يَجِدْ فَصِيَامُ شَهْرَيْنِ مُتَتَابِعَيْنِ مِنْ

注1　アウスビンサーミットの妻であり、タラバの娘ハウラは、夫が彼女を「母」と呼んだ為、彼から離されてしまった。正確には、彼は次の様に語った。「あなたの背は、私にとって母の背のようだ。」（だから、もはや、触れることはできない。）古いアラブの慣習では、この様にして夫婦関係は停止された。この哀れな女性は、再婚する為に離婚を請求する事も、婚姻上の権利を享受する事もできず、中途半端な状態におかれ、面倒を見てもらえなかった。彼女はモハッマド預言者のもとに行き、彼女の置かれた困った状況を彼に訴え、この事で彼の助言と助けを求めた。彼は、啓示に導かれなければこの種の問題には決定を下さない事にしていたので、彼女に何かしてあげる力が自分にないと認めた。啓示が下り、この不可思議な習慣は違法であると言明された。

注2　「その言葉を撤回せん」というのは、妻を「母」と呼ぶ事で、彼等が妻との夫婦関係を取り戻したいと願っている事を示しているようだ。又、一度妻を「母」と呼んだ後、再び同じ言葉を繰り返したともとれる。後者の意味にとれば、それはふとしたはずみの言葉ではなく、故意に不快な言葉を繰り返したもので、発言者はそれにより、当節及び次節に定められた罰を負わねばならない。

之を能くせざる者は、六十人の貧者に食を与えよ。これお前たちをして、アッラーとその使徒を衷心より信ぜしめんがためなり。これ等はアッラーによって規定された掟なり。而して不信心者輩には痛罰あり。（注３）

قبل ان يتماسا فمن لم يستطع فاطعام ستين مسكينا ذلك لتؤمنوا بالله ورسوله وتلك حدود الله وللكفرين عذاب اليم ٤

6．アッラーとその使徒に逆う者は、彼等以前の者が卑しめられたる如く、必ず卑められん。われらはすでに明白なる種々の神兆を降せり。されば不信心者輩は屈辱的な懲罰を受けん。（注４）

ان الذين يحادون الله ورسوله كبتوا كما كبت الذين من قبلهم وقد انزلنا ايت بينت وللكفرين عذاب مهين ٥

7．アッラーは、彼等を一緒に甦らしめんその日、彼等に告げん、彼等のなせる所業を。彼等はそれをすでに忘れたれど、アッラーはそれを記録せり。アッラーは万事を検証し給う。

يوم يبعثهم الله جميعا فينبئهم بما عملوا احصه الله ونسوه والله على كل شيء شهيد ٦ ع

第二項

8．汝は、アッラーが天地の一切を知ることを見ざるか？　三人密かに相い語れば、彼は第四者なり。五人で語れば、第六者なり。それより多くとも少なくとも、彼等の在るところには何処にも彼は彼等と偕に坐し給う。然る後、復活の日に、彼は彼等の所業を告知せん。げにアッラーは一切を熟知し給う。

الم تر ان الله يعلم ما في السموت وما في الارض ما يكون من نجوى ثلثة الا هو رابعهم ولا خمسة الا هو سادسهم ولا ادنى من ذلك ولا اكثر الا هو معهم اين ما كانوا ثم ينبئهم بما عملوا يوم القيمة ان الله بكل شيء عليم ٧

9．汝は見ざるか、密談を禁ぜられたる徒輩がその禁を犯し、使徒に対して、罪と、違犯と、不服従を謀議するを？　しかも彼等は、汝の前に来たりて、アッラーが汝に挨拶せる言辞とは違った言辞で挨拶し、呟いて云

الم تر الى الذين نهوا عن النجوى ثم يعودون لما نهوا عنه ويتنجون بالاثم والعدوان ومعصيت الرسول واذا جاءوك حيوك بما

注３　これ等の節に述べられた厳罰は、妻を「母」と呼ぶ事が大罪だと示すものである。母との結び付きは非常に尊く、軽くあしらう事はできない。

注４　妻を「母」と呼んで、夫婦関係をあいまいにすることは神に背くに等しく、その罪は憎むべきものである。ユダヤ人及び偽善者による真実への敵対という主題が、当節で適切に導入されている。

う、「何故にアッラーは我等の言辞（ことば）に対して、我等を罰せざるか？」と。彼等には地獄が適処なり。彼等その中にて燔（や）かれん。禍（わざわい）なるかなその落ち行く先は！（注５）

لَمْ يُحَيِّكَ بِهِ اللَّهُ وَيَقُولُونَ فِي أَنفُسِهِمْ لَوْلَا يُعَذِّبُنَا اللَّهُ بِمَا نَقُولُ حَسْبُهُمْ جَهَنَّمُ يَصْلَوْنَهَا فَبِئْسَ الْمَصِيرُ ﴿٩﴾

10．汝等信徒たちよ、密談をする時は使徒に対する罪や、違犯や、不服従を奨励する謀議をするなかれ。徳行と正義を達成することについて相談し、而（しか）してアッラーを畏れ敬え。お前たちは彼の許（もと）へ召し寄せられん。（注６）

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا تَنَاجَيْتُمْ فَلَا تَتَنَاجَوْا بِالْإِثْمِ وَالْعُدْوَانِ وَمَعْصِيَتِ الرَّسُولِ وَتَنَاجَوْا بِالْبِرِّ وَالتَّقْوَىٰ وَاتَّقُوا اللَّهَ الَّذِي إِلَيْهِ تُحْشَرُونَ ﴿١٠﴾

11．邪悪を目的とする密談は、信者たちを悲しましめんとする悪魔（サタン）の業（わざ）なり。されどアッラーの許しなしには、悪魔（サタン）といえど何人（なんぴと）も害する能（あた）わず。されば信者たる者、その信をアッラーに託すべし。

إِنَّمَا النَّجْوَىٰ مِنَ الشَّيْطَانِ لِيَحْزُنَ الَّذِينَ آمَنُوا وَلَيْسَ بِضَارِّهِمْ شَيْئًا إِلَّا بِإِذْنِ اللَّهِ وَعَلَى اللَّهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُونَ ﴿١١﴾

12．汝等信徒たちよ、集会の時、「広く場所をあけよ」と云われなば、ただちに広く場所をあけよ。アッラーはお前たちのために広い場所を設けん。また、「起（た）て」と云われなば、ただちに起（た）て。アッラーはお前たちの中の信者並びに知識を授けられたる者を、高い位階（くらい）に登らしめ給う。アッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا قِيلَ لَكُمْ تَفَسَّحُوا فِي الْمَجَالِسِ فَافْسَحُوا يَفْسَحِ اللَّهُ لَكُمْ وَإِذَا قِيلَ انشُزُوا فَانشُزُوا يَرْفَعِ اللَّهُ الَّذِينَ آمَنُوا مِنكُمْ وَالَّذِينَ أُوتُوا الْعِلْمَ دَرَجَاتٍ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ خَبِيرٌ ﴿١٢﴾

13．汝等信徒たちよ、使徒に私的なことで相談する時は、それに先だち喜捨をせよ。そはお前たちのためになり、清廉（せいれん）なり。されど施すもの持たざる場合は、アッラーは寛大にして慈悲深くまします。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا نَاجَيْتُمُ الرَّسُولَ فَقَدِّمُوا بَيْنَ يَدَيْ نَجْوَاكُمْ صَدَقَةً ذَٰلِكَ خَيْرٌ لَّكُمْ وَأَطْهَرُ فَإِن لَّمْ تَجِدُوا فَإِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿١٣﴾

注５　この節は、イスラム教徒に対する、ユダヤ人及びメディナの偽善者の陰謀に触れ、彼等の悪事を咎めている。ユダヤの三部族のメディナからの追放は、彼等がイスラム教に対して、又モハッマド預言者の命を狙って背信行為や陰謀を繰り返した為である。

注６　当節及び次の節では、秘密の会合が非難されているが、この咎めは制限なく行われているのではない。信者は、正義を推し進める為に、秘密の会合を催す事は許されている。

14．お前たち、相談する前に喜捨を行うことを憚(はばか)るか？　お前たち之(これ)をなさぬともアッラーがお前たちに寛大なる時は、礼拝を遵守し、定めの喜捨をなし、アッラーとその使徒に従え。アッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

ءَاَشْفَقْتُمْ اَنْ تُقَدِّمُوْا بَيْنَ يَدَيْ نَجْوٰىكُمْ صَدَقٰتٍ ؕ فَاِذْ لَمْ تَفْعَلُوْا وَتَابَ اللّٰهُ عَلَيْكُمْ فَاَقِيْمُوا الصَّلٰوةَ وَاٰتُوا الزَّكٰوةَ وَاَطِيْعُوا اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ ؕ وَاللّٰهُ خَبِيْرٌۢ بِمَا تَعْمَلُوْنَ ﴿۱۴﴾

第三項

15．汝は見ざるか、かのアッラーの怒りにふれたる者どもを友とする徒輩(やから)を？　彼等はお前たちの仲間に非ず、また彼等の仲間に非ず。彼等はそれと知りつつ虚偽の誓言をなす。

اَلَمْ تَرَ اِلَى الَّذِيْنَ تَوَلَّوْا قَوْمًا غَضِبَ اللّٰهُ عَلَيْهِمْ ؕ مَا هُمْ مِّنْكُمْ وَلَا مِنْهُمْ ۙ وَيَحْلِفُوْنَ عَلَى الْكَذِبِ وَهُمْ يَعْلَمُوْنَ ﴿۱۵﴾

16．アッラーは彼等のために厳しい懲罰をすでに用意せり。彼等が日頃なせることは実に邪悪なり。

اَعَدَّ اللّٰهُ لَهُمْ عَذَابًا شَدِيْدًا ؕ اِنَّهُمْ سَآءَ مَا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ﴿۱۶﴾

17．彼等は悪行を隠さんがために誓いを立て、（注7）アッラーの道より人々を背かしむ、それ故に彼等は屈辱的な懲罰を受けん。

اِتَّخَذُوْۤا اَيْمَانَهُمْ جُنَّةً فَصَدُّوْا عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ فَلَهُمْ عَذَابٌ مُّهِيْنٌ ﴿۱۷﴾

18．その財も子女(こどもら)も、アッラーに対してはいささかも役に立たざるべし。彼等は業火(ごうか)の住人、その中に永劫(えいごう)に留まらん。

لَنْ تُغْنِيَ عَنْهُمْ اَمْوَالُهُمْ وَلَاۤ اَوْلَادُهُمْ مِّنَ اللّٰهِ شَيْـًٔا ؕ اُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ النَّارِ ؕ هُمْ فِيْهَا خٰلِدُوْنَ ﴿۱۸﴾

19．アッラーが彼等を一斉に召集する日、彼等は今お前たちに誓いを立る如くアッラーに誓いを立て、以て何事かを得んと想(おも)わん。彼等こそはげに嘘つきどもなり。（注8）

يَوْمَ يَبْعَثُهُمُ اللّٰهُ جَمِيْعًا فَيَحْلِفُوْنَ لَهٗ كَمَا يَحْلِفُوْنَ لَكُمْ وَيَحْسَبُوْنَ اَنَّهُمْ عَلٰى شَيْءٍ ؕ اَلَاۤ اِنَّهُمْ هُمُ الْكٰذِبُوْنَ ﴿۱۹﴾

20．悪魔(サタン)が彼等を支配し、彼等にアッラーを念ずることを忘れさしめたり。彼等はいま悪魔(サタン)の仲間なり。悪魔(サタン)の仲間こそはげに失敗者なり。

اِسْتَحْوَذَ عَلَيْهِمُ الشَّيْطٰنُ فَاَنْسٰىهُمْ ذِكْرَ اللّٰهِ ؕ اُولٰٓئِكَ حِزْبُ الشَّيْطٰنِ ؕ اَلَاۤ اِنَّ حِزْبَ الشَّيْطٰنِ هُمُ الْخٰسِرُوْنَ ﴿۲۰﴾

注7　偽善者は、宣誓により、その信仰が真実であると大声で言明し、その偽りの誓いを隠そうとする。

注8　人が常習的なうそつきとなった時、彼にはそのうそが真実に思えてくる。偽善者は裁きの日に、神の御前にあってさえ、無実を主張するであろう。

21．アッラーとその使徒に逆らう者は、最も卑賤なる類いとならん。

إِنَّ الَّذِينَ يُحَادُّونَ اللَّهَ وَرَسُولَهُ أُولَٰئِكَ فِي الْأَذَلِّينَ ٢١

22．アッラーは、「最後の勝利はわれと使徒たちのものなり」と定め給えり。げにアッラーは強力にして、偉大なり。（注９）

كَتَبَ اللَّهُ لَأَغْلِبَنَّ أَنَا وَرُسُلِي ۚ إِنَّ اللَّهَ قَوِيٌّ عَزِيزٌ ٢٢

23．汝は、アッラーと末日を信ずる人々が、アッラーとその使徒に逆らう徒輩と仲良くするを見ざるべし。たとい相手が父であり、子であり、兄弟又は親族であろうとも。アッラーはこれ等の人々の心に真の信仰を刻みつけ、御自ら聖霊を以て之を強めたり。而してアッラーは、彼等を河川流るる楽園に入らしめ給わん。彼等そこに永遠に住むべし。アッラーは彼等に満悦し、彼等もアッラーに満悦す。彼等こそアッラーの党の者なるかな！　本願成就するは、アッラーの党の者なり。（注10）

لَا تَجِدُ قَوْمًا يُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ يُوَادُّونَ مَنْ حَادَّ اللَّهَ وَرَسُولَهُ وَلَوْ كَانُوا آبَاءَهُمْ أَوْ أَبْنَاءَهُمْ أَوْ إِخْوَانَهُمْ أَوْ عَشِيرَتَهُمْ ۚ أُولَٰئِكَ كَتَبَ فِي قُلُوبِهِمُ الْإِيمَانَ وَأَيَّدَهُمْ بِرُوحٍ مِنْهُ ۖ وَيُدْخِلُهُمْ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا ۚ رَضِيَ اللَّهُ عَنْهُمْ وَرَضُوا عَنْهُ ۚ أُولَٰئِكَ حِزْبُ اللَّهِ ۚ أَلَا إِنَّ حِزْبَ اللَّهِ هُمُ الْمُفْلِحُونَ ٢٣

注９　最後には真実が偽善を打ち負かす事は、歴史にも大書されている。

注10　信者と不信心者の間に、真の友情も愛情も有り得ない事は明らかである。両者の概念・主義・信仰は相反し、真に親しい関係に不可欠な利益の共有が無い為、信者は不信心者と親交を結ばない様に求められている。信仰の絆は全ての結び付きに優り、血縁をもしのぐ。当節は一般に当てはまるものであるが、特にイスラム教徒と争う不信心者に向けられている。

سُوْرَةُ الْحَشْرِ مَدَنِيَّةٌ (٥٩)

アル・ハシュル
（メディナ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．天にあるもの、地にあるもの、すべてはアッラーの栄光を讃え奉る。アッラーは偉大にして、賢哲にまします。

سَبَّحَ لِلّٰهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ ۚ وَهُوَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ②

3．最初の追放の時、経典の民の中の不信心者どもをその住居より追い出したのは、アッラーなり。お前たちは、彼等が出て行くとは思わざりき。（注１）彼等にしても、その城塞(じょうさい)が能(よ)くアッラーの攻撃に対して耐え得べしと思いたり。然(しか)るにアッラーは、予想せざりしところより攻撃し、彼等の心中に恐怖を投じたり。かくて彼等は信者たちと共に、自らの手で己が家を破壊せり。（注２）されば汝等眼(まなこ)ある者よ、之(これ)を教訓とせよ。

هُوَ الَّذِيْۤ اَخْرَجَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ اَهْلِ الْكِتٰبِ مِنْ دِيَارِهِمْ لِاَوَّلِ الْحَشْرِ ؕ مَا ظَنَنْتُمْ اَنْ يَّخْرُجُوْا وَظَنُّوْۤا اَنَّهُمْ مَّانِعَتُهُمْ حُصُوْنُهُمْ مِّنَ اللّٰهِ فَاَتٰىهُمُ اللّٰهُ مِنْ حَيْثُ لَمْ يَحْتَسِبُوْا ۗ وَقَذَفَ فِيْ قُلُوْبِهِمُ الرُّعْبَ يُخْرِبُوْنَ بُيُوْتَهُمْ بِاَيْدِيْهِمْ وَاَيْدِي الْمُؤْمِنِيْنَ ۗ فَاعْتَبِرُوْا يٰۤاُولِي الْاَبْصَارِ ③

4．もしアッラーが彼等に対して追放を命ぜずば、アッラーは彼等を他の手段で、必ず現世で罰したりき。而(しか)して来世でも、彼等は必ず業火(ごうか)の罰を受けん。（注３）

وَلَوْلَاۤ اَنْ كَتَبَ اللّٰهُ عَلَيْهِمُ الْجَلَآءَ لَعَذَّبَهُمْ فِي الدُّنْيَا ؕ وَلَهُمْ فِي الْاٰخِرَةِ عَذَابُ النَّارِ ④

5．これ彼等が、アッラーとその使徒に逆らうが故なり。誰であれアッラーに逆らわば、アッラーの応報は厳酷(げんこく)なり。

ذٰلِكَ بِاَنَّهُمْ شَآقُّوا اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ ۚ وَمَنْ يُّشَآقِّ اللّٰهَ فَاِنَّ اللّٰهَ شَدِيْدُ الْعِقَابِ ⑤

注１　メディナのユダヤ人の物力及び政治同盟を考慮すれば、両軍の人命の犠牲無くして、ユダヤ人が容易にメディナから追放されるとは、イスラム教徒には考えられなかった。

注２　メディナを離れる前に、バヌー・ナズィールはイスラム教徒の面前で、彼等の家や動産を自らの手で壊した。モハッマド預言者は、思い通りに物事の始末ができる様にと、彼等に10日間を与えた。こうして、第二次世界大戦でロシアが採択した何世紀も前に、メディナのユダヤ人が初めて焦土政策を採ったのである。

注３　バヌー・ナズィールのメディナ追放は、非常に軽い罰であった。彼等はもっと重い罰を科せられて当然であり、もし彼等が追放されていなければ、いつの日か厳罰に処されていた事であろう。

6．お前たちが彼等の棗椰子の木を伐採せることも、またその根の上に立たせておいたことも、そはアッラーが罪を犯せし者を辱めんとして、アッラーの許しによってなされたることなり。（注４）

مَا قَطَعْتُمْ مِّنْ لِّيْنَةٍ اَوْ تَرَكْتُمُوْهَا قَآئِمَةً عَلٰٓى اُصُوْلِهَا فَبِاِذْنِ اللّٰهِ وَلِيُخْزِيَ الْفٰسِقِيْنَ ﴿٦﴾

7．アッラーがその使徒に彼等からの鹵獲品として与えしものは、お前たちが馬や駱駝を駆って捕獲せるものに非ざるなり。アッラーはその嘉する者に、使徒の権能を授け給う。アッラーは一切を支配し給う。

وَمَآ اَفَآءَ اللّٰهُ عَلٰى رَسُوْلِهٖ مِنْهُمْ فَمَآ اَوْجَفْتُمْ عَلَيْهِ مِنْ خَيْلٍ وَّلَا رِكَابٍ وَّلٰكِنَّ اللّٰهَ يُسَلِّطُ رُسُلَهٗ عَلٰى مَنْ يَّشَآءُ ۗ وَاللّٰهُ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ﴿٧﴾

8．アッラーがその使徒に、諸邑の住民からの鹵獲品として与えしものは、アッラー並びにその使徒、近親、孤児、貧者及び旅人のものなり。そはお前たちの中の富める者の手に入らざらしめんがためなり。何であれ使徒が与えるものは之を取り、使徒が禁ずるものは之を避けよ。げにアッラーの応報は厳酷なり。

مَآ اَفَآءَ اللّٰهُ عَلٰى رَسُوْلِهٖ مِنْ اَهْلِ الْقُرٰى فَلِلّٰهِ وَلِلرَّسُوْلِ وَلِذِى الْقُرْبٰى وَالْيَتٰمٰى وَالْمَسٰكِيْنِ وَابْنِ السَّبِيْلِ كَيْ لَا يَكُوْنَ دُوْلَةًۢ بَيْنَ الْاَغْنِيَآءِ مِنْكُمْ ۗ وَمَآ اٰتٰىكُمُ الرَّسُوْلُ فَخُذُوْهُ وَمَا نَهٰىكُمْ عَنْهُ فَانْتَهُوْا ۚ وَاتَّقُوا اللّٰهَ ۗ اِنَّ اللّٰهَ شَدِيْدُ الْعِقَابِ ﴿٨﴾

9．鹵獲品はまた貧しい移住者たちのものなり。彼等はアッラーの恩寵と嘉賞を求める余り、家郷を追われ財産を失いたり。されどアッラーとその使徒を助けたり。これ等の者の信仰は、誠実なり。

لِلْفُقَرَآءِ الْمُهٰجِرِيْنَ الَّذِيْنَ اُخْرِجُوْا مِنْ دِيَارِهِمْ وَاَمْوَالِهِمْ يَبْتَغُوْنَ فَضْلًا مِّنَ اللّٰهِ وَرِضْوَانًا وَّيَنْصُرُوْنَ اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ ۗ اُولٰٓئِكَ هُمُ الصّٰدِقُوْنَ ﴿٩﴾

10．移住者以前にすでにこの邑に家を持ち、入信せる者で、移住者を愛し、移住者に分配されるものについて心に如何なる欲望も抱かず、たとい自ら貧するとも自分のことより移住者を気遣う者、而してその心から貪欲を取り除く者は、いずれ必ず成功せん。

وَالَّذِيْنَ تَبَوَّؤُ الدَّارَ وَالْاِيْمَانَ مِنْ قَبْلِهِمْ يُحِبُّوْنَ مَنْ هَاجَرَ اِلَيْهِمْ وَلَا يَجِدُوْنَ فِيْ صُدُوْرِهِمْ حَاجَةً مِّمَّآ اُوْتُوْا وَيُؤْثِرُوْنَ عَلٰٓى اَنْفُسِهِمْ وَلَوْ كَانَ بِهِمْ خَصَاصَةٌ ۗ وَمَنْ يُّوْقَ شُحَّ نَفْسِهٖ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُوْنَ ﴿١٠﴾

注４　この言葉は、モハッマド預言者の命により、バヌー・ナズィールのヤシの木を切り倒した事を指している。３節に述べられた通り、バヌー・ナズィールは要塞に籠もり、明け渡す様にというモハッマド預言者の命令を無視した。包囲攻撃が数日続いた後、モハッマド預言者は彼等を降服させる為、彼等のなつめやしを切り倒す様命じた。ほんの数本が切られた後、彼等は降服した。モハッマド預言者の命令は、近代戦争の法にのっとり、非常に軽く寛大なものであった。

11．移住者と援助者より後に入信せる者は、(注５)云えり、　「主よ、我等並びに我等以前に入信せる兄弟たちを赦し、信者たちに対する如何なる怨恨も我等が心に許すことなかれ。主よ、げに汝は憐憫にして、慈悲深くまします」と。

وَالَّذِينَ جَاءُو مِنْ بَعْدِهِمْ يَقُولُونَ رَبَّنَا اغْفِرْ لَنَا وَلِإِخْوَانِنَا الَّذِينَ سَبَقُونَا بِالْإِيمَانِ وَلَا تَجْعَلْ فِي قُلُوبِنَا غِلًّا لِلَّذِينَ آمَنُوا رَبَّنَا إِنَّكَ رَءُوفٌ رَحِيمٌ ⑪

第二項

12．汝はかの似非信者どもを見ざりしか？　彼等は経典の民の中の信ぜざる兄弟どもに云えり、「もしお前たちがメディナより追放されなば、我等もお前たちと共に去らん。また我等は、お前たちに敵対する者は、断固従わぬ。お前たちが攻撃せられなば、我等は必ずお前たちを援助せん」と。されどアッラーは、彼等が偽つきなることを立証す。(注６)

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ نَافَقُوا يَقُولُونَ لِإِخْوَانِهِمُ الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ أَهْلِ الْكِتَابِ لَئِنْ أُخْرِجْتُمْ لَنَخْرُجَنَّ مَعَكُمْ وَلَا نُطِيعُ فِيكُمْ أَحَدًا أَبَدًا وَإِنْ قُوتِلْتُمْ لَنَنْصُرَنَّكُمْ وَاللَّهُ يَشْهَدُ إِنَّهُمْ لَكَاذِبُونَ ⑫

13．彼等が追われるとも、彼等は共に去りはせぬ。攻撃されるとも、援助などせじ。たとい援助するとも、必ず背を見せて敗走せん。その時彼等は誰の援助も得ざるべし。

لَئِنْ أُخْرِجُوا لَا يَخْرُجُونَ مَعَهُمْ وَلَئِنْ قُوتِلُوا لَا يَنْصُرُونَهُمْ وَلَئِنْ نَصَرُوهُمْ لَيُوَلُّنَّ الْأَدْبَارَ ثُمَّ لَا يُنْصَرُونَ ⑬

14．実は彼等の心の中は、アッラーよりもお前たちをより一層恐れるなり。それは彼等がなにもわからぬ民なるが故なり。

لَأَنْتُمْ أَشَدُّ رَهْبَةً فِي صُدُورِهِمْ مِنَ اللَّهِ ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَا يَفْقَهُونَ ⑭

15．彼等は強力に防塞された邑又は城壁の背後よりならでは、一団となって、お前たちと戦わざるべし。彼等同士の戦いは熾烈なり。汝は彼等が団結していると思えども、彼等の心は四分五裂なり。それは彼等が思慮なき民なるが故なり。(注７)

لَا يُقَاتِلُونَكُمْ جَمِيعًا إِلَّا فِي قُرًى مُحَصَّنَةٍ أَوْ مِنْ وَرَاءِ جُدُرٍ بَأْسُهُمْ بَيْنَهُمْ شَدِيدٌ تَحْسَبُهُمْ جَمِيعًا وَقُلُوبُهُمْ شَتَّىٰ ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَا يَعْقِلُونَ ⑮

注５　　この言葉は、メディナに後からやって来た避難民、又はイスラム教徒の新しい世代全体を指すようだ。

注６　　偽善者達は、モハッマド預言者を拒み、必要な時に手が差し伸べられると偽りの約束をしたとして彼との契約を破る様に、メディナのユダヤ人を煽った。彼等の言葉を信じて、ユダヤ人がモハッマド預言者を拒み、彼に向い進撃した時、彼等はユダヤ人を見捨てた。

注７　　不信心者、特にユダヤ人とメディナの偽善者は、反イスラムで結び付いている様に見えるが、戦いの共通の動機が無く、利害も異なるので、彼等の間に真の団結は有り得ないと、当節は示している。アラビアには、イスラム国家に対抗して団結している様に見える三つの勢力、ユダヤ人、メディナの偽善者、メッカの偶

16. 彼等は、彼等より少し前の者ども、己が所業故に悪果を嘗めさせられた徒輩と、相い似たり。而して、彼等には痛罰あり。（注８）

كمثل الذين من قبلهم قريبا ذاقوا وبال امرهم ولهم عذاب اليم ⑯

17. そは人に向って「信仰を棄てよ」と云う悪魔に似たり。その人不信心者となれば、悪魔は云う、「我は汝と関わりなし。我は万物の主アッラーを畏敬し奉る」と。

كمثل الشيطن اذ قال للانسان اكفر فلما كفر قال اني بريء منك اني اخاف الله رب العلمين ⑰

18. されば、彼等両者の末路は業火の中となり、末長くそこに住み留まらん。不義者への応報はかくの如し。

فكان عاقبتهما انهما في النار خالدين فيها وذلك جزؤا الظلمين ⑱

第三項

19. 汝等信徒たちよ、アッラーを畏れ敬え。而して各人に、明日にそなえて何をなすかを留意せしめよ。アッラーを畏れ敬え。げにアッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

يايها الذين امنوا اتقوا الله ولتنظر نفس ما قدمت لغد واتقوا الله ان الله خبير بما تعملون ⑲

20. アッラーを忘れたるが故に、アッラーが彼等に己が魂を忘れせしめたる者、かかる徒輩になるなかれ。邪悪なる者とは、彼等なり。

ولا تكونوا كالذين نسوا الله فانسهم انفسهم اولئك هم الفسقون ⑳

21. 業火の住人と楽園のそれとは等しからず。勝利者とは、楽園の住人なり。

لا يستوي اصحب النار واصحب الجنة اصحب الجنة هم الفائزون ㉑

22. もしわれらこのクルアーンを山の上に降したりせば、汝は、山が畏まり、アッラーを

لو انزلنا هذا القران على جبل لرايته خاشعا

像崇拝者クライシュがいる。クライシュは、イスラム勢力の高まりに、彼等の覇権に対する危機を読み取り、偽善者達（アブドゥラ・ビン・オバイがその指導者であった）はメディナの支配権を、そしてユダヤ人は彼等の組織と民族の優越をそれぞれ脅かされると考えた。共通の目的がないので、彼等の上辺の団結は確固たる基盤を持たず、危機に瀕すれば実現しないであろう。

注８　この言葉は、バドルで不名誉な敗北を喫したメッカのクライシュあるいは、バドルの後謀略のかどで罰せられたバヌー・カイヌカのことを示すようだ。後者は、バドルの戦いの一ヶ月後、イスラエルの三部族の中で最初にメディナより追放されたが、それは彼等がモハッマド預言者との誓約を破ったからであった。最終的に彼等はシリアへ落ち着いた。

注９　イスラム教以前の教義はいずれも、尊大な異教徒であるアラブ人から多神教信仰及び偶像崇拝行為を引き離す事ができず、彼等は硬い岩の様にベドゥウィンの慣習に固執し、隣接するキリスト教文明の華やかさに惑わされていたが、イスラム教の崇高なお告げの前にへりくだり、かってのかたくなな心からは、知識の泉がほとばしるであろう。当節は以上の事を示している。

مُّتَصَدِّعًا مِّنْ خَشْيَةِ اللّٰهِ ۚ وَتِلْكَ الْاَمْثَالُ نَضْرِبُهَا لِلنَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَتَفَكَّرُوْنَ ﴿٢٢﴾

恐れて粉砕四散するを見ん。われらがこれ等の比喩を述べるは、人間に反省を促(うなが)さんがためなり。(注９)

هُوَ اللّٰهُ الَّذِيْ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ۚ عٰلِمُ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ ۚ هُوَ الرَّحْمٰنُ الرَّحِيْمُ ﴿٢٣﴾

23．彼はアッラーなり、彼の外に神なし、見えざるものも、見えるものも知悉(ちしつ)し給う。彼は仁慈者、慈悲者なり。

هُوَ اللّٰهُ الَّذِيْ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ۚ اَلْمَلِكُ الْقُدُّوْسُ السَّلٰمُ الْمُؤْمِنُ الْمُهَيْمِنُ الْعَزِيْزُ الْجَبَّارُ الْمُتَكَبِّرُ ۗ سُبْحٰنَ اللّٰهِ عَمَّا يُشْرِكُوْنَ ﴿٢٤﴾

24．彼はアッラーなり、彼の外に神なし、至高者なり、天主なり、平安の源(みなもと)なり、安全の授与者なり、守護者なり、偉力者なり、征服者なり、至尊者なり。神聖なるかなアッラー、人々が彼と併(あわ)せ祀る神々とは比較にならぬ高みにまします御方。

هُوَ اللّٰهُ الْخَالِقُ الْبَارِئُ الْمُصَوِّرُ لَهُ الْاَسْمَآءُ الْحُسْنٰى ۗ يُسَبِّحُ لَهٗ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۚ وَهُوَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ﴿٢٥﴾

25．彼はアッラーなり、創造者なり、造形者なり。最高の美名は挙(あ)げて彼の有(もの)なり。天にあるもの、地にあるもの、挙(あ)げて彼を讃美し奉る。彼は偉大にして、賢哲にまします。

سُوْرَةُ الْمُمْتَحِنَةِ مَدَنِيَّةٌ

アル・ムムタヘナ

（メディナ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍く（あまね）アッラーの御名（みな）において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．汝等信徒たちよ、わが敵にして且つお前たちの敵たる者を友とするなかれ。お前たちは、お前たちに降（くだ）されたる真理を信ぜず、お前たちが主アッラーを信ずるというだけの理由で使徒並びにお前たちを家郷から追い出したるあの者どもに、友誼（ゆうぎ）を示さんとするか？たといお前たちがわがために出で奮戦し、嘉賞（かしょう）を得んと欲しても、心ひそかにあの者どもに好意を寄せていては、われはお前たちが隠すことも顕（あらわ）すこともよく承知している　故、彼等を友とするなかれ。お前たちのうち誰であれそのようなことをなさば、正しい道を踏みはずしたことになろうぞ。（注１）

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَتَّخِذُوْا عَدُوِّيْ وَعَدُوَّكُمْ اَوْلِيَآءَ تُلْقُوْنَ اِلَيْهِمْ بِالْمَوَدَّةِ وَقَدْ كَفَرُوْا بِمَا جَآءَكُمْ مِّنَ الْحَقِّ يُخْرِجُوْنَ الرَّسُوْلَ وَاِيَّاكُمْ اَنْ تُؤْمِنُوْا بِاللّٰهِ رَبِّكُمْ اِنْ كُنْتُمْ خَرَجْتُمْ جِهَادًا فِيْ سَبِيْلِيْ وَابْتِغَآءَ مَرْضَاتِيْ تُسِرُّوْنَ اِلَيْهِمْ بِالْمَوَدَّةِ وَاَنَا اَعْلَمُ بِمَآ اَخْفَيْتُمْ وَمَآ اَعْلَنْتُمْ وَمَنْ يَّفْعَلْهُ مِنْكُمْ فَقَدْ ضَلَّ سَوَآءَ السَّبِيْلِ ②

3．もし彼等がお前たちより優位に立たば、彼等は必ずお前たちの敵とならん。而（しか）して彼等は悪意を以て、その手とその舌をお前たちに差し伸べ、お前たちが不信心者にならんことを熱望す。

اِنْ يَّثْقَفُوْكُمْ يَكُوْنُوْا لَكُمْ اَعْدَآءً وَّيَبْسُطُوْٓا اِلَيْكُمْ اَيْدِيَهُمْ وَاَلْسِنَتَهُمْ بِالسُّوْٓءِ وَوَدُّوْا لَوْ تَكْفُرُوْنَ ③

4．親族の絆も、子女（こどもら）も、復活の日にはなんの役にも立たざるべし。アッラーはお前たちに判決を下すべし。アッラーはお前たちの所業をみそなはし給う。

لَنْ تَنْفَعَكُمْ اَرْحَامُكُمْ وَلَآ اَوْلَادُكُمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ يَفْصِلُ بَيْنَكُمْ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ بَصِيْرٌ ④

5．お前たちのために、アブラハムと彼に従いたる人々のよい手本あり。彼等はその民に

قَدْ كَانَتْ لَكُمْ اُسْوَةٌ حَسَنَةٌ فِيْۤ اِبْرٰهِيْمَ وَالَّذِيْنَ

注１　この禁止令は非常に厳しいものである。イスラム教徒は、神の敵と公言する者、その家庭から預言者やイスラム教徒を追い払い、イスラム教を滅ぼそうとする者と親交をもってはならない。イスラム教の妨げになる近親者との縁に配慮しなくとも良いという事も、この禁止令に含まれている。イスラム教の敵は、それが誰であれ、神の敵である。

向って云えり、「我等は、お前たち並びにお前たちがアッラー以外に崇める神々と何んの関わりもなし。我等はお前たちが崇める神々のすべてを信ぜず。お前たちがアッラーのみを信ずるに至るまで、我等とお前たちの間には永久に敵意と憎悪が生じたり」と。但し、アブラハムはその父に向って云えり、「我は汝のためにアッラーを説き伏す能力（ちから）をもたざれど、必ず汝のために宥恕（ゆうじょ）を請わん」と。彼等は神に向って祈りて、云えり、「主よ、我等はひたすら汝にお縋りし、汝に悔い改め、汝に帰趨（きすう）す。（注２）

مَعَهُۥٓ إِذْ قَالُوا۟ لِقَوْمِهِمْ إِنَّا بُرَءَٰٓؤُا۟ مِنكُمْ وَمِمَّا تَعْبُدُونَ مِن دُونِ ٱللَّهِ كَفَرْنَا بِكُمْ وَبَدَا بَيْنَنَا وَبَيْنَكُمُ ٱلْعَدَٰوَةُ وَٱلْبَغْضَآءُ أَبَدًا حَتَّىٰ تُؤْمِنُوا۟ بِٱللَّهِ وَحْدَهُۥٓ إِلَّا قَوْلَ إِبْرَٰهِيمَ لِأَبِيهِ لَأَسْتَغْفِرَنَّ لَكَ وَمَآ أَمْلِكُ لَكَ مِنَ ٱللَّهِ مِن شَىْءٍ ۖ رَّبَّنَا عَلَيْكَ تَوَكَّلْنَا وَإِلَيْكَ أَنَبْنَا وَإِلَيْكَ ٱلْمَصِيرُ ٥

6．主よ、我等を以て信ぜざる者どもへの試練とするなかれ、而（しか）して我等を赦し給え、主よ。偉大にして賢哲にましますは、ただ汝お独（ひと）り」と。

رَبَّنَا لَا تَجْعَلْنَا فِتْنَةً لِّلَّذِينَ كَفَرُوا۟ وَٱغْفِرْ لَنَا رَبَّنَآ ۖ إِنَّكَ أَنتَ ٱلْعَزِيزُ ٱلْحَكِيمُ ٦

7．お前たち、これこそよい手本に非ざるか、アッラーに拝謁する最後の審判に望みを託している者たちにとりては。されどたとえ顔をそむける者あるとも、アッラーは自足し給う御方、すべての讃美に価する御方なり。

لَقَدْ كَانَ لَكُمْ فِيهِمْ أُسْوَةٌ حَسَنَةٌ لِّمَن كَانَ يَرْجُوا۟ ٱللَّهَ وَٱلْيَوْمَ ٱلْءَاخِرَ ۚ وَمَن يَتَوَلَّ فَإِنَّ ٱللَّهَ هُوَ ٱلْغَنِىُّ ٱلْحَمِيدُ ٧

第二項

8．アッラーはお前たちと、今お前たちが敵とする者どもとの間に、好意の情を生ぜせしむることあらん。アッラーは全能なり、而（しか）して寛大にして慈悲深くまします。（注３）

عَسَى ٱللَّهُ أَن يَجْعَلَ بَيْنَكُمْ وَبَيْنَ ٱلَّذِينَ عَادَيْتُم مِّنْهُم مَّوَدَّةً ۚ وَٱللَّهُ قَدِيرٌ ۚ وَٱللَّهُ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ٨

9．アッラーは、宗教上のことでお前たちと戦わざりし者、またお前たちを家郷より逐（お）わざりし者にお前たちが親切と公正を以て交わることを禁じ給わぬ。げにアッラーは公正なる者を愛（め）で給う。

لَّا يَنْهَىٰكُمُ ٱللَّهُ عَنِ ٱلَّذِينَ لَمْ يُقَٰتِلُوكُمْ فِى ٱلدِّينِ وَلَمْ يُخْرِجُوكُم مِّن دِيَٰرِكُمْ أَن تَبَرُّوهُمْ وَتُقْسِطُوٓا۟ إِلَيْهِمْ ۚ إِنَّ ٱللَّهَ يُحِبُّ ٱلْمُقْسِطِينَ ٩

注２　ある者又は人々が真実に敵意を持って向い、それを根絶しようとするのが分かれば、彼等の親交は断ち切られる事となる。アブラハムの例は、この事を強調する為に、処所で述べられた。

注３　当節は預言を含む。モハッマド預言者の仲間は、彼等の信仰の敵が例え近親者であれ、その者との親交を断ち切る様命じられたが、この禁止令はごく短命に終わる運命だと告げられた。かっての敵が彼等の愛する友となる日は急速に近付きつつあった。次節が示す通り、この戒律は、イスラム教徒と戦う不信心者に対してのみ適用される。イスラム教徒でない普通の人々との友好は禁じられているわけではない。

10．アッラーがお前たちに禁ずるは、宗教上のことでお前たちと戦い、お前たちをその家郷から逐い出した者並びにその放逐に手を貸した者と友誼を結ぶことのみなり。何人であれ彼等を友とする者、そは罪人なり。

إِنَّمَا يَنْهَىٰكُمُ اللَّهُ عَنِ الَّذِينَ قَاتَلُوكُمْ فِي الدِّينِ
وَأَخْرَجُوكُم مِّن دِيَارِكُمْ وَظَاهَرُوا عَلَىٰ إِخْرَاجِكُمْ
أَن تَوَلَّوْهُمْ ۚ وَمَن يَتَوَلَّهُمْ فَأُولَٰئِكَ هُمُ الظَّالِمُونَ ⑩

11．信徒たちよ、女性の信者がお前たちの許へ逃げて来た時は、まずよく調べよ。アッラーは彼女たちの信仰の度合いをよく知り給う。而して、彼女たちが真の信者なりとわかれば、不信心者の許へ帰すなかれ。彼女たちが不信心者の妻たることは合法に非ず、また不信心者が彼女たちの夫たることも合法に非ず。但し、婚資として費せるものは、その不信心者の夫に返還せよ。而して、お前たちが彼女たちに婚資を与うれば、彼女たちと結婚するも罪に非ず。不信心者の女との絆を、固持するなかれ。されど、お前たちが費せるものの返還を求め、不信心者にもその費せるものの返還を求めしめよ。これアッラーの審判なり。アッラーはお前たちを審判す。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。(注4)

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا جَاءَكُمُ الْمُؤْمِنَاتُ مُهَاجِرَاتٍ
فَامْتَحِنُوهُنَّ ۖ اللَّهُ أَعْلَمُ بِإِيمَانِهِنَّ ۖ فَإِنْ عَلِمْتُمُوهُنَّ
مُؤْمِنَاتٍ فَلَا تَرْجِعُوهُنَّ إِلَى الْكُفَّارِ ۖ لَا هُنَّ حِلٌّ
لَّهُمْ وَلَا هُمْ يَحِلُّونَ لَهُنَّ ۖ وَآتُوهُم مَّا أَنفَقُوا
وَلَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ أَن تَنكِحُوهُنَّ إِذَا آتَيْتُمُوهُنَّ
أُجُورَهُنَّ ۚ وَلَا تُمْسِكُوا بِعِصَمِ الْكَوَافِرِ وَاسْأَلُوا
مَا أَنفَقْتُمْ وَلْيَسْأَلُوا مَا أَنفَقُوا ۚ ذَٰلِكُمْ حُكْمُ اللَّهِ ۖ
يَحْكُمُ بَيْنَكُمْ ۚ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ⑪

12．もしお前たちの妻たちのうち、お前たちを棄てて不信心者の許へ走り、お前たちが報復して、不信心者どもから鹵獲品を獲た場合は、その中から妻に逃げられた男に、そ

وَإِن فَاتَكُمْ شَيْءٌ مِّنْ أَزْوَاجِكُمْ إِلَى الْكُفَّارِ
فَعَاقَبْتُمْ فَآتُوا الَّذِينَ ذَهَبَتْ أَزْوَاجُهُم مِّثْلَ

注4　イスラム教徒が激しく迫害され、メッカを去りメディナのイスラム社会に加わるのも危うい時ではあったが、信者の絶え間ない流れは、メッカに近親者を残したままで、メディナに殺到した。これ等避難民の中には、相当数の女性が含まれていた。当節はその様な難民のイスラム女性について語っている。メッカから流れて来た女性は調査を受け、その信仰が真実のものであり、イスラム教を受け入れた動機に不純なものの無い事を証さねばならない。それができなければ、如何なる女性もイスラム社会へは受け入れられない。此所にモハッマド預言者の苦悩の様がよく表されている。当節は更に、信者の女性と不信心者の夫の婚姻関係は、彼女がイスラム社会に加わる時自動的に解消され、ある信者が二つの条件を満たせば、彼女との結婚が認められる、と述べている。(1)彼は、彼女の夫が彼女の為に使った費用を払い戻さねばならない。(2)彼は彼女の婚資も用意し、支払わなければならない。イスラム教徒とイスラム教を捨てた妻との婚姻も同様に続かず、もしその様な背教者の女性が不信心者と結婚するなら、イスラム教徒が難民の女性信者と結婚する時と同じ手続きがとられるであろう。当節のこの相互協定は、個人間の問題だけでなく、これ等の節が特に取り上げる戦時の慣例として国により実施されるものである。個々の信者と不信心者間の社会的関係は継続し得ないし、又してはならない。

の者が婚資に費せるものと同額のものを与えよ。而して、お前たちが信ずるアッラーを畏敬せよ。(注５)

مَآ أَنفَقُوا۟ ۚ وَٱتَّقُوا۟ ٱللَّهَ ٱلَّذِىٓ أَنتُم بِهِۦ مُؤْمِنُونَ ⑫

13．預言者よ、女性の信徒が汝に来たりて、アッラーと偕に何者も併せ祀らず、盗まず、姦通せず、子女を殺さず、自ら捏造せる嘘を云いふらさず、正しいことにおいて汝に背かず、と誓わば、彼女たちの忠誠の誓いを納れて、彼女たちのためにアッラーの宥恕を請え。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

يَٰٓأَيُّهَا ٱلنَّبِىُّ إِذَا جَآءَكَ ٱلْمُؤْمِنَٰتُ يُبَايِعْنَكَ عَلَىٰٓ أَن لَّا يُشْرِكْنَ بِٱللَّهِ شَيْـًٔا وَلَا يَسْرِقْنَ وَلَا يَزْنِينَ وَلَا يَقْتُلْنَ أَوْلَٰدَهُنَّ وَلَا يَأْتِينَ بِبُهْتَٰنٍ يَفْتَرِينَهُۥ بَيْنَ أَيْدِيهِنَّ وَأَرْجُلِهِنَّ وَلَا يَعْصِينَكَ فِى مَعْرُوفٍ ۙ فَبَايِعْهُنَّ وَٱسْتَغْفِرْ لَهُنَّ ٱللَّهَ ۖ إِنَّ ٱللَّهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ⑬

14．汝等信徒たちよ、アッラーの怒りを蒙れる徒輩を友とするなかれ。彼等は、不信心者どもが墓中の者に絶望する如く、来世に絶望する者なり。(注６)

يَٰٓأَيُّهَا ٱلَّذِينَ ءَامَنُوا۟ لَا تَتَوَلَّوْا۟ قَوْمًا غَضِبَ ٱللَّهُ عَلَيْهِمْ قَدْ يَئِسُوا۟ مِنَ ٱلْءَاخِرَةِ كَمَا يَئِسَ ٱلْكُفَّارُ مِنْ أَصْحَٰبِ ٱلْقُبُورِ ⑭

注５　もし、イスラム教徒の妻が不信心者のもとへ走り、不信心者の女性がイスラム教徒達に捕らわれるか、彼女が不信心者達から逃れてイスラム社会へ加わるなら、信者の夫が逃亡した妻に支払った婚資と、妻がイスラム社会へ入った不信心者の夫へ払う金額が同じ場合、信者の夫の損失はそれで相殺される事となる。しかし、不足があるとすれば、信者達がそれを補うか、あるいは、他の説によると、国の戦利品で埋め合わされた事になる。不信心者が、彼のもとへ走った女性にその夫が支払った婚資の返還を拒むであろうから、この協定は必要なものであった。

注６　最後の文は、彼等は死がいつか生に訪れると信じない様に、来世も信じない事を示している。「アッラーの怒りをこうむれる」という言葉が、クルアーンの数節でユダヤ人に関して使われているので、ここでの「不信者」は特にユダヤ人を指しているようだ。

سُوۡرَةُ الصَّفِّ مَدَنِيَّةٌ

アル・サッフ
(メディナ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ①

2．天にあるもの、地にあるもの、挙(あげ)てアッラーを讃美し奉る。彼は偉大にして、賢哲にまします。

سَبَّحَ لِلّٰهِ مَا فِى السَّمٰوٰتِ وَمَا فِى الۡاَرۡضِ‌ ۚ وَهُوَ الۡعَزِيۡزُ الۡحَكِيۡمُ ②

3．汝等信徒たちよ、何故に行わざることを口にするのか？（注１）

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيۡنَ اٰمَنُوۡا لِمَ تَقُوۡلُوۡنَ مَا لَا تَفۡعَلُوۡنَ ③

4．行わざることを口にするのは、アッラーが最も憎むべきことなり。

كَبُرَ مَقۡتًا عِنۡدَ اللّٰهِ اَنۡ تَقُوۡلُوۡا مَا لَا تَفۡعَلُوۡنَ ④

5．げにアッラーは、堅固なる建物の如く、隊伍を組んでアッラーの道のために戦う者を愛(め)で給う。（注２）

اِنَّ اللّٰهَ يُحِبُّ الَّذِيۡنَ يُقَاتِلُوۡنَ فِىۡ سَبِيۡلِهٖ صَفًّا كَاَنَّهُمۡ بُنۡيَانٌ مَّرۡصُوۡصٌ ⑤

6．モーゼがその民に向ってかく云いたる時を念(おも)え。「我が民よ、何故にお前たちは我を中傷するか？お前たち、我がお前たちに遣わされた使徒なることを知りながら」されど、彼等が正道を逸脱したれば、アッラーは彼等の心を歪(ゆが)めさせたり、アッラーは邪悪な人々を導かざるが故に。（注３）

وَاِذۡ قَالَ مُوۡسٰى لِقَوۡمِهٖ يٰقَوۡمِ لِمَ تُؤۡذُوۡنَنِىۡ وَقَدْ تَّعۡلَمُوۡنَ اَنِّىۡ رَسُوۡلُ اللّٰهِ اِلَيۡكُمۡ‌ ؕ فَلَمَّا زَاغُوۡۤا اَزَاغَ اللّٰهُ قُلُوۡبَهُمۡ‌ ؕ وَاللّٰهُ لَا يَهۡدِى الۡقَوۡمَ الۡفٰسِقِيۡنَ ⑥

注１　イスラム教徒の行いは発言と一致していなければならない。自慢や実質の無い言葉は何の役にも立たない。行為の伴わない口先だけの発言は、偽善と不実の色合を帯びる。

注２　イスラム教徒は、彼等が無条件に従わねばならない指導者の指揮の下(もと)、悪の勢力に対し堅固な前線となる様期待されている。しかし一つに強く結び付く社会を求める人々は、生活規準、概念、目的、目的達成の為の宣伝活動を一つにしなければならない。

注３　モーゼ程に従者の手で精神的苦痛を味あわされた神の預言者は、おそらくいまい。モーゼの一族は、目の前でファラオの強力な軍隊がおぼれて行くのを見たが、彼等は海を渡り切るとたちまち偶像崇拝に戻ろうとし、誰かが偶像を崇めるのを見て、自分達にもその様な偶像を作るようにモーゼに頼んだ(7 139）。神が彼等に与えると約束された地カナンへ行く様求められた時、彼等はモーゼに、モーゼがそれ程までに信じる彼の神と行けば良いではないか、自分達は、落ち着いたこの場所から一寸たりとも動くつもりはないと、恥知らずにもばかにした様な口調で告げた(5 25)。この様に、モーゼは、彼がフォラオの厳しい束縛から解き放してやった人々から何度も侮辱され、彼等を偶像崇拝から立ち直らせようとする努力を踏みにじられた。彼等はモーゼを誹謗すらした。

7．またマリアの子イエスがかく云いたる時を念え。「イスラエルの子孫よ。我はお前たちに遣わされたる使徒なり。我は、我以前に降されたる律法を確証し、我が後に来る一人の使徒の朗報を伝えに来た者。その使徒の名は、アフマドなるべし」然るに、イエスが種々の明証を携えて彼等に来ると、彼等は云えり、「これ明らかに妖術なり」と。（注４）

وَإِذْ قَالَ عِيسَى ابْنُ مَرْيَمَ يَا بَنِي إِسْرَائِيلَ إِنِّي رَسُولُ اللَّهِ إِلَيْكُم مُّصَدِّقًا لِّمَا بَيْنَ يَدَيَّ مِنَ التَّوْرَاةِ وَمُبَشِّرًا بِرَسُولٍ يَأْتِي مِن بَعْدِي اسْمُهُ أَحْمَدُ فَلَمَّا جَاءَهُم بِالْبَيِّنَاتِ قَالُوا هَٰذَا سِحْرٌ مُّبِينٌ ۝٧

8．誰が、イスラームに帰依することを勧められながら、アッラーに対して嘘を捏造する者にもまして罪を犯し得ようか？アッラーは罪人どもを導き給わず。（注５）

وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرَىٰ عَلَى اللَّهِ الْكَذِبَ وَهُوَ يُدْعَىٰ إِلَى الْإِسْلَامِ وَاللَّهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظَّالِمِينَ ۝٨

注４　精霊の到来いに関するイエスの預言は、ヨハネの福音書12：13、14：16〜17、15：26、16：７を参照の事。その内容からは、次の事が推論される。(1)もしイエスがこの世を去らない限り、安らぎを与える、真の精霊は現れるはずがなかった。(2)彼は永遠にこの世に止まり、イエス自身が語れなかった多くの事を述べるはずであった。それは、当時世界の人々がそれ等に、耐え得る能力を持ちあわせていなかったので多くは語られなかった。(3)彼はあらゆる真実への導き手であろうとした。(4)彼は自身の事は語らないが、耳にする事は全て話そうとした。(5)彼はイエスを賛え、彼の真実を証そうとした。この聖霊に関する記述は、クルアーンに与えられたモハッマド預言者の地位や使命と完全に一致する。モハッマド預言者は、イエスがこの世を去った後に現れた。彼は啓示を伝える最後の預言者であり、クルアーンは、終りの時まで全人類に向けられた神の律法を、最後に啓示した(5：4)。モハッマド預言者は自らの事には触れなかったが、神に告げられた事は全て話した(53：4)。彼はイエスを賛えた（2：254、3：56)。ヨハネの福音書にある上記の預言は、アハマドという名がパラクレートとなっている他は、当節の預言と酷似している。キリスト教徒の作家達は、聖書とクルアーンに一致する特質を無視して、二つの名の違いを根拠に、クルアーンの正当性を疑う。事実、イエスはアラム語、ヘブライ語の両方を話した。アラム語は彼の母の言葉であり、ヘブライ語は彼の宗教用語であった。現存の聖書は、アラム語及びヘブライ語をギリシャ語に翻訳したものである。翻訳では、当然、元の内容の美しさを完全に伝える事はできない。言語には限りがある。同じ事は、それを話す人にも当てはまる。彼等の限界は、その作品に表れる。ギリシャ語には、アラビア語のアハマドによく似た意味のペリクルートスという語がある。高名なキリスト教の神学者Jack Finganは、その作品‘The Archacology of World Religions’の中で次の様に述べている。「ギリシャ語でパラクレートス（聖霊）はペリクルートス（高名な）と非常に似ており、後者はアハマドやムハマドという名を意味する。」

当節の預言はモハッマド預言者に適用されるが、必然的に約束された救世主、アハマディーア協会の創始者にも当てはまる。その理由は、彼が神の啓示の中でアハマドと呼ばれたからであり(バラヒーン・アハマディーヤ)、その身にモハッマド預言者の第二の出現又は再来が起きたからである。このモハッマド預言者の第二の出現に関しては、62章３節が明確に述べている。モハッマド預言者についての預言はバルナバの福音書にも明示されている事が、加えて述べられている様だ。この福音書は、キリスト教に、にせ物として扱われているが、四つの福音書と同じく本物と認められるべきだと主張している。

注５　当節は不信心者の事を述べている。モハッマド預言者は彼等にお告げを発したが、それは彼が招待主であり、彼等が招待客だったからである(20：109、33：47)。又、彼等はクルアーンの中で、神に対し虚偽を捏造する者と烙印を押されている(6：138、141)。しかしこの預言が約束されたメシヤに適用されるとすれば、

9．彼等は息を吹きかけてアッラーの光明を吹き消さんとす。(注6)されど、不信心者どもがいかに強く嫌悪するとも、アッラーはその光明を完うせん。

يُرِيدُونَ لِيُطْفِـُٔوا نُورَ اللّٰهِ بِأَفْوَاهِهِمْ وَاللّٰهُ مُتِمُّ نُورِهِ وَلَوْ كَرِهَ الْكٰفِرُونَ ٩

10．アッラーこそはその使徒に、真の宗教と嚮導をもたせて遣わした御方なり。神と共に他神を併せ祀る徒輩がいかに嫌悪するとも、彼はすべての宗教の上に真の宗教を普及させん。(注7)

هُوَ الَّذِيٓ أَرْسَلَ رَسُولَهُ بِالْهُدٰى وَدِينِ الْحَقِّ لِيُظْهِرَهُ عَلَى الدِّينِ كُلِّهِ وَلَوْ كَرِهَ الْمُشْرِكُونَ ١٠

第二項

11．汝等信徒たちよ、お前たちが痛罰から救われる取引を、われはお前たちに伝授しようか？（注8）

يٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ اٰمَنُوا هَلْ أَدُلُّكُمْ عَلٰى تِجَارَةٍ تُنْجِيكُمْ مِّنْ عَذَابٍ أَلِيمٍ ١١

12．そはアッラーと使徒を信じ、アッラーの御為に生命も財産もなげうって戦うことなり。もしお前たち之を知らば、そはお前たちのために最善なり。

تُؤْمِنُونَ بِاللّٰهِ وَرَسُولِهِ وَتُجَاهِدُونَ فِي سَبِيلِ اللّٰهِ بِأَمْوَالِكُمْ وَأَنْفُسِكُمْ ذٰلِكُمْ خَيْرٌ لَّكُمْ إِنْ كُنْتُمْ تَعْلَمُونَ ١٢

13．さればアッラーはお前たちの諸悪を赦し、お前たちを河川流るる楽園に入らしめ、エデンの楽園の汚れない楽しい家に住ましめん。そは最高の幸福なり。

يَغْفِرْ لَكُمْ ذُنُوبَكُمْ وَيُدْخِلْكُمْ جَنّٰتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهٰرُ وَمَسٰكِنَ طَيِّبَةً فِي جَنّٰتِ عَدْنٍ ذٰلِكَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ١٣

14．アッラーはまた、お前たちが好きな他の恩恵を賜うべし。すなわち、アッラーの佑助と目前の勝利なり。されば汝、信者たちにこの朗報を伝えよ。

وَأُخْرٰى تُحِبُّونَهَا نَصْرٌ مِّنَ اللّٰهِ وَفَتْحٌ قَرِيبٌ وَبَشِّرِ الْمُؤْمِنِينَ ١٤

「イスラムへ招かれる」という言葉は次の事を示す。約束されたメシヤが、いわゆるえせのイスラムの守護者達より、悔い改め、彼等の様なあいまいなイスラム教徒になるように、と招かれるということである。

注6　モハッマド預言者は、クルアーンの中で、繰り返し「アッラーの光明」と声をあげた（4：175、5：17、64：9）。

注7　クルアーンのほとんどの注釈は、当節が約束されたメシヤに適用されると認めている。その理由として、彼の時が来れば、全ての宗教が現れ、それ等に対しイスラム教の優位が確立されるからである。

注8　貿易や商業が栄え、非常に有利な取引を求めて異常な状態となる、約束されたメシヤの時代を、当節は語っている様だ。

15．汝等信徒たちよ、アッラーを助ける者たれ。マリアの子イエスがその弟子たちに向って「アッラーの道のために我を助ける者は誰か？」と云える時、「我等アッラーを助ける者たらん」と弟子たちは答えたり。而して、イスラエルの子孫の一部は信じ、一部は之を信ぜざりき。さればわれらは信じたる者を佑助けてその敵に抗せしめ、勝利を得せしめたり。

يَآ أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا كُونُوٓا أَنصَارَ اللّٰهِ كَمَا قَالَ
عِيسَى ابْنُ مَرْيَمَ لِلْحَوَارِيِّينَ مَنْ أَنصَارِيٓ إِلَى
اللّٰهِ ۖ قَالَ الْحَوَارِيُّونَ نَحْنُ أَنصَارُ اللّٰهِ فَآمَنَت
طَّآئِفَةٌ مِّنۢ بَنِيٓ إِسْرَآءِيلَ وَكَفَرَت طَّآئِفَةٌ ۖ
فَأَيَّدْنَا الَّذِينَ آمَنُوا عَلَىٰ عَدُوِّهِمْ فَأَصْبَحُوا
ظٰهِرِينَ ﴿١٥﴾

سُوْرَةُ الْجُمُعَةِ مَدَنِيَّةٌ (٦٢)

アル・ジュムア

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。	بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①
2．天にあるもの、地にあるもの、挙げてアッラーを賛美し奉る、至高なるかな、聖なるかな、偉大なるかな、賢哲なるかな。(注1)	يُسَبِّحُ لِلّٰهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ الْمَلِكِ الْقُدُّوْسِ الْعَزِيْزِ الْحَكِيْمِ ②
3．無知蒙昧な民に、(注2)その同族から使徒を興し、彼等にさまざまなる神兆を誦み聞かせ、彼等を浄め、且つ経典と知恵を教えしむる者はアッラーなり。彼等それまで明らかに迷誤の中にありし者なれど。(注3)	هُوَ الَّذِيْ بَعَثَ فِي الْاُمِّيّٖنَ رَسُوْلًا مِّنْهُمْ يَتْلُوْا عَلَيْهِمْ اٰيٰتِهٖ وَيُزَكِّيْهِمْ وَيُعَلِّمُهُمُ الْكِتٰبَ وَالْحِكْمَةَ ۗ وَاِنْ كَانُوْا مِنْ قَبْلُ لَفِيْ ضَلٰلٍ مُّبِيْنٍ ③
4．またアッラーは、まだ彼等の仲間入りせぬ人々にまで。アッラーは偉大にして、賢哲にまします。(注4)	وَّاٰخَرِيْنَ مِنْهُمْ لَمَّا يَلْحَقُوْا بِهِمْ ۗ وَهُوَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ④

注1　この四つの神の特性は、次節に述べられたモハッマド預言者の四つの使命に係るものである。

注2　3 76、7 158 参照。

注3　モハッマド預言者に下された神の使命は、当節に書かれた四つの宗教上の義務を果たす事から成る。これは彼にゆだねられた偉大で高尚な任務であった。それは、アブラハム預言者が、息子とカーバの基盤を起こした数千年前に祈った内容が、無知のアラブ人の中からモハッマド預言者が現れる事だったからである(2：130)。事実、如何なる神の使者も、自ら高尚で清い手本となり、誠実で献身的そして高潔な弟子達の社会を準備しなければ、その使命を真に果たす事はできないのである。彼はまず弟子達に、お告げの理想と教義、その原理と重要性を教え、その後このお告げを他の人々に説く為に彼等を海外へ送り出す。彼が弟子達に与える訓練は彼等の知性を研き、彼の教養の哲学が彼等に信仰の確信をもたらし、彼の高尚な手本は彼等の内に心の純化を生じさせる。当節が語るのは、宗教のこの基本要素である。

注4　モハッマド預言者のお告げは、彼がその中から立ち上がったアラブ人だけでなく、非アラブ人にも向けられたものであり、又彼と同時代の人々だけでなく、終りの時が来るまで幾世代にも渡って引き継がれるものであった。あるいは、モハッマド預言者が、彼の最初の弟子達にまで加わっていない他の人々の中から立たせる、と当節は示しているのかもしれない。当節のこの言葉は、モハッマド預言者の有名な言葉にも出て来るもので、後日約束のメシヤの身にモハッマド預言者が再度現れる事を示している。アブー・フライラは次の様に語っている。「ある日我々がモハッマド預言者と座っていると、アル・ジュモア（当章）が啓示された。私はモハッマド預言者から尋ねられた『この言葉は誰に向けられているのか。述べてみよ』ペルシア人のサルマーンが我々の中に居た。私が同じ質問を彼は繰り返すと、モハッマド預言者はその手をサルマーンの上に置き、

5．これアッラーの恩寵なり。彼はその欲する者に之(これ)を与え給う。アッラーは限りなき恩寵の主なり。

ذٰلِكَ فَضْلُ اللّٰهِ يُؤْتِيْهِ مَنْ يَّشَآءُ ۗ وَاللّٰهُ ذُو الْفَضْلِ الْعَظِيْمِ ٥

6．律法(トーラー)の戒律の義務を負わされ、しかも之(これ)を耐え忍べざる者は、譬うれば経典の重荷を運ぶ驢馬(ろば)の如し。アッラーの神兆(しるし)を拒否する徒輩(やから)もまた災いなるかな。アッラーは不義の徒輩(やから)を導き給わぬ。

مَثَلُ الَّذِيْنَ حُمِّلُوا التَّوْرٰىةَ ثُمَّ لَمْ يَحْمِلُوْهَا كَمَثَلِ الْحِمَارِ يَحْمِلُ اَسْفَارًا ۭ بِئْسَ مَثَلُ الْقَوْمِ الَّذِيْنَ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِ اللّٰهِ ۭ وَاللّٰهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظّٰلِمِيْنَ ٦

7．云え、「汝等ユダヤ教徒よ、お前たちは、他のすべての民を超えてアッラーのお気に入りだと主張するならば、而(しか)してその言(ことば)本当ならば、ただちに死を希(こいねが)え」と。（注5）

قُلْ يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ هَادُوْٓا اِنْ زَعَمْتُمْ اَنَّكُمْ اَوْلِيَآءُ لِلّٰهِ مِنْ دُوْنِ النَّاسِ فَتَمَنَّوُا الْمَوْتَ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ٧

8．しかし彼等は、己が手が先に送りしことのために、決して死を希(こいねが)わざるべし。アッラーは不義なす徒輩(やから)を熟知(じゅくち)し給う。

وَلَا يَتَمَنَّوْنَهٗٓ اَبَدًا ۢ بِمَا قَدَّمَتْ اَيْدِيْهِمْ ۭ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌۢ بِالظّٰلِمِيْنَ ٨

9．云え、「お前たちが死から逃れんとしても、死は必ずお前たちに追い付かん。而(しか)してお前たちは、不可視なる世界も可視なる世界も知る主に帰らん。その時主は、お前たちが日頃なせることをお前たちに語り告げん」と。

قُلْ اِنَّ الْمَوْتَ الَّذِيْ تَفِرُّوْنَ مِنْهُ فَاِنَّهٗ مُلٰقِيْكُمْ ثُمَّ تُرَدُّوْنَ اِلٰى عٰلِمِ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ فَيُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ٩

第二項

10．汝等信徒たちよ、金曜日の礼拝に召される時は、アッラーを念ずることに急ぎ、すべ

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اِذَا نُوْدِيَ لِلصَّلٰوةِ مِنْ يَّوْمِ

語った。『もし信仰がプレイアデス星団に届くものなら、サルマーンの故郷(ペルシヤ)の人のうち、だれかが、必ずそれを取り戻すであろう。』このモハッマド預言者の言葉は、当節がペルシヤ人の男に向けられたものである事を示している。アハマディーア教会の創立者は、ペルシヤの子孫であり、約束されたメシヤだと主張している。モハッマド預言者の別の言葉はメシヤの到来を述べたもので、その時、クルアーンは残らないがその言葉が、イスラム教ではなく、その名が残るのである。つまり、イスラム教義の真の精神は失われるのである。この様にクルアーンとハディスは共に、当節が約束されたメシアの身に起こるモハッマド預言者の再来に触れている事を認めている。

注5　約束されたメシアは、いわゆるイスラム教徒（偽りのイスラム教学者）に挑むが、彼はムバハラーの要求を拒むであろう。このムバハラーは祈りを競い合うもので、これにより、神に対し虚偽を捏造する者に神ののろいがかけられる（3：62）。

ての仕事をやめよ。お前たちわかりさえすれば、その方がお前たちのためには最良なり。（注６）

الْجُمُعَةِ فَاسْعَوْا إِلَىٰ ذِكْرِ اللَّهِ وَذَرُوا الْبَيْعَ ذَٰلِكُمْ خَيْرٌ لَكُمْ إِنْ كُنْتُمْ تَعْلَمُونَ ⑩

11．礼拝が終らば方々に散り、アッラーの恩恵を求め、自分たちが栄えるように不断にアッラーを唱念せよ。（注７）

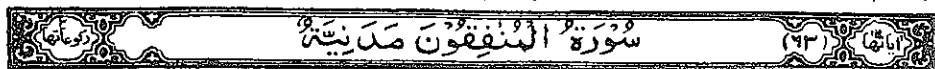
فَإِذَا قُضِيَتِ الصَّلَوٰةُ فَانْتَشِرُوا فِي الْأَرْضِ وَابْتَغُوا مِنْ فَضْلِ اللَّهِ وَاذْكُرُوا اللَّهَ كَثِيرًا لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ⑪

12．然（しか）るに彼等は、儲け口や娯楽を見ると、集礼を解散し、汝独りを残して去る。云え、「アッラーの許（もと）にあるものの方が、娯楽や商売よりはるかに優る。而（しか）してアッラーは最上の供給者なり」と。

وَإِذَا رَأَوْا تِجَارَةً أَوْ لَهْوًا انْفَضُّوا إِلَيْهَا وَتَرَكُوكَ قَائِمًا قُلْ مَا عِنْدَ اللَّهِ خَيْرٌ مِنَ اللَّهْوِ وَمِنَ التِّجَارَةِ وَاللَّهُ خَيْرُ الرَّازِقِينَ ⑫

注６　前数節には、モハッマド預言者を拒み、その安息日を活用し、ひいては神の不興を招く事となったユダヤ人達の事が述べられている。しかし当節では、イスラム教徒は義務的な金曜礼拝に特に注意するよう命じられている。人には皆安息日があり、イスラム教徒の安息日は金曜日である。この章は特に約束されたメシヤの事を取り上げているので、金曜礼拝に対する要求は、同時に、イスラム教徒が彼のお告げに耳を傾けるようにと彼が、らっぱのごとく呼びかけている事を示してもいるようだ。

注７　ユダヤ教徒やキリスト教徒の安息日とは異なり、イスラム教徒の安息日は休日ではない。金曜礼拝の前後に、イスラム教徒はいつも通りに日常業務に携って構わない。「アッラーの恩恵」とは、一般的に、「仕事をし生計を立てる」という意味に解されている。

سُوْرَةُ الْمُنٰفِقُوْنَ مَدَنِيَّةٌ (٦٣)

アル・ムナーフィクーン

（メディナ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．似非信者どもが汝に来て云う、「我等は、汝が真のアッラーの使徒なることを証言す」と。されどアッラーは、汝が確かに使徒なることを知り、また似非信者は間違いなく嘘つきなることを証言す。（注１）

اِذَا جَآءَكَ الْمُنٰفِقُوْنَ قَالُوْا نَشْهَدُ اِنَّكَ لَرَسُوْلُ اللّٰهِ ۘ وَاللّٰهُ يَعْلَمُ اِنَّكَ لَرَسُوْلُهٗ ؕ وَاللّٰهُ يَشْهَدُ اِنَّ الْمُنٰفِقِيْنَ لَكٰذِبُوْنَ ۚ ②

3．彼等はその誓いを隠れみのとなし、人々をアッラーの道から妨げる。彼等のなしたることはげに罪悪なり。

اِتَّخَذُوْٓا اَيْمَانَهُمْ جُنَّةً فَصَدُّوْا عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ؕ اِنَّهُمْ سَآءَ مَا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ③

4．そは、彼等一旦は信じたれど、後に之を棄てたるが故なり。されば彼等の心は封じられ、それ故に彼等は理解し得ざるなり。（注２）

ذٰلِكَ بِاَنَّهُمْ اٰمَنُوْا ثُمَّ كَفَرُوْا فَطُبِعَ عَلٰى قُلُوْبِهِمْ فَهُمْ لَا يَفْقَهُوْنَ ④

5．汝、彼等を見る時、彼等の風采が汝を感心させる。また彼等もの云えば、汝は彼等の言葉に耳傾ける。彼等は恰も支えられて立つ材木の如し。彼等は、それぞれの叫びが自分に敵対するものの如く思う。（注３）彼等こそ敵なれば用心せよ。アッラーの呪詛が彼等の上にあれ！なんと彼等の真理から離反せることぞ！

وَاِذَا رَاَيْتَهُمْ تُعْجِبُكَ اَجْسَامُهُمْ ؕ وَاِنْ يَّقُوْلُوْا تَسْمَعْ لِقَوْلِهِمْ ؕ كَاَنَّهُمْ خُشُبٌ مُّسَنَّدَةٌ ؕ يَحْسَبُوْنَ كُلَّ صَيْحَةٍ عَلَيْهِمْ ؕ هُمُ الْعَدُوُّ فَاحْذَرْهُمْ ؕ قٰتَلَهُمُ اللّٰهُ ۫ اَنّٰى يُؤْفَكُوْنَ ⑤

6．彼等に向って「いざ来れ、アッラーの使徒がお前たちのために宥恕を請わん」と云え

وَاِذَا قِيْلَ لَهُمْ تَعَالَوْا يَسْتَغْفِرْ لَكُمْ رَسُوْلُ اللّٰهِ

注１　信仰を大声で告白し、心中の背信を隠そうとするのが、偽善者の特性である。

注２　ごまかしや口先だけの話しで、アッラーやアッラーの預言者をだませるという誤解にあえぎ、偽善者達は理性と分別を全て失ってしまったようだ。

注３　偽善者は自信がない。彼はいつも頼る者を求めている。又は、当節は、彼の内面が外見と一致しないと示しているのかもしれない。彼は外に向かっては、理性と威厳があり、誠実な人に見える様に振る舞うが、その内面はうつろで、心まで腐っている。口先だけの言葉で人を喜ばそうとするが、臆病で、全てを疑ってかかる。

ば、彼等はわきを向く。汝は彼等が傲然として背を向けるを見ゆ。

لَوَّوْا رُءُوسَهُمْ وَرَأَيْتَهُمْ يَصُدُّونَ وَهُمْ مُّسْتَكْبِرُونَ ⑥

7．汝、彼等のために宥恕を請うも請わざるも、そは同じなり。アッラーは断じて彼等を宥恕せざるべし。げにアッラーは邪悪な徒輩を導かず。

سَوَآءٌ عَلَيْهِمْ أَسْتَغْفَرْتَ لَهُمْ أَمْ لَمْ تَسْتَغْفِرْ لَهُمْ لَن يَغْفِرَ اللّٰهُ لَهُمْ إِنَّ اللّٰهَ لَا يَهْدِى الْقَوْمَ الْفٰسِقِينَ ⑦

8．「アッラーの使徒に従う者に喜捨するなかれ。彼等はいずれムハンマドを離れて四散する故に」と云う者は、彼等なり。天地の宝はすべてアッラーの有なり。されど似非信者にはそれがわからぬ。(注４)

هُمُ الَّذِينَ يَقُولُونَ لَا تُنفِقُوا عَلٰى مَنْ عِندَ رَسُولِ اللّٰهِ حَتّٰى يَنفَضُّوا وَلِلّٰهِ خَزَآئِنُ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ وَلٰكِنَّ الْمُنٰفِقِينَ لَا يَفْقَهُونَ ⑧

9．彼等は云う、「もし我等メディナに帰らば、身分の高い者が必ず卑しい者を邑から放逐せん」と。(注５) 然るに真の栄誉は、アッラーにあり、その使徒にあり、信徒たちにあり。されど似非信者にはそれがわからぬ。

يَقُولُونَ لَئِن رَّجَعْنَآ إِلَى الْمَدِينَةِ لَيُخْرِجَنَّ الْأَعَزُّ مِنْهَا الْأَذَلَّ وَلِلّٰهِ الْعِزَّةُ وَلِرَسُولِهِ وَلِلْمُؤْمِنِينَ وَلٰكِنَّ الْمُنٰفِقِينَ لَا يَعْلَمُونَ ⑨

第二項

10．汝等信徒たちよ、お前たちの財産と子女に気をとられて、アッラーを念ずることをおろそかにするなかれ。かくなさん者は、必ず失敗者とならん。

يٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ ءَامَنُوا لَا تُلْهِكُمْ أَمْوٰلُكُمْ وَلَآ أَوْلٰدُكُمْ عَن ذِكْرِ اللّٰهِ وَمَن يَفْعَلْ ذٰلِكَ فَأُولٰٓئِكَ هُمُ الْخٰسِرُونَ ⑩

11．死がお前たちの各自を不意に襲う前に、われらがお前たちに賜えるもののうちから喜

وَأَنفِقُوا مِن مَّا رَزَقْنٰكُم مِّن قَبْلِ أَن يَأْتِىَ أَحَدَكُمُ

注４　自信が不誠実なので、偽善者は他人も自分と同じだと考える。メディナの偽善者達は、モハッマド預言者の仲間の目的の誠実さに対し全く愚かで誤った評価を下していた。モハッマド預言者の仲間が彼の周囲に集まるのは、物的利益を求めての事であり、彼等の期待がかなわなければ、その時彼等は彼を見放すであろう、と偽善者達は考えた。時には、彼等の一人よがりでむなしい期待を完全に裏切った。

注５　戦闘（おそらくはバヌー・ムスタリークに対するもの）の最中、メディナの主になりたいという期待がモハッマド預言者の到来で挫かれてしまった、メディナの偽善者達の指導者アブドゥラ・ビン・オバイは、メディナに戻る途中次の様に語ったとされる。住民の中で「最も高潔な者」は彼自身であり、それ故「最も卑しい者」とはモハッマド預言者を指す事になる。アブドゥの息子は、父親のこの不愉快な自慢を耳にし、軍隊がメディアに到着した時、剣を抜き、父親こそがメディナの住民の中で最も卑しく、モハッマド預言者が最も高潔であると認めるまで中に入らせなかった。この様にして、彼の自慢はその身に報いをもたらした。

捨をせよ。そは、「主よ、暫しの猶予をお与えくださるなら、我は喜捨を行い必ず義しい人間とならん」と云わざらんがためなり。

الْمَوْتُ فَيَقُوْلَ رَبِّ لَوْلَآ اَخَّرْتَنِيْٓ اِلٰٓى اَجَلٍ قَرِيْبٍ فَاَصَّدَّقَ وَاَكُنْ مِّنَ الصّٰلِحِيْنَ ﴿١١﴾

12．されど、定められたる時至れば、(注６)アッラーは何人にも猶予を与えざるべし。アッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

وَلَنْ يُّؤَخِّرَ اللّٰهُ نَفْسًا اِذَا جَآءَ اَجَلُهَا ۭ وَاللّٰهُ خَبِيْرٌۢ بِمَا تَعْمَلُوْنَ ﴿١٢﴾

注６　良い目的の為に働くという、神から与えられた機会を逸する時。

سُوْرَةُ التَّغَابُنِ مَدَنِيَّةٌ (٦٤)

アル・タガーブン
（メディナ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．天にあるもの、地にあるもの、挙てアッラーを讃美し奉る。（注１）大権を掌握し、讃美を一身に集める彼は、萬事を支配し給う。

يُسَبِّحُ لِلّٰهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ لَهُ الْمُلْكُ وَلَهُ الْحَمْدُ وَهُوَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ②

3．お前たちを創造したるは彼なり。然るにお前たちの中には、信者もあれば、不信者もあり。（注２）アッラーはお前たちの所業をみそなはし給う。

هُوَ الَّذِيْ خَلَقَكُمْ فَمِنْكُمْ كَافِرٌ وَّمِنْكُمْ مُّؤْمِنٌ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ بَصِيْرٌ ③

4．彼は真理に因って天地を創造し、お前たちを造形するにあたって美しい姿を与えたり。而して、最後の帰りどころは、彼の許なり。（注３）

خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضَ بِالْحَقِّ وَصَوَّرَكُمْ فَأَحْسَنَ صُوَرَكُمْ وَإِلَيْهِ الْمَصِيْرُ ④

5．彼は天にあるもの、地にあるもの一切を知り、お前たちが隠すことも顕わすことも知り給う。アッラーは人々が胸に抱くことまで熟知し給う。（注４）

يَعْلَمُ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ وَيَعْلَمُ مَا تُسِرُّوْنَ وَمَا تُعْلِنُوْنَ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ بِذَاتِ الصُّدُوْرِ ⑤

6．昔の信ぜざりし者どもの消息が、お前たちに達せざりしか？彼等は己が行状の悪果を味わい、痛罰を蒙りたり。

أَلَمْ يَأْتِكُمْ نَبَؤُا الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ قَبْلُ فَذَاقُوْا وَبَالَ أَمْرِهِمْ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيْمٌ ⑥

注１　万物は、定められた任務を規則正しく遂行し、その創造の目的を果たす事で自らの欠点を補い、自身の主・創造主・支配者となると神に告げる。これが「讃美」の真意である。

注２　神は人間に素晴らしい天性の力を授けられ、道徳的・精神的進歩を遂げる機会をお与えになったが、人間の中にはそれ等を正しく用いる事ができず、特に神の恩恵を知るのを拒む者もいれば、それ等を同胞の為に用い、神の喜びを受ける者もいる。これが「不信者」と「信者」の意味する所である。

注３　宇宙は一定の自然法に支配され、人間が偶然の犠牲となる事はない。むしろ、地上における神の代理として高位に据えられ、それにふさわしい力を授けられている。人間は神に自らの行為の申し開きをしなければならないであろう。

注４　神は宇宙の創造主にして支配者であられ、神が御気付きになられない事はない。それ故、人間が自らの行為の責任を取らなくとも良いと考えるのは無意味である。

7．そは使徒たちが明らかな神兆を携えて彼等に来るたびに、彼等は、「ただの人間が我等を導かんとするか？」と云い、信ぜず、背きしが故なり。されどアッラーは彼等を必要とせざりき。アッラーは自足して、讃美されるべき御方なり。

ذٰلِكَ بِأَنَّهٗ كَانَتْ تَّأْتِيْهِمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَيِّنٰتِ فَقَالُوْٓا اَبَشَرٌ يَّهْدُوْنَنَا ۡ فَكَفَرُوْا وَتَوَلَّوْا وَّاسْتَغْنَى اللّٰهُ ؕ وَاللّٰهُ غَنِيٌّ حَمِيْدٌ ۝٧

8．不信心者どもは復活はあり得べからずと断言す。云え、「主にかけて云う、そはあり。お前たちは必ず甦らしめらるべし。その時、お前たちはそのなせることを告知されん。そはアッラーにはいと易きことなり」と。

زَعَمَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْٓا اَنْ لَّنْ يُّبْعَثُوْا ؕ قُلْ بَلٰى وَرَبِّيْ لَتُبْعَثُنَّ ثُمَّ لَتُنَبَّؤُنَّ بِمَا عَمِلْتُمْ ؕ وَذٰلِكَ عَلَى اللّٰهِ يَسِيْرٌ ۝٨

9．さればアッラー並びにその使徒と、われらが降したる光明とを信ぜよ。（注５）アッラーはお前たちの所業を知悉し給う。

فَاٰمِنُوْا بِاللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ وَالنُّوْرِ الَّذِيْٓ اَنْزَلْنَا ؕ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِيْرٌ ۝٩

10．アッラーがお前たちを集合日に集め給う時、そは相互の損得明示の日となるべし。（注６）アッラーを信じ、善行をなす者だけが、その諸々の罪を浄められ、河川流るる楽園に入らしめられ、その中に永遠に住ましめられん。そは最高の大成功なり。

يَوْمَ يَجْمَعُكُمْ لِيَوْمِ الْجَمْعِ ذٰلِكَ يَوْمُ التَّغَابُنِ ؕ وَمَنْ يُّؤْمِنْ بِاللّٰهِ وَيَعْمَلْ صَالِحًا يُّكَفِّرْ عَنْهُ سَيِّاٰتِهٖ وَيُدْخِلْهُ جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ خٰلِدِيْنَ فِيْهَآ اَبَدًا ؕ ذٰلِكَ الْفَوْزُ الْعَظِيْمُ ۝١٠

11．されど、不信心者にしてわれらの神兆を拒否する者は、業火の住人にして、その中に永遠に住み留まらん。行き着く先の災いなるかな！

وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَكَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَآ اُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ النَّارِ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ؕ وَبِئْسَ الْمَصِيْرُ ۝١١

第二項

12．如何なる災難も、アッラーの許しなく生ずることなし。（注７）而してアッラーを信ず

مَآ اَصَابَ مِنْ مُّصِيْبَةٍ اِلَّا بِاِذْنِ اللّٰهِ ؕ وَمَنْ

注５　「光明」はモハッマド預言者が特に賜った、啓示・知恵・魂の啓発・洞察・神の知識と認識の光を指す。

注６　「損得明示の日」という言葉には、次の様な様々な解釈がなされる。(1)喪失と獲得の日。つまり、信者は手にした物を知り、不信心者は失った物に気付く時。(2)喪失が示される日。その日、不信心者は、神と人間に対する自身の義務を如何に怠ったかを悟り、この様にして失った物が彼等に示されるのであろう。(3)不信心者の欠点は、信仰よりも不信仰を選ぶ彼等の無知によるものだと信者が考える日。

注７　神は一定の法則により宇宙を支配する。人間がそれ等の法のいずれかを犯す時、彼は災難に巻き込まれる。しかし神は全ての自然の法則の創造主であり、人間の苦悩はこれ等の法のいずれかに、又は神の特命の一つに背く為であり、困難は神から発するか、あるいは神の認知のもとに生じるものである。

る者は、彼その人の心を正しく導く。アッラーは萬事を熟知し給う。

يُّؤْمِنْ بِاللّٰهِ يَهْدِ قَلْبَهٗ ؕ وَاللّٰهُ بِكُلِّ شَیْءٍ
عَلِيْمٌ ﴿١٢﴾

13. さればアッラーに従え、使徒に従え。されどたといお前たちが背き去るとも、われらの使徒はただ明白に神託を伝達するのが務めなり。

وَاَطِيْعُوا اللّٰهَ وَاَطِيْعُوا الرَّسُوْلَ ۚ فَاِنْ تَوَلَّيْتُمْ فَاِنَّمَا
عَلٰى رَسُوْلِنَا الْبَلٰغُ الْمُبِيْنُ ﴿١٣﴾

14. アッラー、彼の外に神なし。されば信者たちをアッラーに頼らしめよ。

اَللّٰهُ لَاۤ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ؕ وَعَلَى اللّٰهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُوْنَ ﴿١٤﴾

15. 汝等信徒たちよ、げにお前たちの敵は、その妻女や子女の中にもあり。されば彼等に用心せよ。されどお前たちが之を看過し、赦免し、寛恕するなら、然らばアッラーも寛大にして、慈悲深くまします。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْۤا اِنَّ مِنْ اَزْوَاجِكُمْ وَاَوْلَادِكُمْ
عَدُوًّا لَّكُمْ فَاحْذَرُوْهُمْ ۚ وَاِنْ تَعْفُوْا وَتَصْفَحُوْا
وَتَغْفِرُوْا فَاِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿١٥﴾

16. お前たちの財産や子女は、たんなる試練にしか過ぎず。アッラーの御許にのみ莫大なる報奨あり。

اِنَّمَاۤ اَمْوَالُكُمْ وَاَوْلَادُكُمْ فِتْنَةٌ ؕ وَاللّٰهُ عِنْدَهٗۤ
اَجْرٌ عَظِيْمٌ ﴿١٦﴾

17. されば全力を盡してアッラーを畏敬し、聴き、従い、喜捨をせよ。そはお前たちのためとならん。また己れの貪欲を除き去る者、かかる者は必ず栄ゆべし。

فَاتَّقُوا اللّٰهَ مَا اسْتَطَعْتُمْ وَاسْمَعُوْا وَاَطِيْعُوْا وَ
اَنْفِقُوْا خَيْرًا لِّاَنْفُسِكُمْ ؕ وَمَنْ يُّوْقَ شُحَّ نَفْسِهٖ
فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُوْنَ ﴿١٧﴾

18. もしお前たちアッラーに善き貸付けを行えば、彼は之をお前たちのために倍加し、且つお前たちを宥恕せん。(注8)アッラーは頌賞者にして、大度者、

اِنْ تُقْرِضُوا اللّٰهَ قَرْضًا حَسَنًا يُّضٰعِفْهُ لَكُمْ وَ
يَغْفِرْ لَكُمْ ؕ وَاللّٰهُ شَكُوْرٌ حَلِيْمٌ ﴿١٨﴾

19. 不可視なる世界と可視なる世界の(注9)能知者、偉大にして賢哲にまします。

عٰلِمُ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ﴿١٩﴾

注8　神の為に財を費やす事は、寛大で御理解ある神にいわば貸しを作る事であり、神は様々な形でそれを払い戻される。

注9　見えざる物と見える物。

سُوْرَةُ الطَّلَاقِ مَدَنِيَّةٌ (٦٥)

アル・タラーク
(メディナ啓示)

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ (١)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

يٰٓاَيُّهَا النَّبِيُّ اِذَا طَلَّقْتُمُ النِّسَآءَ فَطَلِّقُوْهُنَّ لِعِدَّتِهِنَّ وَاَحْصُوا الْعِدَّةَ ۚ وَاتَّقُوا اللّٰهَ رَبَّكُمْ ۚ لَا تُخْرِجُوْهُنَّ مِنْۢ بُيُوْتِهِنَّ وَلَا يَخْرُجْنَ اِلَّآ اَنْ يَّاْتِيْنَ بِفَاحِشَةٍ مُّبَيِّنَةٍ ۗ وَتِلْكَ حُدُوْدُ اللّٰهِ ۗ وَمَنْ يَّتَعَدَّ حُدُوْدَ اللّٰهِ فَقَدْ ظَلَمَ نَفْسَهٗ ۗ لَا تَدْرِيْ لَعَلَّ اللّٰهَ يُحْدِثُ بَعْدَ ذٰلِكَ اَمْرًا (٢)

2．預言者よ、お前たちが妻を離別する場合は、(注1) 定められた期間が過ぎてから之を離別し、その期間をよく数え、(注2)アッラーを畏れ敬え。明らかに醜行を犯した場合は別として、彼女たちを家から追い出したり、出で行かせたりするなかれ。こはアッラーによって課されたる掟なり。誰であれアッラーの掟を破る者は、必ず己れ自身をそこなう。汝は知らねども、アッラーが後で何か新しい事態を惹き起すやも知れぬ。

فَاِذَا بَلَغْنَ اَجَلَهُنَّ فَاَمْسِكُوْهُنَّ بِمَعْرُوْفٍ اَوْ فَارِقُوْهُنَّ بِمَعْرُوْفٍ وَّاَشْهِدُوْا ذَوَيْ عَدْلٍ مِّنْكُمْ وَاَقِيْمُوا الشَّهَادَةَ لِلّٰهِ ۗ ذٰلِكُمْ يُوْعَظُ بِهٖ مَنْ كَانَ يُؤْمِنُ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ ۗ وَمَنْ يَّتَّقِ اللّٰهَ يَجْعَلْ لَّهٗ مَخْرَجًا (٣)

3．定められた期間が過ぎなば、親切を以て彼女たちを家に留めるか、離別せよ。而してお前たちの中から二名の公正な証人を立て、アッラーに向って正しく証言せしめよ。こは、アッラーと末日を信ずる者への訓戒なり。而してアッラーを畏れ敬う者には、アッラーは出口を設え、(注3)

注1　当節は、モハッマド預言者に向けられた様でいて実は信者に発せられた言葉を含む、クルアーンの(数)節の一つである。モハッマド預言者は、いずれの妻とも離婚する事を禁じられていたので(33：53)、この禁止令は明らかに彼に従う者に適用される。

注2　離婚の宣言は二度の月経期間を経た後なされるべきで、その間夫と妻は関係を持ってはならない。これにより、離婚の決定は怒りやその他一時の感情で急ぎなされる事はなく、冷静・慎重な思慮の後下されるのである。又、離婚した妻はイッダ(待機期間)が切れるまで、婚家に留まる事になっている。離婚のこの過程は、待機期間中に不和の原因が徐々になくなり、仲たがいしていた夫婦の間に和解が成立する事もあるので、言い渡されているのである。

注3　もし夫と妻の不和が夫の貧しさによるものであり、彼が神を畏れ、この困難な状況を乗り切る誠実な努力をしていれば、神は彼に思いがけない所から富をお与えになるであろう。

4．予期せざるところより給養を賜わらん。アッラーにその信頼を託す者は、アッラーのみで満ち足りる。アッラーは必ずその目的を成し遂げん。アッラーはすべてのものに限度を定めたり。

وَّيَرْزُقْهُ مِنْ حَيْثُ لَا يَحْتَسِبُ ۚ وَمَنْ يَّتَوَكَّلْ عَلَى اللّٰهِ فَهُوَ حَسْبُهٗ ۚ اِنَّ اللّٰهَ بَالِغُ اَمْرِهٖ ۚ قَدْ جَعَلَ اللّٰهُ لِكُلِّ شَیْءٍ قَدْرًا ﴿٤﴾

5．お前たちの妻のうち月経の望みなき者を離別せんとする場合、もしお前たち疑心を抱かば、(注4)その守るべき期間は三ヵ月と定む。未だ月経なき者もまた然り。また女が妊娠している場合は、その期間は、胎の荷を産み落すまでと定む。誰であれアッラーを畏れ敬う者には、アッラーはその者の事情を容易ならしむべし。

وَالّٰٓـِٔیْ يَئِسْنَ مِنَ الْمَحِيْضِ مِنْ نِّسَآئِكُمْ اِنِ ارْتَبْتُمْ فَعِدَّتُهُنَّ ثَلٰثَةُ اَشْهُرٍ وَّالّٰٓـِٔیْ لَمْ يَحِضْنَ ۚ وَاُولَاتُ الْاَحْمَالِ اَجَلُهُنَّ اَنْ يَّضَعْنَ حَمْلَهُنَّ ۚ وَمَنْ يَّتَّقِ اللّٰهَ يَجْعَلْ لَّهٗ مِنْ اَمْرِهٖ يُسْرًا ﴿٥﴾

6．こはアッラーがお前たちに降せる掟なり。而してアッラーを畏れ敬う者には、(注5)アッラーその罪を払拭し、その報奨を加増せん。

ذٰلِكَ اَمْرُ اللّٰهِ اَنْزَلَهٗۤ اِلَيْكُمْ ۚ وَمَنْ يَّتَّقِ اللّٰهَ يُكَفِّرْ عَنْهُ سَيِّاٰتِهٖ وَيُعْظِمْ لَهٗۤ اَجْرًا ﴿٦﴾

7．お前たちその資力に応じて、離別せる妻を自分の家に規定された期間住ましめよ。(注6)されど彼女を窮迫に陥いれて、苦しめるなかれ。もし彼女が妊娠中ならば、その重荷を産みおとすまで面倒をみてやれ。また、彼女がその子のために授乳する場合は、彼女にその報酬を与えよ。お互に好意を以て商量せよ。されど話がまとまらぬ場合は、その子の授乳は他の女にさせよ。

اَسْكِنُوْهُنَّ مِنْ حَيْثُ سَكَنْتُمْ مِّنْ وُّجْدِكُمْ وَلَا تُضَآرُّوْهُنَّ لِتُضَيِّقُوْا عَلَيْهِنَّ ۚ وَاِنْ كُنَّ اُولَاتِ حَمْلٍ فَاَنْفِقُوْا عَلَيْهِنَّ حَتّٰى يَضَعْنَ حَمْلَهُنَّ ۚ فَاِنْ اَرْضَعْنَ لَكُمْ فَاٰتُوْهُنَّ اُجُوْرَهُنَّ ۚ وَاْتَمِرُوْا بَيْنَكُمْ بِمَعْرُوْفٍ ۚ وَاِنْ تَعَاسَرْتُمْ فَسَتُرْضِعُ لَهٗۤ اُخْرٰى ﴿٧﴾

8．資産の裕福な者には、裕福なりに費やさせよ。生計が苦しい者には、アッラーがその者に賜えしものの中より費やさせよ。アッラーは何人にも、賜えしもの以上の負担を課し給わず。アッラーは苦の後に必ず安楽を与えん。

لِيُنْفِقْ ذُوْ سَعَةٍ مِّنْ سَعَتِهٖ ۚ وَمَنْ قُدِرَ عَلَيْهِ رِزْقُهٗ فَلْيُنْفِقْ مِمَّاۤ اٰتٰىهُ اللّٰهُ ۚ لَا يُكَلِّفُ اللّٰهُ نَفْسًا اِلَّا مَاۤ اٰتٰىهَا ۚ سَيَجْعَلُ اللّٰهُ بَعْدَ عُسْرٍ يُّسْرًا ﴿٨﴾ ع

注4　「疑心を抱かば」という言葉は、更年期が訪れてもいないのに、子宮異常かその他の原因で閉経が起きる事もあり、付け加えられた。

注5　先の五節で不信者は神を畏れる様にと繰り返し命じられている。これは、離婚の際、一般的に男性は妻を不公平に扱い、彼女達の権利を奪おうとする事を示している。

注6　離婚した女性は、婚家を出、自由に生き方を選べる様になるまでは、夫の最善の努力により、その家の主婦であった時と全く同じ状況の下、そのイッダの間、夫に養われる事となる。

第二項

9．神とその使徒の命に背ける邑がどれほどありしことか！されぱわれらは厳しい計算を以て清算し、恐ろしい刑罰を以て懲らしめたり。（注7）

وَكَأَيِّن مِّن قَرْيَةٍ عَتَتْ عَنْ أَمْرِ رَبِّهَا وَرُسُلِهِ فَحَاسَبْنَاهَا حِسَابًا شَدِيدًا وَعَذَّبْنَاهَا عَذَابًا نُّكْرًا (٩)

10．さればその行状の悪果を味い、最後は破滅なりき。

فَذَاقَتْ وَبَالَ أَمْرِهَا وَكَانَ عَاقِبَةُ أَمْرِهَا خُسْرًا (١٠)

11．アッラーは彼等のために厳しい懲罰を用意せり。さればアッラーを畏れ敬え、汝等思慮ある者よ、信仰する者よ。げにアッラーはお前たちに一つの注意を降したり、

أَعَدَّ اللَّهُ لَهُمْ عَذَابًا شَدِيدًا فَاتَّقُوا اللَّهَ يَا أُولِي الْأَلْبَابِ الَّذِينَ آمَنُوا قَدْ أَنزَلَ اللَّهُ إِلَيْكُمْ ذِكْرًا (١١)

12．そはすなわち、信じて善行を積む人々を暗闇から光明へ導かしめんと、アッラーの明らかな神兆をお前たちに誦み聞かす一人の使徒なり。アッラーを信じ、善行を積む者は、アッラー之を河川流れる楽園に入らしめ、その中で永遠に住ましめん。アッラーはその者のために素晴らしい給養を準備せり。

رَّسُولًا يَتْلُو عَلَيْكُمْ آيَاتِ اللَّهِ مُبَيِّنَاتٍ لِّيُخْرِجَ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ مِنَ الظُّلُمَاتِ إِلَى النُّورِ وَمَن يُؤْمِن بِاللَّهِ وَيَعْمَلْ صَالِحًا يُدْخِلْهُ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِن تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا قَدْ أَحْسَنَ اللَّهُ لَهُ رِزْقًا (١٢)

13．七層の天を創り、（注8）またそれに相似する地を創造せるはアッラーなり。神命は天地の間に降る。そはお前たちをして、アッラーが萬物を支配し、その知恵の中に萬物を包み込むことを知らしめんがためなり。

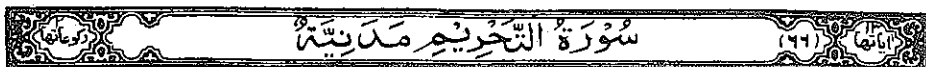
اللَّهُ الَّذِي خَلَقَ سَبْعَ سَمَاوَاتٍ وَمِنَ الْأَرْضِ مِثْلَهُنَّ يَتَنَزَّلُ الْأَمْرُ بَيْنَهُنَّ لِتَعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ وَأَنَّ اللَّهَ قَدْ أَحَاطَ بِكُلِّ شَيْءٍ عِلْمًا (١٣)

注7　前節に取り上げられた離婚の主題から、当節は神の戒律に対する挑戦へと移っている。それは、神の戒律に反抗する者は神の恩恵から我身を切り離す事になるからである。

注8　「七層の地」とは、クルアーンの他の箇所（23：18）に述べられている様に、太陽系の七つの主な惑星とその軌道を指す。又「七層の天」の宗教的な意味は、人の魂の七つの発達段階であり、「七層の地」は肉体の発達の七段階を指す。

سُورَةُ التَّحْرِيمِ مَدَنِيَّةٌ

アル・タフリーム

(メディナ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ①

2．預言者よ、何故に汝はアッラーが合法となせることを禁止して、汝の妻たちを悦ばさんとするか？（注1）アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ لِمَ تُحَرِّمُ مَا أَحَلَّ اللَّهُ لَكَ ۖ تَبْتَغِي مَرْضَاتَ أَزْوَاجِكَ ۚ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَحِيمٌ ②

3．アッラーはお前たちに、その誓いを解消することを許し給えり。(注2)アッラーはお前たちの味方なり。彼はすべてを知り、賢哲にまします。

قَدْ فَرَضَ اللَّهُ لَكُمْ تَحِلَّةَ أَيْمَانِكُمْ ۚ وَاللَّهُ مَوْلَاكُمْ ۖ وَهُوَ الْعَلِيمُ الْحَكِيمُ ③

4．預言者が妻たちの一人に秘密を打ち明けたる時、彼女は之を漏らしたり。アッラー之を預言者に知らしめたれば、預言者は彼女にその一部を告げ、他は告げざりき。預言者がこの事を彼女に告げたる時、彼女は問えり、「誰がその事を汝に告げたるか？」と。(注3)預言者は答えり、「深知にして、知悉する神が之を我に告げたり」と。

وَإِذْ أَسَرَّ النَّبِيُّ إِلَىٰ بَعْضِ أَزْوَاجِهِ حَدِيثًا فَلَمَّا نَبَّأَتْ بِهِ وَأَظْهَرَهُ اللَّهُ عَلَيْهِ عَرَّفَ بَعْضَهُ وَأَعْرَضَ عَنْ بَعْضٍ ۖ فَلَمَّا نَبَّأَهَا بِهِ قَالَتْ مَنْ أَنْبَأَكَ هَٰذَا ۖ قَالَ نَبَّأَنِيَ الْعَلِيمُ الْخَبِيرُ ④

注1　ある日モハッマド預言者の妻の一人が、彼の好物らしい、蜂蜜から作られた飲み物を彼に与えたと書かれている。他の妻の何人かは、腹立ちから、彼の息はマガフィールの臭いがすると言った。このマガフィールとは、蜂蜜とは似ているが悪臭を放つ飲み物の事である。モハッマド預言者は思いやりある人だったので、以後二度と蜂蜜を食べないと約束した。当節は、一般的には、このできごとが述べられていると解してよい。しかし、唯、妻あるいは妻達の怒りを静める目的で、クルアーンに「病に効く」(16：70)、と書かれた正当な物の使用を、自らに永久に禁じる様な思い切った手段をモハッマド預言者が採る等有り得ない。ある伝承によれば、モハッマド預言者がザイナブの家から蜂蜜を取った時、アイシャとハフサは彼に前述の約束をさせたとある。又別の伝承では、モハッマド預言者はハフサの家で蜂蜜を振る舞われ、それに反対した妻がアイシャ、ザイナブ、サフィヤであった事になっている。この出来事の語り手は、幾つかの誤認、精神的動揺、とりわけ上記の伝承のくい違いに苦しんだ事が示されている。

注2　モハッマド預言者は、生活を楽しみたいという妻達の願いにひどく苦しみ、彼の非常な苦しみを示す為、一ヶ月間彼女達から離れると誓った。法で認められた所有物は、それを使わないと宣言しただけで所有者の権限が無効となる訳ではない、と当節は述べている。この様な不慮の出来事に際しては、破られた誓いの償いをする事だけが求められるのである。

注3　当節が述べる出来事が、事実如何に特異なものかを伝えるのは難しい。文脈から判断すれば、アイシャ自身が語った出来事を指すようであり、内容は次の様なものである。33：29が啓示された時、快楽を求める妻

5．今もしお前たち両名（注4）悔い改めアッラーに頼るなば、すなわち一度は心が傾きたるが故、それに越した事なかるべし。されど、互に助け合い預言者に抗する場合は、アッラーが預言者の味方なり、ガブリエルや正義の信徒たちもまた然り。更に、他の諸天使も預言者の味方なり。

إِنْ تَتُوبَا إِلَى اللّٰهِ فَقَدْ صَغَتْ قُلُوبُكُمَا ۚ وَإِنْ تَظٰهَرَا عَلَيْهِ فَإِنَّ اللّٰهَ هُوَ مَوْلٰىهُ وَجِبْرِيلُ وَصٰلِحُ الْمُؤْمِنِينَ ۚ وَالْمَلٰٓئِكَةُ بَعْدَ ذٰلِكَ ظَهِيرٌ ﴿٥﴾

6．預言者もしお前たちを離別しなば、主はお前たちの代りにはるかに優る妻を彼に与えん。そは従順にして、信心深く、敬虔にして、常々神にお縋りし、礼拝に専念し、断食をする者にして、既婚者もあれば、処女もあらん。

عَسٰى رَبُّهٗٓ إِنْ طَلَّقَكُنَّ أَنْ يُبْدِلَهٗٓ أَزْوٰجًا خَيْرًا مِّنْكُنَّ مُسْلِمٰتٍ مُّؤْمِنٰتٍ قٰنِتٰتٍ تٰٓئِبٰتٍ عٰبِدٰتٍ سٰٓئِحٰتٍ ثَيِّبٰتٍ وَّأَبْكَارًا ﴿٦﴾

7．汝等信徒たちよ、人間と石をその燃料とする業火から、お前たち自身とお前たちの家族を護れ。業火の上には厳格にして猛烈なる諸天使が番をし、彼等はアッラーの命に背かず、ただ命ぜられた通りに行う。

يٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ اٰمَنُوا قُوٓا أَنْفُسَكُمْ وَأَهْلِيكُمْ نَارًا وَّقُودُهَا النَّاسُ وَالْحِجَارَةُ عَلَيْهَا مَلٰٓئِكَةٌ غِلَاظٌ شِدَادٌ لَّا يَعْصُونَ اللّٰهَ مَآ أَمَرَهُمْ وَيَفْعَلُونَ مَا يُؤْمَرُونَ ﴿٧﴾

8．汝等不信心者どもよ、今日は弁解するなかれ。お前たちはそのなせることのために報いられる。

يٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ كَفَرُوا لَا تَعْتَذِرُوا الْيَوْمَ ۖ إِنَّمَا تُجْزَوْنَ مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٨﴾

第二項

9．汝等信徒たちよ、心から悔い改めてアッラーにお縋りせよ。主はお前たちの諸々の罪を

يٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ اٰمَنُوا تُوبُوٓا إِلَى اللّٰهِ تَوْبَةً نَّصُوحًا ۖ عَسٰى رَبُّكُمْ أَنْ يُّكَفِّرَ عَنْكُمْ سَيِّاٰتِكُمْ وَيُدْخِلَكُمْ

達の要求に答える中で、モハッマド預言者は、彼と共にいるか彼から離れるかの選択を彼女達にせまり、彼はまずアイシャの一件を切り出した（ブハリ、マザーリム・ワル・ガサブ書）。モハッマド預言者がこの様な手段をとったのは、アイシャがハフサと共に要求の口火を切ったからであり、アイシャがモハッマド預言者の秘密の話をハフサに伝えた事が考えられるからである。この件の事実がどうであれ、秘密をもらしてはならないと制限された人の義務を当節は強調している。特に当事者が夫と妻で、秘密が家庭内の個人的な事に関する場合、更に、神の預言者とその弟子の一人のあいだに秘密があげられる。

注4　「お前たち両名」とは、家庭生活における世俗的快適を率先して求めたマイシャとハフサを指しているようだ。しかしモハッマド預言者の他の妻達は、彼の同僚の間で最も尊敬される二人、アブーバクルとオマルそれぞれの娘だった為、先導役はアイシャ、ハフサの二人に任したものの、彼女達も又この要求に加わった。当節に述べられた出来事は非常に重大なものではあるが、妻の家から蜂蜜を取る事は、モハッマド預言者を一ヶ月間妻達から引き離す程深刻なものではない。又、アッラー、ガブリエル、及び正義の信徒たちが、モハッマド予言者の味方となるという訳がこの節の終わりにあるが、これも蜂蜜のことにしては重すぎる表現であり、そのことを示すのではないとわかる。

払拭し、河川流るる楽園に入らしめん。その日アッラーは、預言者並びに彼と信仰を共にせし人々を辱しめざるべし。彼等の光明はその前方に馳せ、またその右方に馳せん。彼等は云わん、「主よ、我等のためにこの光明を完うし給え。(注5)我等を赦し給え。(注6)げに汝は万物を支配し給う」と。

جنت تجري من تحتها الانهر يوم لا يخزي الله النبي والذين امنوا معه نورهم يسعى بين ايديهم وبايمانهم يقولون ربنا اتمم لنا نورنا واغفر لنا انك على كل شيء قدير ⑨

10．預言者よ、不信心者や似非信者とは断固戦い、(注7)手厳しく之を懲らしめよ。彼等の住居は地獄なり。その行く着く先の悲惨きかな！

يايها النبي جاهد الكفار والمنفقين واغلظ عليهم وماوىهم جهنم وبئس المصير ⑩

11．アッラーは不信心者どものために、ノアの妻並びにロトの妻の例を示し給う。(注8)彼女等はわれらの正しき二人の僕のもとなりしが、その両夫に背きたり。されば両夫は、アッラーに反抗して、その妻たちのために何もなし得ざりき。而して、「業火に入れ、汝等両名業火に入る徒輩と共に」と云われたり。

ضرب الله مثلا للذين كفروا امرات نوح وامرات لوط كانتا تحت عبدين من عبادنا صلحين فخانتهما فلم يغنيا عنهما من الله شيا وقيل ادخلا النار مع الدخلين ⑪

注5　「主よ、我等のためにこの光明を完うし給え」という言葉に表される、天国の信者の完全を求めて止まない願いとは、天国における生が不動のものでない事を示している。むしろ、天国での精神的発達は止まる所を知らないであろう。それは、信者がある段階の優秀な特質を獲得してもそこで止まる事なく、その前に更に優れた段階があるのを見て、自分が到達した段階が最高位ではない事を知り、又前進を続け、この様に終り無く突き進んで行くからである。

注6　天国に入った後、信者は「赦し」を請う。彼等は神の光の中に完全に浸される様に祈り続け、より高い者と比べて己れの至らなさを知り望みの高さまで上り続け、より高い段階に到達したいが為に、短所の隠ぺいを神に祈るのである。これがイスティグファールの真意だが、この語の文字通りの意味は「過失の許しを請う事」である。

注7　不信心者や偽善者達が仕掛けなければ、イスラム教徒が戦うことはあり得ない。当節は、付随して「懸命なる努力」という意味の語であるジハード（本文中では「戦い」という言葉で書かれている）の真意を説明している。ここに書かれている「戦い」というのは剣を交えるという意ではない。イスラム教徒は、広い意味でのジハードで、偽善者達に対するのである。又、偽善者達は、表面上、イスラム教徒とみなされていて、イスラム教徒が偽善者と剣で戦うことは許されていない。

注8　高潔な人との交わりは、神の預言者とのものであっても、真実を拒む悪に染った者のためにはならないと示す目的で、不信心者はノアやロトの妻達と比較されている。罪から逃れたいと懸命に願い祈るが、ファラオに象徴される悪の勢力と離れられず、自虐的になり、時に心がくじける信者を、ファラオの妻（12節）は表している。イエスの母マリア（13節）は、罪の道を断ち、神と和解した為に、神の霊感を与えられた、神の正しき下僕を表す。

12．アッラーはまた信ずる人々のために、ファラオの妃の例を示し給う。すなわち、彼女は云えり、「主よ、楽園の中に、汝のおそばに我がために家を建て給え。而(しか)して、我をファラオとその所業より救い給え。また不義を行う徒輩(やから)から救い給え」と。

وَضَرَبَ اللَّهُ مَثَلًا لِّلَّذِينَ آمَنُوا امْرَأَتَ فِرْعَوْنَ إِذْ قَالَتْ رَبِّ ابْنِ لِي عِندَكَ بَيْتًا فِي الْجَنَّةِ وَنَجِّنِي مِن فِرْعَوْنَ وَعَمَلِهِ وَنَجِّنِي مِنَ الْقَوْمِ الظَّالِمِينَ ﴿١٢﴾

13．またイムラーンの娘マリアの例を示し給う。すなわち彼女はその貞操を守りたれば、われらは彼女に聖霊を吹き入れたり。彼女は経典に盛られた主の言葉を実証せり。彼女は敬虔なる僕(しもべ)の一人なりき。

وَمَرْيَمَ ابْنَتَ عِمْرَانَ الَّتِي أَحْصَنَتْ فَرْجَهَا فَنَفَخْنَا فِيهِ مِن رُّوحِنَا وَصَدَّقَتْ بِكَلِمَاتِ رَبِّهَا وَكُتُبِهِ وَكَانَتْ مِنَ الْقَانِتِينَ ﴿١٣﴾

سُوْرَةُ الْمُلْكِ مَكِّيَّةٌ (٦٧)

アル・ムルク
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍（あまね）くアッラーの御名（みな）において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．大権を掌握し給う御神を讃美せよ。彼は万物を支配し給う。

تَبٰرَكَ الَّذِيْ بِيَدِهِ الْمُلْكُ وَهُوَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرُ ②

3．彼はお前たちを試みんがために、すなわちお前たちのうち誰が一番立派な振舞いをするか試さんがために、生と死とを創造せり。（注1）彼は偉力者、寛容者にまします。

الَّذِيْ خَلَقَ الْمَوْتَ وَالْحَيٰوةَ لِيَبْلُوَكُمْ اَيُّكُمْ اَحْسَنُ عَمَلًا وَهُوَ الْعَزِيْزُ الْغَفُوْرُ ③

4．調和する七層の天を創造せるは、彼なり。汝は、慈悲深き神の創造にいささかの不調和も見る能（あた）わず。改めて観察せよ。汝、なんらかの欠陥を見るか？

الَّذِيْ خَلَقَ سَبْعَ سَمٰوٰتٍ طِبَاقًا مَا تَرٰى فِيْ خَلْقِ الرَّحْمٰنِ مِنْ تَفٰوُتٍ فَارْجِعِ الْبَصَرَ هَلْ تَرٰى مِنْ فُطُوْرٍ ④

5．然（しか）り、改めてとくと見なおしてみよ、さらに再び。汝の視力は困惑し疲れはて、ただ己れに帰るのみなるべし。（注2）

ثُمَّ ارْجِعِ الْبَصَرَ كَرَّتَيْنِ يَنْقَلِبْ اِلَيْكَ الْبَصَرُ خَاسِئًا وَّهُوَ حَسِيْرٌ ⑤

6．而（しか）してわれらは、燈明を以て最下層の天を飾り、之（これ）を以て悪魔（サタン）を追い払う流星となせり。われらは彼等のために火炎の刑を用意せり。

وَلَقَدْ زَيَّنَّا السَّمَآءَ الدُّنْيَا بِمَصَابِيْحَ وَجَعَلْنٰهَا رُجُوْمًا لِّلشَّيٰطِيْنِ وَاَعْتَدْنَا لَهُمْ عَذَابَ السَّعِيْرِ ⑥

注1　生と死の法則は全宇宙で作用する。万物は衰え死す事になっている。死は2：29及び53：45にも書かれているが、当節では生の前に述べられている。これは、死又は非実在が生の前段階である為の様だが、あるいはおそらく、死が人に、永遠の生命と終わり無き魂の向上に向かう入口を開き、他方この世の生は一時的なもので、死後の永遠の生命をひかえた前段階でしかなく、死が生より遥かに重要な意味を持つからかもしれない。

注2　神の創造はまことに素晴しいものである。小さな一員にしか過ぎない我地球が属する太陽系は、広大で変化に豊み整然としているが、この太陽系も又、何億とある天体系の一つに過ぎず、その中には太陽系とは比較にならない程大きなものもある。しかし無数の太陽や星は、いたる所で調和と美をかもし出す様に、互いにうまく位置付けられている。宇宙に広がる秩序は、普通の肉眼でも明らかで、科学技術が生み出した器具を総動員して観測できる視界の遥かかなたまで広がっている。

7．主を信ぜざる者どもには地獄の刑罰あり。そは悲惨(いたまし)き行先かな！

وَلِلَّذِينَ كَفَرُوا بِرَبِّهِمْ عَذَابُ جَهَنَّمَ ۖ وَبِئْسَ الْمَصِيرُ ﴿٦﴾

8．彼等その中に投げ込まれるや、恰も煮えたぎるが如き怒号を聴かん。

إِذَا أُلْقُوا فِيهَا سَمِعُوا لَهَا شَهِيقًا وَهِيَ تَفُورُ ﴿٧﴾

9．そは憤怒の余りまさに破裂せんとす。不信心者どもがその中に投げ込まれるたびに、看守等は「お前たちのところへ警告者が行かざりしか？」と彼等に問わん。

تَكَادُ تَمَيَّزُ مِنَ الْغَيْظِ ۖ كُلَّمَا أُلْقِيَ فِيهَا فَوْجٌ سَأَلَهُمْ خَزَنَتُهَا أَلَمْ يَأْتِكُمْ نَذِيرٌ ﴿٨﴾

10．彼等は答えん、「然(しか)り、確かに一人の警告者来たれども、我等は之(これ)を嘘つきとみなし、『アッラーは何も啓示せず。お前たちははなはだしき迷誤の中にあり』と我等は云えり」と。

قَالُوا بَلَىٰ قَدْ جَاءَنَا نَذِيرٌ فَكَذَّبْنَا وَقُلْنَا مَا نَزَّلَ اللَّهُ مِنْ شَيْءٍ إِنْ أَنْتُمْ إِلَّا فِي ضَلَالٍ كَبِيرٍ ﴿٩﴾

11．彼等はまた云わん、「我等もし聞く耳を持ち、良心に従いたれば、(注３)我等火獄の住人どもの仲間に加わらざりしものを」と。

وَقَالُوا لَوْ كُنَّا نَسْمَعُ أَوْ نَعْقِلُ مَا كُنَّا فِي أَصْحَابِ السَّعِيرِ ﴿١٠﴾

12．かくして彼等は、諸々の己が罪を認めん。されど火獄の住人どもは、神の容赦からへだたることはるかなり。

فَاعْتَرَفُوا بِذَنْبِهِمْ فَسُحْقًا لِأَصْحَابِ السَّعِيرِ ﴿١١﴾

13．げに密かにその主を畏れ敬う人々には、容赦と素晴らしき報奨あり。

إِنَّ الَّذِينَ يَخْشَوْنَ رَبَّهُمْ بِالْغَيْبِ لَهُمْ مَغْفِرَةٌ وَأَجْرٌ كَبِيرٌ ﴿١٢﴾

14．お前たち密かに云うも、また声高に語るも、主はお前たちが胸に抱けることを熟知し給う。

وَأَسِرُّوا قَوْلَكُمْ أَوِ اجْهَرُوا بِهِ ۖ إِنَّهُ عَلِيمٌ بِذَاتِ الصُّدُورِ ﴿١٣﴾

15．彼、己が創りしものを知らざらんや？彼はすべての霊妙を知る者、知悉(ちしつ)者なり。

أَلَا يَعْلَمُ مَنْ خَلَقَ وَهُوَ اللَّطِيفُ الْخَبِيرُ ﴿١٤﴾

第二項

16．お前たちのために大地を平坦ならしめたるは彼なり。さればお前たちその諸地域を旅し、(注４)彼の給養を食せよ。而(しか)して、彼の許(もと)に復活せらるべし。

هُوَ الَّذِي جَعَلَ لَكُمُ الْأَرْضَ ذَلُولًا فَامْشُوا فِي مَنَاكِبِهَا وَكُلُوا مِنْ رِزْقِهِ ۖ وَإِلَيْهِ النُّشُورُ ﴿١٥﴾

注３　もし我々がシャリヤ（律法）か良心の命令に従っていたなら。

注４　クルアーンでは世界を旅する様、繰り返し推めている。それは、家を離れ他国へ旅行する事が、人の知識や経験を増やす為、大いに役立つからである。

17. お前たち、天上にましますお方が（注5）大地をしてお前たちを呑み込ましむることなし、と安心し得るか？見よ、そは振動し出す。

ءَأَمِنتُم مَّن فِي السَّمَاءِ أَن يَخْسِفَ بِكُمُ الْأَرْضَ
فَإِذَا هِيَ تَمُورُ ١٦

18. お前たち、天上にましますお方がお前たちに激しい砂嵐を送ることなし、と安心し得るか？いまに思い知らん、わが警告の恐ろしさよ。

أَمْ أَمِنتُم مَّن فِي السَّمَاءِ أَن يُرْسِلَ عَلَيْكُمْ حَاصِبًا
فَسَتَعْلَمُونَ كَيْفَ نَذِيرِ ١٧

19. 彼等以前にもわが使徒を拒否せる者どもあり。あの時のわが懲罰の如何に凄惨なりしことか！

وَلَقَدْ كَذَّبَ الَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ فَكَيْفَ كَانَ نَكِيرِ ١٨

20. 彼等は頭上に翼を拡げ、またそれをつぼめて獲物に舞い降りる鳥たちを見ざるか？慈悲深き神に非ずして、誰が鳥たちを空中に保持し得ようぞ。（注6）げに彼はすべてをみそなはし給う。

أَوَلَمْ يَرَوْا إِلَى الطَّيْرِ فَوْقَهُمْ صَافَّاتٍ وَيَقْبِضْنَ
مَا يُمْسِكُهُنَّ إِلَّا الرَّحْمَٰنُ إِنَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ بَصِيرٌ ١٩

21. 慈悲深き神以外に、誰がお前たちに味方して軍兵たらん？不信心者どもは自己欺瞞の犠牲者にすぎず。

أَمَّنْ هَٰذَا الَّذِي هُوَ جُندٌ لَّكُمْ يَنصُرُكُم مِّن
دُونِ الرَّحْمَٰنِ إِنِ الْكَافِرُونَ إِلَّا فِي غُرُورٍ ٢٠

22. 彼もしその給養を止むれば、（注7）お前たちを養う者は果して誰ぞ？然るに彼等は、反抗と忌避を固執す。

أَمَّنْ هَٰذَا الَّذِي يَرْزُقُكُمْ إِنْ أَمْسَكَ رِزْقَهُ
بَل لَّجُّوا فِي عُتُوٍّ وَنُفُورٍ ٢١

23. なに、その顔を俯きながら歩く者は、真直ぐな道を正直に歩く者より良く導かれるとな？（注8）

أَفَمَن يَمْشِي مُكِبًّا عَلَىٰ وَجْهِهِ أَهْدَىٰ أَمَّن يَمْشِي
سَوِيًّا عَلَىٰ صِرَاطٍ مُّسْتَقِيمٍ ٢٢

24. 云え、「お前たちを生み、耳と目と心とを創れるは彼なり。然るにお前たちは殆んど感謝せず」と。

قُلْ هُوَ الَّذِي أَنشَأَكُمْ وَجَعَلَ لَكُمُ السَّمْعَ
وَالْأَبْصَارَ وَالْأَفْئِدَةَ قَلِيلًا مَّا تَشْكُرُونَ ٢٣

注5　当節及び次節に神は天におられると記されてあるのは、クルアーンで一般に罰は天より下されると告げられているからである。神は、どこにでもおわします。

注6　もし不信心者達が神に反抗し続けるなら、彼等は飢饉、地震、特に戦争により滅ぼされ、空の鳥達が彼等の死体をついばむであろう。

注7　この言葉は、メッカを数年間襲った恐ろしい飢饉を指している様だ。この飢饉は、メッカ人が、その苦しみから逃れられる様に祈ってくれとモハッマド預言者に請うた時まで続いた。

注8　不信者は、首を垂れ、疑いと不信の闇を這いつつ、悪の道を歩む、他方、信者は信仰の確信の中で、頭を上げ、神の道を突き進んで行く。この両者が平等であり得るだろうか？

25．云え、「大地にお前たちを繁殖させたるは彼なり。而(しか)してお前たちは彼の許(もと)に召し寄せられん」と。

قُلْ هُوَ الَّذِي ذَرَأَكُمْ فِي الْأَرْضِ وَإِلَيْهِ تُحْشَرُونَ ٢٥

26．彼等は云う、「もしお前たちの言葉が事実なら、その約束は何時実現せん？」と。

وَيَقُولُونَ مَتَىٰ هَٰذَا الْوَعْدُ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ٢٦

27．云え、「之(これ)を知るはアッラーのみ。我はただ一介の警告者にすぎず」と。

قُلْ إِنَّمَا الْعِلْمُ عِنْدَ اللَّهِ وَإِنَّمَا أَنَا نَذِيرٌ مُبِينٌ ٢٧

28．されど、彼等その近づくを見るに及んで、不信心者どもの顔は悲嘆にくもらん。(注9) 而(しか)して彼等は云われん、「こは常々お前たちが求めしことなり」と。

فَلَمَّا رَأَوْهُ زُلْفَةً سِيئَتْ وُجُوهُ الَّذِينَ كَفَرُوا وَقِيلَ هَٰذَا الَّذِي كُنْتُمْ بِهِ تَدَّعُونَ ٢٨

29．云え、「もしアッラーが我並びに我に従う者を滅ぼすにせよ、また慈悲を垂れるにせよ、不信心者どもを痛刑から護るは誰か、我に告げよ」と。

قُلْ أَرَأَيْتُمْ إِنْ أَهْلَكَنِيَ اللَّهُ وَمَنْ مَعِيَ أَوْ رَحِمَنَا فَمَنْ يُجِيرُ الْكَافِرِينَ مِنْ عَذَابٍ أَلِيمٍ ٢٩

30．云え、「彼は慈悲深き神なり。(注10) 我等は彼を信じ、彼に頼る。やがてお前たちは誰が明らかに迷誤の中にいるかを知らん」と。

قُلْ هُوَ الرَّحْمَٰنُ آمَنَّا بِهِ وَعَلَيْهِ تَوَكَّلْنَا فَسَتَعْلَمُونَ مَنْ هُوَ فِي ضَلَالٍ مُبِينٍ ٣٠

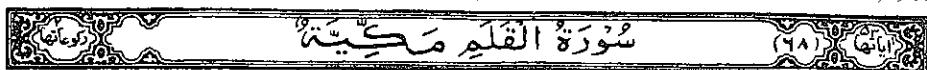
31．云え、「もし水がすべて地中深く消え去りなば、お前たちのために水を湧き出させてくれるは誰か、我に告げよ」と。(注11)

قُلْ أَرَأَيْتُمْ إِنْ أَصْبَحَ مَاؤُكُمْ غَوْرًا فَمَنْ يَأْتِيكُمْ بِمَاءٍ مَعِينٍ ٣١

注9　罰が下されない限り、不信心者は自慢し、信者にあざけりやからかいの言葉を投げ付けるが、いざ罰に直面すると、極度の挫折感に捕われる。これが不信心者の特徴である。

注10　神の特性アル・ラフマーン(慈悲深さ)は、クルアーン他所と同じく、この章でも繰り返し述べられて来たが、それは、そこに書かれた神の恩恵全てが、人の肉体維持に係わるか、その精神向上に係わるかを問わず、神の慈悲深さによるからである。

注11　全生命は、肉体・精神の別無く、水に頼っている。前者は雨水であり、後者は神の啓示の水である。

سُوْرَةُ الْقَلَمِ مَكِّيَّةٌ (٦٨)

アル・クァラム

（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．硯、筆並びに彼等が書くものによって誓う。（注1）

نٓ وَالْقَلَمِ وَمَا يَسْطُرُوْنَ ②

3．主の恩恵によりて、汝は狂人に非ず。（注2）

مَآ اَنْتَ بِنِعْمَةِ رَبِّكَ بِمَجْنُوْنٍ ③

4．汝には必ず尽きせぬ報奨あり。（注3）

وَاِنَّ لَكَ لَاَجْرًا غَيْرَ مَمْنُوْنٍ ④

5．げに汝は、崇高なる美徳を有す。（注4）

وَاِنَّكَ لَعَلٰى خُلُقٍ عَظِيْمٍ ⑤

6．やがて汝は見るべし、彼等もまた見るべし、

فَسَتُبْصِرُ وَيُبْصِرُوْنَ ⑥

7．お前たちのいずれが狂人なのか。（注5）

بِاَيِّكُمُ الْمَفْتُوْنُ ⑦

注1　当節で、硯、筆、全ての筆記用具は、次の三節の記述を実証する証拠として引用されている。

注2　モハッマド預言者の主張が如何なる知識をもって試されたとしても、彼は、不信心者の言う様に狂気じみていることはなく、最も良識と知恵の備った人物だと確認されるであろう。当節は以上の事を示している。又、次節には、この非難が事実無根であるだけでなく、愚かでとりとめないものだという事の理由を挙げている。

注3　次節と共に当節は、狂気の非難の不合理を、非常に効果的に暴露している。狂人の行為は不変で有益な結果を何も生み出さないが、モハッマド預言者は、神の使命の目的を果たし、堕落した人々の生命に素晴しい変革をもたらす事に成功しつつあると表明している。この変革は彼の死で終わるものではない。将来彼の弟子達が正しい道からそれる事があれば、必ず神は、彼等を再生させ、彼等に新たな生命を吹き込む神の使者を、彼等の間に起こされるであろう。そして、この過程は終りの時まで続くのである。

注4　当節は、愚か者としてモハッマド預言者にあびせられた狂気の非難について、より雄弁な注釈を与えている。モハッマド預言者は狂人ではなく最も高潔な人物であり、あらゆる道徳上の美点を十二分に備え、それにより彼の創造主の完全像をその身に表わすことができる、と当節は述べている。彼は人間が持ち得る全ての道徳上の長所の完全なる化身である。高尚な道徳的特質全てが彼の内で完全に調和して総体となっている。モハッマド預言者の有能な配偶者アイシャが、モハッマド預言者の道徳を解明する様かつて求められた時、彼女はこう答えた。「彼は、神の真の下僕の特質としてクルアーンに述べられた道徳上の美点を全て備えていた。」

注5　当節は、モハッマド預言者を非難する者達に対し形勢を一変し、挑発的な口調で彼等に次の事を告げている。狂気に苦しむのはモハッマド預言者かそれとも彼等か、神の使者であるという彼の主張は興奮から思わず出て来たものなのか、彼等自身は時のしるしを示すものを読み取れない程に、気がふれていたのでモハッマド預言者を信じる事を拒んだのか、これ等の問いに対する答えは時が示すであろう。

8．げに主は己が道より迷う人々を良く知り、また嚮導に従う人々を良く知り給う。

إِنَّ رَبَّكَ هُوَ أَعْلَمُ بِمَنْ ضَلَّ عَنْ سَبِيلِهِ وَهُوَ أَعْلَمُ بِالْمُهْتَدِينَ ﴿٨﴾

9．されば、真理を拒否する者どもの願望に応ずるなかれ。

فَلَا تُطِعِ الْمُكَذِّبِينَ ﴿٩﴾

10．彼等は汝が妥協せんことを望み、さすれば彼等も汝と妥協せんことを望む。(注6)

وَدُّوا لَوْ تُدْهِنُ فَيُدْهِنُونَ ﴿١٠﴾

11．汝、卑劣な宣誓者に屈服するなかれ、

وَلَا تُطِعْ كُلَّ حَلَّافٍ مَهِينٍ ﴿١١﴾

12．陰口をたたく者、悪口に狂弄する者、(注7)

هَمَّازٍ مَشَّاءٍ بِنَمِيمٍ ﴿١٢﴾

13．善事を妨げる者、掟に背く罪深い者、

مَنَّاعٍ لِلْخَيْرِ مُعْتَدٍ أَثِيمٍ ﴿١٣﴾

14．不作法でしかも素性のいかがわしい者に。

عُتُلٍّ بَعْدَ ذَٰلِكَ زَنِيمٍ ﴿١٤﴾

15．こはその者が裕福で子女に恵まれているが故なり。(注8)

أَنْ كَانَ ذَا مَالٍ وَبَنِينَ ﴿١٥﴾

16．そのような者にわれらの神兆を誦み聞かすと、彼は云う、「前人の故事なり」と。

إِذَا تُتْلَىٰ عَلَيْهِ آيَاتُنَا قَالَ أَسَاطِيرُ الْأَوَّلِينَ ﴿١٦﴾

17．われらは必ずその者の鼻の上に烙印を押さん。(注9)

سَنَسِمُهُ عَلَى الْخُرْطُومِ ﴿١٧﴾

18．げにわれらは果樹園の持主を試した如く、彼等をも試すべし。すなわち、その時果樹園の持主は翌朝すべての果実を摘まんと約束せしが、(注10)

إِنَّا بَلَوْنَاهُمْ كَمَا بَلَوْنَا أَصْحَابَ الْجَنَّةِ إِذْ أَقْسَمُوا لَيَصْرِمُنَّهَا مُصْبِحِينَ ﴿١٨﴾

注6　当節は、モハッマド預言者をその不動の目的からそらす為、メッカのクライシュが彼にした申し出に、特に触れているようだ。又、真実は岩のごとく固く、他方偽りは足場を持たず、圧力や誘惑に屈し、常に妥協に傾きやすいという、一般的な意味も当節は有する。

注7　当節及び前三節は、特にワリード・ビン・モグィーラ又はアブ・ジャハルを、そして又偽りの指導者全てを語ったものと言える。

注8　神に対する罪・不徳・抵抗は全て、慢心から生じ、いかがわしい手段が巨万の富を貯え、膨大な権力を得ようとする者の道徳上の病いである。あるいは、卑しき者は、唯富と権力を手にしたというだけで敬意を表されるべきではない、と当節は意味しているともいえよう。

注9　「鼻の上に烙印を押さん」とは、人に恥をかかせる事の比喩である。

注10　此所では、卑しく強欲で思い上った不信心者が、ある果樹園の所有者に例えられている。彼はそこで採れる果実全てをむさぼり食い、それを汗水流して育てた者と分かち合わず、彼等の果実に対する権利を奪ってしまうのである。

19．「もし神欲しなば」と保留をつけ加えざりき。（注11）

وَلَا يَسْتَثْنُونَ ﴿١٩﴾

20．それ故彼等が眠れる間に、主の災いが果樹園を襲いたり。

فَطَافَ عَلَيْهَا طَآئِفٌ مِّن رَّبِّكَ وَهُمْ نَآئِمُونَ ﴿٢٠﴾

21．さればば朝には、それは刈り取られた如くなれり。

فَأَصْبَحَتْ كَالصَّرِيمِ ﴿٢١﴾

22．彼等は朝早く互に呼び合いて、

فَتَنَادَوْا مُصْبِحِينَ ﴿٢٢﴾

23．云う、「収穫せんとせば、急ぎ畑に出で行け」と。

أَنِ اغْدُوا عَلَىٰ حَرْثِكُمْ إِن كُنتُمْ صَارِمِينَ ﴿٢٣﴾

24．道すがら、彼等声を低めて相い語りて、

فَانطَلَقُوا وَهُمْ يَتَخَافَتُونَ ﴿٢٤﴾

25．云う、「今日は一人の貧者も我等の果樹園に入らせまいぞ」と。（注12）

أَن لَّا يَدْخُلَنَّهَا الْيَوْمَ عَلَيْكُم مِّسْكِينٌ ﴿٢٥﴾

26．彼等かく決心して早朝に家を出たりしが、（注13）

وَغَدَوْا عَلَىٰ حَرْدٍ قَادِرِينَ ﴿٢٦﴾

27．果樹園を見て、云えり、「我等は道に迷いたり！

فَلَمَّا رَأَوْهَا قَالُوا إِنَّا لَضَالُّونَ ﴿٢٧﴾

28．否な、さに非ず、我等は果実をみな奪われたり」と。

بَلْ نَحْنُ مَحْرُومُونَ ﴿٢٨﴾

29．彼等のうち最も心掛けの良い者は云えり、「我はお前たちに、何故神を讃美せざるか、と云わざりしか？」と。

قَالَ أَوْسَطُهُمْ أَلَمْ أَقُل لَّكُمْ لَوْلَا تُسَبِّحُونَ ﴿٢٩﴾

30．そこで直ちに彼等は云えり、「我等の主に讃えあれ。げに我等は不義者なりき」と。

قَالُوا سُبْحَانَ رَبِّنَا إِنَّا كُنَّا ظَالِمِينَ ﴿٣٠﴾

31．而（しか）して彼等向きをかえ、互に詰め寄り責めたり。

فَأَقْبَلَ بَعْضُهُمْ عَلَىٰ بَعْضٍ يَتَلَاوَمُونَ ﴿٣١﴾

注11　この果樹園の持ち主達は、他人の手で育てられた果実を欲深く奪い取り、彼等と分かち合う事なく、一人占めに食べた。彼等は、自分達の努力が実り、災害もなく高い収穫を確信していたので、神を忘れ、「もし、神欲しなば、と言葉に出して神の保護を求める事もしなかった。

注12　この比喩にある果樹園の金持ちの所有者は、利己的で無慈悲・強欲な者に例えられている。彼等は他人の労働を食い物にする他、非常にけちで、貧しい者の必要を満たす為、彼等が不正に得た物を使おうとは決してしない。

注13　他者の労働の搾取者は、彼等だけで一つの階級を成す。彼等は、額に汗してかせぐ者が当然手にすべき利益から後者を締め出す。彼等は豊を享受し、他方その貧しき同胞は、彼等の眼前で、汚れの中を這い進むのである。

32．彼等は云えり、「我等は災いなるかな！げに我等は背逆者なりき。

قَالُوا يَا وَيْلَنَا إِنَّا كُنَّا طَاغِينَ ٣١

33．主は之(これ)に代るより良き園を我等に賜わるやも知れぬ。されば我等は、謙虚に主に嘆願す」と。

عَسَىٰ رَبُّنَا أَن يُبْدِلَنَا خَيْرًا مِّنْهَا إِنَّا إِلَىٰ رَبِّنَا رَاغِبُونَ ٣٢

34．かくの如きは現世の罰なり。而(しか)して来世の罰は更に重し。（注14）彼等之(これ)を知らば。

كَذَٰلِكَ الْعَذَابُ ۖ وَلَعَذَابُ الْآخِرَةِ أَكْبَرُ ۚ لَوْ كَانُوا يَعْلَمُونَ ٣٣ ع

第二項

35．義(ただ)しき者には、必ず主と御一緒できる至福の園あり。

إِنَّ لِلْمُتَّقِينَ عِندَ رَبِّهِمْ جَنَّاتِ النَّعِيمِ ٣٤

36．われら帰依者を遇すること、罪人を遇する如くあるべきか？

أَفَنَجْعَلُ الْمُسْلِمِينَ كَالْمُجْرِمِينَ ٣٥

37．如何がした？汝等どう判断するや？

مَا لَكُمْ كَيْفَ تَحْكُمُونَ ٣٦

38．お前たち学ぶべき経典を有し、

أَمْ لَكُمْ كِتَابٌ فِيهِ تَدْرُسُونَ ٣٧

39．その中でお前たちが選ぶものを必ず獲(え)られるのか？

إِنَّ لَكُمْ فِيهِ لَمَا تَخَيَّرُونَ ٣٨

40．それともお前たち、復活の日までわれらを拘束する誓約をわれらから手に入れたとでもいうか、自分が欲するものは必ずすべて獲(え)られんその誓約を？（注15）

أَمْ لَكُمْ أَيْمَانٌ عَلَيْنَا بَالِغَةٌ إِلَىٰ يَوْمِ الْقِيَامَةِ ۙ إِنَّ لَكُمْ لَمَا تَحْكُمُونَ ٣٩

41．彼等に問え、彼等のうち之(これ)を保証するは誰なるか、と。

سَلْهُمْ أَيُّهُم بِذَٰلِكَ زَعِيمٌ ٤٠

42．それとも彼等は、神に仲間があるというなら、その仲間を提示せよ、その言葉が真実なる証拠に。

أَمْ لَهُمْ شُرَكَاءُ فَلْيَأْتُوا بِشُرَكَائِهِمْ إِن كَانُوا صَادِقِينَ ٤١

43．真実が露(あらわ)になる日、彼等は叩頭(こうとう)平伏せよと要求(もと)められるも、之(これ)をし得ざるべし。（注16）

يَوْمَ يُكْشَفُ عَن سَاقٍ وَيُدْعَوْنَ إِلَى السُّجُودِ فَلَا يَسْتَطِيعُونَ ٤٢

注14　遅かれ早かれ天罰がこの搾取者に下り、他者からその労働による果実を奪うという彼等の計略は、その邪悪な目的を達成しない。

注15　当節は不信心者に次の事を尋ねる。彼等は望み通りの生き方の選択が許され、しかもその悪業の結果から逃れられると、いずれかの啓示書に認められているのか？　あるいは、彼等は揃って裁きの日まで、望みの物全てを手に入れ、望む事を全て為し、しかもその行為の結果に苦しむ事も無いと神から約束されているのか？

44．彼等はその目を伏せ、屈辱が彼等を覆わん。そは彼等が無事なる時叩頭(こうとう)平伏を要求(もと)められしが、之(これ)に従わざりしが故なり。

خَاشِعَةً أَبْصَارُهُمْ تَرْهَقُهُمْ ذِلَّةٌ ۖ وَقَدْ كَانُوا يُدْعَوْنَ إِلَى السُّجُودِ وَهُمْ سَالِمُونَ ٤٣

45．されば、われらの言葉を拒否する者どもおば、われに委ねよ。彼等のわからざるところから、われらは彼等を滅亡に近づけん。(注 17)

فَذَرْنِي وَمَنْ يُكَذِّبُ بِهَٰذَا الْحَدِيثِ ۖ سَنَسْتَدْرِجُهُمْ مِنْ حَيْثُ لَا يَعْلَمُونَ ٤٤

46．われは彼等に当分猶予を与えん、わが計画の確かさ故に。

وَأُمْلِي لَهُمْ ۚ إِنَّ كَيْدِي مَتِينٌ ٤٥

47．汝、その負担に彼等が打ちひしがれる程の報酬を彼等に求めるか？

أَمْ تَسْأَلُهُمْ أَجْرًا فَهُمْ مِنْ مَغْرَمٍ مُثْقَلُونَ ٤٦

48．それとも、彼等不可視なる世界の知識を持つが故に、それを記録し得るか？

أَمْ عِنْدَهُمُ الْغَيْبُ فَهُمْ يَكْتُبُونَ ٤٧

49．されば汝忍耐して、主の命が成就(じょうじゅ)されるを待て。深い悲しみの余り主を叫べる魚の人の如くなるなかれ。

فَاصْبِرْ لِحُكْمِ رَبِّكَ وَلَا تَكُنْ كَصَاحِبِ الْحُوتِ إِذْ نَادَىٰ وَهُوَ مَكْظُومٌ ٤٨

50．もし主の恩恵があの者に達せざりせば、あの者はその民に罪を負わされ、不毛の荒野に追放されたり。(注 18)

لَوْلَا أَنْ تَدَارَكَهُ نِعْمَةٌ مِنْ رَبِّهِ لَنُبِذَ بِالْعَرَاءِ وَهُوَ مَذْمُومٌ ٤٩

51．されど、主はあの者を選びて、義(ただ)しき人の中に加えたり。

فَاجْتَبَاهُ رَبُّهُ فَجَعَلَهُ مِنَ الصَّالِحِينَ ٥٠

52．不信心者どもは訓戒を聞くたびに、もの凄い行相で汝を追い払う。(注 19) 而(しか)して云う、「彼は確かに狂人なり」と。

وَإِنْ يَكَادُ الَّذِينَ كَفَرُوا لَيُزْلِقُونَكَ بِأَبْصَارِهِمْ لَمَّا سَمِعُوا الذِّكْرَ وَيَقُولُونَ إِنَّهُ لَمَجْنُونٌ ٥١

53．否、この訓戒こそ、世界中の人々の節義のよりどころなり。

وَمَا هُوَ إِلَّا ذِكْرٌ لِلْعَالَمِينَ ٥٢

注 16　当節は、復活の日の厳しさに触れ、又、全ての神秘のベールをはがし、裁きの日の秘密を明るみに出している。27 章 48 節も参照の事。

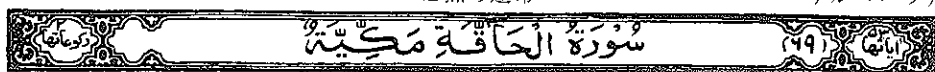
注 17　神の罰は徐々に不信者に下される為、彼等には、クルアーンのお告げを受け入れる事で悔い改める機会が数多くある。

注 18　当節には、モハッマド預言者のメディナへのヒジラ（移住）を巧みに暗示している。

注 19　不信心者は、能力の無い者を脅してその使命を放棄させるのではないかと、モハッマド預言者に厳しい見方をするが、モハッマド預言者には伝えるべき神のお告げがあり、彼等におびえることはなく、おだてられたり、買収されたりして、その様な圧力戦術に屈することは有り得ないことだ。

سُورَةُ الْحَاقَّةِ مَكِّيَّةٌ (٦٩)

アル・ハークァ
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ①

2．必然の運命。（注１）
الْحَاقَّةُ ②

3．必然の運命とは何ぞや？
مَا الْحَاقَّةُ ③

4．必然の運命の何たるかを汝に知らしめるものは何か？
وَمَا أَدْرَاكَ مَا الْحَاقَّةُ ④

5．サムード並びにアードの手合いは、突然襲う災難を虚偽なりとせり。
كَذَّبَتْ ثَمُودُ وَعَادٌ بِالْقَارِعَةِ ⑤

6．さればサムードは猛烈な突風により滅ぼされり。
فَأَمَّا ثَمُودُ فَأُهْلِكُوا بِالطَّاغِيَةِ ⑥

7．アードもまた荒れ狂う怒風により滅ぼされり。
وَأَمَّا عَادٌ فَأُهْلِكُوا بِرِيحٍ صَرْصَرٍ عَاتِيَةٍ ⑦

8．主は七夜八日絶えまなく彼等に吹きつけ給えば、彼等は恰も倒れた棗椰子樹の如く地に倒れたり。
سَخَّرَهَا عَلَيْهِمْ سَبْعَ لَيَالٍ وَثَمَانِيَةَ أَيَّامٍ حُسُومًا فَتَرَى الْقَوْمَ فِيهَا صَرْعَىٰ كَأَنَّهُمْ أَعْجَازُ نَخْلٍ خَاوِيَةٍ ⑧

9．汝見得るや、何か彼等の遺物を？
فَهَلْ تَرَىٰ لَهُمْ مِنْ بَاقِيَةٍ ⑨

10．またファラオ及びファラオ以前の人々、並びに転覆せる邑々の住民も、常に罪を犯したり。
وَجَاءَ فِرْعَوْنُ وَمَنْ قَبْلَهُ وَالْمُؤْتَفِكَاتُ بِالْخَاطِئَةِ ⑩

注１　既定の避けられない事柄。必ずや起こる不幸。不信心者の最終的打倒。

注２　当節はノアの大洪水に触れている。

注３　モハッマド預言者のメッカへの進軍は素早くかつ突然であった為、メッカ人達は完全に意表を突かれた。それは、いわば、彼等にとり青天の霹靂であった。当節は又、復活の日にも当てはまる様だ。その日、らっぱが鳴りひびくと共に、正しき者・悪しき者双方は、神の偉大なる裁判席の前に、自らの行為の申し開きをするため立たねばならないであろう。

11．彼等は主の使徒に従わざれば、主は彼等を厳しく懲らしめたり。

فَعَصَوْا رَسُولَ رَبِّهِمْ فَأَخَذَهُمْ أَخْذَةً رَّابِيَةً ﴿١١﴾

12．げに洪水が起りし時、われらがお前たちを舟に乗せたるは、（注2）

إِنَّا لَمَّا طَغَا الْمَآءُ حَمَلْنَٰكُمْ فِى الْجَارِيَةِ ﴿١٢﴾

13．之を以てお前たちへの訓戒となし、また留意する耳に之を記憶せしめんがためなりき。

لِنَجْعَلَهَا لَكُمْ تَذْكِرَةً وَتَعِيَهَآ أُذُنٌ وَٰعِيَةٌ ﴿١٣﴾

14．喇叭ひとたび鳴りひびき、（注3）

فَإِذَا نُفِخَ فِى الصُّورِ نَفْخَةٌ وَٰحِدَةٌ ﴿١٤﴾

15．大地と山々は隆起し、（注4）而して粉々に砕かれる時、

وَحُمِلَتِ الْأَرْضُ وَالْجِبَالُ فَدُكَّتَا دَكَّةً وَٰحِدَةً ﴿١٥﴾

16．その日こそ一大事が起るべし。

فَيَوْمَئِذٍ وَقَعَتِ الْوَاقِعَةُ ﴿١٦﴾

17．その日天は脆弱となり、ばらばらに割れん。

وَانشَقَّتِ السَّمَآءُ فَهِىَ يَوْمَئِذٍ وَاهِيَةٌ ﴿١٧﴾

18．天使たちは天の境に立たん。而してその日、主の玉座を頭上に捧げまつるは八天使なり。

وَالْمَلَكُ عَلَىٰٓ أَرْجَآئِهَا ۚ وَيَحْمِلُ عَرْشَ رَبِّكَ فَوْقَهُمْ يَوْمَئِذٍ ثَمَٰنِيَةٌ ﴿١٨﴾

19．その日お前たちは、神の御前に出で拝謁させられん。その時隠し得るものは、一つもなかるべし。（注5）

يَوْمَئِذٍ تُعْرَضُونَ لَا تَخْفَىٰ مِنكُمْ خَافِيَةٌ ﴿١٩﴾

20．その時、己が記録をその右手に渡される者は、（注6）云わん、「来たりて、我が記録を読め。

فَأَمَّا مَنْ أُوتِىَ كِتَٰبَهُۥ بِيَمِينِهِۦ فَيَقُولُ هَآؤُمُ اقْرَءُوا كِتَٰبِيَهْ ﴿٢٠﴾

21．げに我は、必ず我が清算に満足させられんと信じたり」と。

إِنِّى ظَنَنتُ أَنِّى مُلَٰقٍ حِسَابِيَهْ ﴿٢١﴾

22．されば彼は楽しい生活をすごさん、

فَهُوَ فِى عِيشَةٍ رَّاضِيَةٍ ﴿٢٢﴾

23．高尚な楽園の中で。

فِى جَنَّةٍ عَالِيَةٍ ﴿٢٣﴾

注4　アラビア全土は大きく揺れ動いていた。アラブの貴族階級の指導者達や一般民衆は、イスラム教の征服、及びイスラム教が彼等の生活にもたらした激しい変化に強い衝撃を感じた。「大地」は民衆を「山々」は人の指導者を、それぞれ指す。

注5　本文の文字通りの意味以外に、メッカ陥落の日に、偶像崇拝信仰の偽り及びメッカ人の行状が完全に露かれると当節は示している。

注6　「己が記録をその右手に渡される者」とは、試練を無事くぐり抜ける者という意味の、クルアーンの比喩である。

24．そは鈴なりの果実がたやすく手の届くところなり。

قُطُوفُهَا دَانِيَةٌ ﴿٢٣﴾

25．「満悦して食い且つ飲め。これ過ぎし日の己が善行の報いなり」

كُلُوا وَاشْرَبُوا هَنِيٓـًٔا بِمَآ أَسْلَفْتُمْ فِى الْأَيَّامِ الْخَالِيَةِ ﴿٢٤﴾

26．されどその左手に己が記録を渡された者は、（注７）云わん、「我この記録を渡されざりせば！

وَأَمَّا مَنْ أُوتِىَ كِتٰبَهُۥ بِشِمَالِهِۦ فَيَقُولُ يٰلَيْتَنِى لَمْ أُوتَ كِتٰبِيَهْ ﴿٢٥﴾

27．我が清算の如何なるものなるかを知らざりき！

وَلَمْ أَدْرِ مَا حِسَابِيَهْ ﴿٢٦﴾

28．死がすべての終りなりせば！（注８）

يٰلَيْتَهَا كَانَتِ الْقَاضِيَةَ ﴿٢٧﴾

29．我が富はついに役立たざりき。

مَآ أَغْنٰى عَنِّى مَالِيَهْ ﴿٢٨﴾

30．我が威勢は消え去りしか」と。

هَلَكَ عَنِّى سُلْطٰنِيَهْ ﴿٢٩﴾

31．天使たちは命ぜられん、「彼を捕えて縛り、

خُذُوهُ فَغُلُّوهُ ﴿٣٠﴾

32．地獄に投ぜよ。

ثُمَّ الْجَحِيمَ صَلُّوهُ ﴿٣١﴾

33．然（しか）る後七十尺の鎖で彼を縛れ。（注９）

ثُمَّ فِى سِلْسِلَةٍ ذَرْعُهَا سَبْعُونَ ذِرَاعًا فَاسْلُكُوهُ ﴿٣٢﴾

34．げに彼は至尊者アッラーを信ぜず、

إِنَّهُۥ كَانَ لَا يُؤْمِنُ بِاللَّهِ الْعَظِيمِ ﴿٣٣﴾

35．また進んで貧者を養わざりき。

وَلَا يَحُضُّ عَلٰى طَعَامِ الْمِسْكِينِ ﴿٣٤﴾

36．されば今日、彼はここに如何なる友とてなく、

فَلَيْسَ لَهُ الْيَوْمَ هٰهُنَا حَمِيمٌ ﴿٣٥﴾

注７　「左手に己が記録を渡された者」は、クルアーンの専門用語で、試練に耐えられない者を示す。

注８　不信心者は、全てを終えるに当たり、他の生命も、又神の前での自らの行為の申し開きをしたくはないので、死を願うであろう。

注９　死後の生命は新たなものではなく、唯、現世の事実の象徴に過ぎない事が、クルアーンに繰り返し述べられて来た。当節では、現世における魂の苦悩が来世での体罰として表されている。例えば、首の回りに巻かれた鎖は、この世の欲望を表し、この願望が来世で足鎖の形を取るであろう。同様に、現世の恋愛問題も足鎖として示されるであろう。又、この世の恨みは災となって現れるであろう。人の平均寿命は、幼児期・老齢期を含めておよそ70年である。この70年を、不徳な不信心者は、恋愛問題や世俗の係わりや肉欲を満たす事に浪費する。彼は肉欲の隷属から逃れようとはしない為、70年間享楽して来たこの一連の肉欲は、来世に70尺の鎖となって表わされるであろう。この鎖一つ一つは一年を表し、悪者はこれによりつながれるであろう。

37．水を混ぜた血の外に食物もなく、

وَلَا طَعَامٌ إِلَّا مِنْ غِسْلِينٍ

38．之（これ）を食するはただ罪人のみ」と。

لَّا يَأْكُلُهُۥٓ إِلَّا ٱلْخَٰطِـُٔونَ

第二項

39．われはお前たちの目に見えるものすべてにかけて誓う、

فَلَآ أُقْسِمُ بِمَا تُبْصِرُونَ

40．またお前たちの目に見えぬものすべてにかけて。（注 10）

وَمَا لَا تُبْصِرُونَ

41．そは実に高貴なる使徒によってもたらされた言葉なり。

إِنَّهُۥ لَقَوْلُ رَسُولٍ كَرِيمٍ

42．そは詩人の言葉に非ず、されどお前たちはほとんどそれを信ぜず。

وَمَا هُوَ بِقَوْلِ شَاعِرٍ ۚ قَلِيلًا مَّا تُؤْمِنُونَ

43．そは占い師の言葉にも非ず。されどお前たちはほとんどそれを注意せず。

وَلَا بِقَوْلِ كَاهِنٍ ۚ قَلِيلًا مَّا تَذَكَّرُونَ

44．そは万物の主よりの啓示なり。

تَنزِيلٌ مِّن رَّبِّ ٱلْعَٰلَمِينَ

45．もし使徒がわれらに関して虚偽の言を弄したりとすれば、

وَلَوْ تَقَوَّلَ عَلَيْنَا بَعْضَ ٱلْأَقَاوِيلِ

46．われらは必ず使徒の右手を捕え、

لَأَخَذْنَا مِنْهُ بِٱلْيَمِينِ

47．而（しか）してその頸動脈（けいどうみゃく）を切断せん。

ثُمَّ لَقَطَعْنَا مِنْهُ ٱلْوَتِينَ

48．さすればお前たち誰一人われらの懲罰から彼を守り得ざるべし（注 11）

فَمَا مِنكُم مِّنْ أَحَدٍ عَنْهُ حَٰجِزِينَ

49．げにそは義（ただ）しき人々への訓戒なり。

وَإِنَّهُۥ لَتَذْكِرَةٌ لِّلْمُتَّقِينَ

50．われらは知るなり、お前たちのうちわれらの神兆（しるし）を拒否する者あることを。

وَإِنَّا لَنَعْلَمُ أَنَّ مِنكُم مُّكَذِّبِينَ

51．げにそは不信心者どもの悔恨の因（たね）たるべし。

وَإِنَّهُۥ لَحَسْرَةٌ عَلَى ٱلْكَٰفِرِينَ

52．げにそは完全無欠なる真理なり。

وَإِنَّهُۥ لَحَقُّ ٱلْيَقِينِ

53．されば至尊者たる汝の主の御名（みな）を讃え奉れ。

فَسَبِّحْ بِٱسْمِ رَبِّكَ ٱلْعَظِيمِ

注 10　我々が物質界で作用するのを目撃できる物。つまり、我々の視界から隠された生物・無生物の明白な事実。すなわち、クルアーンの神の由来を確証するものとして、39 と 40 節に述べられた人間の理性と分別。モハッマド預言者の時代に不信心者がその目で確かめた神のしるしと、未だ成就を待ち受けるイスラム教の輝ける未来についての預言は、クルアーンが、神が神の高潔な預言者モハッマドに表した神御自身の世界であるという、反論の余地の無い主張となっている。当節はこの事を示しているとも言える。当節が取り上げているのは、人生の過酷な事実であり、詩人の甘い夢でもなければ、占い師の闇の徘徊でもない。

注 11　もしモハッマド預言者が偽りの捏造者であれば、偽りの預言者がたどる運命通りに、神の力強い腕が彼の喉を捕え、彼は必ずや苦しみ抜いて死に到り、彼の業及び使命は全て崩壊するはずである、と当節及び前三節は主張する。当節のこの言葉は、聖書の申命記 18：20 を、そのまま再現したものの様である。

سُوْرَةُ الْمَعَارِجِ مَكِّيَّةٌ

アル・マアーリジ
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。　بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．尋ねる者ありて、(注1)降りかかる天罰について問う、　سَاَلَ سَآئِلٌۢ بِعَذَابٍ وَّاقِعٍ ②

3．不信心者どもの身に。そは何人も忌避する能わず。　لِّلْكٰفِرِيْنَ لَيْسَ لَهٗ دَافِعٌ ③

4．天罰は登昇の主アッラーより出づ。(注2)　مِّنَ اللّٰهِ ذِى الْمَعَارِجِ ④

5．諸天使並びに聖霊は、この世の五萬年に相当する一日で、(注3)主の許へ登り行く。　تَعْرُجُ الْمَلٰٓئِكَةُ وَالرُّوْحُ اِلَيْهِ فِىْ يَوْمٍ كَانَ مِقْدَارُهٗ خَمْسِيْنَ اَلْفَ سَنَةٍ ⑤

6．されば汝、立派な忍耐をもって忍耐せよ。　فَاصْبِرْ صَبْرًا جَمِيْلًا ⑥

7．彼等は天罰を遼遠と見なすが、　اِنَّهُمْ يَرَوْنَهٗ بَعِيْدًا ⑦

8．われらは之を近しと見る。　وَّنَرٰىهُ قَرِيْبًا ⑧

9．蒼穹が溶銅の如くなる日、　يَوْمَ تَكُوْنُ السَّمَآءُ كَالْمُهْلِ ⑨

10．山々が羊毛の如く飛び散る日、(注4)　وَتَكُوْنُ الْجِبَالُ كَالْعِهْنِ ⑩

11．親しい友とて友の安否を問わざるべし、　وَلَا يَسْـَٔلُ حَمِيْمٌ حَمِيْمًا ⑪

注1　当節の「尋ねる者」は、ナザル・ビン・ハーリス又はアブ・ジャハルの事を述べる為に、数人の注釈者が用いている。しかしこの語は特定の人物に当てはめる必要はなく、不信心者全てを指すと考えられる。それは、彼等が、その身に下される恐しい罰を減じる様、繰り返しモハッマド預言者に求めたからである(8：33、21：39、27：72、32：29、34：30、36：49、67：26)。

注2　神は信者に高い地位を授けられる。

注3　当節は、神の御計画が成就されるには、何千年という月日がかかる、と示している。あるいは、特に大きな変化が起きると定められた、五万年という一定の周期を指すとも言える。それは、神の預言が成就されるのに一定の期間を要するからである。

注4　原水爆が存在する現代は、羊毛の様に山が吹き飛ぶ事は大いに有り得る。

12. たとい互に顔を見合せたとて。罪を犯せし者は、此の日の罰を免れんがために、己が子を、

يُبَصَّرُونَهُمْ ۚ يَوَدُّ الْمُجْرِمُ لَوْ يَفْتَدِي مِنْ عَذَابِ يَوْمِئِذٍ بِبَنِيهِ ﴿١١﴾

13. 己が妻を、己が兄弟を、

وَصَاحِبَتِهِ وَأَخِيهِ ﴿١٢﴾

14. 庇護してくれた親戚も、

وَفَصِيلَتِهِ الَّتِي تُؤْوِيهِ ﴿١٣﴾

15. 更に地上の人間すべてを差出して贖(あがな)わんと欲す、もしそれで己れを救い得なば。(注5)

وَمَنْ فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا ثُمَّ يُنْجِيهِ ﴿١٤﴾

16. されど能(あた)わず。げに地獄の炎は、

كَلَّا ۖ إِنَّهَا لَظَىٰ ﴿١٥﴾

17. 体の末端の皮まで剥ぎとるなり。

نَزَّاعَةً لِلشَّوَىٰ ﴿١٦﴾

18. 地獄の炎は、背を見せて背き去りし者を呼ぶべし、

تَدْعُو مَنْ أَدْبَرَ وَتَوَلَّىٰ ﴿١٧﴾

19. 富を貯え之(これ)を出し渋る者を。

وَجَمَعَ فَأَوْعَىٰ ﴿١٨﴾

20. 人間は性急且つ欲張りに創られたり。(注6)

إِنَّ الْإِنْسَانَ خُلِقَ هَلُوعًا ﴿١٩﴾

21. 災難に見舞われれば嘆き悲しみ、

إِذَا مَسَّهُ الشَّرُّ جَزُوعًا ﴿٢٠﴾

22. その身が幸せになれば人は吝嗇(けち)とる。

وَإِذَا مَسَّهُ الْخَيْرُ مَنُوعًا ﴿٢١﴾

23. されど礼拝する人々は然らず、

إِلَّا الْمُصَلِّينَ ﴿٢٢﴾

24. すなわち常に礼拝を遵守し、

الَّذِينَ هُمْ عَلَىٰ صَلَاتِهِمْ دَائِمُونَ ﴿٢٣﴾

25. 正当と認められたる己が財産すら、(注7)

وَالَّذِينَ فِي أَمْوَالِهِمْ حَقٌّ مَعْلُومٌ ﴿٢٤﴾

26. 乞い求める者並びに羞ぢて乞わざる者のために施す者は。

لِلسَّائِلِ وَالْمَحْرُومِ ﴿٢٥﴾

注5　これ等の節に描かれた裁きの日の描写の、何とすさまじい事であろうか。人は不幸に直面した時、もしそうする事で自身が助かるなら、全てを、そして最愛の肉親をすら切り捨てる覚悟がある。

注6　人間とは、本来、忍耐に欠け、欲深いものである。「性急」のこの意味に関しては、21：38、30：55を参照の事。

注7　宇宙の万物は全人類の共有財産であり、誰もその絶対の所有権を授けられてはいない。貧しき者は、権利として、富める者の財の分け前を与えられる。

27. また審判の日を固く信じて疑わず、（注8）

وَالَّذِينَ يُصَدِّقُونَ بِيَوْمِ الدِّينِ ﴿٢٦﴾

28. 主の懲罰を恐れる者—

وَالَّذِينَ هُمْ مِنْ عَذَابِ رَبِّهِمْ مُشْفِقُونَ ﴿٢٧﴾

29. げに何人も主の懲罰を免れて安全無事なる者なし—

إِنَّ عَذَابَ رَبِّهِمْ غَيْرُ مَأْمُونٍ ﴿٢٨﴾

30. 貞潔を守る者—

وَالَّذِينَ هُمْ لِفُرُوجِهِمْ حَافِظُونَ ﴿٢٩﴾

31. 但し妻並びにその右手の所有する者と偕なる場合は罪なし。

إِلَّا عَلَىٰ أَزْوَاجِهِمْ أَوْ مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُهُمْ فَإِنَّهُمْ غَيْرُ مَلُومِينَ ﴿٣٠﴾

32. されどこれを越えて求める者は、罪人なり—

فَمَنِ ابْتَغَىٰ وَرَاءَ ذَٰلِكَ فَأُولَٰئِكَ هُمُ الْعَادُونَ ﴿٣١﴾

33. また信託や約束に慎重なる者—

وَالَّذِينَ هُمْ لِأَمَانَاتِهِمْ وَعَهْدِهِمْ رَاعُونَ ﴿٣٢﴾

34. 証言に際しては正しくする者、

وَالَّذِينَ هُمْ بِشَهَادَاتِهِمْ قَائِمُونَ ﴿٣٣﴾

35. 礼拝を厳格に遵守する者。

وَالَّذِينَ هُمْ عَلَىٰ صَلَاتِهِمْ يُحَافِظُونَ ﴿٣٤﴾

36. かくの如き人々は栄誉を得て、楽園の中に住まん

أُولَٰئِكَ فِي جَنَّاتٍ مُكْرَمُونَ ﴿٣٥﴾

第二項

37. 不信心者どもが汝の方へ急ぎ馳せ来るはどうしたわけか、

فَمَالِ الَّذِينَ كَفَرُوا قِبَلَكَ مُهْطِعِينَ ﴿٣٦﴾

38. 右からも左からも、さまざまに異なる集団が？（注9）

عَنِ الْيَمِينِ وَعَنِ الشِّمَالِ عِزِينَ ﴿٣٧﴾

39. 彼等は皆至福の園に入ることを希うか？

أَيَطْمَعُ كُلُّ امْرِئٍ مِنْهُمْ أَنْ يُدْخَلَ جَنَّةَ نَعِيمٍ ﴿٣٨﴾

40. 断じてなし得ず。われらは、彼等が知れるものにて彼等を創れり。

كَلَّا إِنَّا خَلَقْنَاهُمْ مِمَّا يَعْلَمُونَ ﴿٣٩﴾

注8　来世を真に信じずして、真の義務感等あろうはずがない。この確信は、神の存在に対する信仰に次ぎ、二番目に重要なイスラム教の信仰である。

注9　当節及び前節は、来たるべきイスラム教の勝利の預言を記している。その時、アラブの異教徒達は、イスラム教徒に加わりたいと願いつつ、モハッマド預言者の代理を待ち受ける為、全土より急ぎ集まった。あるいは、モハッマド預言者はクライシュの偶像を非難する説教を止めてはどうかという、彼に対するクライシュの指導者の誘いに、当節は触れているのかもしれない。しかし、さる権威筋によれば、当節は、形や方向を変えて、敵対者によりモハッマド預言者に加えられた危険な攻撃を指すと受け止められている。

41．否、われは、われらが統べ給う東西の主にかけて誓う、

فَلَآ أُقْسِمُ بِرَبِّ الْمَشٰرِقِ وَالْمَغٰرِبِ اِنَّا لَقٰدِرُوْنَ ﴿٤١﴾

42．彼等より優るものを以て彼等に代えることを。而して、われらは之を妨げられることなし。（注10）

عَلٰٓى اَنْ نُّبَدِّلَ خَيْرًا مِّنْهُمْ وَمَا نَحْنُ بِمَسْبُوْقِيْنَ ﴿٤٢﴾

43．されば約束されたるその日が来るまで、彼等をむだ話しにふけらせしめよ。

فَذَرْهُمْ يَخُوْضُوْا وَيَلْعَبُوْا حَتّٰى يُلٰقُوْا يَوْمَهُمُ الَّذِىْ يُوْعَدُوْنَ ﴿٤٣﴾

44．その日彼等は、的に向って競い合う如く、急ぎあわててその墓穴より出で来るべし、

يَوْمَ يَخْرُجُوْنَ مِنَ الْاَجْدَاثِ سِرَاعًا كَاَنَّهُمْ اِلٰى نُصُبٍ يُّوْفِضُوْنَ ﴿٤٤﴾

45．その目を俯け、恥ずかしくも恐れ入って。かくの如きが、すなわち彼等が約束せられたる日なり。（注11）

خَاشِعَةً اَبْصَارُهُمْ تَرْهَقُهُمْ ذِلَّةٌ ؕ ذٰلِكَ الْيَوْمُ الَّذِىْ كَانُوْا يُوْعَدُوْنَ ﴿٤٥﴾

注10　モハッマド預言者に刃向う者達は、古い秩序が失せ、そこに新たにより良い秩序が生まれ、他の人々によってその地位をとって替えられると告げられている。

注11　当節及び前節には、メッカ陥落後のクライシュの指導者達が生々しく描かれている。その時、彼等は完全に気落ちしてモハッマド預言者の所へやって来たが、彼等は目を伏せ、失望と罪悪感が顔面に広がっていた。

سُوْرَةُ نُوْحٍ مَكِّيَّةٌ

ヌーフ

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2. われらはノアをその民に遣わし、「痛烈なる懲罰が降る前に汝の民を警めよ」と命じたり。

إِنَّآ أَرْسَلْنَا نُوْحًا إِلٰى قَوْمِهٖٓ أَنْ أَنْذِرْ قَوْمَكَ مِنْ قَبْلِ أَنْ يَّأْتِيَهُمْ عَذَابٌ أَلِيْمٌ ②

3. ノアは云えり、「我が民よ、げに我はお前たちに遣わされたる明白なる警告者なり。

قَالَ يٰقَوْمِ إِنِّيْ لَكُمْ نَذِيْرٌ مُّبِيْنٌ ③

4. お前たちはアッラーに仕え、之を畏れ、我に従え。

أَنِ اعْبُدُوا اللّٰهَ وَاتَّقُوْهُ وَأَطِيْعُوْنِ ④

5. さすればアッラーはお前たちの諸々の罪を赦し、定めの期限までお前たちを猶予せん。げにアッラーによって定められたる期限は、一度到来すれば、引延すこと能わず。(注1) お前たち之を知ることこそ望ましけれ」と。

يَغْفِرْ لَكُمْ مِّنْ ذُنُوْبِكُمْ وَيُؤَخِّرْكُمْ إِلٰٓى أَجَلٍ مُّسَمًّى ۚ إِنَّ أَجَلَ اللّٰهِ إِذَا جَآءَ لَا يُؤَخَّرُ ۘ لَوْ كُنْتُمْ تَعْلَمُوْنَ ⑤

6. ノアは云えり、「主よ、我は日夜我が民に喚びかけたり。

قَالَ رَبِّ إِنِّيْ دَعَوْتُ قَوْمِيْ لَيْلًا وَّنَهَارًا ⑥

7. されど喚べば喚ぶほど彼等は我より逃れ去るばかりなり。

فَلَمْ يَزِدْهُمْ دُعَآءِيْٓ إِلَّا فِرَارًا ⑦

8. 我彼等を喚びて、汝が彼等を赦さんと告げるごとに、彼等は己が指を以てその耳を塞ぎ、且つその心を閉じ、(注2)邪悪に固執し、傲岸不遜なりき。

وَإِنِّيْ كُلَّمَا دَعَوْتُهُمْ لِتَغْفِرَ لَهُمْ جَعَلُوْٓا أَصَابِعَهُمْ فِيْٓ أٰذَانِهِمْ وَاسْتَغْشَوْا ثِيَابَهُمْ وَأَصَرُّوْا وَاسْتَكْبَرُوا اسْتِكْبَارًا ⑧

9. されば我は声を大にして、彼等に公正たれと喚びかけたり、

ثُمَّ إِنِّيْ دَعَوْتُهُمْ جِهَارًا ⑨

注1　天命が実施されるその時に至っては、全く後悔は役に立たない。

注2　「指を以てその耳を塞ぎ」というのは、比喩で、「彼等は神のお告げに耳を傾けるのを拒んだ」事を示す。彼等は神のお告げに対し、全く心を閉じてしまったのである。

10．公然と語りかけたり密（ひそか）に説教したりして。（注３）

ثُمَّ إِنِّيٓ أَعۡلَنتُ لَهُمۡ وَأَسۡرَرۡتُ لَهُمۡ إِسۡرَارٗا ٩

11．また我は云えり、『主の赦しを請いまつれ、主は寛大なる御方なれば。

فَقُلۡتُ ٱسۡتَغۡفِرُواْ رَبَّكُمۡ إِنَّهُۥ كَانَ غَفَّارٗا ١٠

12．主はお前たちのために沛然（はいぜん）と雨を降らせん。

يُرۡسِلِ ٱلسَّمَآءَ عَلَيۡكُم مِّدۡرَارٗا ١١

13．またお前たちに富や子女（こどもら）によって勢力を増さしめ、畑を与え、河川を流れしめん。

وَيُمۡدِدۡكُم بِأَمۡوَٰلٖ وَبَنِينَ وَيَجۡعَل لَّكُمۡ جَنَّٰتٖ وَيَجۡعَل لَّكُمۡ أَنۡهَٰرٗا ١٢

14．お前たち何故に偉大さと知識をアッラーより獲（え）んと望まざるか？

مَّا لَكُمۡ لَا تَرۡجُونَ لِلَّهِ وَقَارٗا ١٣

15．アッラーはさまざまなる形と状態にお前たちを創り給えり。（注４）

وَقَدۡ خَلَقَكُمۡ أَطۡوَارًا ١٤

16．お前たちは見ざるか、アッラーが七層の天を完全な調和を以て創造せるかを、

أَلَمۡ تَرَوۡاْ كَيۡفَ خَلَقَ ٱللَّهُ سَبۡعَ سَمَٰوَٰتٖ طِبَاقٗا ١٥

17．そこに月を据えて明りとなし、太陽を据えて炬火（たいまつ）となし給えしことを？

وَجَعَلَ ٱلۡقَمَرَ فِيهِنَّ نُورٗا وَجَعَلَ ٱلشَّمۡسَ سِرَاجٗا ١٦

18．またアッラーは草木の生える如く、お前たちを土より生ぜしめたり。

وَٱللَّهُ أَنۢبَتَكُم مِّنَ ٱلۡأَرۡضِ نَبَاتٗا ١٧

19．而（しか）して再び土に帰らしめ、然（しか）る後新たにお前たちを生ぜしめん。

ثُمَّ يُعِيدُكُمۡ فِيهَا وَيُخۡرِجُكُمۡ إِخۡرَاجٗا ١٨

20．またアッラーはお前たちのために大地を広々と展（ひろ）げ給えり、

وَٱللَّهُ جَعَلَ لَكُمُ ٱلۡأَرۡضَ بِسَاطٗا ١٩

21．お前たちにその広々とした道を往来せしめんがために』」と。

لِّتَسۡلُكُواْ مِنۡهَا سُبُلٗا فِجَاجٗا ٢٠

第二項

22．ノアはまた云えり、「主よ、彼等は我に背き、その富も子女（こどもら）も徒（いたず）らに身の破滅をまねくばかりの者に従えり。

قَالَ نُوحٞ رَّبِّ إِنَّهُمۡ عَصَوۡنِي وَٱتَّبَعُواْ مَن لَّمۡ يَزِدۡهُ مَالُهُۥ وَوَلَدُهُۥٓ إِلَّا خَسَارٗا ٢١

注３　ノアは、あらゆる手を尽して、一族の者が神のお告げに耳を傾ける様試みた。しかし、彼等は皆、断固としてそれを拒んだ。

注４　神は、人それぞれに異なった能力を授けられ、人間社会の存続・発展は、この能力及び体調の相違に負っている。神は、形・状態の異なる人々をお創りになった。又は、神は段階に応じて形や性質の異なる人を作られた。この事を当節は示している。

23. 而(しか)して彼等は重大なる策謀を企(くわ)だてたり。

وَمَكَرُوا مَكْرًا كُبَّارًا ﴿٢٢﴾

24. 彼等は互に云えり、『お前たち、断じてお前たちの神を棄てるなかれ。ワッドやスワー、ヤグースやヤウークやナスルを棄てるなかれ』と。（注５）

وَقَالُوا لَا تَذَرُنَّ آلِهَتَكُمْ وَلَا تَذَرُنَّ وَدًّا وَلَا سُوَاعًا وَلَا يَغُوثَ وَيَعُوقَ وَنَسْرًا ﴿٢٣﴾

25. 彼等は多くの人を迷わしめたり。されば悪人どもには、迷誤以外に何も加え給うなかれ」と。

وَقَدْ أَضَلُّوا كَثِيرًا ۖ وَلَا تَزِدِ الظَّالِمِينَ إِلَّا ضَلَالًا ﴿٢٤﴾

26. 彼等はその数々の罪ゆえに溺死させられ、次いで業火(ごうか)に投ぜられたり。而(しか)して彼等は、アッラー以外に如何なる救援者も見つけざりき。

مِمَّا خَطِيئَاتِهِمْ أُغْرِقُوا فَأُدْخِلُوا نَارًا فَلَمْ يَجِدُوا لَهُمْ مِنْ دُونِ اللَّهِ أَنْصَارًا ﴿٢٥﴾

27. ノアは云えり、「主よ、地上に一人の不信心者も残し給うな。

وَقَالَ نُوحٌ رَبِّ لَا تَذَرْ عَلَى الْأَرْضِ مِنَ الْكَافِرِينَ دَيَّارًا ﴿٢٦﴾

28. もし残さば、彼等は必ず汝の僕等(しもべら)を迷わしめ、ただ罪人と不信心者のみを産まん。

إِنَّكَ إِنْ تَذَرْهُمْ يُضِلُّوا عِبَادَكَ وَلَا يَلِدُوا إِلَّا فَاجِرًا كَفَّارًا ﴿٢٧﴾

29. 主よ、我を赦し給い、我が父母(ちちはは)を赦し給い、信者として我が家に入る者を赦し給い、男女の別なくすべての信者を。而(しか)して悪人どもには破滅以外に何も加え給うなかれ」と。（注６）

رَبِّ اغْفِرْ لِي وَلِوَالِدَيَّ وَلِمَنْ دَخَلَ بَيْتِيَ مُؤْمِنًا وَلِلْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنَاتِ وَلَا تَزِدِ الظَّالِمِينَ إِلَّا تَبَارًا ﴿٢٨﴾

注５　いずれもアラブの偶像神。

注６　神の預言者は、人の優しさに満ちている。ノアの祈りは、彼に対する抵抗が続き、一族の者を正義へ導こうとする彼の努力が全て無に帰し、彼に従う者が増える可能性は無く、彼に刃向う者が彼やその弟子達を苦しめ、悪事にふけって法を犯したに違いない事を示している。事態がこうであったからこそ。ノアのごとく最も哀れみ深い人が、一族の者の不利になる祈りを強いられたのである。同じ状況の下で、モハッマド預言者の、その対抗者に対する態度は、非常に対照的である。オハドの戦いで、彼は二本の歯を折り、大怪我をし、大量に出血したが、その時彼の口を突いて出た言葉は次の様であった。「罪も無い預言者を傷付け、その顔面を血だらけにした人々を、しかし彼は神のもとへ呼び寄せる。嗚々、如何にすれば彼等は救われるのだろうか。神よ、我民を救い賜え。彼等は為すべき事を知らないのです。」

سُورَةُ الجِنِّ مَكِّيَّة

アル・ジン

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ ٱللَّهِ ٱلرَّحۡمَٰنِ ٱلرَّحِيمِ ①

2．云え、「我はかくの如く啓示されたり。一群の妖霊たちが（注１）耳を欹てて聴き入り、かく云えり、『我等が聴けるものは、驚くべきクルアーンなり。

قُلۡ أُوحِيَ إِلَيَّ أَنَّهُ ٱسۡتَمَعَ نَفَرٞ مِّنَ ٱلۡجِنِّ فَقَالُوٓاْ إِنَّا سَمِعۡنَا قُرۡءَانًا عَجَبٗا

3．そは直き道に導くものなり。されば我等はそれを信じ、何者をも我等が主に配せざるべし。（注２）

يَهۡدِيٓ إِلَى ٱلرُّشۡدِ فَـَٔامَنَّا بِهِۦۖ وَلَن نُّشۡرِكَ بِرَبِّنَآ أَحَدٗا

4．我等は信ず、崇高なる主の御稜威よ。主は妻もなければ、子もなし。

وَأَنَّهُۥ تَعَٰلَىٰ جَدُّ رَبِّنَا مَا ٱتَّخَذَ صَٰحِبَةٗ وَلَا وَلَدٗا

5．我等の中の愚かな者は、アッラーについて、常々途方もない嘘を云いふらしおることは事実なり。

وَأَنَّهُۥ كَانَ يَقُولُ سَفِيهُنَا عَلَى ٱللَّهِ شَطَطٗا

6．我等は、一般庶民と妖霊はアッラーについて決して嘘を云うまいと思いたりき。

وَأَنَّا ظَنَنَّآ أَن لَّن تَقُولَ ٱلۡإِنسُ وَٱلۡجِنُّ عَلَى ٱللَّهِ كَذِبٗا

7．確かに、庶民の中には、（注３）妖霊の或る者たちに常々庇護を求め、之がために妖霊たちにその傲慢さを助長せしめたり。

وَأَنَّهُۥ كَانَ رِجَالٞ مِّنَ ٱلۡإِنسِ يَعُوذُونَ بِرِجَالٖ مِّنَ ٱلۡجِنِّ فَزَادُوهُمۡ رَهَقٗا

注１　46章30節参照。
この言葉は、ナスィービーンのユダヤ一族を指している様だ。彼等はアラブ人ではなく、他人という意味の語「ジン」と呼ばれた異邦人であった。当節の出来事は、40：30－33に述べられた事と異なる様に思えるが、当節の「一群の選良たち」の言葉と、46：30－33の「選良たち」の言葉が、一見した所似ているので、当節は46：30－33に言及したものと取る向きもある。

注２　「一群の選良たち」は、ユニテリアン派のキリスト教徒か、彼等と結び付きの深いユダヤ教徒、あるいは彼等の影響を受けている者、更にはキリスト教に詳しい者。当節から、これ等の事が推察される。

注３　リジャール（庶民）という語は人間に関してのみ使われるので、当節及び46章の「一群の選良たち」は人間以外のものではない、と当節は示している。此所にあるアラビア語のジンは、地位が高く有力な者を指し、インスは、前者に従いその保護を求める事で慢心を深める低い位の卑しい者を表している。

8．彼等は、お前たちが考える如く、アッラーは如何なる使徒も甦らしむることなしと思えり。（注4）

وَّأَنَّهُمْ ظَنُّوا كَمَا ظَنَنتُمْ أَن لَّن يَبْعَثَ اللَّهُ أَحَدًا ۝٧

9．我等は天上に達せんと謀る。されど、強力な護衛と流星が天に満つるを見たり。（注5）

وَّأَنَّا لَمَسْنَا السَّمَاءَ فَوَجَدْنَاهَا مُلِئَتْ حَرَسًا شَدِيدًا وَشُهُبًا ۝٨

10．我等は盗み聴きするために、天上の席に坐するを常とせり。されど盗み聴きする者は今、（注6）彼を待ち構える流星あるを見ん。

وَّأَنَّا كُنَّا نَقْعُدُ مِنْهَا مَقَاعِدَ لِلسَّمْعِ ۖ فَمَن يَسْتَمِعِ الْآنَ يَجِدْ لَهُ شِهَابًا رَّصَدًا ۝٩

11．されば、主が地上の者どもに災いを加えんとするのか、それとも嚮導を授けんとするのか、我等は之を知らざるなり。

وَّأَنَّا لَا نَدْرِي أَشَرٌّ أُرِيدَ بِمَن فِي الْأَرْضِ أَمْ أَرَادَ بِهِمْ رَبُّهُمْ رَشَدًا ۝١٠

12．我等の中には義しき者あり、また然らざる者あり、すなわちそれぞれ別れて違った道を奉ず。

وَّأَنَّا مِنَّا الصَّالِحُونَ وَمِنَّا دُونَ ذَٰلِكَ ۖ كُنَّا طَرَائِقَ قِدَدًا ۝١١

13．我等は、地上において、アッラーの計画を失敗させること能わず、またアッラーより逃避すること能わざるを知る。

وَّأَنَّا ظَنَنَّا أَن لَّن نُّعْجِزَ اللَّهَ فِي الْأَرْضِ وَلَن نُّعْجِزَهُ هَرَبًا ۝١٢

14．されば我等は、嚮導の呼びかけを聴くや、之を信じたり。主を信ずる者は、損失の心配なく、他人に不当に遇せられることもなし。

وَّأَنَّا لَمَّا سَمِعْنَا الْهُدَىٰ آمَنَّا بِهِ ۖ فَمَن يُؤْمِن بِرَبِّهِ فَلَا يَخَافُ بَخْسًا وَلَا رَهَقًا ۝١٣

15．我等の中には、神に帰依する者もあれば、正道から逸脱せる者もあり』」と。而して神に帰依する者、そは正しい道をもとめる者なり。

وَّأَنَّا مِنَّا الْمُسْلِمُونَ وَمِنَّا الْقَاسِطُونَ ۖ فَمَنْ أَسْلَمَ فَأُولَٰئِكَ تَحَرَّوْا رَشَدًا ۝١٤

注4　ユダヤ人は、後に続く神の使徒がまた現れない、預言者ヨセフの時代に、既に信仰を捨て去った（40：35）。

注5　「天上に達せん」とは、「未知の秘密を嗅ぎ取ろうとする」を意味する。神の使徒がこの世に真に現れようとする時、星の異常な動きが起きる。当節に述べられているのは、この予期せぬ自然現象である。

注6　神の使徒が現れる前に超自然現象を予告する者は、そのいかがわしい技で未知の神秘に近付けるふりをし、その巧みな詐欺の術を使って、民衆をだまそうとし、彼等の単純さにうまく付け入る。しかし神の使者が出現すれば、彼等のうそは暴かれ、その未知に対する偽りの知識は、占星術の上辺だけの不完全なものに過ぎないと暴露される。「今」という語は、此所では特にモハッマド預言者の時代に関して用いられているが、同時に、全ての偉大な神の使徒の時代をも示していると言える。37：7－10も参照の事。

16．されど正道から逸脱する者どもは、地獄の薪となならん。

وَأَمَّا الْقَاسِطُونَ فَكَانُوا لِجَهَنَّمَ حَطَبًا ﴿١٥﴾

17．もし彼等が正道を守らば、われらは必ず彼等に豊かな飲料水を供給し、（注７）

وَأَلَّوِ اسْتَقَامُوا عَلَى الطَّرِيقَةِ لَأَسْقَيْنَاهُم مَّاءً غَدَقًا ﴿١٦﴾

18．之によって彼等を試さん。されど主を念ずることを顧みない者は、主はその者をば抗し難い苛酷な刑に追いやらん。

لِّنَفْتِنَهُمْ فِيهِ ۚ وَمَن يُعْرِضْ عَن ذِكْرِ رَبِّهِ يَسْلُكْهُ عَذَابًا صَعَدًا ﴿١٧﴾

19．すべての礼拝堂はアッラーの有なり。さればアッラーの外に如何なる者も祈るなかれ。（注８）

وَأَنَّ الْمَسَاجِدَ لِلَّهِ فَلَا تَدْعُوا مَعَ اللَّهِ أَحَدًا ﴿١٨﴾

20．アッラーの僕が礼拝のために起てる時、(注９)彼等は僕に押し寄せて、窒息させるほどなりき。

وَأَنَّهُ لَمَّا قَامَ عَبْدُ اللَّهِ يَدْعُوهُ كَادُوا يَكُونُونَ عَلَيْهِ لِبَدًا ﴿١٩﴾

第二項

21．云え、「我は主のみを祈り、何者をも主に配せず」と。

قُلْ إِنَّمَا أَدْعُو رَبِّي وَلَا أُشْرِكُ بِهِ أَحَدًا ﴿٢٠﴾

22．云え、「我はお前たちを害し、または益する能力を有せず」と。

قُلْ إِنِّي لَا أَمْلِكُ لَكُمْ ضَرًّا وَلَا رَشَدًا ﴿٢١﴾

23．云え、「げに何人もアッラーに抗して我を護る能わず、また我はアッラーの外に何処にも避難所を見いだす能わず。

قُلْ إِنِّي لَن يُجِيرَنِي مِنَ اللَّهِ أَحَدٌ وَلَنْ أَجِدَ مِن دُونِهِ مُلْتَحَدًا ﴿٢٢﴾

24．我が責務は、ただアッラーより我に降る啓示並びに神託を伝達するにあり」と。而してアッラーとその使徒に従わざる者どもには、地獄の火ありて、その中に永劫に住み留まらん。

إِلَّا بَلَاغًا مِّنَ اللَّهِ وَرِسَالَاتِهِ ۚ وَمَن يَعْصِ اللَّهَ وَرَسُولَهُ فَإِنَّ لَهُ نَارَ جَهَنَّمَ خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا ﴿٢٣﴾

注７　水は全生命の根源であり、「豊かな飲料」とは、財産やその他物的所有の豊富さを示している。

注８　前節には、モハッマド預言者の出現と共に、唯一神確立という神の御計画が示されたと書かれている。当節は、イスラム教寺院（モスク）が以後中心となり、そこから神の光が全世界へ広がる、と述べている。

注９　「アッラーの僕」という別称は、モハッマド預言者が一段と優れた神の下僕である為に、彼を示しているのだが、同時に、神の使徒全てを指してもいるようだ。

25. 彼等はその約束されたるものを目のあたりにするまで信ぜざるべし。而してその時に及んで、彼等初めて助力において弱く、しかも数において少きは誰なるかを知るべし。

حَتَّىٰٓ إِذَا رَأَوْا مَا يُوعَدُونَ فَسَيَعْلَمُونَ مَنْ أَضْعَفُ نَاصِرًا وَّأَقَلُّ عَدَدًا ﴿٢٥﴾

26. 云え、「お前たちに約束されたることは、近く起きるのか、それとも主がそれを遠い先のことに定めたるか、我はそれを知らず」と。

قُلْ إِنْ أَدْرِىٓ أَقَرِيبٌ مَّا تُوعَدُونَ أَمْ يَجْعَلُ لَهُۥ رَبِّىٓ أَمَدًا ﴿٢٦﴾

27. 主は不可視なるものを知る者なり。されど主は、その秘密を何人にも漏らさず、

عَٰلِمُ الْغَيْبِ فَلَا يُظْهِرُ عَلَىٰ غَيْبِهِۦٓ أَحَدًا ﴿٢٧﴾

28. 已れが選べる使徒の外には。而してその場合は、使徒の前後を諸天使に護衛せしむ。(注 10)

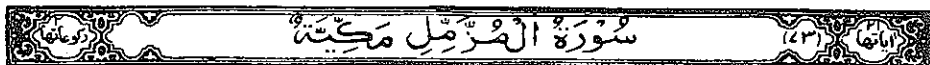
إِلَّا مَنِ ارْتَضَىٰ مِن رَّسُولٍ فَإِنَّهُۥ يَسْلُكُ مِنۢ بَيْنِ يَدَيْهِ وَمِنْ خَلْفِهِۦ رَصَدًا ﴿٢٨﴾

29. そは、使徒たちが主のお告げを伝えたか否かを知らんがためなり。主は使徒たちと共にあるすべてを取り囲み、すべてを数え給う。(注 11)

لِّيَعْلَمَ أَن قَدْ أَبْلَغُوا رِسَٰلَٰتِ رَبِّهِمْ وَأَحَاطَ بِمَا لَدَيْهِمْ وَأَحْصَىٰ كُلَّ شَىْءٍ عَدَدًا ﴿٢٩﴾

注 10　神の使徒に啓示される未知の神秘の本質及び領域と、他の高潔な信者に示されるものとを区別する明白な基準が、当節に含まれる。この差異は次の様なものである。神の使徒達は、他の正しき人々に示される未知の神秘より優位に立つ。更に、神の使徒に授けられる啓示は、神の特別な保護のもとにあるので、邪悪なものがこれに手を付ける事はできないが、他の高潔な人々に示される神秘は、必ずしも保護されてはいない。

注 11　神の使徒への啓示は、不正な干渉から守られているが、それは、彼等が成就すべき神の偉大な使命を帯び、伝えるべき神の偉大なお告げを賜っているからである。

سُورَةُ الْمُزَّمِّلِ مَكِّيَّةٌ

アル・ムッザムミル
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍く(あまねく)アッラーの御名(みな)において。 بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①
2. 汝外套をまとう者よ、(注1) يٰۤاَيُّهَا الْمُزَّمِّلُ ②
3. 暫時の間を除き、夜も起きて礼拝せよ。 قُمِ الَّيْلَ اِلَّا قَلِيْلًا ③
4. 夜の半分か、それより僅かに減じるか、 نِّصْفَهٗۤ اَوِ انْقُصْ مِنْهُ قَلِيْلًا ④
5. 或いは少しそれに加えて、ゆっくりとよく考えながらクルアーンを読誦せよ。 اَوْ زِدْ عَلَيْهِ وَرَتِّلِ الْقُرْاٰنَ تَرْتِيْلًا ⑤
6. げにわれらは重大なる言葉を(注2)汝に説示せんとす。 اِنَّا سَنُلْقِيْ عَلَيْكَ قَوْلًا ثَقِيْلًا ⑥
7. 礼拝のために夜起きることは、(注3)己れを抑制する最も効果ある方法であり、また礼拝の言葉を最も効果的にす。 اِنَّ نَاشِئَةَ الَّيْلِ هِيَ اَشَدُّ وَطْاً وَّاَقْوَمُ قِيْلًا ⑦

注1　神の天使が、ヒラーの洞窟に、神の啓示を携えてモハッマド預言者を訪ねた時、これはモハッマド預言者にとり初めての精神的な体験であり、その後彼は驚いて家へ急ぎ戻った。この驚きは、その体験が見聞きした事のないものであった為、ごく当然である。モハッマド預言者はマントで覆ってくれる様頼んだ。「覆う」とは、「共に加わり一つになる」とも意味するので、当節は次の様な事を示すものであろう。「おお、一つの旗の下に世界中の人々が一つになる様命ぜられた御方！」モハッマド預言者は、「世界の層を一つに結び付ける人」という意味の語アル・ハーシル（統率者）として、ハディスに記されている（ブハリ）。当節は又次の様な意味もある。(1)モハッマド預言者が人類を目覚めさせ、その高度な宿命を悟らせるまでには、まだ長い道のりを行かねばならず、その為彼は急がなければならない。つまり、懸命に、休む事なく、急ぎ事を為さなければならないのである。(2)彼は、重荷、つまり、神のお告げを世に伝えるという重責を担った人である。モハッマド預言者は、神を畏れ従う者の社会を準備するという重責に気付いていたであろう。この従者達は、彼と同じ高尚な理想を持ち、同様の不断の熱意に奮い立ち、彼を助けてイスラム教のお告げを人類に伝えなければならないのである。此所に述べられてあるのはモハッマド預言者のこの重責であって、マントに身を包む事ではない。

注2　「重大なる言葉」は、「クルアーンの教義は最高の意味に満ちている。それは余りに重く、動かす事のできないものである。」と示しているようだ。クルアーンの一字一句たりとも変える事はできない。しばしば引用されるハディスによれば、モハッマド預言者に啓示が下された時はいつも、どんなに寒い日でも大粒の汗が額から落ち、自身の身体の重みを感じられる様にと、彼は忘我の境地に至り、独特の感覚に触れたのである。(ブハリ)。クルアーンの啓示は「重大なる言葉」であり、モハッマド預言者の発作はこの感覚によるものである。

注3　祈りの為に夜起きるのは、自己を抑制し、自身の悪へ傾きがちな性癖を抑えるのに強力な手段である。夜の祈り程魂を向上させるものはなく、神の高徳な人々の全ての体験がこれを証明している。夜の静寂と孤独

8．げに汝は、昼の間、絶えまなき用事あり。（注４）

إِنَّ لَكَ فِي النَّهَارِ سَبْحًا طَوِيلًا ﴿٨﴾

9．されば主の御名(みな)を唱念し、一意専心(ひたすら)主におすがりせよ。

وَاذْكُرِ اسْمَ رَبِّكَ وَتَبَتَّلْ إِلَيْهِ تَبْتِيلًا ﴿٩﴾

10．彼は東西の主なり。彼の外に神なし。されば彼を汝の守護者とせよ。

رَبُّ الْمَشْرِقِ وَالْمَغْرِبِ لَا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ فَاتَّخِذْهُ وَكِيلًا ﴿١٠﴾

11．彼等が云うことはすべて耐え忍び、上品に彼等から身を退(ひ)け。

وَاصْبِرْ عَلَىٰ مَا يَقُولُونَ وَاهْجُرْهُمْ هَجْرًا جَمِيلًا ﴿١١﴾

12．真理を認めざる富裕な者どものことはわれに任せ、暫く彼等を猶予せよ。

وَذَرْنِي وَالْمُكَذِّبِينَ أُولِي النَّعْمَةِ وَمَهِّلْهُمْ قَلِيلًا ﴿١٢﴾

13．げにわれらがところには重い足かせ、燃え盛る業火(ごうか)あり。

إِنَّ لَدَيْنَا أَنْكَالًا وَجَحِيمًا ﴿١٣﴾

14．喉につかえる食物も、痛刑もあり。

وَطَعَامًا ذَا غُصَّةٍ وَعَذَابًا أَلِيمًا ﴿١٤﴾

15．すなわちその日、大地も山々も震撼(しんかん)し、山はさながらもろく崩れる砂丘の如くならん。

يَوْمَ تَرْجُفُ الْأَرْضُ وَالْجِبَالُ وَكَانَتِ الْجِبَالُ كَثِيبًا مَهِيلًا ﴿١٥﴾

16．げにわれらはかつてファラオに一使徒を遣わした如く、お前たちの証人たるべき一人の使徒をお前たちに遣わしたり。（注５）

إِنَّا أَرْسَلْنَا إِلَيْكُمْ رَسُولًا شَاهِدًا عَلَيْكُمْ كَمَا أَرْسَلْنَا إِلَىٰ فِرْعَوْنَ رَسُولًا ﴿١٦﴾

17．されどファラオがその使徒に従わざるが故に、われらは彼を捕え、厳罰に処せり。

فَعَصَىٰ فِرْعَوْنُ الرَّسُولَ فَأَخَذْنَاهُ أَخْذًا وَبِيلًا ﴿١٧﴾

18．もしお前たち信ぜずば、童(わらべ)が白頭に化さんその日、（注６）如何にその身を護るべきや？

فَكَيْفَ تَتَّقُونَ إِنْ كَفَرْتُمْ يَوْمًا يَجْعَلُ الْوِلْدَانَ شِيبًا ﴿١٨﴾

の中で、独特の平安が支配する。万物は静まり返り、人はその創造主と向き合い、神との特別の対話を享受し、彼が他人に伝える特別の天の光に照らし出される。人が徳性を高め、その言葉を思慮あるものにするには、真にこの時を置いてはない。難業の為の感銘を与える演説と無限の包容力が、神の使者がその使命を果たすのに求められる二つの不可欠な特質である。自らの心と言葉を自制できてこそ、他人を支配できる様になる。

注４　当節は、モハッマド預言者が機敏に遂行し、そうする事で大きな喜びを得た、彼の多くの義務を述べている。これが「用事」の意味する所である。

注５　当節は聖書の預言を述べている。「私は彼等の同胞の内から、彼等の為に貴人の様な一人の預言者を起こそう。私は彼の口に私の言葉を授けよう。彼は私が命じる事を皆、彼等に告げる。私の名によって彼が告げる私の言葉に聞き従わない者があれば、私が彼に責任を問う。」（申命記 18：18－19）。

注６　当節の「わらべが白頭に化さん」、次節の「天は崩壊」、その他クルアーンで用いられた同様の言葉（21：105、82 2、84 2）は、不幸な変化を引き起こす最も悲惨な出来事の比喩である。

19．その日、天は崩壊し、主の約束は履行されん。（注７）

20．げにこは訓戒なり。されば欲する者には主への道を辿らしめよ。

第二項

21．主は、汝が夜の三分の二近く、時には半分か三分の一を起きて礼拝するを知る。（注８）汝に従う人々の一団もまた然り。アッラーは夜昼の長さを測定す。アッラーはお前たちがその時間を正確に算定し得ざることを知りて、（注９）慈顔をお前たちに向けたり。さればクルアーンを、お前たちに無理にならざる程に誦め。アッラーは、お前たちの中には病人あり、アッラーの恵みを求めて処処方方を旅する者あり、またアッラーの道のために戦う者あるを知る。さればお前たちに無理にならざる程にクルアーンを誦み、礼拝を遵守し、定めの喜捨をなし、アッラーに立派な貸し付けをせよ。お前たち、己が魂のために何か善いことをしておけば、アッラーの御許でそれを見ん。そはより良く、より立派な報奨として。而してアッラーに赦しを請い奉れ。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

ٱلسَّمَآءُ مُنفَطِرٌۢ بِهِۦ ۚ كَانَ وَعْدُهُۥ مَفْعُولًا ⑲
إِنَّ هَٰذِهِۦ تَذْكِرَةٌ ۖ فَمَن شَآءَ ٱتَّخَذَ إِلَىٰ رَبِّهِۦ سَبِيلًا ⑳

إِنَّ رَبَّكَ يَعْلَمُ أَنَّكَ تَقُومُ أَدْنَىٰ مِن ثُلُثَيِ ٱلَّيْلِ
وَنِصْفَهُۥ وَثُلُثَهُۥ وَطَآئِفَةٌ مِّنَ ٱلَّذِينَ مَعَكَ ۚ
وَٱللَّهُ يُقَدِّرُ ٱلَّيْلَ وَٱلنَّهَارَ ۚ عَلِمَ أَن لَّن تُحْصُوهُ
فَتَابَ عَلَيْكُمْ ۖ فَٱقْرَءُوا۟ مَا تَيَسَّرَ مِنَ ٱلْقُرْءَانِ ۚ
عَلِمَ أَن سَيَكُونُ مِنكُم مَّرْضَىٰ ۙ وَءَاخَرُونَ يَضْرِبُونَ
فِى ٱلْأَرْضِ يَبْتَغُونَ مِن فَضْلِ ٱللَّهِ ۙ وَءَاخَرُونَ
يُقَٰتِلُونَ فِى سَبِيلِ ٱللَّهِ ۖ فَٱقْرَءُوا۟ مَا تَيَسَّرَ مِنْهُ ۚ وَ
أَقِيمُوا۟ ٱلصَّلَوٰةَ وَءَاتُوا۟ ٱلزَّكَوٰةَ وَأَقْرِضُوا۟ ٱللَّهَ قَرْضًا
حَسَنًا ۚ وَمَا تُقَدِّمُوا۟ لِأَنفُسِكُم مِّنْ خَيْرٍ تَجِدُوهُ
عِندَ ٱللَّهِ هُوَ خَيْرًا وَأَعْظَمَ أَجْرًا ۚ وَٱسْتَغْفِرُوا۟
ٱللَّهَ ۖ إِنَّ ٱللَّهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌۢ ㉑

注７　当節の約束とは、メッカ陥落と共に悪の勢力が壊滅する事であった。

注８　この章の第一節で、モハッマド預言者は夜の祈りを続ける様命じられた。それにより、間もなく彼に話される神のお告げの伝道という重責を果たすに必要な強さが、彼に備わるであろう。当節で、彼は神の喜びを保証され、夜の祈りについての神の御命令を、彼のみならず信者たちも忠実に遂行する様、命じられている。この命令はモハッマド預言者の弟子達にだけ向けられているのではなく、彼を踏襲したいと願う者全てが対象であり、この意味からも、彼等は彼という手本をまねるのである。

注９　「アッラーは夜昼の長さを測定す。」この言葉は、夜が、時には長く、時には短かく、又ある時は昼と同じ長さになる事を示している。「お前たちがその時間を正確に算定し得ざる」という言葉は、全イスラム教徒に向けられているようだ。彼等は、その全てが規則正しく夜の祈りをできるとは言えない、と告げられている。

سُوۡرَةُ الۡمُدَّثِّرِ مَكِّيَّةٌ

アル・ムッダッスィル
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。　بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿۱﴾

2．汝外套をかぶる者よ、（注１）　يٰۤاَيُّهَا الۡمُدَّثِّرُ ﴿۲﴾

3．起て、而して警告せよ。　قُمۡ فَاَنۡذِرۡ ﴿۳﴾

4．汝己が主を讃美し奉れ。　وَرَبَّكَ فَكَبِّرۡ ﴿۴﴾

5．汝己が衣を潔め、（注２）　وَثِيَابَكَ فَطَهِّرۡ ﴿۵﴾

6．不浄を避けよ。（注３）　وَالرُّجۡزَ فَاهۡجُرۡ ﴿۶﴾

7．より多き返礼を目当てに親切を施すなかれ。　وَلَا تَمۡنُنۡ تَسۡتَكۡثِرُ ﴿۷﴾

8．主の御為に耐え忍べ。　وَلِرَبِّكَ فَاصۡبِرۡ ﴿۸﴾

9．喇叭が吹き鳴らされる時、（注４）　فَاِذَا نُقِرَ فِى النَّاقُوۡرِ ﴿۹﴾

10．その日は悲惨な日とならん。（注５）　فَذٰلِكَ يَوۡمَئِذٍ يَّوۡمٌ عَسِيۡرٌ ﴿۱۰﴾

注１　「外套をかぶる者」は、その語源の様々な意味から判断して、次の様な意味が考えられる。消し去る人、改良者、又は物事を整理する人。征服者。馬に跳び乗ろうとしている人。この語は又、神の預言者の重責を授けられた人とも解釈できる。更には、最善の生来の力・特質・預言者の高潔さを備った人をも意味する。これ等の別称は全て、モハッマド預言者にそのまま当てはまる。

注２　モハッマド預言者は、その使命遂行に先駆けて、心・品行・風評いずれも汚れの無い弟子の一団を用意せよ、と命じられている。あるいは、彼自身が、敬神・高潔・品行方正の模範となるべきだ、と当節は示しているともいえる。

注３　偶像崇拝撲滅の為、労をいとわない様にと、当節はモハッマド預言者に命じているようだ。

注４　神が人々を御前に呼ばれる際に用いられる神のらっぱであり、当節は、彼が現れ、神のもとへ行く様人々に呼びかける時を示している。又は、モハッマド預言者自身が一族の者達に呼びかけているのかもしれない。

注５　「悲惨な日」とは、復活の日、又は、不信心者が最終的な敗北を喫し、真実が完全に勝利を治める日を指す。

11．不信心者どもにとりては容易ならざる日なり。

عَلَى الْكٰفِرِيْنَ غَيْرُ يَسِيْرٍ ١٠

12．わが創れるあの男を、われに任せよ、(注6)

ذَرْنِيْ وَمَنْ خَلَقْتُ وَحِيْدًا ١١

13．われはあの男にあり余る富を与え、

وَّجَعَلْتُ لَهٗ مَالًا مَّمْدُوْدًا ١٢

14．偕(とも)に住む子女(こどもら)を与え、(注7)

وَّبَنِيْنَ شُهُوْدًا ١٣

15．必要なるすべてのものを授けたり。

وَّمَهَّدْتُّ لَهٗ تَمْهِيْدًا ١٤

16．然(しか)るにあの男は更にわが賜与を望む。

ثُمَّ يَطْمَعُ اَنْ اَزِيْدَ ١٥

17．断じて可ならず！われらの神兆(しるし)に頑(かたく)なに反抗したるが故に。

كَلَّا ۗ اِنَّهٗ كَانَ لِاٰيٰتِنَا عَنِيْدًا ١٦

18．われはあの男に、必ず抗し難い責苦を課せん。

سَاُرْهِقُهٗ صَعُوْدًا ١٧

19．見よ、あの男は熟慮せり、而(しか)して策謀せり。

اِنَّهٗ فَكَّرَ وَقَدَّرَ ١٨

20．没落があの男を突然襲う。よくも策謀せることよ！

فَقُتِلَ كَيْفَ قَدَّرَ ١٩

21．かさねて没落があの男を襲う。よくも策謀せることよ！(注8)

ثُمَّ قُتِلَ كَيْفَ قَدَّرَ ٢٠

22．その時、あの男は己が周囲を見まわし、

ثُمَّ نَظَرَ ٢١

23．眉をひそめ、顔をしかめ、(注9)

ثُمَّ عَبَسَ وَبَسَرَ ٢٢

注6　この言葉は次の事を意味する。「私が作り出した者の事は、私に任せなさい。」あるいは、「その大いなる富・権力・地位は、神が彼に授けたにもかかわらず、彼は、それが為、己を同胞の及ぶべくもない存在と考えている。彼の処置は私に任せなさい。」とも解せる。

当節及び前数節は、傲慢で思い上った不信心者全てに向けられたものであるが、中でもワリード・ビン・ムギーラを指しているようだ。彼はクライシュの間で目立つ存在で、「類いまれなる人物」あるいは「クライシュの香気」といった大げさな敬称で、当方に知られていた。彼は端正な容姿をし、その優雅な詩やその他の教養で有名であった。彼には10才から13才までの息子がおり、非常に裕福であった。

注7　当節は、ワリードの息子達も又、彼と同じく人の尊敬を集めていたことを示している。彼の加わる会合では、彼等も又貴賓席を提供された。あるいは、ワリードは非常に豊かであり、彼の息子達は常に彼と行動を共にし、生計を得る所へは、どこにでもついて行った。

注8　この話は、特にワリード・ビン・ムギーラを指している。彼の通った跡は破壊が付いて回った。彼の息子の内、ワリード、カーリッド、ヒシヤームの三人はイスラム教を受け入れたが、他の息子達は、彼の目の前で亡くなった。彼の財産は大幅に減り、最後には、彼は貧困と不名誉の中で死んだ。

注9　クルアーンがワリードに読み聞かせられた時、彼は尊大な態度で顔をしかめ、腹を立てて立ち去った。

24．顔をそむけて軽蔑し、

ثُمَّ أَدْبَرَ وَاسْتَكْبَرَ

25．而して云えり、「こはむかしからある妖術に外ならず。

فَقَالَ إِنْ هَٰذَا إِلَّا سِحْرٌ يُؤْثَرُ

26．こは人間の言葉にすぎず」と。

إِنْ هَٰذَا إِلَّا قَوْلُ الْبَشَرِ

27．われはあの男を必ず地獄の火に投げ込まん。

سَأُصْلِيهِ سَقَرَ

28．業火の何んたるかを汝に知らしむるものは何か？

وَمَا أَدْرَاكَ مَا سَقَرُ

29．そは何ものも余さず、何ものも残さず。

لَا تُبْقِي وَلَا تَذَرُ

30．そはその顔を焼く。

لَوَّاحَةٌ لِلْبَشَرِ

31．業火の上には十九の諸天使あり。（注10）

عَلَيْهَا تِسْعَةَ عَشَرَ

32．われらは天使のみを業火の番人とせり。われらがその数を限定したるは、不信心者を試みんがため、また聖書を授けられた人々に確信を得せしめんがため、また信ずる人々の信仰心を強めんがためなり。すなわち、信ずる人々同様聖書を授けられたる人々が疑心を抱くことがないように、また心に病ある者と不信心者に「アッラーはこの譬喩を以て何を諭さんとするか？」と云わしめんがためなり。かくの如くアッラーは己れの欲する者を迷わしめ、また欲する者を導き給う。而して主の軍勢を知る者は、主御自身の外になし。これすなわち人類への訓戒に外ならず。

وَمَا جَعَلْنَا أَصْحَابَ النَّارِ إِلَّا مَلَائِكَةً ۙ وَمَا جَعَلْنَا عِدَّتَهُمْ إِلَّا فِتْنَةً لِلَّذِينَ كَفَرُوا لِيَسْتَيْقِنَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ وَيَزْدَادَ الَّذِينَ آمَنُوا إِيمَانًا ۙ وَلَا يَرْتَابَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ وَالْمُؤْمِنُونَ ۙ وَلِيَقُولَ الَّذِينَ فِي قُلُوبِهِمْ مَرَضٌ وَالْكَافِرُونَ مَاذَا أَرَادَ اللَّهُ بِهَٰذَا مَثَلًا ۚ كَذَٰلِكَ يُضِلُّ اللَّهُ مَنْ يَشَاءُ وَيَهْدِي مَنْ يَشَاءُ ۚ وَمَا يَعْلَمُ جُنُودَ رَبِّكَ إِلَّا هُوَ ۚ وَمَا هِيَ إِلَّا ذِكْرَىٰ لِلْبَشَرِ

第二項

33．否、月にかけて、

كَلَّا وَالْقَمَرِ

注10　人には九つの主要な感覚が授けられている。それは、七つの外界感覚と、体内からの刺激を伝える一感覚と飢えや渇き等の感覚に関係する臓器から起こる内界感覚である。制御感覚、つまり人間の諸機能を支配する意志力、を伴う九つの精神的対応物とそれぞれ結びついたこれ等の感覚は、地獄の19人の守護者である。あるいは、19という数は、経典の民に特に関係ある、偉大な神の神秘かもしれない。この経典の民の意義や本質は、神御自身が望む時に明かされ、彼等にクルアーンの教義の真実を知らせる事となり、信者の信仰の確信を大いに増すであろう。全ての神の神秘を知りたいとあえて求める者がいようか？

34．退(しりぞ)き逝(ゆ)く暗やみにかけて、　　وَالَّيْلِ إِذْ أَدْبَرَ

35．白(しら)み来るあけぼのにかけて誓う、(注 11)　　وَالصُّبْحِ إِذَآ أَسْفَرَ

36．げに地獄は最大の災いの一つなり。　　إِنَّهَا لَإِحْدَى الْكُبَرِ

37．そは人間への警告なり、　　نَذِيرًا لِّلْبَشَرِ

38．お前たちの中の前進を望む者にも、しり込みする者にも。　　لِمَن شَآءَ مِنكُمْ أَن يَتَقَدَّمَ أَوْ يَتَأَخَّرَ

39．人はみなその所業(かせぎ)を質に置く、(注 12)　　كُلُّ نَفْسٍ بِمَا كَسَبَتْ رَهِينَةٌ

40．但し右側の人々は除く。　　إِلَّآ أَصْحَٰبَ الْيَمِينِ

41．彼等は楽園に入り、互に相い問わん　　فِى جَنَّٰتٍ يَتَسَآءَلُونَ

42．罪人(つみびと)どもについて。　　عَنِ الْمُجْرِمِينَ

43．「お前たちを地獄の業火(ごうか)におとし入れたるものは何んぞや？」　　مَا سَلَكَكُمْ فِى سَقَرَ

44．彼等は答えん、「我等は礼拝を捧げざりし者、　　قَالُوا لَمْ نَكُ مِنَ الْمُصَلِّينَ

45．また貧者を養わざりき。　　وَلَمْ نَكُ نُطْعِمُ الْمِسْكِينَ

46．また我等は、ふらちな徒輩(やから)とふらちなお喋りに耽りたり。　　وَكُنَّا نَخُوضُ مَعَ الْخَآئِضِينَ

47．而(しか)して常々審判の日を否認せり、　　وَكُنَّا نُكَذِّبُ بِيَوْمِ الدِّينِ

48．死が我が身に襲いかかりしその時まで」と。　　حَتَّىٰٓ أَتَىٰنَا الْيَقِينُ

49．されば如何なる仲裁者の執り成しも、彼等には役立つものとならざらん。　　فَمَا تَنفَعُهُمْ شَفَٰعَةُ الشَّٰفِعِينَ

50．彼等いったい如何がした、訓戒より背を向けるとは？　　فَمَا لَهُمْ عَنِ التَّذْكِرَةِ مُعْرِضِينَ

注 11　「あけぼの」は又、モハッマド預言者の偉大な代理である、約束されたメシヤを指し、前節の「退き逝く暗やみ」は、メシヤの出現する前の精神の闇夜を示しているようだ。

注 12　魂は、それが犯した罪の償いをしなければならない。いつかは、罰に苦しんで罪を洗い流さなければならない。

51．さながら彼等は恐れ戦(おのの)く驢馬(ろば)の如し、

كَأَنَّهُمْ حُمُرٌ مُّسْتَنفِرَةٌ ﴿٥١﴾

52．獅子より逃れる。

فَرَّتْ مِن قَسْوَرَةٍ ﴿٥٢﴾

53．否、彼等はそれぞれ、開かれた啓示の書が己れに授けられんことを希(こいねが)う。（注 13）

بَلْ يُرِيدُ كُلُّ امْرِئٍ مِّنْهُمْ أَن يُؤْتَىٰ صُحُفًا مُّنَشَّرَةً ﴿٥٣﴾

54．否、彼等は来世を恐れざるなり。

كَلَّا ۖ بَل لَّا يَخَافُونَ الْآخِرَةَ ﴿٥٤﴾

55．否、このクルアーンは警告として足(た)るべし。

كَلَّا إِنَّهُ تَذْكِرَةٌ ﴿٥٥﴾

56．されば欲する者をして、肝に銘じせしめよ。

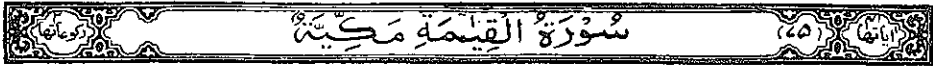
فَمَن شَاءَ ذَكَرَهُ ﴿٥٦﴾

57．されどアッラーが欲すに非ずば、彼等は留意警戒せざるべし。（注 14）アッラーこそは畏れ多い御方、而(しか)して罪を容赦する御方なり。

وَمَا يَذْكُرُونَ إِلَّا أَن يَشَاءَ اللَّهُ ۚ هُوَ أَهْلُ التَّقْوَىٰ وَأَهْلُ الْمَغْفِرَةِ ﴿٥٦﴾

注 13　不信心者達は、モハッマド預言者が天国から神の書を持って来るのでなければ、読んだ内容を信じない、と厚かましく求めた事が、クルアーンの他所に書かれてあり、本文の言葉はこの事を指しているようだ。（17：94）

注 14　不信心者達は、その意志を神の御意志に添わせない限り、つまり、神の御意志を自らの願望に優先させない限り、クルアーンの恩恵に浴する事はないであろう（76：31）。

سُورَةُ الْقِيٰمَةِ مَكِّيَّةٌ

アル・クィヤーマ
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．否、われは復活の日にかけて誓う。

لَآ أُقْسِمُ بِيَوْمِ الْقِيٰمَةِ ②

3．否、われは審判の日が確実なることを自責の念にかけて誓う。（注１）

وَلَآ أُقْسِمُ بِالنَّفْسِ اللَّوَّامَةِ ③

4．人間は、われらが人間の骨を集め得ず、と考えるか？

أَيَحْسَبُ الْإِنْسَانُ أَلَّنْ نَّجْمَعَ عِظَامَهُ ④

5．然らず、われらは人間の指先の骨まで復原する能力あり。（注２）

بَلٰى قٰدِرِيْنَ عَلٰٓى أَنْ نُّسَوِّيَ بَنَانَهُ ⑤

6．然るに人間はこれからも悪行をし続けんと欲す。

بَلْ يُرِيْدُ الْإِنْسَانُ لِيَفْجُرَ أَمَامَهُ ⑥

7．人間は問う、「復活の日は何時なるべし？」と。

يَسْـَٔلُ أَيَّانَ يَوْمُ الْقِيٰمَةِ ⑦

8．目がくらみ、

فَإِذَا بَرِقَ الْبَصَرُ ⑧

9．月が蝕けり、

وَخَسَفَ الْقَمَرُ ⑨

10．日月が合体する時、（注３）

وَجُمِعَ الشَّمْسُ وَالْقَمَرُ ⑩

注１　クルアーンは、人間の魂の三つの発達段階を述べている。第一段階はナフス・アンマーラ（抑制できない魂）と呼ばれ、獣性が人を支配する。第二段階はナフス・ラッヴァーマ（自責の魂）で、人の目覚めた良心が、悪行を働いた事で自らを責め、自己の感情や欲望を規制する。この段階に至れば、人間性が人の中で優勢となる。これが人の道徳的再生の始まりで、それ故、処所に「審判」の証拠としてあげられているのである。もし人に責任がなく、死後自らの行為の責任をとらないとすれば、なぜこの様な罪の意識にさいなまれるのか？第三段階は、人間の魂が最高に発達した段階で、ナフス・ムトゥマインナ（静止した魂）と呼ばれる。この段階に至ると、人の魂は、特に誤ちに対して抵抗力を持ち、その創造主と共に安らかになる。

注２　物事の一部が時として全体を表わす事もあるので、この語は人間の身体全体を指すのであろう。人間、あるいは完全に死んだ状態の人々でさえ、その全能力を復活させる力か神にお有りだ、と当節は示している。

注３　「日月が合体する時」という言葉は、太陽系全体が完全に崩壊すると示しているようだ。あるいは、月はアラブ諸国の、そして太陽はイスラエル帝国の政力権力の象徴である為、当節は両権力の崩壊を示しているのかもしれない。又、この言葉が異常な自然現象を表している為ハディスによれば、ラマダーンの月、約束

11．その日に及んで、人間(ひと)は云わん、「何処へのがれるべきや？」と。

يَقُولُ الْإِنْسَانُ يَوْمَئِذٍ أَيْنَ الْمَفَرُّ ⑪

12．否、何処にも逃げ場なし！

كَلَّا لَا وَزَرَ ⑫

13．その日、安息所は、ただ汝の主の許(もと)のみなり。

إِلَىٰ رَبِّكَ يَوْمَئِذٍ الْمُسْتَقَرُّ ⑬

14．その日、人間(ひと)は、自分がすでに前に送りしもの、並びにし残せしものについて告げられん。（注４）

يُنَبَّؤُا الْإِنْسَانُ يَوْمَئِذٍ بِمَا قَدَّمَ وَأَخَّرَ ⑭

15．否、実を云うと、人間(ひと)は己れ自身に対して証人なり、

بَلِ الْإِنْسَانُ عَلَىٰ نَفْسِهِ بَصِيرَةٌ ⑮

16．たといいろいろと弁解しようとも。

وَلَوْ أَلْقَىٰ مَعَاذِيرَهُ ⑯

17．預言者よ、クルアーンの啓示を催促するために汝の舌を動かすなかれ。

لَا تُحَرِّكْ بِهِ لِسَانَكَ لِتَعْجَلَ بِهِ ⑰

18．之(これ)を集め、之(これ)を誦(よ)むは、われらの仕事なり。（注５）

إِنَّ عَلَيْنَا جَمْعَهُ وَقُرْآنَهُ ⑱

19．されば、われら之(これ)を誦(よ)まば、汝復誦せよ。

فَإِذَا قَرَأْنَاهُ فَاتَّبِعْ قُرْآنَهُ ⑲

20．然(しか)るに後之(これ)を解きあかすことも、われらの仕事なり。

ثُمَّ إِنَّ عَلَيْنَا بَيَانَهُ ⑳

されたメシヤ（マハディ）の時に起こる事になっていた月食と日食を指しているとも言える。不思議な事に、1894年のラマダーンの月に、日食と月食が同時に起こったが、この時、既に、アハマディーヤ運動の創始者は、自らが約束された救世主マハディであると断言していた。

注４　この言葉は次の事を意味する。人が、犯すべきではないのに犯してしまった悪行、そして、為すべきでありながら為さなかった善行。つまり、不作為の罪と作為の罪。

注５　初めてクルアーンの一部がモハッマド預言者に啓示された時、それを忘れてはならないと案じて、彼は急いでそれを復唱しようとした、とブハリは言っている。前節で、あわてて、繰り返そうとするのはよくないとされている。神の啓示は消えるものではないので、落ちついて正確に受けとられねばならない。それは、後の三節に述べられてある様に、神の御計画がクルアーンの聖句に手が加えられるのを避けるだけでなく、それが誤りのない聖典（'Introduction of the Study of the Holy Quran'参照）として集大成され、そのお告げが全世界へ伝えられるのを確かめる事にあったからである（15：10）。又、前節が不信心者処罰の日に触れているので、モハッマド預言者は、約束の罰に関する啓示が間もなく下されると、当然案じていた事を、当節は示しているようでもある。いつ適切な啓示が下され、罰がどの様な形をとるかは、神がお決めになる事で、モハッマド預言者がその事で案ずる必要はなく、又、クルアーンが集大成され、全世界の人々に読まれ、明らかにされなければならない、とモハッマド預言者は此所で告げられている。本文の意味の他、当節は次の解釈もなされる。「貴人の口を通してクルアーンの啓示を明らかにするのが、我々の任務だ。」これは、クルアーンに次ぎ、モハッマド預言者のスンナ（行い）が、確かな導き手として、犯すべからざるものであり、必要不可欠であると強調するものである。

21．否、お前たちは現世を愛し、　　كَلَّا بَلْ تُحِبُّونَ الْعَاجِلَةَ ﴿٢١﴾

22．来世をおろそかにす。　　وَتَذَرُونَ الْآخِرَةَ ﴿٢٢﴾

23．その日、或る者の面(おもて)は輝きて、　　وُجُوهٌ يَوْمَئِذٍ نَاضِرَةٌ ﴿٢٣﴾

24．主を仰ぎ見ん。（注６）　　إِلَىٰ رَبِّهَا نَاظِرَةٌ ﴿٢٤﴾

25．また或る者の面(おもて)は陰に曇りて、　　وَوُجُوهٌ يَوْمَئِذٍ بَاسِرَةٌ ﴿٢٥﴾

26．一大不幸が今にも降り懸からんとするを知らん。　　تَظُنُّ أَنْ يُفْعَلَ بِهَا فَاقِرَةٌ ﴿٢٦﴾

27．然(しか)り！まさに死なんとする者の魂が喉元(のどもと)まで上り来る時、　　كَلَّا إِذَا بَلَغَتِ التَّرَاقِيَ ﴿٢٧﴾

28．云われよう、「彼を救う呪術師は何処にありや？」と。（注７）　　وَقِيلَ مَنْ ۜ رَاقٍ ﴿٢٨﴾

29．彼は臨終の近きを悟り、　　وَظَنَّ أَنَّهُ الْفِرَاقُ ﴿٢٩﴾

30．苦しみもだえて脚と脚とをからみ合う。（注８）　　وَالْتَفَّتِ السَّاقُ بِالسَّاقِ ﴿٣٠﴾

31．彼はその日、主の御許(みもと)へ駆り立てられん。　　إِلَىٰ رَبِّكَ يَوْمَئِذٍ الْمَسَاقُ ﴿٣١﴾

第二項

32．これ彼が真理を受入れず、礼拝を捧げざりしが故なり。（注９）　　فَلَا صَدَّقَ وَلَا صَلَّىٰ ﴿٣٢﴾

33．そればかりか、彼は真理を拒否し、その背を向け、　　وَلَٰكِنْ كَذَّبَ وَتَوَلَّىٰ ﴿٣٣﴾

34．而(しか)して自分の一族のところへ傲然とそりかえって帰りたり。　　ثُمَّ ذَهَبَ إِلَىٰ أَهْلِهِ يَتَمَطَّىٰ ﴿٣٤﴾

注６　高潔なる信者は、その善行が報われる事を期待して、神の方を向くであろう。あるいは、彼等は、神を見る特別な心眼を与えられるであろう。神の御姿は、現世の衣を脱ぎ捨てた、人の魂に示される神の特別な明示である。

注７　当節は次の事を意味する。⑴死に行く者の魂と共に昇り、彼を天国へ連れて行くのは慈悲の天使であり、彼を地獄へ引きずり落とすのは、罰の天使なのか？　⑵近付く死を避け、瀕死の者からその苦しみを取り除く魔術師はどこにいるのだ？

注８　一つの苦悩が、死に対するもう一つの苦悩に加えられるであろう。近親者を後に残す苦しみが、死と、来世で不信心者を待ち受ける罪の苦しみに加えられるであろう。当節は以上の事を示している。

注９　当節は、不信心者の心と身体が共に神に反発した、と示している。

35. 「汝に災いあれ！幾度も災いあれ！

أَوْلَىٰ لَكَ فَأَوْلَىٰ ﴿٣٥﴾

36. 更に汝に災いあれ！幾度も災いあれ！」（注 10）

ثُمَّ أَوْلَىٰ لَكَ فَأَوْلَىٰ ﴿٣٦﴾

37. 人間は、自分が勝手放題に放任せられると、思うか？（注 11）

أَيَحْسَبُ الْإِنسَانُ أَن يُتْرَكَ سُدًى ﴿٣٧﴾

38. 人間はもと、射出せられたる一滴の液体に非ざりしか？

أَلَمْ يَكُ نُطْفَةً مِّن مَّنِيٍّ يُمْنَىٰ ﴿٣٨﴾

39. それが血の凝りとなりたるとき、主が之を形づくり、而して完成せり。

ثُمَّ كَانَ عَلَقَةً فَخَلَقَ فَسَوَّىٰ ﴿٣٩﴾

40. 次いで主は、之を男女の両性となせり。

فَجَعَلَ مِنْهُ الزَّوْجَيْنِ الذَّكَرَ وَالْأُنثَىٰ ﴿٤٠﴾

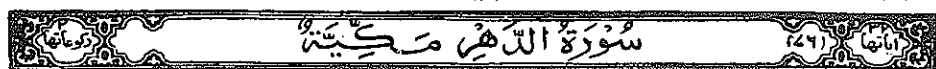
41. 斯かる御方でも、死者を生き返らす能力なしと云うか？（注 12）

أَلَيْسَ ذَٰلِكَ بِقَادِرٍ عَلَىٰ أَن يُحْيِيَ الْمَوْتَىٰ ﴿٤١﴾

注 10　「汝に災いあれ」という言葉の繰り返しは、現世及び来世における精神的苦悩と肉体に科せられる罰を示している。又、この言葉は、強調の意味で使われている。

注 11　神は、微々たるもの・すなわち精子から人をお作りになり、彼を神の全創造物のかなめとする為に、この様に大きい力と能力を彼に授けた。もし、その後、彼が食べ・飲み・楽しむがままにしてておかれたとしたら、それは神の栄知と矛盾する。

注 12　さ程にも小さきものから人間をお作りになった神は、彼が死に、砕けた骨とちりになる時、終りの無い魂の向上の為、彼に新たな生命を授ける力を持たれる。

سُوْرَةُ الدَّهْرِ مَكِّيَّةٌ

アル・ダフル
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ (١)

2．人間は言うに価しない一時期を経過す。

هَلْ اَتٰى عَلَى الْاِنْسَانِ حِيْنٌ مِّنَ الدَّهْرِ لَمْ يَكُنْ شَيْـًٔا مَّذْكُوْرًا (٢)

3．われらは人間を試みんがために、混合せる一滴の精液より之を創りたり。故にわれらは、人間にものを見、ものを聴く能力を授けたり。(注1)

اِنَّا خَلَقْنَا الْاِنْسَانَ مِنْ نُّطْفَةٍ اَمْشَاجٍ نَّبْتَلِيْهِ فَجَعَلْنٰهُ سَمِيْعًا بَصِيْرًا (٣)

4．人間がその恩に感謝するか、しないかはともかく、われらは人間に道を示したり。

اِنَّا هَدَيْنٰهُ السَّبِيْلَ اِمَّا شَاكِرًا وَّاِمَّا كَفُوْرًا (٤)

5．げにわれらは不信心者どものために、鎖と、枷と、燃え盛る業火とを用意せり。(注2)

اِنَّآ اَعْتَدْنَا لِلْكٰفِرِيْنَ سَلٰسِلَا۠ وَاَغْلٰلًا وَّسَعِيْرًا (٥)

6．されど義しい人々は、薄荷の香る器をかたむけん、(注3)

اِنَّ الْاَبْرَارَ يَشْرَبُوْنَ مِنْ كَاْسٍ كَانَ مِزَاجُهَا كَافُوْرًا (٦)

7．アッラーの僕等が飲む泉で。そはこんこんと湧き出ずる。(注4)

عَيْنًا يَّشْرَبُ بِهَا عِبَادُ اللّٰهِ يُفَجِّرُوْنَهَا تَفْجِيْرًا (٧)

注1　人間は精子から作られるが、精子自体は幾つかのものの混合体であり、これは、精神的向上の為、人間が様々な力・能力・特性を授けられた事を示すものである。この過程は、人間誕生の一般原則のみを指しているのであり、他には当てはめられない。

注2　人の行為は全て、対応する神の行為に伴われる。不信心者の俗事のもつれは、来世で鎖の形をとる。現世の不安は鉄製の衿となり、強欲・肉欲は地獄の炎となる。69章33節も参照の事。

注3　はっかの香る飲み物を飲むことは、肉欲を静める効果がある、と当節は示している。高潔な信者の心からは、不純な思いは全て洗い流され、彼等は深い神の知識に静められるであろう。

注4　高潔な信者は、苦労して掘り出した泉で満たされた器を飲むであろう。彼等が現世で為した行いは、来世で泉の形となって現れる。これは、精神的発達の第一段階であり、人間は抑制しその悪の性癖に歯止めをかけなければ、魂を向上させる事ができない為、信者は懸命のたゆまぬ努力を求められている。当節の「泉」は、神の愛と悟りの泉である。

8．彼等義しい人々は誓いを果たし、(注5)災厄の広がる日を恐る。

يُوفُونَ بِالنَّذْرِ وَيَخَافُونَ يَوْمًا كَانَ شَرُّهُ مُسْتَطِيرًا ٨

9．而して彼等は、アッラーを敬愛するが故に、貧しき者、孤児、俘虜に食物を恵む。(注6)

وَيُطْعِمُونَ الطَّعَامَ عَلَىٰ حُبِّهِ مِسْكِينًا وَيَتِيمًا وَأَسِيرًا ٩

10．「我等はアッラーのお喜びを願ってしたまでのこと。あなたがたの報酬も感謝も求めはせぬ。

إِنَّمَا نُطْعِمُكُمْ لِوَجْهِ اللَّهِ لَا نُرِيدُ مِنكُمْ جَزَاءً وَلَا شُكُورًا ١٠

11．げに我等は、主の不機嫌な厄災の日が主よりもたらせられることを恐る」

إِنَّا نَخَافُ مِن رَّبِّنَا يَوْمًا عَبُوسًا قَمْطَرِيرًا ١١

12．さればアッラーはその日の厄災から彼等を護り、快活と幸福とを彼等に与えん。

فَوَقَاهُمُ اللَّهُ شَرَّ ذَٰلِكَ الْيَوْمِ وَلَقَّاهُمْ نَضْرَةً وَسُرُورًا ١٢

13．アッラーはまた楽園と絹の衣とを以て、彼等の堅固なる信念に報いん。

وَجَزَاهُم بِمَا صَبَرُوا جَنَّةً وَحَرِيرًا ١٣

14．彼等は楽園で榻牀にねそべり、暑熱を知らず、また酷寒を知らず。

مُّتَّكِئِينَ فِيهَا عَلَى الْأَرَائِكِ لَا يَرَوْنَ فِيهَا شَمْسًا وَلَا زَمْهَرِيرًا ١٤

15．その樹陰は濃く彼等を覆い、その鈴なりの果物は垂れて摘むに易し。

وَدَانِيَةً عَلَيْهِمْ ظِلَالُهَا وَذُلِّلَتْ قُطُوفُهَا تَذْلِيلًا ١٥

16．銀の器や、玻璃の高盃が彼等の間に献げ巡されん。

وَيُطَافُ عَلَيْهِم بِآنِيَةٍ مِّن فِضَّةٍ وَأَكْوَابٍ كَانَتْ قَوَارِيرَا ١٦

17．玻璃の如く見えて実は銀にて作られたり。彼等は自らの量に合せて盃を満たす。

قَوَارِيرَ مِن فِضَّةٍ قَدَّرُوهَا تَقْدِيرًا ١٧

注5　「誓いを果たし」は、人間の神に対する義務からの解放を表している。人の同胞への義務は、次節に述べられている。

注6　当節は次の事を示している。(1)高潔なる信者は神を敬愛しているので、神に喜ばれる様に、貧しき者や捕虜を養う。(2)彼等は自らを向上させる為に、貧しき者を養う。つまり、彼等は、その行為の見返りを求めずして善行を為す為に、貧しき者を養うのである。(3)彼等自身、自分に費やす分を押さえて、貧しき者の為に金銭を費やし、彼等を養う。(4)「食物」(ターム)は「健康に良く、好みに合った」と意味するので、彼等が、貧しき者に、身体に良くその好み通りの食事を提供した事になる。

18．彼等はそこで生姜(しょうが)をほどよく混ぜた盃のもてなしをうけん、（注７）

وَيُسْقَوْنَ فِيهَا كَأْسًا كَانَ مِزَاجُهَا زَنجَبِيلًا ﴿١٨﴾

19．サルサビールと呼ばれる楽園の泉より汲まれしもの。（注８）

عَيْنًا فِيهَا تُسَمَّىٰ سَلْسَبِيلًا ﴿١٩﴾

20．年とらぬ小姓(こしょう)たちありて、彼等に給仕せん。その小姓(こしょう)たちは散らばれる真珠と見まごうばかり。

وَيَطُوفُ عَلَيْهِمْ وِلْدَانٌ مُّخَلَّدُونَ إِذَا رَأَيْتَهُمْ حَسِبْتَهُمْ لُؤْلُؤًا مَّنثُورًا ﴿٢٠﴾

21．汝これを見る時、至福と偉大なる神の国をそこに見ん。（注９）

وَإِذَا رَأَيْتَ ثَمَّ رَأَيْتَ نَعِيمًا وَمُلْكًا كَبِيرًا ﴿٢١﴾

22．彼等は緑の紗綾(さや)、金襴(きんらん)の衣を身にまとい、白銀(しろがね)の腕環もて飾られん。而(しか)して主お手ずから浄(きよ)き飲物を賜(たま)わらん。（注10）

عَالِيَهُمْ ثِيَابُ سُندُسٍ خُضْرٌ وَإِسْتَبْرَقٌ وَحُلُّوا أَسَاوِرَ مِن فِضَّةٍ وَسَقَاهُمْ رَبُّهُمْ شَرَابًا طَهُورًا ﴿٢٢﴾

23．「これぞお前たちへの報奨なり。お前たちの精進は認められたり」

إِنَّ هَٰذَا كَانَ لَكُمْ جَزَاءً وَكَانَ سَعْيُكُم مَّشْكُورًا ﴿٢٣﴾

第二項

24．げにわれらは、少しずつ汝にクルアーンを啓示せり。（注11）

إِنَّا نَحْنُ نَزَّلْنَا عَلَيْكَ الْقُرْآنَ تَنزِيلًا ﴿٢٤﴾

注７　カフール（はっか）とザンジャビール（生姜）が述べられているこの二節は、二つの段階への注意を喚起している。感情の奴隷の低い地位から、徳の最高位へと魂の向上を果たす為には、信者はこの段階を経ねばならない。有害な事が廃され、感情の渦が静められる第一段階はカフール（はっか）の段階と名付けられている。それは、はっかが感情の強い力を抑える効力を持つのと同様に、この段階では、唯・有害な事が抑えられるだけだからである。しかし、ザンジャビール（生姜）の段階と呼ばれる第二段階においては、あらゆる困難克服に必要な精神力が獲得される。精神構造に強壮剤の効果がある魂の生姜は、魂に栄養を与える神の美と栄光の現れである。この明示に力付けられた魂の旅人は、その魂の旅の途上に出くわした、荒涼とした砂漠を横切る事も、険しい山を登る事もできるのである。

注８　「サルサビール」というのは「道を尋ねる」という意味である。ザンジャビールの段階では、魂の旅人は神の愛に酔いしれる為、神にお会いしたいという尊大な願いの中で、神の入口へ如何にすれば早く近付けるかと、あちこちで会う人毎に尋ねまわる、と当節は示している。

注９　高潔なる信者が来世に約束された魂の王国に加えて、モハッマド預言者の仲間達は、現世で、当時の大帝国の支配権を与えられた。

注10　魂の旅のカフールの段階で、神に夢中になった旅人は、神の愛のワインを飲みたがると記されているが（当章６節）、ザンジャビールの段階になれば、彼は他人から元気づける飲み物が与えられ（８節）、最後のサルサビールの段階に至れば、神御自身が永遠の命の秘薬を彼に授けられる。これは、この三種の飲料の重要な格付けとなる。はっかは冷やし、生姜は暖める効果があり、サルサビールは自ずと定められた針路を進み続ける事を意味する。第一の飲料は、はっかで加減されており、感情を静めるのに役立つ。生姜を加味した第二の飲料は、正義を求める気持ちを起こさせる。そしてサルサビールの段階に至れば、信者は自ずと正義の道を行くのである。

注11　クルアーンは徐々に啓示された。その啓示は23年にも及んだ。このゆるやかな過程には二つの目的があった。それは、信者がクルアーンを学び・覚え・自分のものにし、その教義に従い彼等の生活を作りあげる

25. されば耐え忍びて、主の審判を待て。而して、罪人や忘恩の徒輩に従うなかれ。

فَاصْبِرْ لِحُكْمِ رَبِّكَ وَلَا تُطِعْ مِنْهُمْ آثِمًا أَوْ كَفُورًا ﴿٢٥﴾

26. 而して、朝な夕な主の御名を讃え奉れ。

وَاذْكُرِ اسْمَ رَبِّكَ بُكْرَةً وَأَصِيلًا ﴿٢٦﴾

27. また、夜半に起きて、主の御前にぬかずき、長き夜に主を讃美し奉れ。

وَمِنَ اللَّيْلِ فَاسْجُدْ لَهُ وَسَبِّحْهُ لَيْلًا طَوِيلًا ﴿٢٧﴾

28. げにこれ等の者どもは現世のくらしを愛し、来るべき重大な日を閑却す。

إِنَّ هَٰؤُلَاءِ يُحِبُّونَ الْعَاجِلَةَ وَيَذَرُونَ وَرَاءَهُمْ يَوْمًا ثَقِيلًا ﴿٢٨﴾

29. 彼等を創り、その四肢五体を堅牢ならしめたは、われらなり。われらもし欲しなば、いつでもわれらは彼等に似たる者を以て、彼等の代りとすること可なり。（注 12）

نَحْنُ خَلَقْنَاهُمْ وَشَدَدْنَا أَسْرَهُمْ ۖ وَإِذَا شِئْنَا بَدَّلْنَا أَمْثَالَهُمْ تَبْدِيلًا ﴿٢٩﴾

30. げにこは訓戒なり。されば望む者には主への道を辿らしめよ。

إِنَّ هَٰذِهِ تَذْكِرَةٌ ۖ فَمَنْ شَاءَ اتَّخَذَ إِلَىٰ رَبِّهِ سَبِيلًا ﴿٣٠﴾

31. されどアッラー欲すに非ずば、お前たちはその気が起こるまいが。げにアッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَمَا تَشَاءُونَ إِلَّا أَنْ يَشَاءَ اللَّهُ ۚ إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَلِيمًا حَكِيمًا ﴿٣١﴾

32. アッラーは御心にかなう者はその慈悲に浴せしめ、不義なす徒輩には苛き懲罰を用意せり。（注 13）

يُدْخِلُ مَنْ يَشَاءُ فِي رَحْمَتِهِ ۚ وَالظَّالِمِينَ أَعَدَّ لَهُمْ عَذَابًا أَلِيمًا ﴿٣٢﴾

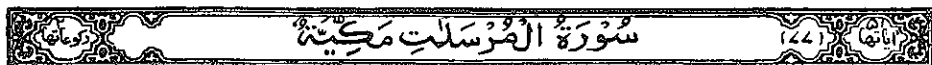
助けとなった。この漸進的な過程は又、状況の変化により増して行く必要に応じる為であり、更には、その間に、初期にクルアーンに記された預言の成就を目撃する機会がイスラム教徒に与えられる為、彼等の信仰が強められる事を意図していた。クルアーンのこの漸進的な啓示は又、次の聖書の預言を成就した。

『戒めに戒め、規則に規則、ここに少し、あそこに少し』と。誠に主は、もつれた舌で、外国の言葉で、この民に語られる。（イザヤ書 28：10）

注 12　神は、向上し、その身に神の属性を表すに最も適した様に、人間をお作りになられた (95：5)。それ故、もし不信心者がクルアーン教義の恩恵に浴する事を拒めば、彼等は他の人々に取って代られるであろう。

注 13　（ア）本文中の意味の外、当節は次の事を示す。(1)神のもとへ向い、神の恵みを授けられたいという貴人方の意志を実行に移す事が、神の御意志である。(2)もし神の御意志に沿わなければ、貴人方は神のもとへ向うことはできない。(3)貴人方の意志より神の御意志を優先させるべきだが、貴人方はそれをしなかったようだ。

（イ）神の戒律に従い、神の恩恵に浴したいと自ら願う者に、神は恩恵を授けられる、と当節は示してもいるようだ。

سُورَةُ الْمُرْسَلَاتِ مَكِّيَّةٌ (٧٧)

アル・ムルサラート
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。　بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ①

2．正義を広めんために遣わされたる者にかけて、(注1)　وَالْمُرْسَلَاتِ عُرْفًا ②

3．強く押す者にかけて、(注2)　فَالْعَاصِفَاتِ عَصْفًا ③

4．真理を普及し、公正を広めるその力にかけて、(注3)　وَالنَّاشِرَاتِ نَشْرًا ④

5．それは善悪を完全に区別する者。(注4)　فَالْفَارِقَاتِ فَرْقًا ⑤

6．彼等は訓戒を遍く運ぶ、　فَالْمُلْقِيَاتِ ذِكْرًا ⑥

7．容赦のため、または戒めのために。(注5)　عُذْرًا أَوْ نُذْرًا ⑦

8．げにお前たちに約束されたることは、必ず起らん。　إِنَّمَا تُوعَدُونَ لَوَاقِعٌ ⑧

9．あまたの星がその光りを消される時、(注6)　فَإِذَا النُّجُومُ طُمِسَتْ ⑨

10．天がばらばらに引き裂かれる時、(注7)　وَإِذَا السَّمَاءُ فُرِجَتْ ⑩

注1　当節及び次の四節に述べられている物は、その働き・存在の如何を問わず、風・天使・神の使者・その弟子を、特にモハッマド預言の仲間を語る為に、様々な典拠により取上げられて来た。モハッマド預言者の仲間に関して言えば、彼等は初め、ゆるやかにイスラム教義を広める、と当節は示しているのだろう。

注2　伝道に伴なう初期の困難が克服された後、モハッマド預言者の仲間達は、より速く歩を進め、精力的にイスラムのお告げを伝えるであろう。あるいは、クルアーンの教義に支えられ、折れたわらが風に吹き飛ばされる様に、彼等は、その前に立ちはだかる偽りや悪の勢力を追い散らす、と当節は意味するといえる。

注3　彼等は、神のお告げを誉め称え、遙かかなたへ広める。又は、善の種子を到る所にまく。

注4　クルアーンのおつげ普及に伴い、真実は虚偽と、善なる者は悪なる者と区別されるであろう。

注5　彼等が伝え、託された任務を十二分に果たした事を、事実は証明するであろう、と当節は示している。

注6　当節は、様々な災難が人々にふりかかろうとする時を意味する。アラブの人々は、星の消失を、惨事が差し迫っている徴候とみなした。

注7　大惨事が世に起こる時。

11．山々が塵の如く吹きとばされる時、（注８）	وَإِذَا الْجِبَالُ نُسِفَتْ ١١
12．使徒たちが時を定めて召集される時、(注9）	وَإِذَا الرُّسُلُ أُقِّتَتْ ١٢
13．その定めの時はいつまで延期されるや？	لِأَيِّ يَوْمٍ أُجِّلَتْ ١٣
14．判決の日までなり。	لِيَوْمِ الْفَصْلِ ١٤
15．判決の日の何んたるかを汝に知らしむるものは何か？	وَمَا أَدْرَاكَ مَا يَوْمُ الْفَصْلِ ١٥
16．すなわち真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな！	وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِلْمُكَذِّبِينَ ١٦
17．われらは昔、いくたの民を滅ぼしたに非ずや？	أَلَمْ نُهْلِكِ الْأَوَّلِينَ ١٧
18．而(しか)して今、われらは後の世の民に彼等の後を継がしめん。	ثُمَّ نُتْبِعُهُمُ الْآخِرِينَ ١٨
19．われらはかくの如く罪人(つみびと)を裁く。	كَذَٰلِكَ نَفْعَلُ بِالْمُجْرِمِينَ ١٩
20．真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな！	وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِلْمُكَذِّبِينَ ٢٠
21．われらはお前たちをとるに足らぬ一滴の液体から創り、	أَلَمْ نَخْلُقْكُمْ مِنْ مَاءٍ مَهِينٍ ٢١
22．それを安全な場所に置きしに非ずや、	فَجَعَلْنَاهُ فِي قَرَارٍ مَكِينٍ ٢٢
23．定められたる期限まで？	إِلَىٰ قَدَرٍ مَعْلُومٍ ٢٣
24．これみなわれらの計らいなり。われらの計らいのなんと見事なことよ！（注10）	فَقَدَرْنَا فَنِعْمَ الْقَادِرُونَ ٢٤
25．真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな！	وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِلْمُكَذِّبِينَ ٢٥

注８　大変革が生じる時、又は、権力ある者が失脚する時。あるいは、古くからある制度が完全に崩壊する時。つまり、腐敗した秩序が全て絶える時。

注９　偉大なる神の指導者が、いわば神の使者達全てのマントをまとうかの様に、彼等の力と精神を身に付けて現れる時。

注10　子宮の中で精子が発達し、一人の人間へと育って行く、実に創造の驚異とも言うべき神秘的な過程を、当節及び前三節は述べている。この創造の過程は、復活を支持する論拠として提示されている。それは、母親の子宮が現世における人の生命に例えられ、人の誕生が復活に例えられておりこの両者の間にみごとな対比が存在するからである。

26．われらは大地を容器となさざりしか、

أَلَمْ نَجْعَلِ الْأَرْضَ كِفَاتًا ﴿٢٦﴾

27．生者並びに死者のために？（注 11）

أَحْيَاءً وَأَمْوَاتًا ﴿٢٧﴾

28．而(しか)してわれらは大地の上に山々を聳えせしめ、また飲むべき甘泉をお前たちに与えたり。（注 12）

وَجَعَلْنَا فِيهَا رَوَاسِيَ شَامِخَاتٍ وَأَسْقَيْنَاكُم مَّاءً فُرَاتًا ﴿٢٨﴾

29．真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِّلْمُكَذِّبِينَ ﴿٢٩﴾

30．彼等は命ぜられん、「さてお前たち、虚偽なりとみなせるものに向って行け。

انطَلِقُوا إِلَىٰ مَا كُنتُم بِهِ تُكَذِّبُونَ ﴿٣٠﴾

31．然(しか)り、三つ股に分れた陰に向って行け。(注13)

انطَلِقُوا إِلَىٰ ظِلٍّ ذِي ثَلَاثِ شُعَبٍ ﴿٣١﴾

32．そは陰の役には立たず、焔を防いではくれはせぬ」と。（注 14）

لَّا ظَلِيلٍ وَلَا يُغْنِي مِنَ اللَّهَبِ ﴿٣٢﴾

33．焔の火花は巨大な城郭の如し、（注 15）

إِنَّهَا تَرْمِي بِشَرَرٍ كَالْقَصْرِ ﴿٣٣﴾

34．さながら黄褐色の駱駝(らくだ)の如し。（注 16）

كَأَنَّهُ جِمَالَتٌ صُفْرٌ ﴿٣٤﴾

35．真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِّلْمُكَذِّبِينَ ﴿٣٥﴾

注 11　人は皆この世に生き、死すれば、その亡骸はそれぞれこの世に残る。当節は又、重力の法則、あるいは、地球の自転と公転を示しているとも言える。前節の「容器」という語は、人間が肉体的に必要とするものは全て、地上で満たされる、と示してもいる。

注 12　山は自然の巨大な貯水池として役立つ。

注 13　不信心者の誤った信仰・愚かな慣習は、次節で、三つ叉の影の形を取っている。あるいは、イブナバスによれば、これはキリスト教の三位一体説を指している。又、不信心者が左右から、そして上からも罰せられる事を、当節は示しているとも言える。更には、徳育の教師達は、人の義務の認識を阻もうとする三つの要素、感受性の無さ、思慮の欠除、判断の無さ、を指摘する。同様に、三つの要素は、向上したいと願う道徳的な衝動を阻止するもの、恐れ、傲慢、肉欲にも当てはまる。心理学用語では、三つの要素は、人を地獄へ送り込む原因となる、認識と理性の誤り、性の過失、意志の弱さ、を指すとも言える。

注 14　56：43－45 参照。

注 15　不信心者達は安楽を求め、城や堂々たる建物を誇ったので、彼等の罪は、巨大で城の様に高く燃え上る炎の形を取るであろう。

注 16　アラブ人達は、彼等の富を最大に生み出す自分達の駱駝を誇った。

36. この日は彼等もの云うことを許されざる日なり。（注 17）

هٰذَا يَوْمُ لَا يَنْطِقُونَ ﴿٣٦﴾

37. 弁解も許されざるべし。（注 18）

وَلَا يُؤْذَنُ لَهُمْ فَيَعْتَذِرُونَ ﴿٣٧﴾

38. 真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِلْمُكَذِّبِينَ ﴿٣٨﴾

39. 「こは判決の日なり。われらはお前たちや遠い昔の人々を召集せり。

هٰذَا يَوْمُ الْفَصْلِ جَمَعْنَاكُمْ وَالْأَوَّلِينَ ﴿٣٩﴾

40. お前たちに策略あらば、われに対してそれを用いよ」（注 19）

فَإِنْ كَانَ لَكُمْ كَيْدٌ فَكِيدُونِ ﴿٤٠﴾

41. 真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِلْمُكَذِّبِينَ ﴿٤١﴾

第二項

42. 義(ただ)しき人々は木陰と泉の間でくらさん、

إِنَّ الْمُتَّقِينَ فِي ظِلَالٍ وَعُيُونٍ ﴿٤٢﴾

43. 好きな種々の果物に囲まれて。

وَفَوَاكِهَ مِمَّا يَشْتَهُونَ ﴿٤٣﴾

44. 「楽しく食い且つ飲め、こはお前たちの所業に対する報いなり」

كُلُوا وَاشْرَبُوا هَنِيئًا بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٤٤﴾

45. かくの如く、われらは善行を積(つ)む人々を報奨す。

إِنَّا كَذٰلِكَ نَجْزِي الْمُحْسِنِينَ ﴿٤٥﴾

46. 真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِلْمُكَذِّبِينَ ﴿٤٦﴾

47. 「真理を拒否する者どもよ、束の間の現世で食い且つ楽しめ。げにお前たちは罪人(つみびと)なり」

كُلُوا وَتَمَتَّعُوا قَلِيلًا إِنَّكُمْ مُجْرِمُونَ ﴿٤٧﴾

48. 真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِلْمُكَذِّبِينَ ﴿٤٨﴾

49. 「ぬかずいて崇めよ」と告げられるも、彼等はぬかずかず。

وَإِذَا قِيلَ لَهُمُ ارْكَعُوا لَا يَرْكَعُونَ ﴿٤٩﴾

注 17　36 章 66 節参照。

注 18　不信心者の有罪は確定したので、最早如何なる申し開きも許されないであろう。

注 19　モハッマド預言者の敵共は、彼に対し悪事の限りを尽して挑んだ。

50．真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな！　　وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِّلْمُكَذِّبِينَ ۝٥٠

51．ならばこの後、彼等は如何なる説教を信ぜんとするか？（注20）　　فَبِأَيِّ حَدِيثٍ بَعْدَهُۥ يُؤْمِنُونَ ۝٥١

注20　この不運な不信心者達は、クルアーンの様な正しい聖典の受け入れを拒んだので、神の御声を耳にする事も、又正しい道を見い出す事もないであろう。

سُورَةُ النَّبَإِ مَكِّيَّةٌ

アル・ナバ
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。	بِسۡمِ ٱللَّهِ ٱلرَّحۡمَٰنِ ٱلرَّحِيمِ ①
2．彼等は互に何について相問うか？	عَمَّ يَتَسَآءَلُونَ ②
3．重大なる知らせなり、(注1)	عَنِ ٱلنَّبَإِ ٱلۡعَظِيمِ ③
4．彼等はそれについて意見を異にす。(注2)	ٱلَّذِي هُمۡ فِيهِ مُخۡتَلِفُونَ ④
5．否、そのうちわかるべし。	كَلَّا سَيَعۡلَمُونَ ⑤
6．否、われら再び云う、彼等そのうちわかるべし。	ثُمَّ كَلَّا سَيَعۡلَمُونَ ⑥
7．われら大地を臥所となし、	أَلَمۡ نَجۡعَلِ ٱلۡأَرۡضَ مِهَٰدٗا ⑦
8．山々を天幕の綱を張る杭となさざりしか？	وَٱلۡجِبَالَ أَوۡتَادٗا ⑧
9．またわれらは、お前たちを番に創り、	وَخَلَقۡنَٰكُمۡ أَزۡوَٰجٗا ⑨
10．休息のために睡眠を定め、	وَجَعَلۡنَا نَوۡمَكُمۡ سُبَاتٗا ⑩
11．夜を衣となし、	وَجَعَلۡنَا ٱلَّيۡلَ لِبَاسٗا ⑪
12．昼を生業の時と定めたり。	وَجَعَلۡنَا ٱلنَّهَارَ مَعَاشٗا ⑫
13．またわれらは、お前たちの頭上に堅固な七層の天を築き、(注3)	وَبَنَيۡنَا فَوۡقَكُمۡ سَبۡعٗا شِدَادٗا ⑬
14．太陽を以て燦然たる燈明となせり。	وَجَعَلۡنَا سِرَاجٗا وَهَّاجٗا ⑭

注1　重大なる知らせ、又は出来事を意味する語、アンナバに、修飾語アル・アズィーム(力強い)を付けたという事は、此所に述べられた出来事が非常に重要であることを示している。

注2　不信心者達は、裁きの日のある事を信じない。

注3　太陽が中心となる太陽系の七つの主要惑星。又は、23章に述べられた、人の精神的発達の七つの段階。

15．またわれらは、雨雲より沛然たる水を降し、
وَّاَنْزَلْنَا مِنَ الْمُعْصِرٰتِ مَآءً ثَجَّاجًا ﴿١٥﴾

16．之によって穀物と草木を生ぜしめたり、
لِّنُخْرِجَ بِهٖ حَبًّا وَّنَبَاتًا ﴿١٦﴾

17．木々繁る果樹園も。（注４）
وَّجَنّٰتٍ اَلْفَافًا ﴿١٧﴾

18．げに判決の日は定められたり。
اِنَّ يَوْمَ الْفَصْلِ كَانَ مِيْقَاتًا ﴿١٨﴾

19．その日、喇叭が鳴りひびくや、お前たち群をなして集り来るべし。（注５）
يَّوْمَ يُنْفَخُ فِى الصُّوْرِ فَتَاْتُوْنَ اَفْوَاجًا ﴿١٩﴾

20．天は開かれ、悉く門となり、（注６）
وَّفُتِحَتِ السَّمَآءُ فَكَانَتْ اَبْوَابًا ﴿٢٠﴾

21．山々は移し去られて、恰も蜃気楼と化さん。（注７）
وَّسُيِّرَتِ الْجِبَالُ فَكَانَتْ سَرَابًا ﴿٢١﴾

22．げに地獄は待ち伏せ場所に在り、
اِنَّ جَهَنَّمَ كَانَتْ مِرْصَادًا ﴿٢٢﴾

23．背逆者の行先にして、
لِّلطّٰغِيْنَ مَاٰبًا ﴿٢٣﴾

24．彼等永劫にその中に住みとどまらん。
لّٰبِثِيْنَ فِيْهَاۤ اَحْقَابًا ﴿٢٤﴾

25．彼等はそこにて涼を知らず、飲むべきものもなし。
لَا يَذُوْقُوْنَ فِيْهَا بَرْدًا وَّلَا شَرَابًا ﴿٢٥﴾

26．ただ煮えたぎる熱湯と悪臭を放つ液体あるのみ。（注８）
اِلَّا حَمِيْمًا وَّغَسَّاقًا ﴿٢٦﴾

27．これすなわち応報なり。
جَزَآءً وِّفَاقًا ﴿٢٧﴾

28．げに彼等は清算を恐れず、
اِنَّهُمْ كَانُوْا لَا يَرْجُوْنَ حِسَابًا ﴿٢٨﴾

注４　７－17節には、人の肉体を維持する上で必要な、基本的な神の恵みのいくつかが取り上げられているが、人の肉体的維持に適切な配慮をなされた神が、一方でその精神維持には同様の準備を怠られた、とは有り得ない事だと暗示している。

注５　裁きの日、つまりメッカ陥落の日に、クライシュはらっぱの音で呼び出されたかの様に、モハッマド預言者の前に集められ、罪の許しを請うた。

注６　その時、正義なる者を支持し、悪なる者を混乱させる神のしるしが、数多く示された。

注７　当節は次の事を示す。(1)権力と地位のある者は、その権威と力を失うであろう。(2)イスラム教による征服の突撃を前にして、巨大で強固な帝国は、もろい岩山の様に崩壊し、完全に消失する為、その往時の存在は唯の幻と思えるだろう。

注８　有徳者に対する、背徳者の冷淡で不法行為は、熱湯と、極めて冷たく悪臭を放つ飲料の形を取るだろう。

29．われらの神兆（しるし）を悉（ことごと）く拒否せり。

وَكَذَّبُوا بِآيَاتِنَا كِذَّابًا ﴿٢٨﴾

30．われらはそのすべてを帳簿に記載せり。(注 9)

وَكُلَّ شَيْءٍ أَحْصَيْنَاهُ كِتَابًا ﴿٢٩﴾

31．「されば汝等罰を味わえ。われらは呵責（かしゃく）以外に何ものもお前たちにふやさず」

فَذُوقُوا فَلَن نَّزِيدَكُمْ إِلَّا عَذَابًا ﴿٣٠﴾

第二項

32．げに義（ただ）しい人には本願成就（ほんがんじょうじゅ）あり、

إِنَّ لِلْمُتَّقِينَ مَفَازًا ﴿٣١﴾

33．すなわち囲まれた果樹園や葡萄畑、(注10)

حَدَائِقَ وَأَعْنَابًا ﴿٣٢﴾

34．年も頃合の乙女たち、（注 11）

وَكَوَاعِبَ أَتْرَابًا ﴿٣٣﴾

35．溢（あふ）れこぼるる酒盃なり。（注 12）

وَكَأْسًا دِهَاقًا ﴿٣٤﴾

36．そこではもはやくだらぬ話や嘘いつわりを聴かざらん。

لَّا يَسْمَعُونَ فِيهَا لَغْوًا وَلَا كِذَّابًا ﴿٣٥﴾

37．こは主よりの報奨なり、彼等の所業に応じた恩賜なり、

جَزَاءً مِّن رَّبِّكَ عَطَاءً حِسَابًا ﴿٣٦﴾

38．天地（あめつち）並びにその間の万物の主にして慈悲深い神よりの。彼等は主と言葉を交すこと得ざるべし。

رَّبِّ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا الرَّحْمَٰنِ لَا يَمْلِكُونَ مِنْهُ خِطَابًا ﴿٣٧﴾

39．聖霊や（注 13）諸天使が起立して整列する日にも、慈悲深い神が許したもう者、且

يَوْمَ يَقُومُ الرُّوحُ وَالْمَلَائِكَةُ صَفًّا لَّا يَتَكَلَّمُونَ

注 9　テレビ・ラジオ・テープレコーダー等の機器の発明により、人の行為のみならず言葉も保存・再生される様になった。

注 10　天国の恵みの中でも、ブドウの木は、クルアーンに幾度も記されている。これは、ブドウが美味で重要な食物だからである。それは長期保存が可能であり、酔いをもたらす。タクワ（正義）にも、この三つの特徴がある。それ故、ブドウの木は、正義ある者にふさわしいほうびである。

注 11　高潔なる者は、初々しく生気あふれる友や妻たちを有し、高位を享受するであろう。彼等は高貴な家柄で、大望に奮い立つであろう。クルアーンの他の箇所（56：35）で、高潔なる信者の同胞は、高貴な配偶者と記されている。天の恵みの特質と意義に関しては、52 章、55 章、56 章を参照の事。

注 12　心が、あふれんばかりに神の愛で満たされている、神に酔いしれる巡礼者は、醒める事のない精神的陶酔に加えて、当然、器に満たされた飲物を与えられるであろう。

注 13　此処にある「聖霊」とは完全なる魂、すなわちモハッマド預言者を、又「整列する日」とは、復活の日を表しているようだ。

つ正しいことのみを云う者を除いて、彼等はもの云うことを得ず。

إِلَّا مَنْ أَذِنَ لَهُ الرَّحْمٰنُ وَقَالَ صَوَابًا ﴿٣٩﴾

40．その日は必ず来る。されば欲する者をして、主におすがりせしめよ。

ذٰلِكَ الْيَوْمُ الْحَقُّ فَمَنْ شَآءَ اتَّخَذَ إِلٰى رَبِّهٖ مَاٰبًا ﴿٤٠﴾

41．げにわれらは懲罰の近からんことをお前たちに警告せり。（注 14）その日、人は己が手が先に送れるものを目の当りに見て、不信心者どもは叫ばん、「願わくは我塵埃（ちりあくた）に帰せんことを！」と。

إِنَّآ أَنْذَرْنٰكُمْ عَذَابًا قَرِيبًا يَّوْمَ يَنْظُرُ الْمَرْءُ مَا قَدَّمَتْ يَدٰهُ وَيَقُولُ الْكٰفِرُ يٰلَيْتَنِي كُنْتُ تُرٰبًا ﴿٤١﴾ ع

注 14　「懲罰」とは、現世で罪深い不信心者に下される罰を指すようだ。クルアーンの他所 (32：33) では、この罰はより近いと記されてあり、一方来世の罰はより大きい罰となってる。

سُوْرَةُ النّٰزِعٰتِ مَكِّيَّةٌ

アル・ナーズィアート
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。　　بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．荒々しく引き抜く者にかけて、　　وَالنّٰزِعٰتِ غَرْقًا ②

3．その結び目をしっかりと結ぶ者にかけて、　　وَّالنّٰشِطٰتِ نَشْطًا ③

4．迅速に滑空する者にかけて、　　وَّالسّٰبِحٰتِ سَبْحًا ④

5．他を追い抜き、　　فَالسّٰبِقٰتِ سَبْقًا ⑤

6．事を見事に処理する者にかけて誓う。　　فَالْمُدَبِّرٰتِ اَمْرًا ⑥

7．その日、大地は震えおののき、（注1）　　يَوْمَ تَرْجُفُ الرَّاجِفَةُ ⑦

8．第二の震動が之(これ)に続かん。（注2）　　تَتْبَعُهَا الرَّادِفَةُ ⑧

9．その日、人々の心はおののき、　　قُلُوْبٌ يَّوْمَئِذٍ وَّاجِفَةٌ ⑨

10．その目は伏すべし。（注3）　　اَبْصَارُهَا خَاشِعَةٌ ⑩

11．彼等は云う、「我等は以前の状態に復原せられるのか？　　يَقُوْلُوْنَ ءَاِنَّا لَمَرْدُوْدُوْنَ فِي الْحَافِرَةِ ⑪

12．なんとな！我等朽骨(きゅうこつ)となり果てりというに」と。　　ءَاِذَا كُنَّا عِظَامًا نَّخِرَةً ⑫

13．彼等はまた云う、「然(しか)らばそは失敗の帰環なり」と。　　قَالُوْا تِلْكَ اِذًا كَرَّةٌ خَاسِرَةٌ ⑬

注1　「震えおののき」は戦争に備える、という意味である。前節に布告された預言は、神の正しき下僕と悪の勢力の間で戦いが起き、その結果後者が根絶される形で成就される、と当節は示している。

注2　イスラム教徒と不信心者の間に一旦戦いが始まれば、悪の勢力が次から次へと打撃を受け、徹底的に打ち砕かれるまで、それは続くであろう。

注3　不信心者が次々に敗北を喫し、イスラム教が勝ち続けるのを目の当たりにする時、不安が彼等を襲い、“復活”はあるのではないかという恐怖が、その心を苦しめ始めるであろう。

14. ただ一声の叫びあらば、

فَإِنَّمَا هِيَ زَجْرَةٌ وَاحِدَةٌ ⑭

15. 見よ、彼等は地上に出て来たらん。

فَإِذَا هُمْ بِالسَّاهِرَةِ ⑮

16. モーゼの物語はすでに汝に達したるか？

هَلْ أَتَاكَ حَدِيثُ مُوسَىٰ ⑯

17. 主が聖なるトゥワーの谷でモーゼにお言葉をかけ、命じたり、

إِذْ نَادَاهُ رَبُّهُ بِالْوَادِ الْمُقَدَّسِ طُوًى ⑰

18. 「ファラオの所へ行け。彼は反抗せり。

اذْهَبْ إِلَىٰ فِرْعَوْنَ إِنَّهُ طَغَىٰ ⑱

19. 而（しか）してファラオに云え、『汝その身を浄めんと欲するや？

فَقُلْ هَلْ لَكَ إِلَىٰ أَنْ تَزَكَّىٰ ⑲

20. 然（しか）らば我は、汝をして主を畏れ敬わしめんがために、汝を主の許（もと）へ導かん』」と。

وَأَهْدِيَكَ إِلَىٰ رَبِّكَ فَتَخْشَىٰ ⑳

21. かくしてモーゼは偉大なる奇蹟をファラオに示したり。（注４）

فَأَرَاهُ الْآيَةَ الْكُبْرَىٰ ㉑

22. されどファラオはモーゼを拒否し、従わざりき。

فَكَذَّبَ وَعَصَىٰ ㉒

23. 而（しか）してファラオはモーゼから顔をそむけ、陰謀をたくらめり。

ثُمَّ أَدْبَرَ يَسْعَىٰ ㉓

24. ファラオはその民を集め、かく宣言せり。

فَحَشَرَ فَنَادَىٰ ㉔

25. 「余はお前たちの主にして、至高者なり」

فَقَالَ أَنَا رَبُّكُمُ الْأَعْلَىٰ ㉕

26. さればアッラーはファラオを捕え、来世並びに現世の懲罰を加えたり。

فَأَخَذَهُ اللَّهُ نَكَالَ الْآخِرَةِ وَالْأُولَىٰ ㉖

27. げにこの中には、畏敬する者への教訓あり。

إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَعِبْرَةً لِمَنْ يَخْشَىٰ ㉗

第二項

28. お前たちを創ることと、天を創ること、果していずれが難事なるか？アッラーはその天を創りたり。（注５）

أَأَنْتُمْ أَشَدُّ خَلْقًا أَمِ السَّمَاءُ ۚ بَنَاهَا ㉘

注４　「偉大なる奇蹟」は、モーゼにより示された他の全てのしるしに先立つ杖のしるしであった。

注５　複雑だが完全な、太陽系の創造は、事実、死後の生を支持する不可侵な論拠となっている。つまり、その様に広大な宇宙を無からお創りになった神は、その中でほんの小さな点にしか過ぎない人間に、死後新たな生命を与えることもお出来になられた。これが当節及び次の六節の主旨である。

29. 彼は高々と天を挙げ、（注6）次いで之を完全なものとなせり。

رَفَعَ سَمْكَهَا فَسَوّٰىهَا

30. 而して夜を暗くし、それより朝を生ましめたり。（注7）

وَاَغْطَشَ لَيْلَهَا وَاَخْرَجَ ضُحٰىهَا

31. 次いで大地をのべ広げたり。（注8）

وَالْاَرْضَ بَعْدَ ذٰلِكَ دَحٰىهَا

32. 彼はそれより水と牧草とを生ぜしめ、

اَخْرَجَ مِنْهَا مَآءَهَا وَمَرْعٰىهَا

33. 更に山々をしっかと据えたり。

وَالْجِبَالَ اَرْسٰىهَا

34. こはすべてお前たちとその家畜のための給養なり。

مَتَاعًا لَّكُمْ وَلِاَنْعَامِكُمْ

35. されど、大災厄来たる時、

فَاِذَا جَآءَتِ الطَّآمَّةُ الْكُبْرٰى

36. そは人がその努力せることを想起する日なり。

يَوْمَ يَتَذَكَّرُ الْاِنْسَانُ مَا سَعٰى

37. また、地獄が、目ある者の前に出現する日なり。

وَبُرِّزَتِ الْجَحِيْمُ لِمَنْ يَّرٰى

38. その時、反抗して、

فَاَمَّا مَنْ طَغٰى

39. この世を選びし者、

وَاٰثَرَ الْحَيٰوةَ الدُّنْيَا

40. その住まいは地獄の業火たるべし。

فَاِنَّ الْجَحِيْمَ هِيَ الْمَاْوٰى

41. されど主の御前に立つことを畏れ、その魂をよこしまな欲望より守りし者、（注9）

وَاَمَّا مَنْ خَافَ مَقَامَ رَبِّهٖ وَنَهَى النَّفْسَ عَنِ الْهَوٰى

42. その住まいは必ず楽園たるべし。

فَاِنَّ الْجَنَّةَ هِيَ الْمَاْوٰى

注6　屋根、天井、物の高さ、深さ、厚さを意味する。

注7　地球につきものの、夜と昼の現象は、我々が昼・夜を持つのが太陽系のしくみによるものである事から、当節ではこれを天に起因するものとしている。

注8　本文中の意味以外に、当節は、地球がより大きい集合体から漂流して来た事を示す。

注9　罪人の様に、神の前に立つのを恐れる者。又は(2)神の尊厳を恐れる者。

43．人々は汝に、「そはいつ起こる？」とその時について訊ねん。

يَسْـَٔلُونَكَ عَنِ السَّاعَةِ أَيَّانَ مُرْسٰهَا

44．されど汝はそれについて教えられるか？

فِيمَ أَنتَ مِن ذِكْرٰهَا

45．それを知るは、ただ主あるのみ。

إِلٰى رَبِّكَ مُنتَهٰهَا

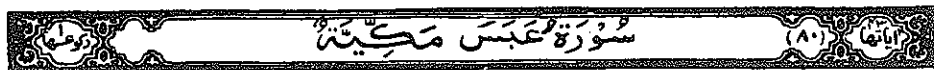
46．汝はただ、それを恐るる者への警告者にすぎぬ。

إِنَّمَآ أَنتَ مُنذِرُ مَن يَخْشٰهَا

47．その日、人はそれを目の当たりにする時、この世に滞在せるは、恰も一晩か一朝にすぎざりき、と思わん。（注10）

كَأَنَّهُمْ يَوْمَ يَرَوْنَهَا لَمْ يَلْبَثُوٓا إِلَّا عَشِيَّةً أَوْ ضُحٰهَا

注10　問題は、処罰の時・場所・形ではない。神の罰が下される時、それが余りにも早く、突然で、厳しい為、不信心者の現世における繁栄と快楽が、つかの間の、わずか一昼夜の出来事の様に思えるだろう事を、彼等が悟る事こそ、重要なのである。

سُوۡرَةُ عَبَسَ مَكِّيَّةٌ (٨٠)

アバサ

(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。 — بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ①

2．ムハンマドは眉をひそめ、顔をそむけたり、(注1) — عَبَسَ وَتَوَلّٰىٓ ②

3．そは盲人来たりし故なり。 — اَنۡ جَآءَهُ الۡاَعۡمٰى ③

4．されど汝は知り得るか、盲人がその身を浄めんとし、 — وَمَا يُدۡرِيۡكَ لَعَلَّهٗ يَزَّكّٰىٓ ④

5．または警告(いましめ)に留意し、その訓戒が彼を益するかもしらぬことを。 — اَوۡ يَذَّكَّرُ فَتَنۡفَعَهُ الذِّكۡرٰى ⑤

6．冷淡で尊大なる者には、 — اَمَّا مَنِ اسۡتَغۡنٰى ⑥

7．汝関心を示す、 — فَاَنۡتَ لَهٗ تَصَدّٰى ⑦

8．たとい浄められずとも汝に責任ない者に。(注2) — وَمَا عَلَيۡكَ اَلَّا يَزَّكّٰى ⑧

注1　当節は、有名な史実を述べている。モハッマド預言者が、ある日、数人のクライシュの指導者と信仰の事で話をしていた時、アブドゥラ・イブン・ウンメ・マクトゥームがそこにやって来た。彼は、モハッマド預言者の貴重な時と活力が、頑固な不信心者の指導の事で浪費されていると考え、モハッマド預言者の注意を引こうとし、幾つかの宗教問題の説明を請うた。モハッマド預言者は干渉を嫌い、アブドゥラから顔をそらす事で、不快を示した。モハッマド預言者がクライシュの指導者達と会話を続け、アブドゥラの干渉に注意を払わなかった事は、クライシュの指導者達の精神的福利を、彼が願っていた事を示し、同時に、この出来事は、盲人の鋭い感受性に対する彼の大いなる配慮を表してもいる。それは、彼は唯アブドゥラから顔をそ向けただけで、つまり後者が盲目だと行為で示しただけで、後者の時宜を得ない、唐突な中断を咎める言葉は一口も口にせず、その自尊心や鋭い感受性を傷付けない様に、慎重に配慮をしたからである。当節は、この様に、モハッマド預言者の高い徳性に、あふれんばかりの光を投げかけている。そして、幾人かの注釈者達が考える様な、神の非難の暗示ではなく、貧しき者、卑しき者の鋭い感受性に十分配慮する様に、モハッマド預言者に、そして彼を通してその弟子達に命じているのである。

注2　当節は、アブドゥラ・イブン・ウンメ・マクトゥームに対するモハッマド預言者の態度が正しかったと示している。クライシュの指導者がモハッマド預言者の話に何ら得る所がなかったとしても、それは彼の責任ではないと当節は述べている。アブドゥラに対する彼の一見冷淡な態度、又、クライシュの指導者への敬意を表する振る舞いは、個人的な利害を一切廃した所から生じたものであった。戒律では、唯、来訪者に対して親切に礼儀正しく接しなければならないとだけ命じられてあった。

9．然るに汝は、熱意を以て汝に来たる者を、　وَأَمَّا مَنْ جَآءَكَ يَسْعٰى ⑨

10．しかも神を畏敬する者を、　وَهُوَ يَخْشٰى ⑩

11．軽視す。(注3)　فَأَنْتَ عَنْهُ تَلَهّٰى ⑪

12．かくあるべからず！げにそは訓戒なり。(注4)　كَلَّآ إِنَّهَا تَذْكِرَةٌ ⑫

13．されば欲する者をして、之を留意せしめよ、　فَمَنْ شَآءَ ذَكَرَهُۥ ⑬

14．すなわち尊き原簿の載せられたものを、(注5)　فِى صُحُفٍ مُّكَرَّمَةٍ ⑭

15．気高く、浄きものを、　مَّرْفُوعَةٍ مُّطَهَّرَةٍۭ ⑮

16．書記たちの手になるもの、　بِأَيْدِى سَفَرَةٍ ⑯

17．高貴にして高潔な。(注6)　كِرَامٍۭ بَرَرَةٍ ⑰

18．人間に災いあれ！そはなんたる恩知らずよ！ (注7)　قُتِلَ الْإِنْسَانُ مَآ أَكْفَرَهُۥ ⑱

19．何から神に創られし身か？　مِنْ أَىِّ شَىْءٍ خَلَقَهُۥ ⑲

注3　6－11節は「汝が、尊大で冷淡な彼に配慮したり、神を恐れ汝のもとへ急いで来る者を無視する等、あるはずがない。と解釈される。しかし、これ等の節はクライシュの指導者に向けられたとも言え、ある注釈者達の言を借りれば、彼は、モハッマド預言者の所へ盲人が来た為に、眉をひそめ顔をそ向けたのである。この場合、これ等の節は、モハッマド預言者に転嫁された弱点に触れる事なく、彼を酷評する者達に彼等自身の気持をはっきり悟らせる様に、反語的に用いられたと解される。

注4　当節は、冷淡だという非難は間違いだと示している。クルアーンが富める者にも貧しき者にも等しく向けられているのに、一体、モハッマド預言者が、盲人に邪険な態度を取る事があるだろうか？　その様な行為は、彼自身の高い徳性と矛盾するのみならず、人間の理性にも反するものである。この特殊な場面でのモハッマド預言者の行為は、事態がそうさせたのであり、彼のした事は正しかった。

注5　クルアーンは、様々な啓示書に含まれる永遠不滅の教義全てを要約したものなので、いわば、全ての聖典の集大成と言える。これが「尊き原簿の載せられたもの」の意味である。当節は更に、クルアーンが聖典として書かれ、崇められ、あらゆる改ざんや干渉から守られるであろう、と述べている。

注6　先の14－15節で述べられたクルアーンの三つの主要な特性に対し、そのお告げの伝道者の三つの等しく際立った特質が、当節及び前節に述べられている。クルアーンのお告げを伝える者は、高潔である事に加え、普く旅をして、それを明らかにし広める。

注7　クルアーンは、そのお告げを受け入れるだけで、不信心者が徳の卑しさから魂の重みの高まりへと引き上げこれるように啓示されたものである。しかるに、クルアーンのごとき偉大にして高尚な聖典を拒むとは、不信心者は何と恩知らずなのだろう。

20．一滴の精液より。神は人間を創り、而してその形体を整え、

مِنْ نُّطْفَةٍ ۭ خَلَقَهٗ فَقَدَّرَهٗ ۝٢٠

21．次に体外への道を容易ならしめ、

ثُمَّ السَّبِيْلَ يَسَّرَهٗ ۝٢١

22．然る後之を死なしめ、墓に帰し、（注８）

ثُمَّ اَمَاتَهٗ فَاَقْبَرَهٗ ۝٢٢

23．次いでその欲する時に、之を再び甦らしむ。

ثُمَّ اِذَا شَاۗءَ اَنْشَرَهٗ ۝٢٣

24．否！人間は神が命ぜしことをいまだに果さざるなり。

كَلَّا لَمَّا يَقْضِ مَآ اَمَرَهٗ ۝٢٤

25．人間をして己が食物をとくと見せしめよ。

فَلْيَنْظُرِ الْاِنْسَانُ اِلٰى طَعَامِهٖٓ ۝٢٥

26．われらは沛然たる雨を降らせ、

اَنَّا صَبَبْنَا الْمَاۗءَ صَبًّا ۝٢٦

27．次いで大地を裂きて之を剖き、

ثُمَّ شَقَقْنَا الْاَرْضَ شَقًّا ۝٢٧

28．そこに穀物を生ぜしむ、

فَاَنْۢبَتْنَا فِيْهَا حَبًّا ۝٢٨

29．葡萄や野菜、

وَّعِنَبًا وَّقَضْبًا ۝٢٩

30．橄欖や棗椰子の木を。

وَّزَيْتُوْنًا وَّنَخْلًا ۝٣٠

31．囲いめぐれる庭園は樹木茂り、

وَّحَدَاۗىِٕقَ غُلْبًا ۝٣١

32．果物と牧草は、

وَّفَاكِهَةً وَّاَبًّا ۝٣٢

33．お前たちやその家畜のための食料なり。

مَّتَاعًا لَّكُمْ وَلِاَنْعَامِكُمْ ۝٣٣

34．されど、耳を聾する一声とどろくとき、

فَاِذَا جَاۗءَتِ الصَّاۗخَّةُ ۝٣٤

35．その日、人間は己れの兄弟、

يَوْمَ يَفِرُّ الْمَرْءُ مِنْ اَخِيْهِ ۝٣٥

36．己れの父母、

وَاُمِّهٖ وَاَبِيْهِ ۝٣٦

37．己れの妻や子を棄てて逃げ去らん。（注９）

وَصَاحِبَتِهٖ وَبَنِيْهِ ۝٣٧

注８　肉体を離れた後、人の魂は、現世の行状に応じ、新たな身体を得る。それこそ、人の真の墓である。それは、遺体が肉親の手で葬られる穴ではなく、魂の状態に応じて幸福にも不幸にもなる住居である。

注９　裁きの日の何と恐ろしい図であろうか。

38．みなそれぞれ自分のことを心配し、他人(ひと)のことには無関心。(注 10)

لِكُلِّ امْرِئٍ مِّنْهُمْ يَوْمَئِذٍ شَأْنٌ يُغْنِيهِ ﴿٣٨﴾

39．その日、或る者の顔は輝き、

وُجُوهٌ يَوْمَئِذٍ مُّسْفِرَةٌ ﴿٣٩﴾

40．笑い且つ喜ばん。

ضَاحِكَةٌ مُّسْتَبْشِرَةٌ ﴿٤٠﴾

41．また或る者の顔は埃(ほこり)にまみれ、

وَوُجُوهٌ يَوْمَئِذٍ عَلَيْهَا غَبَرَةٌ ﴿٤١﴾

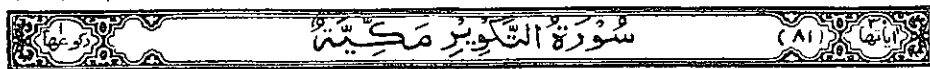
42．暗黒が之(これ)を覆わん。

تَرْهَقُهَا قَتَرَةٌ ﴿٤٢﴾

43．これ等の者どもは不信心者なり、悪人なり。

أُولَٰئِكَ هُمُ الْكَفَرَةُ الْفَجَرَةُ ﴿٤٣﴾

注 10　苦しみや悲しみの時、人は近親者のことさえ忘れがちとなる。彼は余りにも多くの問題を抱え込み、手が開(あ)かないのである。

سُورَةُ التَّكْوِيرِ مَكِّيَّةٌ

アル・タクウィール
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。　بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ (١)

2．太陽が包まれる時、(注1)　إِذَا الشَّمْسُ كُوِّرَتْ (٢)

3．星々が落ちる時、(注2)　وَإِذَا النُّجُوْمُ انْكَدَرَتْ (٣)

4．山々が吹き飛ぶ時、(注3)　وَإِذَا الْجِبَالُ سُيِّرَتْ (٤)

5．懐胎十ヵ月目の雌駱駝がうち捨てられる時、(注4)　وَإِذَا الْعِشَارُ عُطِّلَتْ (٥)

6．もろもろの野獣が一緒に集められる時、(注5)　وَإِذَا الْوُحُوْشُ حُشِرَتْ (٦)

7．海洋が澎湃たる時、(注6)　وَإِذَا الْبِحَارُ سُجِّرَتْ (٧)

注1　この章は、我々が知る様に、自然の法則及び過程が作用しなくなる最後の復活を扱うと、一般的に言われている。しかし、その全体の趣旨は、物質界の状況を明確に示す事にあり、もし最後の復活のみを語ると取れば、数節は全く意味をなさなくなる。事実、この章は、モハッマド預言者の時以降、特に現代において物質界、人間の生活の中で既に起こった大いなる変革に触れている。当節は次の事を示しているのであろう。世界中を精神的な闇が覆う時、すなわち、精神の太陽（モハッマド預言者）の光が薄れ消える時。あるいは、モハッマド預言者の有名な言葉によれば、ラマダーンの月にマハディの時に起きた、世にもまれな出来事、すなわち、日食と月食を指しているのかもしれない。この日食と月食は、預言通り1894年に起きた。

注2　この意味はモハッマド預言者の有名な言葉に裏付けられている。「我友は星の様だ。貴人達が誰に従おうとも、正しく導かれるであろう。」それ故、当節は、「宗教の指導者達が堕落し、力を行使できなくなる時」を意味する。この言葉は又、神の指導者の時に、まれに見る数多くの星が落ちて来る事をも指す様だ。

注3　山がダイナマイトで吹き飛ばされ、そこに道が通される時。比喩的には、統治者の権威が徐々に失われて行く時。ジャバル（山）という語は、人々のリーダーを意味する。

注4　雌の駱駝がアラビア人にとってさえ、価値が無くなるであろうことを当節は預言する。この言葉は、駱駝が、より速い交通機関、鉄道・蒸気船・自動車・飛行機等に取って代わられる宿命にある事を示している。モハッマド預言者の発言の中に、駱駝が次の交通機関に置き換えられるという旨の、適切な言葉がある。「駱駝は見捨てられ、場所から場所への移動に使われなくなるであろう。」(ムスリム)

注5　「集まる」(ホシェラ)の語源の様々な意味を考慮すれば、当節は次の事を指すといえよう。獣が動物園に集められる時。あるいは、未開人が組織化された文明社会に移住させられる時。又、彼等が生地を離れる様強いられる時。

注6　当節は次の事を意味する。川の水が灌漑その他の目的で抜かれる時。あるいは、海戦で大型船に火が

8．もろもろの民が一緒に連れて来られる時、（注７）	وَإِذَا النُّفُوسُ زُوِّجَتْ ﴿٨﴾
9．生埋にされし女児が	وَإِذَا الْمَوْءُودَةُ سُئِلَتْ ﴿٩﴾
10．「如何なる罪にて殺されしか？」と問われる時、（注８）	بِأَيِّ ذَنْبٍ قُتِلَتْ ﴿١٠﴾
11．書籍が広く普及する時、（注９）	وَإِذَا الصُّحُفُ نُشِرَتْ ﴿١١﴾
12．天が剥き出しにされる時、（注10）	وَإِذَا السَّمَاءُ كُشِطَتْ ﴿١٢﴾
13．業火が燃え立つ時、（注11）	وَإِذَا الْجَحِيمُ سُعِّرَتْ ﴿١٣﴾
14．天国が近づく時、（注12）	وَإِذَا الْجَنَّةُ أُزْلِفَتْ ﴿١٤﴾
15．それぞれの魂は己れのなせることを知らん。（注13）	عَلِمَتْ نَفْسٌ مَا أَحْضَرَتْ ﴿١٥﴾
16．否、われは沈み行く星々に誓う、	فَلَا أُقْسِمُ بِالْخُنَّسِ ﴿١٦﴾
17．塒に急ぐ星々に。（注14）	الْجَوَارِ الْكُنَّسِ ﴿١٧﴾
18．われはまた夜の終りに誓う、	وَاللَّيْلِ إِذَا عَسْعَسَ ﴿١٨﴾

付き、海が燃えている様に見える時。又は、大洋が運河で結ばれる時。更には、地方の人口が都会へ流れ込み、町が住民で溢れる時。

注７　交通及び通信手段が非常に発達すれば、遠隔地に住む人間の往来が容易で頻繁になり、彼等は一つに結び付られる。当節は又、類似した社会観・政治思想を持つ人々が党派をなす、とも示している。

注８　少女を生き埋めにしたり焼き殺せば、死罪となるであろう。

注９　この言葉は、新聞・雑誌・書物の普及、図書館の制度、読書室・その他の知識を広める設備や手段が、後世に生じると告げている様だ。

注10　当節は、後世に起こる宇宙科学の著しい発達を示している様だ。過去10年間における科学のこの分野の進歩は、世界を驚かせた。

注11　人の罪深く非道な行為がもとで、神の怒りに火が付き、真の地獄が壊滅的な戦争の形を取り、世に放たれるであろう。

注12　後世に、悪が巷にあふれ、人は悪事と富の神への崇拝にふける為、ささやかな善行ですら、それを為す者は大きなほうびを授けられ、神により近付くであろう。

注13　神の特命が下され、人の悪事の罰は広範囲に及ぶ自然災害の形をとるであろう。

注14　後世において、イスラム教徒はその高位から落ち始めるであろう。それは、彼等が軽率にも自ら意図した計画を実行しようと走り、あるいは失意の内に前向きな努力を放棄する為である。

19．夜明けが息づき始める時、（注 15）

وَالصُّبْحِ إِذَا تَنَفَّسَ ۝١٩

20．げにこは貴き使徒の啓示の言葉なり、(注16)

إِنَّهُ لَقَوْلُ رَسُولٍ كَرِيمٍ ۝٢٠

21．力の所有者、玉座の主の御前（みまえ）で高い地位を占め、

ذِي قُوَّةٍ عِنْدَ ذِي الْعَرْشِ مَكِيْنٍ ۝٢١

22．忠順と称され、且つその信託に忠実なる使徒の。（注 17）

مُطَاعٍ ثَمَّ أَمِيْنٍ ۝٢٢

23．お前たちの仲間は狂人に非ず。

وَمَا صَاحِبُكُمْ بِمَجْنُوْنٍ ۝٢٣

24．ムハンマドは確かに明るい地平線上にガブリエルを見たり。

وَلَقَدْ رَاٰهُ بِالْأُفُقِ الْمُبِيْنِ ۝٢٤

25．ムハンマドは不可視なることについて告ぐるを吝（おし）む者に非ず。（注 18）

وَمَا هُوَ عَلَى الْغَيْبِ بِضَنِيْنٍ ۝٢٥

26．そはまた拒否されるべき悪魔（サタン）の言葉に非ず。

وَمَا هُوَ بِقَوْلِ شَيْطٰنٍ رَّجِيْمٍ ۝٢٦

27．然（しか）らばお前たち、何処へ行くか？

فَأَيْنَ تَذْهَبُوْنَ ۝٢٧

28．こは世界中の人々への訓戒以外の何ものにも非ず、

إِنْ هُوَ إِلَّا ذِكْرٌ لِّلْعٰلَمِيْنَ ۝٢٨

29．お前たちのうち正しい道を歩まんと欲する者への。

لِمَنْ شَآءَ مِنْكُمْ أَنْ يَّسْتَقِيْمَ ۝٢٩

30．されど万物の主アッラー欲すに非ずば、お前たちは之（これ）を欲せざるべし。（注 19）

وَمَا تَشَآءُوْنَ إِلَّآ أَنْ يَّشَآءَ اللّٰهُ رَبُّ الْعٰلَمِيْنَ ۝٣٠

注 15　後世の神の指導者出現と共に、イスラム教徒の道徳的退廃の夜は去り始め、イスラムの偉大にして輝かしい未来の夜明けが取って代わるであろう。

注 16　「貴き使徒」とはモハッマド預言者の事で、一般に誤解されている様に天使長ガブリエルを指しているのではない。

注 17　五つの特性、すなわち高潔な神の使徒、力ある者、神の座の前の高位を享受する者、忠順を与えられた者、神の目に信仰に忠実と写る者、これ等は全てモハッマド預言者にそのまま当てはまる。

注 18　神は、モハッマド預言者の口を通して、未知の偉大なる神秘を世にお示しになられた。

注 19　神の御意志を求め、自らの意志に優先させる者のみが、正義の道に導かれるであろう。

سُوْرَةُ الْاِنْفِطَارِ مَكِّيَّةٌ (٨٢)

アル・インフィタール
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．天がばらばらに割れる時、（注１）
اِذَا السَّمَآءُ انْفَطَرَتْ ②

3．星々が追い散らされる時、（注２）
وَاِذَا الْكَوَاكِبُ انْتَثَرَتْ ③

4．諸方の海が流れ出て合一する時、（注３）
وَاِذَا الْبِحَارُ فُجِّرَتْ ④

5．墳墓が発かれる時、（注４）
وَاِذَا الْقُبُوْرُ بُعْثِرَتْ ⑤

6．その時、それぞれの魂は己れが先に送りしものと、引き止めしものとを知らん。（注５）
عَلِمَتْ نَفْسٌ مَّا قَدَّمَتْ وَاَخَّرَتْ ⑥

7．人間よ、慈悲深い主について、汝を欺きたるは何者ぞ、
يٰۤاَيُّهَا الْاِنْسَانُ مَا غَرَّكَ بِرَبِّكَ الْكَرِيْمِ ⑦

8．汝を創り、形を整え、而して正しく釣り合せたる主について？（注６）
الَّذِيْ خَلَقَكَ فَسَوّٰىكَ فَعَدَلَكَ ⑧

注１　この章は、キリスト教が非常に優勢で、三位一体、神の子イエス、贖罪、このキリスト教の三教義が至高を際める時を、特に取り上げている。偽りのキリスト教の教義のこの優勢に対し、クルアーンは非常に厳しい言葉を述べている。19章91, 92節参照の事。当節はこの二節に言及し、その時キリスト教の偽りの教義が世を支配し、その結果、神の怒りが下され、天罰が様々な形で世に迫る、と述べている。

注２　当節は比喩的に語り、後世において、真の魂の知識と導きを持つ者は無くなるか又は希となる、と示している。

注３　その時大海は運河を通じて繋がるだろう。あるいは、その入り口は、大船が往来できる様に、幅広く堀り下げられるであろう。この言葉は、パナマ・スエズ両運河を指している様だ。

注４　後世において、古代エジプトの墓同様に、墓は掘り出されるであろう。又、当節は、水中に沈み長い間忘れ去られた町や遺跡が発掘される、と示しているのかもしれない。

注５　当節及び次の二節では、偽りのキリスト教教義の主唱者に向けて声明が出されている。彼等は、その偽りの教えの非道を悟るであろう。

注６　神は、人間に、精神の最高峰へ登り詰める様にと、素晴らしい力と才能を授けられた。

9．主は己が欲する形に汝を形造りたり。

فِيٓ أَيِّ صُورَةٍ مَّا شَآءَ رَكَّبَكَ ⑨

10．然るにお前たちは、審判を否定す。

كَلَّا بَلْ تُكَذِّبُونَ بِالدِّينِ ⑩

11．然しながら、お前たちの上には監視者あり、

وَإِنَّ عَلَيْكُمْ لَحٰفِظِينَ ⑪

12．貴き記録者にして、(注７)

كِرَامًا كَاتِبِينَ ⑫

13．お前たちの所業を知悉す。

يَعْلَمُونَ مَا تَفْعَلُونَ ⑬

14．げに高潔な者は天国に入り、

إِنَّ الْأَبْرَارَ لَفِي نَعِيمٍ ⑭

15．邪悪な者は地獄に落ちん。

وَإِنَّ الْفُجَّارَ لَفِي جَحِيمٍ ⑮

16．審判の日には、彼等はその中で身を焼かれ、

يَصْلَوْنَهَا يَوْمَ الدِّينِ ⑯

17．そこより逃れること得ざるべし。

وَمَا هُمْ عَنْهَا بِغَآئِبِينَ ⑰

18．審判の日のなんたるかを汝に知らしむるものはなんぞや？

وَمَآ أَدْرٰىكَ مَا يَوْمُ الدِّينِ ⑱

19．重ねて云う、審判の日のなんたるかを汝に知らしむるものはなんぞや？

ثُمَّ مَآ أَدْرٰىكَ مَا يَوْمُ الدِّينِ ⑲

20．その日こそ、如何なる魂も他の魂のために一事をもなし得ざるべし。その日こそ、すべての命令はアッラーの御手に握られるべし。

يَوْمَ لَا تَمْلِكُ نَفْسٌ لِّنَفْسٍ شَيْـًٔا ۖ وَالْأَمْرُ يَوْمَئِذٍ لِّلَّهِ ⑳

注７　人は生まれながらにして自由行為者であり、自らの決断と行為に責任を持つ。この事が「貴き記録者」の手で記されている。

سُوْرَةُ التَّطْفِيْفِ مَكِّيَّةٌ (٨٣)

アル・ムタフィフィーン
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．量目をごまかす徒輩に災いあれ。
وَيْلٌ لِّلْمُطَفِّفِيْنَ ②

3．あの徒輩は、他人に量らせる時は量目を十分にさせ、
الَّذِيْنَ اِذَا اكْتَالُوْا عَلَى النَّاسِ يَسْتَوْفُوْنَ ③

4．自分が他人に量り、または秤量する時は之を減ず。
وَاِذَا كَالُوْهُمْ اَوْ وَّزَنُوْهُمْ يُخْسِرُوْنَ ④

5．かかる徒輩は再び甦らしめらるることを知らざるか、
اَلَا يَظُنُّ اُولٰٓئِكَ اَنَّهُمْ مَّبْعُوْثُوْنَ ⑤

6．恐ろしい日に、（注１）
لِيَوْمٍ عَظِيْمٍ ⑥

7．人みな万物の主の御前に立つその日のことを？
يَّوْمَ يَقُوْمُ النَّاسُ لِرَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ⑦

8．然り、悪人の記録はシッジーンの中にあり。
كَلَّآ اِنَّ كِتٰبَ الْفُجَّارِ لَفِيْ سِجِّيْنٍ ⑧

9．シッジーンがなんたるかを汝に知らしむるものはなんぞや？
وَمَآ اَدْرٰىكَ مَا سِجِّيْنٌ ⑨

10．そは永久不変の書冊なり。（注２）
كِتٰبٌ مَّرْقُوْمٌ ⑩

11．その日を虚偽なりとせる徒輩に災いあれ。
وَيْلٌ يَّوْمَئِذٍ لِّلْمُكَذِّبِيْنَ ⑪

12．審判の日を否定する徒輩よ。
الَّذِيْنَ يُكَذِّبُوْنَ بِيَوْمِ الدِّيْنِ ⑫

13．之を虚偽なりと云う者は罰当たりな罪人なり、
وَمَا يُكَذِّبُ بِهٖٓ اِلَّا كُلُّ مُعْتَدٍ اَثِيْمٍ ⑬

注１　来世には、人が自らの行為の申し開きを主に対ししなければならない、裁きの日がある。しかし、人々の悪行が法を犯した時、この裁きの日は現世においてもその者達に訪れ、彼等はそれぞれの復しゅうの女神と出会うのである。

注２　シッジーンという名は、邪悪な不信心者に対する罰が、厳しく長く続く事を示している。あるいは、当節は、邪悪な者は屈辱の中に置かれ、これは廃棄できない決定である、と意味するのかもしれない。

14．彼等はわれらの神兆を誦み聞かされるとも、「昔の物語よ」と云う者なり。　إِذَا تُتْلَىٰ عَلَيْهِ آيَاتُنَا قَالَ أَسَاطِيرُ الْأَوَّلِينَ ﴿١٣﴾

15．断じて然らず、彼等はその稼ぎしもののために、己が心を腐食せり。　كَلَّا بَلْ رَانَ عَلَىٰ قُلُوبِهِم مَّا كَانُوا يَكْسِبُونَ ﴿١٤﴾

16．然り、げに彼等は、その日、主を拝するを禁じられん。（注３）　كَلَّا إِنَّهُمْ عَن رَّبِّهِمْ يَوْمَئِذٍ لَّمَحْجُوبُونَ ﴿١٥﴾

17．それどころか、彼等は必ず地獄で焼かれ、　ثُمَّ إِنَّهُمْ لَصَالُوا الْجَحِيمِ ﴿١٦﴾

18．あまつさえかく云われん、「お前たちが日頃否認せるものは、これなり」と。　ثُمَّ يُقَالُ هَٰذَا الَّذِي كُنتُم بِهِ تُكَذِّبُونَ ﴿١٧﴾

19．然るに、義しい者の記録は、イルリイーンの中にあり。（注４）　كَلَّا إِنَّ كِتَابَ الْأَبْرَارِ لَفِي عِلِّيِّينَ ﴿١٨﴾

20．イルリイーンがなんたるかを汝に知らしむるものはなんぞや？（注５）　وَمَا أَدْرَاكَ مَا عِلِّيُّونَ ﴿١٩﴾

21．そは永久不変の書冊なり。　كِتَابٌ مَّرْقُومٌ ﴿٢٠﴾

22．神の側近く伺候する天使らがそれを証明せん。　يَشْهَدُهُ الْمُقَرَّبُونَ ﴿٢١﴾

23．げに義しき者は至福にひたらん、　إِنَّ الْأَبْرَارَ لَفِي نَعِيمٍ ﴿٢٢﴾

24．榻牀に坐してあたりを眺めながら。　عَلَى الْأَرَائِكِ يَنظُرُونَ ﴿٢٣﴾

25．汝は彼等の面上に歓喜の光輝を見ん。　تَعْرِفُ فِي وُجُوهِهِمْ نَضْرَةَ النَّعِيمِ ﴿٢٤﴾

注３　神への拝謁は、二段階に分けて信者に許される。第一段階は、信じる段階であり、この時信者は神の特質を確信する。第二段階、つまりより高い段階になると、神の悟りを授けられる。罪人は、その罪故に、裁きの日に神の悟りを与えられないままに、神のお顔を拝見できないであろう。

注４　イッリイーンは、「高かった」あるいは「高くなった」という意味の語、派生したものと考える人もおり、高潔なる信者が享受する最高位を意味する。ムフラダート辞典によれば、イッリイーンというのは他者より精神的な優位を享有するのは、この様な高潔な信者の高みのことである。この言葉は又、信者の大いなる向上と繁栄についての預言を含むクルアーンの箇所をも指す。イブン・アバースによれば、この語は天国を意味し一方イマーム・ラーギブは、それは天国の住人の名であると考える。

注５　シッジーンが単数形でありイッリイーンが複数形である事から、悪者の罰は動きの無いもの、つまり一箇所に留め置かれるもので、他方正義なる者の魂の向上は、形を変えつつ、絶えず続いて行く、と示している。彼等は一つの位からより高位へと上って行くであろう。

26．彼等は封印されたる醇酒をすすめられん。（注6）

يُسْقَوْنَ مِنْ رَّحِيْقٍ مَّخْتُوْمٍ ﴿٢٦﴾

27．その封印は麝香なり、さればその酒が欲しいなら、大いに努めをはげめ。

خِتٰمُهٗ مِسْكٌ ۚ وَفِيْ ذٰلِكَ فَلْيَتَنَافَسِ الْمُتَنَافِسُوْنَ ﴿٢٧﴾

28．そはタスニームの水で割られん、

وَمِزَاجُهٗ مِنْ تَسْنِيْمٍ ﴿٢٨﴾

29．神の側近く伺候する天使らが飲む泉の。

عَيْنًا يَّشْرَبُ بِهَا الْمُقَرَّبُوْنَ ﴿٢٩﴾

30．罪人どもは信心深い人々を日頃嘲笑せり。（注7）

اِنَّ الَّذِيْنَ اَجْرَمُوْا كَانُوْا مِنَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا يَضْحَكُوْنَ ﴿٣٠﴾

31．信徒らが彼等のそばを通りすぎると、互に目くばせし、

وَاِذَا مَرُّوْا بِهِمْ يَتَغَامَزُوْنَ ﴿٣١﴾

32．家族のところへ戻るや、嘲り笑いたり。

وَاِذَا انْقَلَبُوْٓا اِلٰٓى اَهْلِهِمُ انْقَلَبُوْا فَكِهِيْنَ ﴿٣٢﴾

33．また、彼等は信者を見ると、「げにこの者たちは邪道にはまりし輩なり」と云えり。

وَاِذَا رَاَوْهُمْ قَالُوْٓا اِنَّ هٰٓؤُلَآءِ لَضَآلُّوْنَ ﴿٣٣﴾

34．然れども彼等は、信者たちの監視人として遣わされたるに非ず。

وَمَآ اُرْسِلُوْا عَلَيْهِمْ حٰفِظِيْنَ ﴿٣٤﴾

35．さればその日、信者たちは不信心者どもを笑わん、

فَالْيَوْمَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مِنَ الْكُفَّارِ يَضْحَكُوْنَ ﴿٣٥﴾

36．榻牀に坐してあたりを眺めながら。（注8）

عَلَى الْاَرَآئِكِ يَنْظُرُوْنَ ﴿٣٦﴾

37．不信心者どもはその所業に対して返報されざるか？

هَلْ ثُوِّبَ الْكُفَّارُ مَا كَانُوْا يَفْعَلُوْنَ ﴿٣٧﴾

注6　「醇酒」がクルアーンを指すとすれば、タスニームは、神の選民、モハッマド預言者の高潔なる弟子達に授けられる啓示と考えられるであろう。この「醇酒」は、精神的飲みものを意味し、飲んで酔う実際の酒を意味していない。

注7　イスラム教が、その存続の為に、一見負け戦を戦っていた時になされた、イスラム教の急速な普及と勝利の預言を、不信心者達は内心あざ笑ったものだった。

注8　この言葉は次の事を意味する。(1)高位の座につくので、信者達は、傲慢な不信心者の哀れな運命を目撃するであろう。又は、(2)彼等は権力の座にある為、人々を裁くであろう。あるいは、(3)彼等は他人の要求に十分配慮するであろう。

سُوْرَةُ الْاِنْشِقَاقِ مَكِّيَّةٌ (٨٤)　آياتها ٢٦　ركوعها ١

アル・インシクァーク
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍く アッラーの御名において。
بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．天が粉々に破裂し、(注1)
اِذَا السَّمَآءُ انْشَقَّتْ ②

3．主の命に耳を傾ける時 (注2) —これすなわち天の務めなり—
وَاَذِنَتْ لِرَبِّهَا وَحُقَّتْ ③

4．大地が伸べ広げられ、(注3)
وَاِذَا الْاَرْضُ مُدَّتْ ④

5．地の中にあるすべてを吐き出し、空虚となり、(注4)
وَاَلْقَتْ مَا فِيْهَا وَتَخَلَّتْ ⑤

6．主の命に耳を傾ける時—これすなわち大地の務めなり—
وَاَذِنَتْ لِرَبِّهَا وَحُقَّتْ ⑥

7．汝人間よ、主への道を辿ることは実に辛いが、汝は必ず主に見えん。
يٰۤاَيُّهَا الْاِنْسَانُ اِنَّكَ كَادِحٌ اِلٰى رَبِّكَ كَدْحًا فَمُلٰقِيْهِ ⑦

8．その時、右手に、己が行状の記録簿を渡される者は、
فَاَمَّا مَنْ اُوْتِيَ كِتٰبَهٗ بِيَمِيْنِهٖ ⑧

9．必ず楽な清算を受け、
فَسَوْفَ يُحَاسَبُ حِسَابًا يَّسِيْرًا ⑨

10．喜んでその家族のところへ帰らん。
وَّيَنْقَلِبُ اِلٰۤى اَهْلِهٖ مَسْرُوْرًا ⑩

注1　天国の門が開かれ、クルアーンを支持する天のお告げが数多く現れ、高位の人々が、啓示された手本について思索を始める時。当節は、この時の事を述べている。

注2　新たに一人のアダムが生まれ、天国の天使達は、彼の神の使命推進及び伝達を助けようと、彼の側に立つであろう (69：18)。それは、この事こそ、彼等が作り出された主な目的であり、彼等の義務だからである。

注3　地球は寿命が延び、人の罪故に受けるべき崩壊は引き延ばされるであろう。そして、そこに住む人々の魂の向上の為に、新たな手段が与えられるであろう。当節は又、天に属するとみえる惑星の幾つかが、地球のある地域で発見され、人がロケット等を使ってそこへ行こうとするだろう、とも示している。

注4　地球は隠された財宝を余りにも多く取り除く為、地球自体が「空虚」の様に見えるであろう。

11. 然るに、背後に、己が行状の記録簿を渡される者は、(注5)

وَأَمَّا مَنْ أُوتِيَ كِتَابَهُ وَرَاءَ ظَهْرِهِ ⑪

12. いっそ死をと叫びながら、(注6)

فَسَوْفَ يَدْعُوا ثُبُورًا ⑫

13. 燃え盛る業火に焼かれるべし。

وَيَصْلَىٰ سَعِيرًا ⑬

14. げに彼は、すぎし日々、家族と偕に楽しく暮らしたり。

إِنَّهُ كَانَ فِي أَهْلِهِ مَسْرُورًا ⑭

15. 神の御許に帰ること決してあるまじ、と彼は思いたり。

إِنَّهُ ظَنَّ أَنْ لَنْ يَحُورَ ⑮

16. 然らず、主は彼をつぶさに照覧せり。

بَلَىٰ إِنَّ رَبَّهُ كَانَ بِهِ بَصِيرًا ⑯

17. われは黄昏に誓う、

فَلَا أُقْسِمُ بِالشَّفَقِ ⑰

18. 夜とその帳に、

وَاللَّيْلِ وَمَا وَسَقَ ⑱

19. また満月の月に、(注7)

وَالْقَمَرِ إِذَا اتَّسَقَ ⑲

20. お前たちを必ず一層から他層へ通過せしめんことを。(注8)

لَتَرْكَبُنَّ طَبَقًا عَنْ طَبَقٍ ⑳

21. 然るに彼等信ぜざるは、如何なることか？(注9)

فَمَا لَهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ㉑

22. クルアーンを彼等に誦み聞かせるとも、彼等は叩頭服従せず、

وَإِذَا قُرِئَ عَلَيْهِمُ الْقُرْآنُ لَا يَسْجُدُونَ ㉒ السجدة

23. それどころか、クルアーンを虚偽なりとす。

بَلِ الَّذِينَ كَفَرُوا يُكَذِّبُونَ ㉓

注5　クルアーンを廃棄された物の様に扱う人々。(25：31)

注6　人は非常な苦しみの中にある時、死がその生命を終わらせる様にと願う。

注7　17－19節には、イスラム教徒の一時的な退廃と、モハッマド預言者の偉大なる代理、約束されたメシヤを通じての復活に関する預言が含まれている。この約束されたメシヤは、月の様に、太陽（モハッマド預言者）の輝ける光を、完全にして忠実にその身に映し出す事となっていた。

注8　イスラム教徒は、先の数節に書かれたあらゆる状況を体験するであろう。

注9　不信心者達は、この預言の初めの二箇所が成就されたのを目撃した後に、何故三箇所目が成就されないとあきらめたのか？　彼等は、精神の闇夜の後、イスラム教の日の出の朝焼けを目にした。しかし、彼等は、満月の夜に月が闇を追い払う為に現れるとは信じない。

24．されどアッラーは彼等が胸中に隠すことを熟知し給う。(注 10)

وَاللّٰهُ أَعْلَمُ بِمَا يُوعُونَ ﴿٢٤﴾

25．されば、辛(から)き懲罰の通知を彼等に伝えよ。

فَبَشِّرْهُمْ بِعَذَابٍ أَلِيمٍ ﴿٢٥﴾

26．されど信じて善行を積(つ)む人々には、つきることなき報奨あり。

إِلَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ لَهُمْ أَجْرٌ غَيْرُ مَمْنُونٍ ﴿٢٦﴾

注 10　不信心者達は、神の使徒に対して、彼等が心中に隠し持つ敵意を、神はよく御存知である、と警告されている。神は又、神の目的を推し進める為の、神の使徒の使命と努力を無にしようとする彼等の陰謀にも、気付いておられる。

سُوْرَةُ الْبُرُوْجِ مَكِّيَّةٌ (٨٥)

アル・ブルージ
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。　بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．幾多の星座を有す大空にかけて、　وَالسَّمَآءِ ذَاتِ الْبُرُوْجِ ②

3．約束の日にかけて、(注１)　وَالْيَوْمِ الْمَوْعُوْدِ ③

4．証人と被証者にかけて誓う、(注２)　وَشَاهِدٍ وَّمَشْهُوْدٍ ④

5．火坑の徒輩は呪われよ、(注３)　قُتِلَ اَصْحٰبُ الْاُخْدُوْدِ ⑤

6．薪を燃やせし。　النَّارِ ذَاتِ الْوَقُوْدِ ⑥

注１　「約束の日」は、約束された救世主が、イスラム教復活を成し遂げる為に立たされる日を指しているようだ。事実イスラム教の歴史には、約束の日と呼ばれる日が数多くあった。バドルの戦いの日、堀の戦いが輝かしい結末を迎えた日、メッカ陥落の日、等がそれに当たる。しかし約束の日はその中でも特に抜きん出ており、ヒジラ14世紀に、モハッマド預言者の再来が、彼の代理の身に起こった日を指す。この時、イスラム教は新たな命を得、他の全ての宗教に勝つ事となっている。約束の日は又、正義なる者が、その主との出会いという至福を享受する日でもあるようだ。

注２　全ての預言者又は神の指導者は、彼等が神の存在の生き証人である為、シャーヒッド(証人)、つまり証明する人となる。又、神が彼等の手にしるしや奇跡をお示しになる事で、彼等の真実を証されるため、彼等はマシュフード（「被証者」）でもある。しかし此所では、本文の示す通り、「証人」は約束された救世主であり、「被証者」はモハッマド預言者を指す。そして当節は、約束された救世主が、説教や書物で、又神が彼の手にお示しになるしるしにより、モハッマド預言者の真実を証明するであろう、と示している。彼は又、ヒジラ14世紀の約束された救世主およびマハディの到来に関するモハッマド預言者の預言が、その身に成就されるという意味において、立証するであろう。モハッマド預言者自身が約束された救世主を証明したという意味では、彼も又被証者である。この様に、モハッマド預言者及び約束された救世主は、共に証人（シャーヒッド）であり、又、被証者（マシュフード）でもある。

注３　あるクルアーンの注釈者は、当節が、イエメンのイスラエルの王ズー・ヌワースによるキリスト教徒の火刑を示している、と解釈している。又別の注釈者によれば、バビロンの王ネブガドネザルが、イスラエルの指導者達を、燃えさかる炉に投げ入れた事を指すと解される（ダニエル書３：19―22)。当節は、更に、真実の敵にもあてはめられる。彼等は、全ての神の指導者の時に、信者に激しく対立し、迫害する。此所では、過去の、真偽の程が定かでない出来事を述べようとしているのではない。クルアーンのどの箇所にも、神が過去の事実により誓われた事実はなく、第三節で、神は「約束の日」の名の元に証言されておられる。当節及び次の数節では、約束された救世主の弟子達は、その大いなる日の到来をつげる為に、非常な苦しみを味わねばならないであろう、と暗示されている。

7．その時彼等は火坑（かこう）の傍に坐し、（注４）

إِذْ هُمْ عَلَيْهَا قُعُودٌ ٧

8．信者たちになせる己が仕打ちを眺めたり。（注５）

وَهُمْ عَلَىٰ مَا يَفْعَلُونَ بِالْمُؤْمِنِينَ شُهُودٌ ٨

9．彼等が信者たちを憎みしは、信者たちが全能にして讃美すべきアッラーを信じたるが故なり、（注６）

وَمَا نَقَمُوا مِنْهُمْ إِلَّا أَنْ يُؤْمِنُوا بِاللّٰهِ الْعَزِيزِ الْحَمِيدِ ٩

10．天地（あめつち）の大権を掌握するアッラーを。アッラーは萬事を照覧す。

الَّذِي لَهُ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ ۚ وَاللّٰهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ شَهِيدٌ ١٠

11．男女の信者を迫害し、しかも後悔せざる徒輩（やから）には、必ず地獄の罰あり、火責めの罰あり。

إِنَّ الَّذِينَ فَتَنُوا الْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنٰتِ ثُمَّ لَمْ يَتُوبُوا فَلَهُمْ عَذَابُ جَهَنَّمَ وَلَهُمْ عَذَابُ الْحَرِيقِ ١١

12．然（しか）るに信じて善行を積（つ）む人々には、河川流るる楽園あり。これ最上の成就なり。

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ لَهُمْ جَنّٰتٌ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهٰرُ ۚ ذٰلِكَ الْفَوْزُ الْكَبِيرُ ١٢

13．げに猛烈なるは、汝の主の急襲なり。

إِنَّ بَطْشَ رَبِّكَ لَشَدِيدٌ ١٣

14．創造し、復活させる者は、主なり。（注７）

إِنَّهُ هُوَ يُبْدِئُ وَيُعِيدُ ١٤

15．而（しか）して主は、寛容者にして慈愛者なり。

وَهُوَ الْغَفُورُ الْوَدُودُ ١٥

16．光栄ある玉座の主なり。

ذُو الْعَرْشِ الْمَجِيدُ ١٦

17．己が欲することは必ず実行す。

فَعَّالٌ لِمَا يُرِيدُ ١٧

注４　５－９節では、真実の敵に触れている。彼等は、いつの世でも、高潔なる信者に対し迫害の火を付け、常にそれを燃やし続ける。彼等の結末は11節に預言されている。

注５　真実の敵は、彼等の妨害が残酷かつ不当なものであり、彼等の残虐行為の犠牲者が無実である事を、実は知っているのである。

注６　当節は哀感に満ちている。神への信仰は、それを持つ者が残虐な迫害を受けねばならない程に、極悪非道な罪なのであろうか、と問いかけている。

注７　神は、信者に対する残酷で専制的な迫害者を、現世で、また来世においても罰せられるであろう。

18. かの軍勢の物語(はなし)は汝に達せざりしか、 هَلْ أَتٰىكَ حَدِيْثُ الْجُنُوْدِ ﴿١٨﴾

19. ファラオとサムードの？ فِرْعَوْنَ وَ ثَمُوْدَ ﴿١٩﴾

20. 否、信ぜざる者どもは真理を否認し続ける。 بَلِ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا فِيْ تَكْذِيْبٍ ﴿٢٠﴾

21. さればアッラーは、彼等を前後から取り囲む。 وَّاللّٰهُ مِنْ وَّرَآئِهِمْ مُّحِيْطٌ ﴿٢١﴾

22. 否、それは光栄あるクルアーンなり、 بَلْ هُوَ قُرْاٰنٌ مَّجِيْدٌ ﴿٢٢﴾

23. 大事に保管された書板に銘記されたる。(注８) فِيْ لَوْحٍ مَّحْفُوْظٍ ﴿٢٣﴾

注８　当節は、クルアーンがあらゆる干渉、歪曲から守られるという、預言を述べている。15章10節も参照の事。

سُوْرَةُ الطَّارِقِ مَكِّيَّةٌ

アル・ターリク
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。　بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．大空と明けの明星にかけて誓う。(注1)　وَالسَّمَآءِ وَالطَّارِقِ ②

3．明けの明星の何たるかを汝に知らしむるものは何んぞや？　وَمَآ اَدْرٰىكَ مَا الطَّارِقُ ③

4．そはきらめき輝く星なり。　النَّجْمُ الثَّاقِبُ ④

5．何人も己が守護者を持たざる者はなし。(注2)　اِنْ كُلُّ نَفْسٍ لَّمَّا عَلَيْهَا حَافِظٌ ⑤

6．されば人に、己れが何より創られしかを考えさせよ。　فَلْيَنْظُرِ الْاِنْسَانُ مِمَّ خُلِقَ ⑥

7．人は噴出する液体より創造せらる、(注3)　خُلِقَ مِنْ مَّآءٍ دَافِقٍ ⑦

8．腰と胸骨の間から出るところの。(注4)　يَّخْرُجُ مِنْ بَيْنِ الصُّلْبِ وَالتَّرَآئِبِ ⑧

9．げに主は、人の生命を甦らせる能力を有す、　اِنَّهٗ عَلٰى رَجْعِهٖ لَقَادِرٌ ⑨

注1　当節には、モハッマド預言者の代理の事が述べられているようだ。明け方の星のごとき彼の到来は、イスラム教を覆う精神の闇夜が過ぎた後、イスラム教の勝利と普及の夜明けを告げるものであった。しかし、注釈者の中には、当節はモハッマド預言者自身を指すと解する人もいる。彼等によれば、モハッマド預言者が現れた時、精神の闇夜が全世界を覆い、彼の到来地アラビアは闇に包まれていた。

注2　神は、「明けの明星」すなわちモハッマド預言者の代理、そして「きらめき輝く星」すなわちモハッマド預言者を守られるであろう。

注3　人の魂の向上は、噴出の後勢いの弱まる精液の様に、前進と後退の時期を交互に繰り返しがちである。

注4　クルアーンの文体の特徴は、厳しくそっけない言葉ではなく、穏やかな表現を用いている事である。「腰と胸骨の間から出るところの」というのは、クルアーンに使われる婉曲表現の一つである。当節は、人が父親の腰から出る水より生まれ、母の胸で育てられると意味するようだ。ほとばしりその後勢いの弱まる液体から人間が作り出されたという事は、彼が急激な進歩を遂げる大いなる力を生まれながらにして備わったが、同時にもしこの神より授かった力を適切に用いなければ堕落の深みへ落ちる可能性もある事を示している。噴出しその後勢いが弱まる精液の様に、人の魂の向上も前進と後退の時期を交互にする、と当節は示している。

10．すべての秘密が暴露される日。	يَوْمَ تُبْلَى السَّرَآئِرُ ⑩
11．その時、人は、力もなく助け手もなき者たらん。	فَمَا لَهُ مِنْ قُوَّةٍ وَلَا نَاصِرٍ ⑪
12．くり返して雨を降らす雲にかけて、	وَالسَّمَآءِ ذَاتِ الرَّجْعِ ⑫
13．また、牧草が広がる大地にかけて誓う。(注5)	وَالْأَرْضِ ذَاتِ الصَّدْعِ ⑬
14．げにクルアーンは決定的な言葉なり。	إِنَّهُ لَقَوْلٌ فَصْلٌ ⑭
15．そは空論に非ず。	وَمَا هُوَ بِالْهَزْلِ ⑮
16．げに彼等は策謀をめぐらす。	إِنَّهُمْ يَكِيدُونَ كَيْدًا ⑯
17．されどわれも謀(はかりごと)を策す。	وَأَكِيدُ كَيْدًا ⑰
18．されば不信心者どもに猶予を与えよ。然(しか)り、彼等に暫く時を与えよ。(注6)	فَمَهِّلِ الْكَافِرِينَ أَمْهِلْهُمْ رُوَيْدًا ⑱

注5　地上の草木に欠かせない雨は、空から降り、それが止まれば、地上の水は徐々に干上がる。同様に、天の啓示が無ければ、人の理性は、その純粋さ、強さを失う。当節及び前節ではこの事を示している。

注6　不信心者は、イスラム教やモハッマド預言者に対し、持てる力と財を全て使って悪計を試みる猶予期間を与えられている、と当節では述べている。彼等の計略やその自慢の力を持ってしても、イスラムの勝利は、ゆるぎなく、イスラム教が神からのものであり、神の支持を得ている事を立証するであろう。

سُوْرَةُ الْاَعْلٰى مَكِّيَّةٌ (٨٧)

アル・アーラー
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。	بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①
2．いと高き汝の主の御名を讃えよ。	سَبِّحِ اسْمَ رَبِّكَ الْاَعْلَى ②
3．彼は人間を創り、之を整え給う。	الَّذِىْ خَلَقَ فَسَوّٰى ③
4．彼はまた人間の能力を限定し、且つ之を導き給う。	وَالَّذِىْ قَدَّرَ فَهَدٰى ④
5．また彼は牧草を生み、	وَالَّذِىْٓ اَخْرَجَ الْمَرْعٰى ⑤
6．次いでそれを黒い刈り株となす。	فَجَعَلَهٗ غُثَآءً اَحْوٰى ⑥
7．われらは汝にクルアーンを教えん、されば汝は之を忘れざるべし、(注1)	سَنُقْرِئُكَ فَلَا تَنْسٰٓى ⑦
8．アッラーの思し召しに非ざる限りは。(注2)げにアッラーは現われたるものと隠れたるものを知り給う。	اِلَّا مَا شَآءَ اللّٰهُ اِنَّهٗ يَعْلَمُ الْجَهْرَ وَمَا يَخْفٰى ⑧
9．われらは汝のためにすべてを容易ならしめん。(注3)	وَنُيَسِّرُكَ لِلْيُسْرٰى ⑨

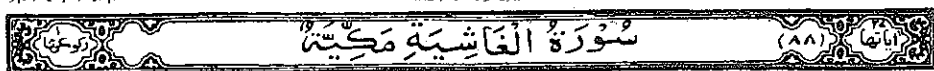
注1　モハッマド預言者は人間であり、日常の事に関する限り、よく物事を忘れた。しかし、絶対に正しい知恵を備えられた神がよく御準備なさった為、モハッマド預言者には学がなかったにもかかわらず、又時には長い章が一度に彼に啓示される事があったにもかかわらず、啓示は彼の心にしっかりと刻み付けられ、その啓示された部分を暗唱する時、彼は忘れたりつかえたりする事は決して無かった。第2章、第3章、第4章、の様に非常に長い章は少しずつ啓示され、啓示の間隔が数年にも及んだが、モハッマド預言者は、啓示された節を正しい位置に据えるのに、一瞬たりとも躊躇しなかったとは、実に驚くべき事だ。これは、クルアーンを最も激しく非難する者でさえ、反論できなかった事実である。

注2　「アッラーの思し召しに非ざる限り」という言葉は日常の事にのみ関するものである。すなわち、忘れることがあってもそれは日常の事のみで、宗教など大切なことは決して忘れることはなかったということ。

注3　当節は次の事を示す。(1)クルアーンを覚えるのは易しい。(2)クルアーンの教義は、状況の変化に応じ、気質の異なる人々の必要に見合う様それぞれに融通性を備えている。(3)クルアーンの禁止礼は独断的ではなく、賢明で理に適ったものである。以上の要素がクルアーンを学び易く、従い易いものにしている。これ等はとり分け、神がクルアーンの聖句及びその意味を永遠に守られるように用意したからである。

10．されば人々を訓戒せよ。げに訓戒は有益なり。	فَذَكِّرْ إِنْ نَّفَعَتِ الذِّكْرٰى ⑩
11．畏敬者は之を心に留めん。	سَيَذَّكَّرُ مَنْ يَّخْشٰى ⑪
12．されど神に見放された者は之を避けん。	وَيَتَجَنَّبُهَا الْاَشْقَى ⑫
13．その者は恐ろしい業火に入らん。	الَّذِىْ يَصْلَى النَّارَ الْكُبْرٰى ⑬
14．その中で、死ぬもならず、生きるもならざらん。	ثُمَّ لَا يَمُوْتُ فِيْهَا وَلَا يَحْيٰى ⑭
15．その身を浄める者は成功疑いなし、	قَدْ اَفْلَحَ مَنْ تَزَكّٰى ⑮
16．主の御名を念じて礼拝する者よ。	وَذَكَرَ اسْمَ رَبِّهٖ فَصَلّٰى ⑯
17．然るにお前たちはこの世の生活を好む、	بَلْ تُؤْثِرُوْنَ الْحَيٰوةَ الدُّنْيَا ⑰
18．来世の方がはるかに優り、恒久なれども。	وَالْاٰخِرَةُ خَيْرٌ وَّاَبْقٰى ⑱
19．げにこの事は古の諸聖典にあり、	اِنَّ هٰذَا لَفِى الصُّحُفِ الْاُوْلٰى ⑲
20．すなわち、アブラハムやモーゼの聖典にあり。（注４）	صُحُفِ اِبْرٰهِيْمَ وَمُوْسٰى ⑳

注４　　全ての宗教の根本原理は基本的には同じであるが、これまでの節に述べられた教義はモーゼとアブラハムの書にも見られる。世に最後の神のお告げと最も完全なる教義をもたらす宿命にあった、偉大なる預言者到来の預言が、モーゼの書とアブラハムの書に見られる、と当節は示してもいるようだ。（申命記 18：18－19、33：２）

سُورَةُ الْغَاشِيَةِ مَكِّيَّةٌ

アル・ガーシヤ
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。	بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ١
2．圧倒的災難の話は汝に達したるか？(注１)	هَلْ أَتَاكَ حَدِيثُ الْغَاشِيَةِ ٢
3．その日、或る者どもの顔はうちしおれん、	وُجُوهٌ يَوْمَئِذٍ خَاشِعَةٌ ٣
4．労苦に疲れはて。	عَامِلَةٌ نَاصِبَةٌ ٤
5．彼等は燃え盛る業火(ごうか)に入れられ、	تَصْلَىٰ نَارًا حَامِيَةً ٥
6．煮え湯の泉水を飲ましめられん。	تُسْقَىٰ مِنْ عَيْنٍ آنِيَةٍ ٦
7．食物といえば乾いた苦い荊棘(いばら)ばかり。	لَيْسَ لَهُمْ طَعَامٌ إِلَّا مِنْ ضَرِيعٍ ٧
8．之(これ)を食うとも太らず、飢を癒さず。	لَا يُسْمِنُ وَلَا يُغْنِي مِنْ جُوعٍ ٨
9．また、その日、或る人々の顔は欣然(きんぜん)として、	وُجُوهٌ يَوْمَئِذٍ نَاعِمَةٌ ٩
10．己が過去の精進を喜び、(注２)	لِسَعْيِهَا رَاضِيَةٌ ١٠
11．至高の楽園にありて、	فِي جَنَّةٍ عَالِيَةٍ ١١
12．無益な話を聞かず。	لَا تَسْمَعُ فِيهَا لَاغِيَةً ١٢
13．園内には泉が流れ、(注３)	فِيهَا عَيْنٌ جَارِيَةٌ ١٣
14．高榻(こうとう)おかれて、	فِيهَا سُرُرٌ مَرْفُوعَةٌ ١٤

注１　(1)裁きの日、又は恐ろしい災難。(2)モハッマド預言者の時代に、およそ７年間メッカを襲った深刻な飢饉は、クルアーンに「圧倒的災難」として記されている (44：11, 12)。

注２　高潔なる信者は、イスラム教の目的の為に払った犠牲のもたらす素晴らしい結果に喜ぶであろう。

注３　湧き出る泉の様に、彼等の善行は、絶えず流れ出るだろう。

15. 酒杯そばにあり、

وَّاَكْوَابٌ مَّوْضُوْعَةٌ ﴿١٥﴾

16. 褥(しとね)は並べられ、

وَّنَمَارِقُ مَصْفُوْفَةٌ ﴿١٦﴾

17. 風雅なる敷物広げ敷く。

وَّزَرَابِيُّ مَبْثُوْثَةٌ ﴿١٧﴾

18. 彼等は駱駝(らくだ)を見ざるか、そは如何に創られるかを？（注４）

اَفَلَا يَنْظُرُوْنَ اِلَى الْاِبِلِ كَيْفَ خُلِقَتْ ﴿١٨﴾

19. また大空を、そは如何に高々と揚げられるかを？

وَاِلَى السَّمَآءِ كَيْفَ رُفِعَتْ ﴿١٩﴾

20. また山々を、そは如何に据えられるかを？

وَاِلَى الْجِبَالِ كَيْفَ نُصِبَتْ ﴿٢٠﴾

21. また大地を、そは如何に広々と拡げられるかを？（注５）

وَاِلَى الْاَرْضِ كَيْفَ سُطِحَتْ ﴿٢١﴾

22. されば訓戒せよ、汝は訓戒者に外ならず。

فَذَكِّرْ اِنَّمَآ اَنْتَ مُذَكِّرٌ ﴿٢٢﴾

23. 汝は彼等の監督者に非ず。

لَسْتَ عَلَيْهِمْ بِمُصَيْطِرٍ ﴿٢٣﴾

24. されど背を向ける者や信ぜざる者は、

اِلَّا مَنْ تَوَلّٰى وَكَفَرَ ﴿٢٤﴾

25. アッラー重刑を以て之(これ)を罰せん。

فَيُعَذِّبُهُ اللّٰهُ الْعَذَابَ الْاَكْبَرَ ﴿٢٥﴾

26. 彼等がわれらが許(もと)に帰るは必定、

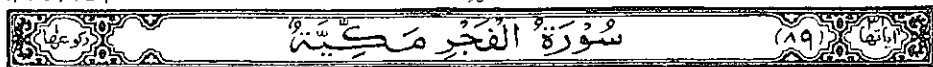
اِنَّ اِلَيْنَآ اِيَابَهُمْ ﴿٢٦﴾

27. その時彼等に責任を問うのはわれらの務めなり。

ثُمَّ اِنَّ عَلَيْنَا حِسَابَهُمْ ﴿٢٧﴾

注４　駱駝が導くものの後を一列に並んで進むように、信者達は彼等の指導者に完全に従う。あるいは、暑い砂漠を水無しに何日も進む駱駝の様に、彼等は試練の中で無限の忍耐力を持ち、不平も言わずに魂の旅を続ける。イビル（「駱駝」）には雲という意味もあるので当節は、神が全土を覆う魂の水であるクルアーンの教義を広められるであろう、と示しているのかもしれない。

注５　この四節（18－21）は、イスラム教徒に次の様な至高の道徳上の教訓を示している。(1)イスラム教徒は雲の様に寛大で、(2)天のごとく気高く、(3)山の様に不屈の決意を持ち、(4)土の様に優しく謙虚でなければならない。

سُوْرَةُ الْفَجْرِ مَكِّيَّةٌ (٨٩)

アル・ファジル
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．暁にかけて、(注1) وَالْفَجْرِ ②

3．十夜にかけて、(注2) وَلَيَالٍ عَشْرٍ ③

4．偶数と奇数にかけて、(注3) وَّالشَّفْعِ وَالْوَتْرِ ④

5．逝り行く夜にかけて誓う。(注4) وَالَّيْلِ اِذَا يَسْرِ ⑤

6．この中には思慮ある者への誓言あらざるか？ هَلْ فِيْ ذٰلِكَ قَسَمٌ لِّذِيْ حِجْرٍ ⑥

注1　「暁」とは、メッカにおける迫害の暗夜に終止符を打つ事となった、モハッマド預言者のメディナへの移住を指しているようだ。又、何世紀にも及ぶイスラム教徒の堕落の後、彼等への希望と明るい未来のお告げをもたらす事となっていた、約束されたメシヤの到来を示してもいるようだ。

注2　「十夜」とは、イスラム教徒がメッカで受けた厳しい迫害の最後の10年、あるいは、約束されたメシヤ出現前の、イスラム教徒腐敗の十世紀間を表しているようだ。この約束されたメシヤ到来により、イスラム教徒の精神的、政治的退廃の暗黒時代は終わりを告げ、イスラム教の輝ける未来の夜明けを告げる事となっていた。この「十夜」、あるいは、イスラム教退廃の10世紀を示す箇所は、他にもクルアーンに見られる（32：6）。イスラム教徒が道徳的に退廃したこの十世紀間（千年）は、モハッマド預言者がイスラムの最高の三世紀間と呼ぶ（ブハリ，リカーク書）、彼等の名誉と威厳の全盛期である初期の三世紀間の後に来たものであった。イスラム教の退廃はヒジラ三世紀末に始まった。この時、スペインのウマイヤカリフは、バクダードのアッバシー帝国に対し、法王と相互援助条約を結び、他方バクダードのカリフは、スペインのウマイヤカリフに対し、ローマのシーザーと友好条約を結んだ。

注3　比喩を続けながら、「偶数」という語は、モハッマド預言者と、彼のかつての信心深い仲間アブー・バクルをそれとなく指しているようだ。ヒジラの苦難の時に二人だけで（偶数で）逃れたが、彼らと共におられた神がそれを奇数になさった。この「偶数と奇数」の数に関しては、9：40に適切な記述が見られる。あるいは、モハッマド預言者と約束されたメシヤは偶数を、アッラーは奇数を表す。又「偶数と奇数」は、モハッマド預言者と約束された救世主は別人であったが、後者は前者と同一化する程に前者に心酔していた事を示しているようだ。

注4　「夜」は、モハッマド預言者の悩みの種が尽きなかったヒジラの最初の年を表しているようだ。メディナへの移住の後、イスラム教徒に朝が訪れたが、彼等はまだ完全に困難を脱していた訳ではなかった。彼等はもう一晩苦難に耐えねばならなかった。つまり、更に一年の苦難を経て、バドルの戦いでクライシュが完敗を喫し、イザヤ預言者の預言（21：16）は文字通り成就したのである。

7．汝は、主がアードの民を如何に処分せしかを見ざるか、

أَلَمْ تَرَ كَيْفَ فَعَلَ رَبُّكَ بِعَادٍ ﴿٧﴾

8．すなわち聳え立つ建造物の所有者、イラムの支族を？

إِرَمَ ذَاتِ الْعِمَادِ ﴿٨﴾

9．これに類するものは未だかつてこの地方で造れる者なかりしなり。

الَّتِي لَمْ يُخْلَقْ مِثْلُهَا فِي الْبِلَادِ ﴿٩﴾

10．また渓谷で岩を切り出したるサムード族や、

وَثَمُودَ الَّذِينَ جَابُوا الصَّخْرَ بِالْوَادِ ﴿١٠﴾

11．大軍勢の支配者ファラオを如何に処分せしかを？

وَفِرْعَوْنَ ذِي الْأَوْتَادِ ﴿١١﴾

12．彼等はその邑々において不行跡な行いをなし、

الَّذِينَ طَغَوْا فِي الْبِلَادِ ﴿١٢﴾

13．その地に腐敗をもたらせり。

فَأَكْثَرُوا فِيهَا الْفَسَادَ ﴿١٣﴾

14．されば汝の主は、彼等の上に懲罰の笞を加えたり。

فَصَبَّ عَلَيْهِمْ رَبُّكَ سَوْطَ عَذَابٍ ﴿١٤﴾

15．げに汝の主は常に油断なく人間を監視す。

إِنَّ رَبَّكَ لَبِالْمِرْصَادِ ﴿١٥﴾

16．人間というものは、主が試さんとして栄誉や恩恵を授けると、「主は我を礼遇せり」と云う。（注5）

فَأَمَّا الْإِنْسَانُ إِذَا مَا ابْتَلَاهُ رَبُّهُ فَأَكْرَمَهُ وَنَعَّمَهُ فَيَقُولُ رَبِّي أَكْرَمَنِ ﴿١٦﴾

17．されど、主が試さんとしてその生活を苦しめると、「主は我を辱しめたり」と云う。

وَأَمَّا إِذَا مَا ابْتَلَاهُ فَقَدَرَ عَلَيْهِ رِزْقَهُ فَيَقُولُ رَبِّي أَهَانَنِ ﴿١٧﴾

18．然らず、されどお前たちは孤児を礼遇せず、

كَلَّا بَلْ لَا تُكْرِمُونَ الْيَتِيمَ ﴿١٨﴾

19．また互に相い促して貧者を養わず、

وَلَا تَحَاضُّونَ عَلَىٰ طَعَامِ الْمِسْكِينِ ﴿١٩﴾

20．而して他人の遺産を貪り食いて飽くことを知らず。

وَتَأْكُلُونَ التُّرَاثَ أَكْلًا لَمًّا ﴿٢٠﴾

注5　恩恵は、時に人の気概を試す為に、又ある時はその善行に報いる為に、人に授けられる。同様に、人は困難に巻き込まれ、その結果試され、報いられるか応分の処罰を受ける事となる。しかし、人は豊かな時、それは自身の働きと知恵の賜物であるとみなし（28：79）、逆に不幸に襲われれば、それは神のせいだとするのが常だ。

21．お前たちの富への執着は異常なり。（注６）

وَتُحِبُّوْنَ الْمَالَ حُبًّا جَمًّا ﴿٢١﴾

22．断じて然（しか）らず、大地が粉々に砕かれる時、

كَلَّآ اِذَا دُكَّتِ الْاَرْضُ دَكًّا دَكًّا ﴿٢٢﴾

23．主は列をなす数多（あまた）の天使等を従えて出御（しゅつぎょ）し給う。（注７）

وَّجَآءَ رَبُّكَ وَالْمَلَكُ صَفًّا صَفًّا ﴿٢٣﴾

24．その日、地獄は身近に出現す。而（しか）して人間（ひと）は己が所業を想起せん。されど、想起したとて、何の益するところぞ。

وَجِاْیْٓءَ يَوْمَئِذٍۢ بِجَهَنَّمَ ۙ يَوْمَئِذٍ يَّتَذَكَّرُ الْاِنْسَانُ وَاَنّٰى لَهُ الذِّكْرٰى ﴿٢٤﴾

25．人間（ひと）は云わん、「この日を知らば、善行を積（つ）みたりしものを！」と。

يَقُوْلُ يٰلَيْتَنِىْ قَدَّمْتُ لِحَيَاتِىْ ﴿٢٥﴾

26．その日何人（なんぴと）も、主が罰する如く罰し得る者なし。

فَيَوْمَئِذٍ لَّا يُعَذِّبُ عَذَابَهٗۤ اَحَدٌ ﴿٢٦﴾

27．また何人（なんぴと）も、主が縛る如く縛り得る者なし。（注８）

وَّلَا يُوْثِقُ وَثَاقَهٗۤ اَحَدٌ ﴿٢٧﴾

28．おお、汝　魂（たましい）よ、安んじて、

يٰۤاَيَّتُهَا النَّفْسُ الْمُطْمَئِنَّةُ ﴿٢٨﴾

29．主の許（もと）へ帰れ、自ら満悦し、且つ主に嘉（よみ）されつつ。（注９）

ارْجِعِىْۤ اِلٰى رَبِّكِ رَاضِيَةً مَّرْضِيَّةً ﴿٢٩﴾

30．されど汝、わが選びし僕（しもべ）等の中に入れ、

فَادْخُلِىْ فِىْ عِبٰدِىْ ﴿٣٠﴾

31．わが楽園の中に。

وَادْخُلِىْ جَنَّتِىْ ﴿٣١﴾

注６　当節は、富を貯える者に、蓄積の悪をよく理解させる。金銭に対する極端な執着は、良い目的の為には使わず、唯、ひたすら自分の財産を増やしたいという節度のない欲望を、人の心に生じさせる。それは、財産獲得の為には手段を選ばない様に人を変え、人の道徳的退廃をもたらす。イスラム教は、個人と同様、社会の道徳の健全さにも非常な配慮を示す。社会が健全である為には、物が広く行き渡り、富がゆるやかに循環する事が必要である。

注７　天使達が随行する「出御」とは、クルアーンの成句で、差し迫った破壊的な神の罰を表す。

注８　神のひき臼は、ゆっくりしかし非常に細かくひく。神は、すぐには罰を下されないが、神の罰が下される時、それは最も破壊的なものである。74章29節も参照の事。

注９　これは、人が神を喜び、神が人に満足なさる、精神発達の最高の段階である(58：23)。天の段階と呼ばれるこの段階に至れば、人は道徳的な弱さに免疫を持つ様になり、独特の精神的な強さで支えられる。人は神と一体になり、神無しには存在し得ない。この素晴らしい精神的変化が人に生じるのは、現世においてであり、来世ではない。又、天国へ入る許可が与えられるのは、どこでもない、この現世においてである。

سُورَةُ الْبَلَدِ مَكِّيَّةٌ (٩٠)

アル・バラド
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．われはこの邑にかけて誓う、（注1）

لَآ أُقْسِمُ بِهٰذَا الْبَلَدِ ②

3．汝はこの邑に住む、

وَأَنْتَ حِلٌّۢ بِهٰذَا الْبَلَدِ ③

4．われは父と子にかけて誓う、（注2）

وَوَالِدٍ وَّمَا وَلَدَ ④

5．げにわれらは、人間を、苦難に立ち向かわせるよう創りたり。（注3）

لَقَدْ خَلَقْنَا الْإِنْسَانَ فِيْ كَبَدٍ ⑤

6．人間は、何人もこの自分を支配せず、と思うか？（注4）

أَيَحْسَبُ أَنْ لَّنْ يَّقْدِرَ عَلَيْهِ أَحَدٌ ⑥

7．人間は云う、「我は莫大なる富を費せり」と。（注5）

يَقُوْلُ أَهْلَكْتُ مَالًا لُّبَدًا ⑦

8．人間は、何人もこの自分を見ず、と思うか？

أَيَحْسَبُ أَنْ لَّمْ يَرَهٗٓ أَحَدٌ ⑧

9．われらは人間に、両眼と、

أَلَمْ نَجْعَلْ لَّهٗ عَيْنَيْنِ ⑨

10．舌と、上下の唇とを与えたるに非ざるか？

وَلِسَانًا وَّشَفَتَيْنِ ⑩

注1　当節は次の事を意味する。「お前達はイスラム教に対して悪い企みを抱いている。ああ不信者達よ、お前達が何を心に抱いているか私は知っている。しかし、お前達の望み通りにはいかないと告げておく。私は、この事実の証人、としてこの町を挙げる。」

注2　カーバの基礎が作られる間に、アブラハム預言者とその息子イシュマエルは、メッカの人々の中から神の使者を立たされるように、神に祈った（2：129, 130)。この様に「父と子」は、モハッマド預言者の真実を証明する。

注3　モハッマド預言者はメッカを追放され、勝利者としてそこへ戻り、メッカは彼に屈服し、その住民はイスラム教の輪に加わるであろう。上記の預言は、モハッマド預言者とその民が非常な困難をくぐり抜けて初めて成就されるであろう。つまり、彼等が目標を達成するには、激しく続く戦いが求められるであろう。

注4　神は不信心者の悪の企てに気付かれている。神はその力を持たれており、彼等の計画を無効にされるであろう。

注5　イスラム教の普及を阻止しようと、対抗者はあらゆる手を尽くし、多額の金を使うが、そのままやりたい様にさせなさい。彼等の企みは成功せず、イスラム教が、精神的、政治的勝利を治め続けるであろう。当節はこの様に述べている。

11. またわれらは、人間に善と悪の二つの道を指摘せり。（注６）
وَهَدَيْنٰهُ النَّجْدَيْنِ ⑪

12. されど人間は嶮岨な道を採ろうとせじ。（注７）
فَلَا اقْتَحَمَ الْعَقَبَةَ ⑫

13. 嶮岨の何たるかを汝に知らしむるものは何ぞや？
وَمَآ اَدْرٰىكَ مَا الْعَقَبَةُ ⑬

14. そは奴隷を解き放すことなり。
فَكُّ رَقَبَةٍ ⑭

15. 或いは飢饉の時に
اَوْ اِطْعٰمٌ فِىْ يَوْمٍ ذِىْ مَسْغَبَةٍ ⑮

16. 近親の孤児や、
يَّتِيْمًا ذَا مَقْرَبَةٍ ⑯

17. 地面に臥す貧者を養うことなり。（注８）
اَوْ مِسْكِيْنًا ذَا مَتْرَبَةٍ ⑰

18. 而して信者の仲間に入り、互に忍耐すべく励まし合い、且つ情けをすすめ合うことなり。（注９）
ثُمَّ كَانَ مِنَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَتَوَاصَوْا بِالصَّبْرِ وَتَوَاصَوْا بِالْمَرْحَمَةِ ⑱

19. これ等はすなわち、右側の衆なり。
اُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ الْمَيْمَنَةِ ⑲

20. されどわれらの神兆を信ぜぬ徒輩、彼等は左側の衆なり。
وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا بِاٰيٰتِنَا هُمْ اَصْحٰبُ الْمَشْئَمَةِ ⑳

21. 彼等の周囲には業火が覆いかぶさるべし。（注10）
عَلَيْهِمْ نَارٌ مُّؤْصَدَةٌ ㉑

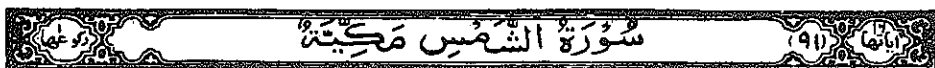
注６　人が正しい道を見い出し、悪から正義へ、偽りから真実へと変わる為の手段を全て、神は人に与えられた。人は、善悪の区別をつける為に精神的そして肉体的にも目が与えられ、導きを求める為に、舌と二枚の唇を授けられた。とりわけ、持てる力を全て注いで成就する様にと、神は人の前に至高の目的を置かれた。

注７　モハッマド預言者を通して、神は、人が精神的、物質的に最大の進歩を遂げる為の方法、手段を全て示されたが、人はこの目的を成し遂げる為に、必要な犠牲を払う事を拒んだ。

注８　14－17節は、人の道徳性を向上させる二つの方法を述べている。(1)奴隷解放。つまり、社会の抑圧された階層をこの世で同等の仲間にまで引き上げる事。(2)孤児や貧しい人々が、自立し、社会に役立つ一員となれる様手助けする事。

注９　先の数節で述べられた善行だけでは、社会全体が向上するにはまだ不十分である。道徳の正道に対する絶えざる忠誠と徳を他の人々に伝える行為が伴った、優れた理想と正しい主義も又、前途の高い目的を達成する為には欠かせないのである。

注10　四方から迫る火が最も破壊的となる。

سُوْرَةُ الشَّمْسِ مَكِّيَّةٌ (٩١)

アッシャムス
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍（あまね）くアッラーの御名（みな）において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．太陽、(注1) その朝の輝きにかけて、(注2)

وَالشَّمْسِ وَضُحٰهَا ②

3．その太陽に追随する月にかけて、(注3)

وَالْقَمَرِ اِذَا تَلٰهَا ③

4．太陽がその壮観さを見せる真昼にかけて、(注4)

وَالنَّهَارِ اِذَا جَلّٰهَا ④

5．太陽の光の上に帷（とばり）を引く夜にかけて、(注5)

وَالَّيْلِ اِذَا يَغْشٰهَا ⑤

6．天と之（これ）をうち建て給える者にかけて、

وَالسَّمَآءِ وَمَا بَنٰهَا ⑥

7．大地と之（これ）をうち拡げ給える者にかけて、

وَالْاَرْضِ وَمَا طَحٰهَا ⑦

注1　当節の「太陽」は精神界の太陽、モハッマド預言者を指す。彼は魂の光の源であり、終わりの時まで世を照らし続けるであろう。

注2　クルアーンの誓いは、その奥に深い意味を含む。神の戒律は神の業の二面、明白なものと推定によるものを表す。前者は理解し易いが、後者の理解には誤りの可能性がある。神はその宣誓の中で、明らかなものよりも推測されるものに注意を向けられた。2－7節の誓いにある、太陽と月、昼と夜、天と地は明白なものに属し、その属性は広く知られている事、とそれ等の節に述べられている。しかし、人の魂に見られるこの同じ属性は明白ではない。人の魂にこれ等の属性が存在するという推論を導く為に、神は神の明白なる業を証言する様命じられた。37章2節も参照の事。

注3　「月」も又モハッマド預言者を指す。それは彼が神より光を授かり、それを精神の闇の世に伝えたからである。あるいはこの言葉は、聖職者や宗教の指導者達、特にモハッマド預言者の偉大な代理である約束されたメシヤを指すともいえる。彼はモハッマド預言者より真実の光を借り受け、道徳と精神退廃の闇を払う為に、それを世に伝える事となっていた。

注4　「真昼」とは、イスラム教のお告げとその創設者の実在が確証され、それを世に伝える為に基盤が築かれた時を指しているようだ。当節のこの言葉は、イスラム教の光がきらびやかに輝いていた、モハッマド預言者によって正しく導かれたカリフの時代を特に示しているのかもしれない。

注5　「夜」は、イスラム教の光が覆い隠され、世の人々の目から見えなくなったイスラム教徒の退廃の時を指しているようだ。この四節（2－5）は、イスラム教の波乱に富んだ歴史の内の四時期に触れている。(1)精神の太陽（モハッマド預言者）が精神の空に燃える様に輝く、モハッマド預言者自身の時代。(2)モハッマド預言者から発する光が闇の世に照り映える、約束されたメシヤの時代。(3)イスラム教の光がまだ輝いていた、

8．魂と之(これ)を完成し給える者にかけて、

وَنَفْسٍ وَمَا سَوَّاهَا ﴿٨﴾

9．すなわち、何が不正で何が公正なるかを魂に示唆し給える御方(おんかた)にかけて誓う。（注６）

فَأَلْهَمَهَا فُجُورَهَا وَتَقْوَاهَا ﴿٩﴾

10．げに魂を清める者は栄え、

قَدْ أَفْلَحَ مَن زَكَّاهَا ﴿١٠﴾

11．之(これ)を汚す者は亡ぶ。

وَقَدْ خَابَ مَن دَسَّاهَا ﴿١١﴾

12．サムード族はその邪悪さ故に真理を拒みたり。

كَذَّبَتْ ثَمُودُ بِطَغْوَاهَا ﴿١٢﴾

13．彼等の中で最も卑劣な者どもが起ち上りし時、

إِذِ انبَعَثَ أَشْقَاهَا ﴿١٣﴾

14．アッラーの使徒は云えり、「アッラーの雌駱駝(めすらくだ)なれば、水飲むことを妨げるなかれ」と。（注７）

فَقَالَ لَهُمْ رَسُولُ اللَّهِ نَاقَةَ اللَّهِ وَسُقْيَاهَا ﴿١٤﴾

15．然(しか)るに彼等は使徒の言を拒み、雌駱駝(めすらくだ)の膕(ひかがみ)を切りたれば、主はその罪ゆえに彼等を抹殺(まっさつ)し、皆一同ひとしく懲罰せり。

فَكَذَّبُوهُ فَعَقَرُوهَا فَدَمْدَمَ عَلَيْهِمْ رَبُّهُم بِذَنبِهِمْ فَسَوَّاهَا ﴿١٥﴾

16．主はその結果を顧慮(こりょ)せず。（注８）

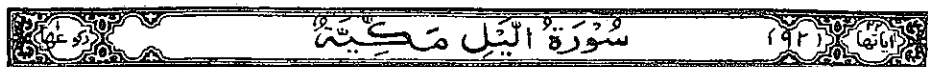
وَلَا يَخَافُ عُقْبَاهَا ﴿١٦﴾

モハッマド預言者直後の後継者の時代。(4)イスラム教が栄光の極みにあった初めの三世紀間の後、精神の闇が世を覆った時代。

注６　神は人間の本質に善と悪の感覚を植え付けられ、悪を避け善を選ぶ事で魂の完成に到達できる事を、人間に示された。

注７　サーレ預言者は、神のお告げを伝える為に雌の駱駝にまたがり各地へ赴いた。駱駝の自由な動きを妨げる事は、サーレ自身を妨害し、神より彼に託された神聖な義務の遂行を妨げるに等しいことであった。ある意味で、サーレは、全ての神の指導者と同じく、神の雌の駱駝なのであった。

注８　ある民族が神の罰を受け滅ぼされる時、その破壊を生き延びる者には、構われない。又は、神は、彼等が如何に悲惨な状況に置かれるかには留意されない事を意味する。

سُوْرَةُ الَّيْلِ مَكِّيَّةٌ (٩٢)

アル・ライル
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)にかけて。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ١

2．夜、すべてを覆い包む時にかけて、(注１)

وَالَّيْلِ اِذَا يَغْشٰى ٢

3．昼、光り輝く時にかけて、(注２)

وَالنَّهَارِ اِذَا تَجَلّٰى ٣

4．また雄雌(おすめす)を創り給える者にかけて誓う。(注３)

وَمَا خَلَقَ الذَّكَرَ وَالْاُنْثٰٓى ٤

5．げにお前たちの精進は種々様々なり。(注４)

اِنَّ سَعْيَكُمْ لَشَتّٰى ٥

6．されど、アッラーのために施しをなし、且つ公正なる者、

فَاَمَّا مَنْ اَعْطٰى وَاتَّقٰى ٦

7．而(しか)して正義を実証する者のために、(注５)

وَصَدَّقَ بِالْحُسْنٰى ٧

8．われらは幸福への道をすべて容易ならしめん。(注６)

فَسَنُيَسِّرُهٗ لِلْيُسْرٰى ٨

注１　先の章において、主な主題は「太陽」つまり、あらゆる光の源であるモハッマド預言者であった。太陽や昼が月や夜より先に語られるのは、この為である。しかし当章では、信者と不信心者の対比が始められる。後者は一般に人数が多く、より大きな権力を振うので、不信心者を表す夜が、信者を表す昼より前に述べられ

注２　先の章の対応する節に用いられた「壮観さを見せる」に代えて、当節では「光り輝く」と言う語を使っている事から、先の章では、神の指導者の高い精神の発達に重きを置かれたが、当章では、神の教義を学び吸収する為の、弟子達の素晴らしい能力を強調している事が示されている。

注３　人の誕生は、二個の異性の結び付きによるものである。一方の性（男性）の特質は与える事であり、他方（女性）のそれは受ける事である。物質界同様、精神界にも男性、すなわち、教え導く神の偉大なる預言者及び神の指導者と、精神界の女性、すなわち、神の教義に得るところある彼等の弟子達、が存在する。当節は、完全なる指導者、モハッマド預言者と、その最善の弟子達、すなわち彼の仲間が力を合わせる事により、新たな世が真に生まれようとしている、と暗示している。

注４　当節は、信者と不信心者の大きく異なる目標、及びそれぞれの目標達成に向かう努力の相違に、目を向けている。信者の努力は真理の普及に向けられ、他方不信心者のそれは、真理の普及を阻止する事にある。この両者の努力の結果は、当然異なるに違いない。

注５　当節及び前節には、人生で成功を治める人々の三つの特質が述べられている。かいつまんで言えば、彼等は行い感情、思考の正しい者で、これ等の特質を信者は十二分に有する。

注６　先の二節に述べられた三つの特質を持つ人は、自らの行為が望ましい結果を生み出すと気付くであろう。あるいは、善行を為す事はこの様な人には容易になり、彼は又それを喜んでする、と当節は意味するのかもしれない。

9．されど強欲で、尊大且つ冷淡な者、
وَاَمَّا مَنْ بَخِلَ وَاسْتَغْنٰى ⑨

10．而(しか)して正義を拒む者には、(注7)
وَكَذَّبَ بِالْحُسْنٰى ⑩

11．われらは苦難への道を容易ならしめん。(注8)
فَسَنُيَسِّرُهٗ لِلْعُسْرٰى ⑪

12．堕落する時、その財宝はその者に役立たざるべし。
وَمَا يُغْنِيْ عَنْهُ مَالُهٗۤ اِذَا تَرَدّٰى ⑫

13．導くは、げにわれらの務めなり。
اِنَّ عَلَيْنَا لَلْهُدٰى ⑬

14．而(しか)して、来世も現世もわれらの所有(もの)なり。(注9)
وَاِنَّ لَنَا لَلْاٰخِرَةَ وَالْاُوْلٰى ⑭

15．さればわれは、燃え盛る業火(ごうか)をお前たちに警告す。
فَاَنْذَرْتُكُمْ نَارًا تَلَظّٰى ⑮

16．最も性悪(しょうわる)な者を除いて、その中に入れられざるべし、
لَا يَصْلٰىهَاۤ اِلَّا الْاَشْقَى ⑯

17．そは真理を拒否し、その背を向けし者なり。
الَّذِيْ كَذَّبَ وَتَوَلّٰى ⑰

18．されど義(ただ)しい者は、業火(ごうか)に近づけられざるべし、
وَسَيُجَنَّبُهَا الْاَتْقَى ⑱

19．そは清廉潔白(せいれんけっぱく)ならんがために、己が財産を擲(なげう)つ者なり。
الَّذِيْ يُؤْتِيْ مَالَهٗ يَتَزَكّٰى ⑲

20．誰かに恩義があるためでなく、また恩返しを当にするわけでもなし。
وَمَا لِاَحَدٍ عِنْدَهٗ مِنْ نِّعْمَةٍ تُجْزٰۤى ⑳

21．ただひたすらに至高(いとたか)き主の喜びを求めんがために。(注10)
اِلَّا ابْتِغَآءَ وَجْهِ رَبِّهِ الْاَعْلٰى ㉑

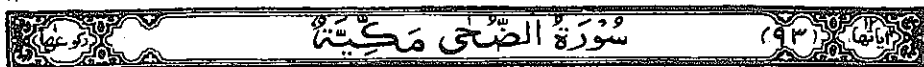
22．されば主は、かかる者を必ず嘉(よみ)すべし。
وَلَسَوْفَ يَرْضٰى ㉒

注7　先の二節（6，7）に述べられた三つの善なる特質とは対照的に、人の精神的破滅をもたらす三つの悪なる特質が、この二節（9，10）に述べられている。

注8　前節で触れた人の行為は、的をはずし、望みとは逆の結果をもたらす。あるいは、このような者にとり、善行を為すのは難しくなる、と当節は意味しているともいえる。

注9　邪悪な不信心者は、現世で敗北を喫し、来世で罰を受けるであろう。それは、現世、来世共に神の支配下にあるからである。当節は又、「万物の始まりと終わりはわれらに属する。」とも意味しているのだろう。

注10　高潔なる信者は他の人々に善行を施し、それに対する見返りを受ける事無く、唯、神の創造物の役に立ち、天主の喜びを得たいと願うのである。

سُورَةُ الضُّحَى مَكِّيَّةٌ (٩٣)

アル・ドゥハー
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。	بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①
2．朝の輝きにかけて、(注1)	وَالضُّحٰى ②
3．並びに夜の静寂にかけて誓う。(注2)	وَالَّيْلِ اِذَا سَجٰى ③
4．汝の主は汝を見棄てざりき、また汝に立腹せず。(注3)	مَا وَدَّعَكَ رَبُّكَ وَمَا قَلٰى ④
5．げに汝の後の状態は、先の状態よりも良し。(注4)	وَلَلْاٰخِرَةُ خَيْرٌ لَّكَ مِنَ الْاُوْلٰى ⑤
6．しかも主はやがて汝に慈悲を垂れ給わば、汝は満足せん。	وَلَسَوْفَ يُعْطِيْكَ رَبُّكَ فَتَرْضٰى ⑥
7．孤児(みなしご)の汝を拾うて庇護を賜いしは、主に非ずや？(注5)	اَلَمْ يَجِدْكَ يَتِيْمًا فَاٰوٰى ⑦

注1　「朝の輝きにかけて」は、イスラム教の勃興を指すようだ。又、モハッマド預言者が、一万人の信心深い聖なる戦士からなる軍隊の先頭に立ってメッカに入り、カーバが偶像を廃された特別の「朝」を述べてもいるようだ。

注2　「夜」は、イスラム教退廃の長期間を示しているようだ。更には、闇が訪れた後、モハッマド預言者が家を出て、アブー・バクルとソール洞窟に避難した、特別の夜を指してもいるようだ。事実、モハッマド預言者がメッカを去った夜、そして闇が訪れた日は、モハッマド預言者の全生涯における様々な浮き沈みを、一言で表したものである。

注3　モハッマド預言者の全ての昼と夜、彼の大いなる成功と一時的な敗北、彼の喜びと苦難、彼の夜の礼拝と昼の活動、これ等全ては、神が彼と共にあられる事を証している。

注4　モハッマド預言者の人生のあらゆる瞬間は、それ以前より更に良いものであった。

注5　モハッマド預言者は、比喩のみならず、事実孤児であった。彼の孤児の身の上は、非常に過酷なものであった。父親は彼が生まれる前に、母親は彼が六才になるかならないかのうちに亡くなり、母親の死後彼の世話をした祖父アブドル・ムッタリブは、貧しい伯父に彼を託して二年後に死んだ。この様にモハッマド預言者は、幼くして父母の保護と愛を奪われた。しかし彼は、目下の者、目上の者から、彼の仲間や同胞から、後には彼の弟子達から、一女性から生まれた者誰もが(人間誰もが)、これまで受けることがなかった。又今後とも受ける事がないであろう程の多くの愛を受けたのであった。

8．主は迷える汝を見つけ、己が手許に導けり。（注６）

وَوَجَدَكَ ضَآلًّا فَهَدٰى ﴿٨﴾

9．而して、貧乏ぐらしを富栄えしめ給いしに非ずや？（注７）

وَوَجَدَكَ عَآئِلًا فَأَغْنٰى ﴿٩﴾

10．されば孤児を虐げるなかれ。

فَأَمَّا الْيَتِيمَ فَلَا تَقْهَرْ ﴿١٠﴾

11．また助けを請う者を叱るなかれ。

وَأَمَّا السَّآئِلَ فَلَا تَنْهَرْ ﴿١١﴾

12．而して主の恵み深さを宣言せよ。（注８）

وَأَمَّا بِنِعْمَةِ رَبِّكَ فَحَدِّثْ ﴿١٢﴾

注６　「迷う」には、一般的な意味として様々な意味がある。道に迷う、という意。進むかどうかためらう意。また、物事の追求に努めている際の無我夢中の状況を示す意がある。当節は、道に迷ったり、ためらったりする意ではなく、あるものを求めて夢中になっている意と、解される。(1)モハッマド預言者は神に到達する手段を求めてさ迷ったが、神は、彼を望みの目的地へ導く戒律を彼に示された。(2)モハッマド預言者は、彼が追求するものへ達する道を、如何にして見つけたら良いか分からなかったが、神が彼をそこへ導かれた。(3)彼が心から一族の人々の事を思っていたので、神は彼に、彼等に対する完全な手引きを与えられた。(4)彼は世の人々の目から隠されていたが、神が彼を見い出し、神へ導く者としての任務の為に彼を選ばれた。この様に、「迷う」という言葉は、モハッマド預言者を非難するのではなく、賞め誉える為に用いられている。道に迷ったという意味では、この言葉はモハッマド預言者に当てはまらない。それは、クルアーンの他の箇所(53：3)によれば、彼は誤りを犯したり、道をそれる事はなかったからである。更に、この章の第６節は、ある相続いで起こる出来事を表している。第７、８、９節は第10、11、12節にそれぞれ対応し、深く結びついている。第８節。「迷う」は第11節で「請う」に置き換えられ、「神の下へ導かれる様にと神の助けを求めた人」、又は「神の手引を授けられる様求めた人」、と後者は前者の意味を説明している。当節は又、「神は汝が神を求めている事に気付かれ、汝を神の元へ導かれた」とも意味しているようだ。

注７　モハッマド預言者は、孤児としてその人生を始め、アラビア全土のまぎれもない支配者となりその生涯を閉じた。

注８　第７、８節は、モハッマド預言者に授けられた神の恩恵について語り、第10、11、12節では、モハッマド預言者は、同様の恩恵をその仲間に施す事で、神への謝意を示す様命ぜられている。この戒律は彼の弟子達へも等しく向けられたものである。

سُوْرَةُ الْاِنْشِرَاحِ مَكِّيَّةٌ (٩٤)

アル・インシラーフ
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。　　بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．われらは汝のためにその心を開き、　　اَلَمْ نَشْرَحْ لَكَ صَدْرَكَ ②

3．汝より重荷をとり除けたるに非ずや、　　وَوَضَعْنَا عَنْكَ وِزْرَكَ ③

4．汝の背にのしかかれるその重荷を？（注1）　　الَّذِيْٓ اَنْقَضَ ظَهْرَكَ ④

5．而(しか)してわれらは、汝の名声を高からしめたり。（注2）　　وَرَفَعْنَا لَكَ ذِكْرَكَ ⑤

6．げに苦労の後には楽あり。（注3）　　فَاِنَّ مَعَ الْعُسْرِ يُسْرًا ⑥

7．然(しか)り、げに苦労の後には楽あり。　　اِنَّ مَعَ الْعُسْرِ يُسْرًا ⑦

8．されば手隙(てすき)のときは、懸命に努力し、　　فَاِذَا فَرَغْتَ فَانْصَبْ ⑧

注1　モハッマド預言者は、これまで誰も託された事のない様な、神経がすり減り忍耐を要する任務、すなわち、堕落した人々を、道徳的退廃の深みから、道徳的卓越の頂点へと引き上げ、その後彼等を通して、非道と無知と迷信のあかにまみれた全人類を浄化する任務を、課せられていた。これは、事実、彼をほとんど押しつぶそうとする程に重い責任であったが、神は彼の重荷を軽くされた。

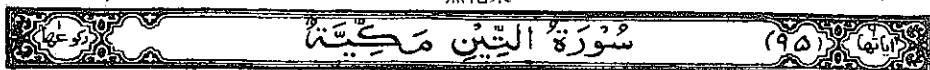
注2　この章はモハッマド預言者の出現の二年目又は三年目に啓示された。この時はまだ、モハッマド預言者は近隣以外ではほとんど知られていなかったが、間もなく彼は、宗教の指導者の中で、最も有名で、かつ愛され、尊敬され、成功を治める者となった。宗教界においても、又俗界においても、モハッマド預言者程、従う者の愛と尊敬を集めた指導者は、他に見られなかった。

注3　「げに、苦労の後には楽あり」というのは、二度繰り返されている。これは次の事を示している。イスラム教は非常に苦しい時を経ねばならず、二度に渡りその存在の危機に直面する。一度目は、イスラム教創始の数年間、二度目が「末H」である。このどちらの時にも、イスラム教は苦難の中から新たな力を身に付け立ち上がるであろう。これ等の節は又、モハマッド預言者やイスラム教徒が直面する苦難は一時的なものであるが、彼等の成功は永遠に且つ常に拡大されると示してもいる。

9．ひたすら主に仕え奉れ。（注４）

وَإِلَىٰ رَبِّكَ فَٱرْغَب ۝٩

注４　精神的発達の終わり無き展望がモハッマド預言者の前にあり、彼の行く道を遮る困難を克服した後、成し遂げた成功に満足して休む事なく、一つの峰を登り終えると、次の峰に向かわなければならない。そして彼の注意は全て、堕落した人類の再生へと、又、地上に神の王国を築く事へと向けられるべきである。以上の事に、モハメッド預言者は確信を持って従う。当節は又、次の事も示している様だ。モハメッド預言者は、弟子への説教や他の俗事の処理という日々の業を終えると、心をこめて神に向かわなければならない。それは、彼の精神的な旅が終わりのないものだからである。

سُوْرَةُ التِّيْنِ مَكِّيَّةٌ (٩٥)

アル・ティーン
（メッカ啓示）

1. 慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。 بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2. 無花果(いちじく)と橄欖(かんらん)にかけて、（注１） وَالتِّيْنِ وَالزَّيْتُوْنِ ②

3. シナイ山にかけて、 وَطُوْرِ سِيْنِيْنَ ③

4. また安全なるこの邑(まち)にかけて誓う。 وَهٰذَا الْبَلَدِ الْاَمِيْنِ ④

5. げにわれらは、人間を最上の形態に創りたり。 لَقَدْ خَلَقْنَا الْاِنْسَانَ فِيْٓ اَحْسَنِ تَقْوِيْمٍ ⑤

6. されど、もし悪行をなさば、われらは之(これ)を最も卑(いやし)き者に落とす、（注２） ثُمَّ رَدَدْنٰهُ اَسْفَلَ سٰفِلِيْنَ ⑥

注１　「無花果」「橄欖（オリーブ）」「シナイ山」「安全なる邑」左記の言葉は、モハッマド預言者はその使命を果たす、という当章に述べられた主張を証す証拠として用いられて来た。「無花果」「橄欖」はイエスを、「シナイ山」はモーゼを、「安全なる邑」はモハッマド預言者をそれぞれ象徴している。この三節は共に、次の有名な聖書の言葉を示している。「主はシナイから来られ、セイルから彼等を照らし、パランの山から光を放たれた。」（申命記33：２）。だが、注釈者の中には、「無花果」は仏教を、「橄欖」はキリスト教を、「シナイ山」はユダヤ教を、そして、「安全なる邑」はイスラム教をそれぞれ指す、と解する人々もいる。しかし、これ等の節で用いられた象徴的表現の最善の解釈は次のものである。この四つの言葉は、人間の精神発達史における四つの時代を表す。「無花果」はアダムの時代を、「橄欖」はノアの時代を、「シナイ山」はモーゼの時代を、そして「安全なる邑」はイスラム教の時代を象徴している。この解釈は、聖書やクルアーンが十分に裏付けている。アダムとイブが禁断の実を食べ、自分達が裸である事に気付いた時、彼等はいちじくの葉をつづり合わせて、自分達の腰の被いを作った。（創世記３：７）。ノアについては次の様である。「鳩は夕方になって、彼のもとに帰って来た。すると見よ。むしり取ったばかりのオリーブの若葉がそのくちばしにあるではないか。それで、ノアは水が地から引いたのを知った。」（創世記８：11）。又、モーゼがシナイ山で神の啓示を受けた事、更には、イスラム教誕生の地メッカは、有史以前より「安全なる邑」と認められて来た事は、衆知の事実である。この四時代は、人が完全な進歩を遂げるまでに通り抜ける四つの時代を表す。アダムの時代に人間の文明の基礎が築かれた。ノアは律法の創始者であった。モーゼの時代には、律法の詳細が啓示され、モハッマド預言者の出現と共に、神の啓示はあらゆる面で完成された。こうして、人間は、知的、社会的、道徳的、そして精神的に完全な発達を遂げたのである。「無花果」は又、モーゼの律法を、「橄欖」はイスラム教の律法の象徴でもある。この直喩は、「シナイ山」「安全なる邑」の語に、より具体的に表されている。

注２　人間は、自ずと善行に向かう純粋な性質を持って生まれたが、同時に、意志と行動の自由裁量を大幅に与えられた。人間は、究極の道徳的発達を遂げ、神の属性が写し出される鏡となる様精神的に高まる為に、大いなる力と創造力を生まれながらにして授けられた。しかし、もし人間が神に賜った能力や特質を誤って使

7．但し信じて善行をなす者は除く。彼等には尽きせぬ報奨あり。

إِلَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ فَلَهُمْ أَجْرٌ غَيْرُ مَمْنُونٍ ۝٧

8．さればこの後、審判について汝に、それは虚偽（うそ）なりと云い得る者ありや？（注3）

فَمَا يُكَذِّبُكَ بَعْدُ بِالدِّينِ ۝٨

9．アッラーは最もすぐれたる審判者に非ざるか？

أَلَيْسَ اللّٰهُ بِأَحْكَمِ الْحٰكِمِينَ ۝٩

えば、獣よりも卑しくなり、次節が示す通り、悪魔の化身となるのである。つまりは、人間には、善行をも、又同時に悪行をも為す可能性があるのである。

注3　人間は、非常に高度な精神的運命を遂げる為に作り出され、この偉大な目的達成を助ける為に、神は、アダム、ノア、モーゼ、モハッマド預言者のごとき神の使徒を送り出された。もし人間が生来の能力を適切に用いず、神のお告げを拒み、神の使徒に刃向かうならば、人間は罰せられる事となる。この様な時に、現世に、又来世にも裁きの日があり、最高の審判長であられる神の戒律が罰を下さざるを得ず、人間の行為が報い無しでは済まないのは当然であり、これを否定する事など誰にできようか？

ركوعها　سُوْرَةُ الْعَلَقِ مَكِّيَّةٌ　(٩٦)　اٰياتها

アル・アラク
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。　بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ١

2．汝、創造者なる主の御名において伝えよ、　اِقْرَاْ بِاسْمِ رَبِّكَ الَّذِيْ خَلَقَ ٢

3．一凝血より人間を創り給える。(注1)　خَلَقَ الْاِنْسَانَ مِنْ عَلَقٍ ٣

4．伝えよ、主は最も慈悲深き者にましまして、(注2)　اِقْرَاْ وَرَبُّكَ الْاَكْرَمُ ٤

5．人間に筆の妙用と、(注3)　الَّذِيْ عَلَّمَ بِالْقَلَمِ ٥

6．その知らざることを教えたり。　عَلَّمَ الْاِنْسَانَ مَا لَمْ يَعْلَمْ ٦

7．然るに、人間は必ず罪を犯す、　كَلَّآ اِنَّ الْاِنْسَانَ لَيَطْغٰىٓ ٧

8．他に頼らずとも暮らしてゆけると思う故に。　اَنْ رَّاٰهُ اسْتَغْنٰى ٨

9．帰還は必ず主の御許なり。　اِنَّ اِلٰى رَبِّكَ الرُّجْعٰى ٩

10．汝妨げる者を見たるか、　اَرَءَيْتَ الَّذِيْ يَنْهٰى ١٠

11．われらの一人の僕が礼拝を捧げる時？(注4)　عَبْدًا اِذَا صَلّٰى ١١

注1　神の愛は人の本質に深くしみ込まされており、この生得の衝動により神の愛が現れるのに気付いた人がいたとしても当然であった。と当節は示している。この人こそ、その創造主を心から愛した、モハッマド預言者であった。当節の「人間」は、本文中に与えられた意味以外に、完全なる人、モハッマド預言者を指す。

注2　クルアーンがより多く読まれ世に示される程、神の神聖と人間の尊厳はより良く理解される。

注3　クルアーンを書き記し、紛失や歪曲から守る為に、「筆」は非常に重要な役割を果たすであろう、との預言が当節に含まれている様だ。クルアーンに啓示された精神科学と神秘、クルアーンの研究が刺激を与える自然科学、「筆」はこれ等の普及に大いに貢献した、とも当節は述べている。敬意を払うでもなく、ほとんど使用する事もない人々の間で啓示され、しかも啓示された人自身が読み書きも出来なかったという、その聖典の中に「筆」が多用されているのは、非常に重要な意味を持つ。

注4　この語は、祈りをささげるイスラム教徒全てに、特にモハッマド預言者に向けられている。

12．もしわれらの僕が嚮導に従い、	أَرَءَيْتَ إِن كَانَ عَلَى ٱلْهُدَىٰٓ ﴿١٢﴾
13．或いは公正なることを命じなば、妨害者の末路や如何に、我に告げよ。	أَوْ أَمَرَ بِٱلتَّقْوَىٰٓ ﴿١٣﴾
14．もし妨害者が真理を拒否し、之に背を向けなば、彼如何に暮らさんとするかをわれに告げよ。	أَرَءَيْتَ إِن كَذَّبَ وَتَوَلَّىٰٓ ﴿١٤﴾
15．彼はアッラーがすべてを照覧することを知らざるか？	أَلَمْ يَعْلَم بِأَنَّ ٱللَّهَ يَرَىٰ ﴿١٥﴾
16．然り、彼もし止めずば、われらは彼の前髪をとって必ず引っ捉えん、	كَلَّا لَئِن لَّمْ يَنتَهِ لَنَسْفَعًۢا بِٱلنَّاصِيَةِ ﴿١٦﴾
17．罪深い前髪を摑んで。	نَاصِيَةٍ كَٰذِبَةٍ خَاطِئَةٍ ﴿١٧﴾
18．かくて彼にその仲間を呼び集めさせよ。	فَلْيَدْعُ نَادِيَهُۥ ﴿١٨﴾
19．われらもまた彼を罰する天使たちを呼ばん。	سَنَدْعُ ٱلزَّبَانِيَةَ ﴿١٩﴾
20．断じて然らず、汝彼に従うなかれ、平伏して神に近づけ。	كَلَّا لَا تُطِعْهُ وَٱسْجُدْ وَٱقْتَرِب ۩ ﴿٢٠﴾

سُوْرَةُ الْقَدْرِ مَكِّيَّةٌ

アル・クァドゥル
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．げにわれらは之(これ)を定めの夜に（注１）降(くだ)したり。（注２）

اِنَّآ اَنْزَلْنٰهُ فِيْ لَيْلَةِ الْقَدْرِ ②

3．定めの夜のなんたるかを汝に知らしむるものはなんぞや？（注３）

وَمَآ اَدْرٰىكَ مَا لَيْلَةُ الْقَدْرِ ③

4．定めの夜とは、千の月にもまさるもの。（注４）

لَيْلَةُ الْقَدْرِ خَيْرٌ مِّنْ اَلْفِ شَهْرٍ ④

5．その夜、諸天使並びに聖霊は、その主の命を奉じ、すなわち一切の神命を携えて降臨し給う。（注５）

تَنَزَّلُ الْمَلٰٓئِكَةُ وَالرُّوْحُ فِيْهَا بِاِذْنِ رَبِّهِمْ مِنْ كُلِّ اَمْرٍ ⑤

注１　この語は、クルアーンが啓示された夜の荘重さ、重大さを示している。

注２　「定め」と「夜」の様々な意味を考慮すれば、当節は次の様に解釈さる。クルアーンが啓示されたのは、神の特別な力を表す為に取っておかれた夜であった。又は、他の全ての夜が合わさったのに等しい価値を持つ夜であった。あるいは、おごそかな夜。満ち足りた夜、つまり、クルアーンは、道徳的・精神的な人間の要求を全て十分に満たすのである。又、神は「定めの夜」にそれを啓示された、とも意味する。つまり、人の運命が定められ、世界の未来像が決定され、人類を導く正しい教義が来るべき時に、向けて制定された時に、クルアーンは啓示された。ある偉大な神の指導者が現れた時は、「定めの夜」とも呼ばれる。それは、当時罪と非行が満延し、悪の勢力がはびこっていたからであった。又、クルアーンが啓示され始めたラマダーンの、最後の10日間の異常な夜の中でも、際立った夜を指すとも解せる。あるいは、クルアーンが徐々に啓示されつつあった、モハッマド預言者の23年の任期全てを指すとも言えよう。

注３　「定めの夜」の恩恵は、計り知れないものである。

注４　アラビア語で最大の数であるアルフ（千）は、数えきれない数字を表し、当節は、「定めの夜」が無数の月を合わせたよりも素晴らしいものである、と示している。つまり、モハッマド預言者の時代は、他の時代全て合わせたものに遥かに勝るのである。当節は、イスラム教徒が苦難の中にあった時、彼等の間から神の指導者が現れた事を暗示している。千ケ月はおおよそ一世紀に当たり、モハッマド預言者は、次の様に語ったとされる。各世紀の初頭に、イスラム教を甦らせ、新たな生命と活力を与える神の指導者を、神はモハッマド預言者の弟子達の中から立たせ続けられるであろう。

注５　「定めの夜」に、神の天使達が、神の使徒又は神の指導者が神の目的を推し進める手助けをしに降りて来る。そして、彼の弟子達は、神のお告げを広める為に、新たな命、新たな目覚めをもたらされるのである。

6．黎明の光りたち昇るまで（注6）夜は平安なり。（注7）

سَلٰمٌ ۛ هِيَ حَتّٰى مَطْلَعِ الْفَجْرِ ۝

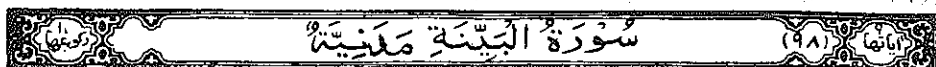
注6　「黎明の光りたち昇る」とは、苦難の夜が過ぎ去り、神の目的が優位に立つ夜明けを表す。

注7　ある預言者又は、神の指導者の時代に、困窮にあるイスラム教徒達に、特別の心の平安がもたらされる。その時彼等を奮い立たせるこの天の喜びは、あらゆる物質的、感覚的な喜びに勝るものである。

سُورَةُ الْبَيِّنَةِ مَدَنِيَّةٌ (٩٨)

アル・バイィナ
（メディナ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．経典の民の中の信ぜざる徒輩、並びに偶像崇拝者どもは、明証が彼等に至るまでは信用せざりき。（注1）

لَمْ يَكُنِ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ اَهْلِ الْكِتٰبِ وَالْمُشْرِكِيْنَ مُنْفَكِّيْنَ حَتّٰى تَاْتِيَهُمُ الْبَيِّنَةُ ②

3．明証とは、すなわち、アッラーの使徒が浄き聖典を彼等に誦述することなり、

رَسُوْلٌ مِّنَ اللّٰهِ يَتْلُوْا صُحُفًا مُّطَهَّرَةً ③

4．不変の掟がその中にある聖典を。（注2）

فِيْهَا كُتُبٌ قَيِّمَةٌ ④

5．また経典を授かりし人々は、明証が彼等に至るまでは、諸宗派に分れざりき。

وَمَا تَفَرَّقَ الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْكِتٰبَ اِلَّا مِنْ بَعْدِ مَا جَآءَتْهُمُ الْبَيِّنَةُ ⑤

6．彼等に命ぜられたることは、ただアッラーに仕え、遵奉の誠をつくし、公正で、礼拝を遵守し、且つ定めの喜捨を納めることのみ。これすなわち真正の宗教なり。

وَمَآ اُمِرُوْٓا اِلَّا لِيَعْبُدُوا اللّٰهَ مُخْلِصِيْنَ لَهُ الدِّيْنَ ۙ حُنَفَآءَ وَيُقِيْمُوا الصَّلٰوةَ وَيُؤْتُوا الزَّكٰوةَ وَذٰلِكَ دِيْنُ الْقَيِّمَةِ ⑥

7．げに経典の民の中の信ぜざる徒輩、並びに偶像崇拝者どもは、必ず地獄の火の中に落ち、永劫にその中に住みとどまらん。彼等は最悪の被造物なり。

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ اَهْلِ الْكِتٰبِ وَالْمُشْرِكِيْنَ فِيْ نَارِ جَهَنَّمَ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ؕ اُولٰٓئِكَ هُمْ شَرُّ الْبَرِيَّةِ ⑦

注1　クルアーンは、不信心者を二種類、キリスト教徒と偶像崇拝者（如何なる啓示書をも信じない人々）に分けた。

注2　クルアーンは、それ以前の啓示書の教義の中で、優れてしかも永遠に残るもの全てを要約し、更には、それ等の啓示書に欠け、しかも人の道徳的・精神的向上に無くてはならないより多くの教義を備えている。永遠に人の役に立つ、正しい規範・法則・法令・戒律全てが、それに含まれる。クルアーンは、いわば、それ等の啓示書の後ろ立てとなり、しかもそれ等にみられる欠陥や不純物を避けて来た。

8．げに信じて善行を積む人々―彼等は最良の被造物なり。

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ أُولَٰئِكَ هُمْ خَيْرُ الْبَرِيَّةِ ﴿٨﴾

9．彼等の報奨は主の御許、すなわち河川流るるエデンの園なり。彼等はその中に永劫に住まん。アッラーは彼等に満悦し、彼等はアッラーを賀し奉る。こは主を畏れ敬う者への報奨なり。（注３）

جَزَاؤُهُمْ عِندَ رَبِّهِمْ جَنَّاتُ عَدْنٍ تَجْرِي مِن تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا ۖ رَّضِيَ اللَّهُ عَنْهُمْ وَرَضُوا عَنْهُ ۚ ذَٰلِكَ لِمَنْ خَشِيَ رَبَّهُ ﴿٩﴾

注３　精神発達の最高の段階は、人の意志が神の御意志と完全に一つになる時、達する事のできるものである。

سورة الزلزال مكية (٩٩)

アル・ズィルザール
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。　بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．大地が激しく揺れ動き、(注1)　إِذَا زُلْزِلَتِ الْأَرْضُ زِلْزَالَهَا ②

3．その中の荷を吹き上げる時、(注2)　وَأَخْرَجَتِ الْأَرْضُ أَثْقَالَهَا ③

4．人間(ひと)は云う、「大地に何が起りたるか？」と。(注3)　وَقَالَ الْإِنْسَانُ مَا لَهَا ④

5．その日こそ、大地は諸々の消息を語らん、(注4)　يَوْمَئِذٍ تُحَدِّثُ أَخْبَارَهَا ⑤

6．主が大地に命じたるが故に。(注5)　بِأَنَّ رَبَّكَ أَوْحَىٰ لَهَا ⑥

7．その日、(注6)人々はさまざまなる集団に分れて、(注7)過ぎし日の己が所業を見せられるために現われ来たらん。　يَوْمَئِذٍ يَصْدُرُ النَّاسُ أَشْتَاتًا لِيُرَوْا أَعْمَالَهُمْ ⑦

注1　世界中が、外的のみならず内面的にも、あらゆる激変を経験するであろう。

注2　(1)地球の内部が切り開かれ、鉱物資源が取り出されるであろう。❖精神科学のみならず、自然科学、特に地質学及び考古学に関して、あらゆる種類の膨大な量の知識が発表されるだろう。

注3　変化が何度も広範囲に及んで起きるであろう。そして余りにも広大な発見が為された為、人は驚きうろたえこう叫ぶ。「地球に何が起こったのだ？。」

注4　当節の意味を尋ねられた時、モハッマド預言者は、「密かに行なわれた事は全て、明るみに出されるであろう。」と述べたと記されている。(テルマディ)

注5　神がそう命じられた為、地球はその財宝を出すだろう。

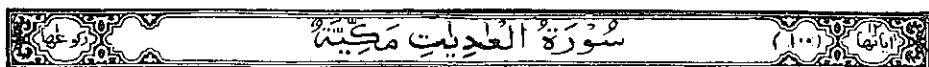
注6　「末日」に人々は、その政治的・社会的・経済的利益を守る為に、政治的・経済的な基盤の上に、それぞれ集団を形成するであろう。そして、強力なギルド・カルテル・シンジケートが生じるのであろう。

注7　個々人が共同出資し、集団の努力が個々の努力に取って代わるであろう。それは集団をつくることの重要性を感じそれが良い結果をもたらすと考えるからである。

8．極く僅かでも善を行える者はその善を見、　فَمَن يَعْمَلْ مِثْقَالَ ذَرَّةٍ خَيْرًا يَرَهُ ۝٨

9．また極く僅かでも悪を行える者はその悪を見る（注8）べし。　وَمَن يَعْمَلْ مِثْقَالَ ذَرَّةٍ شَرًّا يَرَهُ ۝٩

注8　人の行為は、良しにつけ悪しきにつけ、無駄ではない。それは、それなりの結果を生み出すに違いなく、又、事実そうである。

ركوعها ١ سُوْرَةُ الْعٰدِيٰتِ مَكِّيَّةٌ (١٠٠) اٰياتها ١١

アル・アーディヤート
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。
بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ١

2．鼻息あらく疾駆して、
وَالْعٰدِيٰتِ ضَبْحًا ٢

3．蹄に火花を散らしつつ、(注1)
فَالْمُوْرِيٰتِ قَدْحًا ٣

4．黎明に急襲し、(注2)
فَالْمُغِيْرٰتِ صُبْحًا ٤

5．砂塵をまき揚げ、(注3)
فَاَثَرْنَ بِهٖ نَقْعًا ٥

6.敵陣深く突入する軍馬にかけて誓う。(注4)
فَوَسَطْنَ بِهٖ جَمْعًا ٦

7．げに人間(ひと)は、その主に対して忘恩なり。
اِنَّ الْاِنْسَانَ لِرَبِّهٖ لَكَنُوْدٌ ٧

8．げに人間(ひと)は、その行状によって、そのことを証明す。
وَاِنَّهٗ عَلٰى ذٰلِكَ لَشَهِيْدٌ ٨

9．またその物欲はすさまじい限り。
وَاِنَّهٗ لِحُبِّ الْخَيْرِ لَشَدِيْدٌ ٩

10．人間(ひと)は知らざるか、墓中の者が生き返らされ、(注5)
اَفَلَا يَعْلَمُ اِذَا بُعْثِرَ مَا فِى الْقُبُوْرِ ١٠

注1　イスラム兵士の軍馬は余りにも速く走るため、地面にひづめを打ち付ける時、火花が生じる。この引喩は、神の為に戦うイスラム兵士の熱意を示している。

注2　勇敢なイスラム兵士達は、夜討ちをかけて敵の隙に乗じる様な不法な真似はしない。

注3　イスラム軍の猛攻はすさまじく、彼等の馬の素速い動きに舞い上がる砂ぼこりで、当たり一面闇となる。

注4　イスラム兵士は、一人一人を、あるいは、弱い女・子供や年寄りを襲ったりはしない。彼等は一丸となって、敵の総戦力を攻撃し、敵軍の中枢部へ深く切り込む。

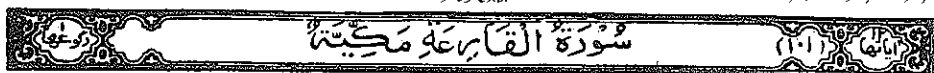
注5　不信心者の中に、生き残った者はいないようだ。彼等は、その墓場、すなわちその家に、死んで横たわっている。しかし、すぐに彼等はイスラム教に対する敵意の中で甦り、メディナのモハッマド預言者を攻撃する為、長い道のりを行軍するであろう。

11．胸中に秘めたるものも露見する時あるを、（注6）　وَحُصِّلَ مَا فِي الصُّدُورِ ⑪

12．げにその日は、主が人間どものことをすべて御承知なることを。（注7）　إِنَّ رَبَّهُم بِهِمْ يَوْمَئِذٍ لَّخَبِيرٌ ⑫

注6　イスラム教の敵の陰謀は、明るみに出るであろう。

注7　神は彼等の企みをよく御存知であり、その悪業故に彼等を罰せられるであろう。

سُوْرَةُ الْقَارِعَةِ مَكِّيَّةٌ

アル・クアーリア
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。　بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．大災難！　اَلْقَارِعَةُ ②

3．大災難とはなんぞや？（注1）　مَا الْقَارِعَةُ ③

4．大災難のなんたるかを汝に知らしむるものはなんぞや？（注2）　وَمَآ اَدْرٰىكَ مَا الْقَارِعَةُ ④

5．その日、人間は四散する蛾の如く、　يَوْمَ يَكُوْنُ النَّاسُ كَالْفَرَاشِ الْمَبْثُوْثِ ⑤

6．山々も梳かれた羊毛の抜け毛の如くならん。（注3）　وَتَكُوْنُ الْجِبَالُ كَالْعِهْنِ الْمَنْفُوْشِ ⑥

7．秤量重き者は、（注4）　فَاَمَّا مَنْ ثَقُلَتْ مَوَازِيْنُهٗ ⑦

8．楽しい生活あり。　فَهُوَ فِيْ عِيْشَةٍ رَّاضِيَةٍ ⑧

9．されど秤量軽き者は、　وَاَمَّا مَنْ خَفَّتْ مَوَازِيْنُهٗ ⑨

注1　接頭辞をつけて大災難としていることでこの惨事を特殊化し、その恐ろしさを増している。アラビア語の表現ではより悲惨で破壊的な、ニュアンスが含まれている。

注2　この惨事は余りにも悲惨であり、その恐ろしさを想像する事も、ましてや言葉に表すなどできる訳がない。類似の効果を及ぼす同じ表現が使われている69：2－5も参照の事。「大災難」とは、大惨事という意味の他に、突然下される罰をも意味する。

注3　その惨事の恐ろしさは想像を絶するものであるが、その恐ろしい結果が二・三述べられている。当節及び次節では、それのもたらす混乱や苦悩の状況が描かれている。恐ろしく悲惨な出来事は、クモの子を散らす様に人々を四散させ、彼らは逃げ場を失うであろう。

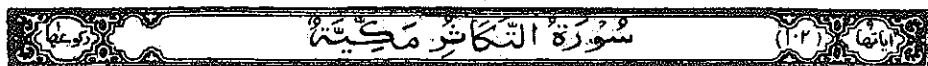
注4　「秤量」は、一個人に関して使われる時は、人の仕事を意味するが、一国に関する時は、その国の物的財産を表す。現代の戦争用語で、軍艦のトン数を表すトンネッジは、国の物的財産の特有の表現のようだ。後者の意味において、物的財産を多く持つ国、又は、汽船や飛行機の積荷の重い国は、相手国に対して優位に立ち、この事がその国の威信や勢力を強め、ひいては国の幸福につながると、当節は意味するようだ。

10．母の胎内に宿る如く地獄に宿らん。（注５）　　فَأُمُّهُ هَاوِيَةٌ ﴿١٠﴾

11．されど、地獄のなんたるかを汝に知らしむるものはなんぞや？　　وَمَا أَدْرَاكَ مَا هِيَهْ ﴿١١﴾

12．そは燃え盛る業火なり。　　نَارٌ حَامِيَةٌ ﴿١٢﴾

注５　罪深き人々と地獄との係わりは、赤子と母親の結び付きに似ている。胎児が子宮の中で様々な発達の段階を経て、完全な人間の形で生まれて来る様に、罪人は様々な段階の苦悩の後、彼等の魂は罪の痕跡を完全に洗い流され、彼等は新たな生を受けるのである。この様に、地獄の罰は、彼等の罪を悔い改めさせ、彼等を更生させる事を目的としている。イスラム教の概念では、地獄は更生監である。

سُوْرَةُ التَّكَاثُرِ مَكِّيَّةٌ

アル・タカースル
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍く（あまねく）アッラーの御名（みな）において。
بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．お前たちは財産を殖やすことを競い合う余り、遂に神を失念す、（注１）
اَلْهٰكُمُ التَّكَاثُرُ ②

3．墓に入るまで。
حَتّٰى زُرْتُمُ الْمَقَابِرَ ③

4．不可なり！お前たちやがて真実を知らん。
كَلَّا سَوْفَ تَعْلَمُوْنَ ④

5．重ねて云う、不可なり！お前たちやがて知らん。（注２）
ثُمَّ كَلَّا سَوْفَ تَعْلَمُوْنَ ⑤

6．不可なり！お前たち確かな知識で之（これ）を知らば、
كَلَّا لَوْ تَعْلَمُوْنَ عِلْمَ الْيَقِيْنِ ⑥

7．必ずその目で地獄を見ん。（注３）
لَتَرَوُنَّ الْجَحِيْمَ ⑦

8．然（しか）り、お前たち必ず確かにその目で地獄を見ん。（注４）
ثُمَّ لَتَرَوُنَّهَا عَيْنَ الْيَقِيْنِ ⑧

9．而（しか）してその日、お前たちは授けられし現世の恩寵に対して釈明を求められん。
ثُمَّ لَتُسْـَٔلُنَّ يَوْمَىِٕذٍ عَنِ النَّعِيْمِ ⑨

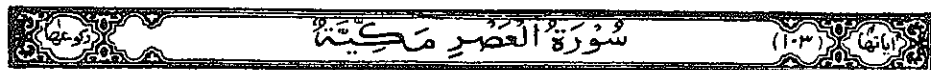
注１　物欲、つまり、富・地位・名誉において他人を凌駕したいという、人間の法外な欲望から、人は様々な問題を引き起こし、人生のより重要な事柄を看過してしまう。世俗的な物を得たいという感情には限りがなく、神や来世の事を思う時を人から奪ってしまう。人は死ぬまでこれ等の事に心を奪われ、死後に初めて、貴重な人生を無駄に過ごしたと気付くのである。

注２　当節の繰り返しは、この章に含まれる警告を強調し、より効果的にする為のものである。あるいは、現世で世俗的な物の獲得にふけった後、もたらされる因果応報を、当章は示しているのかもしれない。

注３　もし人が常識を働かせれば、どんなにわずかな知識しか持ち合わせないとしても、必ず人は、現世で目の前に大きく口を開く真の地獄を見るだろう。つまり、一時的な華やかさ、仰々しさ、物的優越を求める事に夢中になれば、道徳的退廃を招いてしまうと、人は悟るであろう。

注４　第５－８節は、現世で地獄のような生活が始まる事に疑いを差しはさまない。来世の地獄は現世で準備されており、それは人の目から隠されてはいるが、それを考える者には確信を持って認識される。これ等の節には、地獄に関する認識を確かなものにする三段階が述べられている。イルムル・ヤキーン（推論による確信）、アイナル・ヤキーン（視覚による確信）、ハックル・ヤキーン（悟りによる確信）、以上の段階である。悪の本質を表す者を見れば、この世でも地獄の存在を推測できるが、死後に、人は自分の目で地獄を確かめる事となる。一方、復活の日に、人は実際に地獄に落ち、確信していた事は真実だったと完全に悟るのである。

سُورَةُ الْعَصْرِ مَكِّيَّةٌ

(١٠٣)

アル・アスル
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍く（あまね）アッラーの御名（みな）において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．いつしか過ぎ行く時間（とき）にかけて誓う。

وَالْعَصْرِ ②

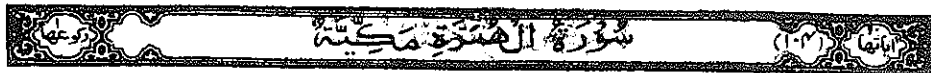
3．人間（ひと）は常に損をする、（注１）

إِنَّ الْإِنْسَانَ لَفِيْ خُسْرٍ ③

4．信ずる人々や善行を積む（つ）人々、並びに真理を伝えるために励み且つ忍耐を励む人々のほかは。（注２）

إِلَّا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ وَتَوَاصَوْا بِالْحَقِّ ۙ وَتَوَاصَوْا بِالصَّبْرِ ④

注１　この世で授けられる機会を有効に使わず、人間の運命を左右する永遠の自然の法則を拒む人又は国家は、必ず災難に出会うと、歴史は証明する。この様な人又は国家は、時間に対して敗者（時を経るごとに衰退していくもの）であり、当章では、特に「損をする人間」という言葉があてられている。神の法は罰を下さざるを得ないのである。

注２　当章及びクルアーンの他の数箇所において、信者達は正しい教義を受け入れるだけでなく、それ等を他の人々に伝えなさい、そうする事が周りに健全な環境を作る助けとなる、と告げられた。彼等は更に、その非常に困難な任務を遂行する際、直面するであろう抵抗や迫害にひるんではならず、不屈の精神でそれに耐える様、申し渡されている。この様に、当章は、短い一節の中で、人は、幸福で、満ち足り、栄えて、しかも前向きな人生を送る事ができると述べる事により、行動規範を定めている。

アル・フマザ
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍（あまね）くアッラーの御名（みな）において。　بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ①

2．災いなるかな陰口や中傷を事とする者、（注1）　وَيۡلٌ لِّكُلِّ هُمَزَةٍ لُّمَزَةِ ②

3．そは富を蓄積してひまさえあれば銭勘定。（注2）　اۨلَّذِىۡ جَمَعَ مَالًا وَّعَدَّدَهٗ ③

4．彼はその富が、己れを不死ならしむべしと考える。（注3）　يَحۡسَبُ اَنَّ مَالَهٗۤ اَخۡلَدَهٗ ④

5．然（しか）らず！彼は必ず粉砕の罰の中に投ぜられん。（注4）　كَلَّا لَيُنۡۢبَذَنَّ فِى الۡحُطَمَةِ ⑤

6．粉砕の罰のなんたるかを汝に知らしむるものはなんぞや？　وَمَاۤ اَدۡرٰٮكَ مَا الۡحُطَمَةُ ⑥

7．そはアッラーが燃やし給う火にして、　نَارُ اللّٰهِ الۡمُوۡقَدَةُ ⑦

8．たちまち断罪されたる者どもの心を焼きつくす。　الَّتِىۡ تَطَّلِعُ عَلَى الۡاَفۡـِٕدَةِ ⑧

注1　「陰口を事とする者」は、陰で他人の悪口を言う人を指し、「中傷を事とする者」は、陰でも、又本人の目の前でも悪口を言う人の事である。二つの基本的な善の本質前章に述べられた寛容と忍耐、に対し、社会の平和と秩序を根底からくつがえす、二つの悪の本質が当章に述べられている。陰口をきく事と中傷を言いふらす事、この二つの主な悪に、いわゆる文明社会は今日非常に被害を被っている。

注2　当節は、世欲的な富に対する人の欲望に、悲しい注釈を付けている。富（物欲）の神を崇拝することは、今日の物質文明を破滅に追いやるものである。

注3　不幸な守銭奴は、手段を選ばず手を尽くしてお金を稼ぎ、それを貯える。その富を誇り、しかも正しい目的の為に使おうとはしない。そして、それが彼を不滅にし、彼の名が消え去るのを防ぎ、永遠に繁栄をもたらすものだと考える。しかし、彼は大きな誤解に悩むのである。

注4　人が全力で戦い、力を尽くしてつぶそうとした大義が、前進し栄えるのを目の当たりにする事程、人にはなはだしい屈辱感や苦悩を与えるものは他にはない。クライシュの指導者達の目前で、イスラム教の弱々しい苗木が大木に育つのを見て、彼等が感じたのが、この心の燃える様な痛みであった。

9．そは彼等の上にかぶさり、（注5）　　إِنَّهَا عَلَيْهِم مُّؤْصَدَةٌ ⑨

10．長大な火柱の如くなるべし。（注6）　　فِي عَمَدٍ مُّمَدَّدَةٍ ⑩

注5　取り囲まれた炎の熱は、どんどんと上って行く。

注6　「長大な火柱」とは、不信心者の人生を有益な規範に従わせない、悪習を指す。

ركوعها ١ سُوْرَةُ الْفِيْلِ مَكِّيَّةٌ (١٠٥) آياتها ٥

アル・フィール

（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．汝は、主があの象（注1）の徒輩を如何に処分せしかを見ざりしか？

اَلَمْ تَرَ كَيْفَ فَعَلَ رَبُّكَ بِاَصْحٰبِ الْفِيْلِ ②

3．主は彼等の企みを失敗せしめ給わざりしか？

اَلَمْ يَجْعَلْ كَيْدَهُمْ فِيْ تَضْلِيْلٍ ③

4．主は彼等に対して鳥の群れを遣わせり、(注2)

وَّاَرْسَلَ عَلَيْهِمْ طَيْرًا اَبَابِيْلَ ④

5．彼等の屍を喰い、彼等に飛礫を打ち当てるその鳥の群れを。（注3）

تَرْمِيْهِمْ بِحِجَارَةٍ مِّنْ سِجِّيْلٍ ⑤

6．而して彼等を、喰い荒された藁くずの如くなし給えり。

فَجَعَلَهُمْ كَعَصْفٍ مَّاْكُوْلٍ ⑥

注1　アブラハーキリスト教徒。アビシニア王国のイエメン総督。エチオピア皇帝の支配するイエメンで、国王の代理を務めるアブラハは、西暦 570 年、モハッマド預言者誕生の年に、カーバ討伐の為、大軍を率いてメッカへ向かった。彼はたくさんの象を連れて行った。天然痘の自然発生が彼の軍を壊滅させ、彼等の腐った死体は鳥の大群についばまれた。詳しくは英版参照の事。

注2　「鳥の群れ」とは、それぞれに群れをなす鳥、季節ごとに群れをなす鳥、一羽ずつ又は一群ずつ並んだ鳥を指す。

注3　鳥の大群は、侵入者の死体の肉片を、石に打ち付けながら食べた。これは、動物の死体の小さな肉片を食べる時に、鳥がよくやる方法である。

ركوعها ١　سُوْرَةُ الْقُرَيْشِ مَكِّيَّةٌ　(١٠٦) اياتها ٤

アル・クライシュ
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。　بِسْمِ اللهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．クライシュ族への愛情のために、（注１）　لِاِيْلٰفِ قُرَيْشٍ ②

3．アッラーは彼等クライシュ族に冬と夏の隊商旅行を定め給えり。（注２）　اٖلٰفِهِمْ رِحْلَةَ الشِّتَآءِ وَالصَّيْفِ ③

4．さればクライシュ族は聖殿の主を拝すべきなり、　فَلْيَعْبُدُوْا رَبَّ هٰذَا الْبَيْتِ ④

5．飢えたる時に彼等を養い、恐れたる時に彼等を安(やすん)じたる御方をば。（注３）　الَّذِيْٓ اَطْعَمَهُمْ مِّنْ جُوْعٍ ۙ وَّاٰمَنَهُمْ مِّنْ خَوْفٍ ⑤

注１　「クライシュ」という語は、その語源「カラシャ」から派生しりものである。この「カラシャ」は、彼はそれをあちこちから集めた、又は、彼は一部を別のものに付けた、ということを意味する。クライシュの一族がそう呼ばれたのは、彼等の祖先の一人、ケラーブ・ビン・ナザルが、彼等が遊牧民として暮らしていたアラビア全土から、メッカへ移住しそこで定住する様に説き伏せた為であった。バヌー・カナーナの内、メッカに定住したナズルの子孫達だけが、彼等は小集団であった為に、小さな集団があちこちから集まった、という意味のクライシュと呼ばれたのであった。

注２　当節は、二様に解釈ができる。わかりやすいものから述べると、「おおモハッマドよ、神がその心に夏と冬の旅への愛をもたらされたクライシュに対する、神の大いなる恩恵に、汝は驚くのか？」 神の恩恵は次の事実にあった。冬にはイエメンへ、夏にはシリアやパレスチナへ隊商を組むことで、クライシュはメッカに生活必需品をもたらした。この商業活動により、彼等は町の繁栄に加えて、ある種の信望を得た。又、アラビアに偉大な預言者が現れるという預言も知った。それは既にこの預言を知っていた、イエメンのユダヤ教徒や、シリアのキリスト教徒との交流がもたらしたものであった。クライシュはその地に深く根付き、カーバに非常に愛着を感じていたので、その地を例え片時でも離れるぐらいなら飢え死にを選んだであろう。彼等がこの呼びかけに応じたのは、モハッマド預言者の偉大な祖父、ハーシムの熱心な勧告によるものであった。彼等は、これ等の旅により利益を得ただけでなく、これ等の地を旅する事で、間もなく到来が期待されるモハッマド預言者受け入れの準備をさせられていたが、これこそ、彼等に対する偉大な神の恩恵であった。文脈に添った、あるいはより適した、当節のもう一つの解釈がある。それは次の様である。「おお、モハッマドよ。汝の主は象の所有者達を滅ぼされた。それは、彼等が、冬と夏自由に旅する為のクライシュの要所を攻撃したからである。これが、クライシュに対する偉大な神の恩恵であった。」もしアブラハが滅ぼされていなければクライシュは彼の地への旅を好まなかったであろうし、彼等の旅は安全ではなかったはずで、上記の解釈はもっともらしく思える。このアブラハの滅亡は、クライシュの貿易路を開いただけでなく、カーバは、既に聖地であったが、アラブ人の目には、より一層神聖不可侵なものとなった。そしてこれが又、クライシュの貿易に対しはずみを

付ける事となった。「主はクライシュをまもる為に、象の所有者達を滅ぼされた。」

注3　クライシュは恐怖から守られていたが、彼等の周囲は全て、恐怖と不安が押し寄せていた。更に、彼等は一年中あらゆる種類の果実や食物に恵まれていた。これは全て単なる偶然ではなく神の御計画の遂行であり、2500年前にアブラハム預言者が行った預言の成就であった(2 127,130 、14：36, 38)。彼等に偉大な恩恵を授け、飢えや恐怖から彼等をお守りになった寛大なる神よりも、木や石で出来た神を崇めた忘恩の罪を、当節は不信心者のクライシュにはっきり悟らせるのである。

سُوْرَةُ الْمَاعُوْنِ مَكِّيَّةٌ (١٠٧)

アル・マーウーン
(メッカ啓示)

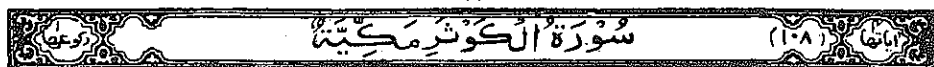
1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。	بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ١
2．汝はかの審判を否定する者を何と思うか？(注1)	اَرَءَيْتَ الَّذِىْ يُكَذِّبُ بِالدِّيْنِ ٢
3．かかる者は、孤児(みなしご)を邪慳に追い払い、(注2)	فَذٰلِكَ الَّذِىْ يَدُعُّ الْيَتِيْمَ ٣
4．貧者を養うことに気乗りうすなり。	وَلَا يَحُضُّ عَلٰى طَعَامِ الْمِسْكِيْنِ ٤
5．されば災いなるかな、礼拝するも、(注3)	فَوَيْلٌ لِّلْمُصَلِّيْنَ ٥
6．その礼拝をおろそかにする者。	الَّذِيْنَ هُمْ عَنْ صَلَاتِهِمْ سَاهُوْنَ ٦
7．彼等は見られることは好きなれど、(注4)	الَّذِيْنَ هُمْ يُرَآءُوْنَ ٧
8．施しは差し控える。	وَيَمْنَعُوْنَ الْمَاعُوْنَ ٨

注1　神の罰を信じず、あるいは、全ての道徳の源であるイスラム教を信じないとは、彼は実に罪深い者だ。

注2　当節及び次節は、二つのはなはだしい社会的罪悪を述べている。これ等の罪は、もし周到に防がれなければ、社会を完全に崩壊すると推測される。孤児に対する適切な世話を怠れば、犠牲の精神を人の心から抹殺する事となる。又、貧しき者の放置は、社会の有益な部門から、彼等の運命を変えようとする意志や決断を奪い取ってしまう。

注3　祈りとは、我々が神に負う義務を表す。神の創造物への義務を果たさない偽善者の祈りは、魂の無い肉体、中身の無い殻である。

注4　偽善的な人々は、魂のこもらない慈善行為を示すのみである。

سُوۡرَةُ الۡكَوۡثَرِ مَكِّيَّةٌ (١٠٨)

アル・カウサル
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。　بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ①

2．げにわれらは汝に潤いを与えたり。(注1)　اِنَّاۤ اَعۡطَيۡنٰكَ الۡكَوۡثَرَ ②

3．されば主に祈り、犠牲を捧げよ。　فَصَلِّ لِرَبِّكَ وَانۡحَرۡ ③

4．汝を害する者には、子女なかるべし。(注2)　اِنَّ شَانِئَكَ هُوَ الۡاَبۡتَرُ ④

注1　カウサー（「潤い」）は多量の善を意味する。又、豊かな徳を備えた人、何度も多くの物を与える人、をも意味する。当章は、神が豊かな徳を授けた人として、モハッマド預言者の事を語っている。それは、モハッマド預言者が何も持たず、又与える物を持たなかった時に啓示された。彼はその時非常に貧しく、預言者だという彼の主張は、軽べつを持って、まじめに取り合う価値の無いものとして受け取られた。この章が啓示された後何年もの間、彼はあざけられ、迫害され、ついには、その首に賞金がかけられたまま、逃亡者として生地を去らねばならなかった。メディナでの数年間も又、彼は絶えず危険にさらされ、彼の敵は、（人間的見地からすればしごくもっともな事だが）悲劇を、イスラム教の早期終焉を目にしようと待ち望んでいた。彼の命が消えようとしたその時、多量の善があらゆる形を取り、滝の様に彼に注ぎ始めた。そして、この章に含まれる約束は、忠実に成就されたのであった。メッカからの追放者は、アラビア全土の運命の裁定者となり、破漠の文盲の息子は、全人類にとり永遠の指導者となったのである。神は彼に、以後永遠に人類の絶対の指導書となる神の書を授けられ、神の属性を受け入れる事で誰にでも可能な様に、主のお側近くの高みにまで上ったのである。彼は、比類無い忠誠を備えた、献身的な弟子の一団に恵まれた。この世を去れという主のお召しがあった時、。彼は、自分に託された聖なる務めを十分に果たし終えた事に、満足した。要約すれば、物質的・道徳的な、あらゆる種類の善が、十二分に、モハッマド預言者に授けられたのであった。それ故、彼は最も成功を治めた預言者と呼ばれるにふさわしい人物であった(Enc. Brit)。

注2　当節で、モハッマド預言者の敵が「子孫なき者」（男の子を持たない）として述べられてあるのは、非常に重要な事である。一方、この章の啓示前後に相次いで生まれたモハッマド預言者の息子は全て亡くなり、彼には、男の後継者がいなかった事は、事実である。これは、処所での「後継ぎなし」が「いわゆる息子ではなく、精神的なものを奪われた者」という意味でしかない、と示している。モハッマド預言者は、終わりの時までは、いつの時代にも、多くの息子達の精神的な父親であり、この息子達は、どの父親の実子よりも、遥かに忠実であると運命づけられていたので、モハッマド預言者は男の後継者を残してはならないというのが、事実神御自身の御計画であった。この様に、男の後継ぎを残さず亡くなったのは、モハッマド預言者ではなく、彼の敵の方であった。彼等の息子達は、イスラム教徒の輪に入り、モハッマド預言者の精神的な息子となって、実の父親との血のつながりを恥じたからである。

سُوْرَةُ الْكٰفِرُوْنَ مَكِّيَّةٌ

アル・カーフィルーン

（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．云え、（注１）「汝等不信心者どもよ！（注２）

قُلْ يٰٓاَيُّهَا الْكٰفِرُوْنَ ②

3．我はお前たちが崇めるものを崇めず。

لَآ اَعْبُدُ مَا تَعْبُدُوْنَ ③

4．お前たちも我が崇めるものを崇めず。

وَلَآ اَنْتُمْ عٰبِدُوْنَ مَآ اَعْبُدُ ④

5．我はまたお前たちが崇めるものを崇めず。

وَلَآ اَنَا عَابِدٌ مَّا عَبَدْتُّمْ ⑤

6．お前たちもまた我が崇めるものを崇めず。（注３）

وَلَآ اَنْتُمْ عٰبِدُوْنَ مَآ اَعْبُدُ ⑥

7．お前たちにはお前たちの生き方あり、我には我が生き方あり」と。（注４）

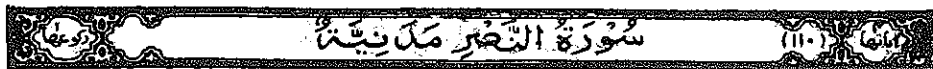
لَكُمْ دِيْنُكُمْ وَلِيَ دِيْنِ ⑦

注１　「云え」と言う言葉で表された神の御命令は、全てのイスラム教徒に向けられたものである。この章以外にも、第72、112、113、114章の始めにこの言葉が書かれ、クルアーン全体で306節程使われている。この言葉は、つかわれる全ての箇所で、主題の重要性を強調する。この様に、信者は、この章に示されたイスラムの偉大な教義を、繰り返し声高く宣言し、又この教義を明確な言葉で不信心者に伝えよ、と命じられている。

注２　「〜よ」という言い方は、当章の主題へ注意を引き付け、その重要性を強調する為に用いられている。この言葉は、上記の目的でクルアーンによく使われている。

注３　当節及び前三節は、注釈者の手で、様々な解釈が為されている。ある人々は、多神教徒であるメッカ人が二種の表現を使って質問したので、それに答える時二つの表現が用いられた、と主張する。他の人々は、この繰り返しは強調の為だ、と言う。又別のザジャージの様な学者は、初めの二文は現在の崇拝否定を示し、後の二文は未来におけるその否定を指す、とみなす。これに対し、ザマハシャリの様な学者は、前者の二文が未来における崇拝拒否で、後者の二文が現在のそれの拒否だ、と述べる。

注４　信者の生き方と不信心者の生き方の間に共通の土壌は全く無いと当節は示している。両者は、宗教の基本理念のみならず、その細かい部分において、又他の面でも全く意見が合わない為、歩み寄りは不可能である。

سُوْرَةُ النَّصْرِ مَدَنِيَّةٌ (١١٠)

アル・ナスル

(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍く(あまね)アッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．アッラーの助けと勝利が来たりて、(注１)

اِذَا جَآءَ نَصْرُ اللّٰهِ وَالْفَتْحُ ②

3．人々が続々とアッラーの教門を叩くのを見る時、

وَرَاَيْتَ النَّاسَ يَدْخُلُوْنَ فِيْ دِيْنِ اللّٰهِ اَفْوَاجًا ③

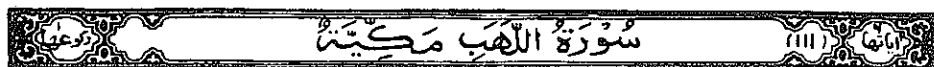
4．汝主の栄光を讃えて、(注２)主に宥恕(ゆうじょ)を請え。げに主は幾たびとなく容赦し給う。(注３)

فَسَبِّحْ بِحَمْدِ رَبِّكَ وَاسْتَغْفِرْهُ ۚ اِنَّهٗ كَانَ تَوَّابًا ④

注１　約束された勝利。

注２　モハッマド預言者は、神の約束が成就され、多くの人々がイスラム教の輪に加わり始めたので、彼は主に、約束の成就を感謝し、主の賛美を歌うべきだ、と処所に命じられている。

注３　モハッマド預言者は処所で次の様に命じられている。勝利がモハッマド預言者にもたらされ、イスラム教がこの国で地上で、優位に立ち、彼の従来の敵は彼の忠実な弟子となったのであるから、過去において彼等が彼に為した容易ならぬ悪事の数々の許しを、彼等に代わり彼が神に請うべきである。これが、神の許しを求めよという、モハッマド預言者への命令の意味である様だ。あるいは、次の様な意味にもとれる。新たなイスラムへの回心者は、適切な訓練や教育を欠いたが為に、イスラム社会に道を見出したのであり、彼等の弱さや欠点を守って頂けるように、神に祈る事を、モハッマド預言者は命じられている。クルアーンの中において、モハッマド預言者にもたらされる勝利及びその他の大いなる成功を記述した全ての個所で、彼が、神の許しを請い、神の保護を求めよと告げられているのは、非常に重要な事である。これは、当節においても、彼が、神の許しを請い、神の保護を求め、しかもそれは彼自身の為ではなく、他者の為にそうする様にと命じられた事を、はっきりと示すものである。つまり、彼の弟子達がイスラム教義からそれる恐れのある時はいつも、神がその様な危機から彼等をお守り下さる様にと、彼は祈る事を命じられているのである。この様に、モハッマド預言者が、自身の行為のいずれかに関して許しを請うたという可能性は、此所には全くない。クルアーンによれば、彼は、正道からそれて道徳的退廃に陥る事のない様、完全に守られていたのであった。40章56節及び48章3節も参照の事。

سورة اللهب مكية

アル・ラハブ
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ①

2．腐ってしまえアブー・ラハブの両の手よ、而して彼も滅ばんことを！（注１）

تَبَّتْ يَدَا أَبِي لَهَبٍ وَتَبَّ ②

3．その富は彼に役立たざるべし、儲けし金もまた然り。（注２）

مَا أَغْنَىٰ عَنْهُ مَالُهُ وَمَا كَسَبَ ③

4．やがて彼は、必ず燃えさかる業火で焼かれん。（注３）

سَيَصْلَىٰ نَارًا ذَاتَ لَهَبٍ ④

5．悪口を云いふらす彼の妻また然り。（注４）

وَامْرَأَتُهُ حَمَّالَةَ الْحَطَبِ ⑤

注１　アブー・ラハブ（炎の父）は、モハッマド預言者の伯父、彼の執念深い敵であり迫害者である、アブダル・ウッザのあだ名であった。彼がそう呼ばれたのは、彼の肌の色と髪が赤味がかっていたからか、あるいは、その激しやすい性格の為であった。当章は、モハッマド預言者の初期の頃の説教の途中に起きた出来事を、思い起こさせる。親戚の者を集めて、彼等に神のお告げを伝えよとの神の命を受け、モハッマド預言者は、ある日サファー山に立ち、様々なメッカの部族、ラヴィ，ムッラ，ケラーブ，クサイの名を呼び、更に彼の近親者を呼び寄せた。そして彼等に、彼が神の使者であり、もし彼のお告げを受け入れなければ、彼等は悪の道から抜けられず、神の罰が彼等に下されるであろう、と告げた。モハッマド預言者が説教を終えようとした時、アブー・ラハブが立ち上がってこう言った。「なんて奴だ、こんなことのために呼んだのか。」（ブハリ）。この「炎の父」というあだ名は、特にアブー・ラハブを指すが、同時に、イスラム教の短気な敵全てを、あるいは、原子爆弾や核爆弾を持ち、支配する、後世の西側諸国を指すと言った方が良いかもしれない。彼等の内、ある集団は完全に神を拒絶し、又別の集団は唯一神を否定しているが、両者共にイスラム教に対立している。この意味では、「両の手」はこの二つの集団を意味しており、当節は次の事を示す事となる。イスラムの敵、特に西側勢力のこの二集団とその衛星国による謀略は全て失敗に終わり、彼等の邪悪な企てはその頭上にはね返るであろう。彼等は、イスラムが前進し、彼等自身の富と権力が目の前で消滅して行くのを目撃し、怒りに燃えるであろう。

注２　彼の「富」は、自身の国で生み出した富を意味し、「儲けし金」は、弱小国を搾取し、そこから奪い取った富を表す。

注３　アブー・ラハブという語は又、火を作り出す物を発明した人、あるいは、自ら炎に焼き尽くされる人、をも意味する。後者の意味にとると、当節は、現代の二大政治圏が、原子爆弾や他の核爆弾のような火を吹く自らの兵器により、壊滅する事を預言したものと、解釈され得る。又、当節は、これ等の国々にとり裁きの日が遠からず訪れる、とも示している様だ。

注４　当節の言葉は、アブー・ラハブの妻、ウム・ジャミールを語っているようだ。彼女はモハッマド預言

6．彼女の頸には椰子の皮で撚られし縄かけらるべし。（注5）

فِيْ جِيْدِهَا حَبْلٌ مِّنْ مَّسَدٍ ⑤

者の通り道にとげをまき散らし、彼の悪口をふれ回った。当節は又、イスラム教およびモハッマド預言者にたいする中傷や偽りの非難を広める人にも、当てはまるようだ。

注5　一見自由なようでいて、これらの国民は、それぞれの政治的イデオロギーや体制に強く拘束されるので、それから逃げられないであろう。あるいは、薪を持ち去った為に絞殺されたと伝えられるウム・ジャミールの様にこれ等の国民は、他を滅ぼそうとした為に、同じ方法で滅びるであろう。

سُورَةُ الإِخْلَاصِ مَكِّيَّةٌ (١١٢)

アル・イフラース

（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。	بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ ①
2．云え、「彼こそはアッラー、（注１）独一者にして、（注２）	قُلْ هُوَ اللَّهُ أَحَدٌ ②
3．自存者、（注３）もろ人の依(よ)り縋(すが)る御方なり。	اللَّهُ الصَّمَدُ ③
4．彼は産み給わず、また生まれ給わず。（注４）	لَمْ يَلِدْ وَلَمْ يُولَدْ ④

注１　「アッラー」は、神にもちいられるクルアーン特有の言葉である。アラビア語では、この言葉は他の物には一切使われない。それは、神の実質的な名であり、属性を表したり説明を加えるものではない。１章１節も参照の事。

注２　「独一者」は、神のみに用いられる形容語句であり、唯一の方、比類無き方、これまでもそしてこれからも唯一の方、その地位と属性を分かち合う者の無い御方、を意味する。「独一者」は、神の存在の唯一、第二の存在は考えられない事を示し、神の属性が比類無き事を神が万物の源・天帝であられる事を示す。「独一者」アッラーは、我々がその御方の事を思う時、我々の心から他の全てが消え去るという意味において、唯一の存在であられる、と示している。神は全ての意味で唯一であられる。神は如何なる連鎖の初まりでもなければ終わりでもない。神に代わるものはなく、又、神は如何なるものとも似ておられない。この御方が、クルアーンに記されたアッラーである。

注３　「自存者」とは、頼られる人、従われる人、その人無くして何事も遂げられない人、その上には如何なる人も物も存在しない人、等を意味する。神の属性である「自存者」は、必要の成就を求められる天帝、如何なるものの影響も受けず、しかも全てのものが必要を頼る御方万物が絶えた後永遠に存在される御方、その上に存在するものの無い御方、を示す。前節では、神が唯一であられるとの主張が為された。当節は、その主張を立証する。万物は神に依存するが、神御自身は独自であられ、しかも全てを求められる方である。万物は神を必要とするが、神は何ものをも必要とされない。神は宇宙を創造されるに当り、如何なる助けも必要とされなかった。事実、宇宙の万物は一つとして、最小の原子ですら、それ自体は完全ではない。独自に存在できるものは無い。万物は、その生存の為に他に依存する。何ものにも依存しないのは、神御一人である。神は概念や推測を越えた方である。神の属性には限りがない。

注４　神の属性「自存」は、アッラーが「唯一」であられるという主張を立証する為に、前節で述べられた。そして、当節では、神の属性「産み給わず」「生まれ給わず」が、神が「自存」（他のものを必要とされない）であられる事を示す為に述べられている。それは、もし神に必要が存在するとすれば、その前提として、神は何者かの援助を必要とされ、神はそれ無くして業を遂げられず、その者が彼の死後神の業を引き継ぐ事となるからである。万物は、他者が死に支配されるが為に、継ぎ、継がれる者となるのである。アッラーは誰の後継でもなく、又誰にも後を継がれない。神はその全ての属性において完全であり、永遠にして、絶対であられる。

5．彼と比肩し得る者、何処にも非ず」と。(注5)

وَلَمْ يَكُن لَّهُۥ كُفُوًا أَحَدٌۢ ⑤

注5　前節の内容に対して起こり得る疑いを、当節は取り除く。仮にアッラーが「唯一」絶対であり、「自存」であるとしても、又、仮に「産み給わず」「生まれ給わず」だとしても、アッラーの様に、アッラーの持たれる全ての属性を備えた今一つの存在があるかもしれない。当節はこの疑惑を払いのける。アッラーの様な存在はない、とそれは告げる。人の理性も又、全宇宙の唯一の造物主であり支配者をもとめている。そこに広がる完全なる秩序は、唯一一定の法がそれを支配しなければならないという必然的な結論にたどり着き、法と計画の一致は、唯一の創造主を立証する（21：23）。この様に、当章は、他の宗教に見られる多神信仰、二神･三神あるいはより多くの神への信仰、魂と物質がアッラーと共存するという信仰、を根底から覆す。これが、クルアーンに与えられた、神の崇高な定義であり、他の如何なる啓示書にも、この定義の美・崇高・荘厳の周辺にすら触れたものはない。

سُوْرَةُ الْفَلَقِ مَدَنِيَّةٌ (١١٣)

アル・ファラク
（メッカ啓示）

1．慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 — بِسْمِ اللهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2．云え、「我は黎明の主にお縋り申す、(注1) — قُلْ أَعُوْذُ بِرَبِّ الْفَلَقِ ②

3．主が創り給える悪を逃れて、 — مِنْ شَرِّ مَا خَلَقَ ③

4．覆い広がる暗闇の災厄を逃れて、(注2) — وَمِنْ شَرِّ غَاسِقٍ إِذَا وَقَبَ ④

5．結び目に息吹きかける巫女の災厄を逃れて、(注3) — وَمِنْ شَرِّ النَّفّٰثٰتِ فِي الْعُقَدِ ⑤

6．嫉む嫉妬者の災厄を逃れて」と。 — وَمِنْ شَرِّ حَاسِدٍ إِذَا حَسَدَ ⑥

注1　「黎明」は、夜明け、地獄、万物を意味しているので、イスラム教徒は次の事を祈る様に告げられている。(1)イスラム教を覆う闇夜がさり、イスラムの輝ける未来の朝が訪れる時、イスラムの太陽が真上に来るまで輝き続けますように。(2)遺伝や伝統悪い環境、教育の欠如等による悪影響を含み、神が創り出されたものの、隠れた悪と明らかな悪より、彼を守り給え。(3)神が、現世及び来世において、地獄の苦しみから彼を救い出されますように。

注2　当節は、神の光が消され、罪の闇が地上を覆い尽くす時の悪事に触れている様だ。あるいは、人が貧困に押しつぶされ、彼を闇が取り囲み、最後の希望の光が消えた時の悪事を述べているのかもしれない。

注3　当節のこの言葉は、悪い考えを吹き込む者達、を指している様だ。彼等は、重大な契約や友情が壊れる様画策し、既成の権威に対する反抗精神や、忠誠の誓いの破棄を人々に吹き込む。この様に、彼等は、イスラム社会に不和が生じるのを望み、人々の間に分裂傾向を煽る。次の章が人生の精神面を扱うのに対し、当章はその物的側面に触れている。人は、人生において様々な危機や困難に直面させられる。人は非常に重要な任務に携わる時、特に、神の光を広める任を負う時、闇の勢力が彼を四方から取り囲む。そして、彼が成功している様に見える時、悪意ある者達が彼の道を塞ぎ、彼に対しあらゆる妨害を為す。しかし、最後に彼に成功がもたらされる時、嫉妬深い人々は、努力の結晶を彼から奪い取ろうとする。人生におけるこれ等全ての妨害・困難・危機から身を守る手段として、闇が覆う時、その身を照らし、中傷する者の悪企みや嫉妬深い者の陰謀から守って下さいと、黎明の主に助けを祈願する様、信者は告げられている。

سُورَةُ النَّاسِ مَدَنِيَّةٌ (١١٤)

アル・ナース
(メッカ啓示)

1．慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。	بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①
2．云え、「我は人類の主にお縋りもうす、	قُلْ اَعُوْذُ بِرَبِّ النَّاسِ ②
3．人類の王に、	مَلِكِ النَّاسِ ③
4．人類の神に、(注1)	اِلٰهِ النَّاسِ ④
5．卑劣な私語者の災悪を逃れて、	مِنْ شَرِّ الْوَسْوَاسِ الْخَنَّاسِ ⑤
6．人の心にささやきかける	الَّذِىْ يُوَسْوِسُ فِىْ صُدُوْرِ النَّاسِ ⑥
7．妖霊(ジン)と人間の輩(ともがら)から逃れて」と。(注2)	مِنَ الْجِنَّةِ وَالنَّاسِ ⑦

注1　当章には、神の三つの属性、ラッブ(「人類の主」)、マリク(「人類の王」)、イラーフ(「人類の神」)、が、前章の一つの属性、「黎明の主」に対して、呼びかけられている。それは後者の一つの属性が、前者の三つの属性を含むからである。一つの神の属性、黎明の主が、前章で四つの危害に対する庇護を求めて呼びかけられたのに対し、当章では、三つの神の属性が、害悪、悪魔のささやきに対する「庇護」を求めて呼びかけられている。これは、サタンの暗示が考え得る限りの悪を含むからである。この三つの神の属性は、人の肉体的・精神的状態と微妙に結び付いている。人の身体的・道徳的発達は「人類の主」の属性の元に起こり、人の思考・発言・行為は「人類の王」により罰せられるかあるいは報いられ、「人類の神」の属性は、神が人の愛と崇拝の対象であり、人の目標である事を示している。この章で、三つの神の属性が述べられているという事は、あらゆる罪が三つの原因から生じる事を暗に示すものである。それは次の様な時に起こる。ある者が、他者を彼の主、又は神の王と崇める時、すなわち、前者が後者を人生における主な支援者とみなす時。あるいは、後者の不当な権威に卑屈に身を委ねる時。又は、後者を自らの愛と崇拝の対象にする時。信者は、人生の真の支援者として神のみを崇め、神のみに真実絶対の従順を捧げ、神御一人を真の愛と崇拝の対象とするよう命じられている。あるいは、だまされやすく単純な人々を不当に利用し、彼等を非情にも搾取する、悪賢い聖職者達や、不正な資本家、暴君からの保護を絶えず求める様、これ等の節で信者は告げられているのかもしれない。

注2　サタンは、「妖霊(ジン)」(偉い人)や「人間の輩」(一般の人、普通の人)の心に悪意をささやくが、誰をも助けはしない。あるいは、悪意をささやく者は、「妖霊(ジン)」にも「庶民の輩」にも見られる、と当節は示しているのかもしれない。

い

う

き

く

け

こ

さ

し

す

せ

そ

つ

て

と

に

ぬ

ね

の

は

ひ

ふ

へ

ほ

ま

み

む

め

も

や

ゆ

よ

ら

り

る

ろ

わ

この刊行にあたって、ご支援とご尽力とをいただいた多くの方々に対して、深く謝意を表します。また、全面的に諸費用をご援助くだされたシャハナワーズ (SHAHNAWAZ) 家の皆様に、満腔の深謝の意を表明するとともに、ご一同にアッラーのご嘉賞賜わらんことを祈念いたします。

日本語版クルアーン刊行を機に、一人でも多くの人々が、至高なる神アッラーのお言葉に触れ、慈悲に浴し、義しく導かれますように。

聖クルアーン

1988年12月1日　発行

翻訳者　モハマッド・オウェース・小林　淳

監修者　マグフール・アハマド・ムニーブ

発行者　イスラム・インターナショナル・パブリケーションズ

照会先　〒465 名古屋市名東区貴船2丁目1602
アハマディア・ムスリム・センター
(052) 703-1868

印刷所　いろは株式会社

The Holy Qu'ran (Japanese)

1988 December 1　　Printed in Japan

Translated by Mohammad Owais Kobayashi

Revised by Maghfoor Ahmad Muneeb

Published by Islam International Publications

Address　●Vakalat-Ishat, 16 Gressenhall Road,
London U.K.
●Ahmadiyya Muslim Center,
2-1602 Kifune, Meito-ku, Nagoya,
JAPAN 465
Tel. (052)703-1868

ISBN4-931236-08-1